君は僕の太陽、月のように君次第な僕

茶山ぴよ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君は僕の太陽、月のように君次第な僕

【Ｎコード】
Ｎ５８０５Ａ

【作者名】
茶山ぴよ

【あらすじ】
◆完結しました◆有力政治家の子息で「人殺し」の噂を持つ不良少年・将は、新しい女担任の聡に恋をする。紆余曲折の末、二人はようやく結ばれるが、卒業を前にして聡が身ごもってしまう。将は聡との結婚の条件として父から出された難題、東大現役合格に挑戦するが……。

1◆夕陽へ通う（前書き）

●最初に申し上げておきますが、この話はわかりやすいハッピーエンドにはなりません。バッドエンドでもないですが、二人が結ばれてめでたしめでたし、というようにスカッと終わりたい方にはお勧めできません。

●他サイトにて序盤の大幅改訂中です。

●携帯読者を見込んだ改行や空白をわざと入れています。一部ＰＣで読みづらいかもしれませんがご了承ください。

●市販の小説程度（一般的なケータイ小説よりやや難しめ）の漢字を使っています。読めない場合はお手数ですが辞書などでお調べください。

●市販の恋愛小説なみの性描写、また薬物、犯罪、暴力等過激なシーンがあります。１５歳未満の方は、保護者同伴でお読みください。

●この話は、主に若い年齢層に向けた恋愛小説です。
プロ作家の小説になれた文学愛好家の方、特に中高年の方には噴飯ものであることが予想されますので、そういう方はなるべく読まないようお願いします。

●文体・レイアウト等が読みづらい場合は、内容も合わないと思いますので、ムリして読んで時間などを無駄にすることのないよう、先に申し上げておきます。

●読んでしまって受けたという精神的な損害、時間の無駄に関して

の苦情や損害請求は一切受けません。

●評価感想は公開されるシステムになっております。
作品を全否定するような評価感想は、この作品を愛してくださる他の読者をも貶めることになりかねません。
自分の行為が他人の感情におよぼす影響を考えて、評価感想は慎重にお書きいただくように重ねてお願い申し上げます。

●小説への批評・アドバイスはありがたく受けとり参考にさせていただきますが、作者の人格への批判、お叱りは一切お断りします。

1◆夕陽へ通う

1

「1日に入り日を43回も眺めるほど」。

星を旅する王子様の「かなしい思い」を、あの名作ではそんな風に書いていたと思う。

だからじゃないが、鷹枝将（たかえだしょう）は晴れてさえいれば、海が見えるこの場所に夕陽を見にくる。

都内からここまで、愛車のローバーミニで片道1時間30分はかかる。

あまり時間が大事じゃない将にとってそんな時間は些細なことだ。

――あのカーブを曲がれば。

濃い紫色の世界が、いきなり、金色になった。

目が慣れると白く霞んだ西の空に、舐めたらサッカリンのように甘そうなあんず色の太陽が満月のように「のっ」と現れた。

もやのせいでそれほどまぶしく感じないが、空も海も区別なく白い世界の中で、太陽の下だけ桜貝のような波がキラキラしていた。

今日で99回目。明日も晴れれば100回目……。

◇

「よぉ、山田さん、釣れたかい？」

一人の警官――というより、こののどかな防波堤の風景もあいまって『お巡りさん』と呼んだほうがふさわしい雰囲気――が、自転車の上から防波堤から釣り糸を垂れる将に声をかけた。

将はタバコを咥えたまま軽く会釈して

「今日はぜんぜん」と答えた。

「そうか、残念だなぁ。今日は鯵のタタキで1杯やれるかと思ったのになあ」

「すいません」

一応、将は釣竿を海にたらしていたが、釣りが目的ではない。

単に夕陽を眺めたかっただけだが、初めてここに来たとき、何もしないで車の中でボーっとしていたらあの『お巡りさん』に不審者に間違われそうになった。

そのとき免許証を見せながら「釣りに来たいなと思っていたんです」と言ってしまったのだ。

いかにも釣りが似合わない今風の若者、といった風貌の将なのに『お巡りさん』はそれを信じた。

「ああ。ここはいい釣り場だよ。またおいで」と自転車の上から親しげに笑った。

その親しげな笑顔のせいなのか、なぜか将は馬鹿正直にすぐ釣り道具を揃えてしまい、

さっそく翌日同じ場所にやってきた。

小学生の頃、海辺にいたこともあったので少々の釣りは心得ていた。

思えば、将はあの頃から夕陽を見ていたかもしれない。

あの頃。母が死んで、海辺の家に預けられた幼い頃。そのとき将は父に捨てられたと思っていた。

新しい母は優しかったが、5年前の事件が起きて……。

あの燃えさかる火の中で将は、それまでの将は燃えてしまったのだと信じている。

堤防の上からは空いっぱいに浮かぶ雲が茜色に焦がれる、壮大な風景が海いっぱいに広がるのが見えた。

釣りのふりをして、夕陽を眺めるのは悪くなかった。

竿の先には夏の太陽が釣れそうなほど近くに見えていた。

しかし夕陽が色づいて沈み、黄昏るまでの2時間たらずの間に、

初日だというのに10匹もの魚を釣り上げてしまったのが計算違い

だった。

バケツの中には小さめの鯵がピカピカ光っていた。

都会育ちの若い男が魚をさばけるわけでもない。仕方なく釣った魚を1匹ずつ海に捨てているときだ。

「オイっ！」

また昨日の『お巡りさん』が現れた。

「なんてもったいないことをしやがるんだっ！よこせっ！」

将は素直にバケツをお巡りさんに渡した。

「なんだお前は。大物狙いか。雑魚は捨てるのか？え？イケメンの兄ちゃん！」

啖呵をきられる。

「……いや、釣る行為が目的なんで、もういいかなぁ……って」困った将、言い訳を見つける。

「キャッチアンドリリースってのが俺は大嫌いなんだ。

だいたいこの鯵はもうみんな死んでるじゃないか！海に返しても生き返りゃしないんだよ！」

将は困った。目的の夕陽はもう沈みきった。

こんな魚のことでもめるのはめんどうくさい。早く帰りたい。

「もしよかったらコレ、あげますよ」
「へ？」

◇

以来、ここへ釣りに来るふりをして夕陽を眺めにやってくる。あれが高一の夏休みからだからもう１年になる。

将の獲物をもらう約束をしたお巡りさんは毎回「山田さん」と自転車から親しげに声をかけてくるのだ。

で、なぜ鷹枝将が山田さん、と呼ばれているのか？

実は将はまだ１７歳、高校２年生なのだ。

あのとき渡した免許証は『山田某』名義で将の顔が入っていた

――つまり将自身が精巧につくった偽造免許証なのである。

もっとも写真以外の情報は本物だから、こんな田舎の職務質問ぐらいでバレるはずもない。

そんなわけで将は、沈みゆく入り日に、炎の記憶と孤独を確かめるかのように、

晴れた日はこの海辺の町に１時間３０分かけてやってくるのだ。

もう９９回。……明日晴れれば１００回。

2

1時間30分かけて、将が都内に戻ってきたときは、とっぷりと暮れていた。

庶民的な下町に不似合いな、スタイリッシュなマンションの10階に将の部屋はある。

――バイトに遅れる。

将は車を駐めると、部屋には戻らずに、あわただしく夕食を求めて下町の弁当屋に走った。

チェーン店ではない。小さなボロい店だが、安い割に旨い個人経営の店だ。

しかし安さと旨さのほかに将を引き寄せる理由があった。

「いらっしゃいませぇ！」若いお姉さんの澄んだ声がひびく。

「中華弁当ちょうだい」

「ハーイ。中華弁当一丁」

とお姉さんは奥に声を張り上げながら

「山田くんはいつも中華弁当か揚げ物弁当かオムライス弁当だもんね。

今日は中華だと思ったんだよねー」と軽口を叩く。

「なーぜーわーかーるー」

将はオカルト口調を真似ておどけながら、読み古された漫画雑誌片手にビニールのソファに腰掛ける。

「今から家庭教師のバイトでしょ？」

とお姉さんは弁当に飯をつめながら聞いた。

「そうそう」

「東大生はいいわねー。わりのいいバイトができて」

将はなんと山田名義で東大の学生証も持っているのだ。もちろん偽造だが。

この東大の学生証のおかげで高額な家庭教師のバイトにありつけている。

いつもの将は、あまり余計なことは自分から話さないほうだ。

同年代の中ではクールなやつと思われている。

でも下町の、こんな店だから将は明るくふるまえる。偽の、とはいえ自分のことを少しだけ話せていた。

それにしてもこのお姉さん。

前髪を全部あげておでこを丸出しにして、ひっつめた髪は三角巾ですっぽり。

割烹着みたいな白いうわっぱりを着ていて年齢不詳だが、かなりの美人だなといつも思う。

丸出しにしても欠点の見つからない顔のカタチに、軽口を叩く目がいつも優しい。

唇は何もつけてなさそうなのに、いつもバラ色でツヤツヤしている。

袖からのぞく手首は信じられないくらい細いのに、無骨なうわっぱりの下の胸。

あれはけっこうボリュームがあるんじゃないだろうか。

こんな地味な弁当屋で働いているのは不似合いなほどの美人だった。

将は、正直なところ、このお姉さんとつかのまの軽口を楽しむためにこの店へ来ることにしているのだ。

「お姉さんも塾講師やってるっていってたじゃん」

「うふふ。夏休みでやめちゃった。……ここも今日までなのよ」

とお姉さんは信じられないことを宣言し、大きな目を細めて微笑んでいる。

「えー！……俺、ここの娘かと思ってた」

「まさか」

「ケッコンすんの？」違うよな。

「いやーね。教職が決まったのよ。産休の代理だけど。だからここも今日まで」

出来上がったお弁当を白いビニールに手早く入れながらお姉さんは嬉しそうだった。

「……ハイ。４５０円になります。お別れに八宝菜のうずらの卵、サービスで３つも入れといたよ。好きでしょ」

お弁当を将に手渡した。

「ウソー、マジかよー」将は５００円玉を渡した。

レジの引き出しからおつりを取り出す、その下向きの顔に睫だけが黒い。そして信じられないくらい長い。

そんなことを今初めて知ったことをとても悔しく思った。

いや、お姉さんに毎回会うたびに発見がある。それはどれも将を惹きつけるものばかりだった。

「マジ、マジ。ようやくフリーター脱出だよん」

とお姉さんはおつりを将の手の中へ。その手を将は思わず握る。

お姉さんが、何よ、と微笑みかけた。

その一瞬。カウンターを越えてお姉さんの肩を抱き寄せ、すばやく唇を重ねた。

将の想像通り、その唇は柔らかくて、想像以上に温かだった。

お姉さんはびっくりして目を丸くしている。

「お別れだよ。元気でね」

「……ちょっと、何するのよ！」

お姉さんが文句を言おうとしたときには、もう将はカウンターを離れ、自動ドアのところにいた。

あまりに一瞬だったので厨房の中にいたおかみさんやご主人も気づいていない。

何か声をかけようとしたときには将は行ってしまい、代わりに別の客が入ってきた。

「いらっしゃいませ……」

お姉さんこと古城聡（こじょうあきら）はかろうじて声を発することができたが、

それは将のときとまったく違う小さな声だった。

将はお姉さんの名前も知らないままだった。

2◆婚約者

聡のアパートは弁当屋から自転車で１５分ぐらいのところにある。４階建て、タイル張りの小ぎれいな鉄筋コーポだ。

２年働いた弁当屋の主人もおかみさんも聡の就職を心から喜んでくれた。それどころか、

「これは少ないけど……おせんべつ」

と、あまり話さない主人が封筒に入れた１万円さえ手渡してくれた。揚げ油の前にいるせいかシミだらけの手と、青みがかってみえるほど白い封筒。

その顔の、昔の人らしく太い眉に白いものがまじっているのを見たとき、聡はたしかに自分の親を思い出した。

今、その封筒はとりあえず飾り棚の上に置いてある。

その飾り棚の上には、香水、指輪、ネックレス。

聡のお気に入りだけがそこへ並ぶことを許されている。

そして写真立てが１つ。写真立てには日焼けした男性の顔が写っていた。

「ふうー」シャワーを浴びてようやく聡は人心地ついた。

頭にタオルをまいて、オフホワイトのバスローブを着ている。

シャワーで流した汗がまた噴出すことのないように、部屋はエアコンであらかじめ涼しくしてある。

冷蔵庫から化粧水を取り出し、コットンもつかわず手にとってそのままピチャピチャと頬に乗せる。

ひんやりして聡が好きな一瞬だ。夏だから乳液は付けない。

パソコンのスイッチをいれながら、リップを唇に押し当てたそのとき、聡はさっきのキスを思い出した。

「山田め」

と口に出してみるが不思議に怒っていない。単なる顔見知りに唇をいきなり奪われたのにだ。

実は聡も『山田』を可愛い常連さんだと思っていた。

今どきっぽい顔の、最近人気が出てきた、モデル出身の背の高い俳優にちょっと似ている。

――あのコだったらモデルもできるだろうな、あ、でも東大生がモデルする必要もないか。

――店にくるようになって1年以上ってことは、2回生以上だよね。ちょっとあどけないから、きっと2回生かな、たぶん。だとしたらハタチ、かあ。つまり5歳年下。

異国にいる『恋人』の、男性らしい唇の感触とはぜんぜん違った瑞々しい唇だった。

ほのかに潮の香りがしたように思った。聡は思い出しながら唇に指をあてていた。

――何考えているんだか！

聡は甘い妄想をふりはらうかのように、頭に巻いたタオルを勢いよくはずした。

濡れて甘栗色になった髪がバスローブの肩にかかった。将はその髪を見ていない。

――もう逢えないのかぁ。ちょっと寂しいナ。メアドぐらい聞いておけばよかったかな。

そこへ新着メールを知らせる音。

パソコンへ駆け寄る。『恋人』からだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ＭＹ　ＳＷＥＥＴ　アキ

明日から教師だね。緊張してるアキの顔が見たいよー。
日本はそろそろ秋の気配かな？
イイナー。こっちはやっぱ、暑すぎですＴＴ
お盆にアキとデートしたことが遠い昔のようだ……

じゃ、がんばれ

博史

＝＝＝＝＝＝＝＝

仕事中に手早く打ったのだろう短いメール、でも明日の初出勤を覚えていてくれて、

気にかけてくれてるのが嬉しい。

この、恋人の原田博史とは3年前、サンフランシスコで留学中に出会った。

現地で技術者をしていて、日本人にしてはスーツが似合う格好よさに、

聡のほうからデートに誘ったと思う。

以来、週末は博史のアコードで、カーメルへドライブしたり、

ナパバレーでワインのテイスティングをしたり、スポーツクラブでスカッシュをしたりした。

きりっとした切れ長の一重まぶたは、仕事の話になると鋭く光り、

でもスカッシュでミスをしたり、とびきり美味しいワインになごんだりすれば、糸のように細くなり。

はじめて付き合う大人の男に聡は夢中になった。

すぐに抱かれても嫌じゃなかったのに、そんなふうになったのはずーっと後のことだ。

そして、関係ができてすぐに、聡は結婚を申し込まれた。博史３０歳、聡２２歳のときである。

でもそのすぐあとに、博史の赴任地が中東になり、危ないから、という理由で結婚は延期になっている。

聡のほうは、留学で１年遅れた大学卒業後すぐに結婚するつもりだったので、就職活動というものをまるでしていなかった。

それで今日まで弁当屋と塾講師を兼業してなんとか暮らしていたというわけだ。

髪をブロウしながら、アイスティを入れた。小さなバルコニーへ続くサッシをあける。

むわっ、と重たい暑さがのしかかってきた。夜も遅いというのに、明日から９月だというのに、なんだか嫌な暑さだ。

聡は鉢からミントの葉をちぎってすぐにサッシを閉めた。

その葉っぱをアイスティに浮かべる。涼しい、匂い。氷がグラスに触れる、涼しい、音。

暑い中東の街で働く彼を思い浮かべる。

「オフィスはね、暑いというよりむしろ寒いんだ。

イスラム圏の人は、ホラ被り物をしてるからね。冷房をガンガンかけるんだ。

スーツの上着を着ていても大丈夫なくらいだよ。

わざわざ寒くしてもったいない、と思うけど何しろ原油は湯水のごとくあるところだからね。

でも外は５０度。もう暑いを通り越して痛い、んだよね」

そういえば、お盆に帰国したとき、博史の唇は痛々しくひび割れていた。

うっかり日焼け止めを忘れてしまったのがまだ治っていないといっていたが、そのひびわれた唇で聡の体を隈なく口付けた。

そう、隈なく……聡は思い出して一人で頬を赤らめる。

中東に赴任するようになってから、会ったときの抱擁はいっそう激しくなったように思うのは気のせいか。

「浮気しようにも、女性がいないからね」

そんなセリフを聞いた聡、ぷっと頬を膨らます。

博史は聡の膨らんだ頬をつつきながら

「うっかり現地の女性のそういうことになったら、一族から結婚しろ、さもなくば殺す、と迫られて大変だよ。……本当だってば、ちゃんと実話だよ」

と面白おかしく話すが、実際楽しみがなく寂しい暮らしを強いられているのだろう。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ヒロへ

日本とて、秋の気配はまだ遠く、暑いです。
明日から9月なんてウソのようだー。
教師ちゃんとできるかなぁ緊張してます（汗
イジメられたらなぐめてください。

クリスマスまでまだ遠いね。
体に気をつけて無理しないでね。

アキ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

呼ぶときは博史さん、だけど、メールでは他人行儀な気がして「ヒロ」と書く事にしている。

返信はもう12時すぎなので、短くまとめたが、一度書き直している。

最初は『若いコにイジメられたら』と書いていた。「若いコ」の単語を打ったところで、山田とのキスを急に思い出した。

メールを通して博史がこちらを見透かしている気がして胸が一瞬ギュッとした。

思わず飾り棚の博史を見る。細い目はなごんだままだ。

でも……結局「若いコ」の部分は削除してしまった。

3◆新米教師1

職員室で聡はため息をついていた。

荒江高校に赴任して3日目の朝は、めちゃくちゃな天気だった。

台風が接近しているのだ。

朝からもう疲労しているのは、台風の中の出勤のせいでもある。

もちろん慣れない勤めというのもある。

だが、それらは疲労の理由としてはほんの一部だろうと思う。

聡が赴任した、荒江高校がひどくガラの悪いところだ、というのは、初日、学校の前に立っただけで分かった。

屈強な、生徒じゃなくても避けたくなるような、ジャージ姿の体育教師とおぼしき、

ターミネーターのような男が2人竹刀片手に仁王立ちで正門を守っていたからだ。

彼は生徒が「おはようございます」と挨拶しながら通るのをあたりまえのように無視し、にこりともしない。

生徒も生徒。男子生徒は腰パンに茶髪、女子生徒はパンツが見えそうなミニスカートと黒々としたアイラインが標準のよう。

その肌は皆ニキビや肌あれに覆われているのがいかにも不健康だった。

聡は回れ右したくなるのを理性でこらえた。今日初めて生徒の前に立つ新米とはいえ教師なのだ。

職員室が、また異様な雰囲気だった。

職員室に聡が入ると教師が一斉にこちらを見た。

その視圧は一瞬あとずさりしそうになるものだった。

聡を見つめる教師群は、自衛官かヤクザのような風貌の屈強者か枯れ果てた年配者か変質者と間違われそうな個性派ばかりだった。

しかもそのほとんど男性で女性は聡が見る限り年配者が2人だけだった。

聡は、勇気をふりしぼって、一番近くにいたジャージ姿の中年の教師に

「あの、今日からお世話になる古城と申しますが、教頭先生はどちらでしょうか」

地味なスーツぐらいでは隠しきれない聡の若さと色香は、そのムサイ集団の中で確かに目立った。

まさにはきだめにナントカのことわざ通り。

「古城さんってアナタ？」

別の教師の机で話していた、教頭が立ち上がった。

「ハイ。よろしくお願いいたします」

「あ、ああ、ああ。じゃ校長先生に挨拶に行きましょう」

教頭はなぜかうろたえていた。

校長も同じだった。

「……君かね？古城聡くんは」

開口一声が裏返ってしまっていた。

小太りでテカテカした頭の校長は驚きでずり落ちた眼鏡を持ち上げて聡をマジマジと見た。

痩せぎすの教頭とは対照的だ。

「はい。山中教授の紹介で参りました。よろしくお願いします」

聡は、なんで皆こんな風に見るんだろ、といぶかしく思いながらも挨拶。

「女の子、ねえ……」ため息をつく校長。

――女じゃいけないわけ？

ひそかにむっとする聡をよそに

「さっそくですが、1、2年の英語と2年2組を受け持ってもらおうと思いますが」と教頭。

「え、いきなり？」再び校長が飛びあがる。

「そのために紹介して頂いた代用教員でしょう。女性だとは思いませんでしたが」

「ハア……」ため息をついて頭をかかえる校長。

何その態度。どうやらボーイッシュなこの名前で性別を勘違いしたようだけど、

こっちこそため息つきたいわ。という気持ちを聡は

「新人な上に女性でご心配だとは思いますが精一杯頑張りますのでよろしくお願いします」

という言葉に変換した。

就職難にようやく見つかった代用教員のクチを反古にするわけにいかない。すると校長は

「頑張らなくていいよ。それより気をつけてね」

意味深なはげましを聡にくれたのだった。

その後、聡はこの荒江高校の一風変わったシステムについて教頭から説明を受けた。

低偏差値校としては珍しく、中退が少ないこの学校の一番の特徴は

『卒業キャッシュバック』だ。

無事に卒業できたら、生徒に入学金の半金が返されるという。

聡は、きちんと卒業するなんてアタリマエじゃないか、とも思ったが、この中退が多いご時世としては、

画期的アイデアなのかもしれないと、とりあえず感心するそぶりを見せた。

そして、卒業の判定に使われるのが『ポイント評価システム』なのだという。

アメリカの最新システムを取り入れた、と自慢しながら、教頭はそのシステムを説明した。

教頭によると、荒江高校に入学した生徒は一定のポイントをまず与えられる。

遅刻、無断欠席、授業妨害など問題行動を起こした場合、

注意に従わないとそこから規定のポイントが引かれ、ゼロになった時点で退学になるという。

「現在の自分のポイントは、携帯やインターネットでも確認できます。

例えばだいたい試験も受けずに毎日欠席しますと1年の終わりで退学になりますね。

……まあもっとも試験といっても半分以上は中学の復習ですがね。いじめなどは発覚時点でクラス全員マイナス１０００ですからまずやろうという者がありません」

と教頭は自慢げに話した。

さっぴくばかりでなく、学校のためになるようなことをやったり、成績優秀者は加算もされるという。

そんなゲーム感覚もウケているのかもしれない。

聡は自分の担当である2年2組のポイント一覧と各生徒のデータのファイルを見ながら考えた。

そのあと、初のＨＲがあったのだが、それが最悪だった。

教頭に引率されてリノリウム張りの廊下を踏みしめながら聡は鼓動が一歩ずつ高鳴るのを感じた。

教職実習で教鞭をとったことはある。

しかし、あれは比較的お行儀がよい、故郷にある母校だった。

『あきらセンセイ』と慕ってくる女子生徒は本当に可愛かった。

ここを紹介してくれた大学の卒ゼミの教授は「ちょっと低偏差値の学校」としか言わなかったけど、

まさかこんなガラ悪目の学校で教師デビューとは。

聡は廊下を歩きながらあたりを見回した。

昭和５０年代創立、とあったがなるほど鉄筋3階建ての建物は古びている。

1学年に2組ずつしかないこともあり、トラックをつくれるほどの校庭もない小さな学校だ。

一一一体育祭とかあるのかなあ……。

タイル張りらしきトイレの前を通るとサンポールの匂い。

白かったであろう廊下の壁は落書きを消した跡と手垢で黒ずんでいて、緑と灰色がまじったような色になってしまっている。

壁に鉛筆で禁断の女性マークの落書きがあるのを見て、聡はふいに

女教師が複数の男子生徒にレイプされるアメリカのポルノ映画を思い出す。

たしか『さよならミス××××』だった。

――なんでこんなときにそんな映画を思い出すのさ！

聡は自分の脳を呪い、必死で別のことを考えようとした。

いっそ具合が悪くなった、とウソをついて帰ってしまいたい。そんな考えさえ浮かぶ。

いかにもガラの悪そうな風貌の生徒らだったが、皆教室におさまっていた。

その理由はすぐにわかった。

ターミネーターや自衛官、ヤクザなどの教師が廊下を巡回し始めたからだ。

教室に入る前の廊下上で、教頭は聡の耳にもう一度口を寄せた。歯槽膿漏なのか口臭がきつい。

すんでのところで顔をしかめてしまうところだった。

「……わが校では体罰厳禁ですから。まあ、古城先生は女性だからご心配はないとは思いますが、念のため」

体罰厳禁？じゃこの廊下を巡回してるターミネーターやヤクザまがいの屈強者はなんなの？

どう見たって体罰要員じゃない？聡はわからなくなった。

教室の入り口で教頭は若干胸をそらした。次にガラっと勢いよく木の引き戸を開ける。

古いせいか、ガラガラという音にしんちゅうのレールがきしむキイーという細い音が混じる。

「ホームルームは始まってるんだぞ！」

教頭はどなりながら教壇中央へドカドカとあがる。

大半の生徒らは好き勝手なところでくっちゃべっていたようで、ドアがあくなり、自分の席に慌てて戻る。学園ドラマのよくある風景が目の前で展開されている。

その勢いに乗れず、聡は入り口に突っ立っていた。

「古城先生」

教頭はつったっている聡にやっと気づき、こちらへ来るようながした。

瞬間、４０人ほどの視線が聡につきささった。

鼓動は最高潮になり、体のあちこちはコチコチ……変な話だけど自分の乳首も硬直してるのがわかる……になり、頭は真っ白になった。

どうやって教壇に立ったのかも覚えていない。

教頭がなにやら、今日からナントカセンセイに変わって、君たちの担任になる古城先生だ。

言うことを聞くんだぞ。とかそういうことをいった気がするが。

気が付くと、聡は一人で教壇に取り残されていた。

あいかわらず聡の、教卓から出た上半身にクラス全員の目がそそがれている。

聡は視線から逃げるように黒板に向き、大きく自分の名前を、漢字とひらがなで書いた。

「こじょうあきらといいます。英語を担当しますので、よろしく」

「先生、ニューハーフ？」

と男子生徒のバカ声が飛んだ。とたん、クラス中がげらげらと笑った。

何て答えていいやら。注意すべきなのか、わからない。

「違います」とだけ答えて、しょうがないので無視して、ホームルームを先に進める。

「じゃあ、出欠とりを兼ねて、一人ずつ自己紹介してくれるかな。……じゃあ出席簿1番、阿部くんから」

聡は出席簿の1番から起立させて自己紹介したのだが、これが失敗だった。

1番の阿部豊はボソっと名前を名乗っただけで座った。以降の生徒は皆それを踏襲して名前しか言わない。

それどころか、3番ぐらいからすでに、一部生徒は席を離れて好きなところへ行きしゃべりはじめたのだった。

女子生徒に入る頃には、すでに自己紹介が聞こえないほど、私語でうるさくなっていた。

耳をそばだてて辛抱強く自己紹介を聞いていた聡だが、とうとうたまりかねて

「静かにしてください」

と声をはりあげて注意した。一瞬静かになるや否や、また

「アキラさあ、処女?」と男子のバカ声。

すかさず「違いますぅ」と聡の声色を真似て別の男子。

どっと笑いが起こり、以降は動物園のような騒ぎになってしまった。

聡はどうしていいかわからなくなり、途方に暮れた。

すると廊下側の窓がガラッと開き、ターミネーターが顔を出した。

ターミネーターは、学校一のコワモテ教師・多美栄太先生だ。

それだけで、教室はシーン、と静まり返った。

なんとか自己紹介は終了できたが、聡は今後を思って暗澹たる思いで教室から職員室へ戻った。

4◆新米教師2

翌日の初授業も同じようなものだった。というより、さらに乱れていた。

席についているのは全体の半数ほどで、あとは好きな場所へ行っている。

女子はおのおの好きな席に固まってだべっているか、一心不乱にメールを打っているか。

男子は後ろのほうの地面に円陣を組んでこれまたダベリ。コンポまで持ち込んでいる。

プレステ、ＤＳに興じるものあり。席を３つ４つつなげて寝る者までいる。

「席についてください」

と聡が教卓の上から促しても、完全に無視。席につくのを待っていると、

「先生、アイツらにかまわないほうがいいですよ」

「授業を始めちゃってください」

とボソッとした声。前のほうの席の一部のマジメな生徒だった。たしかにこの様子では待っていても無駄だろう。

「じゃあ、始めます」

聡は仕方なく今日のページを指定した。そのページを開くリアクションがあったのはクラスの3分の1ぐらいだった。

英語のCDを流す。

――それにしても試験は半分以上中学の復習といってたけど、授業は高校2年の標準的なものをやるのね。

と不思議に思った。

「では今のところを、それじゃ、32番の真田由紀子さん、読んで訳してください」

幸い真田由紀子はまじめそうな生徒だ。小柄で小太り、垂れ目が愛らしい。指されて、あわてて起立する。

「え、えーと……」沈黙が続く。

「1フレーズでもいいのよ」

「……わかりません」

本当にわからないらしい。俯いたニキビだらけの丸い顔が真っ赤になっている。目もせつなそうに伏せて泣き出しそうだ。

「じゃあ、分かる人」

聡は、あわてて手をあげて解答者を募ったが誰も名乗り出るものは

いない。

「先生、先生」

と、小さな声。声は一番前の丸刈りの少年だ。野球少年だろうか。
それにしては日に焼けていない。

「いつもは、先生のほうで読んで訳してくれるんです。僕らはそれを写す感じで」

「ああ、そう」

中学レベルが大半の生徒に高校2年の内容を予習して来いといっても無理なのかもしれない。聡は納得して

「じゃあ読んで訳しまーす」

その聡の英語朗読に、騒がしい教室が一瞬静かになった。前のほうのマジメな生徒もポッカーンと口を開けている。

――え?何?

ヒュー、と口笛が鳴った。

「ガイジンみたいじゃん!」

「すっごーい!」

「カッケー!」

「もっとゆっくり読まないとわかりませーん！」

確かに聡は、子供時代を外国で暮らしたこともあるし、留学経験もある。英語はたしかに流暢だが……。

生徒たちは机に乗っけた足をバタバタさせたり、大騒ぎになってしまった。

そこへ。ガラリ。開いた廊下の窓から多美先生が。

とたんにシーンと静まり、生徒はサワサワと席へ戻った。

すべての生徒が席につくのを見届けて、多美先生は去っていった。

騒ぐ生徒、押さえられない聡。うるささに廊下から窓をあけるターミネーター。

2年2組だけでなく、1年生などもほぼ同じだった。

聡は他の教師はどうなんだろうと、空き時間に窓から授業をのぞいてみた。

しかし、聡の授業ほどひどくはなく、少なくとも生徒は自分の席についていたことに、聡はショックを受けた。

中には教科書の下で、漫画を読んだり、居眠りしたり、早弁したりしているものもいたが、静かにしていて授業妨害などはしない。

――私、やっぱり舐められているんだ。

聡はショックを受けた。

そして、台風の今朝に戻る。

昨日から、予報されていた台風は、予報円の一番最悪のコースを通ったらしく、風雨はかなり強かった。

聡は頭痛さえ感じたが、それが低気圧によるものなのか、精神的なところなのかよくわからない。

――今日はちゃんとしなくちゃ。

聡は自分にゲキを飛ばしながら、強い風雨の中、びしょぬれになりながら学校へやってきたのだ。

学校につけたのは教師のうち半数ぐらいらしく、職員室は閑散としていた。

「多美先生、お休みだそうです。土砂崩れで道路が埋まったんだとか」

多美先生以外にも、職員で有給休暇をとる人が多いのも、この天気なら仕方がないだろう。

隣の席の権藤先生によると、生徒のほうは、列車が止まるとか道が埋まるとか、

不可抗力がない限り、天気を理由の欠席はダメらしい。つまりポイントを引かれるということだ。

その言葉を裏付けるように、ＨＲ時に出欠確認すると、２年２組も欠席者数はほんの数名だけで、

台風が通過して小雨になった昼には、ほとんど出てきていた。

今日は、聡の英語は午後・４時間目だった。

ちゃんとしなくちゃ、という聡の意に反して、生徒らは昨日以上に騒がしかった。

教師の休みが多いせいで廊下の巡回が手薄なのを彼らは知っているのだ。

隣のクラスの教師が騒ぎに気づけば……と思ったが、体育で教室はカラッポのようだった。

教室は群れるハエの大群の中に頭をつっこんだような、ワンワンとした騒ぎになった。

聡の朗読も訳も何も聞こえたものじゃない。

ついに。

聡は意を決して後ろで円陣を組んでいる一番騒がしい男子のほうにつかつか歩いていった。

持ち込んだコンポからヒップホップ系の音楽がズンズンとリズムを刻んでいる。

聡はそれを止めた。

男子の群れは仁王立ちで立っている聡を見上げた。

「席についてください」

できるだけ静かな調子で言った。

聡の足元にいた男子がだるそうに立ち上がった。それはにょきっと生えるようだった。

いつのまにか聡を見下ろしていた。

身長１６５センチの聡より頭１つ分も背が高いように見えた。

顔面が、また高校生とは思えない。

細く整えた眉じりには輪っかのピアスがぶらさがっている。鼻にも金色の丸いピアス。

下唇の下に大きなニキビがある、と思ったら、それも丸いピアスだった。

髪は金髪のマカロニ。根元が汚らしく黒い。

細い目でも博史とは違う。腫れぼったい瞼の下で般若の目を押しつぶしたような目が非論理的な眼光を放っている。

盛り場にいるヤバイ兄さんそのものの姿に、聡はふるえを堪えた。

いつのまにかクラス中が、シーンとして、なりゆきを見守っている。

「犯すぞぉ」

間延びした口調だった。足元にいる仲間の男子が下品に笑う。

これでひるむわけにはいかない聡は怒鳴った。

「静かにしなさい！……これ以上、騒がしくしたら、授業妨害で１００ポイントずつ引きますよ！」

フン、と鼻を鳴らして、顔面ピアス男はまた座り込んだ。

聡などそこにいないように、コンポのスイッチを入れ、またもとどおり、だべり始めた。

他の生徒は、少しだけ静かになったので、授業を再開した。

前のほうの生徒は心配そうに聡を見ていた。

――これ以上、のさばらせるわけにはいかない

聡は職員室へ戻ると、彼らのポイントを本当に１００ポイントずつ減じた。

でもそれは、本当にマズイことだったのだ……。

5◆絶対絶命！

雨は5時間目の始まりには止んだ。やがて雲の隙間から陽がひとすじ差し込んだ。

雨に濡れた木々は、9月だとはいえ夏の香りを強く放ちだした。

5時間目と6時間目の間の休み時間。2年2組は解放されたように生徒が動き始めていた。

「あーあ今日も6時間かー。だりーの」つっぷすさっきの顔面ピアス男。

「ちょっと、井口」

携帯をチェックしていた黒髪の少女が手をのばして、隣の席の顔面ピアス男・井口春樹（いぐちはるき）の頭をつついた。

黒い髪は不自然なまでに黒く、ナチュラルではなく染めたもの、というのが一目瞭然だ。

また不自然なまでにまっすぐ背中まで伸びている髪は絶対にストパーだし、

丹念に塗ったマスカラは彼女の目の周りを銀河鉄道へいざなう女のように見せている。

白と黒と青で出来ているようなそんな冷たい印象の少女だった。

「あアん？なんだよ瑞樹」

「ちょ、見てよ」と黒髪の少女・葉山瑞樹（はやま・みずき）が携帯を井口に差し出す。

荒江高校の携帯版ＨＰで、各生徒がポイントをチェックできるページが表示されていた。

「ウソ！？」

井口は般若の目をひんむいて、ガバと起き、瑞樹の携帯を奪いとった。

そこには井口春樹の持ちポイントからきっちり１００ポイントが減点されていた。

まわりにいた不良どもも井口のまわりに集まってきた。

皆、一様に１００ポイントずつ失っていた。

「クソッ！マジでやりやがったな」

「どうするよ」井口をにらむ瑞樹の白目の面積が広くなり、キツイ顔立ちになった。

「幸い今日はうるせー奴らもすくねーし」

「やるか？」

「一度教えてやらねーとな」

不良一同うなづいたとき6時限を知らせるチャイムがなった。

6時限めが終わった。聡は1年2組の授業を終わらせていた。1年も巡回教師がいないせいか、遠慮のないうるささで、昨日よりさらに疲れてしまった。

「お疲れ様」

席につくなり、紙コップに入ったお茶が聡に差し出された。隣の席の権藤先生だ。

「あ、権藤先生。すいません。私のほうこそ淹れますのに」

聡は恐縮して立ち上がった。

同じ英語で3年生を担当している権藤は、自衛官のような角刈りの血色のよい顔をほころばせた。

「いやいいんですよ。お疲れのようですから」

「すみません。いただきます」

聡は紙コップのお茶をいただいた。鼻のあたりをくすぐる湯気にまじる茶の香りには憩いがあった。

職員室は冷房が効いているので、こんな熱い茶も悪くない。

「多美先生たちが休みだと、大変ですよね」と権藤。

「…え、ええ。あの、女の先生はほかにいらっしゃらないんですか？」

「いますよ。家庭科の持田先生に、保健体育の女子担当の三田先生」

どちらも年配の教師だ。

「音楽は……？」

「ああ。多美先生は音楽担当なんですよ」

「ええっ！」

「ふふ、信じられないって顔してますね。巧いんですよ。彼のピアノ。歌もすごい。見事なテノールでね」

あのターミネーターそのものの多美先生が音楽！

背が高い彼がピアノの前にこごんで弾く姿を思い浮かべると笑いが浮かんできた。

強面の教師ばかりか、と思ったけど、みんな中身は案外優しいのかも。聡は少しなごんだ。

そんなようすを職員室の窓から、瑞樹と井口がのぞいていた。

「だめだ、権藤といっしょじゃん。あたしマークされてるからダメだよ」と瑞樹。

「なんとかしろよ」

「そんなこといったって」

そのとき権藤と聡の二人は立ち上がって、職員室を出て行ってしまった。

他の教師も出たところを見るときっと放課後の職員会議だろう。

不良の企みは失敗したかにみえた。

職員会議は、報告などが主で1時間ほどで終わった。

もう夕方5時すぎている。

聡が会議室から職員室に戻ると、聡が出てくるのを待ってたように、女子生徒が二人待っていた。

茶髪にドロップのようなヘアピンをつけた背の低い女子と、日に焼けたサーファー風の二人だ。

権藤が目を柔らかくしたところを見るとまじめな部類の生徒なのだろう。

「おう、村上麻美に豊川香莉菜。どうしたんだ」

「あのぉ……。あたしたちぃ、英語&英語音楽部の顧問をぉ……。古城先生にやってもらいたくてぇ……」

背の低いほうが話し始めたが、言葉は尻切れとんぼになって、二人とも下を向いてしまった。

「ああ、いままで今井先生が顧問だったもんな、いいじゃないですか？」と権藤。

「……」二人とも、下を向いたままだ。

＜いいなよカリナ＞　＜ヤダあたし＞

香莉菜も麻美もコソコソと下をむいて、つっつきあっている。

「なんだ、お前たち？」さすがに権藤が不審に思ったようだ。

「あああの、そっそれで今から視聴覚教室に……」麻美のほうが意を決したように口を開いた。

「ああ、まだ活動してんのか……行っても大丈夫ですよ。古城先生。英語部は比較的マジメで可愛い奴らばかりですよ」

権藤先生のお墨付きがあるなら大丈夫だろう。聡は

「あ、はい。じゃあ。行きましょう」と席を立った。

職員室を出ると、なぜか香莉菜が泣きそうな顔をして顔をブルブルと横にふるわせた。

麻美がそんな香莉菜に『バカ』とこれまた必死な顔。

「……どうしたの？」

「い、いいえ」二人思わず声が揃ってしまった。

汚れた廊下の壁が、ガラス窓を通して落ちる直前の太陽により茜色に染まっている。

狭い校庭は、水はけが悪いらしく、一面の水溜りになっていた。

その静かな鏡のような水面に金色に染まる雲が映り、

校庭はそこが泥水でなすすべもない地面であることを忘れさせる美しさになっている。

「あの……。ここが視聴覚教室です……」

「私たちはここで……」視聴覚教室の扉のまえで麻美&香莉菜はあとずさりする。

「え、何？」二人は一気に逃げていった。

「英語部のチャミにカリナ、サンキューよ」

かわりに視聴覚教室のドアから現れたのは、あの顔面ピアスの不良生徒・井口らだった。

「何？あなたたち」聡はあとずさる。

彼女の後ろにはいつのまにか仲間の不良がガムをくっちゃくっちゃ噛みながら立っていて、あとじさる聡を受け止めた。

「先生の教育指導にお返しせんと、と思ってサァ」と井口。

「ね？」後ろにいた唇の分厚い茶髪が聡の耳元でいやに優しく囁いた。

息が耳たぶに吹きかかる。むせるような若者の体臭。気持ち悪さで背筋がぞくっとした。

次の瞬間、聡は両腕を不良につかまれ、視聴覚室の中に連れ込まれた。

「ホラホラっと」

聡は視聴覚教室の奥の準備室まで連れ込まれた。

西日が目に突き刺さる。と、突き飛ばされた。

聡が床に倒れこむと、すかさず金髪と茶髪の男子生徒が聡の両腕両足を一人一本ずつ床に押し付ける。

聡は大の字の姿で、標本に止められた蝶のように動けなくなってしまった。

いや、まだ生きているから必死で体をよじろうとする。

男子が「なんだよ」「無駄なんだよ」といいながらそれでも押し付ける力を強くする。

「やめなさいっ！何するの！」大の字のまま聡は叫ぶ。

「何するって……先生トロイんじゃない」と女子の声。

デジタルカメラを持った黒髪の女子生徒・瑞樹が準備室に入ってきた。

平然とした顔の女子生徒、それから動画で稼動しているらしいカメラ。

聡は、戦慄というものを味わう恐ろしさを初めて知った。

「何でこんなこと。……いつもこんなことをやってるの！？」

「そうだったらどうする、アキラちゃん」

井口が噛んでいたガムを聡の顔にむけて吐き捨てた。

聡は顔を反射的にそむけた。唾液にまみれたガムはサナギのように

聡の右頬にへばりついた。
そしてドロリと落ちていった。
それでも聡は井口らに顔だけでも向き直った。
「あなたたち、こんなことして、どうなるかわかってるの！」
すると瑞樹が「うるさいなあ。早くむいちゃえばァ」。
その声を合図に腕をつかんでいた男子が聡の上着を引っ張った。
「あっ！ダメ！何する……」
聡の抵抗も空しく、もともといっぱいいっぱいで止まっていた上着のボタンが次々に飛びちり、
聡の上半身を守るのは頼りない水色のレースのランジェリーだけになってしまった。
ヤバイ。どうしよう。
「ヤバイよ。これ。」
聡の心の中と奇しくも同じ台詞を見守る男子生徒がひゃっひゃっひゃと笑った。
もちろんこの場合は、ピンチである、というほうの意味ではない。
下着のみとなった聡の白い上半身の豊かさが欲情するほどだ、とい

う意味である。

それでも聡は大声で叫ぶ。

「誰かァ！誰か！来てください！誰かー！！」

「うるせえよ。誰もこねえんだよ。ばーか」

この視聴覚室は校舎のはずれにあるのだ。

井口はバタフライナイフを取り出して、その刃を聡の顔の前で音をたててかざした。

頬ぎりぎりの……産毛まで近づける。

「！」

――――切られる！

聡はおもわず目を閉じた。

しかし、刃をあてられたのは、ブラジャーの前の一番細い部分だった。

刃先で引っ張られて、あっけなくそれはちぎれてしまった。

聡の胸の先端を守るものはなくなった。真ん中に拘束されていた白い柔らかい塊が左右に流れた。

体を水平にしているのにそれは一定のボリュームが残っていた。

不良がいっせいに色めき立った。

裸の上半身をこんな悪童の前でさらしてしまったことに対する、激しい憤りと悔しさで聡は歯を食いしばった。

ガキどもは、聡の裸の上半身を見て、口々に卑猥なことを浴びせ掛けた。

「ちゃんと映ってるのか？瑞樹」

同じように卑猥なことを言っていた井口が、カメラを操る瑞樹に向き直った。

「う…ん。なんかぁ、逆光が激しくて。いまいち」

聡の体の真後ろの窓から、落ちる間際の夕陽の日差しがかなり強く窓から差し込んでいた。

それは、ファインダーの中の不良たちや聡の半裸を金色と黒のコントラストだけにしていた。

「なんだよ」井口は、瑞樹からデジカメを奪ってのぞきこむ。

そのすきにも

「まだまだこれから」

と斜に構えて聡の姿を見下ろして楽しんでいた男子の一人が、かがんで聡に近寄ってきた。

さっき視聴覚室の前で聡のわきにたって耳元に吐息をふきかけた茶髪。ラテン系のバタ臭い顔の奴だ。

奴は聡のほうへ黒い毛がその半分にも生えた手をにゅっと伸ばしてきた。

そのまま裸の肌に手のひらを這わした。胸の柔らかい塊にいきなりふれる。

聡は歯を食いしばった。

手は素肌をなぞりながら臍へ。聡を押さえる男子生徒が待ちわびている。

聡は本当にふるえがきた。

「ふるえてるの？まさか処女じゃないよね」

ラテンはそのまま聡の黒のズボンに手をかけた。

「イヤっ！」

聡は本当の恐怖を感じた。絶対絶命。腰を床に押し付けて、必死で抵抗した。

しかし細い腰は軽々と持ち上げられてしまい、ラテンのひざの上に移動させられた。

ばたつかせた足からローヒールの靴が脱げて、床の遥か彼方へ滑っ

ていった。

遠慮のない毛深い手で、黒のズボンがその下の下着ごとぐいぐいと掴み降ろされていく。

6◆再会1

1

聡の黒いズボンは腰骨まで降りてひっかかった。

グイグイと力任せに引っ張られるが、尻と腰骨にひっかかり、それ以上は降りない。

ラテンが面倒くさそうに聡のズボンをとめるボタンとジッパーに手をかけたそのとき。

バタンと、ドアがあいた。

反射的に一同がドアのほうに振り向いた。

「ショウ」まず瑞樹の驚いた声。

次に口々に不良が

「ショウ」「将さん」と歓迎の声をあげた。

それはもちあげられた聡の足先の方向へ向かっていた。

腰をラテンに持ち上げられている聡にはその顔は見えない。

――ショウ、『将』？あ！

聡は、初日に見たクラスのポイントやデータの一覧を思い出した。

その中に、ポイントが一人極端に低い生徒がいた。教頭はそれを指差して

「ああ、鷹枝将。一番の問題児です」

吐き捨てるように言った。月に一度程度しか登校しないのがどうやら低ポイントの原因らしい。

試験も受けていないので1年生の終わりで退学になるだろうに3月に高いポイントを獲得している。

コメントに「ボランティア」とあった。

「ここだけの話ですが金銭的な貢献、つまり寄付です。彼の父親は××党の有力者でね」

「そのうち、イロイロ噂を聞くでしょうが。とりあえず今はおとなしくしてるので、

ヘタにあまり関わろうとしないほうが賢明です」

データに貼付された写真には、憮然とした表情ながらなかなかの美少年が写っていた。

ＩＱ値が記載してある。その数値に思わず聡は

「ウソ！」と叫んだものだ。

ちなみに、テレビのＩＱ番組に出ればトップレベルの数値だった…

…。

鷹枝将。学校一の問題児が現れたとしたら。

助けではなく新手の仲間であることは間違いない。

聡は絶望したがそっちに気をとられている男子の隙をつこうともがいた。

将はドアの近くに転がっていた聡のローヒールを拾いながら

「何してんの」

近くにいた瑞樹と、井口に訊いた。

「ちょっと撮影会よ」

「教師？例の？」将は靴を瑞樹らに見せながら、奥をみやった。

そこには、若い女性が上半身裸で、押さえつけられていた。

下半身も今まさにあらわになろうとしているところであった。

「生意気なんで、ちょっとお仕置きしようとしていたんだよ」

井口が将に言い訳のように言う。

「ふーん」

女の頭の後ろにある窓からの逆光で詳しい様子はわからない。

沈む直前の夕陽は世界を赤みを強めた金の光と黒のコントラストにしてしまっている。

女の体は黒い陰の部分に属してしまっている。

聡の腰を抱え上げたまま動きをとめて、将のほうをうかがっているラテンのほうへ、将は歩いていった。

紫色の影に横たわる、女のほうを見る。あられもない姿とはこのことだった。

「な、なんだったら最初にヤってもいいぜ」

ラテンはなぜか将に気を遣っているようだった。

将が近づいたことで、聡を押さえている男子生徒の力はゆるんだ。

聡は、腕をふりほどいて、力が抜けているラテンに抱えられていた腰をひいた。

上半身を起こすと、腕にかろうじて残っていたジャケットの前を固くあわせ、将という少年の視線から自らを守った。

夕陽で茜色に染まりながら近づいて来る男をにらみつけようとして、

――――あ！

と気がついた。それは弁当屋に通ってきていた東大生『山田』だったからだ。

「……山田さん？」

呼ばれても、将は目の前の女が、弁当屋のお姉さんだとはしばらくわからなかった。

「……え？あ！」

やっと気がつくと同時に将は驚いた。

不良少年らはびっくりして二人をみていたが、

井口が将の後ろから声をかけて手をかけた。

「将、どうしたんだよぉ」

「……やめとけ」

「何？」

「やめろといった」と将は平坦な口調でいった。

「何だよ、こいつ俺たちのポイント操作しやがったんだぜ」

「そうだよ」ラテンも立ち上がる。

「とにかくやめろ」

井口は不服そうにだまりこんだ。

しかしラテンは

「ちょっとぐらいいいじゃん。ここまできてんだからさあ」と

将に背を向け、再び覆い被さろうと聡を組み敷いた。聡は悲鳴をあげた。

「やめろと」

将はラテンの襟をぐいっと引き、聡の身体からラテンを引きはがすと

「言ってるのが」

胸元に持ち替え、

「わからないっ？」

拳をその顎に下から食らわせた。ゴキっという嫌な音がした。

ラテンの下の前歯が一本空中へ飛んだ。

仲間がやられたのに、「すげえアッパー」とつぶやく声さえあった。

ラテンは口から血を流してその場に倒れこんだ。

「無駄な暴力使わせるなよ」将は言い捨てた。

「将、まあそのくらいでさあ」と井口がとりなした。

その場の不良は皆降参し、退散した。

瑞樹だけが、

「将、あとで行くから」と部屋を出る前に声をかけた。

2

聡はやっと解放された安心感で、いまさらガタガタと震え出した。

目じりに涙が一筋流れていたのに今気がつくと、後から後から涙が流れてきた。

涙を『山田』だった鷹枝将に見せたくない、と背を向ける。

将は肩をふるわせて泣いているらしい聡の後姿にそっと近寄った。

「大丈夫?」

聡の肩の横より先に進めなかった。

聡の横顔のむこうで、今まさに夕陽が今日の終焉をつげていた。

目をしきりに手の甲でぬぐいつつも、頬のあたりが涙で濡れている。

それがピンクがかったオレンジにキラキラと光り、将は一瞬みとれた。

――こんな風に再会するなんて。

永遠のように思われた夕陽は、あっけなく隠れ、あたりはいつしか藤色がかった黄昏。

聡の乱れた髪、首の横のあたりに、くちゃくちゃになったガムがひっついていることに将は気がついた。

取ってやろうと将は聡の首筋に手を伸ばした。

次の瞬間、視聴覚準備室に

パチーン！

と音が響いた。聡が将の頬を思い切りはたいたのだ。

「……！　痛ってえ」

将の口の端から、血が一筋流れた。

頬に走る熱い痛みは、将に小さい頃の記憶を思い出させた。

本当に将を産んだ母親の。

『将！遅くまでどこに行ってたの！心配したのよ……』

しかし今、将に強烈な平手を食らわせたのは将が助けた女だ。

「俺、叩かれるようなことしたっけ」

血を手の甲でグイとぬぐいながら将は、聡に向きなおった。

あの弁当屋のお姉さん。前髪も何もかもひっつめた色気のない髪と違い、

柔らかそうな髪にふちどられた顔はさらに美しかった。

しかしあの優しげな瞳はなく、涙に濡れた瞳のまま将をにらみつけている。

「触らないでっ。アンタもあいつらの仲間なんでしょ」

ナーバスになっているのか、言葉を投げつけながらも声は震える涙声だ。

そのまま将が左手に持っていた靴を奪いとり、履くのももどかしく、走り去った。

カッカッカッカッカッ……

走る足音が遠ざかる。

黄昏の中に、将は一人取り残された。

「弁当屋。あれで教師かよ」

頬がジンジンと痛んだが、不思議に腹が立たない。

それどころかなんだか笑いがこみ上げてきた。

将はタバコを取り出して、火をつける。

一瞬夕陽がそこによみがえったかのような暖かい光がライターから生まれる。

吐き出される紫煙は立ち昇り、やがて夕闇迫る部屋に溶けていく。

夕陽の赤は、将の忌まわしい記憶である火、そして血の色を連想させてもいいはずなのに、その光に包まれると将は安らぐのだ。

海に行けば、今日で１００回目の夕陽だった。

3

弁当屋にキスした翌日からここ3日、あいにくの天気だった。

将はひたすら眠った。外に出る気がしない――おそらく、弁当屋にいっても彼女がいないから。

彼女を失って、将は何をする気にもならなかった。

天気も悪いので夕陽を眺めにもいけない。

家庭教師のアルバイトだけ、重い体をひきずるように出かける。

便宜上、東大生を名乗っているが、小学４年生の勉強なんて別に東大生の必要はないと思う。

高２（将の学力は中２程度で中断しているが）でもまったく問題ない。

でもわが子をできれば東大に入れたい親は、東大生に執着する。

『東大ウィルスでもあると思いたいのかな』あるいはオーラか。

「最近は山田さんみたいにイケメンの東大生も多いですわね」３０代後半らしき、教え子の母親は、将が来る日はいつも着飾っている。

将が東大生であることをまったく疑っていない。まさか『電話一本即入学』の荒江高校の生徒だとは夢にも思わないだろう。

疑っていないといえば、アイツもそうだった。弁当屋。

将はことあるごとに弁当屋のお姉さんを思い出す自分の心をいっそ捨ててしまいたかった。

◇

将の３ＬＤＫのマンションは、しばしば、遊び仲間がやってくる。

夜、雨が降ったりして、行き場がないときなどは特に、

プチ家出している面々が将の家に泊まりに来る。

昨日も雨で、家に帰りたくない奴らが将の家に来ていた。
その中に荒江高校のクラスメートである、井口と瑞樹らも入っていた。

「今度の担任、結構カワイイの」最初に新しい女教師のことを告げたのは井口だった。

顔面中のピアスは将から見ても痛そうだが、本人は気に入っているらしい。

「あーいうの好みなんだ」と瑞樹が軽蔑したようにいう。

「オッパイでかそうじゃん、てかもろ巨乳」

「男ってみんなそこだよねー。牛みたいなのがいいんだ」

そういう瑞樹も別に貧乳というわけではない。

ほどよく形の良い瑞樹の裸の乳房を少しだけ将は瑞樹の制服の下に思い浮かべた。

……彼女とはそういう関係である。

しかし特に好きだというわけでもない。

最初に瑞樹が泊まった晩に、瑞樹のほうから将が寝ているベッドにもぐりこんできてそういう風になっただけで、
将のほうとしては、体にたまりゆくものを吐き出すのにちょうどいい存在なだけだ。

以来、彼女は家庭の事情
――離婚した母親に新しく彼氏が出来て同棲しているのだが、けしからぬことに、その彼氏が瑞樹にも手を出そうとしたらしい――で

家に帰れない、と将の家にほぼ住み着いている。

家庭に帰れない孤独をそれぞれに抱え、共通の寂しさを舐めあうように将と瑞樹は毎晩のように抱き合って眠る。

弁当屋への思いとそれとは別なのだった。

……そして今日。さすがに3日ぐたぐたしてたら、昼すぎには寝れなくなった。

急に晴れそうにもないし、今日も海には行けないだろう。

――暇だなあ。

と新しい巨乳女教師の顔でも見に行くか、と、つまり暇つぶしで、制服も着ずに夕方学校に行ってみたのだった。

覗いた職員室にはそれらしい女はいなかった。

おまけに雲間からはいまさら夕陽の光が差し込んでいた。

――やっぱり海にいけばよかったなあ。

水浸しになった校庭は、その静かな水面に茜色の雲を反射していた。

それを見ながらタバコに火をつけようとして、細く助けを求める叫び声を聞いたのだった。

◇

夕闇はいっそう色濃くなってきた。

将は、正面から目を射る夕陽の朱い光の陰で組み敷かれていた聡（まだ名前もしらないのだけど）を思い浮かべて、

その場所に目をやった。そこに何かが落ちている。

飛び散ったボタン、そして携帯電話だった。

7◆再会2

1

将は視聴覚準備室で拾ったいくつかのボタンと携帯電話をもう一度見た。

おそらくあの弁当屋のお姉さんのものだろう。

将はこれをどうするか、考えた。

夕闇も夜になりつつある。職員室にはもう誰もいなさそうだし、よしんば、いたとしても。

自分が『問題児』扱いであることを、称はよくわかっていた。

……となると。

将はとりあえず自分のマンションのほうへ向かって歩き出した。

◇

聡は前を固く閉じて廊下を走って……そのままタクシーで家に帰った。

誰にも会いたくなかったが、バッグをとりに職員室に入った。

幸いほとんどの教師は帰っており、誰にも声をかけられずに済んだ。

ドアを閉めて、鍵をチェーンまでかけると、靴も脱がずにドアを背もたれにしてその場に座り込んだ。

ボタンが飛んだ上着は、手を離すと自然にはだけてしまったが、気をまわす余裕もない。

静まり返った部屋。暗がりで閉じた青いカーテンだけが外に残った明るさを透過している。

聡はその場で１０分も動かなかった。

――絶対辞めよう。あの学校は危なすぎる。

辞めるとなると暮らせない。博史のいる中東へ行こうか。結婚を早めてもらって。とりあえず実家の母に電話をして。

と、腰のポケットをさぐる。

――！　ない！

携帯電話がないのだ。あの騒ぎのときに落としたか盗られたに違いない。

――どうしよう。

聡は再び座り込む。

――もうやだ。

また涙が出てくる。聡はそのままうずくまった。

盗られたとしたらどう悪用されるかわかったもんじゃない。

すぐさま、電話会社に連絡しなくてはならない。

でも、長いことバイトの掛け持ちで暮らしていた聡は生活費を切り詰めるために連絡手段は携帯電話だけだった。

だから連絡をとるには一刻も早く公衆電話を探さなくてはならない。

聡は立ち上がると、ボタンが飛んだ上着を脱いだ。

真ん中が切れたブラジャーを見て、恐怖が蘇るようだった。

手早く着替えて、携帯の契約書類を捜して。意を決してドアを開けて外へ。

本当はアイツラが待ち伏せしている気がして外に出るのも怖かったのだが……。

近くのコンビニにいけば公衆電話があるに違いない。

すでに空は藍色になり、夜と呼べる状態である。

人通りが多い通りに出るまで、聡は走った。

「おい！」

突然暗い水銀灯の下で通りすがりの男に引き止められる。

「……いやっ！」

聡は思わず、その男の顔も確かめず、持っていたバッグを抱えてうずくまった……。

2

「おいってば」

男は聡の肩をゆする。

「やめてぇ！」

聡はうずくまったまま叫んだ。

「俺だよ。俺。山田だよ」

聡はおそるおそる顔をあげた。

顔をあげたところに携帯と飛んだボタン４つ。将の手の中にあった。

「落ちてたんで拾ってきたんだよ。……悪用してないぜ」

将は聡とおなじようにしゃがみこみ聡の顔をのぞきこんだ。

水銀灯に照らされた、少し傾けた将の顔が聡の目の前にある。

何も悪びれない顔。さっき聡が殴った頬が少し赤く腫れている。

実は大学2年にしては少し幼い顔だと聡も思っていた。

まさか高校2年だったとは。

「なんで？なんで……」

なんで大学生なんてウソをついていたの？

なんであんな奴らの仲間なの？

なんで問題児なの？

頭にうかぶ「なんで？」のうち、1つだけ聡は口にだせた。

「なんでここがわかったの？」

「弁当屋のおばさんに聞いた」

本当は将は聡の名前も知らなかった。

昨日、井口と瑞樹が新しい教師の噂をしたときもロクに聞いてなかったのだ。

だから本当は弁当屋にいくまえに、井口に電話して名前を聞いたんだけど。

それは言うまい。

◇

弁当屋の主人は将をさんざん疑った。

「お前、その、ス、スト、スト……何だ」

「ストーカーですか？」と将が先に言った。

「そうだ。そのストー…カーするんじゃないだろうな」

「しませんよ」

「いいや。若い男は信用できんっ！」

すると奥さんが

「この人は常連さんだよ。そんなことする人じゃないだろうよ」

と、とりなしてくれて聡の住所を教えてくれたのだ。

「聡に変なことしたらタダじゃおかないぞー！」

という声に見送られて、将は聡の家へ走ったのだ。

◇

「変なことしたらタダじゃおかないぞー、って言われた」

将は聡の手の中に携帯電話とボタンを押し付けるように渡した。

メタリックの携帯は水銀灯の光を受けて鈍く光った。

「また会えて俺、めっちゃ嬉しい」

聡はまだ信じられない、といった顔で手渡された携帯とボタン、そして将の顔を見比べている。

「あきら、っていうんだ。男みたいな名前だね」

将は水銀灯で彫りが深く見える、聡の呆けた顔を見つめた。

長いまつげが頬の上に濃い影をつくっている。

「……担任なんだ」

これから毎日会えるんだ……。

聡は呆けた顔のまますくっと立った。

「あきら」

将の声など聞こえないように、聡はそのまま将に背を向けて歩き出した。

「やめるなよ！あきらセンセ！」

その背中に将は言った。早足になった。

「俺が守るから！絶対やめるなよ！」

将が追っているわけでもないのに聡はついに走り出した。

将は水銀灯の下で立ち尽くした。

3

将は聡とはじめて会った日を思い出していた。

あの日、少し風邪気味だった将はコンビ飯に心底飽きていた。

オニギリは薬臭く、ラップで包んであるプラスチックはレンジで温めると石油の臭いがした。

目先を変えたいと足を向けた小さな弁当屋。

しかし、女店員は早くも店じまいの支度をしていた。

「あの……もう終わりですか」咳をこらえながら将は聞いた。

「はい？……ちょっと待って下さいね。店長、店長……」店員は笑顔で奥に消えた。

奥から、

――油はもう火を落としてしまいました？

――でもまだ熱いですよね。お客さんなんですけど。

と聞こえた。この女店員こそ聡だった。

そして、その会計のとき。

ガソリン代を払いすぎたのか、お金が４０円足りなかった。

――しまった。

将は動揺した。ポケット中をまさぐったがお金はない。

「あの。お金が足りませんでした……」

そういって将はうつむいた。

すると聡はにっこり笑って自分の財布を出したのだ。

「ハイ。４０円」

「え」

「いいんですよ」

将が翌日、４０円を律儀に返しにいったのは、

もう一度あの笑顔に会いたかったからであることは自分でも知っている。

4

将はさる高級住宅街の大邸宅の前に立っていた。すっかり夜になっている。

「これは将ぼっちゃまお帰りなさいませ……。あら、ほっぺたはどうなさったんですか」

「なんでもない」

と将が答える前に太ったお手伝いは奥にむかって声を張り上げていた。

「奥様、将様がお帰りになりましたよ」

その声を聞いて奥から走り出てきたのは7歳ぐらいの子供だ。

かわいらしい顔の、でも頬に痛々しい傷跡がある。

「お兄ちゃん」

「おう、孝太。……元気だったか」

「うん、お兄ちゃん、ほっぺが痛そう」

と赤く腫れた将の頬を指差した。

将には異母弟にあたる孝太は優しい性格で、

言葉を覚えた頃から人のことを気遣う子だった。

「なんでもないんだよ」

くるくると孝太の頭をなでてやってると奥から和服姿の女性が駆け出てきた。

「将、お帰り……」

「おひさしぶりです。お義母さん。」

「その頬は……またケンカなの？」

「担任に引っ叩かれました」

バカ正直に答えた後でしまった、と思った。

無視しようと思ったのに。聡に関連することだから、嬉しさでつい口に出てしまった。

「でも大したことはないです」

とすぐさま付け加えたのだが、

「そんなに腫れあがるまで叩くなんて、酷い学校だわ」

と義母は眉根を寄せた。

「……お夕食は？」という問いに

「制服を取りに来ただけだから」と

将は義母の前を通り過ぎ、自分の部屋へ入る。

といっても、将は、この家に引っ越してきてから――――あの事件で前の家が焼けてから――――

この部屋で眠ったことは数えるほどしかない。

高校にあがってからは、世間体を気にする父が学校の近くにマンションを買ったので帰るのは何かをとりに帰るぐらいだ。

引き出しから制服を取り出す。まだ新品同様だ。

将は実は学校へ制服を着ていったことすらないのだ。

「将……、うちには戻ってこないの？」

部屋の入り口で問い掛ける母に将は何も答えず、制服を抱えると、横を無言ですり抜けた。

玄関で靴をはく将に義母は遠慮がちに続ける。

「将、お父さんが、あなたさえ行きたければアメリカでもフランスでもどこでも留学してもいいって……」

将は立ち上がると

「やっかい払いですか」

と薄く笑った。

「違うわ、違うのよ将、あなたにあんな学校は不似合いだと……」

義母の声を背に受け、将は路上に停めたローバーミニに乗り込み、エンジンをかけアクセルをいきおいよく踏んだ。

8◆テロ勃発

1

聡は一気に家まで駆け込んだ。

――よかった、本当によかった。

手の中の携帯を見る。本当に悪さはされていないようだ。

胸がドキドキしている。

胸の鼓動を収めるように、冷蔵庫からミネラルウォーターをとりだしてごくごくと飲む。

ひと息ついたところで、携帯の実家の番号を表示しようとして、操作する手が止まった。

冷たい水が動揺した心をクールダウンしたようだ。

――だめだ。実家になんて頼れない。

聡の実家は今は山口県の萩にある。

父親も母親も教師だった。

単なる教師ではなく、日本人学校の教師として一家でカナダのバンクーバーにいたこともある。

そんな両親の口癖が

「成人したら、何があろうとも親を頼るな」だった。

成人、とは聡の場合、大学を出るまでの意味だったけれど。

それに加え、聡は1年間、サンフランシスコの大学に留学したとき、その費用も、聡自身もバイトをしたとはいえ、大半を出してくれた。聡の将来のためになることだったら、身を投げ出すようにしてくれた親に恩義を感じている。

だが、大学を出たあとの親は厳しかった。

博史との海外での恋にのぼせあがっていた聡は就職活動もしなかったので、

なかなか就職できなかったが、一銭も援助はなかった。

「大人は自分の始末は自分でつけろ。例え女でもだ。現代は男女平等だ」

というのが父の口癖だった。

しかし厳しいことを言いながら娘の身を案じているのも知っている。

そんな親に、教師を3日で辞めるとも、その詳しい理由もどうしていえるだろうか。

聡は携帯を持った手を下ろした。

2

――学校を辞めて博史さんのところにいくまではまた、バイトで食いつなげばいい。

聡は自分を慰めた。そう思って辞表を書く。

学校には正直に理由を言うつもりだった。

未遂だから告訴するまではないと思う。

『やめるなよ』

『辞表』のタイトルを書き始めたとき、その声が脳裏にひらめいた。

『やめるなよ、俺が守るから』

鷹枝将の声。間一髪で助けてくれた。

携帯もわざわざ届けてくれた。

――でも。あんな子。東大生なんてウソついて。名前だって……。

しかし一度鳴り出した『やめるなよ』のリフレインが止まらない。

聡は一枚書き損じてしまった。

静かにしていると『やめるなよ』のリフレインがうるさいので、聡

はテレビをつけてみた。

いつも見ているバラエティがあるはず。

古いテレビは画面が明るくなるまえにまず音声が聞こえる。

しかし、笑い声が聞こえない。何か緊迫したアナウンサーの声が聞こえてきた。

ようやく画面が鮮明になった、と思ったら煙がもうもうと出ている建物が映った。

左端にテロップがあった。

『中東カタールでテロ邦人多数負傷か』

中東カタールといえば、婚約者の原田博史が赴任している場所だ。

「ただいま、臨時ニュースをお伝えしております。中東カタールで大規模な自爆テロがあり日本人が多数負傷している模様です」

聡は息が止まった。

3

テレビの画面に映し出されたのはあの９１１を思い起こさせるようなすさまじい煙だった。

襲撃されたのは日本企業を含む外国企業の入ったオフィスビルで

大量の爆薬と燃料を積んだタンクローリーが突っ込んだらしい。

１Ｆホールを中心にビルの低層階は火に包まれ、いまなお消火活動中だという。

画面に映し出された町は、消防と警察と野次馬が入り乱れて、騒然としている。

血に染まったビジネスマンらしき男が担架で運ばれていく。

血染めの包帯をまいたアラブ系ビジネスマンらしき男が放心した状態でインタビューに答える。

「ビルから出てきたら、爆発の勢いで５ｍも飛ばされた。ガラスの破片にやられた。

１階ホールにはエレベーターを待っている人もたくさんいた」

聡は固唾を飲んで、テレビを見守った。

状況は映し出されるが、なかなか続報は届いてこない。

あのビルは博史の働いているビルなのか。

博史の名刺を取り出して住所を見たが、わからない。

思い切って国際電話をかけてみたが、つながらない。

そこへ、望遠レンズが捉えたビル上層階が映し出される。

大勢の人が窓から助けを求めている。

ネットを開いてみた。博史から無事だと、メールが届いているのを期待した。

しかし届いていない。

頭を抱える聡の耳にアナウンサーの声。

「えーただいま、続報が入ってまいりました。

襲撃されたのはカタール中心地区にある××タワービルでして、

3階と5階に日本企業が入っています。

入っているのは○×商事、○×エレクトロニクス……」

聡は目の前が真っ白になった。博史のいる会社が読み上げられたのだ。

――博史さん！

ニュースは非情にも読み続けられる。

「ビルは3階までが壊滅状態になっており、多数の死傷者が出た模様です。

死亡した方の中に日本人が含まれているかどうかはわかっていません」

死。と聞いて聡は震える。

――あの博史さんが死ぬ？

ほんの2～3週間前に確認した博史の笑顔や逞しい体、熱い体温を思い出す。

――そんなこと、ありえない！

「最悪の場合、ビルが倒壊する恐れもあると現地消防局は懸命に消火活動と、

上層階に取り残された人々の救出活動を急いでいます」

聡はテレビにかじりつきながら、無事を告げるメールが博史本人から到着することを願った。

そんな聡は、ひさしぶりに涼しい夜が訪れたことすら感じるゆとりはない。

4

マンションの駐車場でミニを降りた将は、半そでに少しひんやりとした空気を感じた。

――ようやく夏も終わるのかな。

自宅のマンションの扉を開けたとたん、ギャハハと馬鹿笑いと共に若者の嬌声、

ズン、ズン、ズンと音楽の重低音が響いた。

１２畳のリビングには、煙草の煙が立ち込め、制服姿、私服姿を問わず、

若者が男女入りみだれて、ちらかった菓子やその他で足の踏み場もないほどだった。

なかには将が直接知らないやつもいる。

将の家は帰りたくないヤツの絶好の溜まり場になっていた。

「ショウさ～ん」
「将、遅かったじゃんよ」
「将」「将さん」
と皆が将を歓迎する。

すでに酒も入っているらしい。

将は「ハイ」とコンビニ袋を差し出し、

ソファーの、瑞樹が「こっち」と示した隣に腰をおろす。

何を話すでもなく、くだらない話。

何を成すでもない、くだらない遊び。

そんなもので時間をつぶす。

将は場に加わりながらも、心は完全に醒めてまわりのようすを睥睨

していた。

「頬、どうしたの」と瑞樹。

「別に」と将ははぐらかした。

瑞樹は少し不服そうな顔をする。

そこへ、かん高い少女の声。

「将さん、このコぉ、将さんに憧れててぇ」

などと真っ赤になっている少女を紹介している、その少女すら、実は将にはあまり覚えがない。

あどけない顔だから中学生かもしれない。

将はさげずむのか照れてるのかわからないような笑顔だけを返す。

しばらくたつと皆酒がだいぶまわってきた。

酔いつぶれて寝ているものもいる。

「将さ、さっきのひどくねー?」と井口。

赤くなってロレツと共に、理性も少し飛んだらしい。

「前原、泣いてたよ」

前原とは将が顎をくだいたラテンの名前だ。

「そうそう。せっかくいいところだったのに」

と瑞樹も井口に加勢する。酒で白い頬に少し赤みがさしている。

瑞樹には不思議な性癖がある。

女がヤられる現場にかならずいて、面白がるともなく冷静に、少しだけ笑みを浮かべて見下している。

前から不思議だったが、将にはだいたい理由はわかっている。

たぶん瑞樹自身もそういう修羅場を経験したことがあるのだ。

だからこそ女が同じ立場にひきずり降ろされる様子を確かめたいのだろう、と見当をつけている。

可哀想な女だとは思うが、相手が聡の今回は別だ。

将は上に向けた顎をゆっくりと下げながら、井口、そして瑞樹、その他クラスメートのほうをみやった。

目を心持ち細め、その瞳だけで。

その視線の冷たさに井口はギョッとした。将に関する、ある噂を思い出して凍りつく。

「や、あいつもいけないんだけどさぁ」

とあわててフォローする。

瑞樹も不服そうではあるが押し黙った。

「ふん」将はビールをぐいっと飲んだ。

――どいつも口ほどにない。

将は、席を立った。

「あん、将」

引きとめようとする瑞樹に

「風呂」と言っておく。

それを聞いた中学女子が二人つつきあって「キャー」など騒いでいる。

――うるせーの。

何もかも今日の将にはうるさくなった。

腫れた頬にシャワーの熱い湯がひりつく。

流れるような若々しい筋肉がついた将の裸身。

なめらかな皮膚の中、背中から上腿にかけて、古いケロイドのような傷跡が斜めに横切っていた。

あの事件でできた傷だ。

「じゃ、俺もう寝るから」寝室に入る前、将はそれでも騒いでいる一群に一声かけておいた。

「ええ、もう～？」１２時を少しまわったばかりだ。

まわりの騒ぎをよそに将は寝室に引き上げた。

暗がりのなか、将はセミダブルのベッドの上、ノートパソコンでインターネットをチェックする。

画面からのわずかな青い光だけが将のよすが――。

そんな状態がとても落ち着くのだ。

将は株をやっている。

自分名義の貯金を元手に投資を続け、それで中古ではあるが、あのローバーミニも手に入れたのだ。

取引は終了しているが、売買のために情報を収集する。

ポータルサイトのニュース一覧に

「中東カタールでテロ、邦人に死傷者」とあるのを見つける。

そして裾から煙を吐くビルの画像。

将は嫌なことをかすかに思い出した。

突然の爆発音。充満する煙。迫り来る熱さ。腰にのしかかった重い柱。

そして、泣き叫ぶ孝太。「お兄ちゃあん……」と必死で叫ぶ声。

将はパソコンを閉じた。

まさかこのニュースが聡に関係あるものとは将はまだ知らない。

寝室のドアの外からはまだワイワイ、ズンズンと音が聞こえてくる。

将は音楽をかけた。

深海のように光のない室内にけだるい、つぶやきのような低いヴォイス。

リズムではなくメロディをきざむベース。

その中で頬が少し熱をもっているのがわかる。

将はベッドボードに寄りかかって、暗闇に聡の姿を投影した。

――まだいてえ……。だまってやられるところ見といたほうがよかったかな。

――助けてやったのに、携帯を届けてやったのに礼の1つもないんだぜ、あの女。

将の脳裏に、押さえつけられた聡の姿。

――なかなかいい体だった。って何考えてんだ俺。

胸は横たわっていても柔らかそうなボリュームを保っていた。

乳首はどうだっけ？

さらに細部を思い出そうとすると肩をふるわせて泣く姿が浮かんできた。

コツ、コツ

ドアを叩いて、入ってきたのは瑞樹だ。

「将。あたしよ」

いい、とも言っていないのに、瑞樹は暗い部屋の中に入ってきた。

オーディオのパイロットランプのみが暗がりに赤や黄緑や青に光っている。

光はそれだけなのに、目が慣れたのか瑞樹が枕もとに腰掛けたのがわかる。

夢想の邪魔者に将はあからさまに嫌な顔をしたのだが、

瑞樹のほうの目は暗がりに慣れていないのか、そんな将の表情は見えていないらしい。

シャンプーの香りがする。

「バスローブ借りたよ。……こんな真っ暗にして何してるの」

「別に」

「ハイ」

何かを手渡された。掌にあたる冷たい塊。

「保冷材。ほっぺた赤かったから」

「……サンキュ」

瑞樹はベッドの上に乗ってきた。

今までの関係上、仕方がないので少し横にずれてやった。

瑞樹は将の隣、ふれあうほどの近さに座る。

「あいつらは？」

「また酒飲みゲーム」

瑞樹はさらっと言った。

グループでゲームをして負けた者が酒を飲む。

一見ゲームだが、女の子を酔いつぶれさせてヤる遊びだ。

今日は実はあの中学生らしき女の子がターゲットらしい。

将はまたか、と呆れた。

――――そんなに女に飢えているんだろうか。

否違う。単に退屈しているのだ。

行き場のない自分の力をどこかで爆発させたいのだ。

それを、女に向けている、それだけだろう。それは将にもわかる。

「この音楽何？暗いね」瑞樹が訊く。

つぶやくようなヴォーカルの音域は、

日本の平均的なヴォーカリストより1オクターブも低く感じる。

煙草の吸いすぎで死んだフランスのアーチストだが、

瑞樹は知らないだろうから将は言わない。

ふいに明るい曲になる。

「ね、この歌エッチな歌でしょ」

「……知ってるの？」

「なんとなく勘」

勘はあたっていた。棒つき飴と少女を歌った歌詞は実はエロティックなことを暗示している。

瑞樹の白目が暗がりで妖しく光った。

情を訴えるのは黒目だが、人を威圧しその通りに従わせるのは白目である。

瑞樹はベッドに深くもぐりこんだ。

若い将の体はすぐに反応してしまった。

慣れ親しんだ快感。将は瑞樹がしたいようにさせておくしかなかった。

扉の向こうから「将さ〜〜ん」
「いや、いや〜〜〜〜」
と切れ切れに聞こえてきた。

泥酔しているせいか、叫び声になっていないような、だらしない細い声だ。

でも確かに助けを呼んでいる。

「助けにいかないの？」

瑞樹が、飴を舐めるのを止めて、ベッドの中から問い掛ける。

将は快楽に身を委ねながら、「……いいよ、めんどくせ」とだるくつぶやいた。

「……だよね、だよね？じゃ、どうしてさっきはあの女を助けたのよ」

瑞樹がベッドを剥いでガバと起き上がる。

「関係ねえだろ……」将はつぶやくしかない。

「いつもは黙ってるのに。おかしいよ。変だよ」

――だまれよ、途中でやめるなよ

走り出した本能はもう止められないところまで来てしまっている。

将は瑞樹の唇に自分の唇を押し当てて黙らせた。

すべてが終わったとき、将の頬は痛みを再び主張しはじめた。

聡が触れた痕跡。

寝息を立てる女と一緒にいる自分に急に罪悪感が芽生える。こんなことは初めてだ。

神に許しをこうように、将は聡が明日学校へ来ることを祈りつつ、眠りに落ちていった。

9◆補習授業1

1

聡はふいに目が覚めた。ガバ、と身を起こす。

――うそ、もう7時30分！

聡は慌てて髪をまとめ、洋服を着替えると、化粧もせずに家を飛び出した。

◇

あれから聡は博史の身を案じてずっと眠れなかった。

テレビとパソコンの画面にずっと張り付くように起きていた。

そして、聡が待ち焦がれた、

博史からのメールは、明け方5時すぎにようやく来た。

＝＝＝＝＝

アキ

まず無事を報告します。

怪我ひとつしていないから安心して。

昨日は、原油プラントに視察に行ってて、

命拾いしました。

すぐに無事を知らせたかったけれど、会社がめちゃめちゃになった

し、
同僚が何人も怪我をして、その対応に追われていて、
こんな時間になってしまいました。
いちおう僕の社内で亡くなった人はいないんだけど、
隣の会社の方で、運悪く1階にいた方がいたそうです。
とりあえず、僕は無事です。

心配しただろう、ごめんね。

PS。
本当に霊界からのメールじゃないからね

博史

＝＝＝＝＝

「よかった。よかった……」
聡はメールを見て涙した。そしてそのまま脱力するように眠ってしまったのだった。

◇

つかまえたタクシーの中で手早くメイクをした。

――うわ、真っ黒なクマさん！

聡の目の下にはどす黒い三日月が2つくっきりと浮き出ている。

コンシーラーをぬりたくっても隠せるものではない。

タクシーはなんとか8時すぎに校門前にたどりついた。

道が復旧したのか、今日は来れたらしい多美先生が門の前に仁王立ちになっている。

しかし、茶髪や腰パンの生徒を見るなり、聡は昨日の出来事を思い出した。

テロ報道ですっかり忘れてしまっていたが、聡の体はいまさら固く強張った。

「古城先生？」

立ち止まった聡を見て多美先生が声をかける。

聡は何も言わずに多美先生にだけ会釈して学校へ走りこんだ。

職員室の教師は皆、昨日聡に何が起こったかを知らないようだった。

台風で欠勤した教師が多かった昨日に配慮して少し長めの伝達事項の発表がされたぐらいだ。

朝一番で辞表を出そうと思っていた聡だが、昨夜のことで辞表はまだ書き上げていない。

チャイムがＨＲを知らせた。聡のいちばん恐れていた時間だ。

聡は胃と頭が急にズキズキするような感覚に襲われた。

――教室に行きたくない。

しかし、辞めるつもりとはいえ、今は、まだ教師なのである。
行かざるを得ない。
覚悟を決めて、入り口の引き戸を開ける。
聡の気持ちに呼応するようにいっそうレールがきしんだ。
聡の顔をみるなり、昨日の悪童どもは口笛を鳴らした。
机に足を投げ出しながらも珍しく席についているが
「センセ、オッパイまた見せてねー！」
などと野次を飛ばす。
それを見て前の席のまじめそうな生徒までが「なにが起きたのか」
という目で聡を見上げる。
昨日、将にアッパーを受けたラテン系こと前原まで頭から顎に包帯
を巻きながら
「こんどこそやってやっからな」などと叫んでいる。
「ね、先生やっぱりヤラれちゃったのかな」
とそんな騒ぎの中、カリナはチャミにひそひそと言う。
「ええー、ヤラれたら出てこないでしょ」

とチャミ。

「でもさ、あの目の下のクマ、あれってやっぱり……」

「やめなよ」

聡はキレて、出席簿をバシッと教卓に叩き付けると

「静かにしなさいッ」

と叫んだ。

その瞬間、前の入り口がガラッとあいて背の高い男が息を切らして倒れこむように入ってきた。

その顔を見てクラス中がシーンとした。将だった。

2

将が目をさますと、隣で寝ていた瑞樹はいなくなっていた。

それに安心してアクビを1回。睡眠は記憶と共に罪悪感を薄めてくれていた。

リビングへ出ると、『酒飲みゲーム』をしていた奴らが何人か寝ている。

みんな他校のやつらだ。クラスメートは瑞樹も含めてみんな学校へいったらしい。

中学生らしい女の子が一人まだ裸に近い姿で意識がないのを見て将は目をそむけた。

――クスリを使ったな。

もう一人は部屋の隅でべそをかいていた。服はきちんと着ていたので将はほっとする。

彼女は将を見ると、泣き声が大声になった。

将は声もかけられずあとずさりし、リビングのドアを閉めた。

そこで頬の痛みに気が付いた。まだ少し腫れている。

急いで、昨日実家からもってきた制服を着ようとする。

が全体的にキツイ。袖も足も丈が極端に短い。それもそのはずだ。

この制服をつくってから将は１０センチも身長が伸びたのだ。

「毛ズネ丸見えじゃん」

などといいながら、シャツの前をひっぱると脇の下の縫い目がビリっと裂けた。

将は仕方なくいつものように私服で学校へ向かった。

◇

将は頬を少し腫らしたまま、でもツカツカと聡のほうへ向かってきた。

「おはよ、先生」

将はそれだけいうと教壇の上にあがった。歩いてくる。

どくん。

走ってきたせいか将の息は荒い。

聡はなぜか鼓動が高まるのを感じた。数歩で触れ合うほどの距離。

しかし彼は体を水平にすると聡の横をすり抜けた。

肩が聡の鼻先を通った一瞬、干草のような香りがした。

クラス中がその動向を見守っていた。

将は教壇を降りると

「どいて。そこ俺の席」

一番前、聡が立っている教卓のすぐ脇の席に座っている丸刈りの生徒に将は言った。

「ここは僕の席ですっ！」

と丸刈りは主張した。

「なんだぁ？」

将の眉がいびつにいきり立った。

「将、席替えしたのよ。アンタはこっち」

瑞樹が後ろから将に声をかけた。将は瑞樹が指す一番後ろの隅のその席を一べつすると、

「俺、前がいい。お前、替われよ」

と丸刈りの少年に向き直った。

「嫌ですっ」

丸刈りも負けていない。

「何……」

将が鋭い目でにらみつけるのを見かねて、丸刈りの隣の席の、ハンカチを鼻にあてた男子が

「あの、ここでよければ、替わります」

と将に席をゆずった。ちょうど教卓のまん前になる。

「悪いね～。サンキュ」

将は睨んでいた形相をいっぺんさせて一瞬笑顔になり、次には澄ましてその席に収まった。皆あっけにとられた。

「た、鷹枝くん。制服はどうしたの」

聡は将にいう。教師らしい台詞を頭の中で検索してやっと探した言葉だった。

「制服ですか？」

「そうよ」

「……ああ、合わなくなってた。毛ズネ出して来るわけにはいかないでしょ」

聡は「すぐに制服を直すなりつくるなりしなさい」としか言えない。

「はーい」と素直に返事する将を不良どもはウソだろ、という目で見ている。

「それに、そこは松岡くんの席でしょ。勝手に変わっちゃ」

「松岡くんが自分から替わってくれたんでしょ。それに熱心に勉強したい人間が前に座ってどこがいけないんですか」

「でもみんな平等に勉強する機会を与えられるべきでしょ。あなたは松岡くんから機会を奪ったのよ」

聡はようやく教師らしい台詞を言えたと思った。

「センセー、あいつ鼻炎持ち。チョークの粉ツライのを我慢してたのわからない？」

聡が後ろに移った松岡を見ると、松岡は鼻をハンカチで押さえたま

ま、おずおずとうなづいた。

とりあえず、今日の朝のＨＲ後半は静かだったことは確かだ。

3

今日は聡にとっては運が悪いことに1時間目が英語だった。

ＨＲから直接授業に移ってもよいのだが、聡は一刻も早く教室から抜けたかった。

早々に退散して職員室でひと息いれる。

「将、朝から学校に来るなんてどうしたのよ」

瑞樹がわざわざ一番前の将の席にやってきた。

将はいつも（というほど学校に来ていないが）、学校に来るときは正午近くや午後にちらっと来るぐらいだったのだ。

自分の席に、瑞樹の長い髪がかかるのを、隣の丸刈りは迷惑そうに眺めていた。

「別にいいじゃん」

「……将さ、あのヒトが好きなの？」

「なんでよ」

将は実は小さく動揺したがそれは表面になんとか出さずにすんだ。

聡への思いを瑞樹に知られることを恐れたのが原因ではない。

『好き』という直接的な単語にびくついたのだ。俺が弁当屋を『好き』？

「だってさ、昨日だっていいところで助けちゃうし……」

「俺は前から言ってただろ。ああいうのはよくないって」

「でもぉ」

そこでチャイムがなる。瑞樹は不満そうに後ろに戻っていった。

◇

実は将は、聡がきちんと学校に来ているかどうか不安で全速力で走って学校に来たのだった。

上半身だけとはいえあんな風にさらしものにされてしまっては、来なくても普通のことだろう。

――――せっかくまた逢えたのに。

将は走って走って走って、教室の入り口をあけた。

教壇の上に、聡は、いた。

それを確認して、将は安堵で力が抜けそうになったのだ。

授業が始まった。

今日は廊下を多美先生やその他屈強教師が巡回しているので、わりに静かだ。

後ろのほうの悪童連中も将の動向をみたいのか、席についている。

そういう将は教科書もノートも持っていなかった。手ぶらでガッコウに来たのである。

再び教壇にあがった聡が

「鷹枝くん、教科書は？」ととがめる。

将は悪びれもせず「持ってません」と答えた。

「……それでどこが熱心に勉強したいんですか」聡は問い詰めた。

「今日から熱心に勉強しようと思ったんだけど。いけませんか？」

と立ち上がってまっすぐに聡を見つめた。

聡は教壇の上でひるんだ。

しかし将は、次の瞬間には着席して、隣の丸刈りに

「教科書見せてくれない」と頼んでいた。

丸刈りはいぶかりながらも机をくっつけて将に教科書を見せた。

ようやく授業に入る。

こんなに静かなのははじめて、という静かさの中、聡は教科書を読む。

いや、本来はこれが普通なのだけれど。

将はくっついた机の隣、丸刈りから甘酸っぱい香りがするのを感じた。

汗の匂いのような不快な酸っぱさではない。もっと、覚えがある香り。あ！

「お前、寿司屋さん？」

将は熱心にノートに何かをしこしこと書いている丸刈りに小声で話し掛けた。

丸刈りは一瞬びっくりした目をして将を見たが

「授業中ですよ」と下へむきなおった。

「鷹枝くん、ノートは？」聡はリーディングをとめる。

「ありません。……ちょっと、ノートちょうだい」

将はまた丸刈りに頼んだ。丸刈りはさも嫌そうに後ろのページを破って将に渡した。

聡は再びリーディングに戻る。

「シャーペンも貸してよ」こそこそと将は丸刈りに要請する。

「赤ペンしかないよ」

「赤〜？ヤダよー、お前使ってないとき貸してよ、今板書してないじゃん」

「いやですよぉ」

リーディングしかしていないはずなのに、丸刈りはなにやらノートにしこたま書き込んでいる。

将がノートをのぞきこむと、聡の口頭の説明から、発音時の特徴や真似の振りがな、独自の注意まで細かく書き込んである。

「すげ！すごいなあ」思わず将の声が大きくなる。

「鷹枝くん」

聡が読むのをやめて注意をする。

「お前のせいでまた怒られたじゃないか」

将は丸刈りに毒づく。すると丸刈りは手をあげて

「センセイ、鷹枝くんが鉛筆忘れたそうです」と発言。

聡は無言で、胸ポケットに刺していたボールペンを将に渡し、リーディングを進める。

「センセイ、サンキュ！」

ボールペンには聡の胸のぬくもりが残っていて、将は自分の胸も温かくなるのを感じた。

井口が瑞樹に

「なあ、将ってさ、あーいうキャラだったっけ？」

と耳打ちする。

「知らないわよ」

瑞樹は、不機嫌そうに一番前の将の背中を睨みつけた。

将は何をメモするでなく、聡の姿を目で追っていた。

教科書を読む。皆にわかるようにゆっくりと、次に普通の速さで繰り返す。１センテンスずつ。とても上手い。

――外人みたいだな。帰国子女か？……まさかな。弁当屋が。

やっと平穏な授業風景になった、と思ったそのときだ。

教室の前の扉があいて、教頭が顔をだした。

「古城先生、ちょっと。至急校長室へ来てください」

１０◆補習授業２

1

授業を中断しての呼び出しとはなんなのか。

――まさか、昨日のことが問題になったとか。

でもあのことに関しては聡はむしろ被害者だと思う。

教頭は何もいわずに足早に前を歩くのみである。

聡が去ったあと、２年２組は急遽自習になり生徒は喜んだが、将は聡が行った後をずっと見ていた。

「失礼します」教頭が校長室の扉を開けると、そこには上品な和服姿の婦人がソファーに腰掛けていた。

「古城先生をお連れしました」

教頭は婦人に向かってもみ手をせんばかりに、猫なで声を出した。聡に対しては目配せをした。

しかし突然授業を中断させられて連れてこられた聡には何のことだかさっぱりわからない。

「古城です」

とだけ名乗って頭を下げた。

「……まあ。こんなお若くておきれいなお嬢さんが……」

と婦人は驚いたようだ。

「あ、あの……何ですか」とまどう聡に向かって

「古城先生、昨日、鷹枝君にひどい体罰を加えたそうじゃないか」

と教頭。

聡は何のことかしばらくわからなかったが、ようやくその記憶に思い至った。

昨日、視聴覚準備室で乱暴されそうになったのを助けてくれた将。

それを気が動転していたせいか、力いっぱい叩いてしまったのだ。

ここに座っている和服の婦人は、どうやら将の母親らしい。

「で、君が鷹枝くんを叩いたのは事実だね」

「ハイ」聡はうなづいた。

「こ、困るんだよ、あれだけ体罰を禁止していたのに……」と校長は弱りきっている。

「鷹枝君は、頬が腫れあがったそうじゃないか。どういう指導をしたんだね」と教頭。

「……ハァ。どうもすいません」

聡はあまり納得はしていないが、とりあえず動転して叩いたのはいけない、と謝った。

「謝ってすむ問題じゃありません」

上品そうな顔からは意外にも婦人はくいさがる。

「こんな若い先生が、息子に怪我をさせるまで叩くなんて、おたくの学校はいったいどうなっているんですか?」

「は、あの、古城先生は産休の代理教員の新任でして、それで……」

「代理教員に大事な息子の担任をさせていらっしゃるの?」

「は、はぁ……」

校長も教頭も恐縮しきってしまった。

「こんな未熟な教師がうちの息子の担任だなんて、とんでもありません。すぐさま替えてください」

婦人は強い調子で訴えた。それは命令ともとれる口調だった。そのときだ。

「その必要はねえよ」

その声は校長室の窓からだった。将だ。将が顔を出しているのだ。

次の瞬間、将は窓を乗り越えて校長室に入ってきた。

「将」婦人はソファから立ち上がった。

「これは、俺が悪いんだよ」将は自分の腫れた頬をぴしゃんと叩いた。

「将さん、何をいって……」

「俺が、先生を押し倒して、ヤろうとしたんだ。で、抵抗されて引っぱたかれたんだよ」

校長も、教頭も、婦人も、聡もあっけにとられた。

「あ、先生の名誉のためにいっとくけど、最後までヤッてないから」

「古城先生、本当ですか？」

校長が眼鏡を指で支えながら確認する。

違う。鷹枝将は乱暴されかけた自分をむしろ助けた側だ。決して彼が乱暴しようとしたわけではない。

「違います。彼はそんなことはしていません」聡はつい言ってしまった。

「何言ってんだよ、俺が悪いんだよ。俺が先生を襲ったんだよ」将はそんな聡にくってかかる。

「いいえ」聡は譲らない。

「じゃあ、何で鷹枝君を叩いたの？」

校長は眉も目じりも下げ汗をかきながら、本当に困ったように聡にきいた。

「それは……」

聡はいいよどんだ。まさかクラスの生徒に乱暴されかかったと、告げる覚悟はまだできていない。

「ふむ……」

教頭は将と聡のようすをじっと見ていた。そしておもむろに将に向き直って訊いた。

「鷹枝くん。君は本当に古城先生に……乱暴を働こうとしたんですか？」

「そうだよ。」

「違いますってば」教頭はそんな聡の反論を遮って

「古城先生はだまっていなさい……。鷹枝さん、将くんのほうにも非があったようですね」

「え？……ええ」

婦人も、教師を暴行しようとした、という息子自身の告白の前には何の言葉もない。

「ただ、古城先生にもやりすぎた面があったことは我々も否めません。……そこでどうでしょう、我々のほうで古城先生と将くんにそれぞれに適切な指導を与えるということで、ご納得いただけないでしょうか」

「……わかりましたわ」

婦人は深くお辞儀をして校長室を辞した。

婦人の姿が見えなくなると教頭は

「さて、二人の処分だが……」と切り出した。

「だから、先生は悪くないっていってるだろ！」

「何いってるの、嘘ついて！」

「二人とも、だまりなさい！」

教頭が怒鳴った。

「鷹枝くん。今回の処分としてこれから、毎日放課後に補習」

「ええっ！」将は顔をしかめた。

「今までずっと欠席していた分として当然だよ。そしてその指導は、古城先生にお願いします」

将の顔がパッと明るくなり、こんどは聡が顔をしかめた。

「担任として当然でしょう。準備があるでしょうから、明日からさっそくお願いしますよ」教頭はこともなげにいった。

教頭は、さっきからの顛末を見ていて、将が聡を気に入っていることに気付いていた。

聡を餌にすれば、将が学校に出席し、ひいては卒業させることができるだろう、とこの短い時間で計算したのだ。次期総理も噂される政治家の息子が卒業したとあればこの学校にプラスになるとのもくろみだ。

授業終了を告げるチャイムが鳴り二人は校長室から解放された。

「何であんなこと言うのよ」聡は将をにらみつけた。

「自分が……押し倒した、なんて嘘ついて」

「だってよ」将は聡を見下ろしていった。

「本当のことを言ったら、アイツラ今度は本当に何をしてくるかわからないぜ」

2

聡は帰るなりコンビニで買ってきた缶ビールをあけてぐっと飲んだ。

将はあのあと、聡以外の授業は、ほとんど寝ているか、携帯を使って株取引に専念していたという。

大胆にも教卓のまん前の席で。

その様子は授業担当から逐一、担任である聡の耳に入ってきた。

――なんなの、あのコは！

今日は、本当はあのままクビになったって異存はなかったのだ。

それをブチ壊しにした上に、余計な仕事まで増やしてくれて。

聡は空になった缶をローテーブルに勢いよく置くと気晴らしにＴＶをつけた。

ニュースでは昨日のテロの続報をやっている。

日本人が2人亡くなったらしい。怪我の軽い日本人にインタビューをしていた。

博史の会社の同僚だろうか。

聡は心配になってパソコンの電源を入れた。博史からの新着メールは来ていない。

まだ後片付けや処理が大変なのだろう。

聡はもう一度今朝来たメールを読み返した。

余裕を見せているけど行間に多忙さがにじみ出ている、と今さら気がついた。

すぐに、教師をやめて、博史の元へ行きたい、なんて言えないだろう。

メールの文字を見ながら聡は途方に暮れた。

3

翌日の放課後。

将と聡の居残り補習が始まった。

二人きりだと聡が危ないかも、という配慮で多美先生をはじめ屈強な教師が一人ずつ交代で、教室の後ろに座って見張りをすることになっている。

見張られての補習でむしろ緊張しているのは聡のほうで、当の将は「めんどくせえなあ」といいながら屈強教師のことなど気にもしていないようだ。

外はよく晴れて、窓からはオレンジ色の日差しの中、乾いた狭い運動場ではサッカーの練習をする生徒が見える。

今日こそ水平線に沈む美しい夕陽が見られそうだが、将は夕陽を見に行くことなどすっかり忘れていた。今の将は夕陽よりも聡の顔を見ていたい。

瑞樹が言った『あの人が好きなの?』。

あのとき、将は『好き』という言葉に一瞬ひるんだ。

だけどたぶんそうなんだろう。

気がつけば、将はいままで一度も、自分から誰かを好きになったことがなかった。

女のコのほうからは、いままでに何度も言い寄られた。

面倒臭そうなコでなければ拒まなかったから「付き合った」コはたくさんいる。

性格のいい子もいたし、かわいいコもいた。

けれど、こんな風にいつまでも顔を見ていたい、一緒の空気を吸うのが嬉しい、と思うような人はいなかった。

――なんでコイツ（教師）なんだろ。

将は自分でもよくわからなかった。

でも識らないうちに心が惹かれている。気付かないうちに芽生えた思いはたぶん……。

「で、いつから学校にいってないの」と聡は将に訊いた。

「え？」ボーっと聡を見ていたので、一瞬何を訊かれたかわからなかった。

「え、えーと、小6？中1？ぐらいかな」あの火事以来だ。

聡は事情も知らないのでただ、あきれる。

「はあー、何が東大生よ。よく家庭教師ができるわね」。

将は東大生の偽造学生証で家庭教師のバイトをしているのだ。

「小4の勉強ぐらいはチョロイさー」。

「こんなこともあろうかと、持ってきたけどやってみて」

聡は小学校の算数の問題集を机の上に置いた。

「ええー！何これ」

「勉強はつまづいたところまで遡ってやらないと、いくらやったって無駄なの。さ、やる！」

聡はそれは、クラスの授業でも思っていたのだ。

中学の問題をやらせても半分ぐらいできない生徒らに高校2年の内容を理解しろ、といっても無駄だろう。

「出来た」

「え、もう？」まだ15分しかたっていない。

答え合わせをするとパーフェクトだった。

そのあとも中学生の問題をやらせてみると、中二ぐらいまではほぼ

完全にできるのだった。

「学校に行ってないとかいって……これもまたウソ？」

「いや、ほんとうに行ってないって。家出する前に塾で習ったんだってば」

聡は将が、有力政治家の息子だということを思い出した。

たぶん、人気・実力とも若手ナンバー1で次期総理ともいわれている現・官房長官の鷹枝康三が彼の父だろう。

戦後を立て直した総理をも輩出した代々政治家の家系だ。

「鷹枝くん、小学校はどこ？」

「××小」。特に有名でもない小学校。たぶん公立だろう。

名門のおぼっちゃまがどうして公立小学校にいったのかは定かではないが、きっと何もなければ、有名私立中学を受験していたのだろう。

何もなければ？　では小6のときに何かあったのだろうか。

「じゃあ、三平方の定理あたりね」

聡は気をとりなおして、説明することにした。

英語専任だけれど、中学の数学程度だったら教科書を見ればだいた

い思い出す。

難題にぶつかったら、他の先生を呼んでもいいことになっていた。

ひととおり例題を説明したあとで、問題をやらせる。

しかし、これまた将はすばやく、かつ完全にできてしまうのだった。

あまりにもスムーズに進むので

「一度習ったんじゃないの？」と聡は疑った。すると将は

「こんなの一度説明聞いたら、フツーできるぜぇ、つまんねー」

と頬づえをずらして机に顎をつけた。

「行儀悪い！」聡はいちおう教師だからそういうだらしない姿勢を注意する。

「……それにウソばっかりついて。若いうちからハッタリ言わないの」

将はこんどは背筋を伸ばして足をブラブラさせた。

「ねえ！こうしようよ」

将はいきなり、叫ぶと、頭の後ろに組んでいた手を机の上にいきなり置いた。聡はびっくりして、のけぞった。

「何よ」

「あのね」
将はいたずらっぽい目で聡を見ると、ノートを指し示した。昨日買ったまだ新しいノートだ。
そこに将は新しいシャーペンで字を走らせる。学校にずっと行っていないわりにはきれいな字だ。
『この教科書、来週中に全部できたら、またキスさせて』
と書いてあった。
「何いってる……」
言いかける聡に将は人差し指を立てて制止した。
後ろに多美先生がいる。
「ダメ」聡はおかまいなしに断言した。
「じゃ覚えない」
「覚えないなら覚えなくてもかまわないわ。勉強は自分のためにするものでしょ」
「ふーん。自分のため、ね。でもこれって役にたつのかな」
勉強の意義。それは聡も生徒だった時代に思ったことだった。
「特に英語とか。大学にいくやつならともかく、一生外国なんか関係ないヤツがほとんどでしょ」

――勉強の意義はある。

それは確かだけど、聡は適切に答えられなくて、だまるしかなかった。

11◆休日

翌日はようやく土曜日。待ち焦がれた休日だった。

休日がこんなに嬉しかったことは聡にとって初めてだった。

とにかく精神的にも肉体的にも疲れた聡は、いったん起き上がって窓だけは開けたが、カーテンは引いたまま、ひたすらベッドの上でごろごろすることにした。

青いカーテンは、外の明るさを透過して、聡のいる部屋を深海のようにしている。

風に揺れるカーテンが白い壁に水中にいるかのような濃淡をつくっているのを眺めて、聡は砂にもぐる魚のようにうとうとと夢を見る。

もう一度目がさめたとき、すでに正午すぎていた。

さすがに起きないといけないだろう。

聡はベッドを降りて大きく伸びをした。そこへ携帯電話がなった。

見覚えのない番号。

いちおう出てみる。用心のため、声は出さないようにする。

「もしもし。俺だよ。俺」

巷で流行の詐欺のような台詞で電話してきたのは将だった。

「なんで、あたしの電話番号知って……」

――そうだ。あのコが携帯拾ったんだっけ。

「ちょっと、悪用してないって言わなかったっけ？」

やっと頭が冴えてきた聡は抗議する。

「もらった教科書でわからないところがあったからさぁ。訊きたいと思って……てか、もうすぐ近くにいるんだけど、そっちにいくから」

――え！

何だ、その断定口調。

「来ていいって言ってない、ちょっと、鷹枝くん」

聡の抗議の言葉は、伝えられないまま電話は途切れていた。

聡は携帯を握ったまま焦った。

寝乱れたベッド、掃除をするどころじゃなかった1週間で床には埃がつもっている。

着た洋服がそこら中にちらばっている。

台所には夕べの食器が洗わずにそのまま水に浸っている。どこから

手をつけていいかわからない。

あわててベッドを整える聡、と、自分の姿に気がつく。

ノーブラにタンクトップ、短パンは17歳の少年にはあまりにも挑発的すぎるだろう。

着替えようと鏡の前にたつと今度はぐしゃぐしゃの髪。昨日乾かさずに寝た髪は逆立っていた。

聡はパニックになった。

……ピンポーン。チャイムがなったのは非情にもそれから3分後だった。

電話がきてから、チャイムがなるまでの間、なんとかベッドにカバーをかけるのとジーンズにTシャツに着替えて髪を1つにまとめる。

それだけで汗だくになった。

「ちょっと、急に来るとかいって、迷惑よ！」

聡はハッキリと言った。

「ふーん、ここが先生の部屋か。結構お洒落にしてるじゃん」

将はあつかましくもあがりこむと、ローテーブルの前に座り込んだ。

「こっちは休みなのに」

聡はぶつぶついいながらも、将にウーロン茶を出した。

「で、どこが分からないの?早くだして」

「先生、まだ寝てたの?」

将が指差すほうを見ると、さっきまで着ていたタンクトップと短パンが脱ぎっぱなしになっていた。

聡はとびあがらんばかりに立ち上がるとあわててそれをしまいこむ。

将はたいして気にしないようで

「これ。弁当屋のおやじさんからおごりだってさ」

持っていた白いビニール袋に入った弁当を差し出した。

「寄ってきたの?」

「うん。早く食べようよ。俺超腹へったし」

何で、土曜日のランチをこんなガキと一緒に食べないといけないのかとも思ったが、聡もちょうどお腹がすいたところだった。弁当屋のご主人の好意を素直に受け取ることにした。

「いただきます」と箸を割って以来、もくもくと食べている。

聡がバイトしていた弁当屋は、材料もいいし、つくり置きなんかしない。

職人気質のご主人が手抜きせずにやっているからどのメニューもとても美味しい。

だが、聡はそれを味わう余裕がないほど緊張していた。

何か話さないと、と必死で話題を探した。

こんな狭い部屋で二人きり。しかも将が背もたれにしているのは聡のベッドだ。

何か話さないと、沈黙が彼に何かをさせそうで。

実際、バイトの最後の日、将は聡の唇を奪っているのだから。

「鷹枝くんってさぁ、なんで学校ずっと休んでたの？」

「行きたくなかったから」

将は即答した。

「お父様って、今の官房長官、だよね……」

「そ」

「……お母様はあれから？」

「知らね。俺、家出てるから」

そうだった。そうでもなければ、あんな風にしょっちゅう弁当を買いにくるはずがない。

「嫌いな食べ物とかある？」

「そーだねぇ、あんま、ない。あ、殻をむくようなものとか面倒。カニとか」

「身長何センチ？」

「１８２」

「……あ、制服、注文した？」

「した。……あのさ先生、俺、先生を襲ったりしないよ」

将は聡の心の中を見透かしたような言葉を言った。目が笑っている。

「いや、そんなつもりじゃ……」聡はうつむいて弁解するしかなかった。

将はあらためて部屋の中を見回す。

「あれ、彼氏？」

将は飾り棚の上の博史の写真を指差した。

「え、そ、そうだけど」なぜか聡は声がうわずってしまった。

「なーんだ、彼氏いるんだぁ、そーかあ」

早くも食べ終わった将は、博史の写真の近くにいってまじまじと見

ている。

「リーマン？」

「そうよ」

「付き合ってどれぐらい？」

「３年、もうすぐ４年ぐらい？」

聡は食べながら答える。博史のことが話題にのぼっていればとりあえず安心な気がしている。

「結婚しないの？」

「ん。今海外に行ってるから……」

「へー、そー、なんだ。彼氏いくつ？」

「３３歳」

将は１７歳の自分の倍近い年齢にあたる男の写真をもう一度見た。

「俺のほうが全然カッコいいじゃん……」

「……そうお？」

遅れてやっと食べ終わった聡は、コップのウーロン茶を飲みながら、あいまいに返事をした。

実際のところ、より『イケメン』なのは将だろう。

スラリ、という形容がぴったりな長身は、彼がいるこの部屋の天井を低く見せている。

流れるような筋肉のついた体、今時流行りのちょっとボサボサの髪型に相反して整った顔。

――本当に俳優かモデルやれそう。

聡はちょっとのあいだ将に見とれていた。

「よし、やろか」

将は、唐突に宣言した。

聡の目をまっすぐに見て言ったので、聡は心臓が止まりそうになるぐらい驚いた。

しかし、その直後、将はデイパックから教科書を出していた。聡はいろんな想像をした自分を恥じた。

「何？」

「いえ、ななな、なんでもない」

聡は動揺をかくすため、ウーロン茶を一気に飲み干した。

今日は英語だった。英語は小学校の低学年のときに習い事でやったきりで、どうも苦手のようだった。ほぼ最初からやり直さないといけない。

ただ覚えた単語をつづるのだけはすごく早い。

アルファベットもきれいだ、というより書き慣れている。訊くと、父が外交官だった関係で6歳までパリの幼稚園にいっていたという。

「じゃ、フランス語できるの？」

「使わないからほとんど忘れてるよ。英語はぜんぜんダメだし」

「日本へはいつ帰ってきたの？」

「小1。親父が選挙に出ることになって……」

将の瞳に一瞬、暗い影がよぎったのに聡は気付かなかった。

将は英語でも、文法の理解は早く、かつ応用もすぐにできるようになった。

「……本当に頭がいいのね」

「へっへー！」将は胸を張った。

「だからさ、ねえねえ、全部覚えたらさ俺とデートしてよ。そしたらもっと頑張るからさ」

「まだ言ってる。だから勉強は自分のためにやるんだってば」

「でもさ、励みがないとやりがいがないよ」

「励みねえ……」

将は立ち上がると勝手に聡の冷蔵庫を開けた。缶ビールを取り出す

と、プシュと開けている。

「あ、コラ！」

聡が気がついたときには、んぐんぐんぐ……、と飲んでいた。

ぷはーっと気持ちよさそうに息を吐き出すと

「だから、ご褒美」

いたずらっぽく笑う。

「もう……」

といいつつ補習を始めて1時間半以上経過している。

9月の昼下がり、気温もあがりつつある。

聡も冷蔵庫からビールをとりだして飲んだ。喉から胸へ爽やかな道ができたようだが、しばらくするとよけいに暑く感じられてきた。

冷房をいれるのももったいない気がしたので扇風機を稼動する。

「さ、やりましょ！」

「何を？」将がしらばっくれる。

「お勉強」

「もういいよ。疲れた。先生がデートしてくれないなら適当でいい」

将は寄りかかっていた聡のベッドに肩から上をつっぷした。ビールでけだるくなったのだろう。

それは聡も同じだ。

「……じゃ、こうしましょ。中学3年分。次の金曜までに覚えられたらデートしてもいいわ」

「本当!?」将は飛び起きた。

「ただし、超難関高校の入試問題から抜粋してテストの問題をつくるから、それで全教科９０点以上取ること」

「よし、やるやる」

将は腕まくりせんばかりにローテーブルに向かい続きを始めた。

その変貌ぶりというか猛勉強ぶりはすさまじかった。

さっきまで聡がひととおり口頭で説明してから問題をやっていたのだが、挙句の果てには

「説明はもういいよ。わかんないとこだけ呼ぶから好きなことやってて」

と言い出した。自分で読んだほうが早い、ということだろう。

一心不乱とはまさにこのこと、とばかりに将は集中して勉強していた。

そんなにしてまで彼氏のいる自分とデートしたい将。聡は彼が理解できなかった。

――頭はいいけど、どっか変。

――てか、自分ちでやればいいのに。

それでも、聡は将が勉強している間、邪魔しないように、少し離れたところでベッドに寄りかかって学校で配られた資料を読んだり、雑誌を読んだりしていたが、さっきのビールも手伝ってうとうとし始めた。

――教え子が頑張ってるのに寝ちゃいかんだろ。

と踏ん張ったが、ついに意識は彼岸の彼方へ連れ去られた。

「よし！……先生、文法、2年の範囲まで終わったよ」

将は聡を振り返った。聡は胸から上をベッドに預けてすやすやと寝入っている。

「先生？」

呼びかけても反応がない。口の端に笑みを浮かべて、いかにも幸せそうな寝顔。

1つにまとめた髪のこめかみのあたりで栗色の髪がほつれている。閉じた瞼をふちどる長い睫。ビールのせいなのか、少し上気した白

い素肌、ばら色の唇。

上からはTシャツの襟の下に息づく胸の谷間がのぞいている。

扇風機の回る音だけが、午後の部屋に鳴り響く。

沈黙は将に『眠れる森の美女にくちづけを』と甘く誘った。

将はそっと自分の顔を聡の顔の上に重ねた。

あと1センチで唇が触れ合う、というところまで接近したそのとき。

「……博史。」

聡は確かに眠っていた。

近づいた将の熱い体温は、眠れる聡に他の男の夢を見せたのだ。

将は、聡のそばから身を起こすと、今一度、棚の上の写真の中の博史を睨んだ。

しかし、夢の中の男相手では、将はぎゅっと奥歯を噛み締めることしかできない。

12◆人殺しとテストと

「なにやら鷹枝のやつ、ガリ勉してますなあ」

将の勉強ぶりは職員室でも話題になった。

「中学校の復習のようですが、今日は、N高校の入試問題をやってるようでして、いきなり質問されて焦りました」

というのは数学の教師だ。

「そうですか、国語の時間にはR高校の問題をやってましたよ。質問はなかったですが……古城先生、補習で何か喝を入れられたんですか？」

将のテストの問題をパソコンで作成しながら

「いいえ、何も……」と聡はお茶を濁した。

まさか、テストの成績次第でデートする約束をしたなんて言えない。

◇　◇　◇

あの日、うっかり寝てしまった聡が、次に目を覚ましたのは暗くなってだった。

目を覚ますと、将はまだ勉強していた。

「……ん？鷹枝くん？　……まだ勉強してたの？」

「あ、先生、やっと起きた？じゃ俺帰るよ」

「え？あ、今何時？」

もうすぐ7時だよ、といって将は立ち去ろうとした。

「もしかして待っててくれたの？」

「うん。だって俺が帰っちゃったら、鍵開きっぱなしでキケンだろ」

「起こしてくれたらよかったのに」

聡は教え子、しかも男子生徒の前で油断して寝てしまったのが少し恥ずかしかった。

「だって、あんまり気持ちよさそうに寝てたから。じゃ。先生。デートの約束忘れるなよ」

◇　◇　◇

今日は約束の金曜日だ。あと1時間終えれば約束のテストだ。

この1週間、将は集中して勉強した。

話題になったのは、職員室だけではない。クラスでも気味悪がられていた。

めったに来ない将が毎日出てきている。そして勉強ばかりしている。

クラスには変な緊張感が流れ、授業中もシーンとしていた。

特にとばっちりを受けたのは、不良仲間だ。

アジトというか、溜まり場にしていた将の家を追い出された。

『うちに泊まるのはかまわないけど、俺の邪魔をするな』

と将本人に言い渡されたからだ。

それでもこっそり女の子を連れ込んで酒飲みゲームをしているのを見つかって、ぶん殴られたやつもいる。

殴られたユータが頬にシップを貼ったまま

「あいつ、気が狂ったんじゃない？」と呟いた。

「てか、アキラちゃんに夢中なんでちょー？」というのは難を逃れたカイト。

視聴覚室で聡の腕を押さえつけていた二人だ。

「ゲロゲロ、カンベン、いくつ年上だよ～」

と井口がピアスだらけの顔をしかめた。

将が聡と二人で（屈強教師の監視つきだが）放課後に補習をしているというのはクラスの皆が知っていた。

これまでは夜遊びするときに、気前よく将がみんなの分のお金を出していたのだが、それも期待できなくなってしまった。

瑞樹はシャーペンの芯を出したりそれを指先でひっこめたりして弄びながら、一番前で授業も無視して勉強しているらしい将の背中を睨みつけていた。

家に帰りたくない瑞樹の事情を知っているから、一応家には泊めてくれるが、先週以来一度も相手にしてくれない。

誘っても「眠いからやめて」と完全無視だ。

実際、夜は早い時間からすべての機能を停止したかのように眠ってしまっている。

それに、瑞樹は見ているのだ。

聡の補習に将が出かけるときの、ポーズではだるそうに見せていて、楽しそうな目を。

――なんであんな年上（ババア）の教師に。

そのとき指先に強く押し当てたシャーペンの芯が折れた。

「っつ……」

桃色をした瑞樹の、人差し指の皮膚の先に黒い芯が刺さっている。

紅い血がみるみる滲み出した。

その横でチャミとカリナは、昨日放課後に買った髪飾りやらアクセサリーやらを机の上に広げ、他の女子生徒と共に品評会をしていた。

「かわいいー！」

「昨日××いったらちょうど安売りしてて超ラッキー」××とは若者が集まる町である。

「ありえなーい！超カワー！」

というたわいのない甘い声。

が、何かの拍子か、ネックレスの細いテグスがちぎれ、ついていたビーズやトンボ玉が散らばった。

「キャー、拾って拾って」

その1つが瑞樹の椅子の下に転がった。

「ごめん」

チャミがそのトンボ玉を拾おうと屈むと、瑞樹はおもむろに立ち上がり、玉を上靴のかかとで踏みつけた。

ボリっという鈍い音と共に、玉はバラバラに砕けていた。

「ちょー何するんよ。ひどくなーい？」

「何？何か文句ある？」

瑞樹は横目でチャミを睨みつけた。その光る瞳と白目に圧倒されて、チャミはだまりこんでしまった。

将は、一番前の席で難問の練習問題を解き終わって、伸びをしていた。

元の体勢に戻るときに、床を転がってきたキラキラした玉に目がいった。

足元で止まったので拾い上げる。将が玉を拾ったのを見て、玉を追ってきたカリナは凍りついた。

いや、見ていたチャミやみんなすべてが固まった。

「あ、あの……」カリナは意を決して将に話し掛けた。

「これ？……ハイ」

将はカリナの手の中に、玉を落とすと何事もなかったように机に向かった。

「チョーヤバかった、見てるほうが怖かった」

チャミは席に戻ってきたカリナに囁いた。

「でもさ、……人殺しに見えないよ。鷹枝君」

カリナは将の背中を見ながら呟いた。

「……まあね。それに超イケメンだしね」

「優しそうだった」

「おっとお。でもあの瑞樹とつきあってるんでしょ。そーだ、ちょー聞いてよ瑞樹ってばあったまくるー……」

クラスでは『将は人を殺したことがある』というまことしやかな噂が囁かれていた。

そしてクラスの誰もがそれを信じていた。ゆえに、めったに学校に来ないというのも、納得されていた節がある。

「フン、いい気になりやがって」

教室の隅でつぶやいたのは、あのとき将に顎をやられた前原だ。

「……人殺しがよ。本当はあいつのほうがカンベツ送りのはずなのによ」

将の後姿を憎憎しく見つめていた。

金曜日の6時間目は自由学習の時間となっている。

従来であれば図書室を利用したり、ボランティア活動をしたりする時間だ。

その時間から、特別に許可をもらって将のテストを始めることになっていた。

教頭や教師たちには、このテストの成績がよかったら、努力を認めて、放課後の補習から解放することにしたい、と話して許可をもらっていた。

２時間３０分で５教科、しかしその問題は、聡が自ら、難関校の受験問題から難問を選りすぐって作成したものだ。

「古城先生も恐ろしいテストをつくりましたねー」と教師たちは笑った。

すべての教科で６０点以上も取れれば日本全国どんな一流高校でも受かるだろう。

この学校の生徒がやっても２０点も取れない者が大半で、おそらく将とはいえ１週間の付け焼刃では４０点にも届かないだろう、というのがこのテストを見た教師の意見の大半だった。

とどこおりなくテストが終わって、聡が採点する横で将は祈っていた。

慎重に……マーカーの音がシューッと少し長い音がするときは〇で正解。

シュッと短い音のときは間違い。その音が聞こえるのを将は恐れた。

１教科平均１５題の問題はすぐに採点が終わった。

「終わりました」聡が宣言した。

「すごいよ。国語が９５点、数学が１００点、理科が９０点……」

思わず将がよっしゃ、と拳を握る。

「社会が８５点、英語が７０点」

ガクッと肩を落とす将。

いくら頭の回転が速い将とはいえ、たった１週間では記憶系教科の網羅には足りなかったのだろう。

特に英語は長文問題がキツかった。

「でもすごいじゃない！すごいよ、鷹枝くん！たった１週間で」

聡ははずんだ声をあげた。まさかここまでいい成績をとるとは。

「鷹枝、お前すごいじゃないか」一緒に監視していた多美先生も驚いている。

「でも……。俺、９０点以上とらないと意味ない……」

将はしょぼーんとうなだれた。

「なんだ、その９０点てのは？」

いぶかる多美先生の横で聡はなぜか笑いがこみあげてきた。

聡とデートしたいがためにそこまで必死になるなんて。しかもダメでうなだれている。

――なんてカワイイやつ。

聡はなんだか、しょぼくれる将をぎゅっと抱きしめてあげたい気分になってきたのだ。

13◆汐風の中で1

土曜日。午後の空はすでに金色の粒子を含んだような秋の色になっていた。

聡はローバーミニの助手席に乗っていた。運転席には楽しげにＦＭラジオにあわせて鼻歌の将。

ローバーミニの狭い車内は、二人の距離をとても近いものにしていた。

昨日。

自宅に帰りついてから聡は将に電話をかけた。

「先生？」

将は電話に出るなり聡を呼んだ。きっと番号を登録してあるのだろう。

「今日は残念だったね」

「フン……で、なんだよ」

「明日デートしてもいいよ」

「ウソっ！？マジ？……何で」

「前に助けてもらったのに、お礼もしてなかったでしょ。携帯も拾ってもらったし。それにテストすごい頑張ったし……」

電話を切って、聡は思わず、博史の写真を振り返った。

細い目の笑顔はいつもと変わりがない。

「浮気じゃないよ。教え子のご褒美にちょっと付き合うだけだから、ね？」

と写真の博史に囁く。

このちくちくとした罪悪感は婚約者以外の男性と2人でデートするからであって、特別なものではない、と聡は思い込んで納得する。

しかし、高校生とのデートに何を着ていくべきなのか。

あんまり若作りするのも何だし。

あんまり気合を入れたと思われるのも何だし。

そうかといっていつも学校に着ていくようなスーツじゃあんまりだし。

鏡の前であれこれ合わせ。挙句、床に紙を敷いて靴まで合わせないと気が気じゃなくなる。

聡は小一時間たっぷり悩んだ。

結局、聡は学校では着れないフェミナンな柔らかい生地の、柄ものスカートに黒いノースリーブのカットソーとデザインジャケット、それに少し早めではあるがブーツをあわせることにした。

黒は流行を問わず、聡の好む色だ。肌の色が引き立って大人っぽく見える上に、スタイルのよさを引き立てることを知っている。

これなら少し年上の雰囲気もあって、ブーツで可愛さもあるし、いいだろう。

聡は髪に艶出しのヘアオイルをいつもより多めに塗った。

家まで迎えに来るというので、待っていると時間に、合図どおりワンギリコール。

外に出ると将はローバーミニの横から手を振っていたのだ。

「た、鷹枝くんっ、あなた無免許」聡は階段を降りて駆け寄る。

「先生、ここ、駐禁だから早く乗って」

サングラスをかけた将は、聡を強引に助手席に座らせてアクセルを踏んだ。

「どこいこうか?」

将はのんびりと運転している。そのサングラスをかけた横顔はとても高校生には見えない。

高く鋭い鼻梁に、整った形の良い唇。聡は一瞬見惚れてしまった。

長い足を包んでいるのはジーンズ、たぶん高価なヴィンテージものだろう。

そこらの不良少年のように「腰パン」などにしていない。

「ちょっと、鷹枝くん、無免許でしょ」

「免許？もってるから心配しないで。ほら」

よこした免許は写真だけ将にすり替わっていて、他は山田某名義になっている。

「これは山田のでしょーっ！先生に運転代わりなさい！」

「え、先生免許持ってるの？」

一応持っている。もっとも高校を卒業した春休みに取得して以来、ほとんど運転してないが……。

でも無免許の教え子に運転させてたことがバレたらそれこそ一大事だ。

将はしぶしぶ、道路わきに車を止めた。

聡は覚悟を決めて、運転席に座った。

――え、うそ。マニュアル車？

いちおう聡の免許はマニュアルも運転できるものだが、本当に教習所以来運転していない。

アメリカで少々運転したのは、すべてＡＴ車だった。

「ちょっとクラッチ固めだから」助手席に移った将がアドバイスする。

なんとかなるさ、と再度覚悟を決めてクラッチをおそるおそる踏みつつアクセルを踏む。

前に進まない。

――なんで？

「先生、ハンドブレーキ、ハンドブレーキ」

「あ、そうか」

ハンドブレーキ解除。よし。クラッチとアクセルをゆっくり……。

「危ねえっ！」振り返っていた将の緊迫した声。

「ええっ？キャ！」

とたん、運転席の窓ギリギリを原付バイクが走り抜けていった。

車を出していたら接触したかもしれない。
聡は胸が痛くなるほどドキドキした。
「ちゃんと後ろ確認して」思わず将の声が少し鋭くなる。
今度は確認した。聡は再度クラッチとアクセルを踏んだ。
ガクッと車がのめった。お決まりのエンスト。
「……やっぱり俺が運転するよ」
「で、どこに行こうか」
落ち込む聡だったが将は別段気にする様子もない。
「水族館、遊園地、動物園、映画、海……デートっていったらこのへん？」
聡は思わず博史とのデートを思い出していた。
博史が帰国したときに一緒にいくところ、といったら、ホテ……。
――バカ、そればっかじゃないでしょ！
聡は照れ隠しに窓の外に顔をむけた。それは将にはそっぽを向いたように見えた。

窓の外に聡は博史との思い出を投影していた。

お盆に行ったのが温泉。聡は一人頬を染める。

前には和食、映画、美術館、歌舞伎、買い物に行っている。

ひとつひとつに博史の思い出がまとわりついている。

外国に赴任している博史は、帰国すると『日本』にどっぷり浸かろうとする。

今年一緒に行った温泉宿でも、浴衣に檜風呂、冷酒にうっとりしていたっけ。

竹林にひらけた縁側、浴衣姿で同じく浴衣姿の博史に膝枕を与えて、和紙の団扇で風を送った今年の夏。

竹林がさわさわと風の訪れを告げ、風鈴が儚げな音色をたてた……。

「どうするよー」将の声で窓の外は竹林から殺風景な国道沿線に戻った。

夏の回想を振り払うように将の提案を検討してみた。

水族館は行ったことがある。

遊園地、これはネズミのキャラクターで有名なあそこに行った。

動物園、行った。海。

――そういえば、今年の夏は海にいかなかったな。

聡の実家は山口県萩市。あのあたりは透明度で有名な海岸線が続いている。

聡は子供の頃、よく泳ぎにいったものだ。

「じゃ、とりあえず、海にむかってドライブしよっか」

将が、聡の心を読んだように言った。

でも、本当の恋人同士でもないのに、単に海を見に行くなんて、間が持つんだろうか。

海へ行く、といったがまだまだ道のりは遠い。

車はようやく高速道路の南下をはじめたばかりだ。

「音楽どんなの聴く?」

好きな音楽が終わったのか、将はラジオのチャンネルを切り替えながら聡に訊いた。

「え、別に普通の……」

音楽に関しては、流行りにまったく疎い聡は、若くていかにも洒落者っぽい将に普段自分が聞く音楽を言う自信がない。

「……が好きだろ？」

将が、あるＪポップアーチストの名前を挙げた。少年のような声がずっと変わらない大御所である。

「なんで知ってるの？」

「ＣＤが部屋にあったから」

「！。勝手に引き出しを開けたのね！」

めったにＣＤを聞かない聡はそれを引き出しにしまいこんでいたはずだ。

「いいじゃん、別に下着盗んだわけじゃなし」

将は笑う。「んもう！」膨れる聡に

「俺のおふくろも好きだったよ。といっても……の頃だけど」

といってそのアーチストが昔所属していたグループ名を言った。

「へえ……、あのお母様が」

聡は校長室に苦情を言いにきた和服姿の将の母親を思い浮かべた。流行歌などまったく聞きそうにない雰囲気だったと思う。

「いや、俺の本当のおふくろの方。こないだ学校に来たのはママハハ」

「……そうなんだ」

まずいことを聞いてしまったと思った。

問題児といわれる将がそうなるには、きっと家庭の問題があったのに違いない。

しかし、担任教師としての使命感なのか、単なる好奇心なのか、聡は質問をやめることができない。

「本当のお母様は……？」

「小1のときに死んだ。病気で」

将は淡々と答えながらCDをセットした。

「……ごめん」

今度こそマジでまずいことを聞いてしまったと聡は後悔した。

ハンドルを握る横顔はサングラスでその表情が隠されてしまっている。

小1といえば、将の父が選挙に出た、といっていたのも小1だ。

父の立候補、母の死、さまざまな出来事がまだ小さい将をゆがめたのかもしれない。

ゆがめた？　横にいる将はゆがんでいる人間には、あまり見えない。

聡が知る限り、将は明るくて快活な普通の17歳だ。

カーオーディオからは聡が好きな歌声が流れ始めた。

「これ、俺も好きなほうだよ」

聡はその声に救われた。

「あんたみたいな若い子が意外ね」

あんた言うな。と将は笑った。

CDの中で大御所が『また来る　哀しみは　超えてゆくもの』と歌っていた。

それは二人の遥かな未来を暗示していた。

哀しみの到来も、そのまえの嵐も、きらめきも、まだかすかな予感にすぎなかった。

14◆汐風の中で2

2

「……ここに寄ってみよっか」

将が唐突に言ったので、聡はなんのことかわからなかった。

「この歌の場所に」

CDはちょうど今の季節を歌った歌に移っていた。

歌の中に出てくる港を見下ろす小高い公園、へ行ってみよう、と将は誘ったのだ。

「行ったことある？」

「ない」

「俺もない。いいじゃん、初めての場所に先生と初めてデート」

そこは、もろ、デートスポットだった。

土曜日のせいか、人出も多く、その多くがカップルである。

しかし真昼のせいか淫靡なムードはまるっきりなく、明るい雰囲気で、将と聡も安心してそれらのカップルのうちの1組として溶け込むことができた。

「見えるねー、港が」

「ヨコハマって感じ」

無邪気に語らいながら二人は展望台に並んで立った。

港から吹いてくる風が聡の髪を揺らして、甘い香りと共に将の頬をくすぐる。柔らかく濃い栗色の髪だ。

「今、気がついた。先生、いつもと雰囲気違うね」

「そお？」

「うん。髪とか、スカートとか」

そういえば、聡がこんな風に髪を下ろしているのを、将は初めて見たのだった。

髪を下ろしてスカートを穿いた聡は、他のカップルのパートナーと比べても、とてもきれいに見えた。

女性としてはやや長身なうえにさらにヒールを履いているから、さらにスラリと小顔に見える。

固い色と柔らかい色とを大胆に配色し、センスよく着こなしている聡のまわりにはオーラさえ立ち込めているようだ。

化粧を少し変えているのが、また教師のときと違って色っぽい。

まわりの男性どころか女性までが羨望のまなざしをむけるのがわか

る。

もっとも実は、女性の羨望のまなざしは将に向けたものが半分なのだが。

ほとんど聡しか見えていない将には、その区別がつかなかった。

将は、これ以上、男の視線に聡を晒すこともないと思い、将は人の少なそうなほうへと歩き始めた。港への方向にあたる。

「先生って、いくつだっけ」

普通は女性にはそういうことは聞かないものよ、と注釈をつけながら、聡はもうすぐ２６歳になる２５と教えてくれた。

８歳違い、学年でいうと9年違うのか、と将はすばやく計算し一瞬落胆した。

１７歳から見たら２５や２６は大人もいいところである。

「見えないね。大学出たばっかりかと思った」

と将が答えたのは事実でもあるが、自分の年との差を縮めたい、将のせめてもの抵抗でもある。だから

「でも、そっちは大人っぽいよね。私、大学生っていうの信じてたもん」

という聡の言葉に一層希望を持った。

公園の奥へ進むにつれて、木立が増え、静かになってきた。

木陰のベンチでは昼間から堂々とくちづけを交わすカップルなどもいて、聡は目をそむけた。

将は気がついているんだろうか。

さらに進むと橋があった。このあたりには、奇跡的に人が誰もいなかった。

橋の真ん中で聡は声をあげた。

「ほら、ベイブリッジが」

木々のむこう、目の前に青く霞むようにベイブリッジが見える。

「すごいね、穴場だね」将は一人ではしゃぐ聡の両肩をつかまえた。

そのままぐっと引き寄せる。せつなげな将の顔が、ベイブリッジを遮って聡の目の前に迫る。

どことなく懐かしい夏草のような匂いに聡はめまいがしそうになる。

「……もう一度引っぱたかれたい？」

聞こえてしまいそうなほどの鼓動を隠して、かろうじて聡は制止の台詞を、上の立場で口にした。

その華奢な肩がふるえているのが将にもわかった。

将は微笑むと、と聡の肩においていた腕を自分の頭の後ろで伸ばしたり曲げたりしながら

「せっかくいいムードだったのにぃ～。アキラのバーカ」

と聡の香りを振り払うように背を向けて元来た道を歩き始めた。

3

再び車に乗って、海をめざす。

将はいつもの海をめざそうと思っていた。夕陽に間に合わせようと再び高速に乗る。

秋の日が落ちるは早い。地球との追いかけっこだ。

あいかわらず聡の好きな大御所のＣＤがＢＧＭだ。

将も知ってる歌になり、運転しながら無意識にサビの部分を一緒に歌い出したときだ。

「ところで、この車って、自分の？」

それまで無口だった聡が急に口をきいた。

「そうだよ」将は歌うのをやめて答えた。

「……お父様に買ってもらったの？」

「自分で買ったんだよ。去年、株の儲けで」

「お父様は、……が車を乗り回してること知ってるの？」

さっきから聡は将のことを何て呼んでいいか無意識に迷っている。
だから主語を誤魔化した。

「さぁ？」将は短く答えると歌を続けた。

大御所より1オクターブ低い声で軽く歌っているのが男っぽい。

しかし聡はわざとその歌を遮って

「免許は？どうしたの？」と質問した。

将は合点がいった。この歌の歌詞を意識して、必死で阻止しているのだろう。

「プ……アッハハハ」

将は今度こそ本当に吹き出し、笑い始めた。

笑いながら、聡のほうをわざとちらちら見ながら続ける。

♪君を抱いていいの　好きになってもいいの♪

案の定、聡は赤くなって目をそらした。

「担任をからかうんじゃないわ」とかろうじて呟いた。

4

高速道路を降りた。ようやく落ち着いて聡はもう一度質問した。

「で免許は？どうしたのよ」

「本当の山田さんにもらった」

「ウソばっか」

「本当だよ。去年東大に入った山田ってやつがいてさぁ……」

その山田某も国会議員の息子である。

その山田某は、高校生の頃、前に話題になったSというサークルの集団強姦事件に関わっていた。

かろうじて捜査網にはひっかからなかったが、将はそのことを知っていた。

早い話が、将は、その事件をネタに、学生証ごと山田から恐喝して免許証を手に入れたのである。

それをスキャンして写真を入れ替えて偽造したのが今持っている将の免許証と学生証だ。

「でも、もう本人にちゃんと返したし。これが本物のコピー」

将が取り出した、本物の免許には本物の山田某の写真が載っていた。

顔は全然違うが骨格が似ていないこともない。

「山田本人はもっとちっちゃい。でも免許には身長のデータを書く欄なんてないし」

楽しげに免許証と学生証偽造の顛末を話す将を見て、やっぱり問題児だ、と聡はため息をついた。

そのときフロントガラスが金色の光に包まれ、聡はまぶしさに目を細めた。

目が慣れると目の前にはきらきらと輝く海が広がっていた。

「やった、海だ」思わず聡は叫んだ。

将は得意げに海岸線をさらに南へと車を走らせる。

将の横顔越しに見える9月の海には、さすがに泳いでいる人はいない。

もう夕方だというのにサーファーが熱心にパドルをしているのが見える。

聡は実家の近くの日本海を思い出した。しかしここは太平洋だ。

「ね、降りてみたい」

「ここで？」

将はもっと先へ急ぐつもりだったが、この砂浜も悪くはない、と車を停めた。

待ちきれないように聡は外に出る。

「わー、潮の匂い」聡は伸びをした。

風が、聡の髪とスカートを煽る。

おかまいなしに、砂浜へ出てみる。ヒールの足がずぶずぶと入り込み歩きにくい。

ブーツを履いてきたのを死ぬほど後悔した。

そろそろと波打ち際に近づこうとして、バランスをくずした。

「わわわ」

尻餅をつくように後ろに倒れる。

倒れた聡の下から「いて！」と声。

将が見事下敷きになっていた。将はいつのまにか聡に追いついていたらしい。

倒れた聡の顔のすぐ近くに灰色の砂がある。聡は将の上にのっかったまま砂を手に乗せた。

「あったかい……」

日差しで温まった砂は灰のような色だ。故郷の海のベージュの砂とは全然違う。

「もー、はやくどけよー、重いしー」

将は文句をいいながらも、柔らかい聡の重みはそんなに嫌じゃなかった。

「不良少年にお仕置きだよーん」といいつつ腰をどかしてあげた。

「そんなの、履いてるからだよー」

ヒールのブーツを指した。

「脱げよ」

意味はわかってるのに、聡はそんなセリフの1つ1つにドキッとしてしまう。

「ほらあ」

将は聡のブーツのジッパーに手をかけると、足から引っこ抜こうとした。

聡は、夕陽を眺めながら将にされるがままにしておいた。

力を込めるのにブーツはなかなか抜けない。……とスポッと抜けて、そのはずみで将はまた尻餅をついた。

「あはは……」

聡は指差して笑った。

起き上がった将も、聡を指差して笑う。

「なんだよー、その靴下、ババくっせー」

聡はブーツの下に靴下を履いていたのだ。生足でブーツを履くのに抵抗があったから。

「いいじゃんっ！」

聡は自分でもう片方のブーツと靴下を脱いではだしになると、小走りに波打ち際に向かった。

「わ、ぬるい」

まだ9月だからなのか、今日一日晴れていたせいなのか、聡の裸足に寄せてきた波はそれほど冷たくなかった。

波が寄せたときは白く泡立った波がシャワシャワと聡の足首まで覆う。

そしてひとしきり寄せると引いていく。

引いていく波は、下を見ているとそのまま波に連れて行かれそうになる。

そして足の下から砂がごっそりと持っていかれる感覚。

聡は久しぶりのその感覚を味わうかのように足元をじっと見つめて立っていた。

落ちる間際の夕陽の日差しが、聡の影を長く砂浜に映している。

そこへ。

バシャッ！

「キャッ」

将から海水攻撃だ。海水は聡の顔を直撃した。潮臭さが鼻にくる。

「イエーイ」全身を太陽と同じオレンジに染め、潮風に髪をぼさぼさにして将が無邪気に喜ぶ。

すでに将自身もかなり濡れている。

「いやーん、びっしょり……やったわねー！」

聡は波うちぎわで反撃した。

横から海水をすくうように将に向かって投げる。

交差する水しぶきが夕陽を反射して金色に光る。

よけながら、新たなる攻撃をしかけようとする将は、ジーンズを膝まで折り曲げていたが、すでにそれ以上の深さまで走りこんでいった。

「それっ」

「キャ」将が投げつけた何かが聡の顔にべちゃっとついた。何かの藻だ。

「へへへー！」夕陽を背に受けて将があっかんべーをする。

「もー許さないわよーっ！」

聡も藻を探そうとした。しかし、将よりは分別があるので、そうそう深みにはいけない。

――あった。

ちょっとだけ深いところに藻を見つけ、取ろうとして……本日二度目の転倒。

しかもちょうど寄せてきた波の中に。倒れた聡にようしゃなく波が打ちよせる。

「アキラ？」

急に視界から消えた聡。次の瞬間、引いた波の中にびしょぬれで聡が倒れているのを見つけた。

「大丈夫っ？」

あんまりあわてて助けに行こうとしたのか、聡のすぐ近くで、将も転倒した。

塩辛い海水。ずぶぬれで起き上がろうとした将の顔に、

バシャッ

聡の反撃。冷たく目に染みる海水をぬぐって目をあけると、すぐそばに聡が全身濡れ鼠で笑って立っていた。

髪の毛からしずくがトパーズのようにきらめいて滴っている。

夕映えの空の中で、濡れた服が体に張り付いて、体のラインのほぼそのままがシルエットになっている。

見とれる将の前で聡は、おもむろにスカートを前で絞った。ジャーっと海水が滴る。

それをみて二人はびしょぬれになりながら波打ち際で笑いあったのだった。

◇

紅色、といえるほど赤くなった太陽は、水平線のすぐ上のもやの中に吸い込まれていった。

――今日で１００回め。

将は流木の上に聡と並んで座りながら、心の中でカウントした。

「寒くない？アキラ」

「ちょっと。でも平気。そっちは？」

「うん大丈夫」

「ヴィンテージがびしょぬれだね」

「関係ないよ」

9月の夕暮れに服のまま泳いだような二人。

車の中にどうにかあった1枚のタオルと聡のハンカチでおおかたの水分をとって、

流木の上で夕陽を浴びながら、少しでも乾くのを待っていた。

いつのまにか、将は聡のことを「アキラ」と呼び捨てにしていたが、聡はあまり気にならなかった。

教師としては本当は咎めるべきなのだろうが、今日はこのままでいいや、と思う。

しかし、風は二人を乾かしながらも、急激に冷やしつつあった。

空が黄昏るのを見届けていたら風邪をひいてしまうかもしれない。

「車に戻ろうか」将が聡を気遣った。

「でも、このまま座ったらシートが……」

「いいって。俺もだし」

結局、二人とも大して乾かず、潮臭いまま、ミニに乗り込んだ。

暖房を入れて、途中コンビニで顔を洗ってタオルを手に入れて、どうにか都心に戻る頃には見た目だけは乾いた。外はもう真っ暗だった。

「今日は楽しかった」信号待ちで聡は素直に心のままを口に出した。

すると将が

「何、シメてんだよ。まだまだ、だよ！」と聡のほうへ向き直った。

15◆汐風の中で3

そのとき、ある音がエンジン音をもしのいで車内に響いた。

聡がうつむいた。お腹の空腹のサインが派手に鳴ってしまったのだ。

「ほら。ゴハンいこ」信号が青に変わり、将は笑いながらハンドルをきった。

――まあファミレぐらいなら、つきあってもいいか。

と思った聡だったが、到着したのは……。

◇

「ちょっと……。ここ1食3万は下らないってレストランだよね」

シャンデリアの下、豪華な織りのクロスがかかるテーブルをはさんで向かい合う二人。

テーブルの上にかがみこむように聡は囁いた。

「ここは大丈夫。俺がおごるから」

「そういう問題じゃなくて……、問題でもあるけど……。こんな汚いカッコで。見てよ、ジャケットなんか塩ふいてるよ」

「それをいうなら俺もだってば」

服のまま海で泳いだような二人は、髪も服も塩でバリバリに固まっていた。

よくも、出迎えた年配の食堂支配人（メートル・ド・テル）は通してくれたと思う。

ジャケット着用でないと入れない一流フランス料理店。食堂支配人はジーンズ姿の将を見ると、

気を利かせて奥から若いギャルソンにジャケットを持ってこさせて着用させた。

「ほかでもない鷹枝様ですから」

とにっこりする。

ふかふかの絨毯に高い天井。

フランスの本店とほぼ同じといわれるインテリアは写真などでみるより落ち着いた雰囲気だ。

モダンとかスタイリッシュといった客寄せのための奇抜さとは無縁。

さらに明るすぎない照明、客の会話を邪魔しない程度の静かなクラシック音楽が上品な寛ぎの世界を演出している。

「食前酒などいかがでしょうか」

「シャンパン。クリュグ」と将は即答した。

メートルが去ったあとで、聡は小声で「未成年でしょ！」と咎めたが

将は知らん顔でメニューを開き

「アキラ何食べる？」などと言う。

「えー。何がなんだかよくわからない……」

それもそうだ。メニューは全部フランス語で書いてある。

「嫌いなものとかあるの？」

「……特には」

「じゃあ、デギュスタシオンにすれば」

つまりおすすめ品お試しコースである。

「そんなの書いてないよ」

「大丈夫だって」

将は、自らメニューをとりにきたメートルに、

「ムニュ・デギュスタシオン２つ」とオーダーした。

するとメートルは、恭しく「かしこまりました」と承った。

それどころか「今日は鶉とスズキがいいようですが」と付け加える。

「うん。いいんじゃない。それも入れといて」と将。

次にすかさず、

「ワインは何になさいますか」

ソムリエがやってくる。大きなメダルのようなものを首から下げた、本物のソムリエ。

聡はドラマの中でしか見たことがなかった。

「アキラ何か飲みたいのある？」

と聞かれても、いまいちわからない。

――――ていうか、未成年でしょーっ！

と言いたいのを押さえて、「グラスでいいんじゃない？私だけだし」。

すると将は、その皮肉に気付かないのか、あるいは気付かないふりをしているのか

「せっかく二人なんだから1本頼もうよ」

などとワインリストを前に考えている。

結局、ソムリエと話し合って勝手に決めてしまったらしい。

その慣れたようすは、とても17歳に見えない。

聡は再度テーブルの上に身をかがめるようにして、

「お酒！未成年でしょ！それに運転はどうするの」と囁いた。

「こんな店で野暮いうなよ。運転はいざとなったら代行頼めばいいよ」

ととりあわない。

そこへ、アミューズと共にシャンパンが運ばれてきた。

「……クリュグでございます」

そういってラベルを示すと、開栓した。ポン、という音と共に瓶の中でシュワーっと泡がざわめいた。

聡のほうのグラスからついでくれる。

細長いシャンパンフルートの底から細かい泡が立ち上ぼり、表面でピチピチとはねる様子が小さな線香花火のように可憐で美しい。

「じゃあ、アキラと俺の初デートに乾杯」

「……乾杯」

シャンパンフルートの細い脚はそれがとても高価なガラスであることを告げている。

金色の液体を含むと、泡と爽やかな甘味と酸味が口いっぱいに広がり、聡は素直に「美味しい」と呟いた。

ウニとキャビア、マスの卵を使ったアミューズも口にとろりと溶けていく。

「うまー」

「本当に美味しい」

ムニュ・デギュスタシオンはさまざまな料理が少しずつ味わえて、客としては嬉しいシステムである。

しかし、少量でも掛かる手間は同じなのでシェフ泣かせともいえるのだが、

店の者は将をとても優遇しているように見えた。

「……なんども来てるの？」

「うん。ここは本当に旨いからね。それはアキラも期待してていいよ」

始まったばかりのコース、前菜に手をつける聡はなんだか腑に落ちなくて自分もカトラリーを手に取った。

そんなことより、聡が無意識に知りたかったのは、いつ頃から、誰と来ているのかを知りたかったのだが……

自分でも明確に意識していない設問を相手が答えるはずもない。

将はアミューズもその次の前菜も、にこにこほくほくしながら次々

と平らげた。

姿勢もカトラリーのあしらいも、きちんと躾けられたもののらしく、自然に寛ぎながらも、見よいものだった。

前菜はどれも手が込んだものなうえに、素材自体がとてもいいように見えた。

聡は話題の泡ソースというものを初めて食べた。

何度か博史と食べたことがあるフォワグラも、コンソメで柔らかく煮込んだ大根をサンドしてまた、別の旨さになっている。

スープは栗をつかったヴィシソワーズ。冷たいポタージュだ。

「これがうまいんだ。だれも見てなかったら皿を舐めたいくらい」

といって将はせっかちにスプーンを手に取った。

ほこほこした栗が濃厚なクリームに生まれ変わったような、そんな逸品に聡もうっとりした。

もはや、ボキャブラリーを忘れたように「美味しい」しかいえなくなっている。

「アキラがバイトしてた弁当屋も相当うまかったけどね」

魚料理が運ばれてきた。スズキのポワレをクレープで包んだ凝った料理だ。

「値段がぜんぜん違うでしょ」

「アキラも料理とかすんの？」

「ちょっとだけね。大学生までは全然ダメだったのよ。でも博史に……」

りんごをゴボウの笹がきのように剥いて博史に笑われた。

弁当屋でバイトすることにしたのは料理修行の意味もあった。

あそこで野菜の見分け方から、いろいろご主人や女将さんにおそわってだいぶマシになったのだ。

そんないきさつを聡は楽しげに話した。

シャンパンが入って気楽になっているせいか、博史の名前を出してしまっていた。

「でもやりだすと料理って楽しいんだよね」

――博史、っていうんだ、彼氏。

将は、博史のためにわざわざ料理修行をしたという話を、自分に楽しそうに聞かせる聡が少し憎らしくなって

「ふうん。その博史にはつくってやったの？」

わざとその名前を呼び捨てで呼んでやる。

「ううん。まだ……だってずっと外国だもん。日本にいるときは実家かホテルにいるし」

気付かずにいる聡に少し腹立たしくなって、将はグラスに残ったシャンパンをグイッと一気に飲んだ。

そこでソムリエがきびきびと赤ワインを持ってくる。

「エシュゾーでございます」

ここでもラベルをきちんと見せる。少しだけ将のグラスに注ぐ。つまりテイスティングだ。

将は、器用にグラスをくるっと傾けると、その香りを嗅いで、味わった。

「いいです」

クールにＯＫを告げる。その動作には一切よどみがない。

聡でも聞いたことのある有名ワインの値段も気になったが、まさか１７歳、

塩でバリバリになったジーンズを穿いているとは思えない紳士ぶりである。

「本当にお坊ちゃまなのね」

シャンパンで多少放恣になった聡はつぶやいた。

「ねえ、お坊ちゃまがなんで、あんな学校に行ってるの？」

「あんな学校ってどんな学校？」

と将は鶫の身を骨からはずし、それにチョコレートソースを器用からめながら口に放り込みながらおどけた。

「……ちゃかさないで。アンタみたいに頭が抜群に良くて、金持ちだったら、

どうにか名門校に入れるでしょ。なのになんで」

「なんでかなー、ねえ。家出したからじゃない？」

「じゃなんで家出したの」

聡は下を向いて、鶫と格闘しながら聞いた。骨をはずすのがなかなか至難だ。

「……つっつくなよ、アキラ。アキラはなんで教師やってんだよ」

「あたし？」

やっとはずした肉を口に入れたところだ。

実は聡は特に教師になろうとめざしていたわけではない。

教職の単位はなんとなく取ったに過ぎない。

博史と卒業後すぐに結婚しようと思っていたのだが、博史は中東勤

務になり、結婚はのびた。

急に就職しなくてはならない羽目に陥って、頭に浮かんだのが、教師だったのだ。

その影響はやはりいずれも教師だった両親に負うところが大きい。

「うちにはね、あたしがいつも小さい頃から、親の教え子が出入りしてたの。

こっそり悩みを相談しにきたりとか、親とケンカして帰れない子とか」

そんな風に慕われる父母だったから、いつも夫婦で教育について熱心に語り合っていた。

「教師は、教室の中では絶対的な存在だ。だから、それに見合った重い責任がある。

だからいつも自分を律して生きなくてはならない」ということをいつも言っていた。

それから「子供たちは教師を追い抜いていく存在だ。

その才能の芽をつぶすような時間のすごさせ方を学校でしてはいけない」とも。

「ふーん。偉いご両親だね」

将は赤ワインで酔いが少し進んだ頭でぼんやりと聡の話を聞いていた。

シャンペンで少し頬が紅潮していた聡の顔。口紅はとうに剥げているはずなのに、バラ色の唇。

つぶらな黒い瞳。細長い首。ナイフとフォークをあやつる白くて細い指、細い手首。

ネイルアートなんかしなくても、十分に艶めいて魅力的な爪。

可愛い顔に反比例する低めの声は、「しっとり包み込む」って表現がぴったりだと思う。

こうやってずっと彼女と二人で向かい合っていたい……と将は願っていた。

「……はあるの？」

「は？」

ボーっとしていた。話を聞いている間に、皿は肉2品めの子羊に変わっていた。

「悩みとかあるの？」聡がまっすぐに将のほうを見ている。

「ああ。いろいろ……いろいろあるよ」将は、肉を切って頬張った。

「もし、よかったら先生に相談して」

教育の話をしたあとだから、自分のことを思わず『先生』と呼ぶ聡。

「うん。……1つ相談があるんだ」

「何?」思わず聡は身を乗り出すようにして聞いた。

将は食事の手をとめると、テーブルのうえに頬づえをついた。

「俺さ、好きな人がいるんだ。でもその人は、他の男に夢中みたいでさ……」

聡は、カトラリーをカタン、と皿の上に置いた。

「どうやったら、俺のほうを好きになってくれると思う?」

こんどは将のほうが聡をまっすぐに見る。

多少充血しているが、射るような瞳である。

「好きだ」

聡のまわりの音がすべて止まった。

16◆過去1

突然の告白。

聡は――もちろん、なんて答えればいいか、なんてわからないで呆然としていた。

自分は教師で、彼は単なる教え子である。

そして自分には結婚を約束した恋人がいる。

それを再確認させればいい。

頭の冷静なところでは理解しているのだが、口に出せない。

ただ、将の顔を眺めていた――眺めていたというより、顔のほうをむいて目を開いていたという状態――。

――流れにまかせて言っちゃったぜ、俺ってば。

将のほうは、告白したところで、正気に戻った。一瞬後悔したが、ええい、本当のことだ、と開き直った。

初めて自分から好きになったひと。

心の片隅に芽生えた淡い思いは9月になって急に将の心を支配し、

それが年上だろうと、担任教師だろうと、婚約者がいようと、口に出さずにはいられなくなったのだ。

１０００万回「好きだ」といえば思いが通じるなら、たぶん今の将は愛の言葉を繰り返すだろう。

「アキラ」目の前の聡にもう一度呼びかけてみる。

「あたし……」

聡は握りこぶしを握って、うつむいた。

そんな聡をみて、これは『もう婚約者がいる』、

もしくは『私は教師、あなたは生徒よ』と１分以内にいわれるな、

と将は覚悟した。

まあそんなことは告白した時点で『想定の範囲内（↑古いか、あはは by 将）』だけど。

どうしたら、彼女が俺に振り向くか。

そりゃ決まってる。博史より俺のほうが彼女を幸せにすると確信させればいい。

しかしどうやったら彼女は幸せを感じるのか？彼女の幸せって何だ？

将は１秒のあいだに考えた。

「アキラ、俺は」と、あてどもなく、思考の海へ漕ぎ出したところへ

「お兄ちゃんだ」

思いもかけないところから聞き覚えのある子供の声。

声のほうを振り向く。義弟の孝太がなぜかいた。

後ろにはメートルに案内されてまさにこちらに来ようとしている父・鷹枝康三と義母がいた。

父と義母も孝太の声で将の方に気付いたようだ。

孝太は子供ながらに蝶ネクタイのついたかわいらしい正装をしていた。

――――そうか、今日は孝太の誕生日か。

将はすべてを理解した。

「お、お父様っ？」

聡は、こないだ学校に来た義母と、テレビで見る官房長官の組み合わせで、

それが瞬時に将の両親だと言うことに気がつき、立ち上がると、ぺこりと挨拶した。

康三は、今日は世間で人気を集めているクールビズ姿ではなく、きちんとスーツを着た正装に近い姿をしている。

テレビよりも痩せていて、端正なおもざしは将によく似ている。

義母が康三に耳打ちをした。

「お兄ちゃんも一緒に食べようよ」

「孝太、来なさい」康三は孝太を連れ戻して、聡には目で挨拶した。

義母も軽く会釈をした。

しかし康三は、将の席のすぐ近くを通ったのに、声もかけずに個室のほうへ消えた。

孝太だけが個室に入る寸前まで将のほうをなんども振り返った。

◇

「ちょっと、飲みすぎよ」

将の、ワインを飲むペースはあれからあきらかに早まった。

まるで1杯を一口のように飲み続けている。

エシュゾーは聡に1杯注がれただけで、あとは全部将が飲んでしまった。

追加してグラスワインも頼む。

シャンペンも2／3は将が飲んだことを考えると2本ぐらい将が開けたことになる。

「まだ足りないよ〜。せっかく飯がうまいのに、ワインが足りないと哀しいじゃん……」

明るくふるまっているが、聡には将の気持ちも理解できなくはなかった。

家出した息子とはいえ、あれが実の父の態度だろうか。

テレビで見る官房長官のにこやかな姿とはまるで違う。

冷たい目で将を一瞥したきり、まるきり無視していた。言葉の1つもかけず……。

「食後酒っ……マールちょうだい」

将はデザートの途中でさらに酒をオーダーした。

マールとはワインの絞りカスでつくった焼酎のような強い酒である。

聡の鼻先を強いアルコールの匂いがツンと突いた。

顔にはあまり出ないタイプなのかもしれないが、目が完全に据わっている。

「もう一杯！」というのをなんとか制止して、お勘定を頼む。

様子が変な将に配慮してか、ギャルソンは勘定を一瞬、聡のほうに持っていこうとした。

が「勘定はこっちでしょー！」と将は大声を出す。

財布からカードを取り出して、ぽいっと皮の皿に載せる。

「ごちそうさまー」

「あの、代行をご用意しましょうか？」とメートルが気を利かすが

「大丈夫、大丈夫。まだお茶するから」と将は却下してしまった。

いちおう、ギャルソンの手前、すくっと立って、多少軸をぶらしながらもまっすぐ歩く……店内までは。

広い通りに出て、ギャルソンが見えなくなった瞬間、将の体がぐらりと揺れる。

あわてて聡は支えた。熱い体温。息がもろ酒臭い。

「アキラ、大丈夫、大丈夫だよ。少し酔いをさませば……」といいつつ、離れるとグラグラする。

「ちょ、ちょっと……」

ぐらつく将を抱きかかえるように支える。

１８２センチの大男の体重が聡にかかり、聡も倒れそうになるのを踏ん張りながら横断歩道を渡る。

しかし、歩行者の横断を告げる音楽が止んでしまった。

わたりきれないと判断した聡は、抱きかかえるように将を中央分離帯の植え込みの縁に座らせた。

将は聡にしがみついたまま離れようとしない。

「アキラぁ。俺さ」
「何」
「俺……」

聡の肩に首を埋めたまま、吐息のように呟いた将の声は、動き出した車の音にかき消された。

「しっかりして」聡はそういって肩にからみついた将の腕をはがそうとした。

するとなおさら、がっしりとしがみついてくる。

「……このままで。このままでいさせて」

将は聡の肩に顔をうずめたまま、うめくように呟いた。

酔っ払っているから引き剥がすのは簡単だろう。しかし聡は突っぱねる気になれなかった。

聡は将のとなりに座り、しばらく将の肩を受け止めて、通りを眺めていた。

車の、赤いヘッドライトがつぎつぎと流れていく。

再び、歩行者の横断を告げる音楽。行き交う通行人が二人を好奇の目で見ながらも、

それぞれが行くべき道を歩いていく。

家庭の中に居場所がない。

そんなことは今の世の中、悲劇とも言えないほどありふれたことだとも言える。

しかし実母をわずか6歳か7歳のときに失い、残された父にあのように冷遇されたなら。

将はどんな10年を過ごしてきたのだろう。

夕陽に照らされた将のいたずらっぽい笑顔。きらめく水しぶきが蘇る。

目の前の焦点をわざとぶらす。夜の街は揺らめく赤やピンクの光の集合体になった。

そのまま焦点がぶれたまま、光は重なって揺れた。聡は知らず目に涙を溜めているのだった。

◇

何回、人々がここを横断しただろうか。

将が頭をあげた。

「……大丈夫？」

聡は何度かよけいに瞬きをして、目に溜まった涙をどこかにやりながら将を気遣った。

将は呆けた目をしながらもうなづき、立ち上がる。

多少ぐらつきながらも、歩こうとする。しかし車がびゅんびゅん来る大通りにそのまま出ようとして、

「だめよ、まだ赤だってば」と聡に止められる。

「あ、うん」その目はまだボーっとしている。

あまりに危なっかしい姿に聡は支えようとするが、将は

「もう大丈夫」と振りほどいた。

信号がやっと青になった。将は元きた道を戻る。

「酔いをさますんじゃないの」

「……もう大丈夫だから」

そうはいってもまだまっすぐ歩けていない。

「じゃあ代行よぶわ」聡はバッグに携帯をさぐる。

「いらねえよ」
「でも」
「大丈夫」
「だめよ」
「いいったら」

将は多少だらしない口調ながら足を速めていった。

駐車場についてしまった。

「だめよ。事故を起こしたら……、万が一、人をはねたらどうするの」聡は車のドアのまえに立ちはだかった。

「大丈夫だよ」将はそんな聡をどけようとする。

「大丈夫じゃないわ」

将は一瞬聡の顔を見た。心配そうな顔をしている。

それを見ると将はいったん視線を下に落とした。そのまま目だけで聡に向き直る。

「万が一、人をはねても……あの親父がなかったことにしてくれるさ」

「な……」

聡は固まった。そんな聡の肩をつかんで将は続ける。目には強い光が戻っていた。

聡にとってこんな将を見るのははじめてだ。

「俺は何をしたって許されるんだ。人を、例え、刺し殺したとしても。親父のチカラでな」

聡が驚いたのか呆れたのか確認もせず、将は聡の首をひったくるようにして、唇をあわせる。

突然の隙をついて舌までも差し込む。

「……アキラ！」

次の瞬間、将の頬に熱い衝撃が走り、酒で足元がふらついていた将はよろめいた。

顔をあげると髪をふりみだして息が荒くした聡が睨みつけていた。

「何てことというの！」

叫ぶその顔からは今噴き出したらしい涙がぼたぼたと落ちている。

「情けない……見損なったわ」

17◆過去2

そのまま身を翻して、振り返りもせず、聡は走り去ってしまった。

将はローバーミニによりかかってようやく立っていた。

聡の姿が見えなくなったとき、涙が膨れ上がってきて、それは頬を伝った。

――行くなよ。俺を置いていくな。

今度こそ本当に世界から見捨てられたような気がした。

◇

あれは同級生が高校受験を控えた15歳の冬だった。

古くて汚いアパートの1室。風が吹くと、ベニヤのドアがガタガタと音を立てた。

汚い砂壁のあちこちは砂が剥げ、ひびが入っていた。

畳はあちこちがささくれて、裸足で歩くと刺が刺さった。

そんな家でも外にいるよりははるかにマシだった。

寒さ――風を凌げるという点だけでも。そこは将が唯一、親友と呼べる少年の家だった。

将と少年はたった一つの暖房器具である電気ストーブにあたっていた。

少年とその父の二人暮し、というにしては家具がまったくない６畳間。

ほとんどの家財は「あいつら」が持っていったという。

電気ストーブは民生委員の人が好意で持ってきてくれたものだった。

そこへ、ヤクザのような「あいつら」が突然やって来たのだ。

ヤクザは少年の父親の居所を執拗に少年に聞いた。

少年の父親はおそらく多額の借金を抱えていて、取立てから逃れるべく姿をくらましていた――将もその少年の父親を見たことがなかったから、もうずいぶん前から。

「知らない」という少年をヤクザは殴った。そのまま理不尽に殴られ続ける友人。

止めようとした将も連れのヤクザに１発殴られた。

ケンカ慣れしている大人の手加減しない１発は、まだ１５歳の将を真の恐怖に陥れた。

将は恐ろしくて、流しの隅でへたりこんで見ているしかなかった。

そのうち、ヤクザは刃物を取り出した。

友人の指をつめる、と言い出したのだ。障害者になったら年金が出る。

それで借金を返せとむちゃくちゃな理由だ。

もう一人のヤクザは友人の手を床に固定した。

『やめて、やめてくれ』という友人の絶叫が響いた。

将は絶叫に操られるように、知らず、流しから出刃包丁を取り出していた。

『観念しろや』ヤクザのセリフは自らへの言葉となった。

将は無我夢中で体を丸めて、ヤクザの腰のあたりに突進していった。

『ぐあぁっ』

気がつくと、友人に向かって刃物を振りかざしていたヤクザは倒れ、大量の血を傷口から噴出していた。

将たちが軽い怪我をしたときに見るようなどす黒い血ではない。

朱色のような鮮やかな赤い液体が定期的にどくっどくっと脈打つようにヤクザの体から流れ、ささくれた畳を血で染めた。

もう一人のヤクザは『ひぃいい！』と叫んだぎり逃げて、とうにいなかった。

将は返り血を浴びて突っ立っていた。

『ショウっ……』友人は泣きながらそんな将にすがりついてきた。

結局ヤクザは出血多量で死んだ。

が、将の父が手をまわして、ヤクザを刺したのは将ではなく、友人だったということにされた。

将が刺したのを知っていたはずの連れのヤクザも、半年ほどたってどこかの港に浮いているのが発見された。

ブロック塀を括りつけられた無残な腐乱死体として。

友人は、正当防衛性が認められたものの、それまでの素行から、鑑別所に入っている。

◇

将は、なんとか自力で運転してマンションに戻ってきた。

体ごと倒れこむようにドアを開ける。すると部屋の奥からは瑞樹が出てきた。

「……将、どうしたの」

塩で汚れた服、バリバリに乱れた髪、それよりも異様なのは赤く充血した目と憔悴しきったような顔である。

将は瑞樹の声などまったく聞こえなかったかのように、また瑞樹などいないかのように、歩を進める。

今日は瑞樹以外はまだ誰も来ていないらしい。土曜日の１１時前だから外で遊んでいるのだろう。

特にピアス男の井口は最近は踊りにハマッていると聞いた。

将はキッチンに入ると、冷蔵庫から水を取り出し、がぶ飲みした。

「将、今日はどこにいってたの」

瑞樹は将のあとを追うように傍らに立った。

将は無視してキッチンを出ると、ソファに寝転がった。置いてあった漫画を開く。

「誰と会ってたの？」

瑞樹はソファの足元に立つと将を見下ろした。

お気に入りのヴィンテージのジーンズを穿いているところを見ると、単にいつものドライブではなさそうだ。

「あの、キョーシと会ってたの？そうなのね」

とたん、将は漫画雑誌を閉じて体を起こした。

「うるせえよ！」

怒鳴りつける。

思わぬ大声、そしてその形相に瑞樹は黒髪を揺らしてひるんだ。
が、彼女には、今までの関係から、まだ自信があった。
「ふられたのね」
そういうと、体を起こした将の横に腰かけた。
将はそれを拒むように立ち上がるとバスルームに向かって歩き始めた。
その将の前に立ちふさがるように瑞樹は
「そうでしょ」
と将の顔を見上げた。
将からみたその目は三白眼になっている。笑っているような口から
「代わりになってあげるから、さ」
という言葉。そして、将のジーンズに手をかけようとする。
――今までなら。そのまま将は、瑞樹がしたいように、下半身を預けたのだが。
将は瑞樹の手を振り払うと静かに言った。
「……出ていけ」
「……？」

「出ていけと言ってる」
「……将」
将は瑞樹の手を掴むと、引っ張った。そのまま玄関のほうへ歩く。
「将、どうしたの？将ったら」
「出ていけッ！邪魔なんだよッ」
将は瑞樹の手をつかんだまま、裸足で玄関のドアを開けた。
そのまま力いっぱい瑞樹を突き飛ばす。瑞樹はマンションの廊下に倒れた。
その上に玄関にあった瑞樹のサンダルをも放り出すとドアを閉めた。
夜のマンションの廊下にその音はひときわ大きく響いた。
続いて内側からチェーンをかけるチャリチャリという音。
「将、どうしたの、何を怒ってるの？」
瑞樹は立ち上がると、閉じられたドアを叩きながら叫んだ。
「将！将！ねえ、ショウ！」
瑞樹はしつこく叫んだ。隣の住人が、その騒ぎにドアを開けてこちらを見る。
瑞樹はかまわずドアを叩き続けた。

と、ドアが開いた。

「将」

チェーンの鎖の分だけ開いたドアからは瑞樹のバッグが放り投げられた。

「将、どうしたのよ、私、何か悪いことした？」

瑞樹は必死で、細く開いたドアをキープしようと手を割り込ませる。

ドアの細い隙間から見上げた将の顔……瑞樹がこれまで見たこともないような冷酷な目でこちらを見下ろしていた。

いや、瑞樹のことを人としては見ていない。そんな視線。

「ケガするぞ」

それだけのセリフでドアに割って入った瑞樹の手をひっこめさすと、将はドアを閉めてしまった。

瑞樹は冷え込み始めたマンションの廊下に裸足で立ち尽くしていた。

◇

聡は放心していた。

タクシーを拾い、部屋にたどりつくと、水を飲み、そして塩でバリバリになった服を脱ぎ、シャワーを浴びた。

そこまではほとんど無意識状態だった。習慣というか本能で動いていたに過ぎない。

汚れも落として、ようやく「ヒト」としてマシになるといろいろなことが頭に浮かんだ。

――いろんなことがあった1日。

楽しかった海、幼くして亡くなった将の母、レストランで貴公子然とした将、父・官房長官との偶然の出会い、

父親に無視される将、酔っ払った将の重み。

そして、再びの深い口づけ。

しかし、今の聡にはそんなことより、将の背負った過去のほうにより心が動かされていた。

――あのまま、置いてきてよかったのかしら。

同時に後悔もした。突然の唇に動揺してしまったが、置いてきてはいけなかったのではないだろうか。

問題児と名高い将。偽造免許証や、同級生を思い切り殴りつける姿。

「何をやっても許される」との開き直り。

それはすべて、人並みはずれた寂しさが一因なのには違いあるまい。

聡は、床に入っても将のことが頭から離れなかった。

◇

聡は夢を見た。

博史と海岸を歩いている。顔は逆光でまぶしくて見えないが、こんな風に並んで歩く男性は博史しか考えられない。

なぜか裸足。黒い砂に吸い込まれるような足が気持ちいい。

博史はなぜか突然海に駆け出していった。顔を見ようとするがあいかわらずまぶしくて見えない。

ざぶざぶと中へ入っていく。静かだった海がだんだんと波が高くなっていく。

ついに波が彼を隠してしまった。

聡は追って海へ歩こうとするが、粘りついたように足がなかなか動かない。

それでもなんとか博史に追いついた聡はその背中に抱きついた。

そのまま二人は海中に倒れこむ。

とたん床が抜けたように、海の中に二人抱き合って沈んでいく。

その沈んでいく感覚が気持ちいい。髪も服も海水になびいている。

ゆらゆらと光る海面がどんどん遠くなっていく。

深い青の世界を二人はゆっくりと深みへと降下しながら長い口づけを交わした。

水中のはずなのに息が苦しくない。

冷ややかになっていく海水の中で柔らかく温かい唇をお互いにむさぼった。

聡は目をあけて自分を抱く男の顔を確認しようとした。するとそれは博史ではなかった。

将が寂しい顔をして微笑んでいた……。

１８◆勉強の意義１

月曜日は朝から雨が降った。

聡は足取りも重く学校へ向かった。

ここのところ将が出席しているせいか、ずいぶん授業がやりやすくなっていた。

おかげで、聡は赴任当初ほど学校へいくのも嫌じゃなくなっていたのだが、

今日はひさしぶりにどんよりとした気分でバスに乗った。

来ないかもしれない、と諦めていた聡だったので、ブスっとしつつも教卓のまん前に座る将を見たときはとてもホッとした。

ようやく出来上がったのか、制服を着ている姿は、土曜日のデートのサングラス姿とはかけ離れている。

今日の欠席は葉山瑞樹だけのようだった。

今日もスムーズにＨＲも授業も終わった。

帰りのＨＲまで終えて、聡が職員室へ戻ろうとする聡は、教室の出口で肩をぐいと引っ張られた。将だった。

腕の長さだけの近さにいきなり将の顔を見て、聡の心臓が鼓動を一瞬強めた。

夢の中の口づけと抱擁を思い出してしまう。

「……補習」

将はそっぽを向きながらも言った。

「え、でも、テストがよかったから、もう……」

「まだ中学までの内容だろ」

そこへ「先生！」と割って入った者がいた。

将の隣の席の丸刈り生徒、兵藤憲一である。

「僕にも補習していただけませんか」

「あの、僕も」次に弱弱しい声で参加を告げたのは鼻炎もちの松岡。

その後ろには3人の女子生徒がいた。

皆、普段まじめに授業を聞いている者ばかりだ。

「何だよ、お前ら」将が集まった生徒に文句を言う。

「鷹枝君が遅れているからと補習するなら、僕らにも教えてください！」と兵藤が訴える。

◇

結局、将の居残り補習に、兵藤ら5人が加わることになった。

というより、中学の内容がほぼ完璧にできて、教科書を自力で理解できると見なされた将はほとんど自習になってしまった。

聡は他の生徒につきっきりになった。

最初、他の生徒は将を恐れるようにチラチラと見ていたが、勉強が始まるとそちらに集中してしまった。

皆、中学の内容もあまり完璧とはいえず、聡は一人一人の進度にあわせて中学の内容まで遡ることになった。

暇になった将は尖らした口と鼻の間にシャーペンを挟んで聡の様子を眺めていた。

英語以外のどの教科も教え方が丁寧でわかりやすい。

他の教科は自分が専任じゃない分、自分も一緒に考えようとする。

その道筋がたぶんわかりやすいのだろう。

そこまでわかりやすい説明はないと将は思ったが、生徒らはあやふやに相槌を打っている。

たぶん理解していないのだ。問題をやらせたら一目瞭然だろう。

――ふん。バカばっか。

心で毒づいたとき、聡がこっちを見た。

あわてて将は目を外にそらした。挟んでいたシャーペンがノートの上に落ちた。

窓の外に目をやる将の耳に比較的流暢な英語が聞こえた。

そっちを振り向くと兵藤が英語の教科書を読んでいた。

珍しく高校の教科書だ。将は丸刈り少年・兵藤が英語の時間に熱心にメモをとっていたのを思い出した。

「ｇｏｏｄ。じゃあ、この例題をやってみて」

「あの、先生」

最初は素直に指示にしたがっていた兵藤が、おずおずと聡を呼んだ。何か申し出があるらしい。

「なあに?兵藤くん」

「あの、僕、英語しゃべれるようにはなりたいんですけど……こんなに難しい文章を読めなくてもいいんですけど」

「え?」

「ぶっちゃけ、僕は先生に英会話の特訓をしてほしいんです」

「でも……」

困惑する聡に兵藤は続ける。

「僕のお父さんも、高校を出てるけど、英語なんか全然覚えてないみたいです。

でも、別に普通に暮らせています。こんな難しい英語って、やる意味あるんですかね。

他の教科もそうですけど」

それが聞こえたのか、他の生徒もうなづいている。

勉強の意義。

聡にとって超難問が出題された。

将は、再びシャーペンを鼻の下に挟んだ。

◇

聡は家に帰っても考えた。

確かに兵藤のいうことは本質をついていると思う。

現に聡だって、英語教師だから英語はできるが、高校の頃習ったはずの、三角関数や微分積分、行列、

そしてｍｏｌ計算に数々の化学式、そして漢文……すべて忘れている。

いや、聡の場合、これらは、いちおう大学受験で役割を果たしたか

らいい。

しかし、大学を受験しないとなると。果たして意味はあるのだろうか。

かつ、聡の教え子の大半は中学の勉強でつまづいている。

そこへ高校の高度な内容を詰め込んだところで何になろう。

風呂の中でも、聡は考え込んだ。

そのとき、携帯電話が鳴った。

聡は慌てて風呂から上がった。タオルを巻きつけて、電話を拾ったとたんにくしゃみが出る。

まだ十分に温まっていないせいか、濡れた肌に鳥肌が立った。

登録していないが見覚えのある番号が表示されている。

「センセー、俺」

やっぱり将だった。

「何」

事務的にクールに出ながら、寒い聡は再びバスルームに戻り、下半身を湯につける。

携帯を湯の中に落とさないように肩から上をバスタブの外に出して

会話を続ける。

「土曜日は、ゴメン」

素直に謝る将。少し意地悪したくなって聡は

「何が」

と訊き返した。電話の向こうでわずかに沈黙があったあとで

「キスしたこと」

と返って来た。さらに少し間をおいて

「飲み過ぎて醜態をさらしちゃって」

とも言った。聡はそんな風に素直な将がまた可愛くなってきた。

「もういいのよ」

と優しく言った。とたん将は、

「センセイ、今風呂入ってる?」

とずうずうしくも聞いてきた。

「何で」

「だって声にエコーがかかってるもん。いいなあ。俺も先生とお風呂に入りてえ」

「バカ」

聡はそういいつつもまたドキッとした。夢がオーバーラップする。

こうして裸でいる自分を見られているような気さえする。

しばらく、お互いに携帯を持ったまま、沈黙が続く。

「ねえ。鷹枝くん。あのとき、何言ったか覚えてる？」

「コクッた」

「そうじゃなくて」

「そうじゃないんだー、ハァ」

「聞きなさい」

「……ハぁイ」

いやに今日は素直な将に聡は続ける。

「自分さ、お父さんの力で『何やっても許される』って言ってたよね」

「……」

「あのさ、力を持っている人はね。それを自分のためだけに使わない、ていう責任があるんだよ」

「……力を持ってるのは親父なんだけど」

電話の声はあきらかに不貞腐れているものの、将は反論する。

「その力で好きなように出来るアンタも同じでしょ。

お父様だって、みんなのために忙しく頑張ってらっしゃるんだし」

「……」

返事が聞こえない。聡は両手で携帯電話を握った。

「だから、もうあんなこと言わないのよ」

再びしばらく沈黙が続く。

「先生はわかってない」

と返答が返ってくる。

「どうして。立派なお父さ」「違う」

聡が言おうとした言葉を将がさえぎった。

「俺の本当の母親は、親父に殺されたようなもんだ」

衝撃的な内容に聡は何もいえなくなる。

「親父の選挙で、無理をして、病気に気付くのが遅れた」

哀しみを1つ1つ噛み締めるような告白。電話の向こうで将はどんな顔をしているのか。

聡は携帯電話を強く握り締めた。

「力を自分のためだけに使わない、ていうなら、親父は何だよ。自分の名誉のために議員になったんじゃないか」

語気の激しさに、聡はこのまま電話を切られるだろうと思った。しかし電波はつながっている。

聡は携帯をにぎりしめて、次の言葉を待った。

沈黙が続いている。

「鷹枝くん?」

泣いてるのかも、と思った。

「……ごめん、アキラ。俺を、見捨てないで」

泣いてはいないようだったが、絞り出すような嘆願を聡は電話ごしに聞いた。

将の寂しさは聡に電波を通じて伝わっていた。

酔った将を支えて座っていたときのせつない気持ちが蘇った。

あのとき、将の寂しさは触れ合った体温を通して聡に真摯に伝わり、聡の眼をうるませた。

「見捨てないよ。……だから、心配なことはしないで」

電話は切られた。切る間際にかすかに『わかった』と呟いたように聡には聞こえていた。

19◆勉強の意義2

「ここ2～3日、瑞樹を見ないな。お前ら別れたの？」

ピアス男、井口が言った。将のマンションに泊まりに来ている。

聡との電話を切ってからかなり時間が経っている。もう12時近い。

将が出入りを制限して以来、将の部屋を訪れる不良仲間はめっきり減った。

来るのはクラスメートの井口とそのまわりの何人かだけである。

井口とは中学が一緒だったことで、何かとつるむことも多い。

家に引きこもりの兄がいて、井口いわく、よく「修羅場」になるんだそうで、面倒だからと将の家によく泊まっていく。

「……最初から付き合ってたわけじゃないし」

将はプレステをしながら淡々と答えた。

井口が『ウソォ』といいたげな疑惑の目で将を見て

「つまりセフレだったてこと？」

と付け足した。

将は声に出さず「フン」と呟き、横目でチラリと井口を見た。

将も、実は少し瑞樹のことが気になっていた。前に、家に帰れない彼女の事情を聞いていたから。

あのときは気が立っていて、ひどい追い出し方をしてしまったかもしれない、と少しだけ胸が痛んだ。

しかし、将自身が聡を好きだと本格的に気付いたからには、もう他の女とはヤる気になれなかった。

それにしても顔面ピアスだらけの井口は、顔や目付きは怖いが、意外に人がいいところがある。

たまに「酒飲みゲーム」のような悪さをするが、聡を暴行しようとしたときも、

リーダー格でありながら結局離れて見ていたように、最近はそれほど積極的でもない。

「今日はどこで踊ってきたの？」

将は話題を変えるべく、井口が最近ハマッているというダンスのことを口にした。

ヒップホップダンスだかなんだか、をファンキーにカッコよく踊れるようになりたい、と練習を重ねている。

体を動かすのが好きな性質なのだろう。ダンスの前は３ｏｎ３にハマッていた。これは将も参加した。

体育をサボることが多い将も長身なだけにバスケは得意である。

「××公園で練習。……あ、そしたらさぁ」

井口が体を乗り出してきた。

「前原の奴が、他校の奴とかと、つるんでオヤジ狩ってた、みたいな」

前原とは、聡を暴行しようとして、将に顎を砕かれたクラスメートである。

「マジ？」

将はプレステの画面から、顔を井口のほうにむけた。

「ああ。暗くてよく見えなかったけど、いかにもって感じ」

前はよく将の部屋にもたむろしていたのだが、顎を砕かれて、酒飲みゲームを禁じられてからは一度も足を踏み入れたことがない。

「どーしよーもねーな。アイツ、どんどん悪くなっていくぜ」

井口はつぶやいて残った缶チューハイを飲み干した。

「……将さぁ、やっぱ大学うけんの？」

将からリモコンを受け取った井口が画面を見ながら話題を変えた。

「なんでよ」

「や、来週、三者面談らしーからよ。進路指導とかの」

将はソファーに寝っころがった勢いで「めんどくせー」と吐いた。

どうでもいい、と思った将の脳裏の別の部分に、聡の姿が浮かんだ。

聡は――教師だから当然4年制大学を卒業しているだろう。留学しているとか聞いたっけ？

そして写真でしか見ていない婚約者の博史。

リーマンだとか言ってたけど、海外に赴任するぐらいだからやっぱりそこそこの学歴があるんだろうか。

細い目がいかにも知的な感じだった。

――あいつには負けたくない。

将は天井に思い浮かべた博史に、闘志を燃やした。

聡のためなら、何でもできる、何でもやってやる、と思う。

◇

聡は再び悩んでいた。生徒の兵藤から出題された「勉強の意義」についてである。

それに来週は進路指導もある。

聡は進路指導の資料をめくった。

卒業生は、専門学校に行くか、フリーターになる者が一番多いという。

専門学校に行った者もその後フリーターになることが多いともいう。

ボーナスもなし、各種保険も負担する必要がない働き手のフリーターは雇用主からはお安い労働力として貴重な存在である。

若い卒業生の側も手っ取り早く、今の自分の能力のまま、大した責任も持たされず、サービス残業もなく、自由に働けるからと飛びつくのだろう。

若いうちはいい。

しかし、自分の能力のまま、というのは新しいスキルを身につけないことである。

責任を持たされないということは、いつまでもそれに見合った高い賃金も期待できないということである。

さりとて、大したネームバリューもない3流大学に行ったところで、金だけ掛かって問題は先延ばしになるだけである。

学校側としては、できれば、きちんと就職するか、少しでもレベルの高い大学を目指してもらうのが一番いい、ということだった。

――レベルの高い大学、か。

聡は今日補習に来た生徒たちの顔を思い浮かべた。

高校2年で中学2年の内容をやっているような生徒にそれを要求するだけ、無駄な気がする。

そうかといって、今日来た子達はマシなほうなのだ。

他の生徒は授業もロクに聞かず……。

――結局、今やってる勉強に、意味を見出せないから、なんだろうな。

聡は自分の高校時代を思い出してみた。聡は、萩で一番の進学校に行っていた。

指導が厳しかったのと、「進学」するのがあたりまえのような風潮になっていたから、

嫌でも勉強をせざるを得なかった高校時代。

――全然参考にならないな。

結局、「勉強って何なんだろう。将来役にたつのか」という問題につきあたるのだ。

聡は、パソコンをあけると博史にメールを打ち始めた。

＝＝＝＝＝＝

ヒロ

元気にしてる?

やっと学校にもなれてきました。
ところで相談があるんだ。
今日ね、学校で教え子に
「高校の英語って、役に立つのかと
＝＝＝＝＝
ここまで打って、やっぱり聡はメールを打つのを止めた。

名前のある大学、かつ理系を出ている博史に聞いたところで答えは出ないだろう。

聡は、学生時代の友達である美智子に電話してみた。

本人いわく2流の出版社に勤めて編集から執筆まで何でもやらされているというが、

個性的な考えの彼女なら何かヒントが見つかるかもと思ってであった。

「あー、アキラぁ、元気だった？ようやく就職できたんだって？」

忙しい美智子を気遣って、今話しても大丈夫？といちおう訊くと、

案の定、今校了（原稿を最終的に印刷所に戻すこと）作業の真っ最中とのこと。

明日ならば暇になるということで、聡の就職祝いをしてくれるという。

「あ、そうだ、安くて美味しいお寿司屋さん取材したんだ。就職祝いにおごるから明日行こうよ」

明日の約束だけして電話は手早く切られてしまった。

聡はため息がでた。

20◆勉強の意義3

久しぶりに再会した美智子は、長い髪を真上でシニヨンにして、アイラインがいっそう濃くなっていた。

服装も、学生時代よりコケティッシュになっていてパッと見、編集者に見えない。

指摘すると、若者向けの情報誌をつくっているからネ、とチロッと舌を出した。

聡は、同じ若い女性として、学校帰りの地味なスーツをちょっと恥じた。

待ち合わせ場所から話は尽きず、言っていた「安くて美味しい寿司屋」まで、お互いの近況を話すには短すぎるほどだった。

その寿司屋は、こぢんまりとしているが、白木のカウンターがよい匂いを放っており、いかにも清潔な感じのたたずまいだった。

早い時間だからかまだ客はまばらだが、美智子の担当した記事が世に出たら、こうは簡単にこれなくなるだろうとのことだった。

貝殻を使った箸置きが女将さんによって置かれる。

しかし着物も着ておらず、白いブラウスに黒いエプロン姿は「奥さん」といったほうがふさわしい。

店の接客は若い衆とこの奥さんだけでまかなわれていて、気楽な感

じだ。

「ここはね。本当におすすめなの。基本的にはお任せコースしかないんだけど、マグロ以外は国産の天然ものしか使わないのよ。全部ご主人のコネなんだから」

まずはビールで乾杯する。もちろんヱビスビールである。

「聡の就職祝いに乾杯！」

「ありがとう」

仕事帰りの体はビールを砂のように吸い込んでいく。

聡のグラスはあっという間に空になり、そこへすかさず美智子が2杯目を注ぎ込む。

握るのは年配の主人といくぶん若いベテランの職人のようだ。

さっそく目の前にサヨリの握りが置かれる。

白く透明な身に銀青色の皮が少し残してある。それを見て聡はまたも故郷を思い出した。

聡は箸で口に運んだが、ほどよい握りの寿司を箸で食うのは難しい。

裏返して醤油をつけるときに飯が崩れそうになる。

しかし、最初の握りにふさわしい清冽な身に、握り過ぎない飯粒が舌の上でほろほろとほぐれ、交じり合う様は素晴らしかった。

握りの飯が小さめなのは、客を見て加減しているのだという。

ここ数年、やけに甘いぎっちりと固められた寿司飯に乗った、脂っぽい養殖タイや、サーモンしか味わっていなかった聡には別世界のような旨さだった。

次に岩塩が乗せられたイカ。身がまだ透明でシャキッと噛み切れる。

自虐芸人のギャグよろしく、『いつ飲み込んでいいかわからない』ゴムのような冷凍イカと比べると別物である。

ひととおりの仕事のグチを言い合ったところで聡はくだんの問題をもちだしてみた。

目の前には、落ちギスの握りが置かれた。白いキスの身の上にはぽっちりと小さく桃色の梅肉が置いてあるのが美しい。

それを素手で一口で頬張りながら美智子は考える。

「んー。勉強ねえ……。あたしの仕事はそれなりに全部役に立ってる感があるんだけど」

「大学行かないコとかだとどうなんだろ」

箸を使っていた聡だが、美智子を真似てこれ以降は手でいただくことにする。

梅の酸味がキスに秘められた甘味を引き出している。

「そーだねー。難しいわねー」

次に置かれたのは、皮付きの鯛。皮を香ばしく炙ってあり、九州特産のユズコショウが一粒載せられている。

「1つは忍耐力を養う、ってところかなあ」

「はあーなるほどね」

自分のクラスを思い出す。忍耐力を養うというよりは、面倒くさいことをていよくやり過ごす、という時間になっていそうだ。

「あとは、人と共通の経験。勉強が嫌だった、我慢したってのは世代を超えてわりと共通の話題になりえるでしょ」

「フンフン」

次の紫蘇をあしらった鯖はこってりと舌にとけていく。

舌を爽やかにすべく聡は、自家製だというガリを噛んだ。

タイ産のピンク色のそれとは違ってショウガのままの色だ。

まあ、勉強で退屈だった、という共通の思い出は、寿司におけるガリ程度のつまみになるのかもしれない。

「あとはぁ、うーん。大学行かなくても分野によっては必要なものもあるかもしれないんじゃない？例えばさあ……」

美智子は、キュウリと海苔でおのおの巻かれた小さなウニの軍艦巻

き2種を頬張りながら、
取材で出会ったというあるセラピストの話を詳しくはじめた。
「なるほどー」聡はそれはとても参考になると思った。
「でもさ、聡、そもそも高校時代に自分のなりたいものってあった？」
聡は自分の高校時代を思い浮かべる。
初めて出来た彼氏に浮かれていた自分を思い出している聡の前に、活きトコブシの軍艦が置かれた。
ヌルヌルとまだうごめく、アワビのミニチュアのような姿に一瞬ギョッとしたが、
こわごわ口にすると以外にも涼やかな味なのだった。レモンのさっぱりとした後口がする。
あの頃、同級生の彼氏ができて、しばらくして聡はセックスを知った。
知ってしばらくは、それればかりに夢中だったような気がする。それは大学受験を意識する頃まで続いたのだ。
あの頃、遠い将来なんかより、彼氏と一緒にいることのほうがずっと大事だった。
「ないねー。なかったね」

「あたしはさ、本当はさ、漫画家になりたかったんだけどさー。でもね、たぶん今のコたちもそうだけど、大人になることに夢が持てないんじゃないかなあ」

「夢？」

店自慢の穴子が置かれ、寿司のコースもクライマックスを迎えている。美智子は食べながら話を続ける。

「うん。大人になっても、つまんない労働だけさせられて、そのくせ働いても働いて給料もあがらないで、リストラにおびえるの。親たちも含めて、まわりがそういう大人ばっかりなんじゃないかな。で、自分もいずれそうなると思ってて、絶望してんの。だから今を楽しんじゃってるんじゃないかなあ」

穴子は濃く煮締めてあるように見えたが、口に入れるとふわっとしていた。

「でもさ、労働ってさ、つらいばかりじゃないんだよね。努力して苦しい思いをしたのが報われるとかさ。自分が成長したのを感じるとかさ。

こういうのって学生時代はわかんないじゃん」

聡はまだその果実の味を知らないので黙ってきいている。

「ねっ？大将！」

美智子は１２種の寿司の最後の玉子焼きを置いた主人に同意を求めた。

「これが絶品でデザートがわりなのよ～」と目を細めて付け加える。

５０代後半だろうか。主人は微笑んでうなづいた。お愛想ではない額に刻まれた皺を崩すようないい顔だ。

「そうですね。やらされてる、と思っている間は仕事はつらいばかりですけど、

自分でやるって決めた仕事は面白くなりますね」

聡はハッとした。確実なヒントを１つ聞いた気がした。

デザートがわりの玉子は甘じょっぱさがいい塩梅だった。

そのとき、シメの濃いお茶を運んできた若い衆と目が合った。見覚えのある顔。

――ええっ！

その若い衆も目を丸くしている。

「兵藤くんじゃない！何やってるの」

聡に『勉強って役に立つのか』という難問を出した丸刈り少年である。

白いうわっぱりを着た兵藤は盆を胸元に持ってペコリと頭を下げた。

「ん、憲どうした？」主人がこちらに気がついて、兵藤に声をかけた。

「親方、僕の担任の先生です」

「あ、先生ですか、どうも。憲がお世話になってます」

主人は、仕事の手を再びとめて、カウンター越しに挨拶した。

「ここでバイトしてるの？」バイトは特に禁止されていないのだが。

「……修行してるんです」兵藤は顔を真っ赤にして言うと、お茶を運びに行ってしまった。

◇

翌日。

朝のＨＲで教室に入った聡は、将よりも前に、兵藤憲一と目があってしまった。

兵藤は顔を赤くするとペコっと頭だけで挨拶をした。

隣の席の将は目を丸くして、兵藤と聡の様子を交互に見比べた。

聡は教卓に立ち、出席を取ると、おもむろに生徒全員に向かって聞いてみた。

「この中で、大学に進学しようともう決めてる人」

生徒は突然の質問に顔を見合わせたが、１０人ほどが手を挙げた。

その中に頬杖をつきながら一番前で手を挙げる将がいたのが意外だった。

「じゃあ、将来何の仕事をやりたいか決めてる人」

こちらは数人程度だ。その中には、昨日寿司屋で働いていた兵藤がいた。

聡は、皆に来週から進路指導のための三者面談が始まることを告げてＨＲを終了した。

「兵藤くん、いい？」聡は兵藤を廊下に呼び出した。

聡が将以外の生徒を一人を呼び出したのは初めてである。とたんに廊下の窓に野次馬が鈴なりになった。

兵藤は赤くなって下を向いた。

話にならない、と判断した聡は「放課後にね。事情を教えて」と言って兵藤を解放した。

将は戻ってきた兵藤に「ケンちゃん、何だったのよ」とふざけて聞いたが

兵藤は丸刈りの地肌をほんのりピンクにそめて、「何でもないよっ」と下を向いて教科書を出し始めた。

21◆勉強の意義4

聡は放課後、兵藤憲一の話を聞いた。

東京からＪＲの快速で1時間半程度のところに実家があるという兵藤は、

あの寿司屋に弟子入りし、住み込みで修行しているのだという。

ただ、「高校はくらいは出ておけ」という主人の方針で、店から比較的近い荒江高校に進学したのだという。

「どうして、お寿司屋さんで修行することになったの？」

聡が訊くと、兵藤は少しだけ頬を赤らめて

「僕の叔父が寿司職人だったんですけど、5年前からニューヨークで店を開いてるんです」

スシブームに乗って、叔父の店はいまだに客が絶えないという。

勉強がそれほど好きじゃなかった兵藤は腕一本で海外までも渡り歩ける寿司職人に憧れを抱いたというわけだ。

「そうなの……。じゃあ兵藤くんもいずれは外国に？それで英語を頑張ってるの？」

英語だけ、特に頑張っている兵藤に理由を求めた。

「それはわからないんですけど……。そういうチャンスがあるかもしれないし、

それに店に結構外国の方がいらっしゃるんです。だから……」

将と違って、幼くみえる丸刈り頭の兵藤だが、敬語もしっかりと使えるし、

その視線は自分の未来をしっかりと見据えている。

自分の将来に関係があるから、勉強を頑張れるのだろう。

◇

聡が兵藤を呼び出して話を聞いているしばしの間、補習組は自習になっていた。

聡目当てで放課後居残っている将は、とてもつまらない。

株取引も終了している今の時間、特にやることもない。

将は窓側に座り、校庭ごと夕陽に染まりながらサッカーに興じる生徒をぼんやりと見ていた。

そのオレンジ色は、将に土曜日の海辺の聡を思い出させた。

びしょぬれになりながら、何がおかしいのか笑いあっていた記憶は将を少し幸せにした。

そして強引にした2回のキス。

その感触を思い出し、将は唇に拳をあてる。

と、教室の入り口が開いた。聡が入ってくると思った将はあわてて視線をそちらに向ける。

兵藤一人が教室に戻ってきた。

――なーんだ、ケンちゃんだけかあ。

がっかりした将の視線は、また元の窓辺に戻ろうとして、止まった。少し離れた斜め前に座る、松岡の腕にひどい擦り傷を見つけたからだ。

軽いものだからか、包帯などは巻いていないが、それゆえにまだ新しい海老茶色の傷は目立った。

肘から腕にかけて広い範囲にわたっている。

「松岡クーン」

将は机に乗り出すようにして、松岡を呼んだ。

松岡は将に呼ばれてギョッとしたように身震いしながら振り返った。

「何ですか？」

同級生なのに松岡は将に敬語を使った。そのくせ将の顔をまともに見ず、おどおどとしている。

将はおかまいなしに訊いた。

「その腕どうしたの？」

「え……」

ふいに訊かれ、松岡はあきらかにとまどっていた。

「……何でもありません」

そういうと松岡は前を向いて、勉強に集中するふりをした。

――何でもないってことないだろ。

将はその態度を見て不審に思った。そのとき聡が入ってきたから、すっかり忘れてしまったのだが……。

◇

「今日の英語は、教科書もノートも使いません」

次の日。聡はＨＲの時間にそう宣言した。クラスは、何が始まるのかとざわめいた。

「静かに。……ですから、英語の時間はみんな視聴覚室に移動してください」

将は目の前、教卓の上の聡を見上げた。何かを決意しているようである。

今日の英語は昼食が終わってすぐの４時間目だ。

将は、昼食はいつも井口らとつるんで学食を利用する。

先週、教室からピザを注文して、多美らにこっぴどく叱られたので、安いけれど美味しくない学食で我慢しているのだ。

ネギとなぜかピンク色に着色されたカマボコで嵩を増した親子丼をかきこむと一人、

職員室の窓を校庭側からのぞく。

職員室には屈強教師らが宅配弁当を食べながら憩いのときを過ごしていた。

が、その中に聡はいなかった。将は視聴覚室に向かった。

ＤＶＤの説明書を熱心に読んでいた聡は、急に後ろから温かい体温に包まれた。

誰かに急に抱きすくめられたのだ。

嫌な思い出がある視聴覚準備室だ。聡は思わず「キャ」と声を出しかけた口をふさがれる。

「俺だってば」

手を振りほどいた聡の前に将がいた。将がいきなり聡を後ろから抱きしめたのだ。

「もう！何するのよ！」

聡は心臓が止まるかと思うほどびっくりしたのだ。まだドキドキしている。

「いいじゃん。もうデートした仲なんだし。……何してんの」

将は聡の手元を覗きこむ。

「見りゃわかるでしょ。仕事よ。そっちこそ何してんのよ」

「何って。アキラと二人になりたかったんじゃん」

「先生、でしょ」

「アキラでいいじゃん。マイ・スイート・ハニーアキラ。昨日はケンちゃんと何話してたの」

聡はバカ、といいながら、

「ちょっといろいろ将来のこととか。そうだアンタ、大学進学考えてるの」

と教師の顔に戻って訊いた。将は軽くうなづくと、逆に聡に訊いた。

「ね、博史って何大？」

何でそんなこと訊くのよ、という聡に、いいから、と食い下がる。

「××大」

地方の国立大だが、将でも知っているとてもレベルの高い大学だ。

「ふーん。じゃ俺、もっといい大学に行く」

「何それ」

「アキラが好きだから。博史に負けたくない」

聡の心臓が再び体中に響くような音をたてはじめた。

それは静かな視聴覚教室のこと、聞こえてしまうのではないか、というほどだった。

ふいに午後の授業の予鈴チャイムが鳴った。聡は助かった、とホッとした。

「バカなこといってるんじゃないの」とあしらいの言葉を何とか舌に乗せた。

将は何食わぬ顔をして、井口らと合流して、生徒らの一番後から視聴覚室に向かった。

そのとき、はるか前を歩く松岡の腕の傷に目がいった。

傷は昨日より色が濃くなり、カサブタ化しているようである。その横顔をみてハッとした。

唇の横が少し赤く腫れている。

直感的に、近くにいた前原を見た。

前原は将に殴られて以来、将と直接話をしないが、クラスの中の不良グループの一人として、

井口らとはまあまあ親しくしているらしい。

こうして視聴覚室などに移動するときも、誰と同じグループの中で将とは離れたところを歩いていた。

前原は将の視線に気付くと一瞬睨み返したが、すぐに目をそらした。

◇

視聴覚室で、聡はマイクを使って言った。

「今日から、映画とか音楽を使って、英語の基本をやります」

再び生徒はざわついた。

「日本語もそうだけど、言葉ってのは、他人に何かを伝えるためにあるんだよね。

で、一番手っ取り早いのは、話すことと聞くこと。

それは、字に頼っていたらいつまでたっても覚えられない。

なので、今日から教科書は使わないで、耳と口と体を使った授業をやります。ただし」

嬉しさからかさらにざわめきが強くなる生徒ら。

「授業にきちんと参加しないと、テストの点がとれないように問題をつくります」

少し静かになる。

「だから。そこ！」

早くも視聴覚室の暗さに、机の上につっぷしていた不良の一人、ユータを聡は指差す。

皆に注目されてユータは起き上がって頭に手をやりながらニヤニヤする。

「寝ないように。わかりましたか」

「はぁい」

茶髪の頭を軽く前にゆらす。

「あと。大学を受験したい人は、個別に対策をしますので、放課後

の補習なり、添削なり……希望の方法をあとで聞きます」

聡は照明を消すと、映画を流し始めた。

22◆不穏1

放課後の補習は、また少し人数が増えた。

大学進学志望者が入ってきたほかに、口コミでわかりやすい、というのが広まったからである。

授業中寝てたやつも、「個別の進度にあわせて」というのに惹かれてか、放課後にはのこのこやってくる。

聡は一人一人に、どこでつまづいたかテストをし、遡って説明しなくてはいけないので大忙しとなった。

将ときたら、いよいよほったらかしにされて不満である。

新規参加組にチャミとカリナもいた。

彼女たちは、前に座った聡の顔を見て「先生、こないだはごめんね」と謝った。

聡が暴行されそうになったとき、井口ら不良グループを手引きしたことを言っているのだ。

「うちら、アイツらに脅されて……。先生、ヤられてないよね」

「大丈夫よ」

聡が答えると、二人とも両手を顎の下で握り締めて

「よかったー。学校来てたから大丈夫だとは思ったけどぉ、でも心配でぇぇ」

と顔を見合わせた。

「でも何で助かったの？あいつらツるんでたでしょ」

聡はちらっと将のほうに目を走らせた。するとこっちを見ていた将と目が合った。

呆けたような顔が、聡と目があったとたん、ニッと笑う。

「人が偶然来てくれてね」

聡はあわてて視線を戻したが、チャミとカリナは将とのアイコンタクトに気付いたようだ。

「鷹枝くんと先生って仲いいよね」

さすが女子高校生、前触れもなくズバリと突いてくる。

「え、フツー、だけど」

聡はあせって答えた。

するとチャミは急に声をひそめて、聡だけに聞こえるように言った。

「だけど先生、鷹枝くんのこと、怖くない？」

「？」

「鷹枝くんってね……。人殺ししたって噂流れてるんだよ」

聡は一瞬ぞくっとした。

『俺は何をしたって許されるんだ。人を、例え、刺し殺したとしても』

と土曜日に将が言ったセリフを思い出す。

「よしなよ、チャミ。噂でしょ」

カリナが制止する。

聡は、勉強に戻るよう彼女らにうながすしかできなかった。

将は暇でしかたなかった。

こんなんなら、夕陽を見に海へ行ったほうがマシかもと思ったが、最近いよいよ日暮れが早くなってきている。

授業が終わって車を飛ばしたとしても間に合うかどうかである。

将は、松岡のことが気になって、彼を見る。

反対側の頬しか見えないので、特に異変はないように見える。

しかし。なんとなく嫌な予感がしていた。

将は聡の顔と松岡の腕の傷を交互に眺めていたが、次第にうつらう

つらしてきた。

昨日は久しぶりに、井口らと夜遊びに出たのだ。

たいして出たくもなかったが、井口が、

「オヤジガリガリしようぜ」

というのでしぶしぶ外出したのだが

（ちなみにオヤジガリガリ、というのはオヤジ狩りをする、自分たちより弱そうな不良を狩る、という正義の味方ごっこである）、

実際に行ったのは踊るほうのクラブだった。

将がいると女の子が寄ってくるという井口の計算だったが、なるほどブスっとしている将はクールな雰囲気で女受けは悪くない。

平日のクラブはほとんど高校生と大学生ばかりで、１２時すぎに２度目の盛り上がりのピークを迎えた。

それに便乗してバカ騒ぎをした……。

「……くん、鷹枝くん」

聡の声で将は目が覚めた。

「んあ？」

将は寝ぼけて頭をあげると前に聡が立っていた。いつのまにか机に

つっぷして寝ていたらしい。
教室にはもう誰もいない。
「下校時間よ」
いまいち頭がはっきりしない。ボーっとしている。どれぐらい眠っていたんだろうか。
教科書を閉じた将は、あ、と気付いた。
「センセイ、松岡くんは？」
「帰ったわよ」
ヤッバ、とつぶやくと即座に「先生さよなら！」と教室をダッと駆け出た。
「教科書出しっぱなしよ！」と聡の声が背中に聞こえた。
将は校門を出ると、学校近くの公園に走った。
桜並木に囲まれ、砂場と鉄棒、ジャングルジムにブランコ、そしてベンチがある、子供を遊ばせるためのような公園だが、夕暮れで薄暗い今の時間には誰もいない。
将はコンクリート製のトイレの裏にまわった。
――――やっぱり。

そこにはトイレの裏の壁に張り付くように財布を手にした松岡、その前に前原がいた。

「何してんだ！」

走ってきた将は息をきらせながら叫んだ。前原は将の姿を見るとギョッとしたようだが、すぐに居直った。

「見りゃわかるだろ。邪魔すんな……」

と前原が言い終わる前に将は彼に殴りかかった。その濃い顔にパンチをくらわせる。

次の瞬間には前原は赤っぽいカタバミの葉が生い茂る湿っぽい地面になぎ倒された。

右頬が次第に赤くなり、分厚い口の端から血が流れていた。

「おまえ、何様だァ……！」

前原は隈取をしたかのように見える大きな目を歪ませて将を睨みつけると、ポケットからナイフを取り出した。

壁に張り付いていた松岡がふるえあがった。

ナイフを振りかざして前原は突進してくる。将はそれを素早くかわすと膝で前原のみぞおちを蹴り上げていた。

前原は貯水タンクの地面を固めるコンクリートの上に飛ばされた。横向きに丸まり、ゴホッゴホッと咳き込んでいる。

「大丈夫、松岡くん」

将は松岡を振り返った。

「……ありがとう」

松岡は壁にはりついたまま小さな声を出すのが精一杯だった。

「で、いくら取られたの？」

「全部で……5万、それとカード」

松岡は倒れている前原をチラチラ見ながらさらに小声で言った。

将は再び倒れている前原のところへ近寄ると、

「金とカード、返せよ」

と上から言った。前原は苦しそうに咳ばかりをしつつも将には

「なんのことだよ」

としらばっくれる。将は前原からナイフをとりあげた。

そして彼を靴先で転がして仰向けにさせると、その長い足で彼をまたいで、両手のひらを足で踏んで固定した。

前原の指の骨は固いコンクリートと将の体重が掛かった靴底に挟まれてギシギシと悲鳴をあげた。

あまりの苦痛に前原がうめく。

「松岡くんからとった金とカードは？」

両手を踏みつけたまま、前原の顔を見下ろして、もう一度訊く。

「し、しらねえよ」

将は、そのままの体制でナイフの刃を再び出した。

それは今から果物でも剥くのかと思うような日常的な出し方だった。

「知らないはずはないんだけど」

といいながら、将はナイフを高くかざす。前原が見上げた将は、能面のような無表情だった。

明るいところでは茶色っぽく見える将の瞳が薄闇のせいで光のない真っ黒に見える――――ＴＶで見たホオジロザメの目のように。

それが冷酷さを極めた顔であるというのを彼は知らない。

「おかしいなぁ」

将は無表情のまま、あまり抑揚もなく言うと、その刃を一気に前原の胸に向かって振り下ろした。

松岡ですら、その恐ろしさに、顔を壁に向けて目を閉じたほどだ。

「ギャアアアア！」

夕闇せまる誰もいない公園に前原の悲鳴が響き渡った。

◇

補習を終えた聡は、職員室に一人残り、残業をしていた。

新人教師の聡は、授業が終わるといろいろとやることがある。

プリントの作成や会議のレポートをまとめたり、研修資料をつくったり、コピーを何十部もとったり。

補習をしなくても忙しいのに、放課後に補習を1時間入れたばかりに、仕事はたまりにたまっていた。

英語の授業が映画鑑賞に変わった件について、生徒にはおおむね好評のようだった。

もちろん聡は映画鑑賞だけで終わらせるつもりはない。

ここから中学レベルでもできる日常表現を抜き出して、文字列に頼らずに耳と口で覚えさせるつもりだった。

実際、聡はアメリカ・サンフランシスコに1年間留学したことがあるのだが、

発音がクリアーではない西部だったせいもあり、そのとき向こうで出会った日本人留学生は

日本でＴＯＥＦＬ対策でやったヒアリングなど、日常ではほとんど役に立たないも同然だと言っていた。

聡は両親が日本人学校の教師をしていた都合で小学生から中学生にかけてカナダのバンクーバーにいたのでそれほど苦労しなかったのだが、

外国語を習得するには、結局「字」に頼らない体験にまさるものはないのである。

それと、友人の美智子は高校の勉強の意義の１つを「忍耐力の養成」と言った。

そして勉強の退屈が「世代を超える共通体験」とも。

しかし、せっかく頭の働きが一番いいときに、興味のない授業の忍耐で時間をつぶすのはもったいない、と聡は思った。

教育要項には英語の重要な役割に「国際人の養成」とあった。

それだったら、つまらなくてレベルばかり高い英語の教科書よりも、英語にひっかけて、映画でも見たほうが、よほど一般教養にもなるし、海外の文化の勉強にもなると思う。

英語は将来忘れても、感動した映画のストーリーは容易に忘れないだろうから。

英語の他にも、聡はいずれ英語のカラオケをさせる予定もあった。

流行の英語の歌をカラオケで歌えればカッコイイ。その方が大学にもいかない生徒らには「役に立つ」だろう。

それに、音楽に助けられて英単語や熟語もすっと頭に入りやすくなるに違いない。

そして、さらに英語の授業の改革のほかに、聡が考えていることがあった。

気がつくと、今日は他の教師は皆帰ってしまい、聡一人になっていた。

もう外はすっかり暗い。

「もういいや。今日は帰ろうッと」

聡が帰り支度をして、警備員に自分が最後だと告げにいこうとしたときだ。

職員室の電話が鳴った。

こんな時間に？と聡は踵を返して電話をとる。

「もしもし。お待たせいたしました、荒江高校ですが」

「もしもし、こちら○○署ですが。お宅の生徒さんのことで――」

警察からの突然の電話だった。

23◆不穏2

警察によると荒江高校の生徒が何か問題をおこしたらしい。

生徒の両親は連絡がとれないので、学校関係者に来てほしいとの連絡だった。

聡は、自分が行っていいのかとも思ったが、他の教師はすでに帰宅している。

教師の個人宅への電話番号は、「個人情報」とのことで公表されていない。

教頭の番号のみ教えられているが、それではあまりに事が大きくなりすぎると聡は判断し、警察に出向くことにした。

まさか、将？

いやな予感をかき消しながらタクシーを拾う。

◇

「あっちゃ～……」

目をつぶった松岡は、将の声でおそるおそる目をあけた。

前原は血まみれではなかった。

将の視線の先には、血の海ではなく、濡れたコンクリートの面積が

徐々に広がっていた……前原の腰の下あたりから。

将が振り下ろしたナイフは、前原の脇の下すれすれのコンクリートを傷つけただけだった。

しかし、あまりの恐怖に前原は失禁してしまったのだ。

「うっ……」

前原は悔しさと恥かしさでうめいた。

将は、ナイフを握りなおすともう一度訊いた。

「金とカードは？」

「返す、返すからやめてくれ」

前原は泣きながら懇願した。

将は前原の両手から足を引いた。

前原は起き上がるとカードと2万を出した。

「あとの3万は！」

将はナイフを前原の目の前にかざして厳しく問い詰める。

「もうない。……使っちまった」

「何だァ？」

再びいきりたつ将は、前原の襟をつかんだ。松岡が、とめに入る。

「も、もういいです」

「よくないッ！」

将は松岡を一喝してさらに前原を責める。

「どこで使ったんだ！」

将はナイフを前原の喉もとにつきたてた。

前原はひっ、とうめくと、

「……ゲーセンとか……ふ、風俗とか」と白状した。

「フーゾクだぁ？」将はあきれた。

松岡が将を懇願するように止める。

「鷹枝くん、本当にもういいんです。親の財布から盗った分は戻ってきたから……」

松岡は、前原に脅されて、親の財布からの盗みまで犯したというのだ。

幸い、カードの暗証番号を問い詰められていたところで将が割って入ったらしい。

将は、最後に前原を一瞥すると、松岡をうながしてその場を立ち去った。

前原は自ら垂れ流した尿にまみれて、腰が抜けていた。

「チキショウ……。覚えてろよ」

しかしラテン系の大きな目は、将の後姿をいつまでも睨んでいた。

◇

聡は料金を払うのももどかしく、タクシーから転がるようにして降りると、警察署への階段を駆け上がった。

古い警察署の建物のグレーを基調とした部屋は、蛍光灯の緑がかった光でよけいにくすんで見える。

そんな中で待っていたのは、ピアス男の井口春樹だった。

……将ではなかった。聡はほっとしたと同時に、再び緊張した。

なんといっても井口春樹は先々週、赴任したての聡を集団暴行しようとしたリーダー格である。

今度は何をしでかしたのか。

熟年の、温和そうな警察官が説明する。

「××書店で万引きをしましてね。店の人によると、1回は注意を

して見逃したそうですが、今回が2回めなので、通報したとのことです」

「万引き……」

聡は力が抜けた。

当の井口は警察官の前でも不貞腐れたようにそっぽを向いている。

「ただ、いずれも未遂ですし、反省しているようですので、補導するほどでもない、ということで。

厳重注意で今回は穏便に済まそうと、署では判断しまして。

それで再三、おうちのほうにも電話をしたんですが、お留守のようで、時間も遅くなりましたので先生に来ていただいたんです」

井口は、椅子に浅く腰掛け、手をズボンのポケットに入れて、バカでかい体を斜めに仰向けにしている。

この、不良そのもののポーズのどこが反省しているのだ。聡はなんで補導しないんだ、とさえ思った。

「どうも、お手数をおかけしまして、申し訳ありません」

聡は一応儀礼的に謝った。

「今日は先生にお任せしてよろしいですか?」

聡は、一瞬とまどった。視聴覚室で組み敷かれた嫌な思い出が蘇る。

夜道をこんな危ないやつと二人で帰るのは自分が危険だと思ったのだ。

「……あの、もう一度、おうちに電話をしてみてもよろしいですか？」

聡は警察官に申し出て、再度、井口の家に電話をする。

……本当に出ない。

聡は根気強く、コールを３０回以上鳴らした。

すると、一瞬受話器を上げる音がした。

「もしも」ガチャッ。ツー、ツー、ツー、ツー。

聡が呼びかける前に受話器は置かれてしまった。一度は確かに誰かが出たはずだが……。

もう一度かけても、もうつながらない。

――どうしよう。

聡は途方にくれた。

……結局、聡は井口と二人で警察署を出るしかなかった。歩きながらも一定の間隔を保つようにする。

しかし警察署から少し離れると「じゃーね。先生よ、」と言って井

口のほうから勝手にいってしまおうとする。

「待ちなさい！私はあんたを家に送り届ける義務があるんだから」

「……ンだよ」

井口は、振り返るとこっちへ歩いてきた。

腰パンのポケットに手をつっこみ、バッシュの踵を踏みつけてサンダルのように足をひきずりながら、

ガニ股で肩をいからせて聡にまっすぐに近寄ってくる。

「や……」

聡が声をあげそうになったその時。

そのとき聡の後ろでパッパー、とクラクションが鳴った。

井口が聡の横をすりぬけて「将じゃん、何だよ」と親しげな声を出した。

聡が振り返ると、ローバーミニがいた。運転席の窓から将が頭を出す。

「先生、迎えにきたよ」

困り果てて聡は、将に電話をしたのだ。

◇

「万引きィ？だっせーの」

将は夜の町を運転しながら笑った。

「うっせえ」

助手席の井口は照れて窓の外に顔をそらした。

後部座席にいる聡は、そんなふうに照れる井口を意外に思った。

「で、なんでやったの？金ないの？」

将の問いに

「ないね」

と井口はあっさり答えた。人気の漫画本を万引きして古本屋に売れば金になる。井口はそれで稼ごうとしたのだ。

「なんでよ」

「お前のせいなんだよ」

井口は運転席の将に向き直って吐き出すように言った。

「なーんで」

答えながら将はバックミラーに目を走らせる。暗がりの中で対向車のライトに照らされた聡の顔が白く浮き出ている。

聡はバックミラー越しに自分を見る将の視線に気付いて、視界から逃げようとした。

将はそんな聡にふっと笑う。

「お前最近付き合い悪いじゃん。だから……」

井口は二人の様子にも、気付かずに将に不平をもらした。

「あ～……」

将は理解した。

いつも金を出す将が一緒に遊ばないから、遊ぶ金がない、というわけだ。後ろにいる聡にはさっぱり意味がわからない。

「何、そんなに遊びたいわけ？」

井口は答えないで再び窓の外に顔をそらした。

「俺、あすこ、帰りたくないんだけど」

しばらくして井口が将に言う。「今日もお前んち泊めてよ」と続ける。

聡はそれを阻止する。

「ダメよ！今日はおうちに帰らないと」

「うるせえなあ」

井口が助手席から振り返って睨みつけたので聡はひるんだ。

「まあ、今日は帰れよ」

将が助け舟を出してくれた。

「え～……。今日、『バカ』しかいねえからなあ」

と井口はいかにも嫌そうに言った。

「あ～」将は再びそれだけで分かったように答えた。

「なあに、『バカ』って。ご両親今日は留守なの？」

聡は後ろから訊く。

すると井口はいかにもうざそうに「ホージ」と一言で答えた。つまり法事に出かけているということだ。

「でも誰かいらっしゃるのね。よかった。挨拶くらいしておかないと」

「『アイツ』が挨拶なんかするわけねえよ」

そうこう言っているうちに、井口の家についた。わりときれいな一戸建てである。

聡は唾を吐きながら歩く井口と共に、玄関に立った。

井口は自分で勝手に鍵を開けると、聡などいないように中に入ろうとする。

「おうちの方は？」

聡が訊くと、井口は「いねえも同然だよ」と答えると「じゃな先生、手間かけたな」と奥へ行ってしまった。

「ちょっと……！」と引きとめようとする聡の肩を将がつかんだ。

「いろいろ事情があるんだよ」

「でも……」

「いいから」

将は聡の手を引っ張って、ローバーミニの助手席に乗せると、夜の街へとアクセルを踏んだ。

２４◆握り合う手１

「俺さ、アキラが頼ってくれて、めっちゃ嬉しい」

最初の角を曲がる前に将ははずんだ声で告げた。

「頼ったなんて……」

反射的につい、意地をはったセリフがこぼれてしまった聡だが、今回の場合は明らかに『頼って』いたことに相違ない。

「……そうね。どうもありがとう」

と素直に感謝の言葉に言い換えた。が

「手間をかけてごめんなさいね」

と『大人』を強調しようと、気遣いの言葉も末尾に付け加えた。

「何いってんだよ。いくらでも頼れよ。俺アキラのためなら何でもやるんだから」

信号待ちになり、将は顔を軽くこちらに向けてくる。

ヘッドライトにてらされた左頬に線のような傷があるのを聡は見つけた。

「頬の傷、どうしたの」

将は傷にいままで気付いていなかったようだ。バックミラーで確認して

「ほんとだ。あのヤロー」

と小さくつぶやいた。

夕方に松岡を助けたときに、前原のナイフの先がかすったらしい。

しかしそんなことは聡に言う必要はない、と将は判断した。

「なんでもないよ」とミラーを戻すと、

「さーて、どこに行こうかー?」とおどける。

「バカいわないの。明日も授業あるでしょ」

将は「チェー」といいながらも

「でもちょっとぐらい夜のドライブに付き合ってよ。呼び出したお礼にさ」

と車線を変更した。

聡は本当は疲れているから、早く帰りたかったのだが、まあ仕方ないか、とあえて異論は唱えなかった。

車は首都高に乗った。進む先には星を撒いたような都心部が、空に半月を浮かべて展開していた。

「で、井口くんの事情って何なの」

まるで恋人のような雰囲気に抵抗するため、聡は教師としての責任感を前に出した。

「ああ」

将は井口に引きこもりの兄がいることを説明した。

「たしか、アキラと同じぐらいのトシじゃなかったかな。すっごいベンキョーができたみたいで、

××大に進んで、一流企業っていうのかな。……に入ったんだけど、1回仕事で失敗しただか、でそれっきり」

親も黙って見ているだけでなく、いろいろするらしいが、そのたびに修羅場になり、

それが井口に飛び火することも少なくない、という。

「……ちょっと可哀想なやつなんだ」

「そう……」

でも聡はあのピアスだらけの風貌の井口がどうしても恐ろしい。

「だからさ、あんなふうにオッパイみられて悔しいと思うけど、アイツを許してやってよ」

将からそんな言葉を聞いて、聡は顔が熱くなった。

それを見られないように、窓の外の夜景に目を移そうとしたが、あいにく防音壁があり、それほどよくは見えない。

あのとき、一瞬だったとはいえ、たぶん将も聡の裸の胸を目にしたはずなのだ。

それを思い出したとき、悔しさではなく、恥かしさが、しかし、ときめきに似た感情が聡の心を支配した。

それを振り払うように、聡は

「知らない」

と肩をすくめた。

沈黙する二人の行く先では夜を彩る光の色合いがどんどん派手になってきた。

街を区切るように赤いテイルランプが連なる道路同士が並行し、上下し、交差する。

色とりどりの光の海に光の網を投げたようだ。車の中も赤い光、オレンジの光につぎつぎと照らされた。

「あ……」

聡の目の前に東京タワーが現れた。

鉄柱のあちこちにランプをつけた姿は季節外れのクリスマスツリー

のようだ。

上のほうには赤い光が点滅している。

「こんなに近くでタワーを見たの、初めて」

窓に張り付くようにして見上げる聡が、将には嬉しくて、すぐ近くに見える月までドライブできそうな気さえした。

◇

今度は聡のおごりで軽く食事を済ませた後、二人は湾岸の遊歩道を歩いていた。

ドラマなどで、よく恋人同士がデートする場所だ。

今日もまだ平日だというのに、若い恋人同士がよりそいあって歩いている。

実は聡も博史とではないが、学生時代に付き合っていた男と一度歩いたことがある。

「高級フレンチをおごってもらったのに、ごめんね」

聡は手すりによりかかって対岸の夜景を眺めながら言った。

狭くなった東京湾は対岸の夜景をゆらゆらと水面に映している。

聡がおごったのはごくごく普通の値段の店だった。

「アキラとだったら、それだけでなんでも旨いよ」

本当は聡の肩に腕をまわしたい。それをぐっとこらえて将は聡の隣の手すりに体重をかけた。

腕同士がふれるかふれないか、そんな距離は、将に聡の香りを感じさせた。

香りは、将の理性を少し蹴飛ばした。

左にいる、香りの源をのぞきこんだ。すると、聡も将を見ていたのか、至近距離で運命のように目が合った。

聡の視線ははじかれたように夜景に戻っていった。

将も鼓動が手すりから聡に伝わりそうな気がして、湾に背を向けて、手すりによりかかった。

その前を、まだ付き合いはじめ、のような初々しいカップルが手をつないで通り過ぎた。

二人がつなぐ手に将の目は釘付けになった。

今まで付き合った女のコとは、手をつなぐ前に、いきなり肩や腕を組んでいた。

肩は男のほうからさりげなく抱くものだ。

『イケメン』の将だからだいたいの女の子はそうされても嫌がらず、むしろうっとりとして体重を預けてきたものだ。

腕のほうは女の子のほうからたぐってくるもので、それも将はたいてい拒んだことはない。

だけど、『手』はお互いの手が握り合うものだ、ということに将は気がついた。

握り合った手は想いあう二人の象徴なのだ。

将は、聡とあんなふうに手をつなぎたい！という思いでいっぱいになった。

再び聡と同じ方向に向き直った将は、隣の聡に

「ね、手。出して」

と言った。聡は唐突な将の申し出に、

「なあに？」と言いながらも右手を差し出した。

その右手を、将は左手でガシッと握り締めた。柔らかくてしなやかな聡の手。

「？」

聡はわけがわからず、目を丸くしている。

――だめだ、こんなんじゃない。

将は聡の手を握ったままうなだれた。

聡のほうは、いきなり聡の手を握り締めた、将の熱い手に困惑していた。

博史の固い手とも違う、若者らしいみずみずしさが残る、手。

「アキラ、俺のことどう思ってる?」

急に投げられた質問と視線に聡はますますとまどった。

「どうって」

「男として好き?嫌い?」

男として。たしかに聡の手を握り締めて、見つめるその顔は『男』だ。

「そんな……」

いよいよ視線を熱くする将の瞳を見ることもできず、聡はうつむいた。

「手を離して」

「……ゴメン」

将は素直に手をはなした。聡はなぜか、もどかしいような思いにとらわれた。

このまま手を離さないでほしい、そんな想いがどこかにあった自分

に言い訳をするように

「私には結婚を約束した人がいるから……」

とかろうじて言った。

「博史？博史のどこが好きなのさ」

将は不満そうに少し頤をあげた。

「そうね……。おだやかなところとか、大人なところとか、かしら」

わざと、将と真逆のことを言いながら、聡はちくちくと心が痛んだ。

「あと、安定した収入とか？」

不機嫌そうに将は付け足すと、すぐに反論した。

「俺だっていつまでも17じゃない。すぐ大人にだってなる。収入だって、博史なんかに負けないぐらい稼ぐよ」

「そんな……だけど私は……担任教師だし、9歳も年上よ」

「関係ないよ」将は聡の言葉がおわる前に即座に言ってのける。

「そんなの関係ないよ……アキラ」もう一度言い聞かせる。

目の前の揺れる波がそのゆらぎを大きくした。沖のほうで船が通ったのだろうか。

「私の……いったいどこがいいの」

聡は波に問い掛けるように小さく訊いた。

将は訊かれてしばし沈黙した。何を伝えたらいいのかわからない。

「どこが、なんて。……わかんないよ」

将は聡と同じように、波に答えるように答えてさらに考える。時間だけが流れていく。

足元の岸壁に波がうちよせる水音だけが聞こえる。将は意を決したように答え始めた。

「全部好き。知れば知るほど。毎日好きになる。アキラと毎日逢えるだけで嬉しい。マジで超好きだから……どこなんて言えないよ」

将は少しだけ大きな声でいうと、照れてうつむいた。

聡は同じ質問を博史にしたことを思い出した。あのときもこんな風に二人並んでいたと思う。

『私のどこが好き?』

博史の顔をのぞきこむ聡に、博史は微笑みを返しながら

『そうだね』と考え込むふりをした。

『まずは顔。それから感度抜群のボディ』

エッチ、と聡は博史を殴るふりをする。それをかわしながら

『若くて素直な性格。まずまずの教養。語学堪能なところ。どこに出しても恥かしくない嫁さんになってくれそうなところ』

と続ける博史。あのとき聡は博史に認められたようで、嬉しかった…。

だけど、目のまえの若い男は、全部が好きだという。マジで好きだから、どこなんて言えないといった。

毎日逢えるだけで幸せだともいった。

何かが聡の心のなにかを強く押し流していくのがわかる。

せつない気持ちでいっぱいになって、ただ「ありがとう」とだけつぶやいた。

泣きたいような気持ちになった。

25◆握り合う手2

聡は自分の気持ちに気付かないふりをしている自分を、とうに自覚していた。

以前、聡が大学生のときに、同じサークルの同級生に真剣な思いを告白されたことがある。

それまでは、一緒によく遊び、悩みの相談にも乗ってくれたとてもいい友達だった。

が。彼の告白によってすべては無になってしまった。

聡が「ごめんなさい」と謝ったとき、彼は「友達でいてもいい？」と訊き、聡はうなづいたはずなのだが……。

気がつくと彼のことを避けている自分がいた。

潔癖な聡は異性関係に関して、ＹＥＳかＮＯか、残酷なほどに態度に出てしまうタイプだった。

しかし、将に関しては。ＮＯといいながら、こうして一緒にいる。ときめいてさえいるじゃないか。

――将のことを好きになりかけている。

担任教師であること、年上であること、そして博史のこと。

これらが仮になかったら？

いや、すでに『なければいいのに』という願いさえ一瞬浮かんだ自分を責めるもう一人の聡。

乱れた聡の心が泣きたい気持ちにさせたのだ。

「いこうか」

聡は涙を浮かべる前に、将に微笑んでうながした。

背の高い将の左側を、さっきより近い位置で並んで歩き始める。

と、将の左手の甲が聡の右手の甲に擦り合わせてきた。

そのまま聡の右手を握り締める。

「……！」

聡が将の顔を見上げると、将は一瞬いたずらっぽく笑って、そして右側の夜の東京湾に顔をそらす。

でも握った手は離さない。

手を振り払って『やめてよ！』と怒鳴るべきなのだ。

わかっているけど、聡の声帯は働きをやめてしまったように沈黙している。

9月も下旬、夜の港はひんやりとした涼しさだが、将の手は温かく聡の手を包んでいる。

そこから将の血液が聡の体内に流れてくるような錯覚さえ起こしそうな、触れ合い。

つながれた手を揺らして歩きながら、

『浮気』というものの線引きを聡は考えている。

無理やりのキスを受けるのは？

休日の部屋へあげて二人きりになるのは？

二人で海へとデートするのは？

こうして手をとりあって歩くのは？

……そしてその先は？

遠い異国にいる博史の顔を思い浮かべて判断しようと試みた。

しかし、将の温かい手が聡の思考を支配してしまったように、博史の顔がどうしても思い出せない。

タガが１つはずれた。聡は将の手の温かさに対して素直になることにした。

将の左手の甲が、ふいに少し温かくなった――いままで握られていた聡の右手が、将の左手を握り返したのだ。

将は思わず聡を見た。聡は将と一瞬目をあわせるとまっすぐに前を

見た。

将は胸がいっぱいになった。こんな幸福感を味わったことは、彼の17年間で初めてだった。

走り出したい気分を、左手にこめて、よりギュッと聡の手を握って空を仰いだ。

夜空は地上の明るさに負けて、漆黒になりきれていない。

そんな夜空だが、将の目には満点の星空が見えるようだった。

◇◇

校庭を囲む桜の木は、葉の色を赤く変え、そして今、その葉をすっかり落としてしまっている。

11月のある金曜日の6時間目。聡は女子生徒数人と街に出ていた。

ネイルアーティストの見学と、話を聞くためである。

聡と同じ年ぐらいの、若い女性アーティストによって、一人の女子生徒の爪がみるみる可愛らしい色と柄で満たされていくのに、皆はため息をついた。

◇

聡が金曜日の6時間目の自由学習の時間に企画したのがこの、社会見学である。

英語の授業を画期的に変えた週の金曜日の6時間目、聡はクラスの生徒にアンケートを行ったのだ。それには

『将来なりたい仕事はあるか』

『今、何をしているときが一番楽しいか』

『これから始めたい趣味はあるか』

などの質問があった。

「これから、金曜日の6時間目は社会見学にあてます。このアンケートは見学先を決めるためのもので……」

『なりたい仕事』があれば、もちろんだが、『一番楽しいこと』についてもそれに関連した仕事を調べて、その現場とその仕事にたずさわる人を訪ねるという企画だ。

聡は、アンケートを配り終えると、手を叩いて話を聞くよう求めた。

「じゃあね、今から質問するから、あてられた人は答えてね。じゃあ井口くん」

この前日、井口が万引きで捕まった件を、聡は結局、他の教師に話さなかった。

井口はそんな恩なんか感じていなさそうに、机の上に脚を投げ出している。

が、聡のほうをむいているだけマシだともいえる。

「ライオンは、何を食べますか」

井口は思いがけない質問にアァ？とピアスだらけの眉根を寄せたが、

「肉」

とそっけなく、しかし素直に答えた。

「野生のライオンは、肉をどうやって手に入れる？」と聡は続ける。

「捕まえる？」

井口は自信なさそうに語尾を上げた。

「そう。他の動物を捕まえるよね。……じゃ次、豊川さん」指されたカリナは、神妙に問いを待った。

「鹿は何を食べる？」

「えー鹿ぁ？」とまどったカリナは前の席のチャミと相談している。

横の席の葉山瑞樹は今日は出てきていたが、一心に爪をみていて、この妙な授業を態度で拒否している。

「草？葉っぱ？とか？」

「そう、そうＯＫ。じゃ野生の鹿はどうやってそれを手に入れる？」

「生えてるところまでぇ、探す」今度は単独で答えられた。

「そう。探して歩くわけです」

聡はそこで、一息置くと話を続けた。

「動物は、みんな生きるために餌を食べるよね。みんなだってゴハンを食べるでしょ。

動物だったら、餌をとるために、自分でいろいろな行動をします。これが労働です……」

ライオンは、餌をとる――すなわち狩りをするとき以外はズッと寝ている。

動物は本来、何もしたくない、寝ていたいという本能があるけれど、飼われているのではない動物だったら、自由な立場のかわりに自分で餌をとらなくてはならない。

「人間も動物のうちの1種類なんだけど、人間の場合は、餌じゃなくて、餌を買うお金をもらうわけね。

でもどうせだったら、できるだけラクにもらいたい。そうだよね。そこで」

自分がもともと好きなことに関連する仕事を選べば、多少のつらさは我慢できるだろう。聡は寿司屋の主人の話を思い出していた。

「ただ、みんなが好きだな、と思うこととか、楽だなって思うことって重なりやすいんです。

だから、就職は、スタートが自由な椅子とりゲームのようなものだと思ってください」

椅子へ近寄る瞬発力の差はあるかもしれないが、その椅子へ向かって早く行動したものが座れる可能性が高まる。

聡は、学力で劣る生徒たちに、一足でも早く社会への道を踏み出してもらおうと考えてこの社会見学を考えたのである。

もちろんクラス全員が訪ねたら大変なことになるので、希望が強い数人を聡が引率することにし、

残った者は、自分が好きなものや興味があることに関連する仕事があるかどうか、

またどうやったらなれるのか、またその年収や待遇について、情報処理室や図書室を利用して調べる。

ふだん授業に関しては昼寝ばかりしている生徒も、これに関しては、好きなことをネットで調べられるということで、多少は生き生きとしはじめた。

◇

今回のネイルアーティストの見学に参加したのは、チャミら「お洒落が好き」という女子生徒たちだ。

10月からスタートしたこの企画ですでに「カフェ店主」「声優」を訪ねている。

このために聡はツテを頼ったり、何もないところから連絡先を探したり、とますます忙しくなった。

何せ、謝礼もろくに用意できないのだ。快く引き受けてくれる人は限られている。

訪ねるにしても、できるだけ、今の生徒たちと同じ出発点からスタートした人を探したいと聡はねばった。

やりたい仕事が出来ていても、「親の跡をついだ」とか「コネがあった」とか「金を出してもらった」というのでは意味がない。

だけど、聡はそうやって訪問先を調べているうちに、その3種類に恵まれた人が思ったより多いことを知った。

自分がやっていることは生徒たちにむしろ残酷なことなのかもしれないとも迷った。

だが、今日のネイルアーティストの女性は違った。

高校を出て普通に社会人デビューし、独自にネイルを研究していたという。

そのうち趣味が嵩じて学校にも通ったというが、成功の一番のポイントはファッションビルの改装のニュースを聞いて、

自分で「ネイルのコーナーを持ちたい」と掛け合いにいったことである。

たまたま話を聞いてくれた人が、女性で興味を持ってくれたことを、彼女は「とてもラッキーでした」とさらりと言ったが、自分で売り込みに行ったその勇気は素晴らしいと聡も生徒たちも感動した。

「すごいよねー」

「いいハナシ聞かせてもらったわー」

「あたしも絶対がんばろーっと」

女生徒たちは皆興奮していた。帰りに寄ったカフェ。聡は生徒たちにカフェ・マキアートなどをおごった。

ほぼ毎回おごっているから、少々痛い出費だが、生徒たちの若い素直な感動に立ち会うのは聡としても嬉しいことだ。

今日はガラス窓近くのソファを運よく陣取ることができた。１８時近い今、ガラスごしの通りはすでに暗くなっている。

「先生。あれ……」

『本日のコーヒー』をすする聡を女生徒の一人がつついた。

カフェの自動扉を通って今店内に入ってきたのは将だった。

聡たちには、そしらぬ顔で私服の皮のジャケットに薄いサングラスをかけているが、一目でそれとわかった。

「きっと先生目当てだよね」チャミがくすっと笑う。

「でもこうやって私服だとまたすっごいイケメンだよね」

「邪魔しちゃアレだから、いこ」生徒たちは次々に立ち上がった。

「ちょっと、みんな……」

「じゃあね先生、さようなら」皆ミニスカートの制服をひるがえして店を出て行った。

すると、将はさもわざとらしく、今気付いたような顔をしてソファに残された聡のほうへ寄ってきた。

カフェモカを片手にソファの聡の横に座る。

26◆1～25話あらすじ◆

＜これまでのあらすじ1～25話＞
つらい過去を持つ17歳の鷹枝将（たかえだしょう）は「山田」の偽名入りの偽造免許証でローバーミニを乗り回し、毎日のように学校をさぼって夕陽を眺めに、海までドライブしていた。

彼は通っていた弁当屋のバイト古城聡（こじょうあきら）に淡い思いを抱いていた。（1話）

9月。彼女は将が通う学校とも知らず荒江高校の臨時教師となる。

しかし荒れる生徒達を制御できず、男子生徒らに集団暴行されそうになる。

それを危ないところで助けたのが将で、そこで二人は再会する。

しかし、将が高校生でかつ学校一の問題児だったと知り、動転した聡は彼を殴ってしまう。（2話～6話）

聡はこんな怖い学校はすぐさま辞表を出して、

中東に赴任中の婚約者・原田博史（はらだひろし）のところへ行こうと思うが、

その夜おこった博史の赴任先でのテロ事件のせいで、辞表を書き損ねる。（7話～8話）

翌日、聡が将を殴ったことを抗議にきた将の義母への体面で学校は、聡に将への補習を担当することを命じる。（９～１０話）

放課後に聡と二人になれて嬉しい将はまじめに学校に来るようになる。

休日に聡の家にまで押しかけて、テストの成績がよかったら、ごほうびにデートすることを聡に約束させる。（１０～１１話）

猛勉強した将。成績は惜しいところだったが結局、聡は将と海へドライブする。

そこで聡は将の実母が、将が小１のときに病気で亡くなったことを聞く（１２～１３話）

二人、海で暗くなるまで遊んだ帰りに、将のなじみの高級フランス料理店で食事をする。

そこで将はいきおいで聡に思いを告白してしまう。二人がとまどっ

ているちょうどそのとき、

偶然、彼の父で現・官房長官の鷹枝康三（たかえだこうぞう）がレストランに現れる（１４～１６話）

実の父から冷たく無視される将。大酒を飲んで酔った状態で運転しようとする将を心配する聡に、

将は「俺は何をしても許されるんだ」と暴言を吐いて、無理やりキスをしてまた殴られる（１６話）

将がそんなことを言うのにはわけがあった。

実は将は１５歳のとき、親友をかばうためにヤクザを刺し殺してしまったことがあるのだが、

それを父は親友がやったものとして隠蔽していた（まだ聡はそのことを知らない）。

その夜、将はセフレで同棲状態だった、クラスメートの葉山瑞樹（はやまみずき）を

一人暮らしの部屋から追い出してしまう。（１７話）

翌日、将は聡に電話をかけて、デートの夜の行いを詫び「俺を見捨

てるな」と懇願する。

聡は孤独な将にだんだん惹かれていく。（１８話）

いっぽう、学校で生徒らに「今やってる勉強って役にたつの」と問われ悩む聡は、

編集者の友達に寿司屋で相談する。友達や寿司屋の主人の助言を参考に、

授業内容を変えたり、進路に関して社会見学を試みるなど新しい試みをはじめる。（１８～２５話）

一方、聡を乱暴しようとして将に顎をくだかれ、

弱いクラスメートからカツアゲしようとしたところをまたも将に邪魔されたその上、

失禁するほど脅かされたクラスメートの前原茂樹（まえはらしげき）は将をとてもうらんでいる（２２～２３話）

万引きして警察に捕まった井口を聡は迎えに行く。二人を車で迎えに来た将は、

帰りに湾岸で散歩しているときに聡の手を握る。聡はそれを拒まなかった。（２４～２５話）

そして１１月になった。ネイルアーティストを社会見学した帰り、カフェにいる聡のとなりに、わざとらしく将が偶然をよそおって座った。（２５話）

27◆教師と生徒の恋1

当然のように1つのソファの中の聡の隣に座った将。聡は少し腰をずらした。

あまりに将が接近して座ったので、少し距離を置くためだ。

それでも同じソファの中、将の体温というか香りというかオーラが聡に迫ってくる。

「ネイルどうだった？」

将は自分が発しているさまざまなものに気付いていないのかまったく悪びれる様子もない。

「……よかったよ。すっごくいいヒトだったよ」

聡は答えながらも、やはりときめきを抑えられない。

毎日教卓の上と下で顔をあわせているのに。

こうやって制服を脱いだ将は、教師と生徒という制約を少しだけはずしたような感じで、だからこそよけいに聡は我慢をするのが苦しい。

二人が教師と生徒になってもう2ヶ月以上になる。

将と親しい井口や、一部の女子生徒は二人の接近に気付いているものの、表面上は、それ以上には、なっていない。

『やましいこと』は何1つない。外見上は。

が、聡は日に日に増殖していく自分の心をもてあましていた。いまは辛くも理性で押さえているけれど……。

◇

聡は、高校時代の同級生の女子生徒を思い出していた。

若い男性国語教師に恋をし、アタックを繰り返したあの子。

同学年の彼氏と付き合っていた聡はあんなオジサンのどこがいいのか、とからかったりもした。

が、そのたびに彼女は

「ふん。あんたたちに○○先生のよさがわかるわけないし。あたし絶対○○と結婚するんだもん」

と夕陽にむかって瞳をキラキラ輝かせた。

なんと彼女は卒業とともに、その国語教師と結婚したのである。

そして、聡が大学生になった夏休みにもっと仰天する告白を聞くことになる。

「実はさ。私、高3のときから、○○と何度もシてたんだよ」

18歳で人妻となった彼女は大きなお腹をさすりながら、隠す必要

もなくなった秘密を暴露した。

――そりゃそうだ。そうでなければ夏休みにもう8ヶ月なんてね。

しかし、あのときその告白を聞いた聡はとても嫌な気分になった。

なんといっても同じ国語教師に習っていたのである。

冗談1つ言わず、真面目な顔で受験指導をしていたあの教師が陰で友達と寝ていた。何度も、子供ができるほどに。

同級生とさんざん同じようなことをしているにもかかわらず、聡はその教師のことをとても不潔だと思った……。

しかし。男性教師と女子生徒だったら、まあよくあるケースと言えるだろう。

20代後半の男性と17~8の女子生徒なら年まわりもちょうどいいと言えなくもない。

ドラマとか漫画とかでも見かける設定だ。

だけど、女性教師と男子生徒の場合は。不潔感はその比ではない。

その非は、男子生徒のほうではなく、主に年上の女教師のほうに問われるのは間違いない。

「年上のくせに」

「教え子に欲情して」

「教師失格」
「けがらわしい」

聡は自分への責めの言葉を容易に想像できた。

しかし、そんなことはむしろ小さなことのように思える。

将の思いを受け入れたい聡を阻害するもの。その1つが将の未来、可能性だった。

あのアンケートに将はこんな風に答えていた。

『将来なりたい仕事はあるか』

アキラの彼氏。

『今、何をしているときが一番楽しいか』

アキラと二人きりでいるとき。

『これから始めたい趣味はあるか』

アキラが喜ぶことぜんぶ。

職員室でこのアンケートを読み返したとき、聡は喉につきあげてくるほど胸がいっぱいになると同時に、

そこまで将の心を独占している自分が怖くなった。

激しい気性を持つ将は、いつか自分のために未来までゴミ箱につっこむのではないか。

それが怖かった。

◇

「アキラ、アキラってば」

将に呼ばれるまで聡はぼーっとしていたらしい。

「ん……？」

聡はあわててマグカップを唇にあてた。

半分ほど残った、『本日のコーヒー』はすっかり冷めて苦いばかりになってしまっていた。

「何、っボーっとしてんだよ」

将は薄いサングラスをはずした優しい目で聡を見た。

この2ヶ月の間で、ますます男っぽくなった、と成長期にある彼を思う。

長い首の途中で節のように喉仏が飛び出している。

教卓から、制服姿の彼を見下ろしている限りは見えない喉仏。

だけどこうやって同じ目線で座るとそれは聡の内部に火をつける…

…そうなると聡はもうダメだ。

将がどんな風に自分を抱くのか、そんな妄想から逃げるためには聡はそっぽを向くしかない。

今回は視線をかろうじて冷めたマグの中に落とした。

「ん。少し考え事してた」

「もー。聞けよ。アキラ、来週の金曜日誕生日だろ」

「そうだけど、なんで、知ってるの？」

「教員ファイルを見た」

隙をみて職員室に忍び込んで、パスワードをＧＥＴしたという。あいかわらず頭脳犯は健在だ。

「２６歳になるんだよな」

「うん」

この年になると、あんまりおめでたくない。それに……。

「９歳違い、かー。でもあと５ヶ月で今度は俺が１８になるよ」

４月生まれ、牡羊座生まれの将。星占いにはいかにもそれらしい性

格が示されている。

将は『18になったら結婚だってできる』と言おうとしたが、聡の言葉がそれを遮った。

「うん。でも将と比べたら、オバサンだよ」

「そんなことない。……アキラ、今、俺のこと、何て呼んだ?」

将はいかにも嬉しそうに訊き返した。

――しまった。つい。名前で呼んでしまった。

もう、心の中ではずっと前から名前で呼んでいるから……。

「ちょ、ちょっと間違えたのよ。鷹枝くん」

聡はあわてて言い直したがもう遅い。

「いいってば! ショウで。他に誰もいないし」

「だめよ。癖になっちゃうもん」

聡は薄くコーヒーが残るマグを低いテーブルに置いた。

「いいーってば!」

「ダメよ! キャ」

将はカフェのソファのうえで、隣の聡を急に抱きよせた。聡の頭を

ぎゅうっと自分の胸板に押し付ける。

「ちょっと、ダメよ。人が見てるし、ちょっと」

聡は皮の匂いと干草のような香ばしい匂いが混ざった将の腕の中でもがいた。

皮のジャケットの下は、どうやらTシャツ1枚らしい。

聡が押し付けている頬の、木綿1枚の下は将の素肌だ。

熱い将の血潮が肌をつたわって急激に脳天にまわったようで聡はクラクラした。

「ショウってもう1回呼べよ。呼ぶまで離さない～っと」

将は細くて華奢な聡の肩を抱きながら楽しげに言った。

さっきのんだカフェモカより甘く感じる聡の香りが将をさらにハイにふるまわせる。

聡は飴色のブーツを履いた足をバタバタさせた。

「もうやめてよ！……ショウ、ってば」

将はパッと聡の肩をつかんで元の位置に戻してあげた。

髪がぐしゃぐしゃに乱れ、頬を桃のように染めて可愛らしいその姿は9歳近く年上とは思えなかった。

お洒落関係の仕事の訪問だから、普段学校で見る服より少しお洒落をしてきている。

スカートだし、髪も下ろしてきているのだ。

将は笑いながら、乱れた聡の髪をなでつけるのを片手で手伝ってあげた。そして提案。

「来週さ。アキラの誕生パーティしようよ。俺と二人で」

「そんなの、まだわからないわ」

聡はまだ怒ったふりをしてツンと横を向く。実はまだ心臓がバクバク言っている。

将は「どうせ博史はこれないんだろ」と付け加えた。

聡は向き直ると「わかんないわよ。急に飛んでくるかもしれないし」と答える。

本当のことをいうと博史の名前なんか出して欲しくなかった。

聡はほとんど残っていないマグをとると、残った液体を、上をむくようにして流し込んだ。

将は、そんな聡をみながら、来週は二人でもっと幸せな時間を共有できることを信じて疑わなかった。

そのとき、カフェの外、ガラスの向こうの夜の街から、ソファの上のそんな二人を見ている男がいたことに、二人はまるで気付いていなかった。

28◆教師と生徒の恋2

――――へー、そういうこと、なんだ。

男は心でつぶやくと、人ごみの中に消えていった。

◇

「アキラ、メシ行こうよ」将の誘いを

「ダメよ。そんなに毎週外食なんて」と聡ははねつけた。

実は、聡の経済状況はかなり厳しいのだ。

なぜなら、弁当屋のバイトから急に教師になったことで、「キチンとした服」を買うのにまとまったお金が掛かった。

それから、毎日忙しいことからつい、自炊を怠ってしまい、食費もかさんだ。

かつ、疲れが累積した木曜日の朝が雨だったりすると、どうしても混んだ通勤のバスに乗ることが出来ず、タクシーを使ってしまう。

そこへ毎週、生徒へのお茶代。

毎月1万ずつこつこつと貯めてきた貯金もここ2ヶ月滞っている。

9月以来、気がつくと毎週1回は将と外食している。

将は払いたがったが、聡は示しがつかなくなる、とたいていワリカンにした。

「おごるのにぃ」将はいかにも残念そうだ。

「夕食何すんの。作るの？」

「そうねえ」

そうはいってももう、１９時近い。今から帰っても２０時近くになる。とてもじゃないけど週末疲れで、それから作る気になどなれない。

「……お弁当屋さんで買うわ」

「じゃ、俺もそうしよーっと。そうするから、乗ってけよ。な？」

お金のない聡は、将の申し出に従うことにした。

「アキラ、何かほしいものとかあるの？」

ローバーミニの中は相変わらず狭い。でも今の聡にとってはその狭ささえ嬉しく感じるようになっている。

「え？何で？」

「だってサ……」誕生日でしょ。将は言葉を飲み込んだ。できればびっくりさせてあげたかった。

「そうねえ……」将がほしい。

ゴホッ、ゴホッ。とっさに浮かんだセリフに、聡は一人でむせた。

「大丈夫？」

ドアのほうにうつむいて咳き込む聡を将がのぞきこむ。

――何だ、今のは！

自分で自分が信じられない聡の背中を、追い討ちをかけるように将がさすった。信号が赤になったらしい。

「風邪流行ってるから。気をつけて」

後ろめたい聡はうなづくだけでせいいっぱいだった。

◇

弁当屋の女将さんは入ってきた聡と将を見つけるやいなや

「あら～アキラちゃんと、山田さん！」

と親しげに声をかけた。

将は「どーも」と顔をぺこっと下げ、聡は会釈した。

「あたし、野菜弁当」

「俺、揚げ弁」

「仲いいねえ。あんたら美男美女で本当にお似合いだよ」

と女将さんはにこにこしながら奥に行った。

揚げ油の前では、一瞬ご主人が晴れやかに聡を見たが、隣に将を見つけたとたん、ムスッとした顔で油に視線を戻した。

弁当屋では将はいまだに山田なのである。

それは、先日、初めて二人で弁当屋に来たとき

「あらあら。二人で……あんたたちいつのまにそういう仲に」

と女将さんは目を丸くした。誤解を解こうと聡が、

「いいえ、あの教え子な……」

と言いかけたところで将はカウンターから見えない部分にある聡の足を軽く蹴って

「教え子の兄です」と笑顔と共に付け加えた。

女将さんは「じゃあ弟さんが荒江高校に？」と訊いた。

将は「ハイ。出来の悪い弟で……」とさらにごまかす。

女将さんが「兄さんに似ればよかったのにねえ」と笑いながら奥に消えたとき聡は

「なにすんのよ、痛いじゃない」

と抗議した。将は人差し指を口にあてながら

「だって俺、前に『東大生山田』で聡の住所聞いてるんだぜ。マズイよ」

と声を出さずに言い訳した。

他の客が途切れたからか、出来た弁当と一緒に、主人が出てきた。

眉毛の中の白いものは、また少し増えたようだ。

「聡、学校はその後どうだ」

「ハイ。なんとか」

主人は、将のほうに目をやった。長身の将は主人から見ると見上げる形になる。

「ま、こんな男にうつつをぬかしているようなら、仕事のほうは問題ないようだな」

「いえ……」

聡は何もいえずに固まった。でも頬だけは赤く染まっていた。

「あら、山田さんはいい男じゃないですか。ちょっとこんなコいませんよ」

と奥さんが横槍を入れる。

「オイ、山田、聡を泣かすようなことすんじゃねえぞ」

と主人が将にむかって言った。

将は素直に「ハイ」と返事をした。

聡はなぜか切なくて、胸がギュッとした。

それは弁当屋の主人の愛情が沁みたのか、将の素直な返事が響いたのか。

「フン。とっとといっちまえ」

主人はお弁当代の端数を聡の掌に返した。

◇

「弁当屋のオッサン、こないだも、同じ事言ってたね」

弁当を受け取り、再びハンドルを握った将はつぶやいた。

「聡を泣かすようなことすんじゃねえぞ、って。……アキラ、泣いてるの」

「……ううん」

といいつつ、聡はもうなんども目から溢れる涙を手の甲でぬぐっていた。

「きったないなあ。手鼻かむなよ～」

将は後部座席からティッシュを取って聡に手渡した。

「そんだこと、してだいぼん」

といいつつ、聡はティッシュをうけとると、ヂーン、と鼻を派手にかんだ。

「……ったく。オッサンこそ、アキラを泣かしてるじゃん」

とつぶやきながら、運転中、助手席の聡を何度も振り返った。

あんな風に、あれ以上に聡に優しくありたい。

将はハンドルを握ったままフロントガラス越しの夜空を仰いだ。

都会の空の上ではカシオペアが弱弱しく光っていた。

「いつぼ、どうぼありがとう」

家につくまえに、なんとか泣き止んだ聡だが、まだ鼻をぐしゅぐしゅさせていた。

「いいえ。じゃ、またな」

本当は将は、聡の家にあがりこんで、一緒に夕食を食べようと思っていたのだが、泣いた聡に、ついそれを言いそびれてしまった。

仕方なく、一人で家へと車を走らせる。

と、ガラの悪そうな少年2人が路地に入るところをローバーミニのヘッドライトが照らした。

眉を剃った金髪に、だらっとしたトレーナーに腰パンを将は見た。

それは別にいいが、肩を押されていた黒髪の少女は……。

将は、車を急いで道のわきに停めると、路地に駆け戻った。

雑居ビルの非常階段の分の幅しかない路地は、空き瓶用のプラケースやごみバケツで雑然としている。

非常階段の下の暗がりで、瑞樹は今、少年に押されてよろけて倒れたところだった。

「瑞樹！」

将は、一人の少年に体当たりを食らわせて倒すと、すかさず向き直りもう1人のみぞおちを蹴った。

少年らはケンカ技量の差を知るとあっさり引き下がった。たぶん中学生なのだろう。

半身を起こした瑞樹は、ほうけたような顔をしている。そういえば

ここ2〜3日、また学校を休んでいた。

制服が薄汚れている。

「大丈夫か」

「将……」

瑞樹は将にすがりついた。

◇

洗濯乾燥機が回り、瑞樹はシャワーを浴びていた……将のマンションである。

将は、ソファに寝転がり、テレビを見ながら、心配そうにバスルームのほうを振り返った。

テレビの内容など頭に入ってきやしなかった。

さっき、すがりついてきた瑞樹を受け止めてきたとき、キツい男性の体臭のような臭いがした。

将のマンションを追い出された瑞樹は、学校を休みがちになっていた。

前に、家に帰れない事情を聞いていた将だけに、少し心配をしていたが、その心配は的中しているかもしれない。

タオルを頭に巻きつけて、バスローブを借りて出てきた瑞樹を見て、

将はソファから起き上がった。

ウーロン茶を手渡しながら「大丈夫？」ともう1回訊いた。

「……うん」とうなづく瑞樹。こんな風に眼力の失せた瑞樹を将は初めてみた。

「半分食べる？」将は買ってきた弁当を見せた。

「ううん、いい」

「そう……」

将はそう言われるとなぜか、自分も食べるべきじゃない気がして、ソファに腰を下ろした。

お腹はひどくすいているのだが。

瑞樹は静かに将の隣に腰を下ろした。

将は、ぎくりとして反射的に立ち上がった。

「……制服、乾くまでゆっくりしてていいから」

可哀想だと思いながら、釘をさす自分を将は残酷だと自覚していた。

「……将」

将を見上げる瑞樹はあきらかに痩せた。バスローブの襟元の鎖骨が前よりくっきりと浮き出ている。

「もう一度、やり直せない？」瑞樹が再びすがりついた。

29◆教師と生徒の恋3

聡は将のローバーミニが遠ざかっていくのを見送ったあと、習慣的に見た郵便受けの中に、

ダイレクトメールに混じって、厚みがある郵便物を聡は見つけた。

取り出したそれは、水銀灯の光の中で『国際郵便』とあった。差出人は原田博史だった。

聡は地面が揺れるようなショックを感じた。

英語のスタンプが押された茶色の包装紙に包まれたそれは、郵便受けに入るぎりぎりの厚みで、

配達員が無理やり押し込んだらしく、すこし擦れていた。

急いで階段をかけあがり、部屋へあがるなり包みを開けてみる。

すると箱の中に、花束の写真のカードとさらに小さな箱が入っていた。

聡へ

誕生日おめでとう。

少し早いけど、僕の気持ちです。
本当は手渡したかったけれど、善は急げということで。
いちおう、給料3ヶ月分です（↑古い？）
気に入ってくれるかなあ……。
僕は似合うと思うんだけど。

PS.
クリスマスには日本に帰れそうです。
そのときに重要な話があります。
聡にぜひ協力してほしいんだ。

博史

小さな箱をあけると、紺のびろうどに覆われたリングケースが入っていた。
それをあけると、シルクの中に埋め込まれたダイヤモンド。石はキラリと光って聡を見つめた。
小さな石は、蛍光灯の安っぽい光をも鋭く反射させ、聡の揺れる心を射抜いてカラッポにした。

聡はしばし、美しいダイヤのエンゲージリングを箱に入ったまま見入った。

あまりに豪華なので、指にはめていいか迷ったのだが、意を決して、取り上げる。

いつ測ったのか、プラチナのリングは聡の薬指のサイズにピッタリだった。

小さな石1つで、豪華に彩られた自分の指を眺めながら、聡はだんだん息が苦しくなってきた。

薬指に重みを感じて、そっとそれをはずした。

元通りにおさめて、ローテーブルの上に置く。

給料3ヶ月分のダイヤをあしらったエンゲージリング。それをもらって喜ばない婚約者はいないだろう。

ダイヤは、確かに聡の気持ちを無にするほど美しかった。

しかしそれ以上に、ダイヤに託された「エンゲージ＝約束」の重みが聡にのしかかってきていた。

それに聡が協力しなくてはならない、重要な話とは何だろう。

最近、博史は仕事で忙しいのか、メールも疎遠になっている。

わざわざ婚約指輪に添えたカードに書いた重要なこと、とは結婚が

らみのことだろうか。

聡はローテーブルの上に頬杖をついて、もう一度ダイヤを眺めた。

――どうしよう。

ダイヤは無垢な光をキラキラと聡の瞳に返した。

ダイヤよりきらめくものに惹かれている聡。引き返せる自信はなく、聡は途方にくれるしかなかった。

◇

「もう一度、やり直せない？」

すがりついた瑞樹に将は沈黙した。

「なんでもするから、ここに置いて。お願い」

瑞樹は将の胸に顔をうずめた。将はしばらくそのまま瑞樹を受け止めていた。

が、しばらくしてそっと瑞樹の肩に手を置くと、自分の胸から引き離した。

「ごめん。無理なんだ」

「どうして……？あたしたち、ずっとうまくやってたじゃない」

瑞樹は将の顔に両手を伸ばして包み込むと、自分の顔に近づけようとした。

将はその手を振り払うと、

「俺たちは、もう何もないよ」とそっぽを向いた。

何もない、と言われた瑞樹は、カッとなって

「さんざんヤッたくせに！」と叫んだ。

しかし、将は無言のままだ。

瑞樹は、横を向いたまま何もいわない将の正面にまわると、

「お願い。将が嫌なところはなおすから……。ここに置いて」

と、再びひざまづいて将にすがりついて泣いた。

将は石のように動かなかった。そのとき洗濯乾燥機の終了音が張り詰めた空気に穴をあけた。

「……ごめん。ダメなんだ」

「それって、あのキョーシのことが好きだから？」

瑞樹は涙をためた大きな瞳で将を見上げた。

うるんでいるものの、黒目をふちどる白目は恨みに燃えていて、将は少し怖くなった。

「関係ねえよ」

とだけ答えて、「制服、できたらしいよ」とバスルームを顎でしゃくった。

瑞樹は不服そうに、バスルームへ戻る。しばらくドライヤーの音が聞こえていたが、着替えて戻ってきた。

制服姿の瑞樹を見ると、「送っていくよ」と立ち上がった。

瑞樹はだまってうなだれた。

ローバーミニの中で二人は無言だった。

将は本当は、家に帰っても大丈夫なのか、訊きたかった。

しかし、あれほど将の家にいたがった瑞樹を見ればそれは一目瞭然だろう。

それを拒んだ自分。

だけど、将の胸の中には聡が住んでいる。

いくら可哀想といっても瑞樹を部屋に置くわけにはいかなかった。

「……誰か友達んちにでも送っていこうか」

将はそれだけ訊いた。が瑞樹は首をふった。

「最近、なんとかうまくやってるから……大丈夫」

そういったわりには、

「○○駅でいい」

と降りたのは瑞樹の家から、まだ5駅も離れた駅だった。

「ここでいいの？」

瑞樹はうなづいた。

「……ありがとう。じゃね」

それだけ言ってミニを降りるとドアを閉めた。

将は交通量の多い駅前だけに運転席を離れるわけにいかなかったが、瑞樹の青白くなった頬に、まっすぐな黒髪がかかるのを見ると、急に罪悪感に捕われた。

「……ごめん」

将は窓の向こうにたたずむ瑞樹にせめての謝罪をする。

瑞樹は何もいわなかった。ただ、今日助けたときのような呆けた顔をしていた。

将は少し心にひっかかりを残して、車を発進させた。

瑞樹はしばらく歩道に立ち尽くしていた。

今夜から冷え込みが厳しくなるらしい。吹いてきた木枯らしにふるえが来た。

黒髪をなびかせて駅へあがると、瑞樹は家とは反対方向のきっぷを買った。

そして携帯をかける。

30◆急接近1

「来週は、大学受験者を対象にした全国模試があります。それから……」

「ぶへっくしょん！」

将の派手なくしゃみのおかげで、帰りのＨＲでの聡の言葉が中断された。

将は、ずずーっと鼻水をすすると「ごめん」と聡やまわりの生徒らにぺこりと頭を下げた。

「ええと、それからその次の週には期末試験がありますので、そろそろ苦手なところは対策するように……」

「ぶしゅん！」

2回目のくしゃみは横にむかって吹いた。丸刈りの兵藤が嫌な顔をする。

「鷹枝くん、風邪？」聡は教卓のまん前の将への言葉をはさんだ。

将は「ハイ」とうなづいた。

「急に冷え込んだので、風邪には注意してください。みんな、うがいを欠かさずにね。

それと明日の社会見学はゲーム会社の人、だけど行くのは○○くん

……の６人ね。

聞きたいことがあったらちゃんと整理してきてください。以上」

木曜日になっていた。帰りのＨＲが終わり、帰る生徒は制服の上にダウンやコートを羽織った。

今週初めから、さらに急激に気温が下がった。

それまで２０度近くあった最高気温が、雨を境に急激に１５度までいかなくなったのだ。

こういうことは１１月中旬にはよくあることだ。

補習の前にいったん職員室に戻ろうとした聡は、将のようすが少し気になったので教卓を降りて机のわきに立つ。

「何、センセイ」

将はいつもはアキラと呼びすてのくせに、学校ではセンセイと、器用に呼び名を使い分けている。

「鷹枝くん、大丈夫？　今日は補習やめて帰りなさい？」

「そうだよ。鷹枝くん、顔赤いよ」

丸刈りの兵藤も同意する。さっきからクシャミのシャワーをさんざん浴びているのだ。

「大丈夫だよ！来週試験なんだろ」

と将は元気に言ったが、試験なんて本当はどうでもいい。今日は聡と一緒に帰りたいのだ。

明日は聡の誕生日だ。逢う約束をしておきたい。

メールを送ってもいいのだが、直接逢って話がしたい。

将はあきらかに風邪を引いていた。しかもかなり性質が悪い。頭がフラフラするのはたぶん高い熱があるんだろう。家に体温計がない将でもそれは分かる。

いくら着こんでも寒く、体の節々が痛い。そして喉の激しい痛み。実のところ、将は学校に来るだけでせいいっぱいだったのだ。

瑞樹のことで、罪悪感で心にモヤモヤしたものを抱えていた将は、火曜日の夜、井口らに誘われるままに「オヤジガリガリ」に酒を飲んで参加した。

弱そうなチンピラはパンチでモヤモヤを発散させるのにうってつけだったが、

その最中にあられ交じりの大雨がざっと襲ってきたのだ。

皆クモの子を散らすように退散したが、イライラしていた将はそのうちのリーダー格を執拗に攻撃しつづけた。

……気がつくと全身びしょぬれの自分が一人でつったっていた。

あられがビチビチと痛いほど体を打ち付けている。酒が冷めてきたのか、体の芯からゾクゾクとしてきた。

翌日からさっそく喉が痛くなり、あとはすべて今日の将に続く現実である。

と、聡が将の額に手をかざした。教室の後ろでたむろしていた、女子生徒がそれを見て小さく「キャー」「やっぱりぃ？」と顔を見合わせた。

今の将には聡の手はひんやりとすべらかな救いのように思えた。

「すごい熱」聡は絶句した。ゆたんぽに直接ふれたかと思うかのような熱さ。

「大丈夫だってば」

「大丈夫じゃないわよ。保健室にいきなさい……あとで病院に付き添ってあげるから。

兵藤くん、鷹枝くんを保健室に連れて行ってあげて」

将は、あとで付き添ってもらえる、という言葉ゆえに素直に従った。

ちなみに葉山瑞樹は今週はずっと欠席していた。

◇

補習が終わるとすっかり暗くなっていた。このところ暗くなるのが本当に早くなった。

聡が帰り支度を整えた姿で保健室へ入ると、荒江高校で数少ない女性職員の1人、年配の保健教師・三田先生が椅子から立ち上がった。

「あ、古城先生。寝てますよ、鷹枝くん」

「すいません、遅くまで付き添って頂いて」

聡は頭を下げた。

「いいのよ。まだ部活の生徒なんかも来るから……。おうちに連絡しなくていいのかしら」

「いろいろと事情があるみたいですので……。とりあえず病院に連れて行ってそれから私のほうで対応しておきます」

将をおこさないように静かに言うと、聡は眠っている将に近づいた。

「いちおう総合感冒薬を飲ませておいたから、熱は下がってると思うわ」

「何度ありました？」

「39度いってたのよ」三田は顔をしかめた。

将は、赤い顔をして寝ていた。鼻がつまっているのか口を軽く開けている。風邪薬のせいか、汗が額に浮かんでいる。

聡は将の額の汗をタオルでそっと押さえるようにぬぐった。将が目をあけた。

「……アキラ」熱で目が少し充血している。

「起きた？今から病院にいきましょ」

将はうなづくと、体を起こそうとした。それを聡が抱きかかえるように手伝う。

「センセイにそんなに優しくしてもらうなんて、風邪っぴきも悪くないな」

と将は鼻をシュンとすすりながら言った。息が荒い。

「バカいいなさんな……。じゃ、三田先生、失礼いたします」

「お大事に」

校門の前には呼んでおいたタクシーが待っていた。

将を抱えるように乗り込んで「××病院へお願いします」と運転手に行き先を伝えると、聡はシートに体重を預けた。

室内灯が消えた車内は住宅街の間は、冷たい暗さになった。

その聡の肩に将が頭を預けてくる。息が荒く、苦しそうだ。

「大丈夫？」

「ぜんぜん、大丈夫。……なんでもねえよ」将は目を閉じたまま答えた。

「熱、３９度だって」

「すぐ下がるよ……。だって明日、アキラの誕生日だろ。俺、いろいろ準備してるんだぜ」

「それどころじゃ……ないでしょ」

「アキラ」

将は手を伸ばすと、軽く腕を組んでいる聡の腕に触れた。

聡はドキドキしながらも将にされるがままになっていた。将は聡の手をとると握り締めた。

「アキラの手、冷たくて気持ちいー……ねえ、絶対明日までに風邪なおすから、約束してよ」

聡の側から見れば、将の手は熱すぎた。長い指を持つ大きな手が、熱で乾いている。

「ねえ」

「……」

カーラジオが、明日、いっそう強い寒気団が来ることを伝えている。平年より早い初雪になるかもしれない、とも。

「雪かあ……」

将は聡の手を握ったりさすったりしている。

ダイヤのエンゲージリングがすでに定められているとも知らず、聡の薬指をも将は柔らかく握り締める。

結婚を約束して3年以上にもなる博史を指輪ごと捨てることなどは考えられない。

そうかといって聡の心に深く入り込んでいる将を置き去りにするのは、今の聡には爪をはぐような痛みを想像させた。

――時が止まってほしい。

聡は将の手をいつのまにか握り締めていた。将もその手をさらに固く握る。

後部シートでお互いに寄り添う二人の顔を、対向車のライトだけが定期的に照らす。

早くもクリスマスの装いを始めた街の上に、墨色ににごった夜空が寒そうにのしかかっていた。

「復活！」点滴が終わった将は、元気そうに台から降りた。

インフルエンザではなく、単なる風邪だったようで、注射と点滴を打ったせいかだいぶ調子がよくなったようだ。

「本当に大丈夫なの？」

「大丈夫、大丈夫」

抗生物質と、感冒薬と、喉の炎症を取る薬などを受け取ると、病院の玄関のところで将は

「栄養があるもの食べにいこうよ」と聡を誘った。

「ダメよ。すぐに帰って温かくしなくちゃ。……それに、明日があるんでしょ」

将は立ち止まった。聡は少し頬を染めているけど将をまっすぐ見ている。

「明日？いいの？」

「誕生日祝ってくれるんでしょ」今度は照れて少し視線をそらす。

将は、目を輝かせると、走り出すと、玄関のところにある階段１０段ほどをジャンプして一気に飛び降りた。

「ヤッター！」

「あ、コラ！だから静かにしないと」

将は再び階段を駆け上がると、聡をきつく抱きしめた。聡はコートごと少しいつもより汗臭い将の香りに包まれた。

病院に出入りする人が、まじまじと見る。将はそんなことおかまいなしだ。

「コラ…、風邪うつす気？」

将は聡を抱いたまま唇を尖らせて顔を近づけていた。

聡は１０センチの超至近距離で、将の眼を見つめてストップをかけた。

「心配すんなよ」将は目を細めて聡のおでこにチュッとキスをした。

「もうっ」

聡の無意識は『今』を味わいつくすことに、決めていた。

エンゲージリングは確実に聡を追い詰めていたけれど、それに対する反動なのかもしれない。

31◆急接近2

聡は将の部屋の台所に立っていた。

喉の痛い将には、口当たりが柔らかくて、かつ温かく、栄養がある食べ物が必要だったが、そういうものに限って売っていない。

実家に帰るのは将が断固拒否したので、聡は『仕方がなく』将の夕食の面倒まで見てやることになってしまったのだ。

家には材料がなんにもない、というのでスーパーで急遽米や野菜を買いそろえる。

「なんか、新婚さんみたい？俺ら」

カートを押す聡の横で将が囁く。

「バカね。制服姿の新婚さんがいるわけないでしょ」

と聡はクールに野菜を選ぶふり。

「嫌いな野菜とかあるんだっけ？」

「ないない。アキラがつくるもんは何でも食う」

「なんか……全然元気みたいじゃん」

聡のつっこみに、

「あ、急に熱上がってきた」

と将は急にふらふらとするリアクション。

「先に帰っててていいよ」と聡が鼻をすすりながらついてくる将を気遣う。

「先に帰ったらどうやってうちに来るんだよ」

「あ、そっか」

ままごとのような買い物ーーー博史とはこういう時間を過ごしたことがない。聡はそっけなくふるまいながらもほのぼのとした幸せに浸った。

「すっごいマンションね」

弁当屋の近くの庶民的な町の中にある、不似合いなスタイリッシュなマンション、ここに将が一人で住んでいるという。

１０Ｆの将の部屋までエレベーターの狭い箱の中で二人きりになったが、

将はさっきはしゃぎすぎて疲れてしまったのか黙って壁にもたれている。

きっと防犯カメラに映った二人はそっけない関係に見えるに違いない。

でも将の顔はにやついて聡を見つめていた。

「なによ」

「いや、嬉しいな、と思って」

「オカユつくるだけだからね。……変なことしないでよ」

「変なことって何だよ」と笑いをふくんだ将の声。

「……知らない」

チン、と１０Ｆへの到着を告げる音。

「すっごい部屋ね。本当に１人で住んでるの」

元々３ＬＤＫの将の部屋は、４人家族でも住めそうなものだった。

１間をつぶして、広くしたリビングはフローリング。埋め込みの間接照明、天井はスポット光とつくりも凝っている。

そこにはすわり心地のよさそうなソファーとコンポ類、大型液晶テレビだけが置いてある。

それ以外は家具がないのでよけいに広く感じる。

案外片付いている理由を訊くと、週１でヘルパーが掃除に来るんだそうだ。

「家の人は来るの？」

聡は使ってないせいで異様にきれいなカウンターキッチンにスーパーのビニール袋を置きながら訊いた。

「めったに来ない、つか来ない。最初にオヤジが来ただけ」

将は大型冷蔵庫からウーロン茶を出した。

「あ、それとも温かいのがいい？」

「いいから。あたしがやるから、着替えて早く寝なさい」

「ハーイ」

といいつつ将はソファでだらだらしていた。毛布だけはかぶっていたけれど。

本当は、キッチンで働く聡を、ただ見ていたかったのだ。

――だって本当に、新婚さんみたいじゃん？

バレッタで髪をまとめた聡は、いかにも新妻っぽく、将は聡が自分の部屋のキッチンに立っている幸せに酔いしれた。

「何？」聡が将の視線に気付いた。

「ううん、嬉しいなあ、と思って」

「さっきからそればっかり」

「だって嬉しいもん。何つくってくれるのかなー」将はソファの上

で毛布にくるまって頬杖をついた。

わくわくしている、という姿勢である。

――さて、何をつくるか。

将の期待には応えたい聡だったが、つくれるものは限られていた。

設備だけは素晴らしいが、肝心の調理器具もあまりないからだ。

聡は、おかゆではなく、栄養を考えて具が入った雑炊をつくることにした。

2年前の聡だったら絶対にできなかったが、弁当屋にいたおかげで、これぐらいのものだったら簡単に出来るようになっていた。

若いくせに舌が肥えている将のために、ダシは念入りにかつ、濃厚に取る。

聡が料理に集中しはじめたので、将は1回着替えることにした。

そのついでに、ソファに放り出してあった旅行パンフレットを、聡の目に触れないようにさりげなく持ち去った。

実は、明日の夜から、聡を強引にどこかへ連れて行く心づもりで、行き先を検討していたのだ。

さんざん迷って、結局さっき授業中に、携帯サイトから明日の沖縄行き最終便を予約した。

国内だったら、手ぶらで行ってもなんとかなる。

――びっくりするだろうなあ。

拒まれることなど毛頭考えてない。根拠はないが、将には何故か自信があったのだ。

◇

「うまい。うまいよ」

将は聡のつくった雑炊をハフハフと口に運んだ。レンゲも土鍋もさっき買ったものだ。

雑炊と一緒に、絹ごし豆腐のあんかけとビタミン不足を補うべく、ほうれん草のおひたしを付けた。

冷蔵庫には煮リンゴが冷やしてある。

「喉にさわらない？」

聡はキッチンであいかわらず何か仕事しながら訊いた。

「大丈夫。本当に超旨いよ。アキラ、料理うまいな」

「よかった」

それはお世辞抜きで、口当たりもよく美味しかった。

カツオの香りがするダシはまさに将が今食べたいものだった。腹が

すいていた将はしばらく食べることに没頭した。

食べ終わっても聡はあいかわらず、キッチンで何かをつくっているようだ。

「何してんの？」

「残った野菜、野菜のままだったら食べないだろうから、レンジでチンするだけで食べられるようにしてる」

余ったネギやらにんじん、ほうれん草をチャーハンやキッシュ風の卵焼きにしているのだ。

……というのは口実で、二人でまったりした空気をつくると、自分の気持ちが押さえきれなくなる。

聡はそんな自分を予感して料理に逃げているのである。

「いいよ、野菜なんて持って帰ってくれて」

「ダメ。将、ふだん野菜食べないでしょ。だから風邪ひくんだよ」

「……また、ショウって言った」将が嬉しそうに指摘する。

「シマッタ」

聡は笑って舌を出した。すでに癖になってしまってるかもしれない。

「でも本当にアキラ、料理がうまいよ。いい嫁さんになれるね」

だ。

「……ありがとう」りんごを笹がき状に剥いていた頃がウソのよう

「博史にはまだ食わせてない、って言ってたよね。……俺ラッキー」

将は聡の顔を見ながらわざと言ってみた。

聡は将の顔をみないように無言でにんじんの皮を剥いた。

本当は博史の花嫁になるために、料理を修業したはずなのに。こうして他の男から賛辞をもらっている。

罪悪感を感じたせいなのか、手元が狂った。

「痛ッ」

包丁を使っていた聡が右手親指を反射的に唇にあてた。

「大丈夫!?」将はテーブルからあわてて立ち上がり、聡のそばに行った。

「ちょっと滑っただけ」

「見せて」

親指に赤く血が滲んでいる。将はいたずらっぽくその手を取ると自分の唇にあてようとした。

「大丈夫だってば」

聡は将の手から自分の手を引き抜くとその乱暴さを誤魔化すように

「もう食べた？」と付け加えた。

幸いあんまり気にしてないようだ。食べた食器をカウンターの中に持ってくる。

「デザートもあるんだからね。……まだ冷えてないか」

「もう腹いっぱいだよ」

「じゃ、あとで食べて。薬は？」

「今飲む」

将は冷蔵庫からミネラルウォーターを出すと、「ほい」と聡の前にばんそうこうを置いた。

「……ありがと」

「食器洗いついてるから、使って。傷にしみるだろ」

優しい声だ。聡はさっき将から乱暴に手を引き抜いたことを後悔して、将の顔を見上げた。

「また汗かいたからシャワー浴びる。その間に帰るなよ」

聡はだまってうなづいた。

なんとか残り野菜をすぐ食べられるように料理して、台所を片付けたところで、将が頭をふきながらバスルームから出てきた。

急いで出てきたようだが、まだ聡がいるのを見て安心したように顔をゆるめた。

「じゃあ、そろそろ帰るね」

「ええっもう？まだいいじゃん」

「風邪っぴきは早く寝なさい。治らないわよ」

聡はコートとかばんをとったが、どっちから入ってきたか一瞬迷った。

「アキラ、こっち」

将が先導して聡をドアの向こうに誘導した。

「え？」そこは真っ暗で、明らかに玄関ではないようだった。

将は素早くドアを閉めると、聡をきつく抱きしめる。

そして、そのままベッドに押し倒した。

32◆急接近3

暗がりで、いきなり熱い塊に聡は包まれた。そのまま天地が逆転するように倒れこむ。

でも、何が起きたかわからない……といったら嘘になる。

予想まではしていなかったけど、予感ぐらいは聡にもあった。

将は病人とは思えない力でベッドに聡を押し付けるやいなや、聡の髪からバレッタを抜き去り、首筋に唇をはわせてきた。

聡の背筋に反射的に信号が走り、思わず声をあげそうになってしまうのをかろうじて飲み込んで制止の言葉にいい換える。

「……やめて」

やめるはずがない。

それでも、風邪をうつしてしまうと気遣っているのか、唇同士のふれあいは求めず、将の唇は首筋から耳たぶに移った。

ヤバい。声はまたかろうじて止めたけど、体がビクっと反応するのは制御しようがない。

――17歳のくせに、慣れているんだ。

将はしつように抵抗しようとする聡を抑え込みながら器用に耳たぶに舌をはわせる。

ここで初めてのときのように、いきなり笑い出して「くすぐったい」などと言えれば。

もちろん今の聡にはいえるわけもない。

「病人でしょ。やめて」

何とか聡は声に出すことに成功した。が、その声はかすれてしまい、抑止になるとは思えなかった。

「我慢できないんだ」

将は耳から舌をはずして、ようやく答えた。その声はやはり苦しげにかすれている。

コンポのパイロットランプの星々の中に将の輪郭が黒く浮かんでいる。

暗がりに目が慣れた聡にはぼんやりと将の苦しい表情が見えるようだった。

「……将」

将は次の瞬間、唇に柔らかい感触を感じた。聡の唇だった。

聡が頭を起こして自分から将に口づけをしたのだ。

将はあまりにびっくりして、すべての動きを止めた。

口づけだけでない。聡は将の口の中に自らの舌を割り込ませた。

将は自分の口の中に入り込んできた柔らかい聡の舌をどうしていいものか一瞬とまどった。

が、すぐに聡の舌と将の舌はからみあった。

息も唾液も交換するような口づけ。その直接的な快感よりも、将は精神的な至福感に包まれた。

手をつないだときは駆け出したい気分になったが、今は違う。

宇宙のすべてが自分の味方になったような、そんな安心感に心が温かくなった。

聡といえば、夢中で将と舌をこすりあわせながら、なんで自分がそんな行動に出たのかがまだわかってなかった。

でも、１つだけ確実なのは、とうとう将を、１人の男として好きになってしまったということ。

でも、そんなことは前からわかっていたような気もする。いつから?

将の部屋に入ったときから?

手を握り返したときから?

デートをＯＫしたときから?

それともももっとずっと前……弁当屋ではじめて逢ったときから?

聡の思考は逆回転する時間をたどっていた。

それと同時にかろうじて残った理性が、警報を激しく鳴らす。

危険地帯に入り込んでしまったと。

しかし、これ以上「進まない自信」はない。

「風邪をうつしちゃう」と将は自分から唇を離した。

「……大丈夫よ」再び頭をベッドに横たえた聡は、その手を将の顔にまわした。

頬を優しくなでられて、将はもう一度ベッドの上で聡の体を抱きしめた。

「でも……これ以上はだめ。風邪が悪化しちゃう」

かろうじて理性が勝ったらしい。聡は自らの声で悟った。

「……わかった。でももう少しこのままでいさせて」

「……じゃあ、ベッドに入って」

暖房が効いているといっても、風邪をひいた体だ。温かくしないといけない。

聡はいったん立ち上がって乱れた髪を手ぐしで整えた。

将はランプをつけた。暗かった部屋を暖色の暖かい光が照らした。

そのまま素直にベッドカバーの下の布団の中にもぐった。

「来いよ、アキラ」

聡は布団に入った将の傍らに腰掛けると、身をよじって将のおでこに唇をよせた。

ランプで明るくなったために、そんな風に上からのしかかる動作をすると、ニットの中の乳房が将の目の前で丸く揺れるのがわかる。

将は再び聡を抱きたくなって、聡の背中に手をまわした。

ガチャ。

ふいにドアが開く音に二人は振り返った。それはすでに玄関ではなく、寝室の入り口だ。

そこには毛皮を着た将の義母が立っていた。

「何してるんです」

厳しい声は二人の接近を目撃した証である。

聡は反射的にベッドから降りて立ち上がった。顔がカッとほてってくるのがわかる。

「あ……あ、あの」何かいいわけをしなくてはならない。

「お義母さんこそ、なんだよ」将は身をおこした。

『お義母さん』という主語に似つかわしくない乱暴な述語。二人のぎくしゃくした関係が聡にはわかった。

「なんで来たんだよ」

「××病院から連絡が来たんです。お宅の息子さんが今日風邪で来たって。それで心配して来たんですよ」

今日将が点滴を受けた病院だ。

「心配ないから帰れよ」

義母は将の最後のセリフは無視して、聡に向き直った。

「先生はどうしてここに？」

聡が答える前に将がどなるように答える。

「見りゃわかるだろ。センセイが俺を看病してくれてんだよ」

寝室の床には単純にそう言えない証拠に、聡のコートやかばんが置いたとは思えない状況で落ちていた。

だから将を無視して義母は聡を糾弾する。

「先生。わたくし、先生を少し信頼してましたのよ。息子がきちんと学校に行くように指導くださって……。

なのに、こんな風に教え子を誘惑されるなんて……」

聡は下を向いたまま何も言えない。本当のことだからだ。

「アキラは誘惑なんかしてねえってば！俺のほうが誘ったんだよ！」

――そんな大声出したら、喉が……。

将の体が心配な聡だが、将のほうを見るのは許されない。

そんな将の弁解など聞こえなかったかのように

「今日のことは、学校にあとでお伝えしておきます。今日はおひきとりください」

と聡に命令した。

「どうも……すいませんでした」

聡は頭を下げると、コートとかばんを拾って寝室を後にした。

将の顔を見ることはできない。

「アキラ、行くなよ！」将の叫び声が聡の背中にからみついた。

義母は聡が出て行くと、さっきとはうってかわった優しい調子で、ベッドの将に近づいた。

「こんなことがあるから、いつもおうちに帰ってきなさいといっているのに。……ご飯は食べたの？」

今度は将が義母を無視する。冷たい目は伏せていたから義母には見えない。

「コレ、つくってきたから、お台所に置いておくわね」

と風呂敷に包んだ重箱をいそいそとキッチンへもっていった。

「誰がうちに入っていいって言った」

将は静かに口を開くと

「帰れよ」と続ける。

「将」

「帰れっていってんだよ！」

将はベッドから降りて一気にキッチンまで早足で歩くと、義母をキッチンから引っ張り出した。

「将。私はあなたのために……」

玄関の上がり口まで追い詰められて義母は未練がましく将を見上げて何かをいいかけたが、

「俺が本当に助けて欲しいときは見捨てたくせに、いまさら母親づらするな！」

それを聞くと、義母は靴をはかざるを得なかった。

「それから」

すでに将は激したために息が苦しくなっているのか言葉を区切った。

しかし苦しい息の底から低い声を出して続けた。

「アキラが困るようなことを学校の奴らやオヤジに告げ口してみろ……」

義母は今まで誰からも向けられたことのないような鋭く冷たい視線で射抜かれた。

「そんなことしてみろ、お前を必ず殺す」

あまりの恐ろしさに固唾を飲む。

「早く、出て行け！」

将はドアを自分で開けると、義母を押し出してチェーンを締めた。

苦しい息にやけつくように痛い喉をなだめるために、キッチンへ向かい、ミネラルウォーターを一気に飲む。

そこで置いてある風呂敷包みに気付いた。

一一一こんなもの！

将は風呂敷包みごとゴミ箱に投げ込んだ。

◇

一一一5年前。

燃えさかる火が迫るのが足先の熱さでわかる。

将は腰にのしかかる柱から脱出できないでいた。

煙と熱さに頭が朦朧とする。

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！」

と必死に叫んで、小さな手で将の手を引っ張ろうとするまだ2歳の孝太。

火の粉が孝太の頬にかかる。

現れたあの女は。動けない将を見下ろした。

「助けて……助けて、おかあさん」

将は手を伸ばして助けを求めた。将を押さえつける柱がパチパチと炎をあげはじめる。

女は目の中に炎を映してしばしたたずんだ。その顔は能面のように無表情だった。

口紅が異様に朱くみえた。ふだん優しい義母のこんな顔を、12歳の将ははじめて見た。

「おかあさん?」

女は……素早く孝太だけを抱きあげると、そのまま走り去った。

「お兄ちゃあーん!お兄ちゃあーん!やだやだ!」

女に抱かれた孝太の泣き声が遠ざかっていく。

将は絶望のあまり、そこで気を失った……。

33◆急接近4

右手の親指にシャンプーがしみて、聡は我に帰った。

気がつくと、聡は自分の部屋のバスルームにいた。

将のマンションを出てからどうやってバスルームまでたどりついたかを、聡はほとんど覚えていなかった。

タクシーのシートにもたれて、流れゆく街の灯りを見たことだけ、なんとなく覚えている。

ばんそうこうがずれて、さっき包丁を滑らせた傷にシャンプーがしみたのだ。

将のために将の部屋で料理をつくってできた傷。

ずれたばんそうこうはふやけてほとんど用をなさなくなって、ただ親指の傷口に粘着していた。

聡はシャワーの栓をひねった。高い位置にあるシャワーからは雨のように湯が聡の体にかかった。

その中で、ばんそうこうを剥いでしまおうとして、聡はその手を止める。

将の家にあったばんそうこう。

『ほい』とばんそうこうを置いた将を呼び水に、今日の将の思い出

が怒涛のようにあきらに押し寄せた。

タクシーの中で握った手。

おでこへのキス。

二人で買い物したときめき。

聡がつくった料理を旨いと、食べる将。

聡の傷ついた親指を唇にあてる将。

そして暗闇で押し倒されての抱擁。

そして……聡からしかけた深いキス。

蘇る将の声。

『博史にはまだ食わせてない、って言ってたよね。俺ラッキー』

『食器洗いついてるから、使って。傷にしみるだろ』

『こんな風に教え子を誘惑されるなんて！』

甘い思い出の中に、将の義母の声が雷鳴のようにとどろいた。そのまま聡の脳裏をこだまする。

確かに、自分は誘惑した。

17歳の将の唇に自分から舌を挿し込んだ行為は『淫行』だといわれても仕方がない。

あのとき、聡の本能は、将と行き着くところまで行くことを望んでいたんだと思う。

本能は本心だったのではないか？

聡はシャワーの雨に打たれて、あまりに鮮やかな今日の前にただうなだれていた。

◇

シャワーからあがった聡は、飾り棚の博史の写真と目が合った。

でも博史は遠い過去になってしまっているかのように心は冷たく固まったまま動かない。

わかっているのだ。

将への想いは断ち切って、ダイヤの指輪をくれた婚約者と何もなかったように結婚すべきだと。それがお互いのためだと。

だけれど。聡は、自分をきつく抱いた将の腕を、もう忘れることはできない。

唇も舌も手のひらも指も、将以外の男を忘れてしまったかのように、もう彼しか考えられない。

なぜ、教師と生徒なんて立場になってしまったのだろう。

聡は一瞬、教師をやめた自分を夢想した。やめて、ただの男と女になって……。

――だめだ。

聡の心に1枚のアンケート用紙が舞い落ちる。

『今、何をしているときが一番楽しいか』

……アキラと二人きりでいるとき。

『これから始めたい趣味はあるか』

……アキラが喜ぶことぜんぶ。

それは喉が痛いのを堪えて聡のために、大声を出して弁解するさっきの将と重なった。

将は自分のために、すべてを捨てるに違いない。そんな危惧はより確実となって聡を襲う。

許されない恋をまっとうすることは、彼の人生をめちゃくちゃにすることを意味するだろう。

聡は、写真の前に置いた、びろうどの指輪ケースを手にとって蓋をあける。

ダイヤがあいかわらず美しく煌いた。

聡はエンゲージリングを右手の薬指に嵌めてみる。

親指には、くたびれたばんそうこうがまだ未練がましく貼り付いている。

薬指のダイヤに、親指は汚いばんそうこう。

用をなさないそれは「将がくれた」、ただそれだけの理由でくっついている。

聡は、ばんそうこうを剥いだ。

ばんそうこうはあっさりはがれると、単なるゴミとなった。

ばんそうこうに覆われていた皮膚は白くふやけ、ぱっくりと切れた傷口からは赤っぽい肉が少し見えている。

血はとまったようだが、心が痛い。

テーブルの上でゴミになったばんそうこうを見て聡の目には涙が盛り上がってきた。

そのとき、テーブルの上で携帯電話がメールの着信を告げた。

将からだった。

義母に、学校によけいなことを言わないよう、きつく口止めをしたから大丈夫だ、ということ、

それから明日の待ち合わせ場所が記してあった。そして

『明日は絶対こいよ』と付け加えてある。

聡は携帯を握り締めた。

涙はとうとう溜まりきれず、聡の頬をつたった。

落ち始めると、とめどがなく、流れて顎からぽたぽたと落ちて、

それはテーブルの上に小さな水溜りをつくった。

そこは2ヶ月前、突然休日に来た将が座った場所だ。

何もかも、将の思い出につながってしまう。聡の世界はすでに将で満ちている。

そんな自分の中から将を消せるだろうか。

将のいない世界に生きることは可能だろうか。

この想いも単なる気の迷いとして笑える日がくるのだろうか。

聡にはすべてが不可能なように思えた。

だけど、決意しなくてはならない。

聡は自分の心が、ちぎれていくのを感じている。

３４◆拉致１

あまりよく眠れずに、聡は金曜日の朝を迎えた。

目覚めた瞬間に内容は忘れたが、悪夢にうなされていた。いやな残滓だけがしつこく残っている。

青いカーテンの向こうはすでに明るいらしい。

聡はベッドから降りると立ち上がって窓を開けた。

予報は雨もしくは雪だが、空には明けたばかりの濃い青色が冷たく広がっていた。聡は今日、２６歳になる。

まだ起きるべき時間より３０分ほど早いが、聡はベッドを降りてパソコンを開く。

案の定、博史から聡の誕生日を祝うメールが来ていた。

そういう記念ごとを、ぜったい外さない男だ。

ただ、指輪に同封されていたカードに書いてあった「重要なこと」については触れていない。

聡は返信を手早く打った。何事もなかったかのような、今までの二人にありふれた文面で。

将にはっきり伝えなくてはいけないだろうか。

やはり、自分たちはこれ以上先に進んではいけない、と。単なる教師と生徒に戻るべきだと。

いや、言ったところで納得するまい。

決意はしたものの、聡は将にどう説明すべきか、どうしたら諦めてくれるか、というよい考えが浮かばなかった。

＞鷹枝くん、ごめんなさい。今日、やっぱり行けません。

携帯でメールを打ってみたが、やはり、送信する勇気がない。

うだうだ悩んでいるうちに出勤時間が迫っていることに気付いて、聡は携帯を閉じた。

◇

ところが、鷹枝将は今日は欠席だった。

ぽっかりと空いた教卓のまん前を見て、再会して以来、将が欠席したのは初めてだということに聡は気がついた。

――風邪がとても悪化したのではないだろうか。

聡は心配で、気もそぞろに、今日の社会見学の確認事項を伝えるのみでＨＲを終わった。

職員室に戻ると携帯に着信があった。将だった。

＞ちょっと準備があるから今日、学校休む。

＞風邪はだいたい治ったから心配すんな。

＞じゃあ１８時３０分に。△△で。

準備とは何か。いずれにせよ、聡は今日行けない。それを言わなくては。

ズル休みを諫める口実で自分の心に言い訳をしながら将へ電話をかけた。

何コールも待たされてやっと将が出た。

「……アキラ？」

将はどうやらメールを打ったあと二度寝していたらしい。声がひどくしゃがれている。

声を聞く限り、風邪は昨日より悪化していそうだ。

ーーー準備などではなく、本当に具合が悪いのだ。

聡は瞬時に悟った。

「鷹枝くん、風邪はひどいの？」

「心配いらねえよ」

という将の声の次に鼻をすする音がまざるが、ことさら元気そうに「夕方までには完全に治るよ」と付け加えた。

「……無理しないで」

「大丈夫だってば。じゃ、俺もう少し寝るから」

「ちょっと鷹枝くん」

「あ、誕生日おめでとう、アキラ。じゃあな」

電話は一方的に切られた。どうしても『今日行けない』の一言が聡には言えなくて、聡は携帯を握り締めてうなだれた。

◇

晴れていたのは朝だけで、空は徐々に厚い雲に覆われてきた。午後の早い時間から不透明で暗い雲の割れ目から射す太陽はオレンジがかってそれがいっそう寒そうに見えた。

将は約束の場所で待っていた。忠犬の銅像で有名な広場である。

日はとっぷり暮れてもうすっかり夜の風情である。

空に厚い雲があるなら、冷え込まないはずなのに、しんしんと冷える。

皮のコートにマフラーと厚着をした将だが、１５分も待っていると震えが歯に来た。

――待ち合わせ、店の中にすればよかったかな。

手の中には紙袋がある。中には沖縄行きのチケットと急遽買ったプレゼント。

今朝、将は昨日買ったばかりの新しい体温計の中に３８度７分という数字を見た。

昨日はうがいできる場所が痛かった喉は、その痛い場所をより下に下げて、じんじんと痛んだ。

体はあちこちが筋肉痛になっている。

薬を飲んで、昼の間寝れば治るだろうと、聡が昨日つくっといてくれた煮リンゴを食べる。

柔らかいはずなのに、喉を通るときに激痛がする。

将はそれでも全部食べ、聡にメールをするともう一度寝た。

そこへ、聡から電話があったわけだ。

しかし、喉の激しい痛みは将を少し弱気にした。

――もしかしたら、沖縄行き、拒否られるかもな。『病人でしょ、何いってんの』とか言って。

いかにも聡が言いそうだ。

将は午後少し早めに起きた。風邪のほうは、そんなに短時間でよくなるはずはない。

薬のおかげで熱は37度8分に下がっていたが、喉の痛さはあいかわらず、というより、むせて咳が出る分ひどくなった、といえる。

しかし、将は着替えると街へ出た。

『いくらなんでも沖縄は』と拒否られたときのために、聡へプレゼントを買うことにしたのだ。

鼻水をすすりながら、最近出来たナントカヒルズあたりへ行ってみる。

熱があるせいかボーっとする。最初は聡に似合いそうな服関係を見ていたが、サイズがわからない。

何せ、いくら今まで女に不自由しなかった将だといっても、女、しかも大人の女性に服をプレゼントしたことなどはない。

熱も手伝って売り場にボーゼンと立ち尽くしてしまった。

アクセサリーは、あまり聡は付けないみたいだし、

ジュエリー売り場は、店員の目が厳しくて、風邪をひいた今の将はしりごみした。

途方にくれて歩き回っていると、雑貨屋のガラスの棚に乗った可愛いペアのマグを見つけた。

将は、まだ暑かった頃訪ねた聡の家を思い出した。

あのとき、テストの成績次第でデートしてくれる、と約束して、将が勉強に集中しはじめて。

聡は眠気覚ましに、とコーヒーを淹れてくれたのだ。

でも、将にはソーサー付きのティーカップ、聡は自分専用らしいマグカップと、不揃いだった。

おまけに聡のマグカップは少し縁が欠けていた。

『大学のとき、友達から誕生日のプレゼントでもらって、気に入ってるんだけど、うっかり落としちゃって』

と言っていた。

コーヒーを飲んだにしては、すぐに寝ちゃった聡。あのあと、将がキスしようとしたら、寝言で『博史』なんていいやがった。

――今なら？今でも『博史』と言うだろうか……。

言うはずがない。将はそれについては、今は自信がある。

聡は将に自ら深い口づけをしてきたのである。しかも、風邪をひいている自分に、だ。

博史には作っていない料理だって作ってくれた。

手をしっかりと握り合ったように、心はしっかりと結ばれているはずだ。

『これ以上はダメ』と制止したが、それは教師という立場上の話で、本当は体だってそうなりたいはず……。

まあ、それは置いといて、将は聡へとそのマグカップを買った。

少し安易に決めちゃったかな、と思ったが、あくまでも沖縄チケット（将同伴）が本当のプレゼントで、

これはサブという位置付けだから、まあいいか、と将は妥協した。

◇

一一一おっそいなー。

待ち合わせ時間を15分過ぎている。

寒さが将を少しいらつかせた。携帯を鳴らしてみる。

『この電話はただいま電波の届かないところに……』

将は舌打ちすると、空を眺めた。

暗いが、雨か雪がふりそうな雲がたれこめているのがわかる。

将は耐えられずゆっくりと足ぶみを始めた。

沖縄行きの最終は２０時３０分だ。手続きを考えると１９時すぎには空港に向かわなくてはならないだろう。

通常だったら聡の家に直接車で迎えにいったほうが確実だったが、社会見学で都心に出ている今日は交通機関を使ったほうがいいだろう、と判断したのだが……。

こんな寒い日だが、金曜ということも手伝ってか、ここで待ち合わせをするカップルも多い。

将の目の前を、相方を待っていた何組かが幸せそうに二人で腕を組んで夜の街へと消えていった。

あと少しで自分もその１組になれる……。

骨身にこたえる寒さは聡のぬくもりにかわる、と信じて将は待ち続けている。

が、時計はついに１９時をまわった。

不安になった将に追い討ちをかけるように、雨が降り始めた。

晩秋の、みぞれ交じりの冷たい雨となって、いきなり強く激しく。

待ち人を待つ人は皆、ちりぢりに屋根のあるところに避難を始めた。

将もあわてて避難して、聡に再度電話をする。が、電波が届かないメッセージだけが繰り返される。メールを送る。

＞アキラ、何やってんだよ。

＞俺、こごえそうだよ。

＞社会見学が長引いてるなら連絡くれ。

しかし5分たっても10分たっても着信はない。

まさか、来ないつもりじゃ。という考えを将は無理やり打ち消す。

そんなはずはない。聡は絶対に来る。絶対に……。

将はポケットに手をつっこんで雨宿りをしながら、吐く白い息に聡を夢想した。

屋根がいっそううるさく鳴り、雨だれが白く濁って見えるのは、アラレを含むからだろうか。

一度浮かんだ不安は、将の胸の中で蟹が吐く泡のようにぶくぶくと不穏に膨らんだ。

ーーーアキラ、何やってんだよ。早く来いよ。早くーーー

と、やっと。不安で張り裂けそうになった胸を抱えた将が右手に握り締めた携帯が鳴った。

『何やってんだよ』とセリフを準備しつつ、期待して開けた携帯に表示されていたのは聡ではなく、井口春樹だった。

「何？」

がっかりした将はあからさまに不機嫌な声で出た。声を出したはずみで痛い喉が咳を2，3回返してきた。

「将？センセーがなんかヤバイらしーぜ」井口の緊迫した早口が聞こえた。

35◆拉致2

聡がヤバイと聞いて、将は真っ先に義母を思い浮かべた。

口止めしたのに、告げ口したんだろうか。

「何、学校にバレた？」咳をこらえて将は訊き返した。

「いや、たぶん前原。松岡が見たっていってんだけどよー……」井口は続きを話し始めた。

◇

今日の社会見学は、『ゲーム会社の社員』だった。

希望者が多いので何回か実施すると予告した第1回には、くじ引きで選ばれた生徒6人が参加していた。

中には松岡と不良仲間の沖田海人（カイト）が含まれていた。

「服装がきちんとしていない人は連れて行けません」

と事前にいわれていたのでカイトは腰パンをやめ、今日はきちんと制服を着こなしている。

こうしてみると、なかなかジャニーズ系にも見えるのになんで、なぜわざわざずんだれているのか、謎である。

ゲーム会社は皆が知る大手の会社で、超近代的な高層ビルにあった。

聡の大学時代のサークルの先輩が、ここで働いていることもあり、快く社会見学を許してくれたのだ。

近代的なパーテーションで区切られた広いフロアに生徒たちは息を飲んだ。

そこで、ふだん「リーマン」と呼んでバカにしている大人たちが忙しく働いている。

パーテーションの中にはディスプレイがあり、そこでおのおのの仕事に集中している。

「制作はチームごとにわかれてやっています。報酬は能力主義なので、ヒット作を企画制作したチームはボーナスをいっぱいもらえるという仕組みです」

1つのパーテーションで制作途中のゲームソフトを大きなディスプレイ画面で見せてもらったときは皆興奮した。

ひととおり会社一周と仕事の様子を見学したのだが、会社が広いのと、

案内担当が聡の知り合いということもあり、説明を丁寧に行ってくれたので、見学だけで少し予定時間を押した。

そのあと、小会議室で社員の1人に話を聞く。最初営業職で入社して、

積極的に社内コンテストに参加し、見事優勝、企画に異動したという社員が語り役になったが、この人の話がまた面白かった。

成功だけでなく失敗談など、今は笑いで話しているが相当苦労しているという生の経験談に生徒一人一人が真剣な目になった。

そのとき、メモをとっていた松岡のシャーペンの芯がなくなった。

替えもないらしい。動揺する松岡を聡が察して、黙ってペンを差し出した。

松岡は、首だけでぴょこんとお辞儀をして話に戻っていった。

質問もいろいろと飛び、社員のほうも丁寧に答えるので、予定時間をだいぶ過ぎた。

長く掛かったことを社員や聡の先輩に詫びて、皆で会社を出たのはすでに１８時３０分近い時間だった。

もう外は暗かったし、予想では雨または雪だったので、お茶はしないで解散することになった。

同じ方面の聡、松岡、カイトが一緒に電車に乗った。

ふだんは話もしない松岡とカイトだったが、聡が一緒だったということもあり、電車の中、今日の話でなごんだ。

３人は同じ駅で降りた。

駅の階段を降りたところで

「じゃあ、気をつけてね」

と聡は2人を背にして歩き出した。

松岡とカイトも「じゃっ」と別れたが、

松岡は、数歩進んで「あ！」と聡に借りたペンを思い出した。

かばんからペンを取り出して、返そうと、引き返す。

一一一間に合った。

聡の後姿はまだそこにいた。『先生！』と声をかけようとした松岡だったが……。

◇

「瑞樹が？」

将は意外な名前に電話を握りなおした。寒さから手がかじかんでくる。風が強く吹いて、みぞれまじりの雨が将のほうまで飛んできた。

「ああ。センセーは瑞樹のヤツと話してるように見えたらしい。でもすぐに……」

松岡は、現れたラテン頭に嫌なやつを見た気がして反射的に隠れた。

隠れた松岡はそっと顔を出して、見てしまった。

聡が数人の不良に囲まれ、抵抗する間もなく口に何か布をあてられて、その場に崩れるのを。

そのまま抱えられて、車道に着けた、黒いフィルムが貼られたワゴン車に乗せられてしまった。

一瞬だったので行き交う人の誰もが気付いていないようだった。

松岡は、誰かに連絡しないとと思ったが、彼は携帯を持たない。

警察はあてにならない、と直感で思った彼は、今別れたばかりのカイトを全速力で走って追った。

そのカイトから井口に連絡があったのだ。

しかも、カイトは実は昨日、前原からメールを受け取っていたのだ。

＞明日、面白いパーティをやるけど来ない？

「もちろんパスしたから、連絡きたわけだけど」と井口はここまで一気に話した。

将はすべてを聞いて、地面が脈打つのを感じた。

「それで、瑞樹は？」

「前原と一緒にワゴンに乗ったらしい」

「わかった」

「将、どうすん…」井口が言いかけている間に将は電話を切った。

そのまま瑞樹の番号にかける。

将は、あせる気持ちを必死で鎮めた。冷静にどこに行く気なのか聞き出さなくてはならない。

◇

その頃、都心と反対方向へと走るワゴン車の中では、

念のために薬をしみこませたタオルを鼻と口に固定された聡が後部座席に倒れていた。

「結構、いい女じゃん」

スキンヘッドの不良は眠る聡の顔をのぞきこんで言った。

今日、前原の主催する集まりに参加したのは前原を含めて5人。

他校生やフリーターばかりで、誰一人としてまともな風貌の者がいなかった。

赤や黄色の髪、髭づら、ピアスにタトゥーで趣味の悪さを競うがごとし、だったが肌や歯、濁った目は不健康さでも際立った。

「オッパイもたぶん大きいよね」

待ちきれない赤毛は聡のコートのボタンをはずしていた。

パンツスーツはきっちりとボタンをはめて着込んでいるが、

その胸のあたりは、固い布のスーツにも関わらず、はちきれそうに横にピンと張り詰めている。

「瑞樹、マジでアレやんの？」

不良の一人が瑞樹の横顔に訊いた。

中シートに座っていた瑞樹は、振り返って後部座席に倒れる聡を一瞥した。

「そうよ。明日の昼、スクランブル交差点で放り出すの。マッパでね」

「こっえー」車内の不良どもは皆笑った。

「そんなに憎たらしいんだ、この女が」

「顔はカワイイけどねー」

瑞樹は前に向き直ると

「恥をかかせるぐらいじゃ足りない。殺したっていいぐらい」

と窓に向かって少し大きな声で言った。すると助手席に座っていた前原が

「あそこ、生コンあるよ」と瑞樹を振り返った。あそこ、とは今から行く目的地である。

不良どもが、「ひえぇー」「コンクリ詰め！」「冗談でしょぉ」とひゃらひゃら騒ぐ。

「やるだけやって、ダムに捨てちゃうのもいいんじゃない？絶対ばれないよ」

瑞樹は、前原による、その残虐な企画に眉一つ動かさず、

「そうね」

と窓の外に目をやった。雨が降り始めている。みぞれまじりの雨は瑞樹が乗るワゴン車の窓を激しく打った。

白い粒粒が窓の下に溜まる。みぞれは雹になっている。

ーーーアイツさえ現れなければ。将は……。

瑞樹はこの2ヶ月の屈辱を思い起こした。

将に追い出されてからの瑞樹の生活を思えば、それぐらいの仕打ちは当然だ。

瑞樹は雨に濡れて赤く光る路面を見つめた。

36◆拉致3

将には「やられかけた」と話したが、実は瑞樹の処女を奪ったのは、母の再婚相手の義父だった。

まだ瑞樹が小5のときだ。

こんなことは誰にも話したくないから、瑞樹は初体験の年齢を聞かれたときはいつも

「14歳のとき。ナンパされて、なんとなく」と明るめに嘘を言った。

義父の相手をするのが嫌で嫌で、友達の家に泊まったり、街角で夜明かしをしたこともある。

そのうち瑞樹は、体を他人にまかすことで、宿を得ることを思いつき、中学に入ってついに家出をした。

男に身をまかせて、その家に居着く。または、夜の街で知り合ったばかりの友達の家に何日も居候をする。

そうやって義父の魔の手から自分を守ってきた瑞樹は、高校に入ってようやく安住の地を見つける。

それが将の家だったのだ。

自分と同じように家に帰れない理由をもつ将だから、1年以上も「帰れ」とは言わなかった。

なのに。

あんな年上の教師に熱をあげた将は、あっさりと自分を追い出したのだ。

２ヶ月前、将の家を追い出された瑞樹はふりだしに戻ってしまった。

アイツ（義父）のところには帰りたくないから、出会い系サイトで、その日の宿になる男を捜す日々。

しょぼい男にあたり、やるだけやられて、くれたのははした金だけ、泊めてくれもしない雨の夜もあった。

雨に濡れて、しかたなく家に帰ると待っていたのは義父の下半身だった。

その日２人目のものを咥えさせられて、瑞樹の脳裏には炭火のように小さく、しかし深く熱く復讐の炎が燃えはじめていた。

――許せない。

なんで自分だけがこんな、娼婦のような暮らしをしなくてはならないのだ。

復讐の炎は、自分を追い出した将でもなく、倒錯した義父でもなく、将を夢中にした聡のほうに一途に向かったのだ。

そして１ヶ月ほど前。

疲れた瑞樹は、繁華街の道端で、制服姿でうずくまっていた。

１０月の夜は、暖かかった昼間からガラリと変貌して、冷たい夜風を瑞樹に吹き付けた。

生理中だった瑞樹は、宿になる男を捕まえることもできず、しくしくと痛む下腹に耐えられず道端にしゃがみこんでいたのだ。

「何やってんの」

そんな瑞樹に声をかける聞き覚えのある声があった。

隈取をしたような大きな目、分厚い唇、まわりの髭といったラテン系の濃い顔立ちに、根元が黒くなった茶髪のマカロニくずれ。

同じクラスの前原だった。

瑞樹は返事をする力もなく目をあげた。

元・将の女だった瑞樹が、将に追い出されたらしいことは不良仲間は皆知っていた。

「うちにくればぁ？」

前原は語尾を延ばしたバカっぽい話し方で瑞樹を誘った。

ついていけば、何をされるかわかっていたが、疲れていた瑞樹はもうどうでもよかった。

工務店の社長をしている前原の家は、一戸建てで、母屋から独立し

た離れが前原の部屋になっていた。

前原の親は放任主義で、警察沙汰にならない限り、離れで前原が何をしようと口を出さないらしい。

その離れで案の定、前原はヤリたがったが、瑞樹が生理中だと知ると、あっさり引き下がって、母屋から鎮痛剤を持ってきて

「女は大変だよなー」とヘラヘラ笑った。

そして立ち上がると押入れの奥から箱を取り出してきた。

「コレは効かないのかな」

と、開けた箱の中には白い粉と注射器が入っていた。

瑞樹は目を丸くして前原の顔を見た。本物を初めて見た。

――こいつヤバイかも。

「やってみる？」

瑞樹は無言で首を横に振った。前原はケケケと笑うと

「そんな顔で見るなよ。別にチュードクじゃないんだから。たまに楽しむだけだよ。気持ちいいぜ。悩みがふっとぶ」

と箱をしまった。

生理が終わり次第、関係を持つことになってしまったが、瑞樹は幸

いしばらくそこに居着くことが出来そうだった。

前原との行為は、どうでもよかったが、薬をヤッてるせいか、途中でやたらと将と比べたがるのには閉口した。

大きさ、技巧、優しさ、よさ。

すべての項目を執拗に聞いてくる。

全部、将のほうが優れている。などとは言えない。

返事をしないでいると、痛い行為に及んでくる。その目には狂気があった。

だから、声を出さずにうなづくなど適当にごまかすが、毎回のことで、さすがに瑞樹も嫌になった。

よほど、この男は将に劣等感を持っているのだろう。

瑞樹は必死で体を揺らす前原の下で、その濃い顔を見上げた。

――バーカ。ぜんっぜんよくない。早く終われ。

そういうかわりに、わざとらしく声を出してやった。

もうたまらない、とばかりに、体をのけぞらす。早くこの不快な摩擦を終わらせるためには、このくらいの演技は軽い。

瑞樹は偽りの声をあげながら、早くここを抜け出したいとそればかりを感じた。

だけど、どこへ――瑞樹には居場所がない。

絶望にとらわれた瑞樹は、とうとう、前原に薬をもらった。

体が軽くなると同時に、思考はぼんやりとしてし、かわりに本能が剥き出しになる、と自分でも思った。

いつもより前原の行為を好ましく感じてしまう自分に嫌悪しながら、居場所を奪ったあの女への憎しみが脳を占めていく。

薬は一時的に体を軽くしてくれたが、翌日、瑞樹は激しい吐き気をもよおした。

だるくてだるくて苦しい。瑞樹は布団の上でもがいた。

そのとき離れの縁側が開いた。

「アンタ、今日1日家に居るの？」前原の母だった。

ダンプカーを思わせる四角く太った体の両端に垂れた胸がついている。

「出かけるなら、今出て。私もでかけるんだから」

そんなわけで、瑞樹は最悪の体調を抱えて、前原の家を出かけなくてはならなくなった。

それが先週の金曜日だった。

瑞樹はダメだと思いながらも将の家に近くに来てしまった。

運が悪く、自分より年下らしき非行少年に目をつけられてしまった。

体が思うように動かない瑞樹は、倒れこんでしまった。どこだかもわからない。

そんなあのとき、助けてくれたのが将だ。

しかし、将は非情にも、瑞樹を家に置いてくれず、別れたあと、瑞樹は前原の家に帰るしかなかった。

「な、将って、あのアキラと付き合ってんのな」

瑞樹を抱いたあと、前原は蛍光灯を付けると煙草をふかしながら言った。

夜には薬は抜けてだいぶマシにはなっていた。

「見たの？」

瑞樹は、Tシャツを着込んだ下で、背中に手を回してブラジャーのホックをとめていた。

なぜ、そんな着方をするかといえば、好きでもない男にできるだけ肌を見せなくなかったからだ。

「ああ。スタバで仲良さそうに抱き合ってたぜ」

前原に背を向けていた瑞樹の動きが止まった。

「瑞樹？」

前にまわった前原は能面のような瑞樹の顔を見た。

「……せない」

「なんだよ？」

「許せない」

唇を噛み締めた瑞樹は、決意を固めていた。

――絶対に復讐してやる。

瑞樹は前原に向き直った。

「ねえ。茂樹ィ、将のこと憎たらしくない？」

高めの声で急にしなをつくる。

前原は、一瞬ぎくっとした。失禁させられたことを言われたのかと思った。もちろんこれは皆に秘密にしてある。

「だってサ、差し歯」

ああ、そっち。前原はほっとしたが、今度はすっかり忘れていた、アッパーを食わされたときの悔しさが蘇ってきた。

「将のさ、新しい彼女をひどい目にあわせない？」

「新しい彼女って……」

「そう。アキラせんせい」

瑞樹は前原の肩に顔を乗せて瞳だけで前原の顔をのぞきこんだ。

そうすると白目が妖しく光り、抗うことは絶対許さないという目になった。

瑞樹は立ち上がると、いつもの隠し場所から薬を持ってきて、注射器にセットして、前原に渡した。

「茂樹だって、あのときやり損ねたうえに、殴られて悔しかったでしょ……だから、ね」

不快な屈辱の思い出に駆られて、前原は注射器を奪うようにして自らの手に打った。

前原にそれを拒否することはもはや、できない。

◇

瑞樹は、自分の携帯が鳴るのに気付いた。将が表示されている。

将が企みに気付いたのかもしれない、と一瞬ギクっとする。

瑞樹が声を出す前に将の声が聞こえた。

「俺」
「何？」
「暇だから久しぶりに会いたいんだけど。今どこ」
将は何気ないふりを装った。咳をこらえるのに苦労する。
「何よ、いまさら」冷たい調子を装い答えるものの、会いたいという言葉に瑞樹の気持ちは動いた。
「いいじゃーん……」
――こうしている間にも、聡は？
将は瑞樹とつながる電話の向こうの音を必死で聞き取ろうとした。聡を乗せた車はまだ走っているらしい。
ということは、まだ無事。
「ねえ。やっぱ、お前がいいんだよ」
そらぞらしく聞こえないだろうか。将は嘘をつく自分に気持ちが悪くなる。
しかし聡を助けるためだ。
「ちょっと待って」
しかし、瑞樹はそれを信じたらしい。

携帯の向こうで、『いまどのへん』と誰かに問う瑞樹の声が聞こえる。

将はそのすきに、こらえていた咳をする。喉の奥の痛みは咳にかわりつつあった。

「もしもし」瑞樹の声が戻る。

「今どこ。迎えに行くよ」

「もうすぐ××ぐらいなんだけど」

そこだったら、まだ近い。少しいけば将の家がある。

「じゃ、今すぐうち来いよ」

将は、電車に乗るために、携帯がつながったまま、駅へと足早に向かう。歩き始めたせいで咳が出そうになるがこらえる。

「わかった」

「すぐだぞ」

なんとかだましおおせたらしい。

携帯を切った瑞樹は

「将だった」と助手席の前原に言った。

「何だァ」前原は剃った眉毛を歪ませた。

「あたしさ、念のために将の足止めしてこようか」

瑞樹のガラにもなく浮き足立った様子に、前原は面白くなかったが

「そうだな。お前がいてもヤることないしな」と仕方なく途中下車を許可した。

少し回り道して××駅へまわる。

駅前のネオンを反射する濡れた路面に白い粒がバラバラと落ちてくる。

瑞樹は、ミニスカートと長い黒髪をなびかせてワゴン車を飛び降りると駅へ駆け込んだ。

前原が、瑞樹の長い黒髪姿を目にした最後だった。

37◆拉致4

雹交じりの雨はいよいよひどくなった。

雨だけでなく雷もとどろき、駅は雨宿りとタクシー待ちの人でごったがえした。

将は駅から家までタクシーを使おうかと思ったが、待つ人が多く断念せざるを得なかった。

たかだか1メーターだからだ。

しかし1メーターといえど歩けば10分近くある。

白い粒を包んだ雨はますますひどく道路を叩き、強風にあおられたしぶきが屋根の下まで飛んでくる。

景色がかすんで見えるほどのひどい雨。

将は意を決して、冷たい雨の中に飛び出した。

全速力で走る。咳が邪魔をする。信号無視した将に、するどくクラクションが鳴るがかまわない。

頭はあっという間にびしょぬれになり、皮のコートは濡れてずっしりと重くなった。

靴もとうに水浸しになり、その下の靴下ごと用をなさなくなっている。

と、持っていた紙袋が破けて中身が水溜りに落ちた。
プレゼント・サブのマグカップが入った紙箱だ。
将は拾い上げた。箱はびちゃびちゃになっていたがかまわず、抱えて走る。
やっとマンションのエントランスにたどりつくと、将はその場にひざまづいて苦しく咳き込んだ。
咳き込むたびに冷たい空気が将の肺に苦しく沁み、それがますます激しい咳を誘発した。
血でも出るのではないかというほど、将の胸から喉は激しく痛んだ。
……ようやく、落ち着いた頃、ちょうどエントランスに瑞樹が現れた。
駅でビニール傘を買って歩いてきたらしい。ローファーに紺の靴下が濡れている。
「将。どうしたの？」
びしょぬれで壁にもたれかかる将に瑞樹は驚いたようだ。
将は睨み付けそうになるのをこらえて笑顔を作った。
「部屋、行こうぜ」

瑞樹が部屋に入るのを見届けて、将は入り口の鍵を閉めた。

しかし瑞樹は、逃げ出そうという気配もない。

すっかり将のことを信用しているのだ。

「早く、拭かないと」

瑞樹は勝手を知っているバスルームからタオルを持ってくる。

将はタオルを受け取らずに、

「アキラはどこだ」

といきなり切り出した。1秒でも時間が惜しい。

瑞樹は一瞬驚いた顔をしたが、すぐにそれは冷たい笑顔になった。

「そういうこと？おっかしいと思ったんだよね」

「だからどこだ」

将はずぶぬれのまま瑞樹に詰め寄った。

濡れた冷たい雫が頭から湧き出してくるように顔に流れてくる。

濡れた衣類が将の体を冷たくしぼりあげるようだ。

「いうはずないじゃん」

瑞樹は嘲笑った。

「言えよッ！」

将は、瑞樹の両肩をつかんだ。しかしそのはずみに激しく咳がでる。

瑞樹は肩をつかまれたまま将をにらみつけた。

「やだよ……絶対言わない」

将は思わず右手を振り上げた。しかし瑞樹はみじろぎもせず言い放つ。

「殴れるはずないよね。将、言ってたもんね。生理的に女を殴れないって」

将は唇を噛み締めて、右手を下ろした。

そのまま瑞樹の足元に崩れるように膝をついた。床に両手もつく。

「頼む。教えてくれ。頼む」

頭を下げた将の髪の毛からの雫が床にぽたぽたと落ちる。

床に土下座して自分に頭を下げる将を、瑞樹は驚いて見下ろした。

あのプライドの高い将が、あの女のためにこんな格好をするなんて。

一一一ますます許せない。

「教えられねーよ。そんな格好をしたって無駄なんだよ」
瑞樹は顔をそむけると
「そういう用件だったら帰る」と玄関へ踵を返し始めた。
「待てよ」
将は立ち上がると瑞樹を追った。思わずナイフを持って先回りする。
「アキラの居場所を教えるまで帰さない」
リビング出口のドアに手をかける瑞樹の前に立ちはだかる。
「そんなもので……刺せるわけ？刺せるなら刺せば」
瑞樹はバカにするように言った。しかし言った後で、将の噂を思い出した。
瑞樹も真相は知らないが、将が人を殺したという噂を信じている一人だからだ。
将は鋭い目で瑞樹をにらみつけると
瑞樹に左手を伸ばした。
「キャ……」
刺される、と思わず目を閉じた瑞樹。

しかし、将は瑞樹の黒髪を掴んでいた。髪にひっぱられて瑞樹の頭が傾く。

「もう一度聞く。アキラはどこだ」

顔は熱で赤くなっていたが、それと逆に将の目は無機質に光っていた。

瑞樹は将のこんな顔を初めて見た。

「教えろ」

調子は静かだったが髪を掴まれた瑞樹はだまって将の顔を見るしかない。

数秒沈黙が続いた。

将の右手のナイフが次の瞬間、瑞樹の髪へと非情に動いた。

黒髪はジャクっと嫌な音をたてて、瑞樹の頭から離れた。

「……！」

瑞樹は信じられないという顔で将が床に放たれた自分の黒髪と将の顔をかわるがわるに見た。

無表情を続ける将は、再び瑞樹の残った髪を握ると再びナイフを動かす。

「非道い……」

瑞樹の大きな瞳に涙があふれた。

「非道いのはお前のほうだ。丸坊主になりたくなかったら、早く教えろ」

将は瑞樹の涙にもひるまずに、瑞樹の頭に残った、すでに短くなった髪も乱暴にナイフで切り取っていく。

「……くっ」

女に暴力をふるわない、といっていた将にこんな行為をさせるあの女が憎い。

――絶対に言うもんか。

瑞樹は歯を食いしばって落ちていく髪を見ていた。

瑞樹の頭髪がほとんどショートカットになったとき、将の携帯が鳴った。

井口だった。

「前原の行き先がわかったぞ」

「どこだ！」

井口は気を利かせて、カイトに『今から参加したい』とフかせて、場所を手に入れたのだ。

将は、濡れた服のまま、鍵もかけず部屋を出た。

――アキラ！無事でいてくれ！

将はローバーミニのキーを差し込むのももどかしく急発進させた。

瑞樹は切り取られた自らの髪の中にへたりこんでいた。

さっきまでつややかな長い黒髪が自慢だった頭は、部分的に刈りたての芝生ほどに短くなっているのが手触りでわかった。

――悔しい。

――どんなことをしても二人の邪魔をしてやる。

瑞樹は床にうねる髪に誓うと、携帯を取り出した。アドレス帳からある人間を探し出して掛ける。

「はい。週刊パパラッチの安藤です。瑞樹ちゃん？」

「もしもし。面白いネタがあるんだけど……」

38◆夜の川1（前書き）

今日は暴力シーンがかなりあります。苦手な方はご注意ください。

38◆夜の川1

将は車を飛ばしていた。雨はいくぶん小止みになったようだが、それでもスピードをあげるミニのフロントガラスのワイパーの下に氷の粒がたまっていった。

ミニは、東京郊外の大きな川を遡っていた。

この県境を流れる川の中流の河川敷で護岸工事をやっている。前原の父が請け負っている工事だが、泊まりの土木作業員のための飯場が川原にあるという。

この土日はそこが留守になるとのことで、そこで「パーティ」をやるのだという。

――早く、早く!

将はスピードをあげた。濡れた服で冷え切った体は車内の暖房でカッと熱くなっていた。

たぶん熱が出てきたのだろう。

しかしそんなことはおかまいなしに将はアクセルを踏み、前を行く車と対向車の間を縫って危険な追い抜きを繰り返した。

◇

「寒いなー、ここ」

「こんなんで『パーティ』やれんの？」

金髪と赤毛が飯場に入るなりまわりを見渡して文句を言った。

すぐ近くに川が流れるプレハブの飯場は冷え切っていた。室内だというのに、息が白く、震えがくる。

一度も掃除などしてないがごとく、醤油や油が隙間なくこびりついたガス台が置かれた汚い台所が入り口を兼ねていて、

その奥に小上がりのような6畳間があり、隅に布団が畳んであった。

「文句いうなよ。今ストーブいれっからよ」

前原が台所にあった丸い石油ストーブに火を入れた。

とたんに金髪と赤毛はストーブに寄ってきて「寒い、寒い」と手を温め、

「酒も飲めないよ、この寒さじゃ」と不平たらたらだ。

「酒がだめならドラッグでしょー」と車を運転していた髭面が笑った。

聡を抱えてきたスキンヘッドがことさら大声で言った。

「ハゲしく動けば平気でしょ」

一同はげらげらと笑った。

スキンヘッドは、畳に聡を下ろした。薬をかがされた聡はまだ眠っている。

他の者はストーブにあたっているのに、スキンヘッドはせっかちに聡の上着のボタンに手をかけている。

「なんだよ、超せっかちだなー」

ストーブを囲んで他の者が笑う中、缶チューハイを手にしていた前原は

「俺が先だぜ」

と聡に近寄るとパンツスーツのジッパーを下げる。

「意識がないとやりにくいな」

スキンヘッドは聡の上着を脱がせながらつぶやく。

実際、薬で眠った聡はぐんにゃりとして、固いスーツの片袖を脱がすだけでも、スキンヘッド一人ではそうとう手間がかかった。

前原は聡の腰を少し持ち上げると、あっさりと聡の脚からスラックスを抜き去ったが、今日は寒かったせいか、

スラックスの下にストッキングが張り付いていた。

「おい手伝えよ」

スキンヘッドがストーブのまわりで見物する3人に声をかけた。

「破いちゃえばいいじゃん」

といいながら髭面が近寄ってきた。

「こんなふうにさぁ」

髭面は聡のブラウスを乱暴に左右に引っ張った。ボタンがぶちん、ぶちん、と次々に飛び、眠った聡の前がはだけた。

が、ここにも聡はアンダーウェアを着けていた。

「ち、ババシャツかよ、厚着な女だなー」

といいながら髭面は薄いアンダーウェアを引っ張り、そこをナイフの先で突く。

薄い布はピリピリと見る間に裂けて、肌が露出した。

「なるほど、こんなふうに、ね」

前原は、聡のストッキングをショーツごと腰骨のあたりからナイフをくぐらせた。

ショーツの脇は切れるのに多少手ごたえがあったがストッキングは手ごたえも何もなく、空気のようにナイフの刃で裂けた。

スキンヘッドは後ろから手をまわして聡の胸を守るランジェリーも上にずりあげて中身を露出させた。

ほとんど全裸になった聡に、赤毛や金髪も寒さを忘れて寄ってきた。

「いい体だな」

スキンヘッドは遠慮なく、すでに聡を掌でもてあそんでいる。

「じゃあ俺が一番でいいな」と前原は自分のズボンを下ろした。そのとき。

ガラリと台所の入り口のサッシが勢いよく開いて聡に群がっていた不良たちは一斉に振り返った。

将は、不良たちの中に倒れる聡の姿を見て、髪の毛が逆立つほど逆上した。

次の瞬間、前原の体がふっとんだ。前原は下半身を露出したまま壁に激突し、プレハブの飯場全体が揺れた。

将は振り返りざま髭面の横面にキックを決めた。

髭面は台所のほうに飛んでいき、安物の水屋にぶつかった。

水屋からこれまた安物の湯飲みや茶碗が固い床に落ちて割れた。

将は裸で倒れている聡に落ちている上着を素早く掛けた。

そこへ赤毛がナイフを振りかざして将の後ろから突刺しようとしたが、将はそれをかわして足をかけた。

赤毛は窓側の壁にぶつかり、その衝撃でサッシの窓にひびが入った。

金髪とスキンヘッドはナイフを片手に将のすきを伺っている。

口から血を流して起き上がった前原は、萎縮した下半身の上にズボンをずりあげながら、

「……ここじゃまずい。これ以上壊すと、オヤジに怒られちまう」

とつぶやいた。

「外に出ろ」将は前原を引っ張り上げると外に蹴飛ばすように出した。

「お前らも外に出ろ」

将はのびている赤毛をはたき起こすとこれも引きずり起こした。

5人全員を聡の体から距離を置かせると自らも外に出た。

外の雨は小雨になりながらもその冷たさは失われていなかった。

将が外に出るなりまだ一度もやられていない金髪とスキンヘッドがナイフを片手に向かってきた。

将は素早くかわしながら金髪のほうを膝で蹴ると、スキンヘッドの腹にむしゃぶりついて押し倒し、ナイフを奪い取った。

しかし、その瞬間、復活した髭面が将の腰にとりついてスキンヘッドから将を引き剥がした。

その無防備になった将の腹に赤毛の蹴りが決まった。

将は、かがみこむと激しく咳き込んだ。そこの横腹を赤毛は蹴り続ける。

エビのように体を丸めて倒れた将は、そのまま咳を続ける。

「フン」

離れて見ていた前原がおもむろに近づいてきた。赤毛と入れ替わると横向きに倒れた将を、前に自らがされたように仰向けにする。

仰向けにされても将は、目を閉じて喉からひゅーひゅーと音をたてて肩で息をしている。

「いいざまだな」

とかがんで将に声をかけた前原だが、再び、横たわっているはずの将にアッパーをくらった。

差し歯が夜の川のほうへ飛んでいった。

将はふらふらと立ち上がった。

……が、すぐに赤毛とスキンヘッドに両肩を掴まれた。

髭づらが動けない将の顔にパンチをあびせる。両側から、まるでサンドバックのように執拗に。

ようやく気が済んだのか、将は解放されると、立ち上がる力もなく、川原に倒れこんだ。

わずかに残る意識の中で、顔にあたる小雨がひんやりと気持ちいい。

「さあて、変な邪魔がはいっちゃったけど、続き続き」

スキンヘッドが言って、プレハブの中に入ろうとした。

将は最後の力を振り絞って、スキンヘッドの足にとりついた。

どんなに蹴られても離さない。すっぽんのように将は耐えた。

やっと復活した前原と髭の2人がかりでスキンヘッドの足から将を剥がした。

前原と髭面で将の肩と足を持ち上げ抱えると、１０ｍほどのところを流れる川へと進む。。

水際で何度か揺らして勢いをつけると、将の体を川に投げ込んだ。

「目には目をだっけ。人殺しは死んで償わなきゃ！」

前原はハッハハーと笑うと夜の川に向かって叫んだ。

39◆夜の川2（前書き）

引き続き暴力シーンがあります。苦手な方はご注意ください。

39◆夜の川2

寒さは聡を思いのほか早く覚醒させた。

目が覚めた聡の上に粗末なベニヤ板の天井が広がっていた。

――ここ、どこ？

あまりに見慣れない風景に一瞬、夢なのかと思ったが、寒さのあまりくしゃみが2回連続で出て、聡は体を起こした。

次の瞬間、自分の姿に気付いた。

――何コレ！

上着がなぜか掛かっていたが、右の膝下にストッキングとちぎれたショーツがかろうじて残っているほかは素裸だった。

しかし誰も居ない。

聡はあわてて体を確認したが、何かをされたような痕跡も感覚もない。ケガもしていないようだ。

まわりにあった服をかき集めた。破けて使い物にならないブラウスにアンダーシャツ。ショーツも片側が見事に切られている。

聡は何も考える余裕もなく、かろうじて無事なスラックスを裸の下半身に穿き、ブラジャーと上着、コートを身につけてから、

自分に何があったのかを思い出そうとして頭がくらっとした。

そうだ、何か薬をかがされて……。

駅の風景が脳裏にひらめく。黒髪の女。そうだ。

駅で教え子の葉山瑞樹が「話があるんですけど」と寄ってきた。その直後に誰かにタオルを口にあてられたんだ。

と、複数の若者の笑い声がプレハブの外から聞こえた。

聡は靴を履くと本能的に身を隠しながら、サッシの入り口から外を覗いた。

恐ろしい遊びが行われていた。いたぶられているのが誰だかわからないが、聡は血が凍る光景を見た。

川に投げ込まれた将は、体全体に染み込む冷たい水に、逆に意識がはっきりした。

浅瀬だったせいもあり、立ち上がろうとした。

しかし、殴られ続けたのと、氷のような冷たさに体全体がこわばり、思うように動けない。

やっと立ち上がったと思ったら川底の石に滑って転んだ。再び、全身を冷たい水が縛り上げる。

それを見た川原にいる前原ら不良5人が大笑いする。

なんとかずぶ濡れで立ち上がると、川原に向かって歩き始めた。

歯の根があわないとはこのことだろう。ガチガチと将の歯が小刻みに鳴る。

歯が鳴るのは生死に関わる体温低下にさらされている証拠である。しかし、将はまだ自分が死ぬとは考えられない。

将はすべての思考を停止し、単に生存本能だけで起き上がり、岸へと歩いた。

雨は、いつのまにか雪に変わっていた。暗い水銀灯に照らされて雪が舞う。

ふらふらと岸にあがってくる将に、こんどは赤毛と金髪が向かった。ちょっと蹴っただけで倒れる将を再び、二人で抱える。

水に濡れた将の体は氷のようで、持つだけで手が固くかじかむようだった。

よくこれで生きてると二人は思ったが、勢いをつけて再び川の中に投げ込む。

この二人もまだ将が死ぬとは思っていない。また死んだ場合どうしよう、とも考えていない。

軽い感覚で、この見栄えの良い青年をいたぶるゲームを楽しんでい

た。

ゲームは最高に楽しかった。だから寒いのを忘れて転げるように笑う。

もうあがってこない、と誰もが――サッシから覗いていた聡も――信じたが、2分ほどして、少し下流に流された将は再び立ち上がった。

横なぐりのように降るボタ雪の中を、さっきより若干早いペースで岸に向かって歩いてくる。

「お前、しぶとすぎッ！」

前原は狂気の叫び声をあげると、氷のような川の中を歩いてくる将に向かった。

自らも川の中ジャブジャブと入る。

前原はここに来る前にクスリをやっていた。そんな彼には水の冷たさは感じていても関係なかった。

雪が降る川の浅瀬にやっと立っている将を三たび川の中へ殴り倒す。

起きようとするその顔を水の中に押し込んだ。

「死ねやあああ！」

「がふっガボっ」

将はすごい力でもがいて水面に顔を出そうとする。ばしゃばしゃと手を動かして水面に押し付ける前原の手をどけようとする。

氷のような水しぶきが前原の顔や体にかかった。

前原はやみくもに動かす将の手を払いのけながら、将の頭をさらに水中に押さえ込む。

川原ではやしたてていた不良はいつしか固唾を飲んでいた。

――あいつヤバくない？

――本当に死んだらどうする気だ？

ふっと前原の手をどかそうとする将の手の力が抜けて、水面が静かになった。

川のせせらぎが雪の中に不気味に響く。将はうつぶせのまま動かなくなった。

突如、サイレンが鳴り響いた。暗闇の対岸遠くに赤いランプが点滅した。

「ヤバイ！」川原にいた不良はあわてた。

髭面が川の中に入り、なおも気違いじみた力で将の顔を水中に押さえ込む前原を連れ戻すとワゴンを急発進させた。

窓から聡のカバンを放り投げる。

聡は不良が退散したとたん、サッシを開けて、外へ出た。
暗い空に水銀灯に照らされて雪が花びらのように舞っていた。

「将！」

川の浅瀬でぐったりと倒れる男がはっきりと見えたわけではない。
ただ直感で聡はそれが将だと確信した。

聡は川に足を浸した。冷たいというよりは痛いような川の水。

川底の丸みのある石にローヒールの靴底をとられそうになりながら、
将のいる川の浅瀬に入っていった。

深さ２０センチぐらいのところに将は倒れていた。

「将！しっかり」

聡は力をふりしぼって将の体をひきずった。

が、足をとられて二人とも倒れた。水際といえるほど浅い場所だった。

聡は自分が濡れるのもかまわずにその場で横たわる将の顔をぴしゃぴしゃと叩いたが、将は呼吸していなかった。

暗い水銀灯とプレハブからもれたわずかな光の中浮き上がった将の顔は、

殴られた跡の色とりどりの鮮やかな痣が浮き上がっているものの、

不思議に青白かった。

その上に白い雪が舞い落ちる。

葬列の花を予感させるようなぞっとする美しさだった。

聡は死の予感に負けじ、と将の唇に自らの唇を押し当てた。

将の唇は氷のように冷たくなっていた。

聡は自分の息が将の肺へと届くのを祈り、熱い息を将の中へと吹き込んだ。

「将！将！しっかりして！」

呼びかけながら胸をマッサージして再び息を吹き込む。

何度か繰り返すうちに喉で

ごぼっ、と音がして、水が将の口から逆流した。

やっとあいた将の眼に、髪の毛に雪をくっつけた聡が映った。

「ア……キラ」

将は手を伸ばすと、聡の髪に手をやった。

「雪が……」

将は深く息を吸い込んで目をあけると、苦しそうにむせて水を吐き

出した。

「将……よかった、よかった……」

聡は安堵して、咽る将の背中をさすりながら泣いた。

そこへ、やっと井口とカイトが走ってきた。

「将！」

「大丈夫か」

二人はカイトのバイクに二人乗りしてやってきたのだ。

「センセーも無事？」将のそばにかがみこんだ井口が聡をふりかえった。

「私は大丈夫よ」

カイトが赤く点滅するサイレンを手に持っていた。

「覆面パトから前に盗んだヤツです。なんとかだませたらしーな」

にやっと笑って聡に差し出した。

「ありがとう……」

聡は二人に頭を下げると再び涙をこぼした。

そのとき雪雲の陰から月が顔を出した。雪がやみそうだった。

◇

ミニは井口が運転して、なんとか将をマンションに連れて帰ることができた。

長身の将は、同じくガタイがでかい井口と聡の2人がかりで運ぶのも大変だった。

将の体は、さっきとはうってかわって火のように熱くなっていた。さっきからのひどい状況で風邪が悪化したのだろう。意識が飛んでいるらしいが、息はしている。

救急車を呼ぶことを聡は提案したが、車の中で将自身が却下した。いろいろと面倒なことになるから、と。

「何だこれ。髪？」

リビングの入り口にちらばった黒髪を見て井口は言った。

「片付けてくれる、いえ、まず濡れた服を脱がすのを手伝って」

何度も川に投げ込まれた将は、全身びっしょりだ。

このままベッドにいれたらベッドもぐっしょりになってしまうだろう。

聡はソファにバスタオルを敷くとそこに将を寝かせて井口と二人で服を脱がせた。

脱がせながら乾いたタオルで水気をぬぐっていく。

部屋の暖房は最強にした。

濡れたシャツを脱がせた聡はハッとした。

将の背中にケロイドのような古い傷跡を見つけたからだ。傷跡は水でふやけて蛸のようになっている。

火傷だろうか。もし火傷だとしたらかなりひどい傷だったはずだ。

聡は一瞬躊躇したが傷のあたりもそっと拭ってパジャマを手早く着せた。

将の体は湯気が出そうなほど熱くなっていて、意識がないままガタガタと震えていた。

「センセイ、パンツもびしょびしょなんだけど」

ジーンズと靴下を苦労して脱がせた井口が聡に伺いをたてた。

濡れたジーンズに包まれていた将の足は蛸人形の足のように白っぽくなっていて、

腰のまわりにはまだびしょびしょのトランクスがぴったりと貼り付いている。

聡は顔をそむけて「もちろん、脱がせて」と指示した。

「ええー。はずかしいんだけど」

「バカなこと言わないの。男同士でしょ」聡は強い調子で言った。

「やだよ。センセイやれよ。彼女なんだし、もう何度も見てんだろ」

井口はぷいっと横を向いたがニヤニヤして続けた。

「違うっ……！まだそういう関係じゃないっ」

聡は目をむいて否定した。

「あ、そ、『まだ』そういう関係じゃないんだぁ」

井口はピアス顔の目を三日月のようにニヤつかせた。

こんなことをしている間にも震えと熱が心配だ。

らちがあかないので、聡は仕方なく将のトランクスの腰の後ろに手を回してずり下ろした……。

「何してる」急に将の目が覚めた。

「ご、ごめん。下着まで濡れてたから、替えようと思って」

聡は将のトランクスからとびのいた。

「……自分でやる」

将はかすれた声で言うと、いったん脱がされかけたトランクスをずりあげて起き上がった。

いつもだったら聡には何か冗談の1つもいう将なのにそういう余裕もないようだ。

よろけて柱にもたれかかる。頭はボーっとしているようだ。

「大丈夫かよ?」

井口が肩を貸してなんとかふらつきながらもバスルームへ行った。

バスルームの脱衣所からは立て続けに激しい咳が聞こえてきた。

「で、見た?」

井口が再び目を三日月にして聡をのぞきこんだ。聡は顔を赤くした。

「見たんだ、見たんだー!」

「何コドモみたいに騒いでるの。これ片付けてっ」

聡は井口にリビングの入り口にちらばった髪を片付けさせた。

「あたし、1回着替えてくるから、井口くん、ちょっとここにいてね!1時間以内に戻るから。

将が出てきたら寝かせて、顔に氷をあててあげて!」

聡も実は下着を着けていないのが、そろそろ気になっていたのだ。

「ほいほいサー、……将、ね」

井口は、いつのまにか『将』と呼んでいる聡に気付いていた。なぜかほほえましく思っていた。

そして掃除機でちらばった黒髪を吸い取りながら、これは瑞樹の髪だ、と直感した。

40◆寝室1

タクシーをつかまえ、急いで家に帰った聡は、もう一度体を点検した。

あんな格好で倒れていたということは、意識を失っている間にレイプされてしまったかもしれないからだ。

自分でわかる限り、その痕跡はない――聡は少し安堵したが、何をされたかわかったもんじゃない、と寒気がして、あわててシャワーの栓を捻った。

「！」

シャワーからは冷水が出てきた。

いつもは蛇口でお湯に変わるのを確かめてからシャワーに切り替えるのに、あわてた今日はそれを忘れたのだ。

今日の冷え込みに蛇口の水は凍る寸前のように冷えていた。

その水の冷たさに、川の水の冷たさを……そして水に濡れた将がはっきりと蘇った。

ガラが最悪に悪い、不良どもに殴られ、川に放り投げられる恐ろしい光景と共に。

――たった一人で助けに来てくれたんだ。

来てくれなかったら今ごろ自分はどうなっていただろう？

それを想像すると、シャワーが温かい湯に変わっているのに聡は震えた。

手早くかつ念入りに体を洗うと、髪の毛を大雑把に乾かしながら携帯でタクシーを呼ぶ。

今、夜の１０時になるところだ。

生乾きの髪は１つにまとめ、Ｔシャツ、セーターにジーンズを身につけて無化粧でコートを再び羽織ると、ちょうど来たタクシーに乗り込む。

「センセー、将のやつ、すっげー熱出てる」

マンションに戻ってきた聡を出迎えた井口は、開口一番、そのピアス顔を心配そうにゆがめて将の容態を伝えた。

寝室で将は赤い顔をして目を閉じていた。あいかわらず殴られたアザが痛々しい。

額に汗を浮かべ、苦しそうに口で息をしている。

聡は将の額にそっと手を乗せた。

今まで何度か同じ行為をした中で一番ーーーすぐに手を引っ込めたくなるような熱さだった。

若い男があまり熱を出すのはいけない、というのを聡は思い出した。

「保冷材ある？」

「あるけど、あっという間に溶けたから今冷やしてる」

聡は舌打ちした。うちから余分を持ってくればよかった。

「薬は飲んでた？」

井口は首を横に振った。

「シャワーから出てきたらすぐ寝た。いちおう枕の下に氷入れてるけど……」

ビニールに二重にくるまれた氷がタオルにくるまれて枕の下にある。意外に適切な処置だ。

でも、次の氷が固まるまでに溶けてしまうだろうと思って聡は、井口に1万円札を渡して

「これで氷と保冷材と製氷皿を買ってきて。氷はいっぱいいね」と頼んだ。

赴任直後の事件や万引き未遂で捕まったことを考えると、この生徒にお金を渡すのはどう考えても無謀なのだが、今の井口は信頼できる気がした。

「わかった」

井口は神妙にうなづいて金を受け取ったが、次にニヤッと笑って

「な、ところでセンセイ、ホントに将とはエッチしてないの？」

と訊いてきた。聡はドキッとする。実はまさに昨日、この場所で、そうなってもいいと思っていたからだ。

「してるわけないでしょ！」

心にやましいところがある聡は、語気も激しく否定した。

「ふーん、そっかぁ。ずっと前から絶対デキてると思ったのになあ」

「バカなこといわないで早く買ってきて。あ、そうだ牛乳も買ってきて」

「で、チューはしてるんだろ？」

……ヤバ。聡はたじろいたが、

「……し、してないっ！だいたい、井口くんが想像するような関係じゃないですッ」

「ふーん、そー？」

いぶかしげな井口の目が笑っている。

「そうッ」

「でもさ将、センセーの名前寝言でずっと呼んでたしぃ。……じゃ、いってくる」

井口はガタイのよい体と金髪を揺らして、買い物に出て行った。

井口が出て行ったあと、聡は将の枕もとに戻った。

ベッドの脇にひざまづくと、乾いたタオルで額に浮かんだ大粒の汗をそっと押すようにぬぐう。

と、将の瞼が静かに開いた。

「アキラ……」

声がかすれている。起きたとたんに苦しげな咳が吐き出された。

「ごめん、起こした？」

「あんな大声、誰だって起きるよ……」

咳を挟みながら、将は苦しげに明るい声を出そうと努めている。

「ごめん。……ねえ、薬飲まない？」

聡は水薬を持ってきた。昨日病院でもらったものだ。

「ウソは……いけないよ」

将は苦しい咳の下からつぶやいた。

「チュー、したじゃん、もう何度も」とアザだらけの顔で微笑んで見せると、布団の下から手を伸ばしてきた。

「俺、すっげー嬉しかったんだ、昨日」将は聡の髪をなでた。

「さっきだって……。アキラの……人工呼吸だから俺は生き返ったんだ……」

声はかすれ、唇を通る空気だけで、一生懸命言葉をつむぐ。

その間にもヒューヒューと苦しげな息がまざる。顔はますます赤くなり、汗が流れ落ちる。

「将……もういいから」

聡はその汗をぬぐった。目が熱くなるのをまたたきでこらえる。

「ねえ……、またやってよ……」

将は水薬を指差した。つまり、口うつしで飲ませてくれという意味に聡は少し躊躇した。

ほとんど忘れているけれど、今朝まで聡は将との関係を清算するつもりでいたのだ。

針でつつかなくては出てこないような隅にこびりついた、教師としての義務感がかろうじて聡をためらわせていた。

が、将は自分を命がけで助けてくれたのだ。

それに対する恩という大義名分のようなものが、将への聡の思いを正当化し、抗いがたいものにした。

義務感は大義名分にあっさりと負けた。

聡は甘ったるい水薬を口に含むと、将に上からのしかかるようにして自分の唇を将の唇に押し当てる。

将は、せまりくる聡の顔を見ながら、聡の背中に腕をまわした。

唇がふれあう瞬間、二人とも同時に目を閉じた。

将は音をたてて聡の唇から薬を吸った。

上半身は密着して聡の豊かな乳房はセーターごしに将の胸のあたりにふんわりと温かな弾力を与えた。

将の唇も口の中も切れていてかなり痛んだが、そんな痛みはどうということはない。

聡を守るために得た痛みは逆に勲章のような誇らしさを将に与えた。

……聡とのふれあいはモルヒネなのだ。すべての苦痛も忘れられるかわりに、もっともっとほしくなる。

将は薬を全部吸い尽くしたにもかかわらず、聡と舌をかわしていた。

唇から糸をひいて、聡が離れた。「口の中が傷だらけ」と。

甘い薬を将が飲んでしまうと、塩辛く、鉄臭い味が聡の舌に伝わった。聡は将の血の味が嫌だったわけじゃない。痛みを気遣ったのだ。

「いいんだ」将は聡をまた抱き寄せた。

「ダメ。もう寝なきゃ」聡はアザだらけの将の顔に向き直ると、汗で濡れた額に口づけをして布団をかけなおした。

「ずっとついてるから、寝なさい」

その言葉に将は安心して目を閉じた。

聡は正直なところ、博史のことも、義母のことも、そして自分が教師であることも忘れてしまっていた。

まもなく、井口が戻ってきた。彼なりに気を利かせて、サプリメントや、ドリンク剤、桃缶も買ってきていた。

「将寝てる?」と寝室をのぞく。

「うん。今薬を飲んだから」

「あっそー」と、なぜか井口は聡の顔をじーっと見た。

聡は再びドキっとした。まさか顔に『口移しで薬を飲ませました』とは書いてないだろうに。

聡は自分の顔がみるみる熱くなるのを感じて思わず顔をそらしてしまった。

井口はプッと吹き出した。

「センセー、中坊みたいだなー」

あーおかしーと笑い出す。

「邪魔だろうから、俺帰るわ」

「そんな、井口くん……」といいつつ聡は井口が泊まるといっても困るのだが。

ずかずかと玄関へ向かう井口を聡は追った。

「あの、どうもありがとうね、井口くん」

「こっちこそよぉー」靴を履いた井口は振り返った。

「まえにケーサツに捕まったのをガッコに言わないどいてくれてサンキュ」

ちょっと照れくさそうに体を揺らしてそっぽを向きながら、初めて聡に礼を言った。そのようすは案外可愛らしい。

「あ、そうだ、あとよ」

井口は体を揺らすのをやめて聡に向き直った。

「瑞樹のやつには気をつけたほうがいいぜ。あいつ、将をとられて、ブチ切れてるはずだから。センセーに」

聡は駅で瑞樹に話し掛けられたそのときに、薬をかがされたことを思い出した。

「なんで葉山さんが……」

「将の元セフレなんだ、あいつ」

「セフ……？」唐突だったので聡は一瞬意味をうまくとらえられなかったが、

井口が「セックスフレンドだよ」と言い直したので、さらに驚いた。

「もっとも瑞樹のほうは、そう割り切ってなさそうだったけどさぁ」

だとしたら、今回のことは瑞樹がたくらんだことなのか。

「今日も相当ヤバかったんだろ」

「……うん」

「あいつ、コワイ女だし、今回だけで諦めるとは思えないからサ。気をつけときー。じゃーね、センセー」

玄関のドアをあける井口の金髪が、吹き込む風で揺れた。外は寒そうだがそのまま出て行く。

「わかった。ありがとう」

聡はススキの中で迷子にされたように、心が揺れた。

瑞樹との関係に投影させられた、将の『男性』としての側面にとまどったのだ。

41◆寝室2

眠る将の額に浮かぶ汗をふき取りながら、聡は葉山瑞樹について思い出してみた。

休みが多い彼女だが、案外強い印象がある。

黒い長い髪を持ち、印象的な瞳を持っていた彼女はひょっとすると聡より美人かもしれない。

しかし、聡に対してつねに無視というか反抗的なムードを漂わせていた。

あの、将来についてのアンケートも提出してなかったはずだ。

彼女が、将と関係があった。『セフレ』として。

――何なんだろう、そのセフレというのは。

さして好きでもない相手と性欲処理のために寝る。聡には理解できなかった。

異物の侵入を許し、体の内部に体液をぶちまけられ、あまつさえもそれで出来たものを9ヶ月あまりも育てなくてはならない、

そんなリスクがつねにセックスという行為に伴う女という性。

少なくとも女性のほうは、多少は相手に好意がないと無理だ、と聡は思う。

だから、瑞樹が将のことを好きなんだろう、ということは井口に言われなくてもわかる。

おそらく、聡にあんなことを計画するほどまでに、激しく恋していたのだろう。

そして将は、そんな彼女を利用していたのだ、性欲処理に……。

聡は寝ている将が少し憎たらしく、汚らわしくなった。

――たかだか17歳のくせに、セフレって何よ。

「将のバカ」

聡は思わず口に出してしまって、自分の声に驚く。

幸い将は、声に起きることもなく、口をあけて眠り続けている。

聡は罪滅ぼしのように、再び将の汗をぬぐった。

もう17だ、同じ学年のガールフレンドがいるくらい、当たり前だ、驚くこともない。

自分に言い聞かせる。が、聡の心はよじれていく。

――いくつから女を知っているのか、今までに何人と関係があるのか。

こんなこと、博史のときには思わなかった。

過去の女を思わせる行動の端々に嫉妬したこともある。

が、聡より8歳も年上の博史が女性経験が豊富なのは、年をとれば皺が出来るように自然なことだと思っていた。

だが逆に9歳近く年下で10代の将が、すでに清らかでないという証拠を目の前にたたきつけられた今、心が激しくざわめく。

もちろん童貞だなんて絶対思ってなかったけれど。だけど『セフレ』がいたという事実は嫌だ、許せない。

そして、聡は気が付く。

こんな嫌悪感を抱かずにいられないほど、将のことを愛してしまっている自分に。

将の額に再び手をかざす。まだ熱いが薬を飲んだせいか、少しましになっている。

枕の氷が溶けているのに気付き、キッチンへ替えの氷をとりにいった聡は、カウンターの上に置かれた包みに気がつく。

水分を含んでふにゃふにゃになった水色の包みには、やはり濡れてしおれた紺のリボンが掛かっている。

そして”Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ”　と印刷された二つ折の

カードがこれまた水分でよれてリボンに引っ掛かっている。
包みを開けると、可愛らしいペアのマグカップが入っていた。
聡は、カードを手に取って開けた。
見覚えのある将の字があった。

２６才おめでとう、聡。
宇宙一愛する聡が、世に生まれ出たこの日に感謝！
月並みだけど、聡は僕の太陽だ（照れるぜ）
聡と昨日みたいに何度でもＫＩＳＳしたい。

聡がいてこその将

店のマーカーで急いで書いたと思われるやや雑な将の字。
ブルーのインクは包み同様濡れたのか、にじんでいる。その上に新たに雫が落ちた。
聡はもはや、目からほとばしり落ちるものを止めることはできない。

真面目に書いたと思われるクサい文言だけでなく、命がけで自分を守った将の愛情が心に迫った。

愛されている。これ以上ないほどに。何を嫌悪することがあったのか。

幸せなのに、せつなくて、涙はつぎつぎと湧き出してくる。

制御できない感情があふれだすように、涙が止まらない。

聡は顔を覆って、むせび泣いた。

◇

聡は深夜から翌日にかけて精力的に将の看病をした。

口の中を切っていて、かつ気管支が炎症を起こして痛い将のために、ポタージュやジュースをつくり、薬を飲ませ、汗を拭き、氷を替える。

土日の2日間、聡が精力的に看病したおかげで、将の容態は落ち着きを見せはじめた。

気がつくと聡は将のベッドの端に肩から上を預けて眠っていた。

もう日曜の日はすっかり落ちて、再び夜になっている。

スタンドをつけて、眠っている将を見ると、アザは残るものの顔の腫れはだいたい引いた。

聡は将の額に手を置いた。

熱はかなり下がったが、着ているものが汗で湿っている。

聡の手で将は目が覚めた。

「……アキラ」

声はあいかわらずかすれ気味だが、目は透明だ。まっすぐ聡のほうを見ている。

「あ、起きた？ちょうどよかった、着替えようか」

うなづく将の体を起こすのを手伝って、替えのTシャツをバスルームから持ってくると、将は自分でパジャマの上を脱いで上半身裸になていた。

「ちょっとまって」

聡は暖房を再び強くすると、給湯器の熱いお湯でタオルを湿らせたものをいくつか持ってきた。

「汗で気持ち悪いでしょ。ちょっとだけでも拭いたら違うから」

そういうと聡は将の裸の上半身をタオルで拭き始めた。すこしドキドキする。

贅肉というものがついていない、流れるような筋肉に覆われた将の裸。

がっしりとした肩や、筋張った首筋、関節など、汗をかいていそうなところを先に拭く。

「くすぐったいよ、自分でやるよ」

我慢していた将だが、ついに笑い出す。将はタオルを聡から受け取り、自分で脇の下を拭いた。

脇も体毛もそれほど濃くない。

――体毛が濃くない人は、性欲も薄いんだっけ？

聡は変なことを思い出した自分に少し恥じ入った。

まだ『セフレ』という単語がひっかかっているらしい。

「じゃあ、背中を拭くね」

といった聡は背中を拭こうとして、あの傷跡を目にして、動きを止めた。

「……アキラ？」

「あ、ううん。なんでもない」

「ヤケドのあとだろ」

聡はうなづいた。聞いちゃいけない気がしたが、黙ってるのも不自然なので、何気なく聞いた。

「どうして、ヤケドしたの？」

将は静かに目を伏せるように答えた。

「俺んち、昔、爆破されたんだ。そんときの傷」

42◆寝室3

小1の終わりに実母を亡くした将は、父が当選したばかりで忙しかったこともあり、父方、母方の里それぞれに預けられた。

将が小3になって家に戻ると、そこには新しい母がいた。それが今の義母である。

良家の子女で、きちんと礼儀正しい義母は、前妻の子供である将のことも、とても可愛がった。

まだお母さんが恋しい年頃で、かつ素直な性格の将は、ひねくれもせず義母になついた。

しかし義母との蜜月は孝太の誕生で終焉を迎える。将が１０歳のときだった。

義母は手が掛かる初めての乳児の世話にかかりきりになり、将は寂しくなった。

だが、孝太の面倒をみれば義母が喜んでくれる、と将は時に友達と遊ぶのを断って孝太を可愛がった。

義母の愛情が欲しいばかりに、孝太に愛情を必死で注いだのである。

言葉もわからない孝太に、将は一生懸命に本を読んでやり、話し掛けた。

そのせいか、孝太は早い段階で人の言葉がわかるようになっていた。

そんな孝太が初めて話した2語の言葉が「おにいちゃ、大丈夫?」である。

「孝太はお兄ちゃん子ね」そんな義母の言葉を将はどんなに嬉しく思っただろう。

そして勉強はもとより、スポーツも武道も頑張った。

小5からは私立の有名中学に入るために努力をし、実際、塾や学校では『神童』『天才』の評判がついた。

それらは何もかも義母に「えらいわ、将」と言われたいが為だった。

あの日まで、将は愛情を得るために多少の努力をしている、と感じるだけで、おおむね幸せだったのだ……。

将が12歳のあの日まで……。

ところで将の父方の家は、代々政治家の家系である。

将の父は現官房長官、祖父は各閣僚を経験している。

将が12歳だったときに閣僚入りしていた祖父は、アメリカとの外交を重視し、

アジア諸国、ことC国に対して日本は強硬な立場をとるべきである、と明言して近隣諸国から嫌われていた。

そして、将が中学受験を控えた１２月に、あの事件が起こる。

将の一家の住む家が爆破されたのだ。

犯人は、Ｃ国の過激派が有力視されているが、いまだにわからない。

それは、一家が寝静まる夜に行われた。

家はあっという間に瓦礫の山になり、将といえば、柱の下敷きになっていた。

幸い壊れた机などがつっかえ棒になり、背骨を傷つけるまではなかったが、どうしても抜け出せない。

同じ部屋に寝ていた２歳の孝太は無事だったが、将がはさまれているのを見ると、その小さな手で一生懸命引っ張り出そうとした。

「おにいちゃ、大丈夫？」

「孝太……」

将は必死で体をひっぱりだそうとしたが、足先が何かに引っ掛かっていてどうしても抜けない。

そうこうしているうちに、火の手が迫っているらしい。

まず、足先に異様な熱さを感じた。だがそのうちに、足よりも先に、頭の上が明るくなった。

火の手は上から襲って来たのだ。煙にまかれる。将はパジャマの袖を鼻と口にあてた。

火の粉がパチパチと音をたてて舞う。

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」孝太はそれにもひるまず、煙に咳き込みながらも将を引っ張り出そうとする。

その火の粉が孝太の頬にかかった。

とたんに泣き喚く孝太。その声に呼ばれたのか、義母が現れた。将は少し安堵した。

「孝太！」

義母は頬に火傷を負った孝太を抱き上げた。

「助けて……助けて、おかあさん」

将も助けてもらえるのだろう、と手を伸ばして義母に助けを求めた。

しばらく義母は将を見下ろしていた。無表情に見えた。

ガウン姿なのに、口紅をつけている――そういえば義母が素顔で表に出るのを見たことがない。外に出るときは必ず化粧を欠かさない女だった。

そのとき将を押さえつける柱に火が燃え移った。空気が乾燥していたせいか、パチパチと炎をあげはじめる。

その炎が義母の瞳に反射したそのとき、義母は将に背中を向けて、次の瞬間走り去った。

――自分を見捨てるのか。

「お兄ちゃあーん！お兄ちゃあーん！やだやだ！お兄ちゃんも助けてよおお……」

義母に抱かれた孝太だけがいつまでも泣いていた。

それすらも遠ざかり、将は絶望した。

せまりくる『死』に対してというより、自分は義母に対して必要のない子供だったのだ、ということが将を気絶させた……。

「たぶん、気を失ってすぐに消防が来たと思うんだ。背中からお尻の火傷は部分的に3度っていうのかな？
になってて、何度も自分の皮膚を植えて、3ヶ月も入院したんだ」

将はパジャマのズボンを下ろすと、片膝を上げて、腿の裏を指差した。

「ここから皮膚を持ってきてね」

と説明したそこは火傷ほどではないが、少しえぐれたような傷跡がかすかにあった。

「……もちろん中学受験はパー。その後、グレたってわけ。単純だ

ろ」

将は聡の顔を見て微笑んだが、聡は絶句するしかなかった。

「あ、アキラさあ、また勝手にパンツ脱がすなよ。恥かしいじゃんか」

将は明るくふるまおうとする。

聡は、上半身裸のままの将を思わず抱きしめた。

「アキラ？」

聡は何もいわずに将の肩をぎゅっと抱きしめると、顔をその胸に埋めた。

胸に温かいものが流れ落ちるのを、将は感じた。聡が泣いているのだ。

「アキラ、泣くなよ」

といいつつ、聡は自分のかわりに泣いてくれているのだ、とわかった。

将は、あのヤケドの治療中、どんなに痛くても泣かなかった。

泣けなかったのである。

泣いたところで、自分を本気で心配するヤツなんて一人もいない。

だから無駄な涙は流さない。

と、あの事件をきっかけに、将は自分の心の柔らかいところから湧き起こる感情のすべてを封印することにしたのだ。

将は、聡に会うまで、人のぬくもりをわざと避けて暮らしていたようなところがある。

――否、たった一人の親友がいた。しかし、親友は将の罪を被って、檻の中にいる。

もう二度と会えないだろう。

親友が捕われの身となり、将の心は再び冷たい闇の中に沈んでいた。闇に沈みながらも、将の本心は太陽を求めていた。だから毎日夕陽を見にドライブを続けていたのだろう。

そして将の心を温かく明るく照らしたのが、聡だった。

素直さや優しさ、自分の才能を信じること、一途に努力をすることなど、本当は将が持っていた善きものの全ては、聡との出逢いによって再び育くまれだしたのだ。

そういう意味で、聡は将のすべてで、将は聡のものだった。

聡を愛し始めてから、将は生まれなおしたようなものなのだ。

イブは、アダムの肋骨から生まれた、というが逆に、将は聡の何かから生まれたことになっても納得できる。

将がくしゃみをして、聡は我に返った。

「ごめん」と将から離れる。

「いいよ。俺のかわりに泣いてくれたんだろ」

将は聡の髪をくしゃと混ぜた。まだベソをかいている。そういう顔は、年上なのに幼女のように見える。

将は聡から差し出されたTシャツを着て、薬を飲むと再びベッドに横たわった。

「今日は帰るね」もう大丈夫と判断した聡は将に告げた。

「ええっ、何でー。今日も泊まっていけよ」将は抗議の声をあげた。

「明日学校だし。実は超眠いんだ……」

聡は本当に眠かった。金曜は将の枕辺、土曜はソファーで仮眠とほとんど寝てないのだ。

それで、さっきまで居眠りしていたというのもある。

「明日、勤労感謝の日だぜー？」

「え、ウソ」聡はカレンダーを見る。

「ホントだ……」いろいろあってすっかり3連休というのが頭から抜けてしまっていた。

「だから、ここで寝ろよ、ほら」

将はベッドの上で布団をあけた。広いセミダブルだから成人二人でも狭くはない。

「ええー」

「ほらあ。なんにもしないからぁ」将はベッドの片側に寄ると甘えた声を出した。

その言葉を信じたわけじゃないが、聡はまあいいか、とベッドに腰掛けた。

さっきのことで人肌が恋しくなっているのかもしれない。

「ジーンズのまま布団に入る気？」

「んもう」

聡は、立ち上がるとスタンドを消してあたりを闇にすると、ジーンズとセーターを脱いだ。

Tシャツと下着だけになると、暗がりで将が布団をあけて待っているところにもぐりこんだ。

43◆寝室4

「これだけ離れれば問題ないだろ」

将は聡から見てセミダブルベッドの反対側の端に寄った。

それでも、手を伸ばせば届く距離に二人は並んで横たわっている。

コンポの星々を眺めながら、聡は疲れているはずなのに、目が冴えていくのを感じた。

心臓の音が暗闇の中に空気も震わすほどよく聞こえる。

目が慣れると、将の体が横たわっている影がよく見える。

将は眠ったのだろうか、沈黙している。数分たって、聡はのしかかる静けさに耐えられず声を出した。

「……寝ちゃった？」

「起きてるよ」

かすれた将の声がして、聡は安心したのか、自分の心境を素直に吐露する。

「なんか……やっぱキンチョーするかも」

「なーんで」

こちらを振り向く将が立てる布団の音と、あいかわらずかすれた将の声。

さっき話しすぎて、治りかけた喉を痛めたのだろうか。

「だってサ……」

暗闇の中、こちらを向いた将の視線を感じて聡の胸は息苦しいばかりに振動した。

「アキラ、やっぱ俺のこと、好きなんだろ?」

「……」

また、将は返答に詰まる問いかけをしてきた。聡の心臓どころか、体中の脈がドクンドクンと音を立て始める。

なんで、将は答えられない質問ばかりするんだろうか。わかっているくせに。

「そうなんだろ?」

その声と同時に、将の手が聡の体に伸びてきた。

そして、聡の体を、ベッドの中で不意にきつく抱きしめた。

聡は将の匂いを強く感じた。聡の鼻先にある彼の首筋からは、風呂に入っていないせいか、男性の香りが強く香ってくる。

しかしそれは嫌な匂いではなかった。逆に聡の中の『女』を強く目

覚めさせるような香りだった。

将の匂いと、きつく聡の体を抱きしめる腕の感触、そして熱い体温。

すべてがむせるような将の実体となって聡を襲う。

聡はあせった。

「ちょっと、何もしないって言わなかった?」

「何もしてないよ。ダッコしてるだけ」

聡は、体中が熱くなるのを感じた。

本能を制御するどこかが溶けて、それが下腹部の奥から液体となって流れ出すのがわかる。

体中が心臓になったように脈打っている……と思ったら、実はそれは将から伝わる音だった。

聡を抱きしめる将も同じように、強い鼓動に翻弄されているのだ。

理性が溶けた聡は抵抗することすら思いつかず、そのままに任せていた。

もう、どうなってもいい――諦めと願いの境界は、聡自身でもわからなくなっている。

そして将は聡の髪に顔を埋めながら、さらに腕に力を込める。華奢な肩がきしむようだ。

自分の腕を聡の背中で交差させて、より彼女の体を自分に密着させようとする。

ひんやりとした、聡の上腕。

滑らかで柔らかい皮膚に覆われているが、それは将が親指と人差し指でつくった輪の中にすっぽり収まる細さだ。

腕だけでなく体中の骨が簡単に折れそうな細さなのだ。

将は、子供の頃に買ってもらったヒヨコを思い出した。両手で大事に包むように握る。

温かくほわほわの体は、慎重に扱わないとつぶれてしまいそうだった。

腕の中の聡もそんな感じだ。

聡はといえば、そんなふうに撫でられるだけで、背筋がぞくぞくするような感覚を感じていた。

将に触れている全身が、性感帯になったような危うさを聡は感じながら、聡は将の腕から逃れられない。

聡も無意識のうちに、将の背中に手を回していた。

二人はしばらく、お互いの鼓動を感じながらそのまま抱き合っていた。

どれくらい時がたっただろう。

狂おしいほどの本能は、優しく穏やかな体温にいつしか溶けていった。興奮は安らぎへと変貌を遂げていった。

「将……」

聡は将の首筋に顔をうずめながら囁いてみた。

将は聡を抱きしめたまま無言だった。

聡は熱い体温に抱きしめられたままの状態で、暗闇の中で将の顔を見た。

将は眠っていた。暗い中に将の幸せそうな顔が見える気がした。

――将ってば。

聡はふっと微笑むと、将の胸に顔をうずめた。ゆっくりと打つ、将の鼓動に耳を傾けた。

鼓動を１００も数えないうちに、聡も眠りに落ちていった。

◇

遮光カーテンの細い隙間から朝日が漏れて、将の瞼の血の色を赤く

透けさせている。

なんだか体が温かい。おそるおそる目をあけた将の目の前には……。

茶色がかった女の髪の毛――忘れていた将だが、瞬時にそれが聡だとわかった。聡の腕が自分の体に巻きついている。

一瞬びっくりするが、ゆうべの記憶はすぐにフラッシュバックし、将は幸せな気分になった。

朝の光の中で、聡を抱いている。

こんなに幸せで安らいで、それでいてわくわくする朝を過ごしたことがあるだろうか？

聡を愛したときから、将にとって女は世界に彼女一人きりになった。

まだ、男女として交わったわけではないが、その聡と抱き合って眠った。

将は幸せのあまり目が熱くなるのをこらえて、聡の髪を撫でた。

「…んん……」

すると、聡は寝ぼけたのか、よけいにギュッと将を抱きしめてくる。

すると将の腹のあたりで聡のふくよかな胸が柔らかく密着した。

――ヤバ。

その刺激でもう一人の将が、いきなり起きてしまった。

「アキラ、アキラ」

聡の耳もとで将は小声で囁いた。

「うん……？」

聡はようやく目が覚まし、将の顔を見上げた。顔がピンク色に紅潮し、半開きの目は黒目がちに潤んでいかにも眠そうだ。

「……将？」

「アキラ、あんまり胸くっつけんなよ。俺、ヤバイ」

「あ」

次の瞬間、聡の顔がはっきりした。お腹にあたるものは……。

聡は一瞬顔を赤くしたが、イタズラっぽい顔で微笑むと、

「すっかり元気じゃん」

と将のおでこをこづいて、さっと起き上がり、ベッドを降りた。

将は聡のむきだしの脚を一瞬目にし、しばらくベッドから起き上がれなかった。

◇

高い熱は下がり、容態がある程度落ち着いた将だが、喉の腫れはなかなか引かなかった。

声もずっとかすれたままだった。

口を開けると、喉の奥に大きな潰瘍状の患部の一部が見えた。

あまりに喉が腫れたので、それが化膿したのである。

月曜日の夜までなんやかやと世話をする聡に、将は

「ハスキーヴォイスがセクシーだろ」などと冗談を言って強がったが夕食に聡が柔らかめに作ったリゾットも

「美味しい」と喜びつつ、顔をしかめて食べている。

喉を通るときに相当痛むらしいのだ。

プリンや茶碗蒸し、ゼリーに葛湯といった柔らかいものでさえヒイヒイいいながらようやく喉に通している。

聡が心配だからと、将は翌火曜日から学校に行きたがったが、これでは無理だった。

すると将は、井口に電話をして『前原のやつを聡に近づけないでくれ』と念を押した。

しかし、火曜日に学校に行った聡は、朝の職員会議で前原茂樹の退学処分を知った。

前原は麻薬所持で警察に捕まったのである。

44◆スキャンダル1

前原らは将を半殺しにした後、さらにカップル狩りをしようとし、通報され警察に捕まった。

そして覚醒剤反応が出て一一一ということだ。

いちおう彼の担任である聡は教頭に、職員会議後、校長室に来るようにと言われた。

「今回のことは、古城先生に責任はない、と我々は認識しています」

と校長はデスクの上で手を組んで言った。

学校側はもちろん、聡が前原らに拉致されて、あわや輪姦寸前だったことなど知る由もない。

それどころか、それを助けようとした将が川に投げ込まれ、殺されかけたことも知らないはずだ。

「ただ……、どうだろう。古城先生は生徒に甘くないですか？」

と教頭が聡を見下した目で言う。

聡は顔を上げて教頭の顔を見る。

教頭と一瞬目が合うが教頭はそれをつい、とそらして続ける。

「型破りな英語の授業といい、社会見学といい。生徒の人気取りも

いいが、もっと厳しく指導していただかないと……」

一一一人気とり？

聡はむっとして教頭をにらみつけた。

「お言葉ですが、私はそれらの指導計画については、きちんと教頭先生と校長先生に提出しました。お二人が許可なさったから、実行したまでです」

校長は広げた両手を机の上でぷるぷると震わせて

「いや、何も、それがいけないと言ってるんじゃないんですよ。ただもう少し厳しく指導すべきだと……」

「そうです。一部生徒ばかりに愛情を注ぐのではなく……ね」

教頭は少し粘りつくような目で聡を見た。

聡はそれが将のことを示しているのだ、とわかった。

「それはどういう意味でしょうか」

聡は、キッと教頭を見た。

「さあ……それは先生が一番ご存知のはず」教頭はそっぽを向いた。

校長はそれをとりなすように、

「とにかく、2年生は緩みやすい時期ですので、古城先生は厳しく

指導するように心がけてください。

あと英語の授業については、あさって木曜日に行われる、大学進学志望者への模擬試験の結果で是非を問うということでいかがでしょうか」

あさって。早すぎる。

ようやく、皆英語に親しみ始めたところなのだ。

親しんで、興味を持ち、学ぶ、というステップがあるのに、今の段階で是非を問うとは。

「ちょっと待って下さい」と聡が言う前に、教頭が

「そうしましょう。それで行きましょう」

と声を高くして賛同したので、聡は口を挟む余地を与えられなかった。

◇

前原の退学はあっという間にクラス中に伝わった。

もっとも、最近休みも多く、言動もキレがちだった前原に同情する意見はほとんどなく

「あー、やっぱりぃ？」

という感想を皆で述べあうと、ほとんど平常に戻った。

「センセー」

朝のＨＲのあと、廊下で井口が声をかけてきた。

「将、やっぱまだ悪いの？」

「喉が化膿しちゃってるの」と聡はうなづいた。

「あそー。今日、俺行ってもいいかなぁ」

「別に私に聞かなくてもいいわよ」

「じゃ、いく。センセーも行くんだろ」

聡はあたりを見回して、他の教師が誰もいないのを確認すると、無言でうなづいた。

将から、今日も絶対に来るようにと約束させられているのだ。

補習と雑用を済ませた聡が将のマンションのインターフォンを押したのは夜の7時をまわっていた。

奥からドドドと走ってくる音が聞こえると同時に、玄関のドアが開き、聡はパジャマ姿の将にいきなり抱きしめられた。

「おかえり、アキラ。超待ってた」

「ちょ、ちょっと」

聡は仕事モードがまだ抜けてなく、将のそんな行動が照れくさい。

リビングにいる井口が、こっちを見ているのが将の肩越しにわかった。

井口はまた目を三日月にしてニヤッと笑うと、会釈をした。

聡はどう反応していいかわからなかった。

「そっか、前原は退学になったんだ……」と将。少し安堵したように見える。

将、井口、聡で夕食のテーブルを囲んでいる。

井口と聡は弁当だが、将だけ喉に柔らかい豆乳入りのおかゆを聡につくってもらっている。

いちおう将も食べられる豆腐の味噌汁を手早く作って加えた。

「カクセー剤のほかにも、あいつ余罪いっぱいあるから、しばらくカンベツ間違いなしだぜ」

井口が食べながらピアスを揺らす。

「で、瑞樹は」

将が井口に訊くのをみて、聡はドキッとした。セフレという単語が再び蘇る。

「休み。あいつずっと休んでるよな、センセー」

聡はだまってうなづくと、将の目をじっと見た。

しかし、聡が何を思って将を見つめたのか、将はわかっていないように

「なんだよ、アキラ」と微笑んだ。

「あ、将、センセー大変なんだぜ」

と井口が新しい話題に持っていく。

「あさっての模擬試験の成績が悪かったら、英語、元の教科書に戻るんだよな?」

食べ終わった井口は金髪に手をやって伸びをした。

「……なんでそんなこと知ってるの」

聡は井口に訊き返す。

「校長室立ち聞きしたんでーす。みんな知ってるぜ」

井口は悪びれもせずに答えた。

「マジ？」将は聡に訊いた。聡はうなづくしかない。

将はいきなり立ち上がった。

「俺、今から勉強するから」

◇

将は翌水曜日まで休んだが、木曜日には無理して登校し、模擬試験を受けた。

聡も試験監督をやったが、治りがけの、痰がからんだ咳を繰り返しつつ試験を受ける将は苦しげだった。

この日は試験があったので、補習もなく、聡は１７時３０分には学校を後にすることが出来た。

すっかり暗くなった道を足早に歩く聡は、ふいに背中を叩かれた。

反射的に叫び声が出そうになる聡は口に手をあてられた。

振り返ると制服の上にダッフルを着た将がいた。

「もう、なによ～」聡はへなへなと力が抜けた。

「保健室で寝て待ってた。今日も来てくれるんだろ、一緒に帰ろう

ぜ」

「もー……」

といいつつ、本当に体調が悪くなったのかもしれない、と思いなおし

「喉はどう?」と訊いた。

「うん。まあボチボチ」明るく答えた声音からは特に悪化したわけでもなさそうだ。

「試験はどうだった?」

「うん。まあボチボチ」今度は、ちょっと自信なげの声になった。

「志望校はどこを書いたの?」

「東大、ワセダ、ケイオー」

「バカ……」

聡は絶句した。無謀にも程がある。9月まで中学の復習をやりなおしていた将である。

「大丈夫だよ。俺めっちゃ勉強したし。それに、博史に絶対負けたくないんだもん」

その名前をひさしぶりに聞く気がした。エンゲージリングをもらっている婚約者なのに、すっかり忘れていた。

聡は薬指に重みを感じてだまりこんだ。

でも、婚約者に義理立てして『ここで帰る』などとは言わない。聡は将と並んで歩くことを無意識に選んだ。

そのまま二人、しばらくだまって歩いた。

「……あれ?」先に声を発したのは聡だった。

見上げたマンションの、誰もいないはずの将の部屋に明かりがついている。

「電気ついてるよ?」聡の指摘に将も見上げる。

「あ、ホントだー。つけっぱだったかな?」

将は簡単に納得すると、そのまま何も疑いもせずマンションのエントランスをくぐった。

後ろに聡も続く。

鍵を開けて部屋に入ると、灯りのついたリビングのソファに座っていた男が立ち上がった。

聡はその、きちんとスーツを着た身なりのいい中年男性をどこかで見たと思った。

「オヤジ……」将はつぶやいた。それは父、鷹枝康三だった。

康三は、開いたリビングのドアに将を見つけると大またで近寄り、

右手を振り上げた。

次の瞬間『バシッ』という大きな音が響いた。

殴られた将は赤くなった左頬を押さえてリビングに倒れた。

聡は口を手で覆って立ち尽くすしかできない。

「何だ、これは！」

康三は倒れた将の前の床に週刊誌を叩きつけた。

45◆27～44話あらすじ◆

＜27話～44話のあらすじ＞

将への思いが強まっていく聡。

教師と結婚した高校時代の同級生が、在学中から深い仲だったことに不快感を感じたことなどを思い出して悩む。

将は1週間後にせまった聡の誕生日に一緒にすごそうと提案する（27話）

将は、追い出したかつてのセフレ・瑞樹がチンピラにからまれているところを助ける。

瑞樹は「家に置いて」と将にすがるが、将は拒む。一方聡のもとに、婚約者の博史からダイヤのエンゲージリングが届いていた（28～29話）

瑞樹を拒んだ良心の呵責に苦しむ将は風邪をひいてしまう。

聡は将を病院へ連れて行き、なりゆきで彼のマンションで夕食をつくることに。

将は、聡への思いが我慢できなくなり、暗い寝室でとうとう聡を押し倒してしまう。聡は将に深い口づけをする（30～32話）

が、ちょうどそのとき、寝室に将の義母が入ってきて、二人の姿を目撃する。

なじられる聡は将のことをあきらめる決意をする。

将は義母をマンションから追い出し、聡とのことを学校や父にいったら殺すと脅す（３３話）

聡の誕生日。将は風邪を押して聡との待ち合わせに出かける。しかし時間を過ぎても聡は来ず、連絡もとれない。

そこへ井口から聡が前原らに拉致されたという知らせが入る（３４～３５話）

聡の拉致は、将を取られて聡を恨む瑞樹と同じく将を恨む前原のしわざだった。

彼らは薬をかがせて意識不明にした聡を川沿いの飯場へ連れ込み数人の不良に輪姦させようとしている。

その企みを知った将は瑞樹をだまして呼び出し、聡の行方を聞き出そうとする。

絶対口を割ろうとしない瑞樹に将は彼女の髪を短く切ってしまう。

さらに恨みを深めた瑞樹は、週刊誌の記者に連絡をとる（３６～３７話）

意識不明のまま、あわや一人目、というところで将が飯場にかけこんでくる。

将は不良らを飯場の外へと出し聡を守るが、多勢に無勢、おまけに風邪をひいているとあり、すぐにやられてしまう。

不良は将を氷のような川に投げ込む（３８話）

聡は目を覚まして、将が川に何度も投げ込まれ、覚醒剤で狂気の前原に殺されそうになっているのを目撃する。

かけつけた井口らがサイレンを鳴らして不良らは退散するが、将は頭を水中に押さえられ息をしていない。

聡は将に人工呼吸をし、目覚めさせる（３９話）

風邪が悪化した将を、聡は休日返上で看病する。井口は「瑞樹に気をつけろ」と聡に忠告する。

瑞樹が将のセフレだったと聞いた聡は将を不潔だと思う。

が、誕生プレゼントに書かれた将のメッセージを見て許そうと思う。（４０～４１話）

病状が落ち着いた将に、聡は背中の火傷についての過去を聞く。

それは、５年前将の家が爆破されたときのものだった。

それまで優しかった義母は、柱にはさまれた将を置いて、実子の孝太だけを連れて逃げたのだという。

聡は将のつらい過去を思い、涙する。二人は抱き合って眠る（４２～４３話）

連休後も風邪は長引いた。出勤した聡は、前原が覚醒剤所持で逮捕され、退学処分になったことを聞く。

そのことで「指導が甘いのでは」と責められ、模擬試験の成績次第で独自の授業方法を元に戻すように言われてしまう。

風邪をおして模擬試験を受けた将が部屋に帰ると、そこには父・鷹枝康三がいた。

父は将をいきなり殴りつけると週刊誌を叩きつける（４４話）

46◆スキャンダル2

「なぜこうやって問題ばかり起こすんだ！」

康三は倒れた将に向かって怒鳴った。

テレビでおなじみのおだやかな官房長官と同一人物とは思えない激昂ぶりだった。

将は、目の前に叩きつけられた週刊誌を見ようともせず、父親を睨みつけた。

叩かれた衝撃で誘発されたのか、咳をしながら。

「お前を日本に置いておいたのが間違いだった……」

聡は将に駆け寄りたいのをかろうじて押さえて立ち尽くしていた。

将の保護者の前で『単なる教師』のふるまいを保つゆえに。

そんな自分を……愛情より立場で行動を選んでいる自分を、聡は汚いと自覚している。

「近々、お前は外国にやることにするからそのつもりでいろ」

康三は将に言い捨てると踵を返した。リビングの入り口に突っ立っていた聡を見つけると

渋面のまま、いちおう会釈をしたが、言葉をかわすこともなく玄関

へ去っていった。

玄関のドアが閉まる音がして、聡はようやく将へと近寄ることが出来た。

「……大丈夫？」

「心配するな。いつものことだ」

将は咳をしながらも立ち上がった。

「……自分の立場だけでヒトのこと殴りやがる。どうせ俺のことで、何か自分に不利なことでも書かれたんだろ」

聡は週刊誌を拾って中を見た。明日都内発売のものを康三はいち早く手に入れたらしい。

憎憎しげに頁を折ってあったのですぐ該当の記事がわかった。

『スクープ！次期総理候補・鷹枝康三の長男（17）のすさんだ（暴力・オンナ・ドラッグ……）青春』

というタイトルの記事は2Pにわたる大きめのものだった。

タイトルにからめて（教育改革推進論者・自分の子はいったい……？）と茶化した見出しが差し込まれている。

写真は、将が写っているものは2点だけで、他はたむろする若者とか、コギャルとか合コンのようすなどの資料写真のようだが、

それだけ見るといかにも将がそういう世界に生きているように見えてしまうレイアウトだった。

将の写真は、１つめは学校のファイルにある証明写真だ。いちおう目のところに黒いラインが引いてある。

「これ、中３のとき撮影したやつ」と将は特に気にする様子もなく言った。

もう１つはどこから狙っていたのか、先週聡が連れ込まれた飯場がある川原のようだ。

乱闘している不良は暗いせいか、どれが誰だかよくわからないが、いちおうどれも顔がモザイクになっている。

『早くも、××年（さ来年）の総裁選では出馬しないとの宣言が飛び出した大泉総理。

後釜候補として若手ながら有力視されているのが鷹枝康三官房長官（５１）だ。

議員キャリアはまだ１０年ながら大泉総理の改革路線を引き継ぐ者として注目を集めている。

中でも彼が強力に推進しているのが教育改革。

従来のゆとり教育を廃止し、職業教育と愛国心教育、教育への社会人参加と斬新な案をお持ちのようだが、ちょっと待った。

彼自身の教育手腕は、いったいいかがなものなのだろうか。

取材を進めるうちに、都内の高校に通う彼の長男、○○クン（仮名・17才）の、とんでもない模範ぶりが判明した。

取材中に彼のクラスメートである少年Aが婦女暴行未遂・麻薬所持で逮捕されたニュースが入ったが、

彼と親しかったとされる○○クンの行状も次々とつまびらかになっていった……』

このような書き出しで始まった記事は、将が日常的にオヤジ狩りをするなど、荒れた日常生活を送っている、

という記事を元仲間の少年Bや中学の担任の証言を交えて掲載してある。

前原が麻薬所持で捕まった事件についても触れ、『○○（将）もドラッグをやっていてもおかしくない』と少年Bの口を借りて疑惑を報じている。

「少年Bって誰だぁ？」

衝撃的な内容に聡は座ることを忘れて行を追ったが、将のほうは、まったく動じる様子がない。

疲れたのかソファに体を落とした。

さらに元彼女C子の証言として、

『一人暮らしの豪華マンションに女を連れ込んで乱交パーティをす

ることはしょっちゅう』だとある。

元彼女、の字面を見て、記事を垂れ込んだのが瑞樹だと将はわかった。

だが、いち女子高校生の垂れ込みだけでこんなに大きな記事にはなるまい。

おそらく、父・鷹枝康三と次期総理を争うライバルとされる年配の議員による、康三つぶしの力が働いたのだろう。

将はなんとなく予想した。

記事は『人様の子供の教育を論じる前に、自分の子供を何とかすべきなのでは?』と結んである。

息を飲んで真剣に誌面を追う聡に、将は

「こんなのでっちあげだから信じるなよ」

と声をかけた。

しかし『乱交パーティ』と『セフレ・瑞樹』が聡の中で結びついてしまい、聡の心は激しく動揺した。

聡は赴任したてのときに、暴行を受けそうになったときのことを思い出していた。

しかも、あのとき誰かが将に『一番最初にやっていい』と譲ってたような気がする。

つまり、そういう場面を何度も経験しているのだろう。聡はおぞけがした。

「でもここに書いてあることに、近いことはやってるんだよね……」

「やってないってば。だいたいオヤジ狩りが必要なほど金に困ってねえし。逆にオヤジ狩りを退治してるんだぜぇ」

「でも、それも暴力だよね……」

将は返答につまって、新しいでっちあげ箇所を指摘した。

「……ドラッグは嫌いだから、今はぜんぜんやんないし」

「今は？　嫌いってことは、やったことは、あるんだ」

聡はため息をついた。

「やったことあるといっても、合法のやつだよ！」

「合法って今はいわないでしょ。脱法でしょ」

「でもカクセー剤なんかやったこともねーよ！」

「そんなの、あたりまえでしょ！それに……ここで乱交パーティって」

「俺は参加してない」本当は聡と知り合う前は、数回参加したこともあるのだが、それは口に出さなかった。

「これは何よ」聡は記事を指差して将に見せる。

『イケメンの彼は、何もしないでも女のほうから寄ってくるんです。連れ込んだ相手は中学生から３０代人妻までさまざまでした』

そこはC子談となっていた。

「こんなの、瑞樹がでっち上げたんだよ！」将は聡を見据えた。

「……じゃあ瑞樹さん、いや葉山さんとはどういう関係なのよ」

聡は下を向いたままつぶやいた。

「今はなんにもないよ……」

将はソファから立ち上がると聡の肩に手を置いた。

「元彼女なの？　井口くんはセフレだって言ってた……」

「もう関係ないよ。今はアキラだけだ……」

将は聡を抱きしめようとしたが聡はそれを拒んだ。

「セフレって何よ。好きでもないのに、できるの？　信じられない」

聡は哀しそうに目を伏せたままそっぽを向いた。

将は一瞬絶句した。

聡が現れる前の、混沌とした暗闇の中で自分がやったこと。

自分でもなんでそんなことをしたのかよくわからないことがいっぱいある。

自分でもそうなのだから聡に理解してもらうのは不可能だと将はわかっている。

「今は違う。今は違うんだ」

『今』は違うのだ、と将は必死で訴える。

聡は態度で将を拒みながら、将の過去の行いについて、理解しないわけではない。

12歳で愛に絶望し、すさんだ日常に落ちていった将。

ちょうど、『男』としての人生の始まりの頃をそんな環境で過ごせば。

体の中で活発に生産される欲望を吐き出すのに、身近に擦り寄る女がいれば、利用するのは当然だ。

頭ではわかっているのに、女としての気持ちが聡を拒否させていた。

「今はアキラ以外は何もいらないんだ……」

聡の肩に再びかけられた将の手を聡は冷たく振り払った。

「ごめん。今日は帰る」

「アキラ……」将の手は空で行き場をなくした。

そんな風に将のことを責められるほど自分も清らかではない。

いや、むしろ婚約者を裏切っている立場なのに、この態度はなんだろう。

聡は自己嫌悪を隠すように

「ゴハンはリゾットの残りが冷凍してあるから。それと今買ってきた卵豆腐を食べて」

とそっけなく伝えて、そのまま立ち去ろうとする。

そういえばコートも着たままだった。

「じゃあ……」

それでも帰る前に一瞬将を振り返る。……将は涙を流してこちらを見ていた。

47◆失踪1

将は流れ落ちる涙をぬぐいもせず、立ち尽くしていた。

聡はその悲しげな瞳に思わず立ち止まりたくなった。

しかし、聡の足は非情にも勝手に出口へと向かっていく。

ついにドアの向こうに聡の姿が消えてしまった。

「畜生！」

将は吼えると、残された雑誌を床に投げつけた。

雑誌の上に涙の粒がいくつも落ちた。

一方、拾ったタクシーの中でも、家にたどりついても、聡の心は千々に乱れていた。

最後に見た将の涙。

言葉は発しなかったけれど、行かないでくれという将の懇願は聡の心にダイレクトに伝わっていた。

前にもこんなことがあった。

寂しい将の生い立ちを知った聡は、将がどれだけ愛情を渇望してい

るか、あのときよりさらに知っているのに。

くだらない週刊誌の記事に心乱されたぐらいでなぜ自分はそばに居てやれないのか。

聡は自分を責めた。

昔の女性のことを責めるなら、自分は何なのだ。

博史と婚約を続けていて、将とこうやって心を通わす自分は汚い二股女ではないか。

将の「今」をなぜ尊重してやらないのか。

しかし、理性という冷たく計算高いものが聡の心の脇から顔を出す。

――いや、これをきっかけにいっそ離れたほうがいいのだ……。

――康三は将を外国にやる、と言っていた。外国にいけば、将は今の気持ちなどすぐに忘れるに違いない。

――そうだ。将は若いのだから、自分のことなどすぐにきれいに忘れる。

――だから、ダイヤを呉れた博史と、元通り一緒になるのが賢明な道なのだ……。

理性は聡の感情を逆なでする考えに平気でたどりつく。

将が自分を忘れる。外国へ行ってしまう。

それを思うと、聡の心は張り裂けそうになる。

将の声、温もり、笑顔……そして涙。

すべてが別れがたい聡の一部となっている。

永遠に別れてしまうとしたら……体の一部を生きながら引きちぎられるような痛み。それを想像した聡は身震いした。

すでに耐えられる自信がない。

では、そこまで愛しているのになぜ、たかが過去、しかも週刊誌の誇張記事のことで、さっきあんな態度をとったのか。

理性は、今度は正反対の正論で聡を責め始める。

そう……結局、そこに戻るのだ。

聡はベッドに入っても何度も寝返りを打つばかりで、なかなか眠れなかった。

翌金曜日、将は休んだ。

――無理をしたから風邪が悪化したのだろうか？

聡は彼の病状が気になりながらも、その週末はとうとう部屋には顔を出せなかった。

幸い、週刊誌の記事が他のメディアに飛び火することはないようだった。

偽造免許証のことや他のこと（例えば聡がまだ知らない将の昔の殺人のこととか）も新しく出る気配もない。

きっと父の康三が手をつくしたというのもあるのだろう。

週があけて、12月になった。この週には期末テストがある。

将は、火曜から始まった期末テストには出席した。

喉の化膿はとれたのか、風邪はもういいのか、聡自身も気になっていた。

が、将を避けてしまっていた。

試験の監督をするときも、教卓にいると、目の前の将のことが気になる。

だから、できるだけ教室を歩き回った。

それでも試験が終わると、席の後ろから順繰りにテストは回収され、一番前の将から聡に手渡される。

渡されたテストとともに、将のすがるような目線が聡につきささるのが見ないでもわかる。

だが目をあわせられなかった。

意外なことに葉山瑞樹もテストには来ていた。彼女の姿を見つけて聡は動揺したが、彼女のほうは聡を今までどおり無視していた。

瑞樹は将を見ると、冷たく口角をあげ、次の瞬間そっぽを向いたが、将にはどうでもよかった。

将がナイフで短く切ったはずの髪は、元の髪型にそっくりなウィッグを付けているのか、見た目にはあまり変わらないようになっている。

心には波乱を抱えて、でも表面は極めて穏やかに、４日間あった期末テストの最終日は終わっていった。

１２月に入って天気も安定しているように生徒の顔は、皆晴れ晴れとしている。

聡にとってはこれから、採点業務に続いて通知表付けがあるから大変なのだが、無事に試験を終えて晴れやかな顔の生徒を見るとこっちまで少し明るい気分になる。

英語は最後の時間だった。教材に使った英語の映画や、カラオケからの表現を抜き出したヒアリングで、ほとんどの試験問題を作成した。

例の模擬試験と違い、こっちは、授業に出てさえすれば、ほぼ皆合格点を採れるだろう。

帰りのＨＲが終わって、将は再び何か言いたげな顔をこちらに向けたが、聡はわざと目をそらした。

試験最終日の今日は午前中までである。

聡は足早に教室を後にした。

がっくりとうなだれた将に、隣の席の丸刈りの兵藤が「鷹枝くん、今週、先生になんか嫌われてるよね」とクールに声をかけた。

「うるせー、寿司屋」と答える声も元気がない。

生徒らは午前中までだが、教師は採点やらなにやらで、定時の１７時まで仕事がある。

土曜日に出たくなかった聡も１時間ばかり残業をして採点をやった。

期末試験の結果は、聡の担当する１年も２年もおおむねよかった。

ヒアリング部分だけでなく、中学の復習の部分も、前よりかなり平均点は高くなっていた。

文法というより、語彙や熟語で得点を伸ばしているところなどは、やはり印象的な言い回しなどを覚えているからだろう。

しかし……問題は先週あった模擬試験である。

まだ結果が出ていないが、それ次第ではせっかく皆集中してくれる

ようになった授業をまた元に戻さないといけなくなる。

こちらは聡たちが採点するのではなく、業者が一括で採点するのでしばらく結果を待たなくてはならない。

聡は週末の疲れと残業の疲れ、そして将のことでの心理的な疲労をしょって帰途についた。

17時すぎだがもう真っ暗だ。12月に入ったせいか、寒さが定着している。

聡は手を吐息で温めながら自宅コーポの階段を上った。

……自室のドアの前にうずくまる男がいた。

「アキラ」

聡の足音を聞き分けて立ち上がった長身の男は――やっぱり将だった。

将はいままでに見たことのないような心細い顔をしていた。

「……『鷹枝くん』、どうしたの」

「アキラ、今日泊めて」泊めてというわりには準備が何もない。学校帰りのままの格好だった。

かろうじて手にしているのは車のキーだ。

『そんなこと、困る』と聡が言う前に将は

「今日、帰ったら部屋がなくなってたんだよ」

と頭に手をやりながら、うつむいて本当に困っているようだった。

聡は一瞬将の言葉の意味がよくわからなかった。

「どういうこと?」

「たぶんオヤジのやつが、俺の部屋を勝手に引き払ったんだ……」

48◆失踪2

試験を終えた将がマンションに戻ると、部屋はすでにもぬけの殻になっていたのだった。

ご丁寧に電気も水道も止められている。

将名義の通帳もパソコンもすべて持ち去られていた。

ただ、知らなかったのか忘れていたのかは分からないが、かろうじて駐車場にミニだけは置いてあった。

幸い、車のキーは部屋の鍵と同じホルダーに付けていたので、将はミニまで盗られてたまるか、と出てきたのだった。

「そこまでする……」

聡は言葉を失った。康三は本気で将を外国にやるつもりなのだろう。

冬の夕方に廊下で立ち話も何なので、聡は将を部屋に入れて、温かいコーヒーを淹れた。

将が誕生日にくれたマグカップを初めて使う。

「だからサ、しばらく泊めてよ」

将は困っているようだが、喜んでいるようにも見えた。

「誰かお友達はいないの？井口くんとかは？」

「引きこもりがいる家に居候は無理だろ」

他のクラスメートを聡は提案してみたが、皆期待できなさそうなのだった。

「そんなこと言っても……。……ねえ、将……じゃない、鷹枝くん」

聡はマグカップをろーテーブルの上に置いた。

「お父様は絶対外国に行かせるつもりでしょ」

「俺は絶対行かないよ。……絶対襲わないからさ。頼むっ！」

将は聡の前で手を合わせて拝んだ。

「しばらく泊まったとしても、そのあとどうするの？」

「どうって……」

将は下を向いた。

一度決めたことを曲げない父のことを、一番知っているのは他でもない将なのだった。

「俺、いっそ家を出るよ」

「そんなこと……」

「家を出て、学校もやめて、アキラと暮らす」

将は顔を上げて聡の顔をまっすぐに見た。無謀なことを言っているとは思えない澄んだ瞳。

その瞳の中に、聡はどこか世界の果ての、小さな家で寄り添って暮らす、おとぎ話のような二人を一瞬夢想した。が、口にしたのは現実だ。

「そんなことできるわけないじゃない」

「できるよ。俺、聡と離れたくないんだ」

私だって、と聡は喉まで出掛かったのを飲み込む。

「アキラと一緒にいるためなら、何でもやれる」

将は腕を伸ばして、狭いテーブルの隣の辺にいる聡の肩に手を置くと、ぐい、と抱き寄せた。「アキラがいれば何もいらないんだ」

将は自分の心臓の音を聞かせるように聡の頭を胸に押し付けた。

その力強い腕とぬくもりに聡は一瞬、我を忘れそうになった。だけど……。

「……ダメ！」

聡は将の手を振りほどいた。

「そんな非現実的なこと、できるわけないでしょ」

何でこんな冷たいことを言えるのだろう。と聡は自分でも思った。

「それに……私、考えてた」

理性が聡の感情とはまったく反対のことを言わせる。

「私たち、もうこれ以上、進んだらいけないと思う……」

もちろん将の目を見ることはできない。聡は床の木目を見ながら一息に言う。

「だから、将が外国に行くのも、いいと思う……」

どうして大人は思ってもいないことを、自分が望んでもいないことを、やすやすと言えるのだろう。

言い終わって聡は、顔を上げた。そこには驚きと困惑と哀しみと怒りをいっしょくたに同居させたような将の顔があった。

「なんでだよ……」

将は目を歪ませた。その目は赤く充血している。

「あの週刊誌のことを気にしているの？」

聡は首を振った。

「違う。お互いの今後のために」

ひどく落ち着いた声は、より将を傷つけるだろう。なのに何故こんな声が出るのだろう。

「俺……アキラなしの今後なんて、考えられないよ」

「将……」

「アキラは俺のことを好きじゃないのか！」

聡は再び床の木目を見るしかない。

将は聡の肩を再度つかむと揺さぶった。

「アキラ……、アキラ！」

握り合った手は、深い口づけは、口移しは、抱き合って眠った夜はいったい何だったのだ。

揺さぶられながら、聡は目を堅くつぶっていた。目を開けて将の姿を見たら最後、泣いてすがってしまうだろう。

気がつくと、将はがっくりと肩を落として立ち尽くしていた。

「将、遅くならないうちに帰って……」

「嘘言うな！」

将は叫ぶと、玄関ドアへ身を投げ出すように出て行った。

聡は追うこともできず、目を閉じて遠ざかる足音を聞くしかなかった。

その足音も消えてしまったとき

――終わった。

と力が抜けた。あまりにあっけない終わりだと思った。

視線を床から上げた聡はローテーブルの上にペアのマグカップを見た。

将がくれたカップ。聡は吸い寄せられるように飾り棚へ近寄った。

にじんだ将の字が記されたカードがそこにあった。

もう耐えられなかった。涙がぼろぼろとこぼれて床に落ちていった。

ーーー将のことを考えれば、自分がとった行動は正しかったのだ。

とは、思うけれど。聡はベッドに倒れると、カードを抱きしめて、声をたてて泣いた。

夕陽が斜めに差し込む放課後の教室。狭いローバーミニの車内と大御所の歌。ずぶ濡れで笑いあったあの波打ち際。

きらめく都市高速と湾岸の遊歩道。カフェのソファー。……そして雪が花びらのように舞う夜の川とコンポの星を浮かべた暗い寝室。

将のいた風景が聡に押し寄せてくる。

将がいなければ振り返れない日々はどれも煌めいている。

忘れる日など永遠に来ない。聡は泣きながら確信していた。

……その夜から、将の姿が、消えた。

49◆失踪3

「……将！」

また将の夢を見て、聡は目覚めた。目じりから涙が枕へとつたっている。

ここのところ、いつも将の夢を見ては泣いて目が覚める。

将がいなくなってもう2週間になる。

教室は何も変わらないように見える。ぽっかり空いた、教卓のまん前の席を除いては。

最初の月曜日。康三の秘書と義母がやってきて、将が2学期末で中退する旨を学校に伝えた。

義母は応接室に聡を呼ぶと、人払いをした。

そして、誰もいなくなるやいなや、聡に深々と頭を下げた。

「どうか、あの子から連絡がありましたら、お知らせください。お願いいたします」

その目は必死だった。義理や建前でやってるとは思えない真摯さがあった。

聡はぼんやりと、この人が将を炎の中に置き去りにして逃げたんだ……と見ていた。

将の捜索は、父親の鷹枝康三氏の立場もあり、極秘で行われているらしい。

皮肉なことに、その週に学校に届けられた、模擬試験の結果は一一一。

生徒たちは、聡が今までどおりの英語の授業を続けるのに、充分な結果を残していた。

将は、といえば現代国語と小論文、数学は東大のボーダーにもう少し、というところだった。

9月まで中学の復習をやっていたことを考えれば素晴らしい成績だった。

英語などの記憶系教科は東大、ワセダ、ケイオーには届かないものの、いわゆるＭＡＲＣＨ大だったら充分合格をめざせるレベルに到達していた。

いずれも短期間で驚異的な成績を残していた。

聡が考えた独自の英語授業はそのまま続行されることになった。

映画やカラオケを使った、にぎやかな授業風景。

最初の頃と違って、生徒たちは聡を信頼し、慕ってくれる。教師冥利につきる毎日があった。

……ただ、将だけがいない。

笑って授業をしながら聡の胸には風穴があいたような虚無感があった。

今年最後の社会見学は『ダンサー』だった。

クリスマスイベントを参加・見学、かつその楽屋で話を聞くという、いままでにない派手な企画だった。

私服での参加を許可した初めての社会見学だったが、井口らは最高にエキサイトし、ノッていた。

イベントは聡とて一緒に盛り上がってもよかったのだが、そんな気になれなかった。

あくまでも引率の教師という立場を貫いたのは、いうまでもなく心が沈みきっていたからだ。

理由は簡単。将がいないからだ。

将のいない世界は、なんだか醒めたスクリーンの向こうの世界を見ているようなそらぞらしさだった。

どんなに鮮やかなライトも色あせて見え、どんな音楽も単なる空気振動にすぎなかった。

世界は無味乾燥になり、時はいたづらに規則正しく過ぎていくだけだった。

22時まえに社会見学を終えて、生徒たちと別れた聡は、近づくクリスマスに浮き立つ街を独り、歩いていた。

自分から離れたくせに、この2週間、将のことばかり考えている。

あれから、将を探そうとしたことがある。

携帯の番号にかけても、ずっと『この携帯は電源が入っていないか電波の届かないところにあるか……』のメッセージが流れるだけだ。

メールも送ったが届いているのかわからない。

だけど、他にどこに電話をかけたらいいのか、どこを歩けばいいのか、わからない。

聡は、将のことを何もしらない自分に初めて気付いた。

――どこへいってしまったの。

聡は都会の明るさに星も見えない夜空を見上げた。雪さえも降る様

子がない。

と、交差点の向こうの人ごみに背の高いぼさぼさ頭が見えた。

「将！」

聡は思わず車道に走り出た。

急ブレーキをかける車。バランスをくずして倒れる聡。抗議のクラクションが鳴り響く。

「気をつけろ、ブス！」

罵声と共に走り去る車。

――違った。将じゃなかった……。

聡はその場に座り込んでしまった。

年配の男性や女性が見かねて「大丈夫ですか？」と肩を貸すまで放心していた。

聡はあてどもなく、将と歩いたところをさまよった。

そのときの将が、幻影となって浮かんでは消える。

あのカフェの前を通った。

ガラスごしにソファが見える。

温かい色の照明に照らし出されたそこに座っているのは仲がよさそうな若いカップルだ。

『もう一度ショウって呼べよ。呼ぶまで離さない』

じゃれあった思い出が蘇る。

「将……」

聡の頬を涙がつたっていた。涙にネオンが反射してきらきらと光る。通り過ぎる人が不審と好奇の入り混じった目で聡を見るが、今の聡にはまるで関係なかった。

――将に会いたい。会いたい、将。

聡は手で顔を覆った。

聡は、今までの人生で自分の選択をこれほど後悔したことはない。

土曜日も同じだった。

夢の中で将に再会し、嬉し涙を流したところで、目が覚めた。

聡は涙を流したまま、天井を見つめた。

―――夢でもし逢えたら素敵なことね、なんて歌があったっけ。

現実に目を覚まさなくてはならない、いまの聡には、つらいばかりだ。

しかし夢にも現れなくなったときが来ることを考えるのはいやだ。

将がいなくなって、聡の眠りは浅くなった。気力がないから早く床につくが、ずっと眠れない。

寝返りばかり打つ夜の長さは、聡の選択を失敗だ、失敗だと責める。

休みだというのに早く起きてしまった聡はパソコンを開いた。

博史からメールが届いていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

アキ

なかなか連絡できなくてごめん。

今年は、２５日の朝に成田に到着しそうです。

そのあとは年内は休暇になるので、二人でゆっくりと過ごそう。

それから、前にも伝えたと思うけど、重要な話があるんだ。

君はきっと喜んで協力してくれると思う。

それがお互い最大のクリスマスプレゼントになればいいなぁ……。

もうすぐ逢えるのを楽しみにしています。

博史

＝＝＝＝＝＝＝＝

博史にあと1週間もしないうちに逢えるというのに、聡は何も感じなかった。

4ヶ月前、お盆に帰国したときは、指折りながら帰国の日を待ちわびたのに。

今の聡は、むしろ不安を感じた。

『聡がきっと喜んで協力する重要なこと』って……。

中東赴任が終わるとか、結婚を早めるとか、そういうことなのか。

しかし協力とあるのは、何なのか。

聡はいつのまにか博史に逢うことに恐怖を感じていた。

50◆失踪4

胸の中に広がる不安にかきたてられた聡は無駄だとわかっているのに、将が住んでいたマンションに自転車で来てしまった。

北風に逆らって急いで自転車をこいだので、目に冷たい空気が染みて、涙がまた出た。

曇天の下、マンションがそびえている。

聡はマフラー姿のまま、将の部屋のあたりを見上げた。

と、ちょうど住人が出てきた。その隙にふらふらとオートロックのエントランスをくぐる。

聡は無意識に将の部屋を目指してエレベーターに乗っていた。

エレベーターを降りて廊下に出ると……部屋の前に人影があった。

――将？

聡は一瞬期待したが、違った。背丈も髪形もまったく違う。

その男は振り向いた。まだ若い男性だ。

短く刈り込んだ髪は黒く、今時の若者にしては眉が太くきりっとした古風な顔立ちだ。

ジーンズと地味なジャケットを着て、バックパックを持っている。

「……あの」

男は聡に話し掛けてきた。将の部屋を示して問い掛けてくる。

「ここに住んでいた方は、もう引っ越したんですか？」

「……わかりません」

不審な答えだと聡は自分でも思った。男は少しけげんな顔をした。
それを払拭するように

「私もわからないから、来てみたんです」

と付け加えた。

「そうですか……」

男はあきらかに肩を落とした。

「何か御用だったんですか？」

「あ、いえ。たいした用じゃないんです。すいませんでした」

男はぺこっと聡に頭を下げるとバックパックを背負い、エレベーターへと小走りで走っていった。

聡は、男の背中を見送ると、１０Ｆの廊下から広がる景色を見下ろした。

マッチ箱のような下町の家々。

この景色のどこかに将がいると信じて心で話し掛ける。

ーーー将。誰かお友達が来てたよ。どこにいるの？　ねえ将……。

さっきの男が道をいくのが小さく見える。

そのまま、マンションのすぐ下をのぞきこむ。

高さが目に見せる圧迫感が胃をつきあげるような感覚となって迫る。

心臓が一瞬どくん、と音をたてる。

ーーーまさか。

将はまさか、例えば、こんなところから飛び降りてないだろうか……。

自分も引き込まれそうになって聡は軽く恐怖を覚える。

ふっと湧き出たような、飛び降りたい衝動に抗うと、聡はエレベーターに駆け込んだ。

ーーー将。お願い。生きていて。

聡は、どこにいるとも知れない将のことを祈るしかできない。

重い足取りで自転車をこいで、ようやく家の近くまで帰ってきた。

角を曲がろうとしたそのとき。聡はちょうどそこから出てきた人とぶつかりそうになった。

あわててブレーキをかけたおかげで、人とはぶつからなかったが、聡のほうが派手に転んだ。

「痛たた」

聡は地面に腰をしこたま打ちつけてしまった。

人のほうは転びもしなかったらしく、声をかけてきた。

「大丈夫、ですかな?」

多少しわがれた声はずいぶん年配のようだった。

仕立てのよいコートを着ていて、帽子の下は総白髪、これまた高級そうなステッキをついている。

「……大丈夫です。そちらは大丈夫ですか」

聡は腰をさすりながら自転車を起こした。

「なあに……。少し驚いただけじゃ。心臓の訓練によい」

老人はふぉっふぉっと笑った。丸眼鏡の奥の顔には深い皺がきざまれている。

「どうもすいませんでした」

聡は頭を下げた。

「いいんじゃ。気をつけてな。あきらさん」

聡は頭を下げて自転車にまたがると、あわててその場を立ち去った。

気が動転していた聡は、初対面の老人が自分の名前を呼んだことにまるで気付いていなかった。

◇

鷹枝康三は、約束の時間から３０分遅れてレストランの個室に現れた。

「わざわざお越しいただきまして恐縮です」

立ち上がって康三を迎えたのは、荒江高校を経営する荒江学園の理事、そして校長だ。

閣僚としては若手の康三は、会合の場として、料亭などより、レストランの個室を好んだ。

ここなら、料理を食べずに、コーヒーだけの利用も許されるという利点もあるからだ。

ギャルソンがコーヒーを素早く持ってくるのと同時に康三は口を開いた。

「時間がない。ご用件だけを伺いましょう」

「はい。……実は息子さんの将くんの件ですが……」

「あれは、2学期いっぱいで中退させてアメリカへ留学させると申し上げましたが」

「その件で、もう一度お願いがあるのです……」

理事は満面に笑みを浮かべて、康三を見上げた。

会合を終えた康三は、車の後部座席で考え込んでいた。

荒江学園の理事の提案は、政治的には悪くはない話だと思う。

――さて、どうしたものかな。

車は自宅前にさしかかったが、いつもと違う位置で停止した。

「どうした」

康三は運転手に少し尖った声をかける。少しでも合理的でない行動は康三のカンにさわる。

「は……あの」

困惑する運転手の声に、康三は運転席ごしに前を見た。

自宅玄関前に、漆のような艶を乗せた黒塗りのクラシックカーが止まっている。

――あれは。

それを確認した瞬間、康三はドアから転がり出ると、黒塗りの車に近寄って康三自らドアを開けた。

「お、お祖父様！どうなさったんですか」

総白髪の――さっき聡にぶつかりかけた老人がシートに座っていた。

老人はドアがあくなり、康三にどなりつけた。

「康三！話があって今来たんだ！まったく親子そろって１００歳の年寄りをこきつかいおって！」

この人こそ、康三の祖父、将には曽祖父にあたる鷹枝（いわお）巌・元外相である。

転んだ腰に多少のきしみを抱えながら、聡はなんとか家まで戻ってきた。

階段をあがろうとして、郵便ポストに新しい封書を見つけた。

差出人も宛名も書いてない、真新しい封筒はしっかりと糊付けしてある。

よくある広告かと思って一瞬、破り捨てようとした聡は、ある予感を感じて、封を注意深く開けた。

そこには、封筒いっぱいの幅で、聡が好きな大御所のフィルムコンサートのチケットが入っていた。

コンサートの日程は２４日、クリスマスイブになっている。

メモが一緒にひらりと出てきた。

＝＝＝

〇〇前で１７時３０分に待ってる。

来れないなら、もうあきらめる。

＝＝＝

将

すでに懐かしい将の文字だった。

51◆隠棲

日曜日の大磯はよい天気に恵まれた。

大磯、といってもロングビーチから離れた閑静なあたり、水平線をのぞむ高台に、樹齢１００年以上の大木に囲まれて古風かつ重厚な邸宅があった。

今は個人宅では贅沢なものとなった、濡れ縁を備えた純和風・数寄屋造り。

昔ながらの三和土の土間に、釜の炊口が据えつけられた台所から続く裏庭で

――東京なら家が一軒たつほど、裏庭と呼ぶのにはもったいないほどの広さだが――１人の青年が一心に薪を割っていた。

将である。

台に３０～４０センチに切った丸太を縦に置いて、鉈を力いっぱい振り下ろして細く割って薪にする。

慣れないうちはなかなか薪に鉈がヒットしなかったが、今は真ん中に鉈を振り下ろせるようになった。

今日は何本の丸太を薪に替えただろうか。鉈をふりあげる腕がもうダルい。

冬だというのに将の額から汗が流れる。

薪割を始めた今朝は防寒用として首に巻いたタオルで、汗をぬぐう。

「ぼっちゃん、熱心だねえ。少し休んだら」

生垣越しに声を掛けたのは、隣（といっても庭ごしだから少し離れているが）に住む小太りの年配婦人だ。

将はぺこっと頭だけ下げて、すでに束にした薪を示して

「このへん、ハルさんちのだから、あとで持っていきます」と言った。

「悪いねえ。うちの分まで。……これ、おやつに」

ハルさんは、手作りらしき饅頭を乗せたお盆を将に見えるようにかざした。

「ハイ、いただきます」

将は薪割をいったん中断すると、ハルさんと一緒に縁側にまわった。

濡れ縁と奥の間を仕切る障子には、富士を彫った凝った擦りガラスがはめ込まれている。

古い濡れ縁は、巾が広い木が庭に対して垂直につらなった、今では寺などでしか見られない古い様式だ。

その広い板の1枚の上で、温かい冬の陽だまりを受けて、トラ猫が

平和そうにとぐろをまいている。

お湯と茶碗を乗せたお盆を持ってきた将に

「御大、留守なんだって？」

とハルさんが聞いてきた。

「はい。昨日から東京に。……いただきます」

将はハルさんの饅頭をパクついた。

ふだんはそれほど甘いものが好きというわけじゃないのに、肉体労働をしているせいか、とても美味しい。

「うめえ」

将は思わず口に出した。将の笑顔を見て

「ここにいたころはちっちゃかったのに、本当にいい男になったねぇ……。もっとおあがりよ」

ハルさんは目を細めた。そういう顔をすると、乾いたツヤをのせた肌の目元にしわがくしゃくしゃに寄る。

もう８０歳近いのだろうか。

母を亡くしてここに預けられた将の幼い頃を知っているハルさんは

この家の手伝いもやってくれている、気のいいご近所さんだった。

行方をくらました将がこの家に来るかも、というのは東京でも最初に予想していて、何度か

『将が来ていないか。来たら連絡してくれ』

と電話があったらしい。

しかし、将の希望通り、曽祖父もハルさんも、ここにいることを秘密にしてくれている。

「おや、ご帰還のようだね」

黒塗りのクラシックカーが門の前に止まった。

巌は、運転手がうやうやしく開けたドアから、出てくると、ステッキをつきながら玉砂利の中を歩いてきた。

運転手が大荷物を持って後ろからついてくる。

「ヒージー！東京の『おめかけ』元気だったぁ～？」

将は手を振った。ハルさんは居住まいを正して頭を下げる。

「コラ！俗なことをいうでない！　薪割りはどうした！」

巌はステッキを振り上げて声を荒げた。

ステッキをつかなくても本当はスタスタとこちらへ歩いてこれるのだ。

「一休みしてるだけだよ。……これハルさんが」と饅頭を指差す。

「よろしかったらどうぞ」

「いただこう」

巌はどっかと縁側に腰を下ろす。

「ヒージー、うまくやってくれた?」

将は巌にお茶を差し出しながら聞いた。湯飲みも骨董屋でしか見かけなさそうな、細密な絵が書かれた古伊万里である。

「まったくおまえら親子は、１００を過ぎた老人をこきつかいおって……」

巌は顔をしかめながら茶を受け取ると饅頭をむぐむぐと食べ始めた。

ちなみに巌は、将から見ると曽祖父、つまり『ひいじいさん』にあたる。それを略して『ヒージー』と呼んでいるのだ。

「説得してくれた?」

「あいつはワシにさからえん。ばっちりじゃ」

巌はにっかと入れ歯を見せて笑った。ちなみにあいつとは、巌から

は孫にあたる康三のことである。

「ヤッター！さすがヒージー！」

将は手を叩いて喜んだ。

「これで薪割の日々ともサヨナラ……」ニヤニヤしてつぶやいた将を巌は

「甘い！年内やってもらうぞ」とこづく。

将は巌に頼んで、荒江高校を辞めてアメリカへ行かせるという父の企みを阻止してもらったのだ。

◇

あの日、お金もあまりなく、行き場のない将は、ギリギリのガソリンでこの大磯に住む巌の邸宅にやってきたのだった。

母を亡くしたときに預けられていたこともあって、巌は将を可愛がっていた。

将から事情を聞くと、極秘で将をここに置いてくれたのだが、タダで置いてくれたわけではない。

『働かざるもの食うべからず！』という激が何度飛んだだろうか。

将は巌に付き合って毎朝5時に起こされ、畑仕事から薪割りに風呂

焚き、庭掃除に床磨きなど雑用にこき使われたのだった。

「ちょー、なんでユニットバスもあるのに、こっちを使うんだよ～」

将は風呂のたき口で煙に咳き込みながら文句を言った。

古風に小石のタイルをはめこんだ浴槽では巌が鼻歌を歌いながら、『働かざるもの食うべからず！』と決まり文句を一喝し笑った。

将がいるようになって、巌はわざと、薪で沸かす旧型の風呂と、薪で炊くかまどのご飯を復活させた。

表の日本庭園の向こうには、小さな洋館がある。年をとって膝をまげるのがおっくうになった巌はそこで寛ぐのを好んだが、ここの暖炉も薪を使う。

将はそれに使う薪を毎日割らなくてはならなくなった。

先日は、軽トラックで近くの人と雑木林に入り、チェーンソーで来年の丸太を切り出してきた。

近所の人たちは、ストーブや燻製、陶芸などで薪を使うのを好む。

今年切った丸太は1年乾かしておいて、来年割って薪にする。薪も非常に時間と手間がかかるのだ。

ガスがあるのになんで、こんな手間のかかることをするのか。

将は最初はよくわからなかったが、最近なんとなくわかるような気がしてきた。

人に危険を知らせるための臭いがつけてあるガスと違って、薪が燃える匂いは、香ばしくて安らぐ。

苦労して割った薪を燃やして入る風呂は、かすかにその香ばしさが漂ってとても気持ちいい。

同じように薪を燃やして炊くかまどのご飯は、漬物と味噌汁だけでも充分に旨い。

巌は年寄りのくせに肉も好んだが、薪でバーベキューをすると、肉に薫香が付き、たまらない。

ようするに、費やした労力は、それに相当する快楽となって将を労ってくれるのだ。

そして、夜。肉体の疲れは、将を安らかな眠りへといざなってくれる。

何も考えずに深く眠る幸せを将は思い出した。

ここに預けられていた子供の頃――川や海で毎日泥んこになって遊んだ毎日がそうだったはずだ。

この2週間、ここで暮らすうちに、将は体の中の汚れがすべて出て行って、肉体的にも精神的にも健康になった気がした。

それを素直に口に出すと巌は

「お前のお祖父さん、つまりワシの息子は、それをとうとうわから

ずじまいだった。だから親を残して先立ってしまったんじゃ」

と遠い目をした。将の祖父、鷹枝俊太郎元首相は、将が高校に入ってすぐに亡くなった。

まだ75歳で、議員在職中だった。

比べると、巌は現在100歳だがぴんぴんしている。

80歳で政界を勇退して以来、この大磯で畑を耕し、庭木の世話をし、ときおり釣りにでかけながら悠悠自適で暮らしているせいだろう。

頭や目のほうも達者で、例の週刊誌の記事も老眼鏡でしっかりと読んで

「このタワケ！」

とそれを丸めたもので将の頭をはたいた。が、そのあとでこっそり

「まあ、ワシも昔、お前くらいの頃は、芸者遊びが過ぎてな。一浪してやっと東大に入ったものだ」

とウインクする。

将はそんな曽祖父が好きだった。父には似たくないが曽祖父と血がつながっていて、本当によかった、と誇りに思っている。

ハルさんが、お湯をわかしに台所へと席を立った間。

「そうだ。約束のものを持っていったときに、偶然、あきらさんに会ったぞ」

「アキラに？」

将の笑っていた目が真剣に見開いた。

「なんでアキラがわかったのさ」

住所とコーポ名、部屋番号しかメモしなかったはずだ。

「前に、お前のシャメーを勝手に見せてもらったことがある」

『写メ』をシャメーと引っ張るのが年寄りっぽい。何度か指摘したが直らないのが１００歳っぽいな、と将は思う。

つまり、こっそり将の携帯の写真を見た、ということである。

携帯は充電がないので、ずっと電源がきれたままだから、将がここに来たばかりのときに見たのだろう。

「……環さんに似ているな」

巌は目を細めた。環とは、将を生んだ母の名前だ。

「うそぉ。ぜんぜん似てねえよッ」将は反論した。マザコン扱いされたくない。

「顔が、じゃない。雰囲気が、だ」

雰囲気といわれても、7歳で母を亡くした将には本当によくわからないのだ。

「しかし、先生に手を出すとはつくづくワシそっくりじゃ。ワシも小学校のころに、担任の先生が好きでたまらず、無理やり接吻してな……」

とカラカラと巌は笑った。

その昔話を聞きながら将は縁側から青い水平線に目をやった。

消印から居所がばれるといけない、とわざわざ巌に頼んで、聡の家に届けてもらったコンサートチケット。

聡には知られてもいいが、万が一、聡が学校や父母に連絡するといけないから……。

一一一聡は来てくれるだろうか。

「あきらさんを、本当に好きなんだな」

巌は丸眼鏡の奥から将を見つめた。年寄りだが濁りのない目だ。

将はうなづいた。巌は将の目に強い光を見た。

「ワシの頃と違って、今は……」巌は途中まで言いかけてやめると空を仰いだ。

高い空を鳶が、グライダーのように悠然と舞っていた。

「いくら好きでも、成就せん恋もある……。むしろそんな恋のほうが多いものだ」

こんなに哀しい曽祖父の顔を、将は初めて見た。

52◆クリスマスの約束1

その夜、将は寝床の中で考えた。

すでにコンサートは3日後だが、聡は来るだろうか。

仰向けの将の目の前には、行灯の光に暗く照らし出された杉板の古風な天井が広がっている。

少し考えて、『来る』と結論付けた。

なぜなら、あのとき『これ以上進まないほうがいい』という話をしている間、聡は自分と一度も目をあわせられなかったから。

あんなことを言った聡はきっと後悔し、自分を探したに違いない。探したに決まっている。探しただろう。探していてほしい……。

もし、探してなかったら。コンサートに来なかったら。

……もし聡に見捨てられたら。

将は、太陽の軌道をはずれて暗い宇宙を迷走する惑星を思い浮かべた。

陽の光の届かない、漆黒厳寒の空間。そんな心細さを想像して震えた。

いや、そんなことはありえない。

将は寝返りを打って宇宙空間をかき消した。

聡は絶対、自分のことを好きなはずだ。聡の行動を思い起こせばそうとしか思えない。

万が一ーーーー。

もし来なくても、将は学校を辞めないで済むのだから毎日逢える。

毎日、顔をあわせているうちに、いつか元に戻るはず。

だから、来なくても悲嘆することはない……将は自分を無理やり納得させると、行灯を消して深く布団に入り込んだ。

でも、きっと来る。まどろみとの境界線で将はやはり希望を持った。

ーーー3日たてば、きっと聡に逢えるはず……。

◇

ーーーよかった。将は無事だった。

聡は、土曜日の午後から床に入るまで、チケットと封筒、短いメモを何度も繰り返し見た。

将がとにかく無事でいてくれる。

たった1つの安堵だったが、その安心感は聡を緊張から解き放ち、土曜日の夜は、ひさしぶりに深く眠れた。

しかし。

一夜明けると、今度は将がどこにいるのか、どうやって暮らしているのかが気になり始めた。

もしかして、悪いことでもやっているのではないのか。

そうやって結局、聡の心を将が独占している状況は変わらなかった。

聡はもう一度メモを見た。

――3日後になれば、将に逢える。

逢えば、きっと前と同じように、将は自分を抱きしめるだろう。

その瞬間を思うと聡は、確実に来る喜悦の予感に震えた。

今までどおり、いや理性で堪えていた歯止めが利かなくなり、行き着くところまで行くかもしれない。

それでも……かまわない。今度こそ将を離したくない。

走り出す感情の前に、事実が立ちはだかる。

25日、つまり将にあう翌日に帰国する博史。ダイヤの指輪をくれた『婚約者』の博史は……。

彼のことはどうするのだ。

聡は正直なところ、博史への気持ちが今自分でどうなっているのか掴めなかった。

目くらましのような将の愛情にさらされている聡に、沈静化している博史への気持ちが確認できるわけがない。

実際に博史の顔を見て、口づけを交わし、抱かれれば、博史の元に戻るのかもしれない。

そんな現実的な予想は案外あたっているかもしれない。

畢竟、自分はスキンシップに弱いだけの流されやすい女なだけかもしれない。

悪魔のような理性がはじき出した考えを聡ははっきりと否定できない。でももしそうだとしたら……なんて、さもしいんだろう。

ため息をついたとき、携帯にメールの着信音が鳴った。

大学時代の友人の美智子だった。

＝＝＝＝＝＝＝

聡

ちゃお～元気？

聡２４日（つまりイブだけど）あいてる？

彼氏帰ってこないんだったら、うちの雑誌でパーティを企画してるんだけど、来ない？

いちおう、○○とか△△も来るって。２４日の１９時からだよ。

じゃ、返事まってる☆

ミチコ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

○○や△△というのは美智子同様、大学時代の友人だ。

聡は携帯を閉じると、もう一度将からのチケットとメモを見た。

将とこれ以上進まないというのは、自分が決めた道だ。

よしんば、行ってヨリが戻ったところで、将は所詮アメリカ行きが決まっている身だ。

離れ離れになって、またつらい思いをするのは同じ事だ。

だからやはり、行けない。

――将、ごめん。

結局、自分がつらいという理由ーーー聡はそんな自己中心な自分に軽く吐き気のような嫌悪を感じた。

聡は、パーティに出席する、と美智子に返信した。

◇

２４日が来た。終業式でもあるこの日は、日曜日から続いたおだやかな天気から打って変わって冷え込んだ。

将の誘いに行かない、と決意した聡だが、将のことが心を占めている現状はあいかわらずだ。月曜日に、聡は、思い切って教頭に将のことについて聞いた。

将が失踪しているのは、学校も周知の事実である。

それを受けて、将の2学期末での中退をどうするのか、ということを聞いてみたのである。

聡は、学校の理事と校長が、将の引き止め工作をやっていることをもちろん知らない。

教頭は知っていたが、康三からの正式な回答はまだだった。

なので、『そのまま2学期末で除籍になります』という答えが返ってきて聡は失望した。

今日、コンサートに聡が行かなかったら、観念してアメリカに行くつもりなのだろうか。

胸がおしつぶされるような痛みに聡は人知れず耐えるしかない。

教室で聡は、教師として初めて採点した通知表を皆に渡した。

一人一人を、教卓のところまで呼んで、一言ねぎらいとはっぱの言葉を掛ける。

状況的に、呼ばれた者以外の生徒は自由にしゃべっていた。

通知表はテストと違ってそれほど悲嘆するものもいないようだ。

「センセイ、やっぱ元気ないよね」

チャミが後ろの席のカリナに言った。

「やっぱ、鷹枝くんとラブラブってホント?」

とカリナがいうと、

「ラブラブ。ちょ~ラブラブ」

と二人の間にカイトが割り込んできた。

「うっそー!マジぃ」

チャミとカリナが思わず黄色い声を出す。しぃとカイトが歯を剥き出しにして人差し指をたてる。

「で、もうやってんのかナ?」とチャミ。

「やってるやってる。ハゲシくやってる」

とカイトは下品に腰を振った。

チャミもカリナも口をあんぐり四角く開けて一瞬だまった。

そのカイトの茶髪の後ろ頭を、井口がぼこっと殴った。

「バカ。でっちあげんな」

「ってー、ホントのことだろー」

「やってない、って、いちおーセンセイは言ってたぞ」

「ちょー、井口クン、それ、信じるわけ?信じるわけ?」

カイトは井口を指差して半目に笑いを浮かべてのけぞった。

と、そこへちょうど井口が呼ばれて、中断した。

井口は通知表を受け取りながら訊いた。

「センセー、将みつからんの?」

心配そうな表情だ。

聡は井口にだけ聞こえるように

「アメリカに留学するのかも」

と伝えた。

「ええー！いいなあ！」

と井口は大声を出した。

そのバカ声に、一番前の席の丸刈りの兵藤ら数人が思わず顔を上げる。

「でも、それならそうと、連絡してくれてもいいのに」

と聡の制止もたいして気にせず、井口は元のボリュームで続ける。

「あ、おうちの方がそう望んでいるだけで、鷹枝くんがどこにいるのかは、わからないのよ」

と聡は小声でフォローした。

「なーんだ。……心配だね。センセ」

と聡に一言かけて席に帰る井口に、カイトやチャミ&カリナまで寄っていろいろ訊いている。

なんだかんだ言って将のことは、クラスのみんなが心配しているの

だ。

２４日の今日は教師らも１６時までで業務を終了した。

ちなみに教師は２６日まで登校することになっているが、荒江高校の場合、生徒の休み中の教師は自由勤務状態になる。

会議やおのおのの業務さえこなせばよいことになっているのだ。

１９時までには間があるから、聡はいったん帰ってパーティの支度をすることにした。

着替えて、髪を整え、化粧をやり直す。

ローテーブルの上で化粧をやり直しながら、どうしても気になる…メモとコンサートチケットが。

今になって「あきらめる」という文字が気になりだした。

やはりアメリカに行ってしまうのだろうか。

時計を見る。１７時１５分を指していた。

突然、玄関のチャイムが鳴った。

あわててインターフォンに駆け寄る。映っていたのは……。

「アキ！」

ドアが開くなり、博史は聡を抱きしめた。

53◆クリスマスの約束2

ドアをあけるなり抱きしめられた聡は懐かしい博史の匂いに包まれた。

森林を思わせるような香りに、思考が一瞬飛ぶ。

博史は、いったん聡を離すと、ドアを閉めてもう一度聡を抱いた。

しばらく聡をきつく抱きしめたあと、

「顔をよく見せて」

博史は聡の頬を両手ではさむようにして顔を近づけた。

お互いの視界がお互いの顔だけになるほどの距離まで近づく。

もう少しで唇がふれあう、というときに、

「どうしたの……？明日じゃなかったの？」

と聡が訊いた。自分でもかすれてうわずった声だと思った。

「喜んでくれないの？」

聡の視界いっぱいに笑顔を浮かべて、博史はそのまま、聡の唇を吸った。

馴れた博史の口づけに、聡はされるがままに『なるしかなかった』。

そう。いつもどおりの深い口づけを交わしながら、聡は、完全に醒めている自分の心を自覚していた。

聡はからんでいた舌を手始めに、体をするりと離した。

「寒かったでしょ。コーヒーいれるね」

そんな理由もなんとか通用する寒さでよかった、と思う。

博史は、仕事が予定より早く終わったので、急遽有給休暇を取得して飛行機を1日早めてきたのだという。

そんな博史の話を聞きつつ、聡は微笑みをつくりながらコーヒーを淹れ、なお余る頭の余白で考えていた。

博史の顔を見れば、案外自分は博史にまた戻っていくのではないか、という予想は見事にはずれた。

やはり、スキンシップのせいなどではない。自分の心は完全に移動してしまったのだ。

博史の唇を受けながら、醒めた頭のどこかで思い浮かべていたのはやはり将だった。

――将は？将との約束は？

聡は思わず時計を見る。17時23分だ。

「聡の部屋に来るのはじめてなんだよね。結構センスいいね」

博史は、そんなことをいいながら、コーヒーを淹れる聡に気を利かせて、棚からペアのマグカップを出してローテーブルの上に並べた。

デキャンタにコーヒーをもってきた聡はそのカップに気付いた。

一一一将からのバースデイプレゼントのカップ。

1つはもちろん自分のものだ。もう1つを使う権利があるのは……。

でも、聡にそれを言い出せるはずはない。

聡は心で将に謝りながら、もう1つのカップにコーヒーを注ぐしかなかった。

「ところで……重要な話って何?」

聡は博史に訊いた。

博史は将のためのマグカップからたちのぼるコーヒーの湯気に顔をうずめながら、それに答えない。

かわりに

「アキ、あの指輪をはめたところを見せて」

と言った。

聡は、一瞬どきっとしたが、飾り棚の下の引き出しからびろうどの

ケースを持ってきた。

博史はケースをあけた。室内なのにダイヤは明るく煌めいた。

博史は長い指でそのダイヤのリングを丁寧につまみだすと、もう片方の手で、聡の手をとった。

聡の薬指に静かにダイヤ付きのプラチナの輪を通していく。

美しい輝きとはうらはらに薬指に約束の重みが課せられ、聡の心は枷をはめられたように苦しくなった。

聡は救いを求めるようにまた時計を見た。１７時４０分。約束の時間は過ぎている。

だけど……だけど、きっと彼は待っているだろう。

きらめくダイヤで豪華になった聡の手を博史は握った。

熱くて硬い博史の手に聡の手は包まれて、身動きがとれない。

「似合うよ。よかった」

博史は細い目を糸にして微笑んだ。

違う。欲しいのはその手ではない。

やはり将の顔が一一一アメリカに行ってしまうにしても一一一せめて一度だけでも見たい。

熱くて固い手から、聡は手を思い切って抜いた。
博史は少し驚いた顔で聡の顔を見た。
「聡？」
「あ、あの」
聡は指輪を自分で薬指から引き抜きながら、下を向いて言う。
「実は、博史さんが帰ってくるの明日だと思い込んでいたから……。友達とパーティの約束を入れちゃったの」
博史は、ああ、とうなづきながら特に聡を疑う様子もない。
「あ、そう。そうだよね。今日はイブだもんな。それで出かける格好だったんだ」
聡は、疑わない博史に新たな罪悪感を感じて付け加える。今はまだ、婚約者だから。
「ごめんね。ちょっとだけ顔を出して戻るから」
「僕も一緒に顔だそうか？」
「う、ううん。すぐ、すぐに戻るから待ってて」
博史に見られないように、聡は手早くチケットとメモをバッグに入れる。

「じゃあ、僕も1回家に帰ろうかな」

博史の家は都下にある。

「そうして。あとで電話するから、待ち合わせよ……」

「そうだな。実はアキに今日付き合って欲しいところがあるんだ」

「……わかった」

聡はマグカップを流しへと持っていき、その足で、ストッキングを身につけるためにバスルームへ入る。

いったん脱いだコートを着ようとして博史は、飾り棚に奇妙なものを見つけた。

よれよれになったカードだ。『Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ』とある。

にじんだ青いインクで書かれたメッセージは、カードを手にとるだけでたやすく読めた。

……博史は細い目を一瞬、見開いた。

「ごめんね。せっかくうちまで来てもらったのに」

声がして、バスルームからストッキングを身につけた聡が出てくるまえに、博史はカードを棚に戻した。

「いいよ。こっちも突然だったから」

カードの中身など見なかったように、博史はことさら優しい声を出す。

聡のコーポを出た二人は、タクシーが拾える通りまで久しぶりに並んで歩いた。

博史は、聡の腰にさりげなく手をまわした。

8月までは嬉しかった動作なのに、今の聡はとまどった。それを隠すように

「寒いね。今夜はホワイトクリスマスかな」

とたわいもないことを口にする。

たしかにいっそう厚くなった雲は、雪雲のようだ。透明感のないグレイはいっそう寒そうだ。

「そうだね」

博史は聡の耳元で小さく同意した。

ちょうど通りに出たので、博史は手を高くあげてタクシーを呼んだ。

たまたま流しのタクシーがすぐ捕まった。

「先に乗りなよ」

博史は、聡にタクシーをゆずった。

「すぐ、戻るから」

聡は罪悪感からシートから博史を見上げて言う。博史はうなづくと、

「……今夜は一緒に過ごせるんだろ」

と聡の瞳を見つめて確認した。だまってうなづいた聡が、目をそらすのを博史は見てしまった。

聡のタクシーが発車してすぐ、博史はすぐ後ろに来たタクシーに乗り込んだ。

「前のタクシーを追ってください」

運転手に頼むと、博史はシートに深く沈みこんだ。

５４◆クリスマスの約束３

「すいません、できるだけ急いでください」

行き先と共に聡は付け加えた。

「やってみるけど、今日はクリスマス・イブだから都心は混んでるよ」

運転手は暗にそれが難しいと口にした。

携帯を開いて時刻を確認する。もうすぐ１８時。

コンサート会場前の待ち合わせ場所まで急いでも３０分はかかるだろう。

「できるだけ、お願いいたします」

聡はそれでもお願いするしかなかった。

急いた気持ちの聡には、窓の外の美しいネオンなどまるで目に入らない。

将に電話をかけてみる。あいかわらず、いつものメッセージだ。

携帯を開きついでに美智子に電話をかける。

「予定より早く博史さんが帰ってきて……。それで行くって言ってたのに申し訳ないんだけど、今日やっぱり行けそうにない。ごめんね」

博史には、美智子をいいわけにし、美智子には博史のせいにしている。

美智子も、聡を何も疑うことなく

「それじゃ、しょうがないね。でも、よかったじゃーん。博史さんにヨロー」

と明るく返事を返してくる。

「……○○や△△によろしくね」

そこまで嘘をついて、教え子に逢いにいく自分は、なんと堕ちた存在なんだろう。

携帯を切った聡は、ようやくシートに寄りかかって、窓の外に目を移した。

暗い窓には、自分の顔が映っている。

――――卑しい顔をしていないだろうか。

そんな聡はさっき、博史と口づけを交わしたことを思い出した。

コンパクトを取り出して、口紅を塗りなおす。

つやつやとしたそれで装う唇は、まさに9才も年下の教え子のためのものである。

それでも、一目だけでもいいから逢いたい。暴走する感情に聡はもう抗うすべを持たない。

口紅を塗りなおした聡が、髪をととのえようと再び窓を鏡にしたときだ。

ガラス窓に白いものが吸い寄せられるようにくっついて、すぐに消えた。

聡は窓に顔を近寄せた。

――雪だ。

黒い空にも、ぼってりとにごった色を際立たせた雪雲は、とうとう耐えられずに白い華を散らしはじめた。

「とうとう降りだしましたねー」

運転手がフロントガラスから空を仰いで聡に聞かせるように独り言を言った。

道路もだんだん流れが滞りがちになってきた。

でも、まだ歩くよりは早い速度だ、ということに聡は希望を持つ。

しかし。

だんだん、車が停車するたびに、歩道を歩く人に追い越されるようになってきた。

雪はそれほどひどくはないのだが……。

雪の舞う歩道を、手をつないで歩く若いカップルが聡の目に入った。

ビニール傘を1つずつ手にし、舞い落ちる雪を楽しむように、ゆっくりと歩く。

寒さは、お互いの手の温かさを際立たせるだろう。

たぶん、この寒さでさえ、あの二人にとっては、この夜をひきたたせる演出でしかないのだ。

聡は、いつしか、将とはじめて手をつないだあの湾岸を思い出していた。

あのころは今日のように寒くはなかった。将の指は博史と同じぐらい長いが、育ちがいいせいなのか、若いせいなのか、それは柔らかい感触だった。

あの手の感触も、腕の感触も、唇の感触も——鉄くさい味がした傷だらけのキスも——すべて聡には忘れがたいものになっていた。

窓の外をいく二人に、聡は自分と将を重ねた。

聡が乗るタクシーは、信号が緑のときは、その二人をのろのろと追い越し、赤に変わると二人のほうがタクシーを追い越した。

しばらくそんなことを繰り返していたのだが……。

とうとう、タクシーは二人を追い越せなくなった。聡は窓に顔をくっつけるようにして二人の姿をみようとした。

氷のような窓の冷気が産毛から頬に伝わるようだった。

二人の姿は、はるか前方に歩いていってしまったようで、聡からは舞い落ちる雪しか見えなくなっていた。

待ち合わせの場所まであともう少しというところで、車の流れは完全に滞ってしまった。

「お客さん、事故か何かですかねえ……もう進まないみたいですよ。歩いたほうが早いですよ」

運転手は観念して聡に告げた。待ち合わせ場所まではここから歩けば１０分ぐらいだろう。

車道側を見れば、片側４車線の大通りの真ん中の車あたりからも、あきらめた人が車から降りて歩き出している。

傘を忘れてしまったし、歩きにくいヒールのブーツを履いてきてしまった。

もう一度携帯を開いて時間を見る。１８時３５分。

もう待ち合わせから１時間以上も経ってしまっている。

でも。

聡は意を決すると、そこでタクシーを降りた。道路に足がついたとたんに、車の間を縫って走り始める。

将はコンサート会場の前で待っていた。

ここもクリスマスらしい、電飾とライトアップがなされていて、コンサートへ向かうカップルがそれを指差しながら次々と将の横を楽しげに通り過ぎていった。

――アキラ、来てくれるよな。

クリスマスソングがどこからともなく聞こえてくる中、将は、空を見上げた。

聡へのメモには17時30分と書いたが、開演は18時30分なのでまだ余裕がある。

将のすぐ近くを、手をつないだカップルが通り過ぎた。明らかに男のほうが若いカップル。

40代に見える彼女のほうは年甲斐もなく、彼によりそい甘えている。

こんなにあからさまなカップルだっているのだ。聡は何を尻込みすることがあろうか。

なかなか自分に甘えようとはしてくれない聡。

でも本当はとても泣き虫なことを、将は知っている。

――いつだったっけ。

たぶん、将と聡が初めて手を握り合ってしばらくして、だったと思う。

将と聡は週に1度ほど食事をともにするようになっていた。

教え子におごられるのを聡は嫌ったから、安い定食屋やラーメン屋がほとんどだったけれど。

そんなあるとき、聡が「ちょっと本屋に寄っていい？」と提案した。

将に別に異存はなかった。今日発売の漫画誌ではない月刊誌を聡は見つけ出すと、それに1つだけ連載されている漫画を開いた。

「キョーシが立ち読みかよー、しかも漫画」

将はわざとあきれたように言った。

「だってぇ。これ先が気になってたんだもん」

それだけ言うと、聡は漫画に集中し始めた。将は他の本を広げるふりをしながら漫画に見入る聡の横顔を見ていた。

聡は平穏な顔をよそおいながら、その表情を微妙に変化させていった。

読み始めとは明らかに見開く目の大きさが違っている。

お、と将はたじろいだ。聡の瞳に涙がたまりはじめていた。さすがに涙を流すのはまずいと思っているのか何回もまばたきを始めた。

熟読に耐えられないのか、本と顔の距離を離して、早いペースでページをめくりはじめた。

「ハイ。もういいよ」

聡はその雑誌を棚に戻すと、将に向き直った。

その目にはまだ涙が残っているのか、まばたきを素早く繰り返している。

下りエスカレーターに乗りながら、聡は無口だった。

「アキラ、さっきうるうるしてただろ」通りに出て将は笑いを浮かべて言った。

「……え」

「俺、漫画の立ち読みでうるってる女初めて見た」

と将がくすっと笑うと、聡は

「うるさいっ」

と、そっぽを向いてすたすたと歩を早めた。

「アキラー、アキラセンセイ?」

将は聡の後を追うと、さきまわりして聡の肩を正面からつかんだ。

ぷうっとふくれて横を向く聡の瞳から、たまりすぎていたのか、ぽろっと1粒の涙が転げ落ちた。涙は赤いネオンを移してルビーのようにきらめいた。

それを見た将は、なんだか温かい気持ちで心がいっぱいになるのを感じた。

「……いいじゃん。俺、そういうの好きだよ。何をみてもムハンノーよりずっといいと思うよ」

それはフォローなどでなく、たった今湧き出した将の本心だった。

前に一緒にいることが多かった瑞樹は、聡よりかなり若いにもかかわらず、あまり感情を出さない女だった。

そして将自身もあの爆破事件以来、感情を表にだすのを我慢してきたようなところがある。

いままで、漫画や本で涙を流すような女はむしろ嫌いだったはずだ。

だが、そんな聡を好きになって。素直に感情を顔に出す聡といることで、存在を忘れていたような将自身の感受性が再び息を吹き返したのだ。

「うるさいっ。生意気なこと言わないのっ」

聡は涙をぐいっとぬぐって将をにらみつけた。

こんなときに思い出すのは、そんな何気ないことだ。

記憶を彷徨していた将の意識がふっと、現実に戻ると、白いものが舞いだしていた。

55◆クリスマスの約束4

聡は色とりどりの灯りに彩られた通りを、やみくもに走り続けていた。

空気は思ったより冷えていて、それを吸い込む肺がきしむように感じたのも初めのうちで、今は激しく波打つ心臓と一緒に破けてしまうのでは、と思うほど痛い。

走って30秒もしないうちに、ヒールの足が痛んで、これも今は棒のようだ。

それに優雅に舞っているように見えた雪は、走る聡を意外にも阻み、ひらひらと舞い落ちては、走る聡の顔に髪に次々と張り付いて溶けた。

汗と雪どけの水分で、きれいに整えた髪はめちゃくちゃになるが、かまわず走り続ける。

段差にヒールをとられてあわや転びそうになるのを、こらえて足が吊りそうになる。

さっきタクシーで追い越し追い越されつつしていたカップルが見えてきた。

傘2つで道幅いっぱいに歩いているのが、今の聡には邪魔だ。

よけてくれる時間すら惜しい、待てない。

「すいません」といいながら、肩がぶつかって、身を翻す。
カップルの男のほうが何か叫んでいたがかまわない。
聡は無視して走り続けた。

会場前の時計は１８時３０分を指していた。
――やはり来ないのだろうか。
降りしきる、というほどではないが、雪が舞い落ちていく中を、将は立ち尽くしていた。
もう開演時間というのもあり、さっきさんざん通り過ぎた、幸せそうなカップルたちすら通らない。
なんとかして携帯を充電するんだった、と３０分ほど前、将は悔やんだ。
でも――こんな日だから、来るときは遅れてでも来るだろう。
逆に、携帯やメールが通じたなら。
『ごめん。やっぱり行けない』というメッセージを受け取ってしまうかもしれない。
むしろそっちを、将は恐れた。

辛抱強く待つことを決めた将の頭の中に、古い歌が流れ始める。

雨は夜更け過ぎに　雪へと変わるだろう
きっと君は来ない　ひとりきりのクリスマスイブ……

歌はひとたび流れ始めるとリフレインとなって何度も押し寄せてくる。

――本当に来ないつもりかよ？

聡は本当に将を見捨ててしまうのだろうか。

寒さもあいまって、それが現実になる怖さに将は震えた。

美しい色とりどりのライトアップに繰り返されるクリスマスソングが今の将には虚しい。

宇宙空間にたった一人よりむしろ、賑やかな中、たった一人で取り残されるほうが寂しいというのを将は思い知った。

いっそ最初から、愛を知らなければ、こんな思いをすることもなかっただろう。

聡を愛してしまった将は、一人ぼっちだと思っていた頃より、ずっ

と寂しくなった。

太陽の温かさを知る幸せは、それを失えば闇の冷たさがさらに突き刺さるということなのだ……。

――まいったなあ……。

自虐的にそんなフレーズをわざと頭の表面に思い浮かべて、将は目の焦点をぼかした。

色とりどりの光が万華鏡の中の光景のように崩れて、目の前が単なる二次元になった。

そうしないと涙がこぼれてしまいそうだから。

時計は１８時４５分になろうとしていた。

将はもう一度雪が降ってくる空を見上げた。ため息が白く立ち上っていく。

この思いも白い蒸気のようにいつか、消えていくんだろうか。

……とうとう将はあきらめて歩き始めた。

下を向くとよけいに涙がこぼれそうだから、前を向いて、できるだけ何も思わないように意識して歩く。

でもどこへ行けばいいんだろう。これから、どうすればいいのだろ

う。

――――どうすんだよ、アキラ！

最後に将は聡を心で呼んだ。

その名前を思い浮かべただけで、とうとう堪えられずに将の目から涙がこぼれおちた。

そのとき、将は聡の声を聞いた気がした。

まるで心での呼びかけに答えるかのタイミングだった。

「将！」

もう一度、こんどははっきりと聞こえた。

半信半疑で振り返った将は、確かに捉えた。駆けてくる聡を。

雪と汗でぐしゃぐしゃになった顔は、将の姿を見つけて、さらに涙が加わった。

将も知らず、聡が来るほうへと走りはじめていた。

聡はよろよろになりながらも最後の力を振り絞って走った。

「アキラ！」

将の呼びかけを合図に、聡はタックルするように将の腕の中に飛び込んだ。

「将……」

力を出し切った聡は、そのまま力尽きるように倒れこんできた。

「ごめんね……遅くなって」

聡はそれだけ言うと、体をかけめぐる激しい血流に、頭の中が真っ白になり何も考えられなくなった。

ただ、腕だけが、将のぬくもりを求めて、将の体にからみつく。

将は聡の全体重を受け止めながら、彼女の体全部が心臓になったような激しい動悸を感じていた。

全身、湯気がでそうなほどの熱さだ。

責めの言葉も、理由を求める言葉も……愛を告げる言葉ですら出てこない。

将はただだまって聡を力の限り抱きしめるしかなかった。

そんな二人を色とりどりのライトと舞い落ちる雪が包む。

さっきと変わらない風景は、限りなく美しい情景となって将の目に映った。

「……ずいぶん、インターナショナルな挨拶だな」

将の腕に抱かれた聡は、聞き覚えのある低い声を背後に聞いた。

ゆっくりと振り返る……恐れていた通り、そこには博史が立っていた。

56◆ホテル1

博史の視線を照射された聡は、メデューサに魅入られたがごとく動けなくなった。

ただ無意識に将にからめていた腕をはずし、将のそばから一歩下がった。

将は聡の腕が離れて初めてこちらを見ている博史の存在に気づいた。

――この男が……。

将は視線に力を入れた。それは博史の顔をよく見ようと目をこらしたから……だけではない。

博史は、むしろほほえんでいるような顔で、こちらに近づいてきた。

……強い風が吹いて、雪が舞乱れた。

ついに、将の目の前、殴ろうと思えばお互い殴れる距離に博史が立った。

聡は、博史のほうを凍りついたように見て、ただ唇をふるわせていた。

17歳の約2倍、33歳だという男は、将のことなど見ていなかった。

さっきの低い声とはまるで違うやさしい声音で

「教え子さん？」と聡に訊いた。

訊かれたとたん聡は下を向いた。かすかに肩がふるえている。

将は聡を守ろうと自ら口を利いた。

「古城先生の教え子で鷹枝将といいます」

視線は博史の顔に残したまま、頭を軽くゆっくりと下げた。

博史はそこで初めて将のことを一瞥――つま先から頭まで一通り――し、最後に目をあわせて

「原田です」

と低めの声で苗字のみを名乗った。当然ながら頭は下げない。

笑顔に見えるその細い目は何もかも知っている目だった……つまり将のことを間男として蔑ずむべく、目の奥には憎しみがやどっていた。

「教え子さんとパーティだったの？」

博史は将を笑った顔のまま、目の奥でにらみつつ言った。

聡はあいかわらず下を向いたままだ。長い睫がふるえているのがわかる。

そのようすが聡を守るべく将にウソをつかせた。

「そうです。他にもメンバーがいるし、僕はただ迎えに来ただけです」

――こんなくだらない嘘、信じるはずがない。

将はわかっていても嘘をつくほかはなかった。

「先生、言ってた彼氏ぃ？」

下を向く聡のほうを見て、演技を続ける。聡は泣きそうな顔で一瞬将の顔を見上げた。

しかし、すぐに博史の視線を感じて、視線を落とす。

「そうよ……」

将の気遣う視線がわかった聡は、かろうじて声にすることができた。

「……どうして、ここに？」

不自然でないように、博史に訊き返そうとしたが、恐くて博史の顔をどうしてもまともに見ることができない。

目を伏せてしまった。

「さっき言ってた、今日付き合ってほしいところの店じまいが、思ってたより早かったんでね。

それから、だめモトでキャンセル待ちしてたホテルが空いたという

連絡が急に入ったんで追ったんだ」

ホテル。今夜、博史が聡を抱くために用意した部屋。将は思わず再び博史への視線を強めてしまった。

博史のほうはとうに将のほうなど見ていなかった。聡の肩に手をかけると、優しい声で

「来てくれるね？」

と言った。

今度は将が聡を見つめる番だった。思わず奥歯を噛み締める。

――いやだ。

せっかく逢えたのに、他の男に抱かれるために行ってしまうなんて。

将のすがるような目線を感じたのか、意外なことに博史は

「君も来る？」

と将に声をかけた。将は、そして聡も、え？と目を丸くして博史の顔を見た。

博史は、その二人の表情がそっくりなことに嫉妬したが、ひっこみがつかない。

――ここは遠慮するよな、普通。

という思惑は見事はずれた。

将はことさら明るく笑顔をつくり

「ええー、いいんですかぁ。俺どうせ暇だからうれしーなー」

と鈍重でバカな小僧を演じきった。それはひとえに聡が博史に抱かれるのを阻止するためだった。

さっきは舞っていた雪は止んでしまっていた。

混んだ通りを避けて、3人は少し歩いて別の通りに出てタクシーを拾う。

もちろん交わす言葉などない。

タクシーに乗り込むときに、聡は遠慮がちに初めて博史の顔を見て

「あの……、どこに行くの?」

と問いかけた。

博史は細い目で微笑みながら、聡を先にシートに座らせて

「いいところ」

とだけ答えた。運転手には「○○パークホテルへ」と告げた。

その隣に博史が乗り込んだところで、将は博史の隣に――つまり後部座席に3人並んで座ろうとした――ジーンズの腰を押し込もうと

した。

博史はあきれて

「君は助手席」

と命令した。

「あー、すいませーん」

将はえへへと笑うと後ろ頭を掻いた。これも鈍くてバカな若者を演じるアドリブなのだが。

――3人でホテルなんて、何を……。

聡は、博史がどういうつもりだかが理解できなかった。

タクシーは今度は順調に夜の街へ向かって滑り出した。

将は後ろの座席が気になって仕方がなかった。しかし助手席というのは意外に後ろが見えない。

バックミラーは運転手専用のようなものだし、サイドミラーは暗くてよく見えない。

そうかといって、後ろをしょっちゅう振り返るのは、聡の立場を考えると博史がいる限り、難しかった。

仕方なく将は精神を集中して後ろの会話に聞き耳をたてた。

タクシーが動き出すなり、博史は聡の手の甲に自分の手を重ねた。

聡は一瞬びくっと体をふるわせたが、何も声をたてられない。心臓が存在を主張し始める。

行き先を見るような振りをして前をみつつ目の端で将の姿を追った。

しかし前の車の赤いテイルランプに照らされたボサボサ頭は前を向いたままじっとしているだけだ。

博史は聡の顔を見ながら、聡の手をさすった——自らの指をたてて、聡の指と指の付け根の柔らかい部分を、さするように愛撫する。

それは主に愛しあったあとのベッドの上でよく行われた行為だった。

聡は目を伏せて、触れられた手を固く握ることで指の股に挿し入れられた博史の指を追い出そうとした。

すると締め出された博史の手はだいたんにも、聡の太ももに取り付いた。

博史とは逆の方向に閉じて揃えられたそれはスカートとストッキングに覆われていたため、

博史はしばらく布地の上から太ももの上を往復しはじめる。

聡は再びびくっと体を硬直させると前を——後姿の将の髪を再び——

―今度ははっきりと助手席のほうを見てしまった。

次に、しまった、と博史の顔を見た。鼓動が早くなるのがわかる。

暗い車内で、細い目のはずなのに博史の白目がピカっと光った。

そのまま、手を伸ばして太ももに這わせた手を、膝あたりにあるスカートの裾に持っていくと、

内側に手をかけて、そのままグイ、と引いて聡の足を開脚させた。

「やめて」

思わず、聡は大きな声を出してしまった。心臓は胸から飛び出しそうなほど暴れている。

もはや振り返っても不自然ではない声に、当然将は後ろを振り返る。

運転手もバックミラー越しに興味津々なのがわかる。

博史は手をさっと引っ込めて知らんふりをすると、聡に微笑んだ。

「冗談だよ。バカだな」

そういうと将の見ている前で――将の視線を十分に意識しながら――後ろから手をまわして聡の頭を撫でた。

将は、何もいえず、無表情をとりつくろって再びゆっくりと前を向いた。

髪に聡のすがるような視線がからみついているのがわかる。

「なあ、聡、明日学校休める？」

博史は聡の髪をいじりながら訊いた。

「どうして？」

声がうわずってしまっている。

「明日こそ、両親に紹介したいと思ってさ」

「……ずいぶん急ね」

少し低めの声は、暗に強引な博史を非難したつもりである。

「実は、結婚を早めたいんだ」

博史の声は落ち着いたものながら、車内に響いた——もちろん将に聞かせるためだ。

57◆ホテル2

将は博史のおもいがけないセリフに思わず振り返って聡を見た。

ちょうど同じように驚いた聡がよりかかっていたシートから身を起こすところだった。

目があった。

二人の視線の一瞬の邂逅を博史は見逃さなかった。

聡は博史のほうに向き直ると

「何で?急に?」

と訊いた。なんとなく、そういうことを言われるかも、と予想はしていたが、この状況でいわれるとは……。

「何か、悪いこと言ったみたいだなぁ」

博史は笑いを含んだ声で答え、聡の髪を撫でていた右手を自分の頭に持っていった。

その目だけが……明るい調子のセリフとかけ離れている。その目に気おされて聡は

「いや、そうじゃないけど……」

と下を向いた。将も後ろに意識を飛ばせたまま前を向くしかない。

「後で二人になったら話すけど、いろいろと事情があってね」

『後で二人になったら』

今夜絶対に博史は聡を抱くつもりだ。将は思わず瞳だけが後ろを見ようと右に寄ってしまう。

――絶対に、何があっても邪魔してやる。

助手席で将がそんなふうに悶々とした思いを抱えていると知っているのか、

「賛成してくれるだろ。前からアキも早く結婚したがってたことだし」

と博史は二人にプレッシャーをかけるように付け加える。

そのとき、タクシーは○○パークホテルに滑り込んだ。

○○パークホテルは特に新しいわけでも、斬新なデザインでもなく、派手な設備やテナントがあるわけでもないのに、

女性誌などで行われる「有名人に聞いた好きなホテル」などといったアンケート企画に必ず名前を連ねるホテルだ。

「垢抜けないけどなんとなくゆったりとした雰囲気がいい」

などと誉められている記事を聡もサロンで読んだことがある。

その明るすぎない吹き抜けのロビーを聡の手を引っ張るようにして博史は突っ切った。

将のことは無視しているかのようだ。

引っ張られた聡はときどき将をすがるように振りかえる。

こんなところまで将が付いてきたのは、聡のためだけだ。

奥のほうにブライダルコーナーがある。

クリーム色を基調としたここだけは、ひどく明るい印象で、将は足を踏み入れるのが気恥ずかしいほどだった。

博史はそんなことはまるで気にしないように、毛足が長く足が沈む上品なピンク色のカーペットを踏み込んだ。

「ドレスの試着はまだできますよね」

博史は、笑顔で控えている受付の女性に申し出た。

『クリスマスにドレスの試着をしてみませんか』という案内があるのを将は見つけた。

「ほら、すごいだろ」

博史は無邪気に聡をドレスルームに連れて行った。

そこには壁にぐるりと何十着、いや百着を超えるドレスが下がっていた。

将はあたりを見回して圧倒された。ウェディングドレスが白だけでないことを将は初めて知った。

案内の女性が、ここにあるのはすべてブランド物だと控えめに告げる。

「好きなの着ていいよ。……これなんか聡に似合うんじゃない？」

博史が選び出したのは、シンプルだけど複雑な光沢の織りが豪華な真珠色の一着だった。

「あ、あたし、まだいいわ……」

聡は遠慮するふりをして、逃げようとした。

「何で」

博史が無邪気ながら、絶対に逃がさないという声をあげる。

「だって……」

「せっかく来たんだからさ。鷹枝くんだっけ、……も見てみたいだろ？」

いきなり将は自分に話をふられて、とまどった。

困惑する聡を見て『どうでもいい』と言ってもよかったが、ここは

そういう雰囲気ではない、というのは将にもわかる。
それに好奇心もあった。
「アキラ、着てみろよ」
といつもどおり呼び捨てにしまってから、聡の目が見開いたのに気づいた。
――やべえ。『先生』だった……。
博史のほうを恐る恐る確認したが、彼は気づいたのか気づかないのか軽く笑みを浮かべたまま
「ほら、ね？」
と聡に優しくかつ、絶対的権力をもって向き直った。
聡はスタッフに促されて、博史が選んだドレスと共にフィッティングルームに消えた。
聡を待つ間、ソファーを勧められた二人の男は互いにそっぽを向いたまま、話すこともなく沈黙していた。
そんな気まずい空気を悟ってか、お茶を持ってきたスタッフが
「お式の予定は？」

と博史に聞いた。

「そうですね。3月か4月を考えているのですが」

――ウソ！もう半年ないじゃん。

博史を、将は思わず見てしまった。博史は将がこちらを向くのを予想していたように構えていた。

「まあ、もう、すぐじゃないですか」

「ええ。そうなんです。ちょっと急ぎたい事情がありまして」

「ああ……」

スタッフは悟ったようにそのまま黙った。

『最近はそういう方も多いですからね』という言葉が聞こえるような気がして、将は心の中で、違う！と叫んだ。

スタッフの態度は礼を失したものではないが、おそらく慮ったであろう想像は聡を汚したように将は思った。

結婚に関しての具体的なことを話すスタッフと博史を見て、

『自分たちはこれ以上進まないほうがいい』という聡の言葉はこれが原因か、という疑惑が浮かんできて、みぞおちがズキっとした気がした。

しかし次の瞬間、雪の中、髪を振り乱して走ってきた聡が鮮やかに

浮かんだ。

――そうだ。さっき車の中でだって、結婚を早めたいといわれて、聡はひどく狼狽していたじゃないか。

将はみぞおちに話しかけるように自らを落ち着かせた。

そのとき「わあーステキですぅ」と若いスタッフが思わず声をあげるのをソファーの3人は聞いた。

振り返った将は思わず立ち上がった。

真珠色のドレスに包まれた聡がいた。その姿は光り輝くようで、将は息を呑んだ。

博史をはじめまわりのものが手を叩いて賞賛するのもまるで頭に入らなかった。

「ステキです、ステキですぅ～！まるで女優さんみたい」

居合わせたスタッフが皆駆け寄っていくのはお世辞ではないだろう。

ベールこそしていないが、聡はそのドレスを見事に着こなしていた。

「こういうストラップのないドレスは着る人を選ぶんですけど、聡さんは問題ないですね」

スタッフのいうとおり、大胆に肩を出したドレスは、ある程度、胸が豊かじゃないとずり落ちてしまうだろう。

そのくせ、さる高級ブランドの新作だというそのドレスはウエストが信じられないぐらい細いが、聡はジャストサイズだった。

将は、聡の丸出しになった白くてなめらかな肩や、ドレスの中へとつながる胸の谷間を見て心臓が騒いだ。

胸の辺りは少し窮屈そうに見えるほどだったが、肩から続く腕は、あの抱き合って眠った夜の感触の通りとても細く華奢だった。

肩や胸元の白い肌は、あの川ぞいの飯場から救出するときに見た、聡の裸像をフラッシュバックさせた。

夕陽の逆光がきつかった1回目のときと違って、あのとき、蛍光灯の下で見た……

意識がないとはいえ、ひどい格好をさせられていた……聡の姿は一瞬でも将の脳裏に焼きついている。

いけないとは思いつつ、この1ヶ月のあいだ、将は幾夜となくそれを思い浮かべてしまっていた。

そんなこともあって、将はなんだか見ちゃいけないような気がしてそっぽを向いた。

「弟さんも、お姉さんがキレイでびっくりされたんじゃないですか？」

スタッフの一人が将に話しかけた。

弟。スタッフの無邪気な言葉に、将は自分が聡には若すぎるということを思い知らされた。

自分は聡の恋人ではなく弟として世間に見られるのが妥当……。

愕然とした将は、もう一度聡のほうに向き直った。

高価なドレスは、着る女性によっては、女性のほうが負けてしまうものだが、聡の場合は違った。

派手な化粧をしているわけではないのに、ドレスのほうが完全に聡の引き立て役になっている。

そのオーラは、将にみだらな想像をさせることを封じてしまったほどだ。

しかし、当の聡はといえば、皆に賞賛されるほど似合うドレスを着ているとは思えないような、困ったような顔で、伏し目がちだった。

「本当に、すっげーキレイ。アキラ……」

思わず素直な言葉を口にした将に、聡は視線をゆっくりとあげた。

二人はお互いにせつない目で見つめあった。

「ちょっと胸の辺りが窮屈なんじゃない？」

博史は見つめあう二人の間に割って入るように、ドレスの上端をつまむように、

そこはつまり聡の胸元の、やわらかいところ……そこは恋人か夫だけに許された聖域である……に指を少し入れた。

「うん、やっぱりちょっとキツイだろ？」

将はそれをみて『あっ』と声をたてそうになった。

単に布の締め付け具合を確かめただけだったが、二人が深い関係でないとできないことだった。

それはまだ、将には許されていないことだった。

聡は視線をもう将からはずしてしまい、博史の指が触れる自分の胸元を見ているようだった。

博史のその何気ない行為を嫌悪するようすもない。それほど馴れた二人なのだ……。

ふいに、さっき聡を待っていたときに感じた寂しさの影が、将を襲う。

58◆ホテル3

ブライダルコーナーを出ると、博史はチェックインをしにあわただしくフロントへと行ってしまった。

まるで、将に最後の別れを惜しむ時間を猶予するかのように、聡と二人で、ラウンジに残す。

ラウンジの外の滝もクリスマスのライトアップがされていて、夜の中に幻想的な世界を浮かべていた。

あたりは、ディナー前の待ち合わせか、恋人同士ばかりだった。

将と聡も幸せそうなその中に溶け込んでいた。

なのに、二人ときたらまるで言葉が出てこないのだった。

時折思い出したように相手の顔を見つめて、そのたびに視線が沈んでいく。

訊きたいことはお互いいろいろあるのに。

時が徒に流れていく。

やっと将の口からでたのは

「あのドレスで、ケッコンすんのか、あいつと」

という言葉だった。聡は将の顔を見つめるとゆっくりと首を横に振

った。

その目には決意があった。それに勇気百倍した将はさらに続ける。

「……今日、来てくれたってことは、期待して、いいんだろ」

聡はまたたきもせず将を見つめた。

なんて返事したらいいかわからない。

いっそこの気持ちにまかせてＹＥＳと言いたい。

言ったところでどうなるのだ。立場は変わらない。

でも、こんな状況だから、せめて気持ちだけでも伝えておきたい。

でも、そうしたところで、それでどうなるのか……。

だけど。

「私……将のこと……」

聡は観念してその言葉を口にだそうとした。

言いかけたところで、聡は体の側面に重圧を感じた。

聡の座るソファーのわきに博史が立って二人を見下ろしていた。

「……じゃ行こうか、聡。ディナーは部屋にルームサービスを用意してもらってるから」

博史は聡を促した。将には手をひっぱるようにして無理やり立たせたように見えた。

聡がすがるような目で見ている。

「鷹枝くん。付き合わせて悪かったね。みんなに聡は急用が出来たと伝えてくれ」

博史は聡の肩を抱きながら、そっけなく将に伝えると、そのままスタスタとエレベーターのほうへ向かって歩き出した。

拉致されるかのような聡は何度も将を振り返った。見る間に二人の距離が離れていく。

「待てよっ！」

将は二人を追った。

すると博史が振り返った。細い目をいっそう鋭くさせて将をにらみつける。

「先生にこれ以上何か用か?弟クン」

それっきり将は動けなくなった。目の前で二人がエレベーターに消えるのを見ているしかなかった。

エレベーターの扉が閉じるなり、博史は聡を箱の角に押しやると、他の客の目もはばからず唇を押し付けてきた。

今日はクリスマスイブということで、同乗する客も心得ていて皆知らないふりをしている。

逆に下手に抵抗するほうが恥になる、ということを博史は逆手にとったように、聡の唇を自分の唇で押さえ込む……。

ホテルの外に出た将は、再び白いものが舞い落ちているのに気がついた。

風にあおられて少し勢いが強くなっている雪の中に将は立ちすくんだ。

降ってくる先を確かめるように、空を見上げたところに、モザイクのような灯りを浮かべてホテルがそびえていた。

聡が連れて行かれたのはどのあたりなのか。

……どの灯りの中で、聡はあの男に抱かれているのか。

将はしばらく雪にかまわず、灯りを見つめていた。上をむいているのにもかかわらず、目尻から涙が一筋流れた。

◇　◇　◇

聡はシャワールームにいた……すべて終わった後である。

激しい雨のようにふりそそぐシャワーの下で、聡は立ち尽くしていた。

時折、博史が放出した液体が体内から逆流し腿を伝っていく。

シャワーとまざってタイルへと落ちていく濁った色を見て聡はシャワールームの壁にもたれた。

――イヤだ。

体全体を支配する嫌悪感はシャワーごときで流れるはずはない。

皮肉なことに博史に抱かれることで、聡は完全に博史への気持ちが冷めている自分を、

そして、自分の心にいま住み着いているのは将であることをはっきりと再確認したのだった。

部屋に入るなり、博史は聡を抱きしめた。そして有無をいわせずにベッドへと押し倒した。

それは別に、将の存在ゆえ、というわけでもない。

博史の帰国時はいつもそんなものだった。

乾いた砂漠の国で、禁欲を強いられていた男性が恋人に出会ったときの反応としては普通だろうし、むしろ聡もそれを喜んでさえいたはずだ。

そして、それは別に乱暴だったわけではない。

むしろ、いつもより時間をかけた丁寧な愛撫があった。

心は拒否していたけれど、何度も交わり馴れた相手――。

結局、聡の体はいつもどおりに反応してしまい、あとは何事もなくいつものところへたどりついた。

しかし、我に返ってみると、心はあいかわらず元の沈んだ場所にあった。

今まで博史に抱かれることで感じたような、身も心も高揚するような至福は訪れなかった。

そうして聡は知った。心と体が合致しない交わりの哀しさを。

馴れた相手に体がいくら快感を示しても、そこに心がなければ、あとに残るのはとてつもない後悔と虚しさだけということを。

他の男を愛しているとわかった今、体が心を裏切った辛さを、聡は味わうことになった。

終わったとき、聡はいつのまにか涙を流していた。そんな聡の顔を見た博史は

「ごめん……つらかった？」

と優しく口づけした。

いちおう事前に聡は「今日は体調がよくない」と抵抗を試みていたから。

聡は博史の唇が離れると、背を向けて

「……シャワー浴びるね」

と静かにベッドを出た。

博史はそんな聡に確かに異変を感じていた。

いつもだったら。余韻を楽しむかのように、しばらく裸のままお互いの肌のあちこちをくっつけて抱き合うのが習慣だったのに。

そのまま2回目に突入することも少なくなかった。

シャワーの音はまだ続いている。博史は将の姿を思い浮かべていた。

博史にはわかっている。

聡も将もお互いに惹かれあっていることを。

しかし、たぶん……これは男のカンのようなものだが……一線は越えてないだろう。

ということは、まだ取り戻せると博史は思っていた。

女なんて、肉体の快楽に勝てない生き物だ。

博史はいままでの経験上、そう思い込んでいた。

実際、今まで付き合った女と危機に陥ったとき、どんなに博史が不利な状況でも、思い切り快感をあたえてやればもとどおりだったから……。

だが、そのあとの聡のようすから、少し不安を覚えた。

もっとも、今までだったら、別に他の男に取られてもどうということはない。

他の女を探せばいいだけだ。博史はさほど女に不自由したことがない。

しかし……ある事情を抱える今の博史には聡を離すわけにはいかなかった。

だからシャワーを浴び終わった聡がバスローブを身に着けて出てきたのを見て、博史は少しほっとした。

もしかして、今からでも、服を着て将のところに戻るのでは、という不安があったからだ。

「ねえ」

聡は、バスローブ姿でソファに座るとベッドの上の博史のほうをまっすぐ見て問いかけた。

博史はまだ裸のまま、シーツの下に下半身を隠しているだけだ。

「さっきの……、どういうこと？」

さっき。

聡は愛撫に飲み込まれそうになって危うい意識の下で博史に最後の抵抗をした。

『今日は避妊して』と。

しかし、聡の周期がきっちりとしていることを知っている博史は

『今日は大丈夫な日じゃなかった？』

と聡の肌に顔を埋めたまま訊き返してきた。

実際『大丈夫な日』だったが、体のなかを、せめて汚されたくなかった。だから聡はとっさに

『最近ちょっと狂ってるから……』

と嘘をついた。すると博史は

『いいんだ。……出来たって。むしろ出来たほうがいい』

と答えてそのまま聡のなかに入ってきたのだった。

「あたし、出来ちゃった婚なんてイヤ」

聡は少し強い口調で言った。

「聡」

博史は裸のままベッドを降りるとバスローブを羽織り、可動式テーブルにセットされた冷めたディナーの横にある冷やされたシャンパンの瓶を手にとった。

将と初めて海へドライブした帰りに寄った高級フランス料理店で飲んだシャンパンはクリュグだったことを思い出す。

――こんな、他の男に抱かれた直後ですら、将の思い出から離れられないのだ。

聡は自虐的に考えた。また液体が聡のなかを逆流する。まるで抵抗するように。

ワイン好きの博史だから栓を抜くのも慣れたものだ。

低く『ポン』という音がして、シャンパンフルートに金色の液体が注がれた。

フルート1つを聡に手渡すと隣に腰を下ろした。

「早く、子供をつくりたいんだ」

意外な発言に聡は、目を見開いた。何も言葉が出てこない。

博史はシャンパンフルートをあおるようにして空にすると、聡の肩に腕をまわす。

至近距離に博史の哀しそうな目。聡は目を下に向けた。

「聡、聞いて……おふくろが……先月、余命1年を宣告されたんだ」

それだけ言うと、博史はそのまま聡を抱き寄せて首筋に顔を埋めた。

59◆孤独1

聡に抱きついたまま博史はしばらく動かなかった。

「博史さん……」

しかし聡はそれだけで、おおよそ事情がつかめた。

結婚を早めたり、子供を欲しがったりしたのは、余命が1年を切った母のためなのだろう。

「ごめん」

しばらく聡を抱きしめていた博史は、体を離して、でも聡をまっすぐに見た。

「もう……、だいぶ悪いの？」

聡の問いに博史は首を振った。

「いまのところ、小康状態」

「お母様は、あと1年というのを知ってるの？」

博史は再び首を振った。

「取り乱すたちだから……告知してない」

そして、聡のバスローブに包まれた肩を両手でつかむ。

「せめて。元気なうちに孫の顔を見せてあげたいと思って。聡、協力してくれるだろ」

そのまま博史は聡を抱き寄せる。

聡は博史のなすがままになりつつ、心は動揺していた。

動揺する心が、まるで抵抗するように聡に腕をふりほどかせる。

「協力って……。カタールに行くの？」

と向き直って訊くためのように見えるようにさりげなく。

博史は聡を安心させるように瞳を見つめて答えた。

「中東は遠すぎるから、上司にも事情を話して、異動願いは受け入れられたよ。一度引越しと引継ぎのためにあっちに行くけど、すぐ戻る。

3月までは国内で準備をして、4月からはタイか中国のプロジェクトに入ると思う。

その前に式を挙げて……どっちにしても聡にもついてきて欲しいんだ」

もちろん、妊娠したら日本の病院で産むんだけど、と付け加えて聡をまた抱き寄せる。

そこまで、具体的に計画しているとは……。

博史の腕の中で、聡は絶句した。

博史の子供をつくる。

いままで何度も博史を受け入れていても、結婚を約束していても、具体的に考えたこともなかった。

今は――将に心が移っている今は――もっと考えられない。

が、博史に別れを切り出すとなると。

さっきシャワーを浴びながら感じた嫌悪感の中に、それは漠然と含まれていたぐらいで、はっきりと決意するまでには至っていなかった。

何しろ

博史＜将

というのはさっき、はっきりと自覚したことなのだ。

今、一番好きなのは将だ。これは間違いないといえる。

……だから博史とは結婚できないし、子供も産めない。

そうはっきり言えるほど、整理できてない。

現に、さっきは心は抵抗しながらも抱かれて、結局体はいつも通り

の場所まで行った。

博史その人に嫌悪感があるわけではない。よく知っている体に、よく知っている愛撫。

どこをどうすれば聡にとってもっとも効果的か知り抜いている男を、聡の体はまだ信頼していたのだ。

それは心が他の男に移ったからといってすぐに乾くものではない。

もし、同じ行為を、嫌いだったり、知らない男に無理やりされたのであれば、絶対にこんな風にはならない。

体も心同様苦痛を覚えるだろう。

博史は今、自分の何なのだろうと、聡は博史の腕の中で考える。

9月までは結婚を夢見ていた、最愛だった、男。

もしそのままなら、彼の申し出はむしろ嬉しいものだったに違いない。

しかし、今は。

聡は、その男から無邪気に課せられた役目が苦しい。

だけど、『余命1年』の母を哀しむ男に、その役目を即座に拒否するほど、非情になりきれない。

それに肝心の将は、アメリカに行ってしまうかもしれないのだ。

聡は途方にくれていた。

◇　◇　◇

将はローバーミニを運転してマンションに戻ってきた。

雪は、道路につもるほどの気概もなく、ワイパーに触れるとあっさり溶けた。

鍵をあけると、中は元通りにしつらえてあった。

今朝、ヒージーこと曾祖父の巌が朝食の席で

『お前の部屋を元通りにしてやったぞ』と教えてくれたとおりだ。

『わしはクリスチャンではないが、クリスマスプレゼントだ』巌はカラカラ笑うと

『薪割りがいなくなるのはさみしいが』と付け加えた。

将は思わず巌の肩にしがみついた。毎朝朝風呂をあびる巌からは、加齢臭らしきものはしない。

かすかに線香の匂いがするだけ……東京に妾がいるくせに、毎朝、亡き妻の位牌に線香をあげるのは欠かさないのだ。

『これ、大の男が』と巌は笑った。

子供の頃同じように抱きついたときより、巌の肩が軽くて細くなっていることに将は気が付いた。

元気そうにみえても巌は確実に年老いているのだ。

『また、遊びにこい。あきらさんとうまくやれよ』

と、門のところでハルさんと一緒に手を振っていた巌。

来年のクリスマスにはもうすでに巌からプレゼントをもらうことはない。

このときの将は知るよしもなく、ミニのクラクションで応えて、嬉しい気分で大磯を後にした。

将は暗いままの寝室のベッドの上に仰向けで倒れて部屋を見上げた。

今までと何もかわるところはない。

本当に元通りになっていた。コンポのコンセントも差し込んであるのか、暗闇に黄緑色や赤色の星が浮かんだ。

そう、聡と抱き合って眠ったときのように一一。

将は体を横向きにした。

あのときは強く抱き締めたら折れてしまいそうな温かい聡の体が将の体に向かい合って横たわっていた。

今、将の目の前に横たわっているのは、冷たい虚無である。

目の前に、甘い香りがする聡の髪の毛を思い浮かべた。彼女の吐息を胸に感じていた。

そして細い腕の、ひんやりとなめらかな肌を撫でた。

腕の回想は、さっきみたウェディングドレス姿の聡と重なった。

――今頃、聡は博史と……。

馴れた、いままでに何度も抱き合ったであろう婚約者。

しかもクリスマスイブの夜ときている。

――いやだ。

将は頭を抱えて身体を丸めた。

白い肌の回想は、再び飯場の記憶から、淫らなポーズをさせられた聡の裸体を引き出した。

そこへ博史が覆いかぶさるイマジネーション。

――いやだ。

頭は嫌悪感で充満しているというのに、体中の熱い血液が1ケ所に集中していくのがわかる。

感情とは別のところで嵩まっていく、欲望。

熱さから逃れるように、下半身の着衣を脱ぎ捨てる。

そこは、すでに血液を充満させて硬化していた。

想像の中で、体を広げた聡は博史に犯されているように抱かれていた。

将はそんな想像で自分自身を弄ぶ自分をまた嫌悪して、苦しくて、息が荒くなった。

でも始まったものは、終わるまでやめられない。

いつしか想像の中の博史は、将自身とバトンタッチしていた。

もっと加速させるために、もっと淫らな行為を想像の中の聡にさせる。

さらにさらにエスカレートさせていく。

やがて急速に沸点がやってきて、将は果てた。

まっ白な解放感が一瞬……これが去ると、あいかわらずの暗がり。

セオリー通り自己嫌悪がやってきた。

――聖なる夜に何やってんだ俺。

将は手の中のティッシュペーパーを暗がりの中に見た。

いつもはとっとと捨ててしまうそれに、自虐的な今日の将はなぜか惹かれた。

淫らな想像と、それによって吐き出された精液で汚されたティッシュペーパー。

保健で習った知識によれば、その中には将のＤＮＡを持った精子が１億だか、いるはずだ。

そいつらは、もしも女の中に放出されれば、熾烈な競争を遂げて、タイミングが合えば１匹だけが卵子と結ばれるはずだった。

だけど、ティッシュの中のそいつらは、競争のチャンスも与えられることなくティッシュの中で今次々と乾き死にしている……。

今までだって、ティッシュの中や、コンドームの中で何十、いや何百億匹もムダに放出してきたはず。

そのことについては何も思わなかったのに、なぜ今こんなことを思うのだろう。

――それは、聡という絶対的な対象が出来たから。

そしてその聡が他の男を受け入れてしまったから。

そんなことは深く考えなくてもわかる。

聡と結ばれたい。聡を抱きたい。

あいつらだってどうせ無為に死ぬなら聡の体内で競争を繰り広げたかったはずなのだ。

将は、横たわったまま、さっき自販機で買った煙草を取り出すと火をつけた。

ライターのあかりに下半身をむき出しにした自分の情けない格好が照らし出されるが、すぐに暗がりに戻る。

紫煙は暗がりで見えないが煙草の先は幽かに赤く光っている。

まるで、ヒージーが毎朝仏壇にあげる線香の先端のように。

虚しく死んでゆく精子に虚しい自らを重ねると、そいつらへの供養のように、煙を深く吸って吐いた。

60◆孤独2

昨日の残滓のせいか、将は深く眠ることができず、早く目が覚めた。

充電された携帯がようやく使えるようになっていた。

将はベッドに横たわったまま、2週間近く使えなかったメールをチェックする。

電源が切れている間にいろんなやつからメールがきている。井口らから安否を気遣うメールがほとんどだ。

その中に聡の名前を見つけて、将は、ガバ、と身を起こした。

＝＝＝＝＝＝

12／8月21：20

このメールを見たら

今どこにいるか連絡してください。

心配しています。古城

＝＝＝＝＝＝＝

１２／１０水１７：３０

今日、模試の成績が出ました。

すごくいい成績でした。

連絡を待っています。古城聡

＝＝＝＝＝＝＝

１２／２０土０：２４

どこにいるの？

会いたい

会いたい。

＝＝＝＝＝＝＝

３通めのメールを表示した携帯を将は握り締めた。

確かに「会いたい」と表示している。

それを見たとたん、将は手早く服を着ると、駐車場へ駆け下りた。

聡の顔が見たい一心で○○パークホテルへと車を走らす。

昨日の雪はやんで、雲の間から澄んだ青空がのぞいていた。

昨日、タクシーの中で、博史は聡を自分の両親に会わせたいといっていた。

――ということは絶対に、二人はフロントに現れる。

きっと会える。

ハンドルをきりながら将は、高揚していた。

今度会ったら……！

朝日が雲間から将の顔を照らした。

しかし、赤信号で車が止まると同時に、思考も止まる。

光り輝く太陽から見れば真っ暗な高架の下の影にミニは停車した。

たぶん、昨日の夜、聡は博史に抱かれてしまっただろう。

それで、モトサヤかもしれない。

ハンドルを握ったまま肩を落とした。

昨夜の淫らな想像が現実となって脳裏をかすめた。

と、後ろからクラクション。

信号はいつのまにか、気付かないうちに青に変わっていた。

あわててアクセルを踏む、と同時に再び進行するプラス思考。

高架の下を抜けると、冬の朝日がフロントガラスに、希望のように一筋、さしてきた。

昨日の別れ際。博史に肩を抱かれた聡は何度も自分を振り返った。

そのことに希望をつなぐ。

それに昨日、言いかけた言葉。

『私、将のこと……』

それは、前後の行動からいって、絶対に続くのは肯定的な言葉しか、考えられなかった。

ずいぶん早く着いてしまった。

25日、クリスマスといえど今日は平日。将はラッシュがピークを

迎える前に到着することができた。

いくらなんでもこんなに早く、二人が出発することはないだろう。

仕方がないので、バカ高いモーニングをとったあとで、ラウンジへ移動し、新聞を読みながらフロントや、上から降りてくるエレベーターに目を光らす。

あ。そうだ。

気付いた将は、ダメモトで聡にメールを送信する。

『あとできっと会いたい。返信待ってる』

さりげなく読めるように短いメッセージに想いを込める。

そのころ、聡はシャワーを浴びていた。

部屋ではボーイがディナーを片付け、かわりに朝食を用意していた。

「失礼します」

若い女性のスタッフが大きな箱を持って現れた。

リボンが掛かっていていかにもプレゼント風である。

博史はそれを受け取ると、ソファの上に置いた。

ふと、聡のバッグの中で、低い振動音をたてる物体がある。

博史はためらわず、バッグから携帯を取り出した。ピカピカと点滅しながら、案の定『鷹枝将』の文字が表示されている。

博史は携帯を開くと、そのメッセージを読む……顔色一つ変えずに削除した。

ゴミ箱も空にして痕跡を残さない。

ちょうどそのとき、シャワーの音が止んで、博史は携帯を素早くバッグの中の元の位置に戻した。

聡がバスローブに、髪の毛をタオルで包んで再びシャワールームから現れると、

明るい朝日の中で朝食の準備が整っていた。

「……わぁ。すごい」

それにはモーニングシャンパンまで用意されていた。

「せっかくのクリスマスだからね。それと、これは僕から」博史は笑顔で大きな箱を聡に手渡した。

「え、なあに？」

「クリスマスプレゼント、といっても昨日、あわてて選んだんだけど。開けてみて」

そういわれて、聡ははっとした。

博史へのクリスマスプレゼントを何も買っていない。それどころか将へのプレゼントも……。

「ごめん、博史さん、私……」

思わず深刻な顔になる聡に

「何？何だよ」

博史は、おどけて聡に顔を近づけてくると、おでこをくっつけた。

あくまでも優しい目が笑っている。

「いいんだよ。聡にはもっといいものをもらえるから」

聡ははっとする。

子ども。

瞳に不安な色を浮かべた聡の、頭に巻かれたタオルを博史はくしゃくしゃっとかき混ぜて笑った。

髪の水分を含んだタオルはとれて、甘栗色になった濡れた髪の毛が露出した。

「開けてみろよ」

美しいリボンがかけられた包みはびりびり破くのにはもったいない

と感じるものだった。

ていねいに爪をたててシールをとって箱をあけると、そこには淡い色のワンピースが入っていた。

シックなデザインだが上質な色と生地はいかにも高価そうだ。

「ありがとう……」

「今日はそれを着たらいいよ」

「え？」

「今日、俺の両親に会ってくれるんだろ？」

そうだった。余命1年。聡に再び重圧がかかる。

「うん……」

博史は、うかない顔でうなづく聡の濡れた髪の毛をもう1回くしゃっとかき回すと

「俺もシャワー浴びる。あ、髪は、美容室予約しろよ」

と笑顔でバスルームに消えた。

聡は、リモコンでテレビを点けるとソファのほうへ行きバッグを手に取った。

博史の前では見れなかった携帯を取り出しチェックする。

もしかして……万が一のようなものだけど、昨夜のうちに将から何かメールが入っているかも、というかすかな期待があった。

しかし、新着メールはなかった。

聡はため息をついて朝日が差し込む窓辺の外に、将の顔を思い浮かべた。

昨夜、雪の中で夢中でしがみつく寸前、どんな顔をしていただろうか。

思い出せない。聡の中の将の顔は、何故かいつも少しつらそうな笑顔だ。

テレビでは、晴れ間は朝の間だけで、夕方頃から再び雪が舞うと予報していた。

61◆孤独3

ゆっくりめに出勤するのだろうか、9時ごろになるとフロントは平日のクリスマスなりに、チェックアウトするカップルでごったがえしてきた。

一時ほどの流行ではないにしてもやはりクリスマスイブをホテルで過ごす恋人たちはあいかわらず多いらしい。

将は、聡を見逃すまいと、エレベーターが着くたびに目を凝らした。次から次へと着くので気が抜けない。

それでも10時頃にはいったんピークは過ぎたらしい。あわただしさが少し和らいだ。

気がつくと、将の向かいに品のよい老夫婦が腰をおろしていた。60代ぐらいだろうか。二人とも品の良い服を着ている。

「ちょっと電話してみようか」

夫が携帯を取り出す。

「やめなさいよ。まだゆっくりしてるのよ。邪魔しちゃ悪いわ」

とたしなめる妻の細い目のあたりに将は見覚えがある気がした。

誰だかわからないが、ごく最近見た気がする……。

そのときまたエレベーターが着いて、中から人が降りてきた。

その、淡い色を身に付けた女性を聡だと判別するのに一瞬とまどった。

――ふだん、教壇に立っている聡は固い色のスーツにひっつめ髪だし、私服の聡はカジュアルなジーンズに髪を後ろで1つか両側に2つに結んでいることが多かった。

その淡い色のシックなワンピースを着けた女性は、下ろした髪をきれいにカールしていたこともさることながら。

スーツを着た博史に寄り添うその顔は、頬を染めて微笑んで幸せそうに見えた。

ホテルのサロンに博史が迎えに行くと、ちょうど見計らったように聡の髪は仕上がるところだった。

「きれいに出来たね。どこから見てもお嬢様だ」

微笑んで賞讃する博史に聡は

「なんか、照れくさいわ」

と答えながら再び鏡を見た。

ふだん身につけることのない、淡い色のワンピースを身に着けた女がその中にいた。

通常は無造作にまとめている栗色の髪は乱れることなく、つややかな内巻きになっている。

ピンク色のマニュキアを施された爪に、丁寧に塗られたファンデーション。

鏡の中の像は、自分であって、自分ではないのではないだろうか。

今から、婚約者の両親の家に挨拶にいく慎ましい女。これは果たして聡自身だろうか。

聡は、何か、今から舞台の上で芝居でもやるような気分になっていた。

二人きりのエレベーターで、博史は聡の髪をくずさないように肩を抱き寄せ、そっと囁いた。

「服のサイズは大丈夫だった?」

うなづく聡に

「まあ自信はあったけどね。さんざん実物に触ってるから」

とニヤリと口角をあげる。

「ヤダ……」

聡が赤くなって下を向いたとき、エレベーターが1階についた。

将が聡を見つけて立ち上がったとき、前にいた老夫婦も立ち上がった。

「おう、博史！」

夫のほうが声をかけながら、聡と博史のほうへ大またで歩いていった。

「……父さん？わざわざ迎えに来なくてもよかったのに」

「お前が嫁さんを連れてくるっていうから、いてもたってもいられなくてな……。すごい美人じゃないか」

夫妻そろって聡を微笑んで見ている。

聡は自己紹介と挨拶をした。

うまくお嬢さんを演じられていると思う。

「出てきちゃって、母さんは、体は、大丈夫なの？」

博史は母の体を気遣った。

「最近はすっかり大丈夫なのよ。聡さん、これからよろしくね」

「ハ……、ハイ」

聡はあせってお辞儀をした。

博史の母・薫は、『取り乱すたち』には見えず、落ち着いた穏やかな人柄に見えた。

顔色も悪くはなく、余命1年というのは言われなければわからないだろう。

「さっそく、うちに帰って乾杯しよう。聡さん、今日はゆっくりできるんだろう?」

話がまとまると、博史はチェックアウトしにいった。

聡はその間、夫妻とにこやかに言葉を交わしていた。

将はラウンジで立ち尽くしたまま、そんな聡をずっと見つめていた。

聡が少しでもこちらのほうを見れば、気がつく距離である。

しかし、聡はこちらにまるで気付かない。

――緊張しすぎていてまわりがまるで見えていなかった聡に将を見つけられるはずもない、ということが将には考えられない。

チェックアウトから戻る博史が、将に気付いた。

聡の方を見るが、将に気付いていないのを見ると、わざと聡と将の

あいだに立ちふさがり、一同を促した。

４人は駐車場出口へと歩き始めた。

博史だけが将を一度振り返った。聡の姿だけを目で追う将はそんな博史にも気付かない。

４人が見えなくなるまで、ラウンジで立ち尽くしていた。

フロントの賑わいからもクリスマスツリーからも取り残されて、将に寄り添うのは孤独、ただそれだけである。

将はミニを走らせていた。

やみくもに車線を変更するように、運転に集中する。

聡のことを思い出さないように。

――頬をそめて博史によりそう聡は幸せそうだった。

――そのまま笑顔で博史の両親に会っていた。

信号が赤になった。

将はハンドルにつっぷした。

――もうダメなのか。アイツとモトサヤに戻ったのか。そのまま結

婚してしまうのか。

すべての希望はなくなったのか。

それを認めたくなくて、青になるなり、アクセルを踏みスピードをあげ運転に没頭する。

気がつくと、あの海辺の道を走っていた。

聡とびしょぬれになってはしゃいだあの海岸が右に見える。

将はあのときと同じ場所に車を停める。

外に出たとたん、北風が将に吹き付けた。

朝の青空はどこかへ消えて、白い雲に一面に覆われた空の下、冬の海は暗い色をたたえて波が荒い。

サーファーですらいない寒い海。金色に輝くような9月のあの日は幻だったのだろうか。

冷たい風が染みて将の目から涙がこぼれた。

涙は突風にあおられて飛んでいった。

それまでは泣くことなど忘れていたような将なのに、聡を好きになってから、何度涙を流しただろうか。

泣くことだけでなく、笑うこと、喜び、哀しむこと、せつなさ、嫉妬……。

爆破事件以来、凍ってしまったかのようなすべての将の感情を溶かしたのは聡その人だ。

将は空を仰いだ。

その聡が、将をおいて、いってしまう。

飛び立ったかもめが1羽、白い空の中を飛び去ってゆくのが見えた。

「山田さん、山田さんだろ」

と背後から声。

将は防波堤の上で釣りをしていた。

聡との想い出の海岸の先にある、聡と、教師と生徒になるまで、毎日通っていた防波堤で。

ゆっくりと振り返ると、黒いボアのついた紺の防寒ジャケットを身につけた『お巡りさん』が自転車をとめてこっちに近づいて来ていた。

空が暗くなって雪が再び舞い始めていた。降り始めるなり雪は勢いを少し強めた。

「ひさしぶりだねえ。どうしたんだい、こんな寒い日に」

『お巡りさん』の制帽や紺の防寒ジャケットも将のところまで歩くだけで雪でまだらになった。

「どうも……」

将は頭を下げると再び釣り糸に意識を飛ばした。

雪は次々と海の中に音もたてずに吸い込まれていく。

「あーあ、雪積もっちゃってるよー」

防波堤に腰掛ける将にもすでに雪が貼り付いている。『お巡りさん』は将の肩や背中、頭の雪を払いながら

「さては彼女に振られたんだろ」

と笑った。

返事をするかわりに、目からまた涙が出てきた。

『お巡りさん』は将の涙を見て、あせって

「すまんっ！悪かった！」

と謝り、

「元気出せ。女は1人じゃないぞ」

と付け加えて金融の広告が入ったティッシュを取り出した。

優しくされて将の涙はますます止まらなくなった。

ふりしきる雪の中、自らが流す涙だけが温かく頬をつたった。

流した涙は口に入ると海の水のようにしょっぱかった……そのしょっぱさですら、あの海での二人につながる。

『お巡りさん』が慰める言葉は頭には入らなかったがその温かさは心には染みた。

そして温かさは、聡の記憶を呼び起こし、次なる涙を連れてくる。

このままつらい思い出になってしまうには美しすぎるかけがえのない場面の数々。

将はただ涙を流し続けた。

差し出されたティッシュは全部なくなってしまった。

62◆疑惑

「なんだか過剰接待で、ごめんね」

「……ううん。こっちこそ、いろいろしてもらっちゃって」

もう夜も9時すぎ。聡は博史の運転する車の助手席にいた。

断続的に降る雪は、夜を舞う姿がライトに照らされるだけで、都内では積もることはなかった。

午前中に博史の両親の出迎えでホテルを出て。あれから都下の博史の家で聡は歓待を受けた。

博史の実家はゆったりと作ってある4LDKのマンションで、もちろん聡はそこに足を踏み入れるのは初めてだ。

昼食はダイニングで博史の母・薫の心づくしの料理をいただきながらワインで乾杯。

その後リビングで、近所のだという美味しいケーキをいただきながら、博史のアルバムを話題に皆で談笑し、さらに夕食に寿司までとってもらった。

「泊まっていったら」

という申し出を丁重に遠慮したら、博史の父が

「それじゃ、雪も降っているみたいだし、おうちまでお送りしなさ

い」

と博史に命じた。

「ううん、せめて駅までででいいんです」

聡は遠慮したのだが、

「駅までもうちまでも一緒だよ」

と結局、聡のコーポまで送ってもらうことになった。

博史の家のファミリーカーである国産高級車は中も広く、エンジン音なども静かで快適だった。

しかし、正直なところ、聡は早く車を降りたかった。

というのは……、さっき、ソファの上で笑顔で博史の両親と歓談する聡は、体内を流れ落ちる何かを感じた。

昨日、体からしきりに流れ落ちた精液のような感覚。

断って手洗いを借りると、やはり生理が始まっていた。

ひさしぶりにセックスをしたせいなのだろうか、本来は明日だった予定が狂ったようである。

昨日、あわててうちを出て、結果的にそのままホテルに連れて行かれた聡は、その用意をしていなかった。

なんとかトイレットペーパーで急場をしのいでいるが、シートを汚しやしないか心配だし、できれば駅で降りてナプキンを買いたかった。

でもこんなことは博史には言えない。

常識的に恥かしいというのも、もちろんある。それから――昨日、避妊してくれといったのがウソになってしまう。

むしろ聡はそっちを恐れた。

……何を恐れることがあるのだ。バレたら、結婚できない。子供なんてとんでもない。と言えばいいのだ……

聡の中の、本音を手にした悪魔がささやく。

だけど。

優しい博史、そして博史の家の人を――あんなに喜んでくれているのに――傷つけたくない。

いずれ傷つける日がくるのかもしれないが、今はあんまりだと思う。

それから。

本当は早く車を降りて、博史の目の届かないところで携帯をチェックしたい。

将からメールがきているかどうかを確かめたい。来ていなかったらこちらから連絡をとりたい。

婚約している恋人のまえで……仕事上の連絡メールのやりとりなどまずありえない冬休みの聡でもある……携帯をいそいそとチェックするのは憚られた。

「聡、聡ってば」

いろいろなことに気をとられて聡はボーっとしていたようである。呼ばれてはっとした。

「何？」

「年末はいつから萩に帰るの？」

「ああ……。２８日の飛行機を予約してある」

学校は明日が最終日で、翌日はいちおう自宅の掃除をするつもりだ。

「年末年始中に一度、ご両親に挨拶にいかないとね」

博史は聡の顔を見た。

「そんな……、いいわよ、まだ」

一瞬博史と目をあわせた聡だが、合わせ続けることができず、視線は下に下がってしまう。

「よくないよ。結婚を急ぐんだから、遅いぐらいだよ……で、学校は、３月までで辞めてくれるよね」

博史は前方から目をそらさずに言った。

聡はとっさに返事ができなかった。

もちろん将と離れたくないから。

それに……仮に将がアメリカに行ってしまうにしても。

さんざん授業などに工夫した手ごたえがようやく結果になってきている今、辞めてしまうのは惜しい。聡は言い訳のように考えた。

悪かった生徒たちも、なついてきてくれている。

「聡？」

信号が赤になり、博史は返事をしない聡の顔をのぞきこんだ。

「……辞められない、って言ったら？」

聡は下を向いていた顔をゆっくりとあげて、勇気をだして言葉にした。

「どうして辞められないの？」

博史は咎めるでもなく、優しく訊き返した。

「クラスの子と約束したの。卒業まで見守るって」

これは真実だった。あるとき一一たぶん期末テスト近くの放課後の補習だったはず一一で、丸刈りの兵藤にふと訊かれた。

『先生さ、産休の先生が帰ってきたら、やっぱりやめちゃうの？』

どうやら、産休の教師が子供を無事出産したという連絡が生徒にも入ったらしい。

兵藤のせりふを聞いた、近くにいたチャミ&カリナも寄ってきて、

『ウソー？センセイやめるの？』

遠くにいた井口やカイトもこっちを振り向いた。聡は

『わからない。産休の先生がいつ復帰されるかも聞いてないし』

と正直に答えた。

『先生、やめるなよ、絶対』

まず兵藤が言った。するとチャミ&カリナも

『ずっとアキラセンセイがいいよ』

『うちらが卒業するまでいなくちゃヤダ』

と必死な目になった。補習に出ていた一同が同じ目で聡を見ていた。

そのとき井口が後ろから寄ってきて

『フツーさあ、もう2年だし卒業まで担任は持ち上がりだろ。心配すんなよ』

とそっけなく言った。彼なりにクラスメートや聡を気遣っているのだ。

新しい授業方法は、生徒は楽しんで勉強できたが、準備する聡は大変だった。

何しろ、映画を見てレベルなど適切な映画を探さなくてはならない。

そしてその中から授業に使う表現を抜かなくてはならない。

音楽のほうの曲選びは、好きな生徒に協力してもらえばよかったが、それを授業に使えるようにふりがなを振ったり、

文法解説をしたり、使える表現を抜いたりとかはすべて聡の手作業だ。

社会見学については見学先を探してアポイントをとる作業まで、これまた聡のボランティアのようなものだ。

これらのために聡は無償で相当の時間を費やしたはずだ。

でも。これだけ努力をしたのはたしかに報われている。

聡はそのとき、思わず涙が出そうになったものだ。

「……ふーん。意外と頑張ってるんだ」

再び青信号になり博史は前を向いたまま言った。その声はさっきより少し硬質なように思えた。

「でもさ」

博史は平坦な調子で続ける。

「俺と、教え子だったらどっちを取るの」

「そんな」

下を向く聡。以前の聡だったら何の迷いもなく博史を選んだはず、と博史はほぞを噛んだ。

とまどう聡の向こうに、将の姿が透けて見える気がした。

「究極、どうする?」

博史は追い討ちをかけた。早い話が、博史か将かどっちを取る、と問い詰めているのである。

婚約者なら、自分をとのが当然だ、と博史はなおも答えない聡にいらだちを感じる。

「あの鷹枝くんが原因?」

いらだつあまり、思わず直球を投げてしまってから、博史はしまった、と思った。

聡は驚いた顔でこちらを見た。

その顔に、恐怖が浮かんでいるのを……投げた直球が事実である証拠を……博史は見てしまった。

「……なんで、そんなこと言うの？」

聡の声はふるえた。核心を突かれて聡はなすすべがなかった。

――知っている？

当然といえば当然だ。昨日、抱き合っているところを見られているのだから。

かくなる上は博史がどの程度疑念を持っているのかを確かめるしか聡の手は残されていなかった。

聡の瞳に涙がたまってくる――本当は恐怖に震えてなのだが――のを見て博史は動揺した。

「ごめん。そんなつもりじゃないんだ。冗談だよ」

涙をためる自分をずるいと聡は思った。

そんなつもりじゃないにしても涙を、女を……利用しているようなものだ。

だけどそんな理性をよそに、涙は膨れ上がってくる。

まるで、博史を愛していて、彼の疑惑を哀しむように見えてしまうだろう。

実際、まだ惰性のような感情が残っているのかもしれない。

聡は涙しながら自分をつかみきれないでいた。

「ここでいい」

赤信号で止まったとき、聡はドアに手をかけた。

その行動はまるで疑惑をぶつける博史を怒っているように見えるだろう。

本当は博史のほうこそ心変わりした聡に腹をたてるべきなのに……。

先に怒るふりを見せたほうが有利なのだ。聡は醒めた頭の中で考える。

そんな自分に聡は汚らしい女の性（さが）を見た。

「待てよ」

博史は案の定引き止めようとする。

「今日はありがとう。あとで連絡する」

聡はそれだけを言い残すとドアを開け外に出た。幸い沿線の駅近くだ。雪は小やみになっていたものの、冷気が鋭く聡に迫った。

「待てったら」

博史も車を路肩に寄せて、追ってきた。

最寄駅へ急ぐ聡の肩をつかむと、こちらを振り向かせる。

「ごめん。本当にごめん」

せつない博史の目。聡は下を向いた。本当は悪いのは自分のほうなのに。

博史は、そのまま路上で聡を抱き寄せた。温かい体温にすっぽり包まれる聡。

「愛してるんだ……ごめん」

聡の首筋に顔をうめた博史は吐息で囁いた。

聡は目を閉じて深くため息を吐いた。白い吐息は博史の髪の向こうで風にあおられてあっというまに消えた。

――やはり、裏切れない。

3年は離れ離れだったとはいえ4年も付き合った男のぬくもりを聡はむげに突き放せない。

だけど。今日一日、いや、昨日からずっと将のことがいつも心の片隅にあった。

こうしていても恋しいのは将、ただ一人だ。

「もう、いいから」

聡は、博史の腕をゆっくりとできるだけ丁寧にほどいた。

「でも、本当に、今日はここまででいいの。ありがとう」

聡はせいいっぱい笑顔をつくると、博史に背を向けて振り返った。

「連絡するから。じゃあ、さよなら」

博史は信号の赤に染まった濡れた路面に立ち尽くしていた。

以前の聡だったら、別れ際に『さよなら』という言葉は使わなかった。

些細なことだけど……博史は聡の変化にかき消せない不安を覚えた。

63◆46～62話のあらすじ◆

＜46～62話のあらすじ＞

将の父の康三は将に「お前は外国にやるからそのつもりでいろ」と言い残して去る。

週刊誌には将が暴力と薬と不純異性交遊にあけくれている、と大げさに書かれていた。

聡は将のことを信じられなくなり、将の弁解も聞かずに立ち去る（46話）

立ち去ったものの、聡はすでに離れがたくなっている将への想いに苦しむ。

期末テストになって、ようやく将の風邪は治り登校してくるが、聡は彼と目をあわせることができない。

テスト最終日。聡の部屋の前で待っていた将は、部屋がなくなってしまったから泊めて、と聡に頼む。どうやら部屋を父が勝手に引き払ってしまったらしい。（47話）

いっそ家を出て学校もやめて聡と暮らしたい、とまで言う将に聡は心を押し殺して「私たちはこれ以上進んだらいけないと思う」と宣言する。

傷ついて走り去った将を追う事もできず、聡はかつて将がくれたバースデイカードを抱きしめて声をあげて泣く。

その日から、将の姿が消えた（４８話）

将が失踪して2週間。後悔する聡は毎日のように将の夢を見て涙している。

学校には、失踪しているにも関わらず、将の2学期末での中退とアメリカ留学する旨が家族より伝えられる。

問題の模擬試験も、将は素晴らしい成績を残していた。生徒もおおむね好結果で聡はオリジナル授業を続行できることになった。

それでも聡の心は晴れない。聡は将を探して、彼との思い出の場所を彷徨う。

博史から「帰国は２５日」とメールがあるが聡は博史に会うのが怖い（４９話）

土曜日、聡は将が住んでいたマンションに来てしまう。そこで将を訪ねてきた若者と会う。

そのころ、将の父の康三は荒江高校の経営者から、将の引きとめ工作を受ける。

さらにその帰りに、祖父で元外相の鷹枝巌が訪ねてくる。

大磯にある巌（将にとっては曽祖父にあたる）の家にひそかに身を寄せる将が、彼に頼んで、父の横暴を阻止させようとしたのだ。

家に帰った聡は将からクリスマスイブのコンサートチケットが届いているのを見つける（５０～５１話）

将は聡はきっと来てくれると信じている。聡は将の無事を喜んだが、悩んだ末にやはり行かないことにする。

２４日。将との約束ではなく友達の美智子に誘われたパーティに行こうとする聡の家に博史が現れる（５２話）

博史は仕事が早く終わったので有休を取得して帰国を早めたという。

彼と唇を重ねることで逆に将への想いが確固たるものであることを聡は気付く。

一目だけでも将に会いたい聡は、博史に嘘をついて将のもとへ急ぐ。

聡の部屋に将からのバースデイカードを見つけてしまった博史は、聡を追う（５３話）

聡の乗るタクシーは渋滞に巻き込まれてしまい、聡は雪が舞う中、将の元へと走る。

将は約束の時間から1時間以上も聡を待っていた。

諦めようとしたところで聡の声を聞き、二人はついに再会し抱き合う。

しかし、背後から博史の声（５４～５５話）

将は聡を守るため、自分はただの教え子で、みんなでパーティをするために迎えに来ただけだ、と博史に釈明する。

博史は、なぜか将も誘って3人でホテルに行く。

そのタクシーの車中で聡に「結婚を早めたい」と打ち明ける（５６話）

博史は聡をブライダルコーナーへ連れて行き、ウエディングドレスの試着をさせる。

その美しさに圧倒される将。しかし、博史の何気ない動作から、聡と博史の深い関係を知る（５７話）

博史がチェックインしている短い間に、将は聡に「あいつと結婚するのか」と聞く。聡はそれを否定する。

しかし、戻ってきた博史に聡は連れ去られてしまい、将はホテルを見上げて涙する。

博史に抱かれた聡は、早く子供をつくりたい、と言われて驚く。

博史の母が余命1年を宣告されたため、博史は母が元気なうちに孫の顔を見せてやりたいと願ったのだ。

将は、巌の力で元通りになったマンションに帰ると、聡と博史の淫らなようすを想像し自虐的になる（58～59話）

翌朝、携帯を充電してメールをチェックした将は「会いたい」と書かれた聡からのメールを見つける。

将は再びホテルにかけつけ、二人がフロントに降りてくるのを待つ。しかし、将が見たのは、頬を染めて博史によりそう聡だった。

二人がモトサヤに戻ったと思い込んだ将は車を飛ばして思い出の海で泣く（60～61話）

聡は博史の両親の家に招かれ歓待される。

帰りに博史に、学校は3月で辞めれるんだろ?と問われて、聡は辞められないと答える。

それは将のせいか、と思わず訊いてしまう博史。図星の聡は、その

場で車を降りてしまう。

博史は聡を抱き寄せて謝るが、不安がかき消せない（62話）

64◆すれちがい1

汚れたタイル床から洗剤と臭気のまじりあった独特の饐えた臭いが漂う駅のトイレ。

薬局でナプキンを買い、やっと手当てをした聡はようやくほっとした。

激しい水流に飲まれていく、赤黒い色に染まったトイレットペーパー。

早く始まったそれは、博史の精液で汚れた聡の中の粘膜を一刻も早く排出しようとしているのだろうか。

『汚れた』という単語を思い浮かべた自分に聡ははっとする。

9月まで……将を好きになるまでは、愛の行為によるそれは、決して『けがれ』などではなかったはずだ。

むしろ、何日か聡の中で生きているであろう博史の分身をいとおしくさえ思ったこともあった。それなのに。

緊張がとけたとたんに、そんな自分自身を責めるように、下腹部が鈍く痛み始める。

――聡は、生理痛が重いほうである。

子宮に詰まっている自己嫌悪が暴れるかのように、しくしくと痛む。

脂汗さえ浮かんでくる。

しかし、いつまでもこうやって便座に座っているわけにもいかない。

聡は自分自身をうながすように、立ち上がると駅のトイレから出ると、救いを求めるかのように、重い足取りをひきずりながらメールをチェックする。

待っていたメールの着信はない。

いったんホームに上ると、メールを打とうとして、やはり電話をかけることにする。

将の声が聞きたかった。

将と電波をつなげたかった。

将と同じ時間を共有したかった。

コールが鳴り続ける。一心に待ち続けるホーム上の聡に冷たい風が吹き付ける。

３０回鳴らして1回切り、もう1回かける。

乗車方向の電車がホームに入ってくるが、かまわず聡は待ち続ける。

電車を1本見送って、もう３０回コールを鳴らしたが将は出ない。

突風が聡のコートに殴りつけるように吹いた。

携帯を持つ手がかじかんでくる。

ストッキングにパンプスだけの……博史は上品なワンピースにあわせて、靴もプレゼントしてくれたのだ……聡の足先もホームからの冷気で感覚をなくしつつあった。

聡は電話を諦めて、メールにした。

かじかんだ手はミスタッチを繰り返してしまう。両手で包むようにしてようやくキーを打つ。しかし。

『昨日はごめんなさい』

の先が浮かばない。何を打ったらいいのか。何を伝えるべきなのか。

昨日、ホテルのラウンジで、別れ際を思い出す。

あのとき、聡は将にそれを伝えようとした。

結局、チェックインを終えた博史が戻ってきたため、伝えられずじまいだったが……。

将への、もう一人で秘しておくのには耐えられないほどに、せつない思い。

ただ、それをメールで『やっぱり将のことが好き』などと書いてしまうのは軽すぎる気がした。

実際打ってみたけれど、携帯メールのいやに丸っこい字が気になった。

悩む聡の前に、乗車方向の電車がまたやってきた。
聡はいったん携帯を閉じると、電車に乗った。
結局、車内でも帰り道でも、適切な言葉は思い浮かばなかった。
『昨日はごめんなさい。連絡を待ってます』と送信できたのは、もう25日も終わるギリギリの時間だった。

◇　◇　◇

ぼんやりと開けた将の目に縞模様が見えた気がした。
頭が痛い……いや、体のあちこちが痛い。
意識がようやく覚醒し、畳の上に身を起こした将の目に映ったのは鉄格子だ。
鉄格子の前に、警官の後姿が見える。将は留置場にいるらしい。
将は脱力して、再び畳の上に転がった。その物音で、警官が振り向く。
「目が覚めたか」
意外に優しい声で声をかけられた。将は寝転がったままで
「ハイ」と答えながら、夕べの記憶をたどった。

昨日、いつものあの海辺の防波堤の上で釣りをしながら泣いて。

そのあと都内に帰って井口に連絡して。

ひさしぶりの将からの連絡に、井口は喜び『遊ぼうぜ』と声をかけてきたのだった。

井口の誘いに乗った将は、最初は踊りに行き、最初から強いカクテルを立て続けにあおった。

そこで知り合った女の子たちとカラオケに行き、さらに浴びるようにチューハイとビールをがんがんやった。

そのあたりから記憶がごちゃごちゃになっている。

起き上がりながら警官に

「俺、どうしたんすか」

と間の抜けた質問をしながらも、ランダムになった記憶の順番をソートした。

「覚えてないの？」

もう一人、檻の前にやってきた『おじちゃん』という感じの、警官だか刑事だか、が訊き返した。

制服ではなく背広を着ている。

カラオケのあとゲームをしにいったのは覚えている。なんか女の子に無理やりキスされた気がする。

――あと、そうだ、その女がらみでヤンキー軍団と大喧嘩になったんだ。

まもなく将は檻から出されて、調書を取られた。

「君、路上で大喧嘩して、止めようとしたまわりの人まで叩いたあげく、気持ち悪い、とか言い出して吐いちゃってさー、大変だったんだよ」

『おじちゃん』は可笑しそうに将の昨夜の行いを教えてくれた。

「それで、反省を促すために、とりあえず一泊してもらったわけ。……ふーん。君、まだ高2なんだー、見えないねぇ。……でもいけないね。飲酒は」

『おじちゃん』は調書を読み返しながら、穏やかに説教した。

「まあ、前科はないみたいだから、家の人が迎えに来るまで、とりあえずね、留置所で反省してね」

――前科という言葉に将は一瞬ずきん、と心臓が動いた。

とっさに顔をあげた将と、『おじちゃん』の目が合う。笑ったような目だが瞳は厳しく将を見つめていた。

「あの」

反射のように声が出た。『おじちゃん』はそのままの顔で「何？」と訊き返した。

「他のやつらは……？」

「ああ。みんな逃げたよ。君だけここに連れてこられたの。ドジだね」

『おじちゃん』はようやく瞳の奥から笑った。

ふたたび留置場に戻った将は、携帯を取り出そうとして、所持品を取り上げられていることに気付いた。

――そりゃそうだ。留置場の中から携帯できるはずないもんな。

最初から飲む気で、車で行かなかったのが幸いだった、

しかも偽造免許証を車の中に置いてきて本当によかった、と将は胸をなでおろした。

もし車で来ていて、偽造免許証のことがばれたら、留置場1泊ぐらいで事は済まないだろう。

それにしても、携帯をはじめ、いじくるものが何もない留置場はとてつもなく暇だった。

時間を早く消費するために眠りたくても、二日酔いが邪魔をして眠れない。

いちおう、調書をとりながら水をがぶ飲みさせてもらい、頭痛薬ももらったので二日酔いは回復傾向にはあるものの……。

ケンカでいつのまにか殴られたのか体もあちこち痛い。

横になると、「起きなさい」と注意されるので、将は畳の上で体育座りになり、二日酔いのだるさと格闘した。

昨夜の乱行の道筋が明らかになってしまうと、将の意識は自然に聡のほうへ飛んでいった。

博史に寄り添って頬を染めていた昨日の聡が、将が見た最後の聡である。

しかし、あれは本当に聡だったのだろうか。一度は絶望したものの、ここへ来て将は信じがたく思った。

それよりも、おとつい、クリスマスイブにラウンジで聡が言いかけたこと。これがやはり気になる。

昨夜将は、ナイフを手にしたヤンキーにひるまなかった。

聡との愛に絶望した将は、もうどうなってもいいと思っていたのだ。

殺されるなら、殺されてもかまわないと。

将はヤンキーに馬乗りになってその顔をぶちのめしながら、ボロ布のようになって死んだ自分の姿を想像していた。

冷たい死体になった自分に、聡はすがって泣いてくれるだろうか。

目に映る留置場の色がグレーだからだろうか。

想像はモノクロームで、死体になった自分にすがる聡にだけ、光があたっていた。

とてつもなく美しい、でもどうしようもなく馬鹿馬鹿しい幻想に、将は自虐の笑みを浮かべると自らの膝に顔を埋めた。

殴られて腫れた部分に膝があたり、将は「痛て」と小さくつぶやいた。

そのとき、ようやく「出ろ」と警官からうながされた。

午後になって、迎えに来たのは義母だった。義母は何度も警察官や『おじちゃん』に頭を下げていた。

ようやく携帯その他を返してもらい、将は釈放された。

警察署の玄関前の階段を降りてしまうと、将は義母に向き直り

「手間かけたな」

とその場を立ち去ろうとした。

「待ちなさい」

義母は将を呼び止めた。しかし、将はその声に振り向きもせずに、足を早めた。

「大磯のお祖父さまに、ちゃんとお礼を言うのよ、将」

もう何を言っても仕方がないと思っているのか、それだけを将の背中に向かって叫ぶ。

井口のやつに今日の顛末を電話してやろうと、将は信号が点滅し始めた横断歩道を走りながら携帯を手に取る。

携帯を開いて表示を見て、立ち止まる。

聡から夕べ着信があったことを今初めて知る。……しかも2度も。

着信時間を見る。22時25分。ちょうど、踊りに行って大音量の中、バカ騒ぎしていた頃だ。

横断歩道の真ん中に立ち止まる将に、車のクラクションが浴びせられる。

65◆すれちがい2

もつれそうになる足をひきずって、将はようやく道路の対岸につくと、はやる心でメールをチェックした。

あった。聡からの受信メール。

『昨日はごめんなさい。連絡を待ってます』

たった一言だが、将は浮き立つ心でそのまま聡に電話をする。

――出ない。

コールがずっと響き続けた。将はコールが15回鳴ったところでいったん切り、すぐ掛けなおす。

ふだんは無意識にコール数を数えている将だが

――次こそ、次こそつながる?

と期待しているのでカウントしなかった。誰かがカウントしたら50回も鳴らしていたことになる。

将は少しがっかりしたが、なんといっても聡自身から連絡を待ってるとメールがあったのだ。また掛ければいい。

とりあえずメールをしてもよかったが、

聡の声を聞きたかった。

聡の携帯と電波がつながってる実感が欲しかった。

聡と共通の時間を持ちたかった。

……本当は、聡の家に押しかけてもよいのだが、あいにく今日は年内最後の家庭教師のバイトがある。

将は、明るい気持ちで部屋へ帰ることにした。

二日酔いのだるさも殴られた痛さもどっかにすっとんでいった将はようやく、空に晴れ間が見えていることに気付いた。

◇　◇　◇

その頃、聡は、年内最後の勤めで学校に行っていた。

将から電話があったときは、最後の職員会議に出席中で、携帯の近くにいなかったのだ。

職員会議では、新学期は1月8日からであること、また2年生は新年そうそうの1月11日より修学旅行がある旨が確認された。

行き先は北海道でスキー研修である。

他校の生徒と問題を起こさないようにという配慮がいかにも問題児の多い学校らしい。

他に、こまごまとした伝達事項があり、職員会議は長引いた。

職員会議のあと、聡は教頭に呼ばれた。職員室の一角を区切った打ち合わせスペースに教頭と向かい合う。

「古城先生のクラスの鷹枝将くん、学校に残ることになったから」

開口一番そういわれて、聡は開いた口がふさがらなかった。

「それから、古城先生の授業のおかげで1、2年の英語の成績が全国偏差ポイントで5もアップしたので、来年度もよろしくお願いしますよ」

聡はしばらくボケッとしていたがようやく口をひらくことができた。

「あの……、どうして、でしょうか、何かあったんですか？」

教頭はそれを将のことだと思わずに、後半のことだと思ったらしい。

「だから、英語の成績がアップしたからですよ。古城先生のやり方が認められたんですよ。

来年度からは産休代理ではなく、正式に持ち上がりで3年2組の担任をやっていただきます」

「あ、いえ。鷹枝くんは、どうして……」

教頭は目をちらりと聡のほうに向けた。

「さあ。家庭の事情で、アメリカ行きが取りやめになったと聞きましたが」

本当は、学校が政治献金を餌に引き止め工作を行ったのであるが、教頭はそういう風に説明した。

「彼も、『古城先生のおかげ』で素行がかなり改善しました。これも我々は評価しています」

教頭は好色そうな色を少し浮かべて聡を見た。それでも丁寧な口調は変わらない。

「とにかく、古城先生は我々が当初思っていた以上に結果を残してくれました。来年も頑張ってください」

教頭は聡の肩をぽんと叩くと先に打ち合わせスペースを出て行った。

――アメリカに行かないんだ。

最初、呆然としていた聡だが、安心がひたひたと心に広がっていった。

――よかった。

なんだか、期末前から続いていた悪夢の抜け道が見えた気がする。抜け道のむこうにはただ漠然と希望が明るかった。

聡は今はただ、その漠然とした希望にひたった。

職員室に戻った聡は携帯が点滅しているのを見つけた。

博史だった。漠然とした希望にひたっていた聡は、『婚約者』という現実に引き戻された。

職員室はリラックスしたムードで、取っても問題ないだろう、と聡は電話を手にする。

「はい……」

「アキ？今日さ、学校何時に終わるの？」

穏やかな博史の声は、そのまま夕食に誘いたいと続いた。

「せっかくだけど、今日は終わった後で忘年会があるの」

これは本当だった。だけど断る理由があることにほっとしている聡は事実である。

「あ、そうか。じゃあ明日はどう？」

明日は萩に帰る前日。婚約者との食事を断る理由は見当たらない。

聡は気乗りがしないままＯＫして電話を切った。

そこへ隣の権藤から、

『古城先生の授業方法を僕も来年取り入れたい』と相談があり、そ

のまま打ち合わせに入る。
おかげで将からの着信に聡は気付かないままだった。

◇　◇　◇

将はスキップをするようにマンションへ帰ってきた。
エレベーターをのぼって廊下に出た将は、ある男性を見つけて立ち止まった。
「将！」
その若い男のほうが先に将の名前を懐かしそうに呼んだ。
……以前、将が失踪している間に、将の部屋を訪ねてきた眉の濃い青年だ。
「大悟……！」
将は驚き、一瞬とまどい
……かすかに困惑と罪悪感が心をかすめ……
そして大悟の顔に将への恨みがみじんもないのを確認してようやく、彼のほうに近寄ることができた。
この青年、島大悟こそ、将のヤクザ殺しの身代わりになった親友で

ある。

将の部屋。ソファに座った大悟に何を出すか迷った将は、缶ビールを渡した。

大悟は「サンキュ」と嬉しそうに受け取りながら、将に

「お前、でっかくなったなぁ。今何センチよ」と笑いながら、将をこづいた。

「４月で１８２。去年から今年にかけて１０センチ以上も伸びたんだ」

「カンベツ入る前は俺のほうが高かったのにな」

大悟は今１７５センチで少しだけ伸びたということだった……

そんなことより、『カンベツ』という言葉が将の心に突き刺さる。

本来は自分が入るべきだった牢獄。

「いつ出てこれたんだ？」

将が遠慮がちに訊くと

「４月には出てきてたんだ、俺模範だったから」

大悟は少し自慢するようなそぶりを見せておどけた。

将は「そう」としか言えない。何か、自分がたどるはずだった運命を聞くのは申し訳ない気がした。

「それにしても、すっげーところに住んでるなあ」

とビールを手にした大悟は部屋を見回している。

別に将への恨みなどは見当たらず、昔の大悟のままだというのに安心して、もう少しだけ訊いてみる。

「今、……どうしてるの？」

「愛知の自動車部品工場で働いてる」

「へー、そうなんだ」

将はやりきれなくて、冷蔵庫からビールを取り出すと自分もあおる。

「将は高校いってるの？」

「あ、ああ。井口のやつと同じ学校に行ってるよ」

答えながら、将は息苦しくなった。

本来は……殺人者である自分は……のうのうと高校などに行っている自分ではないのだ。

大悟と話をしていると、忘れていた自分の罪が掘り返されていく気がして将は胸が痛んだ。

大悟は、あいかわらず罪のない顔で、ああ、あの卒業できたらキャッシュバックがある学校ね、と微笑んだ。

「井口くんと一緒だったら、茂樹とも一緒だろ？」

一瞬将はその名前が誰のものだかわからなかった。キョトンとする将に大悟は

「前原茂樹」と言い直した。

「あ、ああ……」

そういえば、大悟は前原と同じ中学だった。

まさか、こないだ彼に殺されかけた、とは言えない。

将は一瞬迷ったが、思い切って

「前原くんは、一緒だったけど、こないだ中退したよ」

と口にして「麻薬所持とかで捕まって」と付け加えた。

「そう。そうなんだあ……」

大悟は特にショックを受ける様子もなく、つぶやいた。

「今日は、愛知からどうしたん？」

できるだけ何気なく訊いた将に、大悟は目を伏せた。

「将、……実は頼みがあるんだ」

次の瞬間、大悟は濃い眉毛をゆがめ、その下にある端正な目を見開いて苦しげに懇願した。

「正月休みの間、ここに置いてくれないか」

66◆すれちがい3

「正月休みの間、ここに置いてくれないか」
という大悟の懇願。

「ああ、いいよ」

将は即、快諾した。

「本当に？……よかったぁ」

大悟は眉毛をゆるめて、安堵したようだった。

その顔を見て、将も安心する。

時計を見る。もう18時近い。家庭教師のバイトに行かなくてはならない。

うっかりビールを飲んだので車で行けない分、早く出なくてはならない。

いつもならこの程度の飲酒は無視するが、さっきまで留置場にいた将である。自重することにした。

「悪い、俺今からバイトなんだ。

勝手にゆっくりしてくれていいから。帰ってきたら飯にでも行こうぜ」

将は大悟を家に残してバイトに出かけた。

◇　◇　◇

権藤との打ち合わせが長引き、終わったときには、他の職員たちはあらかたもう忘年会会場に行ってしまっていた。

「権藤先生、忘年会の『××屋』の場所わかります？」

みんなで一緒に移動するつもりだったから、場所を詳しく聞いてなかった聡は権藤に訊いてみた。

「あれ、たしか地図があったはず……」

権藤もガサガサと探しているが心もとない。

さっき整理整頓したばかりだが、整頓というよりは体裁を整えた、といったほうが正しい。

この場合、しまいこんだ紙切れなどは、まず出てこない。

聡は、先にいった先生に電話をかけようと携帯を取り出した。

たしか、保健の三田先生の番号を登録していたはずだ、と携帯を開く。

……そこで初めて、将からの着信履歴に気付いた。

一瞬、世界がゆれた気がした。携帯を思わず握りなおして、表示されている『鷹枝将』の文字を眺める。

携帯を抱きしめたくなるのをなんとかこらえて、三田先生に電話をかける。

そのために画面を切り替えるのですら惜しい気がした。

将は、乗り換えの地下鉄を待っている間に、もう一度聡に電話をかけてみた。

あいにく話中だった。

かけなおそうとしたとき、電車が入ってきた。

三田先生に場所を教えてもらい、権藤先生と忘年会の会場へ向かう。

最寄り駅前商店街の雑居ビルの地下にある居酒屋だ。

「権藤先生、私1本電話入れますんで、お先にどうぞ」

権藤先生を先に行かせると、店への階段を降りる前に聡は、将にも

う一度電話をしてみた。

『この電話は電波が届かないところにあるか……』というメッセージが流れた。

……ちょうどその頃、将は地下鉄に乗っていたのである。

聡はがっかりして、階段を降りた。

雑居ビルの地下だけあって、携帯の表示は「圏外」になってしまった。

聡は後ろ髪を引かれる思いをひきずりながら、居酒屋の縄のれんをくぐった。

「おお、今日の主役の登場だ」「古城先生こっちこっち」

聡が登場すると、ムサイ男教員が集まるテーブルのあちこちから歓迎の声が飛んだ。

◇　◇　◇

将の家庭教師先では、今年最後ということで、夕食まで用意されていた。

ボロを出したらまずいので断りたかったが、教え子の母親がはりき

って作った料理が並んでいるのを見ると、むげにはできなかった。

父親は単身赴任ということで、小４の教え子と小２の弟、その母親と将の４人で食卓を囲んだ。

そのことは、主に教え子を喜ばせた。教え子は何故か将のことが大好きで、なついているからだ。

「山田さんのおかげで、通信簿の『大変よい』が増えたんですよ」

いつもに増して気合を入れて髪や化粧をセットした３０代後半の母親は、にこにこしながら将のグラスにビールをついだ。

公立小だったら、人数制限のない絶対評価だからそれほど価値がない『大変よい』だが、この家の子は私立小に行っている。

そこは昔ながらの相対評価で、クラスのうち『大変よい』がとれる人数は決まっている。

つまり、『大変よい』をとった教科は、クラスでトップレベルだということになる。

母親のそのきちんと内巻きにセットされたカールは、将に昨日の朝の聡の髪を思い出させた。

「山田先生は学校の先生より面白いし、わかりやすいもん」

教え子が口をはさんだ。

「山田さんはたしか、法科系でしたわよね。将来は……？」

そらきた。あまり大学のことを訊かれるとまずい将である。

といっても、ウソの身分を名乗る以上は、東大の学内や授業、教授などの情報はネットなどで一通り仕入れて暗記している。

学校をさぼってた頃は、偽の学生証を使って東大の一般教養の授業にこっそり出席してみたこともある。

幸い本物の山田が不真面目で学校をよくさぼっているせいか、バッティングしなかったのだが、

背が高く足が長い将の容貌は、学内で目を引いた……特に女子学生の。

授業が終わって

『すいません、キャンパス××といいます。ちょっと写真をとらせてもらっていいですか？　1回生の方ですか？』

とキャンパス誌の記者らしき女子学生に声をかけられてしまった将は、『いや、写真苦手だから』と取り繕ってあわてて逃げたものだ。

「そうですね。弁護士にでもなれれば、と思っているんですが」

とっさにウソが出た。それは実は、将がまだグレる前、小学生時代

に父から言われていたことだった。

忙しくてたまにしか顔をあわせない父だったが、将と顔をあわせると『お前は弁護士になるといい。そこで一般市民の悩みや問題などを勉強したあとで、お父さんやお祖父さんの跡を継ぐんだ』と毎回のように言い聞かせていのだ。

エリート官僚から政治家になった父は、自分に足りないものを自覚していて、それを息子に託したのだ。

「まあ、ステキ。山田さんだったら、ナントカ弁護士みたいに、テレビでも活躍できそうですね」

母親は軽口を叩きながら、またビールを注ぐ。

おかげで、少し遅くなってしまった。大悟が待っているだろう。

連絡したいが、大悟は携帯を持っていないといっていた。

将は急ぎ足で夜道を歩きながら、聡に電話をかけてみる。

◇　◇　◇

忘年会は、会場を2次会に移すことになった。

聡は、生理中で体調がいまいち、ということもあり、2次会を固辞

しようと思ったのだが、

「ええー！」

「古城先生が来ないと話しになんないよ」

と温かい抗議に引き止められて、かつ他2人の女性教員も行くということだったので、少しだけ付き合うことにした。

2次会はカラオケボックスに行くことになった。

聡はいったんトイレに立つとそのついでに将に電話をかけてみる。

あいかわらず『この電話は電波が届かないところにあるか……』というメッセージが流れるばかりだ。

「アキラ先生は何歌うの？」

戻るなり、電話帳のように分厚いリストを渡される。

「やっぱ英語カラオケでしょ」

カラオケをつかった英語の授業のことは、教師全員が知っていた。

「いえ、いまどきの歌は、授業で私も一緒に勉強しないとわかんないんですよ」

そこで笑いが起きる。

「英語でナツメロっていったら何」

「ビートルズとかでしょ。僕歌えますよ」

と、やはり自衛隊系の若い体育教師。

「ビートルズもいいと思うんですけど、私はストーンズとか不良系のほうが好きなんですよね」

そういった聡の心の底のほうで、ひそかに懐かしくて甘酸っぱい空気が流れた。

それをかき消すように、さっそく他の教師が、自慢げに最新ヒットナンバーを歌い始め、ボックスは話もできないほどの大音量に包まれた。

いやがおうでも歌に喝采を送るほかはない、という音量だ。

聡も勧められて、はじめのほうのページに載っていた無難な最近のナンバーをリモコンでセットする。

カラオケはいよいよ盛り上がりを見せてきた。

最新ナンバーの次には、人気歌手のメドレー、それに触発されて懐メロと続き、酒がまわった頃には多美先生の『宇宙戦艦ヤマト』を皮切りにアニメソングが連続投入された。

「すごい、上手いですね！」

聡は、大音量の中、隣の教師に叫ぶように話し掛けた。隣の教師は

「ホンモノのササキイサオそっくりでしょー！」

と興奮してやはり叫んだ。残念ながら、聡はホンモノを知らないのだが……。

『ガンダム』『ヤマト』『ルパン三世』程度だったら、聡もなんとかメロディぐらいはわかるが、そのうちまったくついてゆけない古いものが次々と大合唱される。

わけもわからず、とりあえず手拍子をとる聡に携帯の振動が伝わった。

聡は、携帯を手にして、部屋を出ながら、表示を見る。

一一将！

「もしもし……」

ようやくつながった電波にお互いの思いが交差した。

67◆かき消された言葉

ダメもとの電話がつながって、将は立ち止まった。踏み切り近くの路上だった。

「……将」

携帯の向こうから聞こえる、聡の声。クリスマスイブに二言、三言交わしたぎりの懐かしいアルトの声。

もう、長いこと聡の声を聞いていない気がした。

まだ通勤帰りの人の往来も多く、将は、邪魔にならないよう警報機の近くの道端に寄った。

聡のほうは防音にも関わらず、カラオケボックスの廊下では各部屋から重低音と歌声が漏れてくる。

聡はじりじりと、部屋を離れて店の出口付近へと移動した。

「……アキラ」

お互い、ときめく心臓に言葉を奪われてしまったかのように、言葉がでない。

あんなに待ち焦がれていた電話なのに、名前を呼び合うしかできない。

「学校に残れるんだってね……」

セリフを探して、聡は、ようやくさりげない言葉を探すことができた。

「……うん」

将のほうは何をいうべきか、まだ探せない。

「アキラ、昨日……。いやいい」

昨日の朝のことを言いかけてやめる。

「将、心配してたんだよ。……今までどうしてたの？」

「ヒージー、いやひいじいさんの家に置いてもらってたんだ。アキラ、アキラは……昨日、博史のオヤと会ってたんだろ」

とうとう言ってしまった。本当はこんなことを確かめたいわけじゃない。

「どうして……？」

「俺、あそこにいたんだ」

「……全然、気付かなかった」

聡は昨日を思い出そうとしたが、緊張していたせいか何も思い出せない。

言ってしまえば、博史の両親の顔ですら、おぼろげにしか覚えてい

ない。

「やっぱ、あいつとケッコンすんだ」

せっかく聡と話しているのに、つむぎだされるのは言いたくないことばかりだ。

「しない」

聡は反射的にはっきりと口に出してしまった。

じゃあ、どうやって断るのか。あの優しい人たちをどうやって傷つけずに納得させるのか。

聡にはその方法は見当もつかない。だけど。

聡が肝心のことを口にしたところで、踏み切りの警報音が鳴り出した。

間近なので、将は頭が割れるように感じた。

携帯に耳を押し付けるようにする。今、『しない』と聞こえた気がする。

「今、しないって言った?」

将は、警報音に負けないように大声で確認した。

聡の携帯にも、将の近くで鳴り響く踏み切りの警報音が届いた。それは自分への警鐘にも聞こえる。

だけど、一度抑圧された思いは、もはや抗えないほどになっていた。
聡はあまりに暴れすぎて苦しい心臓に対抗する様に言った。

「しない。だって私は……」

聡の言葉の途中で、電車が轟音を立てて踏み切りを通過し始めた。
通過列車なのか、猛スピードだ。

「アキラ？聞こえないよ」

どんなに耳を押し付けても聡の声は聞こえない。
その電車は、今までに出会ったどんな電車より大編成に思えた。

「アキラ、ちょっと待って……」

それが通り過ぎるやいなや、次は対向方向からもやってきた。
踏み切りを過ぎたところの駅に止まるのか、いやにゆっくりと踏み切りを通過する。

ようやく、聡の声が聞こえるようになるのに1分以上は経っただろうか。

「……ごめんね。変なことを言って」

そのとき、カラオケの出口付近で電話をする聡を、他の教師が聡を見つけたらしい。

「古城先生」と大声で呼びながら寄ってきた。
聡はあわてて、電話にケリをつけようとした。
「アキラ?ごめん、さっきの、聞こえなかったんだけど」
「ん。もういい。ごめんね。また掛けるから」
そういうと、電話は切られた。
将は切れた電話を握り締めて、舌打ちした。
それでも、聡はたしかに結婚『しない』と明言した。
そのことに将は勇気づけられる。

「アキラ先生、何してんですか。さあ行きましょう」
近寄ってきたのは権藤先生だった。少し酔っているのか顔が赤らんでいる。
「ハイ」
何食わぬ顔をして一緒に戻る聡だが、まだ心臓がドキドキしていた。
一一言ってしまった。

ちょうど、それを言ったとき、電車か何かが通過したらしい。ゴーという音は聡にも聞こえていた。

そのせいか将には聞こえてなかったらしいけど……それでよかったかもしれない。

それでもなんだか、胸のつかえが1つだけ取れて、聡はすっきりしていた。

◇　◇　◇

大悟は、家にあったスナック菓子にも手をつけずに、将を待っていた。

夕食の時間にしては遅くなったが、帰宅した将は、大悟と一緒に近所の焼肉屋へ行った。

バイト先で一度夕食を食べた将だが、食べ盛りなので少しぐらいは平気である。

ビールとタン塩で乾杯したあと、ロース、カルビなどを頼む。

大悟は

「焼肉なんて久しぶりだなあ」

と嬉しそうだ。丁寧に肉をひっくり返すと「旨い、旨い」と繰り返す。

「遠慮すんなよ。どんどん食えよ」

と勧める将に

「お前、あいかわらず株やってんの？」

と大悟が訊いた。

将が、中2のときに遊んだ（というか遊ばれたといったほうが正しい）年上の女の影響で株をはじめたのを大悟は知っている。

「ちょっとだけな」

「元手があると羨ましいな」

熱い肉を飲み込んだ将は再び胸がちくっと痛んだ。

その話題からそらすように、

「ところでさ、大悟はなんでこっち来たの？」

と訊いた。

「うん。いろいろあってさ……」

大悟は、焦げかけた肉をつまみながら浮かない顔で話しはじめた。

愛知の自動車部品工場で働く大悟の身元引受人となったのは遠い親戚だった。

借金漬けで行方もしれない父の代わりになってくれた親戚だから感謝している、と前置きしながらも、肩身が狭いのだと大悟は打ち明けた。

その親戚は年金暮らしの夫妻だった。夫妻と、2児を抱える出戻りの娘、という家族の暮らし向きは豊かでなかった。

大悟は給料を全額、その家に入れて、小遣いとして2万だけもらっているという。

でも自室も与えられないのだ、と大悟はあくまでも控えめに不満をもらした。

「ひどいな」

将は聞きながらビールが苦くなっていくのを感じた。

「それだけなら、まだいいんだ。俺は居候だから。だけど……」

大悟の話にはまだ先があった。

大悟の身元引受人夫妻の夫のほうは、実は酒とパチンコ癖がひどく、パチンコに負けると酒を浴びるように飲んで、大悟をなぐるのだという。

「この前科者が、といいながらさぁ。もうボッコボコ」

大悟は弱く笑いながら飲み終わったグラスをテーブルに置いた。少し固い音が響いた。

前科者、と聞いて将は、再び激しい罪悪感にとらわれて下を向いた。もう、焼肉の味もしない。

「大悟、ごめん。俺……」

「将？」

大悟のほうは将を責めるつもりではなかったらしい。少し不思議そうな顔をした。

「俺、俺のほうこそ、本当は」

将は搾り出すようにいうと、頭を下げた。

「すまん」

ロースターの上で肉が焦げて縮こまっている。

大悟は将のグラスにビールをついで、自分のにも注いだ。

「将、……そんな風に謝るなよ。あれは……あれは、俺がそうしたいと思っていたことをお前が代わりにやってくれただけなんだ」

将はその声に目をあげる。大悟の目が将のそれをまっすぐに見る。

「だから俺はお前のことを恨んだりしてないぜ」

「だけど。だけど……」

「気にすんなよ。だいたい、お前があんときあのバカヤクザをぶっ殺してくれなかったら、俺は今ごろ指がないだろうし」

大悟は笑顔で両手を将の前に出して広げた。

大きな大悟の手のひらはカサカサに乾燥して、その皮膚にはヒビが赤く入っていた。

指の関節は将のそれより発達し、膨らんでゴツゴツしている。……あきらかに苦労しているのがわかった。

「ごめん」

将は前を向いていられなくて再び下を向くと、歯を食いしばるようにした。

「だから、もういいんだってばぁ。ホラ、飲めよ」

いくら大悟が笑って許すといっても。将は自分自身が許せない。

68◆将、13歳1

その夜、将はリビングで大悟と枕を並べて遅くまで語りあった。

主に二人の中学時代の思い出が中心だったが、懐かしい思い出話の間にも、二人が離れていたあいだの、語り尽くせないいろいろが透けて見えるようだった。

◇　◇　◇

もう4年半以上も前。

将の背中の火傷が治ってしばらくして、中学校が始まった。

火傷のせいで私立中の受験を棒にふり、公立に進むしかなかった将は、失意の中で『不貞腐れている』ポーズをとることでなんとか日々をやりすごしていた。

公立の学校は、将にはバカばっかりに思えた。

1回説明すればわかるようなことを、50分使って説明するような授業はとても退屈で、将は落書きと居眠りで授業の大半を過ごした。

クラスメートは子供っぽいやつばっかりで、進んで友達になりたいようなやつはいなかった。

気がつくと将は、まわりのやつから浮いていた。イジメられていた

というわけではない。恐れられていたというほうが正しい。

中学に入ったばかりのころは、背もそんなに高くなかったのだが、その不遜な言動は上級生の不興を買った。

で、桜が散って青葉になった頃、将はさっそく『なまいきだ』と上級生に因縁をつけられ、お決まりの体育館裏に呼び出されるのである。

『お前、携帯もってんだろ。出せよ。それで許してやる』

声変わりした上級生の声は、実は、将にはとても恐ろしく感じた。しかしプライドの高い将である。

『イヤだ』

とできるだけ低い声で即答した。まだ声変わりしない自分の声が腹立たしい。

『何だよー』

上級生は将の肩をこづいた。中1と中3では体格も筋肉も違う。体が大きく揺れ、よろけたが、目は上級生をにらみつけたままだった。

『何だ、その目はよォ』

左右からこづかれた。将はだまって上級生を睨みつけていた。

『なまいきなんだよ、コラァ』

ふいに体が揺れて地面が近づいた……将は地面に引き倒された。

起き上がろうとする背中を上級生の足が踏みつける。３年生の重みと力に１年の将が逆らえるはずがない。

将は起き上がろうともがいた。

その将の襟首を別の上級生がぐいっと引き上げた。

『あのね。僕、暴力ふるいたくないんだ。だからおとなしく携帯出しなヨ』

甘く優しい……将を馬鹿にした声。

『イヤです』

将はいちおー敬語を使ってやったぜ、とその上級生を見つめた。

目の細いにきびづらは、眉を剃って細くしていることで目と眉毛の間隔が広くなり、よけいにのっぺりと間の抜けた顔に見える。

『じゃあしょうがないね、イケメンくん』

将は、その間の抜けたやつにグーでぶん殴られた。

頭が真っ白になった。口の中が切れたのかしょっぱくなった。

――オヤジにも殴られたことないのに。ってセリフがあったな。昔のアニメに。

そんなことを思い浮かべる間もなく、次のグー。

2発で将は起き上がる気力をなくした……小学生時代、武道や空手で優秀だった将は、あの程度だったら立ち向かうこともできたはずだった。

しかし、道場ではないところで実際に人を殴るのは怖くて出来なかった。

倒れた将の上着とズボンのポケットをまさぐり、上級生は携帯を見つけ出した。

『痛い目にあいたくなかったら料金払えよ』

そう言い残して、上級生は立ち去った。

とられた将の携帯は、暴走族の上級生に上納され、さらにそれはヤクザに渡って、闇取引などに使われるのである……そんなことを将は知らない。

将は倒れたまま、青空を眺めた。唾液が鉄臭い。しかし吐く気になれなかった。

なんだか、世界にたった一人で倒れてるような気がした。

次に、将がトイレに呼び出された、というより連れ込まれたのは連休の後だった。

今度はトイレに付くなり、いきなり突き飛ばされた。

『おい、何で使用停止なんかにしやがるんだよォ』

将はあのあとすぐに携帯を使用停止にしたのだ。それがバレたらしい。

『おかげで恥かいたじゃんか』

掃除をしても臭う、トイレのタイル床に倒れた将の前髪をひっつかんで、上級生は将を立たせる。

『金出せよォ。お前んち金持ちだろー』

『持ってない』

髪を引っ張られて体の自由を奪われた将は、それでも上級生を睨みつけた。

『何だとォ』

上級生は将の髪をつかんだまま引き倒すと、個室に引きずっていき、洋式便器の中に将の顔を無理やり突っ込んだ。

ドラマや漫画で見るような、イジメの典型的な場面。まさか自分がされるとは。

将は便器の水を飲みたくなくて、呼吸をとめながら、頭を押さえる上級生の手をはがそうともがいた。

上級生は意外にも将の力が強いため、押さえ込むのにてこずった。

しかし、将の我慢は1分が限界だった。

『グっ……ガボっ』

将は臭い便所の水を飲み込むハメになった。

――くそ。

その屈辱が将の馬鹿力を引き出した。

将は上級生に押さえつけられた頭を起こした……だが、まだ殴る勇気はない。

叫び声を上げながら、濡れた顔と頭を上級生のみぞおちに押し付けた。

『ウわっ』

将を押さえつけていた上級生はその勢いで個室を飛び出し、後ろ向きに倒れると、後ろ頭を壁に思い切りぶつけてのびてしまった。

将はびしょぬれの頭で、息も荒く立っていた。

『なんだコイツ』

『やっちまえ』

たかが中1の将1人に、上級生が3人も飛びかかった。あっという

間に決着がついた。

トイレは薄暗くなってきた。

――くそっ。

将はトイレの個室の中、うずくまっていた。出るに出れないように……つまり全裸にされていた。

上級生は、将が意地でも金を差し出さないとわかると、将を身ぐるみ剥いでしまったのだ。

彼らは将の背中のケロイドを見て、一瞬ひるんだが、

『毛も生えてないくせに逆らうな、バーカ』

捨て台詞を残して将の制服ごと財布を持っていってしまった。金はたいした額じゃないからいい。

しかし、ここからどうやって出ろというのだ。

初夏の陽気であたたかい今日このごろとはいえ、裸でいると寒い。

ふいに涙が一筋流れた。こんなのが出てくるのすら、負けたみたいで悔しい。

将は流れた涙を手の甲でぐいっとぬぐった。そのときだ。小声で将を呼ぶ声がした。

『鷹枝くん、鷹枝くん』

少し声変わりした声に聞き覚えがあった。

『井口……くん？』

『ジャージもってきた。上から投げるから受け取れよ』

机の横にかけてあった将の体育用のジャージをクラスメートの井口が持ってきてくれたのだ。

それを身につけて、ようやく将は外に出ることができた。

『ありがとう。……なんでわかったの』

『俺も前にされたからさぁ』

井口は1年にしてはガタイがよく、髪も少し赤毛に染めている。それが上級生の気に障ったらしい。

『……俺んときなんか、誰もいなくなってから、マッパで教室に帰ったんだぜぇ。

お前、目付き悪すぎだから絶対やられると思ってたんだけど、やっぱりなぁ』

『目付き悪い？』

『悪い、チョー怖いし。女子なんか避けながらキャーキャーいって

んぜ。お前が女子にモテるのもあいつらムカついてんだ、きっと』

井口は少し伸びた天パーの赤毛頭をゆらして笑った。

それで井口と意気投合した将は、夜遅くまで遊ぶようになった。

なんでも、井口には今年就職したばかりのエリートの兄がいて、何かの折に比べられるのがいやでたまらなく、

それで家に帰りたくないのだという。

爆破事件以来、義母とギクシャクしている将も家には帰りたくない。

義母の執拗な心配は、殴られたことや、携帯をぶんどられたこと、制服をなくしたことまで、将の非のように聞こえる。

彼女は本当に将を心配しているのではない。

彼女の夫や世間へのメンツのために、将を心配しているポーズをとっているだけだ。

爆破事件以来、それに気付いてしまった将にとって、家は自分の居場所ではなかった。

そうやって帰りが遅くなり、時に外泊する将を、義母はいっそう非難する。

――てめえのせいなんだよ。

将は口に出さずに義母を目でにらんだ。

『金』

将が彼女に口を利くのはこの単語だけだ。この頃、将が遊んでいたのは主にゲーセンである。それには金が要った。

最初はしぶしぶ出していた義母だったが、夏休み直前のある日、

『お父さんにお言いなさい』

というようになった。父には言えないことをわかっているのである。

将はフン、と鼻をならすと、風呂場に入った。今日はまあいい。

実は、この日、将はパジャマの中に毛染めを隠し持っていた。

風呂場に入るなり、臭いそれを全部頭髪に塗りたくる。それは、毛穴にえらく染みた。いてもたってもいられないような冷たさと痛さ。

それに何分か耐え抜いた上で、毛染めを洗い流すと……風呂場の鏡の前には濡れて濃い蜂蜜のような色の髪になった将がいた。

『ヤッタ』

将は裸のまま、自分の姿を見て満足げに微笑んだ。

最近ようやく声変わりが始まった将は、ちょうどあちこちの毛が生え始めてきたところだ。

眉毛やそれらの毛は黒いのに、蜂蜜色の髪。妙でアンバランスだけ

ど、将はそれを気に入った。

蜂蜜色の髪はドライヤーでかわかすと、その髪は見事に明るい金髪になった。

金髪になってバスルームから出てきた将をみて、義母は

『ひっ』

と息を飲んであとずさりした。それは近年まれにみる愉快な気分だった。将は大いに満足した。

翌日、学校にいってもそうだった。

生徒は同級生、上級生を問わず道をあけ、教師があんぐりと口をあける。

井口だけが

『将、どうしたん、その頭。超カッケーじゃーん』

と寄ってきて賞讃した。

教師はその日のうちに義母を呼び出し、それは父に伝わった。

ある日、夜遅く家に帰った将は、父にいきなりなぐりつけられた。

『なんだ、その頭は！』

父になぐられたのはそれが初めてだった。倒れこんだ将は、１回だ

け父を睨みつけると、そのまま家を出た。

将は、新しくつくった携帯から井口の家に泊めてもらおうと電話をした。

今までも何度か泊めてもらったことがある。

『やー、今日はサ……。ごめん、ちょっと修羅場で』

いつもノリがいい井口らしくなく、弱弱しく困り果てた感じの声が携帯から聞こえた。

断られた将は、途方にくれた。

後で聞いたのだが、あの頃、ちょうど井口の兄が会社を辞めて引きこもり始めて、井口の家庭はめちゃくちゃになりはじめたところだったのだ。

あてどもなく夜の街を一人っきりで歩く、まだ子供っぽさが残る金髪の将は目立った。

そして、高校生らしき不良に因縁をつけられ……案の定一発殴られた。

『警察が来たぞおーっ！』

そのとき誰かが叫んだ。その声に、高校生は一目散に逃げた。

『大丈夫？』

手を差し伸べてきたのは将と同じ年ぐらいの少年だった。

こんな盛り場をうろついている少年には珍しい、きりっとした濃い眉毛と意思の強そうな目を持っていた。

だが、たぶん中学生ぐらいなのに、ピアスをしていたし、某サッカー選手を模したであろう髪型の黒髪は天に向かって立っていた。

『目立つね、それ』

少年は将の金髪頭を指した。そこには笑顔があった。

『一緒に来る？』

少年は顎をしゃくって将を誘った。

その目付きはなんだかガイジンの俳優みたいに余裕があってカッコよかった。だから将は、ついていったのだ。

これが、島大悟との出逢いだった。

６９◆将、１３歳２（前書き）

※犯罪シーンがありますが、まねしないで下さい（最近は監視カメラも付いていますので、絶対に捕まります）

なお、防犯のため、車をお持ちの方は、たかがＣＤ１枚といえど、見えるところに出しっぱなしにしないことを強くお勧めいたします。

69◆将、13歳2

『俺、大悟ってんだ。○○中1年。お前は？』

『将、将っていうんだ……。△△中1年』

大悟は将を連れて、深夜もあいてる大型書店に入った。

コミックのコーナーでは何冊か、お勧めコミックの1巻が立ち読みできるようになっている。

『ここで立ち読みしてて。俺のほうは絶対見るなよ』

その1冊を将に立ち読みさせると、大悟は素早く他の棚を物色しはじめた。

大悟は、悪びれもせずに、コミックの数冊をリュックの中に入れた。

気付いた店員がそっちを見るのがわかる。

将は立ち読みをしながらヒヤヒヤした。

……しかし、大悟は、レジに行くとリュックからコミックを出してお金を払っていた。

そしてそれが終わると将のところへ来て、

『行くぞ』

と囁きながら将の腿のところに平積みになってるコミックを1冊素早く盗った。

これは店員は気付かなかったらしい。

将は冷や汗が出る思いだった……万引きの現場を見たのは初めてだった。

さらに、大悟はいったんトイレで戦利品のフィルムとスリップを取り外すと、その足で今度はブックオフへ向かった。

そこで将は、大悟が盗ったのが1冊ではないことに気付いた。

さっきリュックに入れたコミックのうち、お金を払ったのはほんの一部で、半分はそのまま持って来ていたのだ。

コミック5冊は新品だったので１０００円以上になった。

『やった、メシ代』

ブックオフを出た大悟は将の顔を見てニヤっと笑った。

その夜、将は大悟のアパートに泊めてもらうことになった。

『誰も来ねえから。安心しろよ』

大悟の住んでいるというアパートは、アパート同士、離れてる意味がなさそうなくらい建て込んでいた。

翌朝将は、そこの日当たりが最低なことを知るのだが、将がそこに

到着したときはまだ夜だった。

大悟は先にベニヤ製のきしむドアを開けると、蛍光灯を付けた。

いやにチカチカと点滅する白い安っぽい光に照らされて、そこは古くて汚いアパートだということが分かった。

汚い砂壁のあちこちは砂が剥げ、ひびが入っている。

『痛え！』

裸足だった将は足裏に何かが刺さって足の裏を覗き込んだ。

トゲが足の裏にぶっすりと刺さっていた。

『気をつけろよ。畳がときどき刺さるんだ』

大悟はマキロンを投げながら言った。トゲが刺さる畳なんて将は初めてだった。

『やる？』

大悟はショッポを差し出した。将がうなづくと大悟は器用に一本を飛び出させた。

将が不器用に一本を指に挟むと、大悟はそれにライターで火をつけてくれた。

タバコは隠れて何度もやっているが、大悟のいかにも物慣れた動作の前で、将は少し緊張しながら煙を吐いた。

『さっきはありがとうな』

大悟は言った。将はきょとんとした。助けたのはそっちのほうじゃ……。

『お前がタテになってくれたから、俺のほうは疑われないで済んだ。いいよ、その金髪』

大悟はもう一度ニヤッとした。

――ああ、そういうこと？

将は納得した。将の目立つ金髪に気を取られて店員は大悟の万引きをずいぶん見逃してしまったということだ。

『一人暮らし？』

将は大悟に聞いた。大悟は煙を吐いて目を細めながら首を振った。

『オヤジと二人暮し。でもオヤジはめったに帰ってこねえし』

『そっか』

『将、お前は？』

『……』

いいいどむ将に、大悟はあまり深く訊かなかった。ミスドからけっぱってきたであろう灰皿にタバコを揉み潰すと、

『好きなだけここにいればいいや』

とフトンを敷き始めた。

バカオヤジのだけど、いい？と言われたフトンは、思い切りセンベイで、酸っぱいようなカビの臭いとヤニの混ざったようなニオイがひどかった。

おまけに風の通らないアパートの夏の夜は暑くて、将はなかなか寝付けなかった。

夏休みに入った将は大悟からいろいろなことを教わった。

見つからずに、かつ疑われずに万引きする方法。

普通の薬や小麦粉を『ドラッグ』だといって女の子たちに売りつける方法。

将は、小学生の女の子が夜遊びや援助交際をしているのに最初とても驚いた。

が、そんな女の子たちが将たちの顧客だった。

偽の薬で『ラリッた』などとフラフラする女の子を見て、将は可笑しかった。

それは主に遊び代もそうだったが、食うための熾烈な戦いだった。

さらに、自転車の鍵を壊す方法。盗んだ自転車は登録を剥がして、闇業者に売って金にする。

応用編で原付を鍵なしでエンジンをかけるにはどうしたらいいか。また、その運転方法。

将はすぐに原付のリミッターを切って突っ走る快感を知った。

どんなに暑い夜も、ノーヘルでぶっ飛ばせば気持ちいい。

大悟を後ろに乗せて金髪をなびかせて盗んだ原付をぶっ飛ばす。

笑いながらすべてが後ろにふっとんでいく。

そのとき将も大悟も世界を手にしたような錯覚に酔った。

夏休みの間、大悟の父はまったく帰ってこなかった。

ということは、家に金も入れない。

この家の家賃をどうしているのか、という疑問すらまだ中1の将は気付かなかった。

それはそうと、大悟は自分の食い扶持のほとんどは自分で稼がなくてはならなかったのだ。

大悟の父が、借金取りに追われている、というのを知るのはその直後だった。

『将、今日は車を狙おうぜ』

マックで一番安いハンバーガーを食べながら、大悟が言った。

その前に、新しい服がほしい、と言っていた。

将も明らかに校則違反の長さに伸びた髪の長さはいいとして、根元が黒くなってきたのが気になり始めていた。

家に帰って、自分名義の通帳を盗んでこようかと思っていた矢先だった。

『え、車を盗むの？』

将はマックシェイクのストローから口を離して言った。

『バカ、車が盗めるわけねーじゃん』

大悟はギャハハとウケた。

その夜。大悟と将はある屋外駐車場に来ていた。

鉄パイプを途中、工事現場からＧＥＴしている。そしてなぜか将にバスタオルを持たせている。

『ここは、監視カメラがないんだ。奇跡的だぜ』

大悟は、静かに並ぶ車を見て、声をひそめて囁いた。

大悟は常日頃から、ハンザイは準備がカンヨウだと言っている。

カンヨウ、なんて言葉を使うなんて、意外とこいつ、国語できんだ？と将は思う。

『なるだけ目立たないように、車の中を覗くんだ。ＣＤが置いてあったら頂くんだ。カーナビがあったらラッキー』

『頂くって、どうやって』

『これで窓を叩き割るんだよ』

大悟は鉄パイプをかざした。将はそのあまりに大胆な手口に口をあんぐりあけた。

『これは何に使うんだよ』

将はバスタオルを広げた。

『まあ見てろよ。おっ、あったぜ。カーナビ♪　しかもＣＤもいっぱい出しっぱ』

大悟は、将にいって、窓にそってタオルを広げさせた。

そして鉄パイプを振り上げると、タオルの上から窓ガラスにヒットさせる。

鈍い音がして、窓ガラスがバラバラに割れた。

『こうやると、音が小さくなるでしょ。まわり見とけよ』

大悟は割れた窓に手をつっこんでロックを解除すると車のドアをらくらくとあけた。

そして、ケースに入ったCDを将にまず渡すと、自分はカーナビを取り外し始めた。

カーナビはあっさり外れたが、大悟はダッシュボードを開けてまだ何かを探している。

将は、時間が経過するとともにひやひやしてきた。

『大悟、もういいだろ、何探してるんだよ』

『ナビのマニュアル。マニュアルがあると値段があがるんだ。あった』

マニュアルはダッシュボードではなくて、ドアのポケットにあった。

『やべえ、人が来そうだぜ』

将は大悟に囁いた。

大悟はナビとマニュアルを手早くリュックに入れると、正面入り口はヤバイと思ったのか将をうながして駐車場の金網を乗り越えた。

ＣＤ２０枚以上とカーナビは結構なお金になった。

それから、その日偶然にも大悟の父から2万が現金書留で送られてきた。

おかげで将は根元を染めるための毛染め、大悟は新しい服を買うことができてなお、金は余った。

『これで、今日は焼肉にでも行こうぜ』

などと二人、民生委員に持ってきてもらった扇風機にあたりながら、にこにこと話していたときだ。

廊下に響く靴音に敏感に大悟は振り返った。何枚かある万札の1枚を手早く折り始める。

『なんだ?』

将はそんな大悟の行動が分からなかった。

が、まもなくドンドンドン、とベニヤのドアが乱暴に叩かれて

『島さーん!』

『島ァ、いるんだろ!』

とどなり声が聞こえた。

大悟は折りたたんだ万札の1枚を、畳と壁の間の隙間にねじこむ。

その上から読み古した漫画雑誌を隠すように置いたとき、ベニヤのドアが蹴破られた。

趣味の悪いスーツを着た顔色の悪い男と、アロハシャツの若いチンピラが土足のまま部屋に上がってきた。

『おう、ぼっちゃん。オヤジは?』

年配のほうが聞いてきた。

『……いねえ』

大悟は呟くように答えた。

『おらぁ、隠すんじゃねえ!』

若い方がいきなり大声を出したので、将はその音量にビクッと体を振るわせた。

『お友達は、ここのお父さんに会わなかった?』

年配のほうが将に聞いてきた。将は首をブンブンと振った。

『そう……じゃあ、ぼっちゃん、何かお父さんから預かってない?』

こんどは大悟のほうが首をブンブンと振った。

『かわりにぼっちゃんが利息を払ってくれてもいいんだけど』

年配のヤクザがタバコに火をつけた。

『……そんなの、ありません』大悟はうつむいた。

『ウソつきは』

若いチンピラが大悟の首根っこをつかむと

『泥棒の始まりって』

そのままその顔を殴った。

『やめろ！』

思わず将は立ち上がって叫んだ。若いヤクザはまったく感知せず、倒れた大悟を蹴っている。大悟は身を丸めて耐えている。

『お友達のボク、このコはいつもウソをつくんだよね』

年配のヤクザが将に向き直る。

『うそつきにはお灸を据えないと――』

そういって、年配のヤクザは吸っていた煙草を大悟の肩に押し付けた。

『うあああっ』

じゅっと小さく音がして、大悟が悲鳴をあげた。

その恐ろしい様子を見てしまった将は思わず、その年配のヤクザに

飛びつくと……とうとう一発殴った。

こんな風に人を殴ったのは初めてだった。ヤクザは油断していたのかそのまま倒れこんだ。

『小僧ーー』

若いチンピラが、大悟を蹴るのをやめて将に鉄拳を振り上げた。

大悟がそれを止めようとチンピラの腕にしがみつきながら、

『払います、払いますから』と叫んだ。

将は、起き上がった年配のヤクザに一発仕返しをされた。上級生のパンチなどとは違う。

将の頬から眼窩にもろに決まり将は壁まで飛ばされた。目から火花が散った。おかげで気絶する寸前だったのに

『これでも手加減してやったんだぜ、気をつけろや、ボクちゃん』

と見下ろされた。

大悟はポケットに残っていた札のうち1枚は自分のところに残して、2枚を出した……父から送ってきた全額にあたる。

すると若いチンピラは、2枚を受け取ると、大悟が残そうとした1枚も引っ張った。

『迷惑料だよ』

と凄んだので、大悟は指を離さざるをえなかった。

さらに、チンピラはまわっていた扇風機のコンセントも引っこ抜くとそれを抱えて、ようやく帰ってくれた。

殴られて倒されたままの将に、大悟が振り返った。

『ごめん。将。……あいつらたまに来るんだ。オヤジが利息を払ってないとかで』

将は何もいえなかった。殴られた目が開かない。

しかし、次に大悟は、ニヤッと笑って指差した。

『でもこれだけは見つからなかったぜ』

さっき畳にねじこんだ万札。

将は大悟の笑顔を見て、指を立てて弱弱しく笑顔を返した。

殴られた目は腫れあがり、完全に治るのに1週間以上を要した。

しかし、それ以来、将は人を躊躇せずに殴れるようになった。もともと基礎があった将である。急に強くなった。

おかげで、自分より弱そうな不良からカツアゲをするようになって、金回りもよくなった。

悪い仲間も増え、その年のうちに女も覚えた。

だけど、大悟との友情はずっと続いた。１５歳で離れ離れになるまで。

今も……大悟とさまざまな冒険をした１３歳の夏は将にとって忘れがたい思い出だった。

あんなことはあったけれど、かけがえのない友情はこれからも続く、と将は信じたかった……。

70◆たくらみ1

――ピンポーン

玄関のチャイムが鳴ったとき、聡はまだベッドの中だった。

昨日の荒江高校の教師たちによる忘年会だが、結局、聡は最後までつきあってしまった。

あれからもカラオケボックスで飲んで歌って大騒ぎ。

アニメソングメドレーのあとは出鱈目な英語で歌う懐かしのディスコやロックナンバーになり、皆ボックスの座席も狭しと踊り始めた。

鬱憤を晴らすように、教師たちは笑い踊った。日頃、いかめしい顔で生徒を監視している姿とは別人のようだった。

聡もボーっと座っているのを許されず、アースウィンド&ファイアの『セプテンバー』に続いて、アバの『セブンティーン』など70年代のナンバーを次々と歌わされてすっかりお抱え歌手状態。

やけくそ気味にディープパープルに続いて今やこれも懐かしい『深紫伝説』をシャウトしてようやくチェンジさせてもらったが、すっかり枯れた喉は『ボヘミアン』でも歌えそうだった。

面白かったが、すっかり疲れた聡は、ようやく訪れた教師の冬休みに寝坊を決め込んでいたのだ。

――ピンポーン

チャイムはもう1回鳴った。

「ん……、将？」

聡は起き上がると大きく伸びをした。寝起きでうまく働かない頭は、訪問者を将だと決め付けていた。

「ハーイ。ちょっと待って」

玄関にむかって叫ぶ。やっぱり声がかすれている。パジャマにしていたスウェットの上にカーディガンを羽織って、乱れた髪を2つに結びなおす。

玄関へ小走りに向かい、扉を開けるとそこにいたのは……博史だった。

聡は失望を隠して、

「どうしたの？」

と博史に問い掛けた。

「大掃除するっていってたから。親が『手伝いにいけ』っていうから、来たんだよ。まだ寝てたの？すごいハスキーヴォイス」

博史はそういいながらも、部屋の中に入ってくる。

「うん……、昨日遅くまでカラオケだったから」

「もう11時すぎだぜ。……本当に寝起きなんだー」

博史はベッドを見て言った。いちおうフトンはかぶせてある。

「コーヒー淹れるね」

といってキッチンに立とうとした聡の後姿に、博史は抱きついてきた。

スウェットの裾から侵入した博史の手は、聡の肌に触れた。

そのままブラジャーを着けていない胸にあっという間に到達する。

「イヤ……、ちょっとやめて、朝から」

博史は荒い息は聡の首筋にある。

聡のハスキーな制止は博史をますます昂ぶらせたらしく、博史は聡を後ろから羽交い絞めにしたままじりじりとベッドに移動した。

「聡、少しだけ……」

そういいながら、博史はついに聡をベッドに押し倒すと、深く口づけをしながら、スウェットをずりあげて聡の胸を剥き出しにした。

「ダメ。ダメだってばー……」

ようやく唇が離れて口がきけるようになった聡だが、博史は唇をその胸の先端に這わせはじめた。

「ちょっと本当にダメ。……今生理」

博史は顔をあげた。そのすきに聡は身を起こして剥き出しになった自分の乳房の上にスウェットを被せた。

「何、はじまったの？」

博史も体を起こすと乱れた髪をかきあげながら聡に訊いた。

「うん。急に。働きはじめてから不順になったみたい」

……よく、いけしゃーしゃーとウソをつける、と聡は自分にあきれる。まあ、生理なのは本当だけど。

「じゃあ仕方ないね」

博史は素直に諦めると、聡の頬に軽くキスをした。

聡は罪悪感から目をあわせることができなかった。

それからコーヒーを飲んで、掃除を始めた。

といっても狭い部屋、特に時間がかかるわけでもないが、男手があるとそれなりに仕事は増える。

もうとうに結婚する気が失せている男。その男に掃除を手伝わせてしまっている。

手を止めるとそんな罪悪感がふつふつと心に湧いてくる。

それに抗うように、聡はホコリはたきに専念した。

ふと、飾り棚の上にある、将からのよれよれのバースデイカードに目が行った。

――ヤバ。

『宇宙一愛する聡』とか『昨日のようにＫＩＳＳしたい』とか。

こんな文言が書かれたカードが博史の目に触れたら大変だ。聡はこっそりとカードを化粧道具の奥深くにしまいこんだ。

――将は、どうしているかな。

すぐに着信がわかるように、テーブルの上に置いた携帯だが、着信はないようだ。

「聡、油汚れの洗剤ある？マジックリンとか」

「あ、しまった。ないわー」

電気の笠や換気扇、網戸なんて、聡は引っ越して初めて掃除する気がする。一人だからそれほど汚れないというのもあるが。

当然、それに応じた洗剤もないのだ。

「あたし、買ってくる」

「ああ、俺もいくよ」

「ううん、コンビニすぐ近くだから。ついでにお昼も買ってくる。博史さんはちょっと休んでて」

聡は朝食を抜いて、ひどくお腹がすいていたのだ。

それと、狭い部屋で、博史と二人という状態に――もう押し倒されないとは思うけれど――とても緊張していた。

そこから一息つきたかった、というのもある。

ジーンズの上からジャケットをひっかけると、聡は外に飛び出した。

聡が出て行って、博史は、あらためて部屋を見回した。

飾り棚のほうへ近寄る……クリスマスイブの日にあったカードを確かめようとして、だが、それはすでに片付けられたのか、もうなかった。

博史は、他に将の痕跡を探すべく、聡の部屋のあちこちを開けた。

婚約者のいない間に、こそこそと、その浮気の証拠を探す。

そんな自分がいじましいと思ったが、疑惑に抗うことも出来ず、博史は探し続けた。

しかし、ちょっと開けただけでは、何も出てこなかった。

一一見つけてどうするのか。

博史は心で自嘲した。聡を責めるのか。それとも別れないでくれと懇願するのか。

そのとき。

テーブルの上に置きっぱなしにしてある聡の携帯が鳴った。

『鷹枝将』

と表示されている。博史は動揺した。

無視しようかと、いったんはそっぽを向いたが、吸い寄せられるように手にとってしまった。

そしてもう一度玄関に目をやる。

聡が戻ってくる気配はないのを確認して受話ボタンを押し、耳に携帯を押し当てる。

「アキラー？俺。今何してんのー？」

「……」

「アキラ？もしもーし、アキラー？聞こえてるー？……」

博史は電話をプチ、と音を立てんばかりに切った。

その若い男は親しげに聡を呼び捨てにしていた。それに自分を『俺』と名乗った。

……つまり、何度もこうやって電話をかけてきているということだ。

博史は将へとわきあがってくる憎しみを冷静に押さえると、今の着信履歴を削除した。

そして、立ち上がると窓辺を見て、聡がまだ帰ってこないのを確認して、メールボタンを押した。

受信フォルダから将のメールはすぐに見つかった。

内容は今はさほど問題じゃない。そのメールに返信ボタンを押し、

＝＝＝＝＝＝＝

もう電話しないで。さようなら。聡

＝＝＝＝＝＝

と手早く打つ。

送信ボタンを押したとき、博史の心臓はここ数年で経験していないほど、早く打っていた。

しかし、鼓動を押さえながら冷静に、今度は今のメールの送信履歴を消す。

そこまで終わって、ようやく博史は脱力して座り込むと聡のベッドによりかかった。

そして腕を伸ばして、テーブルの上に、元通りに携帯を置いたちょうどそのとき、玄関があいて聡が現れた。

脱力していた博史は、飛び上がらんばかりに玄関に振り向いた。

「ただいまー。……あら、テレビも付けなかったのー？」

「あ、ああ」

博史は、そんなしどろもどろの自分が、心底情けないと思った。

71◆たくらみ2

将が聡から受け取ったメールはあきらかに変だった。

その前の電話の最後に『また掛けるから』と言っていたのと、あまりにも矛盾している。

だからその言葉どおりを信じるわけにはいかなかった。

そうかといって、ウソだという確証は持てない。

大悟と二人、遅い昼食のカップ麺を食べていた将はいてもたってもいられなくなった。

とうとう立ち上がると

「ちょっと、俺、出かけてくるから」

と家を飛び出した。

博史がいたおかげで、聡の部屋の掃除ははかどった。

午後3時には例年以上に隅々までキレイになった部屋で、博史と二人コーヒーを飲んでいた。

すっかり博史のもののようになってしまったマグカップを見ながら、

聡は携帯を気にしていた。

将の連絡があれば、と思ったのだが、携帯はうんともすんとも言わない。

さっきちょっと出かけたときに持っていって……将に連絡すればよかった。

博史はコーヒーを飲みながら、昨日の忘年会のこと、また聡の学校のことを聞いてくる。

聡も辞めたくない、と言った以上、学校や教育に対して熱心なところを話さなくてはならない。

無難に自分がやっているオリジナルの授業のことを話した。

博史はそれを興味深げに聞くそぶりを見せながら、実はそんなことが聞きたいのではない。

あの鷹枝将と聡の関係を、聡の話から窺いたかった。

しかし聡の唇から一度も将の名前は出なかった……そのことは、聡が将のことを意識していることをかえって博史に連想させた。

将が運転するミニのフロントガラスに聡のコーポが見えてきた、ちょうどそのとき。

階段の一番下に博史の姿が見えた。あとに続いて聡。

二人ともクリスマスのときよりカジュアルな格好で、それは仲良さそうに見えた。

博史は笑顔で聡を促して……背中に手を置いて……将とは反対の方向へと歩いていった。

二人の姿が角を曲がって見えなくなったとき、将は自分が息をとめていたことに気付いた。

一度つかんだ命綱が、再びちぎれて、将は谷底へ突き落とされるような錯覚に陥った。

気乗りがしなかったが、『親が楽しみにしているんだ』という博史のたっての願いで聡は再び博史のマンションへやってきた。

聡は極上のしゃぶしゃぶで再び歓待を受けることになった。

それだけでなく、食後には美味しいケーキも用意されていた。

先日聡が『美味しい』といったのをちゃんと覚えていてくれたのだ。

博史の両親に優しくされればされるほど、聡は申し訳なくて、言葉が少なくなった。

いっそ博史を好きなままだったら、どれほど幸せだったろう。

聡は、博史の両親から『これ、ご両親に差し上げて。つまらないものだけど』と帰省用のお土産までもらってマンションをあとにした。

もちろん博史が送って、である。

「アキは、いつまで萩にいるんだっけ」

運転しながら博史は聡に訊いた。

「4日まで。冬休みは7日までだけど職員は5日が仕事始めなの。博史さんはいつまで日本に？」

「5日の朝早くには、いったんカタールへ発つよ」

「あ、そう」

聡は淡々と返事をしつつ、それだったらもう博史と寝なくてもいいと計算し、ホッとしていた。

去年といえば、聡は31日まで弁当屋の手伝いを口実に東京に残り、3日の夜には戻ってきていた。

……博史と少しでも長く一緒にいたかったからである。

もちろん逢えなかった分を取り返すように、毎晩抱き合った。

去年と今年の自分の気持ちのあまりの変わりように聡は少し怖くなった。

「そういえば11日から修学旅行って言ってたね。どこ？スキー？」

「うん。北海道でスキーなの」

「ふうん。教師も滑れるんだ？」

聡は小学生のときに親が日本人学校の先生をしていた都合で、カナダにいたこともあり、ウィンタースポーツ全般が得意である。

アメリカ留学時代、二人でではないが、博史とスキーにいったこともある。

「さあ。自由時間は滑っていいとは言われたけど。ところでカタールからはいつ帰るの？」

聡は別れを切り出すならいつがいいのか、考えている。

「2月までには帰りたいね。遅くとも4月に式を挙げたいことを考えると」

『式』と聞いて聡は一瞬だまりこんだ。

「……次の赴任先へはいつからの予定なの？」

「辞令が出るのは3月で、4月から書面上は赴任になるんだけど、たぶん最初は出張対応かな。

赴任するのはGWあけじゃない？だから新婚旅行はGWに行けばいいよ」

「博史さん。あたし……」

「わかってる。学校は辞められないんだろ。それについてはもう少し二人で考えようよ。俺は、聡が仕事を続けたいってのは尊重したいんだ」

博史は自分がそらぞらしいことを言っていると自覚している。

博史の母親は専業主婦である。そして博史自身、妻子を養えるだけの収入がある代わりに、とても忙しい。

聡には博史の『妻』業に専念してほしいと、漠然と望むというかそれが当然だと思っていた。

そのとき聡の携帯が鳴った。ハンドルを握る博史の目が鋭くなる。

遠慮しながら表示を見ると『弁当屋』とあった。

安心して博史に「元バイト先から」と博史に告げて、出る。博史の目が和らいで再び前を向いた。

「ああ、アキラちゃん。元気だった?」

懐かしいおかみさんの声がした。

「おかみさん」

「アンタ、いつ萩に帰るの? いやね、いつもうちの黒豆を持って帰ってたでしょ。今年も持っていくのかなと思って用意してるのよ」

――そうだった。

一度持ち帰った弁当屋の黒豆は実家で大好評を博し、以来、毎年持って帰っているのである。

「明日、帰るんですけど……。もしよかったら、今から取りにいってもいいですか？……ハイ、いつもすいません」

聡は電話を切ると、事情を博史に話し、弁当屋に寄ってもらうことにした。

「おかみさん、よかったぁ、連絡してくれて」

「アキラちゃん、よかったよ、間に合って。ほらコレ」

おかみさんは白いビニール袋に入ったタッパーを聡に渡しながら、聡の後ろに立つ男に気付いて

「そちらは……？」と聡に訊いた。

「あ……」

言いよどむ聡に代わって博史自ら

「原田博史と申します。聡さんとずっとお付き合いしてまして、このたび結婚することになりました」

と名乗った。

「……へえ」

おかみさんは、驚いて目を丸くした。奥で、ご主人もこちらを振り返った。

この二人は、聡は山田、つまり将とうまくいってると思い込んでいるのである。

聡は困惑して、でも否定するわけにもいかず、あいまいに笑うしかなかった。

「そう、それはおめでたいねえ」

聡の困惑した顔と博史の顔を見比べていたおかみさんは、とりあえず無難な祝い言葉と笑い声を口にした。

「お代は？」

博史は財布を出した。

「ああ、いいんだよ。これはアキラちゃんちへのお歳暮がわりで」

おかみさんは両手を胸のところで振った。

「ですけど」

博史は万札を出した。

「いいんだって」

「博史さん、いいんだってば。いつも頂いてるんだから」

「聡がお世話になったお礼です」

押し問答の上、博史は強引に万札をおかみさんに受け取らせた。

聡はおかみさんに申し訳なかった。

◇　◇　◇

「大悟じゃーん！」

その夜。将の部屋を訪れた井口は、玄関に出てきた大悟を見て嬉しそうな声をあげた。

「井口クン！ひさしぶり！すっげーピアスだな」

大悟は井口の顔中のピアスを指差すと笑顔を浮かべた。

「いつこっち来たの？　ん？将」

将はリビングでぐったりと潰れて寝ている。

「なんか、今日昼出てって、帰ってくるなり、大酒のんじゃってー。こんなんなった」

「おい、将ってば」

井口は将の体を揺さぶった。

「う～……揺さぶるな。気持ち悪」

将は赤い顔に眉根を寄せてつぶやく。

「将のやつ、こないだから変なんだ」

そういう井口は２５日に酒を飲んでヤンキー相手に大暴れしたときから一緒で、失踪から戻って以来の将の荒れ方を心配していた。

「ずっと、居んの？」

井口は大悟に訊いた。

「うん。正月中はいるつもり」

「いいなぁ。俺もここに居ようかなあ」

そう言いながら井口はタバコに火を付けた。

「ところで、井口さあ、将の女って知ってる？」

大悟が唐突に質問したので、井口はタバコを取り落としそうになった。

「え？アキラセンセのこと？……てか、なんで？」

「いや、今日の昼な……」

将の留守中。

いきなり玄関チャイムが鳴った。大悟は、出ていいものか迷ったが宅急便だったりするといけない、と思いつき

『ハイ』

と玄関ドアを開けた。

そこには髪の長い少女が立っていた。

制服姿だったが、青ざめて見えるほどの顔色の悪さが大悟の印象に残った。

少女は出てきた大悟を見て、ただでさえ大きな目を真ん丸くしていた。

『……将は？』

『いま留守、ですけど』

大悟はいちおう丁寧語を使った。

『そう』

少女は失望したようにいっとき目を中空に遊ばせると、大悟に挨拶もせずにそのままエレベーターに向かった……。

井口はその話を聞いただけで、その少女が瑞樹だとわかったが、何で今ごろ彼女がここに現れたのかよくわからなかった。

72◆苛立ち

将が目を覚ましたのは夜更けだった。もう井口も大悟も寝静まっている。

フトンをしいた覚えはないのに、きちんとフトンがひいてあるのは勝手を知っている井口がやったのだろう。

飲みすぎたせいか、やたら喉が渇いて唾がねとつく。

将は暗闇の中、キッチンへと歩いていって冷蔵庫をあけるとミネラルウォーターをがぶ飲みした。

暖房と加湿器と井口のいびきが規則的な音を立てる中、ソファで点滅するものがあった。

将の携帯だ。

寝ている間にメールの着信があったらしい。

開けると聡だった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

１２／２７土２３：０２

電話もしたんだけど、出れないみたいなので、メールしました。

明日２８日から萩に帰省します。
東京へは４日の夜帰る予定です。また電話します。聡

＝＝＝＝＝＝＝

将は、携帯の画面をあけて右手にもったままフトンに転がった。
――わけわかんねーよ。アキラ。人には電話するな、といっといて、自分は電話するって？
結婚しないと決めた男といつまでもズルズル一緒にいるのも、将には理解できなかった。
――単に、早くきっぱりと別れればいいだけなのに、何をぐずぐずしているんだ。
将は優柔不断な聡に腹が立ってきた。
だからといって嫌いにはなれない。
だいたい、なかなか逢えないからいけないんだ。
寝付けない将はごろごろと寝返りを打った。
あることを思いついて、ガバ、と起きた。
――いっそ、萩まで行こうか。ミニで。

行ける。

が、イビキで計画は崩れる。

――こいつらをここに二人っきりにさせるわけにもいかねえだろうし。

一緒に連れて行く？いやミニの狭い車内にでっかい男３人乗って１０００キロ以上の旅は酷だ。

将はまた横になって寝返りを打った。

眠れないと思ったが、いつのまにか意識がなくなっていた。次に気付いたときは陽が高くのぼっていた。

時計を見る。１０時すぎ。

ぼーっと起き上がると、大悟だけ起きて、お湯を沸かしていた。井口はあいかわらずイビキをかいて寝ている。

「おはよー。コーヒー淹れるよ」

「ん、ああ」

将は起き上がると伸びをした。そのとたん腹から鈍い音がした。

そういえば昨日、早い段階で酔いつぶれて以来、何も口にしていない。

「俺さ、メシ買ってくるよ」

将は部屋を出ると、商店街を歩き、弁当屋をめざした。

天気は上々で、陽射しのあるところを歩けば寒さはそれほどでもなかった。

「ちわー！」

まだ開店したばかりで、カウンターから引っ込んで仕込みの手伝いをしていたおかみさんを呼び出す。

「あら！山田さん！」

おかみさんは笑顔ではなく驚いた顔ですっとんできた。

「ちょっと、ちょっと！」

菜箸を持ったまま、将をカウンターの隅に呼ぶ。

「アンタとアキラちゃんどうなってんの？別れたの？」

「え？」

「いや、昨日ね、アキラちゃんが男の人と一緒に店に来てね……それがずっと付き合ってて結婚するって……。

だからあたしも主人もびっくりして。アキラちゃんは山田さんと付き合ってると思ってたから」

「……はァ」

何と答えていいかわからない将は、どんどん力が抜けていくのを感じた。

「自分も、わかんないスよ」

あいまいに笑うしかない将をみておかみさんは、とりあえず将の気持ちだけは察したらしい。

「あんた、アキラちゃんが好きならしっかりしなよ！」

それに相槌を打つように奥から主人が将を強く睨みつけた。

聡は博史に送られて空港にやってきた。

いちおう遠慮はしたのだが、どうしても、というので乗せてもらったのである。

日曜日の今日は、早くも帰省ラッシュが始まっていたようで道路は若干混んでいた。

そのせいか空港に着いたときはそれほど余裕はなかった。

聡は手早くチェックインすると、名残惜しそうな博史に別れを告げて搭乗口へと向かった。

まだ、搭乗が始まるまで、少しだけだが時間がありそうだ。
搭乗ラウンジに腰掛けると、将に電話を掛ける。

ちょうど将は出来上がった弁当3つを持ってマンションのエントランスに着いたところで携帯が鳴った。

『アキラ』との表示。

「もしもし」

「将？あたし。今空港なの」

「……ふーん」

「4日に帰るから」

「……メールに書いてたよね」

本当は飛び上がるほど嬉しいはずの聡からの電話。おまけに『鷹枝くん』でなく『将』と呼ばれている。

なのに、なんでこんなにノリが悪くてむしろ意地悪な答えしかできないんだろう。

「もしかして、寝起きだった？」

そのノリの悪さは聡にも伝わったらしい。気を遣ってくる。

「ううん。寝起きじゃないよ」

「そう……？」

あきらかに不機嫌な将の声に、聡は沈黙してしまう。でも聡は電話を切りたくなかった。

将だって同じだ。だけどこのまま徒に沈黙のまま電波を共有するのにも限界がある。

「アキラさあ」

将は思い切って声にした。

「結婚しないって言ったよね。なのにさ、なんでアイツとずるずる付きあってんの」

気をつけたつもりなのに、かなり腹立ちが声に出てしまった。

携帯の向こうで聡が息を飲むのが聞こえる。

「俺、アキラのことが好きだ」

言い訳のように付け加える。セリフに似合わない口調。

日本語がわからない人が聞いたら、なにか苦情を申し立てているように聞こえるだろう。

「好きだけど、そういうの理解できないよ。さっさと別れないのは、俺がたよりないから？」

「将……」

聡は何も言えない。博史より将のほうが好きだということが、はっきりとわかってまだ４日だ。

だけど、この４日間、博史のペースに乗せられて、博史の両親に会ってしまった。その両親からことのほか優しくされた……そしてますます別れを言い出しにくくなってしまった。

おまけに博史の母は余命１年だ……。

こんなことを将に説明したところで、どうにもならないだろう。

いずれ聡が決断し、行動しなくては……皆を傷つけなくてはならないのだ。

「将。ごめん。……私、まだ勇気がないの」

優しい人を傷つけてまで将を選ぶ勇気が。

「なんだよ、それ」

それは将には、自分が若すぎて、たよりないから、付き合う勇気が持てないというように聞こえた。

「ようするに、俺じゃダメなんだろ」

「違う。将、聞いて」

「もういいよ。じゃよいお年を」

電話が一方的に切られたのとほぼ同時に、搭乗案内のアナウンスが響いた。

電話を握り締めたまま聡の意識は空港の喧騒の中に蒸発していった。

73◆それぞれの年末1

電話を切ったとたん、将は我に返った。

なんか腹立ちまぎれにひどいことを聡に言った気がする。

――すぐに掛けなおして謝らないと。

そう思ったが、なぜか指が動かない。

将は携帯を握り締めた手をあげたり、おろしたりして何分か迷った末、やっと聡に掛けなおした。

しかしその時にはすでに飛行機に搭乗してしまったのか、電波がつながらなかった……。

将は自分が取り返しのつかないことをしたのでは、と気が気でなかった。

高速バスのアナウンスがまもなく萩に到着することを告げた。

1年ぶりに帰る萩は曇り空だった。日本海側にある萩は、冬の間は曇っていることが多い。

聡はバスの窓の外に映る曇り空に吹きかけるようにため息をついた。

ほどなく、バスは東萩駅前に着いた。

父か母が車で迎えに来るはずだが、まだ着てないらしい。

聡は携帯を手にする。習慣的に発信履歴をあけてしまう。一番上には鷹枝将の名前。

それを見て、またため息をついた聡に、寄ってくる若い女がいた。

「聡、聡じゃない？」

聞き覚えのある声に聡が振り返ると、そこには高校時代の同級生だった初美がいた。

「……初美？」

「久しぶり～！」

初美は人懐こい笑顔を浮かべて寄ってきた。

「ちょっと、ちょっと、聡、すっごく女っぽくなっちょらん？」

「えー、そんなことないよー。ところで初美、なんでここにいんの？東京で就職したんじゃなかったっけ？やっぱり里帰り？」

初美はにっこりと笑った。

「ま、いろいろ。ね、お茶しない？」

お茶といっても、萩にはスタバなどのカフェはない。

二人は萩で一番賑やかなあたりにある昔ながらの『喫茶店』に入った。

聡が高校生ぐらいまで、ゲーム機械がテーブルがわりだったように記憶しているが、さすがに今はない。

しかし、ひさしぶりに来てみると、わりとコーヒーは美味しいように思った。

さっそく同級生の近況に花が咲く。

「美佐はあいかわらずでねー。もう3人の子持ちだよ」

美佐というのは、例の、卒業してすぐに国語教師と結婚した元同級生だ。

この初美と聡は高校の間ずっと同じクラスで仲がよかったにも関わらず、こんなふうにおしゃべりするのは本当にひさしぶりだ。

初美のほうはセミロングだった髪をショートにしたぐらいで、茶色っぽい地毛に小麦色の肌、切れ長の目、と顔立ちもほとんど変わっていない。

たしか、地元国立のY大に進学して、成人式の年に一度会ったが、それきりだ。

「でもさー、本当に聡、別人みたいに女っぽくなったねー。さては結婚相手でもできた?」

結婚相手、という言葉にすこし心がきしむ。

「そんなことないよ。ところで初美は駅で何してたのよ」

「ああ、東京から来たお客さんを見送りにいっちょった。私、実は半年前からここに戻って修行してるんよー」

「修行って、何の？」

「萩焼、というか萩ガラスというか」

と嬉しそうに笑顔を浮かべながら、自分がしていたペンダントをはずして見せてくれた。

そのペンダントトップは小さなクッキーのような陶器に、細かいひびが入った白っぽい水色のガラス釉がかかっている。

昔カナダで見た氷河のような、冷ややかな水色に入ったひびが、光を反射させてオパールのように輝き、なんとも美しい。

「きれい……」

手に取った聡は目をみはった。ガラスでも陶器でもない、こんなのを見るのは初めてだった。

「萩焼に萩ガラスの技法をあわせたものなんだけど、私が弟子入りしている先生が考えたものなんよー」

初美は会社を辞めてそのアクセサリー作家のもとに弟子入りし、学んでいるのだという。

「で、このペンダントトップは私がはじめて成功させたものなん」

「すごいね、初美、すごい」

聡はそのペンダントトップにしばらく見とれた。

「萩に戻ったと言えば……、秋月くんも戻ってるよ」

「え」

聡はひさしぶりに聞く懐かしい名前に思わず手にしていたペンダントトップを取り落としそうになった。

脳裏に、優しい目と、柔らかい声、懐かしいガクラン姿が浮かぶ。

「秋月くん、1年前に結婚して帰ってきて旅館を継いだんよ」

――結婚、したんだ。

聡は飲み干したコーヒーのかわりに水を飲んだ。心をなだめるように。

「彼も、2日の同窓会来るって。きっと彼びっくりするよ、聡を見て。もちろん聡もくるっちゃろー？」

「うん。行く」

心に一瞬たったさざなみ。秋月くんが、萩にいる。また会える。

高校生のときに好きだった、というより憧れていたひと。
だけど結局結ばれることもなく、何年も前に封印された思い。
聡はホコリを被った箱の中から、読みかけの本を見つけたような気がした。

「それは、そうと、東くんはどうしてるか聡知ってる？」

「うわ、その名前もめっちゃ懐かしい」

聡は、秋月のときとは対照的に、手を髪にやって笑った。

こっちは聡が高校生のときに付き合っていた相手である。

「ていうか、付き合ってた相手やろーが」

初美は笑いながら目をむいた。

「知らん。大学入って自然消滅したもん」

現役で東京の大学に進学した聡は、浪人したという東のその後をまるで知らない。

聡は17才で彼と初体験をしている。そんな相手なのに、消息を知ろうとも思わなかった。

秋月に淡い思いを抱いていた聡だったが、東が聡に告白し、なかば強引に交際が始まったのだ。

真面目なサッカー少年だった秋月も下級生に人気があったが、コピーバンドのベースをやってた東は萩じゅうの女子高校生が知っている、というほどの有名人だった。

ちょっと危ない感じの強い視線は、少し寂しい色が混じっていて、告白された聡はその瞳にやられてしまった。

まもなく、聡は同意の上で、東と寝たのだが、そういう関係になっても、秋月に対する淡い思いは忘れがたかった。

それにしても。

東の、あの瞳は……誰かと似ている。聡はなんだかデジャヴを覚えてハッとする。

東のあの瞳は、将のそれとそっくりなのだ。

だけど、相手のペースに飲まれていく、そしてそのかわりに大事な人を失うあの感じ……。

今のシチュエーションは逆だ。役者を変えて、また同じことが繰り返されるのだろうか。

――将。

聡の脳裏が将の画像でいっぱいになる。

『もういい』と電話は切られてしまった。

いっぱいになった将の記憶に押し出されたように涙がこぼれ落ちた。

「聡？どうしたん？東となんかあったん？」

初美は、話の流れ上、聡が高校時代に付き合っていた東のことを思い出して涙をこぼしたと思ったらしい。

「あ……ちがう。東のことじゃない」

聡はテーブルの上にある、吸水性の悪い紙ナフキンを手に取ると涙をぬぐって、初美を安心させるために笑顔を見せた。

「何、あたしでよかったら、聞くよ」

心から心配そうな顔だ。まるで変わっていない。

高校時代も、いろいろ悩みを打ち明けあって、一緒に泣いたりしたものだ。

こんな昔からの友人だったら、しかも東京から遠く離れている友人だったら、いっそ胸のうちを話してしまってもいいかもしれない。

「私、今年の秋から教師をしているんだけど……」

聡は言葉を選びながら悩みを打ち明けはじめた。

74◆それぞれの年末2

将とのこと、博史とのことを舌にのせようとしたとき、携帯が鳴った。メールの着信である。

初美に断って、メールを見る。将からだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さっきは言い過ぎた。ごめん。将

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

短い一言だったが、聡はかなり救われた。

聡の表情の変化は、初美にも伝わったらしい。

「好きな人から？」

「……うん」

聡は携帯を閉じながら微笑んだ。

「悩みは、解決したの？」

初美はいたずらっぽく微笑を返した。

「……少しだけね」

そう。事態が進展したわけではない。だけど、心はずいぶん晴れた。
聡は、自分の心のありようさえ決めてしまう将の存在の大きさを噛み締めていた。

「将、さっきから何、携帯ばっかいじくってんだよー」
ゲームをしていた大悟はとうとう将にツッこんだ。将はさっきから携帯を開いては閉じ、閉じては開いていた。
それを繰り返して……ようやく、聡に短い謝りの言葉を送信できたところだった。

「アキラセンセーだろー」
井口がゲームを交代しながら言った。

「先生ぇ？」
大悟が不思議そうな顔をする。

「こいつ、担任とデキてんだぜ」
井口が面白半分に大悟に告げ口する。

「ウッソ、マジ」

大悟は冗談だと思い込んでいる顔だ。

「マジ、マジ。でもまだキヨい仲らしいけど。コイツらしくないよなー」

という井口に対してやっと将は

「別にデキてないよ」

とゲームのリモコンを奪いながら答えた。照れてるという感じではなく、そっけない感じである。

「またまたぁ」

「なーんか、彼氏が結婚早めたいらしいぜ」

将はゲームに意識を飛ばしながら、抑揚もなく言い捨てた。

「ウソっ！……だって、アキラセンセ、ここに毎日通ってたじゃん」

「知らねえーよ」

将は答えながら画面に現れる敵をバカスカやっつける。

こんな風に、博史も消してしまえたら。聡は自分だけのものになるだろうか。

そんな将に、井口は、どんな言葉をかければいいかわからない。ただ、将の気持ちは……わかっている。わかっているだけに困った。

「いくつぐらいの先生だよ」

大悟の問いに対し、井口が代わりに答えてやることにする。

「さー？２３ぐらい？けっこーかわいくて、足キレイで、しかも巨乳」

と少しでも明るい雰囲気にしようと茶化す。

「２６だよ」

将はゲームに目をやったまま、井口の言葉を訂正した。

「えー！アキラセンセ、そんなになるんだ！みえねー！９も年上！」

騒ぐ井口に、大悟が

「まあ、将の年上好みは今に始まったことじゃないけどな」と含み笑いをした。

「え」

大悟を振り返ったおかげでゲーム中で将はやられてしまった。

「そんな……、ヒトのことを年増好きみたいに言うなよっ！」

思わず将はムキになる。年上だからという理由で聡を好きになったわけではない。

「でもさー、結構、将、年上に可愛がられるタイプじゃん」

将の中学生時代の女性関係を知っている大悟である。事実だから将は口答えできない。

実際、将は最初の女も含めて、年上に好かれ、また付き合ったと思う。

もっとも、中学時代の将にとって、年下はほとんど『お子様』に思えたからなのだけど。

「ところでさ、昨日の髪の長い子も将の元カノ？」

大悟は井口を振り返った。

「ああ、瑞樹？」

井口の口からこぼれた名前に将の目が鋭くなる。

「何、瑞樹がどうかしたの」

「なんかさー、昨日お前がちょっと留守にしてるときに、たぶん瑞樹だと思うけどー、髪の長い女が来たんだってー」

「そうそう。目がこんなにでっかくてキレイな子。でもすっげー顔色がまっさおでさ」

井口の説明に、大悟が指を丸めて目をかたどりながら、補足をする。

「元カノなんかじゃねーよ」

将は吐き捨てるように言った。

瑞樹が聡にしようとした企み。将が邪魔したから成就することはなかったが、将はそれを決して許していない。

「そういや、瑞樹といえばさあ。お前がここを追い出してから、前原んちに入り浸ってたらしいけど、ホントかな」

将はそれを初めて聞いた。

「何それ」

井口に訊き返す。

「いや、まえにサ、前原が自分で言ってたんだけど、『瑞樹がうちにいる』って」

将は前原の、隈取をしたかのような目を思い出した。

瑞樹は、事情があって……母の再婚相手である義父に迫られているから……家に帰れないと言って将の家にずっと泊まっていた。

その瑞樹が将の家を追い出されて、こんどは前原の家に泊まっていた。

『泊まる』というのは将にもしていたように、やることをやっていたのだろう。

その瑞樹が、自分の家に再び現れた、というのは。

なんだか将は嫌な予感がした。

１２月３１日。

将は井口、大悟らと一緒にクラブのカウントダウンイベントにいった。

井口は大ノリで得意のダンスを披露していた。

「上手いなァ。プロみたい」

大悟は井口のダンスを見て、大音量の音楽に負けないよう、叫ぶように言った。

「ホントー！ねー！」

隣にいる今知り合ったばかりのギャル系女子が黄色い声で相槌を打つ。

「なんか、本気で習ってるらしいけど」

将はカシスソーダをあおりながら大悟にだけ聞こえるように教える。

実際、聡の企画した社会見学に刺激された井口は自己流のレッスン以外に、そのときプロに教えてもらったスタジオで本格的にレッスンを始めたのだ。

そのレッスン費用のためにバイトも始めるらしい。

「すごいね～！」

将の隣のギャルにも聞こえていたらしい。ギャルは将と大悟の会話に積極的に参加しようとしているらしい。

明るい感じの可愛いコだったが、正直なところ今の将にはウザかった。

もともとイベントにあまり気乗りのしない将は言葉も少なく、やはり隣にいるギャル系の質問にも

「ああ」
とか
「うーん」
「そうそう」程度に適当に答えている。

そういってるうちに今年もあと30分以内に迫ったクラブは踊ろうにも体を揺らすのが精一杯なほど込み合ってきた。

将たちもフロアに出ることにした。

飛び交う鮮やかなライトに自然に体が動くほどに響く重低音。

しかし、将はふいに体をとめてしまいたいほどの思いにとらわれる。

――聡。

この年末、将の脳裏にはいつも聡がいた。

聡から掛かってきた電話で、ひどいことを言ってしまった。聡に見捨てられたくないのは自分のほうなのに。

しかし、どうしても電話をかけられなかった。

かろうじて短いメールを送れたが、そんなものは自分の思いのすべてではない。

表面のフォローだけなのだ。

そのフォローメールに聡からの返信はこれまた短いものだった。

＝＝＝＝＝＝＝

こっちこそ本当にごめんね。

年が明けたら直接話したい。

＝＝＝＝＝＝＝

何を直接話すんだろう。まさか最悪の内容ではないだろうが、と思いつつ将の心は不安になる。

聡を失うことが、今の将にとっては一番の恐怖である。

この東京を襲うかもしれない大地震よりも。無一文になることよりも。そして死よりも。

だからどんなに楽しいイベントも、ゲームも、美味しいものも、もはや将の心の穴を埋めることはできないのだ。

ＤＪが腕を高く上げて、カウントダウンを始める中、将は祈るよう

に聡のことを考えていた。

75◆出発

イベントのあと、3人は初日の出を見に、将のローバーミニで太平洋に面した海岸をめざした。

井口はまだ踊っていたそうだったが、大悟も将もノリがいまいちだったからだ。

運転は将、井口が助手席で大悟が後部座席、と全員175センチを越す大男の若者3人でミニは悲鳴をあげそうだった。

都内から2時間ほどかけてようやく「本州で一番早い日の出」とやらが見える海岸にたどりついた。

が、うっすら明るくなりかけた水平線はなんだか曇っているらしい。紫色の海面の上は同じく紫色がかった濃いグレーの厚い雲が覆っていた。

「なーんかビミョーだなあ」

といいながら助手席のドアをあけた井口の金髪が、海風に押さえつけられるように歪む。

3人はいちおう、外に出てみた。

「寒っ！」

一同車から出たとたんに身を縮こまらせた。

明け方というのと、吹き付ける海風とで、全身の毛穴がギュッと音をたてそうなほどだ。

一同肩を縮めて海のほうを見る。

砂浜に打ち寄せるのは墨色の波。将はまた、聡と二人でびしょぬれになった波打ち際を思い出した。

場所も波の色も、あたりの温度もまるで違うのに。

海を見るたびに、聡とのあの海を思い出すのだろうか。この先、永遠に。

将はそんなことを考えた。

あたりには、初日の出を見に来た若者が結構いる。

車を新年仕様にペイントした暴走族もいるが、少数のグループのようだ。

「もう明けてもいい頃だな」

大悟が時計を見ながら言った。

しかし、雲は茜色にすらならず、厚いままだ。それでも雲の厚みのムラに光が透けはじめた。

「将さ、今さ、センセーのこと考えてるべ？」

水平線に目をやったまま、ふいに、井口が言った。

あまりに唐突だったので、将は否定も言い訳もできず言葉につまった。

実際、ずっと聡のことばかり考えている将なのだ。

「わかるべー！」

井口は金髪に、冬休みで少し伸ばした無精ひげ、という悪人づらに似合わなく明るく笑った。

「そんなに好きなんだー」

大悟も将を振り返る。

「そんなに好きならさ、会いに行けばいいじゃん」

とんでもない提案までする。大悟は昔から将の思っていることを大胆に先回りをするところがあった。

「そうだよ！今から行こーか？みんなでよー」

井口まで賛成する。

「……無茶いうな。アキラんち、萩なんだぜ」

「萩ってドコよ？」

「山口県だよ」

「ヤマグチ〜？それって九州？だっけー」

さすが偏差値４０荒江高校の生徒・井口らしい返答だ。

「広島の近くだろ。ちょっと遠いな」

むしろ、中卒の大悟のほうがよっぽどマシだといえる。

「ヒロシマかあ〜」

間の抜けた井口の声を最後に皆だまり、再び海を見つめた。

雲の切れ間から眩しい光が海に落ちはじめる。

縦に幾筋もの光が水平線近くの海面に落ちて、まるでオーロラのようだ。

それは太陽本体ではなく、光があたった波だけをキラキラと輝かせている。

太陽はそれ以上姿を現さないらしい。

「今日はダメだな」

井口の言葉は、初日の出が、という意味なのか、聡に会いに行くのが難しいという意味なのか、わかりかねた。

３人、申し合わせたように車に戻ろうとしたとき。

「何だァ……おまえら」

と背後から声がかかった。

声のほうを振り返ると、シャコタン車とそのまわりに特攻服で『正装』したヤンキー数人が鋭い目付きで将を睨んでいた。

反射的に睨み返す将と大悟だったが、そんなふうに敵意を丸出しにされるようなことをした覚えはない。

しかし、井口だけが、「ヤベ！」とあわてた。

「将、逃げないとマズイぜっ。お前がクリスマスにカランだやつらだよっ」

将はまるで覚えていなかったが、留置場に入れられたときの相手か、と即座に判断した。

「コラァ、あんときはヨォ……」

と剃りこみを入れた『正統派』のやつが凄んでくる。

将は対抗して睨み続けたが、大悟と井口が将を引っ張って車に乗せた。

『早く、早く』と2人にせかされてエンジンをかける。

「逃げんのかコラァ！」

「ぶっ殺してやる！」

獣のような咆哮をあげながらヤンキーも、シャコタンに乗り込む。
将はわけもわからず、ミニを急発進させた。

「ゲエエ！追ってくるぜ！」

井口が後ろを見ていう。わざわざ追いかけてくるとは……将は、自分が何をしたのか思い出そうとしたがまるでわからない。

「これ、リミッター切ってる？」

大悟が聞いた。最高速度の制限を解除できるよう改造したか、ということである。

改造していない場合、普通の車は１８０キロ程度しかでない。

「切ってない」

将は必死でアクセルを踏み込んだ。

「やべえじゃん！」

「大丈夫！」

単なるスピードでは負けるが、道路には他の車が何台もおり、全速力を出せる状況ではなかった。
せいぜいが１００キロだ。

対向車を避けながら、他の車をちょこまかと追い抜いていく。ハンドルを切るたびに３人の体が大きく揺れる。

細かい取りまわしではミニのほうが有利とはいえ、相手も直線で差を縮めてピッタリついてくる。

「わ！渋滞だ！」

前方で車が列をなして止まっているのを見て助手席の井口が悲鳴をあげる。

こんなところで止まったら、引きずり出されてひどい目にあわされるに違いない。

何せ、今日は相手の人数が多すぎる。

「見てろ！」

将はハンドルを大きく切るといちかばちか、歩道に乗り上げた。

ミニでぎりぎりの幅らしく、街路樹が助手席の窓を激しく擦る。

歩行者がいたら、終わりだ。

無免許運転に、免許証偽造、おまけにこのスピードだ、歩行者がいたら重傷はまぬがれまい。

将は祈るように歩道を猛スピードでくぐりぬける。

シャコタンも続こうとしたが、歩道の幅が狭すぎたらしい。追って来れない。

窓から首を出して何かを悔しそうにほざいているのがバックミラーから確認できた。

「ヤッター！」

大悟が歓声をあげつつ、追って来れないヤン車を振り返って、ベロを出す。

「よっしゃー！」

車中の３人は安堵して、笑いあった。

横断歩道で、本来の車道に戻る。

そこでちょうど渋滞区間は終わっていた。

しかし念のためスピードは緩めずに走り続ける。

そのとき、ようやく遅い朝の光が車の中にも差し込んできた。

「なあ！」

笑いながら井口が運転席の将に叫ぶように提案した。

「このまま、今から行こうぜ！ヤマグチ県ハギ！」

「……バカか？１０００キロ以上あるんだぜ」

将は前を見たまま言い放った。

「いーじゃん、ヒロシマって、お好み焼きうまいんだろー！」

日本地理にうとい井口にしては、よく知っている。

「面白そうじゃん。行こう、行こう！」

後部座席から身を乗り出して大悟もノってくる。

「バカ、おまえら本気？」

将は呆れたふりをしながら、大きく心が動いていた。

「どーせ、お前が運転すんだから、俺らは別にラクだっしー」

「そーそー」

井口と大悟は顔を見合わせて将を促した。

「もー、マジかよ」

といいながらも将はすでに、萩までどれぐらいの時間で到達できるか計算していた。

千葉－山口。ほぼ本州を横断する形になる。

１０００キロ、いや１５００キロを走りぬける。聡に逢うために。

決意した将は太陽を背にして、ハンドルを握りなおした。

76◆同窓会

「お正月ぐらい着物でも着たらどう？せっかくつくってあげたのに」と出かけるために着替える聡に母が言った。

「やめてよ。飲みに行くのに着物なんか着ていく人誰もいないってば」

新年もあけて2日。聡は夕方から行われる同窓会に出かける準備をしていた。

客間のほうからは父と教え子たちの笑い声が聞こえる。すでにお酒が入っているようだ。

今日は、父の昔の教え子が福岡から総勢6人で来ていて山口旅行がてら泊まっていく予定なのだ。

築１００年を越える古民家である聡の実家は父母と聡だけで住んでいたにしてはかなり広い。

聡が小４から中3までカナダにいた聡の一家だが、この萩に戻るにあたって、Ａ川ぞいにある下級武士の家だったここを管理がてら借り受けることにしたのだ。

『古い家でも人が住めば生き続ける。逆に住まなければ荒れる一方だ』

と紹介した人は言ったが、それに父母が感銘を受けたのだ。

水まわりを変えたりやエアコンをつけたりなどはしているが、東京のコーポに住みなれた聡にはもはや少し居心地が悪い。

特に冬はすきま風が入るし、廊下は氷のようでとても裸足で歩けないし、とにかく寒いのだ。

しかし、来客には、『風情がある』『旅館みたい』とすこぶる好評な家だ。

父も母も教職ということで昔の教え子などの来客が多い。

昨日の元旦は、萩焼の窯元を営む叔父一家が昼からやってきて、酒が入って運転できない、と泊まっていった。

明日も、昼は母の教え子、夕方は父の教え子である中学生がやってくるだろうということだ。

聡が実家でのんびりできたのも年内だけで、新年は来客のたびにもてなしにあれこれ狩り出されて落ち着けなかった。

今夜は同窓会があるおかげで、『パシリ』や『姐や』からやっと解放されて聡はホッとして爪にマニュキアを塗っていた。

秋月も来る、と聞いて浮き立つ聡の気持ちは少し濃い目のマニュキアを選ばせた。

マニュキアを乾かすのに少し時間がかかって、開始時間から１５分

遅れてしまった聡だが、店の引き戸を開けるなり

「聡～！こっち！」

初美が座敷から身を乗り出して手を振った。

出席者ほぼ全員がこちらを振り返り、おおー、と声が上がった。

「古城さん久しぶり！」

「ちょっと聡～何年ぶりよ！」

「めちゃくちゃキレイになっちょらん？」

次々に声がかかる中、聡は秋月の姿を探した。まだ着てないようだ。

２０人ほどが参加している同窓会は、カウンターと座敷……というより小上がりだけの小さな居酒屋の座敷を占領しているようだ。

とりあえず初美の隣に座る。とたんにビールが注がれる。

「聡！久しぶり！」

と声をかけるふっくらした女がいた。

「……美佐？」

卒業と同時に国語教師と結婚してすでに３人の子持ちだという美佐だ。

「ちょっと、もう3人も子供いるんだって～？」

と声をかけながら、聡の脳裏を将のことがよぎる。教師と生徒の恋愛のなれの果て。

美佐は、小柄で可愛かった高校生の頃の面影はない。それでもまん丸でツヤツヤした頬は幸せそうだ。

「もう、今４人目がいるよ。５ヶ月だよ」

とお腹を差してにっこりする。

あいかわらず、聡はそんなふうに国語教師に孕まされている美佐を、少し汚らわしいと感じてしまう。

――もし将と結婚して４人も子供をつくったら、教え子たちは自分を汚らわしい女だと思うんだろうか。

聡がそんな想像をしているとも知らず美佐は

「聡は何してんの？なんかめっちゃ色っぽくなってない？」

と訊き返して来た。

「東京で高校の先生してるんだ」

「なんか胸、すっごく大きくなっちょらん？ニンシンしてんじゃない？」

脈絡もなく話が飛ぶところは昔の美佐のままだ。

聡は今日は少し胸のあいたニットにジーンズというシンプルないでたちだ。

それで靴を脱ぐときにかがんだ際、谷間が大胆に見えてしまったらしい。

「ちょっと、いきなり、何いうのよー」

「あー、これしてきてくれたんだー」

初美が返答に困る聡の胸元にペンダントを見つけた。年末にさっそく初美の工房を訪れて買ったものだ。

「昔はもっと胸なかったハズ！」

「ちょっとさぁ。男子が話題に入れなくて困ってるよ」

すでに酔っているのか、しつこい美佐に初美がフォローをいれてくれる。

そこで男子も聡になんとなく注目しているのがわかった。

幸い、といったらなんだが、昔、彼氏だった東が来ていないのにほっとする。

安心して男子とも声をかけあう。

聡が同窓会に来るのは、成人式以来だから6年ぶりということになる。

それでも、あまり変わらない人と、すごくおじさんになった人といるのにびっくりした。

しかもそれは高校時代の美形度に比例していないのだ。

高校のときはカッコよくてモテていた男子が、すごく疲れた感じになっていたり、パッとしない地味な男子がパリッとしていたり。

それに対して女子のほうは、美佐は別としてだいたい高校時代の雰囲気を残しているといえよう。

引き戸がガラッと開くたびにそっちを気にする聡に、

「秋月くん、旅館の夕食を出し終わって来るって。今7時すぎだから、もう少しだね」

初美が聡に囁いた。

正月といえば一番の稼ぎ時、旅館も大変なのだろう。

しかし、秋月がどんな風に変わっているのか、聡は少し心配になった。

それから1時間もたって宴もたけなわになり、出席者は皆赤い顔になっていた。

聡もビールからそろそろ違うお酒にしようかとメニューを見ていたその頃。

引き戸がガラリと開いた。思わず聡の目はメニューからそちらに移動する。

「ごめん！遅くなって！」

秋月が一升瓶を持って現れた。

――変わらない。

たぶんユニクロのフリースを着ているその姿は太りもせず、やつれもせず……。

頭に若白髪が目立ったが、少年っぽい感じなのに落ち着いた雰囲気は変わらなかった。

最初に聡のほうを見た、と思ったのは気のせいだろうか。

しかし。

その後ろに、ショートカットの女性が見えて、聡の甘いノスタルジィはすぐ打ち破られた。

「秋月！それ嫁さん？」

ヒューヒューと冷やかしの声が座敷のあちこちからあがる。

秋月はそれでも、小上がりまで歩いてくると、聡に

「よっ」

と声を掛けて、伴った女性ともども、聡の隣にさりげなく座ると「まずビールでいいよね」と女性に確認してから「生2つちょうだい」と店の人に注文した。

低い声は完全に大人の男性のものだ。

「聡、すっごいキレイになったねー」

如才なく聡に声を掛けるところなどは少し大人になったのかもしれない。

昔はそんな直接的な褒め方をしなかったよう思う。

「そんなことないよ……。奥さん？」

聡は隣にいる女性に気を遣った。

「綾、といいます」

和服が似合いそうな涼しげな目が笑顔のおかげで柔らかくなっている。

いかにも旅館の若女将が似合いそうだ。

「福岡の大学のときから付き合ってて、去年結婚したんだよね」

初美が解説するのに代わって、秋月が妻の綾に聡を紹介する。

「こちらは古城聡さん。僕が高校のとき片思いしてたヒト。きれいな人でしょ」

「本当ねー」と綾は悪びれもせずに答える。

聡は思わずドキッとしたのを「ヤダー、もう」と笑って誤魔化す。

――片思い、だって。

片思いはむしろ、聡のほうだと思っていた。

そのとき、秋月が持ってきた酒がさっそくぐい呑みでまわってきた。聡は萩焼のそれを受け取りながら秋月を盗み見る。

秋月のほうは、綾を交えて美佐や初美、まわりの男子と近況を話している。

聡はほっとしたような、がっかりしたような気分でぐい呑みの酒を飲んだ。

「どうですか？」

綾が聡を振り返って話し掛けた。一瞬どぎまぎする聡だったが、酒のことか、と安心する。

「美味しいです。とっても」

「よかったぁ。これうちの里でつくってるお酒なんですよ」

「福岡の？」

「いいえ、山口です」

その『T』という酒は実際口当たりがよく旨かった。

聞けば山口には小さな酒蔵がいっぱいあり、最近は各酒蔵で個性を競った酒造りをしているのだという。

秋月の妻の綾は、とてもさっぱりとした性格のようで、話していて気持ちのいい女性だった。

それで、聡は秋月が今とても幸せなのだということがわかった。

だからああやって、聡のこともさらりと話せるようになったのだろう。

「じゃあ、私はそろそろ」綾は３０分ほどで席を立った。

「え、もう？今来たばっかりじゃ」

聡の口から社交辞令なしで、心からの引止めの言葉が出た。

秋月が幸せである証拠である綾と話すことで、とてもほっとした気分になっていたのだ。

「３ヶ月の子供がいますんで……。それに皆さんのお邪魔をしちゃ

悪いですし。たまには主人に羽を伸ばさせてあげないと」

そうやって引き上げていく綾を見送って、聡は完全に秋月が『過去の人』であることを実感した。

「気をつけて帰れよ」

秋月も身を乗り出して、綾に声を掛ける。本当に幸せな二人なのだ。

「めちゃくちゃ、いい奥さんだね」

口当たりのよいお酒で酔いがまわった聡だから本心しか口にできない。

「そう？」

聡の隣で赤い顔の秋月は心から嬉しそうだ。

「実はさぁ、俺、会社勤めしてたんだけど、萩に戻って旅館を継ごうって言ったのもアイツなんだ」

秋月は綾との出逢いから、萩に戻ったいきさつまでを嬉しそうにひととおり話した。

「聡は、どうなんだよ。東と別れたのはなんとなくわかるけど、誰かいい人いないのかよ」

聡はまたぐい呑みに口をつける。

「いい人ねえ……」

そのとき酔った頭に浮かんだのはまぎれもなく将である。

77◆1300キロを越えて1

「いい人、か……」

聡は空になったぐい呑みを弄びながら、将を思い浮かべる。

「いるけど。好きになっちゃいけないヒトなんだ……」

「何だよ。……まさか不倫してるんじゃないだろうな」

秋月は心配そうに聡をのぞきこんだ。ちなみに聡にあわせて標準語になっている。

昔はお互いもっとキツイ方言で話していた。

「やだなー。違うよ」

「俺さ。聡には本当に早く幸せになってほしいんだ」

秋月は酔っているせいか、少し恥かしいことを神妙な顔で言う。

聡は、ふふ、と笑うと

「なんか私が幸せじゃないみたいね」

と答えながら、ジーンズの足を揃えて胸の前に立てた。

「本当にサ。俺が幸せにしてやりたいって思ってた。17歳のときは」

聡は長期熟成させた酒を飲んだように、胸がじん、と熱くなる。

「あたしも。秋月に片思いしてたんだよ」

「ウソ」

秋月は心から驚いたようだった。見開いた目が酔いで充血している。

「東は……？」

「うん……。何なんだろうね。わかんない……」

聡は立てた膝に顔を半分埋めて、目だけで秋月を見る。

「そっかー。実は両思いだったんだー」

秋月は壁によりかかって天井を見あげた。それきり黙りこむ。

2次会の話で盛り上がっているみんなが遠くにいるような、二人。

だが、二人の間には9年の年月が横たわっている。もう道が交わることはないのだ。

「ほら、ソコ！何いいムードになってる！」

オヤジになった男子にとうとう指摘された。

「おう、邪魔すんなや」

気がつくと秋月も元通りになって笑っていた。

「聡、2次会いく？カラオケだけど」

初美に声をかけられる。

「どうしようかな」

と腰をあげたとたん、フラッと酔いが足に来た。

「大丈夫～？」

「えへへ。ちょっと酔ったかなあ……。今日は帰ろうかな」

「じゃあ、俺送るよ」

と秋月が聡に肩を貸す。

「いいってば」

「何いってんだ、そんなヘロヘロで……。悪い、俺、聡を送ってからまた来るよ」

秋月はそう皆に断ると、聡を促した。

「ちょ～、まだかよ～、ハギは～、もう2日車に乗ってんじゃん」

井口が後部座席で文句を言う。

「うるさいなあ、お前がやれ、名古屋で味噌カツだ、広島でお好み焼きだ、って言うから遅くなったんだろ」

運転する将もいらついている。

「何だよ！だいたい高速使えばこんなに時間かかんないだろ！お前がケチるからいけないんだろーが！」

「るせー！じゃお前高速代出すか？出さねーくせに文句いうなっ！」

思わずカーブを曲がる将のハンドルが荒くなり3人体が傾いた。

「まあまあ。もう山口入りはしてるんだから」

大悟がフォローする。

もう1月2日の夜だというのに、ようやく車は2号線をはずれて北上しているところだ。

元旦の7時に千葉を出てもう37時間が経つ。

ガソリン代がバカにならないので、高速道路代をケチって1号線をひたすら西へ進む。

正月らしく途中何箇所か渋滞があり、思うように進まない中、1日目の夜を名古屋で迎えた。

夕食に名古屋名物の味噌カツを食べ、再び西へ向かう。

大晦日に寝ていない将は、お腹いっぱい食べたおかげでひどい眠気に襲われたが、京都、大阪、神戸といった大都市は夜中に通り抜けるべきだ、と判断して明け方までになんとか姫路まで走りぬけた。

ここまでに井口や大悟は居眠りし放題だったが、将はここでようやく仮眠を取ることができた。

コンビニの駐車場に車を止めて、3時間だけ爆睡して、朝9時には姫路を出発する。

2号線も岡山あたりは順調で、午後には広島についた。

そこで、井口が初詣しよう、と言い出したので、安芸の宮島に行く。運転もせず暇な井口や大悟は携帯などで情報収集に余念がなかったのだ。

そして、市街地にある『お好み村』へ行き、お好み焼きを食べて、そこを出たのが17時である。

そこで今朝3時間しか仮眠していない将はまた馬鹿眠くなってきたが、ひたすら耐えてハンドルを握り続けた。

ここへ来て、さすがに若い将でも、肩が凝ってきた。

今、国道262号に入ったところだからあと1時間足らず。

1時間足らずで聡に逢える。もはや執念でハンドルを握る将だ。

「どうやら着いたらしいけどサ。アキラセンセイんちてドコよ?」

井口が不平ったらしく将に訊いた。

萩に到着したらしいが車は依然暗い中を走っている。

「お前、電話かけろよ」

「えー。ヤダよ。びっくりさせたいのに」

将はハンドルを握りながらキョロキョロとしている。

「そんなこと言ってる場合かよ!」

「誰かに聞けばわかるって」

将はうわの空で言った。

「バカか~!渋谷駅で『古城先生の家どこですか』って赤の他人に聞くようなもんじゃねーか!」

井口はブチ切れる。

「そこまで人口多くないって」

と答える将によけいに井口は

「あーそうだよ！誰も訊けるような人いねーし！暗いし！」

と叫ぶ。

川に並行して走る一般道に人影はない。ときおり水銀灯が寂しい色の白い光を照らしているのが逆に暗さを引き立てる。

大悟が

「将、さっきから何探してるの」

と訊いた。

「いや、アキラんち、川の近くの武家屋敷って聞いたから。川沿いを走ってる」

「何川」

「A川とかっていってたような……」

「あそこに橋がある。ちょっと川の名前を見てこよう」

大悟は将に、水銀灯の下で車を停めさせた。

広島を出てから4時間あまり。狭いミニの車内に押し込められていた若者3人は、車が泊まるなり外に出て伸びをした。

水銀灯の下とはいえ、東京の明るさに慣れた3人には驚くほど暗い夜だ。

車も通らないので川のせせらぎが異様に響く。
そんな外は冷え込んでいるが、逆に新鮮な空気を感じさせる心地よさだ。

「あ、あれ……」

井口が指を差した方向に、こちらへと歩いてくる男女がいた。

「ごめんね。付き合わせちゃって」

「何いっとん。歩こうっていったのは俺だろ」

聡は、秋月と並んでH川沿いの道を歩いている。
冷たい冬の夜の空気は、それだけで若干聡の酔いを覚ました。
タクシーをつかってもよかったのだが、少し歩こうと提案したのは秋月のほうだった。
A川の近くにある聡の家は、居酒屋のあたりから、歩けば２０分ぐらいだ。
少しだけ遠回りして、二人でH川沿いの道に来たのだ。
春には土手に生える桜並木が美しい道だ。

高校生のとき、ペアで学級委員をやったこともある二人は、桜吹雪の中、自転車を並べて通ったものだ。

吐息が時折ある水銀灯に照らされて暗闇に溶けていく今、コンビニで買ってくれたお茶だけ手に温かい。

「酔いは醒めた？」

「うん。もう大丈夫だよ」

こんな風に並んで歩くのは9年ぶりだ。

お互い思いあっていたのに、『同級生』として並んで歩く以上には、とうとうならなかった二人。

ほんの少し、勇気を出して、手を握るなりすれば違った二人になっていたかもしれない。

手を握る。

将は……あの、湾岸の遊歩道で手を握ってきた将の手の温かさを、聡はふいに思い出す。

そんな聡の脳裏が透けて見えているように秋月は聡に訊いた。

「それでさ。さっき言ってた、好きになっちゃいけないヒトって何なん？」

「ああ」

秋月の幸せを見せてもらった聡は、自分の今の恋を、思い切って秋月に打ち明けたい気がした。

打ち明けたにしても秋月だったら聡のことを軽蔑したりしないだろう、と思う。

「教え子、なの」

聡の告白に秋月は驚いて一瞬足が止まった。しかし、すぐに

「へえ」と

相槌を打ち、歩き始めた。

「何年生？」

「高2。17歳。……バカみたいでしょ、あたし」

秋月は黙っている。

「でもね。本当に好きなんだ。だからスゴく悩んでる」

「……意外だなあ。聡は大人が好きだと思ってた」

ようやく秋月が口を開く。特に聡を非難するようすもない、淡々とした口調だ。

「うん。自分でもそう思ってたんだけど……。もう気持ちがぐっちゃぐちゃでさぁ」

聡はなるべく明るく見えるように笑って見せた。

そのとき。

「アキラセンセー！」と前方の水銀灯の下から声がした。

ローバーミニが止まっているのをみて、まさか、と聡は心臓が止まりそうになる。

手をふる金髪のガタイの大きな男の横で、見慣れたボサボサの茶髪が振り返る。

「……将！」

聡は思わず立ち止まった。

78◆1300キロを越えて2

水銀灯の下の将は、まるでスポットがあたっているように見えた。

聡の動きはすべて止まった。いや、まわりの時間さえも止まってしまったかのようだ。

活発に動いているのは心臓だけである。

将のほうも、聡を見つめてそのまま動けない。

一瞬だったが、二人は突っ立ったまま見つめあった。

二人が会うのはクリスマス以来である。

立ち止まる聡に秋月がやっと気付いてその視線の延長上にいる若者を見た。

そのときには、聡はそこへ小走りで近寄っていた。

「どうしたの？こんなところで。まさか東京から来たとか」

井口と将と両方に話し掛ける。

「そのまさかっすよ。昨日の朝から車乗りっぱー、でようやく着いたところですよー」

井口が顔をしかめながら話す。

「何で？ここに？」

と訊きながら聡はわかっていた。将は自分に逢いに来てくれたのだ。

言葉にできない将のかわりに井口が代弁する。

「こいつがセンセイに逢えなくて死にそーになってたから。……センセイ、あれ誰」

井口が顎をしゃくった。そのとき大悟も戻ってきた。聡を見ると会釈をした。

「ああ。高校のときのクラスメートで秋月くん。今日、同窓会だったの」

秋月はそばに寄ってきた。

金髪にピアスといった井口の容貌にもそれほどけげんな顔を見せないのは、客商売をしているせいか。

「聡、教え子さん？」

「うん」

聡は頬が熱くなるのがわかった。

――さっき、あんなこと言わなきゃよかった。

聡は教え子に恋していることを秋月に打ち明けてしまったばかりなのだ。

「はるばる、聡に会いに東京から？この車で！すごいねえ！何時間かかった？」

秋月は無邪気に話しかけているが、このうちの誰が聡の相手なのかさぐっているのだろう。

「昨日の朝7時ぐらいだから、えーと38時間ぐらいすか」

話すのはもっぱら井口で、将は無言で聡を見詰めている。

秋月は、そんな将のようすに気付いたようだ。

「運転は、自分が？」

と秋月は将に向き直ると、訊いた。

「え、あ。……ハイ」

将は気付いて、ようやく返事をする。聡はひさしぶりに将の生の声を聞いた。

「高2、だったら無免許、だね」

一一しまった。

聡は反射的に秋月の上着を引っ張った。

「見逃してあげて」

「ああ、いや別に目くじらたてようってわけじゃ。ただスゴイなと思っただけ。俺らも高校生から結構車乗り回してたしな」

秋月が柔らかい目を聡に向けるのを将は見た。

「ところで、いつまで……今日はどこに泊まるの？」

聡は主に井口に訊いた。

井口は将、大悟と顔を見合わせた。

「センセイんちに泊めてもらおうと思ってたんだけど……」

あいにく今日は父の昔の教え子６人が泊まっている。新たに将たちを泊める余裕は、聡の家にはもはや、ない。

「今日は……」

「予備室でよかったらだけど、今日はうちに泊まれば」

察した秋月が、申し出てくれた。

「空いてるの？」

聡がすまなそうに秋月に訊く。

「予備室だったらね。改装してない古い部屋だけど」

「ホントにごめんなさい」

聡は秋月に頭を下げた。

「いいって。……車、ナビついてる？じゃ、たぶんうちの宿、登録されてるから」

そういって、秋月は携帯で綾に電話を掛けて部屋の準備をさせる。

その間、聡は将をもう一度見た。そのとき将もちょうど聡を見ていたのか、目が合う。

何て声をかけていいのかわからない。

まして秋月や井口の前だ。

「ずーっと、全部、鷹枝くんが運転したの？」

「……うん」

将も秋月を意識しているのか、その答え方は教師に対するものといって遜色なかった。

「……明日だったら、大丈夫だと思うから。明日もいるんでしょ？」

聡はさりげなく、将へ『明日はうちへ来て』という意味を込めて、瞳を見つめた。

将も聡の目を見つめてうなづいた。

宿へと走り去るミニを見送って、川沿いの道には再び聡と秋月だけが残された。

「びっくりしたぁ」

聡はなるべく明るくおどけた。

「あの、運転してたっていう茶髪のコだろ。聡の……って」

秋月はいたずらっぽい顔で言った。

「すぐわかったよ。最初から最後までずーっと聡のほうを見てたから」

聡はまた顔が熱くなるのを感じて、声に出さずにうなづいた。

「なんかボロ……」

案内係が消えるなり井口が呟く。

秋月の宿は、最近デザイナーを入れて改装したばかりのモダンな宿だが、６畳の予備室は改装されずにそのままだった。

うぐいす色の砂壁が蛍光灯でぶっきらぼうに照らされ、テレビは一番小さい１４型だ。

桜の無垢材を用いた床や壁に間接照明が美しい陰影をつくる、いかにもスタイリッシュなロビーラウンジや廊下を通ってきた将ら一行には、改装していない予備室は、よりみすぼらしく見えた。

畳はささくれてこそないものの、なんだか将は大悟のアパートを思い出した。

ちなみに予備室とはかつて団体客をとっていた頃の名残で、添乗員やバス運転手が泊まるための部屋だ。

それでも、すでにフトンを敷いておいてくれたので、運転疲れも激しい将は倒れこんだ。

フトンだけは糊の利いたシーツがかけられた上等なものだった。

「なあ、将、ここの秋月ってオッサン、アキラセンセと単なる同級生かな」

井口が倒れた将の腰をべし、と叩きながら言った。

「二人っきりで歩いてたしなあ」

大悟も同意する。

「さー。知ったこっちゃねー」

と将は掛け布団を抱きしめて、着替えもせずにもぐりこむ。

そこへコツコツとドアを叩く音。

「失礼します」

現れたのは若女将の綾……といってもカジュアルな格好だ。

「すいません、浴衣をお持ちしました。それと、着替えをお持ちじゃない、と伺いましたが、お洗濯しておきましょうか？」

実はもう大晦日から3日間着たきりである。将たちは、ありがたい申し出を受けることにした。

とりあえず、パンツだけは途中のコンビニで買ってある。

その後ろから、聡を送ってきた秋月が顔を出した。

「温泉も今だったら誰も入っていないぜ。あとで、バーのほうに来い。飲ませてやるから」

「おまえら、行ってこいよ。俺、激ネム……」

将は井口と大悟を促して再び横になった。

「そっか。聡の昔の写真でも見せてやろうかと思ってたんだが」

そう聞いて、将はガバと起き上がる。

最近配湯されるようになったという温泉に浸かり、浴衣に着替えた3人は、バーへ行った。

ここも改装されて、モダンな感じのスペースになっている。

暗めの中にある桜の一枚板のカウンターに、懐石盆をイメージしたスポットが各席ごとに丸くあたっている。

「シッブイな」

タオルをバンダナのように頭に巻きつけた井口が感嘆の声を上げる。

といっても、カウンターにバーテンダーもいないし、背後には座り心地のよさそうなソファー席と共に最新のマッサージチェアなどが置かれ、湯あがりの寛ぎスペースといったところだ。

30時間以上の運転でバリバリにこわばった背中をマッサージチェアに預けると堪えられない。

将はマッサージチェアの振動に体を預けながらまたうとうとし始めた。

しばらくして秋月がアルバムを持って現れたとき、将はマッサージチェアの上でぐうぐう眠っていた。

「将、将ってば」

大悟の呼びかけにも反応しないほど熟睡している。

「焼酎とか飲む？」

秋月は、秘蔵だという、奄美の黒糖焼酎をカウンターに座った井口と大悟の二人に見せた。

「飲みます、飲みます」

はしゃぐ二人に秋月は奮発して、『南極の氷』でオンザロックにしてくれた。

しかし、１７才に４５度の焼酎のオンザロックは少々キツかった。

二人とも『おおお』と声をあげた。

「バカだなあ。ロックなんてそんなに一気に飲むもんじゃないぜえ」

秋月は苦笑しながら、オンザロックに水を足した。

「でさ。秋月サンは、アキラセンセイの何なんすか」

井口が得意の単刀直入をやった。

「何、突然。……普通に元クラスメートだけど」

秋月はツマミを用意しながら笑った。

「マジっすか？」

「マジっすよ」

秋月はおどけて井口の口調を真似しながら自分もオンザロックをたしなむように口にする。

「元カレとかじゃなくて？」

「元カレだったとしても、今は関係ないだろ」

秋月はそう言った後で疑惑を晴らすために

「残念ながら元カレじゃないけどサ」

と付け加えた。

「ところで、あのコ、聡の何」

秋月はマッサージチェアの上でぐうぐう寝ている将を指差して井口に訊いた。

「え。彼氏、だと思う」

井口はタオルの上から頭を掻いて答えた。

「やっぱり？」

「たぶん……？」

井口の口調が若干自信なさげになった。

「おい、アイツ、起こしてこいよ」

秋月は大悟に命じた。大悟は素直にカウンターから立ち上がると、将のところへ行き、体を揺さぶった。

「おい、将、起きろよ」

「んー」

熟睡している将はなかなか起きない。

「アキラセンセイのアルバム見ねえの？」

「見る！」

聡の名前がてきめんに効くのを見て、秋月は可笑しくなった。

79◆1300キロを越えて3

まず最初は、集合写真だ。

「これが聡で、これが俺。1年のとき学級委員だったんだ」

一番前列で教師の両側に二人はいた。まだ幼さが残る顔だ。

「あんまり今と変わんないじゃん」と大悟。

「おっさん白髪増えたけどね」

とよけいな口を叩く井口のおでこを秋月が『コラ』とこづく。

「おおっ、これ運動会？」

ブルマー姿の聡と秋月のツーショットに思わず皆の目が集まる。

「これは、1年のクラスマッチかな」

「……昔はそんなに巨乳じゃなかったんだな」

「どこ見てるんだよッ！」

こんどは大悟が井口をこづく。

たしかに、足を付け根から剥き出しにしたブルマー姿は清楚な感じだ。

ぴったりくっつくわけでもなく、少しだけ間をあけて立つ秋月との関係は、将にとって安心できるものだとすぐわかった。

「今は女子も短パンなんだろ」

「てかウチはみんな夏でもジャージ着てるけどー」

秋月と井口、大悟のやりとりをよそに将は食い入るように昔の聡を目で追った。

自分と同じ年頃の聡。

仲良しだったという秋月だけあり、聡が写っている写真は多い。

遠足、クラスマッチ、キャンプ、運動会など行事ごとに写真が残っている。

みんなで行ったという海水浴では、目隠しをしてスイカ割りの棒を振り上げているパレオを巻いたビキニ姿まであった。

が、細身の体はまだ発育途中らしくすがすがしい線をつくっていた。

この頃はいずれの写真も、すこしふっくらとした顔にくったくのない明るい笑顔が特徴的だった。

制服も短くしすぎず、田舎の進学校に通う、健全な女子高校生がそこにいた。

将とはあまりにかけ離れていた。

もし目の前にこの聡がいて、果たして好きになっただろうか。

いや、自分は好きになったとして、聡の側は、おそらく将のことなど歯牙にもかけないだろう。

アルバムをめくっていく。

「これ何？」

将が指差した一枚の写真には派手な、たぶんパンクバンドが映っていた。

髪を立て、素顔がわからないほどの化粧をほどこした女性ヴォーカルが中央に映っている。

「聡だよ。２年のときの文化祭かな」

「えええええ！」

一同、宿中に響くほどの大声で驚愕した。秋月がさすがに「しぃ！」と指をたてる。

ＮＡＮＡもびっくりといういでたちである。

「センセーこんなのやってたんだー！」

「すっげー」

井口も大悟も目をみはって写真を見直した。

「このときは、このバンドのヴォーカルの子が急に盲腸になっちゃって、聡が代打で出たんだ。

ほら、聡、帰国子女で英語できるだろ。英語の歌を3曲だけ歌ってさぁ」

「すっげー……」

将は、聡のパンク姿を見つめた。

破けまくって、足をまるで覆っていないジーンズに、これまた破けていることも関係なさそうな網のタンクトップからは黒いブラジャーが見えている。

ジャラジャラとつけたクロスなどのアクセサリーは重そうで、髪は根元を高く立てて。

黒い口紅に黒々とアイラインを入れた目は、強く観客を睨みつけている。

『照れ』とか、『あがり』がまるでなさそうな、堂々たる迫力のステージが聞こえるようだった。

「でさ、このときだけのつもりだったらしいけど、結構人気がでちゃって、何回かライブでヴォーカルやってたよ。……でこれが、聡の元カレ」

聡の後ろでベースを弾いている男を、秋月は指差した。

ヒュー、と井口が口笛を吹く。

下をむいて演奏に集中しているこの写真ではよくわからない。

将は卒業アルバムを手に取り顔写真を探した。秋月がそれに気付いて、該当ページを開いた。

「この人だよ」

将は目を近づけて、東というその男の写真にガンを飛ばした。悔しいけどイケメンだ。

「センセとこの東クン、どんくらい付き合ってたの？」

将の代わりに井口が訊いてくれた。

「高2の夏から卒業まで、かな」

「へーそう、じゃセンセ食われたかな」

遠慮もない井口だが、秋月は薄く笑ってタバコに火を点けると

「たぶんな」

煙と共にと言い放った。淡々としたようすだ。

将はまた、文化祭のところまで戻った。その後、聡の写真は激減している。特に秋月との2ショットは皆無になってしまった。

修学旅行の電車の中らしき写真など、大勢で写っているものばかりだ。

そして、そこに映る聡の横には必ず、あの東がいた。
頭をお互いのほうへ傾けたり、大胆に肩を組んだものまであった。
1年のときと違って表情が大人っぽい。
将は、聡をこんなふうに成長させた、写真の中の東に激しい嫉妬が湧き起こるのを感じた。
「秋月サン、この東って人にアキラ先生を取られたの？」
大悟が鋭い質問をした。皆に倣って聡のことを『先生』と呼んでいる。
「……バレた？最近のコは鋭いなあ……。ま、昔の話だけどね」
秋月は煙を吐きながら目を細めて笑った。
食い入るように写真を見ている将に秋月が
「鷹枝くん、だっけ。ちょっと東に似てるよ」
「え」
将は顔をあげて秋月を見あげた。そして訊いてみる。
「アキラ、いや先生は、この人とその後……？」
「さあ。大学入ったら自然消滅したって聞いたけど」

秋月は煙草の煙をひと吐きすると、煙草を灰皿に押し付けた。
将は、なんだか嫌な気がして薄まった焼酎を一気に飲んだ。
「ぶっちゃけ、聡が好き？」
「ゲホ！」
突然秋月に単刀直入されて、将は激しくむせた。
「ごめん、ごめん」
秋月は笑いながら水を差し出した。
将の咳がおさまるのを待って、秋月は静かに言った。
「正直、俺、鷹枝くん、若すぎると思うけど……。でも聡が好きだっていうんだからいいと思うよ」
将は驚いた。
「そんなこと、アキラがいったの？」
「うん。ついさっき。……ちょっと酔ってたからね」
秋月は2本目の煙草に火を点けると、将のグラスに焼酎を注いだ。
それを将は一気に煽った。腹の底が、心と同じように熱くなった将は立ち上がった。

「俺、行ってくる！」

「どこに」

井口が将を見上げる。

「アキラんち」

「もう１２時になるぜえ」

大悟も暗に迷惑だぜ、という。

秋月だけがくわえ煙草のまま、メモに何かを書いて将に渡した。

「ここが聡の住所。聡の部屋はたぶん玄関に向かって右横すぐだから。飲酒運転気をつけろよ」

「サンキュっ！秋月さん！」

将は浴衣のまま、宿を飛び出すとミニに乗り込んだ。

いつのまにか上弦の月が空をりんどうのような色に明るく照らしていた。

聡の家は、古い民家がこみ入った小さな通りにあった。

川というよりは溝といったほうがいい流れが静かな夜にチョロチョロと響く。

将は静かにミニを路上に止めると、溝に掛かるゆかしい石橋を渡り、利休色に変じたこれまた古式ゆかしい木の門を押した。

それは無用心にもたやすく開いたが、『ギギー……』という音が途中で大きく鳴り、将は飛び上がりそうになった。

聡は、ちょうどいい具合に酒が入っているにもかかわらず眠れずにいた。

将が、自分に逢いに、はるばる東京から萩までやって来た。

そのことだけで胸がいっぱいで、体中の血液が駆けめぐるのが止まらない。

――どうしよう。

もう聡の気持ちはセーブできない。この押さえられない思いのままに、将を選んでしまってもいいのだろうか。

聡は久しぶりの自室のベッドで寝返りを何度も打った。

体が火照っているのか、今日は木造の古民家の冷え込みが気にならない。

と。門が開く、ギギー……という音がした。

今日最後に帰ったのは聡である。

――しまった。門を閉め忘れたんだ。

酔っていたせいか、門の鍵を閉めないでそのまま家に入ってしまった。

――犬でも入ってきたのかしら。

聡はベッドから起き上がって、カーテンを開けると、ガラス越しに門のほうを見ようとした。

そのガラスのすぐ外、聡の顔の目の前に男がいた。泥棒？痴漢？

（キャ）

すんでのところで悲鳴が出るところだったが、その前に、聡の目は月明かりの中に将の顔を判別することができた。

聡はあわてて鍵を開けてサッシをからりと開けた。古民家だが、寝室だけサッシに変えているのだ。

冷え込んだ冬の夜の空気と共に、浴衣姿の将の上半身がなだれ込むように飛び込んできた。

80◆1300キロを越えて4

将の顔はちょうど聡の顔の前にあった。縁のすぐ下にある、石の上に立っているらしい。

一瞬だけ見つめあって、聡は将に体重を預けるように体を投げ出した。

将は聡の重みを受け止めると、ためらわず聡の唇に自らの唇を重ねた。

冬の夜半のしん、と尖った空気の中で、温かく柔らかいお互いの唇。

聡は、将を部屋に上げて窓を閉めることを思いつかず、

将は草履を脱いで聡の部屋に上がることを忘れて、しばらくそのまま抱き合っていた。

そんな二人を上弦の月が冷たく照らす。

流れるせせらぎさえも今の二人にはまったく感じなかった。

お互いの腕をお互いの体に絡みつけたぬくもりで寒さも感じない…

…はずだったが、将がくしゃみをして聡は我に返った。

将の姿を見ると、丹前も羽織も身につけず浴衣一枚だった。足元は裸足に草履だけ。

「大変。そんな格好で風邪引いちゃう。……入って」

将は草履を石の上に脱いで、縁側から聡の部屋に入った。

板張りの縁側は、地面からの底冷えで氷のようだったが、長いこと裸足でいた将の足はすでに感覚がない。

月明かりの届かない部屋はお互いの顔がようやく判別できるほどの暗さだった。

そこへゴツン、という鈍い音に続いて

「いて！」

と将の声。

背の高い将は、古い家の障子の鴨居におでこをぶつけたのだ。

「大丈夫？」

将はおでこを押さえて苦笑いをした。聡も吹き出す。二人小さく笑いあった。

窓を開け放して抱き合っていた時間は思いのほか長かったらしく、部屋はすっかり冬の空気で冷え切っていた。

パジャマ姿の聡は、ベッドサイドにあるスタンドをつけると、同じくベッド近くに置いた部屋のヒーターを入れた。

二人はヒーターに向かって並んで腰を下ろした。吐く息が室内なのにしばらく白かった。

将はあたりを見回した。

6畳の和室にカーペットを敷いて洋室状に利用している。部屋にはベッドと勉強机、本棚。

杉板張りの天井は、大磯の『ヒージー』の家を思わせる。

たぶん、あのアルバムの中の聡が暮らしていた部屋のままなのだろう。

「寒くない？　お茶か何か淹れて来ようか」

将はだまって、ゆっくりと首を振った。聡の顔から目をそらさない。

と、プッと吹き出す。

「な、何？」

「文化祭のパンク姿、見た」

将は笑いながら答える。見る間に聡の顔が赤くなった。

「……ヤダー、もう信じられなーい！秋月ったら、何の写真見せてるんだか！」

「でもカッコよかったぜ」

「んもー。あれは、私の人生の汚点なんだからー。忘れて！ネ？」

聡は将の前で手をあわせた。

「ううん。忘れない」

「ええー、ヤダ」

将は静かに聡の顔を見つめて微笑んだ。

「俺と同い年の、貴重なアキラ画像だもん。心に焼き付けた」

そういうと、将はそっと聡の顔を両手で包むようにした。

「でも、今のアキラが一番好きだ」

「……将」

頬を包む手が冷え切って冷たい。

「アキラ。……本当にこないだはごめん」

今度は聡が首を振る番だ。

「こっちこそごめん。優柔不断な態度で。だけど……」

聡は一瞬下を向いたが、将の目を見つめて言った。

スタンドのオレンジの光を表面に映しながらも明るい金茶色に透けた瞳に吸い込まれそうになる。

「私が好きなのは将、一人だから」

ここまで聞くと、将は聡を抱きしめずにはいられない。

「いろいろ……。まだいろいろ問題があるんだけど、きっと乗り越えるから」

将の熱い体温に包まれた聡は、将の肩に腕をからみつけながらあえぐように宣言する。

「アキラ……」

もうこれ以上の言葉はいらなかった。将は聡の自分に対する思いのすべてを受け取った。

将はいったん聡の体を離すと、その柔らかい唇に再び自分の唇を押し当てた。

力が抜けていくような聡の体をしっかりと支えるように抱きしめながら唇をあわせた。

何度も何度も。

将の舌は聡の口の中のすべてを、そして聡の舌は将の口の中のすべてを愛撫した。

温かくぬるぬるとした唾液が混じりあう。

柔らかくざらざらした舌、つるりとした歯、そして歯茎……そんなところなのに、舌で撫でられるだけで、動悸が昂まるような快感を二人とも共有していた。

お互いの口を何度舌が絡み合いながら往復しただろうか。

聡は気が付くと将の膝の上で抱えられるような体勢で将を見上げていた。

腕だけを将の首にからめるように回す。また、いっそう将は逞しく成長したように思う。

最後の1回がお互いの唇から唾液の糸をひいて離れたとき、聡はふわりと宙に浮いた。

突然だったので思わず将の首にしがみつく。

将は聡を横抱きにして抱えあげて立ち上がると、彼女をベッドに横たえるようにそっと下ろす。

横たわった聡と将で目が合った。

将は見開いた目で何かを確かめたいような顔だ。聡は何も言わずにうなづいた。

将は聡がうなづくのを見ると、帯を解いて自らの浴衣を脱ぎ始めた。

聡は目を開けてその一部始終を見ていた。

何度か目にしているが、長身に流れるような筋肉がバランスよくついた美しい肉体が浴衣の下から現れる。

トランクス1枚だけになると、聡の華奢な肩の外側に肘をついた体

勢でのしかかってきた。

ギシッと鈍い音がする。ベッドか、家か、どっちがきしんだのかわからないが。

聡の目の上の視界は、ほとんど将の裸の上半身に覆われた。

スタンドだけの灯りの中、十代の若者らしい筋肉が、しっとりとした光沢を放っているのがわかる。

これから将が何をしようとしているのかぐらいは、わかる。

聡の意識のどこかでまだ、阻止しなくては、まだ自分と将は教師と生徒だ、という理性が残っていないわけではない。が、聡はもう抗えなかった。

将と行き着くところまで行ってみたら。彼は聡を何処まで連れて行ってくれるのか。

自分に逢いに、自分に愛を告げるために、はるばる１０００キロ以上の距離をほぼ寝ずに走破した将に、聡はすべてを与えてもいいと決心した。

将は、そのままの体制で、聡の名前を呼ぶと、聡の首筋に唇を這わせながら、抱きしめてきた。

聡は衣服に覆われない、生（き）のままの将の熱い体温と体臭に包まれた。もう何も考えられない。

腿のあたりには、すでに固くなった将のそれがあたっている。

それは聡の体をよけいに熱くした。

もはや、すべての理性は溶けて、将の『それ』を迎え入れる器官から液体となって流れ出るのがわかる。

将は口づけしながら、聡のパジャマのボタンをはずそうとしているらしい。

しかし、なかなか巧くいかないらしく、とうとう、いったん上半身を離すと、慎重かつ丁寧に聡のパジャマのボタンをはずしはじめた。

パジャマの下はブラジャーをしていない胸がときめいている。

聡はされるがままに任せながら、『作業』をする将の顔を下から見上げた。

テストでも解いているような大真面目な顔に、聡は思わず吹きだしそうになるが、こらえた。

すべてのボタンをはずすと、将はいったん聡を抱き起こした。

パジャマの袖を脱がせるつもりだろう。聡は、自らパジャマの前を開くと、肩を開いてそれを脱ぎ捨ててしまった。

聡の、何も身につけない豊かな上半身はオレンジ色の灯の下、将の目の前にさらけだされた。

聡は、掛け布団を開けた中に再び横たわると、腕をのばしてスタンドの灯りを一段暗くした。

将は、ベッドに両腕をついて、聡のそれをしばらく放心したように眺めていた。あんまり見られて聡はとうとう

「……はずかしい」

と小さくつぶやいて、胸の上に自分の両腕を重ねた。将は

「アキラ、愛してる」

と吐息のように囁きながら、もう一度聡に覆い被さると、何度目だか、もはや二人とも数えていない口づけをした。

剥き出しになったお互いの上半身の、熱い肌と肌を密着させて抱き合う。

くっついた部分から将の血潮が流れ込んで来るような、そんな感覚に聡は酔った。

81◆後朝（きぬぎぬ）

カラスの鳴き声で聡の意識は覚醒した。

ヒーターが吐息のような音をときおり出して稼動しているのが聞こえる。

胸の上が重くて温かい。

ゆっくりとまぶたをあける。障子がコバルトがかった藤色になっているのが見えた。

もう夜明けらしい。

聡の顎のすぐ下に黒い山のように……将の頭があった。

将の髪を撫でたまま聡は眠っていたらしい。

将はうつ伏せで聡の左の乳房を枕にして、右の乳房の上に掌を乗せて、そのままぐっすりと眠っていた。

少し眉根を寄せたような寝顔だ。

――将ってば。

聡は将の髪の中に埋めた手をゆっくりと動かした。

昨夜。

激しい抱擁。そして裸の上半身にくまなくほどこされる愛撫と口づけ。

聡は自分の本能と快楽の濁流の中で流木につかまるように意識をかろうじて保っていた。

しかし……ふと正気に戻る。

いつのまにか愛撫は止んで、将は聡の裸の胸を愛撫している体勢のまま眠ってしまっていた。

すうすうと深い寝息が、聡の皮膚に生暖かくあたっている。

呼びかけても、ゆすっても起きない。

こんな淫らな体勢でいるにもかかわらず聡は、なんだか可笑しくなった。

そっと将を動かさないように、腕を伸ばしてスタンドを消すと、掛け布団を将の肩まで引っ張りあげて、自分もそのまま目を閉じたのだった。

だから聡はパジャマのズボンを着たままだし、将も最後の一枚を身につけたままだ。

結局、最後の一線は越えなかった……。

そのことに、聡は今ほっとしている。

昨日は少しお酒も入っていたし、何よりも１０００キロ以上も運転してはるばる自分に逢いにきた将の思いに感動して、それに応えたいと思っていた。

が、やはり、まだ担任教師と生徒なのだ。

もちろん、こんな風に上半身だけといえど裸で同衾すること自体、問題だと思うが、セックスはやはり特別だ。

それは、やはり二人が教室で出会わない関係になってからのほうがいいと思う。

冷静になった聡に、『けじめ』が線をひく。

それにしても将はよく寝ている。

右の頬を聡の左の乳房に押し当てるかのようにして、寝息をすうすうと立てている。無防備な寝顔だ。

こうしていると、まるで大きな乳飲み児のようだ。いとしい将。

これが母性本能なんだろうか、と聡はぼんやりと思う。

井口によると、元旦の朝に出発してからずっと車に乗りっぱなしだったという。

つまり、将はずっと運転しっぱなしだったということだ。

よほど疲れていたのだろう。

そのまま寝顔を見ていたい気もしたが、もうまもなく明るくなる。

誰かが起きてくるかもしれない。

「……将、将、起きて」

聡は意を決すると、胸の上の将に囁きかける。少し強めに髪をくしゃくしゃとする。

「ん……。アキラ……？」

いったんは顔を起こして、半開きの目でこちらを見るが、寝ぼけていただけなのか、顔を胸の上にまた置いてしまう。

「将ってば」

次の瞬間、将は目を見開いた。顔にあたる感触の異様な柔らかさで正気に戻ったらしい。

将はパッと顔を起こすと聡の顔と裸の乳房を見比べた。

「……うわ、アキラ？」

パニックになったようにあわてて起き上がった。

裸の自分にも動揺しているようだ。

「しっ、静かに」

聡は身を起こすと掛け布団を自分の胸のところにずりあげて、口元に人差し指をたてる。

あわてふためく将が可笑しくて思わず笑みがこぼれる。

「おはよ」

将もつられて困り顔に笑顔をつくり、

「……はよ。あのさ、昨日、俺たち……とうとう？」

と訊いて来た。あせっているようすだと覚えていないらしい。

「してないよ。将、途中で寝ちゃったんだよ」

「なんだー、そうかー」

とホッとしたような残念なような表情で一瞬安堵し、

「ごめん」

と付け加えた。

トランクス一丁で頭をかきながら、将は夕べを一生懸命思い出した。

とにかくすごく興奮していたことは覚えている。

やる気まんまんだった。なのになんで？

すべすべと吸い付くようでいて、搗き立ての餅のように温かく柔らかな聡の胸の感触は覚えている。

豊かなそれは将の掌に余るほどだったはずだ。

胸の先端を吸ったときに聡が漏らしたかすかなあえぎ声、柔らかかったそれが固くなった感触も覚えている。

ふだんの低めの声とぜんぜん違う聡の声に将はよけいに興奮したはずだったのだが……。

行為を繰り返す途中でだんだん安心したのか、眠気が勝ってきた。

何せ、大晦日から昨日までの3日間で、寝たのは姫路で取った仮眠の3時間だけである。

おまけに聡の部屋に来る前に焼酎を2杯も飲んだ。

もっと乱れる聡を見ていたいのに瞼が重くて開けられない。

……それ以降の記憶がぷっつりと途絶えている。将は圧倒的な眠気の前に倒れたのだった。

それにしても、女と、しかも一番大好きな聡と初めてエッチ、という最中に寝てしまうなんて最低だ。

将は自分の失態に頭を抱えたくなった。

「ううん、逆によかったかも……しなくて」

聡がフォローしてくれるのも情けない。

将は、情けなさを隠すように聡を布団ごと抱き寄せた。裸の肩は昨日の記憶どおりのなめらかさだ。

動揺が収まってくると、聡の剥き出しの肩ごしに見下ろせる、真っ白な背中を見て、むくむくとヨクボウが再び頭をもたげてきた。

将は聡に朝のキスをした。軽く唇をあわせて

「……続き、しようよ」

聡の耳元で囁くように提案する。

しかし聡は

「ダメ。もう誰が起きてくるかわかんないから」

教師の聡に戻ってしまっていた。

そこには、昨日のように、危うい声を漏らしていた聡はみじんもない。

昨日の、あのトロリとした夜の時間は夢だったかのようだ。

「じゃあさ、せめてキスマーク付けさせて」

将は聡を再びベッドに押し倒すと、隙をついて胸を隠す掛け布団を取ってしまった。

「ダメー。もうダメだってば」

聡は両手を交差させて自分の胸を守ったが、ボリュームがあるのでこぼれている部分も多い。

「いいじゃん」

将は、聡の胸の谷間の横の柔らかい皮膚を力いっぱい吸った。

「いったーいっ！」

あまりの痛さに聡が悲鳴をあげる。

スパッという音をたてて将の唇が離れるとそこには赤い内出血、つまり鮮やかなキスマークが出来ていた。

「俺の、っていう印」

将はいたずらっぽい笑顔でベッドから降りると、脱ぎ捨てた浴衣を着た。

「もう」

といいながらも、聡は背を向けてパジャマを着ながら、胸の赤くなった皮膚をいとおしそうになでた。

将が吸ったキスマーク。

将の女である証。

「じゃあ、あとでな」

サッシの窓を開けると、厳しい朝の冷気が、二人のとろりとした夜の余韻から、完全に現実に戻した。

コバルトの空の東が白くなっている。

「寒っ！」

浴衣一枚の将は震え上がった。

石の上に置きっぱなしにしていた草履は氷のように冷たくなっていた。

「ちょっと待って」

聡は押入れを改造したクロゼットからマフラーを持ってくると、将の浴衣の襟元に巻いた。

「これだけでもずいぶん違うでしょ。あとでうちに来た時に返して」

「ありがと。じゃ」

将は忘れな草色に冷たく染まった庭を、門へと歩き始めた。

「待って」

と行こうとする将を聡はなおも引き止める。

「将、わざわざ萩まで逢いに来てくれてありがとう」

「アキラ……」

将はもう一度縁側に戻ってくると、聡を抱き寄せ口づけをする。今度は深い口づけ。

シンと尖った朝の冷気のなかでお互いの唇と舌、唾液だけが温かく、離れがたい。

そのとき、家の奥で音がした。とうとう誰かが起きだしたらしい。

「行って」

聡は唇を離すと将を促した。

将は片手をあげて微笑むと、門を開ける。古い門が再びギイイ……ときしんだ。

82◆お年玉

将が宿につくのとほぼ同時に陽が差してきた。今日は快晴らしい。

「よう、朝帰り」

帳場で雑用をしていた秋月が声をかけた。

何もかも見透かしたように目が笑っている。

『いや、そこまでやってないんだけど』と将は心の中で弁解しながら、とりあえず照れるポーズをしてみる。

「朝風呂でも浴びて、もう1回寝ろ。ロクに寝てないんだろ」

と気を遣ってくれる。

将は、言われたとおりに朝風呂をもらい、部屋に戻った。部屋ではまだ井口と大悟がイビキをかいて寝ていた。

朝風呂でけだるくなった将は、またすんなりと眠りに落ちていった。

10時すぎに聡は自家用車で将たちを迎えにいった。

取り回しのよい1300ccの国産車は母のものだが、オートマチックなので聡でもラクに運転できる。ミニよりは内部も広い。

いくらなんでも、教師の親に教え子が無免許で東京から萩まで運転してやってきた、とは言えない。

秋月の宿にローバーミニは隠しておいて、口裏をあわせておく必要があった。

「おー、聡。あいつら今メシ食ってるぜ」

「朝ご飯なんか食べさせなくてもいいのにぃー。ごめんね」

といいながら、聡は財布を取り出す。将たちの宿泊費を払うためだ。

「いいって。どうせボロい部屋だし」

遠慮する秋月が心持ちニヤニヤしている気がする。

そんな風に感じるのは自分が後ろめたいからだ、と聡は自分に言い聞かせる。

まもなく将ら3人が、洗ってもらった服を着て現れた。

今朝つけられた胸のキスマークが一瞬熱くなる。しかし何くわぬ顔をして、

「よく寝れた？温泉は入ったの？」

などたわいもないことを話しかけながら、宿をあとにした。

せっかく山口まで来たということで、秋吉台のカルスト台地に秋芳

洞などを観光がてらドライブする。

冬枯れたカルスト台地はベストシーズンとはいえなかったが、天気は快晴で、

ラクダ色になったなだらかな丘陵地に羊のように石灰岩が群れる風景は、東京からきた高校生にはそこそこウケた。

昼食は長門で活きたイカを聡がおごり、午後には萩に戻る。

今日は、客間の1つに将たちが泊まると親に言ってある。

『ギイイ……』ときしむ門をくぐり、古い地紋ガラスがはめこまれた引き戸を開けて聡は

「ただいまー」

と奥に向かって大きい声で叫ぶ。

「すっげー家だな」と大悟がキョロキョロと見回す。

「なんか武家屋敷を借りてるらしい」

答えながら将は門の音に、昨夜の聡との情事を思い出し、一人でこっそり照れた。

「あら、いらっしゃい」

聡の母・幸代が奥から出てくる。おそらく50代だろうに、若い生徒に囲まれているせいか若々しい。聡に口元がよく似ている、と将

は思った。

「こんちわー」３人は声を揃えてぺこっと頭を下げた。

「私の教え子の井口くん、鷹枝くん、とその友達の島くん」

「あらあらようこそいらっしゃいました。東京のコは大きいねえ」

と目を見張る。一番小柄な大悟でも１７５ある。中学校の教師の幸代には大男の集団に見えた。

「さあ、あがって。お客が他にもいるけど仲良くしてね」

と、それでもこなれた笑顔で客間へ案内してくれた。

そういわれれば、居間のほうからキャアキャアと声が聞こえる。どうやら幸代の教え子たちがまだいるらしい。

「寒いから居間のこたつのほうへどうぞ。お茶を用意しますから」

「お忙しいところ恐れ入ります」

将は客間に着くと、いったん膝をついて深々とお辞儀をした。

「あら……丁寧に」

その折り目正しさに幸代のほうが面食らう。

それを見て、聡はすっかり忘れていたが、将が『いいところのボンボン』であることを思い出した。

客間の大き目の掘りごたつには素朴な風貌の、いかにも地元のコらしい中学生女子が４人、おしゃべりに興じていた。

そこへぬっと現れた大男３人にシーンとなる。しかも『イケメン含む』だ。

「あらあら。どうしちゃったのかな。こちらは娘の聡の教え子さんたち。東京の高校２年生なのよね」

お茶とお菓子を持ってきた幸代が笑いながら仲介をする。

やっとポツポツと会話が始まったかと思うとすぐに若いもの同士で話が盛り上がり始めた。

父は昨夜の６人を送ったついでに買い物にいったらしい。

聡は座が盛り上がるのを見届けて席をはずすとミカンを運ぶ幸代に

「お母さん、うちのコたち、着替えもなんにも持ってきてないっていうから、秋月ンちから浴衣借りてくる。パジャマ余分ないでしょ」

と耳打ちした。

中学生との会話のほうはうわの空で、席をはずす聡を目で追っていた将は、

「将、」

と大悟に呼ばれて我に帰った。

「え。何？」

「だからぁ。鷹枝さんはカノジョとかいるんですかぁ？」

中学女子からの質問だった。

「あ、うん。……うん、いるよ」

そのとき、将ははっきりと聡を思い浮かべていた。

将の返事に中学女子の「やっぱりぃー」という黄色い声の応酬。

将は『わりぃ』と大悟に断るとコタツを立った。

大悟は察して「しっかりな」と小声で囁いた。

将が玄関を出るとちょうど聡が車庫にいるところだった。

葉を落とした柿の木から午後の陽射しが斜めに木漏れ日になって聡の体に落ちている。

「アキラ……じゃない、センセイ」

いくらなんでも聡の実家で呼び捨てはマズイだろう、と呼びなおす。

聡は将の姿を見て、胸の痕跡がぎゅっと主張を始めるのを感じた。

「どこいくの」

「秋月んち。あんた達の浴衣やらタオルを借りに。あとお金も払わなくちゃ」

と何気なく答える。

「ああ、俺が払うよ」

「いいって。お年玉がわりだもん」

「でも一緒に行く」

聡は少し頬を染めてうなづいた。

秋月は留守だったが、さんざん遠慮する綾に『これは、クリーニング代です』と無理やり2万を渡す。

用事が済んで、夕食までまだ時間がありそうなので、二人っきりのドライブを楽しむことにする。

今の時期は静かな菊が浜を二人で歩くのもいいと思ったが、知っている人に見られると少し言い訳がめんどくさそうだ。

聡は車を北に向けて走らせる。まもなく左手に海岸線が平行し始め

た。

晴れた冬の日本海が濃紺の水平線をくっきりと見せている。

「おおー」

助手席の将が左の窓に張り付く。

須佐のあたりの砂浜で車を止めた。

冬の太陽は傾きかけて、あたりをセピアがかった色に変えている。

その中に紺碧の日本海が横たわっている。

「おおー！冬の日本海！」

「寒うーい！」

車から降りるなり、冷たい海風が勢いよく吹きつけ二人の髪をぐちゃぐちゃにする。

風があるせいか波は少し荒く、沖のほうまで白い波頭がうねるのが見える。

ベージュの砂浜に波が容赦なく叩きつけるかのようだ。

それでも二人は砂浜に降りてみる。

「今日、水かけなんかしたら、凍え死んじゃう」

聡が先に言った。将は聡の瞳を見てうなづいた……二人ともちょうど同じ思い出をたどっていたのだ。

二人は波に近いところにある乾いた岩を見つけると腰掛けた。

ちょうどそのとき突風が吹いて、二人とも震え上がった。

晴れているのにこんな風が吹くと凍りつくようだ。

「アキラ、おいで」

将は自分のダウンの前をあけて膝を示した。

胸でキスマークが熱く主張を始める。

聡は少しためらったが、「はやくー」とせかされて、将のジーンズの膝の上に腰掛ける。

将は自分の膝の上に座った聡をそのまま後ろから抱きしめるようにダウンで包み込む。

そして朝借りたマフラーを二人で半分ずつ二人の首に巻きつける。

こうするとお互いのぬくもりでずいぶん温かくなった。

「このまま急に離れたら首がしまっちゃうね」

「じゃ、もっとくっつけよ」

「うん」

聡はさらに腰を引いた。体重を将に預けて寄りかかるようだ。
将は聡の胸のあたりで組む腕の力をそっと強くして二人の体を密着させた。その腕に聡は自分の手を添える。
「重くない？」
「……実は重い。でも聡のお尻だから我慢する」
「……バカ」
しばらく、何もいわない。波の音だけをＢＧＭにお互いのぬくもりを堪能する。
単調な海の風景なのにいっこうに飽きないのはなぜだろう。
ときおり吹き付ける潮風が柔らかい聡の髪で将の頬をなぜる。
将は聡の肩と首に自分の顔を埋める。
温かい将のぬくもりにつつまれて。
温かい聡のぬくもりを抱いて。
――このままずっとこうしていたい。
「……将、これ心臓の音？コトコト聞こえるの」
聡がつぶやいた。寄りかかる温かい背中に規則正しい音が伝わって

いる。

「うん。緊張してるもん。アキラは？」

将は前で組んだ腕をずらして、聡の左胸に掌を乗せる。

ざっくりと編んだニットのパーカーの下に息づくふくよかな弾力を将の手は捕らえた。

「エッチ」

聡が小さく囁く。でも将はその手をどかさない。

「もっとエッチなことしたじゃん」

「ふ……」

聡は小さく笑った。

将は、聡の前で腕を交差させたまま、右の胸もとらえた。

服の上から両のふくらみをゆっくりと動かす。

聡は特に抵抗もせず、だまったまま身を任せている。

将が胸を揺らしはじめたおかげで、潮風も波の音も、寒さも他人事になってしまった。

「すっごいドキドキしてる」

将が聡の心臓の音をとらえたことを耳元で囁く。

囁きと共に漏らされた息で、聡の力は抜けていく反面、体が熱くなっていく。

――だめだ。溺れてしまう。

うねる波の轟音は自分の本能のたてる轟音のようだ。

「……今夜、全部していい？」

将は聡の耳たぶに唇をはわせながら、とうとう訊いた。

聡は将の唾液で湿った耳たぶで潮風を冷たく受け止めていた。吹き付ける風に目を細める。

「……ダメ」

「なんで」

「だって」

聡はマフラーをはずしながら将の膝の上から降りた。

とたんにお互いの体に冷え冷えとした潮風が吹きぬける。

二人寄り添っていたせいか、その前よりずっと寒く感じる。

聡は将に向き直るとゆっくりと諭すように言う。

「私たち、まだ教師と生徒でしょ」

「カンケーないじゃん、そんなの」

立ち上がって聡の肩を掴む将。

斜めの陽射しがあたって、将の顔は彫りが深く大人っぽく見えた。見開いた瞳は明るい茶色に輝いていた。

そのまっすぐなまなざしに耐えられず、聡は思わず目を砂浜に向ける。

「だめよ。だって、……溺れちゃうもん。将と寝たら、たぶん」

「溺れていいよ、一緒に溺れようよ」

と将は聡の体をもう一度抱き寄せる。

まるで溺れる、の言葉に呼応したかのように大きな波がドーンと響きながら打ち寄せた。

冬だけれど白い波の下にはエメラルド色の海水が輝いていた。

塩辛いとは思えない、ソーダ色の波頭がシャーベットを砕いたように崩れる。

聡は将の腕をゆっくりとほどいた。

「だめだよ。教室の中できっと、そういうの出ちゃうもん」

「……」

「だから、将が卒業するまで待ちたいの」

遥か彼方をつがいなのか、二匹の鳥がオレンジの光を受けながら飛んでいくのが見える。

「……アキラ、アキラはそれでいいの？」

将のガラスのような瞳は、これ以上ないほど、せつなげだった。

聡はその瞳に少しとまどったが、まっすぐにうなづいた。

「こんなに好きなのに……まだ1年以上先じゃんよ！」

将は聡を追い越して砂浜をずかずかと歩くと、石を海に向かって力いっぱい投げた。

若い将にとって1年はあまりに遠かった。

「ごめん」

聡はその将の後姿にすがりついた。

その日までの道のりを思って二人立ち尽くす。

砂浜に映る長い影は1つになっているのに、二人はそれに気付かないままだった。

それっきり無言で、二人は車に乗ると、萩への帰路についた。

もうすぐ日が暮れる。

「卒業したら……いいんだよな」

萩の市街地に入ったことを告げる、最初の信号待ちで、将はブスッとつぶやいた。

「卒業したら、セックスできるんだよな」

聡はその直接的な単語に焦ったけれど、意を決して将のほうを見つめると、首を縦に2回振った。

すると将は、『仕方ないや』という顔の中から、にんまりと笑顔を返してきた。

「卒業式が終わったらすぐ、いいんだな」

なんか可笑しくなってきた。聡は

「うん。いいよ」

と澄まして答えると、前を向いた。信号が青になっている。

将はアクセルを踏む聡の横で

「じゃぁ、キスは？していいよね」

と明るく訊いてくる。

「……いいよ？　誰も見てなかったら」

聡は顔を前に向けたまま、瞳を宙に一瞬迷わせて、答えた。

「ダッコは？」

「……誰も見てなかったら」

ちょっと聡の答えが自信なげになってきた。

「おっぱいは？」

聡はぐっと言葉に詰まる。

「ねえ」

ちらっと横目で見た、将は二ヤついている。

「ダメー！」

「ええー！じゃ昨日のは、なんだよぉ」

抗議する将は子供のようで、聡は可笑しくなって、ハンドルを握ったまま吹き出した。

「昨日のは、お年玉！」

「チェー、なんだよー……ま、いいや」

将は、腰を前にずらして車のシートにだらしなく寄りかかると、手を頭の後ろで組んだ。

♪卒業したら～、アキラとセックス～、すりきれるまで～♪

と変な節をつけて歌い始めた。

「バカね」

呆れるあまり、交差点のカーブを少し勢いよく曲がりすぎた聡だった。

「ただいまー」

教師と教え子に戻って玄関の引き戸をあけた二人に奥から母が出迎えた。

「おかえり。聡、お前にお客さんがもう一人いらっしゃったよ」

「え？」

「おかえり」

奥から出てきたのは、博史だった。

83◆64~82話のあらすじ◆

博史の車を降りた聡は、将に電話をかける。

ちょうどそのころ将は、やけになって井口と夜遊びをしているところで、聡からの着信に気づかない。

さらに大酒を飲んだ将は、ヤンキーと派手に喧嘩し、留置場に入れられてしまう。

翌日、留置場を出たところでようやく、聡からの着信に気づく（64話）

将と聡は、お互い声が聞きたいと、連絡をとろうとしているが、タイミングが悪くすれ違ってしまう。

聡は、今年最後の職員会議のあと、将が学校を続ける事を教頭から聞かされほっとする。

また、オリジナル授業も認められ、持ち上がりで来年も担任を続けてほしいと要請される。

一方、将の元へ、かつて将の殺人罪をかぶった親友・島大悟が現れて懐かしがる。

大悟は、正月の間、将の家に置いてほしいと頼み込む（６５話）

将は大悟の頼みを快諾し、バイトに出かける。

聡は職員の忘年会に出席していて、あいかわらず連絡がとりあえない二人。

バイト帰りの路上、だめモトで掛けた将の電話が、やっと聡に通じた（６６話）

電話の中で、聡は博史とは結婚しないと将に明言する。

しかし、肝心なこと（おそらく愛の言葉）を言っているとき、将の背後を電車が通り抜け、将はそれを聞き逃してしまう。

部屋に帰った将は、待っていた大悟と焼肉屋に出かけるが、そこで大悟の今のつらい状況を聞かされ肩身が狭くなる。

謝る将に、大悟は、将のことをまるで恨んでいない、と言う（６７話）

将の１３歳のころの回想。グレ始めや、島大悟との出会い（６８、６９話）

昨夜の忘年会の疲れで寝坊した聡の部屋に、いきなり博史があらわれる。成り行き上、部屋の大掃除をすることになる。

途中、足りないものを買いに聡が出かけている留守中に、聡の携帯が鳴る。

博史は、将からのそれを取ると無言で切って、着信履歴を消す。

さらに『もう電話をかけないでほしい』と聡に成りすまして将にメールを送る（７０話）

聡からのメールを不審に思った将は、聡に直接会おうと出かけるが、そこで博史と仲良く部屋を出てくる聡を目撃してしまう。

（実は、博史の家の夕食に招かれた聡は、それを断れなかっただけなのだが）

その頃、将の留守中に、顔色の悪い瑞樹が将を訪ねてくるが、留守だと知ると立ち去ってしまう。

将は大酒を飲んで酔いつぶれる（７１話）

博史の家から帰った聡は、将に『電話する』とメールを送る。

が、さきほどの偽メールと正反対の内容に将は、聡に不信感を抱いてしまう。

おまけに弁当屋で、博史が『聡の婚約者』として現れたと聞き、将はさらにを呆然とする。

そんな将に、聡からちょうど電話が。聡は実家に帰る飛行機に搭乗する直前に将に電話をかけたのだ。

苛立つ将は聡に冷たくあたる。『なぜ結婚もしない博史とズルズル付き合うんだ』と聡を責めて電話を切ってしまう（７２話）

言い過ぎた、と思い直した将は聡に電話をかけなおすが、そのとき聡はもう飛行機の中だった。

萩に帰った傷心の聡は、駅前で高校時代の友人・初美に出会い、昔

の思い出話に花が咲く。

将を思い出して涙する聡を心配した初美は、『悩みがあったら聞くよ』と優しい。

将のことを思い切って話そうとしたところへ、ちょうど将からメールがある。さっきの言動を謝る内容を見て、聡は救われる

大晦日、将は井口や大悟とクラブのカウントダウンイベントに来ていた。盛り上がる最中も聡のことが頭を離れない（７３～７４話）

イベントを早めに切り上げた３人は初日の出を見に、千葉の海岸までやってくる。

あいにくの曇天で初日の出は拝めず、帰ろうとしたところで、将がクリスマスにからんだヤンキーに声をかけられてしまい、３人はミニに乗り込んで逃げる。

危ないところでなんとかヤンキーをまいた将に、井口は「今から行こうぜ、山口県萩！」と提案する（７５話）

１月２日。ひさしぶりに高校のときの同窓会に顔を出した聡は、高校のときの仲良しで片思いしていた秋月に会う。

秋月は妻を連れてきていた。秋月の妻と話をした聡は、秋月が今幸せなことを知る。

『お前はどうなんだ？いい人はいないのか』と秋月に問われた聡は『好きになっちゃいけない人』を好きになってしまったことを打ち明ける。

酔った聡は、夜道を秋月と歩きながら、好きになっちゃいけない人というのは、実は教え子だ、と告白する。

その夜道で、聡は、東京からはるばる、ミニを運転してきた将と再会する（７６、７７話）

将ら３人は、とりあえず秋月の宿の予備室に泊めてもらうことに。そこで秋月に、聡の高校時代の写真を見せてもらう。

聡の昔の彼に似ていると秋月に言われた将。

さらに『（将は聡には）若すぎると思うけど、聡が好きだというんだからいいと思う』と

秋月のお墨付き（？）をもらった将は、夜更けにもかかわらず聡の家に忍び込む（７８、７９話）

聡の部屋で、とうとう将は聡に『私が好きなのは、将一人』と告白される。

博史とのいろいろはきっと乗り越える、と誓う聡。二人は抱き合い口づけを交わす。

将はそのまま、聡を抱こうとしたが、大晦日からの3日間で3時間しか寝ていないことが災いして、

行為の途中で寝込んでしまう。翌朝、冷静になった聡はそれでよかった、とホッとする（８０、８１話）

聡の迎えで秋月の宿を後にした3人は、周辺を観光したあと、聡の家へ。

用事で出かける聡に将はついていき、二人は日本海が見える砂浜へ短いドライブをし、ひとときを過ごす。

しかし『今夜こそ全部していい？』と訊いた将に聡は、

『卒業するまで、そういう関係にならないほうがいい』と諭す。

まだ1年以上先、という果てしない時間の長さにうなだれる将だったが、帰り道で卒業したらきっと、という約束を交わす。

教師と生徒に戻って何食わぬ顔で戻ってきた二人を聡の家で出迎えたのは博史だった（８２話）

８４◆呉越同舟１

母の後ろから出てきたスーツ姿の博史は、柔らかい視線で聡を出迎えて、すぐに少し鋭い目付きに変わった。

聡の後ろにいた将を睨みつけているのだ。

聡は振り返らなくても将も、博史を睨み返しているのがわかった。

「……どうして？」

聡は靴も脱がないで、博史にここにいる理由を問い掛けた。博史は将から聡に視線を移すと

「やだなあ。挨拶に来たんだよ。……聡、結婚のこと、ご両親に全然話してなかったんだね」

博史の口調は柔らかいものの、暗に聡を責めている。聡は言葉につまった。

「こんなところで立ち話もなんだから、コタツへどうぞ。……聡は夕食の支度を手伝って。こんな時間までどこに行ってたの」

聡の母の言葉が助け舟になり、聡は

「ごめん」

と母にいいながら、将を振り返る。聡の後姿を見つめていた将と一瞬目が合う。

聡は目でうなづくと、家にあがり、台所へ向かった。

後に続いて靴をぬぐ将を、博史は見下ろしていたが、踵を返した。

長方形の堀ごたつの短辺に、帰宅してまもないらしい聡の父・大二郎、長辺の片方に井口と大悟、もう片方に父の教え子で昨年の卒業生だという男女が3人座っていた。

大二郎の傍らの席があいているのは、博史が座っていたのだろう。

どうやら大二郎とビールを酌み交わしていたらしい。コップ2つとビール瓶が大二郎の近くにあった。

将の三歩先を歩く博史は当然のように空いている聡の父のすぐ近くにおさまった。

残りはもう片方の短辺、つまり聡の父と遠く離れた対面しか座る場所がない。

将は、欄間に頭をぶつけないように、身をかがめて注意深く居間に入った。

大悟と井口が「将、」と何か言いたげに振り返った。

将は聡の父と博史の間のこたつの角まで、畳のへりを踏まないように歩いていくと正座した。

「鷹枝将、といいます。古城先生にはお世話になっております」

と丁重に頭を下げた。

大二郎は赤ら顔で、微笑むと

「ああ、丁寧に、どうも。……礼儀正しいねえ。今時の若いモンにしては珍しい。それにいい男だねえ」

と上機嫌で将の態度と容姿を褒めた。

そういう大二郎のほうも、まるで刑事ものに出てくる俳優のような渋い熟年である。

５０代半ばだろうに、その頭はきれいな銀髪に染まっている。将を気に入ったのか

「こっちに座んなさい」

と隣の席を勧めた。教え子に詰めろと促す。博史が笑顔のまま、瞳だけで将を睨みつける。

「いえ、せっかくですけど、僕、先生を手伝ってきてもいいですか？台所大変そうだったから」

と将は博史を一瞬睨み返しながら固辞した。

「おお、おお。手伝ってこい」

大二郎はますます相好を崩した。将はもう一度軽く頭を下げると立ち上がり際に博史をちらりと見た。

向こうも一瞬将を睨んだようで、目が合った。大二郎のポイントを稼いだ将が面白くないのだ。

「じゃ僕も手伝いましょうか……」

博史は立ち上がるポーズを見せた。が、

「博史君はいいよ。聡の結婚相手なんだから」

と引き止められる。

――結婚相手。だって？

将は背中でその言葉を聞いてしまい振り返る。

またも博史と目が合う。こんどは得意そうな顔をしている。将のほうが面白くない顔をする番だ。

「博史君、今日はどこに泊まるんだね」

「ハイ。ビジネスホテルにでも、と思っているんですが」

「まだ予約してないんだったら、うちに泊まりなさい。今日は聡の教え子たちも泊まるが、もう1部屋空いてるから」

「お言葉に甘えてよろしいでしょうか」

「かまわんよ」

大二郎の教え子も高校生とあり、なんとなく言葉を交わしていた井

口と大悟だったが、二人とも博史と大二郎のやりとりを耳をダンボのようにして訊いていた。

「なあ。こういうの『呉越同居』っていうんだよな」

と井口がボソッと大悟に耳打ちする。

「違うって。呉越同『舟』（ごえつどうしゅう）だってば」

大悟が訂正する。

「どっちでもいいけど、結婚相手なんて認められてるよ。将どうすんだァ？」

「さあ。なるようにしかならんでしょ……、おいあれ」

大悟は話の途中で、突然テレビを指差した。一座が皆、自然にテレビに注目した。

テレビの画面には、将の父である鷹枝康三官房長官が映っていた。

新春の午後、テレビでは硬派のバラエティをやっているようで、そこにゲストとして康三が出演していたのだ。

若手ながら次期総理の一番候補とされ、国民の人気も高い康三は、最近、硬軟問わずテレビ出演が多い。

今日も、日本の今後について、タレントから繰り出される幼稚園のような質問にわかりやすく笑顔で答えている。

「将のオヤジじゃん」

井口がもらした言葉に、大二郎が反応する。

「鷹枝って……、さっきのイケメンくんは、まさか、官房長官の息子さん？」

「そうでぇす」

大悟と井口は口を揃えてうなづいた。

「はー、どうりでねえ……。きちんとしてると思ったよ。明治維新から続く政治家の坊ちゃんじゃ」

大二郎は感心してテレビの康三を見つめる。大悟と井口は顔を見合わせて

『きちんとしてる、だってよ。あの将がヨ』

とこっそり笑いあった。

博史は、まだ笑顔で映っている将の父を画面を冷ややかな横目で見つめていた。

「聡。博史さんって、アメリカにいたときから付き合ってたって人

でしょ。指輪まで頂いて、どうして黙ってたの？」

台所。聡の母の幸代は流しの横で大根の皮を剥きながら聡に問うた。

「お母さん……あたし」

聡は流しの後ろのダイニングテーブルに立って、ニンジンを手に取ったまま一瞬言いよどんだ。

「向こうのお母様の具合もよくないんだから、早く進めてあげないと」

「その話なんだけど……」

聡が言いかけたとき、将が台所ののれんをくぐって身をこごめるようにして入ってきた。

「しょ……鷹枝くん？」

思わず名前で呼びそうになるのを聡はかろうじて抑えた。

「あの、自分手伝います」

「あら、男の子なのに感心ね。ちょうど猫の手も借りたかったところよ」

幸代は、振り返ると笑顔で長身の将を見上げた。

「じゃあ、このゴボウを洗って、笹がきにしてちょうだい」

遠慮なく言いつける。

「笹がきって……」

「聡、教えなさい」

聡は将を流しへと促すと、タワシを持って「こうやって」と教える。

将は熱心に教えを請うふりをして、聡にくっつく寸前、吐息がかかるほど、まで近寄る。

「洗ったら、ここにまな板があるから半分ぐらいに切って」

聡は指示すると、将のそばをつい、と離れて、元の位置に戻る。

幸代は将に

「料理に興味があるの？」とか

「聡は教室ではどんな感じなの？」などとしきりに質問している。

将は感じのよい青年を演じ切っているというか、おそらくこっちのほうこそ将の地なんだろう。

だが、おかげで聡は『博史と結婚する気はない』という大事なことを幸代に言いそびれてしまった。

「センセイ、切ったよ」

「じゃ、こんどはね……」

ボウルを取り出して、水を張ると、エンピツを削る要領でゴボウを削る、と教える。

しかしロクに包丁を握ったこともないどころか、エンピツも削ったことがないような将にそれは難易度が少し高かった。

「違うってば。そうじゃない。てか包丁の握り方がぜんぜん違うし」

「えー、どうすんだよー」

「こう」といいながら将の手を持って包丁を握らせる。

いつのまにか体が触れるほど接近している。

教えるのに夢中な聡は気付いてないが、聡の甘い香りと体温を感じて将は幸せな気分になった。

おかげで、切り方はうわの空で、聡にまた「違う！」と怒られてしまった。

「だから、こうだってばー。ちゃんと家庭科出席してんのぉ？」

再び、くっつくようにして教えているときに、のれんをかき上げて博史が現れて、二人はハッとした。

博史は聡にくっついている将を一瞬睨みつけたが、幸代が振り返ったのを見ると

「ビールもう1本いいですか？」

と爽やかな笑顔をつくった。

「ああ、聡、冷蔵庫からビールを出してあげて」

と幸代に指示された聡は、将から離れるとのれんの横にある冷蔵庫からビールを出した。

博史はそんな聡を見つめて囁いた。

「聡」

「なぁに？」

囁かれたにしては大きすぎる声で聡は答えた。将にあらぬ疑いをかけられたくない。

「聡、明日、何時の飛行機？」

「４時３０分だったと思うけど……」

「同じ便だ。じゃあ一緒に帰れるね」

「……ハイ、ビール」

明るく大きな声で、ビールの栓を抜いて渡す。

まだ何か言おうとしていた博史はそれで何も言えなくなり退散した。

聡がため息をつくと、幸代が

「早いうちに、上京して、向こうのご両親ともお会いしておかないとね」

と振り返った。

将が悪戦苦闘するゴボウから顔をあげてこちらを見ている。

「お母さん、あの……」

聡は核心に触れようとしたが、まだ博史が近くにいるかもしれない、と思い一瞬とまどった。

博史にはきちんと自分から別れを告げるべきだろう。

でも両親には、自分の心変わりを先に話しておかないと取り返しのつかないことになる。

だけど、今日泊まっていくという博史は明日までべったりと一緒にいるに違いない。

両親だけに打ち明けるチャンスがあるだろうか。

考えたあげく、妙案が思いついた。

「お母さん、今日なんだけど、人数が多いから、みんなで温泉にでもいかん?うちお風呂狭いしー」

「ああ、いいねえ。秋月くんちにでもいくね?」

それはマズイ。秋月のところの温泉は男女の風呂が壁一枚でしか隔てられていない。

話し声などは筒抜けになる可能性がある。

「もっと広いところにしようよ。露天があったりとか」

聡は男女別になる温泉で、とりあえず母にだけでもうちあけておこうと思ったのだ。

「じゃあ、〇〇屋敷さんにでも行こうか。あそこは露天風呂もあるし」

話は決まった。

85◆呉越同舟2

総勢１０人の夕食は、堀ごたつだけだと詰めて８人がけなので、折りたたみテーブルを足していただくことになった。

将は、聡と幸代は足が伸ばせない折りたたみテーブルのほうに座るのだろう、と予想して

「あ、僕、こっちでいいですよ」

と折りたたみテーブルに自ら志願し先手を打った。こうすれば聡の隣の辺か、対面に必ず座れる。

「悪いけど、そうしてくれる？」

と聡も将のたくらみに気付いたようで加勢してくれる。

しかし、博史がさも当然というように、聡の隣にあたる掘りごたつの一番下座に席を取ったのが将には気に入らない。

将は聡の隣の辺を死守した。

夕食は肉団子や豚肉を入れた味噌味の鍋がメインで、ほかに萩名物の瀬付き鯵の刺身、

他に、食べ盛りの高校生対応で、飛騨コンロで焼く牛肉、腹を膨らますためのコロッケやサラダなどが並んだ。

「まあ、１杯ぐらいは」

という大二郎の粋なはからいで将ら高校生もビールを飲んでいいことになり、座は賑やかになった。

「なあ、大悟、あそこおもしれえな」

「井口も気付いてた？おっかしいの」

大悟と井口が、鍋をつつきながら笑っているのは、聡を真ん中に挟んでの将と博史のバトルである。

「センセー、肉とってやろーか」

将が自分の前に置かれた飛騨コンロで焼けた肉を聡にやろうとすると、博史が

「こっちのほうが食べごろだよ」

と先に自分の近くの飛騨コンロからさっと取って聡の皿に置く。

むっとした将は、

「こっちのほうがレアで旨いぜ。いい肉なんだからっ。見蘭牛でしたっけ、ねー、おかーさん」

と負けずに聡の皿に置く。ちなみに見蘭牛とは萩の離島原産の上質な霜降り肉である。

幸代を『おかーさん』よばわりする将に、博史はムッとした顔を表面に出し、

「君のおかあさんじゃないだろう」

とムキになる。しかし将に『おかーさん』と呼ばれた幸代はまんざらでもなさそうで

「いいのよー、別にぃ、博史さん」と太平楽だ。

聡のグラスが空くと、両側からビール瓶が差し出される。

聡が鍋をかき混ぜはじめると、博史と将の両側からさっと空の器が伸びる。

年功序列でいちおう博史のほうからよそってやったものの、聡は将のほうには少し肉団子を多めによそってやった。

将は、それがさっき聡が手でこねていた肉団子だというのを知っているので、嬉しくてつい、

「アキラ、超うめーよ」

と言ってしまった。それを

「おい、先生のことを呼び捨てか」

と博史が咎める。

こんどは聡が

「いいんだってば。あだ名なんだから」

と父や母にも聞こえるようにさりげなくフォローする。

これで将がいつものように『アキラ』と呼んでしまったにしても大丈夫なことになる。

しかし、博史は、聡と反対側の隣に大二郎が座っているので、そっちにも気を遣わなくてはならず、

夕食のバトルは、手伝ったことで幸代のポイントをよくしている将が少々有利だった。

「あ～気持ちいい」

一足先に体を洗った幸代は岩の露天風呂でのんびりと体を伸ばした。

庭園の中にしつらえたような露天風呂が男女各2つずつある旅館・○○屋敷の温泉だ。

萩ではここ2～3年のあいだに温泉が掘削されて配湯されるようになり、ここ○○屋敷でも温泉が楽しめるようになった。

賑やかな夕食の後、大二郎の教え子の3人が帰宅し、残った7人でワゴン車に乗り温泉に来ている。

正月3が日にもかかわらず、時間がずれたせいかそれほど人は多くない。

幸代より髪の毛を洗うのに少し手間取った聡が今、露天風呂に現れた。

本当は内湯で温まりたいが、幸代に話したいことがある聡は、できるだけ幸代のそばでチャンスを伺いたかった。

それにしても、内湯に入らずにいきなり露天に来ると、濡れた肌に寒い風が吹きつけ一瞬で凍えてしまう。

「寒い寒い」とうめきながら湯に身を素早く沈める……今度は湯の温かさに逆に一瞬毛穴がギュッと引き締まる。

それが時間の経過と共に弛緩していく。そんなとき、

「あ〜気持ちいい」

という声が思わず漏れる。空を見上げたが、さかんに立ち上る湯気のせいか星は見えない。

こうして母娘揃うと、聡の豊かな胸は母譲りだというのがよくわかる。

「あら、聡、それどうしたの？」

「え？」

幸代が指差す先には、ゆうべ胸元に将がつけたキスマークがあった。

まだ鮮やかに赤い痣。

「え、あ、やだ」

聡は慌ててそれを手で隠す。

「あ、……なんか虫に刺されたみたい」

と笑ってごまかした。幸代は

「どんな虫だか」

といぶかしげな顔のままだった。

一方、男湯。

将は、素早く衣服を脱ぐと、誰より早く洗い場へ行き、体を洗ってしまい、内湯に浸かった。

できればあまり、他人に背中のケロイドを見せたくないというのもあるが……。

実は、将は博史の体を観察していたのである。

「お義父さん、背中流しましょう」

と大二郎の背中を流す、博史の裸体。

スーツのときはわからなかったが、かなり筋肉質でしかも陽に焼けている。

腹の筋肉などはしっかりと割れている……将の視線はいやでも、タオルで隠した下半身のほうへ移ってしまう。

大二郎の背中を流し終わった博史は、湯船の中を将のほうへとまっすぐに歩いてきた。

将の隣に腰をおろすと

「お前はゲイか。人のコカンをジロジロみやがって」

と小声で耳打ちする。

将はカッと顔面が熱くなったが、それはもともと温泉の熱で赤くなっていたので表面にはでなかった。

将は、博史の目の前で、わざと勢いよく、ザバっと立ち上がると、

「意識しすぎるテメエのほうこそ、その気があるんじゃねーの」

と言い返して、前も隠さずに露天風呂のほうへ歩いていった。

博史は、将の、大きな傷跡が残りつつも、流れるような筋肉がついた若い背中を憎憎しげに睨んだ。

将の裸体を間近で見た大二郎は、近くに浸かって『一部始終』を見ていた井口と大悟に

「かなり、いい勝負だねぇ～」

と囁いた。目が笑っている。三人は顔を見合わせて笑った。

「お母さん。あのさ……」

聡は湯に浸かったまま、母に話し掛ける。他の客が露天から消えた今が話しどきだ、と判断したのだ。

幸代は早くもいったんのぼせてきたので、裸のまま浴槽のふちに腰掛けて涼んでいる。

「ん？」

「博史さんのことなんだけど」

話題を口に出したとたん、心臓がどきん、と抵抗を始める。

だけど将からもらったキスマークに勇気をもらい、話を続ける。

「私、博史さんとは結婚しないから」

一息に言った。幸代は、それほど驚きもしなかったが一応

「どうして？指輪をもらっちょるんやろ」

と訊き返してきた。

「他に、……好きな人ができたん。私がいけんのやけど」

「博史さんには？まだいっちょらんの？」

「うん。でも、近いうちに絶対に自分でいうから。指輪も返す」

幸代はもう一度湯船に浸かると聡を見据えた。

「その、好きな人っていうのは……。一時的な気の迷いとかじゃないん？」

聡は深くうなずいた。

「でも……。博史さんのほうは、もうご家族でそのつもりなんやろ。病気のお母様も」

『病気のお母様』という言葉が胸に痛い。頭の中で血液がずきん、ずきんと音をたて始めた。

少しのぼせ始めたらしい。

聡は湯からあがると湯船のふちに腰掛けた。さっきは寒かっただけの外気がすーっとほてった肌をなだめていく。

「すごく悪いとは思ってる。でも、もう……夫婦には、なれない」

『夫婦には、なれない』の意味は、幸代にも理解できる。

幸代は、そんな告白をする娘の裸体を盗み見た。

仲のいい母親と二人のせいか、タオルをかけて隠しているのは下だけだ。

湯で濡れた白い肌は温まったせいか桜色に染まっている。

幸代ゆずりのボリューム豊かな乳房はまだ若く張りがあり、小さな先端はピンと上を向いている。

そして、ぐいっとくびれたウエスト。首筋にはアップにした髪のほつれ毛が張り付いている。

自分の娘ながら、なまめかしいと思った。そしてたぶん……この娘は、男をもうとうに知っているのだろう。

幸代は聡の胸元の赤い痣に確信を持った。

「もうあんたも大人なんだから、自分でなんとかするんよ」

幸代は、言った。突き放すような言葉だけど、語調は優しさに満ちている。

「……うん」

聡は自分の胸元に残された将のキスマークを見るようにしてうなづ

いた。

そうすると必然的に自分の裸の乳房が見える。ゆうべ将が吸ったところも。

「訴えられてもしかたないんよ」

幸代はさらに厳しい言葉を、でも穏やかな口調で続ける。

「……覚悟してる」

裸の聡の背中に、少し冷たすぎる夜風が吹き付けた。聡は肩を縮めると、湯船にまた浸かった。

「それにしても、そんなに急に心変わりするなんてねえ……。相手は誰なの」

問われて答えられない聡は、湯の中に頭まで沈んでみる。

「ちょっと聡？聡ってば」

幸代が呼びかける。……しばらくして、プハァと顔を出して、エヘヘと聡は笑った。

「もう、このコは……」

幸代が苦笑いをした。

86◆通過地点1

翌4日の午後。聡と博史は宇部空港に来ていた。

「ハイ。隣の席取れたよ」

博史が搭乗手続きを済ませたチケットを聡に渡した。

「ありがとう」

空港までは、わざわざ父の大二郎が送ってくれた。

おそらく幸代から話を聞いたのであろう。

別れ際に父は聡をじっとみつめた。

「しっかりな」

など博史の手前、短い言葉だったと思う。聡は父の黒い瞳から視線を動かさずにうなづいた。

父の銀髪は、いっそう白く、また目じりの皺は一段深くなったことに、そのとき、気付いた。

そして聡は、自分がとても親不孝をしているような気がした……。

その父が帰ってしまい残された聡は、博史と二人きりになってしまい、そわそわとしていた。

胸にはまだくっきりと残ったキスマークがずきずきと主張を続ける。

将は、朝のうちに萩を発ってしまった。

いちおう聡の父母の手前、三人はＪＲの『１８きっぷ』を利用して萩にやってきたことになっている。

鈍行だから、と三人は「お世話になりましたぁ」と明るく聡の家を後にしたのだ。

実は昨夜も、将はこっそりと聡の部屋にやってきた。

最初はアルバムをめくったりしながら

（もちろん、聡所有のものだから、パンク姿とか水着姿のようなヤバいものは抜いてある。子供の頃の写真が中心だ）

たわいもない話をしていたのだが、何せ『誰も見ていない』部屋だ。

気がつくと二人の距離は縮まっていた。

開いたアルバムを前に口づけを交わすのに時間はかからなかった。

気がつくとベッドの上で抱擁を繰り返していた。

「ちょっと……」

抱き合ったままベッドの上に倒れ込んだとき、聡は抗議の声を小さくあげた。

「大丈夫。ダッコするだけだから。約束する」

将は、聡に向かって、いたずらな笑顔で小指を立てた。

聡が『しょうがない』という笑顔で、小指を絡ませる。直後に、今度は二人の体が絡みあった。

将は横になった聡に唇を押し当てる。

しんと静まり返った夜は、息遣いさえも響きそうだったが、じきにそれを意識する余裕を二人とも失った。

将は約束を守って、抱擁以上のことはしなかったが、気がつくと早朝だった。

結局、抱き合ったまま眠ってしまったのだ。

もう一度、軽い口づけを交わすと、将はあわてて自分の部屋へ帰っていった。

飛行機までまだ時間があるので、博史と聡は空港のレストランでコ

ーヒーを飲んだ。

「結局、ぜんぜん二人になれなかったね」

コーヒーをすすりながら博史は少し残念そうだ。

「ごめんね。お正月は、ウチはいつもああなのよ」

と答える聡は博史の目をみないようにコーヒーにミルクを入れる。

「でも、とりあえず最初にご挨拶が出来てよかったよ」

博史は、コーヒーをソーサーに置くと聡の顔を見た。

「挨拶って……」

こんどは聡が顔の下半分をカップで隠すようにコーヒーを飲む。ミルクを入れすぎたコーヒーは舌にからみつくように残る。

「聡さんと結婚させてください、っていう挨拶」

答えない聡は、博史にいつ別れを切り出せば、一番傷つけないで済むか、考えている。

優しげな博史の顔を見ていると、自分がこれからしようとしている行為が、

まるで罪のないものに暴力をふるうような、きれいに整ったものをぐちゃぐちゃに乱すような、そんな暴挙に思えてくる。

目の前に座る、穏やかな男に、確かに惹かれていたときもあったのだ。

もう、愛してはいないが、進んで傷つけたいほど、憎んでいるのではない。

そんな葛藤が、聡に決定句をためらわせていた。

「お父さん、何て言ってた？」

「聡が結婚したいというなら、反対する理由がない、って」

「そう……」

聡は言葉を失った。

両親には、前から『アメリカで知り合った会社員の人と付き合っている』と話していたから、突然現れた博史への返事はそんなものだろう。

男性らしい優しさを漂わせた誠実そうなルックスを持ち、話をすれば聡明さが漂う。おまけに安定した年収もある。

そんな博史を拒む親などいるわけがない。

「ところで、昨日、鷹枝君とどこに行ってたの？」

将の苗字だけで聡はギョッとして、質問の意味を理解するのにワンテンポ遅れた。あわてて言い訳を考える。

「え、ああ。ちょっと昔の友達に呼ばれて……」

「友達に？」

「う、うん。力仕事させるために」

とっさに思いついたにしては、まあまあの言い訳だと思ったが、

博史はカップを口に運びながら上目遣いで

「ふーん」

と聡を見つめた。聡は慌てて

「ちょっと、お手洗いに行ってくるね」

と席をはずした。

トイレで将からのメールをチェックした。新着はない。朝、受け取ったままだ。それには

＝＝＝＝＝＝＝

１／４日１０：０３

今、秋月サンち。今から急いで東京へ帰る。

聡が家に着いた頃には、お出迎えできるように。

じゃあ後で　将

＝＝＝＝＝＝＝＝

そういえば、今朝『いいってば』という聡にかまわず、

『遠くからわざわざ来たんでしょう。それに聡の初めての教え子さんだし』

と父母は将たちにお年玉を渡していた。

自分たちの教え子には、渡さなかったのに、娘の教え子が訪ねてきたのはひときわ嬉しかったのかもしれない。

将はたぶん、それを使って高速道路を利用するのだろう。

『家に着いた頃には、お出迎えできるように』

などと書いてあるが、明日が仕事始めという今日は渋滞することは必須、たぶん無理だろう。

だけど、将のメールを見なおした聡はほんわかと幸せな気持ちになった。

「東京に着いたら、メシにでも行こうか。最後の夜だし」

飛行機の中。機内誌を手に取る聡に博史が声をかける。

『最後の夜』という言葉に聡の体は強張った。

飛行機がつくのは18時すぎである。

博史は明日の早朝に出発すると言っていた。

まだ、今夜がある。たぶん博史は、発つ前に聡をあたりまえのように抱くだろう。

なんとか、避けられないだろうか。

もう生理も言い訳に使えない。

『疲れ』。でも疲れぐらいで博史が諦めるだろうか。

この年末年始休暇で聡は博史に一度きりしか抱かれていない。

いつも、逢えない間を取り戻すように、その数倍は体を重ねていたことを考えると今日は絶対に求めてくるだろう。

――いっそ、今日別れを告げてしまえば……。

聡は窓の外の暗闇に視線を飛ばした。雲の上を飛行しているのか、何も見えない。

そんな聡を、博史は広げた機内誌の端で意識している……。

昨日。

ベッドの上で上になったり下になったりしながら、抱擁と口づけを繰り返す聡と将を伺う視線があった。

聡の部屋の入り口の襖の外に、いつのまにか博史が立っていたのだ。

博史は、聡と二人で逢いたい、出来れば抱きたいと思って部屋にやってきたのである。

細く開けた襖からはスタンドだけの暗い光の中に、ベッドの下１／３ほどがかろうじて見えるだけである。

しかし、掛け布団の上で抱き合っていたのか、絡みあった４本の足ははっきりと見えていた。

陽に焼けて褐色になった若者のむきだしの膝下と、パジャマをまとい、なまめかしいほどに白く輝く聡の足首。

４本はこすりあわせるようにしながら、その向きをせわしく変えていた。

襖に付けた耳には、２つの息遣いと、

「将……」

「……アキラ」

と声を出さずに何度も呼び合うのが確かに聞こえた。

博史は、開けたときと同じように襖を音をたてずに閉めると、自分の部屋へと忍び足で戻っていった。

87◆通過地点2

羽田空港についた聡は、ごく自然に博史の車に乗せられ、夕食に連れて行かれた。

明日からまたしばらく中東での日々が続く博史は、麻布の和食店を予約していた。

カウンターと小さなテーブルがいくつかだけ、という店は落ち着いていて感じが良かったが、

そのこぢんまりさと、一品ずつ出てくる料理ゆえに、別れを切り出すムードとは遠くかけ離れていた。

そのまま、博史に送られて部屋に帰ってきた聡は、博史を玄関で追い返すこともできず、部屋にあげることになった。

「……コーヒー淹れるね」

聡は、部屋に入るとエアコンのスイッチを入れただけで、コートも脱がずキッチンに立った。

お湯をわかそうと、ケトルに水をいれる聡の後ろにすかさず博史が立ったかと思うと、いきなり後ろから抱きしめた。

「聡……」

耳元で囁きながら、博史は身を固くする聡の顎を手にすると、自分の顔の方を向かせ、その唇を吸った。

聡は思わず目を固くつぶった。嫌悪感がこみ上げてくる。

聡の手は無意識に博史の体を引き離すべく押し戻していた。

……と、ふいに博史の唇が離れた。

「……なんだ、その顔は……」

博史は、低い声でとうとう不信を声に出した。

聡はその不機嫌な声にハッとする。しかし博史の顔を正視することができず下を向いた。

「俺とキスするのが嫌なのか」

聡は黙っているしかない。

「聡！」

博史は声を荒げた。聡はその声に身をびくっと震わせる。こんな博史の声を聞くのは初めてだ。

身を震わせた聡に、自分のほうが驚いたのか、博史は、

「俺たち、婚約者じゃないか」

と手のひらを返したように優しい声に変えながら、聡の視線の方向に自分の体をもってくる。

「……3年も前から、結婚を約束してたじゃないか」

博史は聡の両肩を掴んだ。優しいを通り越して、懇願するような声音になっている。

聡は博史の顔を見た。声の通り、懇願するかのような顔だ。

聡は肩を掴む博史の手をゆっくりとふりほどくと、博史の目を見てゆっくりと口にした。

「ごめんなさい。……私、あなたとは結婚できない」

博史は呆然と目を見開いている。だから聡はもう一度繰り返す。

「ごめんなさい。結婚は……なかったことにし」

「何いってるんだ！」

言い終わる前に、博史は聡の肩を強く掴んでゆすった。肩の骨に指が食い込み、痛い。

「いまさらそれはないだろう！」

聡の体全体がガクガクと揺さぶられる。

こんなに激しく動揺する博史を見るのは、3年もつきあっているのに初めてだった。

揺さぶられながら、聡はただ『ごめんなさい』を繰り返すしかない。

「勝手すぎるよ！」

博史は、一声叫ぶと聡の肩を突き放した。髪を振り乱した聡は無言で立ち尽くした。

実際、勝手すぎる自分だから。罵倒に耐えるしかない。

「……理由は何なんだ」

博史は、今度は静かに問いただす。しかし、その語尾は震えていた。

聡は答えられない。取り乱した博史に『他の男が好きになった』などとは恐ろしくて答えられない。

「……何なんだ、え？」

こちらを向いた博史の目が光っている。

いつのまにか、それは聡を抱く前の、男性の、目になっていた。

しかし、いつもの優しいそれではない。獲物を目の前にした獣のような鋭い視線。

聡はあとじさった。

「言えないのか！」

そういうと同時に、博史は聡に飛びかかるように抱きついてきた。

抵抗する聡の唇を無理やり奪いながら、力づくでベッドに押し倒す。

「博史さん、やめて！」

唇が離れて、こんどは聡が懇願する。

しかし博史の懇願に聡が応えなかったように、聡の懇願にも博史は応えない。

博史は抵抗する聡の腰をやすやすと持ち上げると、力任せにジーンズを足から引き抜き、下半身を守る小さな下着も剥ぎ取った。

「嫌ッ……！」

裸になった下半身の間に自らの体を割り込ませて、抵抗を続ける2つの腕を片手で頭の上で押さえつけながら、上半身のニットを胸の上までまくりあげ、素肌を露出させた。

「やめて――」

目を閉じる聡に博史の手が止まったのがわかった。

恐る恐る目をあけると、博史の視線がある1ヶ所に集中していた。

まだ下着ははずされていない。視線は、その胸の谷間の横にくっきりとつけられたキスマークに注がれていた。

聡の脳裏にあのときの将が蘇る。将。聡の体は将のもの、という証。

「……あいつか」

博史の鋭い視線は聡の顔に移された。

それをビリビリと頬に受け止めながら、聡は博史の顔を恐る恐る見つめ返した。

細い目、というのは憎しみが宿ると、むしろ残忍な顔になる、というのを聡は初めて知った。

「あの、……鷹枝とかいうガキと寝たのか」

本当は寝ていない。だけど、それは立場上我慢しているだけで、もし何も障壁がなければとっくに寝ている。

それは事実上『寝た』と同意ではないだろうか……。

聡は、意を決して、横たわったまま、深くうなづいた。

とたん、聡の頬に激しい衝撃が走った。

聡は、博史に頬を思い切り打たれたのだ。

こんな風に誰からもぶたれたことがない聡にとって、今までの人生で一番激しい衝撃だった。

打たれた頬が熱と痛みを帯びていくのと入れ替わりに、はずみで脳に詰まっていた思考と感情がすべて飛んでいったように、聡は無になってしまった。

博史は、それきり無抵抗になった聡の体を奪った。

体液を吐き出して、行為をひととおり終えた博史は、裸の上半身を起こした。

聡の髪に手をやりながら呟くように、ようやく謝る。

「叩いたりして、ごめん……」

聡は無言で、博史に背を向けて横たわっていた。

少し前。

抱けば、もとどおりになってくれるかもしれない、と一縷の望みを託して、

また叩いたことへの罪滅ぼしのように、博史は、行為中、丹念に聡に愛撫をほどこした。

が、どんなに博史が努力しても、聡は冷たくこごったままだった。

目を固く閉じて、感情をなくしたようにされるがままになっていた。

「聡……」

背を向けた聡の額の髪を耳にかけるように繰り返し優しく撫でる。

「聡、聞いてくれ……」

聡は体をピクリとも動かさない。

布団すらもかけずに、死体のように微動だにせず、その白い裸体を横たえている。

レイプ同然の博史の仕打ちに、抗議するかのように……。

「アイツと、今は、うまくいってるかもしれないが」

博史は、背を向けた聡のなめらかな肩の線を撫でながら、穏やかにゆっくりと語りかけた。

「聡、お前は、若い頃を懐かしんでるだけじゃないのか……。高校生との恋愛ごっこで」

諭すように、さらに続ける。聡はあいかわらず動かない。

「そして、アイツにとっては……、聡、お前は通過地点でしかない。アイツはまだ、若いんだ……」

視線を目の前の虚空に泳がせて、光を失ったような聡の瞳が、それを聞いて動いた。

『通過地点』という言葉が心に突き刺さったのだ。

だけど、体は動かさない。

「だから、聡、よく考えなおしてくれ」

博史は横たわったままの聡の裸の背中に語りかけると、立ち上がった。

衣服を身につけると

「またメールする」と

静かに玄関から外に出た。廊下を暗く照らす蛍光灯に、吐く息が白くけぶる。

それを避けるようにうつむいて博史は、聡の部屋を後にした。

88◆通過地点3

将ら3人が、秋月の宿に隠してあったローバーミニに乗り込んで、萩を後にしたのは10時すぎだった。

秋月は妻の綾と共に見送りにでてきた。

出発前、秋月は将に手招きして、近くに呼び寄せると耳元で

「社会人になるまで避妊はしっかりしろ。間違っても聡を妊娠させたりするなよ。俺の大事な思い出のヒトなんだから。いいな」

と囁いて親指をたてた。

本来だったら『そんなドジはふまねえよ』、

もしくは『いや、卒業まで許されてないから』と言ってしまう将だが、何故か素直にうなづいてしまった。

「また聡と一緒に来いよ」

と秋月は笑顔で将の肩を叩いた。

そして綾と二人で、ミニが見えなくなるまで手を振っていた。

将は、萩の地を聡と二人で再び踏む未来は、当然のように来ると思っていた。このときは……。

萩から山口インターまでは1時間程度、一般道だがスムーズだった。

山口インターからは中国自動車道に乗る。１１時すぎだった。

中国地方の内陸部を通るこの高速はカーブが多いものの車の流れは順調だった。

しかし関西圏に入って、三田を過ぎてから急に車が増えた。

途中、サービスエリアで昼を食べたというのもあり、時計はここで１６時になるところだった。

吹田ＪＣＴあたりで、お決まりのひどい渋滞に巻き込まれた。

本来は1時間で通り抜ける距離に2時間以上かかってやっと関西を抜ける。

愛知県の豊田インターでいったん降り、明日から仕事始めだという大悟を送っていき、再び高速に戻る。夜９時３０分になっていた。

しかし、この先は夜が遅くなったこともあり、渋滞は解消されつつあったが、結局東京に着いて井口を送り届け終わってみると1時をまわっていた。

将は、もう寝てるかな、と思いつつ、車の中から聡に電話をかけてみる。

コールが5回鳴って、聡が出た。

「アキラ？ごめん、寝てた？」

「……ううん」

かすれた声が携帯から聞こえる。否定はしたが寝ていたのだろうと検討をつける。

「今から、行ったら迷惑だよね？」

「ううん……迷惑、なんかじゃない、よ……」

なんだか様子が変だ。眠いんだろうか。それとも酔ってる？

「明日、学校なんだろ、やめとこうか」

気を遣った将だが、実は自分も運転で疲れていた。

聡の顔は見たいが、お互い無理をすることもない、と思ったのだが

「……来て。将」

と聡ははっきりと言って電話を切ってしまった。

将は、釈然としないまま、車を聡の家へ走らせた。コインパーキングに車を止めて、コーポの階段をかけ登る。

足音に将を聞き分けたのか、聡のドアの前に将がたどりついたとたん、チャイムも鳴らしていないのにドアが静かに開いた。

スウェット姿の聡が廊下の暗い蛍光灯に細く照らされた。

今朝別れたばかりなのに、ずいぶん顔をみなかったような懐かしさで、将は聡の顔を見つめた。

しかし、聡は、うつむいて、どことなく沈んだ感じだった。

手を伸ばして抱きしめようとした将は、その頬に異変を見つける。左の頬が赤く腫れている。

「アキラ……どうした、そのほっぺた」

将は玄関に一歩踏み込んで部屋に入ると、聡に問いただす。聡は震え出した。

「……将。あたし……」

聡は目をあげた。その目はみるみるうるんで、将のほうを見据えたときは大粒の涙が頬を転がり落ちた。

……もう限界だった。将の顔をみたとたんに、堰を切ったように凍った感情が溶けて激しく流れ出す。

「博史にやられたのか、そうだな」

再び目を伏せる聡をみてそれは図星だと将は確信した。

「ひどいことをしやがる」

将は聡の体を抱き寄せた。しっかりと抱きしめたその体は、まだこきざみに震えている。

「もう大丈夫だから」

将の腕の中で震える聡は、とても小さく見えた。

――守ってやりたい。どんなことをしても。

将の中に、純粋な思いが湧き出してくる。それは清らかな泉のように将の心を浸していく。

冬の夜の静寂に、二人は抱き合ったまま、しばし玄関で佇んでいた。

「はい、紅茶。はちみつ入れといた。それと保冷材」

ベッドに腰掛けた聡に、将がペアのマグカップのかたわれを渡す。

「ありがとう」

鼻の下を柔らかくくすぐる熱い湯気に、戻ってきた安らぎを感じた。

マグカップのもう1つは隣に座る将の手にある。本来の持ち主に戻ったマグカップ。

そのことにも聡は安堵を覚えて、やっと

「将……あたしね」

と落ち着いた声を出すことができた。

「……博史さんにね、とうとう、言ったんだ……結婚できないって」

「それで、殴られたんだ」

本当は違う。『将と寝たこと』を肯定して殴られたのだが、聡は

「うん……。そんなとこ」

と答えて、はちみつで甘くした紅茶を口にする。

舌に優しい甘い味は、将といるこの時間の象徴のようだ。

いつのまにか将は、ときめきだけでなく、安らぎも連れてくるようになっていた。

「許せないな。こんど会ったら、俺がぶん殴ってやる。……それで別れられたの？」

将が聡の顔をのぞきこんだ。

聡は将の瞳を一瞬見つめて、さらに視線を下に落とした。忌まわしい時間を思い出す。

博史にからだを奪われている間、聡は泣かなかった。というより泣けなかった。

頬を打たれたことで感情がどこかでまひしてしまったように、ただ呆然としていた。

クリスマスのときのように馴れた快楽も、もはや何もなかった。

敏感なところを愛撫されても、不快なだけで、聡は目を閉じて我慢していた。

ただ、ただ苦痛な時間だった……。

そのときが蘇った聡は、カップをローテーブルに置くと、両腕を胸の前で固く組んだ。

「アキラ……？」

異変に気付いた将は、自分もカップをテーブルに置くと、迷わず聡の肩を抱き寄せた。

再び、震え始めた聡を見て、将はだいたいの事情を察した。

「アキラ、もう大丈夫だから。……ね」

将はもう一度聡を抱きしめた。

聡も将に腕をまわして体重を預ける。

熱い将の体温と干草のような将の匂いに包まれて、聡はまた少しずつ安堵を取り戻しつつあった。

そんな聡の脳裏に

『通過地点』

という言葉が稲妻のようにひらめいた。

『聡、お前は通過地点でしかない』

頭蓋骨中に響くように蘇った博史の声。おびえた聡は、将にからめた腕に力をこめてしがみつく。

それに気付いた将は聡の頤を上に傾けると、そっと唇を重ねた。

温かい将の唇。柔らかい肉の厚み。

ほんの少しだけ、博史の声のリフレインは弱まったが、消えない。

聡は将と唇を交わしながら、思い出している。

自分が17歳の時を。

秋月は、東は。

17歳のときの恋は確かに『通過地点』だった。

『終着点』の恋、なんてものがあるのかどうか、なんて26歳の聡にもわからないけれど、

少なくとも恋をしているときは、それが最後でありたいと思うのが相手への愛情だろう。

だけど、自分はともかく、17歳の将にとっては、聡が『通過地点』にならない確率のほうこそ奇跡的だろう。

聡はこの恋の、真っ暗な未来を見た気がしておびえる。

しかし、もうこの思いは止められない。

だけど、いつか確実に。若い将は、自分から離れてしまうだろう。

自分にもそうだったように、ある日突然、誰かに心を奪われるのだろうか。

その日を想像した聡はぎゅっと目を閉じて、無我夢中で目の前にいる現実の将を確かめるように舌をからませる。

気がつくと、聡は唇を離して、将の瞳を見つめていた。

聡の心のうちの不安も知らず、見つめ返す将の瞳は優しい。

17歳の若さならではの純粋な、透き通るような視線。

「……将。ずっとそばにいて……」

脳を通さずに、目に涙が満ちるように、唇から言葉がこぼれる。

将は聡を透明な視線で見つめたまま、静かにうなづくと聡を抱いたまま、そっと身を横たえた。

「アキラ。ずっといるよ。だから安心して」

将の声音は、永遠を誓うかのような、磐石な愛情に満ちているようだった。

『通過地点』なんて言葉は、今の将からは想像もできない。

将は、そんな聡の背中を、肩を、ずっと優しくなぜていた。

聡が安心するまで、そして眠りに落ちるまで……。

将は、生まれて初めて、はやく大人になりたい、と強く切に願った。

それは、聡を守りたい、という思いと同義だった。

89◆修学旅行はじまる1

「すごっ。真っ白」

「ね、ね、あれ白樺だよね」

千歳空港に着陸したとたん、荒江高校2年生2クラス約80人が搭乗した飛行機の機内はどよめいた。

1月11日、3学期が始まってまもなくの修学旅行・スキー研修である。

「まだ、座席を立たないで」

一般客が降りてから、修学旅行生という順に飛行機を降りるのだが、シートベルトをはずして席を立つ生徒が早くもいる。

生徒に注意しながら聡は『まあ仕方ないか』と思っている。

初めての北海道という生徒も多いのだ。

学生時代に一度スキーで来たことがある聡も、やはり東京では見られない真っ白な景色を見るとやはり浮き立つ。

青空ではない小さな窓の外は、空と地面の境界がわからないほど、一面白だった。滑走路と木立でようやく地上だというのがわかる。

注意しながら、将のほうをさりげなく見る。

伸びをして大あくびをしている将と目が合った。目が合うなり将はニッと笑った。

さっき飛行中に気分を悪くした生徒がいないかどうか、見回ったところ、狭い座席に窮屈そうに納まりつつもぐうぐう眠っていたのを見ている。

「センセ、そのダウン、超カワイイ。いいな」

座席をまわる聡にカリナが声をかけた。

「ありがと」

聡が着ているメタリックな光沢のあるダウンジャケットは実はスキーウェアだ。

ファーにふちどられたフードがついていて、街で着るのにも違和感はない。

スキーをするチャンスがあるかもしれないので一応着てきたのだ。

ようやく、キャビンアテンダントから案内があり、聡たちは降りる指示を生徒たちに伝えた。

待ちくたびれたように生徒たちはゾロゾロと降り始める。

「飛行機の中で、気分が悪くなった生徒さんはいないようですね」

看護士の山口が聡にほっとした笑顔で話し掛けた。

今回、生徒を引率する教師は聡とリーダーの多美を含め４人。それに看護士が一人。

彼女『山口さん』は聡より２つ年上で、荒江高校の掛かりつけ病院でチーフをしているという。小柄だけど頼りになりそうな女性だ。

到着ラウンジに着くと聡ら教師は軽く点呼をとり、代表の多美先生が今後のスケジュールをメガホンスピーカーをつかって簡単に説明した。

なんと今回の修学旅行は、一人の欠席者もおらず、全員参加しているのである。

聡にはあの葉山瑞樹が参加しているのが信じられない。

将はもちろん、誰も彼女に話し掛けようとしない。

が、瑞樹は、そんなことを気にもしないように、淡々と行動している。今も、耳にイヤホンを突っ込んで、注意事項など聞いていない。

聡は、仕方なく、生徒たちが体育座りしている中に分け入り、瑞樹に注意する。

瑞樹は、うるさそうに聡を横目でちらりと睨みつけ、

「うっせーな」

と小さく呟いて、それでも一応イヤホンを取った。聡はホッとした。

聡を目で追っていた将は、それを見てなんだかハラハラした。

一同は、バス2台に分乗して、まずは空港近くのホテルで弁当の昼食を取った後、Nという北海道で一番大きなスキー場に向かうことになっている。

中宴会場を開放したホテルで、生徒たちは仲良し同士で、思い思いに配られた弁当を食べ始めた。

弁当を配り終えた聡は、看護士の山口に誘われて、空いている席を探す。

将は、2人の姿を見て、呼び寄せようとしたが、あいにく将のいる円卓は、井口やカイト、ユウタなどですでに埋まっており空いている席はなかった。

「古城先生、あそこ……」

山口が指差した先には、瑞樹がぽつんと一人で弁当を食べているテーブルがあった。

「あのこ、イジメというかシカトされてるんですか?」

さすがに山口もおかしいと思ったらしい。

「いえ……。あまり学校に来ないから……だけだと思いますけど」

聡は自分の言っていることが担任としてあまりに無責任なのでは、と少し恥じた。

「まあ、あそこしか空いてなさそうですから、行きましょう」

「ハイ」

率先していく山口に聡は、気が進まないがついていった。

「ここ、いいかしら?」

山口は看護士の職業柄なのか、爽やかな笑顔で瑞樹に近づいた。

瑞樹は見上げると無言でうなづいた。見るとまたイヤホンで音楽を聴いていたらしい。

山口の後ろにいる聡のことを、まるで、見えないがごとく無視する。

しかし、聡としては無視してくれて少しほっとした。

山口は、瑞樹の名前などを聞き出し、

「葉山さんはスキーは初めて?」などと積極的に話し掛けていた。

瑞樹は少しうるさそうにそれらの質問に最低限の言葉だけで答えている。

しかし、とうとう、弁当を半分も食べないうちに立ち上がった。

「あら、そんなに残っているじゃない」

山口が瑞樹を咎める。

「食欲ないから」

と言い捨てると瑞樹は長い髪をなびかせて立ち去った。

バスは千歳の町を抜けると、森を両側に見るまっすぐな坂道をのぼるように走る。

道路の両側にうずたかく積み上げられた雪に最初はいちいち「スゲエ」と歓声をあげていた生徒も、

もう慣れたのか、バスガイドの説明を聞きながら、シートに寄りかかっている。

白樺やダテカンバがまじった白い幹が立ち並ぶ森の地面にもふっくらと白い雪が積もっている。

誰も踏んでいない新雪が惜しげもなく道路わきにある。

東京だったら、皆にまっさきに踏み荒らされてしまうだろうに、ここではそんな新雪など珍しくもないのだ。

一番前の二人がけのシートに一人で座る聡のもとにメールが届いた。

将だ。

＝＝＝＝＝＝

聡、北海道は初めて？

＝＝＝＝＝＝

さりげなく振り返ると、後方の通路がわ座席に座る将がさりげなく手を振った。

メールを送信すると同時にこっちを見ていたらしい。将の隣、窓側のシートの上から井口の金髪が見えている。

学校のみんながいる前で、大胆な気がしたが、

＝＝＝＝＝＝

学生時代のときに来たことある。将は？

＝＝＝＝＝＝

まあ差し障りはないだろう、と聡はメールを返信した。

誰も電波を傍受できるわけないだろうけど、スリルに聡は少しときめく。

将からの返事はすぐに来た。

＝＝＝＝＝＝

小学校のときに。夏だけど。

＝＝＝＝＝＝

聡は、『スキーは?』と続ける。

『初めて。聡は?』

『少しできるよ』

『じゃ教えてよ』

『研修で習うでしょ』

とバスの中、何食わぬ顔で二人、メールで語らう。

と、そんなとき。

「センセイ、葉山さんが、気分悪そうです」

と女生徒が声をあげた。

聡は携帯を閉じると、山口とともに後ろの瑞樹の席のほうへ向かった。

「バスに酔った?」

山口は瑞樹に問い掛けた。

青い顔をした瑞樹は、いかにも具合が悪そうに、うなづいた。

「吐きそう?」

瑞樹は首を苦しげに振った。

「とりあえず、前の席のほうが揺れが少ないわね」

山口に抱えられるようにして、瑞樹は運転席の後ろの席、すなわち、通路をはさんで聡の隣の席に移った。

とりあえず、山口に薬をもらって、できるだけ横になるように座席に落ち着く。その姿は聡が見てもつらそうだった。

ただ、ガイドによると、あと15分ほどで休憩所だというので、瑞樹にはしばらく辛抱してもらう。

思わぬハプニングでガイドが中断したが、窓の外をみてバスガイドはあわててガイドを続け始めた。

「みなさん。窓の右手に見えておりますのが支笏湖です。凍らない湖として知られていまして、凍るのはわずか50年に一度ということです……」

反対側にいた聡は、具合の悪そうな瑞樹の向こうの車窓を見た。

白い山々に抱かれるように、黒っぽい湖面がはるか一面に広がっていた。

９０◆修学旅行はじまる２

支笏湖は車窓に寄り添うように１０分ほど見えていた。

支笏湖と別れるとまもなく休憩所だった。ここで１５分ほど休憩がある。生徒たちは皆、先を争ってバスを降りる。

聡は目をつぶってシートに寄りかかっている瑞樹に、

「休憩所だけど、トイレとか、いっておかなくてもいい？」

と声を掛けた。瑞樹は聡の声など聞こえないように、そのままシートに顔を埋めるようにそむけた。

仕方ないので、聡は瑞樹を置いてバスを降りた。

広い駐車場の奥に、大きなログハウス風の土産物売り場があり、ラベンダーグッズや、ガラス細工のマスコット、ぬいぐるみ、菓子などが並んでいた。

奥の階下が、トイレになっているようだが、そのトイレが凄い。

自動ピアノの演奏が流れる広くてモダンなエントランスを備えている上に、洗面台には全面鏡がついて、パウダールームまである。もちろんトイレの個室数は充分にある。

おそらく、スキーバスのほとんどがここで休憩するのだろう。

店の表では、揚げジャガなどの軽食も売っており、生徒たちはそれ

をこぞって買った。

昼を食べたばかりで、かつ運動もしてないのに、さすが若い生徒の食欲は旺盛だ。

将も井口らと共にすでにそれを買って、雪だらけの駐車場でパクついていた。

「センセー！」

ダッフル姿の将は、まわりの目もはばからず、聡に手を振って呼んだ。

まあ将一人ではなく、他の男子生徒もいるからいいか、と聡は「なあに」といいながら近寄った。

「センセ、アーンして」と将は自らの口を大きくあけた。

「え？」

つられて口をあけた聡に、将は自分の爪楊枝で揚げジャガを聡の口に放り込んだ。

「熱ッ……！」

思いがけず、揚げたてのそれに聡は目を白黒させた。

「旨い？」

将はニコニコしている。

「はふ……んもう、口の中火傷しちゃったよ、おいしいけどさ」

あわてた聡は、文句をいいながらも「じゃあね」と手を振ってバスに戻った。

一緒にいた井口は、もはや慣れているのか、何も言わないが、

「いいな～、年上の彼女」とユウタ。

「あいかわらずラブラブだな～」とカイト。

それぞれひやかしながら将を軽くこづいた。

揚げジャガ売り場は、それを手に入れようとする生徒で、ついに行列が出来た。

終わりのほうの生徒は、その場で食べる時間がなくバスの中に持ち込むしかなくなった。

そのせいか、出発直前のバスの中は、揚げ油の匂いで充満した。

「みんな、揃ったー？」

伸び上がって、車内の人数を数える聡の横で、

「うっ！」

と瑞樹が口をハンカチで押さえて、まさに今、閉じようとしていたバスの入り口から外に飛び出した。

「葉山さん?」

聡は、瑞樹以外の生徒が皆揃っているのを数えると、運転手とガイドに

「ちょっと待っててください」

と断り、瑞樹の後を追い、トイレへ行った。あいにく看護士の山口は、行程の後半は、もう一台のバスに移ることになっていた。

瑞樹は、みかげ石調の洗面台に屈み込むように、咳き込んでいた。

聡は、教師としての責任感から、瑞樹の背中をさすった。

吐き気は強いようだが、吐瀉物はない。苦しそうなその唇からは白い唾液が吐き出されるのみだ。

「葉山さん、大丈夫?……看護士の山口さんを呼んでこようか?」

瑞樹は、洗面台の鏡ごしに聡を睨みつけた。屈み込んでいるので三白眼になっているその目は少女とは思えない鋭さだった。

「大丈夫……余計なことすんなよ」

それだけいうと体を起こして、今度はその大きな目で聡をじかに睨みつけた。

「目障りなんだよッ」

きれいな顔に似合わない汚い言葉を聡に吐き捨て、長い髪とコートをひるがえして、行ってしまった。

窓の外に蝦夷富士・羊蹄山の末広がりが見えていた。

空港近くを出発して3時間あまりが経過している。

途中まではゲームをしたりして盛り上がっていた車内の生徒たちも少し疲れたように窓の外の風景を見ている。

羊蹄山やニセコアンヌプリの白い山々を望みつつ、バスの周囲には、なだらかな雪原が広がっている。

そのだだっぴろい平坦さは、まさに北海道の景色だった。

あいかわらず晴れない白い空は、少しだけグレーに変わって夕方になりつつあることを示していた。

ようやく車窓に、山肌を白く削いだようなスキー場が見えてきた。

4つのスキー場が山頂でつながった巨大スキー場は早くもオレンジや緑のライトでゲレンデを照らし始めている。

それを見て、聡の気持ちは浮き立った。

荒江高校の一行が泊まるのは、そのうちの1つのスキー場に隣接するホテルで、生徒のスキー講習を担当するのは、地元の講師である。

その間、教師は、けが人対策など2人ずつ交代でホテルにいることになっているが、当番以外は自由休憩ということになっている。

滑りたければ滑ってもいいですよ、と自らもスキーをやりたい多美先生は言っていた。

明日の午前と、あさっての午後が自由時間だという聡は、北海道のパウダースノーをひさしぶりに目にして、うずうずし始めた。

まもなく、バスは、ホテルにたどりついた。

一足先にバスを降りた聡は、眠気を誘うほど暖かかったバスの車内とは、まるで正反対で、毛穴が引き締まるほどの冷気を感じた。

雪で覆われたホテルのエントランスは夕方を迎えていて、濡れた路面も固く凍っている。気温はたぶん氷点下なのだろう。

ガイドとともに聡は、降りてくる生徒に、滑らないよう注意をしながら、様子を注意深く観る。

体調が悪い生徒がいたら、ケアしなくてはならない。

葉山瑞樹は、バスを降りるなり、フン、とあからさまに聡から顔をそむける。

その様子だと、体調はよくなったようだ、と聡は少し安心する。

いちばん最後に降りた将は、突如にゅっと上半身を聡に近づけた。

聡は一瞬キスされるのかと、ドキッとした。

が、将は耳元に口をよせて、

「あとでデートしようぜ」

と素早く囁いた。聡が何か答えようと思ったときには聡に背を向けて、井口が待つエントランスへと走っていた。

県道沿いの集落やペンション街から離れているこのホテルは、平日はほとんど一般客の利用はなく、修学旅行生で貸切だということだ。

ただ、教師を含めて９０名弱の荒江高校だけでは満館にはほど遠く、同じ日程で他校の生徒など約２５０人も泊まるとのことだった。

しかし、もう１つの学校のほうは、地方の進学校とのことで、聡たち教師は胸を撫で下ろした。

ケンカやナンパなどの問題はおそらく起きないだろうから。

ちなみに、スケジュールや部屋割りもホテルのほうで配慮してくれている。

荒江高校一行は、中宴会場に案内され、そこで今後のスケジュールや部屋割りの説明を多美先生が行う。

部屋割りは、だいたい生徒たちの希望通りになっていたのか、生徒たちから文句もほとんどなかった。

ただ、将ら『問題児』と見なされている生徒は、ひと塊にすると何をするかわからない、ということで、

将とカイト、井口とユウタで分断され、それぞれ真面目な生徒と一緒にされた。

「なーんだ、寿司屋と一緒か。ヨロ～」

将は、一緒の部屋になった丸刈りの兵藤にニコニコと声をかけて、兵藤に迷惑そうな顔をされていた。

他に大人しい松岡が一緒だが、こっちはゲーム会社の社会見学以来、カイトと交流があるらしい。

特に問題なさそうな部屋割りだ。……実は聡が考え抜いた部屋割りだが。

１８時からの夕食は、レストランでのバイキングだった。

全面窓の外には、すっかり夜になりナイター営業するスキー場を望んでいる。

メニューは、フライや麺類といった無難なものにまじって、北海道らしく茹でた毛ガニやタラバガニが赤く盛り上がっていて、生徒たちはこぞってそれを取った。

最初は生徒を見守っていた聡ら教職も途中から生徒にまじって、バイキングに参加する。

「アキラセンセ、一緒に食べよ」

看護士の山口と一緒に席を探していた聡は、チャミら女子生徒に声をかけられた。

窓側からは

「センセー、こっちー！」

と将のバカでかい声が聞こえていたが、ここは女子の誘いを優先することとする。

すると、将は同室の兵藤や松岡を誘って女子のほうに移動してきた上に、ちゃっかり聡の隣に席をとってしまった。

最初、いきなり近くに来た将に驚いた女子も、兵藤や松岡が一緒だったので安心したらしい。

聡や山口がいたのも幸いして普通に話せるようになっていた。

高校生らしい生徒の中に溶け込んでいる将に安心した聡は、もう一度、教師の眼でレストランをみまわした。

さっきの休憩スポットでも感じていたのだが、たった８０人ぐらいなのに、同級生カップルが案外多い。

だいたいは、カップル２組ほどで席をとってダブルデートの趣になっているが、

中には大胆にも２人きりで、お互いの口に料理を入れあっている生徒もいて、聡は驚いた。

まあ『青春してる』んだろうから目くじらを立てる気は、聡にはない。

そんな賑やかな中、瑞樹があいかわらず隅っこでポツンと座っているのが見えた。

「センセ、アーン」

振り向くと将がハンバーグか何かをフォークで聡のほうに向けている。

「んもうっ」

と聡はフォークを持つ将の腕を握ると、

「ハイ」と将自身の口にそれを入れてやった。

看護士の山口が将のトレーを見て気付いた。

「鷹枝くん、カニ食べないの？」

「ああ、俺、あーいう、殻をむくようなもの苦手なんです」

「わかるー。でもさぁ、カニ自体は嫌いじゃないんでしょ？」

チャミが口を挟んだ。

「そうそう。カニはわりと好きなんだけど、殻をむくのが面倒くさいだけ」

と将は答える。

その答え方は、まるっきり普通の17歳、高2で、聡は安堵するような、でもどこかで胸がチクッと痛むようなそんな気がした。

「単なる面倒がりじゃん」

兵藤がシニカルに笑った。

「何だよー」

将は兵藤の皿から輪切りのトウモロコシを奪った。「あー！」兵藤が抗議の声をあげる。

「せっかく北海道なのに。食べなさいよ。美味しいわよ。ついでに持って来てあげるからさ」

聡は空になったトレーを持って席を立った。

テーブルとテーブルの間隔が広くあけられた『通り道』に出たとた

ん、前から走ってきた生徒にぶつかった。

「わ！」

聡は危うくトレーを落とすところだった。そんな聡を振り返ることなく走り去る長い黒髪。

瑞樹だった。瑞樹は、また気分が悪くなったのか、口を両手で押さえて手洗いのほうへ一目散に走っていったのだ。

「アキラ先生。彼女……つわりじゃないかしら」

いつのまにか聡の後ろにたっていた山口が、呟いた。

91◆月夜の逢引1

「あ、でも疲れが内臓にきているだけかもしれないし……」

こわばった聡の顔を見て、山口がフォローをいれる。

だけど、インクをたらした水のように、ひとたび聡の心に広がった得体の知れない不安は、消えなかった。

聡は、カニをてんこ盛りにした皿を将の前に置きながら、なぜか彼の顔に視線が粘りついたように離れなかった。

何も知らない将は、素直にカニを手にとり格闘している。

その、あまりの不器用さに、つい聡は

「もうっ。貸して！美味しいところを全然とってないじゃないっ」

カニを素早くかつ丁寧にほじくると、身だけを取り出した小皿を将に渡した。

「わーい、センセー、サンキュウ！」

無邪気に喜ぶ将。

それを見ていると聡には、とうてい彼が瑞樹を孕ませたとは、考えられなかった。

というより考えたくなかった……。

「えー、いいなー！」

うらやましがるチャミやカリナらの手前、聡は彼女らにもカニをほじくってあげるハメになった。

「先生、優しいですね」

山口が褒めるとも呆れるともなく言った。

食後、生徒たちは入浴時間となった。

その間、引率の教師らは簡単にミーティングを行い、それが終わると、消灯後の見回り以外は、教師としては自由時間になる。

しかし、聡は看護士の山口と同じ部屋だったので、自由時間になったといえど、

やれお腹が痛くなっただの、頭が痛いだの、と次々に部屋を訪ねてくる生徒がいて、部屋で落ち着くどころではない。

客室備え付けのバスルームもさっきから生徒に占領されている。

「生理中なんです」

と、大浴場に入れないという女生徒がひっきりなしに入りに来てい

るのだ。

ちなみに生徒たちは基本的に温泉大浴場を利用することになっている。

そのために生徒が泊まる客室の浴槽の水道栓は取り去られているという。これも修学旅行対応らしい。

大浴場も他校とバッティングしないように、時間が定められている。２０時までの１時間が荒江高校に割り当てられた時間となっていた。

それに入りそびれた生徒や、また同性の前でも裸になるのが恥かしいという生徒が『生理』軍団には入っているのだろう。

落ち着かないので聡は、１階のラウンジにいってみることにした。

そこには、荒江高校ともう１つの高校がいりまじって、何組かのカップルがジャージ姿

（生徒たちはホテル内はジャージと定められている）で思い思いにときを過ごしていた。

そこには、脱走防止なのか、多美先生ともう一人の教師がソファーで構えているのに、そんなことはカップルたちはおかまいなしのようだ。

ちなみに、そんな風に見張らなくても、今日このホテルに泊まって

いるのは修学旅行生だけ、

というのはホテル側もわかっているから、誰も外出させないだろう。

まして、外出したところで、このホテルのまわりは何もない。

２ｋｍほど離れた道道ぞいにいかなくては、民家もコンビニすらもないのだ。

目が合ってしまったので、多美先生ともう1人の教師に聡は会釈し、戻りがてら、売店で缶ビール2つを購入した。

ずっと『仕事中』が続く山口が飲めるかわからないが……。

もちろん自販機もソフトドリンクだけになっていて、ビールが買えるのは22時までしか開いていないこの売店のみだ。

むろん生徒には売らない。

所在無い聡は、スキー場への出入り口のほうへ行ってみた。

そろそろナイター営業が終わる頃……といっても今日、このホテルの客でナイターを利用する者もいるはずないのだが、自動扉は開いた。

聡はそこから外に出てみた。

ひやっとした空気が額に気持ちいい。

暑いばかりに暖房が効いたホテル内にいたから、外の冷気はなおさ

ら気持ちよく感じた。

しかし、気温は低いらしく、ゲレンデからのライトに照らされた吐息は白い炎のようだ。

まだゲレンデを照らすライトは明るいが、リフトも音楽も既に止まっている。

いまナイターが終わったばかりらしい。

上のほうには、別館へ続く連絡道コースが見えているが、そこからこっちに滑り降りてくる客はまったくおらず、

静まり返った中、冷気がしんしんと染みとおってきた。

館内に戻ろうとしたとき、携帯が鳴った。将だ。

「アキラ？いまどこ？」

「どうしたの、鷹枝くん」

いちおう教師モードで答える。

「いや、今、腹が痛いふりして部屋に行こうと思ったんだけど、いなかったから。どこにいんだよ」

聡は反射的にまわりを見回した。

誰も……教師はおろか生徒もホテル従業員も見当たらない。

ゲレンデ側は、ラウンジから丸見えだが、木立を背にするその反対側は、ホテル側からは廊下にあたり、ゲレンデ側から漏れてくるわずかな明かりだけで暗い。

聡は、さくさくと5センチばかり積もった新雪を踏みしめて、ゲレンデの反対方向に移動しながら、こっそりと今いる場所を将に伝えた。

電話を切ったとたんくしゃみが出た。

ジャケットを着てくればよかった、と後悔する。

「アキラー、どこだよ」

まもなく、将の囁き声が暗い中に響いた。現れた将は、ジャージの上にダッフルを着ている。

どこだよ、といいながら、目が暗さに慣れるやすぐに聡を見つけて駆け寄ってきた。

「滑るから、気をつけて」

と小声で聡が注意するそばから将は雪に滑って転んだ。雪の中での歩き方にまるで慣れてないのだ。

「いてて……」

「大丈夫?」

聡は駆け寄った。転んだ将を上から覗き込もうとして

「キャ」

将に引っ張られて、将の隣の雪の上に転がった。

二人、新雪の上に寝転がる形になった。

「冷たあーい。もう将ったら」

セーターにジーンズの聡はすぐに身を起こしたが、将は

「みろよ、満月だぜ」

寝転がったまま指差した。雪雲が割れてそこに満月が顔を出した。

「ほんとだ……」

月はあたりの雪を青白く照らし、驚くほど明るくなった。

空はコバルトブルーに変わり、雑木林の木立のシルエットが映る。

なのに雪は、相変わらずどこからともなく、ちらちらと落ちてくる。

満月に照らされて、その六角形の華が見えるようだ。

目をこらすと、あたりの新雪の表面も、雪の華そのままの形が無数に重なっているのだった。

それが月の光をうけてキラキラと煌めいている。

ぞっとするほど美しい、北国の冬の満月の夜。

そして、将はあたりの雪と同じように青白く浮き上がった聡の横顔を見ていた。

炎のような形で吐く息の白さが、まわりの冷たい世界と異質な、命の……躰の熱さを想像させる。

月にみとれる聡の腕を、将は寝転がったまま、引っ張って肩を抱き寄せる。

そして、将に許された部分である唇に自らの唇をあわせた。

聡は将に乗っかるような形で抱きしめられた。

将のぬくもりに包まれながら、交わす唇も温かくて、聡は寒さを忘れた。

将は聡の口の中に舌を派遣してきた。

唇をあわせるだけかと思ったのに、濃厚なディープキスになって聡はあわてて唇をはずす。

唾液で湿った唇がキーンと冷たい。

「口の中のヤケドはたいしたことないみたいだな」

と将は月の光の中で微笑んだ。いたずらっ子のようなおなじみの笑顔だ。

さっきの揚げジャガのことを言っているのだろう。聡も思わず、笑みがこぼれた。

92◆月夜の逢引2

「将、ここで、この態勢はヤバくない？　廊下から誰かがみてたら……」

「大丈夫。暗いからずっと見てなきゃ見えないよ。廊下から外なんてそんなに長いこと見るわけないし」

「でも……」

「心配性だな」

将は聡を抱いたまま、体を起こした。

「俺、聡に乗っかられるの好きなのに」

将は立ち上がると、同じように聡の腕を引っ張って立ち上がらせた。聡についた雪を払ってくれる。

「なんで？」

「おっぱいがここにあたるから」

ニヤッとして、自分の胸のあたりを示す。

「んもー、エッチ」

といって、将のぬくもりから離れた聡は、寒さにくしゃみを連発した。

「ほら、おいでよ」

正月に、実家の萩近くの日本海へドライブしたときのように、将はダッフルの前をあけた。

ただ、あのときと違うのは、向かい合っていること。

聡は、ダッフルの中の将にぎゅっと抱きついた。そんな聡を将はダッフルですっぽりと包んだ。

聡がもはや慣れ親しんだ、干草のような将の匂いがする。

「あったかい……。将、湯冷めしてない？　大丈夫？」

ダッフルの中から首を出して将を見あげる黒目がちの聡の瞳は、将にはなんだか子犬のそれのように見えた。

将はいとおしさでいっぱいになって、聡の背中をそっとなでた。

「ああ、今日面倒だから風呂省略した」

「ヤダー、不潔ー」

といいつつ聡は将から離れない。

そういわれてみれば、いつもより匂いが少し強い気がする。

でもそれは、もはや、将の虜になっている聡にとっては、アロマだった。

将の背中に腕をまわして、胸をぎゅうっと押し付けながら、いつもより強い将の香りを吸い込んだ聡は、くらくらするような幸福感に酔った。

ここのところ、このアロマで聡は眠っている。

実は。４日に東京に帰ってきてから、将は毎晩のように聡の家に通ってきていた。

そして、そのまま朝まで二人はベッドの上で抱き合って眠った。

もちろん、聡が禁じたから、抱き合ってキスする以上のことはしない。

だけど、将の息づかい、鼓動、ぬくもり、におい。

それらにくるまって眠る聡は、充分すぎるほどの幸せを感じていた。

女の聡は、それでいい。あれこれしなくても、腕の中にいるだけで、恋の幸せに陶酔できる。

しかし、若い男である将のほうは、それで平気なのだろうか。よく我慢している、といつも思う。

と、口に出して一度言ったら、

「ぶっちゃけ、来る前に、何回も抜いてきてマース」

と照れながら口にした。

あのとき聡は、赤くなって『もー！』とか言いながら将を叩くふりをしたと思う。将はそんな聡に

「だって、男の子だもん」と某アニメソングのセリフを真似しておどけたはずだ。

聡は、ふとそれを思い出していた。

聡がそれを『おあずけ』にしているから、将は仕方なく自慰行為で発散しているのだろう。

では、あの葉山瑞樹と付き合っていた頃は？

井口は彼女を将のセフレだといっていた。当然、彼女とそういう行為を何度もしたのだろう……。

聡は将を見上げた。

将は聡が顔をあげたのに気付いて、聡の髪を撫でながら、柔らかい目で聡を見つめた。

冷気で氷の糸のようにひんやりとしていて、将は手を少しだけひっこめたくなった。

髪ほどではないが、月明かりの中に浮かんだ聡の顔は、将と抱きあっているのにはそぐわない真面目な表情を浮かべているのに気付いた。

「将……。ちょっと訊きたいことがあるんだけど」

「なぁに」

「葉山瑞樹さんのことなんだけど」

「ハァ？」

将は眉根を寄せた。白い息と共に吐かれたのは疑惑か？

こんなロマンチックな月明かりの雪の中で、聡はどうして、そんな話題を持ちだすんだろう、

と一瞬恨んだが、疑いだとしたら晴らさないといけない。

「もう、俺、アイツとは無関係だぜ。マジで」

「あ、そうじゃなくて。それはもうわかってる」

もともと、もう今も続いているとは思わないが、不機嫌な顔をした将を見て、聡はとりあえず安心した。

「でさ、いつまで、葉山さんと付き合ってたの？」

「付き合ってないってばー、もー」

将は心底、嫌そうな顔をした。

「……でも、セフレだったんでしょ……」

「アキラ、もしかして、嫉妬してる？」

将は、こちらを向いたままの聡を抱いた腕の力をさらに強めて、自らが吐く白い息がかかるほどに、聡の顔に自分の顔を近づけた。

「嫉妬してくれるんだったら、スゲー嬉しい。だけど……もう昔の話だから」

そういうと、将は再び聡の唇に自分の唇を押し付けた。

ひとしきり、口づけをかわす。口づけのあいまに漏れる息が思いのほか白く照らし出される。

が、聡は唇をふい、と離した。

「いつまで、関係、があったの？」

将はガクッとなった。

「ごめん、将。嫉妬とかじゃなくて、ちょっと知りたくて。……教師としてサ」

最後の、『教師としてさ』のあたりは、完全に教師の口調だった。

「なんだよー」

将は、ガッカリというか、安心したというか。

それにしても、青い月夜の、こんなにいいムードのときに、そんな話題を持ち出す聡を少し恨んだ。

「だって、彼女、前原くんの、あの事件もあったし。絶対、修学旅行なんか来なさそうなのに、具合悪いのを押してわざわざ来てたから。それに……」

聡は、瑞樹の『つわり』疑惑のことを言いかけて、ハッとした。

「それに、何？」

聡はあわてて、

「う、ううん。謎が多いコだな、と思って。将だったら……、彼女のことを何かわかるかなと思ったの」

と誤魔化す。さらに

「ホラ、私いちおう、担任じゃない？」と付け加える。

将は、まだ軽く自分の体に腕をまわしたままの聡に安心した。

「さあ、……なんか家庭がフクザツらしいぜ。再婚した新しいオヤジに迫られてるから帰りたくないとか、言ってたかも」

「ええっ！義理のお父さんに？　迫られてるってこと？」

聡は将の腕の中でもう一度顔をあげて、目を見開いた。

「うん。だから家にできるだけ、いたくないって俺んちに入り浸って……」

将は言いかけたまま、目をそらした。

瑞樹が入り浸っていた、ということから、将と関係があったことを聡にはっきりと連想させたくないのと、

そんな不びんな瑞樹を追い出した罪悪感が、いまさらながら、ちりりと将の心を引っ掻いたからである。

「ふうん……」

聡は将に抱きついたまま、やはり視線を将の顔からそらして横に向けた。

静寂が二人を包んでいたが、二人は別々のことを考えていた。

「だけど、アキラ」

聡を呼び戻したのはやはり将だった。

「信じて。俺、もう、本当にアキラだけなんだ」

将は目を見開くようにして、聡を見つめた。何かを請うような必死な表情だ。

「それに……だいたい9月3日以来、アイツとは1回もやってない。本当だよ」

「9月3日ぁ？　なんでそんなこと覚えてるの？」

聡はあまりに具体的な日にちが飛び出したことになんだか可笑しさを覚える。

「だって、アキラと学校で初めて逢った日じゃん」

「そうだっけ」

「そうだよ！そんで、アキラと初めてキスしたのが８月３１日」

そうだった。弁当屋のバイト最後の日。

「そうだったね。東大生の山田さん」

聡が微笑んだのに将はホッとして、また聡の体をきつく抱きしめた。

「俺……、アキラ以外の女なんか、一生いらない」

それは聡の瞳に誓うようだった。澄んだ真剣な瞳に捉えられ、聡は身動きができない。

互いの白い吐息が交じり合うほどの至近距離で、二人は見つめあった。

「そんなこと言っちゃっていいの……？」

余裕で茶化すつもりが喘ぐような確認になってしまった。

将は答えるかわりに、聡にあらためて、くちづけしようとした。そのとき、

「そこに、誰かいますかー？こっちのドア施錠しますよー！」

とホテルの従業員らしき男の声がした。

「ヤバ」

二人は顔を見合わせると、舌を出して笑った。

そして、ホテルの出入り口のほうへあわてて走った。

教師と生徒に戻った二人は、ホテルの中に入ると何食わぬ顔をして別れた。

もう消灯時間ギリギリだった。

聡が買ったビールは、凍ってシャリシャリになってしまっていた。

93◆スキー研修

スキー研修第1日目は快晴に恵まれた。

セルリアンブルーの空の下に、ゲレンデはまさに眩しいばかりの白銀で生徒達を待っていた。

ゴンドラで一気に1000m昇った山の上からは、樹氷ごしの真正面に羊蹄山の雄姿を望むはずだった。

しかし。

ほぼ全員がスキー初心者という荒江高校の生徒たちにとって、まずは、そのゴンドラにのるどころの話ではないのだった。

将は、兵藤や松岡ら男子生徒10人ほどのグループで並んで、『スキー板で斜面を登る練習』をさせられていた。

ブスッとした表情は、修学旅行生お仕着せの黄色いウェアにゼッケンがダサいからというのもある。

傾斜が目に見えないのに、勝手に滑り出すゲレンデに辟易していたというのもあるし、

「ほらー、そこ！後ろに滑らないでェ！」

マッチョなのになんだかカマッぽい講師もキモかった。

しかし、一番の原因は聡がいないからだった。

昨夜、別れたあとも将は布団の中から聡にメールを送信していた。

聡からはチャットのように即座に返信が帰って来た。

『聡、明日、オレたちがスキーやってる間、何するの？』

『久しぶりにスキーやろうかな、とか。天気次第かな』

『じゃ、一緒に滑ろうよ』

『将はスキー初めてじゃないの？』

『すぐ滑れるようになるさー』

『そうかなー？』

『とにかく、待ってろよ』

『わかった』

と言ってたはずなのに、将たちがグループにわかれて、スキー靴の履き方などを指導されている間に、

聡ときたら、さっさとどっかに行ってしまったのだ。

斜面を横歩きで登ると、次は緩い斜面を、スキーをハの字にして滑って止まるという講習になった。

このようにして文字で書くと簡単だが、初心者にとっては、なかなか難しいのだ。

一番手の兵藤は難なく出来たので、簡単そうに見えたのが間違いだった。

次の男子が止まらずに前のめりに転んだのを皮切りに、皆止まらないわ、転ぶわで、皆雪まみれになっていた。

将の前の、松岡などは、

「うわあああああ」

と叫んで、止まらないまま、終わった男子の列に突っ込んでいた。

すると突っ込まれた男子が、また後ろに滑り出すわ、止まらないわでパニック。

少し離れたところでは、女子が同じ講習を受けていたが、小柄でぽっちゃりとした真田由紀子が同じく止まらずに、悲鳴をあげていた。

それを女子を担当する若い講師が、なんとか止めようと正面から由紀子の腕を受け止めるも、

由紀子は講師の腕を掴んだまま、恐怖のあまりスキー板の上でしゃがんでしまい、なんと講師の股の下をくぐって滑っていってしまった。

そう、まるで、７０年代後半のダンス映画で見られたあのポーズを雪上でやってしまったのである。

見ていた将は、ぶっと吹きだして、腹を抱えて大笑いしてしまった。

と、笑ったはずみに、今度は将のスキー板が動き出した。

――やべ！止まらねえっ！

あせった将は、どうやったらスキー板が止まるかを今習ったことなどすっかり忘れてしまい……板を揃えてしまった。

よけいにスピードをあげるスキー板。その先にはマッチョ＋ゲイ（？）講師がいる。

「うわあああああ！」

激突。

将は一瞬わけがわからなくなった。気がつくとマッチョ講師の上に将がのっかっていた。

「スキーは揃えちゃ、ダメって言ったっしょぉ。イケメンくん」

髭を剃った跡が青く見えるほどの色白に、サングラスがはずれた、将を見る目がなんだか甘い。

――まさかマジでゲイじゃ……。

「す、すいませんっ」

将は飛び起きようとしたが、慣れないスキー靴のせいで、なかなか起きれない。

そこへ。

上のほうの急斜面から、ものすごいスピードで滑ってくる女がいた。

女だというのは、2つに結んだ髪が肩で揺れていてようやくわかったぐらいで、ダイナミックな滑りは、しばらく性別がわからなかったほどだ。

急斜面ではきれいに波状のカーブをリズミカルに刻んで、緩斜面では、スムーズに大きなカーブを素早く描く。

その女は、背の高さほどまでに雪しぶきをあげて、将たちのグループの前で止まった。

顔の半分がゴーグルで隠れていたが、ファー付フードの、あのメタリックなジャケットは疑いない。

ゴーグルを顎の下にずらして現れた顔は、まぎれもなく聡だった。

「先生！」

「スゲエ！」

そこにいた、黄色一色の生徒から歓声があがった。

色白のほっぺたをリンゴのように赤くした聡は、笑顔の下で白い息をしきりに吐いた。

将は、講師と抱き合ったまま、呆然と聡を見ていた。

「上から一気に滑ってきたから、さすがにキツイ……あら、鷹枝くん」

聡はマッチョ講師と雪の上でからみあう将に気付いた。

「わーっ、アキラ、違う」

あわてる将を、マッチョ講師は、落ち着いて、えいっと一気に立たせた。

はずれたスキーを将に履かせながら、さっと自分のスキーをたてなおすと

「先生、上手ですねー！何級か持ってるんですかぁ？」

すいっと滑って聡の隣に並んだ。

「いや、特には……。ここんとこ、ずっとボードだったから感覚狂っちゃって」

と聡は答えながら、将を見た。

将はスキー靴の裏の凹凸に雪が入り込んだのをストックでしきりに叩いている。

「いやいや、なかなかですよぉ！もうリミテッドは行きました？」

リミテッドというのは、このスキー場でもっとも難しいといわれる上級者コースである。

「まだまだ、足ならしですから……」

将は、なかなかうまくはまらないスキーにいらいらしながら、聡とマッチョ講師の会話を聞いていた。

聡がそこまでスキーが巧いとは……なんだか悔しかった。

聡は休憩がてら、しばらく講習のようすを見学していた。

ほとんど平らなところなのに、皆、面白いように滑って転ぶのが微笑ましい。

ふと女子のほうを見た。

男子と一緒の黄色いウェアに身を包んで、2年2組の女子はすぐ近くで講習を受けていた。

その中に、長い黒髪をなびかせて、おそるおそる滑る瑞樹の姿があった。

身ごもっている女が、スキー研修など受けるはずがない。

彼女……瑞樹が妊娠しているはずがない、と聡は心で断定し、安心した。

聡はしばらく講習を見ていたが、暇なので、また滑りに行くことにした。

上で接続する他のスキー場にも行ってみたい。

「じゃあ、みんな頑張ってね」

と皆に声をかけた聡は、最後に将を一瞬見つめた。

そして、声にださず『がんばって』と口を動かすと、ストックを後ろに投げ出すように、行ってしまった。

緩斜面なので、ステップを踏むように軽やかに片足ずつ滑っていく。スケートのようだ。

将はそれを、真似して追おうとして、勝手にスキーが滑ってまた転んだ。

スキップするように滑っていったはずなのに……。

「くっそぉ」

大またを開いて雪に尻餅をついた将は、とても悔しかった。

転んで、起き上がって、を繰り返して雪まみれになっているうちに、午前中の講習が終わった。あっという間だった。

マッチョ講師と別れて、ホテルにいったん引き上げようとした将たちは、ゴンドラ乗り場の入り口のところにいる聡を見つけた。

「センセと話してるのガイジンじゃん」

井口がいうとおり聡は、背の高い金髪の外国人の男性と談笑していた。

「やっぱり先生、英語うまいね」

立ち止まる将に、兵藤がすれ違いざまに話しかけていく。

将は、嫉妬にかられて、板をかついで聡のそばにズカズカと歩いていった。

自分でも気付いていないが、将は雪道の歩き方に、いつのまにか慣れていた。

聡は将に気付くと、外国人男性との会話にケリをつけて、最後に

「バイ」

と軽く手を振って別れると将のそばに戻ってきた。

「『バイ』だって」

将は聡の口真似をした。

「何、ガイジンにナンパされてんだよー」

将は、怒ったふうを見せた。本当に怒っているわけじゃないが、さっきから聡には少しムッとしている。

「ナンパなんかじゃないわよ。さっき偶然ゴンドラで乗り合わせた人だったから」

「何人？」

「オージーだって」

最近、北海道のスキー場は、オーストラリア人がとても多いのだ。

「で、何話してたんだよ」

「いや、頂上に行きたいけど、どうやって行くか知ってるかって」

「頂上とか行けんの？」

「うん。一番上のリフトに乗って、隣のスキー場にいったん行かないといけないんだけどね。山の向こうの日本海とか見えてキレイだよ」

やっと止まれるようになった将には遠い話だ。

「ところで、どこまで出来るようになった？」

「やっと止まれるようになった」

将はブスッとした顔のまま答えた。あまりに聡とレベルが違いすぎるのが面白くない。

「面白いでしょ？」

「……まあな」

素直に考えれば面白かった。なにせ雪自体が珍しいのだ、滑っても転んでも突っ込んでも楽しい。

スピードが出すぎてしまうのも、車やバイクに乗る将にしてみればどうということはない。

たぶん、すぐ制御できるようになりそうな気がする。

しかし。このいらだちは。あきらかに聡とのあまりのレベルの違いに落胆しているほかならない。

聡はやはり、９歳年上、スキー経験も豊富な大人なのだ、という事実を将は改めて突きつけられる。

94◆女生徒たち

「チャミ、お尻に青アザできてるよ！」

「ゲー、ヤダぁ！　きっとさっき板の上にコケたときのだー」

食後の温泉大浴場は、昨日より多くの生徒で賑わっていた。

スキー研修・初日は、特にケガ人も出ず、晴天のうちに終わった。

天気がよかったせいか気温は温かめで、研修は汗ばむほどだったのと、

夕食のジンギスカンで付いたラム肉の臭いを洗い流したい、というので、昨日風呂をサボった生徒も今日はこぞって大浴場を利用していた。

「あ、アキラ先生だ」

聡はタオルを胸の前にあてて、女生徒たちの嬌声で賑わう大浴場に足を踏み入れた。

客室のバスルームを生徒に占領された聡も、昨日は結局風呂に入りそびれたのだが、今日はそうはいってられない。

今日も自室のバスルームは『生理』軍団に占拠されているので、聡はあっさりと生徒たちと一緒に大浴場を利用することにしたのだ。

石張りで広い温泉大浴場は、外に露天風呂があることもあり、荒江

高校・２クラスの女生徒３０人あまりがいっぺんに入っても、それほど窮屈ではない。

浴槽に満ちる少々褐色に濁った温泉の湯がいかにも気持ちよさそうだ。

聡は生徒たちに笑顔で声をかけながら、洗い場のカランの前に腰を下ろした。

「すっげー、ナイスバディ」

浴槽にいたチャミ&カリナの声が揃ってしまった。

「ボン、キュッ、ボンの見本みたいな？」

「エロイよねー」

女風呂では、あまり体を見ないようにする、という暗黙のエチケットがあるのだが、

チャミ&カリナはそれをすっかり忘れて、洗い場で泡だらけになっている聡の体を浴槽から観察していた。

「巨乳だったらサ、うちらのクラスのトモちゃんとか、１組のサユリとか、もすごいけど、

センセーの場合、ウエストが細っ！それにあんなに胸でっかいのに、腕とか折れそうだしー」

スタイルの観察は女同士のほうが、シビアである。

まもなく、聡が体を洗い終わったのか、浴槽に沈む二人のほうにやってきた。

「センセー、巨乳～ぅ」

「もー、どこみてんのよ」

聡は笑いながら、でも女同士なので特に隠すこともなく、裸体を温泉に沈めた。

浴槽に入ってしまえば、少々濁り気味の湯で、体の詳細は見えなくなる。

「おっぱいが浮いてる～」

聡の豊かな乳房は、柔らかなその上半分を丸い形で、濁り湯に浮かべていた。

聡にとってはいつものことだが、チャミ&カリナには珍しいらしい。

「ホントだ、すごーい」

「いつそんなに大きくなったんですかー?」

「それ知りたい!それと今何カップ?」

バストについて聡に質問攻めするチャミ&カリナだった。

バストの大小は女の子にとっては、死活問題といってもいいほどで、

興味があるのだ。

「高2ぐらいのときは、アナタたちより小さかったわよ」

と、答えつつ、聡はいつこんなに成長したかを思い出して、赤くなる思いがした。

親ゆずりではあるけれど……やはり、『経験』してから格段に大きくなったと思う。

高2の最初はやっとBカップだったのだが、高校を卒業する時は2ランクも成長していた。

揉まれたウンヌンよりも、その行為で、女性ホルモンが活発に出るようになったからだろう。

ちなみに、今は卒業時よりさらに成長しているのだが……。

「ところで、よく筋肉もんどいたほうがいいわよ。特に腿とか」

なまめかしいことを思い出しそうになった聡は、話題をバストから逸らすべく、話の流れをぶったぎって、無理やりアドバイスを始めた。

そのあと聡はチャミ&カリナに誘われて、職員ミーティングのあと、女生徒の部屋で行われるトランプに参加することになった。

女生徒の誘いは、聡にとって胸がジンとするほど嬉しいものだった。

こんなとき、教師冥利につきる思いがする。

スウェットに着替えて、ラウンジで行われる職員ミーティングに参加しようとしていた聡のもとにメールが入った。将だった。

『あとで、また昨日の場所で会おうよ。二人で』

とある。聡は、

『ゴメン。今日は、女の子たちにトランプに誘われたからパス』

と、それに嬉しいという意味の顔文字を添えて返信した。

特にけが人もなかったということで職員ミーティングは『明日も気を抜かないようにしましょう！』で終わった。

「アキラセンセー、こっちだよ」

ミーティングが終わって解散した聡は、ちょうど廊下をいくチャミ&カリナに声をかけられた。

トランプはどうやら男子の部屋でやるらしい。

実は、聡からメールを受け取った将が急遽、セッティングさせたのだ。

将が直接召集すると緊張するだろうから、女子の受けがいい兵藤に客室間電話で誘わせる。

兵藤はパシリをさせられたことにブツブツいいながらも、イベントの内容自体は賛成だったのか、

まんざらでもなさそうに女子の部屋に電話をしていた。

廊下を行く女子たちは、あきらかにワクワクしていた。

毎日のように顔をあわせている男子でも、こんな風に夜、畳の部屋で遊ぶのは、ちょっとだけスリリングなのだ。

修学旅行の夜、男女混じってトランプなどで遊ぶのは、お約束のようなものだろう。

そういう気持ちに覚えがある聡は、まあ不純異性交遊するわけじゃないし、トランプだけだし。

自分もついてることだからまあいいか、と黙認した。

トランプの『会場』となった一番広い和洋室・６人部屋には、すでに多くのジャージ姿の男女生徒が集まっていて、チャミやカリナに聡を入れると、全部で１６人になった。

よくよく聞くと、カップルに部屋を明渡したらしい。

「ちょ、それって不純異性交遊！」

それを聞いて、教師としてさすがに止める立場にある聡は、いきり立ったが、

「まー、いいじゃん」

と生徒たちにたしなめられた。きわめつけに、将に、腕を掴まれて、

「本気で愛し合ってんだし、不純じゃないじゃん。ね？」

と瞳を見つめられて、さらに『俺たちだってサ』と耳元で囁かれて、聡は何も言えなくなった。

こんなふうに丸め込まれるなんて、教師失格……と聡はため息をついた。

生徒たちのほうは、すでにトランプのほうに意識が行っている。

「人数多すぎじゃなーい？」

「トランプ2つ混ぜて使えばいいよ」

「てか、ちょうど男女同数だからペアになったらいいよ」

と提案したのは将である。もちろん聡とペアになるのを狙っている。

ペア案にみんな賛成したので、クジでペアをつくる。

しかし、クジは平等に、と男女別につくってそれを合わせるようにしたので、将の企みは見事はずれた。

聡は兵藤と、将は真田由紀子とペアになってしまい、将はがっかりした。

トランプ2つを混ぜて、大富豪ゲームを始めたのだが、トランプが2つ混ざるとなかなか難しい。

順番が回ってくるたびにペアでの作戦談義が行われる。

扇のように広げたトランプの前で、顔をよせあって仲良くあれこれ相談している丸刈りの兵藤と聡を見るにつけ、将は面白くない。

将の相方の真田由紀子は大人しく、将が何かを相談しようと声をかけるたびに、そのおかっぱの丸顔を真っ赤にしてうつむいてしまう。

将は、さっきのスキー研修中、『ジョン・トラボルタ』出演映画のように、

由紀子が講師の股のしたを潜り抜けた様子を思い出して、笑いがこみあげそうになった。

それを必死でこらえていたせいか、よけいにクールな態度になっていたかもしれない。

さて、ゲームのほうは、配られたカードにツキがなかったのか、将&由紀子チームと、聡&兵藤チームが最後に残った。

切り札を隠しているのかを窺いながらの攻防戦となった。

しかし、将一人で考えているような将組である。

軍配は聡&兵藤チームにあがった。

「ヤッター！」

手を取り合って大貧民にならなかったことを喜ぶ聡と兵藤。

「くっそお」

負けた将は、頬を膨らましながら、大量になって繰りにくいトランプを繰っていく。

負けた者が次のゲームのトランプを配る役目になっている。

ちなみに最後にする罰ゲームは、大貧民と大富豪による王様ゲームだ。

今、大富豪は井口&チャミ組である。このままだと何を命令されるかわかったもんじゃない。それに元来、負けず嫌いの将である。

次こそ大貧民は脱出したいと、トランプを念入りに繰った。

そんな将の横にいた由紀子が、蚊の泣くような声で

「ごめんなさい」

と謝った。将は一瞬キョトンとした。由紀子は丸顔を真っ赤にさせて泣きそうになりながら、

「……ごめんなさい。私のせいで……」

と視線を下に向けていた。

「ハァ？」

将は、なんで謝られるのか本当にわからなかったが、泣きそうな由紀子が可哀想になり、

なるべく優しい声で

「ユキコのせいじゃないよ。気にするな」

と言ってやった。

「でも……」

下を向いた由紀子の目から、ついにポタポタと涙が落ちてジャージの腿に染み込む。

皆が由紀子の異変に気付いてシーンとなった。

固唾を飲んで動向を見守る。聡は、教師として何か、由紀子に声をかけようとしたが、その前に

「ほら、泣くなよ。ユキコ、な？」

と将が、由紀子の頭をくしゃくしゃと撫でた。

由紀子はビクッと体をふるわせて、目を真ん丸く見開いた。顔がさらにカーッと赤くなる。

「な、なんだよ」

由紀子の反応に将のほうが面食らっている。

ウブな由紀子は、男子に……しかも将に頭を撫でられて、本当にショックだったのだ。

クラスで一番大人っぽくて近寄りがたい『イケメン』の将に。

由紀子は、どうしていいかわからなくて、ついに、嗚咽を始めた。

「あー、将が真田を泣かせたー」

「なーかせた～」

井口やカイトが、小学生のようにはやし立てる。

「えー、何、俺のせい？　もー、泣くなよぉ、ユキコォ」

将は頭をかいたり、由紀子の顔をのぞきこんだりして、弱り果てている。

あわてる将が可笑しくて、聡はクスッと笑った。

その騒ぎの中、客室の電話が鳴る。

電話をとった聡に受話器の向こうで、看護士の山口の

「アキラ先生、ちょっとお話があるんですけど」

という声が聞こえた。

部屋が騒がしいので、意味を聞き取るだけでせいいっぱいだったが、なんだか深刻な声に聞こえた。

聡は、隣にいた相棒の兵藤に「ちょっと呼び出されたから行ってくるね」と断って、部屋を出る。

山口はなぜか部屋の前の廊下で聡を待っていた。

「アキラ先生、ちょっと……」

聡の姿を見つけると、声をひそめて手招きした。

「よかった、今ちょうど、生徒がお風呂から出てくれたところなんですよ。次の生徒は入れてません」

唯一客室のバスルームが使える聡と山口の部屋は、一人で風呂に入りたい生徒が交代でやってきていたのだ。

山口は部屋のドアを開けると、あたりを用心深く見回すようにして、

聡と一緒に客室に入った。

聡と山口の客室は和洋室になっているのだが、和室のほうに床が延べられて、ショートカットの女生徒がそこで眠っていた。

聡は、最初、それが誰だかわからなかった。

が、窓側のソファに置いてある長い黒髪のウィッグを見つけ、驚いてもう一度その寝顔を見た。

それはまぎれもなく葉山瑞樹だった。

「彼女、やっぱり妊娠しているそうです……。3ヶ月めだとか」

山口は重い口調で聡に告げた。

95◆敵意

聡は何と答えるべきかわからず、

「3ヶ月、ですか……」

と聞いたことを反復するしかできなかった。眠っている葉山瑞樹のほうに視線が行ってしまう。

離れているのに、閉じた瞳を黒く長い睫がふちどるのが見える。わきに制服が畳んで置いてある。……おそらくホテル備え付けの浴衣を着ているのだろう。

「……葉山さんが自分で言ったんですか？」

次の言葉が出てきたのは、ずいぶん間があいてだった。

山口は「ええ」と頷いた。

瑞樹は、今日の夕食を食べることができなかった。

レストランに入ったとたんに充満していたジンギスカンの匂いで吐き気をもよおしたのだ。

それは聡も知っていた。

だからレストランに頼んで、あっさりとしたメニューを部屋に届けさせたはずだ。

ジンギスカンがダメな生徒は他にも何人かいて、皆に同じ対応をしていたのだ。

「ええ、でも私、昨日からちょっとおかしいと思ったんで、みんながお風呂に入っている間に、

葉山さんにこっそりと訊いてみたんです。一人でいたんで……」

山口はソファに腰掛けながら話を続ける。

「そのときは、何も言わなかったんですが、あとで彼女のほうから部屋に来たんです。それで打ち明けてくれたんです……」

「そうですか……」

聡も山口の向かいに腰を下ろし、自分の膝の上に頬杖をついたとたんにため息が出た。

3ヶ月。

12月、11月、10月。

妊娠経験のない聡は、『3ヶ月』の言葉どおり、3ヶ月前に遡った。

10月頃、瑞樹は身ごもったことになるのだろうか。では誰の子を。

将は……違うだろう。彼ははっきりと『9月3日以来彼女とはヤッてない』と言っていた。

しかし、なぜ胸騒ぎがとまらないのだろう。

１０月頃、自分たちの関係はどうだっただろうか。将と聡の関係は。

聡は初めて、苦い思いで将との思い出をたどる。

「先生、大丈夫ですか？　顔が青いですよ」

山口がうなだれる聡に声をかけた。

「先生の責任というわけじゃ、ありませんから。最近の若いコにはよくあることです」

聡の様子を、担任教師としての責任感に由来するものと捉えたのか、山口はそんな慰めの言葉をかけた。

「お茶でも淹れましょうか」

山口は気を利かす。

「あ、私が……」

立ち上がった聡は、まだ山口が風呂を済ませていないことに気付いた。

「山口さん、せっかくですから、バスルーム使ってください。また、生徒たちが来たら、しばらく使えないでしょう？」

ようやく、気を遣うと共に、微笑をつくることができた。

しかし、それは上出来とはいえない固い顔だろう、というのは自分でもわかる。

「そうですね。じゃあ、お言葉に甘えて」

山口は柔らかい笑顔で答えると、手早く支度してバスルームに消えた。

残された聡は、窓辺に寄ると、外を観るともなく目を暗闇に泳がせようとした。

しかし、客室が明るすぎるのか、ガラスは聡のうかない顔と、その奥に眠る瑞樹を映し出した。

聡は、カーテンを閉めると、所在無く、テレビを付けた。

寝ている瑞樹に配慮して音量は絞る。どこかで天気予報でもやっていれば、と思ったのだ。

しかし、タイミングが悪かったらしく、まだしばらく待たなくてはならなそうだ。

聡は、そのまま、バラエティ番組を映し出すテレビをつけたままにして、ソファに腰掛けた。

囁くようなボリュームで聞こえる芸人やタレントの笑い声は、本来の役割である『賑やかし』を果たすこともできず、空虚に響く。

聡は再び、３ヶ月前に思いを馳せる。

将は、最初から聡への好意をあからさまにしていた。

9月にデートをして、告白されて……何日もしないうちに手を握りあって歩いたはずだ。

聡の脳裏に、夕暮れの海やフランス料理店、東京湾岸の夜景が次々と鮮やかに蘇る。

こんな状況で思い出しているのに、思い出は聡の心を温かくさせる。

それから、週1ぐらいで夕食を共にするようにしていたはずだ。10月といったら、その頃だ。

あれは、宣言はしてないものの、『付き合って』いたようなものではないのだろうか。

聡の心に、『アキラー』と呼ぶ将の声がリフレインする。明るい声、むすくれた声……そして囁き声。

『アキラ、愛してる』

たった今、囁かれたようにそれは鮮やかだった。思い出は、思わぬ涙を連れてきて、それは頬を伝った。

聡は、急に湧き出た涙を手でぬぐって、考えを先に進める。

ああいう状況で、将が他の女を抱くとは、やっぱり考えられない。

だから瑞樹のお腹の子は、将の子ではない。

聡がそう結論付けたとき、携帯が鳴った。

それが将だったことを、聡は吉兆だと無理やり思い込むようにした。

「アキラー？　何やってんだよ。ケンちゃん一人なのに大富豪になっちゃったよ」

能天気な将の声。聡とペアを組んでいた兵藤は、あとで相当ツキがまわってきたらしい。

「……ごめん。もう少し待って。今山口さんがお風呂だから……」

「あっそー」

「将、いや鷹枝くんは、どうなの？」

瑞樹が万が一、目を覚ましてるといけないので、苗字で呼びなおす。

「俺、今、やっと平民～」

将はえへへ、と電話の向こうで笑う。その笑い声に聡は癒された。

「真田さんは大丈夫なの？」

「ああ、ユキコ？　変わろうか？　すっかり元気だよ」

将の声の向こうで、『ええー、ヤダー』と真田由紀子の照れた声が聞こえる。

すっかり元気になったのだろう。

聡は、もう少ししたら行く、と伝えて電話を切った。
明るい気持ちになっていた聡の背後から
「せんせい。」
と低い声がした。
振り返ると、瑞樹が布団の中からこちらを見ていた。
ショートカットになった瑞樹は、青白いほどの顔に、大きな瞳がいっそうきわだつ。
いつから、目を覚ましていたのか。
聡は一瞬、怖気づいたのをなんとか作り笑いの下に隠して、
「起こしちゃった？　ごめんね……。水飲むよね？」
とあわてて、冷蔵庫のほうに近寄ろうとした。
瑞樹は、そんな聡の背後に向かって確かに言った。
「将の子だよ」

聡は手にしたグラスを思わず落とした。グラスは柔らかいカーペットの上で低くバウンドし転がった。

聡はグラスも拾わずに、恐る恐る、瑞樹を振り返った。

瑞樹は、横たえた体を微動だにしないまま、聡を見すえ、もう一度言った。

「……お腹の子は、将の子だよ。せんせい」

『ウソ』反射的に出てきた言葉を聡は飲み込んだ。

瑞樹は聡の顔を凝視している。……あきらかに聡の反応を観察している。

受けた衝撃の外側で、かろうじて残った理性で、判ったことがある。

――この子は将と自分のことを知っているのだ。

そしてさらに。

瑞樹の側では、将はセフレなどではない。

将を愛していた……もしかすると、今も愛しているのかもしれない……。

瑞樹の今までの敵意の理由を、聡はようやく納得した。

96◆演技

瑞樹の敵意を理解した聡は、意外なほど冷静な態度の自分に気付いた。

動揺していないといえば嘘になる。

心臓はずっと鈍い振動を体中に送っている。

しかし、瑞樹の顔を正視し、なんと返せばいいか考えるだけの思考力は保っていた。

感情に任せて行動するなら、

『ウソ』と叫んで泣き崩れるか。

『いつまで……関係があったの?』と震えながら問い詰めるか。

そんなところだろう。

しかし、聡は、冷静な態度を保ち続けていた。そんな自分が嘘のようだった。

この場合、教師として何と答えるべきか。

そんなことを、さすがに動揺して働きがよくない頭で、なんとかシミュレートする。

将で考えるから、私情が入ってしまう。

それに気付いた聡は、身近な例で、兵藤が瑞樹を孕ませたという設定でシミュレーションしてみる。

心の中で、真面目に寿司修行に励む兵藤に謝りながら。

だとしたら。

「……鷹枝くんには話したの？」

これが聡の出した答えだ。聡は瑞樹を見つめて問うた。

こんどは聡が瑞樹を観察する番だ。挑むような気持ちである。

さすがに気持ちまでは教師らしく在ることは難しい。

瑞樹はあきらかに想定外の聡の反応に面食らったようで、眼を大きく見開いた。

聡はもう一度同じ問いを繰り返してみる。

「言ってない」

眼を見開いたまま、抑揚のない声が返ってきた。

しかし、さっき『将の子だよ』と言ったときよりあきらかに落ち着きのない声に思えた。

「病院には行ったのね」

聡は、まるで自分は舞台で芝居をしているようだ、と思った。
暴れる心臓を抱えながら、よどみなく巧く、教師、という役を演じる。
瑞樹は目を見開いて、それでも聡の顔から視線を逸らさずにうなづいた。
「ご両親はご存知なの？」
両親、と聞いて瑞樹はプイっと顔をそらした。
「知ってるわけねーだろ」
と小さく呟く。聡は、将から聞いた瑞樹の家庭のことを思い出した。
「……産む、いえ、産みたい？」
それを聞いて、瑞樹は、跳ね起きると、目をむいて聡を振り返った。
「産めるわけ、ねえだろっ！」
聡の、冷静に自分を見つめる瞳を見て、瑞樹はハッと我に返ったようだ。
「そう……」
聡は、瑞樹を見つめたまま、ソファに腰掛けた。
瑞樹は、取り乱した自分を恥じるように、少し笑いながら、

「センセイさ、自分の彼氏が……、影で他の女を妊娠させたって聞いて、何ともないの？」

と聡に切り込んだ。

聡は黙ったままだ。

だが、視線は瑞樹からはずさない。

というより、はずせなかった。女の意地なんだろうか。それとも……将を信じているから？

そして瑞樹は、将を聡の彼氏、と位置付けている。

自分たちの恋愛は、歴然たる事実としてここで横たわっているわけだが、これをどうするべきか。

聡が今、演じている台本の設定を単なる担任教師から、教え子と恋愛する教師、に変えるべきか。

聡が沈黙したままなので、瑞樹はさらに生々しい言葉を続けなくてはならない。

「センセイとヤりながら、あたしともヤッてたんだよ。悔しくないの！」

それを聞いて、聡の心に何故なのか奇妙な安堵が広がっていった。

――たぶん嘘をついている。

直感。確信は持てないが……。

「将は、いえ、鷹枝くんは」

瑞樹の嘘を暴くことに決めた聡は、もう、単なる教師を演じるのをここで止めた。

「9月以来、あなたとは寝ていないって、言ってた」

「そんなのウソに決まってるだろ」

瑞樹は即座に言い返した。

「前の女と続いてる、なんて素直に言う男がどこにいるんだよ」

それは確かにそうだ。再び劣勢になった聡は、再び教師に戻るしかない。

「……産むにしても堕ろすにしても、相手の人には言っておかないと、ね」

とだけ言って、立ち上がると、瑞樹を独り部屋に残して、廊下に出た。

廊下に出た聡は、困惑していた。

瑞樹は嘘をついていると思う。身ごもっているのは、たぶん将の子ではない。

直感でそうは思うものの、確信を持つまでの証拠はない。

『信じて。俺、もう、本当にアキラだけなんだ。9月3日以来、アイツとは1回もやってない。本当だよ』

という将の言葉だけにすがるしかない。だけど。

9月まで、瑞樹と寝ていたのは事実なのだ。

妊娠してもおかしくないような行為を重ねていたのは消しようもない。

むしろ、そちらのほうが聡を苦しめた。

そして、将に『それ』を禁じている聡は、将が本能のままに他の女に手を出さないとは言い切れない。

将はまだ若いのだ。手近に瑞樹のような女がいれば、そういう行為に至ってもおかしくはない。

聡は、どんどん自分の思考がマイナスのほうへ進んでいくのがわかった。

そのとき、メールの着信音が鳴った。

『まだ～？』と将から一言だけのメッセージ。

こんな気持ちで、みんなが楽しくトランプをしているところに合流できるだろうか。

将と……顔をあわせることができるだろうか。

いや、むしろ今だからこそ将の顔を、見たい。

瑞樹の言ったことが嘘だという確信を得たい。

だけど……もし、本当だったら。

――怖い。

聡は、携帯を両手で握り締めた。知らず、祈るようなポーズになっている。

「センセイ、遅ーい」

「ごめんごめん」

聡が大富豪ゲームをする皆の元に戻ったとき、ゲームはもう最後の1回だった。

将が自分を見ているのがわかったけど、目を合わせられない。

「あいかわらずケンちゃんが大富豪だよ。で、俺たちまた大貧民」

何も知らずに将は、トランプを配りながら聡に現状を説明する。

「あら、そう。兵藤くん、何命令しようか～。楽しみだね～」

楽しげに、でも将の顔を見ないように笑顔をつくる自分。ここでも演技をしているようだ。

さっきより難しい役柄のように感じる。

「でも、負けたら大貧民だし。立場逆転っすよ」

と兵藤は戦々恐々、というようすで、真剣に配られたトランプを目の前に広げた。

大富豪は一番悪いカード、大貧民は一番よいカードとを交換する。

最初はたいしたことのないカードだったが、交換することでどうにか勝てそうなカードになって、聡と兵藤はほっとした。

そこで、将と真田由紀子が顔を見合わせてニヤっと笑った。

大貧民はカードが不利な分、一番最初に出すことができる……そこでなんと、将たちは、1枚残してカードを全部出した。

「え！」

皆が驚いた。なんと、それは3が4枚、4が4枚、5が4枚でかつ、すべての3・4・5でマークが揃っていた。

もちろん後に誰も出せないから、残りの1枚を由紀子が出してゲームは終了した。

「ヤッター！」

将と由紀子はハンドタッチをして喜んだ。

「ウッソー……」

大富豪から大貧民に転落が決まった兵藤はがっくりした。聡も信じられなかった。

「じゃ、罰ゲームねー」

王様ゲームの王様になった将と由紀子は、ゴショゴショと内緒話の末、由紀子が真っ赤になってコクンとうなずいた。

将はニヤリと笑って、兵藤と聡に命令した。

「この中で、一番好きな異性にキスをする」

「ええー！いないよー！」

兵藤がやや顔を赤らめて抗議した。聡も立場上

「ちょっとぉ、だめでしょ、そんなこと」

とたしなめながら、心臓がまた大きく振動を始めていた。

将が自分を見ている。……でも将の顔を正視できない。

「唇？　唇だよね？」

カイトが将に、ワクワクと聞く。

「ちょっと、カンベンしてよ～」

真面目に困っている兵藤と、教師としての聡の立場に少しは配慮したのか将は

「じゃ、おでことか、ほっぺたでもいいや」

としぶしぶ許してやりつつ

「じゃあ、センセイからねっ」

と促す。チャミやカリナら女子が再び、キャー、ヤダーという声を上げる。

皆が、聡は将にキスを与えるのだろうと期待している。

将自身も期待して待っているのがわかった。

能天気な将に、聡は少し腹が立って意地悪をしたくなった。

聡はおもむろに、隣にいる兵藤の頬に両手を添えると、その丸刈りのおでこに唇を寄せた。

その場にいたものは、兵藤の首から耳、丸刈りの地肌が、ピンクから真っ赤に染まっていくのを目撃した。

部屋は「キャー」とか「ウオオー」という騒ぎでいっぱいになった。

将は「ウッソォ」と呟いて唖然としていた。

97◆視線

スキー研修2日目もよく晴れた。

1月にしては珍しく、羊蹄山もニセコアンヌプリの山頂もその白いピークを青い空にくっきりと浮かび上がらせていた。

将は腑に落ちない思いを抱えて、昨日よりは少し傾斜がきつくなった、それでも緩斜面にボーゲンでたどたどしくカーブを描いていた。

2日目は、個別の習熟度によってグループ編成が変わった。

昨日までの内容が巧くできて上の内容に移るグループと、まだ繰り返すグループとに分かれる。

将は当然、上のグループに入った。

おかげで講師はまたも、あのマッチョ講師だったが、将自身のレベルがあがるにつれて、彼がなかなか優秀な講師だということがわかってきた。

カマっぽい口調に、体をすぐに触るのには、少々閉口ぎみだが、何といってもわかりやすい。

おかげで、将は午前中が終わる頃には、ボーゲンながらターンがそこそこできるようになっていた。

昨日は制御しようのなかった雪の斜面が、気持ちのいいものに変化しつつあった。

もともと運動神経は悪くないのと、少しでも聡に近づきたいと頑張ったというのもある。

「ボーゲンがちゃんとできればぁ、理論的には４５度まで滑れることになるのよ」

とお墨付きをもらう。

聡に少しは近づけただろうか。

その聡が、昨晩から今朝にかけて、あきらかに変だった。

昨日、トランプのすぐ後に、消灯時間がやってきた。

消灯時間を守っていないのが見回りにきた多美先生にバレると、部屋のメンバー全員が廊下に１時間正座をさせられる。

初日に井口とユウタの部屋のメンバーがそれをさせられた、というのが伝わっていたので、将は布団の中から聡にメールを打った。

『聡、さっきは何で、俺にチューしなかったんだよー』

プンプンと怒る顔文字を添えて送信する。

返信が来るのに時間が掛かった。スキーで体力を使った将である。

暗いのと、布団が温まったのとで、急激に眠気が襲ってきた。

イヤホンにしておいた着信音で、自分が眠ってしまっていたことに気付く。

『だって、人前でそんなことできないよ』

との返信が返ってきた。

『ケンちゃんにだったら出来るワケ？』と訊き返す。

またずいぶん時間がかかっての返信には

『だって、将と私のことがこれ以上、みんなにバレたらマズいでしょ』

とあった。教師の立場としては、仕方ないのかもしれない、と将は一応納得する。

思い直して

『明日もスキーやるの？』

と話題を変えた。

『わからない。天気次第かな』

どうも、今日の聡の返信は、鈍い。行きがけのバスの中のようなチャット状態を楽しめない。

おかげで将は、待つたびに眠りに飲み込まれそうになる。

もしかして聡も眠いんだろうか。極限に眠い将の頭は、きっと、そうだろうという答えを導き出した。

だから……もう、おやすみの挨拶を送ろう。

マイスイート・ハニーがいいか、Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ　がいいかそれともジュテームとフランス語を使うか。

そんなことを考えているうちに将は、体の疲れに引きずられるように熟睡に落ちていった。

そのときは、まだ聡の異変に気付いてなかったのだけど。

あきらかにおかしいと気付いたのは今朝だ。

朝食の席でも、そのあとのミーティングでも、将はことあるごとに聡を見ていたのだが、聡は将と目があいそうになると、その視線をフイッとはずした。

今までも、人前の場合は、そういうことがあったが、今朝の場合は、なんだかその視線のはずし方が変だった。

単に人目をごまかすため、とは違う。

その証拠に聡もときどき将を盗み見ていた……なのに将と目があうと視線をはずしてしまう。

将は思い切って、朝食の後、皆がスキーの身支度をしているときに、口実を設けて聡たちの部屋を訪ねた。

「すいませーん。筋肉痛がひどいんでシップか何か下さい」

などと山口に頼むふりをしながら、ソファでテレビを見る聡を振り返る。

このときも、だった。

聡の顔は……将がこっちを振り返るまで、将のほうを向いていた。

それを将が聡に向き直るなり、まるで『ダルマさんが転んだ』のようにテレビのほうに頭をくるっと向けた。

「センセイ、何みてるのー？　ワイドショー？」

まだそれを偶然だと思いたい将は、明るく声をかけながら聡のわきに歩いていった。

聡が腰掛けるソファーの横にしゃがみこんで、小声で話し掛ける。

「アキラ、俺、Aグループだぜ」

スキーの習熟度別グループ分けの、上位に入ったことを聡に告げる。

「そう、よかったじゃない」

将が聡の顔をのぞきこんでいるのに、聡の視線はテレビから動かな

い。

いつもは、こんなときは……人前の場合は、教師らしく澄ましたような顔をしながらも……将の瞳を見ながら答えているのに。

「アキラ、今日は午後が自由時間だろ」

将は、ソファーの上で組んだ、聡の膝に手を置いた。

聡は、一瞬将の顔を見て、その視線をツイっとテレビに戻した。不自然きわまりない。

そのくせ、

「……そうよ」

としか言わない。

いつもだったら、微笑むか、さもなくば「何?その手は?」などと笑いながら抗議をするはずだ。

――おかしい。何かあったのか。

「アキラ。俺、何かしたっけ?」

それを聞いて、聡の視線は初めて、将の瞳に戻ってきた。

しばらく聡は将を凝視していた。

しかし、視線と一緒に将に注がれていた意識が、次第にどこかに行

ってしまったように、

気がつくと、聡のガラス玉のような目は、呆けたまま将に固定されていた。

何か言いたげに唇は心持ち、開いたまま。

「鷹枝くん、はい、シップ。大きさはこれで大丈夫？」

山口の声で、二人は我に返る。

将は立ち上がって、シップを受け取ると、後ろ髪を引かれる思いで、部屋を後にするより他なかった。

そのときだけ……聡は立ち去る将をすがるような目で見ていた。

昼食のときも、同じだった。

将を盗み見るくせに、目をあわせようとすると逸らす聡。

一見、何気ない会話を交わしながら、あきらかに様子が変だ。

朝のようすからだと、将に何か原因があるのか。しかし、将にはまるでわからない。

聡に嫌われるようなことをしただろうか。

――スキーが下手すぎるから愛想をつかしたとか。まさかな。

聡がそんな浅はかな女だとは思わない。授業中を思い出す。

もともと聡の担当教科である英語は、他の教科に比べるとあまり得意とはいえない将である。

特に会話中心の授業に移ってから、ロールプレイング中、何度も恥かしい間違いを犯して、クラスの笑いを誘うようなことをしている。

しかし、そんな将を、聡は温かい目で見てくれていた。

『何度も間違えたほうが上達するからね』

などと言ってくれたはずだ。

そのとき、聡が席を立った。手にしたトレーには、昼食メニューであるスープカレーがまだ半分も残っていた。

食欲がないのだろうか。将は自分も食事の半ばで立ち上がり追った。

「アキラ！」

「将……鷹枝くん、どうしたの」

呼び止められて聡はエレベーターの前で立ち止まった。

一瞬、驚いたような表情を浮かべたが、事務的な顔にすぐ戻る。

「アキラ、話があるんだけど」

「……あとでね。私、着替えるから」とそっけない。

「スキー、やるの？」

将が訊いたとき、チン、と音がしてエレベーターが開いた。

エレベーターの箱の中に移動した聡は、頷きながら、箱の外にいる将を見つめた。

さっきと同じ、何かを訴えたいような、瞳。

将が口を開こうとしたとき、その姿は、両側から閉まったエレベーターの扉によって遮断され、将は取り残された。

98◆まっ白1

ウッディなカフェの窓からは、樹氷越しに羊蹄山が見えていた。

が、頂上付近にはさすがに雲が掛かりはじめていた。

聡はホットココアを片手にぼんやりと眺めるともなく景色の中に視線を遊ばせていた。

昼下がりのゲレンデ。ゴンドラを昇った近くにあるカフェに聡は一人でいる。

頭が朝からずっと重いのは、昨夜、ずっと寝付けなかったせいか。それとも……。

あきらかにその原因であろう瑞樹は、さすがに今日はスキー研修を休んだ。

理由は体調不良ということにしているが、実際の理由が理由なだけに、まだそれは聡と山口だけの秘密にしてあった。

研修は授業扱いなので、休んでいる間は、プリントなど自習をやることになる。

その指導には当直の教師があたるのだが、『体調不良』の瑞樹は、聡と山口の客室にやってきて、そこで過ごすことになった。

ウィッグをまるで自分の体の一部のように身につけ、いつもの長い黒髪姿の瑞樹は、聡と必要事項以外話さなかったが、

その態度はなんだか勝ち誇ったようなようすが見え隠れしていて、聡は息苦しくなった。

部屋にいると瑞樹とずっと顔を付き合わせることになる。

午前は当直だから、教師としての義務で耐えたが、自由時間の午後まで瑞樹の顔を見るのは苦しい……。

だから、あまりスキーをする気分ではなかったが、いちおう聡はウェアを着こんでゲレンデに出たのだ。

聡はため息をついて、将を思う。

昨夜、ベッドに入っても寝付けない聡だったが、能天気な将は、罰ゲームについてメールを送ってきた。

『さっきは何で、俺にチューしなかったんだよー』

聡は、その返事をいったん書き換えている。

最初はこう書いていた。

『将、葉山さんとは、本当に9月で別れたの?』

質問の返事をあえて書かず、逆に問い返す。

でも……送信ボタンを押せなかった。こんなことはメールで訊くべきではないと思い直したのだ。

なんにも知らない将からは、次々と無邪気なメールが送られてくる。

メールのすべてに、つい、将への不信を書き込んでしまいそうになる。問題の内容に触れたくなる。

聡はそれを押さえるのに骨を折った。

将は眠ってしまったらしく、メールは途中で途絶えた。

いつも思うが、将は、コトンと眠りにつく。

抱き合っているときもだが、3秒前まで深い口づけをしていたはずなのに、気付くと寝息を立てていたりする。

萩の実家でもそうだった。

健康な若さゆえなのか。

いつもは微笑ましい将の寝つきだが、昨日の聡は、一人取り残されて寂しかった。

そのまま悶々と寝付けない夜が、聡の前に横たわった。

そして、完全に寝不足で迎えた今朝。

自分でも将への態度がぎこちないのがわかっていた。

そんな聡に将は

『アキラ。俺、何かしたっけ?』

と素直に訊いてきた。その顔には、聡を心配する優しさと、

『自分は何もしていないはずだ』という自信が同居していて、そんな将に聡は何も言えなかった。

やはり、あの将が、嘘をついてまで瑞樹と寝るとは、聡にはどうしても考えられない。

聡は再び深いため息をついて窓の外に広がる樹氷の風景を見る。

樹氷は昼下がりの陽光を受けてダイヤをちりばめたようにキラキラ輝いている。

聡はココアを唇に運んだ。

熱すぎて冷まそうとしたココアだが、時間がたちすぎてしまったのか、逆にぬるくなってしまっている。

その甘さをあまり味わうこともなく飲み干す。

カップの最後には、溶けたチョコレート状のココアが沈んでいる。

ココアの最後にそれをすするのは、実は聡のひそかな愉しみなのだが、今日のそれはやたら泥のように粉っぽい気がした。

干潟の泥のように味気ないそれをすすり切ったとき、ふいに携帯が鳴った。

ぼんやりしていた聡はビクッと体を震わせる。

あわててジャケットの内ポケットから騒がしく鳴り続ける携帯を取り出す。

「もしもし？」

「古城先生ですか？」

電話の向こうは多美先生だった。

「……実は、急に鷹枝将が、いなくなりまして」

「ええっ？」

いなくなったとはどういうことだ。聡は携帯にしがみつくように話を聞く。

事情はこうだ。

講習中、急に将は「ションベン行きたい」と言い出した。

トイレはゲレンデの初心者コースを降りきったところにあったが、講師は今の将のレベルだったら十分安全に降りられると判断したらしい。

用を足したら下でそのまま皆が降りてくるのを待っているように、と指示して将を一人で行かせたのが最後、そのままいなくなったら

しい。

単独でゲレンデを降りたのが今から４０～５０分ほど前だという。

「ホテルをさんざん探したのですが見つかりませんで。ゲレンデにいるのでは、と……。今、ゲレンデ放送などをするように手配してますが……、

古城先生も、どこか心当たりがあったら探してもらっていいですか？　目立つ黄色のウェアだから、すぐわかると思うんですが」

「わかりました。探してみます」

「お願いします」

電話はあわただしく切られた。

――いったい、どこへ……。

聡は、とりあえず将に電話をかけてみた。ちなみに学校関係者は将の携帯を知らない。

しかし、やっぱり電源は切られていた。

増殖する不安が胃を圧迫する。将がいなくなったあの、１２月の何週間かの不安と寂しさを脳がトレースしようとする。

それを打ち消すように、聡は将に、『どこにいるの、みんな心配してるよ。連絡して』と

とりあえず短いメールを打つと席を立った。

カフェの前に出ると、聡は前に広がるゲレンデを見渡した。

さっきより少し風が吹き始めたようだ。

視界に広がるのは、ニセコアンヌプリ山頂に向かって上り坂の、傾斜がややきつい中級者コースばかりで、

当然、修学旅行生用の黄色のウェアはいない。

ふと、聡はニセコアンヌプリの山に目をやった。

雪に覆われた山頂は、午後の光を受けて、白い頂を金色っぽく変えていた。

そのとき、カフェの前で、スキーを手にした聡に、ふいに話し掛ける声があった。

「いいスキーだね。でも今日はパウダー目当てにはがっかりでしょう」

声の主はサングラスの中年男だった。雪の中に置かれたテーブルセットで煙草を吸っている。

聡はとっさに無言で頷いた。とりあえずあいまいに笑顔をつくる。

聡のレンタルしたスキーは、山スキー用の最新モデルだった。

普通のスキーよりもかなり長めのそれは制御しづらく、上級者であ

る証でもある。

北海道なのでチャンスがあったらパウダーを滑りたいと思って昨日レンタルしたのだが、

パウダー好きにはあいにくの晴天続きで、ゲレンデはおおむねどこも踏み固められていた。

「僕も、パウダー目当てでさっき山頂に行ってきたんだけど、荒らされちゃってもうダメだね。

午後から少し崩れるっていうから、明日に期待したいよ」

スキー場の管理外である山頂部からゲレンデに降りて来る間の区間は、圧雪も入らずパウダー好きには絶好のコースとなっていた。

もちろん傾斜はおおむね３０度を超え、上級者以外は受け付けない。

「午後、やっぱり崩れるんですか？」

いちおう予報を見てきた聡だが、降雪確率は３０％ぐらいだったはずだ。

「軽く、みたいだけど。ホラ。風も出てきたし」

男が指差した方向をみると、山頂の背後には雲がわずかに見えていた。それは少しずつ面積を増やしていた。

聡は、それを見て、ハッとした。

将は……山頂を目指したのではないだろうか。

99◆まっ白2

とはいっても、昨日、初めてスキーを履いたばかりの将である。

なのに、行くわけがない、と聡は断言できない。

むしろ、山頂を目指しているというのは、確信に変わっていく。

なにせ、昨日、聡は山頂の情報を彼に与えてしまっている。

将の性格からいって『てっぺん』とか『頂上』はいかにも好きそうだ。

時計は１４時３０分になるところだった。

聡は、男に会釈をすると、リフトにむかってストックを蹴りだした。

荒江高校がスキー研修をしている隣のスキー場で、山頂部に最も近い、第７リフトは一人乗りだ。

ここまで来ると、リフトのすぐ近くから胸がすくような急斜面が始まる。

もし初級者がその下をのぞきこめば、まっ逆さまに落ちていくような視覚に背筋に戦慄が走るはずだ。

こうなると雪の斜面ではなく『崖』である。

急な斜面を『壁』と呼ぶが、その表現はまさに正しい。

カフェからダウンヒル第3リフトに乗った聡は、隣のスキー場との間の非圧雪コースを斜面に対して横切るように第7リフトまでやってきた。

非圧雪コースは、晴天続きのせいか新雪もなく、ボーダーの通り道で出来た深い溝と転び跡で、

ちょっとしたモーグルコースのようなコブ斜面になっていた。

コブ斜面に長い板をとられて、さすがの聡でもバランスを崩しそうになる。

こんな急斜面で転倒するとダメージが大きい。

聡は大きなコブを避けながら慎重にスキーを操った。

金色がかった午後の光を反射して、斜面は裸眼だと、目に焼きついて暫く離れないような強烈な『白』に覆われていた。

ゴーグルもさして役に立たないような強烈な反射……ついさっきまでは。

ようやく第7リフトに着いた聡の上には、灰色の雲が展開し、太陽は隠されてしまっていた。

そこから粉雪が風にあおられるようにちらちら落ちはじめた。
スキー場正面に見える羊蹄山もとうに姿を隠してしまっていた。

「あの！」

聡はぐるぐると回るリフトの椅子に積もった雪をほうきで払いのけている係員に、思い切って尋ねた。

「黄色い修学旅行生用のウェアを着た、背が高い男の子を見ませんでした？」

初老の係員は客などロクに見ていないのだろう、首を振った。

「お客さん、山頂にいくの？」

逆に眉根を寄せて問い掛けてきた。

「ハイ」

「危ないから、ガスってきたらすぐに引き返してください。風も出てきたからリフトもじき止まるかもしれないし」

聡は頷いて、リフトに乗った。

係員の注意どおりだった。

地上ではたいしたことのなかった風だが、急斜面を登る一人用のリフトは、

ときおり信じられないほどの強風に煽られ、聡はリフトのバーにしがみついた。

標高１０００ｍを超える雪山は、それなりの装備をしている聡なのにとてつもなく寒く、聡は歯をガチガチとさせた。

おそらくマイナス１５度、いや、それ以下の寒さだろう。

おまけに、あきらかに天気が悪くなってきたせいか、聡の前にも後ろにも誰も客はおらず、心細いことこの上ない。

降り始めた雪は、止むことなく、座る聡の膝の上にサラサラと落ちる。

気温が低いせいか真っ白な粉のようなそれは、重さも感触もなく、聡の膝をなぞって落ちていく。

――早く、早く！

聡は祈るように早く上に到着することを願いつつ、寒さに震えた。

しかし、リフトは安全のために速度を落としているせいか、なかなか上にたどりつかない。

あまつさえ、風のせいなのか、ときどき止まったりして、聡は目を閉じた。

まさか、こんな状況で、将が山頂にいるわけがないだろう。

いないほうがいい。聡だけならどうということはないが、初心者の

将はこの急斜面をどうやって降りるのだ。

そうこうしているうちにようやく上の駅に到着した。

山頂への道はまだ見えているが、雪が降りしきっているせいか、眺めはあまりよくない。

しかも白い面積が多いにも関わらず、どことなく暗い感じがする。まだ１５時すぎなのに。

雪景色慣れしている聡でも心細くなってきた。

上でも係員に

「ガスってきたら引き返せ」と注意を受けた。

その係員に下で聞いたのと同じことを訊いてみる。すると

「黄色いウェアのスキーヤーは何人か見ましたけど」

という返事が返ってきた。

「一人でしたか？」

「さあ……。だけど一人で来る人も結構いますから」

的を得ない答えだ。

「黄色い人は、ここに引き返してきてないですよね」

聡は係員にさらに問い掛ける。

「ええ。でも普通引き返してきませんから」

山頂までスキーを担いでいって、そこから滑り降りる人が大多数だからだ。

実際、右側の斜面には、雪の中に山頂から滑り降りてきたらしいボーダーら何人かの姿が見えた。

それに勇気付けられた聡は、

――いちかばちか、将がいなければそれでいい、とにかく確認してこよう。

とスキーをはずすと担いで、山頂への道を登り始めた。

「風が出てきましたから、注意してくださいよぉ！」

と係員の大声を背後に受けて、聡は雪の階段がつくられた山頂への道を踏み出した。

山頂への道は、途中までは雪を固めて、階段がつくってある。

コンディションがよければ１５～２０分ぐらいで山頂に着くはずだが、なにせ長いスキーを担いで、

さらに踵と足首を固定されたスキー靴での歩行は重労働だ。

それに歩く聡に、ときおり突風が吹きつけてくる。

歩くのを止めるほどではないと思ったのだが、立ち止まらないと堪えられないような突風が、

1回吹いたのを皮切りに、繰り返し聡を襲うようになった。

風がふくたびに今降り積もったばかりの粉雪が舞い上がり視界を遮る。

おまけに舞い上がった雪は、踏みしめる雪の階段をわかりにくくしてしまう。

それが何回か繰り返されるうちに、聡は視界がひどく悪くなっているのに気付いた。

いつのまにか、あたりは米のとぎ汁のような霧に覆われている。

――ヤバイ。ガスってきたんだろうか。

聡はゴーグルのオレンジ色がうっとおしくなり、それを一度ネックウォーマーもろとも顎の下に下げた。

人影は誰もいないようだ。将はいないのだろうか。

「たかえだ、くーーーーん」

大声で呼んだ聡に、今までで最大級の突風が、雪交じりで吹き付けてきた。

足に力をいれても飛ばされそうだ。必死で持ちこたえる。

冷たさで頬が切れそうに痛い。冷気が目に染みて、聡は目をつぶって風下を向いた。

返事はない。

聡は、斜面の下のほうに目を凝らした。さっきまでいたボーダーが誰もいない。

というか、急激に狭まってきた視界に、ゲレンデはほとんど入っていないのだ。

引き返すべきだろうか。

逡巡しつつも、とりあえず前に進んでしまった聡のまわりの世界は、あっという間に米のとぎ汁から画用紙のように不透明な真っ白になった。

たよりにしていた足元も、階段が終わってしまったのか雪に覆われたのか、段差がいつのまにかなくなっている。

視界２ｍもない。そんな真っ白に聡は閉じ込められた。まさにホワイトアウト。

ゴーグルをはずして目を凝らしても何も見えない。

道を示していたロープすらも見えないのだ。

「そんな……」

聡は担いでいた板を降ろして、雪に軽く突き立てると、それにしがみつくようにして、必死で四方に目を凝らした。

もはや自分がどっちから来たかすらもわからない。

何分ぐらい歩いたのだろうか。

風はいよいよ強くなってきた。地吹雪のような雪が吹き付けてくる。

吐く息があっというまに睫や眉毛に凍りついて、瞬きをするとパリパリとした違和感がある。

一度はずしたゴーグルは曇ったまま凍ってしまった。

グローブの指でいくら擦っても、すりガラス状態は取れない。

聡の脳裏に『遭難』の文字が急激に浮かび上がってくる。

不吉な二文字を頭から振り払うと、もう一度

「誰かーーー！いませんかー！」

と叫んだ。

怖い。寒い。心細い。誰でもいいから答えてほしい。さっきの係員に届かないだろうか。

聡は涙を堪えて何度か叫んだ。ちなみに泣いたら、涙も凍ってしまうからである。

しかし、叫びは雪交じりの風の中に飛んでいって、ガスの中に吸い込まれていくようだ。

変な言い方だが、白いブラックホールさながらに、聡の存在を四次元かどこかへ消してしまってもおかしくない。

絶望しそうになった、そのとき。聡の視界を包む白の濃度が一瞬薄くなった。

霧は薄くなったものの、あいかわらず横殴りの雪が降りしきるその先に、何か建物のような影がうっすらと見える気がした。

きっと山頂の避難小屋だ。

一一急に悪化した天気だ、誰かが避難しているに違いない。

避難小屋の影は、あっという間にもとの濃度になった霧と雪に隠れてしまったが、そうたいした距離ではないようにみえた。

１０ｍ？２０ｍはないだろう。

聡はスキーをもう一度抱えると、そっちに向かって歩き出した。

１００◆まっ白３

おかしい。

聡は再びスキーを下ろすと立ち止まった。

もうとっくに２０ｍは歩いているはずだ。

なのに、避難小屋に到着しない。

あいかわらず聡を取り巻いている視界２ｍもない真っ白な霧と、吹きつける強風が方向感覚を狂わせたのか。

それとも、まだ２０ｍ歩いていないんだろうか。

そういえば、足元はすでに降り積もった新雪が１０センチもの深さになっていて、

スキー靴がズボズボとはまりこみ歩きにくいことこの上ない。

だから、あまり進んでいないのか。

いずれにせよ、この２０ｍで消耗していた聡は、降ろしたスキー板につかまると、もう一度目を凝らした。

あたりは、壁に塗り込められたような真っ白で、何も見えない。

真っ白だからよくわからないが、こうやって立ち止まると雪が勢いを強めているのがわかる。

「さむい」

聡は目の下まであげたネックウォーマーの下で呟くと、がくっと膝を落とした。

腿の半分までが、新雪に埋もれた。

雪の上に立てたスキー板が、傾いて聡の肩に寄りかかろうとするのもそのままに、聡はうなだれた。

地上では美しい六角形の華を咲かせていた雪だが、こうやって横なぐりに吹き付けてくる粉雪は、まさに白い悪魔だ。

白い悪魔は、このままだと確実に聡の命を奪ってしまうだろう。

歯が、リフトの上でのようにガチガチと音を立て始めた。

――まさか、このまま死ぬんだろうか。

厳しい寒さは、そんな嘘のような予感を連れて来た。

それを振り払うと、聡は慎重にジャケットから携帯を取り出す。

たしか、山頂部分は携帯が通じたはず。絶望の中でそれを思い出したのだ。

一縷の願いをこめて取り出した携帯は……なんということだろう、あまりの寒さに液晶が役に立たなくなっていた。

聡は絶望のあまり、一瞬、頭の中も真っ白になった。

しかし、生命力なのだろうか、再び生きる方策が頭に湧き出してくる。

もしも……携帯が使えても。この視界の悪さだったら、誰も助けにこれないだろう。

風と雪がおさまるまでどこかでそれを避けなくてはならない。

それにはやはり、避難小屋を見つけなければ。

避難小屋に誰かいれば！

聡は、ネックウォーマーをずらすと、再び力を振り絞って

「誰かーーー！」と叫んだ。

大声を出すたびに冷気が肺にまわって、咳き込むほど苦しくなる。

しかし負けるわけにはいかない。聡は叫び続けた。肺が破れそうになる。

しかし、聡を取り巻く白い壁が風の轟音で答えるだけで、聡の望む人の声はなかった。

「誰も、誰もこないよ……」

聡は凍りついたネックウォーマーをずりあげて、下を向くと一人ごちた。

「もうダメかな……将」

こんなときに、口からポロッと将の名前が出た。

――もう危ないってときにどうかしてる。

だけど、将の名前を口に出しただけで、心なしか温かいような気がする。

「将」

聡はもう一度その名前を舌に載せてみた。小さな声は風の音にかき消されてしまう。

だからもう一度声に出す。

「将」

聡を取り巻く真っ白な壁は将の幻影を一瞬映し出した。

そのときだけ聡は寒さを忘れた。……しかし真っ白な現実に聡は引き戻されてしまう。

聡は凍えながらも、ふっと笑った。なんだかマッチ売りの少女みたいだ。

将の名前を呼ぶことが、マッチに火を灯すかわり。温かい料理とか暖炉とかは将のぬくもりの思い出。

将にくるまるように抱かれて寝た記憶。

その物語をたどるとしたら、聡は明日、冷たくなって発見されなくてはならない。

聡はなぜか、雪に埋もれた聡の亡骸を、将が発見するシーンを想像した。

凍死死体は透き通るように美しいという。

晴れ上がった蒼い空の下、煌めく雪の華に埋もれている、透き通るように青白い聡の亡骸にすがって、将が泣きじゃくる。

それは、どこかで見た古い映画や、小説を編集しなおした、甘いイマジネーションだった。

聡は、頭を抱えて陳腐なそれを振り払った。

そもそも、将を探しに来て、こんな目に逢っているのだ。

だったら死ぬ前に、将に一目でも逢いたい。

座り込んだ下半身を雪に埋もれさせていた聡は、スキー板につかまるようにして立ち上がった。

「しょーーーーうーーーー！」

体に残ったすべての力を振り絞って、聡は叫んだ。

その声は、風に乗って将のもとに届いてくれるだろうか。

しばらく聡はスキー板をたよりに立ち尽くして、あたりを窺った。
聡を取り巻く白は心なしかグレーがかってきている。暗くなってきているのだ。
「やっぱりいないか」
今度こそ絶望した聡は再びその場にしゃがみこんだ。
がっちりとしたスキー靴の上に座り込むようにうずくまる。
「……キ……ぁ」
風の音が、人の声に聞こえてきた。これは死神の声だろうか。天使の声だろうか。
――『パトラッシュ、なんだか僕、とっても眠いんだ』だっけ。
聡は名作アニメのラストシーンを思い出しながら、自分も何故か急速に眠くなっていくのを感じていた。
真っ白に吹きすさぶ風にほとんど飛ばされたような意識だったが、かろうじて残った思考力で
――そういえば、昨日ロクに眠ってないんだよな。
と考える。眠れなかった理由を思い出す。
この状況で思い出す瑞樹の妊娠騒ぎは、すでに遠い昔のことのよう

だ。

「バチが……あたったのかな」

うずくまった聡は自分の膝に問い掛けるように一人呟く。

井口は瑞樹のことを将のセフレだといったが、たぶん瑞樹は将のことを本気で好きだったのだろう。

そんな彼女から将を奪い取った罰。

帰れないほどの複雑な家庭を持つ瑞樹から将を奪ってしまったのは、どれほど彼女を困らせ、傷つけただろうか。

そして3年越しの優しい婚約者を捨てようとした罰。

彼の重病人の母親の生きる希望を、、もしかすると奪おうとしていたのではないか。

――バチがあたっても仕方ないな。

ますます聡は眠くなってきた。

――こんなに眠いなら、もうダメだ。さよなら……将。本気で好きだった……。

人を傷つけても求めずにはいられないくらい愛してた……。

「……お…おー…い…」

聡はハッと目をあけた。きれぎれだが、今度は確実に人の……男性の声だ。

係員が助けに来た？

聡は最後の力を振り絞って立ち上がった。スキー靴での立ったり座ったりは普通より力がいるのだ。

「こっちでえええす！、こっちぃぃい！おおーーーい！」

どこから聞こえるのかわからない助けの声に向かって、聡は四方八方に向かって大声をあげる。

「おおーーーいい！」

男性の怒鳴り声が今度は確かにはっきりと聞こえた。しかもかなり近くだ。

見えないとわかっていても聡はあたりを見回す。

「ここでーーーーす！」

声が聞こえた、と思う後方を振り返って、喉が張り裂けんばかりに大声を出す。

ストックも高く掲げて振り回す。

これが幻だったら、もう喉は使い物にならない。死を待つのみになるだろう。

「ここー……！」

急に至近距離に現れた人影に、聡の瞳は釘付けになった。

帽子に、ゴーグルを着けた顔のほとんどは見えないけれど……それはまさしく将だった。

将はいきなり、聡の腕が届くところに現れたのだ。

もしかして、また幻影か。それにしてはリアルだ。

「アキラか！？」

将はゴーグルをずらした。聡を確認するなり腕を伸ばすと、聡を抱きしめた。

「将！」

聡は身を投げ出すと、将に全体重を預けた。幻影ではない、現実の将が聡の名前を呼んだ。

「アキラ！」

二人は吹きすさぶ雪の中、ついに固く抱き合った。

聡は待ち焦がれていた、世界で一番温かいものに包まれた。

二人を包むのは、あいかわらず塗り込められたような真っ白な世界。

まるで、この世には二人しか存在しないようだった。

１０１◆８４～１００話のあらすじ

博史は結婚の挨拶をしに聡の実家に現れたのだ。

そして聡が留守のうちに挨拶をしてしまったという。

聡の両親の前で、将と博史のひそかなバトルが繰り広げられる。

せめて帰京する前に、博史と結婚しないことを両親に伝えなくては、と思う聡は考えたあげく、皆で温泉に行くことを提案。

何とか女湯で母親に、博史とは結婚しない、と伝えることができる（８４、８５話）

聡の両親の手前、ＪＲで来た事になっている将は、翌朝早く出発する。

聡は博史と共に飛行機で帰京。博史は前夜、聡と将がベッドの上で抱き合っているのを目撃しているが黙っている。

そして、夕食を共にした博史は当然のように聡の家にあがり、聡に口づけをする。

思わず顔をしかめる聡に、とうとう博史は不信を口にする。

聡はそれに答えるように、博史とは結婚できない、と宣言してしま

う。理由を問う博史に、答えられない聡。

博史はそんな聡を無理やり抱こうとして、聡の胸に付けられたキスマークを見つけてしまう。

将と寝たのかと問われ、頷く聡の頬を、博史は思い切り叩いて、聡を強姦するように抱いてしまう。

すべてが終わって横たわる聡に、博史は「将にとって、聡は通過地点でしかない」と諭し、中東へと出発する（８６、８７話）

高速道路を使って将が東京に帰りついたのは夜中の１時すぎだった。

さっそく聡に連絡するが、様子がおかしい。心配して部屋を訪れると、頬を腫らした聡がいた。

将は聡を抱きしめながら、聡を守りたい、早く大人になりたい、と願うのだった（８８話）

１月１１日から、荒江高校の２年は修学旅行。行き先は、北海道へスキー研修だ。

雪景色にはしゃぐ生徒。ウィンタースポーツが得意な聡自身も心が浮き立っていた。

そして、普段休みがちのあの葉山瑞樹が参加していることに違和感を感じている聡。

そして具合が悪いにもかかわらず、聡に反抗的な瑞樹に聡は閉口する。

たびたび吐き気をもよおす瑞樹を見て、看護士の山口は、つわりではないか、と聡に告げる（８９、９０話）

看護士の山口と同室の聡は、しょっちゅう部屋に訪ねてくる生徒たちに落ち着けず、ホテルの外に出てみることに。

そこへ将から電話があり、二人は月夜に照らされた幻想的な雪景色の中、しばし抱き合って語らう。

聡は、将に、瑞樹との関係などについて尋ねる（９１、９２話）

スキー研修が始まった。まるっきり初心者の将の前に、颯爽と滑る

聡が現れて、将はショックを受ける。

聡は、スキー研修を受ける瑞樹を見て、彼女が妊娠しているはずがないと安心する（９３話）

昨夜風呂に入りそびれた聡は、生徒と共に大浴場を利用する。

さらにチャミ&カリナら教え子にトランプに誘われ嬉しい。

将ら男子生徒も交えて楽しく騒いでいる中、看護士の山口に呼び出された聡は、

瑞樹が妊娠３ヶ月であることを告白されショックを受ける（９４話）

聡は、３ヶ月を逆算し、その頃の聡と将の関係を思い出す。

そして瑞樹のお腹の子の父親が将であることはありえない、と自分に言い聞かせる。

しかし、目を覚ました瑞樹は自分の口で「お腹の子は将の子だ」と聡に告白。

ショックを受けた聡だが、冷静な態度で瑞樹と対峙できていることが自分でも意外だった。

しかし、トランプに戻った聡は、能天気な将に意地悪をしたくなり、罰ゲームの「好きな異性にキス」を、

将ではなく、兵藤に与える。将は呆然とする（９５、９６話）

スキー研修２日め。ボーゲンを修得していた将は、昨夜からの聡の異変が気になっていた。

将のほうを盗み見ているのに、目を合わせると逸らしてしまうのだ。

将は、自分が何かしたのか、聡に訊いてみるが、聡は何も言わずに将を見つめるだけだった（９７話）

２日目の午後、聡は、ゲレンデの中にあるカフェでぼんやりしていた。

妊娠が発覚した瑞樹は、聡たちの部屋で自習をさせていたのだが、

自由時間まで彼女の顔を見るのがつらくて、とりあえずゲレンデに

出てきたのだ。

そんな聡に、将が、スキー講習中にいなくなったという連絡が入る（９８話）

将が山頂に行ったのではと思った聡は、ニセコアンヌプリの山頂を目指す。

しかし、天候が急激に悪化し、山頂近くで吹雪とガスに逢い、視界がまったくなくなり立ち往生する。

なんとか見つけた避難小屋まで歩こうとするが、たどりつけない。

携帯も使えず、絶望し、死を覚悟する聡。そんな彼女の前に、将が現れてしっかりと抱きしめる（９９、１００話）

１０２◆雪山の一夜１

「アキラ、大丈夫か」

激しい雪と風の中で、ひとしきり抱き合うと、将はグローブのまま聡のむきだしの頬を両手で包んだ。

それはリンゴのように真っ赤になっている。

聡はそのまま、将を見つめるとこっくりと頷いた。

「眉毛が凍って真っ白だぞ」

将はやさしく、聡の眉毛や瞼を撫でた。張り付いていた氷が薄い破片となってサラサラと落ちていく。

そうする将のニット帽から出た髪や眉毛にも次々に白い雪が張り付いていく。

さかんに吐き出される白い息は、あっという間に、将の睫や眉毛に白く結晶してしまった。

将は、聡のネックウォーマーを目のすぐ下までずり上げた。

「すぐそこが避難小屋だからな、このスキー板使っていい？」

将は聡のスキー板を手に取った。

「何に使うの？」

「こうやって、」

将はスキー板を雪に斜めにしっかりと突き刺した。

「目印にしないと、方向がわからなくなる」

吹雪に前髪をなびかせて、将は白い歯を見せて笑った。

見ると聡の手を取って将が歩く方向には、横殴りの雪とまっ白なガスの中、かすかに、将のスキー板が斜めに突き刺さっているのが見えた。

将は、聡のところまで来るのに、元来た方向に向けてスキー板やストックを突き刺して、自分を見失わないように工夫してきたのだ。

何せ視界ゼロ、といっていいほどの状況である。

「板の数は多いほうがいい」

将は聡の手を取って、見えていた板のところまで歩いた。それはわずか２ｍ足らずの距離だった。

そこで将は目を凝らした。次の板を探しているのだ。しかし見つからない。

少し離れているのだろう。将は聡の手を握ると、

「絶対に足をそこから動かさないで。万が一のためにスキー板を刺しておけ。いいな」

と聡に言い聞かせ、自分は聡の手を握ったまま、大きく一歩踏み出した。

聡の体も大きくそっちへ引っ張られる。将はそこでしばらく目を凝らした。

目印の板はなかったらしい。将は聡の手を握ったまま、横にもう一歩進んでまた目を凝らす。

「あったぞ……あっちだ」

将は聡の手をとってさらに進んだ。

それを何度か繰り返して、ようやく避難小屋に着いた。

聡がうずくまっていたところから避難小屋まではたったの１０ｍあまりだった。

コンクリート製の避難小屋は、思ったよりずっと狭く、暗い内部には壁に沿ってベンチが作りつけられているだけの簡素な作りだった。

いちおう明かりとりの窓はあるが、この雪であまり役割を果たしていないようだった。

凍り付いて開かなくなるといけない、と将が開け放しておいたという出入り口のドアからは、雪が吹き込んで中にまで雪が積もっていた。

そんな場所でも、雪と風の吹きさらしの外に比べると、天国と地獄

ほどの差があった。

聡は凍って縮こまっていた肺が、溶けたかのように息を吐き出した。暗がりに吐く息が白く立ち上るのを見て、逆に暖かさを感じるほどだ。

いままでは吐く息の白さもわからないほどだったのだ。

将は、ドアのところに凍りついた雪をガシガシとスコップで削って、ドアを閉めようとしている。

「誰も、いないの？」

「うん。俺一人だった。……すっげー心細かった」

将は、寒さでやや赤くなった鼻をすすると、少し照れたように笑った。

「……将」

聡はスコップを使う将に後ろからしがみついた。

「あたし、本当に死ぬかと思った……将が来てくれてよかった」

将は、背中でドアを押さえるようにすると、聡を受け止めて、もう一度抱きしめる。

抱きしめられた聡は自分から、将の頭に腕を伸ばして、彼の唇に自ら押し付けるように自分のそれを重ねた。

それは冷えびえとした空気の中、本当に温かかった。
お互いの熱い命をむさぼるように、柔らかな唇を重ねる。
外では雪と風がビュービューと音を立てて、それがときどき将が背中で押さえるドアをがたがたと揺らす。
急速に避難小屋の中は暗くなってきた。
「アキラ……、アキラは俺を迎えに来たんだろ？」
将は唇を離すと囁くように言った。
「……そう。あれ……何で知ってるの？」
「メール見た」
「メールって、携帯電源切ってたよね」
「切ってないよ」
と答えて将は、考える。
「……あー、でも寒いからバカになってたかも」
そういえばさっき、聡の携帯も使い物にならなかった。
「暖めたら使えるかな、アキラ携帯出して」

「将の携帯は？」

「リフトの上でメールチェックしてたら落としちゃった」

「うっそー！」

聡は一瞬絶句したが、なんだか笑いがこみ上げてきた。暗がりの中、二人、顔を見合わせて笑う。

聡の携帯はウェアの中で暫く温めると生き返った。

表示を見ると１６時３０分になろうとしていた。

とりあえず多美先生に連絡を入れる。

「古城です。鷹枝くん、見つけました。……今一緒に山頂の避難小屋にいます。……ええ山頂。

ええ、そうなんです。無事ですけど……、視界が悪くて降りられないんです……」

最初はっきりとしていた聡の声だが、どんどん沈んでいくのがわかる。

「……わかりました」

携帯を切った聡に、将は即座に問い掛けた。

「何だって？」

「強風で頂上のリフトもゴンドラも止まってるんだって」

聡はため息をついて携帯を下ろした。

「いちおう救助を頼んでみるっていってたけど、たぶん風と雪がおさまるまで無理だと思う……」

「それっていつまで？」

「さあ……」

将は『貸して』と聡の携帯を奪った。

「ちょっと、連絡手段これだけなんだから、電池大事にしないと」

と聡は言ったが、将は聡の携帯で気象情報をチェックしているようだった。

「ガーン」

将はベンチの後ろの壁に寄りかかると、聡に投げるように携帯を返した。

「前線の通過で明日未明まで、ところにより風雪の強い状態が続く、だって～」

聡も携帯の画面を見た。

こんな山の上はまさに『ところにより』の『ところ』に該当するのだろう。

最悪、ここで夜明かしをしなくてはならない。

外にいるよりはマシだが、暗くなるにつれて、ここもしんしんと冷え込んできている。

さっきは温かく感じた、吐息の白さだが、暗がりに立ち上るそれはいかにもさむざむとしていた。

「将、寒くない？」

「大丈夫。アキラは？」

本当は少し……というよりかなり寒い。だけど、まだ我慢できる、という意味で

「大丈夫」と聡は答えた。

だが、この我慢がいつまで続くかは……明日朝まで持つかどうかはまるで自信がなかった。

たぶん将も同じような状態なのだろう。

あいかわらず、風でドアがガタガタと音をたてている。
陽はとっぷり暮れたようだ。もうお互いの顔も判別できないほど暗くなってしまった。
「お腹、すかない？」
隣にいる将の存在を確かめようと、聡は訊いた。
「大丈夫だよ」
将は聡を安心させるべく、肩を抱き寄せた。こうすると触れ合う面積が増えて、少しは温かい。
「まっくら」
黙ると寂しいので、聡はぽつりと呟いて頭を将のほうに傾けた。
「うん。まっくら」
将は答えながら、聡の頭に自分の頭をもたれかけた。
真っ暗で寒さは徐々に厳しくなってきているのに、将のぬくもりを肩に感じる聡は、あまり怖くなかった。
それより将と二人きりの時間がいとおしく、嬉しくさえ感じる。
「アキラさあ」

将が口を開いた。

「なあに？」

「今朝、なんだか怒ってなかった？」

「……そうだったっけ」

「うん。なんか俺のこと無視してた」

そういわれて聡は、昨日から今朝にかけてのことを思い出した。

瑞樹が妊娠したこと、そしてお腹の子は将の子、と聡に告白したこと。

とりあえず生命の危機を脱して、安心したせいか、消えかけていた不安と疑問が、再び燻り始めた。

聡はそれを悟られたくなくて、問いに答えずに、新たなる問いで返した。

「それより、将、どうして講習の途中で抜け出したりしたの？」

将は答える前に聡の肩を抱く手に力を込めた。

「だから、それだよ」

「何よ」

「アキラが俺のことを無視するから、腹いせに」

「んもぉ～。心配させてー」

聡はウェアに包まれた将の腿を軽く叩いた。

「俺だって、スッゴイ心配したよ、アキラの変な態度。……でも、抜け出したらきっとアキラが探しに来るとおもったんだ」

将はポケットに突っ込んでいた手を出して、腿を叩く聡の手を握った。

「アキラ……」

将は聡の肩をぐい、と引き寄せた。

「またキスしたくなった」

と囁きながら、暗闇の中、まるで見えるように聡の唇に自分の唇を重ねる。

深く舌を挿し入れようとしたとき、聡が顔を逸らし、唇が離れた。

「……どうしたの」

将は聡の肩を抱き寄せて訊いた。ベンチに並んで腰掛けたままだから、体をひねるようにしてようやく抱きしめている。

聡は将に身を預けたまま、息を潜めている。

ドアを叩く風の音が少しだけ激しくなった。

「アキラ、俺、何かいけないことした？」

朝と同じく、優しく安定した将の声。聡は息苦しくなった。何もかも訊いてしまいたい。

瑞樹のお腹の子は……？

一番最悪な答えを想像して、将の腕の中で、聡は身震いした。

「アキラ、寒い？」

将が気を遣ってくる。聡は即座に首を振った。

「アキラ、なんでも言えよ」

将は聡の頭を、ニット帽ごしに撫でながら、

「ね」

と耳元で囁く。暗闇の中、吐息はよけいに耳を敏感にしびれさせて、聡は将にしがみついた。

ずいぶん時間がたって、聡はようやく口を開いた。

ベンチに横に並んだまま抱き合うのは体がねじれて少々つらい体勢だが、二人ともそのままでいた。

風はあいかわらずひどいらしい。ときどきドアのすきまから風に混じって雪が入ってくるらしい。

「将……」

「……なに」

あいかわらず優しい声は暗闇さえも柔らかいものにする。

「将……、もし……、もしね。私がいなくなったらどうする」

「探す」

将の答えは、即答といっていいほど反射的だった。

「どこを」

「そうだね……世界の果てから新聞の陰まで」将の答えには笑いが含まれている。

「新聞の陰？　何それ？」

突拍子もない答えに、聡は将の胸に埋めていた顔を起こして、暗闇の将の顔があるあたりを見ようとした。

だが、もちろん真っ暗で何も見えない。

さっきは不透明なまっ白だったが、今度は真っ黒。

だけどどこかで透けているのではないだろうか、と間近な将の声に期待してしまう。

「歌でさ。あったじゃん。『そんなところにいるわけないのに』とかいって探すやつ」

ああ。『中華料理』の人か、と聡はそのミュージシャンがわかった。

「あと漫画で、彼女が小さくなってしまう病気になるってやつ、あったろ。

俺、アキラが小さくなっても、すぐに見つけ出してやるよ」

将は、微笑んでいるようだ。声だけで漆黒の闇に将の笑顔が見えるようだ。

「もう……」

といいながら、聡はこんな状況なのに、あったかい毛布にくるまるような、ほのぼのとした幸せを感じた。

「じゃあね。……私が死んだら？」

「後を追う」

「……」

聡は、せつなくなって、もう一度、将の胸に顔を埋めた。

さっき吹雪の中で思った、雪に埋もれて死んだ自分にすがる将のイマジネーション。

将は輝くような白い雪の上に、真っ赤な血を流して、聡と共に斃れ

るのだろうか。

「死んじゃだめ」

聡は小さく呟いた。すると将は

「アキラがいない人生なんて、生きる意味ない」

と言い切ると、聡を抱く腕の力をいっそう強めた。

「じゃあ……私が将を裏切ったら？」

将の腕の力に締め付けられそうになりながら、押し付けられた胸の中で喘ぐように、聡は最後の問いを口にした。

顔が見えない漆黒。凍るほどの寒さ。ある意味、危険な問いなのに、将は

「俺のアキラがそんなことするはずがない」

ときっぱりと言い切った。

聡は将の胸の中で、目を見開いた。そのまま顔をあげる。

暗闇の中で、将がまっすぐに自分を見つめている。それがわかった。

「将……！」

聡は将に強くしがみついた。

「ごめんね……、ごめん」

聡は、瑞樹のことで、将のことを疑った自分を詫びたのだが、将は聡のこの言葉に当惑したようだ。

「アキラ、俺を裏切ったの？……まさか博史と？」

腕を抱く力が少し弱まった。心細そうな声。

「あ、違う、そうじゃなくて……あのね」

聡は、そのまま将の胸から顔を話すと、また隣に同じ向きで座りなおした。

寒い中、長いこと、体をひねって抱き合っていたので、少しあちこちがこわばっている。

「あのね……、葉山瑞樹さんが妊娠してるんだって」

将はだまって訊いているようだ。闇に隠れて将の表情はわからないが、もう確認することもないだろう。

聡は将を信じている。

「……3ヶ月だって。葉山さんは、将の子だって言ったんだけど……私は嘘だと思ってる」

将は黙っている。

１０３◆雪山の一夜２

なぜ、瑞樹はそんな嘘を聡にわざわざついたのだろう、と将は考えていた。

９月３日以来、本当に瑞樹とは関係もないし、だいたい関係があった頃から避妊はきちんとしていた。

将の子供などではないことは、当の瑞樹が一番よく知っているはずだ。

――俺とアキラへの嫌がらせか？まったく。

将は、不快感に黙り込んでいた。

「私……、将を信じていいんだよね？」

聡は将に問い掛けた。暗がりだけど、聡の声はせつなげなのがわかる。

「あったりまえだろっ！」

不快感のあまり、強い語調になってしまった。それをフォローするように、聡をもう一度抱き寄せる。

「アキラ、俺を信じて……」

吐息のように耳元で囁く。

「俺は、アキラを絶対に、絶対に、裏切らない。アキラを悲しませるようなことだってしない」

暗闇に響く声は、自分自身への新たなる誓いとなった。

「将……」

聡もまた、将の胸にすがりついてくる。安心したのか、泣いているようだ。

他人を愛することを初めて教えてくれたひと。そのひとも自分を愛している。

この至福を守るためには何でもする、と将は思っていた。

真っ暗な避難所は、しんしんと寒さを増していた。

あいかわらず、ドアを叩く風の音は激しい。

携帯の時計を確認すると、もう21時をまわっていた。

「アキラ、寒い？」

気がつくと聡は体をこきざみに震わせていた。

「大丈夫」

将は暗がりの中、聡の額に手を置いた。

「ちょっと熱いよ、アキラ」

「大丈夫だったら」

聡はそういうが、大丈夫な熱さではないと将は思った。

あいにく避難小屋には毛布とかそういうものはない。

カイロを持ってくればよかった、と将は舌打ちした。

昨日のスキー研修１日目には持っていたのだが、晴れてて逆に暑くなったので、今日は置いてきたのだ。

よく、遭難した男女が、裸で抱き合って温めあう……というシーンがある。

しかしこの、おそらく氷点下１０度以下の、まさしく冷凍庫状態の中でのそれは自殺行為だ。

ウェアを着たままでも、せめてもっとくっつければと思うが、壁に据えつけられたベンチでは並んで座るしかなく、体をひねって抱き合うのも疲れてしまう。

将は、意を決して立ち上がると、ウェアの上着を脱いだ。

それを闇の中の聡に手探りで着せかける。

「ちょっと、将、だめよ。将のほうが凍死しちゃう」

「アキラ、こっちに来て」

「え？」

聡は暗闇の中、将に手を引っ張られた。その手は低いところに聡を導いた。

将は小屋の床にじかに寝転んでいるらしい。

「床がちょっとだけ冷たいけど、この体勢のほうが、体をくっつけられるだろ」

「将、だめよ、そんな格好で。底冷えしちゃう」

小屋のコンクリートの床は、雪がガチガチに凍りついている。

「だから、アキラ、ほらぁ！」

将は半身を起こすと、床の上にしゃがんだ聡を抱きしめた。

「アキラは熱があるんだから。逆に俺の湯たんぽになってよ。外側はそれ着てさ」

聡を抱きしめたまま、将は横に転がるように寝そべった。

「俺は若いんだから大丈夫。子供は風の子っていうだろ。ほら聡はフードかぶって」

聡のウェアのフードを頭にかぶせて枕がわりにさせる。

「んもう、人のこと年寄りみたいにぃ……」

そんな口答えをするぐらいだから、まだひどくはないんだな、と将は安心した。

聡は怒るふりをしながら、聡は将の自己犠牲的な優しさに感動していた。

「待って」

聡は自分のネックウォーマーをはずした。

「これを将の枕にして」

凍りついた床にじかに頬が触れたら凍傷になってしまう。

「ありがと」

二人、凍った床に横たわると、ぴったりと体をくっつけて抱き合う。

「将、寒くない？上着なくて大丈夫？」

スキーウェアの防寒性能は高い。

もちろんその下にも防寒のアンダーウェアを着ているはずだが、スキーウェアがあるのとないのでは、耐寒性はかなり違ってくるはずだ。

もちろん、聡は将のスキーウェアに袖は通さず、外側に掛けるようにしている。

将の体の半分をせめて覆いたいからだ。

「アキラがあったかいから大丈夫だよ。……それにしても、スキー靴ってこの体勢だと邪魔くさいな」

将は笑った。ほんとうは、アンダーウェアとその下のTシャツだけになった背筋がぞくぞくするほど寒い。

がっちりと膝下を守るプラスチックの重いスキー靴は、足をからめようとすると、ガチンゴチンとぶつかり合う。

将は、片方の膝を、聡の両腿のあいだに割り込ませて来た。

こうしないと体が密着しないのだ。

両腿のあいだに将の足を感じた聡は、大胆にも、上になった足を高い位置で曲げると、将の腿にからめた。

裸だったら、何かの体位になりそうな体勢。

「興奮しちゃうな」

暗がりで見えないけれど将は微笑んでいるようだ。

そのまま聡は将にからみつけた腕に力をこめて体をより密着させた。

寒そうなアンダーウェアだけの首と背中をできるだけ手で包む。

最初、下からの底冷えが冷たく染みるようだったが、こうしていると、だんだん温まってくるようだ。

「……したい？」

聡はいたずらっぽく訊いた。

「うん」

将はうなづいて聡の背中をなでた。

「あたしもしたい」

「ウソっ！」

将は半身をガバっと起こした。

「……バカね。この状況で出来るわけないじゃない」

聡は離れた将の体を『寒いから、ほら』とまた抱き寄せた。

「もー。アキラの意地悪～」

といいながら将は再び聡を抱きしめる。

「出来ないかな。やってたらあったかいんじゃない？」

と将はまだ未練がましく囁いた。

「やってる際中はね。でも体力を消耗するから、終わったとたんに凍死しちゃうよ、たぶん」

「そっかー、残念」

教師と教え子で「したい」「やってたら」「やってる」という会話。真面目に話しながら聡はなんだか可笑しかった。

それきり、二人は黙った。

風がドアをノックする音を聞きながら、いつしか二人はうとうとしていた。

眠ったら死ぬかもしれない、というのは頭にあったが、寒さや空腹をごまかす一番の方策が襲ってくる眠気に従うことだったのだ。

しかし、さすがに寒いせいか、眠りは浅い。睡眠の深みにはまりそうでいて、すぐに風の音で引き戻される。

そのたびに互いを抱く腕の力を強める。

それが何度か繰り返されて。

再び寒さに意識が戻った将は、しばらくして風の音がやんでいるのに気付いた。

あいかわらずあたりは真っ暗だ。

懐にあった聡の携帯をあける。明るい画面は聡の寝顔と、５時０８

分という表示を浮かび上がらせた。

起き上がると、ぞくっとした寒さに襲われたが、風の音はたしかに止まっている。

「……将？」

将の体が離れた冷えで聡も目を覚ましたらしい。

「ごめん、起こした？」

「どうしたの？」

聡も体を起こした。

「風が止んでる。ちょっと外を見てみる」

ドアへと立ち上がる将に、聡は自分の体にかけていた将のウェアを渡そうとした。

将は、『ちょっとのぞくだけだから、聡が着とけ』と押し戻して、入り口のドアをあけた。

とたんに、尖った冷えが将の頬を刺した。……密閉された小屋の中は、寒いとはいえ、二人の体温で外よりははるかに温まっているらしい。

外界は静まり返り、傷一つないなめらかな雪の表面が青く浮き上がっている。

それは神秘的なまでに美しい青だった。

将は鋭い寒さに、顔にまでも鳥肌がたつのを感じながらも誘われるように外に出た。

踏むのをとまどうほどの雪の表面。

将は大きな罪を犯すような気分で、思い切ってそれに一歩を踏み出す。

将の足は吸い込まれるように新雪に沈んだ。かろうじてスキー靴の上部までは覆わなかったものの。

さっき目印に刺したスキー板とストックが、沈黙のまま、まろやかな雪の表面に影を落としている。

それほどまでに明るい夜空だった。

空の雲はいつのまにか、どこかに行ってしまったようだ。

空は西の空に浮かぶいびつな形の月が瑠璃色に照らし、どこから集まってきたのかと思うほど、密集する星々。

ドアからの青い光に誘われて聡も将の後ろに従った。聡も雪に傷をつけるのがしのびなくて、将の足跡を踏む。

空を見上げて佇む将の背中にそっとウェアを着せ掛ける。

「すごいな。気持ち悪いぐらい」

将は星を見上げて言葉を漏らした。聡も見上げる。手が届きそう、とはこのことだ。

夜の中でも白く浮かび上がる周囲の山々が見えなければ、宇宙空間に投げ出されたかと錯覚を起こしそうな星の数。

未踏の惑星に降り立ったかのような静寂と星々の海が二人を包む。

「ホント。すごいね」

青い山々の遥かに、深い紺色の日本海が在った。

海岸線にそって、灯りがポチポチと見える。

それは盛大な星の祭典を繰り広げる夜空から比べれば、遠慮がちに見えるほどだった。

夜に歓喜するような空に比べて、地上は息をひそめて、沈黙を守っている。

地上側の二人は言葉もなく、立ち尽くした。

「あっ！」

二人揃って声をあげる。

大きな流れ星が、空を斬っていったのだ。

「見た？」

「見た」

二人は顔を見合わせると、また視線を空に戻した。

すると、今度はコロコロと転がるように星がいくつも連続して落っこちた。

伏せたおわんのような天球をなぞるように、コロコロ、コロコロと転がる。

「すごい……本当に降ってきてる」

将は感動のままに口に出した。

「あれ、……隕石なんだよね。見えないよね」

「アキラ、現実的すぎ」

将は、聡の肩を抱き寄せた。明るいので吐く息も見える。

「アキラ、何か願った？」

「将は？」

「たりまえじゃん」

「何を願ったのよ……」

青い世界に聡に微笑みかける将の顔が幽かに浮かぶ。

聡は問いかけながらも、それがわかっている。

将は聡を抱きしめると、唇を重ねた。

空気までもその冷気に青ざめたような、この蒼い夜に、お互いの唇だけが、体だけが温かい。

取り残されたような、この瑠璃色の世界で、二人は長い口づけを交わした。

１０４◆雪山の一夜３

それから、１時間あまり、夜が明けるまでが地獄だった。

二人は明け方の厳しい冷え込みに震え上がることになった。

その冷え方ときたら、あの満天の星空が地上の熱気とパワーを吸い込んでいくようにさえ思えるほどだ。

さっきと同じ体勢で、二人は体を密着させたが、その寒さは寝付けないほどだった。

「何時ごろ、日が出るかな」

将が、寒さに耐えられず、口にした。

「さあ……。東京は６時半すぎだけど……。ここは緯度が高いから……」

答える聡もさっきから歯がガチガチと鳴らせている。

だから、明かり取りの窓がうっすら青く壁に浮かんだとき、将は待ちきれずに起きあがった。

ドアをあけると、あたりはさっきよりかなり明るくなっていた。

あいかわらずの青い世界だが、そのトーンは２段ほど明るくなって、ものの形もよく見える。

あれほどあった星も、ほとんどどこかへ消えてしまったようだ。

月の光も弱弱しくなり、刺したスキーやストックの陰も消えている。

将は雪の中をズボズボと歩いて、東に開けた斜面に立った。羊蹄山のむこうの空が白んできている。

聡も将のあとを着いて来た。いつのまにか吐く息が白に戻っている。

「もうすぐ夜明けだ。……アキラ、降りよう！」

将は意を決したように聡に呼びかけた。聡は首を振った。

「救助を待ったほうがいいと思うけど……」

「いや、この寒さはもう限界でしょ」

将はいっそう白い息を吐きながら、組んだ腕をさすった。

「でも、将、ここを降りられる？」

聡は目の前の急斜面を見て、将に問う。将はなんといっても、たった2日スキー研修を受けただけなのだ。

「大丈夫だよっ！」

そうは言うが、たぶんボーゲンレベルだろう。

それに、明るくなりつつはあるが、こんな明け方、アイスバーンが心配……と一瞬聡は思ったが、それについては心配なさそうだ。

これだけ新雪があれば、凍った斜面などありえない。

将のいうとおり、寒さは限界値に思える。

もう明るくなりつつあるから、救助が来るとは思うが、自力で降りたほうが、その分温まるかもしれない。

聡は考えたあげくそう判断すると、多美先生に電話をして、無事なことと、自力下山を試みることを伝えた。

「将、絶対私のいうとおりにするのよ。いい？　危険なことはしないで」

「わかったよ。そのまえに……」

将は聡を抱き寄せた。二人の吐く白い息が交じり合う。

雪はだんだん、冷たい青からラベンダー色に変わりつつある。

だんだんとはっきりとしてくる羊蹄山に見守られて、二人は口づけをした。

美しい天上の世界、二人の一夜を惜しむかのように……。

刺したスキーは昨日より深く埋まっていた。それを抜いて、装着す

る。

新雪は１５センチ近く積もっているようで、スキーを履いた足が板ごと埋まっていくようだ。

とりあえず、ロープが張ってある終わりまで、聡が先行して、ゆるゆると進む。

ゆっくりと進んでいるせいか、スキー板は新雪に埋まってしまい、まったく見えない。

聡は将を振り返った。まだ緩斜面のせいか、問題なく滑っている。

ときおりストックを振り返る聡に向けて振り回すあたりは余裕しゃくしゃくだ。

傷のない滑らかな新雪に二人がつけた、シュプールとはいえないボコボコの通り道が残る。

そしてロープが終わった。

ここからは、いやがおうでも急斜面を下りなくてはならない。

新雪の下は圧雪コースだから凸凹はないとはいえ、今までの緩斜面から見ると、まさに落ちていくような『壁』だ。

コースガイドによれば、最大斜度３６度だという。

長い『壁』は、新雪に覆われて、滑らかなラベンダー色に沈黙していた。

ひそ、とも音がしない。

聡にとってはこれぞ嬉しいパウダーの斜面なのだが、初心者の将が一緒なので、心配が先に立ってしまう。

「将、いい？　スピードが出過ぎないようにゆっくりと横切るように行くのよ」

聡は初心者である将に注意をあたえる。

「……それと体重が後ろにかかるとスピードが出ちゃうから。スキーを止めたいときは、足の親指に力を入れるのよ。いい、親指。それでもだめなときは、斜面の山側に転んで」

あれこれ注意をする聡に、将は

「わかった、わかった。大丈夫だから心配しないで」

そういうと、待ちきれないように先に滑り始めた。

将も、どうやら、この処女地に手をつけるのが嬉しくて仕方がないらしい。

しかし、とりあえず聡のいうとおりに、斜面を横切るように行っている。そこまではスムーズに見えた。

が。ターンしようとしたときだ。

さすがに緩斜面でしかターンをしたことがない将は、重力に負けて

曲がりきれず、そのままスピードを出して下に滑り始めてしまった。

「わあっ！」

加速していく。将はもうわけがわからなかった。聡から受けた注意も、研修で受けたことも忘れてしまうようなスピード。

しかし、雪しぶきをあげて、誰も滑っていない斜面を滑る快感に将は恐怖を忘れた。

「イヤッホウ！」

叫びながら、斜面を突き進む。

しかし、それは一瞬だった。猛スピードで進む将に、コースとの境界を示すロープ見えた。見えたが最後、ぐんぐんと近づいてくる。

「うわあああああ！」

将はすんでのところで転がった。

転がりながらも慣性で体が斜面の下へと滑っているのがわかる。

将が止まったのは、転んだところからさらに５ｍ以上も下だった。

「将！」

聡が叫びながら、滑り降りてきた。雪しぶきにその下半身を覆い隠すようなダイナミックで華麗な滑りだ。

将が斜め一直線に汚くひっかいたような雪面に、美しいカーブを描く。それは機械で描いたかのように、一定間隔の波線だった。

どこかで見たプロモーションビデオのようだ。

将は倒れたまま、降りて来る聡に見惚れた。

すぐに将の近くまでやってきた。

「大丈夫？」

「……大丈夫デース」

将は雪の斜面の山側に寄りかかるようにして聡に手を上げた。

「アキラ、熱あるのに、スゴイな」

将は素直に感心を口に出した。

「熱なんて……。あれ、将、スキーは？」

将の片方のスキー板は見事にはずれていた。聡に言われるまで将は気付かなかった。

しかし、あたりを見回してもそれらしきものはない。

どうやらフカフカの新雪が、はずれたスキー板を埋めてしまったようなのだ。

「ちょっと待ってて」

聡は、横歩きで将の転んだあたりまで登っていくと、ストックをあたりの新雪に刺しこみながら板を探した。

将も同じことを片足でやろうと思ったが、なにせ雪が深いので埋まってしまう。

情けないが、聡が板を見つけてくれるのを待つしかなかった。

板はしばらくして見つかった。新雪の急斜面は外れた板を装着するのも一苦労だった。

ようやく立ち上がった将に、聡は羊蹄山に向かって右側に指をさした。

「将、もう曲がらなくていいから。あっちのほうにできるだけスピードを出さないように行って」

今、幸いコースの一番左端にいる。右へと降りていけば初心者コースの入り口に入るのだ。

ちょっと自分が情けなくなった将は

「ウン」と神妙に答えた。

それから、スピードに歓声を上げる&転がる、を繰り返しながら、ようやく上級者コースを脱出できた。

あとは初級者コースの組み合わせで、下まで降りられる。

研修で使っているスキー場の隣に降りることになるが、タクシーでも使えばいいことだ。

しかし、初級者コースといえど、ときどき急なところもある。将はそれが楽しくてたまらなくなってきた。

スピードをあげて、新雪を滑っていくのがたまらない。しかも誰もいない、傷一つない新雪に覆われた斜面だ。

途中で太陽も羊蹄山の裾から顔を出してきた。

陽の光があたると、新雪は、雪の結晶を浮かびあがらせてキラキラと輝きだした。

透明な粒が集まって、白く反射している。だから目を射るような白さなのだ。将は何回目かに転んだときにそれを目の当たりにした。

振り返ると、聡と将が付けた2つのシュプール。

大きななだらかなカーブを描く聡のシュプールに比べて、将のそれは雑でところどころ転んだあとさえある。

転んだ将に追いついた聡は

「もっとゆっくり滑んないと！」

と呆れて転んだ将を見下ろしたが、このスピード感こそがたまらな

いのだ。

ゆっくり滑ると雪が深くえぐれるようだが、速く滑るとシュッと雪の表面を薄くそいでいくようなのだ。

この『そいでいく』感覚がいい。

「わかったよ。ハニー」

エイヤッと将は雪から起き上がると、聡の頬にチュッとキスをした。

しかし聡のアドバイスに反して、将はむしろ直滑降に近い角度で滑っていった。

「もうっ」

聡は将の後を追った。

「アキラ～！」

驚異的なスピードで滑り降りた将は、今回はなだらかなところで転ばずに止まることができた。遅れて続く聡へとストックを振り回した。

「下が見えてきたぜーー！」

バーンの下に、麓の町が見えている。

こっちのスキー場はホテルが何軒かあり、ペンションなども寄り集まっているようで、なかなか賑やかそうだ。

聡はホッとした。

とりあえず怪我もなくここまで将を連れてこれた……というより暴走する将に連れてこられた、といったほうが正しいかもしれない。

とにかく初心者連れとしては驚異的なスピードでここまで来たと思う。

「最後、キツイから気をつけてね。雪も少ないし」

麓に近いこの辺は、新雪もうっすらとゲレンデを覆う程度しかない。その下は凍りついたアイスバーンなのだ。

「大丈夫って！」

将は、ろくに休みもしないで、最後の坂をほぼ直滑降で滑り始めた。

「イヤッホウ！」

嬌声を上げる将を聡は

「……元気ね」

と見送った。聡はやはり少し熱があるのか、ここまでで少々疲れを感じていた。

と、そのとき。下のほうで、将が頭を下に向けて転んだ。変な転び方だ。スキー板がまたはずれている。

「将！」

聡は、あわてて将のところまで滑り降りた。

思ったとおり凍りついた坂は硬い。

それだけでなく、昨日荒れたまま凍りついたのか、ところどころ硬い凸凹がある。

どうやら将はその1つに足を取られて転んだらしい。

「大丈夫？」

「……痛ってえ」

顔をしかめながらも将は『大丈夫』と答える。

はずれたスキー板は、今度は容易に見つけられたが、装着するときに将はひどく顔をしかめた。

幸いバーンも下のほうだったので、なんとか麓まで滑り降りたが、スキーをはずしても膝下が痛い。

麓では、多美先生がホテルのワゴンをこちらにまわして迎えに来てくれていた。

ホテルに着いた将は、単独行動をこってりと叱られた。

罰として3日目の研修……といってもこの日は東京に帰る日なので、2時間ほどしかないのだが……に参加することを禁じられ、正座1

時間を命じられた。

しかし、膝下の痛みは、正座もできないほどだった。

おかしいと病院に行った結果、将の膝下の骨は、見事骨折していたのだった。

１０５◆入院中１

コン、コン。

病室のドアがノックされて、ベッドの上でパソコンをいじっていた将は急いで振り返った。

「なーんだ。山口さんかぁ……」

入り口に看護士の山口の姿を見たとたん、がっくりとリクライニングにしたベッドにもたれた。

「ちょっと、なーんだ、はないでしょう」

白衣姿の山口は、笑顔で軽く抗議した。

「内科病棟の看護士ってよっぽど暇なんだな」

将は起き上がると、再び持ち込んだノートパソコンの画面に向かった。

「んま！失礼な。せっかく心配して休憩時間に顔を見に来てあげたのに」

修学旅行に同行した内科病棟の看護士・山口は、聡と行動を共にしていたせいか、すっかり将とも顔なじみになってしまい、

外科病棟に入院した将のところにもこうやってちょくちょく様子を見に来るのだ。

将が入院して2日目になる。……つまり、昨日から入院している。

パソコンや携帯が自由に使えるからと個室に入院した将だが、今日の昼過ぎ、すでに退屈していた。

ちなみに、入院の手続きをしたのは義母だが、将に嫌われていることをよく知っている彼女である。

必要なことだけを整えると、即座に退散してくれて、将はホッとした。

看護士の山口がちょくちょく来るのは、そうした将の複雑な家庭事情を察したから、というのもあるのだ。

ちなみに将の骨折は『腓骨』といって膝下を支える2本の骨のうち細いほうの骨の骨折だった。

「ちょっとさぁ、山口さん。ここに腓骨骨折した人の話が出てるけど、

2泊3日で退院したって書いてあるぜー。何で俺、2週間いないといけないのサ」

将はネットを表示したパソコンの画面を見ながら山口に文句を言った。

「鷹枝くんの場合は、折れた骨がずれてたの。同じところが折れてても、ずれていない場合は短いのよ」

たしかに将の折れた部位は、少しずれていたため、手術が必要だった。折れた骨に金具を入れて補強している。

その左足は今、ギプスがはめられて吊り下げられている。

……この、昨日行われた手術が最高に痛かった。

骨に金具を入れているときは、麻酔が効いていたのだが、最後に皮膚を縫合するときに、麻酔が急激に醒めてきた。

局部麻酔だったので、当然、将は痛みを訴えた。麻酔を追加してくれるだろう、と思ったのだが。

『もうすぐ終わりですからね。我慢してください』

と我慢を強いられたのだ。あの縫合時のキリキリとした痛みは、将のいままで感じた痛みで、もっとも鋭く感じられた。

殴られようと、根性焼きされようと、あの麻酔切れの痛さに比べればまだ甘い。

１２のときの大ヤケドの皮膚移植手術でさえ、子供だったせいか、もう少し優しくされたような気がする。

昨日の痛みをリアルに思い出して、ぞっとする将に山口は笑いながら続ける。

「……それに、あなたの場合、早く退院させると絶対に無茶をするでしょ。だからよ」

将はプーッとふくれた。が、気を取り直して、

「……センセーは？」と訊いた。

「古城先生の風邪？　まだよくならないでしょう？」

「……そっか」

将はがっかりした。

あの避難小屋での極寒の一夜があけて、聡はやはり風邪をひいていた。

それでも熱で赤い顔をしながら、山口に薬をもらっただけで、最終日だからと、ほぼ立ち詰めで生徒の引率をやりとげた聡。

千歳空港での自由時間、生徒たちが土産物を買っているあいだだけ、聡は空港のベンチで正直にだるそうにしていた。

とりあえず倶知安の病院で骨折の応急処置をしてもらった将は、松葉杖を傍らに置いて、聡に付き添った。

どっちがどっちに付き添っているのか分からない状態だ。

風邪の教師と骨折生徒が二人きりでベンチで安静にしていても、それほど不自然ではないのが不幸中の幸いだ。

千歳空港の土産物売り場は広い。カニやホッケ、鮭などの海産物や『白い恋人』などの菓子類でちょっとした市場の様相を呈している。

活気ある喧騒の中に、離発着のアナウンスが混じる。そんな騒々しさの中で、聡は傍らの将に話し掛けた。

『将……じゃない、鷹枝くん、お土産買わないの？』

『買ってくヤツ、いねえし』

『自分用にカニは？』

聡は赤い顔をしながらいたずらっぽく笑った。

『何、また、むいてくれんの？アキラ』

具合悪そうな聡の冗談だが、将は冗談で返した。

『だーれが』

と聡はひとしきり笑いつつも

『その足だと動きにくいもんね……。もし、何かほしいのがあったら先生が買ってきてあげるよ？

ホッケとか、イクラ、美味しいって言ってたよね』

どちらもホテルでの食事で出たものだ。聡は気を遣って立ち上がろうとした。

『いいよ、アキラ、じっとしてろよ。どうせ俺、明日手術だし、いいよ。……また二人で北海道来ようぜ』

将は思わず、聡の頭をくしゃっと撫でた。

『誰かが見てるかも……』

といいつつ態度で抵抗しないのは、やはりダルいのだろう。聡は膝の上に頬づえをついた。

『……スキー嫌いにならなかった?』

ダルいのか視線だけを将によこす。

『なんでぇ?面白いじゃん。またやりたいよ』

『そう……。よかった。最初にそんなケガしたから、こりごりになったんじゃないかと心配しちゃった』

と聡は熱で潤んだ瞳を細めて微笑んだ。頬に柔らかい髪が貼り付いている。

その愛らしいけど弱々しい笑顔に将は抱きしめたくなるのを、必死で堪えていた。

そこへ出発便のアナウンスが響く。

好きな人と空港で二人……病気の彼女と二人で出発便を待っている。

何かの映画で見たシチュエーションだ。

『助けてください』だっけ。

あんな、彼女が先に死んでしまう……悲恋の映画と、自分たちはまったく違う。

このとき、将は二人の幸せな未来を、まるで疑っていなかった。

それは、ほんのおとついのことなのに、遠い昔のように将は思った。

聡の顔を見ずに、もう何時間過ごしてしまっただろう。数えて将はため息をついた。

「よっぽど古城先生が好きなのね……」

山口はつぶやいた。

「悪いかよ」

将は、悪びれもせずに答えた。

もちろん、山口は将と聡の関係は知らない。

単に将が聡を慕っていると思っているだけで、まさか二人が大人の関係の一歩前……深い口づけをしたり、上半身だけとはいえ素肌を交わしたことがあるなどとは知らないのだろう。

そんな秘密の記憶を思い出したこともあり、将は少し愉快になって口の端で微笑んだ。

日曜から修学旅行だった2年生は、東京に帰った翌日……つまり昨日は振替休日だった。

昨日まで具合が悪かった聡だが、今日はきちんと学校に行ったという。

それはメールのやりとりで将も知っている。

だから、病院に顔を出してくれるかも、と期待したのだが、まだ風邪がよくならないのなら難しいだろう。

聡のかわり、というわけでもないが、午後も遅い時間になって、井口、カイト、ユータが病室に現れた。

「個室かよ～、すっげーな」

とカイト&ユータはあたりを見回した。

「超ヒマでよぉ」

と将は伸びをした。

「いいじゃんよ、昼寝し放題でさー」

と井口は勝手に椅子を出してくるとベッドの脇に座り、

「俺、ここに泊まっちゃおうかな」

と笑った。半分ぐらいマジで言ってるな、と将は思った。

「なー、ところでさぁ」

カイトが目を三日月のようにニヤニヤさせて将に話し掛けた。

「アキラセンセとの一夜、どうだったの？　やっぱハダカで抱き合ったわけ？」

「バッカ。おまえなー、冷凍庫の中でそれ出来るか？」

将は顔をしかめながら言ったが、

「いや、激しく愛し合えば大丈夫でしょ」

とカイトは一人うなづいた。

将は

「ハァ？」

と呆れた声を出しながらも

――こいつらの発想って……。でも結局俺も同じだったんだけどさ。

と気付いてちょっと恥かしくなった。
「てゆかさ、鼻水も凍るんだぜぇ。そういう状況じゃ……おいユウタ何やってんだ」
きわどい単語を並べて、あの状況でセックスなどできない、ということを証明しようとしていた将は、
左側にまわりこんで将のギプスに何かしているユウタに気付いて咎めた。
「いやー、お約束でしょ」
こちらもニヤニヤ笑うユウタはいつのまにかマーカーを何本も持っていて、将のギプスに落書きをしていた。
「コラ、やめろよ」
しかし、固定された足を動かすこともできず、将のギプスには見事に将と聡の名前付きの相合傘を初め『巨乳アキラ命』『アキラ先生ＬＯＶＥ』などと下品な落書きが書かれてしまった。
カラフルに5色のマーカーをふんだんに使って、グラマーな女性のヌードまで描かれている。
それには、もちろん矢印で『アキラ先生』と示してある。
「くっそぉ、覚えてろよ～、てめ～」
拳を握り締める将に、ユータはそれをよける仕草をした。

「ところでさ、アキラ、具合まだ悪そうだった？」

将は井口に訊いた。

「ああ。悪そう、悪そう。映画見ながら鼻水ぐしゅぐしゅしてた。でも今日は社会見学を休みにしてただろ、それ正解って感じ」

考えれば、今日は金曜日、通常なら6時間目に社会見学がある曜日だが、今週は修学旅行があるため、社会見学のほうは休みにしていたのだ。

明日は土曜日だが、そんなに具合が悪いのなら聡はこないだろう。

将は、また、ため息をついた。

下品な落書きをされてしまったが、3人が来たおかげで、退屈がまぎれたのも事実だ。

泊まりたそうにしていた井口だが、夕食時間になると素直に帰っていった。

将はまた一人になり退屈になった。

今日はテレビも見たいのがない。

「あーあ」

将はひっくり返ると、携帯のメールをチェックした。

聡からの新着は入っていない。やっぱり具合があまりよくないのだろう。

『聡、俺、すっげー暇』

とだけメールを打つ。

ちょうど送信し終わったとき。将の部屋のドアがノックされた。

面会時間ギリギリだ。

また看護士の山口か、でも聡かも？

期待を捨てきれずに、体を起こしてドアを振り返った将が入り口に見たのは、制服姿の葉山瑞樹だった。

１０６◆入院中２

病室に入ってきた瑞樹を将は黙ってにらみつけた。

瑞樹は最初、将の顔をその大きな目で見たが、将の形相を見て下を向いた。

ウィッグの長い髪が顔の両側を覆い、瑞樹の表情を隠した。

しかし、出て行くわけではなく、閉じたドアの内側に佇んだままだ。

沈黙が続いた。

「……何の用だよ」

先に声を出したのは将のほうだった。

下を向いていた瑞樹は、将の声に反射的に顔を上げた。

しかし、いつもの、人をバカにするような冷たい表情でも、将だけに見せる媚びた笑顔でもない。

顔の筋肉に力が入っていないような……ニュートラルな顔だった。

呆けたようなその唇から漏れた言葉は

「お金を……貸して」

だった。

将は、にらみつけるのをやめて、下を向いて一瞬、ハッ、と笑った。

そしてもう一度瑞樹のほうに顔を向けた、

左目だけ目を細めるように眉根を寄せた、人をいぶかしがりながら、さげずむ表情。将がよくする顔だ。

「お前さ、そんなこと頼めるギリかよ」

将の言葉にも、瑞樹は呆けた顔をやめない。

「アキラにとんでもないウソついてよォ！　どういうつもりなんだよ」

聡の名前を聞いて、瑞樹はようやく、再びうつむいた。しかし返答もしないで黙ったままだ。

瑞樹がだまったままなので、将は瑞樹を、にらみつけながら観察した。

うつむいているが、震えるわけでもなく、どことなくふてぶてしい感じだ。

将はベッドにいる自分がもどかしく感じた。

動けるなら、肩をゆすって威嚇するなり、手をひっぱって病室の外に追い出すなりしたい。

しかし、昨日手術したばかりの左足を固定している将は、彼女をに

らむしかできない。

たぶん、貸してほしい金の使い道というのは中絶費用だろう。

イライラした将は、むしょうに煙草が吸いたくなった。

「誰の……だよ。腹の」

と、この状態にいらつく将は多少譲歩して、問い掛けた。

なのに瑞樹は答えないままだ。……時間を稼ごうとしているのだろうか。

将のイライラは頂点に達した。

「あのさ。出て行ってくれない。俺、ムカついて気分悪いし。てかお前が男だったらブン殴ってる。

……金は貸せないし。自分で援交でもすれば」

言ってしまって、将は自分の言葉の冷酷さに、ややビクついた。

しかし……瑞樹はふてぶてしい女だということを将はよく知っている。

これぐらい言わないと、わからない。と将は自分の良心に言い訳した。

瑞樹は、やっと顔をあげた。

その目に涙が溜まっている。すがるような顔だ。

「将、お願い。センセーにウソついたのは謝るよ」

声を出したとたん、涙がぼろぼろとこぼれる。大量に流れたそれを両手でぬぐう。

そんな、か弱い女のようなポーズを、瑞樹がするのを初めて将は見た。

「……だって、だって。センセーが……。将を取ったセンセーがにくたらしかったんだもん……。困らせたかったんだもん」

しゃくりあげ、嗚咽をまぜながらの泣き声は震えて、いつもの落ち着いた瑞樹の声とかけ離れている。

表面はそんな瑞樹を睥睨しながら、将は内心動揺していた。

「私、……将のこと、本当に好きだったから……」

震える声でそこまで言うと、瑞樹はしゃがみこんでしまった。

顔を覆っているので表情は見えないが、肩を激しくふるわせている。ときどき嗚咽と、しゃくりあげる声が聞こえる。

将の中で罪悪感、というものが顔を出す。

それは、いつも瑞樹に対して抱えていたものだ。

愛情もない瑞樹を、性の発散の対象としていたことに対して……。

毎日のように瑞樹を抱いていた頃は、それはまったくといっていいほど感じなかった。

避妊しているし。俺は義務はきちんとしている――と、うそぶいていた将。

だけど、聡を愛したことによって……そんなふうに女を排泄道具のように抱いたことが、いまさら罪の意識となって発作のように襲い、将は苦しんだ。

そして今。『どっちもどっちだったから』と無理やり覆い隠していたそれが、将の心を動かしていく。

しかし将は、嗚咽する瑞樹をもてあましていた。

聡を複数の男に襲わせようとしたり、聡に嘘をついたりしたことは、やはり許しがたい。

だから、将は瑞樹の体をいわばオモチャのように使ったことについて、謝れないでいた。

将は、瑞樹の姿を見るのがつらくなって、そっぽを向いた。

「金って……、中絶費用？」

瑞樹をみないまま、宙に問い掛けるように訊く。

「……ウン」

瑞樹はあいかわらず嗚咽しながら答えた。

「いくら、かかんの……？」

「１５万ぐらい」

将はそっぽを向いたまま、ため息をついた。

高校生には高額な金だ。しかし将には最近、儲かった株がある。それを現金化すればたいしたことのない額だ。

将は、瑞樹をもう一度見据えた。

「もう、アキラに変なことしようとか考えるなよ」

瑞樹は立ち上がった。泣きはらして、ぐちゃぐちゃになった顔だ。マスカラがとれて下瞼にくっついている。

将は、瑞樹がそれを丹念に塗る動作を思い出した。

瑞樹はマスカラがとれたままの顔で、深くうなづいた。

「絶対、だぞ」

将は念を押した。

「わかった……」

瑞樹はうなづきながら、将のベッドに近寄ってきた。

将は思わずあとじさりしたくなったが、あいにくベッドから動けない。

「それで……将、もうひとつお願いがあるんだ……」

「な、何だよ」

瑞樹はベッドの脇に立った。目線は将と同じぐらいの高さにある。

「中絶の書類にサインしてほしいの」

将は、眉根を寄せて、瑞樹を見つめた。瑞樹は泣きはらした顔のまま将をじっと見ている。必死な表情だ。

――何をいうんだ、この女。

「何で……俺がそんなことする必要があるんだよ。サインぐらい相手にしてもらえよ」

将は瑞樹から目を逸らすと、冷静に言った。

「……してもらえないんだもん」

将はおそるおそる……しかし表面上はそんな様子を見せず、瑞樹を見やった。

瑞樹は、またうつむいている。その目から、雨だれのように涙がポタ、ポタ、と下に落ちていく。

「サインしてもらえないって……、お前、相手誰なんだよ」

瑞樹は歯を食いしばったような顔で、顔をあげた。涙が頬をつたう。
すこし間をおいて、覚悟したように相手の名前を告げた。

「前原……」

その名前を訊いて、将は納得した。

カンベツに入所している前原に、たしかにサインは出来ないだろう。
しかし瑞樹は、思いつめた声でさらに続ける。

「……か、オヤジ」

107◆罪

将は最初それを、聞き違いかと思った。次に、オヤジ世代の男、という意味なのかと思った。だから、

「どこのオヤジ」

と訊き直した。

瑞樹は一瞬、将の目を見て、息を飲んだ。白い喉がごくっと揺れるのが見える。

が、すぐに視線を下にはずした。そして

「うちの……オヤジ」

と呟いた。将が『えっ』と言う間もなく、

「義理の父親」

と付け足すと、また視線を将の瞳に戻した。見開いたその目からは、大粒の涙が流れ落ちた。

それはもはや粒の形もとどめないほど大量で、頬には涙の筋が光って見えた。

将は……出そうとした声がひっこんでしまい、それが腹の底に鉛のように重く沈んでいくのを感じた。

舌はおびえたように上あごにくっついてしまったっきりだ。

しかし、瑞樹のほうは、涙を流しながらも、大きな秘密を思い切って将に分け与えたせいで多少は楽になったのか、話を続けた。

「あたしね……、小5からオヤジにずっとヤられてるんだ……」

逆に大きな秘密を与えられてしまった将は、その重さに辟易していた。

たしかに、以前にも瑞樹自身から

『義理の父親に迫られて困っているから家に帰りたくない』

と打ち明けられたことがある。

だけど、実際に関係があったとは……しかも小学生の頃から。

もちろん、義理の父親だから、瑞樹と血のつながりはない。

だけど、瑞樹の母親と結婚している男が、その娘に手を、本当に出すなんて。

あまりに長すぎる間を置いて、将はやっと掛ける言葉を探し出した。

「おかあ……母親には……？」

瑞樹は諦めたように首を横に振った。ウィッグの黒髪が左右にゆらゆらと揺れる。

たしか瑞樹の母親は、小さなスナックを経営している、と聞いたことがある。

「……言える訳ないよ。……あのヒト、オヤジにぞっこんだもん……。オヤジと結婚してようやく母親らしくなったぐらいだし……」

瑞樹はさらに、小さい頃から母親に虐待を受けていたことを話した。

瑞樹が物心つく前に離婚した母親は、手が掛かる幼児をもてあまして、しばしば虐待に及んでいたというのだ。

幼かった瑞樹は、たびたび

「お前のせいだ。お前のせいでっ！」

と大酒を飲んだ母親に殴られ、蹴飛ばされた。食事もろくに与えられなかったことも多い。

何が『瑞樹のせい』なのかわからなかった瑞樹だが、成長するに従って、

母親は、男に逃げられるたびに荒れるのだ、ということが分かってきた。

そして、瑞樹が小5のとき。寂しかった母親は、ようやく男と結婚することができた。

母にとって年下だった男は、瑞樹の母親と結婚するなり仕事を辞め、家でぶらぶらしているという『ヒモ』に徹するのだが、

瑞樹にとってはこの男が来たおかげで、母親の暴力が止んで、瑞樹にも優しくしてくれるようになった、と初めは感謝していたほどなのだ。

しかし、瑞樹が小5の夏。男、つまり新しい父は家にいた瑞樹の処女を奪ったのである。

そんな告白を聞きながら、なぜか将はぼんやりと、瑞樹のその部分を思い出していた。

薄い毛の下に、まっすぐに割れた皮膚が透けて見えていたそれは、その中の肉がはみでることもなく、

援交を重ねた女のそれとは思えない清楚なたたずまいだった……。

そして考えが……そこにいかないようにコントロールしているのに、どうしても行ってしまう。

そこ、とは。瑞樹の義父同様、自分も瑞樹を、瑞樹の性を弄んだ共犯者なのだ、という事実。

毎晩のように、瑞樹のその部分に欲望の塊を挿し入れて、自分を満足させていたという、現実。

それはいつのまにか将の背中にのしかかり、将の心を責めた。

９月に将のマンションを追い出された瑞樹は、再び援交などを繰り返して、家に戻らないように努力していた。

同じようなことをするわけだが、援交相手は少なくともお金をくれる。エイズが怖いのか、たいてい避妊もしてくれる。

それに対して義父は、成長した瑞樹に、どんどん変態行為を要求するようになってきた。いわゆるＳＭ行為である。

まだノーマルで金をくれる分、援交のほうがマシだったのだ。

１０月に前原から声をかけられるまでそれが続き……１０月から１１月に前原が逮捕されるまで、瑞樹は前原の家の離れで過ごした。

前原の家を急に追い出された瑞樹は、将に髪を切られたこともあり、嫌々ながら家に戻っていたのだ。

受胎したのはおそらくその頃だろう、と瑞樹は言った。

そんなわけで、瑞樹が妊娠した体を抱えて、スキー研修に参加した理由は、１つは研修中は義父と離れられることだった。

もう１つは。

「スキーで、できれば子供を流産したかった」。

もういい。やめてくれ。将は顔をこわばらせながら、心の中で叫んでいた……。

気がつくと、二人とも沈黙していた。

瑞樹の涙は乾いていた。今まで背負ってきた重いものを吐き出したせいか、うつむきながらも、ほんのすこしホッとしたようすが見える。

逆に将は、もてあますほどの事実を聞かされて、またその事実でいやがおうにも自分の罪を思い出し、その重さにあえいでいた。

瑞樹を弄んだ罪。そしてそんな瑞樹を放り出した罪。

瑞樹の苦難の半分は自分の責任だ――将は良心が繰り出す責め苦に、息もたえだえになりそうなのをかろうじて持ちこたえていた。

せめて自分の罪を軽くしたい。いつしか、それだけを願っていた将は、瑞樹に答えた。

「わかった……。サインはするよ」

瑞樹は、目を見開くと

「ありがとう。……ごめんね。本当にごめんね、将」

と再び涙をこぼした。

『謝るな、謝らないでいい』。将は、心の中で懺悔していた。

瑞樹に……いまさらだけど、何かできることはないのか。

将は、とにかく自分の抱えた罪の重さを軽くしたくて、必死で考えた。

「今は……どうしてるの？」

「小山にお婆ちゃんがいるんだ……。今週はそこにいさせてもらってる。

休みのときは、できるだけ、そこに行くようにしてるから……でも、来週は学校があるし」

「そうか……」

相槌を打った次の瞬間、考えが浮かぶ。

将は、瑞樹に、傍らの引き出しをあけさせた。そこにはマンションのキーや車のキーがついた、キーホルダーが入っていた。

将はキーホルダーからマンションの鍵だけを抜くと瑞樹の手の中に落とした。

「俺、２週間も入院するらしいから、その間、俺のマンションに泊

まれよ」

瑞樹は丸く見開いた目で、手の中の鍵と将の顔を見比べながら、

「……いいの？」

と呟いた。

将はうなづいた。

「これぐらいしか、お前にしてやれることないし。……金は、明日病院のＡＴＭで下ろしておくから」

それでも将は瑞樹の目をまともに見ることができない。

だけど、瑞樹のその大きな双眸に、涙が盛り上がるのが視界の端に確認できた。

「将……、ありがとう。ありがとう……、ごめんね」

瑞樹は鍵を握り締めた手で、溢れてくる涙をぬぐった。

それきり、安心して力が抜けたのか、しばらく嗚咽していた。

「そんなに泣くなよ……」

瑞樹にティッシュを手渡しながら、まだ飲み込む唾に、異様に苦い味を将は感じていた。

自分の罪はまだ消えたわけではない。

苦しむ心は、いつしか聡を求めていた。

聡に会いたい。聡だったら自分の苦しみを受け止めてくれるだろう。自分を温かく包んでくれるだろう。

そう思う反面、聡を思えば思うほど、背負った苦しみが重みを増していく……そんな気がするのも、また事実だった。

１０８◆甘い時間

「鷹枝くん、元気？」

病室のドアが開いて、看護士の山口が顔を出した。

もう月曜日、入院して5日目の夕方だ。

「へいへい、と」

初め、聡がいつ現れるかと、ノックがあるたびに期待していた将だが、聡の風邪は思ったよりひどかったらしい。

この土日も『伝染るといけないから』とメールがあって、将の病室を聡が訪れることはなかった。

この時間だったら日勤を終えた山口だろうと、と将はパソコンの画面から顔もあげなかった。

「もうっ、可愛くない。いいもの見せてあげないわよっ」

「ハイハイ、何ですか～……、……！！」

ようやく顔をあげた将は、嬉しさのあまり口がパクパクしてしまった。

ドアのところには、聡が立っていたのだ。

逢いたくて、触れたくて、声が聞きたくてたまらなかった聡。

「アキラ！風邪治ったの？」

将は自由のきかない体をベッドの上から乗り出すようにして、聡に声をかけた。本当は駆け寄りたい。

「これ、何ですか、先生を呼び捨てで」

咎める山口を

「いいんですよ。いつものことですから」

聡がなだめる。少し低めの、でも温かみのある声。将がどんな音楽よりも聞きたかった声だ。

「アキラ、こっちこいよ。山口さん、ありがとね。もう帰っていいから」

「んまー！なまいきっ」

「どうもすいません。あの、よろしかったら一緒に食べませんか？」

と聡はお見舞いが入ったケーキ店の紙袋を指差した。

「ええー！山口さんには明日、あげるからサ」

早く聡と二人になりたい将は、追い払うように山口を帰してしまった。

「将ってば……。山口さんに失礼よ」

「アキラ、ここに座れよ」

咎める聡にはまるでおかまいなしに、将は腰をずらして、ベッドの自分の隣の空間を少しあけた。

「もう……。痛みは治まったの？」

聡は苦笑しながら、将の隣に腰掛けた。

将はそのぬくもりが１００年ぶりのように思えた。

殺風景な病室も、聡がいるだけで、華やぎ、寛ぎの空間になる。

その効果はたとえ見舞いの花で病室が埋め尽くされようと、かなわない。

だから、将は問いかけにまったく答えずに、いきなり聡の肩を抱き寄せた。そして素早く唇を重ねる。

柔らかな聡の唇、学校帰りだから塗りなおしたのであろう口紅がついている。

将はべとべとしたそれが付くのを気にもせずに、聡の唇をむさぼった。

「ん……、ダメ。誰かくるかも」

将の強い匂いに包まれた聡はクラクラしそうになりながら、将の肩を手で押し戻した。

将の唇に、ナチュラルピンクの口紅がべっとりとついている。

「大丈夫だってば。夕食まで誰もこないよ」

再び将は聡を強く抱きしめて、続きをした。聡の唇から舌を挿し入れる。

口の中で聡の舌と将のそれがからみあう。湿った粘膜の官能的な感触。

「コラ……。なあに、この手は」

聡が小さくとがめる。

将は聡に深い口づけをしながら、服の上から聡の胸のふくらみに手を置いているのだ。

「いいじゃん。俺、もう限界……。アキラが会いにきてくれないから」

左手で聡の肩を抱いたまま、右手は聡の胸をとらえて、大きく円をえがくように揺らす。

聡は、ブラジャーに守られた先端が硬くなり、心臓が甘く動き出すのを感じた。

「あれに毎日挑発されてるからさぁ」

早くも頬を紅潮させ始めた聡の耳元に囁く。

服の上から乳房を愛撫されたまま聡がそっちに目を走らせると、そこには大きなギプスに覆われた将の左足があった。

「もうっ。なあに、あれ？」

ギプスには、マーカーで、さまざまな落書きと共に、ピンク色の乳首もなまめかしく、女のヌードが描いてあった。

しかも矢印で『アキラ先生』と示してある。

「ユウタのヤツが描いた」

「もう……」

といいつつも、聡は頬を紅潮させて乳房を将に任せたまま、将の顔をみてフフっと笑った。

「……口紅、ついてる。将、女装も似合うんじゃない」

「もうアキラ、ムードないなー」

将も聡のふくよかな乳房の感触を服地の上から、今一度確かめるように揺らすと、聡の瞳を見て笑った。

二人は笑いあうと、もう一度軽くキスをした。

まもなく夕食時間になったが、将があまりに頼むので聡は、病室にいることにした。

看護士が夕食を運んできたときはさすがに傍らの椅子に座りなおしたが、看護士がドアの向こうに消えた今、また将の隣に座っている。

まるで会えなかった5日間のぬくもりを取り戻すかのように、将は聡に触りたがった。

聡も……パジャマごしに触れる将の固い筋肉や熱い体温、若いけど低い声を感じて、自分がいかにそれを恋しがっていたかを実感した。

理性で押さえていたけれど、逢えば逢うほど歯止めが利かなくなっていく……。

まさにベタベタするカップルの典型。自嘲しながらも聡は幸せに酔いしれていた。

「アキラ、いる？」

将が、トレーの上の酢豚を示した。

実は……お腹が少し空いていた聡は、トレーの上に載っている夕食が旨そうに思えていた。

「じゃあ、一口だけ、ちょうだい」

将は、メニューの酢豚を箸に乗せて、聡のほうに向けた。

「ほい、あーん」

何回か将が口に運んで、舐った箸。

当然、間接キス。

あんなに唾液まみれの深い口づけを何度もしているのに、口をあけながら、聡は少し緊張した。

聡の口に、将の箸が……。

「アキラ、何赤くなってんの？」

酢豚を聡の口の中に運んだ将がいたずらっぽく指摘した。

「さてはエッチなこと想像してただろー」

「もー、そんなんじゃないってば！」

聡は肉を素早く噛むと、ますます赤くなりながら反論した。

「アキラ、もういいの？」

将は食事を続けながら聡に訊いた。何回かおかずをわけてもらっている。

「うん。あとはおうちで食べる」

「ここに泊まっていけばいいのに」

実際、個室の病室は、付き添い用のベッドを入れることもできるのだ。

「そういうわけにもいかないでしょ。明日も学校あるし。

……ところで、将こないだ電話で言ってた、話しておきたいことってなあに？」

「ああ……」

食欲旺盛だった将の箸が少し止まった。

将は、少し残っていたおかずを全部たいらげてしまうと、ナースコールをした。

インターホンに「終わりました」という。

ということは看護士が片付けに来る。聡はあわてて、ベッドから降りた。

金曜日の夜。瑞樹が帰ったあとで、将はどうしても聡の声が聞きたくて電話をかけたのだ。

『話しておきたいことがある』と伝えたのはそのときだ。

夕食が片付けられると、将は聡をまたベッドの上に招いた。

両腕で聡の肩を抱き寄せる。しかし、今度は片方の肩に自分の頭を

もたれるように聡に体重をかけた。

「なあに？　急に甘えん坊になってない？」

将の体重を感じた聡は、将の髪の毛に自分の指を埋めた。

一一入院してよほど寂しかったんだろうか。

聡はすがりつくように体重をかけてくる将の髪や背中を優しく撫でた。

「アキラ……、何があっても俺のこと信じてくれる？」

将は、聡の耳に唇を押し付けるように、囁いた。

「なあに？突然」

聡は、笑いを含んだ声で答える。

将は体を離すと、今度は聡の両肩をつかんで、目と目を息がかかるほどの至近距離で合わせる。まるで口づけする直前のようだ。

びっくりして将を見つめる聡の瞳は、至近距離で見ると黒糖飴のような色だった。

その瞳に将は誓うように宣言する。

「信じて、アキラ。俺、アキラしかいないから」

それに対して聡は、真剣に見開いた将の目は、間近に見ると、意外

に大きいことに今気付いた。

どちらかというと将の目は、男らしい切れ長だと思っていた。

二重瞼の甘いマスクでもあるのに、そう見えないのは、人を冷たく睨みつけるような表情によるものなのだろう。

「俺、自分から、信頼失うようなことしてるかもしれないけど……」

将はいったん、悲しげに目を伏せた。が、次の瞬間、

「だけど、信じて」

と再び目を見開いて聡の瞳を見つめた。

「ど……どうしたの？いったい」

聡は肩に置かれた将の手をそっと解きながら問い掛けた。

将は、そのまま、体を離すと聡を隣に置いたまま、リクライニングになったベッドに寄りかかった。遠い目をしている。

「将……」

「アキラ、瑞樹のことなんだけど」

将は重々しく話し始めた。

１０９◆信頼

将は思い切って話を切り出すと、本題を一気に話した。

瑞樹のお腹の子の本当の親は、鑑別所に入っている前原か、瑞樹の義理の父のどちらかだということ。

そして瑞樹は小5から義理の父に犯され続けていること、そして幼少の頃から虐待を受けてきた瑞樹の家庭環境……。

聡はだまって将の話を聞いていた。

その内容のあまりのどぎつさに、顔が徐々にこわばっていくのがわかった。

「……アキラ、だから、せめて俺が入院している間だけ、マンションにアイツを泊めてやることにしてるけど、でも……」

「わかった」

意外にも聡の返事は冷静だった。逆に将は心配になる。

「俺の女はアキラだけだから」

不安が消えない将は、念を押した。

「うん……」

将の不安どおり、隣に座る聡の頤はどんどん下を向いていく。

「……アキラ？心配？」

「ん……」

聡は顔をあげると一瞬将の顔を見た。

そのときの聡の表情は、巷で人気のあるうさぎや猫のキャラクターを思わせるような、無表情で……目だけが何かを言いたげだった。

すぐに下を向くと、

「将の気持ちは心配してない。だけど……」

ゆっくりと語り始めた。

「ごめん、私、葉山瑞樹さんの言ってることが本当かどうか、まだ信用できない……」

将は当然だと納得する。

瑞樹のせいで、もう少しで輪姦寸前のひどい目にあったり、ついこないだもウソをつかれたばかりなのだ。

信用できなくて当然だ。

聡は下を向いたままふっと笑うと

「教え子を信じられないなんて、ダメ教師だね」

「アキラ……そんなことないって」

将は寄りかかったまま聡の頭に手を置くと、髪をくしゃっとしたまま、自分の肩へ引き寄せる。

聡は無抵抗に、将の肩にもたれるように一緒にベッドに寄りかかった。

二人寄り添ってベッドにもたれかかる。

「アキラ、……ごめんな。気分よくないだろ」

聡は無言で首を振ると、付け加えた。

「別に、将と葉山さんが、同棲するわけじゃないし……」

「アキラ……」

「だけど、仮に、葉山さんの話が本当だとして……将が退院したらどうするの……？」

「そうだな……」

将は、聡の髪を撫でながら、空中に視線を遊ばせていたが、ハッとして、寄りかかっていた上半身を起こした。

「そうだ、アキラ！」

そしてまだ寄りかかっている聡を振り返る。

「退院したら、俺たち一緒に住もうよ！」

けだるい雰囲気で寄りかかっていた聡は、将の突拍子もない提案に、目を丸くした。

「将ってば、何言い出すの？」

「俺んちに、瑞樹が住んでさ、俺はアキラんちに住むの。これって名案くない？」

将は、思いついた計画を意気揚揚と聡に話した。

「ええー、そんなのありえないでしょ」

「なんでー、ぜんぜんアリじゃん。俺とアキラは愛し合ってるんだし」

「何いってるのよ。教師と生徒の同棲なんてありえないで……キャ」

将は、またいきおいよくベッドに寄りかかると、聡をぎゅっと抱き寄せた。

そして再びキスする直前のような至近距離に顔を近づける。

「俺……前から思ってた。アキラと暮らしたいって。アキラと1つ屋根の下、いっつも一緒にいられたらって……」

それだけ言うと、将は聡の肩に顔をうずめるように抱きしめた。

「これってチャンスじゃん」

「ちょっと、待ってよ！将！」

聡は、抱きついた将を思い切り振り払った。

ちょっと力が入りすぎたらしい。左足が動いたのか、将は一瞬顔をしかめて

「イタタ……」

とうめいた。

「……大変、大丈夫？」

聡は、ベッドの上でおろおろと、将の顔とギプスの足を見比べた。

「大丈夫。ちょっと動いただけ。……アキラ、俺と暮らしたくないの？」

「そういう問題じゃなくて！」

聡はそういいながらも、将と暮らしている様が一瞬にして頭に広がるのを感じた。

朝から晩まで、将と一緒にいられる。

毎日、将と一緒に目覚める。

聡が作った料理を将が食べる。

萩の実家のときのように二人で並んでキッチンにたつのもいい。

きっと将はコーヒーを淹れてくれる。

将の隣で一緒にテレビを見て笑う。

将の隣で寝れる……。

寝れる……、寝る、といえば当然……。

たぶん一緒に住んだら絶対歯止めが利かなくなるだろう。

想像はポンポン菓子のように一気に膨れ上がり、聡はハッとした。

――何、私ってば、現実感のない少年のたわごとを本気にしてるんだ！

とプルプルと頭を振る。

「アキラァ？……さては、またエッチなこと考えてただろ」

聡の顔を観察していた将が笑い声で指摘した。

「や……そーじゃなくて。そうじゃなくて」

聡は、あわてて反論したが、急に教師の声を取り戻して

「……家庭訪問してみる」

と発言した。まだ将のベッドの上だ。

「ハ？」

いきなり教師モードになった聡に、将は目を丸くしてキョトンとしている。

「葉山さんの自宅を訪問してみる。……それで、あのコが言ってることが信じられるか確かめてみる」

聡は、乱れた髪や服を正しながら、宣言した。

とりあえず、彼女の言動を確かめることが先決だと思っていた。

葉山瑞樹の家庭訪問は、木曜日になってしまった。

風邪で早く帰っていた先週の仕事を火曜、水曜で片付けなくてはならなかったからだ。

当日は放課後の補習を休みにして、授業が終わると聡はさっそく瑞樹の自宅へ向かった。

1月の夕方4時すぎは日没間近で、玄関を出るなり暖かそうな西日の色に似合わない北風が、聡に吹き付けた。

その冷たさにマフラーを顔までずりあげながら校門を出たところで……。

「ワッ！」

急に背の高い人影が聡の前に立ちはだかった。眼鏡がキラリと反射して足が４本ある？

「……、ギャーッ！」

逆光で顔も見えず、聡は思わず大声を出して、腰を抜かした。

「バカだなあ、俺だってば、俺」

声に目を凝らす。……将だった。松葉杖をついた将がなぜか眼鏡をかけて、そこにいたのだ。

ダッフルの下は制服を着ているようだ。

「ちょ、ちょっとおどかさないでよ」

聡は深いため息をついて、次の瞬間『ん？』と気付いた。

「将、なんでこんなところにいるのよ。病院は。しかも何で眼鏡？」

「ああ、これ？優等生に見えるだろ」

将は、黒ぶちの四角いフレームの眼鏡をはずした。裸眼１．２の将だから当然、ダテめがねだ。

ピアスもはずし、制服もいつもと違って、ピシッと着ている。

「足は！病院はどうしたのよ！」

「テストってウソついて、外出許可もらった」

将はニヤっと笑うと舌を出した。

「なんで、そんな必要があるのよ」

「アキラが心配だったから。学級委員役として葉山さんの家庭訪問に同行しまーす」

「そんな茶髪の優等生なんていないと思うけど」

「えー、これぐらいのカラー普通だぜえ」

聡はあきれながらも、少しだけ胸がじん、とするのを押さえられなかった。

「俺も、アイツが本当のこと言ってるのか、ちょっと自信ないし…確認したいってのある」

と言っているが、再婚相手の娘に手を出すような常識に欠けた男と、ひょっとして二人になるかもしれないから、と心配してくれたのだろう。

「でも……足は大丈夫なの？」

「どうせ、本当は1週間で退院できるんだから、かまわないよ。リハビリだって土曜からやってるし。さ、いこうぜ」

最近は手術の直後からリハビリをさせられると、聡も聞いたことがある。

と将は、ちょうどやってきたタクシーに向かって、手をあげた。

１１０◆家庭訪問

瑞樹の家は古い市営住宅だった。

白かったであろう、ざらざらとした壁はグレーに変わり、その外壁を配管が伝っていた。

エレベーターがないその住宅の狭い階段を登るのに、松葉杖に慣れない将は少し苦労した。

すでに外は薄暗くなっていて、外気に露出している階段は寒い。

にもかかわらず、３階まで登った将はじんわり汗をかいていた。

聡は、将が落ち着くのを待って、ブザーを押した。

『ブー』という音が鳴る旧式なものだ。

「ハァイ」

中から答える男の声がして、ドタドタと出てくる足音が響いた。

ドアがあくなり、ツンと鼻をつく匂い。アルコールの匂いだった。

「どなた?」

義父、というには、案外若く見えた。３０代前半だろうか。

いやボサボサの頭に無精ひげ、チェックのシャツが若く見えただけ

かもしれない。

頬から顎に掛けてのラインがだらしなく、そこだけ見たら中年過ぎにも見える。

ドアノブに片手をかけながらブカブカのジーパンの前を今ごろ閉めている。

たぶん家の中では穿いてなかったのだろう……聡は目をそらした。

「こんにちは。さきほどご連絡しました、荒江高校の古城と申します」

「ああ、センセイ。どうぞどうぞ」

赤い顔をした義父は、ドアを開けると、聡と将を中へ招きいれた。

このとき早くも聡は、将についてきてもらってよかった、とホッとしていた。

聡と将はダイニングにあるテーブルの席を勧められた。

セロテープであちこちを繕ったビニールのクロスが掛けられている。

家の中も古く、クロス同様、安っぽい内装と家具で覆われていた。

例えば床は色のさめてグレーがかった色になったピンク色のカーペ

ットで覆われていて……丸見えの台所の水道は、いまどき家庭では珍しい、捻る蛇口だった。

そしてさらに給湯器が剥き出しになっていて、その上には、扇風機の羽のような換気扇が油でべっとりと汚れてやはり剥き出しだった。

「あいにく家内は仕事に出かけたんですよ、この時間はだいたい仕事なんで……」

お茶を淹れながら義父は、申し訳なさそうに聡に謝った。

赤い顔をして酒の匂いをさせていながらも、いちおう常識的なことは言えるらしい。

「そうですか……、お父様は何をなさっているんですか？」

将は、顔を上げた義父が、一瞬、鋭い目をしたのを見逃さなかった。

一一聡は今の目を見逃さなかっただろうか。

しかし、義父はすぐに相好を崩すと

「お恥ずかしい。家内のかわりに家のことをやっております。いわゆるシュオット（主夫）です」

といってハハハと笑い、お茶を勧めた。

とりあえず、世間話を一通り済ませた後、

「これは、月曜からの分のノートのコピーです」

と『学級委員』を装った将がノートを差し出した。

瑞樹は中絶手術のために月曜から休んでいる（もちろん、親には内緒だが）ので、その間のノート、ということだが、

実はそれは、昨日将の見舞いに訪れた、兵藤と真田由紀子が将にと届けたコピーなのである。

そのあと聡は、休みがちな瑞樹の状況を義父に伝えた。すると

「ハァ、そうですか……。私は、てっきり学校に行ってると思ってましたから……。

よく友達の家を泊まり歩いているらしくて、私もあの子のことは、よくわからないんですよ」

義父は頭を掻いた。

「次に帰ってきたら、よく、言っておきます……」

ちょっと……というか、かなりだらしなさそうだけど、それだけで、普通の人にも見える。

聡は判断しかねていた。

それにしても……西日があたるせいか、この部屋の中は暑い。いったい何度に設定しているんだろう。

コートは玄関ドアの外で脱いでいたが、寒い学校に対応した格好を

していた聡はパンツスーツの上着を着ているのもつらいほどだった。

将といえば、とうにブレザーを脱いでいた。

「ちょっと失礼します」

といいながら聡はスーツの上着を脱いだ。

瞬間、ニットだけになった胸に鋭い視線を感じた。

むずがゆいほど粘りつく視線に聡は顔をあげた。そこには義父の顔があった。

瑞樹の義父は、聡と目が合うと、パッと視線を逸らした。

「家での瑞樹さんは、どんな感じなんですか？」

「は？」

義父は赤い顔の中にある充血した目を見開いた。

瑞樹に似ていない一重瞼は、明らかに血のつながりがない証明となっている。

「ああ、……優しくていい子ですよ。……親思いで」

取り繕った答え。さっきは『よくわからない』と言っていたのに。

酒に酔っているのか、本能に素直なようだ。義父の視線は、さっきからニットの下で大きく膨らんだ聡の胸ばかりに集中している。

手で覆い隠すか、背中を向けるたくなるのを聡はぐっと堪えた。

しかし、まだ決定打ではないように思った。

聡は急に立ち上がると、

「こちらが瑞樹さんのお部屋ですか」

と閉じた襖を開けた。その奥には6畳間があり、瑞樹のものらしき学習机と椅子が見えた……。

「アッ！」

義父は立ち上がった。急に動こうとしたのでテーブルに腰があたり、その上の茶が激しく揺れてこぼれた。

それにかまいもせず、襖に近寄ると

「勝手にあけないで下さいッ！」

と、ぴしゃん、と閉めた。

家庭訪問が終わって、タクシーを拾ったときには、すっかり夜になっていた。

タクシーに乗っても二人はしばらく無口だった。
先に口を開いたのは聡の方だった。
「将……。さっきの……見た？」
「……椅子の上にあった手錠だろ。見たさ」
「やっぱり……なのかな」
呟く聡に、
「絶対だろ」
と将は答える。
聡は、さっきの……瑞樹の家を辞した際のことを汚らわしく思い出す。
瑞樹の家の玄関は狭かった。
狭いだけでなく、どうやら瑞樹の母のものらしき靴がずらりと並んでいて足の踏み場もないほどだった。
だから、聡は松葉杖の将を先に外に出した。
すると、瑞樹の義父は、急に聡の肩をポンポンと叩いたのだ。
……さっき出会ったばかりの人だ。

聡は特に親しくない人に体を触られて平気なほど、人懐こくない。

「何でしょうか」

それでも教え子の父兄だから聡は礼儀をもって振り返った。

義父は好色そうな目で、聡のパンツスーツの胸や腰のあたりに視線を這わせながら言ったのだ。

「センセイ……いい体してますね」

何を言い出すのか、と思った。

しかし、こういうことを褒め言葉だと思っている輩かもしれない。

聡はあいまいに笑った。

「こんな色っぽい人がセンセイだなんて、いい世の中ですねえ……。またぜひ遊びに来てくださいよ。ねえ」

といいながら、聡の尻をするりと撫でたのだ。

それは、極めて自然に当たったかのようだった。

しかし、当たったにしては指が柔らかい形で尻に添っていた……。

聡はぞくっとした。

若い女教師だと思って舐められているのである。

……このことからも、瑞樹が語った家庭の状況というのはウソではないらしい。

聡は考え込んだ。

あんな家庭状況を知ってしまったからには、人道的に考えて、あの家に瑞樹を帰すわけにはいかないだろう。

親類も遠いとなると、施設にお願いするしかない。

さりとて、母親には言えない状況で、施設にお願いできるだろうか。

「やっぱり、しばらく、俺んちに置いとくしかないよね」

将が、現在実施中の暫定的な案を肯定すべく、聡に問い掛けた。

「うーん……。そうね……。でも将もいつまでも入院ってわけじゃないんでしょ」

「うん、この分だと退院早まるよ。早かったらあさって土曜日だって」

将が少し嬉しそうなのは、入院生活から解放されるからだけでは、当然ない。

「そっかー……」

「だから、俺を聡の部屋に置いてよ」

「……」

いつまで続くかわからない暫定状態。聡は他のパターンを無理やり考えてみた。

将の部屋に瑞樹と将が一緒に暮らす……絶対嫌だ。

聡の部屋に瑞樹をしばらく置く……聡も嫌だし瑞樹も来るはずがない。

やはり将の提案を受けるしかないのだろうか。

聡はため息をつきながら、心のどこかがフワフワと浮き立っているのを感じずにはいられなかった。

111◆同棲開始1

将の足の経過は、若いだけあって極めて良好で、本人も希望もあり、土曜日に退院することになった。

おかげで聡は土曜の午前中、部屋の整理や、片付けに追われることになった。

そう、結局、将は聡の部屋に『暫定的に』一緒に棲むことになってしまったのである。

昨日、将は

「一緒に住むっていったって、この足だぜ。変なことできねーし」

といって笑いながら聡の頭をくしゃくしゃと撫でた。

たしかに、退院するとはいっても将の足は、松葉杖がとれるまで、まだ2週間はかかるとのことだ。

それまで、足は大きなギプスに覆われていて、当然、寝るときなどは姿勢を変えないほうがいいのだ。

なお走ってもいいほどの完治までは2ヶ月弱かかるらしい。

聡は、自分の下着や生理用品を、将の目の届かない場所に隠すようにしまいながら、

『寝ていない、だけど相思相愛の二人』の同棲が、とても難しいこ

とのように感じた。

おまけに、昨日から聡は生理が始まってしまった。狂ったわけでなく予定通りの日程なのだが、

さっそく経血で汚れたものをどこに置くかで悩むことになった。

いままではトイレと一緒になったバスルームの片隅に汚物入れを置いていたのだが、なんだか目立つような気がしてならない。

結局他に置くところがないからそこに置いたままになるのだが……。

これが、もし一線を越え、体のすみずみまで触れ合い、目にしているような状況なら、こうやって女性特有のものを神経質に隠す必要もないのではないか。

しかも、二人は社会的には担任教師と生徒なのだ。

事情があるとはいえ、一緒に暮らしていることがバレたら一大事だ。

聡は、この狭い8帖のワンルームで、将と身を寄せ合うように暮らせる幸せに酔う暇もなく、初めての同棲に対して緊張していた。

聡が、片付けに心を悩ませている頃。

将は退院していた。

いちおう義母が迎えに来たが、マンションの部屋まで送り届けるだけになっている。

ちなみに、先週から将のマンションに居着いている瑞樹は、中絶手術のあと、ずっと学校を休んでいたが、

この日は小山の祖母の家に行き、部屋を一時的にあけてくれることになっている。

タクシーの中で、義母は

「将……。本当に大丈夫なの？そんな足で、独りで平気なの？」

と訊いた。

……どうせ、うるさがられる、と思っているのか淡々とした口調だが、いちおう眉のあたりに心配そうな表情が浮かんでいる。

将もまた、

「お手伝いの××さんが松葉杖の間だけ、毎日来るんだろ。全然平気」

と淡々と答える。

お手伝いの××さんには、将の方から、マンションには瑞樹が住み着いて、かつ、それを両親に絶対にもらさないように、と言い含めてある。

もともと、お手伝いさんの××さんは、曽祖父の巌のツテで来るよ

うになった者だから、将に対して忠実だ。

マンションに着いて、心配そうな義母を追い返してしまうと、将は部屋の中から、当面必要な着替えなどを出して荷造りをした。

聡との同棲は嬉しくてたまらないが、松葉杖をついての行動はいちいち不便だ。

左足を大きく曲げられないので、クロゼットの下のほうの引き出しをあけるときなど、とても苦労した。

洗面台からは気に入ってる電動歯ブラシやら髭剃り、ヘアムースなどをリュックに入れ、次に寝室で気に入ってるＣＤ数枚を持っていくべく探す。

だいたいラックにあったが残り１枚がどうしてもない。

そういえば、歌詞カードを寝る前に眺めたかも、と将は松葉杖の不自由な足をひきずって、ベッドサイドにまわるとスタンドの下の引き出しを開けた。

目当てのＣＤはそこにあった。

しかしそれと一緒に、コンドームが何枚か入っていたのを見つけてしまった。

……この足だ。まずそういう行為はできないだろう、自粛すべきだと自分でもわかっている。

将は、一瞬悩んだが、やっぱり念のためにそれをリュックに放り込んだ。

冬だから着替えがかさばる、というのもあり当座のものだけで、大き目のリュックはパンパンに膨れた。

それを背負うと、将は部屋を出てタクシーを拾った。

ピンポーン。

――もう来た！

片付けは出来ているのに聡はあせった。あわててドアに駆け寄る。

案の定、そこには松葉杖をついた将が微笑んでいた。松葉杖で3階まで登るのに苦労したのか頬が紅潮している。

「今日からお世話になりまーす」

ドアのところで将は、神妙にペコリと頭を下げると、軽くウインクした。

といっても狭い部屋だ。将は勧められてベッドの上に、壁に寄りかかって足を投げ出すように座ると、あらためて部屋を見回した。

座っているベッドのすぐそばの床に、新しい布団がたたんである。

「アキラ、布団買ったの？」

とキッチンで紅茶を入れている聡に問い掛ける。

「うん。無印の安いのだけど、敷布団だけ。将が私のベッドと掛け布団を使って、

私はその敷布団に毛布とタオルケットを重ねてかければ大丈夫かなーと思ってね」

「ええー、一緒に寝ないの？」

将は抗議の声をあげた。同棲＝同衾だと思っている将だ。

「だって、そのベッド狭いじゃない。私、寝相あんまりよくないから将の足を蹴るかもしれないでしょ」

「別に、そんなのいいのに……」

聡からマグカップで紅茶を受け取りながら将は小声でつぶやいた。

「これ、着替えとかでしょ。片付けようか？　クロゼット、将のスペース少し空けたんだよ」

聡は自分の分の紅茶をテーブルに置くと、将のリュックのジッパーに手をかけながら訊いた。

将は、聡が自分を部屋に受け入れる用意をしてくれていたのを聞くと、とても嬉しくなった（布団はあまり嬉しくなかったが）。

「そのまえにさぁ」

将は、湯気の出るマグカップから顔をあげると、上目遣いで聡を見て甘えた声を出した。

「今日、チューしてない」

「え……」

聡は顔を少し赤くした。

「アキラ、おいで」

将の声に操られるように聡は、将が座るベッドの隣に座った。

将の指が聡の紅潮した頬を持ち上げる。

素顔の頬のすべすべとした感触、柔らかい髪の毛の感覚を確かめるように将は指でいとおしむと、

吸い寄せられるように聡の唇に自らのそれを重ねた。

最初は、お互いの唇の感触を確かめるように浅く、軽いものを。

「やっぱり、チューは毎日しないとね」

鼻先がくっつくような至近距離で笑った。

「毎日？」

聡もくすっと笑って訊き返した。

「毎日最低3回、同棲の鉄則でしょ」

将は囁くと、聡を再び抱き寄せた。

こうしていると、聡はやはり一緒にいることの幸せを感じずにはいられない。

これが、しばらく毎日続くのだ。

聡は体の中心が、幸せのあまり、うずくように震えるのを感じた。

……最初は、あの避難小屋のベンチのときのように、隣に並んで体をよじって深く口づけをしていたが、

じきに、聡は将の投げ出した足の上にまたがるように正面にまわった。

将の足の不自由さが脳裏にあっての聡の行動だが、将はその大胆なポーズに、驚いたように眼を見開いた。

しかし、将の腿にまたがるように立てひざをした聡は、そんな将の顔を手のひらで包みこみ、上から改めて今度は聡のほうから将に口づけをする。

将は、そんな大胆な聡に、大きくときめいた。

大人の女ならではの、天衣無縫かつ大胆無敵な色気を聡に垣間見た気がしたからである。

そして、聡が恥じらいを捨てて、そんな様子を出すのは、自分を愛し、信じているからこそだろう、という結論を出す。

将はそんな聡に答えるべく、聡の口づけに自らを任せつつ、手は聡の背中から腰を撫でた。

華奢な背中はなだらかにそり返り、それに手を添わせていくと、急にジーンズの固い生地に覆われた弾力が現れる。

たぶん、後ろに突き出すようにした聡の腰だ。

そのセクシーなポーズを将は見ることをできないが、撫でる手で十分に感じている。

聡の後ろにまわした将の手は、ニットをまくると、ローライズのジーンズの下に息づく、すべすべとした2つの弾力をじかにさぐった。

ジーンズがゆったりとしていたせいか、将の両手はすっぽりと聡のジーンズの中に入った。

それは、搗き立ての餅のように柔らかく熱かった乳房に比べるとかなり固い張りがあり、ひんやりとしていた。

しかしすべすべしているのは変わりない。

将が手をいっぱいに広げた中にようやくおさまるほどの締まったヒ

ップだ。

将はその張りのある肉をまさぐった。

聡は特に抵抗するでもなく、その唇と舌で将の口腔をむさぼっている。

しかし、その息遣いは荒く、胸から上を将に押し付けるように体重をかけている。

将の、聡のジーンズの中に侵入した手は、さらに腿に近い下へ行こうとして、真ん中の断裂付近に小指が触れる。

そのあたりの皮膚は少し湿気を含んで温かく柔らかくなっていた。

穴のうちの1つに近い場所なのかもしれなかった。

「あ、ダメ」

聡は、唇を離して、いきなり場違いな声を出すと、腰をひいた。

「ごめん……。今、生理中なんだ」

バツの悪そうな顔で、聡は将から離れた。

112◆同棲開始2

「ああ、生理」

将は、ああ、という形で口をあけたまま、ハハと笑って顔をそらした。

「ご、ごめん。なまなましくて……」

聡はうつむいた。若い男のコ相手に、こんなことを口にするのは、知っているとわかっていても恥かしい。

「いいよ、そんな。女のヒトだったら、当然だもんな。で、痛いの？おナカ」

「う、ううん。今は大丈夫、大丈夫よ……。バファリン飲んでるから」

「そっかー。瑞樹のヤツも腹が痛いってよく機嫌悪くなってたし……」

一一しまった！

言ってしまって将はハッとした。

一瞬見開いた聡の目と、視線が合ってしまった。しかも、こっちから、そらしてしまった。バツが悪くてなんだけど……。

「あ、えっと……。昔の話ね、昔の」

将はあわててフォローした。

「そ、そうね。瑞樹さん、いかにも体が弱そうだもんね」

聡も、フォローに答えようとしていたが、その声はうわずってしまっていた。

――そうだった。将は女性と暮らすの、初めてじゃないんだ……。

聡をにらみつける瑞樹の瞳が聡の脳裏にフラッシュバックした。

家に帰りたくなかった瑞樹が将の家に『入りびたっていた』というのは一緒に棲んでいた、と考えて間違いないだろう。

うすうすわかっていたはずなのに、その事実を将自身から知らされると、体が震えるほどのショックを聡は感じざるを得ない。

それを隠すように、聡はベッドを降りると

「これ、片付けるね。ほとんど着替えなんでしょ」

と明るく将のリュックに手をかけた。

「ああ、ああ、頼むよ」

将もベッドの上から明るくそれに答えた。

聡は無造作にリュックに突っ込まれた将のTシャツやジーンズなどを引っ張り出すと畳みなおした。

「あ！」

先に将のほうが気付いて声をあげた。しかし、阻止する前に、

「あら……」

聡がリュックの中に潜んでいた『それ』に気付いて顔を赤くした。

……何枚かのコンドーム。

「ははははは……、一応、念のため、なんちゃって」

いぶかしげな顔をしていた聡だったが、照れ笑いする将についつられて、

「もう……まったくー」

と、ようやく苦笑いを浮かべることができた。

夕食は、将のリクエストで、萩の実家で食べた肉団子の鍋になった。

聡一人で作ろうとしたのだが、将は手伝うといって聞かなかった。

「これからは、オレも料理覚えるよ」

とあまりにも頑張るので、ローテーブルで野菜の皮むきをさせるこ

とにした。

その不器用な手つきに、聡はキッチンで作業をしながら、ハラハラしどおしだった。

「ちょっと、これなあに？」

結局、手こそ切らなかったが、剥いた大根の皮は、いやに分厚かった。５ｍｍぐらいの厚みがある。

「ええー、初めてにしては上出来だろ」

「しょーがないから、これは取っといて明日キンピラか何かにしないとね……」

聡は分厚い大根の皮をタッパーに収めると冷蔵庫に入れた。

５時から作業を始めたのに、結局出来上がったのは７時近くになってだった。

「まだあ？オレ、超おなかぺこぺこだよ～」

野菜をむく以外は、座ってできる作業はなかったので、将は持ってきたＤＳをやっていたのだがもう空腹は限界だった。

「ハイハイ、お待たせ～」

聡は台所で煮ていた土鍋をローテーブルの上にセットしたカセットコンロに持ってきた。

このカセットコンロも急遽買ってきたものだ。

「わーお、うまそう！」

鍋のほかに、卵焼きや、キムチなども並べる。

「アキラ、なんか足りないものない？」

「ん？ご飯もよそったよね。醤油も持ってきたし……」

ご飯は、将がどれだけ食べるかわからないので、とりあえず3合炊いた。これは聡の持っている炊飯器の限界値である。

「泡が出るやつ」

暗にビールのことを言っていることに聡も気づいた。

「……もー！未成年でしょ」

「いいじゃん、今日は退院祝いで」

と将は子供のようにせがむ。そのいたずらっ子のような顔に聡は弱い。

ま、今日ぐらいは、いっか。と聡は冷蔵庫から缶ビールとグラスを持ってきた。

「じゃあ、将の退院に乾杯」

「オレとアキラの同棲第1日目に乾杯」

二人は杯を触れさせると、ぐっとビールをあおった。

将は足を深く曲げられないので、ローテーブルに添うように横向きに座っている。

聡は、そんな動きづらい将を気遣って将の器に鍋をよそってやるのだが、あっというまに食べてしまう。

そうこうしている間に一人用の小さな鍋の中身はあっという間になくなり、新しい具が煮えるのを待たなくてはいけない。

聡が食べる暇もないほどの好評ぶりだ。

もともと鍋料理は、野菜もたくさん食べれるので、独り暮らしにはうってつけ、聡の冬の定番だったのだが、

こうやって好きな二人でつつくほうが数倍美味しい、と食べる暇もないのに、幸福を聡は噛み締めた。

食後は、先に将に風呂を使わせて、聡はキッチンで食器洗いをしようと思ったのだが、将は

「いいよ、俺。昨日病院で風呂入ったし。冬だから毎日入る必要もないでしょ」

などと言う。

「ええー！不潔っ！鍋で汗かいたでしょー！」

聡がさんざん抗議したので、

「わかったよ。ギプスかばうの面倒なんだぜー、もう」

将はしぶしぶバスルームに消えた。それから素直に、しばらくバスルームから水音がしていたのだが、

「あ！」

聡は食器を洗う手を止めた。将は……案の定、タオルを持って入るのを忘れている。

将のマンションは、脱衣所に一通り揃っていたのだろう。

聡がタオルを用意しようとしたそのとき、水音が止んで、中から

「ヤベえ」

と声がした。

「将」タオル持っていくから、と声をかけようとしたそのとき。

ガチャとバスルームの戸が開いて髪の毛がびしょぬれの将が顔を出した。

顔だけでなく隙間から濡れた体の一部が見えている。

暖色のバスルームのライトを背にした、褐色の将の肌。聡は思わず目をそらした。

「アキラ、ごめん、タオル忘れちゃったよ」

「ハイ、タオル」

聡は目をそらしたまま、あわてて、タオルを渡した。

あわてたので何か忘れた気がする。

それに気付いたときは遅かった。

将は、腰にバスタオルを巻きつけただけの姿で、頭を拭きながら出てきたのだ。

「ぱんつも、忘れちゃったよー」

と別にあわてたようすもなく、聡に笑いかける。

頭を拭いているほうの腕は高くあげられているせいか、腋毛が見えている。

毛深くない将なのに、やはり腋は黒々としている。

別に腋毛ぐらい、夏場だったら見えるものだし、どうってことないものだが、間近、しかも自分の部屋で見た聡は少しとまどった。

聡は、さっきしまったトランクスを取り出すと手渡した。

別にトランクスぐらい、とも思うのだが、とても恥かしい。聡は顔が真っ赤になるのがわかった。

「あっ、あたしもお風呂入っちゃうから、将、部屋のほうで着替えてていいよ。広いほうが着替えやすいでしょっ、暖房強くしてるから」

ごまかすように、そういうと、聡はタオルを持ってバスルームに入った。

しかし……なんてことだ。動揺したせいか、こんどは聡自身が下着を忘れてしまったのである。

もともと、聡は独り暮らしなので、風呂あがりは、せいぜい身につけてバスローブぐらいだった。

そしてバスルームが狭いので、部屋のほうでゆったりとテレビでもみながら

乾燥しやすい背中などに化粧水や乳液を塗りこんでからパジャマを身につけるのが冬の習慣になっていた。

つまり、バスルームに着替えを持ち込む習慣がなかったのでうっかり忘れてしまったのである。

――しまったぁ……。

聡はパジャマを手にして舌打ちした。

生理中ということもあり下着なしで、いったんパジャマを着るのも抵抗がある。

「将……」

聡は、バスタオルを体に巻きつけると、バスルームから顔を出して将に声をかけた。

将は聡がゆったりと湯船に浸かっているあいだに、下着も寝巻きも身につけたようだ。

リラックスしてテレビを見ていたのだが、バスルームから顔を出した聡を見て、ハッと上半身を起こす。

「あのさ……着替え忘れちゃったから、目ぇつぶっててぇ……」

将は

「マジ！そんなん目つぶるはずないじゃん」

と目をわざと見開くそぶりをする。

「もうヤダ～」

そういっているあいだにどんどん湯冷めしていく。聡は仕方なくバスタオルを巻いた姿で

「もう。覚えてなさいよ」

と毒付きながらバスルームから小走りにクロゼットに近寄り、中の引き出しから下着を引っ張り出した。

「アキラのぱんつ置き場お～ぼえた～」

などとからかう将に、聡は拳を振り上げようとして、胸からタオルがずれそうになって焦る。

なんとか、狭くて不自由ながらバスルームの中でパジャマまで着替えると、聡は小さくため息をついた。

あっという間に、寝る時間がやってきた。

聡はベッドに添って床に新しい敷布団を敷いた。こっちに自分が寝るつもりである。

「えー。アキラ、やっぱそっちに寝るの～？」

将はベッドの上にギプスの足を投げ出した姿勢だ。

「だって、狭いでしょ。あたし、折れたところ蹴るかもしれないよ」

聡はてきぱきと毛布と夏用のタオルケットを自分用に重ねた。

「それでもいいから一緒に寝ようよぅ……」

寂しそうに将は口をとがらせた。

「だーめ」

「じゃあ、おやすみのキス、しよ」

将は自分の唇を人差し指で指した。

それには聡は、ちょっと下を向いて照れると、

「いいよ……」

とベッドサイドのスタンドを付けて、真上の蛍光灯を消すとベッドのふちに腰掛けた。

将は聡が腰掛けるのを待ちきれないように抱き寄せると、唇を重ねて、舌を割り込ませてきた。

今、歯を磨いたばかりの将の唾液は、ミントの味がかすかに残っている。

それは爽やかで、セクシュアルなキスに似合わない味だった。

将はさらにミント味とかけ離れた行動……聡を抱き寄せたまま一緒にベッドに倒れこんだのだ。

「このまま、一緒に寝ようぜ。な」

将は自分の胸の上に聡を抱えたまま耳元で囁いた。

聡のベッドに横たわる将は、寂しげな目を安心したように細めている。

その瞳は、あどけない子供のように聡の母性本能をくすぐり、再び始まった深い口づけは男性として聡の中の『女』をじわじわと刺激していく。

いつしか、聡は将にのしかかると、さっきのように自らがリードして、将の口の中を舌で愛撫していた。

なんだか変だ。変になっていく。

本当に歯止めが利かなくなっていく。

聡はそんな自分を自覚していた。さっきもそうだった。

夕食のときに2本、風呂上りに1本飲んだビールのせいだろうか。

いや、それだけではない。

聡を燃え立たせているのは……。

「アキラ、その体勢はヤバ……」

聡は将の体に自分の体を重ねるように口づけを繰り返していた。

そうすると、聡のパジャマ越しに柔らかい乳房が将の胸板に密着するようになる。

「あ……」

とうとう聡の腿に、将のそれがあたった。

「ゴメン……。ずっと処理してないから……」

将は赤い頬を隠せずに、素直に聡に謝った。

なにせ、今まで入院していたのだ。敏感になっているのは仕方ないだろう。

聡はまばたきもしないで、将の顔をじっと見つめた。

「将、……あたしと……寝たい？」

将は、聡の瞳に吸い込まれそうになった。なんで聡がこんなことを言うのかわからなかった。

「あたしと……したい？」

将は、聡に何かを吸い取られてしまったように、何もいえずに、ただ深くうなずいた。が、

「でも、今は足が……」

と自ら、なぜか言い訳をしてしまった。本来はそれは聡がいうはずのものだ。

聡は、無表情で勃った将自身に手を伸ばしていた。

自分の中の『女』の暴走。

それは、嫉妬によるものだということを、聡はとうに気付いているのに止められない。

113◆聖女

忘れてしまったが、いい夢を見ていた。

そこへ、ありえないコーヒーの香りが混じった。

なんでコーヒーの香りが……？

それを考え始めたとたん、ぱちん、とはじけるように将は眠りから覚醒した。

横たわったまま天井を見上げる。

――ああ、そうだ、やっと退院してきたんだ。ここはアキラの部屋だ。

――アキラ？　そうだ、オレ、ゆうべ……。

その、感覚が将の体に鮮やかに蘇る。

将は、体を起こして、キッチンのほうを見た。

ちらっと自分の体を確認する。寝巻きは着ている。

あれは、夢、だったんだろうか……。と将は半信半疑になった。

「起きた？」

聡はちょうどコーヒーをいれながらこっちを振り向いたところで、

目が合う。

将の脳裏に、ゆうべの生々しい記憶が鮮やかに蘇った。絶対に夢じゃない。

しかし、聡のほうは、なんにもなかったように、

「おはよ。ちょうどコーヒーが入ったよ」

と将に声をかけてくる。頬が輝いているような、とびきりの笑顔だ。

そしてそれは、まるでゆうべの淫らなことが、将一人の夢だったかのように思わせるほどの爽やかさだった。

「あ、うん」

動転した将は松葉杖なしで歩こうとして、

「いててて」とベッドに再び座り込んだ。

「大丈夫?」

聡が駆け寄ってくる。

「大丈夫……」

と答えながら、将は聡の口元を見てしまった。ゆうべの……将のやましさの原因になっている場所。

それはたぶん、すっぴんだと思うが、健康的なバラ色だった。

弁当屋にいるときの聡の唇がよくこんな色だった。

「着替える？それともしばらくそのままでいる？」

そういう聡は、もう着替えていた。今日は髪を束ねて、ロングスカートを穿いている。

「しばらく、そのまま……」

将はぼうっとしていた。

まだ信じられない。聡があんなことをするなんて。しかも自らすすんで。

もちろん、将は、それまで相手にした大勢の女からそれを施されたことがあった。

たいていの男がそれを好きなように、将もそれが嫌いではない。

だけど、まだ寝てもいない聡が、いきなり、あんなことを……。

聡は

「もう、遅いから、ブランチにするね」

といいながら、将に背中を向けて目玉焼きだかを焼いているようだ。

将は、聡のことをもちろん処女だとは思っていない。

だけど、将のなかの彼女の位置付けは、聖女に近いものがあったのだ。

穢れた自分自身に対して、聡は手を差し伸べてくれる聖母のように優しく、かつ冒し難い存在でもあった。

体も大きく力も強い将だから、聡を無理やり抱くことぐらい、どうってことない。

何度となくあったチャンスにも、それを敢えてせずに、聡の体を抱きしめるだけにとどめていたのは、

そんな聡に対する崇拝のような感情、というのも大きい。

手の中でそっと守るべきものでありながら、同時に崇拝するべきもの……隠れキリシタンが持っていたというクロスやマリア観音のような存在に近いかもしれない。

だけど、ゆうべの聡は違った。

そして、聡によるそれは、とても、よかった。

とろりとした温かい液体に撫でられているような、おっとりとして、でも将のことを慈しむような愛撫。

だから、将は、始まってまもなく、耐えられずに放出してしまったのだ。

聡の……口の中に。

そんな失態を犯したのは、聡が初めてだった。だから将はあわてて謝った。

しかし、聡はそんなことは気にならないように、艶然と優しく微笑んで将を抱きしめたのだ。

それは……再び聖女に戻った聡だった。

本当に、聡がそんなことをするとは思わなかった。

将にとってそれは、とても嬉しいことのはずだったのに、そして発散になったはずなのに、

なぜか心にもやもやしたものが残った。

「ハイ。ブランチできたよ～」

聡は目玉焼きとサラダとスープをローテーブルいっぱいに置いた。

目玉焼きは旧型のフォルクスワーゲンのような黄桃缶のような濃い黄色、

おまけに、つやつやとした半熟で、とても旨そうだった。

「ふうん。将も目玉焼きは塩コショーなんだね」

「う、うん。パンのときは、ね」

将が使い終わった、粒コショウと岩塩が入った容器を聡は受け取って、ガリガリと自分のそれにかけている。

しかし将は、砕かれて降りかかる塩コショウを見るふりをしながら、聡を盗み見てしまう。

なぜか、今朝の聡はすごくきれいになっているように見える。

しかし、将がさっきから、いや昨日の真っ最中から、急に気になっているのは、聡の過去だった。

何人にそれをしてやったのだろう。そして、いつ覚えたのか。

「スープ美味しくなかった？」

聡が首をかしげている。なんだかそんな仕草も異様に可愛く見えてしまう。

将はどうやら、ブスっとしてスープを飲んでいたようなのだ。

「あ、いや、うまいよ。すっごく」

「ふふ。そうでしょ。実は昨日のぉ……」

将は昨日という言葉にドキッとする。

「将が剥いた大根とかニンジンの皮を入れたんだよ」

将はほっとした。ひどく……疲れが残っている気がした。

朝食のあとも、一緒の部屋にいるのに、将はロクに話もしないで、ずっと聡の姿を目で追っていた。

聡は食器を洗ったり、洗濯をしたり、掃除をしたりと忙しく家事をこなしていた。

「手伝うよ」

将は声をかけたのだが

「その足じゃ、何もできないでしょ」

といなされてしまった。

だから将は、悶々と聡の過去について思う暇をつぶすことができずにいる。

「今日のさ、夕食だけど」

聡が洗濯を干しながら将に提案した。

「餃子にする？それだったら一緒に包めるでしょ」

しかし将は聡の方を向いたままぼーっとしていた。

「将？」

聡が洗濯を干す手をとめて将を見る。

「……」

「将、どうしたの？」

視界の中の聡がこっちを向いて将の意識はようやく戻った。

「え、あ、ああ、何？」

あわてて取り繕う。

「今日、餃子一緒に包まないかって聞いたの」

「ああ、うん、……うん、包む」

「じゃあ、これ終わったら買い物いってくるね」

「うん……」

いつもの将だったら、俺も行く、というところだが……。

聡もまた、ひんやりと固く湿った、青い空のような香りがするタオルを干しながら昨夜を思い出していた。

将の態度が朝からぎこちないのは、そのせいだろう。

よっぽどびっくりしたんだろう。

聡自身も自分にびっくりしているぐらいだから。

まだ、最後の一線を越えたわけではないが、もう完全な危険ゾーンだ。

いや、そもそも、正月に上半身裸で抱き合ったのも、ヤバイエリアだった。

でもそのときは、聡は、まだ受身だった、といえる。

しかし、昨夜は……聡は自分から将自身を剥き出しにして、愛撫してしまったわけで、

その積極的な行動は17歳の少年に対しては立派な『淫行』という名の犯罪だった。

だけど、不思議に聡は後悔していなかった。

将が、果てたとき……世間に対して重大な秘密を持ってしまったのに、

そして聡自身が慰められたわけではないのに、

口の中は誤って口にした未熟な果実のような青臭い苦味でいっぱいになったのに……それをゆすぎながら、なぜか爽快感が聡を包んだ。

しきりに謝る将を抱きしめて、彼が眠りにつくまで、寄り添った。

将の寝息を聞きながら、抑圧されたものが、解放されたような、快活な気分になっていた……。

１１４◆能動的な愛

昨日の聡の行為の起爆剤は、瑞樹への嫉妬だったことは否めない。

自分より前に将と一緒に暮らして、将を体で知っている瑞樹に対する、我を……常識を忘れてしまうほどの激しい嫉妬。

あのとき、聡は瑞樹に対する対抗心で、将に手を伸ばした。

だけど、そのうち……将の肉体の温かさに触れているうちに、恍惚としている将の表情を目にするうちに、

ひたひたと聡の心に満ちてくるものがあった。

それは、将への純粋な感情だった。いとおしさ……愛情。

セックスにおいて女はおおむね受身とされている。

それは体の構造上、仕方のないことではある。

そのせいか、男と女でつくりだす『幸せ』というものに対しても、女は受身であたりまえ、

と考えられてはいないだろうか。

例えば、流行歌などで

『幸せにしてやる』などと歌うのは男性歌手で、それに対して女性歌手は『幸せになりたい』と歌う。

『幸せになりたい』と歌う歌詞の主語は、もちろん『私』、もしくは広く見ても『私たち』、である。

つまり、女性は、幸せにおいて（主に恋愛において）自分本位とまではいかないが、

主体であることをつねに自認し、かつ黙認されているのが一般的だろう。

今までの聡もそうだった。今まで……といっても初体験の相手や大学生のときの彼氏までは、

恋愛に対して幼すぎて、そのときどきの甘い感情や行為に酔うだけで、

『幸せ』につながっていく『愛』などおそらく自覚していなかった……そういう深い感情があったかどうかもさだかではない。

聡が、恋愛が深い至福につながっているのを実感したのは、博史からである。

博史との恋愛時、確かに『幸せ』につながる『愛情』に聡は包まれていた。

「愛されている」

「この人なら私を幸せにしてくれる」

博史の愛情に包まれて、聡はただただ幸せと、それが将来に続いていく予感に酔った。

それは、すべてを男に任せてついていく幸せだったのだけれど。

将を愛する今の聡は違った。それを昨夜、聡は確認したのだ。

もちろん、幸せになりたい、というのは人間の生存本能として常に存在するとして。

聡は、むしろ将を幸せにしたい、と強く願った。

その願いは生まれたとたんに、涙が出るほどせつなくて、命を掛けたいほど強い願望になった。

それは、暗闇に迷う旅人にとっての北極星のように、将を愛する聡の道しるべになって、心に燦然と輝いた。

将を、傍目には淫らな行為で愛しながら、聡の心は徐々に純化していった。

将を気持ちよくしてあげたい。できれば幸せにしてあげたい。

そこに、聡自身の存在はどうでもよかった。

愛を受けるだけでなく、与えたい。

将が幸せなら、聡も幸せ。

幸せは与えられるものでなく、自分がつくりだすものになったのだ。

将に対して、今までもそんな気持ちがなかったわけではない。

だけど、どうしても教師と生徒という立場上、女が男にできること、という形でそれをすることは憚られた。

だけど、瑞樹というきっかけで、タガがはずれた聡は、将に『女』という形で愛を与えることができない自分のもどかしさの大きさを知った。

もはや受身ではいられないほどの強い想い。

それが昨夜の聡の原動力だった。

将を手に入れて幸せになるのではない。将を幸せにすることが自分の幸せ。

２６歳の聡は、そんな大人の愛し方で、瑞樹に先んじたい、と無意識に願っていたのかもしれなかった……。

そして聡は、果てた将の寝顔をなぞりながら、もし仮に、

自分の幸せか、将の幸せか、どちらかしかとれない、そんな状況になったら将の方を迷わず選ぼう……

そう心に誓っていた。

しかし本当にその日が来ると、まだ予想もしていない聡は、将の頬に軽く唇を押し当てると、

ベッドを降りて自分の寝床に入った。

「そうそう。将、上手じゃん」

日曜も夕方になっている。『ちびまる子』ちゃんを映すテレビをＢＧＭに二人は餃子包みに励んでいた。

将が餃子を包むのはもちろん初めてだが、手先が器用なのか、長い指を操って、

３つめには等間隔にタックをとってきれいに包めていた。

それきり、二人は無言で餃子を包むのに集中するかに見えた。

なにせちまちまとスプーンで救う量に対して、膨大な肉がボウルの中にある。

西日本出身の聡は一口で食べられるような小さめの餃子が好みだから、皮は小さめだ。

ゆえに大量の餃子を包まなくてはならない。

部屋にはしばらく、まる子と友蔵、キートン山田のやりとりだけが響いていた。

将はあいかわらず無口だが、別に聡のことを避けるようでもない。

チラチラと聡のことをさっきから盗み見ているのを知っている。

聡はそんな将をほうっておくことにした。しかし考えてみたら、今日はキスもしていないのだった。

「まる子、終わっちゃったね」

聡は指先に神経を集中させながら、将に話し掛ける。

「ああ」

無関心を装いながら、実は直前まで聡を見ていた。それを無理やり餃子に神経を集中させているかのよう。

「チャンネル変える？」

「……どうでもいいよ」

「じゃ、サザエのまんまにしとくねー」

それっきりしばらく沈黙が続いた。そして将のチラ見が始まる。

聡は助け舟を出すことにした。将のほうを見ずに餃子を包みながら

「将、なんか言いたいことある？」

と問い掛けてみた。

「え、ええ？」

肉を掬うところだった将は、聡からの思いがけない質問に、思わず力が入ってしまったらしい。

とうてい包めない量の肉がスプーンに山盛りになっていた。

しかし、それを減らすこともなく、餃子の皮に乗せる。

「あ、……えと……」

いいよどんだまま、大量の肉をむりやり餃子の皮で包んでしまおうと格闘する。

しかし、餃子の皮が破けてしまい、将は意を決したように聡に問い掛けた。

「あのさ……、ゆうべの……、ことなんだけど」

「なあに？」

聡は、１つの餃子を包み終わって、皿に並べながら将の顔を見た。

将は破けた餃子を皿の端に置いて、下を向いている。

「アキラ、昨日みたいなこと、いつも……」

言いかけて止まってしまった。あいかわらず下を向いたままでボサボサの前髪の下で睫がしばたたいているようだ。

ふいに将が顔をあげた。目が合う。真剣に何かを乞うような目だ。

「アキラ、ぶっちゃけ、オレって何人目？」

「なあに……、いきなり」

「いいから」

「そんなこと聞いてどうするの？」

「知りたいんだ。博史のほかに、東のほかにも、いたの？」

「なんで東を」

聡は、少し驚いた。なんで高校時代の彼氏の名前を将が知っているのだ。

「萩で秋月さんに聞いたんだ。アキラに、あんな……ことを教えたのは東なの……？」

将の声は最後は消え入りそうになった。声の調子と同じように目線はどんどん落下していった。

聡は静かに立つと、流しで肉と餃子の皮の粉で汚れた手を洗った。
そして、うなだれる将の隣に座ると、肩を抱き寄せた。
「将……イヤだった？」
聡の囁きに、将はびっくりして、首を横に振った。
体をねじって自らも聡の体を強く抱きしめようとしたのだが、手が餃子の皮の粉で汚れていて、それは宙にとどまった。
「イヤじゃない、むしろ嬉しかった……けど、」
「けど？」
「すっげえ、気持ちよかったけど……」
一瞬、ゆうべの感触がリアルに蘇り、将はあせる。
「オレ、アキラにそんなことを教えた昔の男に嫉妬してるんだ」
「将……」
聡は将の胸に顔をうずめながら広い背中を撫でた。が、おもむろに顔をあげて
「４０人め」
と言った。

「へ？」

突拍子もない数字に、さすがに、将は笑い顔のまま顔をひきつらせた。

「……とか言ったらどうする」

と聡は顔をあげたまま、いたずらっぽく笑った。

「ありえないでしょ、アキラが」

将は、冗談だとわかって、だけどホッとした。

「わかんないよー？　そしたら、やっぱり将は私が不潔だと思う？　別れちゃう？」

「もー、アキラ、茶化すなよぉ」

将は、粉まみれの手でついに聡の頬を撫でた。聡の頬に白い指の跡がつく。

「あのね。誰に教わったんじゃなくって」

聡は自分の頬を包む将の手に自分の手を添えた。

「私が……もし、処女でも、同じようにできたと思うよ」

聡はちょっと照れて、視線を下にずらした。長い睫が染まった頬の上でしばたいているのを将は見た。

「将が……どうやったら気持ちよくなるか、一生懸命だっただけだもん……。

誰にも教わってないよ。将が気持ちいいやり方なんて」

聡は顔をあげた。白い粉を頬につけたまま、まっすぐな瞳で将を見ると、ゆっくりと微笑んだ。

そして、そのまま立て膝をして、将の唇に軽く触れるようなキスをした。

将は目をあけたまま、それを受けた。優しくて温かい聡の唇の感触。

……将にとってずいぶん長いこと忘れていたような感覚だった。

考えてみたら、今日、初めてのキスだった。

なんだか、知りたいことはうやむやにされた気もする。

だけど、粉をつけたままキスしてきた聡があんまり可愛かったので、もうどうでもよくなった。

将は聡をもう一度抱き寄せると、今度は将のほうから深いキスをした。

そのまま抱擁と長い口づけを繰り返す。

聡の服も髪も餃子の粉だらけになった。

１１５◆久しぶりの登校

月曜日の朝がやってきた。

あわただしさを予想した聡は、いつもより３０分も早く起きた。朝の支度が二人重なった場合の待ち時間のロスを考えたからだ。

洗面所とトイレが一緒になった狭いバスルームは、二人で暮らすのにはとても不便だ。

しかし、幸いといっていいのか、将はいつまでも寝ていた。

さすがに、ゆうべは土曜の夜のようなことはしていない。

ただ、将があまりにも乞うので、聡は将と手をつないでベッドで横になった。

将が寝付くまで、と思っていたのだが、将の手の温かい感触に、聡のほうが先に眠ってしまったかもしれなかった。

気がついたときは夜中の３時だった。

静かな夜に、すうすうと将の安らかな寝息が響いていた。

聡は幸せのあまり、真っ暗にはならない東京の夜に浮かぶ、将の横顔の輪郭をずっと眺めていた……。

昨日のブランチよりもかなり簡単に朝食をつくると、聡は将を起こした。

「将、今日学校でしょ、もう起きなくていいの？」

「ん……、もう少し……」

といって、あおむけになった顔に布団を自分でかぶせた。

「もう7時30分になるよ、あたしはもうすぐ出ちゃうよ」

8時40分の始業には8時20分にはここを出る必要がある。職員の聡はさらに30分早い出勤だ。

「うん……。タクシーで行くからいい」

かぶった布団の中からくぐもった声が聞こえる。

「んま！あきれた」

「だって、足がさあ……」

将は布団から顔をだした。ほんとうに眠そうな半開きの目だ。

たしかに、松葉杖でバスに乗るのはつらそうだ。贅沢だが仕方がないかもしれない。

「将、じゃあ、しばらくタクシー通学すんの？」

「うん」

「あっそ」

さすがボンボンだ。まあお金は心配ないのだろう。

「あたしさ、今日、補習のあと職員会議あるから、将より遅いはずなんだよね。悪いけど、将、今日はお弁当屋さんで何か買ってきておいて。私は野菜弁で」

「んーー、わかった」

将は布団の中で伸びをすると

「もう、出かけるの？」

とやっと目を見開いて聡を見た。

髪はいつもよりさらにボサボサで、寝起きでうるんだ目は赤ん坊のようだ。

「うん。今日はいろいろやることがあるから早めに出る」

「忘れ物」

「え？」

将は、布団に入ったまま、自分の唇を指差した。

「えー、もう口紅つけちゃったよ」

「いいから」

聡は、将の唇に、素早くキスした。素早く……のつもりだったが、将が布団の中から腕を伸ばしてきて

聡の体を抱き寄せたので、本格的に唇を交わすことになった。

――将でも髭のびるんだ。

将の頬にふだんは、髭の気配を感じることはなかったが、今朝はわずかにざらつく感じがあった。

このキスで5分オーバー。

聡はあわてて、もう一度口紅を塗りなおすと

「じゃ、鍵ここ置いとくから」

とあわただしく出勤していった。

将は、そんな聡を微笑んで見送ると、大きくあくびをした。

「すっかり、目が覚めちゃったよ～」

と上半身を起こした。ローテーブルの上には、

『トースターで温めて！』というメモと共にハムチーズのトーストが置いてあった。

二人の同棲はもちろん秘密である。

教師と生徒で、登下校に時間差があるから、『同伴登校』でバレるということはまずない。

クラスでは井口だけに、将が聡の家に転がり込んでいることを話している。

他のユウタやカイトなどには話していない。彼らから女子に伝わる可能性があるからである。

噂好きの女子に漏れると、学校中に広まり、それは教師たちにも知れることとなるだろう。

将のマンションを貸している瑞樹にも、将の居場所自体は教えていない。

もう、何もしないとは思うが、やはり聡の家にいることが彼女に知れると、何かと弱みになると危ぶんだからである。

しかし、そんな心配は無用だった。

瑞樹自体が先週からずっと学校を休んだままなのだ。

将が久しぶりに登校しての月曜のＨＲが終わると、井口らが将の席に集まってきた。

３学期になり、席替えをして、将の席は教卓のまん前ではなくなってしまった。

が、闇取引をして、なんとか前から2番目のはじっこの席を確保した。

それでも、聡から少し遠いのが不満だが、窓側なので条件はまずまずだ。

ちなみに、井口はこの月曜から髪が黒くなっていて、将を始め、クラスメートの皆を驚かせた。

ピアスも減っている。

「どーしたのよ、いったい。普通の高校生みたいじゃん」

と将が茶化しながら訊くと

「いやー、バイトでさあ」

と井口は黒髪の頭をかきながら、照れて答えた。

ダンスのレッスンを本格的に始めた井口は、そのレッスン料金のためのバイトを始めたのだ。

「何してんの？」

「……パン屋」

「パン屋ぁ？らしくねー！」

将はひゃひゃひゃと笑ったが、井口は『うるせぇ』と顔を赤くして下をむいた。

なんでも、パン屋のバイトは朝4時から7時までだから、夕方はレッスンに費やせるのだという。

家の近所なのも都合がいいらしい。

「なーる……」

将はなんだか急に井口が大人になった気がした。

「がんばれよ。こんどパン買いにいくからサ」

将は励ましながらも、自分のやりたいことを見つけて邁進する井口が、とてもうらやましかった。

夕方、将は、学校帰りにタクシーで弁当屋に寄った。

大学生のふりをしている弁当屋に制服で寄るのは暴挙だが、冬だということもあり、

ダッフルにマフラーをつけているから、たぶんわかるまい、と強気の将である。

「あら、山田さん、足はどうしたの」

カウンターにいたおかみさんは、すぐに将の腋にはさんだ松葉杖に気付いたものの、

その裾が制服であるということには、案の定気付かないらしい。

「ハァ。スキーで転びまして……」

「おやおや、まあまあ……。気をつけないと」

おかみさんは、悲痛な声を出した。

「今日は野菜弁当と、カルシウム弁当、それとフライ盛り合わせをください」

と将は注文した。おかみさんは奥にいるご主人に向かって注文を繰り返した。

「で、アキラちゃんと会ってるの?」

将は思いがけないところで聡の名前を聞いて、思わず頬がゆるんでしまった。

「え、ええ……毎日」

「ニヤニヤして気持ち悪いねえ、なんだい？」

おかみさんはご飯を詰めながら訊き返して来た。

弁当屋に暴露しても問題はないだろう、と将はつい言ってしまった。

「あの、オレとアキラ、一緒に棲んでるんです」

「ええーっ！」

おかみさんは、しゃもじを取り落としそうになるほど驚いたらしい。

さらに、主人も菜箸をもったまま、カウンターに駆け寄ってきた。

深い皺の中、眼窩から飛び出しそうなほどに目をむいている。

「な、何！　聡とお前がっ？」

殴るような勢いで詰め寄ってきた。白髪交じりの眉が激しく上下する。

「は、ハイ……」

将は思わずたじたじとなった。

「こうなったら、セキニンは、ちゃんと取るんだろうな！」

「は？　セキニンですか？」

「ケッコンだよ！結婚。嫁入り前の娘だろ、聡は！　いずれ結婚す

るんだろうな！」

結婚。聡と結婚する。夫婦になる……家族になる。

弁当屋の主人にすごい剣幕で詰め寄られながら、将の頭には急激に、フワフワとこの甘く厳粛な単語が舞い始めた。

聡は補習後、事務仕事に拘束されていた。

日いちにちと夕闇の訪れは遅くなってきているが、もうあたりは紫色の闇に物の輪郭がぼんやりとしている時間だ。

修学旅行や風邪引きでたまった分がようやく片付いて、平常どおりになってきている。

ホッとしているのは、それがなんとか終わりが見えてきたというのともう１つ。

教室で将に対して、なんとか平常どおりに接することができた……ということ。

一緒に暮らしている恋人同士が、教室では教師と生徒という関係を演じなくてはならない。

それを無事演じきることができた、ということに聡はひとまず安堵していた。

ちなみに、修学旅行中、聡と将が二人きりで避難小屋で一夜を過ごしたことは、同行教師らに緘口令が敷かれていた。

そのことについて表向きは、将が単独行動をして怪我をしているのを聡は見つけただけ、ということになっている。

よけいなことが校長や教頭、他の教員に知られて、聡が困った立場に置かれないように、という多美先生の配慮なのだ……。

と、そのとき携帯が鳴った。

表示を見ても、番号に覚えはない。しかし、０４で始まる市外局番に不安があった……。

116◆欺瞞

不安は的中した。電話の向こうから

「原田です。聡さんですか？」

と声がした。

一瞬、聡はその声が誰か判別がつかなかった。

しかし気付いたとたん『あっ』と声が出そうになった。

それは博史の父の慎一だった。

クリスマスに実家のマンションを訪ねたとき、聡のグラスに何度もワインを注いだ、バリトンの朗らかな笑い声の紳士を思い出す。

聡は、どもりそうになるのを押さえて

「ハイ、その節はいろいろとごちそうになりまして……」

となんとか挨拶の言葉をつむぎだす。気付くと、心臓がどくん、どくん、と暴れ始めている。

慎一のほうは、聡が苦労してつないだ挨拶には軽く返事をしただけで、

「聡さん、実は家内が、緊急入院しまして……」

とすぐに本題を切り出してきた。

「えっ！」

博史の母の薫は、ガンで余命1年というのは知っていた。

しかしそれは11月時点の話で、まだ1月末であるいま、危篤になるのは早すぎるのではないか。

「いえ、まだ命がどうこう、というわけではないとは思うのですが……」

聡の驚いた声に、慎一はあわてて、取り繕う。

が、はっきりとした言葉をいわないところに却って不安がつのる。

「もしよかったら、聡さん、来ていただけませんか。

うちのやつ、聡さんにお会いしたいって、ずっと言ってたから……」

聡はしばらく、絶句した。

何か言わなくてはと口は開いているのだが、何を言っていいのかがわからない。

『わかりました、すぐ行きます』と言う関係……博史には、もはやそういう感情を持っていない。

かといって『行けない』と言って捨てるほど聡は非情になりきれない。

心づくしの料理を出してくれた博史の母・薫の柔らかい笑顔を思い出して、聡は苦しくなった。

あの……何の罪もない、優しい人たちを傷つけなくてはならない。

自分がこれから行う罪の痛みを想像して聡は目をぎゅっとつむった。

やはり、今は言う時ではない。

聡は、仕方なく「今から、行きます……」と答えるしかなかった。

待合室のベンチに座っていた慎一は聡の姿を見つけると、立ち上がった。

「聡さん、すいません。お疲れのところ……」

と、頭を下げる。品よく櫛が入った銀髪が少し乱れている。

もう遅めの時間のせいか、待合室にいる人は少ない。

「あの……ご容態は……」

聡は、考えたあげく『お義母さま』という主語を省いてしまった。

「あ、ああ。急に倒れたのでびっくりしたんですが、ちょっと強い

貧血でした。

もう大丈夫です。でもいちおう、念のために、検査入院するんですが……」

とりあえず、危篤ではないということに、聡は胸を撫で下ろした。

「よかった……」

「ええ、本当に。あれも、月末まではカタールって言ってたんで、もし今、何かあったらと気が気じゃなかったんですが、本当によかった」

慎一は本当に安堵したらしい。笑顔で顔を皺だらけにしながら、この年齢の男性にしては珍しく、早口で一気に話す。

それだけ、心配から一気に解放されたのだろう。

逆に聡は、慎一の口から出た博史の近況に、ややびくつく。

「ああ、そうだ。うちのが、せっかくお呼びしたのなら、お会いしたいと言ってまして」

一方的にまくしたてていたことに、慎一はようやく気付いて、聡を薫の病室に案内すると言い出した。

大丈夫なのなら、そろそろ帰る言葉を口にしようとしていた聡は、少し怖気づいた。

しかし、ここで帰るのはさらに不自然だろう。

聡は、バンジージャンプをする前に似た緊張と覚悟を持って、薫の病室へと向かった。

「聡さん！お会いしたかったわ」

個室にいた薫は思ったよりずっと元気そうだった。少し顔色が悪い気がしたが、体を起こして聡を迎えた。

聡は、ふと将が入院していた病室を思い出した。

まったく別の病院だが、個室というのは雰囲気が似ていると思った。

ハッとする。こんなときにまで将のことを考えるなんてどうかしている。

「すいません。あの、手ぶらで来てしまいまして申し訳ありません」

それに対する言い訳のように聡は頭を下げた。

「いいのよ、さあ、ここに座って」

と薫はベッドのそばの椅子を勧める。

「あの、先日はご馳走いただいたのに、ろくにお礼もしませんで……」

「ふふ。聡さん、謝ってばっかりね」

薫は、目を糸のように細めて聡を見た。その細い一重瞼は、あきらかに博史そっくりだ。

聡は、博史そっくりの、その笑顔を見て心臓が苦しくなった。

「博史がいなくても、気軽に遊びに来てくれたらいいのに」

「ハイ……」

聡は返事をしながら腋の下にじっとりと汗が出てくるのを感じていた。

「今日は、学校だったの？」

「ハイ……」

「英語を教えてらっしゃるんだったわね。お嫁に来たら、私にも教えてちょうだい」

薫は無邪気に、未来の聡に願い事をする。

聡は困惑した。

「そんな……お教えできるレベルじゃありません」

「あら、ごけんそん。あのコは聡さんの英語は自分より流暢だってベタぼめなのよ。ぜひ教えて？」

そこで、慎一が口をはさむ。

「どうだい。博史は反対するだろうが、聡さんは結婚しても、東京にいてもらうってのは。

……私ら、ずっと可愛い娘がほしかったんだ。一緒に仲良く暮らすってのはどうだね」

「あら、いい考え。ねえ、聡さん、そうしましょうよ。聡さんだって日本がいいでしょ」

薫は、弾んだ声をあげると、少女のように浴衣の手を前であわせた。

「そして一緒にあちこち旅行しましょう。私、まだカナダに行ったことないの。

カナダの紅葉ってすごくきれいなんでしょう?」

きっと博史から聡が子供の頃、カナダにいたことがあることを聞いているのだろう。

「え、ええ。きれいです……とても」

聡は、それを答えるだけでせいいっぱいだった。

この11月に余命1年足らずを宣告された薫。

カナダの紅葉が一番美しい10月。次の10月に……薫はこの世にいるのだろうか。

いっせいにメイプルの葉が舞い落ちる心象風景に、聡は飲み込まれそうになる。

心に積もるメイプルの葉は、涙をいきおいよく押し出そうとする。

下を向くと流れだしてしまう。薫の顔を見ると涙の湧出が増えてしまう。

ここで泣くことは、薫に自身の余命の短さを、バらしてしまうことになる。

聡は焦点をぼかすことによって必死で堪えた。

「じゃあ、約束よ。一緒に行きましょうね」

薫は聡の手を握った。温かいけれど乾いた感触。

それにつられて思わず、聡は薫の瞳を見てしまった。年齢に不似合いな澄んだ瞳。

聡は、薫が、自分の余命を知っているのでは、と思った。

不自然に瞬きを繰り返して、涙は止めたけれど……。

気がつくと慎一も耐えられないのか、顔をそらしていた。肩が……かすかに震えている。

この、大きな悲しみを持つ家族に、いずれ、あらたなる鉈をふるわなくてはならない聡は、自分の罪深さにおののいた。

「アキラ、遅いじゃん！どこ行ってたんだよ」

ドアを開けて出迎えた将がパジャマ姿で抗議の声をあげた。もう９時すぎになっている。

「オレ、待ってたんだぜ。お腹ぺこぺこだよ！」

そういう将の後ろのローテーブルには、買ってきた弁当がビニール袋に入ったまま置かれている。

将は、聡が帰ってくるまで夕食を待っていたらしい。

先に風呂に入るなどして必死で空腹を紛らわしていたのだろう。

「ごめん……」

将の顔を見たとたん、聡は、もう限界だった。

鼻の奥がつーんと痛くなり、目が熱くなる。

聡は、将の胸にすがりついた。涙が堰を切ったように流れ出す。いったん流れ始めると、止めどなくそれは溢れていく。

すがりついた聡を支えようとして、腋に挟んだ将の松葉杖が、がたんと音をたてて倒れた。

「うぅーっ……」

聡は声を出して、激しく嗚咽していた。

「アキラ、どうしたんだよ、ねえ、アキラ？」

将のとまどう声が聞こえる。

だけど聡は、次々と津波のように押し寄せてくる感情に流されたまま、説明もできず、ただしばらく泣き続けるしかなかった。

「……で、さっきはどうしたの？」

ようやく落ち着いて、遅い夕食をとった後。将は聡にできるだけ優しく訊いた。

聡はだまりこんだ。

「……学校で、なんかあったの？」

将はそう訊きながら、そうではないことだけはわかっている。

だまっている聡の瞳が低い虚空を眺めたまま、柔らかいゼリーのように膨らみ始めた。

それがポロリとこぼれて、頬を伝った。

「アキラ？大丈夫？」

涙を見て、将はまた、とまどったようだ。

聡は涙を頬に伝わせたままハッとしたように上を向いた。

「う、うん」

聡は、あわてて将のほうを向くと、涙を手の甲でぬぐった。

しかし、鼻水まで出てきてしまった。聡は1回立ち上がるとティッシュを掴んで鼻をかんだ。

そのユーモラスで不躾な音に、聡はかろうじて自分を取り戻した。

そしてベッドに寄りかかる将の隣に座る。

将は腕を伸ばすと、聡の頭を自分の肩のほうに引き寄せた。もう、何も考えないで出てくる動作だ。

「余命1年なの」

まったく想像しなかった単語に将は、自分に寄りかかる聡の顔を見ようとする。

しかし、聡はうつむいているので震える睫だけしか見えない。

「誰が……？」

まさか、聡ではないだろう、と将は訊く。

「博史さんのお母さん……。今日、倒れたって連絡があって、病院に行ってきて……」

聡はそれだけ言うと、こみ上げる涙に言葉を流されたようにしまった。

いろいろなことが、また一度に押し寄せる。

薫の乾いた手。細い目を糸にした笑顔。見たいと言っていたカナダの紅葉。

しかし、次の紅葉まで彼女は生きられないかもしれない。

よしんば、余命が延びたとしても聡は彼女に同行できないのだ……。

将は、聡の涙声を聞いて、おおよその事情を察した。

聡のとまどいと苦しみ、哀しみが触れている肩を通じて将の心にも流れ込んでくるようだった。

将は聡を抱く手に力を込めた。

「アキラ、……ごめんな」

聡が苦しむそれらは、自分のせいでもある。

将はそれがわかるから、聡のふるえる両肩に腕を伸ばした。

聡は将の胸にもたれかかって、長いこと震えるように泣いていた。

将はそんな聡をずっと受け止めるしかなかった。

117◆急な出張

「ごめん、アキラ……」

呟やく将に聡は、将の腕の中で首を振った。

「将が、悪いんじゃない……。私が……私が決めたことだもん」

聡は、涙にまみれた顔をあげて、将を見つめた。

「将を好きになったのは……、私だもん」

どうしようもなく、将を愛してしまった。

人を傷つける予感だけで、今の聡の心は血を流すほど痛い。

だけど戻れないほどの想い。

「アキラ」

傷ついてまで自分を選んだ聡がいとおしい。

かくなるうえは聡の苦しみを、痛みを一緒に背負いたい。

決意した将は、聡を再び強く抱きしめた。

その夜、二人は、また手をつないで眠った。

お互いの手のひらをとおして、優しさが二人の体全体を包む……。

夜が更けた。この寒いのに、遠くを走る暴走族のクラクションが静かな夜に響く。

将は、もうとっくに寝付いたようだったが、聡は寝付けず、将の手の温かさを感じたまま目を開けていた。

罪の意識が、聡を寝かせないのである。

いつか……博史の両親に、博史とは結婚できないことを打ち明けなくてはならないだろう。

一体、いつ？

余命1年の博史の母……薫。

余命1年というのが確かであれば、今後容態は少しずつ悪くなっていく一方なのだろう。

……だとしたら、時間がたてばたつほど、言いにくくなる。

一一早く、打ち明けなくては。

つらい決意はできるだけ早く実行しなくてはならない。

聡はそのつらさを思うと暗がりの中で深いため息をついた。

そして……そんな風に、薫の余命を測る自分の冷酷さが恐ろしくな

って、思わず救いを求めるように将の寝顔を見た。

そういえば。

聡は、博史の父・慎一が、博史が『月末までカタール』といっていたことを思い出した。

もう今週末が月末である。

聡は灯りもつけずに、体を起こした。

将を起こさないようにベッドを降りると、パソコンの電源を入れた。

もしかしたら、博史から帰国の連絡が入っているのかもしれない。

将と一緒に寝起きするようになって今日で3晩め、聡はパソコンのメールをチェックするのをすっかり忘れていたのだ。

暗闇の中、異世界への窓のように輝くパソコンの液晶画面。

しかし……博史からのメールは着信していなかった。

1月4日に聡を乱暴するように抱いたあと、『メールする』と言っていたにもかかわらず、帰国予定日の連絡はない。

受信箱は不気味な沈黙を保ったままだ。

聡は、ほっとしたような、しかし不安な気持ちに襲われてまた、ため息をついた。

「……アキラ？」

暗がりの中、将の声がした。振り返ると将が、半身を起こしてこっちを見ていた。

白目と歯がパソコンの光の中に浮かび上がっている。

パソコンが起動する音は真夜中の部屋に意外に響いていたのだろうか。

「ごめん、起こしちゃった？」

「何……してんの？」

将は優しい調子で、聡に訊いた。

「うん……。メールをね。チェックしてた」

聡はパソコンの電源を落とすと、部屋を暗がりに戻した。そして注意深く、将がいるベッドに戻った。

「なんの、メール？」

「あのね」

少し躊躇したが、隠すこともないだろう、と暗がりの中、聡は話し始めた。

「今日、病院で聞いたんだけど、博史さんが月末に帰ってくるんだって。

……で、メールがこっちにも来てないかと思ったの」

「博史が……そっか」

聡は将の隣に先に体を横たえた。

「アキラ、それで、どうするの？」

将もつられて横になった。体は仰向けで顔だけ聡のほうに向ける。

「どうって……。どうにもしないよ」

将の心配そうな声音に、聡は将のほうに体を向けると、ほのかに見える将の輪郭にそって手を添えた。

「もう、博史さんには結婚できない、って伝えてるし……心配しないで」

「でも……」

将は、聡が博史に殴られたことを思い出した。

そんなことをするように見えない優しげな顔の博史。

細い目が、いかにも穏やかそうな男。だけど。

――ああいうやつに限って、逆上すると何をするかわからないんだ。

将は、その言葉を飲み込んだ。

低レベルな嫉妬と間違われたくなかったからである。

暗がりに心配そうな将の目。目を見開いてこっちを見ているのが青く反射する白目でわかる。

「大丈夫だから……。明日も学校でしょ。もう寝よう」

聡は将の手をとった。それはさっき以上に温かいように思えた。

同棲を始めて最初の週は、学校に発覚することもなく、なんとか過ぎていった。

松葉杖なこともあり、家のことをほとんど聡にやらせっぱなしの将は、なんだか申し訳ない気がしたが、

それでも二人で夕食を食べ、手をつないで眠るのは幸せだった。

弁当屋の主人が口にした『結婚』という単語。

将が今受けている授業は、得意の数学の時間である。だけど将はうわの空だった。

例題ではなく、窓から見る冬晴れの空に、聡と作る家庭を思い描いてみた。

二人が結婚したら、こんな幸せが毎日続くのだろうか。

それだけじゃない。毎晩、聡を抱いて……そこに、しばらくすると聡と自分にそっくりな子供が加わる。

聡が自分の子供を産む。

それを考えて将はひとり照れた。

そこで思った。

自分は何をして……何を仕事にして、聡との家庭を守るのだろう。

金曜日の朝。

今日を無事終われば、1週間何事もなく終わる。

聡は、朝から気合が入っていた。

今日の6時間目は社会見学、それが終わったら、将と二人で食事にでも行こうか。

週末はどう過ごそうか。まだ松葉杖だし、家事もたまっているから、ゆっくりしたほうがいいんだろうか。

そんなことを考えていた聡に、教頭が声をかけた。

「古城先生、ちょっと一緒に校長室に来てください」

「ハイ」

いったい何だろうと思いつつ、聡は素直に席を立って、教頭のあとについて校長室に向かった……。

「視察～!?」

将があまりに大きな声をあげたので、聡は

「シー!」

とまわりを見渡して人差し指を立てた。聡の家の近所にある、こぢんまりとしたイタリア料理店に来ている。

漆喰の壁にチェックのテーブルクロスが、イタリア南部の家庭の味の演出に一役買っている。

社会見学が終わって、二人で今日は外食、としゃれ込んだのだ。

将は、いったん聡の部屋に帰って着替えたので私服になっており、グラスワインを傾ける姿も違和感がない。

「なんだよ、それ」

将は、ウナギの稚魚が乗ったブルスケッタを持ったまま、ふだんクールな印象の目を、丸く大きくしたままだ。

「うん、なんかね。山梨に大検試験をめざす全寮制の予備校だかをつくるんだって。

ホラ、引きこもりとか、不登校のコのためなんだって」

聡もよくわからないので、聞いたままを伝えて、鰯のエスカベーシュにフォークを突き刺す。

「いつからできんの」

将はようやく、ワインを口にした。魚介類の前菜にあわせての白ワインは、少し安いのか酸味がきつい。

「この4月開校だってー」

「でさ、なんで明日から、アキラが1泊で視察なんだよ」

「知らないッ……」

将の抗議する口調に対して、聡も唇をとがらせてすねた表情で将を一瞬見つめた。

「でも行けって言われたから……しょーがないもん。断れないじゃん」

そう言うとグラスをぐいっと傾けて、グラスに残った白ワインを一気に煽った。

「アキラ独りでかよ」

聡はグラスを置くと、唇をとがらせたまま、頷いた。

将はため息をついて椅子の背もたれに寄りかかった。

「わけわっかんねーの。……でさ、アキラ行ってる間、オレどうするんだよ」

「それなんだけど、どうせ土日だけだから、瑞樹さんにお祖母ちゃんちに行ってもらえないかな。

どうせ一人でいるんだったら、エレベーター付きの将の家のほうが便利でしょ」

「それはたぶん大丈夫と思うけどさぁ……なんかオレ心配」

「う……ん」

実は聡も、急な出張が心配だった。

実際何の仕事をするというのか、校長や教頭の説明を聞いてもいまいちわからなかったし、何の意図があるのだろう。

「でも、どうせ1泊だし。大丈夫よ」

聡は自分に言い聞かせるように明るい声をあげると、ワインの追加を頼んだ。

だけど将は、なぜか胸騒ぎが止まらなかった。

この胸騒ぎは……的中した。

聡は、月曜になっても帰ってこなかった。

118◆思いがけない縁

イタリア料理店から帰るなり、聡はほろ酔いなのにもかかわらず、洗濯機をまわしていた。

急に出張を言いつけられたので、土日にやるつもりだった家事を明日の午前中までに片付けないといけない。

といっても、週末は将をいったん家に帰すつもりなので、とりあえず洗濯だけでいい。

家の中にロープをわたして、洗濯物を干した中で、二人は手をつないで眠りについた。

足のギプスのせいで抱き合えない分、毎晩、手をつないで眠る……だから結局、新しい布団はほとんど使っていない。

「あさっての夜には戻るんだろ」

将は、暗がりの中、何度目かになる同じ質問をした。

「うん。だから、そんなに心配しないで」

聡は体を将のほうに向けた。将はとっくに顔をこっちにむけている。

「オレ、ここで待ってようかな……」

「ゴハン、どうするの」

「ピザでもとればいいじゃん」

聡は首を振った。

「将の部屋のほうが、エレベーターだし、コンビや弁当屋さんも近いし。お手伝いさんも毎日来てくれてるんでしょ」

「そうだけど……」

実は、さっき聡がバスルームの中にいるときに、瑞樹に連絡をしようとした。

だが、ずっと出かけているのか『電波が届かないところにいるか……』のメッセージばかりだ。

「1泊だけだから、そんな顔しないで」

聡の暗がりに慣れた目には、不安そうな将の顔がわかる。聡は手を伸ばして将の頬を撫でた。

聡の手は少しひんやりとしている。

「……キスして。アキラ」

聡は、何もいわずに、暗がりの中で身を起こすと、唇を重ねてきた。

手はひんやりとしていたのに、唇は温かくて柔らかい……。

こんなふうに口づけを交わす夜。本当は一晩でも失いたくない。

将は、上にのしかかる聡の体に両腕を伸ばすと、その柔らかい体をしっかりと抱き寄せた。

ひとしきり口づけを交わすと二人は並んで、手をつないで眠りを待った。

聡より眠りの到着が遅かった将は、暗い天井を仰いだ。

ふと、瑞樹とこのまま連絡がとれなかったら、大磯のヒージーの家にでも行くかな、と思いついた。

翌朝、学校に行くのよりは少し遅い時間に出発した聡を見送って、将はもう一度瑞樹の携帯に電話をしてみた。

やはり同じメッセージだ。電源を切っているのだろうか。

あっさりと諦めた将は、曽祖父である巌こと、ヒージーの家に電話をする。

すると、電話にはハルさんが出た。隣に住むハルさんは、巌の家のことも手伝ってくれているのだ。

「あ、ハルさん？　ヒージーは？」

「まあ、将ぼっちゃん、久しぶり……」

ハルさんは、年寄りのせいか、前置きの挨拶が長い。

将は、元気だ、学校にも行っている、ちゃんと食べている、などといちいち質問に答えなくてはならない。

そしてようやく本題にたどりついてみると、巌は昨日から2泊3日で人間ドックに入っているというのだ。

将は脱力して、しばらく、ハルさんが一方的に話すヒージーの近況を聞いたのちに電話を切った。

人間ドックは定期的なもので、特に体調が悪いというわけではないらしい。

――どうしよう。

将はベッドに寝転がった。

このままここで聡の帰りを待つべきだろうか。

しかし……聡の言うとおり、松葉杖をついての暮らしは、着替え1つ出すのでも不自由だ。

と、将は瑞樹の携帯がどうしてつながらないのかが少し気になりだした。

何か問題に巻き込まれているのか。

いや、どうでもいい。あまり彼女のことに首を突っ込まないほうがいい。

将は仰向けに寝転がったまま目を閉じた。

本来は寝坊を楽しむ土曜日なのに、聡に付き合って早く起きてしまった。だから少し眠ろうと思う。

が……将はなかなか眠れなかった。心の奥に何かがひっかかっていて小さな警告音が鳴り続けているようだ。

警告音はどんどん大きくなっていく。

ついに将は上半身を起こした。

もう一度瑞樹の携帯に電話をする。結果はさっきと同じだ。

将は、そのまま携帯でタクシーを呼んだ。

1週間ぶりに自宅マンションの前に立った将は、最後にもう一度携帯を鳴らすが、反応はさっきと同じだ。

将は、松葉杖でエレベーターに乗ると自室に向かった。

誰もいなかったら予備の鍵を使おうと思ったが、とりあえずインターホンを鳴らす。

1回目、部屋の中に響いているピンポーンという音がかすかにする。
が、反応はない。
将は念のためにもう一度鳴らしてみた。
すると、次は中からドタドタとドアに駆け寄ってくる音が聞こえた。

「ハーイ」

ドアの内側から響いた声に将はとても驚いた。男性の声だったからだ。
次の瞬間ドアがガチャと開いた。

「将？」

顔を出したのは、上半身裸の島大悟だった……。

「なんだよ、お前、どうしたんだよ」

と将が問い掛ければ、大悟のほうも

「お前こそ、その足はどうしたんだよー」

とコーヒーを淹れながら、笑って訊き返す。バスルームからは水音
……瑞樹がシャワーを使う音が聞こえている。

「や、オレのほうはスキーで折ったんだけどさァ」

とソファに腰掛けた将は笑うと、コーヒーを運んできた大悟の耳に口を寄せて

「何、おまえら、ここで、そういう関係になったわけ」

と声をひそめた。

大悟は端正な顔をやや赤く染めると

「……まあ。実は昨日がはじめて、だったんだけど」

と下を向いた。正月に会ったときより少し髪が伸びて耳にかかっている。

訊くと、とうとう暴力に耐えられずに愛知の親類宅を飛び出してしまった大悟は、

身を寄せる場所もなかったので、将の部屋を訪れたのだという。

それが先週の日曜日だった。

「ちょうどお前と入れ違いだったんだってな。来てみたらお前じゃなくて、女の子が住んでたからびっくりしたよ。

そうだお前、どこに入りびたってんだよ」

「あ、うん。いろいろ……。で、今日まで瑞樹と一緒にいたわけ?」

聡の家にいることは思わず隠してしまった。

「うん。俺、携帯ないし、他に行くとこもないだろ。途方に暮れていたら、瑞樹ちゃんがここにいてもいいって言ってくれて」

「でもさ、だったら何で、瑞樹のやつ、オレに連絡くれなかったんだ？」

「あ、それ。充電器を無くしたって言ってたぜ」

将は、あまりにあっけなく簡単な答えにホッとし、かつガクッと力が抜けてソファーにもたれた。

「買えばいいのに……そんなの。人騒がせだな」

「いやー、瑞樹ちゃん、金がぜんぜんないんだって。ほら、毎日ここにオバサン通ってきてるじゃん。

あのオバサンが作ってくれるご飯だけが命綱って感じで暮らしてたらしいぜ。俺もそんなに持ち合わせないし……」

オバサンとは、巌が派遣してくれている家政婦のことだろう。

将が骨折している間だけ、毎日通うようになっているのだ。

「ふーん」

たしかに、瑞樹には中絶費用だけしか渡してないから、そういうこともあるのかもしれない。

家に帰れずに、援交も控えなくてはならない体だとしたら、金はないだろう。

将が、コーヒーを口にしたとき、瑞樹がバスルームから出てきた。

バスローブを着て、ようやく見られるほどに伸びたのか、ウィッグをやめた髪はショートカットになっている。

将を見つけると、その大きな目を見開いた。

次に、そのまま大悟に視線を移した。大悟も瑞樹を見つめて、うなづいた。

「それでさ、将。俺、このまま東京にいようと思うんだ。で、悪いんだけど、仕事見つかって部屋借りられるようになるまで、ここに置いてくれないか？」

大悟は端正な顔を少しゆがめるように『頼む！』と懇願した。

「や、それは別に、ぜんぜんいいんだけど……」

「マジ？ホントに？」

「いや、ぜんぜん……ずっと居ろよ。遠慮せずに」

将は少し困惑したのだが、親友の窮地を救わないわけにはいかない。安心させるべく笑顔をつくった。

「よかったー。ホント、恩に着るぜ、将」

大悟は、将に向かって手をあわせた。

それにしても大悟と瑞樹が……将はなんだか複雑な思いだった。

瑞樹が『将のことが本当に好きだったから』と涙してから、まだ1ヶ月も経っていない。

そんなに簡単に、他の男に心が移るものなのだろうか。

しかも相手は、将の大事な親友である大悟だ。

大悟は、かいがいしく牛乳を沸かしてカフェオレをつくり、瑞樹に渡していた。

瑞樹もクールな顔に笑顔を浮かべて、大悟と仲むつまじくしているようだ。

冷めたコーヒーの味が、なぜかいっそう苦々しく将の舌の上に広がった。

１１９◆似たもの同士

その夜、リビングでビール片手に語り合う将と大悟に遠慮して、瑞樹は寝室に早々に引き上げた。

まだ、将に対して、なんとなく気まずいのだろう。

将のほうも、瑞樹が部屋に引き上げてくれてホッとした。

ちなみに夕食は、家政婦さんがシチューをつくってくれたのでそれを３人で食べた。

家政婦さんは急に将が帰ってきたので驚いたようだが、急遽夕食の量をふやしてくれた。

将と大悟は、しばらくは将の足のことや、テレビを見ながら当り障りのない話題を話していたのだが、

「な、大悟……。瑞樹のこと、マジなの？」

と将は思い切って切り出した。

「なんだよ、急に」と笑う大悟。

「いや、急なのはお前のほうだろぉ」

と将は、目をむいた。すると大悟は、ちょっと恥かしそうに下を向いたが、すぐに視線を将に戻して、

「うん。マジだよ」

と微笑んだ。それは同じ男の将なのに、思わず惚れそうになるほど、魅力的な笑顔だった。

昔の俳優を思わせるような男っぽさに溢れている。

「あ、そ」

将はその笑顔に圧倒されて、目をしばたくしかない。

しばらく、テレビのお笑い番組で芸人がリズムに乗ったテンポのよいコントを繰り出すのが響いた。

思い出せば、中学の頃、大悟は将と違って、それほど女付きあいが派手だったわけではない。

童貞はあっさりと将と同じ時期に捨てたはずだが、そのあと女がいたというのを聞いたことがない。

「あ、あのさ。言いにくいんだけど、瑞樹って……」

将は、大悟の身ぎれいさに、瑞樹のような女は合わない気がして、自らも加担した瑞樹の過去を口にしようとした。

すると大悟は、将がそれを言う前に

「知ってる。お前のだったんだろ」

と言って微笑んだ。将は、先手を打たれてとまどった。

視線も舌もどこに落ち着けていいか、わからなくて、とりあえず目の前の缶ビールを飲む。

空に近いそれを、天井にむけてあおっても、液体は2〜3滴、将の舌の上に落ちたぎりで味がしない。

「援交をいっぱいやってたのも知ってる。こないだ中絶したのも……」

将は、缶を顔の上に乗せるように上をむいたまま、固まった。

おそるおそる、瞳だけを動かして大悟の顔を盗み見る。

大悟は、さっきと同じ男っぽい笑顔で将を見ていた。

「……瑞樹が……自分で言ったの？」

「……うん。俺たち似たもの同士なんだ」

大悟は、また少しうつむくと、空になったビールの缶を握って少しだけつぶした。

ペコ、という音がどことなく哀しげだった。

その缶の音に続いて、将は信じられない告白を聞くことになった。

「実は俺も、援交してたんだぜ。もちろん買うほうじゃない。……売るほうな」

大悟も援助交際という名の売春を重ねていた、というのだ。

「ウソ……だろ」

将は大悟と過ごした中学時代を思い出した。

借金まみれでめったに帰らないばかりかロクに生活費も渡さない大悟の父。

たびたび万引きや盗みを犯して生活費を稼いでいた大悟に将も加担していた。

それは、生き抜くため、というのもあったが、ワクワクするようなスリルに満ちた日々だった……。

「あれだけで、暮らせるわけないだろ」

目の前の大悟は、あは、と咳き込むように小さく笑った。

将もそれだけで暮らしているとは思わなかった。

自分と同様に、なんだかんだいって親から金をせびっているのだとばかり思っていた。

「……最初の客は、カオリさんに紹介してもらったんだ」

カオリというのは、将も知っている元レディースの投資家女性だ。

将はこの『カオリさん』にとても気に入られて、一時、付き合っていた。将に株式投資を教えたのも彼女だ。

「最初は、金持ちの主婦とかが客だったんだけど、そのうち男からも犯られるようになってさ。ＩＴ長者ってやつ？」

そういう趣味の男がいるということは認識していたが、実際にそんなに身近にいたとは……。

「やつら、金はいっぱい呉れたけどよ。アレやられるとたまんないぜ。痛いし、尻から血が出るし。おかげでウンコが出せないから、ゲリと便秘を繰り返すようになるしヨォ……」

大悟は、淡々と、想像するのすら恐ろしいようなことを告白する。

思わず無言で身震いする将に

「育ちのいいお前とは別世界だから、言えなかったんだけどさ……」

と大悟はソファーに寄りかかって顔を仰向けた。

二人が『男』になったのは中１の終わりだった。

それから、鑑別所に入れられるまでのおよそ２年間、大悟は体を売ることによって主な生計を立てていたというのだ。

将は、本当に何といって声をかけていいかわからなかった。

空になったビール缶を弄びながら、喉がどうしようもなく渇いて、声帯が張り付いたように声がでない。

立ち上がって、水なり、ビールのお代わりなり持ってこなくては、

とそればかりを思う。

だけど、動作が大げさになってしまう松葉杖をとても不便だと、今実感する。

動けない将と、天井をあおぐ大悟に、沈黙がヘドロのように積もったまま時間だけが経過していく。

女性が甲高い声で不満をぶちまけるコントとそれに対する観客の笑い声がだけが部屋に響いた。

「まあ、そんな感じでさ。……だから、俺たちとっても似てるんだ」

しばらく天井を仰いでいた大悟は、顔を静かに将のほうに向けた。

「瑞樹ちゃんのこと、汚いとか、思わないぜ。あのコが悪いんじゃないんだ」

まっすぐな瞳だ。真っ黒なのに、澄んでいるような印象の瞳。

「ただ、生んだ親がマズかっただけなんだ……」

将は、再び罪の意識が腹の底でむくむくと増殖し、それが心をちくちくと攻め始めるのを感じていた。

恵まれない家庭に生まれたゆえに、家を飛び出すしかなかった瑞樹の体を発散対象にしたまぎれもない事実。

しかし、大悟は、罪の意識にさいなまれる将にまったく気付かないのか、

「お前とキョーダイ?になっちまったけどサ」

といたずらっぽい顔になって、軽く将の肩を叩いた。

「そのうち目途がついたらさ、二人で、出て行くから。そんでやり直すんだ」

希望を口にする大悟は、すがすがしい顔だった。

その顔に癒されて将は、かろうじて、頑張れよというエールを発することができた。

そして、空になったビールを、ようやくどうにかしようと

「ビールお代わりいらない?」と気を利かせた。

このビールはもともと将がここに買っておいたストックだ。

もう1本飲みたいのを、大悟は遠慮しているかもしれない、と思い至ったのだ。

案の定、大悟は「いい?」と言いながら立ち上がると将の分と2本持ってきた。

冷えた缶ビールの感触が、まずは手に心地よい。

「だけどさ……」

大悟は缶のリップに指をかけると、少し浮かない顔になった。

「将、おまえさ、ヤクとかやってないだろ」

「やるわけねーだろ」

将は、なんでいきなり大悟がそんなことを言うのかわからなかった。

ケンカに女、盗み、恐喝、偽造など、かなりの非行に手を染めたといえる将だが、

やらないと決めていたのが『薬＝ドラッグ』だった。

やらないと決めていたというより、好奇心で試した合法（脱法）ドラッグの類が、

ことごとく体にあわなかったので敬遠していたといったほうが正しい。

それは大悟も知っていることだ。

「そうだよな。そうに決まってるよな」

大悟は頷いた。

「ていうのがさ。瑞樹ちゃんの腕にさ……」

大悟は瑞樹の腕に複数の注射痕を見つけてしまったというのだ。

将は、大悟の告白のときほどではないが、再び驚いた。

一緒にいる時、瑞樹が覚醒剤をやっているなんて、見たこともなかった。

そのとき、将の頭に濃いラテン顔が浮かんだ。前原茂樹。

……前原かもしれない。覚醒剤所持で捕まった彼のもとに身を寄せていた瑞樹だ。

将は、そのままを大悟に伝えた。

「そっかー。まあ、オレのほうで、絶対やめさせるように、気をつけるけどさ」

大悟は、ため息をつくと、冷えたビールをぐいとあおった。

「ところで、将、お前いったいどこに泊まってんの？

瑞樹ちゃんに気を遣ってるんだろうけど、俺も入れて3人だったら問題ないだろ？帰ってくれば」

大悟は、人のいい笑顔で、将に同居しようと誘った。まったくわだかまりなどない顔だ。

「いや、邪魔だろ」

将も、ようやく笑い顔を出すことができた。

「そんなことないって。部屋もあるんだし、戻ってきたらいいのに。

なんてオレが言うのも変だけどな。お前の部屋なんだし」

と大悟は頭を掻いて、快活に笑った。その笑顔につられてようやく、将は自分のことを話す事ができた。

「ん……実は、アキラと棲んでる、んだ」

「ああー、あの萩のセンセイと！……そうか。よかった、よかったな」

大悟は自分のことのように喜んで将の肩をばんばん叩いた。

その振動に将はやっと心から安心できた。

この週末、聡が出張で留守なので、今日だけ戻ってきた旨を大悟に説明する。

そのとき、自分が今日一日、聡にメールも送ってないことに気付いて、携帯を取り出した。

たぶん気付かなかっただけで着信があるはずだ……そう思った将だが、メールは空だった。

とりあえず、

『聡、出張はどう？　俺のほうは部屋に戻ったら、大悟がこっちに来てた。

瑞樹と付き合っているらしい。落ち着いたら電話くれ』

と打っておいた。

そのまま、遅くまで大悟とまったりと酒を飲みながら語らっていたので、気付かなかったが……。

その日も翌日も、聡からはメールも電話も来なかった。

その異変に将が気付くのは、日曜日も夕方になってだった。

１２０◆１０２～１１９話のあらすじ

視界ゼロの吹雪とガスの中で出会った将と聡。

なんとか避難小屋にたどりついた二人は、抱き合って暖をとる。

落ち着いた聡は、瑞樹がお腹の子供は将の子だと告げたことを将に伝える（１０２話）

もちろんそれは瑞樹のウソだった。

将は「自分を信じてほしい、絶対に聡を裏切るようなことはしない」と誓う。

熱を出した聡に、将は自分のスキーウェアを貸す。

やがて吹雪がやみ、月明かりと星々の世界の中、二人は口づけをした（１０３話）

夜明けの寒さに耐えかねて、少し明るくなったとたんに二人は救助を待たずに下山することにした。

急斜面に転びながらも徐々にそのスピード感が楽しくなる将。しかし一番最後の斜面でアイスバーンに足をとられ、骨折してしまう（１０４話）

入院した将に、看護士の山口や、井口らが訪ねてくる。かんじんの聡はあれから風邪を引いてしまい見舞いに来ない。待ちわびる将のもとに瑞樹が（１０５話）

瑞樹は、将に中絶費用の金を貸して欲しいという。断る将だったが、泣き出す瑞樹を見て、将の中で罪悪感が芽生える。さらに瑞樹は将に中絶の書類にサインをしてほしいと乞う（１０６話）

お腹の子は、カンベツに入っている前原か、母親の再婚相手・つまり義理の父だと瑞樹は告白した。

家庭に事情があって帰れない瑞樹の体を弄んだ罪の意識にさいなまれた将は、

入院中、自分のマンションを使ったらいい、と瑞樹に鍵を渡す（１０７話）

将の病室にやっと聡が現れる。

逢えなかった時間を取り戻すように、将は聡に甘える。

そして瑞樹についてのことを話そうとする（１０８話）

瑞樹のことを将から聞いた聡だが、今までの彼女の言動から、すぐには信じられない。

それに本当だとしても、将が退院したら彼女の行き場は……？と

聡に問われて将は、聡に同棲を提案する。

聡はとりあえず、事の真偽を確かめるべく、瑞樹の家庭訪問をすることを決める（１０９話）

家庭訪問には心配した将もついてくる。瑞樹の父は案の定、だらしなく好色な男だった。

それに加えて、聡と将は瑞樹の部屋に手錠も見つけてしまう。

瑞樹を人道的に家庭に帰すわけにはいかなくなった聡は将との暫定的な同棲を決める（１１０話）

将が退院し、いよいよ二人の同棲が始まった。とはいっても松葉杖の将なので行動は限られる。

しかし、将はうっかり、前に瑞樹と住んでいたことを口にしてしまう。

嫉妬にかられて夜、聡は将に対して積極的にふるまう（１１１~１１２話）

昨夜の聡のふるまいに動転する将は聡の過去が気になる。

一方、そんな行為をした聡だが、心は次第に純化していき、

「将を幸せにしたい。将の幸せと自分の幸せとどちらかしか取れないときは、将の幸せを取ろう」

と決意していた（１１３～１１４話）

月曜日になり、将はひさしぶりに登校する。

帰りに寄った弁当屋に思わず自分と聡が同棲していることをバらしてしまう。

一方、聡は残業中に、博史の父・慎一から、妻の薫が倒れたという電話を受ける（１１５話）

迷いつつも病院へ行った聡。薫から「カナダの紅葉を一緒に見に行きましょうね」と誘われる。

おそらく薫は１０月の紅葉まで生きられないだろう、そして博史と別れる自分は伴えない……という

申し訳なさから出そうになる涙を聡は必死で堪える（１１６話）

耐えた分、将の前で嗚咽する聡。将は聡の苦しみは自分のせいだと自覚し謝る。

将を選んだのは自分だという聡を将は抱きしめる。

……同棲最初の週は無事に過ぎていった。しかし聡は突然週末に出張を命じられる（１１７話）

聡の出張中、将はマンションに戻ってみた。すると、ドアから出てきたのは、なんと大悟。

大悟は親類宅を飛び出てきて、将を頼ってきたのだという。

そしてもともとここにいた瑞樹と一緒に棲んでいるのだという。

瑞樹が大悟にふさわしくないと思った将は、大悟にそれとなく瑞樹のことを伝えようとするが、

そこで将の知らなかった大悟の過去を聞いてしまう（１１８～１１９話）

１２１◆驚天動地ＨＲ

「おっかしーなぁ……」

ついに将は声に出してつぶやいた。そばにいた大悟がそれを聞いて

「どうした」

と振り返った。

「……うん」

そのくせ将は、ろくに返事をせずに携帯をいじくっている。

もう、日曜日も夕方になりつつあるのに、聡から一度も連絡がないのだ。

将は何度かメールを送っている。

『聡、何時ごろ着くか連絡して。それにあわせて帰るから』というメールの返事もない。

メールだけでなく、昼過ぎから何度か電話もしている。

『電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため……』のメッセージを今日何回聞いただろうか。

大悟の問いに答えず電話をして、また同じメッセージを聞いた将は、口をとがらせた。

「アキラと連絡がとれない。電波がずっと届かない」

「地下とかにいるんじゃないの？」

大悟は言った。それは将も考えた。地下にいるかもしれないし、田舎すぎて電波が届かないのかもしれない。

もしかしたら仕事中だからと電源を切っているのかもしれない。

だけど、おかしい。

昨日、朝からもう３０時間も電話もメールもないなんてありえない。

「俺さ、いったんアキラの部屋に帰ってみるわ」

「夕飯食っていかないの？」

今日は日曜なので、家政婦が早めに来てつくった夕食がテーブルの上にすでにセットされている。

「うん。……いいや。アキラ、連絡しないでいきなり帰ってくるかもしれないし」

聡の性格からは、あまり考えられない行動なのだが……。

「じゃあさ、持っていけよ。瑞樹ちゃん、タッパー出して」

大悟は気を利かせた。瑞樹がキッチンの棚からタッパーを出す。

そんなふうに素直に動く瑞樹を見て、将は少し安堵する。

大悟の気持ちはともかく、もしかして……瑞樹が何か企んでいるのでは、と将はまだ少し警戒していたのだ。

「センセイだって、腹すかして帰ってきて自分でつくるんじゃ大変だろ」

大悟は瑞樹と並んでキッチンに立つと箸で、タッパーに今日のおかずのロールキャベツを詰めた。

瑞樹は、きんぴらを小さいタッパーに詰めながら

「これぐらいでいいかな」と大悟に聞いている。

ショートカットになったせいもあるが、瑞樹の印象はとても変わったように思う。

しかも、玄関を出るときに、瑞樹はうつむきながらも

「将、ごめんね。あと、ありがとう」

と言ったのだ……。

昨日、瑞樹の都合の悪いことを大悟に伝えようとしてしまった将は、少しおもはゆいような思いで、

「うん……」

としか答えられなかった。

夕食を詰めたタッパーを入れたリュックを背負って、将はタクシーで自宅マンションを後にした。

コーポの前に立った将は、がっかりした。

もう薄暗いのに、聡の部屋の窓は暗いままだったからだ。

聡はまだ帰っていないらしい。

タクシーの中でも携帯をチェックしたのだが、あいかわらずメールボックスは沈黙したままだ。

『聡、今日遅くなる？　夕食、大悟に分けてもらったよ。連絡くれ』

とメールを打った。

蛍光灯がチカチカと点滅をはじめた階段を、将は松葉杖で一段一段登ると、鍵をあけて聡の部屋に入った。

……その様子を夕闇にまぎれて下から見ている男がいた。原田博史である。

博史は、将が聡の部屋に鍵をあけて入り、電灯がつくところまで見届けると、きびすを返した。

聡のいない部屋は、ひえびえとして、所在無くて、テレビをつけても雑音にしかならない。

何をやっても手につかないので、片足立ちで、部屋の中に干してあった洗濯物を適当に畳む。

一人で勝手に風呂に入ってみるが、メールが気になって、カラスの行水になってしまった。

真裸で部屋に出てきて携帯を取り上げる。しかし携帯はうんともすんとも言わない。

裸のまま、将はフローリングに腰を下ろした。

――今、帰ってきたら、アキラのやつどんな顔するかな。

ちょっといたずらッ気が顔を出す。そんな将は、まだ、単に聡が帰ってくるのが遅いだけだ、と信じている。

なぜなら、明日は月曜日、学校だってあるから。帰ってこないわけがない……。

しかし、くしゃみが出て寝巻きを着ても……、法律番組が終わっても、聡が好きだと言っていたウルルンが終わっても聡は帰ってこない。

途中、空腹に耐えかねて、タッパーにいれてもらったロールキャベツを1つだけ食べる。

最初は15分に一度だったメールチェックは、しまいには5分にな

る始末だった。

電話はＣＭになるたびにかけている。が、あいかわらず電波が届かない。

待ち受けは聡の笑顔にしているが、メールチェックだけでなく、その顔自体がだんだん懐かしく恋しくなってきた。

将は、行き先を細かく聞いておけばよかった、とホゾを噛んだ。

どうせ１泊だから、と宿泊先の住所も電話番号も聞いてないのだ。

情熱大陸も世界遺産も終わって日付が変わっても聡は戻ってこなかった。

将は、携帯をチェックしながらまんじりともせずに、夜を明かした……。

結局、聡は帰ってこなかった。

将は、最大級の不安を抱えながら、タクシーで少し早めに学校へ向かった。

もしかして、出張先から直接学校に来てるかも、という一縷の望みがあったから。

勇気を出して職員室にも顔を出してみた。

だが、そこに聡の姿を見つけることはできなかった。

ガラガラッ！

ＨＲのチャイムが鳴る前に、教室前の引き戸が勢いよく開いた。

立て付けがよくない引き戸をこんな風に開けるにはよほどの力が必要だ。

好きなところでしゃべっていた生徒が、いっせいに前の引き戸に注目したときには、男はズカズカと教壇に上がるところだった。

皆、その場でシーンとなった。

「席に戻れ！」

男は吼えるように生徒たちに命令した。

生徒たちは無言で、席にサワサワと戻った。

松葉杖の将は、自分の席にいて携帯を開け閉めしていた。

メールチェックを兼ねて、待ち受け画面の聡の顔を見て、心配で憂

鬱な気分を紛らわしていたのだが、

さすがに、いきなり教壇に立った男に驚いて顔をあげた。

縦横ともデカい体の上に、短いパンチパーマの小さな頭を乗せた、目付きの悪いジャージ姿の男がそこにいた。

「今日から2年2組の担任になった京極だ！」

「ええーっ！」

クラス中がいっせいにどよめいた。それはあきらかに好意的なものではなかった。

「静かにしろっ！」

京極は出席簿で教卓をバシバシと叩いた。

「あの！」

果敢にも、手をあげたのは丸刈りの兵藤だった。

彼は席替えで教室の真ん中あたり、前から3列目の席に移っていた。

「なんだ」

京極はにらみつけながらも兵藤に発言を許した。

「古城先生は、どうしたんでしょうか。なんで急に担任が変わったんですか。説明してください！」

皆の訊きたいことを兵藤が代弁した。皆、固唾を飲んで、答えを待った。

「知らんっ！」

京極は一言で突っぱねた。

「でも……」

「つべこべ言うな！学校の決定だ！」

京極は、なおも食い下がろうとする兵藤を一蹴した。

「いっとくが、オレは甘やかさないからな。お前ら野獣どもを人間に仕立てるのがオレの仕事だ。

オレの仕事を邪魔するやつは容赦しない！いいなっ！」

京極は強圧的にＨＲを終えると、入ってきたときと同じように引き戸を乱暴に閉めて去った。

はめ込まれたガラスがビーンと振動しているようだった。

生徒たちは再びどよめいた。

「ねえ、なんでなんで？」

「アキラ先生は？どこいっちゃったの？」

チャミとカリナが甲高い声を立てるとそれに呼応するように

「おい、将、お前なんか知ってんのか？」

と黒髪になった井口が将の席に飛んでいくように、寄っていった。

そのあとにカイトやユータが続き、兵藤や松岡やその他の生徒もそのようすを伺っていた。

「知らない……んだ。俺も」

将は立ち上がると松葉杖をつくのももどかしく教室を出て行った。

122◆ヤクザ教師

走りたいのに、こんなときに松葉杖はもどかしい。

将はできる限り、松葉杖を大きく傾けながら職員室へと急いだ。

他の生徒も将に付いてきている。

「タミー！」

タミーとは多美先生のことだ……将は職員室の引き戸を開けると、大声で読んだ。

その大声に、京極が振り返って睨みつけた。先週まで聡が座っていた席に座っている。

その蛇のような目付きに、将の後ろで様子を伺っていた生徒は、ぴゅっと引っ込んだ。

お茶を入れていた多美先生は、京極に「まあまあ」ととりなして、将のほうへ歩いてきた。

「なんだ、鷹枝」

将の言いたいことがわかっているのか、後ろ手で引き戸を閉めながら廊下に出る。

ターミネーターのような容貌の学年主任・多美先生は、京極に負けないコワモテで、将もたびたび彼に叱られていた。

だが、その怖い顔の中にある目は温かいのが京極と違った。

比べると京極はアナコンダのように冷たく、残忍な目をしているように思えた。

「何だよ、あの極道は？　アキラ……センセイはどうしたんだよ」

「コラ、口の利き方に気をつけなさい」

多美先生はいちおう将の乱暴なタメ口を静かに注意しながらも、その瞳は将ら生徒に同情していた。

「先生もよくわからないんだよ。今朝の職員会議でいきなり配置転換が発表になって……。みんな驚いているんだよ」

多美先生はため息交じりだった。

「なんでっ……」

将は前のめりになって多美先生を問い詰めた。

「わからないんだ……。古城先生の指導は高い評価だったはずなのに……」

多美先生は首を横にふって目を伏せた。

「あの……、それでセンセイはどこに……？」

頭がまっ白になった将に変わって、横から兵藤が割り込んで質問し

た。

「山梨の……新しい施設の副校長に任命されたんだが……」

「副校長ー？」

将と兵藤の声が思わず揃った。

「しかし、あそこはまだ電話もなければ、建物も出来てないはずなんだが……」

多美先生も本当に困惑して、首をひねっている。

そのとき、１時限目開始の予鈴チャイムが鳴り、職員室入り口の引き戸をガラッとあけて京極が現れた。

「お前ら、さっさと教室に戻らんかっ！」

多美先生がいるのをものともせず、将らに怒鳴りつける。

多美先生の優しいテノールの声と違って、男にしては耳に響く甲高い声だ。

同時に小さな雷鳴のような音が下から鼓膜をふるわせた。京極は竹刀を持っていて、それを廊下にたたきつけたのだ。

そこにいた生徒は皆、逃げだすように走って教室へ向かったが、将は松葉杖のまま、立ち尽くして彼を睨みつけた。

「なんだぁ？その目は」

京極は、因縁をつけるヤクザのように将にむかって肩をいからせて寄ってきた。

もちろん、睨みつけるのを将が、やめるはずがない。

「京極先生、けが人ですから……」

と多美先生があわてて、とりなそうとする。

「よぉ……。鷹枝将」

京極は、将のことをフルネームで呼んだ。

将の瞼がピクリと動き、そのまま少し目を細める……そうすることで睨みつける目がさらに鋭くなった。

「根性ある目してんじゃねーか、え?」

京極は、竹刀を持ち上げると、その先で将の肩を小突いた。

「京極先生、相手は子供ですよ!」

フッと鼻で笑い、京極は一瞬多美先生を振り返った。

「これが子供の目ですか? ガタイも立派だ……彼は立派に大人ですよ。なぁ鷹枝将」

それだけ言うとすぐに、京極は将のほうに向き直った。

「いいか……。オレは政治家の息子だろうと、けが人だろうと容赦はしねえ。それがわかったらとっとと教室に戻れ！」

多美先生のほうが、あわてて京極を睨み続ける将に

「早く教室に行きなさい！早く」

と肩を抱きかかえるようにして促した。

教室に入る将のすぐ後ろに京極が立っていた。

「早く入れ」

彼は、将の肩を小突いた。松葉杖をつこうとしていた将はバランスを崩して転びそうになった。

片方の松葉杖がガターンと音を立てて倒れた。

将は、一番前の席に手をついて、危うく転倒を免れた。

一番前の席になった真田由紀子が、倒れた松葉杖を拾って将に渡す。

「サンキュ」

由紀子に礼を言った将に、京極は後ろから

「無駄口を叩かないで、早く席に着け」
とどやす。
「てめえが後ろから押したんだろ！」
将は向き直った。
「押されたくなかったらとっとと席につけ」
「なんだとぉ……」
思わず将は、足がギプスなのも忘れて拳を構えた。
「マイナス２０００点」
京極は、将に向かって斜に構えて、冷酷に言い放った。
「教師への暴力はマイナス２０００点。もっともお前に２０００もの持ちポイントが残ってるのかな。鷹枝将」
「なにぃ」
「退学になりたかったら、早く殴れ」
将は拳を震わせながら京極を睨みつけた。
「ほら、どうした」
「将！やめろってば！」

ギラギラとした目で京極を睨みつける将を、後ろから井口が飛び出てきて、辛くも引き止めた。

井口は将に肩を貸して、席へと連れて行った。振り返った将は京極を鋭い目で追い続けた。

京極は、さっさと教壇にあがると、

「今日は、教科書１０９ページ！」

と叫んだ。それにまた生徒がざわめく。

「なんだ、早く出せっ！」

出せといっても、出せないのだ……なぜなら、聡の授業のときは、教科書を使わなかったから。

恐ろしくて誰もそれを言いだせない中、勇気ある兵藤がまた手をあげた。

「なんだ、またお前か。丸刈り。言ってみろ」

クラス中が水を打ったように静まり返って、京極と兵藤の動向を見守った。

「古城先生は……、教科書を使ってませんでした」

「なんだと?……じゃあ、どうやって授業をやってたんだ」

京極が、竹刀片手に兵藤の席に近寄っていく。

その途中の生徒は、上体を仰け反らすようにして、道をあける。

「こ、これで……」

近寄ってきた京極に、さすがに兵藤の声もうわずっている。

聡が手作りしたプリントを出した。映画やカラオケからの抜粋表現である。

京極は、兵藤の手からそれを奪うように取ると、綴じられた中身をパラパラ読みながら教壇へ戻った。

教壇にあがるなり、

「くだらん！」

とそのプリントの束をバリっと2つに破いた。

「ああっ！」

思わず兵藤が声を上げた。2つに破いたものをさらに重ねて、もう一度破く。

厚みがあるはずなのに、ものともせずにビリビリに破く。

兵藤のプリントはあっというまに修復不能なほどにビリビリに破かれてしまった。

「チョー、ヒドーイ！」

「何するんですか！」

生徒から抗議の声があがる。兵藤は、といったら口をあけたまま呆然としている。

「おい！人のもの勝手に破っていいのかよ！」

将は耐えかねて片足で立ち上がった。

「そうだー！」「そうだー！」

井口やカイト、ユウタの援護に続いて、クラス中から抗議の声があがった。

「うるさいっ！」

京極が教卓をビシッと竹刀で叩いた。

それで沸いていたクラスはシーンとなった。将一人が立ったまま、京極を睨んでいた。

「ということは……お前ら、全員教科書を持たないんだな……なっとらんっ！」

教壇を降りた京極は、一番前の席……そこはちょうど真田由紀子の机だった……を竹刀でもう一発ビシッと叩いた。

真田由紀子はのけぞって、両手で顔を覆った。

「罰として、この時間、全員机の上で正座！」

ええー、と再びクラス中から抗議の声があがる。

それに答えるように、京極は、一番前の生徒の机を順繰りにバシバシと叩いていった。

「文句があるやつは、マイナス１００ポイントだ！　授業妨害だから当然だ！」

それには全員シーンとした。

「わかったらさっさと正座ッ！」

皆しぶしぶ、自分の机の上にあがり、正座を始めた。

そんな中、ギプスで正座できない将と京極の目があった。

というより、将はさっきからずっと京極を見据えていたのだ。もちろん仮に正座ができたとしても絶対する気はない。

「鷹枝。お前は正座ができないんだな……。そしたらこっちへこい」

将は黙ったまま、動かなかった。

すると、京極は正座する生徒の間をズカズカと歩いてきて、

「こっちへ来るんだよ」

と引っ張った。もう将の足はかなり回復していて、今週末に松葉杖からステッキに変わる。それでも、むちゃくちゃだ。

将はギプスの足をひきずるように前に連れてこられた。

足が踏ん張れたら、そう無様に引っ張られないのだが……。

京極は教卓脇の椅子に将を座らせると

「おれが、このふざけたプリントを集めるから、お前全員の分を破れ」

何をいうのか、と将は京極を見上げた。

将は、そのプリントをつくるのに聡がとても苦労していたのを知っている。

毎日、視聴覚室でＤＶＤをＭＤにダビングしてきて、必要な部分を英文と聞こえるとおりの振り仮名などに直してパソコンに打つのを家で遅くまでやっていたからだ。

もちろん、将との同棲が始まってからも。

『将、これさ、〇〇〇に聞こえる？それとも〇△〇に聞こえる？』などと、将もたびたび聞かれたものだ……。

京極は将を一瞬睥睨すると、生徒たちの机の中から次々とプリントを出し始めた。

プリント以外にも私物が入っていた生徒には、まるでヤクザが恫喝

するように、怒鳴りつけた。

怒鳴られて泣き出す女子もいた。そして15分以上たつと、皆揃って正座がつらそうになってきた。

ようやく、全員分のプリントを集めてきた京極は、将に

「さあ、破れ」

と命じた。将は黙って座っていた。

「破るんだよッ、ほら」

黙って座る将の肩を、京極はまた小突き始めた。

しかし将はどんなに小突かれて体が揺れようとも、返事をしなかった。

「コラ、お前逆らう気か、アア？」

唾が雨のように将の顔に降り注いで、将は京極のほうに鋭くした目を突き刺した。

「コイツ……」

京極は憎憎しげに将を睨み返した。

クラス中が、正座の苦しみの中から将の動向を見つめていた。

「減点されていいんだな」

「ハイ」

将はあっさりと返事すると、集められたプリントを持って、立ち上がった。

そして、ギプスの足を引きずりながら、教室を出た。

京極は追わなかった。そしてわざとクラス全員に聞こえるように

「授業妨害でマイナス１００。授業放棄でマイナス１００。計２００マイナス」

と大声で言った。

将は、手すりを頼りながら、なんとか階段を降り、職員室にやってきた。しかし、頼みの多美先生はいない。

将は、がっくりと肩を落として校門を出るべく、靴を履き替えた。

もう、学校にいる気がしなかった。ヤクザ教師だけがその理由ではない。……聡がいない学校なんて。

朝の冷えた空気で、将はマフラーもダッフルも教室に置きっぱなしだったことを思い出した。

松葉杖はいいとして、カバンも全部だ。

携帯はポケットに入っているが、財布がカバンの中だからタクシーにも乗れない。

将は、そのまま空を見上げた。

――アキラ、どこにいるんだよ。いったいどうしちゃったんだよ！

１２３◆置き去り

将は、仕方なく保健室へ向かった。

年配の保健教師・三田先生も聡の配置転換の理由については何も聞かされていないとのことだ。

ただ、１つわかったのは、あの極道教師・京極のほうこそ、もともとは新しい学校の校長を務めるはずだったということだ。

「……なんで、いきなり、古城先生と彼が配置転換になったのかしら。本当にわからないのよ」

サボリの生徒には、いつもイヤミの１つも言う三田先生も、今日の将には同情的だ。

「山梨の学校って、まだ出来てないって聞いたけど……」

将の問いに、三田先生も頷いた。

「ええ。やっと校舎ができたかどうかって……。でも携帯が通じない場所らしくて」

三田先生や多美先生も聡に連絡をとろうとしたが、通じなかったらしい。

「山梨の学校って、詳しい住所わかる？」

将は、とにかく聡の顔が見たかった。聡の無事を確認したかった。

が、三田は首を振った。

「誰に聞けばわかるんだよ！」

「校長先生や教頭先生だったら……」

将はすぐさま立ち上がった。

鷹枝くん！という三田の叫び声を背中に受けて、将は松葉杖がないのもものともせず、ギプスの足をひきずって保健室をあとにした。

他の部屋は粗末な引き戸なのに、校長室のドアだけ重厚な飴色の木で出来た扉になっている。

将は、その扉をノックもせずにいきなり開けた。

「あっ……！」

将が息を飲んだのは、そこにいた一同が一斉に振り返ったからではない。

将の視線は、校長、教頭と共にいた、一人の男に集中していた。

それは、将も知っている男だった。将は固唾を飲んだ。

◇　◇　◇

土曜日。聡は中央本線のとある駅で降りて、少し買い物をすると、

タクシーに乗った。

聡は、行き先を告げる代わりに、教頭からもらった紙を運転手に見せた。

中年の、ワイシャツにチョッキを重ね着した運転手は

「へえ……」

と口をはんびらきにしたまま、紙と聡の顔をかわるがわるに見た。

聡は少し不安になったが、行くしかない。車は出発した。

甲府盆地はよく晴れて、山々の上に濃い色の青空を浮かべていたが、そこかしこにある葉を落とした葡萄棚がどことなくうらさびしい雰囲気だった。

タクシーは平坦だった盆地から、山へと登り始めた。

「お客さん、あんなところに、何しにいくの?」

運転手がミラー越しに聡の顔を見ながら言った。

「あ、ハイ。新しくつくる学校の視察に……」

運転手の『あんなところ』というのが気になった聡だが、いちおう自分の任務を答える。

「あ〜、あんなところに学校が出来るの!」

『あんなところ』ってどんなところ?聡はとても不安になった。

それを裏付けるように最初広かった道は、まもなく離合するときにいちいち徐行しなくてはならないほどになった。

もっとも離合する車も数えるほどなのだが……。

しかし聡の不安感を増したのは道の狭さよりむしろ、あたりの暗さだった。

高い杉の木だかに覆われ、正午すぎだというのに道は夕暮れのように暗い。

最初はところどころに固まるようにあった民家も、見かけなくなった。

30分近く走ったところで、道は未舗装道路になった。

道路を両側も杉から原生林になっている。

ガタガタと揺れる車の窓の外にはもうもうと砂埃がたつのが見える。

砂埃に暗い原生林から時折漏れる陽の光がオーロラのような筋をつくる。

「もうすぐですからね。辛抱してくださいよ」

運転手が声をかける。

最後の民家を見てどれぐらい経つだろうか。

聡はこきざみな車の揺れで、体中の柔らかいところがブルブルと揺れるのを感じた。

外からの震えに、掻き立てられるように聡の不安は増していった。

「ここです。お客さん」

未舗装道路を5分も走って、ようやく目的地にたどりついた。

そこには、森を切り開いたような空間があり、そこに真新しい洒落た山荘風の平屋が3軒ほど建っていた。

わりときれいに見えたので聡はホッとした。

「へえ。こんなところに、こんなのが出来てたなんてねえ」

タクシーの運転手も聡と一緒に降りて、興味深そうにその建物を眺めた。

聡は、運転手に料金を払うと領収書をもらった。運転手は

「で、いつ、迎えに来ましょうか?」

と気を利かせた。聡はここで気付くべきだった。

迎えに来てもらわないと帰れない場所だということに。

「あ……今日はここに泊まらないといけないので……。明日電話し

ます」

「わかりました。じゃ、ここに連絡してください」

運転手はにこやかに名刺を取り出して聡に渡すと、一礼して車に乗り込んだ。

そして砂埃を立てて発車すると、元来た道を行ってしまった。

タクシーが見えなくなると、聡はため息をついた。その自分のため息が異様に大きく響く気がする。

ヒソ、とも音のしない静寂に聡は包まれて、聡は身震いした。

が、さっそく仕事に取り掛かることにした。

預かっていた鍵をバッグのポケットから取り出そうとして、携帯に気付く。

仕事の前に、将に『着いた』と一言メールしておこう、と携帯を取り出す。

そこで聡は、ここが圏外であることに気づいた。

しかし、そのとき聡は、

――そりゃそうよね。こんなところだもん。電波が来るわけないか。

と、まだ事を軽く捉えていた。

聡に与えられた任務は、

『この学校の居心地のチェック』だった。

教頭によると、こうだ。

『全寮制の学校の寮や教室などの使い勝手を古城先生の感覚で評価してください。

いちおう生活できるようにはなってますが、足りないところや改善点を挙げていただきたいのです』

とりあえず3つの建物は、寮と教室、武道場らしい。

聡はまず寮に入った。1番大きな建物だ。がらん、とした中に、新しい木の香りだけがかんばしい。

1室だけが泊まれるようにしつらえてある……そこが今夜、聡の寝る場所らしい。

聡はそこに荷物を置くと、食堂に入った。昼食にするつもりなのだ。

もう1時すぎている。

とりあえず今日の昼食には、途中の駅で旨そうな釜飯を買ってきて

ある。

食事はすべて自炊だと聞いている。

が、現地に何が揃っているかわからなかったので、何があるかを見てから決めよう、足りなかったらまた買い足せばいい、とたいしたものは買っていない。

食堂はどうやら、生徒や教師一同で自炊するしくみらしく、調理スペースとダイニングが開放的な感じになっている。

木の色が明るく、窓が広く取られて、明るい雰囲気なのは悪くない。しかし、天井が高い分、外と変わらないほど寒い。

調理スペースには、すでに誰かが使ったのか、ビニールの中に捨てられたゴミがかすかな腐臭を放っていた。

が、生ゴミはまったくなく、カップ麺やコンビニ弁当のプラスチックがその大半だった。

見ると炊事場の片隅に段ボール箱に入ったカップ麺が積み上げられている。缶詰、そしてサプリメント。

冷蔵庫を開けると、壮観なほどに並べられたビールに栄養ドリンク。いちおうウーロン茶などもあることはある。

冷蔵庫が、生徒と教師共用なのはいけない、と聡は思い、気付いたこととして書き留めた。

生ものがまったくないところを見ると、前ここにいたのは男性らしい。工事関係者だろうか、と聡は想像した。

炊飯器、鍋など炊事用具は一通り揃っているがあまり使われた形跡はない。

温かいお茶が飲みたかった聡は、コートのままヤカンに水を入れてお湯を沸かすと、暖房のスイッチを探した。

それはすぐに見つかったが、なかなか効かない。

聡は『エアコンのほかに冬場はストーブが必要』と書き加えた。

とりあえず、昼食を食べて落ち着いた聡は、コートを脱ぐことなく、教室をチェックした。

こちらは椅子や机も入っていなくてガランとしている。

こちらも、新しい木の香りがして、荒江高校と比べると遥かによいつくりであったが何せ寒い。

暖房を入れても効きが悪いのは寮と同じだった。

それにしても、電線もないのに、こんなところに電気が通ってるなんて……と思った聡は外に出て納得した。自家発電装置があったのである。

職員室のほうは、とりあえず机と椅子は入っていたが、どことなくガランとしているのは同じだった。

事務用机椅子セットの１つに腰掛けてみる。

建物は新しいが、緑がかったグレーの事務用机と椅子はうす汚れている。中古品を購入したらしかった。

座ったままあたりを見回した聡は、そういえば、まだＯＡ機器が入っていないな、と気付いた。

パソコンもなければ、コピー機もない。電話、ＦＡＸも……。

電話、ＦＡＸ？

聡はハッとして立ち上がった。

そういえば電話！聡はあわてて、電話を求めて寮、校舎をすみずみまで見て回った。

寮も校舎もそんなに広くない……あっという間に一周して、聡は愕然とした。

電話がない！

もう一度携帯を取り出す。

隅に表示されている『圏外』の文字。

そんなばかな。

連絡不能。

電話が通じなければタクシーを呼ぶことさえできない。

そんな場所に、聡は閉じ込められてしまったのだ……。

124◆陳情

「毛利……」

校長室の扉を開けた将は、校長や教頭と共にそこにいた男の名前をつぶやいた……父の秘書官である。

そして瞬時に、今回のことが、この毛利の差し金だということを理解した。

紺のスーツ姿で、眼鏡の奥の毛利の目が冷徹に将を捉えた。

将も負けずに、彼を睨みつけた。

「毛利、どういうことだ」

将はベンツの後部座席からバックミラー越しに運転する毛利を睨みながら問い掛けた。

学校を出て最初の信号待ち。

この日、結局、将は気分が悪いことにして学校を早退したのである。

松葉杖やカバンなどは、毛利が自ら教室から持ってきたので将の手元にある。

「何が、ですか？」

毛利は将の視線など気付かないように、ハンドルを握ったまま前を向いている。

「とぼけるな。お前の差し金だろ。アキラをどこに隠したんだ」

「何のことだか。アキラというのは古城先生のことですか……」

毛利はそしらぬ顔でしらばっくれると、さらに続けた。

「学校の人事のことまで、私が口出しできるわけがないでしょう」

「オレは人事のことなんて一言も言ってないぜ」

一瞬、勝ったと将は思った。

「なんで、オレが人事のことを言ってると思うんだ」

将は毛利をさらに問い詰めた。

しかし毛利は

「わたくしも、今、校長先生に担任の交代のことを聞かされておりましたので。てっきりそのことかと思ったんですよ。将さま」

とするりと交わした。将はシートから身を乗り出すと、運転席の毛

利の顔の横に顔を出し

「……絶対お前に決まってる。何を企んでるんだ。オヤジの差し金か」

と、低い声で囁いた。クシがきっちりと入った毛利の髪から、上等の整髪剤の香りがする。将の嫌いな香り。

将には確信があった。

この男は多忙な父に代わって、将の学校の手続きなど家族の雑事を行うことが多い。

高校1年の終わり、将がポイント不足で退学になりそうになったのを、裏工作でとどめたのもこの男だ。

感謝してもいいことをしているわりには、将はこの男が好きになれなかった。

というより、はっきりと嫌いだ。

それはひとえに、すべてを将の気持ちなどを考えずに事務的に行っているから、というのと、

自分のことをどこまで知っているのか、という気味悪さからだった。

冷たい眼鏡の下で感情を一切表に出さないのも、計り知れない不気味さがあった。

「私は何も……。長官が何を」

らちがあかない。将は、これ以上この男に直接訊いても無駄だと思った。

「もういい。ここで降りる」

弁当屋もある商店街の入り口で将は降りた。マンションまであと２００ｍもない。

将は、毛利の運転するベンツが行ってしまうのを確認すると、聡の部屋に戻るべくタクシーを拾った。

しかし……、聡のコーポの前でタクシーを降りた将は、そこに毛利のシルバーのベンツを見つけてしまった。

毛利が静かにベンツから降りてきた。

「何だよ」

「将さま。マンションにお戻りください」

毛利は静かに言った。

「お前には関係ないだろ！」

将は松葉杖をついてコーポの階段へ向かおうとした。その背中に向かって毛利は抑揚のない声で言った。

「お戻りいただかないと、古城先生がもっと困ったことになります」

「何ィ？」

将は足をとめて振り向いた。

「……ですからどうぞ、マンションにお戻りください」

毛利の口調は静かながら、有無を言わせない強いものだった。

この男が『困ったことになる』というのは、この男自ら聡を『困らせる』……苦しめるということで、何をするかわからない不気味さがあった。

将の脳裏に、自分が殺したヤクザの仲間の末路が浮かんだ。

将がヤクザを殺すところを目撃したチンピラである。

港に浮かんだ、ブロック塀を括りつけられた腐乱死体が彼の最期の姿だったという。

将はそれを見たわけではないが……ああなるように『手配』したのも毛利だと将は確信している。

裏の世界ともつながりのある男なのだ。

「……アキラはどこにいるんだよ」

「山梨の新しい学校にいらっしゃいます」

「生きてるんだろうな。ちゃんと無事なんだろうな」

将は目を見開いて、毛利の瞳を見た。

「はい。確かに。ご無事です」

毛利はまっすぐに将の視線を返した。これは嘘ではないらしい。

将はそっぽを向いて小さくため息をついた。

安心と諦めのまじった息は白い色になってあっという間に冬の空気に溶けた。

言うとおりにするしかなさそうだ。

遡ること数日前。

毛利は、官房長官との面会を希望していたある男と、ホテルでアポイントがあった。

議員会館や党本部ではなく、目立たないように、ホテルのラウンジを毛利は指定した。

一流企業の名前が印刷された名刺を出した男は３０代で、身なりもきちんとしていた。

整った顔だが、色男というには、それは穏やかすぎる面構えだった。

しきりに恐縮して挨拶をするあたり、変な恐喝などではなさそうだった。

政治家をやっていると……こと、地位が上になってくると、そういう手合いが実に多いのだ……。

そういうのと一々官房長官自ら会っていたら時間がいくらあっても足りない。

さまざまな面会者の処理も毛利ら秘書官の仕事だった。

男の陳情は以下の様なものだった。

『官房長官の、高校生である長男が、担任教師である自分の婚約者を誘惑して困っている。なんとか引き離してくれないか』

聞いたとたん、馬鹿馬鹿しい話だと毛利は思い、男を睥睨した。

しかし、男は冗談などではなく真剣そうだった。

もちろん、こんな私事は、官房長官の耳にじかに入れることもないだろう。

今のところ、これをネタに金品を強請ったり、スキャンダルを起こして長官の足を引っ張ったりしようとしている手合いではない、と毛利は男を値踏みした。

長男がその担任教師と、男女の仲らしいというのは、毛利もすでに感づいていることだ。

長男はまだ１０代、旺盛な性欲からくる独占心を、恋愛感情と勘違いしているのだろう。

あるいは実母と早くに死に別れているゆえの、マザコン的な感情の嵩まりか。

いずれにしても、距離を置けば、すぐに冷めるだろう。

手っ取り早いのは、どちらかを辞めさせればいい。毛利は瞬時に方策を計算した。

長男がこの学校をえらく気に入っているというのは、年末に一騒動あったので毛利も知っている。

ということは……担任教師のほうをどこかへやればいいのである。

といっても、男女のことなんてハタからどうこうしたところで、どうにもならない。

高校生に女を寝取られるような、この男がふぬけなだけだ。

やることはやりました、と形を見せればあとは知ったこっちゃないさ、と毛利は心の奥底でせせら笑った。

毛利は承諾した旨を、『ご迷惑をおかけしました』と言い添えて、さも申し訳なさそうに返事した。

男が帰ってすぐ毛利は、長男の学校に電話をかけた。小面倒なことはさっさと片付けるに限る。

携帯を握ったまま、残されたまぬけな男の名刺に日付と時間を書き込む。

毛利は面会者の名前すらもまともに覚える気がない。

その場では無意識に名前を繰り返し、別れたとたんに忘れるという習慣が出来ているのだ。

問題があったときは、また名刺を取り出せばいいことだ。

その名刺には原田博史、と印刷してあった……。

１２５◆山の中に独り

電話もない。携帯も通じないところに置き去りにされてしまった。

聡はしばらく愕然として何も考えられなかった。

――明日になったら、歩いて降りればいい。

と自分をなぐさめられるようになるのに随分時間がかかった。

一番近くの民家を思い出す。たしか5分ほど続いた未舗装道路の手前、どれぐらいだっただろうか……？

電卓を出して冷静に計算してみる。駅からここまで車で４０分ぐらいだったはず。

そしてその真ん中ぐらいまでは確実に民家があった。

終わりのほうは、山道や未舗装で速度はゆっくりめだったはず。時速３０キロだったとして、２０分で１０キロ。

１０キロ……つまりどんなに長くても2時間も歩けば絶対に民家がある。

ローヒールで2時間はつらいけど、あくまでも最大だから。

そこまでいかなくても途中で携帯も通じるようになると思うし。

なんとか結論を出して、聡はようやく自分を安心させる方向に仕向

けた。

そして、時間が早く経つように、仕事を再開し、念入りに学校のチェックを始めた。

夜が……長かった。

夕食は買い置きのカップ麺とビールしかない。

炊飯器はあるものの、前いた人はそれを使わずに車で弁当を買いに行っていたようだ。

インスタントの麺だけの夕食はさっさと食べ終わってしまう。

風呂は新しいユニットでまともに使えたが、

シーンとしたなか、湯船につかっていると、

ときおり、野犬なのか

『ワオーン！』

『ウオー！』

といった遠吠えも聞こえてくる。

無防備な裸でいるのがとても危険に思えた。

ゆっくり温まっている場合ではない、と早々に上がり、もう一度、寮の入り口、すべての窓の鍵を確認せずにはいられなかった。

そしてカーテンをしっかりと隙間なく閉める。

――まさか熊とか出ないでしょうね。

そんなことまで考えてしまう。

テレビもざらざらとした砂嵐の中にようやく輪郭が映るようなありさまで、まともに見えるとはいえない。

ＤＶＤの機械はあったが、ソフトはアダルトばかりで、どうやら前にここに泊まっていたのはあきらかに男性のようだった。

しかし、テレビを消してしまうと、恐ろしいほどの静けさが聡を襲う。

恐ろしくて、雑音が入るテレビなのに、付けっぱなしで聡は床に入った。

床もシーツこそ洗ってあるがどこどなくタバコ臭い匂いがして、気持ち悪かった。

聡は、早くこの夜が過ぎて欲しい、とそればかりを願った。

眠くなって気付いたら朝、というのが望ましかったが、恐怖に昂ぶる聡に睡眠はなかなか訪れてくれなかった。

目覚めると、ほの明るかった。いつのまにか眠っていたらしい。

ケモノどもの泣き声もおさまって、静かな朝がやってきていた。

寝不足で、体中にタガがかかったようなだるさを自覚しながら、カーテンをあけた聡は、『あっ』と声をあげた。

音もなく雪が舞い降りていた。大量に……。

突っ掛けを履いて、寮の入り口に出る。

「うそぉ……」

雪は、敷地内に粉砂糖を振りまいたようにうっすらとあたりを雪化粧させていた。

この状態で下り坂をローヒールで歩くのは危険だ、ということは聡にもわかる。

聡はため息をついた。ため息はまっ白になって雪景色の中に溶けていった。

甲府地方の冬に、それほど雪は降らないと聞く。

そのうち止んで、雪も解けるだろう、と聡は窓を眺めたが、いっこうに止む気配はない。

雪の勢いは逆に強くなっていくようだ。

砂嵐のテレビをつけて天気予報をみようとしたが、あいにく日曜日。

午前中はどこも天気予報をやっていない。

結局ＮＨＫで正午前にやる天気予報まで待つはめになった。

天気予報を見て聡は、また途方にくれることになった。

それによると、寒気の影響で今日いっぱい雪は止まないとのこと。

――明日、学校に行かなくちゃいけないのにどうしたらいい？

聡は、しばらく考えて、気温が高いうちに自力で降りることにした。

夜になって凍りついたほうがもっと危ない、と思ったのだ。

幸いビニール傘がホコリをかぶった状態で置いてある。

聡はボストンを持って、傘をさして外に出た。あいかわらずうっすらと雪が積もっている状態は変わらない。

――北海道のニセコアンヌプリの頂上で吹雪にあったときよりははるかに温かいんだから。

そう思って自分にゲキを飛ばす。だが、装備もあのときと段違いに

薄いのだ、というのもわかっている。

滑らないように小またで一歩一歩進む。

普通に歩くときの2倍の時間をかけて慎重に進む。学校の敷地の出口にやってきた。

細い未舗装道路の坂道が続いている。

突然、ざざっと音がして、聡はビクッと震えた。

両側の高く茂った原生林が揺れただけだった。風が少し出てきたらしい。

未舗装道路は深い轍に大きな石がゴロゴロと落ちていていかにも歩きにくそうだ。

それらにも、うっすらと粉砂糖をふるったような白い雪が積もっている。

聡はさっきよりもまして慎重に歩を進めた……つもりだった。

ずるっ。

「キャー！」

粉砂糖のような雪の下は、粘土質の泥になっていて、聡はそれに足をとられて尻餅をついた。

「イタタタ……」

思い切り腰を打った。みるとコートも持っていたボストンも泥だらけになっている。

「あっ！」

手から離れた、開いたままのビニール傘が風にあおられて、聡が座り込んでいる場所から下のほうに飛ばされていく。

それを追おうとして、足首がずきっとした。

「捻挫……？」

転んだときに捻ったのか。傘は聡をあざ笑うかのように、一人で坂の下のほうに行ってしまった。

なすすべもなく傘を見送る聡に雪がふりかかる。

北海道の雪と違って、湿ったボタ雪は、聡の体にくっついたとたんに溶けて染みていく。

聡は、泥だらけで座りこんだまま、泣きそうになるのをなんとかこらえていた。

足は、軽い捻挫のようだったが、結局天気が回復せず、携帯も電話もないという状態で、聡は麓に降りれないまま2日目の夜を迎えた。

皮肉なことに……雪は、転んだ後、聡が寮に戻ってまもなく雨に変わった。

しかし、雪でも雨でもあの坂が危ないのは変わらなかった。

このまま降りれなかったらどうしよう。

そんな恐怖が現実となって聡を襲った。

それに、明日このままだと、無断欠勤になってしまう。

――将、心配してるだろうな。

結局、考えはそこにいく。

聡は、携帯のフォトフォルダを開けた。こんなことをするのは、たぶん携帯を買って初めてじゃないだろうか……。

そこには秋吉台での2ショット写真や、雪の羊蹄山をバックに撮影した悪ガキ4人組などと共に、

同棲を始めた日にふざけて撮影した、ブロマイド状にカッコつけた笑顔の将が居た。

ウインクしているものまである。思わず聡はそれを見て

「バカ……」

と、一人笑った。それを呼び水にして将のさまざまな様子が、次々

に頭の中に蘇る。

その1つ1つが……何気ない日常でも胸を締めつけるような想い出になっている。

そう。

思えば、9月の赴任まもなくから、聡は将を見ていた。

日常の……授業中も、何のそぶりも見せずに授業をしているときも、将がそこにいることに安心していた。

悪ガキ同士、学食に向かう後ろ姿から聞こえる笑い声を聞いていた。

1年生に小テストをやらせている午後の窓から、体育でサッカーボールを追って校庭を走る将を目で追っていた……。

もう将の姿を1日以上見ていない。

聡は、自動的に暗くなってしまう携帯を何度も開けて、将の顔を確認した。

将に会いたい……。

2日目の夜も、よく眠れなかった。

雨は月曜日の朝まで残ったが、９時ごろにようやく止んだ。

聡は、もう降らないというのを見届けると安心して帰り支度を始めた。

足は少々痛いが、歩けないほどではない。

そのとき表にエンジン音がした。

軽トラックが止まった様だ。

「古城さん！いますか！宅急便です！」

配達員が、寮の入り口を叩いた。

「ハーイ！」

聡は、ラッキー！と入り口に出て行った。

この配達員に乗せてもらうか、タクシーを呼んでもらうよう頼めばいいからだ。

「誰もいなかったらどうしようかと思いましたよー」

と配達員は軽口を叩きながら、ずっしり重い書類封筒を聡に渡した。

そしてタクシーを呼んで欲しいという聡の依頼を快く引き受けてくれた。

――よかった。歩いて下に降りないで済む。

聡は、ホッとして、自分宛になっている書類の封を開けた。

――えっ！

聡はその文面に目が貼り付いた。

そこには

『古城聡を南アルプス予備校（仮名）の副校長に任命する』

と書いてあった。

そしてその下に、教頭らしき字の手書きで

『今週は現地で、環境を整える作業と、高校資格取得者用のカリキュラム案の作成作業をしてください。

現地の豊かな自然を取り入れたユニークな案を古城先生に期待しています』

と書いてあった。

社判などとともに、高校資格取得者の傾向等についての分厚い資料も入っている。

うそ。

急な転勤に聡は、目がまわりそうになった。

１２６◆中毒

「じゃあ、将さま。お大事に」

毛利はマンションの玄関で将を降ろすと、本当は具合など悪くないのを知っているくせに、

そういってベンツを運転して行ってしまった。

最後に鋭い目配せをしたので、将は聡のコーポに戻るわけにもいかない。

将はため息をついて、エレベーターに乗った。

携帯をあけて聡の待ち受け画面に表示された時刻を見る。１０時３０分すぎだ。

聡からの連絡はない。

大悟と瑞樹が暮らす中に、お邪魔虫させていただくしかなさそうである。

――まさか、エッチの最中とかじゃないよな。

鍵を取り出した将は一瞬迷った。

だが、なんだか、予感のようなものが、将にチャイムを押させることなく鍵を開けさせた。

玄関に大悟の靴はない。

将は、松葉杖をついて、ずかずかと部屋にあがった。

洗面所のドアを開ける。そこにいてちょうど振り返った瑞樹と目が合った。

瑞樹は、大きな目を転げ落ちそうなほど見開いて将を見た。

将のほうも、同じように目を見開いていた……しかしその先にあるのは、瑞樹の顔ではなく、彼女が持った注射器である。

「何やってんだ！」

将は、松葉杖を投げ出して瑞樹に近寄ると、その手から注射器をもぎ取った。

瑞樹は、目を見開いたまま凍りついたように、無抵抗でそれを手から離した。

洗面台の上には……風邪薬ほどの大きさの透明な袋に入った白い薬。

「お前……、大悟の留守に……！」

将は、薬が入ったセロファン袋を乱暴に破いて、洗面ボウルの中にぶちまけた。

クリーム色の洗面ボウルに散った薬は粉砂糖のようだった。

将は蛇口から水を出すとそれを全部流してしまった。

瑞樹は、その1万もする薬が水に流されていくのを、止めるでもなく、呆然と見ているだけだった。

二人はしばらくその場に立ち尽くしていたが、

線香花火のように膨らんだ沈黙に耐えられなくなった将がぽつりと口を開く。

「……いつから、やってんだよ」

瑞樹は観念したように呟いた。

「……11月ごろから」

「前原か……？」

瑞樹は、目を伏せたまま頷いた。

将はため息をついた。

「今日、大悟は……？」

「……ハケンに行ってる」

派遣での日雇いの工場勤務に大悟は行っているのだという。

「大悟が真面目に働いてるのに、お前、隠れてこんな……」

「やめられないんだ」

瑞樹が将の言葉をさえぎるように、低く呟いた。

「やめたいけど、やめられないんだ。やめなきゃって思ってるのに……」

瑞樹は、ゆっくり淡々と告白した。自嘲するようにも見えた。

「薬は……あれだけか？」

瑞樹はいちおう頷いた。将は深くため息をついた。

「大悟は……、お前とやり直すって言ってた。それを裏切るような真似をするなよ」

「わかってる」

将の言葉を聞いたとたん、瑞樹の大きな目に涙が噴き出してきた。

「わかってるのに。大悟が心配してるのもわかってるのに……あたし……」

あとは言葉にならなかった。瑞樹は両手で顔を覆うと、肩をふるわせてむせび泣きだした。

将は、思わず、瑞樹を抱きしめなくてはならない気になった。

それをぐっと抑える。

別に、瑞樹のことを好きなわけじゃない。

だけど、こうやって女が目の前で泣いているのを見ると、支えてあげたくなってしまうのは、男の性なのだろうか。

瑞樹のことを抱きしめるわけにはいかない将は突っ立って、泣いている瑞樹を見守るしかなかった。

将は、少し落ち着いたところで瑞樹を狭い洗面所からリビングに連れ出した。

瑞樹は、放心したようにソファに腰を下ろした。

あいかわらず痩せているが、ショートカットになったせいか、以前よりずっと少女らしく見える。

「ずっと家にいるからいけないんだ」

将はカフェオレをつくって渡した。

「学校に……」

言いかけて将は黙った。今朝のヤクザ教師を思い出したからだ。

学校、と聞いて瑞樹は顔をあげた。カフェオレの湯気が少し彼女を元気付けたらしい。

「ところで将、今日学校は？　なんでこんな時間に帰ってきたの？」

「あ、ああ。ちょっと忘れ物してさ」

将は取り繕った。

ヤクザ教師のことも、聡の転勤のことも、聡の部屋に戻れないことも、なんだかまだ言ってはいけない気がした。

「そう……」

瑞樹は別に疑ってないようだったが、カフェオレの入ったマグをサイドテーブルに置くと、

涙が乾いた目を見開くようにして

「あたし、もう学校には行かないかも」

と落ち着いた口調で言った。

もともと、瑞樹は、聡が担任になってから休みがちだった。修学旅行から帰ってからはずっと休んでいる。

将は、特に驚かなかった。

「やめるの？」

との問いに、瑞樹は、少し微笑むように頷く。

「……働くのか？」

「働くのも……いいかもね」

将と目をあわせずに、ショートの髪を自分でさらっとかき上げる。

少し投げやりな感じの、だけど今までの瑞樹に見たことのない飄々とした態度。

将はそんな瑞樹にたとえようのない不安を覚える。なんだか影が薄いような……そんな不安。

「お前さ……。大悟を好きなんだよな」

「なんで？」

瑞樹は顔を傾けて、少し目を見開いた。

「いや……」

将もなんでそんな確認をしようと思ったのかよくわからなかった。

「……大悟はお前のことを、似たもの同士だって、すごく大事に思ってるから」

「そう……」

瑞樹は、もう一度サイドテーブルからカップを取り上げて、カップの中に顔の半分を隠すようにそれを飲む。

「好き……だよ」

瑞樹はカップの中に話し掛けるように言った。少し間を開けて付け加える。

「あたしのこと心配してくれるし」

それを聞いて将は安心した。

「そうかー。そうだよな。あいつはいいヤツだもんな。オレに負けずにイケメンだし」

アハハとわざと明るく、将は頭を掻いて笑った。そうしないとなんだか間が持たない気がして。

瑞樹もカップに向かって少し照れたように口角を上げた。

――大悟はね、お父さんとかお兄さんみたいな『好き』なんだ。

そんなことを瑞樹はもちろん口に出さなかった。

『忘れ物』と言った手前、将はまたマンションを出なくてはならなくなった。

玄関に立った将は、また携帯を開けて聡の待ち受け画面を見た。連絡はない。

別に外でサボるのは、慣れているし、やぶさかではないが、松葉杖をついた足で外をぶらぶらと歩き回るのは面倒くさい。

足さえ普通だったら、車でどっかに行くのに。

と思い至った将は、車の中でぼんやりすることにした。

聡がいなかった今朝は、朝食も抜きだったので、弁当屋に寄る。

「あら、こんな時間にどうしたの？」

案の定、おかみさんにチェックを入れられたが、

「はあ、休講だったんです」

と大学用語を使って抜け目なくフォローする。

弁当が入ったビニール袋と、コンビニで買ったペットボトルと漫画雑誌を持って、将は久しぶりにローバーミニに乗った。

運転するわけじゃないので、めいっぱい座席を後ろにずらしてリクライニングを倒す。

暗い駐車場の景色のせめての景気付けに、ＦＭをつける。

「あー腹減ったァ」

と独り言と共に弁当のフタを開けようとしたときに、ダッフルのポケットに入れた携帯からメールの着信音が鳴った。

将はあわてて、弁当を助手席に置くと、携帯を取り出した。

……待ち焦がれた『アキラ』の表示。

127◆しばしの離別1

教頭との電話を切って、聡は大きくため息をついた。

宅急便の配達員に呼んでもらったタクシーで、携帯が通じるエリアのコンビニまで下りてきている。

突然の、異動転勤命令について説明を訊くべく、聡はまっさきに学校に連絡したのだった。

そして結果的には。

聡の転勤はもう決まったことで覆せないということがわかった。

聡はしばらく、山の中の新予備校に滞在し、インフラ整備とカリキュラム作成に専念しろ、

という任務が改めて口頭で言い渡された。

それにしても、携帯も電話もない山の中に女一人で当直し続けるのはあまりにも危険ではないか。

聡の陳情に、教頭は次のように答えた。

電話については手続きは済んでいる。ただあまりに遠いので、工事に時間が掛かっていて、もう少し待ってほしいということ。

さらに警備については、敷地に夜間警備システムを完備するということ。

来週から、掃除と警備のため、高齢者ではあるが夫婦が入寮すること。

「それで今日、セ○ムさんが、そちらに警備システムの工事に入る予定なんです。

さっそくですが、また現地に戻っていただけませんか」

「でも、私、一度あそこにいったら、電話も通じないし、タクシーも呼べないし、出てこれなくなっちゃうんですよ……」

「それについては、車を買ってください」

と教頭は簡単に言ってのけた。

「諸経費込み１００万ぐらいで中古の。もちろん学校に請求してもらってかまいません。車種は古城先生に任せます」

「はぁ……」

聡は呆然とするあまり、携帯を持ったままコンビニの店先でしゃがみこんだ。

「あの、私、着替えとか1泊分しか持ってきてないんですよね。留守宅もそんなに長く開けるようにしてないし……」

声が思わず低く尖るのがわかる。

「そうですね。ただ、さきほど言いましたように、今日はセ○ムさ

んの工事のアポが入ってるんですよ。

あと、明日はノートパソコンなどを発送しましたんで、それが着くはずなんです。

なので受け取るまでは現地に滞在してほしいんです。

もし着替えや生活用品で必要なものがあったら経費で落として現地調達してもらってかまいませんから」

「ハァ……」

このため息のような返事を、何度しただろう。

ようするに、聡は今週の週末まで、東京に帰ることを許されないのだ、ということだけがわかった。

「業務連絡とかは、どうすれば……」

「毎日業務日誌を付けてもらって、電話が開通するまでは、週末にコンビニからＦＡＸで流していただければいいです。

緊急連絡などは車で携帯が通じるところまで降りてきてください」

「ハァ……」

教頭は、聡の、英語教育で見せた、ユニークな発想と教育方法に期待していると結んだが、なんだかそらぞらしく聞こえた。

なお転勤手当てで３万、月給の基本給が２万加算、週末の帰京代は

経費でＯＫと破格の待遇を約束されたのだが、聡の心は沈むばかりだった。

電話を切っても、しばらくコンビニの店先でしゃがんだまま立ち上がれなかった。

田舎のコンビニは、客も少なく、そんな聡に目をとめる人もいない。

聡はそのまま空を見上げた。朝まで雨が降っていた空は、青空が見え始めている。

冷たい冬の青空のかけらに将を思い出した。

握った携帯でメールをチェックする。

メールボックスは将からのメールでいっぱいだった。

連絡もなく帰らなかったことへの将の心配がそのメールの数で伝わった。

聡は、将の愛情を感じながら、そのメールの１つ１つを読んだ。

将に会いたい。顔を見たい。声が聞きたい。

メールをあけるたびに、そんな思いが聡の心を占領していく。

何もかも放り出して会いに行きたい。

聡は無意識に将に電話をかけようとしてハッとした。

まだ１１時、授業中である。

辛くもそれに気付いた聡は、将に携帯としては少し長めのメールを打った。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

心配かけてごめんね。

なんとか無事です。生きてますｗ

将の足のほうはどう？

なんと私は、電話も携帯も届かない山奥の新しい学校に閉じ込められています。

このメールも、麓のコンビニまで降りてきてようやく打てました。

そして今、その新しい学校への異動を命じられ、びっくりしています。

どうやら今週いっぱい東京もどれそうにない……ＴＴ

大ショックです。

大悟くんと葉山さんのこと、少し驚いたけど、

もしできるようなら、将、マンションに帰ったほうがいいかも。

（二人にはお邪魔虫かもしれないけど）

何せ電波が通じない場所なので、電話もメールもできないけど、
1日1回はなんとか麓に下りるつもりです。
そのときに必ずメールチェックします。
将のことや、よかったら、クラスのみんなの様子、新しい先生のこととか教えてね。
週末には東京に絶対戻ります。
たしか週末、将の松葉杖もとれるんだったよね。二人でそのお祝いもしようね。

将に会えなくて寂しい聡

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

さんざん時間をかけてメールを打つと、聡は祈るように送信ボタンを押した。
その電話で、聡はタクシーを呼ぶ。
当座で必要なものを買わなくてはならない。
タクシー会社への電話を切ってすぐに携帯が鳴った。

将だ。

「アキラ！」「将！」

二人同時に名前を呼んだあと、1拍の沈黙があった。

「将、……連絡できなくてごめんね」

先に聡が切り出す。

「……めちゃくちゃ、死にそうなほど、心配したんだぜ、アキラ」

聞きたかった将の声。耳から聡の体に沁み込んでいくようだ。

聡は将の声からその表情を目の前に描いた。

「うん……本当にゴメン」

「いや、……無事ならいいんだけどさ。週末まで帰れないの？」

優しく気遣う声から、その唇を思い出す。ほどよい厚みの、形のよい、熱い唇。

「そうなの……」

本当は、あそこで夜を過ごす心細さとか、わけわからない任務の重責とか、連絡もロクにできない不自由さとか、話したいことはいっぱいある。

だけど、せっかく将とつながった電話でそんなグチをぶちまけたくなかった。

「……ところで、将、授業中じゃないの？」

「サボった。聡がいない学校なんて……」

「将……」

本当は咎めるべきところなのだが、聡は胸がいっぱいになって、しばらく黙ってそれを噛み締めた。

「ダメよ。ちゃんと学校に行かなくちゃ」

どうでもいいセリフだと自分でも思う。

「だってヨォ……」

一方、将のほうも、新しいヤクザ教師の非道さを話したかった。

だけど聡が苦労してつくったプリントをビリビリに破かれたことなんて、言えない。

「俺、……今すぐアキラのところに行きたい」

いっぱいになった胸が、うずくように乱れていくのを、聡は感じた。

聡だって、今すぐ将のところへ飛んでいきたい。

「……そんなこと、できるわけないでしょ。いい？午後の授業には

ちゃんと出るのよ」

「……」

かろうじて常識を踏まえた大人らしいことを言うことができた。……将は沈黙している。

「あと、マンションに戻れそう？」

「ん……。大悟は一緒に暮らそうって言ってくれたけど……」

「そう。だったらよかった。家政婦さんもいるんだから、マンションに戻ってて」

そのとき、聡の前に、呼んだタクシーがやってきた。

乗り込みながら一瞬携帯をずらして「このへんで一番近いデパートへ」と運転手に指示する。

「アキラ、週末には帰って来るんだよな」

将の声はせつなげに懇願するようだった。

「うん」

その声を聞いて、聡の目が熱くなってきた。鼻の奥がツーンとする。

まだ月曜、週末まではとてつもなく長い。今までの２６年の人生よりも長い道のりに思えた。

「絶対、だよな」

確認してくる将の声。低いけど、ダダッ子のような確認。聡はもうだめだった。

将は今、どんな顔をしているのか……。

タクシーの後部座席に腰掛けた聡の目から、ついに涙がこぼれた。

たかが1週間の別れに。そんな自分が少し大げさだ、と思う理性もある。

だけど、もう涙は止まらない。

聡の感情は、将と離れる暮らしなど耐えられない、と次々に涙を湧き上がらせる。

それは頬を伝い、顎から膝の上に落ちていく。

「うん、絶対。毎日、毎日メールする」

それだけいうと、聡は鼻水を啜り上げた。完全に涙声になってしまった。

「俺もメールするから」

「学校には絶対に行ってね……」

そこで通話は途切れた。電波が弱くなったのか。

声は聞こえないが、画面を見ると通話時間がまだカウントされている。

しかし、どんなに電話を押し付けても、懐かしい将の声は、もはや聞こえなかった。

だけど。自分から通話を切ることは聡にはできない。

自動的に通話が切れたとき、聡は携帯を握り締めて、シートに座ったままうなだれた……。

128◆しばしの離別2

「学校には絶対に行ってね……」

懐かしい聡の声はそこで途切れてしまった。電波のせいだろうか。

「アキラ、オレ、待ってるから」

それが聡に届いたかどうかはわからない。

聡との電話が途切れて、将のいる駐車場は再び、濃い灰色の静けさに包まれた。

聡無しであと5日もやりすごさねばならない。

将は、腹の奥底から突き上げて身を震わせるような、寂寥感に耐えた。

この感じ。昔に経験している。

思い出して将はハッとした。

母との死別。

まだ7歳だった将は、それがもはやどんな気持ちだったか、具体的に思い出すことはできない。

だけど腹の底からつきあげてくるような悲しさは、体が感覚として覚えている。

それは、長いこと断続的に将を襲ったものだ。

母の死に顔。出棺。火葬場で見送った煙。

そういった直接的なものに触発された悲しさとは違う。

それは、大磯でヒージーと一緒に行った釣りの帰りに見た夕陽の中や、

友達と川で遊んで一人で帰るんぼのあぜ道の真ん中、

秋の夜中にふと起きて虫の声に包まれているのを感じたときだったり……。

将は、気を取り直そうと、助手席に置いた弁当を取った。

何で、そんなのを今、思い出すんだ。聡とは週末にちゃんと会えるのに。

死んでしまった母とは違うのだ。

将は感覚を頭で追い払おうとした。

それにしても。

何でこんなことになったんだろう。

将は、今回のことを秘書官の毛利のしわざだと確信していた。

だけど、何で？

親元を離れてから、こと、将がらみの手続きに関わることが多い毛利だが、今まで将のプライベートに関して介入してくることはなかった。

乱行を逐一知ってはいるだろう、というのは将はわかっていた。

だけど、瑞樹と同棲しようと、免許を偽造しようと、車を勝手に購入しようと、それを阻止したことはない。

毛利には、例えば将のヤクザ殺しのように、仮に問題が起きても、それをもみ消す才覚があるから、将のやることにいちいち口出しをしないのだ。

大嫌いな毛利だが、そのへんは……奇妙な言い方だが……将は信頼していた、といってもいい。

なのに、なぜ聡とは引き離し工作をするのだろう。

将は戦闘的な気分でアジフライを噛み砕いた。

どこかで、答えがわかっている気がする。ヒントは、たぶん手にしていると思う。

続いて、レンコンのはさみ揚げを頬張りながら考えるが、わからない。今は。

――ちくしょう！

そのとき、将は、レンコンの陰にウズラの卵のフライが隠れていたことに気付いた。

本当はこの弁当にそんなフライは入らない。

ウズラの卵好きの将のために、主人がサービスしてくれたのだ。

それを見つけて、将の心は、少し柔らかくなった。

柔らかくなった心は、自動的に聡を映し出した。

聡の泣き顔。

聡が電話の向こうで泣いていたのは、はっきりとわかった。

聡に逢えなくて自分もつらいけど、電話もロクに届かない山奥に閉じ込められた聡はもっとつらいのだろう。

将は、自分のこと以上に胸が痛む気がした。

他人のつらさが、自分に迫る。頭で理解するのではなく……。

こんなことは生まれて初めてだ。

将に逢える週末まで、まるで、今までの人生以上に長く感じていた

聡だが、

予想もできない雑務の忙しさで感傷に浸る暇もない日々が、その週を埋めることになるのをまだ気付いていなかった。

まず、将との電話が切れてすぐ、タクシーの運転手からデパートが遠いことを聞かされた。

急遽予定を変更して、スーパーで食料だけ買って、山に戻る。

運転手には翌日午後に山まで迎えに来てもらうように頼んでおく。

タクシーが敷地から出て行って、すぐに警備会社の社員が工事にやってきた。

だが、連絡に使うのは電話回線なので、それがまだつながってないのなら警備会社への自動連絡システムはできない、と言われ聡は愕然とした。

仕方なく、自動連絡なしでもいいから、警報装置を付けてくれと頼み、セ○ムの社員は翌日出直すことになった。

社員たちが帰ってしまうと、聡はまた山の中に独り、取り残された。

冬の日は2月になってやや長くなったとはいえ、早くも夕暮れの兆しである。

独りぼっちになると、木々を渡っていく風の音だけでも恐ろしい。

――オーディオを買おう。どうせ英語でも使うんだし。

聡は、前向きに考えると『必要なものメモ』にそれを書き込んだ。

ちなみに3万以下のものは、事後報告でよいといわれている。

それに買い物をしてきたから今日はカップ麺でなくまともなものが食べれるんだし。

聡は気持ちを明るく持って、早めではあるけれど、夕食の準備を始めた。

ケモノの声が怖くて、あいかわらずカラスの行水で風呂に入ってしまうと、やることがなくなった。

カリキュラム作成の仕事があるが、もちろん今からやる気になるはずもない。

聡は寒さから逃れるために布団にくるまると、もう一度携帯のメールを見た。

さっき受信した、将からのメールを1つ1つ噛み締めるように読む。

すべてに聡を心配し、連絡を待っている将がいた。

聡はそんな将を今すぐ抱きしめたくなる。将のぬくもりが恋しくてせつなくなる。

そんな中。

受信箱を占める将からのメールの中に1通だけ。

……博史からのメールが混じっていた。

それを見つけて聡の体は緊張した。

さっきはざっと見ただけなので気付かなかったのだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

こないだ、母を見舞いにいってくれたんだってね。

母がとても喜んでいました。

ありがとう。

ようやくカタールでの引継ぎにケリをつけて帰ってこれました。

2月からしばらく本社勤務になります。

週末にでも一度会って話がしたい。

博史

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

聡は忘れていた苦しみが再び重く胸にのしかかるのを感じた。

博史のことよりも、その母のこと……、

余命1年ない病人に新たなる悲しみと絶望を与えることになるかもしれない……

そのことである。

独りで山の中にいる恐ろしさも忘れて、聡はうなだれた。

そして。博史。はっきりと結婚できないと伝えたけれど、彼はまだ承服していないようだ。

このメールに返事をするべきだろうか。

――どうしよう。どうしよう。こわい……こわい、将。

思わず、聡は将に救いを求める。だけどすぐに、そんな莫迦な自分に気付いた。

莫迦だと思うけれど。聡はフォトフォルダの将を再び開ける。

まるで、キリスト教徒のクロスのように、仏教との数珠のように。

今の聡の救いである将を象徴し凝縮した携帯の画像に聡はすがる。

結局、博史には、返信をしないことにした。

『無視』という形をとる自分を卑怯だとは思う。だけど何を返事すればいいのだろう。

相手が望む返事ができないことだけは、わかっている。

だから……何もしない。

火曜日朝、ノートパソコンが届く。

だが、新品なので、その立ち上げにマニュアルとくびっぴきで苦労する。

しばらくは携帯に接続してネットが使えるようにしなくてはならないが（それも麓でしか使えないのだが）それをするための部品もない。

そうこうしているうちに、昨日いったん帰ったセ○ムの社員がやってきて、監視カメラや警報装置の取り付け工事が始まる。

午後は、昨日頼んでおいたタクシーで、車を見に行く。

一刻も早く車は必要だったので、中古屋につくなり聡は

「諸経費込みで１００万以下の車を下さい！」

と叫ぶように言った。だが、人のよさそうな中古屋は

『これは車検が○年までついてますが』

『取り回しだったら』

『燃費だったら』

果ては『ナビはつけますか？』

『ナビはハードディスクとＤＶＤがありますが』

『イオンコーティングもできますが』

などとあれこれいちいち聡に訊いてくる。

とにかく今日の夕方までに車がないと困る聡には、全部どうでもよかったが、何とか全てに判定を下して、車を手にした。

ちなみに自分で車を買うのが初めてな聡は、どんな書類が必要かわからなかったので、社判から通帳から登記書まで、全部の書類を持ってきていた。

それが幸いしたところもあるのだが、ふと『これって重要書類だよね』と気付いて、買った車を運転して文房具店に行き、金庫を買う。

それまでで、陽は傾いていた。夕食はつくるのが面倒になったので、ファミレで済ます。

しかし聡はそれを思い切り後悔することになる。

すっかり陽が落ちた帰り道は真っ暗で、車でも恐ろしい山道が連続していた。

こと、未舗装道路と来たら、暗闇の中ガタガタと揺れる。

ときおり、大きな石に乗り上げるのか、揺れ方が一定ではないのが恐ろしい。

運転に不慣れなこともあり、聡は前にネズミ系テーマパークで乗ったアトラクションを思い出す羽目になった。

ナビを付けておいてよかった、もしこんな真っ暗な山道で迷ったら。車の中で夜明かしすることを考えるとぞっとした。

やっと学校の敷地に着いたときは、どっと気疲れした。

寮でそんな聡を迎えたのは、盛大な電子音だった。

規定の時間を過ぎて車が敷地内に入ったので、センサーが反応して、電子音が鳴り出したのだ。

あわててそれを止めようとするが、まだ新しいのでやり方がわからない。

耳障りな電子音が鳴り続ける中、マニュアルを読み、どうにかそれを止めたときには、心底ぐったりした。

１２９◆依存

結局将は、月曜日１日、学校をサボってしまった。

車の中で弁当を食べてしまい、漫画も一通り読んでしまうと、午後は何食わぬ顔で病院にリハビリに行き、それが終わると、看護士の山口としゃべる。

山口も、聡の転勤に驚いたようだった。

電話も届かない山奥だと聞いて

「普通、若い女性をそんなところに一人きりで赴任させるかしら。業務だとしたって」

と憤慨する。

――そうだよな。それが普通の感覚だよな。

と将は深く頷く。

そうこうしているうちに、暗くなってきた。

そろそろ大悟が帰っているだろうと、将は商店街でラーメンを食べてマンションに戻った。

「おう、将じゃん。どうしたの。入れよ」
笑顔でリビングに迎えてくれた大悟に、
「あのさ……」
と切り出す。やはりちょっと言いにくい。
「何だよ」
と大悟はソファの上、湯上りの寛いだ顔で微笑んだ。将はバツの悪さを感じながらも、
「……悪いんだけどさ。アキラが山梨に転勤になっちまったんだ。それで悪いんだけど、ここに戻っていいかな」
と用件を一気に言った。
「いいけど……」
大悟は予想通り、ＯＫしてくれたが、その返事の仕方は将が思っていたのと違った。
もっと明るく賛成してくれると思ったのだが……。
もっとも将も、彼女と二人で棲んでいるところに友達が転がりこんできたら嫌だよな、

しかもその友達は元カレみたいなもんだし、と大悟の気持ちを慮って、

「ごめんな。邪魔しちゃって……」

と頭を下げた。

「いや、ここはお前の部屋なんだから、気にすんなよ」

ようやくそう言ってくれた大悟ではあるが、あきらかに将のことは想定外だったようで少しとまどっているようだった。

「できるだけ、瑞樹と二人にはならないようにするから……」

将は言っていいものか一瞬迷った末、一応断っておいた。

すると大悟はあわてて将のほうを向き直って

「別に、お前のほうは心配してないんだ。お前はわざわざ車１００キロ走らせて萩にいくほどセンセイにぞっこんなんだし……」

と、とりなした。そして「ただ……」と続けてうつむいた。

「瑞樹のことを心配してんのか？」

将は大悟の顔をのぞきこんだ。

「……だったら、心配要らないぜ。瑞樹はお前のことが好きだ、ってハッキリいってたぜ」

「マジ？」

大悟は顔をあげた。

「マジ、マジ」

将は大悟の肩をぽんぽんと叩いた。

「……いつ、聞いたんだよ」

「あ……。言おうと思ってたんだけど、今日昼、1回こっちに戻ったんだ。そんとき……あ、大悟！」

大事なことを思い出した将は、話を中断して大悟にそれを告げた。

昼間、瑞樹が薬をやっていた件。

「もちろん、取り上げて捨てたんだけど。いちおうあれが最後だっていってたけど……」

「またか」

端正な眉をゆがめて、それでも目を見開いて将の話を聞いていた大悟だが、全部聞き終わると深くため息をついた。

「オレも何度かとりあげてるんだ。そのたびに最後だって言うんだけど……。どこで調達してるんだか……」

「マジ？」

将の問いにうなだれるように頷いた大悟に、将は何て言葉をかけていいかわからず、しばし沈黙するしかなかった。

そういえば、瑞樹の姿が見えないことに、将は今気付いた。

「瑞樹は？」

「おばあちゃんちに行くっていって、さっき出てったけど……」

将の思考は、嫌な考えにゆきあたった。

「なあ、大悟。アレって1万もするんだろ」

「知らないけど、たぶんな……」

大悟は将の顔を見ないで、搾り出すように答えた。

そのようすを見ると、大悟も同じことを考えているのだろう。

「……アイツ、オレのこと本当に、好きだっていったのか……？」

しばしの沈黙ののち、大悟は呟くように将に尋ねた。

そのすがるような表情に、将は言葉が出てくる前に深く頷いた。

「いった」

「そうか……」

なのに、大悟は手を伸びかけた髪に埋めるようにしてうなだれた。

憔悴しているように見えた。

将は、本当にそれ以上何も言えなくなった。

将は久しぶりに自分のベッドに横たわった。

聡にメールを打とうとして……画面を切り替える。瑞樹に電話をかけてみる。

しかし、案の定、電源を切っているのかつながらない。

将は……瑞樹が援助交際を再開したのは間違いないと思っていた。

大悟もたぶん、わかっている。だからあんなに憔悴した様子だったのだ。

それにしても女は、好きな男がいても援助交際なんかできるんだろうか。

将は、聡を思い出す。

今、聡にそれを聞いてみたい気がしてメールにそれを打とうとする。

だけど、メールの文字にしてみるとその問いは、生々しく、かつ、軽軽しかった。

将はいったん書いた文面を削除してため息をついた。

かわりに聡の答えを想像するべく彼女の画像を開けてみる。想像は簡単だった。

『そんなことできるわけないじゃない』

聡だったらそういうに決まっていた。

大悟のことを好きなのに援助交際をして。そうまでしても薬は離れがたいのか。

薬に……依存しているのか。

将は再び考える。瑞樹に巣食っている、依存、という得体のしれないものを。

それがないと正常さを欠くほどの耽溺。

自分ではどうしようもなくなった心の隙間を埋めるために、いや忘れるために、何かに依存することが必要。

瑞樹には……大悟では埋められない心の隙間があるのか。

まさか。まだ……。

入院中、将の病室で泣きじゃくった瑞樹を思い出す。

いや、思い過ごしだ。思い過ごしに決まっている。

瑞樹は大悟のことを好きだとハッキリ言ったのだ。

不安になった将は暗くなった携帯のボタンを押して、聡の笑顔を復活させる。

この場合、聡は精神安定剤だった。

しかし、それを見ているうちに、もっともっと欲しくなる。

逢いたい。話したい。触れ合いたい。

将は、ふと気付いて微笑む。自分も依存しているじゃないか。聡に……。

瑞樹は結局朝まで帰ってこなかった。

だが、将は学校、大悟は派遣があったので二人ともあわただしくマンションをあとにした。

学校に行くのは気乗りがしなかったが、仕方がない。

タクシーを降りたところに、さっそく嫌なヤツがいた。

「へっ、タクシー通学か。お坊ちゃんがよ」

校門で竹刀を持って立っていたヤクザ教師・京極が将に聞こえるようにわざと言った。

立っていたもう一人の屈強教師も唖然とした顔になった。

どう考えてもケンカを売っているようにしか思えない言動だが、朝で完全にエンジンがかかっていない将は、頭の働きも鈍い分、腹立ちも半分で済んだ。

軽く睨みつけるだけで、靴箱へと松葉杖をつく。

「将、お前昨日どうしたんだよー」

教室に入ってきた将の姿を見て、井口が寄ってきた。

「昨日よォ、お前が帰ったあと、あのヤクザめちゃくちゃだったんだぜ」

だが将の返事を聞かずに、まくしたてる。

「めちゃくちゃって……」

将が問い返していると、ＨＲの予鈴チャイムが鳴った。

それを聞いて井口はあわてて席に戻った。

井口だけでなくほかの生徒も席に着きはじめていた。

予鈴なのになんだ?と将が思う間もなく、引き戸を乱暴に開けて京極が入ってきた。

ずかずかと教壇に登ると、クラス中を睨むように見渡す。

クラス全員、ライオンに目をつけられたガゼルのように縮み上がった。

そしてＨＲの本鈴チャイムが鳴り始めると共に、チャイムのボリュームに負けない音量の声で

「きさまら、携帯を出せ」

と生徒たちに命じた。

「ハァ?何でだよ!」

将は、座ったまま抗議の声を上げた。他の生徒のハラハラとした視線が将に集まる。

「説明する必要はない」

京極は言い放った。

「じゃあ、オレも携帯をお前に預ける必要はない」

将も、低い声で応酬する。

「上等だ、鷹枝将。しかしだ」

最初静かな口調で微笑んでさえいるような京極だったが、

次の瞬間、将の席までズカズカと歩いてきて、机を竹刀でビシっと叩いた。

その鋭い音に、まわりの生徒が、身を震わせる。

「教師を『お前』とは何事だァっ！」

と咆哮を上げ、将の襟首をつかんで引っ張り上げた。

クラス中が、固唾を飲んで、成り行きを見守る。恐ろしさのあまり手で顔を覆う女生徒もいた。

「体罰厳禁じゃねえのか、この暴力教師」

将は襟首をつかまれたまま、すくっと立つと上から京極に言い放った。

長身なので、立ち上がると襟首をつかむ京極より視線が上になるのだ。

「説明もなしに、信頼もクソもないテメエに金目のものを渡せるか」

将は京極を見下ろしながらさらに続ける。

「こ、こンのぉ……」

京極は顔を紅くして歯を剥き出しにすると、将の襟首を、投げつけるように解放した。

将は、襟元を整えながら、バカにした目で京極を見据えた。

「授業中に使うバカがいるから預かってるんだ！授業が終了したら返す！」

京極はやっと説明した。

「だったら最初からそう言えっつの」

将はもっと反抗しても良かったのだが、まわりの凍りついた空気に、これぐらいにしてやろう、と携帯を出して渡してやった。

まわりの生徒はホーッと安堵の吐息をついた。

……が、携帯を集め終わっても、京極は教壇の上から、鎌首をあげた蛇のように将を睨みつけていた。

130◆ヤクザ教師2

「将、お前、よくさからえるなあ」

京極が行ってしまうと、再び井口らが席に寄ってきた。

「あいつ、すぐポイントちらつかせんだぜー」

なー、とカイトとユウタは顔を見合わせた。

将は、椅子にもたれて

「何、そんなに退学がコワイわけ」

と言い放つ。

三人はしばし顔を見合わせた。

「……そりゃ。もう2年も3学期だぜ。もったいないじゃん。あと1年我慢すればキャッシュバックがもらえるのに」

井口が3人を代表するように言い「お前は金持ちだから関係ないだろうけど」と小さく付け加えた。

将は窓の外を眺めた。今日も冷たく晴れている。

この冷たい青空は聡がいる山梨までつながっているんだろうか。

「あっ！」

「何だ、将」

突然声をあげた将に、井口らがあわてる。

「くっそ、携帯預けんじゃなかった！アキラにメール打てないじゃん！」

「……なんだ、そんなことかよ」

「そんなこと、だけじゃないぜ。取引もできねえし。しまったァ」

将は頭を抱えた。

株取引は平日の昼間に行われる。携帯を取り上げられたら、何もできない。

デイトレーディングでコツコツと儲けている将である。それは大損害だった。

将は乱暴に立ち上がると、松葉杖をついて職員室に向かった。

そんな将を、３人は心配そうに見送った。

挨拶もなしに無言で職員室に入った将に、教員たちが一斉に注目した。

将はそんな視線にはかまわず、松葉杖をついて京極が座る席に直行する。

京極は将が脇に立っているのに気付いているくせに、無視して机上作業をしていた。

「携帯、返せよ」

将は、京極のパンチ頭の後頭部に向かって切り出した。

「何ィ？」

京極はやっと立っている将を振り返った。

「休憩時間に使うんだからよ」

「何に使うんだ。出会い系サイトか」

京極は勝手に使い道を限定すると、にやりと笑った。

将は、ムカッと来たのを抑えて、それでも京極を心底バカにした目つきで見下ろしながら

「株取引だよ」

と用途を短く話した。

「カブゥ？」

京極は目を細めて将を睨みつけた。その目付きは将が街でたびたび遭遇したチンピラそっくりだった。

「高校生にそんなものは必要ないッ」

1拍おいて京極は怒鳴りつけた。

職員室中がシーンとなった。隣で角刈りの権藤がハラハラしている。

騒ぎに学年主任の多美先生が近寄ってきた。

「どうしたんです」

事情を訊く多美先生に

「授業中に携帯なんて必要ない、と言っていたんです」

京極は、いちおう丁寧な口調で、でも内容は適当に答えていた。

「違うだろ！」

思わず叫ぶ将に、多美先生が

「鷹枝！言葉遣い！」

と注意する。

「コイツ……先生が、勝手に携帯を取り上げたんです」

何かわめこうとする京極を多美先生が制止してくれた。

「で俺、休憩時間に株取引をしているから困るって話してたんです」

「京極先生」

多美先生は京極に向き直った。

「高校生に、株取引は早すぎます。それに儲けたとしたら、よけいな金銭を持つことになり、非行のもとになります」

京極も、さすがに学年主任の多美先生には逆らえず、ブスっとしながらもその趣旨を説明した。

「早いかどうかなんて、誰が決めたんだよ！」

将はそれを聞いて思わず怒鳴る。

多美先生は腕組みをして考えたが、

「この件は、あとで職員会議にかけましょう。鷹枝、わかったな」

「わからねえよ！正当な財産権を奪うのかよ！」

将はなおも反抗した。株取引もそうだが、聡にメールを打てないのは痛い。

「何が『財産権』だ。きいたふうな口を利くな！

……いいか。お前ら未成年は犯罪を犯しても名前がでない分、責任もない。

責任がないってことは、権利も主張できないんだ。覚えとけ！」

京極の応酬に、将は悔しいが言い返す言葉が見つからなく、歯を噛み締めた。

多美先生は、なお京極をにらみつける将に、

「もう、授業が始まるぞ。……教室に戻りなさい」

と落ち着いた口調で諭した。

京極の英語は、この日は2時間目だった。

さすがに今日は、皆、教科書を持ってきていた。

将は持ってきていなかったが、気を利かせた井口が、1組の不良仲間に借りてきてくれた。

京極は授業開始2分前に、乱暴に引き戸をあけて教室に入ってくると、

チャイムと同時に黒板に英文を書きはじめた。

無言で何かの例文を10ほど一気に書いてしまうと、教壇から教室の皆に向き直った。

「15分でこれを覚えろ」

意外な展開に生徒はサワサワと、控えめにざわめいた。

どれも単語を10以上使った長めの例文だ。

「あ、あの……」

その成績のよさから、女子の学級委員を務める星野みな子が手をあげた。

「なんだ」

京極は不愉快そうに返事をする。それでも女子なのでいちおう静かな口調ではある。

「英文の意味が、わからないんですけど……」

「わからなくても覚えろ。機械的にな」

京極の答えに、星野は不服そうに黙った。

初めて目にする単語もあり、読み方すらもわからなかったが、生徒たちはしぶしぶと暗記を始めた。

将は、アホらしい、そっぽを向いた。

そんな将の態度が目に付いたのか、京極は

「15分経ったらテストをする。半分以上覚えてなかったものは、マイナス50ポイントだ！」

「ええー！」

と小さく声があがったが、ギロリと睨む京極に生徒は縮み上がった。暗記を続けるしかない。

将はそれを聞いても、暗記をしようともせず外を見ていた。

「ねえ。アイツの英語、思いっきりヘンだよね」

と将の斜め後ろでチャミが相棒のカリナに言うのが聞こえた。

「うん。あれは『イングリッシュ』じゃなくて、『ジャングリッシュ』だってば」

とカリナも答える。

英語が終わっての休憩時間。こんなに休憩が待ち遠しかったことはない。

生徒たちは皆緊張が解けて一気に脱力していた。

テストは小テスト形式で行われ、隣の生徒と答案を交換して採点す

る方式だった。

将は、白紙のままテストを終えた。

回答は京極が読み上げるのだが、それが思い切り日本語的な発音だった。

単語ごとに区切っているし、かつ、ｔｈとかｒの発音なんて最悪だ。

聡のネイティブに近い発音や、映画の生の英語に慣れていた生徒たちにはとても奇妙な言葉に聞こえた。

「……やっぱり、アキラ先生がいいな」

チャミがそうつぶやくとカリナも

「もう、アキラ先生戻ってこないのかな」

としんみりした。

将だけでなく……クラスのみんなも、聡を早くも懐かしんでいるのだった。

火曜日、真っ暗になって山の学校に戻ってきた聡は、風呂にも入りたくないほどくたくたに疲れていた。

それでも疲れた体に鞭打つように、なんとか風呂に入ると人心地ついた。

今日もカリキュラム作成には手をつけず、テレビをつけて、そのまま横になる。ざらざらの画面を見て、気がつく。

――ああ、テレビもちゃんと映るようにしないと。

聡はのろのろ起き上がると、メモに『テレビ』と書き加えた。

あまりにも必要なものが多いので、そのつど書かないと忘れてしまうのだ。

再び床に戻ると、携帯を取り出す。

将からのメールを読むためだ。

しかし、メールは昨夜寝る前に打ったらしい

『今から寝る。おやすみ。また明日メールする』

の一言だけだった。今日の分はない。

がっかりした聡だったが、そのうち疲れに負けて、ことん、と眠りについた。

翌日も、メモからはみ出すほどの数になった、必要なものをそろえるべく聡は買ったばかりの車で奔走することになった。

３万以上のものを買うときは、いちいち本校に伺いを立てねばなら

ず、そのたびに麓に降りて連絡して……面倒くさいことこの上ない。

聡は朝から晩まで、買い物と工事手続きに走り回った。

木曜もそれが続き……やっと夜。

聡は風呂上りにビールを飲みながら、業務日誌を付けている。

今週は文字通りバタバタしていて、毎日業務日誌を付けるどころではなかったので、あわてて1週間分を付けているのである。

それでも、明日夜には東京に戻れるので、聡の気持ちは少し明るかった。

アンテナ工事をしたテレビは、前よりずっとクリアーになり、BGMがわりにニュースを伝えている。

「よし！これで大丈夫でしょう！」

日誌になんとかケリをつけた聡はウーン、と伸びをした。

と、そんな聡の耳に『連続殺人事件』という不穏な響きが入ってきた。

伸びをしたままテレビに目を向ける。女性キャスターがその不穏なニュースを伝えていた。

『山梨県で起きている連続強姦殺人事件の続報です。

昨日、N市でまた新しい犠牲者が出てしまった事件ですが、依然犯

人像はつかめておりません……』

N市と聞いて、聡は思わずテレビに釘付けになる。聡のいる山の学校に近い場所だ。

テレビは、女性キャスターから現場の映像へと移り、さらにコンピューターグラフィックを使った地図が映し出され、男性のナレーションが入る。

『被害はいずれも２０代の女性で、N市からK市までの間で起きている。

今回のD子さんのケースは独りで車に乗っているところを狙われたと見られる。

犯人は何らかの形でD子さんの車を止め、その中に押し入り、暴行殺害。

そのまま車を運転して遺体を運び、山中に放置したと思われる』

ニュースは、昨日殺されたD子だけでなく、前に殺されたA子からC子までの殺害したと見られる場所から遺体の発見状況まで詳細に伝えた。

いずれも聡のいるところから近いところばかりだった。

聡は固唾を飲んだ。山の中に独り。その危険が改めて聡に迫り、聡は身震いした。

131◆陰謀

ヤクザ教師・京極のやり方に不満を募らせながらも、生徒たちは我慢して、その週は過ぎるかに見えた。

将も、ときどき京極と小競り合いになりながらも、毎日学校には来ていた。

それは将自身の意思というよりも、マンションにいると瑞樹と二人になってしまうので、大悟に気を遣って学校に来ているのだった。

大悟はあいかわらず、日雇いの派遣に行っている。それは工場だったり、流通センターでの力仕事だったり。毎日へとへとになって帰ってくる。

そんな一生懸命に働く大悟に、瑞樹のことでいらぬ心配をさせたくなかったのだ。

そうこうするうちに将にとって、ようやく待ち焦がれた金曜日がやってきた。

今夜は聡が帰ってくる。

おまけに松葉杖とギプスは今日まで、と医者から言われているのだ。

もちろん急に普通に歩くのを許可されるわけではなく、代わりに足にはサポーター、

歩くときは片手で支えるステッキが必須ではあるが、松葉杖の不自

由さに辟易していた将は解放的な気分でいっぱいだった。

ちなみに聡とは毎日欠かさずメールをしていた。

山奥の学校の準備が忙しいのか、それは短いやりとりだったけれど、短い文面でも聡とつながっていることが、ここのところの理不尽な学校生活を送る将の唯一の救いになっていた。

その聡に今日やっと逢えるのだ。

将は久しぶりに明るい気分で、かなり早めに学校へ向かった。

「鷹枝くん、今日日直だよ」

浮かれていた将は、同じく早めに登校していた部活の生徒にいわれて当番だったことに気付いた。

日直は、主に授業の後の黒板消しと日誌を書くことが役目である。

機嫌がとてもいい将は、

「日誌取ってくるよ」

と率先して松葉杖を操るのも軽ろやかに、職員室まで日誌を取りにいった。

しかし、廊下に近い場所にある、各クラスの日誌置き場に日誌が置いてない。

将は、前の日直が

「京極のヤツ、日誌を適当に放り出してやんの。あれで担任かよ」

と憤慨していたのを思い出した。

おまけに、雑なサインだけをするだけで、内容をチェックする様子もない。

聡のときは……個別補習授業にオリジナル教材づくり、社会見学の準備で忙しいだろうに、

ちゃんと毎日、日誌の内容に合ったコメントが書いてあった。

それはユーモアや時事問題を交えたりして、よく考えた内容であることは明確だった。

聡を思い出すと、京極のようすが腹立たしくなる。

将は、京極の机に移動した。幸い京極はいない。……それにしても汚い机である。

聡のときも、仕事が忙しいせいか、書類が山積みになり、決してキレイとは言えなかったのだが、

少なくとも京極のように灰皿からタバコの灰がはみ出していたり、飲んだ後の缶が何本も置きっぱなしになっている、というようなことはなかった。

将はビニールの下敷きの上に、缶の輪染みが残る京極の机をざっと

見渡した。

日誌は見当たらず、今朝のスポーツ新聞がばさっと置いてあるのが目立った。

「どうした?」

将の姿を見て、多美先生がコーヒー片手に声をかけてきた。

「いや、日誌がないんで……。京極はどこ?」

「ああ、今校長室に行ったみたいだぞ」

「ふーん、わかった」

将は、日誌は諦めて、いったん教室に戻ろうとした。

だが、京極が校長と何を話しているのかが気になりだした。場合によっては弱みを握れるかもしれない。

将は、松葉杖をついて、校舎をいったん出ると、校長室の窓の外、カーテンの陰に立った。

南側を向いた校長室の窓には冬の薄い陽射しが差しているが、まだ早朝だ。

冷え込んだ空気に、コートを着ていない将は震え上がった。

すりガラスを通して、中の会話が聞こえる。

「京極先生、その後、例のプロジェクトはいかがですか？」

とは校長の声。

「はい。意外にしぶとくて苦労してます」

京極がふだんとは違う神妙な口調で答えている。

――何がしぶといんだろう。それにプロジェクトって何だ？

「もっと、厳しくしないとダメじゃないですか？」

と教頭。

「しかし、体罰禁止ですから……。そう厳しいことも出来ません」

渋る京極に対して

「力に訴えるより、理不尽かつ威圧的なことをやらないと、自主退学者は出ませんよ」

教頭は強い口調で主張した。

――自主退学？

将はさらにカーテンの陰のガラスに耳をくっつけるようにした。ガラスは氷のように冷えている。

「……理事命令とはいえ、いやな仕事ですな」

校長が、重々しく口をはさむ。続くセリフを聞いて、将の眉は一気に吊り上った。

「ご自分で、生徒を中退するように仕向けるとは……」

「しかしです。うちの学校から中退させれば、キャッシュバックを払わないで済みます。

中退した生徒は、入学金を格安にして南アルプス予備校に入れれば、一石二鳥というものです」

教頭のしたり顔が見えるようだった。

「ですが、今のところ、退学の兆しが見えているのは鷹枝将一人です」

京極の声で自分の名前が出され、将は身を固くした。

「鷹枝将ですか。たしかに、官房長官の息子である彼が南アルプス予備校に入れば、宣伝効果は絶大ですね。

おまけに彼の成績なら、順当に高校卒業資格試験に合格できるでしょうから」

将は、いつのまにか爪が手のひらに食い込むほど強く拳を握り締めていた。

連続殺人のニュースを見たあと、聡は、もう一度全室の戸締り、警報装置をチェックした。

なおかつ、ここに女性が一人でいることを知られてはならない、と窓からのぞきこめる場所にあるものをチェックした。

それでも怖い。

ここのところ、ようやく山の中の静かな夜に慣れてきたところだったのに、聡はまた眠れない夜を迎えることになった。

一夜明けて、金曜日になった。今日の17時までが勤務時間である。

この日、聡はインフラ整備ではなく、滞っていたカリキュラム作成をやろうと思っていたが、どうも、この山奥にいるのが怖い。

最初は職員室でその作業をやっていたのだが、風が戸を揺らすガタっという音だけで震え上がってしまい、アイディアどころではない。

考えた挙句、聡は昼から車で麓に降りることにした。

ファミレスで昼食をとり、そのままそこでカリキュラム作成をする。

しかし、いくら暇な田舎のファミレスといっても、3時間も居座るのはとても気を遣う。

聡は結局ランチとドリンクバーの他に、欲しくもないのに、ケーキを追加してしまった。

苦労のかいあって、『今週暫定分』としては、そこそこのものができたときには１６時前になっていた。

ファミレスを出た聡は、そのままコンビニに向かい、１週間分の業務日報をＦＡＸで学校に流した。

これで仕事は終了。東京に戻れる。とホッとしている聡のバッグで携帯が鳴った。

教頭からだった。

「お疲れ様です。業務日報読みました」

本当に疲れたよ、と聡は苦笑した。

「問題がないようなら、このまま東京に戻ります」

伝えた聡に、教頭は

「問題はないんですが、１つお願いしたいことが」

とさらに業務を付け加えるべく、話を切り出した。

もうすっかり終わったつもりでいた聡は思わず身構える。

「何でしょうか……」

「いえ、そちらの校舎の画像を撮影して送って欲しいんですよ。パンフレットをつくるんですが急遽必要だといわれまして」

「撮影といっても……」

カメラもデジカメもない。

「適当なデジカメを買って頂いて、それで撮影してください。画像はパソコンで送信できますよね」

「今から、ですか？」

「そうです」

教頭は、こともなく言ってのけた。聡は向こうに聞こえないようにため息をついた。

電話を切った後、聡はあわてて量販店に駆け込み、一番使いやすそうなデジカメを買い、山に戻った。

もう直接、特急に乗ろうと思っていたのに。

聡は泣きたかったが、歯を食いしばるようにして、耐えて車を運転した。

外観から撮らないと日が暮れてしまうが、充電しないと撮影できない。

聡はあせりながら、コードを突っ込んで、教室、寮、職員室を撮影

する。

ようやく少しだけ充電が出来て外に出たときは、陽は翳り、校舎は紫色の山影の中に入っていた。

それでもいい、と聡はシャッターを切ったが、暗いせいか手ブレしてしまう。

――さっき、三脚を勧められたとき、一緒に買っておけばよかった。

後悔後先たたず。

三脚無しで手ぶれしない写真をとるべく、聡は四苦八苦した。

あせって撮影をする聡は、恐ろしい風の音も、殺人鬼のニュースもすっかり忘れてしまっていた。

何度となく失敗して、ようやく撮影できたとき、充電がちょうど切れた。

聡はあせりながら校舎に戻り、ノートパソコンに画像を落とす作業に移る。

しかし、その前に、新品のデジカメは、ソフトをパソコンにダウンロードしなくてはならない。

あせる聡はキーッと叫びそうになりながら、ダウンロードを完了し、次にマニュアルと格闘しながら画像をなんとかパソコンに落とした。

あせっているときはなおさらだが……マニュアルってどうしてこん

なに分かりにくいのだろう、と憤慨しつつ、パソコンを閉じる。

送信はどっちにしろ麓に行かないとできないので、聡は降りる支度を素早くする。

そのときには、外はすっかり暗くなっていた。

時計を見ると18時になるところ、である。まだまだ特急はある。

校舎をあとにしようとした聡の耳に、突如警報音が入ってきた。

そのけたたましい電子音に、聡のほうが思わずビクッと体を震わせる。

それは敷地に不審者が侵入したサインだった。

忘れていた殺人鬼のニュースを、聡は急に思い出した。

132◆冷却期間

鳴り続けるけたたましい警報音に、聡はなすすべもなく身を固くした。

――どうしよう。どうしよう。

職員室にカーテンはない。

新しい木造の校舎は、ガラス張りの窓が多く取られた開放的なつくりで、教室も職員室も、もともと外から丸見えである。

しかも外はもう暗く、覗こうと思えばどこからでも覗けるような状態になっている。

そして、ここにいるのは聡一人きりである。

とっさに隠れ場所を探した聡は、机の下にしゃがみこんだ。

机の影にいればしばらくは、やり過ごせるかと思ったのだ。

だけど、ああ。

電灯がついているということは、ここに誰かがいるという印になってしまっている。

おまけに聡の机のスタンドもまだついたままだ。

聡はしゃがんだまま、耳をそばだてて不審者の情報を得ようとした。

騒がしい警報音に隠れて、エンジン音と共に未舗装の敷地をタイヤが踏みしめる音が聞こえた気がする。

聡は……勇気を出して、入り口にある顔の高さのガラス窓から外のようすをうかがった。

ちょうど車のヘッドライトが消えるところだった。

明るさに目がなれた聡には、闇に隠れてしまったその車のようすがよく見えない。

……男が一人、降りてくる。がっちりした男が校舎から漏れる明かりに浮きだされたが、その詳細はよくわからない。

聡はガラス戸の鍵を閉めると、壁に寄った。

――何か武器はないだろうか、武器は！

護身用に金属バットかスタンガンでも買っておくべきだった、と後悔する聡の前のガラス戸にとうとう男の顔が見えた……。

――博史？

ガラス戸の向こうで、壁にへばりついた聡を見つけた博史は、ガラス戸を笑顔でコツコツとノックする。

口元の動きで『聡』と呼んでいるのがわかった。

聡は全身の力が抜けるようにホッとした。

ガラス戸の鍵をあけたとたん、博史がガラス戸を開けて中に入ってきた。

聡を抱きしめようとして止まった博史の手を見て、聡は新しい緊張が走るのを感じた。

「すごい音だね。聡」

言われて聡はようやく、警報音がまだ鳴り続けていることに気付いた。

「ちょっと待って」

聡は奥にある警報装置のところへ駆け寄ると、警報音を止めた。

「……どうしたの？　こんなところに」

聡は自分のデスクに向かうと、意味もなくファイルなどを確認するふりをしながら、博史に出来るだけそっけなく問い掛けた。

「迎えにきたんだよ」

博史は温かみのある声で答えた。

「どうしてここが……？」

あいかわらず、ファイルに視線を落とす聡。博史の顔を見るのが怖かったが、

「学校に教えてもらった。婚約者だって言って」

婚約者、という言葉に聡は博史を振り返る。

博史の細い目の笑顔からは、何の意図があるのか汲み取れない。

「……会社は？」

「今日は有休を取った。ずっと休み無しで引継ぎやってたからさ」

『あたしたち、もう婚約者じゃないでしょ』と聡が言い出す前に博史は聡の近くに来ると、ボストンを持った。

「どうせ、今から東京に戻るところだったんだろ」

柔和な口調。だけど、強引だった。

「まだ、仕事？」

博史は実家の国産車の運転席から、助手席の聡に向かって話し掛けた。

「うん……」

助手席に座った聡は、さっきの画像を送信すべく、膝の上でノートパソコンを操作しているのだ。

聡は、その操作をことさらゆっくりと行ったつもりだった……博史と車の中で二人きりでいまさら何を話せというのか。

それを恐れた聡はひたすら逃げていたのである。

しかし、とうとう送信し終わってしまった。聡は観念してノートパソコンを閉じた。

「終わった？お疲れ様」

「うん……」

博史は行く先から目をそらさずに、優しい言葉をかけてくる。

暗い高速道路を走っているフロントガラスの上のほうに、車内にいる聡と博史の姿が映し出された。

サンフランシスコにいた頃は、頬を寄せて、キスする二人が映し出されたこともあったのに、今の二人は沈黙するばかりである。

「東京に着くの遅くなりそうだから、何か食べていく？」

目の前には、パーキングエリアの表示が出ている。

「ううん、いい……」

早く家に帰りたいから、というより博史と向かい合って食事をするのが怖い。

しかし、博史はパーキングのほうに車線変更をした。

「コーヒー飲もうよ。自販機のだけど」

と柔らかい笑顔をこちらに向けた。

聡はパーキングの女子トイレに入るとメールをチェックした。

将から2件。

1件目は今日の昼だ。仕事に集中していた聡は気付いてなかったのだ。

『連続殺人のニュース見て心配してる。大丈夫?気をつけろよ』

将もあのニュースを知って気に掛けてくれたのだ。

もう一件は夕方になっている。

『松葉杖が取れたよ。何時ぐらいに帰れそう?ご飯一緒に食べようよ』

いま夜の7時すぎだから、おそらくコーポに帰れるのは9時ごろと見当をつける。

早く将に逢いたい。そこで聡は不安になる。

博史は、聡をちゃんと帰してくれるのだろうか。

新年に乱暴されるように抱かれたことが悪夢のように蘇る。

それを振り払うように、将には帰りは9時すぎるかもと返信する。

博史は、コーヒーを買って車で待っていてくれた。

「ありがとう」

それだけ言って、コーヒーを受け取る。自販機の中でも、やや高級なものなのだろう。

その香りと湯気は聡を少し安心させる。

「じゃあ、出発するよ」

博史はエンジンをかけた。

しばらく暗い道が続く。

博史の国産車は濃いグレーの道路だけを照らしている。行く先は真っ暗だ。

しかし、高速道路にいるあいだは、たぶん安心だ。

博史が口を開いた。

「……それにしても。聡、とんでもないところに転勤になったもんだな」

「……そうね」

「あんな山奥に、女性一人なんて危険だよ」

「……」

それは聡もそう思っている。

「あんなところ辞め……」「博史さん」

博史の言葉の先を予想した聡は、それを遮る。

「あたし、博史さんとは結婚できない。考えたけど、決心は変わらない……から」

行く先の闇に語りかけるように、だけど一気に言った。

「ごめんなさい」

その部分でだけ、ハンドルを握る博史の横顔を恐る恐る見る。

「もう……絶対、なのか」

博史は、行く先から目をそらさず、淡々とした口調で問い返す。ハ

ンドルも安定したままだ。

ゆっくり頷く聡の顔がフロントガラスに映しだされた。

しばらくエンジン音だけが響いた。国産車だけあって、高速走行でも静かだ。

そういえば、音楽をかけていないことに聡は気付いた。

さっきはＦＭが掛かっていたが、このあたりの周波数に合わせていないのだろう。

両側は山だから、電波が入らないのかもしれない。

そういえば……博史は、何の音楽が好きだっただろうか。

３年以上も付き合っていたのに、聡は博史の音楽の好みを知らなかった。

聡は、自分がひどく不誠実なように思われた。あわてて博史が好きだったものを思い出す。

映画が好きだった。

スカッシュが得意だった。

スキーもボードも上手かった。

ワインが好きだった。

色々飲んだけど、赤だったらやっぱりボルドータイプに戻った、なんて言ってたっけ。

コスパのわりに味が安定してるって……。

料理も出来たし、中でもパスタが得意だった。

夏の午後、サンフランシスコの摩天楼が見える部屋で、博史は抱いた後の聡にそれを食べさせてくれた……。

優しかった博史。

笑うと目が糸になる博史。

優しかった博史の想い出は、聡をひどい女だと責める。

聡はそれに耐えられず……ついに涙をこぼした。

「なんで泣くの」

博史は前を向いたまま、問い掛けた。相変わらず淡々とした口調だ。

聡は答えられず、バッグからティッシュを取り出すと、だまって涙をぬぐった。

「ごめん……」

「……そうだな。本当にひどいよな。海外赴任中に、彼女が……婚約者が心変わりなんてさ」

博史の口調は、聡を責める内容に似つかわしくないほど静かだ。

だけど、博史の言うとおりの、ひどい聡なのだ。聡の目からまた涙があふれてくる。

「自分をひどいと思うなら、頼みを聞いてくれないか」

「……なに」

聡は涙声で博史の横顔を振り返った。

「冷却期間を置いてくれ」

博史は、聡のほうを向かず、その視線を暗い道路にむけたままだ。

「もう、ダメだってことはわかった。でも俺の気持ちを整理したい。だから冷却期間ということにしてくれ」

うつむいて躊躇する聡に、博史はさらに続ける。

「それに……うちの母があんな調子だ。母に、まさかこんなことになったなんて言えない」

博史の横顔からは、なにもウェットなものは感じられない。

「母は、聡をすごく気に入ってるから……」

博史の母・薫を、聡は思い出した。

『一緒にカナダに紅葉を見に行きましょうね』

と微笑んだ博史に似ている目元。

メイプルの紅葉が美しいカナダの秋。その頃まで余命があるかどうかわからないそのひと。

「……わかった」

聡は新たに湧き出た涙をぬぐいながら小さく答えた。

「それで、さっそくなんだけど、明日、見舞いに行ってやってくれないか」

「……うん。わかった」

それが少しでも罪滅ぼしになるなら、と心ですがるように聡は約束をする。

博史は、あいかわらず目をそらさずに前を向いていた。

ほとんど口をつけていない彼のコーヒーは、すっかり冷めてしまっている。

１３３◆リバウンド１（前書き）

性描写がありますので、苦手な方はご注意ください。

１３３◆リバウンド１

「じゃあ、明日」

コーポの前で聡を降ろすと、博史は運転席から離れることなく、確認するようにそれだけ言って車を発進させた。

走り去る博史の車を見送る聡はため息をついた。

夜に溶ける白い息は、安堵と明日の約束に対する重圧感の姿だった。

携帯をあけて時間を見ると、２０時３０分を少し過ぎたところだ。

コーポを見上げると電気がついている。

それを見たとたん、聡は階段を駆け上がっていた。今週の疲れも何もかも忘れて。

聡が着く前に、ドアが開いた。

開いたドアの内側に将を見たとたん、聡はボストンバックを放り出して飛びついた。

「将！」

懐かしい将のぬくもり。干草のような彼の匂い。

もう１００年も会ってない気がする。

将は聡を受け止めると、しっかりと抱きしめた。

二人は部屋に入るのも忘れて、どちらからともなく唇を求める。

そんな二人にとっては、廊下の蛍光灯の、そっけない光なんてまるで関係なかった……。

ひとしきり口づけを交わしたあとで、将は

「アキラ、おかえり」

と微笑んだ。そうやって微笑む将は、また少し大人っぽくなっている。

「ただいま……。将」

聡はせつなくなって、また将の胸に顔をうずめた。

「早かったじゃん」

「うん……」

聡は将の胸に顔を押し付けたまま離れない。

「アキラ、ちょっとボストン拾わせて」

「離れたくないの……」

「ったく、子供みたいだなあ」

将は笑いながら、聡を抱きしめたまま、手を伸ばしてボストンを拾った。

次の瞬間、聡の体がふわりと宙に浮いた。

将に横抱きにされたのだ。そのまま家に入ろうと、長身の将は聡を抱いたまま、注意深く首をかがめた。

「ちょ、ちょっと将、足は大丈夫なの？」

ギプスがとれたといっても、急にそんなことをして大丈夫なんだろうか。

急に視点が高くなった聡は、怖くて将の首にしがみつく。

「ちょ、アキラ、前が見えない」

ゴン！

少し首を伸ばすタイミングが早かった将は、入り口におでこをぶつけてしまった。

「いってえ～」

将の情けない顔は、聡のすぐ近くにある。

泣きそうな顔だけど、聡の体は離さない。

「将、背伸びたんじゃない？」

聡は将に横抱きにされたまま、クスッと笑った。

「たぶん……、コラ、笑うなよ」

「だって」

ふふふ、と笑いが出てくる。

「おしおきするぞ」

そういうと、将は横抱きにした聡をベッドの上に横たえるようにそっと降ろし、

部屋の電灯を消してスタンドだけにするとそのまま覆い被さってきた。

首筋に唇を這わせながら、服の上から聡の乳房をいきなりとらえる。

「ヤダ、くすぐったい」

聡は本当にくすぐったくて笑った。

「将、ご飯は？」

「そんなの、どうでもいいよ」

将のせつない顔を見て、その広い背中に聡は腕をからませた。

「すっげえ、逢いたかったんだ。アキラ」

「あたしもよ。将」

ベッドの上で再び、唇をあわせる。

服の上からでも、お互い隙間ができるのを惜しむように、体を密着させる。

体がからみあっているのと同様、甘い唾液を含んで舌も柔らかくからみあう。

「寂しくて、死んでしまうかと思ったぜ、アキラ」

「……将」

触れ合いながらも互いの名前を何度も呼び合う。

その瞳、ぬくもり、唇の感触、そして声。

呼び合う名前さえも、全部……互いが互いを愛している。必要だった。

食事を無理に制限していた者が、タガがはずれて過食に走るように。逢えなかった二人は、今、まさに愛のリバウンド状態、歯止めが利かない状態にいる。

将は、聡と舌をからめあいながら、聡のニットの下の滑らかな素肌に手を忍び込ませていた。

聡も知っていて止めない。

このままだと一線を越えてしまうかも、という
理性が鳴らす警報音が小さく頭の隅で鳴っているけれど、今はそれどころではない。
聡は将への激情に完全に身を任せてしまっていた。
ニットの下、最初控えめだった将の手だが、だいたんにもランジェリー越しに聡の胸のやわらかなふくらみをとらえた。
それを察知しながら聡は止めもせず、逆に将の着ているシャツの裾から、
自分も将のなだらかな背中にじかに手のひらを這わせた。
逢えなかった分を取り戻すような、濃厚な逢瀬。
それが素肌への執着となって互いの掌から吐露される。
背中であの火傷のあとが盛り上がっているのがわかる。
将の受けた心の傷の象徴……聡はそれをやさしく指でなぞった。
それに気付いた将は、一瞬優しい目で聡を見つめた。
と、素早く聡の体を起こすと、その上半身からニットを取り去ってしまった。
「……だめ」

といいつつ、聡の感情はとうに覚悟を決めていた。

理性のほうは……とっくに押し流されてどこかへ行ってしまっている。

気が付くと聡は、最後の1枚だけを身につけてベッドの上に横たわっていた。

正月の実家のときより裸に近い状態なのに、火照っているのか寒さを感じない。

今日こそは将と1つになるときなのだ、と体同様、理性を脱ぎ捨てて裸の感情だけになった聡は胸を高鳴らせた。

将も、いったん立ち上がって、来ているものを脱いでいる。

ボクサーパンツ1枚になった将を聡はあらためて見上げた。

長身に、流れるようにしなやかな褐色の筋肉がついた十代の体には贅肉がまるでない。

スタンドの暖色の灯りに照らされたそれは、滑らかな影としっとりとした艶に彩られていた。

広い肩幅と、見るたびにガッチリしていくような長い首が、顔をより小さく見せている。

意思を秘めた……睨みつけるような……強い瞳で聡を見下ろしている。

腕で胸を隠して横たわる聡の上にまたのしかかってきた。

骨折した足は、ジーンズを脱ぐと、あいかわらず白い包帯で巻かれていた。

「足は……大丈夫なの？」

「うん。これ半ギプスなんだ……」

それだけ答えると、将は裸の聡をそっと、だけど強く抱きしめた。

服の上からとは比較にならない熱い将の体温。

肌と肌が触れ合っただけで、吐息が漏れそうになるほどの快感が聡を包み、それは一撃で聡を完全に支配してしまった。

一方将も、柔らかく滑らかな聡に触れただけで、全身の血がたぎるほどの興奮に支配された。

そして緊張した。

――今日こそ聡と1つになれる。

そう思ってはやる気持ちを抑えながら夢中で、かつ自分に出来る限りの慎重さをもって、

聡の唇、首筋、耳たぶ、そして胸へと口づけを落としていく。

聡の背中から腕、そして豊かな乳房へと両手は自動的に吸い付いて

いくかのようだ。

「あっ……」

突然、胸の先端に甘く優しい刺激。将が胸の先端を吸っているのだ。

思わず聡は声をもらしてしまった。抑える暇もない……反射。

その反射信号は背筋を伝って、将を受け入れる場所に同じような甘い刺激をもたらした。

のけぞるように体が斜めに傾いている。

聡は、行き場なく体中をさまよう、とまどいと恥じらい、愛情そして快感の混じったものを両掌に込めて、

胸の上にある将のボサボサ頭をくしゃくしゃと撫でた。

すると将はいっそう、そこへの刺激を強める。

繰り返し狭い面積の皮膚に施される口づけと愛撫。

息を忘れるほどの甘い刺激に、聡は本当に呼吸を忘れた。そしてやっと苦しくなって、大きく息を吸って吐く。

息をする自由も奪われて、聡は大波にさらわれたようにもがいた。

溺れてしまいそうな聡は、必死で将の頭や、背中に手を伸ばしてしがみつく。

将は、荒くなっていく聡の息づかいと共に、話し声からは想像できない甘い声が、

我慢できずにもれるのを聞き、いとおしさでいっぱいになった。

愛する聡を、自分が、悦ばせている。

それはかつて他の女に感じた攻撃的な征服感とは違った、胸に降り積もっていくような幸福感だった。

いったん、胸から顔をあげると、聡を見つめた。

やや斜めに傾けたまっ白な体が桜色に染まっているのが、スタンドの灯りでもわかった。

豊かな胸は横たわってもそのボリュームを失わず、中央の……さっきまで将が口にしていた……

胸の先端が小さく紅く固まって、荒くなった息にあわせて上下している。

髪は乱れ、ほつれ毛が頬や首筋に貼り付いて、閉じた長い睫が紅潮した頬に影を落としている。

目を閉じていた聡は、将の動きがとまったのでゆっくりと瞼を開けた。瞳がうるんでいる。

いとおしく、美しく、淫らで、可愛い聡。

「アキラ、愛してる」

将はもう一度、聡に長い口づけをした。裸の聡をぎゅっと抱きしめる、

滑らかな肌同士が、吸い付くように密着する。

「将、あたしも」

唇が離れると今度は聡のほうから唇をあわせてきた。

濃厚な口づけを交わしながら、将は手をひそかに聡の最後の布の中に侵入させた。

将の長い指は、温かい液体と、重なった襞の中にぬるり、と吸い込まれた。

１３４◆リバウンド２（前書き）

性描写を含みます。苦手な方はご注意ください。

134◆リバウンド2

「だめっ……」

敏感な場所に将の指を感じたとたん、聡は反射的に腰をひいた。

唇が離れた聡の顔を、将は見つめていた……目を見開いた真剣な顔だ。

そんな顔のくせに、熱く潤った聡の粘膜にさらに中指を割り込ませる。

聡も将を見つめ返した。

だけど頬は尋常ではないほど紅潮しているし口は半開きになっている。

呆けたような表情に、いままで舌をからませていたその唇は唾液で濡れて光り、たまらなく淫らな顔だ。

きっと、将の中指がとらえたあたりも唇と同じようになっているに違いない。

「シャワー……あびないと」

聡は、やっと言葉を口にすることができた。

将はかまわず、続ける。

1秒後には聡は体をびくっと痙攣させて、さっきより高い声を漏らした。

聡は何度も、だめ、だめ、だめ、と首をふりながら将の指から逃げようと腰をひいたが、将は執拗に聡の敏感な場所を追ってくる。

それはどんどん的確にさえなってきている。

次第に、だめ、という言葉は、将に対する制止というより、

快楽に溺れて一人歩きしそうな自らの肉体への、せめてもの抵抗と戒めになっている。

しかしそれも、もはや用をなさず、結局快楽を示すサインとなってしまった。

そして……ついに、将は聡から最後の1枚を抜き取ってしまった。

聡は将の前で、生まれたままの姿になってしまった。

将は一糸まとわぬ聡の体をいとおしく眺めた。

次々と襲う感覚に耐えられずに、目を閉じて肩を上下させている……なまめかしい肢体。

聡をここまで連れて来たのは、まぎれもなく将である。

将は、それに満足し、さらに新たなる興奮を得ていた。

そして自分も同じように最後の1枚を脱ぎ捨てた。

聡は将がそのまま覆い被さってくるのかと思いきや、将はかつて聡が将自身に施したのと同じことを始めたので驚いた。

「や……そんなこと、しなくていい」

驚いた聡は横たわったまま将を見下ろして、息も絶えだえにようやく口にした。

が、まもなく、さっき胸の先端に感じたのより何十倍も鋭利な刺激がそこから体中に走るのを感じた。

ギターの、張りつめた高い弦を尖ったものでつま弾くような、そんな鋭い刺激。

制止の言葉を口にしようとするが、脳が麻痺してしまったように言葉にならず、淫らな声となって口から漏れていく。

あまりにも強い刺激から逃れようとするが、両足は将にがっちりと押さえられているので、わずかに腰をずらすしかできない。

一方、将のほうは、進んでこんな行為に及んでいる自分に少し驚いていた。

もちろん、何度も経験はある。

最初の頃は、その実物を見たいという好奇心だった。

初めてそれをまのあたりにしたとき、あまりの生々しさに将は萎えた。

きれいだなどとはちっとも思わなかった。

慣れてしまった頃からは『ギブ&テイク』という意味で奉仕していたのに過ぎない。

存分に快楽を与えてやるから、あとで返せよ、というエゲツない発想。

セックスも所詮『ギブ&テイク』なのだ、と17歳にして将は割り切っていたのだ。

快感をこっちから与える能動的な時間と、向こうから与えてもらう受動的な時間が存在する、と。

だけど、聡を目の前にして。

『将がどうやったら気持ちよくなるか一生懸命だった』

聡がかつて将自身を愛したとき言ったこと……将は立場を変えてそれがよく理解できた。

そして、聡自身も……愛する聡の一部として、いとおしく思えた。

17歳のくせに、こんなこと、するんだ。聡のわずかに残る意識が、無駄な抵抗を試みる。

だけど……将だから……。

理性も恥かしいという感情も、繰り返す刺激のうねりにとうに飲み込まれてしまった。

今聡を支配するのは、剥き出しになった『女』としての肉体だ。それが淫らな声をしきりに漏らす。

もう少しで……てっぺん。

「しょう、将、」

聡は、いま、心も体も、かつてないほど将を激しく求めて、手を伸ばした……。

そのとき、まっ白になった聡の思考を切り裂くように携帯が鳴った。

バッグの中に入ったままの聡の携帯だ。

携帯の音は、現実世界に生きる聡を一気に呼び戻した。

だけど将は、そんな音は聞こえないように愛撫を続けている。

聡は痺れるような快感に息も絶え絶えになりながら

「……将、電話」

やっと声を出す。ひどくかすれた声だ。

将は、聡の足の間から、聡の顔に視線をやると

「……ほっとけよ」

と一言で聡の濡れた肌に戻る。

しかし、携帯はしつこく鳴り続けている。

「出なくちゃ……」

「……」

「ねえ、ってば」

とうとう、いち社会人の聡が、肉体の快楽に勝った。

聡は腰を引くと、裸のまま起き上がってボストンのポケットから携帯を取り出した。

そこには学校の番号が表示されていた。

聡はベッドの端に腰掛けると、同じように裸でベッドの真ん中に座り込む将に「学校」と小さく伝えて、電話を取った。

「お疲れ様です、古城先生。無事東京に戻られましたか」

電話の相手は、教頭だった。

「あ……ハイ」

聡は普通の声を出すべく苦労したが、どうしても声がかすれてしまう。

「もうお休みでしたか」

「いえ」

聡は、教え子との濡れ場を見透かされたかのようにドキっとする。

こんなふうに裸でいるのも覗かれているような錯覚。

下を向いた聡に、自分の陰毛が黒く淫らに映る。

聡は将の愛撫を受けていたときとは違った感覚で顔がカッと熱くなるのを感じた。

裸の背中に熱気を感じて振り返る。電話で話す聡のすぐそばに将が寄り添っていた。

「それで、急で申し訳ないんですが、古城先生に渡しておきたい書類があるんです……」

教頭の用件を真剣に聞く聡を、将がいたずら心で後ろから抱きしめる。

「月曜日でも、とも思ったんですが、月曜日は用務員夫婦さんが朝から入られるから出発は早いだろうと思いまして」

「あッ」

思わず聡は場違いな声をもらしてしまった。話に対してではない。後ろから聡を抱きしめた将は、聡の乳房をわしづかみにすると、その先端を軽くつねったのだ。

思いがけなかったのと、さっきの余韻で敏感になっている聡は、声を抑えることができなかった。

「古城先生？」

電話の向こうで教頭のけげんな声が聞こえた。

「いえ……」

聡は、携帯に向かって取り繕いながら、背筋を伸ばすと、将を睨みつけて、拳を振り上げるポーズをした。

将は声を立てずに笑いながら裸のまま、ベッドの上に転がり『やられた』ポーズをした。

「それで、その書類ですが、今から取りに来ていただけませんか」

まったく体を隠さず、大の字に倒れている裸の将だから、当然何もかも丸見えだ。

「今から、ですか」

聡は将から目をそらして、急な用件に軽く抗議の声をあげた。
時計を見ると9時半に近い。
「ハイ。明日は休みですし……。取りに来ていただくだけですから」
聡はため息をついて、了解すると電話を切った。
電話を切るなり、横たわっていた将はバネのように起き上がり、座って携帯を握ったままの聡に抱きついてきた。
ごく自然に裸の乳房をまさぐりながら電話の内容を訊く。
「今から、なんだって」
聡はため息をつきながら、唇を尖らせて命令された内容を言う。
「ガッコーに書類を取りに来い、だって」
「ええー！」
将は驚いたようだ。眉を歪めて目を見開いて、そりゃないぜ、という抗議を顔全体で現している。
「いまからぁ！……やめとけよ」
そのまま聡を押し倒して、口づけをする。
「そういうわけにもいかないでしょ」

聡は将の唇から自分の唇を引き剥がした。

「じゃあさ、1回終わってからにしようよ」

起き上がろうとする聡を将は押さえつけたが、聡はもう完全に仕事モードになっているようだった。

「ダメ。教頭先生、待ってるみたいだもん」

聡は将を制して起き上がると、ベッドの中でくちゃくちゃになっていた下着を見つけ出して穿いた。

将は裸のまま、ブスっとして、聡が服を次々と身につけていくさまを見ていた。

あっという間に、さっき喘ぎ声を出していた女とは別人のような社会人に変身してしまった。

「あんなに……たくせに」

「え、何?」

聡は化粧を直しているコンパクトから将に振り返った。

「フン」

とそっぽを向いて拗ねる将の声に、長く響く鈍い音が重なった。

「あ……」

興奮から醒めた将の内臓が空腹を一気に訴え始めたのだ。

「書類もらうだけだから、一緒に行く？帰りにご飯でも食べようよ」

さっきの淫らさをみじんも見せずに、聡は微笑みながら、まだ裸でいる将の隣に腰をおろした。

「ね？」

そういって首を少し傾けて上目遣いで将を見る。

そんな聡はやっぱり可愛い。将は聡の肩を抱き寄せると、

「オレ、メシより、アキラが食いたいんだけど」

といって軽く唇をあわせる。

「腹が減っては戦はできぬ、っていうでしょ。ほら服着て」

聡は将のほっぺたに音を立ててキスを返した。

135◆酔っ払い

「じゃ、あらためてお帰り、アキラ」

「ただいまー、将」

「かんぱーい」

二人は生ビールで乾杯した。居酒屋の個室にいる。

もう10時近いのであいてるのは居酒屋ぐらいだったのだ。

空腹が切実になった将は、すっかり機嫌をなおして

カラアゲや串焼き、モツ鍋、焼きそばなどをどんどん頼んだ。

盛大に食べる将を聡はじっと見つめた。

「何？」

将が、聡の視線に気付いて、そのまま視線を返してくる。

「ううん。なんでもない」

聡は、串焼きを取り皿に取るふりをしながら、顔を赤らめた。

こうやってきちんと服を着て、学校の書類なんかを持っていると、

さっきの行為がすごく恥かしくなる。

恥かしいだけではなく、17歳の将を相手に淫らなことに耽ったことへ後ろめたさまで芽生えてくる。

愛の行為、だけど、淫らな行為。

そしてその淫らな快感に聡は確かに酔っていたのだ……。

その罪を少しでもあがなうように、将は年上の教師らしい質問を口にした。

「将、ちゃんと学校いってる?」

「ウン」

将は将で、返事をしつつ、牛さがりの串焼きを歯でグイッと抜くのに専念するふりをした。

……本当は、今日、将は学校をさぼってしまったのだ。

今朝、校長室の窓を離れた将は、教室に戻らずに校門を出た。

まだ早い時間で、屈強教師も立ってないのも幸いと、そのままタクシーを拾い、聡のコーポへ来てしまったのだ。

幸いコーポのまわりに怪しい……たとえば毛利の監視らしき人間とか……人影はなく、

将は合鍵で中に入ると、月曜日に将が起きたままになっているベッドにごろり、と横になった。

あのヤクザ教師・京極の『厳しすぎる』指導は、理事の命令で、荒江高校からわざと中退者を出すためのものだった。

そして、中退者をあわよくば、山梨に新設している新しい予備校に取り込もうという策略。

そういわれてみれば、あの強圧的な態度も納得できる。

――結局、金儲けかよ。

腹立たしい一方で、何も知らずに山梨で忙しく働いている聡が可哀想になった……。

「新しい担任の先生はどう？携帯を取り上げられたってメールに書いてたけど」

聡はビールのジョッキを片手に頬杖をついて将の顔をのぞいた。

将の動きが一瞬止まった。

聡には……ほとんど何も教えていない。

授業中に携帯を取り上げられるようになったので昼はメールを送れない、とだけ伝えている。

あとは、新しい担任がヤクザ同然だということも、その授業の内容も、心配させるだろうから将は一切メールに書かなかった。

もちろん、それらに隠れた陰謀は将も今日知ったばかりだから、教えようもない。

「みんな……井口も寿司屋もチャミもカリナも星野女史も、アキラがいいって言ってたよ」

将は手を伸ばして焼きそばを皿に取ると、ソース味のそれに集中するふりをしながら、答える。

「そう」聡は一瞬嬉しそうな返事をした。

あの陰謀を知った将は、もう学校に行く気になれない。

だけどそれでは、アイツの思う壺だ……。

聡は「そうだ、」と目を見開いて、いたずらっぽく顔を上げた。

「昼メールくれたってことは、将、今日学校さぼったのね！」

「ああ、今日は……病院があったから」

とっさの質問だったけど、将はうまく誤魔化せた。

ついでに将は、話題をそらすために今日、ギプスをカットして半ギプスにした件を面白おかしく話した。

「あれってさぁ、今までのギプスを、足にくっつけたまま本当に切るんだぜー。ちょっと怖かったしー」

ギプスを縦にカットして足の後ろ半分を残したものは、風呂に入るときなど、簡単に取り外しできる。

普段は包帯で固定するのだ。

「松葉杖じゃなくなったけど、片手のステッキもバランスがとれないんだよねー。……あ、そうだ山口サンがアキラによろしくって言ってたよ」

「山口さんかー」

修学旅行に同行した看護士。聡はその名前に、ニセコの雪景色を連想した。

まっ白なガスと吹雪の中、遭難しかけたこと。

将と抱き合って眠った避難小屋。星降る青い夜のキス。ラベンダー色のパウダースノーの斜面。

まだようやく1ヶ月しか経たないのに、ずいぶん昔のように感じる。

個室だったというのもあり、また久しぶりに東京に帰ってきたという開放感、

さらにさっきの行為に対する恥かしさと後ろめたさから、聡は少し飲みすぎてしまった。

気がつくと、なんだか、踏みしめる足元がフワフワして、意味もなくとても楽しくなっていた。

――酔ってる。かんぺきに。

酔いを自覚するほど飲むのは、本当に久しぶりだ。

足元をふらつかせながら、夜道をふわふわと歩く聡を将が心配する。

「アキラー、大丈夫かよー」

居酒屋は聡のコーポから歩いて１０分足らずのところにあるので、二人は歩いて帰途についていた。

「ふふっ。ぜーんぜん大丈夫っ！」

「もー、まったくぅ」

まだステッキが必要な足のくせに、将は聡の肩を抱いて支えようとした。

「そんなことしたら、足に悪いでしょ！」

聡は将をふりほどくと、スキップを始める。だけどそのラインはおもいっきり波線になっている。

「危ないぞー！」

「へーき、へーき」

といっているそばから「キャー！」という声。何かにつまづいたのか、聡は道に倒れこんだ。

「ほらー」

将は聡にステッキで出来る限りの早足で駆け寄ると、手を差し伸べた。

「将……。ダッコ」

聡はとろんとした目で、将を見上げた。

「しょーがないなあ」

将は聡を助け起こすと、その体を抱きしめた。酒に酔っているせいかいつもより熱い。

聡のほうも将にひしっとしがみついてくる。

「そんなに酔っちゃって、続きできんのかよ」

「……」

将は聡を抱きしめると、背中を優しくさすった。

「……続きって、セックスのぉ？」

「バカ、はっきり言うなよ、こんなところで」

12時近いとはいえ、金曜日だ。歩道には人通りがある。

「……セックス、なんかしないも～ん」

聡は上半身を離すと、紅い顔で将をはすに見上げた。

「ハァ？」

将は、聡のいたずらっぽい、かつ色っぽい酔眼に、心底惑った。

「だってえ、将、まだ17でしょ。インコーになっちゃうじゃーん」

そういうと聡は将の手からするりと離れて、

「うふふ、うふふ」

とまたスキップを始めた。

「……しっ、信じられねえ、二重人格……。おいっ、アキラ！」

「じゅうはちになるまで、だめだ、もーん」

聡は振り返ると、将にあっかんべーと舌を思いっきり出した。

そして再びよろよろとスキップを始めて、大通りからコーポへ続く静かな通りへと先に曲がった。

「こら、アキラ！待てよ」

将はステッキをつくのももどかしく聡を追った。

よろよろの聡はすぐに捕まった。

「つかまえた。コラ、アキラ。いったいどういうつもりなんだよ」

ケタケタと笑う聡の体をぐいっと抱き寄せ、唇をあてがって笑いを止める。

息がかなり酒臭い。それにかまわず、将は聡の口の中に舌をねじこんだ。

「ん……」

聡の舌はあっさりと将の舌を受け入れて、いつものように官能的にからみあった。

腕の中で聡の力がだんだん抜けていくのがわかる。

「……さんざんその気にさせて。『おあずけ』はないだろ？アキラ」

唇を離した聡は、こころもち目を伏せてぼーっとしている。

そのとき、二人を強烈な光が殴るように照らし出した。

あまりに急激に襲った、圧力さえ感じるような眩しさ。

将はその光源を探ろうとしたが、しばらく目がくらんで何も見えない。

やっと目が慣れた将は、それがベンツのヘッドライトだということ

に気付いた。

136◆羞恥

ふっ、と光が弱くなり、ベンツから人が降りてきた。

降りてくるまでもなく、それが毛利だということは、将にはわかっている。

将は目が眩んで真っ暗な視界を、見えないまま睨みつけた。

聡は将にしがみついたまま、同じように光のほうを見ている。

まっすぐに歩いてきたスーツ姿の毛利に将は先制した。

「何の真似だ、毛利」

「将さま。迎えに参りました」

毛利の言葉づかいは丁寧だが、頭一つ下げるわけでもない。

「マンションにお帰りください」

「今日は帰らねえよ」

息巻く将に毛利はわざとらしくため息をつく。

「高校生が飲酒するのはよくないですね……。しかも先生同伴で」

「何ぃ？」

「将、誰……？」

将の腕の中で聡が訊く。その声は少し酔いが醒めたようだ。

「父の関係」

将はそれだけ答えると、抱いていた聡からそっと手を離してその場に立たせた。

そして毛利のそばにステッキをつきながらもズカズカと歩いていった。

聡は酔って赤らんだ顔ながらも心配そうな顔をして将を見ている。

至近距離に近づいた将は、毛利の眼鏡越しの瞳に鋭い視線を刺しこんだ。

しかし、毛利はひるまず、低い声でさらに付け加える。

「このことが学校に知れたらどうなるでしょうね」

「だったら知らすなよ」

将はすごんだ。将のほうが背が高いので、毛利を見下ろす形になる。

「……では今日は、お帰りください」

「お前、どういうつもりなんだよ。オレとアキラを引き裂くことで、お前やオヤジになんかメリットあんのか」

将は毛利の耳元で低い声、かつ早口で囁いた。

将の嫌いな毛利の整髪料の匂いが、将に反撃を返す。

将のセリフを聞いて毛利はフッと笑った。爬虫類を思わせるような表情が夜の中に浮かんだ。

「教育的な配慮です」

「ふざけんな！」

将がいきなり怒鳴ったので、立っていた聡がびくっと震えた。だが、毛利は微動だにしなかった。

将は、そんな毛利を睨みつけていた。

しばらくそのままでいたが、らちがあかないと見切りをつけた将は、聡が立っているほうへ踵を返そうとした。

「山梨では最近、連続強姦殺人が起こっているようですね」

将だけに聞こえるような毛利の低い声が背後から響いた。将はハッとして振り返った。

「まだ犯人は捕まっていないようですが……」

無表情のまま、抑揚なく話す毛利。将は得たいの知れない不気味さを感じた。

将は恐怖の中に怒りを混じえて、毛利にふたたび詰め寄ると、その

襟首を掴んだ。

「お前……アキラを……やる気、なのか」

しかし毛利は、襟首を捕まれたまま表情をゆるめて、はじめて将の『顔』を見つめた。

「そんなことはしませんよ。夜道は危険だから、先生もお送りしようと申し上げようとしただけで」

しかし、将にはそれもわざとらしく感じた。

でも結局。

……言うとおりにするしかない。

将は聡の肩を抱いて、ベンツへと歩いた。毛利が、後部座席のドアを慇懃無礼に開けた……。

ベンツに乗るまでもなく聡の家はすぐだった。

心配そうな将を残して、一人ベンツを降りた聡は、そこでほとんど正気に戻っていた。

部屋に入ると、明かりをつけて、冷蔵庫の水をごくごくと飲む。

ふう。

人心地つくと、寝乱れたベッドが急に目に飛び込んできた。

同時にさっき将が自分に行った行為が感覚とともに鮮やかに思い出された。

「もう、ヤダ！」

恥かしさのあまり、声に出して、手で顔を覆ってしまう。

そんな自分に、まだ酒が残ってるんだな、と心に残った冷静な部分で考える。

ベッドのそばに座り込むと、頭をシーツの上に預けてぐったりとしてみた。

なんとなく湿気を帯びたシーツは、二人の体臭の混ざった匂いがする……その中から聡は将の体臭をかぎ分けた。

「しょう」

聡は、つぶやいてみる。目を閉じると、酔った頭に将の顔が浮かぶ。

ベンツから降りる間際に見たせつない顔だった。

――さっきの、いったい何だったんだろう。

酔っていたので、あやふやだが、将と自分をベンツに乗せたあの男は……。

聡はシーツに預けた頭を少し起こした。

しわくちゃになったシーツの真ん中に、乾いた薄いしみがついていた。

快楽のあまり、聡が大量に分泌した液体のあとだ。

それを見るなり、再びいろんな記憶が一気に聡に襲い掛かってきた。

聡はさっきそれをされていたときのように息苦しくなってきた。

主に恥かしさで、である。

体中の血液に充満した恥かしさが聡の体中をぐるぐると駆け巡る。

瀉血するように恥かしさを抜きたいけど、抜けない。

聡はなすすべもなく暴走する恥かしさに地団駄を踏みたい気分だった。

地団駄の代わりに、証拠物件である湿ったシーツを一気にはぎ取る。

酔いがまだ残っているのか、大きな動きをすると、脳が頭からはみでて浮遊しているような感覚でぐらぐらする。

それを耐えて、自分も洗い清めようとシャワールームに入る。

しかし、自分の裸でさえも、あの淫らな行為の『証拠物件』なのだ。

聡は恥かしくて、このままシャワーに溶けてしまいたい気分になった。

だけど、石鹸ですべてを洗い流し、清潔な下着に穿き替え、洗ったパジャマを着ると、さすがに落ち着いてきた。

乾いたシーツに換えたベッドに横たわると、隣に将がいないのが急にさみしくなってきた。

将のことは愛している。いつも一緒にいたい。ぬくもりがほしい。だけど、こんなに動揺するなんて。正直、聡はさっきの行為を後悔していた。

あのまま最後までいかなくてよかった、とほっとしている。

すごく気持ちよかった。溶けて蒸発しそうだった。死んでもいいぐらいだった。

しかももう教え子じゃない。

だけど。

将は依然17歳なのだ。

愛という大義名分のもと、法律を犯してまで1つになるのは、やはり怖い、勇気のない聡だ。

心の片隅にこびりついた、良心というか常識というか、そんなものは意外にも、心を深く操っていたのだ。

それが、酔った聡の言動に現れたのだ。

――愛よりも常識なんだ……。私って。

そんな自分の計算高さのようなものを寂しい、と聡は思った。

聡はため息をつくと、寝返りを打った。

そこへ、メールの着信音。

たぶん、将からメールがあるだろうと、携帯は枕元に置いていた。

案の定将だった。

『今日はごめん。明日、なんとか抜け出すから、そっち行っていい？』

そっち＝聡の部屋。聡は、またさっきの行為を思い出して、顔が一瞬熱くなる。

それをかき消すように、繰り返し携帯に表示されたメールを読む。

文言の一部が気になった。

抜け出す、とは、いったい？

さっきのスーツ姿の『毛利』という人のことだろうか。あの人は将を監視しているのだろうか？

聡の心を少しだけ嫌な予感がよぎる。

だけど、抜け出すって言ってるんだし、『毛利』のことはあとで将に訊けばいい。

いいよ、と打とうとした直前に、聡はかろうじて思い出した。

博史との……博史の母を明日見舞うという約束を。

これもあったんだ。と聡は天井を見て再びため息をついた。

どうしよう。だけど、せっかくの土日だ。将とは少しでも長く逢っていたい。

考えたあげく、

『いいけど、明日午後、ちょっと出ないといけないんだ。その間留守番になるけどいい？』

と送信した。すると間もなく将から

『どこに行くの』

と問い返してきた。

『知っている人のお見舞い』

聡は嘘をつかないように返事をした。

１３７◆見舞い

翌土曜日は２月にしては珍しく、雨が降った。

その気圧の低さゆえか、昨日の酒が残ってしまったのか、

目覚めた聡は起き上がるのも大儀なほどのだるさに包まれているのを感じた。

時計を見ると、もう１１時近い。

今朝未明、いったん目覚めてしまった聡だが、

体に残る悪質なアルコールに邪魔されて、寝付けなくなってしまった。

だけど本などを読むには頭がズキズキと痛すぎる。

つぶせない時間が頭痛と共に悶々と横たわる。

結局、無理やり頭痛薬を飲んで、

――早く、効いて、早く……。

と祈るように目をつぶった……。

聡は粘りつくようなだるさを引き剥がすようにベッドから起きると

青いカーテンを開ける。

空は、だるさを増幅するようなグレー、雨でけぶるようないつもの景色に聡はうんざりした。

何も考えたくないような頭痛はあいかわらずだ。

食欲はないが、食べて頭痛薬を飲まないと、と常備していたゼリーを流し込む。

酔い覚ましにシャワーでも浴びようか、と考えつつも、動かないままの聡を促すように携帯が鳴った。

博史だった。思わず聡は身構える。

「今日、何時ごろ見舞いに来る？」

すぐに用件に入るのは、もう聡に恋人としての役割は一切、期待してないということなのだろうか。

「午後にしようと思ってるんだけど」

「1時ごろ迎えにいこうか」

この天気を気遣っての提案なのだろう。

しかし聡は、ここに来るといっていた将を思い出す。

迎えに来た博史を偶然見てしまう、ということもあるかもしれない。

無駄な疑惑を呼ぶような行為は避けたい。

「うん……。でも駅までででいい」

「そう。わかった。じゃあ駅に1時半で」

博史はあっけなく聡の望むとおりの約束をすると、無駄話をせずにすぐに電話を切った。

身構えていた聡はなんだか拍子抜けするような気がした。

将は、寝室で横たわったまま、雨音を聞いていた。そして考える。

どうやって、毛利に気取られずに聡の家に行くかを。

おそらく……聡が東京にいるとなれば、毛利本人ではないにしても、誰かが常に見張っているに違いない。

といっても通りから一本入った静かなあたりにある聡のコーポを常に見張るのは難しい。

不審者扱いされて通報される恐れがあるからだ。警察の巡回も多い。

以上のことから、おそらく見張るとしたら将のほうである、と将は結論を出した。

大悟は今朝も朝早くから仕事に出たらしい。

早朝に物音と瑞樹との話し声がしていたのを将はうとうとと聞いた。

今は……部屋中がしんとしている。瑞樹もどこかにでかけたらしい。

将は寝返りを打った。この部屋で、聡と抱き合って眠った夜を思い出す。

将は、あのときと違って柔らかな聡の素肌を脳裏に再現することもできるのだ。

それを思い出した将は狂おしいほどの思慕が体中を駆け巡るのを感じた。

昼頃、将は雨を押して出かけた。タクシーでだが、当然つけられていると考えている。

それぐらいのことは毛利にはなんでもないことだろう。

若者が集まる街で井口と待ち合わせをしている。

そうやって油断させておいて、夕方か夜、聡を訪ねるつもりだった。

雨で、かつ半ギプスになったとはいえ不自由な足を引きずってでも、聡に逢うためだったらいくらでも策を講じる。変装したっていいぐらいに考えていた。

将は挑戦的な気分で、山の手線の駅でタクシーを降りた。

まだ、井口との待ち合わせには早かったらしい。

将は、駅の中にあるカフェに入って暇をつぶすことにした。

腹も減っている。サンドイッチを食べ終わると、聡に遅くなりそうだ、とメールを打つ。

と、窓の外に無意識に惹かれた。

チューリップの花束を持った、やや背の高い女が、茶色のセミロングをなびかせて通り過ぎるところだった。

ほっそりとした長い手足に似合わず、前をあけたコートとマフラーの下で張り出した豊かな胸が歩く振動でぷるんぷるんと震えている。

地味な色の服なのに、女らしく優しげなオーラに包まれているようだった。

――聡に似てる。もろタイプだ。

と焦点をあわせる。……それは聡本物だった。

「アキラっ」

将は、反射的に立ち上がった。ガラスの向こうの聡は、こっちに気付かないらしい。

聡はちょうど改札から降りてきたらしく、駅の出口に向かって歩いている。

――そういえば、今日、知人の見舞いに行くって言ってたな。

将はびっくりさせてやろうと、ステッキを付きながら後を追った。

なんだったら、このままデートしてもいい。

聡は、追いかけている将にあいかわらず気付かない。

屋根が終わって外に出るところで、いったん空を見上げると傘を差そうとした。

アキラ、と呼びかけようとして将は息を飲んだ。

傘を差そうとした聡に、一人の男が走ってきて傘を差しかけたのだ。

博史だった。

そのまま、博史が差した傘に、聡を入れると小走りに歩道を渡り、そこに止めた車へ走っていく。

博史は助手席のドアを開けて濡れないように傘を差しながら、聡を車の中に乗せると、

自分も傘を持って車の後ろをまわって運転席に座った。

そしてまもなく車は走り去った。

将は呆然としてそれを見ていた。

「ひどい天気だね」

博史はワイパーが忙しく動くフロントガラスを見ながら、聡に話し掛けた。

「そうね……」

薬が効いて聡の頭痛はようやく止んでいた。だけどダルさはあいかわらずだ。

今までと変わらない博史の雰囲気に、聡は、別れをまだ伝えてなかったかのような錯覚に陥る。

「その後、お母様はどうなの？」

「検査の結果、再検査になってね。結果待ちで少なくとも来週までは病院だよ」

「そう……」

聡は雨粒が貼り付いた窓の外に目をやった。

今度はこっちの罪悪感が胸にこみあげてくる。

重い鉛のようなものを必死で胃が逆流させようとしているかのような息苦しさ。

そして吐き気。聡は思わず、この苦しみの期限を計ってしまう。

……博史は、冷却期間を置きたいといった。それはいつまでなのだろう。

つまり聡はいつまで、薫の前で婚約者の演技をする必要があるのだろうか。

博史は、いつか薫に、聡との別れを説明してくれるのだろうか。

それとも薫が……亡くなるまで演技を続けるのだろうか。

亡くなる、死ぬ。

聡はそんなことを思った自分にぞくっとした。

同時に自分の身勝手さにますます吐き気がするようだった。

「顔色が悪い」

博史は前方から目を離さずに言った。

「そうなの？検査……心配ね」

こちらを見透かされたような気がして、聡は心配そうな声を出すことに、そしてそれがわざとらしくならないように努めた。

「聡が、だよ」

博史は、こっちを一瞬向いて微笑んだ。勘違いだったことを指摘された聡は下をむくと、

「天気のせいよ」

と呟く。まさか二日酔いだとはいえない。

車は病院の地下の駐車場に入っていった。

「聡さん、待ってたのよ！まあ、きれいなチューリップ」

ベッドの上から薫は、元気な声を出した。上半身を起こしている。

だがその顔色はそれほどよい、とはいえない。

「博史に聞いてびっくりしたわ。山梨に転勤ですって？」

薫はベッドの上で、その細い目を見開くようにして聡を見た。

「え、ええ」

「女性一人で心細いでしょう」

薫はベッドの脇の椅子を勧めながら、たたみかけるように話し掛け

てくる。

聡は、根掘り葉掘り訊いてくる薫の質問に、

でも空気はいいですよ、とか、

雪はあまり降らないみたいです、とか、

月曜から用務員のご夫婦が来るんで安心です、

などそれぞれに丁寧に答えるしかない。

だけど、息苦しい。

博史はといえば、立ったままにこにこと聡と母の薫を見守っている。

聡は、演技を続けるしかない。……そしてそれは、失敗を許されないドラマなのだ。

「あの、チューリップ、いけてきましょうか」

聡はこの場を一瞬でも退場したくて、親切心を装う。

しかし、薫は、

「ううん、聡さんとお話がしたいわ」

と離してくれない。

博史が

「花瓶に差すだけだったら俺がやっとくよ」

と花瓶と花束を持って立ち上がった。その博史に薫は

「ついでにちょっと聡さんと秘密の話があるから席をはずしてちょうだい」

と意味ありげに言った。その顔は、温かい笑顔だ。

聡は笑顔を保ちながらもなんだか胸騒ぎがして、薫の顔を盗み見た。

「何？おふくろ。何の話？」

博史も笑顔のまま、いぶかる。

「ふふ。ナイショ。いいことよ……。ね、聡さん」

薫は楽しげに、いたずらっぽい顔で聡のほうを向いた。

わけがわからない聡はあいまいに笑顔を作り続けるしかなかった。

138◆形見

博史がドアの向こうに消えると、薫はあらためて聡にゆっくりと微笑みかけた。

「聡さん、ちょっと悪いけど、そこの引き出しをあけてもらえるかしら」

薫は枕の下から鍵を取り出すと聡の掌の中にそっと置いた。

鍵付きの、貴重品用の引き出しである。

聡は立ち上がると言うとおりにした。

引き出しの中には、深緑色のびろうどに覆われた古風なリングケースらしきものが入っていた。

「その緑色のケースを出して」

聡はそのケースをそっと取り出しながら、薫が何をしたいのかが、おおよそわかってしまい……困惑した。

「聡さん、お誕生日はいつ?」

薫はそういいながら聡の手からリングケースを受け取ると、大事そうにそっと開けた。

「11月……21日です」

「そう。じゃあ誕生石はトパーズね」

とニッコリ笑って聡を見上げた。

「ぜんぜん誕生石とは関係ないんだけど……それにデザインもちょっと古いんだけど」

薫の手の中にあるリングケースの中には、緑色の石に彩られた指輪があった。

それは雨で暗い窓辺にあっても、明るく澄んだ緑色にきらりと光った。

両脇に小さなダイヤが寄り添う豪華なものだった。

「エメラルドよ。これはね、私が博史を産んだときに、お姑さんからいただいたの」

薫はケースの中の指輪をいとおしそうに見つめながら、温かい声で語る。

大事な古い宝物を取り出して慈しむような……おそらく薫には大切な思い出なのだろう。そんな語り方だ。

「お姑さんの、形見、みたいなものかしら……」

形見、という言葉に聡は、思わず薫の顔から目をそらす。

「それでね。私も博史がお嫁さんをもらう時が来たら、その人にあげるんだ、って決めてたの」

薫は突っ立ったままの聡のほうを見上げると、

「聡さん、これもらってくれるわよね」

と微笑んだ。

聡は、ごくりと唾を飲み込んだ。

薫は、それが彼女自身の形見になってしまう日が来るのが、遠くないことを知っているのだろうか……。

「さあ、聡さん」

そうとも知らず、薫はケースを開けたまま、指輪を聡に手渡す。

緑色の石は、ピカッと光って、それは正義のように聡を射抜いた。

足が震え出す。

人を騙すということは……こんなに苦しいことだったのだ。

現実の音はまったく聞こえなくなったくせに、世界中が聡を責める声がこだまのように頭に響いている。

目をぎゅっとつむった。

「聡さん?」

様子がおかしい聡に薫が、声をかけた。

聡はかろうじて、ケースを閉じて薫の手に押し付けるように返した。

「いただけません……」

「そんな、遠慮しないで」

聡のようすを遠慮と思い込んだ薫は、優しくケースを聡の手に戻そうとした。

「私が、もらってほしいのよ」

薫が、ベッドから少し乗り出すようにして、聡の瞳をのぞきこんだ。

細い目の奥から、聡を見つめる澄んだ瞳。

――もう、これ以上はダメ。この人を騙せない……。

薫の瞳から注入された温かさが、聡の瞳に涙をあふれさせていく。

うつむいた聡の瞳から、涙が床へとたて続けに落ちて行った。

「いただけ……ないんです……。わたし、博史さんと……結婚しない……んです」

聡は、ついに真実を口にしてしまった。

この、余命短い、優しいひとを傷つけるであろう真実を。

驚いた薫は細い目を見開いて、そんな聡を見つめた。

リングケースは薫のベッドの上で、今だかつて、こんなふうな置かれ方はしなかっただろう角度で無造作に転がっていた。

聡は一瞬、それを告げたことを後悔したが、もう遅い。

婚約者を裏切った責め。

そして自分がつらい、というだけでこの優しいひとを傷つける事実を告げてしまった責め。

2つの責めが聡の心をつらぬいていく。

「ごめんなさいっ……！」

聡は顔を覆うと、その場にしゃがみこんだ。

薫は、しばらく見開いていた目をしばたたくと、

「本当に？」

と訊いた。聡は涙でぐちゃぐちゃになった顔をあげると、うなづいた。

「博史が……、あなたに、何かいけないことをしたの？」

薫は心配そうに聡を見た。

そんな顔をみて聡はさらに激しい罪悪感にさいなまされて新たなる涙が湧き出てきた。

この期におよんで、薫はまだ聡のほうを心配しているのだ。

「違いますっ……博史さんは悪くありません……。わたしが……、わたしがいけないんです」

そう。何もかも聡が悪いのだ。

博史と結婚を約束していながら、他の男を好きになるのを止められなかった。

博史には何も落ち度はない。

聡は再び、顔を手で覆った。

「そう……」

薫はしゃがんで泣きじゃくる聡から目をあげると、リクライニングになったベッドに寄りかかる。

小さくため息をつくと、目を静かに閉じた。

聡は涙のとめ方もわからないまま、立ち上がった。

「本当に……すいません……でした」

寄りかかる薫に、頭を深く下げる。頭を下げたことによってまた新しい涙がぽたぽたと床に落ちる。

薫は目をあけると、ベッドの上に転がったリングケースを手に取っ

た。そして

「いつから……だめになっていたの？」

と聡に問い掛けた。問い詰めるような口調ではない。

リングケースに話し掛けているような静かな口調だ。

聡は答えられなくて、黙り込んだ。また涙が頬を伝う。

「クリスマスにはじめてお会いしたときには、もう……？」

薫はリングケースから顔をあげて、聡の瞳をのぞきこんだ。

その顔は、怒っておらず、むしろ聡を憐れむような顔だ。

聡はうつむくしかなかった。涙がいっそう激しく湧いてくる。

しかし薫は、聡の涙に答えを見つけたようで、

「そう……、そうなの……」

と呟いて、雨にけぶる窓の外を見つめた。

聡は病院の非常階段を駆け下りていた。涙はまだ止まらない。

『そんな顔で博史に会ったら、大変だわ』

と薫がベッドから身を乗り出すようにして非常階段のありかを教えてくれたのだ。

待合室で暇をつぶしているであろう博史と顔をあわさないように。

非常灯が暗く灯る踊り場で、聡は手すりに寄りかかってすすり泣いた。

あんな、ひどいことを告げたのに、聡に気を遣ってくれるひとなのだ。

薫は最後に言った。

「さようなら聡さん。いろいろと……ごめんなさいね」

薫も博史も、謝ることなんて、ないのだ。

悪いのはすべて、心変わりをした自分なのだ。

聡は足をひきずるようにして、非常階段を降りきった。

土曜日とあり、1階の受付にはかなりの人がいた。

すれ違う人も、ベンチに座る人も、涙でぐちゃぐちゃになった聡の顔を、好奇の目で、もしくは気の毒そうな目でチラリと見る。

ふらふらと玄関にでた聡は、タクシーの扉が自分をめがけて開くのを無視して、降りしきる雨の中に傘も差さずに踊り出た。

傘立てに差した傘のことなど忘れている。

雨は、聡の顔の上の涙を流そうとしたが、あとからあとから湧き出てくるそれと交じり合うのがせいいっぱいだった。

139◆罪と罰1

博史の車に乗る聡を偶然見てしまった将は、一瞬、聡を疑った。

だが、すぐに博史に余命1年の母がいるといって、罪悪感に震えていた聡を思い出した。

おそらく、聡が博史の車に乗りこんだのは、その母の見舞いに行くために違いない。

そう分かっているのに、将の心はざわめいていた。

落ち着かない自分の心を無理に納得させて、将は井口との待ち合わせ場所に戻った。

結局将が、聡のコーポのチャイムを鳴らしたのは夜11時近くだった。

あのあと井口と少し遊んで、一緒に夕食を食って、マンションに来てもらった。

大悟もその頃には帰ってきていて、3人で少し酒を飲んだ。

そのせいか、遅くはなったものの、聡のコーポに来るまでに毛利の邪魔が入ることはなかった……。

ちなみに冬にしては強く降っていた雨は、夕方には止んでいた。

しかしそのかわりに、急激で厳しい冷え込みが襲ってきて、ドアの前に立つ将は白い息を吐きながら震えた。

少し間があいて、聡がドアをあけた。

細く開いたドアから見える聡の様子はかなり変だった。陰気な顔をして沈んでいる。

腫れあがった瞼は、泣きはらしたんだろうか。

「……コーヒー、飲む？」

それでもパジャマ姿の聡は将を部屋にあげると、マグカップをテーブルに置いた。

天井の明かりはつけず、スタンドのあかりだけにしてあった。

寝ていたのだろうか、と将は聡のようすを推し量りながらテーブルのわきに座る。

「うん……」

逢ったらすぐに抱きしめようと思っていたのに出鼻をくじかれた格好の将だ。

「ごめんね、おそくなって」

と到着が遅くなったことを、まずは謝る。

「ううん……」

聡は、ドリップペーパーにコーヒー豆を入れながら、将のほうを見ないで答えている。

「見舞い……、どうだった？」

将はキッチンで湯をわかす聡に尋ねた。

「うん……」

レンジに向かう聡は聞こえているのか聞こえていないのかわからないような、あいまいなようすである。

心ここにあらず、といった感じだ。

「博史のおふくろさん、容態悪かったの？」

焦れた将は……ついに、自分からそれを言った。

自分は何もかもわかってるから……、という自己アピールと、万が一博史との仲が仮にまだ続いているなら、という牽制の意味がある。

それを聞いた聡は、振り返ると腫れた瞼の目で将を見つめた。

将はその悲しそうな視線にとまどう。

「いや、アキラ、まえに博史のおふくろさんが、余命1年っていってただろ。

だから今日の見舞いもそうかな、と思ったんだ……」

聡の瞳から思わず涙がこぼれる。まだ午後の傷は乾いていない。

人を傷つけた自覚によって、自分が深く、かつ複雑に傷ついている聡である。

ささいな刺激で、傷口からの血さながらに、涙がにじみでてくる。

「アキラ」

将は立ち上がると、涙をこぼす聡を抱き寄せた。

聡も将の体に腕を巻きつけてくる。

声こそ出さないが、ときどきすすり上げる音が聞こえる。

『牽制』なんて気分は吹き飛んで、将は聡の髪の毛を優しくときほぐすようになでる。

「……将」

聡は優しい将にすべてを吐露したくなる。

今日、雨に打たれてびしょぬれになりながらも、心からは決して流れ去らない自己嫌悪。

余命短い優しいひとを傷つけてしまったこと。

形見のエメラルド……。

だけど。

それを、当事者の将に言ってしまえば。

聞き様によっては「将と出会わなければよかった」というふうに聞こえてしまうかもしれない。

『出会わなければよかった』？

聡は将の腕の中で目を見開いた。将と出会わなければ、すべてはうまくいっていたのだろうか……。

誰を傷つけることなく……。

聡は、自分の中に芽生えた考えに、ぞくっとする。

心の声は必死で『違う、違う』と叫ぶ。

だけど、一度芽生えた考えは、菌糸のように聡の思考にじわじわと根を生やしていく。

『将と出会わなければ、はやく結婚したいという博史の申し出だって嬉しかったはずだ。

博史を、薫を傷つけることになったのは、将のせいだ』

否。

聡は将にからませた腕に力をこめる。

将が悪いわけではない。将を好きになったのは、他でもない聡自身なのだ。

将は、しがみつく聡の腕の力が強まったのを感じて、聡の顔を自分のほうに向けた。

そのまま唇をあわせる。

最初聡の舌は、とまどっていたようだったが、そのうち意を決したように将のそれにからみついてきた。

ヤカンが沸いてシュンシュンと音を立てはじめた。

しかしそれをよそに二人は、口づけと抱擁を続ける。

将は、聡と舌をからませたまま手を伸ばして、ガスをとめる。

そしてそのまま、少しずつベッドのほうへ移動する。

聡は将に体重を預けて、抵抗する様子はない。

将は、ベッドのそばまでくると、聡をベッドに押し倒した。

「将」

押し倒された聡は、目を開けて、上にのしかかる将を見上げた。

せつなく光る目に、口元はわずかに微笑むよう。

複雑な表情を一瞬だけ見せて、すぐに髪の毛しか見えなくなる……

将は聡の首筋に唇を這わせてきたのだ。

右手はパジャマ越しに聡の乳房をまさぐる。

「……イヤ。やめて、将」

聡の声をとめるように、将は聡の口を自らのそれでふさぐ。

再び舌を聡の口の中にすべりこませ、からませる。

「きのうの、つづき」

唇を離した将は、聡にそう呟いて笑顔をつくると、再び……こんどはパジャマの裾から聡の素肌に手をはわせる。

「いや……。お願い、やめて将」

将はやめない。

本気で抵抗する聡は体をよじらせる。それを無理やり仰向けのまま固定しようとする将。

将は、再び聡の首筋に唇をはわせながら、掌はパジャマの下にそのまま息づく乳房をじかにとらえた。

「やめて！」

聡は将の手から身を守るように体を丸めると、乱暴に将から背をむけた。

「アキラ……？」

さすがに乱暴に抵抗しすぎた。おそるおそる将を振り返ると、彼は聡を呆然と見つめていた。

聡は付け足しのように、だけど極力優しく将に言い訳する。

「ごめん。今日はダメ……。そんな気分になれないの」

将の困惑した顔に、だんだん怒りが混じり始める。

「ごめん……」

聡は体を起こすと、将に手を延ばした。

将は、怒りを隠すように俯くと、ベッドから降りて立ち上がった。

「オレ、帰ったほうがいい？」

言葉は拗ねているけれど。後姿はひどく寂しげだった。

存在を全否定されたかのような、悲哀。

――ちがう、将を拒絶したんじゃない……。

「将……」

聡は将の背中に、すがるように呼びかけると、ベッドから降りて、将を後ろから抱きしめた。

「ごめん……帰らないで。将」

しかし将は後ろを向いたままだ。聡は将の背中にすがりついたままさらに嘆願した。

「帰らないで。お願い……」

将は後ろを向いたまま呟いた。

「今日、オレ、見てたんだ」

その広い背中は少し震えているようだ。

「アキラが博史の車に乗るのを……」

そこで将は、聡の腕をほどいて、振り返ると聡に向き合う。

「オレ、一瞬聡を疑った。だけど、博史のおふくろの話を聞いてたから、疑わないようにしたんだ」

寂しげな将の瞳。スタンドの灯りを受けてそれはトパーズのような色に反射している。

「将……」

「オレ、アキラを信じたい。だけど……、こんなふうに拒否られると、すっげー……」

将は『すっげー』のあとを続けられなかった。

文字通り、言い表せないほどの哀しみや寂しさ、せつなさだったのだ。

聡を直視していた将のトパーズの瞳が、降りてきた睫によってだんだん隠されていく。

将は目を伏せたまま、ついに聡から瞳をそらした。

「将」

聡は将の胸に倒れこむように飛び込んだ。

「ごめんね……」

温かい胸に語りかける。

「今日は、いろいろありすぎて……」

将の胸からは鼓動が聡にかすかに伝わっている。

「でも、信じて。私が好きなのは、将一人、だから」

鼓動をさらに確かめるように、聡は頬を将の胸に押し当てた。

「どんな罰でも受ける……。将のためなら……」

思いがけないところで聡の口から出た『罰』という言葉に将は思わず胸にすがる聡を見下ろした。

『罰』を受ける。ということは。彼女は『罪』を犯したことになる。

将のために犯す罪……。

そのインモラルでドラマチックな響きに無意識に聡を抱きしめる。

ちょうど顔をあげた聡と目があった。

聡の瞳にまた涙が溜まっている。

涙を溜めた瞳の上にある瞼がうす赤く腫れているように、唇もいつもよりぼってりとして濃いばら色になっている。

「泣き虫だな」

つぶやいた将は、少しため息をついた。やはり聡は、いとしい。

将がため息をついたのと同じタイミングで聡が洟をすすった。

二人は同時にゆっくりと微笑うと、互いに吸い寄せられるように唇を重ねた。

将と聡は久しぶりに、ベッドの上で静かに抱き合って眠った。

聡の転勤前は、ギプス足のせいで仰向けで手をつなぐしか許されなかったが、

半ギプスの今はこうやってお互いの体に腕をまわして、抱き合うことができる。

本当は将は、聡のすべてがほしかったけど、これでもいいと思うことにした。

ときどき聡は、将にさらに強くしがみつくようにしてきた。まるで発作のように激しく。

将は、聡がそうするたびに、優しく髪を撫でておでこに口づけをした。

いったい、博史の母の見舞いで、どんな傷を受けたのだろうか。

将は、それを詳しく訊こうかとも思ったけど、なぜか訊けなかった。

さっき聡の口からこぼれた『罰』という言葉。罰というからには罪があるはず。

すべてそれがキーワードなのだと思う。

将は聡の髪を、背中を、優しく撫でて続けてやることにした。聡が寝息を立てるまで……。

それが聡の傷を少しでも軽くするなら……。

寝付いたのが遅い二人が、まだベッドの上で寝息をたてている朝の時間。

玄関のチャイムがけたたましく鳴った。

ピンポーン、ピンポーン、ピンポン、ピポン……、と何度となく間隔を考えずに連続して押しているらしい。

最初の1回で二人とも目が覚めていたが、そのただごとならぬほどせわしない連続チャイムに、

聡はカーディガンを羽織ってあわてて玄関に出た。

将は、目をこすりながら自分の携帯を開いて、時刻を見る。9時前だった。

チェーンをはずすのももどかしく、ドアをあける。

そこには、博史が立っていた。

聡は博史が突然ここに来たことにも驚いたが、その様子にも思わず目を見開く。

髪はボサボサ、充血した目は憔悴しきったようで、あきらかに異様だった。

「どうしたの、博史さん……」

聡が言い終わるかどうかというところで

バシッ

という鋭い音がして、聡は玄関に倒れこんだ。

将は、その音に思わずベッドから立ち上がった。

倒れた聡は赤く腫れた頬を押さえて、博史を見上げる。

将が何か言おうとする前に、博史が聡を睨みつけたまま低い声を出した。

「おふくろが危篤だ」

１４０◆１２１~１３９話のあらすじ

もう帰宅予定の日曜日も夕方だというのに、山梨に出張した聡と連絡がとれずに、将は心配する。

いちおう将は、聡の部屋に戻って彼女の帰宅を待つが、月曜日の朝になっても帰ってこなかった。

将は『学校に直接いったのかも』という希望を持って登校するが、そこで待ち受けていたのは突然の担任交代の知らせだった。

聡の代わりに2年2組の担任になったのはヤクザのようにガラの悪い京極だった（１２１話）

将は事情を訊こうと職員室へ行くが、そこで聡が山梨に新設される学校の副校長として任命されたことを知る。

しかも多美先生ら職員も、理由などの詳しい事情は聞かされていないらしい。

京極は政治家の息子である将のことが気に食わないらしく、最初から目の敵にされる。

また、聡がはじめた教科書を使わないオリジナル授業にも難癖をつけ、

聡のつくったプリントをビリビリに破いたあげく、クラス全員に、教科書を忘れた罰、と正座を命じる。

将は京極に反発して教室を飛び出す（１２２話）

しかし、カバンや財布を教室に置いたままだった将は、家に帰るわけにもいかず、保健室へ行く。

そこで事情を知るのは校長と教頭だけだと保健教諭に教えられ、将は校長室へと急ぐ。

校長室をあけた将はそこに、父の秘書官である毛利がいるのを見る……。

一方、遡って土曜日、山梨の聡。

新しい学校というのは、電話もなく、携帯も通じないとんでもない山奥にあることを知り、愕然とする（１２３話）

校長室で父の秘書の毛利と会った将は、今回のことは毛利の差し金だと感づく。

とりあえず、その日は早退し、毛利の車でマンションに向かった将だが、

毛利の車を降りるなり聡の部屋へとタクシーを走らす。しかし、毛利に先回りされていた。

毛利は、将がマンションに戻らないと、聡が困ったことになる、と言い放つ。

この毛利のいままでの、裏の世界にも通じる冷徹な仕事ぶりを知っている将は、

聡に危険がおよんでは、とその場は毛利に従った。

……実は、この毛利に、将と聡を引き離すよう陳情したのは博史だった（１２４話）

迎えを呼ぶ電話さえない山の中の取り残された聡は、明日になったら歩いて降りればいい、と自分を励ます。

しかし翌日曜日、目覚めた聡は降りしきる雪に呆然とする。

それでも、無理やり降りようとした聡は、雪のつもった泥道に滑り、足を捻挫してしまう。

結局日曜の夜まで山の中に泊まるはめになる聡。

月曜日、山の中に訪れた宅配便の封筒をあけた聡は、自分がこの山の中の学校の副校長に任命されたことを知る。

急な転勤に聡は目がまわりそうになる（１２５話）

毛利にマンションまで送られた将は、独り部屋に残った瑞樹が覚醒剤をやっている現場に出くわす。

もう１１月から薬をやっているのだという。

「大悟が働いているのに……」との将の言葉に、瑞樹は涙する。

ローバーミニの中でさぼることにした将へ、待ち焦がれた聡からのメールが（１２６話）

ようやく呼ぶことができたタクシーで聡は麓に降りると、教頭に電話で急な辞令についての説明を受ける。

それによると今週一杯は東京に帰れないらしい。

聡は将に帰れなくなった自分の事情をメールするが、送り終わるとすぐに将から電話がかかってくる。

急に引き離された将と話しているうちに聡は涙が出てきてしまう（１２７話）

将は、なんで毛利がこんなことを画策するのか考えたがわからない。

一方山の中の聡には、たった一人で新しい学校の準備をするという忙しい日々が待っていた（１２８話）。

月曜の夜、大悟が仕事から帰ってきてから、将はマンションに置いて欲しいと頼む。

そして瑞樹が昼間、覚醒剤をやっていたことを打ち明ける。

大悟によると瑞樹は隠れてたびたび薬をやっているらしい。

高価な覚醒剤を購入するのに瑞樹はまた援助交際をしているのでは、と将は思う。

火曜日、将は登校したが、京極はクラス全員に『携帯を出せ』と命じる（１２９話）

いったん携帯を渡した将だが、休み時間に株取引ができないと気付き、職員室に出向いて京極に返却を迫り一触即発の状態となる。

多美先生のとりなしで将は引き下がるが、京極の英語の授業は強圧

的かつ、発音も悪く、生徒たちはみな聡を懐かしがる。

一方、木曜日の聡。

明日東京に戻れるとホッとする聡に、テレビのニュースが、近くで連続強姦殺人が起きていることを報じ、聡は震え上がる（１３０話）

金曜日。

今夜聡に会える、と浮かれた将は、いつもよりかなり早く学校に登校する。

たまたま日直だった将は、日誌を探して、校長室で校長、教頭、京極が話している内容を立ち聞きする。

それは、学校にわざと中退者を出して、キャッシュバック額を減らそうというのと、

あわよくば新しい予備校に取り込もうという策略だった。

一方、聡は麓に下りて、いまから東京に帰ろうとした矢先にまで面倒な業務を電話で言いつけられ、あわてて山の中に戻りあたふたとその仕事をこなす。

そこへ、不審者の侵入を告げる警報音が（１３１話）

警報音の正体は、山の中の学校に聡を迎えに来た博史だった。

博史の車の中で聡は、博史とは結婚できない、決心は変わらない、ということをはっきりと伝える。

だが博史は、気持ちの整理をしたいのと余命１年の母のために、

『冷却期間』ということにしてくれと聡に頼む（１３２話）

１週間ぶりに再会した将と聡。

二人はまるで『リバウンド現象』のように激しく抱き合い、口づけを交わす。

その行為はエスカレートし、二人は最後の一線を越える直前を迎える。

その最中に、教頭から仕事の電話が入り、聡はあっという間に衣服を身に着けて社会人に戻ってしまった（１３３~１３４話）

二人は居酒屋で夕食をとる。

聡は開放感とさっきの淫らな行為への羞恥心からつい飲みすぎてしまう。

酔った聡と、彼女を路上で抱きとめる将に眩しいライトが射抜くように照らす（１３５話）

ライトは毛利のベンツだった。

毛利は将にマンションに戻るように諭し、将はそれに従うしかない。

ベンツに送られて部屋に戻ってきた聡は、酔いが醒めて来て、ベッドの上でのさっきの行為に対する羞恥にさいなまされる（１３６話）

土曜日に博史の母を見舞う約束をしていた聡は、二日酔いをおして出かける。

一方、将は毛利の目をごまかすべく、いったん外出していた。

井口と待ち合わせをしていた駅で偶然聡を見かけた将は、彼女が博

史の車に乗るのを目撃してしまう（１３７話）

博史の母・薫を見舞った聡は、薫と二人になったときに、エメラルドの指輪を託される。

それは薫が博史を産んだときに姑からもらったもので、博史が結婚する相手にあげるつもりだったという。

ウソをつく限界を感じた聡は、泣きながら、博史とは結婚できない真実を薫に打ち明けてしまう（１３８話）

博史の車に乗る聡を一瞬疑った将。だが、すぐに博史の母の見舞いにいったということに思い当たる。

だが結局、将が聡の部屋を訪ねたのは夜遅くなってからだった。

泣きはらした顔の聡は、抱こうとする将を拒む。

いったん傷ついた将だが、聡の気持ちを確認し、二人は久しぶりに抱き合って眠る。

翌朝、早く博史が聡の部屋を訪れ、玄関に出た聡を殴る。そして母

が危篤だと告げる（１３９話）

141◆罪と罰2

危篤。

聡の人生に初めてじかに登場した思いがけない単語。

その重すぎる意味を噛み砕く前に、博史は畳み掛けてくる。

「お前……、おふくろに、何を言ったんだ！」

博史が、聡のことを『お前』なんて呼ぶのも初めてだ。

「何を言ったんだ……えぇっ？」

博史は、倒れてかろうじて上半身を起こした聡の目線まで腰を落とすと、聡の肩をがしっと掴んで詰め寄った。

そのままガクガクと激しく揺さぶりながら

「何を言ったんだ……何を言ったんだ」

だけを繰り返す。聡をゆさぶりながら、博史自身の乱れた髪もゆさゆさと揺れてますます乱れていく。

細い目は、狂人さながらに限界まで見開いて、聡を見据えている。

聡は、博史のそんな異様な顔から目もそらすこともできず、血走った白目のあたりを見ながら揺さぶられるままになっていた。

「やめろよ！」

そこへ割って入った将が、聡の体を奪うように、博史の手を遮った。

博史は無言で将のスウェットの襟元を掴んで、引っ張り挙げるように立ち上がると、猶予もなく将を殴りつけた。

大きな音をたてて、フローリングの床に将の体が倒れこむ。

「将！」

と叫びながらも、聡の脳裏に『下の部屋に響いてしまう』という常識がちらりとよぎる。

……それで聡は自分の心には冷静さが残っていることを自覚した。

しかし、それはすぐにふっとんでいった。

「お前のせいだ！」

博史は靴のまま、部屋に倒れた将に馬乗りになると、さらにその顔を殴りつけようとした。

「やめて！」

聡は殴りつけようとする博史を止めようとその腕にしがみついた。

しかし博史はすごい力で聡を振り払うと、将の顔を再び殴る。

振り払われた勢いでまた倒れた聡は、少しひるんだが、殴られる将を見て無意識に再び博史の横腹にタックルした。

「やめてー！」

聡の渾身の体当たりに、博史の体は将から離れて倒れた。

倒れた博史の上に、聡の体が重なっていた。

「やめて……博史さん。将は悪くない……」

聡の双眸からまた涙がほとばしりはじめた。

「悪いのは……私だから……。私が……いけないの」

聡の頬を流れ落ちた涙は、博史の頸のあたりを濡らした。

博史は、自分の上の聡を払うようにして跳ね起きると、

「母が……このまま死んだら、おまえらのせいだからな！」

と一吼えして走り去った。

建物中が振動するような大きな音をたててドアが乱暴に閉まって、階段を下りる音が響いた。

将は仰向けのまま、聡は座り込んだまま、言葉もなく呆然として音が消えるのを待っていた。

『死』というもっとも重い単語が、二人を沈黙させていた。

そんな中、先に言葉を発したのは将だった。

「大丈夫か、アキラ。いてて……」

聡を気遣いながら体を起こす。聡はそれでハッと気付き、

「将、足は？」

と起き上がった将に駆け寄る。

「大丈夫。足もたぶん大丈夫」

将は気丈にも答えたが、口の端から紅い血が流れている。

ティッシュで拭こうとする聡だったが、将は立ち上がると洗面所へ行き、血混じりの唾液をブッと吐いた。

口の中も切れているのだ。

そのまま将は水道を出して口の周りを洗うと自分の顔を見た。

殴られた頬がアザになっている。

「……あいつ、こんなこともできんだな。もっと上品なやつだと思ってたけど」

洗面所から出た将は、聡から差し出された保冷剤を受け取りながら、心配させるまい、と笑顔を見せた。

「将……、ごめんね」

「……ほら、また泣く。本当にアキラは泣き虫だな」

また涙を浮かべる聡の頭を、将は笑いながらくしゃくしゃと混ぜた。

そのとき、聞きなれたユーモラスな鈍い音。将の腹からだった。

「ほら、腹の虫も泣くなってよ」

「将ってば……」

ようやく聡も涙の下から笑顔を見せた。

「ごめんね。素うどんだけど」

「でも稲庭うどんじゃん。いただきまーす」

1週間家をあけて、聡の部屋にはほとんど食料が残っていなかった。

その中からどうにか見つけた乾麺を茹でて朝食代わりにした。

食パンもあったけど、口の中が傷だらけの将に、トーストは厳しいだろうと思ったのだ。

だけど、将はそんなことは気にしないようで

「口の中を切るたびに絶食してたら飢え死にするぜ」

と笑い、「うめえ。稲庭うめえよ」と赤や青に内出血した痛々しい顔ながら豪快にうどんを啜りこんだ。

「……でさ、アキラ、博史のおふくろさんに何いったの？」

聡がうどんを食べ終わるのを見計らって将は訊いた。

聡の倍量だったにもかかわらず、随分早く食べ終わった将は、昨日セットしたまま置きっぱなしになっていたコーヒー豆に湯を注いでいる。

「うん……」

うつむいた聡は、だし汁が残るどんぶりの中をのぞいているように見えた。

「言いたくなかったら、いいけどさ」

将は淹れたコーヒーをマグカップに注ぎ分けながら、フォローする。

聡は無言で、テーブルの上のどんぶりを将の分まで重ねてキッチンに持って来た。

一人部屋の狭いキッチンではコーヒーを淹れる将と、どんぶりを流しに置く聡は触れ合うほどになる。

ほのかな体温が磁力のように互いの体を吸い寄せる。

腕が互いの体にのびて、そっと抱きしめあう。二人はしばらく抱き合ったまま流しの前で佇んだ。

聡は、将に昨日のことを打ち明けた。

博史に別れを告げたものの、母のために冷却期間ということにしてほしい、と頼まれたこと。

別れを隠したまま、昨日見舞いに行ったこと。

その博史の母から、姑の形見のエメラルドの指輪を託されてしまい、婚約破棄を隠せなくなった聡は、

思わず本当のことを打ち明けてしまったこと。

「……でね。博史さんのお母さんね。……それでもまだ、博史さんのほうが、

何かあたしにいけないことをしたんじゃないか、って心配していたの」

二人ベッドに寄りかかって、床に足を投げ出すように座っていた。

将の肩に体重をかけるように、聡は寄りかかって、ぽつりぽつりと

打ち明ける。

将はそんな聡の肩を抱き、ときおり相槌を打ちながら、肘を曲げて髪を優しく撫でる。

その博史の母・薫が、急に危篤になった。

きっかけは……やはり聡の告白なのだろう。

昨日まで元気そうに見えた薫。

それは、おそらく博史の結婚、という喜びが彼女の生命力にとって大きな支えだったのだろう。

聡は、彼女の生きる支えを奪ったことになる。

聡は別れ際の薫の声を思い出す。

『さようなら聡さん。いろいろと……ごめんなさいね』

最後まで気丈な態度だった薫だが、生きる支えを失って、聡以上にボロボロだったのだ……。

あのとき、彼女はどんな顔だっただろうか。聡は自分がつらすぎて覚えていない。

身勝手な自分。聡は改めて、己の罪深さにおののいた。

「いつか……天罰を受けるね。きっと……」

天罰。

そのあまりに重い響きが聡の唇からこぼれるのを聞いた将は、聡の肩を少し強く抱き寄せる。

聡にのしかかる重みを、少しでも分け合おうと無意識に感じての行動。

「……アキラ、そんなことないよ。俺だって……もしも俺がアキラでもウソはつき続けられないよ」

告白を終わった聡の頬に、また涙が筋をつくっていた。

将は、聡を抱き寄せた。そして頬に流れる涙を舐めてみた。

それは温かくて、優しいしょっぱさだった。生きている聡。

17歳の将は、26歳の聡よりもたぶん、『死』を多く、かつ生々しく体験している。

母の死。そして自分が殺したヤクザの死。

どちらも相応に重く、質は違えど辛い思い出だった。

そして、いま。もしかすると博史の母の死にかかわろうとしている……。

将は犬のように聡の頬に流れる涙を舐め続けた。

聡に圧し掛かる辛さを、ソフトクリームのように、少しでも舐め取

って減じることができれば。

将自身も気付いていないけど、具体的に例えるなら、そんな気持ちで将は聡の頬を流れる涙を舐めていた。

……その将の唇に、頬より柔らかで滑らかで温かいものが重なる。聡が唇を重ねてきたのだ。

将は聡の唇の中に、今まで涙を舐めていた舌を優しくしのびこませる。

涙に比べると、唾液はさらに温かく、そして甘かった。

聡の口の中で、混じり合う二人の唾液。二匹の軟体動物のような舌。

聡は、将の唾液に混じる鉄の味を……将は慣れてしまってもはや感じなかったが……感じた。

こんなふうに、血の混じったキスを、前にもしたことがある。

聡はぼんやりと思い出した。

あのとき……拉致された聡を助け出そうとして、殴られた将。

聡は将と舌をからませたまま、軽く閉じていた目を思わず開けた。

焦点をあわすのも難しいほどの至近距離にある将の顔。彼は舌を動かしながら目を閉じている。

聡は目を開けたまま、惰性で将と舌をからませながら、今生まれた

考えにおびえた。

それは……

聡と出会ってしまったことで、将はつらい目にばかりあっているのではないだろうか……

という恐れだった。

恐れは思い出の数々とつながることによって

『聡が将を辛い目にあわせている』

という確信に変わりそうになっていき、それは聡の心を次第に侵食していった。

１４２◆運命のひと

自分こそが、将を辛い目にばかりあわせているのではないか。

自分は将を不幸にするのではないか。

そんな考えに囚われた聡の舌はいつしか動きを止めていた。

将が、そんな聡のようすに気付いて、唇を離した。

「どうした……？アキラ」

切れた唇を唾液で艶めかせた将は、心配そうに聡の顔を覗き込むと、聡の体を抱き寄せた。

「心配するなよ、アキラ」

その大きな手で聡の背中を優しくなぜる。

将の腕の中に抱かれた聡は、そのぬくもりと将の匂いに酔うことで、その考えを振り払おうとした。

しかし、白い布についた油性インクのように、心の奥底にいったん染み付いてしまったその考えは、聡を離れることはなかった……。

日曜日は、昨日の雨を忘れてしまったかのように、よく晴れた。

しかし朝の出来事もあって、二人は部屋で息をひそめるように、小春日和の午後を過ごした。

将にとっては……部屋の外に出たら、毛利が見張っているかも、という恐れがあった、というのもある。

だらだらと寝巻きのままベッドにねっころがって、テレビを見たり、ときおり抱き合ったり、口づけしたりして、時間が過ぎていった。

テレビの感想などのほかは、あまり言葉も交わさなかった。

それは……やはり二人にとって、今朝伝えられた、博史の母の容態が気になっているからだろう。

もし、訃報がもたらされたら……。そんな緊張感がつねに部屋に張り詰めていた。

それに耐えられなくなったとき、聡は将にしがみついた。

将はそんな聡をいつでも抱きとめ、髪や背中を撫でる。

「大丈夫だよ」と何度も耳元で囁く。

それに、いったんは癒される聡だが、そうこうしているうちに、心の底にこびりついた『自分は将を不幸にする』

という考えが、将の優しさに照らされてまるで浮き彫りになったように蘇ってくる。

そんな繰り返しだった。

月曜日の早朝。

聡は、朝一番の特急『あずさ』のシートに身を沈めた。

朝９時に山の中の学校に到着する用務員夫妻を出迎えるためだ。

１泊のつもりだった先週よりも、今週はかなり荷物が多くなっている。

シートに座った聡はほっとして、明けたばかりの東京の景色を窓の外に見つめた。

青空の下、連なる家々にビルが次々に後ろへと飛んでいくようだ。

さっきまで一緒にいた、将のぬくもりも、声も、すぐ近くにいるかのように思い出せるのに、

時速１２０キロでどんどん遠ざかっていく――。

その中で、聡は窓の中の東京に、将の顔を投影した。

それははっきりと聡の顔を見ていた。そして。

『１８になったら、結婚しよう』

窓の中の将は、ゆうべのセリフを繰り返した……。

昨日、当然のように将は聡の部屋に泊まった。

夕食の、久しぶりになった聡の手料理を将は『うまい、うまい』と、食欲のない聡の分までたいらげた。

ベッドの上で抱き合って横たわった二人だが、昨日と違って将は聡の素肌に手を出そうとはしなかった。

「しょう……」

スタンドも消した暗がりの中、聡は将の胸の中で訊いた。

すべての明かりを消しても、決して真っ暗にならない東京の夜だ。

玄関の横に、明日のための聡の荷物が準備万端整えてあるのが、うっすらと暗がりに見える。

「なに？」

まだ眠っていなかった将は、即座に返事をする。

「今日は……なにもしないのね」

「なんか、してほしい？」

将は聡を抱いた腕に少し力を込めると、いたずらっぽく囁いた。

「バカ……」

ほとんど吐息だけで甘く呟くと聡は、将の胸に顔を押し付けた。

「エッチなこと……する気分じゃないだろ、今日は」

背中を撫でる将の声は優しい。聡の気持ちをわかってくれているのだ。

「それに、１８になるまでダ、メ、なんだろ」

おとつい、聡が酔っ払って言ったことをちゃんと覚えているのだ。

聡はなんだか恥かしくなって裸足の足先をもぞもぞと動かした。

それは将の足に触れた。すると将も膝下を聡のそれに擦り付けるように動かしてくる。

半ギプスを包む包帯の乾いた感触が温かくて、聡は何故か「もう」と声を出した。

「何が、もう、だよ」

将は低く笑いながら囁く。二人はクスクス笑って足を優しくからめあった。

ひとしきり足を擦り付け終わって、将は聡を抱いたまま、ふぅ、とため息をついた。

そして「アキラ」と呼ぶ。聡は将の胸にうずめていた顔をあげた。

将は聡を見つめていた。真剣な顔をしているというのは暗がりの中でもわかった。

「アキラ、俺さ、ずっと考えてたことがあるんだ」

「……なあに」

将は、聡の背中を再び撫で始めた。

「あのさ。俺が18になったらさ、結婚しよう」

言い終わると、将は笑顔を浮かべた。

聡は……あまりにも突拍子もない、将からのケッコンという発音が意味と結びつくのに、

習いたての外国語を理解するほどに時間を要した。

そしてそれが求婚……プロポーズの言葉だとわかっても、何を答えていいかがわからず

「将……」

と、とりあえず名前を呼んで、呆けたように、暗がりの中の将の瞳を見つめるしかなかった。

将は、もう一度ゆっくりと繰り返す。

「結婚しようぜ、アキラ」

低いけど、まだ１０代のあどけなさの残る口調での求婚が繰り返された。

聡は胸が苦しくなった。苦しいほどの、狂おしいほどのせつなさに……もう一度将の胸に顔をうずめた。

温かい胸とゆっくりとした将の鼓動に、少しだけ落ち着きを取り戻すと

「そんなに……やすやすと、結婚なんて口にするもんじゃないわ」

聡は苦しい呼吸の中から、大人らしい言葉をようやく探し出して口にした。

「やすやすと、じゃないぜ」

将は自分の胸に聡を押し付けるように抱きしめた。

「俺さ、離れてみて、あらためてわかったんだ。アキラなしじゃ、俺やってけないってことが」

二人が片時も離れないようになったのは、つい最近と言えるが、それがまるでずっと続いていたことのように将は言った。

「こんなに好きあってるんだ。離れて暮らしてるほうが不自然だよ。

それに18になってセックスするなら、結婚したっておかしくないだろう」

将は古典の授業で得た知識なのか「平安時代なんかだと、セックス＝結婚だろ」と、おどけて付け加える。

「俺、弁当屋の頃から数えると、もう1年半もアキラを好きなんだぜ」

1年半。だけど、聡は4年近く好きだった博史からあっけなく去ったばかりである……。

そんな現実を思い出した聡は、将に別の現実をつきつけてみる。

「だけど、将。18になってもあなた、まだ高校生でしょ」

「カンケーねえよ。高校生なのが問題なら、高校なんかやめてやる」

「そんな……」

聡は将の胸の中で絶句した。なのに将の腕の中から離れられない。

「ねえアキラ。アキラは俺と結婚したくないの？」

将は聡を依然強く抱きしめながら耳もとで呟いた。

「将……」

将の熱い血潮が聡に流れ込んでくるかのような抱擁。もうこれで何

度目だろうか。

聡はそれを愛していないといったら嘘になる。

熱い体温も、とうに慣れたはずの鼓動も。声もぶっきらぼうな話し方も、顔も、歩き方も……みんな愛している。思えば狂おしくなるほどに。

自分のものにしたいか、といえばもちろんだ。

将は、聡の答えを聞く前に「俺は」と思いのたけを吐露しはじめる。

「毎日アキラのことばかり考えてる。アキラなしじゃ生きられない」

しっかりとした声で将はさらに続ける。

「俺がまともに笑えるようになったのは、アキラのおかげだ。アキラに出会うまで俺、死んだも同然だったし……」

将の声の後半はどんどん小さくなっていって、最後に「クサかった……かな」と照れた声が加わった。

「だけど、本心だから」

でも最後に、将ははっきりと言い切った。

母が死に、厳格な上に多忙な父、義母の優しさはまやかし、そして唯一の親友は鑑別所。

愛に絶望し、冷たくこごえていた16歳の将の唯一の温かさが聡だ

った。

そしてその聡と愛し合うようになった、幸せな今。

将は一生聡を離すまい、と自分の中で誓っていた。

そして願わくば、個人的かつ肉体的なつながりだけでなく、

誰もが認めるすべての次元において聡とつながりたいと急速に思い始めたのだった。

やっと、聡が将の胸の中で口を開いた。

「将……。あたしも将を好き。誰よりも将が大切だよ……だけど」

低めの優しい声で、ゆっくりと将への愛を語る聡。

将は聡の声があたる胸のあたりが、ほんのり温かく、溶けたように柔らかくなるように感じた。

だけどそのとき、聡はたしかに『自分は将を不幸にする』のではないか、ということを恐れていた。

そして、将が早すぎる結婚を望むのも、その一環のように思えたのだ。

「だけど、将、考えてみて。まだ18でしょ。これからもっといい人に出会うことだってありう……」

「絶対ない。アキラ以上の女なんて俺にはありえない」

将は聡の言葉を遮って、断言した。

「１８だろうと２８だろうと、８８になっても変わらないって。アキラは、俺を変えた、たった一人の運命のひと、なんだから……」

一言一言、区切るように聡に言い聞かせる。

『運命のひと』という甘くドラマチックな響きに聡は思わず顔をあげて将を見る。

将の、聡に向けた静かな微笑みは、暗がりの中でもはっきりとわかった。

「何十年経とうと、何百年経とうと、死が二人を別つとしても……だっけ」

将は結婚式で登場する牧師の言葉から一部を引用して、一瞬冗談めかして笑う。

だけど、すぐに真顔に戻って最高級の愛の言葉を続けた。

「俺はアキラだけを愛し続けるよ。神にも誓えるよ」

今度は『クサかったかな』とは付け加えなかった。

温かい波が聡の中でどんどん満ちていく。

急激にそれは聡の胸を満たしていき、心の壁に激しく打ち寄せた。

決壊寸前。胸が張り裂けそうになって、将の胸に顔をうずめた聡は、瞳からあふれでたものをこっそりと将の着ているスウェットでぬぐった。

聡が泣いているのを覚った将は、

「……とりあえず、俺の決意、だから。俺の誕生日まであと2ヶ月、アキラ、いい返事待ってるぜ」

将は、幸せな気分で、いとしい聡をもう一度抱きしめた。

将は、聡の気持ちはわかっていると、少なくともそのときは、そう思っていた。

しかし……思わず泣くほど感動しながらも、その思い出すだけで胸がキラキラしたもので満たされるような言葉は、

将の若さゆえの、純粋さや一途さのほとばしりに近いものだと、聡は解釈していた。

まさか、将のその言葉どおりに、自分が将の生涯最後の恋人になるとは、今の聡には想像もできないことだった。

１４３◆ボイコット

週末が終わってしまった。将はため息をついた。

聡が東京に帰ってきていた、夢の時間。

今朝早く、出発する聡のタクシーに便乗して、将は自宅マンションに戻ってきた。

別れ際に、運転手の目を気にする聡にかまわず、後部座席で将は聡と唇を重ねた。

そのぬくもりはまだ生々しいのに、将がいるマンションの廊下は思わずふるえあがるほど寒い。

今日も天気は好いらしく、その分冷え込みもひどい。

マンションでは、早くも大悟と瑞樹が起きていて、朝食を食べているところだった。

「はよ……、将、なんだその顔？」

大悟が、顔に赤や青のアザが残る将の顔を見咎める。

瑞樹も目を見開いている。

「ああ、コレ。なんでもない。……いまからハケン？」

将は、あまり深く追求するなという意味で、大悟に逆に訊き返した。

大悟はそれをさとったのか、

「ああ」とだけ答えた。

瑞樹までジーンズ姿なので訊くと、今日から一緒にハケンに行くことにしたのだという。

朝食を終えた二人は、あわただしくも、仲良くハケンへ出かけてしまった。

将は取り残されて一人になってしまった。

――しかし好都合。

これで、学校をサボれる。

将は自分のベッドに横になった。

それにしてもよかった……瑞樹が真面目に働こうとしているのはいいことだ。

これがヤクと離れるきっかけになってくれれば……。

まだ寝足りない将はすぐにウトウトとしてきた。

と、そのとき。携帯が鳴った。

「なんだよぉ～」

寝付いたばかりの将は、目をあけるのももどかしく携帯を手探りで取った。

井口からだ。

「なんだよー、朝っぱらからよぉ」

めいっぱい不機嫌な声で出る。

「おう、将、おまえさ、今日学校こいよ、絶対」

「あんだよー。そんなことかよ。……カンケーねー だろ、切るぞ」

まだ眠い将は、井口がなんでいちいちそんな電話をかけてくるのかもちろんわからない。

「おい、切るなよ。将」

井口があわてて大声をあげる。

「ヤクザ（京極）のヤツ、今度から一人でも無断欠席がいたら、クラス全員のポイントをさっぴくなんて言い出しやがってさぁ。ホラ、お前、金曜サボったろ」

「ほわぁ〜……マジかよ」

返事をする将は、まだアクビまじりだ。

「マジだぜ。いいか、俺は伝えたからな。絶対欠席すんなよ。わか

ったな」

井口は、しつこく念を押してようやく電話を切ってくれた。

将は電話を持ったまま、そのまま仰向けに目を閉じた。

――知るもんか。

眠気に支配された将の思考は無視しろ、と指令を出す。

――畜生！

十数秒後、将は、目をカッと見開くとガバッと起きた。

「クソー、あの京極のヤロー！」

とブツクサ言いながら制服に着替えた。

タクシーに乗った将は、金曜の件を唐突に思い出した。

ちなみに、半ギプスになったとはいえ、まだ徒歩１０分の学校に杖をついて行くのはしんどい。

ゆえにまだタクシーを利用しているのだ。

金曜の件……あの京極の強圧的な指導は、中退者をわざと出してキ

ャッシュバック額を少なくするためのものだということ。

そして出た中退者は、あわよくば、山梨に新設中の中退者用の全寮制の予備校に取り込もうという陰謀。

思い出してしまった将は、だんだん学校に行く気が萎えてくるのを感じた。

が、タクシーは校門前についてしまい、

「おう、鷹枝将」

と、タクシーを降りるなり、竹刀を片手にしたヤクザ教師京極に目をつけられることになった。

「金曜日は、無断欠席で、どこにいってたんだァ、ケンカか？オイ」

京極は竹刀で地面を突付きながら、斜に構えて将にすごんでくる。

将の顔のアザは『ケンカ』と勝手に決め付けたようだ。

将は、無視して先に進もうとしたが

「オイ、聞いてンのかァ！」

京極はいきなり、竹刀で地面をバシッと叩いて軽くキレるパフォーマンスをした。

将は面倒くさそうに横目だけで振り返ると

「足。ギプスを半ギプスにした。届忘れただけだっつの」

と言い訳してとっととそこから立ち去った（本当はサボリだったが）。

「あ、将！……ちゃんと来たか、あ～よかったぁ」

将の姿を入り口に見つけた井口は、ほっとしたように教壇に座り込んだ。

「なんだよ」

将はステッキをつきながら、教壇に座り込んだ井口の前を通り過ぎて自分の席についた。

「もー、金曜お前がサボったおかげで、あのヤクザ、さんざんだったんだぜー！」

井口は将の顔のアザをみてもなんにもいわない。

そういうのに慣れているというのもあるが、今は、アザよりヤクザ京極の仕打ちを訴えたいらしい。

「へーそー」

将は興味なさそうにカバンを机の横にかけると、机の上につっぷし

た。

「将、教科書持ってきてるの？」

「ない」

井口の心配そうな問いに将はさも面倒くさそうに答える。

「もー。俺、また借りにいくのかよ～？」

井口が抗議する。英語の教科書を将はとうに紛失している。

だからいつも井口が1組から借りてきてくれてるのだ。

「いーよ。別に借りなくても。フン」

「そういうわけにはいかねーだろ。ヤクザがまたキレるし」

すると、将の斜め後ろから、教科書が無言で差し出された。

女子クラス委員の星野みな子だ。

「星野サン？」

将は、教科書が差し出されたほうを振り返った。

「部室に先輩のが置きっぱだったから。たぶん今年のと同じだから、使えば」

星野は将の顔をみずに、そっぽを向いて答えた。

ツンと横を向いた眼鏡の横顔は、なかなか美人だということに将は今気付いた。

漫研所属、どっちかというとアニオタ腐女子系で、この学校で珍しく勉強ができる星野である。

彼女のことを美人だなんて気づいているやつは誰もいないに違いない。

「……どうもありがとう。星野サン」

将は素直に星野に礼を言った。

星野はあいかわらず将から目をそらしていたが、その頬はほんのりと染まっていた。

乱暴に引き戸が開くのを合図に、チャイムより早めにＨＲが始まるのも、すでに日常になりつつある。

京極はズカズカと教壇に登ると、

「今日は、無断欠席はいないようだな」

とわざわざ将のほうをみて言った。

しかし当の将は、わざとらしく窓の外に目をそらしていて、京極の

嫌味にはまるで気付かない。

京極は、チッと舌打ちをすると、全員の出欠を順番に取りはじめた。

「松岡。……松岡は無断欠席か」

生徒たちは少々ざわめいた。

その見た目からして弱弱しい松岡は、いたって真面目で無断欠席などしたことがないからだ。

鼻をほじっていた将は、振り返った。なるほど、松岡の席はあいている。

京極は、そのまま最後まで出欠を取ったところで、いきなりバシッと教卓を竹刀で叩いた。

生徒がのけぞるように身を固くする。

「……俺が金曜日になんていったか覚えてるよな」

教壇の上から、生徒らを睥睨する。

「一人でも、無断欠席がいたら、お前ら全員１００P引きとな！」

生徒一人一人の目がせつなそうに歪む。沈黙こそ守っているが

『そんな殺生な……』という声が聞こえてきそうだった。

そのときだ。ガラッと前の引き戸が開いて、

「すいません。遅くなりまして」

と息をはずませて、松岡が飛び込んできた。

クラス中の目が松岡に集まる中、彼は教室に入るなり前のめりにかがむように倒れこんだ。

ゼイゼイという息に、ヒューヒューという音が混じる呼吸は誰が見ても体調が悪そうだった。

京極だけが教壇の上から、床に手をついて苦しげな松岡を平然と見下ろして

「あぁっ？遅くなった、だとう？」

と威嚇の大声をあげる。

「理由は！届は出てないぞ！」

「す……すいませ……ん。登校中に……急に……発作が」

理由を述べる松岡の喉からは、ヒューヒューという苦しげな音が響いた。

それは、どんなに鈍い者でも呼吸困難の苦しさを想像できるほどの音だった。

現に一番前の真田由紀子などは、自分が呼吸困難になっているような苦しげな表情に思わず変わっている。

「発作だァ……？」

京極は教壇をドカドカと降りると、床に手をつく松岡の襟首を乱暴に引っ張りあげた。

はずみで、松岡の喉から咽るような咳が立て続けに出た。

「たるんでるからそうなるんだ！」

そういって、叩きつけるように引っ張り挙げた襟から手を離した。

松岡は、倒れこみはしなかったものの、体を曲げて苦しげに咳を続けた。

京極は「ケッ」と吐きすてるように言うと

「無断遅刻は、無断欠席同様、連帯責任と俺はいったはずだ」

とクラス中に聞こえるように怒鳴った。

「全員５０Ｐ引き！」

「えー」

今度は、やや控えめに抗議の声があがった。

「そ、そんな」

松岡も咳で赤くなった顔を泣きそうにゆがめた。

彼のせい……彼の発作のせいでクラス全員が咎を受けるのが彼には耐えられないのだ。

「先生！」

とうとうクラスの皆を代表して丸刈りの兵藤が立ち上がった。

「松岡くんは、喘息持ちなんです。大目に見てもらえませんか」

兵藤の言うとおり、松岡は日頃から鼻炎に喘息とアレルギー系の慢性病に悩まされていたのだった。

兵藤が、京極の目をまっすぐに見据えているのを将は見た。

「ふっ」

京極は兵藤に向かって斜に構えると、軽く笑った。次に

「そんな病気、甘えだ」

と言い放った。

「ヒドイ！」「ひどすぎる」

クラス中がざわめくのを、京極は竹刀で一喝する。

「だが！」

シンと静まり返った教室に京極は偉そうに言った。

「今回は特別に大目に見てやろう。全員３０Ｐ引きにしてやる」

生徒たちは不満を飲み込んで押し黙った。

「お前も３０Ｐ引きでいい。そのかわりに罰を受けろ」

と京極は松岡に向き直ると、黒板にチョークでなにやら文字を書き始めた。

書き終わると、京極は松岡に、

「お前は、次の俺の授業までずっとここに座っていろ。命令だ」

黒板に書いた文字の下の教壇に正座することを命じた。

皆固唾を呑んで、松岡を見守った。

松岡は、うつむくと、京極の言うとおり教壇に座った。

その頬には耐えられなかったのか、涙が流れていた。

黒板にはこう書いてあった。

『私は、たるんだ精神のせいで、病気持ちです。それでクラスに迷惑をかけてしまいました。

このままでは社会のお荷物です。負け組決定です』

もはや罰を超越している、ひどい屈辱を、京極は松岡に与えている

のだ。

将は座ったまま、京極を睨みつけた。

ＨＲはやや延長して終わった。

授業開始まで7分しかないが、何人かの生徒たちは心配そうに、前に座らされている松岡のところに集まった。

松岡は、涙にうるんだ目のまま、休憩時間だというのにずっとそこに座っていた。

「みんな、ゴメン。俺のせいで……」

としきりに謝る。

「なんだよ松岡、お前、そんなところに座っている必要ないよ」

とカイト。カイトは茶髪のワルながら、ゲーム会社の社会見学以来、松岡と親しいのだ。

「そうだよ」

兵藤もうなづく。

だが一一不良のカイトが松岡に同情的な態度なので、表立って松岡を非難するものはいなかったが、

、なんで松岡のせいで自分のポイントが減じられないといけないのか――

生徒の中には、そんな不満を持つ者がいるのも明らかだった。

遠巻きに集まる冷たい視線を感じるのか、松岡はかたくなに、そこに座ったままだった。

そして京極の書いた言葉に直接傷ついただけでなく、ナイーブな松岡は自らを深く傷つけてしまっているのだ。

将は、自分の席から立たずに、松岡の悲しげな顔を見つめた。

――こんなことまですんのか。金のために……。

まず、京極に腹が立った。そして次に彼のそういう行動を容認かつ推奨している学校に。

さらには、自分のポイントのことしか考えないあさましいクラスメートに。

将の中の怒りは、熱く燃え上った……。

将はついに立ち上がった。

ステッキをついて、松岡のいる教壇に上がる。

背の高い将に皆の注目が集まる。

将は黒板消しを取ると、いとも簡単に、松岡の後ろに書かれた言葉を全部消してしまった。

そのまま、松岡の後ろを通り過ぎて、前の引き戸から廊下へ出る。

その手にはいつのまにかカバンを持っていた。

「将、どこいくんだよ。あとちょっとで授業始まるぜ」

井口が将の背中に、大声で訊く。

クラス中の皆が将の動向を見守る中、将は、ゆっくりと振り返ると皆に聞こえるようにはっきりと宣言した。

「俺、授業ボイコットする。全部」

１４４◆ボイコット２

「俺、授業ボイコットする。全部」

将のボイコット宣言にクラス中の皆が目を丸くした。

「お、おい。そんなことしたら、ヤクザ、いや京極が」

井口が身を乗り出して、止めるべく立ち上がろうとしたところで

「僕も付き合う」

と澄んだ声がした。丸刈りの兵藤だった。

兵藤は凛とした迷いのない顔で席に戻ると、いったん机に入れた教科書をカバンの中に戻し、将の後に従った。

「……あたしも、行く」

スクッと立ち上がったのは、女子クラス委員の星野みな子だった。

手早く教科書をカバンに入れて、将と兵藤の後を追う。

さすがにそれ以上、立ち上がる者はいなかったが、

将だけでなく、真面目な兵藤に星野がボイコットに加わったことで動揺が広がっていた。

中には

「あんなことしたら、また連帯責任とかいわれんじゃないの？まったく無責任なヤツらだよなー」

と、とばっちりのポイント減を恐れるあまり、あからさまに非難するものもいた。

教室に残った井口は、非難したやつの顔を横目で睨みつけた。

金髪をやめたとはいえ、ガタイが大きく、普通にしていても目付きがもともと悪い井口に睨まれて、そいつは黙り込んだ。

しかし井口もポイント減は避けたいクチである。

井口は、なんとか無事卒業して、もらえるキャッシュバックを、あの引きこもりの兄がいる暗い家からの独立資金に充てようと計画している。

そいつがグチをいいたくなる気持ちもわからなくはなかった。

将たち3人はとりあえず視聴覚室で作戦会議をすることにした。

将が、視聴覚室の一番前の椅子にどっかりと腰掛けたとき、1時限目の始業のチャイムが鳴った。

「これからどうする」

将の後ろに座った兵藤が訊いた。

「サボっちゃおうか」

半分ふざけて答えた将に、

「サボリとボイコットは違うでしょ」

と同じく後ろに座った星野みな子が軽蔑したように将を見た。

「どう違うのよ、星野サン」

将は振り返ると、みな子の机に頬杖をついた。

一瞬、キスができるほどの距離まで近づいた将の顔に、みな子はあわててのけぞった。

「だ、だからぁ。ボイコットってのは何か意志を表明しないと」

一見鋭い印象の、男性的な切れ長に見える将の目。

それは整える必要のない端正な眉毛ゆえそう見えるのだ、とみな子は初めて知った。

眉の下の目は、睫が長く、大きな瞳を持つ二重瞼である……というのは至近距離まで近づいた者だけが知る秘密だ。

そんな距離に近づいたら最後、その切なくも甘くも見える瞳に、女は簡単に陥落してしまうだろう。

……それを垣間見てしまったみな子は、ただドキドキする。

本人は、といえば、自分がそんな罪作りな目をしているとは、まるで気付いてないらしい。

「なるほどね」

将は、あわてたみな子にまるで気付かず、前を向くとカバンの中からレポートを取り出した。

そして

「本当は、パソコンで作成したいよなあ、こういうの」

などと言いながら、机に屈み込んで、なにやら文字を書いている。

みな子はまだ、想定外のドキドキをもてあましながら、その肩幅を盗み見る。

将のことをイケメンだと騒いでいるのは、主にギャル系の女子生徒である。

みな子たちオタク、すなわち二次元を愛する女子からみれば、将は『ヨゴレ』過ぎていた。

一一何を、誰とどんな風にどれだけしているかわかったもんじゃない。

みな子らから見ると、将はてんで遠い存在だった。

だけど……みな子は思い出している。

1年のときに偶然見た、将の意外な優しさを。

あれは5月の放課後だった。みな子は教室で漫研のクラブ活動に励んでいた。

漫研も部室はあるが、狭い部室は漫画雑誌や同人誌であふれんばかりになっているので、

実質の活動は教室で行うのが通常だった。

勉強ができるみな子は、もちろんこの学校を志望していたわけではない。

滑り止めの学校の入試日、運悪く虫垂炎になってしまった。

ランクを落として受験した女子高も、必要以上に緊張したせいなのか、落ちてしまい……

まったく腑に落ちない状態で荒江高校に入学したのだ。

そんなみな子が漫研に入ったのは、たまたま入学式のときに隣に座った子に誘われたからだ。

聡明なみな子は知っている。こういう『頭の悪い』学校に限ってイ

ジメやシカトが激しいことを。

特に自分のように……

ギャルでもなく、サービス精神旺盛なしゃべりも苦手で、マイペースで、

プライドをこっそり隠し持っていて、下手に勉強さえできてしまう生徒は、

女子生徒にとても嫌われやすいタイプであるというのは、みな子が中学時代に学んだことだった。

だからこそ、早めに『どこかに……所属する』ということが重要だ、とみな子は考えた。

低偏差値校の女子は、だいたいギャルかオタクに2分されるらしい。

ギャルにはどうしてもなれないみな子は、学校ではオタクに属しておけば安心だ、と漫研に所属することにしたのだ。

次の同人誌は新人特集だという。どんな漫画を書こうか。

陽の当たる校庭をぼんやりと眺めながら、みな子は悩んでいた。

みな子はイラストは嫌いではなかったが……むしろ巧いと人から褒められるほどだったが、話を考えるのは少し面倒だった。

鉛筆を軽く紙の上に走らせる。それはみな子好みの美少年キャラの顔になっている。

校庭に再び目を移すと、なぜか制服のまま、3人の男子がサッカーを始めたところだった。

たぶん上級生だ。制服のだらしない着こなしでわかった。

いや、サッカーではなかった。

白いビニール袋に入れたゴミをサッカーのゴールに向かって蹴りこむ、という遊びを一人一人順番にやっていた。

何が面白いのか、ゴールに決まるたびにゲラゲラと腹を抱えて笑う。

下品な笑い声はみな子のいる窓辺まで届いた。

舗装していない校庭は夕陽の中で、みな子が前にテレビで見たサハラ砂漠みたいな色になっていた。

陽がかなり傾いているのが少年たちの影の長さでわかる。

みな子は、その時点では何も気付かなかった。

2人ほどがゴールを決めた時点だった。

校庭の塀を乗り越えて、猛スピードで一人の少年が駆けてきたかと思うと……

ゴールを決めたばかりの男子を思い切り殴りつけたのだ。

その殴り方は鮮やかで、身のこなしは素早く……アニメの1シーン

を見ているようだった。

私服の少年は、上級生より小さくみえたのにダントツ強かった。

遊んでいた上級生がほうほうの体で退散するのに10分もかからなかった。

少年は、ゴールの網の下に転がっていたゴミ袋を拾い、縛ってある口を開けた。

見ていたみな子は思わず『あっ』と声をあげた。

ビニールの中からは血だらけの何か、小動物が出てきたのだ。

あの上級生たちは、ビニールの中に小さな動物を入れて、それをサッカーボール代わりに思い切りシュートしていたに違いない。

――ひどい！

見てしまったみな子は、教室を出て、校庭へ駆け出た。

ちょうど、少年がその血だらけの動物を抱いて、こちらへ歩いてくるところだった。

長めの明るい色の茶髪に、耳には3個ずつピアス、腰パンにしたジーンズと、

いかにも『不良です』とわかる格好にも関わらず、全身に西日を受けて、何故か輝いているように見えた。

「うっ」

その動物を間近で見たみな子は口を手で押さえた。子猫だった。可哀想な子猫からは腸がはみ出ていた。

あんなに血が出てるなら、もうとっくに死んでるだろうと、みな子は思った。

少年の服はすでに猫の血で汚れていたが、少年はそんなことにまるで頓着しないようだった。

少年は、夕陽を背中に立ち尽くしているみな子に気付くと、

「このへんで犬猫病院知らない？」

と訊いた。まだ、あどけなさが残る声だった。

それは……みな子が現実で初めて見た、といっていいほど美しい少年だった。

夕陽がまぶしいのか、端正な顔をややしかめているが、その金茶色に輝く瞳でみな子をまっすぐに見つめた。

「し、しらない……」

「そっか」

少年は、みな子の横を素通りした。血の匂いが一瞬、ツンと鼻をついた。

振り返ったみな子は、少年が抱いた猫から、弱弱しく『ニャー……』という声が聞こえた気がした。

みな子は、その少年が忘れられなかった。

だが、それ以来、校内や、学校近くを歩くときは注意していたのだが、少年の姿を見ることはなかった。

ひょっとして天使なのかも、という自分の考えを、馬鹿馬鹿しいと振り払う。

「わー、これいいね。みな子のオリジナル？」

という声に驚いてみな子は顔をあげた。漫研の先輩の声に、そのへんにいた部員が皆集まってきた。

みな子のスケッチブックの上にはあのときの少年が描かれている。すっかり治った猫を抱いて、笑顔になっていた。笑顔はもちろん、みな子の想像だが。

無意識に描いてしまっていたことに、みな子は顔を赤くした。

しばらくして、みな子は、あの少年が実は、入学以来欠席していたクラスメートの鷹枝将だということを知り、愕然とするのだった。

――あの猫、その後どうなったの？死んじゃったの？

みな子は聞きたかったけれど、めったに学校に来ない将だ。

なかなか訊くチャンスがなかったし、だいたい、札付きの……

みな子は信じていないけど『人殺し』なんて噂のある将に話し掛けるのも憚られた。

それに、将はしばらく学校にこないうちに『ニョキッ』と音を立てるように、いつのまにか大男に変貌してしまった。

それは猫を助けた頃の、天使のような少年とはまるで別人の『男性』が現れたかのようだった……。

その将が、こんなに近くにいる……。ボイコット仲間として。

さっき、間近で見た瞳は、あのとき夕陽に照らされたときのままだった……。

「できた！」

見つめていた丸まった背中が、急に起き上がったので、みな子は再びのけぞった。

席を立った兵藤の後に着いて将の机の上のレポート用紙をのぞきこんだ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

人権侵害教師・京極の罷免を要求する！

我々は、教育という言葉を曲解し、生徒の正当な権利を迫害する京極の行為の数々を断固許さない。

よって彼を2年2組の担任、および英語担当からの罷免を要求するため、一切の授業をボイコットするものとする。

2年2組　鷹枝将

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

知ってる限りの硬い表現を使って、将はようやく文章を書き上げた。

将は、連名のサインを書くように指示しながら、

「誤字ないかな。星野サン」

と親しげに話し掛けた。

みな子は、急に話し掛けられてまた、ドキっとしたが、

「たぶん……ない、と思うけど」

となんとか冷静に答えることができた。

逆に1年以上、ほとんど授業をサボっていたのに、よくこんなに漢

字の熟語を手書きで使えると感心する。

「でもさ、意志を表明したところで、受け入れられるかな」

と署名し終わった兵藤が上目遣いで言った。

「まあ、無理でしょ」

書いた本人の将も、いいかげんに答えながら伸びをする。

そんな格好をすると、ただでさえある上背がグーンと伸びて、いっそうあのときの少年と掛け離れてしまう、とみな子は思った。

「いいんだ、オレ、学校クビになったって」

伸びをし終わると将は、片方ずつ肩を上げ下げしながら言った。

すると兵藤も

「そうだな。僕も、寿司屋になるのに、もともと高校なんて関係ないしな」

と笑った。将と兵藤の視線はしぜんにみな子に集まった。

「あ……、あたしだって。退学ぐらい。……高卒資格試験ぐらいチョロイわよっ」

みな子はあわてるあまり、思わず豪語してしまった。

「さっすが、星野サン！」

「キャ！」

思わずみな子が声をあげたのは、将の長い手がにゅっと伸びてきて、みな子の肩を軽く叩いたからだ。

……そんな声をあげてしまって、逆に照れたみな子は、すっくと立ち上がると

「これ、さっそく提出しにいきましょ」

と将の手書きの声明文を手にとった。

将は、さっきからみな子が可愛らしいヤツだと思っている。

流行りのツンデレちゃんなのかな、と廊下を大またで歩く姿を微笑ましく追った。

ふと、萩にあったアルバムで見た、高校時代の聡もこんな感じだったのかな、と想像した。

１４５◆ボイコット３

「ところでさ、誰に提出するの？」

急に、前を歩くみな子が立ち止まって振り返った。

「そういえば、そうだな」

廊下で立ち止まって、将は考えた。

京極の件について裏で糸をひいている校長や教頭に、いきなり渡しても揉み潰されることは明白だ。

どうせ退学を覚悟しているとはいっても、できるだけ効果的に学校を動かすことを考えたい将の前に、

屈強な巡回教師が現れた……多美先生だ。

「何してる！」

授業が始まったのに廊下でたむろしている将たちに、多美先生のほうから声をかけてきた。

学年主任で、その怖さは京極が赴任してくるまで学校一だったが、生徒のためを思ってくれている先生である。

将はとっさに、多美先生がいいと判断し、みな子が持っている声明文を差し出した。

多美先生は将の手書きのそれを、その場で読んだ……眉根を寄せた。

「ボイコットって……お前ら。こんなことをしてもポイントが減っていって退学になるだけだぞ」

多美先生は堀の深い顔の眉間に皺を寄せて、心配そうに将ら3人を順番に見詰めた。

「退学覚悟です。俺ら、あの京極……先生のやり方には断固着いていけません！」

将は断言した。

少し声が大きすぎたようで、多美先生が人差し指を口に当ててシー！と将を止めた。

「……話を聞こう」

多美先生は顎をしゃくって、将ら3人の前を促すように前を歩き始めた。

多美先生が将たちを連れて行ったのは、職員室ではなく、音楽室だった。

ここは多美先生専用のような教室である。防音装置がついているのも都合がいい。

将、兵藤、みな子は口々に兵藤の行状を多美先生に訴えた。

多美先生は、渋い顔をしながら、3人の話をまともに聞いてくれた。

「お前たちの気持ちはよくわかった。だが……」

授業には出ろ、というであろう多美先生に、将は先回りした。

「とにかく、俺たちは……少なくとも俺は、京極がいる限り、授業には出ません！

京極が出て行くか、俺が出て行くか、どっちかです」

将がそういうと、みな子も

「私も鷹枝くんと同じ気持ちです」

と続ける。兵藤はさらに

「僕も同じです。それに京極先生の英語になって、みんなやる気なくしてます。

古城先生に戻してもらうことはできないんですか。

だいたい、うちの学校ってクラスも担任もずっと持ち上がりが特徴じゃないですか」

と担任を聡に戻すように訴えた。

聡が話題に出て将は、兵藤のほうに視線を移しながら、聡を思った。

聡が担任に戻るのは嬉しい。２学期以来、将にとって、学校は聡に会える場所だった。

再びそうなるのはやぶさかではない。ただ……聡が担任になると、再び二人は教師と生徒の関係に戻ってしまう。

将は少し複雑な気分になった。

「うーん……」

多美先生は腕組みをして、少し考え込んだ。

「とにかく、俺たちは京極がやめるまで、絶対、授業に出ません」

将は断言した。

「それ、幻想即興曲？　去年、荒川静香がフリーで滑った」

みな子がグランドピアノの前に座る将を振り返った。３人は音楽室に残っている。

多美先生は、結局、決心が固い将たちを説得することを諦めた。

ただし

「ボイコットを単なるサボリの理由にするな。みんなが授業を受けている間、お前らなりにちゃんと自習しておけ」

とだけ言い聞かせた。

今日の3時間目に音楽がある。

しかし、授業で音楽室は塞がるだろうから、3人はそのまま空いている音楽室に居残り、

1時間目を音楽の自習に充てる事にしたのだ。

将の鍵盤の上の手は、早いスピードで展開する曲を難なく弾きこなすように見えた。

「……すごいな。鷹枝くん、そんな特技があったんだ」

兵藤が目を丸くする。

将は無言で指を走らせている。左右とも忙しく指を動かすこの曲の難度はかなり高い。

大きく手を広げるパートに移ると、将の手の大きさが俄然引きたつ。

しかし、クライマックスの高いところから低いところへおりてくるところでつまずいて、

将は一気に興が冷めたのか弾くのをやめてしまった。……深いため息をつく。

……10分ほど前。音楽室から職員室へ戻ろうとする多美先生を将は一人で追った。

兵藤やみな子に聞かれたくない話……金曜日に校長室から立ち聞きした、

学校側がわざと中退者を出そうとしている件について、多美先生が知っているかを確認するためである。

将からそれを聞いた多美先生は、

「冗談か何かじゃないのか」

と、いぶかしげな顔をした。

「中退者が少ない、というのは、ウチの学校の特色なんだぞ」

とも言う。やっぱり、その件は一般の教員には知らされていないらしい。

「いや……、その……。経営とか大丈夫、なのかな……とか？」

将は口ごもりながら、なおも訊いてみる。すると多美先生は

「生徒がそんなこと心配するな……というとお前はもっと心配にするんだろうな」

と笑った。将がいっぱしに株式投資をやっているのを知っている多美先生だ。

「荒江学園は、高校以外にも、専門学校や各種スクール、介護施設など多角経営しているのは知っているな。グループ全体としては業績好調だ。そういう意味でも心配するな」

と将の肩を軽く叩いた。

将は腑に落ちなかった。校長たちの話は、結局何をもくろんでいるんだろうか、いよいよわからなくなった。

「何歳から習ってんの？」

と兵藤の声で、将は我に帰った。

将はグランドピアノの黒い天板に、逆さまに映りこむ自分の顎のあたりを見て一瞬ぼんやりしていたらしい。

「3歳。……母が○○さんのファンでさ。無理やりさせられたんだ」

そういうと将は椅子を立った。近年もアルバムでオリコン1位を獲得した還暦近い大御所である。

「そう。あたしもピアノ習ってたんだけど、中2で辞めちゃった。受験だから」

将に代わって今度は、みな子がピアノの椅子に座る。ショパンつながりで、ノクターンを弾く。

「俺も小6で辞めた」

しかし、中学受験のため、というわけではない。

ピアノが爆破事件で木っ端微塵になったから、というわけでもないが……。

「ええー！小6で幻想即興曲！マジスゴッ」

みな子は、ノクターンを弾く手を止めて素直に驚いた。

「いいなー。鷹枝くん指長いもんね……あたしなんて、ようやく1オクターブちょいだもんね」

といいながら、みな子はピアノの鍵盤の上に右手をめいいっぱい広げて置いた。

いちおうドから1オクターブ上のミまで届いては、いる。

「あー攣りそう！」

と悲鳴をあげながら、右手をパタパタさせた。

ミスタッチなく弾けるのはドから1オクターブ上のドまでだ、と嘆く。

「どれ」

将はみな子のパタパタさせた手首をふいに取った。

みな子は、体中が振動するほど、心臓が激しく動き出すのを感じた。

将は、無邪気に、みな子の右手に自らの左手をあわせた。

どうやら大きさを比べているらしい。将の手のほうが指の関節1つ分ずつ長い。

……男子の手がこんなに熱いとは思わなかった。

クラスで……いや学校一、エロい雰囲気の鷹枝将の手。

こんなふうに男子とじかに肌を触れ合うのは、たぶん初めてのみな子だ。

ハンドパワーさながらに、触れ合った部分から、何かがみな子に感染していくよう……犯されていく気がした。

みな子は、体中がカァっと熱くなり、クラクラした。

しかし将のほうは

「ほーんと、ちっちゃい手だなー」

などとのんきに感想を述べている。

我に帰ったみな子は、将とあわせていた右手を素早く引っ込めた。

「み、右手と左手で比べてもしょーがないじゃんっ！」

「えーそう？ケンちゃんはー？」

と今度は兵藤の右手の甲に、自分の右手をあわせる無邪気な将。

「鷹枝くんは、どうせパーツ全部がデカイんでしょ」

という兵藤に対し、

「あー、わかるぅ？」

といたずらっぽく笑う。……もちろん卑猥な意味である。

みな子は、一人でドキドキしていたのが無性に悔しくて乱暴にピアノを閉めた。

閉めた拍子に、弦がかすかに音階を奏でるように震えた。

「そうだ、これ」

視聴覚室に戻った将はカバンの中からプリントの束を出した。

かつての英語の教材だった聡の手作りのプリントだった。

京極が来た初日に、破くように命じられ、そのまま将が持ち帰ったものだ。

「ケンちゃんの分は俺のをコピーしたから」

将は、破かれてしまった兵藤の分として、コピーを渡した。

「ケンちゃんの細かい書き込みは復元できなかったけどサ」と付け加えながら。

だけど兵藤は目を輝かせて、それを受け取った。

「鷹枝くん、ありがとう」

将は照れながら、プリントの束の中から、次にみな子のを探し出して渡しながら

「これ、やろうぜ」

と提案した。

「だけどさ、次の映画、なんだかわからないよ」

と兵藤が言った。みな子はさっきからほとんど黙っている。

プリントには簡単な表現を英語だけで先に抜き出してある。

実際に映画を見ながら、その発音や意味を確認する、というやり方だが、プリントには映画のタイトルが書かれていない。

「えっとなあ……」

将は考え込んだ。聡がこのプリントをつくるためにＤＶＤを見ていたのは覚えている。

だけどタイトルが思い出せない。

将は立ち上がると、ステッキをつきながら準備室へ向かった。

「写真は覚えているんだけどなあ。なんかモノクロで古いやつだと思うんだけど。

なんかイケメンが出てくるやつ」

などといいながら、準備室にあるＤＶＤを1枚1枚取り出して、ジャケットを確認している。

兵藤とみな子も、探すのを手伝った。モノクロの古い映画は手当たり次第将に見せる。

「これは？」

みな子が探し出した一枚を見た将は

「あーそれそれ！……『エデンの東』かあ」

ジェームス・ディーンをイケメン、とはね。みな子は心の中で苦笑した。

さっそく、遮光カーテンを引いて『エデンの東』を流す。

いつもは、授業にあわせて３０分程度ずつの小出しでしか見れない

のだが、

どうせボイコット中だからと、ノーカットで全部一気に流す。

みな子は、この有名な名画をテレビか何かで見たことがあった。

しかし、大画面で見ているうちに、自分の中に異変が起きているのに気付いた。

ジェームス・ディーンの顔が、どうしても将に見えるのだ。

――ぜんぜん、違うじゃんっ！

あせったみな子は、暗がりの中、ひそかに首をプルプル振るったり、目を閉じてパッと見開いたり、

両手で目を覆って隙間から見たりと工夫してみたが、どう見ても、

モノクロ画面の中の寂しげな不良少年はすべて将になってしまう。

みな子は、とうとう画面から視線をそらした。

しかし、そらした視線は今度は、自然に、斜め前で頬杖をついて画面に見入る将のほうへ向いてしまう。

斜め４５度からの将の横顔は、画面の光の中で、いっそう大人っぽく見える。

――これって……。

やたら胸がドキドキする。みな子は必死でそれを否定した。

将に翻弄されているうちに、映画は終了した。

兵藤が遮光カーテンを開ける。

さっと入り込んでくる冬の光に、自分の心がさらけ出されそうで、みな子は思わず窓に背を向ける。

だけど、その視線の先にいる将を盗み見る。

「あー、ひさしぶりに、まともな英語聞いたァ」

将は伸びをしていた。

――あんなにしょっちゅう伸びばっかりしてるから背が伸びるんだわ。

「ね、星野サン」

ふいに話し掛けられて、みな子は再びビクンと体を震わせる。

「そ、そうねっ」

「今の、ジェームス・ディーンって俺っぽくね？」

まるで思っていることを言い当てられたように、みな子は焦った。

「ぜっ、ぜんぜんっ！ぜんぜん似てないっ！」

「えー」

あまりの激しい否定に将は、ぶーっと口をとがらせた。

そのユーモラスな顔に、みな子の焦りは急激に緩和された。

大人の男性に近い容貌と雰囲気を持つ将なのに、ものすごく子供っぽいときがある。

これもさっきの至近距離の目と同様、ごく近くにいる者しか知りえない将なのだ。

みな子は、いけないものを知ってしまった気がして、密かに切なくなった。

そのとき、チャイムが鳴った。3時間目が終わって昼休みになったらしい。

「さーて、メシでも食いに行くかぁ。星野サンは?」

将は席を立った。あっさりと機嫌を治したらしい。

「あ、あたしはお弁当だから、教室に戻ろうかな」

みな子も小さなトートバックに入れた弁当を持って、あわてて立ち上がった。

「ふーん。ヤクザのヤローに気をつけてね」

こんなとき、将はとてつもなく優しい目をする。

それは、猫を抱いていたときの将と今の将の唯一の接点のようにみな子は思った。

そして、それはみな子の心臓を再び忙しくさせる。

「ありがと」

みな子は小さく言って、急ぐ必要はないのに、速打ちを始めた心臓にせかされるように、走って視聴覚室を出ようとした。

出口で、逆に急いで視聴覚室に入ろうとした誰かとぶつかりそうになる。

それは将に負けないほど、デカイ生徒ー井口だった。

井口は、息も荒く叫んだ。

「将、大変だぜ。松岡が屋上にー」

146◆屋上

「松岡が屋上に、屋上にのぼってる！」

「えっ！」

井口の取り乱した様子は、ただ単に『のぼっている』だけではないことは明確だった。

みな子も兵藤も井口が行くほうへ走った。将もステッキをつきながら視聴覚室を出た。

近くの靴箱から、上履きのまま外へ踊り出る。

屋上にのぼった、ということは。将たちは、当然、最悪の行動を想像していた。

朝のＨＲでそれほど、松岡は傷ついたのだろうか。

「やめろー」と上に向かって叫んでいたカイトが、将たちに気付いた。

外には……おそらく、校舎の外にある学食に、昼食を食べに行こうとして見つけたのだろう、十数人の生徒が上を見上げている。

その騒ぎが伝わったのか、校舎から、また学食から次々に生徒たちが出てきて上を見上げる。

将らも上を見上げた。

正午近くの太陽は、ちょうど将のいるあたりからは、松岡のすぐ後ろで輝いているように見えた。

肝心の松岡は逆光で見えにくい。将は手をかざして、目を細めた。

松岡は……屋上、正確に言うと屋上よりさらに高いところにいた。

3階建ての校舎の屋上の一番端に水道タンクがある。

どうやって登ったのか、松岡はその上にしゃがんで下を眺めていた。逆光で、表情までは見えない。

下では感じないが、上では風が結構強いらしい。

松岡の、そう長くはない髪の毛でも、風に煽られて形を変えている。

タンクに手すりはない。松岡がもし飛び降りる気なら、何も阻むものはないのだ。

「いつから、あそこに?」

将は井口に訊いた。

「わかんない。俺らも今気付いた。だけど3時間目、松岡のやつ、保健室に行くとかいってて」

井口は早口で答えた。

「危ないぞー!」

と叫んで止めようとする上級生もいたが、たいていの生徒は、上にいる松岡を好奇心で見あげているようだった。

騒ぎにやっと気付いた教員が一人、二人出てきて屋上を見上げた。

「井口っ！カイト！」

「おう」

将と井口、そしてカイトは、屋上へ続く階段へかけ登った。

将はまだ走れないので半ギプスの足をひきずるように一歩一歩登る。

こんなときに半ギプスの足はもどかしい……将は、井口とカイトを先に行かせながら、

「井口、鍵持ってる？」

と下から訊いた。

「持ってる」と叫びながら井口は階段を駆け上った。

ふだん、屋上へ通じる鉄のドアは鍵が掛かっている。

だが、将ら不良は、こっそりと鍵を盗んで、合鍵をつくっていた。

そして気の進まない授業のときなど、しばしば屋上に登っては、タバコを吸うなどして暇をつぶしていたのだ。

将はやったことはないが、ここできわどい逢引をする者もいるらしい。

できるだけ将は急いだが、やっと屋上のドアのところにたどりついたときに、

下から

「キャー」「わー」

という悲鳴がいっせいに波のように起こった。

――まさか、やってしまったのか。

屋上に出た将に、思いのほか冷たい突風が『ゴッ』っと吹き付ける。

タンクはドアの後ろのあたりにある。振り返った将は、ほっとした。

松岡はまだタンクの上に立っていたからだ。

どうやらしゃがんでいたのが、立ち上がったために、悲鳴が起こったらしい。

「やめろ！松岡」

井口がタンクの上に向かって叫んでいる。彼は実はあまり高いところが得意ではない。これ以上は登れないだろう。

カイトが、タンクに固定された鉄梯子を登っているところだった。

「く……くるな」

鉄梯子を登りつめて同じ高さにやってきたカイトに、松岡が震え声で制止する。

将も、ステッキを捨てて、鉄梯子を両手で引き寄せるようにして、ギプスではないほうの片足だけで一段一段登る。

ギプス足で、タンクの上に登ってきた将を見て、松岡は驚き、唾を飲み込むのがわかった。

もう、朝のように、泣いてはいないようだった。

しかし、紙のように青ざめた顔に、光が失せた目がやたらギョロッとし、異様な様子だった。

下にはかなりの生徒、そして教員も遅まきながら全員外に出てきたようだ。

ざわめきと、ひときわ通る多美先生の声で

「バカな真似はやめるんだ！」

という叫びが聞こえる。

「松岡、そんなところから落ちても、死なないのはわかってるよな」

将は、松岡に語りかけた。

タンクの上は風がいっそう強い。将の髪も風に踊っているのが自分

でもわかる。

松岡は肩をふるわせたまま、それでも少しずつタンクの縁へとじりじり移動する。

「……せいぜい、４階建ての高さだ。怪我をするだけで死なない」

将は、ギプス足をひきずりながらじりじりと少しずつ松岡とのあいだの距離を縮めた。

風の冷たさが目にしみて、将は思わず目を細める。

カイトは、将と違う方向から松岡に同じようにアプローチしている。

「……でも打ち所が悪かったら、最悪、一生動けない体で生きないといけないかもしれないんだぞ」

松岡はうつむいて目をギュッとつむった。

細身の松岡など、そのまま吹き飛んでしまいそうな風が吹き付けてくる。

「あんなヤクザ、いやヤクザ以下のやつの言うことなんか、真に受けるなよ」

とカイトが一生懸命言う。むしろカイトのほうが泣きそうな顔をしていた。

「そうだよ……」

と将がカイトのセリフに同意しようとしたそのとき。

「飛び降りたきゃ、飛び降りればいい」

という声が背後からした。

京極だ。

京極はいつのまにか、屋上にのぼってきていて、タンクを横から見上げていた。

「死にたい奴はとっとと死んだらいい。クラスのお荷物がつらかったら、死ぬのは今のうちだぞ」

と追い討ちをかける。

将は息をするのを忘れるほど激しい憤りを感じた。出来る限りの鋭い視線で、京極を上から睨みつける。

京極は、その固めたパンチパーマもろとも、吹き付ける風にも不動だった。

松岡が、閉じていた目をあけて、そのまま眉ごとゆがめた。歯を強く噛み締めているのが見える。

京極の声は、決して大きな声ではなかった。屋上にいる者だけに聞きとれる程度のボリューム。

下から見たら、京極がタンクの上にいる松岡を説得しているように見えているはずだ。

松岡は、下をちらりと覗きこんで、うつむいた。

将は、そんな松岡を見て、飛び降りられないんだ、と少しほっとした。

時間をかければ、きっと止めさせることができる。

と希望を持った。

ヤクザ教師も、踏みとどまらせるために敢えてひどい言葉を投げたんだろう、と将は少しだけ京極を見直した。

だが、2秒後。

「どうした！まだ飛ばないのかァ！」

と再び京極の怒号が飛んだ。

「思い切って死ぬ勇気もないのか、このヘタレがヨォ」

と、小馬鹿にした調子で続ける。

松岡は、ゆっくりと目を見開くと、初めて、キッと京極を睨んだ。

次の瞬間。

そのまま、身を空中に躍らせた……。

「あっ！」

カイトの声を境に音が止まったように、何も聞こえなくなった。

将は、文字通り息を飲み……声がでない。

……まるでそれはスローモーションを見ているようだった。

松岡は、タンクを蹴り出して、前方の空中に飛び立ち……

その細くて華奢な体はそのままふわっと飛んでいきそうに見えたが、

やがて重力に引きずり込まれるように将とカイトの視界から消えた。

１４７◆悪夢

特急あずさに揺られて、聡はいつのまにかシートに身を預けて眠っていた。

今朝早かったというのもある。

それに、この週末。

金曜の夜は、呑み過ぎ。

土曜の夜は、博史の母に真実を打ち明けてしまったことへの後悔。

日曜の夜は、博史の母がもし、最悪の事態になったらどうしよう、という心配と、将からの思いがけないプロポーズ。

気がかりなこと、興奮することだらけでぐっすり眠るわけにはいかなかった聡の脳は、

本人は気付いていないけれど睡眠を渇望していたのだ。

携帯が鳴っている。

――あれ。音がしないよう設定したはずだけど……。

聡は眠りの中で、眼を閉じたまま、思った。

早く出ないと、他の乗客に迷惑だ、と常識が後追いで目を覚ます。

聡は、くっついた上下の瞼を引き剥がすようにこじ開けると、バッグの中に入れた携帯を探す。

――ない？

取り出しやすいようにバッグのポケットの中に入れたはずなのにない。

ボストンのほうのポケットだっただろうか。それともコートのポケット？

聡はあわてて、あちこちのポケットに手をつっこんで携帯を探した。

その間も、携帯はしつこく鳴り続けている。

こんなに大きな音で鳴るなら、浅いところに入っているはずだ。

それにしても、こんなに朝早く携帯を鳴らすなんて、誰だろう。

すべてのポケットをまさぐり終わったのに携帯はない。

聡は、もう一度バッグを膝の上に取ると、その中身をかきまぜるように丹念に探した。それでもない。

携帯はまだ鳴っている。

絶対にありえない、と思いながら、今度はボストンを取る。

これも中に入った衣類を1枚1枚掻き分けながら用心深く見る。どうしてもない。

ボストンをもとどおり隣の席に置いてため息をついた聡の目に、膝の上で点滅する携帯の姿が飛び込んできた。

――ウソ！あんなに探したのに、なんでこんなところに。

聡はまだ鳴り続けている携帯を、誰からかも確かめずに、あわてて開ける。

『もしもし』

『聡』

博史だった。……まるでうまくいっている時のような、優しい声で博史は聡を呼んだ。

その穏やかな声は聡に次の言葉を想像させるのを阻んだ。

電話の向こうで博史はゆっくりと、告げた。

『母が……死んだ』

――えっ。

ウソ。と普段だったら反射的に出る返答も、喉が貼り付いてしまっ

たように声が出ない。

『母が死んだ。死んだんだ』

博史は電話の中で繰り返す。口調がやや早くなっている。

声が出ない。いや、それ以前に答える言葉も見つからない。

不本意ながら……いや深層では意図的になのか、沈黙してしまう聡。

こんなに早く。余命は11月から1年だったはずではないのか。

余命宣告はそんなに、大きく外れてしまうものなのか。

余命宣告の不確かさに思考を延ばす聡。無意識に……自分をなんとか擁護したいからに他ならない。

博史はさらに追い討ちをかける。

『聡、お前のせいで、死んでしまったんだ』

博史は、低い声で……とうとう、聡の罪を指摘した。

『1年は生きられるはずだったのに……。お前のせいだ』

母の死は、医師の宣告ミスなどではない、と断言する。

声は、あいかわらず出ない。何か一声でもたてなくては、と思うのに出ない。

『お前のせいだ』

博史の電話の声は、だんだん低くなっていく。

『お前が、母を絶望させた』

声がでない。助けて。

『お前が殺したんだ』

やめて。お願い。

『いつか、お前も、絶望して死ぬ。必ず……必ず』

やめて――。

『まもなく○○、○○駅に到着します』

ハッ。

聡は、びくん、と体をふるわせて、現実の世界へと覚醒した。

いつのまにか、背筋にじっとりと汗をかいている。

自分がなぜ列車に乗っているのかを思い出すのに一瞬考えなくては

ならなかった。

まだ、自分が把握できていない聡は手の中にあるはずの携帯を見ようとした。

手は……何も握っていなかった。

聡はタガがかかったような体を動かして、バッグのポケットを見る。

そこに、バイブ設定がなされた携帯がきちんと入っていたのを見て、聡は体中の力が一気に抜けてシートに寄りかかった。

――夢、だったんだ。

とてつもなくリアルで、怖い夢だった。

一気に安堵した聡はしばらく何も考えられなくて、外の景色に目を移した。

いつのまにか、窓の外に立ち並ぶ家々はなくなっていて、

かわりに出現したブロッコリーのような山々に温かそうな朝日があたっていた。

ほどなく○○駅に停車した。降りる客はほとんどおらず、乗ってくる客中心だが、席はまだ充分に空いている。

まだ聡の降車駅には、まだ間がある。

聡は、窓の外に広がる、冬の緑にぼんやりと視線を遊ばせていた。

ふいに、トンネルに入った。

トンネルは、窓を素早く鏡にし、うかない聡の顔を映し出した。

聡は、自分の表情に思わず目をそらした。

あれは……まさか、予知夢じゃないだろうか。

自らの不吉な表情は、一番嫌な考えを聡に突きつけた。

聡は、バッグの中から携帯を取り出す。８時になるところだ。

博史に、電話をかけて、確かめてみたら――。

聡は博史の番号を画面に表示させてみた。

薫が危篤だ、と告げられてからもうまもなく２４時間が経つ。

もう、峠を越えるなら、越えているはずだろう……。

――だめ。

聡は携帯をパチンと音を立てて閉じた。

やはり怖い。

もしも。あの夢が正夢になっていたら。何と答えればいいのだ。

あれが現実でも、聡は何も答えられないはずだった。

それに、博史のいうとおり、薫の容態悪化の大きな原因をつくったのは聡だ。

どんな顔をして、博史に電話をかけられるというのだ。

それに……まだ8時。一般の社会人だったら電車の中か、忙しく出かける前の準備をしているところだ。

聡は消極的な自分に、もっともな理由を見つけ出してため息をついて、とうに鏡ではなくなった外に再び視線を移した。

甲府盆地に近づくにつれて空がだんだん広くなっていき、そして青が濃くなるような気がした。

気を取り直そうと、聡は朝食代わりに、と駅で買ったパンの袋を開けた。

１４８◆春の予感

「聞いた？チャミ、京極のアレ」

「うん。チョーひどいよね。『死にたい奴はとっとと死んだらいい』とか、松岡くんにゆったんでしょ」

残り少ない昼休み。２年２組のあちこちで、「松岡くんは……」「病院……」などと噂が飛んでいた。

一人一人は声をひそめているが、皆が絶え間なく噂話をしているので、教室は全体的にざわめいていた。

そのとき。

カイトのパンチで島田の体が教室後ろのロッカーのところまでふっとばされた。

キャー、と甲高い女子の悲鳴があがる。

ふっとばされた島田は、松岡のせいでポイントが減ってしまった、と声高にグチをもらした男子である。

「何するんだよ！」

島田は倒れたまま、殴られた頬を押さえながらカイトに向き直った。

「うるせえ！お前がよけいなことを言うから、松岡は……！」

「やめろよ、カイト」

なおもつかみかかろうとするカイトの肩を、井口が抱きかかえるようにして止める。

「いいじゃんよ。結局、助かったんだから。……まったく人騒がせだよな」

島田は服をはたきながら、起き上がると、懲りずに憎まれ口を利く。

「なにぃ……」

松岡は井口に肩を掴まれたまま、島田をギラギラと睨みつけた。

今から３０分ほど前。

屋上のさらに上の水道タンクから飛び降りた松岡は……。

落ちた場所がたまたま植え込みだったこともあり、奇跡的にかすり傷だけで済んだ。

しかし、ショックで気を失っていたので、駆けつけた救急車で病院に運ばれて、念のために検査を受けている。

そのとき、昼休みの終了を告げる４時間目の予鈴が鳴った。

カイトは、井口の手を払うようにどけると、島田に向かって唾を吐

いた。

そして

「俺もボイコット参加するぜ。京極を追い出すまでなっ！」

とクラス中に聞こえるようにボイコットを宣言し、カバンを持って立ち上がった。

井口も無言で立つ。

京極の発言をじかに聞いてしまったからには、もうポイントうんぬんの問題ではない、と井口は判断したのだ。

井口、カイトに、真田由紀子ら松岡と親しかった者らが新たにボイコットに従った結果、午後はクラスの４分の１の生徒がいなくなった。

あちこちに空席がめだった教室で、残った者も、今後どうするかを相談する声が、サワサワと休み時間ごとに響いた。

「将、俺たちもボイコットに参加するぜっ！」

と鼻息も荒くやってきたカイトらを見て、

先に視聴覚室に戻っていた将は苦笑した。

「一気に人数増えたな……いっとくけど、サボリとボイコットは違うからな」

と受け売りで注意をする将をみて、みな子は後ろでクスッと笑った。

「だけど、松岡は本当に運がいいよな」

兵藤が、あらためて感嘆する。

「骨折もしてないんだろ。うらやましいよ」

将は、自分の半ギプス足を軽く叩いて笑った。

「それにしても、京極のヤロー、許せねえ」

カイトが怒りもあらたに、拳を握り締めた。

「……絶対に、クビにしてやる！」

将も、そんなカイトに頷きながら、さっきの京極を思い出す。

……教師があんなことを……生徒が自殺しようとしているときに、さらにけしかけるようなことを言うなんて、許されるはずがない。

「なあ、将。さっきの、校長とかに言いつけても、京極をクビにできないかな」

さっきの京極の言動を一緒にまのあたりにしていた井口が、将に囁く。

「うん……」

校長も教頭もダメだ。

なぜなら、京極の行動を支持し……というより裏で糸をひいている張本人かもしれないからだ。

だけど、そんなこと井口はおろか、他の生徒たちには軽軽しく口に出来ない。

「証拠がないからな……」

将は、逡巡を、とりあえず証拠がないせいにした。

「そうだな。アイツ、いかにもしらばっくれそうだもんなー」

井口も、それに疑いを持たないようで、将はホッとしながらも、気持ちが重かった。

ボイコット組は、そのまま視聴覚室で終日自習をして過ごした。

今までも視聴覚室を使って授業を行うのは、聡の英語ぐらいだったので、実質上空き教室なのである。

かつ、多美先生のおかげなのだろうか、今日の段階で邪魔はまだ入らなかった。

将は学校帰りに、病院に寄ってみることにした。

将が入院していた、看護士の山口が勤める病院だ。

松岡はおそらくそこに運ばれたはずである。

山口への土産に、何かお菓子でも買っていこうと、近くのケーキ屋に寄った将は、そこで異様に客が、こと女性が多いことに気付いた。

一瞬入店するのをためらうほどだった。

隙をついてやっと店内に入った将は、箱詰めのトリュフにハート型のケーキの見本を見て、

今週末がバレンタインデーである、ということをようやく思い出した。

――アキラ、今週も帰ってくるよな。

週末以外に、今週は水曜日に建国記念日がある。

だけど、たぶん帰れないと思う、と聡は寂しそうに言っていた。

だったら、いっそ、自分が山梨に聡を訪ねようか。

重かった心が、聡を思うだけでほんのりと温かくなる。

とりあえず、プリンをいくつか買って、表に出た将は、晴れた夕空を見上げた。

夕陽はその色をだんだん赤に近づけながら、オレンジ色の温かい色で将の全身を染めた。

日曜の夜、ベッドの中で聡に結婚しよう、と告げたのは将の心の底からの願いだった。

同じ夕陽の下にいるであろう聡に、将は心で問い掛けてみる。

――アキラ、アキラ、知ってるか？俺を幸せに出来るのは、アキラだけだってこと……。

年上のくせに泣き虫の聡。いつもそばにいて守りたい……。

あいかわらず冷たい木枯らしが、将に向かって吹きつけてくるが、桃色がかった夕陽の色の中に将は確かに、やがて来る春を感じていた。

「あら、鷹枝くん」

看護士の山口は、内科病棟のナースステーションに顔を出した将に気付いて軽く手を振った。

ちょうど日勤が終わるところらしかった。

山口によると、かすり傷だけだった松岡は、入院する必要もないと診断された。

意識が戻ってからも、しばらく安静にしていたが、さっき退院したという。

「でも、ショックが大きいからって、いちおう、カウンセラーが派遣されるみたいよ」

病院に駆けつけた松岡の親は、泣きながら、どうしてあんなことをしたのか、松岡に問い詰めていたという。

しかし、松岡は口を閉ざしたまま何も言わなかった。

「学校で何があったの？」

山口も訊きたがったが、将はいちおう

「俺もあんまりわかんないんだ」

と答えておいた。

「ただいまー」

灯りが漏れていたのが、外からも見えたので、大悟と瑞樹が帰ってきているのだろうと、

玄関ドアをあけた将は中に向かって声をあげた。

病院に寄り道してきたので、帰りが少し遅くなった。

さっき美しい夕陽を見せていた空はすっかり暮れている。

「あ、将、おかえり」

中から、瑞樹だけが出てきた。

「大悟は？一緒に帰ってきたんじゃないの？」

「今日は夜勤もするんだって」

大悟は日中のハケンに加えて、夜も働きに行ったのだという。

よく働くな、と感心した将は……瑞樹の手に白い粉が付着しているのに気付いた。

「瑞樹！お前……またっ？」

将は、瑞樹を睨みつける間もなくあがりこむと、半ギプス足をひきずって洗面所に入った。

しかし、そこに注射器もヤクもなかった。

「将？……どうしたの？」

瑞樹は不思議そうに将の背後から声をかけた。

「ヤクはどうしたんだよ」

将は瑞樹に向き直った。

「え？」

「とぼけるなよ」

「え……やってないよ？」

真剣に問い詰める将に、瑞樹は大きく目を見開いて、パチパチとまたたく。

「この手は何だよ」

将は、瑞樹の、白い粉がついた左手の手首をギュッと掴んで持ち上げた。

瑞樹は大きな目をみはっていたが、一呼吸置いてプッと吹き出した。

「何がおかしいんだよ」

将は笑い出す瑞樹に本気で腹を立てた。

「将、こっち来て」

瑞樹は将の袖を引っ張って、キッチンに連れてくると、そこに置い

たあるものを見せた。

「あっ」

こげ茶色のハート型に、白い粉が雪のように半分ほどふりかけられたケーキだ。

「今日、初めて焼いてみたんだ。これは、粉、ざ、と、う」

瑞樹はいたずらっぽく笑うと白い粉が付いた手をペロッと舐めた。

「なんだよー、おどかすなよー」

将は怒りと緊張が解けて、ソファーに倒れるように腰を落とすと、脱力したように背もたれに寄りかかる。

そういえば、玄関ドアをあけたときに、甘い匂いがしていた。

白い粉をヤクと勘違いして頭に血が上った将は、それに頭がまわらなかったのだ。

「バレンタイン用？」

ようやく落ち着いた将は、瑞樹に訊く。

「うん。……大悟にはナイショね。まだ練習だから」

と瑞樹は、再び茶漉しに入れた白い粉砂糖を、残り半分にさらさらとふりかけた。

「そうだ、将、食べてみる？夕食前だけど」

「おう。食べる食べる」

将はソファに腰掛けたまま、身を乗り出す。

「冷めたほうが美味しいらしいんだけど……」

といいながら瑞樹は、焼きたてのチョコレートケーキにナイフを入れると皿に盛り、フォークと共に将に持ってきた。

「じゃ、いただきまーす」

将はまだ温かい、その小さめの一切れをフォークで一刺しすると、一気に頬張った。

「うっ」

将はケーキを頬張ったまま、目を見開いて、瑞樹の顔を見た。

「ど、どうしたの？　お、美味しくなかった？」

瑞樹が、心配そうに将をのぞきこむ。

「しょ、しょっぺえ……」

「ウソっ！」

瑞樹は、目をみはったかと思うと、オロオロした。

「どうしよう、砂糖と塩、間違えちゃったのかな……」

将は、瑞樹の狼狽振りを充分見届けると

「ふふふ……、ウッソだよ～ん」

と笑って舌を見せた。

「うまかったデース！もう少しちょうだい」

と空になった皿を瑞樹に向かって伸ばす。

瑞樹は、眼窩から目が飛び出しそうなほど、その大きな目を見開くと

「もー！将のバカっ！」

と叫んで、食べたあとの皿を奪った。

「もうあげないッ！」

と怒りの声をあげると、残りのケーキを冷蔵庫の低い位置にしまうためにしゃがみこんだ。

だけど。

一一生まれて初めてつくったケーキを将に食べてもらえた。しかも『うまかった』って言ってもらえた。

瑞樹は、ソファーの将からは見えないカウンターの陰で、涙ぐんでいた。

……翌日、さらにボイコットする生徒は増え、クラスの半数に達していた。

１４９◆山の休日

「副校長さんは、今日はお休みにならないんですか？」

寮母の沢村正枝が、朝食のみそ汁を聡の前に置きながら言った。今日は建国記念日、国民の祝日である。

「ええ……。休んでも行くところありませんしね」

聡が微笑むと、正枝は気の毒そうに笑い顔をつくりながら、聡の向かいに座る正枝の夫である純一の前にもみそ汁を置いた。

夫妻は、月曜日からこの学校に住み込みで着任している。正枝は寮母、純一は用務員である。

人事資料によると、二人とも６２歳とのことで、人のよさそうな顔立ちが夫婦で似通っている。

「東京に帰ってくればいいのに」

純一は生卵に醤油をかけながら、聡を気遣うように目をあげた。

「はぁ……、でもトンボ帰りになっちゃうから、かえって疲れそうで」

「そうだなあ」

純一は細い目をみそ汁の湯気にうずめるようにしてみそ汁をすする。

「あ、でも沢村さんたちは、今日は休日ですから、お好きなように過ごして頂いてかまわないんですよ。

わたしも暇潰し程度にしか働きませんから」

副校長でこの学校のリーダーである聡はいちおう、気遣った。

聡自ら『休日出勤』するとなると、沢村夫妻もそれに倣うかもしれない。案の定、

「そんな、副校長さんが働くのに私たちが遊ぶわけにはいきません。なあ正枝」

「そうですよ、純さん」

夫妻は顔を見合わせた。お互いを名前で呼び合う夫妻を聡は微笑ましく眺めた。

ちなみに『副校長なんて照れくさいからやめてください』と

聡が何度か頼んだにも関わらず夫妻は聡のことをあいかわらず副校長、と呼んでいる。

６２にもなる二人がどういういきさつで、ここに住み込むようになったのか、聡はまだ聞いていない。

だけど、終わった食器を厨房に運んだ際に見た、正枝の年齢以上にゴツゴツした手から、

たぶん相当苦労してきたんだろうな、と聡は想像する。

食器洗いを手伝おうとする聡に正枝は

「これは私のお仕事ですから、副校長さんは、副校長さんのお仕事をなさってください」

とやんわりと聡を追い出そうとする。

そんな正枝は、備え付けられた食器洗い機を『たった3人分だから』と使わないで、頑なに手で洗っている。

本来、休日に関しては寮母は休みで、寮に残った職員生徒で協力して家事万端を行うことになっているのだが、聡はひきさがることにした。

「じゃあ、私は、職員室にいますんで……。何か用がありましたらご遠慮なくどうぞ」

聡は寮を出ると深呼吸をした。今日もよい天気、つまり朝の冷え込みも厳しい。

教室や職員室がある校舎の陰になっている、踏み固められていない地面に、

大きな霜柱が２０センチにもたっているのを見つける。

もう何回も目にしているのに、聡はその端をそっと踏みしめて『さくっ』と崩れる感覚を楽しんだ。

日が当たっているところは、すでに溶けた霜で濡れた藪がキラキラ光っている。

ようやく聡はこの朝の冷え切った空気に慣れてきた。

冷え切った職員室に入ると、大きなストーブに火を入れる。

時計を見ると9時になるところだ。

――休日なんだし、せめてゆっくり起きる、って伝えとけばよかったかな。

聡は苦笑した。

先週、まだ聡一人のときは、どうせ一人なんだし、と特に用がない限り、ゆっくり起きていた。

その分、夕食のあとまで仕事をしたりしていたから、勤務時間的に問題があったわけではない。

しかし沢村夫妻は……彼らはかなり早起きだ。

昨日、聡は7時30分に準備された朝食を食べ、8時30分には勤務開始してしまうことになった。

それでも沢村夫妻にはゆっくりめらしいことが話してみてわかった。

休日の今日はさらに聡に気を遣ったのだろう、朝食は8時すぎだった。

もっとも聡にとっては平日同然の時間だが……。

聡は、今日は、あまりはかどっていないカリキュラム作成を、ちんたらやることにした。

その前にインスタントコーヒーを淹れて、しばし朝の憩いの時間を持つ。

マグカップから立ち上る湯気の向こうの窓から日の当たる外を眺める。

軍手をはめて、大きなスコップを抱えた沢村夫妻が、駐車スペースの向こうの藪のほうへと歩いていくのが見える。

そういえば、昨夜の夕食時に、畑をつくっていいか、といっていたっけ。

校舎の前のスペースは、平らにならして万能コートにしようと思っていたので、端っこだったらＯＫですよ、と聡は許可した。

つくるとしても、せいぜい畳1枚か2枚程度の小さな菜園だろうと思っていたのに、

夫妻はどうやらさっそく藪を開墾してもっと広いものをつくりたいらしい。

聡はそれを見ながら考えた。

カリキュラムに畑仕事を入れるのはどうだろうか、と。

高校卒業資格取得の予備校とは何の関係もないが、作物が育つのを見るのは長い目で見れば、

人生に役に立つはずだし、勉強の息抜きにもなるんじゃないだろうか……。

できた野菜は寮の食材としても使えるし。

聡はコーヒーをぐっと飲み干すと、職員室を出た。

「沢村さーん」

夫妻は揃って聡のほうを振り向いた。

「私にも手伝わせてください。畑づくり」

畑作り、といっても藪を開墾するところから始めないといけない。

背が高く生い茂った枯れた雑草を引っこ抜くのはなかなか骨だった。

「フンぬ！」

笹の仲間や枯れススキは聡一人で踏ん張っても、抜けない。

地面の下の根っこが意外に深く張っていて、かつまわりに密集した仲間どうして絡み合っているのだ。

工事で使うような大きなスコップを力いっぱい地面に差し込んで根を切ってやらないといけない。

しかし、根もまるで木のように硬い。いやそもそも地面自体が固く締まっているのだ。

「副校長、私がやりましょう」

純一がスコップを差し込むとようやく、引っ張った雑草がズボっと抜ける。

「これ、いっそ焼いちゃったらどうでしょうか」

聡は提案する。焼畑農業という言葉を思い出したからだ。

「何いってるんですか。山につながってるから山火事になっちゃいますよ」

純一と正枝は可笑しそうに笑った。

「そうか、そうですね」

聡もアハハと笑う。

寒いはずなのに、一生懸命引っこ抜く作業を繰り返しているうちに、いつのまにか汗ばんでいた。

1時間でようやく畳一帖と少しの草を抜いた。

「休憩しましょうか」

聡の提案に、広がった空き地に残った背の低い草を抜いたり、石を取り除いていた正枝が

「お茶でも淹れましょう」

と立ち上がった。

と、そのとき、車のエンジンとタイヤで石を踏みしめる音が近づいてきた。坂を登ってくるらしい。

「誰かしら」

休日の今日は、宅急便も郵便もないはずだ。

警戒した純一が、唯一の男として小走りに敷地の入り口に向かった。

タクシーだった。

聡、純一、正枝が見守る中、タクシーは敷地の中ほどで止まると、ドアを開けた。

中から出てきたのは……。

「将！」

聡は思わず叫んだのと同時に、車から降り立った将のほうも、聡を見つけて笑顔で手をあげた。

石でごろごろの敷地はステッキも付きにくいはずだが、早足で聡のほうに歩いてくる。

聡も自然に将のほうへ駆け寄った。将は聡の姿を間近で見ると

「泥だらけじゃん。どうしたんだよ」

と笑った。

「副校長、そちらは……？」

純一と正枝がいつのまにか二人並んで、急に現れた背の高い若い男と聡のほうをかわるがわるにいぶかしそうに眺めていた。

何と説明しようか聡が迷っている間に、将のほうが

「アキラの彼氏で、鷹枝将といいます。アキラが世話になってます」

とぺこっと頭を下げて笑顔を見せた。

聡はカァっと顔が熱くなるのを隠すように、うつむいた。

150◆山の休日2

沢村夫妻がお茶の支度をしている間、聡はとりあえず将を寮の中にある聡の部屋に案内した。

将は珍しそうに、簡素な木の壁などを見回していた。

「将、どうしたの、急に」

「会いたかったから……。なんだよ、喜んでくれないの？」

といいつつ、将は聡を素早く抱き寄せた。

柔らかな聡の感触をたしかめるように、抱きしめる腕に力を込める。

そんな将にすっぽり包まれた聡も自然に将の体に腕をまわす。

「土の匂いがする」

聡の髪に顔をうずめるようにして、将が囁いた。

「だって、畑づくり……」

顔を上げて説明しようとした聡は、その口を将の唇でふさがれた。

たった2日あけただけなのに、すでに懐かしい感触。

お互いの柔らかさを確かめるように、最初はそっと、だんだんと押し付ける力を強めていく……。

「お茶が入りましたよー」

食堂のほうから、聞こえた正枝の声に、二人は、名残惜しく唇を離すと顔を見合わせて微笑んだ。

お茶の湯気が窓から斜めに差し込む冬の陽射しを白く反射させる。部屋や教室と同じようにウッディな食堂は、ガラス窓からふんだんに差し込む温かい陽射しのおかげで、いっそうのどかな雰囲気になっていた。

「鷹枝さんは……、学生さんですか？」

「ハイ。２回生です」

純一の問いに、躊躇もなくしゃーしゃーとウソをつく将を、聡は口をぽかんと開けて眺めた。

「どちらの大学で」

「東京大学です」

どうやら、将は、弁当屋についているウソと同じウソをつくことにしたらしい。

「そりゃ、たいしたもんだ」

と純一は目をみはったまま、聡のほうを見た。

ウソです。本当は高校生なんです、とも言えない聡はなんとなく笑うしかない。

背も高く、肩幅もがっしりとして、近頃さらに大人っぽくなってきた将である。

それに話し方だって、自然に敬語を使うことができるし、年配者に対する物腰も落ち着いている。

大学生といって誰も疑わないだろう。

このあとも、二人の馴れ初めなどについて、将は好きなように話していた。

「沢村さんは、ご結婚されてどれぐらいになるんですか？」

自然な流れで、訊いた将の問いに、夫妻は顔を見合わせた。

その見合わせる時間に、微妙な間合いがあった。

「籍を入れたのは、１０年、いや１１年かしらね……」

正枝が８年、９年、と数えるように確かめながら答えた。

１１年？聡は意外に短いその数字を逆算してみる。５０歳のときに結婚？

「わたしら、駆け落ちしたんです。いいトシして」

純一が、少し照れながら、その年齢にふさわしくない告白をした。

しかしその顔は穏やかだった。

「すごいことを聞いちゃったね」

助手席で将が感に耐えずもらす。

ガタガタの未舗装道路を抜けて、舗装道路に出たときだった。

「うん……」

聡はフロントガラスの先に伸びる道路に視線を伸ばしながら、相槌を打った。

舗装道になったとはいえ、急なカーブが連続し、両側は暗い杉林に囲まれている。

二人が乗った軽乗用車は濃い紫の影をひたすら行く。

聡と将の二人は、昼食を兼ねて、夕食の買い物に出てきていた。

夕食は、すき焼きにすることになっていたのだが、若い将が加わったので、

肉や野菜を買い足さないととうてい足りない。

ちなみに将は夜１０時の終電までここにいる、と宣言していた。

お互い、夫や妻、子供がいるのにも関わらず、恋に落ちて、それを全うした沢村夫妻。

特に勤めている会社の重役の娘を妻にしていた純一は、会社にいることもできなくなり、

早期退職し、その退職一時金をすべて別れた妻に渡したという。

正枝も、経済的に何の苦労もなかった家を放り出して、純一に従いていった。

「でもね。私も純一さんも離婚が成立するのに3年もかかったんですよ」

以来、二人は住み込みのパチンコ屋や旅館などを転々とし、ここにたどりついたという。

「自分たちでも、何であんなふうになったのかわからないんですけどね。老いらくの恋、は失うものが多いってのは本当ですね」

と笑う正枝に、

「おいおい、４７歳はまだ『老いらく』じゃないだろう」

と純一が訂正する。出会ったのが４７歳なのだろう。そんなふうに顔を見合わせて笑った夫妻の顔には、

経験した労苦にふさわしい皺が深く刻まれていた。だが、

「自分が選んだことですから」

とまっすぐに将と聡を見る二人の顔には、確かに幸せがあった。

運転しながら、聡は夫妻の話に自分を重ねていた。

博史を……思い出していた。

月曜日、火曜日と麓に降りてメールや留守電をチェックしていた聡だが、博史からの連絡があった気配はない。

危篤だといっていた薫は、どうなったんだろうか。

それを思うと聡は心臓がゆがむような、息苦しさを感じる。

夫妻は、お互いに、元の妻や夫、そして子供たちに申し訳ないことをしてしまった、と話していた。

特に、もう会えない子供のことを話すとき、正枝の目には光るものがあった。

すべてを失ったことも、妻や夫の苦しみを考えれば、当然のことだと言っていた……。

博史と結婚が決まって……指輪までもらっていたのに、将を好きになって別れを決めた自分は。

その報いに何を失うのだろうか。

そして何かの苦しみを与えられるのだろうか。

聡は不思議に怖さは感じなかった。

将は将で、夫妻の話を思い出して、純粋に感動していた。

17歳の自分には計り知れない、しがらみもあるであろう47歳の恋。

すべてを棄てて、全うすることができる。それほどの強い愛が本当にあるのだ。

そして、自分も、聡のためならすべてを棄ててもいい、と今一度、強く決心した将は運転席にいる聡を振り返る。

浮かない顔で運転に集中している聡。

おそらく、博史とその母のことを思い出して、罪の意識に悩んでいるのだろう。

穏やかなのにもかかわらず、沢村夫妻にあれほど強い結びつきを感じるのは、

きっと二人がお互いの罪や苦しみをわかちあって来たからだろう。

幸福という人生の明るい部分だけでなく、暗い部分をもわかちあえる。

つらいことは二人で乗り越える。

聡の苦しみもわかちあって……二人で乗り越えたい。

そう思った将は、そんな決意表明のために、運転する聡の肩に手を置いた。

「運転、うまくなったじゃん」

とさりげなく、笑いかける。

聡は、将を振り返ると、つらそうな瞳のまま、口元で少し微笑んだ。

そして、視線を行き先に戻す。

そのとき、将が見つめていた、聡の瞳に明るい青が反射した。

車は暗い杉林を抜けて、明るい陽射しの当たる県道にようやく出たのだ。

澄んだ冬の青空が、希望のように二人の行く先に広がっている。

１５１◆耳掻き（前書き）

ちょっぴりエッチなので苦手な方は気をつけてください。

１５１◆耳掻き

陽光はますます温かい色を、聡の部屋の木の壁に映している。

そんな中、将と聡はテレビを見ていた。

壁に寄りかかって足を投げ出した聡の腿に将が頭を乗せて……つまり膝枕の状態だ。

天気もいいことだし、ドライブに行ってもよかった（社用車だけど）。

清里とかの観光地もここからは近い。だけど将はあいかわらず不自由な半ギプス足だ。

そんなこともあって二人は昼食を食べたあと、山の学校に帰ってきてゴロゴロすることに決めたのだ。

テレビは、祝日とはいえ平日と同じプログラムで、ワイドショーをやっていたが、

それもさして大事件はないらしく、建国記念日がらみなのか皇室関連のことなどをのんびりと放送している。

６畳間は、大男の将が寝そべるといっそう狭い。

だけど二人には親密な空間ともいえなくはない。

「将、絶対背のびてるよね」

聡は将の髪の毛を優しく撫でながら呟いた。

背も伸びたけど、髪も最初の、海でびしょびしょになって遊んだ頃より少し長めになっている。

こめかみからうなじへと髪を繰り返し撫でる。

ボサボサにしているけど男の子にしてはしなやかな手触りで気持ちがいい。

自然な茶色にカラーリングしているのは聡と同じだ。

『中1から中2ぐらいまで、本当に金髪にしてたんだぜ。ロンブーの亮ぐらいの』

と聞いたことがある。眉の濃い将の金髪姿を想像するのは難しい。

今は普通の色になった髪を陽に焼けた耳の後ろに髪をかけるようにする。

耳にはピアス穴が3つあいている。だけど、今ピアスが入っているのはそのうち1番下の1つだけだ。

と、将が小指をたてて自らの耳の穴に突っ込んでぽりぽりと掻いた。

……無意識らしい。

「将、耳掘ってあげようか」

聡は将に声を掛けた。

「やって、やって」

将は嬉しそうに一度起き上がった。

聡はポーチから耳掻きを取り出した。

耳掻きが好きな聡は、毎日のように欠かさないのでいつもそれを持ち歩いているのだ。

自分の耳掻きで赤の他人の耳を掘るなんて、本当だったら絶対嫌なはずだが、何故か自分から言い出してしまった聡。

耳掻きを共有できるほど……好き。

頭の中に浮かんだヘンな言い方に聡は、ふっと微笑む。

こんな日常の中に、たくさんの『好き』がひそんでいる。

そんな思い出にもならないような1つ1つを積み重ねて、二人の関係はいつか確固たるものになっていくのだろうか。

耳を剥き出しにして、将は再び聡の腿にワクワクした横顔を載せた。

「いくわよ」

なぜか声を掛けてしまったことに、なんだか聡は恥かしくなった。

とってもエッチなセリフを吐いた気がするが、気を取り直して、耳掻きを将の耳の中深くに侵入させる。

「おお」

将は一瞬、ぴくっと背筋を震わせた。気持ちがいいらしい。

「わっ！」

しかし、聡のほうは、将の耳の中から取り出した耳掻きを見て驚きのあまり声を出した。

大きなゴミが耳掻きから落ちそうなほどに掻き出された。

聡は、それを将の頬っぺたにいったんなすって、もう一度耳掻きを侵入させる……そのたびに面白いほどにゴミが取れる。

「将、……訊くけど、いつから耳掘ってない？」

「……あ～、いつだろ。高校入って1回は、やったと思うけど」

再びの耳掻きの侵入に将が背筋を震わせ、足先をもじもじさせる。

「あきれた。よく聞こえが悪くならないわね」

「えー、俺、耳いい方なんだけど」

聡は丹念に将の左右の耳を掘り起こして、さらに最後に、綿棒を使って消毒液で拭き取るところまでやった。

自分の耳でもなかなかここまではやらない。

「ほら、出来た！」

聡は将の頬っぺたに山盛りになった白いゴミを自分の掌に移すと、将を起き上がらせた。

「あ～、気持ちよかったァ。最高ッ」

将は気持ちよさそうに伸びをすると、聡の頬に軽くキスをして

「今度は俺が聡のを掘ってやるよ」

と向き直った。

「え～、あたし昨日やったから、いいよ」

「いいじゃん。新しいゴミが入ったかもしんないだろ」

と将は、強引に聡を自分の腿の上に横たえた。

窓から差し込む陽の光がちょうど、横になった聡の上半身に差して、すぐに翳った。

横たわった聡は、上目遣いで窓を見た。青い空に浮かぶちぎれ雲が太陽を隠したところだった。

大きくないからすぐに出てくるだろう、と思ったら案の定、雲のふちが眩しく輝き、太陽が顔を出した。

再び差し込んだ光に、聡の耳が浮かび、思わず将はごくっと唾を飲んだ。

明るすぎる午後の光に、透けるような色で軟骨による複雑な曲線を描きだしていた。

それは桃の実の表面のような、輝く細かい産毛に覆われている。

ふっくらとした耳たぶは、うっすらとした桃色。そこは何度か将が舐めた場所だ。

耳介の下からは、青いほどに白いうなじが始まっている。

細く、たよりない、うなじの生え際の毛。

耳介の下の日陰に生える隠花植物を思わせるようなひっそりとした毛は、

金曜の夜に至近距離で見た、ちぢれた陰毛よりも、見ようによっては淫らだった。

将はますます昂ぶった心を押さえるように、耳掻きを、やや桃色の聡の耳の中へ、そっと『侵入』させる。

「くすぐったい」

聡が低い声で笑った。

将は、いつのまにか息をとめて、耳掻きに神経を集中させていた。

昨日、掘ったばかりだという聡の耳からはほとんどゴミは出ない。

耳掻きは、いつのまにか、聡の中に入れない将自身の代役になっていた。

「……気持ちいい？」

将は、低い声でゆっくりと訊いた。

「うん。すっごく」

聡は横顔で頷いた。少し笑いが混じった声は、まるで将の中で暴れる欲望に気付いていない。

将は繰り返し、聡の耳の穴に、耳掻きを出し入れしていたが、徐々に『代替』品で収まらなくなってきた。

聡が向きを変えたのをいいことに、あいている左手をそっと伸ばす。

聡はすぐに横顔のまま、将を見上げて、いたずらっぽく笑いながら

「なあに？この手は」

と自分の胸をまさぐりはじめた将の手に自分の手を乗せた。

将は答えない。

右手は耳を掘り続け、左は服の上から聡の乳房の柔らかさを確かめながら、聡のセーターをずりあげていく。

ついに、将は耳掻きを置くと、自分の膝の上に寝そべる聡を仰向けにさせて、

セーター、Tシャツ、ブラジャーをまとめていきおいよくずり上げた。

それらはほぼ抵抗もなく脇の下のラインでくちゃくちゃに丸まり、

窓から差す陽射しの下に、聡の素肌がさらけだされた。

聡はびっくりして将の顔を見上げている。

が、将は明るいところに露出したウエストから乳房までの聡の素肌の美しさに言葉を失った。

午後の陽射しの下で半透明に見えるほどの滑らかな白い肌。

ずりあげられたブラジャーに上部を押しつぶされ、いよいよはじけそうに膨らんだ乳房は、

蛹のようにまっ白でつるつるで、皮膚の下を網目状に走る青い静脈さえも透けて見えている。

まだ固まっていない小さな先端は、ミルクティー色のまま艶めいて、膨らみきった中身がそこからはみでたように見える。

その下、肋骨から腹、臍へと、白くなだらかに続く肌は、北海道のスキー場で遭難した翌日に見た、

新雪に覆われた広いゲレンデを思いおこさせた。

「エッチ」

聡は上目遣いの笑い顔でそういうと、将の膝の上から体を起こした。

そのまま呆けた顔のままの将の唇に軽く口づけをした。

口づけで我に帰った将は、聡を畳の上に押し倒して、もう一度セーターを上にずりあげた。

そのまま、ふくらみの先端を口にする。

将の口づけで乳房の先端は目を覚まし、ぷっくりと固く勃ちあがり、聡の体中に快感を伝え始めた。

「……ダメってば。沢村さんにわかっちゃう」

聡は自らの快感にも抵抗するように、『沢村さん』の固有名詞を出した。

そうしないと、ずるずると引きずられてしまいそうで。

「……アキラ、今週末何の日だか知ってる？」

将は、聡の胸の先端を吸いながら言った。まるで何か甘い液体でも出てくるような吸い方だ。

その刺激で、聡は思わず声をあげそうになるのを必死で堪えた。

「１４日」

「あっ……。バレンタイン？」

将は、乳首を吸うのをやめて、聡の顔に向き直った。

将を見つめる目はせつなげに潤み、頬は赤く紅潮していた。将は聡にそっと口づけをして

「俺、チョコいらないから、アキラがほしいな」

といたずらっぽく懇願した。

「だめよ。……将」

「18じゃないから……ていうんだろ。いいじゃん、前倒しで、さ」

将は、あいかわらず、笑顔のまま、そういいながら、手を聡の裸の胸に再び這わす。

「そんな……ダメだよ、やっぱり」

「ケーチ。でもそういうと思ったんだ」

聡の上にのしかかっていた将は、聡の横にどっかと横になった。

そのまま聡を後ろ向きで抱き寄せると、そのまま聡の裸の胸を愛撫し続ける。

「だから、おっぱいだけ。……いいだろ?」

将は聡の耳に囁いた。耳掻きのおかげでそのセクシーさに気付いた耳。

聡のからだは……あちこちにこんなふうなセクシーが潜んでいるのだろう。

簡単に1つになってしまったら気付かなかったかもしれない。

『じらされている』状態を将は肯定的に楽しむことにした。

まだまだ聡と二人の長い人生はこれからだ、と将は信じているから。

「将ってば、もう」

聡のほうは、そういいながら別段抵抗もせず、乳房を好きなようにまさぐる将に身を任せていた。

152◆最終列車

二人、さっきと同じように寝そべってテレビを見ていた。

違っているのは、ワイドショーが終わって、夕方の地元番組になっていること、

窓から差していた陽射しはいつのまにか陰り、空が夕方の色になっていること、

そして将が聡のセーターの下の柔らかい素肌にじかに手を這わせていることだった。

「今日……、何時までいられるの？」

聡がぽつりと訊いた。いつになく寂しげな声だ。

将はそんな寂しそうな声を出す聡がいとおしくなる。

「泊まっ……ちゃおうかな」

などと言いながら聡を抱く腕の力を少し強くした。

「……だめよ。学校でしょ」

寂しそうなくせに、教師らしいことではゆずらない聡だ。

「冗談だよ」

将は聡をこちらに向き直らせると、今日、十数回目かになる口づけをして、髪の毛に顔をうずめた。

「ずっと……こうしていたいな、アキラ」

「うん……」

お互いのぬくもりも、匂いも、声もあと数時間でお別れ。

その事実が、それぞれをいっそう離れがたいものに感じさせて二人はさらに強く体をくっつけるように抱き合った。

「へえ。肉に直接砂糖を振り掛けるんですか」

将は湯気があがる鍋の中をのぞきこんだ。

寮母の沢村正枝が、鍋の中で焼けた牛肉に直接砂糖を振り掛けている。

寮の食堂は、牛脂が焼ける香ばしい匂いでいっぱいだ。

「そうよ。関西風のやり方を習ってね。美味しかったからそれ以来真似してるのよ」

「アキラんちもこのやり方？」

将が隣の聡を振り返った。聡は山口、つまり西日本出身だ。

「ううん、うちは割り下を使っていたように思うけど。関西とか関東とかそういう意味じゃなくて単に手軽だからだと思うんだけど」

「へえ。でも、これってまさにすき『焼き』ですね」

将は正枝に笑いかけて、好青年ぶりを発揮している。

鍋の中では肉の次に、ネギとシイタケ、しらたきが加わり、肉の脂でいい具合に焼かれている。

正枝はその中に素早く酒を振り掛ける。

鍋から蒸気が勢いよくあがったところで、正枝はラベルのないガラス瓶を手に取った。

どうやら醤油らしかった。

「そして、これがウチのオリジナル。お手製のダシ醤油よ」

それをぶちまけると、鍋は一気に茶色くなり、かわりに旨そうなすき焼きの匂いがあたりに充満しはじめた。

「ああ～っ、腹減った」

「さあ、あとは白菜とお豆腐を入れて、食べる少し前に春菊をいれるだけよ。純さんを呼んでこなくっちゃ」

純一は、暗くなったのに、外灯を点けて畑づくりにまだ精を出しているのである。

ちなみに、外灯は昨日、純一自身が取り付けたものだ。

「かんぱ～い」

すき焼きが出来上がり、将、聡と沢村夫妻の４人はビールで乾杯した。

４人で鍋を囲むと、静かな山の夜もかなり賑やかになる。

先週ここでたった一人でテレビを見ながら食事をしていたことがまるでウソのようだと聡は思った。

１杯目を空けてしまった将は、純一からビールを注いでもらっている。

聡は、将の飲酒に関しては慣れてしまったので、何も言わない。

「んっ……、本当にウマイ！」

最初にすき焼きに手をつけた将は、感嘆の声をあげた。

「アキラも食ってみろよ、旨いぜ」

「ホント？」

聡もレース状に煮えた肉を取り、生卵につける。

肉を口に入れた聡は、大きな目を見開いて将を見つめた。

「ほんとだ、美味しいね！お肉が柔らかい」

「そんな。二人が買ってきてくれたお肉がいい肉なのよ」

正枝は謙遜した。純一は無言だが、その出来栄えに文句はないようだ。

「うちもぜひ真似しようぜ」

将はわざと、『うち』という言葉を使った。

聡と将来つくる家庭を想定した言葉に、将は願いをこめた。

聡は、それに気付いたのか気付かないのか

「そうね。ところであのダシ醤油ってどうやってつくるんですか？」

などと正枝にレシピを訊いている。

すると、純一のほうが、気付いたらしい。

「二人は、将来？」

とビールのロング缶の口を将のほうに向けながら訊く。

将来、の先に省略されているのはもちろん『結婚するのか』という質問である。

「ハイ。なるべく早く……と思ってるんですけど」

「何、学生結婚するの？」

グラスから泡立ったビールがこぼれそうになり将はあわてて口をつけながら

「ハイ」

と答えた。学生結婚という言葉に、レシピを訊き終わった聡が振り返る。

「副校長さん、近いうちにご結婚するんですか？」

「ハ？」

聡は目を丸くして、将と純一をかわるがわるに見た。

将は、横目でこっちを見ながら、いたずらっ子のような顔でビールを飲んでいる。

「ヤダ。そんな、まず卒業しないと、とてもとても……」

聡は手を振った。

「そうよねえ。結婚したら赤ちゃんができるかもしれないし、そうしたら副校長さんもお仕事続けられないしねえ」

と正枝が口を挟んだ。

『赤ちゃん』というリアルな言葉に、聡は少し頬が熱くなるのを感じて俯く。

自分と将と二人のＤＮＡを受けついだ赤ちゃん。……愛の結晶。

かつて、博史にそれを提案されたときは、なんだかとてつもない重荷に思えたが、

将とのそれを考えるのはなんだか甘い綿菓子を口にするようなフワフワした感覚があった。

空のグラスに、ビールが差し出されるが、聡は『あとで運転がありますから、このぐらいで』と遠慮した。

「俺……僕は、経済的にはなんとかする自信はあるんですけどね」

将は、ビールで少し気が大きくなったのか、そう言い放った。

東京方面の特急は２１時すぎで終わるが、将によると、甲府発の普通列車だったら

東京まで接続する最終は、２２時すぎまであるということだった。

食後も、沢村夫妻は気を利かせてくれて、部屋に切り上げてくれた。

将と聡も、部屋に戻って食後のコーヒーを飲んだが、

あっという間にここを出なければならない時間になってしまった。

「将、そろそろ出ないと」

「……まだいいよ」

二人は壁に寄りかかっている。テレビは点いているけど、二人ともほとんど内容は頭に入っていない。

「でも、あたしの運転だし……」

甲府駅までは聡が車で送ることにしている。

「ん……」

将は傍らの聡を振り返った。聡もちょうど将のほうを見ていた。

吸い寄せられるように、二人は唇を重ねた。

「なんで泣くの」

唇を離した聡は、涙をこぼしていた。将はその涙を優しく指の背でぬぐう。

長い睫が涙で濡れているのを見て、将は胸が苦しくなるようなせつなさに襲われる。

「将……」

聡は将の胸にすがりついた。聡もせつないのは同じらしい。

将は聡を抱きしめると、その耳元で、

「やっぱり……泊まっていこうか」

と囁く。それは本心がかなりの割合でまじっていた。

このまま、ここに住み着いてしまってもいい。

将は別れのつらさが起こす刹那のあまり、一瞬そんなことさえ考えた。

でも……聡は、やっぱり将の胸の中で首を振ると頤をあげた。

「ごめんね。心配させて。ちょっとだけ寂しかったんだ」

と将の瞳を見つめてゆっくりと言った。そして

「土曜、いや、金曜夜には会えるんだもんね」

と微笑み、「行こうか」と立ち上がった。

立ち上がってジャケットを着る聡の背中を……将はもう一度後ろか

らきつく抱きしめた。

夜空に思い切りぶちまけたような星々が山影を浮き上がらせていた。

そんなに美しい夜空がフロントガラスの上に展開しているというのに、二人は言葉も少なかった。

急がないと、終電に間にあわなくなる。

だけど……時を先に進めなくない。

そんな葛藤がハンドルを握る聡の中でうずまく。

しかし、夜の道路はごくスムーズに二人を甲府駅まで運んでしまった。

聡は駅の前で別れようとしたが、名残を惜しんだ将のほうが、聡の入場券を買った。

甲府駅が始発の列車は、もうホームに入っていた。

ときおり乗客が、自分でドアを開けて乗り込んでいる。

冬の間、寒冷地の列車のドアは、ボタンで開閉するようになっているのだ。

「金曜日、ていうかもう、あさってだよね。東京に戻るから」

聡は努めて明るい顔を見せるようにした。

だけど、吐く息もろとも、ホームの寒々しい白い照明に照らされて、ひどく寂しげな顔に、将には見えた。

「アキラ……」

何と声を掛けていいかわからない将は、ただ聡の名前を呼んで列車のドアの前で佇んだ。

白い息だけが二人の間にかわされる言葉のように流れていく。

将は聡をこんな寂しげなホームにひとり残して、列車に乗り込むことが、どうしても出来なかった。

将が見つめる聡がビクッと体をふるわせる。スピーカーから発車のベルが鳴り出したのだ。

「学校に、行ってね……将」

聡の目で、蛍光灯がゆらゆら光る。涙が落ちるのを一生懸命堪えているのだ。

それを見つけてしまった将は「じゃあな」という言葉を飲み込むと、ふいに聡を強く抱きしめて名前を呼ぶ。

別れがたいぬくもり。

「行かなくちゃ、将」

将の胸の中で、聡が苦しげに囁いた。

将は、いったん体を離すと、噛み付くように聡に口づけをした。

そのまま顔はずっと聡のほうを向いたまま、列車に乗り込む。

「じゃあな」

将が乗り込んですぐに、列車は動いた。

将は窓に張り付くようにして、ずっと聡を見ていた。

聡は……その場から動けなかった。聡の中でいま動いているのは頬を伝う涙だけだ。

駅員の視線も、乗客の視線もわかっていたし、羞恥心もあった。

けれど将と離れる圧倒的なせつなさの前では、そんなことは小さなことのようにも思えた。

聡は将を乗せた列車の灯りが、暗闇に溶けるように見えなくなるまで立ち尽くしていた。

どうして、こんなに哀しいのだろう。寂しいんだろう。せつないんだろう。

たった2日なのに。

月曜日の朝も同じように二人は別れたはずなのに。

聡は行きは二人でのぼった駅の階段を、たった一人降りながら、考える。

あのときは早朝で……あわただしいのと、頭が眠気に支配されていたので、哀しさもせつなさも、きっと薄まっていたのだろう。

いま、はっきりと覚醒した頭に、星降る夜、最終のホーム、白い吐息と舞台装置が揃いすぎて……

二人にたとえたった2日でも、別れ別れになるつらさをいっそう尖らせた。

聡はさらに記憶をたどる。

博史とは、こんなふうに何度も別れのシーンがあったはずだ。

しかも2日とはいわず、4ヶ月逢えないなんてざらだった。

あのときも、こんな風に泣いていただろうか……。

聡は洟をすすった。もう、思い出せなくなっている。

それほどまでに……将への想いは……博史を愛した記憶を追い出すほどまでに強いのだ。

そのとき、携帯が鳴った。

将が、泣いているであろう聡をなぐさめるべく、早くも電話を掛けてきたのだろうか。

聡はバッグのポケットから携帯を取り出した。

暗い中、輝くサブウィンドウには、『原田博史』の文字が表示されていた。

まるで記憶が、彼を呼んだかのようだった。

しかし、現実の彼から連絡があったということは、おそらく、その危篤の母の動向だろう。

ついに審判が下される。聡は悪い方向ではないことを祈りながら、着信ボタンを押した。

電話の向こうは無言だった。

「……博史さん?」

聡のほうからその名前を呼ぶしかない。

「聡……」

やや低い、感情が読み取れない声で、博史は聡を呼んだ。

１５３◆バレンタイン前

博史は１回聡を呼んだぎり、黙り込んだ。

聡も何をどう話すべきかわからないままに、沈黙が横たわった。

その重みに耐えられず、ついに聡は自分から口を利いた。

「あの……こないだは、ごめんなさい」

とりあえず的な謝罪。どんな声音で話そうとも、どんな言葉を使おうとも軽軽しさはぬぐえない。

「土曜日に……」

聡の謝罪には答えないまま、ふいに博史から、土曜日という言葉が出た。

さっき将も土曜日、といっていた、バレンタインデーだ。

「逢えないか」

「博史さん……」

聡は博史がどういう意図で、逢いたいなどと言うのか計り知れなくて再び沈黙した。

だけど。もうどの道、元の関係に戻れないのだ。

だから、逢うわけにはいかない。

……ということをどうやって伝えるべきか。深層意識下でその言葉を選び始めた聡に

「最後に、もう一度逢って、話して、別れよう……」

これで最後という宣言が博史からなされた。

身構えていた聡は力が抜けるようだった。

本当に最後なのか。

博史は、別れを承諾してくれるのか。

ならば……薫の容態は、どうなったのだろうか。

「あの……お母様は……」

聡は思い切って自分から訊いてみた。

結婚相手でもない今、博史の母を『お母様』とよぶのにわずかに躊躇する。

だが他に呼びようがないのでそれで通す……いずれにしても、知りたい結果に比べればささいなことだ。

「ああ……。持ち直した。日曜の夜には落ち着いていた……連絡しなくて悪かったね」

聡はその場に座り込みそうになった。

「よかった」

思わず安堵の言葉が漏れたが、博史の母の無事を喜んだのではない。自分のせいで悪化した、という罪の意識にさいなまされないで済む……重荷がなくなったことへの利己的な安堵。

そして、それを自覚した聡は、自分を少し恥じた。

「土曜日、逢ってくれるよね」

博史はそんな聡を知ってか知らずか、電話の向こうから詰め寄ってきた。

「あの……土曜日じゃなきゃダメ？」

「ああ。月曜から北京なんだ。時間は取らせないよ……。少しでいいんだ」

いずれにせよ、指輪を返さなくてはならないだろう。

承諾の返事と共に、暗い夜に白い息が立ち上る。

いつのまにか、車を止めた駅裏の路上に出てきていたのだ。

木曜日、再び平日。

始業時間ギリギリに登校した将は、直接、視聴覚室のほうに向かった。

入り口に立った将は、唖然とする。人数がやたら増えていたからだ。

全員とまではいかないものの、2／3以上はこっちに移って来ていた。

月曜以来休んでいる松岡は、今日も姿が見えないようだ。

さすがに人数が増えると、ボイコットとサボリを混同している者が増える。

視聴覚室は思い思いにしゃべる生徒たちで賑わっていた。

「みんな聞いてください！」

スピーカーからの声で、皆が前を見た。

兵藤がマイクの前に立っていた。

「今日からボイコットに加わったひと！ボイコットとサボリは違います。遊びたい人は出て行ってください！」

兵藤の強い口調に、皆、静かになる。

「僕たちは、あの京極先生のやり方についていけない、ということで京極先生を辞めさせて、できれば古城先生に復帰して欲しいという意志をもって、ここに集まっているんです」

将は、ふいに出た聡の名前に、マイクの前に立つ兵藤を見上げた。

「だから、授業をボイコットしても自習するなどして、きちんとした態度を表明しないと学校は動かないと思います。みんな、そのつもりで、きちんとしてください！おねがいします」

兵藤はマイクの前で丸刈り頭を下げた。

パン、パン、パンと単独の拍手が起こった。カイトだ。

カイトにつられて星野みな子、真田由紀子、井口……と拍手は視聴覚室全体に広がっていった。

最初に兵藤のそんな演説があったので、皆、比較的静かに自習を始めた。

それでも、さわさわと話し声は散発的に起こる。

みな子は、とりあえず木曜日の1時間目である英語のプリントを机

に広げていた。

大学進学希望のみな子が広げているのは専用プリントで、Ｂ４の用紙１枚全部が英語で埋め尽くされた、論文の抜粋である。

聡は、習熟度に応じて、かなり難度の高いプリントも渡していたのである。

ちなみに同じ進学希望でも、英語があまり得意でない将には、論文ではなく、日本の漫画の英訳プリントなどを渡して、アレルギー反応が起こらないように工夫している。

英語の論文に没頭しようとするみな子に、同じ漫研の木村すみれがそっと話し掛けてきた。

「ね、みな子、今日こそチョコ買うから、放課後、付き合って」

「決めたの？また迷うんじゃないでしょうね」

みな子が皮肉まじりに言うのにはわけがある。

実は休日だった昨日、みな子は、すみれのチョコ選びに付き合わされている。

しかも散々迷った上で、すみれは結局迷って何も買わなかったのだ。

「今日は買うってば。だからお願い」

と懇願するすみれは、随分前から漫研の先輩が好きだという。

卒業前になんとかコクりたい、つまりバレンタインは最後のチャンスなのだという。

もちろん当日は土曜だから学校は休みだが、前日の１３日は３年は週に１度の登校日にあたっている。

チョコ目当てで登校する３年は結構多いと思われる。

以前、その先輩のことが好きだと、すみれから聞かされたとき、好きなキャラと全然違うじゃん、とみな子は指摘したが、

「キャラとリアルは違うよ」

などとすみれは言い訳したものだ。それどころか

「みな子もリアルで誰か好きな人ができたらわかるってば」

すみれはみな子をバカにした言い方さえした……。

みな子は、そっと英語のプリントから目をあげて、斜め前方２列前をそっと盗み見る。

……将は机にかがみ込むようにプリントをやっているのか、その広い背中しか見えない。

ふいにその背中が動く。みな子はそれだけで心臓が存在を主張を始めるのを感じた。

将は、少し起きると、左手で頬杖をついたようだ。

広い肩の上に、ボサボサの髪が見える。

――反対側に頬杖をついてくれれば顔が見えるのに。

そう思ってハッとする。なんで顔を見なくてはならないのだ。

みな子はすみれに

「わかったから」

と答えて無理やり自分を英語のプリントに集中させた。

午後になり、ボイコットはさらに増えた。

「何だコレ」

学食から井口と共に帰ってきた将は、その人数の多さに、視聴覚室の入り口で思わず呆然と立ち尽くした。

まるで教室がそっくりそのまま移動してきたような多さだった。

「将」

一足先に戻っていたカイトとユウタが将に駆け寄ってくる。

カイトがウヒヒと笑いながら言った。

「とうとう全員ボイコットだぜ」

「ウソ」

将は目をみはってあらためて視聴覚教室を眺めた。

ポイントのことで松岡を責めていた島田ですら、面白くなさそうに席についている。

「アイツ（京極）どんな顔してるだろうな」

ステッキをつきながら自分の席に移動する将にくっついて、カイトはさも愉快そうに話す。

と、将が席についたそのときだ。

視聴覚教室の入り口が、バン！と勢いよく開いて、皆いっせいに振り返った。

京極だ。京極が竹刀を片手に立っていた。

外からの逆光を受けて、シルエット状態だが仁王立ちだということはわかる。

京極は竹刀を床に叩きつけるように振り下ろすと一吼えした。

「……てめえら、いつまで遊んでんだ！」

昼休み明けでざわついていた視聴覚教室がシンと静まり返る。

「人が黙ってると思って、調子にのりやがって」

京極はゆっくりと歩き始める。

「さあ、戻れ、戻れ！」

京極は、一番後ろにいた女子生徒の腕を次々と掴んで引っ張り上げた。

「キャー」

「やめてください」

と声があがるが、視聴覚教室の席はベンチ状態なので、引っ張られても嫌々立ち上がるまでしかできない。

京極は、ベンチの一番端にいた小柄な真田由紀子の腕を掴むと、席から引っ張り出そうとした。

「やああ！」

由紀子の悲鳴に、思わず兵藤が京極のそばに駆け寄った。

「乱暴なことは止めてください！」

兵藤の言うことなど、京極が聞くはずがない。

京極は真田由紀子を席から引きずり出そうとなおも強引に華奢な腕を引っ張る。

「痛いいっ！」

由紀子の悲鳴に

「やめてください！」

兵藤が、由紀子を掴む京極の腕に無我夢中で取り付いた。

邪魔な兵藤を京極が力いっぱい振り払った瞬間、その力が強すぎたのか、兵藤は跳ねるように後ろに飛ばされた。

ゴッ、と嫌な音がした。兵藤が飛ばされたあたりには、違う列のベンチの角があった。

飛ばされた兵藤は……丸刈り頭を手で押さえて尻餅をついているように見えた。

しかし3秒後、押さえた手の下から、赤黒い血がどくどくと流れ出すのを、そこにいた全員が目撃した。

女子の叫び声がまず起こり、視聴覚室は怒号と悲鳴に包まれた。

１５４◆流血事件とチョコ

兵藤の頭の傷からの血はシャツの襟を赤く染めるほどで、それを見た女子の中にはめまいを起こす者もあるほどだった。

京極は黙って立ち尽くしていた。どうしていいかわからないようだった。

兵藤本人は意識もはっきりしていて、保健室まで自力で歩いていったほどだった。

しかし、場所が場所なので保健室で応急手当を受けて、いちおう病院へ検査を受けに行った。

付き添ったのは、多美先生で、京極は事情を説明するため校長室に呼ばれたっきり出てこずに、

他のクラスの京極の担当授業もすべて自習になった。

授業ボイコットしている2年2組はそのまま、視聴覚室で自習するよう、代わりの教師が来て指示していったが、その教師が消えるなり、みな三三五五寄り集まって、

「兵藤くん大丈夫かな」

「血は出てたけど、結構平気で歩いてたよね」

「いやいや、頭は、あとからが怖いんだ……」

「これって暴力傷害事件になるのかな」

「まさか。殴ったわけじゃないし。過失でしょ」

などと噂しあった。

しかし、皆『これで京極はクビ』という期待では一致していた。

そのときだ。

カイトが乱暴に視聴覚室に入ってきた……彼は、校長室のようすを立ち聞きしていたのである。

『どうだった?』と訊かれる前に

「信じられねえぜ!あの京極のヤツ!」と怒鳴った。

『私は、生徒を授業に戻そうと、声を掛けていたんです。そしたら、急に兵藤君が殴りかかってきまして……。

とっさによけたのですが、その反動で彼は机に頭をぶつけたのです。先に暴力行為におよんだのは兵藤君のほうです』

兵藤は校長らにそう説明したのだ。

「アイツ、ぶっ殺してやる!」

カイトは悔しそうに叫んだ。

「で、何、それを校長は信じてるわけ？」

将の問いに、カイトは悔しそうにうなづいた。

「何だよ、それ」

井口も思わず大声を出す。

カイトはクラスの皆にわざと聞こえるような声で話していたので、その話はクラス中に広まり、いっそうざわめきが大きくなった。

皆、口々に「ヒドイ！」「最低！」と吐き棄てるように言いあった。

５時間目の終了のチャイムが鳴ったとき、多美先生が視聴覚室に入ってきた。

休憩時間だけれど、おかまいなしにマイクの前に立った。

皆、席について静かになった。兵藤につきそった多美先生から説明があることは明らかだからだ。

「みんな心配したと思うが、兵藤は大丈夫だ。頭を２針縫ったが命に別状はない。念のためにＣＴスキャンも撮ったが異常はなかった」

一瞬、その場に安堵の空気が流れる。

「ただ、京極先生に暴力をふるおうとした、ということで、ポイン

ト減の他に、1週間停学、ということになってしまった」

多美先生がそれを言い終わった瞬間、視聴覚室は一斉に蜂が飛び立ったような攻撃的な騒ぎに包まれた。

「静かに！」

多美先生が叫んでも、騒ぎはおさまらない。

「多美先生！」

星野みな子が勢いよく立ち上がった。女子クラス委員が立ち上がったことで、騒ぎが少し静かになる。

「兵藤くんは京極先生に暴力なんかふるっていません」

そうだ、そうだ、と皆口々に言う。

「暴力をふるったのは、京極先生のほうです。ユキちゃん……いえ真田さんの腕を京極先生が乱暴に引っ張ったので、それを止めようとしたんです。みんな見てました！」

「ユキちゃん、腕ひねられて、肩が腫れてるんだから！」

真田由紀子の隣の田上ルイが悲鳴のように訴えた。

「そうなのか、真田」

多美先生が真田由紀子のほうを見た。

その口調は比較的優しかったにもかかわらず真田由紀子は多美先生のほうをおそるおそる一瞬見ると、

うつむいて……それでもゆっくりうなづいた。

「田上、真田を保健室に連れて行ってやれ」

多美先生はただちに指示をした。そのときには由紀子の目からはぽとぽとと涙が落ちていた。

ルイはそんな由紀子をかばうように視聴覚室から出て行った。

「しかし……京極先生は、あくまでも最初に暴力をふるったのは兵藤だ、と言っているんだが」

「ウソに決まってるだろ！」

とうとう将が立ち上がった。マイクの前に立つ多美先生をまっすぐに見据える。

「先生、生徒を信じないのか。俺はともかく、兵藤くんとか、星野サンとか、真面目なやつの言い分も信じられないのかよ。

2年近くも一緒だったこいつらより、あんな会って1ヶ月のヤクザ野郎の言い分をそっくりそのまま信じるのかよッ！」

多美先生は、将のまっすぐな視線を受け止めて、黙り込んだ。

しかし、視線はそのまま将の瞳に注がれた。そして、クラスの皆の瞳を一人一人順番に見つめた。

皆、訴えるような目で、多美先生を見つめていた。

「その件は京極先生に、もう一度確認する。今日はみんな、帰りなさい」

多美先生は、ため息をつきながらも、落ち着いた声で皆を諭した。

「これ、美味しそう！」

みな子は、ショーケースの中にある1口サイズのハート型の生チョコレートに釘付けになった。

あんな事情で、だが、いつもより1時間早く始まった放課後にラッキー！とばかりにすみれはみな子を連れてチョコを買いに街へ出てきたのだ。

事件のことは気になるし、嘘をついた京極には本当に腹が立つ、と街へ出てくる電車の中ですみれもしきりに言っていた。

しかし、チョコを目の前にして、一連の事件はふっとんだらしい。

学校の事件と恋する心は別問題で、いまは先輩にあげるチョコの問題がすみれの最優先事項らしかった。

美味しそうなチョコに釘付けになっているみな子を見て、すみれは

「みな子も誰かにあげればいいのに」

と言い放った。

誰か、という言葉にみな子の頭に、背の高いボサボサ頭……将がふいに浮かぶ。

さっき、みんなのために多美先生にくってかかった将。端正な横顔のライン。真剣な瞳。

想像は、思いもよらず暴走して、みな子が将にチョコレートをあげるところまで行き着く。

あの、猫のときのようなオレンジ色の夕陽の中、将にチョコレートを渡す自分を思い浮かべる。

「じょっ、冗談じゃない！」

思わずあせったみな子。次の瞬間、そんな自分に照れる。

幸いすみれのほうは、自分のほうのチョコ選びに夢中で、みな子の様子などどうでもいいらしい。

「トリュフもいいけど……でもオーソドックスにハート型にメッセージを入れるのもいいんだよね」

と真剣だ。

ほっとしたみな子は、ショーケースの中のチョコに再び目をうつす。茶色いココアが降りかかった生チョコレートは一口サイズで上品だし、いかにも美味しそうだ。

しかしどうしても、チョコを見ると、どうしても夕陽の校庭と将がセットになってみな子の頭に顔を出す。

すみれは迷いに迷って、

「やっぱ、ハート型にする！」

と宣言したが、今度はメッセージの文言で悩みだした。

その間、みな子も、生チョコレートの誘惑に悩むことになった。

結局、みな子は、ハート型の生チョコレート3個入りを、「自分用だもん」と言い訳しながら買ってしまった。

１５５◆流血事件とチョコ２

１３日の金曜日というのは、今回は皆忘れ去っているであろう……バレンタインデー前日。

意味もなく、一人で行動してみる男子が増える今日、みな子は生まれてはじめて学校にチョコレートを持ってきてみた。

もちろん漫研仲間のすみれにも内緒だ。

昨日『自分用』に買ったチョコレート。

しかし、自分用にしてはきれいに包装されすぎていた。

だから……それは誰かにプレゼントされるべきなのだろう。

その相手として、みな子は鷹枝将をはっきりと思い浮かべることができた。

みな子は、今は、鷹枝将が好きだと認識している。

そもそも、１年のとき、血だらけの猫を抱えた少年に出会ったときから、好きになり始めていたんだと思う。

今の……少年とは言いがたい、将。彼への愛は自分でも認めたくなくてみな子は少し葛藤した。

だけどこの１週間。

ボイコットがきっかけで、思いは急成長してしまい、みな子自身にも収拾がつかなくなっている。

恋は、こんなに急激に落っこちてくるものなのだ……みな子はこの甘い驚きをもてあましていた。

みな子はなんとなく早く登校してしまった。

ドキドキして眠れなかったというのもある。

温かい自宅の室内で、それは溶けてしまうんではないだろうか、という危惧もあった。

両親にももちろん知られたくないから冷蔵庫にも入れられない。

昨日……正確には今朝、3時。

眠れないみな子は、初めて異性へメッセージというものを書いてみた。

3段目の引き出しの奥には、未使用のカードがたくさん入っている。

特に使用する予定もないのに、デザインが気に入って衝動買いしたものが、今役に立つとは思わなかった。

メモ用紙に、まず下書き。

まず、自分の字が気に入らない。

可愛くて感じのいい字ってどんな字だろうか。

みな子はボイコット声明書に書かれた将の字を思い出した。

学校を1年もさぼっていた、不良とは思えない綺麗な文字だった。

――あの紙、コピーしてもらっておけばよかった……。

ピアノがあんなに巧いのだから、お習字もやってたのだろうか。

将が政治家の息子だということはみな子も知っている。

いつから道を踏み外したのかは知らないが、子供の頃はきっと習い事漬けだったんだろうな、とみな子は子供時代の将の姿をなんとなく想像する。

――いけない。脱線してしまった。

みな子は、メッセージに戻る。

字体はあとにして、文言を考える。

2時間も考えて、結局

『足、早くなおるといいね』

だけになった。

その前に

『ちょっと気になっています』

というのを入れるかどうかでとても悩んだ。

だけど、

気になっている　好きだ

じゃないだろうか。

つまり告白になってしまう。そこまでの勇気は、まだみな子には、ない。

いざとなったら義理チョコのふりができる逃げ道が、恋にウブなみな子には欲しいのだ。

視聴覚室には、まだ誰も着ていなかった。

いつも将が座る席は決まっている。

その机の下に入れておこうか。

だけど、今日に限って他の人が座ることも考えられる。

だいたい、みな子はメッセージに自分の名前を書かなかった。だからそのセンは、ない。

いつも座る自分の位置に腰を下ろしたみな子に、

「よぉ！おはよー！」

と背後から声。みな子の体に大地震のように衝撃が走る。将だ。

「早いじゃん！」

なんにも知らない将は、みな子に声をかけながら、2列前のいつもの場所に、

ステッキをついた足ながらかなりの大またで歩いていく。

みな子は平静を保つのに苦労しながら

「そっちこそ早いじゃん」

と返答した。

「ああ……。寿司屋のこととか気になってさァ。星野サンも？」

席についた将は、みな子のほうを振り返った。

「え……うん」

みな子は頷くしかない。でもチャンスだ、ということはわかっている。

視聴覚室にみな子と将の二人しかいない今、チョコを手渡す絶好のチャンスだと。

『これ、ボイコット仲間として。深く考えないで』

何度となく頭の中で繰り広げたシミュレーション。

眼鏡の奥の瞳が少しでも大きく見えるように、と今日は慣れないマスカラをしてみた。

髪も1つにまとめないで、今日は念入りにアイロンをかけた。

もともとストレートの髪は、おかげで、いつもより、つやつやサラサラになっている。

しかし、チャンスの到来があまりにも突然すぎて、みな子は躊躇してしまっていた。

だけど。みな子は、思い切ってカバンを取り上げた。中に……チョコが入っている。

と。ちょうどそのとき。

「鷹枝サン……」

入り口から、おずおずとした声が将を呼びかけた。

振り返ったみな子に、1年らしい女子の姿が見えた。声を発したのは一人だが、3人かたまっていた。

皆、茶髪に化粧をきちんとほどこしたギャル系だ。

「何」

将は面倒くさそうに、ステッキをついて立ち上がった。

とたん、耐えられずに「キャー」「どうしよう」「ホントに来た！」という声があがる。

「あの、これぇ……」甘く高い声。

チョコを差し出しているであろうことは、背を向けているみな子にもわかる。

「くれるの？ありがとう」

と将の声。アイドル然とした優しい声だ。

1年女子は、チョコを手渡したとたん、きゃあきゃあいいながら走っていってしまったようだ。

「なんだ、アレ」

将は、いっぺんに3個ももらったチョコを、ステッキをついていないほうの右手と体で支えながら席に戻ろうとしたが、

そのうちの1つが床におっこちてしまった。

みな子は、それを拾ってあげながら

「モテるのね」

と皮肉った。

「去年は1個ももらわなかったぜー？」

と将はまんざらでもない笑顔で言った。

「当然でしょ。だって学校に来てなかったんだから」

「あー、そっか」

そんな笑顔が、みな子にはなんだか憎たらしかった。

始業時間が近づいて、生徒たちはぞくぞくと登校してきた。

今日も、2年2組全員が視聴覚室のほうに出席した。

なんとなく、浮き足立っている気がする。バレンタインだからだろうか。

まだチョコを渡していないみな子は、将の動向ばかりを常に気にしていたが

ギリギリに登校してきたすみれに

「やっぱり兵藤くん来てないね。停学決定なのかな」

と言われてやっと、兵藤が来ていないことに気づいた。

それで、ざわついていたのだ……少し自分が恥かしいと思った。

そういえば、真田由紀子も休んでいる。肩の怪我はひどいんだろうか。

すみれが席についてすぐに、ＨＲのチャイムが鳴ったが、ヤクザ京極も、当然現れない。

いつのまにかボイコットのリーダー的存在になった、兵藤が今日はいないせいか、皆少し私語が過ぎるようだ。

教科書は開いているものの、みんな好き勝手に話している。

すみれも、

「ねえねえ」

などとみな子に声をひそめながらも話し掛けてくる。

話の内容は、他の生徒にきかれたくないのか、ノートの端に斜めに走り書きしてみな子に見せる。

『チョコ、いつ渡したらいいかな』

とある。みな子がそれを見たらすぐさま、すみれはそれを消しゴムで消す。

みな子は、いつもだったら、そういう話題はまたか、ウザイな、と思うのだが、密かに自分もチョコを持ってきている今日は話は別だ。

恋する少女の話は、そうでない少女から見れば甚だ迷惑なのだが、自分も恋する少女になってしまった場合は話は別だ。

相手の話は、自分のことのように切に迫る。

『休み時間に呼び出せば』

みな子も自分のノートの端に書いて、すみれが見たら即座に消す。

『はずかしいヨ。靴箱に入れとこうかなと思うんだけど』

『ええー、靴箱。汚くない？』

食べるものを土足と一緒に置くのは、非衛生的だと思ったみな子は

『今日は部活に来るんじゃない？そのときにさりげなく、ってのは？』

と提案してあげた。

『そのさりげなく、がムズイよォ～』

とすみれは汗のイラストを添える。

みな子が、ファイトォ！と書こうとしたときだ。

視聴覚室の扉が勢いよく開いて視聴覚室の一同がそちらに注目した。

「保護者が来たっ！」

ユータだ。

「ええっ！」

「誰のっ？」

叫びながら飛び込んできたユータに、事情を知りたい皆が寄っていく。

席についたものも耳をそばだてた。しかしそんな必要がないほど、ユータの声は大きかった。

「わからないけど3人来てた。みんな校長室に入っていった。カイトが立ち聞きしてるけど」

「マジ！」

将は立ち上がると、ステッキをついて立ち上がった。井口も立ち上がる。

他のものも続こうとしたが、

「大勢だと目立つだろ！待ってろ！」

と井口にどやされて、仕方なく席についた。

「将！」

職員室の窓の外に立っていたカイトが将の姿を見つけて、小声で叫んだ。

「どう？」訊きながら将は身をかがめた。

「なんか面白いことになってるよ」

カイトによると、校長室に来ているのはどうやら松岡の父、由紀子の母、そして兵藤が修行している店の主人ということだった。

それに対して校長室には、校長、教頭、学年主任の多美先生が同席しているようだ。

「……とにかく、うちの憲一は、目上の方に自分から暴力をふるうようなことは絶対にありません。停学を解いて頂きたい」

という声は、おそらく兵藤の店の主人だろう。落ち着いているが、その内容は毅然としたものだ。

「しかし……京極先生は……」

教頭が言い訳をしようとするのを、

「きちんと調べたんですか」

というのは、松岡の父だろう。その口調は弱弱しい松岡にはまるで似ていないが。

「うちの娘は、肩の脱臼の原因は京極先生だと言っています……。京極先生がいる限り、学校には行きたくないと言ってます」

自らも泣きそうな、必死な声は真田由紀子の母親だろう。

「だいたい、何で、古城先生から京極先生に急に担任が代わったんですか。

そこのところの説明が何も我々になされていないのはおかしいと思うんですが」

再び寿司屋の主人だ。一番の年長者らしく、また職人らしい語り口だ。

「ハァ……。古城先生は、新しい学校を任せることになったものですから……」

声だけでも校長のあせるようすが手に取るようにわかる。

「と、とにかく、今回の件は、もう一度京極先生に訊いて、ですね」

「教頭先生」

教頭の声に多美先生の声がかぶさる。

「今回の件は、京極先生に非がある、という生徒たちの言い分は、私は正しいと思います」

そのあとの沈黙はおそらく、3人の保護者が黙ってうなづいていたのだろう。

「処分は、兵藤くんではなく、京極先生になされるべきだと思います。それに私は」

多美先生は少しためらったようだが、思い切って続けた。

「月曜日に松岡くんが、屋上から飛び降りた際に、京極先生が松岡くんをけしかけるのを聞いてしまいました……」

「初耳ですね。私は多美先生と一緒にいましたが、聞こえませんでしたが」

反論する教頭に、多美先生は

「私は、音楽をやるものですから、人一倍耳がきくのです……。

京極先生はたしかに、『死にたかったら死んだらいい。クラスのお荷物』などと言っておりました。

私はまさか、と耳を疑いました。何か意図があるのか、とも思ったのですが……。

ですが生徒たちの様子を見ていましたところ……」

多美先生はいったん言葉を区切って、はっきりと言い放った。

「彼は、あきらかに教師失格です」

「し、しかしだな。問題児が多い我が校にはあれぐらいの強い指導は……」

なおも食い下がろうとする教頭に、

「先生」

松岡の父がとどめを刺す。

「今回のことは、しかるべきところ……例えば都の教育機関などに申し出てもいいんですよ。

我々はそれほど重大だと認識しています」

将とカイトがそこまで聞いたとき

「コラ！何をしている！」

と背後から声がした。巡回している屈強教師だった。

「教室に戻れ！」

と怒鳴られたので、将とカイトは視聴覚室に戻らざるを得なかった。

156◆追跡

体がだるい。どうやら本格的に風邪をひいてしまったらしい……。

激しい悪寒と頭痛に襲われた大悟は、ハケンを予定時間より1時間早くあげてもらい、帰途についていた。

この分だと、予約を入れていた夜のハケンも無理だろう。

最近、ようやく手に入れた携帯で、派遣会社に病欠の連絡をする。

日頃真面目な大悟なので、派遣会社も大悟の体調を心底気遣ってくれているようだった。

「本当に、すいません……」

大悟は電話を切る前にもう一度謝った。

明日は幸い、仕事をいれていなかった。

瑞樹と二人でどこかに遊びにいければ、と思っていたが、体を休めるより他ないだろう。

ふらふらになりながら、大悟はやっとマンションに戻ってきた。

将も瑞樹もいないらしいので鍵を開けて入る。

さっきハケン先で薬を飲んだせいなのか、喉がひどく渇く……水を求めて大悟はキッチンへよろよろと進む。

コップに注いだ水を一気に飲んだ大悟はキッチンのカウンターに目がとまった。

メモと一緒にピンク色のリボンがかけられた包みが乗っている。

隠す様子もなく、それは置いてあった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

将へ

いつも、ありがとう。

これは感謝の気持ちです。

ミズキ

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

おそらく、チョコレートらしきその包みは、市販品でなく、自分で包んだらしい。

ということは中身も、手作りか。

激しい頭痛を抱えた大悟は、それ以上考えることもできず、ソファにごろりと倒れるように寝転んだ。

その１０分後、将が帰宅した。

「ただいまー。……あれ、大悟どうしたの？」

ステッキをついた将は、ソファに寝転ぶ大悟を見つけて近寄った。

「……ああ。ちょっと風邪ひいたみたいでサ。……おまえ、ずいぶんもらったんだな」

大悟は将が持っているチョコが入った紙袋に目をとめた。

チョコのうち１つが入っていた小さな手提げの紙袋に、他のを無理やり突っ込んだので、それは無様に膨れていた。

「いくつもらったんだ」

「７つ、いや８つかな。どうせ遊びだろ」

と将は白い歯を出して笑った。その顔は、大悟から見ても、つくづくいい男だった。

「大悟、ちゃんと薬飲んだのか？」

「ハケン先でもらった……。そこにも１つあるぞ」

「え？」

大悟が指差した先には、例の瑞樹からのチョコがあった。

「お前、どうせ明日はいないと思って、今日置いといたんだろ」

大悟が平然としているので、将は安心して、

「サンキュ。瑞樹にそういっといて」

といいながら、瑞樹のチョコをいちおう寝室へ持っていくと、かわりに着替えを持ってバスルームに入る。

「出かけんのか？」

「ああ。今日、アキラが帰ってくるんでお出迎え。たぶん泊まるから」

「そうか……」

複雑な表情で自分を見ている大悟に、聡のことで頭がいっぱいの将はまるで気付かなかった。

駅に差し掛かったみな子にビルの隙間からオレンジの光が一筋差した。

もう放課後も遅い。

すみれに付き合ったみな子はすっかり下校が遅くなってしまった。

もう、こんなふうに夕陽が差すなんて。1ヶ月前は暗かった時間だ。

まだ風は冷たいけど、確実に季節は春に向かっていることをみな子は感じていた。

だけど……心は寒い。

その原因は、カバンの中にまだ入っている。

結局、渡しそびれたチョコレート。

ちなみに、授業のほうは、結局今日の6時間目までボイコット状態が続き、ずっと視聴覚室での自習が続いた。

将は、休憩時間や昼休みに、たびたび呼び出され、チョコレートを渡されていた。

中には、わざわざ将にチョコを渡すために登校した上級生もいたようだ。

みな子が数えていたところによると、たぶん7個はもらったはずだ。

他の女生徒の積極さに、すっかり出鼻をくじかれた格好のみな子である。

すみれのほうは、放課後待ち伏せて、なんとか先輩にチョコを渡すことができた。

しかも、渡しただけでなく、先輩にそのままデートに誘われた。

感激のあまり涙をこぼしそうになったすみれは本当に幸福そうだった。

みな子は先輩と二人で夕陽の中に遠ざかるすみれを寂しく見送って、今、駅へとやってきたのだ。

将と初めて出逢った時を思わせるような夕陽の色に、みな子はカバンをそっと抱きかかえた。

ため息をついて改札に差し掛かったときだ。

ステッキをついた背の高い男がみな子の前を通り過ぎた。

みな子は息が止まりそうになった。

それは、まさに将だった。

ただでさえ長身なうえに、カラージーンズに、皮のジャケット、ニット帽に薄いサングラスまでも身につけた将は、制服を着ているときと別人の、まるっきり大人だった。

クラスの誰が見てもわからないに違いない。

みな子だから……将を好きなみな子だからわかったのだ。

みな子は、将の姿を目で追う。

高校生に見えない将は、みな子にまるで気付かないまま、切符を買い、改札を通った。

チョコレートを渡すチャンス到来……のはずなのに。

声をかけるべきなのに、みな子は何故か、将のあとをこっそりと追っていた。

将は、山の手線に乗り換えた。

乗り換えながら、右手で携帯を取り出して、メールを操作しているようだ。

いまのところ、跡をつけているみな子にはまるで気付かないようだ。

みな子は、直感で『女に逢うんだ。しかも本命の』と確信していた。

将の本命の恋人を見て、どうするのだ、とも思う。

しかし、好奇心なのか、怖いもの見たさなのか、どうしてもみな子はそれを見てみたいと思う。

将が愛するのは……どんな女なんだろう。

高校生離れした、大人っぽい将は、やはり大人の女と付き合っているのだろうか。

山の手線からは、家々の中に今夕陽が沈むところが見えている。

夕陽は、通勤帰りの人もそろそろ混じりだした車内をピンク色に照らし出した。

新宿駅で将は降りた。ここで乗降する客は多い。

みな子は、行き交う人波に将を見失わないように、あわてた。

しかし、ステッキをついているうえに、将が人より頭1つ分背が高いことが幸いして、みな子はなんとか将を見失わずに済んだ。

広い改札のうちの1つの前で将は止まる。柱に寄りかかるようにして誰かを待っているようだった。

いつのまにかサングラスをはずしている。

電車がついて波のように人が襲来するたびに、改札を注意深く見渡しているようだ。

みな子は、将から少し離れた別の柱から将のようすを見守った。

また、列車が着いたようだ。

人が一斉に改札を通る。

みな子がいる近くの改札を、見たことのある女が通った。

――古城先生?

2週間前まで担任だった、聡だ。

早いうちから放課後の補習にも参加していたみな子は聡を見間違うはずがない。

大好きな、英語担当の元担任に、みな子は声をかけようとした。

「センセ……」

次の瞬間、みな子は凍った。

聡は、小走りに将のほうへ駆け寄っていったのだ。

将のほうも、ステッキをつくのももどかしく、聡のほうへ早足で近寄ると、手を伸ばして聡を抱きしめる。

傍目には、『ハグ』のように見えた……しかし、みな子には見えていた。

聡を抱き寄せる寸前の将が浮かべた、せつない表情が。

みな子は、柱の陰で思わず、かばんを落とした。

157◆チョコレート・タイム

「将……誰かが見てるかもしれない」

いったん抱き合った二人。だが聡は将の腕からするりと離れた。

なんといっても、人通りの多い駅の改札である。

将は、あらためて聡の顔をなぞるように見つめると

「おかえり。アキラ」

と微笑んだ。聡も少し恥かしそうに

「ただいま、将」

と微笑んで、将の顔を見つめる。

たった2日だけれど、お互いの顔はとても懐かしいものとして映る。

二人は、争うように聡の荷物を取り合った。

結局、将がステッキのないほうの右手で持つと、二人寄り添うように並んで、

タクシー乗り場へと仲よさそうに歩いていった。

みな子は……そんな一部始終を見てしまった。足が震えている。

みな子は通勤帰宅者で込み合う列車に乗り込んだ。

ドアのところに立って列車の揺れに身を任せていた。

最初ドアの外を見ていたのだが、さっきの夕陽の光景と打って変わって、外は暗い。

暗い外は、ドアのガラスにみな子の憂い顔を映し出した。

みな子は、みじめな自分を見たくなくて、チョコレートの入ったカバンを抱きしめて、ドアに寄りかかるように背を向けた。

金曜の列車には、これからどちらかの家で過ごすのであろう、仲のよいカップルが目立った。

みな子の前にも、人ごみから彼女の体をかばうようにして立つ、若いサラリーマンがいた。

みな子はさっきの将を思い出す。

将と聡の噂はもちろんみな子も知っている。

だけど、ちょっと仲がいいだけで、よくあるキレイな女教師とそれに憧れるやんちゃな男子という構図だと思っていた。

だけど。

今日の二人は明らかに、そのレベルを超えていた、というのはリアルな恋愛経験がないみな子にもわかる。

一瞬なのに、そのときの将の細部まで鮮明に思い出せた。

聡を抱く一瞬前に見せたせつない瞳。

まるで壊れ物を受け止めるかのように、慎重で柔らかい腕の動き。

抱き合っている一瞬の至福に思わず閉じる睫。

すべてスローモーションでみな子の瞼の裏に再現できた。

いずれも、みな子が初めて見る将の姿だった。

二人は、深く愛し合う恋人同士なのだ……。

みな子は、思わず目を閉じてカバンをぎゅっと抱きしめた。

はじめて目の当たりにした、リアルな、大人の恋。

二人に何の感情もなければ、ただロマンチックに憧れたかもしれない。

でも、その片方は、みな子がはじめて好きになった男性なのだ。

――なんで先生なの。

みな子は涙がこぼれそうになるのを、目を固くつぶって堪えた。

みな子は聡のことも好きだった。

きれいで、威張ってなくて、生徒に理解があって、その将来のこともちゃんと考えてくれる。

そして流暢でわかりやすい英語。

もともと英語が得意だったみな子だが、担当が聡になって、また一段と成績があがっていたのだ。

そんな聡と将が……恋人同士。

みな子は目をつぶったまま首をふる。実際は人ごみの中なので、軽く頤を傾けただけだが……。

帰宅すると、おやつを食べ過ぎて食欲がない、と言ってみな子は自室に篭った。

カバンからチョコレートを出すと、そのきれいな包み紙をビリビリと思い切り破る。

ピンク色の包み紙はみな子の心そのままにずたずたになって床に落ちた。

箱の中で、チョコレートは溶けもせず、けなげに収まっていた。

それを乱暴につまみあげて口にする。

チョコレートは……見た目以上に旨かった。

まずまったりとした甘さが口に広がり、ほろ苦い後口が残る。

食べながら、みな子はいつしか涙を流していた。

――好き……好き。

血だらけの猫を大事そうに抱えていた将。

ふいに顔をのぞきこまれたときに見た、透き通った茶色の瞳。

ピアノを弾く長い指。大人と子供が交差する表情。

乱暴な口調のくせに『星野サン』と改まって呼ぶ低い声。

何もかもいまさら諦められない。

チョコが溶けて、口の中がほろ苦いばかりになったとき、みな子はもう感情を押さえられなかった。

「ううっ……」

制服のままベッドに深くもぐりこむと、親に聞こえないように嗚咽した。

次々に湧き出てくる涙はシーツを濡らした。

初めての恋に破れたみな子。

ただただ、今は恋の悲劇に打ちひしがれるしかない。

悲しみすらもいつしか甘い思い出になる……そんなことは想像もつかなかった。

将と聡は、聡の家の近くのイタリア料理店に来ていた。

家に近いだけでなく、値段が手ごろで、かつ凝ったものが食べれるので、将が気に入っていたのだ。

「ね、アキラ、チョコは？」

将は席につくなり、いたずらっぽい顔でねだった。

「あら、バレンタインは明日でしょ」

聡も負けずにいたずらっぽい顔で、テーブルに頬杖をつく。

「今日くれてもいいんだぜ」

聡は、目で笑うと、ボストンから光沢がある紙袋を出した。

シンプルに銀のシールがついている。

「ハイ。うまく出来てるかどうかわからないけど」

「ひょっとして、手作り？」

「甲府のチョコ屋さんを開発する暇なかったから。チョコつくるの、本当に初めてだから不味いかもよ」

将は目を輝かせた。手作りのチョコを恋人からもらうなんて初めてなのだ。

「うっそー。俺、すっげー嬉しいんだけど……。開けていい？」

「いまから夕食でしょ」と聡は笑った。

そのとき、遅まきながら店の人がオーダーを取りに来た。

二人で食べるとなんでも美味しい。しかも、お気に入りの店である。

二人はおなかが重く感じるまで南イタリア風の料理を堪能してしまった。

バレンタインデーということで、今日は聡が払った。

「ゴッチー！」

店を出て将はおどけると、次の瞬間、聡に抱きついた。

「……早く帰ろうぜ。早く二人っきりになりたい」

聡は「バカね」といいながらも、まんざらでもなさそうだ。

そのまま、しっかりと肩を組んで、腰に手をまわして、お互いがお互いのコートになりながら冬の夜道を歩き始める。

将は、そうやってベタベタと歩きながら、毛利がいつ現れるかと警戒していたのだが、今日は邪魔される気配はなかった。

二人は聡の部屋に入るなり、ジャケットだけ脱ぎ捨てるとベッドにごろんと転がった。

「あー、おなか一杯！」

聡は思わず声をあげたが、将のほうは、二人でベッドに転がったことで反射的に聡の体に手を伸ばしてきた。

「アキラ……だっこ」

「将ってば」

そういいつつ、聡も将のほうに向いて、その熱い体に腕をからめた。

腕だけでなく、脚もからめあう。唇が吸い寄せられるようにあわさ

り、舌もからまりあう。

ニンニクを使った料理をかなり食べたはずだが、二人とも同じ料理を食べたので、気にならない。

食事の最後にデザートとして食べた甘いズコット。

しかし、二人にとっては、こんな触れ合いがまさにデザートである。

「足は、どうなの？」

唇が離れたあいまに、足にあたった固い感触について、聡は将に訊く。

「来週末に半ギプスもとれるかも、だって」

そんな聡の柔らかい唇をもう一度、唇で素早く味わったあと、将は答えた。

「よかったじゃない。本当に長かったね」

聡は将の髪をくしゃくしゃと混ぜるように撫でた。

「でもさ、金具は入ったままだから、夏にもう一度手術受けないといけないんだってさー。あ～あ」

「夏かあ……」

聡は、これから来る、遠い夏を思った。

夏の前には、将の誕生日も来る。１８歳になっている将。

この夏には、二人はどうなっているんだろう……もっと固く結ばれているんだろうか。

すると、将のほうも

「夏には、俺も１８過ぎてるから、きっとセックス三昧だぜ」

とにんまり笑った。

「んもー。そればっかり！エッチねえ」

「だってぇ、男の子だもん」

といつものセリフに聡は腕の中でくくっと笑いながらも……ふいに体の内部にその予兆を感じた。

『あ』

あの、頂点の破片のような感じが、ひらめくように通過し、反射的に腰をよじった。

聡の中の『女性』が、将を勝手に想像して、リアルに感覚を再現したのだ。

もちろん、そんな聡に将は気付くわけもない。

聡はそんな風に勝手にエクスタシーの断片を感じてしまった自分が恥かしくて、将にぎゅっとしがみつく。

あさましい自分の顔を見られたくなくて、その広い胸の中に顔をうずめた。

干草のような将の香り……この場合、聡をさらに息苦しくさせ、窒息しそうな錯覚に陥る。

将は、とつぜん無言でしがみついてきた聡にとまどいながらも、その背中を優しく撫でた。

髪のあたりからいつもの甘い香りと、ほのかに土の匂いがした。

「風呂、入ろうかな。一緒に入らない？」

唐突な提案に、聡は苦しさを忘れ、うずめた顔を思わずあげた。

「何いってんの」

「えー。いいじゃん。もう裸の付き合いなんだし」

「……ヤダ」

『裸の付き合い』というセリフにいろいろなことを思い出した聡は、再び将の胸に顔を隠すようにうずめた。

将も何も本気で言っているわけではない（半分ぐらい、あわよくば、という本気が入っているけど）。

恥らう聡が可愛いからつい、そんなことを言ってしまう。

そんなふうに恥らうくせに、将のほうが恥らったり及び腰になると、積極的な行動に出る。

そんな聡の大人の部分も将は愛して止まない。

溶けたチョコレートのように甘くトロリとした聡との時間を、

将はほのぼのと、そして、ときに狂おしく、せつなく……さまざまな感情を織り交ぜながら味わいつくしている。

突如。

甘い時間に、邪魔が入る。将の携帯の音。

コール3回までは無視したが、聡が「しょう、でんわ」と顔を見上げるので

「……なんだ？いいところで」

将はしぶしぶ立ち上がる。脱ぎ捨てたジャケットのポケットから携帯を取り出した。

大悟からだった。

「もしもし、大悟？」

電話の向こうの大悟は、デート中に電話したことをまずは謝って、本題を切り出した。

「あのさぁ、弟さんがこっちにきてんだけど。帰ってこれない？」

158◆小さな家出人

「弟って……孝太が？一人で？」

異母弟にあたるが、将にとてもなついている10歳年下の弟だ。

「そう。お兄ちゃんは出かけてるって言ったんだけど、帰れないって言って聞かないんだ。俺は風邪っぴきだし、瑞樹は出かけてるし……」

大悟は心底困っているようなので、将はすぐ戻る、と答えて電話を切った。

ベッドの上で身を起こしていた聡のほうに向き直ると

「弟さんがマンションに来てるの？」

と、彼女のほうから訊いてきた。電話の内容が聞こえていたらしい。

将はうなづくと

「アキラ、ちょっと俺、マンションに帰ってくるから」

本当は一瞬、聡と一緒にマンションに帰ろうかとも思った。

正月に一緒に聡の家に泊まった大悟は、聡とも面識があるから問題ない。

が、瑞樹が帰ってきたら。気まずくなるかもしれない、と考えて、

将はとりあえず一人で帰ってみることにした。

でも『ちょっと帰ってくる』の言葉どおり、孝太を言い聞かせて実家に戻したらすぐに聡の部屋に戻るつもりである。

聡は、ちょっと残念そうな表情を浮かべたが、そこは大人だ。

何も異論を唱えずに、将を送り出した。

「お兄ちゃん！」

マンションの玄関ドアをあけるなり、孝太が奥から駆けてきた。

前に会ったときより背が伸びて、子供から少年にまた一歩近づいた感じだ。

しかし、きちんと躾けられている孝太は、飛びついてくるというようなことはない。

靴脱ぎ場のところに立って、将の顔を心底嬉しそうに見あげている。

タクシーの中で

『貴重なデートの邪魔しやがって。叱り付けてやらないと』と

いきまいていた将だが、そんな孝太の顔にそんな計画はふっとぶ。

「孝太、お前、どうしたんだ……」

靴を脱ぎながら、訊くのがせいいっぱいだった。

孝太を連れてリビングに戻ると、大悟がスウェット姿で起きてゲーム機を手にしていた。

具合が悪いだろうに、どうやら大悟はいままで、孝太の相手をしてくれていたようなのだ。

「将にそっくりだな」

大悟はゲームを終了しながら微笑んだ。

孝太は、大好きな将に似ているといわれて、ちょっと嬉しそうに将を見上げた。

「瑞樹は？」

まだ瑞樹の姿は見えないようだ。

「まだ帰ってこない。メール見たら、どうやらバイトみたいだけど」

大悟は、ようやく帰ってきた将に安堵するように、ソファーに寄りかかった。

「悪いな。具合悪いんだろ。ホラ、孝太、大悟兄ちゃんにお礼いえ」

孝太は素直に、大悟にありがとう、と言っただけでなく

「大丈夫ですか？」と付け加えた。

大悟は、笑いながら、

「大丈夫だよ」

と答えて立ち上がる。そして孝太の頭をくるくると撫でると、

「じゃ、将、俺はもう寝るから」

と将に向き直った。少し疲れているようだ。

「ごめんな」

将は、大悟の後姿にもう一度わびると、しゃがんで孝太に向き直った。

「孝太、いったいどうしたんだ」

孝太は悲しそうにだまった。

「おかあさんかおとうさんに怒られたのか？」

孝太はゆっくりとうなづいた。

「ぼく……まえにテストで８０点とっちゃったんだ」

一瞬、子供の頃を忘れていた将は『いい点じゃんか』と口にだしか

けた。が、孝太は

「そしたら、おかあさんが『お兄ちゃんは９０点以下をとったことないのに』って怒って……」

そういえば、『神童』だった小学校時代の将は、学校のテストで９０点以下を取ったことはなかった。

義母の純代からもテストのことで怒られたことはない。

というより、義母に好かれようとめいっぱい頑張っていた小学生時代の将は、純代にまったくといっていいほど怒られたことがなかった。

思えば、それだけに、火事の中で置き去りにされたショックは大きかったのだろう、と将は振り返る。

だが。将はいったん自分の傷に飛んだ思考を、テストに戻す。

将が通っていたのは公立小である。

それに対して、孝太は難関と名高い有名私立に幼稚舎から通っている。テストの内容も当然難しいに違いない。

「何、テストが悪くて、怒られたから出てきたの？」

と将はなるべく優しく訊いた。孝太は首を振った。

「ぼく、また８５点とっちゃって……また怒られると思って……」

「テストを隠したのがバレたのか」

将が先回りした答えに、孝太は、この世の終わりのような顔でうなづいた。

「そんなことするひきょう者は、うちの子じゃないって言われて……」

孝太は耐えられなくなったのか、泣き始めた。

将は、孝太を抱きしめてやりながら、再び火事の中で置き去りにされたことを思い出していた。

あのとき、将は『うちの子』ではないというのを態度で示されたのである。

もう割り切っているつもりだが、こうやって泣く弟を見ていると、子供の頃の寂しさや、あの12歳のときの絶望が顔を出してくる。

将は、泣く孝太の頭を撫でてやりながら

「おかあさんは、本気でそんなことをいったんじゃないと思うよ……」

と諭した。義母の純代は、孝太にとっては彼を生んだ本当の母である。

しかし、孝太はしゃくりあげながら、

「でも……でも。お兄ちゃんのことは……追い出した」

それだけいうと、孝太は声をあげて本格的に泣き出した。

まるで『追い出した』という言葉に孝太自身が傷ついたかのようだ。

出て行ったっきりの将のことについて、孝太は孝太なりに心配し、傷ついていたのである。

将は１０歳年下の弟の、自分を思う心に、胸がいっぱいになった。

思わず涙があふれそうになるのをおさえるように、

「でも、孝太は……おかあさんの本当の子供だから、おかあさんはきっと心配してるよ」

と孝太にいってきかせる。

それは心から出た言葉でもあるが、将は、正直なところ早く孝太を帰して、聡のところに戻りたかったのだ。

しかし孝太は、どんなに言って聞かせても

「今日は、お兄ちゃんのところに泊まる。家には帰りたくない。お兄ちゃんと一緒にいる」

と頑張った。どうやら孝太は義母の言葉にかなり傷ついたようだ。

聡のところに一刻も早く帰りたい将は、舌打ちしたい気持ちになった。

だけど、自分だけを頼っている、いたいけな弟を無碍に放り出すわけにはいかない。

将にとっては、ヒージーに次いで数少ない肉親の情を感じられる相手だ。

まあ、所詮子供だ。

波立った感情が収まれば、ケロリとするのではないか、と将は気を取り直して一晩だけは孝太を泊めてやることにした。

とはいえ、実家では今ごろ大騒ぎだろう。

ヘタすれば捜索願まで出しているかもしれない。

しかし、義母に連絡すれば、孝太の気持ちを無視してすぐに迎えに来るに違いない。

特に将のところに泊めるなんてとんでもない、と考えるのは目に見えている。

ヒージーに説得してもらうのが一番だが、もう９時３０分過ぎている。床についている時間だろう。

――あいつに頼るしかないな。

将はパソコンをを開くと、アドレス帳からめったに使わないアドレスを取り出す……毛利である。

メールを打ちながら、傍らでまだしゃくりあげている孝太に

「ところで、孝太、一人で風呂に入れるか」

と訊いた。

「たぶん入れると思う」

との答え。たぶん、というのは、まだ一人で入ったことがないということだろう。

「ちょっと待ってろ。お兄ちゃんと入ろう」

「うん！」

孝太は急に元気になったようだ。

将は、毛利に、孝太が自分のマンションに来ている旨、とにかく無事であること、

叱られてナーバスになっているから落ち着いたら責任をもって帰すこと、捜索願など出して騒がないように、

などを手早くメールにまとめて送信した。

将と義母の純代との関係を知る毛利は、そのへんは巧くやるはずだった。

大嫌いな毛利だが、その辺のたちまわりは、将も信頼しているところだ。

将は湯船にお湯を溜めながら、孝太が脱いだものをかたっぱしから洗濯機に入れる。

――今ごろは、アキラとラブラブ入浴かもしれなかったのにぃ……。

にこにこと裸んぼうになっている孝太を恨みそうになる自分に

――ま、ありえないか。

と言い聞かせる。

「兄ちゃんすぐ入るから。湯船に入る前によく体洗うんだぞ」

と言い聞かせて、その間に将は聡に電話をする。

「将、……どうだった？弟さん」

電話がつながるなり、聡のほうから様子を訊いてきた。

将は、孝太の家出のいきさつを話して、今日はそっちに帰れそうにない、と謝った。

「明日、朝から二人でどっかいこうぜ」

代わりに明日のことを提案する。

「明日……。明日はね、将……」

聡の声が急に沈んだ。それでも思い切ったように聡は告げた。

「博史さんに会わないといけないの」

――え。

将は一瞬混乱した。なんで、今ごろ博史が。しかもバレンタインデーに。

「最後に、もう一度会って別れたいって言われて……」

そんなことを承諾するのか、とそれは聡への疑惑に一瞬つながりそうになる。

「なんで、バレンタインデーなんかに……」

将は苦々しい思いで抗議する。そういえば、さっき将がもらった聡の手作りチョコを、将は聡の家に置いたままだ。

「私も、断りたかったんだけど、月曜から北京だって言われて。指輪も返さないといけないし……」

困惑した聡の声に……将はかろうじて、日曜日に殴られたことを思い出す。

「おふくろさんは？どうなったって？」

「持ち直したって……。ごめん、将には今日言うつもりだった」

持ち直したという言葉を聞いたとたん『俺だって心配してたんだぜ』と抗議しようとした将だが、

聡に先回りされ、不機嫌に口をつぐむ。しかし、

――こんなことで、心を乱されたくない。もしかしたら、こうやって二人の仲に亀裂を入れる作戦なのかもしれない。アイツ（博史）は。

将は思い直すと、優しい声を出す。

「明日……ひとりで大丈夫？また殴られたりしない？」

「うん……。大丈夫だと思う。もう本当に最後だって言ってたから。午前中に少しだけ会って指輪を返すだけ。本当にそれだけ」

聡のほうも、将に気を遣っているのがひしひしと伝わった。

何も心配することはないのだ……。聡の声が携帯からさらに続く。

「明日、昼からはずっと、将と一緒にいたい」

低いけど温かい声に、将は電話のこちらで頷く。きっと聡は将と同じように携帯を握り締めているだろう。

その姿を想像したとたんに、胸にいっぱいに溜まったいとおしさが溢れ出るように返事がでた。

「うん……」

１５９◆弟と入浴（おまけシーン）

湯船に浸かっていた孝太は、入ってきた将を嬉しそうに見上げた。

「ちゃんと洗ったか」

将の問いにも元気にうなづく。

「そうか」

「お兄ちゃんとお風呂に入るの初めてだね！」

「バカいえ。お前が覚えてないだけで、２歳ぐらいのころずいぶん面倒見てやったんだぞ」

「そうだったね」

といいながら、孝太は腰掛に座る将の裸の全身を見回した。

流線型の筋肉が浮き出た肉体は、冬で多少褪めたとはいえ、浅黒い褐色だ。

それが、徐々に白い泡で包まれていく。

孝太は、将がシャワーをあびて、軽く体を洗う一部始終を珍しそうに見ていた。

将は、何で、とも思ったが、思い当たった。

父が忙しい孝太は、男性と風呂に入ることがない。

だから大人の男のハダカが珍しいのだ……。

将もヒージーの家に預けられるまではそうだった。

『人の体をあんまり見るな』と注意しようとも思ったが、まあいい。

将は孝太の視線を気にせずに湯船に浸かった。

「ふー」

クナイプの入浴剤が入った黄色っぽい湯は将で増えた体積分、湯船からざざーっとこぼれ落ちた。

将は入浴剤の香りに憩いながら湯船のふちに寄りかかった。

マンションの浴槽としてはかなりゆったりつくってあるので大男の将と子供が入っても、それほど窮屈ではない。

「お兄ちゃん。大きくなったね」

普通大人が子供に言う言葉を孝太のほうが口にした。

「あー。孝太ももうすぐでっかくなるぞー」

将は湯船の両ふちに両手をかけて、適当に答えた。

「違うよ。おちんちんがだよ」

孝太はいたずらッ子の目をくるっと動かしてこっそり言った。こんな顔を孝太がするのは珍しい。

「ハァ？」

将は一瞬目をむいたが、『コラ』と孝太に軽く湯を飛ばした。手でつくる水鉄砲である。

湯を飛ばされた孝太は、嬉しそうに反撃してきた。

しばし、水鉄砲合戦になる。

将は、かつて、同じように風呂の中でヒージーにならったお湯の飛ばし方のいくつかを孝太に伝授した。

最初はうまく飛ばなかった孝太だがすぐに要領を得て遠くまで飛ぶようになった。

「……お兄ちゃん、おうちには、もう帰ってこないの？」

ひとしきりびしょぬれになって、二人は並んで湯船のふちにつかまるようにしているときだった。

「ん……お兄ちゃんはもう大人だからな」

将は、孝太を優しい目で見た。

湯船のふちに並んでいる将の手と孝太の手を見比べる。

孝太のそれは将と比べるとかなり小さくて色白だ。

それでもモミジのようだった頃から比べると確実に成長している、と将は思う。

今も可愛いが、輪ゴムを腕や足にいっぱいくっつけたような赤ん坊の孝太は、本当に可愛らしかった。

懐かしく思い出している将に、孝太が言った。

「ぼく、お兄ちゃんともっと一緒にいたいな……」

そんなことを言われると、少し孝太がふびんになる。

こうやって兄に甘えたいほど、今日の孝太は寂しいのだろう。

「孝太、頭あらってやろうか。な？」

将は湯船からザバッといきおいよくあがった。

そんな将の裸の背中から尻に孝太の視線が集まるのを感じた。火傷のあとを見ているのだ。

「ぼくのほっぺたと同じ火傷」

遅れて湯船のふちをまたぐ孝太はそんなことを言った。

「ぼく、覚えてるよ、あのときのこと」

「そうか」

将はに孝太の頭にシャンプーを垂らした。

お互いトラウマを掘り返すこともない、と聞き流すことにしたのだ。

水鉄砲合戦でびちゃびちゃになった孝太の頭は新しく濡らす必要はない。

将は指に優しく力をこめて孝太の頭のシャンプーを一通り泡立てると、自分で洗ってみるようにうながす。

「おにいちゃんを置き去りにして、おかあさんは、おとうさんに怒られてた」

今度は自分の頭を泡立て始めていた将、思わず手を止める。

「おとうさんが？　火事のときは仕事でいなかっただろ？」

孝太は目をつぶって、自分の頭にコシコシと指をたてながら、

「ううん。おとうさんいたよ。すごく大きな声でおかあさんに『バカッ』って言ってた。なんでお兄ちゃんを置いてきたんだって。それで、火の中に入ろうとして、止められて、お兄ちゃんを呼んで泣いてた」

将は、風呂場の鏡にうつる自分の顔を見つめた。

父に似ているといわれる顔はそのまま父の康三の顔になる。

――あいつが……オヤジが……泣いてた？

将の中で、父の表情はだいたい固定されている。その顔は、無表情に近い顔だ。

自分を見つめる目は怒っているか、非難しているかのどちらかだ、と思っていた。

笑い顔でさえ珍しいのに、父が泣くところなんて想像もできなかった。

だいたい、康三は将の実母である環が死んだときでさえ、涙を流さなかったのだ。

将は、ありえない、と立ち上がると栓をひねり、シャワーをいきおいよく出した。

おまけに康三は、将が大火傷で入院していたとき、ロクに顔も見せなかったのだ。

それ以前も、家に帰ることが少ない康三は、将のことなどまるっきり顧みないように思えた。

テストで、武道の試合で、ピアノの発表会でどんなによい成績をとろうと、当たり前のような顔をして声１つかけなかった父。

孝太は記憶違いをしているのだろう。

そう思った将は、孝太の頭にひとしきりシャワーを掛け終わった後、

「それさ、おじいちゃんと間違えてるんじゃないかな?」と訊いて

みた。

当時、祖父はまだ存命で、近くに住んでいたから、祖父が駆けつけるのはありえる。

曽祖父の巌（ヒージー）ほどではないが、祖父も将のことをかなり可愛がっていたから。

「ううん。おとうさんだよ。おじいちゃんはおしごとで外国に行ってたもん」

そうだ。あのとき外務大臣だった祖父は、国際会議で留守だった。

将は思い出した。

将は腑に落ちない思いで、自分の頭にシャワーをあてる。

考えこむあまり、目をつぶるのを忘れて、シャンプーの入った水分が目に沁みる。

「……っつ」

あわてて水流を顔にむけてそれを洗い流す。

「大丈夫、お兄ちゃん?」

孝太が、この世で最初に覚えたフレーズを、将に繰り返した。

１６０◆１４１～１５９話のあらすじ

博史は、止めようとした将も殴って「母が死んだら、お前らのせいだ」と吼えて去る。

残された聡は、将の優しさに慰められるが、殴られた将を見て、

「自分こそが将を辛い目にあわせているのではないか」という考えにおびえる。

その夜、将は聡に「１８になったら結婚しよう」と告げる（１４１－１４２話）

月曜日、学校をサボろうとした将に、井口から「絶対にサボるな」と電話があり、将はしぶしぶ登校する。

なんでも、無断欠席は、クラス全員連帯責任でポイント減になる、とヤクザ教師・京極が無理やり決めたという。

そんな中、松岡が登校途中で突然起きた喘息の発作のために遅刻してしまう。

それをも許さず、クラス全員のポイント減をしたばかりか、松岡に屈辱的な罰をあたえる京極に、

将はついにキレ、授業全てをボイコットすると宣言する（１４３話）

視聴覚室でのボイコットには、寿司屋で修行中の兵藤、女子クラス委員の星野みな子が参加していた。

みな子の助言で、将はボイコット声明文を作成する。

真面目なみな子がなぜ、将と一緒にボイコットに参加したのか。

実は、みな子は1年のときに偶然、将の優しい側面を見ていたのだ（１４４話）

声明書を多美先生に渡した将らは、音楽、英語と独自の自習をする。

昼休み。視聴覚室に飛び込んできた井口は、松岡が屋上のタンクの上にいることを告げる。

将たちはあわてて、屋上にのぼり、松岡に飛び降りないように説得する。

が、いつのまにか屋上に来ていた京極が「死にたいやつは、とっとと死んだらいい」などとけしかけ、

松岡はとうとう飛び降りてしまう（１４５－１４６話）

特急あずさのシートに眠る聡は、博史の母がついに亡くなった悪夢にうなされる（１４７話）

飛び降りた松岡は、場所が幸いして、結局かすり傷で済んだ。だが、事件のせいでボイコットする生徒は増えた。

帰宅した将は、出迎えた瑞樹の手に白い粉が付いているのをみて、また覚醒剤をやっていたと思い込むが、実はそれは粉砂糖だった。

彼女はバレンタイン用にケーキの練習をしていたのだ。

試作したケーキを将に美味しいといってもらえた瑞樹はこっそりと泣く（１４８話）

建国記念日。祝日だが、山の学校から帰れない聡の元を将が訪れて、ラブラブの時間を過ごす。

しかし、楽しい時間はあっという間に過ぎて、将は最終列車で東京に戻る。

そんな聡の元に博史から電話が（１４９－１５２話）

最後にもう一度だけ逢って別れたい、と懇願する博史に聡は承諾してしまう。

一方、将。木曜の午後、ボイコットはついにクラス全体に広がった。

怒った京極は、無理やり連れ戻そうとして、女生徒らの腕を強引に引っ張る。

それを止めようとした兵藤を振り払った拍子に、兵藤は机の角で頭を打ってしまう（１５３話）

頭から血を流した兵藤だが、幸い命に別状はなかった。

だが、京極がウソの証言をしたおかげで、兵藤はポイント減のほかに停学になってしまう。

将は、それをクラスメートらに説明した多美先生に

「2年間も一緒だった生徒より、会って1ヶ月もたたない教師を信じるのか」と詰め寄る。

その放課後。みな子は、友達のすみれのチョコ買いに付き合わされて、つい『自分用』にチョコを買ってしまう（154話）

金曜日はバレンタインデーの前日。みな子は、買ったチョコを将に渡そうと決意していた。

が、次々に呼び出されてチョコをもらう将を見て、その決意は萎える。

そんなとき、校長室に保護者がきているとの知らせに、将は校長室を立ち聞きする。

保護者は、兵藤は修行している店の主人、松岡の父、真田由紀子の母だった。

なおも、京極の言い分を信じようとする校長や教頭に、多美先生が京極が月曜日に屋上で言った暴言を暴露する（155話）

ハケン先を早引けした大悟は、瑞樹から将にあてられたチョコレートを見つけてしまう。

将は、いったん帰宅して着替えると、聡を迎えるべく新宿駅へと向かう。

そんな将をみな子が偶然見つけてしまい、こっそりと跡をつける。

駅の改札で抱き合う将と聡を見てしまったみな子は、思わずカバンを落とす（１５６話）

将と元担任の聡が恋人同士であることを知ってしまったみな子。

同時に将を好きな自分を自覚し、将にあげるはずだったチョコレートを食べて涙する。

将と聡は久しぶりに会って食事をしたあと、聡の部屋で甘い時間を過ごす。

だが、そんな最中に、大悟から電話が（１５７話）

大悟からの電話は、将のマンションに、１０歳年下の義弟の孝太が一人でやってきているという連絡だった。

将は、すぐにマンションに戻って、孝太を諭すが、孝太は今日は帰りたくないといって聞かない。

戻れない旨を聡に電話した将は、聡が明日のバレンタインデーに博史と会う約束をしていることを聞かされる（１５８話）

将は、孝太と風呂に入る。そこで孝太からあの火事のときの意外な事実を聞かされる（１５９話）

１６１◆バレンタインの別れ

午前４時ごろ、大悟は目を覚ました。

傍らで、いつのまに帰ってきたのか、瑞樹が眠っている。

……１時すぎにいったん起きたときは、まだ帰っていなかったので、帰宅はその後だろう。

スタンドを点けたのにも気付かずに、すうすうと寝息を立てて深く眠っているところを見るとよほど疲れているのだろう。

と、大悟は自分の枕もとに、紙袋を見つけた。かなり大きい。

『大悟へ』

とハートマークを添えた宛名。

大悟は、包みをとりあげると、開けた。

音を立てないように、と思ったのだが、紙袋なのでガサガサとかなり大きな音がしてしまう。

しかし、瑞樹は目覚めることもなく眠っている。

中には……バッシュとＴシャツが入っていた。もちろん新品だ。

靴の中に筒状のメッセージがリボンで止められていた。

巻紙のようなそれを開く。

＝＝＝＝＝

Ｄｅａｒ大悟

靴がボロボロだったんで、ほんのキモチです。

ミズキ

＝＝＝＝＝

短いメッセージ。あまり上手とはいえないけれど、手書きで一生懸命書いたのがにじみ出ているような字。

大悟は、安堵のため息をついた。

瑞樹がまだ将のことを好きなのでは、という疑惑を大悟は心の底で抱かずにはいられなかったのだ。

そんなことはない、と自分に言い聞かせれば言い聞かせるほど、疑惑は大悟の心の奥深くに地下茎を張っていった。

もちろん、将のほうは聡に夢中で、瑞樹のことなど、もうとっくに眼中にない、というのはわかっている。

だいたい将がいなければ……将がここに置いてくれなければ、自分はどうなっていたのか。

愛知でいつまでも我慢を強いられていたか、路上で再び犯罪に手を染めるか……どっちにしても最悪の暮らしをしていたことには違いない。

だが、将が感謝すべき対象であればあるほど、大悟は将に対して、瑞樹に関する劣等感で、苦しんだ。

さらに親友に対して、そんな風な醜い感情を持つ自分が息苦しかった。

そんな苦しみから……瑞樹からのプレゼントとメッセージ1つでかなり解放された。

「瑞樹……」

大悟は、呟くと、眠っている瑞樹の額に口づけを落とそうとして、直前でやめる。

――風邪をうつしたらいけない。

瑞樹の肩が毛布から出ているのを直そうとして、大悟はハッとした。

同じように毛布から出ている右手首に、何か縛った痕跡のような痣を見つけたからだ。

大悟は、腕に顔を近づけてまじまじと見た。

瑞樹は右利き、注射痕があるのは左手首だ。その反対側の、白い華奢な右手首にぐるりと何かを巻いた跡のようなものは、やっぱりある。

あまつさえ、少し擦れたような擦り傷もある。

「瑞樹、お前、何やってるんだ……。何をして金を稼いだんだ……」

大悟は小さく呟くと、瑞樹の額にかかる髪を撫でた。

翌土曜日、バレンタインデーは薄曇りだった。そんな天気のせいか、少し寒さが緩んだ午前中。

聡はとある、お洒落な街にやってきていた。

博史と待ち合わせたのは、通りに面した新しいファッションビルの２Ｆにある、ガラス張りのカフェだった。

午前中であることもあり、店内は客も多くなく、静かだった。

博史は先に来ていて、窓際の席にいた。聡を見つけると軽く手をあげた。

その柔らかい笑顔は、二人が別れたことも、先日聡を殴ったことも忘れそうになるほどだった。

だけど聡は、決意も新たに、きゅっと唇を結んで、博史の対面に座った。

博史の前にコーヒーが置かれているのを見て、聡はオーダーを取りに来た店員に

「アールグレイを」

と、紅茶を頼む。

それぎり……何も話すことがなくなる。

博史は、テーブルに両腕をついて、遠くを見ているような、そんな目で、ただ聡を見つめている。

聡を見ているようで、聡の中の思い出を懐かしんでいるような、そんな瞳。

聡は見つめ返すわけにもいかずに膝に手を置いて、何をみるともなく視線を斜め下に置く。

店員が紅茶を持ってくるまで、気まずい沈黙は続いた。

テーブルの上に置かれたアールグレイの香りが、聡のところまで届いたとき、博史が口を開いた。

「覚えてる？ここ」

あくまでも優しい口調。

「……え？」

初めて来る店だと、聡は思っていた。

「ここ、前は違うビルが建ってたんだよ」

それを聞いて、やっと聡は思い出した。

前建っていた雑居ビル。その地下にこぢんまりとした和食屋があった。

そこは……聡が留学を終えて帰国した年の年末に、二人が初めて国内で食事した場所だった。

「思い出した？　あの店、最高に不味かったよなあ……」

博史はさも可笑しそうに言った。聡も思わず「そうね」と微笑んでしまった。

あのとき。年末、久しぶりに帰国する博史は、留学を終えた夏休みに先に帰国していた聡にメールで

『和食が食べたい。どこか探しといて』

と頼んだ。まだ女子大生だった聡は、よくわからなかったから、情報誌を見て一生懸命探した。

だが、せっかく見つけ出した店なのに。

情報誌の写真は美味しそうだったのに、実物はウソ、といいたくな

るほど不味かったのだ……。

帰り道、聡は、泣きそうになりながら

『せっかく楽しみにしてたのに、ごめんね』

と謝った。

博史は、そんな聡に頬を寄せて

『アキのせいじゃないだろ』

と優しく囁いた……。

「あのときの、聡、可愛かったなぁ……。べそべそ泣いちゃって」

博史は、微笑んだまま、窓の外に視線を移していた。

まるで窓に当時のようすが映し出されているように、細い目を糸のように細めている。

聡は、押し寄せる思い出に、思わず胸がしめつけられるように、苦しくなって俯いた。

好きだった博史。

優しかった博史。

何の落ち度もない博史を傷つけなくてはならない、いや、もう傷つけている。

聡は、波のように打ち寄せる記憶に抗うように、バッグから婚約指輪のケースを取り出した。

ケースは、元通り紙箱に入っている。

「あの……これ」

聡は紙箱に入ったリングケースを博史の前に出した。

「ああ……。好きに処分してくれていいのに」

博史は、それを見たとたん投げやりに言った。

聡は首を振って、箱から離した手を元通り膝の上に置いた。

博史の給料3か月分、といえば相当高価なものだ。

その高価な指輪は、所在無くテーブルのやや博史よりの中央に置かれたままになった。

「お義母さまは、その後……」

聡は博史を盗み見るように見ながら訊いた。

「来週、退院できるみたいだ」

「そう……よかった」

指輪を出してしまい、気になることを訊いてしまうと、本当に話すことはなくなった。

ただ、いたずらに時は過ぎていく。

防音ガラスなのか、通りのクラクションも、店内ではＢＧＭ程度だ。

聡は冷めてしまったアールグレイをほんの少し口にすると、それをソーサーに置いた。

本当に幕を引くときだ、と覚悟を決める。

「博史さん……。本当にごめんなさい」

博史はだまったまま、窓の外を見ている。

さっき思い出話をしているときに糸のようになっていた目をやや見開いて。

「それから、ありがとう」

「何が」

博史は思いがけないところで、振り返り、訊き返した。

見開いた白目が少し充血しているように見えた。

聡は、とまどった。

「……いろいろ。楽しい思い出……とか」

やっと答える。声が震えてしまう。

「俺は。お礼をいわれるようなことを何もしてないよ」

博史は、そう言い放つと再び窓の外に目を移した。

「そんな……ことない」

抵抗しながら、聡は急激に目が熱くなってくるのを感じた。

「博史さんは、よくしてくれたよ……」

もう耐えられない。聡は下を向いた。急激にあふれた涙がぽとぽとと膝の上に落ちる。

「聡が泣く必要はないだろ……。泣きたいのは……俺のほうだ」

そんなことを博史が言うのを初めて聞いた。博史は、まばたきをして窓の外を見ている。

たぶん涙を堪えているのだろう。

こんな風につらそうな博史も初めて見る。博史は……聡の前ではいつも、余裕のある大人だった。

こんなときに、聡は初めて、もう1つの生身の博史に触れた気がした。

だけど、もう終わりなのだ。

哀しみを顕にする博史と思わず別れがたくなるけれど、聡はハンカチを取り出して、涙をぬぐう。

「私……なんかより、もっといい人を、見つけて」

博史は、やりきれないように、ふっと笑うと、

「そうだな」

と低く呟いた。そして

「もう、行けよ。鷹枝くんが待ってるんだろ」

と聡を促した。聡は、行ってはいけない気がした。

だけど、もう一度涙をぬぐって、うなづくしかない。

立ち上がると聡は、最後にもう一度、頭をさげた。

「ごめんね」

それが聡の最後の言葉だった。

博史は、窓の外を眺めるふりをしていた……去っていく聡を見るのがあまりに辛かったから。

だけど、最後に、もう一度。

「聡」

博史が、やっと店内を振り返ったとき、聡はもう、いなかった……。

お代わりのオーダーを取りに来た店員に、博史は煙草を頼んだ。

それをその場では吸わずに、博史は店を後にすると、車に乗り帰途につく。

もう博史は、煙草を辞めて7年にもなる。

信号待ちで、ようやく店のマッチで煙草に火を点ける。

ひさびさの煙草の煙は、あっという間に車の中に充満し、目に沁みる。耐えられず博史は窓を開けた。

博史は、本当は……聡と将を許すつもりはまるでなかった。

とことん、邪魔をしてやっていい、とすら思っていた。

訴えてもいい、とも。

母が持ち直したあとも、そんな気持ちは持続していた。だが……。

「聡さんを許してあげなさい」

博史の母・薫は、日曜の夕方、目を覚ますなり、ベッドの脇に立つ博史に苦しい息の下で言ったのだ。

「おふくろ」

「聡さんを……責めないで……」

そういったきり、薫は再び目を閉じた。

その真意を、健康状態を持ち直した母から、博史が聞けたのは、火曜だった。

「私もね。婚約していた人と別れてしまったことがあるの」

薫は、ゆっくりと博史の父の慎一と結婚する前のことを話し始めた。

その婚約者はとても優しかった。交際は順調にいっていた婚約者だが、その父が経営する会社が突然倒産してしまったのだ。

「ついていくべきだとも思ったけど……。結局、私のほうから離れてしまったの」

母の告白を聞いた博史は、他の男に気持ちを移した聡の場合とは事情が違う、とそのときは反発した。

だけど、病床からの母の懇願をきっかけに、博史の心は急激に溶けていった。

憎しみや恨みが溶け去った博史の心には、ただ哀しさが残った。

自分でも気付かなかった……聡への想いの残骸のごとく、車の中は、紫煙がうっすらと残っている。

それがしつこく、博史の目をちくちくと刺激する。

『原田さんの恋人になりたいです！』

４年半前、サンフランシスコの空の下、突然現れて告白してきた若い聡。

当時、博史には、アメリカ人の恋人がいた。

そんな風に現れた聡を、当初博史は、その恋人とうまくいっていなかった空虚さを埋めるだけの存在だと思っていた。

ひとたび抱いた後は、そのグラマーさと若い感性を持つ肢体に溺れた。

だが、結婚を申し込んでいながら……代わりはいくらでもいると思っていた。

単に、ルックスとか抱き心地、語学堪能とか学歴など、条件がいい、と彼女を選んだのだ、と思いこんでいた。

なのに。彼女に去られての、この孤独感は何なんだろう。

結局、自分は、聡の心をつなぎとめておくことができなかったのだ。

いや、心といえるほど、そもそも聡と繋がっていたのか。

聡は自分を慕ってくれていた。それに酔っていただけではないのか。

自分は聡のことを、どれだけ知っていただろう。

一一年に3回の逢瀬しかできなかった恋人じゃしかたないじゃないか……。

博史は、異国で働かなくてはならない自分の境遇を恨み、憐れんだ。

『私なんかより、もっといい人を、見つけて』

最後に聡はそういった。

博史も、聡がたとえ去っても、すぐにもっといい女を見つけられる自信と余裕をいつも備えている、と思っていたのに……。

「あきら……」

声に出さずに、咥えた二本目の煙草の煙で呟く。

すれ違う車のように、二人の思い出が、博史の前に次々と蘇ってくる。

いつのまにか、思ったよりずっと広い面積で、聡は博史の心を占領

していたのだ。

日本に帰国する喜びは、実は聡に逢える喜びがその大半を占めていたのだ……。

今ごろ気付いてどうするんだ。

博史の細い目には、いつしか涙がにじんでいた。

7年ぶりの煙草は、涙の言い訳のためかもしれなかった。

162◆バレンタインデイ・キス

聡は駅前のカフェに入るとあたりを見回した。将の姿を探す。

「アキラ！」

ソファの席で手をふる将をまもなく見つける。

本当は、人目がなければ抱きつきたい今の聡だが、こらえて小走りで駆け寄るだけに留める。

「あ……」

今日はジーンズ姿の将の隣には、子供が座っていた。

小学校低学年ぐらいのその男の子は、聡の姿を見つけると行儀よく、ぺこっと頭を下げた。

……将に似ているその子は見覚えがある。

あれは、将と初めてのデートで行った、夕食のフランス料理店だった。

『弟さん？』と聡が問う前に、将が

「ゴメン、アキラ。どうしても付いていくって聞かないんだ」

済まなそうに説明した。

聡は、隣のソファに腰掛けながら

「こんにちは。お名前は何ていうの？」

と優しく訊いた。

「たかえだ・こうた、K大付属小学校1年です！」

と元気よく答える孝太に、聡も

「こじょうあきらです。よろしくね」

と自己紹介する。

「アキラ、本当にゴメンな」

手をあわせて、本当に困っている将に、聡は

「いいわよ、別に」と笑顔を返すと、孝太に

「孝太くん、どこ行きたい？」

と身をかがめるようにして、孝太に訊く。

「ぼく、……遊園地にいきたいな」

孝太はやや遠慮がちに、言うと、伺いを立てるように上目遣いで将を見る。

「遊園地、行こうか」

聡は、孝太の頭をなでながら答えると、将にも「いいよね」と訊く。

将は、ふん、とため息をつくように頷くと

「遊園地行ったら、大人しくおうちに帰るんだぞ。わかったな」

と孝太に念押しをした。

孝太は、こっくりと頷いた。話は決まった。

遊園地といっても、子供連れだ。

ネズミ系や絶叫系のいわゆるテーマパークではなく、３人は昔ながらのベタな『遊園地』を選んだ。

「キャーーー（聡）」

「わあああ（孝太）」

あまり怖くないとされる、マイルドな傾斜と捻りが入ったジェットコースターだが、聡と孝太が並んで歓声をあげている。

後ろの席では、一人で座った将がむすっとして万歳をしていた。

孝太を一人で乗せるわけにはいかず、将と聡でジャンケンをして聡が孝太の横になったのだ。

「怖かったねえー！」

嬉々として聡と手をつないでいるのは孝太だ。将はそのあとをブスっとして、ステッキを付いて歩く。

「本当、案外怖かったね、将」と聡が振り返ったときだけ

「……そうだな」と笑顔をつくる。

中学時代、無免許でバイクを乗り回していた将には、あの程度のスピードや捻りはどうってことはない。

薄曇りだった空には薄日が差していて、2月にしてはほんのり温かい。

梅がちらほら咲き始めていた園内には、家族連れのほかに、バレンタインデーというのもあり、カップルの姿も目立った。

「お兄ちゃん、次はあれ！」

孝太が指差した先には、お化け屋敷があった。

「……二人で行ってこいよ」

将は、さも面倒くさそうに、傍らのベンチに座った。梅がいい香りだ。

「お兄ちゃん、怖いの？」と孝太が無邪気に訊く。

「ハ？」

「怖いんだー」と聡まで笑う。

「ばっ、バカいえ。わかったよ、行けばいいんだろっ！行けばっ」

将は立ち上がると、ステッキを付いて、いきおいよく先に歩き始めた。

お化け屋敷に入るなり、何も見えない暗闇が数メートル続いた。

「将、足元大丈夫？」

聡が将に声を掛ける。こうなんにも見えないと、ステッキを使って歩く将は歩きにくいだろう。

「全然、大丈夫だよ」

と将が答えたとたん、稲妻のような光があたり、目の前に恐ろしい形相の親子の幽霊が3人現れる。

「うわあああーっ！（将・孝太）」

将は驚きのあまり、バランスを崩しそうになる。

半ギプスの方の足は筋肉が衰えていて、とっさのときにふんばることができないのだ。

それを後ろから聡が支える。

幽霊はすぐに消え、ふっと、また暗闇に戻る。

「大丈夫？将」

背中に聡の手を感じて、将はホッとする。心臓はまだドキドキとしている。

「……鏡だよ」

と聡がつぶやいて、

「なんだよー、あービックリした」

と急激に落ち着いた将は、まだドキドキの余韻を感じながらも、

――この暗闇に乗じて聡とキスできるじゃん。

と思い直す。そして手探りで聡の体を引き寄せようとした。

が、そのとき、ごく薄い照明が復活し、将はがっかりした。

以降しばらくは、人が扮した幽霊や妖怪の登場が続く。

急に登場するのに驚くだけで、あまり怖い、というわけではない。

しかし、さっきから心臓はかなりフル稼働だ。

「アキラ、冷静だな」

将は、気味悪い照明に浮かぶ聡に話し掛けた。いつのまにか、聡は将の腕に自分の腕をからませていた。

「え、結構驚いてるよ」

と振り返った聡は。

――顔が、ない！

「わあああ！（将）」

体中に衝撃が走った将はビクッとあとじさって、尻餅をついた。尻餅をついた将に、聡はあわてて駆け寄る。お面をはずして。

「お兄ちゃん、大丈夫？（孝太）」

「ごめん、足、大丈夫？（聡）」

「なんだよー、アキラ……」

「お化けの一人にもらったの、これ」

聡はいたずらっぽい笑顔で、のっぺらぼうのお面を将に見せた。

「くっそぉ、あとで、覚えとけよ。おしおきしてやるからな」

将は悔しそうに立ち上がった。

ようやくお化け屋敷を出ると、薄曇りながら空が眩しく感じる。

「あんまり怖くなかったね」と孝太が手をつないだ聡を見上げる。

「そうね。将が一番楽しんでたね」と聡は将を振り返る。

将は、いよいよブスっとして二人の後をステッキをついて歩いていた。

あのあとも……、再び真っ暗になった中で、聡にキスしようとした将に、いきなりぐにゃっとしたものが飛んできたりなど、結局将がいちばんビックリさせられたのだ。

「わーい！」

メリーゴーランドに乗って歓声を挙げている孝太に、手を振る聡。

「大丈夫？将」

聡は、隣で、手すりにもたれてぐったりとしている将を振り返る。

「ああ……」

実はあのあと、コーヒーカップに乗った3人だが、孝太が面白がってカップをぐるぐる回したので、将はすっかり気分が悪くなってしまったのだ。

「俺、スピード系は大丈夫だけど、回転系はダメ……」

とヘロヘロだ。将は

「遊園地でよかったの？デート」

傍らの聡に訊いた。もっと大人っぽいところで、語らいたいのではないのか。

と将は気分が悪いながらも、聡に気遣ったのだ。だが、聡は深く頷いて

「うん。大声で笑いたい気分だったから」

とぐったりした将の髪を撫でた。

聡の優しい指を感じながら、将は訊く。

「博史とは……」

訊きながら、蛇足だな、こんな質問は、とも思う。

「うん……ちゃんと、終わったよ」

案の定、聡はキラキラとまわるメリーゴーランドに視線を浮かべながら答えた。

その横顔は、少し寂しげながら、憑きものが落ちたような晴れやかさが漂っていた。

――これで、アキラは俺だけのアキラ……。

将の朦朧とした頭の中で、今はそれだけが嬉しい。

メリーゴーランドを終えて、3人は焼きそばの昼食を食べた。

ふだん食べることのない、庶民的なソース焼きそばの味に、孝太は「おいしい！」と食欲旺盛だった。

将もようやく復活し、午後もソフトクリームを舐めながら動物を見物など、休日の遊園地を満喫する。

「ちょっと疲れたね」

聡がもらしたのは、もう午後も遅い時間だった。

薄曇りのまま赤みがかってきた空はすでに夕方の気配だった。

「じゃ、最後はあれで休憩しようか」

と将が指差したのは、観覧車だ。

昼食以外ずっと広い園内を歩き回っている。

普通に歩いていても疲れるが、ステッキをついた将はやや疲れが早

い。

同じくヒールのブーツを履いていた聡も疲れているようだ。

「うん……」

なぜか神妙にうなづく孝太。

その理由は、乗ってしばらくしてわかった。

かごの中のベンチに、将と孝太が並んで座り、聡がその向かいに腰掛ける。

3人を乗せたかごは、ゆっくりと上へ登っていった。

「わー（聡）」

「結構眺めがいいなあ（将）」

それほど高度がある観覧車でもないが、かごは徐々に視野の面積を増やしていった。

うっすらとピンクがかった午後の空に近づいていくようだ。

はしゃぐ二人をよそに、孝太は外をみようともせずに、俯いている。

「こうやって見ると、将と孝太くん、本当に似てるよね……将の小さいころもこんな風だったのかな」

聡は、並んで座る将と孝太を見比べた。

孝太は、将に似てるといわれて嬉しいはずのに、ちょっと笑っただけでまた視線を下に戻した。

「孝太くん？」

「あ、お前ひょっとして」

そう。将が気付いたとおり、孝太は高所恐怖症だったのだ。

かごが高くなるにつれて、孝太は目をつぶって、小刻みに震え始めた。

そこへ。

ぐらっと、３人を乗せたかごが揺れた。

すでにかなり高いところに来ているので、やや強い風がかごに吹き付けたのだ。

「怖いよう！」

ついに孝太は将にしがみついた。

将と聡は顔を見合わせて微笑む。

「ほら、孝太。ここに座れ」

将は腰掛けた自分の両膝を広げると、その空間に孝太を座らせた。

そこにすっぽりと収まった孝太の目の上に、将は両手をかぶせた。

「これで、見えないから怖くないだろ。もし落っこちてもお兄ちゃんが捕まえてやるからな」

「うん……」

将に目隠しされた将は神妙に、自分の膝の腕に両手を置いている。

聡は、自分の膝の上に頬杖をついて、そんな将と孝太を微笑ましく眺めていた。

かごの中に、午後の名残の薄日が差し始めた。

もうすぐ、てっぺん。最高地点だ。

将は、聡にあごをしゃくって合図をした。

隣に座れという合図だ。

聡は、かごが揺れないように気をつかいながら、そっと将の隣に座りなおした。

「てっぺんだ……」

将はつぶやくと、孝太の目を両手で覆ったまま、首を聡のほうに伸ばして目を閉じた。

薄桃色の雲に一番近い地点。

聡も……、将のほうに肩を乗り出すと、将の唇に、そっと自らの唇を重ねた。

１６３◆復帰

３月に入って最初の月曜日に卒業式があった。

全学年２クラスずつの荒江高校、生徒は全員出席だ。

暦の上ではもう春という今日、まだまだ寒い体育館に全校生徒が並んで座り、端の壁際に沿って全職員が座っている。

在校生として、卒業式に初めて出席する将の視線は、壇上の校長や卒業生からたびたび逸れた。

なぜなら、壁際に並んで座る教職員の中に、スーツ姿の聡の姿があったからだ。

聡が２年２組の担任に復帰することが生徒たちに告げられたのは、先週あった期末試験のあとのＨＲでだ。

兵藤の流血事件があった次の週から、ヤクザ京極は謹慎になり、毎日のＨＲは学年主任の多美先生が担当した。

それをきっかけに、将たちはボイコットを中止し、通常通りの授業に戻っていた。

たぶん聡が戻ってくるのだろう、という予想は生徒たちの噂でさんざん流れていたが、あらためて多美先生から告げられて生徒たちは

皆ワッと歓声をあげた。

そんな中、複雑な表情をしている生徒が2名いた。

一人は……星野みな子だ。

バレンタインの前日に、抱き合う将と聡を目撃してしまった彼女である。

今日卒業式も、職員の席に座る聡と、斜め前方で他の生徒の上に横顔の半分が飛び出しているような将をかわるがわる見ていた。

その将の視線は、たびたび聡のほうに注がれているのは、みな子にもわかった。

もう一人は……言うまでもなく将だ。

「将、よかったな」

多美先生による告知のすぐあと、井口に背中をバンバン叩かれたが、それほど嬉しいわけではない。

なぜなら。二人はこれで担任教師と生徒に戻ってしまうからだ。

聡が山梨に行っている間、つまり将の担任教師という立場ではない間、二人の関係は随分進んでしまっている。

肉体的にも、精神的にも……。

二人は恋人同士といって遜色ない関係だ。

それを、止める、もしくは後退させることができるだろうか……。

将は、できない、と強く思った。

担任だろうと、何だろうと、聡は自分の最愛の恋人であることは変わりない。

だけど、聡は。大人である彼女は、立場やけじめを大事にする。

つまり、担任教師と生徒に戻ったということは、二人がこれ以上進展できるのが卒業まで延びるということを意味する。

将は……目の前で卒業証書を授与される3年に目を移した。

あと1年。自分があそこに立つまで、聡を抱くことは許されない……。

将は小さくため息をついた。

この週末。

大きな荷物を持って、山梨から引き上げてきた聡を将は出迎えた。

将は……先週、半ギプスも取れて、ようやくステッキをつかずに歩けるようになっている。

彼が半ギプスが取れて最初にやりたかった1つが、車の運転だ。

マニュアルのローバーミニは運転に左足も使う。ゆえにギプスの間は運転をまったくできなかった。

将は意気揚揚と、ローバーミニを運転して新宿駅に向かった。

そして聡を乗せるとそのまま、彼女の家に泊まったのだが……。

「あのね。将」

聡はシャンパンの最後の1口を飲み干すとあらたまった。

将は、聡の復帰祝いにシャンパンを用意していたのだ。

聡の家にはシャンパンフルートがないのでワイングラスに注いで、いましがた乾杯したばかりだ。

「校長先生から注意されたの」

「何を？」

「将とのこと」

「えッ」

聡の隣に座る将は目をむいて聡を振り返った。即座に毛利の姿が頭に浮かぶ。

あのとき……そう。聡が突然転勤させられたとき、彼はたしか校長室にいた……。

「何ていわれたの？」

「将と個人的な関係か、って訊かれて……」

もちろん聡は否定した。仲がいいことは認めるけれど、決して『関係』などではない。と。

「そしたらね。一部の保護者から、誤解を受けているようだから、行動にはくれぐれも気をつけなさいって念を押されて。……いちおう、それだけなんだけど」

一部の保護者。間違いなく毛利だろう。

「そんなこと、気にすんなよ。恋愛は自由だろ」

そういう将に、聡は哀しげに首を横に振った。

「たしかに、恋愛は自由よ。だけど担任教師になったからには、他の生徒への立場や影響があるし……」

聡は、高校時代の自分を思い出していた。同級生と教師の恋愛を不潔だと思っていた自分に。

「だから、校長先生の言い分ももっともだと思うんだ」

「アキラ……」

将は目を伏せた。そして自分でシャンパンを注ぐと、それを喉をそらすようにしてぐいっと飲み干すと、聡の目を見据えて言った。

「俺、学校辞めようかな」

「将、何いうの……」

聡も目を見開いて将を見つめた。

「だって、そうだろ。担任と生徒の関係がダメなら、俺が生徒じゃなくなればいい」

「将……」

絶句した聡に将は腕を伸ばして、柔らかく抱きしめる。

「アキラ。俺、アキラのためなら学校なんて全然惜しくないぜ」

言葉に呼応するように将の腕の力がだんだん強くなっていく。

「……だめよ」

将の匂いと体温に包まれた聡は、一瞬それに酔った。だけど、自分にからめられた腕を解いて、将の目を見る。

「せっかく2年続けられたんじゃない。高校は卒業して……。ううん、大学にも行って」

「アキラ……」

「私だって、将のためなら何でもできるわ」

将が、だったら二人で、と言いかけるのを聡は止める。

「将。私は、将の未来を潰したくないの。二人は、今だけじゃないのよ。ずっとずっと続く長い人生に比べたら、卒業までの1年なんて……」

聡はそういうが、将にとっては1年は永遠のように長い。

「アキラ、アキラは卒業まで俺と会わない、っていうの？」

将は思わず声をふるわせた。

「学校で毎日会えるじゃない」

「いやだ！」

将は聡の体を再び抱きしめた。今度は渾身の力を腕に込めるように強く激しく。

「俺、アキラとこうやって抱き合えない状態が1年も続くなんて耐えられないよ！……やっぱり学校を辞め……」「将」

絞り出すような将の声に対して、聡の声は低く冷静だった。

「私を口実にしないで」

「アキラ？」

将は思わず、聡の肩を掴んで自分の体から離すと、その顔を確認した。

聡も……、双眸を見開いて将を見据えていた。

「学校や受験から逃げる口実にしないで」

「何いってる……」

将の唇は言いかけて止まる。聡の見開いた瞳から涙がこぼれたからだ。

「お願い。将。辞めるなんて言わないで……。私、私のせいで、将の人生を台無しにさせたなんて後悔したくないの……」

「ア、アキラ……」

「私、将が学校を辞めるなら、別れる！」

聡は、ついにそう言い切ってしまった。見開いた目も、眉も唇も歪んでいる。その歪んだ眼から涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

「ふっ……、ううっ……」

歪んだ口元から嗚咽が漏れた。いつのまにか肩で激しく息をしている。

ついに聡は顔を手で覆ってしまった。

別れる、という言葉を口にしてしまったことに、自分が傷ついたか

のように……。

将は聡から告げられた突然の『別れ』という単語に呆然としていた。

「私、将と別れたくないよ……。ずっと一緒にいたいよ……」

聡は顔を覆っていた手をはずすと、涙でぐちゃぐちゃになった顔で、将を見上げた。

「アキラ」

聡が将の胸に寄りかかってくるのと、将が聡に手をのばすのとがほぼ同時だった。

「将……。私、自分より将が大事なの……」

聡の吐息のような告白に、将も目が熱くなった。

結局、『別れ』まで持ち出して、学校に行かせたい聡に、将は従わざるを得なかった。

だけど、週末だけ、ばれない様にするから恋人として会いたい、と将も泣きながら訴えた。

聡は、それについては黙って頷いてくれた。

卒業式も無事終わり、まだ桜の蕾も固い学校の前では、しきりに卒業生と在校生が写真を撮影しあったり、恒例のボタン争奪戦が行われていた。

青い空に負けずに卒業生の顔が晴れやかなのは、月末に振り込まれるキャッシュバックのおかげでもあるだろう。

将も、上級生の女子から、撮影申し込みの激しい攻勢を受けていた。背の高い将は、上級生の女子と並んでも見劣りなどもちろんしない。逆にぽっと顔を赤らめる、上級生の女子のほうが、年下に見えるほどだ。

そんな様子を微笑ましく見ていた聡は、多美先生から声をかけられた。

「古城先生、京極先生への引継ぎはどうでした？」

「ハイ。とてもスムーズに終了しました」

ヤクザ京極は、山梨の新学校の校長に元通り収まったのだ。

先日、聡と入れ替わりに山の学校にやってきて、聡から引継ぎを受けている。

彼だけでなく、3月からは何人か教員も山の学校に入り、本格的に準備をすることになっている。

「それにしても、私たちも驚きましたよ。彼に英語教育の経験がまったくなかったなんて……」

多美先生が頭を掻いた。

「ええ。もともと経営畑の方なんですってね。社会人向けに、自己啓発セミナーをされてたって私も聞きました」

聡は、京極が言ったそのままを伝えた。聡が接した京極は、外見ほどに恐ろしくはなかった。

「校長や教頭も、何でそんな人を英語担当にしたのやら……。そりゃうちは私立だし、別に教員免許は不要といえば不要ですが……」

多美先生は苦笑いをした。

多美先生はそれが将の父・鷹枝康三の秘書の毛利からしくまれたたくらみだということは知らない。

当の毛利は、随分前に博史からメールを受け取っていた。

『例の件はもういいです。ご迷惑をおかけしました』

「フン。だから男女のことは……」

とメールを一瞥した毛利は呟いた。

男女のことは、やはり、ハタであれこれやったところでどうにもならないのである。

結局、博史と将の女の取り合いは、将が決定的勝利をおさめたらしい。

毛利が、それでも『どうにもならない男女のこと』に手を突っ込んでいたのは、

キレた博史がマスコミなどに官房長官に不利な情報を垂れ込むことを恐れたからであって、

その危険がなくなったのならもうどうでもいいことだ。

毛利は、返信もせずにノートパソコンを閉じると、席にふんぞり返って、若い秘書に茶を持ってくるように言った。

「京極先生も生徒に舐められるまいと必死だったそうですね」

聡は微笑んだ。卒業生の担任ら屈強教師たちも今日は、相好を崩して生徒たちと写真に収まっている。

「ハァ。それだけじゃないと思いますが……」

多美先生は、松岡飛び降り事件の際の京極の言動を一瞬思い出した。が、わざわざ聡に伝えることもないと

「新しい学校で彼は？」質問に切り替える。

「特に科目は持たないそうです。学校運営と、全寮制ですので生活態度とかそういう方面をビシビシと鍛えるそうです」

「そうですか……。それにしても、古城先生、いや、アキラ先生が戻ってらして本当によかった。がんばってくださいよ」

多美先生は聡の肩をぽんと叩いた。ターミネーター顔に柔らかい皺が刻まれた。

164◆アネモネ

カーテンの隙間から、もう高くなった陽射しが差し込んでいる。

目を覚ました大悟は、隣で寝ている瑞樹の顔を見ていた。

青白いような色白に、とび色がかった髪。

……もともとの瑞樹の髪の色は生まれつきこんな明るい色なのだ。

ショートカットは首を長く見せている。

こうして目を閉じているとハーフの少女のようにさえ見える。

ハケンを入れなかった日曜日。ひさしぶりに大悟と瑞樹は寝坊を楽しんでいた。

ちなみに、このマンションの部屋の主である将は、昨日から聡の部屋に泊まっている。

視線を感じたのか、瑞樹はゆっくりと目を開けた。

「ん……大悟？」

寝起きのせいかうるんだ瞳で大悟を見る。

「おはよう。瑞樹」

「……おはよう」

瑞樹は自分から大悟に腕をからめてきて、軽く口づけをした。

しかし、大悟は、それを返すこともなく、瑞樹の顔をただ優しく見つめた。

「もう起きる……？」

瑞樹は上目遣いで大悟に訊く。低血圧で貧血気味の瑞樹は朝が弱い。もう少しこうやって寝転がっていたいのだ。

大悟は、優しい目で瑞樹を見つめたまま首を横に振り

「もう少しこのままでいよう」

と瑞樹を抱き寄せた。

瑞樹は嬉しげに大悟のTシャツの胸のあたりに顔をうずめた。

「なあ……。瑞樹」大悟はポツリと呟やくように瑞樹を呼ぶ。

「ん？」

瑞樹は目を閉じて、大悟の胸に顔をよせたままだ。

そんな瑞樹の髪を大悟は撫でながら小さな声で、でもはっきりと言った。

「東京を離れないか」

瑞樹は思わず体を起こした。大きな瞳を見開いて大悟を見る。

「どうして……？」

その問いには答えずに、大悟は

「嫌か？」

と訊きながら、瑞樹を見つめる。

瑞樹は自分を見つめる大悟の瞳の深い色をしばらく見つめ返したが、俯いた。

「私のためだよね。私が……クスリをなかなかやめられないから……」

瑞樹はつぶやくとまた大悟の横に自分の身を横たえた。

「東京を出て、どこに行くの？」

大悟は自分の傍らに横たわる瑞樹の肩を撫でながら、

「滋賀に……カップルで住み込みできる自動車部品工場があるんだ」

瑞樹はそっと目を閉じると

「滋賀か……琵琶湖のあるところだよね」

と呟いた。

「将と……離れたくないか」

大悟は思い切って言ってみた。

瑞樹は閉じていた目を開くと、大悟をまっすぐに見た。

「どうして……そんなこと、いうの？」

しばらく、大悟をじっと見つめたあと、瑞樹は震える声でつぶやく。

そして

「将なんか……どうでもいい」

大悟にしがみついた。

だけど、大悟の胸に顔を押し付けるようにしていたのは、その表情を見られないためである。

瑞樹は動揺していた。

しかし、そろそろひきずり続けた将への想いを清算する頃だとも、自覚していた。

将への想いへの苦しさをまぎらわすために、瑞樹はクスリを使っていた部分もあるからだ……。

自分とよく似た境涯を持ち、自分を思ってくれる大悟と2人きりで、いっそ遠いところで、新しい人生をやりなおすのはチャンスかもしれない……。

しっかりとしがみついたまま、沈黙する瑞樹の髪から背中を大悟は

優しく撫でていた。

それに答えるように、瑞樹は大悟の胸の中で

「滋賀でやりなおしたい……」

とつぶやいた。

卒業式が終わると、1学年分生徒が少なくなった校舎ながら、元通りの日々が始まった。

聡にとってはほぼ1ヶ月ぶりの教壇は、生徒からの歓迎をもって迎えられた。

映画や洋楽を使った英語の授業に、放課後の自主補習、金曜日の社会見学も復活することになった。

さらにこれらは、来年度から全校に取り入れようということに決まった。

特に聡がありがたかったのは、社会見学に学校の協力が得られるようになったことだ。

いままで見学先は聡の単独努力で見つけて交渉し、少ない学級予算の中から謝礼などを支払っていたから。

聡は、教える生徒がいることに、喜びを感じ、以前よりも教師という仕事に前向きに取り組もうと気分を新たにしていた。

将は……教壇の上でいきいきとしている聡を、最初、複雑な気分で眺めていた。

聡が、自分自身以上に将のことを思っていることはわかっている。

将の未来を誰よりも案じていることも。

だけど、17歳の将には『いま』聡と愛し合うことも、大事なことだった……。

そんな3月中旬に差し掛かったある放課後。

珍しく放課後の補習に将の姿が見えなかった。

――珍しい。

聡は少し寂しく思いながら、他の生徒に個別指導を行っていた。

いつもなら、最後まで残るのはザラ、聡が業務を終えて職員室から出てくるのを待っていることさえあった。

「ちょっと、ヤバいわよ」

聡が囁くと、ことさら大きな声で

「俺センセーの大ファンだしー。センセーと帰れてうれしーなー」

と他の教師に聞こえるように言う。そして声をひそめて

「あからさまにしたほうが、バレないって」

と聡にウインクする。

「んもう……」

呆れながらも、結局、二人で何度か、夕食まで共にすることもしばしばだった。

将は、とある寺に来ていた。鷹枝家代々の墓がある菩提寺である。

もうすぐ彼岸を迎えるこの頃、日はだいぶ長くなった。

放課後のこの時間も、寺の瓦や墓石に温かい色をした日光が差している。

だが、夕方に近づくにつれ、まだ春とは思えない冷たい風が時折、将に吹き付ける。

将はこの季節には少し早い、アネモネの花束を大事そうに抱えていた。

……今日、３月１２日は、若くしてガンで亡くなった、将の母・環の命日なのだ。

毎年、心でそれを一瞬反芻するだけに留めていたのだが、今年は亡くなってちょうど１０年になる。

なぜか、将は母の墓に語り掛けたい気がしていた。

そんな気持ちにさせたのは、まぎれもなく聡の存在である。

――大事なひとができたんだ。

将は母の墓前にそんな報告がしたかったのかもしれない。

将がひときわ鮮明に覚えている思い出。

それは、パリの幼稚園に、フランス人に混じって通っていた頃。

クラスに好きな女の子がいた。濃い栗色の髪に青い瞳を持った可愛いコだった。

たしか名前はロマーヌだっただろうか。

おませな彼女は、黒い髪の将に「あたしの髪とおそろいね。あんたカッコいいわ」と近づいてきたのだ。

小さかった二人は、あっというまに『ろま』『ショー』と呼び合う小さな恋人同士になった。

彼女は、両親が離婚していて父親に引き取られていた。

その父親も仕事の都合で外国に行くことが多く、ロマは１５区に住む祖母の家に預けられていたのだ。

そんなロマが、将に「ママンに会いたい」と言い出した。

将は、ロマの願いを叶えるべく、「会いに行こう！」と手に手をとって歩き出した。

だが、ロマのママンの家は小さな二人には遠すぎた。

結局、暗くなってもたどりつけず、さりとて家にも帰り着けず。二人は路頭に迷ってしまった。

泣き出すロマ。将も泣きたかったが耐えた。そこへ警察がやってきて二人は無事保護された。

警察にかけつけた環は将をいきなりひっぱたいた。

『将！遅くまでどこに行ってたの！心配したのよ！』

そう怒鳴った。将は叩かれた頬が痛くて思わず涙ぐんだ。

次の瞬間、環は将を抱きしめて『無事でよかった』と泣きじゃくった……。

ちなみに墓参りには白い菊、という常識くらい、将とて知っている。
だがアネモネは将の母が好きな花だった。

パリに住んでいた頃、母はいつも街角の花屋でそれを買ってきて、食卓の上に飾っていた。

日本に帰ってきてからは、父の選挙で忙しかったのと、花が高価だったので飾られる頻度はぐっと減ったが、将は特徴あるその花をよく覚えていた。

死の3日前も……7歳だった将が病床見舞いに持っていったそれを、たいそう喜んでいた。

あのときも、こんなふうな午後の遅い時間だったと思う。

病院の白いカーテン、そして白い壁がほんのり橙色がかっていたのを覚えている。

看護婦によって活けられたアネモネは午後の光の中で……病院には場違いなほどに……赤や紫の鮮やかな花弁を輝かせていた。

「将、ありがとう。とってもキレイね」

それが、起き上がった母と言葉を交わせた最後だった……。

思い出すと、今でも涙が出そうになる。だから将はなるべく何も考えないようにして歩を進める。

この寺でひときわ大きな墓石の前で将は立ち止まった。そこには鷹枝家代々の墓、と掘り込んである。

花束を捧げようとした、将はあるものに気付いて、手を止めた。

墓の前には……すでにアネモネが活けてあったのだ。

ちょうど今燃え尽きた線香からは、名残の煙がまだ立ち昇っている。

将は体ごと今来た道を振り返った。しかし誰もいない。

母がアネモネを好きだったことを、将以外で知っているのは、他にはただ一人……父の康三だけだ。

まさか。母の死に際して涙を一滴も流さなかった父が……。

アネモネの花束を抱えた将に、ひときわ強い風が吹き付けた。

165◆血脈

星野みな子は、復活した放課後の自主補習に出席していた。

英語だけでいけば有名大学に合格できるレベルのみな子は、聡からもらった特製のプリントを机の上に広げている。

放課後の補習が復活してもう何日かたつが、みな子は以前のように勉強に身が入らなかった。

原因は……将と聡である。

今日は、将が欠席しているから少しはマシかと思ったが、やはり、補習のほうは、まるで身に入らない。

いつもは将と聡をかわるがわる観察するのだが、みな子の冷徹な視線は、今日は聡一人に注がれた。

軽くカールした、柔らかそうな栗色の髪を今日は下ろしている。

派手ではない化粧は黒目がちの大きな瞳をかえって際立たせている。

小さめだけど、厚みのある唇は健康なバラ色で、いかにも柔らかそうだ。

そして、固いパンツスーツを着ているのに、その下に息づく柔らかさがわかる張り出した胸……。

――あんなふうに駅で抱き合うぐらいだから、きっと二人は……。

聡の女らしい顔も体も、いやらしい、とみな子は思った。

あの髪を、将はかき上げるのだろうか。

あの瞳で将と見詰め合うのだろうか。

あの唇で将と口づけを交わすのだろうか。

そしてあの体で……。

みな子にそんな経験はないだけに、想像だけは、どんどん膨らんでいく。

――教師のくせに、生徒と寝るなんて不潔。いやだ。

みな子はうつむいて固く目を閉じた。

気がつくと、斜め前で兵藤ら、勉強ではなくて会話が練習したいという生徒相手に会話のレッスンをしているのが聞こえる。

しっとりとした低めの声になめらかな発音。男子にまじって楽しそうな笑い声。

その声で、将と愛を語るのだろうか……。

あのことを知るまでは、大好きだった聡。尊敬していた聡。なのに。いまは声を聞くのもつらい。

「星野さん、できた?」

目をあけると、みな子が座る机の脇に聡が立っていた。

いっこうに進んでいない英作文に、聡はかがみながら、みな子に顔をよせて

「これは、この構文を使ってみるといいわよ」

とみな子が持っている参考書を開けて示してくれる。

下ろしている髪のあたりから、甘い香りが、ほのかに漂う。

みな子は、思わずその香りにむせて窒息しそうになる。

「センセイ、臭い」

思わずみな子は口に出してしまった。声を落とさなかったので、まわりの生徒がこっちを振り返った。

「えっ？」

当の聡も、目を見開いて、のけぞるように身をおこした。

「香水、きつい」

みな子は聡の方を見ずに、冷淡かつ平坦な口調で言い放った。

「ご、ごめんね。つけてないんだけど。リンスかな」

あわてる聡に、後ろの席にいたチャミ&カリナが

「みな子、コワイしー」

「センセー、ぜんぜん臭くないよ。気にしなくていいよ」

とフォローした。

聡は、様子が変なみな子が少し気になったが、他の生徒も見てあげなくてはならない忙しさの中、すっかりそれを忘れてしまった。

寺の年取った住職は、１０年も会ってないはずなのに、将を見るとすぐに

「鷹枝さんところの、将くんだね」

と気付いた。母の葬儀のときにお世話になっている。

小学生だった将も可愛がってもらった覚えがある。

将は住職におずおずと頭を下げた。将は住職に訊きたいことがあった……。

「ああ、あの花は、父上の康三さんだよ。毎年、命日には一人でいらっしゃってあの花を供えて手をあわせていくんだよ。どんなに忙しくても、ね」

将は寺の前の石段に腰掛けていた。住職はその上の縁に同じように腰掛ける。

二人に名残のように夕陽があたっている。それは時間が経つにつれて赤みを増していった。

住職はどこかの葬儀か法事にいったあとらしく、立派な長い僧衣を着ている。この衣からかなり位の高い僧であることがわかる。

将は、まだ腑に落ちなかった。

母の死の際に涙も流さなかった父である。よく似た他人ではないだろうか、とさえ思う。

しかし、反論の根拠も探せないまま、口をつぐんだ。

「将くんも大きくなったねえ。巌さんが言ってた通りだ」

巌、つまり曽祖父・ヒージーと懇意にしている住職は、将の死んだ祖父より少し若い。

「……ヒージー、なんでいってたの」

「自慢の跡取だっていってたよ」

住職の丸めた頭はまるで磨きこんだかのようにツヤツヤとして、夕陽を反射している。

かつて大きかったであろう目もこのように微笑むと皺に埋もれて、

こうやって細めると皺と見分けがつかないようだ。

将は思わず、ハッと笑って言葉を返す。

「俺は継ぎませんよ」

「どうしてだね？」

住職は、目を皺のままにして訊き返した。

「どうしてって……。俺、家出てるし……」

将はいいよどんだ。

自分は見捨てられているのだ。いや、見捨てられるようなふるまいを自分から重ねているのだ。

跡取なんかでは、決して、ない。

「弟の孝太のほうが後継ぎにふさわしいでしょ」

将は、そっぽを向いて吐き出すように言った。

住職は、ため息をつくと、袈裟をひきずるようにして、無言で暗い寺の奥に消えた。

将は、帰っていいのか迷ったが、夕陽があまりにきれいなのでしばらくそこにいた。

柿の木に残っていた枯れ葉が、スローモーションのように将の前に

落ちたとき、住職が奥から再び出てきた。

巻物を持っている。

住職は、巻物を将の前で広げた。

「鷹枝家の系図だ」

「へえ」

思わず将も覗き込む。住職は筆で書かれた系図を差しながら将に説明した。

「これが元薩摩藩士だった初代。……ここに巌さんがおる。亡くなった周太郎さん。そして康三さんだ」

「あ」

将は気付いた。康三の下に、自分の名前が書かれている。孝太の名前はない。

「そう。これはお前さんだ。ここには鷹枝家で15歳を越えた者の名前だけが記されている。……もう1つ気付かないか」

将はわからなかった。

「鷹枝家は、よほどのことがないかぎり、長子が家督を継ぐんだよ」

「で、でもオヤジは」

「そう。康三さんは三男じゃ。本来は康三さんの一番上のお兄さんが継ぐはずだったのだが、事故死されてな。

次男さんはそんなことがあると思わなかったのか、生まれてすぐに養子に出されているから、それで康三さんが継ぐことになったんだよ」

そういえば、康三の政界デビューは遅かった。

詳しく聞いたことがなかった将だが、そういう事情があったことを今日初めて知った。

住職はさらに隠された真実を将に伝える。

「康三さんは、将くんが生まれたとき、ことさら期待されていた。お母さんの環さんも結婚前は優秀な外交官だったから、先が楽しみだ、とね。

それで厳さんに頼んで『国家の将とあれ』という古い漢文からとって『将』と名付けられたんだよ」

将は、腰掛けているにも関わらず、地面が波打つのを感じた。

夕陽が……、沈んでしまう。血のような赤い色で。

自分の中に流れる血脈が重い。重く音を立てて流れる。

――ウソだ。

――ありえない。

――アキラ。アキラ、どうか、そばにいて。

急に混沌としはじめた思考の中で、将はひたすら聡を求めていた。

１６６◆禁断症状

補習を終えた聡はひさしぶりに大学時代の友人の美智子と逢うべく、学校をあとにしていた。

もう６時だけれど、まだ空には太陽の明るさが充分残っている。

――もう春なんだ。

風はまだ冷たいし、桜のつぼみもまだ固い。でも日に日に明るくなってくる放課後に聡は確実に来ている春を感じていた。

通りすがりの桜の枝につぼみを確認しながら駅へ向かう聡の携帯がふいに鳴る。将だ。

「将？どうしたの？」

もう学校を遠く離れている聡は躊躇なく名前で呼んだ。

「アキラ、今日、逢えない……？」

「ごめん。今日は、いまから友達と食事なの」

「それが終わってでいい。顔が見たいんだ」

切羽詰った、というより苦しげな様子。いったいどうしたんだろう。

聡は、そういえば今日、将が補習に来ていなかったことを思い出した。

「どうしたの？いったい」

まだ駅まで遠い。歩きながら事情を訊く暇はありそうだ。しかし、将は

「あとで話す。とにかく連絡くれ」

と言って電話を切ってしまった。

電話を切った将は、待ち受けに戻った携帯を眺める……ずいぶん前に撮影した聡の笑顔が表示されている。

それを見てため息をついたとき、携帯が再び鳴った。

大悟だった。

「将？今日外で一緒に飯食わない？」

一人でいると、乱れる心はますます収拾がつかなくなる気がする。

将は、気持ちを鎮めるために誰かと逢いたかった。

誰か……できれば聡が一番だが、大悟でも悪くはない。

ふだん仕事で忙しい大悟は、一緒に住んでいながら顔をあわせることが少ない。

たまには食事でもしながら、話をするのはやぶさかではない。こっちから誘いたかったくらいだ。

「おう。食おうぜ。何食う？」

将は明るく返事をした。

「上カルビ頼もうぜ。俺がおごるから」

大悟は明るく提案した。

「何、キューリョー日？」

いつになく豪気な大悟に将は笑顔でさぐりをいれる。近所の焼肉屋に来ていた。

「うん。それもある」

大悟の笑顔の前に、ビールの大ジョッキが運ばれてきた。

二人は乾杯した。

「給料日だったら、俺におごるよりも、瑞樹のヤツになんか買ってやったら？……あ、そうだ、もうすぐホワイトデーじゃん」

将はタン塩を焼き網の上に並べながら顔をあげた。

「うん。それはぬかりはないよ」

大悟もタン塩を並べる。その並べ方は将より一段丁寧な感じだった。

タン塩はあっという間に食べごろになり、二人はレモン汁にひたしたそれを口に運んだ。

そこへ、上カルビ、上ロースがやってくる。

あっという間にタン塩を食べ尽くした二人は、しばし無口で、肉を並べて食う、を繰り返す。

満足感の域に達するのは大悟のほうが先だったようだ。

大悟は、もう2杯目になる大ジョッキをぐっとあけると、3杯目をオーダーして

「あのさ」

と将に話し掛けた。

「何」

将は相槌をうちながら、あいかわらず、肉から目を離さない。上カルビは食べ尽くし、並カルビになっている。

レア好きな将だが、安いカルビはよく焼いたものも香ばしくてよい。

これをやりだすのは、将も満足に近いというサインだ。

「俺たち、マンションを出るから」

「あ、そう。……え？」

肉の焼き加減に注意を払っていた将は、しばらくしてその内容を理解し顔をあげた。

「長いこと、世話になったな」

大悟は頭を下げた。

「出るって……どこいくんだよ？」

思わず将の声が乱暴になる。

「二人で、滋賀の自動車部品工場に住み込もうと思う。夫婦向けの寮があってさ」

将は大悟の顔を見たまま、無意識に網のうえで肉をひっくりかえす。

「滋賀……」

絶句する将。

思わず正月に萩まで往復した道のりを思い出す。滋賀はちょうどそ

の真ん中ぐらいだっただろうか。

出て行くというのを将への遠慮と解釈した将は

「大悟、俺んちだったら、いつまでも居てくれてかまわないんだぜ」

と優しい声で引き止める。

「ん……。ありがとう。でも、もう決めたんだ」

大悟は、微笑んだまま、将を見据えた。決意は固そうだ。

「なんで、そんな遠くに……」

将はビールをあおると下をむいた。

せっかく再会できた親友がまた遠くに行ってしまう。

焼肉屋の香ばしい匂いは寂寥感とはおよそかけ離れている。

だけど将の心はじわじわと寂しさに浸されていった。

「東京にいると、いろいろと誘惑が多いだろ……」

大悟は、将のようすに言い訳をするように、新しい肉を網の上に載せた。

「瑞樹か……」

大悟はうなづいた。

「あいつさ……。クスリを辞めるどころか、すっかりクセになってしまったみたいで……。

最近は、クスリが切れると苦しいみたいなんだ。幻覚みたいなのも見えるらしいし」

肉を箸でいじりながら話すのには、ふさわしくない話題だ。

「俺が一緒にいるときは、なんとか我慢させてるけど……。本当に苦しそうなんだ」

依存症、とか、禁断症状というのを将も聞いたことがある。

将は、返す言葉を必死で探す。

「治るのか……？」

それだけしか見つからなかった。

大悟は、将の目を見た。そして頷く。

「苦しみにも波があるみたいなんだ。我慢していたら、収まっていくみたいな……。それを繰り返していつかは禁断症状から抜けるらしい」

「そうか……」

「まだ瑞樹は軽いほうだから、心配すんなよ」

深刻な雰囲気を崩そうと、大悟は懸命に明るい声を出す。

将は、何を基準に『軽いほう』なのか、とも思ったが、大悟がそういうなら、と口元に笑みをつくってみた。

その試みはあまりうまくいかず、どうしても固い表情が崩せないのが自分でもわかる。

「滋賀だって新幹線に乗ればそんなに遠くじゃないぜ」

大悟は、自分をも励ますように、明るく言うと

「まあお前はミニ運転して来るんだろうけど……落ち着いたら遊びに来いよ」と付け加えた。

「ああ。近いうちに井口とでも行くよ」

とようやく答えた将に「センセーとでもいいんだぜ」と大悟はそっと囁く。目が笑っている。

将は、照れてひとしきり笑うと

「で、今日は、瑞樹は？」

と訊いた。

「荷物取って来るって、さっき自宅にいったん戻った。いちおう母親にも挨拶しておくって。

途中で焼肉合流して、将にも挨拶しておきたいとかいってたけど…

…そういや連絡遅すぎるな」

自宅、と聞いて、将は少し嫌な予感がした。

瑞樹の自宅には、瑞樹が忌み嫌っていた義父がいるのではないのか。

将の曇った顔を見て、大悟は将の心配がわかったらしい。

「母親がいるなら、義理父も無茶はしないだろ」

とフォローしつつも、

「ちょっと電話してみるわ」

と携帯を取り出して瑞樹に掛ける。

何回もコールがなったあとでようやく瑞樹は出た。

「瑞樹？」

「大悟……」

「どうした。何で連絡しなかったんだ」

「うん……」

的を得ない返答。どうも様子がおかしい。

「瑞樹、聞いてる？」

「聞いてるよ……」

「一緒に夕食食べるっていってなかったか？将いるよ」

しばし沈黙が流れる。

将の名前に対しての沈黙なのか。

大悟はやや舌打ちしたい気持ちのまま瑞樹の携帯が拾う周囲の音を必死で聞き取ろうとした。

規則的なリズムの轟音。列車に乗っているのか。

列車の轟音に、瑞樹の震える声がやっと混じる。

「……大悟、あたし……今日ね……。義理父とのこと、お母さんに見られちゃった」

１６７◆嫌な予感

「……大悟、あたし……今日ね……。義理父とのこと、お母さんに見られちゃった」

「えっ！」

当然将には大悟が携帯に向かって発する声しか聞こえない。

しかし、そのただならぬ様子に、思わず身を乗り出すようにする。

大悟は、そのときすでに、瑞樹がすすり上げる音を携帯から拾っていた。

「大丈夫か」

大悟の声に優しいいたわりが混じった。見られてどうなったか、を知るよりも先に瑞樹が心配なのだ。

「……うん」

瑞樹は涙を飲み込むように頷いたらしい。そして続ける。

「お母さんね。私のほうを……叩いたんだ。『泥棒猫』って」

大悟はしばらく沈黙した。

目を伏せて歯を食いしばっている様子から将は、瑞樹によほどひどいことが起きているのだ、と予想し緊張した。

「ひどい」

大悟はようやく漏らした。電話の向こうで、電車の揺れる音に瑞樹がときおりすすり上げる声が混じる。

「いま、どこにいるんだ……」

これ以上優しい問いかけはない、というような大悟の声を将は聞いた。

携帯を包み込むように持っている。

……焼き網からこげた肉が、目にしみるような煙と嫌な匂いを発し始めて、将はあわててその肉をどける。肉は、もはや炭のようになっていた。

「小山のおばあちゃんにも、お別れを言いにいこうと思って……。しばらく会えなくなるだろうから」

瑞樹はたびたび小山の祖母の家に行っていた。

祖母のほうは、母親と違ってきわめて普通の人らしく孫の瑞樹を可愛がっていたらしい。

「大丈夫か」

大悟は何度目かになるいたわりの言葉を発した。

「……うん。お母さんのことは……、もういい。もうふっきれた。

……もう捨てる。あんなヒト、お母さんじゃない」

瑞樹は一言一言区切りながら、自分自身に言い聞かせるようにして、母への訣別を口にした。

携帯を耳に押し当てた大悟の顔が、つらそうに歪んでいくのを将は、見てはいけないもののように盗み見た。

将はわからなかったのだが、そのとき大悟は、自分が父に訣別したことを思い出していた。

借金だらけで、大悟に迷惑ばかりかけてきた父とは、連絡がとれなくなって2年以上経つ。

そんな父でも……たった一人の肉親に引導を渡すのはつらかった。

もう頼るまい、愛情を期待するまい、と思いつつ何度もゆきつ戻りつした、つらい日々。

……大悟は瑞樹のつらさを的確に想像していた。

「おばあちゃんのうちには……泊まるのか？」

「……ううん。終電までには帰る。帰りは新幹線使っちゃおうかな」

瑞樹はきっと、つらそうな笑顔を浮かべているに違いない。

大悟はそっとため息をついたとき、

「あ、もう着くみたい」

と瑞樹が電話の向こうで言った。不明瞭だが車内アナウンスも聞こえる。

「じゃあ、切るね。今日、必ず、帰るから。将に……」

1拍、息を吸い込むような沈黙が混じる。

「今までいろいろゴメン。さよなら、って言っておいて」

「瑞樹」

電話は切れた。

大悟は、しばらく携帯を耳に押し当てたまま、目を見開いていたが、ぎこちなく見えるほどゆっくりと携帯を下ろした。

まるで見えない粘りに捕まった様な、そんな感じだった。

「瑞樹、なんだって」

将は、大悟のようすから、訊くべきじゃないかも、とも思ったが、このシチュエーションじゃ話をいきなり変えるのも変だ。仕方なく問い掛けた。

予想通り、大悟は沈黙している。

まるで魂が抜けたように、それでもジョッキに半分ほど残ったビールをあおると流し込んだ。

「どこにいるって？」

将は答えやすい質問に変えてみた。大悟はビールを飲み干して、大きく息をつくと、

「小山」

と短く呟いた。続けて

「おふくろさんと……いろいろあったらしい」

と慎重に言った。

大悟は、瑞樹の家庭の秘密を将が知っているとは思わなかったからそういう表現をしたのだが、

将はそれで、瑞樹の身に何が起こったかが、だいたいわかってしまい、息を飲んだ。

「将、お前に『いろいろゴメン、さよなら』って……」

大悟はやりきれないように、テーブルに肘をつきながら、瑞樹から託された言葉を将に伝えると頭を抱えるようにがっくりとうなだれた。

「なんだそれ」

と将は反射的に答えながら、急に嫌な予感にとらわれた。

それは大悟も同じだったようだ。うなだれていた頭を電気仕掛けの

ように上げた。

髪が乱れ、目は四白眼になりそうなほど、見開いている。

「ヤバイ！」

「どうした」

大悟は、目を伏せると左手を出して、指を折りだした。頭の中で何かを数えているようだ。

「禁断症状が……！」

小山から戻ってくるまでに、時間的に瑞樹を禁断症状が襲うであろうことを、大悟は計算したのだ。

「将、悪い。俺、瑞樹を迎えに行く。俺がついてないと……アイツ……瑞樹は！」

大悟は即座に席を立った。

将も追うように席を立ち、

「車出そうか？」

と大悟の肩をつかんだ。

大悟は、つらそうな中で少し笑顔をつくった。

「今日はいい。飲酒運転になっちまうだろ」

大悟は、焼肉代を払うと、わき目もふらず走り出す。が途中で将を振り返った。

「将、本当にいろいろありがとうな！」

そう叫ぶと、一目散に駅のほうへ走っていった。

不安に囚われた将は、大悟が見えなくなるまで佇んでいた。

「へえ。美智子、４月で独立するんだ」

「ウン。もうこき使われるのはウンザリだからね。もう今年２７になるんだし、今後は自分のペースで仕事したいんだよねー」

そういう美智子はあいかわらず素顔がわからないほどの濃い化粧に、明るい色の髪を今日はゆるく２つに結んでいる。

しかし結んだ先の髪は計算されたようなきれいな波を描いていた。

ほのかに香るスパイシーな香水も美智子のこの雰囲気によく似合っている。

しかし、香水をかいだ聡は、今日星野みな子に

『センセイ、臭い』と言われたことを思い出してしまった。

美智子に、試しに

「あたし、匂いキツイかな?」と聞いてみると、

美智子は『?』という顔をし、

「なんにもにおわないよ。聡、香水つけないでしょ」

と言ったので聡は少し安心した。

聡と美智子がいる、カウンターの前に南部鉄っぽい行燈でライトアップされた坪庭が広がるお洒落な創作料理の店。

これも以前の寿司屋同様、美智子が太鼓判を押す店らしく、出てくる料理はどれもキレイなだけでなく旨い。

リンゴのような風味の生のナスにとろりととろけそうな馬肉をあわせたカルパッチオに聡はさっきもため息をついたばかりだ。

店のスタッフに美味だった旨を伝えると彼は嬉しそうに

「シェフの出身の熊本から取り寄せた馬刺しと、肥後紫というナスを使っております。ナスはハウス栽培ですけど」

と説明を加えてくれた。

「いいなー。美智子は。手に職持ってて」

焼酎で少し頬を赤くした聡は頬杖をついて美智子を眺めた。

お菓子のような香ばしい香りのする芋焼酎も大メーカー品ではなく、小さな蔵元からわざわざ取り寄せたものだ。

ロックにしたそれは、少しずつ舐めるように飲むのがちょうどよかった。

「なにいってんの。聡だってキョーシ頑張ってるじゃん。聞いたよ。すっごくユニークな教育方法をやってんだって？」

「そんなたいそうなことじゃ……」

と謙遜しかけて「なんで知ってるの？」と聡は頬杖からやや顔を起こして目を見開いた。

「新聞社の友達に聞いたの。あれ？まだ連絡行ってない？取材するって言ってたけどな」

「聞いてない、聞いてない。何それ」

美智子によると、中退者が少ない上に、会話を重視した英語教育、将来の夢を見つけるための社会見学を取り入れている荒江高校のとりくみについて、ある新聞社が取り上げたいと言っているらしかった。

「うっそー」

「しかも、それ、ほとんど聡が考えたっていうじゃない」

「中退が少ないのは私とは違うけど……。誰がそんなこと言ってるの？」

「海潮寿司のご主人に聞いたんだと思う」

海潮寿司と聞いて、聡は納得した。教え子の兵藤が修行している店だ。

あの店は、一度美智子の情報誌に掲載されて以来、あっという間に評判が広まってしまった。

テレビ取材の話もあるらしいが、お客さんに迷惑になる、と断り続けているらしい。

聡は、寿司の味と共に鯱が刻まれた頑固そうなご主人の顔を思い出した。

兵藤が京極のことで停学になりそうになったとき、学校にやってきた弟子思いな一面もある、素晴らしい職人だ。

「海潮寿司かぁ……。あそこ本当に美味しかったよね」

聡が寿司の味を具体的に思い浮かべようとしたとき、携帯が鳴った。

「ゴメン」と美智子に謝りながらバッグから取り出す。将だった。

「将？」

「アキラ。いますぐ会いたい。どこいるの」

将は聡の声を確認するなり、畳み掛けてきた。

「将、待って。さっきも言ったけど、今友達と食事してるのよ」

男性の名前を呼んでいる聡に対して、美智子があきらかに、好奇心旺盛な目をこちらに向け始める。

「どうしても会いたいんだ」

「いったい、どうしたの？将」

美智子がいつも持ち歩いているメモに『新しい彼氏？』と書いて電話中の聡に見せる。

ちなみに博史と別れたことは、さっき話したばかりだ。

聡はカッと顔が熱くなるのを感じた。

「会ってから話す。今どこ？〇〇？」

将は街の名前を言った。あたっている。

「食事が終わったら電話するから……」

そこへ美智子が再びメモを見せる。

『聡の新彼、ぜったい見たい！来てもらいなよ』

と書いてある。

「えー、でも……」

思わず、聡は将のほうではなく、美智子のメモに返事をしてしまう。

「○○にいるんだろ。俺、とりあえずそっち行くから。着いたらまた電話する」

「将……ちょっと、」

将は一方的に電話を切ってしまった。

聡はため息をつきながら、電話をバッグにしまった。

「新しい彼氏、しょうっていうんだ……」

美智子が擦り寄ってくる。目が三日月のようになっている。

「婚約者のいる聡を略奪するなんて、どんなオトコなんだろ。ね、今から来るんでしょ。会わせてよ、絶対」

「ヤダ……もう」

まさか教え子の高校生と付き合っているなんて言えない。聡は赤くなって下を向いた。

168◆救いと癒し

「ギャーッ！うそっ！」

美智子は将を見るなり絶叫した。洞窟を模した静かなバーに場所は移っていた。

「背、高っ！足、長っ！顔、小さっ！」

と将の全身を見回した上で、

「めちゃめちゃイケメンじゃん……聡」

と聡を振り返った。

幸い、今日は木曜だから客は少なめで、美智子の絶叫に一度は振り向いた客もすぐにそれぞれの話に戻って、あたりにはジャズが流れる静かな空間が戻ってきた。

「どうも……」

将は笑顔でぺこっと挨拶をしながら名乗るべきが迷った。

というより、偽名の山田を名乗るべきか、本名を名乗るべきか判断しかねたのだ。すると聡のほうが

「鷹枝……将くん。だ、大学生なの」

と美智子に紹介した。

こういうバージョンもありか、と将はとりあえず「鷹枝です」と改めて挨拶した。

美智子はまだ興奮気味で

「いや～ん、年下の彼氏ぃ」と身をよじらせると

「あ、どうも。幸田美智子です。東京××の編集部にいます～」

とピンクメタリックの名刺入れから名刺を取り出して将に渡した。

「ヤダー、ちょー、聡、びっくり。ほんっとにイケメンだよね」

美智子は聡と将の両方をかわるがわる見た。

あげく

「ねえ将くん、だっけ。モデルやんない？」

などと誘っている。将のほうもまんざらでもなさそうで

「ハァ……」

と頭をかきながら、聡にさりげなく「何頼んだ？」と訊く。

聡は「カシスソーダ」と答える。

すると将も店のバーテンに軽く腕をあげると「カシスソーダもう1つ下さい」と頼む。

「ちょっと～、カッコイイ～。あたしこんなにカッコいい子初めて見た～」

美智子は黒々とアイラインを引いた目を細めてうっとりしている。

「ねえねえ、いつ、どこで知り合ったの？」

「えっと……」

聡は将の顔を見ながら、記憶をたどる。

出会いは弁当屋でバイトしていた頃だ、というのはわかる。

だけど、いつ頃から将を意識したんだろう。その辺を思い出せない聡に変わって、将が話し始める。

「アキラがバイトしてた弁当屋に、買いに行ったのがきっかけです……」

それから将は、閉店直後だったにもかかわらず、聡が親切にも主人に声をかけて、将のために弁当を用意してくれたこと、

さらに４０円足りなかったのを聡が貸してくれたことを美智子に説明した。

聡はまるで覚えていなかったことだ。

「ホント？私そんなことしたの？」聡は将に訊き返した。

「あ、覚えてないんだ、ひっでえ。俺は詳細に覚えてるのに」と将。

「いや～ん、将くん、聡にぞっこんなんだ。一目ぼれ？」

「ハイ」

将はやや照れながら、頷いた。美智子が

「いいな～、うらやまし～」

とまた甲高い声をあげる。

別れ際に美智子は、

「ねえ、聡、将くんのケイバン（＝携帯電話の番号）聞いちゃってもいい？本当にモデル頼むかもしれない」

「え……？」

聡は将の顔を見上げた。将は

「別に、いいですよ」

と美智子に携帯の番号を直接教えた。

「将、いいの……？」

もう夜１１時近い電車は、座りたければなんとか席が見つかる程度の空き方だった。

なんとか２人並んで座れる席を見つけて電車のシートに腰掛けたとき、聡がつぶやくように将に問い掛けた。

「何が」

将は聡により掛かるようにもたれながら答えた。

「モデルなんて……。将、高校生だってのがバレたら」

「何、嫉妬？」

「ちがうっ……。心配してるの。またお父さんに何か言われたら……」

聡は以前、将がスキャンダル記事になったときのことを思い出していた。

「大丈夫だよ。それに美智子さんだって『頼むかも』っていってただけだぜ」

「そうだけど……」

将の傾けた頭は、聡の頭にすでにくっついている。

「心配すんなよ……」

膝の上に置かれた聡の手の上に将の大きな手が重なった。
寒々しい夜の列車の照明なのになんだか、ほんのり温かく思えてくる。

「それよりさ。今日だけ、聡の家に泊まってもいい？」

将は、頭を聡にもたれかけたまま、甘えた声で囁いた。

「……今日は、平日よ」

本来二人が教師と生徒でいなくてはならない日だ。

「いいじゃん」

「将、今日、どうしたの？さっきから変よ」

美智子との食事にいきなり割り込んできたり。

「あとで……話す。今日は、アキラと一緒に寝たい」

小さな声で囁いているのだが、まん前に立つサラリーマン風の男性に聞こえてしまったようだ。

男性はスポーツ新聞の陰から横目でチラリと二人をにらみつけると、再びスポーツ新聞に戻っていった。

「将ってば……。こんなところで」

聡は顔を赤くした。

「いいじゃん……。ね、アキラ」

将はまるでキスするみたいに、聡の顔のまん前、至近距離に自分の顔を移動した。

聡は下をむくしかなかった。

将は、聡の部屋に入るなり、靴をぬぐのももどかしく、聡の体を抱きしめてきた。

そして、口づけの雨を降らす。

「ちょっと、将……今日、絶対変」

そういいながらも、聡は将の濃厚な口づけを受け入れてしまう。

聡だって、将と一緒にいたい。くっついていたい。それを大人の、社会人の、教師の理性で押さえてるのだ。

それをこんな風に、抱きしめられたら……。

聡の理性なんてひとたまりもなかった。

将は、聡に口づけと抱擁をほどこしながら、じりじりとベッドのほ

うに移動すると、聡をベッドに押し倒した。

「やっ……。将……、ダメ」

押し倒された聡は将の体の下で、軽く抵抗した。

軽く、というのは、たぶん最後まで求めているわけではない、というのが大体わかっていたから。

将はたぶん、今日何か寂しいことがあって、それで聡に甘えたいのだ。

案の定、将は

「アキラ、ダッコ」

といって自分もベッドに横になった。

聡は自分の横によこたわった将に腕を伸ばすと、ぎゅっと抱きしめてやった。

将の胸に顔をうずめる。熱い体温を確かめる。

将のシャツの胸のあたりから香ばしい匂いがすることに聡は気付いた。

「焼肉の匂いがする」

聡は顔をあげると、５センチと離れていない将の顎に囁いた。

「今日、焼肉行ったの？」

将はなおも聡を強く抱きしめながら、「うん……」とつぶやいた。

「何かあったの……？」

聡は苦しくなるほど強く力を込める将の腕の中で、喘ぐように訊いた。

将はしばらく答えずに、聡の背中をしきりに撫でていた。

「アキラ、アキラは……いつまでも俺のそばにいるよな」

ぽつりと呟いた。

「どうしたの、将」

聡は、将の力がゆるんだ隙にゆっくりと身を起こすと、額にかかった将の髪をゆっくりとかきあげた。

髪の下の瞳は、すがるように聡を見上げていた。

将は、聡を見つめたまま、

「大悟が、滋賀にいっちまう」

と言った。

「仕事が見つかったの？」問い返す聡に

「うん。瑞樹と二人で住み込むんだって」とゆっくり答える。

「そう。大悟くんと葉山さんが……」

聡は、寂しく、せつない将の目を見つめながら優しく髪を撫でた。

親友が部屋を出ていくのがそんなに寂しいのか、と聡は将の心の寂しさを慮った。

だけど、将の哀しい瞳は、大悟のことだけではない。

今日は大悟のことも含めて、あまりにいろいろなことがあった。

母の死の回想。父が墓前に備えていたアネモネ。

そして、自分を見捨てている、と思った父が実は自分に期待していたということ。

しかし、急にそんなことを知っても将はとまどうばかりだった。

将は自分が見捨てられていると思っていたからこそ、家を出てさまざまな非行を重ねたのだ。

そして正当防衛とはいえ殺人まで犯してしまった。

将は自らのアイデンティティが揺らぐ中、聡に救いと癒しを求めていたのだ。

「将。私は、ずっとそばにいるよ……。だから安心して」

聡は子守唄のように、将に囁きかけた。

低いけれど優しい響きに将は安堵に包まれるのを感じた。

「大悟くんだって、落ち着いたらまた会いにいけばいいじゃない。……ね」

髪をなぞる聡の優しい指。将は、再び腕を伸ばして聡を抱き寄せた。

聡は将の上に乗るように抱きしめられた。こうすると将の鼓動がよく聞こえる。

「アキラ……、ずっと俺のそばにいろよ」

「将……」

「やくそくだぜ」

聡は頷く代わりに、将に体重を預けて将の胸に耳を押し当てる。

ゆっくりとした鼓動に安らいでいく。

将は将で、柔らかくて甘い香りがする聡を抱きしめることで、急速に寂しさもとまどいも、アイデンティティの揺らぎもどうでもよくなっていった。

聡がいれば……なんでもどうでもいい。

「あ、そうだ。将」

急に聡が将の体の上で、肩を起こした。

「ね。あたし、匂いキツイ？」

「え？」

唐突な聡の質問に、ぼーっとなっていた将は

「え？匂い？って×××の？」

とシモな答えを思わずしてしまった。

「ヤダ！」

聡は、将の顔を傍らにあったクッションでぼすっと叩くと起き上がった。

「ってー」

将は鼻を押さえて、聡を追うように起き上がった。

「アキラ？あれ、泣いてるの？」

聡は、プーッと膨れたまま、思わず目から流れたものを手の甲でぬぐっていた。

将が後ろから肩に手を置いても、フンと振り払う。

将は可笑しくなった。聡は今日はなぜか匂いのことをとても気にしているらしい。

「ちょー、アキラ、アキラの匂い、俺はぜーんぶ好きだってばー」

そういいながら、将は聡を後ろから抱きしめる。

「アキラ、ごめんよぉ」

そうやって抱きしめた聡は、ほんのり甘い香りがする。

この甘い香りがどんなアロマより自分を癒してくれるんだ、と将は聡に伝えたい。

「アキラ、アキラはめっちゃいい匂い。俺いっつもラリっちゃいそうだぜ」

と将は囁きながら、聡の髪のあたりで、鼻をくんくんさせる。

ふざけて口にした、ラリッた、という単語で、将は瑞樹を思い出した。

瑞樹に禁断症状が現れるのを心配していた大悟が脳裏にフラッシュバックのように現れた。

――大悟、間に合ったかな……。

将は、機嫌を治した聡と口づけを交わしながら、大悟と瑞樹を思っていた。

どうか二人で幸せになってほしい。

将は、聡を愛することで生まれた、心のきれいなところで願っていた。

しかし……その頃、瑞樹はこの世に、もういなかった。

１６９◆母との訣別

今日の夕方、まだ日があるころ。

瑞樹は自宅である市営住宅のドアを開けた。

――まだこの時間だったらお母さんがいるはず。

スナックを経営する瑞樹の母の出勤前を狙って瑞樹は帰ってきたのだ。

母がいれば、義父にもて遊ばれることもない。

そんなに数はないものの、持っていきたいお気に入りの洋服や、最低限の思い出の品もあった。

しかし……瑞樹の予想に反して、母は留守のようだった。

パチンコにでも行ったんだろうか。いったん玄関に足を踏み入れた瑞樹は、出直そうと踵を返した。

そのとき。瑞樹はものすごい力で腕を引っ張られた。

「ひさしぶりだな」

振り返った瑞樹に視覚より先に酒臭さが襲ってきた。

酔って顔を赤くした義父の康平がニヤニヤしながらそこに立っていた。

瑞樹を掴んでいない方の手は、パンツの中に突っ込んで、なにやらボリボリと掻いている。

「いやっ……」

瑞樹は最初抵抗したが、すぐに諦めた。

――これでどうせ最後だし。

抵抗するよりも、とっとと済ませたほうがラクだと思ったのだ。

康平は、自分からパンツを脱いで下半身を露出させると万年床の上に横になった。

そして瑞樹に、いつものように裸になって康平の下半身を慰めるように命令した。

瑞樹は早く済ませたいばかりに言われるとおりにした。

康平の下半身は、まだ柔らかいままで、それは顔を近づけるだけで、強い臭気がした。

瑞樹は思わず顔をしかめた。

それを見た康平は、手を伸ばして、青いほど白い瑞樹の胸の先端の桜色の突起をぎゅっと力いっぱい捻った。

「痛ッ」

瑞樹は顔をしかめた。

「早くやれ」

瑞樹はいやいやながら、康平のものを口にした。

最初はだらりとしていた康平自身はだんだん、膨張しはじめた。

直接的な刺激と、若い瑞樹の裸体がもたらす視覚的な刺激。

「いいぞ、瑞樹。……いいぞ」

康平が快楽のあまり、声をもらしたそのとき。

ガチャガチャと鍵が回る音が玄関のほうからした。

「……もう、今日はさんざんだったわー」

という母の声に瑞樹はびくっとして、康平のものから顔を離した。

「ただい……！」

眼窩から目が転げ落ちそうなほどの顔。瑞樹と母親の夏子はそっくりな顔でお互いを見ていた。

夏子の持っていたコンビニ袋が床に落ちる。

「ち、違うんだ！夏子っ！みみみ、瑞樹が、勝手に！」

康平は下半身を剥き出しにしたままの情け無い姿で跳ね起きると、

夏子に言い訳をした。

瑞樹はだまって脱いだものを身につけた。

だまっているのは夏子にはふてぶてしく見えた。

そして磁器のようななめらかさを持つ若い肌は母の夏子を嫉妬させるのに充分だった。

もともと、とうに瑞樹の母親である自覚など失せていた夏子である。

そこにいる瑞樹は単なる若い女……夫をその若さで誘惑するために現れた……にしか見えなかった。

夏子は、万年床をドスドスと踏みつけるように近づくと、まだようやく下着を着け終わったばかりの瑞樹に向かって手を振り上げた。

バシッ！

部屋中に響くような音に、康平すら肩をすくめて怯える。

瑞樹は倒れなかったが、叩かれた頬を押さえて母を見た。

「おかあさん……」

「この……、泥棒猫！」

瑞樹は眉をゆがめて……それでも、母の顔をよく見た。

その中に少しでも自分への情け……愛情のかけらでも残っていない

か、確認したかった。

「恐ろしい娘だよ。義理の父親を誘惑しようとするなんて……」

「おかあ……」

母親の顔は憎悪で満たされていた。

本当に、自分はこの母親から生まれたのだろうか。

たぶん違うのだろう。そうとしか考えられない。

瑞樹は唾を飲み込んだ。母親の罵倒は続く。

「今まで出て行きっぱなしだったくせに、なんで帰ってくるんだ」

むしろ、康平のほうがハラハラとして二人を見守っていた。

瑞樹は下着のまま立ち尽くしていた。でも寒いのは格好のせいだけじゃない。

「さっさと出て行け！この親不孝者！」

夏子はそこに脱いであった服を瑞樹に向かって投げつけた。服は瑞樹の胸や腹にあたって下に落ちた。

瑞樹はだまって服を拾うと黙って身につけた。

そして部屋に入ると、修学旅行のときのボストンバックに手早く服を突っ込んだ。

不思議に涙は出なかった。こうなることが当然だったような気さえしている。

所詮、母にとって瑞樹は『いらない子』だったのだ。そんなことは小さい頃から知っていた。

服をあらかたボストンに突っ込むと、学習机に持っていくものはなかったか考える。

その上に、写真があった。……まだ幼い瑞樹と彼女を抱く母親の写真。

毛糸の帽子をかぶった瑞樹と母親に冬の陽射しがあたっている。

だけど温かそうなのは、陽射しだけでなく二人の笑顔のせいだった。

小さい頃から虐待を加えられていたけど、母は優しいときだってあったのだ……。

運動会のときは、お弁当だってつくってくれた。こげた卵焼き入りだったけれど。

かけっこで1等を取った瑞樹を抱きしめてくれたこともあった。

母子だけのクリスマスにはファミリーレストランで2人でハンバーグを食べて、食後はパフェを半分コした。

『おかあさん、瑞樹、うさぎりんご食べていい？』

『いいよ。そのかわりおかあさんに、バナナをちょうだい』

バナナも好きな幼い瑞樹は下をむいた。あのとき機嫌がよかった夏子はすぐに

『わかったよ。バナナは半分コしよう。おかあさんが切ってあげよう』

……

瑞樹は感傷を振り払うように、机の一番下の引き出しをあける。

小さい頃からのおもちゃなどが無造作に突っ込んである。

そんな中、小さな犬のぬいぐるみが、引き出しの中から瑞樹を懐かしそうに見つめた。

ぬいぐるみ、というより、マスコットといったほうがいいサイズの犬。

瑞樹が幼稚園に入る前の誕生日に母にねだって買ってもらったものだ。

瑞樹は思わずそれを手に取る。

買ったときはまっ白だった犬は、いつも瑞樹と一緒にいたせいか、すっかり汚れてグレーになってしまっている。

だけど握り締めると昔どおりの乾いた弾力が瑞樹の掌に残った。

その柔らかな感触が幼い日々の記憶を蘇らせる。

それをぎゅっと握りしめるとき、瑞樹の幼い心には、いつも母への思慕があった。

瑞樹の目から初めて涙がこぼれた。

涙は、さっき叩かれて熱を持った頬の上にも優しい感触で流れていく。

「おかあさん……！」

瑞樹は振り返った。

だけど、母はそこにはいなかった。

いるのは、瑞樹を斜に構えて敵視している単なる中年女だった……。

瑞樹は犬をにぎりしめると、ボストンに入れた。

せめて幼い日の思い出までは……なかったことにしたくない。

あの母はたしかに存在していたのだ。だけど……今はもう死んだ。

瑞樹はそう思い込むことで母と訣別しようと決意した。

瑞樹は別れの言葉も言わずに、家をあとにした。

別れはいう必要はない。母ではなくなった『あの女』とは最初から無関係だったのだから。

だけど、瑞樹の目からは涙がとめどなく流れていた。
夕方の冷え込みの中で叩かれた頬だけが熱い。

快速列車の中、大悟と電話で話した直後、瑞樹は小山に着いた。さっそく祖母に電話をかける。
突然の訪問だが、今までも突然行くことはあった。
祖母は母と違って、大きくなった瑞樹でも喜んで受け入れてくれた。
しかし。祖母の家の電話は今日に限って留守番電話だった。
――今日、社交ダンスの日だったかなぁ……。
祖母といっても若々しい彼女は、趣味と健康増進を兼ねて社交ダンスを習いにいっていた。
まあ、いずれにせよ、すぐ帰ってくるだろう。
瑞樹は、祖母のアパートの前で待つことにし、バスに乗った。
しかし……アパートの廊下に座り込んで小1時間。祖母はいっこう

に帰ってこなかった。

瑞樹はひどくおなかがすいてきた。

喉も渇く。

なんだか寒い。

――どうしたんだろう。おばあちゃん。

瑞樹は再び携帯を開いて時計を見る。もうすぐ9時になる。

携帯を閉じてすぐに、携帯が鳴った。大悟だ。

「俺、今、小山に向かってるから」

「どうしたの、急に」

「……なんか、心配でサ。もうすぐ着くから、一緒に帰ろう。な？」

優しい声。大悟はいつも優しい。

大悟だったら自分を絶対に不幸にしないだろう……。

なのに、どうして……こんなに冷や汗が出るんだろう。

瑞樹は異変を気付かれないように「うん」とうなづいた。

「あのね。おばあちゃん留守みたい。だから私、もう帰ろうと思うんだ。大悟が駅に着いたら連絡して」

と瑞樹は冷や汗を忘れるために、無理して元気な声を出した。

電話を切ったとき、瑞樹はすでに細かく震え始めていた。

――駅に、出なくちゃ。駅に。

かろうじて意識を保って、通りへ出るとタクシーを拾う。

しかし、タクシーの中で、瑞樹は運転手にもわかるほどの震えを止めることができなかった。

「お客さん、寒い？」

「い…、いえ。大丈夫です」

――怖い……怖い。大悟、怖いよ。

――おかあさん。わたし泥棒猫じゃない。そんな目で見ないで。

瑞樹はぎゅっと目をつぶる。目をつぶっても母はずっと睨んでいた。その髪が蛇になる。

叩かれた頬にはいつのまにか、大きな蜘蛛が張り付いていた。

蛇は瑞樹の手足をめがけて進んでくる。

「い……いや……」

瑞樹のようすは、運転手から見ても異様だった。

しかし、いったん乗せた客だ。運転手は早く面倒な客を降ろしてしまいたくて、急いだ。

「着きましたよ」

そう声をかけられるまで、瑞樹は幻覚の虜になっていた。

「１２６０円です」

振り返った運転手は、瑞樹には化け物に見えた。義父の顔に似ている……化け物に。

「いやあっ！」

瑞樹は５０００円札を放り出すと、転がるようにタクシーを降りた。

「お客さん、お客さん！お釣り！」

叫ぶ運転手のことなど聞こえないように、フラフラと切符売り場へ歩いていった。

「将……。新幹線に……、乗らなくちゃ」

瑞樹は朦朧とした頭で、それでも東京に帰ることを考えていた。

新幹線の切符を買う瑞樹の足元から、天井からおぞおぞとムカデが這ってくるのが見える。

「嫌……、こないで……」

瑞樹は切符をムカデから逃れるように、よろよろと歩くと自動改札を抜けてホームを目指す。

そこへ再び電話。それは幻覚に囚われた瑞樹にもなんとか認識できた。

「もう、あと2分で着く。いまどこだ」

「あたしも……駅にいるよ、将」

新幹線のデッキから電話をした大悟は、瑞樹のようすがあきらかに変なことに気付いた。

ずっと息があらいし、うわごとのような口調。そして……大悟を将と間違えた。

大悟は思わず舌打ちをした。禁断症状が始まってしまったのだ。

「すぐ、いくから。大人しく待ってろよ」

「……うん。でも……こわいよ、将。たすけて」

瑞樹は震える声で訴える。

「すぐ、いくから……」

「将……こわい。こわいよ」

禁断症状は完全に瑞樹をとらえたらしい。幻覚に瑞樹は翻弄されている。

大悟はラチがあかないので「待ってろ、すぐいくから。じゃあいったん切るぞ」といって携帯を切った。

瑞樹は、携帯を握り締めたまま、壁によりかかるようにして、階段を一段一段登った。

冷や汗が出たと思ったら、体がかあっと熱い。

怖い。ムカデに蛇が追ってくる。蟻もいっぱいいる。頬の蜘蛛は大きなタランチュラだ。

みんな瑞樹によじのぼろうとする。

助けて。助けて将。

「怖い……。助けて……」

うつろな目をして独り言を呟きながら瑞樹はホームまで階段をのぼりきった。

幸い、夜9時すぎの新幹線・小山駅のホームは、人影もまばらで、瑞樹に目をとめる人もいない。

瑞樹は、階段を登ったところにあるベンチに座った。

「将……。早く私を助けて」

瑞樹はこきざみに震えながら、天空に将を夢みて、足元からは、ついにムカデと蟻の群れが襲来するのを感じていた。

そのとき、向かいのホームに東京から来た各駅停車の仙台行きが着いた。

それに大悟が乗っていた。自由席に座っていた大悟は、足早に階段へと向かっていた。

彼を追い越すように発車した新幹線はホームから走り去った。

ふと、向かいのホームを見た大悟は、そこに瑞樹が座っているのを見つけた。

「瑞樹！」

大声で呼びかけるが、気付いていないようだ。

座り方はだらしなく、目はうつろで、普通の状態ではないというのが、ここからでもはっきりとわかった。

大悟は、全速力で階段を降りると、コンコースを走りぬけ、今度は瑞樹がいるホームへと階段をかけあがった。

仕事で体が鍛えられている大悟は、息もあがらず、のぼりつめた。

「瑞樹！」

そのとき、瑞樹の世界では、瑞樹の体をよじのぼった無数のムカデと蟻が這いまわっている最中だった。

「いやだ……。こんなの……。いや……」

「瑞樹ー！」

大悟の姿が瑞樹の視界に入った。

とたん、瑞樹はおびえたようにベンチから立ち上がった。

顔色が真っ青で、目が異様なほどに見開かれている。

瑞樹は後じさりしながらホームの端へ進んだ。

「いや！こないで……！みないで……！将、お願い、みないでええ！」

「瑞樹、落ち着け！俺だ」

そのとき、ホームにアナウンスがかかる。

『まもなく、当駅を東京行きの列車が通過します……』

大悟が瑞樹に向かって走り寄ろうとしたそのときだ。

「いやあああ！」

瑞樹は、虫にまみれた自分を見られたくなくて、走り出したつもり

だった。

瑞樹の腕を掴もうとした大悟の手が……空を掴んだ。

泣き叫ぶ瑞樹は、ホームから身を踊らすように、線路に飛び降りたように見えた。

ああっ、とホームに居た人も駅員も皆驚いて身を乗り出した。

しかし……大悟を含め、皆が、瑞樹が線路上にうずくまっているのを見たのはほんの一瞬だった。

大悟の悲痛な叫びは新幹線の轟音にかき消された。

新幹線の運転士は、緊急ブレーキをかけたが、間にあわず、新幹線は駅を通過して停止した。

だが、瑞樹がいたはずの線路上には『何もなかった』……。

１７０◆赤い霧（前書き）

衝撃的かつ生々しい場面なので、ショックを受けやすい方はご注意ください。

１７０◆赤い霧

「所持品と思われるものを調べましたが、身元につながるものは出てきませんでした」

３０歳ぐらいの鉄道警察隊隊員が敬礼と共に警部にキビキビと報告した。

夜のホームでは依然作業が続いている。

いったん帰宅していた中年の警部は、突然の人身事故に呼び出されて再度出勤したのである。

「そうか。男のほうは」

「はい。ショックが強かったらしく錯乱状態でしたので病院に。安定剤を投与して眠っています」

「まあ、そうだろうな。アレをまのあたりにしたらな……。で、男の身元は」

警部は同情を含んだ渋面で隊員を振り返った。

「聞ける状況では……。免許等も所持していないようでした」

「遺体は？」

「『すべて』収容しました」

「どれだけ、『集まった』？」

「……バケツに半分ほど、ということです」

隊員は今回は、それに当たらずに済んだのであるが、当然その処理の経験はある。

慣れたとはいえ、何度やっても嫌なものだ。彼はそれを思い出して目を伏せた。

「覚醒剤反応の検査にまわしたいが、できそうか」

「難しいかと……」

隊員は、今回の遺体の状況について、収容にあたった隊員からもう少し詳細に聞いていた。

それはもはや遺体と呼べる状況ではなかった。拾えるようなものを見つけるほうが困難だった。

大腿骨の一部らしきもの、それが一番大きなものだった。

惨劇の現場となったホームには、ホームだけでなく、柱、駅名表示板から窓ガラスにまでも、一面に細かい血の飛まつが飛んでいた。

収容よりも、それらの清拭のほうにむしろ時間がかかるとのことだった。

時速２００キロ近くの新幹線は、一瞬にして人間の体の大部分を小さな飛まつにしてしまったのだ……。

「ホームにいた他の目撃者の証言によると、あきらかに挙動が変だったらしい。それに……」

警部は煙草をくわえると、つらそうに目をあげた。

「普通の自殺者だったら、新幹線はまず選ばない。速すぎてその恐怖感に負けてしまうんだ。……おっと禁煙だったな」

警部は事態のむごさを想像するあまり、思わずくわえてしまった煙草をケースに戻す。

「いちおう男のほうも、目が覚めたら尿検査をしておけ。復旧は？」

「本日は全面運休をまぬがれません。明日始発から通常通り運行をめざすそうです」

温かい感覚を頬に感じて、大悟は目をあけた。

蛍光灯の光が目に沁みるようだ……。

ぼんやりとしていた、白衣を着た女性の画像が、だんだんはっきりとしてくる。

彼女は、水色のタオルを持って傍らにたっていた。

どうやら大悟は処置台で眠っていたらしい。

着ていたブルゾンが傍らのかごに入れてある。

「あ、起こしてしまいました？……ごめんなさい。お顔が汚れているから拭いて差し上げようと思ったんですけど」

看護士であろう女性の優しげな声に大悟はほんの少し安心した。

しかし、それに似合わない……彼女が手に持った水色のタオルについたチョコレート色の汚れ。

どれぐらい時間が経ったのか。……どれぐらい？何から？

大悟は跳ね起きると、看護士に詰め寄った。

「瑞樹はッ！瑞樹はどこだ」

大悟は処置台を降りると、診察室のどこかにいるであろう瑞樹を探した。

「瑞樹！瑞樹！どこだ！瑞樹」

看護士は、異変にあわてて医師を呼びに走った。

「瑞樹ッ、みずき！」

叫びながら大悟は、診察室中を歩き回った。診察台の下までのぞきこむ。

「！」

診察室の片隅。洗面台の前の壁に据えつけられた鏡に大悟は釘付けになる。

そこに映った大悟の顔は……。

まるで昔かかった水疱瘡のかさぶたのように……いや、さらに細かく、さらに密集して赤黒い点々が散らばっていた。

看護士がタオルでなぞったところだけそれが消えている。

大悟は鏡にはりつくように、自分の顔をながめた。

手を、そして体を見る。パーカーの前の部分に、細かい水玉模様のように赤黒い染みが点々と付いていた。

大悟の唇は一瞬震えた。そして思い出す。あの一瞬を。

現実的には、何も見えていなかった。

ただ、大悟の心にはたしかに見えたのだ。瑞樹が……一瞬にして赤い霧へと変身したのが。

「わアアーーーー！」

大悟が叫びだすのと、医師が駆けつけてきたのとほぼ同時だった。

「大丈夫ですから、落ち着いてください！」

「落ち着いて！」

大悟は医師と看護士に押さえられて、２本目の安定剤を注射された。

「瑞樹、瑞樹ィ……、なんでこんなことに……、なんで、なんで……あぁぁ」

大悟は無理やり意識を遠のかせられながら、なおも瑞樹を呼んだ。

将は、聡を抱きしめて、幸せな眠りの中にいた。

もう明るくなっていることに二人はまだ気付いていない。

だが、将は朝の浅い眠りがもたらす夢の中でも聡を抱きしめていた。

夢の中でも聡は柔らかくて温かく、香りは甘やかだった。

将はふわふわと空中を漂いながら聡を抱いていたのだ。

二人の上には桃色の空が広がっていた。金の綿菓子のような雲が漂っている。

将はふと、下を覗き込んだ。

下には……漆黒の闇があった。あろうことか、闇はじわじわと聡を抱く将の方へと延びてきているではないか。

『アキラ、しっかりつかまれ』

そう言い聞かせたとたん、聡はするりと落ちた……。

ハッ。

将は急に覚醒した。携帯の音が鳴っている。

「ん……」

聡も目を覚ましたらしい。間近にある、ピンク色の頬を見て、将はほっとした。

「……将の携帯だよ」

聡がうながす。眠そうな、その顔がいとしい。将は聡のおでこに軽く唇を寄せると、ベッドを降りた。

「間違いか？……ったく、こんな時間に迷惑だなあ」

といいながら携帯を拾う。

０２で始まる市外局番に見覚えはない。まだ７時前だ。やはり間違い電話だろう。

聡がベッドに腰掛けて伸びをしている。ちょうど起きる時間だったらしい。

パジャマの下でノーブラの乳房がぷるん、と震えているのがわかるような動作に、将は不謹慎ながらその下の素肌を想像する。

はやく電話を済ませて、その後は……将ははやる心で通話ボタンを押した。

「鷹枝将さんですか」

男性の声は、将の名前を正確に呼んだ。

「ハイ」

「栃木県警・鉄道警察隊の宮原といいます。朝早く申し訳ありません」

「は、いいえ」

不謹慎な想像が頭を占めていた将、『警察』という単語にやや緊張する。

同時に『申し訳ありません』という丁寧な言葉に、自分の非行が暴かれたわけではないのだ、と本能で感じ取っていた。

「今、少々お話できますでしょうか……」

「ハァ」

不意をつかれた将は、鉄道が何だ?と思いながらも、短い相槌だけしか思いつかない。

「昨夜、ＪＲ○山駅で起きました人身事故の捜査でお電話しております」

「ハ」

一一○山。どっかで聞いたな○山。何だっけ。栃木県警っていってたから栃木県か。

何で栃木で起こった事故のことで自分のところに電話が掛かってくるのか、起きぬけの将はまだわからない。

将は背中をボリボリ掻いた。

「失礼ですが、島大悟さんの携帯から番号をお調べして、捜査の必要上、電話させていただきました。ご了承ください」

将の背中を掻く手が止まった。大悟の携帯……?

大悟に何があったのか、将が問う前に、宮原は続けた。

「2、3質問があるんですが。……瑞樹さんという女性をご存知ですか?」

将の心臓が、キコっと軋む。そのままフル回転のようにドクンドクンと激しく波打ち始める。

人身事故の捜査……大悟の携帯……瑞樹。

血液がまわり始めた頭は、嫌なことを結びつけてある答えを導き出しそうになっている。

「はい……。クラスメートですけど、何かあったんですか！」

血相を変えた将の大声に、聡が思わず振り返った。

１７１◆赤い霧２（前書き）

今日もやや衝撃的なことを想像させる表現がありますので苦手な方はご注意ください。

171◆赤い霧2

「昨夜、ＪＲ○山駅で、若い女性が新幹線に飛び込むという事故がありまして……。

それはどうも状況から島さんのお連れの方らしいのです」

大悟の連れといったら瑞樹しか考えられない。

『俺がついてないと、アイツは』大悟はそういって瑞樹を迎えに行ったはずだ。

なのに新幹線に飛び込んだ。瑞樹が……。

「みず……、その女性は……？」

「即死されました」

将は絶句した。頭がまっ白になり、何の言葉も浮かばない。

瑞樹が……もう、この世にいない。

「それで、今、女性の身元を調べているんですが……」

大悟のショックが激しく、事情を聞ける状態ではないので、身元を一刻も早く確認するために電話したのだ、と鉄道警察隊の宮原は説明した。

そして、将から瑞樹のフルネームと、荒江高校の2年であるという

情報を聞き出すと、手短ながら丁重に礼を言い電話を切ろうとした。
将はあわてて、自分が大悟の同居人であることを告げ、大悟が入院している病院を聞き出した。

「どうしたの？」

いつのまにか将のすぐ後ろに聡がいた。心配そうに眉が寄っている。
断片的な会話からもただならぬ事態が発生したことがわかるらしい。

「アキラ……！」

将は、思わず聡を抱きしめた。

聡は、どうしたの、という言葉を飲み込む。

抱きしめる寸前の将の表情から、また抱きしめている腕の力から、とんでもなくショックな出来事が将を襲ったということだけがわかっているから……。

しかし、ひとしきり聡を抱きしめると、将は力を緩めて、聡に向かい合った。

「アキラ、俺、今日学校休む。……大悟を迎えに行かなくちゃ」

「大悟くんに何かあったの？」

将の悲愴に歪んだ目は聡の瞳を見つめていたが、やがてさらに哀しげに目を伏せると

「瑞樹が……事故にあったらしい」

と短く伝えた。

「え！」

聡はその黒目がちの目を大きく見開いた。

「それで……ケガしたの？」

将は目を伏せると、首を振った。

「……新幹線に飛び込んだらしい」

さらに告げられた、あまりに惨い事実に聡はただ呟く。

「ウソ……そんな……どうして」

聡は将がさっき電話しながら頭に浮かんだ疑問を、そのまま吐き出している。

朝に似合わない、どんよりとした沈黙が二人の前に横たわる。

それは将のほうから破るしかなかった。

「大悟、ショックで入院してるらしい。俺、すぐに迎えに行ってくる。それと、たぶん大悟の代わりに警察にいろいろ訊かれると思う。だから……」

「あたしも付いていかなくていい？あたし、いちおう葉山さんの担任だし……」

「いや、いい。学校へはあとで警察から連絡があるはず。……それにアキラ、今日社会見学だろ。人気漫画家にアポが取れたって、言ってたじゃん。それは中止できないでしょ」

将の言うとおり、今日は社会見学がある金曜日だ。

忙しい人気漫画家の仕事場を見学することを許可されて、楽しみにしている生徒も多いのだ。

「そ、そうだけど……」

「必要だったら、警察から学校に出頭要請の連絡があるよ。たぶん。だから聡は、とりあえず学校へ行ったほうがいい」

将は冷静に見えた。実際、判断は冷静だったのだが、聡はその心中を察した。

瑞樹は、親友の大悟の恋人なだけでなく、将とも長いこと一緒に暮らしていたこともあり、関係は深い。

将は瑞樹の死をどう受け止めているのか。

「将は……大丈夫？」

聡は将を見つめた。

「今は、俺より、大悟が心配だ。急ごう」

心配そうに覗き込む聡をよそに、将は立ち上がるとスウェットを脱いだ。幸い着替えは聡の家にまだある。

将は、瑞樹の死をまだ実感していなかった。

というより大悟の心配にすり替えて、自分を冷静に保っていたのである。

瑞樹の……死を直視するのを将自身、恐れていた。

上半身裸になった将に後ろからふわりと柔らかいものが巻きついた。

聡が後ろから将を抱きしめたのだ。

「将、車で行っちゃだめだからね……」

将の背中の傷跡に囁くように聡は言った。

将を案じていることを、今はそんな言葉でしか表現できない。

偽造免許が警察にバレることの他に、不安な精神状態での運転を…

…聡は将もショックを受けていることを心配していたのだ。

将はいったん自分に巻きついた聡の腕をそっとほどいて向き直ると

「そんなドジは踏まないよ」

と微笑みをつくった。それは痛ましい笑顔だった。

今日もよく晴れて、新幹線の窓からは春らしい少しかすんだ青空が見えていた。

復旧した新幹線に乗って、将は○山入りした。

――この駅で、瑞樹が……。

ホームに降り立った将は、そう思うと息苦しくなった。

だが、ＪＲと鉄道警察隊の尽力のせいか、惨劇の痕跡はあとかたもなくなっていた。

降り立った人々は、何も知らないのか、それとも知らないふりをしているのか、ホームから足早に去っていく。

将は、改札を出ると鉄道警察隊を訪れた。

大悟を迎えに行く前に、まず、鉄道警察隊に顔を出してくれ、と言われていた。

わかることを話さなくてはならなかった。

東京でラッシュアワーにひっかかったせいか、思ったより時間がかかり、１０時になるところだった。

ようやく将が『面会謝絶』と掲げてある病室のドアをあけたとき、大悟はベッドの上に半身を起こして静かに窓の外を見ていた。

春の光は、もうすぐ正午になることを告げながら、殺風景な病室にも爽やかに差し込んでいた。

このときには、血の付いた服は着替えさせられて、顔もきれいに拭ってあった。

「大悟……」

将は大悟の名前を呼んだぎり、何と声をかけていいか困って沈黙した。

ここに入る前に、看護士から

『いままで錯乱状態だったんです。くれぐれも興奮させないように。事故のことは一切口にしないで下さい』

と釘を刺されている。

「……将、どうしたんだ」

振り返った大悟は静かに問うた。錯乱していたというのが、まるでウソのような落ち着いた目の色だ。

「どうしたって……。お前がここに入院したっていうから……」

将はしどろもどろになりそうになるのを、何とか抑える。

「学校は？」

「休んだ」

将はそこで言葉がつまってしまった。何も見つからない。

何を訊いても、大悟を傷つけそうで。

「大丈夫か……？」

間抜けな問いだと将は自分でも思った。だけどこれ以外に言葉のかけようがない。

大悟はゆっくりと頷いた。

「一緒に、帰れ……そうか？」

将の問いかけに、大悟は目をあげた。

「瑞樹は、最後までお前の名前を呼んでいたぞ」

将は思わず目を見開いて大悟を見た。大悟は静かに微笑んでさえいるように見えた。

「それはいいとして……瑞樹が、いなくなっちまった」

大悟は将を見つめて言った。将は息を飲んだ。ごくっ、という音が病室中に響くかと思われた。

「瑞樹が、いないんだ……」

将を射る大悟の目。その光はだんだん強さを増してきた。訴えかけるような目になってきた。

「大悟……、瑞樹は……」

将は大悟の目を正視できなくて、目をそらしてしまった。

「知ってるさ、それぐらい！」

急に大悟が大声を出したので、将はビクッと肩をふるわせて、一歩後ろに下がった。

「だけど……、死に顔ぐらい……、見せてくれたっていいじゃないか！最後に瑞樹に会わせてくれたって……いいじゃないか！」

大悟はベッドから立ち上がると、将につかみかからんばかりに詰め寄ってくる。

「誰かが……瑞樹を、隠しちまった」

「お、落ち着け、大悟」

将はそれしか言えない。

「将、お前からも頼んでくれ。瑞樹に、最後に一目、一目だけ、瑞樹に会いたいだけなんだ。頼む、将！頼むよ……」

「だ、大悟……」

見開かれた大悟の目を将は正視できずに、俯いた。

それを、狂気とか錯乱とか呼びたくない。大悟は……正気なのだ。

愛するひとが目の前から消えたら、こうなるのが正しいのだ。

消える。

そう。瑞樹は消えてしまったのだ。

さっき、鉄道警察隊で訊いたあまりにも惨い状況。

『瑞樹は……どうなったんですか。会えないんですか』

将の問いに、鉄道警察隊の宮原は、まだ将が高校生だ、ということもあって、遺体の状況については言葉を濁した。

ただ、『会えない』と言った。

しかし、そのあと、こんな風な説明があった。

状況から瑞樹だということは、ほぼ間違いないが、科学的に検証をする必要がある、と。

『どうやって』と食い下がる将に、宮原は、ＤＮＡ鑑定という言葉を出した。

そのとき将は、新幹線の窓に映っていた、遠ざかっていく関東平野の風景を思い出した。

窓近くに目をやると、黒く後ろへ飛んでいくような電柱。

リズミカルに繰り返しびゅんびゅんと飛び退っていく電柱は、時速２００キロ以上のものに乗っている証明でもある。

そして、思い出す。

何気なく見過ごしている、夏の風景を。

いつものように、ミニを走らせる将。都心を離れていく高速道路。

東名だったか中央だったか忘れたが、道路の両側を緑の山々が囲むようになると車が若干少なくなり走りやすくなる。

そこまで来ると、将はミニのアクセルを踏み込んで一気に加速する。

苦しげなエンジン音ながらメーターは１２０を越えている。

車が少なくなると……それに反比例するように虫が多くなる。

小さな羽虫から、大きなトンボや蝶。

次々と、まるで将の車をめがけるように飛んでくる。

将はそれをいちいち、かわすわけもなく……虫たちはフロントガラスに次々と衝突し、瞬時に粉々になって吹き飛んでいった。

ガラスにたいした痕跡も残さずに、蒸発していくような虫。

時速２００キロの新幹線は、瑞樹の体を、フロントガラスにあたった虫のように粉々にしてしまったに違いない。

将の目から涙が流れた。

「頼む、将！頼む、瑞樹に、会わせてくれ……」

大悟はしきりに訴える。将の肩を掴んで、揺らす。

「頼む！頼む……！」

将は肩をつかまれたまま目を閉じて歯を食いしばった。

しばらくして、ようやく騒ぎを聞きつけた看護士が駆けつけた。

「落ち着いてください、島さん」

「大丈夫ですから」

大悟は看護士を振り払おうとして叫んだ。

「俺は正気だ！瑞樹に会わせてくれ、頼む！……将、お前からも言ってくれ！」

叫ぶ大悟の声を聞きながら、将は、突っ立っているしかなかった。

その目からは涙がとめどもなく流れては、リノリウムの床に落ちて行った。

172◆葬儀

瑞樹の葬儀は1週間以上も経った土曜日にようやく行われた。

身元確認や捜査があったために通常より遅れたのである。

よく晴れた、だけど風の強い日だった。

桜のつぼみは膨らんで、1週間以内に開花宣言がなされそうだった。

そんな中、葬祭場で行われた葬儀には学校関係者やクラスメートも参列した。

当然、制服姿の将、そして黒い喪服姿の聡もいた。

しかし、瑞樹の恋人である大悟の姿はなかった。

大悟は、葬儀に参列できなかった。

大悟が瑞樹の死を冷静に受け止められるようになるまで、3日ほどの入院を要した。

先に荼毘に付された瑞樹の骨をもらうことで、ようやく瑞樹の死の事実を受け入れたように見えた。

「これ……本当に瑞樹かな。瑞樹なんだよな……」

透明なガラス瓶に入れられた白い粉末を、今朝も大悟はいとおしそうに耳元で鳴らしていた。

瑞樹の骨はサラサラというなかに、りん、と透明な響きを含ませて、大悟の耳に何かを囁きかける。

大悟は怒涛のように打ち寄せる哀しみを堪えようと、歯を食いしばった。

だが、だめだった。

将は、制服がない大悟のために、喪服と靴を買い揃えたのだが、大悟はそれを着ることが、とうとうできなかった。

大悟は、骨と小さなプリクラの中の瑞樹に手をあわせて、喪に服すことになった。

そのプリクラは将が探し出した、1年前のものだ。

「俺……、瑞樹の写真も持ってない」

将のマンションに帰ってきた日、大悟は呟いた。

「なにやってたんだろ、俺たち」

続けて自虐的な笑いを浮かべた。

無理もない。ここで大悟と瑞樹は一緒に暮らしていたとはいえ、大

悟は必死で働いていたのだから。……二人の未来のために。

こんな風に未来を急に失った大悟なのに……懐かしむべき思い出は少なすぎた。

「将、お前は、なんか写真ある？瑞樹の」

将もまた……ちゃんと撮った写真を持っていなかった。

それは瑞樹を弄んでいたくせに恋人だと思っていなかった証拠のようで、将は胸がチクっと痛んだ。

（痛んだ胸はまるで膿んだかのようにずっと痛み続けている）

「俺の部分は切ろうか」

といいながら将が探し出したのは、1年前に将と瑞樹の二人で写ったプリクラだ。

それが瑞樹の笑顔の唯一の写真だった。

「いいよ……、瑞樹……。まだ若いな、これ」

大悟は小さなプリクラをいとおしそうに見つめた。

もう1つ、学校で撮影したクラス写真、それだけが将が持つ、瑞樹がこの世にいた証である。

壇上には、クラス写真から加工した、かつての長い黒髪姿の瑞樹の顔写真が菊の花に囲まれていた。

１０代の少女にしては極端に写真が少ない……それは瑞樹の短すぎる人生の本質を象徴しているかのようだった。

通常、こんなふうに若い故人の遺影は、明るい笑顔だったりして、それが白い菊や白と黒の幕に不調和なところが涙をさそうものだろう。

しかし瑞樹のそれは、青白いほどに白い肌に不自然なほどにまっすぐな黒髪、笑顔のないところまで、何故かこの場に調和しすぎていた。

まるで彼女自身が、自分の死を弔うかのように。

カラー写真なのにモノクロのように色みの少ない写真を見ながら、席についている将はいまだに瑞樹が死んでしまったことが信じられない。

……というより、死んだ、という事実にいまだ、思考を深くめぐらすことを避けていた。

ただ、あの心の『膿み』は日一日と痛みを大きくしていった。

「あの、カンオケの中、何にも入ってないんだよな」

「ほとんど骨のカケラしかみつからなかったんでしょ」

「ＪＲ○山駅は血煙で赤く染まったってな」

「そりゃそうさ。水風船を時速２００キロでぶつけてみろよ。人間の体はほとんど水なんだからさ」

ヒソヒソと噂する生徒もいれば、ほとんど交流がなかったのに泣きじゃくる女子生徒もいる。

ちなみに瑞樹が新幹線に飛び込んだことは伏せてあるのに、誰かがネットか何かで調べたのか、どこからともなく漏れて、噂になっていた。

それでも1年からずっと持ち上がりの彼らである。

2年の後半はほとんど休んでばかりだった瑞樹とはいえ、やはりその死はショックだったのだ。

受けた衝撃を、涙なり、友人としきりに噂するなりして必死で消化しようとしているのである。

星野みな子はどちらでもなかった。

噂話をするでもなく、涙をこぼすわけでもなく、ただ前方に飛び出して見える将のようすを見ていた。

聡が来る前、将が瑞樹と付き合っていたことについて、みな子はもちろん知っている。

めったに学校に来ない、あまつさえ『人殺し』の噂がある将と、口数が少なく、冷たい瞳を持つ瑞樹は外見的にはお似合いともいえな

くはなかった。

だが、猫の思い出があるみな子は、なんとなく不思議な思いで二人（二人で学校にいたのはごくまれだが）を見ていたものだ。

その将は……元彼女の自殺をどう受け止めているのだろうか。

だが、壇上を向いたボサボサ頭は微動もせず……何も窺い知ることはできない。

焼香が始まった。

低く流れる読経の中、校長、教頭、多美先生に続いて、聡が席を立って、瑞樹の遺影に手をあわせ、瑞樹の両親に頭を下げる。

生徒らも前列の者から次々に席を立ち、焼香をする。

将の番が来た。

壇上の『空』の棺と、白い菊に包まれた瑞樹の遺影が近づく。

――本当に、消えてしまったんだな。瑞樹。

――もう少しで……幸せになれるところだったんだぞ、お前。

――なのに、どうして……。

将は、大悟の分まで焼香するつもりで、手をあわせた。

目を閉じて手をあわせる将の耳に、読経に混じって

「このたびは……」

という聡の声が聞こえた。

焼香を終えた聡は、壇の前に立つ瑞樹の両親に頭を下げているところだった。

涙もろい聡は、やはり、泣いているらしい。瑞樹にあんな酷いことをされた聡である。

それにしても、初めての教え子の一人、その死はやはりつらいのだろう。

派手なウェーブを付けたパーマヘアに、化粧の濃い女は、おそらく瑞樹の母親に違いない。

瑞樹の目の大きさは彼女ゆずりだろうが、目を伏せて肩を震わせているため、それは確認できなくなっていた。

彼女は、その横にいる年配の女性を寄り添うように支えていた。

「ううっ、瑞樹や、瑞樹ぃ～……、どうして、どうして～……」

派手に声をたてて嗚咽している白髪交じりの女性は、瑞樹を可愛がったという祖母だろう。

瑞樹の最期のあの日、たまたま、社交ダンス仲間と温泉旅行だったという。

「私が、温泉に行っていなければ……、ううっ、ああ～」

泣き崩れる姿に、思わず目が熱くなった将に、男の声が重なった。

「センセイ……。どうして瑞樹は……。学校でイジメでもあったんじゃないんですか」

将は男の声のほうを見た。瑞樹の義父・康平だった。

瑞樹を……瑞樹の体を、まだ子供だった頃から、もて遊んできた男！

将の頭にいままでにない勢いで血が上った。

将はつかつかと大またで義父に近寄ると、その襟首を、グイっと掴んだ。

「何が、イジメだ！」

するどい声で咆哮する。

長身の将に襟を掴まれて、康平の体は吊り上げられるような格好になった。

「お前の……お前のせいなんだよ！お前の」

将は憎しみに燃える瞳で、康平をにらみつけた。

葬儀場にいる参列者すべての視線が集中するが、将は止めない。

「や、やめろ！何をするんだ……」

康平はファルセットのように裏返った甲高い声で叫ぶ。

将は康平を燃えるような瞳で睨みつけていた。そして、いつしかその瞳からは涙が流れ始めていた。

「お前のせいで……瑞樹はっ……」

「やめてー！」

瑞樹の母・夏子が叫ぶ。

「やめなさい！鷹枝くん！」

聡が駆け寄って止めさせようとするが、無駄だった。

鉄道警察隊で、将は瑞樹の自殺の原因について、クスリを常用していたこと以外、思い当たることすべてを打ち明けた。

クスリについては、周囲への影響、そして聡の責任までも問われかねないから将は黙っていたのだが、

それ以外は……むろん、瑞樹が１１歳から康平に犯され続けていることも話した。

瑞樹の不名誉にはなるが、康平に何らかの罰が下されることを期待

したのだ。

なのに康平は、のうのうと、こんな席で父親面をしている。

警察は、結局17歳の将の言うことより、アルコール漬けの無職だろうと、いちおう成人である康平の言うことを信用したのだろう。

多美先生、教頭がようやく駆け寄ってきて、康平から将を引き剥がした。

「離せ！なんでアイツが父親づらしてんだ！瑞樹を傷つけ続けてきた奴が！離せーっ！」

多美先生と教頭によって葬儀場から連れ出される間も喚き続けていた将を、焼香の順番を待ちながら、みな子は目で追っていた。

後ろから促されるまで、みな子は呆けたように将が連れ出された方を見ていた。

いつのまにか、涙が頬を伝っていた。

将は葬儀場の外の駐車場に連れ出された。

「私が、よく言って聞かせますから！彼もショックを受けているんです」

聡が必死でとりなして、多美先生らはようやく将を解放してくれた。

将はもはや喚いてはいなかったが、息を荒くしたまま、うつろな目で地面を見つめて立ち尽くしていた。

「将……気持ちはわかるけど、場所を考えて」

もはや春風の類ながらも、強い風は聡の髪や喪服の裾をあおっている。

「だって、アキラ……。アイツ、アイツが……。なんでアイツが捕まんないんだ」

将は下を向いたまま呟いた。

将の顔の下にある乾いたアスファルトに黒い染みがぽつ、ぽつと出来る。

聡は将の顔をのぞきこもうとした。

「将……」

「アイツのせいで、瑞樹は！」

のぞきこむまでもなく、将は聡に向き直った。風に飛んだ涙が1滴、聡の頬にあたる。

「アイツ……、アイツのせいでっ……」

将は見開いていた目を歪める。ほとばしる涙で顔は濡れていた。口

元もとうに歪んでいる。

「あっ、将……鷹枝くん！」

聡の呼びかけにも答えず、将は走り出していた。

涙でぼやけた視界にかまわず、ひたすらに全力で走る。

信号を無視して大通りを渡る。その行為を責めるクラクションなど、今の将には聞こえないも同然だ。

買い物客にあたりながら、商店街を抜け、大きな川に出る。

休日ながら、少々風が冷たいせいか、人はまばらだ。

土手を駆け降りようとした将は、つる草に足をとられて転ぶ。そのまま土手を転がり落ちる。

草むらはまだ新芽も出ておらず、枯れたままの色だった。

ゴロゴロと回転する視界。青い空と枯れ草が渦を巻くようにシェイクされる。

ようやく止まった将は、そのまま青い空を見た。強い風に流されていくような雲。

泥だらけになりながら、将にはわかっていた。

義父の問われる罪の何分の1かは自分も問われるべきだと。自分も同罪だと。

何が瑞樹を死に至らしめたのか。

その直接的な原因はクスリである。

だけど……なぜ彼女がクスリに手を出すハメになったのか。

彼女は……たぶんそれを前原から覚えたのだろう。

前原のところに身を寄せるはめになった原因は……。

――瑞樹、瑞樹、俺を許してくれ！

『将』

瑞樹の声が、ふいに蘇る。声は彼女の生前の姿をも連れてきた。

長い黒髪をなびかせて走ってくる瑞樹。

将のベッドにもぐりこんできて微笑んだ、いたずらな瞳。

抱き合って眠ったぬくもり。

そして、どこか冷たく、寂しげだった笑顔。

彼女が聡を拉致させたとき。

『教えられねーよ！』

と将を罵倒する顔さえ、美しかった。憎悪する顔は

『将のことが好きだから……』

と髪を振り乱して、泣きじゃくる顔にたやすく変化した。

今ならわかる。

聡にあんなことを計画せざるを得ないほど、瑞樹は将を激しく愛していたのだ。

将に追い出されて、その苦しみから、思わずクスリに手を出したのではないのか。

瑞樹を家出に至らしめたのは、義父だ。

だけど、将が彼女を利用しなければ……愛しているような態度を示していた期間がなければ……彼女はクスリを知ることもなかったかもしれない。

将が、彼女の将への好意を利用して、その体に毎日のように欲望を吐き出していた事実。

あまつさえ将はそのとき、彼女の体を抱きながら、何の罪の意識も持たなかったのだ。

――瑞樹を殺した一人は俺だ……。

将は青い空を隠すように、手の甲で自分の目を覆った。

目を覆っても、瑞樹の姿は消えずに、依然将の瞼の裏に映り続けた。

『もー！将のバカっ！』

瑞樹の面影はキッチンで明るく笑う、最近の姿になっていた。

大悟の愛情に頼ることを知ってからは、その印象はずっと柔らかくなった。

その印象のままに、地毛のまま、明るい髪のショートカットになった瑞樹は、以前の冷たいイメージからがらりと変わって可愛かった。

３人で暮らした日々。手作りのチョコレート。指についた粉砂糖を舐める瑞樹。

寄り添うようにキッチンに並んで食器を洗う二人……幸せそうだった。

将は手の甲をずらして、青空を盗み見るようにした。

目に染み入る蒼の中に、瑞樹の残像は昇華していった。

「将、お前に『いろいろゴメン、さよなら』って……」

そして代わりに、大悟が将に伝えた声がリフレインする。

――瑞樹、お前、遺言みたいじゃんか。

――謝らないといけないのは、俺のほうなのに。

仰向けになった将の目じりから、とめどなく流れた涙は、耳の下を

通過し、首からうなじへと伝う頃には冷たく、将をなじるようだった。

瑞樹は、将の罪を思い出させないためにも、大悟と幸せにならなくてはならなかった。

なのに……。

大悟と瑞樹が幸せになるのを阻んだ根源に……将も確かに加担していたのだ。

「何で……何で死んだんだーー！」

将の虚しい心の声は、早春の青空にいつまでもこだまするかのようだった。

１７３◆五分咲き

「もう五分咲きね」

聡が桜並木を見上げながら言った。

その瞳に青い空が映っているのを、将はいとおしく見つめた。

綿菓子のようになる満開のときと違って、ぱらぱらと花をつけた桜は、青い空をレースのように透かしている。

逢えなかったのはたった3日なのに、まばたきをするのも惜しいほど、将は聡に見とれていた。桜よりも。

二人で街に出てきたついでに、公園にやってきている。

気候に恵まれたせいか、２５日に開花した桜は、今日２８日には聡の言うとおりの五分咲きになっていた。

土曜日というのもあり、人出のほうは、満開に近い。

２４日に終業式があり、荒江高校は春休みに入った。

休みに入ってから、聡に会っていない。

職員の聡は、この時期は入学試験（『電話一本、ハイ合格』の荒江高校といえど、いちおう形式的に入試がある）やら

入学手続きや、来年度のカリキュラム検討など、通常通りの出勤だ、

というのもある。

しかし、会えなかったのは、むしろ将のほうの事情だった。

「大悟くんは、その後……どう？」

聡は少し心配そうに将の顔を見上げた。

「ああ……少しずつ、立ち直ってるよ」

将は聡を安心させるために、少し、希望的なウソをついた。

あれから……瑞樹の死から大悟は、どこにも出かけず、……もちろん仕事にもいかず、引きこもり状態だった。

滋賀の仕事は、断ってしまったらしい。

あまりにもひどい事故を目撃してしまった、ということで週一度のカウンセリングを受けている大悟だが、

それ以外は一人でいれば1日中、残された瑞樹の写真（将が与えたクラス写真とプリクラ）を見るか、酒を飲むか寝るかで過ごしている。

酒も最初はビールだったのが、最近は焼酎になってきている。

「体に悪いぞ」

さりげなく将が注意するものの、大悟はため息をついて言った。

「正気でいるのがつらいんだ」

その気持ちは将もわからなくもない。

瑞樹への罪の意識が消えない将は、できるだけ大悟と一緒にいるようにした。

お笑い番組を見たり、ゲームをやったりして、大悟の意識を瑞樹の死から少しでも遠ざける時間をつくろう、と努力をした。

だけど、将がそんな努力をすればするほど、大悟は瑞樹の思い出に固執した。

大悟は酔ってくると、将に瑞樹の思い出話を強いた。

いや、強いていたのではない。

大悟にとってかけがえのない瑞樹だったのに、彼女とはたったの2ヶ月足らずの日々しか過ごしていない。

それを補完するがごとく、大悟は、将の思い出の瑞樹をも、共有しようとしていた。

だが……将にとっては、それは苦悶だった。

将はあまり瑞樹のことを覚えていなかった。

1年以上も一緒に暮らしていたようなものなのに、印象に残っていることはあまりにも少なすぎた。好きな食べ物ですら知らなかった。

聡だったら……一緒に暮らしたのはたったの1週間なのに、とても細かいことまで覚えている。

それはまさしく、将が瑞樹のことを『道具』扱いにしていた証拠だった。

覚えてもいないのに。見つめてさえいないのに。欲望だけは発散していた……罪。

自らの罪を……瑞樹を死に追いやった罪の一角を担っているということを嫌でも毎日のように反復させられる。

しかし。つらかったが、それも自分に与えられた罰の1つなのだ、と将は耐えた。

つまり、できる限り大悟に付き合っているゆえに、将は聡に会う時間を削らなくてはならなかったのだ。

今日は、たまたま大悟がカウンセリングにいっているので、ようやく聡の顔を見ることができたのだ。

桜に見入る将の目を見て、聡は何も言えなくなってしまった。

瑞樹の死は、将にもまた深い傷を残したのだろう。

それだけはわかる。

聡は話題を変えることにした。

「自動車学校のほうはどう？」

将はパッと明るい顔になって、聡を振り返った。

「おう。ばっちりよ。たぶんストレートで合格だぜ」

１８歳の誕生日まで１ヶ月を切った将は、自動車学校に通い始めたのだ。

毎日が懺悔のような将の最近の中で、唯一明るい話題だ。

荒江高校は校則で免許取得を禁じているわけではないから、そのへんは問題ない。

「これで、ようやく偽造免許証ともサヨナラね」

聡は将の顔をのぞきこむようにしていたずらっぽく微笑んだ。

「なんだよ。１年半、無事故無違反だぜ」

「無違反のほうは、どうだか。……ところで、やっぱ初心者マーク付けるの？」

「つける必要ないでしょ！」

将は、一枝だけ満開のように咲いている桜の枝に向かっていきなりジャンプした。

惜しいところで届かない。将は何度もチャレンジした。

骨折した足も、今では走ったりジャンプしたりするのに問題ない程度まで回復している。

「チェー、やっぱり届かないや」

将は残念そうに枝を見上げた。

「だめよ。枝を折るなんて」

聡が後ろから咎めた。

「じゃ、こっちで我慢」

将はいきなり振り返ると、聡の唇にいきなり軽くキスをすると、逃げ出すそぶりをした。

「ちょっと、我慢って何よ!待ちなさい!」

将は、笑いながら振り返り振り返り、人をよけながら逃げる。聡も笑いながらそんな将を追う。

「あら?将?」

いつのまにか、将はいなくなっていた。

桜並木からはずれた、公園の一角まで来ていた。

ここはあの賑わいが嘘のようにしん、と静かだった。聡はひとりっ

きりで取り残されてしまった。

「将、……どこ？」

聡はあたりを見回したが、将の姿はない。

丸く、背の高さほどに刈り込まれた茂みの向こうに見える、高層ビル群に春の陽射しがあたっている。

それを見ていよいよ心細くなった聡は思わず携帯を取り出した。

そのとき、茂みからにゅっと手が伸びてきて、聡の腕を引っ張り込んだ。

「ひっ！」

茂みの陰の芝生に引っ張り倒された聡の目を、後ろから大きな手が覆った。

「……へっへっへー」

声音を変えているけれど、聡はすぐ安心した。

「もうっ、将でしょ！わかってるんだから！」

目隠しされた聡は、怒っているにしては明るい声を出した。

「なーんだよー。えっちなことしてやろーと思ったのに」

復活した視界で、将がいっぱいに微笑んでいた。

「バレバレだってば」

微笑む聡を

「えいっ」

将は芝生の上に押し倒した。

聡は、特に抵抗もしないで芝生の上に仰向けになった。

芝生はまだ枯れた色のままだが、芝生の中に生えたクローバーなどの雑草はすでに青い。

ひんやりした草の感触がなんとなく気持ちいいのはもうすっかり温かくなった証だろう。

将の向こうの青空も雲も、すっかり春めいている。

花見客の楽しげな喧騒がどこからか聞こえてくる。

「なに、ボーっとしてんの？」

青空を将の顔が遮った。

「ん。空がすっかり春だなと思って」

「もー。アオカンしちゃおうかと思ったのに」

過激なことをいいつつ、聡を見下ろす将の目は優しい。

「バカ」

聡は将の顔に手をそえると、身を素早く起こし、将の唇に自分の唇を一瞬押し当てた。

不意打ち。聡からの思いがけないキスに将は一瞬ぼけっとなる。

聡のほうは再び草に寝転んで、ふふっといたずら気な笑いを浮かべて将を上目遣いに見ていた。

「もー！ホントにやっちゃうぞ！」

ハッとした将は、寝転んだ聡にのしかかって、首筋にキスの雨を降らす。

「キャー、くすぐったい。だめってば、こんなところで」

くすくすと笑いながらじゃれあう。

将は、聡とこんな風にふれあいながら、しばしこのところの暗い気分を……自分の罪も忘れ、ひさしぶりに明るい気分になっていた。

「はあー」

二人は並んで芝生に仰向けに横たわり、青空を眺める。

「んもう、アキラってば、絶対にやらせないんだもんな」

将が不満げにつぶやく。でもそれは、いつものお約束のようなセリ

フだ。

「だって、教師と生徒じゃん」

聡の答え。これもお約束。

「教師が、生徒にキスすんのかよ」

将は笑いながら横にいる聡に目をやる。

「イヤならやんないけど？」

聡も負けずに、言い返す。口調とは逆に目も口も笑っている。

「イヤなんて……言ってないだろっ！」

将は寝転がったままこっちに向き直ると、聡をぎゅっと抱きしめた。

将の胸に顔をうずめた聡は、干草のような将の香りと、地面から香る青草の匂いに酔いそうだった。

しばらく、二人はお互いの感触を確かめるように、抱き合っていた。

「……メシいこうか」

どこからともなく流れてくる、ソースの香りに空腹を意識した将は昼食を提案した。

聡もうなづいて、二人が起き上がったちょうどそのとき。

将の電話が鳴った。聡の友人の編集者、美智子からだった。

「美智子さんだ。なんで俺のほうに掛かって来るんだ?」

と言いながら、電話に出る。

「もしもし」

「あ、幸田です。将くん?……あのさ、ちょっと助けてほしいんだけど。ｍｏｎ－ｍｏの街イケに穴が空きそうでさァ……」

「ハァ?」

早口でしゃべる美智子のいってることが、将はさっぱりわからなかった。

174◆モデル

今年の桜は、本当に短かった。

桜は、あのあと、あっという間に満開を迎えたものの、一度の嵐で一気に散ってしまった。

そして、それと同時に荒江高校に新学期が始まり、将は3年になった。

春休みの間ほとんど、大悟につきあっていた将は、心身ともに疲れぎみだったので、学校が始まったことに逆にほっとしていた。

しかし、自分が学校にいっている間の大悟を思えば、あいかわらず心配な状態だった。

心配する将に大悟は

「大丈夫だよ。安心して学校に行って、先生に会ってこいよ」

と笑顔をつくったが、その顔はすでに酒が入って赤かった。

大悟の心の傷を思えばこそ、将は大悟が浴びるように酒を飲むのを黙認してきたが、このままでは依存症になるのでは、と心配だった。

「？」

靴箱で将は、むずむずとした視線を背中に感じて振り返った。

しかし、見ていたらしい生徒たちは、将が振り返るとぴゅっと引っ込んだ。

「なんだ？」

廊下を歩いていても、遠巻きに見ている誰かがサワサワと噂しているのが聞こえるようだ。

「っかしーなあ……」

将は頭をボリボリ掻きながら、教室に入った。

気を取り直して、くぐるようにして入り口に入ると「はよっス！」と一声。

そんな将に、さっと視線が集まった。

「……何だ？」

将が席につくなり、チャミ&カリナが将の机にやってきた。

雑誌を手に持っている。

「ちょ、これ、ここにいる『ＳＹＯ・荒江高校３年』って鷹枝くん？」

「ああん？」

将はチャミが差した『ｍｏｎ－ｍｏ』という雑誌を受け取ると、そのページを見る。

読者ページの中にある『街で見つけた今号のイケメン男子』というコーナーに、将は確かに載っていた。

将は、さして驚きもせずに

「へー、何、もう売ってんの？」

とチャミを見上げた。

「ねっ、やっぱり写真撮られたの？」

「うん。……なんだよ、笑え笑えっていってたくせに、笑ってない写真使ってんじゃーん」

写真の中の将は、頤を心持あげて、こっちを見据えているような顔だ。

「ちょ、これ、将？」

井口やカイト、ユウタも集まってきた。

「すかしとる～」

「何、カッコつけてんだよォ」

「おま、写真写りめっちゃいいな」

と小突かれる。

「いやー、俺の素の魅力だろ。ハッハハ」

とふざけて威張る将が、ハッと気付くと、廊下側の窓に下級生の女子が鈴なりになっている。

振り返って視線をそっちにやると「キャー！」と声があがった。

星野みな子は

――バッカみたい。

と興味なさそうに騒ぐ一団を睥睨していたが、帰りについその雑誌を買ってしまったのだ。

「今日は入学希望の問い合わせが多いですね」

今まで電話に掛かっていた権藤先生が受話器を置きながら言った。

まだ昼休みだ。

低偏差値校である荒江高校の入学式は４月も下旬になって行われる。

入学希望の最終締め切りは今週末だが、今日はその問い合わせの電話がやたら多い。

「しかも女子ばっかり。今日でもう6件目ですよ」

「もともと、アキラ先生の記事のおかげでいつもより希望者は多いんですが、このままだと、新1年生は1クラス増えそうですね」

先日、美智子が予告していたとおり、聡が始めた荒江高校のユニークなとりくみを新聞社が取材に来た。

結局それは小さなコラム扱いだったが、3月下旬に載ったこともあり、入学希望者の問い合わせは例年になく多かった。

ちなみに始業式と健康診断だけ、という今日は生徒たちは午前中で帰宅になっている。

しかし今日、女子の問い合わせが多いのは、新聞とは無関係だ。

今日、特に女子の問い合わせが多い原因について、思い当たるところがある聡はあいまいに笑った。

あの、桜がまだ五分咲きだった日。

「いやーん、聡たちが近くにいてくれて本当によかったぁ〜。……

あ、将くん、目線ちょうだい」

将と聡は、美智子に急遽呼ばれてケヤキ並木がきれいな街にやってきていた。

美智子はいつもの濃い化粧に下北系の派手な格好、その格好にそぐわない、大きな一眼レフのデジタルカメラを構えて将の写真を撮っている。

「じゃあ、思い切り笑ってみて」

といわれて、将は

「笑えといわれても……」

といいつつ、カメラを構えられるとニィッと歯をむき出して笑い顔をつくる。

「ちょっと体をふってみて」

「ふるって？こう？」

将はパラパラを踊るように体を揺すってみた。

美智子はそれを見て大笑いする。

「アハハ、将くんってば、おもしろーい。じゃなくてー。こうやって体を斜めにむけてみてってことだってぇ」

聡はあいまいに笑いながら、カシャカシャとシャッターを切る美智

子と、ポーズをとる将を見てため息をついた。

その1時間前。

「あ、幸田です。将くん？あのさ、助けてほしいんだけど。ｍｏｎｍｏの街イケに穴が空きそうでさァ……」

と将の携帯にかかってきた美智子の電話。

将は意味がわからなかったので、首をかしげながら無言で電話を聡に渡した。

「もしもし？美智子？どうしたの？」

「あ、聡ァ？一緒でよかった、ちょっとさぁ、連載企画がピンチでさあ。急遽、将くんにモデルをしてほしくて。今どこにいんの？」

「モデル？」

「いや、そんなたいそうなもんじゃないから。とにかく×××ヒルズの前に来て！一生のお願いっ！タクシーで。領収書とっといてね」

早口でまくしたてる美智子に、聡もよく意味がわからなかったが、美智子が困っているのは確からしいので、とりあえずタクシーで××ヒルズに来てみた。

美智子はすでに来ていて、

「ここ、ここー！聡！」

と大きく手を振っていたのですぐにわかった。

領収書を取るまでもなく、タクシーの料金は美智子が払った。

美智子はあらかじめ見つけておいた、という撮影現場まで歩きながら

「もうさあ、困っちゃうの。今日校了日なのに、この読ペ（※読者ページ）の」

といって美智子は雑誌の1ページが印刷されたものの1箇所を聡と将に指し示した。

『街で見つけた今号のイケメン男子』という葉書大のコーナーに若い男の写真が入っている。

なかなか可愛いコだ。だが上から赤いマーカーで大きく×が書いてある。

「このコーナーなんだけど、このコがさぁ、今日になって急に『やっぱり出さないでくれ』とか言い出してきてさぁ。

なーんか、学校で禁止されてるとか言って。それで、もー、パニくっちゃって。そんとき将くんのことを思い出したわけよ」

「え、ここに俺が載るの？」

将は思わず、目をむいた。

「そうそう。大丈夫。素人のコーナーなんだから。将くんは大学生だから問題ないでしょ」

将は横目で聡に助けを求めた。

「校則って、大丈夫だったっけ……？」

聡はヤバイ、という顔で思わず目をそらした。

美智子は目をパチクリとしながらも、察しが早かった。

「えっ！何、将くん、高校生だったの！」

聡は意を決したように、うなづいた。そして小さな声で

「校則は大丈夫なはずだけど……」

と付け加える。

「あ、だったら問題ないじゃん。将くん、お願いねっ！」

美智子はそういうと、将の肩をぽんと叩いた。

とにかく仕事が切羽詰っているのか、聡が高校生と付き合っていることについての突っ込みは何もない。

聡はとりあえずホッとした。

撮影はほんの１５分で終わった。

美智子は１眼レフのデジカメのモニターで画像を再生しながら、にこにこと

「うん、うん、イケてる。ばっちり！」

と一人うなづくと、

「どうもありがとう、めっちゃ助かったわー、これ謝礼」

と聡に１万円札を渡し、

「じゃ、私、編集部に戻って作業するから！じゃあね！」

とあわただしく、今度は自分がタクシーを捕まえると挨拶もそこそこに去っていった。

「なーに、あれ」

将は頭をかたむけて、横目を聡に投げた。

「さぁ……」

聡もよくわからずに首をかしげた。嵐のように突然やってきて、あっという間に去っていった美智子。

「だけど、とりあえず昼代、得したな」

将は聡がつまんでいる1万円札を見てにんまり笑った。

175◆スカウト

「先生、いつも思うんですが、先生はよく車の中で雑誌をお読みになって酔いませんね」

黒塗りの高級車のハンドルを握りながら、帽子をかぶった運転手が後部座席に座る紳士に声をかけた。

議員バッジを付けたその紳士の傍らには漫画誌、ファッション誌などが山積みになっている。

そのページを、車の揺れも意に介さないように次々にめくっていく。

「慣れればどうってことない。それに移動中しか読む暇ないしな」

「しかし……、先生の勉強熱心さにはいつも感心します」

「若者の動向を知るのには、こういうのが一番だからね」

話しながらも、目は熱心に内容を追っているこの紳士は、現外務大臣の浅野一朗だ。

来年行われる与党の総裁選の有力候補の一人であり、将の父親で官房長官の鷹枝康三とはライバル関係にある、といわれている。

６４歳と、康三より１３歳も年上ながら、若者文化に理解があるとされ、近頃とみに人気が急上昇している。

「おぉ？」

浅野氏の目が、あるファッション誌の一角に釘付けになった。

ハガキ大ほどの写真に目を近づけて食い入るように見る。

「これは……鷹枝さんの息子さんじゃないか？」

浅野氏は助手席に座る秘書にそのページを見せた。

秘書は浅野氏から受け取ったファッション誌を確認して

「は。そのようですね」

と答えた。

名前こそ『ＳＹＯ』となっているが、康三に似ている面影は隠しようがない。学校名も合致している。

ライバルの情報は、その家庭のことまで把握している、そつのない浅野氏なのだ。

「こりゃいい。なかなか男前じゃないか。……鷹枝さんも、総理に倣って、息子さんを俳優さんにでもすればいいのになぁ」

浅野氏は、誌面を軽くはじいて愉快そうに笑った。

浅野氏が言ったとおり、大泉現総理の長男は、その端正なルックスを活かし、大学在学中から俳優宣言している。

親の七光り、とさんざん陰で叩かれつつも、今ではコンスタントに

ドラマ出演もある売れっ子だ。

しかし、浅野氏が愉快そうなのは、別の理由だ。

来年の総裁選に向けて、少しでもライバルの足を引っ張りたい……そのネタに発展しそうな匂いを、将の写真から嗅ぎつけたからであった。

「大悟～？いないのー？」

大悟が心配で、学校からまっすぐに帰宅した将だが、昼下がりのマンションは空だった。

空の酒瓶がキッチンに何本も並んでいる。

ゴミステーションに持っていかないと、と思いつつ放っておいてる空瓶は貯まる一方だ。

すべて大悟が飲み干した瓶だ。

大悟は、最近は焼酎からさらに強い、ジン、ウォッカ、というものに手を出している。

最近とみに酒量が増えている大悟は、強いスピリッツ（蒸留酒）をも1日一本のようなペースで飲んでしまう。

ただ、空の瓶はきれいにゆすいであり、キッチンに酒臭さは一切残っていなかった。

飲み終わった瓶をきちんとゆすぐ行為は、まだ大悟が立ち直れる証のようだった。

――今日はカウンセリングの日だったっけ。

そういえば、今朝「俺も午後から出かけてくるから」と言っていた。

将は制服も脱がずに、ソファにごろりと転がると伸びをした。

ひとりきりになると、急に聡が恋しくなる。

今日、久しぶりにその姿を見ることができた。あの雑誌の撮影をした……3月28日に逢って以来だ。

でも、教壇の上の聡と個人的に話ができたわけではない。

将は携帯を開けて聡の待ち受けの右上に表示されている時刻を見る。まだ1時前だ。

教師たちは始業式の今日も通常通りの勤務時間だというから、聡は、まだ学校だ。

メールは、春休みの間も毎日やりとりしていたけれど、生のぬくもりが、将は恋しくて仕方がなかった。

――アキラとキスしたい。抱き合って寝たい。囁きが聞きたい。甘

い匂いを吸い込みたい。

目を閉じて瞼の裏に聡の姿を思い描く。

そんな将を邪魔するように携帯がいきなり鳴った。

編集者の美智子が表示されていた。

「将くん？幸田です。どうも、先日はお世話になりましたぁ」

ハスキーがかった明るい早口は、静かな昼下がりを急に賑やかなものにした。

「ハァ。こちらこそ」

将はけだるく起き上がると、広げた膝の上に頬杖をつくようにして相槌をうった。

「昨日発売の号、編集部にもすっごく評判よかったのよ。それで、ね、将くん、お昼食べた？」

「ハ？まだですけど」

「じゃさ、今から一緒にお昼食べない？好きなものおごってあげるからさ。××あたりに出てきてよ」

唐突な美智子の誘いに、将は少し考えたが、教習所の予約時間までまだ間がある。

将はとりあえずＯＫした。

しかし語尾に、きちんと「ありがとうございます」と付けた折り目正しさを美智子は聞き漏らさなかった。

「将くん、こっちよー！」

自然光がふんだんに差すレストランカフェの一角で美智子が手を振っている。髭面の男と一緒だった。

「こちら、ダイヤモンド・ダストの橋本社長。『ｍｏｎ－ｍｏ』を見て将くんにぜひ会いたいっておっしゃって。……鷹枝将くんです」

「橋本です」

と髭面の男は立ち上がると、名刺を将に差し出した。

背は低いが、細身のパンツ、皮のジャケット、凝った靴と、なかなかオシャレな中年男だ。

『チョイワル』という言葉を将は思い出した。

名刺も、半透明のプラスチックのような紙に、会社のロゴマークが透かしてある凝ったものだが、名刺を見ても何の会社なのかよくわからない。

「鷹枝です。こんにちは」

将は頭を下げてきちんと挨拶した。

ちゃんとした場所で目上にあったらとりあえずきちんと挨拶するのは小さい頃からの習い性になっている。

「ちょっとぉ、美智子ちゃぁん。いいワァ」

社長はラタン調の椅子に腰掛けながら、髭面に似合わない女言葉で美智子の肩をポンポンと叩いた。

ギョッとする将をよそに、美智子は、中年男の女言葉に何も違和感も示さない。

慣れているのだろう。将は、修学旅行のときのスキーの講師を思い出した。

「そうでしょう?社長」

と美智子は満面の笑みを橋本に返した。そして突っ立ったままの将に

「あ、座って、座って」と椅子を勧めた。

「ハイ」

素直に腰掛ける将に、社長は身を乗り出すようにガラスのテーブルに肘をついて将をまじまじと見つめた。

「……いいわぁ。まず、写真より目がいいわ。一見不良っぽくて鋭いのに、近くで見ると王子様みたいにキラッキラなんだもん。将く

ん、いくつ？」

「今度の１５日で１８歳になります」

「身長は？」

「１８５です」

ちょうど、今日の健康診断で計ったばかりの値を将は言った。ちなみに去年より３センチ伸びている。

「ちょっとぉ、声もシッブー！男っぽいッ！美智子ちゃん、この子、うちで預かりたいワ」

社長は将には相槌も打たず、一人はしゃいだ。

将は内心『失礼なヤツだな、コイツ』と思っていたが、美智子の顔を立てて、いちおう笑顔のまま黙っていた。

そのとき、ランチの前菜が運ばれてきた。

「まずは、お食事しましょう。お話は、それから、ということで。私、もーおなかペコペコでぇ。……将くん、ここのイタリアンは結構いけるのよ」

ナイフとフォークを取りながら美智子が、将をうながす。

「あ、ハイ。いただきます」

将もナイフとフォークを取った。

将も腹がすいていたので、遠慮なく皿の上の凝った料理を片付ける。
美智子の言うとおり、料理はなかなか美味しかった。
食事中は美智子と橋本が、あたりさわりのない、出てきた料理やそれに関連した食べ物の話やダイエットの話などに興じていた。
将は、話をふられたときだけ、無難に受け答えをしていた。
メインを食べてしまい、カトラリーを揃えて置いたところで将は、橋本社長がじっと自分を見ているのに気付いた。
「何ですか？」
将はいちおう笑顔をつくって訊いてみた。
すると、橋本の顔が、だらしなく崩れた。
「いやーん、このコ、何者ぉ？」
と橋本はナプキンを持ったまま体をくねらせた。
「ハ？」
「美智子ちゃん、このコ、どっかの御曹司？テーブルマナーといい、口の利き方といい、ほぼ完璧じゃない。いまどきの若いコにしては珍しいわ。躾ける手間が省けるわー」
「将くん、お父さんは何してるんだっけ」

美智子の問いに、将は言いよどんだ。父が官房長官の鷹枝康三だということは、できれば知られたくなかった。

かわりに、さっきからのこの男の反応はなんなのだ、と将は

「あの。さっきから何のお話なんですか」

と訊き返してみた。本当は

『さっきから何の話なんだよ、ったく、きもちわりぃな』

と言い捨てたいのを素早く目上向けに翻訳したのである。

美智子と橋本は、将の問いに、お互い目を見合わせた。

その間に、テーブルの上は片付けられて、デザートが運ばれてきた。

美智子は将に向き直ると、

「あのね、将くん。橋本社長はね。あなたをスカウトしたいっておっしゃってるの」

将は、ぽかん、と目を真ん丸くあけた。

スカウト、という響きがあまりにも唐突過ぎて、よくわからない。

だいたい、何にスカウトしたいのかもわからない。

しばしの沈黙ののち、将は再び訊き返す。

「スカウトって、ホストかなんかですか」

今度は、美智子と橋本が椅子からずっこけた。

ずっこけたいきおいで乱れた髪をかき上げながら、

「ふふ、うふふふ。面白いわねえ、将くん。残念ながらホストじゃないわ」

社長は苦笑した。

「うちはね。芸能プロダクションなの。いちおう業界8位よ」

女言葉に似合わない、鋭い目を将に投げかけながら橋本は話を続けた。

「将くん。あなたはいいタレントになるわ。モデルでもいいけども、俳優でもいけると思う。私のカンでは。……あの松野内透を見つけた私が言うんだから間違いないわ」

将は、スカウト、芸能プロダクション、モデル、俳優と自分には遠い世界の言葉ばかりを並べられて目をパチパチさせた。

「ひえー！あの松野内を社長が見つけたんですか！」

美智子が大げさに仰け反る。将でも知っている有名な美男俳優だ。

トレンディドラマの常連だったが、３０代半ばになった最近は、すっかり実力派になり、海外でも人気がある。

「そうよぉ。知らなかったのぉ？」

橋本は『失礼ね』と言いたげな、でも得意げな目付きを美智子に向けた。

しかし将に向き直ると、にっこり笑った。この人が女言葉をつかうなんて外見的には信じられない。

「ね。だからウチに来てくれない？大事に育てるわよぉ～」

しかし、将は目を伏せた。

「いや、あの、せっかくですけど。俺、モデルも俳優もやれません」

「ええー、どうしてぇ？もったいない」

「そうよー。なんでー？」

橋本と美智子が、目を丸くして将を見た。

「いや、その……。俺、いろいろ悪いことしてるし……家出してるし」

「えー、家出少年なの！将くんって」

美智子が驚く中、社長は冷静に

「悪いことって、どの程度？」

と訊いてきた。

「いえ……」

まさか、殺人などと言えるはずはない。困った将に、新しい言い訳がふいにひらめいた。

「そうだ。あと、俺脱いだらキモイんです」

「脱いだらスゴイ、じゃなくて脱いだらキモイ？なに、将くん、ホ××なの？」

社長は、人前で口にするには、えぐい言葉を平気で言ってのけた。

将は、そんなわけないだろ、と思いながらも、スルーして

「そうじゃなくて、火傷のあとがあるんです」

と答えた。

「根性焼きの跡ぐらいだったら化粧とか、画像処理で消せるわよ」

『根性焼き』などという言葉を軽く思いつく社長の口調からは、似たような不良少年を育てた経験の多さがうかがえた。

「いえ、俺の背中には、こんっなに大きな、火傷のあとがあるんです。だからモデルも俳優も無理です」

将は両手でその大きさを示しながら説明した。

「あら……そうなんだ」

その大きさに美智子が少し残念そうな声を出した。

しかし社長は、太い声で豪快に笑った。

「やだー。そんなのカンケイないって。背中が出ないように演出させるなんて、どうにでもなるもの。

ね、将くん。私の目に狂いはないわ。あなたは絶対、ゼッタイ売れっ子になる。だから、うちに来てみない？最初はバイトのつもりでいいから。ね？」

社長はにっこりと笑いながらも、目を鋭く光らせた。

１７６◆１８歳前夜１

「それでね。社長のスカウトはちょっと置いといて、とりあえず、こんどこっちに出てくれないかしら」

デザートを食べ終わったところで、今度は美智子が雑誌を取り出した。

将も知ってる若者向けのメンズファッション誌である。

「置いといてって、何よ」

と橋本は文句をいいながらも、椅子に寄りかかった。

「街のベスト・ジーニスト５０、っていう読者参加企画なんだけど」

タイトルどおり、街で見かけた、ジーンズの着こなしがいけてる一般人を撮影し、一言コメントと共に紹介する春・秋の人気企画だ。

「これに出てくれないかな。今週の土曜なんだけど」

「え、これってヤラセだったの？」

将は驚いたのと、相手のメインが美智子に移った油断で敬語を使うのを忘れた。

その雑誌の企画は、てっきり取材陣が街角に出て、ちゃんと取材しているのだと思っていたから。

「ヤラセなんかじゃ……。ただ、念のため何人かあらかじめメイン候補を用意しておくだけ。いちおう、広告主から最新モデルも用意してもらえるしね」

「えー、なーんだ、そういうことだったのかぁ。……ガッカリ」

「うう～ん♪そういう普通の言葉づかいもカワイイ」

橋本が、再度テーブルに頬杖をついたので、将はハッとした。

「あ、……すいません」

将は橋本に軽く頭を下げた。

「いいのよぉ。別に」

橋本は鼻をならした。

「出ときなさいよ。その企画。遊んでギャラもらえるようなものよ。求められてるのは素人なんだし、ラクよぉ」

ハーブティを淹れながら橋本は、将にその雑誌の企画に出るように勧めた。

「でも……」

将はコーヒーカップに手をやりながらうつむいた。

「うちのほうの返事は、よく考えてくれていいのよ。……ところで将くん、家出てどこに住んでるの？」

「○○町、友達と一緒に。……そうだ、美智子さん」

将は、あることを思いついて顔をあげた。

聡は、おとつい美智子から送られてきた『ｍｏｎ－ｍｏ』を眺めていた。

頤を少し上に向けるように、やるせない瞳をこちらに向ける将。

二次元化されているのに、聡は心をわしづかみにされるような気がした。

始業式の今日は、さすがに残業もなく、聡は５時３０分には部屋に帰り着くことができた。

３月２８日……あの急な撮影の日以来、１週間も顔を見ることができなかった将をもう一度よく見る。

顔のあたりをなぞる。だけど二次元の将には何の感触も温かみも、ない。

こんなに顔をみなかったのは、山梨に急に転勤になったとき以来だ。

今日久しぶりに、教室で顔を見た将は、すこしやつれているように見えた。

恋人を失った友人を慰めるように暮らす将。そしてその友人の恋人は、かつて将とも……。

将はどんな気持ちを抱えて毎日を過ごしているのだろうか。

あの葬儀のとき。激しく取り乱した将の苦悩は、聡にも伝わった。

きっと後悔と懺悔を繰り返す日々を送っているに違いない……。

こんなときこそ、そばにいてあげたいのに、葬儀以来、逢えたのはあの1日だけだ。

メールは毎日のようにやりとりしているけれど、『ないよりはまし』ぐらいなものだ、と聡は思う。

『元気か』

『今日、何をしたか』

『ちゃんと食事をしたか』……。

聞きたいのはこんなことじゃないし、伝えたいことだってメールの文字にしたらひどく軽軽しい。

ただ、隣にいたい。

つらい気持ちとかやりきれない思いを、癒せないにしても共有したい。

否、それよりも。

聡が、将に会いたかった。将と触れ合いたいのは聡のほうなのだ。

将を思って、聡が深いため息をついたとき。

玄関のチャイムが鳴った。

聡が振り返ったときには、ガチャと鍵が回る音がした。

鍵を持っているのは……！

転がるように聡が玄関に駆け寄ったとき、ドアが開いた。

聡が一番会いたかったひとがそこにいた。

「アキラ！」

「将！」

午前中は教師と生徒だった二人は、しばらく玄関で抱き合ったまま立ち尽くした。

たった1週間なのに、懐かしい将の匂い。

将の胸のあたりに顔をうずめた聡は、しばらく、そのぬくもり、胸

の固い弾力を味わっていたが、匂いの中に異質なものが混じっていることを嗅ぎ取った。

揚げ油の匂い。

胸から顔をはずして見ると、将は手に白いビニール袋に入った弁当を持っていた。

「一緒に食べようと思って、買ってきた」

将は、聡に微笑みかけながら、ビニール袋を高くあげた。

「……大悟くんは大丈夫なの？」

「うん。教習所終わっていったん帰ったけど、いなかったから。携帯かけてもつながんなかったんだよね。で、もう俺、聡に逢いたくて限界だったからこっち来た」

逢いたくて限界。そんな言葉が嬉しくて、聡はもう一度、胸に顔をうずめる。

「なんか、ここもすごく久しぶりな気がする……。あ、アキラも俺に見とれてたの？」

やっとあがって床に座った将はローテーブルの上に広げられた『ｍｏｎ－ｍｏ』を見つけて、いたずらっぽく笑った。

聡だけに向けられた表情に、見とれてしまった聡は、素直にうなづいた。

「ホント？ホントに？」

将はさも嬉しそうに、聡の顔を見た。

そんな子供のように得意げな顔と雑誌の中のやるせない瞳の将はまるで別人みたいだ。

聡だけが知っている将。思わず聡は、目の前の将に対して言葉を漏らす。

「将、ヤバすぎ……」

将は嬉しそうに顔を崩して、ますます聡に近寄ってきた。

「もっと褒めて。俺、アキラに褒められるとゾクゾクする」

しかし、聡の唇から、もはや褒め言葉は出なかった。

なぜなら、それは将の唇でふさがれたから。

二人は、1週間ぶりに、お互いの唾液を味わうかのような、深い口づけに酔った。

「へー。美智子にイタリアン、おごってもらったんだー」

「俺はパスタが食べたいっていったんだけどサ。なんか豪勢なコー

スだった」

買ってきた弁当に、聡手作りのみそ汁を付けただけの夕食だが、二人で食べるだけで、昼間のコースランチよりよほど旨い気がしている将だ。

「でさ、またモデルのバイトやってくれってたのまれた。今度は○○で」

「へー、○○？スゴイじゃない」

その男性向けファッション誌は聡も知ってる有名誌だ。そこのモデル出身の人気俳優が何人かいる。

ちなみに、芸能プロダクションからスカウトされたことについて将は、はなから断る気でいたから、話題にしない。

「それがさ。読者のベストジーニスト、みたいな企画あるじゃん。あれ、ヤラセだったんだぜー……」

将は可笑しそうに、その内情を話した。

「で、そのヤラセの片棒を担ぐんだ。いいバイトじゃない」

聡も面白そうに、相槌を打った。

「うん。あとさ、それに大悟を誘おうと思ってサ。美智子さんにはナシ付けといた」

「大悟くんを？」

「イケメンじゃん、アイツ」

たしかに、大悟も将とはまるで異質だが、イケメンの部類に入る。

それにさ、と将は少し声を落として続けた。

「アイツ、カウンセリングのとき以外、ひきこもってんじゃん。だから、バイト手伝え、とかいって無理やり連れ出そうと思ってんだ。……もう、あれから……そろそろ1ヶ月経つんだし」

「そう……」

聡は、それっきり目を伏せて黙り込んだ将を見つめた。

一生懸命耐えて、乗り越えようと努力している将が透けて見えるようで、聡は胸が詰まった。

何か、話さないと、と思うけれど、何も出てこない。

励ましの言葉はたぶん重過ぎるし、関係ない話題もわざとらしすぎる。

聡は、目の前の弁当を食べるしかなかった。

ご飯と一緒に口に入れた、たくあんを噛む、ボリ、という音がやたら響く気がする。

しかし、その音は、将を少し明るい気持ちにさせた。

「ね、アキラ」

先に食べ終わった将は、ローテーブルに肩肘ついて、聡を見つめた。

そんな瞳は、なんだか大人っぽくて、見慣れているはずなのに、聡はときめいてしまう。

将は……見るたびに成長していく。

辛い日々を過ごした将の瞳はまたいっそう深みが増した。聡は思わず吸い込まれそうになる。

将は、自分がそんな瞳をしているのに気付かないのか、いたずらっぽい口調で

「18の誕生日、何くれるの？」

と訊いてきた。

聡は話題が変わって、とりあえずほっとした。みそ汁を最後まで啜って、

「将は、何がほしい？」

と訊き返す。

「そんなの、決まってんじゃん」

将は、はずみをつけるように、肩肘に預けていた頭を起こした。

「何」

聡は箸を置いて、将に向き直った。

「アキラ」

「んもう……」

将のやや真剣な瞳に、聡は下を向いた。

「ダメって言ってる……」

「1日、いや一度だけでもいいんだ」

将は聡の言葉を遮ると、隣の聡のほうに膝を進めた。そのまま聡の体を抱き寄せる。

「一度でいいから、聡と結ばれたい」

強く聡を抱きしめながら、将はせつなく訴えた。

後年。将自身も気付かない心の奥深いところで、何かを予感していたのではないか……聡は若い彼を思うたびに考えてしまっていた。

将は……もうすぐ18歳になる。

177◆18歳前夜2

将が18歳になれば、二人が結ばれることについて、法律的には何の障害もなくなる。

しかし、二人は依然、教師と生徒なわけで、そこにはモラルの壁が立ちはだかっている。

聡は教師として、社会人として、そのモラルに従っているわけだが、将を恋する一人の女性としては、苦しさは増すばかりだった。

おまけに傷ついた大悟に寄り添って暮らす将だから、聡と触れ合う回数は減ってしまった。

その代償行為なのか、聡はこのところ、将に抱かれる夢をしばしば見る。

夢の中で、聡は自由奔放に将を愛している。

淫らの限りを尽くして、お互い高みに登りつめるところで、いつも目が覚める。

鼓動は、まだ夢の続きで激しく脈打っているのに、聡は冷たい未明の空気の中に現実を認識しなくてはならない。

そして聡をゆっくりと包む自己嫌悪。

――いやだ。

9歳も若い男に欲情している自分が、みじめで憐れで醜いと思った。

幸い春休みで、教室で顔をあわせることはないから、こんな醜い自分は、人知れず抑えればよかったが、これからはそうもいかなくなるだろう……。

将の腕の中で聡は、もう一度将の匂いを吸い込んだ。

『一度でいいから将に抱かれてみたい』

これは聡の願望でもあるのだ。

でも……。

一度、抱かれてしまえば、むしろ落ち着くのかもしれない。

聡の考えは、希望的観測を引き出す。

正反対の場所にある理性が、『なんとあさましい、雌の思考』と自分を嘲笑しているのを自覚しつつも。

聡は、将に悟られないように、こっそりと記憶の引き出しを開ける。

今までに付き合った男との思い出を、順番に検索するように思い出す。

そして。セックスは、どの男とも、『最初』が一番のイベントだったことを改めて確認した。

初めて結ばれるまでの過程が、最も相手を想い、興奮する時期であ

った……それは否めない。

一旦結ばれてしまえば、その後いっときは狂ったように相手を求めるものの、だんだん単なるコミュニケーション手段として、その感情のほうはむしろ安定していったようにも思う。

（もちろん、博史のように、会えない期間が長い男は、別として）

安定のあとは、倦怠があり……その後、何か理由ができれば、そこで別れてしまったわけだが、聡は将についてそこまで考えが及ばなかった。

というより、無意識に及ばせなかった、というほうが正しい。

将の胸のあたりからは、あいかわらず干草のような香りがしている。

この香りを知って、果たしてどれぐらいの月日が経っただろうか。

その香りに陶然としている聡は、いっそ、『１８の誕生日』というイベントに限定して、将と結ばれてもいいような気がしてきた。

いままで恋人だった男の中で、既に、結ばれるまでの日数は、最長を毎日更新し続けているのだから。

だが、もちろん心配はある。

１度、いや１日程度でおさまるのか、という心配。

そして、その後の教室で、そんな二人の淫靡なムードが出てしまわないか、という心配。

しかし、後者についての心配は、薄まっていた。

1週間とはいえ、同棲してしまった二人だが、その間、通常通り学校で『健全な教師と生徒』をきっちり演じていたではないか。

毎晩、抱き合って眠っていたのに、である。

と、将が聡を抱く腕の力をゆるめた。

そして自分の胸から離すと、聡を見つめて言った。

「考えといて。ま、ダメでも、アキラのこと好きなのは変わらないけど」

将はゆっくりと微笑んだ。

――いつのまに、こんなに男っぽい笑顔をするようになったんだろう。

聡は思わず見惚れた。

「……一番嬉しいプレゼントってことでサ。じゃ、俺、帰るわ」

将は、聡からすっかり離れてしまうと、立ち上がった。

3センチ伸びた、と今日確認したせいか、見上げる将はとても大きくなった気がする。

ジーンズを腰パンにしているにもかかわらず、足が長いせいか、そ

ういう風に見えない。

「……もう？」

聡も将を追うように立ち上がった。聡の名残惜しげな顔に、将は柔らかい目で聡を見つめた。

「ん……。大悟が心配だから」

「そう」

聡は寂しさから視線をやや落とした。それでも大人の自覚が、もう一度、笑みをつくらせた。

将はいつになく素直に寂しい様子を見せる聡がいとおしくなり、肩を引き寄せると、軽く唇を重ねた。

「明日、学校で」

軽い口づけとはいえ、聡の唇の柔らかさを充分に堪能して、将は微笑んだ。

「ウン……。あ、明日、実力テストだから」

聡は思い出して顔をあげた。

「そうだった！……やべーや。ぜんぜん勉強してねーや」

将はわざとらしく、『ヤバイ』という顔と素振りをつくっておどけると、

「じゃあ！」

と明るく、鴨居をくぐるようにしてドアの外に出た。

突っ掛けを履いた聡が廊下から外をのぞくと、暗い街灯の下、手をふりながら振り返る将がいた。

聡との逢瀬を早めに切り上げて帰ってきたのに、大悟はまだ帰っていなかった。

電話をかけてもつながらない。

カウンセリングにしては遅すぎる。

「……たく、どこいったんだ」

心配する将をよそに、大悟は何食わぬ顔で、夜１０時すぎて戻ってきた。

「大悟、お前、どこいってたんだ」

近寄った将は、大悟から、酒臭さの代わりに、ヤニのような悪臭と化して染み付いた、煙草の臭いを嗅ぎつけた。

「ちょっと、気晴らしに。カウンセラーからも気晴らしをしろって言われたから」

大悟は笑みを浮かべながら答えた。今日は酒は飲んでいないらしい。

「何？ゲーセン？」

「いや……、パチンコ」

とたんに将は渋い顔をする。その顔を見て、大悟は

「閉店まで粘って勝ったんだぜ」

と言い訳をした。

「いくら」

「５万」

大悟は少し得意そうな顔をした。

「……ふーん。そう」

将は、そういってウーロン茶をグラスに注いだ。

１８歳未満のくせに、と固いことを言うつもりは毛頭ない。

将も遊んだことはあるから。

しかし、結局パチンコ屋が儲かるように出来てるんだ、と、つまらなくなるのに時間はかからなかった。

遊べる時間に対して、金がなくなるペースは速すぎる。それを引き止めるかのようにときどき勝たせてやる。

そんなシステムを知って以来、将はパチンコと聞くと、うさんくさいものの代表のように思え、またそれにハマって、湯水のように大金を擦る大人たちを馬鹿にしていたところがあるのだ。

それに比べると、安価な分、ゲーセンのほうが『まっとうな暇潰し』だと、将には思えていた。

だが、酒も飲まずに、元気が出たような大悟を見ると、気晴らし効果はあるのかな、とも思い「よかったな」と言っておいた。

大悟は一気に、ウーロン茶を飲み干すと、

「風呂入るわ。うータバコくせえ」とバスルームに消えた。

だが……その日に勝ったのが災いして、大悟は翌日からもパチンコに通い続けた。

案の定、負けがこんだ。

最初に大きく勝ったのが忘れられず、粘ってしまったせいで、毎日

信じられない金額を失っていった。

そして……1ヶ月近く働かなかったせいで、もともと少なくなっていた貯えのほとんどをその週のうちに使い果たしてしまったのであった。

178◆小さなしこり（前書き）

178◆小さなしこり

大悟は、昼下がりの街を歩きながら通帳を開いた。もうこれで何度目だろうか。

何度見ても変わらない数字。残高は……153円のみだった。

大悟は爪を噛んだ。

そして後悔する。この1週間……パチンコにはまってしまった自分を。

いつか勝つ、と思って続けているうちに18万あった残高はあっという間に、消えてしまった。

財布に残っているのも300円と少し。

これでは派遣に行くための交通費にもなりやしない。

煙草を買ったら（一番安い煙草でも）もうあといくらも残らない。

大悟は、最近は煙草を吸わなくなっていたが、パチンコ屋で他人の煙に燻されているうちに、いつしか再び口寂しさを煙草で癒すようになっていた。

――煙草は将にもらうか。

しかし、そういえば最近、将が煙草を吸っている姿を見ない。

聡に言われたか何かで、もしかしたら止めたのかもしれない。

大悟はイライラするあまり、道端に転がっていたコーヒー缶を蹴った。

缶は午後の光の中、カラカラと音をたてて転がっていった。

――こんなことになるなら、あのとき将に金を払うんじゃなかった。

あのとき、とは。大悟が瑞樹と滋賀に行くことを決めたとき。

大悟は、いままでタダで将のマンションに居候し、タダで食事を食べさせてもらっていたお礼に、

『これ……。俺と瑞樹の食費と部屋代のかわりに。1ヶ月半にしては少ないけど……』

と5万ほど将に差し出したのだ。将は、

『俺の部屋じゃないし、食費は親持ちだから、いいってば』

とさんざん固辞したのだが、大悟は

『もらってくれないと俺の気がおさまらないから』

と無理やり握らせたのだ。

あのとき将は、いらないって言ってたんだから、無理に受け取らせることもなかった。

――あの5万があれば……。

大悟は、自分の後悔が、すでに歪んでいることに気付かない。

ともあれ、将が帰ってきたら、金を貸してもらうしかない。

そう思った大悟は、コンビニで煙草を買った。

ビールは将の部屋の冷蔵庫にまだあった。

将の帰りを待つ間、昼酒を飲んで、眠ってしまおうという魂胆だ。

金曜日の6時間目は社会見学だが、今日は女の子向けの企画だったので、関係ない将は、聡もいないことだし、とサボって帰ってきてしまった。

まだ4時前、今日はかなり温かい。

歩いて帰ってきているうちに、将は汗ばんで来た。

ブレザーを着ているのがうっとおしくなって脱ぐと、カバンと一緒に抱える。

ネクタイは緩めているし、シャツはボタンを3つはずした上に、スラックスから出して着ている。

この着方について、聡は「だらしない」と顔をしかめたが、風通しのよさには替えられない。

将の前からサラリーマンらしき男が歩いてきた。スーツをきっちり着ている。

将は思わず、すれ違いざまに、その男を振り返った。

別に知り合いというわけではない。その男の容貌や服装が特徴的だったわけでもない。

単に……あんな格好で暑いだろうな、と思ったのだ。

今週、始業式の翌日に実力テストがあった。

勉強をまったくやっていなかった将は、我ながら出来があまりよくなかったのを自覚していた。

来週から、放課後を使って進路相談が始まるらしい。

大学進学志望者はその実力テストの成績を元にするらしいが、おそらくたいした大学は目指せない成績しか取れてないに違いない、と将はわかっていた。

特に、聡には申し訳ないほど、英語ができなかった。

勉強に対してモチベーションが下がった理由はわかっている。

博史という存在がいなくなったゆえ、別に大学にいかなくてもいいや、という気分になってしまったことを将は否めない。

しかし、就職するのか、といえば。

今の男のように、きちんとスーツを着て働く自分はあまりにも非現実的だった。

だけど、聡と暮らす……家庭を持つには、早く仕事を持って自立したほうがいいのかもしれない、とも思う。

聡のために、聡とその子供のために、窮屈なサラリーマンをこなせるだろうか。

来年の今ごろ、自分はどうしているのだろうか。

将は、初夏の様相を呈した午後の空を仰いだ。

将は無言で、マンションの自室のドアを開けた。

今週、大悟はずっと帰りが遅い。だから今日もいないだろうと思ったのだ。

リビングに入らずに、寝室に入ると将は解き放たれたように制服を脱いだ。

室内はパンツ一丁でも寒くないほどだ。

教習所は夜間だから、まだ少し時間がある。

もう路上教習まで来ているので、あと少しで卒業検定が受けられる。

誕生日の１５日がある来週中には免許を取得できる見込みだった。

将は教習所の時間まで一息いれようと、パンツの上からＴシャツを着て、ボリボリと胸のあたりを掻きながら、キッチンへ向かった。

と、リビングのソファで大悟が眠っていたので驚く。

将と同じようにＴシャツとトランクス姿だ。シャワーを浴びたらしく煙草臭さはない。

ソファの足元にビールの空き缶が２個転がっている。

それを見て、ビールを飲みたくなったが、教習所がある将は我慢して冷蔵庫からウーロン茶を取り出した。

――どうしてこんなに早く帰ってきたのか、しかし、明日のことを伝えるのにちょうどいい。

と将がグラスを傾けながら大悟のほうに視線を投げたとき、ちょうど大悟が目を覚ました。

「将……、もうそんな時間か」

と大悟は目をこすりながら時計を見た。

「ああ。6限サボった。おまえこそ、今日は早いな」

大悟は身を起こして、ソファに座りなおすと、煙草に火をつけた。

将は内心、嫌な気分になった。

将は、このところ、煙草をやめている。

別に健康のためではない。聡に言われてもいない。

しかし、聡とたびたびキスをするようになって、ヤニ臭くなるのを自粛したのだった。

煙草をやめた将は、できれば室内で煙草を吸って欲しくなかった。

だが、かつて一緒に煙草を吸っていた親友の……しかも、心に傷を負っているであろう大悟に、ちまちまと煩いことを言いたくない。

その葛藤で、将の心に、ごく小さなしこりが出来た。

「あのさ」

大悟は煙草の煙を吐き出すと、言った。思い切ったような煙の吐き出し方だった。

「悪いんだけど、将。……金貸してくれない？」

煙は、午後の光を斜めに差す筋のように映し出した。

「……なんだ。そういうことか……」

将は思わず呟いてしまった。

「そういうことってどういうことだよ」

大悟は、キッチンにいる将を見上げるように、やや不服そうに言い返した。

「どうって」

……パチンコで使い果たしたんだろ、違うか、というセリフが喉まで出掛かったのをかろうじて止める。

『悪いんだけど』と頼まれているんだから、まずは了承して安心させてやればいい、とも思う。

だが、できなかった。将は、いいかげん、大悟に立ち直ってほしい、と心のどこかで強く願うあまり、いらついていたのだ。

将は大悟に近づいた。

いいかげん、漂う煙草の煙は、将も吸わずにはおれないほど、濃厚になっていた。

「もらうぜ」

将はソファに置いてあった大悟の煙草の箱から一本抜いた。

大悟は無言で、そんな将をキラリときつい視線で見た。

金に困っている大悟は……煙草一本でも惜しかったのだ。

火を点ける将に、煙草の許可のように

「金……貸してくれんだよな」

と険しい表情のまま確かめる。

「ああ……いいよ」

将は大悟の横に腰掛けると、煙草の煙を吐き出した。

ひさしぶりの煙草は、たいして旨くなかった。

「ところでさ」

将は煙を手で払いのけながら、大悟に振り返った。

「明日、バイト手伝ってよ」

「バイト？何の」

「なんか……雑誌のオシゴト」

「いくらぐらいもらえんの？」

大悟は険しい顔を緩めていた。

「さあ？でも、前やったときは３０分くらいで１万もらったよ」

「そんなに?それヤバいバイトじゃないだろうな」

大悟が行っていた派遣は、7時間程度でようやく日給1万ぐらいだった。

しかも、立ち詰めで働いて。

「いや、モデルなんだけど、素人でいいんだってさ」

「モデルぅ?俺に出来んの?」

普段の大悟なら、雑誌モデルのような派手なことは苦手だったはずだ。

しかし、金のない大悟はすでにその金額に大きく心を動かされていた。

判断基準が、やりたい、やりたくない、ではなくすでに出来る、出来ない、になっている。

「ああ。正月に萩いったときの写真があったじゃん、あれを編集のヒトに見せたら軽くOKだったぜ」

「ふーん」

「俺もやるからさ、一緒にいこうぜえ」

将は明るく、大悟の背中に手を置いた。

「金、それでも足りないようだったら、貸すよ。だけどさ……ぶっ

ちゃけパチンコ代なら貸したくない。……すまんけどよ」

将の言葉を聞いて、大悟はうつむいたが、ゆっくり頷いた。

そして暫くの沈黙のあと、ゆっくりと呟いた。

「俺だって……。そろそろ立ち直らないとって思ってるんだ……」

179◆撮影1

「じゃ、二人もうちょっと大股で、カメラにらむ感じで……そうそう」

土曜の午前中。将と大悟は、若者が多い××の街角でポーズを取っていた。

ポーズを取る将と大悟の前で、カメラマンはひざまづいたり、立ち上がったりしながらせわしなくシャッターを切る。

そんな様子を通行人が何事かと目を止めていく。

何人かの若いギャルたちがすでに、将と大悟に見とれて足を止めて撮影に見入っている。

カメラマンが場所を変えるたびに、大きなレフ版を持つ助手らしき若い男もその角度を変える。

ほとんど指示なしで、的確な場所へ移動していく。

そのほんのわずかな間に、コームを持った若いヘアメークが寄ってきて、将の前髪を微調整する。

「ハイ。ＯＫです」

彼女はコームの取っ手でちょっとだけ将の前髪を崩すと、飛びのいた。

カメラマンはシャッターのあいまに、

「はい、いいよ、カッコいいよ！……そうそう。大悟くん、その顔、いいね！」

と将たちを誉めそやす。

――カメラマンって、口のほうも忙しい仕事なんだな。

将がそんなことを思っていたら、

「将くん、その顔サイコー！」

と言われてしまった。あとで聞いたのだが

「人をちょっと見下すような顔が、貴公子っぽくていいよね、彼」

とカメラマンは言っていたらしい。

編集兼ライターの美智子が、ちょちょっと撮影した先日と違って、今回の撮影は思ったより大掛かりだった。

プロのカメラマンとその助手らしき若い男、クライアント（広告主※今回はジーンズのブランド）の担当者が各社1名ずつで2名、スタイリスト、そしてヘアメーク。

グラフィックデザイナー、その場を仕切る美智子と、４月に入社したという出版社の新人編集者の総勢９名。

それに将、大悟を含めて『ヤラセ』モデル４名。

クライアントの担当者はヤラセ部分の撮影が終わったら帰るけど、代わりにあとからデスクが顔を出すと美智子が言っていた。

「午後になって人出が多くなってきたら、その場で、通行人の中から、オシャレでカッコいい子を探して口説かないといけないからね。人海戦術よ」

と美智子が説明した。

もっとも今回のような人の多い取材は特別で、通常の取材は、もっと簡単で、美智子とカメラマンのみ、というものも多いらしい。

薄曇りの今日は４月前半にしては、温かく、気温はすでに２０度を越えていた。

編集の美智子は

「温かくてよかったわー。５月発売なのに、みんな寒い格好してたら困るもんね」

とホッとした顔をしていた。

将たちモデルは、あらかじめ初夏にあわせた格好をさせられているが、今日の陽気はそれでちょうどいいぐらいだった。

今朝、休日だというのに、学校に行くのとほぼ同じ時間に起きた将は、大悟と共に、言われたとおりの時間に出版社のビルの前にやってきた。

そこは、将がめったに足を踏み入れない、皇居がある区にあった。

土曜なので、美智子は通用口の前で待っていて、将たちを見つけると手を振った。

「時間通りね。感心、感心」

美智子はニコニコと、通用口に将と大悟を招きいれた。

休日のせいなのか、その大手出版社のビルの中はやけに静かだった。

「おはよーございまーす」

美智子は明るい大きな声で挨拶をして地下にあるスタジオに入った。

そこにいた女4名と、男性3名の視線がさっとこっちに移る。

美智子が手早く紹介と挨拶をする。

それによれば、男性はこの出版社の新入社員とモデル2名、女性ははスタイリストとヘアメイク2名、、それとモデル付きの女性マネージャーということだった。

マネージャー付きの本物のモデルを使う撮影、ということで、将と大悟は少しだけ緊張した。

そのとき

「おはようございまーす！将くんと大悟くん、今日はよろしくね」

とスタイリストと紹介された一番年嵩の女がスケッチブックを持って近寄って来た。

声はしゃがれているが、格好は若々しい。おかげでいくつぐらいなのか見当がつかない。

ヘアメイクとマネージャー、新入社員は先にいたモデルの髪型の相談に戻った。

女が持っているスケッチブックの中には、すでに将たちの今日の衣装が色鉛筆の絵で指示してある。

――こんなふうに指示するんだ。

思わず、二人は興味深くそれをのぞき込んだ。

「大悟くんが１７６センチ、将くんが１８５センチだったよね。いちおうジーンズは背丈にそろえてあるけど、試着してみて。ダメだったら他のサイズもあるし、裾直しも頼めるから」

といきなりジーンズを押し付けられて、二人は顔を見合わせながら、スタジオの隅につくられた更衣スペースに神妙に移った。

「勝ったな」

大悟が将に小声で言った。

「え？」

今着ているジーンズを下ろしながら将が訊き返すと、大悟は

「あの二人に」

と、ニヤッと笑った。自分たちのほうがイケてる、ということである。

「まあ、な」

将も笑い返した。

「どう？」

スタイリストの声がしたので、二人はあわててジーンズを身につけた。

「将くんは、ぴったりね。大悟くんは……少し背が伸びたのかもね。ちょっと裾が短めだわ。こっちを着てみて」

「やった、足が伸びたかも？」

大悟は嬉しそうに、代わりのジーンズを受け取って更衣スペースに戻った。

そんな明るい大悟を見るのは久しぶりで、将も嬉しかった。

着る服が決まったら、鏡の前に座って、ヘアメーク。

ケープを掛けられて、将も大悟も少し照れくさかったが、先に来ていた二人は慣れていそうだった。

メイクといっても、別に女性のように化粧をするわけでもない。

ニキビや髭剃りあとを隠したり、透明なリップを付けるぐらいだが、将も大悟も肌に関しては問題がないので色物を塗る必要はなく、少しだけ眉を整える程度で済んだ。

眉についても、二人とも剃りこんでいるわけではないので、長すぎる部分をカットするだけだ。

ヘアメイクの女はさすが本職らしく、自らの化粧も巧みだ。

だが、柔らかい雰囲気でゆったりと話しかけてくれたので、将と大悟の緊張はずいぶんほぐれた。

「将くん、ちょっとだけ髪にメッシュ入れていい？」

「ハァ、いいですよ」

ヘアメイクの女は将の髪をいじり始めた。大悟のほうは、スプレーをかけられ、髪を立てられている。

「将くん、ゆるーく、くせ毛入ってる？パーマじゃないよね」

「ハイ。短いとわからないんですけど、伸ばすと出てくるんですよ」

「でも、ナチュラルでいい感じよ。だいたい、髪キレイだよね」

といいながら、少しだけ鋏を入れる。しゃべり方はフランクだが、その手つきは極めて慎重だった。

２０分ほど、彼女が髪をいじっただけで、髪型の印象はガラリと変わった。

「将、カッケー。本物のモデルみたい」

そういう大悟も、眉を少し切って、髪を立てただけでぐっと垢抜けた。

もともといた2名のモデルも、最初に見たときよりあきらかによくなっている。

「わー、カッコイイ～！」

美智子がパチパチと手をたたいた。そこにいたスタイリスト、ヘアメーク、新入社員、モデルのマネージャーも笑顔で拍手して場は盛り上がった。

それから、ワゴン車に分乗して一同は撮影現場である××の街へやってきたのだ。

先にモデルが一人ずつ撮影を終わらせ、マネージャーと共に帰っていった。

将と大悟は友達同士ということで、二人一緒のカットと、別々のカットをそれぞれ場所を移して撮影することになっていた。

将の撮影が終わって、大悟の撮影を見ている将は、肩を後ろからポンポンと叩かれた。

振り返ると、あの髭面の橋本社長がいた。

「こんにちは。将くん。今日はいっそうイケメンじゃない」

と髭面をほころばせて笑った。

「こんにちは……」

頭をぺこっと下げる将の後ろから、

「あら、社長！」

と美智子の声がした。

「来たわよ！お手伝いに」

「ありがとうございます～」

社長は、一般人の撮影に付き合って、その中から有望な若者がいた

らスカウトしようとしていたのだ。

もちろん美智子はそれを承知だし、社長の眼力に頼りたい部分もある。

「でね、美智子ちゃん、手伝う代わりにと言ったらなんだけど、将くんをちょっと貸してくれない？……今日はウチのカメラマンも連れてきたの」

橋本社長の後ろには、やはり中年の男性がいた。機材を抱えた助手を連れている。

変わった形の眼鏡をしているな、と将は思った。

「ウチのって……篠塚さんじゃないですか」

美智子は改まって

「いつもお世話になっております」

とカメラマンに挨拶した。篠塚、と呼ばれたカメラマンは

「まいったよ。オフの予定だったのに、社長に呼び出されちゃってさ」

と苦笑した。

「でも、いい目をしてるコだね」

篠塚は将に視線を照射した。それは笑っているのに鋭い目で射抜か

れるような感覚だった。

「ふふっ。そうでしょう」

橋本は口角をあげて、篠塚を見た。篠塚は将の足の先から頭のてっぺんまで舐めるように見た。

だが不思議と嫌な感覚ではなかった。

なんだかよく知ってる人に褒められるような、そんな感じがした。

美智子の様子からも、どうやら、橋本社長が連れてきた篠塚は、かなり有名なカメラマンらしかった。

実際、将が知らないだけで、彼は依頼されても、彼が認めた人の写真集しかとらない、一流フォトグラファーだったのだ。

「将くん、いいわよね？」

「ハァ」

にこやかながら断るのを許されない雰囲気に、将はしぶしぶ承諾した。

将は、大悟が撮影されているのと少し離れたところにある公園に歩いて連れてこられた。

髪を整え、スタイリストが上から下まで揃えた格好をした将は当然目立ち、すれ違う女性が皆振り返った。

機材を抱えたカメラマンも一緒なので

『芸能人？モデル？』とあからさまに噂する人もいて、将は少し照れた。

「やっぱり、いいわ。将くん、今日は本当に、カッコよくしてもらったわね」

橋本は自分のことのように嬉しそうに笑った。

「じゃあ、ここのベンチに腰掛けて。普通にしてくれていていいのよ」

「ハイ」

しかし腰掛けるところからすでに篠塚カメラマンがカシャカシャと撮影を始めた。

助手を使って2台のカメラをせわしなく変えているので、

「あの、どうして2台使っているんですか？」

と将は訊いてみた。

「ああ。デジカメと銀板カメラと2種類で撮影してるんだよ」

と篠塚は快く答えてくれた。温かい目だ。

「へえ……どう違うんですか？」

「それはね……」

撮影する篠塚に興味深く質問をする将を、橋本はニコニコと見ている。

篠塚は如才なく将をベンチから立たせたりしながら、カメラの種類について説明をしながらも、将のいい顔を見逃さない。

「ねえ、将くん、あの話は考えてくれたかしら？」

カメラの話が一段落したところで、橋本社長が口を挟んだ。

「……ハイ」

「ＯＫしてくれるわよね？」

「いえ……。やっぱり無理です。……すいません」

将の憂いげな顔も篠塚は容赦なく撮影する。

「どうしてぇ？」

橋本社長は咎めるように訊いたが、女言葉のせいか、あまりキツイ印象ではない。

「俺……彼女いるし」

将は答えた。

１８０◆１６１~１７９話のあらすじ

土曜日、バレンタインデイ。午前中に聡は約束していた博史と会う。ちなみに博史の母の病状は、持ち直したという。聡は指輪を返して別れを告げる。

母の言葉もあり博史は引き下がるが、独り帰り道、車を運転しながら、いつのまにか自分の中で大きな存在になっていた聡に気付いて涙する（１６１話）

午後、聡は、弟連れの将と一緒に遊園地に行く。そして観覧車の中でキスする（１６２話）

３月に入って最初の月曜日に卒業式があった。そこに並ぶ教師の中に聡の姿があった。

聡は荒江高校に復帰したのだった。

聡との仲が制限されることに我慢できない将は、「学校を辞めようかな」ともらす。

それに対して、将のことを心配する聡は「将が学校をやめるなら、

別れる」と言い切る。

結局、聡に逆らえない将は、週末だけ恋人になることで妥協するしかなかった。

ちなみに聡と将の仲を裂こうとしていた毛利は、博史から決着がついた連絡を受け、あっさりと手をひく（１６３話）

大悟は、なかなかクスリを辞められない瑞樹を、そしてそのために怪しい仕事をしているらしい瑞樹を心配し、二人で東京を離れて就職することを提案する。

瑞樹は大悟の提案を受け入れる。将は、母の１０回目の命日に、母の好きだった花を持って寺へ参る。

しかしそこにはすでに、同じ花が備えてあった。母がその花を好きだったことを知っているのは父の康三のみだ。

寺の住職に訊くと、やはりそれは父が備えたものだった。将は母の死に涙さえ流さなかったあの父が、と信じられない。

将は寺の住職に、曽祖父、そして父が、跡取として自分に大きな期待をしていたことを聞き、ショックを受ける（１６４、１６５話）

ショックゆえ、聡に会いたくなった将は、電話をかけるが、聡は友人で編集者の美智子と食事で逢えない。

代わりにちょうど電話を掛けてきた大悟と焼肉に出かける。

そこで、大悟から、瑞樹を連れて東京を出る、と聞かされる。瑞樹は薬物依存症になっているらしい。

本当は、一緒に夕食に合流するはずだった瑞樹があまりに遅いので、連絡をいれた大悟は、瑞樹から「義理父とのことが母にばれた」と告白される（１６６話）

瑞樹よりも義理父を信じた母のしうちに、瑞樹は母のことはふっきれた、という。

今から自分を可愛がってくれた小山の祖母に会いにいってくると、瑞樹はひとたび電話を切る。

大悟は彼女に禁断症状が出るのを心配して、将と別れて小山に彼女を追う。

将は美智子と食事中の聡に電話をかけて、無理やり割り込み、そのまま聡の家に泊まる（１６７、１６８話）

夕方。瑞樹は着替えや荷物をとりに、母のいる時間を見計らって自宅へ戻っていた。

だが肝心の母は留守で、義理父に見つかってしまい、いつものように淫らな行為をさせられる。

その行為の最中に母が帰ってきてしまい、母は瑞樹を「泥棒猫！」と叩く。

傷ついた瑞樹は小山の祖母の家を訪ねようとするが、祖母はあいにく留守だった。

時間が経過し、ついに瑞樹を幻覚が襲う。

小山に迎えにいった大悟は、新幹線の向かいのホームに瑞樹を見つけるが、彼女はすでに普通ではなかった。

大悟が瑞樹をつかまえようとしたとき、幻覚に囚われた瑞樹は新幹線のホームに飛び降り、そこへ通過する新幹線が……（１６９話）

新幹線に轢かれた瑞樹は、拾えるものもほとんどないほど、あとかたもなくなっていた。

その現場に居合わせた大悟は錯乱状態になっている。

早朝。聡と久しぶりに抱き合って寝た将の携帯に、鉄道警察隊から電話がかかってくる（１７０話）

鉄道警察隊から連絡を受けた将は、学校を休んで、大悟を迎えにいくべく小山へ向かう。

鉄道警察隊の捜査に協力しつつ、その言葉の端々から瑞樹の状況の悲惨さを想像する。

そして、錯乱した大悟に会い涙する（１７１話）

１週間たって、瑞樹の葬儀が行われた。悲しみが深い大悟は参加することができなかった。

クラスメートにまじって参列した将は、瑞樹の死の責任を学校に転嫁しようとした義理父に怒ってつかみかかる。

かろうじて聡たちに止められるが、将は瑞樹の死の責任は自分にもある、と自分を責める（１７２話）

春休みになり、桜は五分咲きになった。将と聡は3日ぶりに二人で会う。

将はあれ以来、ひきこもって大酒を飲む大悟にできるだけ付き添っていたため、聡と会えなかったのである。

そこへ美智子から将の携帯に連絡が入る。雑誌のページに穴が空きそうなので、将に協力して欲しいという依頼だった（１７３話）

始業式の日、ファッション誌に掲載された将の噂で学校はもちきりだ。

大悟のために早く帰宅した将だが、大悟はカウンセリングで留守だった。

そこへ、美智子から再び連絡が入る。将を待っていたのは、芸能プロダクションの社長で、将をスカウトしたいというのだ（１７４、１７５話）

社長のスカウトのほかに、美智子はモデルのバイトを将に紹介する。

将は大悟も一緒だったらとバイトはＯＫする。

大悟の帰りは遅そうだったので、将は聡の家に弁当を持って訪れる。

久々の二人の夕食の席で、将は１８歳の誕生日のプレゼントは「アキラ」がほしい、とねだる（１７６話）

聡は、とまどいながらも、本心では将に抱かれたかった。

１８歳の誕生日というイベントに限定して、将に抱かれてみようかと考える。

夕食が終わって帰宅した将だが、大悟はなかなか帰ってこない。

１０時すぎてようやく帰った大悟はパチンコに行っていたという。

５万勝った大悟はそれに味をしめて、それから毎日パチンコに通うが、１週間で全財産を擦っていた。

全財産をなくした大悟は、将に金を貸してくれと頼む。

将はパチンコ代は貸したくない、と代わりにモデルのバイトに大悟を誘う（１７７、１７８話）

土曜日、将と大悟は、ヤラセモデルのバイトに来ていた。

それは先日と違って、ヘアメイクやスタイリストがつく大掛かりなものだった。

そこへ、先日の芸プロ社長の橋本が一流フォトグラファーの篠塚を連れて顔を出し、将の写真を撮影し始める。

橋本のオファーについて将は断るが……（１７９話）

181◆撮影2

「彼女いたら、どうして無理なのよ」

橋本は可笑しそうに将に訊き返した。

「いや……、別れさせたりとか、あるんでしょ」

笑われた将は、照れを隠すように、顔をあげた。

「いやね。いつの時代の話？」

そんな将に、橋本はクスりと笑った。

「別に恋愛は禁止してないわよ、うちは。彼女、同級生？」

「いえ……」

将は下をむいた。

さっきから、移ろう将の表情を、篠塚は間隙なくシャッターで撮り続けている。

「何、年上？……そうなのね。いくつ上なの？」

「9、いえ8歳年上です」

もうすぐ将は18になるんだから、8歳差だ。

と将は強気に出ながら、１８歳になることを思い出して、うつむいた顔に思わず笑みが出そうになる。

もうすぐ、聡を抱ける。

将は……昨日、来週の土曜日にあわせて海が見えるホテルを予約した。

聡のために、日常から少しでも掛け離れた場所を用意しようと考えた結果だ。

非日常な中の逢瀬なら、その後、学校で会い続けても、聡が恐れる後ろめたさや生々しさが薄れるのではないか、と将は気を遣ったのだ。

今日か明日、聡にそれを伝えることを考えると、将はワクワクした。

「ずいぶん年上なのね。何してる人？本気なの？」

９歳を８歳と少なめに申告したにもかかわらず『ずいぶん年上』であることは変わりないらしい。

橋本は立て続けに訊いて来た。

まさか、自分の担任教師だとは答えられない。

それが、一般的にスキャンダラスであることぐらい、将でもわかっている。

だから顔をあげて、最後の問いにだけ、うなづく。

うなづいた将の瞳に、篠塚のシャッターが炸裂した。

「本気で好きなんだ。いいなぁ。恋する青年」

ひとしきりシャッターを切って篠塚が言葉を発した。

茶化しているような内容なのに、将は不思議に腹が立たなかった。

さっき、つま先から頭のてっぺんまでチェックされたときもそうだが、この篠塚というオヤジは失礼なことを失礼なことと思わせないテクニックに長けているようだ。

「将くん、高3だわよね。進路は？大学はいくの？」

橋本は、質問の方向性を変えてきた。

将は、篠塚に促されて立ち上がると、その指示通り、走った。

走る将を下から篠塚は捕らえている。

将は走りながら「まだ、決めてません」と答える。声が振動で震える。

「そう。じゃあ、進路の候補の中に、ウチも入れておいてよ」

橋本社長は、あっちに行ってしまった将に向かって叫ぶように誘った。

篠塚はカメラを構えながら将に合図を送った。こっちに向かって走

って来い、という合図である。

将は言われたとおり、わずかな距離を全力でこっちに駆けてきた。

何度も繰り返すとさすがに、短い距離でも息が上がった。

将は膝に手をついて息を切らせながら

「だけど、俺、結構悪いことをしてますから」

と橋本社長に顔をあげた。

「悪いことっていっても、鑑別所に入ってたわけじゃないんでしょ」

鑑別所、という言葉に将の心はチリリと痛んだ。

本当だったら入ってたかもしれない、檻。

将は頭を地面に投げ出すように、下をむいた。踏み固められた地面に、早くも蟻が這っていた。

「せいぜい、女の子に何かしたとか、それぐらいなもんでしょ？将くん、私調べたのよ。……あなた、官房長官さんの息子さんなんでしょ」

将は再び橋本のほうに顔をあげた。おさまらない息が邪魔だ。……胸が苦しい。

将のヤクザ殺しについては、大悟がやったことになっているから、表には絶対に出ないことになっている。

将自身も、きつく口止めされているから、今まで誰にもしゃべったことがない。

橋本が調べたというのは、中学時代からの将の非行についてのことだろう。

「調べたんなら、ダメだってわかるでしょ。あの親が許すはずがない」

将は視線をはずして、投げやりに言った。

「そうかしら」

橋本は得意げな顔になった。いかにも親の説得に自信がありげな表情である。

立っていた橋本は将に顔を近づけた。

「親御さんの説得は置いといて。……ねえ、家出してて、年上の彼女がいるなら、早く自立したいと思わない？」

実際そうだった。

聡のために早く自活したい。

だけど、何をすれば……。将にはまだ、やりたいこともわからないし、何ができるのかもわからなかった。

そこへ、篠塚が近寄ってきた。

「キミのルックス。お金になるよ。しかも、ハシタ金じゃなくて、一生ゼイタクできるぐらいの。ちょっと努力すれば日本征服できるよ」

と笑った。

一一日本征服って、何だよ。

わけもわからず、将はあいまいに笑った。

「篠塚さんの言うとおりよ。……ま、無理強いはしないけど。よかったら今後、バイトしにこない？今日のよりもっと楽しいお仕事まわすわよ」

橋本はウインクした。

「まあ、バイトだったら……」

うさんくささを払拭できない将は、歯切れも悪い返事しかできない。

篠塚は将の撮影が終わると、そのまま自分の事務所に帰ってしまった。

「いち早くチェックしたい」と言っていた。

将は橋本社長と、再び女性の注目を浴びながら、元の現場に戻った。

戻ってきた将を見て、美智子が

「お疲れさまです！」と声をかけてきた。

何もかも知っているように、ニコニコしている。

午前のヤラセ部門は終わりらしく、皆で食事をすることになった。

大悟はすっかりスタッフと打ち解けて、カメラマンや助手の人に仕事のことをあれこれ聞いては、興味深げにうなづいている。

そんな大悟の様子に、将は誘ってよかった、と心から思った。

二人は、その場で謝礼として1万円ずつもらった。

時給換算すれば、この間より割りは悪いが、それでもラクだったせいか大悟は満足そうだった。

大悟は、帰り道の電車の中、将にポツリとつぶやいた。

「俺も、頑張らないとな」

将はつり革を持ったまま、大悟の横顔を見た。

「明日からちゃんとした仕事を探すよ」

大悟は、窓の向こうの景色をまっすぐに見つめていた。

専門技能を持って働く人たちは、大悟に新しい活力を与えたらしい。

将は、ただ「頑張れよ」と言った。

将も……大悟の立ち直りを喜ぶだけでなく、ちゃんとした自分の将来を見つけなくてはならない。

何をしたらいいのだろうか。

ため息をついた将は、電車の中の家族連れに目がとまる。

土曜の今日は、家族連れも多い。お父さんと、お母さんと、子供。幸せそうだ。

ふと聡を思い出す。

聡は……自分に何をのぞむだろうか。何をやってほしいだろうか。

逆に。やりたいことがない将は、聡がのぞむことなら何でもやれる、と思う。

聡次第で将は、何にでもなれる。聡を思った将は腹の底に温かい力がわいてくるのを感じた。

駅を降りると、

「今日は、アキラ先生の家に泊まってこいよ」

と大悟は微笑んだ。

「だけど、お前、またパチンコ……」

「しないよ。安心しろよ。俺はもう、大丈夫だから」

心配する将の肩を、大悟は、ポンと叩いた。そして

「今までずっと付き合わせて悪かったな。……行ってこいよ」

と笑顔で将を促した。

このとき、将は、大悟が本当に立ち直ったことを疑わなかった。

だが、世間の厳しさの前に、さらに大悟が打ちのめされるのに時間はかからなかった……。

182◆欲情

「将の誕生日なのに、悪いわ」

将がホテルを取ったことを伝えると、聡はそんな風に答えた。

聡の部屋で、二人で作った夕食を囲んでいる。

ようやく大悟が立ち直りの兆しを見せてくれたこともあり、週末だけ聡の恋人としてふるまえる将は、モデルのバイトが終わると、聡の部屋に直行した。

「何か美味しいものを食べに行こうか？」

という聡に、将は首を振った。

「アキラがつくったものが食べたい」。

だから、久しぶりに二人で買い物をし、一緒に台所に立って、料理をした。

山梨で教わった関西風のすき焼きがテーブルの上にある。

初夏の陽気に、すき焼きは少し熱すぎて、ビールが進む二人だった。

「俺が泊まってみたかったんだ。それに、ホテルだったら、思いっきり声出せるでしょ」

と将は悪戯っぽく笑った。

2月に聡とその寸前までいったとき。

聡は快楽に押し流されそうになりながら、それでも声を立てるのを我慢しているのを将はわかっていた。

それは、コーポの壁ごしに、淫らな声が聞こえてしまうことを恐れて、ということもわかる。

かといって、将の部屋には大悟がいる。

「もー。エロいことばっかり」

プーッと膨れるふりをしながら、聡は将の気遣いがわかっている。

声のことだけでなく、『その後』学校で会うことを将なりに考えて、非日常を用意してくれたのだ……。

聡が明確にOKしなかったのにもかかわらず、いつのまにか、聡が来週の土曜日に将とついに結ばれるのは二人の間に周知として横たわっている。

聡自身も、いつのまにか、そのつもりになって、期待している自分

がいることに気付いていた。

本当に久しぶりに、将は聡と一緒にベッドに横たわった。

瑞樹が新幹線に飛び込んだ日以来。……それを思い出した将は、胸が痛んだ。

悲しみにくれるあまり酒やパチンコに溺れる大悟を見ている間は、そっちに気をとられて気付かなかったが、将の罪や責任は決して消えていないのだ。

じわじわと湧いてくる自責の念が恐くて、将は聡の体を抱きしめた。

「将……」

聡もしがみついてくる将を抱きしめた。

もう明日になっている。将が18歳になるまであとまる3日、72時間。

聡は熱くまとわりつく将を抱きしめながら、暗くなりきれない空間に視線を浮遊させる。

土曜日の深夜は、まだどこからともなく、賑やかさが漂ってくるようだ。

来週の今ごろは、二人は……結ばれているんだろうか。

走り来る未来予想は、聡の体をひどく敏感にした。

Tシャツごしに密着した将の肌でさえ……思わず吐息がもれそうになるほどの快感だ。

力を込めあうたびに、乳房がぎゅうっと締め付けられる。

聡は声をたてそうになるのを堪えるために、将に話し掛ける。

「将、来週のホテル代……私が払うよ」

こんな風に抱きしめあっている二人には、両極端といっていいほど不似合いな経済的な話題。

すると将は暗がりの中で、聡の顔を見つめた。白目が青く光っている。

「そんなこと、気にするなよ。アキラ」

将は再び聡を抱く腕に力を込め、足を擦り合わせる。

将の足と擦り合わせた聡の足はその付け根に、期待のような快感をもたらした。

……今すぐ迎え入れられるほど濡れている。

聡は雌の自分を自覚し恥じたが、将の抱擁から逃げることはできな

い。

ただ、噛み締めるように一人、快感をひた隠しにしている。

上気した頬を隠すように俯いたのを将は誤解したのか、聡を安心させるように

「俺、最近、儲かってんだから、株」

と付け加えた。そんな明るい口調も、聡には気恥ずかしかった。

自分一人で欲情しているのではないのか。

１０代の男との情交を想像して濡れる自分は……普通よりひどく淫乱な女なのではないのか。

「楽しみだな、来週が。今週は処理すんのやめとこ」

将がふざけてそう言ってくれなければ、聡は救われなかった。

おかげで、

「もうっ」

と呟いて、将の胸をゲンコツで軽く叩くことで、淫らも、それを責める自分も、なんとか押さえ込むことができた。

二人とも、こうやって抱き合いながら、来週のために、と自分を抑えていたのだ。

それがわかると、なんだか可笑しくなった。

そのまま聡は、健全さをとり戻そうと

「将、来週進路相談だけど、どうするか決めた？」

と教師モードを取り出しながら、将に向き直った。

「アキラは俺に、どうしてほしい？」

と将は訊き返してきた。誤魔化すために質問したのに、意外にまじめな口調で返されて聡はとまどった。

「将は、何をしたいの？」

「……それがわからないから、アキラに訊いてる」

言いよどむ聡に

「教師としてでもいいから、教えてよ。俺、何したらいいかな」

と将は食い下がった。

一方『教師』という言葉に、聡の中の雌は引っ込んだ。

――将は何を生業とすべきなのだろう。

聡は、将の腕をほどいて、暗がりの中にぼんやり浮かぶ将の顔を見つめた。

よく整った鋭い目付きの青年の顔は、このような至近距離で見ると、甘い顔になる。

こんな目付きの青年は……人に使われるのには向かないだろう。

と聡は一瞬思ったが、すぐに考えを翻す。

なぜなら、この年頃の他の子にしても、『勤める』のに向いてそうな子などそうそういないから。

みんな『勤め』に向いていない自分を、型にはまるように変形させて働いているだけなのだ。

「わからなかったら……とりあえず大学に行っておけば?」

教師の答えとしてはあまりよいものではないことは、承知の上で聡はそういった。

しかし、先を決める猶予としては、おおむね有効だと思う。

「大学に行きながら、いろいろバイトを経験してみるのも、いいと思うよ」

これは聡の経験から出た本心だ。

生活のためにバイトをすると、抜けられなくなる恐れがあるが、大学に行っている間に下っ端として採まれるのはよいことだ。

特に将のように、恵まれた家に生まれて、プライドが高く、かつ苦労しないで金を稼いでいるような子はなおさら。

それを将に伝えると

「ええー、俺、苦労してるぜー」

将は暗がりには大きすぎる声で抗議した。

「一生懸命、データ探して、考えて。そんで投資してるんだぜ。損することだってあるし」

「でもさ、自分で汗水たらして、物をつくったり、売ったり、サービスしたりしてないでしょ。本来働くってそういうことなんださ。本質を若いうちに勉強したほうがいいってば」

「アキラがそうしろっていうなら、俺はそうするけどさ……」

将は仰向けになって天井を見た。

ちょっと説教くさかったかな、と聡はそんな将を見つめた。

「でも、将がやりたいことをやるのが一番いいんだからね。今のは、何もなかったら、の話」

聡は言い訳のように付け加えて、仰向けになった将の上に上半身を乗せた。

将が好きだといっていた体勢だ。

だけど、そんな聡のほうを見ずに、将は天井に視線を向けたまま何かを考えているようだ。

「将？」

呼びかけにようやく、将の視線は聡の瞳に戻ってきた。

「……アキラ、俺さ」

息継ぎのように一呼吸置いて……一瞬のためらい。

しかし思い切って言葉を一気に吐き出す。

「俺、芸能プロダクションにスカウトされてるんだ」

183◆義母

「俺、芸能プロダクションにスカウトされてるんだ」

聡は驚いたが、将の上に乗せた上半身は動かさなかった。

「将が？」

聡の問いに将はうなづいて

「美智子さんの雑誌に出たのを、プロダクションの社長が見てて、それで」

と言いながら、自分の上に乗った聡の背中を無意識になでた。

「で、どうするの？」

聡もほとんど無意識に訊き返す。

無意識ながら……そこには、将がいなくなる危機感を感じ取っていた。

「まずは、バイト程度って考えてるんだけど……アキラはどう思う？」

「学校は……？」

芸能活動といえば、社会人と同様だから、学校に行けなくなることも当然あるだろう。

「うち、ポイント制だから、何とかなると思う。……それよりアキラはどう？反対？」

聡は、将の胸の上に自分の頬を押し当てた。

将の鼓動が聞こえる。ゆっくりとしている。

何の危機感もなく、将にとっては単に『バイトに誘われたがどうしよう』程度の質問らしいことが、拍動からわかった。

聡は首だけ将のほうに向けた。

枕に頭を預けた将は、二重顎の変な顔になっている。

それを見て思わず聡は微笑みそうになるが、笑いを引っ込めた。

将のそんな顔を知るのは聡だけだ。

そして考える。将は……たぶん芸能界に向いているだろう、と。

弁当屋にいたときから、『このコだったらモデルもできるだろう』と思っていたし、負けん気が強い性格も競争社会に向いているだろう。

だけど、将が芸能界に入るということは、二人の仲の終焉を意味するのではないだろうか。

聡の胸のうちが、触れ合った皮膚から伝わったように

「恋愛禁止ってわけじゃないって社長は言ってた。一般人相手だったらスキャンダルにもならないって。……てか、スキャンダルになるほど売れるわけ、ねーけど。バイト感覚だし」

将はそういって、自分の上にいる聡を抱きしめた。

「そうね……」

そう答えつつ、聡は予感していた。

将は、芸能活動を始めるやいなや、たぶん売れっ子になる。

将の話だと、芸能プロダクションの社長自ら、将に会いに来たらしい。

つまり、目利きから見ても将は輝いているのだ。

そして恐れる。自分の届かないところに行ってしまう、と。

もし、将がスターになったら。担任と恋愛していたことが世間にバレたら……聡は身震いした。

一瞬震えた聡を感じた将は

「アキラ……反対？」

と枕から頭を起こして、聡の顔をのぞきこんだ。

聡は黙って将の顔を見つめた。暗がりだけど、目が慣れたのか、その顔立ちははっきりとわかる。

スターになる、というのは将にとっては素晴らしい成功を意味する。
それに、普通ではできない、貴重な経験を積むこともできる。
それは……、将にとって幸せなことではないのか。
聡は即座に首を振った。
そして微笑みをつくる。
「将がやりたいんだったら、いいと思うよ」
しかし、その顔を続けられなくて、聡は将の胸に頬を押し付けて、
「がんばってみたら。応援してる……」
と呟いた。
将の未来を邪魔する権利はない。
より将が人生で成功するために、聡はいつか、身を引くことになるのかもしれない。
将に密着している、うつ伏せた乳房から伝わる快感は、さっきのように甘い期待ではなく、せつなさを聡にもたらした。
将は、そんな聡の背中を撫でながら、それは聡の本心ではないことはわかっていた。

だけど、将がどんな方向に進めば、聡を幸せにできるのか。

その答えは依然わからないままに、将は聡の顎をあげて、唇を重ねた。

日曜。高級住宅街にある、鷹枝家では久しぶりに休日を取れた康三がソファで寛いでいた。

つい今しがたまで、食後のコーヒーを片手に新聞を読んでいたのだが、妻の……将には義母にあたる純代の報告に、思わず渋面をつくっていた。

先週、芸能プロダクション・ダイヤモンド・ダストから、将を芸能界に入れたいという勧誘を受けたことを、純代は康三に相談したのだ。

わざわざ将の家を訪ねて橋本社長は言った。

「社会経験だと思っていただければ」。

そのプロダクションについて、裏世界とのつながりや、何かたくらみがないことについては、すでに毛利が調査済みだ、とも純代は付け加えた。

「お前は、どう思うんだ?」

康三は純代に訊いてみた。

純代は、いったん目を伏せたが、まっすぐに康三を見て

「させてみるのもいいんではないでしょうか」

と答えた。

「ちゃんとしたところみたいですし……」

と付け加える。

純代の本心は、将を通り越えて、実の息子の孝太のことを考えていた。

鷹枝の後継ぎは、依然、将である。

しかし、純代は親心として、孝太に跡を継がせてやりたい、と考えていた。

純代は将が憎いわけではない。

鷹枝の後継ぎとして、今も大切な息子だというのはいつも自分に言い聞かせている。

康三のもとに後添えとして嫁してきた純代は、とても誇り高い人間である。

自らも戦後の混乱期に総理大臣を輩出した名家の出だった。

先妻の子である将をしっかりと育てることは自らの義務であると思っていたし、実の子の孝太と分け隔てなく育てることが、世間の規範としてあるべき家の嫁として当然の務めだと自覚している。

あの爆破事件さえなければ、純代は、先妻の子である将を分け隔てなく立派に育て上げた後妻として世間から尊敬されるはずだった。

あのとき……純代は単に恐かったのだ。

柱にはさまって動けない将を助けなくては、と思っているのに。

命の危険を感じた純代の本能は、自分の子だけを連れてまっさきに逃げ出してしまった。

しかし安全なところまで来て、ハッとした。

これがもし、自分の腹を痛めた子だったら。置いてきただろうか……。

案の定、あれ以来、道を踏み外した将に、純代は何度も向き合おうとしたが、将は二度と純代を信頼することはなかった。

そして非行に走り、殺人まで犯してしまった。

純代は……できればだが、将自身が後継ぎを辞退すればいい、と思っていた。

康三が、優秀な元同僚の妻との間に出来た将に、今も期待をかけて

いるのはわかっている。

だが、もう将は手遅れだと純代は思う。

それよりは、名家の血をも継いだ孝太のほうが、後継ぎに相応しいと思うのは純代の贔屓目だけではあるまい。

将が他の道を見つけるなら、なお結構なことだと思ったのだ。

「そうか」

康三はジノリのコーヒーカップに残ったブルーマウンテンを飲み干した。

純代の考えは見抜いている。

将が、このまま立ち直らないなら、純代の願いどおりにしてやるのも悪くないと思う。

ただ、孝太は……政治家として人の上に立つには、優しすぎる。

康三は、厳に言われるまでもなく、自分の息子の素養を冷静に判断していた。

ソファに寄り掛かる。

疲れがそのまま、ずっしりと天から降りてきたかのように、康三の体はソファの背もたれに沈んだ。

――芸能界か。

康三は目を閉じた。

大泉総理の長男が、俳優として活躍しているのを目に浮かべる。

最初は若さばかりが目立った彼だが、近頃風格がついてきた、と政治家仲間の中でももっぱら評判だ。

悪くはないのかもしれない、と康三は考える。

芸能界に入れてしまえば、将はプロダクションと衆目の監視を常に受けることになる。

そのほうが、いつぞやの殺人事件のような問題を起こしにくくなるには違いない……。

しかし。

総理の息子は、一応一流大学を卒業している。

将はといえば……。康三は考えると頭を抱えた。

担任教師と相性がいいのか、どうにか3流高校を卒業はできそうだが、総理の息子のような大学にはとうてい進めないに違いない。

それにもし、再度問題を起こせば……それは隠し切れないほどの大

問題になる。

そしてそれは、総裁選を来年に控えた康三の足を引っ張ることになるだろう。

「ふむ……」

康三はソファに寄りかかった背中を引き剥がすように起こした。

そして息を深く吐くと、おごそかに純代に伝える。

「いいだろう。ただし、身元については一切公表するな。それが条件だ」

１８４◆世間の厳しさと甘さ１

メールの着信音が鳴って、大悟は求人誌の中に転がっていた携帯を急いで取り上げた。

そしてため息をつく。将からだった。

『今日、バイトで遅くなる』

との連絡。大悟は携帯を床に置いた。

火曜日も夕方になりつつある。

一念発起して日曜日から就職活動を始めた大悟だが、……きちんと就職するのがこれほど難しいとは思わなかった。

５月で１８になる大悟は、そろそろ不安定な日雇いのハケンなどではなく、できるものなら正社員として働きたいと思っていた。

だが、中卒の大悟に、正社員の求人は皆無といってよかった。

１年足らずではあるが自動車部品工場で働いた経歴をもとに、あらゆる求人誌、そして将のパソコンでネット検索してみたが、めぼしいものは、ごくわずかだった。

そもそも履歴書を書くこと自体が困難だった。

大部分は問題なく書ける。だが……未成年の大悟は、保護者の欄を埋めるのに躊躇した。

嫌々ながら愛知の親類を書いて臨んだ今日午後の工場の面接だが、あまり芳しい結果ではなかった。

まず、

「どうして高校にいかなかったのか」

と訊かれた。

もちろん、鑑別所に入っていたから、などと答えるはずはない。ただ、

「親の経済的な理由で」

と答えた。

「今は、愛知に住んでるの?」

「いえ、東京の友達の家に世話になっています」

そう答えた段階で、面接官の視線が斜めになった。

何も言われなかったが、すべてを見透かされている気がした……。

メールの着信音が再び鳴った。大悟はあわてて置いた携帯を拾い上げた。

今度こそ、大悟が待っている連絡だ。

そして……さっきより大きなため息をつく。

不採用だった。

――まあいい。明日も面接がある……。

という希望と

――明日も同じような結果じゃないのか。

という絶望が入り混じる。

まだ希望と絶望は5分5分で大悟の心にマーブルをつくっていたが、心の奥底から泡のように出てくる考えがあった。

自分はひょっとしてスタート時点でひどく損をしているのではないのか。

泡はまだ、小さなものがぷくっと1つ出てきたに過ぎない。

大悟の表層心理は、いまのところ、それを必死で無視している。

将はM区にある、芸能プロダクション、ダイヤモンド・ダストに来ていた。

制服のままでいいと言われていたのでそのままだ。

今日は土曜ほど暑くないのと、まがりなりにも会社というところに来るので、いつものようにだらしない制服の着こなしは自粛している。

瀟洒なガラス張りの１０階建てビルの８階から１０階がプロダクションである。

８階の受付で名前を告げると、すぐに社長室に通された。

「あら～、いらっしゃーい。制服姿だとちゃんと高校生なのね」

橋本社長は、あいかわらずのオネエ言葉で椅子から立ち上がって歓迎してくれた。

そしてなにやら社内に電話をかけている。

その直後に、

「失礼します」

と女性が一人入ってきた。

黒いパンツスーツを着て、髪を後ろで１つに束ねている。

眼鏡の奥は少しキツイ感じの一重瞼でいかにもキビキビした印象だった。

「こちらが、鷹枝将くん。芸名はＳＹＯのまんまでいいわ。将くん、アナタの担当マネージャーの武藤さん」

「武藤です。よろしくお願いします」

武藤は低めの声で挨拶した。年の頃、３５～６ぐらいだろうか。

将は、よくわからなかったので「こんにちは、よろしくお願いします」と挨拶だけしておいた。

「武藤さんはね、とってもヤリ手の敏腕マネージャーなのよ。だから将くんも安心して彼女に頼ってね。で、武藤さん、今日の予定は？」

社長は椅子に腰を戻しながら武藤に訊いた。

「さっそく、コンポジ撮影に入ります。１スタと篠塚さん、真理ちゃんを押さえてます」

「よく篠塚さん押さえられたわねえ……。たかがコンポジ撮影に」

社長は目を丸くした。

「先日の撮影で、とても気に入ったようでした。写真集撮りたいって言ってましたよ」

「えー！写真集っ！」

社長は驚いて椅子から立ち上がった。

「ギャラが恐いですけどね」

武藤はクスッと笑った。冷たい感じの笑顔。将はクールビューティという言葉を思い出した。

「コンポジ撮ったら、さっそく『ばくせん2』のオーディションに出すつもりです」

「えっ、『ばくせん』？ドラマの？」

思わず将は目を丸くした。

博徒女教師が不良生徒を導いていくという単純なストーリーながら、人気女優と人気アイドルのキャスティングもあって平均視聴率２５％以上をマークした、お化けといっていいドラマだ。

「そうよ。7月から『ばくせん2』が始まることが早くも決まってるんだけど、将くんにはその生徒役オーディションを受けてもらうわ。たぶん受かるから心配しないで」

と橋本社長は笑った。

「え、でも。俺」

テレビなんて聞いてない。と言いかけた将に

「その他大勢の役だから、大丈夫よ」

「……なーんだ」

アハハ、と将は照れ笑いをした。主演の中田雪絵とからむのかと一瞬想像してしまったのだった。

「よ！来たな！」

９Ｆにあるスタジオに入ると、篠塚が手をあげた。今日も先日と違う形の変わった眼鏡を掛けている。

傍らに、派手な若い女性と、お洒落な感じの男性がいた。

「こんちわー！」

先日のこともあり、将はリラックスして元気に挨拶した。

「このたびはお世話になります」

武藤が篠塚に深々と頭を下げた。

篠塚のような一流フォトグラファーがタレントのコンポジを撮影するためにやってくるのは異例中の異例なのだ。

「こちらは、ヘアメイク兼スタイリストの真理ちゃん、アートディレクターの坂井さんよ」

「よろしくお願いします」

「将、髪は切ってもいいわよね。校則はたしか茶髪ＯＫだったし、役柄にあわせて一段明るくしましょう」

武藤が将に振り返った。呼び捨てにされて、一瞬、将はとまどった。

が、すぐに、「ハイ」と素直に返事した。

聡や友達にはいつも呼び捨てにされて平気なのに、会ったばかりの女性に『将』と呼ばれたのに違和感を感じたのだった。

だけど、すぐに芸名で呼んでいるのだ、と理解した。

「今の色と長さでも撮影しておきたいなぁ。貴公子っぽいし」

と篠塚がストップをかける。それが発端でクリエイター同士議論になった。

それぞれが、将を見て、瞬時に撮影したいイメージを思い浮かべたのだ。

議論している3人を見て、将は武藤にこっそり

「あの〜、コンポジってなんですか?」

と訊いた。

「ああ……。あなたのプロフィールにつける写真のことよ。売り込むための重要な資料になるから頑張ってね」

と冷たい一重瞼でにっこりと笑った。そういう顔をすると、なかなか美人なお姉さんだ。

「ハァ」

なんだか、自分を置いてけぼりにして、コトがどんどん進行していくような気がする。

将は、スタジオの窓辺から見える夕景に視線を移した。

夕陽は反対方向にあるらしい。足元に広がる暮れなずむ街に、将は少し心細く聡を思い描いた。

将は、明日１８歳になる。

185◆誕生日当日

「うわっ、もう11時？」

篠塚が腕時計を見て言った。ようやくコンポジの撮影が終わったところだ。

5時頃から開始したので、6時間も掛かったことになる。

さまざまな衣装、ポーズでの撮影は面白かったが、将はかなり疲れた。

途中で小休憩があり、差し入れがあったが、お腹もすいていた。

ちなみに結局、髪は切らずにそのままで撮影している。

「みんなでどっかでメシ食っていきます？」

アートディレクターが提案したが、

「将は明日も学校があるんでしょ。私が送っていくわ」

とマネージャーの武藤が却下した。

将と武藤以外のスタッフは「お疲れ様ー」と言い合いながら、そのまま夜の街に繰り出すようだった。

「将、お疲れ様。疲れたでしょ。すぐ車をまわすから待ってて」

武藤はクールな顔の中に将への気遣いを見せた。

「ハイ」

将は素直に、通用口の前で待つ間に、携帯を開く。

聡の待ち受けに２３：１８の表示。もうあと４２分で明日、つまり１８歳の誕生日だ。

――そうだ。

このまま、聡の家に行こう。

自分の思いつきに将は疲れを忘れて元気になった。

「お待たせ。さ、乗って」

武藤が運転する車が着いた。シルバーの高級国産車だ。

助手席のドアを開けた将は、

「あなたは後ろ。大切なタレントなんだから」

と促される。よく意味がわからなかったが将は素直に後部座席に乗りなおした。

後部座席の窓は、スモークガラスになっていて外から見えにくくなっているのがいかにも芸能プロダクション仕様だ。

「お腹すいた？」

「いいえ、大丈夫です」

本当はお腹が空いていたが、寄り道するよりは一刻も早く聡の部屋に行きたかった。

びっくりさせたいので、敢えてメール連絡はしないことにした。

「１８５センチ、６６キロ。ダイエットの必要はないけど、もう少し筋肉をつけたほうがいいかもしれないわね。週２回程度ジムのスケジュールを入れていいかしら」

「ハァ」

バックミラーに、武藤の眼鏡のあたりが映っている。やや上向きの切れ長の目が将のほうを見ている。

誰かに似てるなあ、と将は思った。

「あ、そうだ！」

思い出した将はすっとんきょうな声を出した。

「武藤さん、スケートのイナバウアーの人に似てるって言われません？」

「えー、何よ、急に」

武藤は、クールな顔と言葉つきを崩した。

「似てる、絶対似てる、そっくり！」

「もう、スケジュールと関係ないでしょ！」

と、たしなめる声が少し大きくなりながらも、アクセルさばきは乱れることはない。

大切なタレントを乗せている自覚があるからだろう。

「……ところで、将」

「何ですか」

「学校は転校することになるからね」

「……え！」

何でいきなり。

将は一瞬狼狽したが、シートから身を起こし、運転席の背もたれに向かってはっきりと

「嫌です」

ときっぱり言った。

今度はそれに武藤が驚いたようだった。幸い信号待ちになり、振り返って

「何で」

と聞いてきた。切れ長の目が見開いてキツイ印象になっている。

将は、武藤を一瞥すると

「そっちこそ、何で、転校しないといけないんですか」

と訊き返す。

「だって、身元を隠すのが、あなたがウチに入る条件でしょう」

武藤の口調は、すでに落ち着いている。

「なんだソレ」

「あなたの保護者から言われたのよ」

「カンケーねーよ」

将は乱暴に言い捨てると、後部座席のシートにふんぞりかえった。

保護者＝父関係、が話題に出て、思わず将の言葉は崩れてしまっている。

「だって、学校のお友達や先生は、アナタの身元を知ってるんでしょう？」

「俺の知ったこっちゃねー。とにかく俺は転校は絶対イヤだ」

そのとき、信号が変わった。

武藤はアクセルを踏みながらバックミラー越しに将を見つめる。というより睨むようだ。

「どうしてそんなに転校が嫌なの？」

「……」

将は、バックミラー越しの武藤の視線を避けるように、窓の外に視線を移した。

夜の中に、街の灯が流れていく。

聡がいるから。聡がいなけりゃ学校なんかいかない。……とは言えない。

「身元なんかさ、口止めしとけばいいじゃん」

将は学校に執着する理由のかわりに、対応策を出した。

「バカね。口止めなんか誰が守るもんですか。ちょっと小金を積まれただけで軽くしゃべるわよ」

「フン」

将はそっぽを向いたまま

「とにかく、絶対転校しろっていうなら、俺はこの話降りるぜ」

と言い放った。

武藤は、『なんだこのデカイ態度は』と思った。

本来だったら『アンタの代わりぐらいごまんといる』とも言いたいところだ。

だが、社長強力推薦の新人の将である。ここでヘソを曲げられてしまったら武藤の責任になってしまうので口をつぐんだ。代わりに

「わかったわ。転校の件は少し考えるわ」

とたしなめておいた。

そして、社長から聞いた彼女、というのは学校の中にいるんだな、と確信していた。

聡は、風呂からあがって一息ついていた。

もうすぐ将の誕生日の日付になる。

土曜日に泊りがけのデートをするのは決まっているけれど、聡はその瞬間に将にメールを送ろうと、メッセージを考えていた。

しかし、文面をどうしようか、と頭を抱えた。

ふと、思いついて、将が聡の２６歳の誕生日にくれたカードを取り

出す。

雨と涙で滲んでよれよれになったそれには、将から聡への愛が詰まっていた。

――宇宙一愛する聡が世に生まれ出たこの日に感謝、か。

もらったときは、少しクサイかも、と思ったが、こうしてみると、将の聡への愛情表現はなかなかだ。

それ以上のものは思いつかないかもしれない。

そういえば、将の先日の実力テストの成績は、現代国語と小論文だけ飛びぬけてよかった。

この2つだけだったら、どこの大学を受けても問題ない実力だった。

――どうしよう。

聡は悩んだ。文面に悩む頭は、寄り道をしようとして、マグカップのほうに聡の注意を向けた。

そうだ。将は誕生日にマグカップを呉れたんだった。

聡も、せめて土曜日に間に合わせて、何かプレゼントを用意するべきではないのか。

――買う暇あったっけ。

今週、放課後はずっと進路指導で埋まっている。

だけど、5時に終了してダッシュで電車に乗れば、少しは見る時間があるだろう。

木曜日か金曜日に、聡は将のプレゼントを買うことにする。

そして、再び文言に戻る。

「うーん……」

聡は思い浮かばなくて、ベッドの上に寝転がった。

――私は、将が生まれるのをずっと待っていた……年増っぽいなあ。

――将に出会えて幸せです……月並みだなあ。

もうあと3分しかない。

聡はゴロゴロとベッドの上で寝返りを打ってじたばたと足を動かした。

……ピンポーン。

聡はハッと身を起こす。こんな夜更けに誰?

警戒して足音を立てないように、玄関にしのびよる。

インターフォンの画像を確かめようとしたとたん、ドアがいきなり開いて、聡は熱いものに抱きしめられた。

近すぎて見えないけど、懐かしい匂いはまぎれもなく将のものだ。

「アキラ！」

「……将！」

もはや、どうしたの、などとは訊かない。将は聡に逢いに来たのだ。

二人は玄関先できつく抱きしめあった。

「いま、何時？」

ハッとして聡が訊いた。

つけていたテレビがＣＭから番組に切り替わった。

「ちょうど１２時だよ」

将は自分の携帯を開いて確認すると、聡の瞳を見つめた。

聡は、将の顔を両手で包むようにすると、自分のほうに引き寄せた。

そして聡のほうから、将の唇に吸い付く。

「将……、１８歳の誕生日おめでとう」

それを言えたのは、長い口づけの後ようやく、だった。

186◆誕生日当日2

――やっぱりダメだったか。

大悟は携帯を握った手をダラリと下げた。

水曜日。午前中にあった面接の結果が今、携帯にもたらされたのだ。

これで2件目の不採用。

たった2件ともいえるが、そもそも中卒の大悟が応募できる求人は少ない。2件でも大悟の絶望は深かった。

ため息をつくと、大悟は財布の中身を確認した……もう3000円を切っている。

土曜日にモデルのバイトでもらった1万円だが、求人誌、履歴書、交通費、昼食代などで羽が生えたように飛んでいってしまった。

また、しばらくハケンにでもいかないと、もたないな。

そう思ったやさきに、折りよく、ハケン会社から連絡があった。

「明日、菓子工場で人が足りないんだけれど、島くん、これないかな」

と頼まれる。ちょうどいいタイミングではある。

「ハイ……行きます」

と即答した大悟だが、電話を切ったとたん、再び深いため息をついた。

所詮……自分は日雇いのハケンぐらいしか仕事がないのだろうか。

ハケンも今だけで考えれば悪くはないが、今日は菓子工場、明日は倉庫でダンボール運び、その次はコンビニの弁当詰め、文房具の検品……と毎日その場その場で仕事が違う。

その場の人出不足をまかなうための人材。

つまり、将来への積み重ねのない仕事である、ということを大悟はわかっている。

できれば、少しずつでも確実に自分の能力を積み上げることができるような仕事がしたい……だけどそれすらもダメなのだろうか。

まだ、就職活動を始めてたった4日なのに世間の厳しさに大悟はうなだれていた。

そこへ、いきおいよくドアが開く音がした。制服姿の将だ。学校が終わってまっすぐ帰ってきたらしい。

「あ、大悟、いたんだ」

将はブレザーを脱ぎながらリビングのソファにいる大悟に声をかけた。

なんだか浮き足立ってみえるほど楽しげにこちらに歩いてくると、

冷蔵庫をあけてミネラルウォーターを取り出す。

「俺さ、すぐ出かけるから」

「どこに」

「アキラと二人で、俺の誕生パーティだよん」

将はグラスに注いだ水を一気に飲むと、白い歯をむき出していかにも嬉しそうに笑った。

「そっか、将、今日誕生日だっけ……」

大悟はつぶやくと、「おめでとう」と寝室に入った将に言葉を投げる。

将はくぐもった声で「サンキュ」と答えた。なにやら着替えているらしい。

「車でいくの？」

大悟は着替えている将に話し掛けた。

「いや、ワイン飲むから今日は電車」

「また、泊まってくるの？」

昨日も、将は聡の部屋に泊まってきているから。

「いや、今日は、こっちに戻るよ」

答えながら着替えた将が出てきた。

洒落た細身のパンツに細身のジャケットからは黒いストライプのシャツがのぞいている。

いつものストリート系と違って、かなり高価な服だというのは、大悟にもわかった。

そんなふうな私服を着ると、本当に高校生とは思えない将である。

「じゃ、行ってくるよ」

うかない顔で見つめている大悟に将は気付かずじまいだった。

「じゃあ、改めて将の１８歳の誕生日に乾杯」

「乾杯」

聡と将はシャンパンフルートを傾けた。

将の誕生日である水曜日も１９時をまわっている。

二人は、初めてデートした高級フランス料理店に来ている。

あのときと違うのは、二人とも塩で汚れていないところと、個室を取っているということだ。

個室は、メインダイニングより一段落ち着いた色調に暗めの照明で、より二人の親密さが増す。

昨夜、突然聡の部屋を訪れた将は、当然のように聡の部屋に泊まっていった。

だけど、抱き合って眠っただけで、一線はあいかわらず越えていない。

土曜日の楽しみを増すかのように、ただ抱きしめあって、お互いの感触だけを確かめ合う。

そのとき、聡が提案した。

「今日が、将の誕生日だよね。もし今日バイトがないなら、二人で乾杯しない？」

将はもちろん賛成した。

聡は近所の将も気に入っている気軽なイタリア料理店を提案したのだが、将はせっかくだから、と、あの初デート以来のこの店を推した。

「高いんでしょ、あそこ。私、将におごりたいけど、払えないわ……」

と躊躇する聡に、将は

「じゃあさ、シャンパンだけおごって」

と微笑んだ。本当は全額将が払ってもいっこうにかまわない。

だけど、聡が自分を祝ってくれる気持ちが嬉しいのでそういうことにしたのだ。

聡も今日は、学校からいったん部屋に帰ってお洒落してきている。

桜色にチョコレート色のアクセントがついたワンピースは、いつも地味で固いデザインの服を着ている聡とは違う印象だ。

でもそんな甘い色使いもよく似合っている。

すでにシャンパンで、服よりも濃いピンク色に頬が染まっているのが可愛い。

将は、そんな聡を見つめた。どんなに見つめても見飽きない。

これからもいろいろな聡を見つめていたい。

将はふと、昨日、マネージャーの武藤にいわれた転校の件を思い出す。

……転校なんてとんでもない。

「何？」

聡が将の視線に気付いた。

「アキラ、ずっと、一緒にいような」

将は優しい……どこか寂しげな目で聡を見つめた。

「え、どうしたの？急に」

聡は微笑んだままだが、お洒落して食事を前にして、という状況で、そういうプライベートなセリフにドギマギしていた。

そういえば個室だったことに、さんざんときめいた後から気付く。

「卒業したらさ。結婚しようぜ」

将のほうは、すでに個室を堪能すべく、大胆な言葉を並べていく。

１８になったら、と言っていたのだが、教師と教え子に戻ってしまったので、卒業したら、に延期されている。

聡はいたずらっぽく笑うと

「卒業したときも、将の気持ちが変わってなかったらね」

と答えた。冗談のつもりでいったのに、何故か聡は心にちくっと刺さるものを感じた。

小さな痛みを無理やり消すように

「あたしのほうが９歳年上だから、早くおばあちゃんになるわよ。おっぱいだって垂れちゃうし」

聡はそれを冗談にしてしまうと、シャンパンを口にした。

「8歳だろ。いーじゃん。ばあちゃん上等。だいたい女のほうが寿命長いんだからちょうどいいじゃん」

将はいったん冗談に冗談で応酬すると、

「俺の気持ち、変わるわけないじゃん。俺、聡のこと、もう2年近く好きなんだぜ」

真剣な瞳を聡に注ぎ込んだ。

「俺さ、早くアキラと夫婦……家族になりたい。もう、一人は嫌なんだ」

「将……」

「俺、絶対いい夫になる。子供ができたら優しいお父さんにだってなるよ。……聡と家庭をまず大事にしたい」

聡の心に、将の抱えていた寂しさがダイレクトに流れ込んできた。

小さい頃に実母に死なれ、父は忙しく、頼っていた義母には大事なときに見捨てられ。

聡には考えられない寂しさが将に『一人は嫌だ』と言わせているのだろう。

まだ前菜なのに、聡は胸がいっぱいになった。

「まだ、たよりないかもしれないけどサ」

少し照れたのか、将はいったん俯く。そしてもう一度、顔を上げると崩れた笑い顔を聡に見せた。

なんて笑顔をするんだろう。

聡の胸をいっぱいにしたものは、急激に体の中をこみ上げてきて、目に熱いものを溢れさせた。

「まだ1年あるわ……」

聡はあわてて、それをナプキンで拭うと、まっすぐに将に向き直った。

「将は、将の道をまず見つけて。私は、将をいつも見てるから……」

聡の濡れた、しかし強い光を放つ瞳に、将は、ゆっくりとうなづいた。

「少し、歩こうか」

「うん」

食事を思い切り堪能して店を出た二人は、賑やかな通りを歩いた。

デザートは店のサービスでろうそくが乗ったケーキだった。
大きなろうそくが1本を取り囲むように、小さなものが8本。
そこまで全部食べるとかなりのボリュームになった。
もう10時近いにもかかわらず、通りは昼間のように賑やかさである。
ワインの酔いも手伝って、二人とも夢心地だった。4月の冷たい夜風がちょうど気持ちいい。
大通りに差し掛かる。
あのとき、酔っ払った将に寄り添って座った中央分離帯を聡は懐かしく眺めた。
――あれからもう、半年以上になるんだ。
「……ね、アキラ」
「？」
将は肘を聡のほうに突き出した。
「ああ！」
やっとわかった聡だが、

「腕なんか組んでるところを誰かに見られたら大変よ」
と笑いながら将の肩を軽く叩いた。
「チェー」
学校から離れているものの、誰かがいるかもしれない。酔っていてもそれを忘れない聡が、少し憎たらしい。
「ねえ、将。なんか欲しいものある？」
聡がふいに訊いた。
通りに面した店は、まだ開いてるところもある。
どうせプレゼントされるなら、一番欲しいものがいいだろう、と聡はサプライズより実用性を重視することにした。
「だから、アキラだってば」
将はおどけて、歩きながら聡の肩に手をまわそうとする。
聡は、やめてよ、人が見てるわ、と笑いながら
「それは土曜日でしょ。そうじゃなくて、何かプレゼントしたいの、誕生日の」
聡は将を見上げた。
「えー、そんなのいいのに。今シャンパンおごってもらったし」

将は、傍らの聡を優しく見つめ返す。

「よくないよ！あたしマグカップもらったもん」

「何、ギブ&テイク？あれ、そんなにいいものじゃないよ」

「そんなんじゃなくて！」

聡は、将の袖を強く引っ張った。

「あたしね。あのマグカップ見るたんびに、あのときの嬉しさが蘇るんだ。だから、将にもそういう思い出の品みたいなのをあげたいの！」

「アキラ……」

「それに、あたし、あのマグカップすごく気に入ってるんだからね」

聡の言葉に将は、胸が熱くなった。ウォッカでも飲んだときのような熱さに、思わず顔を空に向けた。

東京の空は夜なのに、ピンクっぽい色に濁っている。星などはまるで見えない。

だけど、横に聡がいるだけで、二人で見た北海道の、山梨の、降るような星空が透けて見えるようだ。

「俺……。今すっごく、アキラを抱きたい」

2003

将はつぶやいた。

2004

187◆世間の厳しさと甘さ2

「ごめんね……。誕生日なのに」

将の腕の中で、聡はつぶやいた。

もうすぐ、将の誕生日が終わる。二人は聡のベッドの中で肌を寄せ合っていた。

「気にするなよ……。それより痛くない？お腹」

将はパジャマに包まれた聡の体を抱き寄せて、優しく囁いた。

「……大丈夫」

土曜日が待ちきれなくなり、聡を抱きたくなった将だが、聡はあいにく、まだ生理日だったのだ。

しきりに謝る聡を将は包むように抱きしめた。

「いいよ、明日1時間目から英語だろ。もし、今日したら、明日思いっきり顔に出るだろ。これでよかったんだよ」

と将は聡の肩をさすりながら、優しく言って聞かせる。

枕もとのスタンドが、ベッドを温かく照らしている。

将は、素顔の聡を飽かず見つめた。

こちらを見つめる瞳が熱をもって黒糖飴のように光っている。

スタンドの灯りで琥珀色になった髪がいとおしい顔をふちどっている。

あわてなくても、いい。どうせ土曜日には……。

将は、聡の額に唇をよせると、目を細めた。

至近距離ならではの将の甘い瞳。長い睫。聡も彼を飽かず見つめている。

眠るのが惜しい。夢の中でもこうやってずっと抱き合っていられたら。

二人とも同じことを考えながら、ワインの残滓がもたらすまどろみの中に引き込まれていった……。

結局、将は今日も聡の部屋に泊まることになりそうだ。

木曜日。久しぶりのハケン労働を終えて大悟は心底疲れていた。

今日は菓子工場へのハケンだった。

女の子のハケンも多い行き先だから、楽なことを大悟は期待していた。だが……。

そこで働く者は宇宙服もしくは放射能の防護服を思わせるような白い制服を着る。

靴は借り物だが、皆が借り回したせいか、やけに臭い靴を履く時点で大悟の労働意欲は減退していた。

大悟はやけに暑い、焼き場に連れて行かれた。

むせかえるような甘い香りが『美味しそうないい匂い』だと感じたのは最初だけだった。

髪を包む制帽と、そしてマスクで覆われた顔から見えるのは目のあたりだけ……それがいやにくっきりとした男に、

「この鉄板、掃除してね」

と言われる。口調からどうやら外国人のようだ。

1枚だけでもかなり重い、黒い鉄板にはお菓子のサイズにあわせた小さな窪みが等間隔に空いている。

「ここのゴミを指でとるヨ」

窪みにこびりついた焦げなどを、軍手の指でひっかいたり、なすったりするようにして掃除していく。

力仕事だが単純作業、楽勝だと大悟は思った。

だが、それは最初だけだった。

まだ熱い鉄板を運んで、軍手の指をつかって掃除をし、そして所定の場所へ運ぶ。

それを繰り返しているうちに、だんだん指が痛くなってきた。

焦げ付きをとるのには結構指の力がいる。

中には指のほうが曲がりそうになるほどしつこく焦げ付いたものもあった。

それに、重い鉄板を運ぶのも重労働だ。

大悟が所定の位置に運んだ鉄板に、さっき作業の説明をした外国人が、同僚と笑いながら新しいお菓子用の紙を敷いている。

こっちの作業は楽そうだ。

大悟は鉄板を運びながら、いつか代わってくれるのだろうと期待した。

「チョット」

声がかかって、やっと交代かと大悟は急ぎ足で呼ばれたほうへ行った。

「もうチョト急いでネ」

大悟は脱力した。だが、言われたことはやる、という基本的な責任感が大悟を動かした。

大悟は疲れを意識の外に追いやるように、がむしゃらに働いた。

「熱！」

あまり急いだのか、軍手に覆われていない腕に、鉄板の取っ手が触れてしまった。

じゅっと音がした気がする。

気がつくと大悟の手首には細長い楕円形の赤い痣が出来ていた。

ヒリヒリする。すぐに冷やさなくては……本能が警鐘を鳴らす。

しかし、そんな暇はなさそうだ。大悟は、痛みを無視して仕事を続けた。

ようやく昼休みになった。

大悟は、制服のまま社員食堂の椅子に座り込んだまま、しばらく動けなくなるほど疲れた。

当然食欲はない。昼食代が少なくてすむ、というのを心の拠り所に、しかしまだ午後があと5時間もあると思うとうんざりした。

手首の火傷は水ぶくれになっていた。

その痛みを耐えて、午後も鉄板掃除をする。誰も大悟と交代してくれる者はいなかった。

「ちょっと、そこの人」

勤務時間があと2時間に迫ったところで、ようやく大悟は鉄板から解放された。

かわりに固太りで大柄な年配女性の社員に呼ばれてついていく。

女性とはいえ、マスクの上の目はやぶにらみで、嫌な予感がした。

「このシールを貼って。この見本の通りにね」

とセロファンに包まれた菓子がいっぱいに詰まったプラスチックの箱を運ばされる。

しかし、焼き場よりは涼しいのと、単なるシール貼りが今度の作業ということで大悟は心底ほっとした。

見本と言われた菓子を、大悟は手にとってしげしげと見る。そして注意深くシールを貼り始めた。

女性社員は、そのままシール貼りを大悟にまかせると、太った体をゆすりながら、他のところへ行ってしまったのだが、ようやく1箱分、大悟が終える頃に戻ってくるなり、

「あーあ！」

と声を出した。大悟の顔のすぐそばに、やぶにらみの目がある。

歯槽膿漏だろうか……嫌な匂いがして、大悟は思わず顔をそむけたくなった。

「全然違う！このシールは、真ん中っていったでしょ！もうっ」

え？と大悟は目を丸くした。

彼女は大悟が貼ったシールをこれみよがしに剥がして貼りなおしている。

大悟は見本を見なおした。それには、真ん中より少々上にシールが貼ってあるように見える。

しかし、

『アンタ、真ん中とは言ってないでしょう。この見本のシールは真ん中より上に見えますが！』

と口答えをするほど大悟は子供でもない。

「すいません」

と無難に謝ると、シールの貼りなおしを手伝おうとした。だが、

「もういいっ！こっちをやって」

と同じような新しい菓子のシールを貼るように言われた。

「ここに見本があるから、今度は間違えないようにね！」

――別にさっきだって間違えたわけじゃないのに。てめえがちゃんと教えないからいけないんだろ。

大悟は、胃のあたりがモヤモヤするのを堪えて、注意深くシールを貼った。

すると横で貼りなおしをしながら、また、女は

「あ〜ああ」

と手を出してきた。再び嫌な匂いがマスクを通して大悟を襲った。

「アンタ、ちゃんと見てんの？」

「え？」

「ホラ。これはこう！」

女はシールを逆さまだと指摘した。だが大悟にはさっぱりわからない。

しかし、よく見るとわずかに模様が入っている間隔が違った。

一一上下があるなんて、教えられもしないで、わかるわけねえよ。

大悟のモヤモヤはさらにイガイガと胃のあたりで暴れ始めた。

そのあとも、シールを貼って並べ終わったあとで、

「並べ方が違う！これじゃ数がわからないじゃない」

といきなり怒鳴られたり、片付けとけと言われたので、シールを貼

った後の台紙を捨ててたら、

「あーあ、これは数を数えるのに必要なのよっ！」

あげく

「アンタ、何にも考えてないでしょ」

とまで罵倒された。

しかし大悟は、胸が熱くなるほどのストレスに耐えた。

鉄板のときに駆使した足、そして指ももうボロボロだった。

そこへ罵倒の嵐。

労働ってこんなにつらかっただろうか。

勤務時間が終了したとたん、大悟はマスクと帽子をはずして更衣室の前の廊下に座り込んだ。

するとさっきの口臭デブ女も勤務終了だったらしく、まわりの白衣に「お疲れさまー」といいながらにこやかにこちらへ歩いてきた。

大悟はいちおう、しゃがみこんだままとはいえ「お疲れ様です」と頭を下げた。

本当は口も利きたくない。

女は

「あら、アンタ、さっきのコ？……ふーん、結構カワイイ顔してんじゃない」

と立ち止まった。

大悟は見上げるふりをして、斜めに睨みつけた。

しかしそれを悟られないように頭は軽く会釈して、口元は笑いながら

「どうも」

と愛想をいう。

「また、来なさいよ。お疲れ様ー」

と女は大悟の視線の質を見分けないまま、やぶにらみの顔に能天気な笑顔を浮かべて更衣室に消えた。

――クソッタレ。

思わず口に出そうになるのを大悟は抑えた。

それだけ消耗した1日だったのに……8250円。それが今日の手取りだった。

「くそっ！」

大悟は現金だけをポケットにねじ込むと、明細を破り捨てた。

……自分はスタートラインでひどく損をしている。

それはもはや無視できないほど強く大悟の心に閃いていた。

もし……あのとき。

将の身代わりで人殺しの罪をかぶらなかったら。普通に高校に行って……。

と一瞬考えた大悟は、ひとり、ふっと笑う。

借金から逃げ回るような親しかいなくて、高校なんかいけるわけがない。

カンベツに入ろうと入ってなかろうと、大差はない。大悟は一生懸命そう思おうとした。

自分が選んだ道だ。将のことを恨みたくなかった。

『身代わり』。

大悟は、あることを思い出した。

将の身代わりに人殺しの汚名を引き受ける代わりに、大悟は相当のものを受け取る約束になっていたのだ。

大悟に面談した将の父親の代理人である弁護士は、言ったはずだ。

『成人するまで困らない程度の金額を受け取れます。もし、進学なさりたいなら力になってさしあげることもできます』と。

188◆親友1

大悟は名古屋行きの夜行バスに乗っていた。

もう日付は金曜日に変わろうとしているとき、携帯が鳴った。将だ。

――そういえば、将に連絡しておくのを忘れた。

大悟はまわりの乗客に遠慮して小声で「もしもし」と携帯に出る。

「大悟？お前、今どこにいるんだ。いきなり夜勤か？」

将は、今日は、聡の家に泊まらずにマンションに帰ってきたらしい。

大悟の帰りが遅いので心配して電話をかけてきたようだ。

「将……。悪い。俺、ちょっと愛知にいってくるから。今バスん中」

「愛知？いつ帰ってくるんだ？」

「明日、……いや今日にはすぐ戻る」

ちょうど日付が変わったところだった。

「愛知に何しに行くんだ？」

「ちょっと、取りに行くものがあって。ごめん、連絡しなくて」

「いや、いいんだけど」

気のいい『親友』は、じゃあ、気をつけて行ってこいよ、と大悟に声を掛けた。

大悟はそれを聞いて、スリッパを履いた足先からじわじわと恥かしさと後ろめたさがよじのぼってくるのを感じた。

だけど。

――必要な金なんだ……。

大悟は閉めたカーテンの隙間から外を見た。

バスはまだ東京を抜け切っていないらしく、窓の外には家々やビルの明かりが散りばめられている。

自分が将の身代わりになった代償として受け取れる金について思い出した大悟は、さっそく将の父の代理人である弁護士に電話をかけてその現状について聞いた。

驚いたことに、その金は、愛知の親類に今も月１０万ずつ振り込まれているということだった。

しかも大悟がそこにいたころからずっとだという。

大悟は唇を噛んだ。

自分の給料の大半をぶん取り、酔って暴力をふるったあの親戚のジジイは、給料ばかりでなく、大悟が将の身代わりになった金までこっそりと我が物にしていたのだ。

大悟は、電話口で弁護士に、その親類のしうちについて訴えた。

そして、その金を自分の口座に直接振り込むように頼んだ。

弁護士は、大悟に同情的な口調ながら、未成年である大悟に、大金を直接振り込むわけにはいかない、と諭した。

いくら大悟が懇願しても、その強硬さは変わらなかった。

だから……大悟は、今日の給料となけなしの金をはたいて、夜行バスに乗って、親戚に交渉に行く羽目になったのだ。

聡は、学校を終えると若者の街にやってきた。将のプレゼントを選ぶためである。

ふだんだったら社会見学がある金曜日だが、今週と来週は進路相談のため社会見学のほうは休みになっている。

８歳も若い１０代の男の子に何をあげたら喜ぶのか、正直いまだにわからない。

だけど、消耗品や流行ですぐ変わってしまうようなものは避けたかった。

一生もののプレゼント……これが一番難しい。

服やアクセサリー、時計など、聡が買える値段のものはたいてい流行系だ。

そうかといって、生活雑貨は将はあまりなじみがないだろう。

将が生まれた年のワイン。

これは一瞬よさげに思えたが、ワイン好きだった前の恋人の博史を思わせそうなのでＮＧである

（将はそんなことを知るよしもないのだが、何となく）。

頭を抱える聡の目のまえに、高級ステーショナリーショップがあった。

なんとなくそこへ入ってみる。

桜の木目で彩られた暗めの店内には、皮表紙の手帖や、メタリックに輝くシャープペン、国ごとに色の違う石をはめこんだ地球儀などがまるでギャラリーのように数少なく陳列されていた。

金属板で小さく表示された値段は、聡がふだん職員室で使っている文房具の１００倍もするようだった。

――こんなの誰が使うんだろう。

そう思った聡だったが、ガラスケースの前で足をとめた。万年筆が陳列されている。

その万年筆で書いたものとして、さまざまな色の文字が見本として

展示されていた。

その中で、聡の気持ちを素晴らしく惹いた、セピア色の文字があった。

「こちらは、●●県の工房がつくっている、手作りの万年筆なんですよ」

見とれる聡に、低い静かな口調で女店員が、声をかけた。

そんなところで、と聡は少し驚いた。

それは日本海側にある、人口が少ない県だったからだ。

「本当はオーダーメイドなんですが、うちでは標準的なものを置かせてもらってるんです。インクもこちらの工房のオリジナルで、こちらは」

と聡が見とれていた色を指す。

「イカの墨を原料にしてつくったインクなんですよ」

「え！イカですか！」

「ええ」

女店員は微笑んだ。聡は、見本の文字に思わず鼻を近づけた。

「匂いはしないんですね」

聡はおどけて微笑んでみせた。

「もちろん」

仕立てのよいスーツを来た女店員は聡のジョークに対応して少し可笑しそうなそぶりを見せた。……感じのいい店員だ。

「よろしかったら、試しに書いてみてください」

「いいんですか」

聡は、万年筆を握った。すっと手になじむ心地よい重みがあった。

ざらつく紙なのに書きやすい。

店員は、この万年筆は１００年、いや半永久的に持つものだ、と言った。

創業１００年近い工房だから、メンテナンスも万全だという。

３万円台はやや高いが、一生ものなら、十分に許せる値段だ。

イカ墨のセピア以外の色も、独特の色合いで、かつ万年筆ならではの濃淡が美しい。

聡は、自分がこれを欲しくなったほどだった。

そこで、将の文字を思い出す。

長いこと学校をさぼって不良をやっていたくせに、均整のとれた文

字を書く将。

国語の担当に、彼が書いた小論文を見せてもらったことがある。

中身はもちろん、字の美しさからもそのクオリティの高さが伺えるような、そんな端正な文字だった。

「すいません。プレゼント用にこれを包んでください」

聡は将のプレゼントを即座に決めた。

プレゼントも買ったし、明日のために早く帰ろうと、聡は電車に乗った。

ちなみに将は、今日はバイトだという。

「週に2度ジムに通えって言われてさあ」

と口を尖らせた将の顔を思い浮かべる。

事務所としてはもう少し、筋肉をつけさせたいのだろう。

聡の脳裏に、細身だけどしなやかな筋肉がついた、浅黒い将の裸体が蘇る。

思わず聡は顔を伏せた。

あしたの今ごろは……将と。

それを考えるだけで、体の中心に快感の予兆がほとばしる。

聡はそれを追いやるように、踵をもう片方の足に引き寄せた。

そして、そんなことをみじんも考えてませんよ、というまわりへのPRのために、つまらなそうに顔を窓の外に向けてみる。

もう暗いせいか、窓は車内の蛍光灯に照らされた聡の顔を反射した。

幸い、そこには地味なスーツに髪をひっつめた、淫らなことなどとおおよそ縁のなさそうな女が映し出されていた。

ほっとした聡の顔の向こうに、見覚えのある端正な横顔があった。

思わず聡は振り返った。

――やっぱり。

「大悟くん？大悟くんでしょ」

萩の実家に将と一緒にやってきた友人。将は彼を中学時代からの親友と紹介したはずだ。

急に声を掛けられて、振り返った大悟は目を見開いてけげんな顔をしたが、すぐに

「あ、アキラセンセイ」

と気がついた。

聡は、大悟の口元が殴られたような痣とともに切れていることに気付いたが、その顔に隠された憔悴には、まだ気付いていなかった。

189◆親友2

「久しぶりね」

元気だった?と言いかけて聡は口をつぐんだ。

大悟は瑞樹を亡くしてまだ1ヶ月しか経っていないのだ。とっさに

「仕事の帰り?」

と続けてみる。大悟は、少し躊躇して

「ハァ。そんなもんです……」

といちおう笑顔を作った。

そのつくり笑顔は、聡にはとても痛々しいものに思えた。

きっと、まだ心の傷が癒えていないんだろうと想像した。

「センセイは?」

それでもけなげに訊き返してくる大悟を、なんだか放っておけなくて聡は

「うん。ちょっと買い物。……もしよかったら、夕食一緒に食べない?今日どうせ、将はバイトだって言ってたし」

と誘ってしまった。

二人は、駅前の通りから一本入ったところにあるラーメン屋ののれんをくぐった。

大悟のお勧めだった。

「ここのタンメンが旨いんですよ。あと餃子も」

狭い食堂は、カウンターとビニールクロスが掛かったテーブルと背もたれのない丸いパイプの腰掛をいかにも安っぽい蛍光灯が照らしている。

しかし、旨いというのは本当らしく、労働者やサラリーマンっぽい男が上のほうに据えられた１４型のテレビを見ながら食事をしていた。

「ホント？じゃそれ頼もう。今日はアタシのオゴリ」

「いいんですか？」

と訊き返しながら、大悟はそうしてもらわないと困るほどお金がなくなっていた。

もともと財布にあった２０００円あまりと昨日の給料の８０００円あまりから、新宿－名古屋往復のバス代だけで９０００円近くを払ってしまっている。

新宿までの交通費はｓｕｉｃａを使ったからいい。

だが名古屋から親戚の家までの交通費だけで、もう昼食も我慢しなくてはならなかったほど、大悟の財布はすっからかんになっていた。

そこまでしたのに……大悟は、愛知の親戚宅での出来事を思い出して俯いた。

「いいのよ。いつも将がお世話になってるから。ビールも飲む？……いいのよ。未成年だなんて言わなきゃわかんないから」

悪戯っぽい顔になって、小声で飲酒を勧める教師らしからぬ聡に、一瞬大悟は、暗い出来事を忘れた。

――２６歳って言ってたっけ。それにしちゃほっぺが桃みたいだな。

井口が『結構カワイイ』といってたのがよくわかる。

メニューをのぞきこむ下向きの顔の中で睫が黒く長い。

固いスーツに包まれた胸のあたりは、井口がいってたほど『巨乳』でもないと思うが、柔らかそうに揺れて、つい触りたくなるような感じだ。

――って何考えてるんだ。将の彼女だろ。センセイだろ。

大悟はあわてて「じゃ、生２つ」と店員に注文する。

「じゃ、カンパーイ」

二人は重いジョッキをガッチンと触れ合わせた。

「大悟くん、ここ、痛くない？」

聡は、自分の口角を指で示した。大悟の切れた口のことを言っているのだろう。

「これぐらい、ぜんぜん平気です」

「やっぱり男の子は強いよね」

感心する聡だが、今大悟が痛いのは、そんな傷より、心であり、経済状況であった。

今日、早朝に名古屋に降り立った大悟は、そこから私鉄に乗りかえて、親戚の家を訪れた。

留守だったら困るなとは思ったが、そんな心配は無用だった。

遠い親戚のオヤジは朝から酔っ払って家にいたからだ。

玄関をあけたその妻……大悟は『おばさん』と呼んでいた女は大悟を見ると目を見開いた。

「こんにちは」

大悟はいちおう頭を下げた。

小さな古い一戸建ての奥からは、出戻りの娘の子供なのか、ギャンギャンと泣き声が聞こえる。

「今日は、俺の金の件で来ました」

それを聞いた『おばさん』が一瞬息を飲むのが大悟にもわかった。

いちおう家に上げられた大悟は、ここにいたとき寝場所だった居間に通された。

この家にいた頃、大悟は自室すら与えられなかったのだ。

茶も出されずに、待っていると、奥からドカドカという乱暴な足音と共に

「大悟だと？勝手におん出てったヤツがなんダァ？今ごろ」

という罵声が奥から近づいてきて、染みと繕いで彩られた襖がガラッとあいた。

禿げた親戚のオヤジが、肌着のまま腹をボリボリと掻きながら大悟を見下ろした。

朝だと言うのに、禿げ頭から顔、たるんだ首、つやのない胸の皮膚のあたりまで赤らんでいる。

「なんだ今ごろ」

投げるような乱暴な口調。安っぽい日本酒の匂いが大悟の顔に吹き掛かるようだった。

大悟は反抗をあらわにして見上げながらも

「今日は、俺の金の件で来ました」

といちおう丁寧語を使ってやった。

いちおう、この家にいた頃は、不良少年的な言葉づかいや態度をしたことはない。

このオヤジが酔って大悟を殴るときなどは、いつも黙って耐えた。

「金ダァ？」

といいながら、親戚オヤジはどかっとあぐらをかいた。

「俺の学費名目で１０万振り込まれているでしょ。俺がここを出てったあとも。２月から３ヶ月分、返してほしいんだけど」

大悟はできるだけ冷静に感情を抑えたのだが、最後のほうはつい、乱暴な言葉づかいになってしまった。

「そんなものはないっ」

親戚オヤジはそっぽを向いた。

「ないはずはないだろ。三宅さんに聞いてンだよ」

三宅というのは、将の父親・康三の代理人の弁護士である。

「俺が高校に通ってるとかいって、学費、食費その他もろもろで１０万。受け取ってんのはわかってんだよ」

つい言葉が荒くなる。

「本当は高校いってないんだから1年分の学費を返せって言いたいところを、3か月分に負けてやってんだよ。返せよ」

「ないもんはないっていってんだ」

オヤジは大悟を斜めに見据えると、吐き捨てるように言った。

「もともと、たいして縁のない前科物のテメエを預かってやったんだ。月１０万じゃ足りねえや」

「ざけんな！」

大悟はついに立ち上がると、禿げオヤジの肌着の首を掴んだ。

「俺の……俺の給料もほとんど、ぶん取りやがったくせに！」

大悟の大声に触発されたのか、家の奥で、幼児が火がついたように泣き始める。

締め付けられるほど首を掴まれて、禿げオヤジは狼狽した。

「落ち着け……。大悟、落ち着け。うちは年金暮らしで手一杯なんだよぅ……」

「嘘つけ！」

ついに大悟は禿げた親戚オヤジの横っ面にパンチを食らわせた。

古い家全体を振動させてオヤジは転がった。

襖の隙間から見ていた『おばさん』が喉の奥から悲鳴をあげる。

「やりやがったな」

親戚オヤジは唇から流れた血を手の甲でぬぐいながら大悟をにらみつけた。

「やって悪いか。俺の金でさんざん飲んだくれやがって！」

「なんだと、このガキィ～！」

親戚オヤジは立ち上がると大悟に向かってきた。

肉付きがいいオヤジが勢いよくタックルし、大悟はそのまま畳に引き倒される。

そしてそのままつかみ合いになる。

「やめてーっ！」

おばさんの悲鳴。子供の泣き声。

「だいたい、こうなったのは、お前の父親がいけないんだろうが！」

オヤジは大悟にのしかかるようにして首をぎゅうぎゅうと締めながら怒鳴る。

唾が大悟の顔にしぶきのようにかかる。

「俺は関係ねーよ！」

大悟は負けずに、オヤジの首を掴んだまま、勢いよく上体を起こすと、吼えた。

「関係あんだよ！お前の父親の借金を俺が払ってんだろうが」

それを聞いたオヤジの首を掴む大悟の力がゆるんだ。

そこでオヤジが1発、大悟に逆襲した。再び家全体が揺れるようにして大悟の体が飛ばされた。

「お前のダメオヤジがよ、借金の保証人に勝手にウチを指名しやがったんだ」

「ウソだ……。親父はもう何年も行方不明……」

大悟は、口の端から血を流したまま、上半身を重く起こした。

そこで『おばさん』がようやく、禿げオヤジを止めるようにすがりつく。そして大悟に

「本当なんだよ……大悟。闇金融っていうのかい？ヤクザみたいな人が来て、無理やり判を押させられたんだよ。押さないと、娘や孫がどうなるか、って言われて……」

なきそうな顔で『おばさん』は説明した。

「それ、いつ……？」

「1年ぐらい前だよ……。だから、悪いとは思ったんだけど、お前に振り込まれている金で返済にあてさせてもらったんだよ……」

彼女は嘘を言ってなさそうだった。

「悪いなんて、思う必要はねえっ。親父の借金を子供が返すのは、っ当然じゃねえかっ」

禿げオヤジは吐き捨てるように言った。

大悟は、再び親戚オヤジを睨むと立ち上がった。

「……とにかく。僕はもうこの家を出てますから。１０万はここには振り込まないようにしてもらいます」

「何ぃ？」

禿げオヤジは目をむいて大悟を睨んだ。

『おばさん』の眉がみるみるうちに八の字になると、大悟にすがりついてきた。

「大悟、そんなこと言わないでくれよ。お前がいなくなって、１０万もなくなったら……。私ら殺されてしまうよ」

まるで歌うような声での懇願。

だが、大悟は、唇の血を拭いながら、冷たい目の端で彼女と禿げオヤジを一瞥した。

「……自己破産、すれば」

それだけいうと、大悟は居間を後にした。

「あいつらが、自己破産なんかさせるかよォ！」

という親戚オヤジの声を背に受けて大悟は、狭い廊下を玄関へと向かった。

と、背中に視線を感じる。

この家の出戻りの娘が、子供二人と共に廊下の奥に立っていた。

３０になるかならないかの……地味な顔立ちだが、働いていないせいであまり所帯じみてはいない娘。

彼女は、５歳ぐらいの女の子の手をひき、２歳ぐらいの男の子を抱いて、こっちを睨むともなく、静かに注視していた。

さっきまで火が付いたように泣いていた男の子は濡れた瞳のまま、きょとんとした顔で大悟を見ている。

そして、髪を2つに結んだ女の子は、無表情のまま大悟に

「ばいばい」

と言った。

大悟は聞かなかったように踵を返し、その家を辞した。

その3人の姿は、なぜか大悟の心に焼きついて離れなかった……。

190◆親友3

「はい、タンメンおまちぃ！」

三角巾で髪を覆ったおばちゃんが、タンメン2つを二人の前に置くまで、大悟はなんとなくぼんやりしていたらしい。

聡に割り箸を渡されて、ハッとした。

「わーい。美味しそう。いただきまーす」

聡がにこにことレンゲで湯気の立つ熱いスープをすくい、注意深く唇をつける。

口紅なんぞとっくに剥げてそうなのに、それは餃子の脂のせいなのか、バラ色でつやつやしている。

「本当だ！すっごく美味しい。野菜の味がスープに入ってる！」

と大悟に笑いかけた。

そのまま、麺をすする。

女性なのに結構豪快に麺をすする聡を、大悟は好ましいように思い、自らも麺をすすった。

「ここ、よく将と来るの？」

一段落したのか、聡は麺を箸ですくいながら、大悟に訊いてきた。

「1〜2回かな。俺、ずっと家にいたから」

「そっか……」

聡は、スープをすくった。タンメンでよかった、と思った。

麺が延びるのを防ぐため、という名目で、話より食べるほうに集中することを許される。

大悟がずっと家にいた、というのは瑞樹のことで沈んでいたからだろう。

聡は麺をすくいながら

「大悟くん、将とは中学からの付き合いだっていってたよね」

とさりげなく話を変える。

「……ハイ。中学が一緒だったわけじゃないんですけど」

「うん。ワル仲間だったって聞いてる」

聡は可笑しそうに笑っている。

「ね、どんなことしてたの？」

黒目がちの瞳をくるっと動かして訊いてくる。

「えー……」

「やだわ。いまさら警察なんかにいわないわよ。時効だってば……将がどんなコだったのか聞きたいだけ」

聡はビールのジョッキを手にした。

ビールとタンメンの熱さのせいか、頬が上気してよりピンク色に染まっている。

かわいい顔に似合わない低音の声がなければ、聡が年上だということを忘れてしまいそうだ。

「そうですね。いっつもつるんでましたね。アイツは髪をまっ黄っ黄に染めてたし……」

「それ聞いた。ロンブーの亮なみだったって」

「そうそう。そうなんです。今みたいにバカでかくないし、結構カワイかったですけどね」

「見たかったー」

聡は目は細めつつ、口を大きくあけてアハハと笑った。

「……で、ケンカしたり、本盗んで古本屋に売ったり、自転車とかバイクを盗んだり。粉砂糖をマリファナだって嘘ついて小学生に売ったりとかもしてましたねえ」

「うわ！本当に不良、てかそれ立派に犯罪じゃん！」

聡は眉をひそめるようなそぶりを見せながら、目は笑っている。

もう、二人が更生していると思っているから。

それは単なる過去の思い出話としてとらえているようだ。

大悟は、なんで自分がいかにも楽しげにこんな話をしているんだろうと、思った。

同時に、聡が、将が人を殺したことを知らないのだ、ということがわかった。

なぜか、無性にそれを聡に聞かせたくなって……それを必死で自分でとどめるように話題を変える。

「センセイは、なんで将と付き合うようになったんですか？」

「え？」

聡はぽっと頬を染めた気がする。

「博史さんと婚約してたんでしょ」

聡は、大悟の顔を見た。そうだ、大悟は……将と一緒に萩に来てるから、博史のことを知ってるんだ……と気付く。

「わかんない。気がついたら……ねぇ」

聡は年下のコに自分の心の動きを説明するのが照れくさくて、誤魔化した。

「中学のときも……将は、もてたの？」

と話題をそれとなくそらす。

「……そうですね。いつも、誰かいたと思う」

大悟は正直に答えてしまって、ハッとして、フォローする。

「でもコロコロ代わってましたよ。アイツ、ほらイケメンだから、女のほうから寄って来るんですよ」

「ありがと」

聡は大人の顔で微笑んだ。

「気を遣ってくれて。大悟くん、すごくいいコだよね」

「いや、そんな」

包み込むような柔らかい視線。落ち着いた温かい口調。

そんなものをめったに向けられない大悟はどぎまぎして下をむいた。

将が、聡に惹かれるのがよくわかった。

家族の愛に飢えているゆえ、心に寂しさを持つ、不良タイプは聡のような女に弱いのだ。

抱きしめたい、というより、抱きしめられたい。

成熟した、というより満たされている内面からあふれるものが、こちらの寂しさにひたひたと染み入ってくるような感じ。

『大人』というのとはまた違う。

もともと生まれつき深い『情』が、育ちや精神が安定しているゆえに、対峙する相手に献身的に向けられる。

相手を信用していることがわかるゆえ、相手に嘘をつかせない。そんな奇跡的な女がたまにいるのだ……。

――瑞樹……、お前、負けるわけだぜ……。

ふと、瑞樹のことを思い出す。

瑞樹が将を好きでたまらず、セフレに甘んじながらも傍にいたことを大悟は知っている。

そんなふびんな瑞樹を大悟は愛したのだから。

大悟は、聡が瑞樹の担任だったことに思い当たった。

「あの」

大悟は顔をあげた。タンメンはすでに食べ終わっている。

「……瑞樹って、どんなコでした？」

「え……」

聡の笑顔が消える。

わずかに、つらそうな顔になり、それを隠すように下をむいてスープの中に沈んだキャベツやもやしをしきりに掬っている。

井口によると、瑞樹は将をとられた仕返しを聡に企てたりもしたらしい。

そのことを聡は思い出したのだろうか。

ふと、大悟は、瑞樹が将のことをどれくらい好きだったのか、瑞樹が聡に仕返しとして何をしたのか、それを知りたくなる。

聡はようやく、体勢を立て直すと、

「あたしが赴任してきてから、葉山さん、休みがちだったから……。あんまり印象に残ってないの」

と、伏目のまま答えた。

「なんか、センセイにひどいことをしたらしいですね。どんなことをしたんですか？」

「それは……」

聡は箸を置いて、目をしばたいた。

「俺、瑞樹のことは何でも知りたいんです」

大悟は、少し自分が嗜虐的になっていると思う。

そうだ。この女は、虐めたくなるような部分も併せ持っているのだ……将が聡に惹かれる理由がより明確になったと大悟は感じた。

しかし、聡は大悟をまっすぐに見ると、

「もう過ぎたことよ」

と言った。

それは、瑞樹が将を好きだったことに関連する。その事実が大悟を傷つけるのではないか、とも聡は考えたのだ。

だが大悟は食い下がった。

「言いにくいかもしれないけど、俺、瑞樹の思い出が少ないから……知りたいんです。瑞樹が将を好きだったことは本人から聞いて知っています。だから……教えてください」

聡は、大悟の瞳をじっと見つめた。

大悟も、聡の瞳をそのまま見つめ返した。

しばらく、その空間には、テレビの声だけが流れた。

やがて聡はため息をついて

「私は意識がなかったからあまり覚えていないんだけど……」

と前置きをして、話し始めた。

「街で葉山さんが私に話し掛けてきて。そのとたん、なんか男のコたちに薬をかがされて……。気がついたら、どっか知らない小屋に連れてこられてて……」

大悟は思わず眉をひそめ……聞いたことを後悔した。複数の男に聡をレイプさせる。

まさか、そんなことまでしていたとは。

「すいません。嫌なこと思い出させちゃって」

と頭を下げる。聡は、あわてて、ううん、と首と手のひらを振った。

「でもね、将が助けに来てくれたから、結局、何もされなかったのよ」

未遂と聞いて、大悟はほっとした。だが、瑞樹がそれを企てたことは変わりない。

瑞樹は、そんな卑劣なことを企てるほど、将を好きだったのだ。

大悟の心は、締め付けられるように苦しくなった。

なのに、瑞樹の心の軌跡をたどるのを止められない。

「あの……、瑞樹は、いつごろまで将を好きだったと思いますか」

もっと苦しくなるかもしれないのに。大悟は自分で自分をバカだと

自覚しながら、やめられない。

聡は、大悟の苦しさを見透かしたように

「さあ……。私にはわからないわ。……ホラ、葉山さん、学校来なかったし」

とだけ答えた。

本当は……、少なくとも妊娠騒ぎがあった修学旅行のときまで、瑞樹が将のことを愛していたのを知っている。

でも大悟を傷つけると思って黙っておいた。代わりに

「……でも、葉山さんは、大悟くんにとても頼っていたって、将に聞いているわ。だから、もう将のことは忘れていたんじゃないかしら」

大悟をなぐさめるためとは別に、自分にも言い聞かせている部分があったのを聡は否めない。

だけど、大悟はそのまま黙り込んでしまった。

「センセイ、ごちそうさまでした」

口数少なくなった大悟だが、店を出たとき、聡にきちんと礼を言うのは忘れなかった。

聡は、微笑みを浮かべて

「いいのよ」

と答えた。さらに

「もし何かあったら、グチでもいいから、いつでも相談してね。先生がわりとして」

と付け加えた。それほどに大悟の様子は、つらそうだったのだ。

「ありがとうございます」

といって大悟は俯いた。そのとき、大悟の携帯が鳴った。

そのまま、そこで別れようと思っていた聡は、状況的に夜の路上に引きとめられる。

「ハイ……島ですけど。は、瑞樹の……おばあちゃん?」

聡は瑞樹の名前に思わず振り返る。

「ハイ……。ハイ。ありがとうございます。ハイ……わかりました」

あとはたいした内容は聴き取れないままに、電話は切られた。

しかし、瑞樹がらみの内容で、また大悟を落ち込ませるのもなんなので、聡は電話には突っ込まず、『じゃ、これで』と声に出そうとしたとき。

「あの、センセイ……。言いにくいんですけど」

と大悟がおずおずと聡に声を掛けた。

「なあに？」

聡は明るく向き直った。

「あの……、お金を貸してくれませんか？」

大悟の財布の中には、小さなコインしかなくなっていたのだ。

聡は一瞬目をパチパチとさせたが、にっこりと笑った。

「５千円でいい？」

「あ、十分です」

急に大悟の手は、ふんわりとした温かいものに包まれた。

聡が、財布から出した５千円札を

「あげる」

と言って、両手で大悟の手に握らせたのだ。

「いえ、金ができたら……返します」

大悟はふたたびドギマギして、目を見開いて聡の顔を見た。

聡は、ううん、と首を振った。

「いいの。これから就職するんでしょ。将に聞いてる。頑張ってるって……。これは少ないけど前祝だと思って」

大悟は、呆けたように「じゃ」と駅前のネオンの中に去っていく聡の笑顔と後姿を見つめていた。

１９１◆春の嵐１

将がマンションに帰ってきたのは夜の１０時すぎだった。

ジムとダンスレッスン、そのあとで、代理店やらアートディレクターやらを交えての食事会への参加を急遽指示される。

和食の店での食事会は事務所が抱える他のタレントが関わったＣＭなどの慰労会という名目だった。

どこかで見たことのあるタレントの先輩と同席した将は、マネージャーの武藤に言われたとおり愛想よく大人しくしていた。

武藤と一緒にようやく帰りのタクシーに乗ったときはクタクタだった。

「代理店のほうは、アナタをえらく気に入ったようね。よくやったわ」

と武藤は褒めてくれたが、将はとくに、何かしたという覚えはない。ただ、疲れていたのとお腹がすいていたので、目の前の食事のことしか考えてなかった気がする。

「じゃ、次のジムは火曜日にね。体育の授業のあとに、できるだけたんぱく質をとってね、筋肉になるから。あと、今週は急な連絡が入るかもしれないから、その時はよろしく」

武藤はそういって将をマンションまで送ってくれた。

タクシーが見えなくなって、将は思わず

「あ”～疲れた」

と声に出してしまった。

しかし一人になった将に、生温かい夜風と共に、いよいよ迫った明日が、じっとしていられないほど嬉しくせまってくる。

明日こそ、ついに聡と身も心も1つになれる。

疲れているのにもかかわらず、将はスキップするようなはずんだ足取りでエレベーターに乗った。

――でも、明日、ひょっとして筋肉痛かなぁ……。

日頃、体育の授業も好きな種目だけしか真面目にやらない将なので、若いといえど、ジムトレーニングは結構、体にきたのだ。

「ただいまー」

大悟はリビングにいるらしい。将は

「俺、シャワーあびるから」

声だけで大悟に伝えて、寝室から直接バスルームに入った。

ジムでも浴びたが、着替える前にもう一度浴びてすっきりしたかった。

Tシャツとショートパンツに着替えた将は、タオルで頭を拭きながらキッチンに入り、冷蔵庫からウーロン茶を取り出してぐいっと飲む。

「明日、俺さぁ」

といいながら大悟を振り返る。

「試験場に免許とりにいって、そのあと、アキラとお泊りデートだから……」

そこまで伝えて、大悟の異変に気付いた。

大悟はソファに寝転がって瑞樹の骨の入ったガラス瓶を眺めていた。

「……大悟？」

大悟は瑞樹の骨から視線を移さない。その顔はかなり赤い。

ソファの前の床には、スピリタスの瓶、グラスが置いてある。

「飲んでんのか？」

将は、ウーロン茶片手に大悟に近寄った。

スピリタスは半分になってしまっている。よく見ると、大悟の唇は切れて腫れている。

「愛知で何か、あったのか？」

心配した将は、大悟が寝そべったソファの前にしゃがみこんだ。
だが大悟は、何もいわず、瑞樹の骨の瓶を見ている。
かすかに唇が動いたようだが、声は聞こえない。
「何？」
「今日……アキラセンセイとメシ食った……」
ようやくかすれた声が聞こえた。視線はあいかわらず骨になった瑞樹に注がれたままだ。
「アキラと？」
「……アキラセンセイ、いい女だな……。瑞樹が、かなわないわけだよ」
将にはあいにく、大悟の発音は不明瞭で、よく聞こえない。
「お前何言ってんだ？……酔ってんだな。水もってくるよ」
将は立ち上がって、キッチンへといったん戻る。
冷蔵庫をあけてグラスにミネラルウォーターを注ぐ将の背中に
「将」
とこんどははっきりと声がした。

振り返ると大悟が体を起こしていた。

膝に肘をついて、組んだ両手の中に瑞樹の骨を握り締め……、ボサボサの髪を乗せた頭は将のほうに向けている。

「おう待ってろ、今、水もってくから」

「あのさ」

「ん？」

将は、大悟のところに歩いていって水を手渡そうとした。

大悟は、その端正な形のくっきりとした目を三白眼にするように、将を見上げて言った。

「アキラセンセイ、貸してくれ」

将は意味がわからなくて、

「え？」

と目をパチパチとしばたかせた。その表情は聡とよく似ていた。

どっちかがどっちかに影響された、ということが大悟の、酔った頭でもよくわかった。

「お前のあとでいい。アキラセンセイとやらせろ」

酔って充血した大悟の目だが、強い眼力が将を突き刺すようだった。

将は思わず、大悟に平手を張った。……その眼力に反発するように。

派手な音がリビングに反響する。

水が入ったグラスを無意識に左手に持ち替えていた。

大悟は髪を乱して、顔は叩かれたままの方を向いたまま、目だけ将のもとに戻した。

将は俯いて思わず謝った。

「ごめん……。酔ってたんだな」

大悟は、あいかわらず目だけで将を見据えたまま、小さく笑った。

「何、謝ってんだよ。将。俺は正気だぜ。……アキラを抱きたい。抱かせろよ」

「お前……」

将は、大悟の顔に目をあげた。

大悟は、酔って充血した目のまま、斜に構えて将を見ていた。

「冗談にもほどがあるぜ」

「だから冗談じゃな……」

大悟がそう言い終わる前に、将は大悟の襟を掴むと、ギラギラとした目で大悟を睨み付けた。

「お前、まさか、アキラに何かしたのか？」

「……した、っていったらどうするんだ」

大悟は襟をつかまれたまま将を見据えると、将の腕をふりほどいた。

将は一瞬ひるんだが、再び大悟につかみかかった。

その勢いに、酔っている大悟はソファに倒れこんだ。

握っていた瑞樹の骨の瓶が大悟の指から離れてフローリングの床に転がった。

「それだけは許せねえ！」

そういいながら将は腕を振り上げた。

しかし、次の大悟の言葉に凍りついた。

将を見上げながら大悟は確かに言ったのだ。

「お前も瑞樹とさんざんヤッたんだろ」

将は腕を振り上げたまま、眦が裂けるほど目を見開いて、大悟を見下ろした。

「さんざん瑞樹をもてあそんだんだろ……」

振り上げた将の腕が震える。

「やめろ……」

「お前が瑞樹で遊んだ分、俺にアキラセンセイを貸してくれたっていいだろ……」

「やめてくれ！」

「俺にアキラを……」

将は大悟の襟を掴んで彼の上体を引き起こすと、その額に自分の額を勢いよくぶち当てた。

頭蓋骨に……その中にある脳と瑞樹への罪悪感もろともに大激震が走る。

「イッ……テエ」

大悟は額を押さえて、ソファに脱力したように仰向けに横たわった。

そんな大悟を見下ろしている将も悪夢のように頭がクラクラしている。

じんじんと額に血液が充満してくるのがわかる。

はっ、と額を押さえたまま、咳き込むように大悟は笑った。

「ウソだよ……。なんにもしてねえよ。アキラセンセイにメシおご

ってもらっただけだ……」

大悟は将のほうを見ずに言った。そして

「アキラセンセイ、めちゃくちゃ優しいな……」

と遠くを見ているような目で呟いた。

「優しい……センセイ」と反芻する。

その直後に虚空を眺めていた大悟の眉と瞳、そして切れた口元が大きくゆがんだ。

その目じりから、涙が流れる。

そのまま大悟は目を閉じて、視界から将を追い出すと泣きはじめた。

「瑞樹……。みずきぃ……、ううぅ……」

将は無言で立ち上がった。額が熱をもったように痛い……だけど、それ以上に心が痛い。

大悟が言ったことは、真実だから。

将はソファで嗚咽する大悟を残して、リビングを後にしようとする。

……そこで、行く先に転がった、瑞樹の骨の瓶が将の目にとまった。

骨は、哀しげに将を見つめているようだった。何かを訴えているように将の心が揺れた。

将はそれを手に取ると、いったん引き返して、大悟がいるソファの傍らのテーブルの上にそっと置いた。

「将……」

大悟は、目の上を腕で覆ったまま、行こうとする将を呼び止める。

将は立ち止まって振り返った。

もう……大悟を咎める気はない。むしろなじられるのは自分のほうだ、とわかっている。

『瑞樹は、お前のせいで死んだんだ』

そう怒鳴られることをも将は覚悟していた。

覚悟したところでどうしようもない……何もできないけれど。

だが、大悟は目を腕で覆ったまま、

「俺は……、もうダメだ」

と乾いた吐息のように呟いた。

１９２◆春の嵐２

金曜の夜、聡は気持ちが昂ぶってなかなか眠れなかった。

大悟と別れて一人になるなり、ついに明日、将に抱かれることで頭がいっぱいになっていた。

夜道を歩く足取りもふわふわして落ち着かない感じがする。

たった今、将に抱きしめられたように……体中が覚えている将の感触が肌に花開くように一気に蘇る。

夜道を歩く聡は、そんな自分が急に恥かしくなって、突然駆け出す。

次の瞬間、そんな奇異な自分を誰かに見られているのではないかとあたりを見回す。

……そんなばかげたことを繰り返してやっと家に帰ってきた。

帰るなり、明日の支度をする。何を着ていこうか。

一張羅は、水曜日に着てしまったので今回は違う服にしたい。

シティホテルだから、あんまりカジュアルな格好もよくないだろう。

だけど……どうせ脱がされるための服。聡は一人顔を赤らめる。

下着は今日、新品を３セットも買ってきてしまった。

いずれも、凝った刺繍がほどこされているものだ。

こうして服を揃えるのに1時間以上もかかり、そして肌に磨きをかけるべく、ゆっくりと風呂に入る。

バスタブにはラベンダーの香りの入浴剤を入れる。

明日、どうせ朝シャワーを浴びるけれど、肌からほのかに香ってくれたらいいな、と夢見る。

こうして自分の裸をみていると、いよいよ明日が現実になるのを感じずにはいられない。

思わず聡は目を閉じる。

再び将の愛撫が肌に蘇る。

一人、浴槽でそんなことを想像する自分は、やはり淫乱なんだろうか。

よく眠れるようにとぬるめの風呂にしたのに、それほど効果はなかったようだ。

部屋を暗くして横たわっていても、ずっと胸がときめいている。

男との泊まりだったら、聡はすでに何度か経験している。

とくに博史とは、もうそれがあたりまえのようにさえなっていた。

こんな風にときめくのは、高2のとき、当時の恋人だった東と親に

内緒で、初めて二人きりで旅行に出たとき以来だ。

あのときの前夜も……、こんな風に眠れなかった。

聡は記憶がもたらす甘酸っぱい感覚がしみて瞼をぎゅっとつむった。

懐かしさと淫らさがまじった記憶は、それを発した脳から一気につま先に駆け抜けて、思わず聡はつま先をきゅっと折り曲げた。

何度も寝返りを打って……聡がようやく眠りについたのはもう明け方近くだった。

だから、朝７時３０分にドアのチャイムが鳴ったときも、ぐっすりと眠っていた。

ピンポーン。

ピンポーン。

ドンドンドン。

ピンポーン。

そこでようやく聡は重い瞼を開ける。

粘りついたようにまた降りようとする瞼を無理やりこじあけて、聡

は重い体を起こす。

「アキラ」

ドアの外からの聞きなれた声に、聡は急激に覚醒した。

「将」

あわててドアに駆け寄る。

意識は覚醒したが、体はまだ起き切っていないらしく、ローテーブルに脛をしこたまぶつける。

「……いったーい」

と足をひきずりながらドアを開ける。

次の瞬間いきなり。将の姿を確かめる前に、聡はきつく抱きしめられた。

「将、どうしたの」

将の胸の中でつぶやく。

将の匂いと共に、雨の匂いが部屋に入り込んでくる。将自身も少し雨に濡れて湿っていた。

そこでようやく……激しい雨音に聡は気付いた。

「アキラ……急に逢いたくなったんだ」

将は聡の髪に顔をうずめたまま、喘ぐように囁いた。

開いたままのドアから聞こえる激しい雨の音で聴き取りづらい。遠くで雷さえも唸るように響いてくる。

「へんなの……。今日、午後迎えに来てくれるんでしょ」

聡は将の顔を見上げようとした。

今日将は、まず自動車試験場で免許を受け取ってから、午後、車で部屋まで聡を迎えに来ることになっていた。

「アキラ……」

将は聡の肩を掴んで、いとおしいその顔を確かめた。

聡が見た、将の顔はひどくせつなげだった。

突然、天が裂けるような轟音が真上で鳴った。

「うわっ！」

聡は色気もない声で、将にしがみついた。次の瞬間

「びっくりしたぁ。近かったね、雷」

と舌を出して将の顔を見上げた。寝起きの乱れた髪に、素顔の頬がピンク色だ。

それを見て、将は少し安心する。

昨日、将は大悟の態度が気になって眠れなかった。

もちろん、長年の親友だから大悟のことは信用したい。

昨日の言葉は、酒の酔いがもたらした単なる気の迷いだと思いたかった。

でもやはり心配でまんじりともせずに夜を過ごした将は、朝が来るなり聡を訪ねたのだ。

ちなみに大悟はすでにリビングから引き上げているようだった。

半分になったスピリタスとグラスがキッチンカウンターの上に置いてあった。

「アキラ」

将は聡の素顔の頬に両手を添えてしばし見つめた。

黒糖色のビー玉のような2つの瞳に将が映っている。

掌から伝わる温かさと柔らかさに我を忘れる。

「将……？なんかあったの？」

濡れた路面をタイヤが踏みしだいていく冷たい音で、将は現実に戻る。

「……昨日、大悟とメシ食った？」

「うん……？」

聡は質問の意図がわからずに、黒目がちの目をキョトンとさせている。

続いて将は『何もされなかったか？』と訊いてしまいそうになったが踏みとどまる。

それは大悟への信頼を自ら捨てることになる。そこまで疑いたくなかった。

それに聡に、大悟に対しての無駄な警戒心を起こさせることになるのもよくないと思ったのだ。

将はまだ大悟を信じるほうを選択した。

それに聡のこの表情をみれば、大悟が何もしなかったのは明快だ。

聡の件についてホッとした将は、今度は別の部分で胸騒ぎがした。

『俺は……、もうダメだ』

といっていた大悟。

将の知っている大悟は、何があっても弱音など吐いたことはない。

金がなくても盗みでどうにか凌ぎ、取立て屋になぐられようともこっそり金を隠しておく、そんなしぶといまでの大悟の強さを、いつ

も将は尊敬していたのだ。

……瑞樹のことがまだ癒えていないのだ。

瑞樹を守りつつも、瑞樹を守ること自体が大悟の拠り所になっていた。それを失って……。

そして、昨日、大悟の口元にあった、殴られたような痣。

どうして、あんなに嫌っていた愛知の親戚のところに急に行くことになったのか。

おそらく、そこで大悟に『もうダメだ』言わしむる決定的なことがあったに違いないことは、将でも容易に想像できた。

「……将？」

急にだまりこんで、下方の虚空に視線が固まった将に、不審に思った聡が声をかける。

聡の声に将はハッとした。そして

「ごめん、朝早く。あとで来るから。もう1回寝ろよ」

と立ち去ろうとした。そんな将に聡は

「せっかくだし、コーヒー飲んでく？」

と引き止めたが、将は

「ううん、いい。試験場にいかなくちゃ遅刻しちゃう」

と微笑んだ。

激しい雨を降らせている空が暗いので、今が何時なのか聡はわからなかったが、その微笑を見て聡も安心した。

こんな雨の中、わざわざ試験場に行く前に聡を訪ねる将に、気がかりなことでもあるんだろうか、と少し心配していたのだ。

「将。忘れ物」

聡は呼び止めた。

強くなった雨音は4階の廊下まで響いてくる。

暗い空のどこかで雷が鈍くとどろいているのも聞こえている。

そんな天気に似合わず、聡は晴れやかな笑顔で、尖らせた自分の唇を指した。

昨夜からの将の不安な気持ちは一瞬吹き飛んだ。雨音に似合わない温かいもので心が満ちていく。

将は聡を再び抱き寄せると、そっと唇を重ねた。

それは、今日の期待がなせる技なのか、心配事が晴れたせいなのか、いつもより一段甘く感じた。

時が一瞬止まる。

甘い口づけに、時の感覚が、麻痺する。

濡れたアスファルトの上を車が走っていく音で、ようやく二人は麻痺から覚醒し、唇を離した。

ディープなキスはお互い自粛している。

あとでの楽しみにと、思う気持ちまで一緒だった。

「じゃ、免許とれたら、連絡するよ」

「うん。わかった。がんばってね」

聡は頬をいっそう染めて微笑んだ。

パジャマ姿のまま、廊下で小さく手を振る聡を、階段を降りるまで何度も振り返った。

時計はまだ7時30分だったので、聡は将が言うとおり、もう一度ベッドに戻った。

ぐっすり眠っていたところを起こされたせいか、今度はあっさりと眠りの中に落ちていくことができた。

朝の眠りは若干浅く、雨音と遠くで響く雷の音を夢の中でも聞いていた気がする……。

ピンポーン

チャイムの音に聡は飛び起きた。何の疑問もはさまずに、将だと思った。

――連絡するっていってなかったけ？

聡はカーディガンをはおる。今度は意識も体も同時に覚醒したせいかスムーズに動く。

さっきローテーブルにぶつけた脛は案の定痣になっていた。

将だと思い込んだ聡はモニターを確認せずに、ドアを開けた。

雨の匂いと共に視界に飛び込んできたのは、大悟だった。

１９３◆春の嵐３

とうとう、将は正式な免許証を手にした。

とれることはわかりきっていたが、『ヤッタ！』という満足感がひたひたと押し寄せてくる。

１８歳になったと同時に、将が前から決めていたことがある。

それは、１７歳までの、ウソの自分を金輪際捨てるということだ。

もう『山田』は必要ないから。

ちなみに、家庭教師も３月で辞めている。

教え子やその親は

『山田先生ぐらい、わかりやすくて面白い先生はいない』

と残念がったが、

『大学も３回生になるし、司法試験の準備に力を入れたい』などと言い訳をした。

今まで１７歳を２０歳といつわって家庭教師をしてきたことについて何の罪悪感も持たなかった将である。

だが最後の授業の別れ際、教え子の

『先生、頑張ってね』

というけなげな瞳を見た将は、ウソをつくことは……たとえどんな内容にしても、そのつじつまを合わせるときに、誰かを傷つけるものだ、と学習した。

思わず『自分はまだ高校生だけど、それでもいいか』と喉まで出かかったのを、かろうじて押さえた。

教え子はいいにしても、三流高校在学中の将を親が許すわけがないから。

しかし仮に、将がモデルを務めた雑誌を、親が美容院かなにかで目にしたとしても、すべては後の祭り、もう咎めたてはしないだろう。

責める理由のない成績を、将は教え子につねにキープさせてきたからである。

あとは弁当屋だけだが、こっちは高校を卒業して、晴れて聡と結婚することになったときにバラすくらいで大丈夫だろう。

――驚くだろうなあ……。

将は、自分の免許証でミニを運転しながら、その様子を想像して思わずにんまりした。

そして、あとわずかに迫った聡との逢瀬に、自然に思考が浮遊してしまう。

雨はあいかわらずひどく、フロントガラスの上を早い速度でワイパ

ーが稼動している。

「おっと」

将は急ブレーキを踏んだ。前の車との車間距離が急激に狭まっている。

角を曲がろうとした前の車が急ブレーキを踏んだらしい。

車の陰からレインコートを着て傘をさしながらの人が操る自転車がひょろひょろと見えた。

「危ないなあ。こんな雨の中チャリなんか乗るなよ」

将はフロントガラスに向かって思わずつぶやく。

そうだ。自分の免許証、ということは事故を起こしたら大変だ。

といっても。偽造免許証だった昔は事故を起こしたら逃げるしかない状況ではあったのだが。

雨のせいか渋滞気味の道路に、将は舌打ちした。

濃いグレーを基調とした風景。濡れた黒い路面に赤く反射するテイルランプが明るく見えるほどの暗さ。

よく眠れなかったせいか少し疲れている。そう自覚した将は、ハンドルに突っ伏すようにした。

……と、昨夜大悟に頭突きをした額がハンドルに触れて痛んだ。

額は、コブになっているようだ。それで大悟のことを思い出した。

『俺は……もうダメだ』

何が、もうダメなのか。聡と逢う前に一度、相談に乗ったほうがいいのかもしれない。

免許がとれた嬉しさと聡と抱き合える喜びに、心が温かくなった将は大悟に優しく話を聞いてやりたい、できれば力になりたい、と思う。

将は、はやる気持ちで、マンションへと急いだ。

だが、マンションには誰もいなかった。

誰もいない部屋は、雨のせいか昼だというのに真っ暗で、留守番電話の赤い光の点滅だけが白い壁に反射してやたら目立つ。

どこに行ったのか。将は大悟に携帯電話を掛けてみたが、どうやら電源を切っているらしい。

将は、めったにつかわない固定電話機の留守番電話が点滅しているのを、無意識に押す。

『今日１０時３７分、一件です』という機械音声のアナウンスのあ

とに男性の声が続いた。

『弁護士の三宅です。携帯電話がつながらないので、こちらにお電話いたしました。例のお金の件ですが、こちらでもいろいろ方策を考えてみましたので、お電話ください』

将は、何のことかわからなかったが、この三宅弁護士は知っている。将が小さい頃から家族ぐるみで付き合ってきた『三宅のおじちゃん』である。

人のよさそうな紳士を将は思い出した。将が１３歳で非行に走るまでは月に１回程度交流があった。

父親の康三が、幼い将に『弁護士を目指しなさい』と言い聞かせていたのは、おそらくこの三宅のおじちゃんの影響だろうと将は思っていた。

その三宅のおじちゃんが今ごろ何の用だろう、と将はいぶかったが、今日、将はたしかに学科試験のときに携帯を切っていた。

幸い留守電には電話番号が表示されていたので、将は掛けなおしてみることにする。

「ごめんね。ちょっと寝坊しちゃったから」

バスルームで手早く部屋着に着替えた聡が、顔を出した。

「いえ、こっちこそ、突然お邪魔してすいません」

ローテーブルの前で大悟が神妙に頭を下げる。ちょうどコンロではいいタイミングでお湯が沸いたようだ。

突然の大悟の来訪に、聡はあわてた。

大悟は、雨に濡れそぼっていた。

傘も刺せなかったのだろうか、というほどの濡れ方に、聡はとりあえずパジャマ姿のまま、大悟にタオルを渡した。

ベッドにあわててカバーを引っ張り、暗い室内を明るくするために、蛍光灯とスタンド、そしてテレビを付けると、自分は部屋着を持ってバスルームに入る。

カーディガンを引っ掛けているとはいえ、いくらなんでも、ノーブラのパジャマのまま、１０代の男の子をもてなすのは刺激的過ぎるだろう、と思ったからだ。

「うち、紅茶はミルクかストレートなんだけど、どっちがいい？」

「……ストレートで」

大悟は頭をタオルで拭きながら、おずおずと希望を述べた。

聡は自分の分だけミルクティーにした。

朝食もまだの聡は、少しこってりしたものが飲みたかったからだ。

鼻先をくすぐるミルクのこってりとした匂いに、雨の日の憂鬱さが融和されていく。

「ここ、どうしたの？」

聡は自分の額を指差すようにして大悟に聞いた。

将に頭突きをされた額は少し赤く腫れていた。

「……転んで」

大悟は下を向いた。

「あのあと？」一緒に食事した後か？と聡は訊く。

「……ハイ」

大悟は、下をむいたまま頷いた。

正直なところ、聡はいきなり部屋に来た大悟にとまどっていた。

どうやって自分の部屋の場所を知ったんだろうとも思ったが、将の親友である。

将が何かの折に教えたのかもしれない、と考えた。

自分のとまどいと動揺を隠すべく、聡は年上の教師らしく、まず会話の先制攻撃を仕掛けることに努力をしていた。

大悟は聡のそんな努力に気付かないように、沈んでいる。

そういえば……昨日、食事を一緒にしたときから、大悟は何かを背負っていそうな雰囲気だったことを聡は思い出す。

それに同情して聡は『悩みがあったら聞く』といい、少しでも元気が出れば、と５０００円を手渡したのだ。

「さっそく、何か悩みがあるのね？」

聡はできるだけ優しく、大悟の顔をのぞき込んだ。

「……就職のこと？」

先回りした聡に、大悟の黒い瞳は、初めて視線をあわせた。

一一綺麗な顔。

将とは違うタイプながら、ひどく整った顔を持つ大悟に、聡は一瞬みとれた。

しかし、大悟の視線は再び沈んでしまった。

「……それもあるかも、……しれません」

低い、消え入りそうな声。

この年頃の子の、こんなようすを聡は初めて見た。

絶望。という言葉が脳裏をかすめていく。恋人を失った彼は、すべてに絶望しているのだろうか。

「大丈夫よ、今に」

「センセイ」

聡の励ましの言葉は、急に遮られた。下を向いていた大悟が顔をあげて、こちらを見据えている。

「俺、鑑別所に入っていたんです」

聡は動揺が体に現れないようにするのに、最大の努力を払った。

目だけが、しばたいてしまったが、聡は黙ったまま、大悟を見つめた。

次に何を言うかで、聡は自分の態度を決めなくてはならない。

だけど、大悟も同じように、聡の言葉を待っているようだ。

じっと、聡の顔を見つめている。

まるで我慢比べのような時間。それはたいした時間ではなかったが……聡のほうから譲歩することにした。

「どんなことを……したの？」

大悟の喉がごくんと動く。覚悟を飲み下した反動のように

「人殺しです」

と呟いた。

聡は、目を見開いてしまうのを押さえられない。

人殺し。殺人者。聡の脳裏に、新聞沙汰になった、少年による凶悪犯罪が駆け巡る。

しかし……目の前の大悟に対して、不思議に恐怖感は湧かなかった。

この端正な顔の、実直そうな青年が人殺し。

それは、絶対に何か理由があるに違いない、と聡は思い込みたくて訊いた。

「あの……、どうして……、殺したの？」

「俺、父親も前科者で……」

聡が息を飲むのが、大悟にはわかった。なぜか快感を覚えて一気に話す。

父の借金のこと。それを取立てに、たびたびヤクザのような連中が来ては、大悟に暴力をふるったこと。

「……それで、ある時、借金を障害者年金で払えって、指を切り落とされそうになって……。それで、はずみで刺してしまいました」

「……じゃ、ほとんど正当防衛じゃない」

息を詰めて聞いていた聡は、ほっとしたように肩を落とした。

「……よかった」

聡は独り言のように呟いて、ミルクティーのカップに顔をうずめる。

こくん、とミルクティーを一口飲むと、

「大悟くんは悪くないよ。……みんなそう思うよ」

と微笑を作った。

「悪くない、と思ってくれますか」

大悟は自らの犯罪を告白したときと同じ口調で、聡に問い掛けた。

まるで何かを確認するかのような口調だった。

聡はうなづく。

「私は悪くないと思うよ」

大悟は「そうですか」と俯いた。

なぜ、ここで俯くのか聡にはよくわからなかった。

うなだれた大悟は、垂れた前髪と、その向こうに睫が見えるだけで、

その表情はまるで見えない。

「……大悟くん？」

聡の声に、大悟は意を決したように、再び顔をあげた。

「先生。俺、本当は殺していません」

「えっ」

「本当は……あのとき、ヤクザを刺し殺したのは……、将なんです」

１９４◆春の嵐４

「本当は……あのとき、ヤクザを刺し殺したのは……、将なんです」

飲んだ息が詰まっていくように苦しい。言葉はとうに失っている聡だ。

雨がひとしきり強くなった。ベランダの手すりを叩きつけるかのような音。

聡の瞳にひそむ『何故』をキャッチして大悟は続けた。

「あのとき……ヤクザが取り立てに来たとき、将も一緒でした。将はいつも俺とつるんでいましたから……」

聡は、大悟の話を聞きながら、自らの記憶との合致があることに気付いていた。

『鷹枝くんってね、人殺ししたって噂流れてるんだよ』

と言ったのは誰だったか。

「それでヤクザが俺の指を切り落とすって、俺を押さえつけて……。見ていた将がヤクザを刺したんです」

聡はつまった息を無理やり臓腑に落とすがごとく唾を飲み込む。目は見開いたまま瞬きを忘れてしまった。

ビー玉のような目は大悟のほうを向いていたが、心は目の前の大悟

ではなく遠い記憶を彷徨していた。

「それで、ヤクザは出血多量で死にました」

聡の意識はとうに、記憶の中の将のセリフを探し出していた。

『俺は何をしたって許されるんだ。人を、例え、刺し殺したとしても』

まさか、とは思ったが、現実に経験していたとは。

聡は、こびりついたような視線をギリギリと動かして墜落させた。

一方、大悟はどうして自分がそんな告白を聡にしているのかわからなかった。

こんなことは、今まで誰にも話さなかったことである。

自らこそが殺人者である、という身代わりを、当時１５歳だった大悟だが、相当の覚悟で引き受けたのだ。

将の父親が相当な権力者だというのは知っている。もし、漏らせば自分の命も危ない。

現に、あのとき事件を目撃したもう一人のヤクザは消されているのだから。

なのに……どうして。こうも口を滑らせてしまうのか。将の最愛の女に向かって。

「先生。でも、将がヤクザを殺さなかったら、俺は今ごろ指がありません……」

目を伏せてしまった聡に、言い訳のように、将の正当性を付け加える。

聡は低い声で何かをつぶやいた。不明瞭で聞こえない。俯いた顔の中で長い睫がふるえているのがわかる。

低く屋根を振るわせるかのような雷が断続的に響いている。

と、聡は顔をあげた。本来だったら自然のまま整ったような優しげな眉毛が歪んでいる。

その下の目もせつなげに歪んで大悟を見据えた。

「将は……大悟くんに、殺人の罪を着せたのね」

「いえ……」

大悟は、聡の苦しげな瞳にひるんだ。あとじさりしたいほど動揺した。

「将自身は、そんなことしたくなかったと思います」

ふいに声になった自らの言葉を聞いて、大悟は、将を陥れたいわけではない自分に気付く。

では、なぜ、こんなことを聡に聞かせて、わざわざ苦しめているのだろう。

大悟は、手渡されたタオルを指で弄んだ。それは雨で湿っている。

しかし、話せば話すほど、心が軽くなっていくのも事実なのだ。

自分がわからないままに大悟は続けた。

「でもアイツは……オヤジが政治家だし……。罪をあきらかにできなかったんだと思います。俺は……それでお金もらうことになってたし」

そうだ。金だった。

母親が早くに出て行き、父親に育児放棄されたかのような大悟は子供の頃から、金に困っていた。

金を稼ぐことのつらさだったら、恵まれた現代には時代遅れなほど、身にしみていた。

それから解放されたかったのも、大悟がその罪を被ることに決めた原因だ。

――腹いせ？

結局、罪を被ることによって得る金を受け取ることが出来ず……逆に自分が犯してもいない罪で社会的に不利益を被っていることへの……腹いせを、聡にぶつけているのだ。

聡の方は……完全に黙り込んでしまった。

色々な思考が一気に聡に押し寄せ、何を話せばいいのかわからなくなってしまったのだ。

……否。

しばらくたって、聡は気付く。訊きたいことの大半は、将に直接訊くべきことだということに。だから黙るしかないのだ。

大悟へは……何もない。

唯一の疑問があった。どうして、こんなことを聡に話すのか、ということ。

それもすぐ計り知れた。

つらいことが続いた大悟はその元凶である身代わりのことを話すことによって、少しでもラクになりたかったのだろう。

案の定、大悟は

「先生。こんなことを言ってすいません。だけど、俺……、誰かに俺が前科者なんかじゃないってわかってほしかったから……。すいません」

としきりに頭を下げるではないか。

聡は、せめて首を振った。

「いいの。大悟くんは、本当に悪くないんだから……」

ほとんど惰性で言葉を並べる。

あとは……放心していた聡は、いつのまにか一人で部屋にいた。

部屋を辞していく大悟の暗い瞳は少し気がかりだったものの、聡は構うことができずに、気がつくと一人になっていた。

雨が降っていることもすっかり意識の外だったが、突然の激しい雷鳴に、ようやく自分を取り戻す。

「将」

声に出してみる。最愛の男の名前は、あいかわらずいとおしいままだった。

――将、早く迎えに来て。

そして……早く抱きしめて。すべてを忘れるほどに。すべて小さなことに思えるように。

いっそ……もう戻れないところまで連れていってほしい。

聡はベッドに突っ伏した。

そんな聡に、激しい雨音が休みなく降りしきる……。

「あの、鷹枝です。ええと、将です。……お久しぶりです」

「あ？将？いやー久しぶりだなあ」

三宅弁護士は突然電話をかけてきた将に、懐かしそうな声を出した。

そのまま近況から思い出話になってしまいそうなところを将は、ぐいっと方向修正する。

「あの、おじさんさ、うちに留守電入れたでしょ？今日」

本題である留守電の意図を三宅に訊く。

「え？」

「なんか、例のお金の件とか言ってたけど」

そこまで将が説明してようやく、三宅は、ああ、と声を出した。

「何、将の電話番号だったの？……つまり島くんは、将の家に住んでるの？」

「え、あの電話、大悟にだったの？」

二人ともが「？」を投げ合うようにして、お互いの答えを類推する。

「そうそう。そうかー、島くんは将と暮らしているのか」

三宅は、同じことを繰り返して

「お前ら、またワルやってないだろうな」

と笑う。その笑いは『もう更生している』という安心感を前提にしたもので、将も

「あたりまえっすよ。もう１８ですから」

と笑いながら答えた。そして

「ところでさ、留守電で言ってた、例の金って何?」

将は気になったので訊いてみる。しかし、三宅は

「いや……」

と電話の向こうで口ごもった。

将は直感で、自分に関係することだ、とひらめいた。

「何で、島くんはこっちに来ることになったんだ?」

三宅は逆に訊いてきた。

「大悟さ、カンベツ出て愛知の親戚ンちに居たんだけど、酷い目にあったみたいでさ。殴られたり、給料ほとんど取られたり……。それで我慢できなくなって俺んちにきたんだ」

将はさらに続ける。

「なのに昨日、なぜか急に、愛知に行ったんだよ。で帰ってきたら殴られたみたいな傷あるし……。それと、さっきの留守電と何か関係ある？」

「関係は……ないとはいえないが……。将、島くん本人に連絡をとりたいんだが」

三宅はどうしても、核心は将に言いたくないらしい。

だけど、将にはおおよその予想はついている。

「俺も連絡とりたいんだけど、あいつ携帯の電源切ってるみたいなんだ。てか、なんか昨日から様子が変で……。おじさん、ひょっとして俺の身代わりのことで何かあったの？」

『俺は……もうダメだ』という大悟のかすれた声が、将の耳元に再びこだまする。

「む……」

三宅は電話の向こうで言いよどんだ。将はさらに切り込む。

「金って、大悟が俺の身代わりになるかわりに渡すことになってたんだろ？」

「将……」

将は別に驚かなかった。金で解決することへの痛みはあるものの、

当然すぎる償いだと思うから。

逆に何の償いもなく身代わりになってもらっていたなら、将のほうがつらすぎる。

……もちろん、金で感情まで解決できるなんて思っていないから、それを話す将の心はチクチクとうずく。

「将、それがな……」

三宅は観念したように、話を始めた。大悟が三宅に何を相談したのかを。

話を聞いているうちに将の眉はみるみる歪み、しまいには逆立つほどになった。

「金は……大悟に渡ってないのか。愛知の親戚とやらが全部使い果たしていたのか！」

将は思わず電話口に叫びそうになった。

「そうだ。大悟くんが高校に行っていると嘘をついてな。もちろんそんないいかげんな親戚に送金を継続できないから、次回からストップするが」

「あたりまえだ！」

将は怒りを吐き捨てるように声をあげた。

「ただ、保護者もいない島くんに、直接お金を渡すわけにはいかな

い。だが、お前と暮らしているならちょうどいい。とりあえず間接的に家賃や食費の補助はしてあげられるから」

「でも……それだけじゃなくて、なんとかならないのかよ？」

「とにかく、保護者を見つけることが先決だ。保護者がいなければたぶん、就職もできないはずだからね……。なんとかおじさんも、島くんの保護者になってくれる人はいないか探すから」

電話を切ったあとも、将は胸騒ぎが止まらなかった。

瑞樹を亡くし。就職も保護者がいないことで不利。……そして唯一の拠り所だった金も横取りされ。

傷が固まる前に掻き毟られるようなことが、ここのところの大悟に続いていたに違いない。

もう一度大悟の携帯に電話をかける。やはり電源を切っている。

『俺はもうダメだ』

暗いままの将の部屋に、稲光が閃く。

将はソファに腰を落とした。

心配と不安で頭を抱える……と、手が触れて、額の痛みが復活する。

ゆうべ大悟に頭突きをした名残。

『お前が瑞樹で遊んだ分、俺にアキラセンセイを貸してくれたって

いいだろ……』

――まさか。

突然、空襲か何かのような爆音が耳をつんざく。すぐ近くに雷が落ちたのだろう。

『俺はもうダメだ』

『アキラ先生とやらせろ』

『俺はもうダメだ』

『アキラ先生とやらせろ』

『俺はもうダメだ』

『アキラ先生とやらせろ』

ゆうべの大悟の言葉が将の脳裏をぐるぐると回転する。

回転速度はどんどん速くなり……ついに2つの言葉が合体してしまい、自暴自棄という答えを出す。

考えたくない。そんなことをするやつだと思いたくない。だけど。

嫌な予感に、将は跳ねるように立ち上がり、携帯を手に取った。

そして聡の無事を確かめる……。

１９５◆禍々しい形見１

――ついに言ってしまった。

聡の部屋を辞してコーポの階段を降りきったところで、大悟は大きく息をついた。

一生、自分だけの胸に秘めていよう。いや、本当に刺したのは自分だと思い込もうとしていた。なのに。

――俺も救いようがないな。

階段を降りた大悟の前を、再び春には似合わない滝のような雨が阻む。

――将……ごめんな……。

重い荷物を吐き出して軽くなったはずの心だが、そこにはべっとりと冷たい空虚が残っていた。

別名、絶望というのかもしれない。

絶望は、親友を裏切ったことで、腹にたまった空気のようにさらに自らを不快にさせていた。

『生まれたことが間違いだから』

天からの啓示のように、脳裏に声が蘇る。瑞樹の声だ。

瑞樹がたびたび呟いていた言葉。

彼女からため息のようにその言葉が発せられるたびに、大悟は

『違う。生んだ親は間違いだけど、俺たちは頑張れば幸せになれる』

と励ましていた。だけど、今、瑞樹の気持ちは彼女が乗り移ったようによくわかる。

「瑞樹……。お前のところに行こうか」

死ねば無になるのかもしれない。

このどうしようもない、不快感とも、友人を裏切った後悔とも、そして生きるために必要な金銭の悩みとも別れられるかもしれない。

大悟はポケットから瑞樹の骨の瓶を出した。

骨は雨が別世界のように、瓶の中でさらさらと乾いていた。

いっそ、こんな風になるのも、いいかもしれない。

大悟は瓶の中の白い骨に憧れた。

それほどに……大悟は疲れていたのだ。

親にさえも頼らずに生きてきた大悟の精神は、ただでさえ限界だった。

そこに、殺人犯という重い十字架が加わり。

それに耐えるべく、庇護しつつ頼っていた瑞樹もいなくなり……もう大悟にとって、生きるということはつらいことでしかなかった。

『死のう』

ついに大悟は決意してしまった。あっさりと。

今の大悟には生へと引き止める未練など何も無い。決意してしまえば話は早い。

大悟は死に方を考え始めた。

その前に。

将に、あのことを聡に話してしまったことを謝っておかなくては。

大悟は、将に電話を掛けようとして、着信履歴から将の番号を探した。

そのとき、目に止まった番号があった。

昨日、聡との夕食の後に掛かってきた番号……瑞樹の祖母の番号である。

「もしもし……」

将からの電話に聡はすぐに電話に出た。

雷が一段落した分、間断なく激しい雨音が続いている。

「あ、アキラ。俺。今、試験場から帰ってきた」

「将……」

なんとなく、返答がだるそうに聞こえるのは気のせいだろうか。

「今日、大悟が来なかった?」

将は、思い切って訊いてみた。

「来たよ」

聡の返事に将は息を飲み込んだ。思わず

「それで!」

と反射的に訊いてしまう。その訊き方は答えづらい、と言ってしまった後で気付く。

だいたい、大悟が何で聡の住所を知っているのだ、と将の思考は慌てた。

しかし……将は思いなおす。将と同居しているのだから、いくらで

も知るチャンスはあったのかもしれない。
現に、携帯やパソコン、車のナビに聡の住所の情報は入っているから。

「それで……って？」

聡は訊き返してきた。

単に質問の意味がわからないのか、それともつらい出来事を隠しているのかを将は、聡の声音から必死で判別しようとした。

「何も……なかった？」

直接的なマズい訊き方だと自分でも思う。

「それ、どういう意味？」

聡の答え方にずっしりしたものを感じてしまう。

「いや……、大悟、聡の部屋にわざわざ何しに行ったのかな……と思って」

「……悩みを、相談しに来ただけ、だよ。……大悟くん、部屋に戻ってないの？」

「ああ。いない」

答えながら、将は聡の答え方について、いやにゆっくりしすぎていると思った。

考えながら、言葉を選んでいるような印象。

それが、将には、悲劇的な出来事を隠しているように思えた。

「アキラ、大悟に何もされなかった？」

将は、あえて直球を投げてみる。

「何もって、何よ。あるわけないじゃない」

怒ったような聡の口調。それでようやく将は安心することができる。

「……自分の、友達でしょ」

怒りだけでなく、軽蔑を含んだ声が電話の向こうから付け加えられ、将は慌てた。

「いや、大悟の様子が変だったからさ。アキラ、大悟、ヘンじゃなかった？」

とフォローを加える。

「……いろいろ悩んでたみたい」

あいかわらず、いつもより低い聡の声。

だけど、大悟に何もされていないのなら、大丈夫。

最初の予定通り、ホテルでの逢瀬へと進めばいい。将は

「そうか。どうしたんだろうなー、あいつ」

声のトーンを無理やり変え、

「アキラ、今から迎えに行くから。準備は出来てるんだろ」

と明るい声を出そうと試みた。

しかし、電話の向こうからは、はずんだ返事は返ってこない。

沈黙が海底を泳ぐエイのようにのったりと横切っていった後、低い聡の声が聞こえてきた。

「将……」

「ん？」

ようやく、聞こえた聡の声は、

「大悟くんに会って」

というものだった。

「え？」

将は思わず電話を持ち直すようにして訊き返す。

「大悟くん、とても辛そうだった」

聡の方は。

将が何を心配しているのか、最初からわかっていた。

将も、大悟が置かれた危機的な状況がわかっているのだ。

だから自暴自棄になって自分に乱暴な形で手を出すのではと恐れていたのだろう。

しかし、大悟の自暴自棄は、別の方向になって自分に向けられた。

将が関わる大悟の不幸の原因の一角を、自分に告白するという形で……。

しかし、それを告白したことによって、大悟はより苦しんでいるのではないか。

聡は、大悟をそれほど知っているわけではない。だけど……

もう5年も将と友達だということ。

将から聞いた瑞樹の死への悲しみ方。

そして萩で一緒だった2〜3日。

タンメンを一緒に食べた短い時間とその後……

断片的にしか過ぎない大悟の印象を組み合わせて大悟の人間像を類推する。

すると、どうしても、あのような秘密を暴露してすっきりするような人間ではない、という結論に至ってしまうのだ。

そして……電波の悪いテレビのようにざらついた聡の記憶の中で、聡の部屋を辞すときの大悟の暗い瞳がサブリミナルのように聡の中でフラッシュする。

「……だって、考えてみて。私のところに、わざわざ話しに来たんだよ」

聡は将に訴える。

「何の話、したんだよ」

将の質問に聡は答えられない。まさか将の人殺しを大悟が被っていることを告白されたとは……。

「それは……。悩みとか」

聡は言葉をにごらせた。

「とにかく、将。大悟くんが心配なの。私は待ってるから、大悟くんを探して」

無茶なことを言ってると、自分でも思う。

聡は……早く抱いて欲しい、戻れないところまで連れて行ってほしい、と願いつつ、

実は殺人犯だった将に会うのが恐いのだ。

いや、将がこわい、というより、将にあって自分が何を口走るか、どんな態度を取るか、が恐い。

それで将に逢うのを必死で遅らせているのだ、ということを聡はとうに自覚している。

「……って、どこに行ったかわかんないし。電話さっきから掛けてるけどつながんないし」

聡は一瞬考える。

奇跡のように閃く昨日の記憶。あっ、と声に出す。

「昨日、タンメン食べた帰りに、大悟くんの携帯に、葉山さんのおばあちゃんから電話があった」

「え！それホント？」

「うん。瑞樹のおばあちゃん、って訊き返してたから。もしかしてそこに行くかも」

瑞樹の祖母は小山在住である。

その地名を思い出したとき、将の脳裏に暗雲のように１ヶ月あまり前の記憶がたちこめていく。

ＪＲ〇山駅。鉄道警察隊。ＤＮＡ鑑定。時速２００キロの新幹線。

そこは……瑞樹が、そんなふうに最期を遂げた場所である。

そして、それは嫌な連想となって、将の中で自暴自棄の大悟とつながってしまった。

196◆禍々しい形見2

「……将、大悟くん、今考えると、何かすごく思いつめた感じだった……。だから……お願い」

聡に念押しされなくても、将は、大悟が心配でたまらなくなった。

聡と一刻も早く逢いたいのは変わらないが、こんな心配事を抱えたままで彼女を抱くのはよくないように思えた。

「……わかった。なるべく早く見つけて、そっち行くから」

電話を切った後で、将は深いため息をついた。

聡は、ベッドに腰掛けたまま切れた携帯を見つめた。そこには将の待受画像があった。

気取っているけど、くったくのない表情。

そんな将がいとおしいのは変わりはない。もし目の前にいたなら……そのぬくもりを確かめたくなるだろう。

だけど、彼は『殺人』という、人間に存在する罪の中でもっとも重いものを犯している。

聡は、将がその罪を犯した状況は理解していた。

仮に。

もし、聡の目の前で、将がヤクザに指を切断されそうになっていたら……そこに刃物があれば聡はためらわずヤクザにそれを突き立てるのかもしれない。

理屈、いや心でも、それは理解できることだ。

なのに。

とにかく今日は、将に抱かれるわけにはいかない。

聡は心の奥深くで、すでにそんな風にジャッジを下している。

大悟を探して、と将に願ったうち本心は1／3で、残りは、時間稼ぎだった。

将に対して時間稼ぎなんて真似をする自分が信じられない。

そんな自分が哀しくて聡は携帯を握り締めたまま、ベッドに再び倒れこんだ。

単に今はショックを受けているだけだ。

きっとそうだ。あまりにも事が衝撃的だったから。

そんな風に思い込もうとした聡は、いったん起き上がると蛍光灯を

消す。

テレビのほうは、さっき消してある。

昼だというのに濃いグレーに沈んだ部屋は、外の激しい雨音がいっそう響くようだ。

雨音から逃げるように掛け布団とシーツの間に頭までもぐりこむ。

――とにかく今は少し眠ろう。

眠りは、尖った記憶を丸くさせ、波立った感情を静めてくれるだろう。

目覚めたときは、元のように、将に抱かれるのが待ち遠しくなっているに違いない。きっと……。

聡は布団で胎児のように丸まった。

布団の中まで忍び寄る雨音は、最初耳障りだったが、やがて子守唄になり、聡を午睡にいざなっていった。

大悟は、小山行きの快速に乗っていた。

聡の類推どおり、大悟は昨日、瑞樹の祖母から電話をもらっていた。

どうして、自分の番号を知っているのかわからなかったが、瑞樹の祖母は、遠慮がちな口調ながらも、大悟のことを瑞樹の恋人だったと認識しているようだった。

『先日、東京で、あのこの形見わけをしたんです。それで、もしよかったら、島さんにももらっていただけたら、あのこも喜ぶと思って……』

深酒をしたおかげで、すっかり忘れてしまっていたが、思い出した大悟は、さっそく今日もらいにいっていいか、と連絡を入れた。

小山入りするのに新幹線は避けてしまっていた。

いや、避けたくなくても、大悟の手持ちの金では乗れなかったのだ。

おかげで……あの惨劇の現場を直接目にすることなく、大悟は小山に着いた。

在来線でかつ昼のせいか、あの悲劇をオーバーラップさせる要素はほとんどなかった。

それでも『新幹線のりば』という案内板が大悟の心のかさぶたを引っ掻く。

あのとき、何も見えていなかったはずなのに。

線路上にうずくまる瑞樹。

次の瞬間には、もう縞模様になって通り過ぎる新幹線の車両しか視界になかった……。

あのとき、瑞樹の腕を掴めていれば。

いや、もっと早く、瑞樹を迎えに行っていれば……禁断症状が起きることに早く気がついていれば。

大悟は、今までに何度となく繰り返した後悔を再び繰り返す。

それを振り払うようにして、大悟は瑞樹の祖母の家方面のバスのりばに足を運んだ。

ここでも強い雨に、黒く染まったアスファルトが雨雲を鈍く反射していた。

もし、大悟が瑞樹の祖母を前から知っていたら、その老け込み方に驚いたことだろう。

しかし、幸い大悟は、前の姿を知らない。

茶色に染めた髪がとび色に見えてしまうほどのくすんだ白髪に、深く刻まれた皺のこの女性に何の疑問も持たずに挨拶をした。

瑞樹の祖母・春江は駅から少し離れた小さなアパートに独りで暮らしていた。

何の変哲も無いモルタルのアパートだが、雨の中、寄り添う木立がその建物を少し優しげに見せていた。

「あなたが瑞樹の……」

春江は大悟を見ると、涙を流した。

年をとって涙もろくなっているのだろうか……相手がおくめんもなく感情を見せる分、大悟は自然に気丈になっていた。

驚くことに、瑞樹の位牌はこの老婆の部屋にあった。

大悟は、はからずも、ここで焼香することができた。

線香の香りは、雨音が響くアパートの部屋に静かに広がっていった。

位牌と共に飾られた写真は、瑞樹が小さな頃のものと、大悟も持っているクラス写真の2つだった。

他人が見たら、その2枚は、同一人物とは思えないほど印象が違った。

小さい頃の瑞樹は、笑い声が聞こえてきそうな笑顔だった。まん丸なほっぺがいかにも健康的だ。

それに対して、クラス写真はまっ白な顔に真っ黒な髪と、ファインダーに注がれる冷たい瞳。

美しいが見るものを威圧するような冷たさに満ちていた。

「あんな家に置いておくなんて、あまりにも可哀想なものですから」と春江は大悟の背中に向かって激しい語調で言い放ち、また涙を流した。

泣き崩れるこの老婆は、瑞樹の死の真相を知っているのだろうか。

直接的なもの……覚醒剤のほうはおそらく知らないだろう。

だが間接的なほうは……すなわち、義父からの性的虐待については知っていたのだろうか。

だが、霊前でそれを口にするのを憚られた大悟は、代わりに訊いてみる。

「僕のことは、どうして……？」

「瑞樹が、教えてくれました。大事にしてくれる人と一緒に滋賀にいく、って……。あのこが逝く1週間前に……」

春江の瞳は、まるで涙の塩が水晶体にこびりついてしまったようなグレーだった。

そんな目をしばたかせながら、生前の瑞樹のことを話し出した。

「まだ17歳ですから、私は心配だったんですが、とても落ち着いてて、今までになく幸せそうな様子だったので……」

言葉と一緒にほとばしり出るように、グレーの瞳からは、また涙が

溢れてくるのだった。

天が彼女に同情するように、雨音はあいかわらず続いている。

◇　◇　◇

『滋賀って……お前、高校はどうするのかい？』

『もう、ほとんど行ってないもん』

と瑞樹は春江に笑顔を見せた。

『もし必要なようだったら、大悟と一緒に夜間にでも行くよ』

『でも……滋賀は、遠いねえ。こうやってしょっちゅう遊びにこれなくなってしまうんだろ』

『おばあちゃんが、遊びにきなよ。京都とか一緒にいこうよ』

『そうねえ……。その、大悟って人は、どんな人なの？』

『すっごく、いい人だから心配しないで。ほら！……いまどきの若い人にしては、まじめそうでしょ』

瑞樹はそこで携帯で撮影した写真を見せた。

瑞樹と一緒に新幹線でこなごなになったであろう携帯には、まだ今より髪が短い頃の大悟と瑞樹が写っていたという。

◇　◇　◇

大悟の携帯番号を聞いたのも、そのときだったという。

「一度、電話ででもご挨拶、と思っていた矢先に……ふびんな子だよ」

春江は、皺だらけの顔がほとびんばかりに泣き出した。

思わず、大悟の目も熱くなり、大悟はあわてて瞬きをした。

「あの……それで、形見を」

「そう、そうだったわね」

春江は涙をぬぐうと、奥の間によろよろと入って、ボストンバックを持ってきた。

「これ……。あのこが滋賀に持っていこうとした荷物です」

大悟は、開けてもいいかと訊いて、そのジッパーを開けた。

「着替えが中心なんですけど……」と春江が言い添える。

きちんと収まった荷物の一番上に、小さなぬいぐるみが入っていた。

白、というよりはグレーの小さな掌サイズの犬。

大悟はそれをそっと取り出した。

「小さい頃あのこは、それをとっても気に入っていてねえ。お母さんに構ってもらえないからなのか、いつも独りでそのこを握りしめててねえ……」

白かったであろう犬は、瑞樹の愛着のままに、その孤独を吸い込んだような寂しげな色に染まっている。

大悟の手の中で、犬はその黒い瞳を大悟のほうに向けた。

はっきりと表情をつくっていない犬の顔は、嬉しいようにも悲しいようにも見えた。

大悟は犬をそっと握ってみた。犬は、古いぬいぐるみ特有の柔らかい感触を大悟に残した。

おそらく、幼い瑞樹の心に同情するように共鳴して、その表情を変えたのだろう。

「そのバッグはあの駅の……ホームに置いてあったんです……」

そういうと、春江はまた湧き出た涙をぬぐった。

犬は……バッグの中で、瑞樹の最期にどんな表情で沈黙していたのだろうか。

それはわからないが、大悟の手の中の犬は、とてつもなく寂しげな顔に見えた。

正視することに耐えられず、犬を握ったまま、大悟は下をむいた。

そのジーンズの腿に、パタパタという小さな音と共に、濃紺の丸い染みが複数現れた……ついに堪えられなくなった大悟の目から、涙が落ちたのだ。

「瑞樹……」

大悟は、このままだと、とめどのない哀しみに飲み込まれそうになる、とあわてて犬を絨毯の上にそっと置くと、涙を手の甲でぬぐった。

そしてボストンの他の荷物を注意深く出す。本当に着替えが中心だった。

ポケットに固い手触りがあった。

大悟は手探りでそれを探し出すと取り出した。鍵だった。おそらくコインロッカーだろう。

「何かしら……気付かなかったわ」

春江が目を見はる。

１９７◆諦めと新たな希望と

電話から聡の声が聞こえなくなると、部屋は再び湿った雨音に包まれる。

将は、ソファーにごろりと寝転んで暗い天井を仰いだ。

昨日のワークアウトの残滓か、体がだるい。わずかだが体を動かす度に筋肉痛もある。

大悟を探す、と聡に返事はしたものの……電話もつながらない状況だ。

小山にいる瑞樹の祖母から大悟に連絡があったというが、それだけでは本当に小山にいるのかどうかもわからない。

よしんば、小山にいたとしても、将には瑞樹の祖母の家がどこだかもわからない。調べようもない。瑞樹の自宅に聞けばわかるのかもしれないが、そもそも自宅の番号を知らない。

瑞樹自身が家に帰りたくないといっていたせいなのか、将はそれを知らなかったのだ……。

それに小山は新幹線が止まるような駅だ。駅をずっと見張るというのも無理があるだろう。

それに、だいたいこんな雨だ。人を探すのには不向きだろう。

将は、すぐに出かけない言い訳をしながら再び、ため息をつく。思

考を聡の方に向けてみる。

――今日もダメなのかな。

電話の聡の声を思い出せば、早くもそんな諦めが浮かんでくる。

将の予定では、今ごろ、聡を迎えに行って、どこかでランチでも食べて、ホテルを目指している頃だ。

今まで何度も、聡を抱くチャンスがあったのに、そのたびに邪魔が入ってまっとうできなかった。

今回もそうなのだろうか。

将は頭を抱えて、横向きになり、窓を見る。

考えてみれば、聡は、卒業するまで『男と女』にならないほうがいい、といつも言っていた。

それを……せっかく18歳になったのだから、と将がなかば強引にお願いした部分もある。

それでも、今回は聡も楽しみにしているようだったから、今度こそ、と将は期待したのだが、ひょっとしたら大悟の件でお流れなんだろうか……。

将は、もう一度天井を見上げる。

そこに聡の姿を投影する。

将はそれを一瞬うらめしく眺めようとして、それでも狂おしいほどに逢いたい自分に気付く。

本当は聡を抱きたい。だけど抱けなくても逢いたい。

もしダメなら、それでもいい。

そんなことで、自分の聡への思いは変わらない。

どんなにじらされても、待たされても……。

将はそれほどに聡が必要な自分を再確認した。

出かけてみるか、とのろのろ起き上がる。

しかし、雷はおさまったものの、あいかわらず雨は続いているようだ。

将は地図を持ってきて開いた。

「ゲー、大磯より遠いじゃん……」

将のマンションからだと、小山はヒージーのいる大磯より少し遠いようだった。

いるかいないか不確実なのに、そんなところまで行きたくない。

と、将は、大磯と比べついでに、ヒージーこと曽祖父の巌を思い出した。

大悟の保護者を……ヒージーになんとかしてもらえないだろうか。

ヒージー本人は１００歳だから無理だとしても、大臣まで務めた人物だ。

誰か紹介してもらえるに違いない。

保護者が見つかって、ちゃんとお金を受け取れるようになれば、少しは大悟も気が晴れるのではないだろうか。

将はさっそくヒージーに電話をかけた。

電話口に出たヒージーは、しわがれた大声で

「将か！ちょうどよかった。今から来い！」

と用件も聞かずに怒鳴るように言った。

補聴器を付けているのに、長年のならわしなのか、電話口の声が異常に大きい。

「え、どうしたの」

とまどった将に、ヒージーは

「肉じゃ」

と嬉しそうに笑った。

「米沢牛のとてもいいところをたくさんいただいてな。ちょうどよ

かった。今日は学校は休みじゃろう。今からすぐ来い。夕食はしゃぶしゃぶと網焼きじゃ」

「いや、俺それどころじゃ」

「とにかく来い！」

日頃穏やかなヒージーだが、年をとったせいか、言い出したら聞かない頑固なときがある。

まさに今のヒージーはそうなっているようだ。

「いや、ヒージー、今日俺、彼女とデートなんだよ」

「あきらさんか。じゃあ、連れてこい。肉はたくさんあるぞ」

１００歳の年寄りにしては記憶力がいいな、と一瞬感心した将だが

「そうじゃなくて……頼み事があって電話したんだけど」

と話を戻す。だが

「頼みごとだと？そんなものは、こっちで聞く。とにかく来い！わかったな」

と、一方的に電話は切れた。

将は携帯を握ったままボーゼンとしてしまった。

「連れて来いといわれても……」

聡は、さっきの話のようすだと、大悟のことをひどく心配しているようだ。

大悟のことをほったらかして、聡をホテル……ましてや大磯には誘えない。

将は三たびのため息をつくと、ダメもとで大悟に電話をかけてみる。やはり通じない。

時計を見る。まだ1時すぎだ。

そこで、昼食を食べていない将はひどい空腹に気付く。

一息入れてから、考えよう。

雨で外に出るのも面倒な将は、キッチンをあさり、カップ麺を何とか探し出した。

まだどうにでも出来る。

お湯をわかしながら将は考えた。

なんだったら夕食を大磯で食べて、そのあとホテルに入ってもいい。

極上肉のしゃぶしゃぶと網焼きの、こってりとした脂の甘味を舌の上に想像する。

目の前のカップ麺とのコントラストで、それは光り輝くような夢の味に思えた。

それは逆にいいアイデアなのかもしれない。

大好きなヒージーに聡を紹介する。

それは自分の愛の磐石さと将来への決意を聡に伝えることになるだろう。

――うん。そうしよう。大悟とは何とか連絡を付けて。

ようやく電気を付けたリビングで、カップ麺をすすりながら、将は今日という日の幸せをまだ信じている。

１９８◆拒絶

だるい体を起こすと将はソファで伸びをした。時計はもう１５時に近くなっていた。

昨日よく眠れなかった将である。カップ麺を食べ終わって、どうやらここで少しうたた寝したらしい。

雨音は若干弱まったようだ。

将は、もう１回大悟に電話をかけた。今度はあっさりと繋がった。

本当は、大悟が列車を降りて、瑞樹の祖母・春江に連絡を入れた１３時３０分前……つまり、将がさっき連絡した直後には繋がるようになっていたのだが。

「……大悟？俺」

つながることを想定していなかったので、何て声をかけるべきかを何も考えていなかった将はつい

「昨日は……ごめん」

などと言ってしまった。

言ってしまったあとで何で自分が謝らないといけないんだ、と一瞬後悔した。

だが、やはり暴力をふるったのはいけなかった、とすぐに思い直し

て撤回はしなかった。

すると大悟のほうからも

「俺の方こそ……悪かった」

と返ってきた。

「大悟、今どこにいるんだ？」

「小山。だけど、もう帰るよ」

やはり大悟は小山にいた。聡が言っていたとおりだ。

「瑞樹のばあさんちか」

「ああ」

「……迎えに、行こうか？」

「いや、いい。寄るところもあるし」

「そうか……」

将はホッとした。迎えに行こうかと提案しつつ、もし頼むといわれたら困る将だった。

何せ、小山まで2時間ぐらいはかかる。往復すれば4時間。もし迎えにいけばヒージーの家にいけなくなってしまうからだ。

「それで大悟……、大丈夫か？」

そんな計算をした罪滅ぼしのように、将は親身な声を出す。

「うん」

短く返事をする大悟の心中など、将はわかるはずもない。

瑞樹の後を追うことを考えた大悟だが、瑞樹の形見を受け取ることでようやく踏みとどまっていた。

特に……残されたコインロッカーのキーに何か胸騒ぎがしていた。

それを確かめたい。絶望の中で、大悟に託された使命が、彼に死を忘れさせていた。

そこへ、ホームに電車が近づくというアナウンスが聞こえた。

将は思わずドキッとする。『あの』現場にいるのでは、と思って思わず携帯を握り締め

「今、駅か」

と問う。

「ああ」

大悟はあいかわらず短く答えた。続いて列車がホームに入ったらしい轟音が聞こえてきた。

大悟がいるのはどうやら在来線らしかった。

「じゃ、俺、電車に乗るから」

アナウンスをバックに大悟の声が聞こえた。

どうやら瑞樹の後を追うつもりで駅にいたのではないらしいのはそのしっかりとした口調からもわかった。

「大悟」

「将……。本当にごめんな」

大悟はそう言い残して、電話を切った。

何に対して大悟が謝ったのか、将はわかっていなかった。

それを知ったら、将は聡の元に行くのに、とてつもない勇気がいるところだった。

だけど……幸せなことに将は聡が、将の昔の罪を……そしてそれを大悟に着せて安穏としていたことを、すでに知っているなんて思いもよらなかった。

大悟は都内のＳ駅で快速列車を降りた。巨大なターミナル駅である。

大悟はポケットに手を突っ込んだまま、多くの人に紛れて足早にホームを降りる。

ポケットの中の手には、あのコインロッカーの鍵が握られている。

駅の係員を見つけた大悟は、コインロッカーの鍵を見せた。

この駅のであるというのはわかっているが、瑞樹が逝ってもう1ヶ月以上が経つ。

中身はとっくに出されて保管されているだろう、と大悟は思っていた。

だが、何人かの係員をたらいまわしにされた末に、

「ああ。これは長期契約分のコインロッカーですよ」

ということが判明した。

半年とか1年分の料金を払って、その間、コインロッカーを自分のトランクとして使えるシステムは、最近人気だという。

瑞樹はこのロッカーに半年分の利用料を支払っていて、ちょうど今月末が契約切れになるところだった。

大悟はこのロッカーの契約者がすでに故人で、中身を遺品として受け取りたい旨を伝えた。

こんなケースは初めてだったらしく、係員は他の係員と相談して、

大悟に事務所から瑞樹の祖母の電話をかけさせると、念のために彼女に確認を取った。

「本来は、身内の方が取りにこないといけないんですけど……」

と係員は言ったが何せ、瑞樹の祖母・春江は小山在住である。

春江自身も電話口で大悟に譲りたいと希望したこともあって、ＦＡＸで印鑑付きの念書を取ったうえでようやく許可してくれた。

大悟は、教えられた場所にあるロッカーへ行った。

半年契約してまで、入れていた中身。

大悟は、ある予感がしていた。自宅はもちろん、将のマンションにも持って帰れないもの。

注射痕……そして、手首の擦れたような傷。

数々の生前の瑞樹が残した証拠の記憶が、歩く大悟にフラッシュバックする。

大悟は、ロッカーの前に立つと、唾を飲み込んだ。

人波が切れるのをわざわざ待って、大悟はキーを差し込んだ。

中には、大き目の手提げの紙袋が入っていた。

ブランド名が書かれた厚手の紙でできた紙袋なのに、ぷっくりと膨れて見えるほど中身が詰まっていた。

紙袋の口付近には、黒のTシャツが入っていた。

それを掻き分けて、大悟はさらに紙袋の深部をさぐる。

奥には派手な色の下着と一緒に手錠、首輪、縄、そしておぞましい道具類が入っていることが一瞬でわかり、大悟は顔をあげるとあたりを見回した。

誰もいない。

大悟はホッとして紙袋の口に元通りTシャツを被せた。

係員が立ち会わなくてよかった、と胸を撫で下ろした大悟は、その少し重い紙袋を持ち上げると、係員にロッカーの鍵を返すべく歩き出した。

ピンポーン

チャイムの音が意味をなさないほどの直後に将は合鍵を使って部屋に入ってきた。

ベッドにもぐりこんでいた聡は、浅い眠りからとうに目覚めていたが、重い心にひきずられるように、

そのまま布団の中で丸まっていた。

雨の音はいつのまにか布団の中まで届かなくなっていた。

「アキラ！お待たせ！」

呼びかけられて聡は横たわったまま、のろのろと将のほうを振り返った。

「しょう……」

「行こうぜ。ホラ起きて」

将は聡の手を取って無理やり体を起こした。

体を起こした聡だが、顔は将のほうを見ることなく、そのまま下を向いてしまった。

「アキラ？」

聡は俯いてだまっている。

将は、遠慮なくベッド脇に腰掛けると、聡の肩に手をかけてその顔をのぞきこんだ。

まっ白な顔色の中で、黒目がちの瞳がいっそう目立つ。

それは、一瞬将の目のあたりまでもちあがったものの、またすぐに墜落してしまった。

「アキラ……大悟はもう大丈夫だってさ。だから、行こう？」

「将……」

将は、優しく聡をうながした。

だけど、聡の視線は墜落したまま、動かない。長い睫だけがときどきしばたくのが見えるだけだ。

「将……ごめん。あたし、今日、行けない」

「え」

という形の口から将は息を吸い込む。それは鼻から同じ勢いで出て行った。聡の肩から手が離れる。

――やっぱり。

将はさほどショックを受けなかった。こんなことだろうというのは少し予想していたから。

『行けない』と言ってしまった聡の視線はようやく、将の顔まで浮上した。

その顔に、あきらかな落胆が見えて、聡は言い訳をする。

ショックは薄かったが、やはり将の顔には正直に落胆が現れてしまったのだ。

「具合が……悪くなっちゃったの。本当にごめん」

たしかに、体はこれ以上ないほどだるかった。

「ぜんぜん出られない？」

将は咎めるような口調ではなかった。あくまでも優しい。

のぞきこむように、見つめ返されて、聡の視線は再び墜落してしまった。

「今日さ……。俺を可愛がってくれたひーじーさんが大磯に住んでるんだけど。アキラをつれて来いって言われてて……。米沢牛がいっぱいあるんだって」

将はゆっくりと聡に語りかける。

「俺も……、アキラをひーじーさんにぜひ会わせたいんだ。ホテルはいいから、一緒に来てくれないかな」

ひーじーさん、曽祖父。……将の家だったらたぶん、大臣経験者だろう。

家の……言って見れば長老に自分を会わせたいという将の気持ちは、とても嬉しいけれど、今のこんな状態では会うことはできない。

「……ゴメン。無理」

「アキラ……」

将は、うつむく聡を見つめた。

やはり、大悟に何かされたのか。それとも傷つくことでも言われたのだろうか。

しかし、それを口にすることは憚られた。聡は電話で、何もない、と言い切っていたのだ。

疑問を繰り返すことは、聡と大悟の両方を疑うことになる。

将は、聡の表情に何か鍵がないか、覗き込みながら確かめる。

「……どうしても、だめ？」

聡はうつむいたまま、うなづいた。

「ごめん。将……悪いけど、今日はダメ」

「そうか……」

聡の表情からは何も読み取れなかった。

だけど、何かを隠している、と将は直感した。でも……問い詰めても絶対に言わないに違いない。

将は聡の肩にふたたび手を添えると、そのまま聡の体を元通りに横たえた。

そして布団を掛けなおす。

「俺……、今日付き添っていようか？」

将は縋るように聡を見つめた。

聡は将の寂しい瞳の色を見つめた。そのいとおしさは変わらないのに。

だけど、非情にも、首を横に振ってしまう自分に、より胸が苦しくなる。

「ううん……。おじいさま、たぶん将を待ってるわ。お肉もたぶん、将のためにわざわざ用意したんだと思う」

「アキラ……」

「私は寝てれば大丈夫だから……。悪いけど一人で行って」

将の誕生日を祝うはずなのに、どうしてこんなひどいことを言っているんだろう。

聡は自分の心がつかめなくて軽い吐き気さえこみあげてくる。

それを押さえるように寝返りを打って、視界から将を追い出した。

「アキラ……」

背を向けた聡に、将ははっきりと『拒絶』を感じた。

「アキラ……。俺、なんにもしてないよな」

将は立ち上がると、横たわる聡に確かめるべく問い掛けた。

拒絶されるようなことをした覚えは……どんなに考えても思いつかない。

「俺、アキラを傷つけること何もしてないよな。してたら……謝る」

「将は……なんにもしてないよ。あたしが……勝手なだけ」

背を向けたままの聡から、くぐもった声が聞こえた。

そのまま、沈黙が壁のように将を遮った。

冷蔵庫が、かすかに不快なモーター音をたてている。

将はそれに抗うように思い切っていう。

「アキラ……。俺さ。高校にいる間はプラトニックがいい、ってアキラが言うなら、それでもかまわないよ」

将の口調はあくまでも穏やかだった。

「セックスできないからって、俺の気持ちは変わらないから……。そんな軽い気持ちじゃないから」

１０代のまだ青さが残る口調で、一生懸命に伝えようとする。その真摯さは聡にも伝わった。

「前にも言ったと思うけど……アキラは俺の運命のひとだから」

その声に思わず、横たわったままの聡の目から涙がこぼれる。

何かを感じる前に……反射のような涙。左目の涙は右目に入り、そのまま目じりを伝って、枕に落ちていった。

しかし、それは顔の半分を覆った布団で将からは見えなかった。

本当は、聡がどうしてこんな風になったのか、なんとか知りたい。

それに、いつになく顔色の悪い聡が本当に心配だった。

だけど。聡の言うとおり、ヒージーは将のために肉を用意したのだろう。

誕生日の前後の土日にはいつも、ヒージーは将の好物を用意して、強引に呼びつけるのが毎年の習いだったから。

「アキラ……。じゃあ俺、行くから」

将が行く気配を聡の背中は察知していた。

「あとで、電話するから」

「うん」

聡はあいかわらず体を動かさないで小さく返事だけをした。

空気がうごくのがわかる。

呼び止めたい。だけど……。聡の体はびくとも動かない。

ドアが静かにあいて、そして閉まる……そして、外から鍵をかける音を聡はなすすべもなく聞いていた。

将が完全に行ってしまって、ようやく聡は体を起こした。

「将……」

涙をぬぐう。

こんな風に泣くぐらいなら、どうして将にもっと優しくしなかったのか。と自分を責める。

――あんなに楽しみにしていたのに……。

将の嬉しげな様子が聡の脳裏に蘇る。

将が……もちろん聡も楽しみにしていたイベントを聡は自ら壊してしまったのだ。

楽しみにしていたイベントをすっぽかされたのに、将は優しかった。

それを思い出して、聡の目にさらに新しい涙が大量に湧き出てくる。

それを拭うためにティッシュを取ろうとして、聡の視界に小さな紙

袋が目に入った。

将にプレゼントとして渡そうとした万年筆が入った紙袋だ。

１８歳のプレゼントも渡させなかった……聡は床に座り込んだ。

１９９◆団欒のあと

ミニは雨に濡れた道路を走っている。

黒く湿った道路とタイヤが立てる冷たい音が、どんよりとした空の下で将の心と共鳴していた。

将は西へと車を走らせながら、寂しかった。

聡の前では、ものわかりのよい男を演じていたけれど、心は孤独で千切れそうだった。

『あたしね。あのマグカップ見るたんびに、あのときの嬉しさが蘇るんだ』

嬉しそうに目を細めていた水曜日。

『忘れ物』

いたずらっぽい瞳で唇を指差した今朝。

そこから、どうしたら……こんな風に鮮やかに、将の期待を裏切れるのだろう。

聡を恨みそうになるのをこらえるようにアクセルを踏む。

苦しげなエンジン音はそのまま苦しい将の気持ちになる。

将は苦しさに唸りをあげるようにして、濡れた道路の音が聞こえな

くなるまでアクセルを踏み込む。

そうしないと……涙がこぼれてしまいそうになるから。

こうして大磯をめざしているとクリスマス前の気持ちが蘇ってくる。

あの頃、聡に見捨てられたと思った将は、軌道をはずれて、ひたすら太陽から離れ、宇宙空間へ迷走していく惑星のような寂しさを感じていた。

今また、こうして東京から離れていくのは、ひょっとして、太陽の重力圏を離れていっているようなものなのではないだろうか……ふとそんなことを考えが浮かぶ。

ばかばかしい。

将はすぐに否定した。

今はあのときとは違う。今日は、単に、肉を食いに行くだけの話だ。

それに聡から見捨てられたわけでは……。

もしかして見捨てられたのだろうか。

聡は、将の何かに、愛想をつかしてしまったのだろうか。

ひとたび湧き出た疑問に、将はすぐに引き返して聡に確かめなくてはならない気持ちに支配される。

だけど、もう出口のＩＣだ。

物狂おしいほどの思いは消化できないまま、将はヒージーの家へ向かうしかなかった。

「そうか、あきらさんは具合が悪いのか」

ヒージーこと巌は少しがっかりした顔をした。

「ああ。４人で食っちまおうぜ」

将は上着を脱ぎ捨てながらそっけなく言った。

４人というのは、将、巌、ハルさん、運転手の西嶋さんのことである。

「ケンカしたのか？」

「……そうじゃないけど」

目を伏せた将の寂しげなようすを、巌は丸眼鏡の奥から心配そうに見た。

「ハルさん、手伝うよ」

将は、巌の視線に気付かないふりをして台所で野菜などの準備をす

るハルさんに声をかけた。

淡いピンクに見えるほどにサシが入った高級な米沢牛は、本当にたっぷりあった。

しゃぶしゃぶ用にあらかじめ薄くスライスされたものと、塊のままのものが大型冷蔵庫を占拠していた。

晴れていれば薪でバーベキューにするのもよかったが、あいにくの雨である。

炭火を起こして、飛騨こんろで炭火焼にすることになった。

ハルさんや運転手の西嶋さんは

「私らまでお相伴させていただいちゃって」

と恐縮していたが、もともと厳の家族のようなものである。

おまけに料理の腕が二人とも素晴らしいのだ。

しゃぶしゃぶにはハルさん特製の胡麻だれ、それと西嶋さんは

「オードブル程度で……」と謙遜しながら炙り寿司をつくってくれ

た。

そこへ、巌が土蔵から文字通り『秘蔵』のシャトー・マルゴー８９年を持ってくる。

将が生まれた年のヴィンテージだ。

わざわざ、この日のために用意していたに違いない。

将は巌の心遣いに、冷えた心がほんのり温まる気がした。

肉の素晴らしい味もさることながら、将がここに預けられていた頃からの古い顔なじみで、久しぶりに将は温かい団欒の夕食を過ごせた。

本来だったら、大食いするような気分ではない将だが、それをすっかり忘れて肉の旨さに没頭する。

渋みの利いた、フルボディのシャトーマルゴーは、ぼってりと甘い米沢牛の脂をすっきりと洗い流して、また新たなる食欲を引き起こす。

それを繰り返しているうちに、一同、腹が重くなるほど、肉を堪能していた。

「まだ肉はたっぷりありますよ」

とハルさんが言う。

「もう入らんわ。将食え」

「もう俺もダメ」

若い将にしてももう腹がはじけそうだった。体が牛になりそうなほど重い。

「じゃあ、明日、牛たたき丼にでもしましょうか。牛丼でもいいですけど」

と西嶋が提案するが、将も巌も顔をしかめて

「今、その話はやめて」

と声がそろってしまった。次の瞬間顔を見合わせて、大笑いした。

じゃあ、食後のコーヒーにしますか、とハルさんは洋館の灯りを点けた。

食事は母屋でいただいたのだが、食後は茶室がわりのそこで寛ぐのが巌の好みだからだ。

雨はもう上がっていて、空は藍色に晴れて月が出ていた。

ただ日中陽がささなかったので、少し冷える。

暖炉ではいくらなんでも強すぎるので、将は火鉢に炭を起こした。

ハルさんはコーヒーと一緒に手作りの小さなみつ豆を切子のお猪口に盛ってきた。

家で寄せた透明とミルクの寒天に、赤えんどう、そして黒蜜だけのシンプルなものだが、これまた将と巌の大好物のデザートだった。

「こりゃー、舌がすっきりするわい」

と巌が上機嫌なところを狙って、将は頼みごとをすることにした。

ワインのおかげですっかり忘れるところだったが、大悟の保護者の件である。

幸い、ハルさんも西嶋も片付けをしているせいか、こっちに来る気配はない。

「すっかり、食べ過ぎたなあ……極楽、極楽」

巌は、一人がけの皮のソファーに身を預け、台に足を乗せ、夢見ごこちの瞳をうっとりと閉じた。

「あのさ、ヒージー。頼みがあるんだけど」

将ももう1つの1人がけのソファに身を沈める。重力を忘れるような、絶妙のすわり心地だ。

「ああ、電話で言ってたな……。何だ」

あいかわらず１００歳にしては素晴らしい記憶力だ。

「あのさ……。俺の友達で、島大悟っていうやつがいるんだけど……」

将は、保護者がいない大悟の境涯と自分との関係をざっと話した。

ちなみに巌は、将が殺人を犯して隠していることは知らない。

あのことは、父の康三と三宅弁護士、それと毛利ぐらいしか知らないのだ。

父にも口止めされているし、あの現場にいたヤクザの片割れが殺されたことも知っている将は、たとえ相手が巌だろうと今まで話さなかったのだ。

ゆえに将は少し説明に苦労した。

「あいつ保護者がいなくていろいろ困ってるみたいなんだ」

程度しか大悟の困窮について述べることができなかった。

「それで、ヒージーだったら誰か保護者になれそうな人を紹介してくれるかな、と思って……」

案の定、ヒージーは眉を少し寄せた。疑念のある表情だ。

「それは……いくらでも紹介はできるが……。将、お前はどうして、そんなにその友達のために世話を焼くんだ」

部屋を間貸ししているだけで十分なのではないか、ということだ。

「いや……。保護者がいないと、受け取れる金も、もらえないみたいなんだ」

「なんだそりゃ。本人の金なら、保護者も何も関係なかろう」

将は、ワインのせいで表面に薄い膜が張ったような脳を必死で動かそうとするが巧くいかない。

「いや、そうじゃなくて……」

将は小さく舌打ちした。

「何か、お前、秘密があるんじゃろー」

巌は、ワインの酔いで赤くなった顔を、ぐいと将の方に向けた。そして、ふふ、と笑う。

「……何でも話してみろ。今更、驚かんわ」

もう一度、ソファに寄りかかりながら、腕かけをポンポンと叩いた。

そう言われると、将は、酔いのせいか、『あのこと』を話してもいいような気になってきた。

しかし核心は言わずにおく理性は残っていた。

将はソファから立ち上がって、火鉢の炭をいじくりながら、

「実は、俺さ……前にちょっと悪いことをしちゃってさ。それで……親父がその罪を大悟に被せてバックれたんだ」

とだけ言ってみた。

できるだけ、その『悪いこと』が大したことのないように伝えながら、将の心は押しつぶされるような痛み……罪悪感を覚えていた。

殺人の重さはあれから2年以上経った今も将を大きく動揺させるのに変わりはない。

苦痛に耐えながら大悟のために続ける。

「で、代わりに、大悟は金をもらえるようになってたんだけど、何せ、俺らワルだったからさ……。未成年のうちは保護者がいないと、大悟はその金を受け取れないんだ。だから……、お願い」

「なーにをしたんだ」

巌はソファに寄りかかったまま、視線だけをだるそうに将に投げてきた。

「なんだっていいじゃん。……相当悪いことだよ」

そういいながら、将は緊張のあまり、震えそうになる。

さっきまでワインで火照っていたのに、なぜか寒い。火鉢の上に手と顔をかざす。

巌は目を三日月のように細めて

「オンナか」と訊いた。

「違う」

反射的に将はムッとした。

「そうか、オンナじゃないのか。……よかった、わしゃ、お前がどこぞの娘さんを手篭めにでもしたのかと心配したぞ」

「そんな極悪非道、するわけねーじゃん、俺が」

将は口を尖らせつつも、少し緊張が和らいだ。

「じゃあ、何なんじゃ」

巌は背もたれから身を起こして、食い下がった。

「いいじゃん、もう」

将はそっぽを向いた。すると巌は

「じゃあ、誰も紹介せん！」

とヘソを曲げて「ハルさん、ハルさん」と大声で呼んだ。2回目は声が裏返った。

母屋の奥から「はーい」と聞こえる。

「風呂じゃー！」と巌は叫ぶ。

ヤバイ。このままじゃ、本当にヘソを曲げたままになる。

「いや、ヒージー、困るよ」

将は、火鉢のそばから立ち上がると、ヒージーの腕かけのところに駆け寄った。

「じゃあ、何したんじゃ。教えなさい」

「殺し……」

将は、俯いて小さく呟いた。巌の目は恐くて見ることができない。

２００◆１８１～１９９話のあらすじ

誕生日前の土曜日。

雑誌のヤラセモデルのバイトをしている将は再び、芸能プロの社長の橋本に、熱心なスカウトを受ける。

聡のために早く自立したい気持ちも手伝って、「バイト程度なら」と承諾する。

それを将の口から聞いた聡は、将が遠くにいってしまう予感に震えながらも、将がやりたいなら、と応援する。

康三や純代も、それぞれの思惑から、将の芸能界入りを特に反対しなかった。

また将は、１８歳になって最初の休日である次の土曜日にホテルをとったことを聡に伝える（１８１～１８３話）

火曜日、芸プロの帰りに聡の部屋に寄った将はそこで、１８歳の誕生日を迎える。

水曜日に一流フランス料理店で聡は将のためにシャンパンをおごる（１８５、１８６話）

一方、活動的な撮影現場で元気を取り戻した大悟は、立ち直るべく就職活動を始めるが、うまくいかない。

そもそも求人が少ない上に、２件立て続けに不採用だった大悟は落ち込む。

お金もなくってきたので、再びハケンに行ってみるが、さんざんの扱いに疲れてしまう。

身も心もボロボロの大悟は、自分はスタート時点でひどく損しているのではないか、と将の罪を被ってしまったことを後悔する（１８４、１８７話）

大悟は、将の身代わりになるかわりに、金を受け取れるようになっていたことを思い出して弁護士に電話をする。

だが、保護者である愛知の親戚に振り込まれてしまっていることを知り、大悟は話をつけるべく名古屋へ向かう。

だが、愛知の親戚から、その金は大悟の父の借金の返済にあてていることを罵声と共に聞かされて大悟はショックを受ける。

一方聡は、明日に迫った逢瀬に合わせて、遅ればせながら将の誕生プレゼントを買いに街に出てきていた。

その帰りに傷心の大悟とばったり出会う（１８８話）

聡は、大悟を夕食に誘う。元気のない大悟をなぐさめるべく優しくふるまう聡。

まだ傷が癒えていない大悟は動揺してしまい、部屋に戻ると再び大酒を飲んでしまう。

そこへ帰ってきた将に「アキラ先生を貸せ」などとつい口走ってしまう。

当然将は怒るが、大悟は将が、かつて瑞樹をセフレとして弄んでいたことを持ち出す。

将は大悟に頭突きをしてねじふせる。大悟は瑞樹を思い出してむせび泣く（１８９～１９１話）

大悟が聡に何かをしたのでは、と心配した将は、土曜日の早朝、聡の部屋を訪ねる。

何もなさそうな聡に安心して、将は免許試験場に向かう。

免許を受け取った後で、聡とホテルに行くことになっていたのだ。

だがそのあと、大悟が聡の部屋を訪れる。

そして将が過去に殺人を犯していること、そしてその罪は大悟が被っていることを聡に教えてしまう（１９２～１９４話）

聡を迎えに行く前に、自分の部屋に寄った将は、弁護士からの留守番電話で、

大悟が自分の身代わりに金を受け取るようになっていたこと、またそれがうまくいっていないことを知る。

昨夜の大悟の態度とそれが結びついて、嫌な予感がした将は、聡に無事を確かめるべく電話をかける（１９４話）

とりあえず何もなかったことを知った将はほっとするが、すべてを知った聡のほうは、その状況は理解するものの、もはや将に抱かれる気分ではなかった。

聡は時間稼ぎのように、将に大悟を探すように願う（１９６話）

すべてを聡に話してしまった大悟は、自己嫌悪に陥る。

死を覚悟した大悟は、将に秘密を聡に暴露してしまったこと謝るべく電話しようとする。

そこで瑞樹の祖母から、形見分けをしたいという電話があったことを思い出して、小山に向かう。

小山で瑞樹の位牌に焼香することができた大悟は、瑞樹の形見のなかからコインロッカーらしき鍵を見つける（１９５~１９６話）

将は、電話の聡の様子から、今回もまたダメなのかもしれない、と予感していた。

ふと思いついて将は曽祖父の巌に大悟の保護者の件を頼むべく電話をかける。

が巌は、米沢牛にかこつけて将に聡と一緒に大磯に来いと命令する。

将は、聡を巌に紹介するのも悪くないと、まだ今日に期待を残している（１９７話）

大悟と連絡をつけて表面上の仲直りをした将は、聡のもとに意気揚揚と向かう。

だが、聡は体調の悪さを理由に、今日は行けないと言う。

聡からの拒絶を感じた将は、それでも優しい態度を貫いて聡の部屋を立ち去った。

そんな将に聡は、どうして誕生日を祝うはずだった日にこんなひどいことをしてしまうのだ、と自分を責める。

一方大悟は、瑞樹の残したコインロッカーの中身に忌まわしい道具類を見つけてしまっていた（１９８話）

聡の前では気丈だった将だが、実は傷ついていた。雨の中車を飛ばして大磯に向かう。

巌をはじめ、大磯の邸宅の人の優しさに少し心なごむ。

米沢牛を堪能した将は、食後、巌に大悟の保護者の件を相談する。

将が殺人を犯して隠していることを知らない巌は、大悟の件に関する将の介入を不審に思い、問い詰めてくる。

そしてとうとう、将は隠していた殺人を巌に打ち明けなくてはいけないことになる（１９９話）

２０１◆慟哭

大悟は嵩高い２つの荷物を抱えて夕方の商店街を歩いていた。

瑞樹のボストンに、例の紙袋。……朝さしていったビニール傘が邪魔だが雨が止んでいてよかった、と心から思う。

と、腹が鳴る。思えば、朝から何も食べていない。

腹が鳴ったとたん内臓が裏返りそうなほどの苦痛に近い空腹が大悟を攻撃してきた。

大悟はボストンを肩にかけると、財布を出す。

弁当屋にいってみようかと思ったのだがあいにく……聡からもらった５０００円も、小山までの交通費でほとんど消えてしまい、小さな小銭ばかりしかない。

大悟は舌打ちする。だが、すぐに気を取り直す。

冷蔵庫にまだ何かあったはずだからだ。

それに将が気を利かせてくれれば、今日の夕食は家政婦さんがつくりに来ているはずだ。

部屋に帰ってきた大悟は、自分の寝室に使っている部屋に荷物を下ろして身軽になると、ダイニングへ急いだ。

案の定、テーブルの上には、麻婆豆腐の夕食が１人分用意されてい

た。

まだそれほど時間が経っていないらしくほんのり温かい。

大悟は、買ってきたビールをあけると、夕食をガツガツと食い始めた。

しばらく食うことに没頭する。

何も頭に浮かばない。部屋がシンとしていることもどうでもいい。

ようやく、胃を満たすことができた大悟は惰性でテレビをつけてみる。

空きっ腹へのビールは、感受性のアンテナを真綿でくるんでしまったかのように、テレビを見ても何も感じない。

大悟はソファにごろり、と横たわった。とたんに瞼が重くなる。

ビールがなくても……昨日からのことで、大悟は心身ともに疲れ切っていたのだ。

大悟が起きたのは、それからずいぶん経って……瑞樹といつも見ていたお笑い番組が始まった頃だった。

大悟はテレビで観客に大うけを博しているコントも無視して大きく伸びをした。

そしてボリボリと首筋を掻く。

眠っていたせいか、大悟の頭からはすべてが抜けていた。

瑞樹が死んだことも。昨日、愛知にいったことも。将と喧嘩したことも……。

大悟はただ、本能的に風呂に入るべく部屋に戻ると照明を点ける。

そこにあった紙袋とボストンを見てようやく、何かが大悟の頭に命中したかのように、すべての出来事とそれにまつわる感情が爆発的に大悟の頭の中に蘇った。

大悟は膝まづくとボストンを開けて犬のぬいぐるみを救出するようにそっと取り出した。

そして内ポケットから骨の瓶を大事に握ると

「瑞樹、お前が好きだったやつだぞ」

と語りかけながら隣に置いてやった。

骨とぬいぐるみは、暖色の灯りに同じような色に染まってお互い懐かしげに寄り添っていた。

そして、瑞樹が滋賀に持っていこうとしたお気に入りの衣類を取り出して、やはり骨のまわりに置いてやる。

続いて……大悟は紙袋から中身を取り出そうとした。

だが、その内容の曲々しさに、大悟はいったん骨とぬいぐるみに背を向けた。

たぶん瑞樹が好んだり愛着を持っていたものの逆だと思ったから。

フローリングの上に置かれたものは、あらためて、すさまじかった。

普通には着用しても意味をなさないような下着類。手錠、首輪、そしてさまざまな玩具と脱法ドラッグ。

出しながら大悟は顔をしかめていた。

中には大悟自身が体を売っていた頃の、嫌な記憶を刺激するものもあったのだ。

これを使って、いったい瑞樹は生前に何をしていたのだろうか……。

全部出し終わったとき、大悟はため息をついた。

何をしていたにしても、瑞樹はもういないのだ……。

大悟は、指定ゴミ袋とスーパーのゴミ袋を持ってくると、見えないようにそれをスーパーの袋にくるんで分別した。

たぶん、瑞樹だって未練はないだろう、そんなものに。

続いて入っていた紙袋をかさばらないように畳んで捨てようとした大悟は、それがうまく畳めないことに気付いた。

底のほうがなんとなくぷっくり膨れている。

大悟は再び紙袋をのぞき込んだ。もう何も入っていないはずだ。

「あ」

紙袋が二重になっていることに気付いた大悟は一人、声をあげた。

二重になった紙袋の底にまだ何かが入っているようだ。

重なっていることがわからないように紙袋の口の折り返しがきちんと被さっている。

その巧妙さに、大悟は何かを直感した。

何かを隠すべく、糊で貼り付けてさえある内袋を大悟は苦心してはがした。

「……！」

紙袋の二重底から出てきたものを見て、大悟は息を飲んだ。

そこにはセロファンの袋に小分けになった、大量の白い粉薬が隠されていた。

瑞樹を狂わせ、死に追いやったあの薬に違いない。

脱法ドラッグとわざわざわけて、こんな風に隠してあるのだから間違いない。

大悟は、帯状につながったままのセロファンの小包を乱暴に取り出すと、ぐしゃっと握りつぶした。

そのまま捨ててしまおうとして、こんなものをゴミに捨てたらマズイということに気付く。

水に流すしかない。

袋を切り刻むべく鋏を持ってこようとして、大悟の足が止まる。

「殺し……」

巌に問い詰められて将はついに答えてしまった。

恐くて顔をあげて巌の顔を見ることができない。

「殺し……だと？」

巌の声で忌々しい犯罪の名前が繰り返された。

将はだまって頷くしかなかった。

「将、本当にお前、人を殺したのか」

巌は、ソファからいつのまにか身を起こして、枯れ枝のような手で将の両肩を掴んでいた。

「将、顔をあげなさい」

絞り出すような声は、いっそうしわがれている。しかしその迫力に将は顔をあげた。

「本当なのか……、本当にお前が殺したのか」

巌の顔は、上からのアンティークランプの灯りで、その皺がいっそう深く見えた。

しかし丸眼鏡の奥の……いつもは皺に隠れたような瞳だけは、丸くこちらを向いている。

見開かれた目頭のピンク色が痛々しいほどだ。

それに反比例するように、将の目は巌の眼力を受け取るのに耐えられないがごとく、細くゆがんでいった。

歯を食いしばって、将は頷いた。

そのとたん、巌の喉の奥から「クカァァ」と声とも空気ともいえないような音が漏れる。

「戦争でもないのに……、お前は人を殺してしまったのか！」

巌は将の肩に手をおいたまま、悲痛な声を出してうなだれた。

巌の悲痛な声のままに、食いしばるようにぎゅっとつむった将の瞼から沁みだしてくるように涙が現れた。

それはひと筋を呼び水のように、あとからあとから流れ出した。

「何てこと……、何てことをしたんだ……」

巌も将と同じ顔で、涙を流していた。

将は、とめどもない涙を頬に感じながら、今までになく後悔している自分を感じている。

というより、そもそも本気で後悔したことがあっただろうか……そんな自分が恥かしく、苦しい。

罪を覆い隠した父に対しては、反発しか感じなかったが、今こうやって悲嘆にくれる巌を見て、

自分は敬愛する巌の血に殺人犯という泥をつけてしまったのだ、と気付いた。

いまさら気付いても、もう遅い。

巌に申し訳なくて泣く将の脳裏に、長い巻紙がほどけるように蘇った。

菩提寺で見せてもらった、家系図だ。

あのとき……血のようだった夕陽に、将は血脈を感じて息苦しくなった。

その息苦しさの正体は、これだったのかもしれない。

古びて黄ばんだあの重い和紙を、将は自ら血で汚してしまったのだ……。

「ヒージー、ヒージー、……ごめん、……ごめんなさい」

ヒージーは白目を真っ赤にして泣いていた。

たぶん将の目も同じようになっているだろう。

１００歳と１８歳の泣く顔は、血のつながりのままに、虚しいほど似ているのだった。

それを、古い洋館のアンティークランプの暖かい色が、哀しげに包んでいた。

巌は、袂からハンカチーフを取り出すと、丸眼鏡を取って自分の涙をぬぐった。

そして、大きくため息をつくと、ソファに再び寄りかかり、目を閉じた。

将は、巌のソファの腕置きにもたれてまだ泣いていた。

しゃくりあげるように泣くのは、いつ以来だろうか。

静けさが、夜寒と共に、しのびよってきた。

泣いて腫れた唇に、瞼に、その冷ややかさが差し伸べられる。

しばらくののちに

「もう泣くな。やってしまったものは……いくら後悔しても消えんのじゃ」

巌は丸眼鏡を掛けなおすと、将に声をかけた。

その口調は落ち着いていたとはいえ、声は普段になくしわがれていた。

「誰を……、何故殺した」

将は何を言っても、言い訳にしかならないように思えて、鼻だけをすすった。

巌は、軽くため息をついた。

「康三は、お前の罪を、友達の大悟くんに被せたのだな」

「……ハイ」

将は、新たに湧き出た涙を手の甲でぬぐって、鼻をすすった。

「……わかった。大悟くんの保護者の件は、ワシが手を尽くそう」

しわがれた声ながら、どっしりとした口調で巌はそう言うと立ち上がった。

「お前は……せめて康三の配慮を無駄にするな」

それだけ言い残すと巌は、将に背を向けて、母屋へ続くドアのほうに歩こうとした。

その体がグラリと揺れる。

「ヒージー！」思わず将は涙と鼻水をたらしたまま、巌に駆け寄る。

「……大丈夫じゃ。将、ステッキを、ステッキを持ってこい」

ヒージーは漆喰の壁に寄りかかった。

動転している将は、暖炉のわきに立てかけてあった巌のステッキを取ることだけに夢中で……巌の息がいつもより荒いことに気付いていない。

202◆急変

早めに床についたのに、将は寝つかれず、何度も寝返りを打った。

糊が気持ちよくきいた布団なのに、居心地が悪い。

何度も泊まっている部屋なのに、今日は自分を排出しようとしているような、異物感……ちなみに異物は将自身である……がある。

じっとしていると、過去の行いがじわじわと自分自身を侵食してくるようで耐えられない。

自分は、ヒージーにも愛想をつかされてしまったのだろうか。

にも、という助詞に、まず最初に聡に見放されたのかもしれないという自分の中の危機感に気付く。

聡に見放され、ヒージーにも見捨てられ。

――本当に一人ぼっちになってしまうのか……。

将は、一人ぼっちの果てしない寂寥感に、布団の中、苦しくまた寝返りを打った。

13歳の頃も将は、こんな風なひとりぼっちだったはずだ。

だけど、今のほうが何倍もつらい。

人の情愛というものは、知らないよりも、知ってしまった上でそれ

を亡くすほうが、むしろつらいのだ……。

だけど、いまさらもう知らない頃には戻れない。

つまり、将はずっとこの寂しさを抱えて生きていかなくてはならないのかもしれない。

将はため息をつくと、再び寝返りを打った。

何十回となく寝返りを打って、将にようやく眠りが訪れた。

あわただしい足音がする。

――うるさいなあ。もっと静かに歩けよ、大悟……。

夢の中で将はそんなことを考えていた。

それにしても、マンションでこんなに頭に振動が響くほど音がするだろうか。

将はそんな自分の中のそんな疑問に気付かないふりをしていたのだが、

足音に、遠くの救急車の音が混じり始めて、その嫌な予感に、急速に現実世界に意識が舞い戻った。

気がつくと、目の前にさっきと同じように杉板天井が広がっていた。

将は、行燈を消すのを忘れたまま眠ってしまったらしい。

夢から覚めたというのに、あいかわらず、救急車の音が止まらない。

それどころかまるで頭の真上から聞こえるほど近い。

将は起き上がって、廊下の障子をあけた。もう、夜が白み始めている。

と、救急車の音がやんだ。

近くに急病人が出たのだろうか。そう思いつつ、将の心は濃厚な嫌な予感を察知していた。

「あ」

将は叫びそうになった。白衣を来た救命士2名が担架をかついで、庭に入ってきたからだ。

ふいに後ろから声をかけられる。

「坊ちゃん、お起きになりましたか……。御大が、御大が……」

寝巻きにガウンをひっかけただけのハルさんが、泣きそうになりながら、将に訴える。

「ヒージーが……どうしたの?」

ハルさんのただならないようすに将は目を見開く。

「廊下にお倒れになられているのを、西嶋さんが見つけて……」

「ヒージー！」

ハルさんが言い終わらないうちに将は担架が入っていった方へ走った。

だが2，3歩進んだところで、担架に横たわり酸素吸入器を付けたヒージーが運び出されてきた……そう、生きている人間だったら『運び出され』たりしない。

紙のように顔面蒼白のヒージーは、まるで物体のように動かなかった。

「ヒージー！ヒージー！」

将は、ヒージーの担架を追った。裸足は庭の土にまみれたがかまわない。

ヒージーが息をしているのか、そして体は温かいのか。たしかめようとして止められる。

「坊ちゃん、私がつきそいますから！大丈夫ですから！」

と西嶋が言うのにもかまわず、将は必死でヒージーの名前を呼び続けた。

だが、ヒージーは目をあけないまま、救急車に乗せられてしまった。

救急車は再度、耳をつんざくようなサイレンの音を鳴らして走り去った。

将ははだけた浴衣に、泥だらけの素足のまま、門の前に取り残され……救急車の行く末を見ているしかなかった。

そんな将のもとに非情なほどに冷たい朝が訪れる。

大磯総合病院に運び込まれたヒージーはかろうじて生きてはいたものの、容態は重篤だった。

ハルさんと共にすぐに駆けつけた将は、ランプがついた手術室の外で立ち尽くした。

「ヒージー……、俺の……俺のせいだ」

将はやり場のない強烈な罪悪感のあまり頭をかきむしった。

「坊ちゃん、大丈夫ですから……。西嶋がすぐに見つけたんですから……大丈夫ですよ。だからおかけになって」

ハルさんが背伸びをするように将の肩に手を伸ばし、それに抱えられるようにベンチに腰を下ろす。

――もし、ヒージーが死んでしまったら……自分のせいだ。

将が暴露した過去の罪は……激しすぎるショックをヒージーの心身にくらわせたのに違いない。

――もし……もしも、ヒージーが死んでしまったら。

自分はヒージーの血脈を汚しただけでなく、ヒージーの命をも奪ってしまうのだ。

その恐ろしさに、うなだれた将はふるえる。

ことはあまりにも重く、地球……いやこの世のすべての罪の重みに近い重圧を感じている将には、呼吸する空気すら重い。

消毒液の匂いのまじった苦い空気はまるで、何かの毒ガスがまじっているかのように息苦しい。

その息苦しさに、時がつらい。1分を1時間のように感じながら、将は待ちつつ、恐れた。

その長いときの途中で、知らせを受けてすぐにやってきたのだろう、東京から康三と純代が駆けつけた。

一瞬、将と康三は目を合わせたが、お互いに言葉も交わさない。

ハルさんが状況を説明し、将は再びうなだれて審判を待つ。

時の長さが再び戻ってくる。

「や、鷹枝さんの！」

と声がしてふりかえる。そこには白衣に眼鏡をかけた年配の医師がいた。

言葉少なく挨拶をする康三のようすから、どうやらこの病院の院長らしい。

巌は海が見えるこの病院で年に一度、人間ドックを受けていたのだ。

「将くん、かい」

院長は将のほうを振り向いた。将は、会釈をした。笑顔をつくるゆとりすらもない。

「いつも巌さんから聞いてるよ。自慢の、イケメンのひ孫だってね……。本当に大きくなったなあ」

院長は銀縁眼鏡の奥で柔らかく微笑んだ。

「先生……ヒージーは……」

「頑張ってるよ。うちの外科の一番手が手を尽くしてるからね」

将のあまりにも悲痛な表情に、院長は思わず幼児に語りかけるような優しい口調になっている。

その優しさに思わず、張り詰めていた将の緊張が、瓦解した。

「先生、俺の……俺のせいなんです」

言葉と共に、人前だというのに涙がぼろぼろとこぼれてくる。

「俺が……ショックなことをしゃべったから……」

康三が思わずこっちを目で振り返る。だが将はそんなこと、今更どうでもよかった。

「俺が……いけないんです……」

リノリウムの廊下に、涙がぼたぼたと落ちていく。

「将くん」

院長は、自分より背の高い将の肩に手をおいた。

「たぶん、関係ないよ……。巌さんは、いずれにしてももうかなりな年齢だからね。心臓だって悪くなってあたりまえだよ」

院長はそうは言ってくれたが、その１００歳の高齢の心臓に負担をかけたのは紛れもない事実なのだ。

将が、手の甲で涙をぬぐったとき……ついに手術室のランプが消えた。

顔をあげた将の前で、扉があいた。

「ヒージー！」

駆け寄る将を、集中治療室へ入りますから、と看護士が止める。
術衣をつけた医師が出てきて、将はそっちに駆け寄った。後ろには同じように康三がいる。
「手術はいちおう成功しました」
と医師が宣言したので一同は皆ほっとした。
午後も遅くなって将は、マンションに帰って来ていた。
どうやってミニを運転してきたのか、あまり記憶にない。
厳の手術はいちおう成功した、と執刀医は宣言した。
だが……そのあと、執刀医は院長と康三と純代だけを別室に呼んだ。
再び病院の廊下に取り残された将を、またも不安が取り巻く。
暫くののち、出てきた康三と純代の顔は……暗かった。
だが康三は将の顔を見ると
「大丈夫だから、もうお前は東京に帰りなさい」

とだけ、促した。その静かなようすに、逆に将は従わざるをえなかった。

大悟は出掛けたらしく、誰もいないリビングで晩春の陽射しだけが将に寄り添おうとした。

しかし、それがうっとうしくて将は窓に背を向けてキッチンへ入る。温かさに抗うように氷水を飲もうと冷凍庫に手をかけて……その中に大悟のスピリタスの瓶を見つける。

罪悪感は、とりあえずヒージーの命は無事だったという安心を得て、やりきれなさに変化していた。

そのやりきれない思いをどうにかしたくて、将は凍ったスピリタスの瓶を手にとるとグラスに注ぎ、一気に飲んだ。

とたん、喉がやけついて将はむせた。

だけど……その苦しさが、今の将にはよかった。

喉から腹に熱い線が出来る。巌の体を傷つけた将は、自らの体を痛めつけるように、カウンターに立ったまま、ひたすら強い酒をあおった。

熱い線は、それを酒がなぞるたびに、どんどん膨張し、将の体をついにはみだすほどになった。

つまり全身が熱を持つ。

脳が煮えるようになった将は、ようやくふらふらとキッチンを出てソファに自らを投げ出した。

何かを忘れている。

忘れたいものは、脳が煮えても忘れられないのに。

将は、ふふふと鼻先で笑った。

うっとおしい晩春の陽射しも、酒場の女のように煮えた脳には好ましく感じている。

……と。

携帯が鳴る。

瞬時に『忘れていた何か』を思い出す……聡。

メールの着信音だった。

将は自分のポケットなのに、ひったくるように携帯を取り出し、中を見る。

＝＝＝＝＝＝

昨日は、本当にごめんなさい。

＝＝＝＝＝＝＝

たった一言で、将の心は聡一色になる。

聡を求め、聡を渇望する将はそのまま、聡に電話をかける。

「もしもし……？」懐かしい声に思わず将はすがっていた。

「アキラ！俺を……助けて！」

203◆青い朝

いきなり、携帯がバカでかい音を立てた。メールの着信音だ。

――せっかく気持ちよく寝てんのに。うるせえなあ……。

将は瞼を閉じたまま、無意識にいつも近くに置いているはずの携帯をさぐった。

次の瞬間、いつもと勝手が違うことに気付いて、目を見開く。

ガバ、と上半身を起こした。

違う。将のベッドではない……ここは聡の部屋だ。

「うわ！」

自分の姿に気付いた将は、たった一人で声をあげる。

将は……何も身につけてなかった。真裸だった。

あわてて見回すと、フローリングの床の上に、将の衣類がきちんと畳んで置いてあった。

だが、なぜ、真裸で聡の部屋のベッドで寝ているのか。

そして聡はどこに？

将は思い出そうとして、激しい頭痛にそれを阻まれた。

「……っいてー」

将は、畳んだ服の一番上に置いてあった携帯をなんとか取り上げると、頭を押さえてもう一度ベッドに転がった。

仰向けになって眺めた青いカーテンのあたりは、もう陽が高いことを示している。

将は、鈍く痛む頭を動かさないように、昨日を思い出そうと試みた。

しかし、大悟のスピリタスを拝借して、酔っ払ったまでは覚えているが、その後の記憶は遥として知れなくなっている。

横たわったまま、携帯を開く。今着信したメールは、マネージャーの武藤からだった。

着信履歴の2番目に聡の名前があった。

そうだ。聡のメールを受け取って……電話をかけたんだ。

そこまではなんとか思い出したが、その後は……。

将は目を閉じて、記憶をたぐる。

苦悩。慟哭。不安。孤独。後悔。

将の中で出口を持たずにうずまいていた、負の感情。

やりきれない思い。

そんなものに飲み込まれそうで。

それを、どうにかしてほしくて……救いを聡に求めたのだった。

だが、今の将に……それらはもはや責めて来る事はなかった。

聡はゆうべ確かに将を救ってくれたのだ。

柔らかくてあったかい聡の肌に包まれて……将は体の中で行き場を失っていたそれらをぶちまけた。

その、肉体的な感覚を伴った解放感を思い出して、将は思わず目を開けた。

そして自分のそれに触れてみる。

シャワーを浴びていないそれは、べたべたとゆうべの行為を証言した。

将は、確かに聡の中で射精していた。

だけど……、そこへの道のり、いやその行為そのものも思い出せない。

記憶は、すべて感覚に昇華されてしまっている。

将は目を閉じると、わずかに残ったその感覚を反芻した。

温かい液体にすっぽりと包まれた幸福感。

放出する瞬間の圧倒的な……すべてが蒸発していくような快感。

そして……聡の肌のぬくもりと、優しく背中を、髪を撫でる手。

「アキラ！」

将は、再び身を起こすと、部屋を見回した。

時計はもう１０時近くを指していた。今日は月曜日、とっくに聡は学校にいったのだろう。

ローテーブルの上に、伏せたお椀、グラスそして頭痛薬と共にメモが置いてあった。

＝＝＝＝＝＝＝＝

おはよう。

たぶん二日酔いだよね。

今日は入学式だから、学校は休んでもいいよ。

ＰＳ

おみそ汁はあっためてね。

あきら

＝＝＝＝＝＝＝

授業中に見る黒板の字より、若干くだけた字ながら、いつも通りの落ち着いた聡の字。

そこには、最後の一線を越えたことなど、まるで感じさせない日常があった。

将は、聡に会いたくて、

会って、昨日二人が結ばれたことを確かめたくて、

頭痛を押して、急いでシャワーを浴び始めた。

今年の新入生は、１００人あまり、上級生たちより１クラス多く、３クラスになった。

卒業式同様、入学式も上級生同席で、無事行われた。

１年生は入学式後もいろいろとレクチャーがあったり、健康診断があったりするが、２、３年生は１時間のＨＲのあと、午前中で下校となる。

今日のＨＲは、６月にあるクラスマッチについての種目決めだ。

生徒数が少ない荒江高校に体育祭というものはなく、代わりにさまざまな種目をクラス別に競うクラスマッチがある。

体育祭をしないのは、応援合戦で喧嘩になったり、体育祭後に飲酒をしたりするのを抑える低偏差値校ならではの配慮でもある。

ちなみに、サボるとポイントがいつも以上に引かれ、かつ、各種目の優勝クラス全員にポイントが加算されるというところはこの学校ならではの仕掛けだろう。

聡は教壇に立って、議事をクラス委員に任せるべく、前ふりをしていた。

「じゃあ、あとは星野さんと兵藤くん、お願いしますね」

と言ったところで、教室の前の入り口がいきおいよく開いた。

将だった。

聡の部屋から直接学校に来たのだろう、私服のままで、急いで階段をあがってきたのか息を切らして、聡を見つめていた。

そんな姿は、二人が初めて教室で顔をあわせた日を聡に思い出させた。

思わず引き寄せられてしまう瞳を、引き剥がすようにして、

「早く席について」

と事務的に聡は言い放った。

「……ハイ」

将は息を切らしながら、素直に席についた。４月から廊下側の、やはり前から２番目の席になっている。

「じゃ、星野さん、兵藤くん、お願い」

聡はあらためて、議事を彼らに渡してしまうと、彼らの会議を見守るべく、教室の後ろの空席に座る。

そうすることによって、将の姿は、他の生徒の陰に隠れてしまい、好都合なはずだった。

だが。気を抜くと……いつしか、聡の思考は将のそばに寄り添ってしまっている。

たとえ、陰に隠れていても、体中に残った将の感触が……そして体内に残った将の精液が、まるで磁石に引き寄せられる砂鉄のように将のいる方角へ引き寄せられていくのがわかる。

体内に残る、将が熱く駆けぬけた跡に、聡はこっそりと意識を集中させると、窓の外に目をやった。

今日もよく晴れて、窓の外には若葉が揺れている。

今朝。

ベッドの上で聡は、カーテンが紺から群青へ、そして青へと変化していくのをぼんやりと見つめていた。

横たわった乳房のあたりに、向かい合って横たわる将の頭があった。

将は、眉根を寄せて少し苦悩しているような、いつもの寝顔で、ときおり鼾をかきながら眠っている。

ときおり、無意識に聡にまわした腕に力を込めて、乳房に顔を埋める。

そのたびに、聡に刻印された快感の余韻が、ぴくりと目を覚ます。

まだ、将が何度となく往復した、聡の中の粘膜は、どことなく熱い感じが残っている。

ときどき……そこから、将が放った液体がとろとろと流れ落ちる。

そのたびに、聡は将の髪を撫でた。

体には、まだ熱い余韻があちこちに残っているけれど、聡の心は静かだった。

『アキラ、俺を助けて』

昨日の夕方、いきなり電話をかけてきて、そう訴えた将。

３０分もしないうちに聡の部屋に現れた将は、ひどく酔って、そして憔悴しているようだった。

そして聡に抱きつきながら、もう一度

『助けてくれ』と連呼しながら泣いたのだ。

その悲痛な響きに、聡はただ将を抱きしめた。

圧倒的な将への思い……愛情は、将が人を殺した過去など軽く凌駕してしまっていた。

将がなぜ、これほど激しく悲しむのか、後悔しているのか、救いを求めているのか。

理由を知るよりも、まず救いたくて、聡は将を抱いた。

哀しいまでの将への思い。それがつのって、そんな形になった。

自分の中で激しくうずまいていたであろう、やりきれないものを、聡の中に吐き出して、こときれた将は、ひたすら眠っていた。

――もう、戻れないかな。

聡は、青いカーテンの色に自分の瞳を染めながら、ぼんやりと感じていた。

ついにセックスしてしまった、という形式が、ではない。

自分の中に確かにある、将への愛。

将がどんな過去を持って、どんな人間であろうと。

聡は、もう将を見捨てることも、逃げることもできないところまで愛してしまっていた。

肉体的に結ばれることは、単にそれを確認したに過ぎないのだ……。

将が再び、ぎゅうっとしがみついてきた。

「アキラ……」

寝言を呟く。乳房に押し付けられた将の顔。

いよいよボサボサになった将の髪を梳きながら、聡は自分の中に今までにない感情が生まれているのを感じた。

何かわからないけれど、母性のようなもの……。

今まで、聡にとって、男と寝ることは、すべてを『任せる』喜びだった。

もちろん、それは共犯者的な共同行為でもあったし、もちろん、淫らな行為の1つ1つには、聡が主導権を握るものもある。

しかし、そんなことは瑣末事項に過ぎない。聡の中で、男は基本的に自分を導く存在だったのだ。

精神的にも、感覚的にも、どこか……感情の、感覚の、果てへ連れて行ってもらい……そのあとは、子猫のように男の懐で無防備に眠る。

それが『寝る』悦びだったはずだ。

だけど、今回は違った。

聡は、ひたすら将を受け止めて、包んだ。

将は、自分の中にうずまく何かをぶつけるように、聡の一番奥を何度となく激しくノックした。

そんな何かに憑かれたような行為は、けして技巧的に長けたものではなかったけれど……聡はそれで大きな満足感を感じていたのだ。

嵐のような将のすべてを飲み込んで、聡の心は静かな湖面のように凪いだまま青い朝を迎えていた。

２０４◆水色の瞼

「じゃ、次はバスケット。希望者が多いのでくじ引きで決めていいでしょうか」

さくさく進めようとする兵藤に

「待てよ、どうせだったら勝てるメンバーを選ぼうぜ」

と珍しく井口が立ち上がって意見を言っている。

そんな会議なぞ完全に上の空の将もまた、聡のいる方向である右後ろに強烈な磁力を感じていた。

なのに、振り返れない。

強烈な紫外線を照射されたように右側の肩や背中は妬けつくようだ。

さっき、入り口をあけたときに目に飛び込んできた聡の姿。

黒に近いグレーのパンツスーツを着て、髪を１つにまとめて……一見いつもと変わらない姿だったが、

瞼にうっすらと水色のアイシャドウを付けているのに将は気付いた。

愛らしい瞳からの視線を、その水色はクールに引き締めていた。

甘さのないその視線は、頭痛薬を飲んでもいっこうに思い出せない昨夜とあいまって、昨日のことは夢だったんじゃないかと、将は疑

いそうになる。

「やっぱ、将とかはバスケだろー。あのデカさで卓球はありえないだろー、なー将」

井口の発言の中で、突然呼ばれて、将はハッとした。

「あ？ああ」

状況がよくわからないので、適当に返事をする。

「しかし、ですね。やっぱりこういうことは公平にしないと」

星野みな子がたしなめる。続いて

「先生はどう思いますか？」

と意見を求めたので、クラス中の目が後ろにいた聡に集まる。

将も、それに乗じて振り返ると聡を盗み見る。

すると、ちょうど将のほうを見ていたのか、聡と一瞬目が合った。

しかし、水色の瞼の下の瞳は、すぐに教師に戻ると

「やっぱりくじ引きが一番なんじゃない？」

と皆に向かって意見を言った。

これが決め手でくじ引きでバスケのメンバーを決めることになった。

「ありえねーし。卓球かよ」

HRが終わっての下校時間。井口が面白そうにそばに寄ってくるとケケケと笑った。

「るせーし。俺わりと得意だぜ、ピンポン」

といいながら、将は聡を目で追った。聡は教壇を降りると、振り返りもせず職員室へ向かった。

「じゃな」

「おい、将、マックいかないのかよ！」

という井口の声を背に受けて将は廊下へと聡を追った。

「アキラ！」

と呼びかけて

「……先生」

とすぐさま付け加えたのは、すぐそばに多美先生がいたからである。

「何？鷹枝くん」

聡は教師のままの顔で、将を振り返った。

「いえ……。えーと。明日は補習はありますか？」

「ありますよ」

聡は水色の瞼を少し見開くようにして、『生徒』に対して軽く微笑んだ。

微笑んでいるのに、睨まれているように将は緊張した。

「わ……かりました。じゃあ、さよなら」

将は引き下がるしかなかった。

「あのさ。昨日、大悟がさー……将、聞いてる？」

ビックマックを食べ終わってポテトをつまみながら、井口。

将は井口と一緒に駅前のマックに来ていた。

だが、将のビックマックはなかなか減らない。

将の意識は、油断するとすぐに聡のところへ飛んでいってしまう。

「え、あ、うん」

「お前、今日おかしーぜー。さっきから上の空だし。だいたいなんで私服なんだよ」

「あ、うん……。大悟がどうしたの」

説明できない将は、あわてて話題に上った大悟に話を戻す。

井口はフンと鼻をならして、コークをストローで吸い上げると

「大悟が昨日、クラブに来てたぜ」

「へえ」

少し驚いた将は、テーブルについていた肘を離して、椅子に寄り掛かるようにした。

一一遊ぶ金、あるんだ。

と意外に思い、次にどこから調達したんだか、と少し疑念を抱く。

「……て、踊りにじゃないぜ。なんかヤバそうだったぜー」

「え? 何が」

井口は、将を肩を抱くように顔を寄せてきた。そして囁く。

「たぶん、やばいクスリ売ってんじゃないか、と思う」

はれぼったい瞼の下の井口の目が光った。

「ああ……、偽シャブ売り。あいつ、そんなことまた始めたんだ」

将は、ふっとせせら笑った。

中学の頃、よく二人でやったなあ、と懐かしくさえある。

「いや、それがさあ。ホンモノっぽいよ。ダチがお持ち帰りした女子大生がそれ買っててさあ

……マジでラリッちゃってゲエゲエ吐いたらしいもん」

「まさか。自己暗示だろ」

昔、将たちが、マリファナと偽って売った粉砂糖＋すり潰した頭痛薬をブレンドしたものでも、結構みんな『効く』『ラリッた』などと騙されていたから。

しかし、そんなふうに否定しながらも、将は心の中にできた小さなニキビのように嫌な予感を消し去ることができなかった。

井口とわかれた将は、聡の部屋に帰ってきてしまった。

このまま、聡の帰りを待つつもりだ。

将は、今朝自分が起きたままになっているベッドの掛け布団を上げた。

シーツには、将と聡が確かに結ばれた、いくつかの証拠が染みになってすでに乾いていた。

それを見て、将はため息をついて、汚れたシーツに倒れこんだ。

そして目を閉じる……。

「だめだ」

将は一人、声をあげた。

やっぱり何も思い出せない。将は頭を抱えた。

――何てことだ！

最愛の聡との、初めてのセックスなのに……一生の思い出になるはずなのに。なんにも覚えてない。

将が覚えている、聡の肌は……あの山梨の寮で午後の陽射しの中で見たものが最後だ。

温かさとか、柔らかさとか……かろうじて覚えている感覚も、時間の経過とともに薄れ……今は他の女を抱いた記憶と混じってしまいそうだ。

もしも、こうして汚れたシーツがなかったとして。

仮に『そんなことはしていない』と言われたら、信じてしまいそうな、あやふやさ。

……最悪だ。

将は天井に向かってため息をついて、舌打ちをした。

しかし、そうやって舌打ちをしながらも、将はふわふわとした幸福感の中にあった。

一度愛し合ったなら、また何度でも……。

と甘い希望を抱いて、聡はそこまで甘くないだろう、と、さっきの聡の水色の瞼を思い出す。

せっかく18歳になったのだから、一度だけ。

というスタンスでこの土曜日の逢瀬は約束されていたはずだ。昨日はその代わりだったのかもしれない。

昨日、という単語に、巌を思い出す。

康三は『大丈夫』と言っていたが、将は心配になって、ハルさんに電話をしてみた。

たぶん、彼女が巌に付き添っていてくれるだろうから。

だが、ハルさんは電話に出ない。病院の中だから電源を切っているのかもしれない。

思い出してしまった昨日の苦悩だが、聡を抱いたおかげなのか、そこまで自分を責めないで済みそうだ。

将は携帯を閉じようとして、思いついて再び開ける。

聡にメールを送ろうと思ったのだ。

そこで、朝着信した、マネージャーの武藤からのメールを見つける。

そういえば内容をロクに確認していなかった、と開封する。

そこには、今日放課後、事務所に来るように、とあった。

――めんどくせ。

将は、シーツの上に身を起こすと、武藤に電話をかける。何とか理由をつけて断るつもりである。

「もしもし、将？今日これるでしょう？」

武藤は将からの返答を待ちかねていたようだった。

「いや……ちょっと」

行きたくないが、とくに用事があるわけでもない。将は自然に言葉を濁した。

武藤の声には抗議テイストが混じる。

「今日、入学式で学校が早く終わるって言ってたでしょ」

――そんなことまで教えたっけ。

将は

「何でですか？」

と、とりあえず用件を聞くことにした。

「ちょっとあなたに会いたいっていうプロデューサーがいるの。ほら、こないだ言ってた『ばくせん2』の」

「はあ、『ばくせん2』」

その他大勢役で出演できるかも、と言われていた夏に予定されている人気ドラマだ。

「それがね、よく聞いて、将。実は、主要な生徒役のうち、内定していた一人が、急に芸能活動を休むことになっちゃって」

「ハァ」

それがなんだ、と将は興味のない、単なる相槌をいちおう声にする。

「飲酒喫煙がバレて謹慎だそうよ」

「……へーそー」

ドジだな。と将は心の中でせせら笑う。

「でね、代役にあなたを推したいの」

「ハ？」

「……というより、あなたにほぼ、決まりなの。こないだの食事会に来てた△△さんがあなたをとても気に入ってね。あの人、局Pと仲がいいのよ」

「え」

将はわけがわからなくて、短い声しか発することができない。

「ということだから、今日、来てほしいのよ」

武藤は畳み掛けるように言葉を重ねる。

「いや、でも」

「あいてるのね？」

有無をいわせない武藤。その勢いに

「……あいてなくは、ないけど」

つい、将は正直に言ってしまった。

「じゃあ、５時までに事務所に来て。絶対よ」

「えー」

「えー、じゃない。これは仕事よ」

武藤の口調はどんどん強気になってくる。将は承諾せざるを得なかった。

205◆プレゼント

「じゃ、あさって水曜日、9時に迎えに来るから。……モーニングコールは8時でいいわね。

学校の方は私から電話しておくから。……ああ、そう、明日はジムと演技指導だから、わかった?」

武藤が運転席から顔を出して、降りた将に繰り返す。

すべて車の中で一度言い渡されたことばかりだ。

「台本は読めるところだけでいいから、いちおう目を通しておきなさい」

「ホイホイサー」

将はもらった台本とスケジュールをひらひらさせて、そっぽを向いた。

「んもうっ。ほんとにわかってる?……じゃ、明日忘れずにねっ」

と武藤の運転する車は、夜の中に走り去っていった。

もう夜9時を過ぎている。

ちなみに将が手にしている台本は『ばくせん2』のものではない。

△△さんの紹介で、プロデューサーに挨拶に行った将は、そこでも

かなり気に入られたらしい。

ただ、演技経験はほとんどない、というところで、本当にその役をできるのかどうか試すことになった。

つまり、プロデューサーが今クールで担当している連ドラのゲストのチョイ役で急遽出演させて、様子を見ることになったのだ。

「女弁護士モノでね。将くんは、冤罪を被せられた不良少年の役。あまりしゃべらない役だけど、そこそこ演技力は必要だから頑張って下さいよ」

とプロデューサーはにこにこと笑った。

5月3週目放送ということで、あさってから早くも台本（ほん）読みが始まり、今週中にリハーサルがあり、来週には撮りが行われるという。

放送日まで1ヶ月足らず、である。

テレビドラマの収録が意外にせっぱつまって行われるのが将には意外だった。

「最近は主要キャストだけ先に決めて、ストーリーはあとからつくる、というドラマも多いの。『ばくせん』のような人気シリーズの2作目なんかは別だけどね」

と、帰り道、武藤が車を運転しながら説明する。

今日台本を渡されたこのドラマも例外でなく、おかげでスケジュールがおせおせなんだという。

「これも、飲酒喫煙の奴の代役？」

と将が聞くと、武藤は平然と

「いいえ。プロデューサーのごり押し。今ごろ、どっかのプロのペーペーのコが泣いてるはずよ」

と言ってのけた。つまりすでに決まっている配役をプロデューサー権限で将に変えたのだ。

「そんなこと……しょっちゅうあるの？」

将はなんだか罪悪感のようなものを感じて武藤に訊いた。

「あまりないわね。まあ、今回は、もともと決定済みの子が少しＰのイメージと違っていたっていうのもあるから……

もっとも、そのプロダクションにも局のほうで埋め合わせを用意するだろうから、あなたが心配する必要はないわ」

「ふーん」

将は窓の外を流れていくとりどりの街の灯に目を移した。

別に将はテレビやドラマに出たくて出るわけじゃない。

そりゃ『ばくせん』の中田雪絵や、今回の女弁護士ドラマの主役を演じる人気女優にじかに会えるのはまんざらでもない。

だけど本気で俳優になりたいわけでもない。なりゆきでどんどん道が出来ていくから進んでいるだけだ。

そんな将だから、他人の役を奪ってしまったというのが少しせつなかった。

武藤の車が見えなくなると、将はさっそく聡に電話を掛けようと携帯を取り出して電源を入れた。

今まで武藤の命令で電源を切っていたのだ。

待ちきれない足は駐車場のほうに向いている。

「あ、アキラ？今からそっち行くけど」

有無をいわせない言い方をしながら車のキーを解除する。

「……そのようすだったら、すっかり元気になったみたいね」

プライベートな、低めの聡の声。いつもの声だけど久しぶりのような気がする。

「ご飯は食べた？」

聡のほうから訊いてくれるのが、むずむずするほど嬉しい。

運転席に乗り込むと、勢いよくキーを差し込む。

「……食べた。けど食べたい」……ほんとうは聡を食べたい。

「何ソレ」

と笑いを含んだ聡の声。

すっかり元通りなのが嬉しく、また不安になる。

――昨日のことは、幻だったんだろうか。

綿菓子のように……甘い記憶も感触も溶けてしまって、何も残っていない将である。

「昨日……」と将はいったん舌に乗せかけて

「いいや、直接言う……じゃすぐ行くから」

と一旦電話を切った。

シートベルトを装着し、アクセルを踏もうとしたとたん、留守番電話センターからの着信音が派手に鳴った。

電源を切っている間の着信。もしかしたらハルさんかもしれない、と将は再び携帯を手にとる。

メッセージはやっぱり、ハルさんだった。

『何度かおかけしたのですが、出られないようですので、こちらに

失礼します。

巌様の意識が戻られました。ご心配されていたと思いますので、取り急ぎお伝えしておきます。また掛けなおします。失礼します……』

丁寧の上に、さらに丁重を重ねるような口調でもたらされた、巌の無事の一報に将は心からホッとした。

とりあえず、自分のせいでヒージーが死ぬことは避けられた……。

ハルさんに掛けなおそうかとも思ったが、もう9時、年よりは寝ている時間なので明日にしようと、将はより明るい気分で、アクセルを踏んだ。

薄手の寝巻きに着替えた聡は、風呂上りなのか、ピンク色の頬のままのすっぴんだった。

瞼の水色もない。そんな聡にほっとして、将は玄関先で聡を抱きしめる。

「ちょっと……、将、苦しい」

きつく抱きしめすぎたのか、聡が小さく悲鳴をあげた。

寝巻き越しでも昨日の感触が蘇るかと試したのだが、力を込めすぎたようだ。

残念ながら、この柔らかさやぬくもり、甘い香りが昨日と同じかどうか判別できない。

いつもの聡であることは変わりないけれど。

「ごめん……」

「いちおう、ご飯だけあるよ。それともコーヒーがいい？」

聡が将を中に招きいれる。そんな態度も普通だ。

「あ、うん。……じゃあ、コーヒー」

将の顔をみた聡が、ふっと笑った気がした。

「今何してたの？」

背を向けて、コーヒーの準備をしている聡に、将はできるだけ何気なく声をかけてみた。

聡は、豆が入ったドリップペーパーに湧いたお湯をたらたらとかけながら

「お風呂から出たところ。髪乾かしてた」

と答えた。その答え方も別に特に変わったところはない。

その淹れ方がつもよりことさらに丁寧な気がするのは、テレビの音がしないからだろうか。

「昨日さ、俺……」

将はせっかちにも、本題を切り出すことにした。

聡はちょうど、淹れ終わったコーヒーポットとカップを持ってくるところだった。

思わずその胸元に目が行く。

今日はブラジャーをしているようだ。薄手のパジャマの生地にその線がわずかに透けていた。

ここのところ将と二人きりのときは、ノーブラのことも多いのに。

「そうだ。将」

コーヒーを注いでいた聡は、目を見開いて将の顔を見た。

黒糖飴のような瞳の大きさに思わず見とれた将だが、次の瞬間、聡はくるりと背中を向けると、飾り棚の前にあった小さな紙袋を持ってきた。

「ハイ。これ。１８歳の誕生プレゼント」

今度は将のほうが目を見開いた。

「マジ！」

「うん。遅くなっちゃってごめんね。土曜日に渡せばよかったんだけど……」

将は紙袋を嬉しげに見つめた。

見たこともない店名だが、厚手の紙で出来た濃い色の袋はいかにも高級そうだ。

「ありがとう……うれしー。あけていい？」

聡も微笑んでうなづく。

シックな包装紙を爪をたてて丁寧に剥いで、その中の箱を慎重にあける。

中には上品な色合いの万年筆が入っていた。

「万年筆！」

将は、聡の顔を見つめた。聡は万年筆を見つめながら

「何をあげたらいいか、わかんなかったから。これだったら邪魔にならないでしょ。

今は使わなくても、とっといたら将来使うだろうし」

と控えめに選んだ理由を声にする。

好きな人からのプレゼント。

それだけでも嬉しいのに、このプレゼントが一生ものになりそうな高級品だというのは将にもわかる。

ペンの握り心地を試したり、色艶をいろいろな角度から見る将に、聡も嬉しそうに

「でね……このインクが実はイカスミなんだよ」

と付け加える。

「へえー、イカスミ。どんな色なんだろ。さっそく書いていい？」

将は瞳をくるっと動かして聡の顔をのぞきこんだ。

「もう使うの？」

「アキラ、手帖持ってきて」

「え？」

「このペンで最初に書きたいことがあるんだ。だから、はやくー」

206◆塗りつぶされた相合傘

聡は素直にバッグから手帖を持ってきた。赤茶色の合皮に包まれている。

「へー、これがアキラの手帖かー」

将は、興味深げにぱらぱらと中身を開く。

「やだ、もう。関係ないところ見ないでよ」

といいつつ、聡はたいして止めない。

来年の3月まで日付があるところが気に入って買った手帖は、ほとんど仕事でしか使っていないから。

それに買ったのは昨年の12月で、その頃には聡の心は将に傾いていたから、彼に対してやましいことは何1つ書かれていないはずだ。

「よし、ちゃんと俺の誕生日チェックしてるじゃん」

将は満足げにうなづく。

「てことは……このちっちゃい赤い点は『あの日』？」

「ちょ！」

聡の目が真ん丸くなった。図星だった。

将の誕生日の3日前に生理が始まったということを将は知っているのだ。

聡はあわてて、将の手から手帖を取り上げようとした。

将は、歯をむき出して笑いながら、長い手を高くかざすようにして、手帖を聡から遠ざける。

「もー、返してよ！」

ついに、聡は手帖を追うあまり、将の上半身にタックルするように床の上に押し倒してしまった。

とまどった聡の顔は将の顔の真上で静止していた。

そのまま、将は上に乗った聡の背中に手をまわした。

「アキラ……。俺たち、昨日……」

聡は突然、将の唇に自分のそれを押し付けてきた。

将は、そのままパジャマに包まれた聡の体をそっと抱きしめた。

聡の体の重み。胸の上に押し付けられる柔らかい乳房の感触……しかし、昨日の記憶と同じかどうかはさだかでなくて、口づけしながら将は息苦しくなってきた。

長い口づけのあと、聡の黒糖飴のような瞳は、ねぶったあとのようにうるんでいた。

「昨日……、俺……。アキラと寝た、……んだよな」

聡は、ほんのりと微笑んだ。頬も唇も何もつけていないのにばら色だ。

「やっぱり……。覚えてない？」

「ん……。なんとなく、覚えてるけど……」

これは嘘だ。本当はなんにも覚えていない。

聡は将の上からゆっくりと身を起こした。

そのまま、床にぺたんと座り込んで首を傾げる。

「ね。あたし、途中で起きて、ご飯食べたんだけど覚えてないよね」

「食べたっけ」

そんな記憶はぜんぜんない。

「あたしだけね。……夕食前だったから、あたしお腹すいちゃって。将を呼んだんだけど『うん』って言うだけで、起きなくて」

本当に覚えていない。

「覚えてない？」

聡の問いに将はうなづきながら、頭を抱えたくなった。

「2回、したのも？」

「2回！？」

聡からもたらされた事実に、将は目を見開いた。

1回も覚えていない自分に、いったいどれだけ酔っ払っていたんだ、と将は自分を責めた。

「……本当に、覚えてないのね」

聡はなぜか可笑しそうだった。そんな聡に将は思わずうつむく。

「中で、出しちゃっ……」

将は聡を盗み見た。聡は悪いことがばれた子供のような将の瞳を見て笑いながらうなづいた。

「たぶん、大丈夫だから、気にしないで」

慰めるような口調に将はますます落ち込む。

ここ2年ほど、将は性行為の際、必ずコンドームで避妊していた。

もちろん、女性の粘膜の中に、直に射精する快楽も知っている。

それでも避妊していたのは、まわりのやつが、やれ性病だ、妊娠だと騒ぐのをまのあたりにしていたからだ。

たいして好きでもない相手と面倒な問題を起こすほどバカじゃない

というプライドが将にはあった。

その禁を昨日、うっかり破ったのはいい。相手は最愛の聡だから。

仮に妊娠したとしても、責任をとる覚悟は出来ている。

だけど……その、極上だったはずの感覚をまるで覚えていない、そのことが無念でならない。

「あのさ……。俺、ひょっとして、めちゃくちゃ、独りよがりなセックスしてなかった？」

「えー、どうかなあ」

聡はいたずらっぽい顔で、瞳をくるりと回転させて将の顔を横目で見た。

聡はさっきから可笑しくてたまらなかった。

何気ないふりをしながら、本当は、今日1日、ずっと将にどう接していいかわからなくて、迷っていたのだ。

教え子と、ついに関係を持ってしまった。

罪悪感と恥かしさと、体中に残る余韻。その片鱗も表に出すまいと聡は必死で戦っていたのだ。

でも。昨日、かなりの深酒にヨロヨロになっていた将は、案の定何も覚えていないらしい。

それを知ったとたん、聡は優位に立った気がして、快活な気分になってきた。

……もともと、将と寝たことで、満ち足りた気分ではあるのだが。

「アキラ！」

将は聡ににじり寄ってきた。滑稽なほど真剣な顔で肩を掴む。

「やり直し、させて。頼む」

やり直しって。聡は思わず吹き出しそうになるのをこらえながら

「ダメ―！」

と冗談テイストをまじえながら答える。将の顔が、そんなぁ、と歪む。

「昨日は特別だもーん。続きは卒業のあとでネ」

聡はやんわりと将を振り払うと、手帖を取り戻した。

「えー……。俺なんにも覚えてないのに……」

子供のように唇を尖らせる将がいとおしくて、聡は首を伸ばすようにして、将の額に軽くキスをすると、そのまま唇を耳元に移動させて

「あたしはいっぱい覚えてるよ」

と囁く。そう、体の中に将の形を思い浮かべられるほどに……聡の

中の将は鮮明だった。

将は聡の囁く息づかいが耳に染みて、背筋にぞくっとくるような快感に見舞われて、反射的に聡の体を抱き寄せる。

「もう一度、頼む……」

将は聡の頬にくっつくほど顔を寄せて喘ぐように懇願した。だが、聡はうるんだ瞳に将をいっぱいに映しながらも

「……ダメ。今日、教室ですごく恥かしかったから……」

とゆずらない。

「……ぜんぜん、クールだったじゃん」

聡の唇まで、あと1センチというところで、水色のアイシャドウを付けた聡を将は思い出す。

そこに恥らう素振りなどみじんもなかったはずだ。

「一生懸命、隠してたのよ。二人のために……」

それ以上、聡はしゃべれなかった。将の熱い唇にふさがれたからである。

「で、手帖に何を書くの?」

ひとしきり激しい口づけを終えて、より紅潮した顔で、聡が訊いてきた。

「そうだった」

忘れるところだった、と将は万年筆を手にとってローテーブルに向かった。

聡にもらった万年筆で聡の手帖にぜひ書いておきたいこと。

手帖の裏表紙の半分には赤茶色のカバーが被さっている。

カバーから将は手帖の裏表紙を引き抜くと、そこに文字を書き始めた。

「えー、なあに？」

聡も覗き込む。

そこには、イカスミインクの自然なセピア色で

Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ，　Ｆｏｒｅｖｅｒ

ＳＹＯ

と書かれていた。

「フツーすぎるけどぉ」と将は照れて笑い、

「あ、綴り、間違ってないよな」

と聡を振り返って確認した。

聡は頷きながら、その単純ながら心のこもった言葉に、胸がいっぱいになった。

カバーに隠れる部分に書かれた、将のメッセージ。

来年の3月まで……つまり将が卒業して、二人がただの男女になれる日が来るまで、聡はこのメッセージをひそかに抱いて暮らすのだ。

さらに照れたのか、それとも書き味が気に入ったのか将は、手帖の中面を開くと、今日の日付のところに小さな相合傘を書き始めた。

聡はあわてて

「だめよ！そこは仕事で使うんだから！誰かに見られちゃう！」

と止めたが、傘の下にはハートマーク付きで、「あきら」「将」と名前が書かれてしまっていた。

「チェー、わかったよ」

聡の必死の形相に将は、相合傘の上に重ねて×を書くと、その上を塗りつぶし始めた。

結局、今日の日付の欄には、セピア色で塗りつぶされた2センチぐらいの正方形が残った。

その下に隠された相合傘は二人だけの秘密になった。

207◆血の、いとしき源

「大悟ー、……いないのか」

将は、真っ暗なリビングダイニングにあかりを灯しながら呼びかけた。

昨日に引き続き、大悟は出掛けているようだ。

キッチンに入って冷蔵庫から水を取り出すと、グラスに注いで一気に飲む。

体にいきおいよく取り込まれていくミネラルウォーターのかわりのように、大量のため息が出る。……疲れた。

火曜日ももう11時になる。

急遽決まった、ドラマのゲスト出演に備えて、今日、将は学校から直接事務所に来るように言われていた。

演技指導を受けるためである。

事務所に顔を出すと、そこには武藤と一緒に演技の講師がいた。

将は知らない顔だが、若手の演出家だという。30代後半ぐらいに見えた。

「台本は読んだ?」

武藤に訊かれて

「……いいえ」

と将は素直に答えた。すると武藤は、

「やっぱりね。ハイ。こっちをあげるから」

と別の台本を将によこした。

そっくり同じもののようだが、中身を見ると、ほとんどの漢字に振り仮名が振ってある。

そして将の部分に蛍光ペンでラインが引いてある。……すべて武藤の手書きである。

「これだったら読めるでしょう」

と武藤は優しいような目をした。少しだけバカにしているのがわかる。

「漢字ぐらい読めますよ。時間がなかったんです」

大人気ないな、と思いつつ将は反論した。

「ハハハ！」

突然演出家は笑うと

「やる気あるじゃん……、上等、上等」

将に向き直った。

「じゃあ、さっそく、この話の説明しよっか。……でも本来は、自分で台本を読んで理解しないといけないところだからね」

と丸い目をきらっと光らせた。年齢に似合わない、子供のような瞳だ、と将は思った。

「この話は、少女が殺害されて、犯人は誰だ、という話ね。で、将くんの役である、尾崎優は、冤罪を着せられる不良少年。

でも、本当は殺人現場の唯一の目撃者なのね。だけど、親に対しての復讐心というか反抗心があって、

犯人のままでいて、親の社会的地位をめちゃくちゃにしてやりたいと思って黙ってる……という設定」

「あ、役の名前は、『将』に変えてもらいました」

と武藤が口をはさむ。

将は台本を素早く目で追う。

しかし、シーンごとに細かく区切られているせいか、読んでいるだけでは、いまいち話がわからない。

演出家は将の役の抱えている内面などを細かく説明した上で、

「でも最後には、主役の女弁護士である大岡政子が将くんが犯人じ

ゃないという証拠を見つけてきて、無罪放免になるわけ。

……まあ、こうやって聞くと複雑だと思うけど、セリフは少ないから」

演出家のいうとおり、将の登場シーンはほとんど、

（優、黙り込んでうつむく）

（優、政子をにらみつける）

（優、目を見開いて立ちすくむ）

とそんなト書きがほとんどだ。

「ま、論より実践。やってみよっか。じゃ武藤さん、政子やってみて……シーン１－５からやってみようか」

武藤は「ハイ」とうなづいて、さっそく、主役の大岡政子のセリフを読み始める。

「『あなたの弁護を担当する大岡政子です。よろしくね』」

プッ。

将は吹きだしてしまった。

「こら！」

そんな将に演出家が目をむく。

「だって、だって、なりきってるんだもん」

将は堪えられずに笑ってしまった。武藤はちょっと頬を赤くしながらもムッとする

「これが仕事なの！アンタもなりきらないと。明日の台本読みはこんなんじゃないわよ！」

「そうだよ、笑うのはサイテーだよ……まあ初めてじゃ、仕方ないけど。じゃ次、将のセリフ『弁護なんて必要ないしぃ』」

演出家にもたしなめられ、将は自分の部分を読もうとした。

「べっ……弁護士なんて、必要ないし」

武藤と演出家が同じように額に手をやった。

「ックううう。みごっとな棒読みっ！相当しごかないとな」

武藤がため息をつくそばで、こんどは演出家が額にあてた手の下でくっくっと笑った。

……と、こんな感じで軽食をはさみながらの演技指導が3時間。そのあとジムが1時間。

ジムの後、夕食をおごってもらったが、将はくたくたになっていた。

将は、台本をもう一度取り出すと、ソファに体を投げ出した。

「『だから、俺が殺したんだよ』、か……」

そのセリフを口にして、ふと大悟を思い出す。

今日、説明を受けていても思ったのだが、将が演じるこの不良少年『尾崎優（武藤のごり押しで、名前は将になったというが）』という役は、なんとなく大悟を思い出させる。

自分がやってもない犯罪を、被ったという点でだろうか。

それでいて、親に対しての反抗心、という部分は自分そのものだ、と思う。

いずれにしても、昔の傷に微妙に触れる面倒な役だと将はため息をついた。

将は胸の古傷に埋め込まれたトゲがチクチクと動くのに、必死で気付かないように、心を鈍感に保っていた。

……それゆえ、必要以上に棒読みになってしまった、というのもあるかもしれない。

それにしても、大悟はいったいどこに行ったんだろう、と将は携帯を取り出して掛けてみる。

……あいにく、電波が届かないらしい。地下のクラブにでもいるんだろうか。

昨日も……聡の部屋に泊めてもらえなかった将は、12時ごろ帰宅したのだが、そのときもまだ大悟はいなかった。

朝、登校前に部屋をのぞくと、着替えもせずに布団の上に倒れこむように大悟は寝ていた。

その服装から、おそらく夜遊びに行っていたのだろう、ということがわかる。

井口が言っていた……ヤバイ薬を売っていた、というのは本当だろうか。

売っているのは、昔のように偽の薬なのか。

それとも……本物？

本物ならば、どこで調達しているのか。

昼間働いていないのなら、夜遊びの金など……まして薬を仕入れる金もないはずだ。

将は、ソファから起き上がると、大悟が寝室に使っている部屋のドアをあけた。

部屋を見渡す。

万年床になっている布団。壁に掛けられた着替え、かごの中に畳まずに突っ込まれた服。

なんら異常はない中で、将の目をひいたものがあった。

スタンドの下に、きちんと畳まれた女物の衣服の上に、小さな白い犬のぬいぐるみ、骨が入った小さな瓶、瑞樹が写ったプリクラが並べられていた。

おそらく、瑞樹の遺品だろう。

雑然とした部屋の中でその一角だけが、きちんと整っていた。

それを目にして……最近の大悟の行動に、何か一言忠告しなくては、といきまいていた将だったが、そんな気分はしぼんでしまった。

1ヶ月以上が経った今も……大悟はおそらく瑞樹のことで受けた傷が癒えていないのだろう。

だったら、なおさら。将は大悟が立ち直るために、早く伝えたいことがあった……保護者の件だ。

そして、大悟の保護者の件に関連して、将は忘れていた昼間の電話を思い出してしまう。

将は眉間に拳をあてると、走り来る巌の……自分を愛してくれた数少ない血族の最期を思い、うち震えた。

今日の昼休み。

早々に昼食を食べ終えた将は、ハルさんに、巌の容態を聞くべく電話をかけた。

意識が戻った、とのことだったので、巌本人とも話せれば……できれば話して謝りたいと思っていた将だったが、ハルさんは巌の状況について、言葉を濁した。

「何、意識が戻ったんじゃないの？」

将は携帯に食いつくように尖った声を出した。

「いえ、ええ。意識は戻られたんですが……」

「危ないの……？」

将はおそるおそる、それを口にした。

賑やかな学食の一角から、自然に足が外に向かい、建物の陰に移動する。

「いえ、危ない、というわけでは……。ただ」

「ただ？どうしたの」

ハルさんは沈黙ののち、

「将ぼっちゃま、西嶋が参りましたので、代わります」

うろたえたように、電話を代わった。

「お坊ちゃま、西嶋でございます。……御大から承った、お坊ちゃまのお友達の保護者の件ですが、私の弟が承りました」

運転手の西嶋に電話が代わったことによって、将が知りたい巌の容態から話も自然に切り替わった。

「西嶋さんの弟？」

「ええ。私の弟は、都内で小さな工場をやっているのですが、将ぼっちゃまのお友達の保護者を引き受けさせていただくことになりました」

「ヒージーが西嶋さんに頼んだの？」

「はい。昨日、御大は意識が戻られて、すぐに私に仰せ付けられました」

と西嶋は続けた。西嶋の弟夫婦には子供がいないので、大悟が希望するなら同居も養子縁組も可能だという。

「……弟夫婦は大変世話好きでして、巌様からのご紹介で海外からの留学生を毎年、ホームステイさせたりしているほどなんです」

「そうか……」

運転手の西嶋は実直な人柄だし、その弟も巌と面識があるのなら、信頼できるだろう。

将は身近なところで大悟の保護者が見つかったことに安心した。

「で……、ヒージーは、大丈夫なの？」

巌自ら西嶋に話をするぐらいだから、大丈夫なのだろうと将は少し安心して再度問い掛けた。

「ハイ……。ただ、全身に麻痺が残っているようです……」

遠慮がちにおずおずと話す西嶋の声は、さっきの保護者の件を話すときと違って明らかに低くなっている。それが事の重大さを物語っている。

「動け……ないの？」

「残念ながら、今のところ……」

将は息を飲み込む。

「ただ、ご本人の気力はしっかりしておられます。リハビリに取り組みたい、とさっきも力強くおっしゃっておられました。もう少し回復したら都内の病院に転院されるかもしれません」

西嶋は将が相手だから、極めて希望的に伝えたのだろう。

容態の希望のなさ、は最初のハルさんの態度からもわかる。

１００歳の老人が全身麻痺になれば……回復の見込みはほとんどないだろう。

それで、ハルさんは言葉を濁していたのだ。

将は目の前が真っ暗になる気がしてしゃがみこんだ。

西嶋を不安がらせないために

「わかった。保護者の件は……本当にありがとう、近いうちに絶対に大磯に行くから」

とだけ返事をした。

粘りつくような回線を切ると、膝に頭を埋めた。

昼休みの喧騒も何も聞こえなくなった。

心臓の波打つ音、ヒージーから続く血を駆け巡らせる音だけが地響きのように聞こえる。

その血の、いとしき源が……近いうちに逝ってしまう。将は恐怖に震えた。

208◆アドリブ（前書き）

出てくる芸能関係の団体名、個人名と実在の人物はまったく関係ありません。

208◆アドリブ

8時きっかりに武藤からのモーニングコールが鳴った。

いつもなら起きている時間なのに、昨日の疲れ……こと精神的疲労が大きい……からかぐっすり寝込んでいた将は、

「ハイ……今起きました」

と返事をして電話を切ると、また倒れこんだ。

それを見越してか、20分後にもう一度鳴った。

「将！二度寝したでしょう！」

電話の向こうで武藤が怒鳴る。

「ほぇ……おきてましたよぉ。おきましたってばー」

見透かされた将は、携帯を握り締めたまま、欠伸をすると、そのまま大きく伸びをした。

頭が半分眠っているせいか幸い、巌の全身麻痺のことなどは思い出さずに済んでいる将だが、なんとなく気乗りがしない。

学校だったら、何があっても頑張って毎朝起きるのだが……。聡がいるから。

ボリボリと腹をかきながら、大悟の部屋をのぞいた。

昨日、結局、将が起きている時間に大悟は帰ってこなかったのだ。

「いねえじゃん……なんだよ」

大悟は今朝はどっかに泊まってきたようだ。それとも夜勤か？

瑞樹がまだいたころ、時給がいいからと、大悟はよく夜勤に行っていた。

立ち直って夜勤に行ったのならそれはそれでいい。

あまり時間のない将は、深く考えないようにして、シャワーを浴びて支度をした。

9時に下に降りると、すでに武藤が車で迎えに来ていた。

「おはよう。朝ごはん食べてないでしょ。食べなさい」

と紙袋を後部座席の将に投げるように渡して、運転に戻る。

ラップに包まれたサンドイッチが入っていた。

「武藤さんの手作り？」

「そうよ。嫌だったら食べなくていいわよ。かわりにコンビニに寄るから」

「食べます、食べます。超うまそー」

それはトーストしたパンに焼いたベーコン、レタス、キュウリ、卵などが入っている具沢山で、まだ作りたてらしく、いかにも旨そうだった。

「調子いいわね。もう」

といいながらもバックミラーに映るクールな顔はちょっと嬉しそうだった。

「今日は、１０時３０分に局入り。わかってると思うけど、局で会う人には、皆愛想よくね。

まあ、アナタは初対面の人には礼儀が正しいみたいだからそこは心配してないけど……。そして台本(ほん)読み、それと衣装あわせ」

武藤は行き先から顔をそらさずに今日の予定を暗誦する。

「ホント、これ旨いよ。わぁ♪バナナサンドもある♪」

「ちょっと、聞いてるー？」

「わかってるって。ところでさ、なんで１０時半局入りなのに、こんなに早く出かけてんの？まだ1時間あるじゃん」

将は、デザート代わりにバナナサンドをぱくつきながら訊いた。

はちみつとチョコレートスプレッドの甘さが朝にはいい。コーヒーもポットに淹れてある気の利きようだ。

「もちろん、昨日のおさらいを事務所でしていくに決まってるでし

よ」

「ゲロゲロ」

将はバナナサンドを取り落としそうになった。

「ベテラン俳優さんと顔をあわせるんだから当然でしょ。今日は主演の奄美ユリも来るんだからしっかりしないとね」

「まじ！奄美ユリ！『魔女の教室』の！」

『ばくせん』同様、高視聴率を叩き出した人気ドラマである。

「そうよ。だから昨日みたいに笑い出したりしないようにね！」

「わー、緊張してきた。どうしようオレ」

といいつつ、リラックスしている将を、武藤はわかっていた。

武藤が用意したサンドイッチを全部平らげたところからもそれは明快だ。

「ところで将」

武藤は信号待ちを選んで意味深に振り返った。

「オフレコだけど、奄美さん、ロックシンガーの彼ともめてるらしいわ。すっごく機嫌が悪いかもしれない。多少イジられるかもしれないけど、我慢するのよ」

「えー、何だよ、イジられるって」

シートに寄りかかっていた将は、思わず身を起こした。

「大丈夫よ。あなただったら、たぶん。あ、このことは誰にも話しちゃだめよ。話したら出所はアナタだって丸わかりだからね」

それだけ言うと、武藤は車を発進させた。

「おはようございます」

――これが芸能界特有の『おはようございます』か。

と将は感心しながら、武藤のあとについて自らも「おはようございます」と頭を下げた。

それにしても……皆が、自分に注目している気がする。気のせいだろうか。

「おはよう！将くん！」

将をゴリ押ししたプロデューサーが、ひときわ大きな声をかけて、にこにこ歩いてきた。

「おはようございます。今日はよろしくお願いします」

武藤がぺこぺこと頭を下げる。

「いや、期待してますからね」

とPは将の肩をぽんと叩くと、台本よみの部屋に案内した。

窓のない部屋に細長い会議机が、口の字型にくっつけてあった。

まだ、誰も出演者は来ていないらしく、そこに座る者はいない。

「将くんは、ゲストだからここ。座っててていいよ」

とADに言われ、将はおずおずと席に座った。もっと端がいいのに、なぜか真ん中だった。

武藤とPはどこかに行ってしまい、将はやることもないので、台本を取り出して眺めていた。

そのとき、遠くの方から波が押し寄せてくるように『おはようございます』の声が次々に重なった。廊下のほうだった。

将は何事かと入り口を見た。

そこには、ちょうどジーンズ姿で眼鏡をかけた奄美ユリが入ってきたところだった。付き人を一人だけ従えている。

皆が、ぺこぺこと挨拶をする。将も思わず立ち上がった。

テレビで見るより、ユリがずっと小さいのに将は驚いた。
だけどほとんど無化粧、髪を1つにまとめているラフな姿なのに、後光が射すかのようなオーラが立ち込めている。
ユリは眼鏡の中から『あら』という顔で将を見た。
「こんにちは。このたびはお世話になります。将といいます」
将は、ユリに頭を下げた。
「あら……優ちゃんじゃないの？今日のゲスト」
ユリは、将の挨拶に返事もしないで、スタッフに訊いた。
スタッフは
「いや、それが……」
とユリに耳打ちした。
「ふーん。残念。あたし、優ちゃんを焼肉に連れてってあげる約束してたのになあ」
とユリは将にも聞こえるように言った。
どうやら、ユリは将の前に、この役をやることになっていた宮沢優と知り合いだったようだ。
「それに、ずいぶんおっきいコね。身長いくつ？」

とユリは横目で将を見上げた。

「１８５です」

将は、どういう顔をしていいのかわからなかったが、とりあえず、訊かれたことには素直に答えた。

「ヤダァ。優ちゃんより１２センチも高いじゃなーい。やりにくぅい」

思わず将がムッとしそうになったそのとき、やっとＰが飛んできた。

「ユリちゃーん、ごめんねー」

「ちょっと□□さん、聞いてなぁい」

一生懸命Ｐが奄美ユリの機嫌を取っているのを見て、将はあっけに取られた。

武藤が寄ってきて囁く。

「さっそくやられた？」

「ハァ」

「我慢するのよ」

武藤はファイト、と拳をつくって後ろに下がっていった。

「ハァ」

将はただ呆然としていた。奄美ユリといえば、視聴率女王といわれる人気女優である。

性格もさっぱりとして爽やかとされているが……今日、将がまのあたりにしている奄美ユリはまるでそんな世評とは別人のようだ。

「ねえ、将くん」

将は思わず椅子に座ったまま、のけぞりそうになった。

いつのまにか隣の席にユリが座っていたからだ。どうやら主役は将の隣のようだ。

さっきスタッフやPと話していたのより1オクターブも低い声、おまけにぶっきらぼうな話し方だ。

「あんた、いくつ？」

「18です」

「なーんだ、未成年かー。もっと年いってんのかと思った。……ハッキリいって老けてるね」

勝手なことをいいながら、ユリは、煙草を取り出すとカルチェのライターで火をつける。

一一う。

禁煙している将は思わず、咳き込みそうになるのをこらえる。

――健康派というのもウソかぁ。

にしては。紫煙の奥の肌は、３６歳にしてはツヤツヤで、聡とそれほど変わりがないように見えたほどだ。

「ユリちゃーん、禁煙だよう」

Pがまるで幼稚園児に語りかけるような声で注意する。

「待ち時間だけ。いいでしょ～。どーせ後ろに空気清浄機あるでしょ」

甘い声でねだられて、禁煙はうやむやになる。

「いままで、どんなドラマに出てるのー？」

紫煙を将の顔に吹きかけながらも、ユリはさっきとは打って変わって、低い声ながら親切そうに訊いて来た。

「初めてです」

「へえ！初めて。Dプロ期待の新人ってわけね、ヒューー」

と、一見褒め言葉をかけながら、茶化しているのは一目瞭然だ。

「色、土人みたく黒いね。表情出にくいんじゃないかなあ。あ、サーファーとか？」

「いえ」

「ふーん、そう。ま、なんにせよ、美白したほうがいいね。お肌はキレイだけど黒光りしてるんじゃない」

ユリは一人でふふふんと笑った。

「ハァ」

……と将は無難に相槌を打ったが、土人のように黒い、などと人から言われたのは初めてだ。

そりゃ、昨年は連日、海辺に夕陽を見に行っていたから、多少浅黒くはあるが、それも一冬越したせいで褪めている。

バカにされてるのか、親切なのかよくわからない。

しかし、将はそんな態度よりむしろ、煙草の煙のほうにうんざりしていた。

まもなく出演者が揃って台本(ほん)よみが始まった。

最初に、脚本の訂正事項が読み上げられる。

将の役名変更もそのときにみんなに宣言された。

「みなさーん。今回のゲストの役名が、尾崎優から尾崎将に変わりましたから、書き直してください」

ちなみに出演者が全員ここにいるわけでなく、スケジュールがあわない何人かは代役になっている。

その代役にはＡＤや製作会社の人が座っている。ユリの恋人役も今日は代役だ。

それでも。台本よみが始まって将は驚いた。

動作は入らないものの、声だけですでにドラマさながらの演技なのである。

代役の人も、慣れているのか、役にはまりきっている。

将はだんだん動悸がしてきた。いよいよ将の番だ。

『あなたの弁護を担当する大岡政子です。よろしくね』

隣のユリもさっきの嫌味女からはまるで違う女に変貌していた。

声も、低いながらも、さっきのぶっきらぼうな調子とは全然違う。

知的で親身な女弁護士が隣に座っているようだった。

その雰囲気に引っ張られて、思わず将も

「弁護なんか、必要ないし」

ごく自然にセリフを口にすることができた。

だが、その後、ドラマの内容が内容だけに、ユリと将のシーンが多いのだが、

『私は、あなたが殺したとは思えないの。ねえ優くん』

『優くん、本当のことを言って』

とことごとく、将の名前のところを間違える。

「あちゃー、まーた間違えちゃった」

とユリはそのつど舌を出す。3回目に間違えたときは

「だって、急に変わったからぁ。……ねえ」

と流し目で将に同意を求めてきた。

――ねえ、と言われても。

将は「ハァ」と答えるしかない。

だけど、これもどこかで見た、年配のベテラン俳優がだけど、これもどこかで見た、年配のベテラン俳優が

「ユリちゃんにしては珍しいねえ」

と突っ込みを入れたので、ユリの顔から甘えた笑顔が消えた。そして小さく

「わざとやってるにきまってるじゃん」

と呟いた。それは隣にいる将だけに聞こえる大きさの声だった。

将は思わず目だけを動かしてユリの方を見た。

するとちょうどユリも将を横目でちらりと見たところで、二人の目があってしまった。

それで、将はわかった。

もともとこの役を演じる予定だった宮沢優は、ユリの単なる知り合いだけではなく、たぶん相当なお気に入りだったのだろう。

その役を将が横から奪い取ったことに、ユリは腹を立てて、嫌がらせにずっとセリフを間違え続けているのだ。

――そんなことをしても、どうしようもないのに。

将は、なんだか脱力しそうになった。

ユリはフンと勝ち誇ったように鼻で笑うと、さらにセリフを続けた。

『優くん、教えて。どうしてアリバイを証明しなかったの』

『将です、大岡さん。……そんなの俺の勝手だろ』

将が挿入したアドリブがあまりにもナチュラルだったので、すぐに気付いたのはペンでセリフを追っていた脚本家とP、ユリ本人、それと壁際で見学していた武藤だけだった。

ユリは驚いて、将の顔を振り返った。眼鏡越しの目が大きくカッと見開いて将を睨みつけた。

その剣幕に将は威圧されるような気がした。

鳥肌が立ちそうになるほど恐ろしかったが、将は勇気を出して、ユリをまっすぐに見返すと、口の端に笑顔をつくってみた。

すると……ユリは固く見開いていた目を、ふっと柔らかく細めた。

そして顎をクイとあげると艶然と微笑んだ。

続いて「やるじゃん」、と小さく囁くのが聞こえた。

209◆見えない屈辱

台本読みは無事終わった。

「どう？将くん」

と将に近寄ってきたPに

「初めてっていうけど、本当に勘がいいわ！とってもイケメンだし先が楽しみね」

と割り込むように絶賛したのは、奄美ユリだ。台本読みが始まる前と正反対の態度に将は唖然とした。

土人って言ったのはどこのどいつだ、と、皮肉が頭の片隅をちら、とかすめるが、それは口に出さず、将は笑顔で頭を下げた。

「ユリちゃんのお墨付きをもらえれば、鬼に金棒だよ」

Pも恵比須顔だ。

「あさってからも頑張りましょうね！将くん」

ちなみにあさってはリハーサルだ。

「ハイ」

ユリは、極上の笑顔で微笑むと立ち上がって将に手を振った。

何もかも許したくなるオーラに、将はやっぱり大女優なんだな、と感心した。

「すごいわ。奄美ユリに気に入られるなんて」

衣装合わせも終わって、事務所に戻る帰りの車の中で武藤は感嘆した。

「あれって気に入られてるの？最初、土人とか言われたぜー」

将は気疲れして後部座席にもたれている。

「奄美ユリの好みは野性的なタイプよ。今付き合っているロックシンガーのK・Kなんてまさにそういうタイプじゃない。

身長が高くて足が長いところも将と似ているわ。……だからといって将、誘惑に乗るんじゃないわよ」

「だーれが。あのひと、もう３０代だろ」

と将は悪態をつきながらも、内心、奄美ユリに誘惑されたらそれはそれでちょっと嬉しい、と思った。

だけど自分には聡がいるから、誘惑に乗るつもりは毛頭ないけれど。

武藤は「冗談よ」と笑って

「まあ、奄美ユリは、気分屋だけど、裏表のないさっぱりした性格で有名よ。

誘惑するならハッキリ言われると思うし、たぶん年下の男は子分にしたいだけだと思うわ」

「ええー。今日のあのイジメがさっぱりした性格？」

将は顔をしかめた。前半の、あのねちねちとした、役名間違いのどこがさっぱりとした性格なのだろう、と思う。

「彼女、T歌劇団の出身だから芸には人一倍厳しい人でね。それで実力派と言われているんだけど、

たぶん今回の配役交代のことで何か誤解したんじゃないかしら……。まあ許してあげなさいよ」

「ふーん。別にいいけどぉ」

もともと将は口で言っているほど気にしてはいない。

「それにしても……T歌劇団出身の奄美さんに褒められるなんて、やったじゃない。彼女はお世辞を言わないことでも有名なのよ！」

と武藤は思い出したように振り返った。

台本読みが終わっても将は解放されなかった。

こんどはリハーサルに向けて、事務所で演技の猛練習があった。

しかし、台本読みのときと違って、一度、プロの俳優たちの演技をまのあたりにした将はふっきれたように照れを捨てて、自分の役を表現できるようになっていた。

「飲み込みがいいよ。それと人に訴える目力は逸品だね。トシのわりに表情も豊かだよ」

指導にあたった演出家も褒めるしかなかった。

演技力はそこそこ認められたものの、発声練習には骨が折れた。

特に「滑舌」をよくするための発声練習は本当に疲れた。

「将くんはもともと声質が低いから、より明瞭にしゃべらないと、何しゃべってるか視聴者に聞こえないよ」

と注意される。

将は一生懸命ハッキリしゃべっているつもりなのに、それでも「不明瞭だ」と指摘される。

「だけど、その声の低さが、女性にはウケると思う。特に、年とってから。日本の俳優は声が甲高い人が多いから。……だから頑張ろう」

頑張ろうと言われても。もともと将は何のために頑張っているのか、わからない。

とりあえず、やれ、と言われるからやっている。

だんだん舌がだるくなって、ろれつが回らなくなる直前に、ようやくレッスンが終了して将は解放された。

来た時同様、武藤がマンションまで送ってくれた。

「明日は、午後から『メンズｍｏｎ－ｍｏ』の撮影だから。学校には早退届を出しておくから。校門に１２時３０分に迎えにいくからね」

そういって武藤は夜の中走り去っていった。もう時計は２３時を指していた。

将は長い一日を思って、深いため息をついた。

「遅かったな」

ソファに寝転んでテレビを見ていた大悟が、帰ってきた将を見つけて声をかけた。

お互い、マンションで出会うのはあの頭突きの金曜日以来だ。

まだ、ジーンズを穿いているところを見ると、今帰ってきたところらしい。

サイドテーブルの上に缶ビールが置いてある。

「ああ。バイトでな」

将はややロレツが回らないまま答える。しゃべりすぎて舌がだるい。

そして自分も冷蔵庫からビールを取り出して、リップに手をかけた。

プシュっという音がとてつもなくいい音に思える自分は、やっぱりすごく疲れているのだろう。

それきり言葉もなくテレビを見入る大悟は、少し疲れているようだった。

「お前さ……。昨日どこ行ってたの？」

将は一人がけのソファのほうに腰を下ろして、ビールを飲みながら大悟に昨日の泊まりについて訊く。

「いや、バイトとか」

大悟はソファから身を起こすことなく、テレビから目を離すことなく、答えた。

「偽シャブ売りの？」

疲れていた将、単刀直入に訊いてしまって、しまった、と少し思った。

「偽シャブだって？」

大悟はその黒い瞳をぐるりと将の方へ動かした。

「井口から聞いたんだ。お前、また偽シャブ売り始めたんだろ」

引っ込みがつかなくなった将、井口に訊いたことを前面に出すことにしてビールをあおった。

「……」

大悟は一瞬将の顔を見つめたが、将がビールをあおっているのを見て、再び視線をテレビに戻した。

だから、将は無言の大悟にしびれをきらしたように再び話すしかない。

「あれサ……バレたらヤバくない？小学生相手ってわけでもないんだろうしさ。……まさか本物ってことないよな」

できるだけ、角が立たないように、冗談めかす。

将の、できる限りの丸腰の口調が大悟に届いたのか、大悟はテレビから目を離すことなく話し始めた。

「脱法は本物。……瑞樹の遺品に入ってたのを売りさばいた」

「えっ」

「もう全部売り払ったよ」

瑞樹の遺品と聞いて、将は一瞬、あの最悪の薬……つまり覚醒剤の

ことを思い浮かべた。

が、脱法ドラッグと聞いて、また、すべて売り払ったと聞いて少しホッとした。

それでも、悪いことには変わりないが。

「そっか。……もう、そういうことすんなよ。いいトシなんだしさ」

と将は言いながらも、我ながらうそ臭いほど説教臭いなと、言葉を引っ込めたくなる。それを切り替えるように

「ところでサ、三宅さんから連絡あった？」

と訊いてみる。

三宅弁護士の名前に大悟が再び、その黒い瞳をテレビからこちらに向ける。

「いや。俺も、さっき帰ってきたばっかだから。三宅さんがどうしたの？」

「や……あのさー」

将は、大悟の鋭い視線に、少し躊躇する。

前かがみになってビールの缶をいじりながら、意を決して話す。

「保護者がいなくて、お前がいろいろ困ってるって聞いたからさあ……」

と前置きをしつつ将は、巌の運転手・西嶋の弟が、大悟の保護者になってくれるという件を伝えた。

「西嶋さんは俺も小さい頃から知ってるけど、すっごくいい人だし……。

弟さんも小さな町工場を経営していて、特許付きのすごい技術を持ってるんだって。

だから潰れる心配はないから……大悟の金を使い込むとかそういうのは心配しなくていいし」

その口調からも、将は大悟に払われる金のことも、またそれが親戚に使い果たされていることも知っていそうだった。

なんで将が、それを知っているのか、と大悟はけげんに思ったが、悪い話ではないので、とりあえず

「悪いな。いろいろ面倒をかけて」

と言っておいた。将は大悟の言葉に安心したのか、

「これで、金のことで困らなくて済むだろ。怪しい薬を売らなくてもいいし」

と背もたれに寄りかかった。

「それにさ……大悟が希望すれば、だけど養子縁組だってしてくれるっていうんだぜ」

それには大悟は返事をしなかった。

「な、いい話だろ。いきたけりゃー学校だって行けるし。うまくいけば社長を継げるぜ」

将は、大悟の沈黙には気付かず、明るい調子で続けた。

「ああ……そうだな」

ようやく大悟は言葉を返した。

しかし返事をしながらも、ひどい屈辱を感じているのは否めない。

将は……最初から、金で大悟の人生を買ったのだろうか。

殺人犯という汚名に穢れない……人生を。

そして、自分は無垢な人生を、将に売り渡してしまったのだろうか。

「俺、先に風呂に入っていい？」

将は、大悟が感じている屈辱にまるで気付かないらしく、凝ったらしい首をカクカクと左右に動かしながら訊いてきた。

「いいよ」

大悟はできるだけの笑顔をつくった。

そして

「将」

と呼びかける。

「んー？」

バスルームへ歩く将は伸びをしながら振り返った。健やかに伸びきったその腕はもう少しで天井に届きそうに見える。

「ありがとうな」

「そんな、改まるなよ。照れちゃう～ん」

とふざけながら将は白い歯の笑顔でバスルームに消えた。

リビングに一人残された大悟を、ふたたび屈辱が包んだ。

養子縁組だって。

誰が、そんなもの。

と唇を噛み締める。

本当は……大悟はとうの昔に実の父などあてにしていなかった。

かといって誰かの養子になるなんて、想像もつかない。

という以上に、将にそんな情けを掛けられる自分がみじめだった。

将の罪を被ったことを、金で清算することに甘んじる自分が情けなかった。

本当は、将が見つけてきた保護者だって頼りたくない。

食い扶持が、部屋代が、学校が、月なにがしかの小遣いが何なんだろう。

と一旦は思った大悟だが、やはりそれは大きかった。

いま、大悟の手の中には、脱法ドラッグを売った万札が少しばかりある。

だが……将の罪を被った金に一切頼らないなら、一生暗闇の中ですごさなくてはならない。

大悟の真っ暗な脳裏に、白い粉が舞い散る。

まだ……瑞樹が残した、あの白い粉薬のほうには手をつけていない。

だけど、あれを売るとなると……暗闇に生き、おそらく暗闇に死んでいったであろう父親の二の舞だ。

しかし……それもいいような気がしている自分を、大悟はあわてて揉み潰した。

２１０◆昼休みの逢瀬

視聴覚準備室のドアがコン、コン、と鳴った。

「アキラぁ……」

細く開いたドアの隙間から将の笑顔がのぞいて、思わず聡は準備デスクから立ち上がる。

昼休みになっていた。

「焼きそばパン、売り切れ直前だったぜー」

将は得意げに購買で買ったパンの袋を聡に見せる。

「午後からモデルやるのに、焼きそばパンなんか食べちゃっていいの。青のりついちゃうんじゃない」

と聡が茶化す。

「焼きそばだけじゃないもん。ほら。鶏めしのおにぎり。アキラ好きだろ」

「大好き。ゴボウの香りがいいんだよねー」

目を輝かす聡を将は嬉しげに眺めた。

今日は、午後から雑誌のモデルの仕事のために学校を早退しなくてはならない将である。

午前中に英語の授業もないので、将は武藤が迎えにくる１２時３０分までの短い昼休みに聡と二人の時間を過ごそうと、こっそり休み時間にメールを送っておいたのだ。

カーテンをすっかりあけた視聴覚準備室には、晩春の陽射しが満ちて、半年前、聡がここで暴行されそうになった面影はほとんどない。

いや、その記憶も。

聡にとっては、『将に助けられた』という嬉しい部分が強調されている。

二人は静けさだけが寄り添う思い出の部屋で、購買のパンと鶏めしのおにぎり、紙パックのジュースでちょっとしたピクニック気分を二人は味わった。

「……でさ、奄美ユリに土人、とか言われてさ。アキラ、俺そんなに色黒かなあ」

「そうねえ。間違っても色白、とは言えないわね」

陽射しを背にして聡の笑顔の頬は、産毛が輝いて輪郭が光っているように見えて、思わず将は見とれる。

「チェー。俺、幼稚園ぐらいの頃はすっごく色白だったんだぜー。フランス人に負けないぐらい」

「いつ、黒くなったの？」

「んー。ヒージーんちに預けられたぐらいかなあ。毎日パンツ一丁で遊びまわってたからなあ」

聡は、そんな浅黒い将が魅力的だと思う。笑うと白い歯がこぼれて、あどけなくなるのがいい。

目を細めるのと見開くので別人のように顔が変わるのも好き。

聡は聡で将をいとおしげに見つめる……。

たわいもない話をしているうちに、もう将の携帯が鳴ってしまった。

「ハイ。ハイ。わかった。ちょっとメシ食ってるから、待ってて」

武藤からの電話をさもうるさそうにあしらって、将は切った携帯に文句を言う。

「チェー。まだ12時25分じゃんよ」

「迎えが来たんでしょ。行きなさい」

聡はパンの入っていた袋や鶏めしのパックをくしゃっと丸めながら将を促す。

「仕事なんだから、頑張ってね」と分別臭くいう聡が、将にはちょっと恨めしい。

そんなところは、一夜を共にする前とあまり変わらない。

立ち上がった聡は、同じように立ち上がった将の顔を見あげて「あ」

と目を少し見開いた。
次に自らの歯をむき出して指差す。
「青のり。ついてる」
「ホント？……どこ」
将も歯をむき出して、前歯のあたりを手探りで触る。
「とれた？」
「とれてない」
「じゃあ、取って」
将はそういうと、ふいに聡の唇に自分の唇を押し付けた。
どちらからともなく、ほんのりとソースの味が漂うキス。聡の舌が、前歯を撫でていく。
キスしてないのは1日やそこらなのに、そんな感覚がたまらない。
もっと酔いたい将なのに、聡は素早く唇を離した。
「取れたよ。ホラ、早くいかないと」
「チェー。アキラ、メールくれよ」
「わかった……。あたし化粧直しするから。先行って」

将はキスの余韻を味わう間もなく、武藤が待つ校門方面へ向かった。

武藤はボーっと待っているのも何なので、『メシ食ってるから待ってて』といった将を探すべく、学食に顔を出した。

しかし、そこに将はいなかった。

1学年2クラスずつの小さな学校にも関わらず、学食は結構ゆとりがあった。

メニューは貧弱なようだが、生徒と教師が入り混じってゆったりと寛いでいる。

うどんをすする男子生徒と、持ってきたお弁当を食べる女子のカップルがいたりする。

それを見て……武藤は、ふと、知りたいことが浮かんできた。

将の付き合っている彼女、とは誰なんだろう。

武藤は今までの将の言動から、将の彼女が学校にいるというところまでわかっていた。

通りかかった3年のバッジを付けた女子生徒に声を掛ける。

「あの……鷹枝くんって知ってる？」

「知ってるよ。２組のめっちゃ背ェ高い。ｍｏｎ－ｍｏに出てた」

「あ、そう。２組なんだ」

その女子生徒は１組だったので、武藤は２組の生徒を探した。

食後のデザートなのか、購買で買ったヨーグルトを手に持った女子生徒二人組に声を掛ける。

二人とも茶髪に濃い化粧、ミニスカートといかにもギャル風だ。

「あなたたち３年２組の生徒さん？」

「うん。そうだよ」

背の小さい方が敬語も使わずにアニメ声で答えた。

明るい茶色の髪にドロップのような飾りのついたヘアピンが刺さっている。

「あのね。ちょっと訊きたいんだけど……鷹枝くんの付き合っているコってどんなコ？」

武藤は、無意識に声をひそめて訊いた。

それに頓着もしないように、女子生徒は甲高い声をあげた。

「ああー、アキラ先生のこと？めちゃくちゃスタイルがよくて、カワイイよ」

すかさず、隣にいた背の高いサーファーヘアの女子が、

「よしなよ、チャミ」

とたしなめたので、チャミと呼ばれたほうは『しまった』という顔で口に手をあてた。

「すいませーん。あたしたち行かなくちゃ」

と口々に言いながら、逃げるように二人で走り去ってしまった。

しかし、武藤はたしかに『アキラ先生』という単語を聞き逃さなかった。

そこへ、眼鏡を掛けたスラリとした女子生徒が再び購買から出てきた。

やはり3年2組のバッジを付けている。

「あの」

武藤は再び声をかけた。

「何でしょうか？」

今度の女子生徒は、黒いままの髪を2つにわけて結んでいる。

そんな真面目な雰囲気のせいか、きちんと丁寧語を使うことができた。

だがあまり歓迎していないようすが、笑顔のない顔から読み取れた。

「アキラ先生って、何の先生？」

質問を聞いて、女子生徒の眼鏡の奥の整った顔が、あきらかに曇った。

だが、それでも、訊かれたことにきちんと答える礼儀正しさはあった。

「英語です。私のクラスの担任ですけれど」

「そう……。ありがとう」

星野みな子は無言で、武藤に会釈をして立ち去った。

そこへ、ようやく将が現れた。

「武藤さーん！ごめんね、待たせちゃって」

と息をはずませている。

武藤はその将の唇についている、あるものに気付いた。

ほんのわずかに……口紅が付いているのだ。

「いいのよ。ちょっと、先生がたに挨拶していこうと思って。将、

悪いけど車に先に乗ってて」

と武藤は将にキーを渡した。

将の芸能界での活躍は、学校の宣伝になるということで、校長室に通された武藤は、歓迎された。

校長も教頭も、将の芸能活動と高校の単位取得が両立できるように協力すると約束してくれた。

考えてみれば、この学校のポイントシステムは、芸能活動には打ってつけであるといえる。

「失礼します」

そのとき校長室の重い木の扉が開いて、一人の若い女が現れた。

やや長身に地味なスーツを身につけているが、桃のような愛らしさが漂う女だ。

芸能人を見慣れている武藤は素早く女の器量を値踏みした。

「ああ、紹介しましょう。こちらが、鷹枝将の担任の古城先生です。……古城先生、鷹枝くんのマネージャーの武藤さん」

「よろしくお願いします」

聡はぺこりと頭を下げた。

「こちらこそ、よろしくお願いいたします」

そして……武藤は聡の顔を一瞥しただけで、聡が付け直した口紅の色と、将の唇にわずかに付着していた色が同じであることに気付いていた。

そして……この、目の前にいる、柔らかい雰囲気の教師が、将の恋人なのだ、と判ってしまった。

――まずい。

武藤は、聡へと深々と下げたその怜悧な頭の中身を素早く回転させていた。

将に彼女がいるのはいい。一般人との恋愛ならそれほど問題にしないのが事務所の方針だ。

だが、自分の担任と付き合っているのは……十分にスキャンダルの危険性がある。

そう結論付けると、さっそく対策を考え始めた……。

211◆策略

「将くん、今のシーンだけど。『俺の勝手だろ』の前に1拍間をおいてみたらどうかな。

……前半にも同じセリフがあるけど、この頃には結構政子に気を許してきてるわけでしょ。それを表現するのに」

「ハイ、わかりました。そうしてみます。奄美さん」

リハーサル中の休み。何度となくある、容疑者の将と弁護士の奄美ユリの面会シーンについて、ユリは将に演技上のアドバイスをしていた。

「お、ユリちゃん。面倒見がいいね」

と通りかかったPが愛想よく声をかける。

「あったりまえでしょー。新人クンに足引っ張られたらたまんないもん」

とユリは言ったが、そういうわりには将に親切だ。

「あの奄美ユリが新人に演技指導をするなんて……、将、よっぽど気に入られたのね」

とリハーサルを終えて局をあとにした帰りに武藤が感嘆した。

将初出演のドラマのリハーサルは、演技の特訓のかいもあって、問

題なく終わった。

むしろ、初出演で演技初体験の新人としては出来がかなりいい、と言える。

来週の本番もそのとおりにできれば文句ない。

それは、将自身も手ごたえを感じていた。

疲れてはいたが、自分は演技をすることに向いているのかもしれない、という心地よい充実感があった。

そのあと、夕食を食べながら、武藤と打ち合わせをする。

将のリクエストで中華だが、オフレコ話ができるよう、念のために個室を取っている。

高級な中華は、将がイメージしている中華料理とずれているが、文句を言わないことにした。

「今日はね。ＳＹＯのホームページが立ち上がったわ」

「俺のホームページ？」

将は、どす黒い八宝菜風の野菜炒めに入ったうずらの卵を箸で突き刺して口に運んだ。

「まだ簡単なものだけどね。それで、来週はダウンロード用の着ボイスとかムービーをあいてるときに撮るから。もしアイデアがあれば、言って」

「へー。着ボイスねえ」

照れくさい気がして、将は口の中でつるっとした卵を噛んだ。

「それから、将、パスポート持ってる？持ってなかったら早速申請するから」

「何で？」

「実は、５月に急遽『ウルウル滞在日記』の仕事が入ってね」

「うっそー！あの『ウルウル滞在日記』？」

将は驚きのあまり、皿の上に屈みこんでいた上半身を起こした。口が縦に丸くなっている。……日曜日にある聡の好きな長寿番組だ。

「どこ、どこ、どこ？」

将はワクワクと武藤に訊いた。

「モロッコ。『サハラ砂漠の遊牧民・ベルベル人とＳＹＯが出会った』……っていう企画でね」

武藤は、その番組の名物ナレーションの口調を少し真似て説明した。

将の耳にもそのナレーションが聞こえるようだった。

「サハラ砂漠～？ゲー、暑そっ」

「でね。それだけじゃないのよ。その話が決まったら、前から話があった『E』のCMがからんできてね。ほら、あそこ『ウルウル』のスポンサーだから」

『E』というのは、先日、大悟と一緒に参加した雑誌のヤラセ読者モデルのバイトで穿いた、ジーンズのブランドだ。

あのときいた広告宣伝の担当者は将に注目していたんだという。

「最初『E』のロケ候補地はオーストラリアだったんだけど、『ウルウル』がモロッコなら、バーターしようという話になって。それで急遽モロッコで撮影することになったの」

「へー」

なんだか話がどんどん大きくなっているようだ。

「それだけじゃないのよ」

さらに武藤はバンバンジイとくらげの酢の物を手元に取りながら続ける。

「ついでに写真集も撮っちゃおうということになってね。モロッコに行くのにパリ乗換えだから、パリとモロッコで写真集も撮影するから。

……コンポジでお世話になった篠塚先生よ。ついでに『E』のコマーシャルフォトも撮影してくださるらしいわ」

『ウルウル』に『E』に写真集。将は、余りにも膨らんだ話を消化

するのに、今口の中にある肉の塊を噛み切るのと同じぐらいの時間を要した。

「どんくらい、あっちに行ってんの？」

肉を飲み込んで、将はようやく質問を口に出した。

「まだ未定だけど……短くて2週間はかかると思うわ」

「えー……そんなに」

将はあきらかに顔を歪めた。

「どうして？」

「だって、学校……」

といいつつ、将の頭にあるのは聡のことだけである。

「学校のほうだけど、ポイントは心配いらないって先生方は言ってくださったわ」

それでも将は口を尖らせたままだ。

そのとき将の頭に聡のことがある、というのは武藤にはわかっていた。

が、無視して続ける。

「戻ったら『ばくせん2』が始まってますます忙しくなるわよ」

「まだ、本決まりじゃないじゃん」

「今日のリハーサルを見れば、下ろされる理由は見つからないわ」

将はそれほど嬉しくもなさそうに、フカヒレスープをレンゲで掬って無言で飲んだ。

「でね……将。考えたんだけど、今のマンションも遠くはないんだけど、これからもっと忙しくなるから、事務所とＴＶ局の近くにマンションを借りようと思うの。

学校に行かないときはそっちを拠点にしなさい」

武藤の提案に、将はとうとう、さも不機嫌そうに顔をはすにして、抵抗を口にしはじめた。

「なんでそんなに忙しいんだよ。俺はバイト程度って言ったはずだけど」

武藤は、箸を置いて、将の顔を見据えた。

「芸能界ってところはね、ヒマか、忙しいか、どっちかなの。そして新人のときが一番大事なの。忙しいことはいいことなのよ」

「てかー。俺、モデル程度だと思ってたしー」

将はテーブルにヒジをついて、レンゲでスープの中を探っている。

無作法は不機嫌のアピールでもある。

「将」

武藤は、それでも、あくまでも親身な声を出すよう努めた。

「今日、リハーサル、楽しくなかった？」

将は押し黙った。楽しくなかった、やりがいがなかったといえば嘘になる。

今日の将は自分でもイキイキしているのがわかった。

「社長から聞いてるけど、彼女がいるんですって？」

武藤の口からいきなり『彼女』という言葉が出たので、将は驚いて、武藤の顔を見つめた。

そのクールな顔の中に、咎めだてする様子はなかった。

「……別れろなんて言わないわよ。うちは恋愛に関しては寛大だから」

と前置きをした上で武藤は、ゆっくりと語りかけた。

「彼女のためにも早く大人として自立したいっていうのも聞いてる。……ねえ、聞いて将。今忙しくて彼女に逢えないのは寂しいと思うけれど。

奄美さんやPにも気に入られるようなアナタよ。きっと実力派の俳優になれるって、みんな期待してるのよ」

「そんな、まだ初出演だし」

将は斜め下をむいて、気のないそぶりをした。

が、武藤には『そぶり』の殻の中にある将の自尊心が嬉しげに震えるのを見抜いていた。

「今、頑張れば、早く若手実力派としての地位が確立するわ。そうやって身につけたものは立派に『手に職』よ。大人として自立するのに、こんなに近道はないと思うけど」

将はあいかわらず黙っていた。

だけど、その俯いた顔からは、反抗の度合いはあきらかに薄れていて、武藤は少しホッとした。

実は、『ウルウル滞在日記』は、同じ事務所の先輩にあたる男性俳優に来ていたオファーを無理やり将のために武藤がもぎ取ったのである。

海外ロケ、人気番組、ＣＭと派手な仕事を立て続けに入れていったのは、もちろん武藤の計算である。

そこにはいくつものもくろみが隠されていた。

１つは純粋に将を売り出すため。……２つめは聡と引き離すためである。

武藤は将や聡に直接「別れろ」などと言うつもりは、事務所の方針

同様まるでない。

そんなことをすれば、マネージャーとして一番重要な『タレントとの信頼関係』が失われる、というのを武藤はわかっていた。

そんなことをしなくても、二人が自然に離れていくように、武藤は策略を張り巡らせていた。

まずは将の体が空かないほど仕事を入れて、物理的に二人を逢えなくしようというもの。

しかし、そっちよりむしろ、もう1つのほうこそ、武藤には勝算があった。

それは、派手な仕事をさせることによって、芸能界の面白さ、人の注目を浴びて、大衆に愛される快感に、将をどっぷり浸らせるというものであった。

ひとたびその味を覚えてしまえば、そこから離れられなくなる。

そして、ついには、それを守るためなら、一般人の恋人などは捨てても惜しくないと思うようになる……。

芸能界というところは、そんな、阿片窟のような魔力があるところなのだ。

――それに。アイドルや女優たちが常に手に届くところにいるようになれば、8歳も年上の『アキラ先生』どころじゃなくなるでしょう……。

武藤は一昨日に会った、年に似合わず、桃のように可憐な聡の姿を、目の前の将の姿に重ねた。

それは思いのほか似合っていて……武藤は少しだけ罪悪感を感じた。

212◆保護者

金曜の夕方。

大悟は三宅弁護士に送ってもらった地図に従って、西嶋運転手の弟・西嶋隆弘の家を目指して歩いていた。

西嶋隆弘の家があるＴ地区は、東京の『モノづくり』を代表するような小さな町工場が密集し活気がある一帯だ。

西嶋隆弘が経営する西嶋光学工業は、隆弘が一代で築きあげた会社だが、ある技術で世界中にその名を知られているという。

その光学機器はＮＡＳＡの宇宙開発にも使われているという記事を、大悟はあらかじめネットで見つけていた。

当初、なんとなく、西嶋を訪ねあぐねていた大悟だが、それで少し興味が湧いて、訪ねてみることにしたのだった。

もちろん、手持ちの金がなくなってきたことのほうが原因としては大きいが……。

西嶋光学工業は、大悟の想像よりずっと立派だった。

『町工場』というと、錆びたトタンの外壁に、とびちる油、黒く汚れた作業服に軍手……というのが大悟のイメージだったが、ここはまるで3階建てのこぢんまりとしたオフィスビルのように見えた。

大悟はとりあえず、その小さなオフィスビルの玄関から入り、受付に立った。

受付の奥は小さな事務所になっていて、そこで電話の受け答えをしていた中年の女事務員が大悟を見つけてすぐに

「ハーイ。ちょっと待っててくださいね」

と元気な声をかけた。そして、観葉植物で区切られた応接スペースにあるソファを手振りで勧める。

事務員は電話に戻ると、真剣な顔でファイルを取り出して、チェックをしたりなどしていた。

大悟は小さな事務所を見渡した。キャビネットに囲まれた中に、グレーの事務用机が5つ置かれていて、いずれも書類が雑然と置かれている。

小さな事務スペースの向こうはガラスで仕切られていて、作業台の上で精密な作業をしている男達が見えた。

女事務員は、やっと受話器を置くと、

「あの、どちら様でしたでしょうか」

とソファに座る大悟のほうに近寄ってきた。小太りなのに身のこなしは素早い。

「あの……。島といいます。三宅弁護士事務所の紹介で伺いました」

大悟は立ち上がるとおずおずと頭を下げた。

「ああ！島大悟さん。聞いてますよ。……そう、あなたがぁ、まあ、まあ」

女事務員は感慨深そうに大悟を見上げた。そして

「もうすぐ5時30分だから、少し待っててね。工場がひけるから。主人もすぐ出てきますからね」

と親しげに声をかけた。

「あ、私は、西嶋の家内で、節子といいます。よろしくね」

と大悟に微笑みかけた。

節子の言ったとおり、まもなく17時30分になり、工場は終わった。

1階奥と2階の作業場より３０人ほどの作業服の男達が次々と

「お疲れ様です」

と声をかけあいながら出てきて、ロッカールームに入り、引けていった。

中には作業服のまま、会社を出る男もいる。

「あ、社長」

節子は夫を呼ぶのに、『社長』と呼んだ。社内だから呼び分けているのだろう。

節子の視線の先に、薄いグリーンの作業服を着た中年の男性がこちらへやってくるのが見えた。

すっかり禿げた頭は、大悟の親戚のバカ親爺を思わせるが、禿げ頭の下の顔は、穏やかで、仕事を終えたせいか、さばさばとした笑顔だ。

「島大悟さんがいらっしゃったわよ」

節子は、隆弘にはずんだ声をかけた。

「おお、来たか。じゃ、上で」

と、親しげに、年の割にキラキラと光る瞳を大悟に向けた。

西嶋光学工業の社ビルは2階までが工場兼オフィスで、3階以上が社長の自宅になっていた。

社長の隆弘について、大悟は階段を上った。

「会社が休みのときは、外階段から出入りするんだ」

といいながら隆弘は3階の階段を登ったところにあるドアをあけた。

そのとたん、まっ白な猫が飛んできて、隆弘の足の周りに嬉しそうにまとわりついた。

「こら。シロ。足踏むぞ……」

隆弘はそういいながら、

「遠慮しないで、あがりなさい」

と大悟を促した。

「ハイ」

猫は客が珍しいのか、大悟を見上げてニャー、と鳴いた。

下の事務所にはソファがあったのに、ここにはなく、かわりに畳の間と古風なちゃぶだいが応接間を兼ねている。

オフィスビルの外観から信じられないほど、所帯じみた……まるで昭和３０年代を思わせるようなスペースになっていた。

隆弘は、ちゃぶ台の奥に作業服のままドッカとあぐらをかくと、大悟にも親しげに座布団を勧めながら

「座って、座って。……君はまだ未成年だったな。熱いのと冷たいのとどっちがいい？」

と聞いてきた。

「……じゃあ、冷たいので」

と大悟が言い終わる前に

「節子、麦茶２つー！」

と隆弘は奥に向かって怒鳴った。

「あら、ビール、栓抜いちゃったわ」

節子はすでに、怒鳴ることもない位置に、盆にグラス３つとビール瓶を乗せて立っていた。

「しょーがないなあ……。大悟くんは、イケる口かい？」

隆弘は大悟をいたずらっぽく見つめて、手首をクイッと傾けた。お酒はやるのか、という意味だ。

「いや、僕はいいです」

大悟は用心のために、遠慮した。

もしかしたら、更生したのかどうか、試しているのかもしれないから。

本当は……、ここまで来るのに駅から結構歩いたので、ビールは大歓迎なのだが。

「そうか……。節子、アレを持ってこい」

「ハイハイ」

節子はお盆に載せたビールとグラスを畳に置くと、踵を返した。

隆弘は、「じゃあ、悪いけど私だけもらいますよ」と笑顔で大悟に断ると、手酌でビールをついでグラス1杯を一口のように飲み干した。

ぐいっと喉が動くさま、そして気持ちよさそうに息を吐き出す様は、とても旨そうだ。

グラス2杯ほどを飲んだところで、節子が「それ」を両手で捧げるように大事そうに持ってくると、隆弘に渡して、自分もその横に座った。

それは……大悟名義の通帳とそれに挟まった封筒だった。

通帳を開いて、隆弘は説明した。

「これは、私が三宅さんから預かった通帳だ。この中に、君に必要な金が振り込まれる」

中には5万と記帳され、今日の日付で引き出されていた。

その引き出した5万は封筒の中に入っていた。

「これは5月分に少し4月分がプラスされているそうだ。いま、君は鷹枝さんの息子さんのマンションに住んでるというから、小遣いと散髪代、洋服代ということだ」

隆弘は封筒から紙幣を出すと、大悟の前でいったん広げた。

「これからは、毎月1回、小遣いを取りに来なさい……もちろん、君がどこか学校に通いたい、というのなら、ここに必要な学費が振り込まれる。

私はそれを責任を持って、学校に振り込むようにする。きちんと領収証もとるから、君は毎月確認しなさい」

「どうも、ありがとうございます」

大悟は頭を下げながら、その封筒を受け取った。

「そうだ。大悟くん。あなた保険証持ってないでしょう?」

節子が隆弘の隣から声をかけた。

「あのね。もしよかったら、うちの子になりなさい?そしたら扶養

家族として保険証も使えるのよ」

大悟はそういえば『保険証』を持っていなかったと思い出した。

自動車部品工場に勤めていたときは持っていたのだが、その後、保険のないハケン勤務だったから。

「こら、お前、まだ気が早いぞ。……ところで、ちょうどよかった。大悟くん、1つ頼みがあるんだが」

隆弘は、気の早い節子を咎めると、大悟に封筒を渡し、にっこりと笑った。

「ハイ」

「実はな」

隆弘は、あぐらから勢いよく立ち上がると、箪笥の上に飾ってある模型の軍艦を持ってきた。

それは砲台が見事に壊れていた。

「戦艦大和の模型だ。知人にもらったものなんだが、シロがいたずらして壊しやがってなあ……。

自分で治そうと思ったんだが、今日は疲れてしまってねえ……。

でも今週末、その知人がうちにくるんだよ。それで、大悟くん、もしよかったら、ちょっと治してくれないか?」

隆弘は「これが、壊れる前の写真」と模型の完成形の写真を持ってきてくれた。

「元通りに見えればいいから」

大悟は、それ模型と写真をじっと眺めた。あまり難しくなさそうに見えた。

「ハイ。僕でよかったら……」

「よかった。じゃさっそく頼むよ」

隆弘はボンドやカッター、塗料などの道具を持ってくると、自分はちゃぶだいの片方に腰掛けて、ビールの続きを飲みながら、大悟の手並みをのんびりと観察していた。

節子は夕食の支度をしはじめた。

台所から包丁を使うコトコトという音や、何かを炒める賑やかな音がしたかと思うと、ちゃぶ台の方まで醤油の匂いが漂ってきた。

……大悟は、手先が器用なほうである。

それを、最大限に生かして、万引きやバイク泥棒などをして暮らしていたのである。

父が借金取りに追われて貧乏暮らしだった大悟は、こんな立派な模型を作ったことはないが、材料と完成図があるなら、別に特に難しいようにも思えなかった。

ときおり、アドバイスを受けながらも、1時間あまりで、壊れた砲台は元通りになった。

「ありがとう！助かったよ。大悟くんは、手先が器用だな」

隆弘は、握手を求めてきた。

この昭和な雰囲気の中で、欧米風の挨拶がどことなく面映い。

「いい手だ。それにいい目だ」

隆弘は大悟の手を握りながら、まっすぐに大悟を見つめ、さらに褒めた。

大悟はくすぐったいような気持ちになった。

「もう、あなたったら。大悟くん、お腹すいたでしょう」

「ちょうど、メシの時間だな。メシ食ってけ。たいしたものはないが」

隆弘は、大悟の肩を叩いた。

「まあ。失礼ねっ」

節子は『たいしたものはない』に腹を立てるそぶりをしながら

「よかったらぜひ、食べていって。大悟くん」

と大悟を誘った。その温かい雰囲気は逆らいがたい気がした。

だが、この家の雰囲気もろとも、あまりに温かすぎて……自分にはそぐわない気がして、大悟は

「いえ、いいんです。……友達と約束がありますから」

と断ってしまった。

「そうか。残念だな」

隆弘と節子は目を見合わせた。

「じゃ。僕はこれで」

大悟は一礼すると、靴を履いて、外階段のほうに出た。

そのとたん、真っ赤な夕日が大悟の体を染め抜いた。

「大悟くん」

夕陽を背にして、紫に翳った階段を駆け下りようとした大悟は、節子に呼び止められた。

「大悟くん、来月誕生日なんでしょ。もしよかったら、うちに来なさい。お祝い用意するから」

節子の小太りの体の後ろから夕陽が射して、後光のように見えた。

213◆1週間ぶりの学校

将のドラマ初出演作の収録は月曜、火曜で無事終わった。

将の演技は、自分に近い役柄だったせいか、

「初めてとは思えないね」

と周囲のものを感心させた。

事務所上げての特訓の成果なのだが、それもあってセリフを噛むこともなかった。

何より、物怖じしない堂々とした演技とＴＶ映りのよさがスタッフに好評だった。

奄美ユリもすっかり将を気に入ったようで

「今回の役が将くんになってよかったわ」

などと最高級の言葉を将に与えた。最初、配役交代を怒って、意地悪していたことが嘘のようである。

「今度、みんなで焼肉食べにいきましょうよ。……また一緒に仕事しましょうね」

と笑顔を将に投げかけながらスタジオをあとにしていった。

しかし、翌日から世間はＧＷに入ったのにも関わらず、将は忙しかった。

ＧＷあけから始まる海外ロケの打ち合わせに、『Ｅ』のスタジオ撮影。着ボイスや着ムービーの録音、撮影。

さらに『ばくせん２』の主要な生徒役が本決まりになったので、さらなる演技指導。

いちおう、歌とかダンスのレッスンもあったが、歌の方は

「ヘタってわけじゃないけど、無理して売る必要もないわね」

ということもあり、また将自身が「えー、アイドルかよ～」とごねたこともあり、歌手デビューは避けられた。

時間はいくらあっても足りないということだが、ＧＷ中から始まる海外ロケで、しばらく学校に行けないので、４月３０日と５月１日は午前中だけ学校に行くことを許された。

ひさしぶりに聡に会える。

武藤が運転する車に揺られながら、将は再会を夢見てまどろんだ。

先週からずっと忙しかった将は、家に寝に帰るだけで、聡にこっそり会いに行くどころではなかったのである。

それでも

『いまから○○で撮影』

『ドーラン塗られた。キモイよー』

『奄美ユリに褒められた』

と移動時間や休憩時間ごとに短いメールを聡に送っていた。

聡からも、

『がんばってね』

『あとでしっかりおとさないとお肌に悪いよ』

『スゴイ！よかったね！』

とすぐにではないものの、返信が返って来て、その短いメッセージと待ち受け画面に、疲れた将は癒された。

ちなみに将の企画で着ボイスに録音された

『今日も、頑張れよ』

『おやすみ』

は、実は聡へのメッセージなのだ。

ほぼ1週間ぶりに学校にやってきた将は、HRが始まる前から、廊下の窓をあけて、聡がやってくるのを今か今かと待ち受けていた。

まもなく、ベージュのスーツを身につけた聡が1組の担任とともに廊下に現れた。

将は、顔を窓から半分ほど出して、聡に手を振る。

それに気付いた聡は、駆け出したくなる。

だけど他の教師の手前、『もう』と少し怒ったふりをして微笑むのがせいいっぱいだ。

1週間ぶりに見る将は、髪型が変わっていた。

若干短くした髪型は、去年学校で再会した頃に近い。

聡は懐かしさのあまり、胸が苦しくなるのを感じた。

この半年で、将はどれだけ自分の中で大きい存在になったのだろう。

聡はこの1週間でさらに思い知ることとなった。

将のいない教室は、他の生徒で賑やかでもどこかガランとしている気がしていた。

居場所はわかっているのに、メッセージももらっているのに、12月に失踪したときより、寂しさはひとしおだった。

聡は、その寂しさを、将が写っている『ｍｏｎ－ｍｏ』や将に教えられたＨＰを見て紛らわすようにしていたが、こうやって教壇の上からでも、実物を見ると、やっぱり写真とは違う。

プロが撮ったとはいっても、聡が知っている本物の将の魅力にはとうてい及ばない。

ぬくもりも、匂いも、触れることもできないけれど、こうやって教卓の上からでも将に逢えるのは、胸がときめく。

つい、将のほうばかり見てしまいそうになるのを、かろうじて教師の義務感で抑え、聡はＨＲを終えた。

１時間目は体育だった。

「よー、将。お前、卓球の練習しねーの」

体育館の壁際に座りこむ将に、バスケットボールを手にした井口が窓から声をかけてきた。

伸びたマカロニを、頭の高い位置でピンクのゴムでツインテールに括ったヘンな頭は、ジャージとは不似合いで、珍妙な格好だ。

これから１ヶ月、体育はクラスマッチの種目を各々練習することに

なっているのだ。

「だって、しんどいもん。これ以上体動かしたくない」

ジムと演技特訓、ダンスレッスンで疲れている将は、ジャージには着替えたものの、教師の眼を盗んでさぼることに専念しているのである。

教師は今、バレーボール組の監視に行っている様で、バスケの井口は水を飲みに来たついでに将に声をかけてきたわけだ。

井口はそのまま体育館にあがりこむと将の横にドッカと腰をおろした。

楽しげに卓球とバドミントンに励むクラスメートを眺めながら

「お前、やっぱオーディションとか受けてんの？」

と井口が訊いてきた。

「いいや。別に」

井口がダンスレッスンに行っているスタジオでは、しょっちゅうオーディションの告知が張られ、巧い人間はそれにチャレンジすることで、プロへの第一歩としているらしいのだ。

「俺なんかはまだまだだけどぉ。でもこんど、映画のエンディングでの群舞のオーディションがあるんだけど、それは受けてみようかなと思うんだ」

と嬉しそうにバスケットボールを小さくドリブルさせながら話した。

「へえ」

と将が相槌をうったときだ。

バドミントンの練習にいそしむ女子のグループが1箇所に集まりだした。

将と井口が座っている窓際のすぐ近くで上を指差して、困った顔をしている。

どうやら……バドミントンのシャトルが高い窓から降りてこないらしい。

座ったまま将もそっちを見上げると、シャトルは上の窓を防護する柵にひっかかってしまっている。

女子の一人が、長ほうきを持ってきたが、あと少しというところで届かない。

「あーん、惜しい」

皆がため息をもらす。

「俺が」と将が立ち上がろうとしたときに、

「こんなの登ればすぐ取れるわよ」

と星野みな子が、下の窓の防護柵に手をかけて、梯子のようにして

登り始めた。

「みな子、危ないわよ」

とそこにいる女子が口々に声をかけるが、「大丈夫」とみな子は聞かず登り続ける。

防護柵を梯子のように登れば、上の窓の防護柵の上まで簡単に届きそうな気がした。

運動神経がよくないみな子だが、クラス委員としての責任感からつい、体が動いてしまったのだ。

体育館の窓を登り始めたみな子に、卓球をやっていた生徒も手をとめて集まってくる。

将と井口も、なんとなくそっちに行ってみた。

みな子の足が、下の窓の防護柵の上にかかる。両手は上の窓の防護柵にかかっている。

しかし、そこから先が困った。

シャトルに手が届くまで、あと３０センチはある。

足をどうしようか。みな子は逡巡した。

上の窓の防護柵と下の窓の防護柵の間は１メートルほどあいている。

足をあげるには……上の防護柵はまだ遠い。

途方にくれたみな子は、下に体育館中の生徒が集まっているのに気づいた。

その中に……将を見つける。

「やだ、みんな見ないでよ」

声が震えている自分に気づいた。

将の視線に……そして自分が思ったより高いところにいることに今更おびえたのだ。

だけど、これだけの注目を浴びている中、引っ込みがつかない。

みな子は、行き場のなくなった足を、下の窓の枠に乗せてみた。

2センチばかりの出っ張りにつま先を乗せるようにして、上の防護柵にかけた手を1段上に伸ばす。

そこに懸垂のように体重を掛けて、みな子は片足ずつ、上の防護柵に足をかけようとした。

ぎしっ。

上の防護柵がきしんだ。

「くっ」

もう少しで足がかかりそう……というところで、みな子は

「危ない！」という将の声を聞いた。

顔に何かがパラパラと降りかかり……次の瞬間、みな子の体はぐらり、防護柵ごと勢いよく地球に引っ張られた。

２１４◆再燃する想い

一瞬なのに、みな子にはスローモーションのように思えた。

みな子は、床へと落ちながら、自分が窓からはずれた防護柵を握っていることに気づいた。

まだ無重力のうちに、とそれを無我夢中でできるだけ自分の体から遠くに離すべく体をよじる。

ガターン

と体育館の木の床が、はずれた防護柵で派手な音を立てたのをみな子は聞いた。

だがその瞬間、みな子は自分がどうなったのか、まるで記憶がなかった。

ごく一瞬だけ、みな子は気を失った状態になっていたらしい。

「キャー！」

「みな子！」

一瞬の静寂ののちに、騒然となった周囲に気づいて、みな子はようやく自分を取り戻した。

目をつぶっていても横向きに倒れているのがわかる。

皆が自分を取り巻いているらしい。それにしても。

今の姿勢から、肩を強打しているはずなのだが、２ｍほどの場所から落ちた、にしては、どこにも衝撃を感じた痕跡がない。

「将！」

井口春樹の野太い叫び声に、みな子はハッとした。

倒れたみな子は温かいものに抱きとめられていた。

干草のような香りがする。

「……大丈夫。なんともねえよ」

みな子の耳の、思いがけないほど近くで聞こえたその声は。

――まさか、まさか……。

みな子が恐る恐る目をあけると……自分の下敷きになっているのは、他ならぬ将だった。

どうやら、落ちたみな子を将が受け止めながら、一緒に床に倒れこんだらしい。

みな子は、それを知ったとたん、あわてて跳ね起きようとしたが、起きれない。

将の腕が自分の肩をしっかりと抱いているのだ。

「大丈夫？星野サン」

自分に話し掛ける将の声がすぐ近くで聞こえる。

自分の半身がありえない温かさに触れていることにみな子はあわてた。

「だっ、大丈夫。離して」

みな子は将の腕をふりほどいて、立ち上がろうとした。

皆が見守る中、いつまでもこんな体勢でいるわけにもいかない。

しかし、ケガはしていないようだが、体全体がこわばっているため、ふらついた。

「みな子！大丈夫？」

漫研仲間のすみれが駆け寄って支える。

「保健室、いちおう行く？」と訊くすみれの後ろで

「お前、大丈夫かよ。ゲイノー人は体が資本じゃね？」

という井口の冗談めかした声が聞こえて、みな子はハッとして将のほうを見た。

将はちょうど遅れて起き上がるところだった。いててて、と背中に手をやっている。

「だーいじょうぶ。打ち身程度だし」

といいながら立ち上がって、ジャージの腰のあたりをはたいている。

本当にケガはないようで、井口は

「明日、ケツに青タン出来てんじゃねーの」

と冷やかしの言葉を口にした。……彼なりの安堵のセリフである。

みな子はホッとして、何か声をかけようか、と思ったが、喉が乾いたように声がでない。

「さ、保健室、いこ」というすみれに従うしかなかった。

そこへようやく体育教師がやってきた。

彼はバドミントンのコートの真ん中に落ちた窓の防護柵を見て仰天すると、あわてて皆に

「ケガはないか！」

と声をかけていた。

みな子は、将が受け止めてくれたおかげで、奇跡的に無傷だった。

しかし、ショックがあるだろう、ということでとりあえず保健室で1時間様子を見ることになった。

しかし……みな子がショックを受けたのだとしたら、それは、落下したことではない。

ベッドに横になりながら、みな子は、さっきの一瞬を脳裏に再現していた。

落ちていくあの一瞬をみな子はスローモーションのように思い出すことができる。

だが、将に抱きとめられた一瞬を……どうしても思い出すことができない。

気がついたときは、将の腕の中だった。

あのまま床に叩きつけられたはずだったみな子を助けてくれたのは、ほかならぬ将なのだ。

将は、みな子をしっかりと抱きしめていた。

みな子にとって、異性に抱きしめられるのは、生まれて初めてである。

その腕の力強さが……胸板の弾力が、みな子の肩のあたりに生々しく蘇って、みな子は息苦しくなる。

思わず寝返りを打った。

――あれが……男、なんだ。

そして初めて好きになった異性。鷹枝将。

自分を抱きとめた体の熱さが今も残るようで、みな子はそれから逃れるように反対側に寝返りを打った。

みな子は眠ろうと、努力した。

だけど、みな子の脳は、隙あらば、さっきの一瞬を再現しようとしてしまう。そして

――どうして、助けてくれたの？

みな子は、集まっていたクラスメートの中で、将が、助けてくれたことに何か、特別な意味を見出そうとしてしまっていた。

それに何度となく抗っているとき、保健室の引き戸が開いた。

「あら、アキラ先生」

三田先生の声がした。みな子はその名前を聞いて、体をびくっとふるわせた。

「星野さんが体育館の窓から落ちたって聞きまして……」

と聡の声が聞こえる。

この時間、授業がないらしい聡は、担任教師として教え子のようすを見に来たらしい。

「寝てますか？」

「たぶん、おきてると思うけど。さっきまで寝返り打ってたから…星野さん、どう？」

と、みな子が寝ているベッドのカーテンが開く。

幸い、聡や三田先生のいる方角に背を向けているものの、将の胸板があたっていた肩がうずくようだ。

みな子は背を向けたまま、寝ているふりをすることに努めた。

鼓動が全身に響く。それは布団すら揺らしているのではと気が気でない。

「寝ちゃったみたいね」

と三田先生の声がして、カーテンが閉じる音がした。

「いちおう、ケガはないみたいだから、アキラ先生の心配には及びませんよ」

「わかりました。よろしくお願いします」

聡はしっとりとした低音でみな子のことを三田先生に頼むと、去っていった。

ようやく、みな子は心臓との戦いから解放された。

そのとたん、肩に刻印された、熱い感触が再び戻る。

あの感触を……古城先生は知っているんだ。もっと深く。

それは嫉妬というよりも、もっと深く将の抱擁を知るであろう聡への……せつないほどの憧憬だった。

みな子は、聡が心から羨ましかった。

みな子が知っている将は……学校の誰も知らない、血だらけの猫を抱いた優しい姿。

夕陽に金茶色に輝く瞳。成長しきった身長に似合わない、子供っぽい笑顔。

「星野サン」とあらたまる低い声。

ピアノの前であわせた、熱い手のひら。

将と抱き合える聡にはかなわないけれど、みな子が知る将のすべては、それだけでも、宝物のようだった。

だけど……今また、将の腕と胸の力強さ、血潮の熱さを知ってしまったみな子。

それは稲妻のように、燻っていたみな子の思いに命中した。

聡と抱き合う将を目撃して……一度は諦めたみな子だが、想いはずっと燻っていたのだ。

燻っていた煙がしみるように、せつなさが尖って、つん、と鼻から目頭に刺さった。

思わずみな子は涙をこぼした。涙は音もなく、保健室の枕に染みをつくった。

――やっぱり、好き。……好き。

燻っていた想いは、喉の下で熱く燃え上がった。

将が聡と愛しあっていることはわかっている。

だけど。将を恋する気持ちは抑えられない。

みな子は、三田に気付かれないように、静かに涙を流し続けた……。

215◆連休

土曜日から、暦は本格的にＧＷ入りした。

しかし、そんなことに関係なく、将はあいかわらず忙しかった。

なにせ、ＧＷが終わる直前の５月５日からパリに旅立たなくてはならないのだ。

それからモロッコへの移動も含めて５月２６日まで帰国できない。

ウルウル滞在日記の仕事で、サハラ砂漠の遊牧民・ベルベル人の家庭に１週間も滞在するのが大きい。

武藤は

「思い切ってこんなに長く日本を離れられるのも今のうちだけよ」

とヘンな慰め方をしてくれた。

あまりにも忙しいので、聡に会えたのも、あの午前中だけ学校に行った２日のみだ。

いや、逢えたというより、顔を見れた、というほうが正しい。

直接、言葉すらロクにかわしていないのだから。

それに、ヒージーのことも心配だったのだが、結局、見舞いに行けてない。

命は助かったものの、全身に麻痺が残ると伝えられたヒージーの容態に付いて

「思ったより回復されています。お医者様も１００歳にしては素晴らしい体力だ、と驚かれて……もうすぐ普通にお話もできるようになりそうですよ」

と西嶋が電話で教えてくれた。

だけど……裏を返せば、今まで普通に話をするのも難しかった容態だった、ということがうかがえて、将は心配になった。

だが、どうもできない。将は、電話で「ヒージーをお願いします」と頼むしかなかった。

大悟は、新しい保護者である西嶋の弟に、履歴書にハンをもらえて、ＧＷだけの短期のアルバイトに行っているらしい。

一緒に住んでいるとは思えないほど、顔を見ない。

ただ、洗濯が干してあったり、ビールの缶が増えていたりすることで「いるんだな」ということがわかるぐらいだ。

だから、５月５日から３週間、パリとモロッコに行く件もメールで伝えたほどだ。

同居しているのにメールするのもヘンだなと、将はちょっと可笑しかった。

しかし、出発前に絶対に逢っておきたいのは聡だった。

体中が酸素不足のように、聡を欲している。

将は、たびたび携帯をあけては聡の写真をながめてため息をついた。

聡のほうは暦どおり休みに入っていた。

今年のGWも五月晴れに恵まれ、行楽日和だったが、聡はどこにも行かなかった。

行くなら……将と一緒がよかったから。

だけど将本人からちょこちょこと送られてくるメールからは、将が分刻みのスケジュールで忙しいということがうかがえる。

――萩に帰ればよかったかな。

という考えがちらりと頭をかすめる。

そこから、今年の正月を……古い家を軋ませるように抱き合った自分の部屋、そして膝の上に乗って将のコートの中で温まった須佐海岸を懐かしく思い出す。

きっと一人で帰っても、寂しさが染みるだけだろう。

聡は狭いバルコニーに出ると、ミントに水をやった。

冬の間枯れていたミントは、初夏の陽気に、イキイキと若葉を伸ばしていた。

玉のように水を弾くミントの若葉をを見ているうちに、将のマンションに夜食でもつくりに行ってあげようか、と思いついた。

それは一瞬いい考えのように思えた。

ミントを使って、ベトナム風の春巻きでもつくったら喜ぶんじゃないだろうか。

浮き立つ聡だったが、あることを思い出して、立ちすくんだ。……大悟。

あの雨の日。

聡の部屋にやってきて将の罪を告白しに来た大悟。

その後も大悟はあいかわらず将と暮らしているというが、もし、将を待っている間に大悟と二人になったら……。

どう接していいのか。

あのとき、聡は大悟の苦しい胸のうちがわかったような気がしていた。

本当のことを告白して、少しでもラクになりたかったことも。

だけど。そんなことは、まるで聞かなかったように、ふるまえるだろうか。聡には自信がない。

それに。聡はもう1つ重要なことを思い出した。

……あの武藤というマネージャーが家まであがってくるかもしれない。

聡は校長室で挨拶をした武藤の目を思い出した。

一重瞼の、欧米人に人気があるタイプのクールビューティ。

しかし、一見感じよくふるまっていた、あの知的な瞳は……すべてを見透かしているように、聡には思えた。

つまり、将との関係がすべてバレているのではないだろうか、と聡は恐れた。

だから……聡は、将に逢いたいのに、逢いにいけずにただ徒に休日を過ごしていた。

明日はいよいよ出発だ。

将は、武藤と社長、それからカメラマンの篠塚の4人で小料理屋の

座敷で夕食に来ていた。

名残の和食で壮行会というわけだ。

「それにしても、びっくりしました。将が、フランス語が出来るなんて」

武藤が小さな鉢の中の、冷たくひやした茶碗蒸を匙で掬いながら感嘆した。

「自分でもびっくりした。結構覚えてるもんなんだなーって」

と将は、おこぜの薄造りをつまみあげながら笑った。

「やっぱり、アタシの言った通りでしょ。このコは他のコとは一味も二味も違うのよ」

社長が得意げに笑う。

出発を控えた今日、挨拶と数字ぐらいは理解できたほうが、と将は、フランス語の集中講義を2時間だけ受けたのだ。

といっても、父の仕事の都合で、幼稚園までフランスにいて、現地の人々と何不自由なく話していた将である。

そこで、将はみるみるうちに、よく使うフレーズを思い出していた。

そもそも、聴き取りは最初からかなりできていた。

将は、聡が日頃『語学は、字に頼らない体験が大事だ』と言ってい

る意味がよくわかる気がした。

「発音もスバラシイです」

フランス人の講師は絶賛した。

後半は、単語を補助してもらうだけで、簡単な会話は問題なくできているように、武藤には見えたほどだ。

「幼稚園までいたって、じゃあ、パリに知り合いがいるの？パリジェンヌのガールフレンドとか？」

篠塚がお猪口を傾けながら三日月のような形をさせた目をあげた。

今日、酒を飲んでいるのは、車の運転がない篠塚と社長だけである。

ちなみに写真集とコマーシャルフォトを担当する篠塚も明日から一緒にパリ入りすることになっている。

「ハァ……」

と笑顔であいまいに答えながら、将は時間があったら訪ねてみたい人を思い浮かべていた。

6歳同士で手に手とって街に出て。迷子になって大泣きして。

母の思い出につながるあの黒褐色（ブリュン）の髪に青い瞳が可愛かったあのコは今もあの街にいるんだろうか……。

明日のために、９時には店を出た将は、武藤の車に揺られて軽く眠っていた。

「将。ここが、新しいマンションよ」

武藤の声で、目が覚めた。車が止まっている。

将はうながされて窓から外を見上げた。新しいマンションらしかった。

「ここの１４階、１４０２号室だから。……事務所から歩いて５分、一番近いテレビ局で歩いて５分、一番遠いところでも車で１５分以内だから。使わないと思うけど、地下鉄の駅もすぐよ」

武藤はちょっと得意そうに説明すると、後部座席の将を振り返って、

「まだ家具は入ってないけど、帰国までに万事そろえるように頼んでるから」

と将の手に鍵を落とした。

新しい鍵は、将の手の中で、青い街の灯を映してピカッと光った。

それを見た将は、出発前に実行すべき、楽しい企みを思いついた。

「じゃあ、明日。7時にモーニングコールするから。早く寝るのよ」

そういって武藤の運転する車は夜の中へと走り去った。

将は、武藤の車が見えなくなるのを見計らって、さっそく聡に電話をした。

「あ、アキラ？」

電話をしながら駐車場へと急ぐ。

「将、帰ってきたの？」

このところ、毎晩、帰宅後にする短い会話だけが、二人をつないでいたのだ。

「うん。……今から行っていい？アキラを連れて行きたいところがあるんだ」

「今から？　将、明日からフランスでしょう」

思いがけない提案に、電話の向こうで聡が驚いた声をあげる。それも将には愉快だった。

「いいから。……とにかく、行くから」

聡を驚かせたい将は、ミニに乗り込むとエンジンをかけるのももど

かしく、電話をいったん切った。

２１６◆何もない部屋で

「わあ……。大都会の真ん中って感じだね」

１４階のバルコニーからの風景に、聡は思わず感嘆の声をあげた。

同じ都内でも聡の家や、学校があるあたりとはまるで違う風景。

将が仕事の拠点とする新しいマンションがあるこのあたりは１４階がそう高く思えないほど、ビルが林立している。

ビルの木立の向こうに赤いランプをつけた東京タワーが見えている。

それらは、ＧＷ中の夜１０時といえど、明るく煌いて、夜空の星を霞ませていた。

夜風に柔らかくそよぐ聡の髪を指にからませながら、将はひとときの幸せを噛み締めていた。

風にのって、聡の香りが将の鼻に届く。

たぶん、彼女は風呂に入ったばかりなのだろう。

香りは、いつもより軽くて爽やかだけど、濃厚な甘さに欠ける気がした。

久しぶりにミニを運転して（皮肉なことに、きちんと免許をとってからのほうが運転するチャンスが少なくなった）聡の部屋を訪れた将は、

いつものように玄関先でひとしきり抱きしめてその感触とぬくもり、香りを確かめた。

こうやって実体を確かめると、写真やビデオといった記録媒体なんてものは、まるで役に立たないことがわかる。

押し返してくるような柔らかい肌の弾力。

さらに柔らくて温かい唇から中へと続く湿った口の中の粘膜。

市販の石鹸やシャンプーと聡自身の体臭がまじった甘い香り。

囁く声の、耳の産毛が震えるようなかすかな振動。

そんなものを再現できるものがあればいいのに、と逢えない間、将は願っていた。

……ひとしきり、それらを確かめると、強引に聡の手を取って、ミニに乗せた。

そして、いま、二人は、なんにもないマンションの一室にいる。

１ＬＤＫのそれは武藤の言ったとおり、家具もなく、新築の香りだけがそこにあった。

月のない夜なのに、明るい都会の夜が、窓枠の形にフローリングに映っていた。

その明るさに誘われる2匹の蛾のように、将と聡は、バルコニーに

出てきて外を眺めている。

聡の肩においた将の手に、一瞬ぶるっとした震えを感知した。

「寒い？」

将は、聡の肩を少し強く抱き寄せた。薄いブラウスだけの聡に夜風が少し冷たすぎたのかもしれない。

「うん。少し」

聡は隣の将を見上げた。その瞳にビル群の灯りがキラキラと映っている。

「中に入ろうか」

将は、聡の肩を抱くように、バルコニーから部屋の中に入った。

カーテンもない部屋だから、窓ガラスは冷たい空気だけを遮断して、風景はそのままだ。

「あ、靴」

聡はバルコニーで履いていた靴を玄関に戻すべく、かがもうとした。

そんな聡を将はいきなり後ろから抱きしめる。

前を向かせて、むさぼるように口づけをする。

熱くて激しい口づけに、聡の力が抜けていくのがわかる。体から力

は抜けていくのに、細い腕は将にしっかりと巻きついている。
背中に、腰に、つる草のように巻きつく聡の腕が、今の将には震えるほど嬉しい。
「しょう……靴を戻さなくちゃ」
聡が夢見るような瞳で将を見つめている。
「いいよ、あとで」
そういうと、将は再び聡の唇に自分のそれを押し当てて、舌を挿入した。
どれぐらい、そうやって口づけと抱擁を繰り返していただろうか。
将の頭は完全に時の感覚が麻痺していた。
気がつくと、将と聡はフローリングの床に横たわって抱き合っていた。
「あきら……あきら」
将は聡を抱きしめながら、いつしか、その服地ごしの柔らかい胸に顔をうずめていた。
寂しかった。甘えさせてくれ。言葉にするかわりにそんな行為になっていた。
「将ってば」

聡は将の髪を撫でた。少し短くなった髪は、少年っぽいといえなくもない。

そんな将はまるで大きな子供みたいだ。

「将。明日、早いんでしょ……」

聡は非情だと自覚しながらも、分別を口にする。

さっきから乳房を押されることで、自分の中の野性的なものが目覚めそうで。

自分の中のそれを牽制するように聡は常識的なことを口にしたのだ。

「まだいいよ。……俺、完璧に、『アキラ欠乏症』でさ」

将は、いっそう強く、胸に顔をおしあててきた。

いつのまにか、背中を往復する手は腰まで範囲を広げている。

胸の中から、いたずらな瞳をあげて

「ただいま、アキラ補給中」

と白い歯を見せながら、将はブラウスの裾から聡の素肌に掌を這わせてきた。

「んもう……」

聡はそういいつつも、止めさせる言葉を口にすることができない。

理性ではいけない、と思っているのだが、すでに将を知っている体は、それだけで理性を越える快感に包まれてしまっているから。

聡も……将がいなくて寂しかった。もしかしたら、将以上に、将が欠乏していたのかもしれない。

「でもさ……。3週間もアキラと離れ離れで俺、大丈夫かな」

将の掌はランジェリー越しに聡の胸のふくらみをとらえて、ゆっくりと回転させだした。

「メールとか、電話はできるでしょ」

聡は、その動物的な快感に抵抗するべく、卑近で無機質な単語を、やけに唾液で粘っこい舌に乗せてみた。

「ベルベル人の家庭じゃ無理じゃねー？」

将は、ブラウスの下で聡の胸を覆う下着をずりあげてしまった。

そして、すでに固くなった先端を人差し指で撫でる。

「あっ、ダメ」

胸の先端から、快感は、将を覚えている、将だけのための器官に鋭く走った。

それは耐えがたくて、思わず聡は身を引いた。

「だめ。将……明日、早いんでしょ。もう帰らなくちゃ」

聡は乱れた服のまま、体を起こした。

「アキラ……」

将も一緒に身を起こす。

摩天楼の明かりに青く照らされた将の顔は、せつなさでハッとするほど美しかった。

将は、聡の体をもう一度抱きしめると

「……明日から、俺、3週間もアキラなしなんだぜ」

と耳元で囁く。さらに

「アキラは俺を覚えているんだろ。でも俺は覚えてないし……」

将の肩越しに、白いシャツを着た将の広い背中が聡の目の前に広がっていた。

「こんなの寂しすぎるし……。だから、もう一度」

これ以上ないほど切ない声で訴える。

一一3週間も顔をあわせることができないんだし。

一一一度、受け入れたあとも、巧く教師として振舞えたんだし。

いったん溶けて液体になった聡の中の『女』は、理性の盆からこぼれてしまったように、もうそこへ収まろうとしない。

かわりに、将の訴えを受け入れてもいい理由を挙げ始める。

聡は結局、将にも自分の中の『女』にも抵抗の言葉を持たないまま、再びフローリングに横たわっていた。

将は窓からの淡い光に浮かび上がる聡の顔を見つめた。

黒目がちの瞳がうるんで、青い都会の夜が揺れた。

ガチャ。

玄関からの音を二人は聞いた。

「将、そこにいるの？」

マネージャーの武藤の声が、がらんとした部屋に響いた。

今から、甘く激しい感覚の世界を彷徨おうとしていた二人は一気に現実に引き戻された。

将は、聡の濡れた粘膜に埋めていた中指をあわてて引き抜き、

昇りはじめていた聡は、息を飲んで、閉じていた目をあけた。

ガチャガチャと音がするのは、将がさっきチェーンをしていたからだろう。

二人は顔を見合わせた。

「やばい」

将は力が抜けたような聡の腕を引っ張りあげると、引きずるように洗面所へ連れて行った。

半透明のバスルームの扉を開けると、

「ここに隠れてて。俺がなんとかするから」

と早口で囁きながら、聡をバスルームの中に押し込んで、扉を素早く閉めた。

その間も

「将、いるんでしょー！開けなさい」

と武藤の声と、チャイムが響く。

「ほーい」

将は、何気ない、のんびりした声を出すべく努力をした。

それは、奄美ユリのドラマより、演技力が必要だった。

そして聡の性器を愛撫していた中指をペロッと舐めて清めると、その手をジーンズのポケットに突っ込み、

何食わぬ顔で洗面所から出て、リビングと玄関を仕切る扉を閉めながら玄関に出た。

「ちょっと待って」

将はいったん、ドアを閉めると、チェーンをあけて武藤を中に入れた。

「なんだよ……。こんな時間に」

と武藤に、わざとけげんな声を向けつつ、今が何時になっているのか将にはよくわからない。

「あなたこそ、なにやってんの。明日早いのに」

「……いいじゃん。新しい部屋が見たかっただけだよ」

武藤は言い訳する将の横をすり抜けて、リビングに入るべく照明のスイッチをつける。

将は彼女の後についていきながら、何もヤバイものはなかっただろうな、と今二人が横たわっていたあたりを素早く点検した。

「武藤さん、なんで、ここに来たのさ」

「……ちょっとね」

「ちょっとって何だよ」

武藤はわざと理由を口にしないまま、将をちらりと横目で見た。

反応を見ているのである。何かを隠している、とすぐに分かった。

本当は、将を送った後、海外に旅立つ前に確かめておくことを思い出して、武藤は事務所に戻ったのだが、その帰りにここに寄ってみたのである。

そこで、この部屋専用の駐車スペースに、ミニが置いてあったのを見つけた。

将がすでに免許を取得していて、かつミニを持っていることを知らない武藤は、管理人に無断駐車を注意してもらうように言いにいった。

すると、２４時間常駐の管理人は

『１４０２号の鷹枝さんはさっき、車を停めたいけど駐車場はあるか、と訊きに来られましたが』

と答えたのだ。

「将こそ、まっくらなまま何をしてたの」

と問われて、将は言葉に詰まった。

武藤は将に疑惑の目を向けたまま、少し微笑むと

「ちょっと手を洗わせてね」

と洗面所のほうに向かった。

「や……」

将は一瞬止めようと思ったが、止めたところで同じだと瞬時に気づいた。

腹を決めて、それでも心配で、武藤の後ろについて洗面所に足を踏み入れた。

――アキラ、バスタブの中にでも隠れていてくれ……！

祈る将を嘲笑うように、武藤はなぜか洗面所でなくバスルームの扉を開けた。

217◆何もない部屋で2

「わ！」

「何、どうしたの」

突然大声をあげた将に、バスルームの扉を開けた武藤は振り返った。

「いえ……」

その隙に将は、武藤越しにバスルームをのぞいた。

――いない！

聡の姿はバスルームになかった。バスタブのなかにもいない。

――確かに、ここに連れてきたはずなのに……。

「何、口をあけてんの」

呆けて思わず口をあけたままの将を、武藤がクスっと笑った。

「シャワーカーテンも買い物リストに入れなくちゃ、ね」

武藤は独り言をつぶやくと、バスルームの扉を閉めて、洗面所で手を洗った。

そしてハンカチで手をぬぐいながら、腕時計を見て

「やだ。もう11時30分じゃない」

と声をたてる。

「……帰らなくちゃ。ところで、将、あなた車の免許持ってるの？下に停めたミニはあなたのなの？」

「うん」

将は返事をしつつ、悟られないように目を部屋中に泳がせていた。

聡はどこに消えてしまったのか。

ある一点に気づいて、将は声をたてそうになる。

バルコニーに並ぶ、二人の靴！

幸い、ガラス窓は明るいリビングを反射して、外を見えなくしている。

将の立っているところからも、靴は見えなかったが……あそこには確かに、靴が2つ並んでいるはずなのだ。

「仕方ないわね。……でも今日はもう遅いから、私が送っていくわ。下の駐車場はこの部屋専用のだからアナタの車を置きっぱなしにしても差し支えないし」

「い、いいよ、そんな。自分で帰るよ」

とんでもない、と将は思った。この部屋のどこかにいる聡を置いて

帰るわけにはいかない。

「バカいいなさんな。事故でも起こしたらどうするの」

武藤の口調が強くなる。武藤はとうに……ここに踏み込んできた時点で、将が隠しているものに気づいていた。

おそらく、女だろう。

ここで逢引でもしていたのに違いない。

乱れてボサボサになった将の髪はたぶんそのためだろう。

そう広くない１ＬＤＫだ。

女のほうはバスルームあたりに隠したのだろう、と武藤はバスルームに行ってみたのだ。

そこにいないとなると。

武藤は、部屋を見渡しながら、リビングを反射している窓、そしてクロゼットで視線を止めた。

……だが、そこを開けることはしなかった。

女を……たぶん聡を、見つけ出してどうするのだ、と思い直したからだ。

その代わり、明日のリスクを減らすために、逢引は中断させたほうがいい。

「大丈夫だから」

強くなる武藤の口調に対し、将の口調は懇願するようになっている。

「ダメ。さあ、帰るわよ」

将は思わず、武藤を睨みつけた。しかし武藤はひるまない。本気なのだ。

「さあ」

――この場は、従うしかない。

将はチッと舌うちした。

……将は毅然とした女性に弱い。

これが男性だったり、女性でもヒステリックにわめきちらしたりするのだったら、強引に自分を通すこともできるのだが。

それにしても聡はどこに行ってしまったのだろう。

もう11時30分、と武藤は言っていた。まだ電車はあるものの、

――1人で帰れるだろうか。

と心配になる反面、

――聡は大人だ。なんとかするだろう。そしてあとで、もう一度、

聡の家で続きをする、というのもアリだろう。

という楽観もなくはない。

いずれにせよ、メールでフォローをしなくてはならないだろう。

将はため息をつくと武藤について玄関に向かいながら、リビングの照明を消した。

「将、靴は？」

武藤が玄関で将の靴がないことに気づく。

将は慌てて、バルコニーに靴を取りに行った。

そこにはまだ、将の２８センチのバッシュと一緒に、聡の２３．５センチのミュールが夜風に冷たくなって並んでいた。

――本当に、どこに行ったんだろう。

玄関以外から、外に出られるはずもないのだ。

将は後ろ髪引かれる気持ちで、何もない部屋を後にした。

部屋から二人が出て行って……聡は、クロゼットからようやく出る

ことが出来た。

リビングは再び青い街の光だけの薄暗がりになっている。

そんな中、まだ残る胸の鼓動がやけに響く気がした。

――よかった……見つからなくて。

バスルームに隠された聡だが、洗面所を使う、と言われたらマズイと考えた。

そして将が武藤を迎えに玄関に出た一瞬に、バスルームからクロゼットに移動したのだ。

聡はずっと……クロゼットの２ｍｍほどの隙間からリビングをうかがっていた。

その間も、胸を飛び出して聡の体を震わせそうなほどの、激しい鼓動に翻弄されていた。

そして、リビングを見渡す武藤の視線が、一瞬こちらを向いて固定したとき……聡はもうこのまま心臓麻痺で死んでしまうかと思った。

――恐かった。

聡は胸を押さえて、四角くフローリングに映る淡い光の中に膝まづいた。

しばらく、そのまま動けない。呼吸さえも、自由にできない。

硬直したような体、そして時間の中で一つ、わかったことがある。

――バレるのが……こんなに恐いなんて。

紙一重で二人の関係があからさまになる局面に遭遇して、聡は自分がいかにそれを恐れているかを再確認することになった。

部屋は動揺する聡に反して、静まり返っていた。自分の息遣いさえ聞こえそうなほどに。

窓には、夜のビル群。さっき、二人で眺めたときと同じように煌いている。

なのに、一人で暗い部屋で膝をつく聡には、冷たくこちらを拒絶しているように感じた。

そこへ突如。

メール着信音が響きわたって、聡の神経は再び緊張する。……将だ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

アキラごめん。

武藤のババアが強引で、断れなかった。

悪いけど地下鉄で帰ってもらっていい？

鍵は開けっ放しでいい

あとで、部屋に行くから、続きをしよう

＝＝＝＝＝＝＝

将も慌てていたのがわかる文面だ。

きっと、後部座席に落ち着くなり送ったのだろう。

聡はそれを見て大きくため息をついた。

そんな聡が、はっきりとわかってしまったことがある。

それは、将がこうやって芸能界に入っていくということは……もともと、担任教師と教え子の関係はタブーであるけれど……

二人の恋は、さらに重い秘密になっていく、ということなのだ。

将は、果たしてそれをわかっているのだろうか。

いや、そこまで気づいていないはずだ。

もしも、気づいていたら。将は芸能界に入らなかっただろう。

しかし……聡はここ何日かの将のメールや短い電話を思い出す。

『収録、一発でＯＫだった』

『目力がある、って言われた』

『奄美ユリに褒められた』

と控えめながら嬉しげに報告する将。

将は、たしかに、その才能の1つを生かせる場所を見つけつつあるのだ。

それを邪魔する資格は、聡にはない。

いや……将自身の成長と幸せを願うなら……本当に愛しているなら……邪魔は出来ないはずだ。

聡は、将への想いの行く末が、急速に閉ざされていくのを感じながら、銀色めいた薄闇の中に落ちている自分の影を見た。

218◆恋の終焉

＝＝＝＝＝＝＝

今、どこ？

俺やっと一人になれた。

武藤のババアが部屋まであがりこんできた。

荷づくりのチェックだと。

近くまで来たら連絡して。

待ってる

＝＝＝＝＝＝＝

将のメールを受信したのは、地下鉄が駅に差し掛かったときだった。

聡は、その受信画面の将を見た。

受信画面はスキーのときの集合写真からとった大口をあけて笑っている顔だ。

その顔に、聡は

――ごめん。

と心で謝る。謝ったとたんせつなさで涙がこぼれそうになるが、他の乗客もいる。

熱くなる瞳をつむってこらえると、返信メールを打つ。

＝＝＝＝＝＝

もう遅いから、今日は美智子の家に泊めてもらうことにしました。

美智子の家はすぐ近くだから…

マンションの鍵は、管理人さんに頼んできました

将、明日から気をつけてね。

そして、仕事頑張って

＝＝＝＝＝＝

「なんだよ、これ」

将は聡からの返信を見て、思わず声をたてた。

美智子の家に泊めてもらう、だ？

しばらく逢えなくなる前夜なのに、どうして。

将は携帯を取り上げると、聡に掛けた。

聡はちょうど、駅についたところらしく、電話はすぐにつながった。

「将。ごめんね」

と電波がつながるなり聡は言った。

「どういうこと」

将はつい、苛立ちが声に出てしまう。

「もう、遅いから……それだけ。美智子んちって、将のマンションからたった4駅なんだよ。それで思い出したの」

「てか」

将の中で聡への逢いたさがつのって、それが怒りに変わってさえいく。

「どうして、今日なんだよ。俺、明日から3週間もアキラに逢えないんだぜ。美智子なんか俺がいない間にいくらでも泊まりにいけばいいじゃんっ」

「ごめん。将……」

聡はそれしかいえない。沈黙に、将の怒りは哀しみに変貌していく。

謝る聡だが、決意は固そうだ。今日は、もう聡に逢えないのだ……それだけはわかる。

でも、将は粘る。

「俺、アキラに会いたい。アキラがまだ足りない」

聡は黙っている。背後の車の音が邪魔だ。

聡の息遣いを携帯が拾っているのだったら、聞きたい。

どうして、急に聡は自分に抱かれるのを拒否するのだろうか……。

そうだ。あの状況から、友達の家にいきなり泊まるというのは『拒否』以外ありえない。

将は懇願する。

「アキラ。セックスが嫌だったら、しなくてもいい。……頼む。アキラの顔が見たいんだ」

抱き合うだけでもいい。本当に欲しいのは、聡のぬくもり。たわいのないことを囁きあう時間なのだ。

だが、車の音だけが、携帯に流れる。そして

「ごめん。でも、もう美智子に連絡しちゃったから……。明日から、頑張ってね。メールするから」

と、ふいに電話は切れた。

「アキラ！アキラ！」

将は電話口に向かって、いとしい人の名前を叫んだ。

もう一度電話をかける。だが、もう聡との電波がつながることはなかった。

「アキラ……」

将は、携帯を持った手をだらりと下げた。

呆然と立ち尽くす将に、これから聡に会えない時間が立ちはだかる。

聡も、駅のコンコースで立ちすくんで涙をこぼしていた。

――ごめん。将。だけど、こうするしかないんだ……。

一度こぼれた涙は、あとからあとから溢れ出てくる。

聡はバッグからティッシュを取り出してそれをぬぐう。

目立たないように壁に向かってしているのに、何人かの乗客が好奇の目を聡に走らせていく。

聡は、涙の処理より、感情を処理するのが先だ、と無意識にさとり、美智子に電話をかける。

そのとたん、プップッと割り込みのサインが聞こえる。

たぶん将だ。

聡は美智子につながるまで、ぎゅっと目をつぶって耐えた。

「聡？駅についた？」

少しハスキーな美智子の声が聞こえて、聡はほっとした。

「うん。何番から出ようか……」

割り込みのサインはずっと聞こえていた。

「ごめんね。いきなり押しかけちゃって」

「いいよー。こっちも久しぶりに仕事から解放されてるところだったから」

とパジャマ姿の美智子は聡の着替えを用意して待っていてくれた。

濃いアイメイクがない美智子は、まるで別人のような童顔だ。

美智子の部屋は、古いマンションの２ＤＫだった。

１室をプライベートに、１室を仕事部屋に使っているらしく、いずれもマスコミ関係者らしくシンプルにお洒落にしつらえられてある。

学生時代からワンルームに住んでいたのだが、フリーになったのを

きっかけに2部屋あるここに引っ越してきたのだという。

「一杯やる？これね。記事書くために取り寄せたお酒なんだけど、美味しいんだよ」

と『菊姫』の一升瓶を、独り暮らしにしては大きな冷蔵庫から嬉しげに出した美智子の手が止まった。

「聡？」

菊姫を冷蔵庫の前の床の上に置くと、美智子は聡に駆け寄った。

聡は、ボロボロと涙をこぼして立っていたのだ。

「聡、どうしたの？」

「美智子ぉ……」

聡はもう限界だった。もう涙を止められない。

「聡、どうしたのよお」

思わず美智子は聡を抱きしめた。

聡は美智子に体重を預けて、体の中から響いてくる嗚咽をもはや止めることができない。

「ごめんね。あたしのせいだね……あたしが将くんにモデルを頼んだから」

美智子は、ぐい呑みを小さく傾けながら言った。もう深夜になっている。

聡は黙って首を横に振ると

膝の上で両手で温めるように包んだぐい呑みを口元に持っていく。

落ち着いた聡は、美智子に、将とのいままでを吐露した。美智子はそれを親身に聞いてくれた。

「あたしが、将くんにモデルを頼まなければ、将くん、芸能界入りすることもなかったんだよね……ごめん、聡」

美智子はぐい呑みを置くと、聡に頭を下げた。

「美智子。違う……んだ」

聡は頭を下げた美智子に、そうではない、と呟く。

たしかに、将の芸能界入りは、それが色濃く出てしまったかもしれない。

だけど、それは、もともと二人が抱えていた問題なのだ。

二人の恋の先には、いずれにしてもそれが立ちはだかっていたのだ。

ことに、よい家柄に生まれ、さまざまな才能に恵まれた将は未来にたくさんの可能性を持っている。

だが、若いゆえに一途で、持てる情熱のすべてを聡に注ぎ込もうとする将。……少なくとも聡にはそう見えていた。

今までに恋をした男の中で、もっとも激しく、自分のすべてをぶつけるような愛し方に、聡は酔いながら、恐れていた。

自分が、彼のすべてを占めてしまうことに。

現時点で恋愛に溺れることは……将の可能性を減らしてしまうことなのだ。

「芸能界入りが悪いわけじゃ、ないから。心配しないで。……もともとは、あたしがいけないんだから」

聡は、ぐい呑みを傾けると、その中の酒を飲み干した。

酒は、透き通ったような甘さで、聡の喉にじんと熱くしみた。

そんな聡を美智子は心配そうに見つめる。

「教え子、なんかと付き合い始めたあたしが、いけないんだ……よね」

「聡……」

「でもさ……」好きなんだ。もう後戻りできないくらい。

言葉のかわりに、再び聡の瞳から涙が染み出してきた。
それを美智子から隠すように、立てた膝に顔を埋める。
「聡……将くんのことを、本当に好きなんだね」
美智子の声も震えている。コケティッシュで明るい美智子だけど感受性もひとしお強いのだ。
聡の気持ちを察して、それが美智子の気持ちを震わせたのだ。
しかし、膝に顔を埋めた聡からは美智子のようすは見えない。
ただ、聡は顔を隠したまま、うなづいた。
「聡」
美智子は聡の肩に組むように腕を回した。
「将くんだって、いつまでも教え子じゃないよ。そのうち、大人になるし……」
美智子の手は、聡の肩をゆっくりと叩いた。
「ほら、聡、〇〇って覚えてる?」
美智子は、若干明るい声で、とある有名なミュージシャンの名前を出した。

若い頃から、アイドルのように活躍していた『歌手』が、いつのまにか『実力派ミュージシャン』になっている、そんな人。

「彼、デビュー前から付き合っていた彼女と結婚してるんだよね。ずっと……5年も交際を隠してて……。

でも、結婚後も人気は衰えなかったじゃん。将くんだって、ある程度実力がついたら、きっと、世間を納得させることができるよ」

そんな日が来るんだろうか。芸能界ではないにしても……将が世間に有無をいわせない実力をつけるとき。

聡はそのとき、いくつになっているんだろうか。

そのあまりの遠さは、恋の終焉と同義ではないか、と今の聡は悲観するしかない。

219◆大人の決意

「それにしても……」

美智子は、聡に静かに語りかけた。

「聡、変わったよね」

聡は、美智子が何を言いたいのかわからなくて、涙目を少しだけ、膝からずらした。

「前はさ……。学生の頃はさ。博史さんに会えなくて寂しい、ってことあるごとにグチってさ。会ったあとは夢みたいに幸せそうな顔してさ」

美智子は当時を思い出したのか、おかしそうに口の端を上げた。

聡も顔を少し上げた。

「ホント、な～んにも考えずに、博史さんと結婚することだけが幸せ……みたいな感じだったじゃん。就活もやんないでさ」

思い出すと、恥かしさのあまり、地団駄を踏みたくなるような、あの頃。

だけど、聡は今、恥かしさを抑えて、あの頃に思いをはせてみた。

あの頃、聡の中の未来予想図は、博史に愛されて、博史に寄り掛かることだけしか存在しなかった。

博史の人生を心配することなど一度もしなかったように思う。

もちろん中東に赴任している身だから、身の安全は心配したけれど。

将来がどうとか、博史の可能性とか……そんなものは、もう博史の場合固まっていたからだろうけれど。

博史が聡より何歩もリードした大人だったので、聡は子供のまま……恋する乙女でいられたのだろう。

博史からあれこれと与えられるものを……それは優しさだったり、プレゼントだったり、愛撫だったり……聡は素直に堪能すればいいだけで、

聡が博史に何かを与えるのはずっと先だろう、と思いこんでいたあの頃。

「あの頃から考えたら、本当に、変わったよ……大人になったんじゃない？」

美智子は聡のぐい呑みに菊姫を注いだ。聡は無意識にそれを口に運んだ。

自分は……大人になったんだろうか。

将を愛するようになって。

聡は、与えられるだけでなく、愛を与える喜びを……自分の愛こそが渇望される歓喜を知った。

それと同時に、若い将の一途過ぎる熱情が、彼自身の人生を破壊するのではと聡は常に恐れることになった。

だけど……それゆえに、ひときわ将がいとしいのも事実だ。

「大人……とかじゃないよ。だって、我慢できなくて……流されることだって多いもん」

聡は思わずつぶやいた。さっきだってそうだ。

教師と生徒だから、せめて卒業まではセーブしなくちゃ、とわかっているのに、将が恋しくて、いつも流されてしまう。

傷ついた将を癒したい、という理由をつけて、本当は自分こそが将と抱き合いたいんじゃないだろうか。

聡はいつも、そんなふうに自分に疑惑を抱いている。……そう、あの、将は覚えていない、一夜だって。

「我慢しようとか、流されてるってわかってるだけでも違うんじゃない？」

美智子は、涙の乾いた聡の顔を一瞬のぞきこむと、黒目をぐるりとまわして、斜め上にある自分の考えを置いたあたりの空気に視線をうつす。

「だあってさ。あたし雑誌で恋愛の読者記事とかも担当するんだけど、みんな自分本位で、彼氏のことなんか、まったく考えてないんだよね。

『仕事で忙しいとかいって、逢ってくれない』とか

『ぜんぜん遊びに連れて行ってくれない』とか

『結婚を言い出してくれない』とか

相手に対して要求することしか考えてないの。あたしが男だったら『アー！ウゼー！』って叫んじゃうだろうなってぐらい」

美智子は、ぐい呑みをあおると、てへっと笑いながら

「ま、あたしも付き合ってるときは、そうだったかもしんないんだけどぉ」

と付け加えた。

そういえば美智子は彼氏いない歴がもうすぐ1年になるらしい。

「まあ、そういうのに比べたら……、聡は将くんのこと、すごく考えてるじゃん。それって、本当に愛してないとできないと思うよ」

愛、という言葉を舌に乗せるとき、美智子は少しだけくすぐったそうに瞬きをした。

「だって……彼は教え子でもあるし」

聡は、下を向いたまま……ようやく小さく笑うことができた。

美智子と枕を並べて横になりながら、聡はなかなか寝付けなかった。

窓にかかるのは遮光カーテンだから、部屋は墨汁に塗りつぶされたような闇になっている。

その中に、美智子が立てる、かすかな寝息が規則正しく響く。

電源を切った携帯は、バッグに入ったまま沈黙を守りながらも、しきりに主張を続ける。

だけど……。

こうやって、暗闇に横たわっていると、さっきのクロゼットの中の暗さが蘇る。

暗さより、あの細い隙間から漏れる世間の光が……本当に恐かった。

あのとき、クロゼットを開けられていたら。

何も言い訳できない。

一部の……聡とごく親しい人は、二人の関係を知っても優しいままだけれど……やはり二人の関係は白日のもとにさらすには、れっきとしたタブーなのだ。

学校にも、世間にも隠しとおさなくてはならない。……特に将のた

めに。

いつまで？

聡は、将の卒業が１つの伏目だと思っていた。

だけど……高校を卒業したぐらいでは、まだまだ人生は脆すぎるだろう。

将はよく言っている。

『アキラと一緒だったら、俺はどんな貧乏ぐらしでもいい。トラックとかタクシーの運転手でも、ファミレス勤めでも、営業マンでも何でも楽しくやれるよ。きっと』

聡も、夢見る。

狭いけれど小さなアパートの一室。聡が産んだ将の子供が３人。

みんなで助け合って笑いあいながら暮らす、平凡な日々。

聡はそれでもいい。

でも。名門に生まれ、人なみはずれた高い知能を持つ将は……小さくまとまるべきではない。

一流になれる能力を自分のために反古にさせるなど、聡は自分で自分が許せない。

将が、確固たる自分自身を築き上げて、ゆるぎない自分の道を進む

まで、待つべきなのだ。

教師として、人間として……それはわかっている。

だけど。それはいつになるのだろうか。

そして。ゆるぎない大人になったとき、果たして将は9歳も年上の自分を選ぶのだろうか……。

いつか博史が言った『通過地点』という言葉がふいにフラッシュバックする。

次に美智子の

『みんな自分本位で、彼氏のことなんか、まったく考えてないんだよね』という声が、神の啓示のように『通過地点』という言葉にひびをいれる。

通過地点でもいい。

聡は、暗闇に目を見開いた。

いつか、自分に誓ったはず。

自分の幸せと将の幸せが相反するときは、将のほうを取ろうと……。

――将が、自分自身を築き上げるまで、待とう。……待たなくては。

待つことが、自分に出来る、将への至高の愛情表現なのだ。

もう、流されない。聡は、今一度決意を固める。

「うーん」

カメラを構えた篠塚だが、ファインダーをのぞいたまま唸ると

「今日は、もういっか」

と首を傾げた。スタッフ一同、ぽかんという顔をした。

パリ、カルチェラタン。ごちゃごちゃとした路地に小さな画廊や画材屋などが軒を連ねる。

昨日、パリ入りした将ら一行は、ここで写真集のための1ショットを撮影しているところだ。

パリ、といえど、女性誌のパリ特集というわけではないので、観光名所やお洒落な場所は最低限にし、わざと雑多な場所や薄暗い『生きたパリ』的な場所を篠塚は撮影スポットに選んだ。

今日は、メトロの駅から、学生の多い１０区、カンボジア料理店などをまわって、カルチェラタンに来ている。

しかし、カルチェラタンではとうとうシャッターを1回も切ることなく、篠塚は終了を宣言した。

「目がね。死んでるの」

篠塚は機材を手早く片付けながら言った。

「まあ、ここはパリだから、憂い顔は多少あってもいいんだけど、それにしても目がベターッとしてるの」

それは、篠塚がどんなに将をノせてもダメだった。

「……いっそ明日オフにすれば」

「そんな」

武藤が落胆の声をあげるのも無理はない。

このあとモロッコでＣＭと『ウルウル』があるので、パリは中３日しか日程がないのだ。

「何かあったの？　なんか将、オーラ完全に消えてるよ」

篠塚に指摘されて、武藤は将を見た。

撮影が中断したせいか、将は石畳にしゃがみこんでボーっとしている。

「あ、もう犬のクソ」

と洗いたての濡れた路面にころりと転がる犬の糞を指差してヘラヘラと笑ったりしているが、その目は、なるほど、生気というものがまるで感じられない。

パリの５月、といえば青空の下、輝く街にマロニエの若葉、気の早い若者はセーヌ河畔で日光浴、と

最高に美しく、かつ躍動的な季節である。

が、その金色の午後の中で、将の周りだけアンニュイを通り越してヘドロのようなどんよりとした空気が立ち込めていた。

平均的なフランス人と比較しても、長身かつ顔が小さく足が長い将は、人目を惹くはずなのに、

往来の人々は、オーラが消えてしまった将に目も止めずに通り過ぎていく。

たしかに、こんな状態の将を撮影しても、目覚しいものは撮れないだろう。

武藤はため息をついた。

「今日、カタコンブに行けば、刺激になったかもね」

と篠塚はジョークで武藤をなぐさめた。

（ちなみにカタコンブとはパリの地下に残る、納骨堂である。地下通路に１９世紀までの骸骨がそのまま放置されている、かなりコアな『観光スポット』である）

「今日は早めにホテルに入ってゆっくりしようよ。今日は『お城』とってるんでしょ」

お城というのはパリ西部の郊外サンジェルマン・アン・レーにある、ルイ１４世の生家といわれているプチホテルだ。

ここは新都心・ラ・デファンスごしに遥かにパリを見渡し、パリから朝日が昇るところも見えるので今回の撮影箇所の１つにも選ばれている。

将が元気のない理由に、思い当たるところがある武藤は、

「そうですね」

といいつつ、ぼんやりしている将を一瞥する。

――やっぱり逢引を中断させたせいなんだろうか。

武藤は少しだけ罪悪感に苛まれる。

そんな武藤をよそに、将は

「ほんっと、犬とクソばっかだよなー。洗う、クソする、洗う、クソする※の繰り返し」

としゃがんだ上に、頬杖までついて、元気なく笑っている。

武藤はもう一度深くため息をついた。

※

パリでは、路上にされた犬のフンを洗い流すための公務員がしょっちゅう巡回しているのです。

しょっちゅう水できれいに道を洗っているのに、洗いたての濡れた路面に、もう新しいフンが置いてあるということも珍しくない……、将はそれを笑っていたわけです。

２２０◆２０１～２１９話のあらすじ

＜２０１～２１９話のあらすじ＞

ついに曽祖父の巌に自分が過去に犯した殺人を告白した将。

巌は激しいショックを受け、その夜倒れて病院に運び込まれる。

将は自分のせいだ、自分は鷹枝家の血を汚し、敬愛する巌の命まで奪ってしまうのかとおびえる。

巌の手術はいちおう成功するが、安心できない状況にある。

一方、大悟は、瑞樹がコインロッカーに残していた荷物の中から、大量の覚醒剤を見つける

将は東京に帰ってきたが、罪悪感は、とりあえず手術が成功したという安堵を得て、やりきれなさに変わっている。

それをどうにかしたくて、強い酒をあおる将。

そこへ聡から、昨日のドタキャンを謝るメールが届く。

将はすがるように聡の部屋を訪れ、そのまま聡を抱く（２０１～２０２話）

ついに、一線を越えてしまった二人。遅く起きた将はあわてて学校へ走る。

教室に駆け込んできた将に何気なくふるまいながら、聡は昨夜のことを思い出していた。

そっけない聡になかなか近づけない将は、仕方なく井口と一緒に下校する。

そこで井口から大悟がクラブに現れクスリを売っていたことを聞かされる。

将は、聡の部屋で彼女を待とうとするが、マネージャーの武藤から呼び出され、自分が人気ドラマの主要キャストに選ばれつつあることを聞く（２０２～２０４話）

演技が初めての将は、様子見のためにまずは連続ドラマの１回にゲスト出演することになる。

夜、武藤と別れた将は聡の部屋を訪れて、誕生日のプレゼントを渡される。

そのプレゼントの万年筆で、将は聡の手帖に愛のメッセージを書く（２０５～２０６話）

急にドラマ出演が決まった将は、演技指導を受けるなど忙しくなる。

そんな中、将は巌の容態を聞かされる。巌は意識が戻ったものの、全身に麻痺が残るという。

１００歳で全身に麻痺が残ることが何を示すかわかっている将は、巌との永遠の別れが身近に迫りつつあることに怯える（２０７話）

いよいよ、ドラマの台本読みのために将はＴＶ局入りする。

そこで将はなぜか、連続ドラマの主役の人気女優・奄美ユリになぜかちくちくとイジめられる。

台本読みが始まっても、そのイジメは続く。

将は機転を利かせて、アドリブで奄美ユリにやり返し、逆にユリに気に入られてしまう。

その後、久しぶりに部屋で大悟に会えた将は、大悟の保護者になってくれる人が見つかったことを伝える。

大悟は表面で感謝をしながらも、将に頼らなくてはならない自分が情けなく、そして屈辱を覚える（２０８～２０９話）

忙しくなった将は、学校も休んだり早退しがちになった。

二人は、昼休みにつかのまの逢瀬を過ごす。

しかし迎えに来た武藤は、将の唇にわずかに残った口紅から、その相手が聡であることを悟ってしまう（２１０話）

将に急遽ＧＷあけに海外ロケの仕事が入ったと伝える武藤。

忙しいからＴＶ局の近くにマンションを用意した、とも。

実は担任教師との恋愛関係が重大なスキャンダルのもとになる、と考えた武藤は、

将の体があかないほど忙しくして、かつ、将を大衆に愛される喜びにどっぷり浸からせることによって二人を引き離そうと考えていたのだ（２１１話）

大悟は、新しい保護者となった西嶋のもとを訪れる。

西嶋の工場はＮＡＳＡで使われる機器を手がけるほどの技術があった。

そんな西嶋は、大悟に金をきちんと渡すことを約束しつつ、なぜか、模型の戦艦の修理をさせる。

西嶋の妻の節子は、大悟に「うちの子にならないか」と、また、５月にある大悟の誕生日をもしよかったら祝いたい、と優しく誘う（２１２話）

ドラマの収録が終わり、１週間ぶりに学校へ行った将は、体育の時間に、窓に登って落ちたクラスメートの星野みな子を助ける。

みな子の中で一度は諦めた将への想いが再燃する（２１３～２１４話）

GW入りしても将は忙しかった。将に会えない聡は、休日だけどどこにも行く気になれない。

大悟や武藤のことを考えると将の部屋を訪れるのにも二の足を踏んでしまう。

新しいマンションの鍵を渡された将は、そこへ聡を連れてくることを思いつく。

壮行会のあと、武藤の目を盗んで、こっそりと聡のもとを訪れた将は、久しぶりに運転するミニで聡を迎えに行く。

家具も何もない部屋で、濃厚に抱き合う二人。そこへ突然、武藤が現れる。

将は聡を隠して何気ないそぶりで武藤を交わそうとするが、武藤に逆らえず、一緒に帰ることになってしまう。

将の部屋のクロゼットに隠れていた聡は、二人の関係が明るみに出ることの恐怖を再確認して震える（２１５～２１７話）

聡は、あとで部屋に行くという将を振り払うように、「今日は美智子の家に泊まる」と告げて一方的に電話を切る。

美智子の家で、将のことを思って泣く聡。

慰める美智子の言葉に、聡は将のために、将が自分自身の道を固めて、ゆるぎない大人になるのを待とう、と決心する。

一方、パリ。死んだような目の将に、写真集の撮影ははかどらない……（２１８～２１９話）

２２１◆突然、一方的な別れ

パリ郊外のサンジェルマン・アン・レーの『お城』に一行がついたのは夕方だった。

テラスごしの眺望がよいレストランで夕食をとり、しかし将が『疲れている』ということもあり、早々に各自の部屋へ引き上げることになった。

といいつつ、カメラマンの篠塚らはバーで、もう少し、シガーとコニャックを楽しむらしい。

ルイ１４世の生家、というだけあり、そこかしこが瀟洒なつくりになっている。

中でも優雅なのが、吹き抜けを囲むようにカーブを描く大理石の階段だ。

しかし、将は、足取りも重く、それを登ると、あまりスムーズとはいえない、極めてクラシックな形の鍵を開けて部屋に入る。

真紅の、足が沈むような毛足の長い絨毯が敷き詰めてある部屋は、それだけで将が大悟と住んでいるマンションほど広いように思えた。

将はこのダブルを一人で使うことになっている。

バスルームや洗面台は本物の大理石をつかった贅沢なもの、蛇口すらも装飾が施された年代ものだが、

将はそれらをチラッとのぞいただけで、ため息をつくと、ダブルのベッドに仰向けに倒れこんだ。

キングサイズのベッドはかなり柔らかく、倒れた将の衝撃をすべて吸い込むようだった。

高い天井は純白で、シャンデリアが下がっているのが見える。

決して目障りなものではなく、むしろ柔らかい上質な照明なのに、将はそれから顔をそむけるようにうつ伏せになると、胎児のように体を丸めた。

何で自分はこんなところにいるんだろう。

自分は何をしているんだろう。

将は、自問自答をしながら、自分の心が真っ暗な闇に閉ざされたあのときを回想していた。

新しいマンションでの逢瀬を、武藤に邪魔された出発前夜。

将はあれから何度も聡と連絡をとろうと試みた。だけど、聡は電源を切ってしまったらしい。

美智子の部屋に泊まるなら……美智子の番号にかけてみればいい。

幸いモデルのバイトがらみで、美智子の携帯の番号は保存してある。

だが、それを思いついたときには、さすがに遅すぎる時間だった。

何時だったら迷惑じゃないだろうか。

いや、多少迷惑でも、急ぎということで容赦してもらえる時間は、何時だろうか。

そんなことを考えあぐねているうちに、疲れていた将は眠り込んでしまった。

そして武藤からのモーニングコールで目覚めて、電話できなかった自分に気づく。

そのあとも……なんとか、聡に連絡を取れないか、と将はスタッフの隙をうかがいながら、懇願するようにメールを送った。

『12時の出発までに、声が聞きたい』

だけど……空港では、武藤のほかに、篠塚、篠塚のアシスタント、ヘアメイク、スタイリスト、ADが集合していて、そこには隙などなさそうだった。

幸い、少し早めに空港についたので、一行はカフェテリアに入って、打ち合わせがてら暇をつぶすことになった。

――今だ。

そう思った将は

「ちょっと、トイレ」

といって席を立った。

スタッフの目の届かない、トイレの近くにある大きな観葉植物の陰まで来ると、祈るように電話をかける。

が、あいかわらず聡は出ない。かわりに、美智子に掛ける。

それはたやすくつながった。

美智子は「将くん、久しぶり……聡でしょ。今変わる」と何も言わずに察してくれた。

電話の向こうで

『ほら、将くん。出なよ』

と美智子が聡に強い口調でうながすのが聞こえる。

聡は、電話に出るのを渋っているんだろうか。

「もしもし」

本当は、耳元でじかに味わいたかった声が電波ごしに届く。

「アキラ。昨日はどうしたんだよ」

つい、問い詰めてしまう将。本当はそんなことが言いたいんじゃな

い。

「昨日はずっと一緒にいたかったのに。３週間も離れ離れで、どうすんだよ」

甘えが、将を強い口調にする。

だまりこんでしまった聡に、将は少し言い過ぎたかな、と思い直し、甘えた口調で言い直す。

「……アキラ、何か言ってよ」

「将……」

やっと聡は将の名前を呼んだ。しかし、それきり聡は沈黙してしまう。

将が、しびれを切らして、自分から何か言おうとした直前に、ようやく聡の声が聞こえた。

「あたし、考えた。……将とはもう付き合えない」

その言葉の意味が……あまりにも唐突過ぎて、将は理解できなかった。

「アキラ……？」

聡はさらに言い直す。

「教師と、生徒に、戻った方がいいと思うん……」

「アキラ！」

将は聡が言い終わらないうちに、いとおしい人の名前を叫んだ。

その声は大きすぎたようだ。トイレへと出入りしようとする人が何人かこちらを振り向いた。

「……冗談だろ？」

将はそう訊き返しつつも、聡がこんなことで冗談をいう女ではないことをわかっていた。

「いますぐ、会いに行く。話し合おう。何がいけなかったんだ」

「将、何をいうの。今からフランスでしょ」

「そんなのどうでもいいんだ！」

将は再び大声をあげた。混乱のあまりコントロールが利かなくなっているようだ。

「アキラに比べたら、どうでもいい」

将は今度はすがるように早口で囁いた。

ウソだといってほしい。驚かそうとしたんだというオチであってほしい。

「将、しっかりして！」

電話の向こうで、聡がやや強い声をあげた。

「アキラ……」

「そういうところが、心配なの！」

いつにない、聡の強い声に将は黙った。

聡のこんな声を聞くのはひょっとして初めてだろうか……。

「あたしのために、何でも捨てちゃう将が心配なの！」

「アキラ」

だって、聡のいない人生なんて意味がない。そう言おうとした将は聡の剣幕に遮られる。

「プロダクションの人だって、ＴＶ局の人だって、新人の将のために、すごく骨を折ってお膳立てしてるはずでしょ。それを、どうでもいい、なんて言わないで！」

「だって……アキラ」

とまどった将は、つい口にしてしまう。

「でも、もともと、やりたくて始めた仕事じゃないし」

将が話したいのはそっちではない。

なぜ、今になって、いきなり、付き合えないなんて、教師と生徒に戻ろうなんて言うのか。

この上なく愛し合っている二人だと思っていたのに。

聡は、少し強めのことを言っているだけだ。

本当は、離れるつもりなんて、ないに決まっている。

そう思い込みたい将に、聡はさらに切り込む。

「やるって決めたのは将でしょ。軽い気持ちかもしれないけど、一度返事をしたら、ずっと責任が発生するの。それが大人なの。甘えないで。

将が大人になるまで、あたし……」

「アキラ……、アキラは俺が子供だから、もう付き合えないっていうのかよ」

「……」

沈黙の向こうで聡が言いよどんでいる返事が、将にもわかりつつある。

そのせいで……将の全身を絶望がくるんでいく。空港の喧騒が他人事のように遠くなっていく。

現実世界が、ガラスで遮断されたように、将と離れていく。

それに抗うようにもう一度、確認する。

「ウソだろアキラ……、アキラは俺を見捨てたりしないだろ」

電話の向こうで深いため息が聞こえる。

聡の放つ一言一句を逃すまいと、将は携帯を耳に押し付ける。

「……見捨てたくない。だけど……」

救いの言葉らしきものが聞こえたそのときだ。後ろから将の肩に手が置かれた。

「時間よ」

振り返ると武藤が立っていた。

武藤が時間を告げる声は聡のところにも聞こえたらしい。

「行って……。将。仕事、頑張るのよ」

「アキラ……俺は」

なおも聡にすがろうとする将に、非情にも、切れた通話を示す音が響いた。

将の心は、あれ以来、闇に閉ざされたままなのだ。

「聡……」

美智子が、聡の肩に手を置いた。心配そうに眉を寄せている。

聡の顔は……、涙で濡れそぼっていた。目はとっくに真っ赤だ。

将と電話がつながった直後からずっと……、聡は涙を絶えず流していたのだ。

222◆幼なじみ1

「よ、おはよ！……冷えるねえ」

すでにテラスでロケハンをしていた篠塚は、将の姿を見つけると元気に声をかけた。

会釈をするのがせいいっぱいの将のかわりに、武藤が

「おはようございます。本当に……。天気、ビミョーですね」

と相槌を打つ。

武藤の言うとおり、夜明け前の空は厚い雲が立ち込めて、その下に広がる遥かなるパリごと、紫がかった濃いグレー一色に塗りつぶされているように見えた。

「予報は悪くなさそうなんだけどねえ」

ただ、テラスには強い風が吹き付けているから、雲が動いて日の出の瞬間の太陽がのぞくかもしれない、と篠塚は一縷の望みをかけていた。

「よく、休めた？」

篠塚が優しい調子で将に話し掛ける。

「ハイ……」

将は、ヘアメイクに髪をいじってもらいながら、風が肌にしみて目を細めた。

きのう、ベッドに倒れこんだ将は、シャワーも浴びずに、そのまま寝込んでしまった。

かろうじて、言われていた時間に携帯のアラームをセットしていたので、起きることは起きたのだが、コンディションは昨日とたいして変わりはなかった。

あわててシャワーを浴びたせいか、夜明けの空気の冷たさが将にはひとしおだった。

曇っているからそれほど冷えこんだわけもないのに、風が吹くたびに首筋がぞくぞくする感じがする。

だけど、そんなふうに肉体が感じることも、今の将には、どこか他人事のようだった。

「よっし。ポラ（※ポラロイド）とろうかな」

この、夜明けの一瞬を撮るのに、篠塚はデジカメではなく、フィルムを使う銀塩カメラを用意していた。

しかも大判フィルムの。

なんでも、緊張感が違うそうだ。

『僕のような年よりは、どうもデジタルはイケ好かなくてね。最近はそうも言ってられないけど、ここぞ、というときは、やっぱりこ

っちで撮りたいもんなのよ』

昨日、カンボジア料理店でうどんのようなライスヌードルの入った鍋に舌鼓を打ちながら、篠塚は笑顔で話した。

将は、篠塚のカメラの前のテラスのてすりに腰掛けた。

塗りつぶされたような空は、東の方から、水彩絵の具でのそれのように、だんだん濃淡が出てきた。

「将、普通にしてていいよ。考えないで」

そうは言われれば言われるほど、将は自分の『普通』とは何かと考えてしまう。

将とて、昨日から、それなりに『仕事を頑張っている』つもりだった。

あの電話の最後に……聡がそういったから、せめて。

だけど、だめなのだ。

まわりが自分に気を使っているのはわかる。盛り上げようとしてくれているのもわかる。

それに応えたい、と将は無理やり微笑んだ。

だけど……そういった偽りの表情に、篠塚は決してＯＫを出さなかった。

今の将も、篠塚からの厳しい眼力では『ダメ』なのだが、

まあ、ポラだから、と篠塚は無理やりシャッターを切った。

夜明けの撮影は難しい。

刻一刻と明るさが変わっていくから、適正な露出に合わせるのにカンのようなものが要る。

しかも今回は、太陽と、その逆光で人物、さらに太陽の下に照らされたパリ、と要素が多い。

それらが最大に美しい色合いと表情を見せる瞬間を、篠塚は狙いたかった。

「ふ……ん」

篠塚は、温め終わったポラをチラリと見た。

露出より、将の表情が気になっていた。が、もうそろそろ、一番いいときだ。

しかも、ちょうどパリの上すれすれの雲が横に裂けた。

上の雲はまだ濃い紫だが、下の雲はみるみるオレンジから金色に変わり始めた。

……まもなく、そこにご来光があるはず。

篠塚はファインダーを覗いた。

あいかわらず、将のオーラのなさはいかんともしがたい。

篠塚は、少しでも将の気分を盛り上げるために自ら口を開いた。

「しかしさ。将。不思議だと思わない？あの今昇ってる太陽は……東京では、真昼間の真上にあるんだぜ」

テラスの手すりに腰掛けた将は、思わず、太陽のほうを見る。

ちょうど、そのとき雲から顔を出した、赤い太陽は、将の顔に強い光線を照射した。

その強烈な光に目を細めながら、なおも太陽から視線をそらさずに、将は希望のように1つのことを思っていた。

――同じ太陽が、聡の上にある。

「よし！……いいぞ」

篠塚は小さく呟くと、立て続けにシャッターを切った。

サンジェルマン・アン・レーからの夜明けの写真は、まずまずのものが撮れたが、その後はやはりさっぱりだった。

それでも、引き続き『お城』で行われた、立て襟のスーツを着て、

髪を固めた貴公子風のカットは「演技をさせる」ことで何とかなったが、その後、パリに場所を移しての撮影はまるでダメだった。

将は篠塚から何度も

「どうした。将らしくないぞ」

とダメ出しをされたが、今の将にはいったい何が自分らしいのか、皆目見当がつかない。

――どうして、自分はここにいるんだろう。

――いったい、自分は何をしているんだろう。

……結局、思考はそこへたどりついてしまうのだ。

貴公子になりきる、というのは、なんとなくわかる。

TVドラマで演じた冤罪を着せられた不良少年というのも、だいたい想像できる。

だけど、将自身を演じる、というのは、一番の難題だ。自分は、いったい何なんだろう。

「だめだ。今日もダメだね」

篠塚は首を横に振って、カメラから離れた。今彼がいじっているのはデジタルカメラだ。

だが、デジタルですら撮る意味がないらしい。

「なんかね。カラッポなんだよ。抜け殻って感じ」

もう、武藤も何も言うことができないで、ただ下を向くしかない。

――これほど、ダメージを受けてしまうとは。

あきらかに武藤の計算外だった。

あのとき、空港で。

たぶん聡と電話で話していたのだろう将は、ひどく悲痛な顔をしていた。

逢引を邪魔されたことで、聡が何か不快に感じて、それを電話で将にぶちまけたのだろうか……というあたりに武藤は理由を考えていた。

聡との関係が悪化するなら、それは願ったりだ、と思っていた武藤だが、ここまで将のパワーが落ちてしまうとは……。

武藤は、何か手を打たなくてはと考え始めた。

「どうも……すいません」

現場のどんよりとしたムードの中、将は篠塚に謝った。

自分でもどうしたらいいか、わからない。将は謝るしかなかった。

しゃがんで機材を片付けていた篠塚は顔を上げた。

「謝るだけの誠意はあるんだ」

そして立ち上がる。

「じゃあさ。午後の撮影の代わりに、つきあってほしいところがあるんだけど」

と篠塚は将に提案した。

将は、篠塚の意図がわからなくて、目をしばたかせた。

「武藤さん、いいでしょ。将がこんなんじゃ話しになんないし」

武藤はため息をつきながら、承諾した。

午後、他のスタッフはオフにして、篠塚は将だけを連れて、タクシーに乗ってパリを南下していた。

モンパルナスタワーを右手に見ながら、さらに南下すると15区、将が幼い頃を過ごしたあたりだ。

それこそが、篠塚のリクエスト、将に付き合えと命令したのは、まさにそこだったのだ。

「僕、英語は大丈夫だからさ。将くんも簡単なフランス語会話だったらＯＫなんでしょ」

と篠塚は将をうながして、日が傾きかけた中、タクシーに乗った。

とはいっても、将がパリをあとにしたのは6歳である。

住んでいたところの住所などはまるで覚えていない。

ただ、よく将の面倒を見てくれたイザベラおばさんが住んでいたのが『ｒｕｅ　ＸＸＸＸＸ』だったことだけ覚えていた。

元外交官だった将の母・環は、将を産んだことで外交官を引退していたが、

夫についてパリに赴任してきてからは、知人の勧めもあって、フランスの絵本を日本語訳して日本に輸出する仕事に付いていた。

そのせいで将は3歳から保育園に預けられたのだが、保育園や幼稚園から迎えに来て、

母の仕事が終わるまで家で預かって面倒を見てくれたのがこのイザベラおばさんなのだ。

フランスでは、こんなふうに、子育てを終えた年配の婦人が小遣い稼ぎに、近所の働くお母さんたちのベビーシッター代わりをするケースが多い。

政府から資金援助が出ていることもあって、お母さんたちの負担も少ないのだ。

あの、幼稚園が一緒だったロマーヌは、ここでも一緒だった。

ただ……イザベラおばさんは、ロマーヌには本当のお婆ちゃんだったのと、

他の子のばあい、みんな夕方や遅くても夜にはお母さんかお父さんが迎えに来てくれるのに、ロマーヌだけはいつも誰も迎えにこない……というところが違っていた。

環が迎えに来て、駆け寄ろうとする将の手を引っ張って、

『ショー、帰らないで』と懇願した青い瞳を将は思い出した。

番地は覚えていなかったけれど、タクシーが『ｒｕｅ　ＸＸＸＸＸ』に差し掛かったとたん、将は懐かしさのあまり、タクシーの窓に張り付いた。

変わっていない。

ゆるい坂道を少し登れば……大きな、５月になると香りの強い白い花を付ける木がある。

花は、風がなくても、ボタン雪のように歩道にひらひらと落ちた。

将にとっては、ボタン雪のほうを、むしろ後で覚えたのだが。

ただ、雪と違って、花は道に落ちるとすぐに茶色く朽ちた。

『滑るから気をつけるのよ』

そこを通るとき、いつも声をかけた、環の声が将の脳裏にはっきりと蘇った。

そして、その木の向こうに、懐かしい建物が見えた。

レンガとモルタルを組み合わせた……日本の団地と比べてもなんの変哲もない5階建てのアパルトマンは、12年前と何も変わっていなかった。

「ここだよ。ぜんっぜん、変わってない」

タクシーを降りた将は、思わず呟いた。

「で、イザベラおばさんは、どの階段？」

篠塚はさっそくそこを訪ねるつもりらしい。

「真ん中だったと思うけれど……、今も住んでるかな」

将のほうが、心もとなく篠塚に向き直った。

「知るか、俺が。……とにかく行ってみよう。なに、引っ越してたら、そのときさ」

背の高い将の腰のあたりを押しだすように、篠塚は階段をのぼるよう将を急かした。

イザベラおばさんが住んでいたのは3階だったはず。

将は、祈るような気持ちで、チャイムを押した。

ブーという無骨な音が部屋の中に鳴るのが聞こえる。そんな音も変わらない。

あの音が鳴るたびに、楽しく遊びながらも、こんどは自分のお母さんかな?と振り返ったものだ。

しかし、音がなってもなんの反応もない。

閑静な住宅街である。鳥の鳴く声だけが静けさに響いた。

――いないんだろうか。

そう思いかけたとき。中からドタドタとドアに駆け寄ってくる音が聞こえた。

「誰?」

中から若い女の声がした。

将は何て答えていいか一瞬わからなくてとまどったが、

「日本から来ました鷹枝将です。ここはマダム・イザベラの部屋ですか?」

と思い切ってフランス語で言った。

ドアが、ガチャ、と開いた。青い瞳を見開いた若い女が将を見上げた。

「ショー……？」

将には、彼女がロマーヌだとすぐにわかった。

223◆幼なじみ2

聡は後悔していた。

将にとって大事な海外ロケの直前に、あんなことを宣言してしまったことを……。

彼に大きな動揺を与えてしまったのではないだろうか。

仕事に影響が出ていないだろうか……。

せめて励ましのメールでも送ろうとも思ったが、

「もう付き合えない」

と宣言した聡が、いったいどうやって励ますのだろうか。

現に……将が発って3日経つが、将からの連絡もメールも何もない。

3日間も連絡がないなどというのは極めて異例なことである。

将は、自分のあの宣言を受け入れたのだろうか……。

後悔と心配とを忘れたい聡はGWが明けて仕事に没頭した。

クラスマッチの練習に付き合い、部活動に顔を出し、進路の方向性が決まっていない生徒を呼び出して積極的に相談に乗る。

また、よりよい社会見学先を探すべく奔走し、

かつ中学の勉強すらもロクにできない生徒が大半を占める学校の実情と、文部科学省が定める高校の教育要項との折り合いをつけるべくカリキュラムに工夫を凝らす計画を立てる。

部屋で一人で、自分の心と向き合うのが恐いばかりに、聡は将の姿の見えない学校で、遅くまで残業をした。

……荒江高校の講師の給与は固定制なので、いくら残業をやっても、金銭的に聡が得することはなにもない（もちろん山梨の出張以来、聡の給料は就職当時より良くなっているが）。

それでもよかった。

GWが終わって2日目の今日も、長くなった日がすっかり暮れて、真っ暗になるまで聡は残業をした。

そして夜10時近い今、ようやく弁当屋で買ってきた弁当で夕食を済まし、疲れた体を湯船に浸していた。

気分が明るくなるという、高価なダマスクローズのエッセンシャルオイルをバスタブに垂らしたのに……、独りになるといやでも将のことが頭に蘇ってくる。

もしも……このまま、本当に将が離れてしまったら……。

聡は、思わずふるえる肩をさらに湯の中にもぐりこませた。

顔に近くなった水面から薔薇の香りが、鼻の中に濃厚に滑り込んでくる。

……いや。そもそも離れるのが前提で自分はそういうことを将に宣言したのだろう。

自分がいたら、将は甘えてしまう。

自分を理由に、小さくまとまることを考えてしまう。

それでは将のためにならない。

将が思い切り羽ばたいて、大空に放たれる日まで、聡は離れているべきなのだ……。

理屈ではわかっているのだが、おんなとしての聡は、ただ苦しい。

聡の目の前には、透明な湯に沈んだ自分の裸体が見えている。

黒々とした陰毛が、水底に生えた海藻のように湯の中で揺らめいているのが見える。

乳房は、浮上しようとして空気中ではありえない丸い形になっている。

全部将が愛撫したところだ。

あちこちに将の感触を記憶している肌は、早くも将に抱きしめれたくて、まるで鳥肌が立つように待機する神経が敏感になっているようだ。

こんなふうで、果たして将なしで、暮らせるだろうか。

また、将は、このまま永遠に自分から離れてしまうのではないだろうか。

聡は視界から自分の裸体を隠すように、湯船に鼻ぎりぎりまで沈んだ。

水面が反射して将を思い出させる自分の体を視界から追い出すことに成功し、聡は鼻から深いため息をついた。

ため息は水面に静かに波紋となって広がった。

そのとき、部屋でけたたましく携帯が鳴った。

聡はしばらく放っておいた。

将からの着信音ではない。

これが将だったら、濡れたまま、床をびちゃびちゃにしながら携帯に駆け寄るのだろうが。

……たかが、携帯が鳴っただけで、将を思い出してしまう自分。聡は湯の中で目を閉じた。

携帯はいったん鳴動をやめた。

だが、１分間隔をあけて再び鳴り出した。

――誰だろう。

さすがに緊急か、と聡は湯船から重い腰をあげた。

バスタオルであらかたの水分を取って、そのタオルを巻きつけながらバスルームの扉を開けて、ローテーブルの上に置いた携帯を手に取る。

発信番号は『非通知』と表示されている。

用心のために通話ボタンを押しても声を出さないでいると、

「古城先生ですか。Dプロの武藤です。お寛ぎのところ、申し訳ありません」

と声がした。

芸能プロで、将を担当するマネージャーだ。聡は、先日校長室で武藤と挨拶をした際に、

『何かあったときに、担任の先生と連絡を密にするために』

と武藤に頼まれて携帯の番号を教えていたのだ。

武藤の電話番号は登録していたはずなのだが、どうやら彼女は携帯を使わず、ロケ先のホテルかどこかから電話をかけているらしい。

今、話をしても大丈夫ですか？と問う武藤に、大丈夫、ととりあえず返事をして

「今、パリにいらっしゃるんですよね……」

と訊き返す。わざわざパリから国際電話をかけてくるなんて、将に何かあったんだろうか。

聡の脳裏に心配が顔を出す。

長くなるかも、と聡はいったんバスタオルを取り去ると、全裸の肩に携帯を挟んだまま、クロゼットを開けてバスローブを取り出す。

「ええ。今日は……折り入ってお願いがあってお電話しました」

バスローブを引っ掛けている聡は、武藤の深刻な声を聞いた。

「何でしょうか」

訊き返しながら聡は、心臓がぐん、と収縮するのを感じた。

出てきた若い女は、アパルトマンの鉄の扉に手をかけたまま、将を見上げた。

「ショー……本当に、あのショーなの？」

「うん。……ロマーヌだね」

「Ａｈ…ｑｕｅｌｌｅ　ｓｕｒｐｒｉｓｅ！」

ロマーヌはその利発そうな澄んだ青い瞳を見張って、口元を手で覆った。

将と篠塚は、玄関で靴を脱ぐとアパルトマンの中のリビングダイニングに通された。

将は昔からそうだったので特に違和感を感じなかったが、篠塚が

「へー、ここでは靴を脱ぐんだ」

と感嘆する。

海外経験は多いものの、一般家庭に入ったことがない篠塚は、欧米では家の中でも靴を履いたままだ、という先入観があったのだ。

確かに、日本の住宅のように、段差をつくった玄関、つまり靴を脱ぐスペースはない。

子供を預かる上に、フランス人としては比較的清潔好きなイザベラおばさんは、ドアから１ｍぐらいのところで靴を脱いで、家の中は裸足で暮らすようにしていた。

「イザベラは今、ちょうど夕食の買い物にいったところなのよ」

ロマーヌはコーヒーを淹れてくれながら話した。

「へえ。『オーシャン』に？」

将は近くにある、フランス版激安スーパーマーケットの名前を口に出した。

ここでだいたいの食材は手に入る。

将はそこの、大箱に山盛りになったいんげんマメや、日本のとあきらかに品種が違う巨大なキュウリを思い出した。

将の母・環はいんげんを手でわしづかみにしてビニールに入れるようなおおらかな性格だったが、

イザベラは、山盛りになったいんげんから一本一本気に入ったものを選りだして自分のビニールに入れる几帳面さがあったのを懐かしく思い出す。

「ウイ。セ『オーシャン』」

ロマーヌもその頃を思い出したのか、ニッコリと笑った。

アパルトマンの中は、日本の住宅と大差はない。リビングダイニングの一角にダイニングテーブルを置いて、そこで食事もお茶もする。

家具の配置も、将が幼稚園に行っていた頃と何も変わっていない。

将は部屋を見回した。

ただ、将が驚いたのは、そこが思ったよりずっと、狭かったことだ。

ここに預けられていた小さい頃は、もっと広い印象があった。

だけど……将が今いるこの部屋は、将が大悟と住んでいるマンションよりかなり狭い。

「変わってないでしょ」

ロマーヌがマグカップに淹れたコーヒーをテーブルに置きながら微笑んだ。

その腕は、蝋のように白い。

ロマーヌは細身の、体の線がぴったりと出る黒い七部袖のTシャツに、ローライズのジーンズというくだけた姿だ。

黒褐色の髪は、一見、後ろから見ると彼女を日本の少女のように見せているが、よく見るとゆるくウェイブがかかったその髪は、東洋人のそれよりとても細いのがわかる。

ロマーヌもフランス人の特徴ともいえる、白人の中では比較的フラットな顔立ちだった。

日本人にも親しみの持てるすっきりとした顔立ちだが、オークルを含んでいない肌の白さと細く尖った鼻梁に、やはり人種の違いが出ている。

たぶん無化粧のその顔は、多少大人びたとはいえ、あまり変わっていない。

「ショーのほうは……すごく、背が伸びたのね。びっくりしたわ」

そういうロマーヌはフランス人としてはやや小柄で、聡より少し小さいぐらいか。

「そちらは？」

ロマーヌは、自分もテーブルに付きながら、篠塚に微笑んだ。

「あー、ボンジュール、マドモワゼル・ロマーヌ」

「コンニチワ」

お互い、それぞれの相手の国の言葉で挨拶をすることで、その場の雰囲気がぐっと柔らかくなる。

「こちらは篠塚さん。彼は、とても有名な写真家なんだ」

とフランス語でロマーヌに紹介したあとで、今度は日本語で

「彼女はロマーヌ。小さい頃、仲が良かったんだ」

と篠塚に説明する。

「エスクヴゼット……ｈｉｓじゃない、えーと何だっけ？プティタミ？」

直訳すると、『あなたは、ｈｉｓ○×△□、恋人？』

という感じだが、ロマーヌはにっこりと笑って、

「ムッシュウ・シノヅカはフランス語が出来るの？」

と訊いた。篠塚は両手を挙げて降参する素振りを見せながら、

「Ｎｏｎ！エクスキュゼモワ、パルレヴーアングレ？」

つまり、英語ができるかをロマーヌに訊いた。

「イエース、オブコース！」

ロマーヌは英語ができるらしい。

「ショーは？英語は？」

将は思わず顔をしかめた。

「俺はまるでダメ。話すならフランス語のほうがマシ」

「あたしが、日本語がもっと出来ればいいんだけどね。アリガトウ、ゴメナサイ、あと……カワイイ」

そういって、ロマはハハっと笑った。大人びているけれどそんな笑顔は昔のロマーヌのままだ。

「で、ショーは何しにパリに来たの？」

とロマーヌはテーブルに肘をついて、身を乗り出した。

「えーと、何だろ。小さな仕事」

将は、『アルバイト』にあたるフランス語がわからなかったので、

代わりに『小さな仕事』と言ってみる。

「仕事？将は高校に行ってないの？」

ロマーヌが青い瞳を丸く開けた。

その青さはポスターなどで見かける南の海のような色で、白人の中でも際立って美しい青だ。

「行ってる、行ってるよ」

その様子に、篠塚が英語で割って入る。

「何？どうしたの？」

するとロマーヌは英語で、篠塚に、同じ質問をしたらしい。

「写真集の撮影の仕事で来てるんだ。彼は、新人の俳優なんだよ」

ロマーヌも篠塚も英語が母国語ではない人間なので、その会話は将にもなんとか理解できた。

「オゥ！ショーは俳優をしているの？」

篠塚の答えを聞いて、ロマーヌはさらに南の海の瞳を見開いた。

「え、だから『小さな仕事』で」

「えぇ？日本では俳優は小さな仕事なの？何てこと！」

224◆幼なじみ3

「ね、ロマーヌ、頼みがあるんだけど」

篠塚がロマーヌに英語で話し掛けた。

「あのさ。君たちが話してるところを撮影させてくれない？」

篠塚はジャケットのポケットから小さなデジカメを取り出した。

ここに来るのにもカメラをちゃんと用意して来ていたのだ。

英語でロマーヌにそう頼んだあと、

「今、ちょっといい顔してるからさ」

と日本語で将に囁く。

ロマーヌは

「ええっ！私が、写真集に載っちゃうの？パリでも買えるかしら」

とおどけながら快諾した。

そこで篠塚はまずはカメラ目線の二人の姿を撮影した。

「ＳＹＯの昔の彼女、スクープ……」

と小さくふざけながらシャッターを切る。

あとは二人で適当に話してて、と篠塚は席を離れて撮影に没頭する。

「ふふ。緊張しちゃうわ。ショー、お母さんは元気？」

将の母・環を知っているロマーヌはテーブルに肘をついたまま、髪をいじりながら訊いた。

そんな仕草もなんだか、パリジェンヌっぽい。

だが将は、なごやかな雰囲気を壊す事実を伝えないといけない。

「日本に帰って、すぐに死んだんだ」

できるだけ、もう過去のこと、というように話したつもりだったのに、ロマーヌは大きな青い眼をまた見開いた。

「なんてこと……。そう……。ヘンなこと訊いてごめんなさいね」

「もう１０年も前だから、気にしないで。……ところでロマは、リセ（高校）にいってるんだよね」

将は話題を変えようとした。

「そうそう。今、私は人生の一大難局に立たされているの」

ロマーヌはコミカルなほどに顔をしかめた。

将には『人生の』に続く言葉の意味はわからなかったが、その大げさな表情で、ロマーヌも話題を変えることに協力してくれているん

だとわかった。

ロマーヌも、幼い頃に父母が離婚し、母がいない寂しさについては身にしみているのだ。

「あと1ヶ月でバックが始まっちゃうから……」

とロマーヌは続けた。

「バック？ああ、バカロレアね」

それは将も聞いたことがある試験だ。

『バック』、つまりバカロレア試験はフランス全土の高校3年生に対して行われる、高校卒業資格認定試験だ。

その厳しさはコメディ映画『ザ・カンニング』でも揶揄されているが、

何しろこれに合格しないと『スーパーのレジ打ち以上の仕事に就けないぞ』と高校生（リセアン・リセエンヌ）は皆、教師から口を酸っぱくしてどやされるという。

教科はおよそ20種類にも及び、その中には哲学やmentionといわれる面接・口述試験なども含まれる。

また、良い大学に進むためにはこれで高得点を取得する必要がある。

つまり、フランス人の人生の鍵を握る試験なのである。

ロマーヌは頬杖をつくと、ため息をついた。

「理工学校に行きたいから、頑張らなくちゃ。彼氏にも会うのも我慢して毎日勉強なのよ」

彼氏、のところでチラリと将のほうに目をあげた。

「ロマ、彼氏いるんだ」

と、誘いに乗ってあげる。彼氏のことを話したいんだろうと思ったからだ。

それは図星だったらしく、ロマーヌは今までで一番愛くるしい笑顔で微笑んだ。

ちょっと頬がばら色に染まった気がする。

「うん。ショーには悪いけど。大学生なのよ」

そういいながら、ロマーヌは立ち上がると自分の部屋にいったん入って、写真立てごと1枚の写真を持ってきた。

そこにはロマーヌと恋人が肩を組んで写っていた。

「彼はアンドレ。ほら、ちょっとショーに似てるでしょ」

将はウソ、と思った。そこには某地方の地タレから俳優になったあの人に似ている男が写っていた。

背が高いところ以外で将との相似形を探すのは難しかった。

「や、優しそうじゃん」

将はお世辞の言葉を探した。

「優しそう、じゃなくて本当に優しいの」

ロマーヌは将のほうなど見ずに、写真に見入っていた。

「でもずっと会ってないの」

「何で？」

将はキョトンとした。

「やーね！勉強しなくちゃいけないからに決まってるじゃない」

ロマーヌがあまりにも早口だったので、将は目をパチパチとさせた。

「ああ」

ロマーヌは自分が早口すぎたのにきづいて

「あたしね、建築家になりたいの。そのためにはぜひ理工学校に入りたいんだけど、バックで高得点を取らないと、受験資格も与えられないの」

とゆっくり話す。

「彼に会ったら、虜になってしまって勉強が手に付かなくなっちゃ

うでしょ。だから彼と会うのを我慢してるの。……今、私の人生で一番大事なときだから」

ロマーヌは頤（おとがい）を傾けて、写真の中の彼に見入った。

「会えばいいじゃん？アンドレに」

あまりにもロマーヌがせつない顔をしていたので、将は思わず口走ってしまう。

「ダメよ！」

ロマーヌはキッと将を睨んだ。

「今は人生で大事なときだもん！」

「会いたいときは会うのが自然なんじゃないの？」

そういった将の心には、はっきりと聡が浮かんでいた。

「試験より、彼といる方が大事なんじゃないの？彼がいれば人生なんてどうにでもなるんじゃないの？」

と言いながらも、将はその言葉が、あまりにも現実離れして甘いことに気づいていた。

そして聡といるとき、そんな風に思っていた自分の……甘さにようやく気づく。

「ショー、何いってんの？彼とは試験が終われば会えるけど、試験

のやり直しは……人生のやり直しは利かないのよ」

ロマーヌは少し軽蔑するように言い放った。

ロマーヌの口調に気づいた将は、言い方を変えてみる。

「アンドレだって寂しがってるんじゃない？」

「ううん。……アンドレだってわかってる」

ロマーヌは再び視線を写真のほうに落としながら首を横に振った。

「それに……アンドレのせいで、私が試験でひどい成績を取ったら……。理工学校に行けなかったら、きっと彼は自分のせいだ、って苦しむと思う」

将はドキッとした。

聡が言っていた言葉と重なる。

「彼は、私の人生を理解してくれてるから……。今が人生で一番大事なときだって、彼が一番よく知ってるから……彼のためにも頑張らないといけないの」

ロマーヌは何度となく『人生（　ラ・ヴィー　）』という単語を使う。

それを発音するとき、きついほどに口角を横に広げる。それはロマーヌの決意の表れのようだった。

将は考え込んだ。

同い年のロマーヌが、ここまで自分の将来を見据えている。

そのために、一時的に恋人に会えないのも、構わないという。

『今が人生で一番大事なとき』

というのは聡も……よく言っていた。

聡のためだったら、人生なんてどうでもいい。

そんな考えは甘いとどこかで自覚しつつ、いつも聡と一緒にいたい将はうそぶいていたのかもしれない。

だけど、自分は建築家になりたいロマーヌのようになりたいものがあるわけじゃない。

いや、だからこそ。

教師の聡は教壇の上でよく言っていた。

『就職は、スタートが自由な椅子とりゲームのようなものだ』と。

早く目標を定めてダッシュをした者が、より夢を叶える確率が高くなると。

『将来の目標を決めていない人は、いろいろと経験を増やして、早く自分がなりたいものを見つけるために、人の数倍は行動してください。

なんにもなりたいものがないから、といってダラーッとしてたら、結局、面白くも給料も高くない仕事をやるハメになる確率が高まりますよ』。

将は教壇の上にいる聡に見とれながら、聡と一緒だったら『面白くない仕事』でもかまわない、とすら思っていた。

でも……そんなふうに『面白くない仕事』についた将を見たならば、聡はやはり、自分のせいだ、と苦しむのだろうか。

「お、いい顔」

気がつくと、篠塚が将の近くでカメラを構えていた。

「もっと悩め。若者たち」

とおどける。

「ま、一生あえないわけじゃないし。あと2ヶ月。辛抱すれば彼と二人でヴァカンスだもん」

ロマーヌは伸びをするように腕をぐーん、と上に伸ばした。

そして、元の体勢に戻ると、

「ショーは彼女いるの？いるんでしょ」

と青い眼をくるっとさせて、こっちに身を乗り出してきた。

瞳の色にあわせたのであろう、耳のピアスが髪の下でキラリと光った。

「うん……」

将はうなづいた。

「どんな人？」

ロマーヌの問いに『先生』と答えようとも思ったが、さっきの話から、少し気恥ずかしい。

それに、篠塚もいる。

答える代わりに将は携帯電話をポケットから取り出すと、待ち受け画面を見せた。

「へえ……。『カワイイ』」

聡の写真を見たロマーヌは、日本語で『カワイイ』と将に向かって微笑みかけた。

「何て名前？」

「アキラ」

ロマーヌはアキラ、アキラと何度か繰り返した。

まさか後に、このロマーヌと聡が関わりあいを持つことになるなど、そこにいた誰も想像しえなかった……。

225◆自分の道

「真剣に何の話してたの？」

タクシーの中で、篠塚が将に訊いた。

篠塚はフランス語がほとんどできないので、将とロマーヌの会話が理解できていなかったのだ。

「いろいろ……。将来のこととか」

将は窓の外の暮れていくパリの街に目をやりながら答えた。

今の時期のパリは、暮れはじめてからが長い。

長い夕暮れは夜の8時すぎまで続くのだ。

「そう。かなり勉強になったみたいだね」

「ハイ」

将は素直に答えた。

彼氏の話をする愛くるしいロマーヌは、一方で自分の人生もまじめに考えていた。

人生で一番大事な時期だから、彼に会うのも我慢できるという。

もし、自分が失敗したら、彼の方が悲しむだろう……。

そんなロマーヌの言葉に将は聡とのことを考えずにはおれない。

将とはもう付き合えない、ただの教師と生徒に戻るべきだ、といった聡を将はひどい、と思った。

あんなに愛し合っていたのに、どうして急にそんな残酷なことが言えるのだろう、と恨みかけさえした。

だけど。今ならわかる。

聡は、将のためを……将の人生を思ってあんなことを言ったのだ。

それは

『あたしのために、何でも捨てちゃう将が心配なの』

という言葉にも表れている。

『アンドレってばね。毎日メールで、今日は何の勉強をしたか、ってチェックを入れるのよ……おかげでサボれないわ』

ロマーヌはあれからさらに嬉しそうに付け加えた。

『あのさ。バックを控えた人はみんな、恋人と会うのを我慢してるの？』

将は訊いてみた。人生の局面と恋は両立できないのか、と思ったのだ。

『ううん。会ってる人もいるよ。我慢できないんでしょうね』

ロマーヌはうっすらと笑った。

それは、自分のことかもしれない、と将は思った。

『でもね。アンドレは違うの。彼は本当に私のことを考えてくれてるから……。

だいたいバックが終わるまで会うのを控えよう、って提案したのはアンドレのほうなの。彼自身すごくバックで苦労したらしいから……』

もし彼が、自分のことしか考えないのだったら、ロマーヌの試験のことなど考えずに、毎日のようにデートしてるはずだ、とロマーヌは熱い目で語った。

そのとき将を世界と隔てていた硬いガラスにひびが入り、それはあっさりと瓦解した。

そこから温かいものがなだれこんできて、将の心はそれに浸された。

わかっていたはずなのに。

わかろうとしなかった、それに耳を塞ごうとしていた甘えた自分。

ぬくぬくとした、二人の時間を守ろうと、ただそれだけに必死になっていた。

だけど、聡は。

もっと先を……今の将だけでなく、将の可能性を含めて将を大事に思っていてくれたのだ。

将が見つめるパリの空に、聡の顔が浮かぶ。ベソをかいた顔。

8歳年上とは思えない泣き虫の聡。二人のときの、甘えん坊な聡。

しかし、彼女は二人の刹那だけでなく、遠くを見据えていたのだ。

見捨てられたのではなく、もっと深い愛情に包まれていたのだ……。

――自分は、聡のために、今、何ができるだろう。

西の空を眺める将の瞳が、澄んだ空の色を映している。

今日の宿は、パリ市街にあるプチホテル・Mだ。

ここに撮影も兼ねて2泊することになっている。

クラシックなしつらえの部屋と、モダンなしつらえの部屋の2通りがあり、将はモダンな部屋を割り当てられている。

モノトーンで統一された部屋に入った将は、昨日とは違った気持ちで、ベッドに身を投げ出した。

昨日はただ重かった体だが、今日はその重みが『生きている』という実感を伴っている。

何かをしなくては。そんなパワーが重みに転化しているのかもしれない。

将は仰向けのまま深呼吸をすると時計を見た。まだ19時になったところで、空は明るい。

このあと、近くのレストランにリヨン料理を食べに行くことになっている。

軽い空腹を感じて、その空腹感が久方ぶりだったことを将は思い出した。

この3日間、空腹感も食べたものも、何も他人事だったのだ……。

将は今日の昼食べた、ブルターニュ風のクレープを思い出した。

目玉焼きとソーセージ、チーズを、そば粉入りの甘くない生地で包むように畳んである。

その味を今ごろ、舌の上に再現する。子供の頃に何度か食べた懐かしい味だ。

シードルも日本では飲めない、濃いものだ。

空腹の将が、食べ物のことを思って時間をつぶしていると、ベッド近くにある電話が鳴った。

武藤だろうか。

夕食に出発するというのだったら嬉しい……将はベッドの上を這って電話に出た。

フランス語だった。

「ムッシュウ・タカエダに日本のマダム・コジョーから電話です」

リラックスしていた将は、フランス語を理解するのに1拍、マダム・コジョーが誰かを判別するのに1拍ほどの時間がかかった。

返事もしないうちに、

「将……」

とどんな音楽よりも聞きたかった声が受話器から聞こえてきた。

「アキラ！」

将は思わず飛び起きて、ベッドの上で正座をした。

「将……、元気？」

「う、うん。元気、だよ。って……アキラ、今そっち何時？」

「２時すぎ……」

将は急な聡からの電話に、何を話せばいいのかわからない。

地球を１／３回転して……ユーラシア大陸を越えて、宇宙の衛星を中継して、届いた聡の声。

あまりにも嬉しすぎて、将は胸が苦しく感じた。

聡も、武藤から教えられた番号を押しているときから、鼓動が乱れていた。

交換台が出て、待っている間も……ずっと心臓は痛いほどに乱打していた。

そしてついに将が出たとき。それは動きを止めてしまうのかと思うほどに、キュッと収縮した。

さっき、日本時間、２２時すぎ。

わざわざ国際電話をかけてきてまで、武藤が聡に依頼したことが、まさにこれだった。

『実は……将が、元気がなくて、撮影が難航しているんです』

『……ハイ』

冷静に相槌を打ちながら聡は、ああ、やっぱり、と額に手をあてた。

やはり、自分が出発前にあんなことを言ってしまったせいで、将に影響を及ぼしてしまった。聡は後悔する。

『それで、古城先生に、彼を励ましていただきたいんです。彼は……将は、古城先生をとても慕っていると聞きました。古城先生にお電話で励ましていただければ、将も少しは元気がでるんじゃないかと思って……』

武藤は『古城先生を慕っている』という言葉を使った。

あくまでも、聡が将の恋人だと知っているとは言わなかった。

だけど、聡にはわかっていた。

武藤は、自分と将の関係を見抜いていると。だからこうやって、わざわざ電話をかけてくるのだ。

それはいいとして……、付き合えない、と宣言した将をどうやってなぐさめるのだろうか。

『私に……、鷹枝くんを励ませるでしょうか』

『ええ。古城先生にしか、彼を元気付けられる方はいないんです。どうか、ぜひお願いします、古城先生』

武藤の真摯な熱意は、国際電話を通しても聡に十分に伝わった。

だから、聡は引き受けてしまったのだが……こうして、将と実際に電話が繋がっても、何を話していいのかわからない。

どうやって彼を励ませばいいんだろう。

『やっぱり付き合える』といえばいいんだろうか。

いっそ、そう言って、自分の言葉を無効にしてしまいたい、元通りに将と一緒にいたい……そんな気持ちも聡の中には、依然存在するのだ。

「将……」

こうして名前を呼ぶことしかできない。

国際電話料金が高いのは知っているけれど、こうやって無為な時間が流れていくのを、聡にはどうすることもできない。

「……アキラ。俺さ」

将の声が無為な回線を有為に変える。

「アキラの気持ち、わかったから」

思わず、携帯を握る聡の目から涙がこぼれ落ちた。

「俺、とんでもなく子供だったよな」

静かな調子の将の声。

「目が覚めたよ、俺」

「しょう」

将は、遥か遠くの聡がすすりあげるのを聞いた。

「アキラ。俺、アキラの気持ちに、絶対に応える」

将は、自分で自分の考えを1つ1つ確かめるように言葉をつむぎだす。

「俺のやりたいことが、芸能界なのかはわからないけど……。でも、とりあえず頑張ってみる。

そして、アキラを心配させないでいいような、大人に1日も早くなる」

涙は、もはや、とめどなく聡の頬を流れ続けている。

「しょう……」

「誰も文句を言えないほどの実力をつける。何年かかっても。……そしたら、アキラを迎えに行くから、絶対に」

何をすればいいのか、何をするべきなのかは、あいかわらず将にはわからない。

だけど、聡のために、自分をせいいっぱい生きていく。

将には、未来へ続く自分の道が見える気がした。

「アキラ、愛してる」

将は、何度か言った、この言葉に、今までにないほどの想いを込めた。

「将、あたしも。……あたしもよ。将が大人になるのを……待ってる。ずっと待ってるから」

今は、流れる涙と一緒にほとばしる気持ちを将に伝えたい。聡は思わずそれを声にしていた。

いつか大人になった将は、自分を忘れるかもしれない。

だから、愛の言葉を伝えるのはこれが最後になるのかもしれない。

そんな哀しい予感を……聡は抱えている。

「将。私は、将だけを愛してる。ずっと……、ずっとよ」

「アキラ」

ついに将の目からも涙がこぼれた。

聡の言葉に、何かの予感が感じられて、それが無意識に将の感情を動かしたのだ。

「将……。頑張って。ずっと見守っているから……」

「アキラ……、頑張る。頑張るから、俺」

このままずっと地球の1／3の距離を結ぶ回線を離したくなかったけれど、明日も学校だから、と聡のほうで電話を切った。

聡は、電話を切ってからも、ずっと涙が止まらなくて……おかげで、翌朝、瞼がひどく腫れてしまった。

将のほうは、少しだけ涙が残ったが、新しく勇気が湧いてくるのを感じていた。

……後年、将はこのときを、自分を変えたターニングポイントのうち、重要な1つとして振り返ることになる。

二人は、新しい局面を迎えようとしていた。

226◆売人稼業

深夜の埠頭を大悟は走っていた。追っ手から逃れるように。

東京の夜は、こんな夜更けでもほんのり薄明るく、小山のように積まれたコンテナが黒い影を空に映し出している。

その中を懸命に走る大悟のあとを2人の男が追う。

コンテナと倉庫が連なる埠頭は静まり返って、追っ手の靴音だけが響く。

大悟のそれは……子供の頃から生きるための犯罪に長けた大悟の足音は、走っていてもあまり響かない。

音を立てずに出来るだけ早く走る術を知らず知らずのうちに体得していたのだ。

大悟は、倉庫と倉庫の間の狭い通路に身を滑り込ませる。

ふだん人が通らないそこには、何だか知らないが膝の上までの背丈の雑草が通せんぼをしている。

こんな環境の悪いところでも、雑草は生えるのだ。

しぶというか、けなげというか。

一瞬、芽生えた感情ごとそれを踏んづけて、大悟はそこを素早く通り抜ける。

通り抜けたところに錆びた扉が開けっ放しになっている倉庫があった。

大悟は持ち前の嗅覚でそこが安全であることを瞬時で判断すると、中に入る。

そして素早く携帯であたりを照らすと、ドラム缶の陰に身を潜め、携帯を畳んであたりを暗闇に戻した。

静けさと塗りつぶしたような闇の中、鈍く響く心臓に『静まれ、静まれ』と囁きかける。

ここは、思ったより湾に近いらしい。

落ち着きつつある大悟に、べったりとした油が混じった、腐ったような潮の匂いが忍び寄ってきた。

「いたか！？」

大悟のいる倉庫の裏のほうから、男のざらついた声が聞こえて、大悟は身構えた。

「……ダメだ、見失った」

若干、若い声。へばっているのか、言葉の前後につらそうな息が混じる。

「……クソっ！」

という声と共に、ガン！という大きな音がした。それは大悟のいる倉庫にも小さくこだました。

たぶん、追っ手のうちの1人がそこらにあったドラム缶か何かを蹴ったのだろう。

しかし、それっきり、男達の声はしなくなった。

諦めて、帰ってくれたらしい。

だが、大悟は用心して、小1時間ほどはそこに身を潜めていた。

ようやく、倉庫から出た大悟は、目の前が湾であることに気づいた。

真っ暗だった倉庫の中に比べると、外は昼間のように明るい。

重油を流したような黒いよどんだ海の上に、東京にしては珍しくきれいな星空が広がっていた。

大悟は、それを眺めながら、ほっとため息をつくと、煙草を取り出した。

本当は煙草より、水がほしい。走り回ったおかげで喉がカラカラだ。

だが、大悟の火をつける仕草に一切のムダはない。煙を吐き出すと、目を細める。

そして……ウェストポーチに入れた、札を取り出して数える。

6万あった。

――まずまずか。

そしてウェストポーチの中に残っている白い薬を取り出す。

白いパラフィンペーパーに包まれている『売れ残り』はあと1つだった。

それをさばいてしまおうとしているときに、アイツらに見つかったのだ……。

この埠頭地区にある倉庫の1つを使って、ダンスパーティがあった。

広い倉庫を使ってのダンスパーティは、とある大学サークルが主催したものだ。

倉庫といいつつ、音響設備はいいものを使っていたし、ＤＪもプロを呼んでいる。セミプロのダンサー達もパーティの盛り上がりに華を添えていた。

今から2時間ほど前、大悟はそこにもぐりこんで、瑞樹が残していったあの薬を売っていたのだ。

脱法ドラッグでもない……おそらく本物の覚醒剤。

ＧＷ前のある日、大悟は思いついて、瑞樹が残したセロファンに入った薬を出した。

それは将に見つからないように、厳重に隠してあった。

セロファンに入った微量の粉末を、注意深くさらに半分にして、若干の粉砂糖を混ぜて嵩増しをする。

それをパラフィンペーパーで丁寧に包みなおして、試しに3つだけ持ってパーティに潜入した。

大悟が1つ1万と値をつけたそれは、あっという間に売れた。

そこに15分もいる必要がなかったほどだ。

それに味をしめて、GWが始まった頃から、パーティにもぐりこんでは、おとついは5つ、今日は6つと売り始めたのだ。

さっき大悟を追っていた男達は、別の……おそらく暴力団が関与しているプロの売人だろう。

まるでナンパするような何気なさで、化粧の濃い、頭の弱そうな、でもお金を持ってそうな女の子に『商談』を持ちかけていた大悟は、後ろから肩をつかまれた。

「何してる」

一見、どこにでもいる普通の男だった。

ジャケットを粋に着こなしているが……そこにいる一般の客と微妙に年齢がずれているのと、その目がいやに鋭いのを大悟は瞬時に察知した。

察知したのと同時に脱兎のごとく逃げ出して……今、ことなきを得ている。

もし捕まっていたら。

――指を詰めるぐらいじゃ済まないかな。

最悪、この埠頭に浮かんでいるかもしれない。

大悟は、目の前の黒い波に、両手の指をかざした。

今も１０本揃っている指は……将のおかげだともいえる。

大悟は煙草を海に投げ捨てた。

ちなみに将にメールで伝えた、履歴書に西嶋さんにハンをもらってバイトに行っている、というのはまったくのウソだ。

大悟はバカらしくなったのだ。

大悟が、アルバイトで１日必死で働いても１万にもならない。

それが、こんな薬が１０分ほどで３万にも化ける。

瑞樹はまったくいいものを残してくれたものだ、と思う反面、高価なこんなものを買ってまで楽しむやつっていったいどういう心境なんだろうか、とも思う。

思えば、瑞樹はこの薬に激しく依存していた。

あんなふうに隠し持っていたのも、大悟のように他人に売るためではなく、自分に使うためだろう。

おそらく、瑞樹は……この薬と一緒に入っていた、下着や玩具を使って、過酷な稼業をしていたのだ。

そういう仕事の内容について、大悟も聞いたことがある。

極めてプライベートなパーティなどに呼ばれて、『奴隷』や『家畜』として弄ばれて、引き換えに高額な謝礼を得る……おそらく瑞樹はそれに近いことをしていたのは間違いない。

そんな仕事をさせられるのは、たいてい借金漬けになった女たちだ。

しかし、瑞樹はそんな仕事をするほどにまで、あの薬に魅せられていたのだ。

瑞樹はいつから、またどんなきっかけで、この薬に頼るようになったんだろうか。

大悟は売れ残った1つを手に乗せて見つめた。

ふいに……自分もやってみようか、という気が起きる。

やってみれば……何もかも忘れられるんだろうか。

パラフィン紙に覆われながらも、その白い悪魔は、大悟をしきりに誘い始めた。

と、そのとき、湾から油臭い風が吹いてきて、掌の上の包みを吹き飛ばした。

「あっ！」

大悟はまるで万札が飛ばされたように、包みが飛ばされたほうに駆け寄る。

幸い、包みは、大悟より2歩後ろのひび割れた埠頭のアスファルトの上に落ちていた。

――ふん。こんなもの。

大悟は、その包みを、何事もなかったように、もう一度ウェストポーチにしまうと、湾に背を向けて歩き出した。

大悟の背中の空は、わずかに白み始めている。

227◆忍び寄る……1

ピンポーン。

「ん……」

大悟は、目を閉じたまま、布団の上で身をよじった。

あれから……明け方にマンションに帰ってきた大悟は、着替えもせずに万年床の上に倒れこんだのだ。

チャイムは再び鳴った。軽く戸も叩かれる。男性の声で

「郵便でーす」

と聞こえて大悟はようやく目をあけた。

瞼が粘りつくようにまだ重く、思わず眉根が寄る。

――なんで郵便がここまで来るんだよ。

と心で悪態をつきながらも、大悟は起き上がると、だるい体をひきずるように玄関へ向かう。

もうずいぶん陽が高いようだ。

カーテンをあけっぱなしにしていたリビングの窓から、真昼のバルコニーの照り返しが入ってくる。

「ハイ」

玄関に立った大悟は、投げるように返事をしながら無意識に頭を掻く。

シャワーを浴びなかったので少し頭がむずむずする。

「鷹枝さんに郵便ですが、郵便受けに入らなかったので持って来ました」

とドアの外から聞こえる。どうやら、本当に郵便局員らしい。

大悟はドアを開けると、その大きな封筒を受け取った。

封筒は大きいだけでなく、相当な厚みがあって、それで郵便受けに入らなかったらしい。

「なんだこりゃ」

と独り言をつぶやきながら大悟は、そのカラフルな封筒に、先日将と一緒にモデルのバイトをした雑誌のロゴがついているのを見つける。

『見本誌在中』とある。

手触りから自分の分も入っているのだと判断した大悟は、少し迷って封を開ける。

中に、フリー編集兼ライターの美智子からの手書きメッセージが入っていた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

将くん、大悟くん

先日はお世話になりました。

記事、めっちゃいい出来です。二人ともカッコイイ。

見本誌を1冊ずつと、読プレのために作ったオリジナルTシャツを1着ずつ入れておきます。

グラフィックデザイナーの××さんの作品なので、

私は結構気に入ってるんですけど……。

じゃあ、また何かあったらよろしくお願いします

幸田美智子

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

大悟は、ビニールに入っていたそのTシャツを広げてみた。

白いプレーンなTシャツの中に、大胆かつ粋に大きな柄がデザイン

され、小さく雑誌のロゴが入っている。

2着あるが、お揃いじゃなく違う柄を入れてくるところが、お洒落な美智子らしい。

あまり金がない大悟にはかなり嬉しいプレゼントだ。

あと3週間近く帰ってこない将を待つ必要もなかろう、と大悟は自分の気に入った方を遠慮なくいただくことにした。

そのまま、雑誌をパラパラとめくる。

『街のベストジーニスト２００６上半期』

という大きなタイトルはすぐに見つかり、大悟はそこを開いた。

次の瞬間、目を見開いた。

その、企画のタイトルページ見開きの左１ページ丸ごとの大きさで、将の写真が使われていたからだ。

フ、と鼻から息をもらして、知らず頤を傾けて斜め下に雑誌を見下した。

大悟は、次の見開きの上のほうに１／４Ｐの大きさで掲載されていた。

いちおうその見開きの中では一番大きいメイン扱いだ。

あのとき一緒だった、他のモデルたちも同じ大きさで、それぞれ見

開きのメイン扱いになっている。

大悟も一般の読者に比べると、格段に大きい扱いだが、それにしても将の扱いは別格だ。

将のところだけ、まるですでに人気があるタレントが出現したようだ。

ヘアメイクにスタイリストがついたせいもあり、普段の将より数倍もイケている。

大悟も、まるで自分ではないような出来栄えだが、将のイケ方と比べると地味なように感じられた。

「ケっ」

大悟は雑誌をソファの上に放り投げた。投げたあとで、ちょっと恥かしくなる。

――まるで将に嫉妬しているみたいじゃないか。

――将は、いまや、本物のタレントなんだぜ。

そう自分に言い聞かせる。

親友に対して、みっともない嫉妬はしたくない。そんなプライドはまだ大悟にもあった。

だがその直後に

――殺人者が、タレントか。

というフレーズが心に浮かび、大悟はギョッとした。

――何を考えているんだ。

大悟は頭をブンっと振るうと、大きく伸びをした。

なんか、ムカついているのを、汗ごと流してさっぱりしようと、大悟はバスルームへ入る。

トランクスとTシャツ姿でバスルームから出てきた大悟は、頭を拭きながら、冷蔵庫をあける。

今日も五月晴れのせいか、マンションの部屋はかなり気温が上昇している。

大悟は何の迷いもなく缶ビールを取り出すと、そのリップを立てる。

真昼の明るさも、もはや彼の飲酒になんの歯止めにもならない。

缶ビールは喉元で冷たく、腹に意外に熱く染みた……それで大悟は自分の空腹に気づく。

あいにく冷凍しといた残り物も尽きているようだ。

外に買いに行くのも面倒なので、大悟はカップ麺で済ますことにした。

ビールを飲みつつカップ麺のフィルムを破いて、お湯を火にかける。

ちょうどそのとき、部屋で携帯が鳴った。

あわてて、部屋に携帯を取りに行き、台所に戻りながら表示を見る。

『西嶋』と表示されていた。新しい保護者である。

「ハイ」

大悟はビールを一気にあけてしまうと、通話ボタンを押した。

「あ、大悟くん。西嶋の家内です……元気？」

「ハイ」

保護者が何の用だろう、と大悟はいぶかりながらも、いちおうハキハキと返事をしておく。

本当は「そちらはいかがでしょうか」と訊くべきなのだろうが、節子だけでなく社長の隆弘のことまで訊かないといけないだろう。

いちいちそれをするのが面倒くさくて、大悟は自分の返事を短くしたきり黙った。

しかし節子は、そんなことに構わないように本題に入った。

「大悟くん、今日、お誕生日よね」

「ハ……」

言われて初めて気づいた。今日5月8日は大悟の誕生日だった。

「18歳になったのよね、おめでとう」

大悟は、一瞬言葉が出なかった。

誰かに誕生日おめでとう、と声をかけてもらうのは何年ぶりだろうか。

「……ありがとうございます」

かろうじて、口ごもるようにだけど、返礼が出来た。

「それでね。たいしたものじゃないんだけど、プレゼントを用意してるの。

もしよかったら、今日、うちに夕食を食べに来ない？主人も待ってるから」

「ハ……」

大悟は迷った。

将がらみの保護者なぞ、できるだけ頼りたくない。

そう思うのは、親友として将と対等な立場でありたい、大悟のプラ

イドである。

だけど……すぐに断ってしまうには……、かの人たちの温かさは勿体なさすぎた。

「あくまでも予定がなかったら、だけど。今日は仕事は遅いの？」

節子はてっきり大悟は仕事中だと思っているらしい。

「い、いいえ」

仕事をしているのではない、という意味の返事をするつもりで、大悟はつい、予定がないという意味にもとれる否定をしてしまった。

「じゃあ、ちょうどよかったわ。ぜひ来て。ね？」

大悟はとうとう断る言葉を見つけられないままに、電話を切ることになってしまった。

気がつくと、お湯がシュンシュン沸騰していた。

それをカップに注いでしまうと、ソファーの前のテーブルにもっていきながらリモコンでテレビを付けた。

ちょうど、昼のニュースの時間らしい。

『次のニュースです。愛知県〇〇市の〇〇埠頭で車が沈んでいるのが発見され、中から４人が遺体で発見されました……』

あくまでも麺が出来るまでの暇潰しなので、画面に目をやっていて

も、内容は頭に入っていない。

大悟は、バラエティに変えることもなく、そのままの画面にして、麺ができるのを待つ。

『４人は死後１週間程度が経っており……』

大悟はそれを耳の端でとらえながら、１週間も経ってるんじゃ、さぞひどい姿だろうな、と想像した。

中学時代に一度、将と一緒に『カオリさん』の部屋のパソコンでグロ画像を見てしまったことがあるのだ。

だがそれへの想像くらいで、目の前のカップ麺への食欲がなくなることはない。

『車のナンバーから、〇〇市在住の××さん夫婦とその孫の△△ちゃん……の４人と見られています』

聞き流していた大悟は、〇〇市在住の××さん夫婦、のところでふと目をあげた。

脳が、記憶しているデータとの一致を告げて、大悟はあっと声をあげた。

鑑別所を出た大悟が預けられていた遠い親戚……つまり、大悟の前の保護者だったからである。

228◆手

「さあさあ、たくさんおあがり。遠慮しないでいいんだよ」

節子は蛍光灯で照らされたダイニングテーブルの上に、ちらし寿司を並べた。

上に切り紙のように散らされたマグロのヅケや酢でメたコハダの身、いくら、薄焼き玉子にさやえんどうが彩りを添えている。

他にも鶏の唐揚げやマカロニサラダなどが次々に並べられる。

「口にあえばだがな」

とちゃぶ台で一服していた隆弘も笑いながら立ち上がってダイニングにやってくる。

「お。花なんか、飾るのは何年ぶりだね」

テーブルの上のスイートピーの花を目にとめて、隆弘がおどける。

「大悟くん、そんなところに突っ立ってないで、座りなさい。……ホラ」

「ハイ」

大悟は、西嶋夫妻のあまりの歓待ぶりに、テーブルわきでぼけっと突っ立っていたのだ。

「今日は、呑みなさい。無礼講だ」

やっと席についた大悟のコップに、隆弘は有無をいわさず、ビールを注いだ。

「あ、ありがとうございます」

大悟はおずおずとコップに手を添える。

最後に、筍とワカメの吸い物を並べ終わって、節子も席について

「じゃあ、大悟くん、誕生日おめでとう！……乾杯」

と隆弘が音頭を取って3人はコップを触れ合わせた。

「さあ、大悟くん。いっぱい食べてね」

「ハイ」

料理の花畑を最初に崩す権利を与えられて少しドキドキしながら、まずはちらし寿司を皿に取る。

こんな風に誕生日に、『ごちそう』をつくってもらうなんて、何年ぶりだろうか。

中学のときに、カオリさんが羽振りよくフランス料理を奢ってくれたことはある。

そういえばキャビアやフォアグラなんてものはあのとき初めて食べたがそんなに旨いとは思わなかった。

しかし……手作りの料理で祝ってもらうのは、もしかして母が出て行って以来だからもう１０年以上ぶり、ということになる。

どんな料理をつくってもらったのかも、もはや記憶にない。

「どう？」

節子が大悟の顔をのぞきこむように微笑んだので大悟はあわてて、口にしたちらし寿司のほうに意識を集中した。

それは、甘めの酢メシに、甘い薄焼き玉子、そしてヅケになって醤油味のマグロが、家庭的な甘じょっぱさをつくりだしていた。

「美味しいです」

大悟は微笑み返した。

本当は酢メシはもう少しさっぱりしていてもよかったが、自分のためにわざわざ作ってくれた料理、というだけですでに美味しかったのだ。

「……よかったわぁ。ちらし寿司なんて久しぶりだから料理の本ひっくり返しちゃったのよ。よかったら、こっちの唐揚げも食べて。これは自信作なの」

と骨付きの唐揚げを勧める節子に

「お前、寿司メシちょっと甘いぞ。これ、いなり寿司の寿司メシだろ」

隆弘が文句をいう。酒飲みには少し甘い味だったのだろう。

「あらいいじゃない。おんなじじゃないの？」

節子は言い返しながら、ビールをあおった。大悟は、瓶を手にとった。

「……あら。ありがとう」

大悟にビールを注いでもらって、節子はにっこり微笑んだ。

「……しかし、君は、礼儀正しいな」

そんな大悟を見て、隆弘は思わず声をあげる。

「親御さんはさぞかし、きちんと躾けをされたんだろうな」

「いいえ」

思わず即答した大悟に、夫妻は、ややけげんな顔をした。

そんな夫妻のとまどう顔を見て、何か言わないと、と思いつつも奇妙な喜びを感じてしまった大悟である。

――まさか、鑑別所じこみ、とは言えないだろう。

親にほとんど躾けをされなかった大悟は、そこでほとんどの礼儀を叩き込まれたのだ。

もっとも食事のマナーなどは、カオリさんと将によるところが大きい。

中学時代、将のマナーを、カオリさんが褒めるのをまのあたりにして、大悟はこっそりと真似て体得したのだ。

「いえ。うちの親は……躾けどころじゃなかったと思います。借金まみれでいつも家をあけていましたから」

大悟は仕方なく事実を話す。

「そう……」

節子がややせつなそうに、目をしばたかせる。

この夫婦は……新しい『保護者』は大悟の過去をどこまで知っているんだろうか。

大悟は賑やかに喋りながら食事をする二人を盗み見た。

ちゃぶ台の前で付けたままになっていたテレビが、7時のニュースを報じ始めた。

『次に、今朝、愛知県○○市の○○港で……』

というキャスターの声に、思わず大悟の意識の1／3がテレビのほ

うに向く。

「もし、言いたくなかったらいいんだが、大悟くんのお父さんやお母さんはどうして行方不明なんだ？」

隆弘は大悟に訊いた。大悟の過去に何らかの傷があると、気を遣っているのがわかる、遠慮がちな口調だ。

しかし１／３の意識がテレビにいっている大悟は、

「母は僕が小さい頃に離婚したっきりで……、父は借金とりから隠れているうちに、家に帰らなくなったんです」

とそっけなく答えた。

テレビは依然、大悟の前の保護者であるハゲ親爺一家の死を報じている。

ただ、昼のニュースより情報が新しく、同居していた娘の行方がわからない、ということと、警察では一家心中の可能性で捜査している旨が報じられた。

「……いつごろから独りっきりなの？」

「えっ？」

新しい情報に意識の１／３どころか全部が集中していた大悟は、隆弘の質問を聞き逃してしまって聞き返す。

「お父さんとは、いつから会ってないの？」

「あ……、もう3～4年、いや5年ぐらい？」

大悟は目を宙に泳がせた。実際に『会った』のはいつが最後だったろうか。本当に覚えていない。

ここ数年、父はときおり書き留めで金を送ってくるぐらいしか交流がなかったから。

しかし、家族と数年も会ってない事実を淡々とした様子で話す大悟は、西嶋夫妻にはかえってふびんに映った。

「お父さんも、お母さんもどこにいるかわからないの」

そういう節子の方が大悟よりつらそうだ。

「ハイ。……もう死んでるかも」

大悟はそう言い放つと、ビールをぐいっとあおった。

あの、元保護者のハゲ親爺が一家心中などするわけがない。

あれは、消されたのだ。借金を返せなくなって……たぶん保険金を掛けられて、闇金融のやつらに『一家心中をした』ように工作されたのだ。

たしか、自殺でも1年経てば、保険がおりる、というのを聞いたことがある。

そうやって、元保護者が消されるぐらいだから、大悟の父ももはや

生きてはいないだろう。

大悟は、黙って唐揚げを手に取った。

それは、節子の自慢というだけあって、旨かった。

ニンニクの利いたしょうゆ味が香ばしい。

「これ、旨いです」

よどんだ空気を変えるため、というのもあったが、大悟は素直に口に出した。

「そう、よかったわ。うちの若い人たちにも好評なのよね」

節子も大悟に乗って、笑顔をつくった。

「大悟くんは……今、何をやってるの？」

隆弘の質問に、大悟は、どきん、と心臓が収縮すると同時に、そら来たか、と身構えて

「ハァ。ときどきハケンで働いてます」

「日雇いの？」

「ハイ」

これは嘘だ。ハケンはあの菓子工場以来行っていない。

もっぱら、大悟は今、瑞樹の遺した薬を売りさばいて稼いでいるのだ。

もっとも、家賃は将のマンションだからかからないし、食費も夕食は家政婦がつくりにくる。

朝や昼はその残りで充分なほどだったから、大悟が生きるのにお金はほとんど掛からない。

煙草代と酒代ぐらいだ。

こないだ、西嶋に手渡された5万も手をつけていない。

気がつくと大悟の手元には20万以上の金があった。しばらくは、『売人』をする必要もない。

プロの売人に追いかけられた大悟は、ほとぼりが冷めるまでのんびりしようと決めていた。

「大悟くん」

隆弘は箸を置いた。まるで正座をするように、きちんと座りなおす。

「もし、よかったら。ウチで働かないか?」

隆弘は大悟の目をまっすぐに見つめた。

……小さな町工場ながら、NASAで使われている光学機器をつくっている西嶋光学工業。

それは魅力的な誘いだったが、同時に大悟は、自分にそんな高度な技術を修得できるはずがない、と視線を落とした。

「だけど、オレ……学校にもロクにいってませんよ」

「そんなのは、実地でどうにでもなる。なんだったら夜間高校でも通信でも行けばいい。私も、夜間高校出だ。

だいたいうちの会社は学歴不問だ。学歴があっても不器用だったら話にならないからな」

ようやく大悟がもらした自己否定の言葉を、西嶋は即座に肯定に変えて見せた。

「実はな」

さらに隆弘は続ける。

「私らは、大悟くんさえよかったら……養子になってもらいたい、って考えているんだ」

大悟は落とした視線をもう一度上げた。

それは、先日将から聞いて知っていた。

あのとき大悟は、ひそかに『誰が養子になんか』と反発したものだが、あらためて本人の口から聞くと印象が違った。

それはとてつもなく、温かい誘いに思えた。

こんな風に、誕生祝いをしてくれる夫妻の養子になれば……闇に傾きかけた自分だが、お天道様の下に戻れるかもしれない……。

『この前科者が！』

そこへ元保護者のハゲ親爺の罵声が大悟の脳裏をつんざくように蘇った。

この夫妻は、大悟が『前科者』だということを知らないに違いない。

まっ白だと思っているのだ。

だから、こんな風に「養子にしたい」などと言い出すのだろう……。

大悟は、いったん目を伏せると、もう一度顔をあげた。

今度は大悟が箸を置く。

「……俺、鑑別所に入ってたんです」

隆弘、節子と順番に目を見ながら、それを打ち明ける。

「知ってるよ」

隆弘はあいかわらず大悟の目を見据えていた。

「そんなものは関係ない」

敢然と言い放つ隆弘に、大悟は、これでもか、と自分の過去を突きつける。

「俺が、何をしたか……知っていますか。人殺しですよ」

――本当は、俺じゃないんだ！

大悟は告白しながらも、心の中の……もっと奥深くで叫んでいた。

いつも、いつも叫んでいた。

裁判のときも。カンベツの中でも。『前科者』と怒鳴られているときも、就職を断られたときも。

それらの記憶が、大悟を俯かせた。

これで……さすがの西嶋夫妻も、諦めるだろう。

諦めて当然……所詮、自分は陽の当たる場所を歩く権利を放棄してしまったのだ。あの時。

無理に陽の当たる場所を歩いて、冷たい世間の風に吹き晒されるよりも、むしろ闇に惹かれるのは、親のＤＮＡなんだろうか……。

ちらし寿司の上に、スイートピーの上に、沈黙が降りていた。

しかしそれは長くならないうちに、隆弘によって打ち切られた。

「……知っているよ。正当防衛だろう」

そういうと隆弘は立ち上がった。

大悟は驚いて、こちらに歩み寄ってくる隆弘を見上げた。

すべてを知ったうえで、そんなことを申し出てくるのか。大悟は目を見開いて、隆弘の顔をよく見ようとした。

隆弘は大悟の傍らに寄ると、ちゃぶ台の奥を指差した。

「ごらん。君が直した、大和だ」

箪笥の上の薄暗がりに、先日、大悟が修理した戦艦大和があった。

「大悟くん、君は、マニュアルもなしで、あれを修理したんだ」

隆弘は穏やかな口調で大悟に語りかけると、膝の上に押し付けられた大悟の右手を取った。

節ばってはいるものの、長い指をもつ手を隆弘はしげしげと眺めた。

「君の手は、こんなにも器用だ。……この手はこれから、いろんなものを創り出すだろう。

その指を切り取ろうとするような輩から君は自分を守ったんだ」

気がつくと大悟は、涙を流していた。

みっともない、と思ったけれど温かい涙は、止まらなかった。

「そうだよ。そうなんだから。大悟くんが悪いことなんて、ちっともないんだから」

と言いながら節子ももらい泣きしていた。

結局、大悟は、プレゼントのシャツに、残った唐揚げをお土産にもらって、西嶋家をあとにした。

「ウチで働く件と養子の件、ぜひ前向きに考えてくれ」

と帰り際に、隆弘は大悟の肩を握るように手を置いた。

すでにいろいろなものを創り出しているその手は、大悟と同じく長い指を持ち、温かかった。

藍色になった夜空の下、ドアから漏れた山吹色の光に照らされて、夫婦は外階段の上からいつまでも大悟を見送っていた。

優しさに、そして温かさに慣れない大悟には芝居じみているように感じられるほどの、いままでの生涯で一番幸せな誕生日だった。

しかし幸せは……陽のあたる場所で暮らせる幻想は一瞬だった。

その夜から、大悟は元保護者の悪夢にうなされることになる。

229◆全部忘れられるもの（前書き）

この話はあくまでもフィクション（作り話）で、この中に登場する薬物のシーンは、薬物の使用を勧めるものではありません。

薬物は常習性を持ち、人体に対してとても危険（大悟は砂糖を混ぜていましたが、毒性のあるものを混ぜて嵩増ししているケースも多い）な上に、

違法行為（未成年でも容赦されません。保釈もありません）ですので、

興味本位で試すような行為は絶対にしないでください。

薬物なんてカッコよくありません。あんなのをするのはタダのバカです。

もし勧められたり、薬をやっていることを自慢するような友達がいたら、虫をみるような目で見てやってください。

そして、そんな友達とは、とっとと縁を切ることを勧めます。

上記について「なんてひどいことを言うんだ」と反発を感じる方もいると思いますが、

これぐらい書かないと、わからない人も多いと判断しまして、あえて強いことを書きました。

もう一度言う！薬物はカッコよくないぞ！

ファッションでやるな。仲間意識で手を出すな！

229◆全部忘れられるもの

「……わァッ！」

自分の叫び声で大悟は飛び起きた。

眠っていたというのに……心臓が激しく暴れている。背中は寝汗でびっしょりだ。

目をあげると、カーテンから陽光が漏れている。すでに陽は高いらしい。

それで、今まで翻弄されていたのは、単なる悪夢だとわかり、大悟はため息をつく。

そして、もう一度、布団の上に上半身を横たえた。

さっきは明け方だった。

やはり、同じように悪夢で目が覚めて……この1週間あまり、大悟は悪夢に悩まされている。

あの、元保護者のハゲ親爺一家が車ごと港に沈んでいた、というニュースを見てから。

一家心中の疑いが濃厚、そして娘の行方がわからない、という情報内容は変わらなかった。

そのニュースは、近頃特に大きなニュースがなかったせいか、ワイ

ドショーでも取り上げられていた。

それが気にならない、といったら嘘になる。

大悟は『興味本位』とうそぶいて、それを可能な限り見てしまっていた。

ネットのほうにもいろいろ噂で流出しているのではないかと、検索してみた。

が、それほど猟奇色がないせいか、目覚しい情報は見つからなかった。

何が気になるのか、といえば。

大悟の金で酒を飲んだくれていたハゲ親爺はどうでもいい。自業自得だ。

その妻『おばさん』も、少し可哀想だが、まあどうでもいいだろう。

気になったのは道連れにされた彼らの孫と、行方不明の娘である。

あの家を訪れた最後に目にした3人の姿が大悟の脳裏に焼きついて離れない。

ハゲ親爺にまったく似ていない娘。

彼女が抱いていた男の子の泣き濡れた黒い瞳。そして『ばいばい』と手を振った女の子の声。

あの2人の、何の罪もない幼児が、今はこの世にいないのだ。

娘のほうは……おそらく、どこか怪しいところで働かされるのだろう。

大悟の金が彼らに振り込まれなくなったことで、あの3人までもが災難にあったのなら……大悟は心の深いところで罪悪感を感じていた。

いや、そもそも、心の表面も痛かった。それを

――でもあれは、もともと俺の金だ。

――俺が悪いんじゃない。闇金のやつらが、借金をつくったオヤジがいけないんだ。

と無理やり言い聞かせるようにしてことなきを得ていたが、コントロールできない心の奥底が大悟に悪夢を見せるのだ。

それは化け物に追いかけられる夢だったり、乗っている車が水中に転落する夢だったり、誰かを刺して包丁が指から離れない夢だったり。

その中で、かなりの頻度で登場するアイテムがある。

溺死体。そして『この前科者が！』という罵声。

さっきも元保護者のハゲ親爺に殴られまいと逃げていた。

大悟は必死で逃げた。追われて気がつくと港まで来ていた。どんづ

まりになって、大悟は目の前の海に飛び込んだ。

もう大丈夫だろう、と泳ぎながら振り返ると……溺死体になったハゲ親爺が大悟の肩を掴んで、『この前科者が！』と吼えた。

溺死体の膨れきった体。ふやけて破れた皮膚……こんなときに登場するなんて、まったくグロ画像なんて見ておくものではない、と大悟は後悔した。

眠れば、必ず悪夢を見る、という状態の中で、大悟は完全に寝不足になった。

酒を飲めば熟睡できるかとも思ったが、入眠効果はあっても、悪夢を阻止する力はなかった。

気晴らしに、パチンコに行ってみた。

今度は大負けしないように、と気合を入れるが、なかなか勝てない。浮上するときはある。例えば、座って1時間やそこらで、1万ほど浮き上がるときがある。

だが、『気晴らし』に来ている大悟は、そんな短時間で離れるのはもったいない気がしてしまう。

もしくはもっと粘れば、もっと儲かる気がしてしまう……かくして、ずっと粘り続けて気がつくと、損をしているのだ。

――『手先が器用だ』なんて言われたけど、たいしたことないんだな。

大悟は勝てない自分を自嘲した。

そして今日、手持ちの金が残り１０万に近づいてしまい、大悟は少し焦った。

どうせ、眠っても悪夢にうなされるだけだ、と大悟は久しぶりに薬をさばきにいくことにした。

今日もそれは、飛ぶように売れた。

パラフィンペーパーに包んだ１０個のうち、一気に８個が売れた。

中には

「こないだの！よかったよ～」

と大悟のことを覚えていて３個も買った客がいた。

大悟のほうは、彼女にいつ、どこで売ったんだか、まるで記憶にないのだが。

８万を手にした大悟は、自分で決めたルールどおり、３０分で店をあとにした。

（長居をすると危険だからだ）

あと２個の白い包みを手にして、大悟は思う。

――なんで、こんなものが売れるんだろう。

瑞樹の死に際がフラッシュバックする。

あんなふうに幻覚に怯え……ついには命まで失ってしまった瑞樹。

恋人の大悟に遺体にすがることも許さず、蒸発してしまった瑞樹。

大悟は、細かい血しぶきがついた自分の顔を思い出して、自分の頬をなでた。

瑞樹のかけらがくっついていた顔は、今は髭でざらついている。

『つらいことを、全部忘れられるから』

瑞樹の低い声が蘇る。

たしかに、あの頃の瑞樹の状況は悲惨だった。

義父に弄ばれ、帰る家がなく。体を差し出すほど好きな将は他の女に走り。

それを忘れるために、彼女はこの白い薬に走ったんだろうか。

それほど、この薬は、すべてを無にしてくれるんだろうか。

「バカだな」

大悟は、煙草の煙と共に、呟きを吐き出すと、

一一感傷に耽っている場合じゃない。この2つを売ってしまおう。

と新しいハコに向かった。

さっそく大悟は、一人で休んでいた女の子に声をかける。

「ねえ。いいもん持ってんだけど」

「えっ何？」

大音響の中、振り返った顔を見て、大悟は息を飲んだ。

瑞樹に、似ている。

「気持ちよくなるヤツ」

女の子の耳元に叫ぶように伝えながら、大悟は少し怯えた。

だけど、まったく違う匂いになぜか安心する。香水の匂いが強く香った。

「ちょうだいっ！いくら」

そんな甲高い声も瑞樹とはまるで違う。

だけど、こっちに走らせる大きな目は、まるで瑞樹だ。

赤毛ではあるが、長い髪をまっすぐにおろした髪型も、クラス写真の瑞樹を思わせる。

「1つ1万。残り2つだよ」

「いいじゃん。買う買うー」

女は明るくポシェットから財布を出した。

ピンク色のブランドの財布からためらいもなく万札を2枚出すと、大悟に渡す。

これで、商売は終了なはずだが、大悟はなんとなくその女から離れがたくて、隣に座った。

「ね。これ、そんなにスキ?」

大悟は女に話し掛けた。

「スキスキー、サイッコー!嫌なことぜーんぶ忘れちゃうもん」

言ってることまで瑞樹と同じだ。調子は全然違うが。

「嫌なことぜんぶ?」

「ぜんぶー、ぜーんぶ!」

とはしゃいだあとで、女は大悟に向き直ると

「アンタ、やったことないのォ?なのに何でー、持ってんのォ?へ

んなのおー」

そういってキャハハと笑った。

大悟の薬をヤル前からかなりハイである。

「1個、返してあげるからぁ、一緒にやるぅ？」

と女は親切そうに、いったんしまった大悟の薬を取り出そうとポシェットに手をかけた。

「いや、いいよ。先輩に言われて、ノルマ分売らないと、あとでボコられるんだ」

よく、とっさに言い訳が浮かぶものだ、と大悟は自分で自分に呆れる。

「へえ。コレ？」

女は、頬に人差し指で斜め線を描いた。そういう筋のものか、という意味だ。

そうやって大悟の顔を覗き込むようにすると、三白眼のようになる。

そんなようすも、ますます瑞樹に似ている。

「うん」

「かわいそー。じゃあさ、これ1個おごってあげるからさ。一緒にヤろうよ」

同情に眉根を寄せながらも女の目が潤んだ。大悟を誘っているのである。

「ヤる？」

大悟はわざとらしく訊き返した。

「これをぉ、ヤッて、ヤる」

女はそういうとキャハハと笑った。

大悟がバスルームから出てくると、先にシャワーを浴び終わってソファで待っていた女はいきなり抱きついて、口づけをしてきた。

女のマンションに来ている。もう3時近い。

すっぴんになると……、アイメイクがとれたせいか、それほど瑞樹に似なくなったな、と思いながら大悟は冷静に女の口の中に舌を這わせる。

ミカというこの赤毛の女は、２１歳の大学生だという。

大学名は訊いてもわからなかったが、一人でこんなオートロック付きの、１ＬＤＫの小奇麗なマンションに暮らしているくらいだから、

地方の金持ちの娘なのだろう。

大悟のほうは、念のために『ダイ』と名乗り、年も２０歳と誤魔化した。

「ダイ……」

ミカはすでに恍惚として、知ったばかりの大悟の偽名を呼んだ。

大悟は、バスローブの襟元から手を侵入させ、ミカの裸の胸に触れた。

それは小柄な体に似合わず案外ボリュームがあった。

瑞樹のよりやや大粒の先端はすでに固まっている。

「ああん、待って。アレ……ヤろう」

ミカは大悟の両肩を掴んで離すと、いったんキッチンに入ってストローを持ってきた。

それを短く切って大悟に差し出す。

「これでね、鼻に吸い込むの。飲んじゃってもいんだけど。でも、こうすると、ホラ、スーッとしない？」

ミカは待ちきれないように、ソファのテーブルの上にかがみこんで、パラフィンペーパーの上の白い粉末を吸い込んだ。

大悟は、ミカの真似をしながら、別にスーッとなんかしない、と思

った。

半分近くを粉砂糖で嵩増ししているからだろうか。

しかし女のほうは『スーッとしている』らしい。

「よくなってきたァ……」

と目がとろけてきた。慣れているせいの、条件反射だろうか。

「ねえ……、しよ。これしながらヤると、最高、なの」

恍惚とした目で、大悟を再び誘う。そういう目をすると、ミカは少し斜視のように見える。

大悟のほうは、たいして効果がないな、と思いつつ、いわれたとおりミカを寝室に連れていくと、リクエストどおり抱いた。

ミカはバスローブを脱がされただけで、よがり始めた。

空気だけでも感じるような勢いだ。

大悟は、女の体の各部分を、瑞樹と比べながら丹念にいじった。

一一似てない。これは別の女だ。

いじられるだけで、女はまるでＡＶ女優のように高い声で、景気よく喘ぐ。

その声は煩いほどだ。

しかし、だんだん大悟は愉快になってきた。

気が大きくなっている、と思った。

大船に乗ったような……漠然とした安心。

大悟は、瑞樹と似ていない女の体がだんだん好ましく思われてきた。

「ねえ……、ダイ。入れて」

もうすぐなのか、女がせつない声で訴える。

だが……あいにく大悟のそれは、固まっていなかった。

「なあに、まだ、なの？……いいよ、じゃ、あたしがやってあげる」

ミカは気前よく、体勢を交代すると、大悟の股間をとまどいもなく口にした。

気持ちいい。

瑞樹が生きていた頃、それをしてもらいながら……その巧さに我を忘れそうになりながらも

――将のヤツにも、何度となくやってたんだろうな。

ということは常に頭から離れなかった。

なのに今、大悟は、ただ気持ちいい。

ふわふわと花びらのよう空から降ってくる快感が、アレに集中していくようだ。

気持ちよさのあまり、何も考えられない。

「ねえ……、気持ちいい？」

ミカは大悟の先端をこきざみに舐めながら訊く。

「うん」

気持ちいいのに、大悟は勃たないのだ。

大きくはなったけれど……大悟の硬さはこんなものではない。

どこか、だらりとしているのだ。白い薬のせいだろうか。

だけど、そんなこと大悟は気にならなかった。

いや、大悟は、無重力のような感覚に浮かびながら、すべてのことから解放されていた。

ハゲ親爺一家の孫への罪悪感も。

就職の面接官の冷たい視線も。

血の飛沫になってしまった瑞樹も。

『この前科者が！』という罵声も。

帰らなくなった実の父も。

全部、大悟は思い出さなかった。

「……ねえっ！気持ちいい？……ねえ！」

叫ぶようなミカの問いかけすら、どうでもよくなっていた。

こうして……気がつくと大悟は『全部忘れられる』薬から離れられなくなっていた。

230◆ローズオイル（前書き）

ローズオイル、と表記していますが、正式にはローズのエッセンシャルオイルのことです。長いので省略しています。

230◆ローズオイル

成田に降りるなり、空気がねっとりしているように感じた……湿気。

2週間も砂漠にいた将は、日本の空気に、まといつくような重さを感じた。

それでも、やっぱり懐かしかった。

聡がいる国。

聡と同じ空気。

将はさして美味しくもない空港の空気を吸い込んだ。

「あらー陽にやけたわねえ」

成田までわざわざ武藤が出迎えてくれた。

モロッコまで海外ロケに同行した彼女だがＣＭ撮影終了時点で帰国している。

『ウルウル滞在日記』の収録で将に付いていてくれるのはカメラとコーディネーターだけ、というテレビにしては極めて少人数で行われたのだ。

「どうだった?ウルウルきた?」

『ウルウル……』はその名のとおり、現地人の家庭にホームステイ

し、最後には別れがたくて泣いてしまうから、というのもある。

「ウルウルどころか大泣きしちゃったよー。……大変だったけど」

将は陽に焼けた顔から、白い歯を見せた。

砂漠で放牧をするベルベル人のテントでの1週間は、将にとって何もかもはじめてのことばかり、まさにカルチャーショックだった。

羊を追いまわし、羊の屠殺から解体に立会い、少年たちと一緒に『砂漠のバラ』と呼ばれる結晶を見つけに行く。

過酷な気候に加え、日本のような利便性がまったくない暮らしに、さすがの将もめげそうになったが、

それを支えたのは、将のもちまえの好奇心と、ベルベル人の家庭の人々の素朴な優しさだった。

特に2歳年下の、その一家の長男とはことさら仲良くなった。

「いや、将くんは根性あります。あの環境で10代のタレントさんだったら、だいたい1回は泣きが入るか倒れるところですけど、将くんは泣き言を1回も言いませんでした」

同行したカメラマンが褒めた。

「よく頑張ったわ」

武藤は満足そうだ。

本当は……将を支えたものはもう1つある。

聡。

聡に、頑張ると約束したから、将はつらい仕事も耐えたのだ。

砂漠の夜は、信じられないほど冷える。

昼は50度近くまで気温が上昇するのに、夜は0度近くまで下がるのだ。

最初の夜、寒さに眠れなくて、将は外に出てみた。

すると、夜空はすごい数の星に覆われていた。

それは、あの二人っきりで一夜を過ごした、北海道のニセコ山頂を思い出させた。

以来、将はつらくなると、聡を思い浮かべて自らを癒した。

ここでへこたれたら、聡はますます遠くなる、と自分を叱咤激励したのだ。

「3日間、完全オフにしてあげたから、ゆっくり休みなさい」

マンションまで送ってくれた武藤はそういったが、翌日、将は時差ぼけを押してきちんと起きると学校に出掛けた。

「うぉ、真っ黒だな。パリで日サロいったん？」

井口がそういったとおり、白いシャツを着た将は、ますます日焼けが目立つ。

「バーカ。モロッコだよ、アフリカだよ。サハラ砂漠だよ」

「サハラ砂漠の土産が、なんでクッキーなわけ」

早くもユータが将の土産のクッキーを開けている。

「かわいいけどさあ」

ユータがくわえているクッキーは顔をかたどったチョコサンドで、そんなに変わったものではない。

3種類の表情がかわいいが味は『普通に美味しい』程度だ。

「でも、うまくねー？てか、土産買う時間ほとんどなかったし、おまえらにガスール石鹸とかやってもしょうがないじゃん……って、それクラス全員分なんだから、何枚も食うなよ」

「せこっ！」

そんな様子を、みな子は見るともなく、見ていた。

手の中には、将が欠席しているあいだの授業を記録したノートのコ

ピーがある。

極力きれいな字で、わかりやすくメモをとったのは将のためだからだ。

何でそこまで、と問われたら

『この間、助けてくれたから。それにクラス委員として当然のことよ』と答えようと思っていたが、

あんな風にワル系男子とつるんでいるところに、ノートを渡しにいくのはみな子でも出来ない。

そこへ、前の扉が開いて、聡が入ってきた。朝のＨＲだ。

「おはよう」

教壇の上から皆に投げかけるその言葉が……みな子には、将に向けられているように思えた。

実際は、聡が将に視線を投げた時間は、他の生徒と極めて平等な一瞬だけだったのだが。

しかし、聡は、その一瞬で将の様子を焼き付けた。

陽に焼けた肌。それは白目とのコントラストが際立った。

そのせいか自分に向けられた瞳はいっそう大きくなったかのように見える。

将のほうも、頬杖をつきながらも、ひさしぶりの聡に見入っていた。

思えば出発前日、何もない部屋での逢瀬を邪魔されて以来の聡。

5月も下旬の日本は、気温もあがっている。

聡は黒い半袖の開襟シャツを着ていた。

それは冬の間、スーツを着込んでいた頃より、ずっと体の形を……ことさら張り出した大きな乳房を強調していた。

シャツから出た鎖骨、そして首や腕は、まっ白な上に簡単に折れそうなほど華奢で、胸が大きい女性に特有の愚鈍な印象を見事に消している。

あんまり見たらいけない、と思うけれど、聡から目を離すことができない。

ちなみに……『もう付き合えない』聡だけど、将はこっそり聡への土産を持ってきていた。

アロマ好きの聡のために、モロッコ産のダマスク・ローズのオイルの瓶をポケットにしのばせている。

放課後の補習のときにでも、さりげなく渡せれば、と思っていたけれど、HRによると補習はクラスマッチの練習のために今週は休みだという。

渡すのは難しいかもしれない、と将は落胆した。

一瞬の視線の邂逅だけでＨＲはむなしく終了した。

「将、起きろよ。昼だぜ」

「……んア？……もう、そんな時間」

あっという間に午前中の３時間が終わったらしい。

時差ぼけのせいか、眠気を抑えられなくて、授業中ずっと机で爆睡していた将である。

井口に揺り起こされて、大きく伸びをすると、ボリボリと首の後ろを掻きながら、井口と共に学食へ向かうべく立ち上がった。

将が廊下に出ると、どこからともなく、

「キャー」

「鷹枝さんよ」

「ヤバすぎ（＝カッコいい）」

という下級生女子の囁きが聞こえた。

下級生の女子が、将が出てくるのを遠巻きに見ていたのだ。

４月のｍｏｎ－ｍｏ、そして５月のメンズファッション誌、とその

時点では一般人扱いながら大きく雑誌に写真が出た将は、すでに校内では有名人だった。

特に下級生はすでに、将をアイドルのように崇めているようだ。

ちょうどそのとき、隣の3年1組での授業を終えたのか、聡が廊下に出てきた。

将も聡もお互いを一瞬で見つけた。そして二人の視線が再びつながる。

「先、行ってて」

将は、井口にそういうと、聡のほうにつかつかと向かってきた。

聡はその大胆な行動に『えっ』という表情を隠せなかった。

「キャー、ヤダ！」

「ちょー、噂本当なんだ。鷹枝さんがアキラ先生に……って」

とあからさまに噂する黄色い声が聞こえる。

しかし、将は……身を硬くした聡の肩越しをすっと通り抜けた。

立ち止まりもせず。言葉もなく。視線もくれずに。

聡に残されたのは、3週間ぶりの……ほのかな干草のような香りだけ、だった。

将は聡を無視すると、そのまま3年1組の向こうにある、便所に入ってしまった。

聡は……そしてまわりのギャルたちも、唖然とした。

あっという間に放課後になった。

橙色がかった光が窓から差し込む中、クラスメートは、各々、クラスマッチの練習をすべく、着替えを持って楽しげに更衣室へ移動し始めた。

そんな中、将は、どうせ卓球の練習をしても、クラスマッチへの参加は無理だろう、と一人サボって帰る準備をしていた。

武藤が『6月は忙しいわよ。覚悟しなさい』と言っていたから。

そんな将のポケットの中にはあいかわらず、ローズオイルが入っている。

結局渡しそびれてしまった。さっきの、昼休みも。午後の英語の時間も。

万が一聡が教室に戻ってくるかも、とわざとノロノロしていた将は、ついに見切りをつけて立ち上がった。

黄色い声の下級生も、今はいない。

カバンを肩にひっかけ、入り口をくぐるようにして廊下に出た将に、ジャージ姿の女子が一人駆け寄ってくるのが見えた。

星野みな子だ。

「鷹枝くん！」

「どうしたの、星野サン」

息を切らして駆けてくるみな子に、将は立ち止まった。

「……これ。休んでいる間の、ノート」

みな子は走ってきた勢いでノートのコピーを差し出した。

将は口を半ばあけて、みな子を見つめた。

みな子は将の顔ではなく、自分が差し出したコピーのあたりに視線を固定していた。

そんな様子に、将の口からは思わず素直にお礼の言葉が出た。

「……ありがとう」

みな子は、首をぶんぶんと横に振ると

「くっ、クラス委員だからっ……。当然のことだよ」

と早口で言った。危うく声がうらがえりそうなみな子だ。

――あっ『この間、助けてくれたから』を忘れた！

そう気づいたが、いまさら付け加えるのも逆に不自然だ、とみな子は黙った。

将は、それを受け取ると中身を広げた。

とても丁寧に記録してある内容に、将はその場で読み込んでしまった。

「だっ、大学、受けるの？」

将の手が届きそうな範囲に黙って立っている緊張に耐えられずに……みな子は質問を投げてみた。

将の視線がノートに移ったので、少し安心して将の陽に焼けた顔を見る。

「んー、わかんない。……でも受けられたら受けたいのは変わんないけど」

将はコピーを閉じて、みな子に笑いかけた。

将と視線があってしまい、みな子はあわてて、目をそらした。

「ノート、これからも取っといたげようか」

「いいの？」

「……いいよ。どうせついでだもん」

「ありがとー、助かる。星野サン」

あいかわらずそっけない口調のみな子だが、将にはそんなところが、可愛らしく思えた。

前も思ったが、聡の高校生時代もこんな感じだったんだろうか。

「ね。手ェだして」

将はいたずらっぽくみな子に促した。

「なに？」

「いいから」

みな子はいぶかしげな顔をしながら左手を差し出した。

将は、ポケットからあのローズオイルの瓶を取り出した。

聡への土産のつもりで持ってきたものだ。

それをみな子の手の上に置いた。

「これさ。モロッコ土産。……お礼にあげる」

オイルの小瓶は将の体温でほんのり温かかった。

みな子は思わず将の顔を見上げた。

黒く焼けているが、今までみたこともない優しげな笑顔があった。

「……いいの？」

将は微笑んでうなづくと、

「じゃ」

と歩き出した。

「ねえ！」

みな子は1歩ずつみな子から離れていく将の背中にむかって叫ぶように声をかけた。

将は立ち止まると振り返った。

みな子はばら色の頬をして、小瓶を両手で握り締めて立っていた。

午後の光が、みな子のすぐ近くのサッシに反射している。

「今度、モロッコの話、聞かせてね」

将は、口元に微笑を浮かべて「ああ」と答えた。それは、

一一ああ、この人が、芸能界に入るのがわかる。

とみな子に思わせるような、とびきりの笑顔だった。

将が行ってしまった後、みな子は、ローズオイルの瓶をあけてみた。

将の熱い血潮で温められた瓶からは、甘い香りが立ちのぼり、みな子は一瞬めまいがしそうになった。

231◆隠し事

マンションに帰りついたのは、5時前だった。

日が長い時期だから、夕陽には程遠い陽射しが差し込んで、閉め切った部屋はむっとしていた。

大悟は留守のようだ。

ダイニングテーブルの上に『気温が高いので、夕食は冷蔵庫に入れています。電子レンジで温めてお召し上がりください』と家政婦のメモがあった。

将は窓を開けて外の空気を中に入れつつ、バルコニーから外を見渡した。

こんなに早く帰るのは久しぶりな気がする。

去年の今ごろはどうしていただろう、と空に思いを馳せたとたん、夕陽の海が脳裏に暖色に染まった水平線を描いた。

学校にも行かずに、晴れれば毎日夕陽の海に通っていた去年。

唐突に……将は、海を見たくなった。海だって自分を待っているだろう、と思った。

だけど。あいにく、ミニは新しいマンションに置いてきてしまっている。

将は舌打ちした。

――明日にするか。

幸い明日もオフだ。学校は聡の英語までだけにして、あとはさぼって海に行ってもいい。と、将はバルコニーに寄りかかって空を眺めながら再びあの頃を回想する。

聡は、まだ弁当屋のお姉さんだった。

白いうわっぱりに、オデコ丸出しの姿は、もう思い出すのに苦労するようだ。

将の中の聡は、地味な色のスーツに身を固めた教師姿か、ラフなジーンズ、もしくは何度も見たわけじゃないのに、妖しげなヌードすらすぐに思い出せる。

心に映し出した聡の姿から、将は今日、学校の廊下で無視したことを急に思い出した。

本当は、あのとき……聡にさりげなく話し掛けて、土産を渡すつもりだった。

ポケットに突っ込んだ手は、ローズオイルの瓶を握り締めていた。

だけど、自分に集まる視線に、将は思い直したのだ。

視線に臆したわけではないけれど。

将は部屋に入ると、ソファに身を投げ出しながら携帯を開いた。

この時間はまだ勤務中だろう、職務にいそしむ聡を思い浮かべながらメールを打つ。

本当は、こんな風にメールを打つのも控えるべきなのかもしれない。

だけど、さっき無視したことについて将は言い訳したかった。

そしてあらためて、自分の決意を形にしておきたかったのだ。

ちょうど聡にメールを送信したところで、玄関ドアの鍵がガチャガチャと音を立てた。

大悟が帰ってきたらしい。

姿より先に、ヤニを濃縮したような不快な匂いがソファに寝そべる将を起き上がらせた。

大悟に何か一言いおうとした将は目を見張った。

3週間、いやそれ以上ぶりに顔を見る大悟はあきらかに痩せた。……やつれた、といったほうが正しいかもしれない。

しかし大悟は、将を見つけると、痩せた顔の中でいっそう目立つ目を細めた。

「おかえり」

今帰ってきた人間から『おかえり』と言われる奇妙さを将は感じたが、すぐに、気づいた。

モロッコから帰ってきた将に向けられているのだ、と。

「ただいま。……パチンコ？」

それは大悟の匂いからすぐに見当がついた。

「ああ。今日は、３万勝った」

大悟は楽しげにコンビニのビニール袋をカウンターの上に置いた。

「そう……。よかったじゃん。昨日は遅かったの？」

将はソファから動けないまま、目は大悟の姿に張り付いていた。それほどまでに酷い痩せ方だった。

大悟はそんな将に気づかないまま、カウンターの中身を冷蔵庫に移す。

「いや、１時ぐらいかなあ。お前、もう寝てたから起こさなかった」

将が『お前ちゃんとメシ食ってんの？』と喉まで出かかったとき、大悟が

「そこに、見本誌置いてるよ」

とソファの前のテーブルを指差した。

将と大悟がバイトでヤラセモデルをしたファッション誌である。

素直に雑誌を開いた将は、１Ｐで掲載されている自分の姿に面食らった。

それで、学校での下級生の様子に合点がいった。

＝＝＝＝＝

１８５ｃｍの長身で、”Ｅ”の最新モデルＸＸＸをどうどうと履きこなしているＳＹＯくん。

『シャツはオークションで落札したばかりの古着です』と笑顔だ。

＝＝＝＝＝

と、たぶん美智子が考えたのだろう、適当なキャプションがついている。

へえ、あれ古着だったんだ、と将は雑誌の中の自分が着ているシャツをまじまじと見た。

スタイリストが用意したものだから将がそれを知るはずもない。

ちなみにモロッコで行われた”Ｅ”のテレビＣＭは7月オンエアだという。

地中海沿岸は過ごしやすかったが、サハラ砂漠といったらジーンズなど履いている場合じゃなかった。

しかし、履いていないともっと暑いということにすぐに気づく。

体温より高温の空気。ここでは、衣服はその暑熱から体を守るためのものなのだ。

「汗出さないで！」

と監督に指示されたのが、今考えてもおかしい。

出さないぞ、と思ったって出てくるんだからしょうがない、とそのときは思った。

だが、カメラがまわり始めると、本当に汗は出なくなったのだ……。

あれは、本当に不思議だった。緊張感のマジックだろうか。

大悟に続いて、将がシャワーを浴びて出てくると、ダイニングテーブルの上には大悟が冷蔵庫から出して並べたのか夕食が用意してあった。

大悟は、当然のように缶ビールを冷蔵庫から出して、

「飲むだろ？」

とタオルで頭を拭いている将に差し出した。

「ああ。サンキュ。……あれ、お前、それどうしたの」

大悟の左腕の肘関節の内側にある、紫色の斑点。

褐色が薄れた腕の内側で、それはひどく目立った。

大悟はビクッとしたのを悟られまいと、ビールをカウンターに置くと、将に背を向けて食事の準備を続ける。

「なんか、いつのまにか。どっかでぶつけたのかも」

と苦しい言い訳で誤魔化す。肘の内側をぶつける可能性は低いが仕方ない。

「ふーん」

それでも将はたいして疑いもしないようだった。

トースターで温めていた揚げ出し豆腐を、大悟は器に移し変えると、大根おろしをかけ、小鍋で温めたダシをかけた。

「お前、凝ってるなあ。そのまま食ったっていいのに」

そういう将は大悟の腕のことなどまるで気にしていないようで、大悟はほっとする。

家政婦さんが外国帰りの将を気遣ってなのか、今日はカツオのタタキに揚げだし豆腐など、と純和風のメニューだ。

彼女が家で自分で漬けたのか、きゅうりのぬか漬けも付いている。

将は、若いくせにこういうものがわりと好きだ。

ヒージーの家で覚えたからだろうか。

ヒージーは、自分が丹精こめて世話をしたきゅうりやなすを、ハルさんに頼んでぬか漬けにしていた。

それを毎晩嬉しそうに晩酌のつまみにしていたようすを将は思い出した。

そういえば、ヒージーにも連絡をとらないと、と将はきゅうりをパクつきながら思った。

「これ、旨いよな」

大悟も気に入ったらしい。

それにしても……テーブルいっぱいの料理の前にいる大悟はいっそう痩せて見える。

将は思わず訊いた。

「お前、ちゃんとメシ食ってる？」

「食ってんじゃん」

牛肉とごぼうの時雨煮でご飯をほおばりながら、大悟はおどけた。

今、こうして食べてるよ、という意味。

そんな風に返されると、将は何も指摘できなくなる。

「なら、いいけど……」

とだけ言って、将はビールと一緒に何かを飲み込む。

大悟に何か言いたいことがあるのに、言えない。

明るい様子なのに、今日の大悟には、どことなく見えない壁があるようだ。

将は、ことごとく、はじき返される。

「……そういえば、西嶋さんの弟さんのところに行った？」

つまり新しい保護者のことを将は話題にしてみた。

「行ったよ」

大悟は箸でカツオをつまみながら、短く答えた。

「どうだった？」

将はビールの缶を口にあてながら、大悟の様子を伺った。

「いい人だったよ。養子にならないかって誘われた」

そう答えながらも、大悟は今度は、揚げだし豆腐を崩す。

将にはその口調が、少し明快すぎるように思えた。

「で、どうすんの？」

「うーん」

そういう声も奇妙に明るい。

大悟は口をもぐもぐと動かしながら、箸と同じ方向に視線をやりながらしばし考えているようだった。

「前向きに、考えようかな……って、思ってる」

それでも、たいして時間を置かずに、大悟は答えを提示すると缶ビールを手にした。

「そっか」

将は、思わず箸を止めて、ビールが流れ込む大悟の喉のあたりを見つめた。

まさか、大悟がそういうとは思わなかったから。

三宅に聞いて将も知っていた、大悟が養子になる話。

いい話だとはわかっていたのだが……将の知っている大悟は、親に見捨てられながらも、飄々とたくましく、自由に生きていた少年だ。

いわば野生動物のように生きてきた青年が、今さら、保護者の庇護にすがるとは考えにくかったから。

だけど。

大悟は、一気に疲れたのかもしれない……瑞樹を失ったことで。

将は、このところの大悟の身の上をあらためて思い返す。

それに……これは将の都合だが、このオフの3日間のあと、将はしばらくここを離れて、事務所近くのマンションを拠点にすることになる。

ここで一人っきりで暮らすよりも、西嶋の弟の養子になるほうが、大悟のためになるだろう。

「そっかー……」

将は、もう一度噛み締めるようにそう漏らすと、

「よかったな」

と大悟の顔をあらためて見つめた。

だけど……その痩せこけた顔は、将の心に依然として何か割り切れ

ないものを残した。

それがわからないままに、将は、大悟に乞われてモロッコの話をはじめるよりほかなかった。

しかし、将は気づいていなかったけれど……大悟は、将と瞳を一度もあわせなかった。

将に対して、重大な隠し事があったから。

大悟が将から隠す、腕の紫色の斑点。

それは『薬』を注射した際に、失敗して出来た内出血だった。

……その頃大悟は、すでに吸引と注射で、日に3度はあの薬に頼っていたのだ。

232◆恋しさと愛しさ

陽が長くなったにもかかわらず、聡が明るいうちに帰れる日は少ない。

今日もすっかり暗くなっている。

部屋に戻った聡はすっかり疲れていた。

今年度から1年生が3クラスになったというのもあり、もともと仕事量自体が増えている。

その分の疲れが蓄積されている、というのもある。

しかし、今日の疲れはことさらだ……たぶん、将が久しぶりに登校したから。

将の姿を目にしたせいで、いつもより余計に心臓が脈打ち、そのせいで血液が体をめぐる速度は尋常じゃなかったはずだ。

つまり、いつもより激しい代謝が行われたせいで疲れているというのも、もちろんあるだろう。

聡は、無意識にミネラルウォーターを冷蔵庫から取り出して飲むと座り込んだ。

夕食にするつもりのコンビニ弁当はローテーブルの上に置いたまま、スイッチが切れたように脱力する。

遠回りして、バイトしていた弁当屋さんにいく気力もなかったのだ。

無意識のまま、手は携帯を開く。

職場で開くことはまずないから、待ち受けは将のままにしている。

画像の将は、疲れて無意識になった聡に感情を回復させた。

「将……」

付き合えない、と言い出したのは聡のほうなのに、こうして将の顔を見ると、

聡の心には小さく固めた水中花を水の中に沈めたときのように、一気に将への想いが花開く。

心という容器に収まりきれない想いの花びらが、吐息や呟きとなって口から漏れた。

さっきも……久しぶりに将の顔をみた聡の心は、体を抜け出して将のすぐそばに飛んでいきそうだった。

でも社会的立場を持つ肉体を抜け出すことができない心は、聡の中でひどく暴れた。

それを押さえつけながら、何でもないように教壇に立ち続けた聡は、ただひどく消耗した。

そして昼休みの前、聡のほうへ歩いてきた将。

一歩一歩、こちらへ近づいてくる将は、まるで磁力を持つように、聡の全身の産毛を引き寄せた。

将は聡を見つめていた。陽に灼けて黒くなった顔の中で、際立つ白目。

それはその中心の瞳が見つめるものを強調した……将の瞳は聡を射抜いていた。

本当に矢が刺さったように、聡はその場から動けなくなった。

地球に確実に衝突するコースで彗星が近づいてくる。

なのに、何もできずに地球は宇宙に浮かぶしかない……そんな風に聡の体は固定されてしまっていた。

動けなくなった肉体の中で……彗星が近づく地球上の人類のように、心が恐慌を起こしていた。

この肉体を脱出したい、と心は徒に暴れていた。

バカな心の奴は、体を脱出して近づく彗星にもっと近寄りたがっている……一体化したがってさえいる。

その熱さは、大気圏たる皮膚を破る勢いで、聡は肺もが灼けたように呼吸をするのを忘れていた。

しかし。聡に定められていた将の軌道は……すんでのところでずれた。

聡まで、あと3歩というところで、将の瞳は聡からふい、と離れた。

地球に衝突するかと思われた彗星は、急に軌道を変えてすり抜けていった。

聡は振り返ることも出来ずに、気が抜けた。

3週間ぶりの、干草の香りだけが、聡に残された。

それは、彗星が地表に撒き散らしていった流星群のように、聡の心にキラキラときらめくせつなさだけを残していったのだ。

ほっとしたような、がっかりしたような脱力。弛緩。

しかし、聡はわかっていた。

――あれは将の、決意の表れなのだ。

開いた携帯はメールの着信を示している。案の定、将からだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝

さっきは無視してゴメン。

本当はすっごくしゃべりたかった。

でも、我慢したんだ。

＝＝＝＝＝＝＝

その下は何行か改行による空白があって見えなかった。

それは、将の沈黙なのだろう。

沈黙のあとには、たぶん決意がある。

聡は予感しながら、スクロールボタンを押して移動して続きを見る。

＝＝＝＝＝＝＝

俺、本気で聡と距離を置こうと思う。

みんなが、俺と聡が無関係になった、と思い込むほど、徹底的に。

つらいけど、二人の将来のために我慢する。

今は、我慢のときだけど、その先にはきっとずっと一緒にいられる未来がくると信じたい。

だけど……ときどき、こうしてメールを送るかもしれない。

寂しすぎるときもあるだろうから。

それだけは許して。

無視してくれて構わないから。

将

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

聡は、携帯にしては少し長いメッセージを繰り返しスクロールさせて読んだ。

やはり、あれは将の決意の表れだった。

それを確認して安心しつつも、すでに聡は寂しかった。

将が、表面上とはいえ、自分から離れていく。

自分で決めたことなのに。

自分で言い出したことなのに。

将のためだと、理性ではわかっているのに……。

聡の本心は、将を恋しがって叫びをあげていた。

将に会いたい。

将と語らいたい。

将と触れ合いたい。

将と抱き合いたい。

聡は、それらが叶えられないかわりに、せめて将の記憶を脳裏から引き出そうとした。

だけど、求める心に対して、それは薄すぎる気がして、聡はベッドに倒れこんだ。

もう疲れて、座っているのすらつらいのだ。

ベッドの上で聡は目を閉じる。ここは傷ついた将を受け入れた場所だ。

あのときの将は、荒々しい波のようだった。

聡は浜辺の砂のようにただ、それを受け止めるしかなかった……。

聡は、やっと鮮やかに蘇った記憶に、思わずため息をつくと天井を見上げた。

やっと静まった将の髪を撫でながら、見上げたあのときの、せつないまでの彼への愛しさも蘇ってくる。

寂しさは恋しさを訴えたが、蘇った愛しさは冷静な忍耐を聡に諭す。

――今は……見守るしかない。

将の成長を。

将が輝かしく活躍するであろう様を。

もしかしたら、その過程で聡は忘れられていくかもしれないけれど、それすらも見届けることが聡に出来ることなのだ。

聡は、携帯をもう一度開く。

＝＝＝＝＝＝＝

メール、ありがとう。

ずっと、見守ってるよ

＝＝＝＝＝＝＝

短いメッセージに、聡は宇宙ほどに膨らみきった将への愛しさを詰め込む。

将の中で水中花のように、聡の心が花開きますように、と聡は願って送信ボタンを押した。

233◆さやえんどう

将は、今日も授業が終わると、クラスマッチの練習をさぼって学校をあとにした。

あいにく、海に行くのにはいまいちの曇天だったので、将はヒージーが入院している病院に見舞に行くことにした。

ヒージーは将が海外ロケに行っている間に、東京の病院に転院していたのだ。

「将！」

ヒージーは病室の入り口に将の姿を見つけると、懐かしそうにその名前を呼んだ。

しかし……その声の大きさもそうだったが、可動式ベッドに横たわるその姿は以前よりずっと小さくなったように見えた。

その一流病院で、一番広い特別室の中ではいっそう、そのか細さがめだつようだった。

「く、く、くろ、くろく、なった、なあ」

運転手の西嶋によると、かなり普通に話せるようになったということだが、まだ麻痺が残っているらしい。

「く、くちが、まめ、まめらなくて。ぉお～、おかげで、あた、あたま、まで、も、も、モウロクしたように、思われて、困る……」

それでもヒージーは笑顔で将に手を伸ばした。
その、静脈が浮き出た腕の細さに将は胸が痛んだ。
「ヒージー……。ごめん。俺のせいで」
ヒージーの手の先で、自然に将は頭を垂れた。
ヒージーが心臓発作で倒れて、いまも麻痺に苦しんでいるのは、おそらく、将が自分の過去の殺人を告白したからだろう。
「な、な、何を謝るんだ。たっ……ただの、に、に、肉の、肉のっ……喰いすぎの、む、むくいだ」
ヒージーは傾けたベッドから将に微笑を向けた。
そうやって笑うと少し、左右の頬がゆがんだ。それがまた痛ましい。
しかし、ヒージーは歪んだ笑いのまま、将に視線を向けた。
「将。みたぞ」
「え?」
そこにいた看護士が、専用棚から将が載っている、あのファッション誌を持ってきた。
「いつも、自慢しておいでですよ。いい男だろうって」

「イッ……い～い～」

ヒージーは目を宙に泳がせた。慣れない将は思わず、はっとしてヒージーを見つめる。

「イケメン、でしょう」

「そ、そうだ。イケメンだ。わ、わかってるのに、さ、さきに言いおって」

どうやら看護士は、ヒージーが言いたいことを先まわりしてしまったらしい。

「ハイハイ。すいません。将さん、テレビにもお出になるなら、今のうちにサインもらっとかなくちゃ」

看護士はヒージーを見てにっこり笑った。

きっと誰かに将の芸能界入りを聞かされているのだろう。

口は多少不自由なようだったが、たしかに本人の言うとおり、頭は以前と同様、１００歳にしては明瞭なようだった。

しかしそれだけに不憫だった。

「ふ、ふらんすに行ってきたんだな」

「うん。モロッコもだけど」

「ど、ドゴールも、ミッテランも、もうおらん……」

ヒージーは可動式ベッドに寄りかかったまま、少しだけ遠い目をした。

政治の中枢に長くいたヒージーの遥かなる記憶の彼方で、彼らは知己だったから。

もっとも、将にとっては、どっちもすでに単なる『歴史上の人物』でしかない。

「ハルさんは？」

将は、ヒージーのベッドのわきの椅子に腰掛けながら言った。

「る、留守宅を、守ってもらっておる。大、大磯にいずれ帰るでな」

ヒージーはあの、大磯の邸宅をことのほか、愛しているのだ。

「は、はたけも、ほったらかしに、している。さ、さ、さやえんどうを収穫してやらないと、可哀想だ」

将は、子供の頃、ヒージーと一緒に摘んだ、さやえんどうを思い出す。

東京から預けられたばかりの将は、大磯になじめずに……毎日のように雷を落とす厳にも反抗しては毎日のように尻を叩かれていた。

母を亡くしたばかりで、自分が父に厄介払いされたのだ、と子供心に感じていた将は、周囲に対していつも尖っていたのだ。

あのときも何が原因だかは忘れてしまったが、ぶたれた将は縁側でベソをかきながらも、憮然と座っていた。

そんなときに、ヒージーは将を畑に連れて行ったのだ。

初めて踏む畑の土は、将が今までに知っている土と、色も柔らかさもまったく違った。

校庭の土のように赤い色でもなく、公園の木の下のそれのように、わくらば色でもない。踏み固められてもいない。

かつて母が鍋でかき混ぜていたココアの粉末のような、冴えざえとした茶色だった。

柔らかなそれは将の運動靴の下でふかふかと沈み込んだ。

蔓から千切りたてのさやえんどうは、スーパーなどに並んでいるのとは違って、粉を吹いたような白っぽい色だった。

蝋みたいだな、と将は思った。

そのくせ手に取ると、硬く締まっているくせに瑞々しい。

将は、嫌なことを忘れて、さやえんどうを無心に次から次へと千切った。

夜、そのさやえんどうを使ったみそ汁が食卓に並んだのだが、火を通すと舌の上で甘さが花開くのが子供の将でもわかった。

ヒージーはあの頃、思えばたびたび、将を畑仕事へ、また海へ釣り

に、と連れ出した。

それを繰り返すたびに、ささくれていた将の心は、次第になだめられていったのだ。

忘れかけていた懐かしい思い出だ。

「そ、それに。大磯には、お前に渡すものが、しまってある」

そのときだけ、ヒージーは、比較的明瞭に言葉を発することができた。

「何？」

「そ、それは、あとでの、おたのしみ、じゃ」

ヒージーはにんまりと笑った。

「なんだよ～」

将は、その笑顔にようやく、心から笑うことができた。

「だからな」

ヒージーの表情が笑顔から変わった。

「もう少し、じ、自由がきくようになったら、将、わしを、お、大磯に連れて帰れ」

打って変わった真剣な顔。瞼が小刻みに震えている。それは白いも

のがまじった睫に縁取られていた。

瞼は震えているのに、その奥の灰色ににごりかけた瞳は微動だにせず将に向けられていた。

「た、たのむ。……絶対、絶対だ、ぞ」

ヒージーの細い腕が、再び将のほうに伸びた。しみに彩られた細い腕は細かく震えている。

顔も腕も薄くなった皮膚は窓の光を反射していた。

皮のジャケットの肘がてらてらと光ってくるように。

１００年の年月を経たヒージーの皮膚はどこもホットミルクに張る膜のように薄く皺になり、そのくせ乾燥していた。

聡の肌が畑から収穫したばかりの瑞々しいさやえんどうなら、ヒージーのそれはスーパーのさやえんどうだろう。

「ヒ、ヒージー」

思わず将のほうが言葉に詰まってしまった。

「たのむ……将。たのむ」

伸ばしたヒージーの手が、ぶるぶると大きく震え出したので将はあわててその手をとった。

乾燥して生ぬるい手には……まだ血が通っている。

長い指は、見事に将と相似形を描いていた。

「う、うん」

将が、あまりの真剣さにうなづいたとき、病室の扉があく音がした。

体が不自由なヒージーより、素早く振り向いた将がそこに見たのは、父の康三だった。

康三もそこにいる将にすぐに気づいたようだ。

二人は一瞬だけ目をあわせると、互いにさりげなく逸らした。

「な、な、なんだ、康三か」

「お見舞いにあがりました。おじいさま」

康三は丁寧に頭を下げた。

「お、お、お前、会期中じゃないのか」

国会が行われているのではないか、とヒージーは心配したのだ。

「終わり次第、伺いました」

将は、自分がいるべきではない、と判断して立ち上がった。

「じゃあ、ヒージー。また来るから」

と手を軽くあげた。

「て、て、テレビ、たっ……楽しみにしているぞ」

ヒージーは少々歪んだままながら、名残惜しそうな顔を将に向けた。

引き止めないのは将と康三の関係を気遣っているからだろう。

しかし、出て行こうとする将を康三が引き止めた。

「将。ちょっと」

顎をしゃくるようにして、将に合図をする。

将は怪訝な顔を、ヒージーの手前、目だけにとどめて康三に従った。

「サハラ砂漠にいたと聞いたが……疲れてないか」

病院の廊下で康三の口からもたらされたのは、意外な言葉だった。

最初将は、それが自分を気遣う言葉だとわからず……思わず目を見開いて康三の顔を見た。

康三は、見たこともないような……ヒージーが将を見るときのような目をしていた。

そこでようやく、康三が自分の体について、訊いているのだと理解した。

「ああ」

「今度、連続ドラマに出ると聞いたが」

「何で……」

「ダイヤモンド・ダストのほうから報告が随時ある。お前は未成年だからな」

いつもの高圧的な単語の片鱗に将は、いつものように目の端で父親を睨みつけようとした。

しかし、あとに続く康三の言葉は将の予想を裏切るものだった。

「しっかりやれよ」

「……？」

将は、睨もうとした目を見開くと、パチパチとしばたたいて、自分より背が低い康三を見下ろした。

気づかないうちに、唇も『え』の形で半開きになっていた。

「大人に混じって仕事をするとなると、お前にも大人の責任が発生する。

……そうなると、いくら私でも尻拭いできないことだらけだからな」

内容は厳しいものだったが、その声音は、ここ何年も聞いたことのない、穏やかなものだった。

「いいか。無責任なことは、するな」

念を押すそれも、押し付けるようなものではなく、人生の先輩として語りかけるような、ゆっくりと温かい口調だ。

だから、面食らった将は、反抗することもなく素直に

「わかった」

と答えてしまったのだ。

２３４◆製作発表（前書き）

作中に出てくる芸能人は、実在の方とは何の関係もありません。

234◆製作発表

オフの3日間、将はついに聡と一言も言葉を交わさなかった。

異変に気付いた井口は、聡の姿を見るたびに将を心配そうに振り返ったが、将は平然と一生徒になりきっていた。

3日目の放課後、教室から出て行った聡を見て、とうとう井口が口を出す。

「お前さ、アキラ先生、諦めたの？」

中学から一緒の井口に嘘を付くのは気がひけた将は、それに返事をせずに

「ホラ、お前、バスケの練習だろ」

と促しながら、井口を置いて歩き出した。

「鷹枝くん！」

そのとき、星野みな子が将のほうに、机の間を縫って近寄ってきた。

女子は早々と更衣室に移動したらしく、教室に残っているのは彼女一人だ。

そうなるのを待って将に話し掛けたのだろう。

「あ、明日からまた学校休むんでしょ……。次の登校はいつ？コ、

コピーしないとだから」

みな子は言い訳がましく、あくまでもコピーのためだ、と最後に付け加えた。

「んっと、武藤さんに聞かないとわかんないな……わかったらメールするから、星野サンのメアド教えといてよ」

「えっ」

みな子は思わず、眼鏡の奥の瞳を見開いた。

将から、メアドを訊かれた。

一瞬、時が止まるほどの大事件だった。

それを『用心』と解釈した将は

「個人情報の悪用なんかしないからさぁ」

と冗談めかして付け加える。

それでもみな子は立ちすくんだままだ。

「星野サン、携帯Ａ社？」

「うん……」

将はポケットから自分の携帯を取り出した。

「じゃあ、ケイ番教えてよ。Cメールができるでしょ」

電話番号でメールがやりとりできるA社のシステムだ。幸い将もA社だったのだ。

みな子は、まだ現実感がないまま、自分の携帯の番号を口にした。

将はそれを自分の携帯に打っている。

自分の番号が将の携帯にインプットされている。みな子はただ呆然と将の手元を見ていた。

1秒後には、聞き慣れた自分の携帯の着メロが鳴ってみな子はハッとした。

あわてて携帯を取り出すと、将の番号が表示されている。

――これが……鷹枝くんの番号。

みな子は、騒がしく鳴る携帯を止めるのも忘れて見入った。

「星野さんの着メロ、『ウルウル滞在日記』なんだ～」

将は嬉しそうに目を見張った。

みな子は我に返った。

将が『ウルウル……』の仕事でモロッコに行ったというから、ついそれにしてしまっていたのだ。

「将、ウルウル出るんだろぉ」

井口が二人の間に割って入ってくる。

みな子から見ると口をきくのもちょっと恐いたぐいの男子だったが、ボイコットをきっかけに少しだけ慣れた。

今日も黒髪になったくせ毛を頭の上のほうで2つにまとめた珍妙な髪型だ。

「そうなんだー。知らなかった」

とみな子は答えながら、携帯を仕舞うふりをした。

本当は……将が初出演した、女弁護士もののドラマもしっかりと見てしまっている。

「放送日決まったら教えてね。……じゃ」

さも、社交辞令のようにそっけなく言い添えて、みな子は早足でその場を去ろうとした。

「星野サン、練習は?」

「今日は予備校なの」

「ふーん。じゃあ校門まで一緒に帰ろうよ」

みな子は足をとめて佇んだ。時が再び止まった。

「オハヨーございます」

翌日、将は朝１０時には事務所に顔を出した。

「あ、ＳＹＯくん、おはよー！」

「モロッコ、どうだった？」

「お土産美味しかったよ！」

事務所中の人間が何かと声をかけてくる中で、武藤が満面の笑みで近づいてきた。

「将、見て」

とパソコンの画面の前に将を引っ張ってくる。

そこには、事務所に所属するタレントのＨＰへのアクセス数が表示されている。

事務所のスタッフしかアクセスできないページだ。

「男性中、堂々の５位よ」

低い声ながら嬉しそうな武藤は、画面をのぞきこむ将の肩をポンポ

ンと叩いた。

「ＳＹＯくん、カッコよかったですもん」

隣の席の若い女スタッフも首を伸ばして声をかける。

「なんで……？」

大した活動もしていないのに。素人として載ったあのファッション誌の影響だろうか？将は素直に疑問を口にした。

「奄美さんのドラマにゲスト出演したの忘れたの？」

「あ、そっか」

それは将が海外ロケの最中にオンエアされていた。

「アップが多くてビックリしたわ。もう、インタビューの申し込みもチラホラ来てるのよ。

明日、『ばくせん２』の制作発表があるから、そのあとはどんどん引き受けるわよ」

クールな武藤の顔だが、今日は嬉しさからか、その印象はずっと柔らかかった。

翌日、正午からある『ばくせん2』の制作発表にあわせて、将は武藤と某ホテルへやってきた。

7月開始のドラマの制作発表にしては少し早めなのは、爆発的な人気だった前作の第2弾ということで注目されているからだろう。

「仲田雪絵に会えるの？」

タクシーの中、将はウキウキと武藤に訊いた。

前作から引き続き主役の女教師役を演じる人気女優だ。

「当然でしょ。共演者ですもん。共演者なんだから、毅然とね」

武藤の横顔はあくまでもクールだ。

ホテルに着くなり、衣装を手渡される。

制作発表は、生徒の衣装を身につけて行われるのだ。

将は控え室に案内されて、着替えとヘアメイクを施される。

そこには、何人もの生徒役が同じように着替えとヘアメイクを施されていた。

どうやら仲田雪絵が担当するクラスの悪ガキ全員が今日はせいぞろいするらしい。

リーゼントや、虎刈り、アフロヘアにモヒカンなどカラフルで珍妙な髪型にされている彼らは皆、将と同じぐらいの年頃に見える。

しかし、井口らと違って、悪そうな姿に似合わず、彼らは皆礼儀正しいのだった。

３０分後、武藤の前に現れた将は、ガクランを身につけて、明るい茶髪をツンツンに立たせた悪ガキ高校生になっていた。

『仲田チャン』演じる教師は、さぞ苦労しそうだ、と見上げた武藤はクスッと笑った。

「俺、ガクランって初めて。ちょっと嬉しいかも」

将もちょっと嬉しそうだ。

「将、ちょっとこっち睨みつけてみて」

「……コラァ」

と役になりきって、武藤を睨みつける。

眉は左右非対称に寄っているし、舌は丸まっていて完璧だ。

「……ぴったり。将、地でやってるでしょ」

「まっさかぁん。ちょっとションベン」

将はすぐに笑顔に戻ると、武藤に背中を向けた。

しかしトイレへと歩く後姿は、バッシュの踵を踏みつけた独特のガニ股だ。

誰にもまだ演技指導をされたわけでもない。

衣装を身につけただけで、記憶の中にある、そういう姿の悪ガキの歩き方を知らずにトレースしてしまっているのだ。武藤は感心した。

手を洗った将はペーパータオルが切れているのに気付いた。

衣装に着替えた将は、ハンカチを持ってくるのを忘れたのだ。

――しまった。

まさか、手に残った水気を衣装になすりつけるわけにはいかないだろう。

思わずあたりを見回した将は、自分がいる洗面台の端に、同じようなガクランを身に付けた青年がハンカチで手を拭いているのを見つけた。

やや長めに垂らした濃いめの金髪で顔は隠れて見えないが、おそらく共演者だろう。

将は迷わず

「ね、ハンカチ貸してくんない？」

と声をかけた。

金髪の青年はこちらを振り返った。

ハッとするほどの美青年だった。

背は将よりかなり低いが、色白の肌に細めに調えた眉毛が、細面の顔に似合っている。

女のように長い睫の庇を持った切れ長の目の中で、冴え冴えとした瞳がこちらにゆっくりと動いた。

青年は将を一瞥すると、無言でハンカチを差し出した。

ちゃんと乾いた方に折り返してある。

「サンキュー」

将は手を拭わせてもらうと、それを畳みなおして返した。

そのとき、後ろの個室から、またガクラン姿の若者が出てきた。

髪は黒い短髪だが、ガクランの下に赤い派手なTシャツを着ている。

彼は将にハンカチを貸してくれた金髪の青年を見るなり、背筋を伸ばした。

「わっ、四之宮さん！お疲れ様です！」

しかし『四之宮』と呼ばれた金髪の美青年は、それに答えもせずに静かにそこを立ち去った。

「うわー、四之宮さん、怒ってないかなあ」

赤シャツの若者は、居合わせた将に言うともなく独り言を呟きながら、手を洗った。

鏡には、眉尻が少し下がった人のよさそうな顔が映っている。

「え、誰あれ？」

将は、さっきの美青年のことを知っているらしいその若者に、訊いてみた。

「ＫＡＴＺＥの四之宮さんでしょ。知らないの？」

赤シャツはウソだろ、という顔で将を振り返った。

「知らない」

将は素直に答えた。

言われてみれば、たしかにどこかで見たような顔かもしれないが、そんなアイドルグループがいたことすらわからなかった。

「……ふーん。あ、僕、『ばくせん』で共演する大野啓介っていいます。よろしく」

赤シャツは気を取り直したように、自己紹介をした。

目と眉毛の間が、やや離れているおかげで、いつもなごんでいるよ

うに見える顔だ。

笑い顔になるとますます眉尻がさがり、人がよさそうになる。

「僕は……」

「ＳＹＯくんでしょ」

自己紹介する前から、彼は将を知っていた。

え、という顔を隠せない将に

「〇〇に出てたから」

と将が『一般人』扱いながら１Ｐで取り上げられた雑誌の名前を彼は出した。

「知ってる？メインの５人の中で、本当に１０代なのＳＹＯくんと僕だけなんだよ」

と啓介は親しげに付け加えた。

「へえ。さっきの四之宮くんは？」

「ハタチ」

「ふーん」

意外だった。

背が低いせいか、また美しい瞳がそう見せるのか、将には彼が自分より年下に見えていたのだ。

「あのさ」

啓介はあたりを見回しながら将を手で呼び寄せた。

声がぐっと小さくなっている。ナイショ話の合図だ。

「君の前に、飲酒喫煙でおろされたのって、四之宮くんの相棒だから。気をつけたほうがいいよ」

将は思わず啓介の顔をのぞきこんだ。

啓介は将の顔を見てうなづいたが目は笑っている。

「それに、あの人、芸歴１０年ぐらいあるし」

ああ。このことか。

将は思わず声に出しそうになった。

武藤の注意が蘇る。

『将。この世界は、先輩後輩の礼儀をどこよりも大事にするの。たとえ年が若くても芸歴が長い人は先輩になるのよ。

だから先輩に嫌われないように口の利き方にはくれぐれも気をつけてね』

「俺はまだデビューして1年ぐらいだけどぉ」

目の前の啓介が、ちらりと将を見た。

将はとっさに

「すいません」

と頭を下げた。

「いいって。気にしなくても。俺はまだ1年だから君とは同期みたいなもんじゃん。これからヨロシクね」

啓介はあいかわらず親しげな顔で、将の肩をぽん、と叩いた。

235◆猫のその後

まもなく中宴会場で製作発表が始まった。

ドラマの制作発表なので、ＴＶカメラは自社のみだが、雑誌関係者はかなり来ている。

広めに作られたひな壇の上に、将ら生徒役は並ばされた。

特に将、大野、四之宮らメインの５人は生徒の中でも前に並ぶように指示されている。

そこへ主演の仲田雪絵が笑顔で登場した。すっかりおなじみになったジャージ姿だ。

おもったよりずっと小柄なのに将は驚いた。

しかし小柄なのに、あたりをうっとりとさせるオーラに満ちているのに２度驚く。

「ちょっと、アンバランスだよな。あのＳＹＯってコ」

武藤は声のほうを思わず振り向いた。ひそひそとした声だが、ＳＹＯの名に敏感に反応したのだ。

そこには二人の男がいた。きちんとしたスーツを着てひな壇を眺めている。

持っているデジカメが小型デジカメなところと、服装から、芸プロ関係者だろうか、とあたりをつける。

「生徒役メインのうち、一人でバカでかいよな。大野くんと比べても１０センチ違う。うちの四之宮とは……並べたくないな」

聞き耳をたてた武藤は『うちの四之宮』という言葉から、彼らが業界５指に入るＪプロの人間だということがわかった。

「仲田ちゃんが小柄だから、生徒も小柄で揃えるって発想のはずなのに……まあ、イケメンくんであることには変わりないわな」

「まったくＤプロも偉くなったもんだ」

スポットがあたっているひな壇以外の場所は暗い。

だから武藤が一重の切れ長の端で鋭い視線を送っていることに、彼らは一向に気付かない。

ひな壇では、彼らがいうとおり、５人のメイン生徒の中で首１つ分背が高い将がいた。

やや緊張した面持ちながら笑顔をつくっている。

――将、頑張るのよ！

武藤は、客席から目線でエールを送った。

それから、将は少しずつ忙しくなった。

何しろ、前の『ばくせん』のメイン生徒役は皆、人気アイドルや俳優として活躍している。

そのパート2ということで、将たちは明日の人気者扱いで次々に取材を受けた。

その数は世の中にこんなに雑誌があったのか、と思うほどだ。

加えて、ファッション誌やメンズｍｏｎ－ｍｏでスタイルのよさを披露した将は、モデル系の仕事も多い。

『行けるうちに出席日数を稼いでおきなさい』

という武藤の配慮で、学校には出来るだけ行かせてもらえた。

ほとんどは午前中のみ、などで1日中いられることはなかったが。

あいかわらず将は必要以上に……例えば指されたときなどは別だが……聡と言葉を交わさなかった。

そんなようすに、クラスメートたちもようやく異変に気付いたようだった。

「ねえ、鷹枝くん。アキラ先生とはどうなってんの？」

休み時間に早退しようとする将に、チャミが甲高い声で聞いた。

近くでは星野みな子が、ひそかに耳に神経を集中させている。

「……もともと何ともないよ」

「うっそぉ！めちゃくちゃ付きまとってたじゃん」

やめなよ、とチャミの肩をカリナがつかんでいる。

将は一瞬黙って、瞳だけを動かしてチャミを見下ろした。

そのようすに、チャミは、その後ろのカリナごとたじろいだ。

しかし、すぐに明るい調子で

「そっかな？」

と返した。そして、チャミもカリナも通り越して、席についたままのみな子に顔を向けると

「みな子ぉ～、コピーありがとう！またヨロシクっ！」

と手をあげた。

「み、みな子ぉ？」

チャミとカリナがみな子を振り返って、再び将のほうに視線を戻したときは将はカバンを肩にかつぐようにして入り口をくぐっていた。

みな子自身もびっくりしていた。

『星野サン』がいきなり『みな子』になったのだ。

考えれば、名前だけを、声変わりした男子に呼ばれるのは初めてだった。

みな子。その名前を初めて低い声で呼んだのが、鷹枝将。

みな子は、悦びに震える心の中を表面に出すまいと、今日あてられる場所の準備に集中するフリをした。

将は、タクシーで現場に向かいながら、携帯を開いていた。

いつ武藤などに見られるかもしれないから、待受画面は携帯オリジナルに変えてある。

最新のメールを開く。

そこには聡からの短いメッセージがあった。

＝＝＝＝＝＝

メール、ありがとう。

ずっと、見守ってるよ

＝＝＝＝＝＝

ここのところ将は、寂しくなると、こっそり聡からのメールを繰り返し見ている。

それは、他人が見たとしても、ありふれた、短い言葉でしかない。

だけど、その中には、受け取った将だけにわかる、聡の気持ちが封じ込められている。

短い文字の羅列は、将が読めば血が通う。

血が通い始めた聡の想いは、瞳の網膜を通じて、将の体を駆け巡る。

すべての毛細血管のすみずみまで聡の思いが行き渡るまで将は、聡を思い浮かべて目を閉じる。

そうやって静かに聡を思う時期があるのも悪くない、と思うことにしている。

たまの学校で……教壇の上に立つ聡に出会えたときは、いっそう目

に力を入れるようにしてその姿を、耳に神経を集中して声を焼き付ようと努力した。

みな子にもらうことにしている、聡のプリントのコピーも、聡を感じることができる素材の1つだ。

近頃、聡は新しい映画から例文を抜き取ることも多い。

市販にテキスト化されていないものを教材にするということは、聡自身の労力を意味する。

聡が皆に覚えて欲しい、と聡自らが抜いた例文を将は1つでも覚えようと、新しいマンションのベッドにそれを持ち込んで眺めながら眠りにつく。

「ハイ。昨日の分だけだけど」

早くも翌々日に学校にこれた将は、さっそくみな子にノートを渡された。

いつもギリギリの時間に来る将だが、今日は比較的ゆとりのある時間に来ている。

「サンキュ」

そんな将とみな子の様子を見た、チャミやカリナがヒソヒソと話をする。

「やっぱさぁ……鷹枝くん、アキラ先生からみな子にチェンジしちゃったのかなあ」

「でもさ、全然タイプ、ちがくな～い？」

「だよねー。でもこないだ、放課後一緒に歩いているの見たって１年がギャースカ騒いでたし」

そんな風に噂されているとも知らずに……いや、本当はみな子は知っている。

すれ違う下級生から羨望の目で振り返られることや、ときに睨みつけられることもあった。

友人のすみれですら

『ちょっと、みな子、鷹枝くんと付きあってんの？』

などと訊いてきた。

もちろん『違うよ、単にノートとってあげてるだけだよ』ときちんと否定することは忘れないが、そのたびにみな子の心には奇妙な喜びが走るのだ。

愉快さ、といってもいい。

火のないところに煙は立たない、という。だけど、そもそも煙は火

のもとではないのか。

虫眼鏡のレンズで黒い紙に日光を集めたとき、最初に出てくるのは煙だ。

そこに油などの可燃性のものがあれば一気に燃え上がる。

だけど、みな子には、どうすればこの煙が炎に燃え上がってくれるのか、わからない。

ただ、しつこくして、紙を湿らさないようにだけ、気をつけるしかない。

「あのさ……」

さっそくみな子のコピーに見入る将に、みな子は慎重かつ、さりげなく話し掛ける。

幸い、横からちょっかいを出しそうな井口はまだ来ていない。

今日、将が来るとわかっていたから、みな子は髪をおろしている。

それがさらりと、うまく顔に掛かってほしい、とみな子は願いながら朝、アイロンをかけた。

「猫のこと、わかった?」

「ああ」

将はやっと、みな子のほうを向いた。

実は先週、将と一緒に帰ったとき、モロッコの話があまりにも面白かったので……将が話すからいつまでも聞いていたいほど面白かったのかもしれないが……

つい、校門までといいつつ駅まで一緒に歩くことになってしまった。

まだテレビに1本と、一般人として雑誌に出ただけの将なのに、人目をひどくひいた。

下級生や、他校のギャルが振り返るのがわかる。

露骨に指差している者までいる。

――きっと、つりあわないとか言われているんだろうな。

俯いて下を向いたみな子は、並んで歩く二人の影がアスファルトに映っているのに気付いた。

影は、二人を先導しているように、二人が行く道に長く伸びていた。

オレンジ色の陽光の中で紫の影になった二人は、なかなか親しそうに見えて、みな子は気を取り直した。

だが、モロッコの話が一段落してしまうと、しばらく沈黙した。

沈黙は、みな子には一大事だった。

何か話題を見つけなくちゃ！とみな子は自分の影を踏みしめた。

やっきになったみな子は、あの1年のときの猫のことを話題にしてみたのだ。

「あのときの、子猫ってそのあと、どうなったの？」

「猫ぉ？」

大げさにこちらを振り返る将は覚えていないようだったが、みな子は辛抱強く説明する。

ちょうど、今ぐらいの時期、こんな天気のときだったような気がする。

「1年のときに、上級生をやっつけて、ビニールに入った猫を助けてたじゃん」

「あー、あれ！」

そこまで聞いて思い出したらしい。将は歩きながら上目遣いになった。

「ひっどいよなあ。猫を袋詰にして蹴ったくるなんてよぉ。……あいつら同じ目にあえばいいんだよ」

「やっぱり……死んじゃったの？」

将の激しい語気に、猫はやっぱり死んだのだと、みな子は思った。

だが一応確かめる。

あんなに……腸がはみ出るほどになった猫が生きられるはずがない。

みな子はアスファルトに映る自分の影をそっと踏みしめる。

「いや。たぶん、まだ生きてると思うよ」

「え？」

みな子は一瞬足を止めて将を振り返った。将も立ち止まってみな子を見た。

「ほんと？」

「うん。病院に連れてってね。俺もダメかと思ったけど、助かったよ」

オレンジ色の太陽が将の後ろから差して、まるで後光のようだった。まるで神話に出てくる太陽神のように、将はこちらを見て微笑んでいた。

みな子は思わず涙が溢れそうになるのを見られまいと、顔をそらすと再び影に向かって一歩を踏み出した。

「そう……。よかった」

さっきのとは違う沈黙が、みな子を包んでいた。

なんだか分からないけれど温かい、時間のようなもの。

みな子を包む世界はすべて、暖色に染まってキラキラ輝いていた。

車のボンネットに反射する夕方に近い太陽の色。線状に金色を反射する電線。

こんなに美しかっただろうか。

「今は、どうしてるの？」

この世界を、自分の声で壊すのはもったい気もしたが、あまりにも美しすぎて、落ち着かなくなったみな子は再度質問を口にした。

「どうしてるかなぁ……。知り合いに頼んで、猫好きの家に引き取ってもらったんだけど……」

将が考え考え歩いているうちに、駅が近づいてくる。

「今度、訊いてみるよ」

そういって、将はみな子と別れたのだった。

236◆日曜日のデート

日曜日。

みな子は、いつもの駅前に立っていた。

いつもと違うのは、私服であること。

そして全身が震えそうなほど、ときめいていること。

あの鷹枝将と待ち合わせをしている自分が信じられない。

猫の行方の続報について訊いた時、将は

「みな子、猫好きなんだ」

とみな子の顔を見上げた。

「う、うん。好きなほう……だけど」

別に飼うほどではないけれど、可愛い野良猫がいれば、つい構ってしまう。

「じゃさ、一緒にあの猫に会いに行かない？」

時ではなく、全身の血流が停止した。……ような気がした。

だから、脳が働きを止めてしまったように、みな子は、将が何を言っているのか、よくわからないのだろう。

たしかに『一緒に会いに行かない？』と聞こえたことを認識するのに2、3秒掛かった。

「行こうよ。あの猫、俺の知り合いのところにいるらしいんだ」

その間、将はもう一度、繰り返す。

将はあきらかにみな子を誘っているのだ。それがわかったとたん、みな子の心臓は早鐘のように打ち始めた。

「でで、でも、忙しいんじゃないの？」

「そーだね。えっとぉ」

将は携帯を取り出した。

どうやらスケジュールをメモしてあるらしい。

「今度の土曜日が雨じゃなかったら、日曜日はオフになるから……日曜日だったらあいてるよ」

今週の土曜日は、川原でエンディングテーマの撮影があるのだが、梅雨ということもあり、予備日として日曜日が設定されているのだ。

したがって土曜日にうまく撮影ができれば、日曜日はオフになるというわけだ。

みな子は、土曜日が晴れてくれることを祈った。

日頃の行いがよかったのか、神様がみな子の恋を応援してくれているのか、土曜日は晴れた。

将からはみな子の携帯にCメールで連絡があった。

『今、無事撮影中。だから、明日1時に駅前ね』

それを受け取って、みな子は嬉しい反面、激しく悩み始めた。

男子と初めて、2人きりのデート、らしきもの。

相手は、ファッション誌にも出ている鷹枝将だ。

何を着ていけばいいのか。

みな子は手持ちの服はどれも、あの将には幼すぎる気がして、急遽貯金をおろして買い物に出掛けたのだ。

それが、今みな子が身につけている服だ。

といっても、結局デニムスカートにキャミ&ブラウスという、極めて高校生らしいスタイルになってしまった。

新調したのはサンダルとバッグだ。

2つともキャミと色を揃えてある上に、試着して足が一番きれいに見えるものを選んだのだ。

みな子はそのサンダルを履いて、30分も前に駅についてしまった。

やたらに喉が渇く。みな子はペットボトルのお茶を買って飲んだ。

ボトルの口に口紅がつく。せっかくつけた口紅が落ちてしまったのではと気が気ではない。

まだ、待ち合わせの1時まで7分もある、トイレで付け直そう、と思ったみな子の後ろでクラクションが鳴った。

まさか自分のことだと思わないから、無視する背中にしつこく鳴らされる。

――うるさいな。

と睨みつけようとしたみな子は、そこに、ミニの運転席の窓から顔を出して

「みな子ー！」

と呼ぶ鷹枝将を見つけたのだった。

まさか車を運転してくるとは思わなかったから、みな子は目を真ん丸くして駆け寄った。

「鷹枝くん！めっ免許持ってるの？」

「早く、乗って。後ろつかえてる」

「う、うん」

みな子は慣れない手つきで助手席のドアをあけた。

それを……今、バスで駅に着いた聡が偶然見ていた。

まさか聡が見ていたとは気付かないまま、将は車を発進させた。

「シートベルト、してもらえる？」

そういわれるまでみな子はどうしていいかわからなかった。

何せ、男の人と二人きりで車に、しかも助手席に乗るなんて初めてなのだ。

家族で車を利用するときは、子供であるみな子は後ろが定位置だった。

「ご、ごめん」

そういいながらあわててシートベルトを引っ張ってくる。

シートに深い位置で拘束されると、ミニスカートの太ももが予想外に丸出しになってみな子はあせった。

あわてて、バッグをスカートのかわりに腿に乗せる。

もっとも、将はみな子の太ももなどに見向きもしていないようだ。

器用にハンドルをまわしながら

「俺さ、待ち合わせ時間の前に、集合しちゃうの好きなんだよね」

などと上機嫌だ。

「今日、眼鏡じゃないんだね」

「え。あ？……うん。使い捨てレンズにしてみたんだ」

これも昨日買ったものだ。

「似合う、っていったら変だけど、似合うよ」

「……ありがと」

みな子は助手席のシートの上で身を硬くしていた。

薄いサングラスをかけた将は、いつも以上に……みな子の想像を遥かに越えて大人っぽかった。

ほとんど大人の男だ。

危険な気配さえする……大人の男と、車という密室で二人。

いつもの将の声がなかったら、逃げ出したくなったかもしれない。

みな子はいつもの将の声に安心したくて、積極的に質問を投げる。

「免許、いつ、取ったの？」

「4月。お誕生日と同時に取得しました。ホラ」

将は得意そうに、片手ハンドルの空いたほうの手で免許をみな子に渡した。

二人が、あの猫がいるという家についたのは3時近くだった。

昼を食べていない将が『デ〇ーズ』に寄ろうと提案したからだ。

将の向かいに座ったみな子は、付き合いでパスタを頼んだのだが、パスタをフォークに巻くのに苦労した。

いつもやってることなのに、なぜかうまくいかないのだ。

どうしても……巻いたパスタは大口をあけなくてはいけないサイズになってしまう。

将の前でこんな大口はあけられない。と、みな子はいったん巻いたパスタをほどいて巻きなおす。

やっとほどよい量になったかと思うと、だらんと垂れ下がる。

――パスタをするのはみっともない。

みな子はパスタが垂れないように、かつ大口をあけないでいいサイ

ズに巻き上がるように、パスタをほどいては、適量になるように繰り返し巻きなおさなくてはならなかった。

――パスタなんか頼むんじゃなかった。

ひそかに後悔するみな子の前で、将は頓着もしないでハンバーグを気持ちよく平らげていた。

「ああ！猫ちゃん！」

みな子は、その家に入るなり、まっ白な猫を見つけて手を伸ばした。猫はびっくりして一瞬身構えた。緑がかった目を丸くすると、ぴょーん、と棚の上に乗った。

小さなオフィスビルのように見える建物の、外階段を登って3階にある家。

看板に『西嶋光学工業』とあった。

そう。ここは大悟の保護者である、西嶋隆弘の家なのだ。

2年前、獣医のもとで回復しつつあった猫をどうするか、将は『三宅のおじちゃん』こと弁護士の三宅に相談したのだ。

三宅は無類の猫好きとして将もよく知っていた。

それで猫はいったん三宅が引き取ったのだが、その後すぐに、西嶋の家にもらわれてきたのだという。

「シロ、というんですよ」

節子がカラフルなストローを差したジュースを持ってきながら猫の名前を教えてくれた。

大悟と同居している将とその友達、かつシロの恩人の訪問ということで、歓迎されている。

「シロ、シロ、おいで」

みな子は、棚の上にあがった猫に声をかけた。

「ほっとけば、降りてきますよ。人間大好きですから」

隆弘も笑った。

「前に飼ってた子が亡くなりましてね。それで、三宅さんに『まだ子猫だから』と頂いたんです」

将もジュースが置かれたダイニングに腰を下ろした。

三宅の友人にあたるこの西嶋隆弘も猫が好きらしい。

しかし本人は猫というよりも柴犬、といった感じの穏やかな容貌だ。

ひとしきり、シロのことで談笑したあとで、

「大悟くんのことで、訊きたいことがあるんですが……」

と、西嶋が切り出してきた。

意外な質問に、将は目をあげて西嶋の顔を見た。

穏やかな表情は、真剣な表情にいつのまにか変わっている。

将は、てっきり大悟は西嶋の世話になっていると思い込んでいた。

もう、将がM区の、事務所近くのマンションに生活拠点を移して2週間以上になるからだ。

今日だって、大悟にはメールで『今日、猫見にいくから』と伝えたはずだ。

「大悟、こっちにいるんじゃないんですか」

将は訊き返した。

西嶋によると、大悟はあいかわらず将と二人で暮らしていると言っているらしい。

「そうですか。鷹枝くんは、お仕事の都合でM区に移られたんですね。……ということは大悟くんは鷹枝くんのマンションで一人で暮らしているんですね」

将の話を訊いた西嶋は、腕組みをしてうーん、と考え込んだ。

「それで……かな」

節子が低い声で隆弘に、確認するように問い掛ける。

「大悟、どうかしたんですか？」

将は西嶋夫妻の様子に、大悟の異変を感じて思わず疑惑を声にした。

「先月末に、今月分のお小遣いを取りに来たんだけど、たった１ヶ月なのにびっくりするくらい痩せちゃってね」

１拍の沈黙があったあとで、節子のほうから話し始めた。

大悟は、この西嶋夫妻から月に一度小遣いをもらうことになっているらしい。

「それに、昨日……」

「昨日？」

「急に来て、お金が足りなくなった、貸してくれって……」

将は黙って節子の話を聞きながら、またパチンコだろうか、と考えた。

でも、それにしてはなぜ痩せるのだろうか。あの痩せ方は、将が見ても異常だった。

「それが、２０万って言うんだよ」

節子は、昨日を思い出したのか、眉根を寄せて、あげた右の掌をパタンと振り下ろした。

「貸したんですか？」

節子は首を横に振った。かわりに隆弘が口を開く。

「何に使うのか、って訊いても黙ってるんだよ。だから、使い道をきちんと納得させてくれるなら、貸すんじゃなくて、あげる、と言い渡したんだが……」

大悟は、いちおう『わかりました』と素直に帰っていったらしい。

将の中で、何か嫌なラインがつながりそうだった。

237◆哀しみ・決意

「あ、美智子？ゴメン。急に気分が悪くなっちゃって。……うん、大丈夫。それで、買い物なんだけど、今日はやめていいかな……」

ドタキャンを、快く承知してくれた美智子に、聡は心から済まないと思った。

もともと、今日買い物に美智子を誘ったのは聡のほうである。

6月のボーナスが出た聡は、夏物のスーツや靴を新調しようと思っていたのだ。

しかし、そんな浮き立った気持ちは、とうに失せている。

……駅前で将のミニとそれに乗り込む星野みな子を見てしまったから。

ミニが走り去ったあとも聡は、しばらくその場で呆然と立ち尽くしていた。

惰性で私鉄に乗り、どうにか山手線の駅までやってきたが、買い物をする気分などではなくなっていた。

乗り換えへと急ぐ乗客の一番後ろから、聡はとぼとぼとホームを降りると、美智子に電話をしたのだ。

美智子への電話を切ると、ため息が出た。

嘘をついた自己嫌悪が呼び水になったように、体の中からすべての力が気体になって出ていき、聡は立っているのもだるいほどになった。

記憶力まで失せてしまったのかどうやって帰ったのかも覚えていない。

気がつくと、暮れはじめた自宅のベッドに身を投げ出していた。

目を閉じると、さっきの駅前での光景が蘇る。

薄いサングラスをかけ、窓から顔を出した将は楽しげにみな子の名前を呼んでいた。

そして駆け寄るみな子。

眼鏡をはずし、バック、サンダル、キャミソールと同系色でコーディネートした姿は浮き立つ心を表しているようだった。

二人の姿を思い出した聡は、ただ哀しかった。

瑞樹のときに感じた、腹立たしさや嫉妬はない。ただ哀しみだけが、心の中から湧き出して聡を浸した。

同い年の、健全な……誰がどんな立場で見ても似合いの二人。

二人で待ち合わせをしていたからといって、付き合っているわけではないだろう。

クラスメートだから、二人でどこかに行くチャンスぐらいはあるだ

ろう。

そんな風に想像できる程度の冷静な思考が失われたわけではない。

今、ベッドに横たわる聡も、将が他の女性……女の子と二人でいた、というショックからは、とうに立ち直っている。

聡の中から湧く哀しみは、別のものだった。

……将がいつか、聡のもとからいなくなる。

……将に似合いの年頃の女の子を見つけて、聡は無用になる。

そんな予感を、そのまま現実にしたような二人に、聡はおびえたのだった。

『聡、お前は通過地点でしかない』

博史の声が蘇る。

若い将にとって、聡は通り過ぎる女の一人でしかない。

あれは予言だったのだろうか。

――予言になんか、したくない。

聡は、起き上がると携帯を手に取った。将の番号を表示する。

通話ボタンを押そうとして……その手を下げた。

何を話すというんだろうか。

『今日、星野さんと、どこへ行ったの？』

『星野さんのことが好きなの？』

『私のことは、気にしなくていいのよ』……。

聡は恨みがましいセリフごと携帯から手を離すと再び寝転んだ。

――女々しい。いやだ。

聡は自分の中のねちっこさから背を向けるように体を横にすると、爪の周りの逆剥けを噛んだ。

引っ張った逆剥けは肉まで深く裂けて、そこにぽっちりと赤い血がにじんだ。

ひりつく痛さに聡は冷静になる。

危うくみっともない真似をするところだった、と聡はぺろりと血を舐める。

舐めてもまた傷口の形ににじんだ血が溜まる。

血はいつか固まって、跡形もなくなるだろうけれど……。

心にこんな風な小さな傷を、何度負うのだろうか。

それとも傷ではなく、いつか聡など必要ないと、将自身からばっさ

り切りつけられるのだろうか。

聡は目を閉じてその痛みを想像しようとしたが、恐さに想像をやめた。

――どうして将なんか、好きになってしまったんだろう。

苦しさのカオスになった聡の心に、そんな疑問がぽっかりと浮かぶ。

もしも、博史を好きなままだったら。

何も考えずに、博史に寄りかかり、今ごろは幸せな結婚生活の真っ只中だっただろう。

わざと、そう考えて見て聡は、気がつく。

――自分が決めたことじゃないか。

将を好きになったのも、その将が大人になるまで離れて見守る、ということも……みんな聡自身が決めたことなのだ。

聡は起き上がると、飾り棚の下の引き出しを開けた。

そこにはいつかもらった、将からのバースデイカードが入っていた。

青く滲んだ将の文字。

そして、手帳を取り出して背表紙を開く。

こちらには聡がプレゼントした万年筆で書かれたセピア色のメッセ

ージ。

２つをテーブルに広げると聡は、ただ繰り返し眺める。

「よかったね。シロが元気で」

みな子の言葉にも、将はうわの空だった。

西嶋家からの帰り道。

「……鷹枝くん？」

みな子が返事のない将を見る。それでようやく将は我に返った。

「なに、みな子」

「……大悟くん、って人のこと考えてたの？」

「ん……。まあね」

あたっていたので将は素直に答えた。

西嶋家に現れて、２０万もの金をねだった大悟。そしてあの痩せ方……。

――まさか。

将の考えは、嫌でもそこへいく。……覚醒剤。

しかし、瑞樹があの薬の虜になったとき、誰よりも心配し、やめさせようとしていた大悟だ。しかも、瑞樹を失ったのはあの薬のせいだ。

一一考えられない。

将は、自分でたどりついた答えを必死で否定しようとしていた。

だけど、再び思考を巡らせると、その答えにたどりつかざるを得ない。

そんな無限ループに将の脳は囚われていたのだ。

「大悟くんって、鷹枝くんとはいつから友達なの？」

将は、「中学」と質問に手短に答えると、思い出したようにみな子を振り返って

「将でいいよ」

と笑顔をつくった。

みな子はみな子で、無難な話題を持ち出したつもりだったのに、びっくりして将を振り返る。

目が合ってしまって下をむいたみな子は

「……そんな」

と呟いた。

「そんな？」

「アキラ先生に悪いし……」

将は、思いがけないところから出た『アキラ』の名前に唾を飲み込んで、前を向く。

「アキラ先生？……関係ないよ」

交差点を曲がるのに集中するふりをして、淡々と口にした。

嘘をつく喉が貼り付きそうだ。

「ウソ。付き合ってるんでしょ」

二人が付き合っているという事実など、改めて確認したくないくせに、みな子はつい訊いてしまう。

さすがに将の顔を見るのがつらくて、窓の外に顔を向けた。

外はまだ明るいが、少し曇って、空はみな子の心のように変な色になっている。

「付き合ってないよ」

将はなぜ、そんなウソをつくのか。みな子は少し腹が立った。

「スキーのとき……。二人で一晩中一緒にいたんでしょ」

どうして『付き合ってない』という将の言葉を喜ばないのか、信じないのか、みな子は自分が不思議だった。

――そんな、表面の言葉を信じるほど、子供じゃない。

自分が子ども扱いされるのが……、何もしらないその他大勢扱いされるのが嫌だったのかもしれない。

みな子はさらに続けた。

「それにあたし。見たんだから。いつだったか、駅で先生と……鷹枝くんが抱き合ってるの」

自分は二人の秘密の証拠を握っている。

だから、将に一歩踏み込める……みな子は心の深いところで悦びに震えながら、将の横顔の変化を注意深く観察した。

将は、将でみな子によって暴かれた、いつかの二人が懐かしかった。

いつのことを言っているのかは、曖昧だったが、それでもまるで懐かしい物語を聞くように……あのころの二人が、幸せだった頃がフラッシュバックした。

いや、いつだって忘れることはない。

いつだって好きなときに引き出しから出せる聡の記憶。

いつになったって、決して色褪せさせやしない……。

将は、ハンドルをぎゅっと握り締めると車のつらなりの向こうに見える空に、遠い聡を見た。

「じゃあ……みな子にだけ、言っとこっかな」

「えっ……」

行く先から視線を動かさないまま、サングラスの中の瞳を細めた将を、みな子は見逃さなかった。

1ナノグラムほどのわずかな期待が、みな子の鼓動を活発にし、頬をばら色にした。

「本気で好きだから……。今は離れてる」

期待はシャボン玉のように音もたてずにはじけてしまった。

238◆梅雨前線北上す

梅雨入り宣言がなされたあとに始まりながらも『ばくせん2』の撮影は順調だった。

将ら、主要な生徒役は、台本読みやリハーサルも含めて撮影に拘束されるのは週4～5日程度だ。

しかし、今回は夏の話なので、外での収録が多い。

天気がいいうちに、できるだけ外のシーンは撮ってしまおうということになり、数話分の脚本から外のシーンを抜き出して連日撮影ということになっている。

セッティングを変えて繰り返される、こまぎれのシーンは、その前後を把握するのに一苦労する。

役の気持ちに入り込むどころではない。

そのせいか将には、いまいち、演技というのがよくわからなかったが、あまり悩むことはなかった。

撮影現場が楽しかったからである。

等身大の高3の役というのもあるし、共演者のほとんどは、同年代の男子ばかりだ。

特に、大野啓介は同い年ということもあり（実際は1学年上の2月生まれだが）、気があった。

おまけに啓介はさっぱりとした性格の明るいムードメーカーだったから、おかげで将も一緒にその他大勢（といったら悪いが）クラスメート役とも、すぐに打ち解けることができた。

毎日、待ち時間にだべったり、ゲームしたりしているうちに、すっかり仲良くなった。

だから、ここのところ将はなんだか学校に行くような気持ちでスタジオやロケに通っているのである。

それにやっぱり、誰もが知っている人気女優の仲田雪絵との共演は嬉しい。

彼女と演技以外のところで話をするチャンスはほとんどなかったが、とてもいい人だということは周りの人の、彼女に接する態度を見ていてもわかる。

仲田ちゃん、仲田ちゃんと親しげに呼びかけながら、みんな目はうっとりとしているのだ。

そしてこれは、仲田雪絵以外にもいえることだが……女優や俳優たちは、実物でみると、テレビで見るよりもずっと派手な顔立ちをしていた。

仲田雪絵などは、その顔のほとんどが目のように見えるほどだ。

それがなぜか、カメラを通すと、少し地味になる。

ブラウン管を通して派手な顔立ちに見える人は、実物はまるで外国

人のような彫の深さなのだということを将は知った。

クラスメート役にしても、みんな『本物』よりかなりルックスのレベルは上なのに、カメラにうつると見事に『普通』の生徒になる。

大野啓介も実物はかなり整った顔なのに、ドラマの中では『俺、3枚目顔だし』と本人も自嘲するとおりだ。

将も、遠目のカットでは、自分が知っている顔よりも、かなり目が細く見えて

――俺ってこんなに目細かったっけ。ブサイクじゃん。

と驚いたくらいだ。

そんな中で、一線を画しているのが、あの金髪の美青年・四之宮敦也だった。

彼も、その大きな瞳は画面では細めに映ったが、その印象は細い、というより「切れ長」だった。

しかし少しでもカメラが近づけば、その黒い瞳は誰よりも早く主張を始める。

これが目力というやつか、と将は感心した。

アイドルグループの仕事で忙しい四之宮は、よく撮影に遅れてきた。

台本読みもだいたいは代役だ。

みんなが和気藹々と騒いでいるときも、それには加わらず、一人、台本を読んだり、ロケバスの中で寝てたりなどして静かに過ごしていた。

劇中では『仲良しの悪ガキ』であるメイン生徒5人の中でも、彼は1人浮いているようなところがあった。

もっとも、5人の中で彼はあきらかに主役なのだけれど。

啓介などは

「だって、恐いじゃん。睨まれそうで。だいたいハタチで芸歴10年とか、何考えてるかわかんないし。SYOとか、ぜったい嫌われてるぜぇ」

と首をすくめたが……将には、そんなに威張ってるようにも思えなかった。

なぜなら、こんなことがあったからだ。

先週行われたエンディングテーマのロケは広い河川敷で行われた。

教師役の仲田雪絵と教え子役がまじってドッジボールをする、という設定だったのだが、主役の仲田雪絵がなかなか到着しなかった。

将ら生徒は最初は大人しくロケバスの中で待っていたのだが、だん

だん狭い車内にいることが退屈になってきた。

スタッフはカメラの準備をしたり、現場になる河川敷で忙しく働いている。

前列でふわーっと欠伸をした将は、バスのフロントガラスの向こうの地面にカラフルなボールを見つけた。

おそらく撮影用に用意されているものだろう。

「大野くん、練習しようぜ」

狭いシートに寝そべっていた啓介も、よしきた、とばかりに飛び起きた。

外に出ると川原の風が気持ちいい。陽射しは強いけれど、風のおかげでそれほど暑くはない。

バスの中で缶詰になっているよりも、体を動かした方が、むしろよい準備運動になるだろう。

二人は緑の中、ボールの投げあいを始めた。

外で、ドッジボールのキャッチボールを始めた二人に、他の生徒たちもわらわらとバスを降りて参加し始めた。

最初はキャッチボールの要領だったが、人数が増えると本番さながらに、ドッジボールに熱中し始めた。

「制服を泥だらけにするなよ」

と『仲田待ち』状態になったスタッフたちも、笑いながら見ていた。

「オラオラーっ……と見せかけて」

本気で目の前の敵にボールをぶつける振りをして将は、ボールをぽーんと外野にいる啓介に送った。

しかし、少し力が入りすぎたらしい。大暴投となったボールは啓介を越えて遠くへ飛んでいった。

「どこに投げてんだよ！」

と笑いながら、ボールを追う啓介が立ち止まった。

いや、啓介だけではない。ボールの行く先を見ていた皆の動きがとまった。

将が投げたボールは、大きく弧を描くと1バウンドした。

その先には四之宮がいた。

四之宮は車のすぐそばの草むらにシートを敷いて仮眠中だった。

直射日光があたらないようにスタッフのジャケットをかぶせたその顔に、ボールは直撃したのだ。

……ヤバ。

その場にいた皆が、凍りついた。

四之宮は、すぐには反応しなかったが、しばらくしてむくっと起き上がった。

すぐそばのタイヤの下で止まったボールに、ゆっくりと不機嫌そうなまなざしを向けた。

「すいませーん」

投げた将は啓介を越えて、四之宮のほうに近寄りながら声をかけた。

「ボール、いいですかぁ？」

啓介は『げっ、怖い物知らず！』と叫びそうになった。

だが……四之宮は、何も言わずに立ち上がると、ボールを手にとり、将の手に投げ返した。

それは、起きぬけとは思えない滑らかな動作で、コントロールも正確だった。

かつスピードもあり、受け取った将の手は、軽い振動でジーンとした。

四之宮は、ボールを将に返すと、何事もなかったようにまたシートの上に仰向けになった。

しかしボールを投げ返した後に、四之宮がわずかな笑みをも投げ返したのを知るのは、将だけだった……。

6月下旬になると、梅雨前線はにわかに北上しだした。

1話をようやく全部収録した直後から、雨の日が多くなってきた。

とうとう撮影予定日が雨でつぶれて、かわりに将は学校に行くことになった。

まるで学校のような撮影現場も楽しかったが、聡がいる本当の学校にいけるのはやはり嬉しい。

浮き立つ気持ちとはうらはらに、濃い雲に覆われ、雨で濡れて色を濃くしたコンクリやアスファルトの町は真っ暗だった。

M区から荒江高校がある町までは、ラッシュと逆方向なので電車は比較的ラクだったのだが、

激しい雨に、駅から歩く将の膝下はびしょびしょになった。

歩くたびにバッシュの中でじゃぶじゃぶと水の音がして、中から水が染み出てくる。

学校まで送ってもいい、という武藤の申し出を断るんじゃなかった、と将は後悔した。

教室もそのままでは授業に適さないほどの暗さなので朝から蛍光灯が付けられている。

将は、上靴に履き替える際に、びしょびしょになった靴下を脱いでしまった。

じっとりと濡れた靴下を手に持って、将は教室の入り口をくぐった。

「おぉ、将じゃん」

将に気付いた井口が声をかけてくる。

「うっす」

将も笑顔で手をあげた。

「すっげー雨やね」

そういいながら将はカバンを置くと、濡れた靴下を窓で絞った。

本当は手洗い所で絞ってもいいのだが、いちいち廊下にでて、下級生にきゃあきゃあ言われるのが面倒だったからである。

気がつくと、靴下を絞る将のすぐ後ろに井口が立っていた。

「……どうしたん？」

将は絞った靴下を持ったままおどけた。

「あのさ」

井口は深刻な顔を近づけてきた。

今日はポニーテールにしている井口は、口の上の髭が少し伸びている。

朝バイトにいっているパン屋の匂いだろうか。香ばしい、パンが焼ける香りをいつのまにか井口は身につけていた。

「最近、大悟をサ」

そんな、なごみの香りとはほど遠い低い声。そして鋭い光を目に浮かべながら井口は将に囁いた。

「よくクラブで見かけるんだけど……。あの前原くんのヤバイ友達と、なんか、話してた」

239◆梅雨前線北上す2

久しぶりにその名前を聞いたと思った。

覚醒剤所持で警察に捕まり、退学になった前原。

その隈取をしたような目を思い出しながら、将の中で、くだんの嫌なラインがますます色濃くなっていく。

「何か……ヤバそうだった？」

変な取引やってたりとか、という質問を将はかろうじて飲み込む。まで疑いを決定的に出したくない。

「いや、ちょっと見かけただけだから……。でも大悟、痩せたな。シャブでもやってるっぽい」

井口のほうが先に疑惑を口に出したので、将は擁護にまわらないといけなかった。

「瑞樹のことから……立ち直れないんだ、アイツ」

「もう3ヶ月以上も経つのに？」

「死に方が死に方じゃん」

「ふーん……」

井口は黙ったが、あきらかに解消できない疑惑は胸の中に残るよう

すだ。

将の中でも、その疑惑は決定寸前だ。

前原の友達といえば、捕まった前原に罪を被せてバックれたような連中ばかりだ。

だが。大悟と前原は同じ中学だ。単に同級生とつるんでいただけかもしれない。

将は、無理やり自分の中の疑惑を消そうとしたが、そうしようとすればするほど確信に変わっていく。

そのとき、教室に聡が現れたので、将も井口も窓のそばから席に戻った。

雨脚はますます強まり、窓からも雨が振り込みそうな勢いだった。

みな子はＨＲ中、教壇の上の聡と、机に肘をついているのだろう、傾いた将の背中を見比べていた。

将の白いシャツは雨に濡れたのか、その下の浅黒い背中の色を透かしている。

それを見ていたら先週の日曜日、車の中で聞いた、

「本気で好きだから……。今は離れてる」

という言葉が蘇ってきた。

その直前の『みな子だけに言っとこうかな』という言葉で芽生えた、まさか、という淡い期待はすぐにかき消されたが、それにしてはみな子は落胆していなかった。

もともと期待自体が、錯覚のようなものだったからだろうか。

「先生と……生徒だから？」

みな子は訊き返した。錯覚だったはずなのに、下瞼が少し熱い。

それを瞳をあげることによって冷まそうとする。

「うん」

将は行き先から目を離さないままだ。車の流れはだんだん遅くなってきている。

「いつまで……我慢するの？」

「俺が大人になるまで」

将の口調は静かながら、確固たる決意に満ちていた。

……みな子の同級生の男子は、決意などをまじめに語ることはない。

ふざけているのが日常のデフォルトで、自分の中の核心に近づくと

言葉もなく黙り込む。

みな子は、初めて聞く、同年代の男子の決意に動揺した。

何と答えるのが適切なのかわからない頭だけが、空回りして、セリフをつくった。

「だ、だから、いきなり、あたしのこと名前なんかで呼んだんだ？」

将は思わずみな子のほうを振り返った。

――違う。

反射的に将は『い』の字に口を開いた。しかし、結果的にそうなってしまっているのかもしれない、とそれを飲み込んだ。

無意識に、聡以外に気を惹かれているアピールを周囲にしてしまっているのだろうか。

それをしないと、聡に引き寄せられてしまうから。

渋滞に入った車内を前の車のテイルランプが赤く照らしだした。それが消えたとき、将は

「……そうかも。ゴメン」

とようやく答えることができた。

「イヤだったら、戻す……けど。イヤだよね」

「ううん！」

みな子は即座に首を振って運転席の将に顔を向けた。

「全然、ヤじゃないよ」

とまで続けて、しまった、強く否定しすぎたかな、と少し後悔する。自分の気持ちがバレてしまう、と危惧したみな子は、

「そんなことぐらい、どってことないし」

と付け加えながら、将の顔から無理やり視線を剥がそうとした。

みな子はすでに、将に名前で呼ばれる喜びにどっぷりと浸りきっているのだ。

この幸せを手放したくない。例え聡の代わりだとしても。

「ありがとな。みな子」

再び、車が停止して、車内が赤に染まる。将は、助手席のみな子に顔を向けて微笑んだ。

みな子の気持ちがどこまでバレたのかは、わからない。

梅雨前線に覆われたまま、暦は7月に入った。

7月1日からモロッコで収録した『E』のCM、そして最初の日曜の夜に『ウルウル滞在日記』とオンエアが相次いだ。

『ウルウル』のオンエアの日、鷹枝家では、日曜日ということもあり父の康三、義母の純代、

そしていつもは21時30分にはベッドに入るように決められている孝太も特別に許されて、リビングのソファにいた。

赤茶けてなだらかなサハラ砂漠に将が登場したとたん、

「お兄ちゃんだ！」

とパジャマ姿の孝太が嬉しそうに、画面を指差した。

病院では巌も

「10時からなぞ、お、遅すぎるわ」

と文句を言いながらも、付き添った30年来の仲である50代の妾と共にテレビに見入った。

「あら。いい男。あたし、巌さんから乗り換えちゃおうかしら」

妾は、いたずらっぽく巌に目を走らせたが、巌はそんな戯言に付き合わず、テレビに真剣に見入っていた。

将の姿が映ったとたん、そのピンク色の目頭には、熱いものが溢れていた。

妾は立ち上がると、それをティッシュでそっとぬぐった。

聡も、ボーナスで買ったＤＶＤに録画しながらも、画面の中の将を見つめていた。

５月の……将が海外ロケに行っていた間の、奄美ユリのドラマもきちんと見ていたが、今回は、まさに素のままの将だ。

羊づくしの食事に目を白黒させ、荒野に散らばった羊を集めるのにへこたれそうになり、

その一家の長男と連れ立って『砂漠のバラ』を探しにいく民族衣装を着けた将。

異文化と厳しい気候の中で、優しくたくましい人々と交わりながらも、将は将だった。

むしろ、厳しい環境で、将の本当の強さや優しさが際立ったがごとく、なんでもない場面で聡は心を動かされていた。

番組恒例の、涙、涙の別れの場面がくる前に、すでに聡は涙を落としていた。

『ウルウル』オンエアの効果はすごかった。

事務所所属のタレント別ＨＰアクセス数も、瞬間的に１位を記録したほどで、将にはさまざまなオファーが舞い込んだ。

「将のいいキャラが出てたよね」

と社長も満足げだった。

素のままでつかえると思われたのか、バラエティ番組のオファーも多かったが、連続ドラマの収録中とあって、武藤や社長は慎重に仕事を選んだ。

仕事以外のプライベートでも、いきなり知り合いが増えたように将やその家族への連絡が増えた。

康三は、閣僚仲間で外務大臣の浅野一朗から

「ご子息、ご活躍ですなあ」

と声を掛けられた。

ＳＹＯが息子の将であることは公表していないから、康三は知らぬふりをした。

来年の総裁選を争う浅野は、油断ならない相手だ。

純代は、親戚一同からの電話応対に追われた。

こちらにもやはり、公表していないが、目ざとく見つけたのか、電話を掛けてくるのだ。

『立派に成長して……。応援しますよ』という好意的な内容が大半だったが

「嘘をつくわけにはいきませんし……。内緒にしてくれと頼みましたが……困りましたわ」

と康三にこぼした。

将本人にも、どこからどうやって調べたのか、というような人間からの連絡がひっきりなしにあった。

真剣に携帯の番号を変えることを検討していた頃に、その電話は掛かってきた。

最近、ほとんどの電話は、サイレントマナーにして無視することにしているが、アラームをセットしていた最中だった将は、うっかり出てしまった。

「将！見たわよ！カッコよくなっちゃって」

電話番号に見覚えはなかったが、ハスキーな女の声に聞き覚えがあった。

「あ……。カオリさん？」

「久しぶりね」

２４０◆２２１～２３９話のあらすじ

将が元気がない理由は、出発時に空港で聡に一方的に別れを告げられていたからだった。

仕事にならない将を元気付けるべく、カメラマンの篠塚は、将が小さい頃に過ごした思い出の場所へと連れ出す。

そこで、幼なじみのロマーヌに再会する。

同い年の彼女はバカロレア試験を控えて、自分の将来のために、恋人との逢瀬も我慢しているという。

そんな風に自分の人生を見据えたロマーヌに、将の心は動かされる。

一方、仕事にならない将をはげますべく、マネージャーの武藤は日本にいる聡に連絡を取っていた。

将を国際電話で励まして欲しいと頼んでいたのだ。

ロマーヌと別れてホテルに戻った将に、聡から電話がある。

将は聡に、一日も早く大人になれるように、誰にも文句を言わせないような実力を付ける、と誓い、それまでの間、距離を置くことにする（２２１～２２５話）

一方、大悟は、瑞樹が遺した覚醒剤を売りさばいて金を稼いでいた。

そんなある日、大悟を冷遇していた、かつての元保護者のハゲ親爺一家が心中したというニュースが入る。

大悟の父親の借金の保証人にさせられていたハゲ親爺は、大悟に渡されるべき金を横取りして借金を払っていた。

だがそれが発覚し、振込みが止まったため、借金が払えなくなり、おそらく保険金目当てで消されたのだ。

大悟は、新しい保護者の西嶋夫妻から、養子にならないかと誘われるが、ハゲ親爺の悪夢に毎晩うなされるようになり、

とうとう、自らに覚醒剤を使うようになってしまう（２２６～２２９話）

３週間後、帰国した将は、大悟の痩せ方に驚く。

だが、西嶋夫妻からの養子縁組を受けるつもりだという大悟の言葉を信じて、自分は生活の拠点をＭ区のマンションに移す。

また、巌は、大磯から東京の病院に転院していた。

巌は将に『もう少しよくなったら、大磯に連れて帰ってくれ』と頼み込む（２３０～２３３話）

連ドラの収録も始まり、忙しくなった将は、なかなか学校に行くことができない。

そんな将に、星野みな子は授業のノートを取って渡す。そのことから急に接近する二人。

クラスメートは、将が聡からみな子に乗り換えたのだと勘違いする。

だが、将も聡もお互いに、心の深いところで想い合っていた。

将は、昔助けた猫を見に行こうと、みな子を誘う。

猫は、大悟の新しい保護者である西島夫妻のところにもらわれていたのだ。

しかし大悟は、西嶋夫妻のところにまだ来ていないどころか、大金を無心に来たというのを知り、

将は大悟が覚醒剤をやっているのではないか、と疑惑を抱きそうになる。

一方、偶然、みな子と将が待ち合わせしているところを見てしまった聡はショックを受ける（２３４～２３７話）

西嶋家からの帰り道に、将が聡を深く思うがゆえに、今は我慢していることを聞かされたみな子。

聡のカモフラージュでもいい、将との今の関係を続けたいと思う。

６月も下旬になると梅雨前線が北上し、雨でドラマの収録が休みになる。

久しぶりに学校に行った将に、大悟をたびたびクラブで見かけていると、井口が知らせる。

しかも、覚醒剤所持で捕まった前原の友達と一緒にいた、という。

将の中でいっそう疑惑が強まるが、将はまだ大悟を信じたかった。

７月に入り、将の出演作品があいついで放送される。

そんな中、懐かしい人から電話が……（２３８～２３９話）

２４１◆決定打

「久しぶりね。テレビ見たわよ」

「ありがとうございます」

どんな返答が適切かわからなかった将だがとっさにそう答えた。

将や大悟が中学生のときに可愛がってくれた１２歳年上の投資家『カオリさん』。

彼女は、１８歳まで、関東を取り仕切っていた暴走族の伝説のリーダーだったという。

もっとも、将たちと知り合ったときにはもうとっくに引退していて、きっぷの良さ以外、その面影はなかったけれど。

彼女は、将と大悟の二人を気に入り、たびたび白金にある自宅億ションに泊めてくれたり、

ブランドの服をプレゼントしてくれたり、またそれを着せてフレンチなどに連れて行ったりしてくれた。

将には特に目をかけてくれて、いっときは男女の関係だった。

株式投資のノウハウから、セックスのテクニックまでいろいろと教え込んでくれたのだ。

若い男の子にあれこれ教えこむことが楽しかった彼女は、将がすべ

てを首尾よくこなすようになると、自分から離れていった。

それはちょうど将が他の女性に目が移っていったのと同じタイミングだったので、二人の間には恨みとかそういう類の、

別れた男女にありがちなマイナスの感情はほとんど何もないに等しい。

ただ、将はまだ幼かった自分を知っている女性ということで、なんとなく照れくさかった。

「すっごく背が高くなったみたいね。今何センチあるの？」

「１８５センチになりました」

「すっごいねー」

もう３０歳になるはずなのに、そんな風な口調もあまり変わらない。

しばらく、近況報告をしあう。カオリさんはあいかわらずで、今は六本木ヒルズに住んでいるということだった。

「じゃあ、近くに住んでるんだー」

「そうですね」

そのあと、微妙に沈黙が流れた。

将は、カオリが単に懐かしさだけで電話をかけてきたのではない、と直感した。

「あのさ」「あの」

二人は同時に声を出した。

「あ……どうぞ」

将はカオリに譲りながら、何の話か身構えた。

「あのね。最近、大悟くんと会ってる？」

将は……やっぱり、と唾を飲み込んだ。

「5月まで、俺んちで一緒に暮らしてました」

「あ、そう。そうなんだ。今は？」

「今は、俺がこっち（M区）に移ったから……俺のマンションで一人で住んでるはずです」

「ふーん……家賃とかは？」

「俺のオヤジが買ったとこだから……。カオリさん、大悟と会ったんですか？」

将は我慢できずに、カオリに訊いた。

「あたしは、会ってない」

もしかして、カオリに金を無心に行ったのか、という将の予測はは

ずれて、少し将はホッとした。

「……けど、アタシの知り合いが、大悟くんにお金をあげてるらしい」

「え」

ホッとしたのも束の間、カオリの声で伝えられた新しい事実に、将は電話を握り直す。

「もちろん、ただで、あげてるだけじゃないよ……報酬として」

『何の』と言いかけて、将の脳裏に、いつかの大悟の、淡々とした声が蘇る。

『実は俺も援交してたんだ。もちろん買うほうじゃない。……売るほうな』

「もう、何度もあげてるらしいんだけど……大悟くん、シャブやってるの、将知ってる？」

ついに……カオリから放たれた決定打に、将は思わず歯を食いしばった。

――やっぱり。

ガンガンするような頭に将は手をあてる。そのまま、がっくりとうなだれた。

腕の紫の痣。激ヤセ。金の無心。クラブで一緒にいた前原の友達。

……すべてのピースがつながってしまった。

「将、聞いてる？」

沈黙に、カオリが電話の向こうから問い掛けてきた。

「……ハイ。うすうす、感づいてましたけど……」

かろうじて声を絞り出す。

カオリによれば、大悟は、売春で荒稼ぎした金で、シャブを買いあさっているらしい。

「……まったく、いつ、覚えたんだろ。将、いつからだか、わかる？」

姉御肌のカオリは怒り交じりながら心配そうな声を出した。

大病院の末娘であるカオリは、レディース引退後、１年浪人して医学部に入ったこともあり（結局、途中で株式投資に夢中になったので医師免許は取得しなかったが）、

後輩の覚醒剤汚染には厳しい態度でのぞんだ。

場合によっては、フクロ（袋叩き）にしてでも止めさせていたらしい。

「……俺と一緒にいたころは、たぶんやってなかった、と……思います」

カオリの質問に、将はショックで痺れたような脳を必死で稼動させて記憶をたぐる。

しかし、大悟がいつ、どんなきっかけでそれを覚えたのか、将には思い当たらなかった……おそらく、将が3週間、家をあけてモロッコに行っている間しか考えられない。

「早くやめさせないとヤバイよ」

カオリは低めの声で冷静に言い放った。

「ハイ」

「将、あんたのためにも。もう、芸能人なんだからさ。自宅でシャブが見つかったなんていったらシャレになんないでしょ」

そんな弊害もあるのか、と今、将は気付いた。

だけど……そんなことより、大悟が心配だった。

「とにかく。監禁してでも、止めさせな。それが本人のためだよ」

将の知っているカオリは、高価なブランド服に、巻き髪、美しいネイルと、暴走族とは掛け離れた、典型的な『小マダム』だ。

しかし、それに似合わない、ぶっそうな言葉をカオリは将に投げかけた。

ガンガンする頭を抱えて将は、新しいマンションのベッドに横たわった。

音楽もテレビもかけていない部屋に、激しい雨音だけがしのびこんできた。

それにここは、大悟と暮らしていたマンションより、やや天井が低いらしい。

雨音もそうだが、それがいやに今日は気になる。

あの頃も、こんな季節だった。

将は、カオリさんと知り合ったばかりの頃の3人を思い出す。

あの頃は楽しかった。

暴走族の元リーダーで、医学部出身、そして投資家のカオリは、さまざまな知識や処世術に長けていた。

それを将と大悟に惜しげもなく与えた。

今も思い出す。カオリの住んでいた億ション。

ある雨の夜、カオリは自宅の億ションに二人を招いてくれたのだ。

オフホワイトで統一された部屋は、外界の梅雨のうっとおしさを忘れるほどの明るさだった。

床もフローリングなどではなく、大理石だった。

「これは２０万もするワインよ」

とあけてくれたロマネ・コンティは、そのまっ白な皮のソファーに恐ろしく映えた。

バカラのグラスでロマネ・コンティをを傾けながら、

「女でもね。総長ができたのは、人間の急所を知ってたからよ」

と微笑んだ。

「へえ。どこどこ？」

二人の１４才の少年は、２０万のワインの味より、そっちに興味を持ち、身を乗り出した。

カオリさんは、いたずらっぽく笑うと、まだ幼さが残る将の腕を取った。

「ここと、ここと……」

と将の体でそこを示した。服の上からだったけれど、将はただ、くすぐったかった。

「ここを殴れば、そんなに大した力じゃなくてもダメージを与えることができるの。そして」

カオリは将の腰のあたりを示した。将は思わず勃起しそうになるのを必死で堪えた。

「ナイフ一本で人を殺すなら、ここを刺すことね。動脈が通ってるから、出血多量でまず助からないわ」

「へえ。刺したことあるの？カオリさん」

と大悟が訊いたはずだ。

「あるわけないじゃない。単なる豆知識よ」

とカオリは艶然と笑うと、巻き髪をかき上げたから、彼女が本当にその豆知識を使ったことがあるのかはいまだにわからない。

しかし後年、ヤクザを刺したとき、将は無意識にその場所を狙っていた……。

「武藤さん！大変です」

まだ勤務時間が始まったばかりの、ダイヤモンド・ダストのオフィ

ス。

パソコンをいじっていた若手のスタッフが手をあげて武藤を呼んだ。

「どうしたの」

武藤はそのあわただしい声に、つかつかと彼のデスクに歩いていった。

「ウルウルのＢＢＳに……」

『ウルウル滞在日記』の番組ＢＢＳ（掲示板）にこんな書き込みがあった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

ＳＹＯの本名は鷹枝将。

父親は官房長官の鷹枝康三だ。

実は元チーマーで殺人、強姦などやりたい放題なのを全部父親が揉み消してきた。

詳しくはこっち。

＝＝＝＝＝＝＝＝

こっち、と示されたリンクは、画像もアップできる掲示板だった。

おそらく中学時代と思われる金髪に染めた将が、いわゆる『ヤンキ

ー座り』で煙草を吸う姿が掲載されていた。

仲間も一緒だったが、そっちは目を黒く塗りつぶしてある。

「誰がこんなこと……」

武藤は絶句した。

事務所の公式ＨＰにあるＢＢＳには会員じゃないと書き込めないようになっているが、『ウルウル』の番組公式ＢＢＳは誰にでも門戸が開かれている。

それが裏目に出たらしい。

「いちおう、ウルウルも、このリンク先にも、削除申請をしていますが」

「あたりまえよ！……早く消さないと名誉毀損で訴えるといって、早急に削除させなさい」

将が昔、問題児だったのは、事務所も把握している事実だ。

しかし、これがこんな風に、早々とネットに出るなんて……武藤は唇をきゅっと結んで自らも検索を始めた。

――それだけ、注目を浴びている、ということか。

武藤は必死でよい方に発想を転換させようとしながらも、冷静に考える。

画像があるということは、将を身近に知っていた誰かだろう……。

「手があいてる人は、至急ネットを検索して。変な書き込みを見つけたらすぐに私に報告して頂戴」

武藤は声をはりあげた。

２４２◆心に残る歌

『ばくせん２』の第１回が放送された。

人気シリーズの２作目とあって、視聴率は上々、

「このドラマ不況の時代に、２５％越えはすごいよ」

と番組関係者は誇らしげだった。

現在４話を収録中の役者やその所属プロダクション関係者にも視聴率は伝えられ、みんな拍手して喜びあった。

「ＳＹＯ。すごいよ。アクセス数、放送直後２位」

月曜日、プロデューサーは廊下でこっそりと武藤に耳打ちした。

この日も雨だったが、スタジオ撮りなので局に来ていたのだ。

番組公式ＨＰのアクセス数は非公開なのだが、局関係者はページごとにカウントされたそれを見ることができる。

その配役ごとのアクセス数が、放送直後はなんと２位だったのだ。

１位は四之宮敦也で、これは妥当かつ予測していたことだが、将が主役の仲田雪絵を抜いて２位というのは誰も予想していなかった。

「まあ、仲田ちゃんは前回と同じ役柄だから、だと思うけど。それにしても無名の新人が２位ってすごいよね。よかった、よかった」

プロデューサーはホクホクとした恵比須顔で武藤の肩をぽん、と叩くと

「出番、増やすから」

ニヤリと笑った。

「ありがとうございます。これからも頑張りますのでよろしくお願いいたします」

頭を下げた武藤は、まさか2位とは思っていなかったが、ある程度予測はしていた。

というのは放送直後、事務所公式のＳＹＯのＨＰのアクセス数が飛躍的に増えて、土日ともに1位になっていたからだ。

しかし、5人の生徒役の中で、一番知名度がない将が、他の3人を差し置いて2位とは快挙である。

社長にそれを話すと、

「ほらね。やっぱりあたしの目に狂いはなかったでしょ。あのこは磨く前から光ってるもの」

と得意そうな顔をした。

しかし、喜んでばかりいるわけにもいかない。

先週から書き込まれ始めた、ネット上の悪口のほうも、『ばくせん

2』後もあいついだ。

見つけ次第、削除させるように手を打っているが、あとからあとから書き込まれる。

『年上キラー』

『乱交パーティの王子様』

『バイク泥棒の常習犯』

内容のほうも、どんどんエスカレートしていく。

画像は、まだ幼さが残る中学時代のものばかりだが、それでも面影で将ということがわかってしまう。

それにしても、人気急上昇中とはいっても、ブレイクしているわけではないのに、どうしてこんなに書き込まれるのだろうか、と武藤は首をひねった。

7月中旬だというのに、梅雨前線は名残りのように活発化した。

火曜日、ロケが中止になり、将はまた学校へ行くことができた。

といっても、午後には早退しなくてはならないが。

『ばくせん』が放送されたせいか、将はいっそう注目を浴びた。

下級生の歓声から逃げこむように教室に入ったが束の間、今度はチャミとカリナが擦り寄ってきた。

「ね。鷹枝くん、頼みがあるんだけど」

「何？」

将のけげんな顔にまるで頓着するようすもなく、

「あのね！四之宮くんのサインもらって！」

と二人揃って色紙を差し出した。

「ええー」

「お願いっ」

ヤダなあ、といいかけて、将は武藤の言葉を思い出した。

『クラスメートとか昔の友達にはできるだけ親切にするのよ。邪険に扱っちゃだめ。

今はネットがあるから、何を言いふらされるかわかったもんじゃないわ。人気商売なんだから、ね』

もちろん、将には、ネット上で自分の過去が誇張されて書き込まれていることなど、知らされていない。

だが、新しい書き込みを少しでも未然に防ぐよう、武藤は将に注意を与えたのである。

「あんまり、話さないし」

将は控えめに、『だから出来ないよ』と言ったつもりだったが、

「でも共演してるじゃん。ねえっ、お願い」

あまりにも彼女たちが必死、かつ強引だったので将は色紙を預かることになってしまった。

聡の姿はＨＲでしか見られないまま、将は武藤の車で学校をあとにした。

なんだか、どっと疲れた気がしている。

後部シートにもたれかかって、ぼんやりとリズミカルに稼動するワイパーを見ていた将に、

透き通った歌声が聞こえてきた。初めて聞くのになじみ深いようなメロディ。ＦＭからだ。

――聡が好きそうな曲だな。

聡が好きな大御所ミュージシャンの作る曲によく似ている。

どちらかといえば洋楽好きの将だが、その大御所の曲だけは、聡の影響でほとんど全部聴いてしまっている。

今掛かっている曲を歌っているのはアイドルグループらしいが、ソロの部分など、せつない感じがよく出ていて将は思わず聞き入った。

『ＫＡＴＺＥの新曲”僕らの道”。いいですね～。なんと、あの○○さんが初めて、アイドルに曲を提供したという話題の曲は……』

曲が終わらないうちに入ったパーソナリティの紹介で、将はその曲が、聡の好きな大御所によるものだということを知った。

それと同時に、メインボーカルとして歌っているのがあの四之宮敦也だということで二度驚いた。

「へえ。歌、うまいんだな。あの四之宮さんって」

将は窓にへばりついた水滴を見ながら呟いた。

「将も歌、唄いたい？」

武藤がハンドルを握りながら茶化した。

「よしてくれよ」

もちろん将はそれが冗談だとわかっているから、伸びをしながら大あくびをした。

その四之宮敦也は今日は、一番にスタジオ入りしていた。

珍しいと思ったら、この局の朝のワイドショーに出演して、そのままここにいたらしい。

スタジオには5人がたむろする喫茶店のセットが組まれている。

「オハヨーございます！」

あとから入った将は、大声を張り上げた。

四之宮は、あいかわらず無視して台本を読みふけっているようだ。

幸いまだ、他のメンバーは揃っていないようなので、将はやや緊張しながら四之宮に近寄った。

「あの、四之宮さん。頼みがあるんですけど」

四之宮は無言で顔を上げた。将は思わずドキッとした。

切れ長ながら、女のように大きな瞳が将のほうを見つめたからだ。

「友達に、四之宮さんのサインを頼まれちゃって……」

四之宮は無言のままだったが、将がおずおずと差し出した色紙を受け取ると、素直にマーカーを走らせた。

サインは手慣れたもので、色紙の上を滑るようだ。

あのあと、チャミやカリナ以外からも頼まれてしまったので、色紙は１０枚にもなっていた。

その間、四之宮はずっと無言だったので、将は試しに

「あの……。新曲、いい曲っすね」

と言ってみた。すると四之宮は

「別に、お世辞言わなくてもいいよ」

と将の顔も見ずに、冷淡に返答した。お世辞のつもりじゃなかった将は

「いや、お世辞じゃないですよ。さっきラジオで聞いたばっかなんです」

と、あわてて反論した。

「四之宮さん、歌うまいですね」

そう付け加えたあとで、ＣＤ出してる人間に『歌うまい』は、あまりにまぬけすぎだったかな、

と思い返したが口にしてしまったものは取り消せない。

「いちおー……歌手でもあるし」

サインを終えた四之宮は、色紙の束を将に手渡しながら、顔をあげた。

「ありがとうございます。俺、ＣＤ買います。特に　♪決して誰も僕たちを認めないだろう♪というところ、ジンと来ました」

本当にその部分は、聡と自分のことのようで、一度聴いただけで口ずさめるほど心に残ったのだ。

「そこ、俺のパートじゃないし」

四之宮はクールな口調で言うと立ち上がった。

「あ」

将はしまった、と思った。

だが、立ち上がった四之宮は近くに置いてあったリュックを持ってくると、その中からＣＤを取り出した。

「やるよ」

四之宮は、将を見上げると、口角をあげた――つまりニヤリと笑った。

将は思わずポカンと口をあけてしまった。

今日の収録終了後、明日のロケが行われるかどうかが検討されたが、天気予報では降水確率９０％ということで、中止がほぼ確実になった。

将は、武藤に

「今日はさ、おうちのほうに帰ってもいい？明日、どうせ学校に行くんだろ」

と訊いてみた。

『おうち』とはつまり、大悟と暮らしていた学校に近いマンションのほうのことである。

ちなみにＭ区のマンションのほうは『寮』と呼んでいる。

武藤は、何の疑いもなく了解してくれて、将を『おうち』まで送り届けてくれた。

収録後も、雑誌の取材などがあったので、帰ってきたときはすっかり夜になっていた。

将は、暗いままの部屋に入ると、照明をつけた。

部屋はあまり変わっていなかった。家政婦が通っているせいか、きれいに整っている。

大悟が留守なのはあらかじめ確認してある。

将が、こっちのマンションに戻ってきた理由は……。

それは先週、カオリに聞いて以来ずっと気になっていたこと。

大悟が、シャブをやっている証拠を見つけ、できれば止めさせることだった。

将は、着替えもせずに、まず大悟の部屋に入った。

そこには、前と同じように万年床と、瑞樹の遺品が並べてあった。

将は、まずクロゼットをあけた。

ハンガーにかかった服はそれほど多くない。その下に奇妙なものがあった。

何かが入ったゴミ袋。中にあるカラフルな布地が透けて見える。

将は、いかにも怪しいそれを引っ張り出した。

そこには……派手な下着類、おぞましい玩具、そして手錠や首輪が入っていた。

２４３◆夜の雨に包まれて

ゴミ袋に入っていたそれらは、目を背けたくなるようなものばかりだった。

中にはかつて、将がセックスをおもちゃにしていた頃を思い出すものもあったが、今の将にはただ胸糞が悪くなるばかりだった。

しかし、目当てのもの……覚醒剤……はその中にはなかった。

それにしても、これらがゴミ袋に入っていたとなると、捨てるつもりだったのだろうか。

将はさらに、クロゼットに入っている服のポケットをすべてあさった。

トランクスや靴下が入っている引き出しもあけてみた。

万年床をあげてみたし、シーツもはがしてみた。

瑞樹のボストンバッグも全部あけてみた。

しかし、ない。

将はため息をついて、床に座り込んだ。

今ごろになって疲れがどっと背中にのしかかった。

静かになると、かすかに外の雨音が聞こえる。

将は重い腰をあげると、自分の部屋に移り、ベッドに寝転んだ。

体は疲れているが、頭は何か、気晴らしの娯楽を求めている。

将は、携帯を取り出すと、その中にテレビを付けてみた。

スキー場のリフトの上から携帯を落としてしまってしばらくは、古い携帯を引っ張り出して使っていたのだが、

この春、新モデルが出たのをきっかけに最新のワンセグ携帯に変えたのだ。

そして、皮肉なことに『芸能人』になってからのほうが、ワンセグが活躍してしまっている。

大画面でテレビをゆっくり見られる時間など、なきに等しいからだ。

「あ」

携帯の画面には四之宮がアップで映っていた。あの歌を歌っている。

どうやらこの春始まった音楽番組らしい。

四之宮はこの5人組グループのメインボーカルのようだった。

将が好きだといったパートも、四之宮が歌っている。

「なんだよ。歌ってんじゃん」

将は、小さな画面に向かって独り呟いた。

四之宮によるそのパートはいっそうせつなくて、さっきラジオで聴いたものよりずっといいような気がした。

しかし、そのあと司会者とのやりとりでわかったことだが、もともとこのグループは6人だったらしい。

メンバーの一人が飲酒喫煙で謹慎をくらったため、一時的に5人で活動しているということだった。

そして、どうやら……将の気に入ったソロパートを担当していたのが、くだんの飲酒喫煙のやつで、

メインボーカルの四之宮は、その部分も一時的に、そいつのかわりに歌っているのだ、ということがわかった。

――そうだ。

将は思いついて画面の隅の時計を見た。まだ9時になったばかりだ。

車のキーを持って立ち上がる。

将は、久しぶりに聡のコーポの前に車を停めた。

聡の部屋の窓からはカーテンを透かした光が漏れている。

懐かしい彼女は、あの青い光の中にいるのだろう。

将はハンドルに肘を乗せて、フロントガラスから、聡の窓を見上げた。

ワイパーが定期的に集める小さな雨粒は、将の涙のようにガラスの上を滑っていく。

将は、今日スタジオで四之宮にもらったＣＤを紙袋に入れた。

そして簡単にメッセージを書く。聡の部屋のポストにそっと投函しておくつもりだった。

＝＝＝＝＝＝＝＝

今日、四之宮さんにもらった。

聡の好きな○○さんが作詞作曲してるから、やる。

将

＝＝＝＝＝＝＝＝

宛名は前だったら『聡へ』と書くところだが、一時的に離れている今、その呼び方は似つかわしくない気がした。

かといって『先生』『アキラ先生』『古城先生』はよそよそしすぎ

る。

結局宛名は書かなかった。内容から聡にということはわかるだろうからだ。

将は、思い切って車のドアをあけた。

ぽつぽつと降る雨からＣＤの袋を守るように、下を向いて一目散に聡のポストへと走ろうとしたとき。

ちょうど階段から降りてきた住人と歩道の上でぶつかりそうになった。

……聡だった。

二人は、濡れたアスファルトの上で立ち尽くした。

そんな二人に関係なく、暗い夜空から雨は、水銀灯に白く染まりながら落ちてくる。

「しょ……鷹枝くん。どうしたの？」

将は、あまりにも突然に現れた聡に、何を話していいかわからなかった。

水銀灯と蛍光灯の素っ気無い光に照らされながらも、懐かしい聡は聡だった。

コンビニにでもいこうとしていたのか、Ｔシャツにバミューダパンツ、つっかけ、手には小銭入れという軽装で、

髪はポニーテール、口紅だけつけた顔の中で、真ん丸くなった瞳に将が映っている。

「そっちこそ、こんな時間にどこいくんだよ」

抱きしめたい。それを抑えているから、つい咎める調子になってしまう。

「……ちょっと、コンビニ。雨降ってるね」

聡の視線は、将の顔を越えて、空を仰いだ。

そのとき、ちょうど雨脚が一時的に強くなったのか、ぼたぼたぼたっと大きな雨粒が空から二人をめがけて落っこちてきた。

「濡れちゃう」

聡はふいに将の腕を引っ張った。温かい手が将の腕を掴んでいる。

将は、胸が痛いほどに打ちはじめるのを感じた。

階段下のコーポの郵便受けのところまで、将を引っ張りこんで聡はもう一度訊いた。

「どうした……」

『の』まで言い終える前に、聡の体は将の体温にすっぽりと包まれていた。

将は耐えられずに、聡を抱きしめていたのだ。

持っていたＣＤの袋が、コンクリートの床に落ちる。

「アキラ……！」

将は狂おしいほどに、聡を抱きしめた。

雨はさっきとは段違いに激しくアスファルトを打ち始めた。

高いしぶきで夜の街が白っぽくけぶるほどに……それは将の温かい体温とは対照的に聡の半袖の腕をひんやりと冷やした。

聡は雨の匂いが混じった干草の香りに倒れそうだった。

意識を保つために薄目をあけて、滝のように落ちる雨だれを、将の肩越しにただ見つめる。

雨は一時的に強まっただけのようだ。

５分ほどで、もとのしょぼしょぼとした雨に戻ってしまった。

逆らえない激情もようやくおさまり、将の腕は聡から離れた。

「ごめん」

将は、ほうけたような聡の顔から視線を下に落とすと、コンクリー

トの上のＣＤを拾った。

「これ……。アキラの好きな○○さんが作った曲なんだって。知ってた？」

聡は黙って首を横にふった。

流行とか芸能関係にうとい聡はたぶん知らないだろう、という将のヨミはあたった。

再び将の目に映った聡は……とまどった瞳はうるんで、蛍光灯の青っぽい光の中でも頬と唇がばら色に紅潮しているのがわかった。

そんな顔を見ると、いとおしくて、また抱きしめたくなってしまう。

それを抑えて、将はＣＤを差し出した。

「……いいの？」

聡はそれを受け取りながら将の顔を見上げた。

「貸して、あげる」

単に『あげる』というつもりだった将はとっさに、言い換えた。

返すのは、二人が堂々と会えるようになってからでいい——。

将は、ＣＤにそんな気持ちを込めたのだ。

聡も将の隠された意図を理解したのか、

「ありがとう。聴いてみる」
と返事をした。
二人は、再び黙って見つめあった。
本当はキスしたい。もう一度抱き合いたい。……同じ想いを抱えた二人を、生温かい風がなぶっていった。もう一雨来そうだ。
「コンビニに行くなら、傘持ってったほうがいい」
「……うん」
「じゃあ」
将は、聡に背を向けようとした。磁石から引き剥がすように、意志と力が要った。
「将」
聡の声に、将はバネのように、すぐに元の……聡が見える向きに戻ってしまった。
「明日は、学校くるの？」
「うん。たぶん」
「そう」

聡はそれだけのために将を呼びとめたのではない。

本当は星野みな子とのことを訊きたかった。

だけど……さっきの抱擁がすべての答えではないか、と聡は思いなおしたのだった。

将が名残惜しげにミニに乗り込んだとき、重苦しい空から、再び大きな雨粒が落ちてきた。

滝のような雨が降りしきる中、再び『おうち』に帰ってきた将は、玄関を開ける前に直感した。

――大悟は帰ってきている。

なぜかわからないが、そう感じた将は、そっと、なるべく音をたてないように、鍵をあける。

案の定、リビングから灯りとＴＶの音が漏れていた。

リビングと廊下を隔てているドアまで忍び足で来ると、将はそれを勢いよくあけた。

ソファにいた大悟は顔をあげた。緊縛した左上腕。右手には注射器

を持っている。

テーブルの上には、破いたセロファン、薬を溶いたらしい容器。

「……何やってんだ！」

将は鋭い声をあげた。

244◆汚染

「何やってんだ！」

将の鋭い声に、大悟の喉を固唾が落ちていくのが見えた。

しかし、大悟はそれを腹の底まで落としてしまうと、落ち着いて注射器をケースに入れ、左腕の緊縛を解いた。

テレビからの賑やかな笑い声に、将の怒号が重なった。

「何やってんだよ！」

将はソファの大悟の近くまで床を踏みしだくように近寄り、見下ろした。

「これは、何だよ！何してんだ！」

将は、破かれた空の小袋をつまみあげて振った。

将の怒髪天をつく勢いに、大悟はそっぽを向いて、ハッとため息をついた……笑ったように見えた。

「バレたか」

「バレたって……、お前、どういうつもりなんだよ！」

思わず将は、大悟の胸倉を掴んだ。

「おい、大悟！」

そのまま、激しくゆする。大悟の痩せた体は、伸びた髪は、ゆさゆさと揺れた。

「ドラッグはやらねえ、ってお前が言ったんじゃんよー！」

それは中学のときに大悟が言っていたことだった。

どんなに犯罪に手を染めても、ドラッグだけは自分の体には入れない。

……おそらく、借金漬けの父やその取立てから、その匂いを身近に感じていた大悟の決意だったのだろう。

それが、どうして。

将は、シャブを大悟の体から、はたきだすがごとく、大悟を揺さぶり続けた。

そんな二人を嘲笑うように、テレビから笑い声が漏れ聞こえてくる。

雨音は、テレビに負けじ、といっそう強くなった。

「やめろよ」

とうとう大悟は、将の腕を振り解いた。

「どこで、手に入れたんだ。前原のダチか？無理やり打たれたのか？」

将はソファの前にひざまずいて大悟の顔をのぞきこんだ。

その顔は、痩せている上に、目のしたにはまるでアイシャドウを施したようなクマがくっきりと浮き出ていた。

そのくせ、瞼や唇などはどことなく腫れぼったい。浮腫んでいるのだろう。

でも……この期におよんでも、まだ将は大悟のことを信じたかった。

自分で進んでシャブを打つようになったと思いたくなかった。

「なあっ！大悟！」

大悟は、自分の肩に手を置いて必死の形相の将を冷静に見つめていた。

大悟は、つい先週見てしまった、将が出演したドラマを思い出していた。

テレビドラマに出演していた将より、苦悩にゆがんだまま大悟の答えを待つその目は大きく見えた。

整った顔をゆがめて、それでも自分を信じたい将。

「どうして、こんな……シャブなんか」

大悟は耐えられなくて、思わず将から目をそらした。そのとたん

「瑞樹を立ち直らせようとしていたのは、お前だろっ！」

と将は叫んだ。

大悟は、その名前に、奥歯をきつく噛み締めた。

その力は頭蓋骨をも緊張させ、目の奥にこびりついた瑞樹の最期が蘇った。

瑞樹の結末。

細かい粒になった瑞樹がくっついた自分の顔が脳裏に浮かんだとたん大悟はつぶやいた。

「もう……俺はダメだな」

今度は将が固唾を飲み込む。

「ダメじゃないだろぉっ！大悟！」

いったんひるんだ将は、ひるんだ間の分、大声で叫んだ。

「何いってんだよ！今からでもやめろよ、こんな薬」

将は、注射器のケースを取り上げるとフローリングの床に叩きつけた。

そして、そこにあった雑誌を載せて、素足で踏みつけた。

ボリッという鈍い音がして注射器は粉砕されたらしい。

将が注射器を壊すのを、大悟は放心したように、しかしすこしホッとしたような顔で見つめていた。

「他に薬は、ないのか」

将はなおも、雑誌に置いた足に力を込めながら、大悟を睨むように振り返った。

「ない。……今ので最後」

「本当だな」

大悟は、将の足元をみたまま、うなづいた。

将はしゃがむと、踏んでいた雑誌をどけた。

注射器はプラスチックのケースと一緒に粉々になっていた。針だけが元の形を留めていた。

将はその針をつまみあげると、さも憎憎しげに両端をつまんだ指先に力を込める。

細い針は、ぐにゃ、と直角に曲がった。

「いいか。絶対に、やめろよ」

将はそれを持ってキッチンに行きながら、大悟を振り返った。

大悟はまだ粉々になった注射器を見ていた。

将はキッチンの燃えないゴミ入れから空き缶を取り出すとその中に曲がった針をポイッと突っ込んだ。

そしてほうきを探したが、見つからないので、将は雑誌を破るとその中に注射器の大きめの破片を素手で拾って乗せた。

大悟はその間ずっと不動のままだった。

「……てっ」

大悟はハッとした。薄い注射器の破片がふいに将の指を傷つけたらしい。

人差し指に赤い血が滲んでいた。

「大丈夫か」

大悟は思わず将のほうへと上体を起こした。

「大丈夫だよ。こんなの」

将は血の出た人差し指をペロッと舐めると、雑誌をやぶいてそれをほうき代わりにして残りの破片を紙の上に追いやった。

破片をあらかた紙に包んでしまうと、将は立ち上がった。

こうやって見下ろすと、大悟は本当に痩せてしまったことがあらわになる。

「瑞樹だって……お前がこんな風になって、哀しむぞ」

瑞樹、の名前を舌に乗せるとき、あいかわらず将の胸はチリリと罪悪感に痛んだ。

だけど、大悟のために、少しでも効果のあるフレーズを探した結果、将はそれを声にしなくてはならなかった。

だが大悟は俯いて黙ったままだ。

「……西嶋さんだって、心配してんだろ」

大悟はうなだれた。

そしてかすかな声を絞り出す。

「やめ……られると思うか」

「やめるんだよ」

将は破片を包んだ紙を床に置くと、再び大悟の肩に手を置いた。

「やめるんだ」

大悟の目からは、涙がこぼれていた。

涙をこぼすその目は、まだ、生きている。

「いいか、絶対に、もうやるなよ。どんなにつらくても……我慢しろよ」

大悟は涙をこぼしながら、歯を食いしばっていた。

「瑞樹の……二の舞にはなるな」

大悟は歯を食いしばったまま、深く頷いた。閉じた瞼から涙がほとばしり出て顎へと伝った。

将は、黙って立ち上がり、玄関わきのクロゼットから掃除機を持ってくると、残った破片を吸い取った。

その騒音に雨の音も、テレビの笑い声も、聞こえなくなった。

将は、大悟の決意を信じていた。

だから、大悟を見守るべく、かつ監視すべく、しばらくは『おうち』から仕事へ通うことにした。

だが……このときの大悟の正気は、薬による安定がもたらしたものである、ということを。

すでに大悟は薬なしでは、正気を保てないほど汚染されていることを。

……将は知らなかった。

２４５◆汚染２

雨は翌日まで降り続いたが、翌々日にはあがった。

強い陽射しが車のボンネットに反射して、朝だというのに頭痛が起きそうほど強烈に将の目を射抜く。

武藤は車の冷房をギンギンに効かせて待っていてくれた。彼女も濃いサングラスを掛けてハンドルを握っている。

「やっと晴れたわねえ。ずっと持ってくれるといいけど」

確かに木曜日の今日は晴れて、陽射しは強い。

だが、まだ梅雨が明け切れていないというのは、その頼りなげな薄い水色の空に現れていた。

しかし、夏本番を思わせる暑さは、すでに息苦しいほどに街を包んでいた。

じっとりとした湿気が、よりそう思わせるのかもしれない。

その湿り気を残したような薄青い空を眺めながら、将はもう少し梅雨が続いてほしいと思う。……大悟のために。

将が『おうち』のほうのマンションにいったん戻ることを許されているのは、雨のせいで学校に行く頻度が高いから、という理由である。

ここで梅雨明けが確定してしまえば、M区の寮に戻らなくてはならない。

せめて大悟が、薬から離れてしまうまで、『おうち』のほうにいたい、と将は思う。

覚醒剤を止めるとき、その常用度にもよるが、通常は禁断症状が襲う。

禁断症状と戦うであろう大悟をできるだけ援護したい将だが、学校や仕事を休むわけにはいかなかった。

しかしこの2日、将が一緒にいるとき、大悟は不気味なほど落ち着いていた。

「お前、禁断症状とか出ないの？」

「……いや、出てるよ。お前がいない間は、結構キテるけど」

「そうか……？」

あまりに落ち着いている大悟に少し疑惑を抱いた将は、その左腕に目をやった。

新しい注射痕はなさそうだ。前のものが薄くなって残っているだけだ。

それで、将は少し安心して

「がんばれよ」

と声をかけた。大悟は「ん」と短くうなづいた。

「そうだ将、来週、連休明けから伊豆ロケだからね。わかってると思うけど」

武藤は前を向いてハンドルを握ったまま、将に確認した。

将はそれが不安だった。3泊4日の伊豆ロケ。

その間、うちをずっと留守にしなくてはならない。

大悟は……大丈夫だろうか。禁断症状に耐えきれるだろうか。将は心配でたまらない。

将の心配は的中していた。

この時点ですでに大悟は、禁断症状との戦いに、実にあっさりと敗北していたのだ……。

今日は、スタジオで7話の台本が配られた。

「この回は、ＳＹＯくんが主人公だから」

台本と共にディレクターに言い渡されて将は驚いた。

「え？僕ですか？」

将は思わず訊き返した。

『ばくせん』は1話完結の学園コメディであるが、ストーリーのパターンは決まっている。

仲田雪絵が扮する女教師の教え子の1人が何か問題を起こすなり抱えるなりし、それを仲田雪絵が励まし、博徒らしい決め台詞と共に解決するというパターンだ。

その、問題を起こす生徒役が、7話では将になるというわけだ。

メイン生徒5人に入っている将ではある。

だが、まだ演技経験が少ないという理由で、その役はおそらくまわってこないだろう、まわってきても複数のうちの1人だろうと武藤も将も予想していた。

それだけに、武藤は嬉しそうに「やったじゃない」と将の肩を叩いた。

将も、いつもより自分の出番が多い新しい台本を見ながら、責任と共にやりがいが湧いてくるのを感じていた。

翌金曜日、荒江高校では、１学期の終業式が行われた。

昨日に引き続いて晴れたこの日、体育館はうだるような暑さだった。冗長な調子の校長の挨拶に、猛々しいほどの蝉の声が重なる。

教師も生徒も、早く終われ、と同じことを考えてじっとしていた。

聡もじっと座っているだけで、耳の後ろから流れた汗が首をつたい、胸の谷間へと転がり落ちるのを感じていた。

やっと終業式が終わると、皆に通知表を渡す。

結果はどうあれ、皆、晴れ晴れとした顔をしている。明日からの夏休みが嬉しいのだ。

撮影で出席できなかった将には、当然、通知表は渡していない。

生徒たちが帰ったあと、聡は冷房の効いた昼休みの職員室で、渡せなかった将の通知表を見つめた。

将の名前を見るだけで、心の柔らかいところを引っ掻かれたような感覚が蘇る。

そして、あの雨の夜の将のにおい……。

聡はそれを振り払うように、この通知表をどうするべきか、ということに頭を集中させる。

最近将と親しいらしい、星野みな子に託すことも思いついた。

大学進学希望の彼女は、夏休み中も平日に行われる補習にくることになっている。

いっとき、聡への態度がおかしかった彼女も、最近は前と同じように接してくれる。

むしろ、聡のほうが、将と仲がいい彼女への嫉妬を表面に出さないように努力しなくてはならなかった。

もちろん、学校一英語の成績がいい彼女だから、教師としての聡は彼女を信頼してもいる。

だから……ここのところ複雑な気持ちを秘めて、聡は、星野みな子に向かい合っているのだ。

聡は、星野みな子に移った思考を通知表に引き戻す。

通知表といえど個人情報だ。

できるだけ、将とは接触しないように、とあれこれ考えたが、やはり自ら渡しに行くしかないという結論に落ち着いた。

今日の帰り、久しぶりに夕食を、前にバイトしていた弁当屋で買って、

そのついでに、将のマンションに寄って通知表を入れた封筒を投函しておけばいい――。

聡はそうすることに決めると、通知表を学校名が印刷された真新しい封筒に入れた。

それと、前から作っておいた、1学期の授業で使った洋楽と映画のセリフを入れたCD、

どうせ受けられないだろうけれど、大学受験者用の補習のスケジュールも同封しておく。

教員は、終業式といえど17時まで勤務がある。

それを終えて、聡は将のマンションと弁当屋がある商店街のほうへ向かった。

こっちのほうにくるのは久しぶりだ。いつ以来だろうか。

まといつくような夏の夕方の空気。聡は懐かしげにあたりを見渡した。

去年の今ごろ、塾講師と弁当屋のバイトをかけもちしていた自分がたしかにいたのだ……。

どこからか、焼き鳥が焼ける香ばしい匂いが流れてくる。

それはこんな夏の夕暮れにとても似合っている。

――美智子でも誘って、生ビールでも飲みに行こうか。

聡はふと夕食の変更を考える。

――どっちにしても、まずは封筒を投函しないと。

そう判断すると、聡は将のマンションにまっすぐに向かった。

誰でも入れる自動ドアのエントランスからロビーに入る。

焼き鳥の匂いや商店街の賑やかさもシャットアウトされているのか、ロビーは静かだった。

すでにここにも冷房が効いているのか涼しい。

この先は、訪問者が各部屋へのインターフォンを押して、住人が入り口を開けるオートロック形式になっている。

郵便受けだったら、そこを通らなくても投函できるようになっている。

聡はこの時間だったら、同居している大悟もまだ戻っていないだろ

う、と考えて郵便受けに封筒を投函すべく、バッグから取り出した。

そのとき、背後の自動ドアが開く機械音ももどかしく、あわただしく誰かが駆け込んでくる足音がして聡は振り返った。

……一瞬、その痩せこけた男が誰か、聡にはわからなかった。

しかし、痩せて異様な形相ながらも、なお端正な顔だちから、大悟だとわかった。

「大悟くん！」

自分の横を通り過ぎようとする大悟に聡は声をかけた。

大悟は骸骨のような顔から転がり落ちそうなほど目を見開いて、聡のほうを睨んだ。

邪魔するな、というような恐ろしい目。聡は思わずひるんだ。

しかし、大悟は、声をかけたのが聡だとわかると、表情を少しだけ緩めた。

「先生」

「……久しぶりね。元気？」

聡は少しほっとした。しかし大悟は

「ハイ。……すいません、俺急いでるんで！」

と早口で言うと、自分でオートロックを開け、中に走りこんでしまった。

聡もそこへ続けばよかったのだが、タイミングを逸した。

立ち尽くした聡の前で、ドアは静かに閉まって静寂が戻った。

痩せて、変わり果てた大悟の顔。そして急いで駆け込む姿。

聡には何がなんだか理解できなかった。

ただ、異様すぎる印象が残った。

お腹の具合でも悪かったのだろうか、と自分を無理やり納得させると、聡は当初の予定通り、通知表を郵便受けに投函することにした。

大悟は、大きな音を立てて、金属のドアを閉めると、震える手でジーンズのポケットから包みを取り出した。

大悟の手の上にはセロファンの小袋に入った白い薬がいくつかあった。

それを目にして、大きく息をつくと、なぜか将の部屋に入る。

将のセミダブルのベッドの前に大悟はひざまづくと、マットを持ち上げてその空間に腕を差し込んだ。

手探りでマットの隙間から取り出したのは、小さなポーチだ。

その中には新しい注射器が入ったケース、小瓶に入った消毒用アルコールが入っていた。

燈台元暗し。

大悟はなんと、将の部屋に、薬関係のものを隠していたのである。

大悟は何食わぬ顔でリビングのソファに腰掛けると、一式をテーブルの上に並べる。

そして屈みこむ様にして、白い薬の包みのうち、1つを慎重にコンタクトレンズのケースのような容器にあけた。

そこへミネラルウォーターを慎重に垂らす。

薬はわずかな水に、幻のようにあっさりと溶けた。

大悟は、ソファの上に素足をあげた。

ジーンズをめくって足首を露出させる……そこには、すでにいくつかの痕跡があった。

注射針をいったんアルコールに浸し、さらにティッシュにアルコールをしみこませると、静脈が浮き出ている今日の位置を素早く、かつ丁寧に拭く。

注射器で、溶かした薬を目盛りまで吸い上げる。それを浮き出た足

の静脈に刺した。

足への注射は難しい。

だが、手先が器用な大悟は、すぐにコツをつかんでしまった。痛みもたいしたことない、と思った。

薬を取り入れた血流はまもなく大悟の全身にまわり、禁断症状におびえた体をなだめていった。

大悟の耳は、ようやく騒がしい蝉の声を、『正常に』捉え始めた。

246◆進学

本格的な夏空には程遠いながらも、今日は1日晴れて、気温もあがった。

そんな暑い中の野外ロケは、とても体力を消耗する。将は疲れてマンションに戻ってきた。

案の定武藤からは

「もう夏休みなんだから、寮に戻れば」

と言われた。だが、将は

「期末試験が悪かったので、できるだけ補習に出ろ、と言われている」

と適当に誤魔化した。そんな将を武藤はバックミラーをちらりと見た。

郵便受けをあけた将は、荒江高校の封筒が入っているのに気付いた。

エレベーターの中で封の中をのぞく。

そこには通知表と、ＣＤ、それと何かプリントが入っているらしい。

……聡だ。聡が届けにきたのだ、ということがわかって将は、思わず何でもない封筒が嬉しくなる。

「おかえりー」

冷房の入った部屋で大悟はテレビを見ていた。

「体は、大丈夫？」

この数日、まるで挨拶のようになった質問を投げてみる。

「うん」

この答えも変わらない。

まさか、薬を足に打ち続けているとは将は知らない。

食事を済ませてきた将は、軽くシャワーを浴びると、寝室で封筒をあけてみた。

通知表に表示された１学期の成績は、思ったとおりあまりいいとはいえない。

なんとか期末テストは受けたのだが、勉強をしていないせいか、本当にソコソコである。

他校の通知表と比べて違うのは、期末段階のポイント数が表示されていることだが、こちらは、欠席が多いにもかかわらずそれほど減っているわけでもない。

たぶん、特別に配慮されているのだろう。

入っていたＣＤをセットして、もう１つのプリントを見る。

CDからは軽快な洋楽が流れてきた。みな子からもらったプリントやノートのコピーにあった、英語の授業に使われた曲だろう。

プリントは、夏休み中の大学進学希望者用の補習の概要とスケジュール表だった。

お盆前まで、ほぼ平日は毎日行われるらしい。

補習というよりも、自習&個人指導……つまり聡が2年のときから放課後に行っている形式らしい。

かつての放課後の補習の光景が将の脳裏をよぎっていく。

聡と二人きりだった補習。9月の暮れ行く教室……壁に映ったオレンジ色の陽光まで将は思い出すことができる。

しばらく思い出に酔った将は、ふと聡がこのプリントを同封した意味を考える。

聡は、将に大学に進学したほうがいい、と暗に言っているのだろうか。

連休も関係なく将は、毎日仕事だった。

新しく入ったCMに、雑誌のインタビュー。そして『ばくせん』の

撮り。

天気のほうは、毎日午後になると決まって夕立が降ったが、それ以外はおおむね晴れて、梅雨明けに近いことを感じさせた。

その忙しいまま、３泊４日の伊豆ロケに突入した。

伊豆といっても半島内陸の、山の中で撮影は行われているので、ギャラリーはそれほどいない。

不良生徒たちが寺に合宿にやってくるという設定である。

ロケ現場の寺を見て、将はなんとなく、聡が副校長を務めていた、あの山梨の学校を思い出した。

すでに仲良しの生徒役同士なので、本当に合宿のようなものだ。

ただ、四之宮だけは、泊まるのは1泊だけ、と彼の登場シーンだけ『ため撮り』が行われた。

アイドルグループに所属する彼の忙しさは他の比ではないらしい。

四之宮がらみの撮りが終わって、スケジュールがゆったりするかと思えばそうでもない。

どうやら、台風が接近しているらしく、３日目後半から天候が悪化しそうなので早く撮り終えたいらしい。

だが、３日目を迎えた将の頭の上には、そんな片鱗もないような青空が広がっていた。

今日の空は、特に逞しいばかりの夏空だった。濃い青色の空に、咽るような草の匂い。

強い陽射し、濃い木陰。

蝉の声も東京と違ってさまざまな声が重なる。

今日は特に暑いらしい。予想最高気温は、この夏最高ということだった。

暑いときの撮影は大変だ。こまめにドーランを塗りなおさないといけない。

衣装も、すぐに汗まみれになってしまうので、何着か同じものが用意されていて、そのつど着替えないといけない。

ただ、予報どおり昼すぎからだんだん曇が多くなってきた。

そして、夕方にはどんよりと曇ってしまった。

厚い雲の切れ目から夕陽が差して、空が気持ち悪いショッキングピンクに染まるのを将は見た。

幸い、3泊4日といっても4日目は予備的なスケジュールだったので、3日目の夕方までには、伊豆でやっておくべき撮影は、ほぼ終了していた。

翌朝は、朝から雨が降っていた。

まだ関東から遠いように見える台風だが、それに刺激されて梅雨前線が活発化しているらしい。

そしてゆっくりとしたスピードながら、関東を直撃するコースをとっているという。

将たちロケ隊は、早々に伊豆を後にすることにした。

局で解散したときには昼すぎだった。雨なのは東京も変わらなかった。

「困るわねえ。台風が直撃すると。明日から仕事が詰まってるのに」

伊豆ロケにも同行した武藤はタクシーで将を送り届けながら呟いた。

「台風が直撃したら、仕事って休みになるの？」

「直撃の度合いにもよるわよね。交通が麻痺したら、スタッフがスタジオにこれなくなるし」

「ふーん」

将は、ちょっとだけ台風が直撃すればいいのに、と思って窓につく水滴に目をやった。

雨粒の張り付き方は弱弱しく、まだ、そんなにひどい台風になりそ

うでもない。

このところ暑いのと、仕事づくめなのとで疲れていた将は休みたかったのだ。

「ところで、将」

武藤は明るい声を出した。

「秋の連ドラのオファーが、もういくつか来てるのよ」

『E』のCMに、『ばくせん2』。これらが放送されるたびに将の人気はうなぎ登りにあがった。

早くも『イケメン俳優』として名前があがるようになっている。

事務所のHPも、番組公式HPもアクセス数でつねに3位以内をキープしている。

「……ふーん」

「ふーん、って嬉しくないの？」

武藤が隣の将を振り返った。

将は窓から自分の膝に視線を移した。

そして、思い切ったように顔をあげると武藤のほうをまっすぐに見た。

「……武藤さん。俺、大学いっちゃダメ？」

「えっ……？」

「大学に進学したいんだ。できれば」

武藤があまりにもびっくりした顔だったので、将は最後に『できれば』と付け加えた。

夏の昼下がりだというのに、マンションの部屋は暗かった。

太陽が照っているわけでもないのに、じっとりと暑い。将は即座に冷房をいれた。

大悟は、この雨の中、出掛けているらしい。

将は、冷蔵庫から缶ビールを取り出すと、迷わず飲んだ。

この伊豆ロケの間中、暑かったのにビールは飲めなかった——まだ、未成年だからである。

3日ぶりのビールは喉に爽快な通り道を描いた。

イッキのみすると、将はソファに体を投げ出した。

——大学進学か。

大学進学を熱望しているわけではないのに、なぜか将は言ってしまった。

ここのところの仕事漬けに少しまいっているのかもしれない、と自分でも思った。

成果は出ているのも、人気が出てきたのも、わかるけど、毎日毎日仕事。

『新人のうちは仕方がない』と武藤は言った。

だけど、新人でもない四之宮はどうだ。

将以上に忙しくしている。

自分で芸能界入りを希望したわけではない将は、あまりの自分の時間のなさに少し辟易していたのだ。

それに……こんなことがあった。

あのＣＤのこと以来、将は四之宮ともポツポツと話をするようになっていた。

もともとあまりしゃべらない性質らしい四之宮だが、話してみると、実はおっとりとした性格だということがわかった。

２つ年上で芸歴は１０年に及ぶが、それを自慢したりも、先輩風も吹かせたりもしない。

それでも芸歴１０年だけあって、局でも有名人がよく声をかけてくる。

昔の共演者だったりするらしいが、将と一緒にいるときは、ちゃんと紹介してくれる。

そのときも、四之宮と将は控え室で、なんとなく話をしていた。

四之宮は疲れているのか、テーブルの上に頬杖をついていた。

と、控え室に四之宮のマネージャーが入ってきた。

「敦也、△さんが来てる」

「えぇ？」

四之宮は珍しく心底嫌そうな顔をした。細く整えた眉が激しく歪んだ。

演技以外でこういう顔をするのはとても珍しい。

「ええって……、いちおう挨拶しとかなきゃ。早く」

「……めんどくせ」

四之宮は、小さく吐き捨てるように言いながらも立ち上がった。

「俺は？　行かなくていいかな」

将は訊いてみた。こんなときいつも四之宮は自分の知り合いに気軽に将を紹介してくれたのだ。

「いいよ。別に」

四之宮は横目を一瞬、将に投げただけで、足早に控え室を出て行った。

そして１０分後には戻ってきた。戻ってきた四之宮は、机に突っ伏すようにして、一層脱力していた。

「どうしたんすか」

「疲れた」

「△さんて誰ですか」

「うちの、事務所の、先輩」

「へえ」

「でもさ」

四之宮は机に頬をつけたまま、将を手招きした。内緒話の仕草。

将は四之宮の口元に耳を寄せた。四之宮は声を出さずに吐息だけで

「落ち目」

と言った。

「昔は、ベストテンっていうのかな、に出るぐらい売れてたらしいんだけど。今は単なるでぶおやじ」

四之宮は聞こえるか聞こえないかの小声で続けた。

「それでもいちおー先輩だし。昔は俺たちより売れてたらしいから、ソンケーしてるフリしないといけない」

四之宮はさも面倒くさそうに言った。

２４７◆台風接近の夜１

それを聞いたとき、将は教頭役として共演している焼津を思い出した。

将と同じく生徒役の大野啓介などは

「俺、４０代で焼津さんみたいな感じになれたら理想」

と憧れている。

コミカルな演技で、仲田雪絵と対立する意地悪な教頭役をこなす焼津は、このところドラマの出演がとても多い売れっ子だ。

しかし実はずっと舞台中心で地道に活動してきた実力派でもあるのだ。

役者という仕事自体は悪くはないと、将は思う。

面白いし、深みも、広がりもある仕事だと、ほんの３ヶ月程度しか活動していない将でもわかる。

だけど。

若いうちにブームのように売れた末路が、年をとって若いタレントに陰でバカにされるのでは悲しすぎる。

売れなくなった時点で他の道を選べるならいいけれど、経験も学歴もないのならば、バカにされながら芸能界にしがみついていくしか

ないだろう。

疲れた将には、そんな道筋が確かに見えてしまったのだ。

将はソファで少し眠ってしまったようだ。気がつくと暗くなっていた。

時計はもう7時を指している。

大悟はまだ帰ってこない。

だいたい、昼間、いつもどうやって過ごしているんだろうか。

将がいないときに禁断症状が出る、といっていたはずだが……。

将は少し心配になって電話をしてみる。

しかし、出ない。

携帯の意味をなさないほど、電話に出ることが少ない大悟に少し腹がたつ。

『俺。伊豆から帰ってきた。今どこ。連絡して』

メッセージは残しておく。

それにしても今日は、家政婦もこないらしい。

そういえば今日まで伊豆ロケだから、夕食はいらない、と将はいっていたのだった。

将は、今日の夕食をどうしようか考え始めた。少し腹がすきはじめた。

雨だから外に出るのも面倒だ。

ピザでもとるか、と考えていると、ふいに、ピアスをつけている耳たぶが痒くなった。

そういえば伊豆ロケの間中つけっぱなしだった。

将は寝室に移動しながら手探りでピアスをはずそうとした。

寝室にあるノートパソコンからピザの注文をしようと思ったのだ。

「おっと」

寝室に入るなり、ピアスが耳たぶからころりと落っこちた。

落ちたピアスはフローリングの上を滑って、ベッドの下に入り込んだ。

将は這いつくばって、ピアスの行方を見ようとした。

が、かなり奥に入り込んでしまっているのか、暗くてよく見えない。

お気に入りだから諦めたくない。

将は、ベッドのマットを動かすことにした。

たしか、マットを載せる台はスノコ状になっていたはず。そこからなら拾えるだろうと思ったのだ。

マットが動いてホコリだらけのベッドの下に光があたった。

そこにキラリとピアスが光っていた。

将はそれを拾い上げると、フッとホコリを吹いて、横の台の上に置いた。

そして元通りマットを戻そうとして、ふと気付いた。

スノコ状になった板を渡す枠の上に、小さなポーチが置いてある。

「なんだ?」

将はそれを取り上げた。

瑞樹がらみの何かだろうか……と思いながらも胸騒ぎがする。

将はポーチのジッパーをあけた。中からは……注射器と小瓶に入ったアルコール、そして透明な袋に入った白い薬が出てきた。

将は口をあけて、しばらく呆然とそれを見ていたが、やがて立ち上がった。

夜になると雨に風も伴うようになった。やはり台風は徐々に接近してきているのだ。

そんな悪天候なのに、夏休みに入ったこともあり、若者御用達の盛り場は賑やかだった。

黒く濡れた路面に、色鮮やかなネオンライトが反射して、晴れた日より華やかにすらみえる。

しかし、空を見上げると、ネオンのピンクや水色に染まった雨粒が横殴りに飛んでいくのが見える。

ときおりの突風に、ギャルたちが、髪を押さえてギャーギャー騒いでいる。

だがそれすらも楽しそうにしか見えない。

そんな中、将は、傘もささず走っていた。

「ＳＹＯよ」

「ばくせんの」

「ＳＹＯじゃん」

若者が多い街をサングラスもかけずに走る将は、ただでさえ長身ということもあり目だった。

皆が振り返り、ひどいものは大声で叫んでいる。

しかし将は、立ち止まらずに走り続けた。

あれから、すぐに井口に電話した。前原の友達など、そういう系のやつがたむろしている店の情報を得るためだ。

ゲーセン、公園、コンビニ、クラブ。

井口はいくつか口頭で教えてくれた上に、

「どーせ、今から遊びに行くし。俺も探そうか」

と言ってくれた。

ありがたかった。

将は、すぐにミニに乗ると雨の中を街へと向かったのだった。

「将？大悟のやつ、”サイケ”に来たぜ」

井口から連絡があったのは１０時をまわった頃だった。

コンビニ、ゲーセンをしらみつぶしにまわった将は、車の中で濡れた頭をタオルで拭っていた。

「わかった。すぐいく」

将は、コインパーキングに停めていたミニをすぐに出した。

”サイケ”は７０年代を模した、やや妖しげな雰囲気のクラブである。

地下にあり、それほど広くはないが、名前の通り幻惑的な雰囲気のライティングや選曲でウケていた。

「ちょー、ＳＹＯじゃん」

「ＳＹＯだよ」

びしょぬれで現れた将は、まだ客が少ない時間というのもあり、その店でも目立った。

ギャル客は遠くからカメラ付き携帯で彼を撮ろうとしたが、暗いためなかなかうまくいかない。

「将」

井口が気付いて近寄ってきた。夏休みに入って伸ばしたらしく、髭面になっている。

「あそこ」

井口は顔を寄せて、顎をしゃくった。

隅の方のシートに、何人かが座っているようだが、暗くてよく見えない。

「ヤバイお兄さんと一緒みたい。……どうする」

井口は囁いた。

そのとき、重低音がリズミカルにフロアを揺るがし始めた。

リズムにあわせてブラックライトとレーザー光線が稲妻のように交差する。

暗闇に将が着ている白いTシャツが、井口の黒いTシャツの白いスケルトンが、紫色に浮かび上がる。

将はズンズンと響くリズムの中、不動で隅の方に目を凝らした。

稲妻のライトの中に、大悟が見えた気がして将は目をカッと見開くと、フロアを突っ切るように大股でそっちへ向かって歩き出した。

「おい、将！」

井口が後を追う。

踊る若者をかきわけてフロアを行く白いシャツの将は目立ち、ギャルらはその行く先に注目した。

大悟はたしかにそのシートにいた。

大悟のほかに男４人とその連れらしき女３人が座っていた。

「大悟！」

将は叫んだが、それは大音響の音楽の中では、普通の話し声にしかならない。

しかし、もはや、フロア中の皆が将に注目していた。

腹の底からビリビリくる重低音も、注目の中では静寂に等しかった。

しばらくして気付いた大悟は将を見上げた。呆けたような弱弱しい目だった。

「将……」

「帰るんだ」

将は大悟の腕を引っ張った。

「おい、何するんだ」

将のすぐ近くにいた男が立ち上がった。一見普通のストリート系の格好だったが、目付きは鋭かった。

舌にピアスをしているのがちらりと見えた。

しかし、それを無視して将は大悟を引っ張り続けた。

重低音のリズムにあわせるように大悟を引っ張りあげる。

「帰るぞ」

痩せ細った大悟は簡単に腰を浮かした。

「お友達はまだ遊びたいみたいじゃんよ」

大悟の左隣にいた眼鏡をかけた若い男が大悟の肩を抱くようにして将を阻止する。

その指にはごつい指輪が嵌っていた。

「邪魔するな」

将は男をその目力で圧倒すると、その手を力いっぱい振り払った。

男は勢いでシートに倒れた。

するとシートにいた男すべて……皆、ヤバそうなやつらばかりだった……が立ち上がった。

ふいに間奏に入ったのか、重低音が止んで、コミカルなラップだけになる。

サイケな模様のカラフルな照明がフロアに壁にくるくると映し出される。

そんな中、しばしヤバイ雰囲気で将と男達は対峙した。

「ふっ。いいさ」

一番奥にいた、一番年上らしい身なりのいい男が、皆を制する。

薄いサングラスをかけ、チョイ悪風ファッションだが、マジで悪いのはオーラでわかる。

再び、重低音がフロアを揺らしだした。暗くなったフロアを稲妻風のブラックライトが飛び交う。

男の尖った白い靴が紫色に浮かぶ。

「また、こいよ。大悟」

とニヤッと笑った。そして

「じゃあね。イケメン俳優さん」

と将を小馬鹿にした顔で舐めるように見つめた。

将はそいつを鋭く一瞥すると、重低音に追い立てられるように、大悟の腕を引っ張って出口へとフロアを横切った。

井口があわてて後ろについていった。

力ずくで大悟を引きずるように出口へと大股で歩く将は、何人ものカメラ付き携帯で撮影されていた。

たいていは暗すぎて将だということは判別不可能だったが、レーザー光線が偶然あたった瞬間のものも、何枚かあった……。

２４８◆台風接近の夜２

「将、ごめんよ、ごめんよ～……」

将に腕を引っ張られながら大悟はしきりに謝った。

暗い階段をあがって、昼間のように明るい通りに出た。そのとたん雨がびたびたと頬に張り付く。

「ヒィッ……！ごめんなさい～、しょう～」

大悟はおびえたように、体をかがめた。

将はそんな大悟にも雨にもかまわず、大悟をひきずるように大股で通りを駐車場へと向かった。

傘を差したギャルたちが

「ＳＹＯじゃん、やっぱりＳＹＯだよ」

と指差しているのがわかったが、それにもかまわない。

井口は大悟の腕を引っ張って、わき目もふらず歩く将の横に追いついて

「大悟、どしたの？」

と訊いた。もはや、大悟は誰の目から見ても変だった。

「シャブ？」

と訊く井口を無視して、将は立体駐車場にやってきた。

しきりにおびえて、謝り続ける大悟を後部座席に押し込み、将は運転席に座った。

井口も無言で、助手席に乗り込む。

「ごめんよ、将～。俺、どうしても我慢できなかったんだー……」

後部座席で大悟は頭を抱えて言い訳をする。

将は無言のまま、アクセルを踏んだ。

駐車場を出るなり、大粒の雨がボタボタとフロントガラスに落ちてきた。さっきよりワイパーを激しく稼動しないと追いつかない。

「井口……。ダウナー持ってる？」

しばらく無言で車を走らせた後、将は前を向いたまま助手席の井口に訊いた。

『ダウナー』とは睡眠薬のことである。

「持ってねえよ、そんなもん。なんだ、やっぱり大悟、シャブ中なの？」

将はそれには答えず、

「悪いけどさ、誰か、ダウナーもってそうなやつに連絡取ってくれない？金は言い値で払うから」

「えーっ」

井口は顔をしかめた。

「頼む」

将は一瞬井口のほうを振り返った。その瞳があまりにも真剣だったので、井口は嫌々ながら電話を取り出した。

「シャブ中に、ダウナー使っても意味ねえんじゃねえの……」

とブツブツいいながらも心当たりに電話をしてくれた。

「大悟、酒飲んだ？」

信号待ちで、将は大悟を振り返った。

大悟は、漠然とした意識を死んだ魚のような目にあらわにして、ただぼーっとしていた。

「……飲んだ」

「どれくらい？」

「将。ごめん……」

質問に答えられない大悟は、ただ謝るだけだ。将は仕方なく訊く。

「シャブは……いつ入れたの？」

「……」

大悟は沈黙している。視線ははるか中空に浮かんだままだ。

薬による恍惚感が消えてきているのだろうか。

この痩せ方だ。すでに、かなりの頻度でやってるのかもしれない。

そして、さっき大悟が一緒にいた奴らは、たぶん、『筋モノ』だろう……。

「あったよ。カイトのダチが弱いけど持ってるって」

電話を切った井口が、将を振り返った。

「よし。行こう」

将は、マンションに帰る前に、睡眠薬を受け取ることにした。

睡眠薬を手に入れて、将はやっとマンションに帰ってきた。

残念ながら、入手した睡眠薬は入眠薬でごく弱いものだった。

持っていたカイトの友達だという青白い青年は

「１００錠飲んでも死なないらしいよ。これで自殺はできないよ」

と淡々と言った。

だが、覚醒剤と併用することなど、噂でしか聞いたことのない将は、使い方がわからなかったので、それぐらいでかえってよかった。

明日天気次第でオーディションがある、という井口には帰ってもらった。

おそらく……これから修羅場になるであろうことが将にはわかっていたのだ。

風雨はますますひどくなり、笛の不協和音のような風の音が不気味に聞こえる。

大悟は、黙り込んでいた。もうさっきのように、ふにゃふにゃした口調で謝ったりもしない。

「大丈夫か」

将は自力で車から降りた大悟に声をかけた。大悟は無言で頷いた。

多少グラリと体が揺れたのは、酒のせいだろう。

部屋に入った将は、大悟に先にバスルームを使わせた。

大悟は、無口だったが、意識は正気を保っているようだった。

その間に、将はもらった薬についてネットで調べた。

確かに『弱い入眠作用』とある。

『多量に服用しても昏睡状態には陥ることはない』ともあった。

「将」

バスルームから出てきたらしい。

大悟の声が背後からした。

「出たか。……！」

将は思わず絶句した。

大悟は、観念したように、ショートパンツを穿いた脛を将に見せるようにむきだしにしていた。

その脛から踝にかけて……両足共に点々とどす黒い注射痕が残っていた。

「そんなところに……」

どうりで、腕に注射痕があまりないわけである。

「止めようとしたけれど、止められなかったんだ……俺は最低だ」

大悟は呟いた。

将は、グラスに入った水と、入眠薬を渡した。

「無理やりでも寝たほうがいい」

「いつも、使ってる」

大悟は、自室から錠剤を持ってきた。ただし、もう残り2回分だった。

それは将でも名前を聞いたことがある、比較的強力な睡眠薬だった。

大悟は、その1回分を将の持ってきた水で飲むと、

「すまないな」

とため息をつくように目を伏せた。

「今日は、ここで一緒に寝ようぜ」

将は、なるべく明るくそういうと、布団を敷き始めた。

将は、自室のパソコンを使い終わると、大悟が先に寝ている、暗いリビングへやってきた。

遮光カーテンから漏れた光が天井に軌跡を描いている。

さっきから遠く雷が鳴り始めた。

その鈍い音に、風がマンションに吹き付けるたびに、鈍い轟音となって混じった。

時間を追うにつれて、風も雨もますますひどくなってきた。

それなのに東京の夜は、完全に暗くなることはない。

将は、遮光カーテンの隙間から外をのぞいた。

外は嵐だった。

バルコニー越しに見える夜景は、横殴りの雨のせいで白っぽく煙っている。

遠くに見える高層ビルの赤いランプも斜めに飛んでいく雨の向こうにぼんやりと浮かぶのみだ。

ときおり、将の目の前のガラスが風でドゥっと振動するのがわかる。

将は、遮光カーテンをきっちりと閉める前に、もう一度大悟の顔を見た。

大悟は、薬のおかげなのか、なんとか眠れたらしい。

それに安心すると、将は携帯にイヤホンをさして、テレビを見た。

リビングのテレビをつけると明るくなりすぎるだろう、と気を遣ったのだ。

テレビでは台風接近中とあって、夜通しで気象情報をやっていた。

天気はすでに大荒れに見えたが、台風の位置的にはまだ暴風域に入ったかどうかというあたりだ。

オホーツク高気圧の勢力が強いため、台風の速度があがらず、ゆっくりとしているらしい。

どの地方も画面いっぱいに赤い警報が並び、『大雨、暴風、波浪……』と同じアナウンスが繰り返される。

今日の昼頃、関東に上陸の恐れがあるというから、この分では仕事はキャンセルだろう。

携帯を消してしまうと、あたりは暗がりになった。

暗がりに、不気味な不協和音を奏でる風のうなり声が強く弱く響く。

将はなかなか寝付けなかった。

いままで、この部屋で、こんな風に嵐をやりすごしたことは一度もない。

去年までは、台風がくると聞けば、知ってる奴から知らない奴らまで『仲間』が雨宿りに来ていた。

音楽をかけて、ゲームして、酒を飲んで。

そんな風にいつもより賑やかに過ごしていたあの頃。

今、同じ部屋にいるのに、嘘のような静寂の中で、風の音におびえている。

たった1年でこんなに変わった自分が不思議だった。

だけど、あいつらに来て欲しいわけでも、懐かしいわけでもない。

今、そばにいてほしいのは。

疲れた将を癒してほしいのは。

励ましてほしいのは……聡。

聡、ただ一人だ。

将は聡を思い浮かべた心のあたりにそっと手をあてた。

思い浮かべるなり、無性にあいたくなって将は携帯のデータフォルダをあけた。

そこには、少し前の聡がいた。それは寒い頃なのか髪を下ろしてマフラーをしていた。

それは聡と二人きりでやり過ごした冬の嵐……ニセコ山頂の吹雪を将に思い出させた。

寒くて凍えそうだったけれど、幸せだった。

しかし……去年の台風の頃には、将の心には『弁当屋のお姉さん』

として聡が住んでいたはずだ。

雷の音が鈍く天をどよめかす。

将は、ふいにその音になま温かい人肌を思い出す。

去年の台風のとき、将は聡に惹かれる自分の心を無視して、瑞樹を抱いていた。

将は記憶と共に弾けたように鮮やかによみがえる罪悪感に、両手で頭を抱えた。

不気味な風の音は、そんな将の耳にまとわりついて離れなかった。

２４９◆死闘１（前書き）

暴力表現がありますのでご注意ください。

249◆死闘1

「わァーーッ！」

大悟は恐ろしい叫び声と共に急に起き上がった。

その叫び声は隣でうとうとしていた将も瞬時で覚醒させた。

「大丈夫か」

「将……。ごめん。いつもの……悪夢」

謝る大悟は息が荒い。脂汗をかいているようだ。

「いいよ。……もう起きるか？また寝てもいいけど」

将は携帯を開けて時間を見た。もう7時すぎだった。

「いや、一度起きたら、眠れないから」

大悟がそういうので、将は立ち上がると遮光カーテンをあけて、夜のままの部屋を朝に変える。

だが、窓の外は昨夜よりいっそう激しい嵐だった。

ひどい雨のあまり、まっ白に見える。

うなる風に乗ってバルコニーに叩きつける雨は、そのしぶきを窓まで跳ね上げた。

将は、極力覚醒作用を避けてわざとコーヒーではなく紅茶を淹れた。

「食欲、ないだろうけど、食べろよ」

将は冷凍しておいたパンを焼いて、インスタントスープと共に大悟の前に置いた。

大悟は、大人しくテーブルにつくと、食べ始めた。

「今、どんな感じ……？」

「まだ……平気」

将は、うなづきながら大悟の顔をのぞきこんだ。大悟は本当に痩せた。

「1日……何回ぐらいやってる？」

「4～5回」

将はパンを噛んだ顔をしかめた。かなりの依存である。

「おま……何で」

「何で、なんだろうな」

大悟は、伏せた目を窓の外にやった。

それが、落ち着いた大悟と会話を出来た最後かもしれなかった。

まもなく。

朝食が終わってソファに腰掛けた大悟は、テレビをみながら、小刻みに踵を上げ下げしていた……貧乏ゆすり。

あきらかに落ち着かない様子だ。

朝8時に、武藤から電話が入って、台風のせいで今日の仕事はキャンセルになる旨が伝えられた。

将はほっとした。

今の大悟を一人にしてはいけない。そう思ったからだ。

電話を切ると、大悟は激しく爪を噛んでいた。

「大悟、大丈夫か」

「あ、ああ」

声を掛けたときだけ、おさまる。

だが1分もしないうちにまた復活する。

そのうち、息が荒くなってきた。

それを本人も自覚しているように、息をとめて……しばらく我慢すると、深く息を吸ったり吐いたりを繰り返す。

その吸う息、吐く息自体が震え始めた。

外の風はいよいよ激しくなってきた、サッシの窓がときどき鈍い音を立ててたわむようだ。

しかし、外の台風より、大悟の中の嵐のほうがずっと激しいのだろう。

大悟は、歯を食いしばって必死で耐えていた。

将は、気晴らしをさせるべきなのか、とゲームをしないか、と誘った。だが

「できる状況じゃない」

と断られた。

9時の時報と共に、台風情報が始まった。

あと2時間ほどで房総半島に上陸するコースだ、と伝えたとき。

大悟は大きく息をつくと、震える声ながら冷静な調子で言った。

「ダメだ。将。もう限界だ……」

大悟は本当に苦しそうだった。肩で息をして、こめかみには脂汗が浮かんでいる。

「少しだけ……少しだけ、やっていいだろ」

「大悟」

将は立ち上がった。

「頼む。将。少しだけ。注射じゃなくて吸引にするから……」

「薬はまだ、あるのか」

大悟は苦しい息の下でうなづいた。

「やれよ」

将は言い放った。

「やればいいさ」

将は苦しむ大悟を睥睨しながらさらに続けた。

本当は、将は大悟が残りの薬を取り出したとたん、それを全部奪って処分するつもりだったのだ。

「将、お前、なんてことを言うんだ。俺……本当にやっちゃうよ？」

と泣きそうな顔で訴えた。そして

「お前、友達失格だな、将」

とも付け加える。本当に苦しそうだ。

「友達なら……俺を縛り付けてでも……我慢させろよ」

「大悟……」

「え？……そうだろ、将」

結局、この時点では大悟は持ちこたえた。

ふうふうと苦しい息の下から、大悟は、将の用意した入眠剤を欲しがった。

「眠らせてくれ……頼む。狂ってしまいそうだ」

大悟は、頭を抱えてその苦しみを訴えた。

すでに声はときおり裏返っていて、その異常な苦しみは将からも想像できた。

将は、入眠剤を定量渡した。

「だめだ！こんなんじゃ効かない。倍だ、倍くれ！」

大悟は、錠剤を見るなり大声で叫んだ。大悟から聞いたこともないような大声。

目は四白眼になるほど見開いている。コミカルなほどの……恐ろしい形相。

将は、凍りついた。

……恐ろしい戦いはまだ前哨戦にすぎなかった。

「将、やっぱり効かない。やっぱりアレしかない」

と大悟は立ち上がった。

入眠剤を飲んでからまだ10分も経たないときだった。

「だめだ」

将は大悟の体を抱えるようにしてソファに座らせた。

大悟は、将に向き直ると

「頼む。ちょっとだけでいいんだ！このままだと狂っちまう」

と叫んだ。涙さえ浮かんでいた。

将は首を振った。

……せっかく入眠剤を倍量も飲ませたのに、興奮させたら元も子もない。

将は薬を横取りする作戦を、眠っている間に処分することにしたのだ。

「落ち着け。大悟」

「俺は落ち着いている。冷静だッ！」

これほど逆の状態もないだろうに、大悟は『冷静だ』と叫び、ものすごい力で押さえつける将をはねのけようとする。

これが、元の大悟だったら、将は簡単に飛ばされていただろう。

ここまで痩せた大悟だから将は体重をかけて、なんとか押さえつけている。

「考えてくれ。将。……ダイエットだって、いきなり絶食するのはいけないっていうじゃないか。だから、アレだって少しずつ減らしたほうがいいんだ」

わけのわからない理屈までこねて懇願する大悟。

「頼む。こんなふうに俺を押さえつけるな……、友達だろ」

大悟は、さっきと真反対の懇願をしながら、友情の確認をしようとする。

「将……」

やっと入眠剤が効いてくれたらしい。ようやく大悟は肩で息をしながらも目を閉じた。

静かになると、外の暴風雨の音が激しいものだということがわかる。

将は、大悟を押さえつけていた手をそっと離した。

そのとたん、大悟はカッと目をあけると、バネ仕掛けのように起き上がった。

「大悟！」

大悟は、室内であることを考慮せずに全速力で走って自室に向かった。

「こらっ！待てよ」

将が追いついたときは、大悟は自室でものすごい勢いで昨日着ていた服をあさっていた。

「やめろよ！」

将は大悟の襟を後ろから引っ張った。

しかし大悟はそんな将に肘鉄をくらわせた。将ははずみで転がり壁に背中から激突した。

起き上がった将は、大悟が透明な袋に包まれた白い粉を取り出したのを見た。

「やめろッ！」

将は、横からその薬を引っ張った。

繋がったセロファンの小袋のうち3つが千切られて将の手に奪われた。

大悟の手元には1つだけが残った。

しかし大悟は、将の手の3つを奪い返そうとして、将に掴みかかってきた。

「返せよ!俺のだぞ!返せ」

その眼は狂気に満ちていた。

「ダメだ!」

すると、大悟は少しもひるまずに、将の顔を拳で思い切り殴った。

将はもう一度床に転がったが、反射的に上体を起こした。

殴られた衝撃で頭がクラクラする。顎を生暖かいものが流れるのがわかる。

唇が切れて血が流れているのだろう。

将はそれでも、3つつながったセロファンを後ろ手で、ドアの向こうの廊下に放り投げると立ち上がった。

「それもよこすんだ」

将は唇の血をぐいっとぬぐうと、大悟の手の中にある1つを取ろうとした。

しかし、それは大悟の握り締めた拳の中だ。

「廃人になりたいのか！」

「うるせー！」

「よこすんだ！大悟ッ！」

将は大悟に飛び掛かると、万年床の上に押し倒した。

馬乗りになると体重をかけて大悟を布団の上に押し付ける。

大悟はすごい力でそれをはねのけようとする。

将は両手に力を込めて大悟の首のあたりを布団に押し付けた。

「うっ、ウガッ」

大悟は、苦しげに顔をゆがめながら、あいている左手で、首を締めんばかりの将の腕を掴んだ。

セロファンを握ったままの右手も、必死で将を殴ろうと振り回す。

将は大悟の首を布団に押し付けながら死んでしまうのでは、と気が気でなかった。

だが、力を緩めたとたんに大悟は反撃するだろう。

将は大悟が振り回す右手の拳があたらないように、必死で上体を逸らしつつも動きを見ていた。

……ついに将の左手が大悟の拳をとらえた。

将は、その手をこじあけようとしたが、左手だけでは無理だとわかると、

手の甲に親指を力の限り親指をめりこませはじめた。

「大悟……早く薬を離せ。手の甲が折れるぞ」

「ううっ……」

それでも大悟はなお、苦痛を我慢しようとした。大悟の手の甲の骨が折れる寸前。

崩れた大悟の拳からセロファンがわずかにはみ出したのを将は見つけた。

将は右手を大悟の首から離すと、そのわずかなセロファンの切れ端に右手の爪を立てた。

「クゥッ……」

大悟は自由になった上体を起こし、拳を握りなおして、それを守ろうとした。

セロファンの袋が強い2つの力に引き攣れて……ついに裂けた。

白い粉が、散乱した。

「ゴホッ」

顔の前で粉が散乱した将は思わず吸い込んでしまい、咳き込んだ。

ごく少量の薬は、ほとんど目に見えないほど散乱してしまった。

「俺の、俺の、くすり！」

大悟は悲痛に叫ぶと、馬乗りになったまま咳き込む将をようやく自分から跳ね除けた。

そして、将が廊下に投げた残りを取ろうと、素早くフローリングの上をいざった。

それを見た将は立ち上がると、大悟がそのセロファンの包みに手が届く寸前に、それを蹴った。

蹴られた薬はフローリングの上を勢いよくリビングのほうへ滑っていった。

それを取り上げた将の肩に背後から大悟がしがみつく。

「よこせ！俺のだ」

振り返ると大悟の頬を平手で力いっぱい叩いた。

派手な音がして、大悟の体はリビングになぎ倒された。

将はキッチンに立つと、水を出した。

３つつながった薬のセロファンの袋の端に爪を立てると、ビッと勢いよく裂いた。

薬は、多少散乱しながらも、水に溶けてあっという間に下水へと流れてしまった。

「バカヤロー……、なんてこと、なんてことをするんだあ……」

大悟は薬が跡形もなくなくなったのを見ると、頭を抱えて足をじたばたさせた。

将は息を荒くしながら、流した水を止めることもなく、そんな大悟のようすを見守るしかなかった。

もはや外を襲う激しい暴風雨も他人事でしかない。

250◆死闘2（前書き）

昨日に引き続き、暴力表現があります。
苦手な方および、現実との区別のつかない精神年齢の方は閲覧をお控えください。

250◆死闘2

翌日は台風も去り、木の葉やゴミが散らかった街の上に澄んだ青空が広がった。

生き残った蝉が仲間に無事を伝えあっているのか、その声のうるささはひとしおだった。

どうやら台風は梅雨前線を押し上げて去っていったらしい。

武藤は手早く化粧を終えると、出かける直前に将にいつものように電話をかけた。

モーニングコールである。

「将？おはよう。今日は9時に迎えにいくから」

即座に返答はなく、電話は沈黙していた。武藤は気にもとめない。

寝起きが悪いときなどは、こんな風になかなか返事が返ってこない場合もしばしばある。

携帯を握ったまま、また寝ているときすらある。

「しょーお、起きてますかあ？もしもーし」

おどけて大声を出す武藤に

「……今日は、仕事休む」

地を這うようなかすれ声が聞こえてきた。

「どうしたの？将。具合でも悪いの？」

「……うん」

うめくような声はただ事ではない。

「大丈夫？将」

「迷惑……かけて、ゴメン。今日は……こなくていいから」

「そういうわけにはいかないわ。どこが悪いの？」

「……」

将は無言だった。

「将？大丈夫？一緒に、病院にいきましょう。ね？」

「……いいってば。……切るぞ」

そういうと将は電話を切った。掛けなおしても、電源を切ったのかつながらない。

固定電話のほうも1コールもなく留守電になる。

武藤は、いつもより急いで準備をして、車に乗り込んだ。

将のマンションに着いた武藤はオートロックの前で待つようにインターフォンで言われた。

いつもだったら、ロックを解除して部屋まで迎えにこさせるのに。

思えばそこから異常だった。

「将……！」

透明な自動ドアの向こうに現れた将の姿を見た武藤は、あまりのひどさに体中に戦慄が走るのを感じた。

まるで特殊メイクのよう……それほどにひどい姿だった。

いちおうジーンズとTシャツに着替えてはいたが、顔中がひどく腫れあがっていた。

頬、そして瞼、唇。肌色のほうが少なく見えるほど……将だというのが一瞬わからないほどのひどい顔だった。

猫背気味に心臓の下あたりをかばって、かつ右足をひきずっていた。

自動ドアが開いても、武藤は言葉を失ったままだった。

胸をかばう右手手首にひどい裂傷がある。それを見た武藤は思わず口を覆った。

「……どうしたの！それはいったい！」

ようやく武藤の口から言葉が出てきた。

心配のあまり咎める口調になってしまっている。

「なんでもな……っつッ！」

将は顔をしかめて、体をいっそうかがめた。

「なんでもなくないでしょ！すぐ病院に」

武藤は駐車場のほうへと将の腕をとった。

「いいって」

「よくないわ！」

「大丈夫だよ」

「大丈夫なはずないでしょ！」

「大丈夫！……てて」

武藤の腕を振り払おうと大声を出した将は、手でかばっているあたりが痛んだのか、下をむいた。

将はそのまましばらく、左胸の下をかばってうつむいていたが、腫れ上がった顔をあげた。

「武藤さん……」

「なに。ほら、行きましょう」

腫れた瞼の下の、細くなった目の中の瞳。それを見るだけで痛々しかった。

「○○病院に連れて行ってくれ」

前に足を折ったときに入院した、看護士の山口が内科病棟にいる病院の名前を将は指定した。

病院の待合室で、将は注目をあびた。将を見たものはみな、そのひどさに眉をひそめた。

だがこの、ひどく顔が腫れ上がった男が『ばくせん』に出ているイケメン俳優のＳＹＯだとは誰も気付かなかった。

医師も、あまりの惨状に目を丸くした。

服を脱がせるとさらにひどかった。

顔のように派手に腫れてはいないものの、全身が赤や青の鮮やかな痣で彩られていた。

まるで袋叩きにでもあったような将に

「これは……何か事件にでも巻き込まれました？」

と思わず医師が聞いたほどだ。しかし、将は

「非常階段で滑って転げ落ちただけです」

としっかりとした口調で言った。

階段から落ちただけで、顔がこうも腫れあがるはずはないし、右腕に裂傷を負うはずもない、と当然医師はわかっている。

だが、何度訊いてもそう答えるだけだった。

見立てでは、全身殴打と見られる打撲だったが、左胸下と右足は特にひどいのでレントゲンを撮ることになり、将はいったん診察室を出た。

武藤は待合室を離れて、電話スペースでしきりに電話で話していた。おそらく、仕事をキャンセルするため、連絡をしまくっているのだろう。

将は、その姿を見て、傷のほかに良心も痛んだ。

たしか、伊豆ロケが終わったあたりから、将がメインになる回の撮影が始まるといっていた。

メインにならない回でも、最近将の出番は目立って増えていた。

たしか今週はＣＭのオーディションもある、っていってたっけ。

ラジオ出演も。雑誌のインタビューも。

まともな文章が書けるということで、女性誌にフォト＆エッセイを載せるという話も決まったはずだ。

スケジュールはぎっちり詰まっていた。

それらを……すべてキャンセルしなくてはならないのだ。

『本当にごめんなさい』

携帯をにぎりしめながら、見えない相手に頭をしきりに下げる武藤に、将は心の底からすまないと思った。

将は待合室の隅にあるベンチに浅くよりかかると、目を閉じる。

瞼を開け閉めするのも、違和感がある……それにゴロゴロと痛む。

だけど、それよりも、全身の痛みよりも……どこよりも痛いのは心だった。

あれから。

残った覚醒剤が全部消えたのを見届けると、大悟は泣き叫んだ。

だが、ようやく倍量も飲んだ入眠剤が効いたのか、こときれたように眠ってくれて、将はほっとした。

将はその間に、さっき薬が散乱したあたりを、水に濡らしたタオルで拭いた。

薬は見えないほどに散乱したらしいが、大悟のあの様子だと、床を這いつくばって舐めかねない。

将は何度となくタオルを洗い、丹念に大悟の部屋の床を拭いた。

一人、床を掃除する将は、窓を叩く激しい雨にようやく今、台風が来ている事を思い出した。

通常だったら廊下やバルコニーに面している窓に雨が直接あたることなどない。

将は立ち上がると、窓から外を見た。

外はあいかわらずまっ白だ。下に広がる街並みが白い斜めの縞模様の中にかすんで見える。

看板か何かだろうか、風に乗ってありえない高さまで舞い上がるのがときおり見える。

将はつけっぱなしになっていたテレビを見た。瞬間最大風速４０ｍを記録した、と報じている。

風雨に煽られてまるで我慢大会のように立っているアナウンサーの画像は『横浜港から中継』とある。

こんなに激しい台風が関東を襲うことなどあまりない。

――聡は大丈夫だろうか。

将はふと心配になった。電話をかけるべきか悩む。

非常時だから、いいだろう、と決意したとき。

大悟が、むくり、と起き上がった。

「大悟」

ことときれたように寝付いてから1時間程度しか経っていない。

「将……」

起きぬけの大悟は、普通の様子に見えた。さっきの暴れぶりが嘘のようだ。

だが、それも一瞬のことだった。大悟は開口一番、

「もう俺はダメだ。体中が気持ち悪い」

と言い出したのだ。目はうつろなまま、虚空に向かって見開かれている。

「何言ってるんだ。大悟」

「ダメなんだ。この体はもうダメなんだ」

何往復か支離滅裂なやりとりが繰り返されたあと、大悟は薬を求めて暴れ始めた。

「もう薬はない！さっき捨てたのを見ただろう」

将がそういうと、大悟は外へ出ようとした。

それを体当たりするように止める。

「外は台風だぞ」

「うるせー！離せ！」……。

大悟は、大声を出して暴れた。

それを止めようとする将を容赦もなく殴る。

ただ、ロクに食べていないせいか体力のない大悟は、３０分も暴れると、がっくりと倒れこんだ。

そして、おびえはじめた。

「しょ、しょ～」

「何だ……」

すでに何発か殴られた将も、力尽きて、ソファに身を預けて目を閉じている。

「俺を……、俺を見捨てないでくれ」

「大悟」

将は、寄りかかっていた上体を起こすと、膝の上に頬杖をつくようにして大悟を覗き込んだ。

「頼む……。将……。俺を……見捨てないで」

大悟は骸骨になったような顔の中の双眸を細めて泣いていた。

その瞳は、さっきの狂気とはまったく別の色だった。

そこには絶望に近い孤独と寂寥だけになった大悟の心象風景が透けて見えるようだった。

「わかってるよ」

将は横たわる大悟に微笑みかけた。

「俺と……一緒にいてくれるか」

大悟はなおも、将に弱弱しく問い掛けながら手を伸ばした。将は深くうなづいた。

殴られた頬が、どこかでぶつけたのか、足がにぶく痛む。だけど。

「薬が抜けるまで、頑張ろうな」

将は大悟の右手を握った。その甲には紫色の内出血があった。

さっき将がギリギリと親指を押し付けたあたりだ。

大悟は嬉しそうに微笑むと目を閉じた。

おびえて震える。錯乱し暴れる。意識を失う。それが不規則に繰り返された。

ただ、外の台風が遠ざかっていくにつれて次第に弱まっていくのとは逆に、大悟の『振れ幅』はますます大きくなっていった。

特に夕方、暗くなってからのそれはすさまじかった……。

「出せ！俺をここから出せー！」

大悟は喚いた。やせ細った体からは考えられないものすごい力だ。

将は、死に物狂いでそんな大悟を後ろから羽交い締めにした。

「誰かアアアア！俺は監禁されている！助けてくれエエエエ！」

すると大悟は近所にわざと聞こえるような大声で咆哮した。

「やめろ」

将は大悟の口を押さえようとした。

その将の左手に大悟は思い切り噛みついた。

「痛てえッ！」

思わず羽交い締めにする将の力がゆるんだ隙に、大悟は玄関に向かって走り出した。

させるか、と将は大悟の足にとりついた。

リビングの出口あたりで、大悟は足をとられて引き倒された。

転ぶ音はフローリングに反響して部屋中に響き渡った。

「何するんだ！」

顔を床にしこたま打ち付けた大悟は、鼻血を流しながら、なおも左足にしがみついている将の頭を右足でやみくもに蹴った。

そして将を足から離すと、再び立ち上がって玄関へ向かう。

しかし大悟から離れた将も同時に立ち上がって、大悟のさきまわりをした。

「行かせない。行くなら俺を殺せ」

将は大悟の前に両腕を大きく広げて立ちはだかった。
すでに大悟に負けないほど息が荒い。
「何を偉そうに……！」
大悟はそんな将の襟首を掴むと、顔を拳で殴った。
鼻血を流す大悟は、手負いの獣そのものだった。人間的な手加減は一切ない。
殴られたはずみで将は、廊下の壁にぶつかるように投げ出された。
そんな将の襟首をさらに大悟はもう一度つかんで引き起こす。
将は口から血をブッと吹き出すと、大悟の瞳を見つめた。
「行かせない……絶対に」
大悟は狂気の目を見開くと、将のみぞおちを膝で蹴った。
「グアッ」
将は玄関の床に横向きに倒れこんだ。
大悟は倒れた将の胴体になおもケリを入れる。
薬への依存に精神を奪われた大悟は、まるで容赦というものを忘れたらしい。

全力を足に込めて蹴ってくる。自分も素足だというのに、関係ないらしい。

「誰の、せいで、こんな、ことに、なってると思うんだ」

言葉の区切り区切りでリズミカルに蹴りを挟む。そのたびに走る激痛に将はただうめく。

生命の危険を感じる激痛。肋骨がきしむ。

内臓を守るために力を込める筋肉がだんだん言うことを聞かなくなってくる。

意識がだんだん遠のいていく。

エビのように体を丸めた将を大悟は仰向けに転がした。

もはや、抵抗できないほど痛めつけられていた将は、ハッハッと小さく息を繰り返すだけだ。

「瑞樹を返せ」

大悟は将を見下ろすとおもむろに言った。

その名前に将は、かろうじて薄目をあけていた瞼を見開いて大悟を見上げた。

……だいご。

声にはならない。唇だけがその形に動いた。

大悟は、正気に見えた。

彼は仰向けに倒れた将の横にしゃがみこむと、

「瑞樹に会わせてくれ」

と将の顔をのぞきこむように言った。落ち着いた、優しげでさえある口調。

将は鉄臭い唾液をごくりと飲み込む。大悟の顔から目が離せない。

風の音はやんだが、雨の音は間断なく続いている。

……これ以上の恐怖はなかった。

251◆死闘3（前書き）

暴力シーンがまだ続いています。ご注意ください。

251◆死闘3

なあ、といって大悟は、自分の顔を将の目の前に突き出した。

「瑞樹は、どこに行ったんだ」

質の悪い冗談をいっているわけでもなく、責めているわけでもなく、ただ、瑞樹の行方を問い質しているように見えた。

本気で瑞樹のことを忘れているらしい大悟を、ただ将は恐れた。

「なあ。将、知らないか」

大悟は将の肩に手をおいた。将は耐えられなくなって顔を床のほうに向けて逸らした。

「なあ、将」

限界まで床のほうに目をそらそうとする将の肩を大悟は揺らした。

「なあ。将。なあ」

問いと同様に繰り返し、肩を揺らす。

最初は……問いかけにあわせていたのに、次第に激しく揺さぶられ始めた。

「みずきはどこにいったんだ、なあ、将」

しまいには、上半身がガクガクとシェイクされる。

「なあ、なあ、なあ」

見開いた大悟の瞳は黒い。白眼には赤い毛細血管が見える……血走った眼。あきらかに狂気が宿っていた。

「やめろ……ッ」

ついに将は、肩に置かれた大悟の手を払いのけた。

大悟の手はあっさりと将の肩からはずれた。

将は身を起こそうとした。

腹に力を入れようとすると、左の肋骨が激しく痛む。思わず将は苦痛の声をあげた。

上半身を起こしながら、将は大悟に向かって辛い事実を再認識させなくてはならない。

「大悟……、瑞樹は……いない。……死んだんだ」

心の痛さと肋骨の痛さで、息がうまくつけない。言葉は切れ切れになった。

やっと言い終わるかどうかというところで、

「お前のせいだろーー！」

と大悟は吼えた。そして首を締めんばかりに将の襟首を掴んだ。

やはり正気だったのか。将は吐いた息をそのまま飲む。

「瑞樹は、最後の最後までお前の名前を呼んでいた。お前のなっ！」

大悟は、１０センチと離れていない将の顔に唾を飛ばして叫んだ。

将は抵抗も出来ず、襟首から半身を吊り上げられたまま、ただ大悟の瞳を見つめるしかない。

その瞳には、蓄積された悲しみが爆発したかのような、狂った怒りが宿っていた。

「お前のせいで、瑞樹はッ！」

大悟は、将の襟を床に叩きつけるように解放すると、横たわった将に馬乗りになり、その顔を拳で殴った。

「お前の、お前の、お前のせいで瑞樹はっ！」

右、左、右、左、と手加減なく繰り返される拳が将の頬に、眼窩にめりこむ。

頭蓋骨に繰り返し衝撃が走る。

衝撃のたびに、なぜか将の目の前に火花のように、瑞樹の記憶の断片が散った。

抵抗することを考えたり、痛みを感じたりすることすら忘れるよう

な激しい拳の嵐の中で、将は失神しそうになるのを耐えていた。

なぜ、耐えているのか……その理由を考えることもできない。

将の思考はすでにあまりの衝撃に擦り切れかかっていた。

かろうじて意識だけがつながっているような中で……それでも、いっそ失神した方がマシなのを持ちこたえているのは、大悟への、瑞樹への……償いのためなのかもしれなかった。

ひとしきり将を殴り終わると、大悟はハアハアいいながら、立ち上がった。

将はぼろきれのようにそこにぐったりと横たわるしかできない。

頭の中では、まだ殴られ続けているように、何かがぐわんぐわんと響いている。

――まだ雨が降っているんだな。

静かになってようやく、将の耳は、さっきよりずいぶん静かな雨音をとらえた。

顔のあちこちを生暖かいものが流れている。

唇や鼻、まぶたが切れているのだろう。

口の中はもはや血だらけで、鉄臭いのも甚だしい。

だが、それを吐き出す気力もなく、将は無意識に舌で歯を一本一本確認していた。

しかし、将は開かない目を薄くあけたまま、大悟のゆくえを見ていた。

大悟はふらつきながら、自室へ向かっているようだった。

財布か何かをとりにいっているのだろうか。

「だ、だいご……」

将は最後の力をふりしぼって、大悟のあとを追って、床を這った。

キリキリと顔の切れた場所が痛い。

殴られた頬や瞼には、小さな心臓が埋め込まれたようにズキンズキンと脈打っている。

しかし、思ったより、手や足は自由だということがわかった。

将は、リビング入り口のドアにつかまりながら、ズキズキと痛む肋骨の痛みに耐えて立ち上がった。

ちょうど、大悟が自室から出てきた。

大悟は立ち上がった将に驚いたようすを見せたが、ひるんだのは一瞬だけで、足を上げると将を蹴り倒した。

ようやく立っていた将だから、簡単に倒れてしまった。

大悟は倒れた将をまたぐように玄関に向かうと、将を玄関スペースから締め出すべく、いきおいよくリビングのドアを閉めた。

しかし、閉まるドアの先には……まだ将の右足首が残っていた。

次の瞬間、将は絶叫した。勢いよく閉まったドアに右足首を挟まれたのだ。

ドアか、右足首かわからないが、ミシッと音をたてた……激痛が右足首を震源に将の全身をつらぬく。

木のドアは、将の足を挟むと、バウンドするように再び開いた。

「うっ…あああ……」

倒れたまま右足首をかばって丸まった将の耳に

カチャカチャ

という音が聞こえた。

大悟がチェーンをはずしているのだ。カッシャン、というロックを外す音も。

引き続き、ガチャガチャとドアノブを回す音。

だが、それに鉄のドアが開く音は続かず、ガチャガチャとドアノブ

を回す音だけが繰り返された。

その音はだんだん大悟の苛立ちをあらわすがごとく、乱暴になってきた。

チェーンをはずしてロックを解除したのに、ドアが開かないのだ。

「なんだこれ」

大悟はついに口に出すと、ドアを蹴った。

重い鉄製のドアが、マンション中に響けとばかりに大きな音で反響する。

実は……将は、大悟が意識を失っている間、彼が出て行けないように、ドアの上部と下部に市販のロックを取り付けていたのだ。

かなり前に、家政婦さんが

『今、ピッキングが流行っているようです。将さんもお部屋にいらっしゃるとき、用心のために付けてくださいよ』

と置いていったのが役に立った。

冷静だったらすぐに気がつくだろうが、案の定大悟は気付かないらしく、ただノブをガチャガチャと回したり、蹴ったりを繰り返している。

将はその背後にいざり寄った。

「まだ……俺は死んでないぞ」

膝をついて立ち上がると、将は大悟の下半身にしがみついた。

「将！」

ふいをつかれた大悟は、恐ろしい叫び声をあげた。

「行くなら、俺を殺してから行け」

地の底から響くような将の低い呟き。大悟は狂気の目に、恐怖を浮かべて将を見下ろした。

大悟の足を死んでも離すものか、と将は心に誓う。

「離せ、離せよ、将」

大悟は両足にしがみついた将の頭を剥がそうとやっきになる。

しかし、そうすればするほど、将は首をすくめるようにして、がっしりと大悟にしがみつく。

どんなに殴られようとも離れない。

「離してくれええ、瑞樹のところに行かせてくれええ」

しまいには、大悟は喚き……泣き叫んだ。

「瑞樹、みずきーっ、ううう、あああ」

大悟は体を痙攣させるようにして泣きわめき続け……再び、すとんと落ちるように意識を失った。

もう完全に夜になっていた。

喚き声に満たされていた将の部屋に、静寂が戻ってきた。

右足をひきずりながら将は、大悟をリビングにひきずってくると、窓辺から外を見た。

夜になって、雨も止んだらしい。

痛くて細くしかあけられない瞼の中の目は、はるかに高層ビルの赤い光りを捉えていた。

将は、再び右足をひきずりながら、ダイニングテーブルの椅子に腰掛けた。

力が入れられない右足の踝は青黒くなっていた。そこを触った将は、激痛に思わず声をあげた。

声をあげると、響くのか左の肋骨も痛む。

痛さに耐えながら慎重に、青黒い部分の感触を調べる。どうやら折れてしまったわけではなさそうだ。

将は、傷だらけの口の中にかまわず、冷たい水を一気に飲むと、テーブルの上にある錠剤を手に取った。

大悟が持っていたほうの強めの睡眠薬と、弱い入眠剤。

大悟の睡眠薬はあと1回分残っているが、まだ夜8時だ。これを使うには早い。

将は、殴られたせいか、真綿で包まれたような脳を稼動させて考える。

台風がいってしまったからには、明日9時に、武藤が迎えに来るだろう。

来なくていいといっても、来るのが彼女の務めだ。

頬杖をつこうとして、頬の痛みに、将は思わず手をはずす。

かわりに背もたれによりかかる。体全体が拘束されたように痛いが、まだ、ましだった。

……この顔は、明日派手に腫れあがるだろう。

それを見た武藤は、将をきっと病院に連れて行く、と言い出すに違いない。

だとしたら。

睡眠薬は自分が家をあける間に使ったほうがいい。

昨日、６－７時間ほど効いた薬……。

将はぼうっとしたような頭を出来る限りフル稼働させた。

やはり、明け方まで使わないほうがいい、という結論に達する。

だが、次に大悟が目覚めたとき。

満身創痍の将に彼を止められるかどうかわからない。

殴られた顔は、いまも血がどくどくと集まってくるように熱い。

将はずきずきと脈打つ顔を保冷剤で冷やしながら、倒れたように床で眠る大悟の顔を見る。

涙の跡が白く頬に残っている。

『瑞樹、みずきーっ』

という悲痛なわめき声が脳裏に蘇る。

それで、将はあるものを思い出す。おそらく瑞樹が持っていた……あの道具。

将は右足をひきずりながら、大悟の部屋へ向かった。

「肋骨にはヒビが入っているようですね」

医師はレントゲンを見ながらいった。

医師の前には顔のあちこちにテープを貼った将が武藤と共に座っていた。

右手首の裂傷は3針縫った。

足のほうは、骨は大丈夫だったらしいが、筋を痛めてしまったらしい。

1～2週間ほど固定すべきだと言われて、普通の靴を履けないほど嵩高く包帯で覆われた。

ヒビの入った肋骨は、固定といってもコルセットをつけるぐらいしかないらしい。

「暑い時期だから、つけなくてもいい」

とも言われたがいちおう今はつけている。

「顔は……」

武藤がおずおずと訊いた。

「個人差はありますが、腫れがひくのに最低でも1週間かかるでしょうね」

医師は淡々と答える。

痣になった瞼の色がひくのには1ヶ月かかる場合もあると付け加えられて武藤はうなだれた。

「そうですか……」

「もしも。誰かに暴力を振るわれたのだったら、いちおう被害届は出すべきだと思いますよ」

医師は瞳だけを動かして、もう一度将を見あげた。

処方された鎮痛剤に湿布薬などが山のように入った薬の白いビニール袋を将にわたしながら、武藤は

「将、いったい、どうしたの。なんでこんなことに」

とようやく見上げた。見上げてその酷い顔に眉をしかめる。

「本当にすいませんでした」

将はただ頭を下げるしかない。

「誰かとケンカしたの？それとも袋……叩きにでもされたの？」

心配そうな武藤だが、答えられない将は、目を一瞬伏せると（伏せるだけでも、眼球がごろつくのだが）

「俺、ちょっと知り合いの看護婦さんに会ってきます」

と一礼した。そのまま踵を返すと、足をひきずって歩き出した。

「あ、将！待ちなさい」

「自分で帰れますから……本当に迷惑かけてすいません」

武藤は、追おうとしたが、まだキャンセルの連絡が山ほど残っている。

立てれるものは代役を立て、スケジュールを調整して……武藤の仕事は急に面倒なことで山積みになってしまったのだ。

「本当に大丈夫ー？」

武藤は将の背中に叫んだ。

「大丈夫です！本当にすいませんでした」

足をひきずりながら、エレベーターに乗りこんだ将は、もう一度深く頭を下げた。

肋骨が『まったく迷惑をかけて』と言うかのように、もう一度痛んだ。

それでもエレベーターの扉が閉まる直前、腫れ上がった顔の口元に

わずかに微笑が見えた気が、武藤にはしていた。

山のようなキャンセルは気が重いけれど、それだけが救いのようでもあった。

エレベーターを降りると、そこは内科病棟の待合室だ。

懐かしい山口の白衣姿はすぐに見つけることができた。

小柄な彼女は、待合室で若い女性と立ち話をしていた。

後姿の女性はカーディガンにチェックのスカート・サンダルといういでたちで、患者のようにはあまり見えなかった。

将のあまりにひどい姿に、内科病棟の患者がいっせいに注目する。

それに気がついた山口は、将を見て一瞬けげんな顔をした。

将の顔があまりにひどい腫れ上がり方なのと、それゆえ誰だかわからないらしい。

「山口さん」

右手をあげようとした将は、思った位置のかなり下で止めた。

折れた肋骨が、また存在を主張するように痛んだのだ。

「……鷹枝くん？」

将の声にようやく気付いた山口が将の名前を口にした。

同時に、背を向けていた女性がこちらを向いた。……聡だった。

252◆死闘4（前書き）

暴力シーンはまだ続いてます。すいませんがご注意ください。

252◆死闘4

聡は振り向くなり、目を丸く見開いた。

将の様子にショックを受けたようだった。

将も思いがけないところでの聡との再会に心臓が止まるかと思った。

だが、聡の驚きの表情で冷静さを取り戻すと、二人のところへ右足をひきずりながら歩いていった。

「しょ……鷹枝くん、どうしたの！そのキズ」

聡は将の足先から顔まで見上げると目を真ん丸くしたまま問い掛けた。

「センセーこそ、こんなところでどうしたの」

本当は抱きしめたい。だけど『生徒らしい』演技は忘れない。

そして将に貼り付いたような聡の視線から、ついと顔をそらすと

「こんにちは。山口さん。ちょっと相談があって来たんだけど」

と山口にまじめな声で話し掛けた。

「何よ、いったい」

将は聡の顔に視線をちらっと走らせると、

「ちょっと、ヒトに聞かれたくない話なんだ」
と声のトーンを落とす。
山口は今日は１１時から昼休みだという。そのときに相談に乗ると約束して診察室に消えた。
だから、将は成り行き上、内科病棟の待合室の隅に聡と並んで座っている。
「センセーは、どうしたの。今日は学校じゃないの」
月曜日の今日は、補習があるはずだ。
「最近ちょっと、貧血気味でね。検査してもらったの」
将は思わず聡を振り返る。その心配する顔に気付いた聡は
「大丈夫よ。結果は単なる夏バテだろうって、栄養剤なんかを処方されたわ。……お弁当屋さんで働いていたころは何ともなかったのにね」
と微笑んだ。たしかにその顔は、すこし青白いように見えた。
「びっくりした。まさかニンシンしたんじゃないかって……」

将は安心してつい、そんなことを口走ってしまった。

聡は目をむいて将を振り返ると、小さな声で『バカ』といった。

「そんなこと、絶対ありえないし。……あたし、周期とっても正確なんだから」

「へーえ。覚えとこ」

「んもうっ！」

拳を振り上げるふりをした聡は、その手を振り上げたまま止める。

「将……そのケガはどうしたの」

「んー。ちょっとね」

笑いながら防御の体制をとっていた将は、ベンチに寄りかかるように座りなおした。

姿勢を変えたら肋骨がまた痛んだのか「イテ」と小さく漏らす。

「……大悟くん？そうなのね」

聡は終業式の日に、将のマンションのエントランスで偶然会った大悟の異様な激ヤセぶりを思い出していた。

たしか、死んだ瑞樹が薬物に依存していたと聞いたことがある。

なぜ、それを今思い出すのか。聡は自問自答しながら、頭はとっくに回答をはじきだしていたのだ。

「大悟くんが、やったのね」

「違うよ～ん」

ふざけた調子をつくりながらも将はそっぽを向いた。

「あたし、見たの。大悟くんがありえないほど痩せてるのを。大悟くん……薬物をやってるんでしょ」

薬物、のくだりで、聡は声のトーンを最低に落とした。隅っことはいえ待合室だから。

「違うってば。これはね、ナイショだけどフクロにされたの」

あいかわらず将はそっぽを向いている。

「ウソ。おとついからあんなにひどい台風だったのに？」

「……」

「将。あたしにウソをつかないで」

聡の上半身は完全に将のほうを向いている。

丸く開いたタンクトップの襟からは、吸い込まれそうな胸の谷間がのぞけた。

こんなに全身傷だらけなのに、将はむしょうに聡を裸にしたい、そしてその豊かな乳房に顔をうずめたいと思った。

「アキラ、『将』って呼んだじゃん」

ふざけているのは、自分の中で一触即発の性欲をはぐらかすためでもある。

「はぐらかさないで」

聡は真剣に怒ったような声を出したあと、

「心配なの……」

と目を伏せた。長い睫がしばたたくのが見える。

「アキラ……」

抱きしめたい。性欲とは別のところで盛り上がる感情。将はそんなせつなさをぐっと飲み込んで耐える。

「俺は大丈夫だから。大悟も絶対、なおるから……」

「こんなにボロボロになってるのに？」

聡は顔をあげると、将の腫れ上がった顔を見た。

……その惨状に、聡の眉は大きくゆがみ、心配のあまり、とうとう涙がこぼれた。

「ごめん」

聡は顔を伏せて将にいきなり泣いたことを謝る。

前を向いて座りなおすと、バッグからハンカチを取り出して、噴き出した涙を拭った。

聡の涙を見て、将は心が温かいもので満たされていくのを感じた。

体はまだあちこち悲鳴をあげているけれど、聡の思いは……それらにそっと乾いたガーゼをあててくれるようだ。

「なおるって、ことは、今は薬物に依存してるんだよね」

聡は涙声ながら冷静に言及した。もう将は否定しなかった。

聡を見つめる腫れた瞼の下のつらそうな瞳が、聡の予想があたっていることを物語る。

「将がそんなになるまで暴れるなんて……依存症専門の病院じゃないと無理だよ。たぶん」

「詳しいな、アキラ」

「このまえ……教師向けに薬物汚染の講習会があったの」

高校生はおろか、中学生、小学生に及ぶまで薬物汚染が進んでいる昨今。

撲滅に向けて、正しい知識と対処法などの講習が教育関係者に向け

て、都で開催されたのだ。

「大悟くん、病院で治してもらったほうがいいよ」

聡は涙のせいで出た鼻水を啜りながら、もう一度将を振り向いた。

将は首を振った。

「病院にいったら……覚せい剤所持で捕まっちまうだろ」

逮捕されたら。せっかく大悟を養子縁組しようとしてくれている西嶋は。

きっと、養子縁組を反古にするどころか、保護者も辞めると言い出すかもしれない。

将はそれを恐れたのだ。

「病院と警察は連携していないと思うわ。自主的にやめたい人だって行くっていうし。ねえ……将。専門家に任せたほうがいいよ」

聡は将の右腕をそっと握った。

その延長上には、サポーターに包まれた右手首がある。さっき3針縫った……。

「俺……あいつに、……大悟に絶対に見捨てないでくれって、頼まれているんだ」

といいつつ、将は目を閉じるとつらそうに俯いた。将とて、もう限

界なのだ。

この傷が出来た、昨日の夜更けが蘇っていた。

あれから将は、瑞樹が遺したと思われる手錠で、自分の右手と意識を失っている大悟の左手をつないだ。

まもなく目を覚ました大悟は、いつものように最初は正気だった。傷だらけの将の顔を見て心底驚いたようだった。そして繋がれた左手を見て、

「こんなことまでさせて、済まない」

と頭を下げた。

しかし、すぐに依存への異常行動と錯乱が始まった大悟は、手錠をどうにかしようとやっきになった。

鎖を切ろうとして包丁を取り出した大悟を見たときは、このまま殺されるかもしれない、と覚悟した。

自分の死体をひきずって、大悟は薬を受け取りにいくのだろうか、と将は一瞬その姿を想像したほどだ。

しかし、金属の鎖がステンレスの包丁で切れるはずはなく……狂気の大悟は、なんと将の右腕を切り落とそうと包丁を振り回し始めた。

将が右手をかばうたびに、大悟の左手はそれを引っ張り出すべく手錠の鎖を力任せに引っ張った。

そして何度も将の右手首をめがけて、包丁が勢いよく振り落とされた。

その勢いは……例えステンレスの包丁でも、腕を骨ごと切断してしまいそうだった。

大悟の目は、狂気に見開かれ……包丁は将の右腕を的確にめがけて振り下ろされる。

将は闇雲に体重をかけて手錠を引っ張って逃れながら何度も、次こそ自分の右手首から先がなくなっているのではないか、と震撼した。

辛くも、包丁の刃先を逃れた将の腕は無事だから、今こうしてあるのだけれど。

そのあと、大悟が力尽きたとき、包丁は隠せたが、手錠を引っ張り合っての格闘は深夜にもう一度あり……、将は心底疲れてしまった。

だが、明け方。力尽きた大悟は、自らすすんで睡眠薬を飲むと嗚咽した。

疲れた将は手錠をつけたまま、なぜかキッチンに仰向けに横たわっていた。

大悟が、シンクの下の戸棚に寄りかかって床に座り込んでいる。

「将……ゴメン。ごめん……」

と子供のように泣いている。

きっと自分は死んだ魚のような目をしているんだろう。

ぼやけた視界が現実なのかどうかも、もうどうでもいい。

ただキッチンの青白い蛍光灯が、目障りだと思った。だがどうすることもできない。

「しょう……。痛いだろ」

大悟は泣きながら、将の裂けた手首に包帯を巻こうとしているらしい。

薬箱はキッチンに置いてある。それで、キッチンにいるんだ、と将は泥になった脳でようやく思いついた。

手錠を何度も引っ張りあったせいで、将の右手首の皮膚は裂け、血が噴き出していた。

将の血で点々と汚れたリビングのフローリングには、包丁の突き刺さったあとが何箇所も残っている。

しかし、大悟はこきざみに痙攣しているせいか、包帯はうまく巻けない。

将は、大悟を見ると、首をわずかに振った。

『もういい』という意味だ。

死にたくはない。だけど死ぬなら、それでも仕方がない。

それだけのことを大悟にも瑞樹にもしてきたのだろうから。

将は天の裁きを受けるのに相応しく、心も静かに横たわっていた。

体中の痛みもどうでもよかった。

大悟は、涙をボロボロとこぼしながら、

「将。頼む。頼むよ」

となにやら訴えている。嗚咽する声がひっくり返ってしまっている。

一一何を頼むんだ、大悟。もう俺はこれ以上、何もしてやれないぜ……。

将は目を閉じた。

「頼む。将。俺を見捨てないでくれ。俺を……見捨てないでくれ。俺をどこかにやらないでくれ」

それでも、まだ大悟は、将を頼っているのだ。

ふいに、中学の頃の二人が将の頭に蘇る。

――これって走馬灯ってやつ？やっぱり俺、死ぬのかな……。

と、そんな考えも走馬灯の前をちらりとよぎった。

そのとき将は確かに、家を出て行き場のない自分を助けてくれた１３歳の大悟を、

家裁で『刺したのは俺です』と証言する１５歳の大悟を瞼の裏に見た。

それはたった今起こったことのように鮮明に思えた。

将はゆっくりと瞼を開けた。

「ずっと……一緒だ。お前が立ち直るのを見届けてやる……」

ほとんど声にならなかったが、将はほとんど開かない瞳を大悟に向けて、唇を動かした。

それは大悟には聞こえたらしい。

やがて将の右手首の血は自然に止まり、大悟は安らかに、眠りに落ちていったのだ。

253◆入道雲

「俺……あいつに、……大悟に絶対に見捨てないでくれって、頼まれているんだ」

「でも、そんなに……。顔がわからなくなるまで殴られるなんて……」

「約束したんだ」

将は腫れ上がった顔で、聡を安心させるべく、微笑んだ。

だけど、それは逆に聡に痛ましさを覚えさせた。

「そこまで大悟くんのために我慢するのは……」

聡はいったんその先のセリフを飲み込んだ。

代わりに

「大悟くんは、今……？」

と訊く。

「……薬で眠らせてる。起きると薬を取りに行こうとするから……。ドアは外から開かないようにしてきてる」

将は、大悟が万が一目を覚ましても外に出られないようにしていた。

玄関のドアの上下に外からピッキング対策のロックをし、念のためにドアノブと近くの窓枠を自転車用のチェーンで固定したのだ。

隣近所の人が見たら、あきらかに異常と思うだろうが仕方がない。

聡は何かで見た、覚醒剤中毒患者の拘束を思い出した（これは、講習で見たわけではない）。

手足を厳重に縛られて、何もない部屋に転がされていた映像。……それぐらいしないと依存から抜けられないのだ。

「いつまで……そんな」

「わかんないから、山口さんに訊きに来た」

「そんな……将。これ以上殴られたら……死」

最悪の単語を聡は言いかけて、口を両手で覆うように顔の大半を覆った。

「大丈夫だよ」

今度は遠い目をして天井を見上げる将。確信を持てない希望は、単なる願望である。

「大悟くんのためにそこまでするのは……」

俯いた聡はそこで声のトーンを最低に落とす。

「身代わりになってもらったからなの……？」

将は思わず聡を振り返った。

見開こうとした瞼が、よじった体の肋骨が、体中の殴られた跡がきしんだが、今受けた衝撃には遠く及ばない。

聡は下を向いたまま黙っている。長い睫が震えているのが見える。

二人を、べったりとした沈黙が遮った。

待合室のざわめき。リノリウムが蒸発したかのような、どことなく苦い消毒薬の匂い。看護士が患者を呼ぶ澄んだ声。

「知って……たんだ」

将は脱力したように再びベンチに寄りかかった。

「いつ、聞いたの」

それでも、すがるべく聡を盗み見る。

「……ずっと前」

「大悟がいったの？」

聡は黙っていた。そんなことを訊いても仕方がない。

答えるはずもない、ということに、問いを声にしたあとで将は気がつく。

「アキラは……だから、俺と離れたの？」

「違う」

即答と共に、聡が顔をあげた。

黒目がちの瞳はまっすぐに将の顔に向けられている。将の傷だらけの顔がその瞳の中に映っていた。

「違う。それは絶対に違うよ。将。あたしは……」

聡の視線が将の顔から、ついと横に流れた。

「おまたせ」

聡の視線の延長上を将も振り返る。そこに白衣姿の山口が歩いてきていた。昼食用なのか小さなトートバックを持っている。

「待ってるから」

聡は将に小さく囁いた。

結局、山口も聡と同じことを言うのみだった。

せめて、睡眠薬か安定剤をもらおうと思ったのだが、それもだめだった。

山口は秘密を守ると約束こそしてくれたが、

「診察しないと、安定剤投与が適切かどうかわからないわ。もし、肝臓を痛めていたらヘタすると命を縮めることになるし……」

と眉をひそめた。

「とにかく、お友達が大事だったら、一刻も早く病院に連れて行くことよ」

そう言うと、将の肩に手を置いた。それは傷を気遣ったのか、ごく軽くだった。

非常階段から出てきた山口と将を見て、ベンチに座っていた聡は立ち上がった。

「いつも、仲がいいわね」

山口は微笑んだ。二人の仲は、たぶんバレているのだろう。

じゃあね、と山口はナースステーションへと別れた。

将は、自分が使う、とウソをついて薬をもらえばよかった、と後悔しながら聡と二人でエレベーターを待った。

いらだちが、傍らの聡を少しだけ邪魔に思わせて、こんなことを言わせた。

「別に待ってなくてもよかったのに。『先生』」

「将……」

聡は将を見上げた。

その黒目がちの瞳に映る窓からの昼の光が少し揺れた。うるんでいるのだ。

すぐに後悔した将は、冗談でフォローしようとした。

「すぐ、泣く」

しかし、将の言葉通り、聡の目は透明な液体で膨れてしまった。

そのとき、エレベーターの扉が開いた。

「ほら。来たよ」

聡はふいに湧き出た涙を拭うハンカチを探して俯いているところだった。

将はサポーターをつけた右手で、そんな聡の肩を抱くように促した。

降りてきたエレベーターには、奇跡的に誰も乗っていなかった。

聡が、ぐしゅん、と洟をすするのを合図に、将は衝動的に聡を抱き寄せた。

体が意識から離れたところで自動的に動いてしまったのだ。

聡も洟をすすりながら、将の胴に細い腕をまわしてくる。

「将……」

将は肋骨が痛むのもかまわず、聡をきつく抱きしめた。

髪のあたりから漂う懐かしい甘い香りに理性はますますふっとんでいく。

――もう、どうでもいい。やっぱり聡といたい。

「アキラ……アキラ」

密室を照らす暗い蛍光灯。

息苦しいような閉鎖空間が、今の二人には夢の世界だ。

このまま、エレベーターに閉じ込められたっていい。いや、閉じ込められればいい。

二人は、抱き合ったまま心の奥底で願ってさえいる。

しかし、夢の空間は、あっという間に割れた。

エレベーターの扉が開いて、現実という名の白日が二人に否応なく

注ぐ。

二人は、教師と生徒に戻らなくてはならなかった。

だが、もう少し将と一緒にいたかった聡は、

「……今日はお弁当を買っていくわ」

と将を先導するように、一歩踏み出すと将を振り返った。

病院から外に出ると、うっとおしいほどの蝉時雨と突き刺すような夏の日差しが二人を出迎えた。

さっきより空の青さはいっそう濃くなっている。正午近いのだろう。

「暑いわねえ」

聡はひなたに出るなり手をおでこにかざした。

「そうだな」

世間に顔が知れつつある将だが、これほど腫れ上がった顔を、イケメン俳優のＳＹＯだと認識する者はいないらしい。

すれ違う者は皆、その形相に一度は視線をひき付けられ、顔をしかめて、目をそらすようにそっぽを向いていく。

「海、行きたいな」

唐突もなく入道雲に夢見るような視線を向ける聡に、ふと将は思い

つく。

「ねえ。アキラ」

「なあに？」

涙はすっかり乾いたようだ。眩しげに目を細めて将の顔を見上げる。

「手つなごう」

将の思いがけない提案に、聡は目とともに口をぽかんとあけた。

「手、汗びっしょりよ」

「いいよ。俺もだもん」

「学校の人に見られるかもよ」

ここは、学校の近くだ。

「大丈夫。昼休みはまだだし、この顔だし。俺が誰かなんてわかんねーよ」

「その背の高さでバレバレだって」

という聡にかまわず、すでに将は聡の手をとっていた。

「ひさしぶりだな。アキラと手つなぐの」

「うん……」

聡は急に無口になった。大きな将の手。初めて握ったときより、やや湿り気を帯びている……そんな将の手の感触を伝える自らの左手に、聡は自然に神経を集中させていたのだ。

将の肌の触感は、聡の体にいろいろな記憶を蘇らせた。

将が最も近くにいた記憶を思い出した聡は、俯きながらも将の手をギュッと握った。

そんな聡の握力を感じた将は、笑顔で聡の手を握り返す。

しばらく握力の応酬で無言の会話を交わしながら、二人は降り注ぐ蝉時雨の中、アスファルトに焼きつくような短い濃い影を踏みしめる。

商店街にさしかかると、将のマンションが見えてくるはずだ。

もうすぐ、手を離さないといけない。

二人は、信号待ちで顔を見合わせた。

そのとき。

なんとなく、周囲があわただしいことに二人は気付いた。

皆が、呼びかけあうように商店街のほうへ走っていく。

信号が変わって、二人は手をつないだまま、将のマンションがある商店街のほうに歩く。

何人もの人が、そんな二人を追い越していくように急いでいった。

集まった人々の表情は悲痛な顔や、興味深げな顔、怒りを顕にした顔、とさまざまだったが、ある一点を見上げていることで共通していた。

濃い青空に逞しい入道雲ではなく……その前にある将のマンションを皆は見上げていた。

「あっ！あそこ」

先に声をあげたのは聡だったが、同時に将も息を飲んでいた。

蝉時雨も喧騒もすべて止んだかのようだった。

将は、マンションの、１０階と9階の間の……バルコニーの外側のありえない場所に男が張り付いているのを見た。

……それは間違いなく大悟だった。

254◆裏切り

「危ないっ」

「あはは、泥棒に入ろうとして身動き取れなくなっちゃったのかな」

「早く消防を！」

「それより下に、やわらかいものを！」

人々は口々に言いながらも、大悟から目が離せないらしい。

将も上を向いたまま聡の手を引いて、マンションのさらに近くへとやってきた。

そこは野次馬でごったがえしていた。

大悟は、将の部屋があるマンションの真ん中付近ではなく、どうやって行ったのかわからないがバルコニーづたいに角部屋まで来ていた。

手を上にめいっぱいに伸ばした状態で１０階のバルコニーの下につかまり、足は９Ｆのバルコニーのてすりに着いた状態で身動きがとれなくなっていた。

「あそこの角部屋に人はいないの？」

「どうやら留守らしいよ」

そんな声も聞こえてくる。

「大悟っ！」

将は人ごみを掻き分けるようにして、マンションのエントランスへ進もうとしたが、野次馬が多くてなかなかたどりつけない。

「すいません！マンションの住民です！」

「通してください」

人ごみより首一つ高い将の傷だらけの顔に、皆一瞬大悟を忘れて視線を投げたが、緊急事態である大悟のほうに戻っていく。

将が立ち往生しているうちに、サイレンが聞こえた。

商店街の反対側から、はしご車がやってきたのだ。後ろにはパトカーもいる。

『どいてください！救助の邪魔になります！どいてください』

レスキュー隊は、丁寧語ながら、かなり乱暴な調子で野次馬にスピーカーで呼びかけて退散させた。

あっという間に、人垣ははしご車を遠巻きにするように後退した。

レスキュー隊を乗せたはしご車が、スルスルとあがっていく。

角部屋の下あたりには、空気を入れたマットが素早く用意されている。

将は救助のようすを静観するしかなかった。腕をぎゅっと掴む聡の手にそっと自分の手を乗せる。

直射日光がじりじりと頭髪を焼く。アスファルトから熱気が昇ってくるのがわかる。

人々は、皆固唾を飲んで、はしご車の行く先を見つめた。

……ついにレスキュー隊を乗せたはしご車が大悟の高さまで到達した。

だが、レスキュー隊が救助しようと大悟に手を伸ばしたとたん。

「離せ！俺にさわるな！」

大悟が激しく抵抗しようとする叫び声は下まで届いた。

手を口にあてるものあり、より面白いと目を輝かせるものあり、で見物人はそれぞれにどよめいた。

しかし、大悟の抵抗は声だけだった。

少しでもバランスを崩せば落ちる、という状態で、身動きが取れないらしい。

あれよあれよという間に胴体に命綱がつけられ……あとはレスキュー隊のなすがままだった。

それっきり静かになった大悟を乗せたはしごが地上近くまで縮んで

くれたとき、将は一安心すると同時に、ハッとする。

「将？」

将は聡の手を振り払うと、解散しはじめる野次馬の中をかきわけて、はしご車の近くに近寄った。はしご車の後ろにはパトカーがいる……。

レスキュー隊に抱えられるようにしてようやく地上に降り立った大悟は、放心したような目をしていた。

「大悟……ッ」

将が大悟に寄る前に、警官が大悟の前に素早く立ちはだかった。

「事情をお聞かせ願えますか」

丁重だけれど、有無を言わせない厳格さで大悟に詰め寄る。

放心した目を地面の方に向けていた大悟は、そのやせ細った顔をゆっくりとあげた。

その目は警官の向こうに、将の姿を見つけた。

「将」

大悟の瞳は、一瞬、とてつもなく哀しげな色を見せた。

「将、俺を裏切るのか」

大悟は低い声で静かに呟いた。

「大悟」

ちがう、と将は警官の前に進み出ようとして、他の警官に肩をつかまれて阻止される。

「俺を、裏切るんだな」

荒くなる吐息と一緒に、将への失望を投げると大悟は目をカッと見開いた。

「俺を見捨てるんだな！そうだな！将ッ！」

咆哮をあげる。飛び散る唾と汗が強い光にキラキラと輝くのが見える。

そして、一瞬の隙をついて、肩を支えていたレスキュー隊員を素早く振り払う。

すべてが、将の目の前でスローモーションのように見えた。

レスキュー隊員がはずみで転ぶ。いっせいに大悟に飛びかかる警官。

周囲の悲鳴。

熱いだろうに、アスファルトに組み伏せられる大悟。

「離せー！離せよ！離せー」

喉も破けんばかりの大悟の喚き声。

大悟は、警官に組み伏せられながら、立ち尽くしている将を見上げた。

照りつける夏の日差しがつくる影で、その汗まみれの骸骨のような顔はいっそう彫が深く悲愴な顔に見えた。

ようやく、警官に脇を固定されながら、大悟は立つことを許された。

「ずっと……ずっと一緒にいるっていったくせに……俺を見捨てるんだな！将」

大悟は、なおも将に向かって叫ぶ。

「コラ、黙れ」

と警官にこづかれながらも

「何とか言えよ！将」

と怒鳴る。

だけど、傷だらけの顔に直射日光を浴びながら、将は何も出来ずに立ち尽くしているのだった。

「将！おい！将！ショオオオウ！」

大悟は無理やりパトカーに押し込まれている最中もずっと叫び続けていた。

……いや、パトカーのドアが閉まっても、将の耳にはずっと聞こえ続けていた。

蝉時雨も、商店街の喧騒も、頭の中に反響する大悟の叫び声でかき消されてしまった……。

空いっぱいを燃やすようにして雲が茜色に焦がれている。今日最後の輝きとばかりに。

将は窓にうつるそんな空に背を向けて部屋に座り込んでいた。

やがて、ネオンのように明るい夕空は、火が消えたように灰色に沈黙した。

灯りもつけない部屋は、なすすべもなく暗くなり……将は濃い紫色の影の中に溶け込むかのようにじっとしていた。

明け方まで大悟と共に闘っていた部屋は、見るも無残に散らかっている。

包丁を振り回していたときに散乱したのだろうか、クッションの中身のビーズのようなものが一面に広がっている。

フローリングはところどころ、血痕で汚れてさえいる。

しかし、将はそれを片付けもせず、独り、ぽつんと座っていた。

さっきからしきりにメールの着信音がある。聡だ。

聡が心配して、メールを送ってくれているのだ。

将はそれが鳴るたびに携帯を拾い上げて読む。

心が慰められるのは確かだけれど、返事をする気にはなれなかった。

『俺を見捨てないでくれ』

と今朝、大悟は訴えた。その、涙でぐちゃぐちゃの顔が頭から離れない。

『俺を裏切るんだな、将』

それはさっきの鋭い咆哮とセットになっていた。

そのとき、固定電話が鳴った。

出ないでいると、留守番電話になる。

メッセージを録音する声がする。

『毛利です。島くんは、矯正病院への入所が決まりました』

将は顔をあげた。

黄昏のわずかな光りの中で、明け方まで将と大悟の二人をつないでいた手錠が鈍く光っていた。

――結局、なんにもしてやれなかった。

将は叫び声をあげると、それを床に投げつけた。

あのとき将は、大悟を押し込んで、最後にパトカーに乗り込もうとする警官にすがった。

「あの、俺、同居人なんですけど」

「じゃあ、あとで署まで迎えに来てください」

警官はそういうと、パトカーに乗り込んだ。パトカーは将を残して発進した。

パトカーを追って思わず、前のめりになる将の前に、スーツ姿の男が現れた。

毛利だった。

なぜ、そこに毛利がいるのか、瞬時にわかった将は目を見開いたまま凍りついた。

将にすがろうとしていた聡も、毛利の姿を見て、将の数歩後ろで思わず立ち止まった。

「もう……り」

「誤解しないで下さい」

毛利は淡々と言った。傷だらけの将の顔にも、まるで動揺を示さない。

この暑い中、きっちりとスーツを着こんで、汗すらかいている様子が見えない毛利。

この男は、本当に冷血動物なのかもしれないと将は心の隅で少しおびえる。

「整形外科医から実家にご連絡がありました。それで駆けつけましたら、あんなことになっていたのです……」

さっきの病院の医師が、実家に連絡したというのか。

「警察は私が呼んだのではありません」

それは言い逃れにしか聞こえなくて、将は不審を態度で示す。それへの回答のように

「実は……島大悟くんの覚醒剤常用については、2週間ほど前からマークしていました」

毛利は意外なことを報告した。

「それで、警察にチクッたのか」

「チクってなど、いません」

毛利は、さりげなく日陰に移動しながらも、将のほうにまっすぐに視線を向けた。

「そんなことをしたら、将さままで疑われますから……わたくしは、将さまが疑われることなく、なんとか島くんを矯正病院に入院させる方策を練っておりました」

将はまだ信じられなくて毛利を睨みつける。

しかし、腫れ上がった瞼があかないおかげで、毛利の方は睨みつけられたことに気付かないらしい。いや、気付いても動じないだけなのかもしれない。

「でも調べるうちに……島くんは……覚醒剤代を稼ぐために、暴力団の下部組織で、振り込め詐欺グループに加担さえしていたことがわかりました」

「あ……」

将は、伊豆から帰った日に、クラブで見た男達を思い出した。

「繰り返すようですが、今日、警察が来たのは私が呼んだのではありません。警察もまだ島くんが、暴力団に関わっていたことは知らないはずです」

毛利はあくまでも淡々と続ける。

「……ですが、島くんは、そのまま矯正病院に入院することになると思います。その手はずだけは取らせていただきました」

将は、数歩後ろの日陰から聡が心配そうに見ていることも気づかずに、夏空の下、立ち尽くしていた。

じっとりと、テープだらけの顔を汗がつたっていく。

２５５◆最期の夏空１

翌日もよく晴れた。朝から青空は輝き、入道雲はむくむくと膨れ上がった。

将は、ソファでそのまま眠ってしまったようだ。

カーテンも閉めずにほったらかした部屋は、日中の明るさにその惨状を顕わにしていた。

エアコンだけが……外の夏空から遮断されたこの部屋に、冷え冷えとした空気をこんこんと送り出している。

将はソファの上から、体をおこすことなく、部屋をみまわした。

眠ったおかげで……将を襲った罪悪感は、記憶と共に整理されたかのようでもある。

それが突き刺さる痛みは、昨日よりはるかに小さい。

だが痛みは、切り傷の鋭い痛みからしつこい疼痛に姿を変えて、将を苦しめているのには変わりはない。

体のほうの痛みは、適切に手当てをされたせいか、半分ほどになっているが、心のほうの痛みはそうはいかないらしい。

爽快さを主張しながら飛び込んでくる眩しい夏空の照り返し。

ここ１０階の部屋にも否応無しに飛び込んでくるそれが、今の将に

は心底うざったかった。

ゆえにしばらくソファから動かなかった。

サイレントマナーにした携帯がピカピカと着信を告げているのもどうでもいい。

仕方なく動いたのは、昼前に家政婦がやってきたからである。

家政婦は、以前将が荒れていた頃からここに通っていたので、部屋の惨状を目にしたときの反応も小さかった。

……前に、プチ家出している連中が雨宿りに来ていた頃は、毎日のようにすべての部屋が汚れていた。

それをこの家政婦は毎日掃除していたのだ。

単に、ここのところラクだった掃除が、今日はひさしぶりに大変になるぞという、かすかな面倒くささと、仕事を前にした小さな意気込みが彼女の後姿には見えた。

将はソファに寝そべったまま

「すいません。手間かけて」

と形式上謝ってみる。すると家政婦は、そんな将のセリフに少し驚いたようだった。

しかしすぐに驚いた表情を引っ込めると、作り笑顔で

「いいんですよ。仕事ですから」

と答えた。そして掃除機を使い出した。

一般的な感想だろうが……将は掃除機の音が大嫌いだった。

だが、オーク材のフローリングの上に散らばった、生米のようなクッションの中身が面白いように吸い込まれていくのに一瞬見とれた。

だが、それらがすべてなくなると、こんどは激しい轟音に自分まで吸い込まれてしまうような気がして、将はあわててバスルームに逃げ込んだ。

考えてみたら夏なのに、もう2晩もシャワーを浴びていない。

体のあちこちがどことなくベトつくようだ。

裸になり、右足首の包帯を解いた将は、右足全体が紫色に膨れ上がっているのに少したじろいだ。

ドアにはさんだのは踝なのに、なぜか、つま先のほうが腫れ上がっている。

そこに痛みはないが、不気味だった。

濡れないように右腕の傷をよけて湯を浴びる。

裸になって剥き出しになる、一連の自分の自己防衛本能に、ふいに軽い吐き気のような嫌悪がこみあげてくる……。

バスローブを羽織ってそのまま寝室に篭ろうとした将だが、家政婦が珍しく引きとめた。

今までは将がどうしようと頓着しなかった家政婦だ。

「坊ちゃん、巌様からお電話がありましたよ」

「ヒージーが？」

入院している曽祖父の巌である。携帯を無視し続けているのに業を煮やして固定電話のほうに電話をかけたらしい。

「すぐに掛けなおせとおっしゃっていました」

自分で電話ができるほど回復したのだろうか。

将はすぐに、家政婦がメモした番号に掛けなおした。

０９０から始まる番号は携帯のようだが、巌は携帯は持っていないはずだ……。

しかし、掛けるなりすぐに艶やかな女の声で

「将さん。おひさしぶりです……すぐに巌さんに変わりますわね」

と聞こえたので将は、ああ、と納得した。

ヒージーの３０年来の付き合いの妾に、巌は携帯電話をかけてもらったのだろう。

電話の向こうから、巌の少ししゃがれた声が聞こえた。

「将。いいいい、今、な、何をしている。し……仕事か」

電話はこういうときに不便だと思う。

目の前にいたら、俯くなり、そっぽを向いたりする姿でだいたい察してもらえる。

仕方ないので

「いや。休み」

と短く答える。

「休みか。や……休みなら、顔を出せ。た……頼みがある」

巌の病室を訪れるのは悪くない。

だが……腫れ上がり傷だらけの将の顔を見せるのは、心臓を痛めて入院している巌の病状によくないのではないだろうか。

「ヒージー。俺さ。ちょっといろいろあってサ」

「い……いろいろとは何じゃ。休みなんだろうが」

巌は不機嫌そうな声を出す。面白いことに怒りゆえの言葉は比較的流暢に出るらしい。

「いや……。ちょっと顔が。男の勲章みたいな」

将は遠まわしに、顔が傷だらけであることを告白してみる。

「何を？……ははーん。お前、年甲斐もなく、取っ組み合いをしたのか」

「ま、そんなとこ」

巌は愉快そうに電話の向こうで笑い声をたてた。

笑い声は元気そうに見えた。前に病室に行ったときより、言葉ともども、かなり回復しているらしかった。

その声に将も癒される。

「よいわ、よいわ。お前の勲章を、とくと見てやるから、来い。い……いいな」

いつものことだが、巌には逆らえない。

電話を切った将はため息をついたが、決して嫌な気分ではない。

車に乗りたいが、右足がこんな状態での運転は無理なので、家政婦が買ってきてくれたつっかけを包帯で倍にも膨れた右足に履いて、電車を利用することにする。

松葉杖をついていた頃に比べれば、別に歩行に不自由はない。

それよりも、閉口したのは人目だ。

昨日より若干腫れが引いた顔は、ＳＹＯに戻りつつある。

さっき洗面所で鏡をチェックした将は、左瞼の腫れと色鮮やかな痣はあいかわらずながら、頬の腫れがかなり引いているのを確認した。

まるで、怪談のお岩さんのような左瞼は、あまりに不気味なので、商店街で眼帯を買って身につけている。

しかし、そのおかげでよけいにＳＹＯらしく戻ってしまったらしい。

電車の中で、携帯をチェックしながら、将は

「ちょっと、あれＳＹＯじゃん」

「傷だらけじゃん。だいたい電車に乗るはずないじゃん」

「でもそっくりだよ」

というギャルのささやきを無視するのに骨を折った。

――俺は単なるそっくりさんです。

と自分に言い聞かせるようにして、居直る。

タクシーを利用してもよかったが、芸能活動のおかげで、思うよう

な株取引がやれてない今、お金はできるだけ大事に使おうと思っているのだ。

携帯のメールには、心配する聡のほかに、武藤からの連絡が入っていた。

それによると、『ばくせん2』の収録は将の部分だけ1週間休みにしてもらったことが書かれていた。

そのせいで、脚本も大幅に書き直してもらったという。

収録中の6話の残りは自然な形で将が出てこないようにしてもらい、将がメインになる7話は、四之宮がメインになる8話と急遽差し替えになったらしい。

脚本家に払う修正料については事務所持ちになったとも書かれていた。

CMについては、代役をたてようと代理店は提案をしたらしいが、ありがたいことに、ぜひ将で撮りたいというクライアントの熱意があり、これは1週間程度なら延期してもらえるということだった。

結果的に1週間休みになってしまったが、1週間でできるだけ顔のケガを直すよう努力をしろ。

皆に迷惑をかけているということを忘れるな。

それでも干されないということに感謝の気持ちを忘れるな。

復帰したら、共演みんなにお詫び行脚だから覚悟しろ。

と武藤は結んでいた。

明日まで調整で忙しいが、あさって頃から、たびたび顔をチェックしにくる、とＰＳに書かれていた。

共演で仲良くなった大野からもメールが入っていた。

そこには、あくまでも噂だという前ふりで、７話と８話の差し替えは、四之宮が自分から言い出したらしいことが大野本人の驚きと共に書かれていた。

どうやら、たまたまその週にあったオフを潰していい、とマネージャーに持ち掛けたらしい。

過密スケジュールの四之宮にとってどんなにオフが待ち遠しいか、将程度の忙しさでもすでにわかる。

それを将のために潰してくれたのだ……。

将は、携帯を閉じると、目を閉じて電車の規則的な揺れに身を任せた。

武藤や共演者へのすまない気持ちが素直にわきあがってきた。

256◆最期の夏空2

病院の中は、ひんやりしていて、灼けるようなアスファルトの上を歩いてきた将はほっとした。

昨日行った学校の近くの病院と違って、高額な入院費が必要な、名士御用達のこの病院はとても静かである。

だが、共通しているのは消毒液がまじっているような、苦い空気だ。

汗がひくにつれて将は息苦しくなってくるのを感じた。

ロビーの水槽に高価なランチュウと丹頂がふわふわと漂っていた。

カルキを無理やり薬で中和した水道水の中の金魚も同じような息苦しさなのかもしれない、と将は思った。

「し……将！」

病室におずおずと顔を出した将の形相にさすがの巌も驚いたようだ。

可動式ベッドに寄りかかったまま、皺に埋もれた目を見開くようにした。

将に背を向けるように座っていた妾のあゆみさんも濃いアイラインにふちどられた目を真ん丸く見開いた。

しかし次の瞬間、巌は発作のように怪鳥の叫びのような声をたてた。

「ヒーッヒッヒッ……」

なんだか、苦しげにさえ聞こえる声に将のほうも目を見開く。

「巌さんたら……」

あゆみさんが、そんな巌に、目を細める。

そして将に向かって口角をあげたので、ようやく巌は笑っているのだとわかった。

「男前だ！将」

ヒッヒッヒ、ふぉっふぉっふぉとしばらく笑い続けた巌は、途中で本当に苦しくなったらしい。胸を押さえた。

「ヒージー！」

将は思わずベッドに駆け寄る。あゆみさんも椅子を立ち上がる。

「たいしたことは……ない。おかしくて……酸欠になるかと、思ったぞ」

巌は苦しげに微笑を見せた。

「今日、呼んだのはな。他でもない……」

巌は3時のおやつに、崩したプリンをあゆみにスプーンで口元に運んでもらいながら言った。

プリンは、将が見舞いに持っていったものである。

あゆみは

「せっかく可愛いプリンですけど、将さん、ごめんなさいね」

と将に断りながら、それをぐちゃぐちゃにかき混ぜた。

そうしないと巌の喉を通らないからなのだが、持ってきた将にきちんと断るあたり、さすがはクラブのママを務めるだけの気遣いである。

巌が妻を失って以来の妾であるあゆみは、ただ囲われるのをよしとせず、巌に買ってもらった銀座の店を切り盛りしている。

店を繁盛させたお金で、深夜営業のビストロを始め、それもなかなかの評判だ。

あまり美人ではないが、頭のよさが強い視線に、人のよさが柔和な頬のラインに現れている。

「もうすぐ、病院長の巡回があるでのう。わしを、大磯に戻すよう、一緒に頼んでほしいんだ」

巌は、皺の襞の中の瞳を将をまっすぐに向けていた。

「どうして俺に……」

将は、無理だ、と思いつつ、それを巌が望むのは当然だ、とも思う。

巌は、あの大磯の邸宅をことのほか愛しているのだ。

『わしはここで死ぬ。わしの死に場所はここじゃ』という言葉も何度となく聞いている。

その言葉を思い出した将は……どきりとする。

死ぬ。ヒージーが死んでしまう……。

もしかして巌は死期を悟って、そんなことを言っているのではないか。

「何度も頼んだんじゃ。すりつぶせば普通食も食べられるでのう。だが……あいつめ、ご家族に相談する、というばかりじゃ」

病院長のことを、あいつめ、といって巌は皺だらけの顔をしかめた。

「康三も純代さんもいい顔をせんのじゃ……。バカめが。それで、うちの跡取のお前にな」

「でも、ヒージー。体は……まだ」

将は寝たきり、という言葉を飲み込んだ。

「同じ寝たきりなら、こんな空気の悪いところより、大磯のほうがいいだろう」

飲み込んだ言葉は、巌にはお見通しだったようだ。

「それに……大磯には……、お前に渡すものがある。大事な、大事なものじゃ」

巌は真剣な顔だった。言葉に力を込めすぎたのか、途中で苦しげに息をついた。

「あら、あたしにはくださらないの？」

あゆみは、巌の緊張をほぐすべく、おどけた。

「お前には、これ以上やらんっ。スッテンテンになっちまうわっ」

巌も心得たように、冗談で応じた。

マンションと店を買い与えてこそいるが、あゆみは巌がこちらに来て以来、店は若いものにまかせて献身的に巌の看病をしている。

自分が付き添えないときは、店の女の子の中でも優しくて賢い娘に自分でギャラを払って巌の世話をお願いしているほどだ。

「あら、残念。身ぐるみ剥いで差し上げようと思ってましたのに」

ほほほ、とあゆみはカールした髪を揺らせて笑った。そんなふうに笑うと、さすがに艶っぽい。

もうすぐ６０歳になるはずなのに、１０は若く見える。

あとで聞いた話だが、将の父の康三は、彼女にいくばくかのお金で礼をしようとしたというが、彼女は

「お世話になったのはわたくしのほうですから」とそれを固辞したという。

「とにかく……大磯に帰りたい。お前ならわかるはずだ」

「ヒージー……」

「一緒に頼んでくれ。な」

そうこうしている間に、病院長が主治医を連れてやってきた。

病院長は将の姿を見ると

「これはこれは……いつもテレビで拝見していますよ」

と声をかけた。名士録に載る様な人物にふさわしい穏やかなバリトンの声だ。

将は頭をさげた。

病院長は、将の顔の傷のことは何も触れずに、巌の方に向き直った。

彼が言葉を発する前に、巌は

「今日こそ、頼みますよ。ワシを大磯に帰してくださらんか」

先制攻撃をしかけた。

「無理ですよ……依然、いつ発作が起きるかわからない状況ですし。そうなったらお命が危険です」

主治医が横から答えた。

「命が危険なのは、ここでも同じだろうに」

巌はすかさず言った。可動式ベッドから身を乗り出そうとして、首だけが前に出ている。

息も少し荒くなっていて、あゆみが心配そうに肩に手をおく。

それに「いい」と小さく答えると、巌は

「もう１００年も生きたんだ。心の臓もポンコツになってしかるべきじゃ……どんなに最新の科学でも……老いには勝てん」

とまず主治医に言う。黙り込む主治医が、巌の言葉が正しいことを示している。

巌の心臓は、発作の危険から逃れられるレベルまで治ることはないのだ……。

「ポンコツの心臓が止まるのを待つなら……待っている間は……好きなところで過ごしたいんじゃ」

病院長に向けられた言葉に、将は巌のほうを振り返る。

心臓が止まる＝死。やはり巌は死を覚悟しているのだ……。

巌は可動式ベッドに頭まで寄り掛かると遠い眼をした。

その視線の先には、きっと大磯があるのだ、と将にはわかる。

「それに……。これに手渡さなくてはならないものが、大磯にはあるんだ」

巌は視線で将を病院長の前に連れ出すようにした。

「将、お前も頼め」

将は困惑した。巌にはいつまでも生きながらえてほしいからだ。

「巌さん。発作が起きても、ここにいれば、すぐに適切な手当てができるんです」

病院長は静かに巌を諭そうとした。

だが巌は

「こんなところで、無理やり永らえてもなんになろうや……。一度や二度は蘇っても、そのうち管まみれにされるのであろう」

鮮やかな大磯の夏を思い浮かべていた将に、いつかテレビで見た、意識もなくスパゲティのように管を取り付けられた患者の姿がよぎる。

大磯は……ここと違って、空気も甘かった。

香ばしいほどに香る青草に、はるかに望む太平洋の潮の香りが隠し香になっているのだろうか。

夏はことさら、むせるほどの酸素の濃さを感じた。

それをそのまま、色にしたような、早朝からつゆ草のような濃い青色の空の下で、

『今年も、うまいこと実ったわい』と

きゅうりを千切る、ランニング姿の巌。

粉をふいたようなきゅうりが旨いのだと得意げに見せてくれたあの姿はスパゲティの患者とどうしてもうまく重ならない。

巌にはいつまでも生きていてほしい。それは将の本心だ。

たとえ管まみれになろうとも。

そうやって息をつないでいれば、いつかは……医療が発達すれば心臓だって元通りに治る日がくるかもしれない……。

いったんそこまでたどりついた思考に将は、ふと違和感を覚える。

たしかに、医療は発達するかもしれない。

しかし、その日まで巌は、あの大磯の夏空の下に帰れないことになる。

それは、今年中とかそんなはずはなく。

そこまでに最低でも何十年かの歳月がかかることは、あたりまえだった。

それまでに間にあわなかったら。

何度目かの発作で巌は管まみれになり……愛する大磯の家とは逢えないまま逝くことになる。

老いと医療の発達の競争を……管まみれになってもいいから、と強いるのは……。

『生きていてほしい』というのは、エゴイズムなのかもしれない、と将はふと思った。

『人命は地球より重い』という大義名分があるから、それはエゴには見えない美しい願いに見えるけれど。

巌の命を尊重するがゆえに、彼が最も愛するものと引き裂いている状態は……巌を愛しているといえるだろうか。

「１００年の締めくくりの場所ぐらい、自分で決めさせてくれ」

なおも、巌は訴え続ける。

「しかし……まだ、発作が」

病院長はにがりきっている。

「ヒージーを。なんとか大磯に帰せないでしょうか」

将は立ち上がった。

「将くん……」

「お願いします」

将は頭を下げた。そんな将をよく見ようと、巌は皺の襞を見開くようにした。その中の目にはすでに熱いものがこみあげている。

「君が、そういっても……。お父さんや、お母さんが……」

病院長は、将を子ども扱いして、却下しようとした。

「父と母は、僕が説得します。曽祖父本人の希望なんです。お願いします」

「将は……立派な鷹枝の跡取じゃ。子供扱い……しないでくれ」

巌は手を伸ばそうとした。あゆみがその手を取る。

「すり潰せば、普通の食事もできる。付き添いは……頼めばよい」

巌がそういうと

「大磯の病院から毎日、先生に巡回してもらいましょうよ」

あゆみは優しく厳にそう語りかけると、主治医を振り返った。

「必要なことは、何でも整えますから……曽祖父の願いを聞いてやってください」

将はもう一度、頭を深く下げた。

「ううむ……」

病院長は主治医と顔を見合わせた。

257◆最期の夏空3

「将。どうした。うかない顔をして」

巌の声に、水平線の上あたりに彷徨していた将の意識は、車の中に舞い戻った。

将は今、巌と彼が横たわるベッドごと乗せた、特別仕様の車に同乗している。

車はすでに東名高速を走っている。窓の外には、紺色に霞む水平線が見えている。

「ん……なんでもないよ」

将はあいかわらず眼帯をした顔を巌の方に向けた。

「なんでもない、という顔じゃあるまい」

そんなことを問いかけながら、巌はごきげんだった。

あんなに帰りたがっていた大磯にいよいよ帰れるのだ。

あまりに嬉しかったのか、不自由だった言葉もほとんど元に戻っている。結局、

『死に体になってまで生き延びとうないわ。人権とやらを尊重しろ』

との罵声まで交えた、巌の懇願に病院長が折れた形になる。

『いい顔をしない』といっていた康三や純代も、結局、巌には逆らえなかった。

純代とあゆみが連携して、大磯の邸宅での看護ができうるよう設備や人を整えることになった。

将が一緒に頼まなくても、充分説得できたのでは、と将は少し可笑しかった。

そして、用意が整った金曜日、巌は待ちきれないように退院し、こうして特別仕様車で搬送されているのだ。

将のケガの方だが、今日までに顔の腫れはだいたいひいた。

だが、傷はまだ治っていないし（一応手首の傷は月曜に抜歯といわれた）、左瞼の痣は真っ黒になって残ったのでそれを隠すべく眼帯をしている。

足のほうの腫れは引きつつあるが、それでもまだ普通の靴は履けない（それもサンダルの時期だからあまり違和感はない。包帯が暑苦しいだけだ）。

痛み的にはかなり改善されたのだが、見た目的にはまだまだで、昨日顔を見に来た武藤はため息をついたほどだ。

「……さては、あきらさんとケンカでもしたのか」

「違うよ」

将はふいに出てきた聡の名前にハッとした。名前だけでも、心がふんわりしたものに、一瞬だけ包まれる。

「じゃあ、どうしたんだ」

将は黙り込んだ。将が窓の外に考えていたのは、大悟のことだった。大悟はいまごろ……拘束されて苦しんでいるのだろうか。

『俺を見捨てるのか』というリフレインは、しつこく将を苦しめていた。

「友達のことで。ちょっと」

将は素直に、少しだけ打ち明けた。

「島大悟くんのことか……。わしでよかったら、相談に乗るぞ」

大悟の一件を何も知らない巌は、ひ孫をいたわるような優しい瞳をベッドの上から向けた。

将は首を振ると、もう一度窓の外に視線を投げた。

「もう……いいんだ」

どうにもならないんだ。という言葉を静かに飲みくだす。

せっかく巌のつてで、保護者として、運転手の西嶋の弟である西嶋隆弘を紹介してもらったのに、矯正病院送りになってしまった大悟。西嶋隆弘・節子夫妻のもとにもその連絡は行っているだろうが、どうなっただろうか……。

三宅弁護士に訊けば夫妻の身の処し方はわかるだろうが、将はそれを聞くのが恐かった。

巌は、横たわったまま、そんな将の横顔を見つめていたが、ふいに

「あきらさんとはうまくいってるんだな」

と問い掛ける。

その口調から、どうやら将を元気付けようと思ったらしい。将は巌の方に視線を戻した。

「うん。順調だよ」

本当は……大人になるまで離れることにした。でも、そんなことは言わなくていいだろうと将は判断した。

「あきらさんと……結婚したいか」

「……なんだよ。いきなり」

突拍子もない質問に、将はあわてた。

思わず動揺が体に出るところだったが、辛くも止める。

「だから、一緒になりたいか、と訊いているんだ」

巌の瞳は、まったくふざけていなかった。しごく真剣に将を見つめていた。

できるなら、18歳になった瞬間に結婚したかった……そんな熱い思いが腹の底からこみあげてくる。

「……そりゃ」

それだけいうと将は下を向いた。巌がこちらを見て微笑んでいるのがわかり、将は照れた。

しばらく巌は、将がひとりで照れる様を、枕から見上げていたが、ふと、

「いいのう……」

とつぶやくと、目を閉じた。

ごくんと、枯れ木のような喉が動き……気がつくと巌の閉じた瞼の縁に涙が光っていた。

「ヒージー」

「……なんでもない。昔のことを思い出したんだ」

将は、大丈夫、と問いかけながらタオルで涙をぬぐってやった。

すまん、と答えながら巌は少し赤くなった瞼をあけた。

「将。この夏のうちに……わしが……生きているうちに」

「バカなこというなよ」

将は巌の言葉を強く遮った。

夏の終わりまでに巌が逝ってしまうなどという不吉なセリフは、本人でも許せない。

巌は少し微笑むと続けた。

「あきらさんを、大磯につれて来い。一度会っておきたい」

「どうして」

「お前がそこまで惚れた女を見たいだけじゃ」

巌はニイと笑った。入れ歯を入れていない巌はいっそう年を取って見える。

その口元は、ピンク色の口腔の中へと入っていくように縦に皺が入っているのだが、それが一瞬なくなるような笑顔だった。

困り顔の将に

「できるだけ早くな」

と催促する。

「巌さーん」「御前ー」

「ふぉっふぉっ。婆が2人寄ってきよったわ」

門前で、ベッドごと慎重におろされた巌は、駆け寄ってきたハルさんとあゆみを見て笑った。

あゆみさんは、巌の介護のために、なんとここに寝泊りすることにして、先に東京からやってきていたのだ。

車庫にはあゆみのシルバーのベンツがとまっている。

さまざまな種類の蝉の声が、大木の濃い影が巌を歓迎するかのようだ。

夏の盛りとあって、涼しげな木陰でも、さすがに暑い。

だがアスファルトが少ないせいなのか、その暑さは東京のそれのように攻撃的ではない。

「笹の香りがするのお」

巌はベッドに横たわったまま、鼻をくんくんと動かした。

ハルさんが打ち水をしておいた庭からは、下生えの笹の甘い香りがただよってくる。

甘い香りは、これだったのか、と将は今気がついた。

「お暑いでしょう」

まだ昼下がりといっていい時間帯だ。

庭を横切る巌のベッドに陽射しが直接あたるのがよくないだろうと、あゆみは日傘を差しかけた。スワトウ生地の上等なものだ。

「よい……。少し止めてくれ」

巌は、あゆみに日傘をどけるように、そしてベッドを運ぶ男に止まるように言った。

ベッドに直射日光があたる中、巌は懐かしそうに庭とそれを囲むような母屋と洋館の離れ、そして土蔵を見渡した。

そして、最後に真上に広がる空を見上げた。巌の上には雲1つなかった。

「まぶしいのお……。夏空は……」

いつまでも飽かず、いとおしむように、目を細めながら巌は空を見ていた。

「体に毒ですから」

付き添った医師が声をかけるまで、巌は空を眺めていた。

ベッドのあとについていきながら、将も空を見上げた。

澄んだ青に、蝉の声ごと体が吸い込まれていくような錯覚に見舞われる。

巌のベッドは縁側からあげられ、いつも寝ている部屋に置かれた。

ちなみに時間が来ると自動的に寝返りをうつようにして床ずれを防ぐ、最新型の介護ベッドである。

「なんだか、違って見えるのう」

ひさびさに自分の部屋に帰ってきた巌は、頭を動かして部屋を見回した。

「布団とベッドで高さが違いますから」

ハルさんが布団を整えながらにこやかに言った。

「それに、わしは冷房は好かん、といったはずじゃ」

巌の部屋にはエアコンがなかったのだが、急遽障子の前に置かれている。

家を傷つけるのを巌が許さなかったので、パイプはガラス障子の隙間から縁側を伝って外に出されることになっている。

「急な気温の変化がよくないって、お医者様がおっしゃったでしょ」

あゆみは、ハルさんに渡された熱い蒸しタオルで、少し汗ばんだ巌の顔をぬぐいながら言い聞かせる。

半分開け放したままの障子から入り込んでくる夏の空気に対抗するように、エアコンはフル稼働している。

「康三さん一家は明日来られるそうです」

運転手の西嶋が開け放したままの縁側から顔を出した。

「『あれ』は……」

「準備してございます」

「よし」

巌は満足そうな顔を、なぜか将に向けた。

将の「へ？」というリアクションを見届けると巌は

「やれやれ。ついているのは婆二人だけかい。わしも落ちたもんじゃ。……将、早くあきらさんを呼べよ」

そんな憎まれ口を叩いて、あゆみとハルさんを笑わせた。

そして障子を閉めようとする西嶋を少しだけ制すると、揺れる風鈴の音を静かに味わった。

258◆遺言1

「うちで食べると、なんでも旨い」

あゆみに朝粥を口に運んでもらう巌は、心底嬉しそうだった。

それは、おかゆや具を小さく刻んだみそ汁、そしてハルさんの工夫で、畑の朝どれ野菜をカツオだしで煮てすり潰したものなどだったが、巌は1つ1つをいとおしそうに味わった。

将も巌のベッドの近くにダイニングテーブルを運んでもらって一緒に朝食を食べている。

7時というのは、ふだんだったらまだベッドの中でぐずぐずしている時間だ。

なのに、あたりは蝉の声はすでにクライマックスのような大合唱に包まれている。

東京のように、朝からのべったりとした暑さとは対照的に、縁側を開け放していると、笹の香りを含んだ、透き通った風が吹き抜けていくようだ。

目にも、露を浮かべた大輪の青、紫、ボタン色の朝顔、そして笹にまじってひっそりと花をつけたつゆ草がいかにも涼しげだ。

将はかつてそれを集めて色水をつくったことを思い出した。

灰の汁を入れると青い汁がピンク色になるのが面白くて何度も何度

もつくったものだ。

「やっぱり、ぜんぶ開け放して風を入れられる日本家屋はよい。湿気の多いわが国に合った建築だ」

巌は『とったばかりの野菜は甘い』と感嘆した後で、こんどは日本家屋を絶賛する。

「そうですわね。マンションなどは壁で仕切られちゃってるから、空気がよどみますものね。

ぜんぶ開け放てる……とまではいかなくても、風がちゃんと通るマンションとか企画するようにお客様に提案してみようかしら」

とあゆみは目をくるりと巌の方に向けて、デザートの桃を差し出す。

「ぜひ、そうするがいい。電気も節約になろうぞ」

小さくきざんだ桃を口に運んでもらいながら、巌は満足げにうなづいた。

康三・純代・孝太は、朝顔がしおれる頃にやってきた。

出迎えた将の眼帯とテープが貼り付いた顔を見て、一同眉をひそめた。

康三は、将の全身を一瞥すると、口を丸くあけたまま絶句し、間をおいてようやく声を出した。

「お前……」

しかし康三が言葉を探している間に、孝太が

「お兄ちゃん、ケガ、大丈夫?」

と心配そうな声をたてて駆け寄ると見上げる。

将はいったんしゃがむと孝太にだけ

「大丈夫だよ。もう痛くはないんだよ」

と言って聞かせる。

もちろん康三や純代にも聞こえるような声で言っているのは、暗に『大丈夫だから口出しするな』という意味である。

将は孝太の頭をなでながら立ち上がると、康三と純代に向かって、厳のいる部屋のほうへと無言で顎をしゃくった。

「大おじいさま!」

孝太が巌のベッドに駆け寄る。

「おお、孝太。背がのびたのう」

巌にとっては孝太も可愛いひ孫であるから、ひさしぶりの再会に目を細めた。

孝太の後ろから、康三と純代が入ってきて頭を下げた。

巌のベッドは向きが変えられて、その横の広いスペースに座卓が置かれている。

「そこに座りなさい」

巌は、一家に厳かに指示をした。

ハルさんが間断を置かずに、切子のグラスに冷たい麦茶を淹れてきた。

純代は、

「あ、私が……」

といって立ち上がろうとしたが

「いいんですよ、お気遣いなく」

とハルさんにやんわりとかわされてしまい、きまり悪そうに座布団のうえに座りなおす。

そのまま下がろうとするハルさんに、巌は

「将は」

と訊く。

「お台所を手伝っていただいてますが」

「すぐに呼べ。それから西嶋にあれを持ってくるよう伝えろ」

巌は厳しい口調で命令した。

将が来るまでの間、蝉の声とかすかなエアコンのうなりだけが部屋に響く。

ときおり、巌が、康三に国政についての質問をした。

巌については、暇つぶしのような質問だったが、現官房長官を務める康三にはなかなかの難問だった。

そのつど康三は汗をぬぐいながら、たどたどしく答える。

巌はその答えを聞いて、ふっと歯のない口角をあげる。

その意地悪気な笑顔に傍らのあゆみが団扇で風を送りながら、眉をひそめてときおり巌を睨む。

公然同様である妾のあゆみも、康三家族の前では、一応ひかえめにしているのである。

「ヒージー。なんだよ」

まもなく将が廊下側の障子をあけて現れた。

乱暴な口調に、純代が眉をひそめる。

しかし巌は康三に向けていた意地悪さからはうってかわった笑顔を将に向けた。

「将。そこに座れ」

鴨居をくぐるようにして部屋に入った将は不承不承、康三や純代と同じ卓を囲んで腰を下ろした。

隣の席の孝太だけが嬉しそうに将を見上げた。

永遠に続くかと思われた蝉の声だが、まもなく襖があいて運転手の西嶋が現れた。

こうべを垂れ、鞘に入った日本刀を両手に捧げるように持ち、しずしずと巌のベッドの方へと進んだ。

康三が、ハッとしてその刀の行方を見届ける。

巌はうむ、とうなづくと目の前に差し出された刀を満足そうに見つめた。

あゆみが巌の手を取り、刀の柄や鞘に触れさせる。巌はいとおしそうに、かつ慎重にその感触を確かめる。

「これが何かわかるか……康三はわかるな」

「……ハイ」

康三は神妙にうなづいた。それは将が今までに見たこともない様子だった。

「これは、薩摩藩士だった我が家に伝わる刀じゃ。……伝わるといっても、下っ端の藩士であった我が家じゃ、ご維新の廃刀令からまもなく売り払ったのだが……わしが買い戻したものだ」

将はもちろん、純代も孝太も初めて見る刀だった。

シンプルな柄の黒い鞘は、百年以上の歴史を語るように庭からの夏の光りを鈍く反射させた。

「わしは、この刀が代々の鷹枝の跡取に受け継がれるべく、まずは周太郎に託した」

皆は、神妙に厳のしわがれた声に耳を傾けた。心なしか蝉の声も少しやんだようだ。

ちなみに周太郎は厳の長男で、将には祖父にあたる。

「そして周太郎から、周一に渡ったのだが、周一はあのとおり若くして亡くなった」

厳の孫、康三の実兄で将には叔父にあたる周一は、将が生まれる前に事故で亡くなっている。

「いったん周一に渡ったこれは、周太郎のもとに戻された。周太郎は康三に渡さねば、と思っていたらしいが、そのうちに周太郎めも、親より先に死におったわ。親不孝者が」

総理をも務めた将の祖父の周太郎の死は、その親の巌にとっては、親より先に逝ったという悲痛な側面を持っている。

だが、その口調はややユーモラスでさえあった。

「……かくのごとくして、刀はわしの手に戻ってきおった。だが」

巌はそこで言葉を区切った。声がかすれたのをあゆみが気付いて、吸い飲みを差し出す。

それをうまそうに飲んだ巌は、凛として言い放った。

「今日から、この刀は将のものだ」

一同、いっせいに息を飲み……それゆえに空気が張り詰める。

皆、微動だにしない。

驚きのあまり、貼り付いたような瞳をぎこちなく動かして、巌と刀の両方を見比べる将。

目をやや見開きながらも、口を結んで巌をまっすぐに見つめる康三。

眼窩から目が転げ落ちそうなほど目を見開き、はずみで口まで半開きになった純代。

びっくりした顔で将と刀を見比べる孝太。

蝉の合唱だけが、息継ぎを終えたかのように再び激しくなった。

「鷹枝の跡取は、将だ。……康三、よいな」

康三は瞳を将に走らせた。将の視線も康三へと引き寄せられる。目が一瞬あう。

康三は……将の予想に反して、その瞳の奥にはなぜか喜びが映っているように見えた。ほんのわずかであったけれど。

「……はい。わかりました」

康三は神妙に頭を下げた。

「純代さん」

呆けていた純代は、ハッとして姿勢と顔を正した。

「ハイ！」

「まだまだやんちゃな跡取ですが、よろしくお願いします」

巌は、純代を見据えると、動ける最大の角度で純代に頭を垂れようとした。

「は、ハイ。……ゆきとどかないところもありますが」

純代もうろたえながらも、体勢を立て直し、深々と頭を下げる。

「孝太」

「はいっ！」

孝太は背筋を伸ばした。

「お兄ちゃんが好きか」

その口調はいままでのものと違って、ぐっと優しかった。

孝太はなぜか、目をうるませて、大きくうなづいた。

心優しい孝太は病床の巌からいろいろなことを……これが、きっと巌の遺言であることを感じ取っていたのだろう。

「……お前は優しい子だ。将といつまでも仲良く、そして何かの折には、きっと助けてあげるのだよ」

巌は孝太に向かって手を伸ばそうとした。

孝太は、純代に静かにうながされて、立ち上がると巌のベッドのわきに寄った。将とよく似た目の中の瞳はすでに涙で濡れて光っている。

「……お前にも、ちゃんと渡すものがある。あとで西嶋に出してもらいなさい」

巌は穏やかな口調で孝太に言い聞かせた。孝太は深くうなづいた。

最後に巌は、将に顔を向けた。

刀を捧げ持つ西嶋が将に向かって一礼をする。

康三も、将に目で合図をした。

将はごくり、と唾を飲んだ。それを腹まで落としこむと、息を深く吸い込む。

そして意を決して立ち上がる。

鉛のように重く、硬直した関節を引き剥がすように動かしてベッドへと近寄る。

乾いた皺だらけの巌の顔の中で、瞳だけがきらりと光った。

西嶋が刀を将に差し出した。

心臓が鈍い音で全身に血を送っている。

それは耳のそばに埋め込まれたようにどくん、どくんと鳴り響いている。

血とともに先祖から受け継がれた、刀。

躊躇する心とは別に、体を流れる血がそれを懐かしがるかのように、勝手に手が吸い寄せられた。

それは心に重く、物理的には思ったよりずっと軽かった。

そして、意外なほど優しげな感触だった。この中に、人を斬るための武器が入っているとはとうてい思えない。

それを両手で握った将は、今まで息をするのを忘れていたことに気付いて大きく息をついた。

刀を握り締めた将に、巌はいつになく謹厳なる口調で語り始めた。

「将。いいか……これからは鷹枝の跡取として、何をするにも……」

だが、そこまで言ったところで、息が荒くなった。少し根をつめすぎたのだろう。

「無理なさらないで。将さんは、明日までいらっしゃいますから」

あゆみがそっと囁く。巌も

「そうだな。明日のほうがよいだろう……」

と頷いた。

「しんみりさせてもうたが、昼餉にしようじゃないか。わしも腹がすいたわ」

と巌は息を整えると、明るい声を出した。

259◆遺言2

「俺……知らないよ」

将は金色が徐々に赤みがかっていく空が見える縁側でつぶやいた。傍らには渦をまく蚊取り線香が置かれている。

打ち水で立ちのぼった土の香り、そして蚊取り線香の香り。これらは夏の夕暮れの気配をより濃厚にしている。

康三らは帰り、もとどおり縁側に沿うようにして巌のベッドは置かれている。

日が落ちてからは、待ちわびたようにいったんエアコンは止められ、蚊帳がつるされた。

夕風は、それで充分なほど、昼間の暑さを黙らせて、涼やかさを連れて来た。

いつも巌の傍らに寄り添うあゆみは風呂をもらっているところで、今、ここには巌と将の2人だけだ。

「生まれた順番だから、跡取なんて言われても……そんなのおかしいよ」

将は時間の経過につれ浮かび上がるような蚊取り線香の赤い火を見つめながらつぶやいた。

巌は、ふ、と笑みを浮かべて縁側にシルエットになった将の背中を

みやった。

「わしの目はそれほど節穴ではないぞ」

夕食を終えたばかりで力がみなぎってきたのか、しっかりとした声で将に語りかける。

将は蚊取り線香と同じ色の蚊帳の中にいる巌を振り返った。

こちらが暗いのと、ベッドのわきに行燈があるから、中は透けてよく見える。

「だって……寺の系図に。長男が相続するって……」

将は、母の命日に菩提寺で見た、系図のことを口にしてみる。

「あれは、たまたまじゃ。もしお前の代で変えたければ、変えてもかまわん。ただし」

巌は意外にもそんなことを言ったあとで、

「長幼の序というのは、一理ある」

と付け加えた。腑に落ちない顔をしているであろう将に巌は続ける。

「早くに親の乳離れを強いられ、幼い弟妹の世話をしているうちに、おのずから強い忍耐力と統率力が鍛えられるのだ。

……もっとも最近は甘やかすばかりで長男をダメにする親も多いがな。お前の母の環さんは違った」

母の名前が出て、将は蚊取り線香の渦巻きの中に必死でおぼろげな母の顔を思い出そうとした。

しかし将が母のことで思い出すことといったら、ロマと一緒に出奔した際に、思い切りぶたれたこと、そしてあと抱きしめられたこと、それと病床のアネモネぐらいだ。

片手で数えられるほどの記憶を将はたぐりよせてみる。

「環さんはお前を厳しく躾けた。お前は生まれつき大変優秀な子供だった。普通の親だったら褒めてダメにするところだ。

『褒めて育てる』などというが、それは並みの子供を並に育てる際にすることじゃ。

学校で褒められるような優秀な子ほど、社会に出るまでは親が厳しくして精神力を鍛えてやらねば、社会の厳しさに挫折してしまう。

社会は勉強や運動が出来るだけでは渡っていけないからのう。

引きこもりやら、ニートなんてのは得てして、精神力と能力がアンバランスに育ってしまい、社会の厳しさに負けたよい例じゃ」

巌は持論を展開しつつ環を称えた。

「……自信をつけてやるのと甘やかすのは別の話じゃ。環さんはそれをよくわかっておった」

確かに、将は母親に甘やかされた記憶がない。

もっとも、フランスにいた将は、まわりの子を見てもそれがあたりまえだったので自分がことさらに不幸だと思ったことはない。

それよりも日本に帰ってきてから、スーパーでひっくり返ってダダをこねる自分と同年輩の子、またそれが恥かしいから、と折れて菓子を買ってやる親を見て逆にびっくりしたものだ。

または「みんなが見てるからやめなさい」というセリフ。

では、みんなが見ていなければやってもいいのか、と将は子供心に可笑しかった。

「それだけでなく、お前は母を早くに亡くしてしまった分、芯が強い。そして情愛に飢えた分、その大切さが身に沁みておる。

康三や純代さんに反抗したのもその裏返しだろう。お前は大変に誇り高い人間だからな」

年若い将は、誇り高いという言葉が居心地悪い。

将の年代で『誇り高い』『プライドが高い』というのは、単にワガママで見栄張りと混同されている節がある。

用例を出せば『あの娘はプライドが高いから、ブランド品しか持たない』などだ。

もちろん国語力が際立って高い将は、その用例が間違っていることを知っている。

だが、なんとなくその言葉は、自分を形容する言葉としては面映かった。そんなことを将が感じているとは知らず、巌は続ける。

「誇り、というものは非常に大切だ。誇りのない人間は、他人の気をひくためや、金のため、生活のために簡単に魂を売り渡す。

ワシが入院していた病院にもな、バカめが毎日のようにお追従をのべにきよったわ……」

東京で巌が入院していた病院は、マスコミなどもシャットアウトする体制が出来ているとあって、要人御用達だった。

ゆえにそこは、汚職や言い訳のできないことをしでかした悪徳な政治家が逃げ込む場所でもあった。

健康でピンピンしているのに、『体調不良』を理由に入院している議員や官僚が、政界の大御所たる巌の入院にこぞって頭をさげに来たのだ。

巌は怒鳴りつけたかったが、言葉が不自由なこともあり、睨みつけるしかできなかったのだが、その冷たい視線に皆はほうほうの体で病室から逃げ出したものだ。

「己れが己れたるための誇りというものがある。ときとして、その誇りのために命を賭す場合もある。お前はそれに耐え得るだろう」

将は、それは買いかぶりだと思った。

脳裏の暗闇に瑞樹、そして大悟の顔が浮かぶ。

人殺しの罪を被せた上に、薬物依存から救い出すこともできなかった大悟……。

「俺よりも」

将は顔をあげて巌の瞳を見ようとして挫折した。視線は墜落して蚊取り線香に戻る。

「……孝太のほうが、血筋がいいんじゃないの」

孝太の実母である純代はやはり総理を輩出した岸田家の娘である。

「孝太はな。康三に似たのか、優しすぎる」

将は本当に驚いた。あの康三が優しい？　実母以上に、康三に可愛がってもらった記憶などない。

「オヤジが優しいって？ウッソだろ」

思わず将は、心のままを吐き出すようにしてしまった。

すると巌は楽しげに笑い声をたてた。

「ホッホッホ。覚えていないのか。お前が４つぐらいまで、康三はそれこそ舐めるように可愛がっておったんだがのう」

「……」

巌が語る康三の姿は将の記憶とはつながらない。だいたい、孝太に対してだって、そんな様子は見せたことはないのだから。

「家では威張っているんだろうが、あいつは穏やかすぎて、外ではケンカができん。だから皆に好かれるし、票集めは得意だろう」

巌は将の前で初めて父親を評し始めた。こんなことは初めてだ。

「次期総理などと、もてはやされているようだが、あいつは敢えて敵を作ることも、それを抑えこむこともできない。

……みておれ。あれが総理になったとたんに、大泉くんに押さえられていた魑魅魍魎どもが息を吹き返すぞ」

現大泉総理は、いままでの与党総理の中では画期的な改革を進めた。おかげで『族議員』といわれる与党の古株たちはつねにホゾを噛み続けて来たといえる。

株式投資のために、世情を掴む必要のあった将も、そのあたりはだいたい知っている。

しかし自分にはかように厳しいあの父親が、世間的には穏やかで優しいという評価だとは知らなかった。

「将。わしが何故にお前に、『将』の名を与えたか知っているか」

巌は声の調子を変えて、将に問うた。

「孟子だか韓愈だかの漢文だろ」

「そうだ」

巌は満足そうにうなづいた。

いつのまに、空が赤く染まっている。あの、菩提寺で見たのより、いっそう明るい紅(くれない)。

「お前は、その名前に相応しい、豪胆さを身につけたはずだ……」

その紅色は、軒に隠れて、巌からは見えないらしい。巌は言葉をつむぐのをやめない。

「よいか、将。お前は罪を犯した。理由はともあれ、それは、人の罪の中で最も重いものだ」

将は空に見とれていた瞳を、思わず巌に戻した。

行燈に浮かび上がる巌は、言葉とはうらはらに穏やかだった。

「誰を守るためにしても、他人の命を奪ったことには変わりない」

あのとき、はっきりと言えなかった、将が人殺しにいたった理由を、巌は誰かに調べさせたのだろう。将はうつむいた。

腕に蚊が静かに止まった。それを叩きつぶそうとした手が……止まってしまう。

「しかしだ。その罪の意識ゆえ、お前はつねに正義をも意識して生きることになる。そして苦しむ人々をもまのあたりにしたはずだ」

再び大悟と瑞樹が蘇る。父に捨てられたような……父の代わりに借

金取りに殴られる大悟。

生活のために犯罪に手を染めざるを得なかった大悟。

そして瑞樹。実母に虐待され、義父に犯され、帰る家もなかった瑞樹。

恵まれた社会とは、誰が言ったのだろうか。

将が垣間見た社会は、あまりにもすさんでいた。

蚊は将の血潮を飲み干すと飛び立っていった。かすかにそこが痒い。

「将よ。……こっちへ来い」

巌は将を呼んだ。将は立ち上がると、蚊帳を静かにめくって巌の枕辺に立った。

巌は将のほうへ、ぶるぶると手を動かして言った。

「お前の誇り高き魂は……苦しむ人々とそれを守るべく在る国家のために使え」

将は三たび、巌の顔を見た。行燈に照らされた顔は、黄昏の薄闇の中で、いっそう厳かに見えた。目は稲妻のように光って将を見据えた。

将は、刀を受け取ったときと同じく……身震いするほどの緊張を覚えた。

「人気商売の世界で勉強するもよい。……だが、いずれ必ず、お国のために尽くせ。国土を喰らって肥え太る蛆虫どもを叩きだし、国を正すのじゃ」

将は緊張に耐えられず、

「何、俺にレーガンやシュワちゃんになれっていうの？」

とおどけてみた。巌は何も言わずに、目を細めると稲妻のような視線を弱めた。

「……将。これは、ワシの遺言だからな」

と微笑んだ巌に、将のほうが険しい顔になった。

「まだ早いよ！ヒージー」

「ところで……将よ、あきらさんに連絡はしたか」

巌は将の険しい顔を解くべく、聡の名前を出した。将は首を横に振る。

「何だ。早く呼べ」

「何でだよ」

「ワシが会いたいんじゃ。いろいろ話しておきたいことがあるんじゃ」

えー、ともったいぶる将に、

「明日がいい。お前はまた忙しくなるんだろう。明日来るように…
…今ここで電話しろ」

と巌は命令した。

将は言われて仕方なく……しかしさっきとは違った緊張を感じながら携帯を耳にあてた。

巌はそんな将を穏やかな笑顔で見守った。

２６０◆２４１～２５９話のあらすじ

将は久しぶりに連絡してきた、昔の彼女である投資家のカオリさんに、大悟がシャブ（覚醒剤）をやっていることを聞いてショックを受ける。

そのころ、将が出演したテレビ番組の掲示板に、将の過去を中傷する書き込みがある（２４１話）

ドラマ『ばくせん２』が放送され、高視聴率をマークする。そして、将の人気もうなぎのぼりにあがる。しかしネットの書き込みは依然続く。

将はドラマで共演している人気アイドル・四之宮が、聡の好きなミュージシャンが作曲した歌を歌っていることを知る。

学校でクラスメートに四之宮のサインを頼まれていた将は、歌を率直に褒めたおかげで、四之宮に気に入られ、ＣＤをもらう。

雨で明日のロケが中止になるということで、将は寮ではなく、学校の近くの自宅マンションに戻ってくる。

将は帰宅するなり大悟がシャブをやっている証拠を見つけようと家をあさる。

しかし見つかったのは瑞樹のものとおもわれるいかがわしい手錠な

どの玩具だった（２４２話）

結局、大悟がシャブをやっている証拠は見つけられなかった。

将は四之宮にもらったＣＤを聡にプレゼントすべく、郵便受けに入れておこうと聡の部屋へひさしぶりに向かう。

そこで偶然コンビニに行こうとした聡とばったり会い、激しく降り出した雨の中、抱き合う。

だが帰宅した将が見たのは、覚醒剤を打つ大悟の姿だった（２４３話）

将は大悟を激しく責める。そして注射器を叩き壊してしまうと、「瑞樹が哀しむ」と諭す。

大悟は後悔・反省し、覚醒剤を止める決意をしたように見えた。

将は大悟を監視すべく、自宅マンションから仕事に通うことにする（２４４話）

梅雨明けがせまり、人気急上昇の将はドラマでメインになる回の脚本を渡される。

一方、荒江高校では1学期の終業式がある。聡は出席できなかった将の通知表を郵便受けに入れるべく将のマンションにやってくる。

そこで、やせ細った大悟の異様な様子を目にする。大悟は、腕ではなく足の静脈に覚醒剤を打っていた（２４５話）

夏休みに入り、伊豆ロケに入った将。３泊４日の伊豆ロケが終わった日、関東地方に台風が接近していた。

秋の連ドラのオファーも来たと喜ぶ武藤に将は「できれば進学したい」と持ちかける。

それは、聡が置いていったプリントに心を動かされたのと、

四之宮らと交流している間に芸能界に生きる者の末路のみじめさを垣間見てしまったからであった（２４６話）

将はひょんなことから、大悟がまだ覚醒剤をやめていないことを知り、台風が接近する中、大悟を探しに街へ出る。

大悟は怪しい雰囲気の男たちとクラブにいた。将は無理やり大悟を連れ戻す（２４７話）

将は、すでに覚醒剤で様子がおかしい大悟を連れて帰る。その夜から東京はひどい台風にみまわれる。

外を台風が吹き荒れる中、覚醒剤の依存によって薬を求めて正気を失う大悟に将は辛抱強く付き合う。

だが、薬を求める大悟は外へ出ようと暴れ、将に断続的にひどい暴行を加える。

絶対に大悟を外に出さない、と覚悟した将は、大悟の左手首と自分の右手首を瑞樹が遺した手錠でつなぐ。

狂気の大悟は将の右手首を切り落とそうと包丁を振り回す。

翌日は台風一過で朝から晴れた。

将を迎えにきた武藤は、顔や体が打撲傷で腫れ上がり、右手首に裂傷を追い、足をひきずる将に驚いて、病院へ連れて行く。

（その間将は、大悟を睡眠薬で眠らせ、外から出られないように玄関ドアを固定していた）

治療後将は、大悟のことを相談すべく、看護士の山口を内科に訪ねる。

そこで偶然、貧血の治療に来ていた聡に会う。

聡は、将の傷が大悟によるものであることを感づいていた。

そして、大悟が将の身代わりになっていた事実を知っていることを打ち明ける（２４８～２５３話）

将と聡は、夏空の下、将のマンションがある商店街まで久しぶりに二人で歩く。

だが、そこで見たのは、将の部屋を脱出すべく、１０階のバルコニーの外側に貼り付く大悟の姿だった。

大悟は、レスキュー隊に救助されるが、警察に連れて行かれる。

パトカーが去ったあと、将の前に毛利が現れた。そして大悟を矯正病院に入れる旨を伝える（２５４話）

顔が腫れ上がった将は、芸能活動の休業を余儀なくされる。

四之宮を始め、皆に迷惑をかけてしまい、将は皆へすまない気持ちになる。

落ち込む将に、東京の病院に入院する巌から連絡がある。将が休んでいることを知ると、すぐに来いという（２５５話）

病院に将を呼びつけた巌は、退院して大磯の邸宅に戻るための説得を将に一緒にしてほしいと頼む。

大磯には将に渡すべきものがある、とも。

医師は、巌の心臓はいつ発作が起きるかわからない状態なので、病院にいるほうが発作時に適切な処置ができるのだと説明するが、

巌は自分の心臓はもう寿命なのだ、と反発する。

いつまでも巌に生きていてほしい将は悩むが、巌の意思を尊重すべく、最終的には医師に一緒に頼みこむ（２５６話）

金曜日、将は巌と一緒に大磯へと向かっていた。その特別仕様車の中で、巌は将に「聡に会いたい。連れて来い」という。

大磯の邸宅に着いた巌は、懐かしそうに自分の家と、夏空を眺める（２５７話）

翌土曜日、将の父の康三、義母の純代、義弟の孝太が大磯にやってくる。

その面々の中で、巌は将に鷹枝家に伝わる刀を将に与え「鷹枝家の跡取は将だ」と宣言する。

皆が帰ったあと、将は「生まれた順番で跡取を決めるなどおかしい」と巌に反発する。

巌はそんな将に、将こそ鷹枝の跡取、そして国家の将に相応しい素養を持つのだ、

そして殺人を犯した罪も、それゆえに正義をつねに意識することになるだろう、と諭す。

さらに、お前の誇り高き魂は、将が見てきた苦しむ人々を救うために使え、

そしていずれは国のために尽くせ、そして自分の利益しか考えない者たちを叩き出して国を正せ、と遺言する（２５８～２５９話）

261◆遺言3

空の青さと蝉の声が東京より一段階強い、と駅舎を出た聡は思った。

「アキラ！」

声に振り返ると、漆のような黒塗りに太陽を反射させたシロトエンの横で将が手を振っていた。

『将』という呼びかけを、思わず飲み込んだのは、運転席の傍らできちんと帽子をかぶった運転手がこちらに一礼したからである。

聡も深々とお辞儀を返すと、教師バージョンで将を呼ぶ。

「鷹枝くん」

「将でいいよ。こっちでは、もう公認だから」

将はそういうと、目を細めて眩しげに聡を見つめた。

夏の日差しが眩しいのか、聡も目を細めている。

その顔や紺色のノースリーブのブラウスから剥き出しの腕の白さは太陽の光をそっくり照り返すかのようだ。

白いプリーツスカートは教室では見ないものだ。

「貧血は大丈夫？」

「ええ。サプリメントを飲んでるから、だいぶよくなったよ。……ケガのほうは？回復は順調？」

将でいい、といわれたが、そぐわない気がした聡は、主語を省略してしまった。

「手首は明日抜歯。腫れもだいたい引いたんだけど、左目と右足がどす黒くなっちゃってさぁ。気持ち悪いのなんのって」

将が冗談めかして答えたところで

「暑い中、立ち話も何ですから、中へどうぞ」

運転手の西嶋が、にこやかにシトロエンのドアをあけた。

「ヒージー。アキラを連れて来たよ」

将は唐長の襖に向かって声を張り上げると、それをいきなりすっと開けた。

聡はあわてて頭を深々と下げた。

「お初にお目にかかります。古城聡と申します」

「おお、おお、あきらさん。こっちに来て掛けなさい」

可動式ベッドに寄りかかっているのは、枯れ木のように痩せた老人だった。

だが、窓からの眩しい照り返しにも、重厚な調度にも負けないオーラが、どことなく漂っている。

なんといっても、大臣を務めたこともある政界の長老なのだ。

ちなみに今日は、巌のベッドのそばには、洋館から持ってきたソファがしつらえてある。

「あれ？あゆみさんは？」

いつも巌の世話をしているあゆみの姿が見えない。

「あれの『びすとろ』とやらのポトフが食いたいと言ってやったでな、なにやら慌てて取りに帰ったわ。

本当はお前が若い美人を連れてくるから、やきもちを焼いたらいかんと、わしが気を遣ったのじゃ」

といって巌はいたずらな笑顔を将、聡に向けた。

「若くて美しいだけでなく、好い所のお嬢さんじゃな。あきらさんは」

巌は細めた優しい目を聡に向けた。

「いいえ。とんでもありません。うちは共稼ぎの一般的な庶民です」

聡は笑みを浮かべながら、一言一言穏やかに返した。

「ふっふ。最近の若い娘さんで、畳の縁を踏まないように躾されている者は少ないぞ」

聡は声にしないで『ハイ』とやや照れて俯いた。萩の武家屋敷を借りて住んでいるゆえの賜物だろう。

いわゆる日本家屋における立居振舞は、家を大事に長持ちさせるための、合理的なものなのだ、と萩焼を焼く叔父に教わったのが役に立った。

「ところで……あきらさんは、将の学校の先生なのじゃな」

「ハイ……」

出された麦茶を飲んでいた聡は、喉がつまる思いがした。

それがどういう意図なのか、少し動悸がする。

将はたしか、二人のことはここでは公認だ、といった。

それを裏付けるようにさっきからアキラ、アキラと呼び捨てだ。

運転手も、お茶を出してくれた老婦人も、皆心底歓迎してくれているように感じた。

だが、先生＝教師が教え子を……という事実を問い質されるのではないか、と聡は戦々恐々として厳のほうに視線をあげた。

「実は、学校の先生をしているあきらさんにぜひ訊いてみたいことがあったんじゃ」

「ハイ」

答えながら聡は思わず逃げ出したくなった。

将は、何も気づかないように、笑顔で聡と巌を見比べている。

「わしはな。畑仕事のあいまに、子供を持つ親御さんを集めて、教育についての意見などを聴くことにしているのだが……」

どうやら、将との恋仲を問い質されるのではない、とわかって、聡の張り詰めた気持ちが急にほぐれる。

「その中で『とにかく他人に迷惑をかけないように』という意見がやたらに目立つのじゃ。あきらさん、あきらさんはそれについてどうお考えじゃ？」

聡は思いがけない質問に軽く目を伏せた。

将は、聡の長い睫が下をむいたまま3回またたいて、再び巌の方に戻るのを見た。

「大事なことだと思います。……ですが」

「ほお？」

巌は、ですが、という接続詞に大いに興味を示した。

「あくまでも最低限、の話だと思います。それだけに終わってはいけないと思います」

将は、低い声で、ゆっくりながらも自分の意見を述べる聡の横顔を驚いて見つめた。

「その心は、いかに？」

「はい。……人間というのは生まれながらにして、知らず知らずのうちに誰かに迷惑をかけているものです。

それに、何が迷惑になるかは、個人の価値観や習慣によって違ったりします……」

「そうだな。日本では泥足で家に入ることは迷惑千万だが、英国などでは臭足を見せることのほうこそ迷惑だそうだからな」

「はい。ですから、どうしても迷惑をかけてしまうことを前提に、その分、何をすれば人の役に立てるか、喜ばせることができるか、を考えるほうが建設的だと思います」

聡はまっすぐに厳を見据えるといったんそう言い切った。だがすぐに「ただ」と付け加える。

「それはあくまでも私の理想です。……私の勤める高校では、最低限を身につけさせることでせいいっぱいです」

下を向いた聡の声は、最後には消え入りそうになった。

将はただ驚いていた。聡が、そのうるんだ瞳の中で、艶かしい乳房

の裏でこんなことを考えているとは。

「天晴れじゃ！」

いきなり大きな声が発せられたので、将も聡も驚いて巌のほうを見た。

巌は心から嬉しそうな顔を見せた。

「将！あきらさんは素晴らしい先生だ。お前も精進しないと、すぐに捨てられるぞ」

「そんな」

聡は思わず乗り出すようにして声にしてしまった。

『そんなことはない』という言葉の向こうにある自分の気持ち。

それを確認して思わず熱くなった顔を隠すように俯く。

「将、台所のハルさんを手伝ってきなさい」

なぜか巌は急に将に申し付けた。

「えー、なんで」

将は不満げに口を尖らせた。

「あきらさんに話があるんじゃ。つべこべ抜かすな」

なんだかんだ言っても巌には逆らえない。

将はちらりと聡のほうに視線を投げた。聡も心細げな顔を将のほうに向けたが、再び俯いてしまった。

巌の真剣な視線に、将は仕方なく立ち上がると、襖の向こうに消えた。

将がいなくなると、部屋はたちまち広くなってしまった。

昼下がりの庭から届く蝉の声はいっそう激しくなったように思えた。

「あきらさん」

永遠のように感じられる、重い沈黙のひとときを破って、巌は今までで最も優しい声をかけた。

「はい」

思いがけない声音に聡は顔をあげる。

こわごわ……だが、もう後戻りはできない、と意を決して可動式ベッドによりかかった巌の顔を見ようと試みた。

何の話か、だいたい予想はついている。

「将を……誠に好いてくれているのか」

あんなに騒がしかった蝉の声が感じられなくなった。

予想していたはずなのに、聡はとっさになんと答えていいかわからなくなった。

聡の視線はいとも簡単に、自らの膝のあたりに墜落した。

「……申し訳……ありません」

声にしたとたん、目をぎゅっとつむる。それがせいいっぱいだった。

恐い。

皺だらけの顔に、ほとんど動かないらしい体。優しい声。

だけど巌にはオーラがあった。

こんな立派な紳士の前で……教師が生徒に恋している、そんな浮ついた告白など、どうして出来ようか。

「あきらさん」

巌はぽつりと、呟くように聡の名を呼んだ。仙人の呼びかけのような、すべてを悟った声。

「……はい」

「顔をあげなさい」

巌の声は穏やかだったが、威厳に満ちていたので聡は、ぎこちなく顔をあげた。

聡の目にはすでに涙が浮かんでいた。恐ろしくて泣いてしまうなど、何年ぶりだろうか。

「……あやまることも、泣くこともない。わしは、あなた様を責めたいわけではないのじゃ」

「で、でも……すいません」

再び俯く聡の声の最後のほうは、喉の奥から絞り出すような細いものになっていた。

将は、襖のこちら側で盗み聞きしながら、聡がどれだけ自分とのことに罪の意識を持っているのかを再確認することになり、胸が痛んだ。

「なあ。あきらさん。あれは不憫な子でのう」

巌は俯いたままの聡に静かな調子で話し始めた。

「まだ子供の頃に母親を亡くし、寂しいときに父親は多忙のきわみ、やっときちんとした継母がやってきたと思ったら、爆破事件でぎくしゃくしてしもうた」

巌によって語られる将の身の上。将は襖の向こうで身じろぎもせずに聞いていた。

「家出中もいろいろとあったらしい」

いろいろ、とは主に殺人事件のことだろう。巌が略した内容は、聡も知っている。

聡は、そのことと、それがもたらした今回の将の負傷を思い、唾を飲み込んだ。

「……わかるかの。あれは心も体も傷だらけなのじゃ」

「……はい」

聡は返事をしながらハンカチで涙をぬぐっていた。

それは、最初は自らの罪の意識から出た恐れによるものだったが、徐々に将の身の上を再確認したゆえの憐憫の涙に変わっていた。

「1年前まで……あれの目はほんとうに冷たくて、そのくせ寂しげでのう。暮し向きも刹那的で殺伐としていたらしい。あのままなら、あれはどうなっていたやら……だが」

巌はそこで言葉を区切る。聡に視線を注ぐ……それを感じて聡も、ハンカチを目にあてたまま、おずおずと顔を上げた。

「あれを変えたのは、あきらさん、まさに、あなた様なのじゃ」

皺の一部のような瞼を見開くようにして、聡を見つめている……その老人ながら澄んだ瞳は、すでに涙で潤んでいた。

「あなたのことを好いたおかげで、あれは本来の姿を取り戻したんじゃ」

聡は眉をゆがめて、必死でかぶりを振った。

違う。将は、最初から将だった。聡はそう思っている。

しかし、巌は続ける。

「単なる惚れたはれただけでは、こうはいかんだろう。あなた様だから将は立ち直ったんじゃ。

……あきらさん。あなたは将にとって、先生であり、恋人であり……、そして……おそらく、母でもあったのだろう」

りん、と風鈴が障子の外で鳴った。

風はガラス障子に遮られてここには届かない。

だが、それが合図のように、蝉の声が一瞬静かになった。

「あきらさん……どうか」

ぼうっとしていた聡はハッとして、巌のほうを見た。声の調子が穏やかなものから変わったからだ。

巌は左手をこきざみにふるわせて、こちらに伸ばそうとしていた。

聡は立ち上がると、ベッドの脇に寄ってその手をとった。

夏のさかりだというのに、乾いた手。乾いた薄い皮膚に覆われた長い指は……たしかに将との血のつながりを感じさせた。

巌は聡の顔を嬉しそうに見上げた。

「……あきらさん。どうか……頼む。わしの代わりに、あれ……将が」

巌の手は、表面だけでなく、その内部にも水分というものが極端に少ないように感じた。

かすかに感じる温かさを確かめるように聡は、握る手、そして巌を見つめる視線にそっと力をこめた。

「道をはずさぬよう……見守って……」

巌は白くなった睫にふちどられた目に涙を貯めて聡の顔を見つめた。

「そして……願わくば……倖せにしてやってくれ」

聡は、しばらく１００歳の老人の瞳を見つめていた。

手の皮膚とおなじように乾いた瞼の中、涙に揺れる瞳の色は将と同じ色だった。

自分の目にも涙が溜まりはじめているせいか、それは徐々にぼやけていく。

そして、意を決すると、瞳から視線を動かさないまま、深くうなづいた。

巌は、安心したように微笑むと、ゆっくりと目を閉じた。

目じりから涙が次々と流れ落ちて掛け布団のカバーにしみをつくった。

そして聡に握られた手を、握り返すべく、ときおり震わせた。それが生きている証だった。

さっきより温かくなった気がする……そんな厳の手を握ったままの聡も、新しい涙が湧いてはとめどなく流れていた。

襖の向こう側では……将も涙ぐんでいた。

いつのまにか蝉の合唱が輪唱のようにこだましていた。

262◆叶わぬ恋

それからしばらくして、あゆみが帰ってきて、大磯の邸宅は再び賑やかになった。

あゆみは聡を見ると

「まあ……素敵なお嬢さんですわね」

と華やかに微笑んだ。そして

「ぜひ、うちのポトフを食べていってくださいね。季節外れだから材料をそろえるのに苦労したとシェフが申しておりましたが。……こういったら何ですけれど、うちの自信作なんですのよ」

と夕食を食べていくように勧めた。

巌も将も強く勧めたので、聡はそのまま皆と一緒に夕食をいただいていくことになった。

「わたくしは、今日はお台所をさせていただきますので、失礼ですけれど、巌様のお手を揉んでさしあげて」

あゆみは将と聡に巌の手を揉み解すように言いつけて、忙しく台所に消えた。

「ほっほっほ。忙しい女よのお」

巌はそれでも楽しげにあゆみの背中を見送った。

将と聡は巌の両側に座って、その皺だらけの手を取る。

ハルさんが持ってきた熱いおしぼりで丹念に指の間もぬぐってやると、巌は気持ちよさげに息をついた。

掌を揉んだり、その指を握り締めさせたり、指を一本ずつ開かせたり、肘を動かしたりといった軽いリハビリも行う。

全身が麻痺してしまった巌だが、あゆみはこうして毎日のように手足を揉んだり関節をゆっくり動かしたりして少しずつリハビリをしていたのだ。

「痛くないですか？」

聡は心配そうに巌の顔をのぞきこんだ。

あくまでも優しくゆっくり、ではあるが聡は大胆な角度に肘の関節を曲げさせている。

「気持ちいい。こわばった肘がほぐれるようだ。もっとやってくれ」

そうは言うが、苦痛もともなうのだろう。巌は目を閉じて少しだけ白い眉をしかめていた。

だが

「痛い、ということはまだ神経が生きているんじゃ。見ておれ。いまに……箸とて持てるぞ」

巌は嬉しげに呟く。

巌の回復を願う将も右腕を聡と同じように動かしてみる。

そんな3人がいる和室には、そろそろ床の間あたりに薄闇がしのびより始めていた。

ガラス障子に映る庭は徐々にオレンジがかってきて午後も遅い時間に入ったことを告げている。

しかし蝉の声はあいかわらずだ。

今日という日を惜しむかのように鳴き続けている。

巌は、熱心に手の運動を続ける二人を「もうよい」と制すると、

「実はな。二人に頼みがあるんだ」

としっかりとした声で語った。そして将に

『書斎の机の右側の一番下の引き出し。上から3番目にある帳面』

と細かく指示をして、それを持ってこさせた。あいかわらずすごい記憶力だと、将は思う。

「一番後ろの背表紙にI県の住所が書いてあるだろう」

将は少々黄ばんだ古いノートの背表紙をめくる。

たしかに巌が言ったとおり、そこにはＩ県の住所が書いてあった。

「その村に、安楽寺という小さな寺がある。そこに森村という家の墓がある。

わしが死んだら……聡さんと二人でそこへ行き、わしの骨の一片なりとも、その森村の墓が見えるところに撒いてくれ」

将は巌による『死』という言葉にいきりたち、言葉を中断させようとした。

だが、巌の声音は淡々としながら真摯な響きに満ちていたので、その機会を逸して黙っていた。

聡は巌の顔を一心に見つめているようだ。

「どうして、そんなところに……持っていくんだよ。うちの墓は、東京にあるんだろ」

墓という単語を口にするのに少しためらう。

だけど、あまり過敏になるのは、逆に巌の死が近いものであると自ら認めているようなものだ、と将は気づいた。

だから明るく、少々乱暴な口調でさりげなく口にした。

「いかにも。わしの骨の大部分は東京の墓に入る。そこには先に逝った妻、周太郎たちがいる。

……だが、そっちには……わしが若いみぎりに……きっと添い遂げ

ようと誓ったひとが眠っているのじゃ」

巌は遠い目を蝉の泣き止まない庭に投げた。

「叶わなかった恋ではあるが……。わしは墓のまわりの土となって、あのひとの墓を見守りたいんじゃ」

「前に言ってた、無理やり接吻したっていう小学校の先生？」

将は好奇心旺盛な声に、悲壮感を隠して訊いた。

「いかにも。……よく覚えてるのう」

巌は遠くに行きかけた目を将に向けると笑った。

『死』『墓』という言葉の響きが薄まったような気がして、将は心から安堵した。

「生みの母を早うに亡くし、学校の先生に惚れたというところで、わしはお前のことが自分のことのように思えて仕方がないのじゃ。わしの恋は叶わずじまいであったが、お前は先生とうまくいきそうだ」

巌につられて、将は傍らの聡を見た。聡は恥かしそうに頬を染めて少し俯いていた。

だけど、その口元はまんざらでもない。

「そのお前たち二人に、わしの骨をあの人の墓のそばにひそかに埋

めてもらえれば、わしはたいそう浮かばれる。
あの人もきっと喜んでくれると思うのじゃ……自己満足かもしれんがのう」

巌は言葉の最後を、静かに微笑みで締めくくる。

「ヒージーの好きだった先生って、何て名前？」

将はこの話題、つまり巌の『恋バナ』をしていれば、暗い雰囲気がなくなるかもしれない、と突っ込んでみる。

「うん。彼女は森村先生といった。名は史絵（ふみえ）といってな。前田家に仕えていた武家の出じゃ……」

何十年ぶりになるだろうか。巌は彼女の名前を舌に乗せていとおしんだ。

白い睫にふちどられた将と同じ色の巌の瞳。

それには黄金色に輝く夏の庭が映っていたが、巌自身はそれではなく、遠い記憶を見つめていた。

明治の終わり、鷹枝巌は東京で生まれた。

このころ薩摩藩士の出である祖父は衆議院の議員を務めていた。その待望の初孫ということで皆に期待と歓迎を受けての誕生だった。

だが、医療が今ほど発達していなかった当時、巌を生んだ母は、産後の肥立ちが悪くて、巌を生んですぐに亡くなってしまった。

衆議院議員の家といえど、それほど裕福でもなかった鷹枝家では、常時乳母を頼むこともできず、巌は飼っていたヤギの乳を飲んで、それでもすくすくと育った。

巌の父もいつまでも『やもめ』でいるわけにもいかないだろう、と財産家の娘を後添いにもらって自らも衆議院に出馬することになった。

巌が5歳のときである。

継母はすぐに巌の義弟や義妹を次々に生んだ。

「この継母が、きつい人でのう」

巌は、遠い目をやや下に向けて、吐息のように笑った。

「もう亡くなっているから言うが、長男であるわしは、とかく目の敵にされてのう。

たまったもんじゃなかったわ。今の言葉でいえば『ムカツク』といったところだのう」

「ふーん。アイツと一緒じゃん」

将は同調して笑った。ちなみにアイツとは将の義母の純代のことである。

「ばかめ。一緒にするでない。純代さんのようにわきまえた後添いはいない。お前と孝太をほとんど分け隔てなく可愛がっていたではないか」

巌は目をむいた。とたんにふくれる将にかまわず、

「将。もう1ついっておくことがある。……いいかげん、純代さんを許してやれ。これがわしのもう1つの遺言だ」

将は、そっぽを向きながらも、

「で、それで、どうしたの。ママハハは。センセーはいつ出てくんの」

と続きを乞うた。

「おうよ」

巌は得たり、とばかりに話を続ける。

社会全体がそれほど裕福でなかった当時である。

継母の態度は、今では考えられないほどあからさまだったのだ。

それでも、長男で後継ぎとされた巌だから、父が在宅のときは、それなりにきちんとしてくれた。

しかし何といっても新人議員の父は忙しい。家をあけることも多く、そのたびに巌はつらく当たられた。

まもなく尋常小学校にあがった巌は、父や祖父の期待通り大変優秀で、毎年のように級長に選ばれた。

それも継母には面白くなかったらしい。

手習いをしているそばを、わざわざ床が震えるほどドスドスと通り過ぎたり、静かに本を読んでいる時にわざと子守りを頼んだり、作文を読んでやろうといって『これではダメです』とビリビリに破かれたり、さんざんな仕打ちをされた。

父に継母の行いを訴えると、いちおう叱りつけてくれた。継母は父の前では神妙に

『そんなつもりではございませんでした。あいすいませんでした』

と手をついて謝る。

だがそのあと、父の目が届かないところで、頬が伸びんばかりに力いっぱいつねられたり、寒い中の水汲みを命じられたり、挙句、

『そんなに憎らしいわたしのご飯などいらないであろう。毒を盛ってるやもしれぬしな』

と食事を抜かれたりした。

結局とばっちりはまだ幼い巌のもとに倍となって返って来たのである。

だから、いつしか巌は継母の行いを父に告げ口するのはやめてしまった。

男尊女卑の世とはいえ、一家の実権を握っていたのは主婦なのである。

家で疎外感にさいなまされた巌だから、学校は天国のようだった。

勉強も出来、負けん気の強い巌だったから、ケンカも強かった。

家でのうっぷんを外で晴らすがごとく、巌はガキ大将になっていった。

「ガキ大将、といってもお前の世代にはわからぬであろう」

「ジャイアン、みたいな感じ？」

将は訊いた。

「あのようなウドの大木とは違うがのう。ワシは歌もうまかったぞ」

おどける巌に、聡はくすっと笑いながらも、１００歳でドラえもんがわかるなんてすごい、と驚いていた。

ちなみに巌は、将を預かっていたときに一緒に『ドラえもん』を読んでいたゆえに、１００歳にして『ジャイアン』が通じるのだ。

「あまりに乱暴が過ぎて小学校３年のとき、初めて級長を落ちた。成績は学級どころか学年で一番だったのだがのう……。そのときの先生が森村先生じゃ」

小学校３年生のときに、師範学校を出たばかりで赴任してきたのが森村先生だった。

級長という名誉職を剥奪された巌は、当初、恨みを持って教壇の森村史絵を見つめた。

「当時、成績は廊下に１番からドンケツまで張り出されたものじゃ。級長をはずされたわしは、見ておれ、と猛勉強をした」

恨みに燃える巌だったが、当時２０歳の森村先生は、他の生徒と同様、にこにこと優しく見つめるだけだった。

262◆叶わぬ恋（後書き）

作中に出てくる『次郎物語』は珠玉の名作です。
作者の下村湖人の実体験を元に書かれており、こと子供時代の1～2部の評判が高いです。

テーマはずばり『親子』。
母に乳が出ずに、乳母に里子に出された次郎は、優しいが教養のない乳母にかしづかれるように育てられ、伸び伸び成長する。だが無理やり実家に帰され、厳しい母の躾になじめず、祖母には苛められ……という話です。

読んだことのない方には、ぜひお勧めしたいですが、最近の若い人は親にとても可愛がられて育っているみたいだから実感わかないかもしれません……。

大人向け（大人視点で書いてある）のものより、児童向けに分かりやすく書いた（大人が子供に語るように書いてある）『少年少女の次郎物語』のほうがより、泣けます。

何度か映像化されているようですが、小説に比べるとかなり駄作なので、やめたほうがいいです。

263◆叶わぬ恋2

小柄で、まだ20歳と若く、可愛らしい丸顔の森村先生は、すぐに生徒たちの人気者になった。

なによりも皆を魅了したのは、顔に不似合いなほどほっそりとした指で弾くオルガン、そして歌だった。

森村先生のオルガンはたいそう巧かった。学校の行事のときは、ピアノを担当していたほどだ。

前に担任だった先生はオルガンがとても下手で、どんな歌も今でいう”Cコード”で通していたというツワモノだったから、森村先生のそれは、素晴らしい音楽に聞こえた。

そして声が大変透き通っていて、小柄な体から信じられないような声量で唱歌を朗々と歌う様に、生徒は皆一瞬聞きほれたほどだ。

「しかしじゃ。森村先生がホトケのような笑顔だったのは、最初だけじゃった。そのうち、鬼のような形相で怒るようになってのう。廊下に立たされるのはもちろん、帳面で叩かれたり、しまいには竹刀を持って追いまわされたわ」

落ちぶれたりといえど武家の血をひく史絵は武芸にも自信があったらしい。

袴を翻して女とは思えない速さで巌に向かってきた。あっという間に追いつかれ、竹刀でバシバシと何度も叩かれた。

現代でいえば、忌み嫌われている体罰にあたる。そんな記憶なのに厳は、さも懐かしそうに目を細めた。

「こっえー。いったい何をやらかしたんだよ」

「そうじゃな。いろいろあるが……イナゴって、聡さん、わかるか？」

聡はうなづいた。バッタのような昆虫である。たしか佃煮にして食べる地方があったようにも記憶している。

「昔の子は野蛮でのう。それを捕まえては着物の襟や袂に噛み付かせての。

思い切り噛み付いたところで体をひっぱると、首だけが残るんじゃ。イナゴの首とりといってよく遊んだものだ」

「俺知ってる。それと同じ遊びを『次郎物語』で読んだ」

将は得意げに下村湖人の名作のタイトルを挙げた。

「そうじゃ。似たような時代だからのう」

「……ところでヒージー、子供の頃、都心近くに住んでたって言わなかった？虫とかいたのかよ」

将が素直に出した疑問に

「昔は東京といっても、今と違ってかなり空き地もあった。渋谷や

原宿なぞ田んぼが広がっていたもんだ。

幕張メッセのあたりなど、遠浅のきれいな砂浜でな。潮干狩りにいくとアサリやハマグリが山のように取れたんじゃ」

巌は目を閉じて、瞼の裏にその頃の景色が見えているように語った。

「……で、その取ったイナゴの首をな。先生が弾くオルガンの鍵盤の上にずらっと並べたんだ。しかし、先生は悲鳴1つあげずに……」

史絵は、弾こうとしたオルガンをパタンとしめた。

女の悲鳴を期待していた巌は、期待はずれに落胆した。が、史絵のようすを、いっときも漏らすまいと観察する。

「こりゃ。罪のない虫を29匹も殺めたのは誰です」

と唱歌のときとまったく異なる低い声で問うと生徒を見回した。皆、巌とその手下の仕業だと知っているが黙っている。

「誰じゃ、と訊いておる」

史絵は低い声で繰り返した。

その静かなる剣幕に、それをやった生徒はよりこうべを垂れ、やっていない生徒はちらちらとやった生徒のほうに目を走らせ始めた。

張り詰めた緊張で、木造の教室はきしむかと思われた。

巌は知らぬふりをして、前に座る女子のおかっぱ頭のうなじの剃り

こみと、自分で結んだのであろう、下手糞な帯の結び目をかわるがわるに見つめていた。

と、その黒いおかっぱがさらりと揺れて崩れた。……彼女はそっと振り返って巌の顔に目を走らせたのである。

気がつくと皆、巌と巌の一味の顔を盗み見ていた。

こうして先生と生徒の根競べは、あっさりと生徒が負けた。

皆から注目を浴び始めた巌は、観念して

「僕がやりました」

と立ち上がった。

「鷹枝君」

史絵は立ち上がった鷹枝の前にゆっくりと歩いてきた。そして目の前に立った。なぜか少し哀しそうな目だと思った。

「歯を食いしばりなさい」

史絵は冷静にそういうと、大きく腕を振りかざした。

矢絣の袂が翻り、それは鳥が羽を広げたようだった。

次の瞬間、巌は思い切り頬を打たれた。

パーンという大きな音が木造の教室に響き渡り、生徒たちは首をす

くめた。

「罪もない生き物を、こうやって悪戯に使うとは何事だ！こんなことをしたら、いつか天罰で自分も首をとられるんですよ！」

生徒たちはぞっとした。どこかで見た首を取られた武将の気味悪い絵が、おのおのの脳裏に蘇ったからだ。

「……さっさと弔って来い！」

史絵は、外を指差した。

巌は叩かれて赤くなった頬をプッと膨れさせて、オルガンの鍵盤の上に並んだイナゴの首を右手で左の掌の中に払い落とした。

イナゴの首のあたりには、白い柔らかい肉がとろりと垂れていたが、それが乾燥して鍵盤にくっついたのか、数個が落ちずに、取るのに巌は苦労した。

巌は教場を出ると、若葉になり始めた桜の木の下に首をまとめて埋めた。

「ナンミョーホーレンゲッキョー」

と、とりあえず、経を適当にあげて立ち上がったそのとき。

今埋めたイナゴの塚の上に毛虫がぽとり、と落ちた。

毛虫は葉っぱの上でないところに落ちて、居心地が悪いのか、もぞもぞと動いていた。

巌は、足を高くあげる。腹いせにそれを踏み殺そうとしたのだ。

しかし……寸前でなぜか止めてしまった。

止めたことになぜかすごく腹が立った。だが、もう一度足をあげようとは思わなかった。

教室には戻りたくなかったので、サボることにした。

川原の土手に来ると寝転んだ。赤い茎のスイバがあったので噛んだ。いつもより酸っぱく感じた。

継母に、新しい担任。女は皆、鬼なんだ。

巌は青い空に、くそくらえ、と小さく叫んだ。

しかし、森村先生はガミガミ叱るだけではなかった。

いろいろな本を貸してくれた。

それは、当時すでに文豪として名高い夏目漱石の「我が輩は猫である」、森鴎外の「山椒太夫」など、小学3年生にしては難しい本だった。

だが、巌の成績なら読めるだろうと、森村先生は見込んだのだ。

「まあ、こんな難しい大人向けの本は、級長でもない鷹枝くんには読めないでしょうね」

史絵はそういって、ふふんと笑った。

まんまとひっかかった巌は、それを史絵の手から奪い取ると読み始めた。

最初『フン、こんなもの』と思っていた巌だが、それを読み進めるうちにやめられなくなっていった。

外で遊べない雨の日など、神社の軒下で一心に本を読む巌を、帰宅途中に史絵はたびたび見かけることになる。

4年になり、再び級長に返り咲くことが出来た巌だが、森村先生とはあいかわらずだった。

「級長なんだから、自覚を持ちなさい。……いいですね」

森村先生は巌にそういって聞かせたが、巌は上の空だった。

級長に返り咲けたことを、早く父に報告したいと、ただそれだけを思っていた。

継母に冷遇されていた巌は、父だけが拠り所だったのだ。

衆議院議員になった父は、議会がある日は国会議事堂の近くにある祖父宅に泊まることも多かったが、それでも毎週土曜日には必ず帰宅した。

父が帰ってくるだけでも巌は嬉しかったが、巌がもう1つ楽しみにしていたのが、ときおり父が買ってくる、ハイカラな洋菓子だった。

文明開化と共に東京には、外国人客向けにさまざまな洋菓子店が出来たが、それは新しもの好きの東京の人にも好評を博し、大正時代にはすっかり定着していた。

……とはいえ、庶民にとっては、現代のように気軽に食べられるものではなく、甘味自体がまだ基調だったこともあり高嶺の花的存在であった。

巌は一度、祖父の家に遊びにいった折に銀座の資生堂パーラーに連れて行ってもらったことがある。

こんなに冷たくて甘くて美味しいものがこの世にあるのか、とアイスクリームを食べた巌はしばらくぼーっとしていたものだ。

家に帰ってから『あいすくりいむ』というタイトルで詩を書いたほどだ。

先々週は村上開新堂のビスケットだった。

あれも、さくさくとして後をひく味だった。

夢中で食べる巌に、継母が

「巌さん。いくつ食べるのですか。弟や妹のことを考えなさい」

とたしなめた。

言われなくても巌は遠慮していた。弟が1枚食べた。妹も1枚食べた。その下の弟が……次は自分の番だ、と思って手を出したのに……。

下を向いてシュンとする巌を見かねて父が

「いいじゃないか。巌は弟たちに比べてお兄さんなんだから」

と味方してくれた。しかし、このときは継母はゆずらなかった。

「兄だからこそ、下へのいたわりが必要なのです」

巌は結局、ビスケットを2枚しか食べられなかった。

絣の部屋着に着替えて、ちゃぶ台の前に座った父に、級長になれた旨を話すとたいそう喜んでくれた。

「父さんも、シュークリームを買ってきたかいがあったというものだ」

と上機嫌で今日の土産を教えてくれた。

「ほんとうですか！」

巌は手を打って喜んだ。

食後のデザートとして出された風月堂のシュークリームは、まさに極楽に登るような味だと巌は思った。

アイスのように冷たくはないけれど、バターの香り香ばしい皮と、とろりとしてコクのあるクリームの取り合わせがたまらない。

あまりにも巌が美味しそうに、また大事に少しずつ食べるものだから、父は

「よし。父さんの分もあげよう」

といって1口だけ手をつけたシュークリームを巌に譲ってくれた。

「まあ。行儀が悪い」

継母は、食いかけを譲る無作法に顔をしかめたが、父は

「級長になれた祝いだ」

と微笑んだまま、取り合わなかった。

その後日。

その日巌は、どういうわけか早く帰宅した。

いつもは雑のうも置かずに、そのまま遊びにいくのだが、たまたま宿題が多かった日だったのだろうか。試験があると予告されたのかもしれない。

その記憶は定かではないが、とにかく巌はその日はまっすぐに家に帰ってきた。

「ただいま」

玄関の引き戸を開けた巌に聞こえてきたのは、ちゃぶ台のほうからの笑い声だった。

継母、弟妹たちの声にまじって若い男の声がする。

巌は、声にひかれて、ふすまを開けた。

そこには……風月堂のシュークリームを食べている義理の弟妹たちの姿があった。

弟妹たちは巌を見上げると、気まずそうに下を向いた。

その皿の上には、シュークリームが1人あたり2つずつ載っていた。

「巌さん、お帰りなさい」

ちゃぶ台の下座で振り返って挨拶した若い男を、巌は知っている。

裕福な継母の実家に仕える書生である。

（書生とはこの場合、下宿人のことである。下宿代は無料で滞在する代わりに、そこの家の使い走りなどで奉公する必要があった。主に若い学生や浪人生がなった）

それで巌はすべて理解した。

風月堂のシュークリームを、継母は実家に仕えるこの男に頼んで買いにいかせたのだ。

「あれ。巌さんの分は買ってませんよ。今日はいないからいい、という話でしたよね、奥様」

男は薄汚れたヨレヨレの紺袴に現れたとおりのズボラさで、フケの浮いたザンギリ頭を掻きながら継母を振り返った。

黒い足袋の踵が擦り切れているのが見える。

弟妹の皿には、シュークリームが2つずつ載っているのに、巌にはない、というのだ。

「いいんですよ。巌さんはこないだ、お父様によけいにいただいたのですから」

と継母は澄ましている。

巌は、誰に、ともなく一礼すると襖をぴしゃんと閉めた。

そのまま、草履を履くと玄関から弾丸のように飛び出した。

すれ違った姐やが何か声をかけたらしいが、それはすでに遥か後ろだった。

「……それも、『次郎』で同じようなの、なかった？　あれは卵焼だったと思うけど」

遥か昔……小学校低学年で読んだ本なのに、将は鮮明に内容を覚えている。

あれはたしか、お婆さんが、家で育った長男と三男だけに卵焼を与えて、

里子に出されて戻ってきた次郎にはわざとあげない、というエピソードだった。

将にも強烈な印象が残っているのは、その話に何か自分との共通項を見出したからなのだろう。

「卵焼はワシもやられたわ。他にバナナやらチョコレートやら、牛肉やら挙げ出したらキリがない。

あの時代、食い物での分け隔ては、もっとも精神的に参ったからのう」

巌は当時を思い出したのか、心持ちうなだれて、白い睫の下の眼は辛そうだった。

「義母は、わしの好物を知ると、わざとそれを出さないようにして、そのくせ、わしがいないときを見計らって山のようにつくる、ということをよくやってくれたものだ。

嫌いなものはテンコ盛りにしてくれてのう。そういうときだけ『お体によろしいですから』などと抜かすんじゃ」

「ひどいですね」

聡は思わず声を漏らす。

巌はあくまでもユーモラスに話しているのだが、その内容は、子供には想像を絶する悲惨さだろうと、聡は思う。

「ヒージー、あとで仕返しした？」

将は興味深げに訊いた。巌はため息をつくと、

「いつか仕返ししてやろう、と思っていたんだが……森村先生がな」

と本題に戻った。

家を飛び出した巌は、いつもの場所になった神社にやってくると、賽銭箱の前に座りこんで膝の中に顔を埋めた。

先週、そこに捨て子があった。

巌が発見したわけではないが、近所中が大騒ぎになったから巌もよく知っている。

子供の親は結局見つからず、結局乳児院に預けられるということだった。

――俺は邪魔ものなんだ。

――生まれない方がよかったんだ。

これらは、いままでに、すでに何度も思ったことである。

そしてそれは何度目だろうと、思い浮かべるたびに巌の心をひどく傷つけた。

心が傷ついて、噴き出した血のように、いつも涙がこぼれてしまう。

泣いたら負けだ、と思うけれど。

もしかしたら。自分はもしかしたら……父が拾ってきた捨て子なのかもしれない。

そんな想像が浮かんできた。

白いくるみに包まれた巌に、父が神社で出会う姿が、まるで白日夢

のように浮かんだ。

想像の中の父は、土曜日に帰ってくるときのように、３ツ揃いのスーツにソフト帽の姿だった。

彼はカバンを置き、しきりに泣く赤ん坊を、慈悲深く抱き上げると、あやそうとした。

だが、泣き止まない赤ん坊に、薩摩藩出身の祖父譲りの濃い眉毛とゆがませて、心底困ったような顔になった……。

想像に、涙はとめどなく流れて、巌の縞の着物の膝を濡らした。

「鷹枝君」

自分を呼ぶ澄んだ声に、巌はハッとした。

あわてて涙を袂でぬぐいながら顔をあげる。

そこには……というより思いがけない近さで森村先生の顔があった。

史絵は、いつのまにか巌の前にしゃがんでいたのだ。

そして大きな目を見開いていた。……それは巌の異変を目にしたしるしだった。

巌は恥かしくて、弱みを握られた気がして、ただ下を向いた。

『どうした?』といつもの男言葉で訊いてくるだろうと身構えた。

だが……史絵は何も訊かなかった。ただ、優しい声で

「先生のうちに来なさい。あたらしいご本を貸してあげるから」

と誘った。

２６４◆叶わぬ恋３

史絵は学校から歩いて１５分ほどのところにある小さな一軒家に、帝大生の兄と一緒に住んでいた。

小さいけれど生垣と坪庭のある家だ。

その家には、はみ出すようにして、本がいっぱいあった。

巌が史絵に連れられて家に上がったときは、兄は留守だったが、その本の多さに巌は目を丸くした。

家中が父の書斎のようだと思った。茶の間まで本棚が侵食していた。

「だいたいは兄のよ」

口をぽかんとあけて、並ぶ本の背表紙を眺める巌に史絵は笑いながら言った。

史絵がいつも貸してくれる本はてっきり図書室から貸してくれるのかと思っていたが、それにしては貸し出しカードがついていなかった。その理由が今わかった。

興味深そうに背表紙を眺める巌に、史絵は

「どうぞ、手にとっていいのよ」

と言ってくれた。巌は、外国語の本の１つを興味本位で手に取った。

「これは独逸語の本。こっちは仏蘭西語。ぜんぶ兄が神田の古本屋で買ってきたの。そのうち鷹枝君もスラスラ読めるようになってよ」

史絵は巌を、ガラスのコップに入った琥珀色の液体でもてなしてくれた。

よく冷えたそれは口にすると、ほのかに甘く、香ばしく、最後に少しだけ渋みが残り、それが知的で大人っぽい味だと思った。

「……うまい。これ何ですか？」

あまりに感動した巌は素直に口に出した。

「紅茶よ。井戸の水で冷やしてみたの。気に入ってくれてよかったわ」

史絵は嬉しそうに笑みを浮かべた。

あの恐い森村先生が、こんな顔をするのか、と巌は思った。

そんな無防備な笑顔を見るのが、なんだか照れくさくて、巌はまたまわりを囲む本に目を走らせた。

「鷹枝君も、いずれ帝大に進むんでしょう」

巌はハッとして史絵を振り返ると、俯いてしまった。

お前は私の跡取だ、だから一高から帝大に行くんだ――というのは父からよく言われていることだ。

だけど、今回の仕打ちを思い出した巌はつい、言ってしまった。

「僕……小学校を終わったら、家を出ようと思うんです。丁稚奉公でも移民でも、士官学校でもなんでもいいから」

言ってしまってハッとした。

とんでもないことを言った気がする。下を向いた巌は、ちらりと上目で史絵を盗み見た。

史絵は笑顔のままだった。茶の間の外にある柿の木の若葉の緑を映した顔は、少し寂しげに見えた。

しばらく黙って巌を見つめていたが

「家がつらいから、逃げよう、というわけですね……。お父様が悲しみますよ」

父を出された巌の脳裏に、再び、神社で巌を拾う父が蘇った。

「僕……捨て子かもしれません」

「たわけ」

史絵はいつもの口調で即座に巌をいましめた。

目を大きく見開いて巌を睨みつけていたが、その顔はどこか可笑しそうだった。

「捨て子が、こんなにお父様に似るはずないでしょう」

史絵は強く言い放つと、フフっと笑った。その笑顔には若い女のあでやかさがあった。

議員である巌の父は、教育にも熱心で、何度か学校を視察に来ていて、史絵もその顔を知っていたのだ。

だが……巌が、父に似ていると言われたのは初めてだった。

実際、その鋭い目の形、整った鼻梁、太めの眉は、父と見事な相似形を描いていたのだが

（それは将まで受け継がれている）継母に遠慮して誰も巌にそれを告げたことはなかったのだ。

『父に似てる』

その事実を知って、巌は泣きたくなった。

何か巌を苦しめていたものが、雪解けの氷のように溶けて流れ出すかのように、目に涙が溜まりだした。

それを史絵に見られるまい、と必死で瞬いてひっこませる。

史絵はそれを見なかったことにして

「……ところでこないだ貸した本は面白かった？」

と訊いてきた。涙をひっこませることで手一杯の巌は、無言でうな

づいた。

「そう。じゃあ、今度は……詩なんかどう？」

と史絵が差し出したのは高村光太郎の『道程』だった。

巌は、それを受け取ると、さっそくその場で開いた。

「俺、それ読んだことある。『僕の前に道はない。僕のあとに道は出来る』みたいな内容だっけ。……ヒージーが子供の頃からあったんだ」

「そうじゃ。ちょうどあの頃に刊行されたんじゃ。あの頃の人々は、今よりずっと詩に親しんでおったからのう。

それにしてもあのときのワシには、沁みいるようだった」

巌は、目を閉じて、詩を唄うように呟いた。

「鷹枝君。自分をいじめる人がいたらね。……自分の道を邪魔する人がいたらね」

史絵はふいに言った。

詩に没頭していた、巌は驚いて顔をあげた。

なんで、先生が、継母のことを知っているんだ、と思った。

実は巌の継母の仕打ちは、おしゃべりな姐やから、近所の奉公人に筒抜けだった。

『うちの奥様は、ご長男をないがしろにしてご自分の子供ばかりを贔屓なさる』

テレビはもちろん芸能週刊誌などのない当時、人の噂は娯楽として面白おかしく伝わった。

もちろん、継母と同じ階層の人々は口をつぐんでいたが、尋常小学校にはそういう奉公人衆の子供も通ってきていたから口伝えで史絵の耳に入っていたのだ。

「自分を強くしてくれるんだ、自分を偉くしてくれているんだ、と思って我慢しなさい」

巌は険しい顔をした。

即座にそんなのきれい事だ、と思った。

そんな巌の顔にかまわず、史絵は続ける。

「悔しいとか、逃げたいとか、仕返ししたい、などと思ったら、負

けですよ」

負けでもいい、そう喉まで出掛かって引っ込んだ。

史絵はまっすぐ巌の瞳を見つめていたからである。

「鷹枝君。君は、頭もいいし、体力もある。輝かしい未来が約束されているのです。

それをつまらない相手の挑発に乗って、台無しにするなど、もったないことです」

史絵に『勉強もできるし、体力もある』などと言われたのも初めてだった。

試験で学年一番を取っても

『まだ日本一というわけではない。天狗になるな。まだまだ精進せよ』

などと言われてきたのだから。

「意地悪をする相手は、君が悔しさのあまり、やる気をなくして、落ちぶれるのを望んでいるのです。

……相手の思い通りになってやることはない。いつか手の届かないほど偉くなっておやりなさい」

「目からウロコが落ちるとは、このことじゃった。
ワシはそれまで、継母にいかに仕返しをしてやるか、もしくは逃げてラクになるか……そればかり考えていたからのう。
先生が言うことはもっともだ、と思った」

「偉い先生だと思うけど、なんで好きになったんだよ。接吻はいつだよ」

将は、なかなか恋愛話にならないのに焦れて、つい急かす。

「そう急かすな。そんなわけで、ワシは先生を困らせるのをやめたんじゃ」

巌は見る間に大人しくなっていった。

本を読んでいろいろな世界に触れることが楽しくなり、ガキ大将で子分を引き連れてチャンバラをやることなどに面白みを感じなくなっていったからである。

今まで、巌は織田信長に倣って、自分のことを『おやかた様』と子分に呼ばせていたのだが、子分は口々に

『おやかた様が出家してしまった』と囃し立てた。

だが巌はおおむね頓着しなかった。

……ときおり、それが過ぎるときのみ、こっぴどくやり込めてやったので、巌は男子からは一目置かれるようになった。

ただ、女子や弱い者がいじめられているときは進んで助けてやった。

そんな巌を、史絵は温かく見守った。

史絵が見守ってくれている、史絵が期待してくれている。

そう思うと、自然に学問にも身が入った。

もともと優秀な巌である。綴り方（作文）で４年・５年・６年と連続で東京市の賞をもらったほどだ。

継母による分け隔てに腹を立てることも、依然あったが、怒りの感情をうまくコントロールすることができるようになった。

自分の中の怒りを鎮めるとき、すでに巌は史絵を思い浮かべるようになっていた。

巌は、尋常小学校６年になった。ちなみに当時の義務教育はここまでである。

その頃、巌は史絵が自分にはなくてはならない人だと自覚していたが、それが恋だとは気付いていなかった。

ある夏休みが近づいた月曜日。

史絵が初めて学校を休んだ。

史絵が学校を休んだことなど、巌が3年生のときに赴任してきてから一度もなかったので、巌は心配して、代わりに教壇に立った教頭に理由を訊いた。

「何でも田舎のお母様が危篤だと、電報があったようです」

学校一いや、市で一番の秀才と評判の高い巌ゆえ、教頭は丁寧に教えてくれた。

夏休みまでに帰ってきますように、と巌は毎晩祈ったが、史絵はとうとう帰らぬまま夏休みに突入した。

夏休み、巌は祖父母の家に逗留するのが習慣になっていた。

さすがに父も、継母が巌を嫌っていることに気付いていた。

休みの間、四六時中顔をあわせるのは巌があまりに可哀想だ、ということで祖父母の家にやっていたのである。

祖父母は優秀な巌をたいそう気にいっていたから、巌は羽を伸ばし放題だった。

だが、3年までは夏休みが来るのを心待ちにしていたのだが、4年

あたりからは、なんとなく寂しい気がした。

休みに入り、史絵に逢えなくなるのが物足りない気がしたのだ。

今年はとうとう、史絵が心配で、祖父母の家に行きたくない気分にさえなってしまった。

だが、継母と1日中顔を突き合せるのは気ぶっせいだから、結局、祖父母の家にやっかいになることにした。

だが、毎日考えるのは史絵のことばかりで、

――まさか、このまま会えないなんてことはないだろうか。

と心配した。祖父母が

「中学にあがったら、ここから通いなさいな。ここなら一高も近いですし」

などと提案するのも上の空だった。

2学期になるのがこれほど、待ち遠しかったことはなかった。

厳は、いつもは帰りたくなかった自宅に帰ると、念入りに夏休みの宿題などを整えた。

そして誰よりも早く学校へでかけると、用もないのに、職員室をのぞいた。

……そこに、海老茶の袴にきりりとマーガレイトと呼ばれる髪型に結い上げた史絵の後ろ姿を見つけると巌はホッとした。

史絵はなぜか他の教師に囲まれていた。

「先生……」

思わず、声をかけようとした巌に聞こえてきたのが

「何はともあれ、おめでとう」

「してお式は……」

という史絵を囲む教師の言葉だった。

史絵は……故郷で縁談がきまったというのだ。

巌は目の前が真っ暗になった。

265◆叶わぬ恋4

「皮肉なことに、先生の縁談が調ったことで、わしは自分が先生をいかに好いているかを

……先生がわしにとっていかに大切な存在かを確認したのじゃ……」

巌は、細めた目を、杉板天井のあたりに漂わせていた。

「でもさ。ヒージー。先生は、お母さんが病気っていう連絡で帰ったんだろ」

将はそのまま疑問をはさむ。

「あの当時、『ハハキトク』の電報は切り札でな。あれで田舎に呼び戻されて、見合いの席が用意されていた、

というのはよくあったことなんだ。実は母親はピンピンしていてな」

「なんだ。それじゃ親の陰謀ってわけ?」

将はまるで自分が陰謀にハメられたように口を尖らせた。

「ハハハ……そういうことじゃのう。あの時代、20をすぎた娘が独身だったら、親はそれぐらいのことを画策して当然だったのじゃ」

巌は力なく笑った。

史絵の実家はＩ県で前田家に仕えていた武家である。

当時女性は学問など身につけず、早々と嫁に行くのが美徳とされていたが、

進歩的だった史絵の父は、学問ができる史絵を女学校にやり、さらに師範学校にやった。

史絵はそんな父を大変に尊敬し、感謝していたが、その父は史絵の師範学校卒業を見ずに亡くなってしまった。

父が亡くなって母は元の領地で、老いた舅夫妻がいる〇〇村に移った。

史絵を教師にしろ、というのは父の遺言だったから、いったんはそれを守り、

東京の帝大に進んだ長男のもとへ送り出したが、２３にもなる娘にトウがたつのを心配していた母だ。

ついに強硬手段を用いたのだろう。

史絵は、おそらくそれに感づいていたに違いない。だが電話もない時代だ。

『ハハキトク』の電報の真偽は行ってみるより確かめる手段はない。

そして、まんまと見合いをさせられたのだ……。

結婚がきまった史絵は、２学期いっぱいで退職することになった。

本当は、すぐに辞めて１０月には輿入れせねば、と母親は急いたのだが、史絵は『せめて卒業まで』と泣いて訴えたらしい。

そこで中間を取って、年内、つまり2学期いっぱいとなったのだ。

輿入れは４月に行われるという。

おそらく桜の花の下、白い綿帽子をかぶるであろう史絵はどことなく輝いて見えた。

そんな史絵を巌は盗み見ては、目があいそうになるとそらした。

そんな巌に、とうとう史絵のほうが声をかけた。

ある日、そっけなく帰ろうとした巌は史絵に呼び止められた。

「鷹枝君。夏休みの宿題の綴り方、また学校代表として市のコンクールに出されたわよ。おめでとう」

巌は、秋口なのに、すでに餅のような白い色になった史絵の広い額を一瞬見て、目をさっとそらした。

「ふん。……おめでたいのは、そっちだろ」

「あら。ありがとう」

史絵は素直に頬を染めた。

「……そんなに嬉しいのかよ」

史絵はそれには答えずにまっすぐに巌を見下ろした。見下ろす角度は年々鈍くなってきている。

まもなく……、その目は史絵と対等なラインになるだろう。

そして逆に巌が史絵を見下ろす日がくる。

……その日を巌は、心から待っていたことに気付く。

胸が苦しい。灼けつくように、そして息ができない。酸欠状態の脳がこんなことを巌に言わせる。

「卒業まで、一緒にいるって言ったのはどこのどいつだよ」

これは事実だった。巌だけに言ったのではないけれど。

『皆さんが卒業証書を受け取る日まで、一緒にいます』

史絵はたしかに教壇の上からそういったはずだ。

「嘘はいけない、って教えたのは、先生じゃないかよ」

史絵をなじる言葉は、あとからあとから出てくる。

本当はこんな風に責めたいんじゃない。

史絵がいなくなることを考えると気が変になりそうだ。

史絵に見守られない自分は、いったいどうなってしまうのだろうか。

史絵のいないころの真っ暗闇に戻りたくない。

――いつまでも一緒にいてほしい。

巌はこみあげてくる自分の思いに耐えられなくなり……。

「で、チューしたんだ」

ニヤニヤして先回りした将は、巌に

「たわけ」

と目を剥かれる。聡が『もう』と軽く将を睨むように笑みを浮かべる。

「まだ12だぞ。今はどうかしらんが、当時の12といったらまだ子供じゃ。小柄だった先生より背丈も低かったしな。

……わしは、先生を見ているのがつらくなり、逃げ出したんじゃ」

巌は、史絵に背を向けると、走り出した。

あまりに全力疾走をしたせいか、下駄の鼻緒が切れて砂利道で転んだ。

かまわずにそのまま、裸足で走る。気がつくと巌は、川原に来ていた。

そこは、何度か史絵とひなたぼっこをしながら、本を読んでもらった場所だ。

この3年あまりの間に、それは10回以上に及んでいた。

堅苦しい文語調も、史絵が読めば、温かい人情話が見えてくるようだった……。

巌は草むらの中に無理やり転がると空を眺めた。

目じりを溢れた温かいものは、9月も終わりの風に吹かれてしだいに冷ややかに、耳の後ろへと流れていった。

――先生が、嫁に行ってしまう。

巌は、鰯雲に花嫁姿の史絵を描こうとした。

しかしそれは巧くいかぬうちに、涙でくずれた。

――先生が、手のとどかないところに……。

巌は声をださずに嗚咽した。

それから。

2学期の間、巌は史絵を無視した。

史絵のほうは、何度か話し掛けようと試みたらしいが、それを頑なに拒否した。

本当は……巌は待っていたのだ。

拒否しても拒否しても、史絵が『新しいご本を持ってきたのよ』と声をかけてくれることを。

そっぽを向く自分を無理やりにでも、史絵のほうに向かせることを。

実際、いままでの史絵は、それぐらい強引に巌に指導をすることもあった。

『話をききなさい！いいですか？』

……だが、史絵は、もはやそこまでしてこなかった。

声をかけようとした手は宙をさまよい、一定のラインで止まる。

「やはり、おなごは結婚がきまるとおとなしゅうなりますなあ」

校長や教頭はそう噂した。史絵が竹刀を持って悪ガキ退治をするところは、学校の名シーンだったが、

この2学期の間、ついにそれを見ることはなかったからだ。

そして、ついに2学期の終業式。

どことなく濁った師走の空は、いまにも白いものをちらつかせそうだったが、まだ風花が舞うばかりだった。

史絵は、いつもの袴姿ではなく、羽織姿で教壇に立った。

結婚を控えた娘にしては、地味な色であったが、そのいつもと違った様子は、あきらかに生徒との別れを意識していた。

「皆さん、卒業まであと3ヶ月です。先生は皆さんより一足先に卒業しますが、風邪など引かぬようがんばって勉学に励んでください」

皆に通知表を配り終えた史絵は、張りのある声で教壇の上から皆に最後の言葉を語りかけた。

そのとき、一番前の生徒は、木製の教壇からパタパタと小さな音が響くのを聞いた。

教壇にはすぐに小さな水溜りができた。

生徒たちは皆、ハッとして顔を上げた。

史絵が涙を流しているのだ。

史絵は、涙で、今までにないほど顔を歪ませていた。

漏れそうになる嗚咽を引き結んだ唇で必死で堪えている……そんな苦しげな顔だった。

小さな丸顔は、すでに紅潮して桃色になっていた。

「……皆さんは。……私の、最初の教え子でした。だから……絶対に卒業するところを見たかった……」

振り絞るような声は初めて聞くものだ。

前に座る女子の肩が震えているのを巌は見た。

女子たちは、みんな堪えられずに下をむいて袂を目にあてていた。

男子も、あるものは唇をぎゅっと結び、あるものは膝の上で拳を握

り締めている。みんな泣き出しそうになるのを耐えているのだ。

巌は……泣きもせず、ずっと史絵の顔を見ていた。

史絵は、顔を涙でぐちゃぐちゃにしながらも、その顔は正面を向いていた。

そして、おもむろに生徒一人一人の顔を焼き付けんとするばかりに、涙まみれの瞳で生徒をじゅんぐりに見つめはじめた。

そして、巌の番が来た。

「そのときの森村先生の目は、ウサギのように真っ赤でな。それでわしは、2学期の間中先生に冷たくしたことを後悔したんじゃ」

当時のことを思い出したのか、ほんの少しだけ、巌の瞳にうつる光がゆがんだ。

最後に、史絵に詫びたい。

帰宅した巌は、ありったけの小遣いを握って、乗合馬車に乗ると、そのまま上野に向かった。

史絵は、終業式を終えたらそのまま、郷里に帰るといっていたからだ。

何時の列車に乗るかわからないので、巌は改札で待ち伏せした。

当時から、東北、高崎線などの玄関口だった上野であるが、現代よりもずっとこぢんまりしていたのだ。

師走の駅は、帰郷する人、そしてそれを見送る人でごったがえしていた。

だが、懐かしい人はすぐに見つけられた。

煮締めたような色の人々の群れの中で、史絵は季節外れの桃の花のようだったからだ。

「先生ーっ！」

巌は史絵を見つけると駆け寄った。

史絵はたいそう驚いたようで、目を真ん丸くした。

だがすぐに、目を細めて優しい顔を巌に向けた。

ごったがえすホームで、二人は対峙した。ホームにはすでに史絵が乗る列車がタールのような色の機関車に続いて止まっている。

巌は、勢いで駆け寄ったものの何を話していいかわからなかった。

吐息だけが、暗い色合いのホームでやたら白く目立つ。

「見送りに……来てくれたの？」

史絵はその美しい澄んだ声を巌だけに向けた。

巌は、無言でうなづいた。

「ありがとう」

史絵は、今までにないほど、とびきり優しい口調で礼をいった。

そして、巌の肩に手をおいた。

風花が舞うような寒さの中、肩だけに春が舞い降りたように暖かくなった。

「鷹枝君。中学に入っても……がんばってね。……きっと、きっと偉くなるのよ」

「先生。僕、先生がいなくなったら、独りっきりになっちまうよ」

本当はこんなことを言いにきたわけではないのに。

先生を祝福して、送り出そうと思ってやって来たのに。

ひとりでに恨みの言葉が口に出てしまった。

「独りじゃないわ。鷹枝君にはお父様だっていらっしゃるでしょう」

巌は首を横に激しく振った。

「先生。いかないでくれ。嫁になんかいかないでくれ。ずっと僕と一緒にいてくれ」

心のままを口にしながら、巌の目からも噴き出すがごとく涙が湧き出していた。

涙の勢いに押されて鼻水も一緒に出る。みっともないが、とめられない。

史絵は、羽織の襟元から懐紙を取り出すと、巌の涙と鼻水を拭き取ってくれた。

しかし、あとからあとから湧き出すものだから、懐紙は何枚も使われることになった。

巌は、肩どころか全身を震わせて、湯気を出すようにして、泣きに泣いた。

声は歯を食いしばって押さえたけれど、そのせいか鼻の奥がつーんとしてくる。

「……鷹枝君。先生はずっと一緒にいるよ」

史絵は、震える巌の肩に両手を置いて、見下ろすと確かにそういった。

「本当か？嫁に行くのを止めるのか」

巌は涙でぐちゃぐちゃになった顔をパッと輝かせた。

史絵は少し困った顔をして首を横に振った。

「いつだって、見てるから。先生ね。……巌君のこと、遠くから、ずっと見守っているから」

「そんなのいやだ」

巌は涙を飛ばしながら首を振った。

そのとき、ホームに止まった蒸気機関車が悲鳴のような汽笛を鳴らした一一大量に吐き出された白い蒸気はホームにまで流れてくる。出発の合図である。

巌も、史絵も、ハッとしてその激しく噴き出した蒸気に一瞬気をとられた。

「……巌君、元気でね。本当に見守っているから」

史絵は意を決したように、巌を見つめた。

そして巌の頬に新しく流れた涙を懐紙で拭き取ろうとして、それがないことに気付く。

史絵はハンカチーフを取り出した。それを右手に持って、涙まみれの頬に両手を添えた。

その手は、温かくて柔らかかった。……そのぬくもりこそ……おそらく、巌が一番ほしかった、憧れたものだった。

「先生」

史絵はハンカチで巌の涙を拭くと、それを手に握らせた。

もう時間がない。車掌が急ぐように声をかけてくる。

「えらくなるのよ。いいわね」

史絵はそう言い残すと、巌に背を向けた。その背を向けるまぎわ、史絵の目は涙で光っているように見えた。

「先生」

それを確かめようとして史絵を追った巌は、客車に乗り込まんばかりに近寄ろうとして駅員に止められた。

そして列車は、ゆっくりとリズミカルに力強く車輪を回して走り出した。

そのとき、史絵が……名残を惜しむように、巌から少し離れた客席の窓から顔を出した。

「元気でね」

蒸気機関車の音に負けないよう、史絵は叫ぶように巌に最後の呼びかけをした。

巌は駅員を振り払うと窓の史絵を追った。

史絵は自分のために涙を流しているか。それを確かめたい。

歩いて追いつけるスピードの列車なのに、駅のホームには同じように別れを惜しむ人が大勢いる。それをかきわけるようにして巌は、列車の窓を追いかける。

しかし、次第に車輪の回転速度はあがり……巌がやっと人波を乗り換えたころには、全力疾走のスピードになっていた。

「先生っ、先生ーっ！」

下駄を投げ出すようにして巌は懸命に走った。

マフラーがほどけて、ホームに落ちる。

着物の襟は羽織の下ではだけ、下駄のない足袋はあっという間に擦り切れ、裸足同然になったがかまわず巌は走り続けた。

だが、とうとうホームの端まで来ても……巌は、史絵に追いつくことができなかった。

266◆叶わぬ恋5

「チュー、しなかったじゃーん」

将はまるでチューするときのように口を尖らせた。

台所のほうから、いい匂いが流れてきた。きっとあゆみのビストロ自慢のポトフに火が入ったのだろう。

「これからがあるんじゃ。わしは中学に進学したんだが……」

当時、義務教育は尋常小学校までで、その上には地域や学費、男女別などの違いで高等小学校（2年）、中学校（5年）、女学校（5年）などがあった。

その中でも中学校に進むのはある程度お金に困らず、勉強も出来る比較的エリートな存在といえよう。

国会議員の息子で成績優秀な巌が中学校に進むのは当然だった。

巌は、祖父母の助言に従って家を離れ、いずれ受験する一高に近い祖父母宅に居候することになった。

さらに小学校での成績を教師らから認められて、級長の上の、学年の総長に選ばれた。

だが、史絵と別れた巌は、気力も何もかも抜けてしまったようだった。

勉強もせず、読書も悪友から借りた春本を読みふけるばかりで、たびたび学校をさぼり、ぐうたらな毎日を送った。

そんな巌だから、ただでさえ生え抜きの生徒たちの中で、成績は急降下していき、

2年生にあがるころには、中ぐらいから中の下までをうろうろするくらいになってしまった。

たまに顔をあわせた継母などは聞こえよがしに

「十で神童、十五で才子、二十歳をすぎればただの人、というけれど、ただの人になるのが早すぎるんじゃないかえ」

とさも楽しそうに嫌味を言ったが、巌は我関せず、と無視した。

その継母の生んだ子供たちは、学習院に小学校から入ったのだが、その成績は今の巌とどっこいどっこいだと祖父宅にいる書生から聞いていたからだった。

悪友とつるんで自堕落な暮らしに耽る巌を、祖父母、及び父はおおむね静観しているようだった。

巌が心の拠り所にしていたのは史絵からの便りだった。

懐かしい手跡が書かれたそれを、巌はそれこそ宝物のように扱かっ

た。

それだけを秘蔵の文箱に入れ、日に三度、必ず目にするようにしていた。

しかし、それも2年、3年と時が経つにつれて心惹かれなくなっていった。

ときおり思い出して取り出すこともあったが、それが何になろう、と巌はため息をついた。

どんなに思っても、所詮、他人の人妻なのだ……。

手に入れられないものに対して興味をなくしていく現金な自分に対し、

大人になったのだ、と嬉しくも、また、こうやって次第に薄汚くなっていくのだろうか、寂しさをも覚えた。

中学も4年の終わり。巌は一高（のちの東大）を受験し、当然のことながら落ちた（当時は中学4年で高等学校を受験できる）。

合格発表を見に行った巌は、それほどショックを受けなかった。

ろくに勉強もせずに、遊んでいたのだから当然の報いだ、と思った。

しかし、しばらくの間、巌は合格者だけが張り出された紙をしばらく眺めていた。

「鷹枝君、君も不合格か。悲しいのう」

悪友のうち一人、平岡が背伸びをするようにして、巌の肩にがしっと腕をからみつけてきた。

「なあに、来年もあるさ。今年は腕試し、腕試し」

我ながらカラ元気な声だと思った。

「さりとて、気晴らしをせねば、耐えられないのう。俺はセンシティブだから」

「行くか？」

「行こうぞ」

巌は、同じように一高に落ちた平岡と門田、犬飼と昼間から酒を飲みに行くことにした。

悪友は皆、

「我は〇〇小ではいつも1番だった」

と威張りながら、遊びすぎが祟って今は……、という巌と似たクチである。皆だらしなく髪を伸ばしているところでも似ていた。

「ヤケ酒は身にしみるなあ」

門田が言った。彼はすでに顔が赤い。

3人がいるのは、縄のれんの居酒屋である。

まだ暗くなるのには間があるのに、3人で銚子がすでに5本開いた。

カラのとっくりをくるくる回して、とっくりの先が差した人間が一杯飲み干すという遊びをしていたものだから、酒はどんどんあいていく。

「ヤケ酒というほど勉強したのかよ」

巌は笑いながら、とっくりが指してもいないのに、酒をついで口に運んだ。

この中学の4年間で巌が身につけた、他の追随を許さない才能といえば、酒の強さだろうか。

さすがは薩摩隼人の血筋などと、変な褒められ方をした。

「やれ巌君は現実的だのう……」

平岡が、箸で皿をチンと叩きながら、好色な目でへらりと笑った。

「で、このあと……行くか?」

「それはいい。グッドアイデアだ。不合格の不名誉は、女に癒してもらうのが一番だ」

それが好きな門田も犬飼も賛成した。ちなみに行き先は遊郭である。

「巌君は……どうする」

「俺はまだ飲み足りないから、そっちはいいよ」

巌は、あいかわらずおちょこを口に運びながら、そっぽを向いた。

「やっぱり」

3人は同時に声をあげた。

「鷹枝巌君。これを機会に童貞なぞ、捨ててしまった方がいいぞ」

「同感同感。巌君ならモテモテで選りどりみどりだろうに」

巌はおちょこから目をあげた。

その目は鋭くて、3人はギョッとした。

3人が縮み上がるのを見届けたので、巌はとっくりの酒に視線を戻して酒をペロッと舐めた。

もう1つの巌の特技は……喧嘩だった。泥酔して乱闘になったときも、絶対に負けなかった。

刃物を持ったヤクザと対決して降参させたこともある。

そのとき、ヤクザの持った匕首は巌の眉を掠った。

そのときの傷が、右の眉尻に残っている。

「今もあるの？その傷」

将は、血は争えないなあ、と思いながら訊いた。

「おう。眉を見てみろ」

将は、長く伸びた厳の白い眉毛をかきわけた。

傷は、あれから８０年以上も経つのに、たしかに痕跡を留めていた。

ケンカと酒命、つまり現代でいえばハードボイルドな奴として悪友から一目置かれていた厳だが、不思議に女遊びだけはしなかった。

年頃の健康な男子として、おおいに誘惑はされたのだが、いつも…心のある一部分が引っ掛かって、遊郭に足が向かわなかった。

引っ掛かった一部分とは……まさに史絵だった。

すべて忘れてしまったような自堕落な日常の中で、そこだけが忘れた頃にときどきうずく。

今度こそ遊郭に足を踏み入れるぞ、と思うたびに、なぜか史絵の泣き顔が浮かんだ。

――あれから４年。

ちらかりきった部屋の中にある、清らかで儚いカットグラスのような心を、巌はもてあましたまま１６歳になっていた。

「梅毒になっちまえ。いっそ鼻がもげりゃいいんだ」

巌は挨拶代わりに毒付きながら、悪友３人と別れると、酒を冷ますべく桜並木にやってきた。

まだ飲み足りない、というのは遊郭を断る口実に過ぎなかった。

最近は、祖父母も巌の乱行を心配しているのが、ありありとわかった。

口やかましく言わず、何も言わないで心配しているのが、巌には一番こたえた。

「サクラチル、か……」

身長５尺８寸（約１７４センチ。当時の１６歳としてはかなり長身）になった巌だから、桜の枝になどすぐに手が届く。

だが、肝心の桜は、まだ蕾も固くこごったようだ。

桜の枝枝に、春の夕陽が細く反射していた。

その枝に浮かんだ桃色の方が、桜の花などより、よほど美しいように思えて、巌は手をかざして夕陽を眺めた。

さすがに日没直前とはいえ、直射日光は巌の目を眩ませた。

巌は眩んだ目で、桜並木に向き直った。眩んでよく見えない目に、向こうから女がやってくるのが見えた。

巌は、よく見えないながらも、その小柄な体型、歩き方をどこかで見たように思った。

視力が回復するに従って、心臓がごとり、と動いた。

――まさか。

巌は、酒のせいで乾いた喉をごくっと動かした。

ごとり、と動いた心臓は、巌の全身を揺らすように、どくん、どくん、と脈打ち始めた。

女は何も気付かずに、伏目がちにこちらへ歩いてくる。

……その女は、まさしく史絵だった。

「……森村……先生？」

巌は声をかけた。

史絵のほうは、最初、自分を呼んだ人間が誰かよくわからなかったらしく、驚いたように身構えた。

無理もない。背は伸び、低い声は完全に男のものだ。そしていがぐりだった頭は、伸び放題のボサボサだ。

自分でも優等生だった小学生の頃の面影はまるでない、と思う。

僕です、鷹枝です、と言おうとしたそのとき、史絵の目が見開いた。

「た、鷹枝君？……そうなのね」

「先生！お久しぶりです」

「大きくなって……」

史絵は懐かしそうに巌を見上げた。

巌も嬉しさのあまり、言葉を失ったまま史絵を見つめた。

史絵は……キラキラ光る瞳や、色白で広い額は変わっていなかった。

いや、あのころよりさらに色白になった気がした。

丸かった頬は肉が削げたようになり、全体に華奢な印象になっていた。

史絵は、いったん嫁にいったのだが、４年近くたっても子が出来なかったために、離縁されて、東京に戻ってきたのだった。

「ひどい。大正時代になってもそんなことがあったんですか？」

思わず聡が口にした。巌はうなづいた。

「そうじゃ。むしろ、一夫一婦制になってからのほうが、そういうことは増えたはずじゃ。江戸時代は側女を許していたからのう。だから跡取を生めない妻を離縁して、若い女と再婚することは、跡取が重要とされた家ではよくあったんじゃ。森村先生は、もう２７歳になっていたからのう……」

２６歳の聡は自分の年齢に近い当時の女性の不幸に胸が痛んだ。

巌にとっては幸運なことに、史絵は、巌が身を寄せている祖父母の家の近くに、女一人で間借りしていた。

当時、女の独り暮らしはとても珍しく、なかなか部屋を貸してくれるところはなかったのだが、幸い前田藩時代の父の知り合いが貸間を手配してくれたのだという。

まもなく巌は手土産を持って、そこに足しげく通うようになった。

『勉強を教えてもらう』という名目である。

巌は、目の前にいる史絵を『これぞ運命だ』と熱い瞳で見つめた。

氷漬けになっていた少年の恋情は、史絵の実体を目の前にして、いっきに溶けて燃え上がった。

『結婚はもうこりごり』。そんな風に笑う史絵はどんな苦労をしてきたのだろうか。

お茶を入れる細い指は、関節ごとにひび割れて、痛々しい肉を見せた断面が指の動きで開いたり閉じたりした。

よく見ると、首も筋が浮き出るほど細くなっていた。

全体に脂肪がとれ、造作が浮かび上がったような顔は、その目と睫をいっそうくっきりと見せた。

それは却って美しくなったといえるが、巌にはせつなかった。

――俺だったら、先生をそんな目にあわせない。

巌は、史絵が受けた仕打ちを想像して、唇を噛んだ。

史絵は、そんな巌の気持ちを知ってか知らずか、淡々と勉強を進めた。

史絵の部屋は、家主の庭にある、文机だけを置いた簡素な6畳間の離れである。

台所や厠、風呂は家主と共同という、つましい暮らしの中で、史絵は自らも懸命に勉学に励んだ。

「流行の職業婦人として一生を仕事に捧げるわ」

冗談めかしてそんなことを言う史絵だったが、仕事に一生を捧げるというのは本気らしかった。

だから小学校の教師にもかかわらず、巌の受験勉強の指導もほぼ完璧にできた。

史絵と巌が再会して半年以上が過ぎた。

史絵と再会してから、巌の成績は生き返ったようにぐんとあがった。身なりもきちんとし、悪友と遊び歩くこともめったになくなった。

そんな晩秋も深まった日曜日。

いつものように、本を片手に、縁側から史絵の部屋に入ろうとした巌は、家主宅のほうから女の話し声が聞こえるのに気付いた。

どうやら一人は史絵のようだった。

部屋の前の落ち葉を松葉箒でかき集めたあとがある。

箒がきちんとしまわれずに、垣根に立てかけてあるから、掃除をしているところを呼ばれたのだろう。

「史絵ちゃん。あの背の高い学生さんとはどういう関係なんだい？」

相手は家主夫人らしい。

「昔の教え子ですけど」

毅然とした史絵の声がする。それに対して、家主夫人のこえはあくまでも下出だった。

「そうかい。……こういったら何だけど、近所で噂が立ってるんだよね」

「噂って、何の噂ですか」

史絵の口調はあくまでもハッキリとしている。まるで教壇に立っているときのようだった。

家主夫人は、よくわからない問題を当てられた子供のように、さもいいにくそうに

「……あんたが、学校の先生様なのに、男を連れ込んでるってさ」

それでもはっきりと答えた。

「まあ……。ホホホ」

思いがけない史絵の笑い声に、巌は思わずそっちに身を乗り出す。だが、丸く刈り込まれたツツジと散りかけたモミジに邪魔されてよく見えない。

いったん笑った史絵だが、それをピタと止めると、おもむろに言い放った。

「あの子は、私の教え子です。あの子の名誉のために、男を連れ込んでるなんて言わないよう、今度から噂をする人に奥様から言っておいてくださいましな」

家主夫人の返事は聞こえなかった。

たぶんあっけに取られた顔をしているのだろう、と巌は前にみかけたことがある家主夫人の、頬が垂れた顔を思い浮かべた。

「わたしのことは、どんな風に言っていただいてもかまいません。だけど、教え子は将来ある身。間男扱いしないよう、重ねてお願いします」

思わず、巌は声がするほうの庭先にさらに一歩進んで半身を傾けた。赤くなったモミジの葉陰に、巌は深々と頭をさげる史絵を見た。

267◆叶わぬ恋6

巌は、そこまでも自分の将来を大切に思ってくれている史絵に深い感動を覚えた。

清らかな水の流れの源に、深い蒼を沈ませた淵をのぞきこんだかのような……巌は自分を思う史絵の心を覗いた気がした。

まもなく、庭先から史絵が戻ってきて、いつも通りに勉強が始まったのだが、巌の鼓動はずっと収まらなかった。

史絵の、寝室も兼ねたこぢんまりとした6畳間にちゃぶ台を出して、そこで二人は頭をつきあわせていたのだが、

巌はいつもの、この近さにめまいがしそうだった。

だがそこから動けない。それどころか、もっと近くに寄ろうとさえ試みてさえいた。

あまりに巌が近すぎると思ったのだろうか。史絵は唐突に

「お茶にしましょうか」

と提案した。懐中時計を取り出すと、なるほどもう3時だった。

史絵は、巌のそばを立つと、火鉢にくべた炭を七輪に移して湯を沸かした。

その間に芋ようかんを切って持って来た。

史絵はようかんの皿をちゃぶ台に置きながら言った。

「鷹枝君。……もう、ここには来ない方がいいわ」

「どうして」

思いがけない言葉に巌は目を見開いた。

史絵は答えずに目を伏せた。いつもの史絵らしくない態度だ。

自分でもそう気がついたのか、史絵はすぐに、姿勢を正して

「いろいろとよくない噂をする人がいるの」

とハッキリと言った。

「噂なんて、関係ないよ」

巌は即座に反論した。

先生に勉強を見てもらったから、成績も上がったんです……そう言おうとして、巌は自分でもそれは違うと気がついた。

その目的が、勉強だけではないことは、自分でも意識していた。

史絵が好きだ。自分は史絵に恋している。

そのとき、ヤカンがしゅんしゅん言い出した。

沸騰するヤカンの中の湯と同じように、巌の思いも急速に沸点に達した。

史絵は静かにちゃぶ台から立ち上がると、七輪からヤカンを持ってきて、その中の湯で湯飲みを温めた。

そして、湯飲みの中の湯をきゅうすに移すと茶葉が開くのを待つ。

やかんから立ち上る湯気が、障子の隙間からの光を斜めに浮き上がらせている。

静かな晩秋の部屋にいながら、巌の心の中では史絵への思いが夏の嵐のように吹き荒れていた。

やがて十分に茶が開いた頃合を見て、史絵は温めた湯飲みに茶を注いだ。

茶の乗った茶托を巌の前に置こうとした史絵は、ふいに巌に肩を掴まれた。

茶托はバランスを崩して、ちゃぶ台の上にこぼれた。

巌は、史絵の唇に自らのそれを押し付けていた。

はじめて味わう女の唇は、柔らかくて、思ったより乾いていると思った。

目をあけていたはずなのに、史絵がどんな顔をしていたか覚えていない。

たぶん無我夢中だったのだろう。

こぼれた茶はしばらく顧みられずに、ちゃぶ台から畳へと滴った。

「お茶が……」

史絵は巌の手を振り解くと、布巾を持って来てこぼれた茶を拭いた。

巌はぼうっとして、そんな史絵の、そろそろあかぎれがひどくなってきた指を眺めていた。

「……たわむれにそんなことをしたら、いけないわ」

やっと史絵が口を利いたのは、こぼれた茶が一通りなくなってからだった。

史絵の声を聞いて、巌は我に返る。

「たわむれなんかじゃない」

巌は怒ったように言った。

「僕は、先生が好きだ」

史絵はあいかわらず畳を拭いていた。目をしばたたいているのが下を向いた睫でわかる。

返事を発することがないまま、史絵は立ち上がった。

奥から乾いた布を持ってくると、しつようなほどに畳の水分を拭き

取る。

「先生。僕は本気だ。高校に受かったら、結婚してくれ」

しかし史絵は畳の目にそって乾いた布を動かしながら顔をあげなかった。

やがて、おもむろに顔を上げると

「そういうことは、軽軽しく口にするものじゃありません」

と教師の口調で言い放った。

「軽軽しくじゃない。本気だ。ずっと、先生のことを好きだった。嫁に行く前から……！」

巌は、ふたたびにじり寄ると、史絵を抱きしめた。

史絵は巌を振りほどこうとしなかった。

「巌くん……」

「好きだ」

顔を埋めた史絵の首筋からは、ほんのりと甘い白粉の匂いがした。

それをむしゃぶるように嗅ぎながら巌は、好きだ、と喘ぐように言う。

他の言葉が見つからない。英語の”Ｉ　ＬＯＶＥ　ＹＯＵ”　の訳

が『愛している』というのはわかる。

だけど、『愛する』というのがどういう感情を現すのか、『好き』『愛』の区別がわからない。

だから巌は、白痴のように「好きだ」を繰り返す。

……どれくらい時間が経ったのか。もしかしたらほんの一瞬だったのかもしれない。

なぜなら、たしなみのある女である史絵が、そんなに長いこと巌に抱きしめられたままになっているはずがないから。

「巌くん。私は……あなたより十も年上よ。……出戻りだし」

巌の気持ちが本気だとわかったのか、史絵は自分の体を抱きしめる巌を引き剥がしながらこんなことを言った。

ゆっくりと落ち着いた物言いだった。

巌の手は依然、史絵の上腕をがしっと掴んでいる。

「年なんか関係ないよ。この世で先生はたった一人っきりだ。俺には……この世で女は先生だけしかいない」

巌はそういうと、もう一度史絵の体を自分の方に引き寄せた。

そしてその狭い背中に

「先生は、俺のことが好き?……愛してる?」

巌は自分には使わなかったくせに、史絵への問いかけには『愛』という言葉を無意識に使った。

巌の胸に押し付けられた史絵は……今度は本当にしばらく身動きしなかった。

巌は、史絵に心臓の音を聞かれているように思った。

小春日和の陽が差す静かな離れが、自分の鼓動で揺れはじめるのを巌は感じた。

「先生。俺が……好きだろう？」

巌は耐えられなくなって、もう一度問いかけた。史絵は巌の胸から顔を起こした。

そして、まっすぐに巌の顔を見上げながら言った。

「答えが知りたかったら、まず、一高に受かりなさい。そして帝大を、きっと卒業なさい」

巌は史絵の瞳を見ながら、少し狼狽した。

「そりゃ、受かるし、卒業もするけど……。先生、そのときいくつになる」

あと7年も先の話になってしまう。17歳の若者には永遠とほぼ同義の遠さだ。

「あら。年なんか関係ないと言ったのは、巌君じゃない」

史絵はにっこりと微笑んだ。

「ね。私、巌君が帝大を卒業するのを待っているわ」

『卒業するのを待っている』。その言葉を巌は、肯定的な言葉として受け取った。

そして、今年こそ一高に受かるべく、猛勉強を始めた。

史絵の部屋へは……無理やり接吻をしてしまったのが恥かしくて、しばらく行けなかったが、代わりに頻繁に……毎日のように文を出した。

ようやく、史絵のもとに顔を出せたのは、年始の挨拶の折だった。

史絵は「ずっと風邪が治らなくて」と小さく咳を繰り返していたが、熱で潤んだ瞳で巌の顔を懐かしそうに見つめた。

せっかくだから、と史絵は巌を近所の神社へ、お参りに連れ出した。

賽銭を投げると、二人拝殿で手を合わせる。

顔をあげた巌の横で史絵はまだ目をつむって神妙に手をあわせていた。

「先生、何祈ったの」

ようやく顔をあげた史絵に、巌は訊いた。

「『今年こそは巌君が一高に受かりますように』って」

「それって、僕が好きだってことだよね」

「またその話」

史絵はつんと横を向くと怒ったふりをした。

そんなようすは、十も年上の女とは思えない。

「今年こそは頑張りなさいよ」

だが史絵は、袂が翻るほど勢いよく振り返ると、強い口調で巌を戒めた。

口調が強すぎたのだろうか、やにわに咳こんだ。

「大丈夫？早く帰って寝ないと」

「大丈夫よ。もう治りがけなんだから。……ところでここの神社のおみくじはとても当たるって評判なのよ。ぜひ引きましょう」

史絵は明るく誘った。

史絵は巌の合格を祈りながら、巌は史絵と結ばれることを願いながら、おみくじを引いた。

「うわっ！」

おみくじを見た巌の顔が歪んだ。

「私は大吉だったわ……どうしたの？」

史絵は、固まってしまった巌と、そのおみくじを覗き込んだ。

……そこには凶、とあった。

「悪いおみくじは、杉の木に結べば『過ぎる』っていうんだから、杉を探しましょう」

史絵は巌を元気付けるように肩を叩いた。

「凶なんて、逆に少ないんだから、巌君、ツイてるわよ。きっと」

そう付け加えながらも、史絵は激しく咳き込んだ。

巌はそれで我に返った。おみくじを丸めて袂に突っ込むと

「もう、家に帰って寝ろよ。な」

と咳き込む史絵の背中をさすった。史絵は弱弱しく微笑んでうなづいた。

この帰り道が……今生の別れであることに巌はまだ気付いていなかった。

「そのときすでに……、いや、ずいぶん前から、先生の体は、労咳におかされていたのじゃ」

「労咳って結核のことだよな」

将でも、それぐらいの単語はわかる。

「そう。……戦後、特効薬が出来るまでは、不治の病じゃった。栄養が足りない時代、この病気に取り付かれると、ほぼ死ぬことが決まったも同然だった」

「ヒージー、先生が労咳だったことを知ってたの？」

「いや……」

巌は、瞼を閉じた。

夕方にさしかかり、蝉の声は一段と高くなったようだ。

カナカナカナカナ……という声も聞こえる。

「わしは、知らなかったんじゃ」

巌の声は、一生分の痛恨を吐露するがごとく、将と聡の心に響いた。

巌には二度目の挑戦である一高の入試が終わった。

出来栄えに確かな手ごたえを感じたとおり、巌は見事に合格した。

祖父母や父に報告するよりも前に、巌は史絵の部屋に向かって走り出していた。

実は、正月以来、史絵に会っていない。

史絵に会うと嬉しい反面、いつかの接吻を思い出して、ときめく鼓動を抑えられなくなる。

自分の中で蠢く狂おしいほどの激しい恋情に自分が制御できなくなる。

受験に臨んで、巌はそれを律するべく、自ら史絵に会うのを控えたのだ。

試験が終わってすぐに来てもよかったのだが、万一の不合格ということもある。

巌はひたすら合格発表を待ったのだ。

「先生ー！」

巌は、いつものように縁側の障子を勢いよく開けた。

火の気のない部屋は、曇り空の下、冷え冷えとしていた。

そして史絵の姿もなかった。

「先生？」

留守だろうか。それにしては、部屋がどことなくガランとしている。

巌は、壁に立てかけられたいつものちゃぶ台を畳の上に下ろすとどっかと座り込んだ。

合格を告げた時の史絵の顔を想像して、しばし、ひとりニヤつく巌だったが、さすがに寒くなってきた。

まだ3月、火鉢もない部屋は寒すぎるのだ。

巌は奥に入って火鉢を探そうとして……気付く。

道具があらかたなくなっている。

巌は部屋を見回した。

史絵のものは、すべてなくなっていた。

不吉な予感にかられた巌は半狂乱のように押入れや箪笥の引き出しなどを開けてまわった。

そして……文机の中に、手紙を見つけた。

『鷹枝君へ』と宛名が書いてある。

合格おめでとう。まだ私は君の合格を知りません。

だけど、きっと合格するでしょうから、先にお祝いの言葉を述べておきます。

急なことですが、私は、郷里の〇〇村に帰ることになりました。

お別れも言えずに、申し訳ないと思いますが、先生はいつまでも巌君を見守っています。

君の今後の栄光と幸せを祈っています。

体に気をつけて、今後も勉学に励んで下さい。

最後の日付には、おとついの日付が書いてあった。

急に帰郷するなんて、また嫁にでも行くんだろうか。

「先生ッ」

巌は、文を懐に押し込むと、縁側を駆け下りるようにして降りた。

そして、隣の、家主の家の戸を激しく叩く。

「もし……！すいません！……すいません！」

やっと開いた引き戸の向こうで、頬が垂れた家主夫人が巌を見上げた。

「あの……先生は？どうして、急に実家に帰られたんですか」

巌は挨拶もそこそこに、疑問をぶつける。

家主夫人は眉を思い切りゆがめて、吐き出すように答えた。

「肺病よ」

その言葉を言うだけで感染するような物言いだった。

「なんか、ずっと咳が止まらないから、病院で検査してもらうように勧めたの。

だって子供たちに教える仕事じゃない。そしたら……肺病だってことがわかって」

巌は、史絵が崖から突き落とされるのを見る心持だった。

「悪いけど、うちもそんな病人を置いておくわけにはいかないし……。

史絵ちゃんも、心得ていて、里のほうが空気がいいからって、すぐに学校を辞めて、荷物をまとめて出て行ったよ」

気がつくと巌は庭先に立ち尽くしていた。

脳裏には、苦しげに咳き込む史絵が、汽車にたった独りで乗り込むところが再現された。

暗い色合いの列車の中で、史絵の顔だけが青白く浮き出ている想像は……死出の旅を想像させた。

巌は不吉な想像を振り払うと、懐から文を取り出して手跡をたどる。

短い文面にあわただしさが出ているようだった。

それでも、最後に自分の里の住所がしたためてあった。

それに希望を託した巌は、ようやく庭先の桃が満開であることに気付く。

巌はさっそく合格したことを手紙に書いた。夏休みになったらぜひ遊びにいく、とも。

一高にあがった巌は、その学校でのことなどをまるで日記のように手紙に書いて史絵に送った。

医術に詳しい友人に訊いた、治療法なども書き添えた。

史絵からはときおり返事が戻ってきた。

それは来るたびに短く、手跡もかぼそくなっていて、容態の悪化を暗示するようだった。

巌は、毎日史絵の回復を祈った。

やがて、若葉の季節から、うっとおしい梅雨が過ぎ……力強い太陽の復活とともに待ちかねた夏休みがやってきた。

巌は汽車に乗って史絵の里を目指した。

史絵からの手紙は、梅雨のさなかにやってきたものを最後に途絶えている。

それからもう1ヶ月が経つ。

よほど容態が悪いのだろうか。

巌の心配は、汽車の中で走り出したいほど高まっていた。

汽車の窓からは、富山湾の蜃気楼がのったりと見えていたが、巌にはどうでもよかった。

一一早く史絵に会いたい。顔を見たい。

どんなに美しい景色よりも、今巌が見たいのは……会わずにはいられないのは史絵の顔だった。

史絵の里は、金沢から馬車で2時間ほど行った、ずいぶん田舎にあった。

巌は住所が書かれた手紙を懐に持っていたが、そんなものはなくても、苗字だけで御者は

「ああ、森村様の」

と勝手に馬車を走らせた。

元領主である史絵の実家は、農家より一段高いところに蔵を備えた立派な邸宅を構えていて、誰が見てもすぐにわかったのだ。

蝉の声と、夏の日差しがいっせいに降り注ぐような中、巌はそれを見上げた。

しかし……東京から一昼夜かけて、ようやくたどりついた巌を待っていたのは、史絵の位牌だった。

268◆夜の東海道線

史絵は、巌が来る10日前に亡くなったという。

森村の家の人は、はるばる東京から訪ねてきた史絵の教え子である巌に大変に親切にしてくれた。

……はずだが、巌はほとんど何も覚えていない。森村家には勧められて1泊した。

史絵が、巌からの手紙を一通も無くさずに大事にとっておいてくれたことと、

翌朝、墓参りへの道すがら、つゆ草が涙のような色の露をいっぱいにためていたことだけが印象に残っている。

「ワシは、位牌に線香をあげながら、騙されているような気さえしていた。先生の死があまりにも唐突すぎて信じられなかったんじゃ……」

当時の巌に自分を重ねた将は、思わず聡の横顔を見た。

生きてそこにいる聡をたしかめて、ホッとする。

聡も、当時の巌の気持ちを、その鋭敏な感受性をいっぱいにして想像しているのか、横から見たその目に涙がたまっているのがわかった。

「でも、ヒージー。先生の気持ちは結局、確かめられなかったんだ

ろ……」

それが一番哀しいと将は思った。

「直接はな。もしかしたらワシの一人相撲だったのかもしれん。だが、その後な……」

夏の終わりに、一人の男性が祖父の家に巌を訪ねてきた。

麻のスーツを着た３０歳ほどの男は、史絵の兄・慶介だと名乗った。史絵が巌の先生だった頃、帝大に行っていたというあの兄だ。

帝大に留まり、講師をしながら英文学の研究を行っているという慶介は、

「君が鷹枝巌くんか……」

と、初めて会うのに懐かしそうな顔で巌を見つめた。

慶介は、巌を近くのミルクホールに連れ出した。今でいうカフェである。

「妹は、結婚に失敗し、もう懲りたから、一人で生きていくのだ、とよく言っておりました」

コーヒーをすする慶介は、わずかに垂れた前髪の下の広い額あたりが、史絵によく似ていた。

史絵とは、互いに学問好きなこともあって、仲のいい兄妹だったという。

『僕にも、同じことをおっしゃっていました』

そういおうとした厳だが、慶介は厳をもう一度懐かしそうに見つめると、話を続けた。

「7月のはじめでしょうか。妹が危ないということで僕は、夏休みを繰り上げにして一度実家に帰ったのです……」

慶介が帰ったとき、史絵は思ったより元気だった。

梅雨のさなかだったが、慶介の帰りを歓迎するように晴れた。

青空に、むせるほどの草の香りが、濡れた地面から立ち上っていた。気温もあがって暑かったので、慶介は氷をかいて黒蜜をかけたものを史絵につくってやった。

それを匙でそっとすくいながら、史絵は嬉しそうに打ち明けたという。

『お兄様、私ね、教え子から求婚されてるのよ』

『奇特な子がいるもんだなあ。出戻りのお前を貰いたいなんて』

慶介は、軽口を叩いた。これくらいのことは、言い合える仲のよさだった。

『ねえ。そうでしょう』

史絵もくすっと笑った。そして軒の下に横たわる青い空を見上げた。

『でもねえ……。嬉しかったなぁ……。感激して溶けちまうかと思ったくらい』

空に語りかけるようにして、夢見るような妹の顔。こけた頬に浮き出た鎖骨は、いよいよ死期が迫っていることを物語っていたが、その瞳だけは天上にいるかのようだったという。

それを聞いた巌は、ついに涙をこぼした。

大の男が人前で、という理性はとっくに失われている。

森村家では辛くもこらえた巌だったが、もう限界だった。

史絵が自分の気持ちを喜んでいた……受け入れられていた、という喜び。

なのにその人は……自分のたった一人の女性は、この世にいないという悲しみ。

それは交互に激しく巌に押し寄せて、混じりあい……いつか悲しみ一色になった。

狂おしいほどの悲しみは、いつも涙となって巌を襲う。一度ほとばしり出ると止めどがなかった。

「結婚して、子に恵まれても……。８０年以上経った今も……、その悲しみは、ときおり不意打ちのように……来るんじゃ」

巌は最後にぽつりと言った。

夜の東海道線に将と聡は二人で乗っていた。

「ポトフ、すごく美味しかったね。……あゆみさんの店、こんど美智子にも教えてあげよう」

将の隣で、聡がつぶやく。向かいの窓は鏡となって、二人を映し出した。

それは説明次第で、恋人のようにも、姉弟にも、教師と生徒にも……見えるようだった。

夜９時すぎの列車は、人もまばらだが、将は用心のために、眼帯の上に薄いサングラスをかけている。

誰も見ていなかったら、肩に手をまわしてもっと近くに抱き寄せた

い。

とは、思うけれど。

ガタン、ゴトン……ガタタン、ゴトトン。

列車の揺れがときおり、隣り合う二人の肌をふいに触れ合わせる。

そんな触れ合いも悪くない。そんな時折のぬくもりが、今はたまらなく、いとおしい。

二人はぽつりぽつりと言葉を交わしながら、ただ隣り合っていた。

巌の悲しい恋の話が終わって、まもなく夕食の準備が整った。

あゆみが「うちの店の自慢」というだけあって、それは大変美味しいポトフだった。

悲恋話に少ししんみりした将も聡も、その滋味深い味とあゆみの明るい話術にかなり救われたところがある。

他にもリエットやらハムやらサラダ、デザートなど、ビストロ自慢の味を堪能して、将と聡は西嶋運転手に駅まで送ってもらったのだ。

「将、そしてあきらさん。森村先生の墓が見えるところに、わしの骨のカケラを埋めてくれる約束……頼んだぞ」

別れ際に巌は念を押した。

もうすっかり暗くなっていて、巌のまわりは蚊帳がつるされていた。行燈の光に照らされた巌の顔は彫が深く見えた。しゃべりすぎて少し疲れたのかもしれない。

「そんなのまだ先だろー」

と将は『もう』とばかりに、怒って見せた。が、もしかして寂しいのかも、と思い直し

「……仕事の都合つけて、すぐまた来るから。リハビリ頑張れよ」

と、付け加えた。

「あきらさん。将をお願いしますよ」

「はい……」

たった、それだけなのに……聡は西嶋さんが運転するシトロエンの中で涙をぬぐっていた。

「アキラ、泣くなよ。ヒージーはまだ大丈夫だから」

「うん……」

なのに、聡はまだ涙を流し続けていた。

死を予感した巌のことを悲しんでいるのだろうか。

それとも巌の悲恋の話に、何か自分の恋との共通項を感じてしまったのだろうか……。

……叶わなかった悲恋との共通項？とんでもない、とばかりに将は、聡の膝に置いた左手に手を伸ばすと、それをぎゅっと握り締めた。

自分たちの恋は、いずれ成就するのだ。今は……世間的に離れているけれど。

将はそれを体温で伝えようとしたのだ。

聡の左手は温かい将の手に包まれた。

と、そのとき、西嶋運転手が「将さま」と声をかけた。

将は少しビクッとして、

「何？」

と答える。

「弟がお世話させていただいております、島大悟くんのことですが……」

将はハッとした。

覚醒剤依存症で、矯正病院に入れられた大悟。西嶋の弟の隆弘が、そんな大悟の保護者を続行してくれるのか。……恐れつつも知りたかったことだ。

「弟夫妻は、矯正病院に会いに行ったそうです。ですが、まだ面会が出来ない状態だそうで……」

会いにいったということは、保護者を続行してくれるのか。

「心配だと思いますけれど、弟夫妻は、島君の更生を信じているし、それを支援する、と申しておりました。

……いちおうそれはお伝えしておかねばと思いまして」

「本当？西嶋さんの弟さん、大悟の保護者を続けてくれるの？」

将は思わず、前のシートにしがみつくようにした。

「もちろんです。無事更生できたら、養子にしたい気持ちは変わらない、ということでした」

「よかった……。本当に良かった」

将は前のシートに頭をくっつけるようにして、安堵した。

やっと涙が止まった聡も、そんな将を嬉しげに見つめた。

普通列車はあいかわらずゆっくりと夏の夜を進んでいる。

将は顔をあげて、向かいの窓に映った二人をもう一度見た。

……二人というより、聡の顔を見つめた。

車内の蛍光灯のせいか、少し青白く見えた。

ふいに……巌の話が将の脳裏に蘇り、それは不吉なことを想像させた。

もしも、聡が、先に逝ってしまったら。

「アキラ」

ふいに、将は傍らの聡を呼んだ。それはさっきから語り合っている声より少し大きめだった。

将を振り返った聡は、将のあまりに真剣な顔に驚く。

「ねえ、アキラ。貧血って、本当になんでもないよね」

「え、なんで？どうしたの？」

聡は目をまん丸く見開いた。

「心配なんだよ。検査とかしたの？」

「大丈夫だってば。ただの夏ばてなんだから」

「だから、検査はしたのかって聞いてるの」

将は鋭い瞳と強い口調で、聡を責めるように訊いた。

「したよ」

「本当に？」

執拗に訊き返す将に、聡は可笑しそうに

「本当だってば。……血もとったでしょ、頭のＣＴスキャンもとったし……どこも悪くなかったよ」

と笑いながら話した。

ちょうど、列車が小さな駅に着いて、向かいの座席に座っていた高校生らしきカップルが降りていった。

これで二人の向かいのシートには誰もいなくなった。

再び動き出した列車の揺れに身を任せながら、

「俺さ……ヒージーみたいなことになったら……、後を追うからな」

将はやや俯くと、少し苦しげに呟いた。

「そんなことになんか、絶対ならないわよ。……あたし健康なんだから。ちょっと今年は異常に暑いからバテたけど」

いつもの温かい低音で答えた聡は、そこまで言って、やや口を尖らせた。

「……将こそ、そんなに傷だらけになって……あたしすごく心配したわよ」

「ごめん」

思わず将は、体を起こして傍らの聡に目を走らせた。

「最初、腫れ上がった顔を見たときは、心臓が止まるかと思った……」

聡はそういうと、ゆっくり将に、頭をもたれた。

聡のほうから頭をもたれかけてくるなんて……将は、久方ぶりの甘い幸せを噛み締めた。

もしこの列車が、星もない宇宙の果てに二人を連れて行くにしても、こんな風に寄り添えるならきっと幸せだろう。

将はこっそりと、腕を後ろから聡の肩にまわすと、自分も聡のほうに寄りかかった。

聡の髪にほおずりをするかのように、体の側面をくっつける。

甘い香りが鼻をくすぐる。将は深呼吸するようにそれを吸い込んだ。

激しく吸い込みすぎて、ひびがはいった肋骨がちょっと痛んだほどだ。

向かいの窓には、これ以上ないほど幸せそうな恋人同士が映っていた。

しかし、二人が今から帰るのは、教師と生徒を演じなくてはならない東京の街だ。

甘く揺れる列車が、願わくばいつまでも着かないように……将と聡は、それぞれ祈っていた。

269◆快癒

翌月曜日、将の右手首の傷の回復は順調で、無事抜糸することができた。

顔のテープも取れ、その下の傷はおおむねきれいに回復していた。

足首の捻挫は、少々痛みが残り力が入りにくい感じがしたものの、ひきずるほどでもない。

これは今後は1ヶ月程度、温熱療法でじっくり治すしかないらしいが、

「スポーツ選手の役でもない限り、無理しなければ大丈夫ですよ」

と医師から太鼓判を押される。

ただ、捻挫したほうの足先と瞼が依然真っ黒なのが気になる。

「俺の足、腐ってんですか?」

将は冗談風に医師に訊いたが、実際そんな風に見える。

「ハハハ……。内出血が固まってこんな色になるんですよ。1ヶ月もすれば自然に取れますよ」

そういわれても、本当だろうか、と将は痛んだバナナの皮のような色をした、腫れぼったい足先を見つめた。

瞼も黒く染まったほうは、少々むくんだ感じだ。

「化粧で隠しても問題ないですよね」

付き添った武藤が訊いた。

「はい。外傷は回復してますから。かぶれない程度に」

武藤はホッと胸を撫で下ろした。

「……ああ、それと。鷹枝くん、君、左膝下に金具が入ってるだろ。あれ、そろそろ取った方がいいよ」

医師に指摘されて、将はスキーで折った左足のことを今、思い出した。

抜釘もやはり手術が必要で、数日の入院が必要とのことだった。

「よかった。ケガの回復が順調で。明日からのスケジュールをキャンセルしないで済んだわ」

武藤は車を運転しながら、ほっとしていた。

「明日から入れてるの？」

「当然でしょ。もうこれ以上は延ばせないって言われてたの。

脚本変更できなかった分の6回分の撮残しが残ってるし……。もうオンエアまで2週間切っちゃってるから、大変よ」

「抜釘は？」

「当分無理ね……。『ばくせん』の収録が終わったら、オフを入れましょう。

それより、明日からの現場、みんなにちゃんと頭を下げるのよ。ご迷惑かけましたって」

武藤は彼女にしては珍しい早口で説明した。

「それと」

ハンドルを切りながら武藤は続ける。

今日は、事務所で今後の打ち合わせと、化粧のリハーサルをやることになっているのだ。

瞼の痣は、できるだけドラマ以外のところでも隠したい。

それがうまくできるかどうかの実験をヘアメイクさんと共にやるのだ。

「進学の件だけど……。社長と話しあってみたんだけど……、一芸入試があるW大学を目指したらどうかしら」

進学したいと言ってみた将だが、その後いろいろなことがありすぎ

て、何も考えていなかった将だ。

どうかしら、と言われてもピンと来なかった。

たしかにW大なら名前もあるが……。

「できればね。秋まで連ドラのオファーを受けたいのよ。……結構いい役が来てるから。将『北の大地から』って知ってる？」

武藤は将にさる有名な脚本家によるドラマの名前を出した。

見たことはないけれど、知っている。

「はい。シローおじさんが出てくるやつでしょ」

その強烈なキャラクターはよく芸人にマネをされているので、オリジナルを見たことないのにわかる。

「そうそう。あれを手がけた脚本家の元倉さんって方が、1月期に北海道を舞台に新作をつくるんだけど。

準主役としてオファーが来てるの。……なんでも『ウルウル』が気に入ったらしいわ」

「ふーん。北海道かあ……」

修学旅行。聡と二人きりで夜を過ごしたニセコの避難所。将の脳裏にまっ白な吹雪の中の抱擁が蘇る。

昨日……東海道線の列車の中、寄りかかりあって、お互いのぬくもりを確かめ合った二人だが、夜遅い時間だというのに横浜あたりから、乗客がどっと乗り込んできた。

だから、二人は寄りかかるのを止めざるを得なかった。

幸い、眼帯の上からサングラスを掛けているのが幸いしたのか、黙って座っている顔面テープだらけの男が将だと、誰も気づかなかった。

幸せな二人を映し出していた窓も、賑やかに立つ乗客に隠れてしまっている。

隙間から、街の照り返しでピンク色がかった夜空に、光のアクセサリーをまとった高層ビルのシルエットが乱立し始めたのが見える。

いかにも恋が似合う夏の都会の夜なのに、二人は他人のように行儀よく列車に座るしかないのだ。

だけど……かすかに、腰が触れ合うだけになっても二人は離れたくなかった。

「北海道か……でも、遠いよね」

そのドラマに出るとしたら、聡と離れる日が増えるだろう。

今も、逢えない日ばかりだけれど、同じ東京にいるというのは大きい。

北海道と東京の距離に隔てられるのは……耐えがたい気がした。

「そうなのよ。でも元倉さんに見出された俳優は、必ず実力派で長く売れるわ。ほら、共演してる焼津さん。彼も元倉さんに掘り出された一人よ」

「ふーん……」

将の思考はあいかわらず、雪の中で聡と抱擁していた。

実力派……とても魅力的な響きではある。しかも、大野が尊敬しているという、教頭役の焼津を見つけ出した脚本家からの指名……。

そのドラマに出れば、年をとって、若いアイドルにバカにされる可能性が少しは減るのだろうか……。

そして、聡と結ばれる日は早まるのだろうか。

「もちろん、オーディションはあるけれど。……でも将、大学もいいけど、これはすごいチャンスよ」

武藤が、将の思考を後押しした。

結局将は、そのドラマのオーディションを受けることを承諾した。

8月を迎えた街は、突き刺さるようなガラス窓からの反射、暴力的なアスファルトからの照り返し、

そして重苦しいエアコンの放射熱で増幅される暑さに人々はうんざりしていた。

エアコンが利いた官房長官・鷹枝康三のオフィスでは、秘書の毛利とその部下が忙しく働いていた。

クール・ビズとはいっても、パソコン類が多いオフィスで、エアコンはフル稼働している。

そのとき、秘書の一人が、

「毛利さん、ちょっと……」

と立ち上がった。ネットをチェックしていた若手の男性である。きちんとスーツを着ている。

「ん？なんだ？」

原稿をチェックしていた毛利は、面倒くさそうにそっちへと歩いていった。

「これ……息子さんですよね」

若手男性秘書は、椅子から立ち上がったまま、屈んで画面を指差した。

そこには

『イケメン俳優ＳＹＯ（１８）ゲイ疑惑?謎の夜遊び』

という見出しの記事が、携帯で撮影したらしき画像と共に掲載されていた。

画像は、いずれも、はっきりと将と確認できるものばかりだった。

すべてあの、台風の日にクラブで撮影されたものだった。

毛利は、眉をゆがめて、上下の唇を口の中に噛みこむようにして、文面を読んだ。

内容もかなりマズかった。

ゲイ疑惑というのは、クラブで友人の島大悟と思われる男性を無理やり引っ張っていく写真から憶測されたのだろうが、

いつか週刊誌に掲載された中学時代の乱行のことなどがこと細かに解説されていた。

しかし、中でも一番まずいのは、ＳＹＯがさる大物政治家の息子である、と明言してあるところだ。

毛利は、顔をしかめると、

「まずいな」

と声に出して言った。そして

「ここの管理者に即刻削除するように申請してください。ごねたら、名誉毀損で訴えることも辞さないと言いなさい。

それから将くんの事務所に連絡。……私は、いちおう先生（康三）に報告しておきます」

若手秘書にキビキビと指示を出しながら自分の席に戻ると、どっかと座り、康三へメールを打った。

２７０◆夏の別れ１

殺人的な忙しさ、とはこのことだろうか。

火曜日から、将のスケジュールは早朝から深夜まで仕事でびっしりと埋まった。

７話だった予定の、将が中心になる８話の収録だけでも出番が多いのに、６話、７話の残り収録もある。

台本は休みの間に読んで覚えていたものの、細切れ度はさらにひどくなり、同じ場所と同じ役が揃う場面では、衣装だけ変えて７話と８話の同時進行というものもあり、混乱した。

そして、あいかわらず野外ロケが多いが、なにせ例年以上の猛暑である。

内出血の黒い瞼を隠すためのコンシーラーやドーランがすぐに汗で流れ落ちる。

その塗りなおしも大変だった。

それでも肌の色はなんとかメイクでごまかせたが、監督は、

「やっぱり、むくんでるね。目のあたりとか」

と撮ったばかりの画を見て言った。

それは将も武藤も感じていたことだった。

痣があるほうの瞼の腫れぼったさは、やはりメイクでは誤魔化せなかったのだ。

ちなみに手首の傷は抜糸したものの、まだ傷を隠すための肌色のテープを貼っている。

まだ今撮影している分がオンエアされているわけでもないのに、これらは、すぐにネットに書き込まれてしまった。

『顔がむくんでいるのは整形？』

『手首に傷があった。例の彼氏に振られて自殺未遂したのかなｗ』

もちろん将はそんなものを見る暇はない。

だが、事務所のスタッフは神経を尖らせた。

先日毛利が見つけた例の記事も、先に事務所で削除させようとしていたのだが、そこのサイトの管理人は出版社のようにバーター関係がないせいか強硬で

『確実に嘘だという証拠がない限り、削除はしないようにしています』

と突っぱねられたのだ。

それでも、毛利が手をまわして、専門の弁護士から裁判をちらつかせたことでようやく削除してくれた。

だが、将が大物政治家の息子であることは、ネット世界ではあっという間に広まり、誰の息子かということでもちきりになった。

……もちろん『大物』『その年齢に近い息子がいる』という条件だけで、鷹枝康三の名前は最有力とされた。

それを知った康三は頭を抱えた。

将が自分の息子であることが世間にバレるのは、もう少し時間が経って、将の過去の『やんちゃ』が薄れてからのほうが

……できれば、来年の総裁選のあとになるのが望ましかったからだ。

康三や裏方の苦労をよそに、将はエアコンをきかせた車の中でメイクを塗りなおしてもらいながら、今ごろ巌はどうしているかを考えていた。

あれから、仕事漬けになっているうちに、あっという間に1週間が経ってしまった。

暇を見つけて帰るといったけれど、暇などないも同然だった。

せいぜい、電話をするぐらいだが、そのたびにあゆみが出て

「巌さんは、お休みになっておられます」

と答えるばかりだった。

何でも、大磯に戻ってきた安心感なのか、それともやはり疲れがたまったのか、巌は1日の大半を眠ってすごしているというのだ。

「容態が悪いというわけではありませんのでご安心ください。脈拍も安定していますし……」

あゆみはそういったものの、将は心配だった。

だから休んでいた間にたまった仕事が一段落したその翌々日、夜11時に仕事が終わったのにもかかわらず、ミニを飛ばして将は大磯を訪れた。

次の日の仕事は正午からだから、午前中は巌の顔を見ることができる。

大磯に着いたのは、夜12時をすぎていたが、あゆみは起きて将の到着を待っていてくれた。

土と木が多いこのあたりは、東京のように夜も汗ばむような暑さがまとわりつくこともない。

将は襖を開けてそっと巌の部屋をのぞいたが、暗くて目の前の蚊帳ばかりが反射して巌の寝台はほとんど見えなかった。

ただ、耳をすますと、虫の声の中に幽かに寝息が聞こえた。

「将さん、お疲れでしょう。お風呂用意しましたから、お休みなさ

いませ……」

あゆみが囁くように背後で呼びかけた。

「ヒージーは、朝は何時に起きるの？」

「まちまちですけれど最近は……8時とか9時でしょうか。前のようにお早くお起きになることはないです」

以前、夏場なら朝5時には起きていた巌としては信じがたいことだ。

「それでも、土曜日の将さんのドラマは、お起きになってご覧になられていましたよ。よくお笑いになっていました」

あゆみは、だから大丈夫だ、と将にもう休むようにと促した。

翌日、疲れているのに将は7時前に起きてしまった。

寝巻きのまま、巌の寝室をのぞいたのだが、障子からの柔らかな朝の光りの中、巌はまだ眠っていた。

「あら将様、おはようございます」

朝食の支度を始めようとしたハルさんが、襖をのぞきこむ将に気付いて挨拶した。

「ヒージー、いつも遅いの？」

「ええ。最近のお目覚めは9時すぎですよ」

やはり、あゆみの言うとおりらしい。

「ハルさん。ヒージーのおかゆ、かまどで作っていい？……俺、火炊くから」

「将さま」

「な？……俺、着替えてくる」

小柄なハルさんは、真上を向くようにして将を見上げた。

巌がかまどで炊いたご飯を何より愛していることを知っている将は、自分がいるときぐらいそれをしてやりたいと思ったのだ。

将は着替えると、使わないまま積んである薪を鉈で細めに割った。

そして炊き口にしゃがみこみ、新聞紙にマッチで火をつけた。

夏の湿気を吸い込んだ薪は、なかなか乾かず、煙ばかりがもくもくと立ち込めたが、将は咽ながらも辛抱強く火を起こし続けた。

『最初は、木の皮の部分から燃やすんじゃ』

やっと赤い色で踊り始めた火のなかに子供の頃にならった巌の声が蘇る。

パリと東京、といった都会育ちの将に、火の起こし方を教えたのは巌だった。

火が燃えるのが面白くて次々と太い薪をくべようとする8歳の将をたしなめるように、巌はそう言った。

事実、将がくべた太い薪は、燃えずに火勢を弱めるばかりだった。

『空気が入るように、薪を組むんじゃ。湿気た薪は少し外側に置いて辛抱強く乾かして……そうじゃ』

18になった将は巧く火を起こすことができる。鉈だって思ったところに振り下ろせる。

それを教えてくれた巌は……もうすぐ逝ってしまうだろう。おそらく。

煙にむせて涙が出るフリをしながら、将はいつしか思い出に涙を流していた。

おかゆがようやく出来上がった。

「お起きになられましたよ」

土間の方の台所にいる将に、起きてきたあゆみが声をかけた。

将は、ハルさんが用意してくれた細かく刻んだぬか漬けや、みそ汁と共におかゆをお盆に載せて巌の部屋に入った。

「将か。……今朝は薪の匂いで目覚めた。おかげでいい目覚めだった」

巌は可動式ベッドに寄りかかったまま、将に微笑みかけた。

先週より、その姿はいちだんと小さく、声は弱弱しくなった気がした。

「寝坊になったな、ヒージー」

将は、そんな風に生命力が弱った巌を認めたくないから、いつも通りにふるまう。

将の後ろから入ってきたハルさんと西嶋は素早く、かつそっと将が座る食卓を準備している。

「年をとると……日いちにちと、赤ん坊に戻っていくようだ。眠っても眠っても、飽きない……。眠ると楽しい夢ばかりを見る」

「森村先生の夢？」

将は元気付けたくて、わざと茶化すように口にした。

「お前の夢も見るぞ。小さくて可愛かった頃のな」

巌はいつものように悪戯気な顔で笑って見せた。

「どうせ今はバカでかくて、憎たらしいけどな」

将が応酬してみせる向こう側であゆみが、将の炊いた粥をふうふうと冷まして「少し熱いですよ」と巌の口に近づけた。

粥を口に入れた巌は、その熱さが嬉しいとばかりに、はふはふと顔をほころばせた。

「……うまい。同じ粥でも、やはりかまどで炊いたものは違う。甘くてふっくらしておる」

巌は嬉しげに顔をくずした。

「将よ、ありがとう。本当にありがとう。今生のよい想い出じゃ……」

美味しい、美味しいと繰り返しながら粥を味わいつつも、巌の食欲は、将が知っているそれより目に見えて細くなっていた。

そして、食べ終わると再び眠り込んでしまった。

将はまだ、食事の途中だった。

「これでも今日はずいぶんお食べになったほうですよ。ねえ」

あゆみはハルさんを見た。ハルさんも、うなづいた。

「今日は、おかゆをぜんぶ召し上がりましたもの。最近は1口、2

口は残されますから……」

将は、満腹したのか気持ちよさそうに眠っている巌を見つめた。

本人がいったとおり、赤ん坊を思わせる無心な表情だった。

皺だらけの老人でありながら、わずかに残るまっ白な髪をはじめ、眉毛や睫も白くなったその顔は、どことなく無垢な趣があった。

巌はそのまま、将が東京へ発つときも起きなかった。

将は、まっ白なシーツと掛け布団にくるまれて赤ん坊のようにすやすやと眠る巌に

「じゃ、ヒージー、また来るよ」

と語りかけて、大磯を後にした。

それが……将が生きた巌を見た最後だった。

翌日の未明、巌は１００年の生涯を静かに終えたのだった。

271◆夏の別れ2

将は夢の中で8歳に戻っていた。

カンカン照りの中、釣竿を肩にかついで、巌のあとをついて歩いていた。

昔の人にしては長身な巌は90近いのに大股で、将は小走りにならなくてはならなかった。

そのたびに、将には長すぎる竿が、肩からずれて、そのたびにかつぎなおさなければならない。

――海はすぐ近くだ、って言ったのに、遠いじゃんか……。

将は、ちょっとふくれっつらになりながらも、懸命に長すぎる竿を持って、巌の背中を追いかけた。

『ヒージー、ちょっとゆっくり歩いてよ』

将の訴えなど聞こえないように、巌はスタスタと歩いていく。逆に早足になっていくようだ。

……と、ゴム草履と裸足の間に小さな砂利が入り込んだ。

将は竿を道端に置くと、ゴム草履を脱いで砂利を取るべくかがんだ。

下を向いた将は、地べたの草むらに咲く昼顔を見つけた。

朝顔のミニチュアのような花だが、夏の日差しに負けずに、けなげに咲いている。

淡いピンク色ではかなげだけれど、派手で大きい朝顔より、実は逞しい。

それに心惹かれた将は、思わずしゃがみこんで、それを見つめた。

手折ろうとした将は、背中に巌の声を聞いた。

『将。わしは行くぞ』

ハッとして振り返る。

振り返った将は、波の音に包まれた。

気がつくと、波打ち際にいた。

巌の姿はどこにも見えない。

『ヒージー』

将は、呼びかけながらあたりを見回した。

……いつのまにか草むらも、昼顔も、釣竿もなくなっていた。

足元を波が容赦なく濡らす。

こんなに何もない海岸は初めてだった。

将の目の前に広がるのはただ水平線とその上に金色に輝く太陽。
背後にはサハラ砂漠のような砂丘が、太陽の色に染まっていた。
『ヒージー、どこ』
将はどこまでも続く水平線と砂浜に向かって呼びかける。
返事はない。
波の音と……立ち木など何もないのに、ジージー、ジワジワと電子音のような蝉の音が煩い。
『ヒージー』
将はたった一人で取残されてしまった。
そんな将を、西日が包む……。
「……ヒージー！」
自分の叫び声で将は目覚めた。
目覚めの瞬間、ふいに落下したような感覚に襲われる。

もう明るいらしい。カーテンから白い光りが漏れている。

一瞬自分がどこにいるのかわからなくて……やっと、M区の寮にいることを把握する。

夢の中で、あんなにうるさく鳴いていた蝉の声が、なぜかピタリと止んでいる。

将は低い天井を見て、ため息をついた。

それを合図にするかのように、蝉が再び鳴き始めた。

携帯をあけて時間を見ると、ちょうど7時になるところだった。

将は、まだ落下したときの戦慄が残っているような体を無理やり起こすと窓辺に寄ってカーテンを開ける。

視線が呼ばれるように西の空に引き寄せられる。

１４階なのに、空は失敗したテトリスのような形でしか見えない。

そのとき、ベッドの上で携帯が鳴った。

武藤にしては早すぎる時間……今日は８時３０分に迎えに来る、と言っていたはずだ。

胸騒ぎを抑えながら将は、ベッドに置きっぱなしにした携帯を開いた。

『自宅』という表示。

将は覚悟をごくり、と飲み干した。そしてそれを胃まで落とし込むと、通話ボタンを押す。

「将か」

電話は父・康三だった。

覚悟したはずなのに、心臓が震え始める。将は立っていられなくなり、そのままベッドに腰掛ける。

「ああ。何」

短く答えるのでせいいっぱいだ。

「大おじいさまが、亡くなった」

康三の口調は、落ち着いたものだった。

――やっぱり。

「朝、ベッドに入ったまま、亡くなっているのをあゆみさんが見つけたそうだ。……おそらく眠っている間に心臓発作が起きたんだろう」

「うん」

将は、何も考えられなくて、短く返事をするしかない。

「これから、すぐ大磯へ向かう。お前は……仕事か」

仕事、という言葉でようやく凍った思考の一部が動き出す。

今週は、将をメインにした8話の撮りのクライマックスになっている。先週ほどではないが、スケジュールは詰まっていた。

「うん」

将は一言で、仕事が詰まっていることを伝えた。

「そうか。じゃあ、一緒に行くのは無理だな」

康三は淡々と続ける。

「葬儀のスケジュールはこれから決めないといけない。葬儀会場を東京にするか、大磯にするか検討しないといけないし」

「オヤジ」

将は巌の死を告げられて初めて、あいづち以外の言葉を口にした。

「……大磯から送り出してやれよ。ヒージーのうちはあそこなんだから。あんなに帰りたがっていたんだから」

巌がことのほか愛していた……命を賭けても帰りたがった、死に場所に決めた、大磯の邸宅。巌の魂を送り出すのに、他の場所はありえないだろう……。

「……そうだな。その方向で検討しよう」

康三は、将の言うことを静かに受け容れるようだった。

最近では……いや、将の生きてきた１８年の中でも、それはとても珍しいことだった。

「じゃあ、また連絡する。お前の事務所にも、私から連絡をいれようか？」

「……いいよ。自分で伝えられるよ。オヤジも忙しいんだろ」

珍しく、自分に気を遣う父親が面映くて、将はそれをそっくりと返してみた。

「大丈夫だ。夏休みだからな……私用で国政に穴をあけるな、とつねづね言っていた大おじい様らしい」

そう、今日は８月１４日、夏期休暇中である。

まるで、夏休みになるのを待っていたかのようなタイミングで、巌は逝ったのだ。

「じゃあ、また連絡する。お前は……つらいだろうが、仕事はしっかりこなせ」

「わかってる」

電話が切れてしばらく、将は、すべてのスイッチが切れたようになってしまった。

272◆夏の別れ3

将のスイッチがどうにか入ったのは、武藤からの電話が入ってからだ。

康三からの電話が切れてから、今までの間、どうしていたかさっぱりわからない。

もしかしたら、血流まで止まっていたのかも、と思ってしまうほど、将は微動だにしていなかった。

「ハイ……、起きてます。……わかりました」

何もなかったように答える自分。

本当は、どうあるべきなのか、わからない。

ヒージーが亡くなった……という事実の受け止め方がわからない。

悲しい？悲しいにきまってる。だけど、なぜ涙がでないのだろう。

だが、それを考えている暇はない。

将は現実を重視すべく、感情をひとまず置いといて、行動に移す。

巌のひ孫の鷹枝将ではなく、俳優のＳＹＯを演じなくてはならない。

将は現実感のない現実への襖をすべく、シャワーを浴びた。

将は、車の中で、武藤にそれを告げた。

「……そう。あなたのひいおじいさま、といったら大臣か何かよね」

「うん。文部大臣、外務大臣とかいろいろやってたと思う」

将は、武藤がつくってくれた朝食のサンドイッチを食べながら淡々と答えた。

武藤のサンドイッチはあいかわらず美味しい、と感じている。

だから、大丈夫だろう、と将は思った。悲しみに飲まれないで、ちゃんと仕事ができる。

「じゃあ、葬儀はすぐにはないわよね。1週間後ぐらいかしら」

武藤は、いつごろ葬儀があるかを予想するために、それを質問したというのがようやくわかる。

「オヤジが連絡するっていってたよ」

「……そのようすだと、仕事のほうは大丈夫そうね」

武藤はバックミラーから将をいたわる瞳を見せた。

彼女には、前に、将が8歳のとき1年間大磯の巌の家に預けられて

いたことを話してある。

だから、おとついの夜中、ミニで大磯に行くという将を止めなかったのだ。

「たりまえじゃん」

将は笑顔をつくった。

「お葬式には出られるように、スケジュールを調整するから……。つらいと思うけど、頑張ってね」

「うん。ありがとう」

そういう武藤の方がよほど辛い顔をしている、と将は思った。

将は実際のところ、まだ悲しみが実感できていないのだ。

大磯に行けば、まだ『こりゃ』と目を剥く巌の姿がみられそうな気さえしている。

「ＳＹＯくん、今日気合入ってない？」

エアコンのきいたロケバスの中。昼のロケ弁を食べながら大野が言った。

「そっかな」

そう答えつつ、いつもより演技に集中していると、将も自覚している。

目の前の現実にどっぷり浸からないと、ぼうっとしてしまうからだ。

瞼の黒い痣は、新陳代謝が激しいせいか、ここ1週間でかなり薄くなった。

今日は普通のドーランで違和感がないほどまで快復している。

「そういや、ＳＹＯは、元倉亮のドラマに出るんだって？」

四之宮が言った。

将と仲良くなったせいか、四之宮は他の共演者にも溶け込むようになっていた。

話してみると、そんなにお高いやつでもないし、先輩風も吹かせないということがわかって、不良生徒役5人の息は最近ぴったり合っているのだった。

「いや、まだ決まったわけじゃないっすよ。オーディションあるし」

「やー、オーディションっていっても、形だけでしょ」

四之宮によると、いちおう局や制作会社の意向でオーディションはやるものの、元倉氏の直指名ならほぼ決まりだということだった。

「へー、すごいな。焼津さんもあのひとのドラマからブレイクしたらしいし……」

大野が羨ましそうに言った。

「でもさ、すっごく拘束されるらしいよ。スペシャルに1年かけて撮影するくらいだから。

『北の大地から』に出ていた××さんによると、雪の上に足跡つけるだけのためにわざわざ北海道に呼ばれたらしいから」

「それマジ？」

「マジマジ」

そんな風に同じ年頃の共演者たちと話していると、今朝の知らせは夢だったのかとさえ錯覚しそうになる。

「じゃ、リハーサルいきまーす！」

ＡＤに呼ばれて将たちはロケバスから川原に出た。

川原に出たとたん、焼けつくような陽射しが照りつけた。将はふと空を見上げた。

大磯より淡い空の色の下、流れ行く川も、川の向こうに霞むビル群も、いつもと変わりないのに、巌はこの世にいない。

自分を愛してくれたものが……一人この世から消えたのに、目に見える世界はまるでいつもと同じなのだった。

今日も、仕事は夜遅くまでかかった。

武藤に送ってもらって、M区の寮についたとき、将は一気に力が抜けてベッドに倒れこんだ。

今日、1日いかに張り詰めていたかがわかった。

シャワーを浴びるのも大儀に感じるほどの疲れは、朝の出来事を遠い昔のことのようにしてしまっている。

将は、ベッドに寝転がったまま、無意識に携帯をチェックした。

10時頃、聡からのメールが着ていた。

将は思わず起き上がった。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

テレビで厳おじいさまが亡くなったことを知りました。

何て言ったらいいのかわからないけれど、ご冥福を祈ります。

聡

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

将は、儀礼的なそれだけでは飽きたらず、聡に電話をかけた。

１２時すぎていたけれど、聡はすぐに出た。

「将？」

大磯以来、『鷹枝くん』が将に戻ってしまっている。それが将には嬉しい。

「うん……。あのさ、ヒージーのこと、テレビでやってたの？」

まるでたった今メールの内容を話していたように、将は続けた。

聡は、違和感なく、それに答える。まるで、ずっと二人で会話をしていたかのように。

「やってたよ。報道ステーションで見た」

「そっか……」

政界の長老で、相談役。２０世紀の生き証人。巌はそんな風に紹介されたらしい。

昔の映像も放送されたという。

「若い頃の顔が、将にそっくりだったよ」

「昔の人にしては、イケメンだろ」

将は、おどけた。

「そうね」

聡は低く笑いながら相槌を打った。

こうして聡と電波が繋がっていると思うだけで、心が温かくなってくる。

「ところで将、今どこ？大磯？」

「ううん。M区の寮」

「そっか、仕事、か。そうだよね……」

芸能界にいたら、肉親が死んだとしてもすぐに駆けつけられないのだ。それは聡も知っている。

「うん。アキラは萩？」

こないだ東海道線の中で、お盆前で補習が終わったら、萩に帰るかもと話していたからだ。

「ううん。帰ってない……。疲れちゃうかなと思って」

夏バテで貧血気味だったから、自重したのだという。

「じゃ、ずっとこっちにいるんだ」

将は、ほっとした。じかに逢えないにしても、聡と距離が離れてしまうのは寂しい。

「うん。いるよ。実家はお正月に帰ったしね」

「……逢いたいな」

将の口から、まるで吐息のように、ごく自然に思ったままが出た。

今、聡に逢いたい。顔が見たい。ぬくもりに触れたい。

小さな願いは芽生えた途端に、激しく将の全身を走りぬけて、心に小さな渦巻きを残した。

「……将、大丈夫？」

聡は、その一言から、将の気持ちの深いところに発生した渦巻きを察したようだ。

「なにが？」

それに自分自身でも気づいていない将は問い返した。

「大おじいさまのこと……」

聡は遠慮がちにそれを口にした。

まだ今朝逝ったばかり。悲しみはまだ心に痛々しい創傷となって、きっと乾いていないと聡は思ったのだ。

「……うん。大丈夫、だよ」

努めて明るく答えながらも、将の中で、堰き止めていたものがグラリと動いた。

動いた途端、何かがいっせいに流れ始めて……胸を熱いものがこみ上げてくる。

「あたしも、できればお葬式、顔出そうと思うの……迷惑じゃない？」

聡のほうは、将の明るい口調を信じたらしい。次の話題に移っている。

だが将の目からはついに涙があふれ始めてしまった。

それを声音に出さないように、かすれてしまわないように、苦心する。

「迷惑じゃないよ。俺のこと頼まれてただろ……」

自ら口にしたあのときのことが、将の脳裏に、たった今あったことのように鮮やかに蘇る。

蘇った記憶は、涙をとめどないものに変えてしまった。

あとから、あとから流れ出てきては、顎を伝ってぽたぽたと落ちていく。

「聞いてたんだ。……ふふ」

聡は電話のこちらの将の様子にまったく気付いていないらしい。

「アキラ、今泣いてるだろ」

自分の涙まみれを誤魔化すように、聡が泣いていることを言い当てた。

根拠は何もない。

だけど、自分がこれだけ涙があふれている状況、当事者で涙もろい聡が泣いていないわけはない。

将はこみ上げる熱い感情で圧迫されたような脳で、確信していた。

「……わかった？いろいろ思い出しちゃって。つい最近でしょ……」

そのとたん、電話の向こう側で、ぐしゅん、と鼻をすすりあげる音が聞こえた。

将のあてずっぽうは当たった。

聡も泣いているんだ、という回答を飲み込んだら、腹の底から、発作のように嗚咽がこみ上げてきた。

「でもさ……、お父様とお母様が変に思うんじゃないかしら。……将？」

聡の涙声の問いかけに、将はもう答えられない。

将は、聡の声のする携帯を握り締めたまま、ベッドにつっぷして、声もなく全身を震わせて嗚咽していた。

聡はそのまま、携帯を切らなかった。ただ……自らも涙声で将の名前をときおり呼びかけていた。

273◆夏の別れ4

巖の通夜は盆明けの19日、葬儀は翌20日に決まったことが翌日の朝刊で告知された。

マネージャーの武藤は、将の20日のスケジュールをあけるために、再び忙しくあちこちと連絡を取り合って調整に奔走することになった。

ちなみに『ばくせん2』の最終回の撮りは、将が登場する部分は8月27日で終了する。

だが、9月に入ってすぐに元倉亮の新作の撮りが始まるという。

「それ1月期って言ってなかったっけ?」

「ストーリーが夏の終わりから始まるんですって。通常のドラマのスケジュールで行くと、雪景色しか撮れなくなっちゃうから」

「ふーん」

将は、先日のオーディションで会った元倉氏を思い出した。

四之宮の言ったとおり、オーディションというよりは、面談に近かった。

『撮影中は、だいたい月の半分くらいは、ロケ地に滞在することになります』

監督が説明する横で、元倉氏は始終にこやかに将を見つめていた。

そしてこんなことを言ったのだ。

『ＳＹＯくん。君、過去に後ろ暗いことがあるだろ?』

将は、あのことを言い当てられた気がしてギョッとした。

元倉氏の視線は、にこやかな表情とはうらはらに鋭くて、将は逃げられない、と思った。だから素直に

『はい』

と答えてしまった。

元倉氏は、まっすぐに答える将を見て、何度もうなづきながら、くっくっと笑った。

そして

『いいよ。君さ……。自分でも気付いていないだろ。すごいコントラストが同居してるんだよ』

と笑いながら将を指差して、指摘を始めた。

明るさと暗さ。優しさと冷酷さ。育ちのよさと野生味。素直さと他人への疑心暗鬼。そして正義感とそれを裏切る過去……。

そんなことを元倉は挙げて

『いいかい。今度の峻という役は、君に極めて近い役どころだ。同じ年代の役者で彼を的確に理解できる者はいないだろう』

シナリオの他に、分厚い設定資料を将に渡した。

何でもドラマに出てくる部分以外の、『峻』の生い立ちが書いてあるらしかった。

将は、分厚いそれを一晩で読んでしまった。

巌の死を思い出さないために……思い出すとぐちゃぐちゃになるまで泣いてしまうから……将はできるだけ空白の時間をつくらないようにしていた。

聡と電話した晩から、悲しみは氷河が一気に解けたように、ことあるごとに将の全身を襲うようになっていた。

『何が悲しい』という理屈ぬきで、体が震えだしてしまう。

熱い何かが腹の底から、脳を圧迫するように突き上げて、涙が押し出される。

そうならないように、将は一人でいるときも、思考に空白を作らないようにしていたのだ。

設定資料を読んだのもその一環ではあったが、そこにはドラマにはまったく出てこない、『峻』の家庭環境や、過去の女性関係その他もろもろが書いてあった。

『峻』自体のストーリーとして十分面白く、将を引き込ませてくれ

て、その間は悲しみを思い出さずに済んだのだ。

「２８日からは６日間、オフにしてあるから、その間に足の抜釘手術をするように手配したわ。手術は２９日の午後からで、入院は３１日までだから」

そこまで話したところで、武藤の携帯が鳴った。

事務所の会議室で、今後のスケジュールについて、打ち合わせをしているところだ。

「……ハイ。ダイヤモンド・ダストの武藤です。……こちらこそお世話になっております。はい。あさっての件ですよね」

あさって、という言葉で将はストローでジュースを吸い込んでいた顔をあげた。

あさっては巌の葬儀の日で、オフになっているはずだ。ということは、実家関係者からの電話だということになる。

「ええっ？ちょっと待って下さい」

武藤が声を荒げたので将は、何事かとその顔を見た。

しかし、武藤は将に背を向けると、会議室を出ていってしまった。

将は、追って立ち上がるとドアに耳をそばだてた。

どうやら武藤はドアの外で話しているらしい。

「どうしてですか」

「そうですけど、そういう約束でしたけど……」

「でも、将くんにとって大事な方の葬儀じゃないですか」

「ひどくないですか」

という声が聞こえてくる。

その声は、最初は抗議の口調だったのが、だんだん悲痛な響きが混じってくるようだった。

どうやら実家の者から、将にとって嫌な知らせがもたらされたらしい。

もともと実家に対して、嫌なイメージがほとんどである将は、

それほど心配もせずに、ドアから離れると元の椅子に座って、ストローで残ったジュースを音を立てて吸い込んだ。

まもなく、武藤が部屋に入ってきた。ドアを閉めるなり、ため息を深くつく。

「どーしたの？」

将は、椅子に寄り掛かるとできるだけ陽気に、問い掛けた。

武藤は、将の前の椅子に、腰を落とすと机に肘をついて、またため息をついた。

いつもクールでしゃきっとしている武藤がこんな様子を見せるのは珍しい。

「電話、誰からだったン？」

将はストローを上下の唇で挟んだユニークな表情で訊いた。

「毛利さん」

武藤は眉根を寄せたまま呟いた。

その名前を聞くだけで、ロクな知らせじゃないな、と将には予想が出来た。

「毛利、何て？」

「それがね……あさってのお葬式、来なくていいって」

「へ？」

「あなたの身元がばれるから、来たら困るって……」

将は口をあけたまま、言葉を失った。ストローが空のプラスチックのコップをそれて床に落ちた。

「……なんだよ、それ」

何でも、葬儀当日は政界関係者や、ＴＶや新聞社、週刊誌までマスコミが多く訪れる可能性があるという。

そんなところに、顔が売れ始めたイケメン俳優のＳＹＯが顔を出すと、

康三がその父親であることを世間に公表してしまうことになるから、葬儀への参列を控えてくれ、という要請だった。

「たしかに、あなたの芸能界デビューは、身元をあかさないのが条件で許可していただいたわ……でも、ひどい」

将もまた、机に肘をついて、額を右手で支えた。自分の頭蓋骨がいっそう重く感じる。

この数日、悲しみを思い出さないようにして頑張ってきたのは……仕事を片付けて、せめて葬儀には出たい、巌と最期の別れに出たい、という目標があったからだった。

大磯に駆けつけることもならず……それすらもかなわないのか。

「……俺、ヒージーの骨を拾わないといけないんだよ。ヒージーと……約束してるんだ」

将は机に向かって、呟いた。

巌の骨のかけらを、森村先生の墓が見える場所に埋めてほしい。

将と聡に託した、最後の願い。

それを遂げるために将は、巌の骨を拾わなくてはならない……。

武藤は少し顎をあげると、俯く将を見つめた。

悲しげに丸まった、広い背中が武藤の胸をついた。

武藤は立ち上がると、将のわきに立って肩に手を置いた。

「将、心配しないでいいわ。ひいおじいさまの葬儀には私が必ず連れて行ってあげる……」

「武藤さん」

将は傍らに立つ武藤の顔を見上げた。

武藤は、将の傍らにしゃがみこむと力強く微笑み、肩を叩いた。

「一番可愛がっていたひ孫が、送り出せないなんて、絶対にありえないもの……。私がなんとか説得するわ。……大丈夫よ、行ってしまえばこっちのものよ」

274◆夏の別れ5

葬儀当日もよく晴れた。

将は、朝から事務所の若手社員の運転する車に乗って、喪服を着た武藤と共に大磯の邸宅を目指していた。

将は高校生だから、本来は制服でもかまわないのだろうが、武藤が喪服の黒のスーツを用意してくれたのでそれを着ている。

幸い、将の顔の痣はこの日までにすっかりなくなった。

足のほうも、わずかな違和感とつま先に黒い内出血が残るものの、むくみもひき、ほとんど支障はない。

スモークの後部座席からの景色は、わずかに青みがかって見える。

将は、夏の太陽の下、きらめく太平洋の水平線を車窓から見つめていた。

世界は巌を失っても、何1つ変わらないように見える。

だが……将の世界では、将を愛した数少ない人間が一人減り、また巌が生きた政治の世界では貴重な長老を失った。

昨日行われた通夜では、焼香をと訪れる大勢の人がひきもきらなかったという。

そうやって、悼む人々は、巌がたしかにこの世にいた証である。

人は……ただ生きているだけではない。

人の中に生きている。人の存在は、他人とのかかわりのなかで初めて意味を持つ。将は今そんなことを考えていた。

将は……世界は1つであって1つではないのでは、と仮定してみる。

それぞれの人の中に、社会の中に、1つずつ世界があるとしたら。

例えばドラマのように。

どれだけ多くの世界の中に登場できるのか。

また、誰かの世界で重要な存在に……主要人物になれるか。

それが、人の生きた証になるのではないだろうか。

将にとって巌は、まさに重要な人物だった。

巌は、また将という個人だけでなく、国家という単位の中でも必要とされた。

そういう意味でも偉大な人物だった。

自分は誰かの重要な人物になりえるのだろうか……そう考えた将は、自然に聡を思い出す。

聡の中で……聡の世界の中で、将の世界の中の聡のように、在ることができれば。

それこそ将が生きている証だろう。

いつもと変わらない太平洋を見つめながら、将の思考は、人の生の意味、自分の中の聡、自分の存在を順番にめぐっていた。

巌の邸宅の近辺から、そろそろ渋滞が始まっていた。

参列者の多くが東京から参列するうえに、重要人物が多いのだ。ゆえに多くが車でやってくる。

それに、マスコミもかなり来ているようだ。数こそそう多くないがテレビカメラも見え隠れしている。

渋滞する車を囲むように、交通整理をする警察やＳＰらしき黒服がうろうろしている。

彼らは、まるで検問のように運転席の窓を開けさせて、誰が乗っているのかを質問している。

「おそらくテロ対策でしょうね。今日は要人が多いから」

将の車を運転する、事務所の若手社員がつぶやいた。

将たちも質問されたが、そこの関門は難なく通過できた。

巌の邸宅の前の、大木が茂る細い田舎道は、いつもの静かな趣は消えて、車がずらりと並んでいた。

あまりの騒がしさに、いつもは祭典のような蝉の声が、なりをひそめてしまっている。

狭い道なので一方通行にし、門のところで参列者だけ下ろし、運転手は近くの小学校の校庭に車を止めることになっているようだ。

足腰もおぼつかない年寄りの参列者が多いので、降りるのにやたら時間がかかるのと、駐車場になっている小学校の場所の説明で車の進みは遅い。

将と武藤は、目立たないよう、門の手前、土間の台所がある裏門で車を素早く降りた。

そのまま裏木戸の中に入ってしまおうとしたとき、前に立ちはだかる黒いスーツがいた。

毛利だ。

「……困りますね」

小柄な毛利は、小さい声で言うと、銀縁の眼鏡の下から将を見上げた。

将は挑戦的な気分で、毛利を睨み付けた。

しかし、さすがにマスコミもいるこの場での押し問答は、目立ちす

ぎると毛利もわかっているのか、

「とりあえず、こちらへどうぞ」

と、隣のハルさんの家に将と武藤を案内した。

「まあ、まあ、おぼっちゃま……」

自宅と巌の邸宅の間を往復して、下働きをしていたハルさんは、居間に座る将の姿を見ると涙をこぼした。

「御前もお待ちかねですよ。今日はお忙しいのによくおいでになりました……」

動きづらいのか、着物ではなく、黒いワンピースの上に白い割烹着を着ている。

「巌様は、本当に安らかなお顔をされていました……」

ハルさんは巌の最期のようすを話してくれた。

亡くなる前の日も、いつも通りにあゆみに体をぬぐってもらい、いたって普通に食事をし、そのまま休んだという。

そして朝、起きたあゆみさんが様子を見に行ったら、ベッドの中でそのまま冷たくなっていたという。

医師によると死亡推定時刻は、午前４時頃とのことだった。

『昨日の粥は本当に絶品じゃった。将のやつ、また来ないかのう』

と食事に際して言ったのが最期のことばだったという。

将は、もう耐えられなかった。

さっきまでの挑戦的な緊張感が一気に瓦解した反動でゆるんだ全身の血管に、怒涛のように感情が流れ始めた。

歯こそ噛み締めていたが、声にできない分まで涙があふれはじめた。

悲しい、と意識をするような思考力はない。

ただ、生理的に涙があふれてきてしまうこの状況……将は全身を支配しそうな感情にかろうじて抗って声を出すのをこらえた。

肩が震え始めた将に気付いて武藤が、無言でハンカチを差し出す。

そこへ。

目の前にいたハルさんが、ハッとして将の後ろを見ると、ひれ伏した。

振り返ると、毛利を伴った康三がこちらに向かって歩いてくるところだった。

「来るな、と言っただろう」

康三は座っている将を見下ろした。将は涙を手の甲でぐいとぬぐった。

何も答えられないその瞳は、悲しみの色から、瞬時に怒りに変わった。

しかし、何と言い返せばいいのか、悲しみに膨張してしまったような脳細胞は巧く働かない。

将は唇を震わせて康三を睨みつけるしかなかった。

「康三様……失礼ですが……あんまりじゃありませんか」

ハルさんが、思わず涙声のまま康三に抗議する。

「申し訳ありませんが」

それでも康三は一応、ハルさんに礼儀はつくしつつ、突っぱねる。

「鷹枝家の問題です。口を挟んでいただくにはおよびません……それに武藤さん。今日は来ないように、とご連絡さしあげたはずでしょう」

矛先は武藤に向かった。

武藤は座ったまま、一応深々と礼をすると、深く息を吸い込んで答えた。

「お言葉ですけれど……将は……将さんは子供の頃、故人さまに預けられていたこともあって可愛がられていたと聞いております。ゆかりの深い親族の葬儀に出席するのは当然だと私が判断したのです」

「ですが」

そこへ毛利が口を挟んだ。

「御社とは、将君の身元を明かさないことを条件に、契約したんですよ。

……この状況で葬儀に出席させるというのは、立派な契約違反ではないですか」

『契約違反』を持ち出されて、武藤は押し黙った。

「……とにかく、今日はお帰りください」

康三は、丁寧な口調ながら冷酷な言葉を、武藤と将に投げかけると、踵を返そうとした。

「待って下さい。一般の参列者としてでもだめでしょうか」

武藤はその背中に向かって叫ぶように訴えた。

康三はゆっくりと振り返った。

「……御社の手腕でしょうか。今では将も、立派に世間に顔が知れるようになっています。

……一般の参列者に置いても、目立ちすぎてしまうでしょう」

静かながら、とにかく将を葬儀に出席させないという決意は固いよ

うだった。

将は、いつしか睨むのをやめて俯いて、畳の目を見ていた。

――ごめん。ヒージー……。約束守れないや。

畳に、巌の在りし日の姿が浮かび上がってきた。俯いた将の目に再び涙が盛り上がってきたそのとき。

「あなた。何という言いようですか」

と鋭い女の声が聞こえた。

顔をあげた将の瞳に、義母の純代の姿が映った。

この暑い中、きっちりと喪服を着けている。

「そんな酷いことを実の息子に向かってお言いになるなんて、あなたは人として恥かしくないんですか」

「純代……」

従順な妻からの思わぬ反撃に、康三はあきらかに狼狽していた。

毛利は、康三の陰に隠れるように一歩奥に下がった。

「それに将は、うちの跡取じゃないですか。跡取が葬儀に参列しないなんて、それこそ道理にあってません」

純代は静かに、しかし威厳を持って、ずい、と進んでくる。

意外な出来事に、将の涙はひっこんでしまった。

康三も毛利も、のけぞるような姿勢になった。

「しかし、将の身元が世間に……」

「身元なんて、隠したっていずれ知れるものでしょう！」

純代は二人に向かって一喝した。凛とした声が、家中に響き渡った。

二人は黙り込むしかなかった。純代は将を振り返ると、そこに静かに正座した。

その立居振舞は、さすがに名門・岸田家の息女だけあり、無駄なく、かつ、たおやかな動きだった。

まず武藤に、両手を揃えて深々と礼をする。そして、将に

「将、忙しいのによくぞ来てくれました……。大おじいさまも、お喜びになるわ。さあ、一緒に参りましょう」

純代は将にむかって膝を進めると、一緒に立ち上がるように促した。

「あちらで孝太も待っているわ」

将は、わけがわからないまま頷くと、純代と一緒に立ち上がった。

康三は、目をパチパチさせながら、自分の目の前を通り過ぎていく、純代とその後に従いていく将を見送った。

「御前のおぼしめしです……」

ハルさんは小さく呟くと、数珠を顔の前にあげて拝んだ。

275◆夏の別れ6

さすがにＴＶカメラなどマスコミがたむろしている表門からは入るわけにいかず、将と純代は、勝手口から巌の邸宅に入った。

台所から、廊下を通って広間に通される。

祭壇は、すべての襖、障子を取り払った広間に作られ、巌の棺はその正面に遺影とともに安置されていた。

すでに前のほうに座っていた孝太が振り返って、将に気付いて「あ」という顔をした。

さすがに場をわきまえているだけあり、大声で呼んだり笑いかけたりはしない。ただ少しだけ嬉しそうな目をしただけだ。

棺の方に案内される将を見て、表にいるマスコミ関係者が気付いて囁きあいはじめた。

「おい……あれＳＹＯじゃないのか」

さすがに、夏の日差しで目が眩むような外から見ると、屋内は真っ暗も同然で、彼らは必死で目をこらした。

「暗くて見えないぞ。背は高いが」

「やっぱり噂は本当だったんだ」

将は純代にうながされて、棺の前に立った。

棺の近くはひやりと冷気がただよっていた……おそらく、巌の遺体はこの数日冷蔵庫で保管されていたのだろう。

この暑さだから棺にはドライアイスも入っているに違いない。

将は乾いて貼りついた喉にわずかに湧いた唾をごくっと飲んで、棺を覗き込んだ。

……白い菊の花に囲まれて、巌は眠っていた。

ハルさんが言ったとおり、安らかな顔だった。先日、朝食後に見たときのままの……無垢な寝顔だった。

だが、その肌の色は、蝋のように白っぽくて、艶がなくなっていた。

それは顔を囲む瑞々しい菊の花との対比でさらに硬く、乾いて見えた。

わずかに開いた口から、白い綿がかすかに見えたとき、将の中にふたたび地鳴りのようなものがこみあげてきた。

生きていれば……あんな綿が詰め込まれるはずはないのだ。

ヒージーは、もう間違いなく、死んでしまったのだ……。

将は再び歯を食いしばろうとしたが、息苦しくて出来なかった。

視界はとうに、こみあげてきた涙で、巌の死に顔もろとも歪んでいた。

将は、がくっと棺の前に膝をつくと、掌で顔を覆った。

こんなことになったきっかけは……巌は違うと言ってくれたけれど、将がつくってしまったことには間違いない。

悲しみと罪悪感は、竜巻のように将の自我を吹き飛ばしてしまった。

すでに広間には参列者が揃っていたが、それももはや関係なかった。

いや……意識の端にそれがあるから、声をたてるのは抑えているが、それが限界だった。

……ようやく、純代に抱えられるようにして立ち上がると、自分の席に座った。

そんな将を、聡は遥か後ろから見つめていた。

読経が始まった。

葬儀社の会場ではなく、一般の日本家屋の広間で行われた葬式は、座布団こそ用意されたものの、正座しなくてはならない。

後ろのほうの一般参列者の中には、１５分ほどで足が痺れたのか、

足をもぞもぞさせる者がかなりいた。

もちろん、広間だけでは入りきれないので、縁側に向かって張られたテントの下に座っている人もずいぶんいた。

さすがに椅子席だが、そちらは暑そうだ。

聡は、かろうじて玄関近くの末席の座布団に座ることができたのだが、案の定、足が痺れてしまった。

庭のテントの下に座っている人が少し羨ましくなった。

スカートの喪服だったのでこっそり足を崩して、ようやくほっとした聡は少し目をあげて将の後姿を盗み見た。

背の高い将は、いつもなら頭1つ分飛び出て見えるはずだが、うなだれているのか、明るい色の髪の毛が黒いスーツの肩の上に少し出ているだけだ。

視線を手元に戻すときに、近くの一般参列者の席にいる武藤と目が合った。

彼女も将を気にしていたらしい。足はやはり崩しているようだ。

二人は、目でお互いに会釈をした。

俯いた将の心は、からっぽだった。

空洞になった体に、読経がいやに響く。

経をあげているのは、いつか将に家系図を見せてくれた、東京の菩提寺の和尚だ。

話すときの声と、経をあげる声はまるで違う。

一人で経をあげているはずなのに、まるで複数の人間がつくりだすハーモニーのように響き渡る。

その威厳は、悲しみと罪悪感の興奮を不思議に呪文のようになだめてくれた。

朗々と……というのは、この場に相応しくない表現だが、それを聞いている将は次第に自分を取り戻していった。

気がつくと、将は祭壇の上の厳の遺影を眺めていた。

将がここに預けられていた頃の姿だろうか。すでに白髪で長い白い眉毛の姿だが、満面の笑みを浮かべていた。

将は、近親者の葬式を今までに2度経験している。

一度目は将を生んだ母親・環。まだ7歳だった将は、そのようすも悲しみも覚えていない。

二度目は、将の祖父の周一。高校1年のときだった。

初孫である将は、小さい頃には可愛がってもらったはずだが、なにせ心が荒れていた頃である。

お通夜にだけ出席し、興味本位で死に顔だけ見ると、すぐに退出し、その夜から遊んでいた。

髪を今よりさらに明るい色に染め、一目でカタギでないことがわかる将だったから、

世間体を気にする康三も純代も葬儀に出席しない無礼を許していたはずだ。

将は隣にいる純代の膝のあたりに視線を走らせた。

そろえた手の下に数珠が見えた。顔まで視線をあげる勇気はない。

どうして純代は急に、あのような、将を擁護する態度を取ったのか。

純代はきっぱりと『将はうちの跡取だ』と言い放ったうえに『忙しいのによく来た』と言ったのだ。

それは、将が知っている純代と１８０度違う姿だった。

――いや。

１８０度という数字に、違和感を感じた将は、急に子供の頃を思い出した。

純代は将に対して……少なくとも巌の継母のような分け隔ては、一

度たりともしなかったはずだ。

つねに自分の子の孝太と平等に扱おうと努力していたのは将にもわかっていた。

孝太だけを優先したのは……あの爆破事件のときだけだ。

将は、純代の数珠から目をあげて巌の遺影を眺める。

あの日、森村先生との悲恋の話のあと、共にした最後の夕食での、巌の話が蘇った。

「ねえ、ヒージー。その後、ヒージーは一高から帝大に入ったんだろ。継母に仕返しなかったの？それ見ろとかさ」

将は気になったことを訊いてみた。

巌は、スプーンで口にいれてもらった細かくしてもらったポトフを味わって飲み込むと、

「仕返しか。今に見ておれ、と思ったのは小学校までだったな」

と遠い目をして答えた。

「えー」

将はつまらなそうに口を尖らせた。

「中学に入って、離れて暮らすようになってからは、憎しみも薄れてしもうた。

高校に入ってからは先生をなくした悲しみを忘れるように勉強に打ち込んだしのう……」

巌は、あゆみに差し出されたもう1口を制して続ける。

「それに、お継母さんは5人子供を産んだのだが、

二人は大人になる前に病気で亡くなり、残るうち二人は戦争で兵隊に行って亡くなってしまった。

ワシは戦争当時、すでに官僚職についていたから赤紙を逃れたが、結局、お継母さんに残されたのは女の子が一人だけだった。

それにお継母さんの実家は大陸にその資本の大部分を投資していたから、戦後はもうボロボロでな……」

「ざまあみろ、って思わなかった?」

巌は将をまっすぐに見据えるときっぱりと言い放った。

「思わなかった」

将は、巌が嘘を言っていると思った。本音では絶対、胸がすくような思いをしたに違いないと確信していた。だが、巌は

「とてもじゃないが、気の毒でそんな風には思えなかった」

と繰り返すばかりだった。

「戦後まもなく父が亡くなってからは、お継母さんが頼れるのはワシだけになってしまったんじゃ。

あいかわらずキツイ性格ではあったが、ワシの奥さんと協力して家のことをよく手伝ってくれたものだ。

末の子などは、お継母さんによく懐いていてな……。

よくよく考えてみたら、多少のわけへだてをしたにしても、忙しい父に代わってワシを大きくしてくれたんじゃ。

……ときどき抜いたにしても、三度三度メシを食わせ、きちんとした着物を着せてくれて、学校には弁当を持たせてくれた。

……考えてみろ、新婚なのに聞かん坊の子供の世話をするおなごの気持ちを。

それぐらいの意地悪をしたくなるのは当然だ、とワシは結婚したことで初めて理解したのじゃ」

将は、承服しかねた。巌は人が良すぎる、とそのときは思った。

……だが、今になって将は、純代の気持ち、というのを、自分のほうこそ考えなかったことに気付いた。

康三にとっては再婚だったが、純代にとっては初婚だ。

当時２８歳の女性としては結婚生活にいろいろと夢もあっただろうに、彼女は新婚まもなく９歳の男の子の世話を押し付けられたのだ。

なのに、厳の継母のように意地悪をすることもなく、

三度三度メシを食わせ、きちんとした服を着せてくれて……という部分では、充分すぎるほど面倒を見てくれた純代である。

孝太が生まれる前も、市販品の添加物がよくないからと、たびたびおやつに焼き菓子を焼いてさえくれた。

その自然な甘味がふいに将の舌に蘇る。

そこまで優しくされたからこそ、愛されていたと思ったからこそ、火事の中でおきざりにされたことが……裏切られたことがショックだったのだ……。

『純代さんを許してやれ』

遺影から、声が聞こえるようだった。

276◆夏の別れ7

人々のすすり泣きの中、葬儀は進み、出棺となった。

喪主である康三を先頭に、純代、将、孝太、そして厳の子供一一すなわち将の祖父の弟・妹、その子供らが棺と共に邸宅を退出する。

遺族と共に棺が出ようとしたとき、記者たちが将をめがけて一斉に押し寄せてきた。

「ＳＹＯさん、鷹枝官房長官の息子さんだったんですね」

「どうして隠されていたんですか」

記者たちは次々に質問をしてくる。

康三のＳＰたちがしりぞけようとするが、かなりしつこい。

将は、もう泣いていなかったが、シャッター音の激しさに思わず顔をそむける。

「ひいおじいさまを亡くされた心境は」

そう聞かれても、どう答えていいかわからない。

まごつく将を、純代や親族がうながして、どうにか先に進む。

記者たちは康三にも

「ＳＹＯさんは、長官の息子さんですよね」

と訊いた。康三は、憮然と

「そうです」

とだけ答えた。

「官房長官、息子さんのこと、どうして隠されていたんですか」

康三はそっちの質問には答えずに、黙って車に乗り込んだ。

それに倣って親族は皆、沈黙を守ったまま車に乗り込み、火葬場に向かった。

残った武藤が、しんがりを務めるように記者団に

「本当に悲しんでいますから、そっとしてあげてください」

と頭を下げた。

聡は離れたところから、首１つ出た将の俯いた横顔が見えなくなるまで眺めていた。

将たち巌の親族は近くの火葬場へ移動し、巌の棺に最後の別れを告げた。

『窯』の中に入っていく棺を見て、孝太は

「大おじいさまが」

と思わず声をあげて純代を振り返った。あとは言葉にならずに純代に抱きついて泣いてしまった。そんな姿が親族の涙を誘った。

火葬場の係員が、今から火が入ることを告げる。将は思わず俯いていた顔をあげた。

だが、すでに扉は閉じられ、なすすべはない。

そこでも読経がのべられ、親族からは、あらたにすすり泣きが漏れた。

それが終わると、親族一同はあきらめたように待合室へ移った。

親族という集まりが苦手な将は、その間、外に出てみた。

表に出た途端……蝉の合唱と共にもわっとした暑さに包まれる。

外はまだ夏の盛りだった。すべて、葬儀からここまでの間忘れていたものだった。

将は、青空へと伸びる煙突を見上げた。

煙突からは、すでに白い煙がうっすらと出ていた。それは厳のまっ白な髪や眉毛をどことなく思わせた。

だが、暑いせいか、煙は煙突から出るとすぐに空になじんで消えてしまうかのようだった。

煙になって天に帰っていく巌。

将は、敬礼するように手をかざして煙を見送りながら、目の前の出来事をわざと化学的に考えてみる。

人間の体は、たんぱく質や脂肪、水分で出来ている。

６０～７０キロの体重のうち、形のある骨として残るのはほんの少しで、大半は気体となる。

今、あそこから見えている白い煙は、巌の体の脂肪や炭水化物が酸素と結びついたＨ２ＯそしてＣＯ２、すなわち水蒸気と二酸化炭素が大半だろう。

水蒸気は雲になり……雲は雨になり、陸地に降れば土に染み込み、そして植物を育て、残りは川になる。

二酸化炭素は光合成の材料として木々に吸われて、酸素として生まれ変わる。

巌は、彼を愛した人の心にその生の証を残しながらも、体の大半は、分子となって地球や植物にリサイクルされていく。

考えてみれば。地球に存在する原子や分子の総量は……ときおり隕石が落ちて来る以外は、太古からたいして変わっていないのだ、ということに将は気づいた。

４６億年前から地球にある原子が、化合や還元を繰り返しながら、今は大量の人間という生命体になっているのだ。

だが人間も、命が尽きれば、物質として地球に還って別の生命体を育む。

将は煙から自分の掌に視線を落とした。赤く眩んだような視界に、左右５本の凹凸が浮かんでくる。

この手を形作っている、皮膚のたんぱく質も、骨のカルシウムも……酸素も水素も炭素も窒素も、４６億年前からこの地球上にあった原子なのだ。

地球上にあった原子が、結びついて将も、聡も、巌も、孝太も、大悟も……みんなの肉体をつくっている。

それは平均８５年だかの限りある、原子の結びつきだ。

今、それが終わって還元されていくところを将はまのあたりにして……将は、小さな単位が結びついて

『自分』というものを作っていることに奇跡のような神秘を感じた。

しばらくの時間ののち、巌は砕かれた骨になっていた。

大きな部分は流木を思わせる形、色は白くなった貝殻のようだった。皆でそれを拾い、骨壷に収めていく。骨は乾ききって軽かった。

１７８センチと昔の人にしては長身だった巌が、こんなに小さな壺に収まってしまうのが不思議だった。

将は、純代に懐紙をもらうと、巌の骨を少しだけもらって丁寧に包んだ。

骨壷に収まった骨は、地球へ還らずに頑なに、それが人の一部だった証明のように保存される。

それは、故人のためというより、生き残って彼を覚えている人のためのように将は思えた。

墓自体が、生きている人のために在るモニュメントなのだ――将は今、それがわかった。

そして将は、巌が自らの骨を『森村先生の墓が見えるところに撒いてほしい』といった意味をも理解した気がした。

おそらく巌は、叶わなかった初恋のひとが眠る傍で、土に還ろうと思ったのだ。

土に還った巌のカルシウムは（どことなく不謹慎な言い方だけど）きっと、まわりの草花の養分となり、森村先生の墓をなぐさめるだろう。

巌の気持ちはわかるけれど、やはり哀しすぎると思った。

原子に戻ってから、傍にいても……寂しい。

４６億年の歴史を持つ原子がくっつき離れ……そうやって出来た奇跡の体。それに宿る命。

命あるうちに……生きているうちに、絶対に聡と結ばれる。

将はあらためて骨を包んだ懐紙をそっと握り締めた。

懐紙は少しだけ温かい気がした。

将が、官房長官である鷹枝康三の息子だったことは、さっそくスクープされた。

翌日のテレビ欄には『ＳＹＯ号泣！元大臣の曽祖父（１００歳）の死』などという字面が詰め込まれた。

土曜なので午後のワイドショーはないが、朝のニュース番組で葬儀の模様は放送された。

「いまや若手イケメン俳優として人気者のＳＹＯさんが、鷹枝官房長官の長男として、曽祖父である鷹枝巌さんの葬儀に参列しました」

巌は芸能人ではない上に、まさか人気上昇中の俳優であるＳＹＯが参列するとは誰も予想しなかったらしい。

アナウンサーが急遽芸能リポーターを兼ねている。

「……今、出棺です。ＳＹＯさん、悲痛な面持ちです。ドラマで見られる溌剌とした笑顔はありません。

ＳＹＯさんからはひいおじいさまにあたる、元外務大臣・鷹枝巌さんの死を、ＳＹＯさんはどんな風に感じているのでしょうか」

スタジオのコメンテーターも

「言われてみれば、お父さんの鷹枝官房長官によく似てますよね。目の辺りとか、背が高いところとか」

と感想をもらす。

かくして、ＳＹＯは鷹枝官房長官の長男として世間に知れ渡ったのである。

ちなみに、なしくずしに身元がバレてしまった件については、父の康三からは何もお咎めなしだった。

康三は腹を決めたようだった。

「世間に知られてしまったからには仕方がない。お前も鷹枝家の跡取として、そのつもりで行動に気をつけなさい」

と将は釘を刺された。

277◆夏の終り1

巌の葬儀の翌日から、喪に服すことなく、将は元通りの忙しい日々に戻った。

巌の死に関する悲しみや罪悪感……一切の感情に浸る暇も、深く思索する暇も余裕もないままに、

時は淡々とした急流となって将を飲み込んでいく。

将もまた、流れに乗って、立ち止まらないようにしていた。

いったん立ち止まれば、今度は感情の波に飲み込まれてしまうから。

将が鷹枝家の子息であることを知ったマスコミは、隙あらば将に近寄って何かを訊こうとしていたが、

将は事務所の固いガードに守られて、何も話さずに済んだ。

そんな中、脚本家の元倉亮から、次の作品はＳＹＯでなく、本名の『鷹枝将』で出ないか、という提案があった。

「どうする？うちの社長も、お父様も将の好きなようにすればいいって言ってたけど」

と武藤は将の顔を心配そうにのぞきこんだ。

「……いいよ。本名で出ても」

もう身元を隠す必要はなくなったのだ。

鷹枝家がどうこう、というのはあいかわらずバカらしいと思うが、将はもうその名を汚すような行為はしないだろう、という自信はあった。

もろもろの事情などを踏まえて検討した結果、結局将は9月から、全ての仕事を本名の鷹枝将で活動することになった。

1週間はあっという間に過ぎた。

この週は『ばくせん2』の最終回の撮りがあったが、天気にも恵まれたおかげで、いたってスムーズに終わった。

大仕事を終えてホッとした将だが、すっかり仲良くなった生徒役のみんなと別れるのは寂しかった。

学校を休みがちだった将にとっては、まるで撮影現場が学校のようだったからだ。

大野や四之宮たちとも、

「また共演しような」

と握手をして別れた。

派手な芸能人やアイドルとはいっても、だいたいの人は、中身はみ

んな真面目だし、

いや一般人以上に自分の仕事や将来を見据えて、自分に対して厳しい。

人気商売なだけに、他人に対しても、とても気を遣っている。

よく噂で聞く、わがままな行いをする芸能人など、ほんの一握りなのだということがわかった。

この夏、振り返ってみれば、そういう人々に出会ったことによって、将は大きな成長を遂げた……それは自分で認めざるを得なかった。

「明日は、完全オフだから、ゆっくり休んであさっての抜釘手術に備えてね。……あさっては3時に予約してるから。病院の電話番号はわかるわね」

「うん。大丈夫」

少しでもゆったりした時間が出来ると、スケジュールの確認をしてしまうのは武藤のクセらしい。

ひさしぶりに早めに仕事が片付いた将は、武藤ら事務所の人間と近くの小料理屋に夕食に来ていた。

ここは比較的安い上に、奥に個室があるので、タレントを連れての食事に便利なのだ。

「入院の荷造りは、昨日やったからいいわね」

昨日は遅くなったのに、武藤が部屋に来てくれて、入院に必要なパジャマ類などをリュックにまとめてくれたのだ。

武藤は本当に、母親顔負けで面倒を見てくれる。

一度口に出してそういったら、

「マネージャーですもん、当たり前よっ」

と言われてしまった。

「入院のあとは、2日オフにしてあるから、ゆっくり傷を治しなさい。

……9月からは北海道ロケがあるけど、通常の2倍の期間をかけての撮りだから、『ばくせん』みたいに忙しくはないと思うわ。

だから学校の出席日数を増やして、暇なときは受験勉強なさい。

……まあ、小論文は得意だろうから、たぶん合格すると思うけど、油断禁物だからね」

学校に行ける、つまり聡の顔をどうどうと見れるチャンスが増えると聞いて、将は嬉しさをこらえた。

ところで将は、なしくずしにW大の一芸入試を目指すことになってしまっている。

それでいいのかな、という気持ちも少しあったが、最小限の勉強で一流大に入るなら、それしかない。

W大に入れればそれで満足、という気持ちと、きちんと受験しなくていいのか、という気持ちは将の中でまざりあって、

それはいつも、自分は将来、本当に俳優でやっていくのか、それでもいいのかという方向へ向かう。

身をたてる、という意味では問題ないと思うが、それが本当に自分がやりたいことなのかどうかはわからないからだ。

夜9時には食事も終わり、いつものように武藤に送ってもらった。

入院する病院に近いので、ひさしぶりに自宅マンションのほうである。

武藤は

「ゆっくり休みなさい。いいわね」

と念を押して帰っていった。彼女は将がオフになっても、会社でいろいろと仕事があるに違いなかった。

一人きりの3LDKのマンションは、真っ暗でがらん、としていた。

『おかえり』

電気をつけると、リビングのソファに寝転んでいる大悟の姿が、残像のように、ふっと将の前に浮かんで消えた。

大悟は、どうしているだろうか。矯正病院に入院してもう1ヶ月になる。

薬のほうは、だいぶ抜けたのだろうか。

会いに行く暇はないし、電話やメールもできない。気になるけれど将は何もできなかった。

部屋のほうは家政婦が掃除に通っているせいか、1週間家をあけたのに埃1つない。

将は広すぎるリビングに背を向けて寝室に向かうと、スタンドのあかりを点け、その下の引き出しをあけた。

そこには巌の骨を包んだ懐紙が入っていた。1週間前、葬儀から帰った将が入れておいたのだ。

それと一緒に、森村先生の墓がある寺の住所を書いた古いノートも入っている。

骨とノートはスタンドの暖色に染まって、将に巌の約束を訴えかけた。

将は引き出しをあけたまま、ベッドに体を投げ出すと、眼を閉じた。

特に疲れている自覚があるわけではないのだが、ここのところ、ちょっと時間があるとすぐに寝転んで体を休ませるクセがついてしまった。

『I県にあるその寺の、森村先生の墓が見えるところに、骨のかけらを埋めてくれ』

巌の願いを叶えるタイミングを将は、ここ数日、眠りに落ちる前に考えている。

しかし……頭の中に入っているスケジュールによれば、今後いちいちI県までいける暇はなさそうだ。

つまり、明日からのまる1日か、退院後の2日間しかオフはない。

時間の余裕で言えば9月1日からの2日間だが、新たな手術で左足にどれだけダメージを受けるかがわからない。

手術というからには足の皮膚を切り開いて骨から金具を取り出すのだろう……つまりクラッチが踏める状態かどうかがわからないのだ。

それに、巌は『あきらさんと一緒に』と言った。

9月1日は2学期の始業式だから、聡の同行は不可能になる。

……となると。

明日のまる1日しかチャンスはない、ということだ……。

瞼をゆっくりと開けた将は、意を決したように、起き上がった。

地図を取り出すとＩ県までの道筋を確認する。

高速道路を使えば片道数時間といったところだろうか。見た目でざっと計算すると、夜から出かければ、日帰りが可能に見えた。

将はさっそく聡に電話をかけた。

聡は、お盆から８月３０日まで休みだと言っていたはずだ。

278◆夏の終り2

「将、大丈夫？……眠くなったらいつでも休憩してね」

「アキラこそ、着くまで寝てていいよ。毛布、積んであるからかけて」

「大丈夫。夏だもん」

将と聡を乗せたミニは、夜の中央高速を走っていた。日にちは変わって、8月28日になっている。

ナビによると、松本・富山経由で到着予定時刻は朝6時頃となっている。

急に呼び出されての長距離ドライブとなったが、聡はときめいていた。

こんな風に二人で将が運転するミニに乗るのはいつ以来だろうか。

伊達眼鏡をかけた将の横顔を、聡はそっと見た。

顔が売れてしまっているので、いちおう将は伊達眼鏡をかけているのだ。

『帽子は？』と聡はさっき面白がって訊いた。

芸能人はよく、サングラスや伊達眼鏡と共に野球帽をかぶっているではないか。将は

『やだよ。暑いし。冬ならともかく。車ン中だからばれないよ』

と面倒くさそうに答えた。

将は自分を見る聡の視線に気づいて

「なに？」

と優しく問い返してきた。

その声音は、またいっそう大人になった気がして、聡の心臓は騒いだ。

「だいたい6～7時間。行って帰ってくるだけだね」

聡はナビの情報を口にして誤魔化す。

「そんなことないよ。明日の3時に病院にいればいいから、逆算したら今日はたっぷり遊べるよ。

金沢とかいく？世界遺産の白川郷とかも寄れるよ。せっかくだから俺、千里浜とかドライブしてみたいし」

いつ調べたのか将は楽しげに観光地を並べた。

「寝る暇ないじゃない」

「正月にアキラんちにいったときに比べれば全然マシ。高速使ってるし」

将の笑いにつられて笑いつつ、聡は胸があったかくなった。

はるばると東京から萩まで車を運転して逢いに来てくれた、今年の正月を思い出したからだ。

あのとき、聡は将と一線を超えてもいい、と思っていたのに、3日3晩の運転が祟って将は途中で聡の乳房を枕にして眠り込んでしまったのだ……。

そのときの記憶をきっかけにして、聡の全身に記憶されている、将から触れられた感覚がふいにフラッシュバックした。

吸われた乳首がランジェリーの下で起立し、体の中心がぎゅっと収縮した。

聡は、運転席の将に、それを気づかれないようにわざと窓に頬杖をつくようにして外を見た。

残念ながら高速の脇は、草むらの斜面になっていて、眺望はない。

星も今日は薄曇りなのか、見えない。

聡は自分に小さくため息をついた。

将が大人になるまで離れると決めたのに、最近のこのていたらく。

会うだけでなく、メールや電話も以前に近い状態で復活してしまった。

大悟のこと。それから巌の死。

いろいろあったから仕方ない、と言い訳しつつも、聡は自分に呆れていた。

……だけどそれは自分は本当に将が好きなんだ、将から離れられないんだ、という再確認にもなった。

それに、こんなふうに人目を忍んだ夜更けにドライブすることに、聡は喜悦を禁じえない。

いや、心の喜悦だけではなく、こうしていると自分の中の『女』が急速に目覚めていくのがわかる。

男としての将が欲しい、将に抱かれたい。……油断すると自分の中のあさましい欲望が顔を出す。

将に抱かれてから4ヶ月も経っている。そして当の将が目の前にいる……これから丸1日は一緒にいる。

聡は自分の深いところで、期待に蠢く野生の声に必死で目をつむった。

聡は黙っていると膨れ上がっていくような本能を、別の本能でごま

かすべく

「夜食に、おにぎりと卵焼きつくってきた。急いだから具は梅干とおかかぐらいだけど……」

と口にした。

「やった。ラッキー。次のパーキングで食べようか」

「ええっ、もう？」

「だって、腹減ったよ……本当は、メシよりアキラが食いたいんだけど」

将は冗談めかして伊達眼鏡の下の目をこちらに走らせた。

おかげで胸の先端が、たった今触れられたようにうずいてしまった。

それを隠すように

「んもう。何いってんだか」

と聡は笑って見せるしかない。

聡がつくってきたおにぎりと卵焼きで夜食を食べると、すぐに眠気が将に襲ってきたらしい。

それでも、将は諏訪湖ＳＡまで頑張って運転した。そこで仮眠を取ることにする。

時刻は２時３０分になっていた。

後部座席で横になりながら、聡はなかなか寝付けなかった。

将は日よけシートを張ったフロントガラスの下の助手席を倒し、ダッシュボードの上に長い足を乗せて

すうすうと寝息を立てている。

聡の足の上に、アイマスクをしたその頭が見えている。

建物から離れた場所に駐めたのに、道路を照らす照明とＳＡの建物から漏れた光で、車内は字が読めるほどの明るさを保っていた。

眠れない聡は、寝そべったまま、足の上のシートに横たわる将の横顔を見ていた。

目元はアイマスクで隠されてしまっているが、コシがあるけれど艶やかな茶髪に、鋭い鼻梁、形の整った唇。それを見ているだけで飽きない。

――そういえば、去年の８月３１日に、初めてキスされたんだっけ。

聡はふいに思い出した。あれから1年。

あのときは、本当にびっくりした。

背の高い将は、やすやすとカウンターごしの聡を抱き寄せて唇をくっつけてきたのだ。

そのときはまだ、将の名前も知らなかった。

弁当屋の常連から、教え子になって……将という名前を知って、もうすぐ1年。聡は上半身を起こすと、シートごと横たわる将の顔を見つめた。

SAから漏れる白い光で、将の顔には深い陰影がついている。その唇は少しだけ開いている。その下の喉仏が呼吸にあわせて上下しているのが見える。

「将」

小さく呼んでみる。

当然、返事はない。本当に眠り込んでいるらしい。

「……あのときの、仕返し」

聡はそう呟くと、アイマスクの下の将の唇に、自らの唇を重ねた。

いつ以来になるんだろうか……久しぶりの将の唇は、少し湿り気があって温かかった。

唇をくっつけただけなのに、その懐かしい感触はとても心地よくて、聡は何度も、唇を押し当てた。

しかし、将は本当に疲れているのか、何度口づけしてもまったく起きない。

すとん、と落ちるように、いったん眠り込むと、ずっと起きない将。

こんな将を、聡は何度見ただろうか。

初めて結ばれたときも、こんな感じで、ずっと眠っていた。

ＩＱ値が高い分、脳が疲れるのだろうか。だから眠りが深いのだろうか。

眠れない聡は、いっこうに起きない将の顔を飽かず、見下ろしていた。

279◆夏の終り3

ようやくウトウトし始めた聡は、セルモーターの回転が繰り返される音で目を覚ました。

気がつくと、聡を後部座席に寝かせたまま、将が運転席に座ってエンジンをかけようとしている。いつのまにか毛布が体にかかっていた。

しかし何度もキーを回しているのに、車は苦しそうなうなりをあげるだけで、なかなかエンジンがかからない。

「エンジン、かからないの?」

聡は身を起こして将のほうをのぞきこんだ。

「あ、アキラ。起こしちゃった?ごめん」

将はキーをまわしながら振り返った。

「……ううん。あ、あたし助手席に戻る」

聡がそう答えたとき、7回目でようやくエンジンがかかった。

暖機運転をしている間、聡は後部座席からいったん紫色に染まったアスファルトにおりると、コーヒーを買いに行くことにした。

もう夜明けだ。山々の上の空は徐々に白っぽくなってきている。

外に出た聡にひやりとした空気が半袖の肌にしみた。
もう8月も終わりだ。信州の夜明けは東京に比べるとすでに秋そのもののように思えた。
「結構、冷えるね」
聡は温かいコーヒーを将に手渡しながら言った。
「うん。俺、寒くて目が覚めたもん」
将は湯気に顔をうずめながら笑うと、
「俺はパーカーがあるから……アキラは毛布にくるまっててていいよ」
と優しい声をかけてくれる。聡は思わずその口元を見てしまう。
……どうやら、眠っている間に聡が将に何度も口づけしたのはまるで気付いていないらしい。
今、5時30分、もうすぐ夜明けだ。将は、車を発進させた。
「車、調子悪いの？」
シートベルトを締めながら聡は、何食わぬ顔で将の横顔に問い掛けた。
「うん。ずっと乗ってなかったから気付かなかったけど、エンジンのかかりが悪くなったらしい。

もうすぐ車検なんだけど。……でもたぶん大丈夫だよ」

将が言うとおり、いったんエンジンがかかったミニは、さっきの不調を忘れたように順調にスピードをあげていった。

そこへ、山の稜線から朝日が顔を出して、世界を冷たい紫からオレンジ色に染めていった。

松本インターで高速を降りると、二人を乗せたミニは北アルプスへ続く国道１５８号を西へ進む。

まだ紅葉には早い木々は、１年で一番濃くたくましくなった緑を朝の中に浮かび上がらせた。

トンネルで安房峠を越えると国道４７１号に入り、富山方面を目指す。

このあたりは、平湯温泉、福地温泉、新穂高温泉郷といった温泉地帯でもある。

「帰りに温泉に寄るのもいいね。二人で貸切とか」

いつもの冗談めいた将の提案なのに、聡はなぜか予言のように思えてしまった。

それが恥かしくて、でもその恥かしさを見せないように、

「温泉は、いいよね」

とだけ言っておく。

カーブが連続する向こうに、朝日に照らされた槍ケ岳がその鋭いピークをのぞかせていた。

車は北アルプスの山に平行するような国道を下り、富山入りした。道のカーブはいつしか穏やかになり、右手に見える山は立山連峰になっている。

「アキラ、お腹すかない？」

富山市街に入ったのをきっかけに、将は運転しながら助手席の聡に問い掛けた。

返事はない。

聡はシートに体を預けていつのまにか眠っていた。

朝の光はいつのまにか白い色になって、聡の半袖の腕を眩しく射抜いている。

麓まで来ているせいか、気温もいつのまにか夏のそれを取り戻したらしい。エアコンは冷たい風を車内に送っている。

教室で見ることのないぴったりしたTシャツに包まれた胸は、無防備に盛り上がり、車の振動でぷるぷると小刻みに揺れている。

こういう格好をすると、聡の胸が言葉通りの『巨乳』ではないことがわかる。

大きいというよりは、丸くて柔らかそうな塊がぷっくりと前に張り出しているのだ。

シートベルトで締め付けられているせいか、その盛り上がりはよけいに目立つ。

それは、その下の肋骨あたりや腕や肩、鎖骨の華奢さから見ると奇跡的な丸みに見えた。

将は、思わずそれに触れたくてたまらなくなる。

記憶の中にある柔らかな感触、そして小さな先端の突起を思い出すと、思わずジーンズの下で将自身が動いた。

「おっと」

気をとられた将は、危うく前の車の減速を見落とすところだった。

あわててブレーキを踏むと、聡の胸から視線を引き剥がし、前を向く。

気を取り直した将にちょうど、富山ＩＣの標識が目に入った。

将は、気をまぎらわすためにＦＭのボリュームをやや大きくした。

富山・金沢間の北陸道は日本海も見えず、平野に田んぼや住宅地が広がるのが見えるばかりである。

朝食をとるために寄ったサービスエリアで目覚めたものの、今度は満腹で聡は再び眠り込んでしまった。

一人で運転する将に悪いなと思いつつも、夏の疲れか、聡は睡魔を抑えることができない。

この夏悩まされた貧血は、盆から学校が休みに入ったことでずいぶんよくなったが、それは睡眠時間が増えたゆえの効果、というのもあるのだ。

料金所などで、ときおり目覚めては、うとうと眠るという状態が続き、車は気がつくと山道を走っていた。

さっき金沢市街で菊の花を買ったから、もうすぐつくのだろう。

聡はシートベルトを装着したまま、大きく伸びをした。

「あ、起きた？おはよう」

将がハンドルを握ったまま、振り返った。伊達眼鏡がサングラスに変わっている。

「もうすぐ着くんでしょ？」

聡はさっきのサービスエリアで買っておいたお茶のペットボトルを口に含みながら訊いた。

それにしてもかなりの山奥だ。

両側には森と畑が続くばかりで民家はほとんどない。

聡は、2月に出張していた山梨の学校のあたりを思い出した。

「あった。あそこだ」

将の声に、フロントガラスを見る。車は舗装道路から、まるで田んぼのあぜ道のような未舗装道路に入り、ガタガタと揺れた。

行き先にはこんもりと茂った木々に囲まれて古い瓦屋根が見えていた。

それこそ目指す寺に違いない。

日陰を選んでミニを駐めると、そこにはまるで栽培しているように草が生い茂っていた。

訪れる人が少ないのか、駐車場も単なる空き地と見分けがつかないのだ。

将は懐紙に包まれた巌の骨をジーンズのポケットに入れると、後部座席に乗せた菊、そして小さな金属製のスコップを手にして車を降

りた。

露を浮かべたつゆ草やカラスノエンドウが生い茂る草むら。そこにサンダルの足で降り立った二人を蝉の声の大合唱が出迎える。

行く夏を惜しむかのような大音量に思わず空を見上げた二人に、ちょうど崩れかけた土塀が見えた。

土塀の内側には桜が常葉色の葉を茂らせていて、その葉陰に墓石が見え隠れしている。

「大丈夫？」

将は上を見上げている聡に声をかけた。緑色の葉陰で、聡の顔は青白いように見えたのだ。

「うん。……どうして？」

聡は緑色に染まったまま、将を振り返った。

寺だからなのか、いちおうサングラスをはずした将も手にした菊の花束同様、全身を緑に染めている。

「暑いから、また貧血にならないかな、と思って」

「大丈夫。東京よりは暑くないよ」

聡は将をうながして寺への石段を登った。

短い石段から寺の本堂へと続く庭はモミジなどの木々で覆われ、こ

こにも濃い木陰をつくっている。

石段の丸みや、門の鬼瓦のコケから寺の古さが伺えた。

本堂もすべてが利休色に変わり今にも朽ちそうな古さながら、線香の香りがすることで誰かがここを守っていることが窺い知れた。

二人は言葉もなく、体中を木々を透過した緑色に染めながら、本堂のわきに進んだ。

紫陽花やつつじの花壇の奥に、ひっそりと墓地があった。

花壇がそこそこ手入れされていることからも、気配こそないが、住職か誰かがいるのだろう。

もしかしたら、寺の存続に巌が援助していたのかもしれない。

土塀と桜の木々に囲まれた墓地は、あと1ヶ月足らずで来る彼岸を待つように、夏草を生い茂らせていた。

森村史絵が眠る墓はすぐにわかった。巌の話によれば、史絵の実家はこのあたりの領主だったという。

その話を裏付けるかのように、墓地の入り口近くにさほど大きくはないものの、古くて立派な墓石を構えていたからだ。

二人は、まず史絵のために墓に水をかけ、白い菊の花を供えて手をあわせた。

燦燦と射す太陽と蝉の声の中に、水はあっという間に蒸発していく

ようだった。

将は、蝉の声にうながされるように、さっそく巌の骨を埋める場所を目で探し始める。

しかし墓の近くの地面は石で覆われて骨を埋められそうにない。

石のないところはいかにも『隙間』でそんなところに巌の骨をねじこむのはあんまりな気がした。

「将、あそこは？」

聡が指差した先に、ひときわ大きな桜の木があった。

その太い幹と張り出した枝は、墓を囲む桜の中で一番樹齢がありそうだった。

将はその桜の下へと歩いた。

桜はきちんと手入れされているらしく、青々と茂った葉に虫食いなどはなく、近くによると威風堂々とした風格があった。

将は、鉄色の鈍い光沢を浮かべた幹に触れてみる。

桜の幹は、ひんやりと固い感触ながらも、なぜか中から温かさが染みてくるような錯覚に将はとらわれた。

史絵の墓とは少しだけ離れているけれど、ここから墓はよく見える。

根元はすこしだけ湿った雑草が生えていたが、骨を埋めるのに問題

はなさそうだ。

上を見上げると、葉陰から漏れる木漏れ日がキラキラと小さく揺れ、将はそれを飽かず眺めた。

「将」

気がつくと、幹をはさんで聡がすぐそこに来ていた。

葉陰から見ると、日なたにいる聡はあまりの明るさに霞むようだった。

「……ここにするよ」

聡は木漏れ日から戻ってきた将の目が、わずかに濡れて光ったのを見た。

それを隠すように将はしゃがみこむと、雑草のない地面を選んでスコップで掘り始めた。

聡もしゃがみこんで、冴え冴えとしたこげ茶色が露出していくところをのぞきこむ。

「これぐらいでいいか」

深さ１０センチほど掘った将は、聡に問い掛けるともなく声にする。

そしてジーンズのポケットから懐紙の包みを取り出した。

折り畳んだ懐紙を慎重に広げると、小さな匙１つ分ほどの骨の粉末

が、将と聡と同じような緑色に染まって現れた。

将はしばらく、別れを惜しむように掌に乗せた骨を眺めていた。

蝉の声が、まるで読経のようにしゃがみこむ二人を包む。

……それが、一瞬切れたとき、将は骨を穴の中にさらさらと落とした。

「そのまま、埋めるの？」

聡が心細いとも、咎めるとも聞こえる口調で将に問うた。

「……うん」

将はココア色の中のフロストシュガーのように見える巌の骨をのぞきこんだ。

こうやって桜の根元に埋められた巌の骨は、やがて土になるだろう。

そして桜の根に吸い取られ、いつか桜自身になる。それは史絵の墓を見守り続けるに違いない。

だけど将は、土に還っていく巌を惜しむように、しばらく白い骨に土をかぶせずに見つめていた。

その目にはとうに涙があふれていたけれど、聡は何も言わずに将につきあって沈黙していた。

280◆261~279話のあらすじ

将に呼ばれて大磯にやってきた聡は、将の曽祖父である巌に面会する。

そして巌の代わりに将を見守り、できるなら幸せにしてやってほしい、と頼まれる。

さらに巌は、将と聡の二人に、自分の骨のひとかけらをかつて女性として愛した恩師の墓が見える場所に埋めてくれるように頼む。

巌はかつての叶わなかった恋について話し始める（261~262話）

大正時代。

赤ん坊のときに実母を亡くした巌の家に継母がやってくる。継母はとても意地悪な人で、巌は乱暴者に育つ。

それを厳しくたしなめ、かつ愛情を持って指導してくれたのが師範学校を出たばかりの森村史絵先生だった。

始めは森村先生に反発ばかりしていた巌だが、その優しさに触れ、次第に恋心を抱くようになる。

だが、巌が尋常小学校の卒業を目の前にした年の冬、史絵は嫁に行くべく郷里へ帰ってしまう。

当時は義務教育ではない中学にあがった巌だが、史絵を失った失望から自堕落な学生生活を送り、

４年のときに受験した一高（現在の東大教養部）に落ちてしまう。

受験に失敗した１６歳の巌の前に、２７歳になった史絵が再び現れる。

史絵は、子供ができないために離縁されて、再び東京に出てきて教師の道に生きようとしていたのだ。

史絵に再会できた巌は、史絵の下宿に通い、猛勉強をする。

それを大家に見咎められた史絵は、巌を擁護する。そんな史絵の姿を偶然見てしまった巌は感動し、史絵に口づけし、求婚する。

だがその冬、史絵は結核を患う。口づけをしたことに照れた巌は、史絵の部屋を訪れるのを控えて受験勉強に励んでいた。

努力のかいあって、中学卒業時に一高に受かった巌は、喜び勇んで史絵の部屋を訪れるが、

史絵はすでに病気を知って郷里に帰ったあとだった。

待ちかねた夏休み。ようやくＩ県の郷里に史絵を訪ねた巌を待っていたのは史絵の位牌だった。

史絵は１０日前に亡くなっていたのだ。

東京に帰り、落胆する巌に史絵の兄が訪ねてくる。

そして生前、史絵は巌の気持ちを喜んでいたと伝え、巌は泣きに泣いた（２６２～２６８話）

巌の邸宅からの帰り、将は運転手の西嶋に、西嶋の弟で大悟の保護者である西嶋隆弘の近況を聞かされる。

隆弘は大悟を見捨てないと聞いた将は安堵する。

東京への帰り道、二人は夜の東海道線・普通列車で寄り添う（２６８話）

ケガも順調に快復し、芸能活動に復帰した将は、有名脚本家のドラマのオファーが来ていることを知る。

主な撮影現場は北海道で、聡と離れることは寂しいが、その脚本家に見出された俳優は実力派で長く売れることから、将はその仕事を受けることにする。

一方、父で官房長官の鷹枝康三の事務所では、ネットで将のスキャンダルをキャッチしていた（２６９話）

ケガで休んでいた分、将のスケジュールはびっしり埋まり、忙しい毎日が続く。

ネットのスキャンダルは父の力で揉み消せたが、将が大物政治家の息子であることは、あっという間に広まってしまった。

巌は、といえば、あれから力を使い果たしたように眠ってばかりいるという。

心配した将は忙しい合間に、大磯へ再度訪れる。

そして巌のために、かまどで朝粥をつくる。

巌はそれをたいそう喜んだが、それが将が生きた巌に会えた最後だった。

巌は翌日の未明に静かにこの世を去った（２７０話）

巌が突然死去した知らせを、将は康三からの電話で知る。

だが仕事で忙しい将は、すぐに大磯に駆けつけることもできない。

悲しみが実感できないまま、将は淡々と仕事に集中する。

夜、将は聡からのメールに気がついて電話をかける。

聡はテレビのニュースで巌の死去を知りメールを打ってきたのだ。

聡と会話をしているうちに、将の目にはいつしか涙が溢れてきたのだった（２７１～２７２話）

将の身元が世間にばれるのを恐れた父の康三は、巌の葬儀への、将の参列を拒む。

マネージャーの武藤は、そんな将を不憫に思い、将を葬儀会場である大磯へ連れて行く。

しかし、毛利に阻止され、康三に帰れと言われてしまう。

そこへ、現れたのが義母の純代だった。

将を葬儀に参加させるまいとする康三と毛利を一喝し、将を葬儀に参列させてくれた。

そうして将はやっと巌と別れを告げることができた。

将は、焼かれて煙になっていく巌を見ながら、

４６億年の歴史を持つ原子が結びついてできた自分の肉体、そしてそれに宿る命を奇跡のように考える。

そして命あるうちに絶対に聡と結ばれたいと思う（２７３～２７６話）

巌の喪に服す暇もなく、将は葬儀翌日から仕事が詰まっている。

それでもついにドラマの最終回の撮りを終えることができた将は８月の終りから９月にかけて６日間オフをもらう。

スキーの骨折のときに足に入れた金具を取る手術を受けるためである。

つまり巌との約束を果たすべく、Ｉ県に行けるのは、オフの１日目だけということになる。

将は聡に突然電話をかけて誘うと、ミニを運転して夜の高速をＩ県へと向かう。

そして翌朝、目当ての寺にたどりついた将と聡は、巌の骨を、森村先生の墓が見える桜の木の下に埋める（２７７～２７９話）

281◆夏の終り4

骨の上に土を被せた将は、終わった終わった、と息をつくと、大きく天に向かって伸びをした。

巌の骨が埋まったあたりの土は、押さえて固めたけれど、まわりより少し茶色が鮮やかになっている。

でもそれも何度か雨が降れば、なじんでいつしかまわりと見分けがつかなくなるだろう。

「ここの桜、見に来たいね」

聡は額に手をかざすように青々とした桜の葉を見あげる。

将は何もいわずに、天に届かんばかりの長い腕を上に伸ばして目を閉じていた。

聡に返事をよこすのは、夏のなごりのツクツクボウシだけだった。

しばらくして将は腕をパタッと落とすと

「行こうか」

と聡に顔を向けてうながした。その顔にはもう涙はなかった。

それでも二人は、墓地をあとにしながら、何度か桜の木を振り返った。

桜は微動だにせず、行く二人を見送っていた。

寺をそのまま去ろうとする将に、聡がいきがけに桶に水を汲んだ水道を見つけて、手を洗うことを提案した。

スコップをつかったけれど、手は土で汚れているからだ。

「わー……、ありえないほど冷たい」

聡が思わず声を出した。水道から出てくる水は、この夏の暑さからは想像できない冷たさだった。

長く触れていると手がかじかんでしまいそうなほどだ。

将はだまって、手を水で濡らしていた。

さっきから言葉数がすくない将を聡はのぞきこむ。

巌と本当に別れてしまったこと……生きた巌にはもう会えないことを、将は噛み締めているようだった。

そんなふうに、あんまり沈みこむのもよくない、と聡は、

「将」

と呼びかける。

「ん？」

とあげた将の顔に、ばしゃっ。

片手に掬った冷たい水道水を将の顔をめがけて放り投げた。

反射的に目をつむる将。水は、顔の中心をややはずれて、将の頬のあたりにかかった。

「油断大敵」

聡は濡れた将の顔を指差して笑った。

「やったなー」

目をあけた将は、いつもの顔に戻っていた。

それを確認した次の瞬間、聡は思い切り冷たい水のかたまりが顔で破裂するのを感じた。将の逆襲だ。

「キャー、なにすんのよ」

「そっちが先にやったんだろー」

「なによー」

二人で蛇口を奪い合うようにして、冷水を掛け合う。

蝉がたじろぐほどの笑い声が、二人の白い歯からこぼれる。

夏の日にきらめいてはじける水玉。二人からそれた水を受けて鮮やかになる紫陽花の葉。

しまいに将は、蛇口を指で押さえつけて、噴き出した水鉄砲状の水を聡めがけて狙い打ちする。

水はビームのように、笑いながら逃げ惑う聡を追った。

方向をコントロールする蛇口からは漏れた水が細くはねて、攻撃する将本人も濡れていた。

……ついに聡がすっかり濡れたTシャツをつまみながら頬をふくらませてみせた。

「もう、びしょびしょー」

ハアハアと息を荒くしている将のTシャツも上半身にぺったりと張り付いている。

「……俺も」

二人はこんなに晴れているのにびしょ濡れのお互いの姿を見て、もうひとしきり笑いあった。

前にもこんなふうにびしょ濡れで笑ったことがあった。

それを二人とも思い出している証拠に、笑いながらもいつしか懐かしい目でお互いを見詰め合っていた。

「さー、どこいこうか。千里浜とか走るのもいいなあ。波打ち際をドライブできるらしいし」

寺をあとにして将は楽しげに提案する。

ミニはまた少しエンジンのかかりが悪く、将は5回もキーをまわした。

だが、金沢へ向かっての下り坂でもあり、いったんエンジンがかかったミニは順調に走っている。

それにあわせて音楽もハイテンションなCDをかけている。

「でも将、明日手術なんでしょ。無理しないで帰ったほうがいいんじゃないの？」

聡は将をたしなめた。

ここにたどりつくのに休憩抜きだと7時間近く掛かっている。

「だーいじょうぶ、だいじょうぶ！夜中までに帰り着けば、たっぷり睡眠とれるし。

せっかく来たんだから4時ぐらいまで遊んで帰ろうぜ」

今、11時をすぎたところだから5時間はある。

「せっかくアキラと二人のオフなんだしー。……忍者寺ってのにも

行きたいなあ」

この時点ですでに聡は、将が少し明るすぎることに気付いていた。

無理して、自分を浮き立たせようとしている……そんな様子がありありとわかった。

「よしっ！とりあえず金沢市内だ！」

ＣＤにあわせて鼻歌を歌う将の横顔を、聡は少しだけ痛ましいもののように見つめた。

二人は将の提案で、忍者寺こと妙立寺を目指して金沢市内に入った。

だが、妙立寺は予約が必要とのことだったので、午後に予約を入れて近くの茶屋で軽く昼食をとる。

食後は犀川や西の廓を少し散策してみようということになったが、いかんせん正午すぎでもあり、暑い。

朝晩は確実に秋の気配が漂っているものの、夏の陽射しはまだまだ逞しくふりそそいでくるのだ。

「アキラ、暑いだろ」

将はそう広くない道の端に植えられた柳のそばにいる聡を振り返った。

二人は妙立寺の近くにある『西の廓』に来ていた。

金沢の代表的な観光地である『東の廓』に比べるとこぢんまりしているが、古い御茶屋の軒並みが何軒か続いている。

それを背にした将は、古い格子戸が並ぶ中ではいっそう長身が目立った。

「うん。でも大丈夫よ。……そろそろ行ってみる？」

聡は答えながら流れてくる汗をハンカチで拭った。

水道で濡れたＴシャツはとうに乾いていたが、ポニーテールにしたうなじやこめかみのあたりに玉のように汗が浮かんでいる。

将からは見えないが、うなじからの汗は、鎖骨を伝って胸の谷間へとさっきから何筋も流れている。

予約の１５分前になったので、二人は寺へ行ってみた。

そこには、すでに何人もの客が時間を待っていた。

忍者寺といわれる妙立寺は、寺自体は寛永２０（１６４７）年に造られた由緒あるものだが、

２３の小部屋と２９の階段をめぐるごとに、どんでん返し、迷路、のぞき部屋という仕掛けに出会えることが受けて、若い観光客も多い人気スポットだ。

３０分ほどかけてガイドに案内されつつ、その『忍者寺』たるゆえんの仕掛けを体験するようになっている。

ガイドによるとこれらは、すべて昔のままのもので、客寄せのためにつくったわけではないらしい。

身をかがめるようにして部屋を移動する将も、そのつど仕掛けに驚いて

「おおーっ」

と体をのけぞらせては、額や後ろ頭をゴチッと打ち付けたりしていた。

「すげえな。どうなってんだろ。ＣＴスキャンあたりで見てみたいな」

思いがけないところに現れた階段を見ては将が感嘆の声をあげる。

そんな将はすっかり自分が有名人であることを忘れてしまっていた。

いくら伊達眼鏡をかけていても、声と目立つ長身で、一緒にガイドを受けている客の何人かは気付いたらしい。

若い女性の３人グループがヒソヒソと話し合ったあげく、一人が思い切って話し掛けてきた。

「あの……ＳＹＯさんですか」

将と聡は固まった。

しかし、違う、とはもはや言えない。

将は観念して

「そうです。……他の人にはナイショにしてね」

とその女性に小さな声で囁いた。

囁かれた一人は両手を口にあてて顔を真っ赤にすると、仲間のところに小走りで戻っていった。

3人で声をひそめつつ、キャーキャーと騒いでいるようだった。

それで不審に思った他の観光客も将をちらちらと見はじめる。

なにせ、将は連続ドラマこそまだ1本だが、いまやCM3本に出演し、顔が売れている。

おかげでガイドは声をはりあげるはめになってしまった。

妙立寺をあとにし、二人は千里浜に向かっていた。

「アキラ、おっかしーの。なんだよ、さっきの『私は遠い親戚のイトコです』っての」

将はハンドルを切りながら可笑しそうに笑った。金沢市街をあとにすべく、高速を目指す。

「イトコって遠い親戚じゃないじゃん」

「だってー。あせったんだもん」

聡は助手席でプッと脹れてみせた。

冷房の効いた車に戻ることができて、二人ともほっとしている。

見学が終わったあと、将は同じグループにいたファンだという観光客に握手と携帯撮影をせがまれてしまったのだ。

幸い通りにいるほかの観光客は無視してくれたので、将は数人と握手し、携帯で写真をとられるだけで済んだ。

そのとき、一緒にいる聡に、ファンの一人が

『そちらは……？』

と大胆にも訊いてきたので、あせった聡は

『あ、私は、こっちに住んでいる、遠い親戚の……イトコなんです』

と答えてしまったのだ。

ファンは、なんとか素直にそれを信じてくれたらしい。

あとを追けてくることもなく、そのまま立ち去ってくれた。

282◆夏の終り5

「もしかして、道に迷ってる?」

ついに聡が遠慮がちに声を出した。

「うーん。そうかも」

答える将の声も、明るい調子ながらも、少し弱弱しい。

どんどん暗くなってくる視界とは裏腹に、あいかわらず賑やかなBGMだけが車内に響いている。

将が行きたがっていた千里浜なぎさドライブウェイを走ったあと、帰りがてら五箇山の合掌集落を見て、帰路についた二人である。

合掌集落をあとにしたのが5時前だが、途中、

「こっちのほうが近そうじゃん?来た道を戻るんじゃなくて違う道を行ってみようよ」

と将はナビで案内されている方ではない県道に進んだ。

それでも、そこまではいちおうナビの地図に表示されている道だったのだが、その道が土砂崩れのため通行止めになっていた。

『迂回路』と表示されている道に進んでみたのだが、これがまるっきりの林道、しかもナビに表示されない道だった。

その道のどこかで分岐を間違えてしまったらしい。

今、将と聡を乗せたミニは、すれ違うのもやっとという、両側を森と熊笹に囲まれた細くくねる道をあてどもなく走り続けている。

もう6時をすぎているというのもあるが、千里浜を走っていた頃までの晴天が嘘のように掻き曇った空は、墨色に濁って真っ暗だ。

グレー一色のあたりは、車内からはかろうじて物の形が判別できる程度になってしまっている……それもどんどん沈み込んでいく。

「戻った方がいいんじゃない？さっきから家も全然ないし……携帯も圏外だし」

心配する聡に

「うん。でもUターンも厳しいよ。この道幅じゃ」

と将は両手でハンドルを操りながら答える。

思わず黙り込む聡に、

「……だあいじょうぶだって！」

と将は明るい声を出して聡を振り返った。

その将の顔も、すでに前方を照らすライトの反射でようやく見えるほどの暗さだ。

「大丈夫。なんとかなるって。狭い日本だし。

……アキラ知ってる?日本って国土の面積の3%が道路なんだってさ。だったら、そのうちどこかに出るに決まってるじゃん」

聡は、ふうん、と答えながら、さっきからの将の明るさを考えている。

千里浜でも将は、いつになく明るくふるまっていた。

『ヒャッホウ!』

と叫びながら、わざと波に近いところにミニを走らせる。

タイヤは日本海の波を踏んで、後ろに派手にしぶきをあげた。

千里浜なぎさドライブウェイは、日本で唯一、砂浜を車で運転できる海岸である。

九十九里浜を思わせる長い砂浜をバスや車、バイクがじかに走行し、道路標識まで立てられているのに聡はびっくりした。

砂の粒子が他の海岸に比べて細かいために、タイヤが埋まらないほど砂浜がよく締まっているという。

ハイテンションぎみの将は、波が引いたところを狙うようにハンドルを切り、

また寄せてくるのを見計らって逃げるようにこれまた反対側にハンドルを切る。

蛇行するミニの車中で、二人の体は大きく揺れて、将はそのたびに笑った。

『ちょっと、海に近寄りすぎじゃない？』

思わず聡は、悲鳴のような声をあげる。

『いいじゃん。すっげえ楽しいよ、おっと』

また波を踏んでしまった感触。派手にしぶきを跳ね飛ばす音がする。

『もう……車が錆びてもしらないわよ』

といいながらも、聡は車よりも、むしろそんな将が少し心配だった。明るすぎる。……というより無理して明るくふるまっている。聡にはそれがわかった。

やっぱり、巌の死は将にとってかなりショックだったのだろうか……。

『アキラー、こっちこいよー！』

ミニを停めるなり、海へと走っていった将は、すでに膝下を金色の波の下に埋めながら手を振っていた。

聡の足元には将のサンダルが乱暴に脱ぎ捨ててある。

聡は、首を横に振りながら、金色一色になった午後の日本海を眺めた。

車に乗っていたときは気付かなかったが、波はかなり高いらしい。

白い泡立ったような波頭が砂浜に打ちつけ、砂浜を一瞬鏡のように変える。

その金色が砂浜にしみこんでいくように消えたとき、再び波が砂浜を金色にコーティングする。

その繰り返しに見とれながら、聡は眩しさに手をかざす。

『さっきの続き、しよーぜー』

将はまだ叫んでいる。

こうしてシルエットになると、将の手足の長さが際立つ。

金色の波涛をバックに立つ将は、何かの神話に出てくる美少年さながらだ。

聡はミニの後ろに寄りかかると、さっき買った冷たいカフェオレを口にした。

将は諦めたのか、ちょうど走ってきた小さな犬にちょっかいを出し始めた。

濡れる覚悟がないのか、犬を連れてきたらしいカップルは、将がびしょ濡れになるのもかまわずに犬と遊ぶのを見て、笑いながら寄り添っている。

犬が将にじゃれついているのか、将が犬にじゃれついているのかわからないほど将は積極的に遊んでいた。

犬のキャン、キャンという鳴き声に、将の『う〜、ワンワン』という声が混じる。

そんな風にはしゃぐ将も、聡にとって初めて見るものだった。

しばらくして、こっちへ戻ってきた将は、去年二人で波打ち際で遊んだときほどではないが、

ジーンズの半分が濡れ、Tシャツはしぶきの水玉模様が盛大についていた。

『またバレたの？』

カップルに乞われたのか握手をして、犬を抱いて携帯で写真を撮られるのが見えた聡は将に訊いた。

『うん、ドラマ見てたって言われたから。……あー面白かったぁ。アキラも来ればよかったのに』

将は白い歯を剥き出しにして笑った。

そのとき将には、あたたかな金色の午後の光が降り注いでいたのに……今、二人が乗るミニの上は、厚い雲が覆っている。

「やっぱり山に来ると天気が悪いね」

あまり不安に思ってないのか、将はあくまでも軽い口調で声にした。

「予報はどうだった?」

「わかんない。金沢の天気は晴れのち曇りだったけど」

しかし、頭上の雲は、今にも降り出しそうに見えた。日が暮れたせいでそうみえるだけだ、と聡は信じたい。

「大丈夫、ガソリンはまだいっぱいあるから」

この状況になってから何度目だろうか、将は『大丈夫』を繰り返した。

たしかにガソリンは千里浜のあと、高速に乗る前に入れたから、まだ当分持つ。

だけど、道はもうすれ違えないほどの幅になり、おまけにライトに照らされた路面には真ん中に朽ちた枯葉が積もっているほどになってしまった。

ひび割れたアスファルトの端にはどうやらコケすら生えているらしい。

対向車も一度も来ない。この狭さだから来てもらっても困るが、あまりにも来ないのは不安を煽る。

おまけに上り坂の傾斜とカーブはどんどんひどくなる一方だ。

車内に流れているCDはもう3回も同じ物が流れているが、不安な二人はそれに気付いていない。

「やった！峠だ……」

ミニはくねるカーブの上り坂を脱出して、切通しの峠に出た。

あいかわらず道幅は狭いが、これからは下り坂だ。

「これ下ったらきっと大きい道に出るよ」

将の希望的観測があたったのか、すれ違えない幅だった道は、あいかわらず原生林に囲まれつつも普通車同士だったらすれ違える程度になり、カーブも緩くなった。

「お、直線」

ひさびさに見通しのいい直線に出て、一刻も早く太い道に出たい将は待ちかねたようにアクセルを踏んだ。

と、そのとき。

何か、緑色に光るものが道路わきの熊笹の茂みから跳ね出てきた。

「うわっ！」

「きゃ！」

将は急ブレーキを踏んだが間に合わなかった。

バンパーに何か重いものがボン、とあたって跳ね飛ばした感触ののこ

ち、つんのめるようにミニは止まった。

止まった拍子にエンジンも停止してしまったらしい。

しばらく車内を静けさが支配した。

将は、静かな車内で聡を振り返った。ちょうど聡もこっちを振り返ったらしい。

二人は暗い車内でしばし沈黙したまま見つめあった。

暗がりは、聡の紅い唇も栗色の髪もすべて暗めのモノクロに変えてしまっている。

「……なんか、動物、轢いたかな」

聡は呟くと、窓を開けて振り返るように暗い道路に目をこらした。

何か小さなものが横たわっているのが黒っぽく見える。

聡は、ドアをあけて外へ出た。将も躊躇しながらも聡を追うように続いた。

真っ暗に見えた外だが、外灯や懐中電灯なしでも、なんとか物の形は判別できる程度の明るさを保っていた。

「……ウサギだ」

聡は呟いてウサギのそばにしゃがんだ。

野ウサギらしきその小動物は道路に横たわったまま、ぴくりとも動かない。

暗さに慣れてきた目は、ウサギの口からどす黒い血が流れているのをとらえた。

といってもほんのわずか、たいした量ではない。

だが毛は生きている動物にありえないほど乱れていて、もはや死んでいるのは明白だった。

せめて目を閉じていてくれたのが幸いだった。

「どうしようか」

聡は突っ立っている将を見上げた。

……暗がりのなかで将はこきざみに震えはじめたように見えた。

283◆夏の終り6

「将？」

将の唇が小刻みに震えているのを見て、聡は立ち上がった。

「……死んでる？」

将は目を伏せたまま、ようやく口を開いた。

聡はうなづくしかない。

「……仕方ないよ。あの状況じゃ。……可哀想だけど」

そっけない口調ながら聡は将をなぐさめると、

「これ……どうしようか。ここに置いといたら、他の車に踏まれちゃうし……」

と将の腕に軽く触れた。もっとも、この交通量だったらめったに車など通らないだろうけれど。

「うん……」

さっきまでの明るさが嘘のような将だ。どうやらウサギの死体から目を離せないらしい。

動物を轢いてしまったのがよほどショックだったのだろうか。

それにしても空模様が怪しい。

「将、さっきのスコップ出して」

そう指示すると聡は小走りに車に戻り、コンビニ袋を取り出してきた。カフェオレを買ったときのものだ。

しかし将は、あいかわらず突っ立ったままだ。

「将、スコップは？」

「あ、ああ……」

2回言われて将はようやく、トランクからスコップを取り出した。

水遊びをしながら、きれいに泥を洗ってある。

「やだ。雨。急がなくちゃ」

聡が空を仰いだと同時に、大粒の水滴がボタボタと音を立てるほどの勢いであたりに落ち始めた。

暗い空はとうとう耐えられなくなって雨を落とし始めたのだ。

聡は文字通りでくのぼうのようになっている将からスコップを奪い取ると、

スコップを持っていないほうの手にコンビニ袋を手袋のようにはめて、ためらいもなくウサギの死体を持ち上げた。

ウサギに外傷がなく、血がほとんど出ていないのが幸いした。小さい体はそれほど重くはない。

聡はウサギをそっと道のわきに運ぶと、笹の茂みの中にそっと置くように手を離した。

ウサギは笹の中に吸い込まれるように、すとんと落ちた。

聡はその上に枯葉や下生えの雑草をやみくもに引きちぎってかけた。

見ていた将は、それがせめてウサギの死体を葉っぱで隠そうという試みだということはわかったが、

手伝う気にはなれなくて、聡のすることをずっと見ていた。

聡はコンビニ袋を手からはずすと、裏返しにして丸め、再びしゃがんだ。

そしてウサギの死体があるあたりに

「ウサギさん、ごめんなさい。せめて成仏してください」

とウサギに手を合わせた。そして将のほうを振り返ると

「いちおう、手あわせときなさいよ。……気持ちなんだから」

と教師の口調で命令した。

その間にも雨は見る間に勢いを強めて、路面は黒曜石のように黒くなってしまった。

物の形が判別できるのが奇跡的な暗さだ。

将がしゃがんで手をあわせたのを見届けると聡は、

「雨、本格的になってきたよ。急ご」

と声をかけて促した。

二人の頭も肩もすでにかなり濡れ、あたりは雨がつくる細かい縦縞に霞んでしまっている。

将はのろのろと立ち上がると、運転席に座ってキーを回した。

そこで、エンジンのかかりが悪くなっていたことを思い出す。

2回、3回、4回とまわす。

エンジンはかからず、セルのまわる苦しげな音が響くばかりだ。

セルモーターがむなしく止まるたびに、雨の音が遠くに遮断された車内は不気味な静けさに包まれた。

「かからないの?」

聡の声に答えずに将は無言でキーをまわし続ける。

こんな、ナビにも表示されていない林道の山の中、しかも雨。

もしもエンジンがかからなかったら……。

あせる将はなんとかエンジンが掛かるよう祈りながらキーをまわす。
しかし、そんな将を嘲笑うように、セルモーターの音が鈍く遅くなってきた。
「……やばい。バッテリーがあがっちまう」
将は呟くとバッテリーをついにオフにした。
ライトが消えた車内はほとんど何も見えない暗がりになった。
もはやお互いの輪郭がようやく判別できるのみだ。
将は携帯を取り出した。だが、案の定圏外であることを確認すると、将はハンドルに突っ伏した。
「……どうしよう」
「将……」
説明なしでも聡には今の状況がわかった。
「俺のせいだ……」
将の声は低かった。あいかわらず突っ伏したままだったので、聡には将が何といったのか、聞き取れなかった。
「どうしよっかねー」

それでも将がなにやら落ち込んでいるのを悟った聡は、シートにすとん、と寄りかかると、おどけるように明るめの声を出してみた。

雨はさっきよりもっと勢いを強めたようだ。

それももう、いくら目をこらしても、音でしか判別できない。

ボンネットを、天井を叩くぼこんぼこんという音でその雨が大粒だということがわかる程度だ。

「ここで夜明かしちゃおうか?」

見えないだろうけれど、せいいっぱいの笑顔をつくって聡は、将のいる運転席のほうに顔をむけた。

「俺のせいだ。……俺が、ウサギを轢かなかったら。俺が道を間違えなかったら……」

将はうめくような声で呟いた。

「将?」

暗闇の中で将の息遣いが粗く不規則になっているのがわかる。ここで聡はようやく将の異変に気づいた。

「ヒージーだって……。俺があんなことを言わなければ……」

「将、何いってるの?」

聡は暗がりに必死で目を凝らして、将のようすを見ようとした。

だが、将の顔も姿も、もはや墨汁のような闇に隠れてしまっている。

そのせいか今までに聞いたこともない、震える声と息遣いがダイレクトに聡に響いた。

「俺が……あんなことをしなければ……大悟だって……。俺の……みんな、俺のせいだ。俺がいけないんだ。俺さえ、いなければみんな……」

それは、将が心の奥底にいつも抱えていた後悔だった。

今、暗闇の中で、まるで自らを傷つけるように、一気に噴出しているのだ。

「俺が、いなければ」

「将、やめて」

聡はシートベルトをはずすと、声のほうに手を伸ばして上体を投げ出した。

聡の手はすぐに声の発信源である将のぬくもりを捉えることができた。

いったん将の体をとらえた聡は、手探りながらすぐに、将の顔を見つけることができた。

それを、ぐいっと引き寄せると、無我夢中で唇を押し付けた。

濡れた将のTシャツからは、雨と潮のまじった生臭い香りがほのかにしたけれど、聡はそれをもっと深く嗅ぐように体を押し付けた。

冷え切った将の心を、体のぬくもりで温めるように。

去年、夜の川で死にかけた将にしたように、熱い息を吹き込むような口づけに、聡は自分の気持ちを込めた。

「将……。あたしは将が必要だから……」

聡は濡れた将の髪をくしゃくしゃとかき混ぜながら呟いた。そして再び唇を寄せる。

わざとなのか、それとも唇がずれたのか、それは将の瞼に、鼻に、頬に……将の顔中に繰り返された。

……聡は視界ゼロの暗闇の中、唇と指で将の姿を確認しようとしていたのだ。

半分濡れた将の髪。耳のカーブ。太いけれど形が整った眉。長い睫に覆われた奥二重ぎみの瞼。高い鼻梁。そして唇。

ぜんぶ、聡が欲しくてたまらないものだ。欠乏すると瀕死に陥るものだ。

「あたしは将がいないとだめなの。……だからそんなこと言わないで」

低い声に似合わない、聡のせつない声が雨音の中に響く。

将は最初されるがままになっていたが、濡れたTシャツに覆われた聡の華奢な背中におずおずと手をまわした。

その温かさと弾力に、感情より先に体が先に反応した。

将の腕はいつのまにか聡をきつく抱きしめて、自らの唇を聡のそれに繰り返し押し付け返し始めた。

ギアとサイドブレーキの存在ももどかしく、二人は胸と胸を密着させようと試みた。

雨の音だけが響く真っ暗な車の中で、お互いのぬくもりと感触だけを確認し、むさぼるように二人は口づけを繰り返した。

284◆夏の終り7

懐中電灯が、濡れた路面を丸く、降りしきる雨を白い縞に照らしているほかは塗りつぶしたような暗闇。

雨音と、雨に濡れた樹木からかぐわしく立つ芳香だけが歩く二人を包んでいる。

さっき降り始めた雨はいっこうに止む気配はない。

ときおり勢いを弱めたと思うと、断続的にどしゃぶりになったりする。

歩けど歩けど両側の原生林も切れ間がなく、舗装こそされているものの、道も曲がりくねっていて、もはや方向もよくわからない。

当てになるはずの星も雨雲に隠されている。

「将、寒くない？」

将のパーカーを着た聡は振り返った。

車を出るときに将が着せてくれたものだが、すでにずぶ濡れのパーカーは用をなしていない。

「大丈夫」

服のまま頭から水をかぶったようになった将は、雨音にかき消えそうな返事とともに聡の手を少し強く握り返した。

こうやって手をつないでいないと、お互いさえも見失いそうな暗闇と雨音。

二人が雨の中、手を取り合って山道を下り始めて、もう３０分以上になるだろうか。

あれから。

どしゃぶりだった雨が少し弱まったのを音で聴き取った聡は、口づけの余韻でぼうっとなっている将にナビをつけさせた。

バッテリーが残り少ないのは承知の上だ。

二人が乗る車が表示されているのはあいかわらず地図にも表示されていない道らしい。

虚しい空白の上に車の印が表示されている。

それでも聡は表示された地図を拡大したり縮小したりして何かを確認しているようだった。

「これさ。直線距離だと、国道まで3キロぐらいだよね」

聡は明るい声を出した。

ナビの画面から放たれた白い明かりに浮かんだ聡の横顔を将は振り返った。

「……てことは、少し歩けば携帯の電波が入るかも」

聡はさらに具体的な希望を口にした。それに対して将は、しばらく黙り込んだのち

「……だけどさ。いまいる道が国道につながってるかどうかわかんないよ」

悲観的なことを口にした。

口づけと抱擁は噴き出す後悔と罪悪感をなだめてくれたけれど、それでも将はいまだ、心を覆う暗い雨雲から脱出できないでいる。

「こんな風にカーブしてるかもしれないし。行き止まりかもしれないし……」

将はナビの画面を指差して、車のあたりでUターンのようなカーブを描いた。

なにせ、今いる道路が表示されていないのだ。それがどこに接続しているのかは、あいかわらずわからない。

ただ、確実に通過してきた国道、県道と、たどりつきたい国道の間の空白に車は表示されていた。

そのたどりつきたい国道までが、直線で3キロぐらいに見えたのだ。

「でも」

聡は即座に言い返す。

「ここにいたってしょうがないでしょ。車がなおるわけじゃないし。携帯の電波がなかったらＪＡＦだって呼べないじゃない。……ほかの車だって全然通らないし」

聡はそういうと、体を将のほうに向けて宣言した。

「将、歩こう」

将はだまりこんで俯いた。

「直線距離で3キロだったら、どんなにぐるぐるカーブしてたって、１０キロにはならないはずだよ。

……てことは2時間歩けば、国道に出るよ。そしたら電波だって通じるだろうし」

聡はぐるぐる、というところをリズミカルに発音した。

そうすることによって二人がクリアすべき試練をできるだけ軽く明るくしようとするかのようだった。

実際、ナビの光に横から照らされた聡は、やる気まんまんに見えた。

そんな聡のしっかりとした様子を見ると、やっぱり聡は年上なんだ、と思う……つまり相対的に将は頼りない自分が情けなくなる。

「雨、どうすんの。傘ないよ」

ナビで多少明るくなったせいか、フロントガラスに雨粒が次々とくっついて、雫となって落ちていくのが見える。

それにつられて、さらに否定的なことを言ってしまう自分が将は情けない。

「いいじゃん、夏だし、ちょっとぐらい。水遊びしたと思えば」

聡は笑いながら将の腕を軽く叩いた。

「懐中電灯もあるんでしょ」

「それはあるけど……」

昨日、ＳＡで日よけシートを探したときに懐中電灯を使ったのを聡は見ているのだ。

「じゃあ、行こう！今7時。きっと9時にはＪＡＦに連絡できるよ。……よーし、まずは車を動かすぞー」

聡は力強く声をあげると、意を決したようにドアを開けて外に出た。

とたん、開けたドアから一瞬雨音が強く響いた。フロントガラスに映るよりそれは激しく思えた。

「将、ギア、ニュートラルにして。サイドブレーキも解除して」

聡は雨に打たれながら、運転席の窓の外から叫ぶように言った。

将はしぶしぶギアをローからニュートラルに変えた。サイドはもとも引いていない。

今、車は1・5車線のほぼ真ん中にいる。

このままだと万が一、対向車や後続車がやって来たら通行を妨げてしまうだろうから、聡はこれを端に寄せようとしているのだ。

「どうせ誰も通らないよ、こんなところ」

面倒臭い将は反論してみた。

このまま放置してもいいだろう、ということだ。

「でもさ、朝になったらわかんないし」

つまり時間的に、最悪明日まで放置しておく可能性まで考えているらしい。聡はそういって車の後ろにまわった。

「……ライトは小さくして。バッテリーないんでしょ……。将はハンドル切って」

叫ぶように指示する聡の頭に肩に雨が刺さるのが見える。そのまま聡は車体を押し始めた。

バックミラーに、赤い光りに浮かび上がる聡が映った。

雨で髪がみるみる濡れていくのがわかる。

「よいしょ、よいしょ」

声をかけながら聡は体重をかけるべく、体を車に押し付けた。

しかし車はまったく動かない。

サンダルと素足の接点が雨ですべって力を込めにくいというのと、道は前への下り坂のはずだが、たいして傾斜していないらしい。

サイドを引かなくてもいい時点で将にはそれがわかっている。

「くう〜っ」

それでも聡は踏ん張った。

将は、運転席に座ったまま、バックミラーで聡のようすを窺っていた。

――女一人の力で、車が動くはずがない。バカだな……。

とさえ思う自分を、次の瞬間に嫌悪する。

大好きな聡が頑張ろうとしているのに、こんなことを思うなんて。

将はますます沈み込む。

それに自分が降りれば、少しは軽くなる。

わかっているのに、なぜか将は動けなかった。

このままここで聡と二人でいてもいい。面倒なことをしてまで、助けを呼ぶ必要はない。

と将の心は刹那に走っていたのだ。

それでも聡は、一向にあきらめないらしい。

将はこんどはミラー越しでなく、振り返って聡を見た。

ガラス越しに見える聡はずぶ濡れで、顔をコミカルなほどにくちゃくちゃにして頑張っている。

車が、ごくわずかに動く気配があった。

将が振り返ったのがわかったのか、聡は力を込めながら微笑んだ。

聞こえないけれど『もうちょっと』と呟いたのがわかった。

それを見て、ふいに将の心は温かくなった。

「アキラ」

ついに将は呼びかけると、車を降りた。

降りたとたん、頭や肩に雨が突き刺さってくる。標高が高いせいか、それは思ったより冷たかった。

「……俺が押すよ。アキラは、前でハンドル切って」

テイルランプの赤い光に照らされて聡は嬉しそうに頷いた。

雨で濡れそぼった肌や髪が赤く輝いている。

山に降る雨は、将の体に冷たく染み込むようだったが、心は温かかった。

それでも聡はドアを開けた状態で、運転席のフロントガラスの枠に手をかける。

一緒に押して動き始めたらハンドルを少しずつ切ろうというわけだ。

「……いしょッ」

将と聡が力をあわせたと同時に車はたやすく動きだした。

285◆夏の終り8

冷たい雨が降りしきる山道を歩いて下る二人は、心細さを紛らわすように、聡の提案でしりとりを始めていた。

「リンゴ」

「ゴ……ゴリ！」

「ゴリってなんだよ。ゴリエならわかるけど」

「あら。金沢名物の魚よ。知らないの？」

二人でやるシリトリは、かなり長く続いている。もう15分も続いているだろうか。

こうしてゲームをしていると、雨の冷たさも、サンダルが滑る坂道の歩きにくさも、少しは紛れる気がする。

「ちぇー」

将は少し考え込んで「リベート」と返した。

聡は即座に

「トリ」

と答える。

「リ……リベンジ」

「ジ、ジ、……じどり（地鶏）」

「……アキラ、ま～だ『り』攻め続けるのかよ」

将はつないだ手を前後に振り回した。

へへーん、と聡は笑った。

暗くて見えないけれど、きっと得意げな顔をしているのに違いない。

「くっそう……。リチウム」

「ム・リ」

「リーチ棒」

リーチ、はさっき言ってしまったので、苦しい将はその先に『棒』をつけている。

「将、マージャンやるの？」

聡はあきれたように声がするほうを振り返った。しかし暗い懐中電灯は前を照らしているので、ほとんど将の顔は見えない。

「あんまやんないけど。アキラは？」

『あんまりやんないけど』といいつつ本当はかなりできる将だ。賭け事全般は中学時代にマスターしている。

それをごまかすように聡に訊き返す。

「大学のサークルでちょっとだけ習った。ぼう……でしょ。じゃ、瓜（うり）」

「また？り、り……、えーと」

しばらく考えながら数歩進んだ。もう手持ちの『り』で始まる単語は使い果たした気がする。

「リンゴ飴！」

将はやっと見つけた嬉しさのあまり、おどけて持っていた懐中電灯を自分の顎の下に持ってきた。

「何、それ。ちょー不気味。ずぶ濡れだしー」

聡はその顔を指差して、笑った。笑いながらもつないだ手は離さない。だが、すかさず

「目盛り！」

と得意げに答えた。

「ゲー。もう降参だしー」

「えー、もう降参なのー？つまんない。まだいっぱいあるじゃーん」

といいつつ、聡は携帯をあけてみた。

携帯の画面の光りに、久しぶりに聡の横顔の輪郭が浮かび上がる。
もうそろそろ歩き始めて1時間になる。
「……まだ、圏外？」
訊きながら将が聡の携帯をのぞきこもうとする。
携帯の電池を無駄遣いしないためと、雨に濡れないように聡は手早くそれを閉めた。
……ということは、まだダメということだ。
「うん。……でもきっともうすぐだよ。がんばろう」
聡は前向きな励ましの言葉を繰り返した。
「アキラ……。アキラは強いよな」
雨にうんざりしている将は、思わず口にした。お腹もすいている。サンダルで歩いてきたので足も少し痛い。
まだ頑張るという聡に感嘆したのと呆れたのと中間のような気持ちだ。
雨は一向に止まない。それどころか断続的にどしゃぶりになったりしている。
車という逃げ場を追い出された二人は、いやおうなしにそれに打た

れるしかない。

将でいえば、泳いだのと同様の濡れ方だ。パンツまで湿った衣服は、じっとりと重く、また時間の経過と共に確実に冷やし始めている。

気温も東京と違ってかなり寒い。

「しりとりが？……なーんちゃって」

それでもやや弱まった雨の中、おどけた聡の声が少し寂しげに響いた。

続いた聡の低めの声は、しみじみと温かかった。

「将がいるからだよ」

聡は、歩みを止めずに、将の腕に自らの腕をからませてきた。

思いがけないぬくもりに、将は先を照らす懐中電灯を聡の顔に向けた。

聡の、濡れそぼった髪が貼りついた顔は、やはり将のほうを見上げていた。

「こんな状況じゃないと、手なんかつなげないでしょ。……腕なんか組めないでしょ。

みんなから写真をせがまれるようなイケメン俳優で、教え子なんて」

といって嬉しそうに笑った顔は、濡れているせいなのか、寒いから

なのか、よけいにまっ白に見えた。

だけど、その唇だけ血の色が差してばら色なのが、暗い灯りのなかでも確認できた。

「しょう」

聡は、将の腕をぎゅっと引き寄せた。そんなふうにすると胸の柔らかさが腕に触れる。

それも温かだったが、覆うTシャツやパーカーは将のそれと同様びっしょりなのがわかった。

「将がいるから強くなれるんだよ。前向きでいられるんだよ」

聡は歩く速度をゆるめずに温かみをおびた低い声で続ける。

「……将がいなかったら、心細くてどうしていいかわからないと思う」

聡につられて雨の音まで優しく響き始めた。

「こうやって将が隣にいてくれるから、冷静にいろいろ考えられるんだよ」

聡は歩きながらも、将の肩のあたりに、一瞬顔を摺り寄せてきた。

「でもさ。今こんなことになってるのは、あきらかに俺の失敗じゃん」

「まーだ、そんなこと言ってるし」

聡は腕を組んだまま将の肩をぺちぺちと叩いた。濡れたTシャツが水音を立てた。

「将はー……」

聡はほどけそうになった腕を再びぎゅっと握ると、語尾を甘く延ばして続ける。

「あたしを何度も助けてくれたじゃない。

誰かに川原の小屋に連れ込まれたときだってそうだし、ニセコのてっぺんでだって……。将がいなかったらあたしはどうなってたか」

「アキラ……」

将は思わず立ち止まると、聡を抱き寄せた。

「だめよ。……ぐずぐずしてたら懐中電灯の電池がなくなっちゃう」

「消すよ。だから……」

このままでいさせて。

……その言葉は吐息と雨音の中に溶けた。将はすでに聡を抱きしめていた。

濡れてじっとりとしたパーカーから水が絞り出るほど強く。

「将……」

瞼を閉じても開けても同じようなこの暗闇の中、お互いの感触とぬくもり、そして吐息だけが確かだった。

「ねえ。将」

聡は将の腕の中でつぶやいた。

「あたしね、本当は嬉しいんだ」

そういうと聡は将の胸に自分の顔を押し付けるようにしてきた。

「え？」

将は意外な聡の言葉に、思わず訊き返す。

抱き合う二人には少し強めの雨が降り注いでいる。濡れた半袖の将の肌にはさっきまで鳥肌が立っていた。

聡をこうして抱きしめているから少しはましになったけれど。

「こんな経験が二人で出来て」

聡はたしかにそういった。こんな辛い状況が嬉しい？将のけげんな

表情が見えないのか聡は続ける。

「たしかに、今は……雨に濡れるわ、寒いわ、歩きにくいわ、少し疲れたわ、お腹すいたわで、ちょっとつらいけどさ。

つらいことって乗り越えたらすっごくいい思い出にならない？」

前半は将にとっても切実な問題だ。でも乗り越えたら、というのがよくわからない。というよりそこまで考えが至らない。

聡は補足するように将の胸に語り掛けるように続ける。

将は、聡の吐息が掛かるところに、さっきから本当に『心』というものが本当にありそうな気がしてならない。

「たとえば旅行だってさ。ハワイあたりでトラブルもなくスムーズで楽しかったです。

……って話聞くよりも、マイナーな、日本人があんまりいない国に行って言葉が通じなくて大変だったけど、なんとか身振り手振りで伝えた、とか、

泥棒に遭ってピンチに陥ったけど、なんとかした、とかそういうほうが面白くない？」

「面白けりゃいいの？」

将は、聡の突拍子もない例えに少し可笑しくなった。

「そりゃもちろん、『乗り越える』っていうのが大前提だけどさ。

本人だってそのほうが強く心に残ると思うんだ。

……それがさ、こんなふうに二人で乗り越えたら、きっとすっごく濃ゆい絆にならない？幸せじゃない？」

聡は、さらに一段優しい声でさらに続ける。

「つらいこととか、ピンチとか、試練とかって、乗り越えたときにより強く幸せを感じるためにあるんだと思う。

もちろん、乗り越えてるときはチョーキツイんだけど。今とか」

将は小さな子供になって母親に諭されているような錯覚に陥る。

こうやっているのも抱き合っているのではなく、聡に抱きしめてもらっているのではないだろうか。

「ビールと夏の重労働みたいな関係？」

将は例えで無意識に子供ではないという意思表示をしてしまう。

「もう。未成年のくせに。……でも、そう。それに近いかな。ご褒美というか……あとのウマさをより引き立てるというか」

聡は将の背中をぺちぺち叩いて笑った。

「きっとさ。今だって、あと1時間……ううん30分もしたら、『あのときはキツかったねー』って二人で笑えると思う。

さっきよりもっと二人の思い出が増えるんだよ。それって待ち遠し

くない？」

聡の口調は、あったかくて、楽しげで、本当にその時を待っているようだった。

もう少し頑張れば、二人はさっきよりもっと強い絆で結ばれる。

この雨の冷たさも、空腹も、疲れも、あとの幸せを引き立てるためのものなのだ。

そんな風に思える聡を、将はあらためて好きだと思った。

「ね。アキラ」

聡のいうとおり、待ち遠しくなった将は試しに口にしてみた。

「それって、俺たち二人もそうなのかな」

教師と教え子。そんな二人の間に横たわる教育上の問題とか、世間体とか。

まして将は、うかつに恋愛もできないとされる芸能人だ。

これ以上愛し合っている二人はいないはずなのに、なかなか結ばれないことを将は、例えてみる。

「簡単に結ばれるより、いろいろ乗り越えた方が強く結びつくって……。固い絆になって、あとで待ってる幸せがより強くなるのかな」

「……きっとそうよ。そうだよ。いつか二人で、こんなこともあっ

た、って振り返れたらいいね」

あいかわらずの真っ暗闇だけど、将には聡が自分を見上げて微笑むのが見える気がした。

286◆夢一夜1

二人は、森へ降り注ぐ雨音だけが響く闇の中で、しばらく抱き合っていた。

将の胸に頬を押し当てて目を閉じていた聡のほうから

「そろそろいこうか」

と顔をあげた。

「うん」

将がポケットに入れた懐中電灯を点けようとしたそのとき、

将の胸から顔を離した聡は、木々の葉陰にぼうっとした光りが見えるような気がした。

「将、あれ……」

といっても指差している指も懐中電灯で照らさなくては見えないような闇だ。

将は聡の手を懐中電灯で照らすと、その方向に目をこらした。

ごくわずかの光りは、懐中電灯の光が邪魔で見えない。

しばらく暗闇で抱き合っていた二人の目には、懐中電灯の暗い光ですら、とても明るく映ったのだ。

将は懐中電灯をもう一度消した……たしかに、幻と見まがうような暗い光が生い茂る原生林の向こうに見える。

「本当だ、やった！」

将と聡は暗闇の中、顔を見合わせた。

「行こう！アキラ」

「うん」

二人は懐中電灯を点けると小走りに道を下り始めた。

民家だったら、事情を話して電話を借りることができる。

最悪外灯だとしても。こんなところで外灯をつけるということは、何かがあるはずだ。

しかし……道を下るにつれて、灯りは再び見えなくなってしまった。

灯りがあるのと逆方向に進んでいるようにさえ感じた。

だが、二人は『道が大きくカーブしているだけだ』と信じて、手を取り合って懸命に歩いた。

曲がりくねった道を３０分ほど歩いただろうか。

だんだんまっすぐな道が増えてきて、雨音に混じってどこからともなく沢の音が聞こえ始めた。

「やっぱり見えるよ！」

聡が歓声をあげた。将は目をこらした。

「ほら！あそこ」

今二人がくだっているカーブの下を指差した。

こんどはかなりはっきりと……懐中電灯に負けない明るさで灯りが見える。

しかも１つではない。水銀灯と、その下に民家らしき影も見える。

「よし！もうひと頑張りだ！」

「うん」

二人は手をつなぐと、待ちきれなくて走り始めた。

あんまり走ったので、民家に着く直前に息が切れてしまった。

「ちょっと、……待って」

聡は息を整えるべく橋の欄干に手をついた。水銀灯はその袂に立っていた。

水銀灯の白い灯に照らされて小さな石橋が、沢……というより小さな川に掛かっていた。民家は少し先に見えている。

気がつくと雨が少し小止みになっている。
久しぶりに二人は、お互いの姿を目にすることができた。
「びっしょりねー」
でも走ったおかげで、寒さは忘れている。
「俺、パンツまでびっしょり」
「あたしも」
二人荒い息ながら笑いあう。
「携帯は……まだ圏外みたいね」
「いいよ。あそこの家で電話を借りよう」
二人は、あと１０ｍばかりに迫った家へと、手を取り合った。

民家は小雨と水銀灯の暗い光の中でかなりオンボロに見えた。
あまり手入れされていない前庭に、いちおう門灯があるにはあるが、消えたままだ。
だがくすんだ緑色のカーテンから蛍光灯らしき暗い灯が漏れている

のが見えるし、

前庭の横の空き地には、軽自動車と軽トラック、こぎれいな国産車が駐まっていた。

「民……宿？って書いてあるよ」

消えた門灯の裏に、泥だらけの看板が置いてあるのを聡は見つけた。

確かに『民宿・清流荘』と書いてある。

「最悪、車が今日中に直らなかったら、泊めてもらえるかな」

そういいながら将は、ガラスの引き戸のわきにあるブザーを押した。

しかし、鳴っている気配がまるでないし、誰も出てこない。

何度か押してみたが誰も出てこない。

二人は顔を見合わせた。そのうち、再び雨がひどくなってきた。

軒にいるから、もう濡れないけれど、川からの風が濡れた体をしばりあげるように急速に冷やし始めた。

さっきまでばら色だった聡の唇がもう紫色になって震えているのを見て、将は引き戸を叩いた。

「すいませーん！夜分すいませーん」

古い地紋ガラスがはまった引き戸は、叩かれて派手に音を立てた。

それでようやく奥から人が出てくる気配がした。

「どなたですか」

それでも年老いた女らしき声は、用心のためか引き戸をあけずに応対しようとする。

その用心を解くべく、聡が将を制して引き戸に向かって話した。

「あの……。この先で車が故障してしまったんですが、携帯が通じなくて困っています。よろしかったら電話を貸していただけないでしょうか」

それで怪しい者ではない、と認識されたのか、ガラリと、戸が開いた。

ハルさんより少し年上くらいだろうか。

寝巻きにカーデガンを羽織った白髪の女が将と聡を見上げた。

「……あらまー、びしょぬれ。ちょっと待って。すぐタオル持ってくるから」

どうやらたやすく警戒を解いてくれたらしい。

白髪の女は小走りに奥にひっこむと、使い古しらしい乾いたタオルを持ってきた。

「すいませんねえ……。年寄りなんで耳が遠くてねえ」

と言い訳をしつつも

「あ、入って、入って。川の風が寒いでしょう」

と暗い蛍光灯に照らされた玄関先に入れてくれた。

立っている玄関の三和土に、足を伝った水滴が落ちて水溜りが出来るほど、二人はずぶぬれだったので二人は有難くタオルを借りることにした。

タオルにも『清流荘』というプリントが消えかかりつつも残っていた。

昔風に少し広い玄関から、2階へあがる階段が目の前にあった。

階段にも、その横の廊下にも、くすんで毛足がほとんどなくなったような赤のカーペットが張り付いていて、壁にはよれた木目調の壁紙。

廊下の奥の、ＮＨＫらしきテレビの音が大きく漏れているところが居間のようだ。

そこから丸い禿げ頭がにゅっと顔を出した。

禿げ頭はどうやら先に出てきた老婦人の夫のようだった。

彼は赤いカーペットをどすどすと踏んで、

「どれくらい歩いたの？ずぶ濡れだねえ」

といいながらこちらにやってきた。

小太りなところなどは妻そっくりである。

すでに晩酌済みなのか、玄関の暗い蛍光灯の下でも、禿げた頭に頬、鼻の頭がほんのりピンク色なのが見える。

「ああ……あれだ、洗濯機や乾燥機も使っていいよ」

と気前よく申し出てくれた。しかし、それよりも前に、電話をしなくてはならない。

「あの、すいませんが……電話を貸していただいてよろしいでしょうか」

聡はもう一度お願いした。

「ああ、ああ、いいよ」

といいながらと男は引っ込むと、玄関まで電話の子機を持ってきてくれた。

家の古さに似合わなすぎる、新しい子機を将は受け取ると、携帯に登録しておいたＪＡＦの番号を取り出して掛ける。

その間、聡が、そこに座った夫妻にここに来るまでのいきさつなどを説明する。

しかし、やり取りをする将の顔が、どんどん傾いてくるのを、説明

する聡は目の端でとらえた。

しまいには三和土に溜まった水溜りを見ているかのようになってしまった。

「……ハァ。明日しかダメですか……。ハイ。……ハイ。9時。わかりました」

通話を終了すべくボタンを押した将は、深いため息をついた。

「明日しか来ないって？」

最後のほうが聞こえた聡は先回りした。

将は声を出さずに頷いた。

「ここは田舎だからねえ……。もう9時だし」

妻のほうが気の毒そうに言った。いつのまにかお盆にお茶が用意されている。

「じゃ、どっか泊まるところ探さないと……」

と聡がつぶやいたとき、後ろの廊下の奥から、浴衣姿の男性がこちらへ歩いてきた。

首にタオルをひっかけた中年男性は、人のよさそうな顔を湯上りらしくテカテカと火照らせて上機嫌で

「いい湯だったよ」

と夫妻に声をかけた。

そしてそのまま、スリッパを履いた足で階段を上っていってしまった。

「……あの、ここ民宿なんですか？」

将は夫妻に訊いた。暗に『ここに泊まれるのか』という意味の質問に、夫妻は顔を見合わせた。

「残念だけど、今はもう辞めたのよ……」

と妻・つまり民宿の奥さんのほうが、気の毒そうに将を見上げた。

「そうですか……」

思わず返事と共に思わずため息が漏れてしまう。

が、考えてみればもともと、ここでは電話を借りるだけのつもりだった……と将は気を取り直して

「ここから一番近い宿って、どのくらいかかりますかねー」

再び訊いてみる。

「そうだねえ……。民宿が受け入れてくれればいいけど、夜だから……。

新平湯とかにいけば大きな宿があるかもしれないけど、車で２０～

３０分はかかるかねえ……」

奥さんはそう答えながら、古びた電話帳を持ってきた。

将は再び失望のため息をついた。それを聞いて、主人が

「泊めてやればいいじゃないか」

と奥さんに囁いた。だが奥さんは

「でも、お父さん。部屋ずっと使ってないし、物置になってますよ……」

と眉根を寄せる。

「あ……おかまいなく。タクシーで行けますから」

と聡が言おうとしたとき、

「困ってるんだったら、僕の部屋の隣、使っていいですよー」

と階段の上から声がした。さっきの中年男性だ。玄関にいた一同は、階段を見上げた。

男性がスリッパをパタンパタンと響かせて降りてきた。

「ご主人、泊めてあげたら」

ともう一度言った。人のよさそうな男性だ。

「でも、高橋さん……」

奥さんが浴衣の男性に何か言おうとしたが、高橋という男性は先回りした。

「僕だって泊まってんだからさ。いいじゃない」

口の利き方からどうやら、この人のよさそうな男性は、ここの常連客らしい。

「僕だったらかまわないよ。そんなびしょぬれで、雨の中放り出すなんて可哀想でしょ……ただ、部屋は襖で区切ってあるだけだけどね」

将は聡と顔を見合わせた。蛍光灯の下でうなづく聡の顔はいっそう青白く見えた。

もはや選択肢はない。

287◆夢一夜2

お湯に顎まで沈むと、ふう、と空気が体から押し出されるようにため息が出た。

聡は一人、元民宿だというこの家の風呂に裸身を沈めている。

川のせせらぎと優しい雨の音に、脱衣所で洗濯機が回る音が混じる。

さっきまで下着までびっしょりだった二人の服をまとめて放り込んでいるのだ。

ここに泊まることが決まったとき、民宿の奥さんはまず言った。

「それにしてもその濡れ方じゃあ……。まず二人一緒にお風呂に入っちゃったらどう」

「え」

二人は止まった。

「……やーねえ。いい仲なんでしょう。恥かしがらなくたって」

奥さんは笑いながら二人を風呂に案内した。

すりガラスの引き戸を開けると、そこは洗濯干し場を兼ねたような、雑然とした脱衣所になっていた。

天井からはのれんの様にタオルが干してあり、床には色のさめたバ

スマット、

その脇には孫用なのか、バケツに入ったカラフルなじょうろやアヒルといった風呂用おもちゃが置いてある。

比較的新しい洗濯機と乾燥機（それでもよく見ると時間が掛かる旧型）、一昔前のピンク色のシャンプードレッサーが木の窓枠とあきらかに異質だ。

「浴衣は大と中でいいわね。それと、ハイ。タオル。バスタオルは本来は貸さないんだけど、今日は特別。洗濯機も乾燥機も自由に使ってね」

と奥さんは使い古された柄物のバスタオルを差し出してにっこりと

「じゃ、ごゆっくり」

とすりガラスを閉めてしまった。

思わず聡は、唾をごくっと飲んだ。将の顔をまともに見れない。

「ちょっと……。将、あたしここで洗濯してるから、先に入ってきてよ」

聡は濡れた将のパーカーを脱いで洗濯機に入れながら俯いた。

「えー、なんで。せっかくだし、一緒に入ろうよ」

将は明るく誘った。

「ダメ」

「なんでー」

「ダメったらダメ。……恥かしいもん」

聡はくるりと後ろを向いた。

「いいじゃーん。もう裸のつきあいなんだし」

「とにかく、いやなの」

将は口を尖らせながらも、それ以上無理強いはしなかった。

聡に背を向けると、さっさと濡れた服を脱いで風呂場に入った。湯上がりも

「ぱんつ穿いてないとスースーするな」

などといいながら浴衣を着てしまうと、脱衣所を出て行った。

「ご飯、先に食べてていいから」

その背中に向かって聡はやっと言えた。

ムリにお願いして食べるものを用意してもらっているのだ。

洗濯物は聡が上がった頃に脱水が終わるだろうから、今度は乾燥機に放り込んでおけば明日には着れるだろう。

まだ8月だけれど、窓の下を川が流れるこの風呂では、体を洗うのももどかしいほどお湯のぬくもりが恋しかった。

しかし、ひとたび湯に入ってしまえば、窓からの川の風はほてりがちの頬と額を冷ましてくれてそれがなんとも気持ちいい。

鉱泉風呂だという湯も、キュッキュッと肌が音をたてそうな独特の柔らかさだ。

2間続きのうちの1部屋を譲ってくれた常連客・高橋が

「ここはお風呂がいいからね。安い上に下手な温泉よりゆっくりできるのがいい」

と絶賛していたのがわかる。

岐阜中をまわる営業マンだという高橋は、ここの鉱泉風呂が気に入って、

民宿を廃業したあとも頼み込んでビジネスホテルの代わりに泊まらせてもらっているということだった。

すっかり温まると、聡は髪を洗うべくお湯からあがった。

ちなみに浴槽も床も、今では珍しい昔ながらの凝ったタイルばりだ。

洗い場に置かれたピンク色のプラスチックの腰掛が少し不似合いだが、『ケロリン』の黄色い洗面器とは調和しているかもしれない。

聡はそこに腰掛けると、まとめていた髪をほどいた。

『○○工務店』とくすんだ金文字で書いてある鏡の中に、湯で桜色に染まったなまめかしい女の裸体が映し出された。

聡は思わず鏡から視線を落として、お湯をケロリンの中に勢いよく出した。

すると、こんどは鏡像ではない、自分の乳房、そして陰毛がじかに目に映った。

乳房の先端は、すでに尖って固まっているのは見ないでもわかる。

今日何度目かのため息をついた聡に、洗濯機の振動が風呂場まで響いてきた……おそらく脱水に入ったのだろう。

さっき、下着を脱いだ聡は、それがべったりと汚れているのに気付いた。

聡はそれが……将と同じ部屋に泊まるということが決まったゆえの期待、そして淫らな想像にによるものだということがわかっている。

尖った乳房も、同じ原因だ。

聡は、欲情が素直すぎるほど露骨に現れてしまう自分の体を恥じた。

何を、期待しているんだろう、とも思う。

自分たちが泊まるのは、あの人のよさそうな高橋と襖1枚隔てた隣なのだ……だから何も起こるはずはないのだ。

そう言い聞かせているはずなのに、体はすでに将に反応している。

聡は備え付けのリンスインシャンプーを頭の上で思い切り泡立てながら思い出す。

思えば。

この冬……同棲していた頃は、将と毎日のように抱き合って眠っていた。

あのとき、抱き合うだけで何もしなかったのが奇跡のように思える。と。将の肌を思い浮かべた連鎖か、唐突に、聡の中で、将の形とそのときの感覚が蘇った。

4月に……酔った将に身を任せたときの……。

聡は目をぎゅっとつむって、頭皮に置いた指を掻き毟るように曲げて俯いた。

――恥かしい。あさましい。おぞましい。

聡は男である将に対して暴走する雌の自分を抑えるのが苦しくて泣きそうになった。

夜に響くせせらぎだけが、清らかだった。

「あ、アキラー。先に食べてるよー」

いちはやく将が聡の浴衣姿を見つけて、ビールのコップを持った手をあげた。

将は台所から続く食堂のテーブルに高橋と一緒にいた。

「やあ奥さん。ご一緒させていただいてます。おかげでおつまみが豪華になりましたよ」

高橋が機嫌よく会釈した。

ビニールクロスがかかったテーブルの上には漬物と残り物の煮物、それにたぶんいそいでつくってくれたのだろう卵焼が乗っていた。

『奥さん』という慣れない呼び名に聡は思わず目を見開いたが、おそらく将が嘘をついたのだろう。

聡はあいまいに笑顔をつくった。

下着はすべて乾燥機の中なので、こうして他人と同席するのは物理的にも、気持ち的にもスースーして落ち着かない。

聡が席につくと同時に、民宿の奥さんが温かいみそ汁とご飯を持っ

てきてくれた。

みそ汁は、空腹を癒しただけでなく、その味はしみじみと臓腑に沁みて、野性的な性欲と反対側に位置するほのぼのした部分を急速に満たしてくれた。

「アキラも飲めよ」

将が機嫌よくビール瓶を差し出した。

「うん。もらう」

気持ちが和らいだ聡はそれを素直にコップで受けた。そこへ民宿の主人が顔を出した。

「もう、お風呂は抜いて掃除するけど、いい？」

つまり、夜中に風呂は使えないという意味だ。

「はい。お掃除をおそくさせてしまって、どうもすいません」

聡の返事をロクに聞かないうちに、ご主人はとうに風呂に向かってしまっていた。どうやら、聡が出るのを待ちあぐねていたようだ。

そこへ高橋が

「朝5時にはお湯、溜まるけど。夜明けの一番風呂がまた、いいんだ」

とコップに残ったビールを飲み干した。そして

「のぞき趣味はないから、安心して、お二人さん。……じゃおやすみ」

と早々に部屋に引き上げていった。きっと気を利かせたに違いなかった。

民宿の奥さんも聡にご飯とみそ汁を出して、将にお代わりをよそうと

「終わった食器はそのままにしておいていいからね」

と引き下がってしまい、蛍光灯に照らされた食堂は、急に静かになってしまった。

居間も電気が消されていて、そこにあるテレビを点けるのは憚られた。

それでもしばらくは、空腹のほうが心に騒がしかったので二人はもくもくと夕食を腹に納めていく。

「将、あたしたちのこと夫婦だって言ったの？」

ようやく落ち着いた聡がお茶を淹れながら訊いてみる。

静かになると、川のせせらぎがここまで届いているのがわかる。

雨が少し弱くなったのか、耳を澄ませば何かの鳥が『ホッホッホッホッホ……』と鳴くのすら聞こえるようだ。

「うん。宿帳にも鷹枝聡って書いておいた。いいだろ。いつか本当

になるんだし」

将はご飯をかき込みながらにんまりと笑った。

聡は茶を啜りながら「もう」と将を軽く睨む。

でも、それが本当になるとしたら、いつなのか、果たしてどれだけ遠くなんだろう……と少しだけ途方に暮れた。

「それにしても、みんな寝ちゃったんだなあ」

料理をぜんぶ平らげてしまった将は、自分の食器を重ねながらあたりを見回した。

電気がついているのはこの食堂と階段だけで、あとは見事に電気が消されているらしい。

廊下や玄関も薄暗い。

早くもどこからともなく鼾が聞こえてくるのはご主人のものだろうか。

「まだ１１時すぎだぜえ。年寄り、夜早すぎ」

将は茶をも飲み干してしまうと頬杖をついた。

「でも将だって、昨日あんまり寝てないでしょ」

聡のいうとおり、将は昨日ＳＡで休憩した3時間程度しか眠っていない。

考えてみたらロクに休憩もしないで、ずっと運転していたのだ。

「そうだな。……じゃあ、そろそろ寝る？」

将は、『寝る』という単語をいやに強調させると、黒目をぐるりと聡に向けて、にやっと笑った。

聡の心臓は、そんな将の冗談にさえ、血をばくっと一気に吐き出すと忙しく動き始めてしまった。

それを隠すように、聡は唇を尖らせて見せた。

288◆夢一夜3

「テレビないんだー」

蛍光灯に照らされた部屋を一瞥した将は思わずがっかりした声を出してしまった。

聡はむき出した歯に指を立てて静止する。

隣からは高橋の鼾がリズミカルに聞こえている。

つまり大声を出すと迷惑だ、という意味だ。

ちなみに1階の食堂で聞こえたのとは違うリズムの鼾である。

二人の部屋は、高橋の部屋と襖で仕切られた6畳間で、すでに床が2組、きちんと並べてのべられていた。

いちおう気を利かせてくれたのか、襖にはお互いが開けられないように、しんばり棒が置かれた上に、

高橋の部屋との仕切り側に、背丈ほどの衝立が置かれている。

そのせいで若干狭く見えるものの、古びた部屋は東京の団地間の6畳とは違って、かなり広い。

窓側に寄せられた座卓の上に、昔ながらの魔法瓶のポットときゅうす、湯のみなども置かれていた。

「まだ１１時すぎっすよー。暇だよ」

将は座卓が寄せられて狭くなった窓際に寄ると、不満そうに緑色のカーテンをあけて外を見た。

橋の袂の外灯もここまでは薄暗くしか届かないらしく、景色は暗がりの中に沈みこんでいる。

ただ、近くに聞こえるせせらぎで窓の下を川が流れていることだけがわかる。

雨はまだ止まないらしく、軒から雨だれが暗い光に反射しながら落ちていくのがときどき見える。

「歯磨いて、さっさと寝よ」

聡は小声でそれだけいうと、今入ってきた襖を出て、共同の洗面所に立った。

登って来た階段の突き当たりに共同のトイレと洗面所があり、

そのタイル張りの縁に歯磨き粉付きの使い捨て歯ブラシが束になって置いてあった。

その１つを破いて歯を磨く聡は、背後に熱い体温を感じた。将だ。

「今時、珍しくねー？この歯ブラシ。超ーレトロ」

将は明るくそういうと聡の隣に立って歯磨きを始めた。

体をわざとくっつけるようにしてくる将が、聡には苦しい。

みそ汁で引っ込んだ『雌』が、２つ並んだ布団を見て、また復活してしまったようだ。

聡の五感は将の肉体の動きを敏感に感じ取ってしまう。

……と将は聡の背後で、いきなり、くっと膝を曲げた。聡はバランスを崩しそうになって

「キャ！何すんのよ！」

と声をあげてしまい、逆に将に『シー！』と指を立てられてしまった。

将は白い歯を剥き出しにして顔をくしゃっとさせた。

その顔に少しだけ、照れが見えた。

それを見たとたん、何かあったかいものに緊張感が急に溶かされていくのが、聡にはわかった。

電気を消した部屋は、ほとんど真っ暗闇になった。

闇の中に、かすかに水銀灯の外灯から漏れる光が、カーテンを幻のような暗緑色に浮かび上がらせている。

光のほとんどない空間は、せせらぎと雨音、そしてかすかに響く高橋の鼾をより強調させた。

二人はすることもないので、並べられた二組の床にそれぞれ横たわっている。

部屋にはエアコンもない。しかし夏布団がないと肌寒いほどの冷やかさが部屋には漂っていた。

さっきまで、

「ゲー、まじで真っ暗。豆電球にしようよ」

と騒いでいた将も、夏布団を蹴ることもなく静かに横たわっているようだ。

だけど、暗闇に、どこか張り詰めた部分がある……たぶん将は起きているだろう。

しかし聡は……心も体も昂揚していた聡だが、せせらぎを闇に聴いているうちに、布団の中に沈みこんでいくような錯覚を覚えた……落ち着いてきたのだ。

もしかすると闇の中に、清流からのマイナスイオンが溶け込んでいるのだろうか。ふと、そんなことを思う。

聡は横たわったまま、わずかな暗緑色に透けるカーテンを見上げた。

雨の音はまだ続いている。

この雨は……巌の骨を埋めた寺にも降っているのだろうか。

雨が染み込んだ土は……巌の骨と交じり合っているのだろうか。

そんなことを思う聡は、雨が静かに闇の森へと落ちていくように、次第に自分の中へと降りていく。

巌の３０年来の妾であるあゆみが、明るく何か話し掛けている……。

「アキラ……起きてる？」

将の声に、聡はハッとした。眠りの世界の門にちょうど入りかけた聡の意識は、急激に呼び戻された。

「……うん。起きてるよ」

声がかすれてしまう。一瞬自分が把握できない。

「そっち……行っていい？」

続く将の言葉に即座に、ダメ、と言わなかったのも、まだ眠気が聡の意識を包んでいたからだろう。

まだぼんやりしている聡の体を覆っていた薄い夏蒲団がふわりと宙に浮いて、冷ややかな空気が一瞬しのびよる。

だがすぐに熱いものが聡の体の隣に横たわった。

「もう来ちゃった」

囁くような将の声。聡にはその悪戯っぽい笑顔が見える気がした。

「もしかして、寝てた？」

将はごく自然に聡の体に腕をまわした。

「ううん……」

眠気のせいか、理性や自制心がどこかにいったように、聡も将の胸に頬を寄せた。

「……あったかい」

そんな聡のほうこそ、手の中の小鳥のように温かくて柔らかい。

「アキラもあったかいよ。……何考えてたの？」

囁く将の声は雨音よりずっと優しかった。

低い地声なのに、耳元で囁くときは１８歳まるだしだ。だけどそんな将の声が、聡は好きだ、と感じている。

「ね」

将は聡の髪をなでると、耳にかけた。手探りだろうに、聡の耳の位置をすっかり覚えているらしい。

「あのね」

安らぎが聡に甘えた声を出させた。

「今、あたしが死んだら……。将と同じお墓には入れないのね、ってこと」

将は驚いたのか、体を少し起こした。暗闇に目をこらして聡の顔をみようと試みるようだった。

……実際、だんだん暗さに目が慣れてきて、お互いの輪郭だったらごくわずかに見えるようになってきている。

「……えんぎでもないこというなよ」

聡は鼻先の吐息に微笑を浮かべながら小さく「ごめん」と謝った。

「……今ね。あゆみさんのことかんがえていたの」

「あゆみって、ヒージーのお妾の？」

将は安心したように、再び聡の横に寝そべると、さっきより少し強く聡を抱き寄せた。

「そう……厳おじいさまのことをすごく理解してらして、実質『妻』みたいなものでしょ。

だけど……同じお墓には入る権利はないんだな、って……。

たぶん、あゆみさんは割り切っていらっしゃるんだと思うけど……あたしだったら寂しいなあと思って」

将はうなづくかわりに、聡の浴衣の背中に回した手で、ゆっくりトントンと優しく叩いた。

「……結婚って、死後も夫婦として扱われることでもあるんだな……って思っちゃったりして」

聡は再び吐息で笑うとそれっきり黙った。

実は将もまた、雨音に、寺に埋めてきた巌の骨のことを思い浮かべていたのだ。

巌は、自分の骨のかけらを、初恋にしておそらく最愛の……

最愛でなければそんな遺言を残すはずがない……森村史絵の墓が見えるところに埋めるよう言い残した。

巌の骨は、しみこむ雨と共に土に溶け込み、やがて桜の大樹となり史絵を見守る。

それは結ばれることもなく先に逝った女性への、最大にして最後の愛情表現なのだろうが……将は虚しいと思った。

でも、結婚して一緒の墓に入り、子孫に祀られるのは？

あたりまえのような愛の結末だけど……将は少し物足りない気がして、腕の中で温かな聡に問い掛けてみる。

「アキラ……。俺が死んだら……」

言いかけてやめた。自分でも何を訊きたいのかよくわからなかった

からだ。

しかし、その消えてしまった語尾は、暗闇の中でたとえようもなく心細く、聡には聞こえた。

生きているうちに結ばれたい。

そのとき、二人は同じことを考えていた。

それでもしばらく二人は暗闇に寄り添ったまま、雨音とせせらぎが溶け合う中に意識を委ねていた。

さっきと違って、眠りは訪れない。……静かなのに闇がざわめいているように肌がぎこちない。

将は、聡の体が動くのを感じた。

どうやら少し身を起こしたらしい……と感じた直後に将は、のしかかるような聡の気配を感じた。

「将」

ほとんど音声にならない囁きながら、将はそれをはっきりとせせらぎと聞き分けた。

「あたしを抱いて」

２８９◆夢一夜４（前書き）

性描写があります（Ｒ１５程度）。
苦手な方はご注意ください。

289◆夢一夜4

「将……、あたしを抱いて」

聡の顔は将のすぐそばにあるらしい。囁きと共に熱い吐息が将の鼻を撫でた。

将の体は思わず、ぶるっ、と震えた。戦慄というやつに違いない。

「ア、アキラ」

声のコントロールができなくて、将の声は暗い部屋に響いた。

し、と聡が小さくそれを制する。

「なんで……？」

自分でもなんでそんな野暮な問いが出てしまうのか、わけがわからない。将は混乱していた。

「……わかんない」

聡は自分でもわからない熱情に突き動かされていた。

将と素肌を交わすことができるのは、このときが一生で最後になる。

……そんなふうに何かを予感していたのかもしれないと後年、聡はこのときを思い出すことになる。

しかし、漠然とした予感はあっても、そんな未来のことを知るよしもない聡は、ただ自分の肌に沸き立つような将への思慕、そして欲望に身も心も委ねていた。

今日が、将と、身も心も結ばれるときなのだ……と聡は将の産毛が唇に触れるほど近くまで顔を近づけた。

聡のたぎる血の温度が将の頬に伝わる。

「い……いいの？」

将は自分にのしかかる聡の影に訊いた。とまどうあまり、こんなことを訊く自分は格好悪いと思う。

自分が聡を抱くときは、きっとリードしようと何度も思い描いていたのに。

幾夜、聡を思って一人眠っただろうか。何度、その肌に思い焦がれて、虚しく射出しただろうか。

ずっと憧れた聡の体が、今差し出されたのに。

将は、思っていたようなことを何１つできずにいた。

と、布がずれる音がして将の顔がふわりと柔らかいものに包まれた。

……聡の掌が将の頬に添えられたのだ。

１秒後には、将の唇に甘い感触が降りてきた。ひさしぶりに味わう聡の唇に、将の息が止まる。

聡は……将の問いに頷くかわりに唇を押し付けてきたのだ。

聡の舌が、将の唇を越えて、軟体動物のように入り込んできた。

将は思わず、止めていた息を吐き出すと、ようやく聡の舌を自分の舌で受け止め、

聡のそれと混じった唾液をごくん、と音を立てて飲み込んだ。

なま温かい舌と舌は絡み付いて、せせらぎに湿った淫靡な音を混じらせた。

舌と舌の交わりだけで脳が痺れたように麻痺していく……将はいかに自分が聡に飢えていたかを思い知った。

鈍くなっていく思考に代わって、性器に直結する本能が屹立していく。

将は自分にのしかかる聡の背中に再び手をまわそうとして、思いがけない熱さにハッとする。

将の手は聡のなめらかな素肌にいきなり触れたのだ。

聡は……すでに浴衣を脱ぎ捨てていた。下着は乾燥機に入ったままだから、すでに生まれ落ちたままの姿に違いなかった。

背中の素肌で将の手を感じたのか、口づけを交わす聡の唇からかすかに吐息が漏れた。

それを聴きとった将は……いきなり体を起こして聡を抱き締める。

そして今度は聡をやや乱暴に敷布団に押し付けると、自分も帯を解いて浴衣を脱ぎ捨てた。

暗緑色のカーテンに、将の肩のあたりのシルエットが浮かび、聡はもう後戻りはできない、と目を閉じた。

夜中になるというのに、せせらぎは、その調子を弱めることはない。夜も、川は眠ることなく、ずっと流れ続けているのだ。

さっきはやや耳慣れなかったこのせせらぎが、今は、二人の息遣いを優しく隠してくれる味方になっていた。

襖と衝立で隔てただけの部屋で行う秘密の行為……。

このほとんど何も見えない闇の中、将は、唇と掌、そして指で、聡を……聡の曲線を記憶するようになぞっていた。

無我夢中だった。

それは画像で記録できない温かさと感触を、確かめ、丹念に記憶する作業のようだった。

何度かじかに触れてきたはずなのに、こうして暗闇で触れるとそれは新しい場所のように新鮮な感触を将に与えた。

よく……富士山やら上高地やら、美瑛やら……景勝地について

「刻々と表情を変える」

「1日も同じ風景はない」

「何度見ても飽きない」

などと褒めてあるものを目にする。

それは、将にとっての聡もたぶん同じだろうと、将は予想した。

きっと……聡は抱くたびに違った魅力を見せるに違いない。

なぜなら、抱かなくても、逢うだけでそのたびに発見がある聡だから。

絶対に飽きるはずなどない……将はなぜか誓うように聡の小さな乳首を噛んだ。

聡が、大きく息をついた。

その息遣いすら聞き漏らしたくない。

初めて絶景を見たものが、目に焼き付けようとするように、将は聡のすべてを心に焼き付けようと試みている。

最初おおまかなデッサンで始まったそれは、つま先から頭のてっぺんまで、

手と口づけで塗りつぶすような愛撫へと移行し、そして細部への描き込みに及んでいく。

どんな僻地だろうと、それが聡自身の目に届かない場所でも容赦はしなかった。

将は丹念に、かつ精緻な指と舌で聡を確かめていく。

今日が過ぎたら、少なくとも卒業までは、この肌に逢えるチャンスはない。

それをわかっている将は、目を閉じても鮮明に蘇らせることができるように、そして聡の体に刻み付けるように繰り返す。

聡は、だんだん熱く、そして塩辛くなり、潤っていった。

暗闇の中で、目には見えない聡の裸像がだんだんはっきりと捉えられるようになるにつれて、

将自身も確固とした形に力をみなぎらせていった。

すべての像をおおまかに描きあげた将は、命を吹き込む場所を再び丹念に舌先でなぞりはじめた。

「……！」

聡は、急激に臨界点を迎えたのか、海老の収縮のようにびくんと上体を起こした。

「もう……」

訴えかけるような聡の呼びかけ。これ以上ないというほどせつなげな声を将は聞いた。

しかしそのあとは、言葉にならない声だけになった。

ずっと声を抑えていた聡だが、我慢の限界を超えたのだろう。

今までに抱いた女の中ではずっと控えめながら、聡はきれぎれに細く高い声を喉の奥から漏らし始めた。

体は大きくのけぞり、開いた腿をすごい力で閉じようとした。

そのときが来た事を将は、みなぎり、屹立する下腹部で感じとっていた。

雨も、せせらぎも次第に聡から遠のいていった。

将だけを感じて共鳴する……楽器のようなものになっている自分に、

そして将からの愛撫に聡の全神経はいやがおうにも集中していく。

将がひと撫でするたびに。将がひと舐めするたびに。

聡のその肌には、蕾が緩んで一気に花開くような快感が生まれた。

楽器は……名演奏家に弾かれた快感を、美しい音色で表現しているのではないだろうか。

感覚が思考を圧倒する寸前、聡はそんなことを思った。

だが、襖だけで隔てられている隣に他人がいるこの状況、将に弾かれて、聡は音を鳴らすことはできない。

だが、声を出せない聡は、鋭くなっていく快感を持て余すしかない。

体をよじらせ、シーツを掴んで、鋭すぎる快感から無意識に逃げはじめる聡に、将は容赦をしないようだった。

聡が一番感じる『音域』を探り当てた将は、高音域でのトレモロのように繊細にかつ的確なタッチで聡を弾いた。

久方ぶりの、体が勝手に痙攣するような、そして大量の何かが体の中心から流れるような感覚が聡を襲う。

それに耐えられなくて

「もう、やめて」

と言おうとした。

だけど、コントロールできない声帯から漏れた、思わぬ音量の声にびくついた聡は、あとの言葉をうまく言えなかった。

聡はせめてもの抵抗に、唇をぎゅっと引き結んだ。

だけど……喉の奥から、高い声が漏れてしまう。

あと少し。あと少し。逃げながら聡はしびれたような脳でしきりにそう感じていた。

快感が肌につくりだす花は聡の中に大きな円をつくりだそうとしていた。

あと少しでまん丸になるのに……なにかが足りない。

本能がそう囁く。

息も絶え絶えになりながら、聡の脳裏に『成り成りて成り合はざる処一処あり』という一文が唐突に浮かび上がってきた。

聡は閉じていた目を開くと、空中に向かって微笑んだ。もちろん将には見えない。

たしか古事記だったはず。

夫のイザナギに訊かれて、妻のイザナミが

「私の体は、だんだん成ってきたけれど、どうしても足りないところが1ヶ所あるの」

と答えるという場面だ。

それに対してイザナギは、自分の体で成り余った1ヶ所を、イザナミの足りないところに挿し入れて……つまりセックスをしようと提案する。

いま、聡は、自分の体が『成っている』のを感じている。

だけど、快感がまん丸になるには、1ヶ所が足りない。

聡の『成り成りて成り合はざる処』を将が埋めてくれなければ、それは完成しないのだ。

２９０◆夢一夜５（前書き）

引き続き性描写（Ｒ１５）があります。ご注意ください。

290◆夢一夜5

せせらぎと、雨音、そして隣の部屋からの鼾はまだ続いている。

どうやら隣の高橋は、襖一枚を隔てて、二人がこんなことをしているとは知らず、太平楽に眠っているらしい。

柔らかい肌を繰り返しなぞるたびに聡への思慕が、震えるような欲望へ転化していく。

将の中で純粋な思いを栄養にして、欲望は爆発的に増殖し、水風船の中の液体のように膨れ上がっていた。

それは、もう許容量を遥かに越えて破裂寸前になっていた。

だが、将はいままでにないほど力が漲ったそれを聡にあてがうことができずにいた。

かつて将は……どんな女でも、その素肌を目にすれば、それなりに征服欲を掻き立てられた。

１０代と若い将は、誘われて脱がせれば、そのまま抱くことができたのだ。

だけど、肉体は勃起しても、心はいつも冷静なままだった。

挿入は……単なる『処理』の一環でしかなかった。

相手と繋がるとか、結ばれるなどと、考えるのはおぞましいほどでもあった。

終わったあと、将は礼儀で相手の体を抱きしめる。だけど本当はその女臭い匂いが嫌でたまらなかった。

できることなら目をあわせずにシャワールームに逃げてしまいたかった。

だが。

今、将は、生まれて初めて、心から好きな女の肉体の中に入ろうとしている。

（前回のことは、まったく覚えていない将にとって、今回がまさに最初なのだ）

それは震えるほどの歓喜と、意外なことに怯えがあった。

自分が聡を『犯す』。あるいは『汚す』。

将は同棲最初の夜を思い出す。

聡がいきなり将のそれを咥えて……将は喜びに震えながらも、心には大きな戸惑いを抱えたあのとき。

あれから二人の関係は大幅に進みながらも、依然、将にとって聡は聖女であることは変わりない。

つまり、淫らな『処理』としてしかセックスをしてこなかった将は、同じ行為を聡にほどこすのに、心にためらいを感じずにはいられなかった。

それを誤魔化すように、また『心から愛している』という証をたてるために、

将はいままでの女たちにはしてこなかった丹念さで聡の体を愛撫したのだ。

「……しょう」

そのとき、将はかすかな聡の声を聞いた。

聡は愛撫し続ける将に両手を延ばしてきたのだ。

将は体を起こすと、聡を抱きしめて、暗闇にその唇を探し当て口づけをした。

今しがたまで口づけしていた部分に比べると、唇はぽってりとした厚みがあったが、その中の艶かしい潤いはそっくりだった。

聡は、舌同士さながらに、体を押し付けるように将にからみつけると、するりと唇を離して将の耳たぶをピアスごと口に含み、軽く噛んだ。

甘い驚きが将の耳から首、そして背筋を伝わって下へと降りていった。

そして聡は、声に出さず吐息だけで

「来て」

と確かに囁いたのだ。

将はハッとして聡の顔を見ようとした。

だが、せせらぎと隣の鼾が響く暗がりに、いとしい女はその顎の輪郭がぼんやりと見えるだけだった。

将は……聡が直接、将をせがんだことに驚き、そして次に、そんなことを聡のほうから言わせてしまった情けない自分に自己嫌悪を覚えた。

だが最後に……聡が自分を求めていることに感動した。

自分は聡に愛されている。求められているのだ。

それは大きな救いとなり、やがて自信へとつながった。

「ごめん」

将は見えない聡の輪郭に向かって呟いた。

なんでそんな言葉になったのか、自分でもわからなかったが、将は瞬間的に覚悟を決めた。

今から聡と1つになる。

これは今までとは違う。生きている命同士……聡との絆を確かにする行為なのだ……。

将は、穢れの処理部位ではなく、愛の掛け橋として自らのものにそっと手を添えた。

聡は、何が『ごめん』なのか理解できないまま、一瞬不安になった。

少し乱れすぎてしまったんだろうか……。積極的すぎたのだろうか。

いまどきの若い男の子は……女の性欲を嫌悪する場合がある。

美智子か誰かとの会話だろうか、急にそんなことが浮かび上がってきた。

陰ではエロい女を想像しているくせに、現実に出逢うと……それが親しい女だったりするとよけいに萎えるなどと言っていた気がする。

聡の脳にわずかに残った思考は、思ったより活発で、油断するとよけいなことが次々と浮かび上がってくる。

――いやだ。将がそんなに幼稚なはずがない。

触れ幅が大きくなっている聡の感情は、ほんの2秒ほどの間にたまらなく不安になってしまった。

目をあけると暗闇の中に将を探した。

将のシルエットは、暗緑色のカーテンに大きく浮かび上がっている。聡に向き合っているようだ。

こうやって影になると、肩幅に対しての頭部の小ささが際立つ。

シルエットの将は、聡の両膝を掴むと、ぐん、と大きく開いた。

思わず涙が出そうなほど安堵すると、聡は息を大きく吐いた。

それからすぐに、敏感になった入り口に、しなやかで硬いものが押し付けられた。

聡のほうはすでに知っている、そして何度か記憶の中で反芻したもの。

「あ……」

欠けていた快感が、いま、まん丸になる。

期待と直接的な快感が、聡に再び声を漏らしめた。

先端に聡を感じながら、将はぐっとさらに力を込める。

小さな甘い悲鳴をあげながらも、これ以上ないほど潤びながらも、聡はなかなか侵入を許さない。

将は息を詰めて、さらなる力を込めた。

いつか『はじめてだ』というコを破瓜したときより、はるかに力を入れているはずだ……と、急に門があいて、将の先は温かい液体に浸された。

聡が出迎えるように、将の名前を吐息で呼びかけた。

それに答えるように将は息を大きく吐くと、聡の膝を両腕に抱えて、さらに奥へとゆっくり侵入していった。

それにしても。

聡の中の熱さは尋常じゃなかった。

将が覚えている他の女はもっと「ぬるい」感じだったはずだ。

あたたかいお湯に浸されたような……将はそれだけで体中を駆け巡る血が温かくなった気がした。

将の皮膚にじかに触れる、ぬらぬらと濡れた熱い聡の中は、液体のようだった。

それでいてまとわりつき絞り上げるような鋭い快感を与えた。

かつて前原たちが『生』『中出し』にこだわっていた、無責任で刹那的な快楽の強さが、今なら理解できる。

膨れ上がった欲望は、聡の熱で膨張して今にもはじけそうだったが、将はこらえながら先へ進んだ。

打ち寄せる快楽と、それを思い切り解放したくなるのを堪える忍耐と。

感覚と、思考と。理性と、本能と。意識の集中と、強すぎる快感の拡散。

すべてがぐちゃぐちゃに渦を巻きながら将を押し流そうとしそうになるのを、将は必死で耐えて進む。

……いきなり、聡がせつない咆哮をあげた。

将がいきなり終点にたどりついたらしい。

足を抱えられているのにも関わらず、起き上がろうとし……溺れる

ようなその手は暗空を泳いで、

将の上腕をぎゅっと掴むと、自分のほうにものすごい力で引き寄せた。

将は、聡が望むままに、体を密着させるようにのしかかると、その名前を呼ぼうとした……。

と、そのとき。

隣の部屋から

「フガッ」

と大きな鼾が聞こえた。

それは、今まで規則正しく繰り返されていた鼾がつまづいたかのようだった。

それっきり、鼾は止んでしまった。

将と聡は1つになったまま、申し合わせたように息を止めて、耳を澄ました。

だが、暗闇の中、聞こえるのはせせらぎばかりだ。

高橋が起きてしまったのだろうか。

将はそれを聡の一番奥にくっつけたまま、

聡は四肢のすべてを将の背中にからみつけたまま、

身動きもせずに隣の様子を伺った。

……急に、墨色だった部屋が、薄墨色へと明るくなった。

隣と部屋を仕切っている４枚の襖の隙間の、衝立に隠されていない上部から、白い光りが線になって漏れている。

どうやら高橋が起きて、しかもなぜか、蛍光灯を点けたようだ。

二人はお互いの顔を見合わせた。

この世で一番そばにいるのに……お互いに、懐かしいその顔を見るのは久しぶりな気がした。

２９１◆夢一夜６（前書き）

※Ｒ１５場面は続いています。ご注意を。

291◆夢一夜6

「ふわ～」

大きな欠伸が襖越しに聞こえたかと思うと、ガタガタと仕切りの襖が揺れた。

二人は裸で結び合ったままハッと身を固くした。

――まさか、こっちに来る？

だが、しんばり棒をあてがった襖は開かなかった。

「おっと、間違えた」

と小さく呟く声がはっきりと聞こえた。

ずかずかと畳を歩く振動がかすかに二人の布団に伝わったと共に、今度はやや遠くで襖が開く音がした。

パタパタと廊下をスリッパで歩く音がして、バタンと戸が閉まる音がした。

「……トイレ？」

将は唇が触れ合うほど近くにある聡の顔に囁いた。

「……たぶん」

聡は、不安げな顔のまま、小さく頷いた。

二間続きのうち、将と聡がいる部屋のほうがトイレに近い。どうやらこの宿の常連である高橋は、いつもこっちから出入りをしていたのかもしれない。

「気付いたかな……」

「ゴメン。あたしが大きい声だしちゃったから……」

聡は困ったように微笑むと、小さく舌を出した。

さっきまで真っ暗だったせいか、この程度の薄暗がりでも聡の顔はよく見える。

将は、その顔がいとおしくてたまらなくて、「いいよ」という代わりに何も塗らなくてもばら色の唇にもう一度口づけした。

「あ」

そのまま舌を交わそうとした将は、唐突に小さく声をあげると、いたずらっぽい顔で聡を見つめた。

「なに？」

目を見開く聡に

「アキラん中……びくびく動いてる」

「やだ」

それは聡自身も自覚していた。心臓が子宮に移動したみたいに、勝手に拍動している。

本当に『そこ』へ達すると、聡はそうなってしまう。

今のように、思考のほうは急速に脳に戻ってきても、いったん反応した体の方はそう容易に通常には戻らない。

照れ隠しに聡が将の肩に顔を埋めてしまおうとしたとき、高橋がトイレから出てきたらしい。

間違ってこっちに入ってきたらコトだったが、今度は間違うことなく、隣の襖から自室に入ってくれたらしい。

まもなく電気が消えて、部屋はせせらぎだけの暗闇に戻った。

暗闇に戻っても二人は、しばらくそのままの姿勢でいた。

「雨……止んだみたいだね」

「うん……」

二人はせせらぎに隠れる程度の吐息で言葉を交わす。

高橋が眠ってしまうまでの間、将は聡の中に入ったまま、静かに聡の髪をなぜていた。

聡はその間ずっと四肢を将に巻きつけるようにしがみついていた。

まるで、すべての肌を密着させるように。

ときおり……慎重に、二人の肌の凹凸のすべてを合わせていくように、聡は将の下で腰を小さくくねらすようにずらしては吐息を漏らす。

「動かそうか？」

そっと囁いた将に聡が首を横に振る気配がした。

「もうちょっと……このままでいて」

聡はまるで再び将の耳たぶを噛むように囁いた。

「将を感じていたいの」

その息は快感となって、再び脊椎から聡の中に埋め込まれた将自身に鋭く伝わる。

膨張したものは、少しでも動かせば破裂しそうだった。

将は破ける寸前の摩擦を味わいたくてたまらない。

聡が腰をわずかにくねらせる振動だけで……先端から耐え切れずに欲望が染み出てくるのがわかる。

でも……愛する聡の願いだから、そのままで我慢する。

聡は、将のためだけの器官を、将が使っている悦びを噛み締めていた。

生殖器。自分の命には何も関係のない器官。

次世代をつくるための器官であり、とてつもない快楽をもたらす器官。

愛しい人とのコミュニケーションに使うそれは……聡のそれは将のためだけのもので、将のそれは聡のためのものだ。

二人は一対になって、肉体の悦び同士で交歓する。

聡の中の『成り合はざる処』は今、将によって埋められた。

聡は真ん丸くなった快楽の中に浮かびながら、下腹部の中に、将の存在を確かに感じていた。

聡の中の粘膜は、将をもっと感じようと、ひとりでに波打つ。

ときおり、将の先端があたっているあたりから送られるパルス信号は、聡を自動的に操るかのように……聡はときおり腰をくねらせてしまう。

そうすると新たなる波が押し寄せてきて……波は増幅するようにだんだんと大きな波になって再び聡を襲い始めた。

いつか将が聡の一部に同化すればいい。

いっそ二人溶けて混ざればいい。

このまま……くっついたまま死んでもいい。

再び思考が感情に支配された聡は、将に巻きつけた四肢にぐっと力を入れると、将の唇を求めた。

聡の子宮に達し、キスしている将自身のように。

聡は将に唇を押し当てると、舌を分け入らせた。

将が聡に入り、聡が将に入る。上と下でパズルのように体を合わせる。

肌と肌を隙間なくぴったりとくっつけながら、舌も再び二人の体のように、くっついた。

溶けて1つになることはできないから、せめて二人に浮かんだ汗を混ぜ合わせるように、二人はくっつけた体をうねらせはじめた。

どれくらい時が経っただろうか。うとうとしていた将は、ふと顔をあげた。

暗緑色のカーテンの色調がわずかに明るくなったのを将は見た。

傍らで寄り添い眠る聡が、暗いながらもいつのまにか見えるように

なっている。

カーテン上部のたるんだ隙間から見える空は、すでに瑠璃色というには明るすぎる。

将は頭に肘をつくと、傍らで裸のまま眠っている聡を見つめた。

わずかに唇を緩めて、安心しきった顔で将のほうに体を向けて横たわっている。

ついさっき……昨夜というべきだろうか。

2回目に交わったとき、聡は感極まって……将の射精を待てずに意識をなくしてしまった。

失神したというよりは、いつのまにか返事が聞こえなくなっていたというほうが正しい。

意識をなくした聡は、そのまま眠りに移行したらしい。

そのとき、愛し合う二人の背後で、せせらぎに負けないほどの勢いで聞こえた鼾が今は止んでいる。

たぶん高橋も熟睡しているのだろう。

――もしかしたら、わざと鼾をかいてたのかな。

将は、ふと思った。それほど……今は静かな隣なのだ。

部屋は、だんだん明るくなってきた。

緑色にカーテンの色を透かす部屋の中で、聡の姿もはっきりとしてきた。

さっきまで白いシーツとの対比で影のように見えた体も、その肌の蝋のような白さを一面の緑の中に浮かび上がらせ、将は思わずそれに見とれた。

昨日、さんざんその柔らかさを確かめた乳房は、横を向いているせいか、鏡餅のように上下に重なっている。

華奢な腕にその半分が隠れた小さな先端も安心しきったように淡い色のまま緩んでいる。

下半身は夏がけに隠されているが、夏がけに入る直前にあるウエストの括れときたら。

こうやって無意識に眠っているというのに、何かで削り取ったような極端な細さだ。

二人が横たわる敷布団の上といわず、まわりと言わず、将と聡のものが混じった体液で汚れたくしゃくしゃのティッシュペーパーが散乱している。

その中に裸で眠る聡は、白バラを散らした中に眠るおとぎ話の美女のようにも見える……。

だが将は、おとぎ話を想像するよりは、夏がけをはずして、聡のすべてが見たくなった。

考えてみたら昨日はほとんどが手探りだった。

手探りゆえに鋭く感じたというのもあるかもしれないが、聡の体は視覚的にも魅力的だったし、かつ再び将の欲望を揺り動かすほど刺激的だった。

行動に入る前に、将は聡の顔を盗み見た。

……いつのまにか、聡は眠ったまま眉根を寄せていた。

何か悪い夢を見ているのだろうか。目を閉じながらもつらそうな表情だ。

将は心配になってその顔をのぞきこんだ。

と、ついに長い睫の下からにじみ出るように、涙が湧き出してきた。

292◆夢一夜7

聡は、冴え冴えとした月明かりの中を将と二人で歩いていた。

道は月光が照らす二人の影のあたりまでしか見えず、その先はまったくの闇だった。

どこに行くのか、または、どこへ帰るのかわからない。

だけど聡は、幸せで、幸せで、ただ幸せで。

しんと冷えた夜の空気の中でも、将とつないだ手と、胸のあたりがほんわかと温かかった。

二人まるきり言葉を交わさなかったが、そのかわりに聡は、ときどき将とつないでいる手に力を込める。

将はそれにこたえるように「ぎゅっぎゅっ」と必ず2回聡の手を握り返す。

それを歩きながら繰り返す。

モールス信号のような、握り合う手での会話。

聡が傍らの将を見上げて微笑めば、将も笑顔を返す。

二人、どこまでもこんな風に歩いていければと、寄り添いあった。

ふいに……月が雲に隠れ、二人を浮かび上がらせていた月光は、くるりと闇夜に変わってしまった。

お互いの姿は暗闇に隠されまったく見えなくなってしまった。

聡は傍らにいるはずの将を呼んだが、返事は聞こえない。

聡の手を握っているはずの将の手はいつのまにか、幻だったかのように消えていた。

「将……どこ！」

聡は立ち止まると、叫んだ。

心の中のざわめきが、外に響いてしまうような静けさ。

いくら耳を澄ませても将の声は聞こえない。

漆黒の闇に捕われてしまった聡は、気が狂ったように将の名前を呼び続けた。

将の姿も、声も聡には見つけられなかった。

まるでブラックホールに飲み込まれてしまったかのように、将の姿はこつぜんと消えてしまったのだ。

気がつくと、聡は月明かりの下、たった一人で自分の影を踏んでいた。

月を覆う雲は溶けるように去っていったのに、将は帰ってこなかった。

月が夜空を瑠璃色に輝かせる中、聡の心は途方に暮れていた。

「将……」

将がいなければ、聡の心は闇夜も同然だった。

先に進めない。何も食べたくない。息をするのもうんざりする。

どうして、置き去りにされたのか。

もしかして飽きられてしまったのだろうか……。

浮かんだ考えが恐くて……聡はしゃがみこむと立ち上がれなくなってしまった。

もともと。9も年上の自分は。いつかは飽きられてしまう存在なのだ……。

甘い哀しみに沈み込もうとする意識を、理性がひきずり出す。

いや。違う。

聡はしゃがんだまま目を見開いた。

あの闇の中での真実を思い出す。

あの、息をするのさえ苦しくなるような闇の中。

絶望に囚われて……将の手を離したのは、聡のほうだった。

あの闇の正体は、聡自身の不安が姿を変えたものだったのだ。

将は聡のためなら何でもする。何でも……自分の将来も捨ててしまうほどに。

闇に飲みこまれながら、聡は恐かったのだ。

自分が将の未来を台無しにしてしまうことが。

随分前から知っていた。

やがて将を包む暗雲は自分自身であることを。

それが恐くて、聡は将を自ら手放したのだ……。

聡はしゃがみこんだまま、いつしか嗚咽していた。

将を手放した悲しみに、涙はとめどなく溢れ、抱えた膝を濡らした。

これでよかったんだとは思う。

だけど、自分から引き裂いた将との絆のあとから噴き出すように涙は止まらない。

涙は永遠に止まらないかと思われた。

体中の水分が涙になってしまうのか。

それとも、死ぬまで泣いて余生を暮らすのか。

涙が止まる未来を想像できず、聡はただ長い時間そこで顔をうずめるようにしゃがんでいた。

と。

泣いている聡の肩に、ぽん、と柔らかいものが乗せられた。

その柔らかい感触があまりに無邪気だったので、思わず聡は顔をあげた。

いつのまにか、あたりは明るくなっていた。

まるで冬の陽だまりのような……柔らかな光が聡を包んでいた。

目の前には……温かな陽だまりの色に染まって、可愛い女の子が聡を見下ろしていた。

幼稚園児ぐらいか。

その整った顔は……なぜか懐かしくて、聡はその女の子をよく見ようとした。

女の子は聡を見つめると口をひらいた。大人の男の声音で

「アキラ」

と呼んだ。その声はまぎれもなく将だった……。

「アキラ、アキラ」

将は、眠ったまま突然涙をこぼし始めた聡の、裸の肩をゆさぶった。

聡の涙に濡れた睫が一瞬、ぴくっと動いた。

そしてゆっくりと瞼が開き、中からねぶった黒糖のようにうるんだ瞳が現れた。

その拍子にまた、ぽろぽろと涙がこぼれた。

「アキラ、大丈夫?」

顔をのぞきこむ将へと、聡の濡れた瞳はゆっくりと動いた。

目を開いた聡は、涙で滲んだ視界に将を見つけて、ほっと安堵の…

…涙でツンとした鼻の奥の感触を深いため息の中に放った。

夢だった——。

「こわい夢、みたの？」

将は聡の体に腕を伸ばし、抱き寄せた。

声をひそめながらも、これ以上ないほど優しい声だった。

聡は余韻で止まらない涙を、将の裸の胸に押し当てた。

まだ夢の中のような気がして、聡は将の胸の中でもう一度小さく嗚咽した。

将は何も言わずに、聡の髪から、カーテンごしの緑を映す白い背中にかけてをゆっくりと撫でた。

現実の将のぬくもり。少し湿った胸のあたり。

髪に背中に触れる大きな将の掌。

実際に、触れ合っている将。将はここにいる。

やっと安心した聡は、将の胸の上にある、小さな黒子に再会することができた。

ふだんは服で隠れてしまうあたりにある黒子。何度か目にしているそれは、聡にとって懐かしいものになっていた。

……それで、あたりがずいぶん明るくなっていることに、聡はようやく気付いた。

聡はもう一度将を見上げた。そういえば将の顔を見るのも何時間ぶりだろうか。

「しょう」

呼んだ自分の声がひどくかすれている。呼ばなくても将は聡を見つめていた。

――黒子、見つけた。

そういうかわりに、聡は将の滑らかな褐色の肌に浮かぶその黒子にそっと口づけした。

口づけしながら、聡は下腹に、ふだんは服で隠れている、将のもう1つのものが触れるのを感じた。

それで急激に、昨夜の記憶が蘇る。思わず意識を手放すほどの快感。記憶というより……体中に残った感触が戦慄のようにいきなり屹立し、体の中が自動的に収縮するのを感じた。

あのとき途切れたままの、強い本能は体中の固い蕾を一気に開かせ、聡の心をも支配していく。

――もっと、現実の将を感じたい。

本能は聡の心にそう思わしめた。

「将」

次に呼ばれたとき、濡れて寂しげだった聡の瞳が、妖しく光るのを将は見た。

聡は黒子から唇を離すと、体を起こし、次に将に上からのしかかるようにして激しく唇を押し付けてきた。

朝のキス、というのにはあまりにも濃厚な……官能的な口づけ。

「アキラ」

見上げた将は、口づけされる一瞬前、重なった鏡餅のようだった聡の乳房が丸く躍動するのを見た。

それは、今は柔らかな揚き立ての餅のように将の胸の肌に密着している。

すでに固くなった中央の触感が、急激に将を三度目へと誘っていく。

聡は唇と乳房の先端で将に接吻を繰り返しながら、手は昨日将がしたように、将の感触を記憶しようとしていた。

将の髪の硬さとしなやかさ。入り組んだ耳介の形。

2日剃っていないせいか、ややざらついた頬。聡の掌は繰り返し将の首から上を往来した。

そうしながらも、聡はときおり目をあけて将の顔をも記憶しようとしていた。

将の、軽く開けられた瞳も、呆けたように、聡へと向けられていた。

奥二重ぎみの将の瞼は、見開くと鋭い目付きになるが（芸能人をしているときはこの顔が多い）、

こんな風な半開きだと少し寂しげで、それでいて優しげな１８歳の少年の顔になる。

雑誌にも、テレビにも出ない、みんなの知らない将の顔。

聡は将のこんな顔をことさら愛していたから、唇をいったん離して、将の顔をよく見ようとした。

焦点ギリギリの距離から聡を見上げる将は、安堵と、嬉しさを混ぜ合わせて呆けたような表情で、聡を見上げていた。

聡の背中を撫でていたその手は、いつのまにか背中から腰の丸みをなぞっていた。

口づけが止まってもさらに下へと降りていく。

将の手が後ろからそこに到達したとき、聡は、くすっ、と笑うと体を小さく震わせた。

その状態を確かめた将も、半開きの目のまま、口角を横に広げて応える。

二人は笑顔のまま顔を見合わせた。

聡はもう一度将に軽く口づけをすると、その華奢な上体を起こした。

そして、ためらいもせず、横たわったままの将に、ゆっくりと慎重に跨っていく。

将は聡にすべてを任せながら、カーテンの緑に染まった朝に浮かび上がる聡という『女』の全容に見惚れた。

そして上から降りてきた、温かい液体のような聡の中に、再びずぶずぶと飲み込まれていく喜悦に軽く吐息をもらした。

293◆夢一夜8

象牙のように白いうなじ。

さっきまで一心に口づけをしていたそれを、シャワーの水滴が濡らしていく。

将は一瞬自分のことを忘れて、見とれた。

「あんまり、見ないで」

髪の毛をアップにした聡は、プラスチックの腰掛に乗せた体を少しだけひねって将の視界から自分の裸体を隠そうとした。

東にある清流に面した鉱泉風呂は、もはやあかりをつける必要がないほど朝の光で満ち溢れていた。

窓から今山から顔を出したばかりの太陽が、窓に面した浴槽を通り抜け、洗い場まで届いている。

背中をむけてしまっても、それは飽きる理由にならない。

贅肉がついていない背中は、手をつけていないアイスクリームの表面のようななだらかさだ。

その背骨をしゅっと中央に浮かび上がらせながら、動きによって肩甲骨がたおやかに浮き出る。

あまりにも狭いので、ときおり隠し切れなくなった前の丸みが横か

らぷるん、とはみ出るさまが愛らしい。

両手ですっぽりと囲めるかも、と錯覚できるほど細いウエストのすぐ下から深い割れ目が始まっている。

それは全体に華奢な聡の中では乳房と同様ボリュームがある部位だった。

目を引くものが多い『前』に比べてたぶん初めて目にする、聡の後姿は将には新鮮だった。

そして、朝日にキラキラ輝く水滴に彩られたそれは素直にきれいだと思った。

パリにいた将は子供の頃から、よく美術館というところに連れて行かれた。

そこで思っていたのが、どうしてこんなに女の裸体画が多いんだろう、ということだ。

成長してすれた今は、単なるエロ趣味だろう、という考えに落ち着いていたが、将はいま聡のそれは本当に美しい芸術品のようだと見惚れた。

将が画家なら、きっと聡を写生するに違いない。

「髪、洗ったほうがいいと思う？」

見とれていた首筋が、斜めに浮きあがり、聡が振り返ったことに気付いた。

と、今度は、顔と共に、そのぷっくりとした形の横顔を見せた豊かな乳房に、将はどうしても視線を移してしまう。

聡は石鹸を泡立てながら、将の視線を感じたらしい。

「えっち」

と軽く笑うと、泡立った石鹸を乗せた掌で自らの首筋を洗い始めた。

聡はタオルを使わず、体を手で洗う主義らしい。

さっき、ビーズのように細かい汗の粒を乗せていた首筋が、石鹸の泡で覆われていく。

1時間も経っていない、ついさっき。

聡は将を支配するように、上から見下ろしていた。

本能のままになったその顔は、いつもの柔らかさや優しさ、そして知性が一切消えていた。

野生の雌の放恣さを半開きの唇に浮かべ、瞳は哀願するようでいて、ときおり

「私に従いなさい。私をもっとよくしなさい」

という高慢さを光らせた。

しかしその次の瞬間には、鋭敏な感覚を恥らうかのように俯いて肩をすくめる。

将を支配する女王と、将に刺し抜かれて恥らう乙女。

阿修羅像のように、さまざまな顔を浮かべて聡は妖艶だった。

それも聡なのだ。

聡というひとは、どれだけの奥深さがあるのだろう。

将は、聡という騎手を乗せた馬のように従順に横たわりながら、その姿を下から観察していた。

カーテン越しの朝は、部屋の物を緑色に染めながらもほとんど明確に見えるようにしていた。

もちろん将は前の2回と違って、聡の艶かしい体の前面を思う存分に観察することができた。

将との接合部を隠しているものは、たおやかな聡の全身の中で唯一、黒々と猛々しいほどに茂っていた。

将とのそれをすり合わせるように動かすたびに、くびれた腰から上半身が大きく揺らいだ。

聡の中にいる将も同じように揺れ、かつ再び動き出した液体がだんだんと波動を強くしていく。

真ん中を震源地とする激震は聡に張り巡らされた神経を通じて全身を揺らした。

カーテンの緑で青磁のような色になった、滑らかな皮膚をうねらせる。

新雪に覆われたゲレンデ。

夕暮れのサハラ砂漠。

指で弾いたら澄んだ音がしそうな磁器。

滑らかな見た目で似ているそれらは、みんな微動だにしないものばかり、こんな風にうねりはしない。

生きている証明のようにうねる聡のその滑らかな肌の下に、真っ赤な血が流れているとは、にわかには信じがたい。

生けとし生けるものの中で、こんなに滑らかなものはあっただろうか。

たおやかな肌の表面に、ときおりその形を浮かびあがらせる骨格と筋肉の動きすらも、将にはいとおしかった。

激震にいまにも崩れそうな華奢な上半身の中で、異彩を放っていたのがまん丸い乳房だ。

その細い肩、腕、ウェストに不似合いなほど丸く張り出して、どうかすると苦しげでさえある聡の中で、そこだけ喜ぶように柔らかく

弾んでいた。

そして、大きさに対してあくまでも小さな2つの粒が将を見つめる。

それを目で追っていた将だが……それに誘われてついに両手を下から伸ばす。

鏡餅のようだったものは、今は揚き立ての餅に戻ったように簡単に形を歪ませると、将の指を温めた。

聡はため息をつくと、胸を将に向かって張り出すように体をのけぞらせた。

将はそのぬくもりをさらに確かめるべく、掌に力を込めていく。

聡の体は、その頭で天井に向かって大きく円を描く様に一周し、再び将の前に戻ってきて、胸を捕まえている将の上腕につかまった。

聡は、頬を真っ赤にしながらも将に微笑んで見せた。

それを見た将は少しだけギャロップしてみることにした。

聡の揺れが、円を描く動きから、上下に変わった。

もう少し、速く駆けても大丈夫。

将は腰を浮かせると、騎手を翻弄する暴れ馬に自らを変貌させる。

騎手を放り投げるように上に弾ませては、それを自分の上に落とす。

それを最初はゆっくりとした間隔で、次第に速く。

「ああ」

ロデオのように騎手たる聡が大きく揺れ、悲鳴をあげる。

騎手の苦しげな表情が、地球の引力をも味方につけた強い摩擦が…馬である将をより快感へと導いていく。

バウンドを繰り返すたびに、将に跨った騎手は小さく悲鳴をあげ、将自身はより奥へずぶずぶと刺さっていく。

聡といえば、ヘッドバンキングのように頭を揺らしながらも、振り落とされないように、将の上腕を手綱のようにぎゅっと握り締める。

それを繰り返すうちに、カーテンの隙間から漏れた光で聡がきらきらと輝き始めた。

ついに朝日が顔を出したのだろうか。

弾み揺れる乳房の向こうで、きらきらと光り始めたものの正体を確かめたくて、暴れ馬は上体をいきおいよく起こすと、落馬する寸前だった聡を抱きとめた。

「しょう」

完全に馬に屈服した騎手は、涙を浮かべて将にすがりついてきた。

将は抱き合った聡の首筋から背中に、びっしりと……まるでビーズを隙間なく貼り付けたように汗の粒が密集しているのを緑と白の光

の中で見た。

抱きしめた体はさっきよりずっと熱を帯びていて熱かった。

将は暴れるのをいったんやめると、その首筋のビーズに舌を這わせた。

ビーズはたやすく形もなく瞬時に潰れると塩辛い味を残した。

それが面白くて、将は一心に首筋のビーズを舌でつぶし、唇で吸った。

しょっぱい聡の味を堪能しつつ、将は聡の中が再び脈動しているのに気付いた。

「あきら」

その心はもちろん、体も、名前も世界で一番愛しいひと。

至近距離で顔をもう一度みる。

呼びかけられた聡は、赤ん坊のように顔を真っ赤にして、汗びっしょりだった。

おでこやこめかみにほつれた後れ毛が汗で張り付いている。

潤んだ黒目がちの瞳は、将を見つめながらどこか、呆けているようでもあった。

すべてを投げ出して、感覚だけで将を受け入れている聡のその唇に、

将は何十回目かの口づけをする。

再び上と下で結びあわさる二人は、外で蝉が鳴きだしたことにも気付いていなかった。

２９４◆夢一夜９

ラブラブ入浴のお約束……といったらいいのか、将は聡に背中を流してもらうべく、背中を向けていた。

しかし、本当は聡の姿がもっと見たい将としては、この向きは少し不満だった。

鏡に聡の裸体が映るかと思ったが、古い鏡は少し曇っているのでぼんやりとしか映らない。

だから将は、少し所在無く、肘を膝に乗せたまま、後ろの様子をうかがうしかなかった。

聡は、将の広い背中と、その下のほうにある痛ましい火傷のあとの盛り上がりを久しぶりに見る気がした。

将の背中は久しぶりに見たせいか、また少し広くなっている気がした。

「将、あいかわらず筋トレいってるの？」

タオルについた石鹸の泡を塗りつけるように、聡は将の背中を洗い始めた。

何も塗らなくてもしっとりとした艶が乗っている褐色の肌は、筋肉の形に盛り上がっている。

だけど、その形はあくまでも流線型で、１０代の青年らしく、しな

やかさだ。

「ん……いや、大悟のこと以来、忙しくていってない」

答える声は何気ない調子だったけれど、それで聡は思い出す。

将には……この1ヶ月あまり、いろいろなことがありすぎたはずなのだ。

大悟のこと。そして巌の死。

昨日の、取り乱した将が、この皮膚の中に隠れている。

そう思うと聡は、目の前にある将の背中を優しくタオルで撫でるようにした。

将の健康な部分の皮膚と、その下でいまだに紅い大きな火傷の跡。

「いろいろ、あったもんね……」

そう呟きながらと、将が昔受けた心の傷跡の上を、聡は石鹸をつけたタオルで少し柔らかめに往復していく。

「ね、アキラはさ、いつも手で体洗うの?」

だけど、今朝の将は、すっかり元気になったようで、話題を変えてきた。

さっき聡が体を手で洗うところを見ていて感じた疑問らしい。

「うん。乾燥肌だから、あんまりこすらないほうがいいんだって」

「へえ」

しばらく、黙って聡に背中を任せられていた将は、

「やったげるよ」

急に振り返った。

「やだ。えっち」

聡は将を軽く睨むと、将の背中を擦っていたタオルで胸を隠してそっぽを向いた。

「じゃなくてー、今度は俺が背中を流してあげるからさ」

将は強引に聡をプラスチックの腰掛に座らせると、石鹸を泡立てた。

聡は将のタオルで胸を隠すようにして、少し俯くようにして背中に将の掌を待った。

華奢でなめらかな聡の背中は大きな手の将なら、二撫でもすれば洗い終わりそうだった。

将は、新品のアイスクリームの表面にスプーンをつけるときのような気分で聡の背中に石鹸をつけた手を伸ばす。

少し丸めた聡の肩甲骨が、ぴくっと動いた。

「なんだかくすぐったい」

「まだ触ってもないぜ」

「だって……ふふふ」

聡は肩を震わせるようにして笑いがとまらないようだ。

将はそっと、聡の首の下に両手を這わせた。

そのとたん、聡は大きく体を震わせると、肩をすくめた。

本当にくすぐったいらしい。

将が聡の背中を撫でるたびに、聡は体を強ばらせ、すすり泣くような笑いを漏らした。

「ちょ、やだ……もう。くすぐったい」

聡は耐えかねて口に出すと、将の手から逃れようとした。

「ちょっと、もういい、もういいってばあ」

笑いすぎの聡は少し苦しそうに体をのけぞらした。

くすぐったさのあまり、タオルはとうに胸から外れている。

石鹸の泡をつけたまま、無防備に息をはずませている裸の聡を見て、将は3度目からまもないというのに、もう起き上がってしまった。

聡もそれに気付いたらしく、最後の笑いを飲み込むようにして黙り込んだ。

「あきら」

将は泡だらけの手で聡の肩を抱きとめると、いきなり唇をあわせた。

体中についた泡で、弾力ある聡の肌はまるでウナギをつかむように、ぬるりと逃げていく。

将はタイルの床に座り込むと、聡を横抱きに抱え込むようにしてやっと固定した。

朝日の中でより美しく血の色を透かしたその唇に自らのそれを押し当てる。

さらに泡でぬるつくのもかまわず、胸の丸みに手を這わす。

しかし、泡は将の指を表面で滑らせ、なかなかその柔らかさを実感できない。

「ダメだってば、将」

聡が意外に冷静な声を出した。

「……いいじゃん。もう1回しようよ」

将はなおも泡だらけのまま聡を抱きしめようとした。

「だめよ。高橋さんが朝風呂に入るっていってたでしょう」

将の動きが止まった。

具体的な言葉に、将は急速に萎えてしまった。

将は、聡にわざとため息をついてみせながら苦笑してみせると、ひょうひょうとシャワーを浴び、湯船へ向かった。

朝の陽射しが湯に差し込んでいる。

透明な鉱泉風呂は、水色のタイルを透かして、それ自身が少しだけラムネのような色にぬめっているように見えた。

「あー」

体を沈めると、お湯に押し出されるようにして声が出る。

今朝は冷え込んだのか、お湯は昨夜より少しだけぬるめに感じる。お湯に陽射しがキラキラと反射するのが清清しい。

聡は、どうやらシャンプーをすることにしたらしい。すこし上半身をかがめるようにしてシャワーで髪を濡らしている。

しばらくその白い後姿を眺めていた将だが、蝉の声に誘われるように湯の中を窓辺へと移動した。

サッシ窓からは、小さな清流が見えた。

きのうから、聞こえていたのはこの川のせせらぎだったのだ。

川の水は、この風呂の湯と同じくらい透き通って、朝日を透かして翡翠色に輝く深みには魚の影さえ見える。将はしばらくそれに見とれた。

体中が温まったおかげか、神経が急速に弛緩してくるのがわかる。

窓辺に手をかけて意識が溶けていくような将の額を、朝の風がひんやりと冷ます。

昨日のサービスエリアでもそうだったが、ここでも、もう秋の気配が漂っているのだ。

そういえば蝉の声も、ずいぶんあせっているように聞こえる。

蝉は……つがいと呼び合うために鳴きあっているのだ、と聞いたことがある。

早く結ばれないと、夏が終わってしまう。

そんな焦りだろうか。

つがい、という言葉を思い出した将は聡をふりかえった。

聡はシャンプーをシャワーで洗い流し終わるところだった。

シャンプーが目に入らないようにだろうか、目を固くつむっているのが将の位置からも見える。

髪の毛がすべておでこの上に固まった変な顔だけど、そんな聡の顔も将にはただ嬉しい。

自分の「つがい」といったら聡しかいない。

夏が終わる前に聡と、とうとう結ばれたんだ、と将は自分のものになった聡の後姿を目を細めてただ見つめた。

まるでお湯で浸されるような、温かいものが心にまで浸透してくる。

やがて、聡は濡れた髪を再びゴムで器用にアップにし、自分用の乾いたままのタオルを胸の前にたらして湯船のほうにやってきた。

「なーんで、隠すんだよ」

将はまた少し口を尖らせた。

「だって、恥かしいよ、こんな明るいところで」

と聡は、タオルごと慎重に湯船に身を沈めた。

「あー気持ちいい」

同じように思わず声を漏らす聡が、微笑ましくて将はそばにくるように誘った。

「こっちこいよ、川見えるよ」

「ほんと?」

聡はタオルで前を隠したまま、湯船の中をしゃがんだまま将のほうへやってきた。

「わー、本当だ。きらきらしてる」

木漏れ日が透き通った流れに反射して、不規則に煌いている。

胸の上まで湯に浸かったままサッシ窓から外をのぞきこんだ聡は歓声をあげた。

「きれーい……」

流れの行く末を眺める聡の顔、そして湯から出た鎖骨のあたりは、半透明に見えるほど輝いていた。

「アキラ、それ……」

将が目で指した聡の胸元には、浮いた聡の胸でタオルが盛り上がっていた。

「ん？」

聡にとってはいつものことだ。

「知らなかったー。おっぱいって水に浮くんだ」

将は感嘆してまじまじと、タオルをぴったりと貼りつかせたまま水面にゆらめく聡の乳房を眺めた。

「だって脂肪じゃない」

聡は濡れて甘栗色になった髪の下で笑った。

お湯のせいなのか、ばら色に染まった頬が朝日の中で微笑む。

将は、清流に見とれる聡に手を伸ばすと、お湯の中でもう一度抱き寄せた。

お湯は一瞬その水面を乱したが、すぐに元通りに静かになって、せせらぎと蝉の声だけが浴室に響いた。

お湯の中で胡座をかいた将の長い脚の中に、聡の腰はすっぽりと収まった。

せせらぎに耳を澄ますようでいて……きらめく川を眺めるようでいて、二人は二人しか感じていなかった。

「アキラのいうとおりになったな」

しばらくののち、将は聡の耳元に囁いた。

「なにが？」

お湯で弛緩しきった体が、なんとなく気だるい聡は、将の体にさらに寄りかかった。

「きのう。雨の中でさ。つらいことも乗り越えればいい思い出になるってさ。言ってたじゃん」

「そうね……」

塗りつぶしたような暗闇は明るい朝日に、冷たい雨は温かいお湯に。

今の二人から見ると、昨日の二人のつらさが嘘のようだ。

「乗り越えてよかった」

将は聡の体を後ろからそっと抱きしめる。

今度は聡のほうから、将に振り返るようにして口づけを求めてきた。

温かいお湯に浸されながらの、生ぬるい口の中の感触。甘い唾液。

せせらぎが、蝉の声が、二人から再び遠のきはじめた。

「もう」

ふいに聡は唇を離すと、軽く怒った顔をつくった。

将の手は、すでに聡の胸の丸みをとらえている。

「だって、アキラの体、エロすぎるんだもん」

将は笑いながら聡の首筋に顔をうめると、そのままの場所を口づけた。塩っ辛い汗のかわりに、鉱泉の甘い味がした。

口づけしながら、お湯の中で浮こうとする胸のふくらみを、押し留めるようにする。

ドリブルのような弾力も何もかも新鮮だった。

「だめよ……お湯が、汚れちゃう」

ついに聡が全身を桜色に染めて、ため息のように漏らした。

295◆夢一夜10

ジリリリン、ジリリリン。

なんとも古風な電話の音が部屋に鳴り響き、重なり合ったまま眠っていた二人は同時に目をあける。

電話は、せせらぎも蝉の声も黙らせんばかりの勢いで、まだしつこく鳴っている。

上と下とで顔を見合わせると、上にいた将が、枕の先にある電話へ、文字通り這うように向かった。

――あ……。

そのとき、最後の1回を終えたまま聡の中にいた将が……ぬるりと抜けて、大量の液体が生暖かく自分の中から漏れるのを聡は感じた。

ティッシュに手を延ばす聡は、1つになったまま二人揃って眠り込んでしまったひとときを、温かく、少しだけ恥かしい気持ちで振り返る。

部屋はすでに朝でいっぱいだった。

軒の上にまわった太陽のかわりに、木々の緑が、爽快な色と風を部屋へと運んでくる。それに、裸はまったく不似合いだった。

「ハイ。あ、わかりました。すぐ降ります」

将は裸のまま、電話に答えながら、聡から受け取ったティッシュで、股間を拭き取っている。

チン、と置くときまで古風な音をたてて電話を終わらせた将が、こちらを振り返った。

「朝ごはん、できてるって。……今、何時？」

「もう８時２０分かな」

裸のまま携帯をあけて時間を確認する聡に、将が抱き付いてきた。

それは勢いあまって、聡を布団の上に再び押し倒す格好になった。

ひとしきり深い口づけを交わしたあと、胸に移行しようとする将を

「９時にはＪＡＦきちゃうんでしょ」

と聡はたしなめた。

将は残念そうに舌を出すと、起き上がった。

「それにしてもすげえな、この散らかり方」

将は二人がいた布団にちらばるティッシュを見て笑った。

暗闇の中で、くずかごがどこかわからなかったので放置していた、二人の体液がついたティッシュ。

それは聡が白バラに囲まれるように眠っていた夜明けより、２回分

増えている。布団からはみ出すほどだった。

くずかごは、壁際に追いやられていた座卓の向こうにひっそりとあった。

聡はさすがに散らかしっぱなしが少し恥かしくなったのか、丸まったティッシュを裸のまま拾い集める。

その無防備な姿に将は飽かず見とれてしまう。

つい1時間ほど前、朝の光の中で、その体の入り組んだ場所まで慈しみ、記憶したというのに……。

川に面した鉱泉風呂に一緒に入った後、二人は明るい部屋で、今までで一番濃厚に交わった。

互い違いに折り重なるようにしてお互いの……将のための場所、聡のための場所を丹念に愛撫しあう。

ほとんど手探りのようだった昨夜に対して、朝は聡というひとの触感だけでなく、鮮やかな色と艶かしい形を浮かび上がらせた。

さっき、汗を浮かべて桜色だった聡の肌は。

朝の、さきほどの鉱泉風呂のように青みを帯びて透き通る空気の中で、その肌の白さは切ないほどだった。

どこもかしこも蝋のような半透明で、丸く揺れる乳房には青い静脈が網目状に走るのが透けている。

聡は集めたティッシュをくずかごに押し込むと、乾燥機から出しておいた衣類を将に手渡し、自らも身につけはじめた。

将は、そんなにきれいな聡の体を服で覆ってしまうのは、なんだかもったいない気がした。

もっと見ていたい……。

しかし、そんな将の願いは叶うはずもなく。

将は仕方なくトランクスを穿くように、自分の欲望もひっこめるしかなかった。

朝食は、ご飯、みそ汁、浅漬けに干物、卵焼などが昨日の食堂に準備されていた。

簡単ですまないねえ、と奥さんは謝ったが、ふだんの朝食に比べると充分すぎるほどの質と量だった。

「よく眠れた？川の音はうるさくなかった？」

温かいものをテーブルに置きながら、奥さんがやたらにこにこと話し掛けてくる。

もしかして、夕べの秘め事がぜんぶ聞こえていたんじゃないだろうか、と二人は少し後ろ暗い。

大丈夫でした、と答えながら将は訊いてみる。

「あの……、高橋さんは？」

「ああ。お二人が起きる前に出ましたよ」

二人は顔を見合わせた。

どうやら、『行為』に夢中だった二人は、高橋の動きに気付かなかったらしい。

「いつもはもう少しゆっくりしていくのにねえ……」

思わず二人は、茶碗を持ったまま、下を向いた。

スタッフが気を利かせたのか、９時ちょうどにＪＡＦがやってきた。

二人は宿泊料金を固辞しようとするご主人夫妻になんとか料金を受け取ってもらい、ＪＡＦの車に乗り込むと清流荘をあとにした。

明るい中で見ると、清流荘はいっそう古びていた。

屋根が赤いトタンだということも今気がついた。それは古びたおかげで、べんがら色のような色合いになり、周囲の緑と絶妙に調和していた。

さすがに9時にもなると蝉の声に誘われるように暑さが戻ってくる。
しかしそれに、東京のような猛々しさはない。

風のひと撫でで、治まるような控えめな暑さの中、二人はミニの応急修理が終わるのを待った。

1時間かからずに修理とバッテリーの充電が終わった。

しかし応急手当だそうで、東京に戻り次第、きちんと修理する必要があるとのことだった。

うさぎを葬ったあたりにもう一度手をあわせて、さっそく出発することにした。

将の抜釘手術がある今日、急いで東京に戻らなくてはならないから。

将は

「面倒だから、手術はもういいよ。のんびり帰ろう」

などと言ったが

「だめよ。ずっとこのあとも仕事が詰まってるんでしょ」

と聡がたしなめるように急がせる。

幸い、この道が聡の予測どおり、国道に通じていることは昨日わかっている。

車が故障した場所から、清流荘まで車だとほんの10分たらずだっ

た。

フロントガラスに再び清流荘の姿が見えたとき、将は思わずそれを懐かしく見つめた。

きのう、二人がたしかに結ばれた場所。

将はハンドルを切りながらその古びた赤いトタン屋根の建物を何度も振り返った。

赤いトタン屋根はいつまでも、木々の影にひっそりと見えていたが、国道へ入るととうとう見えなくなった。

「……高橋さん、気付いてたんだよね」

聡がふとつぶやいた。

将は空いている国道を飛ばしながらわざと「何が」と問い返す。

「きのうの……アレ」

「4回もしちゃったこと?」

将はサングラスの中の目を聡にいたずらっぽく向けた。

聡は無言でハンドルを握る将の肩を叩いた。

車が少しだけセンターをはみ出て、将は笑った。

「ね、アキラ」

口をとがらす聡に将は甘い声を出す。

「何よ」

「アレ、やっぱりこのあとも卒業までお預け？」

「……当然じゃない」

「チェー。残念」

聡は、再び見えてきた槍ケ岳に視線を走らせながら、これからどうしたらいいんだろう、と考えていた。

一度は……将のために、将と離れる決意をしたのに。

それが、このところの色々で、すっかりなし崩しになってしまった。

おまけに、昨日ときたら。聡は、自分から誘って、将とむさぼるように愛し合ってしまったのだ……。

聡は、将とのこれからをどうすればいいのか、また不安になる。

このまま、自分の気持ちに素直なスタンスでいいのか。

それとも、再び距離をおくべきなのか。

人気俳優への道を歩む将。

昨日の忍者寺や、千里浜でもファンに慕われれていた……。

そんな将に、自分の存在は、いつネックになってしまうかもしれないのだ。

スキャンダルという意味もそうだし、将自身のモチベーション的にも。

「……キラ。アキラってば」

聡はハッとして振り返ると、視界に将を戻した。

「なに？」

「あのさ。今ごろ言うのもなんだけど……。アキラ、昨日大丈夫だった？」

「？」

聡は、将の言っていることがわからなくて、瞬きをした。

「ニンシンとか。俺、昨日、避妊具持ってなかったし……。思いっきりぜんぶ中に出しちゃったから……」

少しバツが悪そうな将に、ああ、と聡はようやくうなづくと、即座に

「大丈夫」

と答えてあげた。

「ホント？」

将はホッとしたように、顔をこっちに向けた。

聡はもう一度深く頷いて見せた。

規則的な周期をほとんど崩さない聡にとって、昨日は『安全日』といってよい日だった。

将は、いったん「よかった」と顔を進行方向に向けた。

だが、しばらくしておもむろに付け加える。

「……でもさ、アキラ。もしアキラがニンシンしたら、そのときは……絶対に、結婚しようぜ」

将の口調は、自分に誓うようだった。

聡はとまどった。嬉しい、という気持ちと、それでいいのだろうか、という迷いが聡を俯かせてしまった。

まるで聡の中の迷いを見透かしたような言葉に、聡は目の端で将を盗み見る。

しかし、将のほうは、楽しそうにハンドルを握っているだけだ。

どうやら単に将来の希望として、無邪気にそれを口にしただけらしく、聡はホッとする。

「……大丈夫よ。あたし、将に『出来ちゃった婚』なんて絶対にさせないから。それにしばらく妊娠するようなこと、しないでしょ」

将の顔を見ず、槍ヶ岳に向かってそう呟くのがせいいっぱいだった。

296◆運命1

将は、早朝だというのに足取りも軽くマンションを出た。

朝の陽射しは、いつのまにか暖色を帯びているというのに、空気は驚くほど冷たい。

だけど浮き足立つ彼には……北海道帰りだということもあるが……夏がいってしまったことも、東京の空がいつのまにか高くなっていることにさえ気付かない。

9月に入るなり、北海道ロケが続いた将にとっては久々の登校だった。

もう9月も彼岸を過ぎてしまっていた。

1月から始まる元倉亮脚本のドラマは、蓋を開けてみると、ほとんど将が主役も同然だった。

将の役どころは、バイクで北海道を旅している途中、愛車を盗まれて、そのまま民宿にいつく青年だ。

いちおうトップクレジットは民宿の主人を演じるベテラン俳優になっているが、物語を実際に引っ張っているのは将だ。

脚の抜釘手術を終わらせた将はすぐさま北海道へ飛ぶことになった。

9月の北海道は、すっかり空が高くなり、陽光は金色がかった柔らかなものとなっていた。

秋は気配どころか、いきなり北の大地を澄んだ空気で覆ってしまったかのようだった。

舞台はB町にある本物の民宿のセットで行われた。

波打っているようななだらかな起伏の地面が、すべて畑で覆われている真ん中にある。

木々が色づく寸前に、夏のシーンを撮ってしまうのだという。

陽射しが「夏らしい」感じになるのは昼間のほんの2~3時間で、その時間を狙って撮影は集中的に行われる。

他の時間はゆったりとしていたので、将は待ち時間に

「この撮影用のバイクに乗って、このへん回ってきていいですか」

などと申し出たほどだ（もちろんダメだったが）。

仕方ないので、宿舎や車の中でセリフを覚える合間に、聡にたびたびメールを送った。

美しい風景に出会うたびに、それを携帯で撮影して添付する。

それは、朝霧が夢のように晴れていくアスパラ畑だったり、茜色に燃える夕映えの下で並ぶポプラ並木のシルエットだったり。

それに対して、聡は忙しいのか、返事は1日に1回程度、それも短いものばかりだったが、それでも将はメールを送らずにはいられない。

撮影待ちや宿舎で一人になると、あの夜のことが思い出される。

せせらぎに包まれて聡を抱いた幸せな夜。

「何、ニヤニヤしてるんですか」

武藤の代わりについてくれた若いマネージャーがけげんな顔をした。

目の前に広がるにんじん畑に聡の姿を思い出していた将は、「なんでもないよ」といいながら伸びをして誤魔化した。

「あ、鷹枝くん」

まだ時間が早いのか、教室にいた数少ない生徒の中で、星野みな子がまっさきに将に気付いた。

「よー、みな子。オハヨ」

将は入り口をくぐるようにしてみな子に手をあげた。

みな子は嬉しそうに授業のコピーの束を持ってきた。

みな子とも……ときおりメールを交わしていた。といっても、みな子から来るときは事務的な連絡がほとんどだ。

＞2学期から、進学希望者とそうでない人に授業が分割されたよ。鷹枝くんは進学のほうだよね？

＞そろそろ推薦入学を希望する人は相談するようにって。

そのたびに、将は

＞いつもサンキュ

という文言と一緒に、お礼代わりに待ち時間中に撮った撮影風景などを添付してやる。

それは聡に送ったのと同じ畑の風景だったり、美しい白樺並木だったり、または共演者との寛いだ写真だったりした。

これはみな子が容易に、画像をネット上などに流出させるようなことをしない、とわかっているからできることだ。

みな子は、親しげに将の机に手をついて

「あのね。昨日言われたからメールしなかったんだけど、進学希望者は１０月の全国模試を受けるようにって」

と新しい連絡事項を教えてくれた。そして

「今日は、補習までいられるの？」

と訊いてくる。

「うん。今週は学校週なんだ。仕事は放課後にちょっとだけ。今度のドラマは1月から放送だから『ばくせん』のときみたいに拘束厳しくない」

頬杖をついた将はみな子を見上げながら答える。

その、いかにも親しげなようすを見た他の女子生徒は

「やっぱり……」

と囁いている。

みな子は今や、聡に代わって、将の彼女とされているのだ。

当のみな子もそう言われていることを自覚している。

わざと、他のクラスメートに親しいところを見せているのだ……カモフラージュのために。

『本気で好きだから、今は離れている』

将の聡への思いを聞いたみな子は、自分の入る隙などない、と諦めた。

それと同時に、それでも将のことが好きな気持ちは消せないことを知った。

本気で好きだから、という理由で将が聡と離れていられるなら。

将のことを本気で好きなみな子だって、将の恋を……将が幸せになるのを応援したい。

聡に汚い嫉妬をぶつけるより、自己を殺して将のために献身的に尽くす。

こっちのほうがよほど救われる。

もちろんいつか、二人が別れてしまったときは、みな子に手が差し伸べられるかもしれないという計算もある。

だけど、それよりむしろ、仮に将と聡がこのまま結ばれたとしても笑って『よかったね』といってあげたかった。

そうすれば友情は続くだろうから。

初めての恋の終焉が嫉妬に狂って泣いて醜く終わるより、かけがえのない友情に転化するほうがずっとマシだとみな子は思ったのだ。

だから、みな子は、将が聡のことを諦めたかのような演技に協力すべく、将に親しげに振舞っているのだ。

みな子の気持ちをどこまで知っているのかわからないが、将もみな子の協力には感謝しているようで、何かの拍子に

「みな子、めちゃくちゃいい奴だよな」

と言ったことがある。

その一言で、みな子は思わず泣きたくなるほど救われた。もっともっと、何でもしてあげたいと思う。

そして……みな子にはさらなる希望を持っている。

「鷹枝くん、W大の一芸入試受けるんだよね」

みな子は、確認のように将の顔をのぞきこんだ。なんだか夏休み前より大人っぽくなった気がする。

「うん。いちおう、そのつもりだけど」

「あたしもね。ムリだとは思うけどW大受けてみる」

そうだ。……来年将と一緒にこの東京で大学生になる。それがみな子のささやかな希望なのだ。

「ホント？じゃ来年も一緒にガッコーいけるんだ」

「でも、こないだの模試、D判定だったからムリっぽいけど」

「今から頑張れば大丈夫だよ。みな子頭いいもん」

将の、この笑顔は、自分を歓迎しているのだと思いたい。

「お、将じゃん！学校やめたのかと思ったぜー」

井口が入り口でバカでかい声を出したかと思うと、そのまま将とみな子のほうに寄って来た。

「何、朝からいちゃついてんのヨ」

「いちゃついてないー。コピー渡してるだけだし」

井口の軽口に、みな子は軽く反論した。しかしそれも、計算づくだ。

案の定井口は

「あんまりベタベタしないほうがいいぜー。こないだどっかネットで『ＳＹＯの彼女は同級生らしい』って書かれてたぜ」

などと答える。

うまくいってるんだ、とみな子は内心ほくそえんだ。

あとで、将にこっそり『カモフラージュ作戦、うまくいってるようだね』とメールしようと思いながら、みな子は将の机をあとにした。

そのあとまもなく朝のＨＲが始まり、聡が教室に入ってきた。

半袖ではなく、固い生地のパンツスーツを身につけている。その姿は昨年、赴任してきたばかりの姿を思い出した。

教壇の上に立ち、教室を見渡した聡と、いち生徒として席についた将は一瞬目が合った。

引き剥がすようにして聡が視線をそらすのがわかり、将は軽く俯いた。

毛細血管に及ぶまで、すべての血液の中の鉄分が聡にひきつけられるような感覚。

あの、清流荘で抱き合ってから、もう3週間以上が経っているのに、将の中に残る聡の感触は、聡を求めてU字磁石に引きつけられる砂鉄のようにけばだっている。

将は、聡に逢えた喜びを全身で噛み締めた。

おかげで、聡が教師として何を言っていたのか、ほとんど聞いていなかった。

気がつくと生徒たちがザワザワと移動を始めていた。

生徒のうち半分が、教室を出て行くようだ。

「鷹枝くん、ここいい？」

みな子が席を移って隣にやってきた。

「え？今から何、英語じゃないの？」

「やーね。こないだメールしたでしょ。これから国語と英語は進学

希望者とそうでない人で分かれて授業があるって」

みな子によると、進学希望者はこの教室で聡が教え、そうでない生徒は、視聴覚室で今まで通り映画や音楽を元に権藤が教えるという。

3年1組の進学希望者と合同の授業なので、席のほうは自由らしい。

将のもう片方の隣には「よぉ」と手をあげながらカイトが移ってきた。

「何、おまえも、進学すんの？」

およそそうは見えない赤毛のカイトを将は見つめた。

「ウン。俺さ、ゲーム会社に勤めたいんだ。……て、やっぱ学歴あったほうがいいじゃん」

カイトはやや照れて、それでも真面目な顔でプリントを広げた。

去年、毎晩のように将の家にたむろして、ときに女の子に悪さをしていた仲間とは思えないこの変わりよう。

やっぱり、人間、方向性が定まると、自然に努力するものなのだ。

まだ授業が始まるのに間があると思ったのか、カイトは将にいたずらっぽい顔で話し掛けてきた。

「そういやさ、井口に彼女できたの知ってる？」

「え、何それ」

「なんか、夏休みにどっかでパン屋の研修みたいなやつがあって、それで知り合ったらしい」

そういえば井口は毎朝、近くのパン屋にバイトに行っていた。

しかし、研修に参加するほど嵌っていたとは、将にとって初耳だった。

「ウッソー。あいつパン屋になんの？」

「さー、よくわかんない。でもダンサーの夢も捨ててないらしいけど」

そのとき、聡が再び教室に入ってきた。

さっきは気付かなかったけれど、ひどく顔色が悪いと思った。

黒っぽいスーツと対照的に、あおざめた顔は紙の様だ。

ＣＤラジカセをひどく重そうに教卓に置いた。将の知る限り、いつもはそんなことはない。

それでも聡は声を張り上げて

「じゃあ、今から簡単な英文を3回掛けます。何て言ったか、ノートに書いて見てください。適当でもいいですからネ」

と言った。無理やりつくる笑顔が少しつらそうだ。

CDを掛けているあいだ、椅子に腰を下ろしてテキストに視線を落としている聡は、心もち眉根を寄せているような表情だった。

あきらかに具合が悪いのを耐えている。

そんな聡に気を取られていた将は、ロクに聴き取りできなくて、ノートは白紙に近かった。

何人かを当てたあとで

「じゃあ、正解を書きます……」

と聡が立ち上がった次の瞬間。

黒板に向かい、チョークを持った手をあげようとした華奢な体がぐらりと揺れた。

スローモーションのように崩れていく聡の姿に気をとられている矢先に、大きな音が響き、居合わせた生徒たちはハッとした。

聡は教壇の上に倒れたまま、動かなかった。

297◆運命2

「アキラ！」

反射的に立ち上がった将は、誰よりも早く倒れた聡に駆け寄っていた。

今日は下ろしていた栗色の髪が、教壇の上に広がっている。

「アキラ、アキラ、しっかりしろ」

呼びかけても、蒼ざめた顔に、血の色も意識も戻らない。

思わずその白い頬に触れた将は、それがひんやりしていたことに恐怖を覚えた。

将は、聡の体の下に手を入れると、抱えあげた。

……前にふざけて『お姫様抱っこ』をしたときよりずっと軽くなった気がする。

だけど意識も力もまったく失った聡の体は、ぐんにゃりとして頸も腕も将の腕からこぼれ落ちるように垂れた。

将は聡の体を横抱きにすると、足で引き戸を開けて廊下へ出て行った。

そのようすを教室にいた一同は、固唾を飲み込んで見送った。

「みな子……」

すみれが、みな子を気遣うようにそっと寄り添った。

「あの二人……まだ」

「ん」

みな子は何に頷くともなく、少し俯いてプリントのあたりを見つめる。

手が幽かに震えている。それを膝に落として、すみれの視線から隠す。

しばらく、シンとしていた教室だったが、しばらくするとざわめき始めた。

1組のギャル系女生徒が能天気に

「いいナー。ああいうシチュエーション憧れる」

「ドラマチック」

「しかもSYOだもんね」

などと声高に話しているのが聞こえる。

確かに。あれを見たみな子は、あまりの羨ましさに嫉妬を覚えた。

自分が急に倒れたとして。将は聡のように抱えあげてくれるのだろ

うか……。

嫉妬の炎の痕が、心にちりりと痛んだ。

「先生、どうしたんだろう。心配だね」

その痛みに抗うように、みな子はようやく、傍らのすみれに言うことができた。

聡を一人で抱きかかえて保健室にやってきた将を見て、保健医の三田先生は驚いたようだったが、反射的にベッドを示してくれた。

将は聡をベッドに横たえながら、

「急に倒れたんです」

と必死の形相で三田先生に訴える。

「先生。聡先生」

靴を脱がせながらの、三田先生の呼びかけにも聡は反応しなかった。

いったい、どうしたんだ、と将はぐったりとした聡の顔をのぞきこむ。

いつもばら色の頬は、緑がかって見えるほどの白になり、睫の長さ

を際立たせた。

形のよい唇は閉じられたまま、紫がかっている。

将の脳裏に、いつか病院で会った聡が浮かんだ。

あのとき、確か、貧血と言っていたはずだ。単なる夏バテだとも。

だけど、今日は長袖でもいいほどの涼しさだ。

いまさら夏バテのはずがない。

貧血といえば……将の脳裏に、2年前に大ヒットした小説のヒロインが浮かぶ。

白血病に冒された恋人と死に別れるあの話でも、たしか最初に出た症状は貧血だった。

聡は……もしかして、とんでもない病気に蝕まれているのか。

――嫌だ。

そのとき、将は確かに、棺に入る聡を白日夢のように見た。

将はそんな想像を一瞬でも浮かべた脳を取り出して掻き毟りたい衝動に駆られる。

――アキラが死ぬわけがない。

「どうもありがとう。あとは私がやるから。職員室に行って、代わ

りの先生を呼んできなさい」

三田先生は聡の襟元をゆるめながら、将を振り返った。

「先生。……アキラ先生は……」

「夏バテで、体調が悪かったみたいだから……。たぶん、また貧血だと思うけど」

三田は、心配をまるで隠さない将の顔を見上げて、なだめるように言った。

「でも、もう涼しいのに」

将は三田の言葉を遮るように反論した。

「もちろん、聡先生は意識が戻っても戻らなくても病院で診てもらうわ。だけど、夏バテってね。

涼しくなってからドッと出る場合もあるのよ。だから、たぶん大丈夫よ。鷹枝くんは教室に戻って。ね?」

それぐらいではもちろん納得できなかったが、少しだけ冷静さを取り戻した将は、黙ってうなづくと、保健室を出るしかなかった。

心配で、後ろ髪を引かれるとはまさにこのことだった。

白とグレーと薄緑のだんだら模様が、幾何学模様の平面図になり、やがて遠近感が戻ってきた。

自分の目の前にあるのが天井と薄緑色の仕切りのカーテンだということに聡はようやく気付いた。

聡は起き上がろうとして、いやに冷たい自分の体に気付いた。

「気がついた？」

三田先生が、カーテンを開けて顔を出した。

何か返そうと脳は反射したが、唇に届くまでに思考がまとまらない。

「はい……」

仕方なく短い返事で、気がついたことだけを伝えるに留まる。

「授業のほうは、権藤先生がみてくれているわ。視聴覚組は多美先生が」

実務的なことを持ち出されて、ようやく思考を司る部分に血流がまわりはじめる。

「ありがとうございます」

聡は礼を言いながら上体を起こそうとした。

しかし体を支えようとする腕がしびれたように力が入らなくて聡は

ベッドの上でふたたびよろけた。

血の流れが滞っていたところへ、急速に流れ始めたからだろう。

三田先生があわてて制する。

「聡先生は、今日は大事を取ってここで休んだあと早退するように、ということです。それと、病院にもう一度行きなさい、と」

聡は黙った。

「もう少し休みなさい」

三田先生は年配らしく聡に命じた。しかし布団を掛けなおす手は優しい。

「ここへは……」

聡は倒れたときのことを思い出そうとした。

黒板が……視界が急に、アンテナが壊れたテレビのような砂嵐に見舞われて……手足の先と脳天が冷たくなっていった。

それだけが聡の覚えている全てである。あとはどうなったのか、どうやってここに来たのかまるきり覚えていない。

「鷹枝将が、一人で抱えてきたのよ」

一一将が。

「もうすっかりあのコも大人ね。あなたのことを軽々と持ち上げて、血相を変えてここに飛び込んできたわ」

聡はとっさに三田の顔の中に疑惑の色を探していた。

しかし、進学希望の生徒の中では一番背も高く、がっしりとした将が聡を運んでくることに、さしたる違和感を持っていないようだった。

「鷹枝……くんが」

安心した聡は、将の名前を反芻した。

――将が、自分を抱えて……。

だが甘い想像は、厳しい現実を連れてきた。自分の体が抱え込んだ現実。

実は……聡はすでに昨日、病院に行っていた。

そこで思いがけない現実……運命が自分に訪れたことを知ったのだった。

聡は目の前が、真っ暗になった。

嘘だ、と疑った。

だが、医師は紛れもない事実を聡に突きつけるだけだった。

昨日一晩中、聡は悩み、眠れなかった。

このことを……どうやって将に打ち明けるべきだろうか。

将から受け取った、今日からしばらく学校に来れるというメールをあけて聡は苦しんだ。

そして……今朝。

生徒たちの中に将の顔を、見つけた聡は、緊張と安堵の両極端が体を支配しようとするせめぎ合いの中で、気を失った。

カラスの声に、聡は目覚めた。

眠ればすべては夢に変わってくれるかもしれない、と期待した聡だった。

しかし目覚めるなり現実が体に寄り添っていることを実感し……起き上がる気力を失った。

もう、夕方らしい。自宅コーポの白い天井は薄墨色になって聡を憐れんだ。

このところ、暮れるのがどんどん早くなる。

聡は鉛のような体を横に向けた。

――どうしよう。どうしよう。どうしよう……。

それぱかりが、聡の頭をぐるぐると回り始めた。それがあまりにも煩くて、聡は布団の中にもぐりこむ。すると

――なんで。なんで。なんで……。

リフレインはフレーズを変えて、耳鳴りのように聡の内耳から離れようとしない。

ピンポーン。

玄関のチャイムが鳴った。直後に、

「アキラー。俺」

と懐かしい声と共に、小さくドアを叩くノックの音。

聡は、反射的に起きると、玄関に駆け寄った。鉛のような体が、将の一声で軽くなったかのようだった。

ドアをあけるなり、聡は視覚より先になだれ込んできた干草の匂いにふわりと包まれるのを感じた。

抱きしめられる直前に見た……眼鏡をかけ、帽子を被ったその姿は、将に見えなかったけれど、まぎれもなく将なのはその温もりでわか

る。

聡は、キラキラしたものの目くらましで、悩みが見えなくなるのがわかった。

「ゴメン。合鍵、しまいこんじゃってたから」

ひとしきり聡を抱きしめた将は、眼鏡と帽子を脱ぎながらいたずらっぽい笑顔で言い訳をした。そして

「病院行った？」

と顔を近くに寄せてきた。心配のあまり睨みつけるような顔になっている。

答えることができない聡は、

「タクシーで来たの？」

と訊き返しながら、目で将を中へいざなった。

「うん、そう。最近ミニのほうはチェックされてるらしいから……」

ドラマの放映は1月からとはいえ、将は最近ＣＭやバラエティで以前より頻繁にテレビに出るようになっている。

官房長官の息子であることがバレてから、知名度が増したのはあきらかで、迂闊に外を出歩けないのだ。

「アキラ……、変な病気じゃないよね」

「あれ?将、なんか匂いがする」

またしても聡は、はぐらかすしかない。聡は将の持っている白いビニール袋に今目をとめたフリをした。

「ああ、これ。一緒に食べようと思って買ってきた。アキラ、ちゃんと食べてないだろ。こないだ金沢でもずいぶんメシ残してたし…」

将が持っていたのは、久々に見る聡が前にバイトしていたお弁当屋さんの包みだった。

「ありがと。お茶淹れるね」

聡はパジャマ姿のままキッチンに立つと、お湯を沸かした。

「いいよ、冷たいので」

「あたしが、あったかいのを飲みたいの」

将と向き合えば、事実を告げなくてはならない。それが恐くて……聡は無意識に将に背を向けていた。

そうとは知らない将のほうは、さっきより顔色がよくなっている聡を見て安心したらしい。

白いビニール袋から出した弁当をローテーブルの上に置きながら話を続けた。

「それがさ、俺が高校生だって、すっかりバレてて『何が東大生だ。だましやがって』ってオヤジに小突かれちゃったよ」

どうやら、弁当屋夫妻もテレビで将を見て、今までの将の嘘がわかったらしい。

「サインよこせって言われるし。でも色紙ないから、仕方なく弁当の包み紙にサインしたんだぜー」

将が可笑しそうに話すところを見ると、弁当屋夫妻もそれほど怒っていないらしい。

まもなくお湯が沸いたので、聡は美智子にもらったウーロン茶をペアのマグカップに淹れた。

「温かいうちに食べようぜ。俺もう腹ぺこだしー」

そういいながら将は、聡がテーブルにつくのを見計らって自分の弁当の蓋に手をかけた。

白いプラスチックの蓋がずれたとたん。

いつもは香ばしいだけの油の匂いが、鼻から不快感として体に伝わるのを聡は感じた。

逆流する何かを堰き止めるように聡は手で口を覆って立ち上がると、ユニットバスに走りこんだ。

298◆運命3

「アキラ！」

洗面台にかぶさるようにして咳き込む聡の背後に、将も思わずかけよった。

聡の唇から洗面台には白い唾液が落ちるのみで、何か固形物を吐くというわけではない。だが痙攣するかのような嘔吐の動作は続く。

ぜいぜいと苦しげなパジャマの背中をさすりながら、将はある考えに思いがいたる。

「アキラ……、まさか、アキラ」

学校での貧血。そして吐き気。

「……できた……の？」

ようやく波のように逆流する内臓の動きがおさまりつつあった聡は、洗面台から視線をあげる。

洗面台の鏡の中に、息を飲んで自分をみつめる将の顔が映っていた。

将も、鏡の中の聡の顔を見つめていた。その赤くなった顔が……歪んだかと思うと再び鏡の中から崩れるように落ちていった。

ユニットバスの床にしゃがみ込んだ聡は、膝に顔をつけんばかりに俯いた。

パジャマの華奢な肩がこきざみに震えている。

「アキラ……」

思わず将も聡にあわせてユニットバスの床にしゃがみこむ。

「……ごめん」

聡は顔を膝の中に埋めたまま、うめくように呟いた。

「あたしが、いけないんだ……あたしのせいなんだ」

「て、アキラ」

将は、膝で隠れた聡の顔を覗き込むようにした。

だがその顔は膝と腕で隠されていて見えない。

たぶん泣いているのは震えていることからもわかる。

将はできるだけ優しい声を出してもう一度確認する。

「本当に？できたの？」

もうあれから1ヶ月になろうとしている。

せせらぎの中、声をひそめるようにして何度も抱き合ったあの夜の……。

聡は、声を出さずに、より膝に顔を埋めるようにして頷いた。

まず、生理が４日遅れた時点で、おかしいと思った。

１２歳で生理が来てからというもの、聡は始まった年の冬に3日遅れた以外、極めて正確に毎月やってきていたのだ。

遅れたり早まったりしてもせいぜい2日。

だから、あの日……将と結ばれた日は、完全に安全日のはずだったのだ。

それが、もう４日来ない。

もしかして夏バテで体調がおかしかったから、遅れているだけかも。

そう思って聡は毎日、それを待った。

5日、6日、7日……日にちが過ぎるごとに、聡は薬局の前を通るときに、威圧感を感じるようになった。

そこには聡が確かめたいことを調べる道具が売っていたから。

日ごと、聡は薬局の前を通るたびに、動悸が強くなるのを感じざるを得ない。

そしてついに１４日が過ぎてしまい……聡は薬局に入らざるを得なかった。

まさか、自分がこの商品……妊娠検査薬……を、こんな風に恐れながら買う日が来るとは思わなかった。

こそこそとレジに他の客がいないときを狙って買う未婚の自分は、ひどくだらしない女だと思われているのではないか。

聡は女の店員の様子を盗み見た。

だが、幸い妊娠しても倫理的にも社会的にも問題ない年齢に達していた聡は、何の咎も受けずに、スムーズにそれを買うことができたのだった。

それでも……往生際の悪い聡は、それを買ったまま放置すると、一縷の望みをかけたまま１９日から始まる４連休を過ごした。

果たして……生理は来なかった。

連休最終日も夕方になって、聡はようやく意を決すると、検査薬の封を切った。

検査薬は……あっけらかんと、聡が妊娠していることを伝えたのだった。

「病院、行ったの？間違いないの」

将の問いかけに、聡はあいかわらず無言で頷くしかない。

『間違いかもしれない。検査薬が誤った結果を出しただけかもしれない』

という最後の望みをかけて聡は昨日、病院にいった。

学校から遠く離れた、女医がやっている病院をわざわざネットで調べた。

３０代後半と思われる痩せぎすの女医は、尿検査の結果を見ると、抑揚のない声で淡々と言った。

「妊娠してますね。……最後の生理はいつでしたか」

聡は思わずため息をつきそうになるのを、かろうじて質問の答えに変えた。

「８月８日です」

「じゃあ……いま２ヶ月ですね」

そのとき聡は初めて、妊娠〇ヶ月というのが、最後の生理が始まった日から数えるものだということを知ったのだった。

それでも聡は、納得できなかった。

どうしてきっちり２８日周期の自分が、あのタイミングで妊もるのか。

あの日は安全日じゃなかったのか。

「あの……」

聡は丸椅子の上から控えめに声を出した。

「何か？」

女医の一重瞼にひるみそうになりながら、聡は思い切って問い掛ける。

「排卵日って……急に１週間もずれるものなんですか？それまでずっと正確だったんですけど」

質問を発してしまって、聡はしまった、と後悔した。

これでは自分が望まない妊娠、つまり失敗をしでかしたことが、この女医にバレバレになってしまったではないか。

しかし女医は、首を少しすくめた聡に目もくれず

「風邪をひいたりして薬を飲んだりとか……体調が悪かったり、ストレスが溜まっていたり、ダイエットしたりとか。１週間ぐらいは普通に狂いますよ」

と極めて淡々と回答した。

そういえば今年の夏は聡にとってことさらに暑かった。

きちんとした服を着込んでの蒸し風呂のような教室。そして毎日の補習。

ずっと夏バテで貧血ぎみだったあの頃から……聡の体の歯車は少しずつずれていたのだろうか。

とりあえず淡々とした様子を続ける女医の口調にほっとしたのも束の間、

「産みますか？」

という短剣が聡に突き刺されたのだった。

いる。……このお腹の中に、将の子が。

あの夜、将から受けた精のうちの１つが……確実にいま、聡の腹の中で育っている。

「アキラ、アキラ」

気がつくと、聡はユニットバスの床に座り込んだまま呆けていたらしい。

将の顔が目の前にある。

さっきと同じ、心配のあまり睨みつけるような顔になってしまっている。だけど聡の肩に置かれた手は温かい。

「将……」

角膜に映る、将の顔が万華鏡のように崩れた。

ゆがめた睫の間から大粒の涙がこぼれて、頬をつたっていった。

一一産めるわけがない。

本当は……あの翌日も、その翌日も。

数日間は聡の中で生きているであろう将の精子が……聡は嬉しかった。

自分を抱きしめたくなるほど、いとおしかった。

それが、聡の卵子と結び合って1つの命をつくったのなら……聡にとっては素晴らしい僥倖のはずだった。だけど……。

「ごめんね。将……」

教師が教え子の子を身ごもったなどと、どこの世間が許すだろうか。

まして、将は……人気急上昇中のイケメン俳優、しかも官房長官の息子だ。

『迷惑はかけないから……。自分でなんとかするから』

と哀しい決意を口にしようとした聡は、ふいにがっしりと抱きしめられた。

熱くて弾力がある将の胸が意を決したように深く動いて息を吸い込んだ。

「アキラ……。やっぱり俺たち、こうなる運命だったんだ」

将の声は吐息と共に、聡の背中に染み込むようだった。

そして、将はもう一度聡の両肩をしっかりと掴むと、向き直った。

「結婚しよう」

将の瞳は今までにないほど真剣に聡を見据えていた。

その真剣さに聡の『でも』という言葉はたやすく溶けてしまった。

将は、口元に微笑さえ浮かべながら続ける。

「子供が出来るなんて……、やっぱり俺たちの縁は本物なんだ」

そういうと将は、再び聡を抱き寄せた。首筋に鼻を擦り付けるように……いつになく、髪から背中を優しく撫でる。

「……将」

聡は現実におののきながらも、目の前の将にはからずも、体重を預けてしまう。

「予定日はいつだって？」

予定。産むことなんてまるで頭になかった聡だ。

思い出せるはずが……ない。

あの女医の問いかけにも、聡は『産めません』と答えるしかなかった。

女医はこれまた淡々と、相手の男から署名捺印をもらうように、と中絶同意書を聡に手渡したのだった。

「無理だよ……将」

聡は将の胸に手をおいて自分を引き剥がした。将がどんな顔をしているかは見ないでもわかる。

「ダメだよ。将……産めるわけないよ」

「どうして」

「だって……。教師が生徒の子供を産むなんて……ありえないし」

聡は将の顔を見ることができない。まるでユニットバスに話し掛けるような不自然さで聡は続けるしかない。

「それに、将は……芸能人でしょ。スキャンダルになっちゃう」

「いいよ、俺。学校なんかやめるよ。芸能界だって関係ない……」

そう言いながらなおも聡を抱きしめようとする将を、言葉ごと振り払うようにして聡は言葉を投げる。

「結婚だって。将は未成年でしょ。ご両親の承諾がないとできない……」

振り払った一瞬、聡の視線はとまどった将の瞳まで浮上したが、すぐに墜落してしまった。

「生徒を誘惑して、妊娠した教師なんて……、ご両親が承諾するわけがない」

そこまで言ってしまって、聡は涙が止まらなくなった。

あたりまえの理屈を……自分では納得していることを言っているのに、どうしてこんなに悲しいんだろう。

「堕ろすしかないよ……」

その言葉はすでに涙声になってしまっている。

これではまるで、本当は堕ろすのが嫌で、取り乱しているように見えてしまう。

「アキラ……大丈夫だよ」

案の定、将は懲りずに聡を胸に押し当てた。

聡は、いけないと思いつつ、将の胸にすがってしまう。

すがったら最後、泣きじゃくってしまう。

将はそんな聡の髪を優しくほぐすように撫でた。

「大丈夫。アキラ。せっかくできた二人の子供だろ……。堕ろすとか言うなよ……」

「でも」

しゃくりあげながら、悲観的なことを言おうとする聡を将は優しく制した。

「大丈夫だから。絶対に俺たち結婚できるから」

将は、しゃくりあげる聡の背中を、とんとん、と叩いた。

なんだか、遠い昔……子供の頃、父親にこんなふうになだめられたことがある。

聡の背中で、セピアになった子供の頃の記憶が蘇った。

将は……聡のお腹の子の……すでに父親なのだ。聡は涙と共に、郷愁を飲み込んだ。

「学校や、仕事はいざとなったらやめればいいし……オヤジは絶対説得するから」

「でも、でも。せっかく卒業……それに元倉亮……」

「そんなものより、アキラが大事」

将は優しく、でも、きっぱりと言い切った。

「俺の人生で、アキラが一番大事なんだ」

299◆運命4

どれくらいぶりだろうか。将は聡の部屋の、聡のベッドの上で、パジャマ姿の聡を抱きしめて横たわっている。

「アキラ、本当に、ゼリーだけで大丈夫？お腹すかない」

「うん……」

答える声は、いつになく弱弱しい。

すでにスタンドも消しているせいで、その顔色は見えないが、きっと青白いに違いない……それがたやすく想像できる声だ。

せっかく将が買ってきたお弁当だが、聡はほとんど吐いてしまった。

かわりに常備していた携帯ゼリーを半分だけ口に入れて

「もういい」

と聡はその残りをテーブルの上に置いてしまった。

それは『食べないと、お腹の子どもが……』と喉まで出かかったセリフをひっこめるのに充分なほどの顔色の悪さだった。

幸い明日も学校だったので、聡が心配な将は、今日はここに泊まる、と宣言した。

聡は、明日ここから学校に行くのはマズい、と眉根を寄せたが、

『明け方にタクシーを頼んで一回マンションに帰るから』といって将は頑としてここに泊まると言い張った。

二人を包むのは、同棲していた頃と同じ、暗くならない東京の夜だ。

しかし、しん、と冷えて銀色がかった1月頃に比べると、9月の今は濃紺の羽のような薄闇がシングルベッドの上で抱き合う二人をそっと包んでいる。

将が抱きしめている聡の体は、まだ細く華奢だ。

だけど……この体の中に、自分の子供が確かに息づいている。

溶け合って1つになることさえ望んだ、あの夜の……まさしく愛の結晶が、聡の中に……。

深い感動を覚えた将は、聡の肩を抱き寄せた。

「将……。ほんとうにごめんね」

聡がまだ、将の胸のあたりに呟いている。

「あたしが……ちゃんとしてれば」

「あきら」

将は優しく、聡の懺悔を遮った。

「俺、嬉しいんだぜ」

濃紺の中に浮かぶ、聡の顔を将は見つめた。暗さに慣れた将の目は、いとしい聡の顔をはっきりと捉えた。

「アキラが、俺の子供を産んでくれるなんて」

「将……」

聡の瞳がうるむ気配があった。暗がりでもそれはわかった。

いつか、古典か何かで見た気がする。子供が出来るのは前世からの縁だと……将はそれを信じたい気になっている。

そしてそれは前世よりも、むしろ未来へとつながる聡との絆でもあった。

「ねえ、アキラ」

将は上半身を少し起こすと、聡を上から見下ろした。

「おなか、触らせて」

返事が聞こえる前に将は、聡を仰向けにしてそっとパジャマに覆われた下腹部に手を置いた。

「ここに、いるんだ。二人の子供が」

将は暗がりの中で、感慨深げに呟いた。

それは、まだまったく平坦で、贅肉すらないようだった。

その平坦な聡の下腹部に将は頭を載せた。

子供がいるあたりに耳を押し付けているようだ。

「もう……心臓とかできてるのかな。このドキドキしてるのってそうかな」

暗い気分だった聡は少しだけ可笑しくなった。

「違うと思う」

まだ子供は1センチぐらいのはずだ。早い場合は心音が確認できるというが聡はまだそれを感じていない。

「じゃ、アキラのかぁ。……おーい。お父さんだよー」

おどけてお腹に呼びかける将に、聡はほんの少しだが……救われた。

本当に迷惑じゃないんだろうか、負担に思っていないんだろうか、と聡は無邪気な将を見つめた。

聡にとってでさえ、予期せぬ妊娠だ。とまどい、苦しみ、ひたすら自分の体をを責めるばかりで、

とてもじゃないけれど将の子供を『授かった』などとは思えないでいるというのに……。

こうやって、お腹に呼びかけたり、なぜたりしている将は、本当に嬉しそうだった。

「名前、考えなきゃなー」

将は再び隣に横たわると、聡の肩を抱き寄せた。

「もう、受精したときに性別って決まってるんだよな。どっちかな……アキラに似た女の子がいいな」

将があまりにも、楽しげに希望を紡ぐので、聡は思わず口を挟む。

「だけど、わかるのはもっと先よ」

先、と口に出しながら、性別がわかるほどの未来まで、この子を無事にお腹の中で育てられるのだろうか聡にはかいもくわからなかった。

聡の一寸先は文字通り闇だった。

ただ将の、無邪気で一途な愛情に包まれて漂っている。

その行きつく先はまるで想像できないまま、聡は今はただ将のぬくもりを感じていた。

３００◆２８１～２９９話のあらすじ

巌の骨を、森村史絵の墓が見える桜の木の下に埋めた将と聡は、金沢に観光に出かける。

忍者寺（妙立寺）、千里浜で妙に明るくはしゃぐ将に聡は心配になる。

夕方、来た時と違う道で東京に帰ろうとした将は、ナビにも出ない山の中の細道に迷ってしまう。

一刻も早く広い道に出たい一心の将は、ひさびさの直線にスピードを出しすぎてしまい、うさぎをはねてしまう（２８１～２８２話）

うろたえる将に対し、聡は冷静にうさぎを葬る。そのあいだに、折悪く雨が降ってきた。

かつ、かねてからエンジンのかかりが悪かったローバーミニだが、ここにきてまったくエンジンがかからなくなってしまった。

「自分のせいだ」

と落ち込み、さらに巌の死や大悟のことまで自分を責め始める将に聡は

「私は将が必要だから」と抱きしめる（２８３話）

ナビからここが国道の近くだと判断した聡は、歩こうと将を促す。

あくまでも悲観的な将を励まし、自ら積極的に車をわきに移動するべく懸命に力を込める聡を見るうちに将は温かい気持ちになる。

雨の中を歩きながら、この状況が嬉しいとさえ言う聡に将は驚く。

聡は、こんな経験が二人で出来ること、さらに

「つらいことは、乗り越えたらあとでいい思い出として振り返ることができる。そして強い絆になる」

と話す。将はそれは二人の関係にも例えられるのでは、と答える。

二人の間に横たわる世間体などの問題。それは乗り越えたらより強く結びついて、より幸せになれるということだ（２８４～２８５話）

やがて、灯りが見えてきて、二人は急ぐ。

そこにあったのは、人は住んでいるものの、もう廃業した民宿だった。

近くに宿はなく困った二人だったが、たまたま泊まっていた常連客の好意で、そこに泊まることを許される。

下着までびっしょり濡れた衣類を洗濯させてもらい、お風呂と夕食まで準備してもらう（２８６～２８７話）

二人は常連客と襖だけで仕切った部屋に布団を並べて床に入る。

しかし、気持ちが昂ぶって眠れない二人。将は聡の布団に入り、聡はとうとう自分から将に「抱いて」と口にする（２８８話）

二人はほとんど姿が見えない暗闇の中、襖越しの常連客に聞こえないように声をひそめて愛し合う（２８９～２９１話）

予言的な夢を見て涙する聡を将は揺り起こす。

目を覚ました聡は、現実の将を感じたいと積極的にふるまい、朝ぼらけの薄明かりの中で二人はもう一度愛し合う。

その汗を流すべく一緒にお風呂に入り幸せなときを過ごす（２９２～２９４話）

お風呂のあとも激しく求め合い、さすがに疲れて眠りこんでいた二人は、朝ごはんの電話で飛び起きる。

まもなくＪＡＦが来て、車は無事に治り、二人は東京へと急ぐ。

聡は、将のために離れる決意をしたことが、なしくずしになってしまったことに不安を覚える（２９５話）

９月も下旬。将は2学期になって初めて登校することができた。

それまでは元倉亮のドラマの撮影のために北海道ロケに拘束されていたのだ。

ひさびさのクラスでは、すっかり星野みな子が将の彼女扱いされている。

それはみな子自身も望んで将に協力したカモフラージュだった。

まもなく、教壇の上に立った聡は、将の目の前で倒れる（２９６話）

将は無我夢中で聡を抱きかかえると保健室に運んだ。

幸い聡は単なる貧血だったが……その貧血が何に拠るものか、聡はすでに知っていた。

聡を案じる将は、仕事がなかったのを幸いに、早退した聡に弁当を届ける。

しかし弁当を食べようとした聡は急な吐き気にみまわれて洗面所に駆け込む（２９７話）

聡の様子を見て、将は聡が自分の子供を身ごもったことを知る。

自分を責め、そして子供を堕ろすとさえ言う聡に、将は

「結婚しよう。俺たちはこうなる運命だったんだ」と抱きしめる（２９８話）

ひさしぶりに聡の部屋に泊まった将は、聡のお腹に育つ命に、静かで深い感動を覚える。

お腹に呼びかけるなど無邪気な将に対し、聡は不安で先が見えない中、将のぬくもりだけを感じていた（２９９話）

３０１◆無理難題１

土曜日は、雨が降った。

将は午前中からミニに乗って、高級住宅街にある自宅に向かった。

父の在宅確認のために入れた電話には、義母の純代が出た。

「将、元気なの」

純代の声が、温かく聞こえるのは、やはり厳の葬儀での一件のせいなのだろうか。

そんな風にたやすく義母を許しそうになる自分が将には少し面映い。

だから、意識して固い声を出す。

「ハイ。……今日、オヤジ家にいますか」

「ええ。いるわ。先週まで地方選の応援があったけど、終わったから今日は1日ゆっくりするそうよ」

官房長官でしかも長身・イケメン政治家として人気のある康三は、選挙の応援に狩り出されることも少なくない。

それは当然、来年の総裁選に向けて、自分に投票してくれる議員を一人でも増やすための工作でもある。

……父はやはり総理を狙っているのか、と将は腹の底が少し不安で

重くなるのを感じた。

それは今から切り出さねばならないことに関連している。

「……そうですか。今から話があると伝えてもらえますか」

「将、うちに帰って来るの？孝太が喜ぶわ。そうだわ、みんなでお食事にでも行きましょうか」

無理に明るい声を出そうとする純代に将は

「お気遣い無用です」

と冷淡に答えて、短い謝辞を述べると電話を切った。

「お兄ちゃん！」

開いた玄関から、飛び出すようにして孝太が飛びついてきた。

「孝太、元気にしてるか？」

いつも同じ質問だと思って将は自分に少し苦笑した。

こうやって、この玄関に足を踏み入れて、孝太が駆け寄ってきたのはどれくらいぶりだろうか。

ひょっとして1年以上経っているだろうか。

将は少し背が伸びた孝太の頭を撫でながら少し考えた……そうだ。聡が自分のクラスの担任だと知って。

それで制服を取りに帰ってきて以来なのだ。

つまり理由はともあれ今日と同じく、聡のためにわざわざここを訪れたことに、将はあらためて覚悟を飲み込む。

「将、入って。お茶にしましょう。それともう、お昼にしたほうがいいかしら」

純代がややぎこちない笑顔で将をリビングに招き入れる。

「お昼ねえ、お母さんが栗ご飯をつくってくれたんだよ。僕も栗の皮むくの手伝ったの」

孝太が笑顔で将の手を引っ張る。

純代の実家である岸田家の選挙区の支援者から毎年、立派な栗が送られてくる。

それをつかった栗ご飯は、子供の頃の将の大好物だった。もちろん、今も嫌いになったわけではない。

将は孝太の手を出来るだけ優しくほどくと、純代をまっすぐに見据えた。

「あの……。オヤジに話があるんですけど」

「お食事しながらじゃダメなの？」

将は黙って頷いた。

「わかりました。お父さんは書斎にいらっしゃるから……。お茶を持っていくわね」

純代は素直に引き下がると、内部電話で康三に将の到着を伝えた。

重厚な木のドアは、ノックすると心地よい反響音と緊張感を将に返した。

「入りなさい」

寛いだ康三の声がした。重めのドアを開けると、モーツァルトが掛かっていた。

こんな風な雨の日に、父はよくクラシックを掛ける。

『雨だと、音が柔らかく響くんだ』

そんなことを聞いたのは、もう１０年も前かもしれない。

康三はデスクの前の椅子に掛けて、リラックスした様子で、資料をたぐっていたようである。

将を見ると、顔をあげて笑顔をつくった。

「なんだ、今日は。そこに座りなさい」

康三の書斎は、両側の壁がすべて書棚になっている。真ん中には、秘書などと打ち合わせができるように、皮のソファがしつらえてある。

忙しいときはここで仮眠を取ることもあるスペースを康三は将に勧めた。

「元倉亮のドラマはどうだ。うまくやってるのか」

将はいったん無言で頷いたあと、付け足しのように

「……うん」

と呟いた。

無言で頷くのはもうクセになってしまっていたのだが、今から自分の人生で最も重大なことを願い、いや、宣言しなくてはならない。

そんな将には、声を出さない返事は無責任に思えたので、急遽責任感から声を付け足したのだ。

「今度はいつ北海道に行くのか」

「１０月……」

「元倉亮といえば、お父さんのお兄さんの同級生だって知ってたか？」

「いえ……」

将は首を振りながら、純代の茶が遅い、とそわそわした。

重大な話を切り出している間に、あの女が来るのは、あまりに間が悪すぎるからだ。

「そうか。今度会うチャンスがあったら鷹枝周一を知ってるかと聞いてみなさい」

そのとき、ようやく純代のノックがあり、部屋に紅茶が運ばれてきた。

オールド・ノリタケの器に入った紅い茶は、香りからダージリンだとわかった。

薄くスライスしたオレンジと温めたミルクが添えてある。

どちらでも好きなほうを使えということだが、どうやら正午近い今のタイミングに、どんな紅茶を出すのか考えあぐねてのことらしかった。

デスクの前からソファに場所を移した康三は、温めたミルクを自分のカップに垂らして

「お前は使わないのか」

と訊いた。

将は、紅茶どころではなく……純代が出て行ったとたん、いつ話を切り出すかと身構えていた。

「大事な話があるんだけど」

「ああ。お母さんから聞いた。なんの話だ」

康三はミルクと砂糖を入れた紅茶の柔和な香りに顔をなごませながら、カップごしの目でこちらに向き直った。

「結婚……したいんだ」

そのとき、ミルクティは康三の舌にまろやかな軌跡を残しながら喉へ滑り込もうというところだったが、

それを聞いた康三は咽ないために、それをごくっと飲み下さなくてはならなかった。

「誰と」

それでも冷静さを保って、康三はカップをいったんソーサーに置いた。

「古城聡さん……と」

将は聡の名前に先生を付けるかどうか迷った。だが、結婚は一人の女性の問題だから……と付けなかった。

康三は少し考えて、それが将の担任の聡のことだとわかった。

特徴のある聡の苗字、そして将を曲がりなりにも学校に登校するようにしむけた功績を持つ担任教師として、聡の名前は康三の記憶の中にインプットされていた。

康三は「先生か」と呟くとフンと笑った。

「お前が大学を出て社会人になったら、先生でも、誰とでも好きな相手と結婚すればいい」

「それじゃ遅すぎるんだ。今すぐ結婚したいんだ。……だから保護者の許可がいるんだ」

畳み掛けるような将の言葉は、最後のほうは少し弱弱しくなった。

康三はその弱弱しくなったところにつけこむように

「どうしてだ」

と目で将を圧倒した。

将は思わず視線を、手をつけないで透き通ったままの自分の紅茶に落とすと、躊躇する自分を叱咤しながら言葉を絞り出した。

「子供が……出来たんだ」

言ってしまって再び目をあげた将は、康三の顔がひきつるのを見た。

それを見た将は何故か、勇気を得た気がした。というよりふっきれ

たのかもしれない。

『だから、早く結婚したいんだ』と言おうとした将より一足早く、康三の声が先に出た。

「先生に……か？」

将は再び背筋が凍るように硬直するのを感じた。

明らかに咎める口調……将はもとより、聡のふしだらへの咎を暗示している……に将は必死で反論する。

「アキラは悪くない！俺がいけないんだ」

いけないという言葉を口走った後で、将は一瞬後悔する。聡のお腹の子供がまるで罪のようではないか。

「いや……、俺はアキラが大事なんだ。アキラより大事な人なんて今後絶対に出ない。ヒージーだって認めてた。だから頼む」

将はこうべを垂れた。

康三は自分に頭をさげる将をしばらく見つめていた。

聡に惹かれている将のことは、知っている。

将が月に一度しかいかなかった学校に毎日登校するようになったのも、模擬テストで中ぐらいの成績をとるようになったのも、すべて聡のためなのだ。

去年、なじみのレストランで将と一緒にいた、すらりとしながら柔らかい印象の女性を思い出す。

そういえば、彼女は将のマンションにも来ていたことがあった。

思えば担任教師にしては、将に近すぎた。

将の一途なアタックを受けて情にほだされたのだろうか……。

康三は、やがて静かに口を開いた。

「お前の気持ちはわかった。だが、子供や結婚は早すぎる。今回は諦めなさい」

将は顔をあげた。諦めるというのは、堕ろすということ。すなわち子供を殺すということだ。

「オヤジ！」

将は叫ぶと、ソファから降りた。

柔らかい毛足の絨毯の上に、跪くと這いつくばった。

「頼む。アキラと今すぐ結婚させてくれ。このとおりだ」

せっかく授かった二人の子供を、殺すことはできない。

「俺、アキラを一生守りたいんだ。大学を出て結婚していいなら、今したって同じだろ」

康三は土下座をした将をソファの上から見下ろしていたが、静かに立ち上がると将の横をすりぬけて窓辺に立った。

いつのまにかモーツァルトのＣＤが終わったらしい。

外の雨脚が強くなったのが、将にもかすかに感じ取れた。

康三は窓の外に顔を向けたまま、言った。

「……一生守りたいといったな。お前、今結婚したとして、彼女をどうやって養うんだ」

思いがけない質問に、将は膝をついたまま顔をあげた。

「それは……。芸能活動とか」

「お前はまだ１０代で、アイドルに近い。結婚して子供が出来たなどと知ったら、ファンはすぐに離れるだろう」

将は、そんなことはない、ととっさに言い返そうとして詰まった。

将の中に残る冷静な部分が『それは当たっている』と引き止めたのだ。

将はふたたび、頭を垂れる。

「そうかもしれないけど……。じゃあ芸能活動じゃなくてもいい。とにかく何をやってでも聡と子供を守りたいんだ」

「アキラの体を傷つけたくないんだ。何でもするから……頼む。結

婚を許可してくれ」

康三は、ふいに止めていた煙草を吸いたくなった。

将の実母である環がガンであるとわかってから、康三は煙草を吸わなくなった。

政治家の家に生まれた康三は……三男ではあるものの、それなりの令嬢をもらって閨閥を作ることを期待されていた。

だが。外交官の同僚である環に激しく恋をしてしまった。

表立った反対こそされなかったが、あまり歓迎されない結婚だったのはよくわかっていた。

その頃から長老だった巌が、一族に呼びかけて、ようやく形だけは祝福を受けた……その頃の、自分を思い出していた。

あの頃、祝福されない恋、だけどかけがえのない恋、というジレンマに悩んだ康三はよく煙草を吸ったものだ……。

「何でもする、と言ったな」

長い沈黙の後に、康三は低い声を出した。

その声に顔をあげた将は、康三が顔をこちらに向けていることに気

付いた。

「何でもする、と確かに言ったな」

康三は繰り返した。

その低い声は……将が今まで聞いた父の声の中で、一番恐れるべきものだ、と将は本能で身構えた。

しかし、将は頷くだけしかできなかった。

「私の跡を継ぎなさい」

言葉ははっきりと聞こえたが、将には意味がよくわからなかった。

「私の跡を継いで、政治家になると約束しろ」

今度は意味はわかったものの……なんでそんなことを言い出すのか、意図がわからないで将は狼狽した。

だけど、とりあえず返事をしておかなくてはならない。

「なるよ。約束する」

「そして」

康三はさらに続けた。

「鷹枝家の長男は、厳じいさんから私の兄の周一まで、全員現役で東大に入っている。

だから……将、お前も鷹枝家を継ぐ長男なら、現役で東大に入れ。
それが出来たら結婚を認めてやろう」

３０２◆無理難題２

ここ３日、聡は目覚めとともにお腹に手をやるのが習慣になっている。

お腹は、何の感触も動きもなく平らのままだ。

今日は、学校が休みの土曜日。

毎週、好きなだけ眠る習慣の聡が目覚めたのはもう１２時近くだった。いつもは９時過ぎには目覚めるのに。

妊ごもったことがわかってから……聡はやたらに眠くなった。いつも眠い。

そして起きるときに布団から感じる引力は１０倍になった。

連休があった今週は出勤は３日だけだったが、それでもつらかった。

今も……目は覚めたけれど、体を起こしたくない。

ベッドの中でけだるい体を横たえていた聡は、通過する車のタイヤがたてる湿った音で、ようやく雨が降っていることに気付いた。

重い体を起こすと青いカーテンをあけてみる。目を凝らすと景色の黒っぽい部分に斜めの細い縞が見えた。

「雨かあ……」

それだけを確かめた聡はもう一度ベッドに横たわる。

あいかわらず食欲はない。お腹はすくし、食べなくてはという義務感もある。だが……食べると吐いてしまうのだ。

こうして一人でいると、たまらなく心細くなる。

金曜日の昨日、ここで将は明け方まで、まるで卵を抱える雌鳥のように聡をずっと抱きしめていた。

明け方には約束どおり、タクシーを呼んで自分のマンションに帰り、学校にやってきた。

ずっといたわるような将の視線に支えられて、聡はどうにか授業をこなすことができたようなものだ。

聡は再びお腹に手のひらを添わせた。

超音波には確かに映っていたけれど、この平らなお腹に子供がいるなんて……。

信じられないけれど、体はあきらかに変わっていくようだった。

絶え間ない眠気。食事のたびに襲う吐き気。喉の渇き。トイレも近くなった。

気持ちの準備ときたら、まるで出来ていないのに……。

聡は、おなかをなぜながら

「なんで、出来たの」

と皮膚の下にいる胎児に恨み言を吐いてみる。

一一二人が……いずれ結ばれて家庭を持つにしても、お前は、まだ早すぎる。

聡にはそうとしか思えない。

大学1年のとき。国語教師の子を身ごもった美佐が言っていたことを思い出す。

『女って変わるんよ。妊娠する前は、出来たら堕ろさないと、とか思うやん。

だけど、いざ出来たらね。絶対にこの子を産みたい！って思うんだから』

だけど、今の聡にはとてもじゃないけど思えなかった。

愛する将の子供だから、状況が許せば産みたい。

だけど、今のこの状況じゃ無理なのはわかりきっている。

木曜日の夕方、将は『絶対に大丈夫。オヤジを説得するから』と聡を抱きしめた。

一一でも。

常識的な大人だったら、絶対に許すはずがない。

張本人の聡だって、非常識だと思うのだから。

ふいに、胃が空腹を訴えた。

気分としては何も食べなくないけれど、疼痛のような空腹に聡はのろのろと起き上がると、冷蔵庫をあけた。

あいにく、冷凍しておいたパンぐらいしかなかったので、聡は仕方なくそれをトースターで焼いてみる。

……だが、こんがりとキツネ色に焼けたパンの香ばしい香りは、案の定、痙攣のような吐き気となって聡を襲った。

「うっ……、うぐっ……」

聡は洗面所に駆け込んで、吐き気と格闘した。

食べていないのだから何も出るはずはない。吐瀉物のかわりに涙がぽろぽろとこぼれてくる。

自分が、自分の体はいったいどうなってしまうのか。

一一将。こわい。

痙攣のような吐き気がようやく治まっても、うずくまった聡はパジャマの膝を涙で濡らしながら、将を待つしかなかった。

「現役で東大に入れ。それが出来たら結婚を認めてやろう」

康三はさらに続けた。

「……担任の先生を卒業の前に孕ませたなど、鷹枝家の跡取としては言語道断、世間の格好の物笑いとスキャンダルの種だ。

本来だったら絶対に許可などできない。……だが、お前がそこまで言うのなら、物笑いを跳ね返すだけの実力を身につけなさい。

その第一歩が東大に現役で合格することだ。……どうだ、できるか」

康三はもちろん、将がそんなことを承知するはずがないと高をくくっていた。

いっときはS社の模試で偏差値60程度まであげた将の成績は、芸能活動が祟って、かろうじて全国平均あたりにひっかかる程度に下がっている。

同社の模試で偏差値８１をマークする東大に合格するなど、まずもって無理だ。

おまけにセンター試験まで３ヶ月と少し。受験勉強に取り掛かるにしても時間的にも足りなさ過ぎる。

康三は、頤を心持あげて跪く将を見下ろしていた。

その将は……一呼吸置くと、立ち上がった。

そして目をあげた。その視線の位置ははすでに康三より高い位置にあった。

「わかった」

将はしっかりとした口調で答えた。

将の即答に、逆に康三のほうがうろたえるようだった。

康三はこちらを見ている将の顔を探ろうとして……自分の息子がそんな顔をするようになったのを初めて知った。

将は……澄みきった瞳に、まっすぐな決意を浮かべていた。

「わかった、というのはどういう意味だ」

将の表情から真意を汲み取れなかった康三は、あらためて訊くしかない。

今までの息子の所業から考えると『鷹枝家など捨てて、聡と出て行

く』という言葉が最もありがちなように思える。

だが、自分に注がれるまっすぐな視線は、そういう言動にあまりにふさわしくなかったのだ。

「東大に入るよ。だから結婚を認めてくれ」

将はあっさりと言った。

康三は絶句しかけた。ちなみに三男だった康三は東大出ではない。

孝太が行っている小学校と同系列であるK大の出だ。

『東大がどういうところか知っているんだろうな』と反射的に喉まで出かかった言葉を、舌の上で別の言葉に言い換える。

「お前……本気か？」

そう問いかけながら、本気のはずがないとすでに康三は判断していた。

しかし将は、うなづきながら

「本気だよ。絶対に東大に現役で合格してやる」

とはっきりと宣言さえしようとする。

康三は、ばかな、と小さく嘲笑うと、デスクに置いた資料をめくり始めた。

つまり、戯言扱いしようとしたのだ。

「お前の今の状況じゃ、逆立ちしたって無理だ」

「無理かどうかなんて、やってみないとわからないだろ」

将は康三が立っているデスクのほうに一歩詰め寄った。

「いっとくが、将」

康三は顔をあげて、将の顔を見据えた。

「とりあえず目指したからと、許可させておいて、あとで撤回できない状況にするというのはないぞ」

つまり、『東大に行く』と言葉のうわっつらだけでの結婚許可はない、と康三は断言したのだ。

将はふっと笑うと、

「そんなつもりなんか、さらさらねえから安心しろよ」

といつもの語調で答えた。

笑顔さえ浮かべている息子が康三はわからなくて、康三の舌は丸まった。

「今日からせいいっぱい頑張るよ。合格したらすぐに結婚していいんだろ」

こんどは逆に将が首を少し傾けるようにして康三を見下ろした。

康三は、う、と言葉をつまらせたが、

「先生の出産予定はいつだ」

となんとか体面を保つことができた。

「5月半ば。東大に合格すれば、3月に結婚できるんだろ」

将は笑顔ながらも、視線でじわじわと康三に詰め寄った。

康三はさっき確かに……一瞬将のひたむきな聡への思いにかすかに同情した。

だが、こんなことを本当は許したくはない。

だから絶対に出来ない無理難題を与えたはずなのに、将はやる、と胸を張っている。

その自信たっぷりな息子の表情を見ていると、なんだか本当に難題をクリアしそうな気さえする。

だが、一度口にしてしまったことは、撤回できない。

鷹枝家に育った人間は、そういう口約束をもっとも軽蔑するのだ。

――なに。口だけさ。絶対にできるはずがない。

康三は開き直ることにした。

それに万が一、合格しても……スキャンダルは困るが、将自身の将来のために最高学府の学歴は何かと役に立つ。

そう親心に言い聞かせて康三は

「いいだろう」

と約束をした。しかし目を輝かせた将に、釘を打つように

「ただし、だ」

と条件を付け加える。

「先生のお腹の子供が、お前の子供であることは、合格するまでは絶対に秘密にしろ」

とたんに将の眉根がゆがむ。

「でも……お腹、どんどん大きく……」

「それは、私がなんとか手を打つ」

「オヤジ」

将は何かに思い当たって、まなこを見開いた。

「まさか、毛利に頼んで、アキラに危害をくわえないだろうな。そんなことをしたら……」

オヤジを殺す、と叫ぼうとする将を康三の言葉が遮った。

「そんなことは絶対にしない」

語気が強いあまり、吼えるようなその迫力に将は黙った。

その瞳も将を突き刺すかのようだった。

康三自身も少し過ぎたか、と俯くと

「……仮にもお前の親だ。お前の信頼を失うようなことを、これ以上したくない。……信じろ。

お前も結婚したい、というなら、まず家族を信頼することを覚えろ」

努めて柔らかい声で続けた。そしておもむろに顔をあげた。

「……そうだ。もう1つ。お前はここに……この家に帰ってきなさい」

デスクの上に置かれた康三の手のあたりを見ていた将は、新たなる課題に顔をあげた。

３０３◆無理難題３

９月の雨は、やむこともなく、かといって雨脚を強めることもなく、土曜の昼下がりを憂鬱なものにした。

高級住宅街にある自宅を出た将は、巌が眠る菩提寺を訪れていた。

濡れて艶めいた墓碑。この下に、巌の骨の大部分が納められている。

まだ巌が亡くなって４９日にもならない墓には、誰かしらが白菊を供えている。それも雨に濡れそぼっていた。

「ヒージー」

ビニール傘を差した将はその前にしゃがむと、呼びかけた。

この下に、巌の魂があるわけではない、というのはわかっている。

だけど将は、今日、巌にどうしても話をしたくて、ここにやってきてしまった。

墓というのは……死んだ人のためのものではなく、生きて残された者の拠り所なのだ。今日の将は、それがとても理解できる。

――俺さ。ヒージーと同じ大学に行くことになっちゃったよ。

将は心の中で語りかけてみる。それに対して

――そうか。そりゃ災難じゃのう。せいぜい勉強することだ。

ふぉっふぉっと笑う声が将の心には聞こえた。

――俺、わかってんだぜ。これヒージーの差し金だろう。

将は墓碑の中に浮かんだ巌のイメージを軽く睨んだ。

――なんでそんなことを思うんだ?

巌は、愉快そうに笑った。

なんでかな、と将は傘を差したまま頬杖をつきながら、濡れそぼった白菊と巌のまっ白な眉毛に共通点を探そうとした。

聡が将の子供を身ごもったこと。聡と結婚するために東大を現役で目指さなくてはならなくなったこと。そして実家に帰ること……。

東大に入るのはゆくゆくは政治家としての鷹枝家を継ぐだめだし、実家に帰れば純代とうまくやっていかねばならない。

聡の妊娠は別として、すべて巌が将にのぞんだことばかりではないのか。

――ヒージー。もしかして、聡のお腹の子は……。

巌の生まれ変わりなのではないのか。

将は甘い露のように菊の花びらに丸く浮かぶ雨粒を見つめながら、かねてからの『疑い』を心の表面に浮かべる。

輪廻転生など馬鹿げている。１８歳にして、人の生き死にに、生で接したことがある将は、そんなことを信じなかった。

人は死んだら……見事なまでに動かないし、いなくなる。

それを将は生母をはじめ、祖父、手に掛けたヤクザ、そして今また巌に見てきたから。

だけど……このタイミング。

将は、聡のお腹に子供がいる、とわかったときから、あれは巌の魂がスイッチされたのだ、という考えを消すことができなかったのだ。

実家に帰るという条件をしぶしぶ飲んだ将に、康三はさらにもう一度確認してきた。

「いいか。お前の結婚は、東大に現役で入らないと認められないんだぞ。わかっているな」

「わかってるよ」

将は再度顔をあげて、父親の目をはっきりと見据えた。

しかし康三は、そんな将に挑むように問い掛けてきた。

「じゃあ、将。もし、東大に落ちたらどうするんだ」

「落ちないから安心しろよ」

軽く微笑みさえ浮かべている将に、康三はいらついた。

偏差値８１。しかも他の大学の入試のように、記憶力がメインの試験が行われるわけではない。

記憶させた莫大な知識をもとに、短時間で自分の考えを再構築して述べさせるような試験が行われる東大入試。

康三も辟易のあまり避けたその入試を、この息子は舐めているのではないか。

「お前、先生の子供を堕ろす気はないんだな」

「なんでそんなことをする必要があるんだよ」

将は瞬きをした瞼と一緒に黒目をあげて、康三を睨んだ。

「ということは、先生に子供を産ませるんだな」

「そうだよ」

何度同じことを確認させるんだ、と将の眉根が代弁するようにゆがむ。

「もしお前が、受験に失敗したらどうするんだ。結婚もできないし、先生を未婚の母にするのか」

将は、そのとき、鼻から息をもらすように笑うと

「だから。絶対に失敗なんかしねえってば」

と強く言い放った。どんなに康三に、

「そうはいうが、万が一。万が一落ちた場合、どうするんだ」

問い詰められても、

「万に1つもねえよ。俺は絶対に聡と結婚するに決まってるんだ」

とあくまでも『もしもの受験失敗』について語らなかった。意地になっていたといってもいい。

――だってさ。ヒージー、いつか『言霊』って言ってたじゃん。

言葉は、口にすると魂を持ち、それを実現させる力を持つ。巌が将に教えたことの1つだ。

将は雨粒を蜜のようにはじいている白い菊の花に、8歳の頃を思い出していた。

あの頃、将はハーモニカが苦手だった。

いつも、吐くところと吸うところを間違えて、変な曲になってしまう。

ピアノは思うとおりに弾けるのに、この小さな金属の箱は将の思うとおりにならなく、将を苛立たせた。

明日は音楽のテストというそのときも、将は縁側で嫌々ながらハーモニカを練習していた。

しかし、自分が思うような曲を吹けず、2～3回くらいで吹くのをやめてしまった。

ランニングに地下足袋姿で庭木をいじっていた巌は、珍妙な音楽がやんだのに気づいて、縁側の将に目をやった。

『どうした。練習はしないのか』

『だって、どうせできないもん』

将は拗ねて、縁側からはみ出た足をぶらぶらさせた。

巌は、剪定バサミで枝を切るのをやめると、縁側に向かって歩いてきた。

『お前は、ピアノは上手じゃないか』

『ハーモニカは別だよ』

と将は唇を尖らせた。だからよけいにムカつくのだ。

『どれ、貸してみろ』

そういうと巌は、将の膝の上にあったハーモニカを奪った。

巌がためらわずに将のハーモニカに口をつけた一瞬将は、汚い、と思ったがもう遅かった。

だが次の瞬間、巌の唇があたったハーモニカから流れてきたのは、将が好きなアニメのエンディングだった。

『ドラえもんのおわりの歌だ！』

将は、自分のハーモニカに巌の口が触れた不潔感を忘れて歓声をあげた。

『そうじゃ』

巌は得意そうに将に微笑んだ。

『いつ練習したの？楽譜は？』

『そんなものはない。聞いたままに吹いたんじゃ』

『すっげー』

将は手渡されたハーモニカを思わずのぞきこむ。だけど自分が吹いていたときとなんらかわらない。

巌は将に、何、コツを覚えれば簡単じゃ、とリズムにあわせてフッ

フフッフフー、と唄いながら尖らせた唇で息を吸ったり吐いたりした。

それを一緒に繰り返し真似る将に巌は

『将よ。物事は、出来ない、と声に出したら、そのとおり出来なくなるものじゃ』

と語りかけた。

『それをコトダマという』

『コトダマ？』

『そう。言霊じゃ。古来より言葉は声に出すと魂を持つとされていてな。

出来ない、と言ってしまうと、その言霊に引っ張られて本当に出来なくなってしまうんじゃ』

『ふーん』

将は金属で出来たウエハースのようなハーモニカを見つめた。

ウエハースなら好きだが、この物体は将の思うような音を出さない、にっくき存在だ。

それがさっきは、まるで巌に懐いたように、将の好きな唄を奏でてみせた。

『だから、自信がないときほど、出来る。と言葉に出すんじゃ。さすれば今度は言霊が出来る方に導いてくれるのじゃよ』

半信半疑の将に

『ためしに将、お前は大好きなドラえもんの歌を、ハーモニカで吹ける。そう自分に宣言してみろ』

と巌は白髪交じりの睫をしばたいた。うなづいた将は

『僕はドラえもんが吹ける』

と宣言すると、ハーモニカをおごそかに手に取った。

言霊のパワーがハーモニカに満ちますように、と祈るように。

そして、巌におそわったとおりのリズムで息を吹き込んだ……。

♪青い空は……のメロディが口笛ではなくハーモニカの音で縁側に響き、将は『言霊』の霊験に顔を輝かせた……。

将とて、失敗したらどうするか、を考えなかったわけではない。

いや、油断をすると、聡を連れて逃げてしまったほうが楽だ、という結論に傾きそうになる。

そんな将を踏みとどまらせていたのが、巌が将に託した刀と遺言だった。

聡を連れて駆け落ちしてしまえば、巌の遺言は果たせなくなる。

1年前の将なら、そんなことを気にせずに逃げていただろう。

だが、今の将は違う。

仮に、聡のお腹の子が、巌の生まれ変わりなら。

巌の遺言を……努力もせずに放棄するのは決して許さないだろう。

はっきりそう思ったわけではないが、心の深いところが将を引きとめた。

――東大に行けというのなら、努力しよう。

――巌から続く長男の伝統なら踏襲してやる。

それをきっと成し遂げることが、巌とそして聡、そして生まれてくる子への愛の証になると考えた将は、絶対にそれを成功させるというゲンをかついで、

『もしも失敗したら』

ということを意地でも口に出さないことを誓っていた。

口に出さないどころか、頭の中から一切のイメージを抹消した。

将は自分の脳に、受験成功と聡との結婚だけをイメージするように……そしてそれに続く階段を具体的に築きあげていくことだけに思考を働かせるように厳しく命じた。

――俺さ、頑張るよ。だからめいっぱい応援してくれよ。ヒージー。

将は立ち上がると、白い空を雨粒のついたビニール傘ごしに一瞬あおいだ。

巌の魂が……仮にあるとしたら。あの空と、この墓の下とどこにいるんだろう。

そんなことを考えながら、将は濡れた石畳を歩く。ここの境内にも大きな桜の木があった。

桜は若干その緑をくすませた葉をいっぱいに茂らせている。

――森村先生のところか。

将は笑みを浮かべると、自分も聡に早く逢いたいと急ぐ。

304◆不安

「東大に、現役で」

聡は目を丸く見開いた。その白い喉に固唾が落ちていくのが将にも見えた。

昼食を実家で食べて、そのあと巌の墓に寄ってきた将が、聡の部屋を訪れることができたのは、午後も遅い時間だった。

雨はあいかわらず降り続いている。

「うん。とにかく東大に現役で入れば、結婚していいってさ」

将は聡の体を気遣って、自らキッチンに立つと、ハーブティを淹れている。

ティーバッグをガラスのポットに落とすがごとく、何でもないことだ、という風を漂わせてそれを繰り返した。

が、聡は絶句してしまった。

レモンの甘い香りが漂うお茶を将はマグカップに注いでローテーブルに運ぶと

「で、とりあえず、赤本買ってきた。2回もチャンスがあるんだな、東大って……それとコレ」

と紙袋を破いて分厚い本の朱色の表紙と一緒に出した『ママとパパ

の、はじめての赤ちゃんブック』と書かれた本を聡に嬉しそうに顔の前にかざした。

しかし、かざした本に、いっこうに聡からの手が伸びてこなくて、将は本の陰から顔をおそるおそる出すと聡のようすをうかがう。

将にむけられた聡の瞳はこれ以上ないほど悲壮感が漂っていた。

「無理よ……。今から東大なんて。そんな」

「だーいじょうぶだよ。俺がめちゃくちゃ頭いいの知ってるだろ」

本をテーブルに置きながら胸を張った将に、聡は俯いた頭を横に振った。

「あ、ひどい。ひどいなあ、担任なのに、否定した」

将はハーブティの入ったマグカップを手に取ると湯気の向こうでおどけて笑う。

だけど聡は、そんな将を見ようともせずに、その顔が見えないほど俯ききってしまっていた。

将はマグカップをテーブルの上に置くと、聡の傍らに寄り添った。

「……アキラ？」

「……」

聡に返事はない。

「アーキラ。大丈夫だから」

将は聡の肩に手をまわすと、顔をのぞきこんだ。

聡は泣いてはいなかった。ただ無表情に近いその顔には……絶望の文字だけがあった。

「アキラ、心配するなよ。俺、数学も国語も本当は得意なんだぜ。歴史もヒージーじこみだし。ちょっと覚え直せばバッチリ。まあ、英語はちょっと……アレだけど。そこはアキラ教えて？……ね？」

「だめよ……」

ほとんど吐息だけのようなその言葉は、雨音に混じって将にはよく聴き取れなかった。

「やっぱりだめなのよ」

やっと聞こえたのは低い声だった。

「アキラ？」

「許されるはずがない」

「いや、だから」

東大に入れば、と続けようとした将は、言葉を飲み込んだ。下を向

いていた聡が急に将を振り返ったから。

「ダメなのよ。教え子の子供を妊娠する担任なんて。常識じゃ考えられない！」

苦しげに聡は叫んだあと、再び吐息のような声に戻る。

「……あたしだって、そんな女、非常識だって思うもの。お父様は……できないことをわざわざ押し付けて……本当は反対してるのよ。わかるわ」

「アキラ」

「9歳も年上の担任教師と結婚なんて、ありえないし。お父様がかわいそう」

聡は、将を見ていなかった。ただ辛そうに……その辛さは自分のことより、将の父の立場を慮っているようにさえ見えるほどだった。

「アキラ。それは違う」

将は聡の両肩を掴んで、聡の視界に無理やり割り込もうと試みる。

「オヤジは俺たちのことは反対していない。本当だ」

「うそ」

聡は将のほうを見ようともしない。低い……冷静とも思えるような短い返事を返すのみだ。

「本当だよ。最初俺は、オヤジにアキラと結婚したい、ってだけ言ったんだ。

そしたら、大学を卒業したら先生とでも誰とでも好きな人と結婚すればいい、って」

聡は下を向くばかりだった。

「オヤジは、ただ早すぎるって言っただけで……。だけど、それも東大に入れば許すって」

聡の黒目は将を避けるように斜め下の床に注がれている。

「なあ。アキラ」

将は聡の肩を軽くゆすった。

だけど視線は微動だにしない。

「アキラ、俺頑張るからさ」

返事はない。聡の視線は床にべったりと貼りついたようだ。

「ね？」

「無理よ」

冷淡と思えるような口調だった。

「なんで」

聡は無理だ、という理由のかわりに

「あたし、自信ない」

と答えた。

「東大受けるのは俺だぜ？アキラは、お腹の子供のことだけ考えればいいから」

「それが」

聡の視線が将に戻った。

「自信がないの。あたし、子供なんか産めない……恐い！」

将にすがりつく瞳がみるみるうちに潤んでいく。そしてそれはついに溢れ出した。

「アキラ」

将は思わず聡を抱きしめた。聡も細い腕を将の体に巻きつけてくる。

「将、あたしダメなの。恐い、恐いの」

聡は将の胸で泣きじゃくった。

……こんなに弱弱しく、感情を剥き出しにした聡を……将は初めて見た。

感受性が豊かで泣き虫だけど、大人の女性として芯は強かったはずの聡。

そんな彼女が……思いがけない局面に対峙して、その恐怖のあまり泣いている。

「こんなの、早すぎる……」

「アキラ」

将はとまどいながらも、聡を受け止めた。

聡の体は、この2日のうちにまたいっそうか細くなった気がした。

思えば、昨日。

食べるたびに吐いてしまう、と書かれたメールを将は受け取っていた。

それからして、そもそもおかしかった。

ふだんの聡なら、将を心配させるようなことなど決してメールに書かない。

だけど、今の聡は、体を襲う異変が不安でたまらないのだ。

その不安に耐えられなかった聡は、思わずそれを素直に将に送信してしまったのだろう。

それほどまでに……聡は、今自分の体と人生を襲う不安に恐れおの

のいているのだ。

「アキラ……」

胸の中の聡はとても小さく見えた。

将はむせび泣く聡の背中を優しく叩きながら、どうしたら聡の不安を取り除けるか考える。

「アキラ。……ごめんな」

将は謝ってみた。聡の体におこった異変は将の責任だと思ったから。

だが聡は、肩を震わせながらも、首を横に振る。

「将が……わるいんじゃない」

そういうと、いっそう全身を激しく震わせた。

将は、聡の髪を撫でながら、自分の無力さに天井を仰いだ。

聡を幸せにしたいのに。

聡を守りたいのに。

将の子供を宿した不安に押しつぶされかけている聡。

――どうすればいい。

将は深く……ため息を吐いた。

ため息は、将の瞳にも涙を連れてきた。

それをこぼさないよう、将は瞼を閉じると、再び聡の肩とそれにかかる髪に自分の顔を深くうずめた。

甘い香り。すでに離れることのできない愛する人の……。

「ねえ、あきら」

やがて、将は聡の髪に優しく語りかけた。まるで子供に語りかけるような声音。

「子供……、あきらめる……？」

305◆不安

「子供……、あきらめる？」

将の声に聡の体がぴくっと動いて震えが止んだ。

将の手はあいかわらず聡の背中を撫でている。

「しょう……」

聡はおそるおそる目をあげた。

「ごめん、アキラ。……俺、アキラが今、どんなにつらいか考えてなかった」

顔をあげた聡は、そこに、いままで見たこともない将の顔があるのを見た。

聡をいたわり、心配するその顔は……苦しげで、哀しそうにさえ見えた。

将はまるでそんな顔を見られまいするように、聡を胸に押し付けるように抱き寄せた。

「でも、信じて。俺……アキラを愛しているんだ。だから子供が出来たのも、すごく嬉しかったんだ」

苦しいほどの抱擁に苦しそうな声。聡は将のぬくもりにすっぽりと包まれる。

「だから……どんなことでもしようと思ったんだ。乗り越えられると思ったんだ。……だけど」

将の声が少し震えている。聡は腕の中で気付いた。

「アキラが苦しいなら……つらいなら。俺もつらいから」

「将」

聡は将の腕を振りほどいた。やっぱり将は泣いていた。真っ赤になった目から涙が頬を伝っている。

聡はもう一度将の名前を呼ぶと、その濡れた頬を聡の両てのひらで包む。

「だから、残念だけど、子供は……」

泣きながら、なおもつらいことを口にしようとする将の唇に聡はそっと自分の唇を押し当てて制した。

いったん離れた聡の唇に、今度は将のほうが押し当てる。

涙で腫れぼったくて熱を帯びた唇。涙交じりの塩辛い味。

泣きながら、言葉の代わりに唇を交わす聡は、下腹が小さく脈打っているのを感じた。

だけど、将の本当の涙の理由を、聡は知らなかった。

将は、自分で自分を恥じていた……。

『子供……、あきらめる？』そう切り出したとき、将の心は、たしかに自分の抱えた重荷が軽くなる、と感じてしまっていたのだ。

聡とその子供への裏切り行為……。将は聡を抱きしめながら、自分を責め、そして聡に詫びていた。

いつしか、部屋は薄闇になり、静かなはずの雨音が二人を包んでいた。

将と抱き合いながら、聡は下腹の……かぼそい脈が途切れないのに気付いていた。

将の血を受け継いだ命が、とうとう脈を打ち始めたのだ。

「乗り越えられるかな……。あたし」

思考を経由しないで、ぽつりと言葉が出た。

さっきまで、子供を産むなんて考えられない。……いっそ堕ろしたほうがいい、と考えていたのに。

思わず出た、産むことに前向きな言葉を、聡はまるで後悔していな

いのだった。

――これが、美佐が言ってたことなんだろうか。

ぼんやり考える聡の至近距離にある将の瞳が聡へと動いた。白眼が薄闇の中で揺れる。

「……アキラ」

聡を呼ぶ将の声がかすれている。

「……将。愛してる」

脈絡もなく呟いた聡の思考は、次第にぼんやりから、明晰に将来を想像し始める。

子供を産む将来のことを。将はああ言っているが、東大に合格などするはずがない。

やはり、聡のことまで含めているのかは置いといて、将のこの時期の結婚を反対していることは明確だ。

それを押して、聡が子供を産めば……いったいどうなるんだろうか。

聡はお腹の中の子供にそれを問うように……自らの手を下腹に添わせた。

将の視線が、聡の手にいざなわれるように下腹に移動する。

いとおしい、とまではまだ思えないお腹の生命体。

だけど一生懸命に脈打っているこの小さな命を……殺すことはできない、と聡は感じた。

「アキラ、何考えてんの」

虚ろな聡の瞳を将がとうとう指摘した。

「おなか、どうかした？」

「なんでもない」

将の質問をかわして、聡は思考を進める。

子供を産んだ場合……そう考えて聡はハッとする。

将は芸能人だった。人気俳優の地位を確立しつつある将が、自分の学校の担任に子供を産ませる。

これがスキャンダルでなくて何だろうか。

さらに、芸能活動をしながら東大なんか目指せるはずがない。

聡は視線を将に戻すと、

「将……。東大目指すっていっても……、芸能活動はどうするの？」

と訊いてみる。

「やめる」

将はいとも簡単に、だが力強く答えた。

聡は気付いていないが、それは将の……罪滅ぼしだった。

一瞬でも、子供を殺し、聡の体を傷つける方法を、ちらりとでも望んだ自分への。

「明日、仕事だから、武藤さんに言う」

「そんなに簡単に……」

「大丈夫だよ。いざとなったら、ここだけは親に頼らせてもらう」

つまり康三の政治家としての力でゴリ押してでも聡のために勉強を優先する、というのだ。

「お父様は……」

「プロダクションとの話がこじれたら、相談しろって言ってくれたよ。アキラ……オヤジは、俺を俳優より政治家にしたいんだ。

東大のことは、アキラのことを認める代わりに政治家を目指せってことなんだ。べつにアキラのことを反対するために言ってるわけじゃないよ」

将は聡にゆっくりと説明した。

将が政治家を目指す。

聡の脳裏になぜか、テレビで見た曽祖父の厳の古い映像が蘇った。

外務大臣だった曽祖父の厳。総理だったという祖父、そして父は現官房長官。

そこに将が加わる。

卓越したＩＱに、正義感と行動力を併せ持つ将に、それは向いているだろうと聡も思う。

だけど……政治家というのは、票を取るために、より規範的な行動を求められる仕事でもある。

そんな立場になる将に……１８歳で担任を妊娠させたという過去は……やはり重い十字架となりえるのではないか。

――やっぱり産めない。

この子は闇に葬るしかないのだろうか。

――いいや。

すでに、何がなんでも子供を守りたい聡の本能は、思考をフル回転させて、次々と案を出して来る。

――将の子ではないことにすればいい。

――つまり、一人で産んで育てるってこと？

――できる？

――やるしかない。

それが将への愛の証しになるかもしれない。

そこへ冷徹な理性が割って入る。

――ダメ！本能の言いなりになっちゃ。産んだところで結婚できるかどうかわからないのよ。

――結婚できなくたって、将を愛していることは変わりないでしょう。

心の中に、さまざまな聡が生まれ、かまびすしいほどに議論をする。

その中に沈み込んだ聡の意識を、ユーモラスな鈍い音が連れ戻した。

「……ごめん。おれの腹」

考えてみればもう夕食を食べてもおかしくない時間だった。

微笑んだ将は、言葉を続けた。

「オヤジがさ、言ったんだ。……お前も家族を持つのなら、家族を信用しろって。

だから俺はオヤジが、俺が東大に受かったらアキラと結婚していいって言ってるのを信じようと思うんだ。だから……」

そこで将は腕を伸ばしてもう一度聡を抱き寄せた。

聡は脈打つ下腹ごと再び将のぬくもりに包まれた。

雨はあいかわらず降り続いている。そんな湿った黄昏に将の肌だけが温かい。

「アキラ。アキラは俺の家族だろう。俺を信じてくれないか」

一一家族。

将の肌以上に温かい言葉に、聡は思わず目をあげて将の顔を見つめた。

将も……それがわかっていたように細めた目を聡に向けていた。

「俺を信じて、二人で乗り越えないか」

温かい声だった。

「あのときみたいに。……乗り越えたあとには、きっとすごい幸せがあるって信じて」

あのときを思わせる雨音。

冷たい雨に打たれて真っ暗な道をあてどもなく、二人で寄り添って歩いた。

今、聡は……そして将も人生において同じ状態なのだ。

自分が確実に将の未来の汚点になる、という事実はいまだに聡を苦

しめていたが、

今は将の温かい愛情を生きるよすがにしたい……聡は再びにじみ出てきた涙を将のTシャツにこすりつけた。

だが将は……聡には自分を信じろといいながら、自分で自分が一番信じられなくて……彼もまた聡を受け止めながら、その実、彼女に縋っていた。

３０６◆責任というもの１

その電話は早くも火曜日の放課後にかかってきた。チーフマネージャーの武藤からだった。

「将、悪いんだけど、今から出て来れないかしら……」

武藤には珍しい、困りきった声だった……。

遡って日曜日。

バラエティ番組の収録のあと、将は、一切の芸能活動を辞めなくてはならなくなったことを武藤に告げた。武藤は驚き、絶句しつつも、

「明日、社長が出社したら話し合いましょう」

と努めて冷静に応対してくれた。

また仕事が終わってマンションに戻った将は、生活の拠点を実家に移すべく、すみやかに荷造りをした。

昨日の、一家揃っての昼食の時点で、さっそく今日から帰る事を宣言してある。

ぐずぐずすることで、父に約束を反古にする隙を与えたくなかった

のだ。

将が実家に戻ると聞いて、弟の孝太は目を輝かせた。

義母の純代は

「引越しの手伝いをしなくてもいいかしら？」

と親切に申し出てくれたが

「たいして荷物はありませんから」

と将は断った。

その言葉通り、将が実家に持っていくのは、教科書類とノートパソコン、当座の衣類とお気に入りのＣＤぐらいで、ボストンバックとリュックに収まった。

マンションを畳むわけじゃないので、家具類などはそのままそこに置いたままなのだ。

それでも、将はそこを出るとき、思わず振り返った。

２年あまりにわたって暮らした部屋だ。

ここで、井口やカイトたちと自堕落に過ごした１６歳の頃。

あのころ、毎晩のように慰めあった瑞樹もこの世にいない。

ここへひょっこりやってきた大悟。

覚醒剤に錯乱した大悟と格闘した床の傷。……大悟はいま、どうしているだろうか。

そして聡。

傷ついた将を看病してくれた……そしてコンポが星のように散らばる暗闇で抱き合ったベッド。

今、将は聡との未来のために、思い出深いここをいったん去る。

次の春にはここで、聡との新生活を始めることを夢見て――。

ダイヤモンド・ダストのほうは、どうやら父の康三が手をまわしたらしい。

月曜日、学校を休んで事務所に出頭した将だが、そこで橋本社長はただ、残念だ、と言っただけでしつこく引き止められることはなかった。

ただ、あまりに急な話なので、調整に1～2週間かかること、

かつ、その中にはどうしても出演しなくてはならないものも出てくるかもしれないが、それだけは頼む、と将は逆に頭を下げられた。

もちろん将は頷くしかない。

いまやＣＭ３本を抱えていた将が、急に自己都合で降りるということはおそらく莫大な違約金が発生するに違いなかったが、

それも父がどうにかすると約束したのかもしれない。

そんな非常識なことをしたにもかかわらず社長は、無事に受験が終わったら、将のペースでいいから復帰できないか、と申し出てくれた。

将を見つけ出したのはほかならぬ社長だし、現に今の将の勢いはすごい。

先日行われたある女性誌での『好きな男性タレント』のランキングでは、ベスト９に食いこんだ。

デビューしてまだ半年も経たず、主演作品も持たないうちにである。

実は現官房長官の息子ということが発覚してから、将の名前と顔は一気に世間に広まったのだ。

申し出に対して、将は『考えておきます』とだけ答えた。

今の将には、受験だけでせいいっぱいで、受験が終わったあとなど想像できなかったのだ。

「将、悪いんだけど、今から出て来れないかしら……」

そのとき、将は放課後も教室に残って、自習形式の補習に参加していた。

数学の難問に取り掛かっていた将は、突然の携帯に思わずムッとした。

ちなみに今日は、『どうしても出演しなくてはならない収録』があるとは伝えられていない。

将は焦っていた。

あれから赤本にひととおり目を通した将は、自分が乗り越えるべき壁は、一筋縄ではいかないものであることを早くも痛感していたのだ。

いまだに5教科5科目のセンター試験の受験が必要、かつ論述中心の4科目の2次試験。

時間がたりないことは明白だった。

後期試験も……2次の科目は少ないものの、将がトライする平成20年度から形式が大きく変わることが予告されていることを赤本で知った。

その予告されている問題も……今の将には問題の意味を知ることす

ら難しい難問だった。

だが将は……くじけたくなるのをぐっと堪えた。

――とにかくやろう。聡のために……。

日曜日の夜から、すべての時間を勉強に充てることに決めた。

まずは詰め込め、とばかりに睡眠を3時間まで削り、1日15時間は勉強することを自分に課す。

睡眠不足は頭の働きを鈍らせるだろうが、そんなことを気にしている場合ではないのだ。

学校の授業も自分のペースに比べると遅すぎる。

将は授業を無視して苦手の英語、ほとんどやっていない理科、世界史をがむしゃらにやった。

しかし、やればやるほど、自分がいかに遅れているかを痛感し、焦りに追い込まれていくようだった。

つまり東大を目指して本格的に勉強を始めて、まだ2日なのに、

将は自分に立ちはだかる壁の、てっぺんさえ見えないような高みに心理的に追い込まれつつあったのだ……。

だから、武藤の電話はとてつもなく迷惑だった。

「どうしてですか」

自分の非常識な休業宣言をすっかり忘れて将は冷淡な声を出す。

「元倉さんが、どうしても将と直接話をしたいっておっしゃって……」

将を1月からのドラマの準主役に抜擢した、一流脚本家だ。

北海道を舞台にしたドラマは、すでに夏を舞台にした2話まで撮りが終わっている。

いきなり準主役が降板、代役を立てることに、元倉は納得がいかないという。

将はため息をつくと、しぶしぶ了承し、テレビ局に向かうことにした。

局の小会議室では、元倉と監督、プロデューサー、ディレクター、さらに武藤、橋本社長が勢ぞろいしていた。

タクシーの中ですら世界史の教科書の小さな文字を追っていた将は、

いささか車酔い気味のこうべを小さく垂れて、会議室の輪に加わった。

「君の父上から話を聞いた。将くん」

まず監督がテーブルに頬杖をつくように、こちらへ身を乗り出すと、いきなり話を切り出した。

脳と頚椎をつないでいるあたりが、重苦しい。どうかすると嘔吐中枢を刺激しそうだ。

それを堪えて将は、神妙に頭を下げた。

「こちらの勝手な都合で申し訳ありません」

一同が目を見合わせる中で、鋭い声が飛んだ。

「納得できないね」

元倉の声だった。

「謝れば……金を払えば済むというもんじゃない」

車酔いの気分の悪さのせいか、憮然とした表情が思わず顔に出てしまうのを将は止められない。

「仕事というのは、いったん引き受けた以上、必ずやり遂げるという責任が発生する。それぐらいのこと、わかっていると思っていたよ」

元倉は怒りをストレートに将にぶつけてきた。

将が知る、年の割りに少年のようなユニークさと温かみを持つ表情はそこにはない。

こんな風に、赤の他人に責任感を問われたのは初めての将は、ひそかに動揺しつつも、まっすぐに元倉を見据えた。

しかし膝に置いた手の震えは止められない。

元倉は続ける。

「それを急に降りるというのは……どれだけのことか、君はわかっているのか。少なくとも作品はぶち壊しだ」

静かな口調の中に激しい怒りをくるんだものを、元倉は容赦なく将に投げつけてくる。

将の視線はそれに負けてだんだん下がりはじめた。

そこへディレクターが助け舟を出す。

「元倉さん。急に俳優さんが急病になった場合など、やむを得ず代役を立てるケースもありますでしょう。そのケースだと思っていただいて……」

「将くんは、現に生きて健康な状態でそこにいる。俳優の勝手な都合で急に役者を変えるなんて視聴者に対して誠意がなさすぎます」

と助け舟はにべもなく撃沈された。

さらにプロデューサーが新たなる手を提案する。

「こうなったら代役ではなくて、配役を変更してはいかがでしょうか。将くんの登場シーンだけ撮りなおしすれば……」

この局では、出演者が逮捕されたときに、それをやったことがあるのだ。

しかし、それも元倉ははねつけた。

「無理です。北海道の季節を撮りなおすことはできません」

すでに撮影ずみの2話は北海道の夏という設定だ。演技をする将の背景には、ふんだんに北海道の自然が映りこんでいる。

すでに紅葉が始まった北海道を夏に戻すことは不可能だ、と元倉は言っているのだ。

完全に俯いてしまった将は、揺れていた。

自分が担っていた責任の大きさへのおののきと。

なじられて素直に申し訳ない、という気分と。

もしかすると元倉は、自分を困らせるためにわざとゴネているのではという懐疑心と。

「とにかく、将くんと二人で話させてください」

元倉は一際響く声で一同に言い放った。

307◆責任というもの2

外はすっかり暮れたようだ。

元倉と二人っきりでいやに白い蛍光灯が照らす会議室に残された将を沈黙が追い詰める。

息をするのも苦しいような……緊張感に圧迫されて、すでに将は、対峙する元倉の顔をまともに見ることができない。

「急に芸能活動をやめて受験に専念するというからには、よほど何か事情があるのだろう」

元倉は静かな口調で切り出した。

そうだ。事情があるんだ。だからわかってほしい……将は下を向いたまま念じるしかない。

「だがな。僕は、そんな責任感のない行為を許すことができない。……君は、芸能界を辞めて、お父さんと同じ道を目指すつもりなのか」

つまり、政治家になるつもりか、と訊いてくる。

将の実家が、明治維新から続く政治家の家系だということを知っているのだろう。

「だがな。そもそも、たった1つの仕事をやり遂げられないようなヤツが、国の舵取りを出来るはずがない」

政治家になれるかどうかは知らない。でも今は、何にも優先して東大に入らなくてはならないのだ……。将は苦しい胸の中で言い訳をする。

「仕事に対して、見てくれる視聴者に対して誠意や責任感というものをもてない男が、受験に成功したところで何になる」

――元倉さんは、俺の事情を、何もわかっていないのだ。

将は息も絶え絶えの心でむなしく反駁する。

「誰もついてくるものか」

そういうと元倉は立ち上がった。部屋を出て行くのではない。

元倉は夜景を映す窓辺に立つと、煙草に火をつけた。

「君は、なぜ、この仕事を請けたのか」

元倉は、煙に眉をしかめながら将に問い掛けてきた。

聡のためだ。将は心の中で、即答した。

聡のために……、聡とのことを世間に認められるために、早く実力派俳優になりたかった。

答えははっきりとしているものの、それを声にすることはできない。

だから将は、この不本意な沈黙を続けなくてはならない。

「僕は」

黙っている将に、元倉は舞台にでも立っているような明瞭な調子で語りかけた。

「君にこの役を依頼したのは……君という人の人間性を重視したからだ」

テーブルの木目を追う将は視線の端に、元倉の痛いほどの視線を感じる。

眼鏡のレンズは、まるで日光を集めて紙を焦がすように、元倉の視線をより鋭く集めて将の横顔に照射するようだった。

「正直なところ演技はまだまだだ。だけど……君は、目覚めたばかりのような、芽吹きかけた木の芽のような勢いがあった。……いっとくが人気が、じゃない」

元倉は煙を吐き出しながら続ける。

「将。君は、ただ楽しいとか目立ちたいといった理由でこの世界に入ったわけじゃないだろう。君は何か一生をかけるものに出会っている。そんな目をしていた」

一生をかけるもの。元倉の声に呼ばれるように、テーブルの木目の中に聡の姿が浮かび上がった。

今日もつらそうだった聡。

『ごめんなさいね。ちょっと体調が悪いので座らせてもらいます』

そういいながら、座って授業を続けた聡の顔は青白く、他の生徒も異論を挟まなかった。

あいかわらずゼリーしか食べられないらしい。

土曜日に、将が実家から持っていった残りの栗ご飯も一口しか食べられなかった。

それでも、デザートに純代が手作りした、すだちのゼリーだけは『美味しい』と平らげることができたのだが……。

「君には好きな人がいるか」

唐突に、元倉は将に問い掛けてきた。

――その、好きな人のために、受験に成功しないといけないんだ。

将はあいかわらず心の内側で叫ぶ。

――だから、解放してくれ。

しかし、声にすることはできないから、

「どうしてですか」

と冷静を装って問い返す。

将が答える間、煙草を口にしていた元倉は、それをハッと吐き出すと

「君は、いつか、好きなひとさえ切り捨てるだろう」

と予言した。

聞き捨てならないその予言に将は、やっと元倉のほうを振り返った。

心臓が鈍く、重苦しく動き出している。

体中の血管に縛り上げられるようだ。

――聡を……切り捨てる。

――ありえない！

叫ぶ心の裏側で、理性は妊った聡を確かに重荷に感じていた土曜日の事実を突きつけてきて……将は自分の心の暗闇におののく。

「切り捨てる、とか、諦める……ということは、一度やると癖になるんだ」

将の心の動揺を気付かないのか……いや、気付いているのか、元倉は将の瞳を見つめると煙草を灰皿に揉み消した。

焦げ臭い煙は窓際に置かれた空気清浄機にあっという間に吸い込まれていく。

元倉は、マラソンランナーの話を始めた。

「マラソンランナーがいい例だ。一度棄権してしまうとそれが癖になったようにそのランナーはラストまで走り続けることができなくなってしまうんだ。どんなに立派な成績を残した選手でもね」

将は空気清浄機のあたりに目を遊ばせながら、元倉の話に心を集中させる。

自分の心の暗闇から目を逸らすべく。

聡と聡が腹に抱えた二人の運命を……一瞬でも重荷に思った事実を錯覚だったのだと思い込むべく。

「人生はよく、長いマラソンに例えられる」

そんなことは、将も小学校の頃から聞かされていたし、本の中でも何度となく読んだ、使い古された例えだ。

「人生というのは、人と人との関わりあいの中にある。そして人と人とが協力しあって1つのことを成し得ていくのが仕事だ。その積み重ねによって人は食っていくことができるんだ……」

ここまでで元倉が将に伝えたいことの要旨が、おおよそわかってしまい、将の視線は元倉の足元まで落ちてしまった。

それを見届けたのか、元倉はとどめを刺してくる。

「君は若くしてそれに関わるという貴重な経験をしたんだ。それを

若いうちに放り出すというのは、人生に棄権癖をつけることだ」

否、と反論したい心の表ですら、すでに力を失っている。

元倉の言葉は、将の決意の隙間に楔を刺すようにてきめんだった。

聡とその子供を守りたい。幸せにしたい。

だから父に言われたとおりに、とりあえず東大を目指す……そこに将自身がいないことに……元倉の正論は付け入ってくる。

そんなことで難関突破を成し遂げられるのか。

いや、そもそもその土台ですら揺らいでいる。

聡のことは愛している。一生でたった一人の女性であることはゆるぎない。彼女との結婚、そして温かい家庭を実現するためなら何でもする、というのは嘘ではない。

だが、あまりに早く、現実だけがやってきて……将も聡も、浮かんでいた夢が現実に背中に乗ってきた重さに喘いでいる。

あまつさえ、棄権する楽さを……土曜日に将は選択しかけてしまっている。

「それは……いつか、かけがえのない人ですら放り出すに違いない」

将は思わず、元倉を鋭い眼で睨み付けた。

元倉は将の視線を受けて、おや、という顔で笑った。

「放り出しません」

将は低い声でようやく反撃する。

「わかるもんか。仕事を放り出す人間に何の信用がある。いっとくが、今回のことで君の信用は各界でガタ落ちになるだろうな」

元倉の眼鏡の奥の瞳が、少しだけ意地悪く光った。

「君は、父上の跡を継ぐにしても、親の七光り以上のことは何もできないだろう」

たしかに国民的な人気を持つドラマの作者である元倉亮だが、そんなに力を持つのだろうか。

「言いふらすんですか……」

訊き返した将に、元倉は

「幼稚だね、君は」

といって笑い返した。

「言いふらしたりしなくても、そんなことはおのずと知れるものだ。人と人との関わりあいを放棄したことがある人間に、世間は冷たいものだよ」

言葉とは裏腹に元倉のまなざしは温かく、口調は誠実だった。

ゆえに、彼が汚い手段で陥れたいわけではないことを将は理解した。

案の定、元倉は窓際を離れて将のほうへ歩いてきた。

「僕はね。この仕事を君にやり遂げてほしいんだ。もちろん僕のこだわりであり、わがままであることは百も承知だ」

元倉は隣に座った。

今吸ったばかりの煙草の香ばしい匂いが近寄ってきたが将は目をあげることもできずに、テーブルの上に置かれた元倉の右手を見つめる。

その中指の第一関節は長年の脚本書きによるペンだこで変形していた。

たくさんの仕事をやり遂げてきた人の、歴史を刻んだ手に、将の心はざわめき出す。

「芸能界に残るかどうかは君が決めることだが、一度引き受けた仕事はやり遂げて欲しい」

こんな手を持つ人に、将が理屈でかなうはずがないのだ……そんな思いと同時に、将はその手に激しい憧れを感じた。

こんなふうに、仕事という歴史を積み重ねていく男になる最初のチャンスを将は自ら捨てようとしているのだ、ということは将にもわかる。

「……僕は、君の人間性に賭けていた。そんな君に、人生の棄権癖

を付けて欲しくないんだ。

いずれ父上の跡を継ぐにしても、何かをやり遂げる喜びを積み重ねて成長してほしいんだ。……頼む」

頼む。その言葉に将は目をあげた。とたん元倉の眼鏡の奥の瞳は、将の瞳を通して心まで染み透った。

それは、将の心の……聡への愛と同じ次元にあった何かを突き動かした。それは

『確かな何かを持つ揺るぎない人になりたい』

自分でも気付いていなかった強い願いだった。

もしもそんな人になれれば、自分と聡がどんな立場に置かれても、磐石でいられる。

吹けば飛ぶような自分の軽さを、今度直面した問題で思い知った将は……元倉の懇願をうけいれるより他なかった。

308◆秋空

北海道は、黄金色と真紅の秋が訪れていた。

群青色にさえ見えるほど澄んだ秋空の元、大雪山系の山々は白い冠雪に覆われ、白樺の幹を背景に楓の葉はいよいよ燃えるようだ。

やがて訪れる白一色の季節に抗うように、それは色鮮やかだった。

北海道の紅葉は、本州のモミジと違って子供の掌ほどある楓が中心で、背景とのコントラストも併せてどこか洋風だ。

だが、将はそんな北海道の季節感を感じる間もなく台本とくびっぴきだった。

……もう、同じ場面で5回NGを出してしまっている。

元倉亮作品の撮りは、通常のテレビドラマのように

『セリフを噛まずに口に出せればOK。あとは編集任せ』というような生易しいものではなかった。

役者の演技はもちろん、背景を舞う落ち葉までチェックをされる。

今回の5回のNGのうち3回は太陽が雲に隠れてしまった、という気象条件からだ。

今日は風が強く、千切れ雲がどんどん空を滑っていくようだ。そんな雲が気まぐれに太陽を隠してしまったのだ。

しかし残りの2回は将の演技が監督の満足いくものではなかったからで、

「カット！」

といわれて将は唇を噛んだ。

今日は、元倉も見に来ている。それでことさら厳しいのかもしれない。

ちなみにこのシーンが終われば、将はホテルでゆっくりすることになっている。

だから、一刻も早く終わらせて、勉強に取り掛かりたい……そんな焦りは、見事に裏目に出てしまっている。

結局、脚本家・元倉亮本人の説得で1月期からの連続ドラマ『あした雪の丘で』の出演だけは継続することになった将だが、あの説得の直後、元倉は3話以降の台本を大きく変更した。

それをみた将は仰天した。

将のセリフと登場場面が激増していたからだ。

かつ、ドラマにしては珍しく、カメラを複数使っての長回しが多くなっているらしい。

――イジメかよ。

将は一瞬、ニコニコしている元倉を睨んだ。

「ストーリーを大幅に変えたんだ。民宿の娘はゲスト出演だけの予定だったんだが、急遽レギュラー化して、君とからむことにした」

その民宿の娘役と将の演じる役がたびたびケンカをするために、出番が増えたのだ。

新人の将にとってはケンカのシーンがこれまた難しい。

相手との呼吸をあわせてて畳み込むようなセリフまわしが必要だからだ。

『あした雪の丘で』の撮影現場の、のんびりとしたムードに似合わない厳しさは2話までで身にしみていた将だが、ここまでセリフが長いと覚えるのが大変だ。

将はいままで、台本はざっくりと読んであらすじだけを覚えることにしていた。

あとは本番の雰囲気で自然にセリフが出てきていたのだ。それが出来るのは、ある意味才能があるといえるのかもしれないが、ここまで1場面とセリフが長いとさすがの将も、自信がない。

北海道ロケの待ち時間やホテルでの時間を受験勉強に充てようと思っていた将は、思い切りあてがはずれることになった。

睡眠も、初日に

「なんだ、そのクマは！」

と監督に怒鳴られたので、きっちり6時間は寝なくてはならない。

せめて、『睡眠学習効果』を期待しようと、英語の構文を音声になおしたものをイヤホンで聞きながらベッドに入ったが、

疲れからかすぐに寝入ってしまい、何も覚えておらず、将はがっかりしたのだった。

結局将が受験勉強にとりかかれるのは、夜の撮影がない日の2～3時間だけだった。

それでも寝る前に1回の聡へのメールは欠かさなかった。

今日の勉強の進行具合や仕事のことを書き、聡の体の調子について訊く。

どうしても文面が長くなってしまうので、持参したノートパソコンから打ちこむこともあった。

本当は電話で声が聞きたかったが、話が尽きなくなるのは目に見えていた。

聡との将来のために、時間が何より大事な将は、今の聡との触れ合

いをも削る必要があったのだ。

聡からの返信は、すぐに返ってはくるものの、あいかわらず短めで、省略した文章の中に思わしくない体調が隠れているようだった。

先日のように『食べるたびに吐いてしまう』とは書かれないが、

『今日は何を食べた?』という将の質問に対する返信は

『ちょこちょこ食べてるから心配しないで』。

心配な将だったが、翌日の撮影のためにこれ以上の突っ込みは控えなくてはならなかった。

携帯を閉じる前に現れる、待ち受けの聡の桃のような頬っぺたを撮影したころ、今の聡の青白さは想像もできないかったのに……。

将は聡とその子供の健康を祈るばかりだった。

6回目。なんとか噛まずにラストまで話せた将だが、NGだった。

「もう一度、いってみよう」

監督の声に、将は人目もはばからずため息をついた。

どこが悪いのか、まるきりわからない。今なんかとてもよくできた

気がしているのに。

将は元倉と話している監督のところへと大股で近寄ると

「どこがいけなかったんですか」

と叫ぶように訊いた。もはや口調を気にすることもできない。

監督はあくまでも穏やかだった。

「将くんさ。今、将くんなんだよね。峻じゃない」

役の峻になりきっているつもりだったので、ムッとする。

どうせ、俺は演技力ねーし、と心で毒づく。

「将、昨日の晩飯なんだったか覚えてる?」

そばにいた元倉が唐突に訊いた。

将は答えられなかった。

夕べは、この近くにある元倉主宰の演劇塾のログハウスで親睦会を兼ねての夕食だった。

早く腹を満たして、勉強をしたい一心の将はロクに味わっていなかったのだ。

「昨日はさ。鮭のチャンチャン焼きだったんだけど」

そういわれて、やっと思い出した。

ログハウスの庭で、焚き火を燃やしていた。

その上に鉄板をしつらえて、鮭の半身と味噌、野菜を載せて焼く。

焦げちゃう、といって将とあまり年が違わない塾生たちが楽しそうに騒いでいたっけ。

「峻も、今日のシーンの前日は、同じメニューを食べたという設定なんだ」

将にはわけがわからない。

セリフにもト書きにも、そんなことは書いていないし、それを食べたことに関連した演技が出てくるわけでもない。

キツネにつままれたように、まばたきを繰り返す将の前で、元倉は煙草を取り出した。

「峻はさ。大事なバイクを盗まれて、それでも東京に帰らずに、とりあえずここで暮らしてみることを選んだわけでしょ。

そんな彼が、初めて秋を迎えてさ。民宿や畑の手伝いでブーブー文句をいいながらも、彼は暮らしを楽しんでいる。

よそ者の彼は日々の暮らしで、初めて迎える秋の北海道を堪能しているんだ」

元倉は、台本に出ていない部分を説明しながら、煙草を吸い込んだ。

先日会議室で吸っていたのとは、まるで味が違うことが、他人から見てもわかる。

将は思わずあたりを見回した。

落ちる前の木々の葉が午後の光をうけて金色にキラキラと輝いている。

風はその温度だけでなく、スペアミントのようなスーッとした感触を残す。フィトンチッドだろうか。

元倉はさも旨そうに目を細めて煙を吐くと、将を見上げた。

「その能天気な嬉しさが、君には出ていない。空気感がまるで感じられない。君は……東京から受験を持ち込んで喘いでいる、将のままなんだ」

そういうと、元倉はいきなり将の手から台本を取り上げると命令した。

「あの木のところまで歩いて来い」

元倉が指差した先には……一本のポプラの木があった。

大地がうねっているような丘のつらなり。

遥かに続くその中に小さく見えるその木まで、片道だけで１０分は軽くかかりそうに小さく見えた。

「ここの空気を楽しめ。リフレッシュしてこい。仕事も受験も切り替えが大事だ。君の叔父さんはそれが巧かった」

将はハッとして元倉の目を見た。将が生まれる前に亡くなった叔父の周一とこの元倉は都立高校で同級生だったと康三に聞いている。

「俺と同じように遊んでいながら、東大に軽々と現役合格したんだ。切り替え上手ってのはヤツのことだ……それを見習え」

元倉は笑うと、監督に休憩時間をとるように申し出た。

畑の中の道を将はとぼとぼと歩いた。

おそらくトラクターしか通らないのであろう、未舗装の道はジャリというのには大きすぎる大小の石がゴロついていて、気をつけないと足をとられる。

足元ばかりを見ている将は、巨大な青い半球のような空に気付かない。

ふと、振り返る。

目指す木と撮影現場だとまだ撮影現場のほうが近いくらいだ。

うんざりした将は、誰もこっちを見ていないのを確認すると、牧草地に入り込んだ。

巨大な白いビニールで丸く囲った牧草の陰に座り込む。

撮影と勉強と聡の心配と。将は心底疲れていたのだ。

「はー」

座り込んだが最後、疲れが毛穴から一斉に吐き出されるようだ。

――こっそり煙草でも持ってくればよかった。

将は手持ち無沙汰な両腕を頭の上で組んだ。

こうすると疲れはあくびになって口を大きく開けさせた。あくびは将をとうとうその場に寝そべらせた。

パリにいた小さい頃に連れていかれた、オルセー美術館に、こんな感じの絵があったことを思い出す。

ゴッホだっただろうか。

青空の下、黄金色の草を積み上げた下で、夫婦が幸せそうに寝そべっている絵は、その美しい色合いが幼い将のお気に入りだった。

ひさしぶりに教科書にも台本にも支配されない脳の隙間からは、ぽっかりと聡が浮かんだ。

――アキラとここで寝そべったら幸せだろうな。

だが、一人で寝そべる将の目の前にあるのは、ただただ青い空だ。

聡は津軽海峡で隔てられた１０００キロの彼方にいる。

将は、目の前を滑っていくような千切れ雲の一群を眺めた。

雲は形を変えながら、どこからともやってきて、どこかへと流されていく。

それはなんとなく、自分たちを想起させた。

――俺たちどこにいくんだろうな。

これと同じことを、ホテルの部屋で思ったら、それは焦燥感に繋がったはずだ。

だけど、干草の香ばしい香りと太陽に包まれた今の将は、不思議に不安感は遠くにあるようだった……。

目を閉じた将は、しばらくしてカッと目を見開くと起き上がった。

これが元倉が言っていたことに違いなかった。

現実の不安が消えないまでも……確実に薄めてくれる、ここの空気。

ここで暮らす地元の人には感じ得ないこと。

持ち込んだ現実を忘れさせてしまうような……旅人、つまりヨソ者だけに与えられる能天気な空気。

将は立ち上がると、砂利道を撮影現場をめがけて走った。

かくして……7回目はあっさりとOKが出た。

それから、将の撮りはきわめてスムーズに進んだ。

将は、ここに来ている間は、無理な受験勉強をやめることにしたのだ。

太陽がある間は、できるだけ峻の生活に近い暮らしをするようにした。

そして陽が落ちてから数学の難問を毎日1問ずつ、それ以外の開いた時間は小林秀雄などをじっくりと読むようにした。

せっかく睡眠時間をたっぷり取っているのだから、脳をフル回転させるものに時間を費やすほうが効率がいいと気付いたのだ。

これが受験に不利になるのかどうかはわからない。

だけど、徒に焦れば、時間だけを食って何も結果を残せなくなる。

将はそれを体得したのだ。

撮影は天候にもおおむね恵まれ、秋の北海道ロケも最終日となった。

「将、明日から、存分に受験勉強をしろよ」

小さな打ち上げを終えて、早めに帰る将を、元倉や監督を始めとするスタッフは笑顔で送り出してくれた。

最終便で帰るべく、旭川空港へ向かうタクシーの中でいきなり携帯が鳴った。

忘れ物でもしたかな、と将はジーンズのポケットからそれを取り出すと開いた。

クラスメートの星野みな子からだった。

彼女とメールをやりとりすることはあっても、電話をかけてくることはない。

何事か、と思いつつも将は通話ボタンを押して「もしもし、みな子？」とこちらから声をかけてみた。

今日でとりあえず秋のロケが終りだという解放感が将に明るい声を出させた。

「鷹枝くん、ごめんね。突然……」

それに対してみな子はあきらかに掛けあぐねたあげく、という様子だった。

将は、タクシーの窓から暗い外を見た。あいにく新月に近い外は、

丘のうねりを黒く浮かび上がらせるのみだった。

外灯が少ないところを見るとまだ空港は遠いらしい。

「いいけど、いったいどうしたの？」

ゆっくり話す余裕があると見た将は、タクシーのシートに寄り掛かると、できるだけ優しい声で訊いた。

ちょうどいい、みな子の電話を切ったら聡にメールをしようと思った矢先。

「……アキラ先生が入院したの」

みな子の声はわずかに震えていた。

309◆偽りの父

聡が入院。将はシートから飛び上がらんばかりに驚いた。

まさか流産。

「それで、容態は！……子供は」

あわてて訊き返してしまった将は

「……って、鷹枝くん、アキラ先生の妊娠知ってたの？」

というみな子に問いにハッとした。

聡のお腹の子供の父親が将であることは誰にも秘密。

康三との約束をかろうじて思い出す。

『今度はことがことだ。芸能活動のときのようになしくずし、というのは絶対にないからな』

と康三は念を押したのだ。

「い、いや。具合が悪そうだから……まさかと思ったんだけど」

将は自らの直前のセリフを、まったくのあてずっぽうに仕立てるのに骨を折った。

プロの俳優らしくない棒読みになりそうになるのを、大げさに驚く

こととと

「ウソだろ？マジで妊娠？」

と言い訳がましく付け加えることで誤魔化す。

「婚約している人との間に赤ちゃんが出来たんだって。鷹枝くん、アキラ先生が婚約してるって、知ってた？」

――ああ。

将はタクシーの天井に向かって大きくため息をついた。

――そういうことにしたのか……。

聡らしくない策略だが、将はそれがお腹の子の父親が将であることを隠すためだということがすぐにわかった。

「いや……、あ、うん」

将は知っていたことにするべきか、知らなかったことにすべきか悩んだあげく、

「なんとなく、知ってたけど。外国にいってる人だとか言ってたかな」

と博史のことを頭に思い浮かべて、偽の婚約者に仕立てる。

「そう……知ってたんだ。アキラ先生、鷹枝くんに話してたんだ」

聡のお腹の子は、将の子ではない。

海外赴任中の婚約者の子供だということにすれば、将が疑われることもないし、

相手は海外赴任中だから周りに見えなくても不自然ではない。

「うん……」

将は自分のことを、みな子にどういう設定と説明するべきか悩みつつ、携帯をあてた頭ごと頷く。

「アキラ先生、婚約者がいるのに……鷹枝くんと付き合ってたんだ」

「あ、いや」

みな子の口調にショックと、かすかな怒りが見えて将はあせった。

「お、俺が、強引にアキラに迫ったんだ。婚約者がいるのに」

「でも……サイテー」

携帯を通してでも、みな子の聡に対する軽蔑が見えるようだ。

「いや、だからアキラは悪くないんだ」

将の弁解は、遠くのみな子にはまるっきり届かないようだ。

「鷹枝くんが可哀想」

「いや、違うんだ」

将はみな子にすべてを話してしまいたくなる衝動を抑えるのに苦労した。

「とにかくアキラは、俺があんまりしつこいから、ときどき付き合ってくれてただけなん……」

「鷹枝くん」

みな子は、将の弁解の途中で、凛とした声で割って入った。

思わず将は黙る。

「まだ、先生のことが好きなの？」

「好き……だけど」

みな子の質問に、考えもしないで……自然に答えが出てしまった。

本当は『もう諦めた』などと答えたほうが安全だとわかっているのに。

聡に対しての想いは……ウソをつけない。

しばらく、携帯を持ったままの将に、冷え込み始めた大地を走る車のエンジン音と振動だけが響いた。

「わかった」

みな子は静かにそれだけ言うと、電話を切った。

将は携帯を持った手を膝におろすと、再びため息をついて外を見た。

丘に沿って、何かの儀式が行われるように一列に並ぶポプラ並木。

その上に爪のような月が鋭く輝いていた。

ただ、聡の容態が心配だった。

みな子は、携帯をベッドに投げつけた。

携帯はベッドの上でバウンドすると、床の上に滑り落ちた。

携帯の代わりに自分の体をベッドに投げ出したみな子は、枕につっぷした。

――信じられない。

みな子は目を固くつむる。

その瞼の裏には、あのバレンタインデーの前日のようすがいやがおうにも蘇る。

あのとき、改札を通った聡は、頬を輝かせて将に駆け寄っていった。

嬉しそうに抱き合っていた二人。

それをまのあたりにして嫉妬に泣いたみな子だったが、狂おしいほどの感情が冷めてしまうと、そこには二人への憧れが残った。

年こそ離れているけれど、背が高くて大人っぽい将と、細身だけど桃のような可憐さを持つ聡はお似合いだった。

あんな風に、誰かと愛し合いたい。

そんな想いは、猫を見にいったときに聞いた

『本当に好きだから、今は離れてる』

という将の純粋な気持ちを耳にしてますます募った。

みんなに秘密だからこそ燃え上がる恋。そんな二人だからみな子は、身をひいたのだ。協力だってしたのだ……。

なのに。

みな子は爪を立てると枕を握り締めた。

こともあろうに聡は……将と婚約者の二股を掛けていたのだ……。

きちんとした婚約者がいながら……のうのうと、淑やかな教師の顔をして、年下の生徒と遊んでいたのだ。

そんな聡なのに、将はまだ懲りずに好きだという。

一一憎い。

みな子の心の中に真っ黒な憎悪が沁みこんでいく。

一一先生が憎い。

みな子は胸の中で激しく増殖していく憎悪をなすすべもなくもてあましながら、横たわっていた。

「アキラ先生」

看護士の山口は、いったん細く開けたドアから顔をのぞかせるようにおどけると、

次の瞬間には主任としての職務を遂行すべく、きびきびと入ってきた。

見知った顔に、聡は化粧気のない顔をほころばせると、起き上がった。

「あ、起きなくてもいいのに。……だいぶ顔色はよくなったようね」

「心配かけて、ごめんなさい」

昨日、ひどいつわりのため再び職員室で倒れた聡は、この病院に運び込まれたのだ。

「いいのよ。あたしたちはこれが仕事ですもん」

そういいながら山口は、デジタル体温計を聡にわたす。

山口が働いている総合病院の内科に聡は入院していた。本来は産婦人科に入院すべきなのだろうが、あいているベッドがなかったのだ。

幸い内科のほうは暇らしく、聡は４人部屋を一人で使っている。

「気分のほうはどう？」

「だいぶよくなったわ」

「でも、びっくりしたわ。アキラ先生に婚約者がいたなんて……しかも赤ちゃんができたなんて」

山口はいたずらっぽいまなざしを聡に送った。

聡は何も言えずに、さも渡された体温計を腋の下に挟むためを装うべく、俯いた。

「てっきり、あの鷹枝くんと付き合ってるのかと思い込んでたわ。……ま、よく考えてみれば、教師と教え子でそんなことはありえないんだけど」

山口のほうは、まるっきり悪気はないらしい。その証拠に次の点滴の準備によどみがない。

「でも、妊娠初期は用心しなくちゃ。彼氏は日本に帰って来れない

の？」

「忙しいから……」

ウソをつく聡の胃は、また焼けつくように痛む。

「そう。ご両親も萩じゃ来れないしねえ。……まあ、ここではのんびり気楽に過ごしてね。それが一番の薬なんだから。夕食はまたゼリーしか食べられなさそう？」

「ごめんなさい……」

「あたしに謝らないの。いちおうお粥と、スープも用意するから、食べるように努力してね。いつまでも点滴に頼れるわけじゃないんだから」

そういいながら、山口は聡を横たわらせると点滴の針を腕に刺した。

透明な管に、紅い血が少しだけ逆流するのが見えて……やがて点滴液が落ちるのと共にその紅さは見えなくなった。

「じゃ、帰りがけに寄るわ。今日は日勤だから」

山口は踵を返す歩調までもテキパキと去っていった。

聡は、しばらく点滴の液がぽとぽとと管へと落ちる様子を見つめていたが、やがて視線を天井にうつす。

おとつい。

聡は点滴をしていないほうの手で下腹をそっとなでた。

腹はわずかに脈打っているものの、あいかわらず平らなままだ。

だけど、ここにはもう3ヶ月にかかろうというお腹の赤ちゃんが育っている。

……この子の父親を、『海外赴任中の婚約者』にしようというたくらみを持って来た、冷たい目の男のことを聡は思い出していた。

その冷たい目は、どこかで見たことがあるような気がしたが、聡は思い出せなかった。

男は、おとついの夕方、勤めが終わって校門を出ようとする聡をベンツで待ち伏せていた。

『鷹枝康三の秘書の毛利といいます。少しだけお話をさせていただいてよろしいでしょうか』

仕立てのよいスーツを着て、あくまでも物腰も柔らかく、礼儀正しかった。

だが、拒否はあくまでも許さないという毅然さを、眼鏡の奥の瞳に光らせながら、毛利は聡を車内に招いた。

毛利は、聡を一流レストランの個室に連れて行った。

もう夕食が出てもおかしくない時間だったが、運ばれてきたのはハーブティだった。

『お体とお腹のお子様に触らないようなブレンドを特別オーダーいたしました。安心してお召し上がりください』

威圧感は揺るがさないまま、毛利に勧められて聡はそのお茶を口にした。

しかしそのお茶は、威圧的な雰囲気の中でもそれは素晴らしく旨く、聡は久しぶりに

『美味しい』

という言葉を口にした。毛利は油断した聡に切り込んできた。

『今日、あなたさまをお呼びだてしたのは、他でもありません……』

……お腹の子供の父が将であることは、鷹枝家の指示があるまで隠しとおすこと。

それは聡にも異存はなかった。

最初からそうするつもりだったから。

頷いた聡に、毛利はさらに

『そうはいっても、父親もなくしてお腹が大きくなるのは、世間が納得しないでしょう』

と身を乗り出してきた。その口調といい、むしろこちらのほうが本題に見えたほどだ。

『それで、です。……聡さんには、以前婚約者がいらっしゃったでしょう』

聡はどうして、将の父親の秘書が、聡の以前の婚約者を知っているのか、といぶかった。

だが、そんな謎を自らあかすはずもなく、毛利は続けた。

『お腹の子供の父親は、そのときが来るまでは、海外赴任中の婚約者だということにしていただけませんか』

そういうと、毛利はすかさず分厚い封筒をテーブルの上に出すと、厚地の光沢のあるテーブルクロスの上を、聡のほうへゆっくりと滑らせた。

『１００万入っています。足りなかったら、まだお支払いします』

聡は封筒を一瞥すると、その見開いた大きな瞳を毛利の眼鏡のあたりに向けた。

『どうして……』

『出産費用と、秘密の守秘への報酬です』

毛利はあくまでも事務的だった。

『そんな……』

戸惑う聡に、毛利はさらに付け加える。

『足りないようだったら、さらにお支払いいたします。ただし』

毛利の目が……小刀で削ったような細い目が鋭く光る。

『秘密が、こちらの指示より早く世間に漏れてしまった場合は、お腹の子もろとも安全を保障しかねます』

310◆意外な救い1

『そのときが来るまでは』

と将の父親の秘書・毛利は言った。

『そのとき』が本当に来るのか、そしてそれはいつなのか、聡は聞きたかったが、聞けるはずもなく、ただ承諾するしかなかった。

そして昨晩。鷹枝家の邸宅では、毛利が聡の入院について報告していた。

報告を受けているのは将の義母・純代である。

政務で忙しい康三に代わって、私的なことはこうして純代が報告を受けることも多い。

特に今回の秘密を知るのは、将の両親である康三と純代、そして秘書の毛利だけに留めてあるのだ。

孝太はとっくに眠り、かつ家政婦も帰った22時すぎをわざわざ選んで毛利が来訪したのは秘密が漏れるのを防ぐためなのだ。

「そうですか……」

純代は一瞬目を伏せたが、

「先生の体調のほうは……？」

と訊き返した。

「いいとは言えないようです。いわゆるつわりで食が進まないようで。

春の健康診断時に比べて体重が5キロも減ったとのことです。病院では点滴を受けていますので若干快復したようですが」

「5キロ……ですか」

純代は静かに目を見張った。

「つわりだけが原因ではないかもしれませんが」

毛利はあとから付け加えたが

「それにしても……よくないですね」

と純代は美しく整えた眉を寄せた。

「ですが、奥様……」

毛利は茶托から湯飲みを手に取りながら目をあげた。

「こういっては何ですが、古城先生の子供はご無事ではないほうが、鷹枝先生にも将さまの将来にも都合がよいのでは……」

そう言いかけた毛利は、純代が背筋を伸ばしたので、ハッとする。

純代は軽蔑のまなざしで、毛利を見下すと、

「ご報告ご苦労様でした」

とだけ言い放った。そして毛利を早々に追い返すべく自ら席を立った。

毛利はあわてて茶を啜ると、あわてて席を立ち、鷹枝家を辞した。

「ほとんど食べてないわねえ」

山口は聡の朝食のトレーを見て、首を傾けた。

朝食は喉に通りやすいように、お粥を用意してくれている。だが聡はそれを気持ち程度しか口にできなかった。

「食べないと、お腹の赤ちゃんによくないわよ」

そういわれても、喉に通らないのだ。

お腹の赤ちゃんを育てるべく、たくさん食べないと、という本能はある。

だが、食欲を感じると、すぐさま胃袋を締め上げるような吐き気が

込み上げてきて、聡はどうしても食べられない。

吐くときの体力消耗に懲りている聡は、結局少ししか食べられないのだ……。

「何か心配事があるならカウンセラーを手配しようか？」

山口は専門家らしく、次の手を考えてくれたが、聡はうつむくばかりだった。

心配事なんて……分かりきっているから。

そして、それはどんなに優秀なカウンセラーだって解決できないのだ……。

「彼氏に一度、帰って来てもらうわけにはいかないの？」

山口は提案した。

『彼氏』……つまり、相手についての話題が出たときは、元・婚約者である原田博史のことを想定して話すこと。

聡は、毛利に渡された書類を思い出す。

あの日、レストランの個室で現金１００万円に引き続いて、毛利はプリントアウトされた書類を聡に手渡した。

それはまるで企画書のような体裁で、今後の聡の行動についてが細かく決められていた。

お腹の子供の父親が将であることを隠すために。

・子供の父親は、中国に赴任中の原田博史とする

・学校には、博史と籍を入れた、と説明する

・それがバレないように、出来るだけ早く学校を辞めて転居すること

……

など妊娠について訊かれた場合についても、ケース別に細かく回答例が書かれていた。

とにかく、聡は友人や両親などすべての人間を騙さなくてはならない、ということがわかった。

毛利の書類によれば、山口がいう『彼氏』は博史を想定することになっている。

だけど、聡はもう博史の顔も思い出すことすら難しかった。

「忙しいから。迷惑かけられないわ」

かろうじて、博史のことを思いやるような演技をする。

「そうだけどさ、二人の赤ちゃんでしょ。向こうのご両親は?」

山口は親身になるあまり、少し呆れた口調になった。

『ヨリを戻した』ことになっている博史のことは、ほぼそのまま現

実を説明すればいいが、
その両親――ここだけが事実と異なることを説明しなくてはならない。
「札幌……だから」
聡は博史の両親の住所について嘘を答えながら、少し胃がキリっと痛んだ。
博史の母……薫。クリスマスに余命1年だった薫はまだ生きているだろうか……。
「そうかー。じゃ無理ね。……でも今日は土曜だし、ここはアキラ先生一人の個室みたいなもんだから、せめて電話で彼氏に甘えなさいよ」
あきらかに1人の患者に接する時間をオーバーしながら、山口はなおも親しげな声で聡を元気付けるべく提案をする。
「うん。そうする」
聡が電話で甘えたいのは……将だ。
将の顔が見たい。声が聞きたい。将に寄りかかれば、たぶんこの苦しさは半分になる。
だけど勉強に頑張る将にそんなことができるはずはない。だけど聡は山口へと微笑をつくった。

山口が出て行くと、聡は携帯を開いた。

将からのメール1通。ゆうべのうちに届いていたらしい。

井口か誰かから聞いたのか、聡が入院したことについての心配が述べられていた。

だけど、返信することもなく、聡はベッドに横になった。

ずっと空腹のような、だけどムカムカするような胃を抱えて、聡の体には力が入らない。

聡は下腹をなぞりながら、まだ自分がどうしたいのかわからなかった。

『将さまの将来のためですから、何卒よろしくお願いいたします』。

あの秘書は言った。

だけど、それを言うなら。

18歳で父親になることが、将来のためになるはずがない。

聡は、秘書の目を思い出す。

――教師の癖に、教え子と。

そういう世俗的な軽蔑感情を隠すべく、一切が事務的に話されていたのはいい。

だけど……将はどうか知らないが、明らかに歓迎されていない……迷惑な妊娠だということは、聡にだってわかる。

聡ですら、まだ産む決意には至っていないのだから。

――やはり堕ろすべきなのだろうか。

将とこのまま結婚できるとも思えない。

仮に結婚できたとしても。将の人生にいっそう苦難の道を歩かせることになる。

「やっぱり……」

決意しながらも聡は自分の脈とも思えるような小さな脈を腹に探った。

脈は無防備なほど容易に見つかった。動き始めた小さな心臓を、聡は止めてしまわなくてはならないのだろうか……。

「ごめんね」

声もなく呟いた次の瞬間には、自分と結婚するために、必死で勉強に励む将の姿が思い出されて、決意が揺らぐ。

聡は、天井に目を移した。

――自分に会ったばかりに、将は苦しいほうにばかり導かれている。

春から夏にかけて、将と離れていたときは、忘れかけていたこの考え。

今また、再び聡の心を捉えてしまっていた。

――いっそ将と出会わなかったらよかったのに……。

そこまで行き着いた聡の思考が起爆剤となって、次の瞬間、聡の心に将との1年余りの日々が水中花のように一気に蘇った。

膨らみきった思い出が、聡の目から涙を押し出した。

この思い出から将を抜いたら……。

1年前だっただろうか、将と別れることを決心した聡は、爪を引き剥がすような痛みを想像した。

今は……生きてさえいられないと思う。

だけど、近いうちに将の子供を闇に葬り、将とも離れなくてはならないかもしれない……。

その想像は、将と結婚するよりも、痛いほどの現実感となって聡に迫った。

将の思い出と、それを手放す日を想い、涙が止まらなくなってしまった。

そのとき、ノックの音がした。

誰だろうか。医師の診療ではない。だとすると聡がここに入院しているのを知っている学校関係者だろうか。それとも……将。

聡はあわててパジャマの袖で涙を拭い、カーディガンを羽織ると「はい」と返事をした。

静かに開いたドアのところに立っていたのは……。

聡はあまりの思いがけなさに目を見開いた。

３１１◆意外な救い２

漂うかつおだしの香りに将は目が覚めた。

記憶の中にある何かを煮ているような懐かしい匂いは、昨夜遅くに帰宅したときから漂っていた……それを思い出して、将は完全に覚醒した。

旭川からの最終便で、将が羽田に着いたのは、昨夜１０時すぎだった。

入院した聡に、真っ先に会いたかったが、病院の面会時間などとうに過ぎている。

ダメもとで電話を掛けたが、病室にいる聡にはやはり通じない。

仕方なく将は、見舞いは翌日の土曜日に行くことにしてまっすぐに帰宅し、そこでかつおだしの香りを嗅いだのだった。

枕もとに置いた携帯を見ると、もう朝１０時を過ぎていた。

昨晩のうちに送ったメールに対して聡からの返信がやはりないことを確認すると、将は起き上がった。

大きくあくびをしながら、義母の純代が何か煮物でも作っているんだろうか、と将は匂いの元を探るべく階段を降りる。

すると、階段の音に気付いたのか、ダイニングから孝太が顔を出した。

「お兄ちゃん、おはよう」

孝太は食べ終わった朝食の皿をキッチンに運んでいるところだった。

土曜日の今日は、孝太もゆっくりめの朝食だったらしい。

キッチンに純代の姿はなく、孝太は一人でテレビを見ながら食事をしていたようだ。

「お義母さんは？」

将はパジャマのまま、ジュースを冷蔵庫から出した。

孝太は気を利かせて、ジュース用のコップを戸棚から出して来る。

「お見舞いだって。さっき出掛けたよ」

「ふーん」

代議士夫人である純代が、支援者などのお見舞いに行くのはよくあることなので将はさほど驚かない。

それにしちゃ、この残り香。

しかしキッチンにも冷蔵庫にも、ダシを使って煮るようなものは何も残っていないようだ。

テーブルの上にはほうれん草をいためた物が乗った皿が置いてある。

「お兄ちゃん目玉焼きつくれる？」

孝太は冷凍庫からパンを出してきた。

「うん」

「じゃ、朝ごはんは目玉焼きつくって食べてって。クリームスープはあっためてこの器に入れてってさ」

孝太が伝えるまでもなく、同じ内容がテーブルの上のメモに純代の字で将に宛てて残されていた。

ダシの香りとはまったく逆に、今朝は洋風らしい。

将は香りのもとを突き止めることができずに鍋のスープを火にかける。

「お兄ちゃん、昨日は何時まで頑張ったの？」

「5時くらいかな」

将はスープを温めながら答える。撮影疲れはあったが、仕事がない日こそ勉強をやらなくてはならない。

将は眠気と疲れを我慢しつつ遅れている英語を、聡のために、そして聡を思い出しながら明るくなるまでやった。

……と。将は、急いで聡の元に見舞いに行かなくてはならないことを思い出した。

思い出すと居ても立ってもいられなくなる。

「孝太、パンはいい。……兄ちゃんちょっと出かけないといけないから」

将は慌てて熱いクリームスープを飲もうとして舌を少し火傷してしまった。

タクシーを呼ぶのももどかしかったので、久しぶりにミニを運転して将は聡の入院する病院へやってきた。

スキーで骨折したとき、それと大悟との死闘での負傷のときに世話になった、看護士の山口がいる病院だ。

みな子は、聡が運び込まれた病院名を告げなかった。

だが、学校で倒れたのならここに運び込まれるだろうとめどを付けた将は、看護士の山口に電話して確認したのだ。

すると案の定、聡はここに入院しているとのことだった。

何もかも忘れていた将だが、電話の向こうの山口が、さも言いにくそうに

「鷹枝くん。先生は赤ちゃんが出来たのよ……」

と口にしたことから、聡のお腹の子が、他の男との子供になっていることにかろうじて気付いた。

将は寝不足の頭を回転させて、

「知ってますよ。ムカつくなあ……」

と明るく、単なる聡を慕う生徒を演じるのに苦労した。

「てっきり、あたし鷹枝くんって、アキラ先生のことを本当に好きなんだと思ってた」

――今でも本当に好きなんだよ。アキラのお腹の子は俺の子なんだよ。

本当は叫びたい将だが、そうするわけにもいかず、ゆるく照れ笑いを返す。

「まさか……」

子供の父親と堂々と名乗れない自分が少しみじめで、将は電話を握り締めた。

「でも、近くまで行くんで、ついでに見舞います」

親に命じられたとはいえ、ウソをつかなくてはいけない自分が、将はちっぽけで情けなかった。

病院の地下にある駐車場に将はミニを止めた。

ここから内科病棟までエレベーターで直接上がれることを事前に調べてある。

幸いつけてくる記者はいないらしく、将は暗い駐車場でホッとした。

ミニで見舞いに行くことを選んだのは、こうすれば人目に立つのが最低限で済むという計算もあったのだ。

今日の将はサングラスに、髪を全部入れ込んだニット帽で顔を、大きめのブルゾンとブカブカの腰パンで体のラインを隠すべく努力をしている。

なぜなら、順調な上り坂での将の突然の芸能活動休止に、世間は再び蜂の巣をつついたような騒ぎになったからである。

実は官房長官の息子だったという騒ぎが収まったところへ、なものだから世間の騒ぎ方はすごい。

ちょうど、今出ている週刊誌には将の芸能活動休止に関する憶測記事が花盛りだ。

それでも父と芸能プロダクションの努力の成果か、あまりにひどい記事は載っていないようだ。どれも概ね、

『政治家になる将来を見据えて一流大学への進学を目指すためと思われる』

と現実に近いことだけが記事になっていた。

聡のことはどこも嗅ぎつけていないらしいのが幸いだった。

エレベーターは奇跡的に途中で誰も乗ってくることなく、６Ｆの内科病棟に着いた。

待合スペースには、土曜日のせいか患者がやたら多い。

将はガムを噛みながら何気なくナースステーションへの直行を試みた。

リズミカルなガニ股は井口の歩き方をイメージしているが、その心の中は見つかって面倒なことにならないように、と必死で祈っている。

病院に似合わない、長身・サングラスにガムを噛むＢ系男の出現に患者のうちの数人は顔をしかめたが、幸い将だとは気付かなかったらしい。

なんとか待合スペースを抜けることができて気が緩んだ将は、次の瞬間、後ろから腕を強くつかまれた。

驚きのあまり、全身の毛が逆立ち……将は振り返った。

「こちらへ」

毛利は、小柄な体に似合わない力で将の腕を掴み、給湯スペースへと連れ込んだ。

驚きのあまり、一瞬なすすべをなくした将は毛利が引っ張るがままになるしかない。

「困りますね」

毛利は小声ながら、眼鏡の奥の鋭い瞳で将を威圧した。

銀縁眼鏡に流しの上の蛍光灯が無機質に反射している。

「せっかくこちらがあなた様をスキャンダルから守るべく四苦八苦しているのに……。こんなことをされたらすべてが水の泡です」

憮然とすることで自分を取り戻した将は、毛利を無視して給湯スペースを出ようとした。

そうはさせじと毛利は立ちはだかる。

「お帰りください」

「どけよ」

「そうはいきません」

将はこれ以上の押し問答は無駄だと、実力行使をすべく、毛利を軽く突き飛ばそうとした。

だが、毛利はそういうこともあろうかと足を踏ん張っていたのかそれほどよろけず、将を頑として給湯室から出そうとしない。

そこへ。

「何をしているんですか」

鋭い女の声に一瞬の隙を見せた毛利の脇をすり抜けて、将は給湯室から転がり出て……そこに立っていた女を見て、あっ、と声をあげた。

そこにいたのは……義母の純代だった。

312◆意外な救い3

『どけよ』。

怒鳴りつけるべく将は反射的に目の前にいる純代を睨みつけた。

「先生のお部屋だったら、こちらよ」

意外な純代の声に、将は逆に立ちすくんだ。

どういうわけかスーツの上にエプロンを着けた純代は、歩いて来たらしき方向に踵を返しながら、将をいざなう風をした。

付いていくべきか逡巡する将の後ろから、毛利の抗議が純代へと投げかけられる。

「奥様。そんなことをなさると先生が困ります」

もちろん毛利が言っている『先生』とは、将の父の康三のことである。

「あら」

純代はいったん立ち止まると振り返った。

「保護者同伴で、担任の教師を見舞うことに、何か問題がありますか？」

それでも何か反論しようとする毛利だったが

「それにここは将がお世話になった病院です。お礼をしにくるのは至極自然なことでしょう」

純代は凛とした声で圧倒してしまった。

思いがけない展開に呆けたような将に、純代は目配せをすると先に歩き始めた。

「アキラ！」

純代の前だというのに、聡の姿を目にした将は、いとしいその名前を叫んでベッドに駆け寄った。

聡はいっそう痩せてしまっていた。痩せて小さくなった顔に、黒目がちの目がいっそう大きく見える。

「鷹枝くん」

それでも将を見つけた聡は一瞬顔を輝かせた。

しかし純代の前だから、その微笑みは遠慮がちに小さくなった。

ベッドの上の聡と、その脇で立ちつくす将は、今はただ見つめあっ

た。

そんな二人に

「じゃあ、わたくしは３０分ほど、お昼の準備をしますから」

と純代は声を掛けると、自らはそっとドアの外に出た。気を利かせたに違いなかった。

純代の魂胆はわからないが、将は一歩進むとベッドの上の聡に手を延ばした。

二人は久しぶりに、お互いのぬくもりをむさぼるように抱きしめあった。

「アキラ、つわりはひどいの？入院するなんて」

聡は将の腕の中で首を振った。

「でも……すっごい痩せた」

もともと華奢なのに、少しでも力を込めると壊れてしまいそうな聡だ。

その体の中に子供が宿っているなんて……将はさらに脂肪が薄くなった聡の背中をそっとなでた。

「あいつは、何しに来たの？……アキラに何かひどいことを言ったんじゃ」

聡は将の腕の中で顔をあげると、その黒い瞳を将に向けた。そしてかぶりを振ると、ゆっくりと微笑む。

「質問ばっかりね。将」

その、低めで温かい声は将の中の何かを溶かしていく。

「今日はね……つわりはだいぶよくなったの。お義母さまが魔法をかけてくださったみたい」

将には何があったのかわからなかった……だがそこで、病室にかすかにただよう香りに気付いた。

それは昨日から自宅に漂っていた香りと同じ、カツオだしの香りだった。

1時間ほど前。

聡は思いがけない来訪者に、固唾を飲み込んだ。

「先生。今日は将の母として、お見舞いにあがりました」

現れたのは、将の義母の純代だった。

去年……風邪を引き込んだ将と口づけしている現場を見られ、なじ

られたことがある聡だから、身を硬くした。

もう終りだ、と覚悟した。

きっと、子供を堕ろしてほしい、と乞われるのだ……。

あれほど迷っていて……自分でも何度も堕ろすべきだ、という方向に向かいかけているにもかかわらず……聡はそれを想像する聡は腹をえぐられるような痛みを想像する。

しずしずと病室に入ってきた純代は深々と礼をした。

聡はさらにとまどった。

礼を尽くした態度に、何と返事をしていいかわからないが、謝らなくてはならないことは確かだろう。

聡はベッドの上に座り直した。まだお腹が大きいわけじゃないから正座して居を正す。

「このたびは申し訳ありません。……担任として、いえ、教師としてあるまじきことをしてしまいました」

担任として……将の未来を台無しにしかねないことをしてしまった。

聡は本心から、布団に頭をすりつけんばかりに臥すと声を絞り出した。

だから、子供は……自分で責任を取ります一一口にすることのできない責任が聡の胸で焼けつくようだ。

そしてこみ上げる吐き気。以前だったらすぐに手洗いに駆け込むほど強いそれを聡は必死で耐える。

結ばれてはならない教え子の残した……愛の証は、殺さないでくれ、守ってくれと聡に必死で訴えているのだろうか。

社会への責任感と、将の子供を守りたい母性は聡の中ではみ出すほどに激しくせめぎあう。

「今日は……あなたを責めにきたわけじゃないんですよ」

吐き気をこらえながら純代の言葉を待っていた聡は、優しく抱き起こされた。

抱き起こすだけでなく、純代は聡を見つめた。

その視線には、聡が想像していた『責め』とか『断罪』といった尖ったものが一切なかったので、聡は逆にとまどった。

「だけど……」

「今日はね。あなたに味を見てもらいたいものを持ってきたの」

純代は、聡を楽な姿勢にさせると、風呂敷包みを解いてそこに入ったタッパーのうちの1つを取り出した。

蓋を取ると琥珀色に染まったゼリーのようなものが入っていた。

「桜島大根よ。味を見ていただくだけでいいの」

よくテレビなどで見る、巨大な姿ではなく切り分けた一部らしい。

聡は見た目だけでその柔らかさと味の染み具合がわかるものと、純代の顔とを見比べた。

「薩摩藩時代から鷹枝家に伝わる味なのよ。私も今は亡きお姑さまに教えていただいたの……。あなたにも、将来教えられればいい、ってわたくしは思っていますの」

聡にはわけがわからなかった。

ただ、今しがた強烈にこみ上げていた吐き気は急速におさまり、目の前のものから発せられるカツオだしの香りは聡を苦しめてはいない。

「……先生。わたくし、将から一切の信頼を失っていますの」

純代の口調は、旨そうな煮物を手にしているのには似合わない寂しげなものだった。

前に将から聞いた、家を爆破された事件のことだろうか。

聡は立ったままの純代にやっと気付き、とりあえず椅子を勧める。

純代は微笑むと、それに腰掛けた。

「聞いて頂けるかしら。将とわたくしに何があったか……」

今から9年半前。名門・岸田家の息女である純代は、前妻の一周忌を待ちかねたように鷹枝家に後妻に入った。

政治家によくありがちな閨閥関係を築くための政略結婚である。

しかし名門に生まれた純代のほうは、いつかはそれをするのがあたりまえだと思っていた。

それに、親の決めた結婚相手で13歳も年上の再婚者とはいえ、政界きっての美貌を持つ鷹枝康三が相手である。

男としての魅力で結婚相手を選ぶことなど叶わないと思っていた純代は、ひそかに自分は幸運だと喜んだ。

1ヶ月に満たない短い新婚生活ののち、康三自身が見合いの席で告げたとおり、前妻の子供が預けられていた曽祖父の家から戻ってきた。

その春から小3になるその男の子……将は、新しい母である純代を親しげに見上げると

『鷹枝将です。よろしくお願いします』

と教えられたのか、ぺこりと頭を下げた。

『親の私が言うのもなんだが、素直でとてもいい子なんだ。だが、

母を亡くしたことはどうしてやることもできない。

私も忙しくてめったに面倒をみてやれないんだ。だから、どうか可愛がってやってほしい』

前の日に康三は、純代に頭を下げた。

自分のことに関しての要望はそれまで一切せずに、純代のやり方を見守っていたような康三だ。

その康三が初めて純代に頼みごとをしたのが、将のことだったのだ。

もともと、岸田家の息女として代議士の妻を立派に務めることが自分の生き方だと自覚していた純代である。

もちろん前妻の子供をきちんと育てるのはその一環として当たり前だと思っていた。

だが頭を下げる康三に、さらにその決意を新たにした。

もし自分に子供が生まれても、分け隔てすることなく可愛がろう……純代は自分に誓っていた。

康三は、それだけ純代に対しても誠実な夫だったのだ。

だが、9歳になる男の子が、果たして自分になついてくれるのか不安だった。

ことあるごとに前の母と比べて……康三の前の妻の影をちらつかせるのではないか……そんな暗い予想は見事に外れた。

将はその日から純代を『おかあさん』と呼んで、反抗することもなく慕ってくれたのだ。

313◆意外な救い4

忙しくて家庭を顧みることもままならない夫に代わって、純代は将の面倒を見ることになった。

つまり新婚まもないのに、連れ子の世話に忙殺されるという状況になったのだ。

「将は、明るくて素直で、人を気遣うことができる子供でした。勉強も運動もできて、わたくしは参観日などで学校に行くたびに誇らしかったものです……」

夫と居るより、将といる時間のほうが長いような新婚生活。

だが、それを語る純代は当時を懐かしむべく、陽だまりにいるような穏やかな笑顔を浮かべていた。

それでも政治家一家に生まれ、内閣閣僚である父の忙しさを目にしている純代だが、自分の夫となるとやはり少し寂しい。

まだ20代の若い純代だ。自分のやり方でいいのか途方に暮れることもあった。

かといって実家に頼りすぎるのは、純代の自尊心が許さなかった。手を抜くのも嫌だった。

そんな純代を精神的に支えたのは巌である。

継母と継子の間をとりもつべく、巌はたびたび将と純代の元を訪れ

た。

手作りの野菜を届けるという名目もあったが、将に会いたかったのだろう。

その巌は、ことあるごとに、

『純代さんはよくやっている。うちには過ぎた、いい嫁だ』

と絶賛した。

「大おじいさまの褒め言葉が、あの頃のわたくしにはどんなに救いだったかしれません」。

純代は巌に励まされて、政治家の妻業というプライベートまで侵食してくる仕事と子育てとに健闘した。

まもなく実子の孝太が生まれて、ますます忙しくなったが、今度は将が孝太の世話を積極的に手伝ってくれた。

赤ん坊のうちはいいが、歩き始めた幼児は片時も目が離せない。

そんな孝太の、聞き分けのないやんちゃぶりにも将は辛抱強く付き合ったのだ。

腹を痛めた孝太は本能でいとおしかったが、純代は理性で将と平等に扱うように心がけた。

夫は相変わらず忙しかったが、鷹枝家は順風満帆に見えた。

そんな親子の蜜月を壊したのが、あの爆破事件だった。

「あれは1時すぎでした。犯人は夫の在宅時を狙ったんだと思いますが、幸い夫は帰っておらず、わたくしは先に休んでおりました」

ベッドに入った純代だが、どういうわけか、なかなか寝付かれず、手洗いに立ったそのときだった。

純代は入ったばかりのトイレの個室の中で、激しい衝撃を感じた。

地震かと思った。

あわてて飛び出した純代は、自分が戻るべき方向が、非常灯に照らされた瓦礫の山になっていることに仰天した。

いや、それ以外の方向も変わり果てた姿に崩れており、そこは住みなれた我が家ではなかった。

――逃げなくては。

だが純代はネグリジェ姿だった。こんな姿を非常時といえど一般にさらすわけにはいかない。

純代は今にも崩れそうな自宅の中でややマシだったバスルームとその脱衣所から素早くガウンを見つけるとそれを上に着た。

暗がりの中、手探りで髪も整え、口紅だけをぐいと引く。

なんとか恥にならないところまで、素早く自分を整えた矢先。孝太の泣き声が聞こえて、純代はハッと我に返った。

――孝太、将！

こんなときに身支度にかまけていた自分に激しい自己嫌悪を感じると同時に純代は夫婦の寝室の対面にあった子供部屋に向かった。

すでに火が出ているようだった。

元々廊下だった場所に積み重なった瓦礫の隙間から明るい炎が透けて見える。

廊下から子供部屋にたどりつくのが無理だということを瞬時で悟ると、純代は無我夢中で、リビングから庭に脱出し、外側から子供部屋に向かった。

乾燥した冬である。明るく燃えだした火があたりを照らし始めていた。

子供部屋には、爆風で吹き飛んだらしいガラス窓から容易に中に入ることができた。

窓に近い半分ほどの天井が奇跡的に崩れず、孝太はそこで泣いていた。

純代は孝太を抱き上げると、将を探した。将は足元にいた。

運が悪いことに、将は中学受験の勉強をしていたのか、将は2階から潰れてきた天井と柱に下半身を取られた状態でうつ伏せになって

いた。

たいした怪我はしていないらしく、脱出しようと必死でもがいているが、何かが引っ掛かっているのか足が抜けないらしい。

純代は見あげる将と目があった。

『助けて……助けて、お母さん』

将は目で縋った。

純代は、将の上に積み重なる柱や瓦礫をどけなくてはと思った。だが、柱はどうみても純代一人の力で持ち上げられそうもない。

そして、火のまわりは早い。ちょうど風向きが変わって、火勢がカッと強まった。

まるで純代を照らし出すかのように。

瓦礫に一斉に火が移る。……ついに将を押さえつけている柱に火が燃え移った。

――もうダメだ。

なすすべがない、と判断した純代は、将に背を向けると一目散に駆け出した。

『お兄ちゃああん！ヤダヤダ！お兄ちゃんも助けてよお……』

叫ぶ孝太は、純代の良心の責めでもあった。

一一仕方がない。仕方がないのよ。

孝太に、そして将に心で弁解しながら、純代は無我夢中で走った。気がつくと純代は消防隊員に抱えられるようにして安全な場所に居た。

『お父さん、お兄ちゃんが、お兄ちゃんが』

呆然と突っ立っていた純代は、孝太の泣き声で夫がそこにいることを知った。

『あなた……』

『純代。将は……。将はどうした』

康三はあわてて帰ってきたらしい。髪の毛が乱れて、すすで黒く汚れた顔の中で白目が際立つほど目を見開いている。

純代は何と言ったらいいかわからず黙った。

『将は……まさか、中にいるんじゃないだろうな』

こんな康三を、純代は初めて見た。ふだんは鋭い印象の目を丸く見開いて、瞬きもせず、純代に詰め寄ってくる。

恐ろしかったが、黙ってやりすごすのは卑しい者がすることだ、というプライドが、かろうじて事実を口にさせた。

『まだ……中にいます。助けられませんでした』

『バカヤロー！』

康三は間髪入れずに叫んだ。

上流に育った純代はこんな罵倒を受けるのは初めてだが、何せ非常時である。

罵倒より、今の状況事態がそもそも衝撃的な中で、その乱暴な言葉についてのショックは小さいものの、純代の心に響いた。

『申し訳ありません、あなた』

純代は目を固くつむって頭を下げた。

『それで、将は、まだ中にいるんだな』

康三の目の中には燃え上がる家だけが映り、純代の謝罪など眼中にないようだった。

次の瞬間、康三は家に向かって駆け出した。

だが、すぐに消防隊員に止められる。

『離せ！息子がまだ中にいるんだ！離せ！』

激する康三を止めるのに、消防隊員や警官数人が必要なほどだった。

『落ち着いてください！今救出に向かいましたから』

体を押さえつけながらの必死の説得にも、康三は

『将！……将』

なおも息子の名前を繰り返し叫んでいた。いつしかその目からは涙が流れていた。

ふだん感情をあまり見せない夫が泣いている。

普段、あまり実の息子への愛情をあらわにしない夫を、純代は少し冷たいと感じていた。

もっと息子を可愛がるべきだ、と忙しい夫を理解しながらも、純代は常日頃から思っていたのだ。

だが。夫はやはり、息子を愛していたのだ。自分を犠牲にしてもかまわないほどに。

純代は、自らも涙を流しつつ将の救出を祈りながら……もし将が助かったら、自分と将の今後はどうなるんだろうという予感に震えていた。

……そしてその予感は的中し、将は自分を見捨てた純代を許すことなく、非行に走ったのである。

「私は、もう将とはダメだと思っておりました。所詮継母と継子は、一度こじれたら通い合うことなどない、と……。ですけど、大おじいさまが最期に言い残したことが心に刺さりました」

修復のしようがない亀裂に誰よりも心を痛めていたのは巌だった。

巌は何かと、荒れた将をなごませようと努力し、かつ荒れ切ってしまわないように最期の砦となって将の良心を守っていたのだ。その巌が亡くなって。

「わたくしは、もう一度、将の信頼を取り戻すべく努力してみようと思ったのです」

純代はすがるような瞳で、ベッドの上の聡を見つめた。

「将が、学校に行くようになり、そして家にも戻ってきたのは……いいえ。

そんな形式的なことではなく、人間の心を取り戻し始めたのは、先生のおかげだと感謝しています。

そりゃ……学校の先生とお付き合いするようになったのは決して褒められたことではないですけれど……。ですけどね。聡さん」

純代は、『先生』ではなく、聡の名前を呼んだ。

聡は……将は、もともと将だったのだ、自分のおかげなどではない、と異論を唱えたい気もしたが、

それが本題でないことはわかっていたのでその先に語られるべきこ

とを待った。

「わたくしは、産みの親なら絶対に見捨てない場面で、将を見捨ててしまいました。

だから……私は……今度は、世間の皆が……たとえ夫が反対することでも、私だけはとにかく将の味方をしようと思ったのです」

純代の瞳には強い決意があった。純代は椅子から立ち上がると続ける。

「先生、いえあきらさん。たった一人でお腹の中の子供を大きくするのは並大抵のことではないと思いますけれど、わたくしがついています。

わたくしができるだけのことをしますから、どうか将のためにも頑張ってください。お願いします」

今度は純代が深く頭を下げた。

「そんな、鷹枝さん……」

つまり、自分たちを認めるというのだろうか。

思いがけない純代の言葉は、聡をとまどわせた。

純代は聡の手を取った。

「大おじいさまも認めた、何よりも将自身が選んだ相手です。たとえ、将が東大がダメでも……何年かかっても私が認めさせます」

聡は大磯での、巌の遺言を思い出した。

将を頼む、と懇願した巌。

この、早すぎた妊娠を……生きていたとしたら巌は許してくれるのだろうか。

314◆意外な救い5

聡の手を取った純代はにっこりと笑うと

「だから、一口、味をみていただけるかしら」

といったん置いたタッパーを手に取った。

「無理じいはしませんけど……大おじいさまもお好きだったのよ」

巌の好物と聞いて……さらに、目の前にいる純代がどうやら敵ではないらしいという安堵感から、聡は急速にそれを口にしてみたくなった。

琥珀色のゼリーのような桜島大根からは、冷めているのに、しみじみとした香ばしい香りがほのかに漂っていたのだ。

ここのところの……空腹感を押さえつけていた強い圧迫感が、やや弱くなった気がする。

「……じゃあ、いただきます」

聡は純代を見上げた。純代は柔らかく目を細めると、タッパーの中の大根を器用に切り取って器に盛った。

それは市販のプリンより小さいほどの量だった。

「一口でおやめになってもいいの。逆におかわりはできないのよ。とりあえずここまでにしておいてね」

不思議なことに純代はそういって聡に器を渡した。

たくさん食べろ、とはよく言われるが、ここまでしか食べるな、というのは久しぶりに言われる気がする。

聡は匙ですくった一口を口にした。

大根は舌の上で溶ける様にあっという間になくなり、親しみやすい……塩味も甘味もカツオダシの香ばしさもすべてが突出していない優しい味が一瞬舌に広がり、あっという間に消えた。

その味を確かめようと、二口、三口と口に運ぶうちに、器から大根はなくなってしまった。

「美味しかったです……。久しぶりに美味しいって思いました」

聡は素直に感想を述べた。

純代は聡の顔色を確かめるように

「気分のほうはどう？吐き気は？」

と訊いた。それで初めて、聡は吐き気をすっかり忘れていたことに気付いた。

食べ物を口にして吐き気がないのは久しぶりだ。

今までは本当に吐かなくても、たえず吐き気を堪えていたから。

だけど今は、もっと食べたいような気さえしている。

そんな聡の気持ちを察したのか、純代は

「おかわりは、３０分待ってね」

と微笑んだ。

これが、つわりを治す魔法の一環だったのだ。

純代はほうろう鍋を給湯室に持ち込むと、料理を簡単に温めて、３０分後に再び料理を盛ってきた。

これも今度は温めた桜島大根に加えて二口か三口ずつ盛られた３皿だけの料理だった。

食べろとは言わず、『一口ずつでいいから味を見て』とのことだったが、聡はそれを全部平らげてしまった。

すべて優しい味のものばかりだった。

「気分のほうは？」

「すごくいいです。それにとても美味しかったです」

食べる前よりむしろ、胃のたとえようもないムカつきがなくなった。

まるで妊娠する前のようだ。

どれも少しだけだったので聡はまだ食べたい、と思った。

「お昼は、たぶん将が来るから、それまで待っていてね」
純代は微笑んだ。
将はキツネにつままれたような気分で、純代が用意したちらし寿司の昼食を食べている。
ベッドの上の聡も、同じちらし寿司を気持ちよく片付けている。
その顔色はかなり快復している。
純代の『魔法』と、将と逢えて触れ合えたことで、胃の調子も、精神もかなりの安定を得たのだ。
「アキラ、大丈夫？」
「うん。とても美味しい」
微笑む聡に、純代が
「あまり食べ過ぎないようにしてくださいね。妊娠初期は、お腹をすかせすぎないこと、そして食べすぎないこと。ちょこちょこと食べれば大丈夫なのよ」

デザートを乗せた盆を運びながら語りかける。

あれこれと聡の世話をする純代にどうやら悪意はないらしい。

だが、腑に落ちずに将は純代の様子を盗み見ていた。

食べ終わると、純代は

「じゃあ、わたくしは整形外科の先生にお礼を申し上げてきますから。英語のわからないところを聞いておきなさいね」

と将に言い渡して、再び病室を出て行ってしまった。

『英語のわからないところ』というのは、二人のための口実に違いなかった。

なぜなら将は参考書も何も持っていないから。

挨拶にしては長い1時間ののち、純代は病室に戻ってくると

「将。まだ勉強があるでしょう。一緒においとましましょう」

と促した。

純代がいない間、久しぶりに抱き合ってお互いのぬくもりを……まるで充電のようにそれぞれの記憶に貯めた二人は別れ際にもう一度

見つめあった。

「じゃあ、月曜に学校で」

将は聡が心配だったが、明るくそういった聡を信じることにして、病室をあとにした。

「聡さん、困ったことがあったら、いつでも連絡してくださいね」

「はい。ありがとうございます」

……なんで純代はこんなに聡に優しいのだ。

将はいまだにわからなかった。

駐車場に降りていくエレベーターに純代は一緒に乗ると

「当然……乗せてくれるわよね」

とそっけなく言った。

「ああ」

なぜか断りそびれてしまう。

ミニに義母を乗せるのは初めてだった。

「監視……する気？」

将が口を開いたのは、病院の地下駐車場から出てしばらくの信号待

ちだった。

純代は前を向いたままの将の横顔を一瞬見るとため息をついた。

「初めての妊娠でしょう、聡さん。ご両親が山口なら、私がお世話をするのはあたりまえじゃないの」

純代の答えに、将はフッと鼻をならした。うそ臭いとしか思えない。

「世間体はどうすんだよ」

将はアクセルとともに挑発するように訊いた。

「担任の先生が困っている時、父兄がお世話をするのは自然なことでしょう……。何もわたくしだけではないわ。星野さんのお母様や兵藤くんのおかみさんとも連絡を取っているのよ」

今度は将が助手席の義母の横顔を見た。

つまり父兄みんなで手助けしているという手はずを取っている、ぬかりのなさだ。

しかし将にはまだ、義母が……自分たちのことを単に応援しているとは思えない。というか、思いたくない。

聡の妊娠・出産を手助けすることで何か弱みを握りたがっているのではないか……。

将は想像をめぐらせた。

「あのさ」

ある考えに至った将は、ハンドルを握ったまま、顔を再び前にむけるとそれを声に出してみる。

「聡に子供を産ませて……後でばらして、俺をスキャンダルに陥れる、とか考えてるんじゃないの。そうすりゃ孝太が……」

「将！」

純代は鋭い声をあげると、将の汚いセリフを制止した。

あまりの剣幕に将は、思いついた想像を口にするのを中断せざるを得なかった。代わりに純代の顔をのぞく。

純代は将を見据えていたが、やがて、うつむくとため息をついた。

「あなたがそう考えるのも無理はないわ……」

将は再び赤に変わった信号に、前の車との間隔を測りながら、一方で純代から視線が離せない。

純代はそれほどまでに、やるせない表情を浮かべていたから。

「急に信じろといっても、難しいこともわかる……。でもね、将」

車が停止してしまうと、純代はゆっくりと顔をあげた。

せつない瞳は、強い光を宿らせて、再び将を見据えた。

「私が、聡さんにあなたの子供を無事に産んでほしいと願っているのは本当よ」

義母のこんな顔を見るのは初めてだ。

子供の頃、叱られるようなことをしなかった将だから、義母はただ優しくて。

非行に走ったあとは、いつも心配しつつも強いことなどいえない……将はそう高をくくっていた。

「だから、もし……仮に。これが私があなたを陥れるためのワナだったとしても。私を利用しなさい。

私を利用してでも、二人で幸せになって……私を見返しなさい」

純代は凛とした声を車内に響かせた。

315◆嘘

――今日も撮影は休みか……。

将は窓に向かってため息をついた。その息が窓ガラスを白く曇らせるのも見えないほどの白に今、北の大地も空気も染まっている。

天と地の境が見えないほどの猛吹雪に、いつも見える大雪山系も隠れてしまったようだ。

12月も今日で20日。

ドラマ『あした雪の丘で』のロケで北海道入りしている将だが、一昨日からの大雪で撮影が中断してしまっている。

順調に行けば、明日には東京に帰れる予定だったのに……と、将は窓の外の雪を恨んだ。

案の定、直後にADから撮影中止の電話が入った。

将はため息をつきながら、朝食会場へ向かった。

このホテルはスキー場から離れているため、閑散期の今は、ほとんどドラマ撮影関係者の貸切状態となっている。

朝食会場も、ほとんど共演の俳優や、ドラマ制作関係者ばかりだった。

その中で、唯一ドラマとは関係ない一家が窓がわに席を取っていた。

中年夫婦と娘、の三人家族である。

その夫のほうが将に気付くと手をあげた。

将はそれに頭を下げて会釈をすると、その席のほうに向かった。

途中、将の相手役（といってもケンカばかりしている役だが）の若手女優が

「将くん、一緒に食べません？」

と誘った。そこには若手女優のほかにも、共演者たちがテーブルについていた。

もう6回を撮りだめしている中で、共演者やスタッフたちは家族のような雰囲気を醸し出していたのだ。

しかし将は

「すいません。親戚が来てるんで」

と断った。

「親戚？」

「はい。東京から僕の勉強を見がてらスキーに……」

「あ、もしかして、あの人、政治学で有名な東大の岸田助教授？」

スタッフの一人がそう指摘したとたん、一座は一家の方を振り返っ

た。

背を向けていた助教授はその視線に気付かず、代わりに夫人が会釈を返す。

「何、将くん、裏口入学を手配してもらうの？」

もちろんそれはスタッフの冗談である。

将はそれをほどほどにいなして、助教授一家の席へと移動した。

「やあ、まいったな。スキーをやりにきたのに、この大雪じゃ」

岸田助教授は将が席につくなり笑った。

「仕方がないわ。温泉に入りにきたと思いましょう」

夫人がそれをとりなす。このホテルには展望温泉があるのだ。

「それより今日、帰れるのかなあ。明日クリスマス会の練習があるんだよね」

11歳になる助教授の娘の香奈は、心配そうに窓の外を見つめた。

岸田助教授の一家は、金曜からの2泊3日でスキーにやってきている。……というのは名目で、本当は将の勉強を見に来ているのだ。

将の義母・純代の次兄にあたる岸田助教授に将は先々週から論述問題の特訓を受けている。

最初、純代がその話を持ってきたとき、将は反発した。

これ以上、純代に借りを作りたくなかったからである。

だが、純代はそんな将をわざと挑発した。

『正直に言うわ。あなたの今の成績と撮影を抱えている状況じゃ、前期試験での東大合格は難しくてよ』

１０月、１１月、１２月初めと模試を繰り返すにつれて将の成績はぐんぐんあがっていった。

だが、依然東大の合格圏内には、まだほど遠い現実……それは将が一番よく知っていた。

センターの足切りはなんとか乗り切るにしても、４教科にわたる前期試験は膨大な知識を再構築していく能力が求められる。

その膨大な知識の部分をまだやっている自分を考えると将は途方に暮れそうになった。純代の言っていることは事実なのだ。

義母である純代は、将の成績をもとに東大の助教授を務める兄に相談したらしい。

兄の岸田助教授によれば、国語力と論理的な説明力が際立っている将には、今年から試験方法が変わる後期のほうが可能性が期待できるのでは、ということだった。

純代は、さらに兄に、予想される出題で将を特訓してほしいと頼み込んだのだ。

『自分でなんとかするから、ほっといてくれ。お義母さんには頼りたくない』

プライドの高い将はそれでも、反抗した。なんとかするあてなど、本当はない。

聡のためのことは……自分ひとりで解決したかった。ただそれだけだ。

そんな将に純代は一喝した。

『私に頼りなくないなんて甘えたことを言うんじゃありません！……望みというのは、大嫌いな相手だろうと利用してこそ、叶えるものですよ。私を利用しなさい』

その翌日から、将は純代に引っ張られるように無理やり岸田助教授のもとに連れて行かれた。

祖父、そして曽祖父の厳の葬儀でしか顔を見たことがない岸田助教授はほとんど初対面も同様だった。

丸顔にたれ目、と親しみやすい容貌は涼しい面差しの義母とはまったく似ていないながら、指導は容赦がなかった。例題で書いた将の論理の穴を次々と指摘する。

しかし、身内らしからぬその厳しさに、将は逆に助教授を信頼するようになり……週に2回、通うことにしたのである。

この金曜から日曜日にかけては、昼間は将は撮影、助教授一家はスキー、夜に3時間ほど論述問題の特訓をすることになっていたのだが、

あいにくの天気で昼間からずっと特訓になっているのは不幸中の幸いというべきか。

いや。この時期は本当は論述問題をやるよりは、センター試験に向けた詰め込みをやらなくてはならない。

だから本当は、早く撮影を終わらせて東京に舞い戻り、睡眠時間を削って詰め込み勉強にまい進すべきなのだが

……撮影で北海道にいる限り、顔のコンディションを崩さないために睡眠を充分とらなくてはならない。

それが撮休が重なるにつれて将には焦りにつながってきた。

しかし、天気には逆らえない。

「雪、早く止んだらいいのにね」

岸田の娘の香奈がココアが入ったカップを両手で包むように持ちながら将に話し掛けた。

そのカップの持ち方は聡がよくやるものだった。聡もココアが好きだった……。

「そうだね」

将は白く吹雪く外に、聡を思った。

もうすぐ来るクリスマスは、二人で過ごせると信じて……。

＞今日も雪で、撮影が休み。明日には帰れなさそう。

将からのメールがいい目覚ましになった。

聡はベッドから体を起こすと、下腹に手をやった。

5ヶ月を迎えた下腹は、このところぽこんと膨らんできた。

――おはよう。北海道は大雪なんだって。

小さく、お腹の子に語りかけると聡は立ち上がって青いカーテンを勢いよく開いた。

北海道は大雪だというけれど、東京はいい天気だ。

放射冷却か窓からの冷気にぞくっときた聡は、着替えることにする。

お腹が膨らんできた聡だが、まだそれは少し太った程度だ。

ふだん細身の聡だから、いまのところ普通の服で大丈夫だが、もうあと一月もすればマタニティを買わないといけないだろう。

昨日の土曜日、聡は検診に行ってきた。

医師は『とっても順調ですよ』と太鼓判を押してくれた。

つわりこそ入院するほど酷かったが、それを乗り越えると極めて穏やかな日々が聡に訪れたのだ。

純代が紹介してくれた穏やかなお婆ちゃん産科医は、子供が生まれることをとても楽しいことのように口にする。それで聡はとても楽になった。

早い人だと性別もわかるらしいが、

「赤ちゃん、どうやら恥かしがってるみたいですね。また次の機会にとっておきましょう」

と超音波を見ながらおっとりと産科医は笑ったので聡はつられて笑顔になった。

産科医はそろそろ動く頃ですから楽しみにしてくださいね、とも言ったが、いまのところその気配はない。

聡は好きな音楽を掛けながらブランチをゆったりと味わった。

テレビよりは音楽の方が赤ちゃんにいいのだろうと思ったからである。

『赤ちゃんはね、思ったよりずっと外の音を聞いているんですよ。そしてね、お母さんの気持ちに反応して笑ったりするの……すごいでしょ。だから聡さんも気持ちをゆったりと持ってね』

という産科医のアドバイスに従ったのだ。

ブランチを食べ終わって掃除と洗濯をしてしまうと、もう午後になっていた。

聡はカフェインのないハーブティを淹れると、紙袋を取り出した。

中からは……毛糸と編みかけのマフラー。

「イブには仕上げなくちゃね」

このところ独り言が多くなった、と聡は自分で思う……本当は独り言というより赤ちゃんに話し掛けているのだが。

お腹がぽこんと出てきてから、また、産科医のアドバイスを聞いてから、聡は急にお腹の赤ちゃんに人格を感じるようになった。

思い返せば、あの、つわりで苦しかった日々も、聡の苦悩がお腹の赤ちゃんを苦しめていたためではないかとも思う。

――赤ちゃんは赤ちゃんなんだから。

将との将来の不安を感じさせてはいけない。

聡は努力して、楽観的になるようにした。

その楽観に、毛利から月々振り込まれる５０万は役に立った。

当初聡はいらない、と固辞しようとしたのだが、

「教師をお辞めになるのでしょうから、引越し代と生活費に」

と言われ、断れなかったのだ。

しかし、聡は今のところ学校を辞めていない。

海外赴任中の婚約者と入籍した嘘をつきながら、勤め続けているのは、学校でなら将の顔を見ることができるというのもある。

しかしそれよりも、初めての教え子たちが卒業するところを見たいという願いのほうが大きかった……。

だから、金は病院代以外はすべて貯金されることになった。

それは、もし将が受験に失敗し、引き裂かれたとしても、独りで赤ちゃんを育てるのに大きな助けになるだろう。

……そんなことを思いながら、これが母になるしたたかさなのか、と自分に目を見張りながらも、聡は一心に編み棒を動かす。

去年、萩の海岸で将とわけあったマフラー。長身の将はあれよりもっと長いものが似合うはずだ。

お金はあるから、クリスマスにはもっと高いものをプレゼントすることもできる。

だが、そのお金は元を正せば将の家から出たものだ。それでプレゼントを簡単に買ってしまうのは、心がこもっていない気がした。

だから、聡は将の好きな色の毛糸を買って、長いマフラーを自分で編むことにしたのだ。

ふいに、携帯が鳴った。

将の着信音ではない。

『実家』という表示を見て、聡はどきり、とした。

「もしもし」

「あ、聡？」

電話は母だった。聡は固唾を、臓腑深くまで飲み下す。

「あんた、今年はいつから帰ってくるんね？」

そんな聡の様子を知らずか、母は極めて能天気に、いつもこの時期にしてくる質問を投げかけてきた。

聡はお腹を一撫ですると、意を決して言葉を発した。

「今年は帰れん」

「えー？なんでぇ？」

とたんに高い声で抗議する母。……当然である。

大学以来上京している聡だが、留学している時以外は毎年正月に帰郷していたから。

「今年は……友達と……美智子たちとスキーに行くことにしたんよ」

本当は妊娠しているから帰れない、とは言えない。

聡は、両親にだけは、『海外赴任中の婚約者との間に子供が出来た』という嘘をつけないでいた。

今年の正月に、博史と結婚できないと告白してしまったことも、理由の1つではある。

博史とよりを戻して妊娠し籍を入れた、などと説明したら、親は呆れつつも、博史の親に挨拶しなければ、とか簡単でいいから式をあげなくては、と事が大きくなるだろう。

それを聡は恐れたのだ。毛利によるマニュアルには、何かと忙しいからと言い含める、とあったが、聡の両親がそれで納得するとは思えなかった。それほど律儀な親なのである。

かといって、妊娠していない振りをして実家に帰るのは危険だった。まだお腹はそれほど目立たないとはいえ、四六時中親といれば、聡の体の異変に気付くことは確実だった。

だから聡は……この年末年始は実家に帰るのを自粛したのだった。

嘘が自然に聞こえますように、と祈る気持ちと、嘘をつく後ろめた

さ。

……無意識のうちに下腹をさすっていた。

「えー、なんね。正月に帰らんなんて」

母は聡を非難し始めた。

「ごめん……代わりに春休みには帰るけん」

春休みには、将と二人で……。

将が合格すれば、きっと二人で結婚の報告をしに、実家に帰ることができる。

ふるさとの、桜の咲く川ぞいの土手を、将と二人で歩く姿を想像しようと聡は努力した。

316◆熱い恋情と冷静な計算

やっと晴れたという将からのメールを、聡は職員室で見た。

青空の下、足跡ひとつなく広がるまっ白な丘の起伏、その向こうに同じく大雪山系が輝くように連なる画像と一緒に

＞23日の夜には帰るからイブは一緒に過ごそう

というメッセージ。

「アキラ先生、お正月にはダンナさん帰ってくるんでしょう」

ふいに訊かれた聡はハッとして携帯を折りたたむ。隣の席の権藤先生だった。

「……あ、ハイ。でもとんぼ返り、みたいです」

あわてて、笑顔をつくりながら答える。セリフはもちろん毛利のマニュアル通りだ。

学校では……聡は、海外赴任中の婚約者との間に子供が出来て、籍を入れたことになっている。

『旧姓』で通していることになっている聡だが、通称が『アキラ先生』なのでほとんど支障はない。

婚約者のことも、この学校に入ったばかりの頃、ちらりと漏らしたことがあるので、どの先生も疑わなかったのだ。

あの頃は、まさか将のことを好きになって、博史と別れてしまうなんて思いもしなかった……。

「センセイ、お腹ちょっと大きくなった？」

「彼氏に会わなくて、つらくない？」

帰りのＨＲが終わったとたんにチャミやカリナたちが親しげに話し掛けてきた。

聡が妊娠して以来、おなじみの挨拶のような習慣になっている。

身近な聡の妊娠は、女の子たちには興味津々だったのだ。

体のこと、そして結婚のこと。そして相手のこと。

放課後の補習はたびたび、芸能リポーターばりのインタビューの時間になった。

体のことは、教え子たちも将来経験することだから隠さず話そうと思うが、相手のことを話すのはつらかった。

『先生の彼氏ってどんな人？』

『リーマン？』

『いつ知り合ったの？』

『プロポーズは？』

幸せならのろけるのも嬉しいようなことを……聡は嘘で答えなくてはならない。

いや、嘘ではないけれど。博史という、現実に付き合って別れてしまった恋人のことを、現在進行形として話すのは……嘘を話すよりつらい。

そのせいか……聡はこのごろ、よく博史のことを思い出す。

忙しさのあまり中国から帰って来れない『設定』の博史。

本物はいま、どうしているだろうか。

また去年の今ごろ、余命1年だった優しい博史の母親は……今もまだこの世にいるのだろうか。

聡は、それを思い出すたびに、自分の身勝手さに少し苦しくなる。

余命1年の母に孫の顔を見せたいと、聡に子供を望んだ博史。

あのときは、まるで考えられなかった子供を、まさか1年後、こう

して宿すことになるとは……。

聡の心は、油断すると、運命のめぐりあわせの不思議さのままに、思い出をずるずるとたぐりよせそうになる。

「先生、この英作文添削してください」

そこへ割って入った少女がいた。星野みな子だった。

「ホラ、みんなも勉強しなさい」

聡はチャミやカリナたちを追い払いながら、みな子が差し出したプリントを受け取る。

「……ウン、よく出来ているわ。でもここはこういう表現をつかってもいいかも」

行間に赤ペンで構文を書き添えながら、みな子の英作文がこの学校の生徒にはあるまじき優秀さであることにあらためて感嘆する。

英語に限れば、将よりもみな子のほうが成績は上だった。

「だけど、これでもバッチリよ。星野さん」

笑いかける聡に、みな子はすっと立ち上がると一礼した。

こんなとき、聡はみな子からの敵意、のようなものを感じてしまう。

そして、敵意状の空気を肌から発したみな子は、このごろハッとするほど美しいと思う。

ギャル系女子のような化粧もほとんどしていないし、ヘアスタイルも黒い髪をそっけなく2つに結んでいるだけなのに……透き通るような肌は、

眼鏡の奥の黒い瞳は……聡に勝負を挑んでいるように見える。

若い子への嫉妬なのか、と聡はそっとセーターの下に隠れたお腹を盗み見る。

こんなとき、将からもらった小さな命は、お守りのように聡を温める。

退院してすぐのＨＲの時間に、聡は自らの妊娠を教え子たちに告げた。結婚したという嘘と共に。

もちろん将が撮影で休んでいる日を選んだのは言うまでもない。

そのときの生徒たちの動揺といったらすごかった。

一瞬、水を打ったように静かになり……各自の喉がごくっと動くの

が何かの特殊効果のように連続して見えたほどだ。

「センセー。まさか、将の子供じゃねーだろな」

HRが終わったとたん、井口が駆け寄ってきて叫んだ。後ろにはカイトやユウタも口をパクパクさせている。

あまりの単刀直入に、聡も動揺のあまり瞬きそうになるのを……かろうじて抑える。

丸刈りの兵藤や松岡が、教科書をいじりながら聞き耳を立てているのがよくわかる。

「もー、何いってんの」

昨日……そういわれることを予想してさんざん鏡の前で練習した笑い顔。わざとらしくないだろうか。

そんな心配を無理に飲み込む。

「だってサ。センセイ、将とデキてたんだろ」

カイトが馬鹿でかい声で叫んだ。

「デキてませんっ。ずっと付き合ってた人がいるのよ」

わざとらしくふくれた顔をつくる。嘘をつく喉が焼けついて、声が裏返りそうだ。

井口が顎をあげて、『あー』という形に口を開けた。

彼は思い出したのだ。将と大悟と一緒に聡の実家を訪れたときに同席した男のことを。

「あの、正月に萩に来たリーマン？……先生趣味悪いな」

井口は言葉を放り出す。それは納得したようにも、聡をバカにしているようにも聞こえるが聡は何も言い返せない。

「何、ハルキくん知ってるの？先生の彼氏」

ユウタが金髪を揺らす。

「知ってる、知ってる。なーんだ、ヤルことやってたんだ。できちゃった婚なんて」

井口は少し軽蔑したように、細めた笑い目で聡を見やった。

聡は身が縮む思いだった。

実は、できちゃった婚よりもっと蔑まれることをしている聡だ。

……生徒の子供を妊娠する教師なんて。

それに、井口は将と聡とのプライベートな関係も……将が聡に寄せる一途な思いも、かなり知っていたはずだ。

それで、『将を捨てて博史を選んだ』聡への軽蔑を、彼は態度に表しているのだろう。

これ以上、笑顔をつくり続けるのはつらい……息があがり、視線をそらしそうになる聡に助け舟が差し出された。

「もうそれぐらいにしたら？　先生のプライバシーでしょ」

星野みな子だった。……みな子は、聡が倒れたときに、その真相を職員室で偶然聞いて知っていたのだ。

みな子はクールな調子で続ける。

「できちゃった婚だって、先生はもう結婚したって問題ない大人なんだから、勝手でしょう」

なんだよ、星野サン、と斜に構えようとした井口が、思い出したように口にした。

「……そっか、将は今、星野サンと付き合ってるんだもんな」

みな子はチラっと聡に視線を走らせると、目を伏せた。

「……付き合ってるとかじゃ、ないけど」

聡は、みな子に礼を言うわけにもいかず、ただ立ち尽くしていたのだが、みな子が割って入って興ざめしたのか、井口たちは去っていった。

かわりに、チャミやカリナら女の子たちが

「先生、式はしないの？」

などと訊いてきたので、聡は少しほっとした。

そんな聡を、みな子は離れたところから見つめていた。

聡の妊娠を知って……他の男と将を両天秤にかけていた聡を激しく憎んだみな子だったが、2日も経たないうちに熱く激しい胸のうちの溶岩は急速に冷めてしまった。

冷えて固まった岩のようなごつごつした憎しみは依然胸のうちにあったが、それよりも急速にみな子の心に舞い降りてきたのは希望だった。

もはや他の男の子供を妊娠した聡である。

将がいくら愛しているといっても、また聡が意地汚く将に手を出したとしても、所詮聡は他の男のものなのだ……。

将は、いつか……近いうちに、聡のことを忘れるだろう。いや、きっと忘れるに違いない。

みな子はそのときが来るのを待つことにした。

将への思いを、『一緒に大学生になる』という希望に転化し、勉強に向かった。

将がどういうわけか、芸能活動を休んで東京大学を目指しているのは、本人から聞いてみな子も知っている。

理由については、将は詳しく語らなかったが、それはどうでもよかった。

曽祖父の死が関係しているのではないか、と思っている。

事実、週刊誌などには、将の急な受験休業について、『敬愛していた曽祖父の死によって政治家の血に目覚めた可能性がある』などと書き立てられていたからだ。

さすがに、みな子が東大を目指すのは難しかったが、東大のすぐ近くにある大学でN大やM大などみな子でも目指せそうなところがいくつかある。

将の近くで大学生になれば……いつか、自分に振り向いてくれる日がくるのではないだろうか。

みな子は、勉強に励み、少しでも将の目に魅力的に映るように自分を磨いた。

そしてうっとおしくない程度の匙加減を研究しながら、将に親切であるようにした。

すべては熱い恋情による冷静な計算であった。

317◆未曾有の大雪

「お疲れさまです」

「じゃあ、早いけど、よいお年を！……クリスマスといったほうがいいのかな？」

主演のベテラン俳優が、将にウインクを返した。

若い頃、美男俳優ともてはやされていた彼は年をとってもそういう顔が非常にチャーミングだ。

大雪で押したドラマの撮影だが、月曜からこの3日は順調に進んだ。

将はたった今、出番が終り、その足で東京に帰るべく、残る役者やスタッフに挨拶をしていたのだ。

新年まで撮影はない。もっとも年が明けると、センター試験直前なのにも関わらず、番組宣伝のバラエティなどに多少は出演しなくてはならない。

「やだなあ……、そんなヨユーないです。受験勉強ですよ」

それはフォローでもあったが、余裕がないというのは将の正直な感想だった。

しかし、心は浮き立っていた。余裕がない、といいながらも明日のイブは、聡と一緒に過ごす約束をしている。

といっても外を歩くのは目立ってしまうから、聡の家で英語を教えてもらいながら二人の時間を楽しむ目算だ。

「そうか、そうだったな。頑張れよ」

「そうだ、将。飛行機、止まってたら連絡して」

スタッフのひとりがかけた言葉に将は、え？と止まった。

なんでもスタッフによると、本州は今朝から大雪に見舞われているらしい。

「カミさんから、学校も休みになるくらいひどいって聞いたから」

その場の皆がへえ、と意外そうな顔をする。

それもそのはずだ。皆を取り囲むまっ白な雪の丘の上には雲ひとつない青空が広がってたからだ。

将は、タクシーに乗るなり携帯を取り出し、まずは事務所に撮影が終わった旨を連絡した。

このところ将は、北海道ロケに関しては単独で動くことが多い。それはマネージャーの分の交通費までは撮影予算で出ないという事情もある。

だが単独で動けるようになった一番の理由は、最近ようやく騒動が収まってきたというところにある。

空港からタクシーで撮影現場に直行する限り、ファンやマスコミに囲まれて身動きがとれなくなるということはなくなっていた。

事務所への連絡をすまし、次は聡に電話しようした将に

「お客さん、東京行きですよね」

と、ふいに運転手が声をかけた。

「はい」

「東京行き、今、止まってるみたいですよ」

「え？」

「こっちはこんなにいい天気なのに、本州は今、すごい雪らしいです」

運転手は、カーラジオを付けた。

折りよく、ニュースをやっていた。

『本州を覆うこの冬一番の寒気団が今朝から各地に記録的な大雪を降らせています。……積雪量は東京で１時間に１０センチ、名古屋で５センチ、仙台で……。この大雪で、都内を始め、交通は大混乱になっており、羽田空港は視界不良のため、航空機の離発着を見合

わせています』

将が東京で経験した一番の雪は、一晩で１０センチほどだ。それが１時間に１０センチ。

前のシートにもたれかかるようにしてラジオに耳を傾けていた将は、ウッソー、と呟くとシートに寄りかかった。

「こっちはこんなに晴れてんのにねえ」

運転手の明るい調子の北海道なまりは、天気予報に相槌を打つようだ。

「こんな異常気象も地球温暖化のせいかねえ……お客さん、どうします？空港に行っても、たぶん飛行機は飛ばないんじゃないかな」

「いちおう、お願いします」

午後３時をすぎた外は、オレンジがかった陽の色に染まった雪の丘の起伏が見えている。

そのなだらかさは聡の肌を思わせて、将は携帯を手に取った。

２３日、祝日の今日だから、電話しても咎められることはない。

「将？」

電話から聞こえる、いとしい声。将は自然に携帯に噛み付くような姿勢になっている。

「アキラ、そっちすごい雪なんだって？」

「すごいよ。屋根がみんなまっ白。東京でこんなの初めて見た」

未曾有の大雪を伝える聡の口調なのに、なんだかのんびりしている。

「まだ降ってんの？」

それに対して、将は自分でも焦っているのがわかる。

「うん。朝からずっと降ってる。……将は撮影終わったの？」

「終わったんだけど……。終わって空港に向かってるんだけど、飛行機が止まってるらしい」

「この雪だもんね。仕方ないよ」

「アキラは、大丈夫？」

「大丈夫。病院は土曜日に行ったし、食料も買い込んであるから」

将が訊いたのはそういうことではない……自分に会えなくて心配じゃないのか。

将のほうは、こうやって声を聞いただけで、焦れがつま先からのぼってきて思わず奥歯を噛み締めてしまうほど……聡に逢いたい。

逢って抱きしめたい。

「俺……、絶対明日までにそっちに戻るから」

「うん」

電話の声だけでは、将の狂おしいほどの決意が聡に通じているかどうかがわからなくて、将は続ける。

「俺さ。クリスマスプレゼント、買ったんだぜ。きっとびっくりする……」

それは撮影のあいまの希少な時間に、ひそかに札幌に出かけて買ったものだ。

聡への愛の証であるそれを、将はいつも持ち歩いていた。今も傍らにあるリュックの中に入っている。

「あたしも、将へのプレゼント用意してる。気に入ってくれたらいいんだけど」

将の心に、温かい聡の声が沁みこんでいく。

気がつくと、窓の外の丘が一面の桃色に染まっていた。

それは聡のぬくもりを色にしたかのようだった。逢いたい気持ちは募っていくばかりだ。

本州行きの飛行機がすべてストップした旭川空港は、客でごったがえしていた。

その中に、今朝出発したはずの相手役の若手女優の○○谷詩織を見つけた。

彼女も一人で疲れたようにベンチに座っていたが、将を見つけると笑顔で手を振った。

将は軽く頭を下げるとベンチに近寄った。

「朝からずっと飛行機が飛ぶのを待ってるんだけど。ダメみたい」

詩織は困ったように笑った。将と同様、伊達眼鏡をかけているが、眼鏡の下のさくらんぼのような唇に聡を重ねて将はハッとした。

聡に逢いたいあまり、こないだからすべての女性の中に、聡との共通点を見つけようとしてしまう。

そんなことにも気付かず、詩織は座っているベンチを少し詰めて隣を将に勧めてくれた。

２１歳と将より少し年上の彼女は、若手にしては珍しく舞台畑出身で演技派としても名高い。

今年初めには大河ドラマで評判を取ったという。

にもかかわらず謙虚で気さくな性格の彼女は撮影現場でも皆に好かれている。

「予報だと、明日はもっとひどくなりそうじゃない？だから、どうしよう、と思って……」

「明日、もっとひどいんですか」

将はため息まじりに訊き返す。詩織は頷いてさらに続ける。

「名古屋も、仙台も同じ状況で飛行機が降りれないらしいわ。大阪は今は大丈夫みたいだけど、大阪から東京に向かう新幹線がストップしてるから……はぁ」

いつも元気な詩織が、珍しく語尾にため息をつけた。

空港のテレビでは繰り返し大雪に関する気象情報を放送している。まるで台風のときのようだ。

それによると飛行機だけでなく、雪に慣れない関東一円ではＪＲも軒並みストップしてしまっているという。

寒気はさらに強まりながら南下するらしく、明日２４日の夜まで雪は断続的に降り続くらしい。

東京行きの飛行機が飛び立つのは絶望的だと思われた。

……案の定、まもなく、今日の東京行きの便は全便欠航というアナウンスが流れた。

ごったがえしていた客が一斉についたため息が揃うようだった。

その客の中から、女性3人ほどが、ベンチに座っている将と詩織を見つけてサインを求めてきた。

主に将のファンらしき女性たちは、どうやら飛行機を待ちながら、二人に声をかけるかどうか迷っていたらしい。

詩織は、思いがけないサインと握手に感激しながら去っていくファンを見送りながら

「将くん、どうする?……現場に戻る?それとも、近くのホテルかどっかに泊まる?」

と将に問い掛けた。

そうするしかないんだろうか。

将はあたりを見回した。ざわめくフロアの中で窓が……夕陽が最後に差し出した濃い茜色の陽だまりを透過させていた。

まるで舐めたら甘いようなピンク色は聡を……そして聡のイメージは、将を呼んでいるかのようだった。

３１８◆未曾有の大雪２

一晩明けて２４日。

いつもより少し早く起きてカーテンを開けた聡は、思わず口を丸くあけていた。

一面降りしきる雪で霜降りのようになったクリスマス・イブの街は、どこか日本海側の都市にいるようだった。

家々の屋根はいずれもこんもりと綿帽子をかぶったように白い雪が乗っかっている。

聡の部屋の狭いバルコニーにも軒から降り込んだ雪が１０センチにも積もり、ミントの鉢は可哀想に雪に埋もれている。

せめてミントの鉢に積もった雪をはらってあげようと窓をあけた聡は、突き刺さるような空気に身震いした。

綿のように柔らかそうな雪とはまるで質感の違う湿った冷たい空気。

聡はいったん部屋の中に取って返すとカーデガンを羽織り、しまっておいたつっかけを玄関から持ってきてミントの雪を払った。

白い雪とミントの葉はまるで何かのデザートのような美しさだったが、放って置くと枯れてしまうだろうから。

パイプの手すりの上にも、こんもりと昨晩の雪が積もっている。

ほうきで手早くバルコニーの雪を履きながら、聡はその清浄な雪を思わず手にとりたくなる。

雪に手を延ばした聡は、手すりの下に見えた歩道を見て仰天した。

道はまっ白だった。

朝早い人が踏んで通ったあとが線状に残っているが、舗道にアスファルトの色は見えない。

車道にしても、轍に少々黒ずんだ色が透けてみるだけで、白い部分が大半だ。

東京がこんなふうになるのを、聡は見たことがなかった。

しかも雪は、まだ止むことなく、しんしんと降り続いているのだ。

聡の出勤時間には、雪の舗道は踏み固められた部分が増えていたものの、固まった路面と新雪との高さの差は２０センチもあった。

つまり、長靴を履いていないと、新雪の部分は歩けない。

初めてここを通った人はさぞ苦労しただろうなあ、と聡は、去年北海道へ履いて行った靴で、踏み固められた雪を、ギュッギュッと慎重に踏みしめる。

妊娠５ヶ月の聡は転ぶわけにはいかないのだ。

降る雪の勢いはおさまらないものの、交通は昨日に比べると少しはましになっていた。

バスやタクシーは、ジャリジャリとチェーンの騒音を立てながら果敢にも走っている。

ニュースによればＪＲは日本海側から除雪車を運んでくるなどして、一部徐行運転を始めたものの、視界が悪くてダイヤは乱れっぱなしだという。

聡はチェーンをつけたバスに乗って、なんとか学校に出勤することができた。

今日は2学期の終業式がある。教え子たちに通信簿を渡さなくてはならない大切な日なのだ。

「ああ、アキラ先生。おはようございます」

「おはようございます。多美先生」

聡が職員用入り口にさしかかったとき、ちょうど多美先生たち屈強教師が校門に出るところだった。

ただし今日は竹刀でなく、おのおの大きなスコップを持っている。

「学校の前だけでも、雪かきです」

権藤が四角い顔をほころばせた。寒さで鼻が少し赤くなっている。

「私も手伝いましょうか？」

気を遣う聡に、

「アキラ先生は赤ちゃんがいるんだから、じっとしていてください」

と多美先生が降りしきる雪に目を細めながら笑ってみせた。

長いコートに毛糸の帽子を被った姿は、なんとなく彼をロシア人のように見せている。

聡はうなづきながら、こっそりと微笑んでしまった。

驚いたことに、この大雪だというのにほとんどの生徒が出席した。

それにはわけがある。

今年から卒業時の残留ポイントによって、キャッシュバック額に差がつくという決まりが加わったのだ。

自主中退者を増やす作戦が失敗に終わった学校側は、なんとか予算削減を実現すべく、そういう決まりを急遽作ったらしい。

生徒たちは不満ながらも、少しでもポイントを減らしたくない、と必死で学校に来るはめになった。

「ね、先生。赤ちゃん動いた？」

「先生、それマタニティ？」

ＨＲ前だというのに、チャミとカリナは職員室から離れようとしない。

少しでも暖をとりたいのだろう。この学校の教室には暖房がない。

晴れることの多い関東地方だから、窓を閉めて置けばサンルームのように温かくなり、暖房は必要ないともいえるが、今日のような日は地獄だろう。

スカートの下にジャージを着込み、見た目などどうでもよくなっている女生徒さえいる中で、この二人のミニスカートの下はどうやら生足らしい。

鳥肌が立ち、網目状に紅くなっていかにも寒そうな太ももも。

それを見ると、聡は可哀想になって咎める気になれない。

聡はといえば、今日は初めて身につける冬用のマタニティの下に、パンツを重ねて着ている。

そのとりあわせは、まだお腹がさほど大きくなっていないということもあり、意外にお洒落に見えたらしくチャミは『カワイイ～』を

連発する。

「センセイ、今日イブだね」

「ダンナさん帰って来るんだよね？」

若い女の子には、今日のイブの過ごし方はとても重要なのだろう。

だから

「ううん」

と聡が答えたとたんに二人は職員室にいることも忘れたように、揃って『えー！』と大声をあげた。

聡はあわてて、シーと口の前に指を立てる。

「超さみしくない？」

カリナが不満げに顔を斜めにしている。

「お友達と過ごすから大丈夫よ」

聡は嘘をつき笑顔をつくる。嘘に慣れていく自分が一瞬だけひっかかる。

それにもだいぶ慣れたのがやるせない。

「そうだよね。ケッコンしてるんだし。イブは今年だけじゃないもんね。ずっとあるもんね」

チャミの言葉にうなづきながら、聡は本当の相手……将を思う。

朝のニュースでは飛行機はあいかわらず欠航しているらしい。

将から新しく連絡が入らないということは、北海道から帰れる目途も付かずに往生しているのだろう。

あるいはホテルかどこかにとまって寸暇を惜しんで勉強しているのかもしれない。

――今日は、もしかすると一緒に過ごせないかもしれない。

それは昨日から覚悟していた。なのにやはり寂しい。

来年。将と一緒にすごすクリスマスイブは果たして本当にやってくるんだろうか。

子供はもう引き返せないところに来てしまっていたが、将との未来については、あいかわらず聡は見通すことができないでいる。

全校集会と、通知表を渡してしまうと、2学期の終業式はおわり、解散になる。

だが、3年の進学希望の生徒は、残って自習をすることを許されていた。

ただあまりにも寒いので、いつもの教室に代わって今日は暖房が効く図書室を開放している。

教師たちは、自習する生徒たちの質問に答えるべく、職務をしながら午後も残ることになっているのだ。

学食から戻った聡は、1枚残った将の通知表をもう一度開いた。

英語だけは星野みな子に首位の座をあけわたしているものの、他はすべて学年でトップになっている。

だが……あいかわらず東大には遠い。

北海道ロケに入る直前に受けたS予備校のセンター・プレ試験では、足切りですらきわどいレベルだった。

英語の成績が一番厳しいのは……やはり準備時間不足なのだろうか。

しかし、学校に来ていなかった将は、つい最近まで英語はやっと中学生レベルだったのだ。

そこから考えると飛躍的な進歩をとげたといえるが、依然東大には届かない。

何かのおりに、将がフランス語がかなりできることを知った聡は、いっそフランス語で受験してみることを勧めてみた。

しかし将は

『絶対英語で受ける。聡の科目だもん。聡に教わりたい』

と、頑として受け入れなかったのだ。

英語が他の科目の足を引っ張っている状況に、将よりもむしろ聡が焦っていた。

聡は携帯をあけた。将からの返信はあいかわらずない。

さっき、こっそりかけた電話も

『ただいま、電話をとることができません』というメッセージが流れるばかりだった。

それを、集中して勉強している、と聡は理解するしかない。

この図書室にも２０人あまりの３年生が図書室に残って、一心に勉強している。

わからないところがあったら、すぐに教師に聞ける、学校での自習は、受験生たちには好評だった。

皆、昨年の卒業生に比べると、数段成績があがっているといえる。

将やみな子を始め……今年こそは低偏差値校としての悪評を払拭できる進学実績が残せるかもしれない、と校長や教頭も期待しているのだ。

生徒から頼まれた採点を終えた聡は、窓から空を見上げた。

午後3時をすぎたばかりだというのに薄暗い空からはあいかわらず塵のように雪が舞い降りている。

そのとき、図書室の扉が開いて、多美先生が入ってきた。

天気があいかわらずよくならないので、暗くなる前に、生徒達を帰そうということだった。

聡は了解すると、残っていた20名ほどの生徒たちに帰るよう促した。

聡が校門を出た4時には、もうあたりの雪が紫色に見えるかのような暗さだった。

さした傘が重くなっていくような雪。白く立ち上った吐く息が、すぐに落ちてきそうな寒さだ。

「ホワイトクリスマス、どころの騒ぎじゃないわね」

聡は小さくつぶやくと、ため息をついた。

昨日、急いで仕上げたマフラーは今日は将に渡せないだろう。

「今日の晩御飯、何、食べようか」

聡は、下腹の小さな命に向かってそっとつぶやいた。

そのとき、夕闇色に染まった雪の舗道を踏みしめる聡を、車のヘッドライトがカッと照らした。

ヘッドライトに切り取られたように、道路上に雪が舞うのが照らし出されている。

振り返った聡は、その国産車と……運転している男を見て、あっと叫んだ。

319◆目撃

「あ。あたし学校に忘れ物しちゃった。先に帰ってて」

「えー？みな子ぉ？」

改札の前で、みな子は急に友人のすみれを置いて学校へと引き返した。

3時すぎに下校したものの、駅前のマックですみれの恋話を聞いているうちに時刻はもう4時を大きくまわっている。

すみれは、クリスマス・イブの今日は、付き合っている先輩のバイトが終わるのを待って、イルミネーションの街を歩くそうだ。

しかし、この大雪だ。すみれはマックの窓から恨めしそうにやまない雪をのぞいていた。

だが、相手がいるならいい。

イルミネーションが仮にまったく見えなかったとしても、寄り添って歩けるんだから。

みな子は、すみれに軽く手を振ると、止まない雪の中、学校へと引き返した。

忘れ物は、英語のプリントだった。

さっき、聡に『じゃあもう少しレベルの高い過去問を探しておいて

あげる』と言われていたのだ。

みな子はこのところ……まるで聡に張り合うように英語の勉強にせいを出している。

もともと得意だ、ということもあって、やればやるほど面白い。

本当は歴史……こと近代史のほうこそ苦手だからもっと時間を割く必要があったのだが、ついつい英語ばかりをやってしまう。

そして、市販の問題集をやるよりも、聡の解説が聞ける分、聡から問題をもらうほうがより実力がつく手ごたえを感じた。

憎らしい恋のライバルだけど、利用している感じは悪くない。

今日も、みな子は聡に英作文の添削を頼みながら、こっそりとマタニティの腹を盗み見ていた。

――早く、あのお腹が醜く脹れて、他の男の子供を妊娠していることがあきらかになればいい。

……突き詰めればそんなことを思っていたのだ。

北海道のロケが長引いて、今日の終業式に出席できなかった将。将が聡をまだ好きなのは直感でわかっていた。

だけど。聡のお腹が大きくなるにつれて、気持ちも冷めていくだろう……。

それを期待するみな子だが、今日の段階で聡の腹はまだあまり脹れ

ているように見えず、マタニティも単なるAラインのワンピースに見えて、みな子はがっかりした。

降りしきる雪の中、傘をさして、雪道を滑らないように学校へ引き返すみな子は、この1時間やそこらの間に、あたりがかなり暗くなったことに気付いた。

時計をみたが、まだ4時30分をすぎたばかりだ。

ようやく学校にさしかかったそのとき、みな子は校門を出てきた聡が、駅とは反対方向……つまりバス停のほうへ歩いていくのを見た。

「……先生！」

駆け寄ろうとしたみな子は、あと少しというところで、立ち止まる。聡の身体をヘッドライトが一瞬眩しく照らし、直後に彼女のすぐ横に国産車が止まったからだ。

まもなく運転席のドアが開いて、背の高い男がでてくるのを見た。

その男は……みな子はその男に目が釘付けになった。

開いたまなじりに冷気が突き刺さるのもどうでもいいほど……。

「アキラ！」

車から出てきた男を見て、聡は目を真ん丸く開いた。

髪をニット帽ですっぽりと隠し、薄いサングラスをかけていたが、サングラスを取る前に聡は男の正体がわかっていた。

それはまぎれもなく、北海道から帰って来れないはずの将だった。

「……将！」

「ただいま……じゃない、メリークリスマス」

一刻ごとにその紫を濃くしていく夕闇に降りしきる雪。その中に微笑みながら将はたしかに佇んでいた。

「どうしたの！飛行機、欠航してるんじゃなかったの？」

将にかけよろうとした聡は、足元の注意を一瞬忘れてしまったらしい。

つるりと滑った身体が大きく揺れる。

「危ない！」

将はあわてて駆け寄ると聡の体を抱きかかえるように支えた。

聡がさしていた傘が、雪の積もった路面に音もなく落ちる。

「……セーフ。気をつけろよ、普通の身体じゃないんだから」

聡は、ひさしぶりの将のぬくもりに、学校のすぐ近くだというのも忘れてしばらくしがみついていた。

抱き合う二人に、さらさらと雪がかかる。

昼間の、ふわふわした花びら状から粉状に変わりつつある雪は、冷え込んだ空気の結晶のようだ。

将は聡の肩に手をあててそっと身体を離すと、落ちた傘を拾って渡した。

「赤ちゃんはどう？動いた？」

コートとマタニティの上から、少しだけ膨らんだお腹をさがそうとした。

吐息が唇に凍りつきそうな寒さの中で、将の身体も、お腹をなでる手も確かに温かかった。

「将、どうしたの？信じられない……」

聡は答えもせず、お腹をなでる将の顔を呆けたように眺めていた。

「飛行機だけが交通手段じゃないだろ」

将は微笑むと顔を上げて、聡の頬をいとおしげに掌で包んだ。

それはヘッドライトの光りの中、寒さでリンゴのように赤くなっているのがわかった。

聡は車に目を移した。

「は？福島ナンバー？」

驚く聡に、将はいたずらっぽく笑う。

「そ。レンタカー。ずっと、運転してきたんだぜー」

「えー？福島から？」

「それはあとで。寒いだろ、乗れよ。スタッドレスタイヤだから雪でも安心だぜ」

将は助手席のドアをあけると、聡を車の中に招きいれた。

車に乗ろうと腰をかがめると、聡の中では、わずかにお腹が存在を主張するようになっている。

将は、聡が持っていた傘を差しかけて聡が乗り込むのを見届けると、自分も運転席に乗り込んだ。

みな子は、その国産車が走り去るまで……一部始終をずっと見ていた。

晴れていれば、ここにいるみな子に声をかけるのが自然なほどの距

離で……。

他人には、すぐには将だとわからない格好をしていたけれど、彼を恋するみな子にはすぐにわかった。

二人のほうは、車のヘッドライトに照らされた、空から大量にこぼれてくるような雪が壁になって、みな子は見えなかったらしい。

しかしみな子には、まるでスポットライトに照らされた舞台のように、二人が見えていた。

それを見る観客というよりは……雪の壁になり切ってしまったように、みな子は凍り付いていた。

……二人が、まだ、続いていたなんて。

抱き合う二人を見て、最初はまずその事実に息を飲む。

だが、聡への憎らしさが湧いてくる前に……聡のお腹をいとおしげにさする将をまのあたりにして。

みな子の中に次なる疑念が生まれる。

疑念は生じた瞬間に、確信となってみな子の心の真ん中で動かないものとなる。

……聡の、お腹の子供は、将の子だ。きっと……いや、間違いなく。

立ち尽くすみな子に、雪を含んだ風が一瞬強く吹き付けて、みな子は肩をすくめた。

320◆301～319話のあらすじ

将は聡と結婚したい旨を父で官房長官である鷹枝康三に打ち明ける。まだ早いと反対した康三だったが、将の熱意にほだされ、条件を出す。

その条件とは、東大に現役で合格すること、そして、実家に戻ることの2つだった。

高3になってから芸能活動で学校にあまり行っていない将に、それはほとんど不可能といえることだったが将はその条件を呑む。

一方、聡はその条件を聞いて取り乱し、子供を生む自信がない、と泣きじゃくる。

将は聡を抱きしめながら、ふがいない自分を情けなく思う（301～305話）

将は、東大受験のために、すべての芸能活動を中止して勉強に専念することにする。

だが、そんな将に、すでに撮影が始まっている連続ドラマの一流脚本家・元倉亮は「責任感がないのではないか」と責める。

「君はいつか大事な人をも切り捨てるに違いない」という予言におびえた将は、東大を目指しながら連続ドラマだけは続けなくてはならない羽目になる。

しかもそれ以来、元倉は将のセリフをわざと長くしたのだ。

将は北海道でのロケに苦戦しながら、自分の勉強のペースを徐々に掴む。

そんな将に、聡が入院したという連絡が（３０６～３０８話）

聡はあまりのつわりのひどさに、食事を思うように食べられずに衰弱していたのだ。

その数日前、聡は、康三の秘書・毛利から

「お腹の子の父が将であることは、ときが来るまで、絶対に秘密」と言い渡されていた。

お腹の父は便宜上、元婚約者の博史で、職場である学校へは彼と籍を入れたと偽るようにと指示されている。

入院しても思うように食事をすることができない聡の前に意外な人物が現れる（３０９～３１０話）

北海道から東京に戻った将は、聡を見舞うべく病院を訪れる。そんな将を毛利が阻む。

しかし、そこへ義母の純代が現れて、将を聡の病室へと招きいれる。義母の純代は、身寄りの遠い聡の世話をすべく、病院にやってきたのだ。

純代の、経験による的確な世話のおかげで、聡のつわりは回復する。純代は、将からの信頼を失ってしまった事件のことを聡に聞かせていた。

厳の遺言で、もう一度将からの信頼を取り戻そうと決意した純代は「自分は生みの母親なら絶対に見捨てないところで将を見捨ててしまった。

だから、今度は世間や夫が反対するようなことでも、自分だけは将の味方をしようと思う。

何年かかっても二人のことを認めさせる」と決心を聡に語っていたのだ（３１１～３１３話）

将は、かいがいしく聡の世話をする純代が信じられない。

今回のことも孝太のために自分を陥れるためのものではないか、と疑う将。

それに対し、純代は仮にこれがワナだとしても、自分を利用してきっと幸せになれ、と叱咤する（３１４話）

１２月も下旬すぎ。吹雪のため中断した将の元には、東京から純代の兄である岸田助教授の一家が訪れていた。

成績は上がったものの、あいかわらず東大合格圏には遠い将のために、論述問題の個人教授として純代が差し向けたのだった。

一方聡は妊娠５ヶ月を迎えてお腹が少しだけ膨らんでいた。

そんな聡の元に、実家の親から、毎年恒例の年末年始の帰省についての電話が入る。

しかし両親に妊娠を隠している聡は、年末年始はスキーに行くから今年は帰れないと嘘を付く。

また学校では、婚約者と籍を入れたことになっている。聡は生徒た

ちに嘘をつくのに心苦しい。

将を思う星野みな子は、将と婚約者の二股をかけていた聡を最初激しく憎むが、冷静さを取り戻していた（３１５～３１６話）

吹雪でスケジュールが押した撮影は１２月２３日に終了し、将は午後の便で東京へ帰ろうとする。

だが、関東地方を襲った大雪のため飛行機が欠航し、愕然とする。

受験勉強で忙しい将だが、クリスマス・イブだけは聡と過ごそうと約束していたからだ。

２４日になっても東京の雪は弱まらず、積雪３０センチを記録していた。

交通ダイヤは乱れ、空港もあいかわらず閉鎖されたままだ。

それでも終業式なので、通常通り学校に出勤した聡だが、この雪では将は帰ってこれないだろうと諦めつつ夕方を迎える。

そんな聡の前に、レンタカーで帰ってきたらしい将の姿が。

抱き合う二人を、星野みな子が見ていた……（３１７～３１９話）

321◆クリスマスの夜、二人　1

「このまま、大磯行こうか」

「え？こんな雪なのに？」

聡は将を振り返った。もうあたりは濃い紫色に沈みつつある。ヘッドライトには降りしきる雪が金粉のように反射している。

「うん。アキラこの間、俺の小さい頃の写真が見たいって言ってたじゃん。大磯にヒージーの分がしまってあるんだよ」

たしかにそんなことを言ったかもしれない。

将に似た赤ちゃんがほしい。そう思った聡は、将の子供時代を見てみたくなったのだ。

「それに」

将は運転しながら後ろを顎でしゃくった。

後部座席には細長い箱が置いてあった。シャンパンの瓶が入ったケースだ。

「大磯の家には暖炉があるんだ。暖炉の前で乾杯しようぜ」

将は、巌の遺言で大磯の邸宅を相続している。もちろんふだん住むわけにはいかないから、今まで通りハルさんに管理を頼んでいるのだが。

「大丈夫なの？道、混むんじゃないの？」

聡の心配には及ばなかった。昨日からの大雪で、クリスマスイブといえどマイカーを出すのは控えた人は案外多いらしい。

2日連続の積雪で、走っているのはスタッドレスやチェーンを装着した車がほとんどで、動けなくなる車も今日はさほどないとのことだった。

そういえば会社も臨時休業にしたところが多いという報道が新聞でされていた。

「高速も規制されているけど、なんとか通れるらしいよ」

提案の体裁をとりつつ、将はもうすっかり行く気のようだった。

聡も、雪に反射する緑やピンク、赤のイルミネーションを目にするにつれて行ってもいいような気がしてきた。

諦めていた将に逢えた嬉しさで、聡の心は一気に浮き立ったのだ。

「将、ちょっとあたしの家に寄っていい？」

「いいよ」

将は優しく答えるとハンドルを切って車線変更をした。

聡は手早く泊まれる準備を整え、将へのプレゼントのマフラーを手に取るとコーポの階段を急いで降りた。

吹き込んだ雪が、夕方の冷え込みで、ところどころにへばりついたまま凍っている。それを避けながら慎重に降りなくてはならない。

やっと車に乗り込むと、階段を降りる間に凍りそうだった肺がふーっと溶ける感触がした。

運転席で聡を待っていた将は、携帯を切ったところだった。

「誰に電話してたの？」

「ハルさん。夕食用意しといてって頼んどいた」

「悪くない？急で」

もう5時になるところだ。

「でもさ、ファミレスとかだと、お腹の子供によくないだろ。……いいんだよ。ハルさんも一人ぼっちなんだから、ケーキでも買っていこうよ。よろこぶよ」

将は、それでもまだ気遣う顔をやめない聡の頭にポンと、手を乗せると「行こう」とサイドブレーキを解除した。

走り出した車は、都心へとは逆に向かっているせいなのか、わりに順調だった。

通り過ぎていく街のイルミネーションを見て、聡は去年のイブを思い出した。

去年の将との約束。……逢いに行くつもりじゃなかったのに。やはり逢わずにはいられなくなって、都心のコンサート会場を目指した聡。

あのときタクシーはひどい渋滞に巻き込まれて……聡は将のもとへと、雪が舞う中、走りに走った。

……あのとき、将に会いにいかなかったら……今、自分はこうやって将の子供を身ごもっているんだろうか。

「あきら。何ぼーっとしてるの。眠い？」

将の声で、雪に照り輝くイルミネーションが、急に視界に戻ってきて、聡はハッとした。

聡の意識は完全に窓からタイムスリップしていたらしい。

「ううん」

聡は気を取り直した。

「将のほうこそ、福島からずっと運転でしょ？疲れてない？」

そう言いかけた聡は、疑問を思い出した。

「……それにしても、どうやって帰ってきたの？飛行機欠航してたんでしょ」

「ああ」

将は前を向いたまま愉快そうに頬をゆるめた。

２３日の夕方、旭川空港で、桃色の夕陽に聡を思い浮かべて。

そのとき、ぜったいに聡に逢いにいくことを決意した将は、カウンターに背を向けて歩き始めた。

「将くん。どうするの？」

詩織がそんな将の背中に声をかける。

「ＪＲは動いてるから、いけるところまで行ってみます」

「でも、東京は電車、動いてないわよ」

「……そしたら、タクシーででも帰ります」

「めちゃくちゃね」

詩織はあきれた声をあげた。

しかし、3秒後には将の隣にかけよって、にっこり微笑んだ。

「タクシー代、ワリカンするわ。あたしも一緒に行っていい？」

かくして今から24時間前。東京をめざしての遥かな旅が始まったのだった。

二人は旭川から札幌、札幌から千歳空港とJRの特急で移動してみることにする。

旭川発の本州便はすべて欠航だったが、千歳発はまだあるかもしれないという望みをつないだのだ。

「あたしも、絶対に東京に帰りたいの」

詩織はライラック号の中で告白した。

そのときの詩織は、絶対、という強い言葉がおおよそ似合わない、柔らかい笑顔だった。

冷ややかな色に暮れていく窓の外とは対照的に、車内は暖房で暑い。

それもあるだろうが、うっすらと素顔の頬を染めた……ピンク色の頬は、聡のそれとぴったりと重なる。

その顔をみれば、『何で』などという質問は野暮だった。

たぶん、彼女にも将と同じく、絶対に逢いたい……クリスマスイブを一緒に過ごしたいひとがいるのだろう。

「僕もです」

将の同意に詩織は何も問い返さずに、伊達眼鏡の下の黒目がちの瞳を将に向けた。

詩織は伊達眼鏡に、髪はわざとやぼったい三つ編みにしている。

将はニット帽に髪をすっぽりと入れこみ、同じく流行遅れのオレンジ色のサングラスをかけている。

そんな珍妙な二人が芸能人とは、幸い他の乗客は気付かないようだった。

幸い千歳では、最悪の場合引き返すかもという条件付で、仙台行きの最終便が出発するようだったので、それに駆け込むように乗り込む。

しかし、安心したのも束の間、仙台の視界の悪化で飛行機は花巻空港に着陸することになってしまった。

二人が花巻空港に降り立ったのが２０時３０分だった。ここから仙台までバスが用意されているという。

「札幌に引き返さなくてよかったわね」

それでも詩織は、気丈に微笑むとバスに乗り込んだ。

花巻・仙台間は通常なら2時間程度とのことだったが、だんだん速度がダウンしてきたのが乗客にもわかった。

雪で視界不良になり、渋滞し始めたのだ。

宮城県内に入ると、高速道路の意味をなさないほどの速度まで落ちてしまった。

日本海側と違って東北でも雪のすくない宮城で、ここまで降るのは珍しいらしく、車の列はとまどいを顕わにのろのろと動くしかない。

結局、仙台市内に着いたのは、１２時近くなっていた。もう東京方面の列車もないので二人は駅前のビジネスホテルに部屋を取った。

もちろんシングルを2部屋だが、駅前のビジネスホテルのアルバイトらしきフロントは、二人のチェックインにあきらかに好奇の目を向けた。

なぜなら……伊達眼鏡で変装こそしているものの、二人とも本名で芸能活動をしているからだ。

それにカードで支払いをする以上、偽名は使いにくい。

名前を見れば、よほど疎い人でない限り、興味を持つのは当たり前だった。

雪でどうなるかわからないからと朝7時にはチェックアウトした二人だったが、案の定雪による徐行運転で新幹線は遅れに遅れた。

しまいには郡山でストップしてしまった。

「嘘だろ。こんなところで」

昨夜、ホテルでも3時頃まで英語の勉強をした将は爆睡していたのだが、詩織に起こされて唖然とした。

「動くのを待つ？」

詩織が伊達眼鏡の下から将に訊く。黒目がちの瞳が不安げに少しゆがんでいる。

8時には通過しているはずの郡山なのに9時30分に近いのだ……。

将は新幹線の窓から空を苦々しく眺めた。

あの、ニセコ山頂での吹雪を思わせる空は白いくせにべたっと重かった。

そして日本地図を頭の中に思い描いてみる。旭川に比べるとずいぶん……聡の近くに来ているはずなのに。

——ここまで来てるのに。

将は唇を噛み締めながら腕時計を見た。９時３０分。新幹線は動くだろうか……。

しばらく悩んだ将だったが、意を決すると、ついに立ち上がった。

「将くん？」

「俺、自分で運転して帰ります」

「え？」

詩織の瞳が真ん丸くなる。

「待ってても動かないかもしれないし。レンタカー運転しながら、電車チェックして動いてるようだったら、乗り捨ててそっちに乗ればいいし」

「それで、駅でレンタカー借りたんだけど。面倒くさくて、電車チェックもしないで結局運転してきちゃった。郡山からここまで７時間掛かったよ。普通だったら３～４時間なのに」

将の話を聞いていた聡は、口をあけたまま将を呆れたように見つめていたが、やがて苦笑すると

「もう。無茶するんだから」

と将の肩を軽く叩いた。

「おかげで、雪道の運転が上手くなったぜえ」

将が笑ったそのとき、ちょうど目の前の信号が赤信号になった。慎重にブレーキを踏む将の肩のあたりに、聡はそっと寄りかかってみる。

「でも、よかった……。帰ってきてくれて」

将の肩のぬくもりが髪に伝わり、聡の心を温めていく。

すっかり暮れた窓の外は積もった雪。

積もった雪の上に、信号の赤、緑の美しいクリスマスカラーに染まりながら新しい雪の華が重なっていく。いつもの東京では見られない光景だ。

将も聡の重みを肩に感じながら幸せだった。将の中で、聡とすごす時間が雪のように静かに降り積もっていく。そんな幸せに将は浸った。

なお、詩織が一緒だったことについては、必要ないだろうと、将は話から省いていた……。

これが年明けに大スキャンダルを起こすのだが、今の二人はまだそ

んな予感もない。

これからすごすイブの幸せの予感に、早くも酔いしれていた。

322◆クリスマスの夜、二人　2

いつもの倍の時間をかけてたどりついた大磯でも、多少弱まったとはいえ雪が降り続いていた。

外灯や信号に照らされた夜の景色は、いつもより明るく見える。

「こんなの初めて見る」

思わず将がつぶやいたように、巌の邸宅の、巌がこよなく愛した庭木も綿帽子のような雪にすっぽりと覆われているのがわかった。

雪明りというのだろうか、夜だというのに雪自体がぼうっと光るようだ。

ガラス障子から漏れるわずかな明かりはまるで行燈のようだ。

「きれいね……」

聡は将の後ろに続くとつぶやいた。

「まあまあ、将さま、雪の中お疲れ様でした」

二人の到着を聞きつけたのか、ハルさんと西嶋運転手が引き戸を開けて転がるように出てきた。

玉砂利の庭もすっかり雪に覆われているが、玄関へ続く道だけ雪が取り除かれている。

たぶん将が来ると聞いて雪をあわてて取り除いてくれたのだろう。

「急で、すいません」

「さあさあ、寒いでしょう、お入りになって」

頭を下げながら、聡は、この二人にはお腹の子供はどう説明すればいいのか、迷った。

コートを脱げば、聡が普通の身体ではないことは、すぐにわかるだろう。

「アキラ、入ろう。……あ、いい匂い」

将が少しとまどった聡の肩に手を添えながら、鼻を鳴らした。

「いやだ、それが材料が揃いませんで。寄せ鍋ですよ」

ハルさんは謙遜したが、旨そうな匂いは明かりと共に玄関先まで漂ってくる。

さあ、とうながされて、とまどった聡は、引き戸の前で将に囁いた。

「どうしよう」

「何が？」

きょとんとした将は、せっかく声をひそめた聡に不釣合いなのんびりとした声を出す。

その声に、ハルさんや西嶋が振り返る。聡は息を飲むと、配慮の足りない将を軽く睨み

「あたしの……」

といいながら、下腹にさりげなく手を添えた。

「ああ」

将はようやく聡の心配がわかったらしい。聡に微笑をかえすと、ハルさんと西嶋に向き直る。

「あのさ。ここだけの秘密だけどさ、俺たち、結婚するんだ」

「まあ」

ハルさんは眼鏡の縁に手を添えて口を丸くあけたが、その顔には非難も蔑みも含まれていなかった。

「それは、おめでとうございます」

西嶋があらたまったように二人に頭を下げる。

「しょ……鷹枝くん」

聡はひやひやしていた。結婚できるかどうかは、まだわからない。将の受験次第ではないか。

「それでさ。俺、5月には父親になるんだ」

将は流れのいきおいのまま、ごく自然な形を主張する。

「まあ……」

しかし、今度はハルさんも西嶋も、驚いて口を真ん丸くあけた。

「じゃあ、聡さんは……将さまのお子を？」

ハルさんが口を利いたのは、しばらく経ってだ。

「……すいません」

聡は思わず下を向いた。

この二人にとって将は大切な御曹司だろう。その由緒正しい御曹司をたぶらかしたとんでもない教師であろう自分に身の縮む思いがする。

「何で謝るんだよ」

将は笑いながら、聡の肩に手を添える。

身に染みる寒い外気の中で、聡は目だけに急速に熱い涙が集まっていくのを感じた。

久しぶりに感じる罪の意識に、聡の感情は大きく揺れたのだ。

「……そうですよ。おめでたいことですよ」

ようやく聞こえたハルさんの声に顔をあげた聡の瞳から、涙がぽろ

んと落ちた。

涙はこぼれたとたんに冷えて、頬に冷たい軌跡を残した。

ハルさんの眼鏡の奥の瞳はあたたかだった。

「……こんなところにいるのは体の毒です、早く中にお入りください」

西嶋が促す。

二人とも、聡を咎める様子はなかった。ただ聡を気遣うべく、温かい瞳でみつめていた。

「すいません」

そんな温かさに、聡の涙は止まらなくなってしまった。

「アキラ、何で泣いてんのさ。早く入ろう。ケーキが凍っちゃうよ」

将は駅前で買ったケーキを西嶋に渡すと、聡の体を抱きかかえるようにして引き戸の中に入った。

「ふう。腹いっぱい」

将は、ついに箸を置くと椅子によりかかった。そんな将を見て、ハ

ルさんと西嶋、そして聡が微笑む。

この古いうちにくると、将は少し子供返りするようなのだ。

ハルさんと西嶋は固辞しようとしたのだが、せっかくだからと一緒に鍋を囲んでいる。

「聡さん、足りました？お腹に赤ちゃんがいるんだから、たくさん食べないと」

食後のほうじ茶を準備しながらハルさんが聡に訊く。

巌の畑でつくった野菜に、急遽集めたらしい魚介類を入れた寄せ鍋はハルさん特製のダシが素晴らしく美味しかった。

４人でもかなりの量があったはずなのに、最後に入れたウドンまですっかり食べ尽くしてしまった。

「はい。もう充分に」

聡もようやく、心から微笑むことができた。

巌にかしづいてきたこの二人が、将が選んだ聡を心から歓迎していることがわかったからだ。

それほど温かい、こころづくしの食卓だった。

シャンパンは暖炉でと言っていた将だったが、ここでみんなで乾杯した。それはそれで、楽しいものとなった。

「少し、腹ごなししないとケーキは無理だな」

将は大儀そうに腹をさすった。まるで将が妊娠しているような仕草に聡は口元を緩める。

「こんな雪じゃなかったら、ミサを見にいけたのに残念ですね」

ハルさんはほうじ茶を淹れながら古い柱時計を見た。

「ミサ？何それ？」

「いえね。教会でクリスマス・ミサがあるんですよ。このあたりの子供たちが、教会に集まって賛美歌の練習していたんですが、それはそれはきれいな歌声でねえ。ぜひ見に行きたかったんですけど」

西嶋の解説に、聡が興味深い顔をする。

「教会って、小学校の近くの？」

「はい。9時からとのことですが。この雪じゃあね」

将も柱時計を見た。ちょうど9時になるところだ。

「アキラ、ちょっと行ってみる？」

「え」

聡は、長い睫をしばたいた。頬が輝いているのは、行きたい証拠だ。

「将さま、外はまだ雪が降ってますよ」

ハルさんがとんでもない、と眉を寄せる。西嶋は、呑んでなかったら私がお送りできたのに、と舌打ちした。

「でも俺が通ってた小学校の近くだぜ。すぐ近くじゃん。あったかくしていけば大丈夫だろ」

食い下がる将に、聡は同意の視線を送った。

こんな寒い夜なのに、聡はなぜか、表に出てみたかった。将と二人で歩いてみたかったのだ。

「では、せめてタクシーをお使いください」

責任感の強い西嶋が提案したせいで、歩けばたかだか10分ぐらいの距離にタクシーを使うことになってしまった。

「みな子、遅かったじゃない」

帰宅したみな子に、母親が咎めるような声を立てた。もう9時すぎている。

真面目なみな子だから、この時間の帰宅は極めて珍しかった。

「ごめん。友達んちで、勉強してたから……」

みな子は小さく言い訳する。本当は、勉強なんかしていなかった。

将と聡がまだ続いていたこと。そしておそらく……聡のお腹の子の父親は将だ、ということがわかってしまいショックを受けたみな子は、呆然としたまま、山手線に揺られていたのだ。

雪による視界不良で遅れ気味の山手線のシートに腰掛けたまま、3周はしただろうか。

クリスマスイブ、そして週末の今日、乗客は次々に乗っては降りて……みな子がずっと座りっぱなしだということに誰も気付かなかった。

沿線のネオンやイルミネーションを窓に映しながら、東京を巡るメリーゴーラウンドと化した列車の中、人々は楽しそうに浮き立っていた。

そんな人々の中で、沈んだみな子の表情はかなり異質だった。

しかしそれぞれの幸せしか見えていない今日の乗客である……いや気付いたとて手をさしのべるはずもないのだけれど。

「ごはんは？」

「いい。いらない」

母親を振り切ってリビングダイニングを突っ切って足早に部屋に引っ込もうとするみな子を、なおも父親がその名を呼んで引きとめる。

みな子は立ち止まるしかない。

「何？」

さもめんどくさそうに訊き返す。

「大事な話があるんだ。ここに座りなさい」

父親の重い口調にみな子は仕方なくダイニングテーブルに腰掛けた。

今度から高校生になる弟のヒロトもいる。父親に目で促されて母親も加わった。

考えてみれば、一家でこんな風に集まるのは本当に久しぶりだった。なのに、どことなく緊迫感が漂っている。クリスマスらしい楽しさはまるでない。

「みな子。ヒロト。お父さんは、４月から大阪に転勤になる」

あらかじめ知っていた母親を除いて、二人の子供は目を丸くした。

「大阪ぁ？」

ヒロトが思わず声をあげる。

「本当は１月から大阪勤めなんだが、あまりに急だから、３月までは出張で対応することになった。それで」

父親は二人の子供の顔をかわるがわるに見つめた。

「二人とも関西の学校を受験しなさい」

みな子は息をつめて、父親の顔を見つめていた。

否。視線は父の顔に固定していたが、心は違うところを見つめていた。

さっき、列車の中で……将と一緒に大学生になる夢が、大きく揺らぐのを、ただ見つめていたみな子は……今度はそれが崩れていくのを感じていた。

323◆クリスマスの夜、二人　3

小さなモルタルの教会は、ゴシック様式をかろうじて模した尖塔を、降りしきる雪の夜空にぼやけさせていた。

だが、せっかくタクシーまで使ったにもかかわらず、当の教会は、ミサを一目見ようとする見物人が入り口まで溢れているありさまだった。

入り口にしつらえられた大きな雪だるまも、人々の熱気に汗をかいたようになっている。

小学生の聖歌隊の親たちが多いらしい。それぞれがカメラを手に自分の子供の出番を待ち構えている。

まだミサは始まったばかりらしく、神父の声が聞こえていたが、あたりには厳粛さはまるでない。

「どうする？」

伊達眼鏡をかけた将は入り口の段の下から背伸びをしながら中をのぞいた。

「……やめとこうか」

入り口にたむろする人だかりに、思わずのけぞるような体勢になりながら聡は答えた。

この人だかりに、芸能人である将が現れたということがバレたら、

大変な騒ぎになってしまうかもしれない。

「肩車してあげようか。中のツリーきれいだよ」

おどけて将は微笑む。聡は微笑で返すと、入り口から踵を返してビニール傘をさした。

降り続く雪は、人で踏み固められた上にさらにうっすらと積もっている。

ビニール傘の視界もあっという間に張り付く雪で閉ざされていく。

「アキラ、こっち」

足元に気を取られていた聡が振り返ると、将は教会の裏手へと続く新雪の上にいた。

２０センチにも降り積もったなめらかな雪の表面に将の足跡が数個の穴となって残っている。

「なあに？」

聡は慎重に将のつけた足跡に自分の足をあわせながら将の行く方へついていった。

教会の裏は、小さな公園になっていた。雪に覆われた砂場とブランコ、ベンチが、暗い水銀灯に照らされて滑らかな影をつくっていた。

将は足を振り上げるようにしてズボズボとブランコに近づいた。

ブランコの腰掛の上にも、まるで豆腐のように四角い雪が乗っている。

それを手袋の手ですとんと落とすと、聡を手招きした。

「ここで聞こう。賛美歌」

「濡れてるじゃない」

木の座面は、雪を払い落としたあとも水気があった。そこに腰掛けるのは憚られた。

「平気」

将は自らがつけていたマフラーをはずすと、ためらいもなくブランコに敷いてその上に腰掛けた。

「聡はここ」

雪に目を細めながら、自分の膝の上を指差した。マフラーがなくなった長い首が寒そうだ。

それを見て、聡は「あ」と声を出すと、バッグから紙袋を取り出した。

「アキラ、寒いから早く〜」

マフラーがなくなって震え上がった将は、ブランコの上で縮み上がりながら、自らの湯たんぽである聡を呼ぶ。

「将。これ。クリスマスプレゼント」

本当は、教会の中で渡せればと思って持ってきたものだ。

「え、ここで？」

将は雪交じりの風に震えながら受け取る。聡はうなづきながら

「早くあけて。今一番役に立つから」

といいながら、将にビニール傘を差しかけた。

この寒さだ。リボンを模ったシールをきれいにはぐのに、思った以上に時間がかかる。

中からは……マフラーが出てきた。

「わ……。これ手編み？」

将はその長いマフラーをこれ以上ないほど、うやうやしく紙袋からそっと取り出しながら聡を見上げた。

「早く巻いて。凍えちゃうよ」

聡は繰り返し首を縦に振りながらも、うながした。本当に寒い。

マフラーにタイツ、厚手の靴下、カイロ……と重装備をしている聡でも寒さで顔がこわばりそうになっている。

「マジ……うれしー。俺、手編みなんかもらったの初めて」

将は寒さも忘れたようにマフラーに見入っている。暗い水銀灯の下でも、それは将の好きな色だということがわかった。

好きな色、なんて話し合ったこともなかったのに、聡がそれを知っていたことにも将は深く感動していた。

「あんまり見ないで」

ついに聡は将の手からマフラーを奪うと、その首に無理やり巻いた。

「最後のほうとか急いで編んでるから不揃いなのよ」

そういいながら長いマフラーをぐるぐると将の首のまわりに巻きつける。

「アーキラ！」

急に将が聡の手を引っ張ったので聡は小さく悲鳴をあげて、将の胸に倒れ掛かった。

持っていたビニール傘が、聡の手から落ちて新雪にさくっとささる。

将は後ろに倒れまいと、もう片方の手でブランコの鎖を握り締める。

「もう、危ないよ」

顔をあげた聡のまん前に、将の顔がある。水銀灯に照らされた二人の吐く白い息が、溶け合ってのぼっていくようだ。

「ありがとう……。アキラ」

そのまま将は聡を抱きしめた。雪が花びらのようにくっついた柔らかい髪の毛に、顔をうずめる。

体温のせいだけではなく……心から将は聡のぬくもりを感じていた。

自分もクリスマスプレゼントを用意していることを将が告げようとしたとき

「あっ？」

聡が鋭い声をあげて、将の顔を見つめた。眼を真ん丸く見開いて、しきりに瞬きをする。

その長い睫に、雪の華がひとひら、僥倖のようにかかって落ちていった。

「何？」

「あっ」

将の問いには答えず、聡は、今度は俯いた。将から完全に離れると、立ってお腹をさすっている。

「どうした。……お腹どうかした？」

心配になって立ち上がろうとした将は、雪が舞い落ちる夜の中で、輝くような聡の顔を見た。

「動いた」

祝福のように舞い落ちる雪の中に立つ聡は、将を見つめて一声あげた。

「すごい……。動いてる」

聡は将からすぐにお腹に視線を移し、コートの上から下腹をさすっていた。

ブランコから離れられないまま、聡を見守る将は、聡をよく見ようと伊達眼鏡をはずした。

そしてようやく……聡のお腹の中の、小さな命が活動を始めたことを知った。

「動いてる、動いてるよ！将」

聡は将に向き直ると、呆けたような将の手をとってお腹のあたりにあてた。

「ほら」

ただでさえ、膨らみが小さい聡のお腹だ。厚いコートの生地に隠されて、将は小さな身体がどこにいるのかわからない。

必死で探る将をよそに、聡は

「あ、ほらまた」

と声をあげた。

しまいに将は、聡の下腹に抱きつくような姿勢で耳を澄ました。

しん、と静まり返った中、お腹に神経を集中させる将の目には、音もなく雪が積もっていくのが映っている。

……ぴくん。

「……あ」

厚いコートの下で、聡の腹がかすかに脈動する気配があった。

「ね？」

聡が誇らしげに将を見下ろす。再び、動く。……今度ははっきりとわかった。

小さな命が将に気付いて手を延ばしたのかもしれない。

「……本当だ」

将は感動のあまり、しばらく聡の下腹に抱きついたまま動けなかった。

それに対して胎児は、今起き出したように、さかんに聡のお腹の下で体を動かしているようだ。

あの夏の終りに、二人が結ばれた証の、愛の結晶が、ここまで成長したのだ。

自分と聡の血を受けた……子供がここで小さく主張を始めている。

そのとき、教会のほうから、『きよしこの夜』のオルガンの調べが流れてきた。

1フレーズのあと、子供たちによるハーモニーが重なる。

その透き通った歌声は、まるで聡のお腹の子供の声のようだった。

「始まったね。歌」

聡の声に、将はやっと立ち上がる。

冷たい水銀灯の下で自分を見上げる聡の頬は、紅く昂揚しているのがわかった。

将は、そのいとおしい顔をそっと包む。紅い唇から吐き出される息は白い炎のようだ。

喜びに潤んだ黒い瞳には将だけが映っている。

「ありがとう。アキラ」

将はもう一度静かにつぶやくと、もう一つの命を宿したその身体をそっと抱きしめた。

誰よりも大切な人。

そしてその人との間にできたかけがえのない命。

一生、守っていく……将は誓いを聞こえてくる聖歌にこめながら、聡の顎をあげた。

あいかわらず降りしきる雪。時間ごとに冷たく尖っていく空気の中で、お互いの唇だけが温かく柔らかい。

銀色に輝く夜の雪の表面に、ブランコと一緒に、二人の影が青く重なっている。

324◆クリスマスの夜、二人　4

「行こうか」

ブランコで将の膝の上にいた聡が立ち上がった。

まだ雪と聖歌は続いている。今『衆人こぞりて』が始まったところだ。

「終わったら、みんな一斉に出てくるでしょう?」

出てきた人々が、将を見つけたら騒ぎになるかもしれないことを、聡は危惧していた。

そして、活発に動いていたお腹の胎児も少し静かになった今が、帰り時かもしれない、と判断したのだ。

まだ、歌がたけなわのうちに教会を後にしたほうが静かに帰れる、という聡の提案はもっともなので将はブランコから立ち上がった。

来るときにつけた穴のような足跡に足をあわせながら、二人は教会の前までやってきた。

教会の扉は閉められていて、人々が出てくる気配はない。

扉の隙間から、暖かい色の光と、透明な歌声が漏れてくるのみだ。

あいかわらず舞い落ちてくる雪は、少し離れただけで視界から教会をぼやけさせた。

「タクシー呼ぼうか」

携帯を取り出そうとする将に、聡は傘を差しかけながら首を横に振った。

「歩こう。１０分くらいなんでしょ」

「寒いだろ」

「いいの」

聡は将の傍らに寄り添うと、その腕に軽く手をかけた。

聡らしくない大胆さに将は思わず傍らの聡の顔を見下ろす。

聡はちょうど将の顔を見上げていたので、目が合った。とたんに聡は柔らかく微笑んだ。

傘の下まで舞い込んできた雪がピンク色のほっぺたについて……はかなく溶けたとたん、聡は俯いた。

瞳の代わりに庇のように長い睫だけが聡を代弁するかのようだ。

「将と……歩きたいの」

聡はそう呟くと、もう一度目をあげた。いたずらっぽい瞳だ。

考えてみれば……二人で寄り添って歩くチャンスは少なかった。

もともと教師と生徒という境界が二人の間に横たわっている。

それに将が芸能界に入ってから二人で寄り添って歩く機会はほとんどなくなってしまった。

将は帰路へと踏み出しながら記憶をたぐる。

二人が結ばれたあの清流荘への夜道を除けば、大悟に痛めつけられて面相が変わったときに、手をつないで歩いた、病院から商店街までの短い区間が最後だ。

あのときの入道雲……そして、汗に湿った温かい手のひら。あの直後のことと共に将ははっきりと覚えている。

『俺を裏切るんだな、将』

ふいに大悟の声が大音量で蘇り、将は顔をあげた。

顔をあげた将の頬に寒風が鋭く刺さって将は目を細めた。

次の瞬間……舞い乱れる雪の中に、やせ細った大悟の姿を見つけた将は、眦をカッと見開いた。

「どうしたの？」

聡の声に、大悟の幻はあっけなく消えた。見えるのは暗い水銀灯に

照らされた白い乱舞のみだ。

「何でもない」

救われた証拠に将は笑顔をつくる。

それは聡が久しぶりに見る、翳がある笑顔だった。

聡は、将の腕にしがみつくように自分の腕をからみつけた。こうすると歩くたびに聡の半身が将にふれる。

自分はここにいる……言葉を使わずに、確実に伝えるために。

「雪の日って好き」

とうとつに聡は言った。『好き』というには、過ぎるほどに舞う雪だ。

ここを歩き慣れた将でも進む方向がかろうじてわかる程度の……大雪。

本当なら、ちょうど食べごろのみかん畑の中を歩いているはずなのに、しばらく目をこらさないと影すらも見えない。

ぼんやりしていたら、道を見失ってしまうだろう。

車で踏み固められている雪道は、二人が歩くごとにギュッギュッと

いう音をたてている。

将が差しているビニール傘にはすぐに雪が積もり重くなる。

とてもじゃないけど『好き』なんて言える状況ではない。

「なんで？」

将の問いに、聡は将の腕にしがみついたまま、顔をあげた。

その濡れたような瞳が、将を映して微笑んだ。

「ニセコを思い出すし……それに、こんな雪の日じゃないと、こんな風に将と相合傘で歩けないでしょ」

聡は、その低めの声でゆっくりと答えると、将の腕にからめた腕にいっそう力を込めた。

こんな風に野外で、聡から積極的にふるまうのは初めてかもしれなかった。

寒さゆえに誰もいない道。視界をぼかして舞う雪。

二人が……世間の目から逃れて、こんな風に寄り添い歩けるのは今しかないのだ。

「ずうっと……こんな風に将と歩きたいな」

将は、大悟の幻でこわばった心が、急激に……まるでバターのようにとろけていくのを感じた。

いよいよ冷え込んでいくような夜道だけれど、将の胸の中は温かかった。

将にも、この雪の夜道が、かけがえのないものに思えた。

聡がそばにいれば、どんなに寒い場所でも、陽だまりに変わるのだ……。

「あきら」

将は、吐息と共に、その名前を柔らかく発音する。

「……なあに」

「子供の名前だけどさ」

二人が今、歩いている雪道は、温かい陽射しに満ちた未来へと続いている。

そんな願いを込めて将は子供の名前を口にした。

「太陽の『陽』の字で……女の子だったら”ひなた”ってどう？」

「ひなたちゃん？」

聡は白い息と共に何度かひなた、ひなたちゃん、ひなたさん、と繰

り返した。

「いいんじゃない。可愛くて。でも男の子だったらどうするの？」

まだ性別がわかっているわけではない。

聡は、将に似ていれば、女の子でも男の子でもどちらでもかまわないと思っていたが、将はどうやら聡に似た女の子を希望しているらしかった。

「男だったら、同じ字で”ヨウ”でいいよ。陽太とか陽治とかでもいいし」

”ひなた”を口にしたときよりは、どうでもいいといった口調に聡はクスッと笑う。

女の子の名前が出たのは、そんな希望が、つい口をついて出てしまったに違いなかった。

「将は、太陽の『陽』の字が好きなの？」

「うん。……アキラは俺の太陽だから。そんなアキラが産んでくれる子供だから」

聡は再び将を見上げると目を見開いた。

将は聡の視線に気付くと、照れくさそうに舌を出した。

「クサかった？……クサいよなー。あー、俺バカ」

ひとしきり呟くと、さもバツが悪そうにそっぽを向いてしまった。

「でもさ……アキラがいてくれたから、アキラと出会えたから、俺はここまで立ち直れたんだぜ」

それでも将は、聡に横顔を向けたまま続けた。

聡が将を温かく照らしてくれたから……将は再び、自分自身の未来を信じることができるようになったのだ。

聡がいなかったら……それを考えるのも恐ろしいほど冷たい孤独の中で、将は堕ちるところまで落ちていっただろう……。

白い煙になった将の告白は、水銀灯に照らされながら降りしきる雪の中へと溶けていった。

その横顔の、マフラーに見え隠れする喉仏から顎のラインを、聡は腕をからめたまま見上げていた。

そして、ふいに突き上げてくるように熱い涙がたまってくるのをこらえた。お腹の子供が、聡の気持ちに呼応するように、再び動いている。

「俺、絶対に、東大に合格する」

将は横顔のまま、とうとつに決意を口にした。

「アキラと俺と……生まれてくる陽（ひなた）とで温かい家庭をつくろう」

将の視線が聡の顔に戻ってきたとき、聡の頬には涙が幾筋も伝って

いた。

325◆クリスマス・プレゼント

瞼から明るい光が透けて、聡は目を覚ました。

目の前には将の顎がある。将は半ば口をあけて眠ったまま、なおもしっかりと聡を抱きしめている。

聡は、温かい将の腕の中から、あたりを見回した。

杉板天井に、唐長の襖の和室には、たしかに朝が訪れていた。

しかし、聡が知っている朝はこんなに眩しくない。

雪見障子からは、それ自体が照明器具になったかのような真っ白な光が透けていた。

聡は、自分を抱きしめる将の腕を、そっとはずすとそろりと起き上がった。

将は起きなかった。睡眠をろくにとれないまま、なれない雪道をずっと運転してきた上に、昨夜も遅くまで勉強していた将。疲れているのだろう。

聡は、将の肩口に布団をかけなおしてやると、立ち上がって雪見障子をずらした。

とたんに。圧力を感じるほどのまぶしさに聡は目を細める。

そして次に、その眩しい景色に見入った。

クリスマスの今朝、関東地方に大雪をもたらした低気圧は去り、ようやく青空が戻ってきたらしい。

朝日を浴びた庭は、これ以上ないほど……雪の粒の1つ1つが反射しているような、まばゆい白に覆われていた。

聡は、浴衣一枚の肌寒さを忘れて、障子のそばで雪に輝く庭に見入った。

「ん……、あきら？」

そのときようやく将が目を覚ましたらしい。

目をこすりこすり、聡を探して……やっと障子の傍に立っている聡を見つけた。

「おはよう、将」

「アキラ……何やってんの？」

起き上がった将は、聡と同じように浴衣姿だが、その前はかなりはだけている。

「すごいいい天気だよ。雪がすごく眩しかった」

聡は雪見障子を元通りに上げると、将のそばに戻った。

「そう。ホワイトクリスマスだね」

将は布団の上のまま、寄り添ってきた聡をそっと抱きしめた。そのまま二人、朝のキスを交わす。

「……で、昨日は、何時まで勉強したの？」

「2時すぎでダウンした」

将は笑った。実は、昨夜も将は聡を先に寝かせると、自分は一人起きて勉強を始めたのだ。

聡は、英語だったら付き合おうかと申し出たのだが、お腹の子によくないから早く寝ろと無理やり寝かされたのだ。

浴衣に綿入れを着て、文机で勉強をはじめる将を、聡は布団の中からしばらく見守っていたが、妊娠中の眠気は逆らいがたい。いつしか寝入ってしまっていた。

並べて敷いてある布団ではなく、聡の布団に将が入ってきたことはなんとなく覚えている。

でも目覚めたのは一瞬で、将に抱きしめられた聡はすぐに甘い眠りへと引き戻されていった。

「でさ。気付いてくれた？クリスマスプレゼント？」

「え？」

にんまりと微笑んでいた将は、わざとらしく

「ひでえな。枕もとを見てよ」

と口を尖らせる。

聡はあわてて、枕のあたりを見回した。枕の上の畳に、小さな紙袋がおいてある。

「これ、プレゼント？将からの」

将はさも嬉しそうに口角をあげた。得意な顔に……何かをしくんでいるいたずらっぽい顔がまじっている。

「まあ、あけてみてよ」

何だろ、とつぶやきながら聡は光沢のある紙袋をあけた。

中には……薄紙に包まれて、小さな赤ちゃんの靴下が入っていた。

「かわいい……」

ほわほわの毛糸で編まれた、ほんのり温かみを帯びたクリーム色の靴下には毛糸のボンボンがついていた。

お腹の赤ちゃんが男でも女でも身につけて違和感のない色だ。

「将、ありがとう。すごく嬉しい」

聡は、生まれてきた赤ちゃんがそれを身につけるところを想像して頬を紅潮させた。

「それは、陽(ひなた)へ、俺からのプレゼントその1。まだお礼は早いよ」

将はますます得意げな顔になると、

「靴下の中、見てみて」

と促した。

「靴下の中？」

聡はクリーム色の小さな靴下を手にとった。それは聡の掌におさまるサイズだ。

柔らかい毛糸の生地の靴下を逆さまにすると、小さなリングが出てきた。

大人の指には入らない……ベビーリング。

「……すごい。これダイヤだよね」

聡は、小さなリングを掌に乗せてじっくりと眺めた。

ゴールドの小さな輪にはまったこれまた小さなダイヤは、雪見障子からの眩しい雪明りを反射してキラリと輝いた。

将は嬉しげにうなづくと、

「ひなたの予定日、5月だからエメラルドでもいいかなと思ったんだけど、万が一出産がずれることもあるかな、と思って。無難なダイヤにしといたんだ」

なぜダイヤにしたかを説明した。

「いいだろ。クリスマスプレゼントといえば、靴下の中じゃん」

将は自らのアイデアに得意になるあまり、白い歯を剥き出しにして笑っている。

「……でリングの中にはいちおうメッセージも彫りこんであるんだぜ」

そういわれて聡は、その直径1センチにも満たないリングの内側をのぞいた。

そこにはフランス語で

『生まれてくる君へ、愛を込めて。父』

というメッセージが彫りこんであった。

聡は胸がいっぱいになった。胸から溢れたものが涙腺を圧迫し……朝から涙が溜まってしまった。

「ありがとう、将……」

「だから、まだ早いって。もう片方の靴下も見てよ」

将はなおも、聡をうながす。

聡は涙を瞬きで堪え、鼻を啜りあげながら、もう片方の靴下を掌の上でさかさまにした。

それは、重みでベビーリングより、たやすく手の上に落ちて来た。

落ちたとたん、聡の手の上で燦然と輝くようだった。

「これ……」

「婚約指輪。これがアキラへのクリスマスプレゼント」

桜色に輝くピンクゴールドに、今朝の雪明りを映して輝くダイヤの指輪は、聡の思考を奪うほどの美しさだった。

さっき窓辺から眺めた雪の粒のきらめきを集めたように眩しく、そして無垢に輝き続けていた。

将は、聡の掌の上で輝く指輪を見て、プラチナでなくこの色にしたことは正解だと嬉しくなった。

「将……」

言葉を失った聡の掌から、将はその指輪を取り上げると、聡の手を取った。

細くて華奢な……シクラメンの白い花を思わせる指。将はその薬指

に、ダイヤのリングをゆっくり填めていった。

リングは聡の薬指の根元で止まった。調べたわけでもないのに、サイズもぴったりだった。

「メリークリスマス。アキラ」

微笑む将の浴衣の胸元がはだけて、聡が愛する小さな黒子が見えている。

聡は、息と涙と身体を流れる血の……すべてが喉元に込み上げてきて……思わずその黒子に向かって身を投げ出した。

雪が音さえも吸い込んだような、静かな朝の中、聡を抱きしめた将は幸せを噛み締めていた。

326◆クリスマスの朝

大磯でゆっくりとしたクリスマスの朝を過ごした二人は、西嶋が運転するシトロエンで東京に帰ることになった。

乗ってきたレンタカーで帰るという将を、

「まだ雪道で危険ですから。それに、坊ちゃんはお勉強があるんですから、せめて車の中では休んでください」

と西嶋が頼むようにして申し出たのだ。

レンタカーのほうは最寄の営業所に取りに来てもらうことにした。いわゆる『乗り捨て』制度を利用するわけだ。

雪は、邸宅をあとにする昼前になっても、雫を陽光に煌かせながらその大部分が残っていた。

「それでは将さま、聡さん、また来て下さいよ」

朝食をつくってくれたハルさんも長靴で見送ってくれる。

庭の雪はよけてあったが、日陰になっている道路の上は、踏み固められた固い雪がまだしつこく残っていたからだ。

シトロエンのトランクには、雪が降る前にハルさんが収穫したという冬野菜が山のように入っていた。

聡のためと、将の義母の純代への土産がわりとハルさんが持たせて

くれたものだ。

「受験がんばってくださいね。きっと御大が見守ってくださいますよ」

あけた車の窓をのぞきこむようにしてハルさんが見送ってくれた。

「ありがとう、ハルさん」

「聡さんも、お元気で。お産はお手伝いしますからね」

「ありがとうございます」

お礼を言いながら、また瞳が潤んでいる聡を将は見逃さなかった。

義母の純代がさりげなく世話をしているらしいが、初めての出産である。しかも、結婚もしない不安定な状態。

将を良く知るハルさんからの言葉だけで、こんなに睫を瞬かせるとは……将は聡の日頃の不安を思いやった。

車が動き出して、聡は、じっと涙を飲み込むように下を向いていた。

「アキラ……ごめんな」

「え、どうして？」

聡は涙を手の甲でぬぐって、顔を上げた。涙で目は濡れていたが、いつもの調子は戻っていた。

「不安にさせて……」

将は聡の膝の上に置いた手の甲に、そっと掌を重ねた。

「あ、また動いた」

聡は突拍子もなく呟くと、将の顔を見て、くすりと微笑んだ。

「謝るより、勉強……って、ひなたちゃんも言ってる」

「なんだよ、それ。……ちゃんとやってんじゃん」

将は笑うと、聡の手をぎゅっと握った。

聡は、頑張ってよ、と続けようとしたが、言葉は喉でつまってしまった。

将は、仕事との掛け持ちの中で、すでにせいいっぱいやっているはずだったからだ。

これ以上、はっぱをかけるのは……聡のための利己主義のような気がして、聡は喉でつまった言葉を飲み込んだ。

そうとも知らず、将は聡の肩に寄りかかってきた。

西嶋はもちろん前を向いて、一心に運転に集中しているそぶりを見せている。

彼なりに気を遣っているのだ。

「……俺、冬休み、アキラんちに英語の特訓に行こうかな」

「そんなの、ダメに決まってるじゃない」

聡は将のぬくもりと重みを肩に感じながら、突っぱねる。否定に似合わない甘い語調に、将はいよいよもたれてきた。

「だって、俺英語が一番ネックなんでしょ。こないだの模試最悪だったし」

北海道ロケに出かける前に受けたS予備校のセンタープレの結果を、将はまだ受け取っていないはずだ。

それでも将は、試験の出来を自覚していたらしい。

「そうだけど……。うちはまずいわ」

まだ依然有名人の将である。どこから何を嗅ぎ付けられるかわかったものじゃない。

「じゃあ、俺んちに来いよ」

「そんなこと……できるはずないじゃない」

今、将の『俺んち』といったら、高級住宅街にある自宅を指す。

影ながら二人を応援してくれている義母の純代はともかく、康三がいる家に、現段階で聡が入れるはずがない。

「学校の、図書館はどう？」

聡が、急にシートにもたれていた上半身を起こしたので、将は少しずっこける。

「……何、あいてんの？」

できれば聡と二人で過ごしたい将は、あまり歓迎してないようだ。

ずっこけたまんま、ごろんとシートに横になり……聡の膝の上に無理やり頭を乗せた。

膨らんだ下腹の前に将の頭が並び、聡はその駄々ッ子のような態度に思わず吹き出す。

「うん。今年は３０日まで開けてるって」

例年より進学希望者が多いので、学校は勉強場所として図書館を開放することにしたのだ。

「あっそ。じゃあ、そうしようかな」

そうはいうものの、将の口調はさっきより素っ気無いのは明白だった。

「あたしも毎日通うから。ね」

聡は自分の膝を枕にする将の耳の後ろの髪をなぜた。

前よりずいぶん黒に近い髪色は、今度の役にあわせたものである。

髪を黒くすると将は、ギャル御用達のイケメンから、どんな世代にも受け入れられる好青年になるのだ……。

将は、身体を倒してしばらくすると、寝息をたてはじめた。

睡眠の絶対量が足りていないから気を抜くと眠ってしまうのだ。

聡は将の髪をそっと梳きながら、窓の外をみやった。

高速道路へ向かう窓の外は、白に覆われた木々や屋根がキラキラと輝いていた。

運転手の西嶋が急いでくれたので1時間後には東京に着いた。

東京も大磯同様、屋根の上や舗道の花壇には雪が大量に残っていたが、復活した陽射しと激しい往来に、道路上の雪はほとんど溶けてしまっていた。

黒く濡れた路面からのタイヤが跳ね上げる泥水が脇に積み上げられ

た雪をむざんに汚している。

今日はクリスマスだが、受験生に猶予はない。ただでさえ昨日一日を棒に振った将である。

将は聡をまず送り届けると、

「ごめん。今日は岸田先生の家にいかないといけないんだ」

と抱きしめた。午後から岸田助教授の家に招かれて、論述問題の特訓があるのだ。

ちなみに、野菜を持つからといって、聡の部屋の玄関まであがってきて、西嶋は道路で待たせてある。

「いいのよ。しっかり勉強してきて」

聡は将の肩のあたりに励ましの言葉をかけると、

「いってらっしゃい」

と自分から身体を離した。

将は少し名残惜しそうな顔をしながらも、

「あさって、会えるもんな」

と口角に笑みをつくった。

「じゃあ、お荷物はご自宅にお届けしておきます」

西嶋は、岸田助教授の住むマンションまで将を送ってくれた上、北海道から持ってきた荷物を自宅に運ぶことを申し出てくれた。

「わざわざありがとう、西嶋さん」

自分よりずいぶん年配の西嶋に、重い荷物を持たせるのに少々罪悪感を感じた将は、感謝の言葉を述べると軽く頭を下げた。

そこで、西嶋からのほうから、自発的に言葉が出た。

「それはそうと、将さま。弟の養子になっている島大悟さまの件ですが……」

西嶋が別れ際に出した名前に、将の目の色が変わった。

327◆ケーキ

「それはそうと、将さま。弟の養子になっている島大悟さまの件ですが……」

大悟の名前を聞いたとたん、将は掴みかからんばかりの勢いで西嶋に詰め寄った。

「大悟がどうしたっ！……退院したのか！」

「はい。経過が順調だそうで、年末にあわせて退院するそうです」

ひどい薬物依存症になっていた大悟は、入院した矯正病院の専門的なケアでなんとか依存症を脱出することに成功したらしい。

「弟夫妻は、12月に入って何度か面会に行ったそうですが、元気だったそうです」

「そうか……」

それを聞いて、将は力が抜けた。

――大悟が立ち直った。

嬉しいはずなのに、会いたいはずなのに……将の心はどこかで躊躇していた。

『俺を裏切るのか、将』

その叫びは思い出すたびにリフレインを繰り返し、なかなか消えようとはしない。

大悟は、自分を許すだろうか……。

突き詰めれば、将の中の大悟に対する罪悪感が……大悟に会うことを避けるように仕向けているのだ。

結局将は、西嶋に大悟のその後のことも教えてくれるように頼むしかなかった。

「今日は数学的思考を使った課題と、医療倫理に関する論評に考察を加える課題をやろう。まずは数学的思考のほうね」

岸田は柔らかな口調でそういうと、将に問題を渡した。

岸田のマンションは、庶民的な慎ましい３ＬＤＫだった。

将の父の康三のように書斎を持っているようでもなく、蔵書は家中の各所に置かれた本棚に散逸していた。

将は客間兼用の和室（ここにも壁に沿って本棚が並んでいる）に通され、個人指導を受けていた。

閉じた襖の向こうからは、岸田の妻と娘が見ているらしきテレビの

音が聞こえている。

政治学が専門の岸田だから、数学的思考の課題は彼がつくったものではない。

彼の友人である数学博士にわざわざ想定課題をつくってもらったのだ。

どうしても解き方が分からない場合の突破口は紙面に用意して岸田が持っている。

しかし必要なく論文が書けた場合は、岸田が課題をつくった友人に渡して添削してもらうことになっている。

将は、論文に並んで数学に強い。

学校に来なかった去年まではやっと中学2年程度の学力だったのが、芸能界に入る直前までにほぼ追いついて学校ではトップになっていた。

芸能界入りしてまた学力は下がったものの、本気で勉強をはじめてすぐに文系の履修範囲を理解してしまった。

11月からは、理系範囲の数3を始め、北海道ロケまでの間にひととおり終わっていた。

ひとたび教科書を理解すれば、かなりの難問でも解けるところが将の強みだった。

だが、解き方がひらめくまでの時間にムラがある。

そのつど解き方を一から考えるよりは多くの問題を解いてある程度脳の中にパターン化しておいたほうが効率がいい。

……だから将は1日最低1題は数学の難問を解くことにしている。

しかし、今ここでやっている、後期試験を予想した数学的思考の論述課題は、厳密に数学ではない。

数学を利用して何かを実証するという課題だが、将は実例になっている数式に何かをひらめけばこの手の問題は軽いように思えた。

現に、今与えられた課題も、少し考えるとすらすらと鉛筆を動かし始めていた。

将が問題に掛かっている間、岸田は自分の仕事をするべく資料などを読んで出来上がりを待つわけだが、その資料がたけなわに入ろうというところで

「出来ました」

と声がかかった。

「もう?まだ制限時間まで15分余ってるよ。再考察しなくて大丈夫?」

「はい」

「へえ。冴えてるね……。どれ」

鉛筆で書かれた解答用紙は、あまり消しゴムで消した形跡もなく、きれいな字で書かれた数式とその解説で埋め尽くされていた。

だが、専門が違う岸田にはチンプンカンプンだったせいか、すぐに立ち上がると、襖を開けた。

襖の向こうのダイニングでテレビを見ていた岸田の妻の裕子と娘の香奈が一斉にこちらを振り返る。目が合った将は、頭をぺこんと下げた。

岸田は、キッチンのカウンターに置かれたファクシミリで、将の解答をどこかに送っている……友人の数学博士に送っているのだろう。

「あ、そうだ。将くん、メールアドレス、訊いていい？」

岸田はいったん、将を振り返ると『これに書いて』と将にアドレスを書かせた。

送り終わった岸田は

「解説は、今年中にメールの方に送ってもらうから。早くもらいたいだろ」

と笑った。つまり、論文に対する添削を迅速にするために、インターネットを使うということだ。

納得して頷いた将は……あることを思いついて、思わず顔がゆるむ。

それを誤解した岸田が

「よほど、今の課題は自信があったらしいな」

と微笑んだ。

「いや、そんなわけじゃ」

そのとき、下を向いた将の腹から、派手な音が和室からリビング中に響き渡った。

しまった、と将は腹を押さえる。

朝食がゆっくりめだったので、昼食を食べずにここに来てしまった。

そのせいか、腹の虫が今ごろになって猛烈に抗議を始めたらしい。

「あらあら」

岸田の妻・裕子が笑いながら

「あなた、一息いれましょうよ」

と促したので、ちょうど3時ということもあり、おやつにすることになった。

「これ、うまいですね」

将は、紅茶と一緒に出されたパウンドケーキをぱくついた。

厚めに切られたそれを将はあっという間にたいらげてしまった。

裕子は「まだありますから、どうぞ」と将におかわりを勧めると

「……香奈、切ってきて」

と娘の香奈に命じた。香奈は素直に頷くとキッチンに入った。

「これは、香奈が作ったんですよ」

裕子は、微笑んだ。

「えっ。本当に？」

将は驚いて、カウンターキッチンの中にいる香奈を見た。香奈は将と目が合うと、すぐに視線をケーキの方に落とした。

先日スキー場でも思ったが、長い睫のあたりなど、この娘はときどき聡を思わせるところがある。将は微笑ましく香奈を見つめた。

そして、そのケーキはお世辞抜きでとても美味しかったのだ。

バターと卵の自然な香りから手作りっぽい味だと思ったが、まさか小学校5年生の少女が作ったとは……。

「クリスマスに将お兄ちゃんが来るからって、昨日一生懸命作った

んだもんな」

岸田助教授の言葉に、香奈は将をチラッと見てそっぽを向いた。

「そんなんじゃないもん。お客さんが来るからだもん」

「ウソつけ。最近いつも、『今日は将お兄ちゃんに会ったの？』って訊くくせに」

父の茶化した言葉に、香奈はとうとうプーッと脹れた。

「もー！おとうさん！」

そういいながらも、香奈は将のお代わりの皿をカウンターにやや乱暴に置くと、ダイニングを素通りしてテレビの前に座り込んだ。

「あれ、香奈、お父さんの分は？」

と岸田が甘い声でねだっても

「知らないもん」

とゲームを始める。

将はどう反応していいかわからなくて、ゲームに向かう香奈の横顔と、新しいケーキをかわるがわるに見た。

「もう、あなたったら……」

裕子が苦笑した。そして将には助け舟を出す。

「本当に、遠慮なくどうぞ。香奈はふんわりつくるためにって一生懸命バターを泡立てたんですよ」

それで将はようやく

「香奈ちゃん、どうもありがとう。すごく美味しいよ」

と香奈の横顔に声をかけることができた。

香奈はブスッとした顔を崩さなかったが、その頬にはほんのりと赤みが差していた。

岸田は笑いながら紅茶のカップを傾けていたが

「将くん、どうだい。東大に晴れて合格したら、今度は将くんが香奈の家庭教師をしてくれないか？」

といきなり切り出した。

「あら、いい考えね」

裕子が紅茶のお代わりを淹れながら同意した。

ゲームをする香奈の背中がぴくんと反応した。

香奈は来年６年生で、有名中学を受験することになっている。

岸田が将の大学受験に協力している代わりに、今度は将が岸田の娘・香奈の中学受験に協力してほしいということだ。

「はい。喜んで」

もともと不良時代、何食わぬ顔をして小学生の家庭教師をしていた将である。異存はない。

「そんなのムリに決まってるし」

意外な声が割って入った。香奈本人だった。

「なんで」

岸田は不思議そうな顔でコントローラーを両手で持ったままの娘をみやった。

「だって、将お兄ちゃんは、大学合格したらまた俳優に戻るんでしょう」

「そうなのかい？」

岸田も裕子も将の顔をのぞきこむようにした。

合格の後のことは……聡と結婚することしか、頭になかった将である。

自分でも政治家のあととりとして俳優業はすっぱりと辞めてしまうのか、それとも続けるべきなのか自分でもわからない。

とにかく合格しないと。

聡との結婚を許されないと。

将の未来は白紙のままなのだ……。

「まだ、わかりませんけど……なんとか、時間をつくるようにします」

苦し紛れにそう答えるしかなかった。

328◆借り

岸田助教授宅からの帰宅がてら、将は待ちかねたように聡へ路上から電話をかけた。

「ん……将？」

聡の声はどうやらうたたねしていたようで少しかすれている。

妊娠するとやたら眠い、と聡が前にいっていたのを思い出した。

「ごめん。寝てたんだろ？」

「ううん、いいよ。何？」

聡はホットカーペットの上に寝そべったまま携帯を耳にあてなおした。

「あのさ」

将は携帯で話をしながら、今そこに近づいたタクシーに手をあげて呼ぶと、乗り込む。

別に電車で帰ってもよかったのだが、人目に付かずに済むのと、こうして聡と話すために将はとっさにタクシーを選んだのだ。

「終わったの？個人教授？」

携帯をずらして、運転手に行き先を告げたのが聡にも聞こえたよう

だ。

「うん。あのね、アキラ。俺、いいこと思いついたんだ」

「なあに？」

「あのさ。英語の特訓なんだけど……」

将は、さっき思いついたことを聡に提案する。

それは、インターネットのメールと携帯電話を使って、英語の特訓を行うということだった。

「……これだったら、誰にも知られずに、思いっきりアキラに教えてもらえるだろ」

冬休み中の学校の図書館開放ももちろん利用するが、他の生徒や教師の目がある以上、聡が将ばかりにかまうわけにはいかないだろうことは明白だ。

聡はなるほど、と思いつつ、いちおう眠い頭の中で、不都合な点がないかどうか確認してみる。

「電話は俺から掛けるから」

つまり電話代のことは心配ないと、将は先回りする。

毛利から月５０万ずつ振り込まれている聡だから、その点は心配ないのだが。

「ねえ、アキラ。名案だろ」

「そうね……」

慎重に考えたがどうやらデメリットはなさそうだ。

「じゃあ、時間を決めてダラダラしないようにしましょう。将、勉強は英語だけじゃないでしょ。センターの科目だって多いんだし」

「わかってるよ」

自分の恋人ではなく教師になっている聡に将はわざと反抗したくなる。

「……だけど、お腹のひなたの様子を訊くくらいいいだろ。あれから動いた？」

「動いてる。今も将の声を聞いたとたんに動き出した」

恋人に戻った聡の声に、将は心が温かいもので満たされた。

気がつくと、タクシーの窓からオレンジ色の光が自分を射抜いている。

将は自分の目線の高さになった夕陽に視線を移した。

かつて孤独を感じながら、独りで眺めていた太陽は今、限りなく温かいものの象徴として将を染めている。

その確かな温かさは、臓腑の底へと降りて根をおろし……聡とその

子供の将来のために頑張ろうという意欲につながっていった。

西嶋隆弘が3階にある自宅の鍵をあけるのを待つ一瞬の間、大悟は夕陽を見つめた。

将がタクシーから見つめていたのと同じ夕陽だった。

「さあ、入って。大悟くん。お部屋は用意してあるのよ」

節子が後ろから大悟の背中を押すようにした。

西嶋光学工業の自社ビルの3階にある、西嶋家に入った大悟は……ダイニングに飾られたクリスマスツリーに目が行った。

節子は、大悟を追い越すとかがんで、そのツリーのライトの電源を入れた。

ツリーはカラフルな光で輝き、やがて点滅を始めた。

大悟はしばらくそれを見つめていた。

「きれいでしょ。せめてクリスマスらしくしたいと思ってね。ケーキも買ってあるのよ」

節子が寒さで赤くなった丸顔をほころばせる。

「お前、毎年飽きないな……まあ今年は特別だけど」

隆弘が茶化す中、大悟は返事もせずにクリスマスツリーを眺めていた。

こうして、『自宅』にあるクリスマスツリーを見るのは何年ぶりだろうか……。

それを思い出すには、もう記憶の彼方に消えようとしている、母が失踪する前まで遡らなくてはならなかった。

「これ。使って。いちおうクリスマスプレゼント代わりよ」

節子はリボンがついた、紙袋を大悟に渡した。

中にはパジャマが入っているらしく、大悟はぺこりと頭を下げた。

その頭は、ちょうど東京に出てきた1年前のように短髪だ。

骸骨のようにやせ細っていた体もちょうど1年前と同じくらいまで回復している。

しかし、その瞳はどこか虚ろだった。

「でも、元通りになってよかったわ」

夕食の席で、ジンジャーエールで乾杯しながら節子は感慨深くもらした。

薬物を使っていた期間が2ヶ月ほどだったのと、まだ若いのとで、大悟はほぼ元通りに回復することができたのだ、と医師は言った。

もちろん、今後の人生においてフラッシュバックが起きる危険性をまったく否定しているわけではない。

だが現段階で、大悟がほぼ健康を回復することができたのは、慶ぶべきことだ。

「心配をかけてすいません」

謝りの言葉を述べながらも大悟は……心に得体のしれない不安のようなものを沈殿させていた。

「気にするな。私たちは君の保護者なんだから」

隆弘の笑顔に曇りはない。

この夫妻は、覚醒剤中毒で矯正病院に入院した大悟だというのに、保護者を解消するどころか甲斐甲斐しく世話さえやいてくれたのだ。

大悟はそれには恩義を感じている。

だが、夫妻の温かさに触れれば触れるほど、違和感を感じてしまうのも事実だった。

夫妻が本当に自分を思ってくれているのは、わかりすぎている。

家族の温かさ、というものに今までの人生でほとんど触れていない大悟である。

家族だとか両親というものを頭で理解していても、心は警戒してしまうクセがついてしまっているのだ。

それに……自分が人なみの『両親』を手に入れて幸せになればなるほど……それを知らずに死んだ瑞樹が憐れだった。

そもそも元をたどれば、瑞樹が死んだことは、大悟がこの温かい夫妻にめぐりあうきっかけになっていたのではないだろうか。

瑞樹が生きて、ここにいたら。大悟は想像してみる。

答えは簡単だった。ここにいる夫妻は、きっと彼女にも優しく接しただろう。

――瑞樹。お前バカだ……。

「大悟くん？」

節子に呼ばれて、大悟はハッとした。

どうやら箸が止まっていたらしい。

「お代わりは？」

「もういいです」

クリスマスらしく、テーブルの上にはチキンやローストビーフ、シチューといった洋風の物が並んでいるにも関わらず、ご飯と漬物。

そんな庶民的な温かい食卓も瑞樹はとうとう味わうこともなかったのだ……。

「大悟くん、これからどうする」

ふいに隆弘が訊いた。

「あなた、まだ早いわよ。大悟くんは、まだ病み上がりなんだから」

たしなめる節子を無視して隆弘は続けた。

「高校へ行くか、それとも大検を受けて大学に行くか。好きなようにしなさい。……養子縁組も私たちは心から望んでいる」

大悟は、隆弘の言葉に、めまいがしそうになるのをかろうじて持ちこたえるべく、ぐいと目を見開いた。

「よかったら、私たちの籍に入って一から出直しなさい」

隆弘が、見開いた大悟の目を見つめたので、大悟はうつむくしかない。

「……あなた、まだ早いわよ」

節子は静かにもう一度夫をたしなめると、うつむいた大悟の肩に手をおいた。

「大悟くん、ゆっくり考えていいのよ。まずは何にも考えないで、休んで。ね?」

沈黙の中、ツリーだけが忙しく点滅を繰り返す。

点滅のパターンを5回ほど繰り返したとき、大悟は口を開いた。

「俺……働きます」

夫妻は、大悟の顔を心配そうにのぞきこんだ。

その視線に引き出されるように大悟はゆっくりと顔をあげた。

「タダで、置いていただくわけにはいきません。働いて……せめて家にお金を入れさせてください」

「大悟」

隆弘は大悟を遮るように呼んだ。

いったん、手元のグラスに残ったビールを飲み干すと、黒目だけで大悟を見据えた。

「君は、いくつだ。……18だったな」

質問を切り出して、すぐに自ら解答を出す。

大悟の事を呼び捨てにしたが、口調はあくまでも穏やかだった。

「18やそこらで、他人に力も借りずに出来ることなんてタカが知れている。せっかく手を差し伸べるヤツがいるんだったら……今は力を貯えろ」

借りはつくりたくない。大悟はその言葉を苦く飲み込んだ。

「君は、私たちのところに来ることを、借りだと思っているのだろう……。だからこそ、今、作った借りを、今返そうとするんじゃない」

隆弘の……まるで大悟の心を読んだような言葉に大悟は思わず、対峙する隆弘の真意を探ろうと目を見開いた。

だが隆弘の目はまっすぐに大悟に注がれるばかりだった。

「借りは……いつか大きく成長したあとで、大きく返すんだ」

329◆深層

「借りは……いつか大きく成長したあとで、大きく返すんだ」

「あなた。借りだなんて……」

節子が眉をひそめて弁解をする。

「大悟くん。わたしは……ううん、この人だって借りだなんて、思ってないのよ」

だが大悟には、わかっていた。

隆弘が、高利貸しのようなあざとい気持ちを持っているのではない、ということを……。

「親が、子供に『貸し』なんて言葉は使わないでしょう」

大悟は逆に、節子が言う、『世間の親のあたりまえ』のほうこそわからなかった。

親は……子供を育てて、損をしたと思わないのか。

否。

大悟は、肌でそれを感じていた。

親とて、人間だ、畜生だ。

人であり、畜生である限り、食っていかねばならない。

もし親が、かつがつの生活をしていたのなら、子供の食い扶持は限りなく負担になり……きっと『タダ食いはいつか返せ』という勘定を抱くに違いない……。

それは大悟自身が育ってきた過程で感じてきた現実だった。

「わたしたちはね、……大悟くんに、ここにいてほしいの。ただそれだけ」

「大悟」

節子の温かい声を隆弘が遮る。

「俺は……きれいごとは言わない」

大悟は思わず目をあげる。再び視線をあげたあたりに、隆弘の目があった。

どうやら隆弘は大悟をずっと見据えていたらしい。

「俺は、大悟の将来に期待しているんだ。だからおまえさんを助けたい。……だがな。勘違いしないでほしい。おまえさんを助けた見返りは金じゃない、大悟」

隆弘の目は、酒のせいか少し充血していたが、澄んで、何よりまっすぐだった。

それを見れば隆弘が『株式投資の人間版』をしたいのではないこと

は明白だった。

「おまえが、成長していく姿を見せてくれるのが、私たちへの一番の見返りなんだよ。……もっとも」

隆弘は、大悟を見据えていた視線を、ふっと落とすと、口元に笑みを浮かべた。

「それは……正直、金より重荷かもしれないが……」

大悟の心の底に沈殿した不安は……その隆弘の言葉を聞いて、穏やかな笑顔を見て……中和液をいれたように一気に溶けてしまった。

溶けて嵩を増した心から何かがこみあげてくる。

慣れない『愛』『情』というものを与えられた大悟の心は動揺していた。

突き上げてくるような心を必死で抑える大悟は『重荷なんかではありません』という返事を発するのも忘れていた。

大悟の心のうちとはうらはらに、テーブルの上には、再び沈黙がテーブルに覆い被さっているようだった。

だが大悟はそれすらも感じるゆとりがなかった。

隆弘の顔を見なくてはという意識も力が尽きて……大悟は自然にこうべを垂れてしまっていた。

下をむいた大悟の瞳に、自分の手が映った。

かつて、目の前にいるこの男は、自分の手を褒めた。夫妻が……自分に寄せるもの――期待――の象徴。

人に期待などされたことがなかった大悟である。

それが重荷なのかどうかさえ、よくわからなくて、大悟はただ困惑した。

「あなた、もう、この辺にしましょう……。大悟くん、お風呂に入らない？入りなさい。ゆっくり疲れをとって。今日は早く寝なさい」

節子は沈黙から大悟に助け舟をだすべく立ち上がると、大悟を促しながらバスルームへと向かう。

ダイニングに二人取残されて……大悟はどうふるまっていいかわからなかった。

ただ、自分を思ってくれるこの夫妻を、自分は好きなのかどうか。

それだけを考えていた。

好きなのか。それとも、ただ楽をしたいからここにいるのか。

自分でもよくわからない大悟だが、前者の気持ちには自信がなく、後者だとしたらそれは自分で自分が許せない。

「大悟」

隆弘が呼んだ時、バスルームからちょうどいきおいよく蛇口からお湯が出る音がした。

「どうせ働くなら、月曜日からうちの手伝いをしなさい。わかったね」

隆弘はおごそかに宣言した。

大悟は『はい』と返事をしながら、ついに心のうねりが目の奥に達したのがわかった。

「ベッドがよかったら買ってあげるから、遠慮なく言ってね」

節子はそういいながら大悟の布団を敷いてくれた。

布団もシーツも新品ながら、節子がそれをフカフカに干しておいてくれたのは一目見ればわかる。

「ありがとうございます」

大悟は何度目かの礼を口にした。西嶋家で物置代わりになっていた東向きの6畳間を、大悟は自分の部屋として使うことになった。

自分の部屋を持つなど、大悟にとってはおそらく生涯初めてに違いなかった。

もっとも、小学校高学年から父親がいない部屋で大悟は一人でいることが多かったのだけれど。

窓際には、新しい机も置いてある。押入れの中には、何着か新しい服も買ってある。

普通の子は……小さい頃からこんな風に親に、物質的にも愛されるのだろうか。

病院での習慣か、早めに床についた大悟は、恵まれた子供を想像して……それは将を思い起こさせた。

大悟は、暗闇にため息をついた。

何がため息をつかせるのか……それは大悟にもよくわからない。

大悟の将への思いは、複雑に層を成していて、一言では表せない。

その層の1つ1つにたまったガスを抜くように……大悟は将を思い出すと自動的にため息が出てしまう。

将への思いの表層は……本当にすまないことをした、という罪悪感。

覚醒剤におぼれた自分を、傷だらけになってまで、やめさせようとしてくれた。

あの、死闘が繰り広げられた台風の夜は、こうやって正常になっても思い出すことができる。

悪魔の薬は……記憶はなくさせないまま、人格だけをそっくりと変化させることもあるらしい。

ゆえに、あの狂気の自分を振り返ることができる大悟は、そのたびにその部分を記憶した脳を露出させて掻き毟りたくなる。

その表層の下には……だが、自分が覚醒剤に溺れるきっかけをつくったのは将ではないかという疑惑。

それは地表の下のマグマのように静かに熱を帯びていた。

直接のきっかけは、瑞樹が遺したものからだったが……そもそも、瑞樹が薬をやるようになったのは前原のところに居候をするようになったからである。

そして……将と同棲していた瑞樹が、前原のところに行くハメになったのは将に捨てられたからだということは、瑞樹の言葉の端々から想像できた。

瑞樹が死んだのも……自分が薬をやるようになったのも、元をただせば将のせい。

そんな風に結論付けたくなる自分を、大悟はもみ消すのに苦労した。

しかし、その熱いマグマの下には、清浄な地下水のように、将への友情が流れているのも事実だ。

愛知の親類の家を追い出された自分を、何も言わずに受け入れてくれた将。そして中学時代に過ごした楽しい思い出。

自分で自分の食い扶持を稼いでいて……自分ひとりで生きていけるとうそぶいていた大悟も、将というお互いに傷を持つ仲間がいて、精神的に救われていたのは否めない。

将は、大切な親友なのだ。その存在に癒される自分を……大悟は風に煽られるマッチの火の様に、掌で大事に守っている。

さらにその下には、凍りついた小惑星のような氷塊の……大悟の心があった。

自分でも捉える事ができないその冷たい中心部を、大悟はできるだけ見ないようにしていた。

だが、こんなふうに暗闇で一人になったときに将を思い出すと、その部分は大悟の中で体積を増したように圧迫してくる。大悟はそれを恐れた。

そこに刺激をされておのおのの層が吐き出した気体が……大悟のため息の正体だった。

大悟はその存在を忘れるべく、眠ろうと努力をした。

幸い、薬物がもう抜けてしまった大悟の体は、昼間の疲れも手伝い、まもなく健康な眠りにありつくことができたのだが……。

330◆計画

年末の東京は暖かいよい天気が続いた。

クリスマスに降ったドカ雪は、戻ってきた陽射しによって見る間にその嵩を下げていった。

日陰にこびりついたように残った雪も、30日にはすっかりなくなってしまっていた。

27日からの図書館開放にやってくる生徒は意外に多かった。

2クラスある3年のうち確実に1クラス分は毎日通っていた。

自宅で単独で勉強するよりも、皆がいたほうが励みになるということだろう。

「だってえ。家にいると、ネットとか携帯とかゲームとかついやっちゃうんだよねー」

女生徒のセリフに聡はなるほど、と思った。自分が受験のときにはなかった誘惑に生徒はさらされているというわけだ。

「予備校サボってこっち来ました。だってこっちのほうが先生に直接教えてもらえるし」

なんて子もいて聡は苦笑する。

わざわざ高い代金を払った予備校より学校の図書館のほうがいいというのだ。

「予備校って、かなり出会いの場になってるよね。うちら真面目だからこっちで勉強してるしー」

そういうチャミ&カリナも予備校には適当に顔を出して、こっちで勉強している組だ。

もともと進学希望じゃなかったはずだが、

「受かれば大学行くのもいい」という方針に変わったらしい。

そういうにわか受験組が増えたせいか図書館は活況を呈していた。

将は……一人でもくもくと生物の問題集を解いている。

センター試験まで1ヶ月を切った今、必死で詰め込みをやっているらしく、将の目の下にはクマが出来ている。

25日からは、毎晩メールと電話を使って、英語の特訓をやっている。

それは2時間の予定だったが、集中するあまり3時間になっていることもあったが、将はいたって真面目だった。

甘いささやきなどは一切まじえず、将は英語に集中していた。

聡との特訓が終わった後も寝ずに、記憶教科の詰め込みをやってい

るとう。

その個人授業の際に、聡は睡眠時間を訊いてみたことがある。その答えは

「最近は1時間30分かな。仮眠しかとらない」

と聡を驚かせるものだった。

「体壊すよ」

心配する聡に

「だって撮影が始まったら、無理できないし」

そう答えた将。こうして図書館で遠目に見てもあきらかにやつれている。

年があけたら、スタジオでの撮影があるとかで、睡眠を確保しなくてはならなくなる。

「だから、今が無理のしどきなんだ。大丈夫だよ」

そういうと将は『次の問題、メールして』と笑った……。

わき目もふらず受験勉強に集中していた将だが、今日は少し違う。

午後になると将はボソボソとカイトと話し始めた。

学力で劣るカイトに将が教えてやっているのかと思ったがそうでもないらしい。

カイトは、松岡の座っている席に移動すると、またなにやらボソボソと話している。

松岡は真田由紀子ら女子のところに……。と図書室がなにやらさわさわとしだした。

注意するべきか、聡は迷ったが

「先生……」

と英語の質問を持ってきた生徒がいたので、そっちに気を取られる。

「こういうとき兵藤くんがいないのは痛いな」

将はエンピツを持ったままの手で頬杖をついて呟いた。

「いちおうメールしたんだろ」

と、カイトが赤毛を揺らした。

「でもさ、あいつ寿司屋づとめが今日で終わったら、実家に帰るって。井口は？」

「こっちもわかんない。なんか、彼女のところに行くとか、来るとか……」

「ああー。名古屋のパン屋だかの。うまくいってるんだ」

井口に彼女らしき人ができた、という話の続報を聞くべく将は身を乗り出した。

「ちゃうちゃう。名古屋じゃなくて長野。……そういや星野さんは？ずっと顔みないけど」

井口の彼女話はカイトもそれほど知らないらしく、彼は話題を星野みな子に移した。

そういえばみな子は、意外なことに、図書館開放に一度も顔を出していなかった。

「予備校行ってるのかなぁ？メールしてみるよ」

と、そのとき、将と少し離れたところで甲高い声がした。

「いいじゃん、ＯＫ」

と大声を出してしまったチャミは、ハッとして首をすくめるようにしてあたりを見回した。

しかしすぐに相棒のカリナと誘い合って席を立つと、他の生徒を指

導している聡のところにニコニコと寄ってきた。

「先生さ、お正月はこっちにいるんだよね」

唐突にいつものタメ口で話し掛けてきて、聡は思わず

「そうだけど？」

と二人を見上げた。

「あのね、元旦にみんなで合格祈願に初詣しようって言ってるんだけど、先生も一緒に行こうよ」

将は耳をダンボにしてチャミ&カリナと聡のやり取りを聞いていた。心の中で『おい、先生の安産祈願もかねて、というのを忘れてるぞー』と叫んでいる。

「みんなって？」

「んとー、うちらとぉ、ユキちゃんとぉ……」

チャミは図書室に居合わせたメンツを見回しながら、順繰りに名前を挙げていった。

その名前の中に将が含まれていて、聡は発案者がわかった。

横目でちらりと将を見やると、将は問題集に目を落とすふりをしながら、髪をかき上げたその手にピースサインを一瞬作った。

「ダンナさんも連れて来ようよ！」

「みたい！アキラ先生のダンナさん見たい！」

ふいにチャミとカリナがはしゃぎだした。

事情を知らない生徒たちの、皆興味津々の視線が聡に集まる。

将はひやひやして聡を覗き見た。

だが、聡は平然と「わかった。来れるか訊いてみる」と答えていた。

人気のある講師の英語の講義は、すし詰め状態だった。

もっとも、みな子が勉強に身が入らないのは、後ろのほうの席だからではない。

クリスマス以来、みな子の学習意欲は著しく低下している。

正直なところ、もう受験なんかどうでもよかった。

突然の父の転勤で、みな子は関西の大学を受けることを余儀なくされた。

東京に、行きたい大学がある。

みな子はそう訴えた。行きたい大学というのは、両親に対するせいいっぱいの嘘だ。

本当は将のいる東京の大学に行ければいい。それがみな子の願いだった。

だが、両親はみな子が一人で東京に残ることを許さなかった。

「どうして？私、一人でいても真面目に頑張るよ？」

みな子は食い下がった。

「でも女の子が一人でなんて……」

そういう母親を制して父親が口を開いた。

「お前が真面目にやっていけるのは、お父さんはわかってるよ。だけどな……みな子。うちには、お前を一人暮らしさせてやるゆとりはないんだ」

――そんな。

みな子は言葉を飲み込んだ。それはみな子にも分かっていた。

マンションのローンを抱えた中流のサラリーマンが、娘を４年間、東京で一人暮らしさせてやるほどのゆとりをもてるはずもない。

みな子は、黙るしかなかった。

今、みな子のノートの上には、予備校の英語の講義とは関係ない１０×１２×４という数字が書いてある。

ここ数日、みな子は毎日のようにそれを計算してはため息をついてばかりいる。

１５×１２×４は１０×１２×４になっても４８０という数字にしかならない。

４８０万。

もちろん１０万で暮らせるはずもなく、どんなに安い部屋に住んだとしてもみな子はバイトを強いられるだろう。

それに大学に納める授業料をあわせると、どうしても８００万にもなってしまう。

国公立に進んだとしても……６００万。

それにみな子の下にはこれから高校に進む弟もいる。

それを考えると……みな子の小さな夢――東京で将と一緒に大学生になる――は、どうやっても叶えることは不可能という結論になってしまうのだ。

331◆カウントダウン講習

あきらめきれなかったみな子は、あれからすぐに奨学金という考えに思い当たった。

ちなみに、友達のすみれの彼氏である先輩は奨学金を受けているという。

関西行きを打ち明けられた翌日、みな子は母親に

「奨学金、受けられないかな……」

と相談してみた。みな子の第一志望であるM大には奨学金制度がある。それを母親に説明した。

ネットからプリントアウトした資料も見せる。

そのM大は、将が志望している東大とは目と鼻の先だった。

「みな子、そんなにM大に行きたいの？」

みな子は深くうなづいた。

東京で女の子が一人暮らしなんて、と眉をひそめていた母親だったが、みな子の真摯さに、心を動かされたらしい。

母親は月曜日になるとすぐに、奨学金を受けられるかどうか電話をかけて訊いてくれた。

だが……奨学金をもらうには、みな子の家の年収では多すぎた。

月に十何万ものマンションのローンにひいひいあえぐように、慎ましく生活しているのに、奨学金をもらうには裕福すぎると言われたのだ。

みな子はとっさに、すみれの彼氏の先輩を思い浮かべた。

その先輩は特に貧乏ではなかった。

漫研に所属していたぐらいだから、いわゆる『オタク』趣味の気があった先輩だが、彼は欲しい同人誌などは躊躇せずまとめ買いする豪胆さがあった。

携帯もよく新しい機種に変えていて、どことなくお坊ちゃんの風情があった。

それもそのはず、彼の父親は小さな有限会社ながら社長だった。

それで奨学金とは、なぜ。

「うちより金持ちの……社長の息子でも奨学金もらってるよ」

みな子は母親に食い下がった。

「自分で会社をやってたりするうちは……経費で見た目の収入を減らせるから」

母親はため息をつきながら答えた。

自営業者は、例えば自宅のローンも、その一部を事務所として使っていると申請すれば、その分を経費として計上できる。

水道代も電気代も電話代もその何割かを経費に繰り入れることができる。

結果、手取り収入を少なく申告することができ……一般的なサラリーマンより豊かな暮らしをしているにも関わらず、申告上の年収は少ないということも十分ありえるというのだ。

夢の断念を余儀なくされたみな子は、それでも悪あがきのように計算をする。

――仕送りをいっそ家賃だけにしたらどうだろうか。

――いや、家賃も……誰かに家に居候させてもらったり、ルームメイトとシェアして折半できないだろうか。

みな子が今受けている、予備校の英語の講義代すら、もったいなかったとみな子は舌打ちを堪える。

面白可笑しく、かつわかりやすいということで定評がある講義だったが、人気講師なのでほかより少し割高だったのだ。

と、そのとき携帯がブー、ブーと震える音がして、みな子はハッとする。

幸いマイクを使った講義に比べればたいした音量でなく、まわりの受講生たちの非難の目もない。

それでもみな子は素早く電話を掴むとあける。メールらしい。

表示された『鷹枝将』の名前に、みな子は釘付けになる。

＞予備校はどう？こっちは毎日図書館通い。

＞元旦に、みんなで合格祈願の初詣に行く企画があるんだが来ない？

＞先生の引率付きｗ

いつもは将からメールをもらうだけで夢見ごこちになるみな子である。

こんなふうな誘いなら有頂天になってもよかったが、みな子は別の意味で動悸を抑えられなかった。

それは、いいようのない恐怖に対峙したときに似ている、息も苦しくなるような激しい動悸だった。

肩を縮めたみな子は、クリスマス・イブに雪の中でまのあたりにした光景を思い出す。

マタニティで着膨れしたように見える聡、そして彼女を抱く将。

車のライトに照らされて、将の腕の動きははっきりと見えた。

それは至宝を受け止めるような、慎重で……かつこれ以上なく優しげな動きだった。

そんな風に抱かれたことがないみな子にもわかるほどに。

――先生のお腹の子は、鷹枝くんの子供だ……。

官房長官の息子。そして人気上昇中の俳優。そんな彼が担任を妊娠させたなどと公表されるはずがない。

ひとたび生まれた考えは、疑いという過程を通らずに、一気に確信となった。

関西行きのおかげで忘れていたそれを思い出したみな子の心臓は、今また、恐怖のあまり再び激しく暴れ始めた。

みな子は、落ち着くために、バッグからペットボトルを取り出すとお茶を一口飲んだ。

本来は講義中としてはマナー違反の行為にあたる。だが無意識にやってしまう。

心臓をなだめるべく流し込んだお茶の代わりに、ため息をついて……みな子はようやく少し落ち着くことができた。

――常識ある大人だったら、教え子との間に子供ができたら普通堕ろすはず。

それを敢えて、まわりにウソをついてまで産むのはなぜ……。

みな子は考えたがわからない。

いや、本当はわかっていたが、あえてその結論は見ないようにしていた。

ただ、はっきりとわかったのは。

聡が他の男の妻になったのではないなら……まして将の子供を生むのなら。

みな子に入る隙間は、おそらく未来永劫与えられない、ということだ。

歴史をやっていた将は、顔をあげた。

カーテンの隙間から白い明かりがもれている。

遮光カーテンを開ける。窓の前に立つ、朝の光を浴びて濡れたように光る庭木が大晦日の朝を告げていた。

今朝はついに徹夜をしてしまったらしい。充実感に将は伸びをした。

25日からずっと仮眠しか取っていない将だ。
眠さと疲れは限界のはずだが、まだ力がみなぎっているようだ。
それも、そのはず。
大晦日の今日は、マンションのほうで、聡と二人で『合宿』することになっているのだ。

それを将が提案したとき聡は

『大丈夫なの？』

と案の定心配した。

膨らみ始めたお腹のせいで、実家の萩にも帰れず、たった一人で正月を迎える聡。
将はそんな彼女が不憫で……それを思いついたのだ。
正月は家族と迎えるもの。だから、将来家族になる将と聡が一緒にすごすのは当然だ、と将は考えた。
ちなみに元旦の初詣企画も、二人きりでの初詣が叶わないから、クラスメートを巻き込んでみんなで、という形にしたのだ。
聡と結婚し、二人の子供が生まれる年の始まりだ。

将は、聡のためなら、聡を幸せにするなら、どんなことでもやろうと決意を新たにしていたのだ。

『親には予備校のカウントダウン講義ってウソいうし。あるんだぜー。本当にそういうの』

そういって将は電話口で笑ってみる。

なんでも予備校では、大晦日から元旦にかけてオールナイトで講義をして、受験生の士気を高めようというイベントがあるらしい。

予備校の講師も大変ね、という聡の同情は同業者としての感想らしい。

『俺は、アキラと二人でカウントダウン講義』

甘えた口調になる将に、聡は

『でも、将。記者とかに見張られているんじゃないの？もうすぐドラマ始まるんでしょ』

なおも慎重だ。

『うん。だから』

将は、”二人きりのカウントダウン講義”の会場として前に将が住んでいたマンションを提案した。

『もう3ヶ月もあっちのマンションには帰ってないから、絶対ノーチェックのはず。俺自身は誰かにおっかけられてるはずだから、ア

キラ、先に入って鍵かけといて。帰りも俺が先に出てアキラが後に出れば絶対にバレない。……だから、ね？いいだろぉ？』

時間差攻撃を訴えて甘える将に、聡はやっと折れてくれた。

午後3時すぎ。将は出掛けるべく着替えて部屋を出た。

「じゃ、行ってくるから。帰りは明日の夕方だから」

お手伝いさんと一緒に台所にいる純代に声をかける。どうやらおせち料理づくりも大詰めを迎えているらしい。

巌がいたころは、一族は皆、大磯に集合していたが、まだ喪中にあたる今年は慎ましく各家庭で、ということらしい。

それでも本家にあたるここに来客が多いことはわかっている。

だからおせち料理も、大量に、かつバラエティ豊かに用意しなくてはならない。

お手伝いさん一人と、親戚の若いお嫁さんの援軍がありながらなお、純代は忙しそうだった。

ちなみに『カウントダウン講習』のことは前もって言ってある。

「あ、将。待って」

呼び止められて将はギクッとする。

「何？」

無視すれば逆に怪しまれる……と将は嫌々ながら立ち止まる。

割烹着姿の純代は、いそいそと3段重ねの重箱に風呂敷をかけ、それを持ってきた。

「これを持っていきなさい」

「えー？」

予備校の講習に弁当なんか、と将がさらなるウソを口にする前に

「全部、無農薬野菜だから。お肉は米沢牛、お魚も天然ものよ」

純代は唇に少しだけいたずらっぽい微笑を浮かべた。

「聡さんには、うちの味だからって伝えて。……それと、タクシーを使いなさいな」

将はぽかんと口をあけたまま、風呂敷包みを受け取った。

「お父さんには内緒だから」と純代は最後に付け加えると、にっこりと微笑んだ。

332◆弁当屋

昼下がりの商店街は、食材の買出しをする人でそれなりに込み合っていた。

またその客を見込んで、店々は店先にワゴンを連ねて、乾物や野菜、しめ縄を積み上げている。

31日にしめ縄は遅いのでは、と地方出身の聡は思ったが、まだまだ飛ぶように売れていく。

ふだん、実家に帰る聡が初めて目にする東京の年の瀬だ。

買い物をする人々の群れの中を、聡は膨らみ始めたお腹をかばうようにしてすり抜けながら、目的のスーパーに向かう。

まだかばうほどではないけれど、動き始めた将の分身に、聡はいつもより行動が慎重になっていた。

今日の、二人の合宿の食事について、将は

「何もしないでいいよ。聡といられれば」

と言ったが、買い物をしなければ年越しそばもなければ、それに入れるネギもないありさまだ。

まだ食べきれずにいた、クリスマスにもらったハルさんの冬野菜は鍋にでも入れようと、もって来ていたが、それだけでは食べ盛りの将には足りないだろう。

だから聡は、いったん将の部屋に荷物を置くと、もう一度商店街に出てきたのだ。

鍋には唐揚げでも付けるか。

それとも、そばを具沢山にするか。

考えながら歩く聡は、ただでさえ例年より相当温かい小春日和にうっすらと汗をかいた。

着ているコートがうっとおしくて、スーパーにつくなり脱いでカートに入れて一息ついた聡は、みずみずしい果物に心を奪われる。

早くも並ぶイチゴのパックに思わず手を延ばす聡に、懐かしい声がかかった。

「アキラちゃん？アキラちゃんだよね」

聡は驚いてイチゴのパックを手にしたまま振り返った。

そこには、去年までアルバイトしていた弁当屋のおかみさんが立っていた。

「おかみさん……」

「やっぱりアキラちゃん……」

背の低いおかみさんは、アキラを少し見上げる格好になる。が、聡が恐れていたとおり、その視線は聡の顔とお腹を往復し始めた。

クリスマスイブに胎児が動いて以来、聡のお腹は一回り大きくなった。

マタニティではない服で着られるものはもはや少数になり……誰が見ても妊婦だということがわかる聡である。

「どうしたの。そのおなか」

聡は顔をこわばらせた。

「……おかみさん」

そのとき、後ろを勢いよく通り過ぎた主婦に押されて、聡は少しよろける。

おかみさんは転びそうになる聡を、あわてて支えると

「ちょっと。気をつけなさいよ！」

と押した主婦の後姿に向かって怒鳴りつけた。しかしその主婦は謝ることもなく人ごみに消えてしまった。

「……まったくもう。大丈夫？」

「はい……」

おかみさんは、何と声をかけたらいいのかわからないようで、二人の間にはスーパーの特売品を告げるアナウンスだけが通り過ぎていく。

妊娠してからというものの、お弁当屋には顔を出していない。

毎年恒例の黒豆も、今年は実家に帰らないから、と断ってしまっていた。

なぜなら……このお弁当屋の夫妻には『海外にいる婚約者の子供』という嘘が通じないことがわかっていたからだ。

「何を買うの？」

おかみさんは、これ以上聡のお腹には触れずに、いつもの調子で話し掛けてきた。

「あ……お肉とか。果物とか……、あ、おそばも」

「お肉だったら、表のお店のほうが安くていい肉だよ。果物は……みかんでよかったら、うちの里から送ってきたのが山ほどあるから分けてあげるよ。そばも手打ちのをあげるよ」

おかみさんは親しげに聡の手を引っ張ろうとした。

「そんな……いいです」

遠慮に隠していたバツの悪さが加わって、聡は目の前で手をぶんぶんと振った。

「いいって。遠慮しなさんな。あ、あんたの好きな黒豆もわけてあげるから、店においで」

おかみさんの力強い手に、聡がかなうはずがなかった。

大晦日の今日は、昼までの営業だったという弁当屋のシャッターを背の高さまで中途半端にあげて、おかみさんは聡を中に招き入れた。店の中は大掃除も早めに済ませたのか、こざっぱりとしている。

「はい、黒豆」

おかみさんは厨房に入ると、ステンレスの大型冷蔵庫の中から瓶を取り出してカウンターに置いた。

ガラス瓶の中で、黒い煮汁に沈んでいる大粒の黒豆の姿が透けて見えている。

「おかしいと思ったんだよね。アキラちゃんが実家に帰らないなんて」

おかみさんは、さらに弁当を入れる白いビニール袋の中にみかんを気前よく入れていく。

「それで、おなかの赤ちゃんは、あの……山田さん、じゃなくて官房長官のお坊ちゃんの子供なの？」

いきなり本題を切り出したおかみさんに、答えられない聡は下を向くしかない。

それでおかみさんは、聡のお腹の子供の……世間的に許されない父親が誰かわかってしまったらしい。

いっそう真剣な顔になる。

「そうなんだね。……それで、学校は続けてるんだね」

それだけはうなづくことができた。

「学校には、何ていってるの」

つまり、教え子の子供である事実をどう隠しているのかを、おかみさんは訊いているのだ。

「……前の婚約者の子供で……籍を入れたことにしてるんです」

聡は息もたえだえになりながら、なんとか答える。

「そう……」

おかみさんは深くため息をついた。

それだけで、ことのおおよそがわかったようだ。

「萩の親御さんにも内緒なの？……独りで産むの？」

責めることなく、おかみさんは聡を本気で心配しているらしい。

下をむいた聡の顔をのぞきこむようにかがむ。

……今の聡には、本当にわからないのだ。

将が東大に合格すれば、本当に結婚できるのか。合格しなかったらどうなるのか。

5月にこの子が生まれるとき、自分はどうなっているのか……まるでわからないのだ。

聡は右手を膨らんだお腹にあてて、立ち尽くしていた。

お腹の胎児だけが、また少し動く。

まるでそれが見えたようにおかみさんが口を開いた。

「……今、何ヶ月なの？」

「……6ヶ月に入ったところです。あの」

聡はおかみさんに向き直った。

「このことは、店長には言わないでください」

聡の必死の形相に、おかみさんは目を見開く。喉元を飲み込んだ息が通っていくのがはっきり見えた。

「お願いします」

聡は深く頭を下げた。

一呼吸置いたあと、聡はおかみさんに抱えられるようにして、下げた頭を起こされた。

「……誰にも言うもんかね」

優しい視線が聡に注がれている。

「あんたが困るなら、うちの人にも、誰にも言わないよ」

温かい瞳。少したるんだ二重瞼が……目を取り巻く小じわが……今までの苦労を刻んだその小じわが、温かさをひときわ信頼できるものにしていた。

「すいませんっ……」

聡は申し訳なくて、再び頭を下げた。熱い水分が逆流したように目の裏に集まってくるのがわかる。

「それより、アキラちゃん」

おかみさんは聡の背中を優しくぽんぽんと叩く。

「赤ちゃん生むのに、困ったときはいつでも呼びな。あたしがなんでも手伝ってあげるから。……大丈夫だって。いざとなったら子供なんて勝手に育つんだから……」

おかみさんは、聡が子供を独りで産む覚悟をしていると、勘違いしたらしい。

「おかみさん……」

だけど違うとも言い切れない聡は、もう耐えられなかった。

必死で耐えていた不安に優しさを注がれて……決壊を破ったように、瞳から涙がいっせいに溢れた。

そんな聡の肩を、おかみさんは背伸びをするようにして抱きしめた。

ところで、二人は気付いていなかったが、シャッターを背の高さだけに開けた弁当屋をのぞきこむ男がいた。

年の瀬の商店街には明らかに不似合いな、鋭い目付きは隠しようがなかった……。

333◆おせち

聡が将のマンションに着いて1時間後に、将が現れた。

「アキラ！」

将は変装のニット帽を脱ぎながら駆け寄ってくると、キッチンにいた聡を抱きしめた。

久々の自分の部屋との再会だというのに、そんなことはまるで忘れて、将は酸欠になったように聡の髪の香りを嗅いだ。

「あ、また大きくなった？おなか」

こうやって向かい合って抱き合うと、膨らんだお腹が将を押し返すようだ。

「……わかる？動くようになってから一回り大きくなったみたい」

聡が言い終わる前に、待ちきれない将は聡の唇に自分のそれを押し当てていた。

短い冬の日が、レースのカーテンを早くもオレンジがかった色に染めている。

長い口づけのあと、聡はようやく将が持ってきた風呂敷包みに気付いた。

「これ何？」

「ああ。ハハオヤがアキラにって。無農薬野菜だからとか言ってた」

以前、将が純代を呼ぶときは吐き捨てるような『アイツ』という呼び方だった。

だが聡に注意されたのもあり、最近は『ハハオヤ』になっている。

口調から、ほんの少しだけ、純代に対して気を許しつつあるのがわかって、聡は微笑んだ。

風呂敷包みを開くと、三段重ねの重箱が姿を現した。

その艶から輪島塗のいいものであるのは聡にもわかる。中身はどうやらおせち料理らしい。

「すごい……。明日までこれで十分だね」

聡は三段の重箱をテーブルに展開しながら呟いた。

煮物に伊達巻、昆布締め、ごまめといった伝統的なものから、ローストビーフまである。

「えー。俺はアキラがつくった料理が食べたいよ」

そんなもの、という目付きでチラリと重箱の中身をみやった将は、カステラのような焼色の伊達巻が重箱の幅いっぱいに入っているのを見つけた。

そのふっくらとした黄色い切り口から、子供の頃大好きだった車え

びのすり身と卵を使った上品な甘い味を思い出す。

エビは純代自ら擂り粉木を持って丁寧に擂ったものだ。

それを手伝うべく、すり鉢を押さえる将は、唾を飲み込みながら中身を覗き込んだものだ……。

重箱の一番下の段には、紅白の餅まで入っていた。これは、大磯から送ってきたものだろう。

大磯の巌の邸宅では近所の人を呼んで、毎年年末に餅つき大会をやっていた。

この餅つきの後、ほうぼうに飛びちった餅を拭き取るところから大掃除が始まるのが大磯の恒例だった。

さすがにもう杵は振り上げなかったが、おかしな音頭を取って皆を笑わせていたヒージーの声がふいに将の胸に蘇る。

「将、どうしたの」

聡の声でハッとする。

「あ、ボーっとしてた。昨日徹夜だから」

重箱から飛び出した幼い頃の思い出が、胸の中で痛いほどに膨らんでいた将は、とっさに誤魔化すしかない。

「コーヒー淹れるね」

聡はカウンターキッチンに入るとお湯を沸かした。妊婦らしくなったとはいえ、まだその動きは軽い。

「アキラは飲むなよ。アキラはハーブティか麦茶だからな」

将は照れ隠しに、お腹の子を気遣うべく注意を与える。カフェインを避けてのことだ。

「わかってる。将は一息入れて」

「うん」

将はダッフルを脱ぎながらソファに腰掛ける。

聡の顔を見て安心したのか、怒涛のように眠気が襲ってきて……あっという間に将はソファで意識を失っていた。

「将。コーヒー入ったよ」

聡が振り返ると、将はソファにひっくり返ってぐうぐう眠っていた。

どうやら昨日徹夜したというのは本当らしい。

少しだけ寝かせてやったほうがはかどるだろう。

聡はそう判断すると、残りの湯で自分の分のハーブティだけを淹れて、将のそばへと移動する。

将の頭の下にクッションを差し込んでやりながら寝顔を眺める。

連日の勉強で、さすがの１０代でも少しやつれているのがわかる。

「将……ごめんね」

額に掛かっている将の髪をかきあげながら、聡は呟く。

自分のせいで無理をさせることになってしまったから……。お腹の胎児もそれに呼応してか、少し身体を揺らした。

将の顔を見ながらフローリングの床に腰を下ろそうとした聡は、手をついた床にわずかな違和感を感じて、床に目を落とした。それは傷だった。

目を低い位置に落として確認すると、それは何かを鋭い刃物を床に突き刺したような跡だった。

中にほこりなどが入り込まないようにワックスを塗りこんであったが、間違いない。

傷はリビングに何箇所かあった。いずれも、ものすごい力で突き刺さしたことが一目でわかる深さだった。

前に……聡を守ろうとして傷つきひどい風邪を引き込んだ将を看病した聡は、ここで仮眠を取ったのだが、そのときはこんな傷はなかったはずだ。

334◆父親

「あー、腹いっぱい」

将は満ち足りた腹を叩いた。

鍋と餃子、そして明日の朝だけでは食べきれないだろうと将が持ってきたおせちの一部。

ずらりと並んだ夕食はあらかた二人のお腹に消えた。

「夜食で年越しそばもあるから」

と聡が玄米茶を淹れながら声をかける。

新婚夫婦のようなひとときに、将は幸せを噛み締めながら茶を淹れる聡を眺める。

この幸せは今だけではない。来年からは日常になるのだ。

いや、日常にするために、絶対に合格しなくてはならない。

甘い時間の中で、その現実だけがピリリと辛く将をひきしめる。

「食いすぎたら眠くなっちゃうかな」

さっきのようにふいに襲う眠気を将は恐れている。……もっとも聡と一緒の今日は、4~5時間寝てもいい、と特別に自分を許しているのだけど。

「頭使ったら、きっとお腹すくわよ。……あ、腹ごなしに将、お風呂入っちゃえば？」

その準備をしようと、素早く席を立つ聡に

「また、一緒に入る？クリスマスのときみたいに」

と将はその腕をつかむ。振り返った聡は顔を赤くした。

あの、二人腕をからませて、降りしきる雪の中を帰ったクリスマスイブの夜。

寒さに震え上がった二人は、一緒にお風呂に入ったのだ。

正確に言えば、聡が先にお風呂に入っているところへ、将が無理やり割り込んだのだが……。

「だめよ。あれからもっとお腹が大きくなってるんだから。恥かしいよ」

聡は将を軽く睨んだ。

あの日、大磯の邸宅の檜の湯船の中で、将は聡の少し脹れたお腹にじかに触れた。

お腹の子は、寒いところから温かいお湯に入って喜んでいるのか、活発にぼこぼこと動いた。

『すごいな。あんまり膨らんでないのに……こうしてると、赤ちゃんがいるのがよくわかるよ』

将は聡を後ろから抱きしめながらお腹をなんども撫でて感動を口にした。

そして、聡の乳房に触れて『固い』と驚いた。

妊娠中のせいでパンパンに張っていた聡の乳房。その感触に将は少し驚いたのだ。

それでも4ヶ月ぶりに出会うお互いの素肌である。

お湯の中で控えめながら触れ合わすうちに、聡は『今日は特別だから』と自分に言い訳をし始めていた。

つまり、このまま抱かれてもいい……そう思っていた。

だが、将は聡の素肌の感触を確かめただけで、聡を先にお湯からあがらせようとした。

けげんな顔をする聡に将は

『このままだと、我慢できなくなっちゃうから』と照れ笑いした。

『今日は、我慢しなくていいかも、よ』

聡はいたずらっぽく笑うとお湯の中の将にしがみついた。

本当？と将は聡の顔を見た。長湯したせいか、お互いもうのぼせる２歩ほど前だ。

汗でほつれ毛が張り付いた聡のほっぺたも……照れのせいなのか、長湯のせいなのかわからないほど真っ赤になっていた。

『でも、やっぱりやめとく。ひなたちゃんによくないから』

そう言ったのは将のほうだった。

激しいセックスは流産の元になる、と将は受験勉強の合間に何かで読んだらしい。

『アキラと、激しくないセックスなんて考えられないから』

今度は将がいたずらっぽく笑う番だった……。

「将は、すごく子煩悩になりそうね」

「あたりまえじゃん。アキラと俺の大事な子供だもん。……俺、絶対、子供は可愛がるって決めてるんだ」

食べ終わった食器をキッチンに運びながら、将は強い口調で決意を

新たにした。

「将も小さい頃は、お父さんに可愛がられてたんでしょ」

聡は、将に微笑みかけた。

二人でお風呂に入ったあと、将が勉強する傍らで、聡は大磯にあった古いアルバムを見た。

そこには、幼い将の成長が逐一記録されていた。

貼り付けられない写真が、ポケットにはみ出すほどに――。

おそらくパリで撮ったらしい写真は、将単独か、実母の環と二人のものが大半だった。

将は1歳から、父の仕事の都合でパリに行っていたという。だから、おそらく幼い将を一生懸命撮影したのは父の康三に違いない。

「まさか」

父のことを聞いたとたん、将の口調が吐き捨てるようになった。

「アイツは、俺のことなんか、昔っからほったらかしだったし」

「……そうかしら」

聡は首を傾げるだけにした。確執が強そうな将とその父親の関係。あまり強く否定すると将を傷つけるかもしれないと思ったのだ。

だが、聡は将は父に愛されていないわけがない、と思う。

しかし、わが子を愛していない親が、ああやって自分の子供を写真に大量に撮るだろうか。

「子供の頃はママハハに任せっきりで無視だし。ちょっとグレたら厄介払いしようとするし。……で、今度は跡を継げ、東大に合格しろ、だろ。自分のメンツしか考えてねーの。あのオヤジはよ」

将の口調は……食べながらビールを飲んだせいか、だんだん激しくなっていくようだ。

「でもね、将」

聡は、将の気持ちを傷つけないように、反論を試みる。

さりげなさを演出するために、食器を洗う手元に視線は落としたまま。

「それは違うんじゃないかしら……。お父様だって、将のことを思って」

「思ってねーよ！」

聡はハッとして顔をあげた。キッチンカウンターに両腕をついて将がこちらを睨んでいる。

次の瞬間、将はハッとして視線を下に落とした。

強く言いすぎたことに、すぐに気付いたらしい。

「ごめん」

睫のあたりに、寂しさを残してくるりと背を向けた将は、コップに差してあった南天を手にとる。

実家から持ってきた重箱の中にあしらってあったものだ。

そしてその赤い実をぷち、ぷちと枝からちぎりながら、背中で言葉を続ける。

「仮にさ……。子供のことを思ってるにしてもさ。ちゃんと可愛がってることが伝わってなきゃ、何も思ってないのと一緒だろ」

それは違うと聡は思う。

ただ可愛がるだけが親の愛情ではない。

可愛がる以上に……厳しさは、親だからこそ注ぎうる愛情なのだ。

きっと将の父親だって、将の器量や才能を信じていたから厳しく接したのだろうし、悪の道からなんとか救い出したくて……それが『厄介払い』に見えたこともあったのだろう。

具体的なことはあまり知らないけれど、聡はきっとそうだと思う。

だけど、具体的なことを知らない聡が、いくらそう諭してもそらぞらしいばかりかもしれない。

現実に、将は寂しかったのだ。

そんな寂しい思いは、自分の子にはさせたくない……そう思うに至った将の寂しさが、聡の心に突き刺さった。

聡は食器を洗うのをやめて、将の隣に寄り添うと肩にすがりついた。

「アキラ……」

何も言わなかったが、聡の温かさは将をすっぽりと包んだ。

しばらく、そのまま不動だった将だが……やがて、発作のように聡をきつく抱きしめた。

手の中の赤い実が床に一斉に転がった。

335◆暴露

無意識に聡のぬくもりを探して……将は目が覚めた。

元旦の朝はとっくに明るくなっている。

聡は、どうやら先に起きてキッチンにいるらしい。それらしい香りが漂ってくる。

しかしそれだけでは心配で、将はベッドを飛び降りるとリビングダイニングへ駆け出た。

「あ、将。おはよう」

柔らかい陽射しの中、皿を並べながら聡が振り返る。

それをみて、ようやく将は安堵のため息をついた。

「どうしたの？血相変えて」

「なんでもない」

そういいつつ、将は聡に触れずにはいられない。

その柔らかい感触と温かなぬくもりを肌で確認して、ようやく、心から安心することが出来た。

「どうしたの？いったい」

「なんでもないんだ」

……嫌な夢を見ていた。

夢の中で将は悪夢にうなされていた。

夢だとわかっているのに目が覚めずに苦しんで……さんざん苦しんだあげくようやく目が覚めて、そこに聡がいない。

『アキラ！』

大声で呼んで探し回るが、どこにもいない。

真っ暗で寒い荒野にたった一人で取残されて……やがてそれは夢だと気付く。

しかし夢だとわかっているのに目が覚めない。

そんなメビウスの輪のような、悪夢。

「将……お湯が沸いてる」

その声にようやく将は聡を離した。……だけど夢の余韻か、手放してはならない気がしてならなかった。

「……じゃあ、あけましておめでとうございます」

おとそが入った杯を軽くあわせる。

テーブルの上には、聡がつくったお雑煮と、純代がつくったおせちがきれいに盛りなおされて並んでいる。

外は穏やかな晴天らしい。エアコンを点けなくても柔らかな陽光に満ちた１０階の部屋はすでにサンルームのような温かさになっている。

そして聡の笑顔……まさに理想的な元旦の朝だ。悪夢とはまるで逆の。

『一年の計は元旦にあり』

巌の言葉を思い出す。

元旦の過ごし方でその１年が決まるんじゃ、と巌はよく言っていた。

こんな満ち足りた元旦なのだから、今年はきっと聡と一緒に幸せになれる。

将はさっきの悪夢を忘れるべく、自分に言い聞かせる。

「……将ってば」

聡が軽くにらむ。どうやら聡が何か話し掛けたのを聞き損ねたらしい。

「何？」

「何時までやったの？勉強」

年があけるまでは聡も勉強に付き合っていたのだが、クリスマスのときと同様、お腹の子供に悪いと先に寝かされたのだ。

「７時３０分くらいかな。初日の出を見て、寝た」

「えー！３時間寝てないじゃない。いくらなんでも身体に悪いよ」

もう今日で１週間も仮眠程度しか取っていないことになる。

塗り箸を持ったまま、眉をひそめる聡に、

「元旦なんて毎年徹夜だぜぇ」

将は椀の中の餅を伸ばした。餅の中に昨年の１３００キロ走破の思い出がめぐって将は笑顔になる。

４０時間かけて萩まで走って、聡の気持ちを確かめた去年。あのときはまさか二人の間に子供ができるとは思ってもみなかった……。

将のお椀が空になったのを見つけて、聡が手を差し出す。お代わりを盛ろうと気を利かせているのだ。

椀を聡に手渡そうとして、箸が床に転がってしまった。
すでに席を立っていた聡がそれを拾って……床についた傷に再び気付く。
「ねえ、将。これ、何の傷？」
「ん？」
聡が指差す方を見た将は、一瞬動きを止めた。
夏の……台風の夜の、大悟との死闘の跡。
「前にここに来たときは付いてなかったと思うんだけど」
「うん……」
この穏やかな元旦とは正反対の夜のことを、聡にどう伝えればいいのか、将は言いよどんだ。
将の顔が暗くなったことで、それは深く追及してはいけないことだと、聡は気付いた。
キッチンに入ると雑煮のお代わりを盛り付けるべく
「お餅は1個でいいよね」
と明るく話し掛ける。

お代わりを将の前に置いたとき、ようやく将は口を開いた。

「夏にさ。俺が、超傷だらけになったじゃん。そんときに大悟が付けた傷」

「……そう」

将の口調は、まるで大悟がいたずらをして付けたかのようだった。

それにあわせて、なるべく『よくあること』のような応答をすべく、聡は目の前に残った最後の伊達巻を自分の取り皿に取った。

だけど、あのときの傷だらけの将を思い出した聡は、同時に胸がつぶれるほどの心配をよみがえらせていた。

覚醒剤に依存する大悟を止めようとして、その大悟本人に容赦なく叩きのめされた将。

床の傷は、何かごつい刃物……おそらく出刃包丁か鉈を力いっぱい振り下ろしたような跡に見えた。

大悟は将に対して何をしようとしたのだろうか。聡は想像しただけで柔らかな伊達巻すらも喉を通らなくなった。

「あ、だけどさ。大悟のやつ、すっかり治ったって」

将は、『なんでもない』口調を崩さずに、餅をたくしあげた。

「本当？」

「ああ。こないだ退院したって西嶋が言ってた。西嶋の弟さんの養子になるんだってさ」

「そう……。よかった」

ようやく伊達巻の味が戻ってきた。

聡が知っている大悟は、出刃包丁を振り回すのにはそぐわない青年だった。

瞳に浮かぶ影は、どことなく将と共通している……そんな将の親友が、今度こそ幸せになることを聡は影ながら祈った。

将は聡を安心させながら、去年の１３００キロの旅には大悟も一緒だったことを思い出していた。

あのときの大悟は、骸骨のような覚醒剤依存の姿とは重ならない。

退院した大悟は、あのときの大悟に戻ってくれているだろうか……親友を信じたい将だったが、なぜか心の中の不安は消えなかった。

聡がキッチンで片付けをしている間、将はこっそりと大悟が使っていた部屋のドアを開けた。

家政婦の手で布団は片付けられていたものの、部屋はそのままだっ

た。

瑞樹の遺品が並べられた祭壇のような一角に将は吸い寄せられる。

小さなガラス瓶に入った骨の粉末、小さな白い犬のぬいぐるみ、そして将と写ったプリクラ写真。

大悟が帰ってきたのなら、これらは渡すべきだろうか。

それとも、傷をほじくり返すことになってしまうのか。

将は瓶を手に取った。

ヒージーのと同じように見える、まっ白な骨がさらりと瓶の中で傾き、将の心は痛んだ。

心の疼痛にそれを元通りに置いた将は、その隣にあるノートパソコンに目がいった。

自分は新しいのを持っているからと、大悟に貸した古いパソコンだ。

これはもういいだろうと、将はそれを持ち去ろうとして……ふと、ネットで見たい情報があったことを思い出す。

自分のパソコンは持ってきていない将は、迷わず電源を入れた。

そして検索サイトのポータルを探すべくブックマークを表示した将は、あることに気付いた。

そこには『ＳＹＯ』の名前がついたサイトが大量に並んでいたから

だった。

掲示板らしいそれらは、どうやら大悟がブックマークしたらしい。

『そういうところは見てもモチベーションが下がるばっかりで、いいことないわよ。だいたい人気があればあるほど叩かれるんだから』

と自分に関する掲示板の類を見ることは、武藤から禁じられていた将である。

もちろんその頃は、忙しくて見る暇もなかったのだが、ここへ来て将はそれを無性に見たくなった。

大悟が見ていた掲示板を見るため。つまり好奇心なんだ、と自分に言い訳をして将はその掲示板サイトに接続した。

しかし……だいたいのサイトは時間が経ちすぎていたせいでなくなっていた。

かろうじて生きていた一つを見て、将は

――やっぱりな。

と苦笑した。

そこには、やはり将に対する罵詈雑言が書き連ねてあった。

「不良」「女好き」「大根俳優」「ゲイ」

芸能人が掲示板で叩かれることくらいわかりきっている将は一種の

快感を覚えながら、書き込みを最初から眺めていった。

しかし。

ある1つの書き込みを見つけて、ふいに将の手が止まった。

将は目を見開いてその書き込みを読んだ。

固唾を飲みこむと、目を皿のようにして次へ次へとスクロールしていく。

落ち着け、と言い聞かせても、ばくんばくんと暴れる心臓は止められない……。

その掲示板には、どうやら過去の知り合いが書いたらしき、将の悪行が暴露されていた。

それは実際にしでかしたことだから仕方がないと、将は腹をくくっている。

だが、将を動揺させたのは

『将が同棲していた元カノは、将に追い出されて自殺している』

という一文だった。元カノというのは瑞樹のことに違いない。

その一文を皮切りに、将が瑞樹をいかに酷く捨てたかが、何回かにわけて詳しく書かれてあった。

……ようやく最後にたどりついたとき、左手で覆った口から、大き

くため息が漏れた。

苦い唾液があとからあとから湧いてきて、将はそれを必死で臓腑に飲み下そうとした。

唾液は飲みこめばいいけれど、その書き込みをした『犯人』を一度割り出してしまった頭をどうすることもできず、将はうなだれた。

そこには……将と瑞樹しか知らないこと……つまり瑞樹が大悟に話したとしか考えられない内容も含まれていたのだ。

336◆初詣1

学業の神で有名なＹ天神は初詣の人波でごったがえしていた。

鳥居から少し離れた場所に、聡は首一つ突き抜けた将の顔を見つけた。

さっきまで一緒にいた将だったが、パパラッチ対策のために聡より３０分早くマンションを出たのだ。

「アキラせんせー！」

「あけおめー！」

聡が将を見つけるとともに、そのまわりにいた２０人ほどの見慣れた顔がいっせいに聡に向かって手を振る。

「あけましておめでとうございます」

とりあえずみんなに向かって頭を下げる聡に

「センセー、だんなさんは？」

チャミやカリナが開口一番に聞いてくる。彼女たちは聡の『夫』が見たくて仕方がなかったのだ。

「誘ったんだけど……。いじめられると怖いからって、パスしちゃった」

もちろん聡は嘘をつく。

「えー！」

「まじー！別にいじめたりしないのにー」

チャミやカリナが不満そうに口を尖らす中、聡はその視線を将へとちらっと走らせて見る。

将もずっとこちらを見ていたようで、合ってしまった視線を引き剥がすように聡はそらす。

「……そのうち、会わせるから」

かろうじてそういうのがせいいっぱいだった聡は、あらためて生徒達を見渡した。

チャミやカリナ、カイトに真田由紀子や松岡のほかに、寿司屋勤めを終えて実家に帰ったはずの兵藤も来ていた。

「お、井口くんじゃん」

カイトが声をあげる。傍らにはボブカットのきれいな子を連れている。どうやら噂の彼女らしく、ヒューと声があがる。

「チッス！」

井口は少し照れて手をあげた。

「それ、噂の年上の彼女？」

「やー、そういうわけじゃ……」

といいながら井口は傍らの彼女にちらちらと目を走らせる。彼女のほうはにっこりと笑うと

「藤井さやかといいます」

と自己紹介した。見開くようにする目のあたりに自分の道をきっぱりと見極めた者の大人っぽさがある。

身体は華奢で小柄にさえ見えるが、よく見ると手や指はがっしりと骨太で、そのあたりはしっかりとパン職人していた。

井口より2つ年上だという彼女は、夏休みに飛騨・高山にある有名パン店で行われたパンの研修で知り合ったという。

井口が彼女のことを好きなのは明白だが、彼女の方は好意を持っている程度らしい。

もっとも、昨日長野から出てきて一緒にカウントダウンイベントに行ったくらいだから井口の想いの成就は期待できるのかもしれない。

将は彼女の前ではにかむ井口を微笑ましく見つめた。

そんな将を聡も見つめて安堵していた。

――なんとか、初詣に連れ出してよかった。

マンションを出る前の将のようすは、あきらかにおかしかったから

だ。

「今日……行くのよそっか、な」

さっき将のマンションで。将は急に自らが企画した初詣をドタキャンしようと言い出したのだ。

「え？」

顔をあげた聡は一瞬はっとした。将はずっとこちらを見つめていたらしい。

だけど、その瞳は暗さが混じった、なんとも寂しげなものだった。

「どうしたの？」

聡は異変に、問い掛けると同時に、その表情から将に何が起こったのかを確かめるべく見つめ返した。

だが、すぐにそれは見えなくなってしまった。将が聡を抱きしめたからだ。

「今日はずっと、二人でいたい」

耳元での囁き。それは少し寂しげにも、いつものようにもどちらにも取れた。

「……そういうわけにはいかないでしょ。みんなとの約束だし」

聡はたしなめるしかない。

「約束なんて。アキラに会う口実みたいなもんだし……。もういいよ」

そういうと将は聡をなおいっそう強く抱きしめた。

お腹がぎゅうっと圧迫されて、聡は将の胸を押し戻すと、顔を見上げた。

将の瞳はやはり、暗い色を浮かべていた。

「……どうしたの？」

聡の問いに、将は一瞬目を伏せた。しかし、すぐに

「今日が終わったら……アキラとしばらく二人になれないだろ」

と付け足した。あくまでも付け足しという口調に聡は将の心に何かがあったと確信した。

……事実、将は何も言わなかったが、重い鉛を飲んだような心の鈍い痛みに喘いでいた。

掲示板に書かれていた、将の瑞樹に対するひどい仕打ち。それをネットに暴露したのは大悟であることは、もはや間違いない。

それまで……大悟はいったいどんな気持ちを自分に抱いてきたのか。

それを想像する恐ろしさは、今気付いたことではない。

殺人の罪を被せたときから……常に将の心の奥に居座っていた重苦しさではある。

だが、それが現実のものとなったことに、将はやはりおののかざるを得ない。

いや、『気持ち』なんて生易しいものではない。

自分は大悟からどれだけのものを奪ってしまったのか。

殺人の罪は正当防衛ゆえに帳消しになったものの、1年以上も少年院に入れられてしまったのはあれが遠因である。

そして、間接的に瑞樹の命を奪う原因を作ってしまった――。

暴れる心臓。潰れてしまったように息苦しい肺を抱えて、将はもう一度ネットの書き込みの日時を確認した。

最初が……5月下旬で、最後は7月の、あの台風の前日。

つまり、大悟が覚醒剤をやっていた頃と重なることに将の罪悪感は少しだけ軽くなる。……気休め程に。

あの、執拗な書き込みは覚醒剤に操られた大悟が書いたかもしれないからだ。

だが、気休めはすぐに意味のないものだとわかってしまう。

なぜなら……覚醒剤に操られていたことによろうと、それは大悟の心の中に常に将への恨みがなかったことにはならないからだ。

「あれ、みな子じゃない？」

カリナが指差した方を見ると、振袖姿の女性がこちらに向かって歩いて来る。

内股の歩き方も、膨らませてまとめた髪型もまるで見覚えがないはずの女性だったが、そこにいた中で一番背が高い将と必然的に目が合う……やっぱり星野みな子だった。

目が合ったとたん、みな子は慣れない草履のせいか、小股でいっそうせかせかと歩いてくる。左右に揺れる桃色の袖で彼女が一生懸命急いでいるのがわかる。

「本当だ、みな子だ。キモノだー」

女子が騒ぐ。

やっと皆のところまでたどりついたみな子は、ぜいぜいと息を整えながら

「みんな、おめでと」

とストールの肩を上下させた。さっきからずっと早足だったらしい。

「どうしたのー、そのカッコ」

仲のよい真田由紀子の問いに

「昨日から横浜のおばあちゃんちに行ってたんだけど……、今朝、無理やり着せられたの。でも約束があるからって飛び出てきた」

と将をちらりと見た。

みな子と『いい関係』であることになっている将は、カイトや井口に押し出されるようにみな子の前に立たされる。

将は意味もなくどきりとしたのを隠すように

「似合うじゃん」

と口にしてみる。

「ありがと」

みな子は少し目を伏せて口の端に笑みを浮かべた。……そんな様子

は、彼女をなんだか急にきれいになったように見せた。

牡丹の花びらのようにたっぷりと華やかな桃色の振袖は、そこから抜け出た首や指のしなやかさを強調するようだ。

将は、とても久しぶりに……みな子がきれいな子であったことを再確認した。

337◆初詣2

だいたい揃ったようなので、一同は境内へと歩き始めた。

元旦の境内はなにしろ人がすごい。20人ほどの団体は、小グループに分割されながら人波に乗って拝殿へ進む。

こんなとき将や井口のような背の高い生徒は皆の目印として役に立つ。

いつもは芸能人ということで、人目から隠れるようにしている将ではある。

だが今日はクラスメートたちが取り囲んでいるのと、あたりの人は初詣という目的があるせいか、人目を集めながらもそれらが将へ殺到することはなかった。

「なに、井口くん、本格的にパン屋目指すの？」

「まだダンサーを諦めたわけじゃねーよ」

将の茶化した質問に井口はムッとして答える。

だが、傍らのさやかの視線を感じたのかあわてて

「や、でも。パン屋もおもしれー。マジ、おもしれー。そうだ、パンのワールドカップってのがあるの知ってる？」

「知らない」

「あるんだぜー。俺らが夏に行った研修の講師が、優勝してんの」

引きこもりの兄がいる家をひたすら嫌う井口は、この夏休み、バイトしているパン屋の主人の勧めのままに岐阜県の高山市であった新人向けの研修に参加したのだ。

さやかと知り合ったのもそこで、である。

「へー」

「本場のフランス勢を押さえて、日本の職人が優勝するのってすごいことなんですよ」

口を挟むさやかに、井口がとろけそうな笑顔になる。

さやかの表情に一喜一憂しつつ必死の井口を見て、将は可笑しくてたまらない。

それと同時に聡と近づき始めた頃の、自分を思い出して懐かしくなる。

最初のデートはドライブだった。

自分の車に聡を乗せただけで、とても幸せだったけれど。

聡を好きな将が投げたボールが、ただ返って来るような会話が続く。

そんな中、たまに聡の方から会話のボールを投げてくるだけで……

たまらなく嬉しかった。

聡が自分の車の中で、自分に向けて言葉を発した。

ただそれだけなのに。

受け容れられたような気がして……天にも昇る心地だった恋の始まりを将は甘く思い出す。

それを今、井口も味わっているのに違いないのだ。

聡は前の方を歩く将の頭のあたりを見ていた。

聡のまわりには、初期の頃から補習に参加していたまじめな生徒たちが集まっていた。

いま聡のとなりを歩くのは、いったん実家に帰ったものの、初詣のために、わざわざ東京に戻ってきた兵藤だ。

「兵藤くんは卒業後も海潮寿司で修行を続けるの？」

「はい。卒業したら昼間も修行できるので、仕入れの勉強がしたい

です」

兵藤は午後の陽射しに目を細めながら答えた。

出会って1年以上たって……この子も少し背が伸びた、と聡は少しのびた丸刈り頭を見る。

「キャッシュバックは何に使うか決めた?」

無事卒業できるともらえるキャッシュバック。

遅刻も欠席もせず、赤点もとらなかった兵藤はほぼ満額のキャッシュバックがもらえることになっているのだ。

「まだ……。親方からは、いつか必要になるから大事にとっとけ、と言われました」

「そうね。お店出すときとか必要だもんね」

兵藤はうなづきつつ問い返す。

「先生、僕らの卒業のあとは、だんなさんについて外国に行っちゃうんですか?」

とっさに、どう答えていいか言葉に詰まる。

まわりにいた松岡や真田由紀子らも皆、聡の顔をのぞきこむようにしている。

その猶予のない状況に聡は、うなづくしかない。

「そうですかー。そうですよね……」

兵藤は少し肩を落とす。そんな様子を見て、聡は胸が苦しくなる。

外国には行かないけれど……自分はこの子たちに酷い裏切りをしているのではないだろうか。

同じクラスメートの将の子を孕んでいると知って、この子達は何を思うだろうか。

「赤ちゃんも、外国で生むんですか？」

何も知らない真田由紀子が、心配そうに聡の顔をのぞきこむ。

聡の気持ちに反応して、お腹の中が少し動く。胎児もうなだれたのだろうか。

――この子を生むとき、自分はどこにいるのだろうか。

そして将は一緒なんだろうか。

わずか４ヶ月先のことなのに、何も見通せない聡はただ

「わからない」

と答える。あわてて「どうしたらいいか、二人で考えてるの」と明るく付け加える。

考えても答えは今は決してわからないのだけれど。

生むことに決めてしまったこの子を、健やかにこの世に出してあげることと、将の幸せのために毎日できることをするしかない。

自分と結婚するにせよ、できないにせよ、東大に合格することは将のためになる。

拝殿の前に来た聡は、厳粛な気持ちで５００円玉を賽銭箱に入れる。

将の合格と……初めての教え子たちの今後の幸せを祈念して。

お参りが終わると、皆一斉におみくじを買い求めた。

まるでこっちが本命のような大騒ぎである。

凶が出たらショックだの、逆にめったにないから縁起がいいだの口々にいいながらおみくじを引いていく。

聡もせっかくだからと引いてみた。そんな聡に将がさりげなく近寄ってくる。

「アキラ先生は？……すっげ、大吉じゃん」

聡のおみくじには『願い事……叶う　結婚……良縁あり。慎重に選べ』なと概ねよいことばかりが書いてあった。

将は『出産……安し』をこっそり指差すといたずらっぽく笑った。

「鷹枝くんは？」

「末吉。あんまよくなかったけど、気にしないしー」

将は歯を見せて微笑んだ。いち生徒としての顔だけで、みな子や井口たちのもとへ戻っていった。

あまりベタベタするとよくない、と聡にさんざん言われているからだ。

「ところで将」

ひいたおみくじを囲いのような紐に結んでいる将に、ふいに井口が声を掛けてきた。

そのまま肩を抱くようにして柱の陰に連れ込まれる。

小春日和の境内に慣れた目は、柱の陰を真っ暗に見せた。

徐々に復活したコバルトの視界の中に映った井口の目は、鋭いものだった。

顔を寄せて、ひそめた声が低いところから何かよくない知らせらし

い。

一緒にいたみな子とさやかは、お守りを選んでいる……その隙を狙っていたらしい。

「前原くんが出所したぜ」

元クラスメートで、昨年覚醒剤所持と恐喝・婦女暴行未遂で逮捕された前原茂樹――。

久しぶりに聞く名前だったが、将はその隈取をしたような目を即座に思い出した。

凍るような夜の川に投げ込まれた記憶と共に。

「前原が？」

井口はうなづいた。無精ひげが伸びた顔は、陰にいるせいか蒼ざめて見える。

前原とは昨日、カウントダウンイベントに参加したときに、街でばったり会ったという。

「少年院ってこんなに早く出所できんの？」

まだ逮捕されて1年と少ししか経っていない。

「知らねーけど、初犯で未遂だからじゃね？保護観察チューとか？俺はシカトしたけど……、お前は気をつけたほうがいいんじゃない？あいつ粘着だし」

気をつけたほうがいいというのは、言われなくても反射的に理解していた。

しかし、もはや生きている場所も違うし、それに前原とて更生しているのだろう。

……そう思い込もうとした将だが、心に不快感がしみ出してくるのを防ぎ切れない。

思わず顔をあげると、温かい陽射しの中に聡の横顔を探す。

338◆初詣3

「……じゃあ、今日はこれで解散ね。みんな寄り道しないで帰るのよ」

そう注意を与えながらも、せっかく出てきた生徒たちがそのまま帰るはずがないことは聡にも分かりきっている。

それでも大半の生徒は、おなじみのターミナル駅まで聡について同じ地下鉄に乗る。

ホームで聡は生徒を見回すふりをしながら、離れたところにいる将を見る。

方角が一緒だから付いてきているのを確認した聡は、将の傍らにいたみな子と目が合ってしまった。

桃色の振袖は、ふだんクールな感じの彼女を愛らしく見せてよく似合っていた。

裾などもペラペラとめくれず、しっとりとした艶は上等な生地に違いなかった。

聡は実家に置いたままの自分の着物を思い出した。

成人式は従姉の振袖だった聡だが、せっかくだからと母が作ってくれた訪問着。

毎年、正月に帰るたびに話題に出るのだが、結局、一回も着ていな

い……。

もっとも訪問着だから、結婚しても着ることはできる。

いつか将と一緒にそれを着る日は来るのだろうか。

地下鉄を乗り継いで、やっと若者の町にあるターミナル駅へ着く。

さっきまで小春日和だった午後の陽射しは、すでに夕方に近い色になっている。

正月とはいえ、駅はいつもと同じくごった返していた。元旦から開いて、バーゲンを開始したデパートもあるらしい。

「じゃ、先生は寄るところがあるから」

と聡は先に生徒に手を振って去っていった。

二人でマンションに戻るわけにはいかないことはわかっているが、将は寂しく聡の後姿を見送る。

自分もそろそろ帰ったほうがいいだろうか、と将が時計を確認したとき。

「鷹枝くん。あの」

いつもより言葉少なだったみな子が、急に口を開いた。

「よかったら、少し付き合ってくれない……？」

視線を下に落としたままの調子が、いつもと違う。だが最後に、視線を将の目の位置まであげて

「話があるの」

と続けた。

その必死な様子に、コクられるのかもしれない、と将は直感した。

できれば、聡と会っている時間以外は勉強にあてたい今の将だ。

だが、動きが不自由な振袖姿で駆けつけたのは自分のためかも、と思い直す。

聡と出会ったことで優しくなった将は……みな子を無碍に拒絶することはできなかった。

駅近くのカフェもかなり混んでいた。

オーダーするまえに、あらかじめ席を確保したほうがいい、と将は席を探したが、あいにく窓際のカウンターしかなかった。

「すわりにくくない？」

高いスツールに振袖で座るのは少しつらいだろうと、将はみな子のために椅子を引いてやった。

「俺、買ってくるよ。……何がいい？」

とさらに気を利かす。

「え、いいよ。そんな」

もちろんみな子は遠慮した。なんといっても将は芸能人だ。伊達眼鏡はしているものの、彼が自らレジに行くなんて、目立ちすぎるのではないだろうか。

みな子はまわりを見回した。幸い気付かないのか、見て見ぬふりなのかはわからないが、将を気にとめる人はいないようだ。

「いいって。なんかキモノって壊れちゃいそうで、コワイ。じっとしてて」

将はそういって笑うと、レジに行ってしまった。

みな子は袖を気にしながらカウンターに肘をつくとため息をついた。

将とこのまま別れるのが惜しくて……つい誘ってしまったが、何を話すというのだろうか。

いや、話したいことはいろいろある。

ありすぎて、どれから話せばいいのかわからない。

とりあえず、関西に行かなくてはならないことは……話すべきだろう。

まずは無難なところから、頭の中を整理するみな子だったが、次の瞬間には疑問がわく。

――それを話したところでどうなるのだろう。

別に付き合っているわけでもない二人だ。

将はきっと「残念だ」というだろう……。でも、きっと、ただそれだけだ。

その意味付けに……せめて告白してみるのは？

胸に苦しいほどの思いを吐き出してみたら……。

それを想像するだけでみな子の心臓は激しく収縮しだした。

苦しい呼吸の、まるでクロールの息継ぎをするようにみな子はレジを振り返った。

レジはオーダーを待つ人で行列が出来ていた。

将もまだ待っているようだ。背の高い将だから居場所がすぐわかる。

下を向いている将は……どうやらメールを打っているらしい。

みな子は息を飲み込んだ。

おかげで胸がますます苦しくなってしまったみな子は、思わず手で口を覆う。

――きっとアキラ先生にメールを打っているんだ……。

それがわかってしまったみな子の理性は、告白なんか、なんの意味ももたないことを割り出してしまう。

将は……たぶん、まだ聡と続いている。そして聡が結婚したというのは嘘。

突拍子もない想像だとは思うけれど、疑惑を通り越して、みな子の中では確信になっている。

『アキラ先生のお腹の子は……鷹枝くんの子供なんでしょう』

それを言ったら、将はどう反応するだろうか。

不思議なことに、告白の場面を想像したときより、みな子は奇妙に落ち着いてきた。

将はいろいろと誤魔化そうとするのだろうか。

それとも、6月に猫を見に行った帰りのように、みな子だけに秘密を打ち明けてくれるのだろうか。

――そうだ。

みな子はガラス越しの街並みに向かって背筋を伸ばした。

あのとき、将が聡をまだ好きだということは、仲のいい井口にも秘密にしていた。

それをみな子にだけ打ち明けたということは……将は、みな子を信頼してくれているのだ。

友達だけど……唯一無二の存在かもしれない。

かけがえのない事実に、みな子は一瞬救われる。

そのスタンスに縋って生きてきた。将を想ってきた。

だが……そのスタンスを重視すると……今のみな子には将に話せることはほとんどなくなってしまうのだ。

思考が振り出しに戻ったみな子は、再びカウンターに肘をついて、ガラスの向こうをぼんやりと見るしかない。

オーダーの順番を待ちながら、将は、さっき、なし崩しに別れてしまった聡に宛ててメールを打っていた。

＞今、どこ？俺は○○駅前のスタバ。

＞みな子と一緒。ちょっとコーヒー飲んだらすぐ帰る。

＞今日も、英語特訓ヨロ。

聡は大人だから、キーキー嫉妬することはないだろうが、誤解させないように、先手を打って連絡しておいたのだ。

聡はといえば、元旦から開いている書店の参考書コーナーでそのメールを受け取っていた。

昨日、将が思ったより頑張ったおかげで教材が残り少なくなっていた。その補充のために、いくつか問題集を新たに選んでいたのだ。

メールを読みながら聡は、元旦くらい休んでもいいのに、とも思ったが４日からスタジオ撮影が始まる将だ。今が頑張りどきなのだろう。

と、聡は手にした問題集を、将に渡してしまおうと思いついた。

クラスでの初詣帰りという大義名分がある今だ。街角で参考書を渡すぐらい教師と生徒として別に不自然なこともないだろう。

しかも、星野みな子も一緒ならなおさら都合がよい。なんなら一冊はみな子に貸してもいい。

聡は問題集３冊のお金を払うと、将がいるカフェへ向かった。

その頃。

みな子がぼんやりと見ていた行き交う人々のこちら側で。

カフェにいる二人を……正確には、将を……狙っているカメラがいた。

写真週刊誌の新年最初の号に載るべく、共演の〇〇谷詩織とのスキャンダル記事が進行しているのを……将はまだ知らない。

339◆初詣4

「勉強、進んでる？」

話を切り出したのは将のほうだった。足が長い将には高いスツールも単なる椅子のようだ。

それに軽々と腰を乗せながら、傍らのみな子に微笑みかける。

窓に向かうカウンター席。二人のスツールの距離は思いのほか近い。みな子の肩と将の肩の距離はわずか１０センチほど。

将の体温で体の左半分が熱い錯覚さえ覚えながら、みな子はうなづいた。

本当は……あのクリスマスイブ以来、勉強はまるで進んでいない。

いままでＭ大を目指してたんだから、関西圏ならＲ大やＫ大がある、と両親はみな子を元気付けようとしていたが、みな子はまるっきりやる気を失っていたのだ。

「図書館にぜんぜん来てなかっただろ。みな子。どうしたんだろって思ってた」

一一『どうしたんだろって思ってた』だって。

気にかけてくれていたという将の言葉に、みな子は大きく息をついた。

もちろん熱すぎるカフェオレを冷ますような振りをして。

好きなひとが、自分のことを考えてくれていた。こんな嬉しさは、生まれて以来はじめて味わうものだった。

それで、みな子はかなり救われた。

「予備校に通ってたから……」

これも嘘である。たしかに予備校に通える手続きはしていた。

だが、実際は講義をサボってネットカフェなどで徒に時を過ごしていたのだ……。

「でさ。話って何?」

一刻も早く本題に入りたそうな将に、一瞬浮かび上がったみな子の気持ちは再び沈む。

二人でいる時間がいとおしいのは、みな子の側だけなのだ……。

そんなに軽い存在の自分。

自分が関西に行くときいても、最悪「ふーん。残念だね」だけで終わってしまうかもしれない。

そんなことを考えながら、

「鷹枝くん、東大以外でどっか願書出した?」

と質問をしてみる。

「ああ」

一方将は、みな子がもし、告白してきたらどうすればいいのだろう、と恐れていた。

もちろん応じるわけにはいかない。自分には聡がいる。

でも、みな子はいい子だ。

できれば、今の関係を壊したくない……。

付き合えないけど、失いたくない。これはエゴなんだろうか、と将は考える。

みな子はいったい自分の何なのだと考えたとき、一番近い答えは『友達』である。

だが、その単なる友達が、自分以外の誰かを好きになることを考えると……それはあきらかに不快なのだった。

異性として告白されるのを恐れながら、自分を諦めて他の男を好きになるのは不愉快……。

「いちおう、親がうるさいからK大にも出しておいた。センターで受験できるやつ。でも行く気ないけど」

自分の我侭さに感じるかすかな吐き気。それを自覚しながら将は、何食わぬ顔をしてみな子の質問に答え、さらに質問を返す。

「みな子はM大だろ」

「うん……それがさ」

急に、本題のうちの1つの足がかりを与えられてみな子は下を向いた。

もう、話すしかない。みな子はカップを置いてカウンターに肘をついた。

「うちさ……。オヤが転勤になっちゃって。あたし、関西の大学を受験することになりそうなの」

伝え終わったみな子は勇気を出して、傍らの将の顔を見上げた。

将はカップから唇を離して、こっちを振り返った。

こんなに近い距離で見詰め合うのは初めて——。

みな子は、驚きのあまり眼鏡の奥で大きく見開いた将の瞳を見つめた。

1年生のときと同じ、明るい茶色の瞳がみな子を見つめる。

「うそ……」

「ホント」

思ったより将はずっと驚いてくれた……それだけでみな子は満足し

た気がした。

「こっちには残れないのかよ？」

みな子は首を静かに横に振った。

「うちにはそんな経済力ないもん……。だから、卒業したらもう、鷹枝くんとも無関係」

わざと自虐的な言葉を選んでみる。

「無関係、なんてことないだろ」

自分がいなくなる事実が、将の声を、そんな風にせつなくさせる。

将は、みな子を、みな子として認識してくれていたのだ。

だが、救われた反面、みな子は自分の位置を……聡との相対位置を確かめたくなる。

聡が絶対であることはわかっているけれど。

「関西の、どこ」

「たぶん大阪」

「おおさか、かー」

今度は将が肘をつく。みな子とは反対側の肘をついたおかげで将の身体は大きく傾く。

「ショック？」

おどけて見せるみな子に、将は素直に

「うん」

とやや細めた目をみな子に向けた。いわゆる流し目。

みな子はどきん、とした。おかげで用意していた

『あたしは、鷹枝くんの、いったい何？』

という言葉が吹き飛んでしまった。

カフェを出ると、街はもう紫色に沈んでいた。

ビルの上のほうだけがいやに赤く照り輝き、地上近くでは信号の緑や車のテイルランプの点滅が煌き出した。

昼間こそ温かだったが、陽が翳って急に冷えこんだようだ。

信号待ち。吹き付けた風に、みな子は思わず首をすくめる。

冷えたストールの毛がひやっと頬を撫でてみな子は瞼を一瞬きゅっとつむった。

「だけど、残念だな」

その声に、みな子は思わず瞼に込めた力をゆるめて、将を見上げた。夕映えとは反対側の……わすれな草色を深めていく空に浮かぶ将の横顔の唇から白い息が漏れていくのが見えた。

「そう思ってくれるんだ……」

ため息のようなみな子のつぶやきに、将は小さく「うん」とうなづいたまま俯くと、そのまま、茜色を深めていく夕映えの空を振り返った。

まもなく藍一色になるであろう空は、美しく焦がれていた。

きゅうっと……みな子の胸は締め付けられる。

締め付けられたせつなさが喉を逆流し、つんと鼻の奥を刺激しつつ、脳に達した。

せつなさに支配されたみな子は、将の首にぐるぐると巻かれた手編みのマフラーがふいに羨ましいと思った。

将を温める……将が必要なものになりたい。

将が振り返る……あのたそがれの空になれれば。

『友達』という中途半端な存在。それが何なのだろう。

好き。

どうしようもない想い。

信号がふいに変わり、けたたましいメロディが夕風に混じる。

「あたし……鷹枝くんの何」

「え」

横断歩道に三歩ほど踏み出していた将は止まった。

みな子はそのままの位置に立ち尽くしていた。

「あたし、鷹枝くんの、何なのかな」

震える声。だけど、みな子は泣いてはいなかった。

ただ、その黒目勝ちの瞳は、まっすぐに将を射抜くように見詰めていた。

「みな子」

将は、それだけでみな子が何を言いたいのかわかった。

だけど……どうしようもない。みな子はいい子だ。たぶん、いい女でさえあると思う。

せつないけれど……大事な友達としかいいようがない。

みな子を選ぶことはできない。

いつか、この甘酸っぱいようなせつなさは消えて、平らな友情だけが残る日が来るのだろうか。

そう、お互いに好意を確認しあった男と女の間に、友情はありえるのだろうか。

「ごめん」

将はそれを言うだけでせいいっぱいだった。

「どうして」

みな子は声を張り上げた。すでに限界だったのだろう、涙が一粒頬を伝う。

「どうして、先生なの」

みな子はそこで初めて、こみあげる熱いものと一緒に聡の名前を吐いた。

喉はマフラーで隠れているのに……将が固唾を飲むのがありありとわかった。

みな子はほんの少しだけ溜飲を下げている自分に驚いていた。

生まれて初めて好きになった男が、自分の言葉に感情を動かすさまをまのあたりにして……涙を流しながらも、失恋の場面なのに、一種の喜びを感じずにはいられない。

「先生は関係ない」

将はといえば、みぞおちに一撃をくらう直前のように、腹に力を込めた。

――そうだった。

将が信頼していたみな子だから……聡への想いも知っていたのだった。

その後、諦めたふりをしておいたはずだが、信じていないのは仕方ない。

だが……最後の秘密だけは、ぜったいに知られてはならない。

将はぎゅっと奥歯を噛んだ。

「うそ！」

みな子は叫んだ。

その声に通り過ぎる通行人の何人かが振り返る。

将は、これ以上大声を出させないために、みな子の傍に駆け戻った。

みな子は、しきりに流れる涙を手の甲でぬぐいながら、将を見据えた。

まるで睨みつけられているように見えるほど強い目の光だった。

「あたし、知ってるんだから……」

みな子は自らの昂ぶりを実感しながら、その心の奥では将を観察している冷静な自分がいるのをすでに知っている。

将のとまどう瞳。おびえながらも、みな子の次の言葉を待つその顔をまのあたりにして、喜悦はますます増幅した。

「先生は、本当は、結婚してないし……」

あてずっぽうをさも知っているように舌にのせる。

否……みな子の中では、すでに、クリスマスの夜から事実になっていることだ。

「先生のおなかの子供は、鷹枝くんの」

みな子の言葉はそこで不自然に止まる。

手にしていたビーズのバッグがアスファルトに落ちた。

言葉の続きを発しようとしたみな子の唇は、将の唇でふさがれていた。

横断歩道のメロディが止まり……車が動き出したが、二人は静寂に包まれていた。

横断歩道の向こう側で……聡も立ち尽くしていた。

たそがれゆく冬の街だけが、三人を包んでいた。

３４０◆３２１～３３９話のあらすじ◆

将と聡は、雪の中、大磯の邸宅を目指す。

二人は、ハルさんや運転手の西嶋から心づくしの歓待を受ける。

そして、子供たちの歌声が素晴らしいというハルさんの勧めで、教会のミサを見に行く。

しかし教会のミサは、見物人でいっぱいだった。二人は裏手の公園にまわり、そこで子供たちの聖歌に耳を傾ける。

聡はそこで将へのクリスマスプレゼントのマフラーを渡す。

そのとき、聡のお腹の子供がはじめて動きはじめて二人は喜び合う。

帰り道。「将と二人で歩きたい」という聡の希望で、二人は雪の中を寄り添って歩く。

将は、お腹の子供の名前を、「陽（ひなた）」にしようと提案する。

それは将にとって聡はあたたかな太陽のような存在だからだった。

一方、遅い時間に帰宅したみな子は、父の転勤で関西に引っ越すことを知らされる（３２１～３２４話）

あくる朝。聡は枕もとに置いてあった将からのクリスマスプレゼントを受け取る。

それは赤ちゃんの靴下に入ったベビーリングとエンゲージリングだった。

二人は運転手の西嶋に東京に送り届けてもらうが、そのときに将は、大悟が退院したことを知る。

将はそのまま、論述文の個人教授を受けるべく岸田助教授の自宅を訪れる。

助教授は、将が東大に合格した暁には、今度は娘の香奈の家庭教師をしてほしい、と申し出る（３２５～３２７話）

退院した大悟は、保護者の西嶋隆弘・節子夫妻の元に引き取られる。

彼らの養子になり、希望すれば学校に行ってもいいと言われるが、家庭の温かさを知らない大悟はとまどうばかりだった（３２８～３２９話）

昼は学校の図書館に出てきて自習、夜は聡にメールと携帯で英語の個人指導を受けている将は睡眠を1時間半まで減らして猛勉強している。

そろそろお腹が膨らみはじめたおかげで年末年始も実家に帰ることができない聡のために、クラスで元旦の初詣に行くことを企画する。

一方、みな子は学校の図書館には顔を出さず、予備校の講義も上の空だった。

関西行きを両親に告げられたみな子は、それでも東京に残れないか両親に食い下がっていた。

しかし、経済的に無理だということがわかり力を落としていたのだ（３３０～３３１話）

将は、予備校のカウントダウン講習と偽って、大晦日から聡と二人で過ごすことにしていた。

義母の純代はそれを知っても止めず、逆に聡の体を気遣ったおせち料理さえ将に持たせる。

大晦日の夕食の買い物をすべく商店街を歩いていた聡は、前にバイトしていた弁当屋のおかみさんとばったり出会ってしまう。

聡のお腹を見て、将の子供を妊娠していると見抜いたおかみさんだ

ったが、聡を責めることなく、優しい言葉をかける。

しかし、そんな二人を、目付きの鋭い男が外から見ていた……（３３１～３３２話）

将の元のマンションで落ち合った二人は、甘い時間を過ごす。

将は、自分は絶対に優しい父親になる、と強く宣言する。それは実の父親の康三に反発してのことだった（３３３～３３４話）

元旦の朝。聡がいなくなる悪夢を見た将はそこにいる聡を見て安堵する。

おせち料理を囲んで二人幸せな朝食の席で、聡は床についた傷について将に訊く。

床についた傷は、覚醒剤中毒になった大悟が付けたものだということ、しかし今は治って西嶋隆弘の養子になるであろうことを聞いて安堵する。

しかしそれで大悟のことを思い出した将は、大悟が使っていた部屋に入ってみる。

自分が貸したパソコンを開いてみた将は、大悟がネット掲示板に自分の過去を暴露していたことを知り、愕然とする（３３５話）

午後。学業の神様と知られる神社にクラスメートが集合していた。そこにはいったん実家に帰った兵藤や、進学しない井口も来ていた。ようやく明るさを取り戻した将を見て聡はほっとする。

大悟が自分に対して抱いていた複雑な思いの片鱗を知った将は、気分が重くなったせいか、初詣に行くのを渋っていたのだ。

初詣中将は、井口から、覚醒剤所持と婦女暴行未遂で逮捕された前原が少年院を出所したことを聞かされる（３３６～３３７話）

初詣の帰り。みな子は将に「話がある」とカフェに誘い、関西の大学に行くことになった旨を伝える。

がっかりする将に、みな子はふと自分の想いを伝えたらどうなるだろうかと思うが、伝えることができずにカフェを出る。

将の口から確かに聞こえた、みな子と別れる残念さと、黄昏のせつなさにみな子の気持ちは昂ぶり、みな子は自分が将のなんなのかを

問う。

そして、聡のお腹の子供が将の子供であることを知っていることを口にしようとして、その唇を将の唇でふさがれてしまう。

そんな二人を、横断歩道の向こうで聡が見ていた（３３８～３３９話）

３４１◆口づけのあと１

反射的に、聡は駆け出していた。今来た方向へ。

人波をかいくぐるように走る、走る。

色づき始めた駅前のネオンが後ろに流れていく。

聡は後ろもみずに、膨らみだしたお腹が揺れるのもかまわず走って……気がつくとホームにいた。

荒い息とともに、膨らみ始めたお腹が上下する。

自分は、いったい何を見たんだろう。

横断歩道の向こう側。振袖姿のみな子に、口づけする将。

見まちがい？見まちがいだ、きっと。それか、良く似た他人。

聡の理性は、それを『まちがい』として片付けようとやっきになって働いた。

だが……目をつぶると……瞼の裏に焼きついているその映像は消しようがない。

桃色の振袖姿の若い女に、顎を傾けるようにして唇を寄せる背の高い男。

見慣れたダッフル。それに何より……首にぐるぐる巻きにしている

マフラーは、聡が編んだややふぞろいな編み目だ。

まっ白になった頭の中で、その映像だけが鮮明に何度もリピートされる。

「大丈夫ですか？」

聡はハッと顔をあげた。

無意識のうちに、電車に乗り込んでいたらしい。

棒につかまって立っていた聡の前に座っていた女性が、心配そうに聡の顔を覗き込んでいる。

聡の表情も顔色も、よほど悪かったらしい。

女性の隣に座っていた男性が立ち上がると、「どうぞ」と聡に席を譲ってくれた。どうやら夫婦らしい。

大丈夫です、と遠慮しようとした聡だったが、お腹に視線を感じる。

夫婦そろって聡のお腹と顔をかわるがわるに見つめてにこにこしている。

断る方が不自然な状況になってしまい、聡は好意を受けることにした。

シートに落ち着いたおかげか、お腹の子供がまだ動いていることに気付く。

聡と一緒に走っていた胎児は、いまだ止まりきれないように活発に手足を収縮させているらしい。

……妊婦だというのに無茶な走りをしてしまった。聡は反省をこめて、そっとお腹を撫でた。

今は何も考えたくない。

聡は下腹に手をおいたまま、身も心も電車の揺れに任せるしかなかった。

「みな子？いったいあなた、どこにいるの」

電話の主はやはり母親だった。横浜の祖母宅……正確には母の兄にあたる叔父宅に祖母は同居している。

着物を着せてくれたのもこの祖母だが、そこに昨日からみな子の一家は泊まっているのだ。

夕方になっても戻らない娘を心配して携帯に電話してきたのだ。

「……ごめん。勉強したいから、今日はおうちに帰る」

「そんな、みな子」

抗議しようとする母を、「電車の中だから」といってみな子は一方

的に電話を切った。

さすがに元旦だけあり、この時間にしては乗客は少ない。

みな子は携帯を握り締めたまま、シートにぼんやりと腰を下ろして、寒々しい色に照らされた電車の床を眺めていた。

一瞬の出来事だったと思う。

みな子は、生まれて初めて、人の唇の感触を、唇で味わった。

……はずなのに、くっつけたその感触は、突然すぎてまるで覚えていない。

鼓動も至福感も恥かしさも、何もかもすっ飛んでいた。

ただ、至近距離にいた将を、熱いと感じていた。

時間の感覚がない。その口づけが長かったのか、一瞬だったのかそれもさだかではない。

やがて……傾けた顎を戻すようにして、将はそっと唇を離した。

——キスって。そうか、こんな風に顔を傾けるから、鼻がぶつからないんだ……。

途切れていたせつない感情。漠然と……それだけが戻ってきた。

鷹枝将にキスされた。

せつなさに呼ばれるようにして、心臓が大きく拍動を始める。

鷹枝将にキスされた。

動き始めた心臓に体中の血が熱く駆け巡る。

鷹枝将にキスされた。

脳天に達した熱い血液はのぼせたように思考を邪魔する。身体がただあったかくてふわふわする。

しかし、せつなさとふわふわした身体が、幸福感に到達する前に

『ごめん』

みな子は将の声を聞いた。ハッと我に帰ったみな子は将を見上げる。

『ごめん。本当にごめん。そんなつもりじゃなかった』

将は今までに見たことないほど動揺していた。

みな子と目をあわせないように……顔を逸らしたまま、しきりに詫びの言葉をつなげる。

その、ほとんど後ろ向きの斜め４５度になった耳のあたりには、とまどいと後悔しか見つけられず……そのとき、みな子は初めて傷ついた。

――何で謝るの……。

哀しさは、再びの涙を連れて来そうになる。

みな子は辛くもそれをこらえた。

夜風が、目頭から鼻の奥にツンと沁みて……みな子は、黙って将の傍を離れるしかなかった。

期待していなかった、と言えば嘘になる。

もしかして将が……追ってくる。名前を後ろから呼んでくれる。

諦めながらも、みな子は襟足の端っこに希望を残しながら……惨敗した。

いま、みな子はたった一人で電車に揺られている。

涙も心で貼り付いたように乾いて、もはや出てこない。

誰もいない自宅マンションは、冷え冷えとしていた。

早いところ着替えて、何かコンビニに買いに行こう――。

窮屈な着物を脱ぐべく和室に入ったみな子の携帯がメールの着信を伝える。

もしかしたら将では、と期待してしまう自分を、みな子は自嘲する。母だった。

＞うちには衣紋掛けがないから、着物は洗濯紐に掛けて吊るしておきなさい。

みな子は思わず自嘲を鼻先に漏らした。

この振袖だって。……わざわざ着て横浜から出てきたのは、将に見せたかったからだった。

本当は、元旦の今日の集まりに出るつもりはなかった。

教師と生徒。禁断の関係なのに……秘密裏に子供を産ませるほど、固い仲の将と聡。

そんな二人をまのあたりにするのは、つらい。

対して、卒業したら関西に行く自分。

未来永劫、将の人生と、自分の人生が交わることはないのだ。将の人生に関係ないのは自分のほうなのだ。

そう思っていたみな子だったが、今朝、祖母に振袖を着せてもらっ

た自分を見て、将はこの姿を絶対に見るべきだと思った。

薄く化粧をし、制服とは違う姿の自分を見て、将は何というか。

それを確認したい、とみな子は願ったのだ。

みな子は洗濯紐を探すべく、クロゼットの扉をあけた。

開けたクロゼットの扉からあらぬ色が飛び込んできてみな子は振り返った。

自分が身につけている振袖の桃色だった。

『これは、すごくいいものなんだよ』

着付けた祖母は、うっとりと呟いた。

１００万は下らない……そんな着物の価格を聞いたとき、そんな金があるのなら、こんな着物ではなく、東京に残る資金にあててほしかった……みな子は未練がましくもそう思ったものだ。

しかし、仮に東京に残ったとして何になっただろう。

鏡に映った振袖の長い袖は、柔らかいくせにどこかメタリックな重い光沢でみな子を射抜いた。

下から見上げていった袖の先に、着物より一段紅い色で、自らの唇があった。

初めて口づけを交わした唇。

将とあわせた唇ーー。

みな子は鏡を背にすると帯を勢いよく、ぐい、と前にまわした。

固い帯は一度緩むと、重い感触を残して畳に落ちて、みな子を一気に解放した。

締め付けられていた身体が解放されると同時に、乾いていた涙も、また込み上げてくる。

幾重にも巻いていた紐をすっかり解いてしまうと、桃色の振袖を肩から落とす。

重い絹の着物は、まるでみな子の身体に未練を残すように、肩から腕をなぞって落ちていく。

涙も頬をなぞって落ちていく。

自分を包んでいた桃色が、畳にすっかり滑り落ちたとき……みな子は襦袢姿のまま、その場に突っ伏すと、声をあげて泣いた。

342◆口づけのあと2

将もまた、自分に困惑していた。

いったい、何であんなことをしたのか……。

これ以上、隠している事実を暴露されてはいけない。誰かが聞いていたらまずい。

そういう意識が働いたのは間違いないが……それがどうしてみな子への口づけという形になってしまったのか。

自宅へのタクシーの中、窓に映って流れていく街の灯に将は、さっきのことを投影させてみる。

あのとき。吸い寄せられるようにして、将はみな子の唇に自分の唇を押し当てていた。

無我夢中だった……。

気がつくと、熱に浮かされたようなみな子の顔が至近距離にあり……将は自分のしでかしたことにおののいた。

みな子は……たぶん真面目なみな子だから、おそらく初めてのキスだっただろう。

自分の罪深さに思わず舌打ちすると、将は額に手をあてた。

もはや自分がなんと言って謝ったかも覚えていない。

初めてのキスを奪った謝罪にしては……軽すぎたことだけはわかる。

まともにみな子の顔を見れなかった……それも確実だ。

顔もみずに吐き出した言葉に誠意なんか見出せるはずもなく……将は後悔に再び頭を抱えた。

考えても考えても、あの瞬間の自分の意図がよくわからず、将は虚空にため息をつくしかない。

否……わからない、というのは間違っている。

将は自分の心の片隅に息づく気持ちに気付きながら、それを拾い上げるわけにはいかなかった。

あの瞬間……将は、みな子にたしかに惹かれていた。

自分への気持ちを顕わにしたみな子に、何とかして答えたかった。

だけど……。

将は自分の心の真ん中に住んでいるひとをそっと確かめる。

……それは変わらず聡だった。自分に温かいものを教えてくれたひと。

将が気がついたときには、みな子は静かに踵を返していた。

なおも将は……人波にまぎれていく、その寂しい後姿を思わず追いたくなる。

追ってどうするのか。

将はその姿が見えなくなるまで目で追っていた。足を、かろうじて踏み出さなかったのは……今考えれば聡のためである。

聡。

タクシーの窓いっぱいに、聡の顔が蘇る。

その瞳には、なぜか涙をいっぱいにためていた。

そのせつない表情に、将は呼吸が苦しくなる。

自分は……聡を裏切りかけたのだろうか。

――ごめん、聡。

将は何も知らないであろう聡に心の中で詫びた。

――将は、どうして、あんなことを……。

お風呂の中で、聡の脳裏に再びそれが戻ってきた。

食事の準備をしてそれを食べるまでは、何も考えずに済んでいた。なにせ妊娠も6ヶ月、安定期にある聡の食欲は、ここのところ旺盛だったから。

しかし、こうして静けさが戻ると聡の思考はどうしても、さっきのことを考えはじめてしまう。

そしてそれは、『将の浮気』という結論を安易に出してしまいそうになる。

それに対して心は、昨日から今朝、さらにクリスマスの将を思い出して必死で抵抗しようとする。

だけどすべては、将とみな子が顔を寄せ合う鮮明な映像に打ち消されてしまうのだ。

――いやだ。

聡は記憶を振り払うように、とぷん、とお湯の中に潜った。

目をしっかりと閉じて、息をとめる。……その瞼の裏にも、その映像はしつこく蘇り、聡は苦しさにお湯から顔をあげた。

顔をぬぐって開いた目の前に膨らんだ下腹部がある。

将の子供がいる……お腹。

聡の妊娠を知って、将は……結婚しようと、確かに言った。

――だけど、そんなの無理。

聡は、弾かれるように天井を仰いだ。

寒いので換気を切ったバスルームは湯気でぼんやりと煙っている。

それは聡の先行きのよう。そんなことを思ったとき、聡の額に雫が1つぽとりと落ちてきた。

氷のように冷えきった雫は、一瞬、聡の全身を反射的に震わせて、聡はまた俯いた。

……例え、東大に合格したって。将はまだ若いのだ、まだ18年しか生きていないのだ。

心惹かれる女に出会うのは、むしろこれからじゃないのか。

髪の毛から、次々と流れ落ちて来る水滴のように、聡の心には絶望材料が降り注ぐ。

と、そのとき。

部屋で携帯が鳴り、聡はハッと顔をあげた。将の着信音。

あわてて、タオルで身体を包み、ユニットのバスルームを出る。

時間を見ると、もう個人教授の時間だった。

記憶と絶望に翻弄されながら思わず長風呂してしまったらしい。
聡はさんざん逡巡したあげく、ようやく通話ボタンを押した。
「もしもし」
……相手が将だとわかっていて、通話ボタンを押すのをこんなにためらったことがあっただろうか。
「アキラー？時間だよん。……さっそく教材送ってよ」
電話の中からは、いつもと同じ調子の将の声が聞こえてきた。
聡はますますとまどう。あれは、やはり見間違いだったのだろうか。
「ご、ごめん。まだお風呂なの」
「あ、ほんと？ゴメン、ゴメン」
約束の時間に遅れたのは聡のほうなのに……優しい将の声。
それとも……将は、早くも男のズルさを身につけているのだろうか。
疑心暗鬼になりつつも、聡はそれを表面に出すことができない。
「ううん。あたしがつい長風呂しちゃったから」
「３０分待つよ。その間、先にＣＮＮのトップニュースの要約しとくよ。辞書なしで」

「……じゃあ、そうしといて」

「うん。湯冷めに気をつけろよ……じゃ、あとで」

電話を切ったとたん、一気に力が抜けた。

……それで、逆に将との会話中、ずっと緊張していた自分を知り、聡は再びため息をついた。

将は、どういうつもりなのか。

将を信じるべきなのだろうか。信じていいのだろうか。見なかったことにすべきなのだろうか。

将にどう接していいかわからない聡は、膨らんだお腹を撫でて三たびため息をついた。

343◆口づけのあと3

聡との電話を切った将は、自室の静けさの中で、無意識にみな子の姿を思い浮かべていた。

うるんだ瞳。寂しげに去っていくうなじのあたり。

――やはり、きちんと謝っておかなくては。

そう思った将は、携帯を手に取るとみな子に謝罪のメールを打ち始めた。

＞さっきは、本当にごめん。

ここまではいい。だがそのあとが続かない。

＞俺、どうかしていたんだ。

と打ちかけて思いとどまる。さっきの行為を、自分の意志とかけはなれた、動転と気の迷いのせいにする非道さは、将でもわかる。

＞もっと早く、みな子と出会っていたら……。

自分へのみな子の気持ち。

それに出来る限り答えるべく考えた文言に、出会っていたらどうだというのだ、と自問自答をする。

自分にとって女性はたった一人、聡だけだ。

みな子に対して誠実になるあまり、聡への不実をにおわせるその文言を将は、やはり消去するしかない。

なぜなら、聡がこの世に存在しないほどの事態にならなければ、みな子を選ぶことはないからだ。

＞でも、みな子は大事な友達だから。もし許してくれるなら、友達でいて。

やや自分に都合がいいものの、一番将の本心に近い言葉を、将はようやくつむぎだすことができた……だが、しかし。

もうすぐ関西に、引っ越してしまうみな子には、そらぞらしくないだろうか。

いや、そもそも。メールでどうにかしようということ自体が不誠実であるように思えてきた将は、みな子の携帯番号を表示させる。

数字の羅列の中に、

『あたし、鷹枝くんの、何なのかな』

ふるえる声と黒目がちの瞳がフラッシュバックする。

自分のだらしなさを責めつつ……将は、衝動的に通話ボタンを押してしまった。

電話して、何を話すというのだ、と咎める理性と。

いや、とにかく謝らなくてはという情と。

二つが渦巻きはじめる前に、電波がつながる乾いた音がした。

「……」

いつもなら、『もしもし、鷹枝くん？』と明るい声がするはずだが、携帯は電波のつながりだけの沈黙を伝えるのみだ。

仕方ないので将から

「俺……」

と声をだす他ない。そして声、という現実は将にそのまま謝罪の言葉をつなげさせることになった。

「今日は……本当に、ごめん」

自然にうなだれた将の耳に押し当てた携帯は、しばらく沈黙を続けていた。

みな子の声を待ちつつ、それが怖い将はさらに「ごめん」と続けようとしたが

「こっちこそ……さっきは、ごめん」

というか細い応答があり。将は意外さに顔をあげた。

「いろいろ、変なこと言っちゃって……。『あれ』も……」

キス、という単語を口にしようとして、みな子はその単語の生々しさに、代名詞に言い換える。

将だけにつながっている回線にそれを発するのは、挑発的な気がしたからだ。

みな子の涙は乾いていた。着物を脱いで着替えて、紐を部屋に渡して掛けて……となるべくそれを思い出さないように動く。

それは成功したように思えた。健康なみな子の胃は、空腹を訴えた。コンビニに出るのも面倒だったので、インスタントラーメンをつくる。

しかし、その麺を啜りこもうとして……みな子は一瞬躊躇した。

将とあわせた唇。

その唇を、インスタントラーメンなんぞに使うのはもったいない。

みな子はラーメンをそのままにして、洗面所の鏡に自らの顔を映してみる。視線は自然に唇に集中する。

それは……泣いたおかげで少し腫れぼったいながら紅を差したような色にもなっていた。

初めてのキス。

初めて好きになった、鷹枝将と、キスした。

そして将は、絶対に、自分のものにはならない男。

みな子は、唇をあわせた瞬間を反芻してみる。

突然すぎて、紗が掛かったような記憶から懸命にもやをとりのぞこうと努力をする。

しまいには、引き出しの奥に隠した雑誌を取り出す。

そこには将のグラビアがあった。

本物の将より、目も細く少しいかつい印象の写真の中で、みな子の視線はその唇だけに注がれる。

形がよく、女の唇のようにふっくらとしている唇にみな子は初めて気がついた。

この唇が自分に……。

それを思い浮かべたとたん、その湿った柔らかさと温かさがふいに蘇る。

みな子はプールに入ったときのように、体中がきゅんと締まるのを感じた。

はずみで再び涙がこぼれる。

しかし、さっきのように哀しい涙ではなかった。

将が自分に口づけしたことを……むしろ、神が起こした奇跡のような気がしている。

「『あれ』も……気にしてないから」

みな子は出来る限り明るい声を出すようにした。

そう。気にしないでほしい。気にするあまり、自分から離れてしまわないでほしい。

「それよりも、お願いがあるんだけど」

みな子は将に返答の隙間を与えずに続ける。

「今までどおりでいて」

変な風に意識しないで。せめて友達として、卒業まで、一緒にいてほしい。

どうせ、卒業したら離れてしまう自分だから……。

「先生のことは……誰にも言わないから」

「みな子」

将は、誤解だ、と言おうとして止めた。

嘘を重ねても、みな子はそれをきっと信じないだろうとわかっているからだ。

「でもね。鷹枝くん。……あたし、嬉しかったよ」

「みな子……」

「本当だよ」

みな子の頬をまた、涙が伝った。次に続ける言葉のせつなさに、涙が先走ったかのように。

「だけど、忘れる。だから……お願い、今までどおりでいて」

本当は忘れない。いつまでも覚えている。死ぬまで抱きしめていく思い出。

だけど、『友達』の将を失いたくない。

恋人になれないなら、せめて信頼される友人のままでいたい。

「先生の……カモフラージュ役でもいいから」

カモフラージュという単語に、将の心に何かがちくりと刺さった。

頭から聡の姿が完全に抜けていた、あの瞬間。

さっきの、口づけは……カモフラージュなんかじゃなかった。

だけど、それを伝えてどうする。将はかろうじて、口に出す言葉を変換した。

「みな子は……それでいいわけ？」

我ながら自分のずるさが、やるせなくて……将の口調はやや乱暴になる。

「うん……いいよ。だから」

みな子は深呼吸を挟んだ。とどめを刺すがごとく、思い切る。

「あたしから逃げないで」

３４４◆大悟の失踪

４日から図書館の開放が再開した。

１６日から始まるセンター試験まで２週間を切ったせいか、３年生がいっせいに席を埋めていた。

聡は午後からの出勤だったが、さっそく英語問題での質問が殺到した。

その中に将はいない。

将は、今日からスタジオ撮影に入っているのだ。

受験生とはいえ１４日からのドラマ放送開始に向けて、何かと忙しいらしい。

撮影は夜まで及ぶらしく、今週はいつもの、ネットとメールを使った個人授業も休みになるだろうとのことだった。

「先生。できました」

気がつくと星野みな子が聡のわきに立っていた。

「さすが、早いわね……じゃあ添削しておくわ」

聡は軽口を叩きながら答案を受け取った。

年内は顔を見せなかったみな子だが、今日はこっちに来たようだ。

英語が得意なみな子には、多くの実戦問題に触れるのがいいだろうと、過去問題を渡していたのだ。

みな子は目を伏せるようにして会釈すると、くるりと踵を返して聡の前を立ち去った。

その頬のあたりが、前より輝いているように見えるのは聡の気のせいだろうか。

聡はしばらく、そのすらりとした後姿から目が離せずにいた。

あのとき……将が口づけしていた、映像が脳裏に自動的にフラッシュバックする。

「先生、あたしらも英語するー。問題ちょーだい」

みな子の答案を握り締めたまま、しばらくぼうっとしていた聡は、ハッとした。

チャミ&カリナがにこにこと立っていた。

「センセー、またお腹おっきくなったよねー」

「今日、午前中、びょーいん行ってきたんでしょ？男か女かわかった？」

問題がほしいというわりには、聡のお腹について熱心に訊く。

どうやら二人は勉強に飽きて、気分転換に聡のところに来たらしい。

「お……」と一瞬言いかけた聡だったが、即座にまだわからない、と言い直した。

「えーほんとぉ、つまんなーい」

口を尖らす二人をよそに、聡は選択問題メインの問題集を探して席を立つ。

お腹の胎児が『嘘つき』といわんばかりに、ぼこりと身体を揺すった。

男の子と思わせんばかりのその勢いのよさ。

だけど……聡のお腹の中にいるのは、女の子だった。今日の検診でわかったのだ。

それが判別したとき、聡は、将を思い浮かべて心がはずんだ。

どんなに将が喜ぶか。

つねづね、聡に似た女の子がいい、と言っていた将である。女の子だったら『陽(ひなた)』と、名前まで考えていた将である。

『ひなたちゃんだったよ』

検診が終わって直ちに、メールを打とうとした聡だったが……その手が止まる。

――まだ、わからない。

聡は、メールを打たないまま、携帯をバッグにしまった。

わからないのは、胎児の性別が、ではない。

将がこの子の父親として生きるかどうかが……将が人生を自分に定めてしまって、それでいいのかがわからないのと……。

病院を出た聡はタクシーを拾って、乗り込んだ。

冷え冷えとした曇りの町が流れ出すのを確認すると、聡は背筋を伸ばした。

――これは将への罰なんだよ。ひなたちゃん。

聡は心で胎児に話し掛ける。

この3日間、聡は悩んだ。

クリスマスに呉れた小さな靴下と、自分への婚約指輪を目の前にして聡は悩み続けた。

どうして、将は、みな子にキスなどしたのか……。

最悪のことを想像して、胸はもやもやと痛み続ける。

しかし、出勤を前にして、聡はついに自分の中で結論を出した。

ちなみにこの3が日もネットとメールの個人授業は続いていたが……将はいつもの将だった。

自分との将来のために、必死で東大合格を目指す態度は変わらなかった。

だから、聡は……見なかったことにしよう。将を信じよう。と心に決めたのだった。

だけど。

あの一瞬だけは許せない。

たとえ気の迷いだとしても。

それは、女としての聡の素直な気持ちだった。

だから、せめてその罰として聡は……将が待ち望んでいることを教えないことにしたのだ。

それで、自分の気持ちがすべて整理できればいいのに。

聡は、コピーを取りながら、まだ消化できないやりきれなさを感じていた。

みな子は、みな子で……チャミやカリナに慕われながら図書室のコ

ピーを使う聡を盗み見ていた。

本当は、担任の聡には、関西の大学を目指すことになったことを伝えなくてはならないのに、みな子はそれを言えずにいた。

言うべきことは言えぬまま、みな子は聡を盗み見るしかない。

きゃぴきゃぴとしたチャミやカリナにまじるアルトの声に、大人の女性の落ち着き。

マタニティがすっかりさまになったお腹の中には……将の子供。

自分にくれる指導も的確だ。

なのに、あいかわらず……年下から見てもどこか可愛らしい、聡。

――かなうはずがない。

みな子は、唇を小さく噛むと日本史の参考資料に目を落とした。

英語の答案を聡に渡してしまったので、次は日本史をやることにしたのだ。

そこはちょうど、飛鳥時代の天皇家の系図が記してあるページだった。

そこには、天智天皇と天武天皇、その複数の妻と子供の複雑な系図が記してあった。

――もし、昔なら。

飛鳥時代でも、平安時代でも、なんなら戦国時代でもいい。

無駄だと思いつつ、みな子は空想の世界に足を踏み入れてしまう。

……一夫一婦制でさえなければ、もしかしたら鷹枝将は、2番目の女として、自分を選んでくれたのではないだろうか……。

そうだ。

何も、一番じゃなくてもいいんだ。たった一人の女になんかならなくてもいい。

将の最初の子を身ごもった聡が正妻なら、自分は側室でいい。

聡が女性として、いまの自分より優れているのはわかる。

だから……2番目でいい。2番目でいいから、将に愛されたい。

ほんの少しでいいから将の愛がほしい。

自分は、鷹枝将が好き。鷹枝将だけが好きなんだ。鷹枝将以外の人の正妻になるより、将の側室の方がいい。

もしも鷹枝将が、自分を選んでくれるなら……嫉妬なんか、きっと我慢できるのに……。

――どうして、現代なんかに生まれてしまったんだろう。

そこまで行き着いたみな子は、自分の想像の馬鹿らしさに資料を閉

じた。

ため息をひとつ吐き出すと、問題集を開く。

自分の押したインターフォンが、虚しく中から響いてきた。

間を十分にあけて3回押して……大悟はため息をついた。

――留守か。

夏まで将と暮らしていたマンションを……大悟は訪れていた。

置きっぱなしにしていた瑞樹の遺品を、返してもらおうと思い立っての訪問だった。

諦めてエレベーターを降りた大悟は、それでももう一度１０階のあたりを見上げた。

思えば、瑞樹と初めて出逢ったのも今ごろだった……とどんよりまではいかない白い曇り空に、大悟は目を細める。

青白い小さな顔の中で目ばかりが目立った制服姿。

おどおどと将を訪ねてきた様子は、大悟の中でおぼろげに揺れている。

クリスマスに西嶋家に引き取られてまだ１０日ほどが経過していた。

タダで置いてもらうのに気が引けた大悟は、アルバイト扱いで西嶋光学工業の仕事を手伝っていた。

「まだ退院したてなんだから、無理しなくていいのよ」

節子は気遣ったが、

「俺がやりたいんです」

と大悟は雑用を進んで引き受けた。

社員には一切の大悟の過去は伏せられていたが、真面目な態度は、社員も感心するほどだった。

「新しい子、最近の子には珍しいですよね」

古株の社員にそう褒められて西嶋隆弘は自分のことのように相好を崩した。

しかし、大悟は……動いていたかったのだ。働くことで頭をいっぱいにしておきたかったのだ。

動いていないと、醜くて冷たい心の核が、表層に出てきてしまう。

それを恐れるばかりに大悟は、懸命に働いた。

正月は、家事を手伝い、中学の勉強のやりなおしに取り掛かった。

そんな大悟を西嶋夫妻は、温かい目で見守った。

忙しいけれど、穏やかな日々。

家族に信頼され、信頼する、あたりまえの幸せ。

それを手にしつつあった大悟の中で、急速にクローズアップされてきた想いがあった。

瑞樹だった。

家族に恵まれず、不幸なまま死んでしまったかわいそうな瑞樹。

瑞樹を……このまま忘れてしまうのは、あまりに彼女が可哀想だ。

大悟の亡き瑞樹への思いは、正月の間に急速に膨れ上がった。

3月には、命日がある。

それまでに、せめて……遺骨と遺品を手元に戻しておきたい。

そう思った大悟は、夕べ、瑞樹のことを西嶋夫妻に話したのだ。

大悟は、電話してから来るべきだったか、と後悔した。

だけど……将の携帯番号などまるで覚えていない。

それを記憶させた携帯電話もまた、入院中にとうに失っていた。

また来ればいいさ、と自分を無理やり納得させた大悟は商店街へと向きを変えた。

隆弘との待ち合わせまでまだ３０分もある。

西嶋光学工業の仕事始めは明日の5日からである。

自分もお得意様に新年の挨拶をするから、と隆弘は近くまでマイカーで送ってくれたのだ。

時間をつぶすべく、コンビニに入ろうとした大悟は、ちょうど自動ドアの中から出てきた若者と目が合って……そのガラの悪さに顔をそむけた。

来ているのはジャージ風だったが、真っ赤な短髪に、耳介にぐるりとピアスの穴が開いている。

あまりまっとうではない人種であることを大悟の本能は見分けていた。

無視しようとした大悟だったが、

「大悟、大悟じゃんよ」

と呼び止められてギョッとした。

振り返った大悟に、隈取をしたような特徴ある目と、分厚い唇が記憶を呼び戻した。

「茂樹……？」

トレードマークのマカロニドレッドはなくなっていたとはいえ、それは確かに中学時代の同級生、前原茂樹だった。

「中学以来じゃん……」

前原は大悟を見るとニヤリと笑った。その溶けかけた前歯は一本が欠けたままで、大悟は嫌な予感がした。

「よ。元気そうジャン。……悪いけど俺、急いでるから」

とっさにやりすごそうと、大悟は後戻りをした。

そのまま走り去ろうとして……本当に立ちすくむ。

鏡のように商店街の風景を映し出したベンツが止まっていた。

「そう邪険にすんなよ」

尖った靴、スーツ、独特に香る整髪料で固めた頭に、鋭い眼。

大悟は……ベンツから降りてきた男を見て、蛇に睨まれた蛙のように身動きができなくなった。

３０分後、隆弘との待ち合わせ場所に、大悟は現われなかった。

西嶋夫妻は、捜索願を出したが、大悟の行方は杳として知れなかった……。

345◆スキャンダルと決意1

内閣府では、首相をまじえて新年になって何回目かの会合が行われていた。

内閣から立案したい案件があり、その準備のために新年早々繰り返し会合が行われているのだ。

将の父である鷹枝康三官房長官も当然、そこに出席している。

限られた時間の中で、会合は打ち切るように終了し、康三はため息をつきながら立ち上がった。

まだ派閥間調整が残っているため、場所を変えて再度会合があるのだ。

廊下へ出た康三に、背後から近寄る人物があった。

外務大臣の麻野一朗である。麻野大臣は親しげに「鷹枝さん」と声をかけた。

今年の9月に行われる総裁選の最大のライバルと言われている彼だが、康三の母方の遠縁にもあたる。

何か、さっきの案件について補足したいことでもあるのか、と康三は軽く会釈をした。

康三とは別の派閥に属する麻野だが、今回の案件では敵対はしていない。

ごく近くに寄ってきた麻野は意味深な笑顔を浮かべながら

「息子さん、いろいろと華やかですな」

と声をかけた。

どうやら、マスコミ事情に詳しい麻野は、昨夜放送された、将が久しぶりに出演したバラエティを見たらしい。

ドラマの開始が近い将は、受験生とはいえ、番組宣伝のため、数本のバラエティに出ることが決まっているのだ。

「はぁ……。どうも」

麻野がどうして急にそんなことを言い出すのかわからない康三は、とりあえず社交辞令としてあいまいに返答するしかない。

麻野は、

「ちょっと……」

と言いながら、康三だけをそこにあったドアの中に誘うふうをした。

康三は、いぶかりながらも、側近を廊下に置いたまま素直に麻野のあとについた。

……政治家同士、側近にも秘密の、談合ともいえない密談はよくあることだ。さっきの案件について何か秘策があるのか。

その小会議室に入るなり……オフィシャルな場ではありえないほど、近くに寄ってきた麻野に、康三は身構える。

しかし麻野は康三の耳に口を寄せるようにして囁いた。

「歌舞伎と我々では……、世間への責任が違いますからな」

それだけ伝えると謎めいた……しかし、勝ち誇った笑顔を浮かべて「それだけです。……行きましょう」と康三をうながした。

康三が眦を見開いて、顔をあげたときには、麻野大臣はもはや後姿だった。

――知っている。

康三の背中を冷や汗が流れた。

麻野外務大臣は、知っているのだ。……息子の将の抱える秘密を。

翌日の早朝、康三は事務所でソファの腕かけに頬杖をついたまま、眉根を寄せていた。

テーブルの上に、ネガがある。

一昨日に毛利が買いとったそれには、将がマンションのドアから出てくるところが写っていた。

日付は今年の元旦になっている。

そして、その続きで……同じドアから出てきている身重の聡。

画像の右下に表示された日時時刻は将が出てきた1時間あとになっている。

どうやら近くのビルの屋上から望遠レンズで狙ったらしい。

ややぼやけていたが、被写体が将であることははっきりとわかる。

「私が迂闊でした。ネガはこれだけか、念を押すべきでした」

康三の前で、毛利もまたうなだれた。

――おとつい、事務所を訪れたカメラマンは、これを１０００万で買ってほしいとふっかけてきたのだ。

しかし、二人が同時に写っていないこと、画像がやや不明瞭なことを理由に、毛利はそれを現金３００万に値切った。

これがもしマスコミに流出したところで、いくらでも言い訳が利く写真であることは、カメラマン自身もわかっていたのか、その金額であっさりと承知した。

しかし……カメラマンは、同じネガのコピーを麻野大臣のところにも持っていったらしい。

若いときに隠し子をつくったことが世間に暴露されつつも、有力役者として活躍が許されている……

麻野が歌舞伎を引き合いにだしたのは、あきらかに将が18歳にして女性を孕ませたことを揶揄しているのだ。

――ライバルに秘密を握られてしまった……。

はらはらと気を遣う毛利の前で、康三はただ苦虫を潰したような顔で、沈黙していた。

現時点であのネガは、世間にはいくらでも言い訳ができる。

他のクラスメートや家族も一緒だったなどというフィルムを捏造するのは簡単なことだ。

問題はむしろ、将が万が一東大に合格したあとであり、さらにその2ヵ月後の、聡が出産するときだ。

――やはり、軽率だったか。

康三は……東大合格と引き換えに、聡とのことを認めようとした親心を、後悔していた。

どうしたものか。

大きくため息をついた康三は、腕かけから肘をはずして、冷めたコーヒーに手を伸ばした……そのとき。

「大変です！」

と若い男性秘書が飛び込んできた。

「何だ、騒々しい。打ち合わせ中だぞ」

毛利が咎めるのも聞かず、秘書は血相を変えたまま、激しい息と一緒に声を吐く。

「息子さんが……」

毛利と康三とどちらに渡すか逡巡しつつ差し出したのは、今日発売の週刊誌らしい。

康三がそれをもぎ取るように奪い取ると、開かれたページを食い入るように読む。

そこには、大きな見出しで

『スクープ・イケメン俳優・鷹枝将、〇〇谷詩織と愛の一夜』

とあった。

険しい顔で文字を追っていた康三だが……一番恐れていたことに触れられていないことがわかると、投げるように週刊誌をテーブルの上に放り出した。

久しぶりに今日は学校に行ける。聡の顔を見られる。

……それが嬉しくて、ゆうべ2時まで勉強したにも関わらず、将は朝6時には目が覚めてしまった。

本来は、センター試験まで1週間あまりに迫った今ごろは、本当は体調の調整のためきちんと睡眠をとるべきなのだろう。

しかし、ドラマの収録やその他で忙しい将は、とにかくまだまだ詰め込むようにしているのだ。

早々と制服に着替えた将は、朝食を食べるべく階段を降りる。

ちなみに、家で一番早いのは康三である。

8時には国会議事堂にいる必要があるし、その前に30分ほど事務所でスタッフと打ち合わせをするので、まだ暗い7時前には家を出るのだ。

しかし……今朝は、すでに康三はいなかった。

「……オヤジは？」

将にとってはどうでもいいことだが、手早くスープを温めてきた純代にとりあえず訊いてみる。

「昨日はお仕事で事務所に泊まったらしいわ」

「ふうん」

コーヒーのマグカップに鼻で返事をしながら、新聞に手を延ばす。

どんなに忙しくても新聞は熟読しろという岸田助教授からの指導で、朝最低２０分は新聞に費やすのがここのところの日課になっている。

新聞を手に取る前に……制服のポケットに突っ込んだ携帯がふいにけたたましく鳴った。

まだ６時３０分すぎである。

携帯が鳴るのには、あまりに不自然すぎる時間だ。

将はさもわずらわしげにそれを取り出すと相手の表示を見た。

『武藤さん』とある。

将が所属するプロダクションのチーフマネージャーである。

武藤がこんな早朝になんだ、スケジュール変更か……いずれにしても嬉しい連絡ではないことを予見して将は不機嫌に通話ボタンを押した。

「将？　新聞見た？」

「ハァ？」

挨拶もせずに、いきなり切り出した武藤は「落ち着いて、落ち着くのよ、将」と続ける。

その鼻息さえ聞こえてきそうな慌てっぷりに、武藤のほうこそ落ち

着くべきでは、と将は少し可笑しくなる。

「……今日は、学校は休みなさい」

「ハァ？何で」

うむを言わせないいきなりの指示に、将は短く抗議する。

「学校に行くと、記者に囲まれるわ。……いい？　今日は休みなさい」

質問に的確な答えを返さないまま、武藤は純代に代わるように将に命令した。

将は理解できないまま、「武藤さんから」と携帯を純代に渡してしまうと、新聞をめくった。

ほどなく……週刊誌の広告中の見出しに、自分の名前を見つけた将は

「なんだよ、コレ」

と目を丸くした。

346◆スキャンダルと決意2

校門付近には、朝から記者やレポーターが待機していた。

生徒たちより早めに登校した聡は、何事かと思いつつ……将の身に何かが起こったことを本能的に予感した。

胸騒ぎを抑えつつ職員室の引き戸をあける。

「おはようございます」

「あ、古城先生！これ見てください！」

挨拶もそこそこに、権藤先生が折りたたんだ新聞からスライディングをするように駆け寄ってきた。

「鷹枝将が、ここに」

そういいながら権藤先生が指差す先には週刊誌の広告があった。

『スクープ・イケメン俳優・鷹枝将、〇〇谷詩織と愛の一夜』

聡は……ごくりと唾と同時に動揺を飲み込んだ。

聡の目の前には週刊誌が開いてある。

気を利かせた先生の一人が、出勤の途中で買ってきたものだ。

ため息をついた聡に目を止めた多美先生が、声を掛けてきた。

「古城先生、大丈夫ですよ。問題の鷹枝将は今日は欠席することですし」

つい今しがた、母親から将の欠席の連絡があったばかりだ。

「ええ……」

多美先生は、聡が生徒への影響を慮って悩んでいると思っているらしい。

聡は微笑をつくって、もう一度誌面に目を落とした。

うなだれた目線の先にたまたま週刊誌があっただけの話で、もう、記事は追っていない。

一度読んだだけでその内容は、聡の心に消したくても消えない記憶となって残ってしまっている。

それでも……目線の先にぼんやりと浮かぶ記事の写真や小見出しが否応無しに、まだしつこく飛び込んでくる。

『二人で失踪。謎の一夜』

『本命は同級生の彼女?』

……ドラマ「ばくせん」やＣＭで人気急上昇中のＳＹＯこと鷹枝将と、清純派女優の○○谷詩織が二人で一晩失踪したという記事。

最初に、この記事を目にしたとき、聡はでっちあげだろうと半信半疑だった。

将から詩織の話は聞いていた。送られてきた画像に写っていたこともある。

大河ドラマを見ていた聡も好感を持っていた女優だったから、将がそんな人と共演できることを聡は心から喜んだ。

しかし、読み進めるにつれて……衝撃が表面に出ないよう持ちこたえるのに、聡は知らず息をとめていたらしい。

苦しい。苦しいのに息ができない。

だけど……職員室の誰にもそれを知られてはならない。

何か、言葉を発するべき……だけど何を言えばいいのかわからない。

そのとき、

「古城先生、鷹枝くんのマネージャーから電話です」との声。

思考が停止している聡の元には、救いのようだった。

マネージャーの武藤からは、迷惑をかけた謝罪と説明があった。

それによると、どうやら今度の木曜日から始まるドラマの宣伝のために、関係者の誰かが情報を流したのだろうということだった。

聡と将が続いていると思っていないのか……ことの真偽についての説明はなかった。

聡が武藤にそれを訊くわけにもいかない。

聡はもう一度、記事の写真に焦点をあわせてみた。

大きく載っている写真には、やや不鮮明ながら、フロントガラスごしに、ハンドルを握る将と、助手席にいる○○谷詩織が判別できる。

二人とも地味に変装していたが、何度見ても、それは将であることは、間違いなかった。

白い斑点が画面に写っているのは雪だろうか。12月、将はロケで北海道にいっていたからその間かもしれなかった。

さらに写真のボンネットの上には別の写真が小さく重ねてあった。

角度的によくわからないながら、将と振袖姿の女性。

顔は将で隠れてしまっているが……どうやらキスをしているらしいことが類推できる……聡が見てしまった将とみな子の口づけだ。

『〇〇の横断歩道で。こちらは同い年の彼女（類推）。ドラマのように大胆です』という冗談めかしたキャプションがついていた。

長い一日だった――。

今日の授業をとりあえず終えた聡は、トイレの個室にその重い腰を下ろした。

6ヶ月のお腹は、ことさらにその重さを主張している。

特に……緊張し通しだった今日は、膨らみが少し張っているようだ。

胎児が動くと、ほんの少しだけど鈍い痛みを感じるようだ。

こんなことは初めてで、聡はいつもより固いお腹を撫でた。

いつもだったら職員室でも寛げるのだが、今日という日は……一刻も早く人目のないところに逃げたかった。

心が受けた衝撃を……聡は、今日一日必死で隠していたから。

幸い、教室は平穏だった。聡の目には。

週刊誌の広告は新聞の他、電車の中吊りなどにもあったはずで、それを見た生徒もいて当然だった。

しかし聡の耳には、騒ぎは入らなかった。

職員室も、生徒たちには……騒ぎにならない限り、特に説明しないことになっていた。

学校側から説明することで、寝た子を起こす結果になりかねないからだ。

授業中も、職員室でも……油断すると、動揺が体のどこかしらに現われてしまいそうで……聡は全身を強ばらせていた気がする。

便座に腰掛けると、すべての筋肉が一気に弛緩して、脱力してしまったかのようだ。

ほどけてしまった神経は、聡に無意識に携帯を手にとらせた。

あらためて将からのメール――朝のＨＲが始まる直前に着信していた――を読む。

＞心配するといけないので先に言っとく。

＞週刊誌の記事、ドラマの宣伝のためのでっちあげだから。

＞今日、顔を見れると思っていたのに残念すぎるぜ、コンチキショー。

＞もうそろそろ授業だろうから、またあとで電話する。

再びそれを読み返した聡の心はぬったりとヘドロのように沈んだままで、浮かび上がらなかった。

何の感情も起きない。

何の疑問もわきあがらない。

何の展望も考え付かない。

朝、今と同じように職員用のトイレでこのメールを読んだ聡の思考は、激しく働いて……将のメールと週刊誌の記事の矛盾点を探そうとしていた。

――でっちあげなら、どうして変装して二人きりで車に乗っていたのか。

――仙台のホテルや、新幹線で、二人っきりで目撃されたのはどうして。

――スタッフとどうして一晩以上、連絡がとれなかったのか……。

――どうして、どうして。

思考は激しく聡の中で跳ね返って……心を砕いていく。

それは、見なかったことにしようとした、みな子との一件をも飲み込んで、さらに増幅していった。

いつのまにか沈んだ心から血が噴きだすように……聡は涙を流していた。

涙はさらに、自分を容赦なく追い詰めそうで……際限なく崩れてしまいそうで……聡はトイレットペーパーを引き出すと、目から次々と溢れ出る雫を拭き取る。

必死で持ちこたえるべく、涙を腹の底に飲み込んでしまおうとした……。

朝の感情を生々しく思い出した聡は、少し息苦しくなり、大きく息を吸いこんだ。

張り付いたような胸の筋肉は、呼吸動作をぎこちなくしたが、なんとか肺を満たして……お腹の底から吐き出す。

その瞬間。

何か……液体が、体内から漏れるような感覚。

いつもと違う感じに、ただちに確認した聡は……ありえない色に染まっている下着に悲鳴をあげそうになった。

トイレの薄暗がりでもわかる、生理よりさらに朱い、鮮血。

「嘘……」

脳天を殴られるようなショック。聡は、一目散に個室を出た。

妊娠中期の出血。聡は必死で頭の中の予備知識をたぐる。

血はさらさらしていた。

まさか早産?

……早産なら、まだ6ヶ月の胎児は、まず助からない。

――ひなたちゃん、ひなたちゃん!

心で呼びかけながら、聡は、気がつくと校舎を出ていた。

職員室の先生たちに、何と言いつくろって出てきたのかも覚えていない。

タクシーを拾うべく、とおりに面した校門へと歩く。

――走っちゃいけない。落ち着いて……病院にいかなくちゃ。

急ぎたいのに、身体がいつのまにか……全身が鉛に変わったかのよ

うに重い。

いつのまに鳴り出したのか、耳元で割れ鐘を叩くような、ガンガンとした耳鳴りが止まらない。

聡は自分を励ますべく、無意識に、校門への距離をカウントダウンしていた。

あと１０歩。

――手の指先が冷たい。手袋をするのを忘れてしまったんだろうか。

あと７歩。

――頭ン中も冷たい。スーッとしてる。痺れちゃったみたい……。

あと３歩……。

――もうすぐ。もうすぐタクシーが通る。

白い曇り空がふいに瞳を刺す。門が、校舎が、地面が回転する。

「聡、……聡！　おい！」

将ではない。

だけど懐かしい……聞き覚えのある誰かの声が聡を呼んでいる。

ようやく校門へとたどりついたところで、倒れこんだ聡の意識は…
…急激に遠のいていった。

347◆スキャンダルと決意3

勉強が一段落ついて、鉛筆を置いた将は、窓ガラス越しに通りをうかがった。

さすがに夕方に差し掛かったせいか、ここから記者の姿は見えない。

将はほっとため息をついた。

今朝は朝のワイドショーかテレビカメラまでやってきて、大変な騒ぎだった。

おかげで、小学校の登校時間にさしかかった孝太は、裏口から直接ガレージに行くハメにさえなったほどだ。

喉が渇いた将は、階段を降りた……キッチンには家政婦さんがいる。

孝太の小学校で父兄会があるとかで、純代は出掛けたのだ。

名門私立だけあって、たびたび父兄会が催されるらしい。

「将おぼっちゃま、お茶になさいますか？　それともおジュースで？」

家政婦さんは将に素早く気付くと、気を遣った。

本当は自分で淹れたかったが、かえって面倒なので『紅茶。ダージリン』と頼んだ将は

「で、まだ、いるの？」

と玄関のほうを顎でしゃくった。記者連中がまだいるか、という意味だ。

家政婦さんは大げさに眉根を寄せた。

「さっきは午後のワイドショーで玄関が映ってましたのよ。おかげで騒がしいこと騒がしいこと」

「ふーん」

将は再び、そこにあった新聞をめくると、あらためて自分の記事の見出しをマジマジと眺めた。

ドラマの初回放送日は、もうあさってだ。

確かに、テレビ局にとってはいい宣伝になるんだろうな、と将はため息をついた。

この段階で……将は、週刊誌の記事そのものは目にしていなかったのである。

「ね。緒方さん」

薫り高いダージリンの紅茶を運んできた家政婦に、ふと思いついて将は声を掛けた。

「この週刊誌、買ってきてくれない？」

「おぼっちゃま、そんな雑誌。お勉強の邪魔になりますよ」

家政婦は、眉をひそめた。

「自分のところを見るだけだからさ。……やっぱ、どんなことが書いてあるか気になるじゃん。ね？」

家政婦は「でも、まだ記者の人が……」などとさんざんごねた末に、ようやく買いにいってくれた。

その週刊誌をリビングのソファでめくった将は……思わず立ち上がった。

転がるようにして階段を駆け上がり、携帯を掴み、聡の番号を押す。つながるまでの間、血の気がザーッと音をたててひいていくのを感じた。

ヤバい。

聡に見られて困るのは、大きいほうの……○○谷詩織との2ショット写真ではなく。

むしろ、それに重ねられるようにしてあった、小さい方の写真……つまり、みな子とのキス写真だった。

みな子の顔は隠れているが、あの日、聡はみな子の振袖を見ている。

モノクロ写真でもたぶんわかってしまうだろう――。

体中がドクン、ドクンと揺れる中、コトリ、と回線がつながった。

『この電話は、電波の届かない場所にあるか、電源が入っていないため……』

という無機質なメッセージ。

もう一度掛けなおす。結果は同じだった。

将は唇を噛み締める。……あとは祈るしかない。

――どうか、あの記事を、聡が目にしていませんように。

と、ふいに、置いた電話が鳴って、将はびくっと身体を震わせた。

みな子だ。

週刊誌の件だろうか。

将は恐れながらも……なかば覚悟を決めて通話ボタンを押した。

「みな子……」

「大変なの」とみな子の開口一声が将が呼びかけを遮った。

もしもし、も言わなければ将の名前もよばなかった。

みな子は、周りを意識しているのか、ひそめた声で、続けた。

「アキラ先生が、さっき、救急車で運ばれていったの」

将は、高いところから突き落とされたような錯覚を覚えた。

――聡、しっかりしろ！

右手が温かいものに包まれているのに気付いた聡の意識は、ようやく暗いところから明るいところに浮上して……ふいに現実に戻った。

瞼を開けたものの……視界はまだ、ぼんやりしている。

誰かが聡を見守っているのはわかるが、それが誰か、おぼろげな輪郭しかわからない。

「聡、気がついたか」

声の主は、聡の右手を握りなおした。

この手の感触は、声は、将ではない。でも、どこかで聞いた……聞きなれた声。懐かしい声。

焦点はゆきつ戻りつして、ようやく合った。

そこにいたのは……高校のときに仲がよかった同級生の秋月泰雄だった。

聡の右手をしっかりと握り締めていてくれたのは、秋月だったのだ。

「秋月……」

聡は、秋月がどうしてここにいるのかわからなくて、とまどった。

次の瞬間。重要なことを思い出して、ガバ、と跳ね起きる。

「赤ちゃん！」

「聡！　大丈夫やけん！」

秋月に制される前に、聡は自分のお腹のふくらみを確かめる。

まだ、ある。

「赤ちゃんは？……赤ちゃんは大丈夫なの？」

「大丈夫やけん。落ち着いて。ちゃんと生きちょう……まだ点滴中なんやけん、寝とらな」

秋月は聡の肩をそっと包むように支えると、優しくベッドに横たえた。

「胎盤が少しずれてるんやって。それで溜まった血が一気に出ただけっちゃ」

「胎盤が……」

「そ。紀子さんとおんなじ。でも、ちょっとだけやけん、問題ないって。それと貧血」

「貧血……」

「聡、昔からよく貧血おこしちょったやろ」

秋月は聡の顔の真上で笑顔を見せた。それでようやく落ち着いた聡は、問うことができた。

「秋月……、どうして、ここに？」

「萩の観光ＰＲで昨日から来ちょう……。今日は、少し時間ができたけん、聡に会いに来たんやけど……びっくりさせるなよ」

秋月は冗談めかして笑った。

「ごめん」

「でもよかったよ……」

秋月の言葉はそこで止まり、傍らの椅子に腰掛けた。

あきらかに、それを訊きたくて……でも、本調子じゃない聡の手前、我慢している。

聡の顔と膨らんだお腹とを交互に見比べる秋月の視線で、それは聡にもよくわかった。

そう、秋月は昔から、優しかった。

でも……自分からそれを言い出すのを憚られた聡は、少し秋月の優

しさに甘えることにした。

「わざわざ、観光のＰＲで東京に？」

「そ。知っちょう？東京には萩大使館てのがあって……」

秋月はしばらく、萩の観光ＰＲ戦略などを面白可笑しく話してくれた。

ちなみに旅館のほうは、正月が終わって一段落したとのことで、妻の綾と両親でなんとかなっているらしい。

こうやって話している秋月は、大人の様で……生き生きしている瞳は、高校生の頃と変わらなかった。

中学３年から高校３年まで一緒のクラスだったあの頃と。

「ね。高校んときも、秋月……こうやって付き添ってくれたよね」

「ん。保健委員だったしな」

聡が持ち出した思い出話を、秋月はすぐに思い出したらしい。

あれは、高３の６月だった。じめじめとした……梅雨の頃。

貧血を起こして倒れた聡は、保健室にかつぎこまれたのだ。

同じ思い出を、すぐに取り出せる人がいる。聡は、心がほんのり温かくなった。

倒れた聡を、保健室で見守る秋月。

聡が一番いてほしかった……当時、付き合っていた東悠樹はいない。

……聡ではない女生徒と相合傘で校門を出る東を……聡は目撃してしまったのだ。

生理中だった聡は、目の前が真っ暗になって……倒れた。

「そのあと、東と大喧嘩してたって聞いた」

「ああ……知っとったん。恥かし」

秋月は照れて首の後ろに手をやった。そんな仕草をすると高校時代の面影がより色濃く出る。

聡と付き合っているくせに、他の女に手を出した東を怒って、秋月と東はとっくみあいのケンカになったのだ。

かたやサッカー部の人気者。かたや市内……いや山口中に名前が知れたバンドのイケメンベース。

幸い先生が来る前に、まわりの者が止めたが、そんな二人のケンカは学校中の噂になった。

「でも、あのあとまた、うまくいったんやろ。俺バカやー」

秋月は明るく笑った。

聡は何も言わずに微笑んだ。

本当は……もうとっくに聡と東はダメになっていた。

二人の気持ちは離れたまま、卒業まで惰性で……抱き合っていたにすぎない。

3年になって私立クラスと国立クラスに別れた時点で、早くも聡はそれを予感していたのだ。

それでも、それをはっきりと目にしたあのとき、聡の心で何かが割れたのだ。

……ぽろり。

予期せず、涙が流れ落ちた。涙は目じりを伝って、耳の後ろに流れていった。

そのときの記憶と、何かが重なって……現実の聡に涙を押し出させたのだ。

348◆スキャンダルと決意4

「ちょっと出かけてくる」

家政婦が気がついたとき、すでに将はダッフルを引っ掛けながら玄関に向かっていた。

「だめですよ！　お坊ちゃま、まだ記者が……」

「いい」

止めようとする家政婦を短い言葉で無視すると、将は玄関でバッシュを履き始める。

「だめです。私が叱られてしまいます」

立ち上がる将に、泣きそうな声で家政婦が引きとめようとしたそのとき。

玄関のドアが開いた。

純代だった。

ちょうど父兄会が終わって帰ってきたらしい。

ブランド物のスーツを着て、髪を巻き上げた純代は、ちょうど玄関にいた将に驚いて目を見開く。

「何事？」

「……奥様、止めてください。お坊ちゃまが、今から出かけると……」

家政婦は純代の姿を見てほっとしたのか、手をあわせるようにして、懇願した。

「将」

純代は将を見上げた。……自然に前に立ちはだかる格好になる。

「聡が倒れた。見舞いに行かなくちゃ」

将は早口で説明すると、純代の脇をすり抜けようとした。

「お待ちなさい」

純代はあわてて、手を広げる。

「行かせてくれ……。行かなくちゃいけないんだ」

「だめよ。将、落ち着きなさい」

将は純代を交わそうとさらに横へ行こうとする。純代もそれを防ごうと動く。

まるでバスケのディフェンスとオフェンスのような攻防になる。

純代はついに、突っ張り棒のように手をかけて、ドアの前に立ちはだかった。

「行かせてよ！頼む！」

その手を力まかせにはずそうとした将だったが、次の瞬間、玄関に派手な音が響き渡った。

家政婦が思わず口に手をあてる。

将は……紅くなった頬に思わず手をあてて、呆然としている。

……純代が、将の頬を思い切りはたいたのだ。

「落ち着きなさい！将！」

純代の鋭い声が、玄関に反響する。

「こっちへ、来るのよ！」

純代は呆然とする将の手を引っ張ると、孝太のピアノ部屋に引っ張り込んだ。

……このことが家政婦の口から他に広まるのを危惧した純代は、冷静に行動したのだ。

防音を施してあるこの部屋の扉を閉めてしまうと、純代は将に向き直った。

「……あなたが今出て行って、聡さんのところに行ったら、どんな騒ぎになるかわかっているの？」

声を落としながらも、純代は将の瞳をまっすぐに見つめて続ける。

「聡さんのことが、バレたら、あなたはもちろん大変なことになるけど……。いまは聡さんのほうにむしろ迷惑がかかるのよ」

「でも！」

将は、叫んだ。あの週刊誌の記事の弁解……否、自分の過ちの弁解を……直接逢って話さないと……。

しかし、将はそれを……自分のしでかした聡への裏切り行為を、まさか純代に口にすることなどできない。

純代は、なおも続ける。

「教え子の子供を妊娠した教師なんて……世間のバッシングを一身に受けるのは、むしろ聡さんのほうなのよ。……将、あなたは世間の恐さをわかってない」

叩かれた頬は、じんじんとしている。

その痛みは……1年以上前、聡に叩かれたときとそっくりだった。

将はうなだれた。唇を噛み締める。痛いほどに。今はそんなことでしか自分を罰することができない自分。

「……聡さんのことは、私もさっき聞いたわ。……私に任せなさい。明日、病院に行ってくるから」

純代は、将の背中にそっと手を添えた。

「将、……あなたは、今は、センター試験のことだけを考えなさい。……それが、聡さんのためなのよ」

――アキラ、アキラ！

許してくれ。俺を見放さないでくれ。

噛み締めた唇は……いつしか血が滲んでいたが、そんな痛みはどうでもよかった。

聡が離れてしまう痛みは、きっと将を死に至らしめるに違いない。

将が怖いのはそれだけだった。

「聡？」

秋月が……聡の涙に気付いた。

「どうしたん……？」

優しい声に聡は、ハッとする。

何でもない、と言いかけてやめる。

あとからあとから湧き出てくる涙。どう見ても何でもない状態では

ない自分。

東と、将は違う。

東とのつらい思い出に、無意識に今の将を重ねている自分に気付いた聡は、自分に必死で言い聞かせる。

だけど理性は、あの頃の東と、将がほぼ同じ年齢であることを聡に気付かせる。

……断じて違う。だけど、裏切りの記憶は聡の心の一番柔らかいところから、知らず涙をこぼさせてしまっていた。

「大丈夫か。……つらいことがあるなら、吐き出しちゃえよ」

秋月は、聡が思い出に涙したのではないことを察したらしい。

「うん……。大丈夫……。ありがとう」

言葉だけでは信じられないだろうと、聡は泣いたまま微笑んで見せた。

だけど涙は止まってくれない。

「聡……、結婚してないんやろ」

秋月はとうとう、核心に触れ出した。

聡が旧姓のままであることは……聡が持っていた母子手帳を見れば一目瞭然だ。

このまま我慢してしまう聡を見かねての、優しいつっこみ。

目をきゅっとつむった聡に、秋月はさらに続けた。

「あのコか。去年、萩まで来た……」

否定しなくては。聡が目をあけたときにはもう遅かった。

秋月は、確信を持って聡の眼が開くのを待ちかまえていた。

「鷹枝ってコが……相手なんやろ」「言わないで」

とっさにそう言うのがせいいっぱいだった。

「言わないで……。学校にも、うちの親にも……内緒にしてるの。だから絶対に言わないで。名前を口にするのもやめて」

聡の必死の表情に、秋月はややたじろいだようだった。

「鷹、いや……相手は、知っちょうと……」

聡は深く頷いて、秋月の表情に浮かぶ、将への非難の色を弱めようとした。

「知ってる……。生んでほしいって……。一緒になろうって、言ってくれた……。親ごさんを説得するために……無理して東大を目指してる……」

そうやって将をかばう自分は……やはり将を愛している。

朝から一連のつらい状況の中で忘れかけていた将への愛。

しかしそれに気付いたからこそ、聡は目を伏せる。

「だけど……」

言いかけた聡だったが、再び涙がこみあげてきて、言葉に出来なかった。

秋月は黙っていた。

それ以上は言わなくても、理解したようだ。

わかっている。わかっているから自分を責めるのはやめろ。……そんな言葉の代わりに聡の額をそっと撫でる。

それは、懐かしい感触だった。

帰国子女だった聡。『気取っちょう』と女子から無視されて……こっそりと泣いていた中3の。

『泣くな。お前はいっちょん悪くない』

と撫でてくれたあのとき。

「秋月……。優しいよね」

「今ごろ気付いたか」

秋月は掌を聡の額から髪へと往復させながら、口の端をいたずらっぽく上げた。だけど瞳はこれ以上ないほど優しい。

「あたし、……なんで、秋月と付き合わなかったんだろ」

聡は鼻を啜りながらも、秋月の冗談に応えて微笑んだ。

「……ホントや。聡は男を見る目がないな。……バーカ。聡のバーカ」

秋月の口調は、十代の頃のそれに戻った。

そしておもむろに額から手を移動させると、頬っぺたを柔らかくつまんだ。

「変な顔ー」

「ひっどーい。綾さんに言いつけてやる。お宅のダンナさんがいじめましたって」

「ゲー最悪」

秋月が聡を元気付けようとしてくれているのがわかる。

その温かさに聡はようやく心から笑うことが出来た。

「卒業式が終わったら……学校は辞めるんだろ」

しばらくして……完全に聡の涙が止まったのを見届けた頃、秋月は話題を控えめに戻した。

「うん」

「そのあと、どうすんの。どこで、産むの」

「……さあ。どうなるのかな」

聡は、視線を天井に遊ばせた。今からたった半年以内のことなのに。もう今年のことなのに。

聡は見当がつかなかった。……将とはどうなっているのだろう。

ちくりと、今朝からの痛みを思い出す。

「そしたらさ、萩に帰ってこいよ」

意外な提案に、聡は視線を秋月の顔に戻す。

「仮にさ。東大に合格したからといって、すぐに一緒になれる……ってわけじゃないんやろ」

秋月は、聡を慮ってか、慎重に言葉を選びながら、現実問題を恐る恐る持ち出した。

完全に落ち着いた聡ではあるが、気遣ってくれる秋月の気持ちが嬉しい。

「将は……、そのつもりでいるみたいだけど。無理よねー」

その気持ちに応えようと、聡はまるで他人事のように、語尾を延ばしてみせた。

「……あいつのオヤジさん、今年の総裁選候補だろ」

秋月がもたらしたのは、聡の頭から抜け落ちていた事実だった。

聡の脳裏に、将の父親の……康三の顔がサブリミナルのように蘇る。

349◆スキャンダルと決意5

秋月は、聡の様子がなんとか安定したのを見届けると、「あまり無理するなよ」と帰って行った。

出血自体も、安静にしていればいずれ止まるとのことで、聡は数日間入院することになった。

「生徒たちの大事なときに、ついていてやれなくて……本当に申し訳ありません」

聡は病室から学校に電話をかけた。

大事なとき、というのは今週末のセンター試験のことである。

聡がいる病室はホテルの一室のような個室である。もちろん、携帯電話もOKだ。

持っていた母子手帳から、いつも健診に来ている病院――将の義母・純代の紹介である――に運ばれていたのだ。

電話に出た学年主任の多美先生は、赤ちゃんが無事だったことをまず喜んでくれた。そして

「アキラ先生も大事なときですから。体一番でよく休んでください。英語の授業のほうは、荒江学園グループから非常勤の先生をまわすそうですから、心配いりません」

と気遣ってくれた。

電話を切ると、ちょうど夕食が運ばれてきた。

運んでくれるのが看護士なだけで、内容はちょっとしたレストランのような豪華さだ。

自然食を取り入れた野菜中心の食事は、目にも美しく、妊娠中でも食べやすいように工夫されている。

印刷された品書きまで添えられているという凝りようだ。

……しかし、聡は半分食べるのがせいいっぱいだった。

「御口にあいませんでしたか？……それともおなかの調子が悪いんですか？」

片付けにきた看護士が心配そうな顔をする。

「いいえ。すごく美味しかったんですけど、まだお腹がすいてなくて……」

聡は食欲のない言い訳をした。

妊産婦専門で内科医や精神科医なども常勤しているこの病院である。

うっかり食欲がない、などと言えば、医師を交えてカウンセリングだの、いろいろとややこしくなる。

それに診察されなくても、聡は自分が食欲のない原因がわかっていた。

看護士が食卓をすべて片付けてしまうと、病室は静寂に包まれた。

暖色でまとめられた病室に、間接照明が、夜になっても温かい雰囲気を作り出している。

テレビも付けずに、聡は横たわると、お腹を確認する。

張り止めを投与されているせいか、さっきのように張ってはいない。

――よかった。

聡は、お腹をなでながら、胎児が無事だったことに再度ほっとする。

と、まるでお腹の胎児が指し示したように、聡はサイドテーブルの上の携帯が気になった。

それは、さっき学校に掛けるまで、授業中のまま、電源を切ってあった。

吸い寄せられるように手に取ると、無意識に指は、メールをチェックし始める。

案の定、受信箱は将の名前で埋め尽くされていた。

＞倒れたこと聞いた。大丈夫だよね？　このメール見たらすぐ連絡

して。

＞赤ちゃんは無事だよね。電話かメールちょうだい

＞聡、無事だったら、すぐに連絡して。メールでもいいから

＞心配してる。心配で、心配で、勉強が手に付かないよ。これ見たらカラメールでいいから返信して

＞メール、ちょーだい。

……

メールは聡が倒れた少しあとから１０回にわたって入っていた。

将の動揺と心配が目に見えるようなだった。

その中で、最後の１回だけが少し違っていた。

＞もしかして、怒ってる？　ごめん。いろいろごめん。だけど、俺を信じて。お願いだから電話ください。

短いメッセージを繰り返し眺めながら、聡は、さっきの悲しさが少しだけ癒される気がした。

はっきりと書いてはいないが、将は週刊誌の記事のことを……みな子とのキスのことを、謝っているのだろう。

将は……自分を見捨てたわけではない。心のすべての部分がどこかに移ってしまったわけではないようだ。

それどころか、この文面からは将が、聡の許しを……聡からの連絡を待ちこがれていることがうかがえる。

今週末がセンター試験なのに、勉強に手がつかないほど、聡を心配している。

そんな将が、聡は逆に心配になった。

しかし、聡は……電話をすることができなかった。

ひとこと『心配しないで。赤ちゃんも大丈夫だから。将を信じてるから』と自分の声で伝えられればと思う。

だけど、ひとたび電話して……将の声を聞いたら。

聡は自分自身の感情を抑える自信がもてなかった。

――どうして、こんな記事になってしまったの？

――どうして、○○谷詩織と二人きりで車に乗る必要があったの？

――どうして……星野みな子にキスなんかしたの？

将を問い詰めて……責めたててしまう自分は容易に想像できた。

電話越しとはいえ、声をたてて泣いてしまうかもしれない。

１８歳の将には……同い年のみな子や、３つ違いの詩織のほうが、聡よりふさわしい……。

そして、教師と生徒でもない。つまり、立場を気にする必要もない。

いつも抱えてきた不安。不発弾のように忘れていた不安は……スキャンダル記事という起爆剤を得て爆発寸前に成長してしまっている。

そんな今、きっと将の声を聞いたら、一気に爆発してしまうかもしれない。

静かな病室にいることで、今はそれをかろうじて皮ふの下に抑えているけれど……。

そんな危うさを抱える一方で。

あんな記事を見ながらも、……そして、もっと言えば、みな子とのキスを目撃しても。

聡の本心の深いところでは、将をまだ、信じていた。いや、信じたいといったほうが正しいかもしれない。

なぜなら……いままでに将は、聡への気持ちを偽ったことだけは、ないからだ。

なのに、聡の気持ちは、冷たい湖底から浮かび上がれない。

メールを見直す。

きっと、今の瞬間も……将は勉強が手に付かず、聡からの無事の知らせだけを待っているに違いない。

文面の向こうにその姿が透けて見えるようだ。

聡は、迷った挙句、親指を動かした。

＞頑張って。

将と聡の今後がどうなるにしても。

とにかく、将は今、頑張らなくてはならない。聡との道を開くため……いや、将自身のために。

本当は……聡自身は、将との未来は、混沌とした中に消えかかっている気がしていた。

もうだめ、かもしれない。そんな絶望の姿さえ目にした気がする。

それゆえに……将の気持ちを信じていても、聡の心は沈んだままだったのだ。

だけど。

もし……仮に、二人の将来が別々のものであっても。

将には幸せになってほしい。成功してほしい。

今週末の試験は、その第一歩なのだ。

聡は……たった一言に言い尽くせぬ万感の思いを込めて、送信ボタンを押した。

350◆スキャンダルと決意6

木曜日。将は早朝からテレビ局に入っていた。

「おはようございます」

「おはよう」

にこやかに手をあげて、廊下ですれ違ったのは、将にとってはすっかりおなじみの、出演しているドラマの主演俳優だ。

――この挨拶が、しっくり来る時間帯に局入りしている理由。

それは今日がまさに、9月から撮っていた元倉亮脚本のドラマ「あした、雪の丘で」の初回放送日だからだ。

年があけて……受験生にも関わらず……将はいくつか宣伝のための番組に出演している。

初回放送日の今日は、朝のワイドショーと、昼のバラエティ、午後の特別番組の3本の生番組で忙しさもきわまれり、といったところだ。

主演のベテラン俳優で中高年層、将で女性の視聴率を稼ぐべく、二人セットで出演することも多い。

それだけに、テレビ局がいかにこの新ドラマに力を入れているかがわかる。

特に、裏の局は人気漫画原作のドラマを豪華キャストでぶつけてきている。

将に掛けられた期待と責任も、今までの仕事とは比較にならないほどのものだということは言われなくても理解できた。

しかし、今日……将がやや緊張しているのは、それが原因ではない。

今日、自宅を出るときすでに、将は芸能レポーターに囲まれた。

「○○谷さんとはどういう関係ですか！」

「その後、進展してるんですか！」

一切の質問を無視して……武藤ともう一人若手のマネージャーにかばわれるようにして、将は車上の人になった。

「将、今日は、番組中でも○○谷さんとの関係を訊かれると思うわ。……わかってると思うけど、いい先輩です、くらいに答えるのよ」

その内容は、台本にはないものの……機転を利かせた司会者がアドリブで訊いてくることは十分に想定しうることだと武藤は言うのだ。

事務所には、武藤を通じて記事の説明はしてある。

○○谷詩織とのあの写真は、あの大雪の日、どうしても東京に帰りたいということで、一緒に行動しただけに過ぎないと。

「あまりに軽率すぎる」と形式上注意を受けたものの、それ以上は特に咎められなかった。

相手が中高年にも好感度の高い詩織だったため、そこまでイメージダウンにならないことと……それもある。

しかし一番の理由は、共演する二人の噂は、ドラマを世間に注目させる格好の材料だからである。

ドラマの視聴率があがれば、将はもちろん、脇にねじ込んだ若手の将来にも繋がる。

事務所のそんな勘定ゆえ、将のスキャンダルはむしろ歓迎されているかのようだったのだ。

朝のワイドショーは武藤の予言どおりの展開になった。

最初は無難に、北海道ロケの長さが話題にのぼり、そこからスタッフ・共演の仲のよさに移ったところで、司会者は将に質問をふった。

「将さんといえば、共演の〇〇谷詩織さんと今うわさになってるけど、本当はどうなの？　熱愛の一夜、だっけ？　やっぱり仲がいいの？」

笑いを誘いながらの質問は司会者の力量か、ごく軽いものになっていた。

「仲は悪くないと思いますけど……そんな、恐れ多いっス。たまた

ま飛行機が飛ばなかったから一緒に行動しただけで」

とはいえ、聡が見ているかもしれない、と思うと将はつい、事情の説明を交えて弁解したくなる。

そこで、主演のベテラン俳優が、笑いながら割ってはいる。

「いや、二人はねー。本当に息がぴったりでねー。よくケンカしてるよ」

それで将は我に返った。

自分の話題は今回は単なるアドリブの一環なのであり、本題はあくまでもドラマについてだ。あまり時間をかけるわけにはいかないのだ。

「ケンカですかぁ？」

若い女子アナが、目を丸くするふうをする。

「はい。ケンカばっかりしてる役なんです。二人は……」

ようやく、本来の台本の内容である、二人の役柄説明に戻ることができて、将はほっとした。

「将！」

出番が終わって控え室へ戻る途中、将は廊下で呼びかけられた。
振り返った将は、そこにアイドルの四之宮敦也が立っているのを見つけた。
『ばくせん』での共演以来、４ヶ月ぶりに見る四之宮は、髪が金髪から黒く変わり、やや短くなっている。
「四之宮さん！どうしたんですか」
「どうしたって……」
四之宮は苦笑した。今日、将がゲスト出演する昼のバラエティのレギュラーに、四之宮は1月から昇格していたのだ。
「すっげえ。『よいとも』のレギュラーなんて」
「事務所の力だよ」
と薄い唇で笑うその顔は、あいかわらずクールな美形だ。
「……で、将は受験勉強、進んでんの？　て、受験生なのに、おさかんだよな。〇〇谷さんとラブラブなんだって？」
四之宮は冗談めかしてニヤリと口角をあげた。
「もー、違いますよー。カンベンしてくださいよ」
将は、悲鳴をあげるようにすると、机につっぷした。

待ち時間の間、二人は四之宮の控え室でコーヒーを飲んでいるのだ。

「わーかってるよ。単なる話題づくりだってことは、みんな知ってるし」

四之宮はそんな将の背中をポンポンと叩いた。

芸能生活が長い四之宮、それくらいのことは承知なのだ。

「それよりさ、ちゃんと彼女には説明したの？」

将はつっぷしたまま、目をあけた。

四之宮が言っている彼女とは、おそらく、週刊誌から……みな子のことを指しているのだろう。

だけど、将は聡を思い浮かべる。

この2日間、きちんと説明できていない……それどころか電話もとってくれない聡。

聡とそのお腹の子が無事だったことは、昨日に見舞いに行った純代が教えてくれた。

日頃から純代は、クラスの保護者有志ということで、聡を手助けし

ている。

昨日も、真田由紀子の母親と一緒に『お世話』にいった体裁を取っているから、問題ないのである。

「胎盤が少しずれているけど、自然分娩ができる程度で、問題がないそうよ」

ほっとした将だったが、もう一つの問題……聡が、将のスキャンダル記事を目にしたかどうかまでは確認できなかった。

さすがに、そこまで、純代を通じて確認するわけにはいかない。

将は、直接会えないまでも、せめて自分の口で弁解したい、と聡の携帯に何度か電話をした。

しかし、聡は出なかった。

病院にいるから出られないのか……いや違うだろう。将にはわかる。

聡は……おそらく、週刊誌の記事を見てしまったのだ。

それで、電話に出ないのだろう。

将は、頭を抱えた。聡のことが気になって、勉強どころではない。

空いた時間にせめて参考書を開くものの、いつのまにか気持ちは聡のところへ飛んでいってしまう。

だけど、将は……心配で気もそぞろになりながらも、それを必死で

抑える。

＞頑張って。

聡からの、たった一言のメールゆえに。……それが将のすべてだった。

それは……聡がまだ将を見限ったわけではない証であるに違いない、と将はすがった。

記事を見て、きっと怒っている聡。

だけど頑張れというからには、頑張った先にある……東大現役合格、そして結婚を望んでくれているのだろう。

とりあえずは、今週末のセンター試験でよい結果を残すことが、聡への愛の証明になってくれるはず。

将はそう思って、芸能活動の合間の少ない時間を勉強に費やすしかなかった。

聡は、食い入るようにテレビを見ていた。

１０時開始のドラマには……夏の北海道の風景とともに４ヶ月前の将が映っている。

ほのぼのとした……地味に笑いを誘うはずの脚本なのに、いつしか、聡は涙を流していた。

……将は、役者として成長した。

それははっきりとわかった。

ベテラン勢に囲まれているせいなのか、『ばくせん』のときとまったく違う将がそこにいた。

作られたアイドル役者には留まらない……将が背負った哀しみや寂しさが、役柄に深みを与えているのは明確だった。

これも、将の才能の1つ……いや、将ならではの才能なのだろう。

将の新たな才能をまのあたりにして、嬉しいはずなのに、聡は涙がとまらなかった。

嬉し涙ではない。その逆……将の才能は、聡にあることを決意することを、さらに促すことになった。

そのつらさに、聡は涙を流しているのだ。

だけど、決意しなくてはならない。

お腹の子供は、聡の感情に呼応するかのように、ぐるり、ぐるりと身体を動かしている。

351◆涙の懇願1

センター試験が終わった。

東京は試験日の2日間とも、小春日和にめぐまれ、特に混乱はおきなかった。

近くの大学を受験会場に指定された将は、レポーターに囲まれることなく静かに試験に集中することができた。

さすがのマスコミも、他の受験生の影響を考えてか、受験会場に突撃するのは自粛したらしい。

6教科7科目の試験をすべて終えた将は、荒江高校よりかなり広い敷地内を出口に向かって歩いていた。

ときおり、将に気付いた女子受験生たちが、指さして顔を見合わせる。

目立たない私服に伊達眼鏡を掛けているものの、その背の高さで将であることは一目瞭然だった。

試験が終わって緊張が一気にほぐれたのか

「将！ドラマ見たよ！」

と叫ぶように声を掛けてくるツワモノもいて、そのたびに将は会釈

を返すしかない。

「鷹枝くん」

将は後ろから声を掛けられた。みな子だった。みな子も同じ会場を指定されていたのだ。

『彼女』の登場に、遠巻きにしている女子のため息が聞こえるようだった。

「どうだった？　試験」

「うん。まあまあかな」

その表情から、将の試験の出来は、かなり手ごたえがあったのだろうとみな子は類推した。

特に今日は、将にとっては苦手の英語があったはずだが、その表情は冬の陽射しに照らされていなくても明るいものだったからだ。

「みな子は？」

「あたしも……まあまあかな」

並んで歩く二人の影が、キャンパスの地面ですでに長くなり始めている。

火曜日にあのスキャンダル記事が載った週刊誌が発売されて以来、

皮肉にもみな子は将の彼女として周囲に認識されていた。

『……みな子、鷹枝くんとのアレ……本当にしてたの？』

遠巻きにサワサワと噂をするだけのクラスメートの中で、仲の良いすみれだけがそれを訊いてきた。

訊かれたとたん、みな子の中で、あのときの……せつないほどの、血流を支配するほどの感情の昂まりが蘇る。

誰かに訊かれたら『目にゴミが入ったのをとってもらってただけ』とでも嘘をつこうと準備していたのに、みな子の顔ときたら正直に『鷹枝将とキスしました』と答えてしまったも同然だ。

すみれは、そういうことを面白おかしく話したりしない子だから大丈夫――。

そう思っていたが、その翌日には、クラスメートのみな子を見る目が変わっていた。

将の彼女。

みな子は、周囲にそう決定付けられていた。

『星野サぁン、将、〇〇谷詩織とのこと何て言い訳してたぁ？』

井口まで（もともと将とみな子の仲のよさを茶化していたような彼ではあるが）みな子を将の彼女として扱い出したのには驚いた。

――本当はその逆なのに。将が自分のものになる可能性なんか、ほ

ぼなくなってしまったのに。

かといって、みな子は周囲に否定してまわることはなかった。

将の彼女という、実体のない肩書き。みな子は明らかに悦に入っている自分をわかっていた。

そんな自分を、みな子は時折、笑ってしまいたくなる。自虐。

……それでもいい。

現実は違っても、呼び名だけの彼女でも……将とつながっていたい。

せめて卒業まで。

みな子は、情けなくてみじめで莫迦らしい自分の願いを、今は最優先することにした。

同じ東京の大学に行けたのなら……将の子を聡が妊娠するようなことがなければ、いつもこんな風に歩けるチャンスもいくらかは残されていただろうに。

将と並んだみな子は、今の時間をいとおしむように、キャンパスの風景をみまわした。

同じように出口へと歩いていく受験生たちの背中を、陽だまりが包んでいる。

手ごたえを感じている受験生にも、まったく歯が立たなかった受験生にも平等に。

彼らを見下ろしている桜の枝は、まだむきだしの鉄色のまま、陽射しを受けて鈍く光っていたが、春にはきっと満開になる。

その頃には、将と離ればなれ――。

早くも夕暮れの冷ややかさを含んできた風に、みな子は首をすくめた。

センター試験を終わらせた足で、将は再び北海道へ飛ばなくてはならなかった。

将のセンター試験終了を待って、明日からさっそく、ロケがあるのだ。

ロケ地近くのホテルに将が入ったのは、夜の9時すぎだった。

将は、さっそく聡に電話を掛けてみる。

「将」

まだ入院中ながら、聡は電話に出てくれた。

「今、ホテルに入ったところ。具合はどう?」

「だいぶよくなったよ。今週中にも退院できると思う。将のほうは

……どうだった？」

遠慮がちに訊く聡に対し将は

「たぶん、出来てると思う」

と力強く答えた。

国語・数学といった得意教科の出来は申し分ない。苦手の英語も、いつもに比べるとかなり手ごたえがあった。

「アキラのおかげだよ」

「そんな……将が頑張ったからよ」

将は、電話を握り締めるようにしてもう一度言う。

「金曜日に、アキラが電話をくれたから」

センター試験前日の金曜日、聡は将に自分から電話をかけた。

火曜に将のスキャンダルが発覚して倒れて以来、度重なる将からの電話を、一切取らなかった聡である。

しかし、自分のことを心配した将が、センター試験で実力を発揮できなくなるのを危惧した聡は、思いなおして連絡をとることにした

のだ。

『アキラ！』

電話の向こうからは、叫ぶような将の呼びかけが聞こえた。

『将……』

『アキラ、具合はどう？　赤ちゃんは……？』

聡の呼びかけに被せるように、将は矢継ぎ早に質問を投げかけてくる。

『大丈夫。大丈夫だから、心配しないで』

『そうか、よかった……。ずっと連絡とれないから心配で』

安心した将は、電話もメールもくれないし、と続けようとして『あ……』と自ら気付いたようだ。

『アキラ……、あの週刊誌……見た？』

『うん……。みたよ』

聡の返事に電話の向こうで将が息を飲むのがわかった。

『〇〇谷さんのは単に一緒に東京に帰ってきたときのだし。ホラ、イブにアキラに会いたくて郡山からレンタカー借りて走ってきたっていったじゃん……』

将は弁解を始めた。『馬鹿馬鹿しい』と一笑に付すような口調。

この3日間、頭の中で常に想定していたのか、冷静に紡ぎ出される弁解の途中で

『もう、いいの。将……』

聡は静かに制止した。

『……もういいから』

――もう、決意してしまった。だから、将は弁解しなくてもいい……。

聡はそれでもまだ、心の中に残る未練が、まるで反乱するように胸を締め付けてくるのに必死で耐えなくてはならなかった。

一方将は、弁解が、まだ肝心のみな子のところまで行っていないのに、中断されてとまどっていた。

『アキラ？』

『それより、将。昨日のドラマ、よかったよ』

聡は、力を込めるようにして、無理やり話題を変えた。

『そーかな。視聴率はたいしたことなかったんだけど』

聡からの話題の変更に……聡は本当にスキャンダルなど、気にしていないのかもしれない、と将は安堵した。

やや安易すぎる自分の思考を自覚しつつも、これしきのことで聡との仲が決定的に壊れるはずなどありえない、と信じている。

352◆涙の懇願　2

『15、超えなかったし』

将が残念そうに言った15というのは視聴率のことである。

将がほとんど主役状態の2番手に大抜擢された元倉亮のドラマの視聴率は、15%を超えることができなかった。

初回としては、お世辞にもパッとしたものとはいえない。

『ううん。きっとそのうちあがるわ』

聡は確固たる自信を持って予言した。

将が出演しているというのを差し引いても……というより、やはり主演の熟年俳優が圧倒的によかった。

そして脇役まですべてがしっくりとしていた。

出演している人が皆、悲しみを背負っているのに、なぜかほのぼのと笑いを誘う。

その背景を彩る、北海道の大自然。

派手なところのないドラマだったけれど、それはしみじみと温かくなるような余韻を残した。

『そうかな』

聡にそういわれると、将はなぜかそんな気がして救われた。

それまで将は……ふるわなかった視聴率に対して少し責任を感じていたのだ。

ゲスト出演を入れてようやく3作目のドラマでの大抜擢は荷が重すぎたのではないだろうか……。

朝、ネットで自ら調べた視聴率を見て以来、少しがっかりしていたのだ。

聡のことも心配だったが、ドラマの不振も、センター試験前日の将から気力を奪っていた。

『うん。……だから、将。今度は、明日のセンター試験頑張って』

そんなとき聡の励ましは、まさに、てきめんだった。

自分でもコミカルだと思うほどに、将はやる気がむくむくと湧いてくるのを感じた。

まるでほうれん草を食べたポパイのような……単純な自分。

かくして、将は、土日のセンター試験に対して、全力で挑むことができたのだ。

「本当に、本当に、アキラのおかげだよ。ありがとう」

将は再び繰り返した。

「将の実力よ」

聡の言葉に将は、嬉しくて「いやー」と電話のこちらで頭をかいた。

「まだ、2次試験があるし。こっちのほうが大変だし」

「そうね。ところで……将、北海道ロケはいつ終わるの？」

聡の問い返しに、有頂天の将は、聡が自分に一刻も早く逢いたいのだろうとしか考えられない。

「えっとぉ、24日まで北海道で、そのあとは29日までスタジオで撮りだめ……」

予定を話す将の声を訊きながら、聡が考えていたのは別のことである。

聡が決めてしまったこと。

……それを将に話すタイミングを聡は計っていたのだ。

仮に……もし。それを今、告げてしまったら。

将は、一時的にせよ、大きなショックを受けるだろう。

ドラマの仕事に支障が出てしまうかもしれない。

だけど、将はまだ若いから、きっと立ち直れる……。

だからせめて、仕事へのダメージが最小におさまるタイミングを……聡はさぐっていた。

「2月に入ったら、2次試験用の勉強に専念しろって元倉さんも監督も言ってくれた。だから2月からは、毎日学校で会えるよ」

嬉しそうに話す将に、聡はそれでも、まだ確かめたくなる。

将の中の自分の重みを……。自分の占めるパーセンテージを。

そんな自分の感情を未練がましいと、一方で理性は冷たく見下ろしているのがわかる。

「しばらく、顔を見れないのね……」

それは、聡の寂しさの吐露ではない。将の寂しさを……聡は電話越しに感じたかった。

感じたからといって……決意を翻すわけではないけれど。

でも今は、まだ……将の唇で、将の声で、自分のいない寂しさを呟いてほしい。

「うん。2週間くらい逢えない。……でも合格したらずーっと一緒だからな」

将の中に寂しさなど、なかった。

聡と一緒にいる未来しか見えていないように、将の口調は希望に満ちていた。

将は、聡を信じ切っているのだ。

……聡の目からこぼれた涙は音もたてずに、頬を伝って布団にしみをつくった。

「じゃ、行ってきますね」

西嶋節子は、若い社員に留守中の仕事を任せると、事務所の外に出た。

確定申告が近い今の時期、税理士のところに行く用事があったのだ。さまざまな書類が入った重いカバンを持った節子は、空がやたらに暗いことにすぐに気付いた。

「やだわ、降ってきそう」

この季節にしては厚い雨雲がいつのまにか空を覆ってきた。そのうち、氷雨でも降ってきそうな空……。

税理士の事務所はすぐ近くだ。

ちょっとの雨くらいならまったく平気な節子だが、さすがの暗さに、

いったん3階の自宅に傘を取りにあがる。

傘を取って外階段に出た節子は、階段の下の……郵便受けのところに誰かがいることに気付いた。

郵便受けの前に突っ立っているように見えたその人影は……この5分ほどの間にいっそう暗くなった夕闇のおかげで真っ黒に見えた。

節子はその黒い影が誰かわからず、階段を降りながら

「誰っ？」

と叫んだ。

黒い影は、びくっと一瞬身体を震わせると、こちらを見た。夕闇の中で白目だけが、キラリと光った。

そして、手にもった何かを郵便受けに投函すると、一目散に逃げ出した。

その、一瞬こちらを見た顔は――。

「大悟くんっ！」

節子は、あわてて階段を駆け下りると、大悟を追った。

それを阻むように……突然雨が降り出した。

「大悟くんっ！大悟くん」

傘も差さずに節子は追おうとしたが、大悟はあっという間にみぞれ交じりの雨の中に消えてしまった。

郵便受けには……西嶋夫妻に宛てた封筒が入っていた。

中には、便箋。大悟の字で

『お世話になりました。いろいろとすいませんでした』

と書かれていた。

そして、１０万円が同封されていた――。

節子は顔をあげて、もう一度どしゃぶりの中に目を凝らしたが……大悟の姿はもうどこにも見えなかった。

353◆涙の懇願　3

「おはようございます！」

将は吸い込んだ冷たく澄んだ空気を、一気に声に変換するように挨拶をした。

北海道の真ん中に近いＢ町の朝は冷え込む。今朝のように晴れているとなおさらだ。

なんでも昨日はダイヤモンドダストが観測されたらしい。

今朝は東京ではありえないほど……まさにコバルト色の空の下、白くうねる丘がはるか彼方まで見渡せる好天だった。

ところどころにある葉を落としたポプラ並木や、ハルニレの木が、白い雪に南極の氷のような色の透明な陰をつけている。

あっけらかんとすがすがしい光景……北海道に来て、余裕を持って景色を眺められるのは９月以来だろうか。

ここまで移動する車の中で、将は、景色に見とれながら、晴れ晴れとした自らの心に浮き立つようだった。

底冷えのまま凍りついたような民宿のロケ現場にいるスタッフは、皆白い息を吐きながら縮こまっていた。

そんな中、元気な将の声はいっそう響き渡った。

「おはよう。……やる気まんまんだねえ」

ディレクターが目を細めながら声を掛けた。

「その様子だと、センター試験はかなりよかった？」

「ハイ、たぶん」

たぶん、というのは、この場合謙遜だ。

……今日、将は朝6時に起きると、まっさきに朝刊を広げて自己採点をした。

朝刊には、センター試験の全試験問題と解答が掲載されていた。

果たして将の成績は……運も手伝って自分でも驚くほどの出来だったのだ。

迷って解答した部分もことごとく正答で、将は飛び上がりたくなった。

出来た、というよりは大バクチに勝った様な興奮。

平均点が跳ね上がっていなければ、たぶん足切りには引っ掛からないはずだ。

それも解説によれば、平均点は平年並みだろうと予想されていた。

もちろん……将はこの結果を聡に報告した。

まだ朝早かったから、メールで

＞センター〇点！

と短く報告する。教師である聡には、点数だけでその素晴らしさがわかるだろうと思ったのだ。

聡は、短いメールを受け取って、複雑な気持ちだった。

それは素晴らしい成績だった。おそらく全受験生の中でもトップレベルであろう堂々たる成績。

準備期間を考えれば、神がかりのような出来だった。

いままでの模試とは比較にならない……将自身の頭の良さ、勝負強さもそうだが、おそらく運も味方したのであろう。

これだけの成績を取れば、たとえ東大は難しくても、センター試験の成績だけで受験できるどこかの有名大学に入ることができるはず……。

嬉しいはずなのに、聡は心が沈みこんでいくのを自覚していた。

なぜなら、将の成功は、聡の決意の後押しになってしまうから……。

かりに、将が不安定なら……聡は『心配』という大義名分でいつま

でも将に寄り添っていられる。

聡がいなければ将はダメだから。将は聡が必要だから……。

聡は自分の考えの陳腐さと情けなさに、お腹を押さえる。

お腹の中の……胎児は、まだ眠っているのか心臓の音だけが手にかすかに伝わる。

自分が将と一緒にいたいから……、将の成功を心から喜べないなんて、どうかしてる。

＞すごいね。少し早いけど、おめでとう。仕事もしっかりね

自分でも月並みだと思う返信を返しながら、聡は決意をどうやって伝えるか、その瞬間を想像するのが怖くてたまらない。

将の撮りは、とてもスムーズだった。

１２月のロケでは、あまりに寒くてうまくしゃべれないときがあったが、今回はそれにも慣れた。長いセリフを覚える要領も得た。

待ち時間も、受験のことは一切忘れる心の余裕が出来たせいだろうか。

将の演技が問題になるNGなどはほとんど出すことなく、撮影の半分ほどが進んだ、そんなある夜。

仕事が終わった将は、マナーモードにしてある携帯に着信が入っていることに気付いた。

『西嶋さん』

と表示されている。大悟の保護者である西嶋夫妻の番号だ。

――大悟が見つかった？

将はそのまま発信ボタンを押した。

……正月早々、大悟が失踪したことは将も聞いていた。

心配していたが、仕事と受験、さらにスキャンダルのあわただしさの中、心から抜け落ちていたのだ。

電話には節子が出た。

「ああ、鷹枝くん？　……忙しいんでしょ、ごめんね」

西嶋夫妻とは、みな子と一緒に猫を見にいったときに親しく話している。

くだけた口調ながら……節子の声はひどくかすれていた。

その声で、大悟のことはよい知らせではなかったのだな、と将は瞬

時に悟った。

将が何か話す前に、節子のほうから

「実は、大悟くんが……」と切り出した。

将は、携帯電話を握りなおすようにした。

正月早々、大悟の失踪を聞いたとき、将はふいに元クラスメートの前原茂樹の濃い顔を思い浮かべた。

前原茂樹が少年刑務所から釈放された……。元旦に井口が将に伝えた知らせ。

なぜ、そんなことを思いついたのかわからない。

大悟と前原茂樹はたしかに同じ中学の顔見知りではある。

だけど親が借金からバックれている状態だった大悟は自分の食い扶持を稼ぐために犯罪に手を染めざるを得ず……結果、あまり中学には行っていないはずだ。

「3日前に大悟くんが、うちに来たんだけど……。声をかけたら逃げちゃったのよ」

「逃げた？」

「そうなの。それで、郵便受けに手紙と……10万円が入ってて」

「10万？」

将は、嫌な予感に胃液が逆流しそうになるのをかろうじて止める。

失踪して……１０万もの金を手にする。

台風の夜。地下のクラブ。ブラックライトの明滅。尖った靴の男。

将はつながっていく記憶に下唇を噛みつつ、ようやく次の質問を口にする。

「手紙には……何て書いてあったんですか？」

「『お世話になりました。いろいろとすいませんでした』って……。三宅さんには相談したんだけど、将くん、大悟くんが行きそうなところ、もしかして知らないかとおもって……」

将は言いよどんだ。

大悟が行きそうなところ。

これがもし、中学時代の大悟でも、半分くらいは知らなかった。

将の知らないうちに、自らの身体を売っていた大悟である。

今など、もっと知らない。だが。

将が知るわずかな心当たり……しかしその暗闇を考えると、それを善良な市民である西嶋夫妻に教えるわけにはいかなかった。

将はせめて、友達に聞いておきます、と答えた。

それがせいいっぱいだった。

大悟が、覚醒剤を得るために……暴力団の下部組織の、詐欺グループに属していたことは、さすがに言えない。

将は切れた携帯電話を握り締めながら、記憶をたぐる。

あれは、梅雨の頃だった。

朝なのに、真っ暗な夕暮れのような……どしゃぶりの教室で、たしか井口が言っていた。

クラブで大悟と前原の友達が話していた、と。

将がはじめてのドラマのレギュラー出演で忙しかったあの頃、すでに大悟は覚醒剤に依存していたはず……。

大悟と詐欺グループをつなげたのは前原がらみだ。将は確信を持った。

ほぼ的中してしまうだろう嫌な予感に、将は頭を抱えた。

354◆涙の懇願　4

「すっごい強運だね。……これで運を使い果たしてないといいけどね」

将のセンター試験の結果を聞いた岸田助教授は笑った。

キツイ皮肉ではあるが、柔和な笑顔と声に、それは罪のないものになってしまっていて、将も頷きながら顔を崩した。

将は、ひさしぶりに学校帰りに教授の研究室を訪れて、論述の指導を受けている。

今週からカレンダーは2月になっていた。

撮りだめを終えた将はようやく学校に顔を出すことができた。

センター試験が終わってすぐに北海道に飛んだのが功を奏したのか、スキャンダル騒ぎも下火になり、学校にやってくる記者もほとんどいなくなっていた。

ただ、連続ドラマがもう3回が放送されているせいか、将の注目度自体は高まっているといえる。

落ち着いた大人ドラマで定評のある木曜１０時枠で放送されているせいなのか、今までは騒ぐのはギャルくらいだったのに、ＯＬや主婦の視線を感じることも多い。

視聴率の方は、２回目に少し落ちたものの、３回目はやや持ち直すというよくある推移をたどっている。

１５％を越すことはなさそうだが、低調が続く他のドラマと比較すれば、まあまあの健闘といえる数字に関係者はほっとしていた。

将の演技については、父親のことが明るみに出て以来、最初のドラマということでネット掲示板には

『親のコネ。大根もいいところ』

『無駄に身長が高いだけのでくのぼう』

などといった意地悪なカキコミも相次いだ。しかし専門家筋は

『鷹枝将がここまでやれるとは思わなかった。周りの芸達者な俳優達と実に自然に調和している』

と絶賛に近い感想を寄せる者もあった。

新聞や雑誌に載ったそれらは、もちろん武藤が見つけ次第将にＦＡＸしてくれる。

インタビューの依頼も殺到しているらしいが、１月いっぱいですべてストップしてくれた。

だから将は、２月２５、２６日で前期日程・２次試験が終わるまでは受験に専念できることになる。

しかし、聡の入院は長引いていた。あのあと、再びの出血をみたからである。

将が学校に登校するようになっても、教壇に聡の姿を見ることはなかった。

将は胸がつぶれる思いだったが、見舞いに行くわけにもいかない。

担任の先生を心配する単なるいち生徒として見舞いに行けば、とも思ったが、注目を浴びる自分が目立つ行動をするリスクは純代に言われなくてもわかっていた。

だから将は聡を心配する心の声を無視するように、勉強に専念するしかなかった将だが、今日はその心労からも解放されている。

昨日、聡から明日の土曜日には退院できるとメールをもらったからである。

土日に会いにいくわけにはいかないだろうが、月曜日には顔を見ることができる……将の心は明るかった。

指導を受けている途中で、岸田の机の電話が鳴った。

自分の仕事の資料を眺めていた岸田は、それから視線を移すことなく受話器を耳に持っていった。

「岸田です。……ああ、来てるよ。……そうか、よかったな」

そう答えると岸田は、将にちらりと目を走らせた。

将のほうは、岸田に与えられた論述問題に取り掛かっている最中で、岸田が話す内容などまるで聞こえていないらしい。

集中している将に、岸田は満足げに口角をあげると

「……わかった。伝えとく」

と、受話器を置いた。

だが、岸田は何もなかったように黙ったまま、暫く自らの仕事に戻っていた。

「終わりました」

……やっとなんとかまとめた将が答案を岸田に差し出した。

制限時間を2分オーバーしてしまったのに、岸田は将に目をやると

「おめでとう」

とニヤリと笑った。

「ハ？」

「いま、お母さんから連絡があって、K大から合格通知が来たそう

だ」

将の父、鷹枝康三の出身大である、一流私立大学。

ごく少人数ながら、センター試験の成績を提出するだけで受験できる枠があり、将は見事そこに合格したのだという。

「……そうですか」

将は淡々と答えると冷めたコーヒーをぐっと飲んだ。そして間髪入れず、次の課題を手にした。

「一流大学に合格したのに、それほど嬉しくなさそうだな」

「僕は、東大以外に進む気はありませんから」

将は課題からまったく顔をそらさない。

岸田はくっと笑いながらうなづくと、将の論文にざっと目を通した。

時間をオーバーしたものの、現役受験生としてはかなり巧みにまとめてある。

二次の前期はあいかわらず望みは薄いという。現に1月末に行われた模試では、あいかわらずD判定のままだった。

が、後期だったら……問題次第では奇跡を起こせる確率の高さを岸田は感じていた。

「そうか……合格したか」

国会審議が終わるのを見計らって掛けてきた純代の電話で、康三は将がK大に合格したことを知った。

センター試験の結果がとてもよかったということは聞いていたが、まさかK大の少人数枠に受かるほどだとは、康三も想像していなかった。

「今日も遅くなるから、おめでとうと伝えておいてくれ」

このあとも個別議題の審議委員会などに出席しなくてはならない康三だ。

「それが、将も岸田の兄のところなんです。……ところであなた」

純代は仕事中である夫を気遣いながら遠慮がちに切り出す。

「例のこと……。将が東大に受かったら、必ずかなえていただけるんでしょうね」

康三は、鼻から息をもらすと、周囲に聞かれてマズイ人間がいないかどうかを確認した。

幸い毛利がいるだけだった。

「……受かりやしないよ。東大はそんなに甘くない」

自分に言い聞かせるように康三は言葉を吐き出した。

わずか、４～５ヶ月の準備期間で……しかも、人よりずっと遅れた地点からのスタートの将に、そんなことはありえない。

そういいつつも、康三は将が奇跡を起こすような気がして胸が騒ぐ。

『お子さんの知能は、人なみはずれて、素晴らしいものです』

かつて、将が幼い頃通っていたフランスの幼稚園で、園長に賞賛されたことを康三は思い出していた。

これが、もし。

将が、担任教師を孕ませていなかったら。

そして、その秘密をライバルの麻野に握られていなかったら。

親としてこんなに嬉しく誇らしいことはないのに……。

今の康三は、将に奇跡を起こされては逆に困るのだ。

「でも、このようすだと、合格するかもしれませんわ」

康三に対して、まるで合格をのぞむような純代。

近頃、彼女はとみに将の母親であることを意識しているらしい。康三はそんな純代が苦々しい。

「合格したら」

康三はもう一度あたりを見回した。

「いずれかなえてやるさ。……しかるべき時がきたら」

『しかるべき時』がいつなのか訊こうとした純代だったが、忙しいからと電話は一方的に切られた。

純代はため息をつくと、その手で聡への番号を押した。

風呂に入って自室に戻った将は、まだ少し重い腹をさすった。

暗くなって帰宅した将を待っていたのはごちそうの山だった。

孝太の「お兄ちゃん、合格おめでとう！」でようやく何のごちそうかがわかった。

「本命じゃないけど、いちおう、お祝いにね」

と純代は微笑んだ。ケータリングサービスも頼んだのか、豪勢な食卓は将の好物ばかりだった。

将としてはどうでもいい合格だったが、孝太も純代も嬉しそうだったので、とりあえず付き合ってたくさん食べてしまったのだ。

――聡にもいちおう連絡しておくか。

濡れた髪を拭きながら将は携帯を取り出した。

本命の東大ではないものの……一流であるK大の合格を聞けば、聡は喜んでくれるだろう。

その反応が聞きたくて、あえてメールではなく電話をするつもりだった将は、携帯が点滅していることに気付いた。

どうやら風呂に入っている間に一度着信があったらしい。聡の番号だ。

――なんて気があうんだろう。

ほぼ同じタイミングで声が聞きたくなるなんて。

将ははずむ心で聡へ電話をかける……。

355◆涙の懇願　5

着信音に、聡は思わず体を震わせた。

ベッドサイドのスタンドだけを付けて……聡は携帯の中の将を見入っていた。

高2の頃からの、将の笑顔。

その将の着信音だとわかっているのに、身体は震えるだけで……縛り付けられたように動かない。

出なくては……通話ボタンを押さなくては、と思うのに心が拒否している。

電波をつなげたら最後、言わなくてはならない。

……ちょうど、そのとき。

おなかの皮の内側でくるりと動く気配があった。

胎児が寝返りを打ったようだ。

いとしい、将の子供。

将のために、そして自分のために。覚悟を決めなくてはならない。

聡はごくり、と生唾と共に覚悟を飲みくだすと、人差し指で通話ボタンを押した。

「もしもし」

「アキラ！」

――だめだ。やっぱり言えない。

将の明るい声を聞いた聡は、大いにひるんだ。

やっと聡の声を聞けた嬉しさにはずむ将の声。

長いこと乾いた砂漠を歩いていた旅人が、水にありついたかのような、そんな声で聡は呼ばれたのだ。

「将」

応える自分だってそうだ。将の声を……もう1週間以上も聞いていない。

北海道ロケが終わって、東京に帰れるという知らせをもらって以来だ。

何も知らない将は、はずむ声で続ける。

「アキラ、俺、いちおうK大に受かったよ。関係ないけど、いちおう」

どうでもいい口調を装いながら、嬉しさがにじみ出ている将の声。

「うん。……知ってる。今日、お母様に聞いた」

夕方、純代に将の合格の一報を聞いた時、聡は『そのとき』が来たことを感じていた。

「なーんだ。知ってたのか」

「うん。よかったね……」

いや、でも本命は東大だし。どうせ行かないところだし。

そんな将の声の……言葉の意味はとうに脳に届かず……聡は将の声だけに耳を浸していた。

初めてあったときに比べるとずいぶん男っぽくなった声。

低いその声は……ぶっきらぼうな中にも、聡の名前を呼ぶときだけ、大事そうに、そして確かめるような声色が含まれている。

その声を聞くだけで、心をそっと撫でられたような快感が走る。

心の表面に生えた柔らかい産毛が、なびくようにそよいで……幸せに浸される。

将が好き。将を愛している。でも。

『そのとき』は今だ。

それは……決意を実行するとき。

将と、訣別するとき。

将が無事、一流大学に上がる目途がついて、次の撮影まで3週間以上ある今が、それを言い出すチャンスである。

聡はずっと前からそれをわかっていた。

聡と結婚しないなら、将は何も無理して東大を受験する必要はない。

K大だって……充分立派なのだから。

もし、仮に東大を受験して、万にひとつ、合格したとして。

18歳で担任教師を孕ませて結婚したという事実がどんなに将の未来に傷を付けるだろうか。

そして将の後ろにあるさまざまなものを壊すか。

聡にはそれがわかりすぎていた。

最初から……妊娠したときから、いや、将を愛し始めた時からわかっていたのに……将の情熱の前に、乗り越えられるような錯覚を起こしていた。

将が一般の若者だとしても世間は冷たい視線を突き刺すに違いないのに、まして将は俳優だ。

世間に隠れて、年上の教師を妊娠させた人気俳優に、マスコミがどんなふうに騒ぐか。

詩織の件だけであれだけ騒いだのだ。

いや、あれはドラマの宣伝をかねての『美談』だが、聡とのことが世間に明るみに出れば、俳優としてだけでなく、父の跡を継ぐ道もたぶん閉ざされるだろう。

それに総理を目指す将の父の康三にも悪影響を及ぼすに違いない。

それに……世間体もそうだが、聡自身が怖かったのだ。

まだ若い将の、固まりきらない愛に依存して生きる自分の未来が不透明すぎて。

一連の将のスキャンダルで聡が再確認したことがある。

それが、将の若さだった。

今回は、聡を裏切るところまで至らなかったけれど、いつかきっと。

詩織やみな子のように魅力的な子に心揺らぐときが来るかもしれな

い。

将より先に年老いていく聡。それだけは揺るぎない事実なのだ――。

その考えに至った聡は、苦しい胸から苦く湧いてくる唾液を飲み込む。

本当は……そんな先のことを想像する自分が何より嫌でたまらない。

将に愛されなくなる自分を悲観する……将の幸せより自分がいつまでも愛されることばかりを望む自分があさましくて、聡は吐き気がしそうになる。

じゃあ、自分は将をいつまでも愛し続けられるのか。

聡の前に、自身の過去が立ちふさがる。

あれほど好きだった、４年も付き合った博史を……聡は自ら捨てている。

自分自身をも信じることができなくて……聡は絶望していた。

だから、いっそ別れてしまったほうがいい。

将のために。そして自分がこれ以上醜くならないために。

まだ若い将だから。

心に傷を負ったとしても、3週間あれば、どうにか仕事ができる程度まで回復できるだろう……。

子供のことは、自分さえしっかりしていれば、きっとどうにかなる。

冷静に考えれば考えるほど、将と別れるのは今が最良のタイミングなのだった。

「アキラ、……アキラ？聞いてる？」

電話の向こうでおどけて聞いてくる将。

聡の心のうちなど、何も気付いていない将。

――子供なんだから。

聡は思わず微笑んで携帯電話を掌で包み込む……それが将自身の分身であるように。

他人にはひねくれて、大人びていたりするのに、聡の前では子供な将。

限りなく無防備に心を開く将。

そんな将に、自分は今、一番残酷なことを伝えるのかもしれない。

聡は胸が締め付けられるように苦しく、そして破裂せんばかりに痛んだ。

だけど、言わなくては。

ふいに聡は庭木の剪定を思い出した。

父が……若くみずみずしい芽が吹いている枝を容赦なく切り落としている。

それはひどくもったいなく、そして切られてしまう芽がかわいそうに見えた。

『可哀想じゃない？』

そう訊いた聡に、父は答えた。

『全部伸ばすと、木が弱ってしまうんだ。どの枝を伸ばすか、選ぶのが木のためなんだよ』

将の持っているさまざまな幸せの……可能性の芽。

聡との恋というひときわ瑞々しい芽は、将自身の先行きをきっと弱らせてしまう。

だから、今、剪定しなければ――。

「将」

聡は背筋を伸ばした。

「あたし」

スタンドの明かりだけの病室。

目の前の暗がりに、まるで将がいるかのようにまっすぐに視線を伸ばす。

そして、思い切る。

「将とは、結婚しない」

356◆涙の懇願　6

「え？」

聡の声は明瞭に聞こえていたが、意味が脳に届かなくて――脳は聞きたくない言葉に対してしばしバリアを張る場合がある――将は、反射的に訊きかえした。

「将とは、結婚、しない」

まるで外国人に話すように、ゆっくりと、かつはっきりと聡は繰り返した。

「何、冗談言ってんだよ」

将はハッと笑ってみる。態度からそれを冗談だと自分に言い聞かせるが如く。

聡の言葉を……あくまでもまっすぐに受け取らないのは、この場合本能なのだろうか。

「……冗談なんかじゃない。将、聞いて。あたし、将とは結婚しないことに決めたの」

低いくせに温かみのある声。それは決して将をいたずらに驚かせようとしているのではない。……そのくらい将にもわかる。

「もう、決めたの」

さらに聡は静かに繰り返した。

「何、言ってんだよ」

本気らしい聡に、将はそれでも、やりきれないため息を吐きながら『ばかな』という口調で応対せざるを得ない。

「結婚しない、って……子供はどうすんだよ」

心臓が、あまりの恐怖に波打ちはじめている。聡を失う恐怖は生命を脅かすそれのように、将を追い詰めていく。

核心を直視するのが怖い将は、とりあえず二人の前に横たわる現実を拾い上げるしかない。

「子供は……あたしが、ひとりでちゃんと育てる……」

「俺は、父親だろ！」

動揺した将は、聡の言葉に大声で割って入る。

『ひとりで』と聡はたしかに言った。

つまり聡は将と別れるつもりなのか。

聡自身から核心を伝えられるのを本能で恐れた将は、将は黙っていられない。

「将」

だが聡は、静かな調子で将を制すると、さらに奥へ……むきだしの本題へと進む。

「あたしたち……別れたほうがお互いのためだと、思う」

聡のほうも……酸素が薄くなったような苦しさの中から、言葉を絞りだしていた。

将は、バットで殴られて地面に投げ出されたように、ショックで言葉が出なかった。

飲み込んだ息がそのまま、体の中で凍り付いている。

『別れ』。聡はたしかにそう言った。

聡が自分の前からいなくなる。

将は、もはや聡のいない世界など想像もできない。いや想像もしたくない。……ありえない。

暫しの沈黙ののち、ようやく問い返す言葉が出る。

「何で……そんなこと、いうんだよ」

聡がなぜそんなことを言うのか、あまりにもショックを受けた将は、考えることすらできない。

「将に……、あたしに縛られないで、自由に生きて欲しいから」

聡は……さすがにもう一つの理由は言えなかった。醜い独占欲に由

来するもう一つの理由は……言うつもりもない。

別れの間際に、醜い自己を晒したくない。

聡は今まで生きてきた中でもっとも重い空気に、胸が不自然に上下するのを耐えながら、将の言葉を待った。

しかし、意外なことに。電話は予告もなく、プツッと切れた。

思わず、聡は携帯を耳から離すと、ディスプレイを確認する。

……間違いなく将とつながる電波は切れてしまっていた。

聡は、肺にたまった重い空気を吐き出した。空気と共に体中を強ばらせていた力も抜けていった。

これで、終りなのだろうか。将は、納得したのだろうか。

信じられない。

聡は、将にこちらから電話をかけようか、何度となく迷った。

しかし、なんとか自分を抑える。こちらから掛けるわけにはいかないのだ。

掛けたとして、どうするのだ。

電話を掛けて、別れを納得してくれたのか確認するなど……できるはずもない。

聡は、気を取り直すと、ベッドの上で仰向けに上体を倒した。

白い天井は、スタンドの明かりを映して、くちなし色から灰色へのグラデーションになっている。

明日は退院だ。

まだ１０時前だが、少し早めに眠るべく、聡はテレビも付けずに、ナイトキャップがわりの文庫本を開いた。

だが……案の定、眠りが訪れないどころか、文庫本のストーリーも一向に頭の中に入ってこない。

聡の頭の中では、何度となく……煩わしいほど、さっきの短いやりとりが、リピートしている。

将は納得したのだろうか。

いや、あれだけで納得するはずがない。……将はまた、きっと電話を掛けてくる。

聡はとうとう文庫本を閉じると、視線を天井に移した。

だけど。

さっき……電話を切ったのは将のほうからだ。

冷たい理性という思考が、聡の感情に確認したくない事実を突きつける。

もしかして……、まさか将は……別れを待っていた？

聡は目をカッと開いた。

もしかして、将の聡への気持ちは……とっくに褪めていたのだろうか。

自分とのつながりは、『子供に対する責任』のみになっていたのか。

だから、聡の別れの申し出は、むしろ歓迎すべきものだったのだろうか。

理性は残酷に……聡が望まない道筋を次々と組み立てていく。

――いや！

聡は思わず起き上がった。

自ら思いついた考えの恐ろしさに、震え始める。

それを抑えるように膨らんだお腹に手をあてる。胎児は沈黙したままだ。

そんなはずはない。

聡は、将が自分を愛している証拠を、記憶の中に探した。

愛の記憶は、溢れんばかりにあった。

だけど……今年になって。あの元旦のみな子とのキス以降、それは見つからなくて、聡は崖っぷちに立たされる。

違う。決して違う。

聡は必死で否定する。クリスマスには、大晦日の夜には。

だけど、恋は自分にもそうだったように、突然落っこちてくるものなのだ。

将の中で、みな子の存在がいきなり膨らむ、というのは充分にありえることなのだ……。

冷静な思考が、聡の感情をズタズタに切り裂いていく。

だけどボロボロになりながら、聡の感情はまだ叫んでいた。

これで終わるはずがない。こんなにあっけなく、終わるはずがない……。

突然、大きな音がした。

聡はハッとして、顔をあげた。

そこには……将がいた。病室のドアが開いて、将が立っていた。

伊達眼鏡も変装も何もしていない……聡が一番逢いたかった将の姿が、突然現れたのだ。

将は肩で息をしながら、病室のドアを後ろ手で閉める。

入ってきたそのときから、聡の顔から視線を少しもはずさない。

「アキラ……、何で泣いてんだよ」

将がいうとおり、聡の目はさっきから、涙をこぼしていたのだった。

それは……布団のカバーをしっとりと濡らすほどだった。

「……しょう」

目を紅く充血させた聡は、まだ信じられなくて、近づいてくる将を見上げた。

涙は止め処もなく溢れてくる。

「アキラ」

将は瞳を濡らしたままの聡に手を差し伸べる。

そのまま抱きしめようとする大きな手を……聡はかわした。

「どうやって、ここに来たの？　……面会時間は過ぎてるでしょう」

「そんなことどうでもいいだろ」

将はそれだけ答えると、有無を言わさず、無理やり聡を抱きしめた。

「さっきの、電話……なんなんだよ」

さっきの聡の言動に比べれば……どうやって家を抜け出したか、そしてどうやってナースを説き伏せてここへたどりついたかなど、些細なことだった。

聡のぬくもりに触れた将は、凍りついた息がようやく溶けたように、吐き出しながら背中を撫でた。

「……冗談にしてはひどすぎるだろ」

将は聡の髪に顔をうずめながら、その甘い香りを吸い込みながら、抗議した。

357◆涙の懇願　7

熱い将の腕に抱きしめられて、聡は体中でこわばっていたものが、しゅうっと溶けてそれが瞬時に甘い感覚に変化していくのを感じた。

疑いも、離れていた隙間も、一瞬にして埋めてしまう将の体温。そして干草のような香り。

すべてを忘れてしまう。

ひときわ強く抱きしめようとする将に、聡はかろうじて我を取り戻した。

「ダメ」

聡は将をふりほどいた。

今までくっついていた体のあちこちから、粘りついた未練が糸をひくようだ。

将も同じらしく、瞳に驚きを、半開きにした唇にせつなさを浮かべて聡を見下ろした。

「冗談なんかじゃないの」

聡の視線はそんな将の顔を正視できずに見る間に下に下がった。

将は、上下ともスウェットを着ていた……つまり、着替えもせずに飛び出てきたのだ。

下がっていく聡の視界から将の姿が完全に消えたとき、将が口を開いた。

「アキラ……」

「冗談じゃなくて……あたし、将と別れる」

将を遮るような聡の言葉。

「何言ってんだよ！」

将はかがんで聡の肩を取ると、俯いた聡の視界に無理やり自らの姿を割り込ませた。

聡はそれを避けるように横を向く。

「もう、決めたの」

「決めたって。……何ばかなこと言ってるんだよ！アキラ！」

将は掴んだ聡の肩をゆさぶった。顔がガクガクと揺さぶられる。

「おい、アキラ！」

聡はしばらく目を閉じて、将に揺さぶられるがままになっていた。

「やめて。お腹が……」

やっと口をきいた聡に、将は肩を揺さぶるのをピタリと止めた。

膨らんだお腹の中は、揺さぶられたのが刺激になったのか、ぐるり、と動いた。

それをも無視するように聡は、あいかわらず将の顔をみないように顔をそむけていたが、右頬に痛いほど、将の視線を感じていた。

どんな顔をしているかも……みなくてもわかる。

「なんで……そんなこと言うんだよ。……ねえ。アキラ」

聡の頬は、将の両の掌でそっと包まれた。大きくて温かい手。

この手に包まれて……何度口づけしただろう。

こんなときですら、将の掌を感じた聡の頬は……産毛からしみこむような甘い歓びに脳髄ごと震えている。

「こっち向けよ。俺の顔をみろよ」

将はその甘い感触の掌に力を込めて、むりやり聡の顔の向きを変えた。

……まるで、キスする前のように、将の顔が目の前にある。

きっと将は……そのまま口づけするつもりだったのかもしれない。

口づけはきっと抱擁以上に甘く、聡の全身を支配して……将から離れられなくするに違いない。

しかし、聡は辛くも将の顔を見据えた。

聡に見捨てられてしまう不安に、大きな眼は見開き、眉が不安そうな形に寄っている。

それはさっきの疑惑……将が聡からの別れを待っていたという疑惑を完全に吹き飛ばした。

安心した反面、いまからすることへの心の痛みを想像すると聡はひるみそうになる。

だけど、思い切る。

「あたしに……しばられないで生きてほしいの」

声がうわずる。だけど願いをなんとか音声に変えることができて……聡は将の次の動きを待つ。

「なんだよ、それ」

将の眉がゆるんだ。笑顔をつくる余裕ができたらしい。

思いの真意が伝わっていないと焦った聡はさらに言葉を重ねる。

「あたし、将に、好きなように生きてほしいの」

将は完全に優しい顔になると、聡の頬から手をはずした。

「俺は、もともと好きなように生きてるぜ」

将はベッドの……聡の隣に腰掛けると、聡の肩をぐいっと引き寄せた。

体の力が抜けてしまい……必然的に将の腕に体重を預ける形になった。

今度は肩の血流が甘い振動をたてるのを感じながら、聡は哀しくなる。

「何心配してるんだよ。俺は、アキラとこうして一緒にいたいんだ。アキラと一緒にいるのが俺の一番やりたいことなんだ」

優しい声。

聡は思わず目に熱いものが溜まるのを必死で堪える。

泣いたらいけない。泣いたら、感情にひきずられてちゃんと説明できなくなる。

「違う……」

聡は塩辛くなりつつある唾液を飲み込みながら、反論する。

「将、聞いて」

「聞くよ」

将は、肩から聡の髪に指をからませる。……そのまま、うなじから頭に掌を沿わせ……聡の頭を撫でた。

将の手が通ったあとは、まるで花が開くような歓びに彩られる。
聡は脳を占めていくそれに抗わなくてはならない。
快感にしびれたような部分の残りで将を説得する道筋を考えなくてはならないのだ。

「……将は、有名人でしょ」

「そうだね」

まるで聞いてるんだか聞いてないんだか……幼い子供のたわごとに相槌をうつかのような優しい声音。

「このまま子供が生まれたら……子供を将の子だって世間に公表したら……大騒ぎよ」

将は指の腹で聡の頭皮を軽く優しく叩く。

「そんなこと、最初っからわかってたし。……どうでもいいよ。騒ぎたいやつは騒げばいい」

「将」

聡は、寄り掛かるようにしていた体を起こすと、将を見据えた。

聡が真剣な顔で真正面から将を見据えたので、将の眉は再び……少し不安げな角度をとる。

「そんなところが、ダメなの」

ダメ、といわれて将の唇は半開きになった……意外な言葉に息が止まっているようだ。

「将。きいて。教え子が担任を妊娠させるなんて、普通の人だって大騒ぎになることよ」

いつのまにか、将の唇はぎゅっと結ばれている。

その瞳は憮然と聡に注がれている。

「まして、あなたは芸能人で顔が知られている。……きっともう、どの世界でも生きていけないほど叩かれるでしょうね」

「そんなこと……」

将は反論の糸口を口にしようとした。だが聡はその糸口を素早く拾ってしまった。

「そんなことって？」

吐き出すような反論の言葉が止まる。聡の目が真剣だったからだ。

「どの世界でも生きていけない状態で……、あたしと結婚して……あたしと子供と、どうやって暮らすの？」

「アキラ……」

どうにかなる、と言いかけて……さすがにそれは無責任すぎる言葉だと気付いて将は黙る。

「……あたしだって、教え子を誘惑した教師なわけだし……。就職できなくなるかもしれない」

聡が言っていることは正論だ。だけど、将はやりきれなくなる。

『どうやって暮らす』……つまり生きていく具体的な方策……突き詰めれば金。

聡と一緒にいることの前ではそんなことはちっぽけでくだらなくて、小汚いことだ。

そんなくだらないことで、聡と離れるなんて。

認められない将は、必死で方策を考える。

「金なんか！……デイトレーディングでいままでどおり稼ぐよ」

現に、芸能界に入るまで、そうやって大金を——愛車を手に入れるほどの金を——稼いできた将である。

「将……」

聡にも将の思いはわかっている。

生きていくための具体的方策なんて……そんな些細なことで将を説き伏せることができるはずがない。

聡自身、固い愛情さえあれば、そんなことは乗り越えられると信じたい。

だけど、むしろその固い愛情、というものに聡自身、自信が持てない、などと……そんなことは言えない。

だから、聡は生きる方策や世間体を並べ立てるしかない。

「将は、……それでいいの？　お金の問題はいいとして……世間から隠れるようにしてコソコソ暮らすことに耐えられるの？」

「耐えられる。アキラがいれば」

将は即答すると、再び聡の肩をぐっと引き寄せた。自分の熱い心臓の音を聞かせるように、その頭を胸に押し付ける。

「アキラがいれば、世間から叩かれようと、なんだろうと耐えられる。耐えてみせるよ」

将は胸の中の聡の髪を撫でながら、噛み締めるように言い聞かせる。

「だめよ」

しかし、それは一瞬で、聡は将の胸を押すように離れた。

「そんなの、あたしが嫌」

「アキラ」

驚きのあまり哀しげな顔にさえなっている将を、聡は努力して睨みつける。

そうしないと、崩れてしまいそうで。

「将の才能を……、将の未来をあたしのせいで台無しにするなんて……。あたしが嫌なの」

「アキラ」

「コソコソ生きる将なんて、見たくない！」

358◆涙の懇願　8

「だから……将。あたしと離れて。自由に生きて。将の才能を活かして……」

「嫌だ！」

聡が言い終える前に、将は鋭く叫んだ。

「何いってんだよ！アキラと離れられるわけないだろ！」

将は目をむいて、聡の細い肩を掴んだ。あまりに強く掴んだので、肩の骨がきしんで痛む。

「俺の才能とかいうけど、それを引き出してくれたのは聡なんだぜ！」

唾がかかるほどの至近距離に将の必死の顔があった。

顔をそむけるほどの余裕もないほどの距離。

かろうじてそらしている聡の視線を、将は自分のほうに向けようと懸命に肩を掴み……それがかなわないとわかると、ついに聡をもう一度ぐいっと抱き寄せた。

「……アキラと離れるなんて、死んだほうがましだ！」

ついに、口にした死という単語。

軽軽しくそんなことをいうものではない……たしなめようと肩の上に覆い被さる将を振り返った聡は、将の……これ以上ないほど哀しい瞳の色をみた。

聡がいままで見た中で、もっとも哀しく寂しい瞳。

おそらく……肉親に捨てられるときの子供の瞳もこんな感じなのかもしれない。

見たことがないけれど、聡はおもわず、たった一人で置き去りにされる子供を想像した。

「しょう……」

そのまま心が透けて見えているような、透き通った茶色の瞳に聡は、理性とは別のところで聡を動かした……聡は無意識に将の髪を撫でていた。

それで、将はいくぶん落ち着いたのか、声のトーンを落として……懇願する口調になった。

「アキラ……。頼むから俺からはなれるなんて言わないでよ」

その唇も瞳もあいかわらず至近距離にある。

聡が将のそれを撫でるように、将も聡の髪を指にからめはじめた。

「……二人で考えようよ。きっと二人別れなくても、世間からコソコソ隠れないでも、幸せになる方法があるよ。きっと」

将の茶色の瞳に、ベッドサイトのスタンドの山吹色の光が映っている。

それは、二人で歩いていく温かいの未来の象徴のようだった。

きっと将には、その陽だまりの道が見えているであろう。

だけど、聡はそっと首を横に振った。

聡の出した答えとて……大人がよくよく考えて出した結論なのだから。

否定した聡に、将は狼狽をかくさず、ため息をついた。

少し下を向いて考えると、笑顔を聡に向けた。少し残念そうに眉が下がった笑顔。

「……なんだったら、すぐに結婚しなくたっていい。何年か先……、俺が……叩かれても、どんなスキャンダルを起こしても必要とされる実力を身に付ければ問題ないだろ」

実力、という自らが思いついた言葉は将に希望をもたらしたようだ。

残念そうな顔が徐々に明るい顔になっていく。

「そうだ、そうすればいい。俺が実力を身につけるまで……二人のことは隠せばいい。なんとかなるよ」

この1年で俳優として大きな成長を遂げ、そしてたった4ヶ月の勉強で難関私大に合格することができた将は、努力して実力を身に付

けることの果実を味わっている。

将にとって、社会から必要とされる実力は、もう身近なものになっているのだった。

将は聡に言い聞かせつつ、自らを納得させるようだった。

「ね、アキラ」

将は聡の頬を再び掌で包もうとした。

あらためてキスをしようとした将は、こんどは聡が徐々に寂しげな顔になっていくのに気付いた。

それにかまわず、唇を寄せる。２つの体温が交差し……唇と唇が触れ合う直前。

「だめよ」

聡は無造作に呟いた。

驚いた将は、焦点があう位置まで顔を戻して聡の表情を確認した。

聡の顔は寂しさを通り越して絶望という虚しさに、モノトーンのように色を失っていた。

聡は将を見ずに続けた。

「将は……そのころには、将はきっと、あたしのことなんかどうでもよくなってる」

聡は……ぽろっと言ってしまった自分に驚いていた。

こんなことを言うつもりではなかったのに。

希望に満ちた将の未来。将がいうとおり、きっと将は着実に実力を身につけていくのだろう。

将が身につけていく実力……可能性。

それは彼の中を占める、聡の面積を徐々に狭めていくのではないだろうか。

そしていつか……将の中から、自分が不要になる日をもたらす。

それに怯えた聡の中の感情の一部分が……つい剥き出しになってしまったのだ。

本当は違う。

将に幸せになることの邪魔はしたくない。

なのに。

……将を失いたくない。

将への不信を口にするのが本当の自分なのか。

それを否定するほうこそ本当の自分なのか。

驚いたのか、困惑したように自分を見つめる将。

一度発した言葉は否定できない。

いや本当は否定したくない、将の本心を今こそ確認したいというもう一人の自分に抗えなくて、聡は言い訳をしないことに決めた。

ただ、将を見つめる。

「アキラ、何いってるんだ……」

反射的にそう答えつつも、将は聡の瞳に完全に射抜かれていた。

聡の瞳はエックス線のように、将の中の後ろ暗さを探り出した。

あのときの、みな子への……揺らぎ。

みな子へ口づけしてしまった、自分への後悔。

見てみぬふりをしていた、聡への罪悪感が、聡の視線によって否応なく照射され浮かび上がってくる。

「これから……もっと、将のまわりには素敵な人が現れるわ」

聡はそういうと、照射していた視線を下に下ろした。

射抜くような視線は怖かったのに……それが将から離れてしまうと、取り返しがつかないことをしてしまったように将は落ち着かなくなる。

将は、とりあえず聡の顔を自分に向けるべく、語りかける。

「関係ないだろ。俺は、ずっとアキラ一人だから。いつまでもアキラだけだから」

聡は伏せた睫のあたりに虚しさを漂わせて、将のほうを振り向こうとはしない。

「アキラは特別な人だから」

そういうと将は聡の両手を拾い上げて、ぎゅっと握り締めた。

少し冷たい指は、将の掌にその重さを預けながらも、死んだ魚のように脱力していた。

――やっぱり、あのことか。

急に、他の女の事を匂わす発言をする聡。

心当たりといえば『あれ』しかない。

焦った将は

「ひょっとして……あんな週刊誌、気にしてるの？……本気にする

なよ。バカだなあ」

とついに自分の後ろ暗さの正体を自ら切り出すハメに陥った。

何でもないことだと、懸命に繰り出すアドリブ。

だが、せいいっぱい明るく演じるそれは、スタンドの灯りが届かない薄闇に染まる壁に空虚に響くのみだ。

聡はその表情を変えない。

将は自分の演技力の底の浅さを呪った。

しかし、言い出してしまったものは、仕方ない。

将は喋り続けるしかなかった。

「言ったろ。〇〇谷さんは、クリスマスのとき、聡に逢いたくて郡山からレンタカーを飛ばしてきたときのだし、みな子は……」

雑誌の写真は、顔が重なっているだけだった。

だから将は……聡に誤解だと思わせたくて嘘をつく。

「あれは角度でそんなふうに見えただけで。……ふざけてただけだよ。実際には……してない」

将がそこまでのアドリブをなんとか言い終わったとき、静かに……聡が瞳を動かした。

それを見て将はドキッとする。

しかし……ここは、嘘をつきとおさなければならない。

いや、嘘などではない。将の中では『事実』なのだ。

みな子にキスはしたけど……あれは一瞬の気の迷い。

本当に好きなのは……必要なのは……失いたくないのは聡なのだから。

359◆涙の懇願　9

――嘘！あたしみてたのよ。

喉までででかかったその言葉を聡はかろうじて抑えた。

……言葉にするのは抑えられたものの……悲しみと悔しさが新たな涙になってこぼれ落ちた。

将は、聡の涙を見て、動揺した。

「何で、泣くんだよ」

だけど、聡はそれを言葉にすることができない。

――将が嘘をついた。

嘘をついてまで、聡を手放したくない将の気持ち。

理性では理解しつつも、そんな将に対して胃を突き上げるような不快感を覚えてしまう。

「俺は、本当にアキラだけだから。信じてよ」

聡の涙に焦った将は、手をより強く握り締めてきた。

だけど、聡は、首を横に振ると

「まだ……たかだか18歳でしょ。出会いなんてこれからよ……」

震える声で言い放った。

自ら予言する将の新しい出会いに……聡の瞳からは自動的に涙がボロボロとこぼれていく。

聡はさっきから、打ち寄せる高波のような感情と闘っていた。

必死で食い止めていた防波堤は、漏れた涙がきっかけとなって、少しずつ崩れる兆候を見せていた。

将は将で、聡の自分への不信がまるで拭われないことに恐れつつ、なおも聡の涙にすがる。

まだ自分を好きだから……離れたくないから泣いているんだと、しがみつく。

「……泣きながら何いってるんだよ。アキラだって俺と別れるのが嫌なんだろ」

将に本心を掴まれ、突きつけられた聡は一気に限界を迎えてしまった。

聡は、自分の中の防波堤が小さな穴から一気に砂と化してとけるように壊れていくのがわかった。

崩れた残骸を乗り越えてくる感情の高波に、現実の体すら揺れそうになる。

聡は、涙でぐちゃぐちゃの顔のまま、キッと将を睨み付けた。

「そうよ。将と一緒にいたい。……だけど、将が離れていくのはいやなの」

聡の強い視線……そして強い口調に、将はよろけそうになるほどの衝撃を心に直接受けた。

聡はなおも叫ぶように続ける。

「魅力的な誰かに、将が心奪われていくのを見るのは嫌なの！」

将は強い突風に立ち向かうように、一瞬歯の根を食いしばる。

ここまで、聡が強い感情を見せたのは初めてだった気がする。

豪雨を伴う台風のような聡の……激情。

将の未来に現れる誰かへの嫉妬に……聡がここまで感情を乱すとは。

歓びに震えつつも、聡をなだめなくては。

いつもの穏やかで自分をリードしている……陽だまりのような聡に戻らせなくては……。

そう思った将は、なんとか聡を安心させるべく、必死で言葉を考える。

「絶対そんなことないよ！俺は一生、アキラだけを愛するよ、俺誓えるよ。」

「嘘！」

涙を飛びちらせるようにして、聡は将に対して聞く耳を持たない。

将は、握っていた手を聡の肩に添えながら、なおも続ける。

「うそじゃな……」「あたし見たのよ！」

稲妻のような聡の言葉に将は凍りついた。

時までも凍りついたよう……凍りついた体は聡の顔を振り返るのに相当の努力を要した……聡は、赤い目を光らせて、息も荒く将を見据えていた。

その視線に再度、将はゴルゴンに睨まれたかのように動けなくなる。

「何を……」

わかりきっているのに、将は、答えが違う可能性を、未練がましく求めている。

だが、聡は荒い息の下ではっきりと口にした。

「星野さんとキスしたのを、あたし見てたのよ」

「アキラ」

将の唇は聡の名前の形に動いたが、音声にならなかった。

将の人生で……いまだかつて、こんなに恐ろしいことはなかった。

だけど、こんなときですら、将は聡の顔から目が離せない。

「今でさえこんなにつらいのに……。この先、将に裏切られるなんて……耐えられない」

聡は喉の奥から絞りだすように、吐露した。そのふるえる声の一言も聞き漏らせない。

「アキラ」

目も、鼻も唇もすべて充血して紅くなっている聡は、大きく息をつくと、改めて宣言する。

「だから今のうちに、別れたいの」

それは新たなる涙をこぼしながらもしっかりとした声だった。

――うそだ。

将はがっくりと床に膝をついた。

「アキラ……。そんなことというなよ」

狂おしいほどの恐怖に将は包まれる。震えそうになる。……たった一人になってしまう恐怖。

「みな子のことは謝るよ。このとおりだ」

将は床に手をついて、頭を下げた。

「そんな……ポーズはいらないわ。同じ年の星野さんを好きになる将は……普通だもん」

鼻を啜りながらも、聡は突っぱねる。

「そんなこというなよ」

眉も目もゆがめながら将は顔を起こして聡を見上げた。

誠心誠意のつもりだったのに、にべもなく突っぱねられて途方に暮れた将に、いつか想像した漆黒の宇宙空間が広がりはじめる。

太陽を失ってしまう。軌道をはずれていく暗黒の冷たい惑星。

そうなってたまるか。

「アキラ、許してよ。……頼むよ」

土下座がダメだった将は、今度は聡にすがりつこうと手を伸ばす。

「何でもするから……。何でもするからさ」

声が思わず裏返っている。

もう、格好なんてつけていられない。

聡を失うことに比べたら、他のことなんて何の価値があろうか。

「ねえ、アキラ……アキラってば」

聡が本当に離れてしまったら。将の中に恐ろしい寒さが蘇った。

北海道で何度か体験した……涙ですら一瞬で凍るほどの寒さ。

「そんなことで……俺達別れていいのかよ！」

将は渾身の力で訴えると聡を見上げた。

しかし聡は目に涙をためたまま、将のほうから視線をはずして……

二人の視線はからみあわなかった。

将の瞳は聡から取残されて、すでに孤独の片鱗を味わい……将はどうしていいかわからなくなる。

沸騰するのではないかと思うほど熱くなった眼から……聡の姿がかすんでいく。

ぼやけた視界の中の聡は静かに言った。

「……いつか、将はあたしを捨てるわ」

「捨てないったら！ねえ、アキラ」

将は叫ぶと、そっぽを向いたままの聡の手にすがりついた。

手にぼたぼたと温かいものが落ちる感触に、そっぽを向いていた聡は思わず振り返った。

将は泣いていた。

涙をこぼすなんてものではなかった。大きく見開いた目から涙がぼろぼろと流れていく。

それをぬぐおうともせず、将はなおも哀願を続ける。

「アキラ、俺を見捨てないで、見捨てないでよ」

「将……」

「頼むよ……頼むから、俺を捨てないでくれ」

垂れる鼻水をぬぐおうともせずに、将は聡に懇願を繰り返した。

はっきりいって、無様な姿だった。子供のようだった。

「……泣かないでよ」

みっともない。

そう言おうとしたのに、聡の瞳からも涙がこぼれて、将の姿がぼやける。

「……俺、ひとりぼっちになっちゃうよ」

将は鼻を啜りながら呟いた。

そのあまりにも心細げな将の声に、手の甲で自らの涙をぬぐっていた聡は、将の顔をもう一度見る。

目は真っ赤に充血し、かすれた声が漏れる唇は腫れて厚ぼったくなっている。そこにイケメン俳優の面影は、もはやない。

垂れる鼻水もそのままに、聡と瞳をあわせた将は叫んだ。

「大悟もいなくなって……、ヒージーも死んで……、アキラまでいなくなったら！俺、マジでひとりぼっちだよ！」

みっともない将の姿を目にして。

あるいは『ひとりぼっち』という言葉ゆえに……聡の心の最も温かいところで、急に別の感情が芽生えた。

それは芽生えるなり、『ジャックと豆の木』のように伸び始めていく。

とまらない聡の涙に希望を見出したのか、将はそのままむしゃぶりついてきた。お腹にすがりつくように。

「アキラ……別れるなんていわないでよ」

その姿は本当に小さな子供のようだった。

寝巻きに将の涙と鼻水がしみこんで、赤ん坊がいる肌にじわりとした感触を伝えた。

それに起きたのか、お腹の赤ん坊が聡のお腹の皮をけっとばした。

「将」

「……ずっと一緒にいてくれよ。頼むから……もう二度とあんなことしないから」

聡はお腹にすがりつく将を見下ろした。将はしゃくりあげながら、聡を見上げてなおも懇願する。

涙で濡れそぼっている睫の下の目は真っ赤だ。

「俺は……俺の人生は聡次第なんだ。だから、ずっと俺と一緒にいてくれよぅ」

一度動き出した赤ん坊は、いつになく活発にぐるぐると動き始めた。その振動がわかったのか、将はいっそうお腹に頬を押し付けるようにした。

「ヒージーだって、聡に俺のこと頼むっていってたじゃんか。……子供だって俺と別れたくないっていってるよう」

お腹の中には将の子供。そして子供のように泣いてすがる将。

……確かにそうかもしれない。子供は聡の中でしきりにぐるんぐるんと動いた。

父親と離れたくないと、懇願しているのかもしれない。

「ううーっ……」

それっきり言葉にならず、将は声をたてて泣くと、聡のお腹に顔をうずめた。

「将ってば」

子供みたいに声をあげて泣いてすがる将に……聡はなんだか可笑しくなる。

笑いたいのに涙がこぼれてしまう。

急速に育った感情は大木のように二人を見下ろしていた。

嫉妬も、世間体も、何もかも……その木陰に溶けて……聡は何も考えられなくなった。

――母性本能。

たぶん、これがそうだろう。体の真ん中から湧き上がってくる、聡の中の、もう一人の『女』。

それに聡の理屈は完全に負けた。

離れられない。

先のことなんて……今はどうでもいい。

ただ、離れられない。

……ひたひたと湧いてくる将への純粋な愛情に……聡は、しばし飲み込まれるしかなかった。

３６０◆３４１～３５９話のあらすじ

将とみな子の口づけを目にしてしまった聡は逃げるようにその場を立ち去る。

将はあの一瞬確かにみな子に惹かれていた自分を自覚しつつも、聡の前では何もなかったようにふるまおうとする。

将は聡がその場にいたとは夢にも知らなかったのだ。

一方、みな子のほうには、謝罪の電話をかける。

みな子は将に「今までどおりでいて。私から逃げないで」と乞う（３４１～３４３話）

年明け一番の健診の結果、聡のお腹の子は女の子だということがわかった。

聡は、将が何も言わずに今までどおりなので、見なかったことにするよう心に決めていた。

しかし、お腹の子が将が願っていた女の子だったことを、将への罰として言わないことにする。

肝心の将は、スタジオ撮影のせいで、補習に参加することができないでいる。

その頃、大悟は瑞樹の遺品を受け取るべく将のマンションを訪れた帰りに、前原たちに会ってしまい、そのまま行方不明になる（３４４話）

将の父・鷹枝康三は、次期総理を狙うライバルである麻野外務大臣から、将と聡のことを知っていることを匂わす発言を耳打ちされる。

その対策を練っている最中に、今度は将のスキャンダルが書かれた週刊誌が世に出たことを知る。

クリスマスに詩織と二人で北海道から東京に帰ってきたときの写真が大げさに報じられたのだ。

その週刊誌には、顔を隠した状態ながら、元旦の、将とみな子のキス写真も載っていた（３４５話）

学校もマスコミで大騒ぎになっており、せっかく久しぶりに登校する予定だった将は休まざるを得なくなる。聡は職員室でその週刊誌を目にする。

将からはただちに弁明のメールが届き、ショックを受けながらもなんとか１日授業をこなした聡。

しかし午後になって出血し流産の不安を抱えて倒れてしまう（３４６話）

倒れた聡に、高校時代の同級生の秋月が付き添っていた。聡は彼に胎児の無事を聞かされて安心する。

萩の観光キャンペーンで上京していた秋月は、たまたま学校に聡を訪ねようとしていたところだったのだ。

秋月と会ったことで高校時代に付き合っていた恋人に裏切られたことを思い出した聡。将とその時の恋人を重ねて涙してしまう。

秋月は、聡のお腹にいるのは将の子供であることを察する。

聡の出血を聞いた将は、病院に駆けつけようとする。

しかし、『今二人のことが世間に知れて、つらい目にあうのは聡のほうだ』と純代に止められる（３４７～３４８話）

将から１０回にわたるメールを受け取りながら、聡は将へ電話をかけることができない。

しかし将の一連の行動に不信を覚えながらも、聡はまだ将のことを信じたいと思っている。

センター試験を控える将は、今後の将自身のためにも、今は頑張らなくてはならないと思い直し、ひとこと『頑張って』とメールをする（３４９話）

センター試験の直前だというのに、ドラマの初回放送日、将は番組宣伝で１日テレビ局に拘束される。

テレビ局で将は久しぶりにアイドルの四之宮敦也と再会した。

ちなみに将と共演者の詩織とのスキャンダルは、ドラマ関係者には番組の宣伝になると歓迎されていたのだ。

聡は病室で将のドラマを見る。ドラマの中の将を見て、聡は将の才能を確信した。そのことは聡にある決断を促すのだった（３５０話）

センター試験が終り、将はその出来栄えに確かな手ごたえを感じていた。

実は試験の前日、聡から激励の電話をもらっていたのだ。

聡は、将がスキャンダルのことで自分のことを心配してはいけないと思いなおしたのだ。

そのとき将は詩織やみな子のことを弁解しようとしたが、聡は「もういいの」と制止する。……実は聡は将と別れることを決意していたのだ。

試験が終り再び北海道ロケに飛んだ将と語らいながら、聡はそれを言い出すタイミングを見計らっていた。

西嶋節子（大悟の身元引受人）は、大悟らしき人影を自宅の前で見かけて追いかけようとしたが逃げられてしまう。

郵便受けには大悟の手紙があった。それには１０万円が同封してあった（３５１～３５２話）

自己採点の結果、将のセンター試験の成績は驚くほどよかったことが判明した一方で、西嶋節子からの電話で大悟のことを知った将。

かつて大悟を取り巻いていた闇の組織のことを思いつき、節子に打ち明けるわけにもいかず、頭を抱える（３５３話）

北海道ロケから続く撮りだめを終わらせた将は、前期試験までの１ヶ月弱、勉強に専念することになった。その後また出血した聡の入院は長引いている。

そんな中、父の出身大学でもある一流大学の、センター試験の成績

だけで受験できる少人数枠に将は見事合格する（３５４話）

本命の東大ではないものの、嬉しくて聡に電話で報告しようとする将。

実は、合格を先に知っていた聡は、将についに「結婚できない」と伝える（３５５話）

納得できない将は、病室に無理やり駆けつけると聡を抱きしめる。

しかし、聡の決意は変わらなかった。

聡は将に、二人を待ち受ける厳しい状況と、自分のせいで将の未来を台無しにすることはできない、と話す（３５６～３５７話）

将は、聡と別れるのは嫌だ、と叫ぶ。

そして自分がスキャンダルに負けない実力を付けるまで結婚を遅らせることを提案する。

だが、将が実力を付け、可能性を増すことで、将の中で聡を必要と

する面積が減っていくことを予見する聡は、つい正直な不安を吐露してしまう。

将は将で、聡の言葉がきっかけで自分の中にある後ろ暗さが浮き彫りになってしまい、自らスキャンダルのことを話すハメに陥る（３５８話）

弁解しつつも、肝心のみな子とのキスについて嘘をつく将に、ついに、聡の理性は崩れた。

聡は将の嘘をあばき、

「今でさえこんなにつらいのに、この先将に裏切られるなんて耐えられない。だから今のうちに別れたいの」

と涙ながらに叫ぶ。

すべてを暴かれた将は、がっくりと膝をつき、聡に許しを乞う。

頑なに将の謝罪を突っぱねる聡だったが、涙と鼻水をたらしながらすがりつき、謝罪と懇願を繰り返すみっともない将に『母性本能』という名の新たなる愛情が湧く。

結局、二人は離れられないのだった（３５９話）

361◆遠い春　1

荒江高校には卒業前の自由登校期間がない。授業は卒業まできっちりと行われる。

理由は2つある。

自由登校期間に、休んだ生徒が外で問題を起こすのを防ぐために、とりあえず学校に登校させておくというのが1つ。

荒江高校の生徒であるうちに問題を起こされては困る、という学校側の事情でもある。

もう1つは、もともと学力が劣った状態で入ってきた生徒たちに高校の学習内容を少しでも理解してもらうため……というより、せめて中学レベルの内容くらいはマスターしてほしいという学力の問題だ。

もっとも、今年は『社会人』デビューする前の練習として、電話の取り方など社会でのマナーや、働くということの意味を再確認する特別授業が、就職希望の生徒に対して行われた。

聡の企画で行っていた社会見学の延長として、学校側が考えたものだ。

進学希望の生徒は、その間、自習形式での学習をすることになっていた。

もちろん、息抜きに社会人教育を受けるのも自由だった。

従って2月に入っても他の高校のように3年の姿がない、ということはない。

月曜、聡は3週間ぶりに学校に来ることができた。

来週から妊娠8ヶ月めに入る聡の体を気遣った学校側の配慮で、主に3年の自習を担当することになっている。

聡は、教室の窓から、校庭でドッジボールに興じる生徒達を眺めていた。

ずっと座って自習している進学組の体力の低下に配慮して、1日1回、体育教師が軽く運動をさせているのだ。

いつもは体育館だけれど、今日は日が照って温かいせいか、校庭で遊ばせているらしい。

聡が退院して明日で一週間。

復帰第一週も今日で終りだが、幸い、お腹のほうは悪化の兆しは何もなく、無事に過ごせている。

聡はいつしか、笑いながらボールを投げ合っている生徒の中に将の姿を探してしまう。

無意識に目が吸い寄せられてしまうかのようだ。

仲の良い井口たちと笑いながらボールを投げあう、ジャージに包まれた伸びやかな肢体。

こうして、ずっと将の姿を見ていたい……。

つくづく……あの夜、わきあがる将への気持ちに負けてしまったのは聡のほうだと思う。

泣いて、鼻水を垂らしながらすがって……なりふり構わない将の姿に、聡は完敗したのだ。

聡は1日1回1年の授業の教壇に立つ以外は、努めて進学希望者が学習する教室に常駐するようにしていた。

本来は職員室で待機していてもいいのだが、せめて、疑問点が発生した時点で、生徒がすぐ質問ができるようにとの配慮もある。

しかし……直接の原因は将だった。

教室を出ようとすると、聡は将のせつない視線を背中に感じるような気がする。

現に将は

「ちょうど質問しようと思ったのに」

と追ってきたときもあった。だけど。

そんなあからさまな行動を少しでも抑えるため……そう自分に言い訳しつつ、聡自身が将を見ていたかったのだ。

将と離れたくない。

将をずっと見ていたい……。

二人を取り巻く事情が何一つ変わったわけではない。

二人の関係や聡のお腹の子供のことが露見すれば大変なことになる状態が好転したわけではない。

だけど、聡は……この先どうなるかわからないけれど、将を見守りたいと思う。

考えれば、学校という同じ空間でどうどうと呼吸していられるのは卒業までなのだ。

だから、せめて……卒業までは……将を見つめていたい。

聡は、生徒達の中にいる将を見守っていた。

「鷹枝くん」

見上げると、机の前にみな子が立っていた。

「そろそろ下校時間だよ」

「……ああ」

将は広げていた問題集を片付けながら、聡の姿を確認する。

聡は……というと、他の生徒への指導の最中のようで、顔をあげない。

――放課後も、進学組は今まで通り、自習による補習が行われた。

将も、岸田助教授のところに行く日でない限りはギリギリまでそこで勉強していたのだ。

将は……今までもそうだったが、ずっと聡の姿を目の端で追っていた。

芸能活動を始めるようになって学校に来れない日が多かったのと……先週の聡からの別れの宣告。

あのことがあってから、将もまた、聡と同じ空気が吸える学校という空間、そして時間をこれまで以上にいとおしむようになっていた。

もちろん今まで通り、ネットと電話をつかった個人授業は復活させている。

だけど、こうやって生身の聡と同じ空間を共有しているという幸せ。

……卒業まで1ヶ月を切った今、それが一層心に沁みいるようだった。

昨日の建国記念日もそうだったが、明日もあさっても会えない……人目ゆえに聡に自由に逢いに行くことがままならない今の将には、休日のほうがもどかしかった。

まだ無名だった頃のように、休日の聡を自由に訪ねられたら。

将は、昔を懐かしみつつも……将来の可能性のために今は勉強に打ち込むしかないのだ。

将は後ろ髪を引かれる思いで、教室の引き戸に手をかけた。

ちなみに『彼女』公認のみな子は、あいかわらず今まで通り、将と駅まで一緒に下校していた。

いらぬ誤解で聡との間を波立てたくはないから、本当は一緒に帰るのをやめるべきなのはわかっている。

だけど『私から逃げないで』と必死で訴えたみな子の声音を思い出すと将は躊躇してしまうのだ。

実は、将は復活した聡との電話授業の際に、みな子が「カモフラージュでいい」と言ったことをそのまま聡に伝えている。だが、聡は

『そんなのよけいに、かわいそうなんじゃないかな』

と静かに答えた。

『星野さん……、将のことがたぶん、本当に好きなんだと思う』

怒るでもなく泣くでもなく、電話の向こうから聞こえる淡々とした声は、よけいに真実味があった。

聡は別に、将にみな子との2ショット下校をやめろといっているわけではなかった。

あの病室で見せたような、激しい嫉妬と慟哭は……回線の中にはみじんも伝わってこない。

ただ静かにみな子の『カモフラージュ状態』がかわいそうだというだけだった。

将は「みな子と、単なる友達に戻れないかな」と言いかけて……やめた。

みな子の気持ちを知ってしまった将だ。

……つまり、今の状態は、みな子の純粋な将への好意を……愛情を、将はカモフラージュに利用しているとしか言い様がない。

そんな自分の狡猾さに、将は今日こそみな子に言わなくては……と思いながら、いざみな子の顔を見るとそれを言えないでいる。

将とみな子が廊下に出たとたん、将は下級生の女子に取り囲まれた。

「あの……、これ！」

一斉に差し出されるリボンがかかった包みを見て、将はようやく、今日がバレンタインデー前の金曜日だということを思い出した。

今年のバレンタインデーは日曜日になっている……だから、学校で渡せるとしたら今日になるらしい。

「どうも、ありがとう」

将はいちおう、芸能人の笑顔で答えた。

下級生はキャーっと一声あげるとダッと走り去ってしまった。

「カワイイね」

傍らのみな子がやや皮肉っぽくいう。

「コレ、どうしよう」

将は、両手と腹で支えるようにして、てんこ盛りになっている数個のチョコレートを見て困惑した。

カバンには入らないし、片手でずっと持っているわけにはいかない。

「カバンに入らないよね。……ちょっと待ってて」

みな子は教室に戻ると、なんと聡に声をかけている。

将は思わずギョッとした。

みな子に話し掛けられて、ちょうど生徒の指導に区切りがついたらしい聡は、将のほうを振り返った。

下級生からのチョコレートを抱えた将は、思わず生唾を飲み込んだ。

思わずチョコを隠してしまいたい衝動に駆られるが、手遅れだった。

「ちょっと待っててね」

聡は将に微笑みかけると、職員室のほうへと歩いていった。

週末で8ヶ月になるお腹はいっそう大きくなって、将は何か手を差し伸べたくなる。

だけど……人前では何も言えない。

「これで、入るかナ？」

聡は、大儀そうにお腹を揺らしながら職員室から紙袋を持ってきた。

たぶん、学校の封筒を注文したときのだろう、印刷所の名前が入っている地味な紙袋だが、大きさは充分だ。

「先生、すいません」

将は謝った。

――体裁としては、大きいお腹なのに、面倒なことを頼んですまな

い、という意味だが……もちろん別の意味を含んでいる。

「二人とも、風邪には気をつけてね」

聡は将とみな子に向かって笑顔をつくると、職員室へと去ってしまった。

362◆遠い春　2

聡が見えなくなるまでその後ろ姿を見送っていた将を、みな子もまた見つめていた。

3年生たちは皆帰ってしまったらしく、2階は急に静かになってしまった。

窓からオレンジ色に浮きあがって見えるような狭い校庭からは部活動なのか下級生の声。

しかし、それとは対照的に、校舎の中は見る間に灰色から墨色に沈んでいくようだ。

みな子は、気を取り直すように、

「行こっか」

と将に明るく声をかけた。

うなづいた将だったが、心ここにあらずという感じだった。

そんな将を振り向かせるべく……一緒に帰るときくらい、こっちを見てほしいみな子は少し冒険してみる。

「将、は」

桃色がかった橙色の夕陽が窓枠の形に浮き出た階段に差し掛かったとき、みな子は初めて将を名前で呼んでみた。

しかし、将はそんなみな子の冒険にはまるで気付かないようだ。先をどんどん歩いていく。

みな子は大いに不満を感じながらも、夕陽を受けてキラキラと輝く将のあとを追いかけて話を続ける。

茜色のスポットライトを踏みながら、将に振り向いてほしい、と祈るように。

「今週の土日、どうするの？」

階段を2段ほど降りたとき、みな子の瞳に夕陽が飛び込んできた。

それは蛍光色より鮮やかなピンク色で、みな子は思わず目を細めた。

「どうするって……。ずっと勉強だよ」

将はみな子の顔のほうに視線を一切向けないまでも、まったく上の空ではないらしく、返事は即座に返ってきた。

「ずっと家で？」

振り向いてほしい。できれば気がついてほしい。みな子はその一心で将の後姿に食い下がる。

「日曜日は岸田先生の家に行くけど」

「その前とか、後とかにちょっとだけ会えない？」

将はやっと振り返った。

しかしその表情から、みな子は返事を悟った。

憮然としそうになるのをなんとか隠した中に、みな子を憐れむような色を見つけてしまったから。

「やっぱ、だめか。そうだよね」

みな子は、自分で答えを出すと、将を追い抜いて階段を一気に駆け下りる。

下で将を待ちながらせいいっぱいの笑顔をつくる。

「来週からさ……あたし、関西で受験なんだ。しばらく会えないから……」

目をあげて自分を見る将に……みな子は小さな満足を得る。しかし、それは予想通りすぐに崩れる。

「ごめん」

将はやるせない表情のまま俯いた。

この程度はみな子の予想の範囲だった。

しかし、何度も予想して、傷つくシュミレーションをやっていても……実際に拒否されて受けた心の傷は、予想よりかなり鋭く深かった。

その痛みに負けず、みな子は前を通り過ぎていった将を追う。

「あ」

靴箱を開けたとたんにチョコが雪崩のように落ちてきた。

落ちたチョコを拾いもしないでただ見ている将に、みな子がくすりと笑いながら寄ってきた。

「すごい。マンガみたいだね。靴箱にチョコレート」

そういいつつ、みな子は屈んでチョコを拾ってくれた。

「1、2、3、4……5つ。すごいね。さっきのと足して9つも」

ハイ、とおどけて差しだすその笑顔に、将はどんな顔を返していいものかわからない。

だから、せめてチョコレートを収納すべく、聡からもらった紙袋をみな子に向けて開ける。

みな子はチョコを1つずつ丁寧に紙袋の中に重ねるように入れていく。

ピンクや銀色、紺色と色とりどりのチョコのラッピングに視線を向けているように見せつつ……将の心の中をどのチョコよりも鮮やかに占めていたのは……聡だった。

聡に、みな子と親しくしているところを、またしても見られてしまった。

それどころか、チョコレートを抱えている自分は嬉しそうに見えてしまったかもしれない。

将が舌打ちしたいような気持ちを抱えているとも知らず、みな子は

「ちょっと待って」

と将をそのままの体勢で待たせて、自分のバッグの中から新しいチョコを取り出した。

「はい。これは、あたしから」

みな子は笑顔をつくると、ベージュに紺のリボンがついた包みを紙袋の中に入れた。

「時間があったら、日曜日に渡したかったんだけど」

みな子が一生懸命笑顔を作っているのは、将にもわかった。

『私から逃げないで』

元旦に電話でそういったみな子の顔は、こんな顔だったんだろうか……。

そんな哀しげな笑顔に、心が動いてしまいそうになるのを、将はかろうじて堪える。

今は……今こそ、言わなくてはならない。聡のために……残酷にならなくてはならない。

飛び込み台に立つような勇気を、自分の中からかき集める。

それでも将は、自らが傷つけるみな子の心、そしてその痛みを想像して……足がすくみそうになる。

息を吸い込むと将は、チョコを入れ終わったみな子に、その紙袋ごと押し付けるように差し出した。

「ごめん。受け取れない」

「……どうして？」

みな子は黒目がちの瞳を大きく見開いて、将を見上げた。

「俺達……」

将は１０個のチョコが入った紙袋から手を離した。それを床に落とさないためにみな子は受け取らざるを得ない。

「単なるクラスメートに戻ったほうがいいと思う」

押し付けられたみな子は唖然としている……そのようすも見るにしのびない。

だけど、将は心の痛みに耐えて、みな子を一生懸命直視した。

みな子は、将をまっすぐに見上げたまま涼やかな瞳を2～3回しばたいた。

「……もともと……、単なるクラスメートじゃない」

かろうじて抗議する声と同様、唇や睫も震えている。

「いや、カモフラージュももう……」

「先生のカモフラージュのためにも！」

奇しくも、カモフラージュという言葉が重なり、二人の視線は言葉と同様鋭くぶつかった。

次の瞬間、二人それぞれに唾を飲み込む。

……1拍置いて、将は続けるしかない。

「もう、カモフラージュは……いいんだ。こういう状態、よくないと思うんだ」

絞りだすように言葉をつないでいく。

その言葉が染みこんでいくように……みな子の瞳は目に見えて哀しみに歪んでいく。

愛しているのは聡だけ。聡を悲しませなくない。そのために必要なことなのに。

好意を拒むのは……人を傷つけるのは、こんなにつらいことなのだ。

将は、がっくりと頭を下げた。

「ごめん」

みな子は、いつのまにかチョコの袋を抱きかかえるようにしていた。

何かにしがみついていないと、耐えられない。

……みな子は受けた衝撃と悲しみを紙袋の中のチョコに吸収させてようやく泣きもせず立っていた。

「先生のため、だよね」

将は目をあげるとみな子を見つめた。

その目は……まるで将のほうが振られたような……みな子に助けを求めるようだ。

「先生が……悲しむからだよね。先生は……あたしに」

嫉妬してるんだ。みな子は辛くもその言葉を飲み込んだ。

聡がみな子に嫉妬しているとしたら。

それは一見、同じ土俵に立ったような錯覚をみな子にもたらした。

だが、そんな錯覚は何もならないとみな子はすぐに気付く。

将の気持ちは聡一人に決まってしまっているのだから。

再確認した絶望の位置同様、みな子の視線は床に沈んでしまった。

泣きも喚きもしないみな子に、救われてもいいはずなのに、将は却ってひどい罪悪感を覚えた。

「ごめん……ていうのも変だけど。今までありがとう」

将は罪悪感を覆い隠すために、せめて感謝の言葉を重ねる。

これまで聡とのことが露見せずに済んだのは……クラスメートでさえごまかすことができたのは、みな子の功績であることは確かだったから。

しかし、みな子は下を向いたまま静かに首を横に振るだけだ。

将の中の罪悪感は一向に隠れることはなく……将は恩人であるみな子をここに残したままにするわけにもいかずに立ち尽くしていた。

「ね」

長い沈黙の果てに、みな子がようやく顔をあげた。

1秒を1時間にも感じるような重苦しい沈黙。

呼吸困難になりそうな空気の重さは……本当は一瞬だったのかもしれなかった。

「最後に、教えて」

それは思いのほか明るい声だった。……明るい声を出そうと、みな子がせいいっぱい努力していることが将にも伝わった。

瞳がひたむきに熱を持って輝いているのは、暗い靴箱の中でもわかった。

「あたしのこと……好きだったときもあった？」

363◆遠い春　3

ひるんだ将に、みな子はなおも畳み掛けてくる。

「少しでも……ほんのちょっとでも、好きだったことあった？」

明るく、冗談めかした口調を装いながら……その瞳は真剣だった。

将は息を飲みこむ。

追い詰められた心に直結した心臓が、苦しいほどにドクドクと動き始めるのがわかった。

「そんなこと、今さら」

逃げようとする自分は卑怯だと思う。

あの、一緒にボイコットした視聴覚室で。

色気のない眼鏡の奥に、黒目がちな瞳。

２つにわけて結んだまっすぐな黒髪。

真面目に着こなした制服の下に延びたスラリとした脚。

頬を染めて駆けてきた振袖姿。

みな子の中に、それらを見つけたとき、まったくときめかなかったといったら嘘になる。

でも、それはみんな、若い頃の聡を想像させてやまなかったから。

だけど……一瞬でもみな子自身を見ていなかっただろうか。

いや、あの元旦の日は。

……将は確かに、みな子の中の聡の面影ではなく、みな子自身に吸い寄せられて口づけしてしまったのだ。

だけど、そんなことを……みな子に惹かれた一瞬が確かにあったことを告白してどうする。

自分は最初から聡を選んでいるのだ。

聡だけを一生愛することに決めたのだ。

みな子に揺らいだことを……本人に伝えたところで、みな子の自身にも何の足しにもならないだろう。

将はどうしてみな子がそんなことをいまさら訊くのか理解できなかった。

しかし、みな子はなおも食い下がる。

「もしも……もしも。先生がいなかったら。……あたしを好きになってた?」

聡がいなかったら。それには将は答えられない。

聡がいなかったら、今の自分も……たぶん存在しないから。

聡のいない世界。それは太陽のない世界……暗黒の中で将はいつまでも心に救いがない暮らしをしていたに違いない。

それに……そもそも、そんなことを考えるのは聡に対して限りなく不実に違いないから。

答えられない将は目を伏せた。

「ねえ。先生と出会わなかったら……」

なおも質問を続けようとするみな子を将は遮った。

「ごめん。……アキラがいないとか……考えられない。てか、考えたくない」

みな子が大きく息を飲むのがわかった。

「そっか……。そうだよね」

ため息まじりにそう呟くと、みな子はチョコレートの紙袋を抱えたまま、虚空へと一度目をそらした。

さっきまで最後の光を差し出していた夕陽は、厚い雲に隠れてしまったらしい。

あたりは……みな子の絶望さながらに、青みがかったグレーに沈んでいる。

ごめん、ともう一度言ってここを立ち去れないか、と顔をあげた将に、みな子も同時に振り返った。

「じゃ、好きか嫌いかだったら……好きなほうだった？」

将があきらかに困惑するのが、みな子にもわかった。

みな子も……どうして自分がこんな質問を投げかけて将を困らせているのかわからなかった。

だけど、止まらない。

理性では『なんて馬鹿な質問なんだ。こんなことを訊いたって何にもならないのに』とわかっている。

なのに胸から湧き上がるせつなさは、将に自分の位置を確認させる言葉となって吐き出されていく。

無駄だとわかっているのに、訊かずにはおれない。

……いつかこんな日が来るとわかっていた。

わかっていながら、みな子は将のそばにいたかった。

将が聡を選んでいるのがわかっていても、せめて教室で将に寄り添

いたかった。

自分から初めて、好きになった異性。

それがまったくの一人相撲だったのか。

それとも、髪の毛一本の先だけでも、ほんの０．００１％だけでも。

将が自分に答えていてくれたのか。自分のことを好ましく思ってくれた瞬間があったのか。

それは、みな子の心にとって……畢竟、アイデンティティを賭けるほどの問題だったのだ。

「友達としてでもいい。……好きだった？」

将はみな子の本意がわからなくて、ただみな子の瞳を見つめるしかなかった。

その黒い瞳は……問いを重ねるごとに、歪んでいくのがわかった。

薄闇の中でも、たまりそうになる涙で目の表面が固まりかけたゼリーのように揺れるのがわかる。

それを、長い睫を懸命にパタパタと瞬いて堪えている。

そんな様子をみると、将の心は痛んだ。

傷ついて、必死で助けを求めている子猫を放置するような、心の痛み。

「ねえ……好きでいてくれたんだよね」

その声はどんどんかぼそくなり、ついにはふるえはじめた。

睫は休むことなく瞬いて……揺れる黒目がちの瞳からは、いまにも涙がこぼれそうだ。

「そうじゃなかったら……キスなんか……」

それ以上は言葉にならなかった。

忘れると言ったけれど、忘れられないだろう。みな子にとっておそらく初めてのキス。

それをした将の心に……少しでもみな子への好意を含んでいなかったのか。

みな子はついにそれを突きつけてきた。

それがしのびなくて……ついに将は、だまってうなづいた。

一度だけでは、軽い気がして……将は何度も確認するように、みな子の瞳から視線を動かさないまま首を振る。

みな子は、将がうなづいた——つまり将が少しでも自分のことを好きだった——その事実を確認すると、安心したのか、大きく息をつ

いて横を向いて俯いた。

そのとき……雲が再び流れたのか、おそらく……今日最後の夕陽が一筋、ふいに靴箱に射しこみ、みな子の頬に届いた。

光線から顔を隠すべく、みな子はチョコレートの袋に顔をうずめようとした。

しかし、その直前、将は泣き濡れたみな子の頬がキラキラと輝くのを見てしまった。

みな子が泣いている。

気丈な女子クラス委員が、声を殺して肩を震わせている。

ふいに正義のように湧き上がる、抱きしめたい衝動。

将はそれを、握りこぶしに力を込めながら懸命に堪えるしかない。

それは、ほんの一瞬だったのかもしれない。

気がつくと、夕陽は再び厚い雲に隠されて、靴箱はさっきよりさらに深い翳に沈んでいた。

やっと、みな子がチョコレートの袋から顔をあげた。

暗くてよく見えないが、涙は止まりつつあるようだ。

「……大丈夫？」

こんなことを訊く自分は……みな子のことを気遣うようでいて、とても薄情な偽善者だ。

自分に吐き気さえ覚える将だったが、もはや、どうしようもない。

しかしみな子は気丈にも、こくん、とうなづくと、１０個のチョコが入った紙袋を両手で将に差し出した。

「友チョコ、だから」

躊躇する将に、みな子は拗ねたような声を出して抗議する。

「あたしが持って帰ったって、どうしようもないでしょ。チョコ１０個も」

ほら、と促すみな子は、涙に目を光らせながらも、口調はいつもの調子に戻りつつあった。

それで将はようやく、チョコレートの入った紙袋を受け取った。

「友達では……いてくれるよね。クラスメートだもん」

最後に、みな子は微笑んで、卒業までは、と付け加えた。

濡れた睫で無理やり微笑む瞳。

また揺らいでしまいそうになったことは……ずっと心にしまっておかなくてはならない。

364◆遠い春　4

銀色に光る針を透明な液体に浸す。

無色透明……水道水よりも無垢に見えるこの液体は、ごくスムーズに注射器の中に吸い上げられる。

大悟は器用に目盛りピッタリにあわせて吸い上げると、躊躇もせずに自分の皮膚にその針を突き刺す。

そこまで……一切のよどみもなく、顔色ひとつ変えずに進んでいく。

三度の食事よりもスムーズにみえるほどだ。

「大悟さぁ、いつも思うけど～、注射超うめーよな」

薬と酒に半分ラリッたような前原がケケケと笑いながら話し掛けるのを大悟は……まるで聞こえていないように受け流す。

前原がうらやましがるのも無理はない。

器用な大悟は、注射のコツをすっかりつかんでしまっている。

だから、痛みも少なければ、人に怪しまれるような内出血もごくごく少なく済んでいるのだ。１日３～４回打っているにもかかわらず、だ。

ここに連れ戻されて……今まで以上に薬を使うようになるまで、あっという間だった。

ここ、とは。

大悟は前原らと一緒に、とあるマンションに住んでいた。

３ＬＤＫの部屋は、食料や衣類などのほかに、パソコンや、雑然と積まれたハガキなどで一見、片付かない事務所のような様相を呈している。

ある意味、そこはオフィス（事務所）だった。

振り込め詐欺から、ワンクリ詐欺。フィッシング。

……人の弱みや隙に付け込んだ、あらゆる犯罪を行うための事務所といえる。

被害者からまきあげたマンションの何箇所かを、脚がつかないように大悟たちグループは点々とまわり、拠点にしていた。

「今はねえ。何でもやんないとね。生き残れないのよ」

いわば事務所長的存在の……尖った靴の男は甘い香りの葉巻を吹かしながらそんなことをたびたびつぶやく。

その男の背中には見事な彫物がほどこされていた。

弁財天をモチーフにしたという背中に彫られた女を、大悟は夏前からあわせて３度ほど目撃している。

目撃したときのことは、思い出したくもない。

ただ、『組』関係だというその男は、いろいろな意味で大悟を可愛がった。

幸いなことに……最近は、大悟の器用さや能力に惚れこんでくれたらしく、おかげで両刀使いのこの男の相手はしないで済んでいる。

器用で飲み込みのよい大悟は、少し教えられただけで概ねの『作業』をマスターしてしまっていた。

だから大悟は最近はもっぱら、詐欺行為の準備や、フィッシング用のサイトの構築などに重宝されているのだ。

そう、皮肉なことに、まっとうな保護者である西嶋夫妻と同じ理由で、この尖った靴の男は大悟を手元に置いておきたいらしいのだ。

大悟は、薬を打ってしまうと、前原を無視してパソコンに向かった。

別に急ぐ仕事があるわけではないが、大悟は薬によって手に入れた正気を手放さないために目の前に何かの作業を置くことを好んでいる。

「ケッケッケ……」

今日の前原は、何がおかしいのか、ひとりで笑っている。

覚醒剤だけでなく、酒と脱法ドラッグを一気にやってトランス状態

に陥る……前原は気持ちがいいから、とよくこれをやる。

しかし今日はいささか過ぎたようだ。

「だ～いご～～～」

呼ばれて大悟は前原を振り返った。同じ中学のせいか、前原は大悟に対して親しげだった。

大悟のほうは、あまり学校に行かなかったせいもあり、同級生との付き合いに線引きをしているようなところがあったのだが。

「だいご～。ひゃっひゃっひゃっ……」

ヨレヨレの前原の左右の視点はあっておらず、歯が欠けた口元からはヨダレが一筋流れている。

それを見た大悟は思わず眉根を寄せてしまったらしい。

前原は大悟の目付きに珍しく敏感に反応した。

「……んだよぉ。大悟。文句、あんのかよぉ」

凄みながらも、視線は虚ろだ。

「ああ～？」

前原は近寄ってきて、大悟の襟を掴もうとした。

しかしそれを避けるべく大悟が少し上体をのけぞらせただけで、手

元が狂ったのか、前原はバランスを崩して顔面から転んだ。

「……チキショウ」

なおも、ヨロヨロと大悟にからもうとする前原に、ようやく兄貴分が止めに入る。

だが、興奮した前原は、恐竜のような咆哮をあげて、なおも大悟に掴みかかろうとする。

「お前、調子に乗って、シャブやりすぎなんだよ！　しばらく頭冷やせ」

暴れる前原に兄貴分も手を焼いたのか、前原の両腕と両足をガムテープでぐるぐると固定してしまった。

眉を剃りあげ、髪を赤く染めた兄貴分は、年齢は大悟たちといくつも違わないのにこういう残酷なことを平然と行えるらしい。

もちろん大悟は要領がいいから、そんな風にされることは、まずない。

前原は自分の状態がよくわかっていないのか、しばらく自由のきかなくなった手足のまま芋虫のようにうねっていたが、しまいには

「ごめんなさい、ごめんなさい」

誰ともなしに懇願を始める。

一部始終を見ていた大悟は、ガムテープで両手両足を縛られた前原

を見て、自分の近未来の姿を見た気がして、ぞくっとする。

だけど、やめられないのだ。

覚醒剤。シャブ。……廃人になるかも、とわかっているのに、大悟はそれに再び依存してしまっていた。

薬がもたらす昂揚感が、すでに大悟にとっての正気になってしまっている。

その薬が少しでも不足すると……大悟はいろいろなことを思い出してしまうのだ。

赤い霧になってしまった瑞樹。

自分のせいで……一家心中を図った前の保護者一家。

中学の頃、自分を弄んだ男たち。

そして、将への……恨み。

忘れてしまいたい、覆い被せてしまいたい一切は……薬が切れると一斉に大悟を攻撃し始めるのだ。

このグループに戻ってきたばかりの頃、テレビに映った将に、ラリッた前原がグラスを投げつけたことがあった。

まだドラマが始まったばかりで、将がさまざまな番宣バラエティに出ていた頃だ。

ラリっていた前原が投げたグラスは、テレビの画面をはずれて背後の壁に当たって砕けた。

グラスが割れる音は、前原をよけいに興奮させたらしい。前原は叫んだ。

「大悟ォ。瑞樹がミンチになったのは俺のせいじゃないぜ。コイツのせいなんだぜ！」

少年院を出所してすぐに前原は瑞樹の悲惨な死に様を聞いたらしい。瑞樹が深刻な覚醒剤中毒だったらしいことも。

瑞樹に覚醒剤を教えた良心の呵責から……必死で逃れようとしているのだろうか。

前原は唾を飛ばしながら、瑞樹の死を将に押し付けようとしていた。

大悟は、荒れ始める心の波を抑えながら、そんなことをいまさら言っても仕方がないと

「やめろよ」

とたしなめる。しかし前原の罵声は止まない。

「将のやつ、ムカつくぜ」

大型の液晶画面の中では、将が照れたような笑顔を浮かべていた。

「殺人者のくせによぉ……。何が俳優だ」

無視してチャンネルを変えようとした大悟は、それを聞いて思わず目をあげる。

あのヤクザ殺しの犯人が……本当は将だというのは、大悟と将、将の父親と弁護士しか知らないはずなのに。

前原は顔色が変わった大悟に勝ち誇ったような表情になる。

「俺、全部知ってるんだぜ」

そういってのけると、ひゃっひゃっひゃっと笑う。

狂人のような笑いに、大悟はどう対処していいかわからない。

「何で知ってるか教えてやろうか。俺、あんときお前の部屋のすぐ外にいたんだぜえ～。怖くてすぐ逃げたけど」

前原の口調は、ひゃらひゃらしているものの、あの現場にいたというのは本当らしいと大悟は直感した。

「大悟、お前、悔しくないのかよぉー。やってもない殺人罪着せられてヨォ。年少入りさせられてよぉ……んとに可哀想なやつだぜ」

動きが止まった大悟に、前原はいざるようにして近寄ってきた。そして顔を覗き込むと

「おまけに、瑞樹は将のお古だしさあ」

とニヤリと笑った。……どうやら、前原は大悟と瑞樹が付き合っていたことも知っているらしい。

大悟は勢いよく立ち上がると、鋭い目で前原を見下ろした。

へらへらしている前原でもさすがに……その殺気さえ含む視線に気付いたらしい。

「うわ、殴る？マジ殴る？殴らないでよ。……冗談だからさ」

首をすくめて助けを求める前原に対し……大悟は、手を振り上げもせず、そのまま握り締めた。爪が掌に食い込む。

その脳裏には瑞樹の最期が自動的に再生されている……死の間際まで……自分を将と間違えてまで、将の名前を呼んでいた瑞樹が。

365◆遠い春　5

「あのさ、アキラ。今日……」

将が切り出したのは、電話とネットを使った英語の個人授業が終わり際だった。

聡が退院してから、英語の個人授業は元通り復活した。もう前期試験まで2週間しかない。

苦手の英語を少しでも克服するため、聡も最大限に協力していたのだ。

「何？」

いいよどんだ将に、聡は何気なく訊き返しつつ、将がさっき大量にもらっていたチョコレートについて弁解するのだろうと予想していた。

もちろん、聡に目くじらを立てるつもりはない。

連続ドラマに出るような俳優の将だから、下級生にチョコレートをもらうのはあたりまえだからだ。

「今日……、みな子……いや、星野さんとは、単なるクラスメートに戻ることにしたから」

一言一言、区切るようにして将ははっきりと宣言した。

「いや……もともと単なる友達なんだけど……、アキラのカモフラージュも、もういいって言っといた」

さらに付け加える将の口調に……未練の片鱗を探してしまう自分に、聡はハッとする。

まだ嫉妬している自分の醜さに、聡はそれを覆い隠すべく、とりあえず冗談を投げかけてみる。

「いいのぉ？」

「うん……いいんだ。やっぱり嘘でもアキラを裏切れないよ」

聡の返事が冗談だなんて、将は思いもしないらしい。いたって真面目に届く電話の中の将の声に、聡は胸がいっぱいになる。

「それで、星野さんは？」

しばらくの沈黙ののちに、将はただ、わかってくれたよ、と答えた。答えるまでと……答えたあとの沈黙に、聡はすべての状況が透けて見えるような気がした。

人一倍、柔らかい心を持っている将は、みな子を傷つけてしまった自覚に、自らも傷ついているのだろう……。

「紙袋はあれで足りた？」

――話題を変えるべく聡は、せいいっぱいおどけて質問を投げてみ

た。

「いっぱい、もらったんでしょ？チョコ」

「……うん」

あいかわらず重い将の口調にかまわず、聡は続けてみる。

個人授業のあとは……いつもならできるだけ無駄話をせずに、電話を切るべきところだが、将を少しでも元気付けたいと、今日は思ったのだ。

「いくつもらったの？」

「……学校では１０個かな。でも事務所にも結構届くだろうって、武藤さんが言ってた」

「芸能人だったら、たくさんもらうよね。……そういうチョコって、どうするの？」

「そのまま引き取る業者がいるんだって」

「ふーん。……そう」

話題はそこで途切れて、聡は次の話題を探すべきか、それとも電話を切るべきか迷った。

まだ回線をつなげておきたい……今日の聡は、なんとなくそう思って……息をひそめながらそのまま切らずに……お腹をなでながら黙っていた。

もう11時になるせいか、『ひなた』はとっくに寝たらしい。彼女も静かにしている。

「だけどさ」

切り出したのは将のほうだった。

「俺が一番ほしいのは……アキラのチョコなんだけど」

そのとき二人とも去年の同じ記憶をたぐっていた。山梨から帰ってきた聡が将に渡した手づくりのチョコ。そして観覧車でのキス。

去年……急な山梨の転勤は寂しかったけど、あの期間は教師と生徒の関係から解放されていた。

それになにより、芸能人ではない将は、自由だった。

チョコレートより甘い思い出に聡は、ほんのりと当時の幸せな気分を取り出して浸ってみる。

「そんなこといったって、今年は無理でしょ」

それに対して、二人の関係が露見するのを恐れなくてはいけない、今。

手づくりのチョコレートを渡すわけにはいかない。

「なんとかならないかなあ……」

将は背もたれに寄りかかりながら呟いた。

難しいとなるとよけいに、それがかけがえのないものに思えてくる。ひいては合格するための、特効薬のようにまで思えてくる。……どうしても聡のチョコがほしい将は頭をめぐらせた。

「そうだ」

寝不足で回転が悪い頭ながら、妙案を思いついた将ははずんだ声をあげた。

日曜日の午前中、聡はひさしぶりに商店街に来ていた。

以前アルバイトしていた弁当屋がある……つまり将が前に一人で住んでいたマンションがある商店街。

バイトしていた頃は自転車で通っていたが、妊娠８ヶ月の今の聡にそれは無理だからバスを使う。

聡は、まっすぐに将のマンションのエントランスに足を踏み入れた。

そして地味な……学校名の入った封筒を取り出す。

中には、昨日１日がかりでつくったチョコレートが入っていた。

金曜日の夜、将は提案したのだ。

「俺の……前に住んでたマンションの郵便受けにチョコ入れといてよ」

「郵便受け？」

「うん……俺、月1くらいで郵便物チェックしにいってるんだ。学校の書類みたいに地味な封筒にいれておけば、自然だろ」

アイデアを思いついた将の得意そうな顔が透けて見えるようだった。

ゴディバよりも、ピエール・マルコリーニよりも、聡がつくってくれたチョコがいい。

聡のチョコを食べながら、英語を頑張ったらきっとご利益がある……。

むりやりこじつけながらも熱心に乞う将のために、聡は去年つくったやり方を思い出しながらチョコレートをつくったのだ。

郵便受けに入るよう、薄めにラッピングしたチョコは学校の封筒に入れてある。

部屋番号を確かめながら、聡はそれを用心深く将の部屋の郵便受けに落とした。

将によると、日曜日の今日は岸田教授の家で論述の個人指導を受けて、そのあと、ここに寄って郵便物を拾って帰るという。

ひとしきり、自分のアイデアに満足しながらも、

「……だけど、ほんとは、二人で逢いたいな」

最後に将はぽつりと言った。

急にこみあげてくるせつなさを堪えるように聡は

「毎日、学校で顔を見てるじゃない」

とことさら明るい声を出す。

「違うよ。アキラと二人っきりになりたいんだ」

電話から響く将の声は、聡の心に沁みこんで……かわりに温かい何かが体の奥から遡ってくる。

「早く、二人で気兼ねなく逢えるようになりたいな……」

後期試験はちょうど1ヵ月後だ。つまりもう50日も経たない内に、二人の運命は決まるのだ。

激しい泳ぎを休んで、ぽっかり浮かんでつぶやくような将の声。

今、聡には将の気持ちがそのまま入り込んできた。まるで心の一部を共有しているように、鮮明に。

「うん……そうだね」

目の奥に達した何かに押し出されるように……ふいに湧き出てきた

熱い物を聡はこぼさないようにしきりに瞬きをするしかなかった。

366◆遠い春　6

チョコを将のマンションの郵便受けに入れた聡は、久しぶりに商店街を歩いてみる。

今日もよく晴れて、温かい陽射しが雑居ビルの間から降り注ぐ。

風はまだ冷たいけれど、季節は確実に春に向かっている……聡は目を細めて青い空を仰ぐ。

まだ昼下がりといえる、午後も早い時間。

聡は、かつてバイトしていた弁当屋に足を向けた。

……この時間だったら、たぶん主人は休憩を取っているはず。

膨らんだお腹を……わが子のように接してくれた弁当屋夫妻に見せるべきではないと聡は考えていたのだが、大晦日におかみさんにバレてしまった。

きっと、心配しているだろう……近くに来たついでに、おかみさんには元気な顔を見せておこう、と思いついたのだ。

将のマンションから弁当屋は近い。

そこで……聡が見たのは、弁当屋の前に止まる2台のトラックだった。

運送会社の名前が側面に大きくペイントされている。

弁当屋のシャッターは開いていたが、そこから制服姿の男達がせわしなく、ダンボールや厨房機器を積み込んでいる。

聡は思わず自分の姿を忘れて近くに駆け寄った。

おかみさんも、主人も、引越しの業者にまじって荷物の積み込みを手伝っていた。

「……聡！どうしたんだ、そのお腹！」

おかみさんと同時に聡に気付いた主人は、重いダンボールを抱えたまま、眼を見開いた。

「あ……」

とまどう聡に、おかみさんは

「いろいろ事情があるんだよ。あとで話すからっ」

と主人を荷物運びに追い払うと、親しげに近寄ってきた。

「よかった、あきらちゃん。出発する前に会えて」

「ど……どうしたんですか……これ」

それで、聡はようやくこの状況についての問いを発することができた。

「急にね、再開発が決まってね」

「再開発？」

おかみさんは諦めたように微笑むと頷く。

「大きなショッピングセンターだか、なんだかができるんだって。それで立ち退き」

「そんな……」

聡は絶句した。

次に、この街並みを見回す。

きれいとか、そんなんじゃないけれど。特に何にもないけれど。

駅前の、なんだかゴミゴミした商店街が……聡は好きだった。

活気があって、懐かしい雰囲気が漂っていた。

将と出逢ったのもこの弁当屋だった。

そんな思い出の場所が、なくなってしまう……。

「それで、おかみさんたちは、どこに？」

ハッとした聡は、慌てて重要なことを訊く。

「あたしの里に引っ込もうとおもって。愛媛の、宇和島に」

愛媛、宇和島……あまりに急なことで聡はそれがすごく遠いということしか思い浮かべられない。

「ほら、前にミカンあげたでしょ。……お金もたくさんもらったし、ミカン畑の手伝いしながら、ゆっくり暮らすわ」

リアス式海岸の穏やかな海へ続くなだらかな段々畑に、ミカンが実る風景。

ようやく、中学の教科書か何かで見た風景を、聡は頭の中に展開することができたが、やはり遠いことにはかわりない。

「ちょっと早いけど、リタイヤ」

言葉を失う聡に、おかみさんはそういって微笑んだ。

それでも……血色のいい、ツヤツヤとした頬がどことなく寂しげだ。

そのとき、荷物を全部積み終わったのか、主人がやってきた。

主人は、睨むように目を見開いて、聡を見据えた。

聡は思わず後じさりたくなる。主人は「今、何ヶ月だ」と訊いた。

「……8ヶ月です」

答えつつも聡は主人の顔を見続けることができずに視線をおろす。

「相手は……」と質問を続けようとする主人におかみさんが割って入る。

「あんた、それはあたしがあとから教えるから」

主人はフン、と不服そうに質問を中断しつつ、

「……それで、ここしばらく顔を見せなかったんだな」

と一人うなづいた。

聡は、何を言えばいいのか、どんな顔をするべきなのか、わからずに、ただ俯いて

「すいません」

と謝るしかない。

そのとき、運送会社のスタッフが出発を告げに来た。

厨房機器はしかるべき業者へ、家財を積んだトラックは愛媛へと出発するらしい。

スタッフに一礼をして、トラックが出発するのを見届けた主人は……ふいに聡に向き直ると唐突に問いを続ける。

「……それで、後悔はしていないんだな」

「あんた……」

おかみさんがハラハラとして二人を見比べる。

聡は顔をあげて主人の顔を見た。髪にも眉毛にも……前より白いものが増えている。

怒っているような口調だが、深い皺に縁取られた瞳は、愛情に満ち溢れていた。

――心配してくれている。

聡の中に、忘れていたものがこみ上げてくる。

こみ上げてきたものは、聡に覚悟を促した。……再度の覚悟を。

聡は唾と一緒に覚悟を腹へと落しこんだ。

――後悔しない。まだ何があるかわからないけれど、絶対に。

「……はい」

深く頷く。

「幸せになれるんだな」

今度こそ、聡は涙がたまりそうになってしまう。

だけど、聡はわかっている。

この先どうなろうとも、自分の選んだ道を後悔しないということは……幸せになるべく、たゆまぬ努力を重ねていくということだと。

それが将と一緒になれても、なれなかったとしても。

声にすることはできなかったが、聡は主人の瞳を見据えたまま、大きく頷いた。

主人はそんな聡を見届けると、何度も、何度も……自らを納得させるように頷いた。

「子供が生まれたら、家族で宇和島に遊びに来い。きっとだぞ」

最後に主人はそういって聡の肩に手を置いた。

必死で耐えていた涙が、ここで崩れるようにボロボロとこぼれてしまった……。

そんな3人を。

商店街の中で、さりげなく見張っている男がいることに、誰も気付いていなかった。

やがて弁当屋夫妻が、聡と別れて駅へ向かったのを見届けて……男は電話をかけた。

「○○夫妻、滞りなく旅立ったようです」

その電話を受けていたのは、将の父、康三の秘書の毛利だった。

毛利は、労いの言葉を部下にかけると、電話を切った。

聡がバイトしていたこの弁当屋で、将が常連客だったことを、当然毛利は知っていた。

この夫妻が聡を娘のように可愛がっていたことも把握していた。

二人の接点であるこの弁当屋だから……おそらく主人夫妻は、二人の秘密を知っているだろうと毛利は予測していたのだ。

つまり引越しも……それを促す開発計画も……すべては、秘密が漏れることを恐れた毛利が講じた先手だったのだ……。

367◆遠い春　7

「それで、昨日の模試はどうだった？」

岸田は論文の答案を受け取りながら、笑顔で将に訊いた。

将はいつものように岸田助教授の家に、論文の個人指導を受けにきていた。

最近、将は日曜日に岸田の自宅を訪ねて指導を受けることになっている。

さすがに受験が差し迫った今の時期である。

岸田が試験問題の作成に関わっていないとはいえ、官房長官の息子である将が、受験する東大の研究室を訪れるのは、痛くもない腹を探られるだろうということで自粛しているのだ。

答えをある程度予測している岸田の柔らかい笑顔に、将も顔を少し傾けて苦笑を返す。

……昨日の土曜日は、とある予備校で、最後の東大模試が行われた。

まだ結果は出ていないが、将にはそれがさんざんな出来だったことを自覚している。

やはり、我が国最高学府の試験は並大抵ではないことを……将は思い知らされたのだ。

「だろうな」

岸田はそういって軽く笑うと将の答案に目を落とした。

「今、どれくらい勉強してるの？　睡眠は何時間」

「起きてるときは、ずっと勉強してます。睡眠は……、3時間くらい……、かな」

それを聞いた岸田は答案から目をそらさないまま、ハハハと笑った。

「今ごろ、睡眠3時間。手遅れだね。……合格する実力があるやつは、体調を整える時期だよ」

前期試験までもう2週間を切った今、岸田がそういうのももっともである。

しかし、出遅れている将はそうもいかないのだ。

まだまだ網羅しなくてはならない知識は、将の前に壁となって立ちはだかるかのごとくである。

しかも……昨日の模試では、いつもは得意な国語や数学も、思うように出来なかった。

ここにきて、将は焦り始めている。

もし。東大に合格できなかったら。

考えないようにしていた、望まないほうの未来が、嫌でも将の前に迫ってくる。

聡とはおそらく引き離されてしまうだろう。

どんな風に、引き離されるのか……。

おののく将の脳裏に、自分が殺したヤクザの相棒の死に様が浮かぶ。

実際に見たわけではないが……将の脳裏には港に浮かんだ死体がくっきりと再現されている。

――まさか。

どくっ。

将の心臓が大きく収縮した。

父や……毛利は……、聡をその子供ごと殺してしまうのではないか。

事故死に見せかけることなど、きっとわけはない。

将は、体中の戦慄を抑えるべく、奥歯を噛み締めた。

――いっそ、そうなる前に、二人で逃げてしまえば。

東大の試験も何もかも、放棄して。いますぐ、聡を連れてどこか遠

くへ……。

なぜか夜汽車が思い浮かぶ。

寒い雪原を走る夜汽車は二人を、安住の地へ……地の果てへ運ぶのだ。

そんな夢想は、聡の叫び声でかき消される。

『コソコソ生きる将なんて、見たくない！』

『将の才能を……、将の未来をあたしのせいで台無しにするなんて、あたしが嫌なの』

――俺の才能なんて。

将は聡に答えてみる。

たいしたことないんだ。たぶん、いたってフツーなんだ……。

聡がいなけりゃ、きっとなんにも……できないんだ。

言い訳する将を、心の中の聡は哀しげな瞳で見つめた。

その瞳は、将に新たなる不安を呼び起こす。

引き裂かれるのではなく、聡が将から離れていってしまうのではないか……。

「ダメだね」

岸田の声に将は我に返った。……一瞬、夢の中にいたようだ。

岸田は、答案を突き出すようにして将に戻した。

「まったくダメ。論法が破綻だらけだ。寝不足なんじゃないの」

将は黙って答案を受け取った。

何がそんなにダメなのか、読み返そうとするが、それも頭にまるで入ってこない。

聡が離れていく暗黒の未来に、脳が占拠されてしまったように。

将のそんなようすを、岸田はめざとく見破ったらしい。

手を伸ばして、答案を奪い取ると、

「休憩」

とニッコリ笑った。

結局、その日の論文はふるわないまま、日が傾いてきて、将は岸田助教授の部屋を後にした。

マンションのエレベーターを降りて、ため息をついたとき。

「お兄ちゃん」

横から、ひょこっと少女が顔を出した。

岸田の娘の香奈だ。

今日は、友達の家で宿題をするとかで、部屋にいなかったはずだ。

「終わったの？」

寒いところにいたのか、香奈は頬をリンゴのように染めていた。

タオル地のウサギのマスコットをつけた手提げカバンを持っているが……髪の毛を二つに結んで、耳にホワホワのマッフルを付けている姿は、香奈のほうこそウサギのようだった。

「うん」

うかない顔を隠しながら答えつつ……将は、そのリンゴのような頬に聡の面影を求めてしまう。

こんな子供にまで。将は心の片隅で自分を自嘲する。

そのまま『じゃあね』と立ち去るかと思いきや……香奈は、その場

から動かない。

将の顔を見たかと思うと、その視線を素早く下に下ろしたりして落ち着かない様子だった。

仕方なく将のほうから

「じゃあ……」と言おうとしたとき、香奈の「あのさ！」という声が重なった。

思い切るあまり、怒鳴るような声にふさわしく、顔もこわばっている。

香奈は、持っていた手提げの中からピンク色の包みを取り出すと、ぎこちなく将に差し出した。

あきらかにバレンタインデーのチョコだった。

その、ぎくしゃくした様があまりにも可笑しくて、将はふっと心和んだ。

「くれるの？」

ぶん、と音がしそうな勢いで香奈は首を縦に振った。

受け取ったピンク色の包みは、冷蔵庫に入っていたように冷たくて……それで将は悟った。

両親の前でチョコを渡すのが恥かしくて、香奈は家の外でずっと待っていたのだろう。

「ありがと」

「義理チョコだもん」

自分だけに注がれる、いつになく優しい将の目に焦ったのか、香奈は慌てて付け加えた。

そのくせ……家に帰ろうとせず、将と一緒にマンションのエントランスを出ようとする。

ガラス戸を出たとたん、西日が二人を照らした。

「帰らなくていいの？」

将は心配して傍らの香奈を見た。

「コンビ、いくからいいの」

チョコを渡してしまって、ホッとしたのか、香奈の声ははずんでいる。

しかしこのご時世だ。

夕方にさしかかるこの時間帯に、小学校5年の女の子をコンビニから独りで帰すのもマズイだろうと将は思う。

一般的に見て、香奈はかなりかわいい女の子だから。

……結局、香奈に付き合って一緒にコンビニへ行き、再びマンショ

ンのエントランスまで送り届けるハメになってしまった。

しきりに「別にいいのに」などと呟く香奈だったが、その顔はあきらかに輝いている。

こんな風に夕日の中を将と歩けるとは、予想もしていなかったのだ。

「ね、お兄ちゃん」

夕焼けにほんのりピンク色に染まるマンションが見えてきて、ふいに香奈は問いを投げてきた。

「お兄ちゃん、彼女いる？」

こんな風に見上げる顔も……聡に似ている。

聡を思うあまりの錯覚ではない、と将は香奈の顔を夕陽の中で確認する。

黒目がちの瞳と、それを覆う長い睫。その動き方が、聡にそっくりなのだ。

……香奈の中の聡を見つけたとして、どうするんだ。

聡は、現実に自分のそばにいるんだ……今はまだ。今はまだ、ちゃんと手の届くところにいる。

「……うん。いるよ」

そのとき、将は自分に確認するように答えた。

香奈の黒目がちの瞳に、一瞬落胆の色がよぎる。

だが、すぐに子供らしい無邪気さで問いを続ける。

……本当はそれはすでに香奈の演技だったのだけど。

小5にもなればそれくらいの演技など、呼吸をするように無意識にできるのだ。

「彼女のこと、どれくらい好き？」

「どれくらい……」

将は視線をふいに沈み行く夕陽に投げた。

自分にとって太陽の聡。そのまなざしは陽だまりのように自分を見守り、力づけてくれる。

聡ともし……別れるようなことになれば。引き裂かれるようなことになれば。

陽だまりを失って、自分はどうなってしまうだろう……。

「いなくなったら、死んでしまうくらい好き」

言ってしまって将はハッとした。

子供の質問に何てことを。

それに、死ぬ、なんて。

自らの口をついてでた不吉な言葉にあわてて香奈を振り返る。

立ち止まった香奈は、これ以上ないほど心配そうな瞳で将を見上げていた。

「いなくなったら……死ぬの？」

そんな瞳も、聡に似ている。将を気にかけ、心配する温かいまなざし。

きっと、聡も……そんな言葉を聞いたら、同じような瞳で将を見つめて心配するに違いなかった。

だから……将は無理に口角をあげて、微笑をつくる。

「大丈夫。絶対にいなくならないから、死なないよ」

気がつくとマンションの前までたどりついていた。

ガラスのドアは夕陽に染まる雲を反射してきれいな桃色になっていた。

「……チョコ、ありがとう。じゃあね」

将は香奈に軽く片手をあげると、踵を返した。

「べんきょう！」

もう行ってしまう。香奈は、将を呼び止めるべく、反射的に声を張り上げる。

振り返った将に

「がんばってね」

……そんな、ありきたりのことしかいえない自分が……香奈は悲しかった。

茜色の夕陽を受けながら去っていく将の後姿を、見送って立ち尽くすしかできない。

そのときの言葉と共に……その寂しげな後姿は、香奈の心に焼き付いて、後年も消えることはなかった。

３６８◆遠い春　８

地球温暖化は確実に進行しているのだろうか。

小さなテラスで洗濯を干す聡を、２月最後の土曜日にしては強い陽射しが包む。

気温も今日は１５度近くまで上がるらしい。

天気がいいのは昨日からわかっていたから、今日がチャンスとばかりに聡はシーツやベッドカバーまでも洗った。

妊娠８ヶ月のお腹は、洗濯ものを取ろうとかがむたびに動きを阻む。

それでも聡は、１週間分たまった家事を、いつもより丁寧にこなそうと動いた。

動いていないと不安にとらわれてしまいそうだから。

……昨日から２日かけて、東大の前期試験が行われているのだ。

おとついまで休まずにずっと学校に来ていた将だが、その顔色はあまりよくなかった。

目の下には黒々とクマが浮き出ていた。

連日睡眠を極限まで切り詰めているらしいから、体調もよくないの

だろう、ということは予想がついた。

聡が心配したのはその表情である。

バレンタインの前までは明るかった表情が、日を追って暗くなっていったのが、聡には何より心配だった。

おそらく、最後に個人的に受けた模試があまり芳しくなかったのだろう……聡には予想できた。

担任教師として結果を聞いてみたのだが、将はそれを頑なに教えてくれなかったからだ。

いつもだったら、あまりよくなくても

「まだまだこれから」

と明るくふるまっていた将だったが、今回ばかりは

「睡眠不足かもな」

と初めて言い訳を口にしたのだ。

そのくせ……教室では、教壇に立つ聡を、これ以上ないほどせつない瞳で見つめる。

自習のときも、他の生徒の目をぬすむように、気がつくと聡を見ていた。

聡は気付かないふりをしながら、将の置かれた立場と心境を理解し

ていた。

将は、いま、とても不安なのだ。

運命の……二人の運命をわける試験を前に……自分の力だけで運命が決まってしまうそんな局面を前に、焦っているのだ。

万が一、受験に失敗したら。

二人はきっと、引き裂かれてしまうだろう。

すがるような、必死で聡の像を焼き付けようとするようなそんな視線は、将の不安の現れだった。

今週に入っても、将の目の下のクマはあいかわらずだったので、さすがに聡は英語の個人授業のときに

「将、そろそろきちんと睡眠を取ったほうがいいと思うよ」

と助言した。だが、将は

「眠れないんだ」

と苦しげに告白した。さらに

「……アキラ。もしも。……もしも、ダメだったらどうしようか」

と初めて弱音を吐いたのだ。

聡は将の苦しげな声に、自らも胸が苦しくなるのをこらえながら

「大丈夫よ」

と答えるしかない。

「将はすごく頑張ったじゃない」

こんな、子供に言い聞かせるような言葉で、将の苦しさが減らせるはずがないとわかっていながら、聡は偽善的な言葉をならべるしかない。

「頑張ったけど……ダメかもしれない」

絞りだすような将の声音は続く。

「もしダメだったら……アキラ、俺と逃げてくれない？」

将は苦しげな中から、明るい声を急に装った。

冗談めかした体裁をとりながら、実はそれは将の本音だということは、聡にもわかった。

逃げることを考えるほど、将はつらいのだ。

聡の心は将のつらさに共鳴して……痛くなる。

すぐそばにいれば……将を、抱きしめてやりたい。

何の解決にもならないかもしれないけれど、疲れて苦しい将が癒しを欲していることだけはわかる。

もうすぐ卒業。

卒業したら……教師と生徒として日常的に会うこともできなくなる。

もしも将が受験に失敗したら、そのまま会えなくなってしまうかもしれないのだ……。

将と離れ離れになる現実が迫りくる圧迫感と。

そして運命の鍵を将ひとりに背負わせてしまった済まなさ。

それらは……心の片隅に忘れていた考えを、聡の心の真ん中に押し出した。

いつも……聡のために、将はつらい目にあっている、という考え。

自分さえ妊娠しなければ。いや、自分さえいなければ。

将はこのように無理をする必要もなかったのかもしれない……。

将は『聡がいなければ今の俺はない』とたびたび言うけれど。

聡と出会っていなかったら。

星野みな子のような、きっと自分に似合いのかわいい女の子と、それなりの青春を取り戻していたに違いない……。

将のつらさは自分のせい。

そんな考えに囚われた心は……涙を押し出した。

「うん。……いいよ。逃げよう」

今の聡にできることは、せめて将の心の重圧を軽くしてあげることくらいだった。

涙をぬぐいながら答えつつ、そんなことができるはずがないと……聡はわかっている。

だけど、今の将が少しでも楽になるのなら。

「本当に、いいの？」

将は少し驚いたようだ。

今までのことを考えれば当然だろう。将の未来を台無しにするようなことを、冗談でも言わなかった聡だから。

「うん。いいよ」

聡は鼻をすすりながら答えた。

そのとき、『ひなた』がお腹の中で勢いよく動いた。

まるで反論するように。聡のお腹の壁にキックを仕掛けたかのようだった。

聡はハッとして顔をあげた。

――ここまで来て、何を言ってる。

……とにかく、二人は出会ってしまったのだ。

子供だってもう8ヶ月なのだ。

二人が幸せになる確率をもぎとるには、後戻りや逃げはできない。

あわてて聡は付け加えた。

「だけど……まだダメって決まったわけじゃないでしょ。……前期のあとには後期だってあるんだし」

それに二人がたとえ別れるにしても。

突っ走ったものは……できるだけ完走するほうが、将のためなのだ。

頑張りどきの今、逃げ道が本道になってはいけない。

「とにかく、最後だから頑張って。……ダメだったらどうするかは、終わってから考えよ」

聡の励ましに、将は重い口調ながら

「うん」

と答えた。

卒業式は来週の金曜日。

将に残された学校生活はあと1週間だが、将は今日の試験が終わるなり、再び北海道ロケに入るという。

8話までは貯め撮りしていたけれど、残りの収録があるという。

卒業式のために東京に一度帰ってきて、後期試験までずっと北海道という強硬スケジュールになるらしい。

本当は卒業式は欠席という意見も出たらしいが、将自身が強く出席をのぞんだため、東京にとんぼ返りすることになったのだ。

洗濯が終わったら、掃除。窓をピカピカに磨く。

「ほら。ぴかぴかの窓はきれいでしょ。ひなたちゃん」

前に出たお腹は窓みがきには邪魔だったが、聡はお腹の子供に話し掛けながら、腕を左右に動かす。

もしも。将が受験に失敗したら……最悪、卒業式が二人の最後、ということになってしまうかもしれない。

聡はできるだけ、そこに考えがいかないように懸命に動いた。

お腹の「ひなた」もごぼごぼとリズミカルに動く。まるで一緒に働いているようだ。

窓や流し台まできれいに磨きこんでしまった聡は、遅い昼食を挟んで今度は、大量に野菜を買い込み、煮込み料理を作り始めた。

「おいしいポトフをつくろうね」

だが、無理に歌おうとする鼻歌が何度も中断してしまう。

そしてそのたびに時計と……まな板の傍らに置いた携帯に視線が行ってしまう。

もうすぐ前期最後の教科である、英語の試験も終わるはず……。

どうしてもそっちに意識がいってしまうのだ。

あの、弱音を吐いた夜以来、少しは眠れるようになったという将。

だが、最高の難問が繰り出される東大の前期試験に、万全の体制で立ち向かえているだろうか。

センター試験の奇跡は、果たしてもう一度起こりうるのだろうか……。

「いたっ」

ついに包丁が滑って……聡は反射的に親指を見た。

血の気のない、皮膚の切れ目に、徐々に血が滲み出てくる。

傷はさして深くなさそうだったが、聡はビーズのようにふくれた血

の珠を凝視して動けなくなった。

――いつか、将の家でこんなことがあった。

あのとき、将は……戯れに指に口づけしようとした。

そのあと……初めて深い口づけをして抱き合った……。

押し寄せてくるせつない思い出が、聡を心ごと飲み込んでいく。

――いやだ。

――将と、離れたくない。絶対に。

聡はその場にしゃがみこんだ。

そのとき。

携帯が鳴った。将だ。

369◆卒業　1

聡は重いお腹を忘れて立ち上がるとひったくるように携帯を取った。

こちらから呼ぶ前に、

「アキラ」

と待ち焦がれた声。

「将……」

胸がいっぱいで次の言葉が出てこない聡の耳に

「終わったよ」

と将の声がやっと届いた。

試験の出来がどうだったのか……直接訊くことを逡巡した聡は……

携帯を耳に押し付けるようにして将の声音を聞き取ろうとする。

その声音は、重荷を下ろしたように、安らいでいるようだった。

それだけでは聡の欲しい答えには物足りない。

……だけどもし、あまり出来がよくなかったら、言い出しにくいだろう……気遣いと焦りが聡の中を一周したとき、将は自分から宣言した。

「やれることは、やった」

それは、真に落ち着いた口調だった。

また、その低い声は、いっそう大人びた気がした。

センターのときのように、ツキのようなものは、今回はなかったらしいけれど。

だが自分の持てる力はすべて出し尽くしたというような、さばさばしたものが将の声音からは読み取れた。

「もし……ダメでも、後期があるから」

ダメという言葉を発しながらも、将の笑顔が見えるようで、聡は不安ながらもややホッとした。

「うん……。将、とりあえず、お疲れ様」

聡は心から将をねぎらいたかった。電話でしかそれを示せないのがもどかしい。

「アキラに逢いたいな」

それは聡も同じだ。だが、そんな大胆なことを声にして大丈夫なのだろうか。聡はふと心配になる。

「……今、どこにいるの」

「車の中。運転は西嶋さんだから大丈夫」

それで聡は納得した。

巌の運転手だった西嶋さんは、将と聡のことを知っている数少ない側近のうちの一人だ。

巌に忠誠を誓っていただけあり、口の固さでは信頼できるのだ。

「そう……。将たしか、今日から北海道ロケに入るんだったよね」

前期試験終了と同時に、最終回までの収録が始まるのだ。

それは後期試験の直前にようやくクランクアップする予定だ。

「うん。アキラに会えるのは卒業式までおあずけ」

冗談めかしながらも、若干寂しそうな将の声に聡の胸はきゅんと音をたてそうになる。

「卒業式は……出席するんだよね」

「うん。絶対に」

力強く頷いた後、将はさらに続ける。

「……もし、クリスマスのときみたいに、飛行機が飛ばなかったら。……アキラ。卒業証書はアキラが預かって」

クリスマス。あの大雪のクリスマスの夜。二人だけの雪道が聡の脳裏にいっぱいに広がる。

あれから、たった2ヶ月しか経っていないなんて……嘘のようだ。

聡は携帯を耳に押し当てたまま、部屋の中を移動すると、飾りだなの引き出しを開けた。

大事な宝物だけがしまってある引き出しには……将がくれたエンゲージリングと、それが入っていた赤ちゃんの靴下がしまってある。

聡はリングケースから指輪を取り出すと手の上に乗せた。

ピンクゴールドにダイヤをあしらった指輪は、窓から差し込んでくる午後の光を映して、夕陽のような色に一瞬煌いた。

あのとき。とてつもなく寒かったけれど……二人には温かい思い出。

「それで、アキラから俺に手渡してよ。……それで、俺達、ようやく先生と生徒じゃなくなるんだ」

飛行機がきちんと飛んでも、卒業証書は校長からすべての生徒に手渡されるわけではない。

壇上にあがるのは代表一名のみで……あとは担任教師から渡されることになる。

聡は……あと1週間で、自ら将に手渡す卒業証書のことを思った。

二人の前に横たわっていた呪縛の一つが、そのとき解ける。

二人が教師と生徒でなくなり、ただの男と女になる。

手の中のエンゲージリングを填める権利が……ようやく聡に許されるのだ。

待ち焦がれたときが、やっと、訪れる。

しかし聡は、リングを傍らに置くと、そっと目を閉じた。そして右手をお腹へとずらす。

……もしも、お腹に「ひなた」がいなければ。

卒業さえすれば、二人は自由になれたのだろうか……。

心を通り過ぎたそんな考えに、聡は思わず立ち止まりそうになる……しかし、すぐにそんな仮定を仕方がないと目を開けた。

これは……こうなるのは運命だったのだ。

この先……どうなるか。一寸先もわからない状態だけれど……、将を信じて、明るい未来の到来を信じるしかないのだ。

「アキラ。1ヶ月先には……きっと二人、いっしょになってるよ」

将も、同じ気持ちなのだ。

高い波涛の向こうにきらめいているはずの未来を信じて、今をせいいっぱい頑張るしかないのだ……。

聡は、もう一度、リングを手に取るとそれを握り締める。

そして、こみあげてきた熱いものを飲み下すように、頷いた。

「わー、センセイかわいー」

制服の胸に生花を付けたチャミが、校門の前でタクシーを降りた聡をめざとく見つけて歓声をあげた。

「女学生さんみたーい」

チャミやカリナと一緒に、女子生徒が歓声をあげながら駆け寄ってくる。

皆、卒業生と在校生を区別すべく、胸に生花を付けている。

3月5日、金曜日。荒江高校の卒業式が執り行われる今朝は、うららかに晴れ渡っていた。

担任教師として最初で……もしかしたら最後になるかもしれない卒業式。

その礼装として聡は、実家から送ってもらった着物に、お腹を少しでも目立たなくするべく袴を身につけることにしたのだ。

髪には袴と同色の幅の広いリボンをあしらったその姿は、カリナが言うとおり大正時代の女学生のようにも見える。

校門のところに立っている職員仲間の屈強教師らも（いつものジャージ姿ではなく、今日はさすがにスーツ姿だ）聡の姿を見ると、顔をゆるめる。

「まるで『はいからさんが通る』ですね」とか

「なんだかアキラ先生が卒業するみたいですねえ」

などと冷やかされる。

聡もこの3月31日付けで退職することになっている。

……実際は、3年2組を送り出した後、数日の残務処理ののち、有給休暇を消化することになっているから、今日は実質、聡の卒業式でもあるのだ。

屈強教師らが今日、見張っているのは生徒たちではない。

さっきから校門のまわりに、カメラを持った記者連中が待ち伏せしている……官房長官の息子にして人気若手俳優の将の卒業シーンを狙っているのだ。

その辺は校長も、学校の宣伝に結び付けたいらしく、式を邪魔しないという条件でテレビカメラと雑誌記者の取材を許可しているらしい。

待ち伏せしているカメラマンや記者は、学校が用意した『許可』と書かれた腕章を付けている。

その取材が……行き過ぎないように、教師らはいちおう校門に立っているのだ。

チャミやカリナは、まだ式も始まってないのに、

「センセー、写真一緒にとろー！」

と携帯を向け始めた。

ひとたび撮りはじめると、『あたしの携帯でも取ってぇ』と携帯とメンバーをとっかえひっかえしながら撮影が始まる。

そろそろ職員室に行かなくてはならない聡が、

『続きは、式のあとで、ね』

と言おうとした時、校門が騒がしくなった。

記者やカメラが一斉に走り寄っていく……将が到着したのだ。

370◆卒業　2

卒業式は概ね、つつがなく終了した。

卒業証書の入った筒を持った卒業生も、また送り出す側の在校生も、お互いに名残惜しいのか、なかなか帰ろうとはしない。

天気がいいのもあり、皆学校や門をバックに写真を撮りあったり、寄せ書きを書きあったり、果ては抱き合って泣いたり。

春霞に若干その青を薄めながらも、空はそんな彼らに温かな陽射しを降り注いでいる。

涙で崩れた化粧を直し、遅れて表に出た聡は、その視界に無意識に将を探す。

テレビカメラのおかげで将は簡単に見つかった。

どうやらレポーターから繰り出されるインタビューに笑顔で答えているらしい。

仲のいい井口やカイト、ユータなどもテレビカメラに向かってアピールしまくっている。

前期試験の前は悪かった顔色が、今日はすっかり治って輝くようだ。

ドラマの撮影のために、最低限の睡眠を確保しているからだろうか。

毎日交わすメールによれば、前期がだめだったときのために、後期

の勉強は続けているらしいけれど。

よく見ると、将のブレザーのボタンというボタンは、袖口まで全部なくなってしまっている。

どうやら後輩に全部とられてしまったらしい。

いつもは厳しい顔つきの屈強教師たちも、今日は相好を崩して、生徒たちに囲まれ、写真をとられている。

もっとも、ここ1年の間に、彼らが竹刀を持つことはかなり減ってきた。

学校全体で、生徒たちの将来や夢をバックアップし、それに即したことを学習させる方向になった結果……生徒たちは自主的にどんどんよくなっていったのだ。

この春からは、聡に代わって、女性の教師が何人か入るとも聞いた。皆、社会人経験者ばかり、生徒たちに具体的な未来像を教えてあげることができる能力を持った人ばかりだという。

「アキラ先生のおかげですよ」

ふいに多美先生が後ろから話し掛けてきた。

「ウチの学校は……力と金で生徒を抑えるだけでした」

力は屈強教師と竹刀。金はポイント制によるキャッシュバックのことだろう。

「いってみれば野獣を社会に野放しにしないよう……一定時間、檻に入れておくようなつもりで、教育にあたっていました。……ですが」

多美先生は遠い目で……それでも、鰓に縁取られた柔らかい瞳で、生徒たちと教師たちを眺めながら続けた。

「アキラ先生が、『学校のあとに待っている社会』、というのを教えてくれたおかげで……生徒たちも我々もずいぶん変わりました」

「そんな」

聡は恐縮した。聡はただ……必死だっただけだ。

赴任してきた当時に、将や兵藤から投げられた「勉強って何のためにするのか」という疑問。

それに答えるべく、思えば無茶なこともやったと思う。

「ありがとう。アキラ先生。そしてご苦労様。……幸せになってください」

多美先生は右手を差し出して、微笑んだ。

聡は胸がいっぱいになって、差し出された手を握り返す。

「あー、アキラ先生！」

女子生徒がめざとく聡を見つけて走り寄ってくる。

聡はあっという間に女子生徒に囲まれてしまった。

「センセぇ、センセぇ……、うちらのこと絶対忘れないでね」

「丈夫な赤ちゃん産んで」

チャミやカリナ、そして由紀子たちのひたむきな目を見ているうちに、聡はまた胸がいっぱいになってきてしまった。

……さっき、卒業式の最中も、感極まった聡は、思わず涙をこぼしてしまったのだが。

「みな子……、みな子。ときどきは東京に遊びに来てよね」

仲がよかったすみれが、泣きながら寄りかかってくる。

みな子は、関西でそこそこ有名な大学のひとつに合格していた。

東京を離れて、大阪に住むことは、みな子の中で動かせない未来となって横たわっている。

うん、うん、とすみれに頷きながらも……みな子は、涙をこぼすことはなかった。

少し離れたところでは、聡を囲んで、クラスの女子が泣いていた。

気がついてみれば、女子で泣いていないのは、みな子ぐらいなものだった。

すみれの向こうの視界に、生徒たちに囲まれて自らも涙をこぼす聡を意識しながら、みな子はぼんやりと思い出していた。

あのバレンタイン前の金曜日の夜。みな子は、父母から隠れるように、ベッドにもぐりこんで泣き明かしたのだ。

一番悲しい涙は、あの日……将と訣別した日に……流し尽くしてしまったのだ。

悲しみのあとには、ただただ乾いた虚しさだけが残ったはずなのに。

みな子はこんなときでも……知らず、将の姿を追ってしまう。

やっとレポーターから解放された将は、聡の姿を探した。

幅の広い瑠璃色のリボンをつけた聡を見つけた将は、女生徒に囲まれてまた泣いているらしい聡に思わず口元をゆるめる。

さっき。卒業式のさなか。

マスコミを意識しているせいか、いつもより長い式辞を述べる校長に、生徒たちは早くも退屈してもじもじし始めていた。

その中に混じった将は……ときおり、目の端で聡の姿を追っていた。

妊娠８ヶ月のお腹をうまく瑠璃色の袴で覆い、同色のリボンを髪に飾った聡は、将から見ても可愛らしかった。

しかし体育館の端、教師たちの列に座っている聡は、生徒を送り出す担任教師としての態度にふさわしく凛として背筋を伸ばしていた。

この式が終われば。

卒業証書をもらえば。

二人は先生と生徒の呪縛から解き放たれる。

――長かった。

退屈な式辞をやりすごす将は、聡と自分の……学校での日々を思い返してみる。

どの思い出も、まるで昨日のように鮮やかなまま、取り出すことが出来る。

思い出に浸る将は、この先も……二人の思い出は積み重なっていくものと固く信じている。

式は進み、いよいよ卒業証書の授与となった。

壇上で校長から直接授与されるのは各クラス代表1名のみであるが、おのおの担任教師に氏名を呼ばれ起立し、代表の授与を見守る。

まずは1組。そして聡のクラスである2組の番がやってきた。

聡はマイクの前に立つと壇上の校長と、生徒ら保護者らに一礼をした。

礼をするたびに、藤色の着物の袂と瑠璃色のリボンが揺れる……将は、息をするのも忘れて可憐な聡の姿を見入った。

他の教師らは、聡が名簿を手にしていないことに気付いて、少し顔を見合わせた。

しかし聡は、まっすぐに生徒らのほうを向くと、心持息を吸い込み、

「阿部豊くん」

と出席番号1番から名前を呼び始めた。

「ハイ！」

緊張した面持ちで立ち上がる阿部豊を、聡は優しいまなざしで見つめる。

「井口春樹くん」

「ハイ」

将は前のほうで立ち上がる井口の後姿に目をあげる。

井口は、中学の卒業式を欠席している。

そんな井口が、こうやって素直に名前を呼ばれて立ち上がるのは……将にとっても意外だった。

3年の間に、金髪だった髪は黒くなり、顔面中にあったピアスは、今は耳に残すのみとなっている。

そんな井口を、聡も温かい微笑みで見守る。井口は照れて少し下を向いたらしい。

聡は名簿もなしに、生徒一人一人のフルネームを……読むのではなく、呼びかけた。

そしてそのつど、一人一人の瞳に微笑みかけるようにして見つめた。

きっと、教え子の顔をこうやって記憶しているのだ。

やがて、生徒の名前を……一人一人に呼びかけるうちに、だんだん瞬きの回数が増えていくようだった。

おそらく涙をこらえているのだろう。将にはわかった。

最初で最後になる教え子たちの名前を呼びながら、聡はこみあげてくる万感の思いを堪えているのだ。

将は思わず、拳を握り締めた。

許されるのなら、傍で支えたい。

――がんばれ。がんばれ、アキラ。

そんな風に聡を見守っているのは、将だけではなかった。

聡の凛とした声が、こらえる涙でゆがみつつあるのを、生徒たちはみんなわかっていた。

それでも聡は涙を落とすまいと我慢しながら、生徒たちの名前を一人一人呼ぶ。

いよいよ将の番が来る。

「……鷹枝　将くん」

「はい」

将は立ち上がった。

聡と目が合った将は、とうとう聡の目から、耐えられずに涙がこぼれるのを見てしまった。

「がんばれ」

駆け寄ることができない分、将は声に出さないで唇でつぶやいた。

スワトウのハンカチで涙をぬぐいながら、聡がうなづいた気がした。

生徒たちは皆、めいめいに聡とのツーショット写真を撮影し、別れを惜しんでいた。

高性能のカメラを持ち込んだ松岡が、カメラマンを買って出ている。

「先生、このあと、ダンナさんについて外国に行っちゃうんですよね」

ツーショットを撮影した後、兵藤が名残惜しそうに口にする。

丸刈りから角刈りになった兵藤も……であった頃より少しがっしりして、大人の職人になりつつあることがわかる。

聡はといえば、声を出さずにただ頷くしかない。

「いつまで、とかわからないですよね」

生徒達を騙している心の痛みが、ズキリと来るが……頷くしかない。

真実を知ったら、この子達はどう思うのだろう。

聡は自分を取り巻く教え子達の顔を見回した。

ひょっとしたらこの子達のかけがえのない時間を、思い出を、汚してしまうのかもしれない……。

教え子との愛に密かに酔い、子供まで作ってしまった罪の重さに聡はおののく。

そんな聡の内心を知る由もなく、兵藤はひたむきな眼と共に続けた。

「僕、いつか店を出したら、先生を招待していいですか」

いつのまにか近くにいた井口がヒューッと口笛を鳴らす。

「……もちろん、飛行機のチケットも同封します。あ、もちろんダンナさんの分も」

「それ、すっげー出費くない？」

茶々を入れる井口に「キャッシュバックを使うよ」と兵藤は返す。

無遅刻無欠席、赤点もない兵藤は、月末に満額のキャッシュバックが振り込まれることが決まっているのだ。

「兵藤くん……」

聡が新たな涙を流しそうになったとき。

「俺もー！」

と兵藤の肩を抱くようにして割って入ったのは将だった。

「俺も、俺もケンちゃんのスシ食いたい。招待してよ」

将は兵藤に抱きつくようにしてふざけた。

兵藤はそれをかわすと、わざとらしくむっとした顔をつくる。

「鷹枝くんは、売れっ子俳優なんだから、自腹で来てよ」

「チェー」と一瞬ふくれっつらになった将は、すぐに兵藤と顔を見合わせて笑った。

「修行、がんばれよ」

「鷹枝くんこそ。ガッツリ有名人になって、うちの広告塔になってよ」

そこへ

「鷹枝くん、先生とのツーショット、撮影してあげるよ」

松岡がカメラをかざした。

思わず、将と聡は目をあわせる。

二人のことは、もちろんみんな知らないはずだ。正確に言えば、2年のとき以来、別れたと思っているはずだ。

単に、先生とその教え子の記念写真として言われているにすぎない。

そうわかっているのに、聡の、まだ乾ききれていない濡れた睫は、おびえたように少し震えた。

将は目で『大丈夫』と聡に語りかけながら

「じゃ、アキラセンセ……」

ぎこちなく誘う。

そしてもう一度聡の袴姿を、下から上まで眺めて……眩しげに目を細めた。

「いいですかあ……。はい、1たす1はぁ？」

何も知らない松岡がおどけて音頭を取る。

カシャッ。

デジカメ内臓の、つくりもののシャッター音が、青い空に響いた。

やや緊張した面持ちの笑顔でおさまった二人の写真。

ボタンが全部とれたブレザー姿の将と、袴姿にややうるんだ瞳の聡。

……これが、二人で撮影した生涯最後の写真になるとは……まだ将も聡も知らない。

371◆卒業　3

「せっかくだから、みんなでもう1回撮影しようぜ」

二人の写真を撮りおわった将は、聡のまわりに集まっていたクラスメートにことさら明るく呼びかけた。

ちなみに整列してのクラス写真は、先ほど、式が始まる前に撮影している。

これは、あとで配布される卒業アルバムに掲載されることになっている。

だが、聡を囲んでもう一度、今度は、みんな好きなポーズと笑顔で写真に収まるのも悪くない、と皆賛成した。

そうと決まると皆わいわいと、自分の位置を主張し出す。

「男子パターンと女子パターンでわけようよ」

「何回か撮ったらいいよ」

「先生は椅子に座ってもらおうよ。お腹大きいんだし」

などと意見が飛び交う中、将は小さな異変に気付いた。

みな子がいない。

将はあたりを見回した。

だが……みな子のスラリとした姿は、どこにもいなかった。

日頃、みな子と仲のいいすみれも、今は真田由紀子と一緒にいる。

将はさりげなくすみれの傍に行き、みな子の行方を訊く。

「みな子……星野さんは？」

「今日、大阪に行くって……さっき帰った」

――え。

「鷹枝くん、知らなかったの？」

すみれは驚いて小さな目を丸くあけた――二人がただの友達に戻ったことは、特にクラスメートに宣言したわけではない。

だからすみれは、依然将とみな子が「いい仲」だと思い込んでいるらしいのだ。

なにもなかったようにカメラに向かって陽気にはしゃぎつつ、将はみな子のことが気になった。

――こんなに、急に。

――あいつ、何にも言ってなかったじゃん……。

「……将、将ってば」

将はぼんやりしていたらしい。井口が顔をのぞきこむようにしている。

「ああ、何？」

「今日サ、あとでみんなで、パーティみたいに集まろうっていってんだけど。お前これる？」

せっかくの申し出だったが、あいにく将も今日のうちに再び北海道入りすることになっている。明日も朝一から撮りがあるのだ。

それでも、せっかくだ。

飛行機を最終に変更すれば、最初の３０分くらいは顔を出せる。

将は、飛行機の時間を変更できるか、と武藤に確認するべく携帯を取り出した。

開けた携帯にメールの着信が１通あった。……みな子からだった。

将は反射的に……聡の横顔に視線を走らせる。

女生徒たちに囲まれた聡は、涙もすっかり乾き、ばら色の頬に笑顔が戻ったようだ。

それを確認すると将は、小声で井口に言った。

「ちょっと、俺、事務所に顔出してくる。……パーティはちょっとだけ顔出すから場所とかメールしといて」

それだけ言うと、校門へ向かおうとして……再び振り返る。

「センセイは呼ぶの？」

「いちおう声かけるけど……あのお腹だし、これないんじゃない？」

「ふうん、そ」

これ以上、聡への関心を悟られるのは、仲のいい井口でもマズいだろう。

将は井口にわからないように、聡にもう一度目をやった。

そのとき、首筋に気配を感じたのか、聡がこちらを振り返った。

将の心臓が、どきん、と震える。

それに対抗するように、将は大きな声を出した。

「センセー！センセーも、今日のパーティ、こいよー」

聡はまだそれを聞かされてないのか、きょとんとした顔をした。

そんな聡に、井口や兵藤、チャミやカリナが一斉に今日の催しの話を始める。

その隙を縫って将は……校門へ小走りで向かった。

「品川駅まで」

タクシーに乗った将は、迷わず告げた。

みな子は前に……飛行機が苦手だと言っていた。

『修学旅行のときもね。参加するのやめようかと思うほどイヤだったの。……でね、仕方ないから離陸前にムリヤリ寝ようとしたんだけど、怖くて寝れなくて』

だから、大阪へは飛行機でなく、新幹線を使うはずだろう。

……将は最後に、もう一度みな子に会わなくてはと、強く感じていた。

大阪に行ってしまう前に、もう一度謝りたい。

自分のために傷つけてしまったことを……。

そんなことを思う将の脳裏の片隅には……瑞樹がいた。

気付かないふりをして、その好意だけは、あざとく利用してしまっていた瑞樹。

……ドラッグに救いを求めさせるほど、傷つけた犯人の一人は自分だ。

謝る前に……逝ってしまった瑞樹のことは、ふいに将の心の表面に浮いてきて、将を苦しめていた。

それでも、大悟と一緒に住んでいたころは、ボロボロの大悟に向き合うことでそれが相殺されていた。

だが、大悟と離れた今。

ふいに、むきだしで浮かんでくる瑞樹への良心の呵責は、ときおりではあったものの、将を眠れなくするほどであった。

どうして、生きているうちに謝らなかったのか。償わなかったのか。

やったことの深さも、期間も、瑞樹よりはずっと軽いとはいえ……将がみな子への罪深さを思うとき、その後ろには、つねに瑞樹を感じていた。

将への好意を……利用していたという構図で、みな子と瑞樹は重なるのだ。

いてもたってもいられなくて、将はみな子に電話をかける。

「センセー、みんなでランチ食べにいこうよ」

「いいねー。どこにしよっかー。センセー、何が食べたい？」

写真をあらかた撮り終わって、なおも名残惜しいチャミやカリナたちは、聡を誘い始めた。

と、そのとき。

いつのまにか……見覚えのあるスーツ姿の男が、目の前にいることに聡は気付いた。

「……毛利さん」

「お久しぶりです。古城先生」

将の父・鷹枝康三官房長官の秘書である毛利……彼は、丁重に頭を下げた。

そのスーツの仕立てのよさと……眼光の鋭さに、聡のまわりに群れていた生徒たちは、なんとなく後退し、聡だけが毛利と向き合う格好になる。

「卒業式も、つつがなく終わられて……長官も大変喜んでおられます」

「……ありがとうございます」

目を伏せるようにして一礼した聡に、

「長官は、古城先生を労いたいと、昼食の席を用意しております。よろしかったらお越しいただけないでしょうか」

校門にはいつのまにか、ベンツが止まっている。

『よろしかったら』と聡に選択の余地を残すような言葉ながら、抗

えないことを……聡はよくわかっていた。

372◆卒業　4

雑踏とアナウンスが入り混じるホームの騒々しさに、携帯の呼び出し音を聞き逃すところだった。

電車を乗り換えるべくホームを歩いていたみな子はバッグから携帯を取り出すと、開いて表示を見る。

鷹枝将の表示に思わず立ち止まる。

すぐ後ろを歩いていた人が、急に立ち止まったみな子を睨みつけながら足早に追い越していく。

みな子はホームの階段の陰に無意識に近寄りながら通話ボタンを押した。

「……鷹枝くん？」

「今どこ」

名乗りもせずに、将は訊いてきた。

携帯から……自分のためだけに投げられる将の声。

ふいをつかれたように、それだけでみな子の心はわしづかみにされる。

「○○駅」

みな子はつい正直に、今いる駅を答えてしまった。

「今日、大阪に行くんだって？」

将はいきなり本題を切り出した。

みな子は将の声をより聞き取るべく携帯を耳に押し当てた。

「うん……」

みな子の急な出立を責める将の声は……耳から体中にじんわりと染みこみ……諦めたはずなのに、胸がきゅうっと苦しくなる。

「えらい急だな……一言くらい言ってくれても」

だって、よけいにつらいから。口にできない言葉は胸の中にちくちくと刺さりながらぐるぐると巡るだけだ。

あまりにつらいから……将と地理的に離れることで、決定打を与えて……早く忘れたかった。そんなことは言えるはずはない。

みな子はときめく心を引きちぎって捨てるように

「単なる友達だから。もう無関係じゃん？」

と無造作にいってのけた。

「友達、は無関係じゃないだろ」

怒ったような将の声。将はまだ……自分との『関係』を大事にした

いんだろうか。

それだけで……みな子の心は、忘れなくてはという理性とは裏腹に、温かいもので満たされていく。

しかしそれに浸っているわけにはいかない。

東京駅行きの列車が入ってくる轟音に、みな子は顔をあげる。

「電車が来たから……。じゃあ、元気でね。……先生と幸せにね」

なおもみな子を呼ぶ声を伝える携帯電話を、みな子は未練ごと切った。

そして前をむいて……快速列車に乗る、大阪へ向かう。その道筋だけを考える。

……それ以外の感情の回路のスイッチを切るがごとく。

――ここは。

ベンツを降りた聡は顔をあげた。

……将とはじめてのデートで来たレストラン。

塩でバリバリになった髪と服を気にしながらも楽しい時間を過ごし

た……大切な思い出が聡の脳裏に瞬時に蘇る。

「いらっしゃいませ。……お連れ様はもうお着きになられていますよ」

あのとき、ジーンズ姿の将に、気を利かせてジャケットを貸したメートル・ド・テルがにこやかに迎える。

その柔らかな笑顔からは、聡のことを覚えているのかどうかはわからない。

だけど聡は……毛利のあとについて踏む、体が沈むような絨毯の感触も……よく覚えている。

「古城先生をお連れいたしました」

メートルが扉を開け、毛利が中にいる男性に一礼をする。

そこは個室専用の待合室だった……豪華なしつらえのソファーに負けない品格を持つ男性が立ち上がる。

「おいでいただきありがとうございます。先生」

こうして向き合うと……本当によく似ている。聡は思わず息を飲み込んだ。

飲み込んだ息は、着物の襟元からお腹に落とされて、それで驚いたのか『ひなた』がびくんと動く。

将の父親、鷹枝康三・官房長官。

口元に笑みを浮かべた顔は……テレビ以外では初めて目にするものだ。

聡はこの将の父親に3度ほどじかに会っている――一度目は奇遇にもこのレストランだった。

将との初めてのデートの最中に偶然にやってきて……将などまるでそこにいないように無視した父親。

二度目は……将のマンション。

スキャンダルを起こした将をいきなり殴りつけた雷神のような怒りの表情。

厳の葬儀のときも同席はしていたが、あのときは席が遠くてさしたる印象はない。

促されて、午餐の席に着席する間も、聡の脳裏には、将を無視する冷たい表情と、雷神のような激しい怒りの表情の2つが繰り返し再現されていた。

「こうして見ると……やはり似ています」

毛利とメートルが立ち去るのを見計るように、康三はもらした。

目をあげた聡は、康三の瞳に懐かしい光が宿っているのをみた。

「私の前の妻……つまり将の母親に、先生はどこか似ていらっしゃる」

「私が……？」

「実は私の祖父が、先生は将の母親に似ていると申していると、運転手に聞いたことがあります。そのときは、まさかと思ったのですが……こうしてお顔を拝見すると、やはりどこか似ていらっしゃる」

康三の祖父とは、将には曽祖父にあたる巌のことだろう。

聡の心に大磯のあの邸宅が蘇る。夏の縁側に向けてしつらえられたベッド。

『あきらさん。あなたは将にとって、先生であり、恋人でもあり、……そしておそらく母でもあったのだろう』

しわがれた声は、たった今聞こえたようだ。

聡は……自分をこんな豪華なレストランに呼び出して、しかも『将の母親に似ている』と打ち明ける康三の、意図するところがわからなくて困惑した。

「私が……鷹枝くんの、お母様に……」

そのとき、一礼と共にソムリエが入ってきた。

「私はこのあとも執務がありますので。……先生はいかがですか？」

「私も……いいです」

もう、妊娠８ヶ月……そろそろ臨月に近い妊婦は、アルコールは控えたほうがよい。

瑠璃色の袴に覆われたお腹に目を落とした聡に、康三は一瞬、何かを話し掛けようとしたが……口をつぐんだ。

そしてあいかわらず落ち着いた調子で「すまないね」とソムリエを帰す。

「あの……。今日はどうして」

アミューズが置かれて、聡はずっと渦巻いていた疑問を、控えめに取り出してみる。

康三は光沢のあるナプキンを広げながらにこやかに微笑んだ。

「将が、無事高校を卒業出来たのは、先生のおかげです。そのお礼に、せめてごちそうをと思いまして」

「そんな……」

康三の笑顔は、テレビでの定例会見で見るのと同じだった……つまり本心ではないと直感した聡はうろたえる。

いや、直感しなくても……康三にとって聡は、未成年の息子をたぶらかしたあげく、勝手に妊娠し、あげく堕ろしもしなかった、常識のない教師である。

……そのことは、聡の心に大きく横たわり……いつ康三本人から、

その事実を突きつけられるのかと聡は震える。

それはそのまま、今日、康三がこの場に聡を呼び出した答えとなりそうで……聡の血液は戦々恐々と全身をめぐり、ともすると毛穴を逆立てそうになる。

「それに、一度、先生にきちんとお会いしておきたかった」

康三は口元にはあいかわらず笑みを浮かべながら、言葉には隙のない敬語を施しながら……強い視線を聡に突き刺した。

――将。

人を突き刺すような将の視線は、この父親から受け継いだものなのだ……。

めまいを感じる聡に

「先生、まずは食事を楽しみましょう。……この店は本当に美味しいんですよ。私が保証します」

康三はさっきの視線が嘘だったかのように、目元を和らげた。

それでも聡は、なおも康三の視線から逃げるように、目の前に置かれた、フグの白子を使ったテリーヌに無理やり目を落とすしかない。

373◆卒業　5

「それにしても……、今日は天気に恵まれましたね」

「……ええ。本当に」

将の父親、鷹枝康三官房長官と対峙した聡だったが、何を話題に選べばいいのかわからない。

彼の本題が……このお腹の子と将のことなのなら……いっそ早く切り出して欲しい。

自暴自棄的にそんな考えが浮かんでくるくせに、その場面を想像するのすら怖い。

聡は笑みを浮かべたまま、いつしか顔をこわばらせていた。

世間話を続ける康三の、心中がわからなすぎて。

「先生のクラスは、無事、全員卒業したんですか」

「はい。……3年になれた子たちは全員」

2年の2学期に聡が赴任して、卒業できなかった生徒は、退学処分になった前原茂樹と、自殺した葉山瑞樹だけであとは全員、今日の日を迎えることができた。

だが田舎の健全な県立高校を卒業した聡の常識の中では、クラスメートが2名も脱落していくのはやはり異常なことだ。

『3年になれた子は』と限定を付けることを恥じて聡は少し俯く。

「さすが、中退率の低さを誇る学校ですね」

と感心するようすを見せたあとで康三は続ける。

「なんでも先生は英語の実用会話と、社会見学を取り入れたそうで……。よろしかったら、文部科学省と一緒に考えている教育再生プログラムの参考にしたいので、詳しく教えていただけませんか」

目の前には、前菜のアスパラガスとパルマハムを使った2色のムースが置かれたところだ。

康三はナイフとフォークを操りながら、如才なく聡を促す。

仕方なく聡は、自らの取り組みを話しながら、康三の本意を見抜こうとしたが……康三は聡の話に興味深げにうなづき、ときにカトラリーを置いてメモすらとる始末であった。

それは、ポーズなどではなく、本当に聡の話を参考にしているかのように見えた。

聡はわけがわからないまま、康三が求めるままに、赴任してから今までの奮闘を話すしかなかった。

食事の味など、まったくわからないまま、デザートまでが終った。

あとは食後のコーヒーというところで、ノックがあった。

一礼ののちに、毛利が入ってきた。

もう仕事の時間だと、康三に告げに来たのかも、と聡は少しほっとしながらも、ならば解せないと思う。

康三は、本当に昼食を自分にふるまっただけなのか。……教育の実情をヒアリングしただけなのか……。

毛利は、なにやら康三に耳打ちをした。

そしてちらりと……神経を尖らせていないとわからない程度に……聡に目を走らせる。

緊張していた聡だから、すぐにそれに気付いた。

しかし気付いたときには、毛利は一礼をして個室を辞していた。

――やはり、違う。

聡はこの会合について……楽観するわけにはいかない、と唇をきゅっと結んだ。

しかし康三はナプキンの端で口をぬぐいながら、

「いや、先生。とても参考になりました。先生はお若いのにとても優秀な教育者ですね」

などと微笑んだ。

皮肉だろうか、と聡は思わず目を見開く。

だが……聡の視線の先にいた康三はあいかわらず柔らかい表情で微笑んでいる。

聡はうろたえて俯くと「そんな……ことはないです」とつぶやく。

そのとき、給仕が康三にはコーヒー、聡には黒豆茶を運んできた。

康三はコーヒーの湯気に心から憩いの表情を浮かべつつ、それを啜った。

臓腑に落ちた熱さを吐き出すように、ため息をもらしたあと、

「将のことですが……」

と切り出した。

――すわ、本題。

聡は受けた衝撃のあまり、華奢なジノリのカップを、すんでのところで取り落としそうになる……なんとかかろうじて持ちこたえた。

口腔に残る、香ばしい黒豆茶をごくりと飲みくだす。

「親馬鹿なようですが、子供の頃の将はとても優秀でしてね」

康三は、驚愕し一気に緊張が高まった聡の様子など目に見えていないようだった。

「私の仕事の都合で、将は、まだ赤ん坊の頃からパリに行っていたんですが……」

あいかわらず、大きく表情を動かさないまでも……懐かしそうな瞳に穏やかな声で続くのは、将の子供時代のことのようだった。

……聡は、拍子抜けしながらも、ほっとする。

――これは単なる執行猶予なのだろうか。

わからないままに、聡は康三によって話される将の過去に耳を傾ける。

「家内の考えで、将は日本人の幼稚園に行かず、パリの幼稚園に行っていたんです」

聡は黙ってうなづいた。

将が……会話や聞き取りにおいては英語より、フランス語のほうがましだといっていたのはそのためなのだろう。

康三は、将がフランス人の幼稚園園長に『この子の知能はずば抜けている』と太鼓判を押されたことや、日本に帰ってきてからも勉強はもちろん、スポーツや武道、芸術のすべてにおいて優秀だったことを話した。

「私は仕事の都合であまりかまってやれなかったものの、鼻が高かったものです」

そんなことを語るとき、康三の目は幼い将がそこに座っているかのように、優しい目をしていた。

それは同じ笑顔でも定例記者会見のそれとはまるで違う、柔らかな……父親の笑顔だった。

「あの」

聡はその柔らかな顔に誘われるように、つい口を挟んでしまった。

「鷹枝くんの……本当のお母さまというのは……。どうしてお亡くなりになったんですか」

将は……産みの母親は病気で亡くなったといっていた。

それと同時に、父のせいだとも。

そして母の死に際して、涙ひとつ流さなかった父の非情さを訴えていた。

将が直接道をはずれたのは、あの爆破事件のせいだとしても……それまでに将とその父の間には、亡くなった母を通して何か感情のすれ違いがあったのではないのか。

「将はなんと？」

訊き返した康三に

「ご病気で……と」

さすがに『康三の選挙のせいで手遅れになった、と言っていた』とはいえなくて聡は口をつぐんだ。

康三はしばし沈黙したのち、意を決したように重い口を開いた。

「……将の母親は、私が外務省に勤めていた頃の同僚でした。コネなしで採用された、と噂がたつほど優秀な人材で……」

将の母親・環に、どことなく似ている聡の容貌に誘われてなのか、康三はその死についてではなく、その馴れ初めから語り始めた。

将を生んだ母親、環は康三とは2年違いで外務省に入った。

5ヶ国語を自由に操り、その仕事ぶりは、数少ない女性外交官ながら、男性顔負けだったという。

「それでいて奢らず、優しくて……。みんなの憧れの的でした……」

傾けたコーヒーカップの中に、セピア色の当時が映っている様に、康三は心持ち下を向きながら淡々と昔話を続ける。

「そんな環が……仕事をなげうって私との結婚を選んでくれたときは、本当に天にものぼる心持でした」。

しかし、明治維新から続く政治家の家系・鷹枝家に生まれた康三である。

康三の親は、康三を政治的に有利な令嬢と結婚させようと考えていたらしく、二人の結婚にあまりよい顔をしなかった。

「助け舟をだしてくれたのは祖父です」

康三の祖父とは、即ち将の曽祖父、巌のことである。

康三の話を聞きながら、ぼんやりとテーブルの中央に飾られた花を眺めていた聡だったが、巌の名前にハッとして顔をあげた。

『将のことを頼む』

しわがれた声が、頭の中に、いまいちど響いたようだ。

巌だったら……わかる。

家柄より、個人の資質、なにより本人の意思を大事にするであろうことが聡にもわかる気がした。

「祖父がどうにか両親を説得してくれて、ようやく結婚することができたのです」

聡と目があって、康三は、カップに残ったコーヒーを飲み干した。

さらに話は続く。

「憧れの人と結婚できて……しかも、すぐに将をさずかって、パリでの私は本当に夢のようでした」

康三は、目を細めると、

「赤ん坊のころの将は、本当に可愛かった。……本当にね。フランス人に混じっても一人で輝いているように見えましたよ」

といたずらっぽい顔で、聡に冗談すら投げかける。

その顔は将に似ていて……思わずつられて微笑む聡は、クリスマスに大磯で目にした、大量の写真を容易に思い浮かべることができた。アルバムに収まりきれないほどの写真は、やはりこの父が撮影したものなのだ。

――将。将。あなた、すごく愛されてたんじゃない。

聡の思いはいつしか、大晦日の夜にタイムスリップしている。うかない、寂しげな顔の将に……ひとこと、この父親の顔を届けることができたら。

聡はせつなくなった。

「彼女と将と一緒なら、世界中どこの国に赴任することになっても、うまくやっていけると思っていました……ですが」

パリでの親子3人の幸せな暮らしは、5年で終わる。

将が6つになる少し前に、すでに議員として当選していた、康三の一番上の兄が事故死したのだ。

政治家としての鷹枝家を継ぐはずの、長兄の急死は、康三一家の運命を変える。

「二番目の兄は、母方の兄に養子に出されていまして……それで私が急遽、帰国して立候補することになってしまったのです」

三男ながら、いきなり康三は鷹枝家の跡取として、９６年に行われた衆議院選に出馬しなくてはならなくなったのだ。

帰国後、妻の環は、康三の初選挙に、身を削って尽くした。まだ小学１年生である将の世話も手を抜くことなく。

康三の両親の手前、無理やり結婚した償いのように……無理をした。その頃から体に異変はあったに違いない。しかし環は、不調を疲れだと思い込み、頑張ってしまった。

幸い、事故死した長兄の分の票も集めることができ、康三は初当選を果たした。

しかしそのときすでに、環の体は病魔に冒され……当選後まもなく倒れてしまった。

「病院に入院したときすでに……余命３ヶ月を宣告されました。進行性胃がんでした」

康三は少し前に見せた、いたずらな笑顔がまるで幻のように……それでも淡々と、つらい当時を語り続ける。

「私はできるだけ妻についていたかったが……政界のことなどたい

して知らずに入った三男の私ですから、毎日忙しく……どうすることもできなかった」

涙を見せたり、顔を歪ませたりもしない康三だったが、聡は自分がその場にいるかのように胸を締め付けられる思いがした。

「妻は日に日に悪くなり……将をくれぐれも頼む、と私に託して、11年前の3月12日に息を引き取りました」

今日は3月5日。ちょうど1週間後の今日が命日だ。

聡はハッと顔をあげて康三を思わず見つめる。

康三も聡を見つめていた。

端正なその顔は、無表情に近く……しかし、その瞳は強く光っていた。

その瞳を直視した聡は、瞬時に当時の康三の悲しみを理解した。

最愛の妻を……亡くした悲しみ。

しかも自分のせいで、病気の発見が遅れて……。

康三は泣かなかったのではない。悲しみが強すぎて泣けなかったのだ――。

泣くことすらできない、強い悲しみを想像した聡は、思わず涙ぐんでしまう。

しかし、新人議員の康三に、きっと感傷にひたる暇はなく……悲しみを押し殺して働かなくてはならなかったに違いない。

何度も傷を負った皮膚が固く厚くなるように、妻の死の悲しみを覆った心の表面は厚くなり……いつしか康三の感情を隠すようになってしまったのだろう。

374◆卒業　6

妻を亡くした当時の康三の悲しみに共鳴して涙を浮かべてしまった聡ではあるものの、どうして康三がそんな話を自分にするのかは理解できずにいた。

そんな聡に、康三はさらに続ける。

「先生。あれは……、将はふびんな子でね」

ふびんな子。……たしか巌もそういっていた。

「産みの母を早くに亡くして……そのころは私も議員になったばかりだったものですから、なかなかあれにかまってやれなくて」

聡はしきりにまばたきをして、目の表面にたまった涙をどこかにおいやりながら、子供の頃の将を思い浮かべる。

母を亡くしてからの1年間、将は大磯にある巌の家に預けられていたという。

巌は、将を厳しく躾けつつも可愛がったというが……将の寂しさはどれほどのものだっただろうか。

例えば、授業参観のとき。

例えば、皆が母親手づくりの弁当を持ってくる遠足のとき……。

そのときのことを聞いたわけでもないのに……たった一人で、波止

場に腰掛けている少年が聡の脳裏に浮かび上がる。

寂しそうに丸まった背中は、沈み行く夕陽に、いつしかシルエットになっている。

将の産みの母親である前妻・環を亡くして1年が経った頃、康三の両親を始めとする一族のものは、康三に後添いをあてがった。

名門・岸田家から嫁いで来た、今の妻・純代である。

「……今の母親とも、子供のうちはうまくいっていたのですが」

康三の話は、あの爆破事件のことに及びはじめた。

たまたま自分が仕事で帰りが遅かったときに起きたこと。

将だけが逃げ遅れて大やけどを負ったこと。

その事件以来、将が非行に走り始めたこと。

見捨てられた将の……痛ましいほどの絶望を……康三は知っているのだろうか。

聡は口を開いた。

「3ヶ月も入院するほど……ひどい火傷を負ったと聞きました」

康三に訊きたいことがあったのだ。

「長官は……」

康三を何と呼べばよいかわからなかった聡は、一瞬迷ったあげく、ためらいながらそう呼んでみる。

「鷹枝でいいです」

康三はすぐに柔らかく言い直した。聡は恐縮した。

「鷹枝さんは……。将……くんの入院中は……？」

「会期中でしたから……ほとんど顔を出せませんでした。たまに顔を出しても、うつ伏せたままで、痛いのかロクに口を利いてくれませんでしたし……」

付き添った純代にもほとんど何も話さなかったという。

だけど、聡は将本人から聞いている。

『包帯を替えた日なんか、本当に地獄の痛さでさ。俺、いつまでこんな痛いのが続くのかと思うと、思わず夜中に泣いちゃってさー』

過ぎたことだから、それを話す将の口調は明るかった。

だけど、たった一人の病室で背中に負った火傷の痛みを堪えて涙を流す将を思うと、聡の心も痛んだものだ。

「中学に入って……将は見る間に悪くなっていきました。私たちは、あれにどう接していいかわからなくなってしまいまして」

聡はやるせない気持ちで康三が話す将の姿を、心で追っていた。

母を小さいうちに亡くし……頼るべき父親は忙しくほとんどかまってもらえない。

新しい母親に気に入られるべく、せいいっぱいいい子になろうとした将。

そんな将は、あの爆破事件で燃え尽きてしまったのだ。

自分が所詮一人だと……痛みにも孤独にも、結局誰も手助けなどしてくれないのだ、と……悟ってしまったのだ。

だから、将は……自分を見捨てた両親を、今度は自分が捨てることにしたのだろう。

聡は、いまいちど将の心の軌跡をなぞっていた。

「中学時代に……いろいろなことがあったと、将くん本人から聞きました」

聡は顔をあげて、康三を見据えた。

「そうですか」

それに対して、康三は心持俯いて、聡の視線から自分の瞳を巧みに

隠した。

聡がどこまで聞いているのか――もしかしてあの、殺人まで知っているのか――康三ははかりかねているようだった。

「実のところ」

そういうと康三は深いため息をついた。

「同級生が進学するからと、今の高校に入れましたが、私にはあれがいつ問題を起こすか、気が気じゃなかったんです」

康三はまるで懺悔をするように、両手をテーブルの上で組んだ。

淡々としていた声が、いつしか苦しそうになっている。

「あれは……そんな私のエゴイスティックなところをちゃんとわかってて……私たち親子の間は、最悪でした」

ひとつひとつの言葉を絞りだすように、康三はなおも続ける。

「わかっているんです。将を……あんな風にしてしまった責任者は……私です」

康三は崩れるように、組んだ両手の上に、がっくりとこうべを垂れた。

一切の言葉は、胃の中に沈殿し……聡は凍りついたように将の父の姿を眺めるしかない。

「全部、先生のおかげです」

ぼうっとしていた聡はハッとした。気がつくと、康三は聡のほうにまっすぐに顔を向けていた。

「あれが無事高校を卒業できて……しかもK大にまで合格できるとは思ってもいませんでした。きっと」

その顔には穏やかさが戻っている。……しかし、なぜか聡の心臓はどくん、と不気味に動き始めた。

「先生とであったおかげで、あいつは人間らしい気持ちを取り戻すことができた。もう一度努力というものをすることができるようになったのです」

康三はなおも、聡への謝辞を続ける。

「先生も、あれのことを……慈しんでくださったからこそ、将は立ち直ることができたんです。そういう意味で、先生は恩人です」

職業上訓練された笑顔ではない。康三の表情には……ただ将を思う親心だけがあった。

将を立ち直らせた聡への、心からの感謝が現れていた。

だが、聡の動悸はひどくなるばかりだ。

聡はあいまいに答えるだけで、鼓動が収まるのをひたすら待つしかない。

「先生。……信じられないとお思いでしょうが、私は私であれが、可愛いんです」

康三はとうに冷めたコーヒーカップを傾け……それがもう一滴も残っていないことがわかると、テーブルの上で再び手を組み、もう一度聡をほうへ顔をあげる。

「馬鹿な子ほど、可愛くてしかたがないといいますが……グレてしまったときも、どう扱っていいかわからなかったが、……あれを思う気持ちは変わらなかった」

今度は康三が――聡を見据えていた。

「最初は、あれの将来のために……、あれがグレてしまってからは……せめてあれが問題を起こしても……揉み消せる権力をもちたいと、必死で働きました。それくらいしか私にできることはなかったからです」

４０歳で政界入りし……康三は異例の出世を遂げて、わずか当選３回目にして官房長官の座を手にしている。

それどころか、今年の９月に行われる総裁選の最有力候補でもある。

自分の出世は、息子である将に捧げられたものだ、と告白する康三を目の前にして。

激しい動悸をなだめるように、聡の心の中では自動的に、今日の卒業式での将が再生されていた。

今日一日……聡は将を見ていた。

校門に着くなり、在校生に生花を付けてもらう少し照れた笑顔も。

井口たちと久々に再会してじゃれあう姿も。

体育館での卒業式のときも。

他の……最初で最後の教え子たちの一人一人の名前を呼びながら、その姿を心に刻みつけながら、目の端で……常に将を意識していた。

そして最後のＨＲ。教室での卒業証書授与。

順番がまわってきた将は、得意げに聡のいる教壇に歩いてくると、聡が捧げ持っている卒業証書にその長い腕をすっと伸ばした。

もっと手を伸ばせば、抱き寄せられるほどの至近距離で……二人は瞳を交わす。

教壇の上にいる聡と将の目線は、ちょうど同じ高さだ。

高校を卒業して、ひとつ大人に近づいていく晴れがましさに、心持ち顎を上に向けた将は……今飛び立つ鳥のように希望に満ちて見えた。

将は『センセ、ありがと』といたずらっぽくウインクし、さらに声にださずに唇だけで『またね』と言った。

あの晴れがましさは……二人を引き裂いていた『教師と生徒』という結界が解けた喜びではなかったのか。

「先生。私は」

あるいは……回想は、ほんの一瞬だったのだろうか。

テーブルの上の三色スミレに視線を固定したまま、記憶を彷徨していた聡は、康三の声に再び現実に引き戻される。

「あれに……陽の当たる道を歩かせてやりたい。あれは……親馬鹿だと思うでしょうが、人の上にたってしかるべき人間だと信じている」

レースのカーテンを透過して壁に映った午後の光が、さっきより温かみを帯びている。

それを目にしたからなのか、康三はそんなことを言った。

……心臓が再び、大きく波打つ。

ゆっくりと目をあげた聡を、康三は見届けたように、小さく息継ぎをするように一瞬目を伏せた。

「あれの将来に、一点の曇りもつけたくないんです……おわかりですか」

そういうと康三は再び顔をあげた。

端正な……将によく似た容貌。強い決意に類似した……将への愛情が瞳の奥に映っている。

大きく収縮を繰り返す心臓は、聡の全身を締め上げるようだ。

しかし、もはや聡はそれを止める術を持たない。

「こんなことは……あなたにしか頼めない。将を本当に思ってくださるあなたにしか」

康三が眉を歪めた。

誇り高い……康三のような人間ならばありえない形……康三は聡に何かを懇願しようとしているのだ。

その眉を目にした聡は、呼吸を忘れるほど……追い詰められた。

自分を追い詰めるもの。聡にはその正体の９９％がすでにわかっている。

「先生……いや、聡さん。頼みます」

康三はテーブルの上でがっくりと頭をたれた。

「あれと……別れてください」

375◆卒業　7

ざわめきの中から自分を呼ぶ声がする気がして、新幹線のホームに並ぼうとしていたみな子は一瞬あたりを見回した。

金曜日の今日、ホームは背広姿のサラリーマンや、週末旅行に出かけるのか女性グループでごったがえしている。

こんなところで……誰も自分を呼ぶはずがない。

みな子は気を取り直して、視線を元通り……こころもち下向きに戻す……。

そのとたん、今度ははっきりと聞こえた。

「みな子！」

はっとして振り返ったみな子が見たのは、新幹線の長いホームを駆けてくる将の姿だった。

「鷹枝くん！」

眼鏡もかけず、制服のまま走ってくる長身の将は、かなり目立った。

ホームにいた乗客が一斉に振り返る。

しかし将はそんなことを気にもせず、一目散に走ってくる。

「みな子！……みな子……よかった、……間にあった」

将はみな子のところまで到着するなり、がっくりと膝に手をつく。

その肩から背中のあたりが、呼吸で激しく上下している。

ホームの端にある自由席乗り場まで……将は全速力で走ってきたらしい。

「なんでこのホームだってわかったの？」

みな子は新幹線の時間も伝えなかったはずだ。

しかも新幹線は１６両編成だからホームの長さはとても長い。

どの新幹線に乗るかわからなかったら、人一人を見つけ出すのは奇跡のように難しいはずだ。

「……カン」

将は、ようやく苦しい息の下からぼさぼさ頭をあげていたずらっぽく微笑んだ。

――そのほほえみだ。

みな子は、意に反して胸がきゅっと痛むのを感じた。

将はすくっと背筋を伸ばした。

「最初は向かいのホームにいっちゃったんだ。そしたら、こっちにみな子が見えたから……あわててダッシュしてきたんだぜー」

もう、新幹線のホーム長すぎ、とそこまで一気にまくしたてると

「そっちは、一人なの？親は？」

と訊いてきた。

みな子は頷くと

「父はもう大阪に勤めてるし、母は弟が卒業するまでこっちなんだ」

と答える。

だから、みな子は、どの新幹線に乗るかも決めずに、気の向くままに大阪まで一人旅気分で過ごそう思っていたのだ。

一人で……将の思い出の土地から離れよう。

離れていく時間を噛み締めようと思っていたのだ。

なのに、なんで。

「わざわざ見送りに来ること、なかったのに」

みな子はそっぽを向いた。

「見送りたかったんだ」

将の声に、列車待ちの客が思わず振り返る。

「ちょっと……！」

みな子は顔を紅くすると、ボタンがなくなった将の袖口をつかんで、ホームの端に連れ出した。

「ちょっと。信じられない。鷹枝くん、芸能人って意識あんの？」

声をひそめてみな子は将を睨む。

「そんなの、カンケーないだろ」

それに対して、将は優しい目でみな子を見つめる。

そんな目で見つめられると……みな子の心臓が甘くときめいてしまう。

「カンケーあるよ。だってみんな見てるし」

「カンケーないだろ」

「カンケーある」

「ない」

「あるッ」……。

押し問答ののち、二人は顔を見合わせた。

同時に……プッと吹きだしてしまう。

明るく笑う将を見て……みな子は泣きたいのになぜか笑ってしまっていた。

こんなふうに笑いあえるのも今日で最後だ。そう思うとせつないほど悲しいのに。

みな子はなぜか声をあげて笑い続ける。

からっぽになった心に、自分の声がこだまするようだ。

それがいっそう悲しい。だけどすがすがしいようにも思う。

ホームの端には、新幹線より先に、春風が入ってきている。

「あのさ。ちゃんと謝りたかったんだ」

笑い止んだ将は、微笑みをやや残した優しい瞳のまま、切り出した。

「……大阪にいっちゃう前に」

「何を？」

みな子はまだ笑いが残っているふりをしていた。

……そうしないと、ふいに涙がこぼれそうだから。

「いろいろ」

将は……一瞬、新幹線のホームに、かつての瑞樹の黒髪がよこぎった気がして……錯覚だとわかっているけれど、その行方を視線で追ってみる。

それは、ホームの間にわずかに見える空の切れ端へと溶けていった。

「いろいろ……利用したみたいになっちゃって」

将はそう言い放つと、再びみな子に視線を戻した。

せつなさを含む……しょっぱい笑顔になっている将。

みな子は見つめられて……反射的に首を横に振る。

いまならはっきりとわかる。利用されるのを望んだのは……むしろ、みな子の方だった。

将に利用されるのが……たとえカモフラージュでも将の役にたてるのが嬉しかった。

「それから……キスしたことも」

「謝らないで」

将はハッとした。みな子の瞳にいつのまにか強い光が宿っている。

だが、すぐにみな子はうつむいた。

「謝られると……よけいに、悲しくなるし」

あれは、間違いだったと明言されるのはつらい。

それっきり、口をつぐんでしまった。

将も、謝るなと言われて、何と声をかければいいのか、わからなくなる。

なすすべのなくなった二人の間を……まもなくひかり号が到着するというアナウンスが横切っていく。

もうすぐ、タイムリミットがやってくる。

「あたしはね」

みな子は小さくため息をつくと、意を決したように将を見上げた。

「鷹枝くんとキスできて嬉しかったよ。だって……初めて好きになった人なんだもん」

言っちゃった、という恥じらいが……体中の毛穴をきゅっと縮めるようだ。

だけど、もう。あと少しで、離れてしまうのだ。

みな子は恥かしさを押さえて、勇気を出す。

「鷹枝くんには先生がいるってわかってても……好きなのは止められなかったし」

そのとき、けたたましく新幹線独特のベルがなった。
みな子が乗るひかり号が入ってきたらしい。
二人は振り返った。
新幹線が二つの目を光らせながら、ゆっくりとこちらに入ってくるのが見えた。
「じゃあね。……あたし、行くね」
みな子は今いるホームの端から、乗客の列に戻ろうとした。
「待てよ」
呼び止められて、みな子は振り返る。
将がせつなげに、そして苦しげに目を細めている。
「あの一瞬。……みな子が好きだった」
新幹線の先頭が、二人の横を通り過ぎる。おろしたみな子の髪が舞い上がる。
16両の車両はリズミカルな轟音を立てながら次々と二人の横を通り過ぎていく。
「好きじゃない子に……キスなんかできない。本当だぜ」
それは轟音の中、みな子にだけ聞こえた。

将は……あのバレンタイン前の金曜日のみな子の問いに、今答えてくれているのだ。

別れを前にして、自分に無理をしてまで……みな子の想いに応えてくれているのだ。

――だけど、もういい……。

その気持ちだけで充分。

それでも、みな子は自動的にこみあげてくる熱いものを胸に感じながら、なすすべもなく立ち尽くしていた。

ようやく――いつもよりいやに長い気がした――みな子が乗る車両が定位置に止まった。

「もし、アキラがいなかったら。みな子を好きになってたかも」

「そんなこと、言うもんじゃないでしょ。先生が……悲しむ」

なんとか、みな子は将をたしなめることができた。

「先生が……一番大事なんでしょ……」

わかっていることなのに。それを口にするみな子は、ガラスを飲んだように、胸が痛んだ。

だけど、無理して笑う。

せめて、別れはきれいにしたい。

「いろいろあるだろうけど、先生と……幸せになってね」

「みな子」

将の苦しげな表情は、まだ緩まない。

みな子は息を吸い込むと、いたずらっぽい顔をつくって将を見上げた。

「あたしみたいな子が出てきても……相手しちゃダメだからね」

冗談をいっているのに、将の瞳はかなしげにみな子を見ているのみだ。

――そんな風に見つめたら。

別れがたくなってしまう。

みな子のチケットは自由席だ。

このまま、いつまでも一緒にいたくなってしまう……。

「あたしは」

みな子は、自分の中の未練に訣別するように、大きな声を出すと、くるりと後ろを向いて新幹線へと歩き出す。

将は待てよ、とみな子に並んで歩く。

「大阪で……鷹枝くんよりいい男見つける。そしたら、会わせるね」

ホームにいた乗客はあらかた乗り込んだようで、もうすぐ出発するらしい。

「関西弁でめっちゃ、いちゃついてやる……じゃ元気でね」

ドアの前でみな子は、笑顔とともに将を振り返った。そのまま乗り込もうとする。

「みな子」

思わず将はみな子を呼び止めてしまう。

「まだ何かある？」

みな子はいったんドアを離れるとつかつかと将に近づいてきた。

そのまま背伸びをして、将に腕を伸ばした……。

「仕返し」

みな子は染まった頬を隠すように、あっかんべーと舌を出した。

「クチビルは先生に悪いから。……じゃね」

将は頬に柔らかい感触がリフレインするまま、新幹線に飛び乗るみ

な子と、閉まるドアを呆然と眺めていた。

はめ殺しのドアの向こうでみな子が小さく手を振っている。

「みな子」

微笑むみな子を乗せた新幹線がゆっくりと動き始めた。

――バ・イ・バ・イ

ガラス越しにみな子の口が動く。

将は追いかけることもできずに、立ち尽くしたまま、去っていく新幹線を眺めていた。

ガラスの向こうに、将と……駅が遠ざかって見えなくなったとき……みな子の目から一粒目の涙がこぼれ落ちた。

卒業式には出なかった涙。

一番悲しい涙。

涙は、次の涙を連れて来て……とめどがなくなる。

――さよなら。鷹枝くん。さよなら……。

ドアのガラスの向こうでは、昼下がりの東京がキラキラと輝いていた。

遠ざかっていくのは、将といた輝くような日々。

みな子は止まらない涙を流したままデッキに立って、遠ざかっていく東京の街を眺めていた。

376◆卒業　8

みな子を乗せた新幹線がいってしまった。

将は、軽くため息をつくと、今一度、ホームの上に見えている青空の切れ端に目をやった。

昼下がりのそれは春霞に少し白んで見えるようだったがかえって眩しいようだ。

将はホームを階段に向かって歩きながら、自分の心に新しくあいた穴の感触を確かめている。

その穴は、自分が思っていたよりずっと大きかったことに将は驚きながらも、みな子との日々を振り返る。

思えば、聡のカモフラージュ役を引き受けてくれたみな子は……、大悟を失った将にとって貴重な『友人』だった。

――友人か。

友人ってなんだろう。

井口やカイトは……一般的に友人といえるやつらだろうけど、離れ離れになってもこんな風に心に穴はあかないと思う。

離れても、失ったわけではないと思うから。

そう。将は、みな子を失ったのだ、ということに気付いた。

なぜなら今まで、こんな風に心の一部が抜け落ちたような経験があったとすれば。

ある日突然、死んでしまった瑞樹。

病院に無理やり連れて行かれた大悟。

１００年の人生をひっそりと終わらせたヒージー。

……皆、将に予期する暇も与えずに、手の届かないところにいってしまったひとばかりが思い浮かぶ。

みな子も……おそらく、将の手が届かないところに去ってしまったのだ。

帰りは、久しぶりに山手線に乗ってみることにした。

真昼間だというのに、山手線のホームは雑踏のようなのは、将が芸能人になってここから遠ざかっていた間もかわらないらしい。

入れ替わり立ち代りに列車から人が吐き出され、乗り込んでいく。

すれ違う人が……無視するようなそぶりを見せながら、将に注目していることがわかる。

電車に乗りこんだ将は、人々の注目を、耳からこめかみの皮膚に感じつつも……ドアに寄りかかって窓の外をぼんやりと眺める。

工場と住宅と市街地が入り混じったカオスな風景は、春の陽射しの中にやや霞んでいる。

その下で活動しているたくさんの人々の熱気が放射されたように空もろとも白っ茶けている。

こんなにたくさんの人が生きている中で。

ほんの少しでも、将の寂しさを埋め、心に温かさを与えてくれた人々。

それが……一人ずつ手の届かないところにいってしまうことが、今の将は寂しい。

そんな、人と人との邂逅をいとおしむ自分に、将は少し驚いている。

昔……2年ほど前まで。……人は、人付き合いは。あぶくのようにその場で発生し、消費するものだった。

夜な夜な遊びにいって……その場の楽しさだけを共有する。

一夜明ければ、顔も名前も覚えていない「トモダチ」の多く。

互いに抱えるどうしようもない問題と、虚しく過ぎてゆく時間をなかったことにできれば上々。

そんな自己都合の……うたかたのような「トモダチ」、「カノジョ」を消費していく毎日。

それを大転換させたのは。

『先生が、一番大事なんでしょ……』

みな子の声が蘇る。

みな子の言ったとおり、聡そのひとだ。

聡だけは、離れられない。絶対に。

将は、カーブした列車に遠慮なく降り注ぐ春の陽射しに思わず目を細める。

もしも……聡がいなくなったら、心に穴があくどころではない。

自分の存在意義さえ、見つけられなくなってしまうだろう。

聡がいなければ、生きられない……。

それを思い出した将は心の中で聡に詫びていた。

みな子への思いやりとはいえ、『聡がいなかったら』なんて口に出してしまったことを。

聡がいない、という仮定は、今の将にはありえないのに。

聡がいなくなったら――。

来週、月曜には前期試験の発表がある。

もし不合格だったら、同じ週の週末に後期試験が行われる。……それももしダメだったら。

将は一瞬よぎった暗い考えを、無理やりどこかへ押しやる。

――全力は尽くしたのだ。

――きっと大丈夫。自分は合格して、聡と二人で幸せになることができる。

将はカオスの街に降り注ぐ陽だまりに聡を思い描いた。そして、信じるしかない。

聡がいるこの現実の世界が、このままずっと続くことを……。

聡の中で、時は、止まっていた。

呼吸をするのも忘れ、血流すらも止まってしまったよう。

あるいは、この瞬間がいつか来ることを、聡はずっと前から知っていた気がする。

康三と対面したときには、はっきりと予想していた。

いや……将の子供をみごもったときから、予期していた。

もっと前……将に惹かれ出した頃から、かすかに予感していたのかもしれない。

「ひどいことを言っているのは、百も承知です。……本当にすまない。いや、……すみません」

将と別れてくれ。

聡に懇願する康三の苦しげな瞳に、罪悪感と……聡へのいたわりがよぎっていくのを見て聡は自分が涙を流していることに気付いた。

「ですが……あれの、将来のためを思ってのことなんです」

康三は苦しい表情のまま、さらに訴える。

「担任の先生を……卒業前に妊娠させた、という事実を……世間が許すはずはない」

聡は……本当はずっとわかっていた。

将の未来にとって自分の存在こそが暗雲になりえることを。

わかっていながら……薄氷を踏んでいる自覚がありながら……ここまで来てしまった。

あまりに強すぎる将の愛情に、目くらましをかけられたように。

その目くらましは、とてつもなく幸せな日々を聡にもたらしたのだけれど。

「本来なら……こんな風にお願いするのは、半年前にすべきだった。はんぱな親心から、あれの我がままを受け入れてしまい……、その結果、あなたにこうしてひどいことをお願いする羽目になってしまいました。本当に申し訳ない」

康三はさらに苦しげ眉をゆがめると、再度頭を下げた。

ぐるり、とおなかの中で「ひなた」が動いた。

自分は本来消される命だった――そんなことを感じ取った「ひなた」が聡のお腹にしがみついたのかもしれなかった。

そう……育ち始めた「ひなた」をお腹に感じるようになってからは。母性のおもむくままに、この子を殺すことなど考えられなくなっていた。

聡は涙で濡れた下瞼を指先でなでるようにぬぐった。

涙を止めなくては。涙があると、どうしても感情に飲み込まれてしまうから。

「将は……」

聡は顔をあげてこうべを垂れたままの康三に向かって声を発する。

「いえ、鷹枝くんは……納得するでしょうか……」

きっと将は、納得しない。

口先で、いくら別れてほしいなどといっても、将は笑って……きっと信じない。

あなたの未来の邪魔になる、と身をひこうとしたら、そのまま抱きしめてくるだろう。

「わかっています……」

康三はやっと顔をあげた。

「あれの……将の、あなたへの強い気持ちは、よくわかっています……」

さっきまでのように、眉をゆがめてはいないものの、その瞳はせつなく光って聡の姿を映し出していた。将によく似ている目の形。

康三は視線を一瞬クロスに落として、深く息を吐いた。

「だから」

そして意を決したように視線を再浮上させ、それを聡の瞳に集める。

「あなたが、将を捨ててください」

康三の声は、わずかに震えていた。

「将を捨てて……、姿を消してください。お願いします」

康三は言い切ると、三たび、頭を下げた。

聡はそんな康三をせつなく見つめた。

――わかってない。

将はきっと……聡の別れの言葉など一笑に付すだろう。

置手紙をして姿を消したとしても、どこまでも自分を探すだろう。

地の果てまでも。

目の中には窓の形に切り取られたような春の陽射しが映っているのに、聡はそこに猛吹雪を投影させていた。

あの北海道・ニセコアンヌプリ頂上の……不透明なまでの白い嵐を逃れての真っ暗な避難所の夜。

『もしも聡がいなくなったらどうする』という問いに、将は即答した。

『探す。世界の果てから新聞の陰まで。俺……アキラが小さくなっても絶対に見つけ出してやるよ』

ほんの、寒さと飢えしのぎの……たわむれのような言葉なのに、どうして今、こんなに沁みるのだろう。

そして、将にまつわることを思い出すとき……こんなときなのにもかかわらず……聡はしびれるような歓びに指先からひたされていく。

このうえなく、愛されている。

『アキラのためなら、なんだってできる』

その言葉の通り、殺されかけてまで自分を助けた将。

吹雪の中、助けに来てくれた将。

そして……死にもの狂いで勉強し、たった４ヶ月で偏差値を２５もあげた将。

聡はハッとした。

将は、東大に合格すれば、自分との結婚を許可してもらえると思って、頑張ってきたのだ。

それが叶わないとわかったら。聡は思わず問いを発していた。

「もしも……もしも将が東大に合格したら」

「不合格でした」

康三は顔をあげると厳粛に宣言した。

「え……」

発表は来週の火曜日のはずだ。なのにどうして。聡の疑問に答えるように

「発表は来週の火曜ですが、今日の段階で合格者は確定しています。大学の内部のものに極秘で問い合わせましたところ、不合格だったそうです。大変惜しいところまで漕ぎ付けていたそうですが」

康三は淡々と説明した。

「……そうですか」

聡はがっくりと肩を落とした。

やはり、たった5ヶ月やそこらでは、準備が足りなかったのだ……。

あんなに努力していたのに。将がふびんだった。

自分とのことはさて置いても、合格させてあげたかった……。

いや。

人間、どんなに努力しても報われないことだってあるのだ……。

むしろ、報われないことのほうこそ、多いのかもしれない。

自分たちの愛も……そんな報われない一つになのだろうか。

どんなに努力しても。

どんなに愛し合っていても。

その人生が縒りあわさって同じ方向に進むことはない……。

そのとき。

「ひなた」がお腹を蹴っ飛ばした。

まるで、違う、と叫ぶように強く。

聡は思わず袴に覆われたお腹に手を置いた。

それを目にしたせいか、康三はさらに続ける。

「先生の生活も……生まれてくる子供のことも、何一つ心配はいりません。金銭面その他、こちらで出来る限りのお世話をさせてください」

別れてくれという懇願から、その後の具体的な方策に話が移って、康三の話し方は、いくぶん滑らかになる。

「……もしも働きたかったら、仕事もその内容も最大に配慮してご用意いたします。ですから……将の前から、消えていただきたい」

康三の表情は、さっきのように苦しげではなかった。

親として、これが最善の決断であるという自信さえ見えていた。

「消えるって……どこへ」

なかば諦めながらも……聡の心の奥深くは、なおも将の愛情にすがっている。

どこへ行っても無駄だ。

自分を抱きしめるために１３００キロを寝ずに運転しきったその情熱で……きっとどこへでも追ってくる。

「ボストンに居心地のよい家を用意しました」

「……ボストン？」

思いがけない、アメリカ東海岸の都市。

聡とは何のかかわりもない町。

わかっているのは東京から見て、ほぼ地球の裏側にあるという事実だけだ。

地球のむこうとこちらに二人を隔てても……将はきっと諦めない。諦めるはずがない。

沈み行く聡の睫から、その心の中を悟ってか、康三はさらに言葉を追加する。

「……もちろん、一人でではありません」

意外な提案に、聡は俯きかけていた顔をあげた。

「生まれてくる子供には、私のほうでふさわしい父親を探しました」

――ふさわしい父親？

――この子の父親は将しかいない。それはいったい……。

聡が問い掛けるまえに、康三はドアに向かって声をあげた。

「毛利。入っていただきなさい」

扉が開いて……入ってきた男を見て聡は思わず立ち上がった。

……博史だった。

377◆忘れ雪　1

「あ、センセーだ」

会場となった小さなクラブに、聡が到着したとき、卒業パーティはすでに始まっていた。

クラスメートの声に、将が一瞬こちらを見る。

だが、すぐに興味なさそうに瞳をそらす。

……二人の関係が露見しないための演技が、将は巧くなった。

「センセー、こっちー！」

女子生徒に呼ばれてそちらへ向かいながらも、視線の端が引っ掛かったように、将を意識している。

「じゃ、先生も来たことだし、もう1回乾杯しようか」

さりげなく将が提案するのが聞こえる。

皆、異論はなく、ジンジャーエールやコーラが入ったグラスを持って立った。

「センセー、乾杯の音頭取ってよ」

なにくわぬ顔をして促す将に、聡は微笑みながら、グラスをとった――。

微笑みは意識してつくったものだ。明るい声は必死で絞り出したものだ。

――本当は、ここに来る力も残っていなかった。

あの高級レストランから自宅へ送ってもらった聡は……さっきからの一連の出来事に、激しく磨り減った神経を感じて床にへたりこんだ。

重い袴と一緒に体の芯が抜けてしまったように、そのままそこから動けない。

だけど。

もしかして、これが将の顔を見ることができる最後かもしれない。

康三の申し入れを受け容れるなら、将とはもう二度と逢えない……。

体はあいかわらず床に倒れこんだまま聡は、瞳をあげた。

将に会いたい。これが最後だとしても。最後に一目だけでも。

その思いだけが、聡をここに連れてきたのだ。

3時間ほど前。

さっきまでいた康三に代わって、聡と対峙しているのは博史だった。

康三は、聡のお腹の子供の父親として……そして聡の夫として、かつての婚約者・博史をあてがおうというらしい。

彼は、いったん博史に待合ラウンジに戻らせると、あらためて聡に向かい合った。

「無理強いはしません、ですが」

その瞳は、親として自分の子供の未来を考え抜いた気迫に満ちていた。

「将のためにも……そして、あなたのためにも、これがベストだと信じます。よく彼と話し合って……できるだけ早く、旅立っていただくことを願います」

将のため。

その言葉で、すべての拒絶も反論も封じられて……聡は動けなくなった。

ほぼ1年ぶりに向かい合う博史の顔を……聡は正視できずに俯いていた。

今、給仕によって新たに置かれたハーブティのカップの中に、かけ

る言葉を探すこともなく、聡の頭の中は空白だった。

いや、正確には空白ではない。

康三の……「将のために」という言葉だけが、すべてのシナプスにリフレインするように頭蓋の中に響き渡っていた。

将の未来に垂れ込める暗雲は聡自身――。

それは、聡も……ずっと前から自覚していながら、どうすることもできなかった。

わかっているのに。

聡の心が将を欲していた。将を必要としていた。

将の明るい未来へとつながる道筋を示しつつ……聡とその子供についても不義理はしないと約束した康三の具体的な案。

それを受け入れるべきなのは、とうにわかっている。

だけど、聡の心は……心の一部だった将を、今まさにえぐりとられるべく、血を流していた。

将のために、将の前から消える。

だけど将を失いたくない。

聡の中で、理性と感情はまっぷたつに割れて……それらが乖離した空間に、「将のために」というリフレインががなりたてる。

対峙する二人の間の、重い沈黙を最初に乗り越えたのは博史だった。

「……驚いたよ。こんなことになってるなんて」

『こんなこと』が何を……どこからどこまでを指しているのか、わずかに残った思考力では判断がつかなくて、聡の唇は動かない。

ただ、そのいたわりさえこもった口調で……博史はどういうわけか、聡を責めているのではないことだけが伝わった。

だが聡の瞳は、少しずつ冷めていくハーブティから浮上することはない。

博史の顔を見ることなんてできない。

かつて聡が彼にしたことを考えれば、のうのうと博史に声をかけるなどできないし……、それに博史と言葉を交わすそれだけで……聡がいまから行う将への裏切りの幕あけになるに違いないのだ。

「女の子だって？お腹の……」

将も知らないお腹のこの性別を……どういうわけか博史はすでに知っていることに、聡の胸はズキリと痛んだ。

それで、わかった。

レールは完成しているのだ。

そしてたぶん、そのレールから逃げることは許されないのだ……。

聡は奥歯をただ噛み締めるしかない。

「……乱暴な、話だと思うだろうね」

そう。乱暴な話なのだ。

別の……博史を裏切るきっかけとなった男の子供を孕んだ、前の婚約者。

そんな女と復縁して、自分とは何の関係もないお腹の子供の父親になれという、博史にとっても荒唐無稽この上ない話。

それなのにどうして、そんな穏やかな声を自分にむかって差し出すのだ……。

「だけど。僕は」

博史は、俯いたままの聡にかまわず、穏やかな口調のまま続ける。

「これも運命だと思う」

運命。

その強い単語に聡は顔をあげた。

博史は……これ以上ないほど真摯で温かい瞳を聡に差し出していた。

だけど、その温かさは聡を逆に怯えさせ、聡の視線は再びティーカップの底へ沈んだ。

その温かさを受け取ってしまったら。

受け取った、そのときから、将を本当に失ってしまうのだ――。

それに運命は……。

『アキラ……。やっぱり俺たち、こうなる運命だったんだ』

聡の耳元で、たった今囁かれたように――博史の言葉より鮮烈に――蘇ったのは将の声だった。

思いがけず妊娠して、動揺する聡に、将は力強く囁いたあのときの将。

運命。

そんな重い単語で、自分と結びあわさるのは……やはり将ひとりしかいない。

運命のひとは……将、一人だけ。

将だけなのだ。

「将のため」のリフレインはいつか、聡の記憶の中の将を、花火の

ように次々と花開かせた。

あどけなさが残る笑い顔も。

大人ぶった流し目も。

涙を堪えて歯を食いしばった苦しい顔も。

寂しげな背中も……みんな、みんな聡が愛した将だ。

そして。

あの、将が好きな夕陽の海。

宇宙に投げ出されたかのようなニセコ山頂の星空。

雨に打たれてずぶ濡れで歩いた森の匂い。

腕をからめて歩いた雪の中。

将を思い出すとき、聡の中には将にまつわる鮮やかな風景、そして音色、ぬくもりや風の感触、匂いまでもがいっぺんに蘇る。

すべては、将がいなければ、振り返ることもできない、意味もない日々。

そんな鮮やかな思い出ごと……将を捨てられるのだろうか。

将なしで……生きていく意味があるのだろうか。

壁紙を温かな色に染めて、午後の光が差し込んでいるにもかかわらず。

聡は将のいない、暗澹たる未来を思って、震えた。

378◆忘れ雪　2

「……聡。聞いてくれ」

闇に閉ざされた聡の心を知らない博史は、身を乗り出すようにして聡に語りかけてきた。

その真摯さは顔をあげられない聡にも伝わった。

……だが、聡の視線は博史のカップより上にあがらない。まるで将が引き止めているように。

「君が僕から離れて……いなくなって初めて気付いたんだ。僕の中の君の大きさを」

いなくなって。

そんなことを言っても。聡は心の中で反駁する。

留学から帰って以来、聡が博史と逢えたのは、年に3回だけ。

博史にとって聡など、いないほうが日常だったんではないか。

終わった恋にここまで辛らつになれる自分の冷静さに聡は呆れる。

「確かに、僕達は年に3回しか逢えなかったけど……。僕の帰りを待っている聡がいないのは……しみじみ堪えたよ」

……まるで聡の心が見えるかのような博史に、聡は思わず視線をあ

げてしまい……それは強くて太い博史の視線にからめとられてしまった。

博史はそれを待っていたかのようだった。

「聡。僕は、君をきっと幸せにする」

聡はおびえて唾を飲み込んだ。

抵抗するように、博史の声音のどこかに軽軽しさを探そうとしたが、無駄だった。

博史の声は、聡の人生を引き受ける覚悟に満ちていた。

博史の視線は、聡への愛情で、拒否しようとする聡の皮膚にさえしみこんでいくかのようだった。

ありえない。

聡はなおも思う。

自分を幸せにできるのは将、ただ一人だけ。

聡は博史の愛情を受け止めてしまいそうになる自分を許せなくてすぐさま視線を下にそらした。

そのとき、ぐるりとお腹の中の『ひなた』が聡の中で動いた。

皮膚から沁み込んだ博史の視線が血液を通ってひなたに到達したのだろうか。

そして、それを恐れたのだろうか。

「形式だけでいいんだ。……お腹の子供のためにも、僕と結婚してくれ」

それをも見えたかのように、博史は『ひなた』のことを口にした。

――お腹の子。ひなた。将の残した大切な赤ちゃん。

もしも。

将の幸せのために……康三の申し入れを受け容れるなら。

将と別れるならば。

それを考えるだけで、張り裂けそうになる心を堪えて、聡は……一歩先を……『ひなた』のことに考えを進めてみる。

将と別れるならば。

『ひなた』は父を知らない子になる。

将が父であることも……おそらく口にすることは禁じられるのだろう。

生まれたときから、父なし子。

シングルマザーが多い現代だとはいえ……愛するわが子に、お前は両親の愛の結晶なのだ、二人が待ち望んで生まれたのだ……それを

伝えられないのはどれだけ悲しいことだろうか。

一度動き出したひなたは、お腹の中で、ごぼごぼと動き続ける。

『お腹の赤ちゃんは、お母さんの心がわかるんですよ』

いつか医師が言っていた。

ひなたは……自分を父なし子にしないで、と必死で体を動かしているのだろうか……。

「生まれてくる子は、僕の子だ」

聡は再び顔をあげた。

博史は澄んだ瞳で聡の瞳が戻ってくるのを待っていた。

「聡が産む子は、僕の子だ」

……違う。『ひなた』は……将の。将の。

――将に似た子がほしい。

それは聡の願いだった。

大きいのに鋭い印象の、強い瞳は聡を見つけると和らいだ。

強い意志を示すような眉は照れて笑うと驚くほど角度を変え。

少女のように愛らしい唇は、涙を堪えて歯を食いしばるとき凛々し

い男になった。

きっと聡は……生まれ出た『ひなた』のあちこちに将の面影を探すに違いない。

将の断片が成長する姿を楽しみにするに違いないのだ。

「子供は、絶対に可愛がる。僕は……きっといい父親になるよ。できる限り、いい教育を与えるよ。……聡？」

博史が心配そうに聡をのぞきこんだ。

知らないうちに聡は、涙を流していたことに、今気付いた。

聡の中ですべてが遮断していたのだ。

――将。

ひなたのために、将のかわりに……博史をあてがう。そんなことがいったいできるのだろうか。

将を忘れて、博史を愛する未来は訪れるのだろうか。

かつては、逆だったのに……ひとたび考えて聡はなおも否定する。

逆だったのではない。

将と出会っていなかったから。

将を知らなかったから……なのだ。

いったん将を知って、愛してしまったからには……もう博史の元へは戻れない。

「……鷹枝くんのことは」

聡の涙から察したのか、博史は、将の名前を舌に乗せる。

それはいかにも苦そうに……博史の顔が一瞬歪む。

「……聡が、忘れられるまで、ずっと……待つよ」

……じゃあ、一生、忘れられなかったら？

聡は即座にそう問い掛けたくなる。

だが、一瞬苦しげに歪んだ博史の瞳は、次の瞬間、光を放って輝いた。

「聡、頼む。……俺を利用してくれ」

利用。利益のために、用いる……聡にとっての、一方的な打算。

そんな風に結婚を申し出て……博史は、それでいいのだろうか。

聡は、涙をぬぐいながら、かつてのクリスマスを思い出す。

あのとき……博史は、余命を宣告された母のために、結婚を早めようとしていた。

子供も早くつくって孫の顔を親に見せたいと言っていた。

それは親の残り少ない人生を、少しでも喜ばせたい、きれいな打算だった。

そんな打算を頭では理解しつつも……今考えれば、聡の心が博史から急速に離れた原因にもなったと思う。

だけど、今回は。

聡の事情のために……博史は自らの人生を投げ出してもいいというのか。

「聡のために生きさせてくれ」

博史はなおも訴える。

その見開いた細い瞳に、聡はあることを思い出す。

思い出したとたん、心臓がぎゅっと収縮し、動きを速める。

博史によく似ていた……博史の母・薫。

クリスマスに余命1年だといっていた。

『一緒にカナダの紅葉を見に行きましょうね……』

優しい声が、たった今聞いたように蘇る。

「あの……」

涙を拭った光沢のあるナプキンを置くと、聡は思い切って問い掛けた。

「お母……様は？」

聡からのひさびさの返答に、いったん表情を和らげた博史だったが、その問いは予想外だったようだ。

何回かまたたきをすると、とっさに目を伏せる。

控えめながら……ふいに噴出しそうな悲しみを、隠すような博史の瞼の動きに、聡は答えを聞く前に、おおよその答えがわかってしまった。

「……亡くなったよ。去年の４月に」

聡は、ああ、と声をあげそうになるのを必死で止めて……大きく息を飲み込んだ。

２年前の１１月の時点で余命１年といっていたはずなのに。

それを待たずに……ずっと早くに博史の母・薫は逝ってしまったのだ。

――自分のせいだ。

聡は……息ができなくなった肺を心臓が責めがごとく圧迫するのを感じている。

「聡のせいじゃない」

凍りついた聡の顔を見て、博史が助け舟を出す。

「あのあと、一度よくなったんだ。……花見にも行けたんだ。だけど桜が散るなり……急に悪くなって……再入院して2週間でダメだった。……聡のことは関係ない」

博史の口調は、淡々としていた。

それは……強い悲しみが、ようやく乾いた痕跡ゆえということに聡は気付いている。

聡の頬を涙が再び伝った。

きっと、きっと、自分のせいなのだ。

あの優しいひと……薫から生きる希望を失わせたのは自分だ。

そうでなければ、余命1年が……半年近くも短くなるはずがない。

――きっと、自分はいつか罰を受ける。

聡は強く予感した。

379◆忘れ雪　3

「センセ。何、っボーっとしてんの」

ハッと顔をあげた聡の目に、懐かしい将の笑顔が飛び込んできた。

卒業パーティは1組の生徒と合同かつ在校生も出席可能なため、かなりの盛り上がりを見せていた。

色鮮やかな光が入り乱れる中、音とたわむれるように体を揺らす者、ボックスで笑いあいながらおしゃべりに興じるもの。

皆、制服を脱いで私服に着替えてきているせいか、言われなければこれが高校生ばかりだとは思えない。

おそらく、アルコールがないだけで、ふだんの営業どおりのクラブの姿に近いだろう。

その中にいた将が……いつのまにか聡の目の前に立っていた。

将目当てでこの場に参加した下級生の女子なども多いらしく、注目が集まるのがわかった。

将のその顔を見ただけで、目の奥が熱くなりそうになるのを……聡はぐっと堪える。

将は注目などなんでもないように、あつかましくも聡の隣にいた女生徒を押しのけて隣に腰掛けた。

女生徒からのブーイングを

「もう、俺、行かなきゃいけないからさー」

と軽くいなして、将は聡の顔をのぞきこむようにした。

行かなきゃいけない。

その言葉に聡の心臓は人知れず大きく振動した。

将のために。決心してしまった聡。

決心してしまったら。

今が、将との……永遠の別れになる。おそらく。

そんなことなど何も知らない将は、聡にさりげない言葉を掛ける。

「体、大丈夫？」

その瞳の中で、ライトがくるくると万華鏡のように煌いている。

……聡だけに向けられる優しい瞳。

別れたくない。離れたくない。離れられない……。

泣いてすがりたい衝動を聡はぐっと押し込めて、頷いた。

決意は必ず下さなくてはならないのだ。

わかっている。

「そういえばさー」

聡の様子にまるで気付かない将は、聡の隣でソファーの背に寄りかかった。

熱い体温。聡の血液の中の鉄を体の片側に一斉に集めてしまうような将の磁力。

顔をみなくても……気配だけでもいとおしい……将。

このまま……将の肩にもたれかかりたいのに、許されない自分。

もう一度、最後に……将に触れたい。

将の肌に触れたのはいつが最後だっただろうか。

聡が記憶を遡っているとも知らず、将は『世間話』を続ける。

「センセーの、お腹の赤ちゃんって、男？女？……そろそろわかるんだろ」

ごぼ。

お腹の中で『ひなた』が反応する。

この子にとっても……実の父親とはこれが最後なのだ。

一生、顔をあわせることのない父親……。

将は、いつか自分のことも、ひなたのことも、まったく忘れるのだろうか。

将の中で自分の重みがまったくなくなるとき。

そんな日は未来永劫、来ないほうが自然だった。

将は去った自分を探すだろう。……あるいは待つだろう。

いいや。

聡は、そんな考えを振り払う。

いつまでも自分への思いをひきずってもらっては困るのだ。

将の幸せのために、将から離れるのだから。

だけど……将が自分を忘れる日を想像した聡は、心の奥から狂おしいほどの悲しみが湧きあがってくるのを必死でこらえる。

「ナイショ」

聡は心を隠してそっけなく呟いた。

どうせ忘れてしまうなら……お腹の子のことはできるだけ知らせない方がいい。

聡はそう思って、ひなたが将の望んだ女の子だったことを隠した。

「ちぇー」

将はわざとらしく大声を出した。

「ま、生まれたらわかることだけどぉ」

「センセーってば、ウチらにも絶対教えてくれないもん」

チャミが甲高い声で口を挟む。

「ダンナさんにもナイショなのー？センセ」

カリナの問いに、聡はうなづく……口の端を上げるだけでせいいっぱいだった。

『ダンナ』が暗に自分を指していると思い込んでいる将は、聡にだけわかる笑顔を向けてきた。いかにも嬉しそうだ。

その笑顔に聡は激しいせつなさを感じ……思わず目をそらした。

だけど。これでもう最後かもしれない。

脊髄反射のように、聡の視線はゴムひものごとく将に戻っていく。

将は聡とたしかに視線があわさったのに満足したのか立ち上がった。

「じゃ、俺、そろそろ行くわ」

「えーもう？」

その場にいた同級生から声があがる。

「だって、最終便８時なんだもん」

「何、ドラマ？」

「そーそ。最終回が残ってるし」

ドラマ、という単語に、聡は将の才能の１つを思い出す。

元倉亮脚本によるドラマは、視聴率こそ１３％台と地味ながら、一定の評価を得ていた。

『峻を演じる鷹枝将の、哀しい過去を暗示しつつの爽やかな演技は、まだ１０代だとは思えない存在感がある。このドラマを最後に俳優は休業ということだが大変惜しいことだ』

聡は最近見た新聞のドラマ評と共に、将が雪の中に立ち尽くすドラマのワンシーンを思い出す。

それはたしかに胸を打たれる姿だった。

将本人の過去を知らずとも、同じような感慨を視聴者に与えられる力量を、その記事は示していた。

その記事を見たとき、聡は、嬉しさと共に、そこまで素晴らしい将の才能の一つを自分のために捨てさせることにおののいたものだ。

だけど、それも。

聡が将から離れれば。将はその才能を無碍に捨てる必要はなくなる。華やかな才能はいつか芽吹いて花を咲かせる日もあるかもしれないのだ……。

「……じゃ、センセ」

その声に、聡の体はびくんと震えた。

将は、聡の傍らを立ち上がると、再び聡を見下ろした。

――いかないで。

……もちろん聡の喉は渇いて貼り付いてしまったかのように声が出ない。

聡の心から流れて行きそうな柔らかくて熱い部分を……冷静な理性が必死で固めている。

「合格発表の結果は連絡するから」

――不合格、だったのだ。

そんなことを伝えることもできず、聡はただせつなく将を見上げる。

理性は声帯を凍りつかせるのがせいいっぱいで……何度もまたたきをして……涙は押し留めているものの、せつない思いが瞳からほとばしり出てしまうのを聡は止めることができない。

それに、今年からより難しくなったといわれる後期で、万が一合格

したとしても。

二人の運命はもう決まっているのだ。

いや。

聡は決めざるをえないのだ……。

そのとき。

将はすっと手を差し伸べた。

一瞬、すべてを知っていた将が……自分を連れてどこかへ飛び去ろうとしているのかと、聡は大きく期待した。

しかし、その指のクラシックな揃え方で……聡は瞬時にその期待がありえないことに気付く。

将は生徒として、恩師に握手を求めているのだ。

聡はせつない視線を制御できないまま、立ち上がると、将の求めに応じて、握手を返した。

熱い、将の掌。

それを知ったのは……まだ聡が将の担任になってまもない頃の……たしか夜の港だった。

ふいに握られた手を通して、将の血潮が流れ込んでくるような感覚。

博史という婚約者がいながら、それは聡にとってちっとも嫌な感覚ではなかった。

むしろ心にありえないほどの温かさを感じて……聡は素直にそれを握り返したはずだ。

あのときから……将は聡にとって、かけがえのない存在であると自覚したのだ。

……今、聡はそのかけがえのない愛を手放そうとしているのだ。

この手が離れたら。

それこそ、最後。

離したくない。

離さないで……。

聡の願いもむなしく、握り合った手は、あっけなくほどけていた。

聡の掌に、熱い感触のリフレインを残して。

それは、誰が見ても自然な握手だったのだ。

「じゃあね。センセ」

――行ってしまう。

これが将と最後の邂逅だとわかっているのに、聡の体は凍り付いた

ままだ。

笑顔の将がゆっくりと、後ろを向く。

瞬きさえ惜しいのに……涙を堪えるために、聡は何度も瞬きをしなくてはならない。

大きな荷物を抱えて……フロアの皆に小さく手を振りながら、将が遠ざかっていく。

それは、聡無しで将が羽ばたいていく姿のように、聡には見えた。

――行かないで。

感情はあいかわらず叫んでいる。だけど

――どうか、幸せになって。

それを凌駕する強い祈りが聡を立ち尽くさせていた。

千々に乱れた聡の心中を知ることなく、将は……ついにドアの向こうに消えた。

ドアの向こうに……雲ひとつない未来が広がっていることを。

願った聡の瞳からは、とうとう大粒の涙がこぼれ落ちた。

380◆忘れ雪　4

「さきほど古城先生から連絡入りました。……決心されたそうです」

毛利の報告に、康三は手元の法案関連資料を読む目を一瞬止めた。

国会も忙しいこの頃、康三は土曜日の朝から事務所に来ている。国会が開催される平日にはできない雑用が山のようにあった。

「そうか……。それで、いつ出発すると？」

すぐに資料の続きに戻りながら、肝心なことを訊き返すのは忘れない。

「来週の土曜日、１３日に発つそうです。……将さまの後期試験が終わるまでは、すべてを伏せておきたいとのことです」

前期試験に不合格だった将は、３月１３日に行われる後期試験に最後の望みをかける。

その当日、将がチャレンジするのを見届けて聡はアメリカのボストンへ博史と共に旅立つというのだ。

東大に受かろうと落ちようと、もう二人の行く末は別々のものだと決まってしまっている。それを敢えて望みがあるようにふるまうのは。

「そうか……」

康三は理解した。

聡はせめて最後に、なんとか将を東大に合格させてやりたいのだろう。

それが……将を裏切る形になる聡の、教師としてのせめてもの、愛の証なのだろう。

康三は少し胸が痛むのを自覚した。

これほど、将の幸せをだけを考えることが出来る女。

そしてその女のために立ち直り人並ではない努力をなしとげた将。

そんな二人を引き裂くことへの罪悪感が康三の心にヒリヒリと沁みる。

――タイミングが悪かったのだ。

――人には立場というものがある。

教師という立場にありながら、教え子を愛するからいけないのだ。

よしんば、愛は許されたにしても。

せめて教え子が社会的に自立するまで、どうして待てなかったのか……。

康三は自分に言い訳する。

言い訳をしながらも、次々と不安材料は湧き上がってくる。

将は……聡を失ってどうなるのだろうか。

下手をすれば、また荒れてしまうのではないだろうか――。

歯止めとなる巌も……もはやこの世にはいない。

資料を読もうとする康三だったが、内容は脳に入らなくなってしまった。

――いや、大丈夫だ。

康三はついに資料をデスクの上に置いた。

聡が、将を捨てるのだ。

すべては聡を恨むようにしむければいい。

康三や純代ら家族は……将に同情的な立場をとりながら、心を癒すよう努力すれば、前のように荒れることはない。

それに、将はまだ若いのだ。

一人の女に裏切られたとしても、すぐまた別の女に心惹かれるに違いない。

康三は自分を無理やり納得させようとしたが、心の歯車がかみ合わず……ついに若い秘書官にコーヒーを頼むとため息をついた。

「お母さん、聡さんが博史と仲直りしたんだよ。……赤ちゃんもお腹の中にいるんだよ」

博史の父・慎一は墓に語りかけた。

そして、ぜひ見せてあげたかった……と、ハンカチで目頭を押さえた。

前に会った時よりいっそう白髪が増えているその姿を見て、聡は胸が痛んだ。

日曜日の今日。

聡と博史は、慎一に報告がてらレストランで昼食をとった。

その後、墓の中にいる博史の母・薫に報告するべく、彼岸には少し早い墓参りとなったのだ。

今日は卒業式の日と打って変わってぐっと冷え込んで、墓の前にいる博史も聡も慎一もコートを着込んでいる。

どうやら強い寒気が流れ込んでいるらしい。夜には雪になるのかもしれない。

「桜のつぼみもこごえちゃうねえ。……桜が咲くのを見てから出発すればいいのに」

慎一は二人に向かって微笑みかけた。

そんな風に……急に老け込んだ父を博史はかばうように促した。

急な聡の妊娠報告に、急な博史の留学――博史は会社を辞めて、ボストンにある工科大学の大学院にこの秋から社会人入学することになっていた……もちろん康三の力である。

『お盆に帰国したときにヨリを戻してそのときに子供も授かったのだが、薫の死もあり言いにくくて隠しているうちに、博史の留学が持ち上がり……それで間際まで言いそびれた』

そんな取り繕った言い訳を、一気に老け込んだ博史の父は、まるで疑おうとしないのだ。

ただただ、

「そうか。そうか。よかったな……」

と目に涙をためるのみだった。

「あきらさん」

別れ際に慎一は、深々と頭を下げた。

「博史を、よろしくお願いします」

この人のよさそうな紳士をも、騙しているのだ……。

息をするのですらためらうほどの罪悪感に押しつぶされそうな聡は、何と返事をしたか覚えていない。

今後……ひなたが生まれた後も、ずっと同じ罪悪感に責められるであろう……聡はそれが自分に与えられた罰の1つだと受け容れるしかない。

「聡……きいてる？」

気がつくと、博史と二人、タクシーの中にいた。

慎一と別れた後、寒いからとタクシーを拾ったことを思い出した。

低く雪雲が垂れ込めた空は少し暮れかかっているようだ。

「……ごめん、何？」

「夕食はどうする？」

「……昼ごちそうを食べたから、うちで簡単に済ますわ」

「あきら」

無理に笑顔をつくった聡に、博史は真剣な顔で向き直った。

「俺に……気をつかうなよ」

いつのまにか、『僕』という呼び方が、『俺』に戻っていることに

聡は気付いた。

昔からそうだった。パブリックな場所では『僕』、二人きりのプライベートな場所では『俺』。

どうでもいいことが気になるのは、二人の関係が昔に戻っていくことを、心の奥深くでは、まだ恐れているのだろうか。

将を捨てて……昔の男に戻ることを。

せつなくなった聡は、小さく微笑み、小さく頷くしかない。

「俺は」

博史はさらに細い目を見開くようにして、続ける。

「俺は……負担でも、なんでもないんだからな。……夫婦になるんだから、何でも言えよ。つらかったら頼ってくれよ」

優しい。

そうだ。博史は昔から優しかった。

頼りになる年上の男――。

自分を包み込んでくれる……。

「ありがと」

だけど聡は涙を必死でこらえていた。

泣いてはいけない。涙を見せてしまったら……博史は自分を抱き寄せるだろう。

まだ。

将を裏切りたくない。

もう逢えないけれど。一生顔を見ることも許されないけれど。

13日、後期試験のその日までは……将を励まし、力づけたい。

将がせめて……東大に現役で入れるよう。

最後のチャンスに最高のコンディションで向かわせるべく。

北海道にいる将からのメールや電話に……聡は何事もなかったかのようにふるまっていた。

将が東大に受かりさえすれば、二人の結婚が許可されるという、最初の約束が有効であるかのように……。

381◆忘れ雪　5

部屋の中に入るなり、聡は携帯電話にすがりつくようにしてメールをチェックした。

博史の前では開けることができない携帯には……やはり将からのメールが着いていた。

金曜日――卒業式以来、将は、ことさらまめにメールや電話を聡によこしている。

金曜日の夜も……北海道のロケ現場近くのホテルに到着するなり、電話をかけてきたのだ。

「この土日、アキラもこっちに来たらいいのに」

甘えた口調でそういった直後に

「……そのおなかじゃ難しいか」

と自分で納得している。その表情は聡には手に取るようにわかる。

……もう逢えない。

そのとき、聡は将のために最後の決意を固めていた。

いままで何度も同じ決意をしては、将への愛着故に崩れてきた……だけど、今回は覆すわけにはいかないのだ――。

顔を見ることは、もう一生ない……そう思うと電話から伝わる将の声は、聡をいっそう切なくさせて……聡は涙声になりそうになるのを一生懸命こらえた。

涙をこらえるべく、何気ない質問を探す。

「……撮影はいつまでなの？」

「９日か、天気が悪かったら１０日までかかる」

「そう……」

９日。東大の前期の合格発表の日だ。そのことに聡の心は、再び痛む。

「合格発表は、ハハオヤに知らせてもらうことにしてるから」

まだ何も知らない将。あんなに頑張ったのに不合格だったのだ……どんなにがっかりするだろうか。

つくづく電話でよかった、と聡は思った。

もし目の前にいたら、将はすべてをわかってしまうだろう。

「もし合格してたらさ」

まだ、不合格を知らない将が明るく続けたので聡はハッとした。

「クランクアップしても、俺、東京には帰らない」

「え」

「こっそり、東京じゃないところで落ち合おうぜ。仙台とか名古屋とか」

たとえ合格しても、そう簡単に結婚させてもらえないのではないか。

それを心配したのだろう、将は二人で雲隠れすることを提案した。

「アキラももう学校休めるんだろ。どこがいいかな」

――もうその必要はないのだ……。

楽しそうに計画を話す将に、聡は胸が苦しくなる。

「前期がもしダメでも後期があるし。後期は絶対大丈夫だよ」

沈黙する聡を、将は試験への杞憂と理解したらしい。

「……大丈夫。後期試験を受けることになっても、仕事に影響なんかさせないから。最後まできっちり『峻』になりきるし。そういえばさ、今日現場でさ……」

あまり心配させてもいけないと思ったのか、将は話題を変える。

いつものように、撮影現場での出来事を面白おかしく報告する。

そこには……ベテランのスタッフや芸達者な共演者から愛され、期待される将の姿が浮き彫りになっていた。

――大丈夫。将は……たくさんの人に囲まれている。支えられている。

だから、きっと大丈夫。

聡がいなくなっても……きっといつかはきれいに忘れられる。

＞今日ホテルで、赤ちゃんを連れたファンの人にサインをした。ついでに赤ちゃんを抱かせてもらった。チョー可愛かった。俺らの赤ちゃんが待ち遠しい

今日の、将からの短いメールには、他人の赤ちゃんを抱いた将の画像が添付されていた。

日曜日の今日だから、ホテルの宿泊客の家族だろうか。

まだ生後半年くらいのぷくぷく太った赤ん坊を不器用そうに抱っこしながら将は歯をむき出しにして笑っていた。

『俺らの赤ちゃん』を将は、こんなふうに抱くことは、一生ない……。

だけど、それでいいのだ。

携帯を閉じた聡は、夕闇をカーテンで隠そうとして、窓の外に舞うものに気づいた。

ぼってりと暗い雪雲は、ついに3月の雪を落とし始めたのだ。

聡は思わず窓をあけて、手をかざしてみる。

雪は羽のようにひらりと舞って聡の手の上に落ちた……とたんに解けて、あとかたも残らなかった。

……はかない。

聡は手の上に、たしかにあった雪の姿を思い出そうとした。

だがそれは、もはや、おぼろげにしか浮かばなかった。

自分たちの恋も……こんなふうにはかないものなのかもしれない。

聡はわざとそう思ってみる。

しかし雪は、それに抗うべく、確かに経験した二人の思い出を連れてきた。

あの、雪に閉ざされたニセコの頂上を。

雪の中、腕をからませて歩いたクリスマスを。

あのとき、雪は二人を包んで……解けてしまうことなど未来永劫ないように思えた。

二人には甘く懐かしい思い出が、今の聡には、せつなすぎて息もできないほど苦しい。

だけど。

そんな雪の思い出も……いつか解けてしまうのだろうか。

将への……断ち難いこの思いも……解けて消えてしまうのだろうか。

この痛いほどのせつなさも……感触すら思い出せないほど淡い記憶になってしまうのだろうか。

そんな日など、果たして来るのだろうか。

暮れゆく空から無数に舞い降りてくる雪。

そのひとひらひとひらに将との思い出を散華させるべく……でもできなくて。

聡はただ雪を見つめて窓辺に立ち尽くしていた。

夜。

聡との電話を切った将は、なんだか胸騒ぎがするのを感じた。

ちなみに金、土、日と、このところ毎晩寝る前に必ず聡に電話を入れている。

聡の様子がおかしい。

どこか寂しげというか……変だ。

金曜日の……卒業式のあとのパーティからずっと感じていることだ。

そんな聡が、将を心配させないようにと、なんでもないようにふるまっているのも、わかっている。

だけど……聡が取り繕えば取り繕うほど……はかなげなほどの寂しさが却って浮き彫りになるようだった。

卒業したことで、学校ではもう逢えないからだろうか。

……将がもし不合格になれば、このまま二人は引き裂かれてしまう。

そんな心配が身近になっているのだろうか。

合格が盤石というわけではないゆえに……心配をさせてしまう自分が、将は歯がゆかった。

将はベッドを下りると窓辺へ近寄った。

あけたカーテンの形に、降りしきる雪が切り取られて浮かんだ。

『東京も、今日は雪が降ってるよ』

さっき、聡は言っていた。

『これが止んだら、きっと暖かくなるね』とも。

大丈夫。今を乗り越えれば、二人にも春がやってくる……。

そう伝えられれば。

できることなら、今すぐ飛んで行って抱きしめたい。

「大丈夫だよ」と耳元で囁けたら。

東京に降りしきる雪の下で眠る聡とそのおなかの子供のことを、将は3月の雪の中に思い浮かべる。

382◆後悔

「大丈夫？　聡」

空港に無事着陸したアナウンスが響くなり、傍らの博史が、顔とお腹をかわりばんこに眺めながら気遣ってくる。

「うん……。なんともないよ」

聡はお腹をさすりながら微笑んで見せた。

お腹の中の『ひなた』は飛行中も静かに眠っていた。

火曜日。

聡は萩にいる両親に、博史との結婚を報告するべく、彼とともに山口・宇部空港行きの飛行機に乗っていた。

妊娠８か月での空の旅は本来は控えたほうがよいのだが、では代わりに新幹線は、といえば長時間の振動はさらによくないようだった。

聡の体調が良好ということで早産さえしなければ、おそらく問題はないだろう、と医師のお墨付きをもらっての今日の萩行きとなった。

ちなみに今週末のボストンへの旅は、康三の指示でわざわざ医師を同伴することになっている。

博史は

「ご両親に東京に来てもらえば？」

と聡の体を気遣ったが、聡自身が萩を訪れることを強く希望したのだ。

聡は微笑みをつくりながらも、別のことが気にかかっていた。

――今日は、合格発表の日。

ドラマの撮影にさし障ることがないよう、発表は撮影が終わる夜を待って、義母の純代から将に連絡することになっている。

不合格を知ったら将は……。

『やれるだけのことはやった』。

試験直後の力強い将の声は、おそらく合格を信じていたのだろう。

それが不合格だとわかったらどれだけ傷つくだろうか。

あらかじめ電話で伝えていたものの、聡の両親は、聡のお腹を見て驚きを隠さなかった。

両親の喉を、ほぼ同時に固唾が落ちていくのを目にした聡は思わず下を向いた。

「こんなことになってしまい……報告が遅れて申し訳ありません」

博史は額を畳に擦り付けるようにして頭を下げた。

ここでも、博史の父にしたのと同じ説明を繰り返すしかない。

お盆にヨリを戻してそこで子供を授かった、という嘘だ。

果たしてそんな嘘が親に通じるのか、聡は心臓が逃げ出さんばかりに足踏みを始めるのを感じた。

そもそも、前に帰省した時、博史とは結婚しないと宣言してしまった聡である。

「それで、お正月に帰ってこなかったのね……」

母・幸代の眉が寄っている。そんなにお腹が大きくなるまで実の親に妊娠を隠していた聡を責めているのだ。

「……それで予定はいつなの」

責めながらも幸代は聡の顔とお腹を心配そうにかわるがわるに見つめながら問い返してきた。

「……5月」

「じゃあ、赤ちゃんは向こうで産むの？」

今週末にボストンへと発つことも、今伝えたばかりだ。

「……そうなると……思う」

幸代はそのまま絶句すると、傍らの大二郎を振り返った。

「ずいぶん、急なんだな」

大二郎は、渋い顔を崩さなかったが、心配そうな聡の顔をちらりと一瞥すると、諦めたように

「娘は……聡はもう大人だ。その大人が決めたことなんだから、何も言えん」

とため息とともに言葉を投げた。

「本当にすいません」

もう一度頭を下げる博史を見ながら聡は、つい想像してしまう。

もしも。これが将だったら。

本来なら、将が東大に合格したら。

こうやって頭を下げているのは将のはずだったのだ。

博史のように社会人でもなく、高校を卒業したばかり、しかも教え子にして担任を孕ませた将に……両親はどんな態度をとったのであろうか。

いや。

たとえ怒鳴られようとも。勘当されようとも。それでよかったのだ。将と一緒になれるなら……。

聡はハッとした。

この期に及んで、まだそんなことを考えているなんて。

怒鳴られて、勘当されて、世間の目から隠れるように生きる。

そんなことをさせたくないから、この道をえらんだのに。

聡は未練がましい自分の心を、引きちぎって捨ててしまえれば、と唇を噛んだ。

「……聡。去年のお正月に……博史さんとは結婚しないっていったやろ？」

幸代は意を決したように、人参の皮を剥く聡に問いかけてきた。

聡と幸代は……早めの夕食の支度をすべく二人で台所に立っている。

作っているのは聡の家の冬の定番である肉団子が入った鍋である。

――将も好きだった鍋であることは考えないように聡は一心に包丁を動かして野菜の皮を剥いていた。

両親は、急な報告をした聡と博史の二人に、それでも泊まっていけばいいと勧めた。

一人娘がいきなり結婚して外国へ移住すると聞かされたのだから、別れを惜しむのは当然だと言える。

だが博史は

「明日、役所で入籍しますので」

と断った。入籍と聞いた聡はびくっと肩をふるわせた。

今日、聡の両親の許可をもらって早々に入籍するのは、二人で話し合って決めたことだ。なのに。

将ではない他人の妻に……法律で定められてしまうことに、聡は震えてしまう。

「じゃあ、せめて夕食だけでも……ね。６時前に出れば大丈夫でしょう？……聡、ちょっと手伝って」

聡の様子を黙ってみていた幸代だったが、こうやって聡を台所に連れ出したのだ。

どきりと揺れる心臓にあわせて、全身がふるえたのではないかと一瞬ひやりとする。

「……あのときはそう思ったんだけど、夏に、ヨリを戻したの」

しかし何事もなかったように打ち合わせた通りの回答を明るく声にする。

「玉ねぎ、刻むね。肉団子に入れるでしょう？」

何気なさを装うために聡は幸代が持ってきた玉ねぎを取り上げると、薄皮を剥く。

「……ほかに好きな人ができたっていっちょらんかった？」

去年の正月。博史が結婚のあいさつに来たとき。聡は母の幸代に温泉で密かに

――ほかに好きな人ができたから、博史とは結婚しない。

と伝えたのだった。

聡は幸代のさらなる問いかけが聞こえなかったかのように手元を動かし続けながら、必死で答えを編み出している。

答えを考えている脳の裏側では、去年の正月、ここで将と愛を確かめ合ったことが蘇っている。

１３００キロを寝ずに走って聡のもとにやってきた将。

その将に……『好きなのは将だけ』と伝えたのもこの家だった。

あのとき聡の心にいたのは将だけだった。

いや、今も。愛しているのは将だけ……。

「……ダメだったの」

思い出に押し出されて湧き出てきそうになる涙を、できる限り明るい声で吹き飛ばす。

明るい声にあわせるようにリズミカルに包丁を動かし、手元の玉ねぎをみじん切りにしていく。

「失恋……しちゃったんだ。それで博史さんがなぐさめてくれてね」

そう、本当に。聡は失恋しつつあるのだ。

振られたり、振ったりするだけが失恋ではない。

こんな風に……深く愛し合っていても実らない恋だってあるのだ。

聡は、今まさにかけがえのない恋を手放そうとしている。

自分から、将を捨てようとしているのだ。

それを自覚した途端に、耳元で将のささやきが蘇る。耳の産毛が震える感触も鮮やかに。

――アキラ。アキラ愛してる。

――俺は、アキラだけだから。

――アキラがいればそれでいいんだ……。

手放したくない……将。

「……聡？」

まな板にぽたりと涙が落ちて、幸代が心配そうに聡を見上げる。

「ごめん。……この玉ねぎ、めちゃくちゃ滲みるね」

聡は包丁を置くと、台所に置いてあったティッシュで涙をぬぐった。

「大丈夫？……聡」

背後から心配そうな幸代の声。

「うん。ちょっと滲みただけ」

思い出が、ほんの少し、心に滲みただけなのだ……。

聡は何でもなさを演出するために、さらにティッシュで鼻をかむと微笑んで見せた。

「聡」

幸代は聡の正面にまわった。

聡より背が低い幸代だから、聡を少し見上げる形で……聡の瞳を直視した。

「本当に、博史さんと結婚するんね？」

母の強い視線に聡はとまどった。しかし目をそらすわけにはいかない。

これは自分が決めたことなのだ。

将のために、決意したのだ……。

聡は母の瞳を見詰めたまま、無言でうなづいた。

「後悔は……しないんやね」

後悔。

その単語に聡の心の奥深くがことりと音をたてた。

もう……すでに悔いている部分を聡は自覚していた。

でも。

自分の気持など、二の次でしかない。

大切なのは、自分より大切な将の、将の幸せ。

そのためなら、後悔することになっても、かまわない。

そう思っているのは本心なのに。

なおも将を求める心の奥深くは、血を流しながら叫んでいる。

――将と離れたくない。

――将と別れるなら生きている意味がない。

封印していた奥底で渦巻く激しい感情は、母が口にした『後悔』という単語によって、一気に動脈を伝って心臓を激しく叩いた。

聡はなんとかそれを押し殺してもう一度強くうなづいた。

だが、瞳は。

……理性のコントロールの及ばない瞳からはすでに涙がこぼれおちていた。

「聡……」

次の瞬間、聡は母にすがりついていた。

母親を目の前にして、タガがはずれてしまったかのように。

涙はあとからあとからあふれ出てくる。

「バカな……バカな子だね、この子は」

幸代は、もはや何も訊かなかった。ただ聡の背中をそっと撫でる。

３８３◆最後の望み（前書き）

383◆最後の望み

「……それで聡さんのご様子は？」

鷹枝家の居間。いつものように毛利が報告をすべく純代と向き合っていた。

「……はい。健康的には何も問題ないとのことです」

「そう。よかったわ……それで、新しいお部屋のほうの準備は？」

将の前期不合格を告げられた聡に異変が起こるのを心配してた純代はほっとした顔になった――純代は康三になにも知らされていない。

毛利は何食わぬ顔で……康三には、聡が博史とボストンへと旅立つ準備が整った報告をし、そしてその妻の純代には将との約束がまだ生きているかのように立ち回っている。

「都内の、病院の近くにマンションを用意しました。……こちらが登記書です。万端整えてあります。あとは古城先生が入居されるばかりです」

将が後期の合格を果たした場合……聡をできるだけ世間から隠すようにして、最終的には望みをかなえてやる。

そんな純代の準備を、さもきちんと代行したかのように毛利は書類を差し出した。

「わかりました。いつも、面倒をかけますね」

……珍しくねぎらいの言葉をかけられて、毛利はほんの少しあせった。

すべては無駄になることを承知で、嘘の一環として手続きを万端に進めながら毛利はふと思う。

……家族すら、妻すら裏切って康三が守ろうとしている「体面」とは何なのだろう。

掴もうとしている総理の座とは、それで実現しようとしている国づくりとは、何なのだろう。

一瞬よぎった疑問を、毛利は手元に引き寄せることなくやりすごした。

康三のために、もっと大変な修羅場をこなしてきた毛利にとってはどうということはない。そう思いこもうとした。

「将くん、おはようー」

ロケ現場近くにあるホテルの朝食会場。

窓側の席で一人でパンを頬張る将に気づいた詩織が、くったくなく声をかけてきた。

「おはようございます」

見上げた将はぺこりと頭を下げた。

「ここいい？」

詩織はトレーを将の前の席に置いた。ヘアメイクの女性も一緒だから特に異論はない。

噂の二人とからかわれたのも最初だけで、スタッフは皆、将と詩織がなんでもないことは納得づくだ。

詩織には大学の同級生……つまり一般人と付き合っていることは、騒がれないだけで周知だったし、将はドラマの中でどんなに打ち解けても、素では詩織に先輩としての態度を崩さなかったから。

正月明けに出た週刊誌の記事は、現場ではていのよい話題づくり程度に思われていたのだ。

「将くんのラスト、今日こそギリギリで撮影できそうね」

詩織はよく晴れた窓の外を眺めてほほ笑んだ。

「はい」

今日で3月も11日。最終回の放送日まで2週間となった。

将が準主役を務めるドラマ『あした、雪の丘で』のロケも終盤の大詰めに差し掛かっていた。

将が登場するラストシーン――晴れた雪の丘のてっぺんを目指して峻が新雪に跡をつけながら歩いて行く――ほとんどそれだけのシーンが撮れずに、将は現場で待たされることになった。

ちなみに他の登場シーンはすべて撮り終えている。

詩織や主演の熟年俳優はまだ数シーン残っているが、将はその場面だけ撮ればクランクアップのはずだった。

……監督が将の受験スケジュールに気を配ってくれたのである。

「昨日は、一日勉強？」

うなづいた将に、詩織は「大変ねえ。受験とのかけもちは。スケジュール延びちゃったし」と同情する。

本来は将の撮影は早くて9日に終わる予定だった。しかし、青い空はなかなか現れず……結果、天気まちで将は2日間もここに足止めを食らっていたのだ。

もちろん足止めされている間、仕上げには余念がなかったが、それでも、今日晴れて、本当によかった。

将は心からほっとした。

あさってにはもう後期試験だ。撮影を残したまま後期試験にのぞむよりはずっといい。

９日の夜、将は義母の純代から前期試験が不合格だったことを電話で聞かされた。

もしも合格だったら、すぐさまメールか何かで連絡してくるだろう……それを、撮影終了まで待って連絡してくるということは……と、うすうす感づいていた将はそれほどショックを受けなかった。

試験の出来は、将としてはそう悪くはなかったのだが、それでも合格できなかった。

そんな事実に

――やっぱり東大は甘くない。

と将は再確認することになった。

電話のむこうでは純代が

「まだ後期があるから。後期の二段階選抜の合格通知も来てるのよ……前期より狭き門に合格してるから望みはあるわ」

と、受験に失敗した将に気をつかっているのがわかる。

前期の不合格に対しては、さして悔やむところではない。

しかし残り１回のチャンスへの重圧が急に増したのを強く感じた。

１３日の後期がダメだったら、聡とは……。

電話を切った将は、聡の番号を押しかけて……途中で止めた。

聡をがっかりさせてしまうこともそうだが、今聡の声をきいたら。

すべての歯止めが利かなくなる気がする。

会わずにおれないほど……せつなさがつのりそうで。

かろうじてせきとめている心細さや不安が、聡の声を聞いただけで雪崩のように崩れる予兆を将は感じずにはいられない。

――結局将は、前期の不合格をメールで聡に伝えることにした。

＞ゴメン、前期ダメだった。

＞もともと前期は「ダメもと」だったし、でも後期こそは絶対大丈夫だから。

＞俺を信じて、心配しないで。

本当は、声が聞きたいのをぐっと抑えて、将は送信ボタンを押した。

そして最悪の考えに至りそうになる脳に暇を与えないよう、最後の勉強に没入することにしたのだ。

今年から新形式になった後期試験はほとんど、その場の瞬発的な思考力と発想にかかっていると予想されている。

（もちろんそのバックグラウンドにある知識や教養がものをいうのだが……）

だから、９日に撮影が終わろうと、今日１１日まで引っ張ろうと関係ない。

将はそんなふうに前向きに考えることにして、あいかわらず実力不足を実感している英語の勉強に昨日の待ち時間をあてたのだった。

将はコーヒーを飲みながら、窓の外に目を移した。

美しい丘の町は、その白一色の起伏を、朝日の下に浮かび上がらせて果てしないようだった。

とにかく。

今日は撮影を失敗なく終わらせて、東京へ帰る。

そして今日・明日の2日間、気持ちを無にして仕上げをし、試験に臨む。

それしかない。

将は青空の下にうねる雪の丘を眺めた。

そんな将は……聡がすでに法律上で、人の妻になってしまっていることを知るよしもない……。

384◆最後の望み　2

「お兄ちゃん、コーヒー持ってきたよー！入っていい？」

ノックではなくドアの向こうで孝太が叫んだ。

「どうぞ」

机に向かっていた将は、返事をしながらそれを区切りに携帯の画面で夜9時を確認すると振り返った。

部屋に入ってきた孝太は大振りのマグカップを両手を添えるようにして持ちながらそろそろと将の机に進んできた。思わずその様子に将はなごむ。

将が鷹枝家に戻ってきてからというものの、息抜きのコーヒーを持ってきたり、食事の支度が出来たと声をかけたりする、いわゆる連絡係で孝太は大活躍している。

短期間で受験勉強に集中せざるをえない将に、自分が感情的な邪魔をしないように、との純代の配慮であることを将もわかっている。

「ブラックでよかったんだよね」

孝太はカップを慎重に将が勉強する机の端に置くと、嬉しそうに振り返った。

「うん。ありがとう」

将のことが大好きな孝太だが、純代に邪魔をしないように言い含められているのか、いつもはあまり長居はしない。

だが、今日は勉強机の横の棚の上にある大きなカトレアの花束が気になったらしい。

「あれ、北海道でもらったの？」

孝太は指差した。

「うん。今日で撮影が終わったからね。みんながくれたんだ……」

今日の昼過ぎ、将は無事にラストシーンを撮り終えた。

「ＯＫ！」

と監督が大きな声で叫ぶなり、スタッフの皆から拍手が起こった。

丘の上に一人で佇んで演技を続けていた将には、それがさざなみのようにすそ野から響いて青空へ抜けていくような不思議な感覚に包まれた。

拍手に迎えられながら、雪に自らが足跡をつけた道をたどって、慎重に降りる――そこでクリスマスのときの教会の裏でのことを思い出して将はふと空を見上げる。

あの絶え間なく雪が降り積んだ夜と違って、真っ青な空は白銀の上にありながらすでに春の予兆を見せていた。

――アキラ。終わったよ。やり遂げたよ。

将は青い空に聡の顔を一瞬確認すると、ギュッギュッと雪を踏みしめながら丘を降りた。

ようやくふもとに降りた将に渡されたのが、この一抱えもあるようなカトレアの花束だった。

「お疲れ様でした」

と贈呈役を引き受けた詩織がいたずらっぽく微笑むと、周りに集まったスタッフが一斉に拍手を強めた。

「どうもありがとうございます」

もらった花束は背の高い将ですら鼻先に強い香りを感じるような大きなものだった。

「このまま受験も頑張ってね」

現役大学生である詩織がお姉さんぽく将にエールを送る。その横から

「このまますぐ帰って勉強だろう」

脚本家の元倉亮が笑いかける。

将登場最後のシーンの今日は、元倉も現場に顔を出していた。

元倉や監督の表情から見るに満足な出来だったのだろう……頭を下げながら将は心からほっとした。

考えてみればこの男の手前、やり遂げなくてはならない仕事でもあったから……。

「頑張れよ」

機嫌がよさそうな元倉は、将の肩にポンと手を置いた。

「ハイ」

そのまま、すれ違って行ってしまうと思ったが、元倉は将を呼び寄せた。

「……もっとも、もしダメでも。こっちの世界もお前を待っているぞ」

将は思わず元倉の目を見た。元倉はニヤリと笑うとそのままいってしまった。

将は孝太と一緒に花束を見ながら、終わったドラマに少し思いを馳せていた。

仕事が面白くなかったといったらウソになる。

何より活気があったし、すでにプロとして活躍している大人と同じ土俵にあがるのは、良い意味で将のプライドを刺激した。

彼らから学ぶことも多かった。

芸能界という一見派手な世界ではあるが、演技力という実力や人とうまく協調しながら1つの作品をつくりあげていく――。

それは聡が教室で言っていた社会と大差はない気がした。

『こっちの世界もお前を待っているぞ』

ふいに元倉の最後の言葉がリフレインする。

それは将の中に手ごたえとして残っていた。

評判も悪くないし、自分でも向いていると思う。

ときどき武藤が遠慮がちに見せてくれるドラマ評には、面映ゆくなるような褒め言葉が連ねてあった。

将自身他人を演じるのは面白かった。

今までは自分に近い役が多かったが、もし出来るのならまったくかけ離れた役にチャレンジしてみたい。

だが……もう、おそらく、この世界には戻らないだろう。

聡のために。聡と生きるために捨てるべき道。

将は時計を確認するふりをして、待ち受けの聡を表示させる。

聡のために、あさっての後期試験は全力で臨んで……かつ、絶対に合格しなくてはならない。

そして父が……巌が望んだ道――鷹枝家の跡取りとして、国のために働く――その道へ進まなくてはならない。

「あきらさん、元気？」

携帯をのぞきこんでいた孝太がいたずらっぽく将を振り返る。

「うん。元気……て、おまえ、アキラに会ったことあったっけ」

「あるよー！去年一緒に遊園地いったじゃん！」

ああ、と将は思い出す。去年のバレンタイン前日に家出した孝太を連れて、遊園地でデートしたんだった。

あのころから比べると、この４月で小３になる孝太はずいぶん少年ぽくなった。

「はやく受験終わらせて、あきらさんに会いたいよね」

あまつさえこんな軽口さえ叩く。

「こいつ」

将は孝太のほっぺたに人差し指を食いこませた。孝太は体をよじらせて笑った。

孝太が行ってしまって、部屋は再び静寂に包まれた。

将は再び、携帯の中で微笑む聡を取り出す。聡の髪の上にある時計は２１時３０分を表示している。

もう最後の試験まで３６時間……つまり2日もない。

……あさってから始まる試験こそ、聡との運命が決まる正念場である。

聡のために、後期試験は絶対に、失敗することはできない。

いわば最後の望みである。

チャンスはあと1回しかないのだ。

もしも。前期試験のときのように手ごたえを感じていながら、ダメだったら……。

将はふいに浮かんだその考えを振り払って、目の前の英語に集中しようとした。

しかし、目に入る一切の単語は脳に届かず、英語のまま跳ね返って

くるようだった。

かわりに、暗い想像がじわじわと将を侵食してくる。

将はその想像に飲み込まれるまいと、声に出して英文を読んでみた。

だが……一切は無駄だった。

必死で抵抗したのに、将の脳は真黒な絶望の予感にとらわれてしまった。。

心と脳がそれに占拠されたとたん……不安が血流を伝ったかのように、いままで平穏だった将の心臓は、唐突にばくんばくんと収縮を始めた。

――もし、失敗したら。

――聡とは、たぶん、永遠に引き裂かれてしまう。

将は、痛いほどの拍動と最悪の想像を止めることができない。

暗闇に飲み込まれていく聡の姿が、脳裏に映し出されるのを振り払えない。

考えてみれば……ドラマの撮影が延びていた間は、かえってその限られた合間だけしかなかったから、勉強に集中できていた。

だが今は。

真っ暗な絶望の谷間は将のすぐ背後にある……将はそこから吹き付

けてくる不安に対して何も目隠しできないのだ。

将はいてもたってもいられなくなって思わず立ち上がった。

我慢していたけどやっぱり聡に会いたい。

聡に会って……一言「大丈夫」と言ってほしい。

……否、何も言わないで抱きしめて……いや、優しくみつめてくれるだけでいい。

しかし。それは無理難題であることを将は知っている。

北海道から自宅へ帰ってくるあいだ、ずっと記者やカメラマンがついてきていた。

目立たないようにはしていたけど、陰から狙っているのは、将でもわかった。

皮肉なことに、将の人気はまだ依然上がり続けていた。

そんな将がなぜ芸能界を蹴ってまで東大進学にこだわっているのか、そして受験後の復帰はないのか。

そのあたりの正確な情報を……できればスキャンダル込みで狙っているのかもしれなかった。

将はため息をつくともう一度、聡の待ち受けを見た。

金沢に行った時に撮った聡は、まだ今の運命を知らずに、明るく笑

っている。

聡のためにも軽率な行動は憚られる。

だけど……なんとか、会いにいくことができないだろうか。

それともカフェかどこかに聡を呼び出して……勉強を教えてもらうふりだけでも難しいだろうか。

そうだ。

聡は教師なんだから、卒業したとはいえ教え子に、受験直前の個人授業をするのはまったく世間的に変ではないはず。

最悪それだけでもいい。

そう思って聡に連絡をとろうとした矢先。

唐突に携帯が鳴りだした。

手に持っていた携帯が鳴り響いたので、将は腰を抜かしそうになった。

井口、と表示されている。

……その名前を見た瞬間、将は目を輝かせた。

385◆想いを断ち切る　1

「それにしてもびっくりしたよ。聡がそんなお腹になってるなんて」

もう何度目だろうか。カウンターでおしぼりを受け取りながら美智子はさらにもう1回繰り返した。

買い物の帰り、お別れに美智子が奢ってくれるというので海潮寿司に来ている。

教え子の兵藤が修行している寿司店だ、と思いだして聡は身構えたが、美智子は逆に

「聡の教え子さんが修行している店なんでしょ」

とむしろ肯定的に誘ったから断れない。

真面目な生徒だった兵藤が……聡と将の関係をどこまで知っていて、どう思っていたのかはわからない。

だけど彼のいるところで美智子から『将との別れの顛末』を捏造するのはかなり苦しいと思ったのだ。

しかし幸い、兵藤は使いにでもいっているのか、小さな店の中にその姿はなかった。

聡が持っていたデパートの大きな紙袋を預かってくれたのは女将さんで、聡は心からほっとした。

昨日、たまたま美智子から『聡？暇ぁ？』と電話がかかってきたときは、どうしようかと思った。

妊娠して以来、美智子とは一度も会っていない。

当然、彼女は聡の妊娠も知らないはずだった。

仲の良い美智子にも日本を離れる前に一度会っておきたい、と思う反面、このお腹をどう説明すると悩んだ。

なにしろ美智子は、聡と将の関係も、その深い思いも知っている。

だまし切れるだろうか……。

忙しいなど理由をつけて、会わない選択肢も当然考えた。

だが。

嘘をついたまま連絡もせずに、結婚して海外に引っ越してしまうほどの薄情をすることは、やはりできないと思いなおす。

両親ですら騙しとおしたのだ。大丈夫。

それに、急なボストンへの出発にあたっていくつか足りないものもある。

その買い物に美智子に付き合ってもらおう、買い物という目的があ

ればじっくり向き合って話すこともあるまい……と聡はお腹のことを言わずに、ただ美智子と会う約束をした。

待ち合わせ場所にやってきた美智子は当然、驚いた。

「あ、聡……そのお腹！」

そう言ったきり、口がパクパクしている。

アイラインでフチドリをほどこし、付けまつげを隙間なく貼り付けた目から、目玉が落っこちそうなほど見開いている。

「ま、まさか、将くん？」

そう言われることは、シミュレーション済みなので、聡の心は表面には出ない。

微笑んで首を振りながらも……それでも、聡の心は嘘をついたことにチクリと痛む。

「だよねー、あーびっくりした」

で、誰、相手？

将くんとはあの後、本当に別れちゃったの？

なんで？

スキャンダルになったから？ちがうか。

美智子は質問をまくしたてる。

「そんな、一気に質問されても」

「ごめーん。だーってびっくりしたんだもん。……それで今何カ月？」

そりゃ、そうだ……と聡は微笑んで自分のお腹へと目を伏せると「8か月」と答えた。

そして意を決すると、

「実はね。……博史さんとよりを戻したの」

と嘘をつく。何度ついても苦い嘘は、聡の顔をこわばらせそうになる。

それを無理やりのように……口角をあげる。きのう、鏡の前で練習した笑顔をつくる。

「博史さんと！」

美智子はさらにびっくりした。

艶のあるグロスを塗った口が『と』を発した形のままあけっぱなしになっているのを見て、聡はやるせなくなった。

「将くんとは？　あのあと本当に別れちゃったの？」

だまってうなづくしかない。

うなづきながら、聡は心で美智子に懇願していた。

お願い。これ以上、突っ込まないで……。

美智子に訊かれたときのために、将との別れの顛末は、昨日一生懸命考えていた。

将が海外ロケに旅立ったそのまま……自然に心が離れてしまったのだと。

別れを捏造すべく、あの頃を思い出しながら、聡の心はいつしか、将との思い出の中にのめりこんでしまう。

甘く、せつない日々。

将の笑顔、泣き顔。ぬくもり。少年らしさが残るその囁き。

思い出したら最後、聡は枕カバーをびっしょりにするまで泣いてしまうのだ。

昨日も、泣きぬれてしまった聡は、瞼の腫れの処理に苦労した。

出発のせまった聡の中で、断ち難い思いはなおも日に日に高まっていくようでさえあった。

将とその思い出と……引きはがされる期日まで3日を切った今、聡は必死で将のことが頭に思い浮かばないように……別れの現実を直視しないようにしていた。

荷造り、診察、手続き。体を動かすことで、思考に隙間をつくらないようにする。

せっかく自分の心ごと、取り繕っているのに、あまり突かれると。固まりかけた傷から再び血が吹き出すように……聡は将を失う悲しみに飲み込まれてしまう。

だから。これ以上、将のことを聞かないで。将を思い出させないで。

聡は叫んでいた。

その気持ちが届いたのかもしれない。

聡の顔を美智子はしばらく見つめると、おもむろに明るい声を出した。

「そっかー。そういや長かったもんね、博史さんと。うん、そっかー」

心の底から、聡はほっとした。

この日の寿司も素晴らしかった。

1つずつ握ってもらうのもできるのだが、美智子によればおまかせ

が最もお勧めだというので、おまかせにする。
それがいちいち素晴らしかった。主人も
「憲が世話になったから。お好きなのがあったら遠慮なく言って下さいよ」
と声をかけてくれる。
「大将、この鯛の皮、絶品！もいっこちょうだい」
美智子は冷酒にほんのりほおを赤くしている。
彼女が言う通り、今が旬という鯛の皮の表面を炙ったものだけをネタにした寿司は素晴らしかった。
表面の香ばしさが、皮の裏にたっぷりついた脂肪の甘味を引き立てるようだ。
「先生もいかがですか？」
「……お願いします」
「あきらぁ、いっぱい食べなよ～。こんなに美味しいお寿司やなんて、ぜえったい、ボストンにないんだから」
美智子の口調がかなりリズミカルになったのはお酒が入った証拠だ。
そのときカラリと勝手口が開く音がした。

「おう、憲。仮免許はとれたか」

主人の声で、聡は兵藤が帰ってきたことを悟り、身構える。

「はい。……あ、先生」

すでに着替えた兵藤は聡に気づくと、ぺこっと頭を下げた。

あのときと同じく、甘じょっぱい玉子がデザートがわりだった。

「でさあ。博史さんはァ」

それにしても美智子の声は大きい。

酒が入った美智子は、あまりに遠慮のない声の大きさになってしまっていた。

「会社辞めてなにすんの?」

聡はといえば、兵藤に聞こえないよう、できるだけ小声で答えている。

といっても、兵藤は店に入るなり、洗いものやお運びで忙しく働いていたから、聡は少し油断していた。

「……マサチューセッツ工科大学に社会人留学するんだって」

「ボストンのぉ？　すっごいねー！」

「え、先生。ボストンに行くんですか？」

聡はハッとした。

ちょうど背後に茶を運んできた兵藤がいたのだ。

しかし嘘はつけない。

一瞬――兵藤から将にこのことが伝わればいい。

将に伝わったら……引きとめに来るだろうか。

ほんの一瞬のすきに、期待を割り込ませて震える心を自覚して聡は愕然とした。

この期におよんで――もう博史と籍を入れて夫婦になった自分なのに――まだそんなことを。

――まだ、諦められないのだ。

兵藤の問いにうなづきながらも、これ以上、教え子の瞳を見続けることができなくて聡は目を伏せた。

「へえーっ。いいですねえ」

無邪気に、うらやましがっただけの兵藤に聡はなぜかがっかりした。

聡と将は完全に終わったとクラスの生徒に思われていることは……

喜ぶべきことなのに。

「ほーんと、うらやましいよねー」

美智子が相槌を打った時、

「こら、憲、話し込むな」

と主人の叱責が入り、兵藤は仕事に戻ってしまった。

386◆想いを断ち切る　2

「兵藤くん」

すっかり長居してしまった。

まだ10時前だが、ネタが尽きたのか、店じまいの準備をすべくのれんをしまいに向かう兵藤を聡は呼びとめる。

ちょうどいいタイミングで美智子は手洗いに立っていた。

笑顔できびきびと歩いてくる兵藤に聡は……少し後ろ暗い。

「あのね……」

少し躊躇したが、思い切る。

「私が、ボストンに行くこと、できればクラスのみんなには内緒にして」

つやつやとした顔から笑顔が消え、かわりに、しきりにまたたく目のあたりにけげんさが漂う。

「どうしてですか」

兵藤はそのけげんさをすぐさま言葉に替えてきた。

しかし聡には、その本当の理由も、また彼を納得させるに足る理由をとっさに作ることもできない。

「ちょっと……いろいろと事情があって。あまり派手にしたくないの。お願いだから」

声にしながら、これはないと聡は自分でも思う。

いろいろと事情があって……人を納得させるのにもっとも不足な理由。だけど仕方がない。

「……いいですけど」

兵藤は眉のあたりに不服さを漂わせながらも、それでも最後まで従順で素直な生徒として、聡の言うことに従ってみせた。

「ごめんね。プレゼントまでもらった上におごってもらって」

「いいって……安くしてもらったしぃ。そのかわり、ボストンに遊びにいったときにはタダで泊めてね」

お酒で上機嫌なのか。シートに寄りかかる美智子の語調はあいかわらずリズミカルである。

駅で美智子は聡を残して降りる。

その際、5千円を握らせようとする美智子に、聡は必死で抵抗した。

「いいの、いいの！　結婚祝い！」

「いいよ、お寿司おごってもらったし」

「いいのっ！　あたしのときに倍返ししてくれれば」

結局、美智子は無理やり運転手にそれを握らせると、降りてしまった。

「じゃーねえええ！　気をつけてねえ！　それからお幸せにねえ！」

美智子は人目もはばからず叫ぶと、タクシーの中の聡に向かって手を大きく振った。

派手な柄もののスカートを身につけた美智子が夜の街に溶けるように見えなくなって……聡は、ふう、とため息をついてお腹をさする。

博史の親。聡の親。美智子、そして兵藤。

聡は嘘をつきながらそのたびに……自分自身の外堀が埋められていくような感覚にとまどった。

こうやって、自分自身も嘘から逃げられなくなっていくのだ。

将から……離れる瞬間は着々と近づいて来るのだ……。

聡は……寒くもないのに思わず身ぶるいをした。

「ひなた」が反応したのかお腹がきゅっと収縮する。

それをさすりながら、無意識に携帯を出す。

博史からメールが届いている。

＞準備はどう？　僕のほうは今日が最後の送別会で、まだ飲んでます。

もう走り出したレールから逃げ出すことはできない。

今日は１１日。将から逃げるように日本を離れるのは、もうあさってだ。

なのに……心のどこかでは、まだすべてが覆るのを待っている。

と、そのとき。暗い車内に鳴り響く着信音。

将だ。

聡は飛びあがらんばかりにびっくりした。

――まさか、兵藤くんが。

恐れながら、期待する。すべてを知った将が、計画を止めに来ることを。

それと同時に、聞いただけで将とわかる着信音を……変えなくてはならないことを忘れていたのに気づく。

聡は息をのみ込むと、着信ボタンを押す。

電波がつながるのを待ちきれないように将の声がなだれこんできた。

懐かしい声。聞きたかった声。

「アキラー？　……やっぱり声が聞きたくなっちゃって」

こんなセリフは今までなら甘いいとおしさばかりをつれてきたはずだったのに。

『あたしも』

と答えたなら。聡はその場合の将の顔を、想像することでまたいっそう幸せになれたのだ。

だが……今の聡には、胸が焼けつくような苦しさにしかならない。

それと同時に……やはり将は何も知らされていないことを瞬時に悟り……安心と大きな失望によって聡の心の波は少し静かになる。

「ど、ドラマの撮影は終わったの？」

なんとか平静を装う。

「うん。バッチリ。午後まで掛ったけど。ところで、アキラ」

聡はどきりとする。

――『ケンちゃんから聞いたんだけど……』

心で期待と恐れを復活させながら聡は将の言葉を待つ。

「明日、家にいる？」

「……どうして？」

聡は少しほっとしながらも警戒する。

「んー？」

将は電話の向こうでえへへと笑った。いたずらっぽい笑顔が見えるようだった。

「最後だからいつものように英語を教えて？　ネットで」

聡は心からほっとした。

将が……うちに来るなんてありえない。

そうわかっていても、聡は警戒……いや、むしろ甘い期待を持ってしまう。

いつだって将は、聡の前に突然……本当に、いきなり現れては抱きしめたから。

そのときめきとぬくもりの記憶は……今はただせつない。

「昼間は病院に行って来るから……夕方だったら」

あさってはいよいよボストンへの出発。

妊娠８か月での飛行機での長距離移動は早産の危険が高い。

康三はそれに備えて医師を同行させるよう準備をした。

その同行する医師と打ち合わせがあるのだ。

それに、少しだけど荷造りもある。

だけど。

……ネットと電話をはさんでとはいえ、最後の個人授業。

最後の逢瀬。

将を騙し遂せるかという難問よりも、聡の心は叫んでいた。

将の声が聞きたい。

将と時間を……共有したい。

せめて。これが最後だから。

最後のネット授業を了解して電話を切った聡は、魂が抜けたようにシートに寄りかかった。

街の明かりがぼんやりと滲んで揺れる。聡はやはり涙を流していた。
もう走り出してしまったのだ。
将の幸せのために、将をおきざりにする……。
なのに聡の心はいつまでたっても将を捨ててしまう覚悟ができない。
将のためなのに……。
聡は涙をぬぐった。
いつまでも涙を流したままでは運転手に気付かれてしまう。
聡は無理やり気を取り直すと、顔を整えるべく、暗くなった窓を横目で眺める。
窓には、みじめな泣き顔が映し出されていた。
電話中、ずっとうつむいていたせいか乱れた髪が頬に張り付いている。
それを後ろにやるべく聡は髪に手をやった。
『アキラ……こっち向いてよ』
そう呼びかけながら聡の髪をふいにかきあげて、顔をよせてきた将。
『ねえ。みつあみさせて。俺、うまいんだぜー』

そんな戯れをいいながら、ベッドの上で戯れた、同棲中の夜。

ひなたを身ごもったあの夜も。

……将の指は櫛となって何度も聡の髪を往復した。

波間に漂うように揺れながら、将は聡の髪の根元から毛先までなんども撫でた。

それは将が髪の先まで……聡をいとおしんでくれる行為の表れだった。

――そうだ。

聡は、暗い街を映し出す窓に向かって、眼を見開いた。

――髪を切ってしまおう。

聡は窓に斜めにうつる自分の顔をみながら髪をゆっくりとかきあげた。

栗色の髪は、別段聡の自慢でもなかった。くせ毛だし、この栗色はカラーリングだ。

それでも

『俺、アキラの髪、だーい好き』

などと抱きついてきては、髪に顔をうずめてくんくんと匂いを嗅いでみせたりした将。

その将とはもう一生逢えない。

将がこの髪をいじることは、もうないのだから。

将の愛した聡の姿を……無理やり変えてしまおう。

髪と一緒に、思いを断ち切ってしまおう。

恋を終わらせるために髪を切るなんてセンチメンタルな行為だ。

そんな風に、心の一部で自嘲する自分を感じながらも、聡は決めた。

387◆命日　1

快速は一路、北へと向かっていた。

春の日差しを反射する家々の屋根は、どことなくさざ波を思わせた。

東北本線の快速。ドアの横に佇んだ大悟は、列車の揺れに身を任せながら、後ろへ飛んでいくさざ波を眺めていた。

去年の今日。瑞樹があとかたもなくなってしまった日。

近頃従順な大悟は、単独での外出を許可されて、小山へ向かう列車にいる。

瑞樹が葬られた墓のありかを、大悟は知らない。

しかし、大悟は……瑞樹の魂があるなら……きっとあの死に場所である駅にまだいる、と感じていた。

幽霊でもいい。瑞樹がいるのなら。その気配にだけでも触れたい。

ついでに瑞樹の祖母の部屋に祀られている、瑞樹の位牌に手をあわせたい。

そんな思いが大悟を小山へと向かわせていた。

と、大悟の佇むドアが開いて……ホームから車内に乗り込んでくる少女に大悟は「あ」と声をあげた。

――瑞樹！

そのショートカットの少女に、大悟の視線は惹きつけられて……失望する。

少女は大悟を一瞥したが、その視線はすぐに進行方向に戻り……がら空きの席に腰掛け、のんびりと携帯をチェックしだす。

まったく瑞樹と似ていない少女だった。

どうやったら瑞樹と見間違えるのだ、と大悟は自分が可笑しい。そして悲しい。

瑞樹のはずがないのだ。

大悟は再び動き出した列車のドアのガラスから空を見上げた。

――もし生きていれば……。

二人は今頃どうしていただろう。

『滋賀でやり直したい』

瑞樹のあの言葉は嘘じゃないと思う。

たとえ、死の間際に将の名前を呼んだにしても。

大悟は無駄だとわかっていても瑞樹が生きていれば成しえた可能性を、瑞樹が死なずに済んだ方策を探してしまう。いまだに。

なぜ。助けられなかったのか。

最後にはいつもそこへ向かう。自分への責め。

そしてさらに想像する。

あの場へ行ったのが大悟でなく将だったなら。

瑞樹は線路に飛び込まずに、将へと駆け寄ってきたのではなかったか。

……つまり将なら瑞樹をたすけられたのではないか……。

そうして徒に……大悟は自分の心を傷つけていくことに、快感すら感じてしまう。

心からは血が流れ出しているのに、掻き毟るのをやめられない。

薬は……そんな自分の心臓までも掻き毟り続けたくなるような衝動を落ちつけてくれる。

前向きに……といったら語弊があるが、少なくともつらい過去のことを消してくれる程度の効果はあった。

大悟はいまや正気でいるために、一日４回は薬を使っていた。

薬によって殺された瑞樹の一周忌を弔うために瑞樹の死に場所へと向かう自分が……同じ薬の虜になっている事実に……大悟は思わず自嘲する。

だが。

薬をやめられなかった瑞樹のつらさが……つらいことばかりの人生が今になってよりいっそう身にしみてくるようだった。

ピン、ポーン。

３回目のチャイムは静けさの中に吸い込まれていくようだった。反応はない。

大悟は瑞樹の祖母・春江のアパートのドアの前に立っている。

瑞樹の祖母・春江の電話番号も……将のそれと同様、紛失してしまっていて……だから大悟は記憶をたよりに、バスに乗り、アパートを直接訪れることにしたのだ。

――留守か。

大悟は、試しに扉を強めにノックしてみた。結果は同じだった。

もしかして、瑞樹の命日である今日だ。どこかの寺で法事でも行っているのだろうか。

大悟は、ドアの前に座り込んだ。

泊まりでなければ、そのうち帰ってくるだろう、と思ったのだ。

位牌よりも、遺影に逢いたかった。

大悟は瑞樹の写真を持っていなかったから。

瑞樹の死の直後、将にもらったプリクラとクラス写真は……将のマンションに置いたままだ。

昼下がりの静けさの中……大悟は瑞樹の顔を思い浮かべてみる。

日いちにちと薄れていくその顔は……少しぼやけて見える気がした。

悲しみは依然、心にはっきりと刻印されたままなのに。

俯いた大悟は……まさか昨年の今日、瑞樹がまさにその場所に同じ格好でうつむいていたことをしるよしもない。

陽が傾いてきた。

――そろそろ薬を打っておいたほうがいい。

大悟がポケットに入れた水溶液を確かめた時、階段をあがってくる足音がして、大悟はあわててその手をひっこめた。

もしかしたら春江かもしれない。

しかし、現れたのは太った年配の婦人で……大悟はため息をついた。

「あ、あら？」

階段を登り切って息を切らした太った婦人は、座り込んだ大悟に目を止めて声をあげた。

大悟は立ち上がって、ぺこりと頭を下げる――無駄な警戒心を起こさせないように。

「葉山さんのところに？」

婦人は話しかけてきた。

はい、と大悟が答えたとたん、婦人は気の毒そうに眉を下げた。

「せっかくだけど、葉山さん、入院してるのよ」

「え」

新幹線のホームに差し込む日差しは、もう夕方を告げていた。

防護柵がオレンジ色の太陽を反射してきらきらと輝いている。

大悟は……去年瑞樹が座っていたベンチに腰掛けて……彼女が飛び込んだあたりで輝く防護柵をぼんやりと見つめていた。

ホームには、瑞樹の事故ゆえか、防護柵が新しく設置されていて……ホームに飛び込むことなど容易にできないようになっていた。

その前では、大悟と同じ年ほどのカップルが寄り添って新幹線の到着を待っている。

笑いながら語らう彼らは、かつてここが一面血のしぶきで染まったことなど、何も知らないようだった。

大悟は彼らから目をそらして……ホームの上に見える空を見上げた。

――瑞樹。ここにいるんだろ。

遺影でも逢いたかったのに。

逢えなかった大悟は、幽霊でもいい、目の前に出てきてほしいと思う。

あの婦人は、訊いてもないことまで詳しく教えてくれた。

ついこないだ、春江が脳梗塞で倒れたこと。

なんとか助かったけれど、寝たきりを余儀なくされていること。

娘……つまり瑞樹の母はまったく見舞いにも来ないこと。

『たった一人のお孫さんを亡くされて、ずいぶん老けこまれてねえ。それまではとてもお元気な方だったのに』

それを聞いた大悟の心は痛んだ。

たった今、駅のトイレで打った注射のおかげで、体が軽くなっている。

大悟はベンチに寄りかかると目を閉じた。こうすると、わずかにフワフワする感覚を味わえる。

――お前と同じになっちまったな。

1年前の瑞樹と同様……ドラッグの虜になってしまった自分を、大悟は再び嗤った。

前原のようにトリップなんかしない。

何もかも忘れるような錯覚に酔えたのは最初だけだった。

今は、足りなくなると苦しくなり、それを注射で「補給」すると楽

になる。

ただそれだけだ。

それなのになぜ。

大悟は、廃人への道を着実に進みつつある自分を、捨ててしまいたくなる。

――瑞樹。寂しいなら……俺をつれていけよ。俺はいつだって付き合うぜ。

まるで、それに答えるようなタイミングだった。

ホームに、通過列車の案内が響く。

大悟は、思わず立ち上がる。

去年の、光景が目の前に蘇っている。

叫びながらホームを飛び降りる瑞樹。

つまづいたように線路にうずくまるその姿。

速度をゆるめない新幹線。

新幹線が去った後の……何もない線路。

なにもかも、一瞬だった。

一瞬で瑞樹は、いなくなってしまった……。

今、いけば。

大悟は拳を握りしめた。

――今いけば、瑞樹に会える。

腹の高さの防護柵なんてどうということはない。簡単に乗り越えられる。

――きっと、会える。

大悟は柵めがけて走り寄った。

388◆命日　2

あれは、気のせいなんかじゃない。

……瑞樹の声だった。

大悟の中で、あの瞬間がリフレインしている。

東京行きの新幹線の中にいた。

各駅停車の……あのとき瑞樹を吹き飛ばしたのとはあきらかに違う形の車両を選んで大悟は乗車した。

――あのとき。

大悟の意識は、たしかに防護柵にかけよって、乗り越えたのだ。

だが。

『大悟、だめ』

大悟に聞こえたのはそれだけだった。

気がつくと、大悟は防護柵の前に佇んで、通過する新幹線からやってくる強い風を受けていた。

我に返ったとき、大悟の体は冷たく、しびれたようになっていた。

誰かがいっていた、金縛りの名残のような……。

――瑞樹。お前はやっぱりあそこにいたんだな。

その瞳には後ろへと飛んでいく暮れなずむ街が映っていたけれど。

大悟はそれを見ていなかった。

心に見えていたのはあの瞬間だけ。何度も繰り返す。

まるで……その一瞬の邂逅をいとおしむがごとく。

――どうして、俺を連れて行かなかったんだ。

心で問いかけてみる。……もちろん返事はない。

――将じゃ、ないからか。

太陽と反対側の窓は、紫色に沈黙している。

それは妖しげにも、悲しげにも、どちらにも見えたが……肝心の答えを出すことはない。

このまま逃亡してもよかった。

あの犯罪組織には、何の義理も、未練もない。

どこかあいつらが考えもしない地方にでも逃げてしまうのは、まったく可能だったのに。

大悟の足は、『事務所』に向かっていた。

瑞樹のあとを追い損ねて……もうどうでもいい、という投げやりな気持ちと。

それから切実な問題。

ドラッグ……つまりシャブ。

大悟の精神は、正常でいるために最低でも1日4回の注射を必要としていた。

あそこから逃げてしまったら、シャブが調達できない。

シャブが切れた時の……あの爆発的な恐怖、脳や内臓まで引っ張りだして掻きむしりたくなるほどの憔悴を思えば。

大悟は嫌でもそこに帰るしかなかった。

あたりはすっかり暗くなっていた。

ずっと昼のような明るさの繁華街と違って、今の『事務所』があるのは住宅街だ。

駅前をすぎて、店がなくなると、急にひっそりと暗くなる。

その暗い道を急いでいた大悟の足が、急に止まる。

近くのマンションのタイル壁に赤い光が映っていた。

……規則的に明滅する、危険信号のような光に、大悟は反射的に警戒した。

角を曲がろうとした大悟は、息を飲んで……再び金縛り状になった。

『事務所』があるマンションの前にパトカーが止まっているのを見たからだ。

パトカーは1台ではなく、数台いた。

いずれも屋根の上で赤い光を回転させていた。

――まさか。

硬直しながらも大悟は、電信柱の陰から様子をうかがっていた。

パトカーの出動に、近所の人や通勤帰りのサラリーマンが何ごと、と人垣を作り出したそのとき。

「コラア！放せや、くそったれ！」

姿は見えないのに、エントランスに声が響いた。

カン高い前原の声だと、大悟にはわかる。

まもなく、警官二人に挟まれる様に出てきたのは前原ではなかった。

今度こそ大悟は、「あ」と声をあげそうになった。

尖った靴にサングラスをかけた……組織のリーダー。

白いスーツを着た彼は、両側から警官に押し付けられるようにしてエントランスから出てきた。

前で揃えた両手は布で隠されている。おそらく手錠をかけられているのだろう。

逃げようとするでもなく、周りの視線を気にするようでもなく、ただふてぶてしい表情。

むしろ、その態度は、背筋をそびやかすようにどうどうとしていた。

その後ろから……次々と仲間が連行されてくる。

皆、ややうつむき加減の首から上を、上着で隠すようにして出てくる。

「殺すぞ！クソがぁ！」

狂人じみた罵声と共に、前原が出てきた。

両腕を手錠で固定された上でがっしりと掴まれているというのに、なおも逃れようともがいているのがわかった。

暴れるたびに、警官に小突かれ、腕を引っ張り上げられる。

「バカ面さげて、見てんじゃねえよ！クソがよぉ！」

唾が飛びそうなその罵声が、人垣に向けられて、善良な人々が一瞬ひるむのがわかった。

――バカ面って。てめえが一番バカじゃんよ。

大悟の鼻先から、ふっと笑いがこぼれる。

見ている間に、大悟の『事務所』の仲間たちは全員連行されていってしまった。

サイレンをならしながらパトカーが行ってしまうのを見送りながら……なんとか難を逃れた大悟はほっとした。

気分が晴れ晴れしているのがわかる。

なぜなら。

これで……大悟を縛るものは何もなくなったから。

大悟は本当に自由になったのだ。

「ふふ。ふふふ」

駅へと引き返しながら……あてどもないのに、笑いがこみあげてくる。

嗚咽のような笑い。

通勤帰りのＯＬがけげんな顔ですれ違っていく。

止めようと思うのに、とまらない。

――自由になったんだ。

――また、やりなおせる。

まだ冷たい早春の夜風でさえ解放感の象徴のように思えた次の瞬間。

ある現実が……夜風を一瞬で氷に変える。

薬。

笑いが喉につかえるように引っ込んで……血の気が音を立てるように引いていく。

あの薬は……もう、あと1回分しかない。

389◆命日　3

午後の菩提寺は静かに陽を集めていた。

その静かな佇まいの屋根のあたりを将は、いったん見渡す。

空は青く晴れ渡り……将が手にしたアネモネの赤やピンクをいっそうさえざえとさせた。

母が好きだったアネモネの花。

将は今年もそれを墓に備える。

今年は将が一番乗りだったらしい。

墓は将が備えた花で、急に春色にほころんだ。

それを見届けると、静かに手をあわせる。

今日、３月１２日は、将を産んだ母・環の命日である。

昨年に引き続き、将はここを訪れていた。

午前中に……将は、最後の仕上げに岸田助教授のところへ行って来た。

今日は筆記での練習課題はやらず、ただ新聞に書かれた時事問題などについて岸田と話を交わした。

いたずらに緊張感を高めないためと。

かつ、頭の柔軟性を保つためである。

「あとは、運だけだ。今日はゆっくり寝ろよ」

岸田は笑顔で将の肩をポンと叩いた。

将は静かに母に誓っていた。そして、同じ墓に眠る巌へも。

……大切なひとができた、と報告した去年。

今年は……その人とそのお腹にいる子供のために、せいいっぱい力を尽くすことを誓う。

だから。

見守ってほしい……。

将はおぼろげになった母の面影と、巌にすがるような思いだった。

やれることは、たぶん、やったはずだ。

あとは何を出されても、自分の実力だけである。

どう結果が出ても従容と受けいれるべきなのは、頭ではわかっている。

だけど。

聡と引き離されるのは、だめだ。

だから。どうか。力になってほしい……。

将の誓いはいつか、懸命な祈りに変わっていた。

チーッ、チーッ。

小鳥のさえずりに、将は目をあけた。

ずいぶんな時間……しかも墓に懇願を繰り返していた将は、自分にやや照れる。

——合格したら、聡と一緒にまた来るよ。

墓にそう微笑みかけると、将は墓地の出口に続く石畳へと足の向き

を変えた。

そこで、ある人影をみつける。

スーツ姿の……。

「オヤジ」。

こちらへと歩いてくるのは、父・鷹枝康三だった。

手には将が備えたのよりひとまわりも大きいアネモネの花束を持っている。

「将。どうしたんだ」

「本会議中じゃないのかよ」

同時にお互いへの問いが出て、一瞬沈黙が横切った。

「……本会議が終わってから来た」

そういうと康三は、将の前を通り過ぎた。

花立てが将のアネモネでいっぱいなのを見つけると、自分の花束は墓の前に置き

「明日、2次試験だろう」

と将を振り返る。

ん、と将は軽くうなづきながらも、目の前の康三に、半信半疑だった。

母と静かに語り合えるように康三を残して、その場を立ち去りながら将は思い出す。

やはり、去年……ここの住職が言っていたことは本当だったのだ。

かなり長い時間がたって、康三は墓地から出てきた。

石段に腰かける将をみつけて

「おう」と声をかける。

別に待たなくてもよかったのだが……将はなぜか父を待ってしまった。

「また、戻るの？」

「ああ。委員会があるからな」

康三は仕事の合間にやってきたらしい。

「ふーん」

「駅まで乗ってくか？」

見ると寺の前に車が待っているのがみえた。

「いい……。ところでサ……毎年、ここに来てたの？」

父は、何も言わずに微笑んだまま、まだつぼみも硬い桜の木を見渡しながら振り返るふうをした。

そしてようやく「ああ」と答えたとき……将にはその表情は見えなくなった。

しかし斜め後ろから見る父の頬のあたりは……少し震えている気がした。

そして……急に蘇る古い記憶。

母の葬儀の時も……同じ角度で……父の震える頬を見た記憶は確かにあった。

母が死んだとき、父は泣かなかった。

しかし、涙は見せなかった、それだけで。

……それは間違いだったのか。

「今年は特に……お前のことを頼まないといけないからな」

そういって振り返ったとき、すでに康三は微笑んでいた。

「俺も直接頼んだよ」

将は……涙を呼ぶ記憶を振り払うように、おどけて肩を大きく揺らしてみせた。

「で、どうなんだ。岸田助教授はなんていってた」

「あとは運だけだってさ」

ハッと康三は笑った。

「まあ、あまり気張らずにな。今日はトンカツでも食ってのんびりしろ」

「今朝、ハハオヤがつくってくれたよ。……今日はホテルなんだ」

試験前日の今日、ホテルに泊まるという将の提案を聞いて……純代は急遽、今朝トンカツを作って持たせてくれたのだった。

康三は目をやや見開いて将の顔をのぞきこんだ。

「……だから、ラッシュにあわないようにだよ」

将はあわてて弁解した。……たくらみがバレて、阻止されたらまずいから。

しかし康三は「そうか」とそれ以上突っ込むことはしなかったので、とりあえずホッとした。

「……じゃあ、今日はゆっくり休めよ」

「まてよ、オヤジ！」

それだけ言って、立ち去ろうとする康三を、将はあわてて引きとめる。

「明日の試験、絶対受かるから」

向き直った康三は、将の瞳を見据えた。その瞳には強い光が宿っていた。

「絶対に、受かるから。そのときは、アキラとのこと。……認めろよ」

しばし、二人は寺の前で対峙した。

そんな二人におだやかな春の陽射しは似合わないようだった。

康三は……ふいに目を細めた。眩しげに。

「せいいっぱいやれ」

そう言い残すと、踵を返し……将を残してその場を立ち去った。

390◆命日　4

康三は……将が今日、聡に逢いに行くことを見抜いていた。

見抜いていながら、黙っていた。

――彼女が日本を発つのは明日――。

せめて別れを惜しませてやろうという情けと。

……今日、逢って気持ちを落ちつけておけば、明日の試験によい結果をもたらすかもしれない。

そんな親心とが、康三を大目にさせていた。

にしても。

資料が頭に入らない。

康三は膝の上に開いた資料から目をあげて、軽く目を閉じた。

車の振動のせいではない。

軽い吐き気を覚えて……そのまま、シートに寄りかかる。

そのとたん……フラッシュバックのように、こちらを睨みつける将の目が、記憶の底から急浮上して迫ってきた。

中学の頃……荒れていた頃の将の鋭い目。

『オヤジのバッキャロー！』

若い手負いの猛獣のように手が付けられなかった、あのときの将。

あの、殺人事件を起こした直後だ。

自らの罪を大悟に着せたと知ったとき、将は荒れ狂った。

三宅弁護士の説得により、やっと気を鎮めたように見えたが……。

たしか三宅弁護士はこんな風に説得していたはずだ。

『未成年だし正当防衛だ。大悟くんの将来を傷つけることにはならない。

……しかし将くん、君の場合は違う。目立つ家柄の子供だ。もし、君が犯人だということになれば、ひいおじいさんの血筋に泥をつけることになってしまうんだぞ』

巌の血筋、という言葉に将は黙ったものの。

その瞳は変わらなかった。

康三に向けられたのは、鋭くぎらつく日本刀のような……冷たく鋭い将の視線。

なぜ、そんな視線を今、思い出すのか。

……わかりきっている。

聡を失った将は……またあの頃に逆戻りするのではないか。

将はきっと……今回のことについて、康三のしたことだと……嗅ぎつけるに違いない。

ばかな。

康三は自らの恐れを打ち消した。

前とは状況が違う。

将は、うちに戻ってきてうまくやっている。

康三は条件付きとはいえ……聡のことを認める姿勢を将に見せている。

何も知らない妻の純代は……一生懸命、みごもった聡の世話を焼いていたはずだ。

聡を失っても。

将が康三を恨む理由など、何もないのだ。

そうだ。聡が……自ら、将を、捨てるのだから。

このところ……将の顔を見るたびに、毎回そんな自己確認を繰り返している。

だが、一向に康三は安心できない。

将が……それを嗅ぎつけるのではないか、と気が気でない。

康三は、携帯を取り出した。

毛利を呼び出す。

「例の件は、どうだ」

「はい。順調です。夫妻は婚姻届を出し、明日１１時３０分の便でボストンへ直行します。同行する医師も手配済みです……」

すべて予定通りに進んでいる。

あとは……聡を失い傷ついた将を、家族で慰め、立ち直らせるだけ。

何も、心配することはないのだ。

康三は自分に言い聞かせた。

大きなスーツケースは、フローリングの床を占領した。

……聡は、蔭りゆく部屋の中、荷造りをしていた。

「古城先生がたとえ手ぶらで行かれても大丈夫なように整えておきます」

毛利はそういっていた。

「残った家具などは、こちらで責任を持って保管もしくは処分しておきます」

とも。

家具や家電、食器は向こうの家に万端そろえてあるのだろうから、こっちのを持っていく必要もない。

それでも。

気に入った服や、萩の叔父に焼いてもらった食器、身の周りのこまごまとしたものなどを聡はスーツケースに詰め込んでいく。

2度目の長期渡米だから、だいたい勝手はわかっている。

だけど、大きなお腹を抱えての作業は、少しだけ大儀だった。

パズルのように隙間にものを詰め込もうと、下を向く聡の頬に髪がかかる。

それを無意識のうちに……ゴムを手にして後ろにまとめようとして

……その長さが足りないことに気づく。

――そうだよね。切ったんだった。

聡は鏡を振り返った。

鏡の中には、顎の上あたりで髪を切りそろえた聡がいた。

聡は髪に触れてみた。

ストレートにした短い髪は……今までに比べるとあっけないほど指からこぼれていく。

腕のいい美容師がやってくれたおかげで、その髪型はむしろ前よりお洒落になったといえる。

そして……明るく活動的ともいえる。

聡は鏡の中の自分に微笑んでみせた。

その微笑みに……将が重なり、聡はあわてて目をそらした。

将は見ることのない髪型……。

そんな事実が胸をよぎり、きゅっと苦しくなる。

聡は、感情を無視して作業を続けることにした。

明日発つために、今日の夕方に業者がスーツケースを取りに来る。

急がなくてはならない。

クロゼット、食器棚、本棚……と来て、飾り棚とその下の引き出しに差し掛かる。

引き出しをあけようとする聡の手が止まった。

飾り棚の上に……あのペアマグカップ。

将が、はじめて聡にくれた……。

そしてエンゲージリング。

将との日々が急に膨らんで一気にはじける。

……すべての思考が止まる。

ただ唯一残った感情が……聡の体を動かす。

聡はケースをあけると、そのリングを取り出した。

ダイヤのリングは午後の光を受けてキラリと光った。

将が……。

こちらを振り返った気がした。

長い時間。

リングを指に嵌めたまま……聡はぼうっとしていた。

将と……。

指輪をくれて。

結婚しようと誓った将と……。

離れなくちゃいけないんだ。

明日。

あした。

いやだ。

離れたくない……。

「どうして、行かなきゃいけないの」

口に出してみる。

静まり返った部屋で……返事をするものは皆無だった。

そのかわりに……聡の目から涙がこぼれおちてきた。

ぐる。

『ひなた』の動きに、聡はハッとする。

何をいまさら。

将のために、決めたんじゃない。

聡はかろうじて、気を取り直した。

この指輪だって。

置いて行かなくてはならないのだ……。

どこの世界に。

前の恋人からもらったエンゲージリングを新居に持ちこむ妻がいるだろうか。

……だけど。

いまだけ。

いまだけ、いいよね。

聡は将のリングが光る薬指をもういちどいとおしんだ。

391◆命日　5

今夜だけ。

せめて今夜だけ。

指輪と一緒に、将の思い出にひたろう――。

聡は自分の感情にそう折り合いをつけると……そのままの指で引き出しをあけた。

引き出しの中にも、将の思い出がつまっていた。

指輪と一緒にくれた、『ひなた』への靴下とベビーリング。

クリーム色のボンボンがついたほわほわの靴下。

ちっちゃな2つの足の形に聡は、2ヶ月後に世に出てくる「ひなた」の姿を夢想した。

その中に入っていたダイヤのベビーリング。

思わずその内側を……聡は確認してしまう。

『生まれてくる君へ、愛を込めて。父』

というフランス語でのメッセージを目にしたとたん……無理やり引っ込めた感情が、再び怒涛のように襲ってくる。

聡は歯を食いしばってかろうじてこらえると……それをケースに戻して傍らに置き、次のものを取り出した。

去年の手帳。

将との日々が詰まっているそれを、聡はなつかしくなぞった。

最後の裏表紙には将の字で書かれたメッセージ。

Ｉ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ，ｆｏｒｅｖｅｒ

ｓｙｏ

聡がプレゼントした万年筆の……セピア色のインクで書かれたそれは、もう何百年も前のラブレターのような色合いになっている。

思いはまだ、いまも鮮やかなのに……。

これらすべて。

聡は持って行くことができない。

これらの懐かしい思い出ごと。

聡は将を捨てていかなくてはならない。

聡は心を鬼にして、引き出しをのぞきこんだ。

――！

それを見つけたとたん、聡の手がとまった。

いったんひっこめていた涙が、再び大粒になって頬を転がり落ちた。

聡は……指輪をはめたままの、震えるその手で、引き出しの底からヨレヨレになったカードを取り出した。

将がマグカップと一緒にくれた、バースデイ・カード。

２６才おめでとう、聡。

宇宙一愛する聡が、世に生まれ出たこの日に感謝！

月並みだけど、聡は僕の太陽だ（照れるぜ）

聡と昨日みたいに何度でもＫＩＳＳしたい。

聡がいてこその将

雨でにじんだ青いインクに……聡はいつしか、あの日に引き戻されている。

命をかけて助けてくれたあの川沿い。

あざだらけで……冷たく濡れそぼっていた将。

血の味がした口づけ。

そして、はじめて抱き合った寝室の、星空のようだったコンポのランプ。

『アキラ、本当は俺のこと、好きなんだろ』

いたずらっぽい声。

今、耳元でささやかれたような、産毛の感触。

『そうなんだろ』

思い出の中の声は、何度もリフレインして……切ない思いを増幅させていく。

どこまでも。

果てしなく。

膨らんでいく、将への思い。

――好き。好きよ。

将が好き。だれよりも愛してる。この世で一番大事。

なのに。

どうして――。

思い出の中の将に答えながら……もう涙は止めようがなかった。

聡は将につながる品を手に取ると……声をたてて泣いた。

そんな聡を蔭りゆく部屋が薄いブルーグレーに染めていく……。

将は、マンションを見上げると、エントランスに足を踏み入れた。

かつてここから学校に通っていたマンションだ。

――やっぱり付いてきてるな。

何食わぬ顔でエレベーターに乗り込んだ将は、ため息をついた。

ひそかに自分を追うカメラマンの存在に気づいていた。

ドラマももうすぐ最終回で、〇〇谷詩織とのスキャンダルももうすっかり下火になっている。

なのにカメラマンは依然としてつきまとっている。

芸能関係をよそおいながら……実は父の不祥事を探しているのだろう、と将はわかっていた。

父の康三は今年9月に行われる総裁選の最有力候補だ。

それゆえに、ライバル議員による不祥事探しが躍起になって行われているのだ。

カメラマンの存在になど気付いていないそぶりのまま、エレベーターを降りると自分の部屋へ向かう。

どうせ下で見張っているだけなのだ、とわかっていてもどこかで緊張していた将は……ドアの中に入ると今度こそ深くため息をついた。

井口との待ち合わせにはまだ時間がある。

その間に将は片づけておきたいことがあった。

大悟が使っていた部屋をあける。

瑞樹の遺品のぬいぐるみ、そして遺影などが……正月に見たままで置いてあった。

ほこりもかぶっていないのは、留守中にも家政婦が定期的におとずれているからだろう。

将はクロゼットから段ボールを持って来て組み立てると、瑞樹の遺品をそっと手にした。

――瑞樹。大悟を見守ってやってくれ。

将はその白い小さな犬のぬいぐるみが瑞樹の化身であるかのように、心で語りかけた。

そしてそっと段ボールの中にそれを置いた。

瑞樹の遺品は小さな段ボールにすべておさまった。

将は……ずっと大悟のことと共に、この遺品のことが気がかりだった。

将の部屋に置いてあるよりは。

大悟のところに送ってやったほうがいい。

それはわかっていたけれど。

大悟は依然行方不明のままだ。

だから。

将はせめて大悟の保護者である、西嶋夫妻の家に送っておくことにしたのだ。

大悟の死んでしまった元彼女の遺品を預かってほしい。

大悟がもし見つからずに、処分するようなことがあったら、そのときは将のところに返してほしい。

そんな頼みを西嶋夫妻は快く引き受けてくれた。

大悟が見つかったら、立ち直らせるとも。

それを、今日思いついたのは。

実は――将は、明日の試験が終わったら、聡と共に姿を隠すつもりだった。

何か月……いや、もしかして何年か隠れなくてはならないかもしれない。

世間から身を隠しても、絶対に聡と結婚し、その子供が無事に生まれるところを見届けるつもりだったのだ……。

――よし。

あとはこの段ボールをコンビニから宅急便で送ればいい。

時間もちょうどいい。

今出れば、井口との待ち合わせにぴったりだ。

再びマンションを出ようと立ち上がったそのとき。

携帯電話が鳴った。

『兵藤ケンちゃん』と表示されている。

先週までクラスメートだった兵藤だ。

まじめに寿司屋で修行する兵藤とは……将が一方的にふざけてからんでいたような関係で、兵藤から電話がかかってくることなどは……クラス関連のイベントなどがない限りありえないはずだった。

「ケンちゃん？どしたの？」

将はなかばおどけて電話にでた。

「鷹枝くん。急にごめん。ちょっと気になることがあってさ」

対する兵藤は、少し思いつめたような真剣な声だった。

「昨日、アキラ先生が店に来たんだけど……」

392◆最後の夜　1

また書き損ねてしまった。

聡はそのために買った便箋を破って捨てた。

そのため――将への手紙。将に宛てた、将を捨てるという宣告。

「将さまへは必ず手紙を残してください。出来る限りきっぱりとした文章がいいです。そして……偽造と思わせないように、手書きでお願いします」

毛利は聡にそんな風に指定した。

将に、未練を残させないための手紙。

……できれば恨みを持つほどの冷酷な内容がいい。

それは聡もわかりすぎている。

もしも聡が何も残さずに旅立てば、将は聡を探すだろう。

手紙を残しても……それがメールだったり、印字されたものだとしたら、将はそれを聡本人からのものだと信じないだろう。

毛利の提案は至極当然のことなのだ。

なのに……文案は考えてあるはずなのに、もう5枚は書き損じている。

うち最初の2枚はこぼれた涙で、文がにじんでしまった
あふれる涙を落ちないうちにティッシュでぬぐいながら、できるだけ冷淡に、

――博史とやりなおすことにした――

――将への気持ちはもう醒めてしまった――

そんな内容をつづる。

だけど、どうしても……気持が動揺しているのか、手が震えてしまう。字を間違えてしまう。

6枚目を破って捨てたときには、もう夕焼けもすっかり消えて、部屋には薄闇がしのびよっていた。

――ひなたちゃん。日本で最後の夕焼けを見損ねちゃったね。

聡はお腹に向かって心で囁いた。

できればもう一度――あの海に行きたかった。

将と初めてデートしたあの海へ。

波にはしゃいで、夕陽が落ちるのを一緒に眺めたあの海へ。

でも、先週突然決まったボストン行きに、そんなことをする時間などなかった。

聡は将との思い出の場所を訪ねる暇もないまま、明日旅だたなくてはならないのだ。

そんなことを考えていたら、また涙がこぼれてきた。

「ごはんにしようか」

聡は手紙をいったん諦めると立ち上がった。

出発は明日の朝だから、夜中にゆっくり書けばいい。

立ち上がった聡は灯りをつけた。

夕闇から一転して明るくなった部屋は、その主が明日から旅立つようには見えない。

冷蔵庫の中ですら……今朝、純代が送ってきた無農薬野菜がいっぱいに詰まっている。

康三の妻であるにもかかわらず、おそらく純代には何も知らされていないのだろう。

この部屋と部屋に残されたものの処分と保管についても、毛利は万事責任を持つことを約束していた。

つまり、ごく普通の生活の連続をいきなり断ち切るように、旅立てる手筈が整っている。

聡がボストンへ持っていくのは、スーツケース1つだけだ。

ボストンでの暮らしに必要なものだけを詰め込んだスーツケースは、1時間ほど前に詰め終わり、あとは業者が取りに来るばかりになっている。

将の思い出の品はすべて置いていくつもりだったが……たった1つだけ入れてしまった。

クリスマスに将がくれた、お腹の『ひなた』の靴下とベビーリング。

『ひなた』はもちろん博史の子として育てることになる。

博史は忙しい出発準備のあいまに、産科主催の父親教室にも参加してくれているのだ。

おそらく……博史の性格からいってもやさしい父親になってくれるだろう。

でも。

聡は最後の最後で、それをスーツケースに入れてしまった。

もちろん、本当の父親を知るチャンスなどないほうが、娘にとっては幸せなはずに違いない。

だけど。たった1つくらいは……実の父親ゆかりの品を残してやりたい。

この世に裸で生まれ出てくる娘に、本当の父親が選んだものの1つくらいは身につけさせてやりたい。

それは、娘が愛されて望まれて、生まれてきた証になるだろう。

……聡は無意識にそう思ったのだ。

このあたりは何度か歩いたことがある。もう、聡のコーポに近いのだ。

将はシートの隣にいる藤井さやかを振り返った。

「じゃ、井口クンによろしくね」

するとさやかは、

「マスク、忘れてるよ。『花粉症』なんでしょ」

といたずらっぽく微笑んで、マスクを差し出した。

サングラスの下をマスクでかくしながら将は

「あとサ、悪いけど……」

最後にもう一度念押しをしておこうと口をあけた。するとさやかは

すかさず

「わかってる。降りた場所は、春樹には内緒、でしょ。大丈夫。あたし東京詳しくないから」

と、小さな顔の中のつぶらな瞳をくるっと動かすようにして先回りした。

さすが、井口の年上の彼女だ。察しが早い、と将は思った。

井口とこの長野に住む藤井さやかの仲は、井口にしてはかなり長く続いている。

夏ごろからだから、もう半年続いていることになる。

しかも、さっきの様子から見ると、井口はまだまださやかに夢中なようだ。

今度こそ、井口も幸せになれるかな、と将はさやかを頼もしく思った。

さやかだけを乗せたタクシーが行ってしまうと、将はあたりを振り返った。

誰も付いてきている気配はない。作戦は成功したのだ。

将は愉快な気分で、１ブロック先にある聡のコーポへと急いだ。

コーポの前にはトラックが停まっていた。

駐車禁止のはずだが、宅配便か何かだろうか。将は気に留めず、階段を上った。

途中、階段を下りてきた、大きなスーツケースを抱えた業者とすれ違った。

体を横にして業者を行かせながら、将は、暗い蛍光灯に浮き出たそのスーツケースを振り返る。

どこかで見たような気がする。

聡のだろうか、と一瞬浮かぶが、すぐにそれが違う根拠を将は思い出す。

山梨に転勤していたときに見た聡のスーツケースはあれより小型だったはずだ。

そんなことより早く逢いたい。

将ははやる心のままに、コーポの階段を駆け上がった。

393◆最後の夜　2

ピンポーン。

チャイムの音に、今スーツケースを持っていったばかりの業者が何かを忘れて戻ってきたのだと聡は思った。

とって返してモニターをのぞくと同時に

「センセー、俺。井口」

という声が聞こえた。

画面の中にはニット帽にマスク、サングラスという怪しいスタイルの男が映っている。

しかしその体を揺さぶるような仕草はたしかに教え子の井口だ。

――なんで井口クンが？

聡はいぶかりながらドアをあけた――。

――将。

そのとたん、聡は懐かしい匂いと温かさに包まれた。懐かしい、干し草のような匂い。

触れる直前。すでに聡にはわかっていた。

将。どうして将が。

そんな疑問以前に、体が心が……ひさしぶりの将に引き寄せられていく。

体中の血液が将に向かって集まっていくようだ。

将に接している部分が温かくなっていく。

将は聡のせり出たお腹に沿って上半身を少し折るようにして、聡の顔に自分の顔を重ねる。

1週間ぶりの聡の顔。

至近距離でうるむ黒目がちの瞳に誘われるように将は聡の唇に自らのそれを押し当てた。

柔らかい感触。からみあう舌と舌。混ざり合う液体。

思えば、こんなふうに二人きりで会うのはいつ以来だろうか。

こんな風に口づけするのも何十年かぶりのよう……唇と唇は狂おしいほどに引きつけられた。

意識から遠く離れたところで二人は、夢中でお互いの唇をむさぼった。

ずいぶん長いこと唇を交わし……その唇の甘さを味わったところで、将は聡の顔をもっとよく見ようとした。

そして……その髪が短かくなっていることに気付いた。

「あれっ。髪切っちゃったの？」

久々の口づけでぼうっとしていた聡は、ハッと我に返る。

同時に、髪を切った理由を……今自分が置かれている立場を、そして明日の旅立ちを思い出す。

「なんで切ったんだよ～。俺アキラの髪好きだったのに」

将は未練がましく、あごのあたりで切りそろえられた聡の髪の毛先をいじくる。

髪を切った理由。それは将を断ち切るため……。

でも今それを言うわけにはいかない。明日は将の大事な受験だ。

でも、もし仮に明日が受験ではなかったとしても、聡はそれを言えなかったと思う。

とっさに、言い訳をつくる。

「春だから、イメージチェンジ。似あうでしょ」

自分でも苦しい言い訳だと思う。きっと、つくったようなぎこちない笑顔になっていると思う。

だけど、将は

「まあ、似合ってるけどさ」

とあいかわらず毛先を手のひらでいじくっている。

そんなふうに将の手がうなじとあごを往復するたびに……聡の肌は悦びに震えそうになる。

心は必死でせつない何かを押し殺しているのに。

それをごまかすように聡は

「将こそ、いきなりなあに？　その格好。しかも今、井口って言ったでしょ」

と明るい声を出す。

「ああ、これ井口の服。井口のモノマネも似てたでしょ」

将は得意げに顛末を話し始めた……。

1時間ほど前。将は、井口とその彼女のさやかとカフェで待ち合わせをしていた。

「将！　なんだその格好」

サングラスにマスク姿の井口は、待ち合わせ場所に現れた将を見て思わず大声をあげた。

「よ」

手をあげた将はもう3月だというのにダボダボに厚着して、やはりニット帽にサングラスをして、マフラーを口の上まであげている。

「さやかさん、久し振り～」

さやかは、クスッと笑う。

「こうやってニット帽にサングラスまでおそろだと、似てるね。双子みたい」

それこそ将の狙いだった。

井口と将の背丈はほぼ同じ、細身の将が厚着をして髪を隠せば遠目には井口に見えないことはない。

「どーして、マスクなんかかけないといけねーんだよ。苦しいんだけど」

文句をいう井口に、将は

「花粉症という設定だから、そのまんましといて。俺だって暑いの我慢してるんだしさ」

そういいながら、自分があとをつけられている事情を説明する。

井口にマスクをさせているのは、鼻から口を隠すためだ。
幸い花粉症のシーズンだから、マスクにサングラスという重装備の人は、巷にあふれている。
「で、今からトイレ行って服取りかえるから」
「え～？」
驚く二人に、
「このままだと俺、彼女にも会いに行けないから。頼む、協力してくれ」
と将はおがみ倒した。将の計画はこうだ。
将になりすました井口は、将が今日泊まることになっているホテルに一人で行く。
井口になりすました将は、さやかと一緒にタクシーに乗る。
もっとも、あとをつけられるのは井口のほうだから、将が目的地までついたところで、さやかを井口のところへ返すという作戦。
「スパイごっこみたい。面白そう」
さやかは無邪気に喜んだが、井口は
「いっけどよー。お前、彼女って誰だよ。星野さんはもう大阪だろ」

と食い下がる。将は

「星野さんには振られたよ」

としか言わなかったから井口は不満そうだった……。

「それで井口とさやかさんに協力してもらってここまできたわけ。井口のマネ似てるだろ？　研究したんだぜー」

将は、井口がよくやるように体をゆすってみせた。

「ところで、将、今日はどうしたの？　明日大事な受験じゃないの？」

「その大事な受験だから」

将はそういうともう一度聡を抱き寄せた。

「今晩、一緒にいたいんだ……」

吐息が額に触れるようだ。しびれるような甘い感触。

「でも」

「……アキラといると安心するんだ。今晩一緒にいれば、明日、落ち着いて実力が発揮できると思う……それに英語の仕上げ、してく

れるって言ったろ？」

聡を見下ろす将の瞳は、すでに安心しきった色になっている。

明日の計画……などはまるで気づいていないようだ。

それを見ていると聡のほうは、取り乱しそうになる。

切なくて、別れがつらくて、涙がこぼれそうになってしまう。

すべてを打ち明けてしまいそうになる……聡は思わず将の瞳から自分の視線をそらしてうつむいた。

「そういえば、アキラ」

将は聡の視線を先回りするように、顔を聡の目の前にもってきた。

あまりの至近距離に、少し目が寄っている。

「……ボストンに行くんだって？」

聡は思わず息を飲んだ。

394◆最後の夜　3

――もうだめだ。

一瞬、聡は観念した。

どうして知っているのか、という疑問より先にそう思ったのは――

すべてが将にバレていて、この計画を止めにわざわざやって来たと考えたかったから。

この期におよんで、聡はまだ将と離れたくない自分に気づいている。

いや、ずっと前から。

先のことなど考えずに、まわりなど見ずに、二人だけの世界に逃げられたら。

すべてを御破算にしてしまえればどれだけいいか。

自分にひそむ自暴自棄な思い。

自分の中で激しく渦巻くそれを感じている……ということは、今、現実の聡を支配しているのは冷静な思考ということだ。

計画をすべて反故にして。

激しい感情に身を任せられれば。

そう考えつつも、聡の現実は、自分で自分が憎らしくなるほどの冷静さだった。

そしてその現実の聡を支配している冷静さは……将の様子を観察さえ、していた。

『ボストンに行くんだって？』

といった将のその口調は思いつめた様子ではない。

口元には笑いさえ浮かんでいる。

冗談だとでも思っているように。

……つまり、自分と康三の間に交わされた約束のすべてを将が知ったわけではないのだろう。

その全容を知って……今のような反応はありえないからだ。

もし、すべてを知ったら。

将はどうするんだろうか……。

聡は一瞬想像しかけてやめる。怖かったのと、そんなことを想像しても意味がないからだ。

聡は2度、3度と瞬きをしながら、呼吸を整える。

「なあに、それ」

できるだけ明るく返すのに苦労しながら、聡は将の様子を観察した。

「何それって……アキラが言ってたんだろ。ケンちゃんとこの寿司屋で」

――大丈夫。何も将は知らない。

口止めしたにもかかわらず、兵藤は将に聡のボストン行きを伝えたらしい。

ということは、他のことは何一つ知らないのだろう。

康三から、別れるように言われていることも。

そして聡が博史と籍を入れたことも……。

聡は安心するかたわらで……気持ちのかなりの部分で失望するのがわかった。

将のこれからを考えれば、計画が生きていることは喜ばしいことのはずなのに。

「そういうことにしといたのよ……」

聡は、とっさにでまかせを言って取り繕った。

何を言っても。何を約束しても。明日、日本を発ってしまえば……あとは同じだ。

将を安心させて、願わくば明日の試験に合格させれば、聡はそれでいいのだ。

それで将は幸せになれるのだから……。

「明日、試験が終わって、合格できたら……結婚するんでしょう」

できるとは思っていなかったけれど。本当に望んでいたこと。

将が怪しまないよう、彼の瞳を見つめながら口にする将来の希望。

聡は目が熱くなるのを必死で抑えながら取り繕う。

「でも、将が結婚ってことになったら世間が大騒ぎになるでしょ。……だから、子供が産まれるまで、しばらく隠れたほうがいいかな、と思って。それで、美智子とか知り合いには、ボストンっていってごまかしてあるの」

「やっぱり、そうかー」

将は、この苦し紛れの取り繕いを信じたらしい。

白い歯を見せて笑うと、もう一度聡をそっと抱き寄せてくる。

せつなさのあまり肺が押しつぶされそうになる。

将は……聡を心の底から信用しているのだ。

裏切ることなど考えてもいないのだ。

聡の言うことなら……将はおそらく何でも信じるのだろう。

「俺もおんなじこと考えてたんだ。試験が終わったら二人でどこかに隠れようって」

肩越しに聞こえる、将の温かい声。

二人の幸せを信じて疑わない……そんな声。

そんな将が、今の聡にはつらい。

疑ってほしい。咎めてほしい。つじつまが合わないと問い詰めてほしい。

すべてを告白しなくてはならないほどに、厳しく追及してほしいのに。

本当は離れたくない。

いつまでもこのぬくもりに包まれていたい。

一方的に突き離して去っていくなんてできない、できるはずがない。

将のために、将を捨てる明日。

土壇場の今日になってまで、まだ。

……それが台無しになることを願っている。

聡は息苦しいほどの切なさの中で、将の肩の感触とぬくもりを噛み

しめていた。

将は……胸の中の聡が、涙をためていることなど何も気づかず、幸福に酔っていた。

395◆最後の夜　4

「勉強にならないな」

そういって伸びをした将はベッドに寄りかかった。

さっきまで夕食が並んでいたローテーブルには、パソコンがセットされている。

その中には将の最後のブラッシュアップのために、と聡が選んだ英語のサイトが開いてあり、それを時間内に英語で要約するという難題を聡は出していた。

その聡は、将に背を向けて、食べ終わった夕食の皿を一心に洗っている。

お膳のような小さなローテーブルには、さっきまで純代が将に持たせたトンカツをメインに聡がつくったこまごまとしたものが並んでいた。

将はそれをすべてきれいにたいらげると

「やっぱりアキラのつくったものは一番おいしいな」

とわざとらしいほどの声を出して見せた。

二人の最後の晩餐――。

その事実を知っている聡は……楽しげな将を見れば見るほど苦しか

った。

本当は将を見ていたい。

最後の一瞬まで、今の将を目の奥に焼き付けたい。

将の声を脳に刻み込みたい。

だけど。

将を見つめると……涙がわき出てしまいそうになるのだ。

だから、聡はできるだけ将から目をそらして……料理ばかりを見るようにしていた。

将の声よりも、料理の味に神経を集中するようにした。

純代がつくったトンカツは薩摩黒豚を使っただけあり、時間が経っているにもかかわらず素晴らしく美味しい。

今朝届けてくれた野菜も、おそらく大磯から届いたものなのだろう。

スーパーなどで買ったものとは甘さが違う。

だけど……そんなに美味しい料理なのに。聡はやっぱり集中することができずに……気がつくと将の手元を見つめている。

陽に焼けた長い指。育ちの良さが表れた美しい箸の持ち方。

箸の行く先をたどっていたら、知らず将の顔を見つめてしまってい

る。

だから、聡の口の中では、肉も野菜も、こらえた涙がまじったせつない味になった……。

「アーキラ」

将はとうとう立ち上がると、皿を洗う聡の横に立った。

「手伝う」

「いいよ。もう終わる」

「じゃ、俺がコーヒー淹れるよ」

聡の家の勝手がわかっている将である。

皿を拭く聡の横で、やかんを火にかけ、コーヒーをセットし、飾り棚にあったマグカップを持ってきた。

「アキラ。なんか心配？」

お湯が沸く間、将はわざと聡に体をくっつけるようにした。

横に並んだだけで将の熱い体温に体の左側が溶けてしまいそうだったのに、こうやってくっつくと熱さに甘さが加わわって……それは思わず体が揺れるほどの切なさになった。

「ど、どうして？」

濡れたふきんが皿でキュッと音を立てる。

「なんとなく」

将はそれだけいうと、左側から手を伸ばして、また聡を抱きしめてきた。

聡は持った皿を取り落とさないように、将の腕の間からそっと台の上に乗せるだけでせいいっぱいだった。

「……要約は終わったの？」

かろうじて、切なさとは対極にある言葉を選ぶ。

「コーヒー飲んだらやるよ。アキラ」

こっち向いて、と将はふいに聡の顎をつまむようにしてあげた。

涙が溜まった瞳は、隠す暇もなかった。

「何で泣いてるの？」

聡は答えない。答えられない。

「あしたが、心配？」

将も……聡のそんな顔を写し取ったように切ない顔をしていた。

眉根が寄っているくせに、悲しげな優しげな瞳がまっすぐにこちらに向いている。

溜まった涙が頬へと流れてくれたおかげで、それははっきりと聡の目に映り……思わず見とれてしまう。

でも。

見とれている場合じゃない。

この涙の正体を将に知られてはならない。

とっさに聡は、うなづいた。

つまりこの涙は……明日を愁いているだけなのだと聡は将に目で伝える。

将の眉が下がった。

せつない顔を変えないまま、将は何も言わずに上半身を聡に押し付けてきた。

いつもなら、将の性格なら

『心配するなよ』

『大丈夫だよ』

そんな台詞が出てくるところだが、それを言わずに体を押し付けてくる将。

将も不安なのだ――。

聡にはそれがよくわかった。

もしも。明日の試験で失敗したら……。

今度こそ、二人は引き離されてしまう。

しかも、明日の後期試験は……試験方法が変わって第1回目だ。

どんな出題がなされるかまるで予想がつかない。

絶対に大丈夫、などというのはありえないのだ。

万が一、盲点になっていたところを出されたら、終わりだ。

試験が終わって、たとえ二人で逃げても、権力者である父の康三は……二人をなんとしてでも探し出して、引き裂いてしまうのかもしれない。

それに、万が一逃げおおせても……将は巌から受け継いだ刀に託された遺言を果たすことができなくなる。

将は、今までの人生で最も大きな不安と闘っているのだ。

それがわかったとき、聡の涙は止まった。

将を、不安から救い出さなくては――。

将のために、明日、最大の実力を発揮させなくては。

「……将。ごめん」

聡は将の背中を優しく叩いた。涙はあいかわらず頬を流れているけれど。

「ちょっとだけ不安になっただけ……。きっと大丈夫だよ。将、すごく頑張ったじゃない」

大丈夫。将はきっと、合格できる。聡は自分に言い聞かせる。

「ヒージー……巌おじい様だって、きっと見守ってくれてる」

巌の名前が出て将は少し腕の力を強めた。

それで押されたのかお腹の子供が少しうごく気配があった。

「赤ちゃんのためにも……明日は全力をつくして。ね？」

聡は将の明日のことだけを考えるようにして言葉をつむぎだした。

将の明日だけ。

……二人の明日はすでに違う明日なのだから。

聡の……自分自身の明日は今は考えないようにする。

「アキラ……」

聡の肩にうずめるようにしているから、将の顔は聡から見えない。

顔を見てはげまさなくては、と将の胸をひきはがそうとした聡は、あるものを見てしまった。

それは、キッチンの台の上に並んだ、マグカップだった。

誕生日に将がくれたペアのそれは……今は静かに台の上に並んでいる。

これを二人で使う明日はこないのだ――。

マグカップと、たくさんの思い出と一緒に、将を置き去りにして発たなくてはならない。

あの海。

あの街角。

雪の夜も。

夏の朝も。

夕暮れの教室も。

将がいた場所。

将がいた季節。

すべてはもう

帰れない日々――。

振り返れない日々――。

将の匂いに包まれた聡は、いま再び目が熱をおびてくるのを止められない。

将の背中から腕へと移動した両手が震えて……再び背中に戻る。

押し付けられたお腹は再び動き始めた。

再びしがみついた聡を将は何の迷いもなく抱き寄せる。

お腹を気づかっているのか、その力の込め方はどこか優しい。

将の声が聡の中に蘇る。

アキラ、アキラ……。

低いくせに少年の青さを残した声音で、何度呼ばれただろうか。

将は。

自分を失って。

どうするんだろうか。

『俺の人生はアキラ次第なんだ』

『アキラなしの人生なんて考えられない』

『アキラと離れるなんて死んだほうがましだ！』

そう叫んだ激しさのままに、まさか死を選んだりはしないだろうか。

「しょう」

聡は涙のままの顔をあげた。

「あきら」

自分を見下ろす将の顔は……不安げな子供のようだった。

親と別れなくてはならない子供のようなその瞬きに、聡は一瞬、将がすべてを知っているのかと錯覚しかけた。

それほど、悲しげな顔だった。

「がんばって」

聡は将の頬に両手を伸ばした。

男っぽい顔のくせに少女のような唇が、声のないまま聡を呼ぶ。

「……何があっても、乗り越えて。将が乗り越えてくれれば、あたしも大丈夫だから」

「あきら……」

「ね……？」

それは聡の本心だった。

将を捨てなくてはならない悲しみ。

生きたまま体の一部を引きちぎられるような心の痛みも……将がそれを乗り越えて、幸せになれるのなら、耐えられる。

将の明るい未来につながるのなら、大丈夫。

いつか、巌の遺言を果たした将を、遠くから見守ることができるなら、それでいい。

将は、歯をくいしばるようにしてうなづきながら……違和感を感じていた。

こうやって抱きしめていても。

甘い香りやぬくもりを感じていても。

せり出たお腹から胎動が伝わっていても。

どこか、今日の聡ははかなげに思えた。

まるで。

……このまま、永遠に別れてしまうような。

聡は、明日の試験にそこまで危機感を覚えているのだろうか。

将が、もう少し聡のその瞳の真意を確認しようとしたとき、やかんが沸いた。

「コーヒー、あたしがいれるから」

涙を指でぬぐうようにして微笑みをつくると、聡は将から離れてしまった。

だから、将は……このときも気づくことができなかった。

396◆最後の夜　5

エアコンがシュー、という音を立てて、また動き始めたようだ。

まだ3月なかば、外は相当に冷え込んでいるのだろう。

聡は傍らに眠る将の布団をかけ直すと、携帯をあけて時間を確認した。

2時半すぎ。

明日、将がここを出るのが7時半。

試験は9時30分からだが、念のために1時間前には試験会場に到着するようにと聡は助言した。

もちろんゆとりを持つためでもあるけれど……さっき、将が風呂に入っているときにチェックした博史からのメールには、朝8時すぎに迎えに来るとあった。

朝一番で同行する産科医に病院で検診をしてもらい、そのまま空港へ向かうことになる。

将がもしここでゆっくりしていけば、土壇場ですべてが崩れる危険があるのだ。

だけど、聡はそんなことを忘れて、今はただ将の寝顔を見つめてい

た。

あいかわらず真っ暗にはならない東京の夜。

そんな薄闇の中に、目を凝らせばいとしい将の寝顔は、はっきりと見えるようだった。

将と一緒にいられるのも……あと5時間。

暗がりに身を起こした聡は、将の寝顔を目に焼きつけるべく、微動だにしなかった。

「正月以来かな……二人で寝るの」

今から3時間ほど前。聡は明日に備えて早めに寝るように将にうながした。

将は素直に従いながら、そんな風にはしゃいでいた。

狭いシングルベッドも将に言わせると

「その分、アキラにくっつけるからいいよ」

と嬉しいことらしい。

お腹が大きい分布団の幅が足りなくなったらいけないと、聡は布団の上に毛布を2枚重ねた。

そしていつもは消すエアコンを、つけておく。

受験前日に風邪などひかせたら元も子もないからだ。

灯りを消してもしばらく将は嬉しそうに仰向けになった聡のほうをむいていた。

将の瞳の嬉しげな動きは、薄暗がりの中に三角形に浮かぶ白目でわかった。

「ね、アキラ」

「なあに。……早く寝ないと。明日は余計に頭を使うんだからたっぷり睡眠をとらないと」

聡はさっきから、分別くさい言葉を選ぶようにしている。

刻一刻と迫ってくる別れから目を背けるように。

自分の感情が高ぶらないように。

将は、わかってる、といいながらいったん身を起こすと、せりでたお腹に耳を押し付けるようにしてそっと抱き寄せた。

『ひなた』がそれに気づいてかごぼごぼと体を動かし始める。

この子も、実の父との別れがわかるんだろうか、と考えそうになった聡はあわててそれを打ち消す。

聡の感情は一触即発だった。

少しでも刺激を与えれば大声で泣いてしまいそうになる。

……それをさっきから堪えている。

「おなかの子、動いてるね」

将は嬉しそうに聡を振り返った。目が輝いているのが暗がりでもわかる。

「うん……」

あと2か月かあ……と将はいとおしげに聡のお腹ごと『ひなた』を抱きしめた。

『ひなた』はくるくるとお腹の中で動いた。

まるで笑っているかのように。

「男か女か、まだ教えてくれないの？」

「……明日試験が終わったら教える」

聡は、眠くて目をこするふりをした。

……目にたまったものを、将に見られないようにぬぐうために。

「アキラ」

傍らで布団にもぐりこみながら、将は今度は聡の手をさぐってきた。

聡の左手はちょうど、『ひなた』がいるお腹の上で将の手と重なった。

まるで親子3人で約束を交わすようだ。

「明日、大磯の家に行ってて……」

将の瞳は暗がりの中でもまっすぐに聡を見つめていることがわかった。

「そこで待ち合わせよう。そのまま、発表まで……隠れとこう」

将の計画。

まだ二人の明日が同じ明日であることを信じているゆえの……計画。

「いいだろ」

聡の手をにぎる将の手の力が少し強くなる。

暗がりに目が慣れるのを聡は恐れた。

自分の裏切りが、将にすっかり見えているのではないかと。

「……うん」

「絶対、来いよ」

将は念を押すと、暗がりの中、聡を見据えた。

聡はそんな将を見つめ返す――。

ひょっとして将はすべてわかっているのではないか。

それを見極めなくては、というよりは……将の真剣な瞳に、視線が吸い寄せられて離れられなかったのだ。

真摯に自分を見つめる将は、美しかった。

薄闇の中、二人は見つめあった。

それが、一瞬なのか、長い時間だったのか……二人とも忘れていた。

「……うん。わかった」

ようやく聡は返事をすることができた。

針を飲み込むほどつらい嘘の……返事。

でもそれを言わなくては将は安心して試験に臨めないだろうから。

将は安心したように微笑むと、もう一度聡の手をぎゅっと握った。

「俺、絶対にアキラを幸せにするから」

今度はさっきより柔らかい瞳が向けられている。

温かいその手から……将の思いが血管に注ぎこまれるように、体が温かくなっていく。

愛されている。

その温かさは、明日に迫った別れを忘れさせるほど甘やかに聡を包み込んだ。

「あたしは……もう、十分幸せだよ」

思わず聡はつぶやいた。

今が、幸せ。

こんなにも愛する人に出会えて……愛されて。

こんな至福の瞬間を味わえた。それだけでいい。

「俺も……俺もアキラに出会えただけで、一緒にいられるだけですっげー幸せなんだけど。……ずっと幸せでいような」

二人は同じ幸せを今噛みしめているのだった。

ただ、聡だけがそれが今だけであることを知っている……。

「何？」

ふいに身を起こした聡を将は寝そべったまま見上げた。

「トイレ」

聡は言い訳しながらそっと立ち上がった。

「あー、トイレまで一緒にいけたらいいのになあ」

そんな冗談をいいながら将は仰向けになった。

二人の幸せが未来永劫続くことを信じている、無防備な横顔。

「バカ」

冗談に応じながら、トイレに入った聡は、とうとう声をしのばせて泣いた……。

時計は3時半に近づいている。

完全には暗くならない東京の夜は、あいかわらず将の寝顔を浮かび上がらせていた。

夜明けまであと少し。

将といられるのはあと4時間。

その鋭い鼻梁も、出会った頃よりがっしりとした輪郭も。

その下に澄んだ瞳を隠した瞼も、長いまつ毛も。

りりしい眉毛も、形の良い唇も。

将のすべてを焼きつけようと、聡はずっと見つめている。

いつでも取り出せるように。

こんなにも愛したのは将ひとり。これからも……。

たった一人の人。

おそらく生涯最後の将との夜は……まもなく明けようとしていた。

397◆旅立ち　1

朝が来なければいいのに。

聡のそんな願いもむなしく、ついに夜が明けてしまった。

薄闇はいつのまにか、青いカーテンを透かした朝に変わっている。

子供のように聡のほうを向いたまま眠りこけている将。

眉根を少し寄せた寝顔はクセになっているのだろう。

ずっと見ていても飽きない……将の顔。

だけど、こんな風に見ていられるのもあと少し。

将といられる時間はあと1時間あまり。

聡は1秒も無駄にするまい、と将を見つめた……。

ふいにピー、と音が鳴る。

朝食に仕掛けておいたご飯が炊けたらしい。

その音で、将がもぞもぞと動いた。

大儀そうに目をこすりながら傍らにいるはずの聡を探し……次の瞬

間、目が開く。

「ん……。アキラ起きてたの」

――起きちゃった。

……聡は名残惜しさを感じながらうなづいて、将の髪を撫でた。

本当は、ずっと眠っていてほしかった。

眠っていてくれれば。

夜のままでいれば。

別れの瞬間が来ないで済むから……。

奥二重の将のまぶただが、起きぬけのせいか幅の広い二重になっている。

いつもよりさらに甘い顔立ちになった将は、あどけなく微笑むとこちらに手を伸ばしながら体を起こした。

熱い体温に包まれて、唇が押しあてられる。

――最後のキスかもしれない。

そんな考えをどこかに押しやりながら、聡は口づけに集中する。

この唇の柔らかさも。

舌の感触も。

忘れたくない。

しばらくお互い我を忘れたように唇を重ね合い……二人に挟まれたお腹の中の『ひなた』がぐるりと動く。

どうやら彼女も起きたようだ。

将の唇がゆっくりと離れた。

そのまま優しい瞳で聡を見つめると

「おはよう」

と言った。

そして次に、お腹に向ってささやくように同じように囁くと、聡に瞳を戻していたずらっぽく笑った。

それを見た聡は口角をあげながらも、鼻の奥がツーンとするのを抑えられなかった。

最後の1時間。

それが僅かであることを悲しむよりも、最後のひとときを味わおう。

聡はそんなふうに、悲しみを心から押しやって、進んで平和な朝をつくるようにした。

何もないように朝食をつくり、テーブルに並べる。

将はペアのマグカップにコーヒーを淹れる。

そしてそれを二人で味わう。

「お弁当、簡単だけど作ったから」

昨日、純代のトンカツが入っていた重箱にお弁当を詰めて聡は将に渡した。

「やった。アキラの手作り弁当！」

将は嬉しそうにそれを受け取ると、包みの上からキスをした。

無邪気に喜ぶ姿を見ると……押しやったはずの悲しみが押し寄せてきそうになる。

将がこのお弁当を食べる頃、聡はもう日本を出発しているはずなのだ……。

聡はそれを押し殺すようにして携帯を取りあげ、タクシーを呼ぶ。

もう、あまり時間がない。

「タクシーなんか、別にいいのに」

それを見ていた将は、あいかわらず両手で弁当を持ったままつぶやく。

「よくないよ。ちょうどラッシュアワーだし」

大事な受験にのぞむにあたって、ラッシュなどで体力を消耗するのはもったいないと聡は付け加えた。

将は素直に「わかったよ」と微笑んだ。

聡の気遣いがいちいち嬉しいらしい。

聡のことを信じ切って……まったく疑うようすなどない将。

そんな将の表情を見ていると、今日、将を捨てて出発することなど嘘のようだ。

将の計画通り、試験の終了を待って、大磯で落ち合うほうが現実のようにさえ思えてくる。

今朝の幸せな朝食が、毎日続く道を、今からでも選べるのだと錯覚してしまう。

「ほら、歯磨いて」

将を洗面所へ促しながら、聡は引き出しを開ける。

そこには、将に宛てるために買った便箋が入っている。

将に宛てる別れの手紙。

それを、聡はまだ書きあげていない。

将がここを出て、博史が迎えに来る３０分あまりの間にそれを書かなくてはならない。

かろうじてその現実を思い出すと、聡は目を閉じた。

「じゃあ、行ってくるよ」

靴を履いた将はあらためて聡と向かい合った。

軽く口元に笑みを浮かべながらも目に力が入った……真剣な表情だ。

今日の試験が、二人の未来の正念場。

将の覚悟がその強い視線からひしひしと伝わった。

「がんばってね」

その励ましは本心だけれど。将には頑張って東大に合格してほしいけれど……。

もう――これで最後。

これっきり、将と会うことはない。

なんて……あっけないのだろう。

高波のような悲しみに、崩れてしまいそうな心と体を持ちこたえながら、聡はせいいっぱいの笑顔を作った。

将は玄関のドアを自分であけると、聡の顔を見たままあとじさるようにして階段へと向かった。

聡は開いた玄関ドアを体で支えながら、一歩ずつ遠ざかっていく将の顔に向かって手を振っていた。

将は階段の一段目までのけぞるようにして名残惜しそうに聡の顔を見つめていた。

そんな将がついに見えなくなったとたん、聡は怒涛のような悲しみにとっぷりと飲み込まれた。

両の瞳からは涙がぼろぼろとこぼれ落ちた。

階段を駆け下りていく将の足音。

――いけない。まだ、だめ。

いったんしゃがみこんだ聡は再び立ち上がった。

タクシーに乗り込むときに将はきっと振り返る。

まだ最後じゃない。

まだ泣いちゃいけない。

笑って見送らなくちゃ。

流れた涙を袖でぬぐおうとしたそのとき。

おもいがけなく、あわただしく階段を駆け上ってくる音が響いた。

そして……いたずらっぽい将の顔がひょっこり階段からあらわれた。

将は……なぜか、また戻ってきたのだ。

398◆旅立ち　2

将はなぜか、また聡の元に戻ってきたのだ。

「忘れ物」

そういいながら、将はこちらへと大股で歩いてきた。

聡はふいを突かれた驚きのあまり、流れた涙をぬぐうことも忘れていた。

「何で泣いてるの？」

再び聡の目の前に立った将は、そこで初めてけげんな顔をした。

もちろん聡に理由など言えるはずもない。

涙をぬぐいながら

「忘れ物って何かあった？」

と訊き返すのがせいいっぱいだった。

いたずらっぽく微笑んだ将の顔。

と、次の瞬間、朝の冷たい空気が遮断されて聡はすっぽりとぬくもりに包まれた。

将はそのまま聡の頬に両手を添えると、軽く口づけをする。

さっきより軽い、お互いの唇のぬくもりと柔らかさだけを確認するような優しいキス。

以前、こんなふうに聡のもとから出かける将に口づけを与えたことがあった。

あのとき、聡は自分から『忘れ物』と将を誘ったはずだ。

柔らかな感触が甘い記憶を呼び出す……。

「アキラ。心配しないで」

唇が離れたとき、将はそう囁いた。

柔らかくなった瞳が至近距離から聡に注がれる。

「俺、頑張るから」

そういって将は口角をきゅっとあげると、若竹のようにすっと背筋を伸ばした。

「じゃ、行ってくる」

将は軽く手をあげた。

そのまま聡を振り返りながらも、あんまりタクシーを待たせては、と思ったのか今度は走り去った。

将。

聡が廊下から身を乗り出したそのとき、階段を降り切った将が上を見上げた。

――将。

行ってしまう。もう二度と会えない……。

見上げた将は聡に向って軽く手を振ると、開いたタクシーのドアの中に乗り込んだ。

それが最後だった。

タクシーはそのまま走り去った。

将の乗ったタクシーが見えなくなるまで聡は見送った。

目からは涙がとめどなく流れていた。

しかし、時間があまりない。

聡は涙を手の甲でぬぐうと、部屋に入った。

空気にかすかに混じる将の匂い……新たなる涙がにじみそうになる。

それを聡はこらえながら便箋を取り出す。

一刻の猶予もない。博史が迎えに来るまであと３０分あまり。

将への手紙を書きあげて、食器を洗って、着替えて……それだけのことをしなくてはならない。

聡はペンを取ると、したため始める。

きっぱりと、冷酷に……迷っている暇はない。

――鷹枝くんへ

宛名はわざと苗字を選ぶ。

将という名前を呼んでいいのは親しい人だけだろうから……将と一線を引くべき聡はもはや使ってはいけないのだ。

――私は、鷹枝くんとは結婚できません。それは、よく考えた結論です。

――あなたの若さも、家柄も、あなたにかかる大きな期待も……一緒に受け止めていく自信がありません。

――私は、私にあった安定した人生のために博史さんとやりなおすことにしました。

――両親も賛成してくれました。

将を追い詰める言葉を……意図的に選んで書きながら、聡は息が詰まった。

これを見た将はどんなにうちひしがれるだろうか。悲しむだろうか。悲しむよりは、怒ってほしい。怒りを今後の人生へのパワーにしてほしい。

それだけを願って聡はペンを進める。

――若いあなたとの時間は、私にとって思いがけないものでした。とても楽しかった。

――だけど、生活は、人生は――そうはいかないと思う。

聡の人生にとって将はゆきずりの恋にすぎなかったのだ――。

したためた嘘が、事実となって将に届くことを考えると聡は絶望しそうになる。

生きる希望さえなくなりそうになる。

かけがえのない、たったひとつの愛をこんな風に貶める理由を忘れ

そうになる……。

——子供は、博史さんの子供として育てます。

——だから、鷹枝くんは、鷹枝くんの人生を早く見つけて。

将の人生。将の幸せ。

聡がこの愛を諦める理由はただひとつ。

将の幸せのためなら、自分の幸せを捨ててもかまわない。

いつかひらめいた予感が……いま、現実になろうとしているのだ。

聡は最後に自分の名前をしたためると、それを素早く折りたたんだ。

折りたたみ終わったのとほぼ同時に……涙がボタボタとローテーブルに丸い水たまりをいくつもつくった。

タクシーは高速に差し掛かっていた。

将は、シートに寄りかかりながら考えていた。

何かが、ずっと、胸にひっかかっている。

いや、胸にひっかかっているものの正体ははっきりしている……それは昨日からの聡の泣き顔。

さっきも聡は泣いていた。

いくら今日の受験が心配だからといって。

今日の受験に失敗したら引き離されるからといって。

悲観的過ぎるのではないだろうか……。

悲観的？

聡が泣いていたのは、将が出ていったあとだ。

あのとき、将がふいに戻ったから目にしてしまっただけで……今朝の聡は涙を見せないようにこらえていたはずだ。

こらえていた？

何のために？

考えれば考えるほど、ずるずると何かが引っ張り出されてくる。

何か。不安のようなもの……。

気のせいだ。

ついにやってきた正念場だから……聡も涙もろくなっていただけだ。

そう思おうとしたけれど、脳の奥では割り切れないでいる。

何かが、ずっと注意信号を発している。

しかも深刻な……。

やめよう。今はそれどころじゃない。

今から試験だ。

よけいなことを考えている場合じゃない。

将は目をつむると、不安を追い出すべく瞑想した。

聡の涙の理由は、このもやもやは。試験が終わった後でゆっくり追及すればいい。

いや、今日試験が終わったら二人で大磯だ。

そこでなにもかも解決する……。

息を吸い込んで、目をあけると窓の外を眺める。

都市高速は車が多くなってきている。追いこし、追い越されていく車のボンネットにきらきらと春の朝日が反射している。

すぐ横を追い越していった一台のタクシーを見送ったとき、将の中で、ことり、と何かが動いた。

そのタクシーは……今から成田方面にでも向かうのか、トランクから、大きなスーツケースがはみ出していた。

スーツケース。

将は視線を窓から膝の上に落して、今一度、記憶を探る。

昨日。階段ですれ違った業者が抱えていたスーツケース。

聡のスーツケースは。山梨にいったときのスーツケースは別の色だった。

しかし。

将は、昨日のスーツケースをどこかで見たことがある。

——どこだ。

将は額を右手でわしづかみにした。

次の瞬間、ある記憶が稲妻のようにひらめく。

去年の冬。同棲していたとき。

聡の部屋のクロゼットの中。

将のために、聡は自分のクロゼットの1／3ほどを整理してくれて……将のためにあけてくれた。

そこには、聡のスーツケースが大小2つあるのを……将はたしかに見たのだ。

『アキラ、スーツケース2つも持ってるの？』

『ふだんはこっちしか使わないけどね。大きいほうは留学してたときのなんだ。めったに使わないから、中には季節はずれの服を入れてる』

間違いない。

こっちしか使わない、といっていたのが山梨に持っていったほうで、昨日……業者が持っていったのは、その大きいほうのスーツケースだ。

――しかし、なんで……。

『アキラ先生が、ダンナさんと一緒にボストンに行くって、鷹枝クン知ってた？』

稲妻のあとの雷鳴のように。

兵藤の声が蘇って将は顔をあげた。両のまなこが大きく見開かれている。

まさか。

冷汗が一筋、将の背中を流れていく。

399◆旅立ち　3

手紙を書き終えた聡は、軽く部屋を片付けた。

博史からメールがあり、迎えに来るのは8時30分すぎになるらしい。

出発までの時間が延びた分、聡は部屋の片付けに費やすことにした。

ベッドを整え（本当はシーツを洗濯したいけれどそこまでの時間はないのでそのままにしておく）、床にモップをかけ、ゴミを厳重にくるんでひとまとめにしてベランダに置く。

ベランダにある、なんとか冬を越したミントの鉢植えからは早くも新芽が芽吹いていた。

これも、たぶん枯れてしまうだろうけれど、せめて最後に水をたっぷりあげておく。

そして朝食で使った食器を洗いがてら、流しを掃除する。

旅立った後で誰かが片付けてくれるとはいえ、できる限り見苦しくないようにしておきたい、というのと。

……じっとしているといろいろなことを考えてしまうから。

最後にコーヒーを飲んだペアのマグカップも泡にまみれ、そしてきれいになった。

乾いた布で水気をぬぐったそれを、聡はローテーブルの上に置いた。

一度たりとも飲みっぱなしになどしなかったそれは、茶渋なども付いておらず新品といって遜色ない。

２つ揃いのそれは、愛し合っていた二人の象徴のようによりそっていた。

将がはじめてくれたプレゼント。

もちろんこれらも持っていくわけにはいかない。

聡は封筒に入れた手紙の上に、将が使っていたほうのカップをそっと乗せた。

今日、将は試験を終えたあと、大磯の別邸に直行するという。

そこではじめて、聡が来ていないことに気づくのだろう。

たぶん将は電話をかけてくる。

だけどそのときには、すでに聡の携帯は電源を切った状態でこの部屋にある。

電話がつながらないから、今日の夜か明日か……将はたぶんこの部屋を訪れる。

この手紙を手にするのは、きっとそのとき。

その瞬間を想像した聡は思わず息が止まっていた。

将のためとはいえ、将を傷つける。

将が受ける痛みは……少しでも隙があれば聡自身の痛みとなって襲ってくる。

お腹がぐるりと動く気配があった。

もしかして『ひなた』もおびえたのかもしれない。

「早く、もう少し急げませんか」

将は、運転席に乗り出すように繰り返した。運転手が悲鳴のような声で応答する。

「お客さん、無理ですよ。ちょうどラッシュの時間なんですから」

将は唇をかみしめながら時計を見た。８時になるところだ。

昨日からの聡の涙。

そしてスーツケース。

兵藤の連絡。

予感というより、もっと確実な……不吉な暗示に、将はタクシーの運転手に引き返すように頼んだ。

その段階で7時50分をまわったところだったから、急いで聡の所に戻って、疑惑を解明しても試験にはギリギリで間に合うだろう、と将は素早く計算した。

聡が自分を捨てるはずなんてない。

聡のお腹には自分の子供だっている。

試験に遅刻する危険を冒してまで、引き返す必要もない。

だが……一瞬浮かんだ理性は、いまや嵐のような不安の前に吹き飛ばされていた。

とにかく。

もう一度、聡の顔をみないと。

聡に会って、確認しないと。

聡は……自分の前から消えてしまうかもしれない。

拳を握りしめた将は、昨日から今朝の聡を思い起こした。

……そこで追い打ちのように、聡が急に髪の毛も切っていたことも思い出す。

嫌な予感はますます濃厚になり、将はここが高速道路でなければす

ぐさま車を飛びおりたかった。

引き返すために最寄りのインターで降りなくてはならないが、そこが本線より混んでいた。

坂道を降りていく車は歩くような速度でずるずると進むのみで、将は思わず膝を揺らす。

早く、早く。

引き返すと決めてからもう１０分が経過する。

最悪、試験は２０分程度なら遅刻できる。

９時５０分までに着けばなんとかなる。今８時。まだ2時間近くある。落ち着け……。

将は自分に言い聞かせるそばから、この焦りは時間によるものではないことがわかっている。

聡が。聡が……どこかに行ってしまう。

まさか、兵藤がいった通り、ボストンへ行ってしまうのか。

将はずるずるとしか移動しない窓から、視線を膝の上に移した。

――アキラ、アキラ……俺を置いていくな。

いつのまにか、祈るように手を組んでいた……。

高速を降りると、あいかわらず車は多いものの、スムーズに流れ始めた。

ラッシュアワーと逆方向になるからだろう。

特に問題もなく逆方向の都市高速に乗り、ほどなく、みなれたあたりにやってきた。

祈るように手を組んだまま、少しほっとした将は時計を見た。

８時２０分すぎ。

どうやら聡の顔を見た上で、試験にも間に合いそうだ。

「時間帯一方通行が多いですねえ」

聡のコーポの近くは、朝のラッシュ時間帯に一方通行化しているところが多い。

将の乗ったタクシーは思ったように元の場所にたどりつけずに迂回を強いられた。

「あ、ここで降りて、歩きます」

将は料金を精算してタクシーから飛び降りると、そこから走り始めた。

最高潮に達した不安が将の足を急がせる。

――アキラ。アキラ。考えなおしてくれ。どうか俺を捨てないで！

早足で通勤する人々をも追い越すように将は全力で走った。

次の角を曲がれば、聡のコーポがあるはずだった。

……と。その角に。

若い男が立っていた。

逆光で顔はよく見えなかったけれど……よく知っている背格好。

「大悟」

思わず将は立ち止まった。

そこにいたのは確かに、大悟だった。

「……大悟じゃんか。なんでこんなところに」

こうして顔を見るのは……あの7月の台風の翌日以来だから、何ヶ月だろうか。

将は走りすぎて苦しくなった息を整えながら、逆算しつつも、大悟に近づいた。

「将」

大悟は微笑むと、足早に将のほうへと近寄って来た。

その大悟の顔が……異様なほどに痩せこけて、目の下に真黒なクマが浮き出ているのに、そして瞳が異様な光をたたえているのに……将が気付いたそのとき。

将は、大悟がぶつかってきたのかと思った。

次に……ふいに下腹を殴られたと思う。

内臓が一気に突き上げてくるような強い力を、将は下腹で受け止めた。

いや、殴られたより鋭い衝撃。

しかも、その衝撃を、将の体は跳ね返すことなく、ギリギリと吸収していた。

――刺された。

大悟は将の瞳さえも突き刺すように睨みつけながら、えぐるようにギリギリと刺したものに力を込めてくる。

反射的に局部にあてた手が、次第にぬるぬるしてくるのを感じながら、将は大悟の瞳を見つめ返した。

大悟の瞳は……真黒なクマの上で、狂人さながらに光っていた。

あの夏の。台風の翌日。

警察官に押さえつけられながら将を睨みつけたあのときさながらに。

「だ……いご……」

「……瑞樹のところへ行ってやれ、将」

大悟は激しい視線に似合わない静かな口調でそういい放った。

そしてツカまで将に突き刺したサバイバルナイフをぐっと引きぬいた。

そのとたん、将の視界は暗くなった。まるでパソコンの……省エネモードのようだ。

心臓と同じリズムで、大量に何かが体から失われていくのがわかる。

ピューピューという感覚が傷口から伝わって……体温が失われて寒くなっていく。

傷口から噴き出した血は、ジーンズを内側からあっというまに血染めにした。

ジーンズの内側を伝った大量の血液は、靴下やバッシュも血染めに、アスファルトに染み出した。

もはやまっすぐに立っていられない。

体をエビのように曲げる将は、アスファルトに流れる自らの赤い血

を見た。

明るい赤。

自分がヤクザを刺したときと同じいろ。

『動脈が通っているから、まず助からないわ』

いつかカオリさんに習った、急所の１つを、大悟は冷静に狙ったのだ。

４００◆旅立ち　４

１時間ほど前。

将が以前住んでいた……去年の夏まで大悟と二人で暮らしていたあのマンション。

将の部屋の、隣の住人は、激しい騒音で目を覚ました。

廊下中にこだまする、鉄製のドアを乱暴に叩く大きな音。

自分の部屋の扉ではないものの……それはマンション中の住民に響き渡っていると思われるほど大きな音だった。

若い男の喚き声も聞こえる。

隣の住人はチェーンをかけたまま、そっと扉をあけて様子をのぞいた。

どうやってオートロックの玄関を入ってこれたのか、痩せた若い男が隣の扉を叩いて……ときおり蹴っている。

この男こそ大悟だった。

「将！　あけろ！」

叩きながら、しきりにわめき続ける。

隣の住人は……将の顔は知っていたが、生活している時間帯が違うせいか、大悟とは一度も顔をあわせたことがなかった。

「瑞樹を返せ！　返してくれ！　あけてくれぇー！」

わめきながらガンガンと拳で力いっぱいドアを殴りつける。

その目は尋常ではなかった。

これだけ叩いて無反応なら留守だとわかってよさそうなものなのに、体当たりさえ始める。

そのドシーン、ドーンという音はマンション中に響いた。

そこかしこの住民が……違う階の住人でさえも固唾をのんで様子をうかがっているのが気配でわかった。

それにしても、鉄の扉にあんなに体当たりしたら、自分の体のほうがたまらないのではないだろうか。

隣の住民は騒音に辟易しながら少し心配した。

まもなく。

とうとう住民の誰かが連絡したのか、管理人がやってきた。

年配の管理人はおずおずと大悟に近づいた。

危害を加えられるのを恐れてか、大悟との距離をとったまま、

「あの……鷹枝さんは、ずっとお留守ですよ」

といった。

急に大悟が振り返ったので、管理人は、反射的に後ろに一歩下がる。

管理人は、目の下に真黒なクマが浮き出た大悟の顔を、やはり尋常じゃないと思った。

しかし、できるだけ穏便に出て行ってほしい。

それゆえに繰り返す。

「鷹枝さんは……ときどきお掃除の方がこられるだけで……ずっとお留守にされてるようですよ」

それを聞いた大悟は、やっと将の部屋のドアから離れた。

そして、管理人には返事もせず、エレベーターに向かう。

その体はふらついていて……すれ違いざまに管理人とぶつかった。

管理人は、あとを追うでもなく、黙って大悟の後姿を見送っていた。

大悟はエレベーターの中で、小刻みに震えていた。

気がつくとエレベーターの箱の中は真黒な蟻の群れで覆われていた。
蟻は足もとから1匹、また1匹と這い上がってくる。
「瑞樹……助けてくれ」
大悟は震えながら呟いた。
瑞樹の幻影は、目の前にいる。触れようとするが、触れられない。
かわりに、何やってるんだという理性が蟻の群れの中からずるりと心の中から這い出てきた。
大悟は深くため息をついた。
冷汗がこめかみから、背中から流れている。
無意識に内ポケットに手を伸ばす。
――ない。
わかっているのに。大悟は苛立たしいながら、すっかり忘れていた自分が少し可笑しくなる。
正気を保つ薬は昨日の晩で尽きてしまったのだ。
大悟はふらふらとエレベーターを降りた。
どうしてここにいるのか。その理由をもすっかり忘れていたことにいまさら気づく。

幻覚に囚われながらも大悟は……瑞樹の遺品をとりに、ここを訪れたのだ。

――瑞樹。お前、そんなに将のそばにいたいのか。

遺品を手にすることがかなわなかった大悟は、幻覚と理性のはざまで瑞樹の真意を見た気がした。

遺品となり果ててまで。

瑞樹は将の元に自分を置いてほしいのだ……。

――お前、本当に将が好きだったんだな……。

だけど、将は。あのアキラ先生を今も好きなんだろう。

聡を思い出した大悟は、柔らかい空気が一瞬通り過ぎていくのがわかった。

自分にも優しかった聡。

聡が今の自分を見たら、何というだろう……。

それに油断した大悟めがけて、一匹。大きな蜘蛛が大悟に向って這ってくるのが見えた。

大悟は反射的にそれを殺そうと、ポケットにあったサバイバルナイフを取り出した。

しかし、ぱちん、とナイフを開いた途端、蜘蛛の姿は薄れた。

かわりにナイフの刃に……ビルの谷間から射しこんだ一筋の朝日が、反射して……大悟の瞳を射抜いた。

白い光は、大悟を再び狂気の世界にひきずりこもうとしたが、大悟は辛くももちこたえた。

白い光は、大悟の中にある、狂気より恐ろしい念を、今、はっきりとあぶり出した。

将が憎い。

ずっと前からあった怨念。

自分でも見て見ぬふりをしていた深層。

ナイフは、将を殺せ、と大悟の心の奥深くまで切り込んだ。

将が憎い。

将を殺してしまえば。

支離滅裂に分離しそうな心は、みるみるうちに将への殺意に統一された。

ナイフをしまうと大悟は再び歩き出した。

その足取りはさっきよりしっかりしている。行き先はわかっていた。

――ここにいないのなら。将はきっと聡の家にいるに違いない……。

「大悟……逃げろ」

大悟はハッと我に返った。今にも倒れそうな将が目の前にいた。

その顔からはすでに血の気が失せていて、土気色になっている。

アスファルトにはジーンズを伝って真っ赤な血だまりができつつあった。

大悟は……自分の置かれた状況が、一瞬わからなくなっていた。

血で真っ赤に染まった右手に、血のついたナイフがこびりついている。

瞬間接着剤でくっつけたように、指から離れない、ナイフ。

大悟は、すべてを忘れて動揺した。

自分は将を刺したのか。

（刺した）

どうして刺したのか。

（瑞樹のために）

（瑞樹を死に追いやった元凶の将こそ死ぬべきなのだ）

さっきまでの正義が。将を殺すための正しい論理が。

爪に、手の皺に濃い赤の筋となって沈んだ将の血で。

温かく、べっとりと重い血で。

一気に軽く、そらぞらしくなっていく。吹き飛ばされていく。

代わりに将との日々が頭を駆け巡る。

助け合って暮らした中学時代。

自分のために、ヤクザを刺し殺した将。

命がけでシャブから脱出させようとした台風の夜。

将を、失っていいはずがない。

将が、この世から消えていいはずがない。

大悟はナイフを手にしたまま、激しく震え始めた。

「大悟……俺は……大丈夫だから……逃げろ」

将は苦しい息の下でなおも、つぶやく。

上体が地面に近づいて……今にも倒れそうだ。

血はいまや、押さえた傷口から直接地面へと滴っている。

「……将」

「はやく」

大悟は、震えながらうなづくと、一目散に来た方向へと駆け出した。

「そうだ……逃げろ……大悟」

将は大悟の後姿を見送ると、塀に寄りかかった。

もはや、自力で立っていられない。

視界に霞がかかってきて……脳天が冷たい。

手足は痺れて……すでに感覚がない。

「ア……キラ」

聡のところに行かなくては。

朦朧とした意識の中で、将はなおも強く思った。

聡に会って、引き留めなくては。

将は飛んでいきそうな意識をかろうじて握りしめると足を踏み出し

た。

――アキラ。俺を置いていくな。

あの角を曲がれば。聡の部屋が見える。

将はそれに向けて、ひと足、踏み出した『つもり』だった。

実際には……次の瞬間、将の体はアスファルトの路面に倒れていた。

青空がくるりと回転して、意識は白く蒸発して、途切れた。

往来に女性の悲鳴が響き渡った。

４０１◆旅立ち　５

――遅い。

ベッドに腰かけた聡は時計を見た。

この部屋に置いていく目覚まし時計は、８時４０分を指していた。

さっき連絡があった時間を１０分もすぎている。

……もうすっかりこの部屋を出ていく準備は出来ている。

大きなものは発送したし、聡が持っていくものはわずかな手荷物だけだ。

部屋も……わずかな時間ながら、掃除をしたせいかすっかり片づいている。

あとは、博史の迎えを待つばかり。

なのに、博史は依然現れない。

聡の視線は……油断すればローテーブルの上においたペアのマグカップに吸い寄せられてしまうようだった。

マグカップは息がとまりそうな切なさを聡の中にふいに蘇らせる。

早く。早く来てほしい。

そうでないと、せっかくの決意も覚悟も揺らいでしまいそうになるから。

聡は目の奥にこみあげてくる熱いものをこらえるために、お腹をさすった。

「遅いね」

感情のガス抜きをすべく、お腹に話しかける。

『ひなた』は聡に答えるように、くるり、と動いた。

と。外からサイレンが聞こえ始めた。救急車の音だ。

不吉な予感をかきたてるような音はどんどん近付いてくる。

だけど聡はそれが、まさか自分に関係のある音だとは気付かなかった。

それにしてもサイレンの音が見る間に大音量になった。

まるでこのコーポを目指しているかのようだ。

すぐ近くで病人でも出たのだろうか。

あまりにけたたましい音に、聡はベッドから立ち上がって窓から外をうかがおうとした。

そのとき、ふいにサイレンが止んだ。

そして、まるでサイレンと入れ替わりのようにチャイムが鳴った。

聡は、なぜかビクッと硬直した。

博史だとわかっているのに。

ローテーブルの上のマグカップが、見つめている。将のマグカップが。

マグカップが自分を引き留めているような錯覚を振り切るようにして聡は玄関に向かった。

「遅くなってごめん、聡……あれ、髪、切ったんだ」

やっぱり博史だった。

階段を駆け上がって来たのか息があがっている。

……ついに、来てしまった。

ついさっきまで、早く来てほしいと思っていたのに。

思わず飲んだ固唾を隠すように聡はほほ笑みをつくった。

「なんか、このすぐそばで事故があったみたいで、迂回させられたんだ。人だかりがすごくて」

博史も息を整えながら、言い訳をした。

そんな博史を気遣うように聡はフォローをいれた。

「ついさっきまで救急車の音が聞こえてた。大丈夫？」

「うん、俺は大丈夫。急ごう。病院で先生が待ってる」

聡はうなづくと、準備した手荷物を取った。

そして――もう一度部屋を見渡す。

ここに、勉強を教えてくれと将がいきなりやってきた。

ギプスの足をかばいながら、はじめて一緒に寝た日。

そして、傷ついた将を慰めるように、はじめて結ばれた。

将が真似して買った、ＣＤ。

将がくれたマグカップ。

将がたわむれに相合傘を書いた手帳。

将の思い出がしみついたこの部屋を、ついに発つ。

聡は最後にこの部屋の空気を大きく吸い込んだ。

涙をこらえるため、そして。

１時間と少し前にここにいた将のにおいを、最後に体にとりこむため。

将の空気は酸素になって、お腹にいる『ひなた』にも届けばいいー―。

『ひなた』はぐるぐると活発に体を動かした。

深呼吸が終わった聡は、ゆっくりと博史がいる玄関へと歩き……部屋の鍵をかけた。

鍵は、新聞受けに入れておくことになっている。あとで毛利の部下が取りに来る手はずだ。

博史にかばわれるように聡はコーポの階段を降りると、待っていたタクシーに乗り込んだ。

「〇〇病院へ。急いでください」

ドアが閉まると同時に博史が運転手に言いわたした。

「はいはい。……なんか事件みたいですよ。すごい人だかりだ」

運転手のいうとおりフロントガラスからは、この先の角に人が大勢集まって車道まではみだしているのが見える。

パトカーのうち1台が進行方向に止まっているせいで、さらに車道がせまくなっている。

どうやら角のところで、何か事件があったようだ。

運転手がはみだした人をひっかけないように慎重に車をスタートさせたとたん、サイレンの音が再び鳴り出す。

ガラスが震えるような大きな音。

救急車が負傷者を収容して動き出したらしい。

『どいてください。道をあけてください』

救急車の拡声器から流れる声に、人だかりがわらわらと動きだし…ますます車道にはみ出てきた。

運転手はブレーキを踏むとチッと舌打ちをした。

タクシーの目の前の角から、救急車が出てきて、左折するとスピードをあげはじめた。

客の注文に忠実な運転手は、それきた、といわんばかりにその救急車の後を追った。

たまたま進行方向が一緒だったので、便乗しようというわけだ。

タクシーが順調にスピードをあげはじめたので、博史はほっとして傍らの聡をみつめた。

聡は……ほうけたように車の窓から朝の街に見入っていた。

もちろん、前をいく救急車の中に将が乗っていることなど、またその将はすでに死と隣り合わせであることなど聡は知るよしもない。

402◆旅立ち　6

康三はハイヤーから転がり出るように降りると、あわてて頭を下げる関係者に見向きもせず、救急病院の玄関へと駆け込んだ。

そのあとを腰も低く毛利が追う。

手術室の前のベンチには、一足先に来た妻の純代が腰かけていたが、康三の姿を見ると、反射的に立ち上がった。

「将はっ……！」

康三は荒い息を整えることもせず、純代に詰め寄った。

純代は立ち上がったものの、呆けたような顔つきで……その視線は康三から確実にそれていた。

「無事なんだろうな！」

純代は答えることもなく、目を伏せた。

「どうなんだ！」

康三はそんな純代に容赦することなく、肩をつかむと揺さぶった。

「……心肺……停止状態だそうです……」

「なんだって！」

恐慌状態に陥った康三は、言葉に詰まった純代をなおも揺さぶり続けた。

まるで純代が、将を危篤に追いやったかのように。

「鷹枝さん！落ち着いてください」

そこにいた看護師が気づいて、取り乱した康三をとめようとすがる。

「心肺停止って、どういうことだ……将は、将は、生きているんだろうな」

「今、蘇生処置をしてますから」

「落ち着いてください！」

看護師2名がかりで取り乱した康三を説得しているまさにその最中に、病院長が現れた。

康三はなおもとどめようとする看護師を押しのけるようにして前に出た。

「将は……息子は！無事なんでしょうね！」

病院長は苦い顔のまま、こちらへ、と康三と純代を応接室へと案内した。

「傷は、腹部大動脈まで達しており、出血多量による心肺停止状態

に陥っています」

「それで、将は……」

病院長による説明に康三はソファから立ち上がらんばかりに上体を乗り出した。

「現在、蘇生術を施していますが、心肺停止状態に陥ってから３０分以上が経過しています……」

「それは……」

病院長は顔を伏せた。その先は、聞くまでもなかった。

通常、心肺停止状態から３０分が経過すると、その後の生存率ががくんと落ちると言われている。

血流が止まることによって、脳に酸素がいかなくなり……脳組織が徐々に死滅していくからだ。

朝のラッシュ時ということが災いした。

最初の通報から救急車が現場に駆け付けるのに２０分がかかってしまい、さらに最寄りの救急病院に到着するのに１５分が経過していた。

この病院に到着したとき、すでに将の心臓は止まっていたのだ……。

「そんな……」

力なくうなだれる康三を、そしてすすり泣く純代を、なぐさめるように、病院長は、それでも最善を尽くしている、と繰り返した。

二人は、そのまま応接室で手術の結果を待つことになった。

現官房長官である鷹枝康三の長男で、人気俳優の将が何者かに刺されて重体という情報はいつのまにかマスコミに漏れ、病院の外側には報道陣が集まり始めていた。

その不躾な取材行動から逃れるためにも、康三と純代はここで待ったほうがいいということになったのだ。

「どうして、こんなことに……」

康三はほとんど声を出さず唇だけで呟いた。

本当だったら、いまごろは東大の後期試験に臨んでいるはずだった将が。

どうして……。

呆けたような夫の傍らで純代はひたすら祈っていた。

――どうか、大おじいさま……、将をお助けください。将を連れていかないでください。お願いします。

天にいるはずの巌に、なぜかすがっていた。

と、思い出す。ここに、いて、将の無事を祈るはずのもう一人の人

間を。

純代は立ち上がった。康三はうなだれたまま動かなかった。

ドアをあけると、そこには毛利が控えていた。

「奥さま」

純代に気づいて毛利は立ち上がった。

「毛利。古城先生に、連絡してください」

けげんな顔をする毛利などどうでもいいように、純代は威圧的に命令を下す。

「こちらから目立たないように迎えの車を出して……。そう、孝太が家にいるから、孝太をカモフラージュに使ってちょうだい」

……つまり、孝太のお付き、という形にして聡をここに連れて来いということだ。

「わかりました、奥さま」

「なるべく急いでね」

毛利は一礼すると、きびきびとした動作でそこを出た。

――聡さん。あなたが、将を……将の魂を呼び戻してください。

あとに残された純代は、胸の前で手をあわせると、もう一度祈った。

「よかった。なんとか間に合いましたね」

成田空港にある宅急便のカウンター。

同行する医師の妻が、聡のスーツケースを受け取りながら笑顔で振り返った。

博史・聡に同行するのは、聡の副担当医とその妻だ。

無意識にスーツケースを受け取ろうとする聡だったが

「いいんですよ。あなたはお腹の赤ちゃんだけを無事にアメリカに運んでください」

と、妻のほうにたしなめられる。

「どうもすいません」

博史が代わりに謝る。

「いいんですよ。私たちも役目が終わったらアメリカ旅行を楽しんで帰りますから」

聡たちを無事にボストンに送り届けて、向こうの医師に申し送りを

するまでが同行する副担当医夫妻の役目だ。

万が一、飛行機の中で早産しても最善の処置ができるように、医療器具を山のように抱えている。

いま１１時前。

出発時刻は正午だから、１時間以上ある。

それでも搭乗・出国手続きがあるからギリギリといえる。

「じゃ、急ぎましょうか」

話は通してあるとはいえ、医療器具を機内に持ち込むのにトラブルがあったらいけないと、夫の副担当医のほうがうながしたそのとき。

突然、博史の携帯が鳴った。

航空会社のカウンターへと歩きながら、電話の相手と話そうとして……その足が止まった。

目で一行に会釈しながら、博史は電話を覆うようにしながらその場を一瞬離れた。

「それにしても、赤ちゃんも順調でよかったね」

博史の電話で足止めを食っている間、医師の妻は、まるで赤ちゃんがそこにいるように、お腹にむかってほほ笑んだ。

ついさっき、いつもの病院で出発前の最後の検診を済ませてきた。

それによると、お腹の中の赤ちゃんに異常はまったくなく、健康そのものということだった。

聡はほほ笑みながらお腹を撫でた。

まるで遠足でも楽しむかのように、『ひなた』はぽこっと軽く揺れた。

博史の電話の相手は、毛利だった。

将が刺されて重体。

それを知った博史は思わず、目の端で聡を意識する。

「聡さんには……絶対に知られないようにしてください」

抑揚のない声で、かつ鋭く、毛利はそういった。

「なにごともなかったように、出国してください」

「……わかりました」

思わず返事に重いため息が混じる。

「空港にはテレビがあると思いますが、くれぐれも気を付けてください」

「……はい」

通話が終わった後も、博史は手の中の携帯を見つめて立ち尽くしていた。

将が、重体。十中八九、見込みはない。毛利はそういった……。

「博史さーん」

医師の妻の声にハッとする。

振り返ると、手を振る彼女の横で聡も小さく微笑んでいる。

その顔を、思わず博史はじっと見つめてしまう。

「急ぎましょ！」

「はい。すいません」

博史はあわてて一行のもとに戻ると、カウンターに向って歩き出した。

「電話、誰からだったの？」

聡が博史を見上げる。

「あ、うん。……オヤジ」

「お父様？」

「あ、えっと……なんか、忘れものだって。どうでもいいものだから、いいっていっといた」

「そう」

ごまかすのに苦労した博史だったが、聡がそれで納得してくれたようなので、心からホッとした。

出国手続きは多少混んでいたものの、概ねスムーズにいき、４人は出発ラウンジまでやってきた。

ガラス窓の向こうには、一行をアメリカへと運ぶ機体が見えている。

ちょうど、搭乗開始を告げるアナウンスが流れてきた。

「じゃあ、もう乗りましょうか」

博史がさりげなく促す。

……幸い、ラウンジのテレビで、将のことはまだ報じられていなかった。

「そうですね。わたし、ビジネスクラスって初めてなんですよ」

医師の妻は、気さくで明るい性格らしい。

一行の旅を盛り上げるべく、さっきから明るくふるまっている。

おかげで……聡も、悲壮感を漂わせることなく、医師の妻にあわせてさっきから笑みを浮かべている。

だが。

博史には、それがかえって痛々しく見えた。

何も、知らない聡。

いや、知らなくていいのだ。博史は思いなおす。

聡は……すでに将と別れる決断を下したのだから。

聡は、自分が幸せにすればいいのだ……。

博史は聡の肩にさりげなく腕をまわした。

肩にまわされた博史の温かい腕に……聡はもう戻れないことを改めて感じていた。

自分は、今から目の前の飛行機に乗って。

新天地でこの人と暮らす。

いずれ生まれてくるひなたのためにも、隣にいる博史と、温かい家庭を築かなくてはならない。

将を忘れて――。

それが、将のためなのだから。

聡は、そう自分に言い聞かせると、最後のゲートに向かって一歩を踏み出した。

アキラ……

――将？

急に聡が足を止めたので、博史は傍らを振り返る。

聡は……まるで誰かに呼び止められたように……後ろを振り向いていた。

いまの声。

たしかに、将だった。

将が、背後から自分を呼んだ。はっきりと聞こえた。

聡は、ラウンジにいる人の中に、すでに懐かしいその面影を探す。

「どうしたの？」

いるわけがない。

将が、ここに来るわけがない。

今頃、将は、東大の後期試験に挑んでいるところなのだから。

「……ううん。なんでもない」

聡は、そういって博史を安心させるように微笑むと、ゲートを通った。

聡が、キャビンへと消えたあと。

入れ替わるように、ラウンジのテレビにテロップが入った。

『鷹枝官房長官の長男で俳優の鷹枝将さん、襲われ重体』

機内のテレビは、ニュースを流していなかった。

おそらく毛利が手配したのだろう。

博史はホッとしながらも、細やかすぎる冷酷さに少しだけ胸やけが

する思いがした。

ここまで徹底的に、二人を引き裂くのか――。

毛利の計画に加担している立場ながら、博史は罪悪感さえ覚えていた。

心肺停止。十中八九、助からないだろう。

忠誠を誓う上司の息子の危機に際して、毛利は電話でそう言い放った。

十中八九、死ぬとわかっているのなら。

せめて死に目に恋人を会わせてやる……そんな配慮はみじんも浮かばなかったのだろうか、あの男は。

「どうしたの？」

今度は聡が博史に問いかけた。

博史はぼんやりしていたらしい。

「なんでもないよ」

博史はほほ笑みを作った。

お互いになんでもない、と気遣いあいながら……二人はこの先も生きていくのだろうか。

それは、とてもさみしいことなのかもしれない、と思った直後で博史はその考えを否定した。

大丈夫。二人は幸せになれる。幸せにならなくてはならない。

「聡」

聡は目を見開くようにして博史にその黒目がちの瞳を向けた。

「幸せになろう」

そういうと博史は聡の手の上にみずからの手のひらを重ねた。

機体はゆっくりと滑走路を移動して、離陸を待つばかりになった。

今、正午。

きっと、将は苦手の英語を終えたところだ。

聡は窓の外に広がる平らな風景に目をやる。

空港の上には、霞がかかった春の空が広がっていた。

次はいつ帰ってくるかわからない、日本の空。

この空の下に、将がいる。

『ただいまから離陸いたします』

アナウンスが響いたとたん、聡の胸の中には万感の思いが急に膨れ上がって……再び焼けつくように熱くなった。

エンジンの音が、まるで胸の嵐のように次第に高まっていく。

聡を乗せた機体はゆるやかに滑りはじめた。

次第にスピードをあげていく機体。

同じスピードで聡の心は何かから引きちぎられるような鋭い痛みを感じていた。

引き裂かれていく。

いつしか聡は窓に貼りつくようにして外を見つめていた。

引き裂かれていく、残されていくものを、見ようとして。

ついに、機体が浮いた。

懐かしい日本の土地から、将から、完全に引き離された聡は……涙をこぼしていた。

引きちぎられた箇所から噴き出す血のかわりに、涙がとめどなくあふれてくる。

機体はどんどん高度をあげ、雲を超えて……あっという間に街は地図のようになった。

将と過ごしたあの街は、どのあたりだろうか。

いま、将がいるのは、どのあたりだろうか。

なおも探しながら、聡は涙をぼろぼろとこぼす。

「……聡」

博史の声に、聡は我に返った。

「……大丈夫？」

遠慮がちながら……心配そうな顔をして、聡にハンカチを差し出している。

「……ごめんなさい」

聡は、そのハンカチを受け取らず、手の甲で涙をぬぐうと、もう一度窓に向かった。

――将。さようなら。

日本は窓に貼りつくようにしてみないと見えない程、遠ざかって……足元には紺碧の太平洋が広がっていた。

――将、さようなら。さようなら。幸せに……なって。

再びの涙で……空と海の境界線はぼやけて……いつのまにか澄んだ青一色になっていた。

４０３◆最終章・また春が来る　１（前書き）

終わるはずのない
愛が途絶えた
命尽きてゆくように

違う
きっと違う
こころが叫んでる

ひとりでは生きてゆけなくて
また誰かを愛している
こころ哀しくて
言葉にできない

せつない嘘をついては
言い訳を飲み込んで
果たせぬあの夢も
今はもう消えた

誰のせいでもない
自分が小さすぎるから
それがくやしくて
言葉にできない

あなたにあえて本当によかった
嬉しくて嬉しくて言葉にできない

＜引用：小田和正「言葉にできない」＞

※個人的な趣味として引用しております。コピーなどはお控ください。

４０３◆最終章・また春が来る　１

あれから何回の季節が通り過ぎていっただろうか。

街も、人も、その姿を変えながらも、生きて動き続けているのは変わらない。

失ったひとも。

そして、引きちぎられるような悲しみも。

ともすると、生き続けていくために繰り返す日々の雑務の中で、沈澱してしまい……そのまま澱のように忘れてしまいそうになる。

２月。

小雪が舞う寒い日。

鷹枝総理は、今、先祖代々の墓の前に立ち尽くしていた。

総理にとって墓参りは、奇しくもその悲しみを浮かび上がらせ、今は亡い人を思う大切な日だった。

本来は……いとしい家族の命日は、まだ１ヶ月も先だったが、今年の命日は先進国首脳会議の日程に掛っているから仕方がない。

それは前総理の都合で決まった日程だった。

前総理を衆議員解散・総選挙へと追いやり、歴史的な衆院選大勝で下した鷹枝総理とはいえ、個人的な事情で、国際イベントのスケジュールを覆すわけにはいかない。

総理はアネモネの花を墓前に供えると、手をあわせた。

アネモネは、あたりの寒々しい景色に似合わない鮮やかさで、石造りの墓を彩った。

墓の下には、家族と……あまりに早く逝ってしまった息子、そして偉業を成し遂げてきた先祖が眠っている。

心の中で、彼ら一人一人に声をかけているうちに……いつのまにか長い時が経っていた。

「総理。肩に雪が……」

ようやく総理が寺の外に現れると、待っていた初老の運転手が見上げるようにして声をかけた。

いつのまにか総理の肩には雪が積もっていた。

「ああ。温暖化が少しは止まったのならいいけど」

総理はほほ笑みながら自ら肩の雪を払った。

その間も、周囲に鋭い視線を走らせるＳＰが３人、総理を守っている。

長年政権を握ってきた与党を圧倒的多数で下して選挙に勝ち、史上最年少で宰相になった鷹枝氏は、与党と官僚、そして大企業との癒着をばっさりと断った。

その断ち切り方は容赦がなかった。

大多数を占める庶民の不利になる関係は情けをかけることなく断った。

就任してわずか１年足らずながら、癒着がらみで検挙され、あるいは追い詰められて自殺した者は数十人にのぼるとさえ言われている。

ゆえに総理を恨むものも多く……利権の復活のために命を狙うものさえあることを、総理自ら知っていた。

死ぬことは別段怖くはない。

しかし。

私腹を肥やすために国を食い物にする輩から、この国を守れという一族の長老との約束を果たす道のりはまだ始まったばかりだ。

ここで殺されることによって、仕事を手放すわけにはいかない。

防弾仕様の車に乗り込んだ総理は、秘書から資料を受け取り目を通した。

分刻みのスケジュールは、確認せずとも頭に入っているが、なにせ忙しい総理である。

こうした移動時間は格好の資料を読み込むべき時間になっていた。

委員会の分厚い資料を１０分ほどで目を通してしまい、次の資料を手に取る。

それは今夜収録されるテレビ番組で対談する相手のプロフィールだった。

総理は忙しい身ながら、テレビ番組をレギュラーで持っている。

各界で活躍する若いゲストと総理が１対１で対談する、３０分の深夜番組だ。

対談といいつつ、実はゲストから投げられる政治への疑問に総理が答えるという形式になっている。

ともすると真意が間違って国民に伝わりがちなトップの地位にあって、自らの意思や政策を国民に自分の言葉で伝えること、そして政治を身近に感じてもらうことが主な目的だった。

総理としては本当は生番組がよかったのだが、総理ともなると何が起こるかわからないということで、収録になっているが、ほとんど編集をしないという約束になっている。

総理の人気や支持率は歴代総理の誰よりも高い水準で推移しているのもこの番組が一つの助けとなっているかもしれなかった。

「女優の月舘よう子ねえ。……三島くん知ってる？」

「知ってますよ。カンヌ映画祭で日本人初の主演女優賞を取った、今一番の人気女優さんじゃないですか」

若い秘書の三島が、そんなの常識といわんばかりの声をあげたから、総理は再びプロフィールに目を落とす。

たしかに三島のいうとおり、１年前、２４歳だった彼女はカンヌ映画祭でパルムドールを授与されている。

しかもフランス映画でだ。

アメリカ生まれパリ育ちで３ヶ国語に堪能。１８才で帰国し、１９才でスカウトされてデビュー。

かつ、芸能活動をこなしながら、総理と同じ一流大学をきちんと卒業している。

しかし和服を着たプロフィール写真に、外国育ちながらルーツを大事にする彼女の気持ちが表れているようで、総理は好感を持った。

そのとき、運転手がつけたカーラジオから、懐かしい歌が流れてきた。

本来、カーラジオはニュースなどを知るためにかけている。

車にはテレビも完備しているが、資料に目を通しながらの情報収集にはラジオがぴったりなのだ。

♪　Ｌａ　Ｌａ　Ｌａ

……言葉にできない　♪

愛したひとが好きだった歌の一節を、思わず総理は資料から目を離さないまま口ずさんでいた。

「総理の歌なんて、初めて聞きました」

三島が意外そうにつぶやいた。

「そう？」

総理はいたずらっぽく笑うと、資料を秘書へと返す。

『先日×歳で永眠した〇〇〇〇さんの約半世紀を超えての歌声。本当にいいですね。これからも私たちを魅了し続けていくことでしょう……』

アナウンサーの声に総理は、また、時が進んだことを知った。

人は逝き、歌はこうして残る。

人が生きるとは、そして生きた証とは。

遠い昔、考えたそれが、ふいに頭を占拠しそうになり、総理はあわてて思考を資料に戻す。

考えても考えても、答えになどたどりつくはずなどないのに。

こうして何かを失ったとき、忘れかけていたそれが浮かび上がってくるのだ。

それは……使命のために忙殺されていても、なおも生きている『心』というやっかいなものの証のようだった。

「総理、こちらです」

プロデューサー自ら総理を出迎えるのは毎回のことだ。

「今日のゲストの、月舘よう子さんです」

「よろしくお願いいたします」

総理よりずっと早く到着していたのか、プロデューサーと一緒に月舘よう子が頭を下げる。

顔をあげた月舘よう子を見たとき、総理は、一瞬、懐かしい風が通り過ぎたような錯覚にとらわれた。

しかし、顔をもう少しよく見ようとしたそのとき。

「それではさっそくカメリハ行きましょう」

とプロデューサーが促したから、それはうやむやになってしまった。

収録はつつがなく進んだ。

総理は、よう子の質問に如才なく答えながら、その顔を観察していた。

――どこかで見た気がする。

そして、この雰囲気。低い声ながら温かみのある話し方。

２５才。一見、日本の若い女性とまるで変わらないよう子だったが、しっかりと社会や世界の中の日本を見据えて、自分なりの価値観を持っている……

話からはそんなよう子の高い知性が伺えたが、その雰囲気は硬いものや、人を見下す類のものではなかった。

柔らかく温かい雰囲気。

それは、あきらかに、遠い記憶の中の、あの女性に似ていた。

総理がすべてのスケジュールを終えてから行われる収録だから、終了はたいてい深夜になる。

「お疲れ様でした」

今日の仕事をすべて終えて、ほっとした総理が秘書と共にスタジオを後にしようとしたそのとき、

「総理」

後ろから呼び止められた。よう子だった。

「今日は、ありがとうございました」

しなやかな身のこなしながら、深々と頭を下げる。

「こちらこそ。いろいろと勉強になったよ」

総理は挨拶を返しながらも、再びよう子に漂うものを観察した。

やっぱり似ている。こうやって立ち上がると、ますます――。

「あの、総理」

顔をあげたよう子は、なおも立ち去ろうとせず、総理を見上げた。

どうやら単なる挨拶で呼びとめたのではないようだ。

総理はよう子に向きなおった。秘書の三島は、総理がいつになく優しい表情を浮かべている、と思った。

「……総理は、ロマーヌさんを覚えてらっしゃいますか？」

「ロマーヌ？」

総理は首をかしげたが、よう子はなおも続ける。

「ロマーヌ・ディビエさんです……パリの。総理と幼稚園が一緒だったって聞きました。私、ロマーヌさんのお子さんのベビーシッターをやっていたんですよ」

そこまで聞いて……総理のまなこと口が大きく開いた。

遠い記憶がマジックの花のようにいきなり蘇る。

「ロマーヌ。ロマか！」

「はい」

よう子は嬉しそうにうなづいた。そして、頬を紅潮させたまま、さらに口にする。

「総理。……私の本名は、古城陽（こじょうひなた）っていうんですよ」

鷹枝総理――つまり鷹枝将の息は一瞬止まった。

それは……25年の間、止まっていた何かが流れ始める合図のようだった。

４０４◆最終章・また春が来る　２

陽が暮れてから、雪は本格的に降り積んだらしい。

車の中でもあいかわらず資料に集中していた将は、家の前に降り立って初めてうっすらと積もった雪に気づいた。

見渡すと屋根にも、植栽にも粉砂糖のような雪がのっている。

吐く息が一瞬何も見えないほど白く濁る……気温はおそらく０度近いのだろう。

カーテンの隙間からもれる暖かい色の光に、雪の一部はほんのりと染まっていたから、まだ誰か――おそらく長男の海（かい）が起きているのだろう。

ここ数年、東京では２月に毎年のように大雪が降る。

そのくせ、３月には汗ばむほどの陽気になる……環境問題に詳しい妻に言わせれば、温暖化によって気候が変動しているのだという。

「ただいま」

玄関に立った将は控え目な声で帰宅を告げた。

すると奥からパジャマ姿の少年が走り出てきた。次男の了（りょう）だ。

「お父さん、おかえり」

「なんだ、了。まだ起きてたのか……もう12時すぎてるぞ」

少しだけ咎める口調になった将に、了は

「今寝るところだったんだもん。明日休みだし」

と可愛らしい目をくるっとまわした。

「そうだったな」

返事をしながら将は、了のおでこから頭をくるくると撫でてやった。

この9才の次男は、見れば見るほど弟の孝太の小さいころにそっくりで、顔立ちが愛らしい。

「おかえりなさい、将」

顔をあげると、義母の純代がリビングのドアをあけて微笑んでいた。

「ただいま、お義母さん……すいません、毎晩遅くまで」

将も軽く会釈する。

「いいのよ。そんな寒いところにいないで、二人ともこちらにおいでなさい……将は、お食事は？」

「何か軽いものがあったら……お茶漬けでも、味噌汁だけでも」

「ちょうど、豚汁があるわ」

「……そうですか」

純代は、将一家と同居していた。

純代の夫であり、将の父である康三は、2年前に他界していた。

あれから……あの年にあった総裁選でライバルに圧勝して総理になったものの、わずか1年で病を得て失脚してしまった。

以来、よくなったり悪くなったりしながら議員は続けていたが、とうとう3年前に倒れてしまったのだ。

純代の実子である孝太は大手企業に就職し、ここ数年は妻とともにデュッセルドルフへと赴任している。

この年で外国暮らしはなじめないだろう、と純代は孝太夫妻についてゆかなかった。

『一人暮らしでも大丈夫よ』と純代は気丈にも言ったが、

『せっかくだから、みんなで楽しく暮らしましょうよ』と将の妻は誘った。

純代の姪にあたる将の妻と純代は、日頃から仲がよかった、ということもあり、継子である将との同居を選んだのだ。

忙しい妻に代わって、海や了の面倒をよく見てくれていて、今の将はいろいろな意味で純代に感謝している。

了は気がつくと、玄関の横のガラス窓に頬をくっつけるようにして外を見つめていた。

窓には、雪明かりだろうか、うっすらと雪化粧した外がいかにも寒そうに映っていた。

「……小さいお兄ちゃん、寒くないかな」

小さいお兄ちゃん、とは了が生まれる2年ほど前に、心臓に難疾患を持って生まれ……生後わずか半年で亡くなった将の息子である。

自分の生まれる前に亡くなった家族を気にかける了。

そんなふうに他人を気にかける優しいところまで、了は孝太にそっくりだった。

「……了は、もう寝なさい」

「はい」

了は素直にうなづくと、自室がある2階へと駆け上がっていった。

「静かにな」

将はそっとその後ろ姿に声をかける。了の部屋の隣にある海の部屋の扉からは細く灯りが漏れている。

長男の海は来週に控えた中学受験にそなえて猛勉強中なのだ。
将が首相官邸に住まずに、こちらの私邸から通うようにしているのはこの二人の子供たちのためである。

邪魔しちゃいけない、と将は足音をやや控えめにして廊下を歩くと、いったん寝室に向かう。
スーツを脱いで体を解放したかった。
部屋に入ると、ぐい、とネクタイをほどきながら、携帯をチェックする。
スイスで開催された学会に出席している妻からメールが入っていた。

＞明日の夜には帰れます。お土産にフォンデュに使う鍋を買っちゃった。
＞少し早いけど海の合格祝いに、腕時計も買っちゃったけどいいよね。
＞香奈

選んだ品物のよさを自慢するように、鍋と腕時計の画像が貼りつけてある。

将は……純代の兄、つまり岸田教授の娘である香奈と１４年前に結婚していた。

その香奈は、研究者としての素質を父から受け継いだのか、ファーストレディながら環境学者として活躍している。

あいかわらず明るい性格の妻に、将の心はふっとほどけた。

聡を失ってボロボロだった将の心は、この香奈によって救われたといえる。

スーツから忘れずに手帳を取り出しておこうとして――将の視線が万年筆に留る。

愛用の万年筆は……２５年ぶりにその存在を将にアピールし始めるかのようで、将はそれを握りしめるとため息をついた。

脳裏には……さっき、テレビ局で面会した月舘よう子、こと、古城陽が蘇っている。

「総理。……私の本名は、古城　陽（ひなた）っていうんですよ」

陽はまっすぐな瞳で将を見つめていた。

胸の奥底に、いろいろなものが湧き上がるのを、将は感じていた。

だけど、それを意図的に感情に結びつけないようにコントロールする技を、４４歳になった将は身に付けていた。

ここは人目が多すぎる。

「古城……。先生の娘さんか」

かろうじて、無難に返しながらも、将は目の前にいる美しい女性をもう一度見つめ直した。

将は……かつて1歳半ほどの彼女に会ったことがある。

正確にいえば会ったというより、遠くから見たといったほうが正しいが。

そのとき目にしたチョコチョコと歩く愛らしい姿から見れば、目の前にいる背の高い女性は、ヒヨコが急にツルに成長したような唐突さがあった。

だけど考えなくても将にはわかっていた。彼女は自分の娘なのだ。

２５才、という年齢からの逆算は後から追い付くかのようだった。

「はい」

と返しながらも、陽のその瞳は、すべてを……つまり、自分が父親であることをすでに知っているように思えた。

だけど、軽率にそれを口にするわけにはいかない。

ゆえに言葉が見つからない将は、

「そうか。先生の……」

とだけ繰り返した。

陽は確かに美しいが、あまり聡に似ているとはいえない。

しばらく見つめているうちに、この、どこかで見たようなおもざしは……自分のものなのだ、と唐突に気づく。

陽の顔は……女性らしい華やかさが加わってはいるものの、主に将のパーツを受け継いでいた。

だけど、体全体を包むオーラのようなものは、聡からのものに違いなかった。

「いや……びっくりしたよ。彼女、僕を立ち直らせてくれた恩師のお嬢さんなんだって」

秘書の三島がけげんな視線で二人の顔を見比べ始めたのに気付いて将はさりげなく取り繕った。

陽も、にこやかに三島にもう一度会釈をする。

それにしても、どうして彼女……陽は『原田』でなく、聡の旧姓を名乗っているのか。

アメリカ生まれはわかるにしても、どうしてフランスに渡ったのか。

どうして、日本で女優業をしているのか。

急に美しく成長して現れた女が、血を分けた娘であるという感慨よりも、疑問が波のように起きる。

そして、疑問は1か所に集まる。

聡は今……どうしているのか。もしかして幸せではないのか。

「立ち話もなんだから、少し彼女と話してもいいかな」

将は三島と、陽のマネージャーに頼んだ。

４０５◆最終章・また春が来る　３

陽には付き添いのマネージャーがいたが、二人の前にコーヒーを置くと気を利かせて席をはずした。

将のために用意された控え室に、今二人はいる。

局のスタジオや廊下の喧騒は、ドアで遮断されて、二人を包むのは沈黙である。

テーブルの角を挟むようにしているのは、真正面から視線がぶつかることを二人とも無意識に避けたに違いなかった。

何から話せばいいものか、と将が思案する間もなく、陽のほうから話を始めてきた。

「実は、今日の対談をお願いしたのは、私のほうからなんです」

耳に沁み込んでいくような、この声は。

間違いなく聡のものだ。

将は思わず、声をかけてしまう。

「君……失礼、陽さんは……僕のことを」

陽はうなづいた。

「知っています」

もう一度、将がその表情を確認する前に、陽は少しうつむくようにすると、服の中に隠れていたネックレスを襟の中から取り出した。

それはチェーンをつけたベビーリングだった。

陽はそれを両手を首の後ろにまわしてはずすと、掌にのせて将に見せた。

ダイヤのベビーリングは薄桃色の陽の掌の中でうずくまるようにして光っていた。

……それは、まぎれもなく、２５年前のクリスマスに、まだお腹の中にいた娘に与えたプレゼントだった。

ダイヤのきらめきは、あの、まばゆく輝くようなクリスマスの朝の記憶を連れてきた。

すっかりしまいこんだはずの記憶なのに、思い出せば、まったくといっていいほど褪せていない。

将はたった今、その眩しい雪の朝に遭遇したように、瞬きを繰り返す。

「本当のお父さんがくれたものだ、と６歳のときに教えられてずっと持っていました」

ひなたはそういって大事そうに手のひらのベビーリングに視線を落とした。

長いまつげ。そしてそんな仕草も。

覚えている。……忘れるはずがない。

将の中には、すでに聡の面影と、苦い思い出がよみがえって……やり場のない切ない気持は胸の中ですでに、ぐるぐると渦巻いていた。

顔にはそれを出さなかったけれど、将の胸のなかには、ある記憶が自動再生されていた。

かけがえのない人を諦めた、あの旅。

どうしても諦められなくて、手紙が信じられなくて、将は聡を追った。

はっきりとした居場所もわからないままに、ただボストンへ飛び……そこで偶然目にした光景。

それは初冬の陽だまりの公園で、博史に連れられてちょこちょこ歩く可愛い陽だった。

あれは1歳半くらいだろうか。

陽は自分の足で歩くのが面白くてたまらない、というようにちょこちょこと前へ進んだ。

そんな彼女のあとを博史はいとおしそうについてまわる。

そして、陽を大事そうにそっと抱きあげる。

陽は抱っこされて嬉しいのか声をたてて笑っていた。

あまりに幸せそうな親子に――将はうちのめされた。

聡に会わなくてもわかった。聡は、新しい幸せを手に入れたのだ……。

そのときは、まだわが子になんという名前が付けられたのかも知らなかった。

陽――ひなた。

忘れていたのとは違う。

記憶の奥深くに封印していた聡の思い出と共に蘇る。

この娘の名前はたしかに自分が考えた名前だ。

「ちょっと待って。先生は……結婚されていたと思ったが……」

陽が、自分の本当の父を知っているということが何を意味するのか。

将はそれを確認すべく、心もち身を乗り出した。

陽は再び目を伏せた。

「私が、6歳のときに離婚しました」

息がとまる。胸の動揺は、将の体さえ支配しはじめたのだ。

「どうして……」

「……私は小さかったから、よくわかりません。でも」

しばしの沈黙のあと、陽は答えた。

それは慎重に言葉を選びながら一言ずつ紡ぎ出すようだった。

「母は、一度流産して……それ以来、あまり父とうまくいっていなかったようです」

『どうして俺の子は産めないんだ!』

聡が、博史にどんなふうになじられたのか、一瞬耳元で聞こえた気がした。

幸せそうだった父と子。

聡が手に入れたと思った幸せは、実は長続きしていなかったのだ。

別れはこの娘が6歳のときだったという。

……つまり、あれから数年後。自分はどうしていただろうか。

やり直せた可能性が、いまさら思考を横切っていき、将はハッとした。

しかし今の将には、遠い空を飛行する航空機のように、なすすべがないのに……。

通り過ぎた過去への、焦燥感のような苦しさを将が感じているのをわかっていてか、陽は先へと話を進める。

「離婚した母は……私を連れてフランスに渡りました。鷹枝元総理のはからいで、母はパリの日本人学校の教師の職を得ました」

元総理、つまり将の父、亡き康三だ。

「私は、向こうの高校を卒業して……日本の大学に入学しました。ロマーヌさんのベビーシッターをしていたのは高校生の頃です。総理のことを初恋の人だとおっしゃっていました」

陽は重苦しいムードを変えたいと思ったのか、微笑みを浮かべながらやや明るい口調でロマーヌのことを話した。

将も……それに乗ろうと思ったが、こわばったような頬は、ぴくりとしか動かせなかった。

だから将はせめて陽の身の上をもう少し聞くしかない。

そうすることで、核心から自分を少しでも遠ざけないと……冷静さを保てない。

「大学生の時に、スカウトされて芸能界に入ったんです。もともと演劇は好きで、高校の時に学校で映画をつくったりしていましたから……。それで、芸能界に入った私を、後押ししてくれたのはやっ

ぱり鷹枝元総理でした」

康三が、陰ながら聡と陽の親子を手助けしていたことについては…

…将はうすうすわかっていた。

将の手前、聡が勝手に逃げたように装っていたが、康三は聡の行く先をきっと知っている、と将は最初からわかっていたのだ。

「元総理は、お亡くなりになるまで、何かと私たちに目をかけてくださいました。ボストンにいたときも、パリに移ってからも何度か会いに来られて……おしのびだと」

そういって陽は目を細めた。

そうすると……長いまつげに隠されて、目は黒一色になる。

そんな笑い顔まで、聡に似ていた。

仕草や笑い方が似る母子。きっと二人はとても仲が良いのだろう。

……香奈と長男の海の笑い顔がよく似ているように。

こんなときに、妻と家族を思い出したことに、将は思わず、双方向への罪悪感を感じる。

妻に対しても、目の前の陽に対しても。

だから将は、思考を無理やり康三に引き戻すべく、つぶやく。そして父を思い浮かべる。

「そうか、父が……」

康三にとって、なんといっても陽は初孫だ。

聡のお腹の中にいたときは、むしろ邪魔にしていたのに……ひとたび生まれてからは可愛くて仕方がなかったのだろう。

将は、康三に抱えていた小さなわだかまりが、ほどけた気がした。

そんなわだかまりの存在自体、ひさしぶりに思い出すものだったけれど。

やや冷めたコーヒーのあたりに、しばしの沈黙が漂う。

「今日の対談をお願いしていたのは、お会いしてお礼をしたかったというのもあります」

しばらくして、陽が再び口を開いた。

したかったというのも……つまり他に理由がある、ということだ。

将は目を見開くようにして、今一度陽を見据えた。

陽はすでに、長いまつげの奥の瞳を、将にまっすぐに向けている。

「実は……母に会ってほしくて……そのお願いに参りました」

陽の瞳は、熱を帯びて……いつのまにか歎願するような光をたたえていた。

聡に会ってほしい。

鎮まりかけていた将の心は再び、かきまぜたように乱れ始めた。

それを心の中に押さえつけるようにして将は問い返した。

「先生は、帰国されたの？」

「はい。2年前から……」

陽はゆっくり、かつ深くうなづくとそう答えた。

そしてもう一度、瞳をあげるとはっきりと言った。

「……母は、余命宣告を受けています」

４０６◆最終章・また春が来る　４

夜中になって雪はますます激しくなったようだ。

暗くならない東京の夜に降り積んでいく雪の雪あかりで、外はコバルト色に発光しているようだった。

あの人と抱き合って暖をとった夜も、こんな色だった。

あのニセコの山頂の夜――。

万年筆を握りしめたまま将は、いつしか窓の外に思い出を投影していた。

もう２５年以上も前のことなのに、昨日の出来事のように鮮やかにかつ詳細に思い出すことができる。

意図的に封印していた記憶が浮き上がってくるのを、将はもはや制御できなくなっていた。

いや、本当は。

聡の夢を……将はいまだに見てしまうのだ。

あれから２５年経った今も、数日に１回はその夢を見る。

夢の中で、いつも将は１７歳に戻っている。

そして教壇に立つ聡に見とれているか、もしくはオレンジ色に染ま

る放課後の教室で向かい合って補習を受けている。

そんな夢の中で将はすっかり安心している。

なんだ、聡が妊娠するのも。

聡が博史を選んで消えてしまうのも。

あの、つらくて長かったリハビリの日々も。

……みんな夢だったんだ。

俺たちは、これから幸せになるんだ。みんな、みんなこれからなんだ……。

しかし、オレンジ色の幸せな時間は、唐突に冷たい朝にくるりと変わる。

現実に戻ってきた将は、いつもいつも……落胆を覚えるのを禁じ得ない。

現実に不満なわけではない。

４４歳という史上初の若さで総理大臣にのぼりつめたことは自分でも誇りに思うし、ヒージーの遺言通りの使命を１つ１つ果たしている充実感もある。

妻は聡明で明るい女だし、子供たちは可愛い。

なのに……理性で制御することのできない無意識の中で、将はまだ聡を忘れることができずにいたのだ。

その聡が。

余命宣告を受けている。

つまり、聡はまもなく、この世を去ろうとしている。

陽によれば、聡は2年前にガンで大手術を受けたという。

ガンはあちこちに転移していて……その手術で聡はすでに子宮と両乳房を失っているという。

切除できるガンはすべて取り除いたが、血管に癒着していたりなど、取り除けないものもあった。

医師は、2年前の時点で、新しい治療法が出てこない限り、聡の余命はおそらく2年ほどだろうと宣告した。

……厳しい現実を淡々と説明する陽だったが、将には却ってそのつらさが伝わるようだった。

『先生は、それを知っているの?』

つまり、聡は自分の命の終焉がまもないことを知っているのか、将は陽に問いただす。

『はい。知っています。……だから、悔いがないように、私がお願いにあがりました』

陽は、取り乱すことなく、あいかわらずまっすぐに将を見据えていた。

『……先生が、僕に会いたいと言っているの？』

将は息苦しささえ覚えながら穏やかな口調をかろうじて保った。

そのとき将には、かすかな怒り――いや、怒りというよりむしろ冷めた視線があった。

――自分から離れておいて……何をいまさら。

そのわずかに存在する冷めた感情が、将を冷静に保たせていた。

『いいえ』

意外なことに陽は否定し……将は失望を覚える。

それで将は自分の中に、期待が膨らんでいたことを初めて自覚する。

『私が……総理に、母と会ってほしい、と勝手に希望しているんです』

陽はきっぱりとそう言い切ると『お願いします』と頭を下げた。

こんな風にきっぱりとした口調は……自分ゆずりなのだろうか。それとも単に外国育ちだからだろうか。

失望ゆえに、ややゆとりを取り戻した将は、陽の口調を分析さえしてみる。

『先生の容体は？　先生は入院していらっしゃるの？』

つまり、聡は危ない状態なのか。

将の質問に陽は再び首を横に振った。

『今は、まだ元気です。今は……まだ』

だけど、2年前に余命2年と宣告されている。

それを額面通り受け取るのなら、聡は明日死んでもおかしくないことになる。

将には陽がわざわざ頼み込んでまで、自分との対談に来た理由が痛いほどわかった。

心のどこかがかきむしられるように、痛い。

だが。その痛みを無理やりこらえて将は言い放った。

『……せっかくだが。先生と僕の間は25年前に終わっているんです』

その言葉の冷たさは十分わかっている。

『僕は、先生に捨てられた人間です。先生も静かに残りの人生を楽しんでいるでしょうから……いまさら昔のことをほじくり返すようにして僕になど会わなくても』

『毎晩、母は泣いていました』

将の言葉を遮るように、割り込んだ陽の声に、将の声帯は張り付いたように止まる。

『原田の父と別れた頃、母は、卒業アルバムとこのベビーリングを握りしめては毎晩泣いていました』

博史と聡が別れた当時、幼い陽は、今まで可愛がってくれた博史となぜ別れないといけないのか、聡に問うた。

博史は陽にはよい父だったから。……それも、博史にはせいいっぱいの努力だったのだのだけど。

やっとできた自分と聡との間の子供が流れてしまい、無理をしていた博史の心は限界を迎えたのだ。

それでも、子供である陽にはその限界を見せなかったのが、せめてもの博史の良心だった……。

おとうさんと仲直りして、と何も知らない6歳の陽は、聡に詰め寄った。

そのときだった。

『ひなた。あなたのお父さんは、本当は違う人なの』

泣きはらした顔で聡は、娘に事実を告げた。

そして、それは自分にとって一生忘れることのできない、大事な人だと。

この世で自分の命より大事なのは陽。

そして同じくらい大切に思っているのは陽の本当の父親である人物だと、聡はまだ幼い娘に繰り返し言い聞かせたのだ。

『そのときに、このベビーリングを母からもらいました。その人物の名前を母が教えてくれたのは、大学生になって日本に帰国する直前ですけれど……』

そのあと、何と言って陽と別れたのか、はっきりと覚えていない。

おそらく、検討する、だか、連絡する、だかのあいまいな言葉を言ったような気がする。

それほど、将は動転していた。

心の秩序は、津波に襲われたかのようにぐちゃぐちゃになっていて

……体面を保つだけでせいいっぱいだった。

いや、それもきちんとしていたかどうかわからない。

ここ十数年に渡って、冷静さを保っていた心が、あの人のことだけでここまで乱れるとは。

息苦しいまでに心乱れながらも……将は1つのことだけを思っている。

本当は、もっと考えるべき政策についての懸案事項がたくさんあるのに、それをすべて押しのけてしまったそれは。

――聡も……自分を忘れていなかった――

25年ぶりに明らかになった、その真実である。

４０７◆最終章・また春が来る　５

聡は将を捨てたのではなかった。

おそらく――将のために、将の未来のために、身をひいたのだろう。

いままで濁っていた部分が、何かの溶媒を入れたかのようにクリアになっていき……将には聡の意図するところが今になってはっきりとわかるかのようだった。

すべては将のためだったのだ。

『母に会ってほしいのです。お願いします』

美しく成長した陽の声が将の脳裏に三たび響く。

将は握りしめた万年筆を眺めた。

１８の誕生日に、聡からもらった万年筆。

将はそれを大事に使ってきた。聡を失った後も。

数年に一度は、製造元に送ってメンテナンスまでする凝りようだった。

将とて。

心の底では聡を忘れてはいなかった証――。

諦めながら、忘れることなどはできなかった……。

「将。夜食の用意できてますよ」

背後で純代の声がした。

将がずっとダイニングに降りてこないので、心配した純代が上がってきたようだ。

将は彷徨させていた思考を元の場所に戻す。

「わかりました。すぐ降ります」

そう答えると、窓辺から離れた。

振り返った将に、二つ並んだベッドが目に入る。

今日は出張中で帰らない、妻の香奈のベッド。

離れながらも二人が思いあっていたことがわかったからといって。

二人の間には、それぞれの２５年が降り積もっている。

将には……築き上げてきた家庭がある。

いまさら、どうしようもないのだ。

将は万年筆を自分のベッドサイドに置く。

万年筆は長いこと握りしめていたのでほんのり温かくなっていた。

一度、日本海側の小さな町にある、万年筆の製造元を訪れたことがある。

『大事に手入れをすれば、名前の通り、一万年でも持ちますよ』

年配の店員はそういって笑った。

その言葉の通り、その書き味は今も衰えない。むしろ年を経るごとになめらかになっていくようだ。

万年筆は健在でも。

それをくれた聡の命は、もうすぐ終わろうとしている。

聡が病気。

もう何度も大きな手術を受けている。

そして、2年前に余命2年と宣告されている……。

将の中の聡は、２０代半ばの、桃のようにみずみずしい笑顔のままだ。

もしかして聡は、自分を愛したせいで、不幸になってしまったのではないだろうか。

しなくてもいい苦労をしょいこんでしまったのではないだろうか。

２５年の苦労と、病気は……その姿をどのように変えてしまっただろうか。

次々に湧きあがってくる重いものに、ため息も喉で押し固まるようだった。

「ごちそうさま。おいしかった」

純代手作りの温かい豚汁は、少しだけ沈んだ気持ちをほぐしてくれた。

「おかわりは？」

「いや、もういいです」

将は、ふと義母の純代に……さっきのことを話してみようかと思いついた。

なんといっても純代は２５年前、妊娠した聡の世話を自ら進んでひきうけていた。

聡が消えてしまった後も、夫に内緒で独自に探させたりなど……二人ができるだけ不安のない形で結ばれることを、一生懸命模索してくれたのだ。

かつ、心肺停止から奇跡的に生還したものの、体中に麻痺が残った

将につきそい、つらいリハビリにくじけそうになる将をときに叱咤しながら励ましてくれたのだ。

将が今、ほとんど体に不自由を残さずに暮らせているのは、純代のおかげだといっていい。

「お義母さん。今日……女優の月舘よう子さんに会いました」

できるだけ何気ないように……口にしたはずなのに、食後のほうじ茶を淹れていた純代の手が不自然に止まった。

しん、としたダイニングの中、湯呑から立ち上る湯気だけがふわりふわりと立ち上っていく。

「……将」

純代はおずおずと視線をあげた。

「ご存知だったんですね」

「隠していたわけじゃ、ないのよ。あなたはもう結婚して、ふっきれているからと思って」

とっさに言い訳をする純代を、将はもちろん責めるつもりはない。

「いや、咎めるつもりはないんです……。父は、先生親子をずっと援助していたんですね」

純代はうなづいた。

「それくらいしか、してやれることはないから、と……。先生がアメリカに渡ったときから、いろいろと世話をしていたみたい」

もしかして聡が自分を捨てたのは……父の差し金ではないか、というのは25年前からずっと考えていたことだがそれを聞いて、将は確信を持った。

「やっぱり、先生は父に……」

「ええ。今だからいうけれど……私にも内緒で、先生を結婚させてアメリカに行かせたの。亡くなる前にすべてお話になったわ」

純代はうなだれるようにしながらも、残りのほうじ茶を湯呑に注いで、将に差し出した。

もう、振り返れないところまで来ているという開き直り――いや、純代は、一切父に知らされていなかったのだろう。

いまさらだからなのか、怒りは湧いてこなかった。

ただ、ただ、むなしい胸のあたりに、熱いほうじ茶は沁み込んでいく。

４０８◆最終章・また春が来る　６

「へい、らっしゃい」

格子戸を開けたとたん、威勢の良い声が響いた。

寿司屋の店主は戸口に将と次男の了の姿を見つけたとたん、さらに相好を崩す。

「鷹枝くん。久し振り」

くだけた口調で店主は将に話しかけてきた。

「憲ちゃん、ごめんね……忙しい土曜日に」

「いいってことよ。こっちも総理にひいきにしてもらってるっていったら宣伝になるし」

寿司屋の店主、つまり兵藤は笑った。

高校時代にクラスメートだったあの丸刈りの兵藤は、独立して小さな寿司屋を経営していたのだ。

その寿司屋は宣伝・取材を一切断っているにも関わらず大変評判がよく、予約がないと入れないほどだった。

土曜日の今日、久々の休日をとることができた将は次男の了を連れて、早めの夕食に、と開店前のここを２年ぶりに訪れたのだった。

「……二番目の坊ちゃん？」

兵藤は笑顔のまま将の横にいる了に目をとめた。

「こんにちわ」

了がぺこりとその小さな頭を下げる。

「奥さんやお兄ちゃんのほうは？」

兵藤は、了にこんにちわ、と挨拶を返したあとで訊いてきた。

「奥さんは学会。海は夜まで塾。義母（はは）は友達と食事」

そう答えた将に、了が割り込むように

「お兄ちゃんは来週ちゅうがくじゅけんなんだよ。それでね、お父さんが今日はシチュー作ってくれるって言ってたんだけど、焦がしちゃったの。考え事してたんだって」

と割り込んだから、兵藤をはじめ店にいる若い衆も笑顔になった。

「おいおい、了」

照れながらもカウンターに腰かけようとする将に、

「あの、お部屋も用意してますが」

お運びの女性が案内しようとしたが、将は

「久し振りに大将と思い出話がしたいから」
とやんわり断った。

「了くんは何のお寿司が好きなんだい？」
「アナゴ！」
兵藤に訊かれて素直に答える了に、
「了、アナゴはあとにしなさい。お寿司屋さんでは、まず季節のお魚を楽しむものだよ」
と将はたしなめる。了は素直にうなづいた。

「今日は何があるの？」
「それが、極上の安乗フグがあるんだよ。……鷹枝くんは本当に運がいい。薄造りにしようか」
「いいね」
フグ、ときいて了も目を輝かせている。了は子供のくせに、トラフグの皮が大好物なのだ。
「つい先週、井口くん一家が長野から来てくれたよ」

「へえ、井口が」

「上の娘さんの結婚式だって。……子供ができたらしい」

話しながらも、フグをさばく兵藤の手元によどみはない。

まるで手が作業を覚えているかのように、一切の無駄がない。

了はカウンターのいすの上に膝を乗せて兵藤の手元に見入っている。

「何だ、えらく早いな」

「早いって、もう22だよ」

「そんなになるんだ」

井口の娘がもう22歳で、しかも結婚して子供も生まれるという事実に、将は時の流れの速さを感じた。

井口とも、もうずっと会ってない。

「……井口もおじいちゃんか。で、あいかわらずなんだ?」

「ああ。あいかわらず、仕事のあいまに中学でダンスを教えてるってさ」

「そっか」

将は微笑むと、新潟の純米吟醸を手酌でお猪口に注いだ。

心は井口のあれからをたどっている。

高校を卒業した井口は、キャッシュバックでなんとかひきこもりの兄がいる暗い家を脱出し一人暮らしを始めた。

バイトのかけもちをしながら、ダンスへの夢を捨てない暮らしは、本人いわく「壮絶なビンボー」生活だったらしい。

水道を止められて、公園の水を汲み置きしたり、バイト先のパンの売れ残りばかり1週間も食べ続けていたりしたこともあったという。

『まったく芽が出なかったらとっとと諦めたのによォ』

本人がぼやいたとおり、ときおりステージのバックダンサーや映画などの声がかかったから、諦めきれなかったらしい。

そんな貧乏暮らしながら長野に住む、藤井さやかとの付き合いは、ときどき愛想をつかされながらも細々と続いていた。

そんな井口が夢を諦めたきっかけは、さやかの妊娠である。それは奇しくも井口が２２のときだった。

さやかの妊娠を知った井口の行動は早かった。

ダンサーへの夢をすっぱりと諦めて、さやかがいる長野に移り入籍、そして会社勤めを始めたのだ。

今は長野で、さやかの夢だった『美味しいパンがあって気軽な値段で泊まれるＢ＆ａｍｐ；Ｂ』を夫婦で経営して、そこそこ成功しているらしい。

3人いる子供も大きくなって、時間にゆとりができたここ数年、B&Bを経営する傍らで、週2回だけ地元の中学でヒップホップダンスを教えている。

教え子が全国大会に出場した、と嬉しそうに話していたのはいつだっただろうか……。

他のみんなは元気？という質問に、兵藤は寿司を握りつつそれぞれの近況を話してくれた。

その手つきはまるで手品のようだ。

小さい了には、了の口に一口で入るサイズの握りを握ってくれる。

だから子供の了といえど、醜い『食いちぎり』をしないでいい。

特に考えながら握っている風でもなく、よどみなく握り続けている中から、気がつくと了の前に小さな寿司が出てきている、といった具合。

いちいち確認しなくても手がちょうどいい量を見切っているようなのだ。

「鷹枝くん、これなんだかわかる？」

兵藤は、いったんクラスメートの近況を話すのをやめて、淡いピン

ク色の塊を将に見せた。

「……フグの肝？」

「さすが、鷹枝くん。……食べたことある？」

「一度だけ。〇〇県で」

フグの肝は、ときに毒を持つとされ、一般に食用を禁じられている。しかし、まったりとして一切の臭みがない美味ゆえに、こっそり食べる地域や店もあるのだ。

遊説先でこわごわ食べた将も、その美味に思わず唸ったほどだ。

「そっか……。でも一国をになう宰相には、残念ながら出せないね」

「どうせ当たりっこないだろ」

と憎まれ口を利きながらも将は、自分の立場で、今それを食す無責任さについては、充分にわかっているからそれ以上は言わない。

養殖フグならほぼ、毒にあたることはないとされるが、天然もののトラフグは、もしかするともしかする……かもしれないからだ。

しかし目の前にある肝は、食べられないとなるといっそうなまめかしく見えた。

天然ものの、しかも貴重とされる安乗フグだけに、その肝はおそらく極上の味だろう。

禁じられた美味。

その感覚に……将はふと、甘い既視感を覚える。

許されないそれは、ただひたすらに切なく、甘かった。

あの頃は、そのあとに待っているものなど、何も考えやしなかった……。

兵藤の見事な仕事ぶりを眺めながら……気がつくと将は、聡の話題が出てくるのを、いまかいまかと身構えていた。

そもそも、ここを急に訪れる気になったのも、それが原因だったのだ。

とうとう……聡の話はひとかけらも出てこないまま、最後の玉子焼が出てきてしまった。

兵藤が修行していた店の味をそのまま引き継いだ甘じょっぱい味は、将も了も大好物だった。

お運びさんが、濃いお茶を置いてくれる。

そろそろ、開店時刻になる。

警備の都合上、将がカウンターにいる間は、店は貸切状態にしない

といけない。

兵藤に迷惑をかけられないから、そろそろ帰らないといけない。

諦めた将が、おあいそを、と言いかけたときだった。

「そういえば、鷹枝くん。1年くらい前に先生もきてくれたよ」

と兵藤は何気なく付け加えた。

４０９◆最終章・また春が来る　７

「先生って……」

油断していたところへふいに持ち出された本題に、将は思わず兵藤の顔を見た。

「そう。アキラ先生。ずっと外国暮らしだったみたいだけど、日本に帰ってきてるんだ」

兵藤はさっきと変らない笑顔のまま続けた。

「先生のお友達のライターさんがずっとうちを贔屓にしてくれててね。それで、先生と娘さんを連れてきてくれたんだ。それが、先生の娘さんって、あの女優の月舘よう子だって、鷹枝くん知ってる？」

「ああ。……昨日、対談した」

心の動揺が声に現れないように苦心したのと、よう子の知名度に、将の中で嬉しいような怖いような思いがよぎる。

「そうかー。本当に驚いたのなんのって……」

兵藤はよう子の美しさについて、まだいろいろと述べていたが、そこへ質問を割り込ませる。

「先生は、元気そうだった？」

「ああ。先生も、あいかわらずきれいだったよ。５０すぎたとは思

えない若さでね」

「大きな病気をされたと聞いたけど」

「うん。うちに来たのも、快気祝いって言ってたな。でも、言われなきゃ病み上がりとはわからなかったよ」

兵藤の表情には悲壮さのかけらもない。

だから、聡が余命宣告を受けていることは知らされていないのだろう。

ただ……将は、聡がひとときにせよ元気でいる証明を得たことに、少しだけ安堵する。

今度、先生をまじえて同窓会をしたいね、と別れ際に兵藤は言った。

香奈が帰ってきたのは夜9時すぎだった。

ただ今、の声に、リビングのソファーで将と並んで本を読んでいた了が玄関へとすっとんでいく。

資料に目を通していた将もコーヒーカップを置いて立ち上がった。

妻が帰ると、急に家は賑やかになる。

大きな荷物をひきずるようにして現れた香奈は、かなり疲れているようだ。

目の下にクマができている。

それでも将の姿を見つけるとにっこり微笑んだ。

香奈の荷物の１つを引き受けた了が重そうにそれを持ちながらも、しきりに「お母さん、今日ね」と話しかけながら、まつわりついている。

「おかえり。学会はうまくいったんだろ」

「うん。学会はね。でも日本に帰ってきてからが疲れたわー」

スイスからの飛行機は昼には日本に着いていたが、多忙な香奈はそのあとも会議や打ち合わせが相次いだのだ。

ときに総理の将より忙しいほど仕事に打ち込む香奈を、とがめるつもりは将には毛頭ない。

世界に通用するほど優秀な学者である香奈の能力を、女性であるというだけで将の世話だけにとどめておくのは国としても大きな損失だからだと思うからだ。

だけど……今夜の将はふと思う。

これが聡だったらどうだっただろうか。

聡が、将と何日も会えない程忙しく仕事をこなしたなら、将は果たして今のように冷静で待っていられただろうか。

そんな疑問を……そんな風に聡と香奈を比べること自体ばかばかしい、と将は自ら打ち消す。

自分も成長しているのだ。

聡を愛していた頃の未熟で若い自分と、今の自分は違う。

ただひたすらに甘え、触れあい、抱き合うことが愛情表現だと思っていた若いころと、社会に対して責任があり、家庭という実体を保持し続ける粘り強さが要求される今を比べること自体がおかしい。

しかし、そんな風に否定すればするほど……あの激しく純粋だった愛情のかけらはキラキラと心に刺さってくるようだ。

「お兄ちゃんは？」

香奈が言う、お兄ちゃんとはもちろん長男の海のことだ。

「まだ塾だよ。もうすぐ帰ってくると思うけど」

何気なく答えながら……将は、一瞬どきりとしていた。

なぜなら香奈は、長いこと将のことを「お兄ちゃん」と呼んでいたから。

『お兄ちゃん、どうしちゃったの！……そんなのお兄ちゃんらしくない！　しっかりして！』

ふいに、まだ少女だった香奈の声が脳に響く。

リハビリの一環として将は、この血のつながらない従妹の家庭教師をしていたことがある。

聡を失って死人のようになっていた将に、香奈はそんな風に叱咤激励したのだ。

将がなんとか立ち直れたのは、香奈の存在が大きい。

とはいえ結婚するまで、香奈に男としての感情を抱いたことはない。

香奈のほうも、１１才で将と出会って、２３才で結婚するまで、ずっと将のことを「お兄ちゃん」と呼んでいた。

仲の良い従妹として、つかず離れずの付き合いをしていた二人が結婚することになったのは、３０才を迎えた将に周囲が「そろそろ身を固めろ」とうるさくなってきたのと、政治的な事情である。

将のもとに何枚か届けられた見合い写真の中に、まだ大学院生だった香奈のものがあった。

見合いの話は一切断っていた将だが、『なんだ、香奈ちゃんか』と思わず写真を手に取った。

からかうつもりで香奈本人に連絡すると、

『あたしも、まだ結婚なんか早いと思うんだけど、おじい様がうるさくて』

とこぼしていた。

おじい様――つまり将の義母、純代の父でもある――は総理をも務めた政界の有力者である。

つまり、政界の名門・岸田家と鷹枝家をより強く結び付けるための政略結婚をもくろんだのであろう。

『お兄ちゃんだったら、結婚してもいいかな。勉強も続けさせてくれるでしょ』

と無邪気に言ってのける香奈は可愛かったし、何より政治的なメリットが大きかった。

そんなわけで、もともと知り合いだった二人だが、儀礼的に見合いをした。

見合い、交際、結納……ときちんとした手順は、まるで「ごっこ遊び」のようだった。

ときおり、お互いクスっと笑いあいながら、儀式をこなし、二人は夫婦になった。

結婚してからもしばらくは「お兄ちゃん」だったが、さすがに海が生まれてからは、やっと「あなた」「お父さん」という呼び方に変わった。

傍目にはあざとい政略結婚で結ばれた夫妻だろうし、激しい恋愛の末に結ばれたわけでもない。

それでも、二人は少しずつお互いをわかろうという努力と、温かいものを積み上げてきて……安らぐ家庭を作り上げたのだ。

410◆最終章・また春が来る　8

「スイスからのお土産は明日あけようね」

「うん！」

「よしよし。じゃあ、今日はもう、寝ようね」

そういって香奈は了を部屋に連れていって休ませた。

その間、寒い外から帰ってきた妻を気遣って、将はダージリン・ティを淹れた。

「あー、いい匂い」

深呼吸をするようにして、子供部屋から香奈が戻ってくる。まだ帰って来た時のままの姿で、着替えもしていない。

「コニャック入れる？」

「ちょっとだけ。眠くなってお風呂に入れなくなっちゃうもん」

将の問いに、香奈は手で「ちょっとだけ」と示しながら、くしゃっと笑った。

そのまま、倒れこむようにリビングのソファーに体を投げ出す。本当にクタクタなのだろう。

「ちょっとだけ……ね」

将は慎重にコニャックの瓶を傾ける。

2滴だけ、香奈のカップに垂らすのに成功したとき、急に香奈がこちらを振り向いた。

「……そういえばね。チューリッヒで珍しい人に会ったのよ」

「へえ、誰」

香奈が答えようとしたとき、玄関の鍵が開く音が響いた。

純代か海が帰ってきたのだろうか。

声もなく、ただ廊下を歩く音がする。

「海。海なの？」

香奈はリビングに座り込んだまま、呼びかけた。

紅茶をカップに注ぎ終わった将が、リビングの入り口をあけると、そこにちょうど海の姿があった。

家の者に挨拶もせずに、階段をのぼって自室に行こうとしていたらしく、将の姿を見つけると、眉を少しだけ寄せた。

「帰ったなら、一言ぐらい挨拶しなさい」

思わず将はキツい口調になる。

背が伸びた……といっても１８６センチの将にはまだ遠く及ばない海だから、さすがに反抗はしない。しかし

「……ただいま」

という声は低く……愛らしかった子供の頃からはどんどんかけ離れていくようだ。

「お母さんも、帰ってるぞ。ちゃんと顔を出しなさい」

それには無視して海は階段を駆け上った。

「海！」

「あとでするよ！」

それが聞こえたときにはもう姿は見えなかった。将はため息をついた。

「受験が近づいて、ピリピリしてるのよ」

後ろから香奈の声。

いつのまにかソファから立ち上がって、カウンターキッチンの上で湯気を立てていたティーカップをちゃっかり傾けていた。

「まったく。昔はもっとかわいいヤツだったのに」

「本当にね。誰に似たのかしらね」

香奈はそういうと、クスッと口角をあげた。将は黙るしかない。

香奈は義母の純代や、９０を過ぎた大磯の春さんから将の昔の『武勇伝』を漏れ聞いているらしい。

あの悲惨だった純代との確執の日々も……和解した今では、いつのまにか笑い話に近いものとして妻にはとらえられているらしい。

「あいつ、そんなにピリピリするような成績なのか？」

将はソファに腰掛けながら話題をやや逸らした。

「ううん。Ａ判定よ。でも、好きな子が公立中に進むみたい」

追随して腰掛けながら、香奈は平然と答えた。

好きな子。意外な単語に、将は口をぽかんと開けた。

「……この４月で１３才だもの。好きな子くらいはいてもおかしくないわ」

笑いながらわが子をフォローする香奈に、将は憮然と黙り込む。

海の誕生日は将と近い。

将が海の年齢の頃、ちょうど背中に負ったヤケドで入院していた。

そのせいで将は中学受験をあきらめ、公立中に進んだのだが……そのせいで将は一気に悪くなったと思う。

あまつさえ、１４になるまえに女さえ覚えてしまった。

そんな年に、あの可愛かった息子が差し掛かっているとは……。

感慨深くなったついでに、将は自分の当時の「好きな子」を思い出して見て愕然とする。

将には「好きな子」がいなかった。

つきあっている子はいたが、誰にでもいるはずの「好きな子」という存在が、将にはまったく思い出せない。

それこそ聡という存在ができるまで、まったく。

ふわりと羽が飛んでいくように、将の思考を再び聡がかすめていく。

それを振り切るように

「俺は、海が公立に行きたいなら、別に反対はしない」

将は差し出されたティーカップに、噛みつくように口をつけながら呟いた。

「あの子だって、わかってるわよ。自分のこれからを考えれば私立に行ったほうが楽だって。

だけど、頭ではわかっているけど感情で割り切れていないから、ああいう態度を取るのよ」

フン、と鼻先で答えつつ、将も理解している。

もう海も13。親に反抗したくなるのは、正常に育っている証拠なのだ……と。

「……で、あっちで会った、珍しい人って誰？」

コニャックの甘い香りを含んだ紅茶の湯気に若干心がほぐれた将は、香奈がさっき言いかけたことを思い出した。

「ああ。西嶋さんよ。西嶋大悟さん」

その名前に、湯気さえも一瞬止まった気がした。

なんという奇遇だろう。

昔の……13才頃の自分を思い出していたときに、あの、大悟の話が出てくるなんて。

「……元気そうだった？」

「ええ。何年ぶりかしらね。あちらの精密機械を取り扱う企業と大きな取引があったんですって」

「そうか……」

将は鼻先を温める湯気とともに再び思い出をたぐる。

懐かしいと同時に、お互いの心に大きな傷を残すこととなった、大

悟。

大悟に刺されたことを……将は恨む気になれなかった。

あのおかげで将は1ヶ月も意識不明のままになり、やっと意識が戻っても体がなんとか自由に動くようになるまで1年もの歳月を要したのに、だ。

自分が大悟にかぶせてしまった罪に比べたら。

つらいリハビリのたびに、将はそれを思った。

大悟はといえば、将を刺した直後に自首していた。

被害者である将が意識不明の間に、いったん殺人未遂罪として起訴されていたが、息を吹き返した将の強い願いもあり減刑された。

それでも再犯ということで、2年の懲役が言い渡され、結局1年10か月の間、少年刑務所に入っていた。

その後、大悟は更生し、二度と闇の世界には戻らなかった。

養子縁組を撤回しなかった西嶋氏に心から恩を感じたのだろう。

西嶋氏の会社で働きながら技術を学んだ大悟は、8年前に西嶋光学工業を継いでいた……。

その後、二人が顔をあわせたのはわずか数回だ。

何気ない思い出話も交わしているが、その間柄に大きな傷跡が残る

二人である。

昔のようにいつも一緒にいるような関係には、もうなれないと将はわかっている。

将のほうは……大悟さえ許してくれるのなら、いつだって元どおりの関係になりたい。

だけど、大悟は心の中では、一生自分を許さないだろうと思う。

できれば自分にかかわりたくないだろうと……。

それでも将はいつも大悟を気にかけていた。

大悟が西嶋氏から受け継いだ会社は、大悟自身が、自分の過去を捨てて努力したこともあり、ますます成功していた。

大悟の会社が何か新しい特許をとるたびに、また外国の大きなプロジェクトに参加するたびに、将はいつも自分のことのように喜んだ。

でも……自分の罪は、一生かかっても償えないと思う。

「あいかわらず独身だそうだけど。あんなに素敵なのに、不思議よね」

大悟と今までに2度ほど会っている香奈は、将と大悟の間に何があったかを詳しくは知らない。

彼女が認識しているのは、ただ、将の古い友人だということくらいだ。

香奈が不思議がる、大悟がいつまでも結婚しない理由についても、将は知っていた。

以前、健康診断に訪れた病院で偶然、大悟と出会ったことがある。

『精密機械を扱っているのに、手が震えたらダメだよな』

大悟はそういって静かに微笑んだ。

若いころに覚えたあの薬は、今も大悟の体を蝕んでいたのだ。

手の震え、激しい頭痛、鬱症状……そしてフラッシュバック。

連用していたのは1年足らずのはずなのに、今でもときおり、そんな症状が大悟を襲うという。

何年も経ったのに、未だに大悟は苦しんでいる。

きっと……口には出さないけれど瑞樹のことも、忘れられずにいるのだろう……。

自分の罪の重さは、時を経て消えるどころか、さらに重圧を増しているのかもしれない、と将はおびえた。

411◆最終章・また春が来る　9

暗闇に規則的に繰り返される寝息。

時差があるだろうに、香奈は早々と自分のベッドに入ったかと思うと、すぐに寝息を立て始めた。

やや大きく聞こえる気がするのは、疲れているからだろう。

逆に将のほうは、今日がひさびさのオフだったせいか寝疲れない。

目をつむろうとすればするほど……思考は冴えていくようだ。

無理に眠ることを諦めた将は、思考の行きつくところに自らをゆだねることにした。

思考は暗闇の中に、昨日会った陽の姿を投影した。

自分によく似ていて、しかも美しく成長した陽。

『母に会ってください』

『母は余命を宣告されています』

『母は泣いていました』

陽の、低いけれどよく通る声で、次々と繰り出される真実。

――結局、そこに思考は行きついてしまう。

将は暗闇にため息を吐きだした。

2年前に2年と余命宣告を受けた聡。

医師の余命宣告が正確なら、聡はまもなくこの世から消えていなくなることになる。

聡がこの世からいなくなる。

若いころなら考えただけで胸が張り裂けそうになっていたであろう事実。

それを比較的冷静にとらえている自分を……将はやはり哀しいと思う。

「う……ん」

隣のベッドから声が聞こえて将は思わず振り返った。

どうやら寝言らしい。

香奈は声の後に、むにゃ、と息を飲み込むようにして寝がえりを打った。

その肩が布団から出てしまっているのが、ほの暗い中でも見分けられた。

将は温かい気持ちで妻のほうを見ると起き上がった。

布団から出ると、シンとした冬の冷気がしめつけてくるようだ。

そんな中、香奈は子供のように体を丸めてすやすやと眠っている。

将は、肩口まで覆うように、布団をかけなおしてやった。

子供のように安心しきって眠っている妻。

この妻を裏切ることはできない。

そう思う反面。

余命の少ない恩師に会いに行くことは、世間的には咎められる行為ではない。

特に聡は誰が見ても、手がつけられない不良だった将を、救いあげた人物なのだ。

それをなぜ妻への裏切りだ、などと思うのだ……。

そんな正論をかかげた反論も心に浮き上がってくるのも事実だ。

立ちつくしたまま妻の寝顔を見ていた将は、寒さに思わずぶるっと震えた。

眠れない。

時計は1時をまわっている。

将はガウンをひっかけると寝室を出た。

眠れないときはいっそ起きて仕事をしたほうがいい。

体が疲れているなら横になっているのは意味があるが、ゆっくり休んだ今日だから体に疲れは残っていない。

明日（正確には今日だが）は、党の若手と市民を交えた大きな勉強会がある。

その資料でも読んでおこうと、書斎の鍵を手にする。

「？」

書斎の前で、将は立ち止まった。

閉じた書斎の扉の下から、細い線になって光が漏れている。

不審者？　と一瞬身構えるが、それはありえないことに気付く。

家の外のあちこちにはセンサーが設置してある。もしも不審者が侵入したらただちに警報音が鳴り響き、家人と外を警備するポリスボックスに伝わるようになっている。

灯りをつけっぱなしにしてしまったのだろうか。

しかし灯りにもセンサーが付けられているはずだ。

将の体温をとらえられなくなった場合は、１５分で消える仕組みな

のだ。

どうやら、鍵はかかっているらしい。――それは将がさっき掛けたままといえる。

将は用心深く、かつ、素早く書斎の鍵をあけると中に踏み込んだ。

同時に……将のデスクに座っていた海が驚いて立ち上がった。

「……海？　お前、何やってるんだ」

海が答えるかわりに、デスクの上にあるノートパソコンから少女の声がした。

『海、どうしたの？　今の、お父さん？』

しばらくの間、海は立ちつくしたままパソコンの画面と将の顔を見比べていたが、やがてパソコンに向かってうなづいた。

「ごめん。オヤジが起きてきた。切るね」

海は将の前では出したこともない優しい声を出した。

青いけれど……パソコンの中の少女をこよなく大事に思っていることがわかるような声。

『うん。バイバイ。おやすみ』

通信は途切れたようだ。

将はドアの前に立ったまま、海からの弁明を待った。

しかしパソコンの中の少女との通信が切れても、海は何も言わずにうつむいていた。

「ごめん……」

辛抱強く待った将に、ようやく海が口を開いた。

「勝手にパソコン使っちゃって……」

人のものを勝手に使った、つまり悪いことをしている、ということはわかっているのだろう。

幸い、仕事で使うオフィシャルなパソコンは金庫の中に入れている。デスクに出ていたのは、将の個人的なパソコンである。

だが、公的に公開する以前の独自調査や、若手議員から出された法案の原案以前のアイデア、さらに行政の現場からの雑談的な意見に加え、将のスケジュールのコピーなど、重要なものも入っている。情報が流出すれば、それなりに深刻な事態になるものばかりだった。

「……お前、自分が何をしたかわかっているか？」

海は目を伏せた。ことの重大さはそれなりにわかっているらしい。

「……ごめんなさい。でも、ライブチャットをしてただけ。……本当だよ。オヤジの仕事関係には全然触ってないよ」

「あたりまえだ」

将は静かに、かつ鋭く言い放った。

海のいうとおり、海は好きな彼女とネット上で会話を楽しみたかっただけなのだろう。

親の目を盗んで、深夜に二人きり……。

いけないとわかっているけれど、彼を駆り立てたもの。

こみあげてくるあんず色をした懐かしいもの。

自分にも確かに覚えたあるそれを、将は無理やり心の中に押し込む。

「どうやって、パスワードを盗んだんだ」

将のプライベートなパソコンとはいえ……パスワードを入力するか指紋認証を行うかをしないと、使用できないようになっている。

口をつぐんだままの海に、将は「答えなさい」と鋭く迫る。

将の気迫に海の体がびくっと震えるのがわかった。

海も将の子供時代にならって、武道一般を身に付けていて優秀な成績だった。

しかし……実際に人と争ったことなどないのだろう。

まだ幼さを見せる海に、将の心は、親として温かくなった。

「小型カメラを取り付けた」

「ええっ？」

温かい親心は一瞬で吹き飛んだ。形相が再び変わった将に、逆に海がおろおろとした声をたてる。

「パスワードがわかったら、すぐに画像データは消したよ。本当だよ」

「おま……」

将は絶句した。

１２才の息子が……彼女とネット上で話したいばかりに、小型カメラを父のパソコンに向けて取りつけるとは……。

「そのカメラは、どこで手に入れたんだ。まだあるのか？」

海は量販店の名前を口にすると、素直にカメラを自室から持ってきた。

精巧に出来た、ネジ型のカメラはあきらかに盗撮目的でつくられたに違いなかった。

「すぐに規制しないといけないな」

そういいつつも将にはわかっている。どんなに厳罰で律しても、地

下では出回ってしまうだろう。

「座りなさい」

将は海を書斎のソファに座らせた。

そして、自分がやったことに対して、どんなことが予想されるか、最悪の事態を話してみなさい、と厳かに促す。

しかし驚いたことに……海は、最悪の事態をほぼ正確に把握していた。

ネットを通じて、将のパソコンにまだ未知のスパイウェアが入り込むこと。

そこから将の資料が流出する危険。資料が削除、もしくは改ざんされる危険……。

将はため息をついた。

「お前は、お父さんがどういう立場かわかっているのか。そこまでわかっていて、なんで……」

言いかけた将は、海が憮然とした目で将を見ていることに気付いてハッとする。

自分にも……覚えがある反発。

『立場』それは、今でこそ、その重要性がわかるものの……その単語は、多感な年ごろの子供には単なるエゴイズムのように映るのだ。

将は言い換える。

「最悪の事態になったら、お父さんが失脚するだけじゃない。テロ組織に渡ったら、たくさんの人が危険にさらされてしまうんだぞ」

そして、さらに付け加える。できるだけ静かに。

「お父さんは、一部の人だけが利益を吸い取って、普通の人が生活に喘いでいるような、そんな格差社会を直したいと思って、かなり無理なことをやっているんだ。わかるね」

海は黙ってうなづいた。

「だけど、甘い汁を吸ってきたやつらの中には、お父さんを早く失脚させたり、殺したいやつもいる。そうなったら、この国はどうなる。……そりゃ党はあるけれど、お父さんに代わって改革をやり遂げられる人間など、他にいないはずだ」

将は自ら断言した。

厳の意志を継ぐと決めて。自分が積み重ねてきたものに一切のゆるぎはなかった。

若いうちは美貌を活かして俳優業で人気をとり、その人気が健在なうちに東京都知事に当選。

リーダーとしてさまざまな都政改革の実績を残した上で、国会議員へと転身。

将ほど若くして鮮やかにトップにのぼりつめたものは歴史上誰もいないだろう。

他の者の前では謙虚にふるまっているものの、将には自分に代わる者など誰ひとりとしていない自信があった。

「お父さんが追い込まれると、国民がさらに貧しくなって、格差が広がってしまうんだ」

「……わかったよ」

海は将の言葉を遮るように返事をすると、将に視線を返した。

そんな鋭い目つきを見ていると――『海はあなたにそっくりね』という香奈の言葉がよくわかる。

そしてよくよく考えてみると……海と陽も、よく似ていた。

睨みつけるような瞳に将は念を押すように、強い視線を返す。

「本当に、わかってくれたんだろうな」

「……うん」

海は将の視線に気圧されたのか、弱弱しく瞳を膝の上に落した。

「ごめんなさい。もう二度とやらない」

本当に反省しているようだ。そんなようすはまだまだ子供だ。将は安心した。

「……もう寝ていい？」

「待ちなさい」

立ち上がろうとした海を将は引き留める。

「お前、本当は……公立中に行きたいのか？」

思いがけない質問に、海は目を見張った。しかし、すぐに目を伏せると

「ううん」

と首を振った。将に――つまり、親に気をつかっているのだろうことははっきりとわかった。

格差社会がさらに進んだ今、多くの公立中学は問題を抱えている。

そこに進めば、親を心配させることは海でもわかるのだろう。

「お父さんは――。お前が公立に進むのに反対しない」

将の言葉に、海はゆっくりと目をあげた。あまりに意外だったらしい。

「いろいろな階層の人間と出会うことで見える真実がある。私立は確かに安全だが……限られた階層の人間としか出会えなくなる。お父さんにはそれが心配だった」

将は海に『鷹枝家』を継ぐことを強制はしないつもりだった。

だがもしも。

将のように政治家を目指すのなら、多感な時期に世の中の不条理を肌で知っておくことはとても大事だ。

将が、巌の意志を継ぐことに決めたのも……社会の底辺をまのあたりにしてきたからだった。

恵まれているばかりの人間がいくら理想を掲げても、人心に訴える実行力を持たないだろう、というのは将の生きてきた実感だった。

「……だが、恵まれた立場にいるお前だから妬まれることもあるだろう。精神的肉体的暴力を受けることもある。それに耐えられる覚悟が持てるかどうかを……よく考えなさい」

海は強い光をたたえたまま、目をゆがめていた。

それは泣きだしそうなのを堪えているようにも、嬉しさに目を細めているようにも、どちらともつかないような瞳だった。

海は深くうなづくと、書斎を辞した。

恵まれた立場ゆえの妬み、暴力。将は自分の中学時代を思い出していた。

携帯電話や有り金、服をはぎ取られたあげく裸にされ、トイレから出られなかったあの日。

将はそれに対抗しようとして、負けた。

髪を金色に染め、自らが悪くなることで、彼らに対抗したことは…

…負けたことなのだ。

今の将には、それがわかる。

長いこと泥にまみれていた将を救い出してくれたのは、まさに、あの人だった。

「……パスワード変えないといけないな」

将は、デスクに腰かけると使い慣れたパスワードを入力した。

”ａ１ｋ１ｉ２ｒ１ａ”

将とまったく関係ない英数字を連ねたかに見える不規則な羅列は、おそらく誰も解析できないだろう。

”ａｋｉｒａ”

に彼女の誕生日である１１月２１日をしのばせたそれを……将はひそかに愛用していたのだ。

412◆最終章・また春が来る　10

忘れられるはずがない。

忘れたくなかった。

彼女がくれた万年筆を手放せなくて。

パスワードに彼女の名前をひそかにしのばせて。

25年を経て激しい恋慕は形を変えつつも、聡を忘れることはできなかった。

その思いを心の底に無理に封じ込めたのは……聡のためだった。

聡を包み込む新しい幸せを壊せなかったから。

ボストンへ旅立った時、将は期待していたのだ。

逢えばきっと、聡は自分の元にもどってくる、と。

だが……。

将はため息をつくと、思い出をたどるのをやめた。

いまさら何を思いまどうのだ、と自分を戒めながらも、わかっている。

聡が、博史ととうにダメになっていたと聞いて。

その聡もまた、将への思いを忘れずにいたらしいことを知り。

心はいつになく動揺し続けていた。

いままで、政治的にどんな窮地に立たされようとも、冷静でいたのに。

そして将は、知る。

あの人が、聡が、今もなお、自分の心を支配していることを……。

しかし。

責任ある「大人」という立場になって久しく、さらに一国の宰相となった今。

乱れる心のままに行動することはできない。

１０代のあのときのように……いきなり駆け付けることなどできないのだ。

『母に会ってください』

陽の願いは叶えてやることはできないだろう。

逢えば。その顔を見れば。

地中深くに沈んだマグマのような感情は、もはや将の制御を超えてしまうかもしれない。

将はパソコンを閉じると立ち上がり、窓辺に寄った。

今夜は雪こそ降っていないものの、防弾ガラスの外はすべてが凍りつきそうなコバルトに沈んでいた。

ほとんど寝ずに運転して萩へ行った17才の正月。

その疲れた体で聡の実家にしのんでいったあの夜の冷たい空気がふいに蘇る。

逢いたい。だけど。

自分の取るべき行動は、いまさら選びようがないのだ。

翌日曜日、将は朝早くから仕事に出かけた。

鷹枝家では、朝食後、さっそく香奈がスーツケースいっぱいに持ってきたスイス土産をリビングで広げていた。

チョコレートに喜ぶ了の横で、海が段ボール箱としては小さな箱を取り出す。

「お母さん、何これ？　あけていい？」

昨日の帰宅時に比べて、明るい海に香奈は少しほっとして

「いいよ。あけてごらん」

と促す。

「これ……鍋？」

「そ。フォンデュ鍋。チーズフォンデュもできるし、オイルフォンデュもできるんだよ。チョコレートフォンデュも面白いな」

「えー、チョコかよ。キモっ」

「何よ、美味しいんだからー！　甘いもの好きなくせに」

リビングは朝の光とともに笑いに包まれた。

香奈は海の笑い顔をひさしぶりに見た気がした。

そのとき、リビングの扉が開いて、純代が現れた。珍しく朝寝坊したらしい。

ゆうべ古い友達との食事だとかで帰りが遅かったからだろう。

「すっかり寝坊しちゃって、ごめんなさいね」

謝る純代に、香奈は気遣う。

「いいえ、お義母さま。今日くらいはゆっくりしてくださいな。……海、おばあちゃんのスープあっためてあげて」

海は素直に立ち上がるとキッチンにある鍋に火を入れた。

ダイニングテーブルに腰かけた純代に了が

「これおばあちゃんにお土産だって」

とリビングからのびあがるようにして箱を振ってみせる。

純代は、それに笑顔で応えてから、海の横でコーヒーを淹れる香奈に

「……香奈さんは今日は、お仕事は？」

と訊いた。

「明日締め切りの原稿があるんですけど、おうちでのんびり書きます」

「……そう」

純代は目を伏せた。

それきり、海が持ってきたスープを口にするだけで黙り込む。

その様子から……何か重大なことを言いたいのだ、と香奈は直感した。

413◆最終章・また春が来る　11

香奈はＦＡＸできたゲラ（※初校刷り）の束を目の前にため息をついた。

先週、専門誌向けに出した論文がさっそくゲラになって戻ってきたというのに集中できないでいる。

心配ごとの１つだった海の受験は、今日無事に終わった。

にも関わらず、香奈の心は晴れなかった。

それは、夫、将のことだった。

夫には、忘れられない誰かがいる。

ずっと前から……まだ香奈が少女だった頃……将と初めて出会った頃からわかっていたこと。

これまでは実体をもたない存在だった『彼女』の正体が、純代によって明かされたのはつい最近だ。

余命宣告を受けている、夫の……将の恩師。

その恩師は、ただの恩師ではなく――。

そんな事実を知っても、香奈は冷静だった。

不思議に夫や、その相手への嫌悪感は起こらなかった。

もう２５年も昔に終わっていることだ。

言ってみれば初恋の相手が余命宣告を受けている……というようなものだろう。

今生の別れに、会っておきたいなら、別に反対などはしない。

と、その時は思った。だが……。

香奈は今日のことを思い出して、何度目かのため息をついた。

ため息は夜の静けさに吸い込まれてしまったように、反響さえしない。

今日。

某名門中学の受験当日はよい天気だった。

陽だまりに先週の寒さはすっかり溶けたような中、香奈は足早に校門に入ると、父兄用控室をめざした。

そこではすでにたくさんの父兄たちがわが子を思って気をもんでいた。

難関校であるここでは昼食をはさんで４科目の試験が行われる。

父兄の中にはずっとここで待っていた者も多いらしい。

今は最終科目である理科が行われているはずだが、その終了になんとか香奈は間に合ったのだ。

忙しい香奈だが、息子の一大事である今日はさすがに休みを取った。

国政で忙しい夫に代わって、今日は一日中、わが子の受験につきそうつもりだった。

しかし、こともあろうか、義母の純代が風邪をひいてしまった。

海や了にうつしたらいけない、と自室に自らを隔離した純代は

『私のことは気にしないで。海につきそってあげて』

と気丈に気をつかった。そうはいっても、まだ熱が３８度近くある。

６０過ぎとしては高熱だから家で家政婦任せにしておくわけにはいかないだろう。

結局、海自身が『大丈夫だよ』と強く言ったこともあり、受験会場までは将が官邸までの道すがら送ることにし、香奈は帰りに迎えに行くことになったのだ。

何人かの知り合いの父兄に会釈をしているうちに終了のチャイムが鳴った。

父兄たちは先を争うようにして控室を出ていく。

わが子のほっとした表情を一刻も早く見たいのだろう。

香奈もそのあとに続いた——といっても、試験の出来栄えについては、それほど心配はしていない。

学力的に見れば、海の成績はこの難関を楽に突破するのに十分だった……海自身がその気なら。

ただ、ここのところ進路に迷いが生じているようで、香奈にはそっちのほうが心配だった。

とはいえ、のぞんだ試験に対して、わざと放棄するような性格に育てた覚えはない。

香奈は、試験を終えた自分の息子の顔を見たくて、前庭に急いだ。

「海」

香奈の姿に気付いた海は、軽い笑みを浮かべてこちらに歩いてきた。

晴れやかな笑みに、香奈はほっとする。

おそらく息子は全力で試験にのぞみ、しかも手ごたえがあったのだろう。

こうしてみるとだいぶ背が伸びた。１６３センチの香奈と目線はほぼ水平に交差する。

「どうだった？」

「チョー楽勝」

さばさばと答える調子からも、自信がうかがえた。

香奈はひとまずほっとすると、ちょうど校門のところにやってきた迎えの車に二人で乗り込んだ。

「それで……うかったら、海は○○中に行ってくれるの？」

後部シートに並んだ息子の横顔に向って香奈は遠慮がちに切り出した。

温かい午後の日差しが、まだ柔らかい息子の髪を茶色に縁どるようだ。

「うん。たぶんね」

海はシート越しに車の行く先をフロントガラスに見つめながら答えた。

その様子があまりにも淡々としているので、香奈は思わず

「△△ちゃんのことは、もういいの？」

と言ってしまった。海の「彼女」の名前だ。

「えー、なんだよソレ」

海は驚いて振り返った。

無理もない。海の『恋愛』について、海本人から聞いたわけではないから。

みるみる赤くなっていく頬に香奈は安心してくすっと笑った。

好きな子が出来た、といっても、まだまだ子供なのだ。

「お母さんは何でもお見通しなんだから」

香奈はいたずらっぽく笑った。

海は口を尖らせる。

「どうせ、おばあちゃんから聞いたんだろ」

『おばあちゃん』という単語がそろそろ似合わない声色になってきたな、と香奈は思う。

海は一度、くだんの女の子と二人でいるところを純代に見られているのだ。

ちゃんと挨拶ができる可愛いコだった、と香奈は純代から聞いている。

「……△△ちゃんと別々の中学になるのが嫌だったんじゃないの？」

香奈はふざけるのをやめて、できるだけ優しく聞いてみた。

将が、海が希望するなら公立中にやってもいい、と言っているのを香奈も承知している。

ただ、香奈は母親としてやはり、名門中のほうに進んでほしいのはかわりない。

将来のためというよりは、イジメや治安のことを心配してである。

海は香奈をちらりと見ると、そっぽを向いたまま答えた。

「嫌だったけど、もういい」

「もう、好きじゃなくなったの？」

海は一瞬目をむいた。その目だけで反論しているのがわかる。

だが、すぐに下を向いた。

親から好きだのなんだの、色恋沙汰のことを言われるのは照れくさくて恥ずかしいものだ。

自分にも覚えがあるのに、香奈はついからかうようにつついてしま

う。

本当は幼いなりに真剣な気持ちを理解しているのに。

「……違う」

「じゃあ、どうして？」

しばらく車内に沈黙が流れる。

海はそっぽを向いたまま、「お父さんが……」とつぶやいた。

仕事が一向に進まなくて、香奈は時計を見た。もうすぐ、夫が帰ってくる時間。

いつもは夫の顔を見るのが待ち遠しいとさえ思うのに、今日は会うのが少しこわい。

将は、夫は……片時も『彼女』を忘れなかったのだろうか。

香奈の中で、忘れられない記憶がふと、きらめくように蘇る。

心の奥底にしまった、宝石のような一瞬。

『彼女のこと、どれくらい好き?』

『いなくなったら、死んでしまうくらい好き』

あの日の夕陽の色とともに、それを映した将の瞳は燃えるようないろでいて、透明だった。

きっと……あのときに将が愛していた相手、それが恩師なのだろう。

受験会場へ向かう車の中で、将は、海に向ってこういったという。

『……本当に好きだったら、時間も距離も関係なく、忘れられないものだ』

４１４◆最終章・また春が来る　１２

――そうだ。この笑い方。

香奈のノートパソコンの中では、将が昔に出演したドラマの映像が再生されていた。

パソコンの中の将は、大きな口をあけてゲラゲラと笑い転げている。

または歯をむき出しにしてニィっといたずら気に微笑み。

そうかと思うと、はにかんでくしゃっと顔を崩す。

香奈はノートパソコンの画面に見入った。

仕事の、ゲラチェックなど今はどうでもいい。それより確かめたいことがあった。

北海道の自然の中でのびのびと呼吸する１８才の若い将。

くったくのないさまざまな笑顔と、救いようのない陰を感じさせる寂しげな瞳。

このドラマで将は、単なるイケメンというだけではない、将そのものの魅力を世間にあますことなく見せつけたものだった。

しかしこのドラマの直後に刺されて重体に陥り、１年後にどうにか復帰したものの、以前のような輝きは、もはや見られることはなかった。

香奈は、映像をリピートした。

少女のころから繰り返し見ている映像だから、将がいずれの場面でどんな表情をしているか、手に取るようにわかる。

その、将の笑顔に香奈は注視した。

そしてその笑い方があきらかに変わっていることに、いま、香奈は気付いた。

今の将の笑い方を思い浮かべようとしたとき、階下に将が帰宅した気配があった。

香奈は反射的に立ち上がると階段を降りる。

その途中でリビングに入ってきた将と目が合う。

反射的に出るはずの言葉が喉につかえて声がでない。

「ただいま」

「……おかえりなさい」

将の声にようやく、応じながら……心の中ではその笑顔を比べている。

そうだ。香奈が見慣れた将の笑顔はこの顔だ。

よく言えば、静かで穏やかな微笑み。

よく言えば？　では悪く見るならどういう微笑みなのだろうか。

「……何か食べる？　海の受験が終わったご褒美に、今日はさっそくチーズフォンデュにしたのよ」

香奈は少し怖くなって、その先を考えるのをやめた。

「チーズフォンデュか……。そっちは？」

将はレンジにかかっている土鍋に目をとめた。

「こっちはお義母さんのための雑炊」

「じゃ、雑炊をもらうよ。で、お義母さんの具合は？」

「熱は下がったから、たぶん大丈夫」

そんなふうに何気ない会話を交わしながら、香奈は気づいている。

笑いの強弱はあるにしても、今の将の笑顔は……あの、１８才の将とはまったく異なる笑顔であるということを。

「これ、香奈が作ったの？」

「そうよ。いちおうお義母さんが好きな炙ったアゴ（※トビウオ）でダシを取ったの」

「うまい。本当にうまいよ、サイコー」

目を細めて熱い雑炊をすする夫。

この笑顔は嘘の――いくらなんでも作った笑顔ではないだろう。

だけど、あのドラマの中の笑顔とは違う。

なんで違うんだろう。

香奈はダイニングテーブルに頬杖をついて将を観察しながら考える。

「もしかして、仕事の邪魔しちゃった？」

「ううん、いいのよ。飽きてきたところだから」

総理なのに、妻の仕事を気遣う優しい夫。

思えば将はずっと優しかった。

友達から聞く夫の愚痴のような――たとえば

『家事を何1つ手伝わない』とか

『疲れているのか、ムッツリと黙り込んでいる』とか

『仕事の愚痴ばかり聞かされる』とか。

将にはそのようなことが何1つなかった。

子育てや研究に忙しかった香奈には都合がよすぎたせいで、気づかなかったけれど。

今になってその違和感が香奈の足元を揺らがせる。

将は、本当の姿を……香奈に見せていないのではないだろうか。

「ねえ、あなた」

香奈は将に問いかけてみる。

「ん？」

将は土鍋に向き合ったまま目だけをあげてみせる。

よほど雑炊の味が気に入ったんだろうか。そのユーモラスな表情に、揺らいだ足元が少しだけ安定して香奈は小さく微笑んだ。

「つらいこととか、嫌なことがあったら、何でも言ってね」

「何だ、急に」

将は顔をあげて笑って見せた。だけど、あの１８の時の笑顔ではない。

「急にってわけじゃないけど。ほら、あなた、仕事の愚痴とか何にも言わないじゃない？　我慢してるんじゃないかと思って」

香奈は自分の言葉にハッとした。

将は我慢、つまり何かにずっと耐えてきたのだ。

その何か、の重大な1つが、おそらく……。

「愚痴かぁ……。仕事上のことは、仕事で納得するしかないからね」

将はあいかわらず、香奈の見慣れた笑顔で答えた。

穏やかな、大人の笑顔。

「でもさ、吐き出すだけでスッとするって言うじゃない？」

「俺の場合は、吐き出してもあんまり変わらないからなあ……。ていうより、吐き出すようなことはないよ」

そういうと将は、自分で立ちあがってお代りをよそいはじめた。

実はかなり空腹だったらしい。

いつもどおり、普段は気にならなかった動作だが、香奈は少し不満に思う。

もっと、甘えてくれてもいいのに。

決して甘えない夫。自分にいつも厳しく、子供たちにも理想的な態度の……。

香奈はふと思う。

将は、理想的な夫を、そして理想的な為政者を、ずっと演じてきたのではないだろうか。

何か隠したいことがあるとか、そういう悪意のためではないことはわかる。

だけど、目の前にいる将は、もうずっと前から本当の将ではないのでは、と香奈の疑念は大きくなっていく。

『いなくなったら、死んでしまうくらい好き』

あのときの、若い将の瞳が香奈の中にフラッシュバックする。

詳しい事情はわからないが、あのときの彼女と将は別れた。

だけど、将は彼女を忘れることはなかった。

そのさみしさを耐えてきたんだろうか。

いや。

彼女を失って。

将は、将の心は死んでしまったのかもしれない。

415◆最終章・また春が来る　13

「ね、お義母さまに聞いたんだけど」

できるだけ何気ない様子を装う小道具として、香奈は食後のほうじ茶を入れる。

将がお代りした雑炊も、もはや終わりがけになっていた。

「あなたが高校時代にお世話になった先生が、ご病気なんですってね」

何気なさを装いながら……まばたきをする間も逃すまいと、香奈は将を観察していた。

香奈からそれを聞くことはないと思っていたのだろう、将は驚いて目を見開いた。

それは一瞬だったけれど、将の見開いた瞳にさまざまな色が浮かぶのを、香奈は見逃さなかった。

「ああ」

箸を置きながら将は短く返事を返した。お椀の中に目を落としたのでその表情は見えづらくなっていた。

「お見舞いに……行かなくてもいいの？」

怖いとわかっているのに、足を踏み入れてしまうような感覚。

それでも香奈はつい踏み込んでしまう。

もし、本当に会いにいったらどうするのだ。

忘れられなかった人に会って……将はどうするのだろう。

将はたぶん、彼女に会わないだろう――あのとき、純代はそう言った。

その上でこんなふうに付け加えた。

『だけど……だけどね。もし会うとわかっても、見ないふりをしてあげてほしいの。……乱暴なお願いだと思う、だけどどうかお願い』

……そういって純代は香奈に頭を下げた。

２５年前に無理やり断ち切られた（であろう）恋。忘れられないひと。

そして、自分と二人の息子との……温かい家庭。築き上げてきた１４年間。

いまの夫がどっちを取るかなんて、明白じゃないか。

香奈は自分に言い聞かせる。

言い聞かせないと冷静でいられないほど心が揺れているのも、すでに自覚している。

「……別に、入院しているわけじゃないからね」

将は立ち上がると食べ終わったお椀と箸を流しに運んだ。

「お元気なうちにお会いしておかなくていいの？」

暗に余命宣告のことも知っていると言葉に含ませながら、香奈は自分がわからなかった。

どうして、追い打ちをかけてしまうのか。

会わないなら会わないで……家庭に波風が立つ可能性がなくなるだけだ。

なのに、何故。

なぜ自分は……将をかつての彼女と再会させようとしているのか。

「どうしようもなく悪かったあなたを立ち直らせた先生なんでしょ」

わからないままに香奈は将の背中になおも浴びせる。

あるいは、その背中を試しているのだ、と香奈は思う。

自分たちの絆を。築き上げてきたものを。

恐れながら……香奈は確かめたくて仕方がなかったのだ。

今わかる。

過去と現在（いま）と。将と香奈が築いた現在が盤石であることを確かめたくて。

裏を返せば、不安が潜んでいたのだ。

引きちぎられた愛が戻ってきたとしたら、彼はどうするのだろう――。

振り返った将の瞳は、静かだった。

さっきのように動揺はしていない。

「お会いしなくてはと思うけれど、忙しいからね」

極めて落ち着いた声で、そつのない答えが返ってきた。

「3月の首脳会議までスケジュールはぎっしりだよ。……風呂に入る」

張り詰めていたものが一気にほどけて――将がバスルームに消えるなり香奈は座り込んだ。

再び書斎に戻った香奈だが、仕事は一向に進まなかった。

かといって。

仕事を放棄して横になったとしても眠れそうにない。

香奈は何十回目かのため息をついた。

安堵すべき答えが返ってきたのに、心の中では違和感が刺さっていた。

――あれは、夫の本心ではない。

あるいは、将本人は本当にそう思っているかもしれないが――香奈にはわかっている。

彼女を忘れたわけなどでは、決してない。

簡単に忘れてしまえるような人だったら、香奈は将を愛さなかった、と思う。

将はきっと、心の柔らかい部分――彼女にまつわる部分に意図的に血を通わさないようにして自分を守ってきたのだ。

そうやって――いち社会人としての体面を保ってきたに違いない。

最も愛する人への思慕ごと、心の一部を殺してしまうことで、将は政治家としての使命に邁進してきたのだ。

そんな風に考えないと、若い将と今の夫を結びつけることはできなくて、香奈は悩んだ。

一方で、悩む必要もないという声も、こだましている。

なぜなら、将は総理に登りつめることで敬愛する曾祖父の意志を継いでいる。

さらに二人の子の父親として温かい家庭を持っている。

将は傍目に見れば十分に幸せなのだ。

このまま、黙っていれば……幸せは揺らぐことなく続くだろう。

将の妻としてはその声を支持するべきなのに。心の違和感はどんどん大きくなる。

違和感だけでなくそれは痛みを伴ってきた。

それでいいのだろうか。

夫は……将は、心の一部を殺したまま生きていいのだろうか。

それで幸せといえるだろうか。

香奈は目をつむった。

あの夕陽の中の将は、香奈の瞼の裏に完全に貼りついてしまっていた。

――いなくなったら死んでしまうほど好き。

おそらく。

その言葉通り彼女とひきさかれて、将の心は死んでしまったのだ。

その相手が今度は、この世を去ろうとしている。

この世とあの世に引き裂かれて――将の心は一生死んだままになるのだろうか。

一瞬、たった一人で闇に対峙する、将のさみしい背中が見えた気がした。

その横顔は能面のように青白くて……香奈は震えた。

香奈はかつて、将と結婚するときに冗談めかして誓った。

『お兄ちゃんは、私が幸せにしてあげるからね』

『それ、普通は俺がいうセリフだろ』

冗談で装いながらそれは香奈の本心だった。

思えば、あの頃から香奈は気づいていたに違いない。

将が本当は――心の底では、幸せではないことを。

幸せでないことがわかっていたから、少しでも慰めたかった。笑ってほしかった。

将を愛していたから。

香奈は、少女のころからずっと将だけを見つめていた。

仲のいい従妹として、明るくふるまいながらも……心のどこかに穴があいたような将を心配していた。

見合いの話が来た時は、天にも昇る心地だった。

これで、将を……誰よりも近くで支えられる。

香奈は政略結婚を持ってきた祖父に心の中で感謝したものだ。

もちろん、今も愛している。

若い恋人たちのように愛の言葉を囁いたり、抱き合ったりはしなくても。

将には、心から幸せになってほしい。

生きた心で……。

今がもし、幸せなら。どこかが死んだ状態ではなくて、生きた状態

で感じてほしい。

将はあの彼女に会うべきだ。

答えははっきりとしている。

彼女に会って。断ち切られた終わりを確認すべきなのだ。

二人の間に横たわる、別々の時間を見つめれば……きっと止まっていた時間は流れ出す。

死んでいた部分に血が通い出すかもしれない。

だけど、香奈は悩む。

止まっていた時間が流れ出したなら。

将はもしかして、すべてを捨ててしまわないだろうか。

すべてを捨てて彼女の元に走ってしまわないだろうか……。

――ばかな。

香奈は冷静になろうと努める。

自分はともかく……将が二人の子供を捨てるはずがない。

次男が生後半年で亡くなったときも、誰よりも嘆き悲しんだのは将だった――。

それに。

香奈は女としての私情を押し殺して、考えを進める。

このまま、彼女に会わないままに、彼女が死ねば、将はきっと後悔するだろう。

将の幸せを願うということは。

それは、悔いのない人生を送ってほしいということではないのか。

一睡もできなかった香奈だが、早朝のうちに秘書の三島に電話をかけた。

416◆最終章・また春が来る　14

「ただいまー。う～寒かったぁ」

震えながらも元気に帰ってきたのは了である。今日は卒業式の稽古とやらで帰りが早かったのだ。

「今日は寒かったでしょう。うがいしてこっちで温まりなさい。すぐにお昼にしましょう」

了は香奈の姿を見ると「あー、お母さんだ！」と嬉しそうな顔になった。

あれからよく晴れた温かい日が続いた。

季節はそのまま春に向かうかと思われたが、3月に入った今日、季節は1ヶ月も逆戻りしたようだった。

真昼なのに重い雪雲が垂れこめた空は真っ暗で、今にも白いものを降らせそうだった。

鋭く尖った空気は、ここのところの温かさでゆるんだ体を再びこわばらせるかのようだった。

大学も休みに入り、授業のない香奈は、できるだけ家にいるようにしている。

論文書きやテストの採点など家でやれることは家でやるようにしている。

とはいえ、今日のように朝から一日中家にいるのは珍しいことなのだ。

ちなみに純代は今日はドイツ語会話教室に行っている。

今年こそはデュッセルドルフにいる実子の孝太を訪ねるのに不自由がないようにとドイツ語を習い始めたのだ。

久しぶりの母手作りの昼が嬉しいらしく、赤いほっぺたの子は、しきりに

「なんか手伝うよ」

と香奈のまわりをまとわりつく。

そんな子に適宜、お皿を運んで、などと指示を出しながら香奈は時計を見た。

温かい湯気の向こうの時計はまもなく1時をすぎるところだった。

――もうすぐあの人は、25年ぶりに……。

香奈は夫と、その忘れられない人の再会に思いを馳せる。

車を降りた将は、重い雲を見上げた。今にも白いものがちらつきそうである。

「こちらです」

秘書の三島が誘導する。

今日は、1週間後に迫った先進国首脳会議にあたってアドバイスがある、ということで香奈の父親で政治学者・岸田氏と会食することになっている。

「ずいぶん洒落たところでの会食だね。お義父さんとは思えない趣味だ」

そう軽口を叩きながら将は、真黒の雲の下にそびえる、レンガ造りの洒落た建物を懐かしく見上げた。

それは将には――ひときわ懐かしいレストランだった。

聡との初めてのデートで訪れた……そして18才の誕生日を祝ってもらったレストラン。

塩でバリバリになったみすぼらしい二人を、余裕をもって迎えてくれたあの思い出は、今も夢に時々みる。

もっとも聡との思い出の場所だったせいか、もう長いこと訪れていなかった……。

「鷹枝様。いらっしゃいませ。お連れ様はもうお着きでいらっしゃいますよ」

うやうやしく迎えてくれる給仕長（メートル・ド・テル）も……あのときとまったく変わっていない気がする。

「こちらへどうぞ」

足が沈むような毛足の長い絨毯を歩いて個室のウェイティングルームに案内された将は、そこにいた人を見て、凍りついたように立ち止った……。

「ねえ、陽。私、ドキドキしてきたわ」

「お母さんったら」

陽は瞳を細めて、聡を見つめた。

レストランのウェイティングルーム。

シックながら豪華なしつらえのソファーに聡と陽の親子が腰かけている。

春らしい色のワンピースを身につけた陽、上品な藤色の和服を身に付けた聡の二人は、若いギャルソンから見ると絵物語に出てくる親子のように美しかった。

陽のほうはテレビなどでおなじみの美しさだったが、その母親もかなり美しい。

大学の文学部出身のギャルソンは、『ろうたけたような美しさ』とはこの母親のような美しさを指すんだろうな、と想像する。

アペリティフを置いて、ギャルソンが出ていったのを見計らって聡が口を開く。

「だって……陽に大事な人がいるなんて、お母さん、一言も聞いていなかったから」

「隠してごめんなさい」

陽はアペリティフのグラスを手に取ると、いたずらっぽく口角をあげる。

『実は、お母さんに会わせたい人がいるの。とても大事な人なの』

と陽が打ち明けたのはつい最近だ。今日は、その『大事な人』を交えての昼食ということで、聡と陽は連れだってこの高級レストランにやってきたのだ。

聡にとっては、将との思い出の場所であるレストラン。

……この場所で、娘が大事に思っている恋人と会う。

聡はその偶然を、運命的なものかもしれない、と思う。

願わくば、娘のために……よい運命であることを願う。

「その人とはもう、長いの？　まさか……カンヌとった映画で共演したあの人？」

「違うわ。やーね」

心配そうに訊く聡に、陽は軽く微笑んだ。

カンヌ映画祭の主演女優賞を受賞したフランス映画で、陽は日本人の俳優を相手に大胆なラブシーンを演じていた。

仕事だ、芸術だ、と頭では理解していても、親としては人としての秘め事をあからさまに演じなくてはならない立場の娘が聡は心配だった。

愛しているわけでもない俳優と、あんなふうに肌も顕わに絡み合う娘が不憫で……せめてその人のことを陽が好きだったら、と聡は期待したのだった。

「……でも、私には、とても大事な人なの。だからお母さんにもぜひ会わせたくて」

陽はそういうと、まっすぐに聡を見つめた。

そんな風に真剣で熱っぽい瞳をすると……陽は将に本当に似ている。

こんなときですら、まだ将を思い出してしまう。

自分はよほど諦めの悪い人間らしい……聡は心の中で自嘲した。

もうとうの昔に、女としての幸せなど諦めたのに、５０を越えてなお、自分を女として愛した若い青年のことを、こうして娘の面影の中に見出してしまう……。

こんな自分の往生際の悪さも、もうすぐ終わり。

もうすぐ、すべての人生は幕を閉じるのだ――。

いつ終わるかわからない、でもそれほど残されていない人生でただ一つ心残りだったのは娘の陽のことだったが、彼女は彼女で、いつのまにか『大事な人』をつくっていたのだ……。

そのことに聡は、とまどいながらも、心の大半は安堵していた。

娘とその相手を、温かく見守りながら、穏やかに終わる人生――聡はそれも悪くない、むしろ幸せだと思う……。

だけど、こうして娘の面影に、かなわなかった恋の面影を見つけてしまうのも、まだ生きている自分の心のさまざまなありようを見せつけられるようで……聡はときにそれをもてあましてしまうのだ。

「いらっしゃいました」

ギャルソンがうやうやしく、待っていた相手の到着を告げて、聡は陽とともに立ち上がった。

陽の大事な相手の登場を一瞬たりとも見逃すまいと聡はまたたきさえ我慢した。

次の瞬間。

その姿が映ったとたん、聡の瞳は思考よりも先に勝手にうるんだ。

考えるより前に、感情が、まっさきにその懐かしい姿をトレースしていた。

それは２５年の時を経て……４４歳になった将の姿だった。

聡は、将は。

今、２５年ぶりに対峙して、立ちすくんだ。

417◆最終章・また春が来る　15

「美味しい！　お母さんのオムライスはやっぱり違うね！」

まだ9つのくせにいっぱしの口をきく了だったが、ほっぺたにケチャップがついている。

「ほら、ついてる」

笑ってそれを優しく拭き取ってやりながら。いつもと同じ明るい母を演じながら。

香奈の頭からは将のことが離れることはない。

25年もの間、忘れられなかった恋人と再会して……将はどうするのだろうか。

再会の瞬間に近づけば近づくほど、香奈の心は不安に曇っていく。

もしかして……将はこのまま家族を捨ててしまうかもしれない。

ありえない、と打ち消そうとすればするほど、逆に不安は強まっていく。

『いなくなったら死んでしまう』

つまり彼女の存在が自分のすべてであると言った18才の将。

その彼女が帰ってきて。

しかももうすぐ、再びこの世とあの世に永遠に別れてしまうと知って。

夫は……もしかして彼女のもとに走るのではないか。

目の前でにこにことオムライスを食べる了を見つめることで、香奈はその不安を打ち消そうと試みた。

香奈に似ているといわれる了だが、口元は将に似ていると香奈は思う。

長男の海などは、将そのものだと、義母の純代はよく言う。

自分によく似た二人の息子を、夫はこよなく愛してきたではないか。

25年前の恋人と、息子たちを天秤にかけることじたい、ありえない。

香奈はそう自分に言い聞かせるが、不安を消すにはまだ足りない。

不安材料を取り除こうとやっきになった香奈は、そうだ、と思い出す。

将は総理大臣だ――。まがりなりにも国政の頂点にたつ人間だ。

もしも家族を捨てて恋人の元に走ったりしたら……世間は大騒ぎだ。

騒ぐだけでなく、それをきっかけに将に追い落とされた勢力から糾弾され、将は国政の改革半ばで総理大臣を辞職することになるだろ

う。

曾祖父の遺言をも途中で投げ出すなど、ありえない。

やっと安堵材料を見つけて一息ついたものの……将が自分と家族を捨てない根拠に、仕事や世間体という要素を考えいれないともはや安心できない自分の立場の危うさに、香奈は思わず奥歯を噛みしめる。

「お母さん、どうしたの？　どっか痛いの？」

気がつくと了が心配そうにこちらを見ている。

わが子に心配をかけるなんていけない。香奈はあわてて笑顔でとりつくろう。

「ううん。なんでもない。ちょっと……塩の粒粒が残ってたの」

「じゃ、お水くんでくる！」

了は香奈のコップを取ると冷蔵庫へと走る。

人のことを気にかける優しい了。

だけど香奈は知っている。その優しさも本当は将が心の奥底に持つそれを引き継いだのだと――。

そう。将は優しい。夫としては申し分ない優しさだ。

だけどもしかして――将は自分を愛していないかもしれない。

愛しているのではなくて、優しいだけ――。

政治家として独身を通すわけにはいかないから……自分を選んだだけ。

……不安は、いつのまにか、ずっと見ないふりをしてきたそれにすりかわっている。

自分は、もしかすると、すべてを失う未来を引き寄せてしまったのか。

とてつもない不安――。

だけど。

それでもなお香奈は、将を聡に逢わせることを選んでしまった。

すべてを失うかもしれないけれど。

自分は夫を――将を愛している。その愛情は本物だと思いたい。

妻としての立場を守るためとか……独占欲のためとか、生活や名誉のためとか、そんな理由で将と一緒にいるのではない。

かつて。

教え子である将を愛してしまった女教師は、将のために身をひいたのだろう。

それは純代の態度からなんとなくわかっていた。

結ばれることより、将の幸せを願って、将の盤石な未来のために身をひいた。

いま、将を真に愛する自分も。

今、将が彼女に逢わなかったらきっと後悔するだろうから。

だから将のために。将が生き方に悔いを残さないように行動したい。

将の幸せに対して……将を愛する妻として、今は立場を考えずにまっすぐでありたい。

あのとき将を真に愛したであろう彼女に、行動で引けをとりたくない……。

香奈は不安に打ち勝とうと、心でもがいていた。

「三島くん。どういうことだ」

将は傍らにいる三島にそっと囁く。

三島は、恐縮したように目を伏せて

「奥さまからのたっての願いで、この席を設けました。すいません」

と小声ながら素早く回答した。

「香奈が」

つまり妻の香奈が、父である岸田教授の名前を使うよう三島に依頼したのだ――状況をすぐに理解しながらも、将にはわからなかった。

どうして妻の香奈が、こんなことを。

その疑問について頭は考えようとしながらも……将の視線は、聡のほうに向いてしまっていた。

将の瞳は、ひとたび聡の姿を見つけたが最後、吸いついて離れなかった。

忘れようとしても忘れられなかった懐かしいひとが、今、手の届くところにいる。

気がつけば将は脳裏で、記憶の中の聡と、いま目の前にいる和服姿の聡を知らず重ね合わせている。

聡は、やはり、痩せていた。

腫瘍ごと体のあちこちを切り取ったという陽の話を思い出す。

しかし、そんな痛ましい事実を映し出した姿にも関わらず、聡は依然美しかった。

陽に逢って以来、ひそかに将が想像した聡より……ずっと美しく年を重ねていた。

若い頃の、桃のようなみずみずしさのかわりに、真珠のようなしっとりとした落着きがそなわっていて……内側から照りがにじみ出ているような藤色の和服がよく似合う。

その色に将は見覚えがあった。

たしか卒業式――袴にあわせていた着物ではないだろうか。

萩にいる聡の母親がつくってくれたのだ、とはにかんだ若い日の聡と今の聡が……将の中で今重なる。

「総理……お忙しいところ、よくいらしてくださいました」

とまどう聡をよそに、陽が前に進み出た。

――ああ。

将の中に蘇る聡の懐かしい声が、今度は陽と重なる。

温かみのある低い声。

その声で呼ばれるだけで……こごえた体に血が通って温かくなるような、聡の声そのものだ。

眉と瞳の形、首のあたりに自分の面影を受け継ぎ。

そしてまた聡の優しい声音を受け継いで……立派に成長した娘。

２６年前に二人が愛し合った結晶。

将は、総理としての言葉をすっかり忘れてしまった。

ただ懐かしくて。言葉にならない……。

「驚いたよ」

将は、一言そういうと陽をまっすぐに見つめた。

しかし、すぐあとに、ゆっくりと付け加える。

「だけど……ありがとう」

418◆最終章・また春が来る　16

「お母さん。鷹枝総理よ」

陽にうながされて、聡が顔をあげた。

最初、とまどっていたような瞳が、何かを覚悟したように力が入るのがわかった。

覚悟に光る黒い瞳が、あらためて将に向けられる。

「ご挨拶が……遅れました。総理就任おめでとうございます」

聡は『恩師』として、ごく自然に頭を下げた。

深々とこうべを垂れたうなじのあたりが……若い頃よりいっそう細くなっている。

それに気をとられそうになりながらも、

「ありがとうございます。先生も、お元気そうで」

三島たちの手前『教え子』としての態度を、将はなんとか保つことができた。

演説する時よりも、緊張しているのが、自分でもわかる。

「お席のご用意ができています。さあ、どうぞ」

給仕長がにこやかに個室のダイニングへと案内する。

「陽……。あなたにとって大事な人って……」

そのすきに、聡もまた陽に小声で問いかけた。

「私にとっても大事な人でしょう?」

振り返った陽は、微笑みを母に向けた。

その微笑みは、優しげだけれど絶対的で……聡は娘に向かって何もいえなくなった。

ダイニングテーブルをはさんで、二人は無言だった。

陽は、二人が席に着くのを見届けると、仕事があるからと立ち去ってしまった。

ドアを隔てた待合室には、秘書の三島やＳＰも控えているが、このダイニングには将と聡だけである。

聡は病み上がり、将もまだこれから公務があるということで、グラスに注がれたのはペリエである。

それでも将は

「せっかくですから、乾杯しましょうか。先生」

と目をあげた。

「ええ」

それでようやく聡も、儀礼的ではあるけれど……小さく微笑んだ。

「先生のご快復に」

「鷹枝くんの総理就任に」

二人はグラスを掲げた。

ダイニングのテーブルは、一流レストランの最高の部屋だけあって大きく……18の誕生日のときのように、シャンパンフルートがかろやかな音を鳴らすこともない。

もしも――向かい合う二人が昔のような関係だとしてもテーブルの上で互いに手を取り合うこともできないだろう。

そんな物理的な距離よりも、二人を隔てているのはそれぞれの25年という歳月である。

それでも、万感の思いを抱えているのは二人とも同じだった。

長いこと隔てられていたひとが、今、目の前にいるのだから……。

「前菜の、フォアグラと柔らかく煮た蕪のミルフィーユでございます」

給仕長自ら、前菜を運んできた。

フォアグラには春らしく菜の花があしらってある。

「……あのときを思い出しますね」

二人を隔てる、薄い膜のような沈黙。それを破るべく、将は努めて明るい声を出してみる。

初秋の海でびしょぬれになるまで遊んだあと、二人がはじめて、ここにやってきたとき。

塩でバリバリに固まったみっともない二人にもかかわらず、デギュスタシオンでオーダーした。

その前菜の1つが、フォアグラと柔らかく煮た大根をあわせたものだった。

『あのとき』という単語に、将は祈るように思いを込める。

目の前にいるひとが、それを覚えていれば……と。

覚えていたからといって、どうなるというわけでもない。

それはわかっているけれど……将は、何かの願いを込めるように聡の答えを待った。

「ええ」

聡はカトラリーを手にしたまま、皿の上に伏せていた視線を、いったん将の顔にあげた。

その視線は将のそれにからめとられて、動けなくなる。

「……よく覚えているわ。あのときは、大根だった」

やっぱり、聡は覚えていた。

ワインを飲んだわけでもないのに、将は胸の奥が熱くなった。

同時に、せつなさがこみあげてくる。

２６年、いやあれは１７才のときだから２７年前にもなる。

長い年月を経ても……そんな些細なメニューですら覚えている。お互いに。

なのに、どうして――。

二人はここまで隔たってしまったのだろうか。

もう、戻れないことはわかっているのに。

ふいに将は、２５年前、自分を捨てた聡に取りすがりたい衝動にかられた。

お互いにかけがえのない存在だったのに。

どうして、捨てることができたのか。

思いは、どんどん記憶の深みへと降りていくのに、総理としての将は、如才なく話を取り繕っている。

――「兵藤くんの店に、陽さんと一緒に、いったそうですね。とても喜んでました」

――「井口に孫ができるのをご存知ですか？」

二人の『関係』に触らないように、さも懐かしげに交わす思い出話。

そんなものを交わしながら、将の中でもどかしさがつのる。

こんなことを話したいわけではない。

――自分の２５年を伝えたい。そして聡の２５年を知りたい。

少し逡巡したのち、やはり将は、思いきることにした。

このまま、表面だけの挨拶を交わし合って別れてしまうことは、できない。だから。

「陽さんから、お話をうかがったときはびっくりしました」

将はさりげなく、話題を核心に近づけてみた。

聡は、黒目がちの瞳に微笑みを浮かべたまま、『お話』が何を指すのか慎重に考えているようだ。

聡が答えられないのは無理はない。

そういった将も……漠然といろいろなことを指していたからだ。

食事の席で、聡の病気の話をするのはあまりに不調法というものだし、かといって陽が自分たちの娘だった、という話も……総理としての態度を崩すきっかけをつかめない将としては、唐突すぎる気がする。

「陽さんは……4月生まれなんですね」

25年前の――本題に近い時点の話を取り出す。将の真意を感じたのか、聡の瞳が再び見開かれた。

「先日、テレビの収録でお会いした際に、プロフィールを拝見したんです。……確か、予定日は5月でしたよね」

将だから知っている、本来の陽の誕生日。

聡はカトラリーを置いた。そっとため息をついたのが、胸元の動きでわかる。

「……1ヶ月、早産したんです」

低い声でゆっくりと話す声は、少し苦しげだった。

「その陽さんの、誕生日に」

聡の言葉の後に、将はすかさず続ける。

「僕は、ようやく目覚めたんです……意識不明の状態から。……目覚めるまで僕は、知らなかった」

聡の瞳はせつなげに見開かれている。

将はそれに訴えかけるように続ける。

「まさか、あなたが僕を捨てていたなんて」

419◆最終章・また春が来る　17

今は3月。

もうすぐ、あの日から26年になる。

二人の関係が、途切れてしまったあの日――。

聡が成田から飛び立った、ちょうどその頃。

最先端の医療技術、そして最優秀を誇る医師団の努力によって将の心臓は再び動き始めていた。

しかし、心肺停止状態が30分以上も続いていたせいか、手術が無事に成功したというのに、将は目覚めなかった。

奇跡的に、脳の大半も救われたにも関わらず、将はそれから1ヶ月もの間、眠り続けた。

付き添っていた純代は……将が目覚めるよう何度も呼びかけた。

呼びかけながらも。

目が覚めたら、何と言えばいいのだろう。

聡の不在を……どう説明すればいいのだろうか、悩んでいた。

将の目覚めを心から望みながらも、心のどこかではそれを恐れていた。

一方聡は。

将が刺されて重体に陥ったことを、ボストンに到着してまもなく知った。

無事に到着したことを、萩の両親に知らせようと、日本が朝になるのを見計らって電話したところ、母親からその事実を告げられたのである。

「聡。あんたの教え子さんが刺されて、今こっちじゃ大騒ぎだよ」

「えっ」

聡は一瞬、母親の言葉の意味をよく捉えられなかった。

「……あの、去年うちに来た、官房長官の坊ちゃん」

母親はすぐにそう付け加えたから、聡は今度こそ崖から突き落とされたような錯覚に陥った。

立ちくらみがして電話を握ったまましゃがみこむ。

それを見た博史が駆け寄ってくる。

「刺されたって……。ケガはどうなの？」

震えそうになる声を……かろうじて保つ。

近くで心配そうに様子をうかがう博史のためと、電話の向こうの母親によけいな心配をかけないために。

だけど、体中がふわふわとしている。

現実なのかどうかわからなくなった体の中心で、心臓だけがばくん、ばくんと揺れている。

「今朝のニュースじゃ一命をとりとめたって言ってるけど……、そうとう危なかったみたいだよ」

母親は聡が宿しているのは将の子であるとは、まさか知らないから、事実をそのまま述べる。

だが、こちらの体調を気遣って隠されるよりはいい……。

「でも。助かったのね。とりあえず無事なのね……」

聡はしゃがみこんだまま、あえぐように繰り返す。

「でもね、まだ意識が戻らないみたいだよ」

無理矢理安堵しようとした聡は再び、奈落に突き落とされる。

意識が戻ったという情報が入ったらすぐに連絡するという母親の声を聡はごく遠くで聞いた気がする。

それは地球の裏側から聞こえてくる頼りなさとして、聡の耳に残る。

「あきら」

博史が心配そうに聡を抱え起こした。

「顔が真っ青だ。どうしたの」

優しい博史の顔に聡は思い出す。

この顔こそが、これからずっと一緒に生きていく伴侶の顔なのだ。

聡は、すべてが沈んだような意識の中で、自分に再確認する。

――なんでもない。

そう取り繕おうとしたけれど、口が動かない。

せめて、泣いたらいけない。

そう思っているのに、涙が目じりからこぼれてしまう。

「……鷹枝くんのことだろ」

優しい瞳のまま、まるで博史は聡の心を読んだようだった。

「今、パソコンを接続したらネットに書いてあった」

本当は日本を発つ前に知っていた博史、ネットは続報の確認のため

だったのだが、それは言わない。

「……見せて」

聡は真っ青な顔のまま、自発的にパソコンへと手を伸ばした。

康三の計らいで、到着第一夜はボストンのホテルの、最高級の部屋に泊まっている。

ソファを備えたスイートだ。

ソファのテーブルの上に博史のパソコンは置いてあった。

真っ青な顔ながら……聡の気迫に負けて、博史はテーブルの上に置いたパソコンをあけると再接続した。

聡はソファに座ると、食い入るようにネット上のニュース記事を読んだ。

そして知る。

自分が将と別れた直後に、彼に何が起こったのか。

読み終わって……それまで詰めていた息を大きくついた。

「心配だろう。日本に……帰りたい？」

博史はぽつりと聞いた。

聡はハッとして博史を振り返った。博史は優しい瞳のままだった。

だけど……それは、どこかゆがんでいるようだった。

一瞬『帰りたい。今すぐ引き返す。将のところに帰る』と言ってみたい衝動にかられる。

だけど。

そう答えるわけにはいかないことぐらい……わかっている。わかりすぎている。

聡は、吸い込んだ息をお腹に落とし込むと、首を静かに横に振った。

「帰れないもの。帰らないって、もう、決めたんだもの……」

だけど、涙だけは止められない。

ティッシュでぬぐっても、あとから、あとからあふれてくる。

どうして。

一番大事な人の命の危機に……そばについてやることができないのだろう。

自分の幸せを投げうってまで、幸せになってほしいとまで思ったのに……。

思えば将は。ずっと、自分が離れるのを恐れていた。

泣いて、ダダをこねながら、自分を捨てないでくれと訴えていた。

まさか、将がこのままいなくなるなんてことは。

自分が将の前から消えることを考えても、将がこの世から消えるなんて――。

聡は身震いした。

もしかして自分は、もっとも残酷なことを、将にしてしまったのだろうか。

神はその罰として、まさか、聡にとって一番大切な将を天に召してしまうんだろうか。

このまま……この世とあの世に永遠に別れてしまうのだろうか。

――嫌だ。

この世で逢えないにしても。

将には生きてほしい。生きて……人生を、やるべき使命を……まっとうしてほしい。

そのために聡は身を引いたのだから。

聡は心の中でひれ伏すと祈った。

――将。お願い。目を覚まして。

――神様。いるんだったら、将をどうかお救いください。どうか目を覚まさせてください。

もしも、将の目が覚めるのだったら、どんなことでもする。

自分の命を投げ出してもいい……。

翌日。

将を思って一睡もできなかった聡の体に異変が起きた。

再び出血を見たのだ。

４２０◆最終章・また春が来る　１８

ホテルから新居に入ることなく病院に直行した聡は、絶対安静の診断が下され、そのまま入院することになった。

病院のベッドで思うのは将のことのみ。聡は将の回復をひたすらに祈った。

とはいえ、自分は将を捨てた身である。そして博史という夫さえいる。

博史の前では、あからさまに将を心配するわけにはいかない。

将の容体を聞くべく、日本に連絡をとることも、ひんぱんにはできない。

聡は来る日も来る日も……腹部の鈍痛と、心がねじれるような苦しみとともに、将を案じていた。

そんな聡の容体も、当然のことながら安定しなかった。

そのまま１ヶ月がすぎた。

将の意識に関する朗報は入らないそんなある日。

聡の下腹部を激しい圧迫痛が襲った。

予定より1ヶ月も早い陣痛だった。

医師が駆け付けた時にはすでに破水していた。

36週めだったのでそのまま分娩することになり、聡は分娩処置室に入った。

繰り返し襲う産みの痛みと苦しみ。その中で聡は将だけにすがっていた。

目を閉じれば、そこにいる将。

将は目を見開いたまま、泣いていた。

――将、将。ひなたが……生まれるよ。

あんなに将が待ち望んだ、女の子。

その陽がこの世に生れ出てくるのに、将が眠ったままなんて……絶対あってはならない。

『もう1回、いきんで！』

『もう少しよ、頑張って！』

英語で繰り返される励ましなど、耳に入らない。

ただ、固まったような息を、吐き出す。

次にねばりつくような空気を、吸い込もうと……聡は力んだ。

だけど苦しくて。

『……将』

苦しい息の下、聡は将を呼んだ。

あの吹雪の中でもそうだった。

将の名前を呼べば。聡はほんの少しでも救われる。

いや、将は聡をきっと助けてくれる。

聡は、自分がいま一度、まっ白な中に囚われたのを感じた。

将。将。どうして。あなた、眠っているの。

――お願い。将。目を覚まして。

最後の激しい痛みが聡を襲い、聡は将の名前を叫んだ――。

「ちょうど、その、４月１２日の朝でした。僕が、意識を取り戻したのは……」

ボストンの病院の分娩室で、陽が元気な泣き声を立てた、ちょうどその頃。

将は、ふいに意識を取り戻したのだ。

刺されてから１ヶ月がすぎていた。

付き添っていた純代は、もう一度眠らせるまいと、将の名前を必死に呼んだ。

ぼんやりと虚空を見つめていた将の瞳が……次第に光を取り戻して、最初に呼んだのは、やはり聡の名前だった。

そして、まもなく、そばにいる純代を認めて問いかける。

『アキラ……。アキラは……どこ?』

「あのときは、とにかく寒かった。義母（はは）がどうして自分を見て泣いているのかも理解できず、僕は……あなたの姿を探した」

淡々と当時を語りながら、将の肌にはあのときの寒い朝が蘇っていた。

明るいのに冷たい、妙に静かな朝。

聡は、食事の手を止めて、聞きいっている。

その黒目がちの瞳は……そのときの将をまのあたりにしているかのように悲痛に歪んでいる。

1ヶ月意識を失ったままだった将には、重い運動障害が残った。

最初は体を自力で起こすことさえできなかった。

筋肉はけずりとられ細くなり、そのまま神経ごと固まってしまったかのようだった。

それが脳の障害によるものなのか、筋肉の機能低下によるものなのか、わからなかった。

医師は

『元通りになる可能性は残されている』

と答えた。それは最良の可能性を述べたにすぎなかった。

30分近く血流が滞ったことにより、将の脳はやはりダメージを受

けていたからだった。

『……あせらず、リハビリをしていきましょう。若いからきっとよくなるわ』

純代はそういって将を励ました。

自分の体の行く末より、将にはもっと気になることがあった。

目覚めて3日たつのに。

聡の姿が一度も見えないこと。

学校を辞めるといっていた聡。

身重だとはいえ、一度も見舞いに来ないことに不審を抱いた将は、とうとう純代に問うた。

『……アキラは？　どうしてアキラは一度も見舞いに来ないんだ？』

純代は将を見詰めたまま固まった。

飲んだ固唾が、喉をくだるのを見て将はさらに問いただす。

『俺が……東大に合格できなかったから……。さっそく聡をどっかに遠ざけたのか、オヤジのやつ』

『そんなこと……』

純代はとっさに――いや、将が意識を取り戻す前から、少しずつ準

備していた嘘をついた。

『聡さんは、入院しているの』

『え？』

『あなたのことが、体にこたえたんでしょうね。絶対安静で病院に入院しているわ……だけど、安心して。母子ともに無事だから』

思えば。1ヶ月ずれていたとはいえ。

ボストンでの聡の容体は、あのときの純代の嘘のそのままだった。

将はつらかった思い出の中でのそれと、現実の奇妙な合致を、不思議に懐かしく思った。

聡が入院していることを告げた純代は、

『だから、聡さんの出産に間に合うように、あなたが早く治って』

と将を励ました。

その効果はてきめんで……一日も早く回復したいと、将をリハビリに励ませることになった。

４２１◆最終章・また春が来る　１９

３６週で生まれた陽だが、低体重である以外はなんの異常もなく、健康そのものだった。

産んで間もなく聡は初乳を与えることになった。

――将！

わが子に初めて対面した聡は、そこに確かに将の面影を見た。

――まだ生まれたてなのに。どうかしている。

真っ赤でしわくちゃの新生児……だけど、見れば見るほど似ている気がした。

――将。あなたにそっくりな赤ちゃんが生まれたのに……。

その父親である将はいまだ、意識が戻らない……。

『感動してるのね』

思わず涙ぐむ聡に、アメリカ人の助産師が微笑みかける。

ちょうどそのとき、突然の出産で、立ち会えなかった博史が許可をもらって入室してきた。

一瞬おびえたように顔をあげる聡など見なかったように、博史は赤ちゃんを見るなり相好を崩した。

『ちっちゃいなあ……。かわいいなあ……』

そうやって赤ちゃんを見て目を細める顔に偽りはなく……博史は心から感動しているようにみえた。

『聡に似てるよ。美人になるぞ』

その言葉に、聡は少しほっとする。

まだ生まれたて。誰に似ているなんて、見る人の見方次第なのだ、と聡は思いこもうとしつつ、自分の乳房に吸い付くわが子はやはり将に似ていると思う。

安心しきったときの将の顔を思い出して……聡の目じりから涙がこぼれた。

まもなく初乳を与え終わって、小さな生まれたての赤ちゃんは博史の手にゆだねられた。

この病院では、これから父親の手によって新生児室に連れて行かれ、父親自ら体重測定などを行うことになっている。

本能的に聡は少しおびえたが……杞憂にすぎなかった。

博史はさもいとおしそうに、聡の産んだ赤ん坊をそっと抱えた。

『名前、何にするか決めてる?』

博史は赤ちゃんから目を離さずに、聡に聞いた。

かわいくて仕方がないというように、『わが子』に唇をすぼめている。

そんな無防備な博史を聡は初めて見たと思った。

そこまで喜ぶ様子を見ていると、本当に博史がその子の父親であると錯覚しそうになるほどだった。

『……陽（ひなた）、にしようと思って』

『原田　陽か……。いいね』

博史は、よしよしと赤ちゃんを揺らしながら、今日はよく晴れていて、ここに来る途中の桜並木が少しほころんでいたことを告げた。

『こんな素晴らしい春の日に生まれた子にふさわしいね』

嬉しそうにこちらを振り返った博史に対して……聡は少し後ろめたい気がした。

そして、子供に『ひなた』という名前を付けた将のことを再び案じた。

「鷹枝くんの意識が戻ったことを聞いたのは、その翌日だったわ……。毛利さんがこっそり連絡をくれたと……博史さんから聞きまし

た」

そこまで言って聡はひといき付いた。

博史から将の無事を聞いたとき、聡はみたび、涙をこぼした。

――よかった……。

これで完全にふっきることができる。

将をおきざりにして離れる自分の迷いを断ち切ることができる。

これからは、無事に生まれた陽を大切に慈しみながら、生きていけばいい。

将のことは遠くから見守ることができれば、それでいい……。

「鷹枝くんの無事を聞いて……私は、ようやくふっきることができたのです」

穏やかな聡の口調。

本来ならその余韻が在るべき間に、将は割って入った。

「あなたはふっきったのかもしれないが」

聡はあいかわらず哀しげな瞳で将を見つめていた。

まるで、その言葉が返ってくるのがわかっていたかのように。

思わず将はひるみそうになるが、あまり抑揚をつけずに続ける。

「置き去りにされた僕は、どうしていいかわからなかった……」

一方、将は驚異的な気力でリハビリをこなしていた。

聡が心配で。聡に会いたい一心で。

「思えば、変でした。……だって携帯もメールもつながらないんですから。だけど、僕は何か事情があるんだろう、まずは体を治さなければとやっきになっていた」

2か月たらずで、将は車いすに自力で乗り降りできるほどに回復した。

手すりにつかまれば、数歩ならどうにか歩けるようになった頃になると、将は再び不審を感じ始めていた。

聡の出産予定日は5月の中頃だった。

純代は『初産だから遅れている』と説明したが、今はもう、6月なかばになる。

遅れているにしても……あまりにも遅すぎることぐらい、将にもわかる。

何度目かの鋭い追及に、純代はとうとう観念した。

『将。……これを』

さすがに自らの口で説明できないと思ったのか、純代が差し出したのは手紙だった。

聡の筆跡に、ひとたび将の眉毛がゆるむ。

しかし……その直後。手紙を持つ手がぶるぶると震え始める。

『……将』

純代は何と声をかけたらよいのかわからず、おどおどと将を盗み見る。

『……嘘だ』

やがて将は低い声でつぶやいた。

『隠したんだろう……？』

『ちが……』

違う、断じて違う、と涙目を見開いた純代を押しのけるように、将は怒鳴った。

『オヤジのさしがねだろう！』

『違う、違うわ。将！……私だって何も知らなかった』

『アキラをどこに隠した！』

そう叫ぶと、将はベッドから飛び降りた。

しかし、飛び降りた足はまだ回復していない。

着地する力が足りなくて、将は大きな音をたてて床に転倒し、純代が悲鳴をあげた。

倒れた将の上に、ひらひらと聡の書いた手紙が舞い降りる。

――私は、鷹枝くんとは結婚できません。それは、よく考えた結論です。

――あなたの若さも、家柄も、あなたにかかる大きな期待も……一緒に受け止めていく自信がありません。

これが……聡の筆跡であることは、将が一番よく知っている。

『アキラ……！』

将は倒れたまま、這うようにしてドアに進もうとした。

『鷹枝さん、どうしましたか！』

物音に気がついて看護師が駆け寄ってくる。

将は抱き起そうとする看護師をも押しのけて進もうとした。

『放せ！　アキラは、アキラに会わせろ！……』

押さえつけられて鎮静剤を打たれながらも、将は聡の名前を呼んだ。

422◆最終章・また春が来る　20

『おはようございます。鷹枝さん……？』

病室に将がいないのを最初に発見したのは朝いちばんの検温に訪れた看護師だった。

病院は大騒ぎになった。

夜勤担当によれば、夜中3時の巡回時にはちゃんと眠っていたという。

将はそれが終わった直後に抜け出したらしい。

まもなく病院裏口に車いすが乗り捨ててあるのが発見された。

『あんな体でどうやって……』

リハビリ担当医も目を丸くした。

今の将は、車いすこそ自分で動かせるものの、つかまるものがなければ立つことすらおぼつかないのだ。

病院の知らせにあわてて駆け付けた純代だったが、将の行き先にはだいたい見当をつけていた。

純代の見立てどおり、将が目指したのは聡が住んでいたコーポだった。

絶対に嘘だ。

聡が自分を捨てるはずがない。

聡の住んでいた家にいけば、きっとその証拠が見つかるはず。

看護師の巡回が3時すぎにあることを知っていた将は、それが終わった後の暗闇に目をあけた。

夜が来ても、将は一睡もしていなかった。眠れるはずなどない。

――聡が、自分を捨てるなど、絶対にありえない。

あの手紙に抗うように……暗闇の中でも頭の中で繰り返していた。

鎮静剤を打たれてもそれは変わらなかった。

沈んだ意識の中でも、いますぐに聡を、聡の手がかりを探さなくてはと、それだけを考えていた。

やがて看護師が完全に行ってしまったのを慎重に聞き取ると、慎重に、できるだけ音をたてないように身をおこす。

さりげなくそばに置いておいたリハビリ用の松葉杖によりかかりながら立つ。

感覚がもどらない、ゆえに力が思うように入れられない足に檄を飛ばしながら2歩。そこに車いすがあった。

車いすに無事乗ってしまえば、病院内の移動はどうということはない。

裏口まで来た将は、そこからこっそり呼んでおいたタクシーに乗る。

まず目指したのは自分のマンションである。そこに聡の部屋の鍵があったからだ。

到着してからが骨だった。

使うのもおぼつかない松葉杖に全体重をかけるようにして車を降りたはいいものの、すぐに転んでしまった。

足に力が入らないため、わずかな地面の凹凸でもバランスを崩してしまうのだ。

『お客さん、大丈夫？』

上半身はすぐに起き上ったものの、なかなか立ち上がれない将を見かねて、タクシーの運転手が降りてきて将に手を差し伸べる。

『ありがとうございます』

小さく浮かべたその笑顔を見て、中年の運転手はどこかでみた顔だと思った。

たぶん芸能人……そういえば、と思い出す。

運転手には中学生の娘がいたが、彼女が騒いでいた背の高いイケメン俳優に似ていたのだ。

しかし、若い俳優の名前など覚えているはずもなく、ただ目の前にあるその顔が素晴らしく整っていると思っただけだった。

そして、きっとこんな夜明け前に病院を抜け出すように外出するなんて、きっとワケありなんだろうとも思う。

松葉杖だけを頼りに歩き出そうとした将だが、またよろける。

運転手は

『お客さん。どこ行きたいの』

と将に肩を貸した。

『管理人室へ……』

入院中の将だから自分の部屋の鍵など持っているはずもなかった。ゆえに顔見知りの管理人に頼んで、鍵をあけてもらうもくろみだった。

管理人は将を見ると、そのパジャマとサンダル姿にけげんな顔をしたがすぐに鍵をあけてくれた。

結局運転手は将の部屋まで、将に肩を貸してくれた。

『あの……このあと、もう1か所行きたいところがあるんですが』

聡の鍵を手にした将は、親切な運転手に頼んだ。

将は手すりを頼りにコーポの階段をのぼった。

運転手は心配そうな顔をしていたが、『ここでいいです』とチップ込みで少し多めに料金を払い無理やり帰してしまった。

『アキラ……』

下半身に力が入らないから、手すりにつかまる両腕に渾身の力を込めて、一段一段階段をのぼる。

一段ごとに懸垂をしているようなものだ。

将の額から汗が流れ落ちる。

足に引っ掛かっていたサンダルが脱げて転がり落ちたがかまわない。

もう6月、梅雨入り宣言したばかりの明け方は晴れていても、もう肌寒くはない。

松葉杖は役に立たないから階段の下に置いてきてしまった。

永遠に続くと思われた階段だったが、ようやく目的の階に着き、将は荒い息の中からほっと溜息をつく。

しかし、ほっとしたのもつかの間、そこで手すりも終わりだった。

手すりから、廊下のコンクリ製のフェンスによりかかろうとして…

…うまくいかずよろける。

大きな音をたてて、腰から倒れこんだ将だったが、顔をあげると前だけを睨んだ。

そのまま将は廊下を這いはじめた。

パジャマが汚れるのもかまわなかった。

階段を上ってすでに疲れた腕に、さらに最後の力を込めて将は動かない下半身をひきずって這った。

力が入らないながらも裸足の足で少しでもコンクリを後ろに蹴りだそうとする……感覚がないままにやみくもにそれを繰り返したために親指がすりむけていたが、それも痛みは感じない。

『アキラ。もうすぐだ……』

あと1m。

将のパジャマはすでに汗でびっしょりだった。

コンクリの廊下を擦った下半身は薄黒く汚れていた。

『くっ……』

ようやく将は聡の部屋のドアの前までやってきた。

荒い息を整えることもなく、のびあがるようにして鍵穴に鍵を突っ込む。

鍵がまだ使えることに将は希望をこめる。

ぐい、と渾身の力をこめてノブを引っ張り……開いた隙間に上半身を倒れこますようにして自分の体をねじこんだ将が見たのは……。

がらんとした部屋だった。

『アキラ！』

思わず呼び掛けながら将は、そのまま這い進む。

部屋には何もなかった。

青いカーテンも。

二人で抱き合って眠ったベッドも。

聡が好きなものだけを飾っていた飾り棚も。

二人頬を寄せるようにして英語をおそわったローテーブルも。

何も残っていなかった。

ただ、フローリングの床に、そろそろ明るくなってきた白い空が鈍く反射しているだけだった。

『アキラ……うそだろ』

――若いあなたとの時間は、私にとって思いがけないものでした。とても楽しかった。

――だけど、生活は、人生は――そうはいかないと思う。

『そんなことないだろ……』

将は脳裏に蘇る手紙に、答えていた。

『そんなこと、やってみないとわからないだろ……』

そのまま涙があふれてくる。

――……私は、私にあった安定した人生のために博史さんとやりなおすことにしました。

『どうして……どうしてだよ……』

汗と一緒に、将の目から涙がこぼれた。

それは、そのまま幾粒も落ちて、フローリングの床を濡らした。

そのとき夜があけて……家々の間から陽が昇り始めた。

朝の光に包まれながら、将は自身が、孤独という闇に再びとらえられたのを感じていた。

陽射しは、青いカーテンのない窓から、慟哭する将の背中を直接射抜いた。

423◆最終章・また春が来る　21

「幸い……それから半年ほどで僕の体はほぼ元通りになおることができました。でも心のほうが、立ち直るのにはさらに長い時間を必要としました。……いや」

将は一度口にした言葉を、一拍の間隔の後にいったん止める。

食事はあらかた終わり、たった今二人の前に置かれたのは、香り高いダージリンティだった。

そのティーカップから香り高い湯気が立ち上るのを見届けたあと将は続けた。

「厳密には立ち直った、というより虚しい状態に慣れたといったほうが正しいでしょうか……」

将は乾燥した視線をティーカップに落した。

そこには……あのとき探して歩いた夕陽に似た色が揺れていた。

翌年4月。

将は入学手続きをしたまま休学扱いになっていたK大に2年次から復学した。

しかし、聡を失った将の心はまだ癒えることなく、抜けがらも同然

だった。

1年での単位を全くとっていない将だったが、大学側の配慮で来年までに48単位とれば、留年はまぬがれるということになっていた。

それなのに、将は大学をしばしばさぼった。

学校をさぼった将は、さまよっていた。

二人で歩いたあの街。

二人で座ったあのカフェのソファ。

聡の思い出を、面影を。

探して将はさまよった。

もしかしたら、偶然会えるかもしれない。

……ありえないとわかっているのに。

わかっていても将は思い出を訪ねずにはおれなかった。

あの海辺へも何度も訪れた。

あのときと同じローバーミニを運転して、あの海岸への道をたどる。

振り返れば、助手席であの人が笑っている。

そんな幻を期待したのに。
幻すら今の将に会いに来ることはない。
やがて車は二人がびしょぬれになりながら笑ったあの海岸にたどりついた。
春の海はサーファーでにぎわっていた。
あのとき、初秋の海岸にはあんずのような色の夕陽が輝いていた。
今、将の前にあるのは霞んだ薄水色の空と、水平線の上にやや力強く浮かぶ夏雲のはしりである。

柔らかな風が吹けば
春が訪れて
海に浮かぶ雲は
夏を呼んでる

吹き抜ける
青い空の向こうにはもう
あの真っ白い冬が
待っている

ほんのなにげない
晴れた午後は

二人のことを
思い出すことあるかな

二人の時は
止まったままだね
また　春が来る

今も　信じられないけど
あの日　確かに
二人
終わってしまったのかな

偶然でいいから
どこかで
会えればいいのに
きっと時計が　動き出す

知らないうちに
いつかここも
変わってしまった

もう一度　二人
ほんとうに
会わないで　いいかな
ずっと
このままで　いいのかな

季節はただ巡り

また　春が来る

ねえ
またあの海へ
またあの街へ
行ってみないか

クリスマスの夜
二人腕からませて
またずっと
どこまでも歩かないか

もう一度　二人
会わないで　いいかな
こうして
このまま　終わるのかな

（引用：小田和正「また、春が来る」）

将は高校時代に暮らしたマンションを訪れた。

ここももう、売り払われていた。

聡が立ったキッチンも。

二人で初めて抱き合って眠った、コンポのパイロットランプが星空のようだった寝室にも。

もう立ち入ることはできない。

将はマンションを下から見上げると、あてどもなく夕方の町をぶらついた。

あの頃——塾講師のバイトがない日なら、聡が弁当屋にいた時間。

しかし……ごちゃごちゃした商店街はいつのまにか区画整理されていた。

聡が働いていた弁当屋のあたりは、大きな洒落たショッピングモールが建っていた。

かつての古びた面影などみじんもない。

『いらっしゃいませ。……山田さんは、中華か揚げ弁かオムライスだもんね』

『うすらの卵、サービスで3つも入れといたよ。好きでしょ』

地味な、白い上っ張りの上にあった、輝くような笑顔。

レジを打つ間見とれた優しげな長い睫も、桃色がかった細い指も、低いのに温かみのあるその声も。

もはや将に差し出されることもない。

時は流れ人は変わっていく。

わかっているのに。

将はその流れに身を任せることができず、ただぼんやりと立ち尽くしていた。

423◆最終章・また春が来る　21（後書き）

文中で引用した
小田さんの「また、春が来る」。
作者が大好きな曲ですが、アルバム「個人主義」に収録されています。

424◆最終章・また春が来る　22

窓から薄日が差した。

しかし、雪雲の間から射すそれは冷たく尖ってさえいるようだった。柔らかな紅茶の湯気を鋭い縞に変えてふいと消える。やはり予報どおり雪は断続的に降り続くのだろう。

「……一度は、ボストンにも行ったんです」

聡がゆっくりと顔をあげたのとは対照的に、将はカップに向かって小さく微笑むとそれを口に運んだ。

いつまでも抜け殻のような将を心配した純代は、岸田助教授の娘・香奈の家庭教師をするように命じた。

将には義理の従妹にあたる香奈は、すでに有名中学に入学していた。勉強は一段落したところだったが、将のリハビリのために、と純代と岸田助教授が考えたのだった。

受験のときにお世話になったでしょう、と純代が言い聞かせたせいか、将は重い足取りながら香奈の元へ週一回通った。

しかしそれ以外のときは、大学にもろくに通わず、聡と過ごした場

所をさまよい続けていた。

リハビリをしている間に、将は入院前のことを思い出していた。

たしか、兵藤が言っていたはずだ。

聡は、ボストンに行くと……。

だけど、聡の筆跡で手紙に書いてあったことが真実なら……聡は博史と結婚してそこへ行ったということになる。

時は流れ、大学2年の夏休みになっていた。

将は大磯の邸宅に引きこもり、ひたすら入道雲の彼方・アメリカにいる聡を思った。

そうこうしているうちに、高台から眺める水平線は夏の盛りを過ぎていく。

この太平洋の向こうにいる聡は、もう自分を愛してくれた聡ではないのだろうか……。

そんな将に、一喝したのは香奈だった。

「お兄ちゃん！　……いったいどうしちゃったの！」

いきなり大きな声を出した香奈に、ぼんやりしていた将は目の前で風船を割られたように面食らった。

香奈はずっと、生きる屍のような将に、とうとう業を煮やしたのだ。

「お兄ちゃんらしくないよ。……彼女に捨てられたの？」

香奈は大人びた口を利くと、シャーペンをくるりとまわしながら肘をついた。

はっ、と乾いた笑いが将の口をついて思わず出る。

「そうなんだー」

笑いがあまりにも乾ききっていたせいか、相槌を打つ香奈の瞳も、いかにも気の毒といった風情になっている。

１３やそこらの少女にさえ、同情されるほどのみじめさ。

そうだ、自分は捨てられたのだ。

将には聡がすべてだった。

なのに……その聡に捨てられて。

もう１年半経とうとしているのに、ここにいるのは、現実を受け入れられずにいるみじめな自分だった。

「あのさ」

香奈は頬杖をついて将を斜めに見つめた。

そんな風なしぐさをすると、去年まで小学生だったとは、とうてい思えない。

「そんなにボロボロになっちゃうなら、直接会って、捨てないで……って、もう一度頼んでみればいいじゃない」

それは思いもかけない選択肢だった。

この1年以上。あの手紙以来、聡からの便りなどあるはずもなく。

自分と聡との間の子供が、無事に生まれた連絡もなく。

……聡にもう一度会う。ボストンまで聡に会いに行く。

そんなことは思いもよらなかった。

「そうだよ、会いに行けばいいじゃない。そんなに好きならわかってくれるかもしれないよ」

無理だ、とわかっていたのに。

将はその選択肢を選ばないわけにはいかなかった。

聡がボストンのどこにいるのかもわからない。

探し出したところで会ってくれるかどうかもわからない。

だけど。

香奈の言葉は天から降りてくる一筋の光明のように……わずかだったけれど、将に希望をもたらした。

将はその、一縷の望みにかけるようにして旅立った。

もう一度、聡に会いたい。

会えば、もしかしたら自分のところに戻ってくれるかもしれない……。

だが。

知らない街を、探しに探し歩いて。

かの地で将が目にしたものは、初冬の陽だまりの中でいかにも幸せそうな博史と陽の姿だった――。

博史と陽の姿に、聡の幸せを理解した将は……聡に会うことなく帰国した。

今度こそ、引き裂かれるように胸は痛んだ。

断腸の思い――子猿を失った親猿の、腸がちぎれるほどの悲しみ。その諺どおりの痛みに将は耐えた。

聡のために。

聡が将の未来のために身をひいたように。

聡がやっと手に入れた幸せを壊すことはできない……。

聡と自分の道は、すでに分たれてしまったのだ。

その後、巌の遺言を守るべく奮闘したのはすべて聡を失った痛みを忘れ――そして、聡が自分に望んだ未来を実現させるだめだった。

こころに少しでも隙間ができれば欲してしまう。そんな自分の心から逃げるべく将は働いた。

そして、いま。歴代で一番若くして総理に登りつめた――。

「……結局、僕は、あなたの幸せを壊せなかったのです」

将は『幸せ』という言葉をやや強調してみる。

盤石であったはずの、聡が手に入れた幸せ……。

それを知ってか知らずか、聡は静かに沈黙していた。

その黒目がちの瞳は――睫でその半分が隠れている。ゆえにそこに何が映っているのか将にはわからない。

それを確かめたくて、だけど将は躊躇する。

本当の聡の思い。

その後の聡が、どんな運命をたどり、何を思いながら暮らしたのか。

だけど問いは舌にからまってしまったようだ。

からまった問いを、ほぐすように、将は冷めかけた紅い茶で舌を潤す。

そのとき、再び窓から薄日が射してきた。

さっきより、やや強い日差しは、テーブルの上の小さな紅いバラの色をくっきりと際立たせた。

本当は――。

わかっていること。きっと浮かび上がること。

それは。本当は……二人がやり直せたかもしれなかった事実。

いまさら言っても仕方がないことだ。

だけど。

将は目の前にいる、聡へと瞳をあげた。

藤色の着物に包まれた聡は、レースごしの陽射しの中で、白磁のように白かった。

その血色の薄い肌はただ儚くて。

聡に残された余命の短さを将は確かに感じた。

――もう、これが聡と会う最後かもしれない。

だから。

何十年も前にすれ違ってしまった思いだけど、重ね合えた可能性を。

いま、確かめることができるなら。

将は、あえて投げかけてみる。

「……だけど、あなたは。あなたの幸せは……もうずいぶんまえに壊れていたんですね」

だが、将の言葉に聡は静かに首をふった。

425◆最終章・また春が来る　23

聡のボストンでの結婚生活はしばらくは穏やかだった。

未熟児で生まれた陽も健やかに育ち、夫の博史は優しかった。

産気づいた連絡を受けてやってきた萩の母親は、お産に間に合わなかったが、連休まで滞在して入院中、そして退院後の聡親子の世話をなにかとやいてくれた。

その母親も

「博史さんは本当に優しいねえ。おまえは本当にいい人と結婚したね」

としきりに感心していた。

母親は――言葉にしないだけで、陽が博史の子でないことを知っているはずだった。

母親のいうとおり、本当の父親でもないのに陽が生まれて以来、聡の負担が少ないように、オムツ替えから入浴までやってくれている博史に聡は済まなく思った。

そしてどういうつもりだろう、といぶかった。

だけど、疑う必要はまるでなかった。

一心に世話をし、あやす様子をみれば、博史は単に――生まれたば

かりの赤ちゃんがただ可愛いくて仕方がないだけなのだ、ということは誰でもわかった。

事実博史は「子供がこんなに可愛いとは思わなかった。可愛くて仕方ない」とよく目を細めた。

そして……やがて口にするのだ。

「陽の兄弟をつくってあげたい」

と。

傍目から見れば……いや、自分でも幸せなのだと思う。

幸せだと自分に言い聞かせるようにしていた。

日本に置いてきた激しい愛情と、不安定な未来。

それに比べれば、これほど穏やかで安定した家庭はないだろう。

まもなく大学の博士課程に正式に入り、研究の日々となった博史は優しく。

すくすく育つ陽はいとおしい。

しかし2年以上経っても……聡は陽の中に、自分を愛した彼の面影

を探してしまうのだ。

陽は優しげな顔立ちながら、将にやはり似ていた。

将が安心しきったときの顔。おそらく聡にしか見せなかった顔……。

ときおり、張り裂けそうな心をもてあまして聡は陽をかき抱いた。

「おかあさん、どうしたの？」

そういいながらも、抱きついてくる陽は温かかった。

「陽の兄弟をつくってあげたい」

その言葉通り、博史は聡をごく自然に抱いた。

陽が生まれて半年ほど経った頃だったはずだ。

かつてはこれ以上はないほどの幸せを感じた腕の中で、聡は何かを必死で耐えている自分を感じていた。

やがて博史は……はっきりと自分たちの子供を望むようになった。

博史の行為は毎回優しく、十分に聡のことを考えたものだった。だけど。

……それでも、聡には重荷だった。

行為自体も。そして、それに期待される結果も。

陽を自分の子供のように可愛がってくれる博史には、この上なく感謝しているのに。

この先の人生を一緒に歩いていくパートナーとしては、十分信頼しているのに。

信頼してる？

その言葉に違和感があって聡は我に返る。

自分は……果たして、この人を信頼できるほど知っているのだろうか。

しかし我に返ったところで、聡は……結局、この男を信頼して生きていかなくてはならないのだ。

聡が思うのは、

――早く終わってほしい。

ただそれだけだった。

いや、それよりも。

てっとりばやく博史の子供を身ごもってしまえば、この儀式は繰り返されない……。

それに、子育ては忙しい。

毎日の子育てに追われれば。

博史への思いについて立ち止まることなく、季節は流れて……いつしか年老いて。

いつのまにか二人は「落ち着いた夫婦」にきっとなっているはずなのだ。

聡自身も……博史の子供を心からのぞんでいた。

だが、子供はなかなかできなかった。

426◆最終章・また春が来る　24

「そういえば、父が何度かお伺いしたと、陽さんに聞きましたが」

「ええ。……たしか、ボストンに住んで3年目だったかしら。急に訪ねてこられたのでびっくりしました」

将の問いに、答える聡の声。

それはもともと低めだったから、ほとんどあのころと変わっていない気がする。

そして、それは目を閉じれば――二人が離れていた25年など、なかったような錯覚に将を迷いこませる。

康三が聡の元を突然訪れたのは、陽が生まれて3年目の春だった。

「ボストンの桜も、大変美しいと聞きまして立ち寄りました」

ここに来た理由をそのように説明した康三は、ひどく痩せたと聡は思った。

康三は――将が刺された年の9月に、見事与党の総裁選で圧勝し、それまでで最も若い総理大臣となった。

だが、その若さがわざわいしてか、与党の古株と、与党にがっちりと絡みついた官僚らに足を阻まれて思うような政治ができないまま、病を得てしまい、わずか1年で政権を放棄した。

幸い病気は治ったものの、政権を放棄したことを恥じて国政から一時退いていた――ボストンを訪れたのはちょうどそんなときだったのだ。

「おかあさん、えほんは？」

絵本を中断してお客にお茶を出し始めた聡に焦れて、リビングに顔を出した陽は、ソファに座っている知らないおじさんを見つけると、本能的に聡にすがりついた。

「陽ちゃんですか？　こんにちわ」

康三はすぐにそれが陽だとわかったのか、優しげな声とともに頭を下げて見せた。

その瞳はとろけそうになっていた。

血のつながりなどない、無関係な人から見ても、陽は愛らしかった。

近所のお母さん仲間からは

「ヒナタは可愛いから、くれぐれも変質者には気を付けてね」

と忠告を受けるほどだった。

しかも、3歳になった陽は、将を知る人が見れば誰が見ても……その面影を受け継いでいることは明白だった。

博史だけは頑なに「陽は、お母さんに似てるんだもんね～」と陽に言い聞かせるようだったが。

陽はすがりついた聡のぬくもりを確かめた上で、

「……こんにちわ」

と康三に挨拶を返した。

そして聡へと目をあげる。誰、と問うている陽の小さな瞳に、聡は何と答えていいか迷った。

それを察した康三がようやく

「お母さんの知り合いで、たかえだ、といいます。今日はね、陽ちゃんにお誕生プレゼントを持って来たんだよ」

と助け船を出してくれた。

「陽ちゃん、大きくなりましたね」

康三は目を細めた。

その陽は、康三がくれたクマのぬいぐるみをすっかり気に入ったようだ。

それを抱いて隣のリズおばあちゃんのところへ遊びに行った。

話し上手なリズおばあちゃんは老後の生きがいと趣味の足しにと、近所の小さな子供たちを預かってくれていて、みんなに感謝されている。

「おかげさまで……」

聡は常套句で答えながらも、ある意味、その言葉通りであることをわかっている。

博史が社会人留学している今、聡の家庭は、康三のひそかな援助で成り立っているのだ。

しかもそれはかなり裕福な暮らしができる金額だった。

とはいえ、聡と博史が暮らすこの家は……家こそ立派だが、調度や家具などはこざっぱりとしていた。

聡が身に付けているものも、特に贅沢でもない。

「この9月からは、幼稚園にあがるんです」

聡は、何を話すか考えあぐねて、陽の話題を続けた。

「幼稚園って、アメリカの？」

「はい」

「……そうですか」

そんなふうに遠い目をすると、康三は3年という年月以上に老けこんだように見える。

康三が遠い目になった理由を……聡は知っている。

おそらく、幼い頃の将と重ねあわせているのだろう。

将はたしか1歳からパリにわたり、実母の考えで地元の幼稚園に通っていたはずだ。

その実母の考えが聡にはなんとなく理解できる。

外国語ができるようになる、とかそういう目先の理由ではない。

せっかく日本以外の地にいるのだから、せまい日本人社会を往復させるよりは、多少言葉が不自由でも広い世界になじんだほうがいい——おそらくそんな考えだったのだろう。

「……で、聡さんは、日本人学校の先生を?」

「いえ、何もしてません」

「え?」

けげんな顔をした康三に、聡はあわてて言い添える。

「2年前に紹介状はいただきました。ですが……辞退させていただきました」

「なんてことだ！」

康三は顔に手をあてると、ソファの脇息に寄りかかった。

「あ、いえ……どうしても仕事に困ってる日本の方にお譲りしたんです。うちはお金には……おかげさまで困っていませんから」

それはたまたま、博史と同じ大学で研究する日本人仲間の妻だった。援助を受けている博史と違って、自費の留学だった彼は生活も大変だったのだ。

それに博史の子供を作らなくてはならない聡だから、どうせ仕事に就いてもすぐに放り出さなくてはならないかもしれない、とも思っていた。

でもそれは誤算で、この2年、聡に博史の子供ができる兆候はまったくなかった……。

「いいですか。私は、あなたの家計を援助するために紹介状を書いたわけじゃありません」

康三は聡に向きなおった。

「海外で教育を受ける日本人だからこそ……あなたのユニークな教育方法が必要だと思ったんです、私は」

私は、教育者としてのあなたを買っているんだ、と康三は力強く言った。

「そんな……」

聡は絶句した。

教え子である自分の息子と関係して、子供まで産んだ教師にそんなことを……。

しかし、康三はそんな出来事も、たった今目を細めていた初孫の陽のことも、すっかり忘れたように繰り返した。

「私が任期中に為し得た、数少ない政策が教育なんです。その中で私は小学校4年生から職業研究という新教科を作りました。

世の中にどんな仕事があって、それはどうすればなれるのか。どんな生活を送るのか。どんな喜びがあってどんな苦しみがあるのか。

いくら儲かって何歳くらいまで現役でいられるのか……そういうことを高校3年までかけてじっくり勉強するようにしたのです」

それは、かつて聡が荒江高校で試行錯誤したことと同じだった。

「結果の平等でなく、機会の平等などと私どもの与党でも声高に言われますが、先生がおっしゃっていた

『今の子供は……よほど恵まれていない限り、どんな機会があるかということすら知らない』

という言葉が私の心に残っていました」

それは、あの卒業式の日、レストランで……『本題』に入る前に話したことだった。

いわれて聡も思い出した。その考えは、誰より自分が感じていたから。

聡自身が、大学を卒業するまで……漫然と勉強していたから。

恋におぼれていたから、というのもあったが、何をして食っていくのか、ということをまるで考えないまま、聡は大人になったのだ……。

「しかし、実際に社会で働いたことのない教師ばかりの中で、その新教科はまだまだ試行錯誤の段階です……」

康三はいま一度、聡の顔を見た。

「先生、日本を遠く離れたこの町ではありますが、子供たちにそれぞれの『機会』を見つける手伝いをしていただけませんか」

427◆最終章・また春が来る　25

康三の勧めがきっかけとなって、聡は地元にある日本人の子息向けの日本語補習校で働き始めることになった。

陽が3歳になった年の秋である。

博史が聡に自分の子供を望んでいる状況は変わらなかったが、何せこの3年間、努力して子供はできなかった。

少し生活を変えたほうが、いい影響になるかもしれない……そう思ったのか、博史は承知してくれた。

その博史はその年までで博士号を取得することに成功したが、大学に残留し、研究を続けることになっている。

おそらく――自分と聡との間に子供ができて、二人の間の絆がより確かになるまで、日本への帰国を遅らせたい――そんな思いがあったのだろう、と聡にはわかっていた。

ともあれ、その9月は、聡にとって生活ががらりと変わった月だった。

聡は講師として就職し、陽は幼稚園へ。

ひさびさのお勤めでただでさえ忙しい聡だったが、そこへ陽の送り迎えが加わる。

博史も休みなら手伝ってくれるが、彼も何かと忙しい。

隣のリズおばあちゃんには、謝礼を出して手伝ってもらっているものの……高齢ではあるし、そうそう隣人の善意ばかりに頼るわけにもいかない。

「若いベビーシッターさんを頼んでみれば？」

親切なリズの提案に従うしかなかった。

そして同僚に頼んでやってきたのが……。

「ロマーヌが……？　彼女、ボストンに留学してたんですか？」

もう何年会ってないだろうか。そんなことを思いながらも、将は懐かしい名前を繰り返す。

「ええ。大学3年だったかしら。建築を勉強しにフランスから来たばかりでね。それでうちにベビーシッターとしてやってきたの」

「陽さんが、ロマーヌさんのベビーシッターをしていた、とお伺いしましたが」

敬語を使う自分が……、使わざるを得ない自分の立場が、将はもどかしい。

「ええ。十年以上あとにね」

聡は懐かしそうに頬を緩めた。

「ロマーヌさんが陽の面倒を見てくださった恩返しに、今度は陽がロマーヌさんの2番目のお子さんの面倒を見ることになったんです」

そうやって表情を和らげると、聡の目じりには細かい優しげな皺が寄る。

だけど、それはちっとも彼女の魅力を妨げるものではなく……かえって、その皺が刻まれてきた時間を一緒に過ごしたかったと、将は帰らない時間をむやみに取り戻したい衝動に駆られる。

「ロマーヌさん、とってもチャーミングな方でね。総理のこともよく覚えていました」

聡がロマーヌのことをここでわざわざ口にするということは、当然、将の話題が二人の間で交わされたということだろう。

どうやって、その話題に至ったのか。

将の興味はそこから——次第に聡がどんな気持ちで、自分のことを話したのか、というところに移ろっていく。

そのころには案外、聡は自分のことはすっかりふっ切れていて……単なる思い出話になってしまっていたのか。

いや。

即座に、将は思い出す。

『母は、泣いていました』

という陽の声を。

なぜ。

聡は博史と別れてフランスへ渡ることになったのか。

そして、聡の中の自分の行方は。

「フランスでの暮らしが長かったと聞きましたが……、どうして原田さんと別れたのですか？」

葛藤の末……将は思い切って、問いを声にした。

……聡の柔らかい表情は、変わらなかった。

428◆最終章・また春が来る　26

特に将には話すことはなかったが、ロマーヌとの出会いを、聡はよく覚えている。

彼女は、その南国の海のような明るい水色の瞳で聡の顔をまっすぐに見つめて、今紹介したばかりの聡の名前を繰り返した。

初対面の人間にしては、やや長めに聡の顔を――まるで何かを確認するように見つめた後、にこやかにこう訊いてきたのだ。

「アキラ……どこかでお会いしました？」

聡の方は、もちろん初めてだったし、フランス人の知り合いなどいない。

「いいえ。私はフランスに行ったことはないんですよ」

と答えるしかない。

「そうですよね。なんでそう思ったのかしら」

ロマーヌは軽く自問自答し、次の瞬間には陽に優しく微笑みかけた。

陽といえば、少し恥ずかしそうに聡の後ろにその身を隠しながら、初対面のきれいなお姉さんの様子をうかがっていたのだ。

「ロマーヌです。ロマでいいわ。よろしくね」

「ろま……」

陽はあいかわらず聡の後ろから首をかしげるようにしてロマーヌを盗み見るようだ。

「あらあら、すいませんね。……幼稚園に通うようになってなぜか人見知りするようになってしまいまして。陽（ひなた）といいます。英語もちゃんと話せるんですよ」

聡がフォローする。

ロマーヌは陽の視線の高さにあわせてしゃがみこむと、やさしく陽の名前を呼んだ。

どうやらやさしいお姉さんらしい、と陽はようやくロマーヌの前におずおずと進み出た。

その顔をみたロマーヌは「Ａｈ！」と小さく声をたてると、聡を見上げた。

「ショウ」

まったく無防備だったところへ、ふいに聞く懐かしい響き。

聡の体は一瞬、思わず震えた。

こんな、青い瞳を持つ異国の娘からその名前が出るなんて、予想もしていなかったから。

どうして。

ひそかにおびえる聡に対して、ロマーヌは笑顔さえ浮かべながら立ちあがる。

「そうだわ。ショウ。思い出したわ……アキラさん、私、あなたを知っているわ」

聡より小柄なロマーヌなのに、威圧感を感じて聡はあとじさる。

どうして。

使い慣れている英語なのに、貼りついたように出てこない。

いや、日本語だとしても出てこなかっただろう。

偶然に興奮したのか、ロマーヌは頬を紅潮させて嬉しげに説明する。

「前にショウにあなたの写真を見せてもらったの。私、ショウとは幼稚園が一緒で仲良しだったの」

聡も知っている——将がパリの幼稚園に行っていたことは。

だけどどうして自分の写真を？

疑問のそばから、記憶がはじける。

そうだ。

将が高3の5月だった。

仕事でパリへ旅立つ将へ、聡は一方的に別れを通告した。

パリへ発った将は『一日も早く大人になる』と誓い、聡はいつまでも待っていると応えた。

そしてユーラシア大陸を超えて、かわらない愛を確認した……。

昨日の出来事のように鮮やかに思い出すことができる。

鮮烈な思い出は、感情ごと解けて聡の心を浸し……涙を連れてくる。

あのときの将への思いと。そして……。

「Ａｈ……本当にびっくりしたわ。ヒナタがいるってことは二人は結婚したのね。ショウはここにいるの？　会いたいわ。ヒナタは本当にショウの小さいころにそっくりね」

聡が熱くなる瞳をこらえているとも知らず、ロマーヌは矢継ぎ早にしゃべっている。

フランス人にしてはきれいな英語だから、するすると耳に入ってくる。

それは聡に想像をさせた。

もしも仮に。

お互いにあのときの誓い通り、そのときが来るのをじっと待つことができたら。

いまごろ二人は……。

「……アキラさん？」

聡の様子にようやくロマーヌが気付く。

いつのまにか聡は陽に視線を向けたまま、ぼんやりしていたらしい。

陽はそんな聡を心配そうに見上げている。

そんな顔も、将に似ている……。

「おかあさん……」

陽の声にようやく、聡はハッとする。

ロマーヌは青い瞳を見開いて聡の言葉を待っていた。

やはり心配そうな表情だ。

「ごめんなさい、ロマーヌさん」

聡は笑顔をつくった。

なんて説明すればいいのか迷って……はっきりと言ってしまうのが一番だと結論付ける。

いずれにしても、もう過去のことだから。

「……私、将とはずいぶん前に別れたの。夫は将ではない、別の人

よ」

ロマーヌの視線が陽と聡と行き来する。

無理もない。

将を――特に小さな頃の将を知っている人なら、１０人中１０人が、陽は将の子だと思うだろう。

大磯で見たアルバムの中の小さな将と、陽がよく似ていることは聡自身がいちばんよく知っている。

だけど……ロマーヌはやがてうなづくと

「早とちりしてごめんなさいね。アキラさん」

とまず謝った。そして

「そうよね。もう４年も前になるものね。私だってあの頃つきあっていた恋人とは別れてしまったんだったわ」

とおどけたように両手を広げて首をかしげてみせると、再びしゃがみこんで陽に微笑みかける。

「ヒナタちゃん。仲良くしてね」

……ロマーヌはすべてを悟ったうえで、フォローしてくれていることが、聡にはわかった。

優しいひとなのだ。

ロマーヌはボストンに留学している間の2年にわたって陽の面倒をみてくれた。

自己主張が強いとされるフランス人のロマーヌだが、聡とはとても気があった。

やがて、聡は日本語を、ロマーヌはフランス語をお互いに教え出すことになった。

幼い頃の将を知っているひと。

今から思えば、間接的にでも将とつながっていたかったのかもしれない、と聡は思い返す。

ロマーヌもそんな聡を知ってか知らずか――完全に将のことは思い出になっている風を聡が示したからか、ときおり将の昔話をした。

異国の女から聞く将の子供時代。

ロマーヌの話は、そこにいる陽と重なり、大磯のアルバムの中の将を躍動させる。

動き出した小さな将は……いつしか17才に成長していた。

その姿は、しばしば聡の夢の中にも現れた。

緊張感とともに教壇に立つ聡。

将はその真下の席から、頬づえをついてじっと聡を見つめている。

その射抜くような視線から、聡は逃げるように板書をし……そのくせ振り返るとまっさきに将の姿を確認してしまう。

もちろんそれは目の端でこっそりと行ったことだけれど。

将は聡の目の端と視線が合うと、さも嬉しそうににやついたものだ。

あるいは夕陽の海辺。聡を後ろから抱き締める将。

『卒業するまで待って』

聡が将に乞うと、将は夕陽を反射させたせつなげな瞳で聡を見つめるのだ。

そんなとき、聡は……現実の方こそ夢なのだと安堵しながら、将の柔らかな唇を受ける。

――別れは……すべて夢だったんだ。

――私たちは、これからどうにでも生きられる……。

――卒業するまで待てば、二人は、いつか幸せになれる。

夢の中でいつも、聡は未来を信じていた。

何度夢見ても、夢の中では『今度こそ』と信じてしまう。

だが、朝が来て。

くるりと引き戻される現実。

あきらかに日本とは違う、かわいた空気が聡を包んでいる。

そんなとき聡は博史に見られないように枕に涙を押し付けた……。

そして。

ロマーヌがフランスに戻る直前の5月。

聡に朗報が訪れる。

……やっと博史の子を身ごもったのだ。

ボストンにやってきてから5年の歳月が経っていた。

429◆最終章・また春が来る　27

5年の間、子供ができなかった博史と聡の間には、いまや否が応でも倦怠が漂っていた。

博史は自分に原因があるのかとひそかに検査にも行っていた。

しかし、悪いところは見つからなかった。

世間的には、二人の間にはたしかに陽がいるのだから、二人の身体に欠陥があるなどとは思われていない。

しかし、このところ聡は、博史のいらだちをことあるごとに感じていた。

幸い……陽にはそれを出さないでくれるのがせめてもの救いだったが、それは同時に博史に対する申し訳なさにつながる。

家庭がどこか張り詰めていた分、聡には仕事と、それからロマーヌとのおしゃべりが救いになっていた。

そんな矢先だったから、新たな妊娠に聡は心の底からほっとした。

もちろん博史の喜びはひとしおだった。

聡の健康を第一に考えた博史は、まだ出産には間があるにも関わらず、学年末の6月で学校を辞めるよう言い渡した。

博史自身も、大学の研究を6月で終了することにし、はりきって就

職を探しだした。

「だって、子供ができるんだろ。稼がないと」

そういって

「陽は弟と妹とどっちがいい？」

と陽に頬ずりする博史は明らかに高揚していた。

聡はひさしぶりに明るくなった家庭に喜びつつも、将との絆がいちだんと薄れゆくのを感じていた。

その将は。

大学を卒業するとほぼ同時に、司法試験に受かり、世間の注目を浴びていた。

しかし、弁護士や判事になるわけでもなく、仕事を選びながら芸能活動を続けるらしい――すべてネットで得た情報だ。

元総理の子息で芸能人である将の情報は、地球の裏側に近い場所にいても、こうやって知ることができる。

聡はしばしばこっそり将の消息を調べては、そのネット履歴を念入りに削除していた。

博史に知られないためでもあるけれど。

――もう、これが最後。

履歴を削除しながらいつも、聡はそう思う。

だけど、時間をおくと決意が薄れ……、再びその近況が気になってしまう。

ちゃんと、自分の道を歩いているのか。幸せなのか。

聡の中にはあいかわらず――将が住んでいた。

その将が……もしかしたら聡の妊娠を阻んでいるのではないか。

妊娠できないで悩んでいた頃、聡の心の中にはいつも後ろめたさがあった。

それでも。

聡は博史に対して申し訳ないと思いつつ、将の行方を知りたい欲求に抗えずにいたのだ――。

博史は7月より日系の企業に就職し、東海岸のボストンから西部のサンノゼへ移ることになった。

「しばらく一人で大丈夫。お腹の子が心配だから、引っ越しは安定期に入ってからにしろよ」

と聡の体を気遣った博史は、まず単身赴任する形をとった。

8月になって、博史の仕事もお腹の胎児も安定してから引っ越す心づもりだった。

やがて7月になり、陽の面倒をみてくれたロマーヌは2年間の留学を終え、フランスに帰って行った。

聡も学校を辞めたのであまり支障はなかったが、将とのつながりが、またひとつ離れていくことに聡はさみしさを覚えた。

妊娠してから、将の夢を見ていない。

せめて夢の中だけでも逢いたいのに。

夫の留守の今、仮に寝言で将の名前を呼んだとしても誰も聡を責めはしない……。

そんなことを思いついては、聡は自分を恥じる。

いつまで。いい加減に。

聡自身を諌める理性は確かにある。だけどだめなのだ。

聡は、夫のいない家で、パソコンを開いてしまう。

画面の中に、２４歳になった将が映しだされる。

何かの賞を受賞したのだろうか、スーツを着た将の微笑みは、以前聡に向けられたものとまるで違っていた。

……将は大人になった。

記事を読むと、傍らに立っている共演女優と噂になっているらしい。

垢ぬけて、聡明そうなひと。

そうだ。

将にとっては、もう自分のことなど、とうに過去になっているだろう。

それこそ聡が望んだ本望なのだから。

なのに。

聡は、陽にも内緒で涙をこぼしてしまうのだ……。

美しい共演女優に嫉妬しているわけではない。

将との距離が、少しずつ離れていくことに……納得はしているはずなのに、心は何年たっても聡に涙を流させるのだ。

サンノゼへの引っ越しを控えたある夜、聡はひさしぶりに将の夢を見た。

ああ、将の夢だ。

聡には、これが現実ではないと、すぐにわかった。

夢だとわかっていて、夢にずぶずぶと浸っていく。

こんな感覚は久しぶりだ。

ネットの、画面の中の将ではない。

17才の将。

聡がその体温までよく覚えている将。

彼は、聡をいとおしげに抱きしめた。

二人は抱き合ったまま、いつのまにか吹雪の中にいた。

あの、ニセコ山頂。

抱き合ったままの二人を、吹雪が縛り上げる。

今は夏のはず。どうして吹雪が。

夢の中で聡はふと疑問に思う。

そのとたん、胸が苦しくなる。

『将?』

いつのまにか将は消えていた。

聡を締め付けているのは、得体のしれない何かだった。

まっ白な吹雪の中、聡はまったく温かくない何かに締めあげられている。

体中が縛り上げられたように痺れていく……。

聡は目をあけようともがいた。

これは夢だ。目をあければ終わる。

だが。

目をあけても、あけてもそこはまっ白な吹雪。

覚めない悪夢が次々と幕を開けるように展開する。

聡はそこから逃げるよう、必死で瞼をこじ開け続ける。

何度繰り返しただろうか。

「おかあさん」

陽の声。

悪夢から聡を救いあげる、いとおしい娘の声。

やっと目を覚ました聡は、体中に汗をかいていた。

「おかあさん」

起き上った陽が心配そうに聡をのぞきこんでいる。

博史が留守の間、聡は陽と一緒に眠っていたのだ。

「大丈夫？」

「……大丈夫よ」

娘の額をなでてやろうとした聡だったが、まだ手がこきざみに震えているのに気付く。

汗をかいているのに……体がやたらに寒い。

もう朝だ。

起きなくては。

暖かい夏の朝のはずなのに、寒気がとまらない。

体を起こそうとした聡は、お腹に重い違和感をおぼえた。

ベッドの上に上半身を起したとたん、腹部の重みははっきりとした痛みに変わった。

と。

……何かが流れる感覚。

――あ。だめ！

聡は、急いでタクシーを呼び、病院に駆け込んだ。

だが……遅かった。

子供は流れてしまった。

４３０◆最終章・また春が来る　２８

「待ちに待った子供が流れて、博史さんは……夫はよほど落胆したのでしょう。私たち夫婦はそこからギクシャクしはじめて……とうとうダメになってしまいました」

聡が話す内容は、かつて陽が将に話したことと、ほぼ同じだった。

しかし、その淡々とした口調ゆえ……聡が多くを意図的に省略しているのは、却ってよくわかるようだった。

きっと、博史は聡につらくあたったのだ。

将には目に見えるようにわかる。

だけど、それを聡の口からほじくり返させるのは、やめようと思う。

つらいことをいちいち繰り返し思い出させることもない。

聡の人生は、残り短いのだから。

だけど、聡の中では、つらかったあの頃が、セピアに変わりつつ繰り返させれている。

子供が流れて博史は変わった。

サンノゼにいったまま、家に帰らなくなった。

たまに家に帰ってきても独りで……聡も陽も寄せ付けずに過ごすことが増えた。

書斎にこもった博史は酒をあおる。

心配する聡に怒鳴りつけることさえあった。

あるいは。

「お前は、俺の何なんだ」

完全に坐った目でつぶやくように問いかける。

しかし問いかける形をとりながらも、聡よりも前に言葉を投げる。

「俺の女房なら。なんで俺の子は産めないんだ」

「あなた……」

「教え子の子は産めて、なんで俺の子は……産めないんだ」

博史の声は、ボストンに降る秋の雨より冷たくて。

聡の体を冷たく縛り上げるようだった。

だけど、聡はわかっている。

博史がそんな風になったのは、自分のせいだと。

どうしても将を忘れられない自分。

博史はそんな聡をわかっているのだろう。

子供が流れたのは、きっかけにしかすぎない――自分たちは最初からダメだったのだ。

そんなことが聡の中にふとよぎっていく。

そんなことはない。

聡は自分に言い聞かせる。

この5年間、自分たちは温かい家庭を築いてきたじゃないか。

――そんなものは心の通よっていない砂上の楼閣にすぎなかったのだ。

蜃気楼のような、まやかしの幸せは、崩れるときがやってきたのだ。

聡だって心の奥底ではわかっていた。

それでも。

冷たくなった夫の心をどうにか解かさなくては、和らげなくては…

…そんな努力を聡は放棄するわけにはいかなかった。

そのまま、聡は耐えた。

以来、仕事でずっとサンノゼにいったまま月に一度帰ってくるかどうかの博史を待ち続けた。

聡は予定通り、一家でサンノゼに引っ越すことを提案したが、博史は

「しばらく独りで頭を冷やしたい」

といって受け入れなかったのだ。

そして。

子供が流れて1年以上経った秋。

聡は博史に宣告されたのだ。

「別れよう。俺たちはもうダメだ」

「別れた後、すぐに博史さんはアメリカの方と再婚しました」

聡はやや明るい口調で――取り繕うように、付け加える。

「アメリカの方と?」

将の問いかけに聡はうなずきながら、

「昔、お付き合いされていた方と仕事で偶然お会いして、またよりが戻ったそうです」

と語った。

そういえば、聡と博史はサンフランシスコで出会ったことを将も知っている。

そうだ。

出会ったころ、聡が頬を染めて嬉しそうに教えてくれたのだった。

あのとき将は、聡にそんな顔をさせる博史に、確かに嫉妬した。

すべては懐かしい思い出だ。

そう、博史には聡と出会う前に付き合っていたアメリカ人の彼女がいた。

しかし、彼女の父親の兄は、太平洋戦争で日本軍の捕虜となり惨殺されていた。

父親はＪＡＰとの交際など絶対に許さないと彼女に詰め寄り、二人の仲は停滞していた。

……聡と博史が出会ったのは、そんなときだった。

博史が彼女を忘れるのに、聡はうってつけの存在だったのだ。

そして、１０年以上の時が経って二人が再会したとき、最大の障害となっていた彼女の父は亡くなっていた……。

そんな顛末を話す博史は、「だから別れてほしい」と乞いつつ、「許してほしい」と静かに結んだ。

聡は許してほしいのは自分のほうだ、と胸が熱くなる。

「私は、ロマーヌさんの誘いでフランスにわたりました。ちょっと旅行をするつもりだったのが、ずっと居ついてしまいました」

聡は穏やかに微笑んだ。

「……日本に戻るつもりはなかったんですか？」

あえて将は訊いてみる。

その時点で、聡が日本に戻っていれば――二人は。

考えたところで、時間が逆戻りなどするはずもないのだけれど。

「そのときは……まだ、早いと思いました」

きっぱりと聡は答えた。

あのとき、日本に帰れば、きっと。

それは聡が一番よくわかっていた。

二人は――いや将はふっ切れたのかもしれないが、近くにいれば少なくとも聡の方は……募る思いが耐えがたいほどになる。

あの頃の聡は、自分でわかっていた。

だから、日本へ帰ることは選ばなかった――。

聡と博史の……静かな別れ。

それに際して、最も涙をこぼしたのは、ちいさな陽だった。

陽は

「どうして？」

と黒目がちの瞳で聡を見上げた。

そのあどけない顔を納得させることなど、できるはずがない。

「陽がわるい子だから？」

思いがけない質問。一生懸命に、問いかけてくる。

陽は陽で……この1年間の二人に心を痛めていたに違いない。

聡は首を横に振る。

「ケンカしたの？……じゃあ仲直りして」

聡はそれにも首を横にふるしかない。

「どうして？　陽……おとうさんとはなれたくないよ」

ついに陽の瞳に涙が盛り上がる。

「お願い。おとうさんと仲直りして。仲直りしてよう……」

聡を見上げる陽のつぶらな瞳から、涙がぼろぼろと流れる。

その顔が真っ赤になっている。

この娘は泣くと、その白い肌が真っ赤になるのだ。

将も、そうだった。

いつだったか、泣きじゃくる将を思い出す。

浅黒く焼けていたからわかりにくかったけれど、鼻も唇も瞼も真っ赤にして子供のように泣く将。

「陽……」

聡は思わず跪くと、陽を抱きしめた。

陽も声をあげて泣きながら聡に抱きついてきた。

無理もない。

博史は、陽にはいい父親だったのだ。

最後の別れのときも、博史は心配そうに言ったのだ。

「陽のこと。聡ひとりで大丈夫？」

博史は博史で、必死で砂上の楼閣に心を通わせようと努力していたのだ――。

いつか、本当に心が通う夫婦に……家族になれると信じて。

それを打ち砕いたのは。他ならぬ聡では――将を心から追い出せな

かった聡ではないのか。

「陽ちゃん」

聡の頬にも涙が伝っている。

ボストンの家には早くも初冬の夕暮れの気配が漂っていた。

もうクリスマスまで1ヶ月を切っている。

思えば、離婚のごたごたで、飾りつけもしていない。

斜めに差し込むオレンジ色の弱弱しい日差しは、逆に2人しかいない家の冷やかさを浮き立たせる。

そんな中、聡は陽の肩に手を置いて、幼い顔を見据えた。

いとしい面ざしをより強く受け継いだ顔が……涙にぬれて橙色の陽射しに輝いている。

一方、陽は。

逆光の中で、母の輪郭を伝う涙が、宝石のように煌いていたのを、今も覚えている。

母は――聡は言ったのだ。

「あなたのお父さんはね。……本当は違う人なのよ」

陽は驚いて瞬を繰り返した。

だけど、すぐにまっすぐに問い返す。

「それは誰？　ひなたの知ってる人？」

聡はまたたき……瞳から、再び涙が落ちる。

小さく首を横に振る。

「ひなたちゃんは会ったことないわ。それにもう二度と会えない人なの……」

陽は、二度と会えない人が本当の父親である事実が……幼い理解力ではわからなくて。

また初めて目にする、こんな風に涙を流しながら告白する母、そしてその美しさに押し黙る。

「……でもね。その人は、お母さんにとって、今も一番大事な人なの」

昔も、今だって。

誰よりも愛しているのは一人だけ。将。

将の幸せと自分の幸せが相反するなら、将の幸せをとる。

その決意は変わらない。

だけど、その決意ゆえに、実の父親に会うことすらかなわない娘が不憫で……聡は涙した。

でも、この娘が――将が残したこの娘がいるからこそ、聡は生きられる、生きる喜びがまだ残っているのも事実だ。

それだけは、娘に伝えておかなくてはならない。

博史と別れ、母子だけで暮らしていくにあたって。

いつかこの娘にも、自分の存在を問うときがやってくるだろう。

その日までに。

陽は……二人のかけがえのない愛の結晶だと。

将も聡も、陽が生まれ出でるのを待ち望んでいたのだと、教えておかなくてはならない。

「ひなたちゃん。ひなたちゃんの名前は、本当のお父さんが付けたのよ」

いつのまにか、陽の涙は止まっていた。

泣きだしそうな顔のまま……濡れた睫を必死で見開き、歯をくいしばるようにして、聡の顔を一心に見つめている。

「そのひとは、陽が生まれるのを、楽しみにしていたわ。……そうだ」

聡は思い出すと、いったん立ち上がる。

寝室にある古い鍵付きの引き出しの中から、びろうどのケースを持ってくる。

そして陽の横でひざまずくと、その目の前でケースをあけてみせた。

小さなダイヤがついたベビーリングが入っていた。

「これはね、陽の本当のお父さんが、陽にってくれたものなの」

聡はそういってベビーリングを陽の手のひらにそっと乗せてくれた。

桃色の陽の掌の中で、ダイヤのベビーリングは、弱い日差しを七色に反射させた。

「陽。あなたは、お父さんとお母さんが心待ちにして生まれた大事な娘なの……。それをいつまでも忘れないでいて」

431◆最終章・また春が来る　29

「……その後、パリの学校での教師の口が見つかって、私たち親子は新しい暮らしを始めることができました。……それもお父様のご尽力の賜物だったんですけれど」

窓からときおり射す陽が、だんだん色づいてきた。

淡く温かい色に照らしだされた聡の頬は、少しだけ血色がいいように見える。

だけど、それは同時にその懐かしいおもざしに深い陰影をもつけるようだった。

聡の歩いてきた今までを象徴するように。

聡はおそらく苦労してきたのだろう。

それを思うと将は、苦しい。

なぜ、諦めてしまったのか。

ずっと探し続けなかったのか。

思いを手放してしまったことがいまさらながら悔やまれる。

「……フランスにいても、鷹枝くんの活躍はずっと見てたんですよ」

聡は柔らかく微笑んだ。

だけど、聡が見ているのは今の将ではない。

将にはわかっている。

聡が今も見守り続けているのは、将の幸せであり、将のすべき使命なのである、と……。

聡は、将をみていた。

インターネットがあるおかげで、将のことは地球のどこにいてもわかった。

こうやって遠く離れた国からでも、将の活躍がわかる限り。

聡のしてきたことは無駄ではないのだ。

近くにいると苦しいだろう。

だから。こうして遠くで見守るのがいい——。

将が残した娘の成長と、将の活躍を遠くから見守ること。

それが聡の喜びであり生きる支えだった。

数年後、将は俳優から東京都知事に見事当選した。

そしてまもなく、血のつながらない従妹と結婚をし、子供が生まれた。

将の成功。

幸せな将の家庭。

将の幸せが盤石なものとなっていくごとに……聡はそれを心から喜んだ。

これで将も、自分も惑うことはないだろう。

自分が将の幸せを、邪魔する可能性はなくなったのだ――。

それでも、だんだん遠くなっていく二人の距離に、古い傷はかすかに痛んだけれど。

「今は……娘と――陽と暮らしているんです」

儚げに色づく光の中で、穏やかな声は続く。

こうしていると、二人ともあの頃のまま、年をとったように将は錯覚してしまう。

激しい抱擁も。

苦い懊悩も。

ひきちぎられるような別れのつらさも。

何もないあの頃のまま。

あの頃、放課後の教室で向かい合っていた頃。

あのとき、聡を包んでいたのは、もっと鮮やかな夕陽だった。

だけど、今の淡いいろも、悪くない。

夢で逢ったときのように。

自分たちは、これからなのかもしれない。

希望のひとかけを溶かしたような淡い、暖色……。

「陽は、鷹枝くんによく似ています。顔も……性格も」

聡は置いたティーカップの中にいとおしい娘が見えるかのように微笑んだ。

「あの娘は、リセで映画作りのようなことをやっていたんだけど、思えば俳優としての才能もあなたから受け継いだのね……」

大学進学のために日本へ渡った陽が、思いがけず女優として成功して。

なにもかも思い残すことはない……そう思った時に、病はやってきた。

2年前のことだった。

病の大半は、聡の体の一部ごと除かれたものの……完全になくならなかった。

それは遅かれ、再び大きくなり、いつか聡の命を奪っていくのだろう。

あのときの厳の意志を継ぎ、半年前、ついに総理まで上り詰めた将。

それは聡にとって最後のプレゼントになった……。

「……でもね。病気をしたせいか、陽もできるだけ一緒にいてくれますし……。もう、何も思い残すことはないわ」

何もかも、乗り越えてきた笑顔は……深い翳をものともしないようだった。

時は、もう戻らない。戻せないのだ。

その穏やかな表情はそう語っていた。

そのとき、ドアがノックされる音がした。

「総理……申し訳ありませんが、お時間です」

三島の声がした。

忙しい将は、次のスケジュールが詰まっている。

将は聡の顔を、いまいちど見つめた。

さっきまで射していた陽は翳ってしまったようだ。

赤みのまったくない窓からの薄明かりの中で、聡の顔は磁器のように真っ白だった。

それは一瞬、菊の花の白を想像させ――将の背筋は一瞬震えた。

これが最後。

脳裏にひらめく事実。

聡と顔をあわせるのはこれが最後になるかもしれない。

次に逢うときは……。

菊の花にうずもれた聡がサブリミナルのようにフラッシュする。

恐ろしさに思わず息を止める将の前で、聡は自ら席を立った。

「……待たせてはいけないわ。いきましょう」

まだディナーには早いのだろう、レストランに他の客が残っている様子はなかった。

警備上、客が入らないように予め手配しておいたのかもしれない。

重い扉を開けると、冷たい空気が一気になだれこんできて、二人は目を細めた。

ハイヤーはもう到着していた。

将が聡のために用意させたハイヤーは、その漆のような艶を乗せたボンネットに、いまにも降り出しそうな重い雪雲をくっきりと映しだしている。

さっきまで淡い色を個室に送り込んでいた太陽は、その雪雲に隠されてしまったらしい。

雲の輪郭だけが冷やかに輝いている。

たった2時間ほどの間に、ぐんと気温は下がったようだ。

「また少し、降ったみたいね」

聡が口を開く。

玄関前の植栽の葉に、粉砂糖のような雪が溶けずに残っていた。

その雪は……いろいろなものを思い出させた。

おそらく、二人とも同じ想い出をたどっている――口にしなくてもわかる。

そのかわりに、将は問いを口にしてみる。

「あなたは……先生は、幸せなんですね」

一瞬か、それとも長い時間か。

二人の視線が交差した。

この世で最後の邂逅――。

二人を隔てる空間に、ふいに白いものが横切った。

二人の視線は知らず、その行く末に集まった。

……風に舞って、ゆっくりと落ちていく雪。

雪は路面に着地したとたん、あとかたもなく見えなくなった。

それに代わるように、あとからあとから白いものが天から舞い降りてくる。

絶え間なく舞い降りる思い出のように。

あるいは万感の思いを代弁するがごとく……雪は無数に舞い始めた。

「……ええ」

雪に促されたようだったけれど……聡はしっかりとした声で答えた。

低いけれど温かみのある声。

25年前と変わらない――。

「鷹枝くんは？」

返される問いに将は、迷う。

自分は幸せなのか。

朝までは、自信をもってそう答えられたはずだ。

だけど。

心の底に凍らせていた、さまざまなものが解けだした今――。

――昔のことだ。

――終わったことだ。

――自分はもう大人なのだ……。

何度となく言い聞かせつつ、封じ込めてきた思い。

それがいま、将の胸をどうしようもなく乱している。

将は答えることができず、ただ目の前にいる聡を見つめた。

25年前、自分の幸せよりも……と命を賭けるようにして、この道を選んできた瞳。

将の幸せを願ってやまなかったひと。

そのひとを前に、どうして迷いを口に出せようか。

……将はかみしめた唇が見えないように、うつむいた。

それはうなづいたように見えるはずだった。

聡が望んだ幸せを、どうして否定することができるだろうか。

下を向いた将の足もとに、雪が筋のように流れ始めた。

雪は、今度こそ本格的に降りだしたようだ。

「……寒いでしょうから、どうぞ、お乗りください」

三島の声に、将は顔をあげた。

聡は、もう一度深く頭を下げると、ハイヤーに乗り込む。

うつむいた長い睫が白い頬にいっそうくっきりと浮かぶ。

何か、もう一言……そう思った将の前で。

ドアが、閉じられる。

聡は窓の中から将を見つめていた。

色がついた窓ガラスを、音もなく雪がなぞり、落ちていく。いく粒も、いく粒も。

その中で、その表情は、もはや朧げで。

それを確かめようと、将が一歩踏み出そうとしたとき、ハイヤーはゆっくりと発車した。

「いやー、本格的に降ってきましたね」

三島が天を仰いだ。

雪は3月に東京に降るものとしては類をみないほどひどく、視界を霞ませていた。

将は立ちつくしていた。

雪はハイヤーをあっという間に霞ませ……視界から消した。

将はハイヤーが消えたあたりから目が離せなかった。

「総理。雪が積もる前に会場に向かいましょう」

三島が促す声に、無意識に腕時計を見る動作をつくる――そのコートの袖口に、ふいに舞い落ちる白の1つがくっついた。

六角形の、雪の華。

よく見ようと目を凝らしたとたん解けて……まもなく消えてしまった。

そこにあったことすら幻だったように。

――消えてしまう。

将は、天を振り仰いだ。

太陽はどこにも見えない。

その代りに……雪は散華のように、将に向って一斉に舞い落ちてきた。

あのニセコの頂上。

これよりもっとひどい吹雪に閉ざされたあの雪の中で。

すべてが凍りつくような寒さの中で。

将は確かに聡を探し出した。

すべてが絶望的な世界の中で聡だけが温かかった。

それまで真っ暗だった将の世界を明るく照らし出した、太陽。

聡を失ったときでさえ。あきらめたときでさえ。

将は聡の光を、ぬくもりを、支えにしていなかったか。

将は知らず、左胸のあたりに手を触れている——聡の万年筆があるあたり。

聡が、遠くから将を見ていてくれたように。

将とて——聡を感じていた。

捨てられた、と嘆きながら……心の底では聡のぬくもりを思い出していた。

そして、この世界のどこかから、聡が自分を見ていることを予感していた。

それが、もうすぐ。

消えてしまう。

もうすぐ、聡は消えてしまうのだ。

この世のどこにも、いなくなってしまう。

どこを探しても……聡には二度と逢えなくなってしまう。

距離よりも。

モラルよりも。

法律よりも。

もっと絶対的な——この世とあの世の結界によって二人は永遠に隔てられてしまうのだ。

聡のいない世界に、たった一人で取り残されてしまう。

こんどこそ、本当に——。

将は身震いした。

そしていま一度、目の前にある一面の白を見ようとした。

目に沁みるような風雪にこらえながら、必死で目をこらしたが、ハ

イヤーの姿はとうに見えなかった。

ただ、まっ白だった。

それは、将のすべてをも白紙にしていく。

これが最後なら。

あの人との最後の別れなら。

このまま、今生で逢うことはないなら……。

それでいいのか。

あの人を、このまま、永遠に失ってしまっていいのか。

『アキラは、俺の太陽だから』

太陽を失って、それでいいのか。

白紙になった将が思い出すのは――欲するのは、ただ温かい陽の色だけ。

あの吹雪の中で、聡しか見えなかったように。

「総理！」

三島の叫ぶ声は、もはや将には届かなかった。

まっ白の中に、将は駆け出した。

</ㄱ>

４３１◆最終章・また春が来る　２９（後書き）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5805a/

君は僕の太陽、月のように君次第な僕

2010年10月10日19時30分発行